創世記

第一章 一 元始に神天地を創造たまへり 二 地は定形なく曠空くして黒暗淵の面にあり神の靈水の面を覆たりき 三 神光あれと言たまひければ光ありき 四 神光を善と觀たまへり神光と暗を分ちたまへり 五 神光を晝と名け暗を夜と名けたまへり夕あり朝ありき是首の日なり 六 神言たまひけるは水の中に穹蒼ありて水と水とを分つべし 七 神穹蒼を作りて穹蒼の下の水と穹蒼の上の水とを判ちたまへり即ち斯なりぬ 八 神穹蒼を天と名けたまへり夕あり朝ありき是二日なり 九 神言たまひけるは天の下の水は一處に集りて乾ける土顯べしと即ち斯なりぬ 一〇 神乾ける土を地と名け水の集合るを海と名けたまへり神之を善と觀たまへり 一一 神言たまひけるは地は青草と實蓏を生ずる草蔬と其類に從ひ果を結びみづから核をもつ所の果を結ぶ樹を地に發出すべしと即ち斯なりぬ 一二 地青草と其類に從ひ實蓏を生ずる草蔬と其類に從ひ果を結てみづから核をもつ所の樹を發出せり神これを善と觀たまへり 一三 夕あり朝ありき是三日なり 一四 神言たまひけるは天の穹蒼に光明ありて晝と夜とを分ち又天象のため時節のため日のため年のために成べし 一五 又天の穹蒼にありて地を照す光となるべしと即ち斯なりぬ 一六 神二の巨なる光を造り大なる光に晝を司どらしめ小き光に夜を司どらしめたまふまた星を造りたまへり 一七 神これを天の穹蒼に置て地を照さしめ 一八 晝と夜を司どらしめ光と暗を分たしめたまふ神これを善と觀たまへり 一九 夕あり朝ありき是四日なり 二〇 神云たまひけるは水には生物饒に生じ鳥は天の穹蒼の面に地の上に飛べしと 二一 神巨なる魚と水に饒に生じて動く諸の生物を其類に從ひて創造り又羽翼ある諸の鳥を其類に從ひて創造りたまへり神之を善と觀たまへり 二二 神之を祝して曰く生よ繁息よ海の水に充牣よ又禽鳥は地に蕃息よと 二三 夕あり朝ありき是五日なり 二四 神言給ひけるは地は生物を其類に從て出し家畜と昆蟲と地の獸を其類に從て出すべしと即ち斯なりぬ 二五 神地の獸を其類に從て造り家畜を其類に從て造り地の諸の昆蟲を其類に從て造り給へり神之を善と觀給へり 二六 神言給けるは我儕に象りて我儕の像の如くに我儕人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ所の諸の昆蟲を治めんと 二七 神其像の如くに人を創造たまへり即ち神の像の如くに之を創造之を男と女に創造たまへり 二八 神彼等を祝し神彼等に言たまひけるは生よ繁殖よ地に滿盈よ之を服從せよ又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ 二九 神言たまひけるは視よ我全地の面にある實蓏のなる諸の草蔬と核ある木果の結る諸の樹とを汝等に與ふこれは汝らの糧となるべし 三〇 又地の諸の獸と天空の諸の鳥および地に匍ふ諸の物等凡そ生命ある者には我食物として諸の青き草を與ふと即ち斯なりぬ 三一 神其造りたる諸の物を視たまひけるに甚だ善りき夕あり朝ありき是六日なり

第二章一 斯天地および其衆群悉く成ぬ二 第七日に神其造りたる工を竣たまへり即ち其造りたる工を竣て七日に安息たまへり三 神七日を祝して之を神聖めたまへり其は神其創造爲たまへる工を盡く竣て是日に安息みたまひたればなり四 ヱホバ神地と天を造りたまへる日に天地の創造られたる其由來は是なり五 野の諸の灌木は未だ地にあらず野の諸の草蔬は未生ぜざりき其はヱホバ神雨を地に降せたまはず亦土地を耕す人なかりければなり六 霧地より上りて土地の面を遍く潤したり七 ヱホバ神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまへり人即ち生靈となりぬ八 ヱホバ神エデンの東の方に園を設て其造りし人を其處に置たまへり九 ヱホバ神觀に美麗く食ふに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善惡を知の樹を生ぜしめ給へり一〇 河エデンより出て園を潤し彼處より分れて四の源となれり一一 其第一の名はピソンといふ是は金あるハビラの全地を繞る者なり一二 其地の金は善し又ブドラクと碧玉彼處にあり一三 第二の河の名はギホンといふ是はクシの全地を繞る者なり一四 第三の河の名はヒデケルといふ是はアッスリヤの東に流るるものなり第四の河はユフラテなり一五 ヱホバ神其人を挈て彼をエデンの園に置き之を理め之を守らしめ給へり一六 ヱホバ神其人に命じて言たまひけるは園の各種の樹の果は汝意のままに食ふことを得一七 然ど善惡を知の樹は汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死べければなり一八 ヱホバ神言たまひけるは人獨なるは善らず我彼に適ふ助者を彼のために造らんと一九 ヱホバ神土を以て野の諸の獸と天空の諸の鳥を造りたまひてアダムの之を何と名るかを見んとて之を彼の所に率ゐいたりたまへりアダムが生物に名けたる所は皆其名となりぬ二〇 アダム諸の家畜と天空の鳥と野の諸の獸に名を與へたり然どアダムには之に適ふ助者みえざりき二一 是に於てヱホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時其肋骨の一を取り肉をもて其處を填塞たまへり二二 ヱホバ神アダムより取たる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に携きたりたまへり二三 アダム言けるは此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ此は男より取たる者なれば之を女と名くべしと二四 是故に人は其父母を離れて其妻に好合ひ二人一體となるべし二五 アダムと其妻は二人倶に裸體にして愧ざりき

第三章一 ヱホバ神の造りたまひし野の生物の中に蛇最も狡猾し蛇婦に言ひけるは神眞に汝等園の諸の樹の果は食ふべからずと言たまひしや二 婦蛇に言けるは我等園の樹の果を食ふことを得三 然ど園の中央に在樹の果實をば神汝等之を食ふべからず又之に捫るべからず恐は汝等死んと言給へり四 蛇婦に言けるは汝等必らず死る事あらじ五 神汝等が之を食ふ日には汝等の目開け汝等神の如くなりて善惡を知に至るを知りたまふなりと六 婦樹を見ば食に善く目に美麗しく且智慧からんが爲に慕はしき樹なるによりて遂に其果實を取て食ひ亦之を己と偕なる夫に與へければ彼食へり七 是において彼等の目倶に開て彼等其裸體

なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴て裳を作れり八彼等園の中に日の清涼き時分歩みたまふヱホバ神の聲を聞しかばアダムと其妻即ちヱホバ神の面を避て園の樹の間に身を匿せり九ヱホバ神アダムを召て之に言たまひけるは汝は何處にをるや一〇彼いひけるは我園の中に汝の聲を聞き裸體なるにより懼れて身を匿せりと一一ヱホバ言たまひけるは誰が汝の裸なるを汝に告しや汝は我が汝に食ふなかれと命じたる樹の果を食ひたりしや一二アダム言けるは汝が與て我と偕ならしめたまひし婦彼其樹の果實を我にあたへたれば我食へりと一三ヱホバ神婦に言たまひけるは汝がなしたる此事は何ぞや婦言けるは蛇我を誘惑して我食へりと一四ヱホバ神蛇に言たまひけるは汝是を爲たるに因て汝は諸の家畜と野の諸の獸よりも勝りて詛はる汝は腹行て一生の間塵を食ふべし一五又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置ん彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎かん一六又婦に言たまひけるは我大に汝の懷妊の劬勞を増すべし汝は苦みて子を產ん又汝は夫をしたひ彼は汝を治めん一七又アダムに言たまひけるは汝その妻の言を聽て我が汝に命じて食ふべからずと言たる樹の果を食ひしに縁て土は汝のために詛はる汝は一生のあひだ勞苦て其より食を得ん一八土は荊棘と薊とを汝のために生ずべしまた汝は野の草蔬を食ふべし一九汝は面に汗して食物を食ひ終に土に歸らん其は其中より汝は取れたればなり汝は塵なれば塵に皈るべきなりと二〇アダム其妻の名をヱバと名けたり其は彼は群の生物の母なればなり二一ヱホバ神アダムと其妻のために皮衣を作りて彼等に衣せたまへり二二ヱホバ神曰たまひけるは視よ夫人我等の一の如くなりて善惡を知る然ば恐くは彼其手を舒べ生命の樹の果實をも取りて食ひ限無生んと二三ヱホバ神彼をエデンの園よりいだし其取て造られたるところの土を耕さしめたまへり二四斯神其人を逐出しエデンの園の東にケルビムと自から旋轉る焰の劍を置て生命の樹の途を保守りたまふ

第四章一アダム其妻エバを知る彼孕みてカインを生みて言けるは我ヱホバによりて一個の人を得たりと二彼また其弟アベルを生りアベルは羊を牧ふ者カインは土を耕す者なりき三日を經て後カイン土より出る果を携來りてヱホバに供物となせり四アベルもまた其羊の初生と其肥たる者を携來れりヱホバ、アベルと其供物を眷顧みたまひしかども五カインと其供物をば眷み給はざりしかばカイン甚だ怒り且其面をふせたり六ヱホバ、カインに言たまひけるは汝何ぞ怒るや何ぞ面をふするや七汝若善を行はば擧ることをえざらんや若善を行はずば罪門戸に伏す彼は汝を慕ひ汝は彼を治めん八カイン其弟アベルに語りぬ彼等野にをりける時カイン其弟アベルに起かかりて之を殺せり九ヱホバ、カインに言たまひけるは汝の弟アベルは何處にをるや彼言ふ我しらず我あに我弟の守者ならんやと一〇ヱホバ言たまひけるは汝何をなしたるや汝の弟の血の聲地より我に叫

べり一一 されば汝は詛れて此地を離るべし此地其口を啓きて汝の弟の血を汝の手より受たればなり一二 汝地を耕すとも地は再其力を汝に効さじ汝は地に吟行ふ流離子となるべしと一三 カイン、ヱホバに言けるは我が罪は大にして負ふこと能はず一四 視よ汝今日斯地の面より我を逐出したまふ我汝の面を観ることなきにいたらん我地に吟行ふ流離子とならん凡そ我に遇ふ者我を殺さん一五 ヱホバ彼に言たまひけるは然らず凡そカインを殺す者は七倍の罰を受んとヱホバ、カインに遇ふ者の彼を撃ざるため印誌を彼に與へたまへり一六 カイン、ヱホバの前を離て出でエデンの東なるノドの地に住り一七 カイン其妻を知る彼孕みエノクを生りカイン邑を建て其邑の名を其子の名に循ひてエノクと名けたり一八 エノクにイラデ生れたりイラデ、メホヤエルを生みメホヤエル、メトサエルを生みメトサエル、レメクを生り一九 レメク二人の妻を娶れり一の名はアダと曰ひ一の名はチラと曰り二〇 アダ、ヤバルを生めり彼は天幕に住て家畜を牧ふ所の者の先祖なり二一 其弟の名はユバルと云ふ彼は琴と笛とをとる凡ての者の先祖なり二二 又チラ、トバルカインを生り彼は銅と鐵の諸の刃物を鍛ふ者なりトバルカインの妹をナアマといふ二三 レメク其妻等に言けるはアダとチラよ我聲を聴けレメクの妻等よわが言を容よ我わが創傷のために人を殺すわが痍のために少年を殺す二四 カインのために七倍の罰あればレメクのためには七十七倍の罰あらん二五 アダム復其妻を知て彼男子を生み其名をセツと名けたり其は彼神我にカインの殺したるアベルのかはりに他の子を與へたまへりといひたればなり二六 セツにもまた男子生れたりかれ其名をエノスと名けたり此時人々ヱホバの名を呼ことをはじめたり

第五章一 アダムの傳の書は是なり神人を創造りたまひし日に神に象りて之を造りたまひ二 彼等を男女に造りたまへり彼等の創造られし日に神彼等を祝してかれらの名をアダムと名けたまへり三 アダム百三十歳に及びて其像に循ひ己に象りて子を生み其名をセツと名けたり四 アダムのセツを生し後の齢は八百歳にして男子女子を生り五 アダムの生存へたる齢は都合九百三十歳なりき而して死り六 セツ百五歳に及びてエノスを生り七 セツ、エノスを生し後八百七年生存へて男子女子を生り八 セツの齢は都合九百十二歳なりき而して死り九 エノス九十歳におよびてカイナンを生り一〇 エノス、カイナンを生し後八百十五年生存へて男子女子を生り一一 エノスの齢は都合九百五歳なりき而して死り一二 カイナン七十歳におよびてマハラレルを生り一三 カイナン、マハラレルを生し後八百四十年生存へて男子女子を生り一四 カイナンの齢は都合九百十歳なりきしかして死り一五 マハラレル六十五歳に及びてヤレドを生り一六 マハラレル、ヤレドを生し後八百三十年生存へて男子女子を生り一七 マハラレルの齢は都合八百九十五歳なりき而して死り一八 ヤレド百六十二歳に及びてエノクを生り一九 ヤレド、エノクを生し後八百年生存へて

男子女子を生り二〇ヤレドの齢は都合九百六十二歳なりき而して死り二一エノク六十五歳に及びてメトセラを生り二二エノク、メトセラを生し後三百年神とともに歩み男子女子を生り二三エノクの齢は都合三百六十五歳なりき二四エノク神と偕に歩みしが神かれを取りたまひければをらずなりき二五メトセラ百八十七歳に及びてレメクを生り二六メトセラ、レメクを生しのち七百八十二年生存へて男子女子を生り二七メトセラの齢は都合九百六十九歳なりき而して死り二八レメク百八十二歳に及びて男子を生み二九其名をノアと名けて言けるは此子はヱホバの詛ひたまひし地に由れる我操作と我勞苦とに就て我らを慰めん三〇レメク、ノアを生し後五百九十五年生存へて男子女子を生り三一レメクの齢は都合七百七十七歳なりき而して死り三二ノア五百歳なりきノア、セム、ハム、ヤペテを生り

第六章一人地の面に繁衍はじまりて女子之に生るるに及べる時二神の子等人の女子の美しきを見て其好む所の者を取て妻となせり三ヱホバいひたまひけるは我靈永く人と爭はじ其は彼も肉なればなり然ど彼の日は百二十年なるべし四當時地にネピリムありき亦其後神の子輩人の女の所に入りて子女を生しめたりしが其等も勇士にして古昔の名聲ある人なりき五ヱホバ人の惡の地に大なると其心の思念の都て圖維る所の恒に惟惡きのみなるを見たまへり六是に於てヱホバ地の上に人を造りしことを悔いて心に憂へたまへり七ヱホバ言たまひけるは我が創造りし人を我地の面より拭去ん人より獸昆蟲天空の鳥にいたるまでほろぼさん其は我之を造りしことを悔ればなりと八されどノアはヱホバの目のまへに恩を得たり九ノアの傳は是なりノアは義人にして其世の完全き者なりきノア神と偕に歩めり一〇ノアはセム、ハム、ヤペテの三人の子を生り一一時に世神のまへに亂れて暴虐世に滿盈ちたりき一二神世を視たまひけるに視よ亂れたり其は世の人皆其道をみだしたればなり一三神ノアに言たまひけるは諸の人の末期わが前に近づけり其は彼等のために暴虐世にみつればなり視よ我彼等を世とともに剪滅さん一四汝松木をもて汝のために方舟を造り方舟の中に房を作り瀝青をもて其内外を塗るべし一五汝かく之を作るべし即ち其方舟の長は三百キユビト其濶は五十キユビト其高は三十キユビト一六又方舟に導光牖を作り上一キユビトに之を作り終べし又方舟の戸は其傍に設くべし下牀と二階と三階とに之を作るべし一七視よ我洪水を地に起して凡て生命の氣息ある肉なる者を天下より剪滅し絶ん地にをる者は皆死ぬべし一八然ど汝とは我わが契約をたてん汝は汝の子等と汝の妻および汝の子等の妻とともに其方舟に入るべし一九又諸の生物總て肉なる者をば汝各其二を方舟に挈へいりて汝とともに其生命を保たしむべし其等は牝牡なるべし二〇鳥其類に從ひ獸其類に從ひ地の諸の昆蟲其類に從ひて各二汝の所に至りて其生命を保つべし二一汝食はるる諸の食品を汝の許に取て之を汝の所に集むべし是即ち汝

と是等の物の食品となるべし二一ノア是爲し都て神の己に命じたまひしごとく然爲せり

第七章

一 ヱホバ、ノアに言たまひけるは汝と汝の家皆方舟に入べし我汝がこの世の人の中にてわが前に義を視たればなり二 諸の潔き獸を牝牡七宛汝の許に取り潔らぬ獸を牝牡二宛三 亦天空の鳥を雌雄七宛取て種を全地の面に生のこらしむべし四 今七日ありて我四十日四十夜地に雨ふらしめ我造りたる萬有を地の面より拭去ん五 ノア、ヱホバの凡て己に命じたまひし如くなせり六 地に洪水ありける時にノア六百歳なりき七 ノア其子等と其妻および其子等の妻と倶に洪水を避て方舟にいりぬ八 潔き獸と潔らざる獸と鳥および地に匍ふ諸の物九 牝牡二宛ノアに來りて方舟にいりぬ神のノアに命じたまへるが如し一〇 かくて七日の後洪水地に臨めり一一 ノアの齡の六百歳の二月即ち其月の十七日に當り此日に大淵の源皆潰れ天の戸開けて一二 雨四十日四十夜地に注げり一三 此日にノアとノアの子セム、ハム、ヤペテおよびノアの妻と其子等の三人の妻諸倶に方舟にいりぬ一四 彼等および諸の獸其類に從ひ諸の家畜其類に從ひ都て地に匍ふ昆蟲其類に從ひ諸の禽即ち各樣の類の鳥皆其類に從ひて入りぬ一五 即ち生命の氣息ある諸の肉なる者二宛ノアに來りて方舟にいりぬ一六 入たる者は諸の肉なる者の牝牡にして皆いりぬ神の彼に命じたまへるが如しヱホバ乃ち彼を閉置たまへり一七 洪水四十日地にありき是において水增し方舟を浮めて方舟地の上に高くあがれり一八 而して水瀰漫りて大に地に增しぬ方舟は水の面に漂へり一九 水甚大に地に瀰漫りければ天下の高山皆おほはれたり二〇 水はびこりて十五キユビトに上りければ山々おほはれたり二一 凡そ地に動く肉なる者鳥家畜獸地に匍ふ諸の昆蟲および人皆死り二二 即ち凡そ其鼻に生命の氣息のかよふ者都て乾土にある者は死り二三 斯地の表面にある萬有を人より家畜昆蟲天空の鳥にいたるまで盡く拭去たまへり是等は地より拭去れたり唯ノアおよび彼とともに方舟にありし者のみ存れり二四 水百五十日のあひだ地にはびこりぬ

第八章

一 神ノアおよび彼とともに方舟にある諸の生物と諸の家畜を眷念ひたまひて神乃ち風を地の上に吹しめたまひければ水減りたり二 亦淵の源と天の戸閉塞りて天よりの雨止ぬ三 是に於て水次第に地より退き百五十日を經てのち水減り四 方舟は七月に至り其月の十七日にアララテの山に止りぬ五 水次第に減て十月に至りしが十月の月朔に山々の嶺現れたり六 四十日を經てのちノア其方舟に作りし窓を啓て七 鴉を放出ちけるが水の地に涸るまで往來しをれり八 彼地の面より水の減少しかを見んとて亦鴿を放出いだしけるが九 鴿其足の跖を止べき處を得ずして彼に還りて方舟に至れり其は水全地の面にありたればなり彼乃ち其手を舒て之を執へ方舟の中におのれの所に接入たり一〇 尚又七日待て再び鴿を方舟より放出ちけるが一一 鴿暮におよびて彼に還れり視よ其口に橄欖の新葉ありき是に於てノア地より

水の減少しをしれり一二尚又七日まちて鴿を放出ちけるが再び彼の所に歸らざりき一三六百一年の一月の月朔に水地に涸たりノア乃ち方舟の蓋を撤きて視しに視よ土の面は燥てありぬ一四二月の二十七日に至りて地乾きたり一五爰に神ノアに語りて言給はく一六汝および汝の妻と汝の子等と汝の子等の妻ともに方舟を出べし一七汝とともにある諸の肉なる諸の生物諸の肉なる者即ち鳥家畜および地に匍ふ諸の昆蟲を率いでよ此等は地に饒く生育地の上に生且殖増すべし一八ノアと其子等と其妻および其子等の妻ともに出たり一九諸の獸諸の昆蟲および諸の鳥等凡そ地に動く者種類に從ひて方舟より出たり二〇ノア、ヱホバのために壇を築き諸の潔き獸と諸の潔き鳥を取て燔祭を壇の上に献げたり二一ヱホバ其馨き香を聞ぎたまひてヱホバ其意に謂たまひけるは我再び人の故に因て地を詛ふことをせじ其は人の心の圖維るところ其幼少時よりして惡かればなり又我曾て爲たる如く再び諸の生る物を撃ち滅さじ二二地のあらん限りは播種時、收穫時、寒 熱 夏冬および日と夜息ことあらじ

第九章一神ノアと其子等を祝して之に曰たまひけるは生よ増殖よ地に滿よ二地の諸の獸畜天空の諸の鳥地に匍ふ諸の物海の諸の魚汝等を畏れ汝等に慴かん是等は汝等の手に與へらる三凡そ生る動物は汝等の食となるべし菜蔬のごとく我之を皆汝等に與ふ四然ど肉を其生命なる其血のままに食ふべからず五汝等の生命の血を流すをば我必ず討さん獸之をなすも人をこれを爲すも我討さん凡そ人の兄弟人の生命を取ば我討すべし六凡そ人の血を流す者は人其血を流さん其は神の像のごとくに人を造りたまひたればなり七汝等生よ増殖よ地に饒くなりて其中に増殖よ八神ノアおよび彼と偕にある其子等に告て言たまひけるは九見よ我汝等と汝等の後の子孫一〇および汝等と偕なる諸の生物即ち汝等とともなる鳥家畜および地の諸の獸と契約を立ん都て方舟より出たる者より地の諸の獸にまで至らん一一我汝等と契約を立ん總て肉なる者は再び洪水に絶る事あらじ又地を滅す洪水再びあらざるべし一二神言たまひけるは我が我と汝等および汝等と偕なる諸の生物の間に世々限りなく爲す所の契約の徴は是なり一三我わが虹を雲の中に起さん是我と世との間の契約の徴なるべし一四即ち我雲を地の上に起す時虹雲の中に現るべし一五我乃ち我と汝等および總て肉なる諸の生物の間のわが契約を記念はん水再び諸の肉なる者を滅す洪水とならじ一六虹雲の中にあらん我之を觀て神と地にある都て肉なる諸の生物との間なる永遠の契約を記念えん一七神ノアに言たまひけるは是は我が我と地にある諸の肉なる者との間に立たる契約の徴なり一八ノアの子等の方舟より出たる者はセム、ハム、ヤペテなりきハムはカナンの父なり一九是等はノアの三人の子なり全地の民は是等より出て蔓延れり二〇爰にノアの農夫となりて葡萄園を植ることを始しが二一葡萄酒を飲て醉天幕の中にありて裸になれり二二カナンの父ハム其父のかくし所を見て外にあ

りし二人の兄弟に告たり二三セムとヤペテ乃ち衣を取て倶に其肩に負け後向に歩みゆきて其父の裸體を覆へり彼等面を背にして其父の裸體を見ざりき二四ノア酒さめて其若き子の己に爲たる事を知れり二五是に於て彼言けるはカナン詛はれよ彼は僕輩の僕となりて其兄弟に事へん二六又いひけるはセムの神ヱホバは讃べきかなカナン彼の僕となるべし二七神ヤペテを大ならしめたまはん彼はセムの天幕に居住はんカナン其僕となるべし二八ノア洪水の後三百五十年生存へたり二九ノアの齢は都て九百五十年なりき而して死り

第一〇章一ノアの子セム、ハム、ヤペテの傳は是なり洪水の後彼等に子等生れたり二ヤペテの子はゴメル、マゴグ、マデア、ヤワン、トバル、メセク、テラスなり三ゴメルの子はアシケナズ、リパテ、トガルマなり四ヤワンの子はエリシヤ、タルシシ、キツテムおよびドダニムなり五是等より諸國の洲島の民は派分れ出て各其方言と其宗族と其邦國とに循ひて其地に住り六ハムの子はクシ、ミツライム、フテおよびカナンなり七クシの子はセバ、ハビラ、サブタ、ラアマ、サブテカなりラアマの子はシバおよびデダンなり八クシ、ニムロデを生り彼始めて世の權力ある者となれり九彼はヱホバの前にありて權力ある獵夫なりき是故にヱホバの前にある夫權力ある獵夫ニムロデの如しといふ諺あり一〇彼の國の起初はシナルの地のバベル、エレク、アツカデ、及びカルネなりき一一其地より彼アッスリヤに出でニネベ、レホボテイリ、カラ一二およびニネベとカラの間なるレセンを建たり是は大なる城邑なり一三ミツライム、ルデ族アナミ族レハビ族ナフト族一四バテロス族カスル族およびカフトリ族を生りカスル族よりペリシテ族出たり一五カナン其冢子シドンおよびヘテ一六エブス族アモリ族ギルガシ族一七ヒビ族アルキ族セニ族一八アルワデ族ゼマリ族ハマテ族を生り後に至りてカナン人の宗族蔓延りぬ一九カナン人の境はシドンよりゲラルを經てガザに至りソドム、ゴモラ、アデマ、ゼボイムに沿てレシヤにまで及べり二〇是等はハムの子孫にして其宗族と其方言と其土地と其邦國に隨ひて居りぬ二一セムはヱベルの全の子孫の先祖にしてヤペテの兄なり彼にも子女生れたり二二セムの子はエラム、アシユル、アルパクサデ、ルデ、アラムなり二三アラムの子はウヅ、ホル、ゲテル、マシなり二四アルパクサデ、シラを生みシラ、エベルを生り二五エベルに二人の子生れたり一人の名をペレグ(分れ)といふ其は彼の代に邦國分れたればなり其弟の名をヨクタンと曰ふ二六ヨクタン、アルモダデ、シヤレフ、ハザルマウテ、ヱラ二七ハドラム、ウザル、デクラ二八オバル、アビマエル、シバ二九オフル、ハビラおよびヨバブを生り是等は皆ヨクタンの子なり三〇彼等の居住所はメシヤよりして東方の山セバルにまで至れり三一是等はセムの子孫にして其宗族と其方言と其土地と其邦國とに隨ひて居りぬ三二是等はノアの子の宗族にして其血統と其邦國に隨ひて居りぬ洪水の後是等より地の邦國の民は派分れ出たり

第一一章 一 全地は一の言語一の音のみなりき 二 茲に人衆東に移りてシナルの地に平野を得て其處に居住り 三 彼等互に言けるは去來甎石を作り之を善く熱んと遂に石の代に甎石を獲灰沙の代に石漆を獲たり 四 又曰けるは去來邑と塔とを建て其塔の頂を天にいたらしめん斯して我等名を揚て全地の表面に散ることを免れんと 五 ヱホバ降臨りて彼人衆の建る邑と塔とを觀たまへり 六 ヱホバ言たまひけるは視よ民は一にして皆一の言語を用ふ今既に此を爲し始めたり然ば凡て其爲んと圖維る事は禁止め得られざるべし 七 去來我等降り彼處にて彼等の言語を淆し互に言語を通ずることを得ざらしめんと 八 ヱホバ遂に彼等を彼處より全地の表面に散したまひければ彼等邑を建ることを罷たり 九 是故に其名はバベル（淆亂）と呼ばる是はヱホバ彼處に全地の言語を淆したまひしに由てなり彼處よりヱホバ彼等を全地の表に散したまへり 一〇 セムの傳は是なりセム百歳にして洪水の後の二年にアルパクサデを生り 一一 セム、アルパクサデを生し後五百年生存へて男子女子を生り 一二 アルパクサデ三十五歳に及びてシラを生り 一三 アルパクサデ、シラを生し後四百三年生存へて男子女子を生り 一四 シラ三十歳におよびてエベルを生り 一五 シラ、エベルを生し後四百三年生存へて男子女子を生り 一六 エベル三十四歳におよびてペレグを生り 一七 エベル、ペレグを生し後四百三十年生存へて男子女子を生り 一八 ペレグ三十歳におよびてリウを生り 一九 ペレグ、リウを生し後二百九年生存へて男子女子を生り 二〇 リウ三十二歳におよびてセルグを生り 二一 リウ、セルグを生し後二百七年生存へて男子女子を生り 二二 セルグ三十年におよびてナホルを生り 二三 セルグ、ナホルを生しのち二百年生存へて男子女子を生り 二四 ナホル二十九歳に及びてテラを生り 二五 ナホル、テラを生し後百十九年生存へて男子女子を生り 二六 テラ七十歳に及びてアブラム、ナホルおよびハランを生り 二七 テラの傳は是なりテラ、アブラム、ナホルおよびハランを生ハラン、ロトを生り 二八 ハランは其父テラに先ちて其生處なるカルデアのウルにて死たり 二九 アブラムとナホルと妻を娶れりアブラムの妻の名をサライと云ナホルの妻の名をミルカと云てハランの女なりハランはミルカの父にして亦イスカの父なりき 三〇 サライは石女にして子なかりき 三一 テラ、カナンの地に往とて其子アブラムとハランの子なる其孫ロト及其子アブラムの妻なる其媳サライをひき挈て倶にカルデアのウルを出たりしがハランに至て其處に住り 三二 テラの齢は二百五歳なりきテラはハランにて死り

第一二章 一 爰にヱホバ、アブラムに言たまひけるは汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ 二 我汝を大なる國民と成し汝を祝み汝の名を大ならしめん汝は祉福の基となるべし 三 我は汝を祝する者を祝し汝を詛ふ者を詛はん天下の諸の宗族汝によりて福禔を獲と 四 アブラム乃ちヱホバの自己に言たまひし言に從て出たりロト彼と共に行りア

ブラムはハランを出たる時七十五歳なりき五アブラム其妻サライと其弟の子ロトおよび其集めたる總の所有とハランにて獲たる人衆を携へてカナンの地に往んとて出で遂にカナンの地に至れり六アブラム其地を經過てシケムの處に及びモレの橡樹に至れり其時にカナン人其地に住り七茲にヱホバ、アブラムに顯現れて我汝の苗裔に此地に與へんといひたまへり彼處にて彼己に顯現れたまひしヱホバに壇を築けり八彼其處よりベテルの東の山に移りて其天幕を張り西にベテル東にアイありき彼處にて彼ヱホバに壇を築きヱホバの名を龥り九アブラム尚進て南に遷れり一〇茲に饑饉其地にありければアブラム、エジプトに寄寓らんとて彼處に下れり其は饑饉其地に甚しかりければなり一一彼近く來りてエジプトに入んとする時其妻サライに言けるは視よ我汝を觀て美麗き婦人なるを知る一二是故にエジプト人汝を見る時是は彼の妻なりと言て我を殺さん然ど汝をば生存かん一三請ふ汝わが妹なりと言へ然ば我汝の故によりて安にしてわが命汝のために生存ん一四アブラム、エジプトに至りし時エジプト人此婦を見て甚だ美麗となせり一五またパロの大臣等彼を視て彼をパロの前に譽めければ婦遂にパロの家に召入れられたり一六是に於てパロ彼のために厚くアブラムを待ひてアブラム遂に羊牛僕婢牝牡の驢馬および駱駝を多く獲るに至れり一七時にヱホバ、アブラムの妻サライの故によりて大なる災を以てパロと其家を悩したまへり一八パロ、アブラムを召て言けるは汝が我になしたる此事は何ぞや汝何故に彼が汝の妻なるを我に告ざりしや一九汝何故に彼はわが妹なりといひしや我幾彼をわが妻にめとらんとせり然ば汝の妻は此にあり挈去るべしと二〇パロ即ち彼の事を人々に命じければ彼と其妻および其有る諸の物を送りさらしめたり

第一三章 一アブラム其妻および其有る諸の物と偕にエジプトを出て南の地に上れりロト彼と共にありき二アブラム甚家畜と金銀に富り三彼南の地より其旅路に進てベテルに至りベテルとアイの間なる其以前に天幕を張たる處に至れり四即ち彼が初に其處に築きたる壇のある處なり彼處にアブラム、ヱホバの名を龥り五アブラムと偕に行しロトも羊牛および天幕を有り六其地は彼等を載て倶に居しむること能はざりき彼等は其所有多かりしに縁て倶に居ることを得ざりしなり七斯有かばアブラムの家畜の牧者とロトの家畜の牧者の間に競爭ありきカナン人とペリジ人此時其地に居住り八アブラム、ロトに言けるは我等は兄弟の人なれば請ふ我と汝の間およびわが牧者と汝の牧者の間に競爭あらしむる勿れ九地は皆爾の前にあるにあらずや請ふ我を離れよ爾若左にゆかば我右にゆかん又爾右にゆかば我左にゆかんと一〇是に於てロト目を擧てヨルダンの凡ての低地を瞻望みけるにヱホバ、ソドムとゴモラとを滅し給はざりし前なりければゾアルに至るまであまねく善く潤澤ひてヱホバの園の如くエジプトの地の如くなりき一一ロト乃ちヨルダンの低地

を盡く撰とりて東に徙れり斯彼等彼此に別たり一二アブラムはカナンの地に住り又ロトは低地の諸邑に住み其天幕を遷してソドムに至れり一三ソドムの人は惡くしてヱホバの前に大なる罪人なりき一四ロトのアブラムに別れし後ヱホバ、アブラムに言たまひけるは爾の目を擧て爾の居る處より西東北南を瞻望め一五凡そ汝が觀る所の地は我之を永く爾と爾の裔に與べし一六我爾の後裔を地の塵沙の如くなさん若人地の塵沙を數ふることを得ば爾の後裔も數へらるべし一七爾起て縱横に其地を行き巡るべし我之を爾に與へんと一八アブラム遂に天幕を遷して來りヘブロンのマムレの橡林に住み彼處にてヱホバに壇を築けり

第一四章 一當時シナルの王アムラペル、エラサルの王アリオク、エラムの王ケダラオメルおよびゴイムの王テダル等二ソドムの王ベラ、ゴモルの王ビルシア、アデマの王シナブ、ゼボイムの王セメベルおよびベラ（即ち今のゾアル）の王と戰ひをなせり三是等の五人の王皆結合てシデムの谷に至れり其處は今の鹽海なり四彼等は十二年ケダラオメルに事へ第十三年に叛けり五第十四年にケダラオメルおよび彼と偕なる王等來りてアシタロテカルナイムのレパイム人、ハムのズジ人、シヤベキリアタイムのエミ人六およびセイル山のホリ人を擊て曠野の傍なるエルパランに至り七彼等歸りてエンミシパテ（即ち今のカデシ）に至りアマレク人の國を盡く擊又ハザゾンタマルに住るアモリ人を擊り八爰にソドムの王ゴモラの王アデマの王ゼボイムの王およびベラ（即ち今のゾアル）の王出てシデムの谷にて彼等と戰ひを接たり九即ち彼五人の王等エラムの王ケダラオメル、ゴイムの王テダル、シナルの王アムラペル、エラサルの王アリオクの四人と戰へり一〇シデムの谷には地瀝青の坑多かりしがソドムとゴモラの王等遁て其處に陷りぬ其餘の者は山に遁逃たり一一是に於て彼等ソドムとゴモラの諸の物と其諸の食料を取て去れり一二彼等アブラムの姪ロトと其物を取て去り其は彼ソドムに住たればなり一三茲に遁逃者來りてヘブル人アブラムに之を告たり時にアブラムはアモリ人マムレの橡林に住りマムレはエシコルの兄弟又アネルの兄弟なり是等はアブラムと契約を結べる者なりき一四アブラム其兄弟の虜にせられしを聞しかば其熟練したる家の子三百十八人を率ゐてダンまで追いたり一五其家臣を分ちて夜に乘じて彼等を攻め彼等を擊破りてダマスコの左なるホバまで彼等を追ゆけり一六アブラム斯諸の物を奪回し亦其兄弟ロトと其物および婦人と人民を取回せり一七アブラム、ケダラオメルおよび彼と偕なる王等を擊破りて歸れる時ソドムの王シヤベの谷（即ち今の王の谷）にて彼を迎へたり一八時にサレムの王メルキゼデク、パンと酒を携出せり彼は至高き神の祭司なりき一九彼アブラムを祝して言けるは願くは天地の主なる至高神アブラムを祝福みたまへ二〇願くは汝の敵を汝の手に付したまひし至高神に稱譽あれとアブラム乃ち彼に其諸の物の什分の一を饋れり二一茲にソドムの王アブラムに言けるは

人を我に與へ物を汝に取れと二二アブラム、ソドムの王に言けるは我天地の主なる至高き神ヱホバを指て言ふ二三 一本の絲にても鞋帶にても凡て汝の所屬は我取ざるべし恐くは汝我アブラムを富しめたりと言ん二四 但少者の既に食ひたる物および我と偕に行し人アネル、エシコルおよびマムレの分を除くべし彼等には彼等の分を取しめよ

第一五章一 是等の事の後ヱホバの言異象の中にアブラムに臨て曰くアブラムよ懼るなかれ我は汝の干櫓なり汝の賚は甚 大なるべし二 アブラム言けるは主ヱホバよ何を我に與んとしたまふや我は子なくして居り此ダマスコのエリエゼル我が家の相續人なり三 アブラム又言けるは視よ爾 子を我にたまはず我の家の子わが嗣子とならんとす四 ヱホバの言彼にのぞみて曰く此者は爾の嗣子となるべからず汝の身より出る者爾の嗣子となるべし五 斯てヱホバ彼を外に携へ出して言たまひけるは天を望みて星を數へ得るかを見よと又彼に言たまひけるは汝の子孫は是のごとくなるべしと六 アブラム、ヱホバを信ずヱホバこれを彼の義となしたまへり七 又彼に言たまひけるは我は此地を汝に與へて之を有たしめんとて汝をカルデアのウルより導き出せるヱホバなり八 彼言けるは主ヱホバよ我いかにして我之を有つことを知るべきや九 ヱホバ彼に言たまひけるは三歳の牝牛と三歳の牝山羊と三歳の牡羊と山鳩および雛き鴿を我ために取れと一〇 彼乃ち是等を皆取て之を中より剖き其剖たる者を各 相對はしめて置り但鳥は剖ざりき一一 鷙鳥其死體の上に下る時はアブラム之を驅はらへり一二 斯て日の沒る頃アブラム酣く睡りしが其大に暗きを覺えて懼れたり一三 時にヱホバ、アブラムに言たまひけるは爾 確に知るべし爾の子孫他人の國に旅人となりて其人々に服事へん彼等四百年のあひだ之を惱さん一四 又其服事たる國民は我之を鞫かん其後彼等は大なる財貨を携へて出ん一五 爾は安然に爾の父祖の所にゆかん爾は遐齢に達りて葬らるべし一六 四代に及びて彼等此に返りきたらん其はアモリ人の惡未だ貫盈ざれば也と一七 斯て日の沒て黑暗となりし時烟と火焔の出る爐其切剖たる物の中を通過り一八 是日にヱホバ、アブラムと契約をなして言たまひけるは我此地をエジプトの河より彼大河即ちユフラテ河まで爾の子孫に與ふ一九 即ちケニ人ケナズ人カデモニ人二〇 ヘテ人ペリジ人レパイム人二一 アモリ人カナン人ギルガシ人ヱブス人の地是なり

第一六章一 アブラムの妻サライ子女を生ざりき彼に一人の侍女ありしがエジプト人にして其名をハガルと曰り二 サライ、アブラムに言けるは視よヱホバわが子を生むことを禁めたまひければ請ふ我が侍女の所に入れ我彼よりして子女を得ることあらんとアブラム、サライの言を聽いれたり三 アブラムの妻サライ其侍女なるエジプト人ハガルを取て之を其夫アブラムに與へて妻となさしめたり是はアブラムがカナンの地に十年住みたる後なりき四 是においてアブラム、ハガルの所に入るハガル遂に孕

みければ己の孕めるを見て其女主を藐視たり五サライ、アブラムに言けるはわが蒙れる害は汝に歸すべし我わが侍女を汝の懷に與へたるに彼己の孕るを見て我を藐視ぐ願はヱホバ我と汝の間の事を鞫きたまへ六アブラム、サライに言けるは視よ汝の侍女は汝の手の中にあり汝の目に善と見ゆる所を彼に爲すべしサライ乃ち彼を苦めければ彼サライの面を避て逃たり七ヱホバの使者曠野の泉の旁 即ちシユルの路にある泉の旁にて彼に遭ひて八言けるはサライの侍女ハガルよ汝何處より來れるや又何處に往や彼言けるは我は女主サライの面をさけて逃るなり九ヱホバの使者彼に言けるは汝の女主の許に返り身を其手に任すべし一〇ヱホバの使者又彼に言ひけるは我大に汝の子孫を増し其數を衆多して數ふることあたはざらしめん一一ヱホバの使者又彼に言けるは汝孕めり男子を生まん其名をイシマエル（神聽知）と名くべしヱホバ汝の艱難を聽知したまへばなり一二彼は野驢馬の如き人とならん其手は諸の人に敵し諸の人の手はこれに敵すべし彼は其諸の兄弟の東に住んと一三ハガル己に諭したまへるヱホバの名をアタエルロイ（汝は見たまふ神なり）とよべり彼いふ我視たる後尚生るやと一四是をもて其井はベエルラハイロイ(我を見る活る者の井)と呼ばる是はカデシとベレデの間にあり一五ハガル、アブラムの男子を生めりアブラム、ハガルの生める其子の名をイシマエルと名づけたり一六ハガル、イシマエルをアブラムに生める時アブラムは八十六歳なりき

第一七章

一アブラム九十九歳の時ヱホバ、アブラムに顯れて之に言たまひけるは我は全能の神なり汝我前に行みて完全かれよ二我わが契約を我と汝の間に立て大に汝の子孫を増ん三アブラム乃ち俯伏たり神又彼に告て言たまひけるは四我汝とわが契約を立つ汝は衆多の國民の父となるべし五汝の名を此後アブラムと呼ぶべからず汝の名をアブラハム(衆多の人の父)とよぶべし其は我汝を衆多の國民の父と爲ばなり六我汝をして衆多の子孫を得せしめ國々の民を汝より起さん王等汝より出べし七我わが契約を我と汝および汝の後の世々の子孫との間に立て永久の契約となし汝および汝の後の子孫の神となるべし八我汝と汝の後の子孫に此汝が寄寓る地即ちカナンの全地を與へて永久の産業となさん而して我彼等の神となるべし九神またアブラハムに言たまひけるは然ば汝と汝の後の世々の子孫わが契約を守るべし一〇汝等の中の男子は咸割禮を受べし是は我と汝等および汝の後の子孫の間の我が契約にして汝等の守るべき者なり一一汝等其陽の皮を割べし是我と汝等の間の契約の徵なり一二汝等の代々の男子は家に生れたる者も異邦人より金にて買たる汝の子孫ならざる者も皆生れて八日に至らば割禮を受べし一三汝の家に生れたる者も汝の金にて買たる者も割禮を受ざるべからず斯我契約汝等の身にありて永久の契約となるべし一四割禮を受ざる男兒即ち其陽の皮を割ざる者は我契約を破るによりて其人其民の中より絶るべし一五神又アブラハムの言たま

ひけるは汝の妻サライは其名をサライと稱ぶべからず其名をサラと爲べし一六我彼を祝み彼よりして亦汝に一人の男子を授けん我彼を祝み彼をして諸邦の民の母とならしむべし諸の民の王等彼より出べし一七アブラハム俯伏て哂ひ其心に謂けるは百歳の人に豈で子の生ることあらんや又サラは九十歳なれば豈で産ことをなさんやと一八アブラハム遂に神にむかひて願くはイシマエルの汝のまへに生存へんことをと曰ふ一九神言たまひけるは汝の妻サラ必ず子を生ん汝其名をイサクと名くべし我彼および其後の子孫と契約を立て永久の契約となさん二〇又イシマエルの事に關ては我汝の願を聽たり視よ我彼を祝みて多衆の子孫を得さしめ大に彼の子孫を増すべし彼十二の君王を生ん我彼を大なる國民となすべし二一然どわが契約は我翌年の今頃サラが汝に生ん所のイサクと之を立べし二二神アブラハムと言ことを竟へ彼を離れて昇り給へり二三是に於てアブラハム神の己に言たまへる如く此日其子イシマエルと凡て其家に生れたる者および凡て其金にて買たる者即ちアブラハムの家の人の中なる諸の男を將きたりて其陽の皮を割たり二四アブラハムは其陽の皮を割れたる時九十九歳二五其子イシマエルは其陽の皮を割れたる時十三歳なりき二六是日アブラハムと其子イシマエル割禮を受たり二七又其家の人家に生れたる者も金にて異邦人より買たる者も皆彼とともに割禮を受たり

第一八章一ヱホバ、マムレの橡林にてアブラハムに顯現たまへり彼は日の熱き時刻天幕の入口に坐しゐたりしが二目を擧て見たるに視よ三人の人其前に立り彼見て天幕の入口より趨り行て之を迎へ三身を地に鞠めて言けるは我が主よ我若汝の目のまへに恩を得たるならば請ふ僕を通り過すなかれ四請ふ少許の水を取きたらしめ汝等の足を濯ひて樹の下に休憩たまへ五我一口のパンを取來らん汝等心を慰めて然る後過ゆくべし汝等僕の所に來ればなり彼等言ふ汝が言るごとく爲せ六是においてアブラハム天幕に急ぎいりてサラの許に至りて言けるは速に細麺三セヤを取り捏てパンを作るべしと七而してアブラハム牛の群に趨ゆき犢の柔にして善き者を取りきたりて少者に付しければ急ぎて之を調理ふ八かくてアブラハム牛酪と牛乳および其調理へたる犢を取て彼等のまへに供へ樹の下にて其側に立り彼等乃ち食へり九彼等アブラハムに言けるは爾の妻サラは何處にあるや彼言ふ天幕にあり一〇其一人言ふ明年の今頃我必ず爾に返るべし爾の妻サラに男子あらんサラ其後なる天幕の入口にありて聞ゐたり一一抑アブラハムとサラは年邁み老いたる者にしてサラには婦人の常の經已に息たり一二是故にサラ心に哂ひて言けるは我は老衰へ吾が主も亦老たる後なれば我に樂あるべけんや一三ヱホバ、アブラハムに言たまひけるは何故にサラは哂ひて我老たれば果して子を生ことあらんと言ふや一四ヱホバに豈爲し難き事あらんや時至らば我定めたる期に爾に歸るべしサラに男子あらんと一五サラ懼れたれば承ずして我哂はずと言へり

ヱホバ言たまひけるは否汝哂へるなり一六斯て其人々彼處より起てソドムの方を望みければアブラハム彼等を送らんとて倶に行り一七ヱホバ言ひ給けるは我爲んとする事をアブラハムに隱すべけんや一八アブラハムは必ず大なる強き國民となりて天下の民皆彼に由て福を獲に至るべきに在ずや一九其は我彼をして其後の兒孫と家族とに命じヱホバの道を守りて公儀と公道を行しめん爲に彼をしれり是ヱホバ、アブラハムに其曾て彼に就て言し事を行はん爲なり二〇ヱホバ又言給ふソドムとゴモラの號呼大なるに因り又其罪甚だ重に因て二一我今下りて其號呼の我に逹れる如くかれら全く行ひたりしやを見んとす若しからずば我知るに至らんと二二其人々其處より身を旋してソドムに赴むけりアブラハムは尚ほヱホバのまへに立り二三アブラハム近よりて言けるは爾は義者をも惡者と倶に滅ぼしたまふや二四若邑の中に五十人の義者あるも汝尚ほ其處を滅ぼし其中の五十人の義者のためにこれを恕したまはざるや二五なんぢ斯の如く爲て義者と惡者と倶に殺すが如きは是あるまじき事なり又義者と惡者を均等するが如きもあるまじき事なり天下を鞫く者は公儀を行ふ可にあらずや二六ヱホバ言たまひけるは我若ソドムに於て邑の中に五十人の義者を看ば其人々のために其處を盡く恕さん二七アブラハム應へていひけるは我は塵と灰なれども敢て我主に言上す二八若五十人の義者の中五人缺たらんに爾五人の缺たるために邑を盡く滅ぼしたまふやヱホバ言たまひけるは我若彼處に四十五人を看ば滅さざるべし二九アブラハム又重ねてヱホバに言上して曰けるは若彼處に四十人看えなば如何ヱホバ言たまふ我四十人のために之をなさじ三〇アブラハム曰ひけるは請ふわが主よ怒らずして言しめたまへ若彼處に三十人看えなば如何ヱホバいひたまふ我三十人を彼處に看ば之を爲じ三一アブラハム言ふ我あへてわが主に言上す若彼處に二十人看えなば如何ヱホバ言たまふ我二十人のためにほろぼさじ三二アブラハム言ふ請ふわが主怒らずして今一度言しめたまへ若かしこに十人看えなば如何ヱホバ言たまふ我十人のためにほろぼさじ三三ヱホバ、アブラハムと言ふことを終てゆきたまへりアブラハムおのれの所にかへりぬ

第一九章 一其二個の天使黄昏にソドムに至るロト時にソドムの門に坐し居たりしがこれを視起て迎へ首を地にさげて二言けるは我主よ請ふ僕の家に臨み足を濯ひて宿りつとに起て途に遄征たまへ彼等言ふ否我等は街衢に宿らんと三然ど固く強ければ遂に彼の所に臨みて其家に入るロト乃ち彼等のために筵を設け酵いれぬパンを炊て食はしめたり四斯て未だ寢ざる前に邑の人々即ちソドムの人老たるも若きも諸共に四方八方より來たれる民皆其家を環み五ロトを呼て之に言けるは今夕爾に就たる人は何處にをるや彼等を我等の所に携へ出せ我等之を知らん六ロト入口に出て其後の戸を閉ぢ彼等の所に至りて七言けるは請ふ兄弟よ惡き事を爲すなかれ八我に未だ男知ぬ二人の女

あり請ふ我之を携へ出ん爾等の目に善と見ゆる如く之になせよ唯此人等は既に我家の蔭に入たれば何をも之になすなかれ九彼等曰ふ爾退け又言けるは此人は來り寓れる身なるに恒に士師とならんとす然ば我等彼等に加ふるよりも多くの害を爾に加へんと遂に彼等酷しく其人ロトに逼り前よりて其戸を破んとせしに一〇彼二人其手を舒しロトを家の内に援いれて其戸を閉ぢ一一家の入口にをる人衆をして大なるも小も俱に目を眩しめければ彼等遂に入口を索ぬるに困憊たり一二斯て二人ロトに言けるは外に爾に屬する者ありや汝の婿子女および凡て邑にをりて爾に屬する者を此所より携へ出べし一三此處の號呼ヱホバの前に大になりたるに因て我等之を滅さんとすヱホバ我等を遣はして之を滅さしめたまふ一四ロト出て其女を娶る婿等に告て言けるはヱホバが邑を滅したまふべければ爾等起て此處を出よと然ど婿等は之を戯言と視爲り一五曉に及て天使ロトを促して言けるは起て此なる爾の妻と二人の女を携へよ恐くは爾邑の惡とともに滅されん一六然るに彼遲延ひしかば二人其手と其妻の手と其二人の女の手を執て之を導き出し邑の外に置りヱホバ斯彼に仁慈を加へたまふ一七既に之を導き出して其一人曰けるは逃遁て汝の生命を救へ後を回顧るなかれ低地の中に止るなかれ山に遁れよ否ずば爾滅されん一八ロト彼等に言けるはわが主よ請ふ斯したまふなかれ一九視よ僕爾の目のまへに恩を得たり爾大なる仁慈を吾に施してわが生命を救たまふ吾山に遁る能はず恐くは災害身に及びて死るにいたらん二〇視よ此邑は遁ゆくに近くして且小し我をして彼處に遁れしめよしからば吾生命全からん是は小き邑なるにあらずや二一天使之にいひけるは視よ我此事に關ても亦爾の願を容たれば爾が言ふところの邑を滅さじ二二急ぎて彼處に遁れよ爾が彼處に至るまでは我何事をも爲を得ずと是に因て其邑の名はゾアル（小し）と稱る二三ロト、ゾアルに至れる時日地の上に昇れり二四ヱホバ硫黃と火をヱホバの所より即ち天よりソドムとゴモラに雨しめ二五其邑と低地と其邑の居民および地に生るところの物を盡く滅したまへり二六ロトの妻は後を回顧たれば鹽の柱となりぬ二七アブラハム其朝夙に起て其嘗てヱホバの前に立たる處に至り二八ソドム、ゴモラおよび低地の全面を望み見るに其地の烟燄窰の烟のごとくに騰上れり二九神低地の邑を滅したまふ時即ちロトの住る邑を滅したまふ時に當り神アブラハムを眷念て斯其滅亡の中よりロトを出したまへり三〇斯てロト、ゾアルに居ることを懼れたれば其二人の女と偕にゾアルを出て上りて山に居り其二人の女子とともに巖穴に住り三一茲に長女季女にいひけるは我等の父は老いたり又此地には我等に偶て世の道を成す人あらず三二然ば我等父に酒を飮せて與に寢ね父に由て子を得んと三三遂に其夜父に酒を飮せ長女入て其父と與に寢たり然るにロトは女の起臥を知ざりき三四翌日長女季女に言けるは我昨夜わが父と寢たり我等此夜又父に酒をのません爾入て與に寢よわ

れらの父に由て子を得ることをえんと三五乃ち其夜も亦父に酒をのませ季女起て父と與に寢たりロトまた女の起臥を知ざりき三六斯ロトの二人の女其父によりて孕みたり三七長女子を生み其名をモアブと名く即ち今のモアブ人の先祖なり三八季女も亦子を生み其名をベニアンミと名く即ち今のアンモニ人の先祖なり

第二〇章一アブラハム彼處より徒りて南の地に至りカデシとシユルの間に居りゲラルに寄留り二アブラハム其妻サラを我 妹なりと言しかばゲラルの王アビメレク人を遣してサラを召入たり三然るに神夜の夢にアビメレクに臨みて之に言たまひけるは汝は其召入たる婦人のために死るなるべし彼は夫ある者なればなり四アビメレク未だ彼に近づかざりしかば言ふ主よ汝は義き民をも殺したまふや五彼は我に是はわが妹なりと言しにあらずや又婦も自 彼はわが兄なりと言たり我全き心と潔き手をもて此をなせり六神又夢に之に言たまひけるは然り我汝が全き心をもて之をなせるを知りたれば我も汝を阻めて罪を我に犯さしめざりき彼に觸るを容ざりしは是がためなり七然ば彼の妻を歸せ彼は預言者なれば汝のために祈り汝をして生命を保しめん汝若歸ずば汝と汝に屬する者皆 必 死るべきを知るべし八是に於てアビメレク其朝夙に起て臣僕を悉く召し此事を皆語り聞せければ人々甚く懼れたり九斯てアビメレク、アブラハムを召て之に言けるは爾 我等に何を爲すや我何の惡き事を爾になしたれば爾 大なる罪を我とわが國に蒙らしめんとせしか爾爲べからざる所爲を我に爲したり一〇アビメレク又アブラハムに言けるは爾何を見て此事を爲たるや一一アブラハム言けるは我此處はかならず神を畏れざるべければ吾妻のために人我を殺さんと思ひたるなり一二又我は誠にわが妹なり彼はわが父の子にしてわが母の子にあらざるが遂に我妻となりたるなり一三神我をして吾父の家を離れて周遊しめたまへる時に當りて我彼に爾 我等が至る處にて我を爾の兄なりと言へ是は爾が我に施す恩なりと言たり一四アビメレク乃ち羊牛僕 婢を將てアブラハムに與へ其妻サラ之に歸せり一五而してアビメレク言けるは視よ我地は爾のまへにあり爾の好むところに住め一六又サラに言けるは視よ我爾の兄に銀千枚を與へたり是は爾および諸の人にありし事等につきて爾の目を蔽ふ者なり斯爾償贖を得たり一七是に於てアブラハム神に祈りければ神アビメレクと其妻および婢を醫したまひて彼等子を産むにいたる一八ヱホバさきにはアブラハムの妻サラの故をもてアビメレクの家の者の胎をことごとく閉たまへり

第二一章一ヱホバ其言し如くサラを眷顧みたまふ即ちヱホバ其語しごとくサラに行ひたまひしかば二サラ遂に孕み神のアブラハムに語たまひし期日に及びて年老たるアブラハムに男子を生り三アブラハム其生れたる子 即ちサラが己に生る子の名をイサクと名けたり四アブラハム神の命じたまひし如く八日に其子

イサクに割禮を行へり五アブラハムは其子イサクの生れたる時百歳なりき六サラ言けるは神我を笑はしめたまふ聞く者皆我とともに笑はん七又曰けるは誰かアブラハムにサラ子女に乳を飮しむるにいたらんと言しものあらん然に彼が年老るに及びて男子を生たりと八偖其子長育ちて遂に乳を離るイサクの乳を離るる日にアブラハム大なる饗宴を設けたり九時にサラ、エジプト人ハガルがアブラハムに生たる子の笑ふを見て一〇アブラハムに言けるは此婢と其子を遂出せ此婢の子は吾子イサクと共に嗣子となるべからざるなりと一一アブラハム其子のために甚く此事を憂たり一二神アブラハムに言たまひけるは童兒のため又汝の婢のために之を憂るなかれサラが汝に言ところの言は悉く之を聽け其はイサクより出る者汝の裔と稱らるべければなり一三又婢の子も汝の胤なれば我之を一の國となさん一四アブラハム朝夙に起てパンと水の革嚢とを取りハガルに與へて之を其肩に負せ其子を携へて去しめければ彼往てベエルシバの曠野に躑躅しが一五革嚢の水遂に罄たれば子を灌木の下に置き一六我子の死るを見るに忍ずといひて遙かに行き箭逹を隔てて之に對ひ坐しぬ斯相嚮ひて坐し聲をあげて泣く一七神其童兒の聲を聞たまふ神の使 即ち天よりハガルを呼て之に言けるはハガルよ何事ぞや懼るるなかれ神彼處にをる童兒の聲を聞たまへり一八起て童兒を起し之を汝の手に抱くべし我之を大なる國となさんと一九神ハガルの目を開きたまひければ水の井あるを見ゆきて革嚢に水を充し童兒に飮しめたり二〇神童兒と偕に在す彼遂に成長り曠野に居りて射者となり二一パランの曠野に住り其母彼のためにエジプトの國より妻を迎へたり二二當時アビメレクと其軍勢の長ピコル、アブラハムに語て言けるは汝何事を爲にも神汝とともに在す二三然ば汝が我とわが子とわが孫に僞をなさざらんことを今此に神をさして我に誓へ我が厚情をもて汝をあつかふごとく汝我と此汝が寄留る地とに爲べし二四アブラハム言ふ我誓はん二五アブラハム、アビメレクの臣僕等が水の井を奪ひたる事につきてアビメレクを責ければ二六アビメレク言ふ我誰が此事を爲しを知ず汝我に告しこと無く又我今日まで聞しことなし二七アブラハム乃ち羊と牛を取て之をアビメレクに與ふ斯て二人契約を結べり二八アブラハム牝の羔七を分ち置ければ二九アビメレク、アブラハムに言ふ汝此七の牝の羔を分ちおくは何のためなるや三〇アブラハム言けるは汝わが手より此七の牝の羔を取りて我が此井を掘たる證據となさしめよと彼等二人彼處に誓ひしによりて三一其處をベエルシバ(盟約の井)と名けたり三二斯彼等ベエルシバにて契約を結びアビメレクと其軍勢の長ピコルは起てペリシテ人の國に歸りぬ三三アブラハム、ベエルシバに柳を植ゑ永遠に在す神ヱホバの名を彼處に籲り三四斯してアブラハム久くペリシテ人の地に留寄りぬ

第二二章 一是等の事の後神アブラハムを試みんとて之をアブラ

ハムよと呼たまふ彼言ふ我此にあり二ヱホバ言給ひけるは爾の子爾の愛する獨子即ちイサクを携てモリアの地に到りわが爾に示さんとする彼所の山に於て彼を燔祭として獻ぐべし三アブラハム朝夙に起て其驢馬に鞍おき二人の少者と其子イサクを携へ且燔祭の柴薪を劈りて起て神の己に示したまへる處におもむきけるが四三日におよびてアブラハム目を擧て遙に其處を見たり五是に於てアブラハム其少者に言けるは爾等は驢馬とともに此に止れ我と童子は彼處にゆきて崇拜を爲し復爾等に歸ん六アブラハム乃ち燔祭の柴薪を取て其子イサクに負せ手に火と刀を執て二人ともに往り七イサク父アブラハムに語て父よと曰ふ彼答て子よ我此にありといひければイサク即ち言ふ火と柴薪は有り然ど燔祭の羔は何處にあるや八アブラハム言けるは子よ神自ら燔祭の羔を備へたまはんと二人偕に進みゆきて九遂に神の彼に示したまへる處に到れり是においてアブラハム彼處に壇を築き柴薪を臚列べ其子イサクを縛りて之を壇の柴薪の上に置せたり一〇斯してアブラハム手を舒べ刀を執りて其子を宰んとす一一時にヱホバの使者天より彼を呼てアブラハムよアブラハムよと言へり彼言ふ我此にあり一二使者言けるは汝の手を童子に按るなかれ亦何をも彼に爲べからず汝の子即ち汝の獨子をも我ために惜まざれば我今汝が神を畏るを知ると一三茲にアブラハム目を擧て視れば後に牡綿羊ありて其角林叢に繋りたりアブラハム即ち往て其牡綿羊を執へ之を其子の代に燔祭として獻げたり一四アブラハム其處をヱホバエレ（ヱホバ預備たまはん）と名く是に縁て今日もなほ人々山にヱホバ預備たまはんといふ一五ヱホバの使者再天よりアブラハムを呼て一六言けるはヱホバ諭したまふ我己を指て誓ふ汝是事を爲し汝の子即ち汝の獨子を惜まざりしに因て一七我大に汝を祝み又大に汝の子孫を增して天の星の如く濱の沙の如くならしむべし汝の子孫は其敵の門を獲ん一八又汝の子孫によりて天下の民皆福祉を得べし汝わが言に遵ひたるによりてなりと一九斯てアブラハム其少者の所に歸り皆たちて偕にベエルシバにいたれりアブラハムはベエルシバに住り二〇是等の事の後アブラハムに告る者ありて言ふミルカ亦汝の兄弟ナホルにしたがひて子を生り二一長子はウヅ其弟はブヅ其次はケムエル是はアラムの父なり二二其次はケセデ、ハゾ、ピルダシ、ヱデラフ、ベトエル二三ベトエルはリベカを生り是八人はミルカがアブラハムの兄弟ナホルに生たる者なり二四ナホルの妾名はルマといふ者も亦テバ、ガハム、タハシおよびマアカを生り

第二三章一サラ百二十七歳なりき是即ちサラの齢の年なり二サラ、キリアテアルバにて死り是はカナンの地のヘブロンなりアブラハム至りてサラのために哀み且哭り三斯てアブラハム死人の前より起ち出てヘテの子孫に語りて言けるは四我は汝等の中の賓旅なり寄居者なり請ふ汝等の中にて我は墓地を與へて吾が所有となし我をして吾が死人を出し葬ることを得せしめよ五

ヘテの子孫アブラハムに應て之に言ふ六我主よ我等に聽たまへ我等の中にありて汝は神の如き君なり我等の墓地の佳者を擇みて汝の死人を葬れ我等の中一人も其墓地を汝にをしみて汝をしてその死人を葬らしめざる者なかるべし七是に於てアブラハム起ち其地の民ヘテの子孫に對て躬を鞠む八而して彼等と語ひて言けるは若我をしてわが死人を出し葬るを得せしむる事汝等の意ならば請ふ我に聽て吾ためにゾハルの子エフロンに求め九彼をして其野の極端に有るマクペラの洞穴を我に與へしめよ彼其十分の値を取て之を我に與へ汝等の中にてわが所有なる墓地となさば善し一〇時にエフロン、ヘテの子孫の中に坐しゐたりヘテ人エフロン、ヘテの子孫即ち凡て其邑の門に入る者の聽る前にてアブラハムに應へて言けるは一一吾主よ我に聽たまへ其野は我汝に與ふ又其中の洞穴も我之を汝に與ふ我吾民なる衆人の前にて之を汝にあたふ汝の死人を葬れ一二是に於てアブラハム其地の民の前に躬を鞠たり一三而して彼其地の民に聽る前にてエフロンに語りて言けるは汝若之を肯はば請ふ吾に聽け我其野の値を汝に償はん汝之を吾より取れ我わが死人を彼處に葬らん一四エフロン、アブラハムに答て曰けるは一五わが主よ我に聽たまへ彼地は銀四百シケルに當る是は我と汝の間に豈道に足んや然ば汝の死人を葬れ一六アブラハム、エフロンの言に從ひエフロンがヘテの子孫の聽る前にて言たる所の銀を秤り商買の中の通用銀四百シケルを之に與へたり一七マムレの前なるマクペラに在るエフロンの野は野も其中の洞穴も野の中と其四周の堺にある樹も皆一八ヘテの子孫の前即ち凡て其邑に入る者の前にてアブラハムの所有と定りぬ一九厥後アブラハム其妻サラをマムレの前なるマクペラの野の洞穴に葬れり是即ちカナンの地のヘブロンなり二〇斯く其野と其中の洞穴はヘテの子孫之をアブラハムの所有なる墓地と定めたり

第二四章一アブラハム年邁て老たりヱホバ萬の事に於てアブラハムを祝みたまへり二茲にアブラハム其凡の所有を宰る其家の年邁なる僕に言けるは請ふ爾の手を吾髀の下に置よ三我爾をして天の神地の神ヱホバを指て誓はしめん即ち汝わが偕に居むカナン人の女の中より吾子に妻を娶るなかれ四汝わが故國に往き吾親族に到りて吾子イサクのために妻を娶れ五僕彼に言けるは倘女我に從ひて此地に來ることを好まざる事あらん時は我爾の子を彼汝が出來りし地に導き歸るべきか六アブラハム彼に曰けるは汝愼みて吾子を彼處に携かへるなかれ七天の神ヱホバ我を導きて吾父の家とわが親族の地を離れしめ我に語り我に誓ひて汝の子孫に此地を與へんと言たまひし者其使を遣して汝に先たしめたまはん汝彼處より我子に妻を娶るべし八若女汝に從ひ來る事を好まざる時は汝吾此誓を解るべし唯我子を彼處に携へかへるなかれ九是に於て僕手を其主人アブラハムの髀の下に置て此事について彼に誓へり一〇斯て僕其主人の駱駝の中より十頭の駱駝を取りて出たてり即ち其主人の諸の

佳物を手にとりて起てメソポタミアに往きナホルの邑に至り一一 其駱駝を邑の外にて井の傍に跪伏しめたり其時は黄昏にて婦女等の水汲にいづる時なりき一二 斯して彼言けるは吾主人アブラハムの神ヱホバよ願くは今日我にその者を逢しめわが主人アブラハムに恩惠を施し給へ一三 我この水井の傍に立ち邑の人の女等水を汲に出づ一四 我童女に向ひて請ふ汝の瓶をかたむけて我に飮しめよと言んに彼答へて飮め我また汝の駱駝にも飮しめんと言ば彼は汝が僕イサクの爲に定め給ひし者なるべし然れば我汝の吾主人に恩惠を施し給ふを知らん一五 彼語ふことを終るまへに視よリベカ瓶を肩にのせて出きたる彼はアブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルに生れたる者なり一六 其童女は觀に甚だ美しく且處女にして未だ人に適しことあらず彼井に下り其瓶に水を盈て上りしかば一七 僕はせゆきて之にあひ請ふ我をして汝の瓶より少許の水を飮しめよといひけるに一八 彼主よ飮たまへといひて乃ち急ぎ其瓶を手におろして之にのましめたりしが一九 飮せをはりて言ふ汝の駱駝のためにも其飮をはるまで水を汲て飽しめん二〇 急ぎて其瓶を水鉢にあけ又汲んとて井にはせゆき其諸の駱駝のために汲みたり二一 其人之を見つめヱホバが其途に幸福をくだしたまふや否やをしらんとして默し居たり二二 茲に駱駝飮をはりしかば其人重半シケルの金の鼻環一箇と重十シケルの金の手釧二箇をとりて二三 言けるは汝は誰の女なるや請ふ我に告よ汝の父の家に我等が宿る隙地ありや二四 女彼に曰けるは我はミルカがナホルに生みたる子ベトエルの女なり二五 又彼にいひけるは家には藁も飼草も多くあり且宿る隙地もあり二六 是に於て其人伏てヱホバを拜み二七 言けるは吾主人アブラハムの神ヱホバは讃美べきかなわが主人に慈惠と眞實とを缺きたまはず我途にありしにヱホバ我を吾主人の兄弟の家にみちびきたまへり二八 茲に童女走行て其母の家に此等の事を告たり二九 リベカに一人の兄あり其名をラバンといふラバンはせいで井にゆきて其人の許につく三〇 すなはち彼鼻環および其妹の手の手釧を見又其妹リベカが其人斯我に語りといふを聞て其人の所に到り見るに井の側らにて駱駝の傍にたちゐたれば三一 之に言けるは汝ヱホバに祝るる者よ請ふ入れ奚ぞ外にたつや我家を備へ且駱駝のために所をそなへたり三二 是に於て其人家にいりぬラバン乃ち其駱駝の負を釋き藁と飼草を駱駝にあたへ又水をあたへて其人の足と其從者の足をあらはしめ三三 斯して彼の前に食をそなへたるに彼言ふ我はわが事をのぶるまでは食はじとラバン語れといひければ三四 彼言ふわれはアブラハムの僕なり三五 ヱホバ大にわが主人をめぐみたまひて大なる者とならしめ又羊牛金銀僕婢駱駝驢馬をこれにたまへり三六 わが主人の妻サラ年老てのちわが主人に男子をうみければ主人其所有を悉く之に與ふ三七 わが主人我を誓せて言ふ吾すめるカナンの地の人の女子の中よりわが子に妻を娶るなかれ三八 汝わが父の家にゆきわが親族にいたりわが子のために妻

をめとれと三九我わが主人にいひけるは倘女我にしたがひて來ずば如何四〇彼我にいひけるは吾事ふるところのヱホバ其使者を汝とともに遣はして汝の途に幸福を降したまはん爾わが親族わが父の家より吾子に妻をめとるべし四一汝わが親族に至れる時はわが誓を解さるべし若彼等汝にあたへずば汝はわが誓をゆるさるべしと四二我今日井に至りて謂けらくわが主人アブラハムの神ヱホバねがはくはわがゆく途に幸福を降したまへ四三我はこの井水の傍に立つ水を汲にいづる處女あらん時我彼にむかひて請ふ汝の瓶より少許の水を我にのましめよと言んに四四若我に答へて汝飮め我亦汝の駱駝のためにも汲んと言ば是ヱホバがわが主人の子のために定たまひし女なるべし四五我心の中に語ふことを終るまへにリベカ其瓶を肩にのせて出來り井にくだりて水を汲みたるにより我彼に請ふ我にのましめよと言ければ四六彼急ぎ其瓶を肩よりおろしていひけるは飮めまた汝の駱駝にものましめんと是に於て我飮しが彼また駱駝にものましめたり四七我彼に問て汝は誰の女なるやといひければミルカがナホルに生たる子ベトエルの女なりといふ是に於て我其鼻に環をつけ其手に手釧をつけたり四八而して我伏てヱホバを拜み吾主人アブラハムの神ヱホバを頌美たりヱホバ我を正き途に導きてわが主人の兄弟の女を其子のために娶しめんとしたまへばなり四九されば汝等若わが主人にむかひて慈惠と眞誠をもて事をなさんと思はば我に告よ然ざるも亦我に告よ然ば我右か左におもむくをえん五〇ラバンとベトエル答て言けるは此事はヱホバより出づ我等汝に善惡を言ふあたはず五一視よリベカ汝の前にをる携へてゆき彼をしてヱホバの言たまひし如く汝の主人の子の妻とならしめよ五二アブラハムの僕彼等の言を聞て地に伏てヱホバを拜めり五三是に於て僕銀の飾品金の飾品および衣服をとりいだしてリベカに與へ亦其兄と母に寶物をあたへたり五四是に於て彼および其從者等食飮して宿りしが朝起たる時彼言我をして吾主人に還らしめよ五五リベカの兄と母言けるは童女を數日の間少くも十日我等と偕にをらしめよしかるのち彼ゆくべし五六彼人之に言ヱホバ吾途に福祉をくだしたまひたるなれば我を阻むるなかれ我を歸してわが主人に往しめよ五七彼等いひけるは童女をよびて其言を問んと五八即ちリベカを呼て之に言けるは汝此人と共に往や彼言ふ往ん五九是に於て彼等妹リベカと其乳媼およびアブラハムの僕と其從者を遣り去しめたり六〇即ち彼等リベカを祝して之にいひけるはわれらの妹よ汝千萬の人の母となれ汝の子孫をして其仇の門を獲しめよ六一是に於てリベカ起て其童女等とともに駱駝にのりて其人にしたがひ往く僕乃ちリベカを導きてさりぬ六二茲にイサク、ラハイロイの井の路より來れり南の國に住居たればなり六三しかしてイサク黄昏に野に出て默想をなしたりしが目を擧て見しに駱駝の來るあり六四リベカ目をあげてイサクを見駱駝をおりて六五僕にいひけるは野をあゆみて我等にむかひ來る者は何人なる

ぞ僕わが主人なりといひければリベカ覆衣をとりて身をおほへり六六茲に僕其凡てなしたる事をイサクに告ぐ六七イサク、リベカを其母サラの天幕に携至りリベカを娶りて其妻となしてこれを愛したりイサクは母にわかれて後茲に慰籍を得たり

第二五章一アブラハム再妻を娶る其名をケトラといふ二彼ジムラン、ヨクシヤン、メダン、ミデアン、イシバク、シユワを生り三ヨクシヤン、シバとデダンを生むデダンの子はアッシユリ族レトシ族リウミ族なり四ミデアンの子はエパ、エペル、ヘノク、アビダ、エルダアなり是等は皆ケトラの子孫なり五アブラハム其所有を盡くイサクに與へたり六アブラハムの妾等の子にはアブラハム其生る間の物をあたへて之をして其子イサクを離れて東にさりて東の國に至らしむ七アブラハムの生存へたる齢の日は即ち百七十五年なりき八アブラハム遐齢に及び老人となり年滿て氣たえ死て其民に加る九其子イサクとイシマエル之をヘテ人ゾハルの子エフロンの野なるマクペラの洞穴に葬れり是はマムレの前にあり一〇即ちアブラハムがヘテの子孫より買たる野なり彼處にアブラハムと其妻サラ葬らる一一アブラハムの死たる後神其子イサクを祝みたまふイサクはベエルラハイロイの邊に住り一二サラの侍婢なるエジプト人ハガルがアブラハムに生たる子イシマエルの傳は左のごとし一三イシマエルの子の名は其名氏と其世代に循ひて言ば是のごとしイシマエルの長子はネバヨテなり其次はケダル、アデビエル、ミブサム一四ミシマ、ドマ、マツサ一五ハダデ、テマ、ヱトル、ネフシ、ケデマ一六是等はイシマエルの子なり是等は其郷黨を其營にしたがひて言る者にして其國に循ひていへば十二の牧伯なり一七イシマエルの齢は百三十七歳なりき彼いきたえ死て其民にくははる一八イシマエルの子等はハビラよりエジプトの前なるシユルまでの間に居住てアッスリヤまでにおよべりイシマエルは其すべての兄弟等のまへにすめり一九アブラハムの子イサクの傳は左のごとしアブラハム、イサクを生り二〇イサク四十歳にしてリベカを妻に娶れりリベカはパダンアラムのスリア人ベトエルの女にしてスリア人ラバンの妹なり二一イサク其妻の子なきに因て之がためにヱホバに祈願をたてければヱホバ其ねがひを聽たまへり遂に其妻リベカ孕みしが二二其子胎の内に爭そひければ然らば我いかで斯てあるべきと言て往てヱホバに問に二三ヱホバ彼に言たまひけるは二の國民汝の胎にあり二の民汝の腹より出て別れん一の民は一の民よりも強かるべし大は小に事へんと二四かくて臨月みちて見しに胎には孿ありき二五先に出たる者は赤くして躰中裘の如し其名をエサウと名けたり二六其後に弟出たるが其手にエサウの踵を持り其名をヤコブとなづけたりリベカが彼等を生し時イサクは六十歳なりき二七茲に童子人となりしがエサウは巧なる獵人にして野の人となりヤコブは質樸なる人にして天幕に居ものとなれり二八イサクは麆を嗜によりてエサウを愛したりしがリベカはヤコブを愛したり二九茲にヤコブ羹を

煮たり時にエサウ野より來りて憊れ居り三〇エサウ、ヤコブにむかひ我憊れたれば請ふ其紅羹其處にある紅羹を我にのませよといふ是をもて彼の名はエドム（紅）と稱らる三一ヤコブ言けるは今日汝の家督の權を我に鬻れ三二エサウいふ我は死んとして居る此家督の權我に何の益をなさんや三三ヤコブまた言けるは今日我に誓へと彼すなはち誓て其家督の權をヤコブに鬻ぬ三四是に於てヤコブ、パンと扁豆の羹とをエサウに與へければ食且飮て起て去り斯エサウ家督の權を藐視じたり

第二六章一アブラハムの時にありし最初の饑饉の外に又其國に饑饉ありければイサク、ゲラルに往てペリシテ人の王アビメレクの許にいたれり二時にヱホバ彼にあらはれて言たまひけるはエジプトに下るなかれ吾汝に示すところの地にをれ三汝此地にとどまれ我汝と共にありて汝を祝まん我是等の國を盡く汝および汝の子孫に與へ汝の父アブラハムに誓ひたる誓言を行ふべし四われ汝の子孫を增て天の星のごとくなし汝の子孫に凡て是等の國を與へん汝の子孫によりて天下の國民皆福祉を獲べし五是はアブラハムわが言に順ひわが職守とわが誡命とわが憲法とわが律法を守りしに因てなり六イサク乃ちゲラルに居しが七處の人其妻の事をとへば我妹なりと言ふリベカは觀に美麗かりければ其處の人リベカの故をもて我を殺さんと謂て彼をわが妻と言をおそれたるなり八イサク久しく彼處にをりし後一日ペリシテ人の王アビメレク牖より望みてイサクが其妻リベカと嬉戲るを見たり九是に於てアビメレク、イサクを召て言けるは彼は必ず汝の妻なり汝なんぞ吾妹といひしやイサク彼に言けるは恐くは我彼のために死るならんと思たればなり一〇アビメレクいひけるは汝なんぞ此事を我等になすや民の一人もし輕々しく汝の妻と寢ることあらんその時は汝罪を我等に蒙らしめんと一一アビメレク乃ちすべて民に皆命じて此人と其妻にさはるものは必ず死すべしと言り一二イサク彼地に種播て其年に百倍を獲たりヱホバ彼を祝みたまふ一三其人大になりゆきて進て盛になり遂に甚だ大なる者となれり一四即ち羊と牛と僕從を多く有しかばペリシテ人彼を嫉みたり一五其父アブラハムの世に其父の僕從が掘たる諸の井はペリシテ人之をふさぎて土を之にみてたり一六茲にアビメレク、イサクに言けるは汝は大に我等よりも強大ければ我等をはなれて去れと一七イサク乃ち彼處をさりてゲラルの谷に天幕を張て其處に住り一八其父アブラハムの世に掘たる水井をイサク茲に復び鑿り其はアブラハムの死たる後ペリシテ人之を塞ぎたればなり斯してイサク其父が之に名けたる名をもて其名となせり一九イサクの僕谷に掘て其處に泉の湧出る井を得たり二〇ゲラルの牧者此水は我儕の所屬なりといひてイサクの僕と爭ひければイサク其井の名をエセク（競爭）と名けたり彼等が己と之を競爭たるによりてなり二一是に於て又他の井を鑿しが彼等是をも爭ひければ其名をシテナ（敵）となづけたり二二イサク乃ち彼處より遷りて他の井を鑿

けるが彼等之をあらそはざりければ其名をレホボテ(廣場)と名けて言けるは今ヱホバ我等の處所を廣くしたまへり我等此地を繁衍ん二三 斯て彼其處よりベエルシバにのぼりしが二四 其夜ヱホバ彼にあらはれて言たまひけるは我は汝の父アブラハムの神なり懼るるなかれ我汝と偕にありて汝を祝み我僕アブラハムのために汝の子孫を増んと二五 是に於て彼處に壇を築きてヱホバの名を龥び天幕を彼處に張り彼處にてイサクの僕井を鑿り二六 茲にアビメレク其友アホザテ及び其軍勢の長ピコルと共にゲラルよりイサクの許に來りければ二七 イサク彼等に言ふ汝等は我を惡み我をして汝等をはなれて去らしめたるなるに何ぞ我許に來るや二八 彼等いひけるは我等確然にヱホバが汝と偕にあるを見たれば我等の間 即ち我等と汝の間に誓詞を立て汝と契約を結ばんと謂へり二九 汝我等に惡事をなすなかれ其は我等は汝を害せず只善事のみを汝になし且汝を安然に去しめたればなり汝はヱホバの祝みたまふ者なり三〇 イサク乃ち彼等のために酒宴を設けたれば彼等食ひ且飲り三一 斯て朝夙に起て互に相誓へり而してイサク彼等を去しめたれば彼等イサクをはなれて安然にかへりぬ三二 其日イサクの僕來りて其ほりたる井につきて之に告て我等水を得たりといへり三三 即ち之をシバとなづく此故に其邑の名は今日までベエルシバ(誓詞の井)といふ三四 エサウ四十歳の時ヘテ人の女ユデテとヘテ人エロンの女バスマテを妻に娶り三五 彼等はイサクとリベカの心の愁煩となれり

第二七章 一 イサク老て目くもりて見るあたはざるに及びて其長子エサウを召て之に吾子よといひければ答へて我此にありといふ二 イサクいひけるは視よ我は今老て何時死るやを知ず三 然ば請ふ汝の器 汝の弓矢を執て野に出でわがために麕を獵て四 わが好む美味を作り我にもちきたりて食はしめよ我死るまへに心に汝を祝せん五 イサクが其子エサウに語る時にリベカ聞ゐたりエサウは麕を獵て携きたらんとて野に往り六 是に於てリベカ其子ヤコブに語りていひけるは我聞ゐたるに汝の父汝の兄エサウに語りて言けらく七 吾ために麕をとりきたり美味を製りて我にくはせよ死るまへに我ヱホバの前にて汝を祝せんと八 然ば吾子よ吾言にしたがひわが汝に命ずるごとくせよ九 汝群畜の所にゆきて彼處より山羊の二箇の善き羔を我にとりきたれ我之をもて汝の父のために其好む美味を製らん一〇 汝之を父にもちゆきて食しめ其死る前に汝を祝せしめよ一一 ヤコブ其母リベカに言けるは兄エサウは毛深き人にして我は滑澤なる人なり一二 恐くは父我に捫ることあらん然らば我は欺く者と父に見えんされば祝をえずして返て呪詛をまねかん一三 其母彼にいひけるは我子よ汝の詛はるる所は我に歸せん只わが言にしたがひ往て取來れと一四 是において彼往て取り母の所にもちきたりければ母すなはち父の好むところの美味を製れり一五 而してリベカ家の中に己の所にある長子エサウの美服をとりて之を季子ヤコブに衣せ一六 又山羊の羔の皮をもて其手と其頸の滑澤なる處とを

掩ひ一七其製りたる美味とパンを子ヤコブの手にわたせり一八彼乃ち父の許にいたりて我父よといひければ我此にありわが子よ汝は誰なると曰ふ一九ヤコブ父にいひけるは我は汝の長子エサウなり我汝が我に命じたるごとくなせり請ふ起て坐しわが麞の肉をくらひて汝の心に我を祝せよ二〇イサク其子に言けるは吾子よ汝いかにして斯速に獲たるや彼言ふ汝の神ヱホバ之を我にあはせたまひしが故なり二一イサク、ヤコブにいひけるはわが子よ請ふ近くよれ我汝に捫て汝がまことに吾子エサウなるや否やをしらん二二ヤコブ父イサクに近よりければイサク之にさはりていひけるは聲はヤコブの聲なれども手はエサウの手なりと二三彼の手其兄エサウの手のごとく毛深かりしに因て之を辨別へずして遂に之を祝したり二四即ちイサクいひけるは汝はまことに吾子エサウなるや彼然りといひければ二五イサクいひけるは我に持きたれ吾子の麞を食ひてわが心に汝を祝せんと是に於てヤコブ彼の許にもちきたりければ食へり又酒をもちきたりければ飮り二六かくて父イサク彼にいひけるは吾子よ近くよりて我に接吻せよと二七彼すなはち近よりて之に接吻しければ其衣の馨香をかぎて彼を祝していひけるは嗚呼吾子の香はヱホバの祝たまへる野の馨香のごとし二八ねがはくは神天の露と地の腴および饒多の穀と酒を汝にたまへ二九諸の民汝につかへ諸の邦汝に躬を鞠ん汝兄弟等の主となり汝の母の子等汝に身をかがめん汝を詛ふ者はのろはれ汝を祝す者は祝せらるべし三〇イサク、ヤコブを祝することを終てヤコブ父イサクの前より出さりし時にあたりて兄エサウ獵より歸り來り三一己も亦美味をつくりて之を其父の許にもちゆき父にいひけるは父よ起て其子の麞を食ひて心に我を祝せよ三二父イサク彼にいひけるは汝は誰なるや彼いふ我は汝の子汝の長子エサウなり三三イサク甚大に戰兢ていひけるは然ば彼麞を獵て之を我にもちきたりし者は誰ぞや我汝がきたるまへに諸の物を食ひて彼を祝したれば彼まことに祝福をうべし三四エサウ父の言を聞て大に哭き痛く泣て父にいひけるは父よ我を祝せよ我をも祝せよ三五イサク言けるは汝の弟偽りて來り汝の祝を奪ひたり三六エサウいひけるは彼をヤコブ(推除者)となづくるは宜ならずや彼が我をおしのくる事此にて二次なり昔にはわが家督の權を奪ひ今はわが祝を奪ひたり又言ふ汝は祝をわがために殘しおかざりしや三七イサク對てエサウにいひけるは我彼を汝の主となし其兄弟を悉く僕として彼にあたへたり又穀と酒とを彼に授けたり然ば吾子よ我何を汝になすをえん三八エサウ父に言けるは父よ父の祝唯一ならんや父よ我を祝せよ我をも祝せよと聲をあげて哭ぬ三九父イサク答て彼にいひけるは汝の住所は地の膏腴にはなれ上よりの天の露にはなるべし四〇汝は劍をもて世をわたり汝の弟に事ん然ど汝繋を離るる時は其軛を汝の頸より振ひおとすを得ん四一エサウ父のヤコブを祝したる其祝の爲にヤコブを惡めり即ちエサウ心に謂けるは父の喪の日近ければ

其時我弟ヤコブを殺さんと四二長子エサウの此言リベカに聞えければ季子ヤコブを呼よせて之に言けるは汝の兄エサウ汝を殺さんとおもひて自ら慰む四三されば吾子よ我言にしたがひ起てハランにゆきわが兄ラバンの許にのがれ四四汝の兄の怒の釋るまで暫く彼とともに居れ四五汝の兄の鬱憤釋て汝をはなれ汝彼になしたる事を忘るるにいたらば我人をやりて汝を彼處よりむかへん我何ぞ一日のうちに汝等二人を喪ふべけんや四六リベカ、イサクに言けるは我はヘテの女等のために世を厭ふにいたるヤコブ若此地の彼女等の如きヘテの女の中より妻を娶らば我身生るも何の利益あらんや

第二八章一 イサク、ヤコブを呼て之を祝し之に命じて言けるは汝カナンの女の中より妻を娶るなかれ二起てパダンアラムに往き汝の母の父ベトエルの家にいたり彼處にて汝の母の兄ラバンの女の中より妻を娶れ三願くは全能の神汝を祝み汝をして子女を多く得せしめ且汝の子孫を増て汝をして多衆の民とならしめ四又アブラハムに賜んと約束せし祝を汝および汝と共に汝の子孫に賜ひ汝をして神がアブラハムにあたへ給ひし此汝が寄寓る地を持たしめたまはんことをと五斯てイサク、ヤコブを遣しければパダンアラムにゆきてラバンの所にいたれりラバンはスリア人ベトエルの子にしてヤコブとエサウの母なるリベカの兄なり六エサウはイサクがヤコブを祝して之をパダンアラムにつかはし彼處より妻を娶しめんとしたるを見又之を祝し汝はカナンの女の中より妻をめとるなかれといひて之に命じたることを見七又ヤコブが其父母の言に順ひてパダンアラムに往しを見たり八エサウまたカナンの女の其父イサクの心にかなはぬを見たり九是においてエサウ、イシマエルの所にゆきて其有る妻の外に又アブラハムの子イシマエルの女ネバヨテの妹マハラテを妻にめとれり一〇茲にヤコブ、ベエルシバより出たちてハランの方におもむきけるが一一一處にいたれる時日暮たれば即ち其處に宿り其處の石をとり枕となして其處に臥て寝たり一二時に彼夢て梯の地にたちゐて其巓の天に達れるを見又神の使者の其にのぼりくだりするを見たり一三ヱホバ其上に立て言たまはく我は汝の祖父アブラハムの神イサクの神ヱホバなり汝が偃臥ところの地は我之を汝と汝の子孫に與へん一四汝の子孫は地の塵沙のごとくなりて西東北南に蔓るべし又天下の諸の族汝と汝の子孫によりて福祉をえん一五また我汝とともにありて凡て汝が往ところにて汝をまもり汝を此地に率返るべし我はわが汝にかたりし事を行ふまで汝をはなれざるなり一六ヤコブ目をさまして言けるは誠にヱホバ此處にいますに我しらざりきと一七乃ち惶懼ていひけるは畏るべき哉此處是即ち神の殿の外ならず是天の門なり一八かくてヤコブ朝夙に起き其枕となしたる石を取り之を立て柱となし膏を其上に沃ぎ一九其處を名をベテル（神殿）と名けたり其邑の名は初はルズといへり二〇ヤコブ乃ち誓をたてていひけるは若神我とともにいまし此わ

がゆく途にて我をまもり食ふパンと衣る衣を我にあたへ二一我をしてわが父の家に安然に歸ることを得せしめたまはばヱホバをわが神となさん二二又わが柱にたてたる此石を神の家となさん又汝がわれにたまふ者は皆必ず其十分の一を汝にささげん

第二九章 一 斯てヤコブ其途にすすみて東の民の地にいたりて二見るに野に井ありて羊の群三其傍に臥ゐたり此井より群に飲へばなり大なる石井の口にあり三羊の群皆其處に集る時に井の口より石をまろばして羊に水飼ひ復故のごとく井の口に石をのせおくなり四ヤコブ人々に言けるは兄弟よ奚よりきたれるや彼等いふ我等はハランより來る五ヤコブ彼等にいひけるは汝等ナホルの子ラバンをしるや彼等識といふ六ヤコブ又かれらにいひけるは彼は安きや彼等いふ安し視よ彼の女ラケル羊と偕に來ると七ヤコブ言ふ視よ日尚高し家畜を聚むべき時にあらず羊に飲ひて往て牧せよ八彼等いふ我等しかする能はず群の皆聚るに及て井の口より石をまろばして羊に飲ふべきなり九ヤコブ尚彼等と語れる時にラケル父の羊とともに來る其は之を牧居たればなり一〇ヤコブ其母の兄ラバンの女ラケルおよび其母の兄ラバンの羊を見しかばヤコブ進みよりて井の口より石をまろばし母の兄ラバンの羊に飲ひたり一一而してヤコブ、ラケルに接吻して聲をあげて啼哭ぬ一二即ちヤコブ、ラケルに己はその父の兄弟にしてリベカの子なることを告ければ彼はしりゆきて父に告たり一三ラバン其妹の子ヤコブの事を聞しかば趨ゆきて之を迎へ之を抱きて接吻し之を家に導きいたれりヤコブすなはち此等の事を悉くラバンに述たり一四ラバン彼にいひけるは汝は誠にわが骨肉なりとヤコブ一月の間彼とともに居る一五茲にラバン、ヤコブにいひけるは汝はわが兄弟なればとて空く我に役事べけんや何の報酬を望むや我に告よ一六ラバン二人の女子を有り姉の名はレアといひ妹の名はラケルといふ一七レアは目弱かりしがラケルは美くして妹し一八ヤコブ、ラケルを愛したれば言ふ我汝の季女ラケルのために七年汝に事ん一九ラバンいひけるは彼を他の人にあたふるよりも汝にあたふるは善し我と偕に居れ二〇ヤコブ七年の間ラケルのために勤たりしが彼を愛するが爲に此を數日の如く見做り二一茲にヤコブ、ラバンに言けるはわが期滿たればわが妻をあたへて我をしてかれの處にいることを得せしめよ二二是に於てラバン處の人を盡く集めて酒宴を設けたりしが二三晩に及びて其女レアを携へて此をヤコブにつれ來れりヤコブ即ち彼の處にいりぬ二四ラバンまた其侍婢ジルパを娘レアに與へて侍婢となさしめたり二五朝にいたりて見るにレアなりしかばヤコブ、ラバンに言けるは汝なんぞ此事を我になしたるや我ラケルのために汝に役事しにあらずや汝なんぞ我を欺くや二六ラバンいひけるは姉より先に妹を嫁しむる事は我國にて爲ざるところなり二七其七日を過せ我等是をも汝に與へん然ば汝是がために尚七年我に事へて勤むべし二八ヤコブ即ち斯なして其七日をすごせしかばラバン其女ラケルをも之

にあたへて妻となさしむ二九またラバン其侍婢ビルハを女ラケルにあたへて侍婢となさしむ三〇ヤコブまたラケルの所にいりぬ彼レアよりもラケルを愛し尚七年ラバンに事たり三一ヱホバ、レアの嫌るるを見て其胎をひらきたまへり然どラケルは姙なきものなりき三二レア孕みて子を生み其名をルベンと名けていひけるはヱホバ誠にわが艱苦を顧みたまへりされば今夫我を愛せんと三三彼ふたたび孕みて子を産みヱホバわが嫌るるを聞たまひしによりて我に是をもたまへりと言て其名をシメオンと名けたり三四彼また孕みて子を生み我三人の子を生たれば夫今より我に膠漆んといへり是によりて其名をレビと名けたり三五彼復姙みて子を生み我今ヱホバを讃美んといへり是によりて其名をユダと名けたり是にいたりて産ことやみぬ

第三〇章一ラケル己がヤコブに子を生ざるを見て其姉を夢みヤコブに言けるは我に子を與へよ然らずば我死んと二ヤコブ、ラケルにむかひて怒を發して言ふ汝の胎に子をやどらしめざる者は神なり我神に代るをえんや三ラケルいふ吾婢ビルハを視よ彼の處に入れ彼子を生てわが膝に置ん然ば我もまた彼によりて子をうるにいたらんと四其仕女ビルハを彼にあたへて妻となさしめたりヤコブ即ち彼の處にいる五ビルハ遂にはらみてヤコブに子を生ければ六ラケルいひけるは神我を監み亦わが聲を聽いれて吾に子をたまへりと是によりて其名をダンと名けたり七ラケルの仕女ビルハ再び姙みて次の子をヤコブに生ければ八ラケル我神の爭をもて姉と爭ひて勝ぬといひて其名をナフタリと名けたり九茲にレア産ことの止たるを見しかば其仕女ジルパをとりて之をヤコブにあたへて妻となさしむ一〇レアの仕女ジルパ、ヤコブに子を産ければ一一レア福來れりといひて其名をガドと名けたり一二レアの仕女ジルパ次子をヤコブに生ければ一三レアいふ我は幸なり女等我を幸なる者となさんと其名をアセルとなづけたり一四茲に麥苅の日にルベン出ゆきて野にて戀茄を獲これを母レアの許にもちきたりければラケル、レアにいひけるは請ふ我に汝の子の戀茄をあたへよ一五レア彼にいひけるは汝のわが夫を奪しは微き事ならんや然るに汝またわが子の戀茄をも奪んとするやラケルいふ然ば汝の子の戀茄のために夫是夜汝と寢べし一六晩におよびてヤコブ野より來りければレア之をいでむかへて言けるは我誠にわが子の戀茄をもて汝を雇ひたれば汝我の所にいらざるべからずヤコブ即ち其夜彼といねたり一七神レアに聽たまひければ彼姙みて第五の子をヤコブに生り一八レアいひけるは我わが仕女を夫に與へたれば神我に其値をたまへりと其名をイツサカルと名けたり一九レア復姙みて第六の子をヤコブに生り二〇レアいひけるは神我に嘉賚を賜ふ我六人の男子を生たれば夫今より我と偕にすまんと其名をゼブルンとなづけたり二一其後彼女子を生み其名をデナと名けたり二二茲に神ラケルを念ひ神彼に聽て其胎を開きたまひければ二三彼姙みて男子を生て曰ふ神わが恥辱を洒ぎたまへりと二四乃ち

其名をヨセフと名けて言ふヱホバ又他の子を我に加へたまはんと　二五 茲にラケルのヨセフを生むに及びてヤコブ、ラバンに言けるは我を歸して故郷に我國に往しめよ二六 わが汝に事て得たる所の妻子を我に與へて我を去しめよわが汝になしたる役事は汝之を知るなり二七 ラバン彼にいひけるは若なんぢの意にかなはばねがはくは留れ我ヱホバが汝のために我を祝みしをトひ得たり二八 又言ふ汝の望む値をのべよ我之を與ふべし二九 ヤコブ彼にいひけるは汝は如何にわが汝に事しか如何に汝の家畜を牧しかを知る三〇 わが來れる前に汝の有たる者は鮮少なりしが增て遂に群をなすに至る吾來りてよりヱホバ汝を祝みたまへり然ども我は何時吾家を成にいたらんや三一 彼言ふ我何を汝に與へんかヤコブいひけるは汝何者をも我に與ふるに及ばず汝若此事を我になさば我復汝の群を牧守らん三二 即ち我今日偏く汝の群をゆきめぐりて其中より凡て斑なる者點なる者を移し綿羊の中の凡て黑き者を移し山羊の中の點なる者と斑なる者を移さん是わが値なるべし三三 後に汝來りてわが傭値をしらぶる時わが義我にかはりて應をなすべし若わが所に山羊の斑ならざる者點ならざる者あり綿羊の黑からざる者あらば皆盜る者となすべし三四 ラバンいふ汝の言の如くなさんことを願ふ三五 是に於て彼其日牡山羊の斑入なる者斑點なる者を移し凡て牝山羊の斑駁なる者斑點なる者都て身に白色ある者を移し又綿羊の中の凡て黑き者を移して其子等の手に付せり三六 而して彼己とヤコブの間に三日程の隔をたてたりヤコブはラバンの餘の群を牧ふ三七 茲にヤコブ楊柳と楓と桑の青枝を執り皮を剥て白紋理を成り枝の白き所をあらはし三八 其皮をはぎたる枝を群の來りて飮むところの水槽と水鉢に立て群に向はしめ群をして水のみの來る時に孕ましむ三九 群すなはち枝の前に孕みて斑入の者斑駁なる者斑點なる者を產しかば四〇 ヤコブ其羔羊を區分ちラバンの群の面を其群の斑入なる者と黑き者に對はしめたりしが己の群をば一所に置てラバンの群の中にいれざりき四一 又家畜の壯健き者孕みたる時はヤコブ水槽の中にて其家畜の目の前に彼枝を置き枝の傍において孕ましむ四二 然ど家畜の羸弱かる時は之を置ず是に因て羸弱者はラバンのとなり壯健者はヤコブのとなれり四三 是に於て其人大に富饒になりて多の家畜と婢 僕および駱駝驢馬を有にいたれり

第三一章

一 茲にヤコブ、ラバンの子等がヤコブわが父の所有を盡く奪ひ吾父の所有によりて此凡の榮光を獲たりといふを聞り二 亦ヤコブ、ラバンの面を見るに己に對すること疇昔の如くならず三 時にヱホバ、ヤコブに言たまへるは汝の父の國にかへり汝の親族に至れ我汝と偕にをらんと四 是に於てヤコブ人をやりてラケルとレアを野に招きて群の所に至らしめ五 之にいひけるは我汝等の父の面を見るに其我に對すること疇昔の如くならず然どわが父の神は我と偕にいますなり六 汝等がしるごとく我力を竭して汝らの父に事へたるに七 汝等の父我を欺きて十次も

わが値を易たり然ども神彼の我を害するを容したまはず八 彼斑駮なる者は汝の傭値なるべしといへば群の生ところ皆斑駮なり斑入の者は汝の値なるべしといへば群の生ところ皆斑入なり九 斯神汝らの父の家畜を奪て我に與へたまへり一〇 群の孕む時に當りて我夢に目をあげて見しに群の上に乗る牡羊は皆斑入の者斑駮なる者白點なる者なりき一一 時に神の使者夢の中に我に言ふヤコブよと我此にありと對へければ一二 乃ち言ふ汝の目をあげて見よ群の上に乗る牡羊は皆斑入の者斑駮なる者白點なる者なり我ラバンが凡て汝に爲すところを鑒みる一三 我はベテルの神なり汝彼處にて柱に膏を沃ぎ彼處にて我に誓を立たり今起て斯地を出て汝の親族の國に歸れと一四 ラケルとレア對て彼にいひけるは我等の父の家に尚われらの分あらんや我等の産業あらんや一五 我等は父に他人のごとくせらるるにあらずや其は父我等を賣り亦我等の金を蝕減したればなり一六 神がわが父より取たまひし財寶は我等とわれらの子女の所屬なり然ば都て神の汝に言たまひし事を爲せ一七 是に於てヤコブ起て子等と妻等を駱駝に乗せ一八 其獲たる凡の家畜と凡の所有即ちパダンアラムにてみづから獲たるところの家畜を携へ去てカナンの地に居所の其父イサクの所におもむけり一九 時にラバンは羊の毛を剪んとて往てありラケル其父のテラピムを竊めり二〇 ヤコブは其去ことをスリア人ラバンに告ずして潜に忍びいでたり二一 即ち彼その凡の所有を挈へて逃去り起て河を渡りギレアデの山にむかふ二二 ヤコブの逃去しこと三日におよびてラバンに聞えければ二三 彼兄弟を率てその後を追ひしが七日路をへてギレアデの山にて之に追及ぬ二四 神夜の夢にスリア人ラバンに臨みて汝慎みて善も惡もヤコブに道なかれと之に告たまへり二五 ラバン遂にヤコブに追及しがヤコブは山に天幕を張ゐたればラバンもその兄弟と共にギレアデの山に天幕をはれり二六 而してラバン、ヤコブに言けるは汝我に知しめずして忍びいで吾女等を劍をもて執たる者のごとくにひき往り何ぞかかる事をなすや二七 何故に汝潜に逃さり我をはなれて忍いで我につげざりしや我歡喜と歌謠と鼗と琴をもて汝を送りしならんを二八 何ぞ我をしてわが孫と女に接吻するを得ざらしめしや汝愚妄なる事をなせり二九 汝等に害をくはふるの能わが手にあり然ど汝等の父の神昨夜我に告て汝つつしみて善も惡もヤコブに語べからずといへり三〇 汝今父の家を甚く戀て歸んと願ふは善れども何ぞわが神を竊みたるや三一 ヤコブ答へてラバンにいひけるは恐くは汝強て女を我より奪ならんと思ひて懼れたればなり三二 汝の神を持る者を見ば之を生しおくなかれ我等の兄弟等の前にて汝の何物我の許にあるかをみわけて之を汝に取れと其はヤコブ、ラケルが之を竊しを知ざればなり三三 是に於てラバン、ヤコブの天幕に入りレアの天幕に入りまた二人の婢の天幕にいりしが視いださざればレアの天幕を出てラケルの天幕にいる三四 ラケル已にテラピムを執て之を駱駝の鞍の下にいれて其上に坐しければ

ラバン遍く天幕の中をさぐりたれども見いださざりき三五 時にラケル父にいひけるは婦女の經の習例の事わが身にあれば父の前に起あたはず願くは主之を怒り給ふなかれと是をもて彼さがしたれども遂にテラピムを見いださざりき三六 是に於てヤコブ怒てラバンを謫即ちヤコブ應てラバンに言けるは我何の愆あり何の罪ありてか汝火急く我をおふや三七 汝わが物を盡く索たるが汝の家の何物を見いだしたるや此にわが兄弟と汝の兄弟の前に其を置て我等二人の間をさばかしめよ三八 我この二十年汝とともにありしが汝の牝綿羊と牝山羊其胎を殰ねしことなし又汝の群の牡綿羊は我食はざりき三九 又噛裂れたる者は我これを汝の所に持きたらずして自ら之を補へり又晝竊るるも夜竊るるも汝わが手より之を要めたり四〇 我は是ありつ晝は暑に夜は寒に犯されて目も寐るの遑なく四一 此二十年汝の家にありたり汝の二人の女の爲に十四年汝の群のために六年汝に事たり然に汝は十次もわが値を易たり四二 若わが父の神アブラハムの神イサクの畏む者我とともにいますにあらざれば汝今必ず我を空手にて去しめしならん神わが苦難とわが手の勞苦をかへりみて昨夜汝を責たまへるなり四三 ラバン應てヤコブに言けるは女等はわが女子等はわが子群はわが群汝が見る者は皆わが所屬なり我今日此わが女等とその生たる子等に何をなすをえんや四四 然ば來れ我と汝二人契約をむすび之を我と汝の間の證憑となすべし四五 是に於てヤコブ石を執りこれを建て柱となせり四六 ヤコブ又その兄弟等に石をあつめよといひければ即ち石をとりて垤を成れり斯て彼等彼處にて垤の上に食す四七 ラバン之をエガルサハドタ（證憑の垤）と名けヤコブ之をギレアデ（證憑の垤）と名けたり四八 ラバン此垤今日われとなんぢの間の證憑たりといひしによりて其名はギレアデと稱らる四九 又ミヅパ（觀望樓）と稱らる其は彼我等が互にわかるるに及べる時ねがはくはヱホバ我と汝の間を監みたまへといひたればなり五〇 彼又いふ汝もしわが女をなやまし或はわが女のほかに妻をめとらば人の我らと偕なる者なきも神と汝のあひだにいまして證をなしたまふ五一 ラバン又ヤコブにいふ我われとなんぢの間にたてたる此垤を視よ柱をみよ五二 此垤 證とならん柱 證とならん我この垤を越て汝を害せじ汝この垤この柱を越て我を害せざれ五三 アブラハムの神ナホルの神彼等の父の神われらの間を鞫きたまへとヤコブ乃ちその父イサクの畏む者をさして誓へり五四 斯てヤコブ山にて犧牲をささげその兄弟を招きてパンを食しむ彼等パンを食ひて山に宿れり五五 ラバン朝蚤に起き其孫と女に接吻して之を祝せりしかしてラバンゆきて其所にかへりぬ

第三二章 一 茲にヤコブその途に進みしが神の使者これにあふ二 ヤコブこれを見て是は神の陣營なりといひてその處の名をマハナイム（二營）となづけたり三 かくてヤコブ己より前に使者をつかはしてセイルの地エドムの野にをる其兄エサウの所にいたらしむ四 即ち之に命じて言ふ汝等かくわが主エサウにいふべし

汝の僕ヤコブ斯いふ我ラバンの所に寄寓て今までとどまれり五我牛驢馬羊僕婢あり人をつかはしてわが主に告ぐ汝の前に恩をえんことを願ふなりと六使者ヤコブにかへりて言けるは我等汝の兄エサウの許に至れり彼四百人をしたがへて汝をむかへんとて來ると七是によりヤコブ大におそれ且くるしみ己とともにある人衆および羊と牛と駱駝を二隊にわかちて八言けるはエサウもし一の隊に來りて之をうたば遺れるところの一隊逃るべし九ヤコブまた言けるはわが父アブラハムの神わが父イサクの神ヱホバよ汝嘗て我につげて汝の國にかへり汝の親族に到れ我なんぢを善せんといひたまへり一〇我はなんぢが僕にほどこしたまひし恩惠と眞實を一も受るにたらざるなり我わが杖のみを持てこのヨルダンを濟りしが今は二隊とも成にいたれり一一願くはわが兄の手よりエサウの手より我をすくひいだしたまへ我彼をおそる恐くは彼きたりて我をうち母と子とに及ばん一二汝は嘗て我かならず汝を惠み汝の子孫を濱の沙の多して數ふべからざるが如くなさんといひたまへりと一三彼その夜彼處に宿りその手にいりし物の中より兄エサウへの禮物をえらべり一四即ち牝山羊二百牡山羊二十牝羊二百牡羊二十一五乳駱駝と其子三十牝牛四十牡牛十牝の驢馬二十驢馬の子十一六而して其群と群とをわかちて之を僕の手に授し僕にいひけるは吾に先ちて進み群と群との間を隔ておくべし一七又その前者に命じて言けるはわが兄エサウ汝にあひ汝に問て汝は誰の人にして何處にゆくや是汝のまへなる者は誰の所有なるやといはば一八汝の僕ヤコブの所有にしてわが主エサウにたてまつる禮物なり視よ彼もわれらの後にをるといふべしと一九彼かく第二の者第三の者および凡て群々にしたがひゆく者に命じていふ汝等エサウにあふ時はかくの如く之にいふべし二〇且汝等いへ視よなんぢの僕ヤコブわれらの後にをるとヤコブおもへらく我わが前におくる禮物をもて彼を和めて然るのち其面を觀ん然ば彼われを接遇ることあらんと二一是によりて禮物かれに先ちて行く彼は其夜陣營の中に宿りしが二二其夜おきいでて二人の妻と二人の仕女および十一人の子を導きてヤボクの渡をわたれり二三即ち彼等をみちびきて川を渉らしめ又その有る物を渡せり二四而してヤコブ一人遺りしが人ありて夜の明るまで之と角力す二五其人己のヤコブに勝ざるを見てヤコブの髀の樞骨に觸しかばヤコブの髀の樞骨其人と角力する時挫離たり二六其人夜明んとすれば我をさらしめよといひければヤコブいふ汝われを祝せずばさらしめずと二七是に於て其人かれにいふ汝の名は何なるや彼いふヤコブなり二八其人いひけるは汝の名は重てヤコブととなふべからずイスラエルととなふべし其は汝神と人とに力をあらそひて勝たればなりと二九ヤコブ問て請ふ汝の名を告よといひければ其人何故にわが名をとふやといひて乃ち其處にて之を祝せり三〇是を以てヤコブその處の名をベニエル（神の面）となづけて曰ふ我面と面をあはせて神とあひ見てわが生命なほ存

るなりと三一斯て彼日のいづる時にベニエルを過たりしが其髀のために歩行はかどらざりき三二是故にイスラエルの子孫は今日にいたるまで髀の樞の巨筋を食はず是彼人がヤコブの髀の巨筋に觸たるによりてなり

第三三章一爰にヤコブ目をあげて視にエサウ四百人をひきゐて來しかば即ち子等を分ちてレアとラケルと二人の仕女とに付し二仕女とその子等を前におきレアとその子等を次におきラケルとヨセフを後におきて三自彼等の前に進み七度身を地にかがめて遂に兄に近づきけるに四エサウ趨てこれを迎へ抱きてその頸をかかへて之に接吻すしかして二人ともに啼泣り五エサウ目をあげて婦人と子等を見ていひけるは是等の汝とともなる者は誰なるやヤコブいひけるは神が僕に授たまひし子なりと六時に仕女等その子とともに近よりて拜し七レアも亦その子とともに近よりて拜す其後にヨセフとラケルちかよりて拜す八エサウ又いひけるは我あへる此諸の群は何のためなるやヤコブいふ主の目の前に恩を獲んがためなり九エサウいひけるは弟よわが有ところの者は足り汝の所有は汝自ら之を有てよ一〇ヤコブいひけるは否我もし汝の目の前に恩をえたらんには請ふわが手よりこの禮物を受よ我汝の面をみるに神の面をみるがごとくなり汝また我をよろこぶ一一神我をめぐみたまひて我が有ところの者足りされば請ふわが汝にたてまつる禮物を受よと彼に強ければ終に受たり一二エサウいひけるは我等いでたちてゆかん我汝にさきだつべし一三ヤコブ彼にいひけるは主のしりたまふごとく子等は幼弱し又子を持る羊と牛と我にしたがふ若一日これを驅すごさば群みな死ん一四請ふわが主僕にさきだちて進みたまへ我はわが前にゆくところの家畜と子女に足にまかせて徐に導きすすみセイルにてわが主に詣らん一五エサウいひけるは然ば我わがひきゐる人數人を汝の所にのこさんヤコブいひけるは何ぞ此を須んや我をして主の目の前に恩を得せしめよ一六是に於てエサウは此日その途にしたがひてセイルに還りぬ一七斯てヤコブ、スコテに進みて己のために家を建て又家畜のために廬を作れり是によりて其處の名をスコテ（廬）といふ一八ヤコブ、パダンアラムより來りて恙なくカナンの地にあるシケムの邑に至り邑の前にその天幕を張り一九遂にその天幕をはりしところの野をシケムの父ハモルの子等の手により金百枚にて購とり二〇彼處に壇をきづきて之をエル、エロヘ、イスラエル（イスラエルの神なる神）となづけたり

第三四章一レアのヤコブに生たる女デナその國の婦女を見んとていでゆきしが二その國の君主なるヒビ人ハモルの子シケムこれを見て之をひきいれこれと寢てこれを辱しむ三而してその心ふかくヤコブの女デナを戀ひて彼此女を愛しこの女の心をいひなだむ四斯てシケムその父ハモルに語り此少き女をわが妻に獲よといへり五ヤコブ彼がその女子デナを汚したることを聞しかどもその子等家畜を牧て野にをりしによりて其かへるまでヤ

コブ默しゐたり六シケムの父ハモル、ヤコブの許にいできたりて之と語らふ七茲にヤコブの子等野より來りしが之を聞しかば其人々憂へかつ甚く怒れり是はシケムがヤコブの女と寢てイスラエルに愚なる事をなしたるに因り是のごとき事はなすべからざる者なればなり八ハモル彼等に語りていひけるはわが子シケム心になんぢの女を戀ふねがはくは彼をシケムにあたへて妻となさしめよ九汝ら我らと婚姻をなし汝らの女を我らにあたへ我らの女汝らに娶れ一〇かくして汝等われらとともに居るべし地は汝等の前にあり此に住て貿易をなし此にて產業を獲よ一一シケム又デナの父と兄弟等にいひけるは我をして汝等の目のまへに恩を獲せしめよ汝らが我にいふところの者は我あたへん一二いかに大なる聘物と禮物を要るも汝らがわれに言ふごとくあたへん唯この女を我にあたへて妻となさしめよ一三ヤコブの子等シケムとその父ハモルに詭りて答へたり即ちシケムがその妹デナを汚したるによりて一四彼等これに語りていひけるは我等この事を爲あたはず割禮をうけざる者にわれらの妹をあたふるあたはず是われらの恥辱なればなり一五然ど斯せば我等汝らに允さん若し汝らの中の男子みな割禮をうけてわれらの如くならば一六我等の女子を汝等にあたへ汝らの女子をわれらに娶り汝らと偕にをりて一の民とならん一七汝等もし我等に聽ずして割禮をうけずば我等女子をとりて去べしと一八彼等の言ハモルとハモルの子シケムの心にかなへり一九此若き人ヤコブの女を愛するによりて其事をなすを遲せざりき彼はその父の家の中にて最貴れたる者なり二〇ハモルとその子シケム乃ちその邑の門にいたり邑の人々に語りていひけるは二一是人々は我等と睦し彼等をして此地に住て此に貿易をなさしめよ地は廣くして彼らを容るにたるなり我ら彼らの女を妻にめとり我らの女をかれらに與へん二二若唯われらの中の男子みな彼らが割禮をうくるごとく割禮を受なば此人々われらに聽て我等と偕にをり一の民となるべし二三然ばかれらの家畜と財產と其諸の畜は我等が所有となるにあらずや只かれらに聽んしからば彼らわれらとともにをるべしと二四邑の門に出入する者みなハモルとその子シケムに聽したがひ邑の門に出入する男子皆割禮を受たり二五斯て三日におよび彼等その痛をおぼゆる時ヤコブの子二人即ちデナの兄弟なるシメオンとレビ各劍をとり往て思よらざる時に邑を襲ひ男子を悉く殺し二六利刄をもてハモルとその子シケムをころしシケムの家よりデナを携へいでたり二七而してヤコブの子等ゆきて其殺されし者を剝ぎ其邑をかすめたり是彼等がその妹を汚したるによりてなり二八またその羊と牛と驢馬およびその邑にある者と野にある者二九並にその諸の貨財を奪ひその子女と妻等を悉く虜にし家の中なる物を悉く掠めたり三〇ヤコブ、シメオンとレビに言けるは汝等我を累はし我をして此國の人即ちカナン人とベリジ人の中に避嫌れしむ我は數すくなければ彼ら集りて我をせめ我をころさん然ば我とわが家

滅さるべし三一彼らいふ彼豈われらの妹を娼妓のごとくしてよからんや

第三五章一茲に神ヤコブに言たまひけるは起てベテルにのぼりて彼處に居り汝が昔に兄エサウの面をさけて逃る時に汝にあらはれし神に彼處にて壇をきづけと二ヤコブ乃ちその家人および凡て己とともなる者にいふ汝等の中にある異神を棄て身を清めて衣服を易よ三我等起てベテルにのぼらん彼處にて我わが苦患の日に我に應へわが往ところの途にて我とともに在せし神に壇をきづくべし四是に於て彼等その手にある異神およびその耳にある耳環を盡くヤコブに與へしかばヤコブこれをシケムの邊なる橡樹の下に埋たり五斯て彼等いでたちしが神其四周の邑々をして懼れしめたまひければヤコブの子の後を追ふ者なかりき六ヤコブ及び之と共なる諸の人遂にカナンの地にあるルズに至る是即ちベテルなり七彼かしこに壇をきづき其處をエルベテルと名けたり是は兄の面をさけて逃る時に神此にて己にあらはれ給しによりてなり八時にリベカの乳媼デボラ死たれば之をベテルの下にて橡樹の下に葬れり是によりてその樹の名をアロンバクテ(哀哭の橡)といふ九ヤコブ、パダンアラムより歸りし時神復これにあらはれて之を祝したまふ一〇神かれに言たまはく汝の名はヤコブといふ汝の名は重てヤコブとよぶべからずイスラエルを汝の名となすべしとその名をイスラエルと稱たまふ一一神また彼にいひたまふ我は全能の神なり生よ殖よ國民および多の國民汝よりいで又王等なんぢの腰よりいでん一二わがアブラハムおよびイサクに與し地は我これを汝にあたへん我なんぢの後の子孫にその地をあたふべしと一三神かれと言たまひし處より彼をはなれて昇りたまふ一四是に於てヤコブ神の己と言いひたまひし處に柱すなはち石の柱を立て其上に酒を灌ぎまた其上に膏を沃げり一五而してヤコブ神の己にものいひたまひし處の名をベテルとなづけたり一六かくてヤコブ等ベテルよりいでたちしがエフラタに至るまでは尚路の隔ある處にてラケル産にのぞみその産おもかりき一七彼難産にのぞめる時産婆之にいひけるは懼るなかれ汝また此男の子を得たり一八彼死にのぞみてその魂さらんとする時その子の名をベノニ(吾苦痛の子)と呼たり然ど其父これをベニヤミン(右手の子)となづけたり一九ラケル死てエフラタの途に葬らる是即ちベテレヘムなり二〇ヤコブその墓に柱を立たり是はラケルの墓の柱といひて今日まで在り二一イスラエル復いでたちてエダルの塔の外にその天幕を張り二二イスラエルかの地に住る時にルベン往て父の妾ビルハと寢たりイスラエルこれを聞く夫ヤコブの子は十二人なり二三即ちレアの子はヤコブの長子ルベンおよびシメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンなり二四ラケルの子はヨセフとベニヤミンなり二五ラケルの仕女ビルハの子はダンとナフタリなり二六レアの仕女ジルパの子はガドとアセルなり是等はヤコブの子にしてパダンアラムにて彼に生れたる者なり二七ヤコブ、キリアテ

アルバのマムレにゆきてその父イサクに至れり是すなはちヘブロンなり彼處はアブラハムとイサクの寄寓しところなり二八イサクの齢は百八十歳なりき二九イサク老て年滿ち氣息たえ死にて其民にくははれりその子エサウとヤコブ之をはうむる

第三六章一エサウの傳はかくのごとしエサウはすなはちエドムなり二エサウ、カナンの女の中より妻をめとれり即ちヘテ人エロンの女アダおよびヒビ人ヂベオンの女なるアナの女アホリバマ是なり三又イシマエルの女ネバヨテの妹バスマテをめとれり四アダはエリパズをエサウに生みバスマテはリウエルを生み五アホリバマはヱウシ、ヤラムおよびコラを生り是等はエサウの子にしてカナンの地に於て彼に生れたる者なり六エサウその妻と子女およびその家の諸の人並に家畜と諸の畜類およびそのカナンの地にて獲たる諸の物を挈へて弟ヤコブをはなれて他の地にゆけり七其は二人の富有多くして倶にをるあたはざればなり彼らが寄寓しところの地はかれらの家畜のためにかれらを容るをえざりき八是に於てエサウ、セイル山に住りエサウはすなはちエドムなり九セイル山にをりしエドミ人の先祖エサウの傳はかくのごとし一〇エサウの子の名は左のごとしエサウの妻アダの子はエリパズ、エサウの妻バスマテの子はリウエル一一エリパズの子はテマン、オマル、ゼポ、ガタムおよびケナズなり一二テムナはエサウの子エリパズの妾にしてアマレクをエリパズに生り是等はエサウの妻アダの子なり一三リウエルの子は左の如しナハテ、ゼラ、シヤンマおよびミザ是等はエサウの妻バスマテの子なり一四ヂベオンの女なるアナの女にしてエサウの妻なるアホリバマの子は左のごとし彼ヱウシ、ヤラムおよびコラをエサウに生り一五エサウの子孫の侯たる者は左のごとしエサウの冢子エリパスの子にはテマン侯オマル侯ゼポ侯ケナズ侯一六コラ侯ガタム侯アマレク侯是等はエリパズよりいでたる侯にしてエドムの地にありき是等はアダの子なり一七エサウの子リウエルの子は左のごとしナハテ侯ゼラ侯シヤンマ侯ミザ侯是等はリウエルよりいでたる侯にしてエドムの地にありき是等はエサウの妻バスマテの子なり一八エサウの妻アホリバマの子は左のごとしヱウシ侯ヤラム侯コラ侯是等はアナの女にしてエサウの妻なるアホリバマよりいでたる侯なり一九是等はエサウすなはちエドムの子孫にしてその侯たる者なり二〇素より此地に住しホリ人セイルの子は左のごとしロタン、シヨバル、ヂベオン、アナ二一デシヨン、エゼル、デシヤン是等はセイルの子ホリ人の中の侯にしてエドムの地にあり二二ロタンの子はホリ、ヘマムなりロタンの妹はテムナ二三シヨバルの子は左のごとしアルワン、マナハテ、エバル、シポ、オナム二四ヂベオンの子は左のごとし即ちアヤとアナ此アナその父ヂベオンの驢馬を牧をりし時曠野にて温泉を發見り二五アナの子は左のごとしデシヨンおよびアホリバマ、アホリバマはアナの女なり二六デシヨンの子は左のごとしヘムダン、エシバン、イテラン、ケラン二七エゼル

の子は左のごとしビルハン、ザワン、ヤカン二八デシヤンの子は左のごとしウヅ、アラン二九ホリ人の侯たる者は左のごとしロタン侯ショバル侯ヂベオン侯アナ侯三〇デシヨン侯エゼル侯デシヤン侯是等はホリ人の侯にしてその所領にしたがひてセイルの地にあり三一イスラエルの子孫を治むる王いまだあらざる前にエドムの地を治めたる王は左のごとし三二ベオルの子ベラ、エドムに王たりその都の名はデナバといふ三三ベラ薨てボヅラのゼラの子ヨバブ之にかはりて王となる三四ヨバブ薨てテマン人の地のホシヤムこれにかはりて王となる三五ホシヤム薨てベダデの子ハダデの子ハダこれに代て王となる彼モアブの野にてミデアン人を撃しことあり其邑の名はアビテといふ三六ハダデ薨てマスレカのサムラこれにかはりて王となる三七サラム薨て河の旁なるレホボテのサウル之にかはりて王となる三八サウル薨てアクボルの子バアルハナンこれに代りて王となる三九アクボルの子バアルハナン薨てハダル之にかはりて王となる其都の名はパウといふその妻の名はメヘタベルといひてマテレデの女なりマテレデはメザハブの女なり四〇エサウよりいでたる侯の名はその宗族と居處と名に循ひていへば左のごとしテムナ侯アルワ侯エテテ侯四一アホリバマ侯エラ侯ピノン侯四二ケナズ侯テマン侯ミブザル侯四三マグデエル侯イラム侯是等はエドムの侯にして其領地の居處によりて言る者なりエドミ人の先祖はエサウ是なり

第三七章

一ヤコブはカナンの地に住り即ちその父が寄寓し地なり二ヤコブの傳は左のごとしヨセフ十七歳にしてその兄弟と偕に羊を牧ふヨセフは童子にしてその父の妻ビルハの子およびジルパの子と偕たりしが彼等の惡き事を父につぐ三ヨセフは老年子なるが故にイスラエルその諸の兄弟よりも深くこれを愛しこれがために綵る衣を製れり四その兄弟等父がその諸の兄弟よりも深く彼を愛するを見て彼を惡み穩和に彼にものいふことを得せざりき五茲にヨセフ夢をみてその兄弟に告ければ彼等愈これを惡めり六ヨセフ彼等にいひけるは請ふわが夢たる此夢を聽け七我等田の中に禾束をむすび居たるにわが禾束おき且立り而して汝等の禾束環りたちてわが禾束を拜せり八その兄弟等之にいひけるは汝眞にわれらの君となるや眞に我等ををさむるにいたるやとその夢とその言のために益これを惡めり九ヨセフ又一の夢をみて之をその兄弟に述ていひけるは我また夢をみたるに日と月と十一の星われを拜せりと一〇則ちこれをその父と兄弟に述ければ父かれを戒めて彼にいふ汝が夢しこの夢は何ぞや我と汝の母となんぢの兄弟と實にゆきて地に鞠て汝を拜するにいたらんやと一一斯しかばその兄弟かれを嫉めり然どその父はこの言をおぼえたり一二茲にその兄弟等シケムにゆきて父の羊を牧ゐたりしかば一三イスラエル、ヨセフにいひけるは汝の兄弟はシケムにて羊を牧をるにあらずや來れ汝を彼等につかはさんヨセフ父にいふ我ここにあり一四父かれに

いひけるは請ふ往て汝の兄弟と群の恙なきや否を見てかへりて我につげよと彼をヘブロンの谷より遣はしければ遂にシケムに至る。一五 或人かれに遇ふに彼野にさまよひをりしかば其人かれに問て汝何をたづぬるやといひければ一六 彼いふ我はわが兄弟等をたづぬ請ふかれらが羊をかひをる所をわれに告よ一七 その人いひけるは彼等は此をされり我かれらがドタンにゆかんといふを聞たりと是に於てヨセフその兄弟の後をおひゆきドタンにて之に遇ふ一八 ヨセフの彼等に近かざる前に彼ら之を遙に見てこれを殺さんと謀り一九 互にいひけるは視よ作夢者きたる二〇 去來彼をころして阱に投いれ或惡き獸これを食たりと言ん而して彼の夢の如何になるかを觀るべし二一 ルベン聞てヨセフを彼等の手より拯ひださんとして言けるは我等これを殺すべからず二二 ルベンまた彼らにいひけるは血をながすなかれ之を曠野の此阱に投いれて手をこれにつくるなかれと是は之を彼等の手よりすくひだして父に歸んとてなりき二三 茲にヨセフ兄弟の許に到りければ彼等ヨセフの衣即ちその着たる綵る衣を褫ぎ二四 彼を執て阱に投いれたり阱は空にしてその中に水あらざりき二五 斯して彼等坐てパンを食ひ目をあげて見しに一群のイシマエル人駱駝に香物と乳香と沒藥をおはせてエジプトにくだりゆかんとてギレアデより來る二六 ユダその兄弟にいひけるは我儕弟をころしてその血を匿すも何の益かあらん二七 去來彼をイシマエル人に賣ん彼は我等の兄弟われらの肉なればわれらの手をかれにつくべからずと兄弟等これを善とす二八 時にミデアンの商旅經過ければヨセフを阱よりひきあげ銀二十枚にてヨセフをイシマエル人に賣り彼等すなはちヨセフをエジプトにたづさへゆきぬ二九 茲にルベンかへりて阱にいたり見しにヨセフ阱にをらざりしかばその衣を裂き三〇 兄弟の許にかへりて言ふ童子はをらず嗚呼我何處にゆくべきや三一 斯て彼等ヨセフの衣をとり牡山羊の羔をころしてその衣を血に濡し三二 その綵る衣を父におくり遣していひけるは我等これを得たりなんぢの子の衣なるや否を知れと三三 父これを知りていふわが子の衣なり惡き獸彼をくらへりヨセフはかならずさかれしならんと三四 ヤコブその衣を裂き麻布を腰にまとひ久くその子のためになげけり三五 その子女みな起てかれを慰むれどもその慰謝をうけずして我は哀きつつ陰府にくだりて我子のもとにゆかんといふ斯その父かれのために哭ぬ三六 偖ミデアン人はエジプトにてパロの侍衛の長ポテパルにヨセフを賣り

第三八章

一 當時ユダ兄弟をはなれて下りアドラム人名はヒラといふ者の近邊に天幕をはりしが二 ユダかしこにてカナン人名はシュアといふ者の女子を見これを娶りてその所にいる三 彼はらみて男子を生みければユダその名をエルとなづく四 彼ふたたび孕みて男子を生みその名をオナンとなづけ五 またかさねて孕みて男子を生みてその名をシラとなづく此子をうみける時ユダはクジブにありき六 ユダその長子エルのために妻をむかふその

名をタマルといふ七ユダの長子エル、ヱホバの前に惡をなしたればヱホバこれを死しめたまふ八茲にユダ、オナンにいひけるは汝の兄の妻の所にいりて之をめとり汝の兄をして子をえせしめよ九オナンその子の己のものとならざるを知たれば兄の妻の所にいりし時兄に子をえせしめざらんために地に洩したり一〇斯なせし事ヱホバの目に惡かりければヱホバ彼をも死しめたまふ一一ユダその媳タマルにいひけるは嫠婦となりて汝の父の家にをりわが子シラの人となるを待てと恐らくはシラも亦その兄弟のごとく死るならんとおもひたればなりタマルすなはち往てその父の家にをる一二日かさなりて後シュアの女ユダの妻死たりユダ慰をいれてその友アドラム人ヒラとともにテムナにのぼりその羊毛を剪る者の所にいたる一三茲にタマルにつげて視よなんぢの舅はその羊の毛を剪んとてテムナにのぼるといふ者ありしかば一四彼その嫠の服を脱すて被衣をもて身をおほひつつみテムナの途の側にあるエナイムの入口に坐す其はシラ人となりたれども己これが妻にせられざるを見たればなり一五彼その面を蔽ひゐたりしかばユダこれを見て娼妓ならんとおもひ一六途の側にて彼に就き請ふ來りて我をして汝の所にいらしめよといふ其はその子の妻なるをしらざればなり彼いひけるは汝何を我にあたへてわが所にいらんとするや一七ユダいひけるは我群より山羊の羔をおくらん彼いふ汝其をおくるまで質をあたへんか一八ユダ何の質をなんぢに與ふべきやといふに彼汝の印と綬と汝の手の杖をといひければ即ちこれを與へて彼の所にいりぬ彼ユダに由て姙めり一九彼起て去りその被衣をぬぎすて嫠婦の服をまとふ二〇かくてユダ婦の手より質をとらんとてその友アドラム人の手に托して山羊の羔をおくりけるが彼婦を見ざれば二一その處の人に問て途の側なるエナイムの娼妓は何處にをるやといふに此には娼妓なしといひければ二二ユダの許にかへりていふ我彼を見いださず亦その處の人此には娼妓なしといへりと二三ユダいひけるは彼にとらせおけ恐くはわれら笑柄とならん我この山羊の羔をおくりたるに汝かれを見ざるなりと二四三月ばかりありて後ユダに告る者ありていふ汝の媳タマル姦淫をなせり亦その姦淫によりて姙めりユダいひけるは彼を曳いだして焚べし二五彼ひきいだされし時その舅にいひつかはしけるは是をもてる人によりて我は妊りと彼すなはち請ふこの印と綬と杖は誰の所屬なるかを辨別よといふ二六ユダこれを見識ていひけるは彼は我よりも正しわれ彼をわが子わがシラにあたへざりしによりてなりと再びこれを知らざりき二七かくて產の時にいたりて見るにその胎に孿あり二八その產時手出しかば產婆是首にいづといひて絳き線をとりてその手にしばりしが二九手を引こむるにあたりて兄弟いでたれば汝なんぞ圻いづるやその圻汝に歸せんといへり故にその名はペレヅ(圻)と稱る三〇その兄弟手に絳線のある者後にいづその名はゼラとよばる

第三九章

一ヨセフ挈へられてエジプトにくだりしがエジプト人ポテパル、パロの臣侍衞の長なる者彼を其處にたづさへくだれるイシマエル人の手よりこれを買ふ二ヱホバ、ヨセフとともに在す彼亨通者となりてその主人なるエジプト人の家にをる三その主人ヱホバの彼とともにいますを見またヱホバがかれの手の凡てなすところを亨通しめたまふを見たり四是によりてヨセフ彼の心にかなひて其近侍となる彼ヨセフにその家を宰どらしめその所有を盡くその手に委たり五彼ヨセフにその家とその有る凡の物をつかさどらせし時よりしてヱホバ、ヨセフのために其エジプト人の家を祝みたまふ即ちヱホバの祝福かれが家と田に有る凡の物におよぶ六彼その有る物をことごとくヨセフの手にゆだねその食ふパンの外は何もかへりみざりき夫ヨセフは容貌麗しくして顏美しかりき七これらの事の後その主人の妻ヨセフに目をつけて我と寢よといふ八ヨセフ拒みて主人の妻にいひけるは視よわが主人の家の中の物をかへりみずその有るものことごとくわが手に委ぬ九この家には我より大なるものなし又主人何をも我に禁ぜず只汝を除くのみ汝はその妻なればなり然ば我いかで此おほいなる惡をなして神に罪ををかすをえんや一〇彼日々にヨセフに言よりたれどもヨセフきかずして之といねず亦與にをらざりき一一當時ヨセフその職をなさんとて家にいりしが家の人一箇もその内にをらざりき一二時に彼婦その衣を執て我といねよといひければヨセフ衣を彼の手に棄おきて外に遁いでたり一三彼ヨセフがその衣を己の手に棄おきて遁いでしを見て一四その家の人々を呼てこれにいふ視よヘブル人を我等の所につれ來て我等にたはむれしむ彼我といねんとて我の所にいり來しかば我大聲によばはれり一五彼わが聲をあげて呼はるを聞しかばその衣をわが許にすておきて外に遁いでたりと一六其衣を傍に置て主人の家に歸るを待つ一七かくて彼是言のごとく主人につげていふ汝が我らに携へきたりしヘブルの僕われにたはむれんとて我許にいりきたりしが一八我聲をあげてよばはりしかばその衣を我許にすておきて遁いでたり一九主人その妻が己につげて汝の僕斯のごとく我になせりといふ言を聞て怒を發せり二〇是に於てヨセフの主人彼を執へて獄にいる其獄は王の囚徒を繫ぐ所なりヨセフ彼處にて獄にをりしが二一ヱホバ、ヨセフとともに在して之に仁慈を加へ典獄の恩顧をこれにえさせたまひければ二二典獄獄にある囚人をことごとくヨセフの手に付せたり其處になす所の事は皆ヨセフこれをなすなり二三典獄そのまかせたる所の事は何をもかへりみざりき其はヱホバ、ヨセフとともにいませばなりヱホバかれのなすところをさかえしめたまふ

第四〇章

一これらの事の後エジプト王の酒人と膳夫その主エジプト王に罪ををかす二パロその二人の臣すなはち酒人の長と膳夫の長を怒りて三之を侍衞の長の家の中なる獄に幽囚ふヨセフが繫れをる所なり四侍衞の長ヨセフをして彼等の側に侍しめ

たればヨセフ之につかふ彼等幽囚れて日を經たり五茲に獄に繫れたるエジプト王の酒人と膳夫の二人ともに一夜の中に各夢を見たりその夢はおのおのその解明にかなふ六ヨセフ朝に及びて彼等の所に入て視るに彼等物憂に見ゆ七是に於てヨセフその主人の家に己とともに幽囚をるパロの臣に問て汝等なにゆゑに今日は顏色あやしきやといふに八彼等これにいふ我等夢を見たれど之を解く者なしとヨセフ彼等にいひけるは解く事は神によるにあらずや請ふ我に述よ九酒人の長その夢をヨセフに述て之にいふ我夢の中に見しにわが前に一の葡萄樹あり一〇その樹に三の枝あり芽いで花ひらきて葡萄なり球をなして熟たるがごとくなりき一一時にパロの爵わが手にあり我葡萄を摘てこれをパロの爵に搾りその爵をパロの手に奉たり一二ヨセフ彼にいひけるはその解明は是のごとし三の枝は三日なり一三今より三日の中にパロなんぢの首を擧げ汝を故の所にかへさん汝は曩に酒人たりし時になせし如くパロの爵をその手に奉ぐるにいたらん一四然ば請ふ汝善ならん時に我をおもひて我に恩惠をほどこし吾事をパロにのべてこの家よりわれを出せ一五我はまことにヘブル人の地より掠れ來しものなればなりまた此にても我は牢にいれらるるがごとき事はなさざりしなり一六茲に膳夫の長その解明の善りしを見てヨセフにいふ我も夢を得て見たるに白きパン三筐わが首にありて一七その上の筐には膳夫がパロのために作りたる各種の饌ありしが鳥わが首の筐の中より之をくらへり一八ヨセフこたへていひけるはその解明はかくのごとし三の筐は三日なり一九今より三日の中にパロ汝の首を擧はなして汝を木に懸んしかして鳥汝の肉をくらひとるべしと二〇第三日はパロの誕辰なればパロその諸の臣僕に筵席をなし酒人の長と膳夫の長をして首をその臣僕の中に擧しむ二一即ちパロ酒人の長をその職にかへしければ彼爵をパロの手に奉たり二二されど膳夫の長は木に懸らるヨセフの彼等に解明せるがごとし二三然るに酒人の長ヨセフをおぼえずして之を忘れたり

第四一章 一二年の後パロ夢ることあり即ち河の濱にたちて二視るに七の美しき肥たる牝牛河よりのぼりて葦を食ふ三その後また七の醜き痩たる牛河よりのぼり河の畔にて彼牛の側にたちしが四その醜き痩たる牛かの美しき肥たる七の牛を食ひつくせりパロ是にいたりて寤む五彼また寢て再び夢るに一の莖に七の肥たる佳き穗いできたる六其のちに又しなびて東風に燒たる七の穗いできたりしが七その七のしなびたる穗かの七の肥實りたる穗を呑盡せりパロ寤て見に夢なりき八パロ朝におよびてその心安からず人をつかはしてエジプトの法術士とその博士を皆ことごとく召し之にその夢を述たり然ど之をパロに解うる者なかりき九時に酒人の長パロに告ていふ我今日わが過をおもひいづ一〇曽てパロその僕を怒て我と膳夫の長を侍衞の長の家に幽囚へたまひし時一一我と彼ともに一夜のうちに夢み各その解明にかなふ夢をみたりしが一二彼處に侍衞の長の僕なる若き

ヘブル人我らと偕にあり我等これにのべたれば彼われらの夢を解その夢にしたがひて各人に解明をなせり一三しかして其事かれが解たるごとくなりて我はわが職にかへり彼は木に懸らる一四是に於てパロ人をやりてヨセフを召しければ急ぎてこれを獄より出せりヨセフすなはち髭を薙り衣をかへてパロの許にいり來る一五パロ、ヨセフにいひけるは我夢をみたれど之をとく者なし聞に汝は夢をききて之を解くことをうると云ふ一六ヨセフ、パロにこたへていひけるは我によるにあらず神パロの平安を告たまはん一七パロ、ヨセフにいふ我夢に河の岸にたちて見るに一八河より七の肥たる美しき牝牛のぼりて葦を食ふ一九後また弱く甚だ醜き瘠たる七の牝牛のぼりきたる其惡き事エジプト全國にわが未だ見ざるほどなり二〇その瘠たる醜き牛初の七の肥たる牛を食ひつくしたりしが二一已に腹にいりても其腹にいりし事しれず尚前のごとく醜かりき我是にいたりて寤めたり二二我また夢に見るに七の實たる佳き穗一の莖にいできたる二三その後にまたいぢけ萎びて東風にやけたる七の穗生じたりしが二四そのしなびたる穗かの七の佳穗を呑つくせり我これを法術士に告たれどもわれにこれをしめすものなし二五ヨセフ、パロにいひけるはパロの夢は一なり神その爲んとする所をパロに示したまへるなり二六七の美牝牛は七年七の佳穗も七年にして夢は一なり二七其後にのぼりし七の瘠たる醜き牛は七年にしてその東風にやけたる七の空穗は七年の饑饉なり二八是はわがパロに申すところなり神そのなさんとするところをパロにしめしたまふ二九エジプトの全地に七年の大なる豐年あるべし三〇その後に七年の凶年おこらん而してエジプトの地にありし豐作を皆忘るにいたるべし饑饉國を滅さん三一後にいたるその饑饉はなはだはげしきにより前の豐作國の中に知れざるにいたらん三二パロのふたたび夢をかさね見たまひしは神がこの事をさだめて速に之をなさんとしたまふなり三三さればパロ慧く賢き人をえらみて之にエジプトの國を治めしめたまふべし三四パロこれをなし國中に官吏を置てその七年の豐年の中にエジプトの國の五分の一を取たまふべし三五而して其官吏をして來らんとするその善き年の諸の糧食を斂めてその穀物をパロの手に蓄へしめ糧食を邑々にかこはしめたまふべし三六その糧食を國のために畜藏へおきてエジプトの國にのぞむ七年の饑饉に備へ國をして饑饉のために滅ざらしむべし三七パロとその諸の臣僕此事を善とす三八是に於てパロその臣僕にいふ我等神の靈のやどれる是のごとき人を看いだすをえんやと三九しかしてパロ、ヨセフにいひけるは神是を盡く汝にしめしたまひたれば汝のごとく慧く賢き者なかるべし四〇汝わが家を宰るべしわが民みな汝の口にしたがはん唯位においてのみ我は汝より大なるべし四一パロ、ヨセフにいひけるは視よ我汝をエジプト全國の冢宰となすと四二パロすなはち指環をその手より脱して之をヨセフの手にはめ之を白布を衣せ金の索をその項にかけ四三之をして己のもてる次の輅に乗しめ

下にゐよと其前に呼しむ是彼をエジプト全國の冢宰となせり四四 パロ、ヨセフにいひけるは我はパロなりエジプト全國に汝の允准をえずして手足をあぐる者なかるべしと四五 パロ、ヨセフの名をザフナテパネアと名けまたオンの祭司ポテパルの女アセナテを之にあたへて妻となさしむヨセフいでてエジプトの地をめぐる四六 ヨセフはエジプトの王パロのまへに立し時三十歳なりきヨセフ、パロのまへを出て遍くエジプトの地を巡れり四七 七年の豐年の中に地山なして物を生ず四八 ヨセフすなはちエジプトの地にありしその七年の糧食を斂めてその糧食を邑々に藏む即ち邑の周圍の田圃の糧食を其邑の中に藏む四九 ヨセフ海隅の沙のごとく甚だ多く穀物を儲へ遂に數ふることをやむるに至る其は數かぎり無ればなり五〇 饑饉の歳のいたらざる前にヨセフに二人の子うまる是はオンの祭司ポテパルの女アセナテの生たる者なり五一 ヨセフその冢子の名をマナセ（忘）となづけて言ふ神我をしてわが諸の苦難とわが父の家の凡の事をわすれしめたまふと五二 又次の子の名をエフライム（多く生る）となづけていふ神われをしてわが艱難の地にて多くの子をえせしめたまふと五三 爰にエジプトの國の七年の豐年をはり五四 ヨセフの言しごとく七年の凶年きたりはじむその饑饉は諸の國にあり然どエジプト全國には食物ありき五五 エジプト全國饑し時民さけびてパロに食物を乞ふパロ、エジプトの諸の人にいひけるはヨセフに往け彼が汝等にいふところをなせと五六 饑饉全地の面にありヨセフすなはち諸の倉廩をひらきてエジプト人に賣わたせり饑饉ますますエジプトの國にはげしくなる五七 饑饉諸の國にはげしくなりしかば諸國の人エジプトにきたりヨセフにいたりて穀物を買ふ

第四二章一 ヤコブ、エジプトに穀物あるを見しかばその子等にいひけるは汝等なんぞたがひに面を見あはするや二 ヤコブまたいふ我エジプトに穀物ありと聞り彼處にくだりて彼處より我等のために買きたれ然らばわれら生るを得て死をまぬかれんと三 ヨセフの十人の兄弟エジプトにて穀物をかはんとて下りゆけり四 されどヨセフの弟ベニヤミンはヤコブこれをその兄弟とともに遣さざりきおそらくは災難かれの身にのぞむことあらんと思たればなり五 イスラエルの子等穀物を買んとて來る者とともに來る其はカナンの地に饑饉ありたればなり六 時にヨセフは國の總督にして國の凡の人に賣ことをなせりヨセフの兄弟等來りてその前に地に伏て拜す七 ヨセフその兄弟を見てこれを知たれども知ざる者のごとくして荒々しく之にものいふ即ち彼等に汝等は何處より來れるやといへば彼等いふ糧食を買んためにカナンの地より來れりと八 ヨセフはその兄弟をしりたれども彼等はヨセフをしらざりき九 ヨセフその昔に彼等の事を夢たる夢を憶いだし彼等に言けるは汝等は間者にして此國の隙を窺んとて來れるなり一〇 彼等之にいひけるはわが主よ然らず唯糧食をかはんとて僕等は來れるなり一一 我等はみな一箇の人の子

にして篤實なる者なり僕等は間者にあらず一二ヨセフ彼等にいひけるは否汝等は此地の隙を窺んとて來れるなり一三彼等いひけるは僕等は十二人の兄弟にしてカナンの地の一箇の人の子なり季子は今日父とともにをる又一人はをらずなりぬ一四ヨセフかれらにいひけるはわが汝等につげて汝等は間者なりといひしはこの事なり一五汝等斯してその眞實をあかすべしパロの生命をさして誓ふ汝等の末弟ここに來るにあらざれば汝等は此をいづるをえじ一六汝等の一人をやりて汝等の弟をつれきたらしめよ汝等をば繫ぎおきて汝等の言をためし汝らの中に眞實あるや否をみんパロの生命をさして誓ふ汝等はかならず間者なりと一七彼等を皆ともに三日のあひだ幽囚おけり一八三日におよびてヨセフ彼等にいひけるは我神を畏る汝等是なして生命をえよ一九汝等もし篤實なる者ならば汝らの兄弟の一人をしてこの獄に繫れしめ汝等は穀物をたづさへゆきてなんぢらの家々の饑をすくへ二〇但し汝らの末弟を我につれきたるべしさすればなんぢらの言の眞實あらはれて汝等死をまぬかるべし彼等すなはち斯なせり二一茲に彼らたがひに言けるは我等は弟の事によりて信に罪あり彼等は彼が我らに只管にねがひし時にその心の苦を見ながら之を聽ざりき故にこの苦われらにのぞめるなり二二ルベンかれらに對ていひけるは我なんぢらにいひて童子に罪ををかすなかれといひしにあらずや然るに汝等きかざりき是故に視よ亦彼の血をながせし罪をたださると二三彼等はヨセフが之

を解するをしらざりき其は互に通辨をもちひたればなり二四ヨセフ彼等を離れゆきて哭き復かれらにかへりて之とかたり遂にシメオンを彼らの中より取りその目のまへにて之を縛れり二五而してヨセフ命じてその器に穀物をみたしめ其人々の金を嚢に返さしめ又途の食を之にあたへしむヨセフ斯かれらになせり二六彼等すなはち穀物を驢馬におはせて其處をさりしが二七其一人旅邸にて驢馬に糧を與んとて嚢をひらき其金を見たり其は嚢の口にありければなり二八彼その兄弟にいひけるは吾金は返してあり視よ嚢の中にありと是において彼等膽を消し懼れてたがひに神の我らになしたまふ此事は何ぞやといへり二九かくて彼等カナンの地にかへりて父ヤコブの所にいたり其身にありし事等を悉く之につげていひけるは三〇彼國の主荒々しく我等にものいひ我らをもて國を偵ふ者となせり三一我ら彼にいふ我等は篤實なる者なり間者にあらず三二我らは十二人の兄弟にして同じ父の子なり一人はをらずなり季のは今日父とともにカナンの地にありと三三國の主なるその人われらにいひけるは我かくして汝等の篤實なるをしらん汝等の兄弟の一人を吾もとにのこし糧食をたづさへゆきて汝らの家々の饑をすくへ三四しかして汝らの季の弟をわが許につれきたれ然れば我なんぢらが間者にあらずして篤實なる者たるをしらん我なんぢらの兄弟を汝等に返し汝等をしてこの國にて交易をなさしむべしと三五茲に彼等その嚢を傾たるに視よ各人の金包その嚢のなかにあり

彼等とその父金包を見ておそれたり三六その父ヤコブ彼等にいひけるは汝等は我をして子を喪はしむヨセフはをらずなりシメオンもをらずなりたるにまたベニヤミンを取んとす是みなわが身にかかるなり三七ルベン父に告ていふ我もし彼を汝につれかへらずば吾ふたりの子を殺せ彼をわが手にわたせ我之をなんぢにつれかへらん三八ヤコブいひけるはわが子はなんぢらとともに下るべからず彼の兄は死て彼ひとり遺たればなり若なんぢらが行ところの途にて災難かれの身におよばば汝等はわが白髪をして悲みて墓にくだらしむるにいたらん

第四三章一饑饉その地にはげしかりき二茲に彼等エジプトよりもちきたりし穀物を食つくせし時父かられらに再びゆきて少許の糧食を買きたれといひければ三ユダ父にかたりていひけるは彼人かたく我等をいましめていふ汝らの弟汝らとともにあるにあらざれば汝らはわが面をみるべからずと四汝もし弟をわれらとともに遣さば我等下て汝のために糧食を買ふべし五されど汝もし彼をつかはさずば我等くだらざるべし其はかの人われらにむかひ汝等の弟なんぢらとともにあるにあらざれば汝ら吾面をみるべからずといひたればなりと六イスラエルいひけるは汝等なにゆゑに汝等に尚弟のあることを彼人につげて我を惡くなすや七彼等いふ其人われらの模様とわれらの親族を問ただして汝らの父は尚生存へをるや汝等は弟をもつやといひしにより其言の條々にしたがひて彼につげたるなり我等いかでか彼が汝等の弟をつれくだれといふならんとしるをえん八ユダ父イスラエルにいひけるは童子をわれとともに遣はせ我等たちて往ん然らば我儕と汝およびわれらの子女生ることを得て死をまぬかるべし九我彼の身を保はん汝わが手にかれを問へ我もし彼を汝につれかへりて汝のまへに置ずば我永遠に罪をおはん一〇我儕もし濡滯ことなかりしならば必ずすでにゆきて再びかへりしならん一一父イスラエル彼等にいひけるは然ば斯なせ汝等國の名物を器にいれ携へくだりて彼人に禮物とせよ乳香少許、蜜少許、香物、沒藥、胡桃および巴旦杏一二又手に一倍の金を取りゆけ汝等の嚢の口に返してありし彼金を再び手にたづさへ行べし恐くは差謬にてありしならん一三且また汝らの弟を挈へ起てふたたび其人の所にゆけ一四ねがはくは全能の神その人のまへにて汝等を矜恤みその人をして汝等の他の兄弟とベニヤミンを放ちかへさしめたまはんことを若われ子に別るべくあらば別れんと一五是に於てかの人々その禮物を執り一倍の金を手に執りベニヤミンを携へて起てエジプトにくだりヨセフの前に立つ一六ヨセフ、ベニヤミンの彼らと偕なるを見てその家宰にいひけるはこの人々を家に導き畜を屠て備へよこの人々卓午に我とともに食をなすべければなり一七其人ヨセフのいひしごとくなし其人この人々をヨセフの家に導けり一八人々ヨセフの家に導かれたるによりて懼れいひけるは初めにわれらの嚢にかへりてありし金の事のために我等はひきいれらる是われらを抑留

へて我等にせまり執へて奴隷となし且われらの驢馬を取んとするなりと一九彼等すなはちヨセフの家宰に進みよりて家の入口にて之にかたりて二〇いひけるは主よ我等實に最初くだりて糧食を買たり二一しかるに我等旅邸に至りて嚢を啓き見るに各人の金その嚢の口にありて其金の量全かりし然ば我等これを手にもちかへれり二二又糧食を買ふ他の金をも手にもちくだる我等の金を嚢にいれたる者は誰なるかわれらは知ざるなり二三彼いひけるは汝ら安ぜよ懼るなかれ汝らの神汝らの父の神財寶を汝等の嚢におきて汝らに賜ひしなり汝らの金は我にとどけりと遂にシメオンを彼等の所にたづさへいだせり二四かくて其人この人々をヨセフの家に導き水をあたへてその足を濯はしめ又その驢馬に飼草をあたふ二五彼等其處にて食をなすなりと聞しかば禮物を調へてヨセフの日午に來るをまつ二六茲にヨセフ家にかへりしかば彼等その手の禮物を家にもちきたりてヨセフの許にいたり地に伏てこれを拜す二七ヨセフかれらの安否をとふていふ汝等の父汝らが初にかたりしその老人は恙なきや尚いきながらへをるや二八彼等こたへてわれらの父汝の僕は恙なくしてなほ生ながらへをるといひ身をかがめ禮をなす二九ヨセフ目をあげてその母の子なる己の弟ベニヤミンを見ていひけるは是は汝らが初に我にかたりし汝らの若き兄弟なるや又いふわが子よ願はくは神汝をめぐみたまはんことをと三〇ヨセフその弟のために心焚るがごとくなりしかば急ぎてその泣べきところを尋ね室にいりて其處に泣り三一而して面をあらひて出で自から抑へて食をそなへよといふ三二すなはちヨセフはヨセフ彼等は彼等陪食するエジプト人はエジプト人と別々に之を供ふ是はエジプト人ヘブル人と共に食することをえざるによる其事エジプト人の穢はしとするところなればなり三三かくて彼等ヨセフの前に坐るに長子をばその長たるにしたがひて坐らせ若き者をばその幼少にしたがひてすわらせければその人々駭きあへり三四ヨセフ己のまへより皿を彼等に供ふベニヤミンの皿は他の人のよりも五倍おほかりきかれら飲てヨセフとともに樂めり

第四四章一茲にヨセフその家宰に命じていふこの人々の嚢にその負うるほど糧食を充せ各人の金をその嚢の口に置れ二またわが杯すなはち銀の杯を彼の少き者の嚢の口に置てその穀物の金子とともにあらしめよと彼がヨセフがいひし言のごとくなせり三かくて夜のあくるにおよびてその人々と驢馬をかへしけるが四かれら城邑をいでてなほ程とほからぬにヨセフ家宰にいひけるは起てかの人々の後を追ひおひつきし時之にいふべし汝らなんぞ惡をもて善にむくゆるや五其はわが主がもちひて飲み又用ひて常に卜ふ者にあらずや汝らかくなすは惡しと六是に於て家宰かれらにおひつきてこの言をかれらにいひければ七かれら之にいふ主なにゆゑに是事をいひたまふや僕等きはめてこの事をなさず八視よ我らの嚢の口にありし金はカナンの地より

汝の所にもちかへれり然ば我等いかで汝の主の家より金銀をぬすまんや九 僕等の中誰の手に見あたるも其者は死べし我等またわが主の奴隷となるべし一〇 彼いひけるはさらば汝らの言のごとくせん其の見あたりし者はわが奴隷となるべし汝等は咎なしと一一 是において彼等急ぎて各その嚢を地におろし各その嚢をひらきしかば一二 彼すなはち索し長者よりはじめて少者にをはるに杯はベニヤミンの嚢にありき一三 斯有しかば彼等その衣を裂きおのおのその驢馬に荷を負せて邑にかへる一四 しかしてユダとその兄弟等ヨセフの家にいたるにヨセフなほ其處にをりしかばその前に地に伏す一五 ヨセフかれらにいひけるは汝等がなしたるこの事は何ぞや我のごとき人は善く卜ひうる者なるをしらざるや一六 ユダいひけるは我等主に何をいはんや何をのべんや如何にしてわれらの正直をあらはさんや神僕等の罪を摘發したまへり然ば我等およびこの杯の見あたりし者倶に主の奴隷となるべし一七 ヨセフいひけるはきはめて然せじ杯の手に見あたりし人はわが奴隷となるべし汝等は安然に父にかへりのぼるべし一八 時にユダかれに近よりていひけるはわが主よ請ふ僕をして主の耳に一言いふをえせしめよ僕にむかひて怒を發したまふなかれ汝はパロのごとくにいますなり一九 昔にわが主僕等に問て汝等は父あるや弟あるやといひたまひしかば二〇 我等主にいへり我等にわが父あり老人なり又その老年子なる少者ありその兄は死てその母の遺せるは只是のみ故に父これを愛すと

二一 汝また僕等にいひたまはく彼を我許につれくだり我をして之に目をつくることをえせしめよと二二 われら主にいへり童子父を離るをえず若父をはなるるならば父死べしと二三 汝また僕等にいひたまはく汝らの季の弟汝等とともに下るにあらざれば汝等ふたたびわが面を見るべからずと二四 我等すなはちなんぢの僕わが父の所にかへりのぼりて主の言をこれに告たり二五 我らの父再びゆきて少許の糧食を買きたれといひければ二六 我らいふ我らくだりゆくことをえずわれらの季の弟われらと共にあらば下りゆくべし其は季の弟われらと共にあるにあらざれば彼人の面をみるをえざればなりと二七 なんぢの僕わが父われらにいふ汝らのしるごとく吾妻われに二人を生しが二八 その一人出てわれをはなれたれば必ず裂ころされしならんと思へり我今にいたるまで彼を見ず二九 なんぢら是をも我側より取ゆかんに若災害是の身におよぶあらば遂にわが白髪をして悲みて墓にくだらしむるにいたらんと三〇 抑父の生命と童子の生命とは相結びてあれば我なんぢの僕わが父に歸りいたらん時に童子もしわれらと共に在ずば如何ぞや三一 父童子の在ざるを見ば死るにいたらん然れば僕等なんぢの僕われらの父の白髪をして悲みて墓にくだらしむるなり三二 僕わが父に童子の事を保ひて我もし是を汝につれかへらずば永久に罪を父に負んといへり三三 されば請ふ僕をして童子にかはりをりて主の奴隷とならしめ童子をしてその兄弟とともに歸りのぼらしめたまへ三四 我いか

でか童子を伴はずして父の許に上りゆくべけん恐くは災害の父におよぶを見ん

第四五章 一 茲にヨセフその側にたてる人々のまへに自ら禁ぶあたはざるに至りければ人皆われを離ていでよと呼はれり是をもてヨセフが己を兄弟にあかしたる時一人も之とともにたつものなかりき 二 ヨセフ聲をあげて泣りエジプト人これを聞きパロの家またこれを聞く 三 ヨセフすなはちその兄弟にいひけるは我はヨセフなりわが父はなほ生ながらへをるやと兄弟等その前に愕き懼れて之にこたふるをえざりき 四 ヨセフ兄弟にいひけるは請ふ我にちかよれとかれらすなはち近よりければ言ふ我はなんぢらの弟 ヨセフなんぢらがエジプトにうりたる者なり 五 されど汝等我をここに賣しをもて憂ふるなかれ身を恨るなかれ神生命をすくはしめんとて我を汝等の前につかはしたまへるなり 六 この二年のあひだ饑饉國の中にありしが尚五年の間 耕すことも穫こともなかるべし 七 神汝等の後を地につたへんため又大なる救をもて汝らの生命を救はんために我を汝等の前に遣したまへり 八 然ば我を此につかはしたる者は汝等にはあらず神なり神われをもてパロの父となしその全家の主となしエジプト全國の宰となしたまへり 九 汝等いそぎ父の許にのぼりゆきて之にいへ汝の子ヨセフかく言ふ神われをエジプト全國の主となしたまへりわが所にくだれ遲疑なかれ 一〇 汝ゴセンの地に住べし斯汝と汝の子と汝の子の子および汝の羊と牛 並に汝のすべて有ところの者われの近方にあるべし 一一 なほ五年の饑饉あるにより我其處にてなんぢを養はん恐くは汝となんぢの家族およびなんぢの凡て有ところの者匱乏ならん 一二 汝等の目とわが弟 ベニヤミンの目の視るごとく汝等にこれをいふ者はわが口なり 一三 汝等わがエジプトにて亨る顯榮となんぢらが見たる所とを皆 悉く父につげよ汝ら急ぎて父を此にみちびき下るべし 一四 而してヨセフその弟 ベニヤミンの頸を抱へて哭にベニヤミンもヨセフの頸をかかへて哭く 一五 ヨセフ亦その諸の兄弟に接吻し之をいだきて哭く是のち兄弟等ヨセフと言ふ 一六 茲にヨセフの兄弟等きたれりといふ聲パロの家にきこえければパロとその臣僕これを悦ぶ 一七 パロすなはちヨセフにいひけるは汝の兄弟に言べし汝等かく爲せ汝等の畜に物を負せ往てカナンの地に至り 一八 なんぢらの父となんぢらの家族を携へて我にきたれ我なんぢらにエジプトの地の嘉物をあたへん汝等國の膏腴を食ふことをうべしと 一九 今汝命をうく汝等かく爲せ汝等エジプトの地より車を取ゆきてなんぢらの子女と妻等を載せ汝等の父を導きて來れ 二〇 また汝等の器を惜み視るなかれエジプト全國の嘉物は汝らの所屬なればなり 二一 イスラエルの子等すなはち斯なせりヨセフ、パロの命にしたがひて彼等に車をあたへかつ途の餱糧をかれらにあたへたり 二二 又かれらに皆おのおの衣一襲を與へたりしがベニヤミンには銀三百と衣五襲をあたへたり 二三 彼また斯のごとく父に餽れり即ち驢馬十疋にエジ

プトの嘉物をおはせ牝の驢馬十疋に父の途の用に供ふる穀物と糧と肉をおはせて餽れり二四 斯して兄弟をかへして去しめ之にいふ汝等途にて相あらそふなかれと二五 かれらエジプトより上りてカナンの地にゆきその父ヤコブにいたり二六 之につげてヨセフは尚いきてをりエジプト全國の宰となりをるといふしかるにヤコブの心なほ寒冷なりき其はこれを信ぜざればなり二七 彼等またヨセフの己にいひたる言をことごとく之につげたりその父ヤコブ、ヨセフがおのれを載んとておくりし車をみるにおよびて其氣おのれにかへれり二八 イスラエルすなはちいふ足りわが子ヨセフなほ生をるわれ死ざるまへに往て之を視ん

第四六章一 イスラエルその己につける諸の者とともに出たちベエルシバにいたりてその父イサクの神に犠牲をささぐ二 神夜の異象にイスラエルにかたりてヤコブよヤコブよといひたまふ三 ヤコブわれ此にありといひければ神いひたまふ我は神なり汝の父の神なりエジプトにくだることを懼るなかれわれ彼處にて汝を大なる國民となさん四 我汝と共にエジプトに下るべし亦かならず汝を導のぼるべしヨセフ手をなんぢの目の上におかんと五 かくてヤコブ、ベエルシバをたちいでたりイスラエルの子等すなはちパロの載んとておくりたる車に父ヤコブと己の子女と妻等を載せ六 その家畜とカナンの地にてえたる貨財をたづさへ斯してヤコブとその子孫皆ともにエジプトにいたれり七 ヤコブかくその子と子の子およびその女と子の女すなはちその子孫を皆ともなひてエジプトにつれゆけり八 イスラエルの子のエジプトにくだれる者の名は左のごとしヤコブとその子等ヤコブの長子はルベン九 ルベンの子はヘノク、パル、ヘヅロン、カルミ一〇 シメオンの子はヱムエル、ヤミン、オハデ、ヤキン、ゾハルおよびカナンの婦のうめる子シヤウル一一 レビの子はゲルシヨン、コハテ、メラリ一二 ユダの子エル、オナン、シラ、ペレヅ、ゼラ但しエルとオナンはカナンの地に死たりペレヅの子はヘヅロンおよびハムルなり一三 イツサカルの子はトラ、プワ、ヨブ、シムロン一四 ゼブルンの子はセレデ、エロン、ヤリエルなり一五 是等および女子デナはレアがパダンアラムにてヤコブにうみたる者なりその男子女子あはせて三十三人なりき一六 ガドの子はゼボン、ハギ、シユニ、エヅボン、エリ、アロデ、アレリ一七 アセルの子はヱムナ、イシワ、イスイ、ベリアおよびその妹サラ並にベリアの子ヘベルとマルキエルなり一八 是等はラバンがその女レアにあたへたるジルパの子なり彼是等をヤコブにうめり都合十六人一九 ヤコブの妻ラケルの子はヨセフとベニヤミンなり二〇 エジプトの國にてヨセフにマナセとエフライムうまれたり是はオンの祭司ポテパルの女アセナテが生たる者なり二一 ベニヤミンの子はベラ、ベケル、アシベル、ゲラ、ナアマン、エヒ、ロシ、ムツピム、ホパム、アルデ二二 是等はラケルの子にしてヤコブにうまれたる者なり都合十四人二三 ダンの子はホシム二四 ナフタリの子はヤジエル、グニ、ヱゼル、シレム二五 是等はラバンがその女

ラケルにあたへたるビルハの子なり彼これらをヤコブにうめり都合七人二六ヤコブとともにエジプトにいたりし者はヤコブの子の妻をのぞきて六十六人なりき是皆ヤコブの身よりいでたる者なり二七エジプトにてヨセフにうまれたる子二人ありヤコブの家の人のエジプトにいたりし者はあはせて七十人なりき二八ヤコブ預じめユダをヨセフにつかはしおのれをゴセンにみちびかしむ而して皆ゴセンの地にいたる二九ヨセフその車を整へゴセンにのぼりて父イスラエルを迓へ之にまみえてその頸を抱き頸をかかへて久く啼く三〇イスラエル、ヨセフにいふ汝なほ生てをり我汝の面を見ることをえたれば今は死るも可しと三一ヨセフその兄弟等と父の家族とにいひけるは我のぼりてパロにつげて之にいふべしわが兄弟等とわが父の家族カナンの地にをりし者我のところに來れり三二その人々は牧者にして牧畜の人なり彼等その羊と牛およびその有る諸の物をたづさへ來れりと三三パロもし汝等を召て汝等の業は何なるやと問ことあらば三四僕等は幼少より今に至るまで牧畜の人なり我儕も先祖等もともにしかりといへしからばなんぢらゴセンの地にすむことをえん牧者は皆エジプト人の穢はしとするものなればなり

第四七章一茲にヨセフゆきてパロにつげていひけるはわが父と兄弟およびその羊と牛と諸の所有物カナンの地よりいたれり彼らはゴセンの地にをると二その兄弟の中より五人をとりてこれをパロにまみえしむ三パロ、ヨセフの兄弟等にいひけるは汝らの業は何なるか彼等パロにいふ僕等は牧者なりわれらも先祖等もともにしかりと四かれら又パロにいひけるは此國に寓らんとて我等はきたる其はカナンの地に饑饉はげしくして僕等の群をやしなふ牧場なければなりされば請ふ僕等をしてゴセンの地にすましめたまへ五パロ、ヨセフにかたりていふ汝の父と兄弟汝の所にきたれり六エジプトの地はなんぢの前にあり地の善き處に汝の父と兄弟をすましめよすなはちゴセンの地にかれらをすましめよ汝もし彼等の中に才能ある者あるをしらば其人々をしてわが家畜をつかさどらしめよ七ヨセフまた父ヤコブを引ていりパロの前にたたしむヤコブ、パロを祝す八パロ、ヤコブにいふ汝の齢の日は幾何なるか九ヤコブ、パロにいひけるはわが旅路の年月は百三十年にいたる我が齢の日は僅少にして且惡かり未だわが先祖等の齢の日と旅路の日にはおよばざるなり一〇ヤコブ、パロを祝しパロのまへよりいでさりぬ一一ヨセフ、パロの命ぜしごとくその父と兄弟に居所を與へエジプトの國の中の善き地即ちラメセスの地をかれらにあたへて所有となさしむ一二ヨセフその父と兄弟と父の全家にその子の數にしたがひて食物をあたへて養へり一三却説饑饉はなはだはげしくして全國に食物なくエジプトの國とカナンの國饑饉のために弱れり一四ヨセフ穀物を賣あたへてエジプトの地とカナンの地にありし金をことごとく斂む而してヨセフその金をパロの家にもちきたる一五エジプトの國とカナンの國に金つきたればエ

ジプト人みなヨセフにいたりていふ我等に食物をあたへよ如何ぞなんぢの前に死べけんや金すでにたえたり一六ヨセフいひけるは汝等の家畜をいだせ金もしたえたらば我なんぢらの家畜にかへて與ふべしと一七かれら乃ちその家畜をヨセフにひききたりければヨセフその馬と羊の群と牛の群および驢馬にかへて食物をかれらにあたへそのすべての家畜のために其年のあひだ食物をあたへてこれをやしなふ一八かくてその年暮けるが明年にいたりて人衆またヨセフにきたりて之にいふ我等主に隱すところなしわれらの金は竭たりまたわれらの畜の群は主に皈す主のまへにいだすべき者は何ものこりをらず唯われらの身體と田地あるのみ一九われらいかんぞわれらの田地とともに汝の目のまへに死亡ぶべけんや我等とわれらの田地を食物に易て買とれ我等田地とともにパロの僕とならんまた我等に種をあたへよ然ばわれら生るをえて死るにいたらず田地も荒蕪にいたらじ二〇是に於てヨセフ、エジプトの田地をことごとく購とりてパロに納る其はエジプト人饑饉にせまりて各人その田圃を賣たればなり是によりて地はパロの所有となれり二一また民はエジプトのこの境の極よりかの境の極の者までヨセフこれを邑々にうつせり二二但祭司の田地は購とらざりき祭司はパロより祿をたまはりをればパロの與る祿を食たるによりてその田地を賣ざればなり二三茲にヨセフ民にいひけるは視よ我今日汝等となんぢらの田地をかひてパロに納る視よこの種子を汝らに與ふ地に播べし二四しかして收穫の五分の一をパロに輸し四分をなんぢらに取て田圃の種としなんぢらの食としなんぢらの家族と子女の食とせよ二五人衆いひけるは汝われらの生命を拯ひたまへりわれら主のまへに恩をえんことをねがふ我等パロの僕となるべしと二六ヨセフ、エジプトの田地に法をたてその五分の一をパロにをさめしむその事今日にいたる唯祭司の田地のみパロの有とならざりき二七イスラエル、エジプトの國に於てゴセンの地にすみ彼處に產業を獲その數增て大に殖たり二八ヤコブ、エジプトの國に十七年いきながらへたりヤコブの年齒の日は合て百四十七年なりき二九イスラエル死る日ちかよりければその子ヨセフをよびて之にいひけるは我もし汝のまへに恩を得るならば請ふなんぢの手をわが髀の下にいれ懇に眞實をもて我をあつかへ我をエジプトに葬るなかれ三〇我は先祖等とともに偃んことをねがふ汝われをエジプトより舁いだして先祖等の墓場にはうむれヨセフいふ我なんぢが言るごとくなすべしと三一ヤコブまた我に誓へといひければすなはち誓へりイスラエル床の頭にて拜をなせり

第四八章一是等の事の後汝の父病にかかるとヨセフに告る者ありければヨセフ二人の子マナセとエフライムをともなひて至る二人ヤコブに告て汝の子ヨセフなんぢの許にきたるといひければイスラエル强て床に坐す三しかしてヤコブ、ヨセフにいひけるは昔に全能の神カナンの地のルズにて我にあらはれて我を祝し四我にいひたまひけらく我なんぢをして多く子をえせしめ

汝をふやし汝を衆多の民となさん我この地を汝の後の子孫にあたへて永久の所有となさしめんと五わがエジプトにきたりて汝に就まへにエジプトにて汝に生れたる二人の子エフライムとマナセ是等はわが子となるべしルベンとシメオンのごとく是等はわが子とならん六是等の後になんぢが得たる子は汝のものとすべし又その產業はその兄弟の名をもて稱らるべし七我事をいはんに我昔パダンより來れる時ラケル我にしたがひをりて途にてカナンの地に死り其處はエフラタまで尚途の隔あるところなりわれ彼處にて彼をエフラタの途にはうむれり（エフラタはすなはちベテレヘムなり）八斯てイスラエル、ヨセフの子等を見て是等は誰なるやといひければ九ヨセフ父にいふ是は神の此にて我にたまひし子等なりと父すなはちいふ請ふ彼らを我所につれきたれ我これを祝せんと一〇イスラエルの目は年壽のために眯て見るをえざりしがヨセフかれらをその許につれきたりければ之に接吻してこれを抱けり一一しかしてイスラエル、ヨセフにいひけるは我なんぢの面を見るあらんとは思はざりしに視よ神なんぢの子をもわれにしめしたまふと一二ヨセフかれらをその膝の間よりいだし地に俯て拜せり一三しかしてヨセフ、エフライムを右の手に執てヤコブに左の手にむかはしめマナセを左の手に執てヤコブの右の手にむかはしめ二人をみちびきてかれに就ければ一四イスラエル右の手をのべて季子エフライムの頭に按き左の手をのべてマナセの頭におけりマナセは長子なれども故にかくその手をおけるなり一五斯してヨセフを祝していふわが父アブラハム、イサクの事へし神わが生れてより今日まで我をやしなひたまひし神一六我をして諸の災禍を贖はしめたまひし天使ねがはくは是童子等を祝たまへねがはくは是等の者わが名とわが父アブラハム、イサクの名をもて稱られんことをねがはくは是等地の中に繁殖がるにいたれ一七ヨセフ父が右の手をエフライムの頭に按るを見てよろこばず父の手をあげて之をエフライムの頭よりマナセの頭にうつさんとす一八ヨセフすなはち父にいひけるは然にあらず父よ是長子なれば右の手をその頭に按たまへ一九父こばみていひけるは我知るわが子よわれしる彼も一の民となり彼も大なる者とならん然れどもその弟は彼よりも大なる者となりてその子孫は多衆の國民となるべしと二〇此日彼等を祝していふイスラエル汝を指て人を祝し願くは神汝をしてエフライムのごとくマナセのごとくならしめたまへといふにいたらんとすなはちエフライムをマナセの先にたてたり二一イスラエルまたヨセフにいひけるは視よわれは死んされど神なんぢらとともにいまして汝等を先祖等の國にみちびきかへりたまふべし二二且われ一の分をなんぢの兄弟よりもおほく汝にあたふ是わが刀と弓を以てアモリ人の手より取たる者なり

第四九章一ヤコブその子等を呼ていひけるは汝らあつまれ我後の日に汝らが遇んところの事を汝等につげん二汝等つどひて聽けヤコブの子等よ汝らの父イスラエルに聽け三ルベン汝はわが

冢子わが勢わが力の始威光の卓越たる者權威の卓越たる者なり四 汝は水の沸あがるがごとき者なれば卓越を得ざるべし汝父の床にのぼりて涜したればなり嗚呼彼はわが寢牀にのぼれり五 シメオン、レビは兄弟なりその劍は暴逆の器なり六 我魂よかれらの席にのぞむなかれ我寶よかれらの集會につらなるなかれ其は彼等その怒にまかせて人をころしその意にまかせて牛を筋截たればなり七 その怒は烈しかれば詛ふべしその憤は暴あれば詛ふべし我彼らをヤコブの中に分ちイスラエルの中に散さん八 ユダよ汝は兄弟の讚る者なり汝の手はなんぢの敵の頸を抑へんなんぢの父の子等なんぢの前に鞠ん九 ユダは獅子の子の如しわが子よ汝は所掠物をさきてかへりのぼる彼は牡獅子のごとく伏し牝獅のごとく蹲まる誰か之をおこすことをせん一〇 杖ユダを離れず法を立る者その足の間をはなるることなくしてシロの來る時にまでおよばん彼に諸の民したがふべし一一 彼その驢馬を葡萄の樹に繋ぎその牝驢馬の子を葡萄の蔓に繋がん又その衣を酒にあらひ其服を葡萄の汁にあらふべし一二 その目は酒によりて紅くその齒は乳によりて白し一三 ゼブルンは海邊にすみ舟の泊る海邊に住はんその界はシドンにおよぶべし一四 イッサカルは羊の牢の間に伏す健き驢馬の如し一五 彼みて安泰を善としその國を樂とし肩をさげて負ひ租税をいだして僕となるべし一六 ダンはイスラエルの他の支派の如く其民を鞫かん一七 ダンは路の旁の蛇のごとく途邊にある蝮のごとし馬の踵を嚙てその騎者をして後に落しむ一八 ヱホバよわれ汝の拯救を待り一九 ガドは軍勢これにせまらんされど彼返てその後にせまらん二〇 アセルよりいづる食物は美るべし彼王の食ふ美味をいださん二一 ナフタリは釋れたる麀のごとし彼美言をいだすなり二二 ヨセフは實を結ぶ樹の芽のごとし即ち泉の傍にある實をむすぶ樹の芽のごとしその枝つひに垣を踰ゆ二三 射者彼をなやまし彼を射かれを惡めり二四 然どかれの弓はなほ勁くあり彼の手の臂は力あり是ヤコブの全能者の手によりてなり其よりイスラエルの磐なる牧者いづ二五 汝の父の神による彼なんぢを助けん全能者による彼なんぢを祝まん上なる天の福、下によこたはる淵の福、乳哺の福、胎の福、汝にきたるべし二六 父の汝を祝することはわが父祖の祝したる所に勝て恒久の山の限極にまでおよばん是等の祝福はヨセフの首に歸しその兄弟と別になりたる者の頭頂に歸すべし二七 ベニヤミンは物を嚙む狼なり朝にその所掠物を啖ひ夕にその所攫物をわかたん二八 是等はイスラエルの十二の支派なり斯その父彼らに語り彼等を祝せりすなはちその祝すべき所にしたがひて彼等諸人を祝せり二九 ヤコブまた彼等に命じて之にいひけるは我はわが民にくははらんとすヘテ人エフロンの田にある洞穴にわが先祖等とともに我をはうむれ三〇 その洞穴はカナンの地にてマムレのまへなるマクペラの田にあり是はアブラハムがヘテ人エフロンより田とともに購て所有の墓所となせし者なり三一 アブラハムとその妻サラ彼處にはうむ

られイサクとその妻リベカ彼處に葬られたり我またかしこにレアを葬れり三一彼田とその中の洞穴はヘテの子孫より購たる者なり三三ヤコブその子に命ずることを終し時足を床に斂めて氣たえてその民にくははる

第五〇章一ヨセフ父の面に俯し之をいだきて哭き之に接吻す二而してヨセフその僕なる醫者に命じてその父に釁らしむ醫者イスラエルに釁れり三すなはち之がために四十日を用ふ其は尸に釁るにはこの日數を用ふべければなりエジプト人七十日の間之がために哭けり四哀哭の日すぎし時ヨセフ、パロの家にかたりていひけるは我もし汝等の前に恩惠を得るならば請ふパロの耳にまうして言へ五わが父我死ばカナンの地にわが掘おきたる墓に我をはうむれといひて我を誓はしめたり然ば請ふわれをして上りて父を葬らしめたまへまた歸りきたらんと六パロいひけるは汝の父汝をちかはせしごとくのぼりて之を葬るべし七是に於てヨセフ父を葬らんとて上るパロの諸の臣パロの家の長老等エジプトの地の長老等八およびヨセフの全家とその兄弟等およびその父の家之とともに上る只その子女と羊と牛はゴセンの地にのこせり九また車と騎兵ヨセフにしたがひてのぼり其隊ははなはだ大なりき一〇彼等つひにヨルダンの外なるアタデの禾場に到り彼にて大に泣き痛く哀しむヨセフすなはち七日父のために哭きぬ一一その國の居人なるカナン人等アタデの禾場の哀哭を見て是はエジプト人の痛くなげくなりといへり是により て其處の名をアベルミツライム(エジプト人の哀哭)と稱ふヨルダンの外にあり一二ヤコブの子等その命ぜられたるごとく之になせり一三すなはちヤコブの子等彼をカナンの地に舁ゆきて之をマクペラの田の洞穴にはうむれり是はアブラハムがヘテ人エフロンより田とともに購とりて所有の墓所となせし者にてマムレの前にあり一四ヨセフ父を葬りてのち其兄弟および凡て己とともにのぼりて父をはうむれる者とともにエジプトにかへりぬ一五ヨセフの兄弟等その父の死たるを見ていひけるはヨセフあるいはわれらを恨むることあらん又かならずわれらが彼になしたる諸の惡にむくゆるならんと一六すなはちヨセフにいひおくりけるはなんぢの父死るまへに命じて言けらく一七汝ら斯ヨセフにいふべし汝の兄弟汝に惡をなしたれども冀はくはその罪咎をゆるせと然ば請ふ汝の父の神の僕等の咎をゆるせとヨセフその言を聞て啼泣り一八兄弟等もまた自らきたりヨセフの面の前に俯し我儕は汝の僕とならんといふ一九ヨセフかれらに曰けるは懼るなかれ我あに神にかはらんや二〇汝等は我を害せんとおもひたれども神はそれを善にかはらせ今日のごとく多の民の生命を救ふにいたらしめんとおもひたまへり二一故に汝らおそるるなかれ我なんぢらと汝らの子女をやしなはんと彼等をなぐさめ懇に之にかたれり二二ヨセフ父の家族とともにエジプトにすめりヨセフは百十歳いきながらへたり二三ヨセフ、エフライムの三世の子女をみるにいたれりマナセの子マキルの子女も

うまれてヨセフの膝(ひざ)にありき二四 ヨセフその兄弟等(きやうだいたち)にいひけるは我死(われしな)ん神(かみ)かならず汝等(なんぢら)を眷顧(かへり)みなんぢらを此地(このち)よりいだしてそのアブラハム、イサク、ヤコブに誓(ちか)ひし地(ち)にいたらしめたまはんと二五 ヨセフ神(かみ)かならず汝等(なんぢら)をかへりみたまはん汝(なんぢ)らわが骨(ほね)をここよりたづさへのぼるべしといひてイスラエルの子孫(こら)を誓(ちか)はしむ二六 ヨセフ百十歳(さい)にして死(しに)たれば之(これ)に釁(くすりぬ)りて櫃(ひつぎ)にをさめてエジプトにおけり

出エジプト記

第一章 一 イスラエルの子等のエジプトに至りし者の名は左のごとし衆人各その家族をたづさへてヤコブとともに至れり 二 すなはちルベン、シメオン、レビ、ユダ、三 イツサカル、ゼブルン、ベニヤミン、四 ダン、ナフタリ、ガド、アセルなり 五 ヤコブの腰より出たる者は都合七十人ヨセフはすでにエジプトにありき 六 ヨセフとその諸の兄弟および當世の人みな死たり 七 イスラエルの子孫饒く子を生み彌增殖え甚だしく大に強くなりて國に滿るにいたれり 八 茲にヨセフの事をしらざる新き王エジプトに起りしが 九 彼その民にいひけるは視よ此民イスラエルの子孫われらよりも多く且強し 一〇 來れわれら機巧く彼等に事をなさん恐くは彼等多ならん又戰爭の起ることある時は彼等敵にくみして我等と戰ひ遂に國よりいでさらんと 一一 すなはち督者をかれらの上に立て彼らに重荷をおはせて之を苦む彼等パロのために府庫の邑ピトムとラメセスを建たり 一二 然るにイスラエルの子孫は苦むるに隨ひて增し殖たれば皆これを懼れたり 一三 エジプト人イスラエルの子孫を嚴く動作かしめ 一四 辛き力役をもて彼等をして苦みて生を度らしむ即ち和泥、作甎および田圃の諸の工にはたらかしめけるが其働かしめし工作は皆嚴かりき 一五 エジプトの王又ヘブルの產婆シフラと名くる者とブワと名くる者の二人に諭して 一六 いひけるは汝等ヘブルの婦女のために收生をなす時は床の上を見てその子若男子ならばこれを殺せ女子ならば生しおくべしと 一七 然に產婆神を畏れエジプト王の命ぜしごとく爲ずして男子をも生しおけり 一八 エジプト王產婆を召て之にいひけるは汝等なんぞ此事をなし男子を生しおくや 一九 產婆パロに言けるはヘブルの婦はエジプトの婦のごとくならず彼等は健して產婆のかれらに至らぬ前に產をはるなりと 二〇 是によりて神その產婆等に恩をほどこしたまへり是において民增ゆきて甚だ強くなりぬ 二一 產婆神を畏れたるによりて神かれらのために家を成たまへり 二二 斯有しかばパロその凡の民に命じていふ男子の生るあらば汝等これを悉く河に投いれよ女子は皆生しおくべし

第二章 一 爰にレビの家の一箇の人往てレビの女を娶れり 二 女妊みて男子を生みその美きを見て三月のあひだこれを匿せしが 三 すでにこれを匿すあたはざるにいたりければ萑の箱舟を之がために取て之に瀝青と樹脂を塗り子をその中に納てこれを河邊の葦の中に置り 四 その姉遥に立てその如何になるかを窺ふ 五 茲にパロの女身を洗んとて河にくだりその婢等河の傍にあゆむ彼葦の中に箱舟あるを見て使女をつかはしてこれを取きたらしめ 六 これを啓きてその子のをるを見る嬰兒すなはち啼く彼これを憐みていひけるは是はヘブル人の子なりと 七 時にその姉パロの女にいひけるは我ゆきてヘブルの女の中より此子をなんぢのために養ふべき乳母を呼きたらんか 八 パロの女往よと之にい

ひければ女子すなはち往てその子の母を呼きたる九パロの女かれにいひけるは此子をつれゆきて我ために之を養へ我その値をなんぢにとらせんと婦すなはちその子を取てこれを養ふ一〇斯てその子の長ずるにおよびて之をパロの女の所にたづさへゆきければすなはちこれが子となる彼その名をモーセ（援出）と名けて言ふ我これを水より援いだせしに因ると一一茲にモーセ生長におよびて一時いでてその兄弟等の所にいたりその重荷を負ふを見しが會一箇のエジプト人が一箇のイスラエル人即ちおのれの兄弟を撃つを見たれば一二右左を視まはして人のをらざるを見てそのエジプト人を撃ころし之を沙の中に埋め匿せり一三次の日また出て二人のヘブル人の相争ふを見たればその曲き者にむかひ汝なんぞ汝の隣人を撃つやといふに一四彼いひけるは誰が汝を立てわれらの君とし判官としたるや汝かのエジプト人をころせしごとく我をも殺さんとするやと是においてモーセ懼れてその事かならず知れたるならんとおもへり一五パロ此事を聞てモーセを殺さんともとめければモーセすなはちパロの面をさけて逃げのびミデアンの地に住り彼井の傍に坐せり一六ミデアンの祭司に七人の女子ありしが彼等來りて水を汲み水鉢に盈て父の羊群に飲はんとしけるに一七牧羊者等きたりて彼らを逐はらひければモーセ起あがりて彼等をたすけその羊群に飲ふ一八彼等その父リウエルに至れる時父言けるは今日はなんぢら何ぞかく速にかへりしや一九かれらいひけるは一箇のエジプト人我らを牧羊者等の手より救いだし亦われらのために水を多く汲て羊群に飲しめたりと二〇父女等にいひけるは彼は何處にをるや汝等なんぞその人を遺てきたりしや彼をよびて物を食しめよと二一モーセこの人とともに居ることを好めり彼すなはちその女子チッポラをモーセに與ふ二二彼男子を生みければモーセその名をゲルショム（客）と名けて言ふ我異邦に客となりをればなりと二三斯て時をふる程にジプトの王死りイスラエルの子孫その勞役の故によりて歎き號ぶにその勞役の故によりて號ぶところの聲神に達りければ二四神その長呻を聞き神そのアブラハム、イサク、ヤコブになしたる契約を憶え二五神イスラエルの子孫を眷み神知しめしたまへり

第三章一モーセその妻の父なるミデアンの祭司ヱテロの群を牧ひをりしがその群を曠野の奥にみちびきて神の山ホレブに至るに二ヱホバの使者棘の裏の火燄の中にて彼にあらはる彼見るに棘火に燃れどもその棘燬ず三モーセいひけるは我ゆきてこの大なる觀を見何故に棘の燃たえざるかを見ん四ヱホバ彼がきたり觀んとするを見たまふ即ち神棘の中よりモーセよモーセよと彼をよびたまひければ我ここにありといふに五神いひたまひけるは此に近よるなかれ汝の足より履を脱ぐべし汝が立つ處は聖き地なればなり六又いひたまひけるは我はなんぢの父の神アブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりとモーセ神を見ることを畏れてその面を蔽せり七ヱホバ言たまひけるは我まことにエジプ

トにをるわが民の苦患を觀また彼等がその驅使者の故をもて號ぶところの聲を聞り我かれらの憂苦を知るなり八 われ降りてかれらをエジプト人の手より救ひいだし之を彼地より導きのぼりて善き廣き地乳と蜜との流るる地すなはちカナン人ヘテ人アモリ人ベリジ人ヒビ人ヱブス人のをる處に至らしめんとす九 今イスラエルの子孫の號呼われに達る我またエジプト人が彼らを苦むるその暴虐を見たり一〇 然ば來れ我なんぢをパロにつかはし汝をしてわが民イスラエルの子孫をエジプトより導きいださしめん一一 モーセ神にいひけるは我は如何なる者ぞや我豈パロの許に往きイスラエルの子孫をエジプトより導きいだすべき者ならんや一二 神いひたまひけるは我かならず汝とともにあるべし是はわが汝をつかはせる證據なり汝民をエジプトより導きいだしたる時汝等この山にて神に事へん一三 モーセ神にいひけるは我イスラエルの子孫の所にゆきて汝らの先祖等の神我を汝らに遣はしたまふと言んに彼等もし其名は何と我に言ば何とかれらに言べきや一四 神モーセにいひたまひけるは我は有て在る者なり又いひたまひけるは汝かくイスラエルの子孫にいふべし我有といふ者我を汝らに遣したまふと一五 神またモーセにいひたまひけるは汝かくイスラエルの子孫にいふべし汝らの先祖等の神アブラハムの神イサクの神ヤコブの神ヱホバわれを汝らにつかはしたまふと是は永遠にわが名となり世々にわが誌となるべし一六 汝往てイスラエルの長老等をあつめて之にいふべし汝らの先祖等の神アブラハム、イサク、ヤコブの神ヱホバ我にあらはれて言たまひけらく我誠になんぢらを眷み汝らがエジプトにて蒙るところの事を見たり一七 我すなはち言り我汝らをエジプトの苦患の中より導き出してカナン人ヘテ人アモリ人ペリジ人ヒビ人ヱブス人の地すなはち乳と蜜の流るる地にのぼり至らしめんと一八 彼等なんぢの言に聽したがふべし汝とイスラエルの長老等エジプトの王の許にいたりて之に言へヘブル人の神ヱホバ我らに臨めり然ば請ふわれらをして三日程ほど曠野に入しめわれらの神ヱホバに犠牲をささぐることを得せしめよと一九 我しるエジプトの王は假令能力ある手をくはふるも汝等の往をゆるさざるべし二〇 我すなはちわが手を舒べエジプトの中に諸の奇跡を行ひてエジプトを撃ん其後かれ汝等を去しむべし二一 我エジプト人をして此民をめぐましめん汝ら去る時手を空うして去るべからず二二 婦女皆その隣人とおのれの家に寓る者とに金の飾品銀の飾品および衣服を乞べし而して汝らこれを汝らの子女に穿戴せよ汝等かくエジプト人の物を取べし

第四章一 モーセ對へていひけるは然ながら彼等我を信ぜず又わが言に聽したがはずして言んヱホバ汝にあらはれたまはずと二 ヱホバかれにいひたまひけるは汝の手にある者は何なるや彼いふ杖なり三 ヱホバいひたまひけるは其を地に擲よとすなはち之を地になぐるに蛇となりければモーセその前を避たり四 ヱホバ、モーセにいひたまひけるは汝の手をのべて其尾を執れとす

なはち手をのべて之を執ば手にいりて杖となる五ヱホバいひたまふ是は彼らの先祖等の神アブラハムの神イサクの神ヤコブの神ヱホバの汝にあらはれたることを彼らに信ぜしめんためなり六ヱホバまたかれに言たまひけるは汝の手を懐に納よとすなはち手を懐にいれて之を出し見るにその手癩病を生じて雪のごとくなれり七ヱホバまた言たまひけるは汝の手をふたたび懐にいれよと彼すなはちふたたび其手を懐にいれて之を懐より出し見るに變りて他處の肌膚のごとくになる八ヱホバいひたまふ彼等もし汝を信ぜずまたその最初の徴の聲に聽從はざるならば後の徴の聲を信ぜん九彼らもし是ふたつの徴をも信ぜずして汝の言に聽從はざるならば汝河の水をとりて之を陸地にそそげ汝が河より取たる水陸地にて血となるべし一〇モーセ、ヱホバにいひけるはわが主よ我は素言辭に敏き人にあらず汝が僕に語りたまへるに及びても猶しかり我は口重く舌重き者なり一一ヱホバかれにいひたまひけるは人の口を造る者は誰なるや唖者聾者目明者瞽者などを造る者は誰なるや我ヱホバなるにあらずや一二然ば往けよ我なんぢの口にありて汝の言ふべきことを教へん一三モーセいひけるはわが主よ願くは遣すべき者をつかはしたまへ一四是においてヱホバ、モーセにむかひ怒を發していひたまひけるはレビ人アロンは汝の兄弟なるにあらずや我かれが言を善するを知るまた彼なんぢに遇んとていで來る彼汝を見る時心に喜ばん一五汝かれに語りて言をその口に授くべし我なんぢの口と彼の口にありて汝らの爲べき事を教へん一六彼なんぢに代て民に語らん彼は汝の口に代らん汝は彼のために神に代るべし一七なんぢこの杖を手に執り之をもて奇蹟をおこなふべし一八是においてモーセゆきてその妻の父ヱテロの許にかへりて之にいふ請ふ我をして往てわがエジプトにある兄弟等の所にかへらしめ彼等のなほ生ながらへをるや否を見さしめよヱテロ、モーセに安然に往くべしといふ一九爰にヱホバ、ミデアンにてモーセにいひたまひけるは往てエジプトにかへれ汝の生命をもとめし人は皆死たりと二〇モーセすなはちその妻と子等をとり之を驢馬に乗てエジプトの地にかへるモーセは神の杖を手に執り二一ヱホバ、モーセにいひたまひけるは汝エジプトにかへりゆける時はかならず我がなんぢの手に授けたるところの奇跡を悉くパロのまへにおこなふべし但し我かれの心を剛愎にすれば彼民を去しめざるべし二二汝パロに言べしヱホバかく言ふイスラエルはわが子わが冢子なり二三我なんぢにいふ我が子を去らしめて我に事ふることをえせしめよ汝もし彼をさらしむることを拒ば我なんぢの子なんぢの冢子を殺すべしと二四モーセ途にある時ヱホバかれの宿所にて彼に遇てころさんとしたまひければ二五チツポラ利き石をとりてその男子の陽の皮を割りモーセの足下になげうちて言ふ汝はまことにわがためには血の夫なりと二六是においてヱホバ、モーセをゆるしたまふ此時チツポラが血の夫といひしは割禮の故によりてなり二七爰にヱホバ、

アロンにいひたまひけるに曠野にゆきてモーセを迎へよと彼すなはちゆきて神の山にてモーセに遇ひ之に接吻す二八モーセ、ヱホバがおのれに言ふくめて遣したまへる諸の言とヱホバのおのれに命じたまひし諸の奇跡とをアロンにつげたり二九斯てモーセとアロン往てイスラエルの子孫の長老を盡く集む三〇而してアロン、ヱホバのモーセにかたりたまひし言を盡くつぐ又彼民の目のまへにて奇蹟をなしければ三一民すなはち信ず彼等ヱホバがイスラエルの民をかへりみその苦患をおもひたまふを聞て身をかがめて拝をなせり

第五章 一その後モーセとアロン入てパロにいふイスラエルの神ヱホバ斯いひたまふ我民を去しめ彼等をして曠野に於て我を祭ることをえせしめよと二パロいひけるはヱホバは誰なればか我その聲にしたがひてイスラエルを去しむべき我ヱホバを識ず亦イスラエルを去しめじ三彼ら言けるはヘブル人の神我らに顯れたまへり請ふ我等をして三日程ほど曠野にいりてわれらの神ヱホバに犠牲をささぐることをえせしめよ恐くはヱホバ疫病か又は刀兵をもて我らをなやましたまはん四エジプト王かれらに言けるは汝等モーセ、アロンなんぞ民の操作を妨ぐるや往てなんぢらの荷を負へ五パロまたいふ土民今は多かり然るに汝等かれらをして荷をおふことを止しめんとす六パロ此日民が驅使ふ者等および民の有司等に命じていふ七汝等再び前のごとく民に磚瓦を造る禾稈を與ふべからず彼等をして往てみづから禾稈をあつめしめよ八また彼等が前に造りし磚瓦の數のごとくに仍かれらに之をつくらしめよ其を減すなかれ彼等は懈惰が故に我儕をして往てわれらの神に犠牲をささげしめよと呼はり言ふなり九人々の工作を重くして之に勞かしめよ然ば僞の言を聽ことあらじと一〇民を驅使ふ者等およびその有司等出ゆきて民にいひけるはパロかく言たまふ我なんぢらに禾稈をあたへじ一一汝等往て禾稈のある處にて之をとれ但しなんぢらの工作は分毫も減さざるべしと一二是において民遍くエジプトの地に散て草蒿をあつめて禾稈となす一三驅使者かれらを促たてて言ふ禾稈のありし時のごとく汝らの工作汝らの日々の業をなしをふべしと一四パロの驅使者等がイスラエルの子孫の上に立たるところの有司等撻れなんぢら何ぞ昨日も今日も磚瓦を作るところの汝らの業を前のごとくに爲しをへざるやと言る一五是に於てイスラエルの子孫の有司等來りてパロに呼はりて言ふ汝なんぞ斯僕等になすや一六僕等に禾稈を與へずしてわれらに磚瓦を作れといふ視よ僕等は撻る是なんぢの民の過なりと一七然るにパロいふ汝等は懶惰し懶惰し故に汝らは我らをして往てヱホバに犠牲をささげしめよと言ふなり一八然ば汝ら往て操作けよ禾稈はなんぢらに與ふることなかるべけれどなんぢら尚數のごとくに磚瓦を交納むべしと一九イスラエルの子孫の有司等汝等その日々につくる磚瓦を減すべからずと言るを聞て災害の身におよぶを知り二〇彼らパロをはなれて出たる時モーセとアロンの

對面にたてるを見たれば二一之にいひけるは願くはヱホバ汝等を鑒みて鞫きたまへ汝等はわれらの臭をパロの目と彼の僕の目に忌嫌はれしめ刀を彼等の手にわたして我等を殺さしめんとするなりと二二モーセ、ヱホバに返りて言ふわが主よ何て此民をあしくしたまふや何のために我をつかはしたまひしや二三わがパロの許に來りて汝の名をもて語りしよりして彼この民をあしくす汝また絶てなんぢの民をすくひたまはざるなり

第六章一ヱホバ、モーセに言たまひけるは今汝わがパロに爲んところの事を見るべし能ある手の加はるによりてパロ彼らをさらしめん能ある手の加はるによりてパロ彼らを其國より逐いだすべし二神モーセに語りて之にいひたまひけるは我はヱホバなり三我全能の神といひてアブラハム、イサク、ヤコブに顯れたり然ど我名のヱホバの事は彼等しらざりき四我また彼らとわが契約を立て彼等が旅して寄居たる國カナンの地をかれらに與ふ五我またエジプト人が奴隸となせるイスラエルの子孫の呻吟た聞き且我が契約を憶ひ出づ六故にイスラエルの子孫に言へ我はヱホバなり我汝らをエジプト人の重負の下より携出し其使役をまぬかれしめ又腕をのべ大なる罰をほどこして汝等を贖はん七我汝等を取て吾民となし汝等の神となるべし汝等はわがエジプト人の重擔の下より汝らを携出したるなんぢらの神ヱホバなることを知ん八我わが手をあげてアブラハム、イサク、ヤコブに與へんと誓ひし地に汝等を導きいたり之を汝等に與へて產業となさしめん我はヱホバなり九モーセかくイスラエルの子孫に語けれども彼等は心の傷ると役事の苦きとの爲にモーセに聽ざりき一〇ヱホバ、モーセに告ていひたまひけるは一一入てエジプトの王パロに語りイスラエルの子孫をその國より去しめよ一二モーセ、ヱホバの前に申していふイスラエルの子孫既に我に聽ず我は口に割禮をうけざる者なればパロいかで我にきかんや一三ヱホバ、モーセとアロンに語り彼等に命じてイスラエルの子孫とエジプトの王パロの所に往しめイスラエルの子孫をエジプトの地より導きいださしめたまふ一四かれらの父の家々の長は左のごとしイスラエルの冢子ルベンの子ヘノク、バル、ヘヅロン、カルミ是等はルベンの家族なり一五シメオンの子ヱムエル、ヤミン、オハデ、ヤキン、ゾハルおよびカナンの女の生しシヤウル是らはシメオンの家族なり一六レビの子の名はその世代にしたがひて言ば左のごとしゲルシヨン、コハテ、メラリ是なりレビの齢の年は百三十七年なりき一七ゲルシヨンの子はその家族にしたがひて言ばリブニおよびシメイなり一八コハテの子はアムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエルなりコハテの齢の年は百三十三年なりき一九メラリの子はマヘリおよびムシなり是等はレビの家族にしてその世代にしたがひて言るものなり二〇アムラム其伯母ヨケベデを妻にめとれり彼アロンとモーセを生むアムラムの齢の年は百三十七年なりき二一イヅハルの子はコラ、ネベグ、ジクリなり二二ウジエルの子はミサエル、エルザバン、シテ

リなり二三アロン、ナシヨンの姉アミナダブの女エリセバを妻にめとれり彼ナダブ、アビウ、エレアザル、イタマルを生む二四コラの子はアツシル、エルカナ、アビアサフ是等はコラ人の族なり二五アロンの子エレアザル、ブテエルの女の中より妻をめとれり彼ピネハスを生む是等はレビ人の父の家々の長にしてその家族に循ひて言る者なり二六ヱホバがイスラエルの子孫を其軍隊にしたがひてエジプトの地より導きいだせよといひたまひしは此アロンとモーセなり二七彼等はイスラエルの子孫をエジプトより導きいださんとしてエジプトの王パロに語りし者にして即ち此モーセとアロンなり二八ヱホバ、エジプトの地にてモーセに語りたまへる日に二九ヱホバ、モーセに語りて言たまひけるは我はヱホバなり汝わが汝にいふ所を悉皆くエジプトの王パロに語るべし三〇モーセ、ヱホバの前に言けるは我は口に割禮を受ざる者なればパロいかで我に聽んや

第七章一ヱホバ、モーセに言たまひけるは視よ我汝をしてパロにおけること神のごとくならしむ汝の兄弟アロンは汝の預言者となるべし二汝はわが汝に命ずる所を盡く宣べし汝の兄弟アロンはパロに告ることを爲べし彼イスラエルの子孫をその國より出すに至らん三我パロの心を剛愎にして吾徵と奇跡をエジプトの國に多くせん四然どパロ汝に聽ざるべし我すなはち吾手をエジプトに加へ大なる罰をほどこして吾軍隊わが民イスラエルの子孫をエジプトの國より出さん五我わが手をエジプトの上に伸てイスラエルの子孫をエジプト人の中より出す時には彼等我のヱホバなるを知ん六モーセとアロン斯おこなひヱホバの命じたまへる如くに然なしぬ七そのパロと談論ける時モーセは八十歳アロンは八十三歳なりき八ヱホバ、モーセとアロンに告て言たまひけるは九パロ汝等に語りて汝ら自ら奇蹟を行へと言時には汝アロンに言べし汝の杖をとりてパロの前に擲てよと其は蛇とならん一〇是に於てモーセとアロンはパロの許にいたりヱホバの命じたまひしごとくに行へり即ちアロンその杖をパロとその臣下の前に擲しに蛇となりぬ一一斯在しかばパロもまた博士と魔術士を召よせたるにエジプトの法術士等もその秘術をもてかくおこなへり一二即ち彼ら各人その杖を投たれば蛇となりけるがアロンの杖かれらの杖を呑つくせり一三然るにパロの心剛愎になりて彼らに聽ことをせざりきヱホバの言たまひし如し一四ヱホバ、モーセに言たまひけるはパロは心頑にして民を去しむることを拒むなり一五朝におよびて汝パロの許にいたれ視よ彼は水に臨む汝河の邊にたちて彼を逆ふべし汝かの蛇に化し杖を手にとりて居り一六彼に言ふべしヘブル人の神ヱホバ我を汝につかはして言しむ吾民を去しめて曠野にて我に事ふることを得せしめよ視よ今まで汝は聽入ざりしなり一七ヱホバかく言ふ汝これによりて我がヱホバなるを知ん視よ我わが手の杖をもて河の水を撃ん是血に變ずべし一八而して河の魚は死に河は臭くならんエジプト人は河の水を飲ことを厭ふにい

たるべし一九 ヱホバまたモーセに言たまはく汝アロンに言へ汝の杖をとりて汝の手をエジプトの上に伸べ流水の上河々の上池塘の上一切の湖水の上に伸て血とならしめよエジプト全國に於て木石の器の中に凡て血あるにいたらん二〇 モーセ、アロンすなはちヱホバの命じたまへるごとくに爲り即ち彼パロとその臣下の前にて杖をあげて河の水を撃しに河の水みな血に變じたり二一 是において河の魚死て河臭くなりエジプト人河の水を飲ことを得ざりき斯エジプト全國に血ありき二二 エジプトの法術士等もその秘術をもて斯のごとく行へりパロは心頑固にして彼等に聽ことをせざりきヱホバの言たまひし如し二三 パロすなはち身をめぐらしてその家に入り此事にも心をとめざりき二四 エジプト人河の水を飲ことを得ざりしかば皆飲水を得んとて河のまはりを掘たりヱホバ河を撃たまひてより後七日たちぬ

第八章

一 ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝パロに詣りて彼に言へヱホバかく言たまふ吾民を去しめて我に事ふることを得せしめよ二 汝もし去しむることを拒まば我蛙をもて汝の四方の境を惱さん三 河に蛙むらがり上りきたりて汝の家にいり汝の寝室にいり汝の牀にのぼり汝の臣下の家にいり汝の民の所にいたり汝の竈におよび汝の搓鉢にいらん四 蛙なんぢの身にのぼり汝の民と汝の臣下の上にのぼるべし五 ヱホバ、モーセに言たまはく汝アロンに言へ汝杖をとりて手を流水の上に伸べ河々の上と池塘の上に伸て蛙をエジプトの地に上らしめよ六 アロン手をエジプトの水のうへに伸たれば蛙のぼりきたりてエジプトの地を蔽ふ七 法術士等もその秘術をもて斯おこなひ蛙をエジプトの地に上らしめたり八 パロ、モーセとアロンを召て言けるはヱホバに願ひてこの蛙を我とわが民の所より取さらしめよ我この民を去しめてヱホバに犠牲をささぐることを得せしめん九 モーセ、パロに言けるは我なんぢと汝の臣下と汝の民のために願ひて何時此蛙を汝と汝の家より絶さりて河にのみ止らしむべきや我に示せと一〇 彼明日といひければモーセ言ふ汝の言のごとくに爲し汝をして我らの神ヱホバのごとき者なきことを知しめん一一 蛙汝と汝の家を離れ汝の臣下と汝の民を離れて河にのみ止るべしと一二 モーセとアロンすなはちパロを離れて出でモーセそのパロに至らしめたまひし蛙のためにヱホバに呼はりしに一三 ヱホバ、モーセの言のごとくなしたまひて蛙家より村より田野より死亡たり一四 茲にこれを攢むるに山をなし地臭くなりぬ一五 然るにパロは嘘氣時あるを見てその心を頑固にして彼等に聽ことをせざりきヱホバの言たまひし如し一六 ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝アロンに言へ汝の杖を伸べ地の塵を打てエジプト全國に蚤とならしめよと一七 彼等斯なせり即ちアロン杖をとりて手を伸べ地の塵を撃けるに蚤となりて人と畜につけりエジプト全國において地の塵みな蚤となりぬ一八 法術士等その秘術をもて斯おこなひて蚤を出さんとしたりしが能はざりき蚤は人と畜に著く一九 是において法術士等パロに言

ふ是は神の指なりと然るにパロは心剛愎にして彼等に聽ざりきヱホバの言たまひし如し二〇ヱホバ、モーセに言たまはく汝朝早く起てパロの前に立て視よ彼は水に臨む汝彼に言へヱホバかく言たまふわが民を去しめて我に事ふることを得せしめよ二一汝もしわが民を去しめずば視よ我汝と汝の臣下と汝の民と汝の家とに蚋をおくらんエジプト人の家々には蚋充べし彼らの居るところの地も然らん二二その日に我わが民の居るゴセンの地を區別おきて其處に蚋あらしめじ是地の中にありて我のヱホバなることを汝が知んためなり二三我わが民と汝の民の間に區別をたてん明日この徵あるべし二四ヱホバかく爲たまひたれば蚋おびただしく出來りてパロの家にいりその臣下の家にいりエジプト全國にたり蚋のために地害はる二五是においてパロ、モーセとアロンを召ていひけるは汝等往て國の中にて汝らの神に犧牲を献げよ二六モーセ言ふ然するは宜からず我等はエジプト人の崇拜む者を犧牲としてわれらの神ヱホバに献ぐべければなり我等もしエジプト人の崇拜む者をその目の前にて犧牲に献げなば彼等石にて我等を擊ざらんや二七我等は三日路ほど曠野にいりて我らの神ヱホバに犧牲を献げその命じたまひしごとくせんとす二八パロ言けるは我汝らを去しめて汝らの神ヱホバに曠野にて犧牲を献ぐることを得せしめん但餘に遠くは行べからず我ために祈れよ二九モーセ言けるは視よ我汝をはなれて出づ我ヱホバに祈ん明日蚋パロとその臣下とその民を離れん第パロ再び僞をおこなひ民を去しめてヱホバに犧牲をささぐるを得せしめざるが如きことを爲ざれ三〇かくてモーセ、パロをはなれて出でヱホバに祈りたれば三一ヱホバ、モーセの言のごとく爲したまへり即ちその蚋をパロとその臣下とその民よりはなれしめたまふ一ものこらざりき三二然るにパロ此時にもまたその心を頑固にして民を去しめざりき

第九章 一 爰にヱホバ、モーセにいひたまひけるはパロの所にいりてかれに告よヘブル人の神ヱホバ斯いひたまふ吾民を去しめて我につかふることをえせしめよ二汝もし彼等をさらしむることを拒みて尚かれらを拘留へなば三ヱホバの手野にをる汝の家畜馬驢馬駱駝牛および羊に加はらん即ち甚だ惡き疾あるべし四ヱホバ、イスラエルの家畜とエジプトの家畜とを別ちたまはんイスラエルの子孫に屬する者は死る者あらざるべしと五ヱホバまた期をさだめて言たまふ明日ヱホバこの事を國になさんと六明日ヱホバこの事をなしたまひければエジプトの家畜みな死り然どイスラエルの子孫の家畜は一も死ざりき七パロ人をつかはして見さしめたるにイスラエルの家畜は一頭だにも死ざりき然どもパロは心剛愎にして民をさらしめざりき八またヱホバ、モーセとアロンにいひたまひけるは汝等竈爐の灰を一握とれ而してモーセ、パロの目の前にて天にむかひて之をまきちらすべし九其灰エジプト全國に塵となりてエジプト全國の人と畜獸につき膿をもちて脹るる腫物とならんと一〇彼等すなはち竈爐

の灰をとりてパロの前に立ちモーセ天にむかひて之をまきちらしければ人と獸畜につき膿をもちて脹るる腫物となれり一一 法術士等はその腫物のためにモーセの前に立つことを得ざりき腫物は法術士等よりして諸のエジプト人にまで生じたり一二 然どヱホバ、パロの心を剛愎にしたまひたれば彼らに聽ざりきヱホバのモーセに言給ひし如し一三 爰にヱホバ、モーセにいひたまひけるは朝早くおきてパロの前にたちて彼に言へヘブル人の神ヱホバ斯いひたまふ吾民を去しめて我に事ふるをえせしめよ一四 我此度わが諸の災害を汝の心となんぢの臣下およびなんぢの民に降し全地に我ごとき者なきことを汝に知しめん一五 我もしわが手を伸べ疫病をもて汝となんぢの民を撃たらば汝は地より絶れしならん一六 抑わが汝をたてたるは即ちなんぢをしてわが權能を見さしめわが名を全地に傳へんためなり一七 汝なほ吾民の前に立ふさがりて之を去しめざるや一八 視よ明日の今頃我はなはだ大なる雹を降すべし是はエジプトの開國より今までに嘗てあらざりし者なり一九 然ば人をやりて汝の家畜および凡て汝が野に有る物を集めよ人も獸畜も凡て野にありて家に歸らざる者は雹その上にふりくだりて死るにたらん二〇 パロの臣下の中ヱホバの言を畏る者はその僕と家畜を家に逃いらしめしが二一 ヱホバの言を意にとめざる者はその僕と家畜を野に置り二二 ヱホバ、モーセにいひたまひけるは汝の手を天に舒てエジプト全國に雹あらしめエジプトの國中の人と獸畜と田圃の諸の蔬にふりくだらしめよと二三 モーセ天にむかひて杖を舒たればヱホバ雷と雹を遣りたまふ又火いでて地に馳すヱホバ雹をエジプトの地に降せたまふ二四 斯雹ふり又火の塊雹に雜りて降る甚だ勵しエジプト全國には其國を成てよりこのかた未だ斯る者あらざりしなり二五 雹エジプト全國に於て人と獸畜とをいはず凡て田圃にをる者を撃り雹また田圃の諸の蔬を撃ち野の諸の樹を折り二六 唯イスラエルの子孫のをるゴセンの地には雹あらざりき二七 是に於てパロ人をつかはしてモーセとアロンを召てこれに言けるは我此度罪をかしたりヱホバは義く我とわが民は惡し二八 ヱホバに願ひてこの神鳴と雹を最早これにて足しめよ我なんぢらを去しめん汝等今は留るにおよばず二九 モーセかれに曰けるは我邑より出て我手をヱホバに舒ひろげん然ば雷やみて雹かさねてあらざるべし斯して地はヱホバの所屬なるを汝にしらしめん三〇 然ど我しる汝となんぢの臣下等はなほヱホバ神を畏れざるならんと三一 偖麻と大麥は撃れたり大麥は穗いで麻は花さきゐたればなり三二 然ど小麥と裸麥は未だ長ざりしによりて撃れざりき三三 モーセ、パロをはなれて邑より出でヱホバにむかひて手をのべひろげたれば雷と雹やみて雨地にふらずなりぬ三四 然るにパロ雨と雹と雷鳴のやみたるを見て復も罪を犯し其心を剛硬にす彼もその臣下も然り三五 即ちパロは心剛愎にしてイスラエルの子孫を去しめざりきヱホバのモーセによりて言たまひしごとし

第一〇章一 爰にヱホバ、モーセにいひたまひけるはパロの所に入れ我かれの心とその臣下の心を剛硬にせり是はわが此等の徴を彼等の中に示さんため二 又なんぢをして吾がエジプトにて行ひし事等すなはち吾がエジプトの中にてなしたる徴をなんぢの子となんぢの子の子の耳に語らしめんためなり斯して汝等わがヱホバなるを知べし三 モーセとアロン、パロの所にいりて彼にいひけるはヘブル人の神ヱホバかく言たまふ何時まで汝は我に降ることを拒むや我民をさらしめて我に事ふることをえせしめよ四 汝もしわが民を去しむることを拒まば明日我蝗をなんぢの境に入しめん五 蝗地の面を蔽て人地を見るあたはざるべし蝗かの免かれてなんぢに遺れる者すなはち雹に打のこされたる者を食ひ野に汝らのために生る諸の樹をくらはん六 又なんぢの家となんぢの臣下の家々および凡のエジプト人の家に滿べし是はなんぢの父となんぢの父の父が世にいでしより今日にいたるまで未だ嘗て見ざるものなりと斯て彼身をめぐらしてパロの所よりいでたり七 時にパロの臣下パロにいひけるは何時まで此人われらの羂となるや人々を去しめてその神ヱホバに事ふることをえせしめよ汝なほエジプトの滅ぶるを知ざるやと八 是をもてモーセとアロンふたたび召れてパロの許にいたるにパロかれらにいふ往てなんぢらの神ヱホバに事よ但し往く者は誰と誰なるや九 モーセいひけるは我等は幼者をも老者をも子息をも息女をも羣へて往き羊をも牛をもたづさへて往くべし其は我らヱホバの祭禮をなさんとすればなり一〇 パロかれらにいひけるは我汝等となんぢらの子等を去しむる時はヱホバなんぢらと偕に在れ愼めよ悪き事なんぢらの面のまへにあり一一 そは宜からず汝ら男子のみ往てヱホバに事よ是なんぢらが求むるところなりと彼等つひにパロの前より逐いださる一二 爰にヱホバ、モーセにいひたまひけるは汝の手をエジプトの地のうへに舒て蝗をエジプトの國にのぞませて彼の雹が打殘したる地の諸の蔬を悉く食しめよ一三 モーセすなはちエジプトの地の上に其杖をのべければヱホバ東風をおこしてその一日一夜地にふかしめたまひしが東風朝におよびて蝗を吹きたりて一四 蝗エジプト全國にのぞみエジプトの四方の境に居て害をなすこと太甚し是より先には斯のごとき蝗なかりし是より後にもあらざるべし一五 蝗全國の上を蔽ひければ國暗くなりぬ而して蝗地の諸の蔬および雹の打殘せし樹の菓を食ひたればエジプト全國に於て樹にも田圃の蔬にも青き者とてはのこらざりき一六 是をもてパロ急ぎモーセとアロンを召て言ふ我なんぢらの神ヱホバと汝等とにむかひて罪ををかせり一七 然ば請ふ今一次のみ吾罪を宥してなんぢらの神ヱホバに願ひ唯此死を我より取はなさしめよと一八 彼すなはちパロの所より出てヱホバにねがひければ一九 ヱホバはなはだ強き西風を吹めぐらせて蝗を吹はらはし之を紅海に驅いれたまひてエジプトの四方の境に蝗ひとつも遺らざるにいたれり二〇 然れどもヱホバ、パロの心を剛愎にしたまひたればイスラエ

ルの子孫をさらしめざりき二一ヱホバまたモーセにいひたまひけるは天にむかひて汝の手を舒べエジプトの國に黒暗を起すべし其暗黒は摸るべきなりと二二モーセすなはち天にむかひて手を舒ければ稠密黒暗三日のあひだエジプト全國にありて二三三日の間は人々たがひに相見るあたはず又おのれの處より起ものなかりき然どイスラエルの子孫の居處には皆光ありき二四是に於てパロ、モーセを呼ていひけるは汝等ゆきてヱホバに事よ唯なんぢらの羊と牛を留めおくべし汝らの子女も亦なんぢらとともに往べし二五モーセいひけるは汝また我等の神ヱホバに献ぐべき犠牲と燔祭の物をも我儕に與ふべきなり二六われらの家畜もわれらとともに往べし一蹄も後にのこすべからず其は我等その中を取てわれらの神ヱホバに事べきが故なりまたわれら彼處にいたるまでは何をもてヱホバに事ふべきかを知ざればなりと二七然れどもヱホバ、パロの心を剛愎にしたまひたればパロかれらをさらしむることを肯ぜざりき二八すなはちパロ、モーセに言ふ我をはなれて去よ自ら慎め重てわが面を見るなかれ汝わが面を見る日には死べし二九モーセいひけるは汝の言ふところは善し我重て復なんぢの面を見ざるべし

第一一章一ヱホバ、モーセにいひたまひけるは我今一箇の災をパロおよびエジプトに降さん然後かれ汝等を此處より去しむべし彼なんぢらを全く去しむるには必ず汝らを此より逐はらはん二然ば汝民の耳にかたり男 女をしておのおのその隣々に銀の飾品金の飾具を乞しめよと三ヱホバつひに民をしてエジプト人の恩を蒙らしめたまふ又その人モーセはエジプトの國にてパロの臣下の目と民の目に甚だ大なる者と見えたり四モーセいひけるはヱホバかく言たまふ夜半頃われ出てエジプトの中に至らん五エジプトの國の中の長子は位に坐するパロの長子より磨の後にをる婢の長子まで悉く死べし又獣畜の首出もしかり六而してエジプト全國に大なる號哭あるべし是まで是のごとき事はあらずまた再び斯ること有ざるべし七然どイスラエルの子孫にむかひては犬もその舌をうごかさじ人にむかひても獣畜にむかひても然り汝等これによりてヱホバがエジプト人とイスラエルのあひだに區別をなしたまふを知べし八汝の此臣等みなわが許に下り來てわれを拝し汝となんぢに從がふ民みな出よと言ん然る後われ出べしと烈しく怒りてパロの所より出たり九ヱホバ、モーセにいひたまひけるはパロ汝に聽ざるべし是をもて吾がエジプトの國に奇蹟をおこなふこと増べし一〇モーセとアロンこの諸の奇蹟をことごとくパロの前に行ひたれどもヱホバ、パロの心を剛愎にしたまひければ彼イスラエルの子孫をその國より去しめざりき

第一二章一ヱホバ、エジプトの國にてモーセとアロンに告ていひたまひけるは二此月を汝らの月の首となせ汝ら是を年の正月となすべし三汝等イスラエルの全會衆に告て言べし此月の十日に家の父たる者おのおの羔羊を取べし即ち家ごとに一箇

の羔羊を取べし四もし家族少くして其羔羊を盡すことあたはずばその家の隣なる人とともに人の數にしたがひて之を取べし各人の食ふ所にしたがひて汝等羔羊を計るべし五汝らの羔羊は疵なき當歳の牡なるべし汝等綿羊あるひは山羊の中よりこれを取べし六而して此月の十四日まで之を守りおきイスラエルの會衆みな薄暮に之を屠り七その血をとりて其之を食ふ家の門口の兩旁の楣と鴨居に塗べし八而して此夜その肉を火に炙て食ひ又酵いれぬパンに苦菜をそへて食ふべし九其を生にても水に煮ても食ふなかれ火に炙べし其頭と脛と臟腑とを皆くらへ一〇其を明朝まで殘しおくなかれ其明朝まで殘れる者は火にて燒つくすべし一一なんぢら斯之を食ふべし即ち腰をひきからげ足に鞋を穿き手に杖をとりて急て之を食ふべし是ヱホバの逾越節なり一二是夜われエジプトの國を巡りて人と畜とを論ずエジプトの國の中の長子たる者を盡く撃殺し又エジプトの諸の神に罰をかうむらせん我はヱホバなり一三その血なんぢらが居るところの家にありて汝等のために記號とならん我血を見る時なんぢらを逾越すべし又わがエジプトの國を撃つ時災なんぢらに降りて滅ぼすことなかるべし一四汝ら是日を記念えてヱホバの節期となし世々これを祝ふべし汝等之を常例となして祝ふべし一五七日の間酵いれぬパンを食ふべしその首の日にパン酵を汝等の家より除け凡て首の日より七日までに酵入たるパンを食ふ人はイスラエルより絶るべきなり一六且首の日に聖會をひらくべし又第七日に聖會を汝らの中に開け是ふたつの日には何の業をもなすべからず只各人の食ふ者のみ汝等作ることを得べし一七汝ら酵いれぬパンの節期を守るべし其は此日に我なんぢらの軍隊をエジプトの國より導きいだせばなり故に汝ら常例となして世々是日をまもるべし一八正月に於てその月の十四日の晩より同月の二十一日の晩まで汝ら酵いれぬパンを食へ一九七日の間なんぢらの家にパン酵をおくべからず凡て酵いれたる物を食ふ人は其異邦人たると本國に生れし者たるとを問ず皆イスラエルの聖會より絶るべし二〇汝ら酵いれたる物は何をも食ふべからず凡て汝らの居處に於ては酵いれぬパンを食ふべし二一是に於てモーセ、イスラエルの長老を盡くまねきて之にいふ汝等その家族に循ひて一頭の羔羊を撿み取り之を屠りて逾越節のために備へよ二二又牛膝草一束を取て盂の血に濡し盂の血を門口の鴨居および二旁の柱にそそぐべし明朝にいたるまで汝等一人も家の戸をいづるなかれ二三其はヱホバ、エジプトを撃に巡りたまふ時鴨居と兩旁の柱に血のあるを見ばヱホバ其門を逾越し殺滅者をして汝等の家に入て撃ざらしめたまふべければなり二四汝ら是事を例となして汝となんぢの子孫永くこれを守るべし二五汝等ヱホバがその言たまひし如くになんぢらに與へたまはんところの地に至る時はこの禮式をまもるべし二六若なんぢらの子女この禮式は何の意なるやと汝らに問ば二七汝ら言ふべし是はヱホバの逾越節の祭祀なりヱホバ、エジプト人を撃たま

ひし時エジプトにをるイスラエルの子孫の家を逾越てわれらの家を救ひたまへりと民すなはち鞠て拝せり二八 イスラエルの子孫去てヱホバのモーセとアロンに命じたまひしごとくなし斯おこなへり二九 爰にヱホバ夜半にエジプトの國の中の長子たる者を位に坐するパロの長子より牢獄にある俘虜の長子まで盡く撃たまふ亦家畜の首生もしかり三〇 期有しかばパロとその諸の臣下およびエジプト人みな夜の中に起あがりエジプトに大なる號哭ありき死人あらざる家なかりければなり三一 パロすなはち夜の中にモーセとアロンを召ていひけるは汝らとイスラエルの子孫起てわが民の中より出さり汝らがいへる如くに往てヱホバに事へよ三二 亦なんぢらが言るごとく汝らの羊と牛をひきて去れ汝らまた我を祝せよと三三 是においてエジプト人我等みな死ると言て民を催逼て速かに國を去しめんとせしかば三四 民捏粉の未だ酵いれざるを執り捏盤を衣服に包みて肩に負ふ三五 而してイスラエルの子孫モーセの言のごとく爲しエジプト人に銀の飾物、金の飾物および衣服を乞たるに三六 ヱホバ、エジプト人をして民をめぐましめ彼等にこれを與へしめたまふ斯かれらエジプト人の物を取り三七 斯てイスラエルの子孫ラメセスよりスコテに進みしが子女の外に徒にて歩める男六十萬人ありき三八 又衆多の寄集人および羊牛等はなはだ多の家畜彼等とともに上れり三九 爰に彼等エジプトより携へいでたる捏粉をもて酵いれぬパンを烘り未だ酵をいれざりければなり是かれらエジプトより逐いだされて濡滞るを得ざりしに由り又何の食糧をも備へざりしに因る四〇 偖イスラエルの子孫のエジプトに住居しその住居の間は四百三十年なりき四一 四百三十年の終にいたり即ち其日にヱホバの軍隊みなエジプトの國より出たり四二 是はヱホバが彼等をエジプトの國より導きいだしたまひし事のためにヱホバの前に守るべき夜なり是はヱホバの夜にしてイスラエルの子孫が皆世々まもるべき者なり四三 ヱホバ、モーセとアロンに言たまひけるは逾越節の例は是のごとし異邦人はこれを食ふべからず四四 但し各人の金にて買たる僕は割禮を施して然る後是を食しむべし四五 外國の客および傭人は之を食ふべからず四六 一の家にてこれを食ふべしその肉を少も家の外に持いづるなかれ又其骨を折べからず四七 イスラエルの會衆みな之を守るべし四八 異邦人なんぢとともに寄居てヱホバの逾越節を守らんとせば其男悉く割禮を受て然る後に近りて守るべし即ち彼は國に生れたる者のごとくなるべし割禮をうけざる人はこれを食ふべからざるなり四九 國に生れたる者にもまた汝らの中に寄居る異邦人にも此法は同一なり五〇 イスラエルの子孫みな斯おこなひヱホバのモーセとアロンに命じたまひしごとく爲たり五一 その同じ日にヱホバ、イスラエルの子孫をその軍隊にしたがひてエジプトの國より導きいだしたまへり

第一三章 一 爰にヱホバ、モーセに告ていひたまひけるは二 人と畜とを論ず凡てイスラエルの子孫の中の始て生れたる首生をば

皆聖別て我に歸せしむべし是わが所屬なればなり三モーセ民にいひけるは汝等エジプトを出で奴隷たる家を出るこの日を誌えよヱホバ能ある手をもて汝等を此より導きいだしたまへばなり酵いれたるパンを食ふべからず四アビブの月の此日なんぢら出づ五ヱホバ汝を導きてカナン人ヘテ人アモリ人ヒビ人エブス人の地すなはちその汝にあたへんと汝の先祖たちに誓ひたまひし彼乳と蜜の流るる地に至らしめたまはん時なんぢ此月に是禮式を守るべし六七日の間なんぢ酵いれぬパンを食ひ第七日にヱホバの節筵をなすべし七酵いれぬパンを七日くらふべし酵いれたるパンを汝の所におくなかれ又汝の境の中にて汝の許にパン酵をおくなかれ八汝その日に汝の子に示して言べし是は吾がエジプトより出る時にヱホバの我に爲したまひし事のためなりと九斯是をなんぢの手におきて記號となし汝の目の間におきて記號となしてヱホバの法律を汝の口に在しむべし其はヱホバ能ある手をもて汝をエジプトより導きいだしたまへばなり一〇是故に年々その期にいたりてこの例をまもるべし一一ヱホバ汝となんぢの先祖等に誓ひたまひしごとく汝をカナン人の地にみちびきて之を汝に與へたまはん時一二汝凡て始て生れたる者及び汝の有る畜の初生を悉く分ちてヱホバに歸せしむべし男牡はヱホバの所屬なるべし一三又驢馬の初子は皆羔羊をもて贖ふべしもし贖はずばその頸を折るべし汝の子等の中の長子なる人はみな贖ふべし一四後に汝の子汝に問て是は何なると言ばこれに言べしヱホバ能ある手をもて我等をエジプトより出し奴隷たりし家より出したまへり一五當時パロ剛愎にして我等を去しめざりしかばヱホバ、エジプトの國の中の長子たる者を人の長子より畜の初生まで盡く殺したまへり是故に始めて生れし牡を盡くヱホバに犧牲に献ぐ但しわが子等の中の長子は之を贖ふなり一六是をなんぢの手におきて號となし汝の目の間におきて誌となすべしヱホバ能ある手をもて我等をエジプトより導きいだしたまひたればなりと一七偖パロ民をさらしめし時ペリシテ人の地は近かりけれども神彼等をみちびきて其地を通りたまはざりき其は民戰爭を見ば悔てエジプトに歸るならんと神おもひたまひたればなり一八神紅海の曠野の道より民を導きたまふイスラエルの子孫行伍をたててエジプトの國より出づ一九其時モーセはヨセフの骨を携ふ是はヨセフ神かならず汝らを眷みたまふべければ汝らわが骨を此より携へ出づべしといひてイスラエルの子孫を固く誓せたればなり二〇斯てかれらスコテより進みて曠野の端なるエタム比幕張す二一ヱホバかれらの前に往たまひ晝は雲の柱をもてかれらを導き夜は火の柱をもて彼らを照して晝夜往すすましめたまふ二二民の前に晝は雲の柱を除きたまはず夜は火の柱をのぞきたまはず

第一四章

一茲にヱホバ、モーセに告ていひ給ひけるは二イスラエルの子孫に言て轉回てミグドルと海の間なるピハヒロテの前にあたりてバアルゼポンの前に幕を張しめよ其にむかひて海の

傍に幕を張るべし三パロ、イスラエルの子孫の事をかたりて彼等はその地に迷ひをりて曠野に閉こめられたるならんといふべければなり四我パロの心を剛愎にすべければパロ彼等の後を追はん我パロとその凡の軍勢に由て譽を得エジプト人をして吾ヱホバなるを知しめんと彼等すなはち斯なせり五茲に民の逃さりたることエジプト王に聞えければパロとその臣下等民の事につきて心を變じて言ふ我等何て斯イスラエルを去しめて我に事ざらしむるがごとき事をなしたるやと六パロすなはちその車を備へ民を將て己にしたがはしめ七撰抜の戰車六百兩にエジプトの諸の戰車および其の諸の軍長等を率ゐたり八ヱホバ、エジプト王パロの心を剛愎にしたまひたれば彼イスラエルの子孫の後を追ふイスラエルの子孫は高らかなる手によりて出しなり九エジプト人等パロの馬、車およびその騎兵と軍勢彼等の後を追てそのバアルゼポンの前なるピハヒロテの邊にて海の傍に幕を張るに追つけり一〇パロの近よりし時イスラエルの子孫目をあげて視しにエジプト人己の後に進み來りしかば痛く懼れたり是に於てイスラエルの子孫ヱホバに呼號り一一且モーセに言けるはエジプトに墓のあらざるがために汝われらをたづさへいだして曠野に死しむるや何故に汝われらをエジプトより導き出して斯我らに爲や一二我等がエジプトにて汝に告て我儕を棄おき我らをしてエジプト人に事しめよと言し言は是ならずや其は曠野にて死るよりもエジプト人に事るは善ればなり一三モーセ民にいひけるは汝ら懼るるなかれ立てヱホバが今日汝等のために爲たまはんところの救を見よ汝らが今日見たるエジプト人をば汝らかさねて復これを見ること絶てなかるべきなり一四ヱホバ汝等のために戰ひたまはん汝等は靜りて居るべし一五時にヱホバ、モーセにいひたまひけるは汝なんぞ我に呼はるやイスラエルの子孫に言て進みゆかしめよ一六汝杖を擧げ手を海の上に伸て之を分ちイスラエルの子孫をして海の中の乾ける所を往しめよ一七我エジプト人の心を剛愎にすべければ彼等その後にしたがひて入るべし我かくしてパロとその諸の軍勢およびその戰車と騎兵に因て榮譽を得ん一八我がパロとその戰車と騎兵とによりて榮譽をえん時エジプト人は我のヱホバなるを知ん一九爰にイスラエルの陣營の前に行る神の使者移りてその後に行けり即ち雲の柱その前面をはなれて後に立ち二〇エジプト人の陣營とイスラエル人の陣營の間に至りけるが彼がためには雲となり暗となり是がためには夜を照せり是をもて彼と是と夜の中に相近づかざりき二一モーセ手を海の上に伸ければヱホバ終夜強き東風をもて海を退かしめ海を陸地となしたまひて水遂に分れたり二二イスラエルの子孫海の中の乾ける所を行くに水は彼等の右左に墻となれり二三エジプト人等パロの馬車、騎兵みなその後にしたがひて海の中に入る二四曉にヱホバ火と雲との柱の中よりエジプト人の軍勢を望みエジプト人の軍勢を惱まし二五其車の輪を脫して行に重くならしめたまひければエジプト

人言ふ我儕イスラエルを離れて逃ん其はヱホバかれらのためにエジプト人と戰へばなりと二六時にヱホバ、モーセに言たまひける汝の手を海の上に伸て水をエジプト人とその戰車と騎兵の上に流れ反らしめよと二七モーセすなはち手を海の上に伸けるに夜明におよびて海本の勢力にかへりたればエジプト人之に逆ひて逃たりしがヱホバ、エジプト人を海の中に擲ちたまへり二八即ち水流反りて戰車と騎兵を覆ひイスラエルの後にしたがひて海にいりしパロの軍勢を悉く覆へり一人も遺れる者あらざりき二九然どイスラエルの子孫は海の中の乾ける所を歩みしが水はその右左に墻となれり三〇斯ヱホバこの日イスラエルをエジプト人の手より救ひたまへりイスラエルはエジプト人が海邊に死をるを見たり三一イスラエルまたヱホバがエジプト人に爲たまひし大なる事を見たり是に於て民ヱホバを畏れヱホバとその僕モーセを信じたり

第一五章 一是に於てモーセおよびイスラエルの子孫この歌をヱホバに謡ふ云く我ヱホバを歌ひ頌ん彼は高らかに高くいますなり彼は馬とその乗者を海になげうちたまへり二わが力わが歌はヱホバなり彼はわが救拯となりたまへり彼はわが神なり我これを頌美ん彼はわが父の神なり我これを崇めん三ヱホバは軍人にして其名はヱホバなり四彼パロの戰車とその軍勢を海に投すてたまふパロの勝れたる軍長等は紅海に沈めり五大水かれらを掩ひて彼等石のごとくに淵の底に下る六ヱホバよ汝の右の手は力をもて榮光をあらはすヱホバよ汝の右の手は敵を碎く七汝の大なる榮光をもて汝は汝にたち逆ふ者を滅したまふ汝怒を發すれば彼等は藁のごとくに焚つくさる八汝の鼻の息によりて水積かさなり浪堅く立て岸のごとくに成り大水海の中に凝る九敵は言ふ我追て追つき掠取物を分たん我かれらに因てわが心を飽しめん我劍を抜んわが手かれらを亡さんと一〇汝氣を吹たまへば海かれらを覆ひて彼等は猛烈き水に鉛のごとくに沈めり一一ヱホバよ神の中に誰か汝に如ものあらん誰か汝のごとく聖して榮あり讃べくして威ありて奇事を行なふ者あらんや一二汝その右の手を伸たまへば地かれらを呑む一三汝はその贖ひし民を恩惠をもて導き汝の力をもて彼等を汝の聖き居所に引たまふ一四國々の民聞て慄へペリシテに住む者畏懼を懐く一五エドムの君等駭きモアブの剛者戰慄くカナンに住る者みな消うせん一六畏懼と戰慄かれらに及ぶ汝の腕の大なるがために彼らは石のごとくに黙然たりヱホバよ汝の民の通り過るまで汝の買たまひし民の通り過るまで然るべし一七汝民を導きてこれを汝の産業の山に植たまはんヱホバよ是すなはち汝の居所とせんとて汝の設けたまひし者なり主よ是汝の手の建たる聖所なり一八ヱホバは世々限なく王たるべし一九斯パロの馬その車および騎兵とともに海にいりしにヱホバ海の水を彼等の上に流れ還らしめたまひしがイスラエルの子孫は海の中にありて旱地を通れり二〇時にアロンの姉なる預言者ミリアム鼗を手にとるに婦等みな彼

にしたがひて出で鼓をとり且踊る二一ミリアムすなはち彼等に和へて言ふ汝等ヱホバを歌ひ頌よ彼は高らかに高くいますなり彼は馬とその乗者を海に擲ちたまへりと二二斯てモーセ紅海よりイスラエルを導きてシュルの曠野にいり曠野に三日歩みたりしが水を得ざりき二三彼ら遂にメラにいたりしがメラの水苦くして飲ことを得ざりき是をもて其名はメラ(苦)と呼る二四是に於て民モーセにむかひて呟き我儕何を飲んかと言ければ二五モーセ、ヱホバに呼はりしにヱホバこれに一本の木を示したまひたれば即ちこれを水に投いれしに水甘くなれり彼處にてヱホバ民のために法度と法律をたてたまひ彼處にてこれを試みて二六言たまはく汝もし善く汝の神ヱホバの聲に聽したがひヱホバの口に善と見ることを爲しその誡命に耳を傾けその諸の法度を守ば我わがエジプト人に加へしところのその疾病を一も汝に加へざるべし其は我はヱホバにして汝を醫す者なればなりと二七斯て彼等エリムに至れり其處に水の井十二棕櫚七十本あり彼處にて彼等水の傍に幕張す

第一六章 一 斯てエリムを出たちてイスラエルの子孫の會衆そのエジプトの地を出しより二箇月の十五日に皆エリムとシナイの間なるシンの曠野にいたりけるが二其曠野においてイスラエルの全會衆モーセとアロンに向ひて呟けり三即ちイスラエルの子孫かれらに言けるは我儕エジプトの地に於て肉の鍋の側に坐り飽までにパンを食ひし時にヱホバの手によりて死たらば善りし者を汝等はこの曠野に我等を導きいだしてこの全會を饑に死しめんとするなり四時にヱホバ、モーセに言たまひけるは視よ我パンを汝らのために天より降さん民いでて日用の分を毎日斂むべし斯して我かれらが吾の法律にしたがふや否を試みん五第六日には彼等その取いれたる者を調理ふべし其は日々に斂る者の二倍なるべし六モーセとアロン、イスラエルの全の子孫に言けるは夕にいたらば汝等はヱホバが汝らをエジプトの地より導きいだしたまひしなるを知にいたらん七又朝にいたらば汝等ヱホバの榮光を見ん其はヱホバなんぢらがヱホバに向ひて呟くを聞たまへばなり我等を誰となして汝等は我儕に向ひて呟くや八モーセまた言けるはヱホバ夕には汝等に肉を與へて食はしめ朝にはパンをあたへて飽しめたまはん其はヱホバ己にむかひて汝等が呟くところの怨言を聞給へばなり我儕を誰と爲や汝等の怨言は我等にむかひてするに非ずヱホバにむかひてするなり九モーセ、アロンに言けるはイスラエルの子孫の全會衆に言へ汝等ヱホバの前に近よれヱホバなんぢらの怨言を聞給へりと一〇アロンすなはちイスラエルの子孫の全會衆に語しかば彼等曠野を望むにヱホバの榮光雲の中に顯はる一一ヱホバ、モーセに告て言たまひけるは一二我イスラエルの子孫の怨言を聞り彼等に告て言へ汝等夕には肉を食ひ朝にはパンに飽べし而して我のヱホバにして汝等の神なることを知にいたらんと一三即ち夕におよびて鶉きたりて營を覆ふ又朝におよびて露營の四圍に

おきしが一四そのおける露乾くにあたりて曠野の表に霜のごとき小き圓き者地にあり一五イスラエルの子孫これを見て此は何ぞやと互に言ふ其はその何たるを知ざればなりモーセかれらに言けるは是はヱホバが汝等の食にあたへたまふパンなり一六ヱホバの命じたまふところの事は是なり即ち各その食ふところに循ひて之を斂め汝等の人數にしたがひて一人に一オメルを取れ各人その天幕にをる者等のためにこれを取べし一七イスラエルの子孫かくなせしに其斂るところに多きと少きとありしが一八オメルをもてこれむ量るに多く斂めし者にも餘るところ無く少く斂めし者にも足ぬところ無りき皆その食ふところに循ひてこれを斂めたり一九モーセ彼等に誰も朝までこれを殘しおく可らずと言り二〇然るに彼等モーセに聽したがはずして或者はこれを朝まで殘したりしが蟲たかりて臭なりぬモーセこれを怒る二一人々各その食ふところに循ひて朝毎に之を斂めしが日熱なれば消ゆ二二第六日にいたりて人々二倍のパンを斂めたり即ち一人に二オメルを斂むるに會衆の長皆きたりて之をモーセに告ぐモーセ二三かれらに言ふヱホバの言たまふところ是のごとし明日はヱホバの聖安息日にして休息なり今日汝等烤んとする者を烤き煮んとする者を煮よ其殘れる者は皆明朝まで藏めおくべし二四彼等モーセの命ぜしごとくに翌朝まで藏めおきしが臭なること無く又蟲もその中に生ぜざりき二五モーセ言ふ汝等今日其を食へ今日はヱホバの安息日なれば今日は汝等これを野に獲ざるべし二六六日の間汝等これを斂むべし第七日は安息日なればその日には有ざるべし二七然るに民の中に七日に出て斂めんとせし者ありしが得ところ無りき二八是に於てヱホバ、モーセに言たまひけるは何時まで汝等は吾が誡命とわが律法をまもることをせざるや二九汝等視よヱホバなんぢらに安息日を賜へり故に第六日に二日の食物を汝等にあたへたまふなり汝等おのおのその處に休みをれ第七日にはその處より出る者あるべからず三〇是民第七日に休息り三一イスラエルの家その物の名をマナと稱り是は莞の實のごとくにして白く其味は蜜をいれたる菓子のごとし三二モーセ言ふヱホバの命じたまふところ是のごとし是を一オメル盛て汝等の代々の子孫のためにたくはへおくべし是はわが汝等をエジプトの地より導きいだせし時に曠野にて汝等を養ひしところのパンを之に見さしめんためなり三三而してモーセ、アロンに言けるは壺を取てその中にマナ一オメルを盛てこれをヱホバの前におき汝等の代々の子孫のためにたくはふべし三四ヱホバのモーセに命じたまひし如くにアロンこれを律法の前におきてたくはふ三五イスラエルの子孫は人の住る地に至るまで四十年が間マナを食へり即ちカナンの地の境にいたるまでマナを食へり三六オメルはエパの十分の一なり

第一七章

一イスラエルの子孫の會衆ヱホバの命にしたがひて皆シンの曠野を立出で旅路をかさねてレピデムに幕張せしが民の飲む水あらざりき二是をもて民モーセと爭ひて言ふ我儕に水

をあたへて飲しめよモーセかれらに言けるは汝ら何ぞ我とあらそふや何ぞヱホバを試むるや三彼處にて民水に渇き民モーセにむかひて呟き言ふ汝などて我等をエジプトより導きいだして我等とわれらの子女とわれらの家畜を渇に死しめんとするや四是に於てモーセ、ヱホバに呼はりて言ふ我この民に何をなすべきや彼等は殆ど我を石にて撃んとするなり五ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝民の前に進み民の中の或長老等を伴ひかの汝が河を撃し杖を手に執て往よ六視よ我そこにて汝の前にあたりてホレブの磐の上に立ん汝磐を撃べし然せば其より水出ん民これを飲べしモーセすなはちイスラエルの長老等の前にて斯おこなへり七かくて彼その處の名をマツサと呼び又メリバと呼り是はイスラエルの子孫の爭ひしに由り又そのヱホバはわれらの中に在すや否と言てヱホバを試みしに由なり八時にアマレクきたりてイスラエルとレピデムに戰ふ九モーセ、ヨシユアに言けるは我等のために人を擇み出てアマレクと戰へ明日我神の杖を手にとりて岡の嶺に立ん一〇ヨシユアすなはちモーセの己に言しごとくに爲しアマレクと戰ふモーセ、アロンおよびホルは岡の嶺に登りしが一一モーセ手を擧をればイスラエル勝ち手を垂ればアマレク勝り一二然るにモーセの手重くなりたればアロンとホル石をとりてモーセの下におきてその上に坐せしめ一人は此方一人は彼方にありてモーセの手を支へたりしかばその手日の沒まで垂下ざりき一三是においてヨシユア刃をもてアマレクとその民を敗れり一四ヱホバ、モーセに言たまひけるは之を書に筆して記念となしヨシユアの耳にこれをいれよ我必ずアマレクの名を塗抹て天下にこれを誌ゆること无らしめんと一五斯てモーセ一座の壇を築きその名をヱホバニシ(ヱホバ吾旗)と稱ふ一六モーセ云けらくヱホバの寶位にむかひて手を擧ることありヱホバ世々アマレクと戰ひたまはん

第一八章 一茲にモーセの外舅なるミデアンの祭司ヱテロ神が凡てモーセのため又その民イスラエルのために爲したまひし事ヱホバがイスラエルをエジプトより導き出したまひし事を聞り二是に於てモーセの外舅ヱテロかの遣り還されてありしモーセの妻チッポラとその二人の子を挈へ來る三その子の一人の名はゲルシヨムと云ふ是はモーセ我他國に客となりをると言たればなり四今一人の名はエリエゼルと曰ふ是はかれ吾父の神われを助け我を救ひてパロの劍を免かれしめたまふと言たればなり五斯モーセの外舅ヱテロ、モーセの子等と妻をつれて曠野に來りモーセが神の山に陣を張る處にいたる六彼すなはちモーセに言けるは汝の外舅なる我ヱテロ汝の妻および之と供なるその二人の子をたづさへて汝に詣ると七モーセ出てその外舅を迎へ禮をなして之に接吻し互に其安否を問て共に天幕に入る八而してモーセ、ヱホバがイスラエルのためにパロとエジプト人とに爲たまひし諸の事と途にて遇し諸の艱難およびヱホバの己等を拯ひたまひし事をその外舅に語りければ九ヱテロ、ヱホバが

イスラエルをエジプト人の手より救ひいだして之に諸の恩典をたまひし事を喜べり一〇ヱテロすなはち言けるはヱホバは頌べき哉汝等をエジプト人の手とパロの手より救ひいだし民をエジプト人の手の下より拯ひいだせり一一今我知るヱホバは諸の神よりも大なり彼等傲慢を逞しうして事をなせしがヱホバかれらに勝りと一二而してモーセの外舅ヱテロ燔祭と犠牲をヱホバに持きたれりアロンおよびイスラエルの長老等皆きたりてモーセの外舅とともに神の前に食をなす一三次の日にいたりてモーセ坐して民を審判きしが民は朝より夕までモーセの傍に立り一四モーセの外舅モーセの凡て民に爲ところを見て言けるは汝が民になす此事は何なるや何故に汝は一人坐をりて民朝より夕まで汝の傍にたつや一五モーセその外舅に言けるは民神に問んとて我に來るなり一六彼等事ある時は我に來れば我此と彼とを審判きて神の法度と律法を知しむ一七モーセの外舅これに言けるは汝のなすところ善らず一八汝かならず氣力おとろへん汝も汝とともなる民も然らん此事汝には重に過ぐ汝一人にては之を爲ことあたはざるべし一九今吾言を聽け我なんぢに策を授けん願くは神なんぢとともに在せ汝民のために神の前に居り訴訟を神に陳よ二〇汝かれらに法度と律法を教へ彼等の歩むべき道と爲べき事とを彼等に示せ二一又汝全體の民の中より賢して神を畏れ眞實を重んじ利を惡むところの人を選み之を民の上に立て千人の司となし百人の司となし五十人の司となし十人の司となすべし二二而して彼等をして常に民を鞫かしめ大事は凡てこれを汝に陳しめ小事は凡て彼等みづからこれを判かしむべし斯汝の身の煩瑣を省き彼らをして汝とその任を共にせしめよ二三汝もし此事を爲し神また斯汝に命じなば汝はこれに勝ん此民もまた安然にその所に到ることを得べし二四モーセその外舅の言にしたがひてその凡て言しごとく成り二五モーセすなはちイスラエルの中より遍く賢き人を擇みてこれを民の長となし千人の司となし百人の司となし五十人の司となし十人の司となせり二六彼等常に民を鞫き難事はこれをモーセに陳べ小事は凡て自らこれを判けり二七斯てモーセその外舅を還したればその國に往ぬ

第一九章 一イスラエルの子孫エジプトの地を出て後第三月にいたりて其日にシナイの曠野に至る二即ちかれらレピデムを出たちてシナイの曠野にいたり曠野に幕を張り彼處にてイスラエルは山の前に營を設けたり三爰にモーセ登て神に詣るにヱホバ山より彼を呼て言たまはく汝かくヤコブの家に言ひイスラエルの子孫に告べし四汝らはエジプト人に我がなしたるところの事を見我が鷲の翼をのべて汝らを負て我にいたらしめしを見たり五然ば汝等もし善く我が言を聽きわが契約を守らば汝等は諸の民に愈りてわが寶となるべし全地はわが所有なればなり六汝等は我に對して祭司の國となり聖き民となるべし是等の言語を汝イスラエルの子孫に告べし七是に於てモーセ來りて民の長老等

を呼びヱホバの己に命じたまひし言を盡くその前に陳たれば八 民皆等く應へて言けるはヱホバの言たまひし所は皆われら之を爲べしとモーセすなはち民の言をヱホバに告ぐ九 ヱホバ、モーセに言たまひけるは觀よ我密雲の中にをりて汝に臨む是民をして我が汝と語るを聞しめて汝を永く信ぜしめんがためなりとモーセ民の言をヱホバに告たり一〇 ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝民の所に往て今日明日これを聖め之にその衣服を滌せ一一 準備をなして三日を待て其は第三日にヱホバ全體の民の目の前にてシナイ山に降ればなり一二 汝民のために四周に境界を設けて言べし汝等愼んで山に登るなかれその境界に捫るべからず山に捫る者はかならず殺さるべし一三 手を之に觸べからず其者はかならす石にて撃ころされ或は射ころさるべし獸と人とを言ず生ることを得じ喇叭を長く吹鳴さば人々山に上るべしと一四 モーセすなはち山を下り民にいたりて民を聖め民その衣服を濯ふ一五 モーセ民に言けるは準備をなして三日を待て婦人に近づくべからず一六 かくて三日の朝にいたりて雷と電および密雲山の上にあり又喇叭の聲ありて甚だ高かり營にある民みな震ふ一七 モーセ營より民を引いでて神に會しむ民山の麓に立に一八 シナイ山都て煙を出せりヱホバ火の中にありてその上に下りたまへばなりその煙竈の煙のごとく立のぼり山すべて震ふ一九 喇叭の聲彌高くなりゆきてばげしくなりける時モーセ言を出すに神聲をもて應へたまふ二〇 ヱホバ、シナイ山に下りその山の頂上にいまし而してヱホバ山の頂上にモーセを召たまひければモーセ上れり二一 ヱホバ、モーセに言たまひけるは下りて民を警めよ恐らくは民推破りてヱホバに來りて見んとし多の者死るにいたらん二二 又ヱホバに近くところの祭司等にその身を潔めしめよ恐くはヱホバかれらを撃ん二三 モーセ、ヱホバに言けるは民はシナイ山に得のぼらじ其は汝われらを警めて山の四周に境界をたて山を聖めよと言たまひたればなり二四 ヱホバかれに言たまひけるは往け下れ而して汝とアロンともに上り來るべし但祭司等と民には推破りてにのぼりきたらしめざれ恐らくは我かれらを撃ん二五 モーセ民にくだりゆきてこれに告たり

第二〇章

一 神この一切の言を宣て言たまはく二 我は汝の神ヱホバ汝をエジプトの地その奴隸たる家より導き出せし者なり三 汝我面の前に我の外何物をも神とすべからず四 汝自己のために何の偶像をも彫むべからず又上は天にある者下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず五 之を拜むべからずこれに事ふべからず我ヱホバ汝の神は嫉む神なれば我を惡む者にむかひては父の罪を子にむくいて三四代におよぼし六 我を愛しわが誡命を守る者には恩惠をほどこして千代にいたるなり七 汝の神ヱホバの名を妄に口にあぐべからずヱホバはおのれの名を妄に口にあぐる者を罰せではおかざるべし八 安息日を憶えてこれを聖潔すべし九 六日の間勞きて汝の

一切の業を爲べし一〇七日は汝の神ヱホバの安息なれば何の業務をも爲べからず汝も汝の息子息女も汝の僕婢も汝の家畜も汝の門の中にをる他國の人も然り一一其はヱホバ六日の中に天と地と海と其等の中の一切の物を作りて第七日に息みたればなり是をもてヱホバ安息日を祝ひて聖日としたまふ一二汝の父母を敬へ是は汝の神ヱホバの汝にたまふ所の地に汝の生命の長からんためなり一三汝殺すなかれ一四汝姦淫するなかれ一五汝盗むなかれ一六汝その隣人に對して虛妄の證據をたつるなかれ一七汝その隣人の家を貪るなかれ又汝の鄰人の妻およびその僕婢牛驢馬ならびに凡て汝の隣人の所有を貪るなかれ一八民みな雷と電と喇叭の音と山の煙るとを見たり民これを見て懼れをのゝきて遠く立ち一九モーセにいひけるは汝われらに語れ我等聽ん唯神の我らに語りたまふことあらざらしめよ恐くは我等死ん二〇モーセ民に言けるは畏るるなかれ神汝らを試みんため又その畏怖を汝らの面の前におきて汝らに罪を犯さざらしめんために臨みたまへるなり二一是において民は遠くに立ちしがモーセは神の在すところの濃雲に進みいたる二二ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝イスラエルの子孫に斯いふべし汝等は天よりわが汝等に語ふを見たり二三汝等何をも我にならべて造るべからず銀の神をも金の神をも汝等のために造るべからず二四汝土の壇を我に築きてその上に汝の燔祭と酬恩祭汝の羊と牛をそなふべし我は凡てわが名を憶えしむる處にて汝に臨みて汝を祝まん二五汝もし石の壇を我につくるならば琢石をもてこれを築くべからず其は汝もし鑿をこれに當なば之を汚すべければなり二六汝階よりわが壇に升るべからず是汝の恥る處のその上に露ることなからんためなり

第二一章

一是は汝が民の前に立べき律例なり二汝ヘブルの僕を買ふ時は六年の間之に職業を爲しめ第七年には贖を索ずしてこれを釋つべし三彼もし獨身にて來らば獨身にて去べし若妻あらばその妻これとともに去べし四もしその主人これに妻をあたへて男子又は女子これに生れたらば妻とその子等は主人に屬すべし彼は獨身にて去べし五僕もし我わが主人と我が妻子を愛す我釋たるるを好まずと明白に言ば六その主人これを士師の所に携ゆき又戸あるひは戸柱の所につれゆくべし而して主人錐をもてかれの耳を刺とほすべし彼は何時までもこれに事ふべきなり七人若その娘を賣て婢となす時は僕のごとくに去べからず八彼もしその約せし主人の心に適ざる時はその主人これを贖はしむることを得べし然ど之に眞實ならずして亦これを異邦人に賣ことをなすを得べからず九又もし之を己の子に與へんと約しなばこれを女子のごとくに待ふべし一〇父もしその子のために別に娶ることあるとも彼に食物と衣服を與ふる事とその交接の道とはこれを間斷しむべからず一一其人かれに此三を行はずば彼は金をつくのはずして出さることを得べし一二人を撃て死しめたる妻は必ず殺さるべし一三若人みづから畫策こと

なきに神人をその手にかからしめたまふことある時は我汝のために一箇の處を設くればその人其處に逃るべし一四 人もし故にその隣人を謀りて殺す時は汝これをわが壇よりも執へゆきて殺すべし一五 その父あるひは母を撃ものは必ず殺さるべし一六 人を拐帶したる者は之を賣たるも尚その手にあるも必ず殺さるべし一七 その父あるひは母を罵る者は殺さるべし一八 人相爭ふ時に一人石または拳をもてその對手を撃ちし死にいたらずして床につくことあらんに一九 若起あがりて杖によりて歩むにいたらば之を撃たる者は赦さるべし但しその業を休める賠償をなして之を全く愈しむべきなり二〇 人もし杖をもてその僕あるひは婢を撃んにその手の下に死ば必ず罰せらるべし二一 然ど彼もし一日二日生のびなば其人は罰せられざるべし彼はその人の金子なればなり二二 人もし相爭ひて妊める婦を撃ちその子を堕させんに別に害なき時は必ずその婦人の夫の要むる所にしたがひて刑られ法官の定むる所を爲べし二三 若害ある時は生命にて生命を償ひ二四 目にて目を償ひ歯にて歯を償ひ手にて手を償ひ足にて足を償ひ二五 烙にて烙を償ひ傷にて傷を償ひ打傷にて打傷を償ふべし二六 人もしその僕の一の目あるひは婢の一の目を撃てこれを喪さばその目のために之を釋つべし二七 又もしその僕の一箇の歯か婢の一箇の歯を打落ばその歯のために之を釋つべし二八 牛もし男あるひは女を衝て死しめなばその牛をば必ず石にて撃殺すべしその肉は食べからず但しその牛の主は罪なし二九 然ど牛もし素より衝くことをなす者にしてその主これがために忠告をうけし事あるに之を守りおかずして遂に男あるひは女を殺すに至らしめなばその牛は石にて撃れその主もまた殺さるべし三〇 若彼贖罪金を命ぜられなば凡てその命ぜられし者を生命の償に出すべし三一 男子を衝も女子を衝もこの例にしたがひてなすべし三二 牛もし僕あるひは婢を衝ばその主人に銀三十シケルを與ふべし又その牛は石にて撃ころすべし三三 人もし坑を啓くか又は人もし穴を掘ことをなしこれを覆はずして牛あるひは驢馬これに陷ば三四 穴の主これを償ひ金をその所有主に與ふべし但しその死たる畜は己の有となるべし三五 此人の牛もし彼人のを衝殺さば二人その生る牛を賣てその價を分つべし又その死たるものをも分つべし三六 然どその牛素より衝ことをなす者なること知れをるにその主これを守りおかざりしならばその人かならず牛をもて牛を償ふべし但しその死たる者は己の有となるべし

第二二章一 人もし牛あるひは羊を竊みてこれを殺し又は賣る時は五の牛をもて一の牛を賠ひ四の羊をもて一の羊を賠ふべし二 もし盜賊の壞り入るを見てこれを撃て死しむる時はこれがために血をながすに及ばず三 然ど若日いでてよりならば之がために血をながすべし盜賊は全く償をなすべし若物あらざる時は身をうりてその竊める物を償ふべし四 若その竊める物眞に生てその手にあらばその牛驢馬羊たるにかかはらず倍してこれを償ふ

べし五人もし田圃あるひは葡萄園の物を食はせその家畜をはなちて人の田圃の物を食ふにいたらしむる時は自己の田圃の嘉物と自己の葡萄園の嘉物をもてその償をなすべし六火もし逸て荊棘にうつりその積あげたる穀物あるひは未だ刈ざる穀物あるひは田野を燬ばその火を焚たる者かならずこれを償ふべし七人もし金あるひは物を人に預るにその人の家より竊みとられたる時はその盜者あらはれなばこれを倍して償はしむべし八盜者もしあらはれずば家の主人を法官につれゆきて彼がその人の物に手をかけたるや否を見るべし九何の過愆を論ず牛にもあれ驢馬にもあれ羊にもあれ衣服にもあれ又は何の失物にもあれ凡て人の見て是其なりと言ふ者ある時は法官その兩造の言を聽べし而して法官の罪ありとする者これを倍してその對手に償ふべし一〇人もし驢馬か牛か羊か又はその他の家畜をその隣人にあづけんに死か傷けらるるか又は擄ひさらるることありて誰もこれを見し者なき時は一一二人の間にその隣人の物に手をかけずとヱホバを指て誓ふことあるべし然る時はその持主これを承諾べし彼人は償をなすに及ばず一二然ど若自己の許より竊まれたる時はその所有主にこれを償ふべし一三若またその裂ころされし時は其を證據のために持きたるべしその裂ころされし者は償ふにおよばず一四人もしその隣人より借たる者あらんにその物傷けられ又は死ることありてその所有主それとともにをらざる時は必ずこれを償ふべし一五その所有主それと共にをらばこれを償ふにむよばず雇し者なる時もしかり其は雇れて來りしなればなり一六人もし聘定あらざる處女を誘ひてこれと寢たらば必ずこれに聘禮して妻となすべし一七その父もしこれをその人に與ふることを固く拒まば處女にする聘禮にてらして金をはらふべし一八魔術をつかふ女を生しおくべからず一九凡て畜を犯す者をば必ず殺すべし二〇ヱホバをおきて別の神に犧牲を獻る者をば殺すべし二一汝他國の人を惱すべからず又これを虐ぐべからず汝らもエジプトの國にをる時は他國の人たりしなり二二汝凡て寡婦あるひは孤子を惱すべからず二三汝もし彼等を惱まして彼等われに呼らば我かならずその號呼を聽べし二四わが怒烈しくなり我劍をもて汝らを殺さん汝らの妻は寡婦となり汝らの子女は孤子とならん二五汝もし汝とともにあるわが民の貧き者に金を貸す時は金貸のごとくなすべからず又これより利足をとるべからず二六汝もし人の衣服を質にとらば日のいる時までにこれを歸すべし二七其はその身を蔽ふ者は是のみにして是はその膚の衣なればなり彼何の中に寢んや彼われに籲はらば我きかん我は慈悲ある者なればなり二八汝神を罵るべからず民の主長を詛ふべからず二九汝の豐滿なる物と汝の搾りたる物とを獻ぐることを怠るなかれ汝の長子を我に與ふべし三〇汝また汝の牛と羊をも斯なすべし即ち七日母とともにをらしめて八日にこれを我に與ふべし三一汝等は我の聖民となるべし汝らは野にて獸に裂れし者の肉を食ふべからず汝らこれを犬に投與

ふべし

第二十三章一 汝虚妄の風説を言ふらすべからず惡き人と手をあはせて人を誣る證人となるべからず二 汝衆の人にしたがひて惡をなすべからず訴訟において答をなすに方りて衆の人にしたがひて道を曲べからず三 汝また貧き人の訴訟を曲て庇くべからず四 汝もし汝の敵の牛あるひは驢馬の迷ひ去に遭ばかならずこれを牽てその人に歸すべし五 汝もし汝を惡む者の驢馬のその負の下に仆れ臥すを見ば愼みてこれを遺さるべからず必ずこれを助けてその負を釋べし六 汝貧き者の訴訟ある時にその判決を曲べからず七 虚假の事に遠かれ無辜者と義者とはこれを殺すなかれ我は惡き者を義とすることあらざるなり八 汝賄賂を受べからず賄賂は人の目を暗まし義者の言を曲しむるなり九 他國の人を虐ぐべからず汝等はエジプトの國にをる時は他國の人にてありたれば他國の人の心を知なり一〇 汝六年の間汝の地に種播きその實を穫いるべし一一 但し第七年にはこれを息ませて耕さずにおくべし而して汝の民の貧き者に食ふことを得せしめよ其餘れる者は野の獸これを食はん汝の葡萄園も橄欖園も斯のごとくなすべし一二 汝六日の間汝の業をなし七日に息むべし斯汝の牛および驢馬を息ませ汝の婢の子および他國の人をして息をつかしめよ一三 わが汝に言し事に凡て心を用ひよ他の神々の名を稱ふべからずまた之を汝の口より聞えしめざれ一四 汝年に三度わがために節筵を守るべし一五 汝無酵パンの節禮をまもるべし即ちわが汝に命ぜしごとくアビブの月の定の時において七日の間酵いれぬパンを食ふべし其はその月に汝エジプトより出たればなり徒手にてわが前に出る者あるべからず一六 また穡時の節筵を守るべし是すなはち汝が勞苦て田野に播る者の初の實を祝ふなり又收蔵の節筵を守るべし是すなはち汝の勞苦によりて成る者を年の終に田野より收蔵る者なり一七 汝の男たる者は皆年に三次主ヱホバの前に出べし一八 汝わが犠牲の血を酵いれしパンとともに献ぐべからず又わが節筵の脂を翌朝まで殘しおくべからず一九 汝の地に初に結べる實の初を汝の神ヱホバの室に持きたるべし汝山羊羔をその母の乳にて煮べからず二〇 視よ我天の使をかはして汝に先たせ途にて汝を守らせ汝をわが備へし處に導かしめん二一 汝等その前に愼みをりその言にしたがへ之を怒らするなかれ彼なんぢらの咎を赦さざるべしわが名かれの中にあればなり二二 汝もし彼が言にしたがひ凡てわが言ところを爲ば我なんぢの敵の敵となり汝の仇の仇となるべし二三 わが使汝にさきだちゆきて汝をアモリ人ヘテ人ペリジ人カナン人ヒビ人およびヱブス人に導きたらん我かれらを絶べし二四 汝かれらの神を拝むべからずこれに奉事べからず彼らの作にならふなかれ汝其等を悉く毀ちその偶像を打摧くべし二五 汝等の神ヱホバに事へよ然ばヱホバ汝らのパンと水を祝し汝らの中より疾病を除きたまはん二六 汝の國の中には流産する者なく妊ざる者なかるべし我汝の日の數を盈さん二七 我わ

が畏懼をなんぢの前に遣し汝が至るところの民をことごとく敗り汝の諸の敵をして汝に後を見せしめん二八吾黄蜂を汝の先につかはさん是ヒビ人カナン人およびヘテ人を汝の前より逐はらふべし二九我かれらを一年の中には汝の前より逐はらはじ恐くは土地荒れ野の獸增て汝を害せん三〇我漸々にかれらを汝の前より逐はらはん汝らは遂に增てその地を獲にいたらん三一我なんぢの境をさだめて紅海よりペリシテ人の海にいたらせ曠野より河にいたらしめん我この地に住る者を汝の手に付さん汝かれらを汝の前より逐はらふべし三二汝かれらおよび彼らの神と何の契約をもなすべからず三三彼らは汝の國に住べきにあらず恐くは彼ら汝をして我に罪を犯さしめん汝もし彼等の神に事なばその事かならず汝の機檻となるべきなり

第二四章 一又モーセに言たまひけるは汝アロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの七十人の長老とともにヱホバの許に上りきたれ而して汝等遥にたちて拜むべし二モーセ一人ヱホバに近づくべし彼等は近るべからず又民もかれとともに上るべからず三モーセ來りてヱホバの諸の言およびその諸の典例を民に告しに民みな同音に應て云ふヱホバの宣ひし言は皆われらこれを爲べし四モーセ、ヱホバの言をことごとく書記し朝夙に興いでて山の麓に壇を築きイスラエルの十二の支派にしたがひて十二の柱を建て五而してイスラエルの子孫の中の少き人等を遣はしてヱホバに燔祭を献げしめ牛をもて酬恩祭を供へしむ六モーセ時にその血の半をとりて鉢に盛れ又その血の半を壇の上に灌げり七而して契約の書をとりて民に誦きかせたるに彼ら應へて言ふヱホバの宣ふ所は皆われらこれを爲て遵ふべしと八モーセすなはちその血をとりて民に灌ぎて言ふ是すなはちヱホバが此諸の言につきて汝と結たまへる契約の血なり九斯てモーセ、アロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの七十人の長老のぼりゆきて一〇イスラエルの神を見るにその足の下には透明れる青玉をもて作れるごとき物ありて耀ける天空にさも似たり一一神はイスラエルの此頭人等にその手をかけたまはざりき彼等は神を見又食飲をなせり一二茲にヱホバ、モーセに言たまひけるは山に上りて我に來り其處にをれ我わが彼等を教へんために書しるせる法律と誡命を載るところの石の板を汝に與へん一三モーセその從者ヨシユアとともに起あがりモーセのぼりて神の山に至る一四時に彼長老等に言けるは我等の汝等に歸るまで汝等は此に待ちをれ視よアロンとホル汝等とともに在り凡て事ある者は彼等にいたるべし一五而してモーセ山にのぼりしが雲山を蔽ひをる一六すなはちヱホバの榮光シナイ山の上に駐りて雲山を蔽ふこと六日なりしが七日にいたりてヱホバ雲の中よりモーセを呼たまふ一七ヱホバの榮光山の嶺に燃る火のごとくにイスラエルの子孫の目に見えたり一八モーセ雲の中に入り山に登りモーセ四十日四十夜山に居る

第二五章 一ヱホバ、モーセに告て言たまひけるは二イスラエル

の子孫に告て我に献物を持きたれと言へ凡てその心に好んで出す者よりは汝等その我に献ぐるところの物を取べし三 汝等がかれらより取べきその献物は是なり即ち金 銀 銅四 青 紫 紅の線 麻 山羊毛五 赤染の牡羊の皮 貛の皮 合歡木六 燈 油 塗膏と馨しき香を調ふところの香料七 葱珩およびエポデと胸牌に嵌る玉八 彼等わがために聖所を作るべし我かれらの中に住ん九 凡てわが汝らに示すところに循ひ幕屋の式様およびその器具の式様にしたがひてこれを作るべし一〇 彼等合歡木をもて櫃を作るべしその長は二キユビト半その濶は一キユビト半その高は一キユビト半なるべし一一 汝純金をもて之を蔽ふべし即ち内外ともにこれを蔽ひその上の周圍に金の緣を造るべし一二 汝金の環四箇を鑄てその四の足につくべし即ち此旁に二箇の輪彼旁に二箇の輪をつくべし一三 汝また合歡木をもて杠を作りてこれに金を著すべし一四 而してその杠を櫃の邊旁の環にさしいれてこれをもて櫃を舁べし一五 杠は櫃の環に差いれおくべし其より脱はなすべからず一六 汝わが汝に與ふる律法をその櫃に藏むべし一七 汝純金をもて贖罪所を造るべしその長は二キユビト半その濶は一キユビト半なるべし一八 汝金をもて二箇のケルビムを作るべし即ち槌にて打てこれを作り贖罪所の兩旁に置べし一九 一のケルブを此旁に一のケルブを彼旁に造れ即ちケルビムを贖罪所の兩旁に造るべし二〇 ケルビムは翼を高く展べその翼をもて贖罪所を掩ひその面を互に相向くべしすなはちケルビムの面は贖罪所に向ふべし二一 汝贖罪所を櫃の上に置ゑまた我が汝に與ふる律法を櫃の中に藏むべし二二 其處にて我なんぢに會ひ贖罪所の上より律法の櫃の上なる二箇のケルビムの間よりして我イスラエルの子孫のためにわが汝に命ぜんとする諸の事を汝に語ん二三 汝また合歡木をもて案を作るべしその長は二キユビトその濶は一キユビトその高は一キユビト半なるべし二四 而して汝純金をこれに著せその周圍に金の緣をつくるべし二五 汝その四圍に掌寛の邊をつくりその邊の周圍に金の小緣を作るべし二六 またそれがために金の環四箇を作りその足の四隅にその環をつくべし二七 環は邊の側に附べし是は案を舁ところの杠をいるる處なり二八 また合歡木をもてその杠をつくりてこれに金を著すべし案はこれに因て舁るべきなり二九 汝また其に用ふる皿匙杓および酒を灌ぐところの爵を作るべし即ち純金をもてこれを造るべし三〇 汝案の上に供前のパンを置て常にわが前にあらしむべし三一 汝純金をもて一箇の燈臺を造るべし燈臺は槌をもてうちて之を作るべしその臺座軸 萼 節 花は其に聯らしむべし三二 又六の枝をその旁より出しむべし即ち燈臺の三の枝は此旁より出で燈臺の三の枝は彼旁より出しむべし三三 巴旦杏の花の形せる三の萼節および花とともに此枝にあり又巴旦杏の花の形せる三の萼節および花とともに彼枝にあるべし燈臺より出る六の枝を皆斯のごとくにすべし三四 巴旦杏の花の形せる四の萼その節および花とともに燈臺にあるべし三五

兩箇の枝の下に一箇の節あらしめ又その兩箇の枝の下に一箇の節あらしめ又その兩箇の枝の下に一箇の節あらしむべし燈臺より出る六の枝みな是のごとくなるべし三六その節と枝とは其に連ならしめ皆槌にて打て純金をもて造るべし三七又それがために七箇の燈盞を造りその燈盞を上に置てその對向を照さしむべし三八その燈鉗と剪燈盤をも純金ならしむべし三九燈臺と此の諸の器具を造るには純金一タラントを用ふべし四〇汝山にて示されし式樣にしたがひて之を作ることに心を用ひよ

第二六章

一汝また幕屋のために十の幕を造るべしその幕は即ち麻の撚絲青紫および紅の絲をもて之を造り精巧にケルビムをその上に織出すべし二一の幕の長は二十八キユビト一の幕の濶は四キユビトなるべし幕は皆その寸尺を同うすべし三その幕五箇を互に連ねあはせ又その他の幕五箇をも互に連ねあはすべし四而してその一聯の幕の邊においてその聯絡處の端に青色の襟を付べし又他の一聯の幕の聯絡處の邊にも斯なすべし五汝一聯の幕に襟五十をつけ又他の一聯の幕の聯絡處の邊にも襟五十をつけ斯その襟をして彼と此と相對せしむべし六而して金の鐶五十を造りその鐶をもて幕を連ねあはせて一の幕屋となすべし七汝また山羊の毛をもて幕をつくりて幕屋の上の蓋となすべし即ち幕十一をつくるべし八その一箇の幕の長は三十キユビトその一箇の幕の濶は四キユビトなるべし即ちその十一の幕は寸尺を一にすべし九而してその幕五を一に聯ねまたその幕六を一に聯ねその第六の幕を幕屋の前に摺むべし一〇又その一聯の幕の邊すなはちその聯絡處の端に襟五十を付け又他の一聯の幕の聯絡處にも襟五十を付べし一一而して銅の鐶五十を作りその鐶を襟にかけてその幕を聯ねあはせて一となすべし一二その天幕の幕の餘れる遺餘すなはちその餘れる半幕をば幕屋の後に垂しむべし一三天幕の幕の餘れる者は此旁に一キユビト彼旁に一キユビトあり之を幕屋の兩旁此方彼方に垂てこれを蓋ふべし一四汝赤く染たる牡山羊の皮をもて幕屋の蓋をつくりその上に獾の皮の蓋をほどこすべし一五汝合歡木をもて幕屋のために竪板を造るべし一六一枚の板の長は十キユビト一枚の板の濶は一キユビト半なるべし一七板ごとに二の榫をつくりて彼と此と交指しめよ幕屋の板には皆斯のごとく爲べし一八汝幕屋のために板を造るべし即ち南向の方のために板二十枚を作るべし一九而してその二十枚の板の下に銀の座四十を造るべし即ち此板の下にもその二の榫のために二の座あらしめ彼板の下にもその二の榫のために二の座あらしむべし二〇幕屋の他の方すなはちその北の方のためにも板二十枚を作るべし二一而してこれに銀の座四十を作り此板の下にも二の座彼板の下にも二の座あらしむべし二二幕屋の後すなはちその西の方のために板六枚を造るべし二三又幕屋の後の兩の隅のために板二枚を造るべし二四その二枚は下にて相合せしめその頂まで一に連ならしむべし一箇の鐶に於て然りその二枚ともに是の如くなるべし其等は二

の隅のために設くる者なり二五 その板は合て八枚その銀の座は十六座此板にも二の座彼板にも二の座あらしむべし二六 汝合歡木をもて横木を作り幕屋の此方の板のために五本を設くべし二七 また幕屋の彼方の板のために横木五本を設け幕屋の後すなはちその西の方の板のために横木五本を設くべし二八 板の眞中にある中間の横木をば端より端まで通らしむべし二九 而してその板に金を着せ金をもて之がために鐶を作りて横木をこれに貫き又その横木に金を着すべし三〇 汝山にて示されしところのその模範にしたがひて幕屋を建べし三一 汝また靑 紫 紅の線および麻の撚絲をもて幕を作り巧にケルビムをその上に織いだすべし三二 而して金を着たる四本の合歡木の柱の上に之を掛べしその鈎は金にしその柱は四の銀の座の上に置べし三三 汝その幕を鐶の下に掛け其處にその幕の中に律法の櫃を蔵むべしその幕すなはち汝らのために聖所と至聖所を分たん三四 汝至聖所にある律法の櫃の上に贖罪所を置べし三五 而してその幕の外に案を置ゑ幕屋の南の方に燈臺を置て案に對はしむべし案は北の方に置べし三六 又靑 紫 紅の線および麻の撚絲をもて幔を織なして幕屋の入口に掛べし三七 又その幔のために合歡木をもて柱五本を造りてこれに金を着せその鈎を金にすべし又その柱のために銅をもて五箇の座を鑄べし

第二七章一 汝合歡木をもて長五キユビト濶五キユビトの壇を作るべしその壇は四角その高は三キユビトなるべし二 その四隅の上に其の角を作りてその角を其より出しめその壇には銅を着すべし三 又灰を受る壷と火鏟と鉢と肉叉と火鼎を作るべし壇の器は皆銅をもて之を作るべし四 汝壇のために銅をもて金網を作りその網の上にその四隅に銅の鐶を四箇作るべし五 而してその網を壇の中程の邊の下に置て之を壇の半に達せしむべし六 又壇のために杠を作るべし即ち合歡木をもて杠を造り銅をこれに着すべし七 その杠を鐶に貫きその杠を壇の兩旁にあらしめて之を舁べし八 壇は汝板をもて之を空に造り汝が山にて示されしごとくにこれを造るべし九 汝また幕屋の庭をつくるべし南に向ひては庭のために南の方に長百キユピトの細布の幕を設けてその一方に當べし一〇 その二十の柱およびその二十の座は銅にし其柱の鈎およびその桁は銀にすべし一一 又北の方にあたりて長百キユビトの幕をその縦に設くべしその二十の柱とその柱の二十の座は銅にし柱の鈎とその桁は銀にすべし一二 庭の横すなはちその西の方には五十キユビトの幕を設くべしその柱は十その座も十一三 また東に向ひては庭の東の方の濶は五十キユビトにすべし一四 而して此一旁に十五キユビトの幕を設くべしその柱は三その座も三一五 又彼一旁にも十五キユビトの幕を設くべしその柱は三その座も三一六 庭の門のために靑 紫 紅の線および麻の撚絲をもて織なしたる二十キユビトの幔を設くべしその柱は四その座も四一七 庭の四周の柱は皆銀の桁をもて續けその鈎を銀にしその座を銅にすべし一八 庭の縦は百キユビトその横は

五十キユビト宛その高は五キユビト麻の撚絲をもてつくりなしその座を銅にすべし 一九 凡て幕屋に用ふるところの諸の器具並にその釘および庭の釘は銅をもて作るべし 二〇 汝又イスラエルの子孫に命じ橄欖を搗て取たる清き油を燈火のために汝に持きたらしめて絶ず燈火をともすべし 二一 集會の幕屋に於て律法の前なる幕の外にアロンとその子等晩より朝までヱホバの前にその燈火を整ふべし是はイスラエの子孫が世々たえず守るべき定例なり

第二八章 一 汝イスラエルの子孫の中より汝の兄弟アロンとその子等すなはちアロンとその子ナダブ、アビウ、エレアザル、イタマルを汝に至らしめて彼をして我にむかひて祭司の職をなさしむべし 二 汝また汝の兄弟アロンのために聖衣を製りて彼の身に顯榮と榮光あらしむべし 三 汝凡て心に智慧ある者すなはち我が智慧の靈を充しおきたる者等に語りてアロンの衣服を製しめ之を用てアロンを聖別て我に祭司の職をなさしむべし 四 彼等が製るべき衣服は是なり即ち胸牌エポデ明衣間格の裏衣頭帽および帶彼等汝の兄弟アロンとその子等のために聖衣をつくりて彼をして祭司の職を我にむかひてなすことをえせしむべし 五 即ち彼等金青 紫 紅の糸および麻糸をとりて用ふべし 六 又金青 紫 紅の線および麻の撚糸をもて巧にエポデを織なすべし 七 エポデには二の肩帶をほどこしその兩の端を連ねて之を合すべし 八 エポデの上にありてこれを束ぬるところの帶はその物同うしてエポデの製のごとくにすべし即ち金青 紫 紅の糸および麻の撚糸をもてこれを作るべし 九 汝二箇の葱珩をとりてその上にイスラエルの子等の名を鐫つくべし 一〇 即ち彼等の誕生にしたがひてその名六を一の玉に鐫りその遺餘の名六を外の玉に鐫べし 一一 玉に雕刻する人の印を刻が如くに汝イスラエルの子等の名をその二の玉に鐫つけその玉を金の槽に嵌べし 一二 この二の玉をエポデの肩帶の上につけてイスラエルの子等の記念の玉とならしむべし即ちアロン、ヱホバの前において彼等の名をその兩の肩に負て記念とならしむべし 一三 汝金の槽を作るべし 一四 而して純金を組て紐の如き二箇の鏈を作りその組る鏈をかの槽につくべし 一五 汝また審判の胸牌を巧に織なしエポデの製のごとくに之をつくるべし即ち金青 紫 紅の線および麻の撚糸をもてこれを製るべし 一六 是は四角にして二重なるべく其長は半キユビトその濶も半キユビトなるべし 一七 汝またその中に玉を嵌て玉を四行にすべし即ち赤玉黄玉瑪瑙の一行を第一行とすべし 一八 第二行は紅玉青玉金剛石 一九 第三行は深紅玉 白瑪瑙 紫玉 二〇 第四行は黄緑玉 葱珩 碧玉 凡て金の槽の中にこれを嵌べし 二一 その玉はイスラエルの子等の名に循ひその名のごとくにこれを十二にすべし而してその十二の支派の各々の名は印を刻ごとくにこれを鐫つくべし 二二 汝純金を紐のごとくに組たる鏈を胸牌の上につくべし 二三 また胸牌の上に金の環二箇を作り胸牌の兩の端にその二箇の環

をつけ二四かの金の紐二條を胸牌の端の二箇の環につくべし二五而してその二條の紐の兩の端を二箇の槽に結ひエポデの肩帶の上につけてその前にあらしむべし二六又二箇の金の環をつくりて之を胸牌の兩の端につくべし即ちそのエポデに對ふところの内の邊に之をつくべし二七汝また金の環二箇を造りてこれをエポデの兩旁の下の方につけその前の方にてその聯接る處に對ひてエポデの帶の上にあらしむべし二八胸牌は青紐をもてその環によりて之をエポデの環に結ひつけエポデの帶の上にあらしむべし然せば胸牌エポデを離るること無るべし二九アロン聖所に入る時はその胸にある審判の胸牌にイスラエルの子等の名を帶てこれをその心の上に置きヱホバの前に恒に記念とならしむべし三〇汝審判の胸牌にウリムとトンミムをいれアロンをしてそのヱホバの前に入る時にこれをその心の上に置しむべしアロンはヱホバの前に常にイスラエルの子孫の審判を帶てその心の上に置べし三一エポデに屬する明衣は凡てこれを青く作るべし三二頭をいるる孔はその眞中に設くべし又その孔の周圍には織物の縁をつけて鎧の領盤のごとくになして之を綻びざらしむべし三三その裾には青紫紅の糸をもて石榴をつくりてその裾の周圍につけ又四周に金の鈴をその間々につくべし三四即ち明衣の裾には金の鈴に石榴又金の鈴に石榴とその周圍につくべし三五アロン奉事をなす時にこれを著べし彼が聖所にいりてヱホバの前に至る時また出きたる時にはその鈴の音聞ゆべし斯せば彼死ることあらじ三六汝純金をもて一枚の前板を作り印を刻がごとくにその上にヱホバに聖と鐫つけ三七之を青紐につけて頭帽の上にあらしむべし即ち頭帽の前の方にこれをつくべし三八是はアロンの額にあるべしアロンはイスラエルの子孫が献ぐるところの聖物すなはちその献ぐる諸の聖き供物の上にあるところの罪を負べしこの板をば常にアロンの額にあらしむべし是ヱホバの前に其等の受納られんためなり三九汝麻糸をもて裏衣を間格に織り麻糸をもて頭帽を製りまた帶を繍工に織なすべし四〇汝またアロンの子等のために裏衣を製り彼らのために帶を製り彼らのために頭巾を製りてその身に顯榮と榮光あらしむべし四一而して汝これを汝の兄弟アロンおよび彼とともなるその子等に着せ膏を彼等に灌ぎこれを立てこれを聖別てこれをして祭司の職を我になさしむべし四二又かれらのためにその陰所を蔽ふ麻の褌を製り腰より髀に達らしむべし四三アロンとその子等は集會の幕屋に入る時又は祭壇に近づきて聖所に職事をなす時はこれを著べし斯せば愆をかうむりて死ることなからん是は彼および彼の後の子孫の永く守るべき例なり

第二九章一汝かれらを聖別て彼らをして我にむかひて祭司の職をなさしむるには斯これに爲べし即ち若き牡牛と二の全き牡山羊を取り二無酵パン油を和たる無酵菓子および油を塗たる無酵煎餅を取べし是等は麥粉をもて製るべし三而してこれ

を一箇の筐にいれ牡牛および二の牡山羊とともにこれをその筐のままに持きたるべし四　汝またアロンとその子等を集會の幕屋の口に携きたりて水をもてかれらを洗ひ清め五　衣服をとりて裏衣エポデに屬する明衣エポデおよび胸牌をアロンに着せエポデの帶を之に帶しむべし六　而してかれの首に頭帽をかむらせその頭帽の上にかの聖金板を戴しめ七　灌油を取てこれを彼の首に傾け灌ぐべし八　又かれの子等を携來りて之に裏衣を着せ九　之に帶を帶しめ頭巾をこれにかむらすべし即ちアロンとその子等に斯なすべし祭司の職はかれらに歸す永くこれを例となすべし汝斯アロンとその子等を立べし一〇　汝集會の幕屋の前に牡牛をひき來らしむべし而してアロンとその子等その牡牛の頭に手を按べし一一　かくして汝集會の幕屋の口にてヱホバの前にその牡牛を宰すべし一二　汝その牡牛の血をとり汝の指をもてこれを壇の角に塗りその血をばことごとく壇の下に灌ぐべし一三　汝またその臟腑を裹むところの諸の脂肝の上の網膜および二の腎とその上の脂を取てこれを壇の上に燔べし一四　但しその牡牛の肉とその皮および糞は營の外にて火に燒べし是は罪祭なり一五　汝かの牡山羊一頭を取るべし而してアロンとその子等その牡山羊の上に手を按べし一六　汝その牡山羊を宰しその血をとりてこれを壇の上の周圍に灌ぐべし一七　汝その牡山羊を切割きその臟腑とその足を洗ひて之をその肉の塊とその頭の上におくべし一八　汝その牡山羊を壇の上に悉く燒べし是ヱホバにたてまつる燔祭なり是は馨しき香にしてヱホバにたてまつる火祭なり一九　汝また今一の牡山羊をとるべし而してアロンとその子等その牡山羊の頭の上に手を按べし二〇　汝すなはちその牡山羊を殺しその血をとりてこれをアロンの右の耳の端およびその子等の右の耳の端につけ又その右の手の大指と右の足の拇指につけその血を壇の周圍に灌ぐべし二一　又壇の上の血をとり灌油をとりて之をアロンとその衣服およびその子等とその子等の衣服に灌ぐべし斯彼とその衣服およびその子等とその子等の衣服清淨なるべし二二　汝その牡山羊の脂と脂の尾および其臟腑を裹る脂肝の上の網膜二箇の腎と其上の脂および右の腿を取べし是は任職の牡山羊なり二三　汝またヱホバの前にある無酵パンの筐の中よりパン一個と油ぬりたる菓子一箇と煎餅一個を取べし二四　汝これらを悉くアロンの手と其子等の手に授けこれを搖てヱホバに搖祭となすべし二五　而して汝これらを彼等の手より取て壇の上にて燔祭にくはへて燒くべし是ヱホバの前に馨しき香となるべし是すなはちヱホバにたてまつる火祭なり二六　汝またアロンの任職の牡山羊の胸を取てこれをヱホバの前に搖て搖祭となすべし是汝の受るところの分なり二七　汝その搖ところの搖祭の物の胸およびその擧るところの擧祭の物の腿すなはちアロンとその子等の任職の牡山羊の胸と腿を聖別つべし二八　是はアロンとその子等に歸すべしイスラエルの子孫永くこの例を守るべきなり是はイスラエルの子孫が酬恩祭の犧牲の中よりとると

ころの擧祭にしてヱホバになすところの擧祭なり二九アロンの聖衣は其後の子孫に歸すべし子孫これを着て膏をそそがれ職に任ぜらるべきなり三〇アロンの子孫の中彼にかはりて祭司となり集會の幕屋にいりて聖所に職をなす者は先七日の間これを着べし三一汝任職の牡山羊を取り聖所にてその肉を煮べし三二アロンとその子等は集會の幕屋の戸口においてその牡山羊の肉と筐の中のパンを食ふべし三三罪を贖ふ物すなはち彼らを立て彼らを聖別るに用るところの物を彼らは食ふべし餘の人は食ふべからず其は聖物なればなり三四もし任職の肉あるひはパン旦まで遺りをらばその遺者は火をもてこれを燒べし是は聖ければ食ふべからず三五汝わが凡て汝に命ずるごとくにアロンとその子等に斯なすべし即ちかれらのために七日のあひだ任職の禮をおこなふべし三六汝日々に罪祭の牡牛一頭をささげて贖をなすべし又壇のために贖罪をなしてこれを清めこれに膏を灌ぎこれを聖別べし三七汝七日のあひだ壇のために贖をなして之を聖別め至聖き壇とならしむべし凡て壇に捫る者は聖なるべし三八汝が壇の上にささぐべき者は是なり即ち一歳の羔二を日々絶ず献ぐべし三九一の羔は朝にこれを献げ一の羔は夕にこれを献べし四〇一の羔に麥粉十分の一に搗たる油一ヒンの四分の一を和たるを添へ又灌祭として酒一ヒンの四分の一を添べし四一今一の羔羊は夕にこれを献げ朝とおなじき素祭と灌祭をこれと共にささげ馨しき香とならしめヱホバに火祭たらしむべし四二是すなはち汝らが代々絶ず集會の幕屋の門口にてヱホバの前に献ぐべき燔祭なり我其處にて汝等に會ひ汝と語ふべし四三其處にて我イスラエルの子孫に會ん幕屋はわが榮光によりて聖なるべし四四我集會の幕屋と祭壇を聖めん亦アロンとその子等を聖めて我に祭司の職をなさしむべし四五我イスラエルの子孫の中に居て彼らの神とならん四六彼等は我が彼らの神ヱホバにして彼等の中に住んとて彼等をエジプトの地より導き出せし者なることを知ん我はかれらの神ヱホバなり

第三〇章一 汝香を焚く壇を造るべし即ち合歡木をもてこれを造るべし二その長は一キユビトその寛も一キユビトにして四角ならしめ其高は三キユビトにし其角は其より出しむべし三而してその上その四傍その角ともに純金を着せその周圍に金の緣を作るべし四汝またその兩面に金の緣の下に金の環二箇を之がために作るべし即ちその兩傍にこれを作るべし是すなはちこれを舁ところの杠を貫く所なり五その杠は合歡木をもてこれを作りて之に金を着すべし六汝これを律法の櫃の傍なる幕の前に置て律法の上なる贖罪所に對はしむべし其處はわが汝に會ふ處なり七アロン朝ごとにその上に馨しき香を焚べし彼燈火を整ふる時はその上に香を焚べきなり八アロン夕に燈火を燃す時はその上に香を焚べし是香はヱホバの前に汝等が代々絶すべからざる者なり九汝等その上に異る香を焚べからず燔祭をも素祭をも献ぐべからず又その上に灌祭の酒を灌ぐべからず一〇アロ

ン年に一回贖罪の罪祭の血をもてその壇の角のために贖をなすべし汝等代々年に一度是がために贖をなすべし是はヱホバに最も聖き者たるなり一一 ヱホバ、モーセに告て言たまはく一二 汝がイスラエルの子孫の數を數へしらぶるにあたりて彼等は各人その數へらるる時にその生命の贖をヱホバにたてまつるべし是はその數ふる時にあたりて彼等の中に災害のあらざらんためなり一三 凡て數へらるる者の中に入る者は聖所のシケルに遵ひて半シケルを出すべし一シケルは二十ゲラなり即ち半シケルをヱホバにたてまつるべし一四 凡て數へらるる者の中に入る者即ち二十歲以上の者はヱホバに献納物をなすべし一五 汝らの生命を贖ふためにヱホバに献納物をなすにあたりては富者も半シケルより多く出すべからず貧者も其より少く出すべからず一六 汝イスラエルの子孫より贖の金を取てこれを幕屋の用に供ふべし是はヱホバの前にイスラエルの子孫の記念となりて汝ら生命を贖ふべし一七 ヱホバ、モーセに告て言たまはく一八 汝また銅をもて洗盤をつぐりその臺をも銅になして洗ふことのために供へ之を集會の幕屋と壇との間に置てその中に水をいれおくべし一九 アロンとその子等はそれに就て手と足を洗ふべし二〇 彼等は集會の幕屋に入る時に水をもて洗ふことを爲て死をまぬかるべし亦壇にちかづきてその職をなし火祭をヱホバの前に焚く時も然すべし二一 即ち斯その手足を洗ひて死を免かるべし是は彼とその子孫の代々常に守るべき例なり二二 ヱホバまたモーセに言たまひけるは二三 汝また重立たる香物を取れ即ち淨沒藥五百シケル香しき肉桂その半二百五十シケル香しき菖蒲二百五十シケル二四 桂枝五百シケルを聖所のシケルに遵ひて取り又橄欖の油ヒンを取べし二五 汝これをもて聖灌膏を製るべしすなはち薫物を製る法にしたがひて香膏を製るべし是は聖灌膏たるなり二六 汝これを集會の幕屋と律法の櫃に塗り二七 案とそのもろもろの器具燈臺とそのもろもろの器具および香壇二八 並に燔祭の壇とそのもろもろの器具および洗盤とその臺とに塗べし二九 汝是等を聖めて至聖らしむべし凡てこれに捫る者は聖くならん三〇 汝アロンとその子等に膏をそそぎて之を立て彼らをして我に祭司の職をなさしむべし三一 汝イスラエルの子孫に告ていふべし是は汝らが代々我の爲に用ふべき聖灌膏なり三二 是は人の身に灌ぐべからず汝等また此量をもて是に等き物を製るべからず是は聖し汝等これを聖物となすべし三三 凡て之に等き物を製る者凡てこれを餘人につくる者はその民の中より絶るべし三四 ヱホバ、モーセに言たまはく汝ナタフ、シケレテ、ヘルベナの香物を取りその香物を淨き乳香に和あはすべしその量は各等からしむべきなり三五 汝これを以て香を製るべし即ち薫物を製る法にしたがひてこれをもて薫物を製り鹽をこれにくはへ潔く且聖らしむべし三六 汝またその幾分を細に搗て我が汝に會ふところなる集會の幕屋の中にある律法の前にこれを供ふべし是は汝等において最も聖き者なり三七 汝が

製るところの香は汝等その量をもてこれを自己のために製るべからず是は汝においてヱホバのために聖き者たるなり三八凡て是に均き者を製りてこれを嗅ぐ者はその民の中より絶るべし

第三一章一 ヱホバ、モーセに告て言たまひけるは二我ユダの支派のホルの子なるウリの子ベザレルを名指て召し三神の霊をこれに充して智慧と了知と智識と諸の類の工に長しめ四奇巧を盡して金銀及び銅の作をなすことを得せしめ五玉を切り嵌め木に彫刻みて諸の類の工をなすことを得せしむ六視よ我またダンの支派のアヒサマクの子アホリアブを與へて彼とともならしむ凡て心に智ある者に我智慧を授け彼等をして我が汝に命ずる所の事を盡くなさしむべし七即ち集會の幕屋律法の櫃その上の贖罪所幕屋の諸の器具八案ならびにその器具純金の燈臺とその諸の器具および香壇九燔祭の壇とその諸の器具洗盤とその臺一〇供職の衣服祭司の職をなす時に用ふるアロンの聖衣およびその子等の衣服一一 および灌膏ならびに聖所の馨しき香是等を我が凡て汝に命ぜしごとくに彼等製造べきなり一二ヱホバ、モーセに告て言たまひけるは一三汝イスラエルの子孫に告て言べし汝等かならず吾安息日を守るべし是は我と汝等の間の代々の徴にして汝等に我の汝等を聖からしむるヱホバなるを知しむる爲の者なればなり一四即ち汝等安息日を守るべし是は汝等に聖日なればなり凡て之を瀆す者は必ず殺さるべし凡てその日に働作をなす人はその民の中より絶るべし一五六日の間業をなすべし第七日は大安息にしてヱホバに聖なり凡て安息日に働作をなす者は必ず殺さるべし一六斯イスラエルの子孫は安息日を守り代々安息日を祝ふべし是永遠の契約なり一七是は永久に我とイスラエルの子孫の間の徴たるなり其はヱホバ六日の中に天地をつくりて七日に休みて安息に入たまひたればなり一八ヱホバ、シナイ山にてモーセに語ることを終たまひし時律法の板二枚をモーセに賜ふ是は石の板にして神が手をもて書したまひし者なり

第三二章一 茲に民モーセが山を下ることの遅きを見民集りてアロンの許に至り之に言けるは起よ汝われらを導く神を我儕のために作れ其は我らをエジプトの國より導き上りし彼モーセ其人は如何になりしか知ざればなり二アロンかれらに言けるは汝等の妻と息子息女等の耳にある金の環をとりはづして我に持きたれと三是において民みなその耳にある金の環をとりはづしてアロンの許に持來りければ四アロンこれを彼等の手より取り鎚鑿をもて之が形を造りて犢を鋳なしたるに人々言ふイスラエルよ是は汝をエジプトの國より導きのぼりし汝の神なりと五アロンこれを見てその前に壇を築き而してアロン宣告て明日はヱホバの祭禮なりと言ふ六是において人衆明朝早く起いでて燔祭を献げ酬恩祭を供ふ民坐して飲食し起て戯る七ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝往て下れよ汝がエジプトの地より導き出せし汝の民は惡き事を行ふなり八彼等は早くも我が彼等に命ぜし

道を離れ己のために犢を鑄なしてそれを拜み其に犧牲を献げて言ふイスラエルよ是は汝をエジプトの地より導きのぼりし汝の神なりと九ヱホバまたモーセに言たまひけるは我この民を觀たり視よ是は項の強き民なり一〇然ば我を阻るなかれ我かれらに向ひて怒を發して彼等を滅し盡さん而して汝をして大なる國をなさしむべし一一モーセその神ヱホバの面を和めて言けるはヱホバよ汝などて彼の大なる權能と強き手をもてエジプトの國より導きいだしたまひし汝の民にむかひて怒を發したまふや一二何ぞエジプト人をして斯言しむべけんや曰く彼は禍をくだして彼等を山に殺し地の面より滅し盡さんとて彼等を導き出せしなりと然ば汝の烈き怒を息め汝の民にこの禍を下さんとせしを思ひ直したまへ一三汝の僕アブラハム、イサク、イスラエルを憶ひたまへ汝は自己さして彼等に誓ひて我天の星のごとくに汝等の子孫を増し又わが言ところの比地をことごとく汝等の子孫にあたへて永くこれを有たしめんと彼等に言たまへりと一四ヱホバ是においてその民に禍を降んとせしを思ひ直したまへり一五モーセすなはち身を轉して山より下れりかの律法の二枚の板その手にあり此板はその兩面に文字あり即ち此面にも彼面にも文字あり一六此板は神の作なりまた文字は神の書にして板に彫つけてあり一七ヨシユア民の呼はる聲を聞てモーセにむかひ營中に戰爭の聲すと言ければ一八モーセ言ふ是は勝鬨の聲にあらず又敗北の號呼聲にもあらず我が聞ところのものは歌唱ふ聲なり一九斯てモーセ營に近づくに及びて犢と舞跳を見たれば怒を發してその手よりかの板を擲ちこれを山の下に碎けり二〇而して彼等が作りし犢をとりてこれを火に燒き碎きて粉となしてこれを水に撒きイスラエルの子孫に之をのましむ二一モーセ、アロンに言けるは此民汝に何をなしてか汝かれらに大なる罪を犯させしや二二アロン言けるは吾主よ怒を發したまふ勿れ此民の惡なるは汝の知ところなり二三彼等われに言けらく我らを導く神をわれらのために作れ其は我らをエジプトの國より導き上りし彼モーセ其人は如何になりしか知ざればなりと二四是において我凡て金をもつ者はそれをとりはづせと彼等に言ければ則ちそれを我に與へたり我これを火に投たれば此犢出きたれりと二五モーセ民を視るに縱肆に事をなすアロン彼等をして縱肆に事をなさしめたれば彼等はその敵の中に嘲笑となれるなり二六茲にモーセ營の門に立ち凡てヱホバに歸する者は我に來れと言ければレビの子孫みな集りてかれに至る二七モーセすなはち彼等に言けるはイスラエルの神ヱホバ斯言たまふ汝等おのおの劍を横たへて門より門と營の中を彼處此處に行めぐりて各人その兄弟を殺し各人その伴侶を殺し各人その隣人を殺すべしと二八レビの子孫すなはちモーセの言のごとくに爲たればその日民の凡三千人殺されたり二九是に於てモーセ言ふ汝等おのおのその子をもその兄弟をも顧ずして今日ヱホバに身を献げ而して今日福祉を得よ三〇明日モーセ民に言けるは汝等は大なる罪を

犯せり今我ヱホバの許に上りゆかんとす我なんちらの罪を贖ふを得ることもあらん 三一 モーセすなはちヱホバに歸りて言けるは嗚呼この民の罪は大なる罪なり彼等は自己のために金の神を作れり 三二 然どかなはば彼等の罪を赦したまへ然ずば願くは汝の書しるしたまへる書の中より吾名を抹さりたまへ 三三 ヱホバ、モーセに言たまひけるは凡てわれに罪を犯す者をば我これをわが書より抹さらん 三四 然ば今往て民を我が汝につげたる所に導けよ吾使者汝に先だちて往ん但しわが罰をなこなふ日には我かれらの罪を罰せん 三五 ヱホバすなはち民を撃たまへり是はかれら犢を造りたるに因る即ちアロンこれを造りしなり

第三三章 一 茲にヱホバ、モーセに言たまひけるは汝と汝がエジプトの國より導き上りし民此を起いでて我がアブラハム、イサク、ヤコブに誓ひて之を汝の子孫に與へんと言しその地に上るべし 二 我一の使を遣して汝に先だたしめん我カナン人アモリ人ヘテ人ペリジ人ヒビ人ヱブス人を逐はらひ 三 なんぢらをして乳と蜜の流るる地にいたらしむべし我は汝の中にをりては共に上らじ汝は項の強き民なれば恐くは我途にて汝を滅すにいたらん 四 民この惡き告を聞て憂へ一人もその妝飾を身につくる者なし 五 ヱホバ、モーセに言たまひけるはイスラエルの子孫に言へ汝等は項の強き民なり我もし一刻も汝の中にありて往ば汝を滅すにいたらん然ば今汝らの妝飾を身より取すてよ然せば我汝に爲べきことを知んと 六 是をもてイスラエルの子孫ホレブ山より以來はその妝飾を取すてて居ぬ 七 モーセ幕屋をとりてこれを營の外に張て營と遥に離れしめ之を集會の幕屋と名けたり凡てヱホバに求むることのある者は出ゆきて營の外なるその集會の幕屋にいたる 八 モーセの出て幕屋にいたる時には民みな起あがりてモーセが幕屋にいるまで各々その天幕の門口に立てかれを見る 九 モーセ幕屋にいれば雲の柱くだりて幕屋の門口に立つ而してヱホバ、モーセとものいひたまふ 一〇 民みな幕屋の門口に雲の柱の立つを見れば民みな起て各人その天幕の門口にて拜をなす 一一 人がその友に言談ごとくにヱホバ、モーセと面をあはせてものいひたまふモーセはその天幕に歸りしがその僕なる少者ヌンの子ヨシユアは幕屋を離れざりき 一二 茲にモーセ、ヱホバに言けるは視たまへ汝はこの民を導き上れと我に言たまひながら誰を我とともに遣したまふかを我にしらしめたまはず汝かつて言たまひけらく我名をもて汝を知る汝はまた我前に恩を得たりと 一三 然ば我もし誠に汝の目の前に恩を得たらば願くは汝の道を我に示して我に汝を知しめ我をして汝の目の前に恩を得せしめたまへ又汝この民の汝の有なるを念たまへ 一四 ヱホバ言たまひけるは我親汝と共にゆくべし我汝をして安泰にならしめん 一五 モーセ、ヱホバに言けるは汝もしみづから行たまはずは我等を此より上らしめたまふ勿れ 一六 我と汝の民とが汝の目の前に恩を得ることは如何にして知るべきや是汝が我等とともに往たまひて我と汝の民とが地の諸の民に異る者となるによ

るにあらずや一七ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝が言るこの事をも我爲ん汝はわが目の前に恩を得たればなり我名をもて汝を知なり一八モーセ願くは汝の榮光を我に示したまへと言ければ一九ヱホバ言たまはく我わが諸の善を汝の前に通らしめヱホバの名を汝の前に宣ん我は惠んとする者を惠み憐まんとする者を憐むなり二〇又言たまはく汝はわが面を見ることあたはず我を見て生る人あらざればなり二一而してヱホバ言たまひけるは視よ我が傍に一の處あり汝磐の上に立べし二二吾榮光其處を過る時に我なんぢを磐の穴にいれ我が過る時にわが手をもて汝を蔽はん二三而してわが手を除る時に汝わが背後を見るべし吾面は見るべきにあらず

第三四章一茲にヱホバ、モーセに言たまひけるは汝石の板二枚を前のごとくに斫て作れ汝が碎きし彼の前の板にありし言を我その板に書さん二詰朝までに準備をなし朝の中にシナイ山に上り山の嶺に於て吾前に立て三誰も汝とともに上るべからず又誰も山の中に居べからず又その山の前にて羊や牛を牧ふべからず四モーセすなはち石の板二枚を前のごとくに斫て造り朝早く起て手に二枚石の板をとりヱホバの命じたまひしごとくにシナイ山にのぼりゆけり五ヱホバ雲の中にありて降り彼とともに其處に立ちてヱホバの名を宣たまふ六ヱホバすなはち彼の前を過て宣たまはくヱホバ、ヱホバ憐憫あり恩惠あり怒ることの遲く恩惠と眞實の大なる神七恩惠を千代までも施し惡と過と罪とを赦す者又罰すべき者をば必ず赦すことをせず父の罪を子に報い子の子に報いて三四代におよぼす者八モーセ急ぎ地に躬を鞠めて拜し九言けるはヱホバよ我もし汝の目の前に恩を得たらば願くは主我等の中にいまして行たまへ是は項の強き民なればなり我等の惡と罪を赦し我等を汝の所有となしたまへ一〇ヱホバ言たまふ視よ我契約をなす我未だ全地に行はれし事あらず何の國民の中にも行はれし事あらざるところの奇跡を汝の總躰の民の前に行ふべし汝が住ところの國の民みなヱホバの所行を見ん我が汝をもて爲ところの事は怖るべき者なればなり一一汝わが今日汝に命ずるところの事を守れ視よ我アモリ人カナン人ヘテ人ペリジ人ヒビ人ヱブス人を汝の前より逐はらふ一二汝みづから愼め汝が往ところの國の居民と契約をむすぶべからず恐くは汝の中において機檻となることあらん一三汝らかへつて彼等の祭壇を崩しその偶像を毀ちそのアシラ像を斫たふすべし一四汝は他の神を拜むべからず其はヱホバはその名を嫉妒と言て嫉妒神たればなり一五然ば汝その地の居民と契約を結ぶべからず恐くは彼等がその神々を慕ひて其と姦淫をおこなひその神々に犧牲をささぐる時に汝を招きてその犧牲に就て食はしむる者あらん一六又恐くは汝かれらの女子等を汝の息子等に妻すことありて彼等の女子等その神々を慕ひて姦淫を行ひ汝の息子等をして彼等の神々を慕て姦淫をおこなはしむるにいたらん一七汝おのれのために神々を鑄なすべからず一八汝無酵パンの節筵

を守るべし即ち我が汝に命ぜしごとくアビブの月のその期におよびて七日の間 無酵パンを食ふべし其は汝アビブの月にエジプトより出たればなり一九首出たる者は皆吾の所有なり亦汝の家畜の首出の牡たる者も牛羊ともに皆しかり二〇但し驢馬の首出は羔羊をもて贖ふべし若し贖はずばその頸を折べし汝の息子の中の初子は皆贖ふべし我前に空手にて出るものあるべからず二一六日の間 汝働作をなし第七日に休むべし耕耘時にも収穫時にも休むべし二二汝七週の節筵すなはち麥秋の初穂の節筵を爲し又年の終に収蔵の節筵をなすべし二三年に三回汝の男子みな主ヱホバ、イスラエルの神の前に出べし二四我國々の民を汝の前より逐はらひて汝の境を廣くせん汝が年に三回のぼりて汝の神ヱホバのまへに出る時には誰も汝の國を取んとする者あらじ二五汝わが犠牲の血を有酵パンとともに供ふべからず又逾越の節の犠牲は明朝まで存しおくべからざるなり二六汝の土地の初穂の初を汝の神ヱホバの家に携ふべし汝山羊羔をその母の乳にて煮べからず二七斯てヱホバ、モーセに言たまひけるは汝是等の言語を書しるせ我是等の言語をもて汝およびイスラエルと契約をむすべばなり二八彼はヱホバとともに四十日四十夜其處に居しが食物をも食ず水をも飲ざりきヱホバその契約の詞なる十誡をかの板の上に書したまへり二九モーセその律法の板二枚を己の手に執てシナイ山より下りしがその山より下りし時にモーセはその面の己がヱホバと言ひしによりて光を發つを知ざりき三〇アロンおよびイスラエルの子孫モーセを見てその面の皮の光を發つを視怖れて彼に近づかざりしかば三一モーセかれらを呼りアロンおよび會衆の長等すなはちモーセの所に歸りたればモーセ彼等と言ふ三二斯ありて後イスラエルの子孫みな近よりければモーセ、ヱホバがシナイ山にて己に告たまひし事等を盡くこれに諭せり三三モーセかれらと語ふことを終て覆面帕をその面にあてたり三四但しモーセはヱホバの前にいりてともに語ることある時はその出るまで覆面帕を除きてをりまた出きたりてその命ぜられし事をイスラエルの子孫に告ぐ三五イスラエルの子孫モーセの面を見るにモーセの面の皮光を發つモーセは入てヱホバと言ふまでまたその覆面帕を面にあてをる

第三五章一モーセ、イスラエルの子孫の會衆を盡く集てこれに言ふ是はヱホバが爲せと命じたまへる言なり二即ち六日の間は働作を爲べし第七日は汝等の聖日ヱホバの大安息日なり凡てこの日に働作をなす者は殺さるべし三安息日には汝等の一切の住處に火をたく可らず四モーセ、イスラエルの子孫の會衆に徧く告て言ふ是はヱホバの命じたまへるところの事なり五曰く汝等が有る物の中より汝等ヱホバに献ぐる者を取べし凡て心より願ふ者に其を携へきたりてヱホバに献ぐべし即ち金 銀 銅六青 紫 紅の線 麻糸 山羊の毛七赤染の牡羊の皮 貛の皮 合歡木八燈油 灌膏と馨しき香をつくる香物九葱珩 エポデと胸牌

に嵌る玉一〇凡て汝等の中の心に智慧ある者來りてヱホバの命じたまひし者を悉く造るべし一一即ち幕屋その天幕その頂蓋その鈎その版その横木その柱その座一二かの櫃とその杠 贖罪所障蔽の幕一三案子とその杠およびその諸の器具供前のパン一四燈明の臺その器具とその盞および燈火の油一五香壇とその杠灌膏 馨しき香 幕屋の入口の幔一六燔祭の壇およびその銅の網その杠その諸の器具洗盤とその臺一七庭の幕その柱その座庭の口の幔一八幕屋の釘庭の釘およびその紐一九聖所にて職をなすところの供職の衣 即ち祭司の職をなす時に用ふる者なる祭司アロンの聖衣および其子等の衣服二〇斯てイスラエルの子孫の會衆みなモーセの前を離れて去しが二一凡て心に感じたる者凡て心より願ふ者は來りてヱホバへの献納物を携へいたり集會の幕屋とその諸の用に供へ又聖衣のために供へたり二二即ち凡て心より願ふ者は男 女ともに環釦 耳環 指環 頸玉 諸の金の物を携へいたれり又凡て金の献納物をヱホバに爲す者も然せり二三凡て青 紫 紅の線および麻絲 山羊の毛 赤染の牡羊の皮 貛の皮ある者は是を携へいたり二四凡て銀および銅の献納物をなす者はこれを携へきたりてヱホバに献げ又物を造るに用ふべき合歡木ある者は其を携へいたれり二五また凡て心に智慧ある婦女等はその手をもて紡ぐことをなしその紡ぎたる者なる青 紫 紅の線および麻絲を携へきたり二六凡て智慧ありて心に感じたる婦人は山羊の毛を紡げり二七又長たる者どもは葱珩およびエポデと胸牌に嵌べき玉を携へいたり二八燈火と灌膏と馨しき香とに用ふる香物と油を携へいたれり二九斯イスラエルの子孫悦んでヱホバに献納物をなせり即ちヱホバがモーセに藉て爲せと命じたまひし諸の工事をなさしむるために物を携へきたらんと心より願ふところの男 女は皆是のごとくになしたり三〇モーセ、イスラエルの子孫に言ふ視よヱホバ、ユダの支派のホルの子なるウリの子ベザレルを名指て召たまひ三一神の霊をこれに充して智慧と了知と知識と諸の類の工事に長しめ三二奇巧を盡して金銀および銅の作をなすことを得せしめ三三玉を切り嵌め木に彫刻みて諸の類の工をなすことを得せしめ三四彼の心を明かにして教ふることを得せしめたまふ彼とダンの支派のアヒサマクの子アホリアブ倶に然り三五斯智慧の心を彼等に充して諸の類の工事をなすことを得せしめたまふ即ち彫刻文織および青 紫 紅の絲と麻絲の刺繍並に機織等凡て諸の類の工をなすことを得せしめ奇巧をこれに盡さしめたまふなり

第三六章一偖ベザレルとアホリアブおよび凡て心の頴敏き人即ちヱホバが智慧と了知をあたへて聖所の用に供ふるところの諸の工をなすことを知得せしめたまへる者等はヱホバの凡て命じたまひし如くに事をなすべかりし二モーセすなはちベザレルとアホリアブおよび凡て心の頴敏き人すなはちその心にヱホバが智慧をさづけたまひし者凡そ來りてその工をなさんと心に望ところの者を召よせたり三彼等は聖所の用にそなふるとこ

ろの工事をなさしむるためにイスラエルの子孫が携へきたりし諸の獻納物をモーセの手より受とりしが民は尚また朝ごとに自意の獻納物をモーセに持きたる四是に於て聖所の諸の工をなすところの智き人等みな各々その爲ところの工をやめて來り五モーセに告て言けるは民餘りに多く持きたれはヱホバが爲せと命じたまひし工事をなすに用ふるに餘ありと六モーセすなはち命を傳へて營中に宣布しめて云く男女ともに今よりは聖所に獻納物をなすに及ばずと是をもて民は携へきたることを止たり七其はその有ところの物すでに一切の工をなすに足て且餘あればなり八儕彼等の中心に智慧ありてその工を爲るところの者十の幕をもて幕屋を造れりその幕は麻の撚糸と青紫紅の絲をもて巧にケルビムを織なして作れる者なり九その幕は各々長二十八キユビトその幕は各寛四キユビトその幕はみな寸尺一なり一〇而してその幕五箇を互に連ねあはせ又その幕五箇をたがひに連ねあはせ一一一聯の幕の邊においてその連絡處の端に青色の襟を造り又他の一聯の幕の邊においてその連絡處にこれを造れり一二一聯の幕に襟五十をつくりまた他の一聯の幕の連絡處の邊にも襟五十をつくれりその襟は彼と此と相對す一三而して金の鈎五十をつくりその鈎をもてその幕を彼と此と相連ねたれば一箇の幕屋となる一四又山羊の毛をもて幕をつくりて幕屋の上の天幕となせりその造れる幕は十一なり一五その幕は各々長三十キユビトその幕はおのおの寛四キユビトにして十一の幕は寸尺同一なり一六その幕五を一幅に連ねまたその幕六を一幅に連ね一七その幕の邊において連絡處に襟五十をつくり又次の一連の幕の邊にも襟五十をつくれり一八又銅の鈎五十をつくりてその天幕をつらねあはせて一となしめ一九赤染の牡羊の皮をもてその天幕の頂蓋をつくりてその上に貛の皮の蓋を設けたり二〇又合歡木をもて幕屋の竪板をつくれり二一板の長は十キユビト板の寛は一キユビト半二二一の板に二の榫ありて彼と此と交指ふ幕屋の板には皆かくのごとく造りなせり二三又幕屋のために板を作れり即ち南に於は南の方に板二十枚二四その二十枚の板の下に銀の座四十をつくれり即ち此板の下にも二の座ありてその二の榫を承け彼板の下にも二の座ありてその二の榫を承く二五幕屋の他の方すなはちその北の方のためにも板二十枚を作り二六又その銀の座四十をつくれり即ち此板の下にも二の座あり彼板の下にも二の座あり二七又幕屋の後面すなはちその西のために板六枚をつくり二八幕屋の後の兩隅のために板二枚宛をつくれり二九その二枚は下にて相合しその頂まで一に連なれり一箇の環に於て然りその二枚ともに是のごとし是等は二隅のために設けたる者なり三〇その板は八枚ありその座は銀の座十六座あり各々の板の下に二の座あり三一又合歡木をもて横木を作れり即ち幕屋の此方の板のために五本を設け三二幕屋の彼方の板のために横木五本を設け幕屋の後すなはちその西の板のために横木五本を設けたり三三又中間の横

木をつくりて板の眞中において端より端まで通らしめ三四而してその板に金を着せ金をもて之がために鐶をつくりて横木をこれに貫き又その横木に金を着たり三五又青紫紅の絲および麻の撚絲をもて幕をつくり巧にケルビムをその上に織いだし三六それがために合歡木をもて四本の柱をつくりてこれに金を着せたりその鈎は金なり又銀をもてこれがために座四を鑄たり三七又青紫紅の絲および麻の撚絲をもて幕屋の入口に掛る幔を織なし三八その五本の柱とその鈎とを造りその柱の頭と桁に金を着せたり但しその五の座は銅なりき

第三七章一ベザレル合歡木をもて櫃をつくれりその長は二キユビト半その寛は一キユビト半、その高は一キユビト半二而して純金をもてその内外を蔽ひてその上の周圍に金の縁を造れり三又金の環四箇を鑄てその四の足につけたり即ち此旁に二箇の輪彼旁に二箇の輪を付く四又合歡木をもて杠を作りてこれに金を着せ五その杠を櫃の傍の環にさしいれて之をもて櫃をかくべからしむ六又純金をもて贖罪所を造れりその長は二キユビト半その寛は一キユビト半なり七又金をもて二箇のケルビムを作れり即ち槌にて打て之を贖罪所の兩傍に作り八一箇のケルブを此方の末に一箇のケルブを彼方の末に置り即ち贖罪所の兩傍にケルビムを作れり九ケルビムは翼を高く展べ其翼をもて贖罪所を掩ひ其面をたがひに相向く即ちケルビムの面は贖罪所に向ふ一〇又合歡木をもて案を作れり其長は二キユビト其寛は一キユビト其高は一キユビト半一一而て純金を之に着せ其周圍に金の縁をつけ一二又其四圍に掌寛の邊を作り其邊の周圍に金の小縁を作れり一三而て之が爲に金の環四箇を鑄其足の四隅に其環を付たり一四即ち環は邊の側に在て案を舁く杠を入る處なり一五而て合歡木をもて案を舁く杠を作りて之に金を着せたり一六又案の上の器具即ち皿匙杓及び酒を灌ぐ斝を純金にて作れり一七又純金をもて一箇の燈臺を造れり即ち槌をもて打て其燈臺を作れり其臺座軸萼節及び花は其に連る一八六の枝その旁より出づ即ち燈臺の三の枝は此旁より出で燈臺の三の枝は彼傍より出づ一九巴旦杏の花の形せる三の萼節および花とともに此枝にあり又巴旦杏の花の形せる三の萼節および花とともに彼枝にあり燈臺より出る六の枝みな斯のごとし二〇巴旦杏の花の形せる四の萼その節および花とともに燈臺にあり二一兩箇の枝の下に一箇の節あり又兩箇の枝の下に一箇の節あり又兩箇の枝の下に一箇の節あり燈臺より出る六の枝みな是のごとし二二その節と枝とは其に連れり皆槌にて打て純金をもて造れり二三又純金をもて七箇の燈盞と燈鉗と剪燈盤を造れり二四燈臺とその諸の器具は純金一タラントをもて作れり二五又合歡木をもて香壇を造れり其長一キユピトその寛一キユビトにして四角なりその高は二キユビトにしてその角は其より出づ二六その上その四旁その角ともに純金を着せその周圍に金の縁を作れり二七又その兩面に金の縁の下に金の環二箇をこれがために作れり

即ちその兩旁にこれを作る是すなはち之を舁ところの杠を貫くところなり二八又合歡木をもてその杠をつくりて之に金を着せたり二九又薫物をつくる法にしたがひて聖灌膏と香物の清き香とを製れり

第三八章一又合歡木をもて燔祭の壇を築けりその長は五キユビト其寛は五キユビトにして四角その高は三キユビト二而してその四隅の上に其の角を作りてその角を其より出しめその壇には銅を着せたり三又その壇の諸の器具すなはち壷と火鏟と鉢と肉叉と火鼎を作れり壇の器はみな銅にて造る四又壇のために銅の網をつくりこれを壇の中程の邊の下に置ゑて壇の半に達せしめ五その銅の網の四隅に四箇の環を鑄て杠を貫く處となし六合歡木をもてその杠をつくりて之に銅を着せ七壇の兩旁の環にその杠をつらぬきて之を舁べからしむその壇は板をもてこれを空につくれり八また銅をもて洗盤をつくりその臺をも銅にす即ち集會の幕屋の門にて役事をなすところの婦人等鏡をもて之を作れり九又庭を作れり南に於ては庭の南の方に百キユビトの細布の幕を設く一〇その柱は二十その座は二十にして共に銅なりその柱の鈎および桁は銀なり一一北の方には百キユビトの幕を設くその柱は二十その座は二十にして共に銅なりその柱の鈎と桁は銀なり一二西の方には五十キユビトの幕を設くその柱は十その座は十その柱の鈎と桁は銀なり一三東においては東の方に五十キユビトの幕を設く一四而してこの一旁に十五キユビトの幕を設くその柱は三その座も三一五又かの一旁にも十五キユビトの幕を設くその柱は三その座も三即ち庭の門の此旁彼旁ともに然り一六庭の周圍の幕はみな細布なり一七柱の座は銅柱の鈎と桁は銀柱の頭の包は銀なり庭の柱はみな銀の桁にて連る一八庭の門の幔は靑紫紅の絲および麻の撚絲をもて織なしたる者なりその長は二十キユビトその寛における高は五キユビトにして庭の幕と等し一九その柱は四その座は四にして共に銅その鈎は銀その頭の包と桁は銀なり二〇幕屋およびその周圍の庭の釘はみな銅なり二一幕屋につける物すなはち律法の幕屋につける物を量るに左のごとし祭司アロンの子イタマル、モーセの命にしたがひてレビ人を率ゐ用ひてこれを量れるなり二二ユダの支派のホルの子なるウリの子ベザレル凡てヱホバのモーセに命じたまひし事等をなせり二三ダンの支派のアヒサマクの子アホリアブ彼とともにありて雕刻織文をなし靑紫紅の絲および麻絲をもて文繍をなせり二四聖所の諸の工作をなすに用たる金は聖所のシケルにしたがひて言ば都合二十九タラント七百三十シケルなり是すなはち献納たるところの金なり二五會衆の中の核數られし者の献げし銀は聖所のシケルにしたがひて言ば百タラント千七百七十五シケルなり二六凡て數らるる者の中に入し者即ち二十歳以上の者六十萬三千五百五十人ありたれば聖所のシケルにしたがひて言ば一人に一ベカとなる是すなはち半シケルなり二七百タラントの銀をもて聖所の座と

幕の座を鑄たり百タラントをもて百座をつくれば一座すなはち一タラントなり二八 又千七百七十五シケルをもて柱の鈎をつくり柱の頭を包み又柱を連ねあはせたり二九 又獻納たるところの銅は七十タラント二千四百シケルなり三〇 是をもちひて集會の幕屋の門の座をつくり銅の壇とその銅の網および壇の諸の器具をつくり三一 庭の周圍の座と庭の門の座および幕屋の諸の釘と庭の周圍の諸の釘を作れり

第三九章

一 青 紫 紅の絲をもて聖所にて職をなすところの供職の衣服を製り亦アロンのために聖衣を製りヱホバのモーセに命じたまひしごとくせり二 又金青 紫 紅の絲および麻の撚絲をもてエポデを製り三 金を薄片に打展べ剪て縷となしこれを青 紫 紅の絲および麻絲に和てこれを織なし四 又これがために肩帶をつくりて之を連ねその兩の端において之を連ぬ五 エポデの上にありて之を束ぬるところの帶はその物同じうして其の製のごとし即ち金青 紫 紅の絲および麻の撚絲をもて製るものなりヱホバのモーセに命じたまひしごとくなり六 又葱珩を琢て金の槽に嵌め印を刻がごとくにイスラエルの子等の名をこれに鐫つけ七 これをエボデの肩帶の上につけてイスラエルの子孫の記念の玉とならしむヱホバのモーセに命じたまひしごとし八 また胸牌を巧に織なしエポデの製のごとくに金青 紫 紅の絲および麻の撚絲をもてこれを製れり九 胸牌は四角にして之を二重につくりたれば二重にしてその長半キユビトその濶半キユビトなり一〇 その中に玉四行を嵌む即ち赤玉黄玉瑪瑙の一行を第一行とす一一 第二行は紅玉 青玉 金剛石一二 第三行は深紅玉 白瑪瑙 紫玉一三 第四行は黄緑玉 葱珩 碧玉 凡て金の槽の中にこれを嵌たり一四 その玉はイスラエルの子等の名にしたがひ其名のごとくに之を十二になし而して印を刻がごとくにその十二の支派の各の名をこれに鐫つけたり一五 又純金をもて紐のごとくに組たる鏈を胸牌の上につけたり一六 又金をもて二箇の槽をつくり二の金の環をつくりその二の環を胸牌の兩の端につけ一七 かの金の紐二條を胸牌の端の二箇の環につけたり一八 而してその二條の紐の兩の端を二箇の槽に結ひエポデの肩帶の上につけてその前にあらしむ一九 又二箇の金の環をつくりて之を胸牌の兩の端につけたり即ちそのエポデに對ふところの内の邊にこれを付く二〇 また金の環二箇を造りてこれをエポデの兩傍の下の方につけてその前の方にてその聯接る處に對てエポデの帶の上にあらしむ二一 胸牌は青紐をもてその環によりて之をエポデの環に結つけエポデの帶の上にあらしめ胸牌をしてエポデを離るることなからしむヱホバのモーセに命じたまひしごとし二二 又エポデに屬する明衣は凡てこれを青く織なせり二三 上衣の孔はその眞中にありて鎧の領盤のごとしその孔の周圍に縁ありて綻びざらしむ二四 而して明衣の裾に青 紫 紅の撚絲をもて石榴を作りつけ二五 又純金をもて鈴をつくりその鈴を明衣の裾の石榴の間につけ周圍において石榴の間々にこれを

つけたり二六 即ち鈴に石榴鈴に石榴と供職の明衣の裾の周圍につけたりヱホバのモーセに命じたまひしごとし二七 又アロンとその子等のために織布をもて裏衣を製り二八 細布をもて頭 帽を製り細布をもて美しき頭巾をつくり麻の撚絲をもて褌をつくり二九 麻の撚絲および青 紫 紅の絲をもて帶を織なせりヱホバのモーセに命じたまひしごとし三〇 又純金をもて聖 冠の前板をつくり印を刻がごとくにその上にヱホバに聖といふ文字を書つけ三一 之に青紐をつけて之を頭 帽の上に結つけたりヱホバのモーセに命じたまひし如し三二 斯集合の天幕なる幕屋の諸の工事成ぬイスラエルの子孫ヱホバの凡てモーセに命じたまひしごとくに爲て斯おこなへり三三 人衆幕屋と天幕とその諸の器具をモーセの許に携へいたる即ちその鈎その板その横木その柱その座三四 赤染の牡羊の皮の蓋貛の皮の蓋障蔽の幕三五 律法の櫃とその杠 贖罪所三六 案とその諸の器具供前のパン三七 純金の燈臺とその盞すなはち陳列る燈 盞とその諸の器具ならびにその燈火の油三八 金の壇灌 膏 香幕屋の門の幔子三九 銅の壇その銅の網とその杠およびその諸の器具洗盤とその臺四〇 庭の幕その柱とその座庭の門の幔子その紐とその釘ならびに幕屋に用ふる諸の器具集會の天幕のために用ふる者四一 聖 所にて職をなすところの供職の衣服即ち祭司の職をなす時に用ふる者なる祭司アロンの聖 衣およびその子等の衣服四二 斯ヱホバの凡てモーセに命じたまひしごとくにイスラエルの子孫その諸の工事をなせり四三 モーセその一切の工作を見るにヱホバの命じたまひしごとくに造りてあり即ち是のごとくに作りてあればモーセ人衆を祝せり

第四〇章一 茲にヱホバ、モーセに告て言たまひけるは二 正 月の元日に汝 集會の天幕の幕屋を建べし三 而して汝その中に律法の櫃を置ゑ幕をもてその櫃を障 蔽し四 又案を携へいり陳 設の物を陳設け且燈臺を携へいりてその燈 盞を置うべし五 汝また金の香壇を律法の櫃の前に置ゑ幔子を幕屋の門に掛け六 燔祭の壇を集會の天幕の幕屋の門の前に置ゑ七 洗盤を集會の天幕とその壇の間に置ゑて之に水をいれ八 庭の周圍に藩籬をたて庭の門に幔子を垂れ九 而して灌 膏をとりて幕屋とその中の一切の物に灌ぎて其とその諸の器具を聖別べし是聖物とならん一〇 汝また燔祭の壇とその一切の器具に膏をそそぎてその壇を聖別べし壇は至聖物とならん一一 又洗盤とその臺に膏をそそぎて之を聖別め一二 アロンとその子等を集會の幕屋の門につれきたりて水をもて彼等を洗ひ一三 アロンに聖 衣を着せ彼に膏をそそぎてこれを聖別め彼をして祭司の職を我になさしむべし一四 又かれの子等をつれきたりて之に明衣を着せ一五 その父になせるごとくに之に膏を灌ぎて祭司の職を我になさしむべし彼等の膏そそがれて祭司たることは代々變らざるべきなり一六 モーセかく行へり即ちヱホバの己に命じたまひし如くに爲たり一七 第二年の正 月にいたりてその月の元日に幕屋建ぬ一八 乃ちモーセ幕屋

を建てその座を置ゑその板をたてその横木をさしこみその柱を立て一九幕屋の上に天幕を張り天幕の蓋をその上にほどこせりヱホバのモーセに命じ給ひし如し二〇而してかれ律法をとりて櫃に蔵め杠を櫃につけ贖罪所を櫃の上に置ゑ二一櫃を幕屋に携へいり障蔽の幕を垂て律法の櫃を隠せりヱホバのモーセに命じたまひしごとし二二彼また集會の幕屋において幕屋の北の方にてかの幕の外に案を置ゑ二三供前のパンをその上にヱホバの前に陳設たりヱホバのモーセに命じたまひし如し二四又集會の幕屋において幕屋の南の方に燈臺をおきて案にむかはしめ二五燈盞をヱホバの前にかかげたりヱホバのモーセに命じたまひしごとし二六又集會の幕屋においてかの幕の前に金の壇を居ゑ二七その上に馨しき香を焚りヱホバのモーセに命じたまひしごとし二八又幕屋の門に幔子を垂れ二九集會の天幕の幕屋の門に燔祭の壇を置ゑその上に燔祭と素祭をささげたりヱホバのモーセに命じたまひし如し三〇又集會の天幕とその壇の間に洗盤をおき其に水をいれて洗ふことの爲にす三一モーセ、アロンおよびその子等其につきて手足を洗ふ三二即ち集會の幕屋に入る時または壇に近づく時に洗ふことをせりヱホバのモーセに命じたまひしごとし三三また幕屋と壇の周圍の庭に藩籬をたて庭の門に幔子を垂ぬ是モーセその工事を竣たり三四斯て雲集會の天幕を蓋てヱホバの榮光幕屋に充たり三五モーセは集會の幕屋にいることを得ざりき是雲その上に止り且ヱホバの榮光幕屋に盈たればなり三六雲幕屋の上より昇る時にはイスラエルの子孫途に進めり其途々凡て然り三七然ど雲の昇らざる時にはその昇る日まで途に進むことをせざりき三八即ち晝は幕屋の上にヱホバの雲あり夜はその中に火ありイスラエルの家の者皆これを見るその途々すべて然り

レビ記

第一章一 ヱホバ集會の幕屋よりモーセを呼びこれに告て言たまはく二イスラエルの子孫に告てこれに言へ汝等の中の人もし家畜の禮物をヱホバに供んとせば牛あるひは羊をとりてその禮物となすべし三もし牛の燔祭をもてその禮物になさんとせば全き牡牛を供ふべしすなはち集會の幕屋の門にてこれをヱホバの前にその受納たまふやうに供ふべし四彼その燔祭とする者の首に手を按べし然ば受納られて彼のために贖罪とならん五彼ヱホバの前にその犢を宰るべし又アロンの子等なる祭司等はその血を携へきたりて集會の幕屋の門なる壇の四圍にその血を灑ぐべし六彼またその燔祭の牲の皮を剥ぎこれを切わかつべし七祭司アロンの子等壇の上に火を置きその火の上に薪柴を陳べ八而してアロンの子等なる祭司等その切わかてる者その首およびその脂を壇の上なる火の上にある薪の上に陳ぶべし九その臓腑と足はこれを水に洗ふべし斯て祭司は一切を壇の上に焼て燔祭となすべし是すなはち火祭にしてヱホバに馨しき香たるなり一〇またその禮物もし群の羊あるひは山羊の燔祭たらば全き牡を供ふべし一一彼壇の北の方においてヱホバの前にこれを宰るべしアロンの子等なる祭司等はその血を壇の四圍に灑ぐべし一二彼また之を切わかちその首とその脂を截とるべし而して祭司これを皆壇の上なる火の上にある薪柴の上に陳ぶべし一三またその臓腑と足はこれを水に洗ひ祭司一切を携へきたりて壇の上に焼べし是を燔祭となす是即ち火祭にしてヱホバに馨しき香たるなり一四若また禽を燔祭となしてヱホバに献るならば鳲鳩または雛き鴿を携へ來りて禮物となすべし一五祭司はこれを壇にたづさへゆきてその首を切やぶりこれを壇の上に焼べしまたその血はこれをしぼりいだして壇の一方にぬるべし一六またその穀袋とその内の物はこれを除きて壇の東の方なる灰棄處にこれを棄べし一七またその翼は切はなすこと无にこれを割べし而して祭司これを壇の上にて火の上なる薪柴の上に焼べし是を燔祭となす是すなはち火祭にしてヱホバに馨しき香たるなり

第二章一 人素祭の禮物をヱホバに供ふる時は麥粉をもてその禮物となしその上に油をそそぎ又その上に乳香を加へ二これをアロンの子等なる祭司等の許に携へゆくべし斯てまた祭司はその麥粉と油一握をその一切の乳香とともに取り之を記念の分となして壇の上に焼べし是すなはち火祭にしてヱホバに馨しき香たるなり三素祭の餘はアロンとその子等に歸すべし是はヱホバに献る火祭の一にして至聖物たるなり四汝もし爐に焼たる物をもて素祭の禮物となさんとせば麥粉に油を和て作れる無酵菓子および油を抹たる無酵煎餅を用ふべし五汝の素祭とする禮物もし鍋に焼たる物ならば麥粉に油を和て酵いれずに作れる者を用ふべし六汝これを細に割てその上に油をそそぐべ

し是を素祭となす七 汝の素祭とする禮物もし釜に煮たる物ならば麥粉と油をもて作れる者を用ふべし八 汝これ等の物をもて作れる素祭の物をヱホバに携へいたるべし是を祭司に授さば祭司はこれを壇にたづさへ往き九 その素祭の中より記念の分をとりて壇の上に焚べし是すなはち火祭にしてヱホバに馨しき香たるなり一〇 素祭の餘はアロンとその子等に皈すべし是はヱホバにささぐる火祭の一にして至聖物たるなり一一 凡そ汝等がヱホバにたづさへいたる素祭は都て酵いれて作るべからず汝等はヱホバに献る火祭の中に酵または蜜を入て焚べからず一二 但し初熟の禮物をそなふる時には汝等これをヱホバにそなふべし然ど馨しき香のためにこれを壇にそなふる事はなすべからず一三 汝素祭を献るには凡て鹽をもて之に味くべし汝の神の契約の鹽を汝の素祭に缺こと勿れ汝禮物をなすには都て鹽をそなふべし一四 汝初穂の素祭をヱホバにそなへんとせば穂を火にやきて殻をさりたる者をもて汝の初穂の禮物にそなふべし一五 汝また油をその上にほどこし乳香をその上に加ふべし是を素祭となす一六 祭司はその殻を去たる穀物の中および油の中よりその記念の分を取りその一切の乳香とともにこれを焚べし是すなはちヱホバにささぐる火祭なり

第三章 一 人もし酬恩祭の犠牲を献るに當りて牛をとりて之を献るならば牝牡にかかはらずその全き者をヱホバの前に供ふべし二 すなはちその禮物の首に手を按き集會の幕屋の門にこれを宰るべし而してアロンの子等なる祭司等その血を壇の周圍に灌ぐべし三 彼はまたその酬恩祭の犠牲の中よりして火祭をヱホバに献べし即ち臓腑を裹むところの脂と臓腑の上の一切の脂四 および二箇の腎とその上の脂の腰の兩傍にある者ならびに肝の上の網膜の腎の上に達る者を取べし五 而してアロンの子等壇の上において火の上なる薪の上の燔祭の上にこれを焚べし是すなはち火祭にしてヱホバに馨しき香たるなり六 もしまたヱホバに酬恩祭の犠牲を献るにあたりて羊をその禮物となすならば牝牡にかかはらず其全き者を供ふべし七 若また羔羊をその禮物となすならば之をヱホバの前に牽來り八 その禮物の首に手を按きこれを集會の幕屋の前に宰るべし而してアロンの子等その血を壇の四圍にそそぐべし九 彼その酬恩祭の犠牲の中よりして火祭をヱホバに献べし即ちその脂をとりその尾を脊骨より全く斷きりまた臓腑を裹ところの脂と臓腑の上の一切の脂一〇 および兩箇の腎とその上の脂の腰の兩傍にある者ならびに肝の上の網膜の腎の上に達る者をとるべし一一 祭司はこれを壇の上に焚べし是は火祭にしてヱホバにたてまつる食物なり一二 もし山羊を禮物となすならばこれをヱホバの前に牽來り一三 其の首に手を按きこれを集會の幕屋の前に宰るべし而してアロンの子等その血を壇の四圍に灌ぐべし一四 彼またその中よりして禮物をとりヱホバに火祭をささぐべしすなはち臓腑を裹むところの脂と臓腑の上のすべての脂一五 および兩箇の腎とそ

の上の脂と腰の兩傍にある者ならびに肝の上の網膜の腎の上に達る者をとるべし一六祭司はこれを壇の上に焚べし是は火祭として奉つる食物にして馨しき香たるなり脂はみなヱホバに歸すべし一七汝等は脂と血を食ふべからず是は汝らがその一切の住處において代々永く守るべき例なり

第四章一ヱホバまたモーセに告て言たまはく二イスラエルの子孫に告ていふべし人もし誤りてヱホバの誡命に違ひて罪を犯しその爲べからざる事の一を行ふことあり三また若膏そそがれし祭司罪を犯して民を罪に陷いるごとき事あらばその犯せし罪のために全き犢の若き者を罪祭としてヱホバに献べし四即ちその牡犢を集會の幕屋の門に牽きたりてヱホバの前にいたりその牡犢の首に手を按きその牡犢をヱホバの前に宰るべし五かくて膏そそがれし祭司その牡犢の血をとりてこれを集會の幕屋にたづさへ入り六而して祭司指をその血にひたしてヱホバの前聖所の障蔽の幕の前にその血を七次そそぐべし七祭司またその血をとりてヱホバの前にて集會の幕屋にある馨香の壇の角にこれを塗べしその牡犢の血は凡てこれを集會の幕屋の門にある燔祭の壇の底下に灌べし八またその牡犢の脂をことごとく取て罪祭に用ふべし即ち臟腑を裹むところの油と臟腑の上の一切の脂九および兩箇の腎と其上の脂の腰の兩傍にある者ならびに肝の上の網膜の腎の上に達る者を取べし一〇之を取には酬恩祭の犧牲の牛より取が如くすべし而して祭司これを燔祭の壇の上に焚べし一一その牡犢の皮とその一切の肉およびその首と脛と臟腑と糞等一二凡てその牡犢はこれを營の外に携へいだして灰を棄る場なる清淨處にいたり火をもてこれを薪柴の上に焚べし即ち是は灰棄處に焚べきなり一三またイスラエルの全會衆過失をなしたるにその事會衆の目にあらはれずして彼等つひにヱホバの誡命の爲べからざる者を爲し罪を獲ることあらんに一四もし其犯せし罪あらはれなば會衆の者若き犢を罪祭に献べし即ちこれを集會の幕屋の前に牽いたり一五會衆の長老等ヱホバの前にてその牡犢の首に手を按きその一人牡犢をヱホバの前に宰るべし一六而して膏そそがれし祭司その牡犢の血を集會の幕屋に携へいり一七祭司指をその血にひたしてヱホバの前障蔽の幕の前にこれを七次そそぐべし一八祭司またその血をとりヱホバの前にて集會の幕屋にある壇の角にこれを塗べし其血は凡てこれを集會の幕屋の門にある燔祭の壇の底下に灌べし一九また其脂をことごとく取て壇の上に焚べし二〇すなはち罪祭の牡犢になしたるごとくにこの牡犢にもなし祭司これをもて彼等のために贖罪をなすべし然せば彼等赦されん二一かくして彼その牡犢を營の外にたづさへ出し初次の牡犢を焚しごとくにこれを焚べし是すなはち會衆の罪祭なり二二また牧伯たる者罪を犯しその神ヱホバの誡命の爲べからざる者を誤り爲て罪を獲ことあらんに二三若その罪を犯せしことを覺らば牡山羊の全き者を禮物に持きたり二四その山羊の首に手を按き燔祭の

牲を宰る場にてヱホバの前にこれを宰るべし是すなはち罪祭なり二五 祭司は指をもてその罪祭の牲の血をとり燔祭の壇の角にこれを抹り燔祭の壇の底下にその血を灌ぎ二六 酬恩祭の犠牲の脂のごとくにその脂を壇の上に焚べし斯祭司かれの罪のために贖事をなすべし然せば彼は赦されん二七 また國の民の中に誤りて罪を犯しヱホバの誡命の爲べからざる者の一を爲て罪を獲る者あらんに二八 若その罪を犯せしことを覺らば牝山羊の全き者を牽きたりその犯せし罪のためにこれを禮物になすべし二九 即ちその罪祭の牲の首に手を按き燔祭の牲の場にてその罪祭の牲を宰るべし三〇 而して祭司は指をもてその血を取り燔祭の壇の角にこれを抹りその血をことごとくその壇の底下に灌べし三一 祭司また酬恩祭の牲より脂をとるごとくにその脂をことごとく取りこれを壇の上に焚てヱホバに馨しき香をたてまつるべし斯祭司かれのために贖罪をなすべし然せば彼は赦されん三二 彼もし羔羊を罪祭の禮物に持きたらんとせば牝の全き者を携へきたり三三 その罪祭の牲の首に手を按き燔祭の牲を宰る場にてこれを宰りて罪祭となすべし三四 かくて祭司指をもてその罪祭の牲の血を取り燔祭の壇の角にこれを抹りその血をことごとくその壇の底下に灌ぎ三五 羔羊の脂を酬恩祭の犠牲より取るごとくにその脂をことごとく取べし而して祭司はヱホバに獻ぐる火祭のごとくにこれを壇の上に焚べし斯祭司彼の犯せる罪のために贖をなすべし然せば彼は赦されん

第五章一 人もし證人として出たる時に諭誓の聲を聽ながらその見たる事またはその知る事を陳ずして罪を犯さば己の咎は己の身に歸すべし二 人もし汚穢たる獸の死體汚穢たる家畜の死體汚穢たる昆蟲の死體など凡て汚穢たる物に捫ることあらばその事に心づかざるもその身は汚れて辜あり三 もし又心づかずして人の汚穢にふるる事あらばその人の汚穢は如何なる汚穢にもあれその之を知るにいたる時は辜あり四 人もし心づかずして誓を發し妄に口をもて惡をなさんと言ひ善をなさんと言ばその人の誓を發して妄に言ふところは如何なる事にもあれそのこれを知るにいたる時は此等の一において辜あり五 若これらの一において辜ある時は某の事において罪を犯せりと言あらはし六 その愆のためその犯せし罪のために羊の牝なる者すなはち羔羊あるひは牝山羊をヱホバにたづさへ來りて罪祭となすべし斯て祭司は彼の罪のために贖罪をなすべし七 もし羔羊にまで手のとどかざる時は鳲鳩二羽か雛鴿二羽をその犯せし愆のためにヱホバに持きたり一を罪祭にもちひ一を燔祭に用ふべし八 即ちこれを祭司にたづさへ往べし祭司はその罪祭の者を先にささぐべし即ちその首を頸の根より切やぶるべし但しこれを切はなすべからず九 而してその罪祭の者の血を壇の一方にそそぎその餘の血をば壇の底下にしぼり出すべし是を罪祭となす一〇 またその次のは慣例のごとくに燔祭にささぐべし斯祭司彼が犯せし罪のために贖をなすべし然せば彼は赦されん一一 もし二羽の鳲鳩か二羽

の雛鴿までに手のとどかざる時はその罪ある者麥粉一エパの十分一を禮物にもちきたりてこれを罪祭となすべしその上に膏をかくべからず又その上に乳香を加ふべからず是は罪祭なればなり一二彼祭司の許にこれを携へゆくべし祭司はこれを一握とりて記念の分となし壇の上にてヱホバの火祭の上にこれを焚べし是を罪祭となす一三斯祭司は彼が是等の一を犯して獲たる罪のために贖をなすべし然せば彼は赦されんその殘餘は素祭とひとしく祭司に歸すべし一四ヱホバ、モーセに告て言たまはく一五人もし過失を爲し知ずしてヱホバの聖物を干して罪を獲ことあらば汝の估價に依り聖所のシケルにしたがひて數シケルの銀にあたる全き牡羊を群の中よりとりその愆のためにこれをヱホバに携へきたりて愆祭となすべし一六而してその聖物を干して獲たる罪のために償をなしまた之に五分の一をくはへて祭司に付すべし祭司はその愆祭の牡羊をもて彼のために贖罪をなすべし然せば彼は赦されん一七人もし罪を犯しヱホバの誡命の爲べからざる者の一を爲すことあらば假令これを知ざるも尚罪ありその罪を任べきなり一八即ち汝の估價にしたがひて群の中より全き牡羊をとり愆祭となしてこれを祭司にたづさへいたるべし祭司は彼が知ずして誤りし過誤のために贖罪をなすべし然せば彼は赦されん一九是を愆祭となすその人は誠にヱホバに罪を獲たり

第六章一ヱホバまたモーセに告て言たまはく二人もしヱホバにむかひて不信をなして罪を獲ことあり即ち人の物をあづかり又は質にとり又は奪ひおきて然る事あらずと言ひ或は人を虐る事を爲し三或は人の落せし物を拾ひおきて然る事なしと言ひ偽りて誓ふことを爲す等凡て人の爲て罪を獲るところの事を一にても行はば四是罪を犯して身に罪ある者なればその奪し物その虐げて取たる物その預りし物その拾ひとりし物五および凡てその偽り誓し物を還すべし即ちその原物を還しその上に五分の一をこれに加へその愆祭をささぐる日にこれをその本主に付すべし六彼その愆祭をヱホバに携へきたるべし即ち汝の估價にしたがひその愆のために群の中より全き牡羊をとりて祭司にいたるべし七祭司はヱホバの前において彼のために贖罪をなすべし然せば彼はその中のいづれを行ひて愆を獲るもゆるさるべし八ヱホバまたモーセに告て言たまはく九アロンとその子等に命じて言へ燔祭の例は是のごとし此燔祭は壇の上なる爐の上に旦まで終夜あらしむべし即ち壇の火をしてこれと共に燃つつあらしむべきなり一〇祭司は麻の衣服を着て麻の褌をその肉に纒ひ壇の上にて火にやけたる燔祭の灰を取て壇の旁に置き一一而してその衣服を脱ぎ他の衣服をつけてその灰を營の外に携へいだし清淨地にもちゆくべし一二壇の上の火をばたえず燃しむべし熄しむべからず祭司は朝ごとに薪柴をその上に燃し燔祭の物をその上に陳べまた酬恩祭の脂をその上に焚べし一三火はつねに壇の上にたえず燃しむべし熄しむべからず一四素祭の例は是のご

としアロンの子等これをヱホバの前すなはち壇の前にささぐべし一五 即ち素祭の麥粉とその膏を一握とりまた素祭の上の乳香をことごとく取て之を壇の上に焚き馨しき香となし記念の分となしてヱホバにたてまつるべし一六 その遺餘はアロンとその子等これを食ふべし即ち酵をいれずして之を聖所に食ふべし集會の幕屋の庭にて之を食ふべきなり一七 之を酵いれて燒べからずわが火祭の中より我これを彼等にあたへてその分となさしか是は罪祭と愆祭のごとくに至聖し一八 アロンの子等の男たる者はみな之を食ふことを得べし是はヱホバにたてまつる火祭の例にして汝等が代々永くまもるべき者なり凡てこれに觸る者は聖なるべし一九 ヱホバ、モーセに告て言たまはく二〇 アロンとその子等が膏そそがるる日にヱホバにささぐべき禮物は是のごとし麥粉一エパの十分の一を素祭となして恒に献ぐべし即ちその半を朝にその半を夕にささぐべし二一 是は鍋の内に油をもて作りその燒たる時に汝これを携へきたるべし即ちこれを幾個にも劈て素祭となしヱホバに献げて馨しき香とならしむべし二二 アロンの子等の中膏をそそがれて彼に継で祭司となる者はこれを献ぐべし斯はヱホバに對して永く守るべき例なり是は全く焚つくすべし二三 凡て祭司の素祭はみな全く焚つくすべし食ふべからざるなり二四 ヱホバまたモーセに告て言たまはく二五 アロンとその子等に告ていふべし罪祭の例は是のごとし燔祭の牲を宰る場にて罪祭の牲をヱホバの前に宰るべし是は至聖物なり二六 罪のために之をささぐるところの祭司これを食ふべし即ち集會の幕屋の庭において聖所に之を食ふべし二七 凡てその肉に觸る者は聖なるべしその血もし衣服に灑ぎかかることあらばその灑ぎかかれる者を聖所に洗ふべし二八 またこれを煮たる土瓦の器皿は碎くべし若これを煮たる者銅の鍋ならば水をもてこれを磨き洗ふべし二九 祭司等の中の男たる者は皆これを食ふことを得べし是は至聖し三〇 然どその血を集會の幕屋にたづさへいりて聖所にて贖罪をなしたる罪祭はこれを食ふべからず火をもてこれを焚べし

第七章一 また愆祭の例は是のごとし是は至聖者なり二 燔祭を宰る場にて愆祭を宰るべし而して祭司その血を壇の四周にそそぎ三 その脂をことごとく献ぐべし即ちその脂の尾その臟腑を裹むところの諸の脂四 兩個の腎とその上の脂の腰の兩傍にある者および肝の上の網膜の腎の上におよべる者を取り五 祭司これを壇の上に焚てヱホバに火祭とすべし之を愆祭となす六 祭司等の中の男たる者はみな之を食ふことを得是は聖所に食ふべし至聖者なり七 罪祭も愆祭もその例は一にして異らずこれは贖罪をなすところの祭司に歸すべし八 人の燔祭をささぐるところの祭司その祭司はその献ぐる燔祭の物の皮を自己に得べし九 凡て爐に燒たる素祭の物および凡て釜と鍋にて製へたる者はこれを献ぐるところの祭司に歸すべし一〇 凡そ素祭は油を和たる者も乾たる者もみなアロンの諸の子等に均く歸すべし一一 ヱホバに

献ぐべき酬恩祭の犠牲の例は是のごとし一二若これを感謝のために献ぐるならば油を和たる無酵菓子と油をぬりたる無酵煎餅および麥粉に油をまぜて燒たる菓子をその感謝の犠牲にあはせて献ぐべし一三その菓子の外にまた有酵パンを酬恩祭なる感謝の犠牲にあはせてその禮物に供ふべし一四即ちこの全體の禮物の中より一箇宛を取りヱホバにささげて擧祭となすべし是は酬恩祭の血を灑ぐところの祭司に歸すべきなり一五感謝のために献ぐる酬恩祭の犠牲の肉はこれを献げしその日の中に食ふべし少にても翌朝まで存しおくまじきなり一六その犠牲の禮物もし願還かまたは自意の禮物ならばその犠牲をささげし日にこれを食ふべしその殘餘はまた明日これを食ふことを得るなり一七但しその犠牲の肉の殘餘は第三日にいたらば火に焚べし一八若その酬恩祭の犠牲の肉を第三日に少にても食ふことをなさば其は受納られずまた禮物と算らるることなくして反て憎むべき者とならん是を食ふ者その罪を任べし一九その肉もし汚穢たる物にふるる事あらば食ふべからず火に焚べしその肉は淨き者みなこれを食ふことを得るなり二〇若その身に汚穢ある人ヱホバに屬する酬恩祭の犠牲の肉を食はばその人はその民の中より絶るべし二一また人もし人の汚穢あるひは汚たる獸畜あるひは忌しき汚たる物等都て汚穢に觸ることありながらヱホバに屬する酬恩祭の犠牲の肉を食はばその人はその民の中より絶るべし二二ヱホバまたモーセに告て言たまはく二三イスラエルの子孫に告て言べし牛羊山羊の脂は都て汝等これを食ふべからず二四自ら死たる獸畜の脂および裂ころされし獸畜の脂は諸般の事に用ふるを得れどもこれを食ふことは絶てなすべからず二五人のヱホバに火祭として献ぐるところの牲畜の脂は誰もこれを食ふべからず之を食ふ人はその民の中より絶るべし二六また汝等はその一切の住處において鳥獸の血を決して食ふべからず二七何の血によらずこれを食ふ人あればその人は皆民の中より絶るべし二八ヱホバ、モーセに告て言たまはく二九イスラエルの子孫に告て言べし酬恩祭の犠牲をヱホバに献ぐる者はその酬恩祭の犠牲の中よりその禮物を取てヱホバにたづさへ來るべし三〇ヱホバの火祭はその人手づからこれを携へきたるべし即ちその脂と胸とをたづさへ來りその胸をヱホバの前に搖て搖祭となすべし三一而して祭司その脂を壇の上に焚べしその胸はアロンとその子等に歸すべし三二汝等はその酬恩祭の犠牲の右の腿を擧祭となして祭司に與ふべし三三アロンの子等の中酬恩祭の血と脂とを献ぐる者その右の腿を得て自己の分となすべし三四我イスラエルの子孫の酬恩祭の犠牲の中よりその搖る胸と擧たる腿をとりてこれを祭司アロンとその子等に與ふ是はイスラエルの子孫の中に永く行はるべき例典なり三五是はヱホバの火祭の中よりアロンに歸する分またその子等に歸する分なり彼等を立てヱホバに祭司の職をなさしむる日に斷定めらる三六すなはち是は彼等に膏をそそぐ日にヱホバが命をくだしてイス

ラエルの子孫の中より彼等に歸せしめたまふ者にて代々永くまもるべき例典たるなり三七 是すなはち燔祭素祭罪祭愆祭任職祭酬恩祭の犠牲の法なり三八 ヱホバ、シナイの野においてイスラエルの子孫にその禮物をヱホバに供ふることを命じたまひし日に是をシナイ山にてモーセに命じたまひしなり

第八章

一 ヱホバ、モーセに告て言たまはく二 汝アロンとその子等およびその衣服と灌膏と罪祭の牡牛と二頭の牡羊と無酵パン一筐を携へきたり三 また會衆をことごとく集會の幕屋の門に集めよ四 モーセすなはちヱホバの己に命じたまひし如くなしたれば會衆は集會の幕屋の門に集りぬ五 モーセ會衆にむかひて言ふヱホバの爲せと命じたまへる事は斯のごとしと六 而してモーセ、アロンとその子等を携きたり水をもて彼等を洗ひ清め七 アロンに裏衣を著せ帶を帶しめ明衣を纏はせエポデを着しめエポデの帶を之に帶しめこれをもてエポデを其身に結つけ八 また胸牌をこれに着させその胸牌にウリムとトンミムをつけ九 その首に頭帽をかむらしめその頭帽の上すなはちその額に金の板の聖前板をつけたりヱホバのモーセに命じたまひし如し一〇 ○モーセまた灌膏をとり幕屋とその中の一切の物に灌ぎてこれを聖別め一一 且これを七度壇にそそぎ壇とその諸の器具および洗盤とその臺に膏そそぎてこれを聖別め一二 また灌膏をアロンの首にそそぎ之に膏そそぎて聖別たり一三 モーセまたアロンの子等をつれきたりて裏衣をこれに着せ帶をこれに帶しめ頭巾をこれに蒙らせたりヱホバのモーセに命じたまひし如くなり一四 また罪祭の牡牛を牽きたりてアロンとその子等その罪祭の牡牛の頭に手を按り一五 斯てこれを殺してモーセその血をとり指をもてその血を壇の四周の角につけて壇を潔淨しまた壇の底下にその血を灌ぎて之を聖別め之がために贖をなせり一六 モーセまたその臟腑の上の一切の脂肝の上の網膜および兩箇の腎とその脂をとりて之を壇の上に焚り一七 但しその牡牛その皮その肉およびその糞は營の外にて火に焚りヱホバのモーセに命じたまひし如し一八 また燔祭の牡羊を牽きたりてアロンとその子等その牡羊の頭に手を按たり一九 斯てこれを宰してモーセその血を壇の周圍に灑げり二〇 而してモーセその牡羊を切さきその頭と肉塊と脂とを焚り二一 また水をもてその臟腑と脛を洗ひてモーセその牡羊をことごとく壇の上に焚り是は馨しき香のためにささぐる燔祭にしてヱホバにたてまつる火祭たるなりヱホバのモーセに命じたまひし如し二二 また他の牡羊すなはち任職の牡羊を牽きたりてアロンとその子等その牡羊の頭に手を按り二三 斯てこれを殺してモーセその血をとり之をアロンの右の耳の端とその右の手の大指と右の足の拇指につけ二四 またアロンの子等をつれきたりてその右の耳の端と右の手の大指と右の足の拇指にその血をつけたり而してモーセその血を壇の周圍に灑ぎり二五 彼またその脂と脂の尾および臟腑の上の一切の脂と肝の上の網膜ならびに兩箇の腎とその脂とその右の腿とを取り二六

またヱホバの前なる無酵パンの筐の中より無酵菓子一箇と油ぬりたるパンの菓子一箇と煎餅一箇を取り是等をその脂の上とその右の腿の上に載せ二七是を凡てアロンの手とその子等の手に授け之をヱホバの前に搖て搖祭となさしめたり二八而してモーセまた之を彼等の手より取り壇の上にて燔祭の上にこれを焚り是は馨しき香のためにたてまつる任職祭にしてヱホバにささぐる火祭なり二九斯てモーセその胸をとりヱホバの前にこれを搖て搖祭となせり任職の牡羊の中是はモーセの分に歸する者なりヱホバのモーセに命じたまひし如し三〇而してモーセ灌膏と壇の上の血とをとりて之をアロンとその衣服に灑ぎまたその子等とその子等の衣服にそそぎアロンとその衣服およびその子等とその子等の衣服を聖別たり三一斯てモーセまたアロンとその子等に言けるは集會の幕屋の門にて汝等その肉を煮よ而して任職祭の筐の内なるパンと偕にこれを其處に食へ是はアロンとその子等これを食ふべしと我に命ありしにしたがふなり三二その肉とパンの餘れる者は汝等これを火に焚べし三三汝等はその任職祭の竟る日まで七日が間は集會の幕屋の門口より出べからず其は汝等の任職は七日にわたればなり三四今日行ひて汝等のために罪をあがなふが如くにヱホバ斯せよと命じたまふなり三五汝等は集會の幕屋の門口に七日の間日夜居てヱホバの命令を守れ然せば汝等死る事なからん我かく命ぜられたるなり三六すなはちアロンとその子等はヱホバのモーセによりて命じたまひし事等を盡く爲り

第九章 一 斯て第八日にいたりてモーセ、アロンとその子等およびイスラエルの長老等を呼二而してアロンに言けるは汝若き牡犢の全き者を罪祭のために取りまた牡羊の全き者を燔祭のために取りてこれをヱホバの前に獻ぐべし三汝イスラエルの子孫に告て言べし汝等牡山羊を罪祭のために取りまた犢牛と羔羊の當歳にして全き者を燔祭のために取きたれ四また酬恩祭のためにヱホバの前に供ふる牡牛と牡羊を取り且油を和たる素祭をとりきたるべしヱホバ今日汝等に顯れたまふべければなり五是に於てモーセの命ぜし物を集會の幕屋の前に携へ來り會衆みな進よりてヱホバの前に立ければ六モーセ言ふヱホバの汝等に爲と命じたまへる者はすなはち是なり斯せばヱホバの榮光汝等にあらはれん七モーセすなはちアロンに言けるは汝壇に往き汝の罪祭と汝の燔祭を獻げて己のためと民のために贖罪を爲しまた民の禮物を獻げて之がために贖罪をなし凡てヱホバの命じたまひし如くせよ八是に於てアロン壇に往き自己のためにする罪祭の犢を宰れり九しかしてアロンの子等その血をアロンの許にたづさへ來りければアロン指をその血にひたして之を壇の角につけその血を壇の底下に灌ぎ一〇また罪祭の牲の脂と腎と肝の上の網膜を壇の上に燒り凡てヱホバのモーセに命じたまひし如し一一またその肉と皮は營の外にて火に焚り一二アロンまた燔祭の牲を宰りしがその子等これが血を自己の許に携へきた

りければ之を壇の周圍に灌げり一三彼等また燔祭の牲すなはちその肉塊と頭をかれに持きたりければ彼壇の上にこれを焚き一四彼またその臟腑と脛を洗ひ壇の上にて之を燔祭の上に焚り一五また民の禮物を携へきたれり即ち民のためにする罪祭の山羊を取て之を宰り前のごとくに之を献げて罪祭となし一六また燔祭の牲を牽きたりて定例のごとくに之をささげたり一七また素祭を携へきたりてその中より一握をとり朝の燔祭にくはへてこれを壇の上に焚り一八アロンまた民のためにする酬恩祭の犧牲なる牡牛と牡羊を宰りしがその子等これが血を己にもちきたりければ之を壇の周圍に灑げり一九彼等またその牡牛と牡羊の脂およびその脂の尾と臟腑を裹む者と腎と肝の上の網膜とを携へきたれり二〇即ち彼等その脂をその胸の上に載きたりけるにアロンその脂を壇の上に焚り二一その胸と右の腿はアロンこれをヱホバの前に搖て搖祭となせり凡てモーセの命じたる如し二二アロン民にむかひて手を擧てこれを祝し罪祭燔祭酬恩祭を献ぐることを畢て下れり二三モーセとアロン集會の幕屋にいり出きたりて民を祝せり斯てヱホバの榮光總體の民に顯れ二四火ヱホバの前より出て壇の上の燔祭と脂を燬つくせり民これを見て聲をあげ俯伏ぬ

第一〇章 一 茲にアロンの子等なるナダブとアビウともにその火盤をとりて火をこれにいれ香をその上に盛て異火をヱホバの前に献げたり是はヱホバの命じたまひし者にあらざりしかば二火ヱホバより出て彼等を燬ほろぼせりすなはち彼等はヱホバの前に死うせぬ三モーセ、アロンに言けるはヱホバの宣ふところは是のごとし云く我は我に近づく者等の中に我の聖ことを顯はし又全體の民の前に榮光を示さんアロンは默然たりき四モーセかくてアロンの叔父ウジエルの子等なるミサエルとエルザパンを呼び汝等進みよりて聖所の前より汝等の兄弟等を營の外に携へ出せと之にいひければ五すなはち進みよりて彼等をその裏衣のままに營の外に携へ出しモーセの言るごとくせり六モーセまたアロンおよびその子エレアザルとイタマルにいひけるは汝らの頭を露すなかれまた汝らの衣を裂なかれ恐くは汝等死んまた震怒全體の民におよぶあらん但汝等の兄弟たるイスラエルの全家ヱホバのかく火をもて燬ほろぼしたまひし事を哀くべし七汝等はまた集會の幕屋の門より出べからず恐くは汝等死ん其はヱホバの灌膏汝らの上にあればなりと彼等モーセの言のごとくに爲り八茲にヱホバ、アロンに告て言たまはく九汝も汝の子等も集會の幕屋にいる時には葡萄酒と濃酒を飮なかれ恐くは汝等死ん是は汝らが代々永く守るべき例たるべし一〇斯するは汝等が物の聖と世間なるとを分ち汚たると潔淨とを分つことを得んため一一又ヱホバのモーセによりて告たまひし一切の法度をイスラエルの子孫に教ふることを得んがためなり一二モーセまたアロンおよびその遺れる子エレアザルとイタマルに言けるは汝等ヱホバの火祭の中より素祭の遺餘を取り酵をいれ

ずして之を壇の側に食へ是は至聖物なり一三是はヱホバの火祭の中より汝に歸する者また汝の子等に歸する者なれば汝等これを聖所にて食ふべし我かく命ぜられたるなり一四また搖る胸と擧たる腿は汝および汝の男子と女子これを淨處にて食ふべし是はイスラエルの子孫の酬恩祭の中より汝の分と汝の子等の分に與へらるる者なればなり一五彼等その擧るところの腿と搖ところの胸を火祭の脂とともに持きたりこれをヱホバの前に搖て搖祭となすべし其は汝と汝の子等に歸すべし是は永く守るべき例にしてヱホバの命じたまふ者なり一六斯てモーセ罪祭の山羊を尋ね索めけるに既にこれを燬たりしかばアロンの遺れる子等エレアザルとイタマルにむかひてモーセ怒を發し言けるは一七罪祭の牲は至聖かるに汝等なんぞ之を聖所にて食ざりしや是は汝等をして會衆の罪を任て彼等のためにヱホバのまへに贖をなさしめんとて汝等に賜ふ者たるなり一八視よその血はまだこれを聖所に携へいることをせざりきかの物は我が命ぜしごとくに汝等これを聖所にて食ふべかりしなり一九アロン、モーセに言けるは今日彼等その罪祭と燔祭をヱホバの前に献げしが斯る事我身に臨めり今日もし我罪祭の牲を食はばヱホバこれを善と觀たまふや二〇モーセこれを聽て善とせり

第一一章 一ヱホバ、モーセとアロンに告てこれに言給はく二イスラエルの子孫に告て言へ地の諸の獸畜の中汝らが食ふべき四足は是なり三凡て獸畜の中蹄の分たる者すなはち蹄の全く分たる反芻者は汝等これを食ふべし四但し反芻者と蹄の分たる者の中汝等の食ふべからざる者は是なり即ち駱駝是は反芻ども蹄わかれざれば汝等には汚たる者なり五山鼠是は反芻ども蹄わかれざれば汝等には汚たる者なり六兎是は反芻ども蹄わかれざれば汝等には汚たる者なり七猪是は蹄あひ分れ蹄まったく分るれども反芻ことをせざれば汝等には汚たる者なり八汝等是等の者の肉を食ふべからずまたその死體にさはるべからず是等は汝等には汚たる者なり九水にある諸の族の中汝等の食ふべき者は是なり凡て水の中にをり海河に居る者にして翅と鱗のある者は汝等これを食ふべし一〇凡て水に動く者凡て水に生る者即ち凡て海河にある者にして翅と鱗なき者は是汝等には忌はしき者なり一一是等は汝等には忌はしき者なり汝等その肉を食ふべからずまたその死體をば忌はしき者となすべし一二凡て水にありて翅も鱗もなき者は汝等には忌はしき者たるべし一三鳥の中に汝等が忌はしとすべき者は是なり是をば食ふべからず是は忌はしき者なり即ち鷲黄鷹鳶一四鸇鷹の類一五諸の鴉の類一六駝鳥梟鴎雀鷹の類一七鶴鵜鷺一八白鳥鸅鸕大鷹一九鶴鸚鵡の類鷸および蝙蝠二〇また凡て羽翼のありて四爬にあるくところの昆蟲は汝等には忌はしき者なり二一但し羽翼のありて四爬にあるく諸の昆蟲の中その足に飛腿のありて地に飛ぶものは汝等これを食ふことを得べし二二即ちその中蝗蟲の類大蝗の類小蝗の類螇蚸の類を汝等食ふことを得べし二三凡て羽翼ありて

四爬にあるくところの昆蟲はみな汝等には忌はしき者たるなり二四 これ等はなんぢらを汚すなり凡て是等の者の死體に捫る者は晩まで汚るべし二五 凡てその死體を身に携ふる者はその衣服を洗ふべしその身は晩まで汚るるなり二六 凡そ蹄の分れたる獸畜の中その蹄の全く分れざる者あるひは反芻ことをせざる者の死體は汝等には汚穢たるべし凡てこれに捫る者は汚るべし二七 四足にてあるく諸の獸畜の中その掌底にて歩む者は皆汝等には汚穢たるべしその死骸に捫る者は晩まで汚るべし二八 その死體を身に携ふる者はその衣服を洗ふべしその身は晩まで汚るるなり是等は汝等には汚たる者なり二九 地に匍ところの匍行者の中汝等に汚穢となる者は是なり即ち鼬鼠鼫鼠大蜥蜴の類 三〇 蛤蚧龍子守宮蛇醫蝘蜓三一 諸の匍者の中是等は汝等には汚穢たるなり凡てその死たるに捫る者は晩まで汚るべし三二 是等の者の死て上に墜たる物は何にもあれ汚るべし木の器具にもあれ衣服にもあれ皮革にもあれ囊袋にもあれ凡そ事に用ふる器は皆これを水にいるべし是は晩まで汚穢ん斯せば是は清まるべし三三 また是等の中の者 瓦の器におつればその内にある者みな汚るべし汝らその器を毀つべきなり三四 また水の入たる食ふべき食物も是等によりて汚るべく諸般の器にある飮べき飮物も是等に由て汚るべし三五 是等の者の死體物の上に墮ればその物都て汚るべし爐にもあれ土鍋にもあれ之を毀つべきなり是は汚れて汝等には汚れたる者となればなり三六 然ど泉水あるひは塘池水の瀦は汚るること無し唯その死體に觸る者汚るべし三七 是等の者の死體は播べき種の上に墮るも其は汚るることなし三八 然ど種の上に水のかかれる時にその死體上に墮なば其は汝等には汚たるべし三九 汝等が食ふところの獸畜の死たる時はその死體に捫る者は晩まで汚るべし四〇 その死體を食ふ者はその衣服を濯ふべし其身は晩まで汚るるなりその死體を携ふる者もその衣服を洗ふべしその身は晩まで汚るるなり四一 地の上に匍ところの諸の匍行物は忌べき者なり食ふべからず四二 即ち地に匍ところの諸の匍行物の中凡て腹ばひ行く者四足にて歩く者ならびに多の足を有つ者是等をば汝等食ふべからず是等は忌べき者たるなり四三 汝等は匍ところの匍行物のためにその身を忌はしき者にするなかれ是等をもてその身を汚すなかれ又是等に汚さるるなかれ四四 我は汝等の神ヱホバなれば汝等その身を聖潔せよ然ば汝等聖者とならん我聖ければなり汝等は必ず地に匍ところの匍行者をもてその身を汚すことをせざれ四五 我は汝等の神とならんとて汝等をエジプトの國より導きいだせしヱホバなり我聖ければ汝等聖潔なるべし四六 是すなはち獸畜と鳥と水に動く諸の生物と地に匍ふ諸の匍行物にかかはるところの例にして四七 汚たる者と潔き者とを分ち食るる生物と食はれざる生物とを分つ者なり

第一二章一 ヱホバまたモーセに告て曰たまはく二 イスラエルの子孫に告て言へ婦女もし種をやどして男子を生ば七日汚るべし

即ちその月の穢の日數ほど汚るるなり三また第八日に至らばその嬰の前の皮を割べし四その婦女は尚その成潔の血に三十三日を歷べしその成潔の日の滿るまでは聖物にさはるべからず聖所にいるべからず五若女子を生ば二七日汚るべし月の穢におけるがごとしまたその成潔の血に六十六日を經べきなり六而してその男子あるひは女子につきての成潔の日滿なば燔祭の爲に當歳の羔羊を取り罪祭のために雛き鴿あるひは鳲鳩を取てこれを集會の幕屋の門に携へきたり祭司にいたるべし七祭司は之をヱホバの前にささげてその婦女のために贖罪をなすべし然せばその出血の穢潔まるべし是すなはち男子または女子を生る婦女にかかはるところの例なり八その婦女もし羔羊にまで手の屆かざる時は鳲鳩二羽か又は雛き鴿二羽を携へきたるべし是一は燔祭のため一は罪祭のためなり祭司これがために贖罪をなすべし然せば婦女は潔まるべし

第一三章 一ヱホバ、モーセとアロンに告て言たまはく二人その身の皮に腫あるひは癬あるひは光る處あらんにもし之がその身の皮にあること癩病の患處のごとくならばその人を祭司アロンまたは祭司たるアロンの子等に携へいたるべし三また祭司はその肉の皮のその患處を觀べしその患處の毛もし白くなり且その患處身の皮よりも深く見えなば是癩病の患處なり祭司かれを見て汚たる者となすべし四もし又その身の皮の光る處白くありて皮よりも深く見えずまたその毛も白くならずば祭司その患處ある人を七日の間禁鎖おき五第七日にまた祭司之を觀べし若その患處變るところ無くまたその患處皮に蔓延ること無ば祭司またその人を七日の間禁鎖おき六第七日にいたりて祭司ふたたびその人を觀べしその患處もし薄らぎまたその患處皮に蔓延らずば祭司これを潔者となすべし是は癬なりその人は衣服を洗ふべし然せば潔くならん七然どその人祭司に觀られて潔き者となりたる後にいたりてその癬皮に廣く蔓延らば再ひ祭司にその身を見すべし八祭司これを觀てその癬皮に蔓延るを見ば祭司その人を汚たる者となすべし是は癩病なり九人もしその身に癩病の患處あらば祭司にこれを携ゆくべし一〇祭司これを觀にその皮の腫白くしてその毛も白くなり且その腫に爛肉の見ゆるあらば一一是舊き癩病のその身の皮にあるなれば祭司これを汚たる者となすべしその人は汚たる者なればこれを禁鎖るにおよばず一二若また癩病大にその皮に發しその患處ある者の皮に遍く滿て首より足まで凡て祭司の見るところにおよばば一三祭司これを視若その身に遍く癩病の滿たるを見ばその患處ある者を潔き者となすべし其人は全く白くなりたれば潔きなり一四然どもし爛肉その人に顯れなば汚たる者なり一五祭司爛肉を視ばその人を汚たる者となすべし爛肉は汚たる者なり是すなはち癩病たり一六若またその爛肉變て白くならばその人は祭司に詣るべし一七祭司これを視るにその患處もし白くなりをらば祭司その患處ある者を潔き者となすべしその人

は潔きなり一八 また肉の皮に瘍瘡ありしに癒て一九 その瘍瘡の地方に白き腫おこり又は白くして微紅き光る處おこるありて之を祭司に見することあらんに二〇 祭司これを視るに皮よりも卑く見てその毛白くなりをらば祭司その人を汚たる者となすべし其は瘍瘡より起りし癩病の患處たるなり二一 然ど祭司これを観に其處に白き毛あらずまた皮よりも卑からずして却て薄らぎをらば祭司その人を七日の間禁鎖おくべし二二 而してもし大に皮に蔓延ば祭司その人を汚たる者となすべし是その患處なり二三 然どその光る處もしその所に止りて蔓延ずば是は瘍瘡の痕跡なり祭司その人を潔き者となすべし二四 また肉の皮に火傷あらんにその火傷の跡もし微紅くして白く又は只白くして光る處とならば二五 祭司これを視べし若その光る處の毛白くなりてその處皮よりも深く見なば是火傷より起りし癩病なれば祭司その人を汚たる者となすべし是は癩病の患處たるなり二六 然ど祭司これを視にその光る處に白き毛あらずまたその處皮よりも卑からずして却て薄らぎをらば祭司その人を七日の間禁鎖おき二七 第七日に祭司これを視べしもし大に皮に蔓延りをらば祭司その人を汚たる者となすべし是は癩病の患處なり二八 もしその光る處その所に止り皮に蔓延らずして却て薄らぎをらば是火傷の腫なり祭司其人を潔き者となすべし其は是火傷の痕迹なればなり二九 男あるひは女もし頭または鬚に患處あらば三〇 祭司その患處を觀べし若皮よりも深く見えまた其處に黄なる細き毛あらば祭司その人を汚れたる者となすべし其は瘡にして頭または鬚にある癩病なり三一 若また祭司その瘡の患處を視に皮よりも深からずしてまた其處に黒き毛あること無ば祭司その瘡の患處ある者を七日の間禁鎖おき三二 第七日に祭司その患處を視べしその瘡もし蔓延ずまた其處に黄なる毛あらずして皮よりもその瘡深く見ずば三三 その人は剃ことをなすべし但しその瘡の上は剃べからず祭司其瘡ある者を尚また七日の間禁鎖おき三四 第七日に祭司またその瘡を視べし若その瘡皮に蔓延ずまた皮よりも深く見ずば祭司その人を潔き者となすべしその人はまたその衣服をあらふべし然せば潔くならん三五 若その潔き者となりし後にいたりてその瘡大に皮に蔓延りなば三六 祭司その人を觀べし若その瘡皮に蔓延らば祭司は黄なる毛を尋るにおよばずその人は汚たる者なり三七 然ど若その瘡止たるごとくに見えて黒き毛の其處に生ずるあらばその瘡痊たる者にてその人は潔し祭司その人を潔き者となすべし三八 また男あるひは女その身の皮に光る處すなはち白き光る處あらば三九 祭司これを視べし若その身の皮の光る處薄白からば是白斑のその皮に生じたるなればその人は潔し四〇 人もしその髪毛頭より脱おつるあるも禿なれば潔し四一 人もしその面に近き處の頭の毛脱おつるあるも額の禿たるなれば潔し四二 然ども若その禿頭または禿額に白く微紅き患處あらば是その禿頭または禿額に癩病の發したるなり四三 祭司これを觀べし若その禿頭あるひは禿額の患處の腫白くし

て微紅くあり身の肉に癩病のあらはるるごとくならば[四四]是癩病人にして汚たる者なり祭司その人をもて全く汚たる者となすべしその患處その頭にあるなり[四五]癩病の患處ある者はその衣服を裂きその頭を露しその口に蓋をあてて居り汚たる者汚たる者とみづから稱ふべし[四六]その患處の身にある日の間は恒に汚たる者たるべしその人は汚たる者なれば人に離れて居るべし即ち營の外に住居をなすべきなり[四七]若また衣服に癩病の患處起るあらん時は毛の衣にもあれ麻の衣にもあれ[四八]又麻あるひは毛の經線にあるにもせよ緯線にあるにもせよ皮革にあるにもあれ又凡て皮革にて造れる物にあるにもあれ[四九]若その衣服あるひは皮革あるひは經線あるひは緯線あるひは凡て皮革にて造れる物に有ところの患處青くあるか又は赤くあらば是癩病の患處なり之を祭司に見べし[五〇]祭司はその患處を視その患處ある物を七日の間禁鎖おき[五一]第七日にその患處を視べし若その衣服あるひは經線あるひは緯線あるひは毛あるひは皮革あるひは凡て皮革にて造れる物にあるところの患處蔓延をらばこれ惡き癩病にしてその物は汚たる者なり[五二]彼その患處あるところの衣服毛または麻の經線緯線あるひは凡て皮革にて造れる物を燬べし是は惡き癩病なりその物を火に燒べし[五三]然ど祭司これを視に患處もしその衣服あるひは經線あるひは緯線あるひは凡て皮革にて造れる物に蔓延ずば[五四]祭司命じてその患處ある物を濯はせ尚七日の間之を禁鎖おき[五五]而して祭司その濯ひし患處を觀べし患處もし色の變ることなくば患處の蔓延ことあらざるも是は汚たる者なり汝これを火に燬べし是は表面にあるも裏面にあるも共に腐蝕の陷なり[五六]然ど濯たる後に祭司これを觀るにその患處薄らぎたらばその衣服あるひは皮革あるひは經線あるひは緯線より患處を切とるべし[五七]然るに尚またその衣服あるひは經線あるひは緯線あるひは凡て皮革にて造れる物に患處のあらはるるあらば是再發なり汝その患處ある物を火に燒べし[五八]また汝が濯ふところの衣服あるひは經線あるひは緯線あるひは凡て皮革にて造れる物よりして若その患處脱さらば再びこれを濯ふべし然せば潔し[五九]是すなはち毛または麻の衣服および經線緯線ならびに凡て皮革にて造りたる物に起れる癩病の患處をしらべて潔と汚たるとを定むるところの條例なり

第一四章 [一]ヱホバ、モーセに告て言たまはく[二]癩病人の潔める日の定例は是のごとし即ちその人を祭司の許に携へゆくべし[三]先祭司營より出ゆきて觀祭司もし癩病人の身にありし癩病の患處の痊たるを見ば[四]祭司その潔めらるる者のために命じて生る潔き鳥二羽に香柏と紅の線と牛膝草を取きたらしめ[五]祭司また命じてその鳥一羽を瓦の器の内にて活水の上に殺さしめ[六]而してその生る鳥を取り香柏と紅の線と牛膝草をも取て之を夫活水の上に殺したる鳥の血の中にその生る鳥とともに濡し[七]癩病より潔められんとする者にこれを七回灑ぎてこれを

潔き者となしその生る鳥をば野に放つべし八潔めらるる者はその衣服を濯ひその毛髪をことごとく剃おとし水に身を滌ぎて潔くなり然る後に營に入きたるべし但し七日が間は自己の天幕の外に居るべし九而して第七日にその身の毛髪をことごとく剃べし即ちその頭の髪と鬚と眉とをことごとく剃りまたその衣服を濯ひ且その身を水に滌ぎて潔くなるべし一〇第八日にいたりてその人二匹の全き羔羊の牡と當歳なる一匹の全き羔羊の牝を取りまた麥粉十分の三に油を和たる素祭と油一ログを取べし一一潔禮をなす所の祭司その潔めらるべき人と是等の物とを集會の幕屋の門にてヱホバの前に置き一二而して祭司かの羔羊の牡一匹を取り一ログの油とともに之を愆祭に献げまた之をヱホバの前に搖て搖祭となすべし一三この羔羊の牡は罪祭燔祭の牲を宰る處すなはち聖所にてこれを宰るべし罪祭の物の祭司に歸するごとく愆祭の物も然るなり是は至聖物たり一四而して祭司その愆祭の牲の血を取りその潔めらるべき者の右の耳の端と右の手の大指と右の足の拇指に祭司これをつくべし一五祭司またその一ログの油をとりて之を自身の左の手の掌に傾ぎ一六而して祭司その右の指を左の手の油にひたしその指をもて之を七回ヱホバの前に灑ぐべし一七その手の殘餘の油は祭司その潔らるべき者の右の耳の端と右の手の大指と右の足の拇指においてその愆祭の牲の血の上に之をつくべし一八而して尚その手に殘れる油は祭司これをその潔めらるべき者の首につけヱホバの前にて祭司その人のために贖罪をなすべし一九斯してまた祭司罪祭を献げその汚穢を潔めらるべき者のために贖罪を爲て然る後に燔祭の牲を宰るべし二〇而して祭司燔祭と素祭を壇の上に献げその人のために祭司贖罪を爲べし然せばその人は潔くならん二一その人もし貧くして之にまで手の届かざる時は搖て自己の贖罪をなさしむべき愆祭のために羔羊の牡一匹をとり又素祭のために麥粉十分の一に油を和たるを取りまた油一ログを取り二二且その手のとどくところに循ひて鳲鳩二羽かまたは雛き鴿二羽を取べし其一は罪祭のための者一は燔祭のための者なり二三而してその潔禮の第八日に之を祭司に携へ集會の幕屋の門にきたりてヱホバの前にいたるべし二四かくて祭司はその愆祭の牡羊と一ログの油を取り祭司これをヱホバの前に搖て搖祭となすべし二五而して愆祭の羔羊を宰りて祭司その愆祭の牲の血を取りこれをその潔めらるべき者の右の耳の端と右の手の大指と右の足の拇指につけ二六また祭司その油の中を己の左の手の掌に傾ぎ二七而して祭司その右の指をもて左の手の油を七回ヱホバの前に灑ぎ二八亦祭司その潔めらるべき者の右の耳と右の手の大指と右の足の拇指において愆祭の牲の血をつけし處にその手の油をつくべし二九またその手に殘れる油をば祭司その潔めらるべき者の首に之をつけヱホバの前にてその人のために贖罪をなすべし三〇その人はその手のおよぶところの鳲鳩または雛き鴿一羽を献ぐべし三一即ちその手のおよぶところの者一を

罪祭に一を燔祭に爲べし祭司はその潔めらるべき者のためにヱホバの前に贖罪をなすべし三二 癩病の患處ありし人にてその潔禮に用ふべき物に手の届ざる者は之をその條例とすべし三三 ヱホバ、モーセとアロンに告て言たまはく三四 我が汝らの産業に與ふるカナンの地に汝等の至らん時に我汝らの産業の地の或家に癩病の患處を生ぜしむること有ば三五 その家の主來り祭司に告て患處のごとき者家に現はると言べし三六 然る時は祭司命じて祭司のその患處を視に行く前にその家を空しむべし是は家にある物の凡て汚れざらんためなり而して後に祭司いりてその家を觀べし三七 その患處を觀にもしその家の壁に青くまたは赤き窪の患處ありて壁よりも卑く見えなば三八 祭司その家を出て家の門にいたり七日の間家を閉おき三九 祭司第七日にまた來りて視るべしその患處もし家の壁に蔓延をらば四〇 祭司命じてその患處ある石を取のぞきて邑の外の汚穢所にこれを棄しめ四一 またその家の内の四周を刮らしむべしその刮りし灰沙は之を邑の外の汚穢所に傾け四二 他の石を取てその石の所に入かふべし而して彼他の灰沙をとりて家を塗べきなり四三 斯石を取のぞき家を刮りてこれを塗かへし後にその患處もし再びおこりて家に發しなば四四 祭司また來りて視べし患處もし家に蔓延たらば是家にある惡き癩病なれば其は汚るるなり四五 彼その家を毀ちその石その木およびその家の灰沙をことごとく邑の外の汚穢所に搬びいだすべし四六 その家を閉おける日の間にこれに入る者は晩まで汚るべし四七 その家に臥す者はその衣服を洗ふべしその家に食する者もその衣服を洗ふべし四八 然ど祭司いりて視にその患處家を塗かへし後に家に蔓延ずば是患處の痊たる者なれば祭司その家を潔き者となすべし四九 彼すなはちその家を潔むるために鳥二羽に香柏と紅の線と牛膝草を取り五〇 その鳥一羽を瓦の器の内にて活る水の上に殺し五一 香柏と牛膝草と紅の線と生鳥を取てこれをその殺せし鳥の血なる活る水に浸し七回家に灑ぐべし五二 斯祭司鳥の血と活る水と生る鳥と香柏と牛膝草と紅の線をもて家を潔め五三 その生る鳥を邑の外の野に縱ちその家のために贖罪をなすべし然せば其は潔くならん五四 是すなはち癩病の諸患處瘡五五 および衣服と家屋の癩病五六 ならびに腫と癬と光る處とに關る條例にして五七 何の日潔きか何の日汚たるかを教ふる者なり癩病の條例は是のごとし

第一五章一 ヱホバ、モーセとアロンに告て言たまはく二 イスラエルの子孫に告て言へ凡そ人その肉に流出あらばその流出のために汚るべし三 その流出に由て汚るること是のごとし即ちその肉の流出したるもその肉の流出滯ほるも共にその汚穢となるなり四 流出ある者の臥たる床は凡て汚るまたその人の坐したる物は凡て汚るべし五 その床に觸る人は衣服をあらひ水に身を滌ぐべしその身は晩まで汚るるなり六 流出ある人の坐したる物の上に坐する人は衣服を洗ひ水に身をそそぐべしその身は晩まで汚るるなり七 流出ある者の身に觸る人は衣服を洗ひ水に身

を滌ぐべしその身は晩まで汚るるなり八もし流出ある者の唾潔き者にかからばその人衣服を洗ひ水に身を滌ぐべしその身は晩まで汚るるなり九流出ある者の乗たる物は凡て汚るべし一〇またその下になりし物に觸る人は皆晩まで汚るまた其等の物を携ふる者は衣服を洗ひ水に身をそそぐべしその身は晩まで汚るるなり一一流出ある者手を水に洗はずして人にさはらばその人は衣服を洗ひ水に身を滌ぐべしその身は晩まで汚るるなり一二流出ある者の捫りし瓦の器は凡て砕くべし木の器は凡て水に洗ふべし一三流出ある者その流出やみて潔くならば己の成潔のために七日を數へその衣服を洗ひ活る水にその體を滌ぐべし然せば潔くなるべし一四而して第八日に鳴鳩二羽または雛き鴿二羽を自己のために取り集會の幕屋の門にきたりてヱホバの前にゆき之を祭司に付すべし一五祭司はその一を罪祭に一を燔祭に献げ而して祭司その人の流出のためにヱホバの前に贖罪をなすべし一六人もし精の洩ることあらばその全身を水にあらふべしその身は晩まで汚るるなり一七凡て精の粘着たる衣服皮革などは皆水に洗ふべし是は晩まで汚るるなり一八男もし女と寝て精を洩さば二人ともに水に身を滌ぐべしその身は晩まで汚るるなり一九また婦女流出あらんにその肉の流出もし血ならば七日の間不潔なり凡て彼に捫る者は晩まで汚るべし二〇その不潔の間に彼が臥たるところの物は凡て汚るべし又彼がその上に坐れる物も皆汚れん二一その床に捫る者は皆衣服を洗ひ水に身を滌ぐべしその身は晩まで汚るるなり二二彼が凡て坐りし物に捫る者は皆衣服を洗ひ水に身を滌ぐべしその身は晩まで汚るるなり二三彼の床の上またはその凡て坐りし物の上にある血に捫らばその人は晩まで汚るるなり二四人もし婦女と寝てその不潔を身に得ば七日汚るべしその人の臥たる床は凡て汚れん二五婦女もしその血の流出不潔の期の外にありて多くの日に渉ることあり又その流出する事不潔の期に逾るあらばその汚穢の流出する日の間は凡てその不潔の時の如くにしてその身汚る二六凡てその流出ある日の間彼が臥ところの床は彼におけること不潔の床のごとし凡そ彼が坐れる物はその汚るること不潔の汚穢のごとし二七是等の物に捫る人は凡て汚るその衣服を洗ひ水に身を滌ぐべしその身は晩まで汚るるなり二八彼もしその流出やみて淨まらば七日を算ふべし而して後潔くならん二九彼第八日に鳴鳩二羽または雛き鴿二羽を自己のために取りこれを祭司に携へ來り集會の幕屋の門にいたるべし三〇祭司その一を罪祭に一を燔祭に献げ而して祭司かれが汚穢の流出のためにヱホバの前に贖を爲べし三一斯汝等イスラエルの子孫をその汚穢に離れしむべし是は彼等その中間にある吾が幕屋を汚してその汚穢に死ることなからん爲なり三二是すなはち流出ある者その精を洩してこれに身を汚せし者三三その不潔を患ふ婦女或は男あるひは女の流出ある者汚たる婦女と寝たる者等に關るところの條例なり

第一六章一 アロンの子等二人がヱホバの前に獻ぐることを爲て死たる後にヱホバ、モーセに斯告たまへり二 即ちヱホバ、モーセに言たまひけるは汝の兄弟アロンに告よ時をわかたずして障蔽の幕の内なる聖所にいり櫃の上なる贖罪所の前にいたるべからず是死ることなからんためなり其は我雲のうちにありて贖罪所の上にあらはるべければなり三 アロン聖所にいるには斯すべしすなはち犢の牡を罪祭のために取り牡羊を燔祭のために取り四 聖き麻の裏衣を着麻の褌をその肉にまとひ麻の帶をもて身に帶し麻の頭帽を冠るべし是は聖衣なりその身を水にあらひてこれを着べし五 またイスラエルの子孫の會衆の中より牡山羊二匹を罪祭のために取り牡羊一匹を燔祭のために取べし六 アロンは自己のためなるその罪祭の牡牛を牽きたりて自己とその家族のために贖罪をなすべし七 アロンまたその兩隻の山羊を取り集會の幕屋の門にてヱホバの前にこれを置き八 その兩隻の山羊のために籤を掣べし即ち一の籤をヱホバのためにし一の籤をアザゼルのためにすべし九 而してアロンそのヱホバの籤にあたりし山羊を献げて罪祭となすべし一〇 又アザゼルの籤にあたりし山羊はこれをヱホバの前に生しおきこれをもて贖罪をなしこれを野におくりてアザゼルにいたらすべし一一 即ちアロン己のためなるその罪祭の牡牛を牽きたりて自己とその家族のために贖罪をなし自己のためなる其罪祭の牡牛を宰り一二 而して火鼎をとりヱホバの前の壇よりして熱れる火を之に盈てまた兩手に細末の馨しき香を盈て之を障蔽の幕の中に携へいり一三 ヱホバの前に於て香をその火に放べ香の煙の雲をして律法の上なる贖罪所を蓋はしむべし然せば彼死ることあらじ一四 彼またその牡牛の血をとり指をもて之を贖罪所の東面に灑ぎまた指をもてその血を贖罪所の前に七回灑ぐべし一五 斯してまた民のためなるその罪祭の山羊を宰りその血を障蔽の幕の内に携へいりかの牡牛の血をもて爲しごとくその血をもて爲しこれを贖罪所の上と贖罪所の前に灑ぎ一六 イスラエルの子孫の汚穢とその諸の悖れる罪とに緣て聖所のために贖罪を爲べし即ち彼等の汚穢の中間にある集會の幕屋のために斯なすべきなり一七 彼が聖所において贖罪をなさんとて入たる時はその自己と己の家族とイスラエルの全會衆のために贖罪をなして出るまでは何人も集會の幕屋の内に居べからず一八 斯て彼ヱホバの前の壇に出きたり之がために贖罪をなすべし即ちその牡牛の血と山羊の血を取て壇の四周の角につけ一九 また指をもて七回その血を其の上に灑ぎイスラエルの子孫の汚穢をのぞきて其を潔ようし且聖別べし二〇 斯かれ聖所と集會の幕屋と壇のために贖罪をなしてかの生る山羊を牽きたるべし二一 然る時アロンその生る山羊の頭に兩手を按きイスラエルの子孫の諸の惡事とその諸の悖反る罪をことごとくその上に承認はしてこれを山羊の頭に載せ選びおける人の手をもてこれを野に遣るべし二二 その山羊彼等の諸惡を人なき地に任ゆくべきなり即ちその山羊を野

に遣るべし二三斯してアロン集會の幕屋にいりその聖所にいりし時に穿たる麻の衣を脱て其處に置き二四聖所においてその身を水にそそぎ衣服をつけて出で自己の燔祭と民の燔祭とを獻げて自己と民とのために贖罪をなすべし二五また罪祭の牲の脂を壇の上に焚べきなり二六かの山羊をアザゼルに遣りし者は衣服を濯ひ水に身を滌ぎて然る後營にいるべし二七聖所において贖罪をなさんために其血を携へ入たる罪祭の牡牛と罪祭の山羊とは之を營の外に携へいだしその皮と肉と糞を火に燒べし二八之を燒たる者は衣服を濯ひ水に身を滌ぎて然る後營にいるべし二九汝等永く此例を守るべし即ち七月にいたらばその月の十日に汝等その身をなやまし何の工をも爲べからず自己の國の人もまた汝等の中に寄寓る外國の人も共に然すべし三〇其はこの日に祭司汝らのために贖罪をなして汝らを淨むればなり是汝らがヱホバの前にその諸の罪を清められんためになす者なり三一是は汝らの大安息日なり汝ら身をなやますべし是永く守るべき例なり三二膏をそそがれて任ぜられその父に代りて祭司の職をなすところの祭司贖罪をなすべし彼は麻の衣すなはち聖衣を衣べし三三彼すなはち至聖所のために贖罪をなしまた集會の幕屋のためと壇のために贖罪をなしまた祭司等のためと民の會衆のために贖罪をなすべし三四是汝等が永く守るべき例にしてイスラエルの子孫の諸の罪のために年に一度贖罪をなす者なり彼すなはちヱホバのモーセに命じたまひしごとく爲ぬ

第一七章

一ヱホバ、モーセに告て言たまはく二アロンとその子等およびイスラエルの總の子孫に告てこれに言べしヱホバの命ずるところ斯のごとし云く三凡そイスラエルの家の人の中牛羊または山羊を營の内に宰りあるひは營の外に宰ることを爲し四之を集會の幕屋の門に牽きたりて宰りヱホバの幕屋の前においてこれをヱホバに禮物として獻ぐることを爲ざる者は血を流せる者と算らるべし彼は血を流したるなればその民の中より絶るべきなり五是はイスラエルの子孫をしてその野の表に犠牲とするところの犠牲をヱホバに牽きたらしめんがためなり即ち彼等は之を牽きたり集會の幕屋の門にいたりて祭司に就きこれを酬恩祭としてヱホバに獻ぐべきなり六然る時は祭司その血を集會の幕屋の門なるヱホバの壇にそそぎまたその脂を馨しき香のために焚てヱホバに奉つるべし七彼等はその慕ひて淫せし魑魅に重て犠牲をささぐ可らず是は彼等が代々永くまもるべき例なり八汝また彼等に言べし凡そイスラエルの家の人または汝らの中に寄寓る他國の人燔祭あるひは犠牲を獻ぐることをせんに九之を集會の幕屋の門に携へきたりてヱホバにこれを獻ぐるにあらずばその人はその民の中より絶るべし一〇凡そイスラエルの家の人または汝らの中に寄寓る他國の人の中何の血によらず血を食ふ者あれば我その血を食ふ人にわが面をむけて攻めその民の中より之を斷さるべし一一其は肉の生命は血にあれば我汝等がこれを以て汝等の霊魂のために壇の上にて贖罪を

なさんために是を汝等に與ふ血はその中に生命のある故によりて贖罪をなす者なればなり一二是をもて我イスラエルの子孫にいへり汝らの中何人も血をくらふべからずまた汝らの中に寄寓る他國の人も血を食ふべからずと一三凡そイスラエルの子孫の中または汝らの中に寄寓る他國の人の中もし食はるべき獸あるひは鳥を猟獲たる者あらばその血を灑ぎいだし土にて之を掩ふべし一四凡の肉の生命はその血にして是はすなはちその魂たるなり故に我イスラエルの子孫にいへりなんぢらは何の肉の血をもくらふべからず其は一切の肉の生命はその血なればなり凡て血をくらふものは絶るべし一五およそ自ら死たる物または裂ころされし物をくらふ人はなんぢらの國の者にもあれ他國の者にもあれその衣服をあらひ水に身をそそぐべしその身は晩までけがるるなりその後は潔し一六その人もし洗ふことをせずまたその身を水に滌がずばその罪を任べし

第一八章一ヱホバまたモーセに告て言たまはく二イスラエルの子孫に告て之に言へ我は汝らの神ヱホバなり三汝らその住をりしエジプトの國に行はるる所の事等を傚ひ行ふべからずまた我が汝等を導きいたるカナンの國におこなはるる所の事等を傚ひおこなふべからずまたその例に歩行べからず四汝等は我が法を行ひ我が例をまもりてその中にあゆむべし我は汝等の神ヱホバなり五汝等わが例とわが法をまもるべし人もし是を行はば之によりて生べし我はヱホバなり六汝等凡てその骨肉の親に近づきて之と淫するなかれ我はヱホバなり七汝の母と淫するなかれ是汝の父を辱しむるなればなり彼は汝の母なれば汝これと淫するなかれ八汝の父の妻と淫するなかれ是汝の父を辱しむるなればなり九汝の姉妹すなはち汝の父の女子と汝の母の女子は家に生れたると家外に生れたるとによらず凡てこれと淫するなかれ一〇汝の男子の女子または汝の女子の女子と淫する事なかれ是自己を辱しむるなればなり一一汝の父の妻が汝の父によりて產たる女子は汝の姉妹なれば之と淫する勿れ一二汝の父の姉妹と淫するなかれ是は汝の父の骨肉の親なればなり一三また汝の母の姉妹と淫する勿れ是は汝の母の骨肉の親なり一四汝の父の兄弟の妻に親づきて之と淫する勿れ是は汝の叔伯母なり一五汝の媳と淫するなかれ是は汝の息子の妻なれば汝これと淫する勿れ一六汝の兄弟の妻と淫する勿れ是汝の兄弟を辱しむるなればなり一七汝婦人とその婦の女子とに淫する勿れまたその婦人の子息の女子またはその女子の女子を取て之に淫する勿れ是等は汝の骨肉の親なれば然するは惡し一八汝妻の尚生る間に彼の姉妹を取て彼とおなじく妻となして之に淫する勿れ一九婦のその行經の汚穢にある間はこれに近づきて淫するなかれ二〇汝の鄰の妻と交合して彼によりて己が身を汚すなかれ二一汝その子女に火の中を通らしめてこれをモロクにささぐることを絶て爲ざれ亦汝の神ヱホバの名を汚すことなかれ我はヱホバなり二二汝女と寢るごとくに男と寢るなかれ是は憎むべき事なり二三

汝獸畜と交合して之によりて己が身を汚すこと勿れまた女たる者は獸畜の前に立て之と接ること勿れ是憎むべき事なり二四汝等はこの諸の事をもて身を汚すなかれ我が汝等の前に逐はらふ國々の人はこの諸の事によりて汚れ二五その地もまた汚る是をもて我その惡のために之を罰すその地も亦自らそこに住る民を吐いだすなり二六然ば汝等はわが例と法を守りこの諸の憎むべき事を一も爲べからず汝らの國の人も汝らの中間に寄寓る他國の人も然るべし二七汝等の先にありし此地の人々はこの諸の憎むべき事を行へりその地もまた汚る二八汝等は是のごとくするなかれ恐くはこの地汝らの先にありし國人を吐いだす如くに汝らをも吐いださん二九凡そこの憎むべき事等を一にても行ふ者あれば之を行ふ人はその民の中より絶るべし三〇然ば汝等はわが例規を守り汝等の先におこなはれし是等の憎むべき習俗を一も行ふなかれまた之によりて汝等身を汚す勿れ我は汝等の神ヱホバなり

第一九章 一ヱホバまたモーセに告て言たまはく二汝イスラエルの子孫の全會衆に告てこれに言へ汝等宜く聖あるべし其は我ヱホバ汝らの神聖あればなり三汝等おのおのその母とその父を畏れまた吾が安息日を守るべし我は汝らの神ヱホバなり四汝等虚き物を恃むなかれまた汝らのために神々を鑄造ることなかれ我は汝らの神ヱホバなり五汝等酬恩祭の犠牲をヱホバにささぐる時はその受納らるるやうに献ぐべし六之を食ふことは之を献ぐる日とその翌日に於てすべし若殘りて三日にいたらばこれを火に燒べし七もし第三日に少にても之を食ふことあらば是は憎むべき物となりて受納られざるべし八之を食ふ者はヱホバの聖物を汚すによりてその罰を蒙むるべし即ちその人は民の中より絶されん九汝その地の穀物を穫ときには汝等その田野の隅々までを盡く穫可らず亦汝の穀物の遺穗を拾ふべからず一〇また汝の菓樹園の菓を取つくすべからずまた汝の菓樹園に落たる菓を斂むべからず貧者と旅客のためにこれを遺しおくべし我は汝らの神ヱホバなり一一汝等竊むべからず僞べからず互に欺くべからず一二汝等わが名を指て僞り誓ふべからずまた汝の神の名を汚すべからず我はヱホバなり一三汝の鄰人を虐ぐべからずまたその物を奪ふべからず傭人の値を明朝まで汝の許に留めおくべからず一四汝聾者を詛ふべからずまた瞽者の前に礙物をおくべからず汝の神を畏るべし我はヱホバなり一五汝審判をなすに方りて不義を行なふべからず貧窮者を偏り護べからず權ある者を曲て庇くべからず但公義をもて汝の鄰を審判べし一六汝の民の間に往めぐりて人を謗るべからず汝の鄰人の血をながすべからず我はヱホバなり一七汝心に汝の兄弟を惡むべからず必ず汝の鄰人を勸戒むべし彼の故によりて罪を身にうくる勿れ一八汝仇をかへすべからず汝の民の子孫に對ひて怨を懷くべからず己のごとく汝の鄰を愛すべし我はヱホバなり一九汝らわが條例を守るべし汝の家畜をして異類と交らし

むべからず異類の種をまぜて汝の田野に播べからず麻と毛をまじへたる衣服を身につくべからず二〇 凡そ未だ贖ひ出されず未だ解放れざる奴隷の女にして夫に適く約束をなせし者あらんに人もしこれと交合しなばその二人を譴責むべし然ど之を殺すに及ばず是その婦いまだ解放れざるが故なり二一 その男は愆祭をヱホバに携へきたるべし即ち愆祭の牡羊を集會の幕屋の門に牽きたるべきなり二二 而して祭司その人の犯せる罪のためにその愆祭の牡羊をもてヱホバの前にこれがために贖罪をなすべし斯せばその人の犯せし罪赦されん二三 汝等かの地にいたりて諸の果實の樹を植ん時はその果實をもて未だ割禮を受ざる者と見做べし即ち三年の間汝等これをもて割禮を受ざる者となすべし是は食はれざるなり二四 第四年には汝らそのもろもろの果實を聖物となしこれをもてヱホバに感謝の祭を爲べし二五 第五年に汝等その果實を食ふべし然せば汝らのために多く實を結ばん我は汝らの神ヱホバなり二六 汝等何をも血のままに食ふべからずまた魔術を行ふべからず卜筮をなすべからず二七 汝等頭の鬢を圓く剪べからず汝鬚の兩方を損ずべからず二八 汝等死る人のために己が身に傷くべからずまたその身に刺文をなすべからず我はヱホバなり二九 汝の女子を汚して娼妓の業をなさしむべからず恐くは淫事國におこなはれ罪惡國に滿ん三〇 汝等わが安息日を守りわが聖所を敬ふべし我はヱホバなり三一 汝等憑鬼者を恃むなかれ卜筮師に問ことを爲て之に身を汚さるるなかれ我は汝らの神ヱホバなり三二 白髪の人の前には起あがるべしまた老人の身を敬ひ汝の神を畏るべし我はヱホバなり三三 他國の人汝らの國に寄留て汝とともに在ばこれを虐ぐるなかれ三四 汝等とともに居る他國の人をば汝らの中間に生れたる者のごとくし己のごとくに之を愛すべし汝等もエジプトの國に客たりし事あり我は汝らの神ヱホバなり三五 汝等審判に於ても尺度に於ても秤子に於ても升斗に於ても不義を爲べからず三六 汝等公平き秤公平き錘公平きエパ公平きヒンをもちふべし我は汝らの神ヱホバ汝らをエジプトの國より導き出せし者なり三七 汝等わが一切の條例とわが一切の律法を守りてこれを行ふべし我はヱホバなり

第二〇章

一 ヱホバまたモーセに告て言たまはく二 汝イスラエルの子孫に言べし凡そイスラエルの子孫の中またはイスラエルに寄寓る他國の人の中その子をモロクに獻ぐる者は必ず誅さるべし國の民石をもて之を撃べし三 我またわが面をその人にむけて之を攻めこれをその民の中より絶ん其は彼その子をモロクに獻げて吾が聖所を汚しまたわが聖名を褻せばなり四 その人がモロクにその子を獻ぐる時に國の民もし目を掩ひて見ざるがごとくし之を殺すことをせずば五 我わが面をその人とその家族にむけ彼および凡て彼に傚ひてモロクと淫をおこなふところの者等をその民の中より絶ん六 憑鬼者または卜筮師を恃みこれに從がふ人あらば我わが面をその人にむけ之をその民の中に絶べ

し七然ば汝等宜く自ら聖潔して聖あるべし我は汝らの神ヱホバたるなり八汝等わが條例を守りこれを行ふべし我は汝らを聖別るヱホバなり九凡てその父またはその母を詛ふ者はかならず誅さるべし彼その父またはその母を詛ひたればその血は自身に歸すべきなり一〇人の妻と姦淫する人すなはちその鄰の妻と姦淫する者あればその姦夫淫婦ともにかならず誅さるべし一一その父の妻と寢る人は父を辱しむるなり兩人ともにかならず誅さるべしその血は自己に歸せん一二人もしその子の妻と寢る時は二人ともにかならず誅さるべし是憎むべき事を行へばなりその血は自己に歸せん一三人もし婦人と寢るごとく男子と寢ることをせば是その二人憎むべき事をおこなふなり二人ともにかならず誅さるべしその血は自己に歸せん一四人妻を娶る時にそれの母をともに娶らば是惡き事なり彼も彼等もともに火に燒るべし是汝らの中に惡き事の無らんためなり一五男子もし獸畜と交合しなばかならず誅さるべし汝らまたその獸畜を殺すべし一六婦人もし獸畜に近づきこれと交らばその婦人と獸畜を殺すべし是等はともに必ず誅さるべしその血は自己に歸せん一七人もしその姉妹すなはちその父の女子あるひは母の女子を取りて此は彼の陰所を見彼は此の陰所を見なば是恥べき事をなすなりその民の子孫の前にてその二人を絶べし彼その姉妹と淫したればその罪を任べきなり一八人もし經水ある婦人と寢て彼の陰所を露すことあり即ち男子その婦人の源を露し婦人また己の血の源を露すあらば二人ともにその民の中より絶るべし一九汝の母の姉妹または汝の父の姉妹の陰所を露すべからず斯する皆にその骨肉の親たる者の陰所をあらはすなれば二人ともにその罪を任べきなり二〇人もしその伯叔の妻と寢る時は是その伯叔の陰所を露すなれば二人ともにその罪を任ひ子なくして死ん二一人もしその兄弟の妻を取ば是汚はしき事なり彼その兄弟の陰所を露したるなればその二人は子なかるべし二二汝等は我が一切の條例と一切の律法を守りて之を行ふべし然せば我が汝らを住せんとて導き行ところの地汝らを吐いだすことを爲じ二三汝らの前より我が逐はらふところの國人の例に汝ら歩行べからず彼等はこの諸の事をなしたれば我かれらを惡むなり二四我さきに汝等に言へり汝等その地を獲ん我これを汝らに與へて獲さすべし是は乳と蜜の流るる地なり我は汝らの神ヱホバにして汝らを他の民より區別てり二五汝等は獸畜の潔と汚たると禽の潔と汚たるとを區別べし汝等は我が汚たる者として汝らのために區別たる獸畜または禽または地に匍ふ諸の物をもて汝らの身を汚すべからず二六汝等は我の聖者となるべし其は我ヱホバ聖ければなり我また汝等をして我の所有とならしめんがために汝らを他の民より區別たるなり二七男または女の憑鬼者をなし或は卜筮をなす者はかならず誅さるべし即ち石をもてこれを撃べし彼等の血は彼らに歸せん

第二一章

一ヱホバ、モーセに告て言たまはくアロンの子等なる

祭司等に告てこれに言へ民の中の死人のために身を汚す者あるべからず二但しその骨肉の親のためすなはちその母のため父のため男子のため女子のため兄弟のため三またその姉妹の處女にして未だ夫あらざる者のためには身を汚すも宜し四祭司はその民の中の長者なれば身を汚して褻たる者となるべからず五彼等は髮をそりて頭に毛なき所をつくるべからずその鬚の兩傍を損ずべからずまたその身に傷つくべからず六その神に對て聖あるべくまたその神の名をけがすべからず彼等はヱホバの火祭すなはち其神の食物を献ぐる者なれば聖あるべきなり七彼等は妓女または汚れたる女を妻に娶るべからずまた夫に出されたる女を娶るべからず其はその身ヱホバにむかひて聖ければなり八汝かれをもて聖者とすべし彼は汝の神ヱホバの食物を献ぐる者なればなり汝すなはちこれをもて聖者となすべし其は我ヱホバ汝らを聖別る者聖ければなり九祭司の女たる者淫行をなしてその身を汚さば是その父を汚すなり火をもてこれを焼べし一〇その兄弟の中灌膏を首にそそがれ職に任ぜられて祭司の長となれる者はその頭をあらはすべからずまたその衣服を裂べからず一一死人の所に往べからずまたその父のためにも母のためにも身を汚すべからず一二また聖所より出べからずその神の聖所を褻すべからず其はその神の任職の灌膏首にあればなり我はヱホバなり一三彼妻には處女を娶るべし一四寡婦休れたる婦または汚れたる婦妓女等は娶るべからず惟自己の民の中の處女を妻にめとるべし一五その民の中に自己の子孫を汚すべからずヱホバこれを聖別ればなり一六ヱホバ、モーセに告て言たまはく一七アロンに告て言へ凡そ汝の歷代の子孫の中身に疵ある者は進みよりてその神ヱホバの食物を献ぐる事を爲べからず一八凡て疵ある人は進みよるべからずすなはち瞽者跛者および鼻の缺たる者成餘るところ身にある者一九脚の折たる者手の折たる者二〇傴僂者侏儒目に雲膜ある者疥ある者癬ある者外腎の壞れたる者等は進みよるべからず二一凡そ祭司アロンの子孫の中身に疵ある者は進みよりてヱホバの火祭を献ぐべからず彼は身に疵あるなれば進みよりてヱホバの食物を献ぐべからざるなり二二神の食物の至聖者も聖者も彼は食ふことを得二三然ど障蔽の幕に至べからずまた祭壇に近よるべからず其は身に疵あればなり斯かれわが聖所を汚すべからず其は我ヱホバこれを聖別ればなり二四モーセすなはちアロンとその子等およびイスラエルの一切の子孫にこれを告たり

第二二章一ヱホバ、モーセに告て言たまはく二汝アロンとその子等に告て彼等をしてイスラエルの子孫の聖物をみだりに享用ざらしめまたその聖別て我にささげたる物についてわが名を汚すこと無らしむべし我はヱホバなり三彼等に言へ凡そ汝等の歷代の子孫の中都てイスラエルの子孫の聖別て我にささげし聖物に汚たる身をもて近く者あればその人はわが前より絶るべし我はヱホバなり四アロンの子孫の中癩病ある者または流

出ある者は凡てその潔くなるまで聖物を食ふべからずまた死躰に汚れたる物に捫れる者または精をもらせる者五または凡て人を汚すところの匍行物に捫れる者または何の汚穢を論はず人をして汚れしむるところの人に捫れる者六此のごとき物に捫る者は晩まで汚るべしまたその身を水にて洗ふにあらざれば聖物を食ふべからず七日の入たる時は潔くなるべければその後に聖物を食ふべし是その食物なればなり八自ら死たる物または裂ころされし者を食ひて之をもて身を汚すべからず我はヱホバなり九彼等これを褻してこれが爲に罪を獲て死るにいたらざるやう我が例規をまもるべし我ヱホバ是等を聖せり一〇外國の人は聖物を食ふ可らず祭司の客あるひは傭人は聖物を食ふべからざるなり一一然ど祭司金をもて人を買たる時はその者はこれを食ふことを得またその家に生れし者も然り彼等は祭司の食物を食ふことを得べし一二祭司の女子もし外國の人に嫁ぎなば禮物なる聖物を食ふべからず一三祭司の女子寡婦となるありまたは出さるるありて子なくしてその父の家にかへり幼時のごとくにてあらばその父の食物を食ふことを得べし但し外國の人はこれを食ふべからず一四人もし誤りて聖物を食はばその聖物にこれが五分一を加へて祭司に付すべし一五イスラエルの子孫がヱホバに献ぐるところの聖物を彼等褻すべからず一六その聖物を食ふ者にはその愆の罰をかうむらしむべし其は我ヱホバこれを聖すればなり一七ヱホバまたモーセに告て言たまはく一八アロンとその子等およびイスラエルの一切の子孫に告てこれに言へ凡そイスラエルにをる外國の人の中願還の禮物または自意の禮物をヱホバに献げて燔祭となさんとする者は一九その受納らるるやうに牛羊あるひは山羊の牡の全き者を献ぐべし二〇凡て疵ある者は汝ら献ぐべからず是はその物なんぢらのために受納られざるべければなり二一凡て願を還さんとしまたは自意の禮物をなさんとして牛あるひは羊をもて酬恩祭の犠牲を献上る者はその受納らるるやうに全き者を取べし其物には何の疵もあらしむべからざるなり二二即ち盲なる者折たる所ある者切斷たる處ある者腫物ある者疥ある者癬ある者是の如き者は汝等これをヱホバに献ぐべからずまた壇の上に火祭となしてヱホバにたてまつるべからず二三牛あるひは羊の成餘れる所または成足ざる所ある者は汝らこれを自意の禮物には用ふるも宜し然ど願還においては是は受納らるることなかるべし二四汝等外腎を打壞りまたは壓つぶしまたは割きまたは斬りたる者をヱホバに献ぐべからずまた汝らの國の中に斯る事を行ふべからず二五汝らまた異邦人の手よりも是等の物を受て神の食に供ふることを爲べからず其は是等は缺あり疵ある者なるに因て汝らのために受納らるることあらざればなり二六ヱホバ、モーセに告て言たまはく二七牛羊または山羊生れなば之を七日その母につけ置べし八日より後は是はヱホバに火祭とすれば受納らるべし二八牝牛にもあれ牝羊にもあれ汝らその母と子とを同日

に殺すべからず二九 汝ら感謝の犠牲をヱホバに献ぐる時は汝らの受納らるるやうに献ぐべし三〇 是はその日の内に食つくすべし明日まで遺しおくべからず我はヱホバなり三一 汝らわが誡命を守り且これを行ふべし我はヱホバなり三二 汝等わが名を瀆すべからず我はかへつてイスラエルの子孫の中に聖者とあらはるべきなり我はヱホバにして汝らを聖くする者三三 汝らの神とならんとて汝らをエジプトの國より導きいだせし者なり我はヱホバなり

第二三章一 ヱホバ、モーセに告て言たまはく二 イスラエルの子孫につげて之に言へ汝らが宣告て聖會となすべきヱホバの節期は是のごとし我が節期はすなはち是なり三 六日の間業務をなすべし第七日は休むべき安息日にして聖會なり汝ら何の業をもなすべからず是は汝らがその一切の住所において守るべきヱホバの安息日なり四 その期々に汝らが宣告べきヱホバの節期たる聖會は是なり五 すなはち正月の十四日の晩はヱホバの逾越節なり六 またその月の十五日はヱホバの酵いれぬパンの節なり七日の間汝等酵いれぬパンを食ふべし七 その首の日には汝ら聖會をなすべし何の職業をも爲すべからず八 汝ら七日のあひだヱホバに火祭を献ぐべし第七日にはまた聖會をなし何の職業をもなすべからず九 ヱホバまたモーセにつげて言たまはく一〇 イスラエルの子孫につげて之に言へ汝らわが汝らにたまふところの地に至るにおよびて汝らの穀物を穫ときは先なんぢらの穀物の初穂一束を祭司にもちきたるべし一一 彼その束の受いれらるるやうに之をヱホバの前に搖べし即ちその安息日の翌日に祭司これを搖べし一二 また汝らその束を搖る日に當歳の牡羔の全き者を燔祭となしてヱホバに献ぐべし一三 その素祭には油を和たる麥粉十分の二をもちひ之をヱホバに献げて火祭となし馨しき香たらしむべしまたその灌祭には酒一ヒンの四分の一をもちふべし一四 汝らはその神ヱホバに禮物をたづさへ來るその日まではパンをも烘麥をも青穂をも食ふべからず是は汝らがその一切の住居において代々永く守るべき例なり一五 汝ら安息日の翌日より即ち汝らが搖祭の束を携へきたりし日より數へて安息日七をもてその數を盈すべし一六 すなはち第七の安息日の翌日までに日數五十を數へをはり新素祭をヱホバに献ぐべし一七 また汝らの居所より十分の二をもてつくりたるパン二箇を携へきたりて搖べし是は麥粉にてつくり酵をいれて燒べし是初穂をヱホバにささぐる者なり一八 汝らまた當歳の全き羔羊七匹と少き牡牛一匹と牡山羊二匹を其パンとともに献ぐべしすなはち是等をその素祭およびその灌祭とともにヱホバにたてまつりて燔祭となすべし是は火祭にしてヱホバに馨しき香となる者なり一九 斯てまた牡山羊一匹を罪祭にささげ當歳の羔羊二匹を酬恩祭の犧牲にささぐべし二〇 而して祭司その初穂のパンとともにこの二匹の羔羊をヱホバの前に搖て搖祭となすべし是等はヱホバにたてまつる聖物にして祭司に歸すべし二一

汝らその日に汝らの中に聖會を宣告いだすべし何の職業をも爲べからず是は汝らがその一切の住所において永く守るべき條例なり二二 汝らの地の穀物を穫ときは汝その穫るにのぞみて汝の田野の隅々までをことごとく穫つくすべからず又汝の穀物の遺穂を拾ふべからずこれを貧き者と客旅とに遺しおくべし我は汝らの神ヱホバなり二三 ヱホバまたモーセに告て言たまはく二四 イスラエルの子孫に告て言へ七月においては汝らその月の一日をもて安息の日となすべし是は喇叭を吹て記念するの日にして即ち聖會たり二五 汝ら何の職業をもなすべからず惟ヱホバに火祭を獻ぐべし二六 ヱホバまたモーセに告て言たまはく二七 殊にまたその七月の十日は贖罪の日にして汝らにおいて聖會たり汝等身をなやましまた火祭をヱホバに獻ぐべし二八 その日には汝ら何の工をもなすべからず其は汝らのために汝らの神ヱホバの前に贖罪をなすべき贖罪の日なればなり二九 凡てその日に身をなやますことをせざる者はその民の中より絶れん三〇 またその日に何の工にても爲ものあれば我その人をその民の中より滅しさらん三一 汝等何の工をもなすべからず是は汝らがその一切の住所において代々永く守るべき條例なり三二 是は汝らの休むべき安息日なり汝らその身をなやますべしまたその月の九日の晩すなはちその晩より翌晩まで汝等その安息をまもるべし三三 ヱホバまたモーセに告て言たまはく三四 イスラエルの子孫に告て言へその七月の十五日は結　茅　節なり七日のあひだヱホバの前にこれを守るべし三五 首の日には聖會を開くべし何の職業をもなすべからず三六 汝等また七日のあひだ火祭をヱホバに獻ぐべし而して第八日に汝等の中に聖會を開きまた火祭をヱホバに獻ぐべし是は會の終結なり汝ら何の職業をもなすべからず三七 偖是等はヱホバの節期にして汝らが宣告て聖會となし火祭をヱホバに獻ぐべき者なり即ち燔祭素祭犧牲および灌祭等をその獻ぐべき日にしたがひて獻ぐべし三八 この外にヱホバの諸安息日ありまた外に汝らの獻物ありまた外に汝らの諸の願還の禮物ありまた外に汝らの自意の禮物あり是みな汝らがヱホバに獻る者なり三九 汝らその地の作物を斂めし時は七月の十五日よりして七日の間ヱホバの節筵をまもるべし即ち初の日にも安息をなし第八日にも安息をなすべし四〇 その首の日には汝等佳樹の枝を取べしすなはち棕櫚の枝と茂れる樹の條と水楊の枝とを取りて七日の間汝らの神ヱホバの前に樂むべし四一 汝ら歳に七日ヱホバに此節筵をまもるべし汝ら代々ながくこの條例を守り七月にこれを祝ふべし四二 汝ら七日のあひだ茅廬に居りイスラエルに生れたる人はみな茅廬に居べし四三 斯するは我がイスラエルの子孫をエジプトの地より導き出せし時にこれを茅廬に住しめし事を汝らの代々の子孫に知しめんためなり我は汝らの神ヱホバなり四四 モーセすなはちヱホバの節期をイスラエルの子孫に告たり

第二四章

一 ヱホバまたモーセに告て言たまはく二 イスラエルの

子孫に命じ橄欖を搗て取たる清き油を燈火のために汝に持きたらしめて絶ず燈火をともすべし三 またアロンは集會の幕屋において律法の前なる幕の外にて絶ずヱホバの前にその燈火を整ふべし是は汝らが代々ながく守るべき定例なり四 彼すなはちヱホバの前にて純精の燈臺の上にその燈火を絶ず整ふべきなり五 汝麥粉を取りとれをもて菓子十二を燒べし菓子一箇には其の十分の二をもちふべし六 而してこれをヱホバの前なる純精の案の上に二累に積み一累に六宛あらしむべし七 汝また淨き乳香をその累の上に置きこれをしてそのパンの上にありて記念とならしめヱホバにたてまつりて火祭となすべし八 安息日ごとに絶ずこれをヱホバの前に供ふべし是はイスラエルの子孫の獻ぐべき者にして永遠の契約たるなり九 これはアロンとその子等に歸す彼等これを聖所に食ふべし是はヱホバの火祭の一にして彼に歸する者にて至聖し是をもて永遠の條例となすべし一〇 茲にその父はエジプト人母はイスラエル人なる者ありてイスラエルの子孫の中にいで來れることありしがそのイスラエルの婦の生たる者イスラエルの人と營の中に爭論をなせり一一 時にそのイスラエルの婦の生たる者ヱホバの名を瀆して詛ふことをなしければ人々これをモーセの許にひき來れり（その母はダンの支派のデブリの女子にして名をシロミテと曰ふ）一二 人々かれを閉こめおきてヱホバの示諭をかうむるを俟り一三 時にヱホバ、モーセにつげて言たまはく一四 かの詛ふことをなせし者を營の外に曳いだし之を聞たる者に皆その手を彼の首に按しめ全會衆をして彼を石にて擊しめよ一五 汝またイスラエルの子孫に告て言べし凡てその神を詛ふ者はその罰を蒙るべし一六 ヱホバの名を瀆す者はかならず誅されん全會衆かならず石をもて之を擊べし外國の人にても自己の國の人にてもヱホバの名を瀆すにおいては誅さるべし一七 人を殺す者はかならず誅さるべし一八 獸畜を殺す者はまた獸畜をもて獸畜を償ふべし一九 人もしその鄰人に傷損をつけなばそのなせし如く自己もせらるべし二〇 即ち挫は挫目は目齒は齒をもて償ふべし人に傷損をつけしごとく自己も然せらるべきなり二一 獸畜を殺す者は是を償ふべく人を殺す者は誅さるべきなり二二 外國の人にも自己の國の人にもこの法は同一なり我は汝らの神ヱホバなり二三 モーセすなはちイスラエルの子孫にむかひかの營の外にて詛ふことをなせし者を曳いだして石にて擊てと言ければイスラエルの子孫ヱホバのモーセに命じたまひしごとく爲ぬ

第二五章一 ヱホバ、シナイ山にてモーセに告て言たまはく二 イスラエルの子孫につげて之に言ふべし我が汝らに與ふる地に汝ら至らん時はその地にもヱホバにむかひて安息を守らしむべし三 六年のあひだ汝その田野に種播きまた六年のあひだ汝その菓園の物を剪伐てその果を斂むべし四 然ど第七年には地に安息をなさしむべし是ヱホバにむかひてする安息なり汝その田野に種播べからずまたその菓園の物を剪伐べからず五 汝の

穀物の自然生たる者は穫べからずまた汝の葡萄樹の修理なしに結べる葡萄は斂むべからず是地の安息の年なればなり六安息の年の產物は汝らの食となるべしすなはち汝と汝の僕と汝の婢と汝の傭人と汝の所に寄寓る他國の人七ならびに汝の家畜と汝の國の中の獸みなその產物をもて食となすべし八汝安息の年を七次かぞふべし是すなはち七年を七回かぞふるなり安息の年七次の間はすなはち四十九年なり九七月の十日になんぢ喇叭の聲を鳴わたらしむべし即ち贖罪の日になんぢら國の中にあまねく喇叭を吹ならさしめ一〇かくしてその第五十年を聖め國中の一切の人民に自由を宣しめすべしこの年はなんぢらにはヨベルの年なりなんぢらおのおのその產業に歸りおのおのその家にかへるべし一一その五十年はなんぢらにはヨベルなりなんぢら種播べからずまた自然生たる物を穫べからず修理なしになりたる葡萄を斂むべからず一二この年はヨベルにしてなんぢらに聖ければなりなんぢらは田野の產物をくらふべし一三このヨベルの年にはなんぢらおのおのその產業にかへるべし一四なんぢの鄰に物を賣りまたは汝の鄰の手より物を買ふ時はなんぢらたがひに相欺むくべからず一五ヨベルの後の年の數にしたがひてなんぢその鄰より買ことをなすべし彼もまたその果を得べき年の數にしたがひてなんぢに賣ことをなすべきなり一六年の數多ときはなんぢその値を增し年の數少なきときはなんぢその値を減すべし即ち彼その果の多少にしたがひてこれを汝に賣るべきなり一七汝らたがひに相欺むくべからず汝の神を畏るべし我は汝らの神ヱホバなり一八汝等わが法度を行ひまたわが律法を守りてこれを行ふべし然せば汝ら安泰にその地に住ことを得ん一九地はその產物を出さん汝等は飽までに食ひて安泰に其處に住ことを得べし二〇汝等は我等もし第七年に種をまかずまたその產物を斂めずば何を食はんやと言か二一我命じて第六年に恩澤を汝等に降し三年だけの果を結ばしむべし二二汝等第八年には種を播ん然ど第九年までその舊き果を食ふことを得んすなはちその果のいできたるまで汝ら舊き者を食ふことを得べし二三地を賣には限りなく賣べからず地は我の有なればなり汝らは客旅また寄寓者にして我とともに在るなり二四汝らの產業の地に於ては凡てその地を贖ふことを許すべし二五汝の兄弟もし零落てその產業を賣しことあらばその贖業人たる親戚きたりてその兄弟の賣たる者を贖ふべし二六若また人の之を贖ふ者あらずして己みづから之を贖ふことを得にいたらば二七その賣てよりの年を數へて之が餘の分をその買主に償ふべし然せばその產業にかへることを得ん二八然ど若これをその人に償ふことを得ずばその賣たる者は買主の手にヨベルの年まで在てヨベルに及びてもどさるべし彼すなはちその產業にかへることを得ん二九人石垣ある城邑の內の住宅を賣ことあらんに賣てより全一年の間はこれを贖ふことを得べし即ち期定の日の內にその贖をなすべきなり三〇もし全一年の內に贖ふことなくばその石垣ある城邑

の内の家は買主の者に確定りて代々ながくこれに屬しヨベルにももどされざるべし**三一** 然ど周圍に石垣あらざる村落の家はその國の田畝の附屬物と見做べし是は贖はるべくまたヨベルにいたりてもどさるべきなり**三二** レビ人の邑々すなはちレビ人の産業の邑々の家はレビ人何時にでも贖ふことを得べし**三三** 人もしレビ人の産業の邑においてレビ人より家を買ことあらば彼の賣たる家はヨベルにおよびて返さるべし其はレビ人の邑々の家はイスラエルの子孫の中に是がもてる産業なればなり**三四** 但しその邑々の郊地の田畝は賣べからず是その永久の産業なればなり**三五** 汝の兄弟零落かつ手慄ひて汝の傍にあらば之を扶助け之をして客旅または寄寓者のごとくに汝とともにありて生命を保たしむべし**三六** 汝の兄弟より利をも息をも取べからず神を畏るべしまた汝の兄弟をして汝とともにありて生命を保たしむべし**三七** 汝かれに利をとりて金を貸べからずまた益を得んとて食物を貸べからず**三八** 我は汝等の神ヱホバにしてカナンの地を汝らに與へ且なんぢらの神とならんとて汝らをエジプトの國より導きいだせし者なり**三九** 汝の兄弟零落て汝に身を賣ことあらば汝これを奴隸のごとくに使役べからず**四〇** 彼をして傭人または寄寓者のごとくにして汝とともに在しめヨベルの年まで汝に仕へしむべし**四一** 其時には彼その子女とともに汝の所より出去りその一族にかへりその父祖等の産業に歸るべし**四二** 彼らはエジプトの國より我が導き出せし我の僕なれば身を賣て奴隸となる可らず**四三** 汝嚴く彼を使ふべからず汝の神を畏るべし**四四** 汝の有つ奴隸は男女ともに汝の四周の異邦人の中より取べし男女の奴隸は是る者の中より買べきなり**四五** また汝らの中に寄寓る異邦人の子女の中よりも汝ら買ことを得また彼等の中汝らの國に生れて汝らと偕に居る人々の家よりも然り彼等は汝らの所有となるべし**四六** 汝ら彼らを獲て汝らの後の子孫の所有に遺し之に彼等を有ちてその所有となさしむることを得べし彼等は永く汝らの奴隸とならん然ど汝らの兄弟なるイスラエルの子孫をば汝等たがひに嚴しく相使ふべからず**四七** 汝の中なる客旅又は寄寓者にして富を致しその傍に住る汝の兄弟零落て汝の中なるその客旅あるひは寄寓者あるひは客旅の家の分支などに身を賣ることあらば**四八** その身を賣たる後に贖はるることを得その兄弟の一人これを贖ふべし**四九** その伯叔または伯叔の子これを贖ふべくその家の骨肉の親たる者これを贖ふべしまた若能せば自ら贖ふべし**五〇** 然る時は彼己が身を賣たる年よりヨベルの年までをその買主とともに數へその年の數にしたがひてその身の代の金を定むべしまたその人に仕へし日は人を傭ひし日のごとくに數ふべきなり**五一** 若なほ遺れる年多からばその數にしたがひまたその買れし金に照して贖の金をその人に償ふべし**五二** 若またヨベルの年までに遺れる年少からばその人とともに計算をなしその年數にてらして贖の金を之に償ふべし**五三** 彼のその人に仕ふる事は歳雇の傭人のごとくなるべし汝の目の

前において彼を嚴く使はしむべからず五四 彼もし斯く贖はれずばヨベルの年にいたりてその子女とともに出べし五五 是イスラエルの子孫は我の僕なるに因る彼等はわが僕にして我がエジプトの地より導き出せし者なり我は汝らの神ヱホバなり

第二六章一 汝ら己のために偶像を作り木像を雕刻べからず柱の像を堅べからずまた汝らの地に石像を立て之を拜むべからず其は我は汝らの神ヱホバなればなり二 汝等わが安息日を守りわが聖所を敬ふべし我はヱホバなり三 汝等もしわが法令にあゆみ吾が誡命を守りてこれを行はば四 我その時候に雨を汝らに與ふべし地はその產物を出し田野の樹木はその實を結ばん五 是をもて汝らの麥打は葡萄を斂る時にまで及び汝らが葡萄を斂る事は種播時にまでおよばん汝等は飽までに食物を食ひ汝らの地に安泰に住ことを得べし六 我平和を國に賜ふべければ汝等は安じて寢ることを得ん汝等を懼れしむる者なかるべし我また猛き獸を國の中より除き去ん劍なんぢらの國を行めぐることも有じ七 汝等はその敵を逐ん彼等は汝等の前に劍に殞るべし八 汝らの五人は百人を逐ひ汝らの百人は萬人を逐あらん汝らの敵は皆汝らの前に劍に殞れん九 我なんぢらを眷み汝らに子を生こと多からしめて汝等を增汝らとむすびしわが契約を堅うせん一〇 汝等は舊き穀物を食ふ間にまた新しき者を穫てその舊き者を出すに至らん一一 我わが幕屋を汝らの中に立ん我心汝らを忌きらはじ一二 我なんぢらの中に歩みまた汝らの神とならん汝らはまたわが民となるべし一三 我は汝らの神ヱホバ汝らをエジプトの國より導き出してその奴隷たることを免れしめし者なり我は汝らの軛の橫木を碎き汝らをして眞直に立て歩く事を得せしめたり

一四 然ど汝等もし我に聽したがふ事をなさずこの諸の誡命を守らず一五 わが法度を蔑如にしまた心にわが律法を忌きらひて吾が諸の誡命をおこなはず却てわが契約を破ることをなさば一六 我もかく汝らになさんすなはち我なんぢらに驚恐を蒙らしむべし癆瘵と熱病ありて目を壞し靈魂を憊果しめん汝らの種播ことは徒然なり汝らの敵これを食はん一七 我わが面をなんぢらに向て攻ん汝らはその敵に殺されんまた汝らの惡む者汝らを治めん汝らはまた追ものなきに逃ん一八 汝ら若かくのごとくなるも猶我に聽したがはずば我汝らの罪を罰する事を七倍重すべし一九 我なんぢらが勢力として誇るところの者をほろぼし汝らの天を鐵のごとくに爲し汝らの地を銅のごとくに爲ん二〇 汝等が力を用ふる事は徒然なるべし即ち地はその產物を出さず國の中の樹はその實を結ばざらん二一 汝らもし我に敵して事をなし我に聽したがふことをせずば我なんぢらの罪にしたがひて七倍の災を汝らに降さん二二 我また野獸を汝らの中に遣るべし是等の者汝らの子女を攫くらひ汝ちの家畜を噬ころしまた汝らの數を寡くせん汝らの大路は通る人なきに至らん二三 我これらの事をもて懲すも汝ら改めずなほ我に敵して事をなさば二四 我も汝らに敵して事をなし汝らの罪を罰することをまた七倍おもく

すべし二五我劍を汝らの上にもちきたりて汝らの背約の怨を報さんまた汝らがその邑々に集る時は汝らの中に我疫病を遣らん汝らはその敵の手に付されん二六我なんぢらが杖とするパンを打くだかん時婦人十人一箇の爐にて汝らのパンを燒き之を稱りて汝らに付さん汝等は食ふも飽ざるべし二七汝らもし是のごとくなるも猶我に聽したがふことをせず我に敵して事をなさば二八我も汝らに敵し怒りて事をなすべし我すなはち汝らの罪をいましむることを七倍おもくせん二九汝らはその男子の肉を食ひまたその女子の肉を食ふにいたらん三〇我なんぢらの崇邱を毀ち汝らの柱の像を斫たふし汝らの偶像の尸の上に汝らの死體を投すて吾心に汝らを忌きらはん三一またなんぢらの邑々を滅し汝らの聖所を荒さんまた汝らの祭物の馨しき香を聞じ三二我その地を荒すべければ汝らの敵の其處に住る者これを奇しまん三三我なんぢらを國々に散し劍をぬきて汝らの後を追ん汝らの地は荒れ汝らの邑々は亡びん三四斯その地荒はてて汝らが敵の國に居んその間地は安息を樂まん即ち斯る時はその地やすみて安息を樂むべし三五是はその荒てをる日の間息まん汝らが其處に住たる間は汝らの安息に此休息を得ざりしなり三六また汝らの中の遺れる者にはその敵の地において我これに恐懼を懷かしめん彼等は木葉の搖く聲にもおどろきて逃げその逃る事は劍をさけて逃るがごとくまた追ものもなきに顚沛ばん三七彼等は追ものも無に劍の前にあるが如くたがひに相つまづきて倒れん汝等はその敵の前に立ことを得じ三八なんぢ等はもろもろの國の中にありて滅うせんなんぢらの敵の地なんぢらを呑つくすべし三九なんぢらの中の遺れる者はなんぢらの敵の地においてその罪の中に痩衰へまた己の身につけるその先祖等の罪の中に痩衰へん四〇かくて後彼らその罪とその先祖等の罪および己が我に悖りし咎と我に敵して事をなせし事を懺悔せん四一我も彼等に敵して事をなし彼らをその敵の地に曳いたりしが彼らの割禮を受ざる心をれて卑くなり甘んじてその罪の罰を受るに至るべければ四二我またヤコブとむすびし吾が契約およびイサクとむすびし吾が契約を追憶しまたアブラハムとむすびしわが契約を追憶し且その地を眷顧ん四三彼等その地を離るべければ地は彼等の之に居る者なくして荒てをる間その安息をたのしまん彼等はまた甘じてその罪の罰を受ん是は彼等わが律法を蔑如にしその心にわが法度を忌きらひたればなり四四かれ等斯のごときに至るもなほ我彼らが敵の國にをる時にこれを棄ずまたこれを忌きらはじ斯我かれらを滅ぼし盡してわがかれらと結びし契約をやぶることを爲ざるべし我は彼らの神ヱホバなり四五我かれらの先祖等とむすびし契約をかれらのために追憶さん彼らは前に我がその神とならんとて國々の人の目の前にてエジプトの地より導き出せし者なり我はヱホバなり四六是等はすなはちヱホバがシナイ山において己とイスラエルの子孫の間にモーセによりて立たまひし法度と條規と律法なり

第二七章一 ヱホバ、モーセに告て言たまはく二 イスラエルの子孫につげてこれに言へ人もし誓願をかけなばなんぢの估價にしたがひてヱホバに獻納物をなすべし三 なんぢの估價はかくすべしすなはち二十歳より六十歳までは男には其價を聖所のシケルに循ひて五十シケルに估り四 女にはその價を三十シケルに估るべし五 また五歳より二十歳までは男にはその價を二十シケルに估り女には十シケルに估るべし六 また一箇月より五歳までは男にはその價を銀五シケルに估り女にはその價を銀三シケルに估るべし七 また六十歳より上は男にはその價を十五シケルに估り女には十シケルに估るべし八 その人もし貧くして汝の估價に勝ざる時は祭司の前にいたり祭司の估價をうくべきなり祭司はその誓願者の力にしたがひて估價をなすべし九 人もしそのヱホバに禮物として獻ることを爲すところの牲畜の中を取り誓願の物となしてヱホバに獻る時は其物は都て聖し一〇 之を更むべからずまた佳を惡に惡を佳に易べからず若し牲畜をもて牲畜に易ることをせば其と其に易たる者ともに聖なるべし一一 もし人のヱホバに禮物として獻ることを爲ざるところの汚たる畜の中ならばその畜を祭司の前に牽いたるべし一二 祭司はまたその佳惡にしたがひてこれが估價をなすべし即ちその價は祭司の估るところによりて定むべきなり一三 その人若これを贖はんとせばその估る價にまた之が五分の一を加ふべし一四 また人もしその家をヱホバに聖別ささげたる時は祭司その佳惡にしたがひて之が估價を爲べし即ちその價は祭司の估るところによりて定むべきなり一五 その人もし家を贖はんとせばその估價の金にまた之が五分の一を加ふべし然せば是は自分の有とならん一六 人もしその遺業の田野の中をヱホバに獻る時は其處に撒る種の多少にしたがひてこれが估價をなすべし即ち大麥の種一ホメルを五十シケルに算べきなり一七 もしその田野をヨベルの年より獻たる時はその價は汝の估れる所によりて定むべし一八 もし又その田野をヨベルの後に獻たる時は祭司そのヨベルの年までに遺れる年の數にしたがひてその金を算へこれに準じてその估價を減すべし一九 その田野を獻たる者若これを贖はんとせばその估價の金の五分の一をこれに加ふべし然せば是はその人に歸せん二〇 然ど若その田野を贖ふことをせず又はこれを他の人に賣ことをなさば再び贖ふことを得じ二一 その田野はヨベルにおよびて出きたる時は永く奉納たる田野のごとくヱホバに歸して聖き者となり祭司の產業とならん二二 若また自己が買たる田野にしてその遺業にあらざる者をヱホバに獻たる時は二三 祭司その人のために估價してヨベルの年までの金を推算べし彼は汝の估れる金高をその日ヱホバにたてまつりて聖物となすべし二四 ヨベルの年にいたればその田野は賣主なるその本來の所有主に歸るべし二五 汝の估價はみな聖所のシケルにしたがひて爲べし二十ゲラを一シケルとなす二六 但し牲畜の初子はヱホバに歸すべき初子なれば何人もこれを獻べからず牛にもあれ

羊にもあれ是はヱホバの所屬なり二七若し汚たる畜ならば汝の估價にしたがひこれにその五分の一を加へてその人これを贖ふべし若これを贖ふことをせずば汝の估價にしたがひて之を賣べし二八但し人がその凡て有る物の中より取て永くヱホバに納めたる奉納物は人にもあれ畜にもあれその遺業の田野にもあれ一切賣べからずまた贖ふべからず奉納物はみなヱホバに至聖物たるなり二九また人の中永く奉納られて奉納物となれる者も贖ふべからず必ず殺すべし三〇地の十分の一は地の産物にもあれ樹の果にもあれ皆ヱホバの所屬にしてヱホバに聖きなり三一人もしその献る十分の一を贖はんとせば之にまたその五分の一を加ふべし三二牛または羊の十分の一については凡て杖の下を通る者の第十番にあたる者はヱホバに聖き者なるべし三三その佳惡をたづぬべからずまた之を易べからず若これを易る時は其とその易たる者ともに聖き者となるべしこれを贖ふことを得ず三四是等はヱホバがシナイ山においてイスラエルの子孫のためにモーセに命じたまひし誡命なり

民數紀略

第一章 一 エジプトの國を出たる次の年の二月の一日にヱホバ、シナイの野に於て集會の幕屋の中にてモーセに告て言たまはく 二 汝等イスラエルの子孫の全會衆の惣數をその宗族に依り其父祖の家に循ひて核べその諸の男丁の名の數と頭數とを得よ 三 すなはちイスラエルの中凡て二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る者を汝とアロンその軍旅にしたがひて數ふべし 四 また諸の支派おのおのその父祖の家の長たる者一人を出して汝等とともならしむべし 五 汝らとともに立べき人々の名は是なり即ちルベンよりはシデウルの子エリヅル 六 シメオンよりはツリシヤダイの子シルミエル 七 ユダよりはアミナダブの子ナシヨン 八 イツサカルよりはツアルの子ネタニエル 九 ゼブルンよりはヘロンの子エリアブ 一〇 ヨセフの子等の中にてはエフライムよりはアミホデの子エリシヤマ、マナセよりはバダヅルの子ガマリエル 一一 ベニヤミンよりはギデオニの子アビダン 一二 ダンよりはアミシヤダイの子アヒエゼル 一三 アセルよりはオクランの子バギエル 一四 ガドよりはデウエルの子エリアサフ 一五 ナフタリよりはエナンの子アヒラ 一六 是等は會衆の中より選み出されし者にてその父祖の支派の牧伯またイスラエルの千人の長なり 一七 かくてモーセとアロンここに名を擧たる人々を率領て 一八 二月の一日に會衆をことごとく集めければ彼等その宗族に循ひその父祖の家にしたがひその名の數にしたがひて自分の出生を述たりかく二十歳以上の者ことごとく核へらる 一九 ヱホバの命じたまひしごとくモーセ、シナイの野にて彼等を核數たり 二〇 すなはちイスラエルの長子ルベンの子等より生れたる者をその宗族によりその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるに其名の數に依りその頭數によれば 二一 ルベンの支派の中にその核數られし者四萬六千五百人ありき 二二 またシメオンの子等より生れたる者等をその宗族によりその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數に依りその頭數に依ば 二三 シメオンの支派の中にその核數られし者五萬九千三百人ありき 二四 またガドの子等より生れたる者をその宗族に依りその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭に出るに勝る男丁を數へたるにその名の數に依れば 二五 ガドの支派の中にその核數られし者四萬五千六百五十人ありき 二六 ユダの子等より生れたる者をその宗族に依りその父祖の家に循ひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數に依れば 二七 ユダの支派の中にその核數られし者七萬四千六百人ありき 二八 イツサカルの子等より生れたる者をその宗族に依りその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭に出るに勝る男丁を數へたるにその名の數に依ば 二九 イツサカルの支派の中にその核數られし者五萬四千四百人ありき 三〇 ゼブルンの子等より生

れたる者をその宗族によりその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數によれば三一ゼブルンの支派の中に其核數られし者五萬七千四百人ありき三二ヨセフの子等の中エフライムの子等より生れたる者をその宗族によりその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數に依ば三三エフライムの支派の中にその核數られし者四萬五百人ありき三四又マナセの子等より生れたる者をその宗族に依りその父祖の家に循ひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數に依ば三五マナセの支派の中にその核數られし者三萬二千二百人ありき三六ベニヤミンの子等より生れたる者をその宗族によりその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數によれば三七ベニヤミンの支派の中にその數へられし者三萬五千四百人ありき三八ダンの子等より生れたる者をその宗族によりその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數によれば三九ダンの支派の中にその核數られし者六萬二千七百人ありき四〇アセルの子等より生れたる者をその宗族によりその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數によれば四一アセルの支派の中にその核數られし者四萬一千五百人ありき四二ナフタリの子等より生れたる者をその宗族によりその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁を數へたるにその名の數によれば四三ナフタリの支派の中にその數へられし者五萬三千四百人ありき四四是すなはちその核數られし者にしてモーセとアロンとイスラエルの牧伯等の數ふる所是のごとしその牧伯等は十二人にして各々その父祖の家のために出たるなり四五斯イスラエルの子孫をその父祖の家にしたがひて核べ二十歳以上にして戰爭にいづるに勝る男丁をイスラルの中に數へたるに四六其核數られし者都合六十萬三千五百五十人ありき四七但しレビの支派の人はその父祖にしたがひて核數らるること無りき四八即ちヱホバ、モーセに告て言たまひけらく四九惟レビの支派のみは汝これを核數べからずまたその總數をイスラエルの子孫とともに計ふべからざるなり五〇なんぢレビ人をして律法の幕屋とその諸の器具と其に屬する諸の物を管理らしむべし彼等はその幕屋とその諸の器具を運搬ぶことを爲しまたこれが役事を爲し幕屋の四圍にその營を張べし五一幕屋を移す時はレビ人これを折卸し幕屋を立る時はレビ人これを組たつべし外人のこれに近く者は殺さるべし五二イスラエルの子孫はその軍旅に循ひて各々自己の營にその天幕を張り各人その隊の纛の下に天幕を張べし五三然どレビ人は律法の幕屋の四圍に營を張べし是イスラエルの子孫の全會衆の上に震怒のおよぶことなからん爲なりレビ人は律法の幕屋をあづかり守るべし五四是においてイスラエル

の子孫ヱホバのモーセに命じたまひしごとくに凡て爲し斯おこなへり

第二章 一 ヱホバ、モーセとアロンに告て言たまはく 二 イスラエルの子孫は各々その隊の纛の下に營を張てその父祖の旗號の下に居るべくまた集會の幕屋の四圍において之にむかひて營を張べし 三 即ち日の出る方東に於てはユダの營の纛の下につく者その軍旅にしたがひて營を張りアミナダブの子ナション、ユダの子孫の牧伯となるべし 四 その軍旅すなはちその核數られし者は七萬四千六百人 五 その傍に營を張る者はイツサカルの支派なるべし而してツアルの子ネタニエル、イツサカルの子孫の牧伯となるべし 六 その軍旅すなはちその核數られし者は五萬四千四百人 七 またゼブルンの支派これと偕にありてヘロンの子エリアブ、ゼブルンの子孫の牧伯となるべし 八 その軍旅すなはちその核數られし者は五萬七千四百人 九 ユダの營の軍旅すなはち核數られし者は都合十八萬六千四百人是等の者首先に進むべし 一〇 また南の方に於てはルベンの營の纛の下につく者その軍旅にしたがひて居りシデウルの子エリヅル、ルベンの子孫の牧伯となるべし 一一 その軍旅すなはちその核數られし者は四萬六千五百人 一二 その傍に營を張る者はシメオンの支派なるべし而してツリシヤダイの子シルミエル、シメオンの子孫の牧伯となるべし 一三 その軍旅すなはちその核數られし者は五萬九千三百人 一四 ガドの支派これに次ぎデウエルの子エリアサフ、ガドの子孫の牧伯となるべし 一五 その軍旅すなはちその核數られし者は四萬五千六百五十人 一六 ルベンの營の軍旅すなはちその核數られし者は都合十五萬一千四百五十人是等の者第二番に進むべし 一七 その次に律法の幕屋レビ人の營とともに諸營の眞中にありて進むべし彼等はその營を張がごとくに各々その隊にしたがひその纛にしたがひて進むべきなり 一八 また西の方においてはエフライムの營の纛の下につく者その軍旅にしたがひて居りアミホデの子エリシヤマ、エフライムの子孫の牧伯となるべし 一九 その軍旅すなはちその核數られし者は四萬五百人 二〇 マナセの支派その傍にありてバダヅルの子ガマリエル、マナセの子孫の牧伯となるべし 二一 その軍旅すなはちその核數られし者は三萬二千二百人 二二 ベニヤミンの支派これに次ぎギデオニの子アビダン、ベニヤミンの子孫の牧伯となるべし 二三 その軍旅すなはちその數へられし者は三萬五千四百人 二四 ヱフライムの營の軍旅すなはちその核數られし者は都合十萬八千一百人是等の者第三番に進むべし 二五 また北の方に於てはダンの營の纛の下につく者その軍旅に循ひて居りアミシヤダイの子アヒエゼル、ダンの子孫の牧伯となるべし 二六 その軍旅すなはちその核數られし者は六萬二千七百人 二七 その傍に營を張る者はアセルの支派なるべし而してオクランの子パギエル、アセルの子孫の牧伯となるべし 二八 その軍旅すなはちその核數られし者は四萬一千五百人 二九 ナフタリの支派これに次ぎエナンの子アヒラ、ナフタリの

子孫の牧伯となるべし三〇その軍旅すなはちその核數られし者は五萬三千四百人三一ダンの營の核數られし者は都合十五萬七千六百人是等の者その旗號にしたがひて最後に進むべし三二イスラエルの子孫のその父祖の家にしたがひて核數られし者は是のごとし諸營の軍旅すなはちその核數られし者は都合六十萬三千五百五十人なりき三三但しレビ人はイスラエルの子孫とともに計へらるること無りきすなはちヱホバのモーセに命じたまへる如し三四是においてイスラエルの子孫ヱホバのモーセに命じたまひしごとくに行ひ各々その宗族に依りその父祖の家に依りその隊の纛にしたがひて營を張りまた進むことを爲せり

第三章一ヱホバ、シナイ山に於てモーセと語ひたまへる日にはアロンとモーセの一族左のごとくにてありき二アロンの子孫は是のごとし長子はナダブ次はアビウ、エレアザル、イタマル三是すなはちアロンの子等の名なり彼等は皆膏そそがれ祭司の職に任ぜられて祭司となれり四ナダブとアビウはシナイの野にて異火をヱホバの前に獻たる時にヱホバの前に死り子なしエレアザルとイタマルはその父アロンの目の前にて祭司の職を爲り五ヱホバまたモーセに告て言たまはく六レビの支派を召よせ祭司アロンの前に侍りてこれに事へしめよ七彼らは集會の幕屋の前にありてアロンの職と全會衆の職に替り幕屋の役事をなすべきなり八すなはち彼等は集會の幕屋の諸の器具を看守イスラエルの子孫の職に替りて幕屋の役事をなすべし九汝レビ人をアロンとその子等に與ふべしイスラエルの子孫の中より彼等は全くアロンに與へられたる者なり一〇汝アロンとその子等を立て祭司の職を行はしむべし外人の近づく者は殺されん一一ヱホバすなはちモーセに告て言たまはく一二視よ我イスラエルの子孫の中なる始に生れたる者すなはち首出の代にレビ人をイスラエルの子孫の中より取り一三首出はすべて吾が有なり我エジプトの國の中の首出をことごとく撃ころせる時イスラエルの首出を人も畜もことごとく聖別て我に歸せしめたり是はわが有となるべし我はヱホバなり一四ヱホバ、シナイの野にてモーセに告ていひたまはく一五汝レビの子孫をその父祖の家に依りその宗族にしたがひて核數よ即ちその一箇月以上の男子を核數べし一六是においてモーセ、ヱホバの言に循ひてその命ぜられしごとくに之を核數たり一七レビの子等の名は左のごとしゲルション、コハテ、メラリ一八ゲルションの子等の名はその宗族によれば左の如しリブニ、シメイ一九コハテの子等の名はその宗族に依ば左のごとしアムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエル二〇メラリの子等の名はその宗族によればマヘリ、ムシなりレビ人の宗族はその父祖の家に依ば是のごとくなり二一ゲルションよりリブニ人の族とシメイ人の族出たり是すなはちゲルション人の族なり二二その核數られし者の數すなはち一箇月以上の男子の數は都合七千五百人二三ゲルション人の族は凡て幕屋の後すなはち西の方に營を張べし二四而してラエルの子エリアサフ、ゲルション人の

牧伯となるべし二五 集會の幕屋におけるゲルションの子孫の職守は幕屋と天幕とその頂蓋および集會の幕屋の入口の幔と二六 庭の幕および幕屋と壇の周圍なる庭の入口の幔ならびにその繩等凡て之に用ふる物を守るべき事なり二七 またコハテよりアムラミ人の族イヅハリ人の族ヘブロン人の族ウジエリ人の族出たり是すなはちコハテ人の族なり二八 一箇月以上の男子の數は都合八千六百人是みな聖所の職守を守るべき者なり二九 コハテの子孫の族は凡て幕屋の南の方に營を張べし三〇 而してウジエルの子エリザパン、コハテ人の族の牧伯となるべし三一 彼等の職守は律法の櫃案燈臺諸壇および聖所の役事に用ふる器具ならびに幔等凡て其處に用ふる物を守るべき事なり三二 祭司アロンの子エレアザル、レビ人の牧伯の長となり且聖所の職を守る者を統轄るべし三三 又メラリよりマヘリ人の族とムシ人の族出たり是すなはちメラリの族なり三四 その核數られし者すなはち一箇月以上の男子の數は六千二百人三五 アビハイルの子ツリエル、メラリの族の牧伯となり此族幕屋の北の方に營を張べし三六 メラリの子孫の管理るべき者職守とすべき者は幕屋の板とその横木その柱その座その諸の器具および其に用ふる一切の物三七 ならびに庭の周圍の柱とその座その釘およびその繩なり三八 また幕屋の前その東の方すなはち集會の幕屋の東の方にはモーセとアロンおよびアロンの子等營を張りイスラエルの子孫の職守に代て聖所の職守を守るべし外人の近づく者は殺されん三九 モーセとアロン、ヱホバの言に依りレビ人を悉く核數たるに一箇月以上の男子の數二萬二千ありき四〇 ヱホバまたモーセに言たまはく汝イスラエルの子孫の中の首出たる男子の一箇月以上なる者を盡く數へてその名の數を計れ四一 我はヱホバなり我ために汝レビ人を取りてイスラエルの子孫の中なる諸の首出子に代へまたレビ人の家畜を取てイスラエルの子孫の家畜の中なる諸の首出に代べし四二 モーセすなはちヱホバの己に命じたまへるごとくにイスラエルの子孫の中なる首出子を盡く數へたり四三 その數へられし首出なる男子の一箇月以上なる者はその名の數に依ば都合二萬二千二百七十三人なりき四四 すなはちヱホバ、モーセに告て言たまはく四五 汝レビ人を取てイスラエルの子孫の中なる諸の首出子に代へまたレビ人の家畜を取て彼等の家畜に代よレビ人はわが所有とならん我はヱホバなり四六 またイスラエルの子孫の首出子はレビ人より多きこと二百七十三人なれば是等をば贖ふべき者となし四七 その頭數に依て一人ごとに五シケルを取べし即ち聖所のシケルに循ひて之を取べきなり一シケルは二十ゲラなり四八 汝その餘れる者の贖の金をアロンとその子等に付すべし四九 是においてモーセ、レビ人をもて贖ひ餘せるところの者の贖の金を取り五〇 即ちモーセ、イスラエルの子孫の首出子の中より聖所のシケルにしたがひて金千三百六十五シケルを取り五一 その贖はるる者の金をヱホバの言にしたがひてアロンとその子等に付せりヱホバのモーセに命

じたまひし如し

第四章一 ヱホバまたモーセとアロンに告て言たまはく二レビの子孫の中よりコハテの子孫の總數をその宗族に依りその父祖の家にしたがひて計べ三三十歳以上五十歳までにして能く軍団に入り集會の幕屋に働作をなすことを得る者をことごとく數へよ四コハテの子孫が集會の幕屋においてなすべき勤務は至聖物に關る者にして是のごとし五 即ち營を進むる時はアロンとその子等まづ往て障蔽の幕を取おろし之をもて律法の櫃を覆ひ六その上に獾の皮の蓋をほどこしまたその上に總青の布を打かけその杠を差いるべし七また供前のパンの案の上には青き布を打かけその上に皿匙杓および酒を灌ぐ斝を置きまた常供のパンをその上にあらしめ八 紅の布をその上に打かけ獾の皮の蓋をもてこれを覆ひ而してその杠を差いるべし九また青き布を取て燈臺とその盞その燈鉗その剪燈盤および其に用ふる諸の油の器を覆ひ一〇 獾の皮の蓋の内に燈臺とその諸の器をいれてこれを棹にかくべし一一また金の壇の上に青き布を打かけ獾の皮の蓋をもて之を蓋ひその杠を差いるべし一二また聖所の役事に用ふる役事の器をことごとく取青き布に裹み獾の皮の蓋をもてこれを蓋ひて棹にかくべし一三また壇の灰を取さりて紫の布をその壇に打かけ一四その上に役事をなすに用ふる諸の器具すなはち火鼎肉叉火鏟鉢および壇の一切の器具をこれに載せ獾の皮の蓋をその上に打かけ而してその杠を差とほすべし一五營を進むるにあたりてアロンとその子等聖所と聖所の一切の器具を蓋ふことを畢りたらば即ちコハテの子孫いり來りてこれを舁べし然ながら彼等は聖物に捫るべからず恐くは死ん集會の幕屋の中なる是等の物はコハテの子孫の擔ふべき者なり一六祭司アロンの子エレアザルは燈火の油馨しき香常供の素祭および灌膏を司どりまた幕屋の全體とその中なる一切の聖物および其處の諸の器具を司どるべし一七ヱホバまたモーセとアロンに告て言たまはく一八汝等コハテ人の宗族の者をしてレビ人の中より絶るるに至らしむる勿れ一九彼等が至聖物に近く時に生命を保ちて死ることなからん爲に汝等かく之に爲べし即ちアロンとその子等まづ入り彼等をして各箇その役事に就しめその擔ふべき物を取しむべし二〇彼等は入て須臾も聖物を觀るべからず恐らくは死ん二一 ヱホバまたモーセに告て言たまはく二二汝ゲルシヨンの子孫の總數をその父祖の家に依りその宗族に循ひてしらべ二三 三十歳以上五十歳までにして能く軍團に入り集會の幕屋に動作をなすことを得る者をことごとく數へよ二四ゲルシヨン人の働く事と擔ふ物は是のごとし二五 即ち彼等は幕屋の幕と集會の天幕およびその頂蓋とその上なる獾の皮の蓋ならびに集會の天幕の入口の幔を擔ひ二六庭の幕および幕屋と壇の周圍なる庭の門の入口の幔とその繩ならびにそれに用ふる諸の器具と其がために造る一切の物を擔ふべし斯動作べきなり二七ゲルシヨンの子孫の一切の役事すなはちその擔ふところ

と働くところはアロンとその子等の命に循ふべきなり汝等は彼等にその擔ふべき物を割交してこれを守らしむべし二八ゲルションの子孫の宗族が集會の幕屋において爲べき動作は是のごとし彼等の守る所は祭司アロンの子イタマルこれを監督るべし二九メラリの子孫もまた汝これをその宗族に依りその父祖の家に循ひて計べ三〇三十歳以上五十歳までにして能く軍團に入り集會の幕屋において勤務をなすことを得る者を盡く數へよ三一彼等が集會の幕屋において爲べき一切の役事すなはちその擔ひ守るべき物は是のごとし幕屋の板その横木その柱その座三二庭の四周の柱その座その釘その繩およびこれがために用ふる一切の器具なり彼等が擔ひ守るべき器具は汝等その名を按べて之を數ふべし三三是すなはちメラリの子孫の族がなすべき役事にして彼等は祭司アロンの子イタマルの監督をうけて集會の幕屋において此すべての役事を爲べきなり三四是においてモーセとアロンおよび會衆の牧伯等コハテの子孫をその宗族に依りその父祖の家にしたがひてしらべ三五三十歳以上五十歳までにして能く軍團に入り集會の幕屋において勤務をなすことを得る者を盡く數へたるに三六その宗族にしたがひて數へられし者二千七百五十人ありき三七是すなはちコハテ人の族の數へられし者にして皆集會の幕屋に於て役事をなすことを得る者なりモーセとアロン、ヱホバがモーセによりて命じたまひし所にしたがひて之を數へたり三八またゲルションの子孫をその宗族に依りその父祖の家に循ひて計べ三九三十歳以上五十歳までにして能く軍團に入り集會の幕屋において勤務をなすことを得る者を數へたるに四〇その宗族に依りその父祖の家に循ひて數へられし者二千六百三十人ありき四一是すなはちゲルションの子孫の族の數へられし者にして皆集會の幕屋において勤務をなすことを得る者なりモーセとアロン、ヱホバの命にしたがひて之を數へたり四二またメラリの子孫の族をその宗族に依りその父祖の家に循ひて計べ四三三十歳以上五十歳までにして能く軍團に入り集會の幕屋において勤務をなすことを得る者を數へたるに四四その宗族にしたがひて數へられし者三千二百人ありき四五是すなはちメラリの子孫の族の數へられし者なりモーセとアロン、ヱホバのモーセによりて命じたまひし所にしたがひて之を數へたり四六モーセとアロンおよびイスラエルの牧伯等レビ人をその宗族に依りその父祖の家にしたがひてしらべ四七三十歳以上五十歳までにして能く來りて集會の幕屋の役事を爲し且これを擔ふ業を爲す者を數へたるに四八その數へられしものの數都合八千五百八十人なりき四九ヱホバの命にしたがひてモーセかれらを數へ彼等をして各人その役事に就しめかつその擔ふ所をうけもたしめたりヱホバの命にしたがひて數へたるところ是のごとし

第五章 一ヱホバ、モーセに告て言たまはく二イスラエルの子孫に命じて癩病人と流出ある者と死骸に汚されたる者とを盡く

營の外に出さしめよ三男女をわかたず汝等これを出して營の外に居しめ彼等をしてその營を汚さしむべからず我その諸營の中に住なり四イスラエルの子孫かく爲して之を營の外に出せりすなはちヱホバのモーセに告たまひし如くにイスラエルの子孫然なしぬ五ヱホバまたモーセに告て言たまはく六イスラエルの子孫に告よ男または女もし人の犯す罪を犯してヱホバに悖りその身罪ある者とならば七その犯せし罪を言あらはしその物の代價にその五分の一を加へてこれを己が罪を犯せる者に付してその償を爲べし八然ど若その罪の償を受べき親戚その人にあらざる時はその罪の償をヱホバになして之を祭司に歸せしむべしまた彼のために用ひて贖をなすところの贖罪の牡羊も祭司に歸す九イスラエルの子孫の擧祭となして祭司に携へ來る所の聖物は皆祭司に歸す一〇諸の人の聖別て獻る物は祭司に歸し凡て人の祭司に付す物は祭司に歸するなり一一ヱホバ、モーセに告て言たまはく一二イスラエルの子孫に告てこれに言へ人の妻道ならぬ事を爲てその夫に罪を犯すあり一三人かれと交合したるにその事夫の目にかくれて露顯ず彼その身を汚したれどこれが證人となる者なく彼またその時に執へられもせざるあり一四すなはち妻その身を汚したる事ありて夫猜疑の心を起してその妻を疑ふことあり又は妻その身を汚したる事なきに夫猜疑の心を起してその妻を疑ふことある時は一五夫その妻を祭司の許に携へきたり大麥の粉一エパの十分の一をこれがために禮物として持きたるべしその上に油を灌べからずまた乳香を加ふべからず是は猜疑の禮物記念の禮物にして罪を誌えしむる者なればなり一六祭司はまたその婦人を近く進ませてヱホバの前に立しめ一七瓦の器に聖水を入れ幕屋の下の地の土を取てその水に放ち一八其婦人をヱホバの前に立せ婦人にその頭を露さしめて記念の禮物すなはち猜疑の禮物をその手に持すべし而して祭司は詛を來らするところの苦き水を手に執り一九婦を誓せてこれに言べし人もし汝と寢たる事あらず汝また汝の夫を措て道ならぬ事を爲て汚穢に染しこと無ば詛を來する此苦水より害を受ること有ざれ二〇然ど汝もし汝の夫を措き道ならぬ事を爲てその身を汚し汝の夫ならざる人と寢たる事あらば二一（祭司その婦人をして詛を來らする誓をなさしめて祭司その婦人に言べし）ヱホバ汝の腿を痩しめ汝の腹を脹れしめ汝をして汝の民の指て詛ふ者指て誓ふ者とならしめたまへ二二また詛を來らするこの水汝の腸にいりて汝の腹を脹れさせ汝の腿を痩させんとその時婦人はアーメン、アーメンと言べし二三而して祭司この詛を書に筆記しその苦水にて之を洗おとし二四婦人をしてその詛を來らする水を飲しむべしその詛を來らする水かれの中にいりて苦ならん二五祭司まづその婦人の手より猜疑の禮物を取りその禮物をヱホバの前に搖てこれを壇に持來り二六而して祭司其禮物の中より記念の分一握をとりて之を壇の上に焚き然る後婦人にその水を飲しむべし二七その水を之に飲しめたる時は

もしかれその身を汚し夫に罪を犯したる事あるに於てはその詛を來らする水かれの中に入て苦くなりその腹脹れその腿痩て自己はその民の指て詛ふ者とならん二八然ど彼もしその身を汚しし事あらずして潔からば害を受ずして能く子を生ん二九是すなはち猜疑の律法なり妻たる者その夫を措き道ならぬ事を爲て身を汚しし時三〇また夫たる者猜疑の心を起してその妻を疑ふ時はその婦人をヱホバの前におきて祭司その律法のごとく之に行ふべきなり三一斯せば夫は罪なく妻はその罪を任ん

第六章一ヱホバ、モーセに告て言たまはく二イスラエルの子孫に告て之に言へ男または女俗を離れてナザレ人の誓願を立て俗を離れてその身をヱホバに歸せしむる時は三葡萄酒と濃酒を斷ち葡萄酒の醋となれる者と濃酒の醋となれる者を飲ずまた葡萄の汁を飲ず葡萄の鮮なる者をも乾たる者をも食はざるべし四その俗を離れをる日の間は都て葡萄の樹より取たる者はその核より皮まで一切食ふべからざるなり五その誓願を立て俗を離れをる日の間は都て薙刀をその頭にあつべからずその俗を離れて身をヱホバに歸せしめたる日の滿るまで彼は聖ければその頭髪を長しおくべし六その俗を離れて身をヱホバに歸せしむる日の間は凡て死骸に近づくべからず七其父母兄弟姉妹の死たる時にもこれがために身を汚すべからず其はその俗を離れて神に歸したる記號その首にあればなり八彼はその俗を離れをる日の間は凡てヱホバの聖者なり九もし人計ずも彼の傍に死てそのナザレの頭を汚すことあらばその身を潔る日に頭を剃べしすなはち第七日にこれを剃べきなり一〇而して第八日に鳲鳩二羽かまたは雛き鴿二羽を祭司に携へきたり集會の幕屋の門にいたるべし一一斯て祭司はその一を罪祭に一を燔祭に献げ彼が屍に由て獲たる罪を贖ひまたその日にかれの首を聖潔すべし一二彼またその俗を離れてヱホバに歸するの日を新にし當歳の羔羊を携へきたりて愆祭となすべし彼その俗を離れをる時に身を汚したれば是より前の日はその中に算ふべからざるなり一三ナザレ人の律法は是のごとしその俗を離るるの日滿たる時はその人を集會の幕屋の門に携へいたるべし一四斯てその人は禮物をヱホバにささぐべし即ち當歳の羔羊の牡の全き者一匹を燔祭となし當歳の羔羊の牝の全き者一匹を罪祭となし牡羊の全き者一匹を酬恩祭となし一五また無酵パン一筐麥粉に油を和て作れる菓子油を塗たる酵いれぬ煎餅およびその素祭と灌祭の物を持きたるべし一六斯て祭司これをヱホバの前に携へきたりその罪祭と酬恩祭を献げ一七またその牡羊を筐の中なる酵いれぬパンとあはせこれを酬恩祭の犠牲としヱホバに献ぐべし祭司またその素祭と灌祭をも献ぐべきなり一八ナザレ人は集會の幕屋の門に於てそのナザレの頭を剃りそのナザレの頭の髮を取てこれを酬恩祭の犠牲の下の火に放つべし一九祭司その牡羊の煮たる肩と筐の中の酵いれぬ菓子一箇と酵いれぬ煎餅一箇をとりてこれをナザレ人がそのナザレの頭を剃におよびてこれをその手に授

け二〇而して祭司ヱホバの前にて之を搖て搖祭となすべし是は聖物にしてその搖る胸と擧たる腿とともに祭司に歸すべし斯て後ナザレ人は酒を飮ことを得二一是すなはち誓願を立たるナザレ人がその俗を離れ居し事によりてヱホバに禮物を獻ぐるの律法なり此外にまたその能力の及ぶところの物を獻ぐることを得べし即ちその立たる誓願のごとくその俗を離るるの律法にしたがひて爲べきなり二二ヱホバまたモーセに告て言たまはく二三アロンとその子等に告て言へ汝等斯のごとくイスラエルの子孫を祝して言べし二四願くはヱホバ汝を惠み汝を守りたまへ二五願くはヱホバその面をもて汝を照し汝を憐みたまへ二六願くはヱホバその面を擧て汝を眷み汝に平安を賜へと二七かくして彼等吾名をイスラエルの子孫に蒙らすべし然ば我かれらを惠まん

第七章一モーセ幕屋を建をはり之に膏を灌ぎてこれを聖別めまたその一切の器具およびその壇とその一切の器具に膏を灌ぎて之を聖別たる日に二イスラエルの牧伯等すなはちその諸宗族の長諸支派の牧伯にしてその核數られし者を監督る者等獻物を爲り三彼等その禮物をヱホバに持きたるに蓋ある車六輛と牛十二匹あり牧伯二人に車一輛一人に牛一匹なり即ちこれか幕屋の前にひき至れり四時にヱホバ、モーセに告て言たまはく五汝これを彼等より取て集會の幕屋の用に供へレビ人にその職分職分にしたがひて之を授すべし六是においてモーセその車と牛を取て之をレビ人に授せり七即ちゲルションの子孫にはその職分を按へて車二輛と牛四匹を授し八メラリの子孫にはその職分を按へて車四輛と牛八匹を授し祭司アロンの子イタマルをしてこれを監督らしめたり九然どコハテの子孫には何をも授さざりき是は彼等が聖所になすべき職分はその肩をもて擔ふの事なるが故なり一〇壇に膏を灌ぐ日に牧伯等壇奉納の禮物を携へ來り牧伯等その禮物を壇の上に獻げたり一一ヱホバ先にモーセに言たまひけるは牧伯等は一日に一人宛その壇奉納の禮物を獻ぐべし一二第一日に禮物を獻げし者はユダの支派のアミナダブの子ナシヨンなり一三その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふ此二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す一四また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す一五また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹一六罪祭に用ふる牡山羊一匹一七酬恩祭の犠牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹アミナダブの子ナシヨンの禮物は是の如し一八第二日にはイッサカルの牧伯ツアルの子ネタニエル獻納を爲り一九その獻げし禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふ此二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す二〇また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す二一また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹二二罪祭に用ふる牡山羊一匹二三酬恩祭の

犧牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹ツアルの子ネタニエルの禮物は是のごとし二四 第三日にはゼブルンの子孫の牧伯へロンの子エリアブ献納を爲り二五 その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふ此二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す二六 また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す二七 また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹二八 罪祭に用ふる牡山羊一匹二九 酬恩祭の犧牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹へロンの子エリアブの禮物は是のごとし三〇 第四日にはルベンの子孫の牧伯シデウルの子エリヅル献納を爲り三一 その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふ此二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す三二 また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す三三 また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹三四 罪祭に用ふる牡山羊一匹三五 酬恩祭の犧牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹シデウルの子エリヅルの禮物は是のごとし三六 第五日にはシメオンの子孫の牧伯ツリシヤダイの子シルミエル献物を爲り三七 その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふ此二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す三八 また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す三九 また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹四〇 罪祭に用ふる牡山羊一匹四一 酬恩祭の犧牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹ツリシヤダイの子シルミエルの禮物は是のごとし四二 第六日にはガドの子孫の牧伯デウエルの子エリアサフ献納をなせり四三 その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふこの二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す四四 また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す四五 また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹四六 罪祭に用ふる牡山羊一匹四七 酬恩祭の犧牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹デウエルの子エリアサフの禮物はかくのごとし四八 第七日にはエフライムの子孫の牧伯アミホデの子エリシヤマ献納をなせり四九 その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふ此二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す五〇 また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す五一 また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹五二 罪祭に用ふる牡山羊一匹五三 酬恩祭の犧牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹アミホデの子エリシヤマの禮物は是のごとし五四 第八日にはマナセの子孫の牧伯パダヅルの子ガマリエル献納をなせり五五 その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケルみな聖所のシケルに循ふこの二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す五六 また金の匙の十

シケルなる者一箇是には香を充す五七また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹五八罪祭に用ふる牡山羊一匹五九酬恩祭の犠牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹パダヅルの子ガマリエルの禮物は是のごとし六〇第九日にはベニヤミンの子孫の牧伯ギデオニの子アビダン獻納をなせり六一その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケルみな聖所のシケルに循ふこの二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す六二また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す六三また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹六四罪祭に用ふる牡山羊一匹六五酬恩祭の犠牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹ギデオニの子アビダンの禮物は是のごとし六六第十日にはダンの子孫の牧伯アミシヤダイの子アヒエゼル獻納をなせり六七その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケル皆聖所のシケルに循ふこの二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す六八また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す六九また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹七〇罪祭に用ふる牡山羊一匹七一酬恩祭の犠牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹アミシヤダイの子アヒエゼルの禮物は是のごとし七二第十一日にはアセルの子孫の牧伯オクランの子パギエル獻納を爲せり七三その禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケルみな聖所のシケルに循ふこの二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す七四亦金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す七五亦燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹七六罪祭に用ふる牡山羊一匹七七酬恩祭の犠牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹オクランの子パギエルの禮物は是のごとし七八第十二日にはナフタリの子孫の牧伯エナンの子アヒラ獻物をなせり七九其禮物は銀の皿一箇その重は百三十シケル銀の鉢一箇是は七十シケルみな聖所のシケルに循ふこの二者には麥粉に油を和たる素祭の品を充す八〇また金の匙の十シケルなる者一箇是には香を充す八一また燔祭に用ふる若き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊一匹八二罪祭に用ふる牡山羊一匹八三酬恩祭の犠牲に用ふる牛二匹牡羊五匹牡山羊五匹當歳の羔羊五匹エナンの子アヒラの禮物は是のごとし八四是すなはち壇に油を灌げる日にイスラエルの牧伯等が献げたる壇奉納の禮物なり即ち銀の皿十二銀の鉢十二金の匙十二八五銀の皿は各々百三十シケル鉢は各々七十シケル聖所のシケルに依ばこの諸の銀の器はその重都合二千四百シケルなりき八六また香を充せる金の匙十二ありその重は聖所のシケルに依ば各々十シケルその匙の金は都合百二十シケルなりき八七また燔祭に用ふる者は牡牛十二牡羊十二當歳の羔羊十二ありき之にその素祭の物を加ふまた罪祭の牡山羊十二あり八八また酬恩祭の犠牲に用ふる者は牡牛二十四牡羊六十牡山羊六十當歳の羔羊六十あり壇に膏を

灌ぎて後に献たる壇奉納の禮物は是のごとし八九 斯てモーセはヱホバと語はんとて集會の幕屋に入けるに律法の櫃の上なる贖罪所の上兩箇のケルビムの間より聲いでて己に語ふを聽り即ち彼と語へり

第八章一 ヱホバまたモーセに告て言たまはく二 アロンに告て之に言へ汝燈火を燃す時は七の燈盞をして均く燈臺の前を照さしむべし三 アロンすなはち然なし燈火を燈臺の前の方にむけて燃せりヱホバのモーセに命じたまへる如し四 燈臺の作法は是のごとし是は槌にて椎て作れる者即ちその臺座よりその花まで槌にて椎て作れる者なりモーセ、ヱホバの己に示したまへる式樣にてらしてこの燈臺を作れり五 ヱホバ、モーセに告て言たまはく六 レビ人をイスラエルの子孫の中より取てこれを潔めよ七 汝かく彼らに爲て之を潔むべし即ち罪を潔むる水を彼等に灑ぎかけ彼等にその身をことごとく剃しめその衣服を洗はしめて之を潔め八 而して彼等に若き牡牛一匹と麥粉に油を和たる者を取しめよ汝また別に若き牡牛を罪祭のために取べし九 斯て汝レビ人を集會の幕屋の前に携きたりてイスラエルの子孫の全會を集め一〇 而してレビ人をヱホバの前に進ましめてイスラエルの子孫に其手をレビ人の上に按しむべし一一 而してイスラエルの子孫の爲にレビ人を搖祭となしてヱホバの前に献ぐべし是彼らをしてヱホバの勤務を爲しめんためなり一二 斯て汝レビ人にその手をかの牛の頭に按しめその一を燔祭となしてヱホバに献げ之をもてレビ人のために贖罪をなすべし一三 即ちレビ人をアロンとその子等の前に立しめ之を搖祭となしてヱホバに献ぐべし一四 汝レビ人をイスラエルの子孫の中より區分ちレビ人をしてわが所屬とならしむべし一五 斯て後レビ人は入て集會の幕屋の役事をなすべし汝かれらを潔め之を献げて搖祭となすべし一六 彼らはイスラエルの子孫の中よりして我に献げらるる者なりイスラエルの子孫の中なる始に生れたる者すなはちその首出子の代に我かれらを取なり一七 イスラエルの子孫の中の首出子は人たるも獸たるも凡てわが所屬となるべし其は我エジプトの地において首出子を盡く撃ころしたる時に彼等を聖者となして我に屬せしめたればなり一八 是をもて我イスラエルの子孫の中の一切の首出子の代にレビ人を取なり一九 我イスラエルの子孫の中よりレビ人を取て之をアロンとその子等に與へ之をして集合の幕屋においてイスラエルの子孫に代てその役事を爲しめまたイスラエルの子孫のために贖罪をなさしめん是イスラエルの子孫が聖所に近く時にイスラエルの子孫の中に災害の起ざらんためなり二〇 モーセとアロンおよびイスラエルの子孫の全會衆ヱホバがレビ人の事につきてモーセに命じたまへる所に悉くしたがひてレビ人におこなへり即ちイスラエルの子孫かくの如く彼等に行ひたり二一 レビ人是に於てその身を潔め衣服を洗ひたればアロンかれらをヱホバの前に献て搖祭となしアロンまた彼らのために贖罪をなして之を潔めたり二二 斯て後レビ

人は集會の幕屋に入てアロンとその子等の前にてその役事を爲り彼等はレビ人の事につきてヱホバのモーセに命じたまへる所に循ひて斯のごとく之を行ひたり二三ヱホバまたモーセに告て言たまはく二四レビ人は斯なすべし即ち二十五歳以上の者は軍団に入て集會の幕屋の役事をなすべし二五然ど五十歳よりは軍団を退きて休み重て役事をなすべからず二六唯集會の幕屋においてその兄弟等をつかさどり且伺ひ守ることを勤むべし役事を爲すべからず汝レビ人をしてその職務をなさしむるには斯のごとくなすべし

第九章一エジプトの國を出たる次の年の正月ヱホバ、シナイの野にてモーセに告ていひたまはく二イスラエルの子孫をして逾越節をその期におよびて行はしめよ三其期即ち此月の十四日の晩にいたりて汝等これを行ふべし汝等これをおこなふにはその諸の條例とその諸の式法に循ふべきなり四是においてモーセ、イスラエルの子孫に逾越節を行ふべき事を告たれば五彼等正月の十四日の晩にシナイの野にて逾越節を行へり即ちイスラエルの子孫はヱホバのモーセに命じたまへる所に盡く循ひてこれを爲ぬ六時に人の死骸に身を汚して逾越節を行ふこと能ざる人々ありてその日にモーセとアロンの前にいたれり七その人々すなはち彼に言ふ我等は人の死骸に身を汚したり然ば我らはその期におよびてイスラエルの子孫と偕にヱホバに禮物を献ることを得ざるべき乎八モーセかれらに言けるは姑く待てヱホバ汝らの事を如何に宣ふかを聽ん九ヱホバ、モーセに告て言たまはく一〇イスラエルの子孫に告て言へ汝等または汝等の子孫の中死屍に身を汚したる人も遠き途にある人も皆逾越節をヱホバにむかひて行ふべきなり一一即ち二月の十四日の晩に之をおこなひ酵いれぬパンと苦菜をそへて之を食ふべし一二朝までこれを少許も遺しおくべからず又その骨を一本も折べからず逾越節の諸の條例にしたがひて之を行ふべし一三然ど人その身潔くありまた征途にもあらずして逾越節を行ふことをせざる時はその人民の中より斷れん斯る人はその期におよびてヱホバの禮物を持きたらざるが故にその罪を任べきなり一四他國の人もし汝らの中に寄寓をりて逾越節をヱホバにおこなはんとせば逾越節の條例に依りその法式にしたがひて之をおこなふべし他國の人にも自國の人にもその條例は同一なるべし一五幕屋を建たる日に雲幕屋を蔽へり是すなはち律法の幕屋なり而して夕にいたれば幕屋の上に火のごとき者あらはれて朝におよべり一六即ち常に是のごとくにして晝は雲これを蔽ひ夜は火のごとき者ありき一七雲幕屋を離れて上る時はイスラエルの子孫直に途に進みまた雲の止まる所にイスラエルの子孫營を張り一八即ちイスラエルの子孫はヱホバの命によりて途に進みまたヱホバの命によりて營を張り幕屋の上に雲の止まれる間は營を張をれり一九幕屋の上に雲の止ること日久しき時はイスラエルの子孫ヱホバの職守をまもりて途に進まざりき二〇

また幕屋の上に雲の止まる事日少き時も然り彼等は只ヱホバの命にしたがひて營を張りヱホバの命にしたがひて途に進めり二一また雲夕より朝まで止り朝におよびてその雲昇る時は彼等途に進め夜にもあれ晝にもあれ雲の昇る時は即ち途に進めり二二二日にもあれ一月にもあれまたは其よりも多くの日にもあれ幕屋の上に雲の止り居る間はイスラエルの子孫營を張居て途に進まずその昇るにおよびて途に進めり二三即ち彼等はヱホバの命にしたがひて營を張りヱホバの命にしたがひて途に進み且モーセによりて傳はりしヱホバの命にしたがひてヱホバの職守を守れり

第一〇章一ヱホバ、モーセに告て言たまはく二汝銀の喇叭二本を製れ即ち槌にて椎て之を製り之を用ひて人を呼集めまた營を進ますべし三この二者を吹ときは全會衆集會の幕屋の門に集りて汝に就べし四もし只その一を吹く時はイスラエルの千人の長たるその牧伯等集りて汝に就べし五汝等これを吹鳴す時は東の方に營を張る者途に進むべし六また二次これを吹ならす時は南の方に營を張る者途に進むべし凡て途に進まんとする時は音長く喇叭を吹ならすべし七また會衆を集むる時にも喇叭をふくべし但し音長くこれを吹ならすべからず八アロンの子等の祭司たる者どもその喇叭を吹べし是すなはち汝らが代々ながく守るべき例たるなり九また汝らの國において汝等その己を攻るところの敵と戰はんとて出る時は喇叭を吹ならすべし然せば汝等の神ヱホバ汝らを記憶て汝らをその敵の手より救ひたまはん一〇また汝らの喜樂の日汝らの節期および月々の朔日には燔祭の上と酬恩祭の犠牲の上に喇叭を吹ならすべし然せば汝らの神これに由て汝らを記憶たまはん我は汝らの神ヱホバ也一一斯て第二年の二月の二十日に雲律法の幕屋を離れて昇りければ一二イスラエルの子孫シナイの野より出で途に進みたりしがパランの野にいたりて雲止れり一三斯かれらはヱホバのモーセによりて命じたまへるところに遵ひて途に進むことを始めたり一四首先にはユダの子孫の營の纛の下につく者その軍旅にしたがひて進めりユダの軍旅の長はアミナダブの子ナシヨン一五イッサカルの子孫の支派の軍旅の長はツアルの子ネタニエル一六ゼブルンの子孫の支派の軍旅の長はヘロンの子エリアブなりき一七乃ち幕屋を取くづしゲルシヨンの子孫およびメラリの子孫幕屋を擔ひて進めり一八次にルベンの營の纛の下につく者その軍旅にしたがひて進めりルベンの軍旅の長はシデウルの子エリヅル一九シメオンの子孫の支派の軍旅の長はツリシヤダイの子シルミエル二〇ガドの子孫の支派の軍旅の長はデウエルの子エリアサフなりき二一コハテ人聖所を擔ひて進めり是が至るまでに彼その幕屋を建をはる二二次にエフライムの子孫の營の纛の下につく者その軍旅にしたがひて進めりヱフライムの軍旅の長はアミホデの子エリシヤマ二三マナセの子孫の支派の軍旅の長はパダヅルの子ガマリエル二四ベニヤミンの子孫の支派の

軍旅の長はギデオニの子アビダンなりき二五 次にダンの子孫の營の纛の下につく者その軍旅にしたがひて進めりこの軍旅は諸營の後驅なりきダンの軍旅の長はアミシヤダイの子アヒエゼル二六 アセルの子孫の支派の軍旅の長はオクランの子バギエル二七 ナフタリの子孫の支派の軍旅の長はエナンの子アヒラなりき二八 イスラエルの子孫はその途に進む時は是のごとくその軍旅にしたがひて進みたり二九 茲にモーセその外舅なるミデアン人リウエルの子ホバブに言けるは我等はヱホバが嘗て我これを汝等に與へんと言たまひし處に進み行なり汝も我等とともに來れ我等汝をして幸福ならしめん其はヱホバ、イスラエルに福祉を降さんと言たまひたればなり三〇 彼モーセに言ふ我は往じ我はわが國に還りわが親族に至らん三一 モーセまた言けるは請ふ我等を棄去なかれ汝は我儕が曠野に營を張るを知ば願くは我儕の目となれ三二 汝もし我儕とともに往ばヱホバの我儕に降したまふところの福祉を我儕また汝にもおよぼさん三三 斯て彼等ヱホバの山をたち出て三日路ほど進み行りヱホバの契約の櫃その三日路の間かれらに先だち行て彼等の休息所を尋ね覓めたり三四 彼等營を出て途に進むに當りて晝はヱホバの雲かれらの上にありき三五 契約の櫃の進まんとする時にはモーセ言りヱホバよ起あがりたまへ然ば汝の敵は打散され汝を惡む者等は汝の前より逃さらんと三六 またその止まる時は言りヱホバよ千萬のイスラエル人に歸りたまへ

第一一章

一 茲に民災難に罹れる者のごとくにヱホバの耳に呟きぬヱホバその怨言を聞て震怒を發したまひければヱホバの火かれらに向ひて燃いでその營の極端を燒り二 是に於て民モーセに呼はりしがモーセ、ヱホバに祈ければその火鎮りぬ三 ヱホバの火かれらに向ひて燃出たるに因てその處の名をタベラ(燃)と稱ぶ四 茲に彼等の中なる衆多の寄集人等慾心を起すイスラエルの子孫もまた再び哭て言ふ誰か我らに肉を與へて食しめんか五 憶ひ出るに我等エジプトにありし時は魚黃瓜水瓜韮葱青蒜等を心のままに食へり六 然るに今は我儕の精神枯衰ふ我らの目の前にはこのマナの外何も有ざるなりと七 マナは莞荽の實のごとくにしてその色はブドラクの色のごとし八 民行巡りてこれを斂め石磨にひき或は臼に搗てこれを釜の中に煮て餅となせりその味は油菓子の味のごとし九 夜にいりて露營に降る時にマナその上に降れり一〇 モーセ聞に民の家々の者おのおのその天幕の門口に哭く是においてヱホバ烈しく怒を發したまふこの事またモーセの目にも惡く見ゆ一一 モーセすなはちヱホバに言けるは汝なんぞ僕を惡くしたまふ乎いかなれば我汝の前に恩を獲ずして汝かく此すべての民をわが任となして我に負せたまふや一二 この總體の民は我が姙みし者ならんや我が生し者ならんや然るに汝なんぞ我に慈父が乳哺子を抱くがごとくに彼らを懷に抱きて汝が昔日かれらの先祖等に誓ひたまひし地に至れと言たまふや一三 我何處より肉を得てこの總體の民に與へんや彼等は我に

むかひて哭き我等に肉を與へて食しめよと言なり一四我は一人にてはこの總體の民をわが任として負ことあたはず是は我には重きに過ればなり一五我もし汝の前に恩を獲ば請ふ斯我を爲んよりは寧ろ直に我を殺したまへ我をしてわが困苦を見せしめたまふ勿れ一六是においてヱホバ、モーセに言たまはくイスラエルの老人の中民の長老たり有司たるを汝が知るところの者七十人を我前に集め集會の幕屋に携きたりて其處に汝とともに立しめよ一七我降りて其處にて汝と言はん又われ汝の上にあるところの靈を彼等にも分ち與へん彼等汝とともに民の任を負ひ汝をして只一人にて之を負ふこと無らしむべし一八汝また民に告て言へ汝等身を潔めて明日を待て必ず肉を食ふことを得ん汝等ヱホバの耳に哭て誰か我等に肉を與へて食しめん我らエジプトにありし時は却て善りしと言たればヱホバなんぢらに肉を與へて食しめたまふべし一九汝等がこれを食ふは一日や二日や五日や十日や二十日にはあらずして二〇一月におよび遂に汝らの鼻より出るにいたらん汝等これに饜はつべし是なんぢら己等の中にいますヱホバを軽んじてその前に哭き我等何とてエジプトより出しやと言たればなり二一モーセ言けるは我が偕にをる民は歩卒のみにても六十萬あり然るに汝は我かれらに肉を與へて一月の間食しめんと言たまふ二二羊と牛の群を宰るとも彼等を飽しむることを得んや海の魚をことごとく集むるとも彼等を飽しむることを得んや二三ヱホバ、モーセに言たまはくヱホバの手短からんや吾言の成と然らざるとは汝今これを見るあらん二四是に於てモーセ出きたりてヱホバの言を民に告げ民の長老七十人を集めて幕屋の四圍に立しめけるに二五ヱホバ雲の中にありて降りモーセと言ひモーセのうへにある靈をもてその長老七十人にも分ち與へたまひしがその靈かれらの上にやどりしかば彼等預言せり但し此後はかさねて爲ざりき二六時に彼等の中なる二人の者營に止まり居るその一人の名はエルダデといひ一人の名はメダデと曰ふ靈またかれらの上にもやどれり彼らは其名を録されたる者なりしが幕屋に往ざりければ營の中にて預言をなせり二七時に一人の少者奔りきたりモーセに告てエルダデとメダデ營の中にて預言すと言ければ二八その少時よりしてモーセの從者たりしヌンの子ヨシュアこたへて曰けるは吾主モーセこれを禁めたまへ二九モーセこれに言けるは汝わがために媢嫉を起すやヱホバの民の皆預言者とならんことまたヱホバのその靈を之に降したまはんことこそ願しけれ三〇斯てモーセ、イスラエルの長老等とともに營に返れり三一茲にヱホバの許より風おこり出て海の方より鶉を吹きたりこれをして營の周圍に堕しめたりその堕ひろがれること營の四周此旁も大約一日路彼旁も大約一日路地の表より高きこと大約二キユビトなりき三二民すなはち起あがりてその日終日その夜終夜またその次の日終日鶉を拾ひ斂めけるが拾ひ斂むることの至て寡き者も十ホメルほど拾ひ斂めたり皆これを營の周圍に陳べおけり三三

肉なほ歯のあひだにありていまだ食つくさざるにヱホバ民にむかひて怒を發しこれを撃ておほいに滅ぼしたまへり三四是をもてその處の名をキブロテハッタワ(慾心の墓)とよべり其は慾心をおこせる人々を其處に埋たればなり三五斯て民キブロテハッタワよりハゼロテに進みゆきてハゼロテに居ぬ

第一二章一モーセはエテオピアの女を娶りたりしがそのエテオピアの女を娶りしをもてミリアムとアロン、モーセを誹れり二彼等すなはち言けるはヱホバただモーセによりてのみ語りたまはんやまた我等によりても語り給ふにあらずやとヱホバこれを聞たまへり三(モーセはその人と爲温柔なること世の中の諸の人に勝れり)四是に於てヱホバ遽にモーセ、アロン及びミリアムに言たまはく汝等三人集會の幕屋に出きたれと三人すなはち出きたりければ五ヱホバ雲の柱の中にありて降り幕屋の門に立てアロンとミリアムを呼たまひしがかれら二人進みたれば六之に言たまはく汝等わが言を聽け汝らの中にもし預言者あらば我ヱホバ異象において我をこれに知しめまた夢において之と語らん七わが僕モーセに於ては然らず彼はわが家に忠義なる者なり八彼とは我口をもて相語り明かに言ひて隱語を用ひず彼はまたヱホバの形を見るなり然るを汝等なんぞわが僕モーセを誹ることを畏れざるやと九ヱホバかれらに向ひ忿怒を發して去たまへり一〇雲すなはち幕屋をはなれて去ぬその時ミリアムに癩病生じてその身雪のごとく爲りアロン、ミリアムを見かへるに既に癩病生じをる一一アロン是においてモーセに言けるは嗟わが主よ我等愚なる事をなして罪を犯したれど願くは其罪を我等に蒙らしむる勿れ一二彼をして母の胎より肉半分腐れて死て生れいづる者のごとくならしむる勿れ一三モーセすなはちヱホバに呼はりて言ふ嗚呼神よ願くは彼を醫したまへ一四ヱホバ、モーセに言たまひけるは彼の父その面に唾する事ありてすら彼は七日の間羞をるべきに非ずや然ば七日の間かれを營の外に禁鎖おきて然る後に歸り入しむべしと一五ミリアムはすなはち七日の間營の外に禁鎖られぬ民はミリアムの歸り入るまで途に進まざりき一六その後民ハゼロテより進みてバランの曠野に營を張り

第一三章一茲にヱホバ、モーセに告て言たまはく二汝人を遣して我がイスラエルの子孫に與ふるカナンの地を窺はしめよ即ち支派ごとに一人を取て之を遣すべし其人々は皆かれらの中の牧伯たる者なるべし三モーセすなはちヱホバの命にしたがひてバランの曠野よりこれを遣せりその人等は皆イスラエルの子孫の領袖たる者なり四その名は是のごとしルベンの支派にてはザックルの子シヤンマ五シメオンの支派にてはホリの子シヤパテ六ユダの支派にてはエフンネの子カルブ七イッサカルの支派にてはヨセフの子イガル八エフライムの支派にてはヌンの子ホセア九ベニヤミンの支派にてはラフの子パルテ一〇ゼブルンの支派にてはソデの子ガデエル一一ヨセフの支派すなはちマナセ

の支派にてはスシの子ガデ一二ダンの支派にではゲマリの子アンミエル一三アセルの支派にてはミカエルの子セトル一四ナフタリの支派にてはワフシの子ナヘビ一五ガドの支派にてはマキの子ギウエル一六是すなはちモーセがその地を窺はしめんとて遣したる人々の名なり時にモーセ、ヌンの子ホセアをヨシュアと名けたり一七モーセかれらを遣はしてカナンの地を窺はしめんとして之に言けるは汝等その南の方に赴きて山に登り一八その地の如何と其處に住む民の強か弱か多か寡かを觀一九またその住ところの地は善か惡か其住ところの邑々は如何なるものなるか彼等は天幕に住をるか城の邑に住をるかを觀二〇またその地は腴なるか瘠たるか其中に樹あるや否を觀よ汝等勇しかれその地の果物を携へきたれよとこの時は葡萄の熟し始むる時なりき二一是において彼等上りゆきてその地を窺ひチンの曠野よりレホブにおよべり是はハマテに近し二二彼等すなはち南の方にゆきてヘブロンにいたれり此にはアナクの子アヒマン、セシヤイおよびタルマイあり（ヘブロンはエジプトのゾアンより七年前に建たる者なり）二三彼らつひにエシコルの谷にいたり其處より一球の葡萄のなれる枝を砍とりてこれを杠に貫き二人してこれを擔へりまた石榴と無花果を取り二四イスラエルの子孫其處より葡萄一球を砍とりしが故にその處をエシコル（一球の葡萄）の谷と稱ふ二五彼ら四十日を經その地を窺ふことを竟て歸り二六パランの曠野なるカデシに至りてモーセとアロンおよびイスラエルの子孫の全會衆に就きかれらと全會衆にその復命を申しその地の果物をこれに見せり二七彼等すなはちモーセに語りて言ふ我等は汝が遣し地にいたれり誠に其處は乳と蜜とながる是その果物なり二八然ながらその地に住む民は猛くその邑々は堅固にして甚だ大なり我等またアナクの子孫の其處にをるを見たり二九またアマレキ人その南の地に住みヘテ人エブス人およびアモリ人その山々に住みカナン人その海邊とヨルダンの邊に住をると三〇時にカルブ、モーセの前に民を靜めて言けるは我等直に上りゆきて之を攻取ん我等は必ずこれに勝ことを得ん三一然ど彼とともに往たる人々は言ふ我等はかの民の所に攻上ることを得ず彼らは我らよりも強ければなりと三二彼等すなはちその窺ひたりし地の事をイスラエルの子孫の中に惡く言ふらして云く我等が行巡りて窺ひたる地は其中に住む者を呑ほろぼす地なり且またその中に我等が見し民はみな身幹たかき人なりし三三我等またアナクの子ネピリムを彼處に見たり是ネピリムより出たる者なり我儕は自ら見るに蝗のごとくまた彼らにも然見なされたり

第一四章一是において會衆みな聲をあげて叫び民その夜哭あかせり二すなはちイスラエルの子孫みなモーセとアロンに對ひて呟き全會衆かれらに言けるは嗚呼我等はエジプトの國に死たらば善りしものを又はこの曠野に死ば善らんものを三何とてヱホバ我等をこの地に導きいりて劍に斃れしめんとし我らの妻子

をして掠められしめんとするやエジプトに歸ること反て好らずやと四 互に相語り我等一人の長を立てエジプトに歸らんと云り五 是をもてモーセとアロンはイスラエルの子孫の全會衆の前において俯伏たり六 時にかの地を窺ひたりし者の中なるヌンの子ヨシュアとヱフンネの子カルブその衣服を裂き七 イスラエルの子孫の全會衆に語りて言ふ我等が行巡りて窺ひたりし地は甚だ善き地なり八 ヱホバもし我等を悦びたまはば我らをその地に導きいりて之を我等に賜はん是は乳と蜜との流るる地なるぞかし九 唯ヱホバに逆ふ勿れまたその地の民を懼るるなかれ彼等は我等の食物とならん彼等の影となる者は既に去りかつヱホバわれらと共にいますなり彼等を懼るる勿れ一〇 然るに會衆みな石をもて之を撃んとせり時にヱホバの榮光集會の幕屋の中よりイスラエルの全體の子孫に顯れたり一一 ヱホバすなはちモーセに言たまはく此民は何時まで我を藐視るや我 諸の休徴をかれらの中間に行ひたるに彼等何時まで我を賴むことを爲ざるや一二 我疫病をもてかれらを撃ち滅し汝をして彼等よりも大なる強き民とならしめん一三 モーセ、ヱホバに言けるは汝がその權能をもてこの民をエジプトより導き出したまひし事はエジプト人唯これを聞し而已ならず一四 また之をこの地に住る民に告たりまた彼等は汝ヱホバがこの民の中に在し汝ヱホバが明かにこれに顯れたまふことを聞きまたその上に汝の雲をりて汝が晝は雲の柱の中にあり夜は火の柱の中にありて之が前に行たまふを聞り一五 然ば汝もしこの民を一人のごとくに殺したまはば汝の名聲を聞る國人等言ん一六 ヱホバこの民を導きてその之に誓ひたりし地に至ること能はざるが故に之を曠野に殺せりと一七 吾主ねがはくは今汝の權能を大ならしめて汝の言たまへる如したまへ一八 汝曾言たまひけらくヱホバは怒ること遲く恩惠深く惡と過とを赦す者また罰すべき者をば必ず赦すことをせず父の罪を子に報いて三四代に及ぼす者と一九 願くは汝の大なる恩惠をもち汝がエジプトより今にいたるまでこの民を赦し如くにこの民の惡を赦したまへ二〇 ヱホバ言たまはく我汝の言にしたがひて之を赦す二一 然ながら我の活るごとくまたヱホバの榮光の全世界に充わたらん如く二二 かのわが榮光および我がエジプトと曠野において行ひし休徴を見ながら斯十度も我を試みて我聲に聽したがはざる人々は二三 皆かならず我がその先祖等に誓ひし地を見ざるべしまた我を藐視る人々も之を見ざるべし二四 但しわが僕カルブはその心異にして我に全く從ひたれば彼の往たりし地に我かれを導きいらんその子孫これを有つに至るべし二五 アマレキ人とカナン人谷にをれば明日汝等身を轉して紅海の路より曠野に退くべし二六 ヱホバ、モーセとアロンに告て言たまはく二七 我この我にむかひて呟くところの惡き會衆を何時まで敎しおかんや我イスラエルの子孫が我にむかひて呟くところの怨言を聞り二八 彼等に言へヱホバ曰ふ我は活く汝等が我耳に言しごとく我汝等になすべし二九 汝らの屍はこの曠野に

横はらん即ち汝ら核數られたる二十歳以上の者の中我に對ひて呟ける者は皆ことごとく此に斃るべし三〇ヱフンネの子カルブとヌンの子ヨシュアを除くの外汝等は我が汝らを住しめんと手をあげて誓ひたりし地に至ることを得ず三一汝等が掠められんと言たりし汝等の子女等を我導きて入ん彼等は汝らが顧みざるところの地を知に至るべし三二汝らの屍はかならずこの曠野に横はらん三三汝らの子女等は汝らが屍となりて曠野に朽るまで四十年の間曠野に流蕩て汝らの悖逆の罪にあたらん三四汝らはかの地を窺ふに日數四十日を經たれば其一日を一年として汝等四十年の間その罪を任ひ我が汝らを離たるを知べし三五我ヱホバこれを言り必ずこれをかの集りて我に敵する惡き會衆に盡く行なふべし彼らはこの曠野に朽ち此に死うせん三六モーセに遣されてかの地を窺ひに往き還り來りてその地を誹り全會衆をしてモーセに對ひて呟かしめたる人々三七即ちその地を惡く言なしたるかの人々は罰をうけてヱホバの前に死り三八但しその地を窺ひに往きたる人々の中ヌンの子ヨシュアとヱフンネの子カルブとは生のこれり三九モーセこれらの事をイスラエルの子孫に告ければ民痛く哀み四〇朝蚤く起いでて山の嶺に登りて言ふ視よ我儕此にあり率ヱホバの約束したまひし地に上りゆかん我等罪を犯したればなり四一モーセ言けるは汝等なんぞ斯ヱホバの命に背くやこの事成就せざるべし四二汝ら上り行く勿れヱホバ汝らの中にいまさざれば恐くは汝らその敵の前に撃破られん四三アマレキ人とカナン人其處に汝らの前にあれば汝等は劍に斃るるならん汝らヱホバに遵はざりし故にヱホバ汝等と偕に在さざるべしと四四然るに彼等自擅に山の嶺に登れり但しヱホバの契約の櫃およびモーセは營を出ざりき四五斯りしかばその山に住るアマレキ人とカナン人下り來てこれを打敗りホルマまで追いたれり

第一五章一茲にヱホバ、モーセに告て言たまはく二イスラエルの子孫に告て之に言へ我が汝等に與へて住しむる地に汝等到り三ヱホバに火祭を獻る時すなはち願を還す時期又は自意の禮物を爲の時期または汝らの節期にあたりて牛あるひは羊をもて燔祭または犧牲を献げてヱホバに馨しき香を奉つる時は四五その禮物をヱホバに獻る者もし羔羊をもて燔祭あるひは犧牲となすならば麥粉十分の一に油一ヒンの四分の一を混和たるをその素祭として供へ酒一ヒンの四分の一をその灌祭として供ふべし六若また牡羊を之に用ふるならば麥粉十分の二に油一ヒンの三分の一を混和たるをその素祭として供へ七また酒一ヒンの三分の一をその灌祭として獻げヱホバに馨しき香をたてまつるべし八汝また願還あるひは酬恩祭をヱホバになすに當りて牡牛をもて燔祭あるひは犧牲となすならば九麥粉十分の三に油一ヒンの半を混和たるを素祭となしてその牡牛とともに獻げ一〇また酒一ヒンの半をその灌祭として獻ぐべし是すなはち火祭にしてヱホバに馨しき香をたてまつる者なり一一牡牛あ

るひは牡羊あるひは羔羊あるひは羔山羊は一匹ごとに斯爲べきなり一二 即ち汝らが献ぐるところの數にてらしその數にしたがひて一匹ごとに斯なすべし一三 本國に生れたる者火祭を献げてヱホバに馨しき香をたてまつる時には凡て斯のごとく是等の事を行ふべし一四 また汝らの中に寄寓る他國の人あるひは汝らの中に代々住ふところの人火祭をささげてヱホバに馨しき香をたてまつらんとする時は汝らの爲がごとくにその人もなすべきなり一五 汝ら會衆および汝らの中に寄寓る他國の人は同一の例にしたがふべし是は汝らが代々永く守るべき例なり他國の人のヱホバの前に侍ることは汝等と異るところ無るべきなり一六 汝らと汝らの中に宿寓る他國の人とは同一の法同一の禮式にしたたがふべし一七 ヱホバまたモーセに告て言たまはく一八 イスラエルの子孫に告てこれに言へ我が汝等を導き往ところの地に汝等いたらん時は一九 その地の食物を食ふにあたりて汝ら擧祭をヱホバにささぐべし二〇 即ち汝らはその麥粉の初をもてパンを作りてこれを擧祭にそなふべし是は禾場より擧祭をそなふるが如くに擧てそなふべきなり二一 汝ら代々その麥粉の初をもて擧祭をヱホバにたてまつるべし二二 汝等もし誤りてヱホバのモーセに告たまへるこの諸の命令を行はず二三 ヱホバがモーセをもて命じたまひし事等並にその命ずることを始めたまひし日より以來汝らの代々にも命じたまはんところの事等を行はざる事有ん時二四 すなはち會衆誤りて犯す所ありて之を知ざることあらん時は全會衆少き牡牛一匹を燔祭にささげてヱホバに馨しき香とならしめ之にその素祭と灌祭を禮式のごとくに加へまた牡山羊一匹を罪祭にささぐべし二五 而して祭司イスラエルの子孫の全會衆のために贖罪を爲べし斯せば是は赦されん是は過誤なればなり彼等はその禮物として火祭をヱホバにささげまたその過誤のために罪祭をヱホバの前にささぐべし二六 然せばイスラエルの子孫の會衆みな赦されんまた彼等の中に寄寓る他國の人も然るべし其は民みな誤り犯せるなればなり二七 人もし誤りて罪を犯さば當歳の牝山羊一匹を罪祭に献ぐべし二八 祭司はまたその誤りて罪を犯せる人が誤りてヱホバの前に罪を獲たるが爲に贖罪をなしてその罪を贖ふべし然せば是は赦されん二九 イスラエルの子孫の國の者にもあれまた其中に寄寓る他國の人にもあれ凡そ誤りて罪を犯す者には汝らその法を同じからしむべし三〇 本國の人にもあれ他國の人にもあれ凡そ擅横に罪を犯す者は是ヱホバを瀆すなればその人はその民の中より絶るべし三一 斯る人はヱホバの言を軽んじその誡命を破るなるが故に必ず絶れその罪を身に承ん三二 イスラエルの子孫曠野に居る時安息日に一箇の人の柴を拾ひあつむるを見たり三三 是においてその柴を拾ひあつむるを見たる者等これをモーセとアロンおよび會衆の許に曳きたりけるが三四 之を如何に爲べきか未だ示諭を蒙らざるが故に之を禁錮おけり三五 時にヱホバ、モーセに言たまひけるはその人はかならず殺さるべきなり全會衆營

の外にて石をもて之を撃べしと三六全會衆すなはち之を營の外に曳いだし石をもてこれを撃ころしヱホバのモーセに命じたまへるごとくせり三七ヱホバ亦モーセに告て言たまはく三八汝イスラエルの子孫に告げ代々その衣服の裾に綫をつけその裾の綫の上に青き紐をほどこすべしと之に命ぜよ三九此綫は汝らに之を見てヱホバの諸の誡命を記憶して其をおこなはしめ汝らをしてその放縱にする自己の心と目の欲に從がふこと無らしむるための者なり四〇斯して汝等吾もろもろの誡命を記憶して之を行ひ汝らの神の前に聖あるべし四一我は汝らの神ヱホバにして汝らの神とならんとて汝らをエジプトの地より導きいだせし者なり我は汝らの神ヱホバなるぞかし

第一六章一茲にレビの子コハテの子イヅハルの子なるコラおよびルベンの子等なるエリアブの子ダタンとアビラム並にペレテの子オン等相結び二イスラエルの子孫の會衆の中に選まれて牧伯となれるところの名ある人々二百五十人とともに起てモーセに逆らふ三すなはち彼等集りてモーセとアロンに逆ひ之に言けるは汝らはその分を超ゆ會衆みな盡く聖者となりてヱホバその中に在すなるに汝ら尚ヱホバの會衆の上に立つや四モーセこれを聞て俯伏たりしが五やがてコラとその一切の黨類に言けるは明日ヱホバ己の所屬は誰聖者は誰なるかを示して其者を己に近かせたまはん即ちその選びたまへる者を己に近かせたまふべし六汝等かく爲よコラとその黨類よ汝等みな火盤を取り七その中に火をいれその中に香を盛て明日ヱホバの前に至れその時ヱホバの選みたまふ人は聖者たるべしレビの人々よ汝等はその分を超るなり八モーセまたコラに言けるは汝等レビの子等よ請ふ聽け九イスラエルの神汝らをイスラエルの會衆の中より分ち己に近かせてヱホバの幕屋の役事を爲しめ會衆の前に立て之にかはりて勤務をなさしめたまふ是あに汝らにとりて小き事ならんや一〇神すでに汝と汝の兄弟なるレビの兒孫等を己に近かせたまふに汝らまた祭司とならんことをも求むるや一一汝と汝の黨類は皆これがために集りてヱホバに敵するなりアロンを如何なる者として汝等これに對ひて呟くや一二かくてモーセ、エリアブの子ダタンとアビラムを呼に遣はしけるに彼等いひけるは我等は上り往じ一三汝は乳と蜜との流るる地より我らを導き出して曠野に我らを殺さんとす是あに小き事ならんや然るに汝また我等の上に君たらんとす一四且また汝は我らを乳と蜜との流るる地にも導きゆかずまた田畝をも葡萄園をも我らに與へて有たしめず汝この人々の目を抉りとらんとするや我等は上りゆかじ一五是においてモーセおほいに怒りヱホバに申しけるは汝かれらの禮物を顧みたまふ勿れ我はかれらより驢馬一匹をも取しことなくまた彼等を一人も害せしこと無し一六斯てモーセ、コラに言けるは汝と汝の黨類みなアロンと偕に明日ヱホバの前に至れ一七即ち汝らおのおの火盤を執てその中に香を盛り各人その火盤をヱホバの前に携へいたれその火祭は

都合二百五十汝とアロンも各々その火盤を携へいたるべしと一八彼等すなはち各々火盤を執り火をその中にいれて香をその上に盛りモーセおよびアロンとともに集會の幕屋の門に立り一九コラ會衆をことごとく集會の幕屋の門に集めおきてかれら二人に敵せしめんとせしにヱホバの榮光全會衆に顯れ二〇ヱホバ、モーセとアロンに告て言たまひけるは二一汝等この會衆を離れよ我これを直に滅さんとすと二二是においてかれら二人俯伏て言ふ神よ一切の血肉ある者の生命の神よこの一人の者罪を犯したればとて汝全會衆にむかひて怒を發したまふや二三ヱホバ、モーセに告て言たまはく二四汝會衆にむかひてコラとダタンとアビラムの居所の周圍を去れと言へと二五モーセすなはち起あがりてダタンとアビラムの所に往けるがイスラエルの長老等これに從がひいたれり二六而してモーセ會衆に告て言けるは汝らこの惡き人々の天幕を離れて去れ彼等の物には何にも捫る勿れ恐くは彼らの諸の罪のために汝らも滅ぼされん二七是において人々はコラとダタンとアビラムの居所を離れて四方に去ゆけりまたダタンとアビラムはその妻子ならびに幼兒とともに出てその天幕の門に立り二八モーセやがて言けるは汝等ヱホバがこの諸の事をなさせんとて我を遣したまへる事また我がこれを自分の心にしたがひて行ふにあらざる事を是によりて知べし二九すなはちこの人々もし一般の人の死るごとくに死に一般の人の罰せらるる如くに罰せられなばヱホバわれを遣したまはざるなり三〇然どヱホバもし新しき事を爲たまひ地その口を開きてこの人々と之に屬する者を呑つくして生ながら陰府に下らしめなばこの人々はヱホバを瀆ししなりと汝ら知るべし三一モーセこの一切の言をのべ終れる時かれらの下なる土裂け三二地その口を開きてかれらとその家族の者ならびにコラに屬する一切の男等と一切の所有品を呑つくせり三三すなはち彼等とかれらに屬する者はみな生ながら陰府に下りて地その上に閉ふさがりぬ彼等かく會衆の中より滅ぼされたりしが三四その周圍に居たるイスラエル人は皆かれらの叫喊を聞て逃はしり恐くは地われらをも呑つくさんと言り三五且またヱホバの許より火いでてかの香をそなへたる者二百五十人を燒つくせり三六時にヱホバ、モーセに告て言たまはく三七汝祭司アロンの子エレアザルに告てその燃る火の中より彼の火盤を取いださしめその中の火を遠方に傾すてよその火盤は聖なりたればなり三八而してその罪を犯して生命を喪へる者等の火盤は之を潤き展版となして祭壇を包むに用ひよ彼等ヱホバの前にそなへしに因て是は聖なりたればなり斯是はイスラエルの子孫に徴と爲べし三九是において祭司エンアザル彼の燒死されし者等が用ひてそなへたる銅の火盤を取いだしければ之を潤く打展し之をもて祭壇を包み四〇之をイスラエルの子孫の記念の物と爲り是はアロンの子孫たらざる外人が近りてヱホバの前に香を焚こと無らんため亦かかる人ありてコラとその黨類のごとくにならざらん爲なり是みな

ヱホバがモーセをもて彼にのたまひし所に依るなり四一 その翌日イスラエルの子孫の會衆みなモーセとアロンにむかひて呟き汝等はヱホバの民を殺せりと言り四二 會衆集りてモーセとアロンに敵する時集會の幕屋を望み觀に雲ありてこれを覆ひヱホバの榮光顯れをる四三 時にモーセとアロン集會の幕屋の前にいたりけるに四四 ヱホバ、モーセに言たまひけるは四五 汝らこの會衆をはなれて去れ我直にこれをほろぼさんとすと是において彼等二人は俯伏ぬ四六 斯てモーセ、アロンに言けるは汝火盤を執り壇の火を之にいれ香をその上に盛て速かにこれを會衆の中に持ゆき之がために贖罪を爲せ其はヱホバ震怒を發したまひて疫病すでに始りたればなりと四七 アロンすなはちモーセの命ぜしごとくに之を執て會衆の中に奔ゆきけるに疫病すでに民の中に始まり居たれば香を焚て民のために贖罪を爲し四八 既に死る者と尚生る者との間に立ければ疫病止まれり四九 コラの事によりて死たる者の外この疫病に死たる者は一萬四千七百人なりき五〇 而してアロンはモーセの許にかへり集會の幕屋の門にいたれり疫病は斯やみぬ

第一七章一 ヱホバ、モーセに告て言給はく二 汝イスラエルの子孫に語り之が中よりその各箇の父祖の家にしたがひて杖一本づつを取れ即ちその一切の牧伯等よりその父祖の家に循ひて杖都合十二本を取りその人等の名を各々その杖に書せ三 レビの杖には汝アロンの名を書せ其はその父祖の家の長たる者各箇杖一本を出すべければなり四 而して集會の幕屋の中我が汝等に會ふ處なる律法の櫃の前に汝之を置べし五 我が選める人の杖は芽さん我かくイスラエルの子孫が汝等にむかひて呟くところの怨言をわが前に止むべし六 モーセかくイスラエルの子孫に語りければその牧伯等おのおの杖一本づつを之に付せり即ち牧伯等おのおのその父祖の家にしたがひて一本づつを出したればその杖あはせて十二本アロンの杖もその杖の中にあり七 モーセその杖を皆律法の幕屋の中にてヱホバの前に置り八 斯てその翌日モーセ律法の幕屋にいりて視るにレビの家のために出せるアロンの杖芽をふき蕾をなし花咲て巴旦杏の果を結べり九 モーセその杖をことごとくヱホバの前よりイスラエルの子孫の所に取いだしければ彼ら見ておのおの自分の杖を取り一〇 時にヱホバまたモーセに言たまはく汝アロンの杖を律法の櫃の前に携へかへり其處にたくはへ置てこの背反者等のために徴とならしめよ斯して汝かれらの怨言を全く取のぞきかれらをして死ざらしむべし一一 モーセすなはち然なしヱホバの己に命じたまへる如くせり一二 イスラエルの子孫モーセに語りて曰ふ嗚呼我等は死ん我等は滅びん我等はみな滅びん一三 凡そヱホバの幕屋に微にても近く者はみな死るなり我等はみな死斷べき歟

第一八章一 斯てヱホバ、アロンに告て言たまはく汝と汝の子等および汝の父祖の家の者は聖所に關れる罪をその身に擔當べしまた汝と汝の子等は汝らがその祭司の職について獲ところの

罪をその身に擔當べし二 汝また汝の兄弟たるレビの支派の者すなはち汝の父祖の支派の者等をも率て汝に合せしめ汝に事しむべし但し汝と汝の子等は律法の幕屋の前に侍るべきなり三 彼らは汝の職守と聖所の職守とを守るべし只聖所の器具と壇とに近くべからず恐くは彼等も汝等も死るならん四 彼等は汝に合して集合の幕屋の職守を守り幕屋の諸の役事をなすべきなり外人は汝らに近づく可らず五 斯なんぢらは聖所の職守と祭壇の職守を守るべし然せばヱホバの震怒かさねてイスラエルの子孫に及ぶこと有じ六 視よ我なんぢらの兄弟たるレビ人をイスラエルの子孫の中より取りヱホバのために之を賜物として汝らに賜ふて集會の幕屋の役事を爲しむ七 汝と汝の子等は祭司の職を守りて祭壇の上と障蔽の幕の内の一切の事を執おこなひ斯ともに勤むべし我祭司の職の勤務と賜物として汝らに賜ふ外人の近く者は殺されん八 ヱホバ又アロンに言たまはく我イスラエルの子孫の諸の聖禮物の中我に擧祭とするところの者をもて汝に賜ひて得さす即ち我これを汝と汝の子等にあたへてその分となさしめ是を永く例となす九 斯のごとく至聖禮物の中火にて燒ざる者は汝に歸すべし即ちその我に献る諸の禮物素祭罪祭愆祭等みな至聖くして汝と汝らの子等に歸すべし一〇 至聖所にて汝これを食ふべし男子等はみなこれを食ふことを得是は汝に歸すべき聖物たるなり一一 汝に歸すべき物は是なり即ちイスラエルの子孫の献る擧祭と搖祭の物我これを汝と汝の男子と女子に與へ是を永く例となす汝の家の者の中潔き者はみな之を食ふことを得るなり一二 油の嘉者酒の嘉者穀物の嘉者など凡てヱホバに献るその初の物を我なんぢに與ふ一三 最初に成る國の產物の中ヱホバに携へたる者は皆なんぢに歸すべし汝の家の者の中潔き者はみな之を食ふことを得るなり一四 イスラエルの人の献納る物は皆汝に歸すべし一五 凡そ血肉ある者の首出子にしてヱホバに献らるる者は人にもあれ畜にもあれ皆なんぢに歸すべし但し人の首出子は必ず贖ふべくまた汚れたる畜獸の首出子も贖ふべきなり一六 之を贖ふにはその人の生れて一箇月に至れる後に汝その估價に依り聖所のシケルに循ひて銀五シケルに之を贖ふべし一シケルはすなはち二十ゲラなり一七 然ど牛の首出子羊の首出子山羊の首出子は贖ふべからず是等は聖しその血を壇の上に灑ぎまたその脂を焚て火祭となしてヱホバに馨しき香をたてまつるべし一八 その肉は汝に歸すべし搖る胸と右の腿とおなじく是は汝に歸するなり一九 イスラエルの子孫がヱホバに献て擧祭とする所の聖物はみな我これを汝と汝の男子女子に與へこれを永く例となす是はヱホバの前において汝と汝の子孫に對する鹽の契約にして變らざる者なり二〇 ヱホバまたアロンに告たまはく汝はイスラエルの子孫の地の中に產業を有べからずまた彼等の中に何の分をも有べからず彼らの中において我は汝の分汝の產業たるなり二一 またレビの子孫たる者には我イスラエルの中において物の十分の一を與へて之が

産業となし其なすところの役事すなはち集會の幕屋の役事に報ゆ二二イスラエルの子孫はかさねて集會の幕屋に近づくべからず恐くは罪を負て死ん二三第レビ人集會の幕屋の役事をなすべしまた彼らはその罪な自己の身に負べし彼等はイスラエルの子孫の中に産業の地を有ざる事をもてその例となして汝らの世代の子孫の中に永く之を守るべきなり二四イスラエルの子孫が十に一を取り擧祭としてヱホバに献るところの物を我レビ人に與へてその産業となさしむるが故に我かれらにつきて言り彼等はイスラエルの子孫の中に産業の地を得べからずと二五ヱホバ、モーセに告て言たまはく二六汝かくレビ人に告て之に言べし我がイスラエルの子孫より取て汝等に與へて産業となさしむるその什一の物を汝ら之より受る時はその什一の物の十分の一を献てヱホバの擧祭となすべし二七汝等の擧祭の物品は禾場よりたてまつる穀物の如く酒醡の内よりたてまつる酒のごとくに見做れん二八此のごとく汝等もまたイスラエルの子孫より受る一切の什一の物の中よりヱホバに擧祭を献げそのヱホバの擧祭を祭司アロンに與ふべし二九汝らの受る一切の禮物の中より汝らはその嘉ところ即ちその聖き分を取てヱホバの擧祭を献べし三〇汝かく彼等に言べし汝らその中より嘉ところを取て献るに於てはその殘餘の物は汝等レビ人における禾場より取る物のごとく酒醡より取る物のごとくならん三一汝等と汝らの眷屬何處にても之を食ふことを得べし是は汝らが集會の幕屋に於て爲す役事の報酬たればなり三二汝らその嘉ところを献るに於ては之がために罪を負こと有じ汝らはイスラエルの子孫の聖別て献る物を汚すべからず恐くは汝ら死ん

第一九章一ヱホバ、モーセとアロンに告て言たまはく二ヱホバが命ずるところの律の例は是のごとし云くイスラエルの子孫に告て赤牝牛の全くして疵なく未だ軛を負しこと有ざる者を汝の許に牽きたらしめ三汝ら之を祭司エレアザルに交すべし彼はまたこれを營の外に牽いだして自己の眼の前にこれを宰らしむべし四而して祭司エレアザルこれが血を其指につけ集會の幕屋の表にむかひてその血を七次灑ぎ五やがてその牝牛を自己の眼の前に燒しむべしその皮その肉その血およびその糞をみな燒べし六その時祭司香柏と牛膝草と紅の絲をとりて之をその燒る牝牛の中に投いるべし七かくて祭司はその衣服を浣ひ水にてその身を滌ぎて然る後營に入べし祭司の身は晩まで汚るるなり八また之を燒たる者も水にその衣服を浣ひ水にその身を滌ぐべし彼も晩まで汚るるなり九斯て身の潔き人一人その牝牛の灰をかき斂めてこれを營の外の清淨處に蓄へ置べし是イスラエルの子孫の會衆のために備へおきて汚穢を潔る水を作るべき者にして罪を潔むる物に當るなり一〇その牝牛の灰をかき斂めたる者はその衣服を浣ふべしその身は晩まで汚るるなりイスラエルの子孫とその中に寄寓る他國の人とは永くこれを例とすべきなり一一人の死屍に捫る者は七日の間汚る一二第三日と第七日にこの

灰水を以て身を潔むべし然せば潔くならん然ど若し第三日と第七日に身を潔むることを爲ざれば潔くならじ一三 凡そ死人の屍に捫りて身を潔むることを爲ざる者はヱホバの幕屋を汚すなればイスラエルより斷るべし汚穢を潔むる水をその身に灑ざるによりて潔くならずその汚穢なほ身にあるなり一四 天幕に人の死ることある時に應用ふる律は是なり即ち凡てその天幕に入る者凡てその天幕にある物は七日の間汚るべし一五 凡そ蓋を取はなして蓋はざりし所の器皿はみな汚る一六 凡そ刀劍にて殺されたる者または死屍または人の骨または墓等に野の表にて捫る者はみな七日の間汚るべし一七 汚れたる者ある時はかの罪を潔むる者たる燒る牝牛の灰をとりて器に入れ活水を之に加ふべし一八 而して身の潔き人一人牛膝草を執てその水にひたし之をその天幕と諸の器皿および其處に居あはせたる人々に灑ぐべくまたは骨あるひは殺されし者あるひは死たる者あるひは墓などに捫れる者に灑ぐべし一九 即ち身の潔き人第三日と第七日にその汚れたる者に之を灑ぐべし而して第七日にはその人みづから身を潔むることを爲しその衣服をあらひ水に身を滌ぐべし然せば晩におよびて潔くなるべし二〇 然ど汚れて身を潔ることを爲ざる人はヱホバの聖所を汚すが故にその身は會衆の中より絶るべし汚穢を潔むる水を身に灑がざるによりてその人は潔くならざるなり二一 彼等また永くこれを例とすべし即ち汚穢を潔むる水を人に灑げる者はその衣服を浣ふべしまた汚穢を潔むる水に捫れる者も晩まで汚るべし二二 凡て汚れたる人の捫れる者は汚るべしまた之に捫る人も晩まで汚るべし

第二〇章一 斯てイスラエルの子孫の全會衆正月におよびてチンの曠野にいたれり而して民みなカデシに止りけるがミリアム其處にて死たれば之を其處に葬りぬ二 當時會衆水を得ざるによりて相集りてモーセとアロンに迫れり三 すなはち民モーセと爭ひ言けるは嚮に我らの兄弟等がヱホバの前に死たる時に我等も死たらば善りしものを四 汝等何とてヱホバの會衆をこの曠野に導き上りて我等とわれらの家畜を此に死しめんとするや五 汝らなんぞ我らをエジプトより上らしめてこの惡き處に導きいりしや此には種を播べき處なく無花果もなく葡萄もなく石榴も無くまた飮べき水も無し六 是においてモーセとアロンは會衆の前を去り集會の幕屋の門にいたりて俯伏けるにヱホバの榮光かれらに顯れ七 ヱホバ、モーセに告て言たまはく八 汝杖を執り汝の兄弟アロンとともに會衆を集めその眼の前にて汝ら磐に命ぜよ磐その中より水を出さん汝かく磐より水を出して會衆とその獸畜に飮しむべしと九 モーセすなはちその命ぜられしごとくヱホバの前より杖を取り一〇 アロンとともに會衆を磐の前に集めて之に言けるは汝ら背反者等よ聽け我等水をしてこの磐より汝らのために出しめん歟と一一 モーセその手を擧げ杖をもて磐を二度撃けるに水多く湧出たれば會衆とその獸畜ともに飮り一二 時にヱホバ、モーセとアロンに言たまひけるは汝等

は我を信ぜずしてイスラエルの子孫の目の前に我の聖を顯さざりしによりてこの會衆をわが之に與へし地に導きいることを得じと一三是をメリバ(爭論)の水とよべりイスラエルの子孫是がためにヱホバにむかひて爭ひたりしかばヱホバつひにその聖ことを顯したまへり一四茲にモーセ、カデシより使者をエドムの王に遣して言けるは汝の兄弟イスラエルかく言ふ汝はわれらが遭し諸の艱難を知る一五そもそも我らの先祖等エジプトに下りゆきて我ら年ひさしくエジプトに住をりしがエジプト人われらと我らの先祖等をなやましたれば一六我らヱホバに籲はりけるにヱホバわれらの聲を聽たまひ一箇の天の使を遣して我らをエジプトより導きいだしたまへり視よ我ら今は汝の邊境の邊端にあるカデシの邑に居るなり一七願くは我らをして汝の國を通過しめよ我等は田畝をも葡萄園をも通過じまた井の水をも飮じ我らは第王の路を通過り汝の境をいづるまでは右にも左にもまがらじ一八エドム、モーセに言けるは汝我の中を通過べからず恐くは我いでて劍をもて汝にむかはん一九イスラエルの子孫エドムに言ふ我らは大道を通過ん若われらと我らの獸畜なんぢの水を飮ことあらばその値を償ふべし我は徒行にて通過のみなれば何事にもあらざるなりと二〇然るにエドムは汝通過べからずといひて許多の群衆を率ゐて出で大なる力をもて之にむかへり二一エドムかくイスラエルにその境の中を通過ことを容さざりければイスラエルは他にむかひて去り二二かくてイスラエルの子孫の會衆みなカデシより進みてホル山にいたれり二三ヱホバ、エドムの國の境なるホル山にてモーセとアロンに告て言たまはく二四アロンはその死たる民に列らんイスラエルの子孫に我が與へし地に彼は入ことを得ざるべし是メリバの水のある處にて汝等わが言に背きたればなり二五汝アロンとその子エレアザルをひきつれてホル山に登り二六アロンにその衣服を脱せてこれをその子エレアザルに衣せよアロンは其處に死てその民に列るべしと二七モーセすなはちヱホバの命じたまへるごとく爲し相つれだちて全會衆の目の前にてホル山に登り二八而してモーセはアロンにその衣服をぬがせて之をその子エレアデルに衣せたりアロンは其處にて山の嶺に死り斯てモーセとエレアザル山よりくだりけるが二九會衆みなアロンの死たるを見て三十日のあひだ哀哭をなせりイスラエルの家みな然せり

第二一章 一茲に南の方に住るカナン人アラデ王といふ者イスラエルが間者の道よりして來るといふを聞きイスラエルを攻うちてその中の數人を虜にせり二是においてイスラエル誓願をヱホバに立て言ふ汝もしこの民をわが手に付したまはば我その城邑を盡く滅さんと三ヱホバすなはちイスラエルの言を聽いれてカナン人を付したまひければ之とその城邑をことごとく滅せり是をもてその處の名をホルマ(殲滅)と呼なしたり四民はホル山より進みゆき紅海の途よりしてエドムを繞り通らんとせしがその途のために民心を苦めたり五すなはち民神とモーセにむか

いて呟きけるは汝等なんぞ我らをエジプトより導きのぼりて曠野に死しめんとするや此には食物も無くまた水も無し我等はこの粗き食物を心に厭ふなりと六是をもてヱバホ火の蛇を民の中に遣して民を咬しめたまひければイスラエルの民の中死る者多かりき七是によりて民モーセにいたりて言けるは我らヱホバと汝にむかひて呟きて罪を獲たり請ふ汝ヱホバに祈りて蛇を我等より取はなさしめよとモーセすなはち民のために祈ければ八ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝蛇を作りてこれを杆の上に載おくべし凡て咬れたる者は之を仰ぎ觀なば生べし九モーセすなはち銅をもて一條の蛇をつくり之を杆の上に載おけり凡て蛇に咬れたる者その銅の蛇を仰ぎ觀ば生たり一〇イスラエルの子孫途に進みてオボテに營を張り一一またオボテより進み往きモアブの東の方に亘るところの曠野においてイヱアバリムに營を張り一二また其處より進みゆきてゼレデの谷に營を張り一三其處より進みゆきてアルノンの彼旁に營を張りアルノンはアモリの境より出て曠野に流るる者にてモアブとアモリの間にありてモアブの界をなすなり一四故にヱホバの戰爭の記に言るあり云くスパのワヘブ、アルノンの河一五河の流即ちアルの邑に落下りモアブの界に倚る者と一六かれら其處よりベエル(井)にいたれりヱホバがモーセにむかひて汝民を集めよ我これに水を與へんと言たまひしはこの井なりき一七時にイスラエルこの歌を歌へり云く井の水よ湧あがれ汝等これがために歌へよ一八此井は笏と杖とをもて牧伯等これを掘り民の君長等之を掘りと斯て曠野よりマツタナにいたり一九マツタナよりナハリエルにいたりナハリエルよりバモテにいたり二〇バモテよりモアブの野にある谷に往き曠野に對するピスガの嶺にいたれり二一かくてイスラエル使者をアモリ人の王シホンに遣して言しめけるは二二我をして汝の國を通過しめよ我等は田畝にも葡萄園にも入じまた井の水をも飲じ我らは汝の境を出るまでは唯王の道を通りて行んのみと二三然るにシホンはイスラエルに自己の境の中を通る事を容さざりき而してシホンその民をことごとく集め曠野にいでてイスラエルを攻んとしヤハヅに來りてイスラエルと戰ひけるが二四イスラエル刃をもて之を擊やぶりその地をアルノンよりヤボクまで奪ひ取りアンモンの子孫にまで至れりアンモンの子孫の境界は堅固なりき二五イスラエルかくその城邑を盡く取り而してイスラエルはアモリ人の諸の城邑に住みヘシボンとそれに附る諸の村々に居る二六ヘシボンはアモリ人の王シホンの都城なりシホンは曾てモアブの前の王と戰ひてかれの地をアルノンまで盡くその手より奪ひ取しなり二七故に歌をもて云るあり曰く汝らヘシボンに來れシホンの城邑を築き建よ二八ヘシボンより火出でシホンの都城より焰いでてモアブのアルを焚つくしアルノンの邊の高處を占る君王等を滅ぼせり二九モアブよ汝は禍なる哉ケモシの民よ汝は滅ぼさるその男子は逃奔りその女子はアモリ人の王シホンに虜らるるなり三〇我等は彼らを擊

たふしへシボンを滅ぼしてデボンに及び之を荒してまたノパに及びメデバにいたる三一 斯イスラエルの子孫はアモリ人の地に住たりしが三一 モーセまた人を遣はしてヤゼルを窺はしめ遂にその村々を取て其處にをりしアモリ人を逐出し三三 轉てバシヤンの路に上り往きけるにバシヤンの王オグその民を盡く率ゐて出で之を迎へてエデレイに戰はんとす三四 ヱホバ、モーセに言たまひけるは彼を懼るる勿れ我かれとその民とその地を盡く汝の手に付す汝ヘシボンに住をりしアモリ人の王シホンに爲たるごとくに彼にも爲べしと三五 是において彼とその子とその民をことごとく擊ころし一人も生存る者なきに至らしめて之が地を奪ひたり

第二二章一 かくてイスラエルの子孫また途に進みてモアブの平野に營を張り此はヨルダンの此旁にしてヱリコに對ふ二 チッポルの子バラクはイスラエルが凡てアモリ人に爲たる所を見たり三 是においてモアブ人大いにイスラエルの民を懼る是その數多きに因てなりモアブ人かくイスラエルの子孫のために心をなやましたれば四 すなはちミデアンの長老等に言ふこの群衆は牛が野の草を餂食ふごとくに我等の四圍の物をことごとく餂食はんとすとこの時にはチッポルの子バラク、モアブ人の王たり五 彼すなはち使者をペトルに遣してベオルの子バラムを招かしめんとすペトルはバラムの本國にありて河の邊に立りその之を招かしむる言に云く茲にエジプトより出來し民あり地の面を蓋ふて我の前にをる六 然ば請ふ汝今來りて我ためにこの民を詛へ彼等は我よりも強ければなり然せば我これを擊やぶりて我國よりこれを逐はらふを得ることもあらん其は汝が祝する者は福徳を得汝が詛ふ者は禍を受くと我しればなりと七 モアブの長老等とミデアンの長老等すなはち占卜の禮物を手にとりて出たちバラムにいたりてバラクの言をこれに告たれば八 バラムかれらに言ふ今晚は此に宿れヱホバの我に告るところに循ひて汝らに返答をなすべしと是をもてモアブの牧伯等バラムの許に居る九 時に神バラムに臨みて言たまはく汝の許にをる此人々は何者なるや一〇 バラム神に言けるはモアブの王チッポルの子バラク我に言つかはしけらく一一 茲にエジプトより出きたりし民ありて地の面を蓋ふ請ふ今來りてわがために之を詛へ然せば我これに戰ひ勝てこれを逐はらふを得ることもあらんと一二 神バラムに言たまひけるは汝かれらとともに往べからず亦この民を詛ふべからず是は祝福る者たるなり一三 是においてバラム朝起てバラクの牧伯等に言けるは汝ら國に歸れよヱホバ我が汝らとともに往く事をゆるさざるなりと一四 モアブの牧伯たちすなはち起あがりてバラクの許にいたりバラムは我らとともに來ることを肯ぜずと告たれば一五 バラクまた前の者よりも尊き牧伯等を前よりも多く遣せり一六 彼らバラムに詣りて之に言けるはチッポルの子バラクかく言ふ願くは汝何の障碍をも顧みずして我に來れ一七 我汝をして甚だ大なる尊榮を得させん汝が我に言とこ

ろは凡て我これを爲べし然ば願くは來りて我ためにこの民を詛へ一八バラム答へてバラクの臣僕等に言けるは假令バラクその家に盈るほどの金銀を我に與ふるとも我は事の大小を論ずわが神ヱホバの言を踰ては何をも爲ことを得ず一九然ば請ふ汝らも今晩此に宿り我をしてヱホバの再び我に何と言たまふかを知しめよと二〇夜にいりて神バラムにのぞみて之に言たまひけるはこの人々汝を招きに來りたれば起あがりて之とともに往け但し汝は我が汝につぐる言のみを行ふべし二一バラム翌朝起あがりてその驢馬に鞍おきてモアブの牧伯等とともに往り二二然るにヱホバかれの往たるに縁て怒を發したまひければヱホバの使者かれに敵せんとて途に立り彼は驢馬に乘その僕二人はこれとともに在しが二三驢馬ヱホバの使者が劍を手に拔持て途に立るを見驢馬途より身を轉して田圃に入ければバラム驢馬を打て途にかへさんとせしに二四ヱホバの使者また葡萄園の途に立り其處には此旁にも石垣あり彼旁にも石垣あり二五驢馬ヱホバの使者を見石垣に貼依てバラムの足を石垣に貼依たればバラムまた之を打り二六然るにヱホバの使者また進みよりて狹き處に立けるが其處には右にも左にもまがる道あらざりしかば二七驢馬ヱホバの使者を見てバラムの下に臥たり是においてバラム怒を發し杖をもて驢馬を打けるに二八ヱホバ驢馬の口を啓きたまひたれば驢馬バラムにむかひて言ふ我なんぢに何を爲せばぞ汝かく三次我を打や二九バラム驢馬に言ふ汝われを侮るが故なり我手に劍あらば今汝を殺さんものを三〇驢馬またバラムに言けるは我は汝の所有となりてより今日にいたるまで汝が常に乘ところの驢馬ならずや我つねに斯のごとく汝になしたるやとバラムこたへて否と言ふ三一時にヱホバ、バラムの目を啓きたまひければ彼ヱホバの使者の途に立て劍を手に拔持るを見身を鞠めて俯伏たるに三二ヱホバの使者これに言ふ汝なにとて斯三度なんぢの驢馬を打や我汝の道の直に滅亡にいたる者なるを見て汝に敵せんとて出きたれり三三驢馬はわれを見て斯みたび身を轉して我を避たるなり是もし身を轉らして我を避ずば我すでに汝を殺して是を生しおきしならん三四バラム、ヱホバの使者に言けるは我罪を獲たり我は汝が我に敵せんとて途に立るを知ざりしなり汝もし之を惡しとせば我は歸るべし三五ヱホバの使者バラムに言けるはこの人々とともに往け但し汝は我が汝に告る言詞のみを宣べしとバラムすなはちバラクの牧伯等とともに往り三六さてまたバラクはバラムの來るを聞てモアブの境の極處に流るるアルノンの旁の邑まで出ゆきて之を迎ふ三七バラクすなはちバラムに言けるは我ことさらに人を遣はして汝を招きしにあらずや汝なにゆゑ我許に來らざりしや我あに汝に尊榮を得さすることを得ざらんや三八バラム、バラクに言けるは視よ我つひに汝の許に來れり然ど今は我何事をも自ら言を得んや我はただ神の我口に授る言語を宣んのみと三九斯てバラムはバラクとともに往てキリアテホゾテに至りしが四〇バラク牛と羊を宰り

てバラムおよび之と偕なる牧伯等に餽れり四一而してその翌朝にいたりバラクはバラムを件ひこれを携へてバアルの崇邱に登イスラエルの民の極端を望ましむ

第二三章一 バラム、バラクに言けるは我ために此に七個の壇を築き此に七匹の牡牛と七匹の牡羊を備へよと二 バラクすなはちバラムの言るごとく爲しバラクとバラムその壇ごとに牡牛一匹と牡羊一匹を献げたり三 而してバラムはバラクにむかひ汝は燔祭の傍に立をれ我は往んとすヱホバあるひは我に來りのぞみたまはんその我に示したまふところの事は凡てこれを汝に告んと言て一の高處に登たるに四 神バラムに臨みたまひければバラムこれに言けるは我は七箇の壇を設けその壇ごとに牡牛一匹と牡羊一匹を献げたりと五 ヱホバ、バラムの口に言を授けて言たまはく汝バラクの許に歸りて斯いふべしと六 彼すなはちバラクの許に至るにバラクはモアブの諸の牧伯等とともに燔祭の傍に立をる七 バラムすなはちこの歌をのべて云くモアブの王バラク、スリアより我を招き寄せ東の邦の山より我を招き寄て云ふ來りて我ためにヤコブを詛へ來りてわがためにイスラエルを呪れと八 神の詛はざる者を我いかで詛ふことを得んやヱホバの呪らざる者を我いかで呪ることを得んや九 磐の頂より我これを觀岡の上より我これを望むこの民は獨り離れて居ん萬の民の中に列ぶことなからん一〇 誰かヤコブの塵を計へ得んやイスラエルの四分一を數ふることを能せんや願くは義人のごとくに我死ん願くはわが終これが終にひとしかれ一一 是においてバラク、バラムに言けるは汝我に何を爲や我はわが敵を詛はしめんとて汝を携きたりしなるに汝はかへつて全くこれを祝せり一二 バラムこたへて言けるは我は愼みてヱホバの我口に授る事のみを宣べきにあらずや一三 バラクこれに言けるは請ふ汝われとともに他の處に來りて其處より彼らを觀よ汝ただ彼らの極端のみを觀ん彼らを全くは觀ことを得ざるべし請ふ其處にて我ために彼らを詛へと一四 やがて之を導きてピスガの嶺なる斥候の原に至り七箇の壇を築きて壇ごとに牡牛一匹と牡羊一匹を献たり一五 時にバラム、バラクに言けるは汝此にて燔祭の傍に立をれ我またも往て會見ゆることをせんと一六 ヱホバまたバラムに臨みて言をその口に授け汝バラクの許に歸りてかく言へとのたまひければ一七 彼バラクの許にかへりけるにバラクは燔祭の傍に立をりモアブの牧伯等これとともに居りしがバラクすなはちバラムにむかひヱホバ何と言しやと問ければ一八 バラムまたこの歌を宣たり云くバラクよ起て聽けチッポルの子よ我に耳を傾けよ一九 神は人のごとく謊ること无しまた人の子のごとく悔ること有ずその言ところは之を行はざらんやその語るところは之を成就ざらんや二〇 我はこれがために福祉をいのれとの命令を受く既に之に福祉をたまへば我これを變るあたはざるなり二一 ヱホバ、ヤコブの中に惡き事あるを見ずイスラエルの中に憂患あるを見ずその神ヱホバこれとともに在し王を喜びて呼はる聲その中にあ

り二二 神かれらをエジプトより導き出したまふイスラエルは強きこと兕のごとし二三 ヤコブには魔術なしイスラエルには占卜あらず神はその爲ところをその時にヤコブに告げイスラエルにしめしたまふなり二四 觀よこの民は牝獅子のごとくに起あがり牡獅子のごとくに身を興さん是はその攫得たる物を食ひその殺しし物の血を飲では臥ことを爲じ二五 是においてバラクはバラムに向ひ汝かれらを詛ふことをも祝することをも爲なかれと言けるに二六 バラムこたへてバラクに言ふ我はヱホバの宣まふ事は凡てこれを爲ざるを得ずと汝に告おきしにあらずやと二七 バラクまたバラムに言けるは請ふ來れ我なんぢを他の處に導き往ん神あるひは汝が其處より彼らを我ために詛ふことを善とせんと二八 バラクすなはちバラムを導きて曠野に對するペオルの嶺に至るに二九 バラム、バラクに言けるは我ために七箇の壇を此に築き牡牛七匹牡羊七匹を此に備へよと三〇 バラクすなはちバラムの言るごとく爲しその壇ごとに牡牛一匹と牡羊一匹を献たり

第二四章一 バラムはイスラエルを祝することのヱホバの心に適ふを視たれば此度は前の時のごとくに往て法術を求むる事を爲ずその面を曠野に向て居り二 バラム目を擧てイスラエルのその支派にしたがひて居るを觀たり時に神の靈かれに臨みければ三 彼すなはちこの歌をのべて云くベオルの子バラム言ふ目の啓きたる人言ふ四 神の言詞を聞し者能はざる無き者をまぼろしに觀し者倒れ臥て其目の啓けたる者言ふ五 ヤコブよ汝の天幕は美しき哉イスラエルよ汝の住所は美しき哉六 是は谷々のごとくに布列ね河邊の園のごとくヱホバの栽し沈香樹のごとく水の邊の香柏のごとし七 その桶よりは水溢れんその種は水の邊に發育んその王はアガグよりも高くなりその國は振ひ興らん八 神これをエジプトより導き出せり是は強きこと兕のごとくその敵なる國々の民を呑つくしその骨を摧き矢をもて之を衝とほさん九 是は牡獅子のごとくに身をかがめ牝獅子のごとくに臥す誰か敢てこれを起さんやなんぢを祝するものは福祉を得なんぢをのろふものは災禍をかうむるべし一〇 ここにおいてバラクはバラムにむかひて怒を發しその手を拍ならせり而してバラク、バラムにいひけるは我はなんぢをしてわが敵を詛はしめんとてなんぢを招きたるに汝は却て斯三度までも彼らを大に祝したり一一 然ば汝今汝の處に奔り往け我は汝に大なる尊榮を得させんと思ひたれどヱホバ汝を阻めて尊榮を得るに至らざらしむ一二 バラム、バラクに言けるは我は汝が我に遣しし使者等に告て言ざりしや一三 假令バラクその家に盈るほどの金銀を我に與ふるとも我はヱホバの言を踰て自己の心のままに善も惡きも爲ことを得ず我はヱホバの宣まふ事のみを言べしと一四 今われは吾民にかへる然ば來れ我この民が後の日に汝の民に爲んところの事を汝に告しらせんと一五 すなはちこの歌をのべて云くベオルの子バラム言ふ目の啓きたる人言ふ一六 神の言を聞るあり至高者を知

の知識あり能はざる無き者をまぼろしに觀倒れ臥て其目の啓けたる者言ふ一七我これを見ん然ど今にあらず我これを望まん然ど近くはあらずヤコブより一箇の星いでんイスラエルより一條の杖おこりモアブを此旁より彼旁に至まで撃破りまた鼓譟者どもを盡く滅すべし一八其敵なるエドムは是が產業となりセイルは之が產業とならんイスラエルは盛になるべし一九權を秉る者ヤコブより出で遺れる者等を城より滅し絶ん二〇バラム又アマレクを望みこの歌をのべて云くアマレクは國々の中の最初なる者なり其終には滅び絶るに至らん二一亦ケニ人を望みこの歌をのべて云く汝の住所は堅固なり汝は磐に巣をつくる二二然どカインは亡て終にアッスリアの爲に虜へ移されん二三彼亦この歌をのべて云く嗟神これを爲たまはん時は誰か生ることを得ん二四キッテムの方より船來てアッスリアを攻なやましエベルを攻なやますべし而して是もまた終に亡失ん二五斯てバラムは起あがりて自己の處に歸り往きぬバラクも亦去ゆけり

第二五章一イスラエルはシッテムに止まり居けるがその民モアブの婦女等と婬をおこなふことを始めたり二その婦女等其神々に犠牲を献る時に民を招けば民は往て食ふことを爲しかつその神々を拝めり三イスラエルかくバアルベオルに附ければイスラエルにむかひてヱホバ怒を發したまへり四ヱホバすなはちモーセに告て言たまはく民の首をことごとく携きたりヱホバのためにかの者等を日に曝せ然せばヱホバの烈しき怒イスラエルを離るるあらんと五是においてモーセ、イスラエルの士師等にむかひ汝らおのおのその配下の人々のバアルベオルに附る者を殺せと言り六モーセとイスラエルの子孫の全會衆集合の幕屋の門にて哭をる時一箇のイスラエル人ミデアンの婦人一箇を携きたり彼らの目の前にてその兄弟等の中に至れり七祭司アロンの子なるエレアザルの子ピネハスこれを見會衆の中より起あがりて槍を手に執り八そのイスラエルの人の後を追て之が寝室に入りイスラエルの人を衝きまたその婦女の腹を衝とほして二人を殺せり是において疫病のイスラエルの子孫におよぶこと止れり九その疫病にて死たる者は二萬四千人なりき一〇ヱホバ、モーセに告て言たまはく一一祭司アロンの子なるエレアザルの子ピネハスはわが熱心をイスラエルの子孫の中にあらはして吾怒をその中より取去り我として熱心をもてイスラエルの子孫を滅し盡すにいたらざらしめたり一二故に汝言へ我これに平和のわが契約をさづく一三即ち彼とその後の子孫永く祭司の職を得べし是は彼その神のために熱心にしてイスラエルの子孫のために贖をなしたればなり一四その殺されしイスラエル人すなはちミデアンの婦人とともに殺されし者はその名をジムリと言てサルの子にしてシメオン人の宗族の牧伯の一人なり一五またその殺されしミデアンの婦人は名をコズビと曰てツルの女子なりツルはミデアンの民の宗族の首なり一六ヱホバ、モーセに告て言たまはく一七ミデアンの人に逼りてこれを撃て一八其は彼ら

謀計をもて汝に逼りペオルの事とその姉妹なるミデアンの牧伯の女すなはちペオルのために疫病の起れる日に殺されしコズビの事において汝らを惑したればなり

第二六章 一 疫病の後ヱホバ、モーセと祭司アロンの子エレアザルに告て言たまはく 二 イスラエルの全會衆の總數をその父祖の家にしたがひて核べイスラエルの中凡そ二十歳以上にして戰爭に出るに勝る者を數へよと 三 モーセ及び祭司エレアザルすなはちヱリコに對してヨルダンの邊にあるモアブの平野に於てかれらに告て言けるは 四 エジプトの地より出きたれるモーセとイスラエルの子孫にヱホバの命じ給へる如く汝ら其中の二十歳以上の者を計へよ 五 イスラエルの長子はルベン、ルベンの子孫はヘノクよりヘノク人の族出でパルよりパル人の族出で 六 ヘヅロンよりヘヅロン人の族出でカルミよりカルミ人の族出づ 七 ルベンの宗族は是のごとくにしてその核數られし者は四萬三千七百三千人 八 またパルの子はエリアブ 九 エリアブの子はネムエル、ダタン、アビラムこのダタンとアビラムは會衆の中に名ある者にてコラの黨類とともにモーセとアロンに逆ひてヱホバに悖りし事ありしが 一〇 地その口を開きて彼らとコラとを呑みその黨類二百五十人は火に燒れて死うせ人の鑑戒となれり 一一 但しコラの子等は死ざりき 一二 シメオンの子孫はその宗族に依ば左のごとしネムエルよりはネムエル人の族出でヤミンよりはヤミン人の族出でヤキンよりはヤキン人の族出で 一三 ゼラよりはゼラ人の族出でシヤウルよりはシヤウル人の族出づ 一四 シメオン人の宗族は是の如くにして其數られし者は二萬二千二百人 一五 ガドの子孫は其宗族に依ば左の如しゼポンよりはゼポン人の族出でハギよりはハギ人の族出でシユニよりはシユニ人の族出で 一六 オズニよりはオズニ人の族出でエリよりはエリ人の族出で 一七 アロドよりはアロド人の族出でアレリよりはアレリ人の族出づ 一八 ガドの宗族は是のごとくにしてその核數られし者は四萬五百人 一九 ユダの子等はエルとオナン、エルとオナンはカナンの地に死たり 二〇 ユダの子孫はその宗族によれば左のごとしシラよりはシラ人の族出でペレヅよりはペレヅ人の族出でゼラよりはゼラ人の族出づ 二一 ペレヅの子孫は左のごとしヘヅロンよりはヘヅロン人の族出でハムルよりけハムル人の族出づ 二二 ユダの宗族は是のごとくにしてその核數られし者は七萬六千五百人 二三 イツサカルの子孫はその宗族によれば左のごとしトラよりはトラ人の族出でプワよりはプワ人の族出で 二四 ヤシユブよりはヤシユブ人の族出でシムロンよりはシムロン人の族出づ 二五 イッサカルの宗族は是のごとくにしてその數へられし者は六萬四千三百人 二六 ゼブルンの子孫はその宗族によれば左の如しセレデよりはセレデ人の族出でエロンよりはエロン人の族出でヤリエルよりはヤリエル人の族出づ 二七 ゼブルン人の宗族は是のごとくにしてその核數られし者は六萬五百人 二八 ヨセフの子等はその宗族に依ばマナセとエフライム 二九 マナ

セの子等の中マキルよりマキル人の族出づマキル、ギレアデを生りギレアデよりギレアデ人の族出づ三〇ギレアデの子孫は左のごとしイエゼルよりはイエゼル人の族出でヘレクよりはヘレク人の族出で三一アスリエルよりはアスリエル人の族出でシケムよりはシケム人の族出で三二セミダよりはセミダ人の族出でヘペルよりはヘペル人の族出づ三三ヘペルの子ゼロペハデには男子なく惟女子ありしのみその名はマアラ、ノア、ホグラ、ミルカ、テルザと曰ふ三四マナセの宗族は是のごとくにしてその核數られし者は五萬二千七百人三五エフライムの子孫はその宗族によれば左のごとしシユテラよりはシユテラ人の宗族出でベケルよりはベケル人の族出でタハンよりはタハン人の族出づ三六シユテラの子孫は左のごとしエランよりエラン人の族出づ三七エフライムの子孫の宗族は是のごとくにしてその核數られし者は三萬二千五百人ヨセフの子孫はその宗族に依ば是のごとし三八ベニヤミンの子孫はその宗族によれば左のごとしベラよりはベラ人の族出でアシベルよりはアシベル人の族出でアヒラムよりはアヒラム人の族出で三九シユパムよりはシユパム人の族出でホパムよりはホパム人の族出づ四〇ベラの子等はアルデとナアマン、アルデよりはアルデ人の族出でナアマンよりはナアマン人の族出づ四一ベニヤミンの子孫はその宗族に依ば是のごとくにしてその核數られし者は四萬五千六百人四二ダンの子孫はその宗族に依ば左のごとしシユハムよりシユハム人の族出づダンの宗族はその宗族によれば是の如し四三シユハム人の諸の族の中核數られし者は六萬四千四百人四四アセルの子孫はその宗族によれば左のごとしヱムナよりはヱムナ人の族出でヱスイよりはヱスイ人の族出でベリアよりはベリア人の族出づ四五ベリアの子孫の中ヘベルよりはヘベル人の族出でマルキエルよりはマルキエル人の族出づ四六アセルの女子の名はサラと曰ふ四七アセルの子孫の宗族は是のごとくにしてその核數られし者五萬三千四百人四八ナフタリの子孫はその宗族によれば左のごとしヤジエルよりヤジエル人の族出でグニよりグニ人の族出で四九ヱゼルよりヱゼル人の族出でシレムよりシレム人の族出づ五〇ナフタリの宗族はその宗族によればかくのごとくにしてその核數られしものは四萬五千四百人五一すなはちイスラエルの子孫の核數られし者は六十萬一千七百三十人なりき五二ヱホバ、モーセに告て言たまはく五三この人々にその名の數にしたがひて地を分ち與へてこれが產業となさしむべし五四人衆には汝多くの產業を與へ人寡には少の產業を與ふべし即ちその核數られし數にしたがひておのおの產業を受べきなり五五但しその地は鬮をもて之を分ちその父祖の支派の名にしたがひて之を獲べし五六即ち鬮をもてその產業を人衆き者と寡き者とに分つべきなり五七レビ人のその宗族にしたがひて數へられし者は左のごとしゲルションよりはゲルション人の族出でコハテよりはコハテ人の族出でメラリよりはメラリ人の族出づ五八

レビの族は左のごとしリブニ人の族ヘブロン人の族マヘリ人の族ムシ人の族コラ人の族コハテ、アムラムを生り五九アムラムの妻の名はヨケベデといひてレビの女子なり是はエジプトにてレビに生れし者なりしがアムラムにそひてアロンとモーセおよびその姉妹ミリアムを生り六〇アロンにはナダブ、アビウ、エレアザルおよびイタマル生る六一ナダブとアビウは異火をヱホバの前にささげし時死り六二その核數られし一箇月以上の男子は都合二萬三千人レビ人はイスラエルの子孫の中に產業を與へられざるが故にイスラエルの子孫の中に核數られざるなり六三是すなはちモーセと祭司エレアザルがヨルダンの邊なるヱリコに對するモアブの平野にて數へたるイスラエルの子孫の數なり六四但しその中にはモーセとアロンがシナイの曠野においてイスラエルの子孫をかぞへし時に數へたる者は一人もあらざりき六五其はヱホバ曾て彼らの事を宣て是はかならず曠野に死んといひたまひたればなり是をもてヱフンネの子カルブとヌンの子ヨシュアの外は一人も遺れる者あらざりき

第二七章一茲にヨセフの子マナセの族の中なるヘペルの子ゼロペハデの女子等きたれりヘペルはギレアデの子ギレアデはマキルの子マキルはマナセの子なりその女子等の名はマアラ、ノア、ホグラ、ミルカ、テルザといふ二彼ら集會の幕屋の門にてモーセと祭司エレアザルと牧伯等と全會衆の前に立ち言けるは三我等の父は曠野に死り彼はかのコラに與して集りてヱホバに逆ひし者等の中に加はらず自己の罪に死り然るに男子なし四我らの父の名なんぞその男子あらざるがためにその族の中より削らるることある可んや我らの父の兄弟の中において我らにも產業を與へよと五モーセすなはちその事をヱホバの前に陳けるに六ヱホバ、モーセに告て言たまはく七ゼロペハデの女子等の言ところは道理なり汝かならず彼らの父の兄弟の中において彼らに產業を與へて獲さすべし即ちその父の產業をこれに歸せしむべし八汝イスラエルの子孫に告て言べし人もし男子なくして死ばその產業をこれが女子に歸せしむべし九もしまた女子もあらざる時はその產業をその兄弟に與ふべし一〇もし兄弟あらざる時はその產業をその父の兄弟に與ふべし一一もしまたその父に兄弟あらざる時はその親戚の最も近き者にその產業を與へて獲さすべしヱホバのモーセに命ぜしごとくイスラエルの子孫は永く之をもて律法の例とすべし一二茲にヱホバ、モーセに言たまはく汝このアバリム山にのぼり我イスラエルの子孫に與へし地を觀よ一三汝これを觀なばアロンの既に加はりしごとく汝もその民に加はるべし一四是チンの曠野において會衆の爭論をなせる砌に汝らわが命に悖りかの水の側にて我の聖き事をかれらの目のまへに顯すことを爲ざりしが故なり是すなはちチンの曠野のカデシにあるメリバの水なり一五モーセ、ヱホバに申して言けるは一六ヱホバ一切の血肉ある者の生命の神よ願くはこの會衆の上に一人を立て一七之をして彼等の前に出かれらの前

に入り彼らを導き出し彼らを導き入る者とならしめヱホバの會衆をして牧者なき羊のごとくならざらしめたまへ**一八** ヱホバ、モーセに言たまはくヌンの子ヨシユアといふ靈のやどれる人を取り汝の手をその上に按き**一九** これを祭司エレアザルと全會衆の前に立せて彼らの前にて之に命ずる事をなすべし**二〇** 汝これに自己の尊榮を分ち與へイスラエルの子孫の全會衆をしてこれに順がはしむべし**二一** 彼は祭司エレアザルの前に立べしエレアザルはウリムをもて彼のためにヱホバの前に問ことを爲べしヨシユアとイスラエルの子孫すなはちその全會衆はエレアザルの言にしたがひて出でエレアザルの言にしたがひて入べし**二二** 是においてモーセはヱホバの己に命じたまへるごとく爲しヨシユアを取て之を祭司エレアザルと全會衆の前に立せ**二三** その手をこれが上に按き之に命ずることを爲しヱホバのモーセをもて命じたまへる如くなせり

第二八章

一 ヱホバ、モーセに告て言たまはく**二** イスラエルの子孫に命じて之に言へわが禮物わが食物なる火祭わが馨 香の物は汝らこれをその期にいたりて我に献ぐることを怠るべからず**三** 汝かれらに言べし汝らがヱホバに献ぐる火祭は是なり即ち當歳の全たき羔羊二匹を日々に献げて常燔祭となすべし**四** 即ち一匹の羔羊を朝に献げ一匹の羔羊を夕に献ぐべし**五** また麥粉一エパの十分の一に擣て取たる油一ヒンの四分の一を混和て素祭となすべし**六** 是すなはちシナイ山において定めたる常燔祭にしてヱホバに馨しき香としてたてまつる火祭なり**七** またその灌祭は羔羊一匹に一ヒンの四分の一を用ふべし即ち聖所において濃酒をヱホバのために灌ぎて灌祭となすべし**八** 夕にはまた今一の羔羊を献ぐべしその素祭と灌祭とは朝のごとくになし之を献げて火祭となしてヱホバに馨しき香をたてまつるべし**九** また安息日には當歳の羔羊の全き者二匹と麥粉十分の二に油をまじへたるその素祭とその灌祭を献ぐべし**一〇** 是すなはち安息日ごとの燔祭にして常燔祭とその灌祭の外なる者なり**一一** また汝ら月々の朔日には燔祭をヱホバに献ぐべし即ち少き牡牛二匹牡羊一匹當歳の羔羊の全き者七匹を献げ**一二** 牡牛一匹には麥粉十分の三に油を和たるをもてその素祭となし牡羊一匹には麥粉十分の二に油をまじへたるをもてその素祭となし**一三** 羔羊一匹には麥粉十分の一に油を混和たるをもてその素祭となし之を馨しき香の燔祭としてヱホバに火祭をたてまつるべし**一四** またその灌祭は牡牛一匹に酒一ヒンの半牡羊一匹に一ヒンの三分の一羔羊一匹に一ヒンの四分の一を用ふべし是すなはち年の月々の中月ごとに献ぐべき燔祭なり**一五** また常燔祭とその灌祭の外に牡山羊一匹を罪祭としてヱホバに献ぐべし**一六** 正月の十四日はヱホバの逾越節なり**一七** またその月の十五日は節日なり七日の間酵いれぬパンを食ふべし**一八** その首の日には聖會をひらくべし汝等何の職業をも爲べからず**一九** 汝ら火祭を献げてヱホバに燔祭たらしむるには少き牡牛二匹牡羊一匹

當歳の羔羊七匹をもてすべし是等は皆全き者なるべし二〇その素祭には麥粉に油を和たるを用べし即ち牡牛一匹には麥粉十分の三を献げ牡羊一匹には十分の二を献げ二一 また羔羊は七匹ともその羔羊一匹ごとに十分の一を献ぐべし二二 また牡山羊一匹を罪祭に献げて汝らのために贖罪をなすべし二三 朝に献ぐる常燔祭なる燔祭の外に汝ら是らを献ぐべし二四 是のごとく汝ら七日の間日ごとに火祭の食物を献げてヱホバに馨しき香をたてまつるべし是は常燔祭とその灌祭の外に献ぐべき者なり二五 而して第七日には汝ら聖會を開くべし何の職業をも爲べからず二六 七七日の後すなはち汝らが新しき素祭をヱホバに携へきたる初穂の日にも汝ら聖會を開くべし何の職業をも爲べからず二七 汝ら燔祭を献げてヱホバに馨しき香をたてまつるべし即ち少き牡牛二匹牡羊一匹當歳の羔羊七匹を献ぐべし二八 その素祭には麥粉に油を混和たるを用ふべし即ち牡牛一匹に十分の三牡羊一匹に十分の二を用ひ二九 また羔羊には七匹ともに羔羊一匹に十分の一を用ふべし三〇 また牡山羊一匹をささげて汝らのために贖罪をなすべし三一 汝ら常燔祭とその素祭とその灌祭の外に是等を献ぐべし是みな全き者なるべし

第二九章 一 七月にいたりその月の朔日に汝ら聖會を開くべし何の職業をも爲べからず是は汝らが喇叭を吹べき日なり二 汝ら燔祭をささげてヱホバに馨しき香をたてまつるべし即ち少き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊の全き者七匹を献ぐべし三 その素祭には麥粉に油を混和たるを用ふべし即ち牡牛一匹に十分の三牡羊一匹に十分の二をもちひ四 また羔羊には七匹とも羔羊一匹に十分の一を用ふべし五 また牡山羊一匹を罪祭に献げて汝らのために贖罪をなすべし六 是は月々の朔日の燔祭とその素祭および日々の燔祭とその素祭と灌祭の外なる者なり是らの物の例にしたがひて之をヱホバにたてまつりて馨しき香の火祭となすべし七 またその七月の十日に汝ら聖會を開きかつ汝らの身をなやますべし何の職業をも爲べからず八 汝らヱホバに燔祭を献げて馨しき香をたてまつるべし即ち少き牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊七匹是みな全き者なるべし九 その素祭には麥粉に油を混和たるを用ふべし即ち牡牛一匹に十分の三牡羊一匹に十分の二を用ひ一〇 また羔羊には七匹とも羔羊一匹に十分の一を用ふべし一一 また牡山羊一匹を罪祭に献ぐべし是等は贖罪の罪祭と常燔祭とその素祭と灌祭の外なる者なり一二 七月の十五日に汝ら聖會を開くべし何の職業をも爲べからず汝ら七日の間ヱホバに向て節筵を守るべし一三 汝ら燔祭を献げてヱホバに馨しき香の火祭をたてまつるべし即ち少き牡牛十三牡羊二匹當歳の羔羊十四是みな全き者なるべし一四 その素祭には麥粉に油を混和たるを用ふべし即ちその十三の牡牛には各箇十分の三その二匹の牡羊には各箇十分の二を用ひ一五 その十四の羔羊には各箇十分の一を用ふべし一六 また牡山羊一匹を罪祭に献ぐべし是等は常燔祭およびその素祭と灌祭の外なり一七 第二日には

少き牡牛十二牡羊二匹當歳の羔羊の全き者十四を獻ぐべし一八その牡牛と牡羊と羔羊のために用ふる素祭と灌祭はその數に循ひて例のごとくすべし一九また牡山羊一匹を罪祭に獻ぐべし是らは常燔祭およびその素祭と灌祭の外なり二〇第三日には少き牡牛十一牡羊二匹當歳の羔羊の全き者十四を獻ぐべし二一その牡牛と牡羊と羔羊のために用ふる素祭と灌祭はその數に循ひて例のごとくすべし二二また牡山羊一匹を罪祭に獻ぐべし是らは常燔祭およびその素祭と灌祭の外なり二三第四日には少き牡牛十匹牡羊二匹當歳の羔羊の全き者十四を獻ぐべし二四その牡牛と牡羊と羔羊のために用ふる素祭と灌祭はその數に循ひて例のごとくすべし二五また牡山羊一匹を罪祭に獻ぐべし是等は常燔祭およびその素祭と灌祭の外なり二六第五日には少き牡牛九匹牡羊二匹當歳の羔羊の全き者十四を獻ぐべし二七その牡牛と牡羊と羔羊のために用ふる素祭と灌祭はその數にしたがひて例のごとくすべし二八また牡山羊一匹を罪祭に獻ぐべし是らは常燔祭およびその素祭と灌祭の外なり二九第六日には少き牡牛八匹牡羊二匹當歳の羔羊の全き者十四を獻ぐべし三〇その牡牛と牡羊と羔羊のために用ふる素祭と灌祭はその數にしたがひて例のごとくすべし三一また牡山羊一匹を罪祭に獻ぐべし是等は常燔祭およびその素祭と灌祭の外なり三二第七日には少き牡牛七匹牡羊二匹當歳の羔羊の全き者十四を獻ぐべし三三その牡牛と牡羊と羔羊のために用ふる素祭と灌祭はその數にしたがひて例のごとくすべし三四また牡山羊一匹を罪祭に獻ぐべし是等は常燔祭およびその素祭と灌祭の外なり三五第八日にはまた汝ら會をひらくべし何の職業をも爲べからず三六燔祭を獻げてヱホバに馨しき香の火祭をたてまつるべし即ち牡牛一匹牡羊一匹當歳の羔羊の全き者七匹を獻ぐべし三七その牡牛と牡羊と羔羊のために用ふる素祭と灌祭はその數にしたがひて例のごとくすべし三八また牡山羊一匹を罪祭に獻ぐべし是らは常燔祭およびその素祭と灌祭の外なり三九汝らその節期にはヱホバに斯なすべし是らは皆汝らが願還のために獻げまたは自意の禮物として獻ぐる所の燔祭素祭灌祭および酬恩祭の外なり四〇モーセはヱホバのモーセに命じたまへる事をことごとくイスラエルの子孫に告たり

第三〇章

一モーセ、イスラエルの子孫の支派の長等に告て云ふヱホバの命じたまふ事は是のごとし二人もしヱホバに誓願をかけ又はその身に斷物をなさんと誓ひなばその言詞を破るべからずその口より出しごとく凡て爲べし三また女もし若くしてその父の家に居る時ヱホバに誓願をかけ又はその身斷物を爲ことあらんに四その父これが誓願またはその身に斷し斷物を聞て之にむかひて言ふこと無ば其かけたる誓願を行ひまたその身に斷し斷物を守るべし五然どその父これを聞る日に之を允さざるあらばその誓願およびその身に斷し斷物を凡て止ることを得べしその父の允さざるなればヱホバこれを赦したまふなり六

もしまた夫に適く身にして自ら誓願をかけまたはその身に斷物せんと軽々しく口より言いだすことあらんに七その夫これを聞もそのこれを聞る日にこれに向ひて言ふこと無ばその誓願を行ひその身に斷し斷物を守るべし八されど夫もし之を聞る日にこれを允さざるならば之がかけし誓願または之がその身に斷物せんと軽々しく口に出ししところの事を空うするを得べしヱホバはその女を赦したまふなり九また寡婦あるひは去れたる婦人の誓願など凡てその身になしし斷物はこれを守るべし一〇婦女もしその夫の家において誓願をかけ又はその身に斷物せんと誓ふことあらんに一一夫これを聞てこれに對ひて言ふことなく之を允さざること無ばその誓願は凡てこれを行ふべくその身に斷し斷物は凡てこれを守るべし一二然どその夫もしこれを聞る日に全くこれを空うせばその誓願またはその斷物につき口より出しし事は凡て守るに及ばずその夫これを空くなしたるなればヱホバその婦女を赦したまふなり一三凡の誓願および凡てその身をなやますところの誓約は夫これを堅うすることを得夫これを空うすることを得べし一四その夫もし之にむかひて言ふことなくして日をおくらば之が誓願またはこれが斷物を凡て堅うするなり彼これを聞る日に妻にむかひて言ふことを爲ざるに因て之を堅うせるなり一五然どその夫もしこれを聞たる後にいたりてこれを空うする事あらばその妻の罪を任べし一六是すなはちヱホバがモーセに命じたまへる法令にして夫と妻および父とその女子の少くして父の家にある者とにかかはる者なり

第三一章 一茲にヱホバ、モーセに告て言たまはく二汝イスラエルの子孫の仇をミデアン人に報ゆべし其後汝はその民に加はらん三モーセすなはち民に告て言けるは汝らの中より人を選みて戰爭にいづる準備をなさしめ之をしてミデアン人に攻ゆかしめてヱホバの仇をミデアン人に報ゆべし四即ちイスラエルの諸の支派につきて各々の支派より千人づつを取りこれを戰爭につかはすべしと五是において各々の支派より千人づつを選みイスラエルの衆軍の中より一萬二千人を得て戰爭にいづる準備をなさしむ六モーセすなはち各々の支派より千人宛を戰爭に遣しまた祭司エレアザルの子ピネハスに聖器と吹鳴す喇叭を執しめて之とともに戰爭に遣せり七彼らヱホバのモーセに命じたまへるごとくミデアン人を攻撃ち遂にその中の男子をことごとく殺せり八その殺し者の外にまたミデアンの王五人を殺せりそのミデアンの王等はエビ、レケム、ツル、ホル、レバといふまたベオルの子バラムをも劍にかけて殺せり九イスラエルの子孫すなはちミデアンの婦女等とその子女を生擒りその家畜と羊の群とその貨財をことごとく奪ひ取り一〇その住居の邑々とその村々とを盡く火にて燒り一一かくて彼等はその奪ひし物と掠めし物を人と畜とともに取り一二ヱリコに對するヨルダンの邊なるモアブの平野の營にその生擒し者と掠めし物と奪ひし物とを携へき

たりてモーセと祭司エレアザルとイスラエルの子孫の會衆に詣れり一三時にモーセと祭司エレアザルおよび會衆の牧伯等みな營の外に出て之を迎へたりしが一四モーセはその軍勢の領袖等すなはち戰爭より歸りきたれる千人の長等と百人の長等のなせる所を怒れり一五モーセすなはち彼等に言けるは汝らは婦女等をことごとく生し存しや一六視よ是等の者はバラムの謀計によりイスラエルの子孫をしてペオルの事においてヱホバに罪を犯さしめ遂にヱホバの會衆の中に疫病おこるにいたらしめたり一七然ばこの子等の中の男の子を盡く殺しまた男と寢て男しれる婦人を盡く殺せ一八但し未だ男と寢て男しれる事あらざる女の子はこれを汝らのために生し存べし一九而して汝らは七日の間營の外に居れ汝らの中凡そ人を殺せし者または殺されし者に捫りたる者は第三日と第七日にその身を潔め且その俘囚を潔むべし二〇また一切の衣服と一切の皮の器具および凡て山羊の毛にて作れる物と凡て木にて造れる物を潔むべしと二一祭司エレアザル戰にいでし軍人等に言けるはヱホバのモーセに命じたまへる律法の例は是のごとし二二金銀銅鐵錫鉛など二三凡て火に勝る物は火の中を通すべし然せば潔くならん然ながら尚また潔淨の水をもてこれを潔むべしまた凡て火に勝ざる者は水の中を通すべし二四汝等は第七日にその衣服を洗ひて潔くなり然る後營にいるべし二五その時ヱホバ、モーセに告て言たまはく二六汝と祭司エレアザルおよび會衆の族長等この取獲たる人と畜の總數をしらべ二七その獲物を二分に分てその一を戰爭にいでて戰ひし者に予へその一を全會衆に予へよ二八而して戰ひに出し軍人をして人または牛または驢馬または羊おのおの五百ごとに一をとりてヱホバに貢として奉つらしめよ二九即ち彼らの一半より之をとりヱホバの擧祭として祭司エレアザルに與へよ三〇またイスラエルの子孫の一半よりはその獲たる人または牛または驢馬または羊または種々の獸畜五十ごとに一を取りヱホバの幕屋の職守を守るところのレビ人にこれを與へよと三一モーセと祭司エレアザルすなはちヱホバのモーセに命じたまへるごとく爲り三二その掠取物すなはち軍人等が奪ひ獲たる物の殘餘は羊六十七萬五千三三牛七萬二千三四驢馬六萬一千三五人三萬二千是みな未だ男と寢て男しれる事あらざる女なり三六その一半すなはち戰爭にいでし者の分は羊三十三萬七千五百三七ヱホバに貢として奉つれる羊は六百七十五三八牛三萬六千その中よりヱホバに貢とせし者は七十二三九驢馬三萬五百その中よりヱホバに貢とせし者は六十一四〇人一萬六千その中よりヱホバに貢とせし者は三十二人四一モーセその貢すなはちヱホバの擧祭なる者を祭司エレアザルに與へたりヱホバのモーセに命じたまへる如し四二モーセが戰爭に出しものより分ちとりてイスラエルの子孫に予へし一半四三すなはち會衆に屬する一半は羊三十三萬七千五百四四牛三萬六千四五驢馬三萬五百四六人一萬六千四七すなはちイスラエルの子孫のその一半よりモー

セ人と畜ともに各箇五十ごとに一を取りヱホバの幕屋の職守をまもるレビ人に之を與へたりヱホバのモーセに命じたまへるごとし四八 時に其軍勢の帥士たりし者等すなはち千人の長百人の長等モーセにきたり四九 モーセに言けるは僕等我らの手に屬する軍人を數へたるにわれらの中一人も缺たる者なし五〇 是をもて我ら各人その獲たる金の飾品すなはち鏈子釧指鐶耳環頸玉等をヱホバに携へきたりて禮物となし之をもて我らの生命のためにヱホバの前に贖罪をなさんとすと五一 モーセと祭司エレアザルすなはち彼らよりその金を受たり是みな製り成る飾品なりき五二 千人の長と百人の長たちがヱホバに献げて擧祭となせしその金は都合一萬六千七百五十シケル五三 軍人は各箇その掠取物をもて自分の有となせり五四 モーセと祭司エレアザルは千人の長と百人の長等よりその金を受て集會の幕屋に携へいりヱホバの前におきてイスラエルの子孫の記念とならしむ

第三二章一 ルベンの子孫とガドの子孫は甚だ多くの家畜の群を有り彼等ヤゼルの地とギレアデの地を觀るにその處は家畜に適き所なりければ二 ガドの子孫とルベンの子孫來りてモーセと祭司エレアザルと會衆の牧伯等に言けるは三 アタロテ、デボン、ヤゼル、ニムラ、ヘシボン、エレアレ、シバム、ネボ、ベオン四 即ちヱホバがイスラエルの會衆の前に撃ほろぼしたまひし國は家畜に適き所なるが我らは家畜あり五 また曰ふ然ば我らもし汝の目の前に恩を獲たらば請ふこの地を僕等に與へて産業となさしめ我らをしてヨルダンを濟ること無らしめよと斯いへり六 モーセ、ガドの子孫とルベンの子孫に言けるは汝らの兄弟たちは戰ひに往に汝らは此に坐しをらんとするや七 汝ら何ぞイスラエルの子孫の心を挫きてヱホバのこれに賜ひし地に濟ることを得ざらしめんとするや八 汝らの先祖等も我がカデシバルネアより其地を觀に遣せし時に然なせり九 即ち彼らエシコルの谷に至りて其地を觀し時イスラエルの子孫の心を挫きて之をしてヱホバの賜ひし地に往ことを得ざらしめたり一〇 その時ヱホバ怒を發し誓ひて言たまひけらく一一 エジプトより出きたれる人々の二十歳以上なる者は一人も我がアブラハム、イサク、ヤコブに誓ひたる地を見ざるべし其はかれら我に全くは從はざればなり一二 第ケナズ人ヱフンネの子カルブとヌンの子ヨシュアとを除く此二人はヱホバに全く從ひたればなり一三 ヱホバかくイスラエルにむかひて怒を發し之をして四十年のあひだ曠野にさまよはしめたまひければヱホバの前に惡をなししその代の人みな終に亡ぶるに至れり一四 抑 汝らはその父に代りて起れる者即ち罪人の種にしてヱホバのイスラエルにむかひて懷たまふ烈しき怒を更に增んとするなり一五 汝ら若反きてヱホバに從はずばヱホバまたこの民を曠野に遺おきたまはん然せば汝等すなはちこの民を滅ぼすにいたるべし一六 彼らモーセの側に進みよりて言けるは我らは此に我らの群のために羊の圏を建我らの少者のた

めに邑を建んとす一七 然ど我らはイスラエルの子孫をその處に導きゆくまでは身をよろひて之が前に奮ひ進まん第われらの少者はこの國に住る者等のために堅固なる邑に居ざるを得ず一八 我らはイスラエルの子孫が皆おのおのその產業を獲までは我らの家に歸らじ一九 我らはヨルダンの彼旁において彼らと偕に產業を獲ことを爲じ我らはヨルダンの此旁すなはち東の方に產業を獲ればなり二〇 モーセかれらに言けるは汝らもしこの事を爲し汝らみな身をよろひてヱホバの前に往て戰ひ二一 汝ら皆身をよろひヱホバの前にゆきてヨルダンを濟りヱホバのその敵を己の前より逐はらひたまひて二二 この國のヱホバに服ふにおよびて後汝ら歸ばヱホバの前にもイスラエルの前にも汝ら罪なかるべし然せばこの地はヱホバの前において汝らの產業とならん二三 然ど汝らもし然せずば是ヱホバにむかひて罪を犯すなれば必ずその罪汝らの身におよぶと知べし二四 汝らその少者のために邑を建てその羊のために圈を建よ而して汝らの口より出せるところを爲せ二五 ガドの子孫とルベンの子孫モーセにこたへて言けるはわが主の命じたまふごとく僕等行ふべし二六 我らの少者と妻と羊と諸の家畜は此にギレアデの邑々に居べし二七 然ど僕等はおのおの戰爭のために身をよろひてわが主の言たまふ如くヱホバの前に涉りゆきて戰ふべし二八 是においてモーセかれらの爲に祭司エレアザルとヌンの子ヨシユアとイスラエルの支派の族長等に命ずる事ありき二九 すなはちモーセかれらに言けるはガドの子孫とルベンの子孫もし汝らとともにヨルダンを濟りゆき各箇身をよろひてヱホバの前に戰ひてこの地汝らに服ふにいたらば汝らギレアデの地をかれらに與へて產業となさしむべし三〇 然ど彼らもし汝らとともに身をよろひて濟りゆかずば彼らはカナンの地に於て汝らの中に產業を獲ざる可らず三一 ガドの子孫とルベンの子孫こたへて言ふヱホバが僕等に言たまふごとく我ら爲べし三二 我らは身をよろひてヱホバの前にカナンの地に濟りゆきヨルダンの此旁なる我らの產業を保つことを爲べし三三 是においてモーセはアモリ人の王シホンの國とバシヤンの王オグの國をもてガドの子孫とルベンの子孫とヨセフの子マナセの支派の半とに與へたり即ちその國およびその境の內の邑々とその邑々の周圍の地とを之に與ふ三四 ガドの子孫はデボン、アタロテ、アロエル三五 アテロテ、シヨバン、ヤゼル、ヨグベハ三六 ベテニムラ、ベテハランなどの堅固なる邑を建て羊のために圈を建たり三七 またルベンの子孫はヘシボン、エレアレ、キリヤタイム三八 ネボ、バアルメオン等の邑を建てその名を更めまたシブマの邑を建たりその建たる邑々には新しき名をつけたり三九 またマナセの子マキルの子孫はギレアデに至りてこれを取り其處にをりしアモリ人を逐はらひければ四〇 モーセ、ギレアデをマナセの子マキルに與へて其處に住しむ四一 またマナセの子ヤイルは往てその村々を取りこれをハヲテヤイル（ヤイル村）と名けたり四二 またノバは往てケナテとその村々を取

り自己の名にしたがひて之をノバと名けたり

第三三章一 イスラエルの子孫がモーセとアロンに導かれ其軍旅にしたがひてエジプトの國より出きたりて經たる旅路は左のごとし二 モーセ、ヱホバの命に依りその旅路にしたがひてこれが發程を記せりその發程によればその旅路は左のごとくなり三 彼らは正月の十五日にラメセスより出立り即ち逾越の翌日にイスラエルの子孫は一切のエジプト人の目の前にて高らかなる手によりて出たり四 時にエジプト人はヱホバに擊ころされし其長子を葬りて居りヱホバはまた彼らの神々にも罰をかうむらせたまへり五 イスラエルの子孫ラメセスより出立てスコテに營を張り六 スコテより出立て曠野の極端なるエタムに營を張り七 エタムより出立てバアルゼポンの前なるピハヒロテに轉りゆきてミグドルに營を張り八 ピハヒロテの前より出立ち海の中を通りて曠野にいりエタムの曠野に三日路ほど入てメラに營を張り九 メラより出立てヱリムに至れりエリムには泉十二棕櫚七十本あり乃ち此に營を張り一〇 かくてエリムより出たちて紅海の邊に營を張り一一 紅海より出たちてシンの曠野に營を張り一二 シンの曠野より出たちてドフカに營を張り一三 ドフカより出たちてアルシに營を張り一四 アルシより出たちてレピデムに營を張り此には民の飲む水あらざりき一五 かくてレピデムより出たちてシナイの曠野に營を張り一六 シナイの曠野より出たちてキブロテハッタワに營を張り一七 キブロテハッタワより出たちてハゼロテに營を張り一八 ハゼロテより出たちてリテマに營を張り一九 リテマより出たちてリンモンパレツに營を張り二〇 リンモンパレツより出たちてリブナに營を張り二一 リブナより出たちてリッサに營を張り二二 リッサより出たちてケヘラタに營を張り二三 ケヘラタより出たちてシヤペル山に營を張り二四 シヤペル山より出たちてハラダに營を張り二五 ハラダより出たちてマケロテに營を張り二六 マケロテより出たちてタハテに營を張り二七 タハテより出たちてテラに營を張り二八 テラより出たちてミテカに營を張り二九 ミテカより出たちてハシモナに營を張り三〇 ハシモナより出たちてモセラに營を張り三一 モセラより出たちてベネヤカンに營を張り三二 ベネヤカンより出たちてホルハギデガデに營を張り三三 ホルハギデガデより出たちてヨテバタに營を張り三四 ヨテバタより出たちてアブロナに營を張り三五 アブロナより出たちてエジオングベルに營を張り三六 エジオングベルより出たちてカデシのチンの曠野に營を張り三七 カデシより出たちてエドムの國の界なるホル山に營を張り三八 イスラエルの子孫がエジプトの國を出てより四十年の五月の朔日に祭司アロンはヱホバの命によりてホル山に登て其處に死り三九 アロンはホル山に死たる時は百二十三歲なりき四〇 カナンの地の南に住るカナン人アラデ王といふ者イスラエルの子孫の來るを聞り四一 かくてホル山より出たちてザルモナに營を張り四二 ザルモナより出立てプノンに營を張り四三 プノンより出たちてオボテに

營を張り四四オボテより出たちてモアブの界なるイヱアバリムに營を張り四五イヰムより出たちてデボンガドに營を張り四六デボンガドより出たちてアルモンデブラタイムに營を張り四七アルモンデブラタイムより出たちてネボの前なるアバリムの山々に營を張り四八アバリムの山々より出たちてヱリコに對するヨルダンの邊なるモアブの平野に營を張り四九すなはちモアブの平野においてヨルダンの邊に營を張りベテヱシモテよりアベルシッテムにいたる五〇ヱリコに對するヨルダンの邊なるモアブの平野においてヱホバ、モーセに告て言たまはく五一イスラエルの子孫に告てこれに言へ汝らヨルダンを濟りてカナンの地に入る時は五二その地に住る民をことごとく汝らの前より逐はらひその石の像をことごとく毀ちその鑄たる像を毀ちその崇邱をことごとく毀ちつくすべし五三汝らその地の民を逐はらひて其處に住べし其は我その地を汝らの產業として汝らに與へたればなり五四汝らの族にしたがひ鬮をもてその地を分ちて產業となし人多きには多くの產業を與へ人少きには少しの產業を與ふべし各人の分はその鬮にあたれる處にあるべきなり汝らその先祖の支派にしたがひて之を獲べし五五然ど汝らもしその地に住る民を汝らの前より逐はらはずば汝らが存しおくところの者汝らの目に莿となり汝の脇に棘となり汝らの住む國において汝らを惱さん五六且また我は彼らに爲んと思ひし事を汝らに爲ん

第三四章一ヱホバ、モーセに告て言たまはく二イスラエルの子孫に告てこれに言へ汝らがカナンの地にいる時に汝らに歸して產業となる地は是なり即ち是カナンの地その境に循へる者三汝らの南の方はエドムに接するチンの曠野より起り南の界は鹽海の極端より東の方にいたるべし四また汝らの界は南より繞りてアクラビムの坂にいたりてチンに赴き南よりカデシバルネアに亘りハザルアダルに進みアズモンに赴くべし五その界はまたアズモンより繞りてエジプトの河にいたり海におよびて盡べし六西の界においては大海をもてその界とすべし是を汝らの西の界とす七汝らの北の界は是のごとし即ち大海よりホル山までを畫り八ホル山よりハマテの入口までを畫りその界をしてゼダデまで亘らしむべし九またその界はジフロンに進みハザルエノンにいたりて盡べし是を汝らの北の界とす一〇汝らの東の界はハザルエノンよりシバムまでを畫るべし一一またその界はアインの東の方においてシバムよりリブラに下りゆくべし斯その界は下りてキンネレテの海の東の傍に抵り一二その界ヨルダンに下りゆきて鹽海におよびて盡べし汝らの國はその周圍の界に依ば是のごとくなるべし一三モーセ、イスラエルの子孫に命じて言けるは是すなはち汝らが鬮をもて獲べき地なりヱホバこれを九の支派と半支派とに與へよと命じたまふ一四そはルベンの子孫の支派とガドの子孫の支派はともにその宗族にしたがひてその產業を受けまたマナセの半支派もその產業を受たればなり一五

この二の支派と半支派とはヱリコに對するヨルダンの彼旁すなはちその東日の出る方においてその產業を受たり一六ヱホバまたモーセに告て言たまはく一七汝らに地を分つ人々の名は是なり即ち祭司エレアザルとヌンの子ヨシユア一八汝らまた各箇の支派より牧伯一人づつを簡びて地を分つことを爲しむべし一九その人々の名は是のごとしユダの支派にてはエフンネの子カルブ二〇シメオンの子孫の支派にてはアミホデの子サムエル二一ベニヤミンの支派にてはキスロンの子エリダデ二二ダンの子孫の支派の牧伯はヨグリの子ブツキ二三ヨセフの子孫すなはちマナセの子孫の支派の牧伯はエポデの子ハニエル二四エフライムの子孫の支派の牧伯はシフタンの子ケムエル二五ゼブルンの子孫の支派の牧伯はパルナクの子エリザバン二六イツサカルの子孫の支派の牧伯はアザンの子パルテエル二七アセルの子孫の支派の牧伯はシロミの子アヒウデ二八ナフタリの子孫の支派の牧伯はアミホデの子パダヘル二九カナンの地においてイスラエルの子孫に產業を分つことをヱホバの命じたまへる人は是のごとし

第三五章 一ヱリコに對するヨルダンの邊なるモアブの平野においてヱホバ、モーセに告て言たまはく二イスラエルの子孫に命じてその獲たる產業の中よりレビ人に住べき邑々を與へしめよ汝らまたその邑々の周圍に郊地をつけてレビ人に與ふべし三その邑々は彼らの住べき所その郊地は彼らの家畜貨財および諸の獸をおくところたるべし四汝らがレビ人に與ふる邑々の郊地は邑の石垣より外四周一千キユビトなるべし五すなはち邑の外に於て東の方に二千キユビト南の方に二千キユビト西の方に二千キユビト北の方に二千キユビトを量り邑をその中にあらしむべし彼らの邑の郊地は是のごとくなるべし六汝らがレビ人に與ふる邑々は是のごとくなるべし即ち逃遁邑六を與ふべし是は人を殺せる者の其處に逃るべきための者なり此外にまた邑四十二を與ふべし七汝らがレビ人に與ふる邑は都合四十八邑これを其郊地とともに與ふべし八汝らイスラエルの子孫の產業の中よりレビ人に邑を與ふるには多く有る者は多く與へ少く有る者は少く與へ各人その獲たる產業にしたがひてその邑々を之に與ふべし九ヱホバまたモーセに告て言たまはく一〇イスラエルの子孫に告てこれに言へ汝らヨルダンを濟りてカナンの地に入ば一一汝らのために邑を設けて逃遁邑と爲し誤りて人を殺せる者をして其處に逃るべからしむべし一二其は汝らが仇打する者を避て逃るべき邑なり是あるは人を殺せる者が未だ會衆の前にたちて審判をうけざる先に殺さるること無らんためなり一三汝らが予ふる邑々の中六をもて逃遁邑とすべし一四すなはち汝らヨルダンの此旁において三の邑を予へカーナンの地において三の邑を予へて逃遁邑となすべし一五この六の邑はイスラエルの子孫と他國人およびその中に寄寓る者の逃遁場たるべし凡て誤りて人を殺せる者は其處に逃ることを得べし一六もし鐵の器をもて人を撃て死しめなば是故殺なり故殺人はかならず殺さ

るべし一七もし人を殺すほどの石を執て人を撃て死しめなば是故殺なり故殺人はかならず殺さるべし一八また人を殺すほどの木の器をとりて人を撃て死しめなば是故殺なり故殺人はかならず殺さるべし一九仇を打つ者その故殺人を殺すことを得すなはち之に遭ふところにて之を殺すことを得るなり二〇もしまた怨恨のために人を推しまたは意ありて人に物を投うちて死しめ二一または敵の心を挾さみ手をもて人を撃て死しめなばその人を撃たる者は必ず殺さるべし是故殺なればなり仇を打つ者これに遭ふところにて之を殺すことを得べし二二然どもし敵の心なくして思はず人を推しまたは意なくして人に物を擲ち二三または人あるを見ずして人を殺すほどの石を之に投つけて死しむること有んにその人これが敵にもあらずまた之を害せんとせしにもあらざる時は二四會衆この律法によりてその人を殺せる者と仇打する者とに審判を言わたすべし二五即ち會衆はその人を殺せる者を仇打する者の手より救ひ出してこれをその逃れゆきたる逃遁邑に還すべしその者は聖膏を灌れたる祭司の長の死るまで其處に居べし二六然ど人を殺し者その逃れし逃遁邑の境を出でたらんに二七仇打する者その逃遁邑の境の外にてこれに遭ことありて仇打する者すなはちその人を殺し者を殺すことあるとも血をながせる罪あらじ二八其は彼は祭司の長の死るまでその逃遁邑に居べき者なればなり祭司の長の死たる後はその人を殺せし者おのれの産業の地にかへることを得べし二九汝ら代々その住所において之を審判の法度とすべし三〇凡て人を殺せる者すなはち故殺人は證人の口にしたがひて殺さるべし然ど只一人の證人の言にしたがひて人を殺すことを爲べからず三一汝ら死に當る故殺人の生命を贖はしむべからず必ずこれを殺すべし三二また逃遁邑に逃れたる者の贖を容て祭司の死ざる前にこれを自己の地に歸り住しむる勿れ三三汝らその居ところの地を汚すべからず血は地を汚すなり地の上に流せる血は之を流せる者の血をもてするに非れば贖ふことを得ざるなり三四汝らその住ところの地すなはち我が居ところの地を汚すなかれ其は我ヱホバ、イスラエルの子孫の中に居ばなり

第三六章一ヨセフの子等の族の中マナセの子マキルの子なるギレアデの子等の族の族長等進みよりてモーセの前とイスラエルの子孫の族長たる牧伯等の前に語り二言けるはイスラエルの子孫にその産業の地を鬮によりて與ふることをヱホバわが主に命じたまへり吾主またわれらの兄弟ゼロペハデの産業をその女子等に與ふべしとヱホバに命ぜられたまふ三彼らもしイスラエルの子孫の中他の支派の人々に嫁ぎなば彼らの産業はわれらの父祖の産業の中より除去れてその適る支派の産業に加はるべし斯是は我らの産業の分の中より除去れん四而して彼らの産業はイスラエルの子孫のヨベルに至りてその適る支派の産業に加はるべし斯かれらの産業は我らの父祖の支派の産業の中より除去れん五モーセ、ヱホバの言にしたがひてイスラエルの子孫に

命じて言ふヨセフの子等の支派の言ところは善し六ゼロペハデの女子等の事につきてヱホバの命じたまふところは是のごとし云く彼らはその心に適ふ者に嫁ぐべけれど惟その父祖の支派の家にのみ嫁ぐべし七然せばイスラエルの子孫の産業この支派よりかの支派に移ることあらじイスラエルの子孫はみな各箇その父祖の支派の産業に止まるべきなり八イスラエルの子孫の支派の中凡そ産業を有る女は皆おのれの父の支派の家に嫁ぐべし然せばイスラエルの子孫おのおのその父祖の産業を保つことを得ん九産業をしてこの支派よりかの支派に移らしむべからずイスラエルの子孫の支派の者は皆おのおの自己の産業にとどまるべし一〇是においてゼロペハデの女子等はヱホバのモーセに命じたまへる如くせり一一即ちゼロペハデの女子等マアラ、テルザ、ホグラ、ミルカおよびノアはその父の兄弟の子等に嫁げり一二彼らはヨセフの子マナセの子等の家に嫁ぎたればその産業はその父の族の支派に止まれり一三是等はヱリコに對するヨルダンの邊なるモアテの平野においてヱホバがモーセによりてイスラエルの子孫に命じたまひし命令と律法なり

申命記

第一章一 是はモーセがヨルダンの此旁の曠野紅海に對する平野に在てパラン、トベル、ラバン、ハゼロテ、デザハブの間にてイスラエルの一切の人に告たる言語なり二 ホレブよりセイル山の路を經てカデシバルネアに至るには十一日路あり三 第四十年の十一月にいたりその月の一日にモーセはイスラエルの子孫にむかひてヱホバが彼等のために自己に授けたまひし命令を悉く告たり四 是はモーセがヘシボンに住るアモリ人の王シホン及びエデレイのアシタロテに住るバシヤンの王オグを殺したる後なりき五 即ちモーセ、ヨルダンの此旁なるモアブの地においてこの律法を解明すことを爲し始めたり曰く六 我らの神ヱホバ、ホレブにて我らに告て言たまへり汝らはこの山に居こと日すでに久し七 汝ら身を轉らして途に進みアモリ人の山に往き其に鄰れる處々に往き平野山地窪地南の地海邊カナン人の地レバノンおよび大河ユフラテ河に至れ八 我この地を汝らの前に置り入てこの地を獲よ是はヱホバが汝らの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓ひて之を彼らとその後の子孫に與へんと言たまひし者なりと九 彼時我なんぢらに語りて言り我は一人にては汝らをわが任として負ことあたはず一〇 汝らの神ヱホバ汝らを衆多ならしめたまひたれば汝ら今日は天空の星のごとくに衆し一一 願くは汝らの先祖の神ヱホバ汝らをして今あるよりは千倍も多くならしめ又なんぢらに約束せしごとく汝らを祝福たまはんことを一二 我一人にては爭で汝らを吾任となしまた汝らの重負と汝らの爭競に當ることを得んや一三 汝らの支派の中より智慧あり知識ありて人に識れたる人々を簡べ我これを汝らの首長となさんと一四 時に汝ら答へて言り汝が言ところの事を爲は善しと一五 是をもて我汝らの支派の首長なる智慧ありて人に知れたる者等を取て汝らの首長となせり即ち之をもて千人の長百人の長五十人の長十人の長となしまた汝らの支派の中の官吏となせり一六 また彼時に我汝らの士師等に命じて言り汝らその兄弟の中の訴訟を聽き此人と彼人の間を正く審判くべし他國の人においても然り一七 汝ら人を視て審判すべからず小き者にも大なる者にも聽べし人の面を懼るべからず審判は神の事なればなり汝らにおいて斷定がたき事は我に持きたれ我これを聽ん一八 我かの時に汝らの爲べき事をことごとく汝らに命じたりき一九 我等の神ヱホバの我等に命じたまひしごとくに我等はホレブより出たち汝らが見知るかの大なる畏しき曠野を通りアモリ人の山を指てガデシバルネアに至れり二〇 時に我なんぢらに言り汝らは我らの神ヱホバの我らに與へたまへるアモリ人の山に至れり二一 視よ汝の神ヱホバこの地を汝の前に置たまふ汝の先祖の神ヱホバの汝に言たまふごとく上り往てこれを獲よ懼るるなかれ猶豫なかれと二二 汝らみな我に近りて言り我等人を我らの先に遣してその地を伺察しめ彼らをして返て何の途より上るべ

きか何の邑々に入べきかを我らに告しめんと二三この言わが目に善と見ければ我汝らの中より十二人の者を取り即ち一の支派より一人宛なりき二四彼等前みゆきて山に登りエシコルの谷にいたり之を伺ひ二五その地の菓物を手に取てわれらの許に持くだり我らに復命して言り我等の神ヱホバの我等に與へたまへる地は善地なりと二六然るに汝等は上り往ことを好まずして汝らの神ヱホバの命令に背けり二七すなはち汝らその天幕にて呟きて言りヱホバわれらを惡むが故に我らをアモリ人の手に付して滅ぼさんとてエジプトの國より我らを導き出せり二八我等は何方に往べきや我らの兄弟等は言ふその民は我らよりも大にして身長たかく邑々は大にしてその石垣は天に達る我らまたアナクの子孫を其處に見たりと斯いひて我らの氣を挫けりと二九時に我なんぢらに言り怖る勿れ懼るるなかれ三〇汝らに先ち行たまふ汝らの神ヱホバ、エジプトにおいて汝らの爲に汝らの目の前にて諸の事をなしたまひし如く今また汝らのために戰ひたまはん三一曠野においては汝また汝の神ヱホバが人のその子を抱くが如くに汝を抱きたまひしを見たり汝らが此處にいたるまでその路すがら常に然ありしなりと三二この言をなせども汝らはなほその神ヱホバを信ぜざりき三三ヱホバは途にありては汝らに先ちゆきて汝らが營を張べき處を尋ね夜は火の中にあり晝は雲の中にありて汝らの行べき途を示したまへる者なり三四ヱホバ汝らの言語の聲を聞て怒り誓て言たまひけらく三五この惡き代の人々の中には我が汝らの先祖等に與へんと誓ひしかの善地を見る者一人も有ざるべし三六只ヱフンネの子カルブのみ之を見ることを得ん彼が踐たりし地をもて我かれとかれの子孫に與ふべし其は彼まったくヱホバに從ひたればなり三七ヱホバまた汝らの故をもて我をも怒て言たまへり汝もまた彼處に入ことを得ず三八汝の前に侍るヌンの子ヨシユアかしこに入べし彼に力をつけよ彼イスラエルをして之を獲しむべし三九また汝等が掠められんと言たりしその汝らの子女および當日になほ善惡を辨へざりし汝らの幼兒等彼ら即ちかしこに入べし我これを彼らに與へて獲さすべし四〇汝らは身をめぐらし紅海の途より曠野に進みいるべしと四一然るに汝ら對て我にいへり我等はヱホバにむかひて罪を犯せり然ばわれらの神ヱホバの凡て我らに命じたまへるがごとく我ら上りゆきて戰はんと汝らおのおの武器を身に帶て軽々しく山に登らんとせり四二時にヱホバわれに言たまひけるは汝かれらに言へ汝ら上りゆくなかれ又戰ふなかれ我なんぢらの中間に居ざればなり汝ら恐らくはその敵に打敗られんと四三われかく汝らに告たるに汝ら聽ずしてヱホバの命令に背き自檀に山に登りたりしが四四その山に住るアモリ人汝等にむかひて出きたり蜂の驅がごとくに汝らを驅ちらしなんぢらをセイルに打敗りてホルマにおよべり四五斯りしかばなんぢら還りきたりてヱホバの前に哭きたりしがヱホバなんぢらの聲を聽たまはず汝らに耳を傾むけたまはざりき四六是をもて

なんぢらは日久しくカデシに居りなんぢらが其處に居たる日數のごとし

第二章一 斯て我らは身を轉らしヱホバの我に命じたまへる如く紅海の途より曠野に進みいりて日久しくセイル山を行めぐりたりしが二 ヱホバつひに我に告て言たまはく三 汝等はこの山を行めぐること既に久し今よりは北に轉りて進め四 汝また民に命じて言へ汝らはセイルに住るヱサウの子孫なる汝らの兄弟の境界を通らんとす彼らはなんぢらを懼れん汝ら深く自ら謹むべし五 彼らを攻る勿れ彼らの地は足の跖に踐ほどをも汝らに與へじ其は我セイル山をエサウにあたへて産業となさしめたればなり六 汝ら金をもて彼らより食物を買て食ひまた金をもて彼らより水をもとめて飮め七 汝の神ヱホバ汝が手に作ところの諸の事において汝をめぐみ汝がこの大なる曠野を通るを看そなはしたまへり汝の神ヱホバこの四十年のあひだ汝とともに在したれば汝は乏しき所あらざりしなり八 我らつひにセイル山に住るエサウの子孫なる我らの兄弟を離れてアラバの路を通りエラテとエジオンゲベルを經て／轉りてモアブの曠野の路に進みいれり九 時にヱホバわれに言たまひけるはモアブ人をなやますなかれまた之を攻て戰ふなかれ彼らの地をば我なんぢらの産業に與へじ其は我ロトの子孫にアルをあたへて産業となさしめたればなりと一〇（ 昔エミ人ここに住り是民は大にして數多くアナク人のごとくに身長高かり一一 アナク人とおなじくレバイムと呼なされたりしがモアブ人はこれをエミ人とよべり一二 ホリ人もまた昔セイルに住をりしがエサウの子孫これを逐滅し之にかはりて其處に住りイスラエルがヱホバに賜はりしその産業の地になせるが如し）一三 茲に汝等今たちあがりゼレデ川を渉れとありければ我らすなはちゼレデ川を渉れり一四 カデシバルネアを出てよりゼレデ川を渉るまでの間の日は三十八年にしてその代の軍人はみな亡果て營中にあらずなりぬヱホバのかれらに誓ひたまひし如し一五 誠にヱホバ手をもて之を攻めこれを營中より滅ぼしたまひければ終にみな亡はてたり一六 かく軍人みなその民の中より死亡たる時にあたりて一七 ヱホバ我に告て言たまひけらく一八 汝は今日モアブの境なるアルを通らんとす一九 汝アンモンの子孫に近く時に之をなやます勿れ之を攻るなかれアンモンの子孫の地は我これを汝らの産業に與へじ其は我これをロトの子孫にあたへて産業となさしめたればなり二〇（ 是もまたレバイムの國とよびなされたり昔レバイムここに住ゐたればなりアンモン人はかれらをザムズミ人とよべり二一 この民は大にして數多くアナク人のごとくに身長たかかりしがヱホバ、アンモン人の前に之を滅ぼしたまひたればアンモン人これを逐はらひて之にかはりて住り二二 その事はセイルに住るエサウの子孫の前にホリ人を滅ぼしたまひしが如し彼らはホリ人を逐はらひ之にかはりて今日まで其處に住をるなり二三 カフトルより出たるカフトリ人はまたかの村々に住ひてガザにまで到るとと

ろのアビ人を滅ぼし之にかはりて其處に居る）二四 汝ら起あがり進みてアルノン河を渉れ我ヘシボンの王アモリ人シホンとこれが國を汝らの手に付す進んで之を獲よ彼を攻て戰へ二五 今日我一天下の國人に汝を畏ぢ汝を懼れしめん彼らは汝の名聲を聞て慄ひ汝の爲に心を苦めんと二六 茲に我ケデモテの曠野よりヘシボンの王シホンに使者をおくり和好の言を述しめたり云く二七 我に汝の國を通らしめよ我は大路を通りて行ん右にも左にも轉らじ二八 汝金をとりて食物を我に賣て食はせ金をとりて水を我にあたへて飮せよ我はただ徒歩にて通らんのみ二九 セイルに住るエサウの子孫とアルに住るモアブ人とが我になしたる如くせよ然せば我はヨルダンを濟りて我らの神ヱホバの我らに賜ひし地にいたらんと三〇 然るにヘシボンの王シホンは我らの通ることを容さざりき是は汝の神ヱホバ彼を汝の手に付さんとてその氣を頑梗しその心を剛愎にしたまひたればなり今日見るが如し三一 時にヱホバ我に言たまひけるは視よ我いまシホンとこれが地を汝に與へんとす進んでその地を獲て汝の產業とせよと三二 茲にシホンその民をことごとく率ゐて出きたりヤハヅに於て戰ひけるが三三 我らの神ヱホバ彼をわれらに付したまひたれば我らかれとその子等とその一切の民を擊殺せり三四 その時に我らは彼の邑々を盡く取りその一切の邑の男 女および兒童を滅して一人をも遺さざりき三五 只その家畜および邑々より取たる掠取物は我らこれを獲て自分の物となせり三六 アルノンの河邊のアロエルおよび河の傍なる邑よりギレアデにいたるまで我らの攻取がたき邑とては一もあらざりき我らの神ヱホバこれを盡くわれらに付したまへり三七 第アンモンの子孫の地ヤボク川の全岸山地の邑々など凡てわれらの神ヱホバが我らの往を禁じたまへる處には汝いたらざりき

第三章一 斯てわれら身をめぐらしてバシヤンの路に上り行けるにバシヤンの王オグその民をことごとく率ゐ出てエデレイに戰はんとせり二 時にヱホバわれに言たまひけらく彼を懼るるなかれ我かれとその一切の民とその地とを汝の手に付さん汝かのヘシボンに住たるアモリ人の王シホンになせし如く彼に爲べしと三 我らの神ヱホバすなはちバシヤンの王オグとその一切の民を我らの手に付したまひしかば我ら之を擊ころして一人をも遺さざりき四 その時に我らこれが邑々をことごとく取り取ざる邑は一も有ざりきその取る邑は六十是すなはちアルゴブの地にしてバシヤンにおけるオグの國なり五 この邑々はみな高き石垣あり門あり關ありて堅固なりき外にまた石垣あらざる邑甚だ多くありき六 我らはヘシボンの王シホンになせし如く之を滅しその一切の邑の男 女および兒童をことごとく滅せり七 惟その一切の家畜とその邑々よりの掠取物とはこれを獲てわれらの物となせり八 その時我らヨルダンの此旁の地をアルノン河よりヘルモン山までアモリ人の王二人の手より取り九（ヘルモンはシドン人これをシリオンと呼びアモリ人これをセニルと呼ぶ）一〇 すな

はち平野の一切の邑ギレアデの全地バシヤンの全地サルカおよびエデレイなどバシヤンに於るオグの國をことごとく取り一一彼レバイムの遺れる者はバシヤンの王オグ只一人なりき彼の寝臺は鐵の寝臺なりき是は今なほアンモンの子孫のラバにあるに非ずや人の肘によれば是はその長九キユビトその寛四キユビトあり一二その時に我らこの地を獲たりしがアルノン河の邊なるアロエルよりの地とギレアデの山地の半とその中の邑々とは我これをルベン人とガド人に與へたり一三またオグの國なりしギレアデの殘餘の地とバシヤンの全地とは我これをマナセの半支派に與へたりアルゴブの全地すなはちバシヤンの全體はレバイムの國と稱へらる一四マナセの子ヤイルはアルゴブの全地を取てゲシユルの境界とマアカの境界にまで至り自分の名にしたがひてバシヤンをハヲテヤイルと名けたりその名今日にいたる一五またマキルには我ギレアデを與へ一六ルベン人とガド人にはギレアデよりアルノン河までを與へその河の眞中をもて界となしまたアンモンの子孫の地の界なるヤボク河にまで至り一七またアラバおよびヨルダンとその邊の地をキンネレテよりアラバの海すなはち鹽海まで之にあたへて東の方ピスガの麓にいたる一八その時我なんぢらに命じて言り汝らの神ヱホバこの地を汝らに與へて產業となさしめたまへば汝ら軍人に身をよろひて汝らの兄弟なるイスラエルの子孫に先だちて渉りゆくべし一九但し汝らの妻と子女と家畜は我が汝らに與へし邑に止るべし我なんぢらが衆多の家畜を有を知なり二〇ヱホバなんぢらに賜ひしごとく汝らの兄弟にも安息を賜ひて彼らもまたヨルダンの彼旁にて汝らの神ヱホバにたまはるところの地を獲て產業となすに至らば汝らおのおの我なんぢらに與へし產業に歸るべし二一かの時に我ヨシユアに命じて言り汝はこの二人の王に汝らの神ヱホバのおこなひたまふ所の事を目に視たりヱホバまた汝が往ところの諸の國にも斯のごとく行ひたまはん二二汝これを懼るる勿れ汝らの神ヱホバ汝らのために戰ひたまはんと二三當時われヱホバに求めて言り二四主ヱホバよ汝は汝の大なる事と汝の強き手を僕に見すことを始めたまへり天にても地にても何の神か能なんぢの如き事業を爲し汝のごとき能力を有んや二五願くは我をして渉りゆかしめヨルダンの彼旁なる美地美山およびレバノンを見ことを得させたまへと二六然るにヱホバなんぢらの故をもて我を怒り我に聽ことを爲たまはずヱホバすなはち我に言たまひけるは既に足りこの事を重て我に言なかれ二七汝ピスガの嶺にのぼり目を擧て西北南 東を望み汝の目をもて其地を觀よ汝はヨルダンを濟ることを得ざるべければなり二八汝ヨシユアに命じ之に力をつけ之を堅うせよ其はこの民を率ゐて渉りゆき之に汝が見るところの地を獲さする者は彼なればなりと二九かくて我らはベテベオルに對する谷に居る

第四章一今イスラエルよ我が汝らに教ふる法度と律法を聽てこれを行へ然せば汝らは生ることを得汝らの先祖の神ヱホバの

汝らに賜ふ地にいりて之を産業となすを得べし二我が汝らに命ずる言は汝らこれを増しまたは減すべからず我が汝らに命ずる汝らの神ヱホバの命令を守るべし三汝らはヱホバがバアルペオルの事によりて行ひたまひし所を目に觀たり即ちバアルペオルに従ひたる人々は汝の神ヱホバことごとく之を汝らの中間より滅し去たまひしが四汝らの神ヱホバに附て離れざりし汝等はみな今日までも生ながらへ居るなり五我はわが神ヱホバの我に命じたまひし如くに法度と律法を汝らに教へ汝らをしてその往て獲ところの地において之を行はしめんとせり六然ば汝ら之を守り行ふべし然する事は國々の民の目の前において汝らの智慧たり汝らの知識たるなり彼らこの諸の法度を聞て言んこの大なる國人は必ず智慧あり知識ある民なりと七われらの神ヱホバは我らがこれに龥もとむるに常に我らに近く在すなり何の國人か斯のごとく大にして神これに近く在すぞ八また何の國人か斯のごとく大にして今日我が汝らの前に立るこの一切の律法の如き正しき法度と律法とを有るぞ九汝深く自ら愼み汝の心を善く守れ恐くは汝その目に觀たる事を忘れん恐くは汝らの生存らふる日の中に其等の事汝の心を離れん汝それらの事を汝の子汝の孫に教へよ一〇汝がホレブにおいて汝の神ヱホバの前に立る日にヱホバわれに言たまひけらく我ために民を集めよ我これに吾言を聴しめ之をしてその世に存らふる日の間我を畏るることを學ばせまたその子女を教ふることを爲しめんとすと一一是において汝らは前みよりて山の麓に立ちけるが山は火にて焼てその燄は中天に沖り暗くして雲あり黒雲深かりき一二時にヱホバ火の中より汝らに言ひたまひしが汝らは言詞の聲を聞る而已にて聲の外は何の像をも見ざりし一三ヱホバすなはち其契約を汝らに述て汝らに之を守れと命じたまへり是すなはち十誡にしてヱホバこれを二枚の石の板に書したまふ一四かの時にヱホバ我に命じて汝らに法度と律法を教へしめたまへり是汝らにその往て獲ところの地にて之を爲しめんとてなりき一五ホレブにおいてヱホバ火の中より汝らに言ひたまひし日には汝ら何の像をも見ざりしなり然ば汝ら深く自ら愼み一六道をあやまりて自己のために偶像を刻む勿れ物の像は男の形にもあれ女の形にもあれ凡て造るなかれ一七即ち地の上にをる諸の獣の像空に飛ぶ諸の鳥の像一八地に匍ふもろもろの物の像地の下の水の中に居る諸の魚の像など凡て造る勿れ一九汝目をあげて天を望み日月星辰など凡て天の衆群を觀誘はれてこれを拝み之に事ふる勿れ是は汝の神ヱホバが一天下の萬國の人々に分ちたまひし者なり二〇ヱホバ汝らを取り汝らを鐵の爐の中すなはちエジプトより導きいだして自己の産業の民となしたまへること今日のごとし二一然るにヱホバなんぢらの故によりて我を怒り我はヨルダンを濟りゆくことを得ずまた汝の神ヱホバが汝の産業に賜ひしその美地に入ことを得ずと誓ひたまへり二二我はこの地に死ざるを得ず我はヨルダンを濟りゆくことあたはずなんぢらは濟り

ゆきて之を獲て產業となすことを得ん二三 汝ら自ら愼み汝らの神ヱホバが汝らに立たまひし契約を忘れて汝の神ヱホバの禁じたまふ偶像など凡て物の像を刻むことを爲なかれ二四 汝の神ヱホバは燬盡す火嫉妬神なり二五 汝ら子を擧け孫を得てその地に長く居におよびて若し道をあやまりて偶像など凡て物の像を刻み汝の神ヱホバの惡と觀たまふ事をなしてその震怒を惹おこすことあらば二六 我今日天と地を呼て證となす汝らはかならずそのヨルダンを濟りゆきて獲たる地より速かに滅亡うせん汝らはその上に汝らの日を永うする能はず必ず滅びうせん二七 ヱホバなんぢらを國々に散したまべしヱホバの汝らを逐やりたまふ國々の中に汝らの遺る者はその數寡なからん二八 其處にて汝らは人の手の作なる見ことも聞ことも食ふことも嗅こともなき木や石の神々に事へん二九 但しまた其處にて汝その神ヱホバを求むるあらんに若し心をつくし精神を盡してこれを求めなば之に遇ん三〇 後の日にいたりて汝艱難にあひて此もろもろの事の汝に臨まん時に汝もしその神ヱホバにたち歸りてその言にしたがはば三一 汝の神ヱホバは慈悲ある神なれば汝を棄ず汝を滅さずまた汝の先祖に誓ひたりし契約を忘れたまはざるべし三二 試に問へ汝の前に過さりし日神が地の上に人を造りたまひし日より已來天の此極より彼極までに曾て斯のごとき大なる事ありしや是のごとき事の聞えたる事ありしや三三 曾て人神が火の中より言ふ聲を汝らが聞るごとくに聞て尚生る者ありしや三四 汝らの神ヱホバがエジプトにおいて汝らの目の前にて汝らの爲に諸の事を爲たまひし如く曾て試探と徵證と奇蹟と戰爭と強き手と伸たる腕と大なる恐嚇をもて來りこの民をかの民の中より領いださんとせし神ありしや三五 汝にこの事を示ししはヱホバはすなはち神にしてその外には有ことなしと汝に知しめんがためなりき三六 汝を敎へんためにヱホバ天より汝に聲を聞しめ地に於てはまたその大なる火を汝に示したまへり即ち汝はその言の火の中より出るを聞り三七 ヱホバ汝の先祖等を愛したまひしが故にその後の子孫を選び大なる能力をもて親ら汝をエジプトより導き出したまひ三八 汝よりも大にして強き國々の民を汝の前より逐はらひ汝をその地に導きいりて之を汝の產業に與へんとしたまふこと今日のごとくなり三九 然ば汝今日知て心に思念べし上は天下は地においてヱホバは神にいましその外には神有こと無し四〇 今日わが汝に命ずるヱホバの法度と命令を守るべし然せば汝と汝の後の子孫祥を得汝の神ヱホバの汝にたまふ地において汝その日を永うすることを得て疆なからん四一 斯てモーセ、ヨルダンの此旁日の出る方にないて邑三を別てり四二 是素より怨なきに誤りて人を殺せる者をして其處に逃れしむる爲なり其邑の一に逃るる時はその人生命を全うするを得べし四三 即ち一は曠野の内の平野にあるベゼル是はルベン人のためなり一はギレアデのラモテ是はガド人のためなり一はバシヤンのゴラン是はマナセ人のためなり四四 モーセがイスラエルの子孫の前に示

しし律法は是なり四五イスラエルの子孫のエジプトより出たる後モーセこの誡命と法度と律法を之に述たり四六即ちヨルダンの此旁なるアモリ人の王シホンの地にありベテペオルに對する谷に於て之を述たりシホンはヘシボンに住をりしがモーセとイスラエルの子孫エジプトより出きたりし後これを撃ほろぼして四七之が地を獲またバシヤンの王オグの地を獲たり彼ら二人はアモリ人の王にしてヨルダンの此旁日の出る方に居り四八その獲たる地はアルノン河の邊なるアロエルよりヘルモンといふシオン山にいたり四九ヨルダンの此旁すなはちその東の方なるアラバの全部を括てアラバの鹽海に達しピスガの麓におよべり

第五章一茲にモーセ、イスラエルをことごとく召て之に言ふイスラエルよ今日我がなんぢらの耳に語るところの法度と律法とを聽きこれを學びこれを守りて行へよ二我らの神ヱホバ、ホレブに於て我らと契約を結びたまへり三この契約はヱホバわれらの先祖等とは結ばずして我ら今日此に生存へをる者と結びたまへり四ヱホバ山において火の中より汝らと面をあはせて言ひたまひしが五その時我はヱホバと汝らの間にたちてヱホバの言を汝らに傳へたり汝ら火に懼れて山にのぼり得ざりければなり六ヱホバすなはち言たまひけらく我は汝の神ヱホバ汝をエジプトの地その奴隷たる家より導き出せし者なり七汝わが面の前に我の外何物をも神とすべからず八汝自己のために何の偶像をも彫むべからず又上は天にある者下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず九之を拜むべからず之に事ふべからず我ヱホバ汝の神は嫉む神なれば我を惡む者にむかひては父の罪を子に報いて三四代におよぼし一〇我を愛しわが誡命を守る者には恩惠を施して千代にいたるなり一一汝の神ヱホバの名を妄に口にあぐべからずヱホバは己の名を妄に口にあぐる者を罰せではおかざるべし一二安息日を守りて之を聖潔すること汝の神ヱホバの汝に命ぜしごとくすべし一三六日のあひだ勞きて汝の一切の業を爲べし一四七日は汝の神ヱホバの安息なれば何の業務をも爲べからず汝も汝の男子女子も汝の僕 婢も汝の牛驢馬も汝の諸の家畜も汝の門の中にをる他國の人も然り斯なんぢ僕婢をして汝とおなじく息ましむべし一五汝誌ゆべし汝かつてエジプトの地に奴隷たりしに汝の神ヱホバ強き手と伸べたる腕とをもて其處より汝を導き出したまへり是をもて汝の神ヱホバなんぢに安息日を守れと命じたまふなり一六汝の神ヱホバの汝に命じたまふごとく汝の父母を敬へ是汝の神ヱホバの汝に賜ふ地において汝の日の長からんため汝に祥のあらんためなり一七汝殺す勿れ一八汝姦淫する勿れ一九汝盜むなかれ二〇汝その隣に對して虛妄の證據をたつる勿れ二一汝その隣人の妻を貪るなかれまた隣人の家 田野 僕 婢牛驢馬ならびに凡て汝の隣人の所有を貪るなかれ二二是等の言をヱホバ山において火の中雲の中黑雲の中より大なる聲をもて汝らの全會衆に告たまひしが此外には言ことを爲ず之を二枚の

石の版に書して我に授けたまへり二三 時にその山は火にて焼をりしが汝ら黒暗の中よりその聲の出るを聞におよびて汝らの支派の長および長老等我に進みよりて二四 言けるは視よ我らの神ヱホバその榮光とその大なる事を我らに示したまひて我らその聲の火の中より出るを聞り我ら今日ヱホバ人と言ひたまふてその人の尚生るを見る二五 我らなんぞ死にいたるべけんや此大なる火われらを焼ほろぼさんとするなり我らもし此上になほ我らの神ヱホバの聲を聞ば死べし二六 凡そ肉身の者の中誰か能く活神の火の中より言ひたまふ聲を我らのごとくに聞てなほ生る者あらんや二七 請ふ汝進みゆきて我らの神ヱホバの言たまふところを都て聽き我らの神ヱホバの汝に告給ふところを都て我らに告よ我ら聽て行はんと二八 ヱホバなんぢらが我に語れる言の聲を聞てヱホバ我に言たまひけるは我この民が汝に語れる言の聲を聞り彼らの言ところは皆善し二九 只願しきは彼等が斯のごとき心を懐いて恒に我を畏れ吾が誡命を守りてその身もその子孫も永く福祉を得にいたらん事なり三〇 汝ゆきて彼らに言へ汝らおのおのその天幕にかへるべしと三一 然ど汝は此にて我傍に立て我なんぢに諸の誡命と法度と律法とを告しめさん汝これを彼らに教へ我が彼らに與へて産業となさしむる地において彼らにこれを行はしむべしと三二 然ば汝らの神ヱホバの汝等に命じたまふごとくに汝ら謹みて行ふべし右にも左にも曲るべからず三三 汝らの神ヱホバの汝らに命じたまふ一切の道に歩め然せば汝らは生ることを得かつ福祉を得て汝らの産業とする地に汝らの日を長うすることを得ん

第六章

一 是すなはち汝らの神ヱホバが汝らに教へよと命じたまふところの誡命と法度と律法とにして汝らがその濟りゆきて獲ところの地にて行ふべき者なり二 是は汝と汝の子および汝の孫をしてその生命ながらふる日の間つねに汝の神ヱホバを畏れしめて我が汝らに命ずるその諸の法度と誡命とを守らしめんため又なんぢの日を永からしめんための者なり三 然ばイスラエルよ聽て謹んでこれを行へ然せば汝は福祉を獲汝の先祖の神ヱホバの汝に言たまひしごとく乳と蜜の流る國にて汝の數おほいに增ん四 イスラエルよ聽け我らの神ヱホバは惟一のヱホバなり五 汝心を盡し精神を盡し力を盡して汝の神ヱホバを愛すべし六 今日わが汝に命ずる是らの言は汝これをその心にあらしめ七 勤て汝の子等に教へ家に坐する時も路を歩む時も寢る時も興る時もこれを語るべし八 汝またこれを汝の手に結びて號となし汝の目の間におきて誌となし九 また汝の家の柱と汝の門に書記すべし一〇 汝の神ヱホバその汝の先祖アブラハム、イサク、ヤコブにむかひて汝に與んと誓ひたりし地に汝を入しめん時は汝をして汝が建たる者にあらざる大なる美しき邑々を得させ一一 汝が盈せるに非る諸の佳物を盈せる家を得させ汝が堀たる者にあらざる堀井を得させたまふべし汝は食ひて飽ん一二 然る時は汝慎め汝をエジプトの地奴隸たる家より導き出ししヱホバを忘

るる勿れ一三 汝の神ヱホバを畏れてこれに事へその名を指て誓ふことをすべし一四 汝ら他の神々すなはち汝の四周なる民の神々に從ふべからず一五 汝らの中にいます汝の神ヱホバは嫉妬神なれば恐くは汝の神ヱホバ汝にむかひて怒を發し汝を地の面より滅し去たまはん一六 汝マツサにおいて試みしごとく汝の神ヱホバを試むるなかれ一七 汝らの神ヱホバの汝らに命じたまへる誡命と律法と法度とを汝ら謹みて守るべし一八 汝ヱホバの義と視善と視たまふ事を行ふべし然せば汝福祉を獲かつヱホバの汝の先祖に誓ひたまひしかの美地に入てこれを產業となすことを得ん一九 ヱホバまたその言たまひし如く汝の敵をことごとく汝の前より逐はらひたまはん二〇 後の日に至りて汝の子なんぢに問てこの汝らの神ヱホバが汝らに命じたまひし誡命と法度と律法とは何のためなるやと言ば二一 汝その子に告て言べし我らは昔エジプトにありてパロの奴隸たりしがヱホバ強き手をもて我らをエジプトより導き出したまへり二二 即ちヱホバわれらの目の前において大なる畏るべき徵と奇蹟をエジプトとパロとその全家とに示したまひ二三 我らを其處より導き出して其曾て我等の先祖に誓ひし地に我らを入せて之を我らに與へたまへり二四 而してヱホバ我らにこの諸の法度を守れと命じたまふ是われらをして我らの神ヱホバを畏れて常に幸ならしめんため又ヱホバ今日のごとく我らを守りて生命を保たしめんとてなりき二五 我らもしその命ぜられたるごとく此一切の誡命を我らの神ヱホバの前に謹んで守らば是われらの義となるべしと

第七章一 汝の神ヱホバ汝が往て獲べきところの地に汝を導きいり多の國々の民ヘテ人ギルガシ人アモリ人カナン人ペリジ人ヒビ人ヱブス人など汝よりも數多くして力ある七の民を汝の前より逐はらひたまはん時二 すなはち汝の神ヱホバかれらを汝に付して汝にこれを擊せたまはん時は汝かれらをことごとく滅すべし彼らと何の契約をもなすべからず彼らを憫むべからず三 また彼らと婚姻をなすべからず汝の女子を彼の男子に與ふべからず彼の女子を汝の男子に娶るべからず四 其は彼ら汝の男子を惑はして我を離れしめ之をして他の神々に事へしむるありてヱホバこれがために汝らにむかひて怒を發し俄然に汝を滅したまふにいたるべければなり五 汝らは反て斯かれらに行ふべし即ちかれらの壇を毀ちその偶像を打摧きそのアシラ像を斫たふし火をもてその雕像を焚べし六 其は汝は汝の神ヱホバの聖民なればなり汝の神ヱホバは地の面の諸の民の中より汝を擇びて己の寶の民となしたまへり七 ヱホバの汝らを愛し汝らを擇びたまひしは汝らが萬の民よりも數多かりしに因にあらず汝らは萬の民の中にて最も小き者なればなり八 但ヱホバ汝らを愛するに因りまた汝らの先祖等に誓し誓を保たんとするに因てヱホバ強き手をもて汝らを導きいだし汝らを其奴隸たりし家よりエジプトの王パロの手より贖ひいだしたまへるなり九 汝知べし汝の神ヱホバは神にましまし眞實の神にましまして之を愛しその誡命を守る

者には契約を保ち恩惠をほどこして千代にいたり一〇また之を惡む者には覿面にその報をなしてこれを滅ぼしたまふヱホバは己を惡む者には緩ならず覿面にこれに報いたまふなり一一然ば汝わが今日汝に命ずるところの誡命と法度と律法とを守りてこれを行ふべし一二汝らもし是らの律法を聽きこれを守り行はば汝の神ヱホバ汝の先祖等に誓ひし契約を保ちて汝に恩惠をほどこしたまはん一三即ち汝を愛し汝を惠み汝の數を増したまひその昔なんぢに與へんと汝らの先祖等に誓たりし地において汝の兒女をめぐみ汝の地の產物穀物酒油等を殖し汝の牛の產汝の羊の產を増たまふべし一四汝は惠まるること萬の民に愈らん汝らの中および汝らの家畜の中には男も女も子なき者は無るべし一五ヱホバまた諸の疾病を汝の身より除きたまひ汝らが知る彼のエジプトの惡き病を汝の身に臨ましめず但汝を惡む者に之を臨ませたまふべし一六汝は汝の神ヱホバの汝に付したまはんところの民をことごとく滅しつくすべし彼らを憫み見べからずまた彼らの神に事ふべからずその事汝の罟となればなり一七汝是らの民は我よりも衆ければ我いかでか之を逐はらふことを得んと心に謂ふか一八汝かれらを懼るるなかれ汝の神ヱホバがパロとエジプトに爲たまひしところの事を善く憶えよ一九即ち汝が眼に見たる大なる試煉と徵證と奇蹟と強き手と伸たる腕とを憶えよ汝の神ヱホバこれをもて汝を導き出したまへり是のごとく汝の神ヱホバまた汝が懼るる一切の民に爲たまふべし二〇即ち汝の神ヱホバ黄蜂を彼らの中に遣りて終に彼らの遺れる者と汝の面を避て匿れたる者とを滅したまはん二一汝かれらを懼るる勿れ其は汝の神ヱホバ能力ある畏るべき神汝らの中にいませばなり二二汝の神ヱホバ是等の國人を漸々に汝の前より逐はらひたまはん汝は急速に彼らを滅しつくす可らず恐くは野の獸殖て汝に逼らん二三汝の神ヱホバかれらを汝に付し大にこれを惶れ懼かしめて終にこれを滅し盡し二四彼らの王等を汝の手に付したまはん汝かれらの名を天が下より削るべし汝には當ることを得る者なくして汝つひに之を滅ぼし盡すに至らん二五汝かれらの神の雕像を火にて焚べし之に著せたる銀あるひは金を貪るべからず之を己に取べからず恐くは汝これに因て罟にかからん是は汝の神ヱホバの憎みたまふ者なれば也二六憎むべき物を汝の家に携へいるべからず恐くは汝も其ごとくに詛はるる者とならん汝これを大に忌み痛く嫌ふべし是は詛ふべき者なればなり

第八章

一我が今日なんぢに命ずるところの諸の誡命を汝ら謹んで行ふべし然せば汝ら生ることを得かつ殖増しヱホバの汝の先祖等に誓たまひし地に入てこれを產業となすことを得ん二汝記念べし汝の神ヱホバこの四十年の間汝をして曠野の路に歩ましめたまへり是汝を苦しめて汝を試驗み汝の心の如何なるか汝がその誡命を守るや否やを知んためなりき三即ち汝を苦しめ汝を饑しめまた汝も知ず汝の先祖等も知ざるところのマナ

を汝らに食はせたまへり是人はパン而已にて生る者にあらず人はヱホバの口より出る言によりて生る者なりと汝に知しめんが爲なり四この四十年のあひだ汝の衣服は古びて朽ず汝の足は腫ざりし五汝また心に念ふべし人のその子を懲戒ごとく汝の神ヱホバも汝を懲戒たまふなり六汝の神ヱホバの誡命を守りその道にあゆみてこれを畏るべし七汝の神ヱホバ汝をして美地に到らしめたまふ是は谷にも山にも水の流あり泉あり瀦水ある地八小麥大麥葡萄無花果および石榴ある地油橄欖および蜜のある地九汝の食ふ食物に缺るところなく汝に何も乏しきところあらざる地なりその地の石はすなはち鐵その山よりは銅を掘とるべし一〇汝は食ひて飽き汝の神ヱホバにその美地を己にたまひし事を謝すべし一一汝わが今日なんぢに命ずるヱホバの誡命と律法と法度とを守らずして汝の神ヱホバを忘るるにいたらざるやう愼めよ一二汝食ひて飽き美しき家を建て住ふに至り一三また汝の牛羊殖增し汝の金銀殖增し汝の所有みな殖增にいたらん時に一四恐くは汝心に驕りて汝の神ヱホバを忘れんヱホバは汝をエジプトの地奴隸たる家より導き出し一五汝をみちびきて彼の大にして畏るべき曠野すなはち蛇火の蛇蠍などありて水あらざる乾ける地を通り汝らのために堅き磐の中より水を出し一六汝の先祖等の知ざるマナを曠野にて汝に食せたまへり是みな汝を苦しめ汝を試みて終に福祉を汝にたまはんとてなりき一七汝我力とわが手の動作によりて我この資財を得たりと心に謂なかれ一八汝の神ヱホバを憶えよ其はヱホバ汝に資財を得の力をたまふなればなり斯したまふは汝の先祖等に誓し契約を今日の如く行はんとてなり一九汝もし汝の神ヱホバを忘れ果て他の神々に從がひ之に事へこれを拜むことを爲ば我今日汝らに證をなす汝らはかならず滅亡ん二〇ヱホバの汝らの前に滅ぼしたまひし國々の民のごとく汝らも滅亡べし是なんぢらの神ヱホバの聲に汝らしたがはざればなり

第九章一イスラエルよ聽け汝は今日ヨルダンを濟りゆき汝よりも大にして強き國々に入てこれを取んとすその邑々は大にして石垣は天に達り二その民は汝が知ところのアナクの子孫にして大くかつ身長たかし汝また人の言るを聞り云く誰かアナクの子孫の前に立ことを得んと三汝今日知る汝の神ヱホバは燬つくす火にましまして汝の前に進みたまふとヱホバかならず彼らを滅ぼし彼らを汝の前に攻伏たまはんヱホバの汝に言たまひし如く汝かれらを逐はらひ速かに彼らを滅ぼすべし四汝の神ヱホバ汝の前より彼らを逐はらひたまはん後に汝心に言なかれ云く我の義がためにヱホバ我をこの地に導きいりてこれを獲させたまへりとそはこの國々の民の惡きがためにヱホバ之を汝の前より逐はらひたまふなり五汝の往てその地を獲は汝の義きによるにあらず又なんぢの心の直によるに非ずこの國々の民惡きが故に汝の神ヱホバこれを汝の前より逐はらひたまふなりヱホバの斯したまふはまた汝の先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓た

りし言を行はんとてなり六 汝知る汝の神ヱホバの汝に此美地を與へて獲させたまふは汝の義きによるに非ず汝は項の強き民なればなり七 汝曠野に於て汝の神ヱホバを怒せし事を憶えて忘るる勿れ汝らはエジプトの地を出し日より此處にいたる日まで常にヱホバに悖れり八 ホレブにおいて汝らヱホバを怒せたればヱホバ汝らを怒りて汝らを滅ぼさんとしたまへり九 かの時われ石の板すなはちヱホバの汝らに立たまへる契約を載る石の板を受んとて山に上り四十日四十夜山に居りパンも食ず水も飲ざりき一〇 ヱホバ我に神の指をもて書しるしたる文字ある石の板二枚を授けたまへりその上には集會の日にヱホバが山において火の中より汝らに告たまひし言をことごとく載す一一 すなはち四十日四十夜過し時ヱホバ我にその契約を載る板なる石の板二枚を授け一二 而してヱホバ我に言たまひけるは汝起あがりて速かに此より下れ汝がエジプトより導き出しし民は惡き事を行ふなり彼らは早くもわが彼らに命ぜし道を離れて自己のために偶像を鋳造れりと一三 ヱホバまた我に言たまひけるは我この民を觀たり視よ是は項の強き民なり一四 我を阻むるなかれ我かれらを滅ぼしその名を天が下より抹さり汝をして彼らよりも強くまた大なる民とならしむべし一五 是に於て我身をめぐらして山を下りけるが山は火にて燒をる又その契約の板二枚はわが兩の手にあり一六 斯て我觀しに汝らはその神ヱホバにむかひて罪を犯し自己のために犢を鋳造りて早くもヱホバの汝らに命じたまひし道を離れたりしかば一七 我その二枚の板をとりてわが兩の手よりこれを擲ち汝らの目の前にこれを碎けり一八 而して我は前のごとく四十日四十夜ヱホバの前に伏て居りパンも食ず水も飲ざりき是は汝らヱホバの目の前に惡き事をおこなひ之を怒せて大に罪を獲たればなり一九 ヱホバ忿怒を發し憤恨をおこし汝らを怒りて滅ぼさんとしたまひしかば我懼れたりしが此度もまたヱホバ我に聽たまへり二〇 ヱホバまた痛くアロンを怒りてこれを滅ぼさんとしたまひしかば我その時またアロンのために祈れり二一 斯て我なんぢらが作りて罪を犯し犢を取り火をもて之を燒きこれを搗きこれを善く打碎きて細き塵となしその塵を山より流れ下るところの渓流に投棄たり二二 汝らはタベラ、マツサおよびキブロテハツタワにおいてもまたヱホバを怒らせたり二三 またヱホバ、カデシバルネアより汝らを遣さんとせし時言たまひけるは汝ら上りゆきて我がなんぢらに與ふる地を獲て產業とせよと然るに汝らはその神ヱホバの命に悖り之を信ぜずまたその言を聽ざりき二四 我が汝らを識し日より以來汝らは常にヱホバに悖りしなり二五 かの時ヱホバ汝らを滅さんと言たまひしに因て我最初に伏たる如く四十日四十夜ヱホバの前に伏し二六 ヱホバに祈りて言けるは主ヱホバよ汝その大なる權能をもて贖ひ強き手をもてエジプトより導き出しし汝の民汝の產業を滅したまふ勿れ二七 汝の僕アブラハム、イサク、ヤコブを念たまへ此民の剛愎と惡と罪とを鑑みたまふ勿れ二八 恐くは汝が我

らを導き出したまひし國の人言んヱホバその約せし地にかれらを導きいること能はざるに因りまた彼らを惡むに因て彼らを導き出して曠野に殺せりと二九 抑かれらは汝の民汝の產業にして汝が強き能力をもて腕を伸て導き出したまひし者なり

第一〇章 一 かの時ヱホバ我に言たまひけるは汝石の板二枚を前のごとくに斫て作りまた木の櫃一箇を作りて山に登り來れ二 汝が碎きしかの前の板に載たる言を我その板に書さん汝これをその櫃に藏むべし三 我すなはち合歡木をもて櫃一箇を作りまた石の板二枚を前のごとくに斫て作りその板二枚を手に執て山に登りしかば四 ヱホバかの集會の日に山において火の中より汝らに告たるその十誡を前に書したるごとくその板に書し而してヱホバこれを我に授けたまへり五 是に於て我身を轉らして山より下りその板を我が造りしかの櫃に藏めたり今なほその中にありヱホバの我に命じたまへる如し六 斯てイスラエルの子孫はヤカン人の井より出たちてモセラにいたれりアロン其處に死て其處に葬られその子エレアザルこれに代りて祭司となれり七 又其處より出たちてグデゴダにいたりグデゴダより出たちてヨテバにいたれりこの地には水の流多かりき八 かの時ヱホバ、レビの支派を區分てヱホバの契約の櫃を舁しめヱホバの前に立てこれに事へしめ又ヱホバの名をもて祝することを爲せたまへり其事今日にいたる九 是をもてレビはその兄弟等の中に分なくまた產業なし惟ヱホバその產業たり汝の神ヱホバの彼に言たまへる如し一〇 我は前の日數のごとく四十日四十夜山に居しがヱホバその時にもまた我に聽たまへりヱホバ汝を滅すことを好みたまはざりき一一 斯てヱホバ我に言たまひけるは汝起あがり民に先だち進み行き彼らをして我が之に與へんとその先祖に誓ひたる地に入てこれを獲せしめよ一二 イスラエルよ今汝の神ヱホバの汝に要めたまふ事は何ぞや惟是のみ即ち汝がその神ヱホバを畏れその一切の道に歩み之を愛し心を盡し精神を盡して汝の神ヱホバに事へ一三 又我が今日汝らに命ずるヱホバの誡命と法度とを守りて身に福祉を得るの事のみ一四 夫天と諸天の天および地とその中にある者は皆汝の神ヱホバに屬す一五 然るにヱホバただ汝の先祖等を悅こびて之を愛しその後の子孫たる汝らを萬の民の中より選びたまへり今日のごとし一六 然ば汝ら心に割禮を行へ重て項を強くする勿れ一七 汝の神ヱホバは神の神主の主大にしてかつ權能ある畏るべき神にましまし人を偏り視ずまた賄賂を受ず一八 孤兒と寡婦のために審判を行ひまた旅客を愛してこれに食物と衣服を與へたまふ一九 汝ら旅客を愛すべし其は汝らもエジプトの國に旅客たりし事あればなり二〇 汝の神ヱホバを畏れ之に事へこれに附從がひその名を指て誓ふことをすべし二一 彼は汝の讃べき者また汝の神にして汝が目に見たる此等の大なる畏るべき事業をなしたまへり二二 汝の先祖等は僅か七十人にてエジプトに下りたりしに今汝の神ヱホバ汝をして天空の星のごとくに多くならしめたまへり

第一一章一 然ば汝の神ヱホバを愛し常にその職守と法度と律法と誡命とを守るべし二 汝らの子女は知ずまた見ざれば我これに言ず惟汝らに言ふ汝らは今日すでに汝らの神ヱホバの懲戒とその大なる事とその強き手とその伸たる腕とを知り三 またそのエジプトの中においてエジプト王パロとその全國にむかひておこなひたまひし徵證と行爲とを知り四 またヱホバがエジプトの軍勢とその馬とその車とに爲たまひし事すなはち彼らが汝らの後を追きたれる時に紅海の水を彼らの上に覆ひかからしめ之を滅ぼして今日までその跡方なからしめし事を知り五 また此處にいたるまで曠野に於て汝らに爲たまひし事等を知り六 またそのルベンの子孫なるエリアブの子等ダタンとアビラムに爲たまひし事すなはちイスラエルの全家の眞中において地その口を啓きて彼らとその家族とその天幕とその足下に立つ者とを呑つくしし事を知なり七 即ち汝らはヱホバの行ひたまひし此諸の大なる作爲を目に觀たり八 然ば汝ら我今日汝らに命ずる誡命を盡く守るべし然せば汝らは強くなり汝らが濟りゆきて獲んとする地にいりて之を獲ことを得九 またヱホバが汝らと汝らの後の子孫にあたへんと汝らの先祖等に誓たまひし地乳と蜜との流るる國において汝らの日を長うすることを得ん一〇 汝らが進みいりて獲んとする地は汝らが出來りしエジプトの地のごとくならず彼處にては汝ら種を播き足をもて之に灌漑げりその状蔬菜園におけるが如し一一 然ど汝らが濟りゆきて獲ところの地は山と谷の多き地にして天よりの雨水を吸ふなり一二 その地は汝の神ヱホバの顧みたまふ者にして年の始より年の終まで汝の神ヱホバの目常にその上に在り一三 汝らもし我今日なんぢらに命ずる吾命令を善守りて汝らの神ヱホバを愛し心を盡し精神を盡して之に事へなば一四 我なんぢらの地の雨を秋の雨春の雨ともに時に隨ひて降し汝らをしてその穀物を收入しめ且酒と油を獲せしめ一五 また汝の家畜のために野に草を生ぜしむべし汝は食ひて飽ん一六 汝ら自ら愼むべし心迷ひ翻へりて他の神々に事へこれを拜む勿れ一七 恐くはヱホバ汝らにむかひて怒を發して天を閉たまひ雨ふらず地物を生ぜずなりて汝らそのヱホバに賜れる美地より速かに滅亡るに至らん一八 汝ら是等の我言を汝らの心と魂との中に藏めまた之を汝らの手に結びて徵となし汝らの目の間におきて誌となし一九 之をなんぢらの子等に敎へ家に坐する時も路を歩む時も寢る時も興る時もこれを語り二〇 また汝の家の柱となんぢの門に之を書記べし二一 然せばヱホバが汝らの先祖等に與へんと誓ひたまひし地に汝らのをる日および汝らの子等のをる日は數多くして天の地を覆ふ日の久きが如くならん二二 汝らもし我が汝らに命ずる此一切の誡命を善く守りてこれを行ひ汝等の神ヱホバを愛しその一切の道に歩み之に附從がはば二三 ヱホバこの國々の民をことごとく汝らの前より逐はらひたまはん而して汝らは己よりも大にして能力ある國々を獲にいたるべし二四 凡そ汝らが足の蹠にて踏む處は皆汝らの有となら

ん即ち汝らの境界は曠野よりレバノンに亘りまたユフラテ河といふ河より西の海に亘るべし二五 汝らの前に立ことを得る人あらじ汝らの神ヱホバ汝らが踏いるところの地の人々をして汝らを怖ぢ汝らを畏れしめたまふこと其嘗て汝らに言たまひし如くならん二六 視よ我今日汝らの前に祝福と呪詛とを置く二七 汝らもし我が今日なんぢらに命ずる汝らの神ヱホバの誡命に遵はば祝福を得ん二八 汝らもし汝らの神ヱホバの誡命に遵はず翻へりて我が今日なんぢらに命ずる道を離れ素知ざりし他の神々に從がひなば呪詛を蒙らん二九 汝の神ヱホバ汝が往て獲んとする地に汝を導きいりたまふ時は汝ゲリジム山に祝福を置きエバル山に呪詛をおくべし三〇 この二山はヨルダンの彼旁アラバに住るカナン人の地において日の出る方の道の後にありギルガルに對ひてモレの橡樹と相去こと遠らざるにあらずや三一 汝らはヨルダンを濟り汝らの神ヱホバの汝らに賜ふ地に進みいりて之を獲んとす必ずこれを獲て其處に住ことを得ん三二 然ば我が今日なんぢらに授くるところの法度と律法を汝らことごとく守りて行ふべし

第一二章 一 是は汝の先祖等の神ヱホバの汝に與へて獲させたまふところの地において汝らが世に生存ふる日の間常に守り行ふべき法度と律法となり二 汝らが逐はらふ國々の民がその神々に事へし處は山にある者も岡にある者も青樹の下にある者もみな之を盡く毀ち三 その壇を毀ちその柱を碎きそのアシラ像を火にて燒きまたその神々の雕像を斫倒して之が名をその處より絶去べし四 但し汝らの神ヱホバには汝ら是のごとく爲べからず五 汝らの神ヱホバがその名を置んとて汝らの支派の中より擇びたまふ處なるヱホバの住居を汝ら尋ね求めて其處にいたり六 汝らの燔祭と犧牲汝らの什一と汝らの手の擧祭汝らの願還と自意の禮物および汝らの牛羊の首出等を汝ら其處に携へ詣り七 其處にて汝らの神ヱホバの前に食をなし又汝らと汝らの家族皆その手を勞して獲たる物をもて快樂を取べし是なんぢの神ヱホバの祝福によりて獲たるものなればなり八 汝ら彼處にては我らが今日此に爲ごとく各々その目に善と見ところを爲べからす九 汝らは尚いまだ汝らの神ヱホバの賜ふ安息と産業にいたらざるなり一〇 然ど汝らヨルダンを渡り汝らの神ヱホバの汝らに與へて獲させたまふ地に住にいたらん時またヱホバ汝らの周圍の敵を除き汝らに安息を賜ひて汝等安泰に住ふにいたらん時は一一 汝らの神ヱホバその名を置んために一の處を擇びたまはん汝ら其處に我が命ずる物を都て携へゆくべし即ち汝らの燔祭と犧牲と汝らの什一と汝らの手の擧祭および汝らがヱホバに誓願をたてて献んと誓ひし一切の佳物とを携へいたるべし一二 汝らは汝らの男子女子僕婢とともに汝らの神ヱホバの前に樂むべしまた汝らの門の内にをるレビ人とも然すべし其は是は汝らの中間に分なく産業なき者なればなり一三 汝愼め凡て汝が自ら擇ぶ處にて燔祭を献ることをする勿れ一四 唯汝らの支派の

一の中にヱホバの選びたまはんその處に於て汝燔祭を献げまた我が汝に命ずる一切の事を爲べし一五 彼處にては汝の神ヱホバの汝にたまふ祝福に循ひて汝その心に好む獸畜を汝の門の内に殺してその肉を食ふことを得 即ち汚れたる人も潔き人もこれを食ふを得ること羚羊と牡鹿に於けるが如し一六 但しその血は食ふべからず水の如くにこれを地に灌ぐべし一七 汝の穀物と酒と油の什一および汝の牛羊の首出ならびに汝が立し誓願を還すための禮物と汝の自意の禮物および汝の手の擧祭の品は汝これを汝の門の内に食ふべからず一八 汝の神ヱホバの選びたまふ處において汝の神ヱホバの前に汝これを食ふべし即ち汝の男子女子僕 婢および汝の門の内にをるレビ人とともに之を食ひ汝の手を勞して獲たる一切の物をもて汝の神ヱホバの前に快樂を取べし一九 汝 愼め汝が世に生存ふる日の間レビ人を棄る勿れ二〇 汝の神ヱホバ 汝に言しごとくに汝の境界を廣くしたまふに及び汝 心に肉を食ふことを欲して言ん我肉を食はんと然る時は汝すべてその心に好む肉を食ふことを得べし二一 もし汝の神ヱホバのその名を置んとて擇びたまへる處 汝と離るること遠からば我が汝に命ぜし如く汝そのヱホバに賜はれる牛羊を宰り汝の門の内にて凡てその心に好む者を食ふべし二二 牡鹿と羚羊を食ふがごとく汝これを食ふことを得 汚れたる者も潔き者も均くこれを食ふことを得るなり二三 唯堅く愼みてその血を食はざれ血はこれが生命なればなり汝その生命を肉とともに食ふべからず二四 汝これを食ふ勿れ水のごとくにこれを地に灌ぐべし二五 汝 血を食はざれ汝もし斯ヱホバの善と觀たをふ事を爲ば汝の身と汝の後の子孫とに福祉あらん二六 唯 汝の献げたる聖物と誓願の物とはこれをヱホバの擇びたまふ處に携へゆくべし二七 汝 燔祭を献る時はその肉と血を汝の神ヱホバの壇に供ふべくまた犠牲を献る時はその血を汝の神ヱホバの壇の上に灌ぎその肉を食ふべし二八 わが汝に命ずる是等の言を汝 聽て守れ汝かく汝の神ヱホバの善と觀正と觀たまふ事を爲ば汝と汝の後の子孫に永く福祉あらん二九 汝の神ヱホバ 汝が往て逐はらはんとする國々の民を汝の前より絶去たまひて汝つひにその國々を獲てその地に住にいたらん時は三〇 汝みづから愼め彼らが汝の前に亡びたる後 汝かれらに倣ひて罟にかかる勿れまた彼らの神を尋求めこの國々の民は如何なる樣にてその神々に事へたるか我もその如くにせんと言ことなかれ三一 汝の神ヱホバに向ひては汝 然す可らず彼らはヱホバの忌かつ憎みたまふ諸の事をその神にむかひて爲しその男子女子をさへ火にて焚てその神々に献げたり三二 我が汝らに命ずるこの一切の言をなんぢら守りて行ふべし汝これを増なかれまた之を減すなかれ

第一三章 一 汝らの中に預言者あるひは夢 者興りて徴證と奇蹟を汝に見し二 汝に告て我らは今より汝と我とが是まで識ざりし他の神々に從ひて之に事へんと言ことあらんにその徴證または奇蹟これが言ごとく成とも三 汝その預言者または夢 者の言に

聽したがふ勿れ其は汝等の神ヱホバ汝らが心を盡し精神を盡して汝らの神ヱホバを愛するや否やを知んとて斯なんぢらを試みたまふなればなり四 汝らは汝らの神ヱホバに從ひて歩み之を畏れその誡命を守りその言に遵ひ之に事へこれに附從ふべし五 その預言者または夢 者をば殺すべし是は彼汝らをして汝らをエジプトの國より導き出し奴隷の家より贖ひ取たる汝らの神ヱホバに背かせんとし汝の神ヱホバの汝に歩めと命ぜし道より汝を誘ひ出さんとして語るに因てなり汝斯して汝の中より惡を除き去べし六 汝の母の生る汝の兄弟または汝の男子女子または汝の懐の妻または汝と身命を共にする汝の友潜に汝を誘ひて言あらん汝も汝の先祖等も識ざりし他の神々に我ら往て事へん七 即ち汝の周圍にある國々の神の或は汝に近く或は汝に遠くして地の此極より地の彼極までに鎮り坐る者に我ら事へんと斯言ことあるとも八 汝これに從ふ勿れ之に聽なかれ之を惜み視る勿れ之を憐むなかれ之を庇ひ匿す勿れ九 汝かならず之を殺すべし之を殺すには汝まづ之に手を下し然る後に民みな手を下すべし一〇 彼はエジプトの國奴隷の家より汝を導き出したまひし汝の神ヱホバより汝を誘ひ離さんと求めたれば汝石をもて之を撃殺すべし一一 然せばイスラエルみな聞て懼れ重ねて斯る惡き事を汝らの中に行はざらん一二 汝聞に汝の神ヱホバの汝に與へて住しめたまへる汝の邑の一に一三 邪僻なる人々興り我らは今まで識ざりし他の神々に往て事へんと言てその邑に住む人を誘ひ惑はしたりと言あらば一四 汝これを尋ね探り善問べし若その事眞にその言 確にして斯る憎むべき事汝らの中に行はれたらば一五 汝かならずその邑に住む者を刃にかけて撃ころしその邑とその中に居る一切の者およびその家畜を刃にかけて盡く撃ころすべし一六 またその中より獲たる掠取物は凡てこれをその衢に集め火をもてその邑とその一切の掠取物をことごとく焚て汝の神ヱホバに供ふべし是は永く荒邱となりて再び建なほさるること無るべきなり一七 斯汝この詛はれし物を少許も汝の手に附おく勿れ然せばヱホバその烈しき怒を靜め汝に慈悲を加へて汝を憐れみ汝の先祖等に誓ひしごとく汝の數を衆くしたまはん一八 汝もし汝の神ヱホバの言を聽き我が今日なんぢに命ずるその一切の誡命を守り汝の神ヱホバの善と觀たまふ事を行はば是のごとくなるべし

第一四章一 汝らは汝等の神ヱホバの子等なり汝ら死る者のために己が身に傷くべからずまた己が目の間にあたる頂の髪を剃べからず二 其は汝は汝の神ヱホバの聖民なればなりヱホバは地の面の諸の民の中より汝を擇びて己の寶の民となし給へり三 汝穢はしき物は何をも食ふ勿れ四 汝らが食ふべき獸畜は是なり即ち牛 羊 山羊五 牡鹿 羚羊 小鹿 麣 麞 麈 麕など六 凡て獸畜の中蹄の分れ割て二つの蹄を成る反芻獸は汝ら之を食ふべし七 但し反芻者と蹄の分れたる者の中汝らの食ふべからざる者は是なり即ち駱駝 兎および山鼠 是らは反芻ども蹄わかれ

ざれば汝らには汚れたる者なり八 また豚是は蹄わかるれども反芻ことをせざれば汝らには汚たる者なり汝ら是等の物の肉を食ふべからずまたその死體に捫るべからず九 水にをる諸の物の中是のごとき者を汝ら食ふべし即ち凡て翅と鱗のある者は皆汝ら之を食ふべし一〇 凡て翅と鱗のあらざる者は汝らこれを食ふべからず是は汝らには汚たる者なり一一 また凡て潔き鳥は皆汝らこれを食ふべし一二 但し是等は食ふべからず即ち鵰黄鷹鳶一三 鸇 鷹 黑鷹の類一四 各種の鴉の類一五 駝鳥 梟 鴎 雀鷹の類一六 鸛 鷺 白鳥一七 鶚 鸕 大鷹 鵜一八 鶴 鸚鵡の類 鷸および蝙蝠一九 また凡て羽翼ありて匍ところの者は汝らには汚たる者なり汝らこれを食ふべからず二〇 凡て羽翼をもて飛ところの潔き物は汝らこれを食ふべし二一 凡そ自ら死たる者は汝ら食ふべからず汝の門の内にをる他國の人に之を與へて食しかべし又これを異邦人に賣も可し汝は汝の神ヱホバの聖民なればなり汝山羊羔をその母の乳にて煮べからず二二 汝かならず年々に田畝に種蒔て獲ところの産物の什一を取べし二三 而して汝の神ヱホバの前すなはちヱホバのその名を置んとて擇びたまはん處において汝の穀物と酒と油の什一を食ひまた汝の牛羊の首出を食ひ斯して汝の神ヱホバを常に畏るることを學ぶべし二四 但しその路行に勝がたくして之を携へいたること能はざる時または汝の神ヱホバのその名を置んとて擇びたまへる處 汝を離るること餘りに遠き時は汝もし汝の神ヱホバの恩惠に潤ふ身ならば二五 その物を金に易へその金を包みて手に執り汝の神ヱホバの擇びたまへる處に往き二六 凡て汝の心の好む物をその金に易べし即ち牛羊葡萄酒濃酒など凡て汝が心に欲する物をもとめ其處にて汝の神ヱホバの前にこれを食ひ汝と汝の家族ともに樂むべし二七 汝の門の内にをるレビ人を棄る勿れ是は汝の中間に分なく産業なき者なればなり二八 三年の末に到る毎にその年の産物の十分の一を盡く持出してこれを汝の門の内に儲蓄ふべし二九 然る時は汝の中間に分なく産業なきレビ人および汝の門の内にをる他國の人と孤子と寡婦など來りてこれを食ひて飽ん斯せば汝の神ヱホバ汝が手をもて爲ところの諸の事において汝に福祉を賜ふべし

第一五章

一 七年の終に至るごとに汝放釋を行ふべし二 その放釋の例は是のごとし凡てその鄰に貸ことを爲しその債主は之を放釋べしその鄰またはその兄弟にこれを督促べからず是はヱホバの放釋と稱へらるればなり三 異國の人には汝これを督促ことを得されど汝の兄弟に貸たる物は汝の手よりこれを放釋べし四 斯せば汝らの中間に貧 者なからん其は汝の神ヱホバその汝に與へて産業となさしめたまふ地において大に汝を祝福たまふべければなり五 只汝もし謹みて汝の神ヱホバの言に聽したがひ我が今日なんぢに命ずるこの誡命を盡く守り行ふに於ては是のごとくなるべし六 汝の神ヱホバ 汝に言しごとく汝を祝福たまふべければ汝は衆多の國人に貸ことを得べし然ど借こと有じ

また汝は衆多の國人を治めん然ど彼らは汝を治むることあらじ七汝の神ヱホバの汝に賜ふ地において若汝の兄弟の貧き人汝の門の中にをらばその貧しき兄弟にむかひて汝の心を剛愎にする勿れまた汝の手を閉る勿れ八かならず汝の手をこれに開き必ずその要むる物をこれに貸あたへてこれが乏しきを補ふべし九汝愼め心に惡き念を起し第七年放釋の年近づけりと言て汝の貧き兄弟に目をかけざる勿れ汝もし斯之に何をも與へずしてその人これがために汝をヱホバに訴へなば汝罪を獲ん一〇汝かならず之に與ふることを爲べしまた之に與ふる時は心に惜むこと勿れ其は此事のために汝の神ヱホバ汝の諸の事業と汝の手の諸の働作とに於て汝を祝福たまふべければなり一一貧き者は何時までも國にたゆること無るべければ我汝に命じて言ふ汝かならず汝の國の中なる汝の兄弟の困難者と貧乏者とに汝の手を開くべし一二汝の兄弟たるヘブルの男またはヘブルの女汝の許に賣れたらんに若六年なんぢに事へたらば第七年に汝これを放ちて去しむべし一三汝これを放ちて去しむる時は空手にて去しむべからず一四汝の群と禾場と搾場の中より贈物を取て之が肩に負すべし即ち汝の神ヱホバの汝を祝福て賜ふところの物をこれに與ふべし一五汝記憶べし汝はエジプトの國に奴隷たりしが汝の神ヱホバ汝を贖ひ出したまへり是故に我今日この事を汝に命ず一六その人もし汝と汝の家を愛し汝と偕にをるを善として汝にむかひ我汝を離れて去を好まずと言ば一七汝錐を取て彼の耳を戸に刺とほすべし然せば彼は永く汝の僕たるべし汝の婢にもまた是のごとくすべし一八汝これを放ちて去しむるを難き事と見るべからず其は彼が六年汝に事へて働きしは工價を取る傭人の二倍に當ればなり汝斯なさば汝の神ヱホバ汝が凡て爲ところの事に於て汝をめぐみたまふべし一九汝の牛羊の產る初子は皆これを聖別て汝の神ヱホバに歸せしむべし汝の牛の初子をもちゐて何の工作をも爲べからず又汝の羊の初子の毛を剪べからず二〇汝の神ヱホバの選びたまへる處にてヱホバの前に汝と汝の家族年々にこれを食ふべし二一然どその畜もし疵ある者すなはち跛足盲目なるなど凡て惡き疵ある者なる時は汝の神ヱホバにこれを宰りて献ぐべからず二二汝の門の内にこれを食ふべし汚れたる者も潔き者も均くこれを食ふを得ること牡鹿と羚羊のごとし二三但しその血はこれを食ふべからず水のごとくにこれを地に灌ぐべし

第一六章

一汝アビブの月を守り汝の神ヱホバに對ひて逾越節を行なへ其はアビブの月に於て汝の神ヱホバ夜の間に汝をエジプトより導き出したまひたればなり二汝すなはちヱホバのその名を置んとて擇びたまふ處にて羊および牛を宰り汝の神ヱホバの前に逾越節をなすべし三酵いれたるパンを之とともに食ふべからず七日の間酵いれぬパン即ち憂患のパンを之とともに食ふべし其は汝エジプトの國より出る時は急ぎて出たればなり斯おこなひて汝その世に生存ふる日の間恒に汝がエジプト

の國より出來し日を誌ゆべし四その七日の間は汝の四方の境の内にパン酵の見ること有しむべからず又なんぢが初の日の薄暮に宰りたる者の肉を翌朝まで存しおくべからず五汝の神ヱホバの汝に賜ふ汝の門の内にて逾越の牲畜を宰ることを爲べからず六惟汝の神ヱホバのその名を置んとて選びたまふ處にて汝薄暮の日の入る頃汝がエジプトより出たる時刻に逾越の牲畜を宰るべし七而して汝の神ヱホバの選びたまふ處にて汝これを燔て食ひ朝におよびて汝の天幕に歸り往くべし八汝六日の間酵いれぬパンを食ひ第七日に汝の神ヱホバの前に會を開くべし何の職業をも爲べからず九汝また七七日を計ふべし即ち穀物に鎌をいれ初る時よりしてその七七日を計へ始むべきなり一〇而して汝の神ヱホバの前に七週の節筵を行なひ汝の神ヱホバの汝を祝福たまふ所にしたがひ汝の力に應じてその心に願ふ禮物を献ぐべし一一斯して汝と汝の男子女子僕婢および汝の門の内に居るレビ人ならびに汝らの中間にをる賓旅と孤子と寡婦みなともに汝の神ヱホバのその名を置んとて選びたまふ處にて汝の神ヱホバの前に樂むべし一二汝その昔エジプトに奴隷たりしことを誌え是等の法度を守り行ふべし一三汝禾場と搾場の物を収藏たる時七日の間結茅節をおこなふべし一四節筵をなす時には汝と汝の男子女子僕婢および汝の門の内なるレビ人賓旅孤子寡婦など皆ともに樂むべし一五ヱホバの選びたまふ處にて汝七日の間なんぢの神ヱホバの前に節筵をなすべし汝の神ヱホバ汝の諸の産物と汝が手の諸の工事とについて汝を祝福たまふべければ汝かならず樂むことを爲べし一六汝の中の男は皆なんぢの神ヱホバの擇びたまふ處にて一年に三次即ち酵いれぬパンの節と七週の節と結茅の節とに於てヱホバの前に出べし但し空手にてヱホバの前に出べからず一七各人汝の神ヱホバに賜はる恩惠にしたがひて其力におよぶ程の物を献ぐべし一八汝の神ヱホバの汝に賜ふ一切の邑々に汝の支派に循がひて士師と官人を立べし彼らはまだ義き審判をもて民を審判べし一九汝審判を枉べからず人を偏視るべからずまた賄賂を取べからず賄賂は智者の目を暗まし義者の言を枉ればなり二〇汝ただ公義を而已求むべし然せば汝生存へて汝の神ヱホバの汝に賜ふ地を獲にいたらん二一汝の神ヱホバのために築くところの壇の傍にアシラの木像を立べからず二二また汝の神ヱホバの惡みたまふ偶像を己のために造るべからず

第一七章一凡て疵あり惡き處ある牛羊は汝これを汝の神ヱホバに献ぐべからず斯る者は汝の神ヱホバの忌嫌ひたまふ者なればなり二汝の神ヱホバの汝に賜ふ邑々の中にて汝らの中間に若し或男または女汝の神ヱホバの目の前に惡事を行ひてその契約に悖り三往て他の神々に事へてこれを拜み我が命ぜざる日や月や天の衆群などを拜むあらんに四その事を汝に告る者ありて汝これを聞き細かにこれを査べ見るにその事眞にその言確にしてイスラエルの中に斯る憎むべき事行はれ居たらば五汝その

惡き事を行へる男または女を汝の門に曳いだし石をもてその男または女を撃殺すべし六殺すべき者は二人の證人または三人の證人の口に依てこれを殺すべし惟一人の證人の口のみをもて之を殺すことは爲べからず七斯る者を殺すには證人まづその手を之に加へ然る後に民みなその手を加ふべし汝かく惡事を汝らの中より除くべし八汝の門の内に訟へ爭ふ事おこるに當りその事件もし血を相流す事または權理を相爭ふ事または互に相擊たる事などにして汝に裁判かぬる者ならば汝起あがりて汝の神ヱホバの選びたまふ處に上り往き九祭司なるレビ人と當時の士師とに詣りて問べし彼ら裁判の言詞を汝に示さん一〇ヱホバの選びたまふ處にて彼らが汝に示す命令の言のごとくに汝行ひ凡て彼らが汝に敎ふるごとくに愼みて爲べし一一即ち故らが汝に敎ふる律法の命令に循がひ彼らが汝に告る裁判に依て行ふべし彼らが汝に示す言に違ふて右にも左にも偏るべからず一二人もし自ら擅斷にしその汝の神ヱホバの前に立て事ふる祭司またはその士師に聽したがはざる有ばその人を殺しイスラエルの中より惡を除くべし一三然せば民みな聞て畏れ重て擅斷に事をなさざらん一四汝の神ヱホバの汝に賜ふ地に汝いたり之を獲て其處に住におよべる時汝もし我周圍の一切の國人のごとくに我も王をわが上に立んと言あらば一五只なんぢの神ヱホバの選びたまふ人を汝の上にたてて王となすべしまた汝の上に王を立るには汝の兄弟の中の人をもてすべし汝の兄弟ならざる他國の人を汝の上に立べからず一六但し王となれる者は馬を多く得んとすべからず又馬を多く得んために民を率てエジプトに還るべからず其はヱホバなんぢらに向ひて汝らはこの後かさねて此路に歸るべからずと宣ひたればなり一七また妻を多くその身に有て心を迷すべからずまた金銀を己のために多く蓄積べからず一八彼その國の位に坐するにいたらば祭司なるレビ人の前にある書よりしてこの律法を一の書に書寫さしめ一九世に生存ふる日の間つねにこれを己の許に置て誦み斯してその神ヱホバを畏るることを學びこの律法の一切の言と是等の法度を守りて行ふべし二〇然せば彼の心その兄弟の上に高ぶること無くまたその誡命を離れて右にも左にもまがること無してその子女ともにその國においてイスラエルの中にその日を永うすることを得ん

第一八章一祭司たるレビ人およびレビの支派は都てイスラエルの中に分なく產業なし彼らはヱホバの火祭の品とその產業の物を食ふべし二彼らはその兄弟の中間に產業を有じヱホバこれが產業たるたり即ちその曾て之に言たまひしが如し三祭司が民より受べき分は是なり即ち凡て犧牲を獻ぐる者は牛にもあれ羊にもあれその肩と兩方の頰と胃とを祭司に與ふべし四また汝の穀物と酒と油の初および羊の毛の初をも之にあたふべし五其は汝の神ヱホバ汝の諸の支派の中より彼を選び出し彼とその子孫をして永くヱホバの名をもて立て奉事をなさしめたまへば

なり六レビ人はイスラエルの全地の中何の處に居る者にもあれその寄寓たる汝の邑を出てヱホバの選びたま處に到るあらば七その人はヱホバの前に侍るその諸兄弟のレビ人とおなじくその神ヱホバの名をもて奉事をなすことを得べし八その人の得て食ふ分は彼らと同じ但しその父の遺業を賣て獲たる物はこの外に彼に屬す九汝の神ヱホバの汝に賜ふ池にいたるに及びて汝その國々の民の憎むべき行爲を倣ひ行ふなかれ一〇汝らの中間にその男子女子をして火の中を通らしむる者あるべからずまた卜筮する者邪法を行なふ者禁厭する者魔術を使ふ者一一法印を結ぶ者憑鬼する者巫覡の業をなす者死人に詢ことをする者あるべからず一二凡て是等の事を爲す者はヱホバこれを憎たまふ汝の神ヱホバが彼らを汝の前より逐はらひたまひしも是等の憎むべき事のありしに因てなり一三汝の神ヱホバの前に汝完き者たれ一四汝が逐はらふ故の國々の民は邪法師卜筮師などに聽ことをなせり然ど汝には汝の神ヱホバ然する事を許したまはず一五汝の神ヱホバ汝の中汝の兄弟の中より我のごとき一箇の預言者を汝のために興したまはん汝ら之に聽ことをすべし一六是まったく汝が集會の日にホレブにおいて汝の神ヱホバに求めたる所なり即ち汝言けらく我をして重てこの我神ヱホバの聲を聞しむる勿れまた重てこの大なる火を見さする勿れ恐くは我死んと一七是においてヱホバ我に言たまひけるは彼らの言る所は善し一八我かれら兄弟の中より汝のごとき一箇の預言者を彼らのために興し我言をその口に授けん我が彼に命ずる言を彼ことごとく彼らに告べし一九凡て彼が吾名をもて語るところの吾言に聽したがはざる者は我これを罰せん二〇但し預言者もし我が語れと命ぜざる言を吾名をもて縱肆に語りまたは他の神々の名をもて語ることを爲すならばその預言者は殺さるべし二一汝あるひは心に謂ん我ら如何にしてその言のヱホバの言たまふ者にあらざるを知んと二二然ば若し預言者ありてヱホバの名をもて語ることをなすにその言就ずまた效あらざる時は是ヱホバの語りたまふ言にあらずしてその預言者が縱肆に語るところなり汝その預言者を畏るるに及ばず

第一九章 一汝の神ヱホバこの國々の民を滅し絶ち汝の神ヱホバこれが地を汝に賜ふて汝つひにこれを獲その邑々とその家々に住にいたる時は二汝の神ヱホバの汝に與へて產業となさしめたまふ地の中に三の邑を汝のために區別べし三而して汝これに道路を開きまた汝の神ヱホバの汝に與へて產業となさしめたまふ地の全體を三の區に分ち凡て人を殺せる者をして其處に逃れしむべし四人を殺せる者の彼處に逃れて生命を全うすべきその事は是のごとし即ち凡て素より惡むことも無く知ずしてその鄰人を殺せる者五例ば人木を伐んとてその鄰人とともに林に入り手に斧を執て木を斫んと擊おろす時にその頭の鐵柯より脱てその鄰人にあたりて之を死しめたるが如き是なり斯る人は是等の邑の一に逃れて生命を全うすべし六恐くは復仇する者

心熱してその殺人者を追かけ道路長きにおいては遂に追しきて之を殺さん然るにその人は素より之を惡みたる者にあらざれば殺さるべき理あらざるなり 七 是をもて我なんぢに命じて三の邑を汝のために區別べしと言り 八 汝の神ヱホバ汝の先祖等に誓ひしごとく汝の境界を廣め汝の先祖等に與へんと言し地を盡く汝に賜ふにいたらん時 九 即ち汝我が今日なんぢに命ずるこの一切の誡命を守りてこれを行ない汝の神ヱホバを愛し恒にその道に歩まん時はこの三の外にまた三の邑を增加ふべし 一〇 是汝の神ヱホバの汝に與へて產業となさしめたまふ地に辜なき者の血を流すこと無らんためなり斯せずばその血汝に歸せん 一一 然ども人その隣人を惡みて之を附覘ひ起かかり撃てその生命を傷ひて之を死しめ而してこの邑の一に逃れたる事あらば 一二 その邑の長老等人を遣て之を其處より曳きたらしめ復仇者の手にこれを付して殺さしむべし 一三 汝かれを憫み視るべからず辜なき者の血を流せる咎をイスラエルより除くべし然せば汝に福祉あらん 一四 汝の神ヱホバの汝に與へて獲させたまふ地の中において汝が嗣ぐところの產業に汝の先人の定めたる汝の鄰の地界を侵すべからず 一五 何の惡にもあれ凡てその犯すところの罪は只一人の證人によりて定むべからず二人の證人の口によりまたは三人の證人の口によりてその事を定むべし 一六 もし偽妄の證人起りて某の人は惡事をなせりと言たつること有ば 一七 その相爭ふ二人の者ヱホバの前に至り當時の祭司と士師の前に立べし 一八 然る時士師詳細にこれを査べ視るにその證人もし偽妄の證人にしてその兄弟にむかひて虛妄の證をなしたる者なる時は 一九 汝兄弟に彼が蒙らさんと謀れる所を彼に蒙らし斯して汝らの中より惡事を除くべし 二〇 然せばその遺れる者等聞て畏れその後かさねて斯る惡き事を汝らの中におこなはじ 二一 汝憫み視ることをすべからず生命は生命眼は眼歯は歯手は手足は足をもて償はしむべし

第二〇章 一 汝その敵と戰はんとて出るに當り馬と車を見また汝よりも數多き民を見るもこれに懼るる勿れ其は汝をエジプトの國より導き上りし汝の神ヱホバなんぢとともに在せばなり 二 汝ら戰鬪に臨む時は祭司進みいで民に告て 三 之に言べしイスラエルよ聽け汝らは今日なんぢらの敵と戰はんとて進み來れり心に臆する勿れ懼るるなかれ倉皇なかれ彼らに怖るるなかれ 四 其は汝らの神ヱホバ汝らとともに行き汝らのために汝らの敵と戰ひて汝らを救ひたまふべければなりと 五 斯てまた有司等民に告て言べし誰か新しき家を建て之に移らざる者あるかその人は家に歸りゆくべし恐くは自己戰鬪に死て他の人これに移らん 六 誰か菓物園を作りてその果を食はざる者あるかその人は家に歸りゆくべし恐くは自己戰鬪に死て他の人これを食はん 七 誰か女と契りて之を娶らざる者あるかその人は家に歸りゆくべし恐くは自己戰鬪に死て他の人これを娶らんと 八 有司等なほまた民に告て言べし誰か懼れて心に臆する者あるかその人は家に歸りゆく

べし恐くはその兄弟たちの心これが心のごとく挫けんと九有司等かく民に告ることを終たらば軍勢の長等を立て民を率しむべし一〇汝ある邑に進みゆきて之を攻んとする時は先これに平穏に降ることを勸むべし一一その邑もし平穏に降らんと答へてその門を汝に開かば其處なる民をして都て汝に貢を納しめ汝に事へしむべし一二其もし平穏に汝に降ることを肯んぜずして汝と戰かはんとせば汝これを攻べし一三而して汝の神ヱホバこれを汝の手に付したまふに至らば刃をもてその中の男を盡く擊殺すべし一四惟その婦女嬰孩家畜および凡てその邑の中にて汝が奪ひ獲たる物は盡く己に取べし抑 汝がその敵より奪ひ獲たる物は汝の神ヱホバの汝に賜ふ者なれば汝これをもて樂むべし
一五 汝を離るることの遠き邑々すなはち是等の國々に屬せざるところの邑々には凡てかくのごとく行なふべし一六但し汝の神ヱホバの汝に與へて產業となさしめたまふこの國々の邑々においては呼吸する者を一人も生し存べからず一七即ちヘテ人アモリ人カナン人ペリジ人ヒビ人ヱブス人などは汝かならずこれを滅ぼし盡して汝の神ヱホバの汝に命じたまへる如くすべし一八斯するは彼らがその神々にむかひて行ふところの憎むべき事を汝らに教へて之を倣ひおこなはしめ汝らをして汝らの神ヱホバに罪を獲せしむる事のなからんためなり一九汝久しく邑を圍みて之を攻取んとする時においても斧を振ふて其處の樹を砍枯すべからず是は汝の食となるべき者なり且その城攻において田野の樹あに人のごとく汝の前に立ふさがらんや二〇但し果を結ばざる樹と知る樹はこれを砍り枯し汝と戰ふ邑にむかひて之をもて雲梯を築きその降るまで之を攻るも宜し

第二一章

一 汝の神ヱホバの汝に與へて獲させたまふ地において若し人殺されて野に仆れをるあらんに之を殺せる者の誰なるかを知ざる時は二汝の長老等と士師等出きたりその人の殺されをる處よりその四周の邑々までを度るべし三而してその人の殺されをる處に最も近き邑すなはちその邑の長老等は未だ使はず未だ軛を負せて牽ざるところの少き牝牛を取り四邑の長老等その牝牛を耕すことも種蒔こともせざる流つきせぬ谷に牽ゆきその谷において牝牛の頸を折べし五その時は祭司たるレビの子孫等其處に進み來るべし彼らは汝の神ヱホバが選びて己に事へしめまたヱホバの名をもて祝することを爲しめたまふ者にて一切の訴訟と一切の爭競は彼らの口によりて決定るべきが故なり六而してその人の殺されをりし處に最も近き邑の長老等その谷にて頸を折たる牝牛の上において手を洗ひ七答へて言べし我らの手はこの血を流さず我らの目はこれを見ざりしなり八ヱホバよ汝が贖ひし汝の民イスラエルを赦したまへこの辜なき者の血を流せる罰を汝の民イスラエルの中に降したまふ勿れと斯せば彼らその血の罪を赦されん九汝かくヱホバの善と觀たまふ事をおこなひその辜なき者の血を流せる咎を汝らの中より除くべし一〇汝出て汝の敵と戰ふにあたり汝の神ヱホバこれを汝の手に付

したまひて汝これを俘虜となしたる時[一一]汝もしその俘虜の中に貌美しき女あるを見てこれを悦び取て妻となさんとせば[一二]汝の家の中にこれを携へゆくべし而して彼はその髪を剃り爪を截り[一三]まだ俘虜の衣服を脱すてて汝の家に居りその父母のために一月のあひだ哀哭べし然る後なんぢ故の處に入りてこれが夫となりこれを汝の妻とすべし[一四]その後汝もし彼を好まずなりなば彼の心のままに去ゆかしむべし決して金のためにこれを賣べからず汝すでにこれを犯したれば之を嚴く待遇べからざるなり[一五]人二人の妻ありてその一人は愛する者一人は惡む者ならんにその愛する者と惡む者の二人ともに男の子を生ありてその長子もし惡む婦の產る者なる時は[一六]その子等に己の所有を嗣しむる日にその惡む婦の產る長子を措てその愛する婦の產る子を長子となすべからず[一七]必ずその惡む者の產る子を長子となし己の所有を分つ時にこれには二倍を與ふべし是は己の力の始にして長子の權これに屬すればなり[一八]人にもし放肆にして背悖る子ありその父の言にも母の言にも順はず父母これを責るも聽ことをせざる時は[一九]その父母これを執へてその處の門にいたり邑の長老等に就き[二〇]邑の長老たちに言べし我らの此子は放肆にして背悖る者我らの言にしたがはざる者放蕩にして酒に耽る者なりと[二一]然る時は邑の人みな石をもて之を擊殺すべし汝かく汝らの中より惡事を除き去べし然せばイスラエルみな聞て懼れん[二二]人もし死にあたる罪を犯して死刑に遇ことありて汝これを木に懸て曝す時は[二三]翌朝までその體を木の上に留おくべからず必ずこれをその日の中に埋むべし其は木に懸らるる者はヱホバに詛はるる者なればなり斯するは汝の神ヱホバの汝に賜ふて產業となさしめたまふ地の汚れざらんためなり

第二二章

[一]汝の兄弟の牛または羊の迷ひをるを見てこれを見すて置べからず必ずこれを汝の兄弟に牽ゆきて歸すべし[二]汝の兄弟もし汝に近からざるか又は汝かれを知ざる時はこれを汝の家に牽ゆきて汝の許におき汝の兄弟の尋ねきたるに及びて之を彼に還すべし[三]汝の兄弟の驢馬におけるも是のごとく爲しまたその衣服におけるも斯なすべし凡て汝の兄弟の失ひたる遺失物を得たる時も汝かく爲べし之を見すておくべからず[四]また汝の兄弟の驢馬または牛の途に踣れをるを見て見すておくべからず必ずこれを助け起すべし[五]女は男の衣服を纏ふべからずまた男は女の衣裳を著べからず凡て斯する者は汝の神ヱホバこれを憎みたまふなり[六]汝鳥の巢の路の頭または樹の上または土の上にあるを見んに雛または卵その中にありて母鳥その雛または卵の上に伏をらばその母鳥を雛とともに取べからず[七]かならずその母鳥を去しめ唯その雛のみをとるべし然せば汝福祉を獲かつ汝の日を永うすることを得ん[八]汝新しき家を建る時はその屋蓋の周圍に欄杆を設くべし是は人その上より墮てこれが血の汝の家に歸すること無らんためなり[九]汝菓物園に

異類の種を混て播べからず然せば汝が播たる種より產する物および汝の菓物園より出る菓物みな聖物とならん一〇 汝牛と驢馬とを耦せて耕すことを爲べからず一一 汝毛と麻とをまじへたる衣服を著べからず一二 汝が上に纏ふ衣服の裾の四方に綫をつくべし一三 人もし妻を娶り之とともに寢て後これを嫌ひ一四 我この婦人を娶りしが之と寢たる時にその處女なるを見ざりしと言て誹謗の辭柄を設けこれに惡き名を負せなば一五 その女の父と母その女の處女なる證跡を取り門にをる邑の長老等にこれを差出し一六 而してその女の父長老等に言べし我この人にわが女子を與へて妻となさしめしにこの人これを嫌ひ一七 誹謗の辭柄を設けて言ふ我なんぢの女子の處女なるを見ざりしと然るに吾女子の處女なりし證跡は此にありと斯いひてその父母かの布を邑の長老等の前に展べし一八 然る時は邑の長老等その人を執へてこれを鞭ち一九 又これに銀百シケルを罰してその女の父に償はしむべし其はイスラエルの處女に惡き名を負せたればなり斯てその人はこれを妻とすべし一生これを去ことを得ず二〇 然どこの事もし眞にしてその女の處女なる證跡あらざる時は二一 その女をこれが父の家の門に曳いだしその邑の人々石をもてこれを擊ころすべし其は彼その父の家にて淫なる事をなしてイスラエルの中に惡をおこなひたればなり汝かく惡事を汝らの中より除くべし二二 もし夫に適し婦と寢る男あるを見ばその婦と寢たる男と其婦とをともに殺し斯して惡事をイスラエルの中より除くべし二三 處女なる婦人すでに夫に適の約をなせる後ある男これに邑の内に遇てこれを犯さば二四 汝らその二人を邑の門に曳いだし石をもてこれを擊ころすべし是その女は邑の内にありながら叫ぶことをせざるに因りまたその男はその鄰の妻を辱しめたるに因てなり汝かく惡事を汝らの中より除くべし二五 然ど男もし人に適の約をなしし女に野にて遇ひこれを强て犯すあらば之を犯しし男のみを殺すべし二六 その女には何をも爲べからず女には死にあたる罪なし人その鄰人に起むかひてこれを殺せるとその事おなじ二七 其は男野にてこれに遇たるが故にその人に適の約をなしし女叫びたれども拯ふ者なかりしなり二八 男もし未だ人に適の約をなさざる處女なる婦に遇ひこれを執へて犯すありてその二人見あらはされなば二九 これを犯せる男その女の父に銀五十シケルを與へて之を己の妻とすべし彼その女を辱しめたれば一生これを去るべからざるなり三〇 人その父の妻を娶るべからずその父の被を掀開べからず

第二三章

一 外腎を傷なひたる者または玉莖を切りたる者はヱホバの會に入べからず二 私子はヱホバの會にいるべからず是は十代までもヱホバの會にいるべからざるなり三 アンモン人およびモアブ人はヱホバの會にいる可らず故らは十代までも何時までもヱホバの會にいるべからざるなり四 是汝らがエジプトより出きたりし時に彼らはパンと水とをもて汝らを途に迎へずメソポタミアのペトル人ベオルの子バラムを倩ひて汝を詛はせんと

爲たればなり 五 然れども汝の神ヱホバ、バラムに聽ことを爲給はずして汝の神ヱホバその呪詛を變て汝のために祝福となしたまへり是汝の神ヱホバ汝を愛したまふが故なり 六 汝一生いつまでも彼らのために平安をもまた福禄をも求むべからず 七 汝エドム人を惡むべからず是は汝の兄弟なればなりまたエジプト人を惡むべからず汝もこれが國に客たりしこと有ばなり 八 彼等の生たる子等は三代におよばばヱホバの會にいることを得べし 九 汝軍旅を出して汝の敵を攻る時は諸の惡き事を自ら謹むべし 一〇 汝らの中間にもし夜中 計ずも汚穢にふれて身の潔からざる人あらば陣營の外にいづべし陣營の內に入べからず 一一 而して薄暮に水をもて身を洗ひ日の入て後陣營に入べし 一二 汝陣營の外に一箇の處を設けおき便する時は其處に往べし 一三 また器具の中に小鍬を備へおき外に出て便する時はこれをもて土を掘り身を返してその汝より出たる物を蓋ふべし 一四 其は汝の神ヱホバ汝を救ひ汝の敵を汝に付さんとて汝の陣營の中を歩きたまへばなり是をもて汝の陣營を聖潔すべし然せば汝の中に汚穢物あるを見て汝を離れたまふこと有ざるべし 一五 その主人を避て汝の許に逃きたる僕をその主人に交すべからず 一六 その者をして汝らの中に汝とともに居しめ汝の一の邑の中にて之が善と見て擇ぶ處に住しむべし之を虐遇べからず 一七 イスラエルの女子の中に娼妓あるべからずイスラエルの男子の中に男娼あるべからず 一八 娼妓の得たる價および狗の價を汝の神ヱホバの家に携へいりて何の誓願にも用ゐるべからず是等はともに汝の神ヱホバの憎みたまふ者なればなり 一九 汝の兄弟より利息を取べからず即ち金の利息食物の利息など凡て利息を生ずべき物の利息を取べからず 二〇 他國の人よりは汝利息を取も宜し惟汝の兄弟よりは利息を取べからず然ば汝が往て獲ところの地において汝の神ヱホバ凡て汝が手に爲ところの事に福祥をくだしたまふべし 二一 汝の神ヱホバに誓願をかけなば之か還すことを怠るべからず汝の神ヱホバかならずこれを汝に要めたまふべし怠る時は汝罪あり 二二 汝誓願をかけざるも罪を獲ること有じ 二三 汝が口より出し事は守りて行ふべし凡て自意の禮物は汝の神ヱホバに汝が誓願し口をもて約せしごとくに行ふべし 二四 汝の鄰の葡萄園に至る時汝意にまかせてその葡萄を飽まで食ふも宜し然ど器の中に取いるべからず 二五 また汝の鄰の麥圃にいたる時汝手にてその穗を摘食ふも宜し然ど汝の鄰の麥圃に鎌をいるべからず

第二四章 一 人妻を取てこれを娶れる後恥べき所のこれにあるを見てこれを好まずなりたらば離緣狀を書てこれが手に交しこれをその家より出すべし 二 その婦これが家より出たる後往て他の人に嫁ぐことをせんに 三 後の夫もこれを嫌ひ離緣狀を書てその手にわたして之を家より出し又はこれを妻にめとれるその後の夫死るあるも 四 是は已に身を汚玷したるに因て之を出したるその先の夫ふたたびこれを妻にめとるべからず是ヱホバの憎み

たまふ事なればなり汝の神ヱホバの汝に與へて產業となさしめたまふ地に汝罪を負すなかれ五人あらたに妻を娶りたる時は之を軍に出すべからずまた何の職務をもこれに任すべからずその人は一年家に間居してその娶れる妻を慰むべし六人その磨礱を質におくべからず是その生命をつなぐ物を質におくなればなり七イスラエルの子孫の中なるその兄弟を拐帶してこれを使ひまたはこれを賣る人あるを見ばその拐帶者を殺し然して汝らの中より惡を除くべし八汝癩病を愼み凡て祭司たるレビ人が汝らに教ふる所を善く守りて行ふべし即ち我が彼らに命ぜしごとくに汝ら守りて行ふべし九汝らがエジプトより出きたれる路にて汝の神ヱホバがミリアムに爲たまひしところの事を誌えよ一〇凡て汝の鄰に物を貸あたふる時は汝みづからこれが家にいりてその質物を取べからず一一汝は外に立をり汝が貸たる人その質物を外に持いだして汝に付すべし一二その人もし困苦者ならば之が質物を留おきて睡眠に就べからず一三かならず日の入る頃その質物を之に還すべし然せばその人おのれの上衣をまとふて睡眠につくことを得て汝を祝せん是汝の神ヱホバの前において汝の義となるべし一四困苦る貧き傭人は汝の兄弟にもあれ又は汝の地にてなんぢの門の內に寄寓る他國の人にもあれ之を虐ぐべからず一五當日にこれが値をはらふべし日の入るまで延すべからず其は貧き者にてその心にこれを慕へばなり恐らくは彼ヱホバに汝を訴ふるありて汝罪を獲ん一六父はその子等の故によりて殺さるべからず子等はその父の故によりて殺さるべからず各人おのれの罪によりて殺さるべきなり一七汝他國の人または孤子の審判を曲べからずまた寡婦の衣服を質に取べからず一八汝誌ゆべし汝はエジプトに奴隸たりしが汝の神ヱホバ汝を其處より贖ひいだしたまへり是をもて我この事をなせと汝に命ずるなり一九汝田野にて穀物を刈る時もしその一束を田野に忘れおきたらば返りてこれを取べからず他國の人と孤子と寡婦とにこれを取すべし然せば汝の神ヱホバ凡て汝が手に作ところの事に祝福を降したまはん二〇汝橄欖を打落す時は再びその枝をさがすべからずその遺れる者を他國の人と孤子と寡婦とに取すべし二一また葡萄園の葡萄を摘とる時はその遺れる者を再びさがすべからず他國の人と孤子と寡婦とにこれを取すべし二二汝誌ゆべし汝はエジプトの國に奴隸たりしなり是をもて我この事を爲せと汝に命ず

第二五章一人と人との間に爭辯ありて來りて審判を求むる時は士師これを鞫きその義き者を義とし惡き者を惡とすべし二その惡き者もし鞭つべき者ならば士師これを伏せその罪にしたがひて數のごとく自己の前にてこれを扑すべし三これを扑ことは四十を逾べからず若これを逾て是よりも多く扑ときは汝その汝の兄弟を賤め視にいたらん四穀物を碾す牛に口籠をかく可らず五兄弟ともに居んにその中の一人死て子を遺さざる時はその死たる者の妻いでて他人に嫁ぐべからず其夫の兄弟これの所

に入りこれを娶りて妻となし斯してその夫の兄弟たる道をこれに盡し六而してその婦の生ところの初子をもてその死たる兄弟の後を嗣しめその名をイスラエルの中に絶ざらしむべし七然どその人もしその兄弟の妻をめとることを肯ぜずばその兄弟の妻門にいたりて長老等に言べし吾夫の兄弟はその兄弟の名をイスラエルの中に興ることを肯ぜず吾夫の兄弟たる道を盡すことをせずと八然る時はその邑の長老等かれを呼よせて諭すべし然るも彼堅く執て我はこれを娶ることを好まずと言ば九その兄弟の妻長老等の前にて彼の側にいたりこれが鞋をその足より脱せその面に唾して答て言べしその兄弟の家を興ることを肯ぜざる者には斯のごとくすべきなりと一〇またその人の名は鞋を脱たる者の家とイスラエルの中に稱へらるべし一一人二人あひ爭そふ時に一人の者の妻その夫を撃つ者の手より夫を救はんとて進みより手を伸てその人の陰所を執ふるあらば一二汝その婦の手を切おとすべし之を憫れみ視るべからず一三汝の嚢の中に一箇は大く一箇は小き二種の權衡石をいれおくべからず一四汝の家に一箇は大く一箇は小き二種の升斗をおくべからず一五唯十分なる公正き權衡を有べくまた十分なる公正き升斗を有べし然せば汝の神ヱホバの汝にたまふ地に汝の日永からん一六凡て斯る事をなす者凡て正しからざる事をなす者は汝の神ヱホバこれを憎みたまふなり一七汝らがエジプトより出きたりし時その路においてアマレクが汝に爲たりし事を記憶よ一八即ち彼らは汝を途に迎へ汝の疲れ倦たるに乗じて汝の後なる弱き者等を攻撃り斯かれらは神を畏れざりき一九然ば汝の神ヱホバの汝に與へて產業となさしめたまふ地において汝の神ヱホバ汝にその周圍の敵を盡く攻ふせて安泰ならしめたまふに至らば汝アマレクの名を天が下より塗抹て之をおぼゆる者なからしむべし

第二六章一汝その神ヱホバの汝に與へて產業となさしめたまふ地にいりこれを獲てそこに住にいたらば二汝の神ヱホバの汝に與へたまへる地の諸の土產の初を取て筐にいれ汝の神ヱホバのその名を置んとて選びたまふ處にこれを携へゆくべし三而して汝當時の祭司に詣り之にいふべし我は今日なんぢの神ヱホバに申さん我はヱホバが我らに與へんと我らの先祖等に誓ひたまひし地に至れりと四然る時は祭司汝の手よりその筐をとりて汝の神ヱホバの壇のまへに之を置べし五汝また汝の神ヱホバの前に陳て言べし我先祖は憫然なる一人のスリア人なりしが僅少の人を將てエジプトに下りゆきて其處に寄寓をりそこにて終に大にして強く人口おほき民となれり六然るにエジプト人我らに害を加へ我らを惱まし辛き力役を我らに負せたりしに因て七我等先祖等の神ヱホバに向ひて呼はりければヱホバわれらの聲を聽き我らの艱難と勞苦と虐遇を顧みたまひ八而してヱホバ強き手を出し腕を伸べ大なる威嚇と徵證と奇跡とをもてエジプトより我らを導きいだし九この處に我らを携へいりてこの地すなはち

乳と蜜との流るる地を我らに賜へり一〇 ヱホバよ今我なんぢが我に賜ひし地の產物の初を持きたれりと斯いひて汝その筐を汝の神ヱホバの前にそなへ汝の神ヱホバの前に禮拜をなすべし一一 而して汝は汝の神ヱホバの汝と汝の家に降したまへる諸の善事のためにレビ人および汝の中間なる旅客とともに樂むべし一二 第三年すなはち十に一を取の年に汝その諸の產物の什一を取りレビ人と客旅と孤子と寡婦とにこれを與へて汝の門の內に食ひ飽しめたる時は一三 汝の神ヱホバの前に言べし我は聖物を家より執いだしまたレビ人と客旅と孤子と寡婦とにこれを與へ全く汝が我に命じたまひし命令のごとくせり我は汝の命令に背かずまたこれを忘れざるなり一四 我はこの聖物を喪の中に食ひし事なくまた汚穢たる身をもて之を携へ出し事なくまた死人のためにこれを贈りし事なきなり我はわが神ヱホバの言に聽したがひて凡て汝が我に命じたまへるごとく行へり一五 願くは汝の聖住所なる天より臨み觀汝の民イスラエルと汝の我らに與へし地とに福祉をくだしたまへ是は我がわれらの先祖等に誓ひたまひし乳と蜜との流るる地なり一六 今日汝の神ヱホバこれらの法度と律法とを行ふことを汝に命じたまふ然ば汝心を盡し精心を盡してこれを守りおこなふべし一七 今日なんぢヱホバを認めて汝の神となし且その道に步みその法度と誡法と律法とを守りその聲に聽したがはんと言り一八 今日ヱホバまたその言しごとく汝を認めてその寶の民となし且汝にその諸の誡命を守れと言たまへり一九 ヱホバ汝の名譽と聲聞と榮耀とをしてその造れる諸の國の人にまさらしめたまはん汝はその神ヱホバの聖民となることその言たまひしごとくならん

第二七章 一 モーセ、イスラエルの長老等とともにありて民に命じて曰ふ我が今日なんぢらに命ずるこの誡命を汝ら全く守るべし二 汝らヨルダンを濟り汝の神ヱホバが汝に與へたまふ地にいる時は大なる石數箇を立て石灰をその上に塗り三 既に濟りて後この律法の諸の言語をその上に書すべし然すれば汝の神ヱホバの汝にたまふ地なる乳と蜜の流るる國に汝いるを得ること汝の先祖等の神ヱホバの汝に言たまひしごとくならん四 即ち汝らヨルダンを濟るにおよばば我が今日なんぢらに命ずるその石をヱバル山に立て石灰をその上に塗べし五 また其處に汝の神ヱホバのために石の壇一座を築くべし但し之を築くには鐵の器を用ゐるべからず六 汝新石をもて汝の神ヱホバのその壇を築きその上にて汝の神ヱホバに燔祭を献ぐべし七 汝また彼處にて酬恩祭を獻げその物を食ひて汝の神ヱホバの前に樂むべし八 汝この律法の諸の言語をその石の上に明白に書すべし九 モーセまた祭司たるレビ人とともにイスラエルの全家に告て曰ふイスラエルよ謹みて聽け汝は今日汝の神ヱホバの民となれり一〇 然ば汝の神ヱホバの聲に聽從ひ我が今日汝に命ずる之が誡命と法度をおこなふべし一一 その日にモーセまた民に命じて言ふ一二 汝らがヨルダンを渡りし後是らの者ゲリジム山にたちて民を祝すべ

し即ちシメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ヨセフおよびベニヤミン一三また是らの者はエバル山にたちて呪詛ことをすべし即ちルベン、ガド、アセル、ゼブルン、ダンおよびナフタリ一四レビ人大聲にてイスラエルの人々に告て言べし一五偶像は工人の手の作にしてヱホバの憎みたまふ者なれば凡てこれを刻みまたは鑄造りて密に安置く人は詛はるべしと民みな對へてアーメンといふべし一六その父母を軽んずる者は詛はるべし民みな對てアーメンといふべし一七その鄰の地界を侵す者は詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし一八盲者をして路に迷はしむる者は詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし一九客旅孤子および寡婦の審判を枉る者は詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし二〇その父の妻と寢る者はその父を辱しむるなれば詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし二一凡て獣畜と交る者は詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし二二その父の女子またはその母の女子たる己の姉妹と寢る者は詛はるべし民みな對へてアーメンとふべし二三その妻の母と寢る者は詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし二四暗の中にその鄰を撃つ者は詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし二五報酬をうけて無辜者を殺してその血を流す者は詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし二六この律法の言を守りて行はざる者は詛はるべし民みな對へてアーメンといふべし

第二八章一汝もし善く汝の神ヱホバの言に聽したがひ我が今日なんぢに命ずるその一切の誡命を守りて行はば汝の神ヱホバ汝をして地の諸の國人の上に立しめたまふべし二汝もし汝の神ヱホバの言に聽したがふ時はこの諸の福祉汝に臨み汝におよばん三汝は邑の内にても福祉を得田野にても福祉を得ん四また汝の胎の産汝の地の産汝の家畜の産汝の牛の産汝の羊の産に福祉あらん五また汝の飯籃と汝の捏盤に福祉あらん六汝は入にも福祉を得出るにも福祉を得べし七汝の敵起て汝を攻るあればヱホバ汝をして之を打敗らしめたまふべし彼らは一條の路より攻きたり汝の前にて七條の路より逃はしらん八ヱホバ命じて福祉を汝の倉庫に降しまた汝が手にて爲ところの事に降し汝の神ヱホバの汝に與ふる地においてヱホバ汝を祝福たまふべし九汝もし汝の神ヱホバの誡命を守りてその道に歩まばヱホバ汝に誓ひしごとく汝を立て己の聖民となしたまふべし一〇然る時は地の民みな汝がヱホバの名をもて稱へらるるを視て汝を畏れん一一ヱホバが汝に與へんと汝の先祖等に誓ひたまひし地においてヱホバ汝の佳物すなはち汝の身の産と汝の家畜の産と汝の地の産とを饒にしたまふべし一二ヱホバその寶の藏なる天を啓き雨をその時にしたがびて汝の地に降し汝の手の諸の行爲に祝福をたまはん汝は許多の國々の民に貸ことをなすに至らん借ことなかるべし一三ヱホバ汝をして首とならしめたまはん尾とはならしめたまはじ汝は只上におらん下には居じ汝もし我が今日汝に命ずる汝の神ヱホバの誡命に聽したがひてこれを守

りおこなはばかならず斯のごとくなるべし一四 汝わが今日汝に命ずるこの言語を離れ右または左にまがりて他の神々にしたがひ事ふることをすべからず一五 汝もし汝の神ヱホバの言に聽したがはず我が今日なんぢに命ずるその一切の誡命と法度とを守りおこなはずば此もろもろの呪詛汝に臨み汝におよぶべし一六 汝は邑の内にても詛はれ田野にても詛はれん一七 また汝の飯籃も汝の捏盤も詛はれん一八 汝の胎の產汝の地の產汝の牛の產汝の羊の產も詛はれん一九 汝は入にも詛はれ出るにも詛はれん二〇 ヱホバ汝をしてその凡て手をもて爲ところにおいて呪詛と恐懼と譴責を蒙らしめたまふべければ汝は滅びて速かに亡はてん是は汝惡き事をおこなひて我を棄るによりてなり二一 ヱホバ疫病を汝の身に着せて遂に汝をその往て得るところの地より滅ぼし絶たまはん二二 ヱホバまた癆瘵と熱病と傷寒と瘧疾と刀劍と枯死と汚腐とをもて汝を擊なやましたまふべし是らの物汝を追ひ汝をして滅びうせしめん二三 汝の頭の上なる天は銅のごとくになり汝の下なる地は鐵のごとくになるべし二四 ヱホバまた雨のかはりに沙と灰とを汝の地に降せたまはん是らの物天より汝の上に下りて遂に汝を滅ぼさん二五 ヱホバまた汝をして汝の敵に打敗られしめたまふべし汝は彼らにむかひて一條の路より進み彼らの前にて七條の路より逃はしらん而して汝はまた地の諸の國にて虐遇にあはん二六 汝の死屍は空の諸の鳥と地の獸の食とならん然るもこれを逐はらふ者あらじ二七 ヱホバまたエジプトの瘍瘡と痔と癰と癢とをもて汝を擊たまはん汝はこれより愈ることあらじ二八 ヱホバまた汝を擊ち汝をして狂ひ且目くらみて心に驚き悸れしめたまはん二九 汝は瞽者が暗にたどるごとく眞晝においても尙たどらん汝その途によりて福祉を得ることあらじ汝は只つねに虐げられ掠められんのみ汝を救ふ者なかるべし三〇 汝妻を娶る時は他の人これと寢ん汝家を建るもその中に住ことを得ず葡萄園を作るもその葡萄を摘とることを得じ三一 汝の牛汝の目の前に宰らるるも汝は之を食ふことを得ず汝の驢馬は汝の目の前にて奪ひさられん再び汝にかへることあらじ又なんぢの羊は汝の敵の有とならん然ど汝にはこれを救ふ道あらじ三二 汝の男子と汝の女子は他邦の民の有とならん汝は終日これを慕ひ望みて目を喪ふに至らん汝の手には何の力もあらじ三三 汝の地の產物および汝の努苦て得たる物は汝の識ざる民これを食はん汝は只つねに虐げられ窘められん而已三四 汝はその目に見るところの事によりて心狂ふに至らん三五 ヱホバ汝の膝と脛とに惡くして愈ざる瘍瘡を生ぜしめて終に足の蹠より頭の頂にまでおよぼしたまはん三六 ヱホバ汝と汝が立たる王とを携へて汝も汝の先祖等も知ざりし國々に移し給はん汝は其處にて木または石なる他の神々に事ふるあらん三七 汝はヱホバの汝を遣はしたまふ國々にて人の詑異む者となり諺語となり諷刺とならん三八 汝は多分の種を田野に携へ出すもその刈とるところは少かるべし蝗これを食ふべければなり三九 汝葡萄園を

作りてこれに培ふもその酒を飲ことを得ずまたその果を斂むることを得じ蟲これを食ふべければなり四〇　汝の國には遍く橄欖の樹あらん然ど汝はその油を身に膏ことを得じ其果みな堕べければなり四一　汝男子女子を擧くるもこれを汝の有とすることを得じ皆虜へゆかるべければなり四二　汝の諸の樹および汝の地の産物はみな蝗これを取て食ふべし四三　汝の中間にある他國の人はますます高くなりゆきて汝の上に出で汝はますます卑くなりゆかん四四　彼は汝に貸ことをせん汝は彼に貸ことを得じ彼は首となり汝は尾とならん四五　この諸の災禍汝に臨み汝を追ひ汝に及びてつひに汝を滅ぼさん是は汝その神ヱホバの言に聽したがはず其なんぢに命じたまへる誡命と法度とを守らざるによるなり四六　是等の事は恒になんぢと汝の子孫の上にありて徴證となり人を驚かす者となるべし四七　なんぢ萬の物の豊饒なる中にて心に歓び樂みて汝の神ヱホバに事へざるに因り四八　饑ゑ渇きかつ裸になり萬の物に乏しくしてヱホバの汝に攻きたらせたまふところの敵に事ふるに至らん彼鐵の軛をなんぢの頸につけて遂に汝をほろぼさん四九　即ちヱホバ遠方より地の極所より一の民を鵰の飛がごとくに汝に攻きたらしめたまはん是は汝がその言語を知ざる民五〇　その面の猛惡なる民にして老たる者の身を顧みず幼稚者を憐まず五一　汝の家畜の産と汝の地の産を食ひて汝をほろぼし穀物をも酒をも油をも牛の産をも羊の産をも汝のために遺さずして終に全く汝を滅さん五二　その民は汝の全國において汝の一切の邑々を攻圍み遂にその汝が頼む堅固なる高き石垣をことごとく打圮し汝の神ヱホバの汝にたまへる國の中なる一切の邑々をことごとく攻圍むべし五三　汝は敵に圍まれ烈しく攻なやまさるるによりて終にその汝の神ヱホバに賜はれる汝の胎の産なる男子女子の肉を食ふにいたらん五四　汝らの中の柔生育にして軟弱なる男すらもその兄弟とその懐の妻とその遺れる子女とを疾視五五　自己の食ふその子等の肉をこの中の誰にも與ふることを好まざらん是は汝の敵汝の一切の邑々を圍み烈しく汝を攻なやまして何物をも其人に遺さざればなり五六　又汝らの中の柔生育にして纎弱なる婦女すなはちその柔生育にして纎弱なるがために足の蹠を土につくることをも敢てせざる者すらもその懐の夫とその男子とその女子とを疾視五七　己の足の間より出る胞衣と己の産ところの子を取て密にこれを食はん是は汝の敵なんぢの邑々を圍み烈しくこれを攻なやますによりて何物をも得ざればなり五八　汝もしこの書に記したるこの律法の一切の言を守りて行はず汝の神ヱホバと云榮ある畏るべき名を畏れずば五九　ヱホバ汝の災禍と汝の子孫の災禍を烈しくしたまはん其災禍は大にして久しくその疾病は重くして久しかるべし六〇　ヱホバまた汝が懼れし疾病なるエジプトの諸の疾病を持きたりて汝の身に纏ひ附しめたまはん六一　また此律法の書に載ざる諸の疾病と諸の災害を汝の滅ぶるまでヱホバ汝に降したまはん六二　汝らは空の星のごとくに衆多かりしも汝

の神ヱホバの言に聽したがはざるによりて殘り寡に打なさるべし六三ヱホバさきに汝らを善して汝等を衆くすることを喜びしごとく今はヱホバ汝らを滅ぼし絶すことを喜びたまはん汝らは其往て獲ところの地より拔さらるべし六四ヱホバ地のこの極よりかの極までの國々の中に汝を散したまはん汝は其處にて汝も汝の先祖等も知ざりし木または石なる他の神々に事へん六五その國々の中にありて汝は安寧を得ずまた汝の足の跖を休むる所を得じ其處にてヱホバ汝をして心慄き目昏み精神亂れしめたまはん六六汝の生命は細き糸に懸るが如く汝に見ゆ汝は夜晝となく恐怖をいだき汝の生命おぼつかなしと思はん六七汝心に懼る所によりまた目に見る所によりて朝においては言ん嗚呼夕ならば善らんとまた夕においては言ん嗚呼朝ならば善らんと六八ヱホバなんぢを舟にのせ彼の昔わが汝に告て汝は再びこれを見ることあらじと言たるその路より汝をエジプトに曳ゆきたまはん彼處にて人汝らを賣て汝らの敵の奴婢となさん汝らを買ふ人もあらじ

第二九章一ヱホバ、モーセに命じモアブの地にてイスラエルの子孫と契約を結ばしめたまふその言は斯のごとし是はホレブにてかれらと結びし契約の外なる者なり二モーセ、イスラエルの全家を呼あつめて之に言けるは汝らはヱホバがエジプトの地において汝らの目の前にてパロとその臣下とその全地とに爲たまひし一切の事を觀たり三即ち其大なる試煉と徴證と大なる奇跡とを汝目に觀たるなり四然るにヱホバ今日にいたるまで汝らの心をして悟ることなく目をして見ることなく耳をして聞ことなからしめたまへり五四十年の間われ汝らを導きて曠野を通りしが汝らの身の衣服は古びず汝の足の鞋は古びざりき六汝らはまたパンをも食はず葡萄酒をも濃酒をも飮ざりき斯ありて汝らは我が汝らの神ヱホバなることを知り七汝らこの處に來りし時ヘシボンの王シホンおよびバシヤンの王オグ我らを迎へて戰ひしが我らこれを打敗りて八その地を取りこれをルベン人とガド人とマナセの半支派とに與へて產業となさしめたり九然ば汝らこの契約の言を守りてこれを行ふべし然れば汝らの凡て爲ところに祥あらん一〇汝らみな今日なんぢらの神ヱホバの前に立つ即ち汝らの首領等なんぢらの支派なんぢらの長老等および汝らの牧司等などイスラエルの一切の人一一汝らの小き者等汝らの妻ならびに汝らの營の中にをる客旅など凡て汝のために薪を割る者より水を汲む者にいたるまで皆ヱホバの前に立て一二汝の神ヱホバの契約に入んとし又汝の神ヱホバの汝にむかひて今日なしたまふところの誓に入んとす一三然ばヱホバさきに汝に言しごとくまた汝の先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓ひしごとく今日なんぢを立て己の民となし己みづから汝の神となりたまはん一四我はただ汝らと而已此契約と誓とを結ぶにあらず一五今日此にてわれらの神ヱホバの前に我らとともにたちをる者ならびに今日われらとともに此にたち居ざる者ともこれを結ぶ

なり一六我らは如何にエジプトの地に住をりしか如何に國々を通り來りしか汝らこれを知り一七汝らはまた木石金銀にて造れる憎むべき物および偶像のその國々にあるを見たり一八然ば汝らの中に今日その心に我らの神ヱホバを離れて其等の國々の神に往て事ふる男女宗族支派などあるべからず又なんぢらの中に葶藶または茵蔯を生ずる根あるべからず一九斯る人はこの呪詛の言を聞もその心に自ら幸福なりと思ひて言ん我はわが心を剛愎にして事をなすも尚平安なり終には酔飽る者をもて渇ける者を除くにいたらんと二〇是のごとき人はヱホバかならず之を赦したまはじ還てヱホバの忿怒と嫉妬の火これが上に燃えまたこの書にしるしたる災禍みなその身に加はらんヱホバつひにその人の名を天が下より抹さりたまふべし二一ヱホバすなはちイスラエルの諸の支派の中よりその人を分ちてこれに災禍を下しこの律法の書にしるしたる契約中の諸の呪詛のごとくしたまはん二二汝等の後に起る汝らの子孫の代の人および遠き國より來る客旅この地の災禍を見またヱホバがこの地に流行せたまふ疾病を見て言ところあらん二三即ち彼ら見るにその全地は硫黄となり鹽となり且焼土となりて種も蒔れず產する所もなく何の草もその上に生ぜずして彼の昔ヱホバがその震怒と忿恨とをもて毀ちたまましソドム、ゴモラ、アデマ、ゼボイムの毀たれたると同じかるべければ二四彼らも國々の人もみな言んヱホバ何とて斯この地になしたるやこの烈しき大なる震怒は何事ぞやと二五その時人應へて曰ん彼らはその先祖たちの神ヱホバがエジプトの地より彼らを導きいだして彼らと結びたるその契約を棄て二六往て己の識ずまた授らざる他の神々に事へてこれを拝みたるが故なり二七是をもてヱホバこの地にむかひて震怒を發しこの書にしるしたる諸の災禍をこれに下し二八而してヱホバ震怒と忿恨と大なる憤怒をもて彼らをこの地より抜とりてこれを他の國に投やれりその状今日のごとし二九隠微たる事は我らの神ヱホバに屬する者なりまた顯露されたる事は我らと我らの子孫に屬し我らをしてこの律法の諸の言を行はしむる者なり

第三〇章一我が汝らの前に陳たるこの諸の祝福と呪詛の事すでに汝に臨み汝その神ヱホバに逐やられたる諸の國々において此事を心に考ふるにいたり二汝と汝の子等ともに汝の神ヱホバに起かへり我が今日なんぢに命ずる所に全たく循がひて心をつくし精神をつくしてヱホバの言に聽したがはば三汝の神ヱホバ汝の俘虜を解て汝を憐れみ汝の神ヱホバ汝を顧みその汝を散し國々より汝を集めたまはん四汝たとひ天涯に逐やらるるとも汝の神ヱホバ其處より汝を集め其處より汝を携へかへりたまはん五汝の神ヱホバ汝をしてその先祖の有ちし地に歸らしめたまふて汝またこれを有つにいたらんヱホバまた汝を善し汝を增て汝の先祖よりも衆からしめたまはん六而して汝の神ヱホバ汝の心と汝の子等の心に割禮を施こし汝をして心を盡し精神をつくして汝の神ヱホバを愛せしめ斯して汝に生命を得させた

まふべし七 汝の神ヱホバまた汝の敵と汝を惡み攻る者とにこの諸の災禍をかうむらせたまはん八 然ど汝は再びヱホバの言に聽したがひ我が今日なんぢに命ずるその一切の誡命を行ふにいたらん九 然る時は汝の神ヱホバ汝をして汝が手をかくる諸の物と汝の胎の産と汝の家畜の産と汝の地の産に富しめて汝を善したまはん即ちヱホバ汝の先祖たちを悅こびしごとく再び汝を悅こびて汝を善したまはん一〇 是は汝その神ヱホバの言に聽したがひ此律法の書にしるされたる誡命と法度を守り心をつくし精神を盡して汝の神ヱホバに歸するによりてなり一一 我が今日なんぢに命ずる誡命は汝が理會がたき者にあらずまた汝に遠き者にあらず一二 是は天に在ならねば汝は誰か我らのために天にのぼりてこれを我らに持くだり我らにこれを聞せて行はせんかと曰ふにおよばず一三 また是は海の外にあるならねば汝は誰か我らのために海をわたりゆきてこれを我らに持きたり我らにこれを聞せて行はせんかと曰におよばず一四 是言は甚だ汝に近くして汝の口にあり汝の心にあれば汝これを行ふことを得べし一五 視よ我今日生命と福德および死と災禍を汝の前に置り一六 即ち我今日汝にむかひて汝の神ヱホバを愛しその道に歩みその誡命と法度と律法とを守ることを命ずるなり然なさば汝生ながらへてその數衆くならんまた汝の神ヱホバ汝が往て獲るところの地にて汝を祝福たまふべし一七 然ど汝もし心をひるがへして聽從がはず誘はれて他の神々を拜みまたこれに事へなば一八 我今日汝らに告ぐ汝らは必ず滅びん汝らはヨルダンを渡りゆきて獲るところの地にて汝らの日を永うすることを得ざらん一九 我今日天と地を呼て證となす我は生命と死および祝福と呪詛を汝らの前に置り汝生命をえらぶべし然せば汝と汝の子孫生存らふることを得ん二〇 即ち汝の神ヱホバを愛してその言を聽き且これに附從がふべし斯する時は汝生命を得かつその日を永うすることを得ヱホバが汝の先祖アブラハム、イサク、ヤコブに與へんと誓ひたまひし地に住ことを得ん

第三一章一 茲にモーセ往てイスラエルの一切の人にこの言をのべたり二 即ちこれに言けるは我は今日すでに百二十歲なれば最早出入をすること能はず且またヱホバ我にむかひて汝はこのヨルダンを濟ることを得ずと宣へり三 汝の神ヱホバみづから汝に先だちて渡りゆき汝の前よりこの國々の人を滅ぼしさりて汝にこれを獲させたまふべしまたヱホバのかつて宣まひしごとくヨシユア汝を率ゐて濟るべし四 ヱホバさきにアモリ人の王シホンとオグおよび之が地になしたる如くまた彼らにも爲てこれを滅ぼしたまはん五 ヱホバかれらを汝らの前に付したまふべければ汝らは我が汝らに命ぜし一切の命令のごとくこれに爲べし六 汝ら心を強くしかつ勇め彼らを懼るる勿れ彼らの前に慄くなかれ其は汝の神ヱホバみづから汝とともに往きたまへばなり必ず汝を離れず汝を棄たまはじ七 斯てモーセ、ヨシユアを呼びイスラエルの一切の人の目の前にてこれに言ふ汝はこの民ととも

に往き在昔ヱホバがかれらの先祖たちに與へんと誓ひたまひし地に入るべきが故に心を強くしかつ勇め汝彼らにこれを獲さすることを得べし八ヱホバみづから汝に先だちて往きたまはんまた汝とともに居り汝を離れず汝を棄たまはじ懼るる勿れ驚くなかれ九モーセこの律法を書きヱホバの契約の櫃を舁ところのレビの子孫たる祭司およびイスラエルの諸の長老等に授けたり一〇而してモーセ彼らに命じて言けるは七年の末年すなはち放釋の年の節期にいたり結茅の節において一一イスラエルの人皆なんぢの神ヱホバの前に出んとてヱホバの選びたまふ處に來らんその時に汝イスラエルの一切の人の前にこの律法を誦てこれに聞すべし一二即ち男女子等および汝の門の内なる他國の人など一切の民を集め彼らをしてこれを聽かつ學ばしむべし然すれば彼等汝らの神ヱホバを畏れてこの律法の言を守り行はん一三また彼らの子等のこれを知ざる者も之を聞て汝らの神ヱホバを畏るることを學ばん汝らそのヨルダンを濟りゆきて獲ところの地に存ふる日の間つねに斯すべし一四ヱホバまたモーセに言たまひけるは視よ汝の死る日近しヨシュアを召てともに集會の幕屋に立て我かれに命ずるところあらんとモーセとヨシュアすなはち往て集會の幕屋に立けるに一五ヱホバ幕屋において雲の柱の中に現はれたまへりその雲の柱は幕屋の門口の上に駐まれり一六ヱホバ、モーセに言たまひけるは汝は先祖たちとともに寢らん此民は起あがりその往ところの他國の神々を慕ひて之と姦淫を行ひかつ我を棄て我が彼らとむすびし契約を破らん一七その日には我かれらにむかひて怒を發し彼らを棄て吾面をかれらに隱すべければ彼らは呑ほろぼされ許多の災害と艱難かれらに臨まん是をもてその日に彼ら言ん是等の災禍の我らにのぞむは我らの神ヱホバわれらとともに在さざるによるならずやと一八然るも彼ら諸の惡をおこなひて他の神々に歸するによりて我その日にはかならず吾面をかれらに隱さん一九然ば汝ら今この歌を書きイスラエルの子孫にこれを教へてその口に念ぜしめ此歌をしてイスラエルの子孫にむかひて我の證とならしめよ二〇我かれらの先祖たちに誓ひし乳と蜜の流るる地にかれらを導きいらんに彼らは食ひて飽き肥太るにおよばば翻へりて他の神々に歸してこれに事へ我を輕んじ吾契約を破らん二一而して許多の災禍と艱難彼らに臨むにいたる時はこの歌かれらに對ひて證をなす者とならん其はこの歌かれらの口にありて忘るることなかるべければなり我いまだわが誓ひし地に彼らを導きいらざるに彼らは早く已に思ひ量る所あり我これを知ると二二モーセすなはちその日にこの歌を書てこれをイスラエルの子孫に教へたり二三ヱホバまたヌンの子ヨシュアに命じて曰たまはく汝はイスラエルの子孫を我が其に誓ひし地に導きいるべきが故に心を強くしかつ勇め我なんぢとともに在べしと二四モーセこの律法の言をことごとく書に書しるすことを終たる時二五モーセ、ヱホバの契約の櫃を舁ところのレビ人に命じて言ける

は二六この律法の書をとりて汝らの神ヱホバの契約の櫃の傍にこれを置き之をして汝にむかひて證をなす者たらしめよ二七我なんぢの悖る事と頑梗なるとを知る見よ今日わが生存へて汝らとともにある間すら汝らはヱホバに悖れり況てわが死たる後においてをや二八汝らの諸支派の長老等および牧伯たちを吾許に集めよ我これらの言をかれらに語り聞せ天と地とを呼てかれらに證をなさしめん二九我しる我が死たる後には汝ら必らず惡き事を行ひ我が汝らに命ぜし道を離れん而して後の日に災害なんぢらに臨まん是なんぢらヱホバの惡と觀たまふ事をおこなひ汝らの手の行爲をもてヱホバを怒らするによりてなり三〇かくてモーセ、イスラエルの全會衆にこの歌の言をことごとく語り聞せたり

第三二章一天よ耳を傾むけよ我語らん地よ吾口の言を聽け二わが教は雨の降るがごとし吾言は露のおくがごとく霡の若艸の上にふるごとく細雨の青艸の上にくだるが如し三我はヱホバの御名を頌揚ん我らの神に汝ら榮光を歸せよ四ヱホバは磐にましましてその御行爲は完くその道はみな正しまた眞實ある神にましまして惡きところ無し只正くして直くいます五彼らはヱホバにむかひて惡き事をおこなふ者にてその子にはあらず只これが玷となるのみ其人と爲は邪僻にして曲れり六愚にして智慧なき民よ汝らがヱホバに報ゆること是のごとくなるかヱホバは汝の父にして汝を贖ひまた汝を造り汝を建たまはずや七昔の日を憶え過にし世代の年を念へよ汝の父に問べし彼汝に示さん汝の中の年老に問べし彼ら汝に語らん八至高者人の子を四方に散して萬の民にその產業を分ちイスラエルの子孫の數に照して諸の民の境界を定めたまへり九ヱホバの分はその民にしてヤユブはその產業たり一〇ヱホバこれを荒野の地に見これに獸の吼る曠野に遇ひ環りかこみて之をいたはり眼の珠のごとくにこれを護りたまへり一一鷲のその巢雛を喚起しその子の上に翺翔ごとくヱホバその羽を展て彼らを載せその翼をもてこれを負たまへり一二ヱホバは只獨にてかれを導きたまへり別神はこれとともならざりき一三ヱホバかれに地の高處を乘とほらせ田園の產物を食はせ石の中より蜜を吸しめ磐の中より油を吸しめ一四牛の乳羊の乳羔羊の脂バシヤンより出る牡羊牡山羊および小麥の最も佳き者をこれに食はせたまひき汝はまた葡萄の汁の紅き酒を飲り一五然るにヱシユルンは肥て踢ことを爲す汝は肥太りて大きくなり己を造りし神を棄て己が救拯の磐を軽んず一六彼らは別神をもて之が嫉妬をおこし憎むべき者をもて之が震怒を惹く一七彼らが犧牲をささぐる者は鬼にして神にあらず彼らが識ざりし鬼神近頃新に出たる者汝らの遠つ親の畏まざりし者なり一八汝を生し磐をば汝これを棄て汝を造りし神をば汝これを忘る一九ヱホバこれを見その男子女子を怒りてこれを棄たまふ二〇すなはち曰たまはく我わが面をかれらに隱さん我かれらの終を觀ん彼らはみな背き悖る類の者眞實あらざる子等なり

二一 彼らは神ならぬ者をもて我に嫉妬を起させ虚き者をもて我を怒らせたれば我も民ならぬ者をもて彼らに嫉妬を起させ愚なる民をもて彼らを怒らせん二二 即ちわが震怒によりて火燃いで深き陰府に燃いたりまた地とその產物とを燒つくし山々の基をもやさん二三 我禍災をかれらの上に積かさね吾矢をかれらにむかひて射つくさん二四 彼らは饑て痩おとろへ熱の病患と惡き疫とによりて滅びん我またかれらをして獸の歯にかからしめ地に匍ふ者の毒にあたらしめん二五 外には劍内には恐惶ありて少き男をも少き女をも幼兒をも白髮の人をも滅ぼさん二六 我は曰ふ我彼等を吹掃ひ彼らの事をして世の中に記憶らるること無らしめんと二七 然れども我は敵人の怒を恐る即ち敵人どれを見あやまりて言ん我らの手能くこれを爲り是はすべてヱホバの爲るにあらずと二八 彼らはまつたく智慧なき民なりその中には知識ある者なし二九 嗚呼彼らもし智慧あらば之を了りてその身の終を思慮らんものを三〇 彼らの磐これを賣ずヱホバこれを付さずば爭か一人にて千人を逐ひ二人にて萬人を敗ることを得ん三一 彼らの磐は我らの磐にしかず我らの敵たる者等も然認めたり三二 彼らの葡萄の樹はソドムの葡萄の樹またゴモラの野より出たる者その葡萄は毒葡萄その球は苦し三三 その葡萄酒は蛇の毒のごとく蝮の惡き毒のごとし三四 是は我の許に蓄へあり我の庫に封じこめ有にあらずや三五 彼らの足の躚かん時に我仇をかへし應報をなさんその災禍の日は近く其がために備へられたる事は迅速にいたる三六 ヱホバつひにその民を鞫きまたその僕に憐憫をくはへたまはん其は彼らの力のすでに去うせて繫がれたる者も繫がれざる者もあらずなれるを見たまへばなり三七 ヱホバ言たまはん彼らの神々は何處にをるや彼らが賴める磐は何處ぞや三八 即ちその犧牲の膏油を食ひその灌祭の酒を飮たる者は何處にをるや其等をして起て汝らを助けしめ汝らを護しめよ三九 汝ら今觀よ我こそは彼なり我の外には神なし殺すこと活すこと撃こと愈すことは凡て我是を爲す我手より救ひ出すことを得る者あらず四〇 我天にむかひて手をあげて言ふ我は永遠に活く四一 我わが閃爍く刃を磨ぎ審判をわが手に握る時はかならず仇をわが敵にかへし我を惡む者に返報をなさん四二 我わが箭をして血に醉しめ吾劍をして肉を食しめん即ち殺さるる者と虜らるる者の血を之に飮せ敵の髮おほき首の肉をこれに食はせん四三 國々の民よ汝らヱホバの民のために歡悅をなせ其はヱホバその僕の血のために返報をなしその敵に仇をかへしその地とその民の汚穢をのぞきたまへばなり四四 モーセ、ヌンの子ヨシユアとともに到りてこの歌の言をことごとく民に誦きかせたり四五 モーセこの言語をことごとくイスラエルの一切の人に告をはりて四六 これに言けるは我が今日なんぢらに對ひて證するこの一切の言語を汝ら心に藏め汝らの子等にこの律法の一切の言語を守りおこなふことを命ずべし四七 抑この言は汝らには虛しき言にあらず是は汝らの生命なりこの言によりて汝らはそのヨルダンを濟りゆ

きて獲ところの地にて汝らの生命を永うすることを得るなり四八 この日にヱホバ、モーセに告て言たまはく四九 汝ヱリコに對するモアブの地のアバリム山に登りてネボ山にいたり我がイスラエルの子孫にあたへて產業となさしむるカナンの地を觀わたせよ五〇 汝はその登れる山に死て汝の民に列ならん是汝の兄弟アロンがホル山に死てその民に列りしごとくなるべし五一 是は汝らチンの曠野なるカデシのメリバの水の邊においてイスラエルの子孫の中間にて我に悖りイスラエルの子孫の中に我の聖きことを顯さざりしが故なり五二 然ども汝は我がイスラエルの子孫に與ふる地を汝の前に觀わたすことを得ん但しその地には汝いることを得じ

第三三章一 神の人モーセその死る前にイスラエルの子孫を祝せりその祝せし言は是のごとし云く二 ヱホバ、シナイより來りセイルより彼らにむかひて昇りバランの山より光明を發ちて出で千萬の聖者の中間よりして格りたまへりその右の手には輝やける火ありき三 ヱホバは民を愛したまふ其聖者は皆その手にあり皆その足下に坐りその言によりて起あがる四 モーセわれらに律法を命ぜり是はヤコブの會衆の產業たり五 民の首領等イスラエルの諸の支派あひ集れる時に彼はヱシユルンの中に王たりき六 ルベンは生ん死はせじ然どその人數は寡少ならん七 ユダにつきては斯いふヱホバよユダの聲を聽きこれをその民に引かへしたまへ彼はその手をもて己のために戰はん願くは汝これを助けてその敵にあたらしめたまへ八 レビについては言ふ汝のトンミムとウリムは汝の聖人に歸す汝かつてマツサにて彼を試みメリバの水の邊にてかれと爭へり九 彼はその父またはその母につきて言り我はこれを見ずと又彼は自己の兄弟を認ずまた自己の子等を顧みざりき是はなんぢの言に遵がひ汝の契約を守りてなり一〇 彼らは汝の式例をヤコブに敎へ汝の律法をイスラエルに敎へ又香を汝の鼻の前にそなへ燔祭を汝の壇の上にささぐ一一 ヱホバよ彼の所有を祝し彼が手の作爲を悅こびて納れたまへ又起てこれに逆らふ者とこれを惡む者との腰を摧きて復起あがることあたはざらしめたまへ一二 ベニヤミンについては言ふヱホバの愛する者安然にヱホバとともにあり日々にその庇護をかうむりてその肩の間に居ん一三 ヨセフについては言ふ願くはその地ヱホバの祝福をかうむらんことを即ち天の寶物なる露淵の底なる水一四 日によりて產する寶物月によりて生ずる寶物一五 古山の嶺の寶物 老嶽の寶物一六 地の寶物地の中の產物および柴の中に居たまひし者の恩惠などヨセフの首に臨みその兄弟と別になりたる者の頂に降らん一七 彼の牛の首出はその身に榮光ありてその角は兕の角のごとく之をもて國々の民を衝たふして直に地の四方の極にまで至る是はエフライムの萬々是はマナセの千々なり一八 ゼブルンについては言ふゼブルンよ汝は外に出て快樂を得よイツサカルよ汝は家に居て快樂を得よ一九 彼らは國々の民を山に招き其處にて義の犧牲を獻げん又海

の中に盈る物を得て食ひ沙の中に蔵れたる物を得て食はん二〇ガドについては言ふガドをして大ならしむる者は讃べき哉ガドは獅子のごとくに伏し腕と首の頂とを搔裂ん二一彼は初穂の地を自己のために選べり其處には大將の分もこもれり彼は民の首領等とともに至りイスラエルとともにヱホバの公義と審判とをなこなへり二二ダンについては言ふダンは小獅子のごとくバシヤンより跳り出づ二三ナフタリについては言ふナフタリよ汝は大に福祉をかうむりヱホバの恩惠にうるほふて西と南の部を獲ん二四アセルについては言ふアセルは他の子等よりも幸福なりまた其兄弟等にこえて惠まれその足を膏の中に浸さん二五汝の門閂は鐵のごとく銅のごとし汝の能力は汝が日々に需むるところに循はん二六ヱシユルンよ全能の神のごとき者は外に無し是は天に乗て汝を助け雲に駕てその威光をあらはしたまふ二七永久に在す神は住所なり下には永遠の腕あり敵人を汝の前より驅はらひて言たまふ滅ぼせよと二八イスラエルは安然に住をりヤコブの泉は穀と酒との多き地に獨り在らんその天はまた露をこれに降すべし二九イスラエルよ汝は幸福なり誰か汝のごとくヱホバに救はれし民たらんヱホバは汝を護る楯汝の榮光の劍なり汝の敵は汝に諂ひ服せん汝はかれらの高處を踐ん

第三四章一斯てモーセ、モアブの平野よりネボ山にのぼりヱリコに對するピスガの嶺にいたりければヱホバ之にギレアデの全地をダンまで見し二ナフタリの全部エフライムとマナセの地およびユダの全地を西の海まで見し三南の地と棕櫚の邑なるヱリコの谷の原をゾアルまで見したまへり四而してヱホバかれに言たまひけるは我がアブラハム、イサク、ヤコブにむかひ之を汝の子孫にあたへんと言て誓ひたりし地は是なり我なんぢをして之を汝の目に觀ことを得せしむ然ど汝は彼處に濟りゆくことを得ずと五斯の如くヱホバの僕モーセはヱホバの言の如くモアブの地に死り六ヱホバ、ベテペオルに對するモアブの地の谷にこれを葬り給へり今日までその墓を知る人なし七モーセはその死たる時百二十歳なりしがその目は矇まずその氣力は衰へざりき八イスラエルの子孫モアブの地において三十日のあひだモーセのために哭泣をなしけるがモーセのために哭き哀しむ日つひに滿り九ヌンの子ヨシユアは心に智慧の充る者なりモーセその手をこれが上に按たるによりて然るなりイスラエルの子孫は之に聽したがひヱホバのモーセに命じたまひし如くおこなへり一〇イスラエルの中にはこの後モーセのごとき預言者おこらざりきモーセはヱホバが面を對せて知たまへる者なりき一一即ちヱホバ、エジプトの地においてかれをパロとその臣下とその全地とにつかはして諸々の徵證と奇蹟を行はせたまへり一二またイスラエルの一切の人の目の前にてモーセその大なる能力をあらはし大なる畏るべき事を行へり

ヨシュア記

第一章 一ヱホバの僕モーセの死し後ヱホバ、モーセの從者ヌンの子ヨシュアに語りて言たまはく 二わが僕モーセは已に死り然ば汝いま此すべての民とともに起てこのヨルダンを濟り我がイスラエルの子孫に與ふる地にゆけ 三凡そ汝らが足の蹠にて踏む所は我これを盡く汝らに與ふ我が前にモーセに語し如し 四汝らの疆界は荒野および此レバノンより大河ユフラテ河に至りてヘテ人の全地を包ね日の沒る方の大海に及ぶべし 五汝が生ながらふる日の間なんぢに當る事を得る人なかるべし我モーセと偕に在しごとく汝と偕にあらん我なんぢを離れず汝を棄じ 六心を強くしかつ勇め汝はこの民をして我が之に與ふることをその先祖等に誓ひたりし地を獲しむべき者なり 七惟心を強くし勇み勵んで我僕モーセが汝に命ぜし律法をことごとく守りて行へ之を離れて右にも左にも曲るなかれ然ば汝いづくに往ても利を得べし 八この律法の書を汝の口より離すべからず夜も晝もこれを念ひて其中に錄したる所をことごとく守りて行へ然ば汝の途福利を得汝かならず勝利を得べし 九我なんぢに命ぜしにあらずや心を強くしかつ勇め汝の凡て往く處にて汝の神ヱホバ偕に在せば懼る勿れ戰慄なかれ 一〇茲にヨシュア民の有司等に命じて言ふ 一一陣營の中を行めぐり民に命じて言へ汝等糧食を備へよ三日の內に汝らは此ヨルダンを濟り汝らの神ヱホバが汝らに與へて獲させんとしたまふ地を獲んために進みゆくべければなりと 一二ヨシュアまたルベン人ガド人およびマナセの支派の半に告て言ふ 一三ヱホバの僕モーセ前に汝らに命じて言り汝らの神ヱホバ今なんぢらに安息を賜へり亦この地を汝らに與へたまふべしと汝らこの言詞を記念よ 一四汝らの妻子および家畜はモーセが汝らに與へしヨルダンの此旁の地に止まるべし然ど汝ら勇者は皆身をよろひて兄弟等の先にたち進濟りて之を助けよ 一五而してヱホバが汝らに賜ひし如くなんぢらの兄弟等にも安息を賜ふにおよばば又かれらもなんぢらの神ヱホバの與へたまふ地を獲るにおよばば汝らヱホバの僕モーセより與へられしヨルダンの此旁日の出る方なる己が所有の地に還りてこれを保つべしと 一六彼らヨシュアに應て言ふ汝が我等に命ぜし所は我等盡く爲べし凡て汝が我らを遣す處には我ら往べし 一七我らは一切の事モーセに聽したがひし如く亦なんぢに聽したがはん唯ねがはくは汝の神ヱホバ、モーセと偕にいまししごとく汝と偕に在さんことを 一八誰にもあれ汝が命令に背き凡て汝が命ずるところの言に聽したがはざる者あらば之を殺すべし唯なんぢ心を強くしかつ勇め

第二章 一茲にヌンの子ヨシュア、シツテムより潜かに二人の間者を發し之にいひけるは往てかの地およびヱリコを窺ひ探れ乃ち彼ら往て妓婦ラハブと名づくる者の家に入て其處に寢けるが 二或人ヱリコの王に告て觀よイスラエルの子孫の者この地を

探らんとて今宵ここに入きたれりといふ三是に於てヱリコの王ラハブに言つかはしけるは汝にきたりて汝の家に入し人を曳いだせ彼らは此全國を探らんとて來れるなり四婦人かのふたりの人を將て之を匿し而して言ふ實にその人々はわが許に來れり然れども我その何處よりか知ざりしが五黄昏どき門を閉るころに出され我その人々の何處へ往しかを知ず急ぎその後を追へ然ば之に追及んと六その實は婦すでにかれらを領て屋蓋に升り屋蓋の上に列べおきたる麻のなかに之をかくしなり七かくてその人々彼らの後を追ひヨルダンの路をゆきて渡場に赴むけり、かれらの後を追ふ者出るや直に門を閉しぬ八二人のもの未だ寝ずラハブ屋背に上りて彼らのもとに來り九これに言けるはヱホバこの地を汝らに賜へり我らは甚く汝らを懼る此地の民盡く汝らの前に消亡ん我この事を知る一〇其は汝らがエジプトより出來し時ヱホバなんぢらの前にて紅海の水を乾たまひし事および汝らがヨルダンの彼旁にありしアモリ人の二箇の王シホンとオグとになししこと即ちことごとく之を滅ぼしたりし事を我ら聞たればなり一一我ら之を聞や心怯けなんぢらの故により て人の魂きえうせたり汝らの神ヱホバは上の天にも下の地にも神たるなり一二然ば請ふ我すでに汝らに恩を施したれば汝らも今ヱホバを指て我父の家に恩をほどこさんことを誓ひて我に眞實の記號を與へよ一三又わが父母兄弟姉妹および凡て彼らに屬る者をながらへしめ我らの生命を拯ひて死を免かれしめんことを誓へよ一四二人のものこれに言けるは汝ら若しわれらの此事を洩すことなくば我らの生命汝らに代りて死ん又ヱホバわれらに此地を與へたまふ時には我らなんぢに恩を施し眞實を盡さん一五是においてラハブ繩をもて彼らを窓より縋おろせり是は其家邑の石垣の上にありてかれ石垣の上に住しによる一六ラハブかれらに言けるは恐らくは追者なんぢに遇ん汝ら山に往て三日が間そこに隱れをり追者の還るを待て後去ゆくべし一七二人のものかれに言けるは汝が我らに誓し此誓につきては我ら罪を獲じ一八我らが此地に打いらん時は汝我らを縋おろしたりし窓に此一條の赤き紐を結つけ且つ汝の父母兄弟および汝の父の家の眷族を悉く汝の家に聚むべし一九凡て汝の家の門を出て街衢に來る者はその血自身の首に歸すべし我らは罪なし然ども汝とともに家にをる者に手をくはふることをせばその血は我らの首に歸すべし二〇將た汝もし我らのこの事を洩さば汝が我らに誓せたる誓に我らあづかることなし二一ラハブいひけるはなんぢらの言のごとくすべしと斯てかれらを出し去しめて赤き紐を窓に結べり二二かれら往て山にいり追來るもののかへるを待て三日が間そこに居れりおひ來れるもの偏ねく彼らを途に尋ねしかども終に獲ざりき二三而してかの二箇の人は山を下り河を濟りてヌンの子ヨシュアに詣りて其有し事等をつぶさに陳ぶ二四またヨシュアにいふ誠にヱホバこの國をことごとく我らの手に付したまへりこの國の民は皆我らの前に消うせ

んと

第三章 一 ヨシュア朝はやく起いでてイスラエルの人々とともにシツテムを打發てヨルダンにゆき之を濟らずして其處に宿りぬ 二 斯て三日の後有司ら陣營の中をめぐり 三 民に命じて曰ふ汝ら祭司等レビ人がなんぢらの神ヱホバの契約の櫃を舁出すを見ば其處を發出てその後に從がへ 四 されど汝らとその櫃との間には量りて凡そ二千キユビト許の隔離あるべし之に近づく勿れなんぢらその行べき途を知んためなり汝らは未だこの途を經しことなかりき 五 ヨシュアまた民に言ふ汝ら身を潔めよヱホバ明日なんぢらの中に妙なる事を行ひたまふべしと 六 ヨシュア祭司等に告ていふ契約の櫃を舁き民に先だちて濟れと則ち契約の櫃を舁き民に先だちて進めり 七 ヱホバ、ヨシュアに言たまひけるは今日よりして我イスラエルの衆の目の前に汝を尊くし我がモーセと偕にありし如く汝と偕にあることを之に知せん 八 なんぢ契約の櫃を舁ところの祭司等に命じて言へ汝らヨルダンの水際にゆかばヨルダンにいりて立べしと 九 ヨシュアでイスラエルの人々にむかひて汝ら此に近づき汝らの神ヱホバの言を聽けと 一〇 而してヨシュア語りけらく活神なんぢらの中に在してカナン人ヘテ人ヒビ人ペリジ人ギルガジ人アモリ人ヱブス人を汝らの前より必ず逐はらひたまふべきを左の事によりてなんぢら知るべし 一一 視よ全地の主の契約の櫃なんぢらに先だちてヨルダンにすすみ入る 一二 然ば今イスラエルの支派の中より支派ごとに一人づつ合せて十二人を擧よ 一三 全地の主ヱホバの櫃を舁ところの祭司等の足の蹠ヨルダンの水の中に踏とどまらばヨルダンの水上より流れくだる水きれとどまり立てうづだかくならん 一四 かくて民はヨルダンを濟らんとてその幕屋を立出祭司等は契約の櫃を舁て之に先だちゆく 一五 抑々ヨルダンは収穫の頃には絶ずその岸にことごとく溢るるなれど櫃を舁く者等ヨルダンに到り櫃を舁ける祭司等の足水際に浸ると斉しく 一六 上より流れくだる水止まりて遥に遠き處まで涸れザレタンに近きアダム邑の邊にて積り起て堆かくなりアラバの海すなはち鹽海の方に流れくだる水まつたく截止りたれば民ヱリコにむかひて直に濟れり 一七 即ちヱホバの契約の櫃を舁る祭司等ヨルダンの中の乾ける地に堅く立をりてイスラエル人みな乾ける地を渉りゆき遂に民ことごとくヨルダンを濟りつくせり

第四章 一 民ことごとくヨルダンを濟りつくしたる時ヱホバ、ヨシュアに語りて言たまはく 二 汝ら民の中より支派ごとに一人づつ合せて十二人を擧げ 三 これに命じて言へ汝らヨルダンの中祭司等の足を踏とめしその處より石十二を取あげてこれを負ひ濟り此夜なんぢらが宿る宿場に居ゑよと 四 ヨシュアすなはちイスラエルの人々の中より支派ごとに預て一人づつを取て備へおきぬその十二人の者を召よせ 五 而してヨシュアこれに言けるは汝らの神ヱホバの契約の櫃の前に當りて汝らヨルダンの中にすすみ入りイスラエルの人々の支派の數に循ひて各々石ひとつを

取あげて肩に負きたれ六是は汝らの中に徴となるべし後の日にいたりて汝らの子輩是等の石は何のこころなりやと問て言ば七之にいへ往昔ヨルダンの水ヱホバの契約の櫃の前にて裁斷りたる事を表はすなり即ちそのヨルダンを濟れる時にヨルダンの水きれ止まれりこの故にこれらの石を永くイスラエルの人々の記念となすべしと八イスラエルのひとびとヨシユアの命ぜしごとく然なしヱホバのヨシユアに告げたまひし如くイスラエルの人々の支派の數にしたがひてヨルダンの中より石十二を取あげ之を負わたりてその宿る處にいたり之を其處にすゑたり九ヨシユアまたヨルダンの中において契約の櫃を舁る祭司等の足を踏立し處に石十二を立たりしが今日までも尚ほ彼處にあり一〇櫃を舁る祭司等はヱホバのヨシユアに命じて民に告しめたまひし事の悉く成るまでヨルダンの中に立をれり凡てモーセのヨシユアに命ぜし所に適へり民は急ぎて濟りぬ一一民の悉く濟りつくせるときヱホバの櫃および祭司等は民の觀る前にて濟りたり一二ルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの支派の半モーセの之に言たりし如く身をよろひてイスラエルの人々に先だちて濟りゆき一三凡そ四萬人ばかりの者軍の裝に身を堅め攻戰はんとてヱホバに先だち濟りてヱリコの平野に至れり一四ヱホバこの日イスラエルの衆人の目の前にてヨシユアを尊くしたまひければ皆モーセを畏れしごとくに彼を畏る其一生の間常に然り一五ヱホバ、ヨシユアに語りて言たまひけるは一六なんぢ證詞の櫃を舁る祭司等に命じヨルダンを出きたれと命ぜよ一七ヨシユアすなはち祭司等に命じヨルダンを出きたれと言ければ一八ヱホバの契約の櫃を舁る祭司等ヨルダンの中より出きたる 祭司等足の蹠を陸地に擧ると齊くヨルダンの水故の處に流れかへりて初のごとくその岸にことごとく溢れぬ一九正月の十日に民ヨルダンを出きたりヱリコの東の境界なるギルガルに營を張り二〇時にヨシユアそのヨルダンより取きたらせし十二の石をギルガルにたて二一イスラエルの人々に語りて言ふ後の日にいたりて汝らの子輩その父に問て是らの石は何の意なりやと言ば二二その子輩に告しらせて言へ在昔イスラエルこのヨルダンを陸地となして濟りすぎし事あり二三即ち汝らの神ヱホバ、ヨルダンの水を汝らの前に乾涸して汝らを濟らせたまへり其事は汝らの神ヱホバの我らの前に紅海を乾涸して我らを渡らせたまひし狀況の如くなりき二四斯なしたまひしは地の諸の民をしてヱホバの手の力あるを知しめ汝らの神ヱホバを恒に畏れしめんためなり

第五章一ヨルダンの彼旁に居るアモリ人の諸の王および海邊に居るカナン人の諸の王はヱホバ、ヨルダンの水をイスラエルの人々の前に乾涸して我らを濟らせたまひしと聞きイスラエルの人々の事によりて神魂消え心も心ならざりき二その時ヱホバ、ヨシユアに言たまひけるは汝石の小刀を作り重て復イスラエルの人々に割禮を行なへと三ヨシユアすなはち石の小刀を作り陽皮山にてイスラエルの人々に割禮を行へり四ヨシユアが割禮

を行ひし所以は是なりエジプトより出きたりし民の中の一切の男すなはち軍人は皆エジプトを出し後途にて荒野に死たりしが五その出來し民はみな割禮を受たる者なりき然どエジプトを出し後途にて荒野に生れし民には皆割禮を施こさざりき六そもそもイスラエルの人々は四十年の間荒野を歩みをりて終にそのエジプトより出來し民すなはち軍人等ことごとく亡はてたり是ヱホバの聲に聽したがはざりしに因てなり是をもてヱホバかれらの先祖等に誓ひて我等に與へんと宣まひし地なる乳と蜜との流るる地を之に見せじと誓たまへり七かれらに繼て興らしめたまひしその子輩にはヨシユア割禮を行へりかれらは途にて割禮を施さざりしによりて割禮なきものなりければなり八一切の民に割禮を行ふこと畢りぬれば民は陣營に其儘居てその痊るを待り九時にヱホバ、ヨシユアにむかひて我今日エジプトの羞辱を汝らの上より轉ばし去りと宣まへり是をもてその處の名を今日までギルガル(轉)と稱ふ一〇イスラエルの人々ギルガルに營を張りその月の十四日の晩ヱリコの平野にて逾越節を行へり一一而して逾越節の翌日その地の穀物酵いれぬパンおよび烘麥をその日に食ひけるが一二その地の穀物を食ひし翌日よりしてマナの降ることを止みてイスラエルの人々かさねてマナを獲ざりき其年はカナンの地の產物を食へり一三ヨシユア、ヱリコの邊にあひける時目を擧て觀しに一箇の人劍を手に拔持て己にむかひて立るければヨシユアすなはちその許にゆきて之に言ふ汝は我等を助くるか將われらの敵を助くるか一四かれいひけるは否われはヱホバの軍旅の將として今來れるなりとヨシユア地に俯伏て拜し我主なにを僕に告んとしたまふやと之に言り一五ヱホバの軍旅の將ヨシユアに言けるは汝の履を足より脫され汝が立をる處は聖きなりとヨシユア然なしぬ

第六章一(イスラエルの人々の故によりてヱリコは堅く閉して出入する者なし)二ヱホバ、ヨシユアに言ひたまひけるは觀よわれヱリコおよびその王と大勇士とを汝の手に付さん三汝ら軍人みな邑を繞りて邑の周圍を一次まはるべし汝六日が間かく爲よ四祭司等七人おのおのヨベルの喇叭をたづさへて櫃に先だつべし而して第七日には汝ら七次邑をめぐり祭司等喇叭を吹ならすべし五然して祭司等ヨベルの角を音ながくふきならして喇叭の聲なんぢらに聞ゆる時は民みな大に呼はり喊ぶべし然せばその邑の石垣崩れおちん民みな直に進て攻のぼるべしと六ヌンの子ヨシユアやがて祭司等を召て之に言ふ汝ら契約の櫃を舁き祭司等七人ヨベルの喇叭七をたづさへてヱホバの櫃に先だつべしと七而して民に言ふ汝ら進みゆきて邑を繞れ甲冑のものどもヱホバの櫃に先だちて進むべしと八ヨシユアかく民に語りしかば七人の祭司等おのおのヨベルの喇叭をたづさへヱホバに先だちすきみて喇叭を吹きヱホバの契約の櫃これにしたがふ九即ち甲冑のものどもは喇叭を吹くところの祭司等にさきだちて行き後軍は櫃の後に行く祭司たちは喇叭を吹きつつすすめ

り一〇ヨシユア民に命じて言ふ汝ら呼はる勿れ汝らの聲を聞えしむるなかれまた汝らの口より言を出すなかれわが汝らに呼はれと命ずる日におよびて呼はるべしと一一而してヱホバの櫃をもち邑を繞りて一周し陣營に來りて營中に宿れり一二又あくる朝ヨシユアはやく興いで祭司等ヱホバの櫃を舁き一三七人の祭司等おのおのヨベルの喇叭をたづさへヱホバの櫃に先だちて行き喇叭を吹きつつすすみ甲冑の者等これに先だちて行き後軍はヱホバの櫃の後に行く祭司等喇叭をふきつつ進めり一四その次の日にも一次邑を繞りて陣營に歸り六日が間然なせり一五第七日には夜明に早く興いで前のごとくして七次邑を繞れり唯この日のみ七次邑を繞りたり一六七次目にいたりて祭司等喇叭を吹くときにヨシユア民に言ふ汝ら呼はれヱホバこの邑を汝らに賜へり一七この邑およびその中の一切の物をば詛はれしものとしてヱホバに献ぐべし唯妓婦ラハブおよび凡て彼とともに家に在るものは生し存べしわれらが遣しし使者を匿したればなり一八唯汝ら詛はれし物を愼め恐らくは汝ら其を詛はれしものとして献ぐるに方りその詛はれし物を自ら取りてイスラエルの陣營をも詛はるるものとならしめ之をして惱ましむるに至らん一九但し銀金銅器鐵器などは凡てヱホバに聖別て奉まつるべきものなればヱホバの府庫にこれを携へいるべしと二〇是において民よばはり祭司喇叭を吹ならしけるが民喇叭の聲をきくと齊しくみな大聲を擧て呼はりしかば石垣崩れおちぬ斯りしかば民おのおの直に邑に上りいりて邑を攻取り二一邑にある者は男女少きもの老たるものの區別なく盡くこれを刃にかけて滅ぼし且つ牛羊驢馬にまで及ぼせり二二時にヨシユアこの地を窺ひたりし二箇の人にむかひ汝らかの妓婦の家に入りかの婦人およびかれに屬る一切のものを携へいだしかれに誓ひし如くせよと言ければ二三間者たりし少き人等すなはち入てラハブおよびその父母兄弟ならびに彼につけるすべてのものを携へ出しまたその親戚をも携へ出しイスラエルの陣營の外にかれらを置り二四斯て火をもて邑とその中の一切のものを焚ぬ但し銀金銅器鐵器などはヱホバの室の府庫に納めたり二五妓婦ラハブおよびその父の家の一族と彼に屬る一切の者とはヨシユアこれを生し存ければラハブは今日までイスラエルの中に住をる是はヨシユアがヱリコを窺はせんとて遣はしし使者を匿したるに因てなり二六ヨシユアその時人衆に誓ひて命じ言けるは凡そ起てこのヱリコの邑を建る者はヱホバの前に詛はるべし其石礎をすゑなば長子を失ひその門を建なば季子を失はんと二七ヱホバ、ヨシユアとともに在してヨシユアの名あまねく此地に聞ゆ

第七章一時にイスラエルの人々その詛はれし物につきて罪を犯せり即ちユダの支派の中なるゼラの子ザブデの子なるカルミの子アカン詛はれし物を取り是をもてヱホバ、イスラエルの人々にむかひて震怒を發ちたまへり二ヨシユア、ヱリコより人を遣はしベテルの東に當りてベテアベンの邊にあるアイに到らしめ

んとし之に語りて言ふ汝ら上りゆきてかの地を窺へとその人々上りゆきてアイを窺ひけるが 三 ヨシュアの許に歸て之に言ふ民を盡くは上り往しめざれ唯二三千人を上らせてアイを撃しめよかれらは寡ければ一切の民を彼處に遣て勞せしむるなかれと 四 是において民およそ三千人ばかり彼處に上りゆきけるが遂にアイの人の前より遁はしれり 五 アイの人彼らを門の前より追てシバリムにいたり下坂にてその三十六人ばかりを撃り民は魂神消て水のごとくになりぬ 六 斯りしかばヨシュア衣を裂きイスラエルの長老等とともにヱホバの櫃の前にて暮まで地に俯伏をり首に塵を蒙れり 七 ヨシュア言けらく嗟主ヱホバよ何とて此民を導きてヨルダンを濟らせ我らをアモリ人の手に付して滅亡させんとしたまふや我等ヨルダンの彼旁に安んじ居しならば善りしものを 八 嗟主よイスラエルすでに敵に背を見せたれば我また何をか言ん 九 カナン人およびこの地の一切の民これを聞きわれらを攻かこみてわれらの名をこの世より絶ん然らば汝の大なる御名を如何にせんや 一〇 ヱホバ、ヨシュアに言たまひけるは立よなんぢ何とて斯は俯伏すや 一一 イスラエルすでに罪を犯しわが彼らに命じおける契約を破れり即ち彼らは詛はれし物を取り窃みかつ詐りてこれを己の所有物の中にいれたり 一二 是をもてイスラエルの人々は敵に當ること能はず敵に背を見す是は彼らも詛はるる者となりたればなり汝ら其詛はれし物を汝らの中より絶にあらざれば我ふたたび汝らと偕にをらじ 一三 たてよ民を潔めて言へ汝ら身を潔めて明日を待てイスラエルの神ヱホバかく言たまふイスラエルよ汝の中に詛はれしものあり汝その詛はれし物を汝らの中より除き去るまでは汝の敵に當ること能はず 一四 然ば翌朝汝らその支派にしたがひて進みいづべし而してヱホバの掣たまふ支派はその宗族にしたがひて進み出でヱホバの掣たまふ宗族はその家にしたがひて進み出でヱホバの掣たまふ家は男ひとりびとりに從がひて進みいづべし 一五 凡そ掣れて詛はれし物を有りと定まる者は其一切の所有物とともに火に焚るべし是はヱホバの契約を破りイスラエルの中に愚なる事を行ひたるが故なりと 一六 ヨシュア是において朝はやく興いでてイスラエルをその支派にしたがひて進出しめけるにユダの支派掣れたれば 一七 ユダのもろもろの宗族を進み出でしめけるにゼラの宗族掣れゼラの宗族の人々を進み出しめけるにザブデ掣れ 一八 ザブデの家の人々を進み出しめけるにアカン掣れぬ彼はユダの支派なるゼラの子ザブデの子なるカルミの子なり 一九 ヨシュア、アカンに言けるは我子よ請ふイスラエルの神ヱホバに稱讃を歸し之にむかひて懺悔し汝の爲たる事を我に告よ其事を我に隱すなかれ 二〇 アカン、ヨシュアに答へて言けるは實にわれはイスラエルの神ヱホバに對ひて罪ををかし如此々々行へり 二一 即ちわれ掠取物の中にバビロンの美しき衣服一枚に銀二百シケルと重量五十シケルの金の棒あるを見欲く思ひて其を取れりそれはわが天幕の中に地に埋め匿してあり銀も下にありと 二二 爰にヨ

シュア使者を遣はしければ即ち彼の天幕に奔りゆきて視しに其は彼の天幕の中に匿しありて銀も下にありき二三彼ら其を天幕の中より取出してヨシュアとイスラエルの一切の人々の所に携へきたりければ則ちそれをヱホバの前に置り二四ヨシュアやがてイスラエルの一切の人とともにゼラの子アカンを執へかの銀と衣服と金の棒およびその男子女子牛驢馬羊天幕など凡て彼の有る物をことごとく取てアコルの谷にこれを曳ゆけり二五而してヨシュア言けらく汝なんぞ我らを悩まししやヱホバ今日汝を悩ましたまふべしと頓てイスラエル人みな石をもて彼を撃ころし又その家族等をも石にて撃ころし火をもて之を焚けり二六而してアカンの上に大なる石堆を積揚たりしが今日まで存るかくてヱホバその烈しき忿怒を息たまへり是によりてその處の名を今日までアコル（悩）の谷と呼ぶ

第八章一 茲にヱホバ、ヨシュアに言たまひけるは懼るる勿れ戰慄なかれ軍人をことごとく率ゐ起てアイに攻のぼれ視よ我アイの王およびその民その邑その地を都て汝の手に授く二汝さきにヱリコとその王とに爲し如くアイとその王とに爲べし今回は其貨財およびその家畜を奪ひて自ら取べし汝まづ邑の後に伏兵を設くべしと三ヨシュアすなはち起あがり軍人をことごとく將てアイに攻のぼらんとしまづ大勇士三萬人を選びて夜の中にこれを遣はせり四ヨシュアこれに命じて言く汝らは邑に對ひて邑の後に伏すべし邑に遠く離れをる勿れ皆準備をなして待をれ五我と我に従がふ民みな共に邑に攻よせん而して彼らが初のごとく我らにむかひて打出んとき我らは彼らの前より逃はしらん六然せば彼ら我らを追て出來べければ我等つひに之を邑より誘き出すことを得ん其は彼等いはんこの人衆は初めのごとくまた我等の前より逃ぐと斯てわれらその前より逃はしらん七汝らその伏をる處より起りて邑を取べし汝らの神ヱホバ之を汝らの手に付したまふべし八汝ら邑を乗取たらば邑に火を放ちヱホバの言詞の如く爲べし我これを汝らに命ず努よやと九かくてヨシュアかれらを遣はしければ即はち往てアイの西の方にてベテルとアイとの間に身を伏せたりヨシュアはその夜民の中に宿れり一〇ヨシュア朝はやく興いでて民をあつめイスラエルの長老等とともに民に先だちてアイにのぼりゆけり一一彼に従がふ軍人ことごとく上りゆきて攻寄せ邑の前に至りてアイの北に陣をとれり彼とアイの間には一の谷ありき一二ヨシュア五千人許を擧て邑の西の方にてベテルとアイとの間にこれを伏せおけり一三かく民の全軍を邑の北に置きその伏兵を邑の西に置てヨシュアその夜谷の中にいりぬ一四アイの王これを視しかばその邑の人々みな急ぎて蚤に起き進み出てイスラエルと戰ひけるが預て諜しあはせ置る頃には王とその一切の民アラバの前に進み來れり王は邑の後に伏兵ありて己を伺ふを知らざりき一五時にヨシュア、イスラエルの一切の人とともに彼らに打負し状して荒野の路を指て逃はしりしかば一六その邑の民みな之を追撃んとて

呼はり集まりヨシユアの後を追て邑を出離れ一七アイにもベテルにもイスラエルを追ゆかずして遺りをる者は一人もなく皆邑を開き放してイスラエルの後を追り一八時にヱホバ、ヨシユアに言たまはく汝の手にある矛をアイの方に指伸よ我これを汝の手に授くべしとヨシユアすなはち己の手にある矛をアイの方に指伸るに一九伏兵たちまち其處より起りヨシユアが手を伸ると齊しく奔きたりて邑に打いり之を取りて直に邑に火をかけたり二〇茲にアイの人々背をふりかへりて觀しに邑の焚る煙天に立騰りゐたれば此へも彼へも逃るに術なかりき斯る機しも荒野に逃ゆける民も身をかへして其追きたる者等に逼れり二一ヨシユアおよび一切のイスラエル人伏兵の邑を取て邑の焚る煙の立騰るを見身を還してアイの人々を殺しけるが二二かの兵また邑より出きたりて彼らに向ひければ彼方にも此方にもイスラエル人ありて彼らはその中間に挾まれぬイスラエル人かくして彼らを攻撃て一人をも餘さず逃さず二三つひにアイの王を生擒てヨシユアの許に曳きたれり二四イスラエル人己を荒野に追きたりしアイの民をことごとく野に殺し刃をもてこれを仆し盡すにおよびて皆アイに歸り刃をもてこれを撃ほろぼせり二五その日アイの人々ことごとく斃れたりその數男女あはせて一萬二千人二六ヨシユア、アイの民をことごとく滅ぼし絶まではその矛を指伸たる手を垂ざりき二七但しその邑の家畜および貨財はイスラエル人これを奪ひて自ら取り是はヱホバのヨシユアに命じたまひし言に依なり二八ヨシユア、アイを燬て永くこれを墟垤となしむ是は今日まで荒地となりをる二九ヨシユアまたアイの王を薄暮まで木に掛てさらし日の沒におよびて命じてその死骸を木より取おろさしめ邑の門の入口にこれを投すて其上に石の大垤を積おこせり其は今日まで存る三〇かくてヨシユア、エバル山にてイスラエルの神ヱホバに一の壇を築けり三一是はヱホバの僕モーセがイスラエルの子孫に命ぜしことに本づきモーセの律法の書に記されたる所に循がひて新石をもて作れる壇にて何人も鐵器をその上に振あげず人衆その上にてヱホバに燔祭を献げ酬恩祭を供ふ三二彼處にてヨシユア、モーセの書しるし律法をイスラエルの子孫の前にて石に書うつせり三三かくてイスラエルの一切の人およびその長老官吏裁判人など他國の者も本國の者も打まじりてヱホバの契約の櫃を舁る祭司等レビ人の前にあたりて櫃の此旁と彼旁に分れ半はゲリジム山の前に半はエバル山の前に立り是ヱホバの僕モーセの命ぜし所にしたがひて最初に先イスラエルの民を祝せんとてなり三四然る後ヨシユア律法の書に凡てしるされたる所に循ひて祝福と呪詛とにかかはる律法の言をことごとく誦り三五モーセの命じたる一切の言の中にヨシユアがイスラエルの全會衆および婦人子等ならびにイスラエルの中にをる他國の人の前にて誦ざるは無りき

第九章一茲にヨルダンの彼旁において山地平地レバノンに對へる大海の濱邊に居る諸の王すなはちヘテ人アモリ人カナン人ぺ

リジ人ヒビ人ヱブス人たる者どもこれな聞て二心を同うし相集まりてヨシユアおよびイスラエルと戰はんとす三然るにギベオンの民ヨシユアがヱリコとアイとに爲たりし事を聞しかば四己も詭計をめぐらして使者の状にいでたち古き袋および古び破れたるを結びとめたる酒の革嚢を驢馬に負せ五補ひたる古履を足にはき古衣を身にまとひ來れり其糧のパンは凡て乾きかつ黴てありき六彼等ギルガルの陣營に來りてヨシユアの許にいたり彼とイスラエルの人々に言ふ我らは遠き國より來れり然ば今われらと契約を結べと七イスラエルの人々ヒビ人に言けるは汝らは我等の中に住をるならんも計られねば我ら爭か汝らと契約を結ぶことを得んと八彼ら又ヨシユアにむかひて我らは汝の僕なりと言ければヨシユアかれらに汝らは何人にして何處より來りしやと問しに九彼らヨシユアに言けるは僕等は汝の神ヱホバの名の故によりて遥に遠き國より來れり其は我ら彼の聲譽および彼がエジプトにて行ひたりし一切の事を聞き一〇また彼がヨルダンの彼旁にをりしアモリ人の二箇の王すなはちヘシボンの王シホンおよびアシタロテにをりしバシヤンの王オグに爲たりし一切の事を聞たればなり一一是をもて我らの長老および我らの國に住をるものみなわれらに告て言り汝ら旅路の糧を手に携さへ往てかれらを迎へて彼らに言へ我らは汝らの僕なり請ふ我らと契約を結べと一二我らの此パンは汝らの所に來らんとて出たちし日に我ら家々より其なほ温煖なるをとり備へしなるが視よ今は已に乾きて黴たり一三また酒をみたせるこれらの革嚢も新しかりしが破るるに至り我らのこの衣服も履も旅路の甚だ長きによりて古びぬと一四然るに人々は彼らの糧を取りヱホバの口を問ことをせざりき一五ヨシユアすなはち彼らと好を爲し彼らを生しおかんといふ契約を結び會中の長等かれらに誓ひたりしが一六その彼らと契約を結びてより三日を經て後かれらは己に近き人にして己の中に住をる者なりと聞り一七イスラエルの子孫やがて進みて第三日に彼らの邑々に至れり其邑はギベオン、ケピラ、ベエロテおよびキリアテヤリムなり一八然れども會中の長等イスラエルの神ヱホバを指て彼らに誓ひたりしをもてイスラエルの子孫これを攻撃ざりき是をもて會衆みな長等にむかひて呟けり一九然ど長等は凡て全會衆に言ふ我らイスラエルの神ヱホバを指て彼らに誓へり然ば今彼らに觸べからず二〇我ら斯かれらに爲て彼らを生しおかん然すれば彼らに誓ひし誓によりて震怒の我らに及ぶことあらじと二一長等また人衆にむかひて彼らを生しおくべしと言ければ彼らは遂に全會衆のために薪を斬り水を汲ことをする者となれり長等の彼等に言たるが如し二二ヨシユアすなはち彼らを召よせて彼らに語りて言けるは汝らは我らの中に住をりながら何とて我らは汝らに甚だ遠しと言て我らを誑かししや二三然ば汝らは詛はる汝らは永く奴隷となり皆わが神の室のために薪を斬り水を汲ことをする者となるべしと二四彼らヨシユアに應へて言けるは僕

等はなんぢの神ヱホバその僕モーセに此地をことごとく汝らに與へ此地の民をことごとく汝らの前より滅ぼし去ことを命ぜしと明白に傳へ聞たれば汝らのために生命の危からんことを太く懼れて斯は爲けるなり二五視よ我らは今汝の手の中にあり汝の我らに爲を善とし正當とする所を爲たまへと二六ヨシュアすなはち其ごとく彼らに爲し彼らをイスラエルの子孫の手より救ひて殺さしめざりき二七ヨシュアその日かれらをして會衆のためおよびヱホバの壇の爲に其えらびたまふ處において薪を斬り水を汲ことをする者とならしめたりしが今日まで然り

第一〇章一茲にエルサレムの王アドニゼデクはヨシュアがアイを攻取てこれを全く滅ぼし嚮にヱリコとその王とに爲しごとくにアイとその王とにも爲たる事およびギベオンの民がイスラエルと好を爲て之が中にをる事を聞て二大に懼る是ギベオンは大なる邑にして都府に等しきに因りまたアイよりも大きくしてその内の人々凡て強きに因てなり三エルサレムの王アドニゼデク是においてヘブロンの王ホハム、ヤルムテの王ピラム、ラキシの王ヤピアおよびエグロンの王デビルに人を遣はして云ふ四我の處に上りきたりて我を助けよ我らギベオンを攻撃ん其はヨシュアおよびイスラエルの子孫と好を結びたればなりと五而してこのアモリ人の王五人すなはちエルサレムの王ヘブロンの王ヤルムテの王ラキシの王およびエグロンの王あひ集まりそり諸軍勢を率て上りきたりギベオンに對ひて陣を取り之を攻て戰ふ六ギベオンの人々ギルガルの陣營に人を遣はしヨシュアに言しめけるは僕等を助くることを緩うする勿れ迅速に我らの所に上り來りて我らを救ひ助けよ山地に住をるアモリ人の王みな相集りて我らを攻るなりと七ヨシュアすなはち一切の軍人および一切の大勇士を率ゐてギルガルより進みのぼれり八時にヱホバ、ヨシュアに言たまひけるは彼らを懼るるなかれ我かれらを汝の手に付す彼らの中には汝に當ることを得る者一人もあらじと九この故にヨシュア、ギルガルより終夜進みのぼりて猝然にかれらに攻よせしに一〇ヱホバかれらをイスラエルの前に敗りたまひければヨシュア、ギベオンにおいて彼らを夥多く擊殺しベテホロンの昇阪の路よりしてアゼカおよびマツケダまで彼らを追擊り一一彼らイスラエルの前より逃はしりてベテホロンの降阪にありける時ヱホバ天より大石を降しそのアゼカに到るまで然したまひければ多く死りイスラエルの子孫が劍をもて殺し者よりも雹石にて死し者の方衆かりき一二ヱホバ、イスラエルの子孫の前にアモリ人を付したまひし日にヨシュア、ヱホバにむかひて申せしことあり即ちイスラエルの目の前にて言けらく日よギベオンの上に止まれ月よアヤロンの谷にやすらへ一三民その敵を擊やぶるまで日は止まり月はやすらひぬ是はヤシヤルの書に記さるるにあらずや即ち日空の中にやすらひて急ぎ沒ざりしこと凡そ一日なりき一四是より先にも後にもヱホバ是のごとく人の言を聽いれたまひし日は有ず是時にはヱホバ、

イスラエルのために戰ひたまへり**一五**かくてヨシユア一切のイスラエル人とともにギルガルの陣營に歸りぬ**一六**かの五人の王は逃ゆきてマツケダの洞穴に隱れたりしが**一七**五人の王はマツケダの洞穴に隱れをるとヨシユアに告て言ふ者ありければ**一八**ヨシユアいひけるは汝ら洞穴の口に大石を轉ばしその傍に人を置てこれを守らせよ**一九**但し汝らは止る勿れ汝らの敵の後を追てその殿軍を擊て彼らをその邑々に入しむる勿れ汝らの神ヱホバかれらを汝らの手に付したまへるぞかし**二〇**ヨシユアおよびイスラエルの子孫おびただしく彼らを擊殺して遂に殺し盡しその擊もらされて遺れる者等城々に逃いるにおよびて**二一**民みな安然にマツケダの陣營にかへりてヨシユアの許にいたりけるがイスラエルの子孫にむかひて舌を鳴すもの一人もなかりき**二二**時にヨシユア言ふ洞穴の口を開きて洞穴よりかの五人の王を我前に曳いだせと**二三**やがて然なしてかの五人の王すなはちヱルサレムの王ヘブロンの王ヤルムテの王ラキシの王およびエグロンの王を洞穴より彼の前に曳いだせり**二四**かの王等をヨシユアの前に曳いだしし時ヨシユア、イスラエルの一切の人々を呼よせ己とともに往し軍人の長等に言けるは汝ら近よりて此王等の頸に足をかけよと乃はち近よりてその王等の頸に足をかけければ**二五**ヨシユアこれに言ふ汝ら懼るる勿れ慄く勿れ心を強くしかつ勇めよ汝らが攻て戰ふ諸の敵にはヱホバすべて斯のごとく爲たまふべしと**二六**かくて後ヨシユア彼らを擊て死しめ五個の木にかけて晩暮まで木の上にこれを曝しおきしが**二七**日の沒る時におよびてヨシユア命を下しければ之を木より取おろしその隱れたりし洞穴に投いれて洞穴の口に大石を置り是は今日が日までも存す**二八**ヨシユアかの日マツケダを取り刃をもて之とその王とを擊ち之とその中たる一切の人をことごとく滅して一人をも遺さずヱリコの王になしたるごとくにマツケダの王にも爲しぬ**二九**かくてヨシユア一切のイスラエル人を率ゐてマツケダよりリブナに進みてリブナを攻て戰ひけるに**三〇**ヱホバまた之とその王をもイスラエルの手に付したまひしかば刃をもて之とその中なる一切の人を擊ほろぼし一人をもその中に遺さずヱリコの王に爲たるごとくにその王にも爲ぬ**三一**ヨシユアまた一切のイスラエル人を率ゐてリブナよりラキシに進み之にむかひて陣をとり之を攻めて戰ひけるに**三二**ヱホバでラキシをイスラエルの手に付したまひければ第二日にこれを取り刃をもて之とその中なる一切の人々を擊ちほろぼせり凡てリブナに爲たるがごとし**三三**時にゲゼルの王ホラム、ラキシを援けんとて上りきたりければヨシユアかれとその民とを擊ころして終に一人をも遺さざりき**三四**斯てヨシユア一切のイスラエル人を率ゐてラキシよりエグロンに進み之に對ひて陣を取りこれを攻て戰ひ**三五**その日にこれを取り刃をもて之を擊その中なる一切の人をことごとくその日に滅ぼせり凡てラキシに爲たるが如し**三六**ヨシユアまた一切のイスラエル人をひきゐてエグロンよりヘブロンに

進みのぼり之を攻て戰ひ三七やがてこれを取り之とその王およびその一切の邑々とその中なる一切の人を刃にかけて撃ころして一人をも遺さざりき凡てエグロンに爲たるが如し即ち之とその中なる一切の人をことごとく滅ぼせり三八かくてヨシュア一切のイスラエル人を率ゐ歸りてデビルに至り之を攻て戰ひ三九之とその王およびその一切の邑を取り刃をもて之を撃てその中なる一切の人をことごとく滅ぼし一人をも遺さざりき其デビルと其王に爲たる所はヘブロンに爲たるが如く又リブナとその王に爲たるがごとくなりき四〇ヨシュアかく此全地すなはち山地南の地平地および山腹の地ならびに其すべての王等を撃ほろぼして人一箇をも遺さず凡て氣息する者は盡くこれを滅ぼせりイスラエルの神ヱホバの命じたまひしごとし四一ヨシュア、カデシバルネアよりガザまでの國々およびゴセンの全地を撃ほろぼしてギベオンにまで及ぼせり四二イスラエルの神ヱホバ、イスラエルのために戰ひたまひしに因てヨシュアこれらの諸王およびその地を一時に取り四三かくてヨシュア一切のイスラエル人を率ゐてギルガルの陣營にかへりぬ

第一一章一ハゾルの王ヤビン之を聞およびマドンの王ヨバブ、シムロンの王アクサフの王二および北の地山地キンネロテの南のアラバ平地西の方なるドルの高處などに居る王等三すなはち東西のカナン人アモリ人ヘテ人ペリジ人山地のエブス人ミヅバの地なるヘルモンの麓のヒビ人などに人を遣はせり四爰に彼らその諸軍勢を率ゐて出きたれり其民の衆多ことは濱の砂の多きがごとくにして馬と車もまた甚だ多かりき五これらの王たち皆あひ會して進みきたり共にメロムの水の邊に陣をとりてイスラエルと戰はんとす六時にヱホバ、ヨシュアに言たまひけるは彼らの故によりて懼るる勿れ明日の今頃われ彼らをイスラエルの前に付して盡く殺さしめん汝かれらの馬の足の筋を截り火をもて彼らの車を焚べしと七ヨシュアすなはち一切の軍人を率ゐて俄然にメロムの水の邊に押寄て之を襲ひけるに八ヱホバこれをイスラエルの手に付したまひしかば則ち之を撃やぶりて大シドンおよびミスレポテマイムまで之を追ゆき東の方にては又ミヅバの谷までこれを追ゆき遂に一人をも遺さず撃とれり九ヨシュアすなはちヱホバの己に命じたまひしことにしたがひて彼らに馬の足の筋を截り火をもてその車を焚り一〇その時ヨシュア歸りきたりてハゾルを取り刃をもてその王を撃り在昔ハゾルは是らの諸國の盟主たりき一一即ち刃をもてその中なる一切の人を撃てことごとく之を滅ぼし氣息する者は一人だに遺さざりき又火をもてハゾルを焚り一二ヨシュアこれらの王の一切の邑々およびその諸王を取り刃をもてこれを撃て盡く滅ぼせり、ヱホバの僕モーセの命じたるがごとし一三但しその岡の上にたちたる邑々はイスラエルこれを焚ず唯ハゾルのみをヨシュア焚り一四是らの邑の諸の貨財及び家畜はイスラエルの人々奪ひて自ら之を取り人はみな刃をもて撃て滅ぼし盡し氣息する者は一人だに

遺さざりき一五ヱホバその僕モーセに命じたまひし所をモーセまたヨシユアに命じ置たりしがヨシユアその如くに行へり凡てヱホバのモーセに命じたまひし所はヨシユア一だに爲で置し事なし一六ヨシユア斯その全地すなはち山地南の全地ゴセンの全地平地アラバ、イスラエルの山地およびその平地を取り一七セイルに上りゆくでハラク山よりヘルモン山の麓なるレバノン谷のバアルガデまでを獲その王等をことごとく執へて之を撃て死しめたり一八ヨシユア此すべての王等と戰爭をなすこと日ひさし一九ギベオンの民ヒビ人を除くの外はイスラエルの子孫と好をなしし邑なかりき皆戰爭をなしてこれを攻とりしなり二〇そもそも彼らが心を剛愎にしてイスラエルに攻よせしはヱホバの然らしめたまひし者なり彼らは詛はれし者となり憐憫を乞ふこととせず滅ぼされんがためなりき是全くヱホバのモーセに命じたまひしが如し二一その時ヨシユアまた往て山地ヘブロン、デビル、アナブ、ユダの一切の山地イスラエルの一切の山地などよりしてアナク人を絶ち而してヨシユア彼らの邑々をも與に滅ぼせり二二然からにイスラエルの子孫の地の内にはアナク人一人も遺りをらず只ガザ、ガテ、アシドドに少く遺りをる而已二三ヨシユアかく此地を盡く取り全くヱホバのモーセに告たまひし如し而してヨシユア、イスラエルの支派の區別にしたがひ之を與へて產業となさしめたり遂に此地に戰爭やみぬ

第一二章一偖ヨルダンの彼旁日の出る方に於てアルノンの谷よりヘルモン山および東アラバの全土までの間にてイスラエルの子孫が擊ほろぼして地を取たりし其國の王等は左のごとし二先アモリ人の王シホン彼はヘシボンに住をれり其治めたる地はアルノンの谷の端なるアロエルより谷の中の邑およびギレアデの半を括てアンモンの子孫の境界なるヤボク河にいたり三アラバをキンネレテの海の東まで括またアラバの海すなはち鹽海の東におよびてベテエシモテの路にいたり南の方ピスガの山腹にまで達す四次にレバイムの殘餘なりしバシヤンの王オグの國境を言んに彼はアシタロテとエデレイに住をり五ヘルモン山サレカおよびバシヤンの全土よりしてゲシユリ人マアカ人およびギレアデの半を治めてヘシボンの王シホンと境を接ふ六ヱホバの僕モーセ、イスラエルの子孫とともに彼らを擊ほろぼせり而してヱホバの僕モーセ之が地をルベン人ガド人およびマナセの支派の半に與へて產業となさしむ七またヨルダンの此旁西の方においてレバノンの谷のバアルガデよりセイル山の上途なるハラク山までの間にてヨシユアとイスラエルの子孫が擊ほろぼしたりし其國の王等は左のごとしヨシユア、イスラエルの支派の區別にしたがひその地をあたへて產業となさしむ八是は山地平地アラバ山腹荒野南の地などにしてヘテ人アモリ人カナン人ペリジ人ヒビ人ヱブス人等が有ちたりし者なり九ヱリコの王一人ベテルの邊なるアイの王一人一〇エルサレムの王一人ヘブロンの王一人一一ヤルムテの王一人ラキシの王一人一二エグロン

の王一人ゲゼルの王一人一三デビルの王一人ゲデルの王一人一四ホルマの王一人アラデの王一人一五リブナの王一人アドラムの王一人一六マツケダの王一人ベテルの王一人一七タッブアの王一人ヘペルの王一人一八アペクの王一人ラシヤロンの王一人一九マドンの王一人ハゾルの王一人二〇シムロンメロンの王一人アクサフの王一人二一タアナクの王一人メギドンの王一人二二ケデシの王一人カルメルのヨクネアムの王一人二三ドルの高處なるドルの王一人ギルガのゴイイムの王一人二四テルザの王一人合せて三十一王

第一三章 一ヨシユアすでに年邁みて老たりしがヱホバかれに言たまひけらく汝は年邁みて老たるが尚取るべき地の殘れる者甚だおほし二その尚のこれる地は是なりペリシテ人の全州ゲシユル人の全土三エジプトの前なるシホルより北の方カナン人に屬すると人のいふエクロンの境界までの部ペリシテ人の五人の主の地すなはちガザ人アシドド人アシケロン人ガテ人エクロン人の地四南のアビ人カナン人の全地シドン人に屬するメアラおよびアモリ人の境界なるアベクまでの部五またヘルモン山の麓なるバアルガデよりハマテの入口までに亘るゲバル人の地およびレバノンの東の全土六レバノンよりミスレポテマイムまでの山地の一切の民すなはちシドン人の全土我かれらをイスラエルの子孫の前より逐はらふべし汝は我が命じたりしごとくその地をイスラエルに分ち與へて產業となさしめよ七即ちその地を九の支派とマナセの支派の半とに分ちて產業となさしむべし八マナセとともにルベン人およびガド人はヨルダンの彼旁東の方にてその產業をモーセより賜はり獲たりヱホバの僕モーセの彼らに與へし者は即ち是のごとし九アルノンの谷の端にあるアロエルより此方の地谷の中にある邑デボンまでに亘るメデバの一切の平地一〇ヘシボンにて世を治めしアモリ人の王シホンの一切の邑々よりしてアンモンの子孫の境界までの地一一ギレアデ、ゲシユル人及びマアカ人の境界に沿る地ヘルモン山の全土サルカまでバシヤン一圓一二アシタロテおよびエデレイにて世を治めしバシヤンの王オグの全國オグはレバイムの餘民の遺れる者なりモーセこれらを擊て逐はらへり一三但しゲシユル人およびマアカ人はイスラエルの子孫これを逐はらはざりきゲシユル人とマアカ人は今日までイスラエルの中に住をる一四唯レビの支派にはヨシユア何の產業をも與へざりき是イスラエルの神ヱホバの火祭これが產業たればなり其かれに言たまひしが如し一五モーセ、ルベンの子孫の支派にその宗族にしたがひて與ふる所ありしが一六その境界の内はアルノンの谷の端なるアロエルよりこなたの地谷の中なる邑メデバの邊の一切の平地一七ヘシボンおよびその平地の一切の邑々デボン、バモテバアル、ベテバアルメオン一八ヤハズ、ケデモテ、メバアテ一九キリアタイム、シブマ、谷中の山のゼレテシヤル二〇ベテペオル、ピスガの山腹ベテヱシモテ二一平地の一切の邑々ヘシボンにて世を治め

しアモリ人の王シホンの全國モーセ、シホンをミデアンの貴族エビ、レケム、ツル、ホルおよびレバとあはせて撃ころせり是みなシホンの大臣にしてその地に住をりし者なり二二イスラエルの子孫またベオルの子卜筮師バラムをも刃にかけてその外に殺せし者等とともに殺せり二三ルベンの子孫はヨルダンおよびその河岸をもて己の境界とせりルベンの子孫がその宗族に循がひて獲たる産業は是のごとくにして邑も村もこれに准らふ二四モーセまたガドの子孫たるガドの支派にもその宗族にしたがひて與ふる所ありしが二五その境界の内はヤゼル、ギレアデの一切の邑々アンモンの子孫の地の半ラバの前なるアロエルまでの地二六ヘシボンよりラマテミヅバまでの地およびベトニム、マナハイムよりデビルの境界までの地二七谷においてはベテハラム、ベテニムラ、スコテ、ザポンなどヘシボンの王シホンの國の殘れる部分ヨルダンおよびその河岸よりしてヨルダンの東の方キンネレテの海の岸までの地二八ガドの子孫がその宗族にしたがひて獲たる産業は是のごとくにして邑も村も之に准らふ二九モーセまたマナセの支派の半にも與ふる所ありき是すなはちマナセの支派の半にその宗族にしたがひて與へしなり三〇その境界の内はマナハイムより此方の地バシヤンの全土バシヤンの王オグの全國バシヤンにあるヤイルの一切の邑すなはち其六十の邑三一ギレアデの半バシヤンにおけるオグの國の邑々アシタロテおよびエデレイ是等はマナセの子マキルの子孫に歸せり即ちマキルの子孫の半その宗族にしたがひて之を獲たり三二ヨルダンの東の方に於てヱリコに對ひをるモアブの野にてモーセが分ち與へし産業は是のごとし三三但しレビの支派にはモーセ何の産業をも與へざりきイスラエルの神ヱホバこれが産業たればなり其かれらに言たまひし如し

第一四章一イスラエルの子孫がカナンの地にて取しその産業の地は左のごとし即ち祭司エレアザル、ヌンの子ヨシユアおよびイスラエルの子孫の支派の族長等これを彼らに分ち二ヱホバがモーセによりて命じたまひしごとく產業の籤によりて之を九の支派および半の支派に與ふ三其はヨルダンの彼旁にてモーセ已にかの二の支派と半の支派とに產業を與へたればなり但しレビ人には之が中に產業を與へざりき四是はヨセフの子孫マナセ、エフライムの二の支派と成たるに因て然りレビ人には此地において何の分をも與へず唯その住べき邑々およびその家畜と貨財を置べき郊地を與へしのみ五イスラエルの子孫ヱホバのモーセに命じたまひしごとく行ひてその地を分てり六茲にユダの子孫ギルガルにてヨシユアの許に至りケニズ人ヱフンネの子カレブ、ヨシユアに言けるはヱホバ、カデシバルネアにて我と汝との事につきて神の人モーセに告たまひし事あり汝これを知る七ヱホバの僕モーセが此地を窺はせんとて我をカデシバルネアより遣はしし時に我は四十歳なりき其時我は心に思ふまにまに彼に復命したり八我とともに上り往しわが兄弟等は民の心を

挫くことを爲たりしが我は全く我神ヱホバに從へり九その日モーセ誓ひて言けらく汝の足の踐たる地は必ず永く汝と汝の子孫の產業となるべし汝まったく我神ヱホバに從がひたればなりと一〇ヱホバこの言をモーセに語りたまひし時より已來イスラエルが荒野に步みたる此四十五年の間かく其のたまひし如く我を生存らへさせたまへり視よ我は今日すでに八十五歲なるが一一今日もなほモーセの我を遣はしたりし日のごとく健剛なり我が今の力はかの時の力のごとくにして出入し戰鬪をなすに堪ふ一二然ば彼日ヱホバの語りたまひし此山を我に與へよ汝も彼日聞たる如く彼處にはアナキ人をりその邑々は大にして堅固なり然ながらヱホバわれとともに在して我つひにヱホバの宣ひしごとく彼らを逐はらふことを得んと一三ヨシユア、ヱフンネの子カレブを祝しヘブロンをこれに與へて產業となさしむ一四是をもてヘブロンは今日までケニズ人ヱフンネの子カレブの產業となりをる是は彼まつたくイスラエルの神ヱホバに從がひたればなり一五ヘブロンの名は元はキリアテアルバと曰ふアルバはアナキ人の中の最も大なる人なりき茲にいたりてその地に戰爭やみぬ

第一五章一ユダの子孫の支派がその宗族にしたがひて籤にて獲たる地はエドムの境界に達し南の方ヂンの荒野にわたり南の極端に及ぶ二その南の境界は鹽海の極端なる南に向へる入海より起り三アクラビムの坂の南にわたりてヂンに進みカデシバルネアの南より上りてヘヅロンに沿て進みアダルに上りゆきてカルカに環り四アズモンに進みてエジプトの河にまで達しその境界海にいたりて盡く汝らの南の境界は是の如くなるべし五その東の境界は鹽海にしてヨルダンの河口に達す北の方の境界はヨルダンの河口なる入海より起り六上りてベテホグラにいたりベテアラバの北をすぎ上りてルベン人ボハンの石に達し七またアコルの谷よりデビルに上りて北におもむき河の南にあるアドミムの坂に對するギルガルに向ひすすみてエンシメシの水に達しエンロゲルにいたりて盡く八又その境界はベニヒンノムの谷に沿てヱブス人の地すなはちヱルサレムの南の脇に上りゆきヒンノムの谷の西面に橫はる山の嶺に上る是はレバイムの谷の北の極處にあり九而してその境界この山の嶺より延てネフトアの水の泉源にいたりエフロン山の邑々にわたりその境昇延てバアラにいたる是すなはちキリアテヤリムなり一〇その境界バアラより西の方セイル山に環りヤリム山(すなはちケサロン)の北の脇をへてベテシメシに下りテムナに沿て進み一一エクロンの北の脇にわたり延てシツケロンに至りバアラ山に進みヤブネルに達し海にいたりて盡く一二また西の境界は大海にいたりその濱をもて限とすユダの子孫がその宗族にしたがひて獲たる地の四方の境界は是のごとし一三ヨシユアそのヱホバに命ぜられしごとくヱフンネの子カレブにユダの子孫の中にてキリアテアルバすなはちヘブロンを與へてその分となさしむ一四アルバは

アナクの父なりカレブかしこよりアナクの子三人を逐はらへり是すなはちアナクより出たるセシヤイ、アヒマンおよびタルマイなり一五而して彼かしこよりデビルの民の所に攻上れりデビルの名は元はキリアテセペルといふ一六カレブ言けらくキリアテセペルを撃てこれを取る者には我女子アクサを妻に與へんと一七ケナズの子にしてカレブの弟なるオテニエルといふ者これを取ければカレブその女子アクサを之が妻に與へたり一八アクサ適く時田野をその父に求むべきことをオテニエルに勸め遂にみづから驢馬より下れりカレブこれに何を望むやと言ければ一九答へて言ふ我に粧奩を與へよ汝われを南の地に遣なれば水泉をも我に與へよと乃ち上の泉と下の泉とをこれに與ふ二〇ユダの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる產業は是のごとし二一ユダの子孫の支派が南においてエドムの境界の方に有るその遠き邑々は左のごとしカブジエル、エデル、ヤグル二二キナ、デモナ、アダダ、二三ケデシ、ハゾル、イテナン、二四ジフ、テレム、ベアロテ二五ハゾルハダツタ、ケリオテヘヅロンすなはちハゾル二六アマム、シマ、モラダ二七ハザルガダ、ヘシモン、ベテパレテ二八ハザルシユアル、ベエルシバ、ビジヨテヤ二九バアラ、イヰム、エゼム三〇エルトラデ、ケシル、ホルマ三一チクラグ、マデマンナ、サンサンナ三二レバオテ、シルヒム、アイン、リンモン、その邑あはせて二十九ならびに之に屬る村々なり三三平野にてはエシタオル、ゾラ、アシナ三四ザノア、エンガンニム、タップア、エナム三五ヤルムテ、アドラム、シヨコ、アゼカ三六シヤアライム、アデタイム、ゲデラ、ゲデロタイム合せて十四邑ならびに之に屬る村々なり三七ゼナン、ハダシヤ、ミグダルガデ三八デラン、ミヅバ、ヨクテル三九ラキシ、ボヅカテ、エグロン四〇カボン、ラマム、キリテシ四一ゲデロテ、ベテダゴン、ナアマ、マツケダ合せて十六邑ならびに之に屬る村々なり四二またリブナ、エテル、アシヤン四三イフタ、アシナ、ネジブ四四ケイラ、アクジブ、マレシア合せて九邑ならびに之に屬ける村々なり四五エクロンならびにその鄕里および村々なり四六エクロンより海まで凡てアシドドの邊にある處々ならびに之につける村々なり四七アシドドならびにその鄕里および村々ガザならびにその鄕里および村々エジプトの河および大海の濱にいたるまでの處々なり四八山地にてはシヤミル、ヤツテル、シヨコ四九ダンナ、キリアテサンナすなはちデビル五〇アナブ、エシテモ、アニム五一ゴセン、ホロン、ギロ、合せて十一邑ならびに之に屬る村々なり五二アラブ、ドマ、エシヤン五三ヤニム、ベテタツプア、アペカ五四ホムタ、キリアテアルバすなはちヘブロン、デオルあはせて九邑ならびに之につける村々なり五五マオン、カルメル、ジフ、ユダ五六ヱズレル、ヨグテアム、ザノア五七カイン、ギベア、テムナあはぜて十邑ならびに之に屬る村々なり五八ハルホル、ベテズル、ゲドル五九マアラテ、ベテアノテ、エルテコンあはせて六邑ならびに之に屬る村々なり六〇キリアテバアルすなはちキリアテヤリムおよびラバあ

はせて二邑ならびに之につける村々なり六一荒野にてはベテアラバ、ミデン、セカカ六二ニブシヤン鹽邑エングデあはせて六邑ならびに之につける村々なり六三ヱルサレムの民ヱブス人はユダの子孫これを逐はらふことを得ざりき是をもてヱブス人は今日までユダの子孫とともにエルサレムに住ぬ

第一六章一ヨセフの子孫が籤によりて獲たる地の境界はヱリコの邊なるヨルダンすなはちヱリコの東の水の邊より起りてヱリコにかかり更に上りて山地を過ぎベテルにいたりて荒野に沿ひ行き二ベテルよりルズにおもむきアルキ人の境界なるアタロテに進み三また西の方ヤフレテ人の境界に下り下ベテホロンの境界に及びゲゼルにまで達し海にいたりて盡く四かくヨセフの子孫マナセ及びエフライムその産業を受たり五エフライムの子孫がその宗族にしたがひて獲たる地の境界は是のごとしその産業の境界東はアタロテアダルにて上はベテホロンに達し六ミクメタの北より西におもむき東にをれてタアナテシロにいたり之に沿てヤノアの東を過ぎ七ヤノアより下りてアタロテおよびナアラにいたりヱリコに達しヨルダンにいたりて盡き八タツプアよりして西に進みカナの河にまで達し海にいたりて盡くエフライムの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる産業は是のごとし九この外にマナセの子孫の産業の中にてエフライムの子孫に別ち與へし邑々ありエフライムの一切の邑およびその村々を得たり一〇但しゲゼルに住るカナン人をば逐はらはざりき是をもてカナン人は今日までエフライムの中に住み僕となりて之に使役せらる

第一七章一マナセの支派が籤によりて獲たる地は左のごとしマナセはヨセフの長子なりきマナセの長子にしてギレアデの父なるマキルは軍人なるが故にギレアデとバシヤンを獲たり二此餘のマナセの子等即ちアビエゼルの子孫ヘレクの子孫アスリエルの子孫シケムの子孫ヘペルの子孫セミダの子孫などもその宗族にしたがひて獲る所ありき是等はヨセフの子マナセが男の子にしてその宗族に循ひて言るなり三マナセの子マキルその子ギレアデその子ヘペルその子なるゼロペハデといふ者は女の子のみありて男の子あらざりきその女の子の名はマヘラ、ノア、ホグラ、ミルカ、テルザといふ四彼等祭司エレアザル、ヌンの子ヨシュアおよび長等の前に進み出て言けらく我らの兄弟の中にて我らにも産業を與へよとヱホバ、モーセに命じおきたまへりヨシュアすなはちヱホバの命にしたがひて彼らの父の兄弟の中にて彼らにも産業を與ふ五マナセはヨルダンの彼旁にてギレアデおよびバシヤンの地の外になほ十部の地を獲たり六是はマナセの女の子等もその男の子等の中にて産業を獲たればなりギレアデの地はマナセのその餘の子等に屬す七マナセの境界はアセルよりシケムの前なるミクメタテに及び右におもむきてエンタツプアの民に達す八タツプアの地はマナセに屬す但しマナセの境界にあるタツプアはエフライムの子孫に屬す九またその

境界カナの河に下りてその河の南に至る是等の邑はマナセの邑々の中にありてエフライムに屬すマナセの境界はその河の北にあり海にいたりて盡く一〇その南の方はエフライムに屬し北の方はマナセに屬し海これらの境界を成すマナセは北はアセルに達し東はイツサカルに達す一一イツサカルおよびアセルの中にてマナセはベテシヤンとその郷里イブレアムとその郷里ドルの民とその郷里およびエンドルの民とその郷里タアナクの民とその郷里メギドンの民とその郷里など合せて三の高處を有り一二但しマナセの子孫は是らの邑の民を逐はらふことを得ざりければカナン人この地に固く住ひをりしが一三イスラエルの子孫強くなるに及びてカナン人を使役し之を盡く逐ことはせざりき一四茲にヨセフの子孫ヨシユアに語りて言けるはヱホバ今まで我を祝福たまひて我は大なる民となりけるに汝わが產業にとて只一の籤一の分のみを我に與へしは何ぞや一五ヨシユアかれらに言けるは汝もし大なる民となりしならば林に上りゆきて彼處なるペリジ人およびレパイム人の地を自ら斬ひらくべしエフライムの山地は汝には狹しと言ばなり一六ヨセフの子孫言けるは山地は我らには足ずかつ又谷の地にをるカナン人はベテシヤンとその郷里にをる者もヱズレルの谷にをる者も凡て鐵の戰車を有り一七ヨシユアかさねてヨセフの家すなはちエフライムとマナセに語りて言ふ汝は大なる民にして大なる力あり然れば只一籤のみを取てをる可らず一八山地をも汝の有とすべし是は林なれども汝これを斬ひらきてその極處を獲べしカナン人は鐵の戰車を有をりかつ強くあれども汝これを逐はらふことを得ん

第一八章 一かくてイスラエルの子孫の會衆ことごとくシロに集り集會の幕屋をかしこに立つその地は已に彼らに歸服ぬ二この時なほイスラエルの子孫の中に未だその產業を分ち取ざる支派七のこりゐければ三ヨシユア、イスラエルの子孫に言けるは汝らは汝らの先祖の神ヱホバの汝らに與へたまひし地を取に往くことを何時まで怠りをるや四汝ら支派ごとに三人づつを擧よ我これを遣さん彼らは起てその地を歩きめぐりその產業にしたがひて之を描き寫して我に歸るべし五彼らその地を分ちて七分となすべしユダは南にてその境界の内にをりヨセフの家は北にてその境界の内にをるべし六汝らその地を描き寫して七分となし此にわが許に持きたれ我ここにて我等の神ヱホバの前になんぢらの爲に籤を掣ん七レビ人は汝らの中に何の分をも有ずヱホバの祭司となることをもて其產業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方にて已にその產業を受たり是ヱホバの僕モーセの之に與へし者なりと八その人々すなはち起て往り其地を描き寫さんとて出ゆける此者等にヨシユア命じて云ふ汝等ゆきてその地を歩きめぐり之を描き寫して我に歸りきたれ我シロにて此にヱホバの前にて汝らのために籤を掣んと九その人々ゆきてその地を經めぐり邑にしたがひて之を七分となして書に描き寫しシロの營に歸りてヨシユアに詣りけれ

ば一〇ヨシユア、シロにて彼らのためにヱホバの前に籤を掣り而してヨシユア彼所にてイスラエルの子孫の區分にしたがひて其地を分ち與へたり一一まづベニヤミンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて籤を掣りその籤によりて獲たる地の境界はユダの子孫とヨセフの子孫の間にわたる一二即ちその北の方の境界はヨルダンよりしてヱリコの北の脇に上り西の山地を逾てまた上りベテアベンの荒野にいたりて盡く一三彼處よりその境界ルズに進みルズの南の脇にいたるルズはベテルなり而して其境界下ベテホロンの南に横たはる山に沿てアタロテアダルに下り一四延て西の方にて南に曲りベテホロンの南面に横はるところの山より進みユダの子孫の邑キリアテバアル即ちキリアテヤリムにいたりて盡くその西の境界は是のごとし一五またその南の方はキリアテヤリムの極處よりして西におもむきてネフトアの水の源にいたり一六レバイムの谷の中の北の方にてベニヒンノムの谷の前に横たはる所の山の極處に下り其處よりしてヒンノムの谷に下りてヱブス人の南の脇にいたりエンロゲルに下り一七北に延てエンシメシにおもむきアドミムの阪に對へるゲリロテにおもむきルベン人、ボハンの石まで下り一八北の方にてアラバに對する處にわたりてアラバに下り一九ベテホグラの北の脇にわたりヨルダンの南の極にて鹽海の北の入海にいたりて盡くその南の境界は是のごとし二〇東の方にてはヨルダンその境界となる是すなはちベニヤミンの子孫がその宗族にしたがひて獲たる産業の周圍の境界なり二一ベニヤミンの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる邑々はヱリコ、ベテホグラ、エメクケジツ二二ベテアラバ、ゼマライム、ベテル二三アビム、パラ、オフラ二四ケパルアンモン、オフニ、ケバの十二邑ならびに之に屬る村々なり二五ギベオン、ラマ、ベエロテ二六ミヅパ、ケピラ、モザ二七レケム、イルピエル、タララ、二八ゼラ、エレフ、ヱブスすなはちエルサレム、ギベア、キリアテの十四邑ならびに之につける村々是なりベニヤミンの子孫がその宗族にしたがひて獲たる産業は是のごとし

第一九章一次にシメオンのため即ちシメオン子孫の支派のためにその宗族にしたがひて籤を掣りその産業ばユダの子孫の産業の中にあり二その有る産業はベエルシバ即ちシバ、モラダ三ハザルシユアル、バラ、エゼム四エルトラデ、ベトル、ホルマ五チクラグ、ベテマルカボテ、ハザルスサ六ベテレバオテ、シヤルヘンの十三邑並びに之につける村々七およびアイン、リンモン、エテル、アシヤンの四邑ならびに之につける村々八および此邑々の周圍にありてバアラテベエルすなはち南のラマまでに至るところの一切の村々等なりシメオンの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる産業は是のごとし九シメオンの子孫の産業はユダの子孫の分の中より出づ是ユダの子孫の分自分のためには多かりしに因てシメオンの子孫のおのれの産業を彼らの産業の中に獲たるなり一〇第三にゼブルンの子孫のために其宗族にした

がひて籤を掣り其産業の境界はサリデに及び一一また西に上りてマララに至りダバセテに達しヨグネアムの前なる河に達し一二サリデよりして東の方日のいづる方にまがりてキスロテタボルの境界にいたりダベラに出でヤピアに上り一三彼處より東の方ガテヘペルにわたりてイツタカジンにいたりネアまで廣がるところのリンモンに至りて盡き一四また北にまはりてハンナトンにいたりイフタエルの谷にいたりて盡く一五カツタテ、ナハラル、シムロン、イダラ、ベテレヘムなどの十二邑ならびに之につける村々あり一六ゼブルンの子孫がその宗族にしたがひて獲たる産業およびその邑と村とは是のごとし一七第四にイツサカルすなはちイツサカルの子孫のためにその宗族にしたがひて籤を掣り一八その境界の包括る處はヱズレル、ケスロテ、シユネム一九ハパライム、シオン、アナハラテ二〇ラビテ、キシン、エベツ二一レメテ、エンガンニム、エンハダ、ベテパツゼズなどなり二二その境界タボル、シヤハヂマおよびベテシメシに達しその境界ヨルダンにいたりて盡く其邑あはせて十六また之につける村々あり二三イツサカルの子孫の支派が其宗族にしたがひて獲たる産業および其邑々村々は是の如し二四第五にアセルの子孫の支派のために其宗族にしたがひて籤を掣り二五其境界の内はヘルカテ、ハリ、ベテン、アクサフ二六アランメレク、アマデ、ミシヤルなり其境界西の方カルメルに達しまたシホルリブナテに達し二七日の出る方に折てベテダゴンにいたりゼブルンに達し北の方イフタヱルの谷のベテエメク及びネイエルに達し左してカブルに出で二八エブロン、レホブ、ハンモン、カナにわたりて大シドンにまでいたり二九ラマに旋りツロの城に及びまたホサに旋りアクジブの邊にて海にいたりて盡く三〇またウンマ、アベクおよびレホブありその邑あはせて二十二また之につける村々あり三一アセルの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる産業およびその邑々村々は是のごとし三二第六にナフタリの子孫のためにナフタリの子孫の宗族にしたがひて籤を掣り三三その境界はヘレフより即ちザアナイムの樫の樹より起りアダミネケブおよびヤブニエルを經てラクムにいたりヨルダンにいたりて盡く三四而して其境界西に旋りてアズノテタボルにいたり彼處よりホツコクに出で南はゼブルンに達し西はアセルに達し日の出る方はヨルダンの邊にてユダに達す三五その堅固たる邑々はヂデム、ゼル、ハンマテ、ラツカテ、キンネレテ三六アダマ、ラマ、ハゾル三七ケデシ、エデレイ、エンハゾル三八イロン、ミグダルエル、ホレム、ベテアナテ、ベテシメシなど合せて十九邑亦これにつける村々あり三九ナフタリの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる産業およびその邑々村々は是のごとし四〇第七にダンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて籤を掣り四一その産業の境界の内はゾラ、エシタオル、イルシメシ四二シヤラビム、アヤロン、イテラ四三エロン、テムナ、エクロン四四エルテケ、ギベトン、バアラテ四五ヱホデ、ベネベラク、ガテ

リンモン四六メヤルコン、ラツコン、ヨツパと相對ふ地などなり四七但しダンの子孫の境界は初よりは廣くなれり其はダンの子孫上りゆきてライシを攻取り刃をもちてこれを撃ほろぼし之を獲て其處に住たればなり而してその先祖ダンの名にしたがひてライシをダンと名けたり四八ダンの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる産業およびその邑々村々は是のごとし四九かく境界を畫りて産業の地を與ふることを終ぬ而してイスラエルの子孫おのれの中にてヌンの子ヨシユアに産業を與へたり五〇すなはちヱホバの命にしたがひて彼にその求むる邑を與ふエフライムの山地なるテムナテセラ是なり彼その邑を建なほして其處に住む五一祭司エレアザル、ヌンの子ヨシユアおよびイスラエルの子孫の支派の族長等がシロにおいて集會の幕屋の門にてヱホバの前に鬮をもて分與へし産業は是のごとし斯地を分つことを終たり

第二〇章一茲にヱホバ、ヨシユアに告て言たまひけるは二汝イスラエルの子孫に告て言へ汝等モーセによりて我が汝らに語りおきし逃遁の邑を擇び定め三誤りて知ずに人を殺せる者を其處に逃れしめよ是は汝らが仇打する者を避て逃るべき處なり四斯る者は是等の邑の一に逃れゆき邑の門の入口に立てその邑の長老等の耳にその事情を述べし然る時は彼ら之をその邑に受いれ處を與へて己の中に住しむべし五假令仇打する者追ゆくとも彼らその人を殺せる者を之が手に交すべからず其は彼知ずして人を殺せるにて素より之を惡みをりしに非ればなり六その人は會衆の前に立て審判を受るまで其時の祭司の長の死る迄その邑に住をるべし然る後その人を殺せる者己の邑に歸り往てその家にいたり己が逃いでし邑に住むべし七爰にナフタリの山地なるガリラヤのケデシ、エフライムの山地なるシケムおよびユダの山地なるキリアテアルバ(すなはちヘブロン)を之がために分ち八またヨルダンの彼旁ヱリコの東の方にてはルベンの支派の中より平地なる荒野のベゼルを擇び定めガドの支派の中よりギレアデのラモテを擇び定めマナセの支派の中よりバシヤンのゴランを擇び定めたり九是すなはちイスラエルの一切の子孫および之が中に寄寓をる他國人のために設けたる邑々にして凡て人を誤まり殺せる者を此に逃れしめ其會衆の前に立ざる中に仇打の手に死るがごときことなからしめんためなり

第二一章一茲にレビの族長等來りて祭司ヱレアザル、ヌンの子ヨシユアおよびイスラエルの子孫の支派の族長等の許にいたり二カナンの地シロにおいて之に語りて言ふヱホバかつて我らに住べき邑々を與ふることおよびその郊地を我らの家畜のために與ふる事をモーセによりて命じおきたまへりと三イスラエルの子孫すなはちヱホバの命にしたがひて自己の産業の中より左の邑々とその郊地とをレビ人に與ふ四先コハテ人の宗族のために鬮を掣り祭司アロンの子孫たるレビ人鬮によりてユダの支派の中シメオンの支派の中およびベニヤミンの支派の中より十三

の邑を獲五その餘のコハテの子孫は籤によりてエフライムの支派の宗族の中ダンの支派の中マナセの支派の半の中より十の邑を獲たり六またゲシヨンの子孫は籤によりてイツサカルの支派の宗族の中アセルの支派の中ナフタリの支派の中およびバシヤンにあるマナセの支派の半の中より十三の邑を獲たり七またメラリの子孫は其宗族にしたがひてルベンの支派の中ガドの支派の中およびゼブルンの支派の中より十二の邑を獲たり八イスラエルの子孫ヱホバのモーセによりて命じたまひし所にしたがひて此の邑々とその郊地とを籤によりてレビ人に與ふ九即ち先ユダの子孫の支派の中およびシメオンの子孫の支派の中より左に名を擧たる邑々を與ふ一〇是はレビの子孫コハテ人の宗族なるアロンの子孫に歸す其は彼ら第一の籤にあたりたればなり一一即ちユダの山地なるキリアテアルバ即ちヘブロンおよびその周圍の郊地をこれに與ふ此アルバはアナクの父なりき一二その邑の田野およびその村々はこれをエフンネの子カレブに與へて所有となさしむ一三祭司アロンの子孫に與へし者は即ち人を殺し者の逃るべき邑なるヘブロンとその郊地リブナとその郊地一四ヤツテルとその郊地エシテモアとその郊地一五ホロンとその郊地デビルとその郊地一六アインとその郊地ユツタとその郊地ベテシメシとその郊地此九の邑は此ふたつの支派の中より分ちしものなり一七またベニヤミンの支派の中よりギベオンとその郊地ゲバとその郊地一八アナトテとその郊地アルモンとその郊地など四の邑をあたへたり一九アロンの子孫たる祭司等の邑は合せて十三邑又之につける郊地あり二〇この他のコハテの子孫なるレビ人の宗族籤によりてエフライムの支派の中より邑を獲たり二一即ち之に與へしは人を殺せる者の逃るべき邑なるエフライムの山地のシケムとその郊地およびゲゼルとその郊地二二キブザイムとその郊地ベテホロンとその郊地など四の邑なり二三又ダンの支派の中より分ちて與へし者はエルテケとその郊地ギベトンとその郊地二四アヤロンとその郊地ガテリンモンとその郊地など四の邑なり二五又マナセの支派の半の中より分ちて與へし者はタアナクとその郊地ガテリンモンとその郊地など二の邑なり二六外のコハテの子孫の宗族の邑は合せて十また之につける郊地あり二七ゲルシヨンの子孫たるレビ人の宗族に與へし者はマナセの支派の半の中よりは人を殺せる者の逃るべき邑なるバシヤンのゴランとその郊地およびベエシテラとその郊地など二の邑なり二八イツサカルの支派の中よりはキシオンとその郊地ダベラとその郊地二九ヤルムテとその郊地エンガンニムとその郊地など四の邑なり三〇アセルの支派の中よりはミシヤルとその郊地アブドンとその郊地三一ヘルカテとその郊地レホブとその郊地など四の邑なり三二ナフタリの支派の中よりは人を殺せる者の逃るべき邑なるガリラヤのケデシとその郊地およびハンモテドルとその郊地カルタンとその郊地など三の邑なり三三ゲルシヨン人がその宗族にしたがひて獲たる邑

は合せて十三邑にして又これに屬る郊地あり三四この餘のレビ人なるメラリの子孫の宗族に與へし者はゼブルンの支派の中よりはヨクネアムと其郊地カルタとその郊地三五デムナとその郊地ナハラルとその郊地など四の邑なり三六ルベンの支派の中よりはベゼルとその郊地ヤハヅとその郊地三七ケデモテとその郊地メバアテとその郊地など四の邑なり三八ガドの支派の中よりは人を殺せる者の逃るべき邑なるギレアデのラモテとその郊地およびマハナイムとその郊地三九ヘシボンとその郊地ヤゼルとその郊地など合せて四の邑四〇是みな外のレビ人なるメラリの子孫がその宗族にしたがひて獲たる邑々なり其籤によりて獲たる邑は合せて十二四一イスラエルの子孫の所有の中にレビ人が有る邑々は合せて四十八邑又之につける郊地あり四二この邑々は各々その周圍に郊地あり此邑々みな然り四三かくヱホバ、イスラエルに與へんとその先祖等に誓ひたまひし地をことごとく與へたまひければ彼ら之を獲て其處に住り四四ヱホバ凡てその先祖等に誓ひたまひし如く四方におて彼らに安息を賜へり其すべての敵の中に一人も之に當ることを得る者なかりきヱホバかれらの敵をことごとくその手に付したまへり四五ヱホバがイスラエルの家に語りたまひし善事は一だに缺ずして悉くみな來りぬ

第二二章一茲にヨシュア、ルベン人ガド人およびマナセの支派の半を召て二これに言けるは汝らはヱホバの僕モーセが汝らに命ぜし所をことごとく守り又わが汝らに命ぜし一切の事において我言に聽したがへり三汝らは今日まで日ひさしく汝らの兄弟を離れずして汝らの神ヱホバの命令の言を守り來り四今は已に汝らの神ヱホバなんぢらの兄弟に向に宣まひし如く安息を賜ふに至れり然ば汝ら身を轉らしヱホバの僕モーセが汝らに與へしヨルダンの彼方なる汝等の產業の地に歸りて自己の天幕にゆけ五只ヱホバの僕モーセが汝らに命じおきし誡命と律法とを善く謹しみて行ひ汝らの神ヱホバを愛しその一切の途に歩みその命令を守りて之に附したがひ心を盡し精神を盡して之に事ふべしと六かくてヨシュア彼らを祝して去しめければ彼らはその天幕に往り七マナセの支派の半にはモーセ、バシヤンにて產業を與へおけりその他の半にはヨシュア、ヨルダンの此旁西の方にてその兄弟等の中に產業を與ふヨシュア彼らをその天幕に歸し遣るに當りて之を祝し八之に告て言けるは汝ら衆多の貨財夥多しき家畜金銀銅鐵および夥多しき衣服をもちて汝らの天幕に歸り汝らの敵より獲たるその物を汝らの兄弟の中に分つべしと九爰にルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの支派の半はヱホバのモーセによりて命じ給ひし所に循ひて己の所有の地すなはち已に獲たるギレアデの地に往んとてカナンの地のシロよりしてイスラエルの子孫に別れて歸りけるが一〇ルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの支派の半カナンの地のヨルダンの岸邊にいたるにおよびて彼處にてヨルダンの傍に一の壇を

築けりその壇は大にして遥に見えわたる一一イスラエルの子孫はルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの支派の半カナンの地の前の部にてヨルダンの岸邊イスラエルの子孫に屬する方にて一の壇を築けりと言を聞り一二イスラエルの子孫これを聞と齊しくイスラエルの子孫の會衆ことごとくシロに集まりて彼らの所に攻のぼらんとす一三イスラエルの子孫すなはち祭司エレアザルの子ピハネスをギレアデの地に遣はしてルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの支派の半の所に至らしめ一四イスラエルの各々の支派の中より父祖の家の牧伯一人づつを擧て合せて十人の牧伯を之に伴なはしむ是みなイスラエルの家族の中にて父祖の家の長たる者なりき一五彼らギレアデの地に往きルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの支派の半にいたりて之に語りて言けらく一六ヱホバの全會衆かく言ふ汝らイスラエルの神にむかひて愆を犯し今日すでに翻へりてヱホバに從がはざらんとし即ち己のために一の壇を築きて今日ヱホバに叛かんとするは何事ぞや一七ペオルの罪われらに足ざらんや之がためにヱホバの會衆に災禍くだりたりしかども我ら今日までも尚身を潔めてその罪を棄ざるなり一八然るに汝らは今日ひるがへりてヱホバに從がはざらんとするや汝ら今日ヱホバに叛けば明日はヱホバ、イスラエルの全會衆を怒りたまふべし一九然ながら汝らの所有の地もし潔からずばヱホバの幕屋のたてるヱホバの產業の地に濟り來て我らの中にて所有を獲よ惟われらの神ヱホバの壇の外に壇を築きてヱホバに叛く勿れまた我らに悖るなかれ二〇ゼラの子アカン詛はれし物につきて愆を犯しつひにイスラエルの全會衆に震怒臨みしにあらずや且また其罪にて滅亡し者は彼人ひとりにはあらざりき二一ルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの支派の半答へてイスラエルの宗族の長等に言けるは二二諸の神の神ヱホバ　諸の神の神ヱホバ知しめすイスラエルも亦知んもし叛く事あるひはヱホバに罪を犯す事ならば汝今日我らを救ふなかれ二三我らが壇を築きし事もし翻がへりてヱホバに從がはざらんが爲なるか又は其上に燔祭素祭を献げんが爲なるか又はその上に酬恩祭の犠牲を献げんがためならばヱホバみづからその罪を問討したまへ二四我等は遠き慮をもて故に斯なしたるなり即ち思ひけらく後の日にいたりて汝らの子孫われらの子孫に語りて言ならん汝らはイスラエルの神ヱホバと何の關係あらんや二五ルベンの子孫およびガドの子孫よヱホバ我らと汝らの間にヨルダンを界となしたまへり汝らはヱホバの中に分なしと斯いひてなんぢらの子孫われらの子孫としてヱホバを畏るることを息しめんと二六是故に我ら言けらく我らいま一の壇を我らのために築かんと是燔祭のために非ずまた犠牲のために非ず二七惟し之をして我らと汝らの間および我らの後の子孫の間に證とならしめて我ら燔祭犠牲および酬恩祭をもてヱホバの前にその職務をなさんがためなり然せば汝らの子孫後の日いたりて我らの子孫に汝らはヱホバの中に分なしと言こと無

らん二八是をもて我ら言り彼らが我らまたは後の日に我らの子孫に然いはばその時我ら言ん我らの父祖の築きたりしヱホバの壇の模形を見よ是は燔祭のためにも非ずまた犠牲のためにもあらず我らと汝らとの間の證なり二九ヱホバに叛き翻へりて今日ヱホバに從がふことを息め我らの神ヱホバの幕屋の前にあるその祭壇の外に燔祭素祭犠牲などのために壇を築くことは我らの絶て爲ざる所なり三〇祭司ピネハスおよび會衆の長等即ち彼とともなるイスラエルの宗族の首等はルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの子孫が述たる言を聞て善とせり三一祭司エレアザルの子ピネハスすなはちルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの子孫に言けるは我ら今日ヱホバの我らの中に在すを知る其は汝らヱホバにむかひて此愆を犯さざればなり今なんぢらはイスラエルの子孫をヱホバの手より救ひいだせりと三二祭司エレアザルの子ピネハスおよび牧伯等すなはちルベンの子孫およびガドの子孫に別れてギレアデの地よりカナンの地に歸りイスラエルの子孫にいたりて復命しけるに三三イスラエルの子孫これを善とせり而してイスラエルの子孫神を讃めルベンの子孫およびガドの子孫の住をる國を滅ぼしに攻上らんと重ねて言ざりき三四ルベンの子孫およびガドの子孫その壇をエド（證）と名けて云ふ是は我らの間にありてヱホバは神にいますとの證をなす者なりと

第二三章

一ヱホバ、イスラエルの四方の敵をことごとく除きて安息をイスラエルに賜ひてより久しき後すなはちヨシュア年邁みて老たる後二ヨシュア一切のイスラエル人すなはち其長老首領裁判人官吏などを招きよせて之に言けるは三我は年すすみて老ゆ汝らは已に汝らの神ヱホバが汝らのために此もろもろの國人に行ひたまひし事を盡く見たり即ち汝らの神ヱホバみづから汝らのために戰ひたまへり四視よ我ヨルダンより日の入る方大海までの此もろもろの漏のこれる國々および已に滅ぼしたる一切の國々を籤にて汝らに分ちて汝らの支派の産業となさしめたり五汝らの神ヱホバみづから汝らの前よりその國民を打攘ひ汝らの目の前よりこれを逐はらひたまはん而して汝らは汝らの神ヱホバの汝らに宣まひしごとく之が地を獲にいたるべし六然ば汝ら勵みてモーセの律法の書に記されたる所を盡く守り行なへ之を離れて右にも左にも曲るなかれ七汝らの中間に遺りをる是等の國人の中に往なかれ彼らの神の名を唱ふるなかれ之を指て誓はしむる勿れ又これに事へこれを拜むなかれ八惟今日まで爲たるごとく汝らの神ヱホバに附したがへ九それヱホバは大にして且強き國民を汝らの前より逐はらひたまへり汝らには今日まで當ることを得る人一箇もあらざりき一〇汝らの一人は千人を逐ことを得ん其は汝らの神ヱホバ汝らに宣まひしごとく自ら汝らのために戰ひたまへばなり一一然ば汝ら自ら善く愼しみて汝らの神ヱホバを愛せよ一二然らずして汝ら若後もどりしつつ是等の國人の漏のこりて汝らの中間に止まる者等と親し

くなり之と婚姻をなして互に相往來しなば一三汝ら確く知れ汝らの神ヱホバかさねて是等の國人を汝らの目の前より逐はらひたまはじ彼ら反て汝らの羂となり罟となり汝らの脇に鞭となり汝らの目に莿となりて汝ら遂に汝らの神ヱホバの汝らに賜ひしこの美地より亡び絶ん一四視よ今日われは世人の皆ゆく途を行んとす汝ら一心一念に善く知るならん汝らの神ヱホバの汝らにつきて宣まひし諸の善事は一も缺る所なかりき皆なんぢらに臨みてその中一も缺たる者なきなり一五汝らの神ヱホバの汝らに宣まひし諸の善事の汝らに臨みしごとくヱホバまた諸の惡き事を汝らに降して汝らの神ヱホバの汝らに與へしこの美地より終に汝らを滅ぼし絶たまはん一六汝ら若なんぢらの神ヱホバの汝らに命じたまひしその契約を犯し往て他神に事へてこれに身を鞠むるに於てはヱホバの震怒なんぢらに向ひて燃いでてなんぢらヱホバに與へられし善地より迅速に亡びうせん

第二四章一 茲にヨシュア、イスラエルの一切の支派をシケムに集めイスラエルの長老首領裁判人官吏などを招きよせて諸共に神の前に進みいで二而してヨシュアすべての民に言けるはイスラヱルの神ヱホバかく言たまふ汝らの遠祖すなはちアブラハムの父たりナホルの父たりしテラのごときは在昔河の彼旁に住て皆他神に事へたりしが三我なんぢらの先祖アブラハムを河の彼旁より携へ出してカナンの全地を導きてすぎその子孫を增んとして之にイサクを與へたり四而してイサクにヤコブとエサウを與へエサウにセイル山を與へて獲させたりまたヤコブとその子等はエジプトに下れり五我モーセおよびアロンを遣はしまた災禍をエジプトに降せり我がその中に爲たる所の事のごとし而して後われ汝らを導びき出せり六我なんぢらの父をエジプト入り導き出し汝ら海に至りしにエジプト人戰車と騎兵とをもて汝らの後を追て紅海に來りけるが七汝らの父等ヱホバに呼はりければヱホバ黑暗を汝らとエジプト人との間に置き海を彼らの上に傾むけて彼らを淹へり汝らは我がエジプトにて爲たる事を目に觀たり斯て汝らは日ひさしく曠野に住をれり八我またヨルダンの彼旁にすめるアモリ人の地に汝らを携へいれたり彼ら汝らと戰ひければ我かれらを汝らの手に付しかれらの地をなんぢらに獲しめ彼らを汝らの前より滅ぼし去り九時にモアブの王チツポルの子バラク起てイスラエルに敵し人を遣はしてペオルの子バラムを招きて汝らを詛はせんとしたりしが一〇我バラムに聽ことを爲ざりければ彼かへつて汝らを祝せり斯われ汝らを彼の手より拯出せり一一而して汝らヨルダンを濟りてヱリコに至りしにヱリコの人々すなはちアモリ人ペリジ人カナン人ヘテ人ギルガシ人ヒビ人ヱブス人等なんぢらに敵したりしが我かれらを汝らの手に付せり一二われ黃蜂を汝らの前に遣はして彼のアモリ人の王二人を汝らの前より逐はらへり汝らの劍または汝らの弓を用ひて斯せしに非ず一三而して我なんちらが勞せしに非ざる地を汝らに與へ汝らが建たるに非ざる邑を汝らに與へ

たり汝らは今その中に住をる汝らは亦己が作りたるに非ざる葡萄園と橄欖園とにつきて食ふ一四然ば汝らヱホバを畏れ赤心と眞實とをもて之に事へ汝らの先祖が河の彼邊およびエジプトにて事へたる神を除きてヱホバに事へよ一五汝ら若ヱホバに事ふることを惡とせば汝らの先祖が河の彼邊にて事へし神々にもあれ又は汝らが今をる地のアモリ人の神々にもあれ汝らの事ふべき者を今日選べ但し我と我家とは共にヱホバに事へん一六民こたへて言けるはヱホバを棄て他神に事ふることは我等きはめて爲じ一七其は我らの神ヱホバみづから我等と我らの先祖とをエジプトの地奴隷の家より導き上りかつ我らの目の前にかの大なる徴を行ひ我らが往し一切の路にて我らを守りまた我らが其中間を通りし一切の民の中にて我らを守りたまひければなり一八而してヱホバ此地に住をりしアモリ人などいふ一切の民を我らの前より逐はらひたまへり然ば我らもヱホバに事へん彼は我らの神なればなり一九ヨシユア民に言けるは汝らはヱホバに事ふること能はざらん其は彼は聖神また妬みたまふ神にして汝らの罪愆を赦したまはざればなり二〇汝ら若ヱホバを棄て他神に事へなば汝らに福祉を降したまへる後にも亦ひるがへりて汝らに災禍を降して汝らを滅ぼしたまはん二一民ヨシユアに言けるは否我ら必らずヱホバに事ふべしと二二ヨシユア民に向ひて汝らはヱホバを選びて之に事へんといへりなんぢら自らその證人たりと言ければ皆我らは證人なりと答ふ二三ヨシユアまた言り然ば汝らの中にある異なる神を除きてイスラエルの神ヱホバに汝らの心を傾むけよ二四民ヨシユアに言けるは我らの神ヱホバに我らは事へ其聲に我らは聽したがふべしと二五ヨシユアすなはち其日民と契約を結びシケムにおいて法度と定規とを彼らのために設けたり二六ヨシユアこれらの言を神の律法の書に書しるし大なる石をとり彼處にてヱホバの聖所の傍なる樫の樹の下に之を立て二七而してヨシユア一切の民に言けるは視よ此石われらの證となるべし是はヱホバの我らに語りたまひし言をことごとく聞たればなり然ば汝らが己の神を棄ること無らんために此石なんぢらの證となるべしと二八かくてヨシユア民を各々その産業に歸しさらしめたりき二九是らの事の後ヱホバの僕ヌンの子ヨシユア百十歳にして死り三〇人衆これをその産業の地の内にてテムナテセラに葬むれりテムナテセラはエフライムの山地にてガアシ山の北にあり三一イスラエルはヨシユアの世にある日の間またヱホバがイスラエルのために行ひたまひし諸の事を識ゐてヨシユアの後に生存れる長老等の世にある日の間つねにヱホバに事へたり三二イスラエルの子孫のエジプトより携さへ上りしヨセフの骨を昔ヤコブが銀百枚をもてシケムの父ハモルの子等より買たりしシケムの中なる一の地に葬れり是はヨセフの子孫の産業となりぬ三三アロンの子エレアザルもまた死り人衆これを其子ピネハスがエフライムの山地にて受たりし岡に葬れり

士師記

第一章 一 ヨシユアの死にたるのちイスラエルの子孫ヱホバに問ひていひけるはわれらの中孰か先に攻め登りてカナン人と戰ふべきや 二 ヱホバいひたまひけるはユダ上るべし視よ我此國を其の手に付すと 三 ユダその兄弟シメオンに言けるは我と共にわが領地にのぼりてカナン人と戰へわれもまた偕に汝の領地に往べしとここにおいてシメオンかれとともにゆけり 四 ユダすなはち上りゆきけるにヱホバその手にカナン人とペリジ人とを付したまひたればベゼクにて彼ら一萬人を殺し 五 またベゼクにおいてアドニベゼクにゆき逢ひこれと戰ひてカナン人とペリジ人を殺せり 六 しかるにアドニベゼク逃れ去りしかばそのあとを追ひてこれを執へその手足の巨擘を斫りはなちたれば 七 アドニベゼクいひけるは七十人の王たちかつてその手足の巨擘を斫られて我が食几のしたに屑を拾へり神わが曾て行ひしところをもてわれに報いたまへるなりと衆 之を曳てエルサレムに至りしが其處にしねり 八 ユダの子孫エルサレムを攻めてこれを取り刃をもてこれを撃ち邑に火をかけたり 九 かくてのちユダの子孫山と南方の方および平地に住めるカナン人と戰はんとて下りしが 一〇 ユダまづヘブロンに住るカナン人を攻めてセシヤイ、アヒマンおよびタルマイを殺せり〔ヘブロンの舊の名はキリアテアルバなり〕 一一 またそこより進みてデビルに住るものを攻む〔デビルの舊の名はキリアテセペルなり〕 一二 時にカレブいひけるはキリアテセペルをうちてこれを取るものにはわが女アクサをあたへて妻となさんと 一三 カレブの舍弟ケナズの子オテニエルこれを取ければすなはちその女アクサをこれが妻にあたふ 一四 アクサ往くときおのれの父に田圃を求めんことを夫にすすめたりしがつひにアクサ驢馬より下りければカレブこれは何事ぞやといふに 一五 答へけるはわれに惠賜をあたへよなんぢ南の地をわれにあたへたればねがはくは源泉をもわれにあたへよとここにおいてカレブ上の源泉と下の源泉とをこれにあたふ 一六 モーセの外舅ケニの子孫ユダの子孫と偕に棕櫚の邑よりアラドの南なるユダの野にのぼり來りて民のうちに住居せり 一七 茲にユダその兄弟シメオンとともに往きてゼバテに住るカナン人を撃ちて盡くこれを滅ぼせり是をもてその邑の名をホルマと呼ぶ 一八 ユダまたガザと其の境アシケロンとその境およびエクロンとその境を取り 一九 ヱホバ、ユダとともに在したればかれつひに山地を手に入れたりしが谷に住る民は鐵の戰車をもちたるが故にこれを逐出すこと能はざりき 二〇 衆モーセのかつていひし如くヘブロンをカレブに與ふカレブそのところよりアナクの三人の子をおひ出せり 二一 ベニヤミンの子孫はエルサレムに住るエブス人を追出さざりしりかばエブス人は今日に至るまでベニヤミンの子孫とともにエルサレムに住ふ 二二 茲にヨセフの族またベテルをさして攻め上るヱホバこれと偕に在しき 二三 ヨセフの

族すなはちベテルを窺察しむ（此邑の舊の名はルズなり）二四 その間者邑より人の出來るを見てこれにいひけるは請ふわれらに邑の入口を示せさらば汝に恩慈を施さんと二五 彼邑の入口を示したればすなはち刃をもて邑を撃てり然ど彼の人と其家族をばみな縱ち遣りぬ二六 その人ヘテ人の地にゆき邑を建てルズと名けたり今日にいたるまでこれを其名となす二七 マナセはベテシヤンとその村里の民タアナクとその村里の民ドルとその村里の民イプレアムとその村里の民メギドンとその村里の民を逐ひ出さざりきカナン人はなほその地に住ひ居る二八 イスラエルはその強なりしときカナン人をして貢を納れしめたりしが之を全く追ひいだすことは爲ざりき二九 エフライムはゲゼルに住るカナン人を逐ひいださざりきカナン人はゲゼルにおいてかれらのうちに住み居たり三〇 ゼブルンはまたキテロンの民およびナハラルの民を逐ひいださざりきカナン人かれらのうちに住みて貢ををさむるものとなりぬ三一 アセルはアツコの民およびシドン、アヘラブ、アクジブ、ヘルバ、アピク、レホブの民を逐ひ出さざりき三二 アセル人は其地の民なるカナン人のうちに住み居たりそはこれを逐ひ出さざりしゆゑなり三三 ナフタリはベテシメシの民およびベテアナテの民を逐ひ出さずその地の民なるカナン人のうちに住み居たりベテシメシとベテアナテの民はつひにかれらに貢を納むるものとなりぬ三四 アモリ人ダンの子孫を山におひこみ谷に下ることを得させざりき三五 アモリ人はなほヘレス山アヤロン、シヤラビムに住ひ居りしがヨセフの家の手力勝りたれば終に貢を納むるものとなりぬ三六 アモリ人の界はアクラビムの阪よりセラを經て上に至れり

第二章一 ヱホバの使者ギルガルよりボキムに上りていひけるは我汝等をエジプトより上らしめわが汝らの先祖に誓ひたる地に携へ來れりまた我いひけらくわれ汝らと締べる契約を絶てやぶることあらじ二 汝らはこの國の民と契約を締ぶべからずかれらの祭壇を毀つべしとしかるに汝らはわが聲に從はざりき汝ら如何なれば斯ることをなせしや三 我またいひけらくわれ汝らの前より彼らを逐ふべからずかれら反て汝等の肋を刺す荊棘とならんまた彼らの神々は汝等の罟となるべし四 ヱホバの使これらの言をイスラエルのすべての子孫に語しかば民聲をあげて哭ぬ五 故に其所の名をボキム(哭者)と呼ぶかれら彼所にてヱホバに祭物を獻げたり六 ヨシユア民を去しめたればイスラエルの子孫おのおのその領地におもむきて地を獲たり七 ヨシユアの世にありし間またヨシユアより後に生きのこりたる長老等の世にありしあひだ民はヱホバに事へたりこの長老等はヱホバのかつてイスラエルのために成したまひし諸の大なる行爲を見しものなり八 ヱホバの僕ヌンの子ヨシユア百十歳にて死り九 衆人エフライムの山のテムナテヘレスにあるかれらの產業の地においてガアシ山の北にこれを葬れり一〇 かくてまたその時代のものことごとくその先祖のもとにあつめられその後に至りて他の時代おこ

りしが是はヱホバを識ずまたそのイスラエルのために爲したまひし行爲をも識ざりき一一イスラエルの子孫ヱホバのまへに惡きことを作してバアリムにつかへ一二かつてエジプトの地よりかれらを出したまひしその先祖の神ヱホバを棄て他の神すなはちその四周なる國民の神にしたがひ之に跪づきてヱホバの怒を惹起せり一三即ちかれらヱホバをすててバアルとアシタロテに事へたれば一四ヱホバはげしくイスラエルを怒りたまひ掠むるものの手にわたして之を掠めしめかつ四周なるもろもろの敵の手にこれを賣たまひしかばかれらふたたびその敵の前に立つことを得ざりき一五かれらいづこに往くもヱホバの手これに災をなし是はヱホバのいひたまひしごとくヱホバのこれに誓ひたまひしごとしここにおいてかれら惱むこと甚だしかりしが一六ヱホバ士師を立てたまひたればかれらこれを掠むるものの手よりすくひ出したり一七然るにかれらその士師にもしたがはず反りて他の神を慕て之と淫をおこなひ之に跪き先祖がヱホバの命令に從がひて歩みたるところの道を頓に離れ去りてその如くには行はざりき一八かれらのためにヱホバ士師を立てたまひし時に方りてはヱホバつねにその士師とともに在しその士師の世に在る間はヱホバかれらを敵の手よりすくひ出したまへり此はかれらおのれを虐げくるしむるものありしを呻きかなしめるによりてヱホバ之を哀れみたまひたればなり一九されどその士師の死しのちまた戻きて先祖よりも甚だしく邪曲を行ひ他の神にしたがひてこれに事へ之に跪きておのれの行爲を息めずその頑固なる路を離れざりき二〇是をもてヱホバはげしくイスラエルをいかりていひたまはく此民はわがかつてその列祖に命じたる契約を犯し吾聲に從がはざるがゆゑに二一我もまたいまよりはヨシユアがその死しときに存しおけるいづれの國民をもかれらのまへより逐ひはらはざるべし二二此は我イスラエルがその先祖の守りしごとくヱホバの道を守りてこれに歩むやいなやを試みんがためなりと二三ヱホバはこれらの國民を逐はらふことを速にせずして之を遺しおきてヨシユアの手に付したまはざりしなり

第三章一ヱホバが凡てカナンの諸の戰爭を知ざるイスラエルの者どもをこころみんとて遺しおきたまへる國民は左のごとし二〔こはただイスラエルの代々の子孫特にいまだ戰爭を知ざるものにこれををしへ知らしめんがためなり〕三即ちペリシテ人の五人の伯すべてのカナン人シドン人およびレバノン山に住みてバアルヘルモンの山よりハマテに入るところまでを占めたるヒビ人是なり四これらをもてイスラエルをこころみかれらがヱホバのモーセによりてその先祖に命じたまひし命令に遵ふや否を可知りしなり五イスラエルの子孫はカナン人ヘテ人アモリ人六ペリジ人ヒビ人エブス人のうちに住みかれらの女を妻に娶りまたおのれの女をかれらの子に與へかつかれらの神に事へたり七斯くイスラエルの子孫ヱホバのまへに惡をおこなひ己れの神な

るヱホバをわすれてバアリムおよびアシラに事へたり八是においてヱホバはげしくイスラエルを怒りてこれをメソポタミヤの王クシヤンリシヤタイムの手に賣り付したまひしかばイスラエルの子孫はおよそ八年のあひだクシヤンリシヤタイムにつかへたり九茲にイスラエルの子孫ヱホバによばはりしかばヱホバはイスラエルの子孫の爲にひとりの救者を起して之を救はしめ給ふすなはちカレブの舎弟ケナズの子オテニエル是なり一〇ヱホバの靈オテニエルにのぞみたれば彼イスラエルを治め戰ひに出づヱホバ、メソポタミヤの王クシヤンリシヤタイムをその手に付したまひたればオテニエルの手クシヤンリシヤタイムに勝ことを得たり一一かくて國は四十年のあひだ太平なりきケナズの子オテニエルつひに死り一二イスラエルの子孫復ヱホバの眼のまへに惡をおこなふヱホバかれらがヱホバのまへに惡をおこなふによりてモアブの王エグロンをつよくなしてイスラエルに敵せしめたまへり一三エグロンすなはちアンモンおよびアマレクの子孫を招き聚め往きてイスラエルを撃ち棕櫚の邑を取り一四ここにおいてイスラエルの子孫は十八年のあひだモアブの王エグロンに事へたりしが一五イスラエルの子孫ヱホバに呼はりけるときヱホバかれらの爲に一個の救者を起したまふすなはちベニヤミン人ゲラの子なる左手利捷のエホデ是なりイスラエルの子孫かれを以てモアブの王エグロンに餽物せり一六エホデ長一キユビトなる兩刃の劍を作らせこれを衣のしたに右の股のあたりにおび一七餽物を齎してモアブの王エグロンのもとに詣るエグロンは甚だ肥たる人なりき一八さて餽物を獻ぐることをはりしかば彼餽物を負ひ來りしものをかへし去らしめ一九自らはギルガルの傍なる石像の在る所より引き回していひけるは王よ我爾に告ぐべき密事ありと王人拂を命じたればその旁に立つものみな出で去りぬ二〇エホデすなはち王のところに入來れり時に王はひとり上なる涼殿に坐し居たりしがエホデ我神の命に由りて爾に傳ふべきことありといひければ王すなはち座より起に二一エホデ左の手を出し右の股より劍を取りてその腹を刺せり二二柄もまた刃とともに入りたりしが脂肉刃を塞ぎて之を腹より拔き出すことあたはずその鋒鋩うしろに出づ二三エホデすなはち廊をとほりてその後に樓の戸を閉てこれを鎖せり二四その出でしのち王の僕來りて樓の戸の鎖したるを見いひけるは王はかならず涼殿の間に足を蔽ひ居るならんと二五僕ども耻るまでに俟居たれど王樓の戸をひらかざれば鑰をとりて之を開き見るにその君は地に仆れて死をる二六エホデは彼等の猶豫ふ間に逃れて石像の在るところを過りセイラテに遁げゆけり二七かれ既に至りエフライムの山に角を吹きければイスラエルの子孫これとともに山より下るエホデこれを導けり二八かれ人衆にいひけるは我に續て來れヱホバ汝等の敵モアブ人を汝等の手に付したまふなりここにおいてかれらエホデにしたがひて下りモアブにおもむくところのヨルダンの津を取りて一人も渡るこ

とを允さざりき二九そのとき彼らモアブ人およそ一萬人を殺せり是皆肥太たる勇士なりそのうち一人も脱れたるものなし三〇モアブはその日イスラエルの手に服せり而して國は八十年の間太平なりき三一エホデの後にアナテの子シャムガルといふものあり牛の策を以てペリシテ人六百人を殺せり此人もまたイスラエルを救へり

第四章

一エホデの死たるのちイスラエルの子孫復ヱホバの目前に惡を行しかば二ヱホバ、ハゾルにて世を治むるカナンの王ヤビンの手に之を賣たまふヤビンの軍勢の長はシセラといふ彼異邦人のハロセテに住居り三鐵の戰車九百輛を有居て二十年の間イスラエルの子孫を甚だしく虐げしかばイスラエルの子孫ヱホバに呼はれり四當時ラピドテの妻なる預言者デボラ、イスラエルの士師なりき五彼エフライムの山のラマとベテルの間に在るデボラの棕櫚の樹の下に坐せりイスラエルの子孫はその許に上りて審判を受く六デボラ人をつかはしてケデシ、ナフタリよりアビノアムの子バラクを招きこれにいひけるはイスラエルの神ヱホバ汝に斯く命じたまふにあらずやいはく汝ナフタリの子孫とゼブルンの子孫とを一萬人ひきゐゆきてタボル山におもむけ七我ヤビンの軍勢の長シセラおよびその戰車とその群衆とをキシオン河に引き寄せて汝のもとに至らせ之を汝の手に付すべし八バラク之にいひけるは汝もし我とともにゆかば我往べし然ど汝もし我とともに行ずば我行ざるべし九デボラいひけるは我かならず汝とともに往くべし然ど汝は今往くところの途にては榮譽を得ることなからんヱホバ婦人の手にシセラを賣りたまふべければなりとデボラすなはち起ちてバラクと共にケデシに往けり一〇バラク、ゼブルンとナフタリをケデシに招き一萬人を從へて上るデボラもまた之とともに上れり一一ここにケニ人へベルといふ者あり彼はモーセの外舅ホバブの裔なるがケニを離れてケデシの邊なるザアナイムの橡の樹のかたはらにその天幕を張り居たり一二衆アビノアムの子バラクがタボル山に上れるよしをシセラに告げたりければ一三シセラそのすべての戰車すなはち鐵の戰車九百輛およびおのれとともに在るすべての民を異邦人のハロセテよりキシオン河に招き集へたり一四デボラ、バラクにいひけるは起よ是ヱホバがシセラを汝の手に付したまふ日なりヱホバ汝に先き立ちて出でたまひしにあらずやとバラクすなはち一萬人をしたがへてタボル山より下る一五ヱホバ刃をもてシセラとその諸の戰車およびその全軍をバラクの前に打敗りたまひたればシセラ戰車より飛び下り徒歩になりて遁れ走れり一六バラク戰車と軍勢とを追ひ撃て異邦人のハロセテに至れりシセラの軍勢は悉く刃にたふれて殘れるもの一人もなかりしが一七シセラは徒歩にて奔りケニ人へベルの妻ヤエルの天幕に來れり是はハゾルの王ヤビンとケニ人へベルの家とは互ひに睦じかりしゆゑなり一八ヤエル出來りてシセラを迎へ之にいひけるは來れわが主よ入り來れ怖るる

なかれとシセラその天幕に入たればヤエル被をもてこれを覆へり一九シセラ之にいひけるはねがはくは少しの水をわれに飲ませよ我渇けりとヤエルすなはち乳嚢を啓きて之に飲ませまた之を覆へり二〇シセラまた之にいひけるは天幕の門邊に立て居れもし人來り汝にとふて誰かここに居るやといはば否と答ふべしと二一彼疲れて熟睡せしかばヘベルの妻ヤエル天幕の釘子を取り手に鎚を携へてそのかたはらに忍び寄り鬢のあたりに釘子をうちこみて地に刺し通したればシセラすなはち死たり二二バラク、シセラを追ひ來りしときヤエル之を出むかへていひけるは來れ我汝の索るところの人を示さんとかれそのところに入て見にシセラ鬢のあたりに釘子うたれて死たふれをる二三その日に神カナンの王ヤビンをイスラエルの子孫のまへに打敗りたまへり二四かくてイスラエルの子孫の手ますます強くなりてカナンの王ヤビンに勝ちつひにカナンの王ヤビンを亡ぼすに至れり

第五章一その日デボラとアビノアムの子バラク謳ひていはく二イスラエルの首長みちびきをなし民また好んで出でたればヱホバを頌美よ三もろもろの王よ聽けもろもろの伯よ耳をかたぶけよ我はそのヱホバに謳はん我はイスラエルの神ヱホバを讚へん四あゝヱホバよ汝セイルより出でエドムの野より進みたまひしとき地震ひ天また滴りて雲水を滴らせたり五もろもろの山はヱホバのまへに撼動ぎ彼のシナイもイスラエルの神ヱホバのまへに撼動げり六アナテの子シヤムガルのときまたヤエルの時には大路は通行る者なく途行く人は徑を歩み七イスラエルの村莊には住者なく住む者あらずなりけるがつひに我デボラ起れり我起りてイスラエルに母となる八人々新しき神を選みければ戰鬪門におよべりイスラエルの四萬人のうちに盾或は鎗の見しことあらんや九吾が心は民のうちに好んでいでたるイスラエルの有司等に傾けり汝らヱホバを頌美よ一〇しろき驢馬に乗るもの毛氈に坐するものおよび路歩む人よ汝ら謳ふべし一一矢叫の聲に遠かり水汲むところにおいてヱホバの義しき所爲をとなへそのイスラエルを治理めたまふ義しき所爲を唱へよその時ヱホバの民は門に下れり一二興よ起よデボラ興よ起よ歌を謳ふべし起てよバラク汝の俘虜を虜きたれアビノアムの子よ一三其時民の首長等の殘餘者くだり來るヱホバ勇士の中にいまして我にくだりたまふ一四エフライムより出る者ありその根アマレクにありベニヤミン汝のあとにつきて汝の民の中にありマキルよりは牧伯下りゼブルンよりは采配を執るものいたる一五イッサカルの伯たちはデボラとともに居るイッサカルはバラクとおなじく足の進みて平地に至るルベンの河邊にて大に心にはかる事あり一六何故に汝は圈のうちに止まりて羊の群に笛吹くを聽くやルベンの河邊にて大に心に考ふることあり一七ギレアデはヨルダンの彼方に臥し居る何故にダンは舟のかたはらに止まりしやアセルは濱邊に坐してその港に臥し居る一八ゼブルンは生命を捐

て死を冒せる民なり野の高きところに居るナフタリまた是の如し一九もろもろの王來りて戰へる時にカナンのもろもろの王メギドンの水の邊においてタアナクに戰へり彼ら一片の貨幣をも獲ざりき二〇天よりこれを攻るものありもろもろの星其の道を離れてシセラを攻む二一キシオンの河之を押し流しぬ是彼の古への河キシオンの河なりわが靈魂よ汝ますます勇みて進め二二その時馬の蹄は強きもの馳に馳るに由りて地を踏鳴せり二三ヱホバの使いひけるはメロズを詛ふべし汝ら重ね重ねその民を詛ふべきなり彼等來りてヱホバを助けずヱホバを助けて猛者を攻めざればなり二四ケニ人ヘベルの妻ヤエルは婦女のうちの最も頌むべき者なり彼は天幕に居る婦女のうち最も頌むべきものなり二五シセラ水を乞ふにヤエル乳を與ふ即ち貴き盤に乳の油を盛てささぐ二六ヤエル釘子に手をかけ右の手に重き椎をとりてシセラを打ちその頭を碎きその鬢のあたりをうちて貫ぬく二七シセラ、ヤエルの足の間に屈みて仆れ偃しその足のあはひに屈みて仆れその屈みたる所にて仆れ亡ぬ二八シセラの母窓より望み格子のうちより叫びて言ふ彼が車のきたること何て遲きや彼が馬の歩何てはかどらざるやと二九その賢き侍女こたへをなす(母また獨語して斯いへり)三〇かれら獲ものしてこれを分たざらんや人ごとに一人二人の女子を獲んシセラの獲るものは彩る衣ならんその獲る者は彩る衣にして文繡を施せる者ならん即ち彩りて兩面に文繡をほどこせる衣をえてその頸にまとはんと三一ヱホバよ汝の敵みな是のごとくに亡びよかしまたヱホバを愛するものは日の眞盛に昇るが如くなれよかしとかくて後國は四十年のあひだ太平なりき

第六章一イスラエルの子孫またヱホバの目のまへに惡を行ひたればヱホバ七年の間之をミデアン人の手に付したまふ二ミデアン人の手イスラエルにかてりイスラエルの子孫はミデアン人の故をもて山にある窟と洞穴と要害とをおのれのために造れり三イスラエル人蒔種してありける時しもミデアン人アマレキ人及び東方の民上り來りて押寄せ四イスラエル人に向ひて陣を取り地の產物を荒してガザにまで至りイスラエルのうちに生命を維ぐべき物を遺さず羊も牛も驢馬も遺ざりき五夫この衆人は家畜と天幕を携へ上り蝗蟲の如くに數多く來れりその人と駱駝は數ふるに勝ず彼ら國を荒さんとて入きたる六かかりしかばイスラエルはミデアン人のために大いに衰へイスラエルの子孫ヱホバに呼れり七イスラエルの子孫ミデアン人の故をもてヱホバに呼はりしかば八ヱホバひとりの預言者をイスラエルの子孫に遣りて言しめたまひけるはイスラエルの神ヱホバ斯くいひたまふ我かつて汝らをエジプトより上らせ汝らを奴隸たるの家より出し九エジプト人の手およびすべて汝らを虐ぐるものの手より汝らを拯ひいだし汝らの前より彼らを追ひはらひてその邦土を汝らに與へたり一〇我また汝らに言り我は汝らの神ヱホバなり汝らが住ひ居るアモリ人の國の神を懼るるなかれとしかるに汝らは

我が聲に從はざりき一一 茲にヱホバの使者來りてアビエゼル人ヨアシの所有なるオフラの橡の樹のしたに坐す時にヨアシの子ギデオン、ミデアン人に奪はれざらんために酒榨のなかに麥を打ち居たりしが一二 ヱホバの使之に現れて剛勇丈夫よヱホバ汝とともに在すといひたれば一三 ギデオン之にいひけるはああ吾が主よヱホバ我らと偕にいまさばなどてこれらのことわれらの上に及びたるやわれらの先祖がヱホバは我らをエジプトより上らしめたまひしにあらずやといひて我らに告たりしその諸の不思議なる行爲は何處にあるや今はヱホバわれらを棄てミデアン人の手に付したまへり一四 ヱホバ之を顧みていひたまひけるは汝此汝の力をもて行きミデアン人の手よりイスラエルを拯ひいだすべし我汝を遣すにあらずや一五 ギデオン之にいひけるはああ主よ我何をもてかイスラエルを拯ふべき視よわが家はマナセのうちの最も弱きもの我はまた父の家の最も卑賤きものなり一六 ヱホバ之にいひたまひけるは我かならず汝とともに在ん汝は一人を撃がごとくにミデアン人を撃つことを得ん一七 ギデオン之にいひけるは我もし汝のまへに恩を蒙るならば請ふ我と語る者の汝なる證據を見せたまへ一八 ねがはくは我復び汝に來りわが祭物をたづさへて之を汝のまへに供ふるまでここを去たまふなかれ彼いひたまひけるは我汝の還るまで待つべし一九 ギデオンすなはち往て山羊の羔を調へ粉一エパをもて無酵パンをつくり肉を筐にいれ羹を壺に盛り橡樹の下にもち出て之を供へたれば二〇 神の使之にいひたまひけるは肉と無酵パンをとりて此巖のうへに置き之に羹を斟げとすなはちそのごとくに行ふ二一 ヱホバの使手にもてる杖の末端を出して肉と無酵パンに觸れたりしかば巖より火燃えあがり肉と無酵パンを燒き盡せりかくてヱホバの使去てその目に見ずなりぬ二二 ギデオン是において彼がヱホバの使者なりしを覺りギデオンいひけるはああ神ヱホバよ我面を合せてヱホバの使者を見たれば將如何せん二三 ヱホバ之にいひたまひけるは心安かれ怖るる勿れ汝死ぬることあらじ二四 ここにおいてギデオン彼所にヱホバのために祭壇を築き之をヱホバシヤロムと名けたり是は今日に至るまでアビエゼル人のオフラに存る二五 其夜ヱホバ、ギデオンにいひ給ひけるは汝の父の少き牡牛および七歳なる第二の牛を取り汝の父のもてるバアルの祭壇を毀ち其上なるアシラの像を斫り仆し二六 汝の神ヱホバのためにこの堡砦の頂において次序をただしく祭壇を築き第二の牛を取りて汝が斫り倒せるアシラの木をもて燔祭を供ぐべし二七 ギデオンすなはちその僕十人を携へてヱホバのいひたまひしごとく行へりされど父の家のものどもおよび邑の人を怖れたれば晝之をなすことを得ず夜に入りて之を爲り二八 邑の衆朝興出て視にバアルの祭壇は摧け其の上なるアシラの像は斫仆されて居り新に築る祭壇に第二の牛の供へてありしかば二九 たがひに此は誰が所爲ぞやと言ひつつ尋ね問ひけるに此はヨアシの子ギデオンの所爲なりといふものありたれば

三〇邑の人々ヨアシにむかひ汝の子を曳き出して死なしめよそは彼バアルの祭壇を摧き其上に在しアシラの像を斫仆したればなりといふ三一ヨアシおのれの周圍に立るすべてのものにいひけるは汝らはバアルの爲に爭論ふや汝らは之を救んとするや之が爲に爭論ふ者は朝の中に死べしバアルもし神ならば人其祭壇を摧きたれば自ら爭論ふ可なりと三二是をもて人衆ギデオンその祭壇を摧きたればバアル自ら之といひあらそはんといひて此日かれをヱルバアル(バアルいひあらそはん)と呼なせり三三茲にミデアン人アマレク人および東方の民相集まりて河を濟りヱズレルの谷に陣を取しが三四ヱホバの靈ギデオンに臨みてギデオン笟を吹たればアビエゼル人集りて之に從ふ三五ギデオン徧くマナセに使者を遣りしかばマナセ人また集りて之に從ふ彼またアセル、ゼブルン及びナフタリに使者を遣りしにその人々も上りて之を迎ふ三六ギデオン神にいひけるは汝かつていひたまひしごとくわが手をもてイスラエルを救はんとしたまはば三七視よ我一箇の羊の毛を禾場におかん露もし羊毛にのみおきて地はすべて燥きをらば我之れによりて汝がかつて言たまひし如く吾が手をもてイスラエルを救ひたまふを知んと三八すなはち斯ありぬ彼明る朝早く興きいで羊毛をかき寄てその毛より露を搾りしに鉢に滿つるほどの水いできたる三九ギデオン神にいひけるは我にむかひて怒を發したまふなかれ我をしていま一回いはしめたまへねがはくは我をして羊の毛をもていま一回試さしめたまへねがはくは羊毛のみを燥して地には悉く露あらしめたまへと四〇その夜神かくの如くに爲したまふすなはち羊毛のみ燥きて地には凡て露ありき

第七章一斯てヱルバアルと呼るるギデオンおよび之とともにあるすべての民朝夙に興きいでてハロデの井のほとりに陣を取るミデアン人の陣はかれらの北の方にあたりモレの山に沿ひ谷のうちにありき二ヱホバ、ギデオンにいひたまひけるは汝とともに在る民は餘りに多ければ我その手にミデアン人を付さじおそらくはイスラエル我に向ひ自ら誇りていはん我わが手をもて己を救へりと三されば民の耳に告示していふべし誰にても懼れ慄くものはギレアデ山より歸り去るべしとここにおいて民のかへりしもの二萬二千人あり殘しものは一萬人なりき四ヱホバまたギデオンにいひたまひけるは民なほ多し之を導きて水際に下れ我かしこにて汝のために彼らを試みんおほよそ我が汝に告て此人は汝とともに行くべしといはんものはすなはち汝とともに行くべしまたおほよそ我汝に告て此人は汝とともに行くべからずといはんものはすなはち行くべからざるなり五ギデオン民をみちびきて水際に下りしにヱホバ之にいひたまひけるはおほよそ犬の舐るがごとくその舌をもて水を舐るものは汝之を別けおくべしまたおほよそ其の膝を折り屈みて水を飲むものをも然すべしと六手を口にあてて水を舐しものの數は三百人なり餘の民は盡くその膝を折り屈みて水を飲り七ヱホバ、ギデオンに

いひたまひけるは我水を甞たる三百人の者をもて汝らを救ひミデアン人を汝の手に付さん餘の民はおのおの其所に歸るべしと八ここにおいて彼ら民の兵粮とその箛を手にうけとれりギデオンすなはちすべてのイスラエル人を各自その天幕に歸らせ彼の三百人を留めおけり時にミデアン人の陣はその下の谷のなかにありき九その夜ヱホバ、ギデオンにいひたまはく起よ下りて敵陣に入るべし我之を汝の手に付すなり一〇されど汝もし下ることを怖れなば汝の僕フラを伴ひ陣所に下りて一一彼らのいふ所を聞べし然せば汝の手強くなりて汝敵陣にくだることを得んとギデオンすなはち僕フラとともに下りて陣中にある隊伍のほとりに至るに一二ミデアン人アマレク人およびすべて東方の民は蝗蟲のごとくに數衆く谷のうちに偃しをりその駱駝は濱の砂の多きがごとくにして數ふるに勝ず一三ギデオン其處に至りしに或人その伴侶に夢を語りて居りすなはちいふ我夢を見たりしが夢に大麥のパンひとつミデアンの陣中に轉びいりて天幕に至り之をうち仆し覆したれば天幕倒れ臥り一四其の伴侶答へていふ是イスラエルの人ヨアシの子ギデオンの劍に外ならず神ミデアンとすべての陣營を之が手に付したまふなりと一五ギデオン夢の説話とその解釋を聞しかば拜をなしてイスラエルの陣所にかへりいひけるは起よヱホバ汝らの手にミデアンの陣をわたしたまふと一六かくて三百人を三隊にわかち手に手に箛および空瓶を取せその瓶のなかに燈火をおかしめ一七これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲すごとく汝らも爲すべし一八我およびわれとともに在るものすべて箛を吹ば汝らもまたすべて陣營の四方にて箛を吹き此ヱホバのためなりギデオンのためなりといへと一九而してギデオンおよび之とともなる百人中更の初に陣營の邊に至るにをりしも番兵を更代たるときなりければ箛を吹き手に携へたる瓶をうちくだけり二〇即ち三隊の兵隊箛を吹き瓶をうちくだき左の手には燈火を執り右の手には箛をもちて之を吹きヱホバの劍ギデオンの劍なるぞと叫べり二一かくておのおのその持場に立ち陣營を取り圍みたれば敵軍みな走り叫びてにげゆけり二二三百人のもの箛を吹くにあたりヱホバ敵軍をしてみなたがひに同士撃せしめたまひければ敵軍にげはしりてゼレラのベテシツダ、アベルメホラの境およびタバテに至る二三イスラエルの人々すなはちナフタリ、アセルおよびマナセ中より集ひ來りてミデアン人を追撃り二四ギデオン使者をあまねくエフライムの山に遣していはせけるは下りてミデアン人を攻めベタバラにいたる渡口およびヨルダンを遮斷るべしと是においてエフライムの人盡く集ひ來りてベタバラにいたる渡口およびヨルダンを取り二五ミデアン人の君主オレブとゼエブの二人を俘へてオレブをばオレブ砦の上に殺しゼエブをばゼエブの酒搾のほとりに殺しまたミデアン人を追撃ちオレブとゼエブの首を携へてヨルダンの彼方よりギデオンの許にいたる

第八章

一 エフライムの人々ギデオンにむかひ汝ミデアン人と戰はんとて往る時われらを召ざりしが斯ることを我らになすは何故ぞといひていたく之を詰りたり 二 ギデオン之にいひけるは今吾が成るところは汝らのなせる所に比ぶべけんやエフライムの拾ひ得し遺餘の葡萄はアビエゼルの收穫し葡萄にも勝れるならずや 三 神はミデアンの群伯オレブとゼエブを汝等の手に付したまへりわが成えたるところは汝らの成る所に比ぶべけんやとギデオン此の語をのべしかば彼らの憤 解たり 四 ギデオン自己に從がへる三百人とともにヨルダンに至りて之を濟り疲れながらも仍追撃しけるが 五 遂にスコテの人々に言けるは願くは我にしたがへる民に食を與へよ彼等疲れをるに我ミデアンの王ゼバとザルムンナを追行なりと 六 スコテの群伯等いひけるはゼバとザルムンナの手すでに汝の手のうちに在るや我らなんぞ汝の軍勢に食を與ふべけんやと 七 ギデオンいひけるは然らばヱホバの吾が手にゼバをザルムンナを付したまふときに我野の荊と棘とをもて汝の肉を打つべしと 八 かくて其所よりペヌエルにのぼりおなじことを彼らにのべたるにペヌエルの人もスコテの人の答へしごとくに答へしかば 九 またペヌエルの人につげていひけるは我平康に歸るときに此の城樓を毀つべしと 一〇 偖ゼバとザルムンナはその軍勢およそ一萬五千人をひきゐてカルコルに居る是皆東方の人の全軍の中の生殘れるものなり戰死せし者は劍を拔ところのもの十二萬人ありき 一一 ギデオンすなはちノバとヨグベバの東にて天幕にすめるものの路より上りて敵軍の慮りなく居るを撃り 一二 ここにおいてゼバとザルムンナにげ走りたればギデオン之を追撃ちミデアンの二人の王ゼバとザルムンナを生捕て悉くその軍勢を敗れり 一三 斯てヨアシの子ギデオン、ヘレシの阪よりして戰陣よりかへり 一四 スコテの人の少壯者一人を執へて之に尋ねたれば即ちスコテの群伯およびその長老等七十七人をこれがために書き録せり 一五 ギデオン、スコテの人の所に詣りていひけるは汝らが曾て我を罵りゼバとザルムンナの手すでに汝の手のうちにあるや我ら何ぞ汝の疲れたる人に食をあたふべけんやと言たりしそのゼバとザルムンナを見よと 一六 すなはちその邑の長老等を執へ野の荊と棘を取り之をもちてスコテの人を懲し 一七 またペヌヘルの城樓を毀ちて邑の人を殺せり 一八 かくてギデオン、ゼバとザルムンナにいひけるは汝らがタボルにて殺せしものは如何なるものなりしや答へていふ彼らは汝に似てみな王子の如くに見えたり 一九 ギデオンいひけるは彼らは我が兄弟我が母の子なりヱホバは活く汝らもし彼らを生し置たらば我汝らを殺すまじきをと 二〇 すなはちその長子ヱテルに起て彼らを殺せといひたりしが彼の少者は年尚わかかりしかば懼れて劍を拔ざりき 二一 ここにおいてゼバとザルムンナいひけるは汝みづから起て我らを撃よ人の如何によりてその力量異る者なりとギデオンすなはち起てゼバとザルムンナを殺しその駱駝の頸にかけたる半月の飾を取り 二二 茲にイスラエルの

衆ギデオンにいひけるは汝ミデアンの手より我らを救ひたれば汝と汝の子及び汝の孫我らを治めよ二三ギデオン之にいひけるは我汝らを治むることをせじまた我が子も汝らを治むべからずヱホバ汝らを治めたまふべし二四ギデオンまた之にいひけるは我汝らにひとつの願ふべきことあり汝らおのおの掠取の環を我にあたへよと是は彼らイシマエル人なるをもて金の環を着けたるに由る二五衆答へけるは我ら悦んで之を與へんとて衣を布きおのおの掠取の環を其うちに投げいれたり二六ギデオンが求め得たる金の環の重量は金一千七百シケルなり外に半月の飾および耳環とミデアンの王たちの着たる紫のころもおよび駱駝の頸にかけたる鏈などもありき二七ギデオン之をもて一箇のエポデを造り之をおのれの郷里オフラに藏むイスラエルみなこれを慕ひてこれと淫をおこなふこの物ギデオンと其家を陥るる罟となりぬ二八ミデアン人は是の如くイスラエルの子孫に攻ふせられてふたたびその頭を擡ることを得ざりきかくて國はギデオンの世にある中四十年の間平穏にてありき二九ヨアシの子ヱルバアル往ておのれの家に住り三〇ギデオンは妻を多く有ちたれば其身より出たる子七十人ありき三一シケムに居しその妾またひとりの子を產たれば之をアビメレクと名けたり三二ヨアシの子ギデオン妙齢に邁みて死にアビエゼル人のオフラに在るその父ヨアシの墓に葬られたり三三ギデオンの死るに及びてイスラエルの子孫復ひるがへりてバアルを慕ひて之と淫をおこなひバアルベリテをおのれの神と為り三四イスラエルの子孫その四周のもろもろの敵の手よりおのれを救ひ出したまひし神ヱホバを記憶えず三五またヱルバアルといふギデオンがイスラエルになせし諸の善行にしたがひて彼の家を厚く待ふことをせざりき

第九章 一 ヱルバアルの子アビメレク、シケムに往きその母の兄弟のもとに至りて彼らおよびすべて其母の父の家の一族に語りて云ひけるは二ねがはくはシケムのすべての民の耳に斯く告よヱルバアルのすべての子七十人して汝らを治むると一人して汝らを治むると孰れか汝らのためによきやまた我は汝らの骨肉なるを記えよと三その母の兄弟アビメレクのことにつきて此等の言をことごとくシケムの人々の耳に語りしに是はわれらの兄弟なりといひて心をアビメレクに傾け四バアルベリテの社より銀七十をとりて之に與ふアビメレクこれをもて遊蕩にして輕躁なる者等を傭ひておのれに從はせ五オフラに在る父の家に往きてヱルバアルの子なるその兄弟七十人を一つの石の上に殺せり但しヱルバアルの季の子ヨタムは身を潜めしに由て遺されたり六ここにおいてシケムのすべての民およびミロの諸の人集り往てシケムの碑の旁なる橡樹の邊にてアビメレクを立て王となしけるが七ヨタムにかくと告るものありければ往てゲリジム山の巓に立ち聲を揚て號びかれらにいひけるはシケムの民よ我に聽よ神また汝らに聽たまはん八樹木出ておのれのうへ

に王を立んとし橄欖の樹に汝われらの王となれよといひけるに
九 橄欖の樹之にいふ我いかで人の我に取て神と人とを崇むると
ころのそのわが油を棄て往て樹木の上に戰ぐべけんやと一〇
樹木また無花果樹に汝來りて我らの王となれといひけるに一一
無花果樹之にいひけらく我いかでわが甜美とわが善き果を棄て
往きて樹木の上に戰ぐべけんやと一二 樹木また葡萄の樹に汝來
りて我らの王となれよといふに一三 葡萄の樹之にいひけるは我
いかで神と人を悦こばしむるわが葡萄酒を棄て往て樹木の上に
戰ぐべけんやと一四 ここにおいてすべての樹木荊に汝來りて我
らの王となれよといひければ一五 荊樹木にいふ汝らまことに我
を立て汝らの王と爲さば來りて我が庇蔭に托れ然せずば荊より
火出てレバノンの香柏を燒き殫すべしと一六 抑 汝らがアビメ
レクを立て王となせしは眞實と誠意をもて爲しことなるや汝等
はヱルバアルと其家を善く待ひかれの手のなせし所に循ひて之
にむくいしや一七 夫わが父は汝らのため戰ひ生命を惜まずして
汝らをミデアンの手より救ひ出したるに一八 汝ら今日おこりて
わが父の家を攻めその子七十人を一つの石の上に殺しその侍妾
の子アビメレクは汝らの兄弟なるをもて之を立てシケムの民
の王となせり一九 汝らが今日ヱルバアルとその家になせしこと
眞實と誠意をもてなせし者ならば汝らアビメレクのために悅べ
彼も汝らのために悅ぶべし二〇 若し然らずばアビメレクより火
いでてシケムの民とミロの家を燬つくさんまたシケムの民とミ
ロの家よりも火いでてアビメレクを燬つくすべしと二一 かくて
ヨタム走り遁れてベエルに往きその兄弟アビメレクの面を避
て彼所に住めり二二 アビメレク三年の間イスラエルを治めたり
しが二三 神アビメレクとシケムの民のあひだに惡鬼をおくりた
まひたればシケムの民アビメレクを欺くにいたる二四 是ヱルバ
アルの七十人の子が受たる殘忍と彼らの血のこれを殺せしその
兄弟アビメレクおよび彼の手に力をそへてその兄弟を殺さし
めたるシケムの人々に報い來るなり二五 シケムの人伏兵を山の
巓に置て彼を窺はしめ其途を經て傍を過る者を凡て褫しめたり
或人之をアビメレクに告ぐ二六 ここにエベデの子ガアル其の
兄弟とともにシケムに越ゆきたりしかばシケムの民かれを恃
めり二七 民田野に出て葡萄を收穫れこれを踐み絞りて祭禮をな
しその神の社に入り食ひかつ飮みてアビメレクを詛ふ二八 エベ
デの子ガアルいひけるはアビメレクは如何なるものシケムは
如何なるものなればか我ら彼に從ふべき彼はヱルバアルの子に
非ずやゼブルその輔佐なるにあらずやむしろシケムの父ハモル
の一族に事ふべし我らなんぞ彼に事ふべけんや二九 嗚呼此の民
を吾が手に屬しむるものもがな然ば我アビメレクを除かんと而
してガアル、アビメレクに汝の軍勢を益て出きたれよと言り三〇
邑の宰ゼブル、エベデの子ガアルの言をききて怒を發し三一 私
かに使者をアビメレクに遣りていひけるはエベデの子ガアル及
びその兄弟シケムに來り邑をさわがして汝に敵せしめんとす三

三二然ば汝及び汝と共なる民夜の中に興て野に身を伏よ三三而て朝に至り日の昇る時汝夙く興出て邑に攻かかれガアル及び之とともなる民出て汝に當らん汝機を見てこれに事をなすべし三四アビメレクおよび之とともなるすべての民夜の中に興出て四隊に分れ身を伏てシケムを伺ふ三五エベデの子ガアル出て邑の門の口に立るにアビメレク及び之とともなる民その伏たるところより起りしかば三六ガアル民を見てゼブルにいひけるは視よ民山の峰々より下るとゼブル之に答へて汝山の影を見て人と做すのみといふ三七ガアルふたたび語りていひけるは視よ民地の高處より下りまた一隊は法術士の橡樹の途より來ると三八ゼブル之にいひけるは汝がかつてアビメレクは何者なればか我ら之に事ふべきといひしその汝の口今いづこに在るや是汝が侮りたる民にあらずや今乞ふ出て之と戰へよと三九ここにおいてガアル、シケム人を率ゐ往てアビメレクと戰ひしが四〇アビメレク之を追くづしたればガアル其まへより逃走れりかくて殺されて斃るるもの多くして邑の門の口までに及ぶ四一かくてアビメレクはアルマに居しがゼブルはガアルおよびその兄弟等を逐いだしてシケムに居ることを得ざらしむ四二あくる日民田畑に出しに人之をアビメレクに告げしかば四三アビメレクおのれの民を率ゐてこれを三隊に分ち野に埋伏して伺ふに民邑より出來りたればすなはち起りて之を撃り四四アビメレクおよび之とともに在る隊の者は襲ひゆきて邑の門の入口に立ち餘の二隊は野に在るすべてのものをおそふて之を殺せり四五アビメレク其日終日邑を攻めつひに邑を取りてそのうちの民を殺し邑を破却ちて鹽を撒布ぬ四六シケムの櫓の人みな之を聞てベリテ神の廟の塔に入たりしが四七シケムの櫓の人のことごとく集れるよしアビメレクに聞えければ四八アビメレク己とともなる民をことごとく率ゐてザルモン山に上りアビメレク手に斧を取り木の枝を斫落し之をおのれの肩に載せ偕に居る民にむかひて汝ら吾が爲ところを見る急ぎてわがごとく爲せよといひしかば四九民もまた皆おのおのその枝を斫りおとしアビメレクに從ひて枝を塔に倚せかけ塔に火をかけて彼等を攻むここにおいてシケムの櫓の人もまた悉く死り男女およそ一千人なりき五〇茲にアビメレク、テベツに赴きテベツに對て陣を張て之を取しが五一邑のなかに一の堅固なる櫓ありてすべての男女および邑の民みな其所に遁れ往き後を鎖して櫓の頂に上りたれば五二アビメレクすなはち櫓のもとに押寄て之を攻め櫓の口に近きて火をもて之を焚んとせしに五三一人の婦アビメレクの頭に磨石の上層石を投げてその腦骨を碎けり五四アビメレクおのれの武器を執る少者を急ぎ召て之にいひけるは汝の劍を拔て我を殺せおそらくは人吾をさして婦に殺されたりといはんと其少者之を刺し通したればすなはち死り五五イスラエルの人々はアビメレクの死たるを見ておのおのおのれの處に歸り去りぬ五六神はアビメレクがその七十人の兄弟を殺しておのれの父になしたる惡に斯く

報いたまへり五七またシケムの民のすべての悪き事をも神は彼等の頭に報いたまへりすなはちエルバアルの子ヨタムの詛彼らの上に及べるなり

第一〇章一アビメレクの後イッサカルの人にてドドの子なるプワの子トラ起りてイスラエルを救ふ彼エフライムの山のシャミルに住み二二十三年の間イスラエルを審判しがつひに死てシャミルに葬らる三彼の後にギレアデ人ヤイル起りて二十二年の間イスラエルを審判たり四彼に子三十人ありて三十の驢馬に乗る彼等三十の邑を有りギレアデの地において今日までヤイルの村ととなふるものすなはち是なり五ヤイル死てカモンに葬らる六イスラエルの子孫ふたたびヱホバの目のまへに悪を為しバアルとアシタロテ及びスリヤの神シドンの神モアブの神アンモンの子孫の神ペリシテ人の神に事へヱホバを棄て之に事へざりき七ヱホバ烈しくイスラエルを怒りて之をペリシテ人及びアンモンの子孫の手に賣付したまへり八其年に彼らイスラエルの子孫を虐げ難せりヨルダンの彼方においてギレアデにあるところのアモリ人の地に居るイスラエルの子孫十八年の間斯せられたりき九アンモンの子孫またユダとベニヤミンとエフライムの族とを攻んとてヨルダンを渡りしかばイスラエル太く苦めり一〇ここにおいてイスラエルの子孫ヱホバに呼りていひけるは我らおのれの神を棄てバアルに事へて汝に罪を犯したりと一一ヱホバ、イスラエルの子孫にいひたまひけるは我かつてエジプト人アモリ人アンモンの子孫ペリシテ人より汝らを救ひ出せしにあらずや一二又シドン人アマレク人及びマオン人の汝らを困しめしとき汝ら我に呼りしかば我汝らを彼らの手より救ひ出せり一三然るに汝ら我を棄て他の神に事ふれば我かさねて汝らを救はざるべし一四汝らが擇める神々に往て呼れ汝らの艱難のときに之をして汝らを救はしめよ一五イスラエルの子孫ヱホバに言けるは我ら罪を犯せりすべて汝の目に善と見るところを我らになしたまへねがはくは唯今日我らを救ひたまへと一六而して民おのれの中より異なる神々を取除きてヱホバに事へたりヱホバの心イスラエルの艱難を見るに忍びずなりぬ一七茲にアンモンの子孫集てギレアデに陣を取りしがイスラエルの子孫は聚りてミヅパに陣を取り一八時に民ギレアデの群伯たがひにいひけるは誰かアンモンの子孫に打ちむかひて戰を始むべき人ぞ其人をギレアデのすべての民の首となすべしと

第一一章一ギレアデ人ヱフタはたけき勇士にして妓婦の子なりギレアデ、ヱフタをうましめしなり二ギレアデの妻子等をうみしが妻の子等成長におよびてヱフタをおひいだしてこれにいひけるは汝は他の婦の子なればわれらが父の家を嗣べきにあらずと三ヱフタ其の兄弟の許より逃さりてトブの地に住けるに遊蕩者ヱフタのもとに集ひ來りて之とともに出ることをなせり四程經てのちアンモンの子孫イスラエルとたたかふに至りしが五アンモンの子孫のイスラエルとたたかへるときにギレアデの

長老等ゆきてヱフタをトブの地より携來らんとし六ヱフタにいひけるは汝來りて吾らの大將となれ我らアンモンの子孫とたたかはん七ヱフタ、ギレアデの長老等にいひけるは汝らは我を惡みてわが父の家より逐いだしたるにあらずやしかるに今汝らが艱める時に至りて何ぞ我に來るや八ギレアデの長老等ヱフタにこたへけるは其がために我ら今汝にかへる汝われらとともにゆきてアンモンの子孫とたたかはばすべて我等ギレアデにすめるものの首領となすべしと九ヱフタ、ギレアデの長老等にいひけるは汝らもし我をたづさへかへりてアンモンの子孫とたたかはしめんにヱホバ之を我に付したまはば我は汝らの首となるべし一〇ギレアデの長老等ヱフタにいひけるはヱホバ汝と我との間の證者たり我ら誓つて汝の言のごとくになすべし一一是に於てヱフタ、ギレアデの長老等とともに往くに民之を立ておのれの首領となし大將となせりヱフタ即ちミヅパにおいてヱホバのまへにこの言をことごとく陳たり一二かくてヱフタ、アンモンの子孫の王に使者をつかはしていひけるは汝と我の間に何事ありてか汝われに攻めきたりてわが地に戰はんとする一三アンモンの子孫の王ヱフタの使者に答へけるはむかしイスラエル、エジプトより上りきたりし時にアルノンよりヤボクにいたりヨルダンに至るまで吾が土地を奪ひしが故なり然ば今穩便に之を復すべし一四ヱフタまた使者をアンモンの子孫の王に遣りて之にいはせけるは一五ヱフタ斯いへりイスラエルはモアブの地を取ずまたアンモンの子孫の地をも取ざりしなり一六夫イスラエルはエジプトより上りきたれる時に曠野を經て紅海に到りカデシに來れり一七而してイスラエル使者をエドムの王に遣して言けるはねがはくは我をして汝の土地を經過しめよと然るにエドムの王之をうけがはずまたおなじく人をモアブの王に遣したれども是もうべなはざりしかばイスラエルはカデシに留まりしが一八遂にイスラエル曠野を經てエドムの地およびモアブの地を繞りモアブの地の東の方に出てアルノンの彼方に陣を取り然どモアブの界には入らざりきアルノンはモアブの界なればなり一九かくてイスラエル、ヘシボンに王たりしアモリ人の王シホンに使者を遣せりすなはちイスラエル之にいひけらくねがはくは我らをして汝の土地を經過てわがところにいたらしめよと二〇然るにシホン、イスラエルを信ぜずしてその界をとほらしめずかへつてそのすべての民を集めてヤハヅに陣しイスラエルとたたかひしが二一イスラエルの神ヱホバ、シホンとそのすべての民をイスラエルの手に付したまひたればイスラエル之を撃敗りてその土地にすめるアモリ人の地を悉く手に入れ二二アルノンよりヤボクに至るまでまた曠野よりヨルダンに至るまですべてアモリ人の土地を手に入たり二三斯のごとくイスラエルの神ヱホバは其の民イスラエルのまへよりアモリ人を逐しりぞけたまひしに汝なほ之を取んとする乎二四汝は汝の神ケモシが汝に取しむるものを取ざらんやわれらは我らの神ヱホバが我らに取しむ

る物を取ん二五 汝は誠にモアブの王チツポルの子バラクにまされる處ありとするかバラク曾てイスラエルとあらそひしことありや曾て之とたたかひしことありや二六 イスラエルがヘシボンとその村里アロエルとその村里およびアルノンの岸に沿ひたるすべての邑々に住ること三百年なりしに汝などてかその間に之を回復さざりしや二七 我は汝に罪を犯せしことなきに汝はわれとたたかひて我に害をくはへんとす願くは審判をなしたまふヱホバ今日イスラエルの子孫とアンモンの子孫との間を鞫きたまへと二八 しかれどもアンモンの子孫の王はヱフタのいひつかはせる言を聽いれざりき二九 ここにヱホバの靈ヱフタに臨みしかばヱフタすなはちギレアデおよびマナセを經過りギレアデのミヅパにいたりギレアデのミヅパよりすすみてアンモンの子孫に向ふ三〇 ヱフタ、ヱホバに誓願を立ていひけるは汝誠にアンモンの子孫をわが手に付したまはば三一 我がアンモンの子孫の所より安然かに歸らんときに我家の戸より出きたりて我を迎ふるもの必ずヱホバの所有となるべし我之を燔祭となしてささげんと三二 ヱフタすなはちアンモンの子孫の所に進みゆきて之と戰ひしにヱホバかれらをその手に付したまひしかば三三 アロエルよりミンニテにまで至りこれが二十の邑を打敗りてアベルケラミムにいたり甚だ多の人をころせりかくアンモンの子孫はイスラエルの子孫に攻伏られたり三四 かくてヱフタ、ミヅパに來りておのが家にいたるに其女鼓を執り舞ひ踊りて之を出で迎ふ是彼が獨子にて其のほかには男子もなくまた女子も有ざりき三五 ヱフタ之を視てその衣を裂ていひけるはああ吾が女よ汝實に我を傷しむ汝は我を惱すものなり其は我ヱホバにむかひて口を開きしによりて改むることあたはざればなり三六 女之にいひけるはわが父よ汝ヱホバにむかひて口をひらきたれば汝の口より言出せしごとく我になせよ其はヱホバ汝のために汝の敵なるアンモンの子孫に仇を復したまひたればなり三七 女またその父にいひけるはねがはくは此事をわれに允せよすなはち二月の間我をゆるし我をしてわが友等とともに往て山にくだりてわが處女たることを歎かしめよと三八 ヱフタすなはち往けといひて之を二月のあひだ出し遣ぬ女その友等とともに往き山の上にておのれの處女たるを歎きしが三九 二月滿てその父に歸り來りたれば父その誓ひし誓願のごとくに之に行へり女は終に男を知ことなかりき四〇 是よりして年々にイスラエルの女子等往て年に四日ほどギレアデ人ヱフタの女のために哀哭ことをなす是イスラエルの規矩となれり

第一二章

一 エフライムの人々つどひて北にゆきヱフタにいひけるは汝何故に往きてアンモンの子孫と戰ひながらわれらをまねきて汝とともに行せざりしや我ら火をもて汝の家を汝とともに焚くべしと二 ヱフタ之にいひけるは我とわが民の曾てアンモンの子孫と大に爭ひしときに我汝らをよびしに汝らかれらの手より我を救ふことをせざりき三 我汝らが我を救はざるを見た

ればわが命をかけてアンモンの子孫の所に攻ゆきしにヱホバかれらを我が手に付したまへり然ば汝らなんぞ今日我が許に上り來りて我とたたかはんとするやと四ヱフタここにおいてギレアデの人をことごとくつどへてエフライムとたたかひしがギレアデの人々エフライムを撃破れり是はエフライム汝らギレアデ人はエフライムの逃亡者にしてエフライムとマナセの中にをるなりと言しに由る五而してギレアデ人エフライムにおもむくところのヨルダンの津をとりきりしがエフライム人の逃れ來る者ありて我を渡らせよといへばギレアデの人之に汝はエフライム人なるかと問ひ彼もし然らずと言ときは六また之に請ふシボレテといへといふに彼その音を正しくいひ得ずしてセボレテと言ばすなはち之を引捕へてヨルダンの津に屠せりその時にエフライム人のたふれし者四萬二千人なりき七ヱフタ六年のあひだイスラエルを審きたりギレアデ人ヱフタつひに死てギレアデのある邑に葬むらる八彼の後にベテレヘムのイブザン、イスラエルを審きたり九彼に三十人の男子ありまた三十人の女子ありしがこれをば外に嫁がしめてその子息等のために三十人の女を外より娶れり彼七年のあひだイスラエルを審きたり一〇イブザンつひに死てベテレヘムに葬むらる一一彼の後にゼブルン人エロン、イスラエルを審きたりゼブルン人エロン十年のあひだイスラエルを審きたり一二ゼブルン人エロンつひに死てゼブルンの地のアヤロンに葬むらる一三彼の後にピラトン人ヒレルの子アブドン、イスラエルを審きたり一四彼に四十人の男子および三十人の孫ありて七十の驢馬に乗る彼八年のあひだイスラエルを審けり一五ピラトン人ヒレルの子アブドンつひに死てエフライムの地のピラトンに葬むらる是はアマレク人の山にあり

第一三章 一イスラエルの子孫またヱホバのまへにて惡を行ひしかばヱホバこれを四十年の間ペリシテ人の手にわたしたまへり二ここにダン人の族にて名をマノアとよべるゾラ人あり其の妻は石婦にして子を生みしことなし三ヱホバの使その女に現れて之にいひけるは汝は石婦にして子を生しことあらず然ど汝孕みて子をうまん四されば汝つつしみて葡萄酒および濃き酒を飲むことなかれまたすべて穢たるものを食ふなかれ五視よ汝孕みて子を産ん其の頭には剃刀をあつべからずその兒は胎を出るよりして神のナザレ人〔神に身を獻げし者〕たるべし彼ペリシテ人の手よりイスラエルを拯ひ始めんと六その婦人來りて夫に告て曰けるは神の人我にのぞめりその容貌は神の使の容貌のごとくにして甚おそろしかりしが我其のいづれより來れるやを問ず彼また其の名を我に告ざりき七彼我にいひけるは視よ汝孕みて子を産まん然ば葡萄酒および濃き酒を飲むなかれまたすべてけがれたるものを食ふなかれその兒は胎を出るより其の死る日まで神のナザレ人たるべしと八マノア、ヱホバにこひ求めていひけるはああわが主よ汝がさきに遣はしたまひし神の人をふたたび我らにのぞませ之をして我らがその産る兒になすべき事を

教へしめたまへ九神マノアの聲をきいれたまひて神の使者婦人の田野に坐しをる時に復之にのぞめり時に夫マノアは共にをらざりき一〇是において婦いそぎ走りて夫に告て之にいひけるは先頃我にのぞみし人また我に現はれたりと一一マノアすなはち起て妻のあとに付て行き其人のもとに至りて之に汝はかつて此婦に語言し人なるかといふに然りとこたふ一二マノアいひけるは汝の言のごとく成ん時は其兒の養育方および之になすべき事は如何一三ヱホバの使者マノアにいひけるはわがさきに婦に言しところのことどもは婦之をつつしむべきなり一四すなはち葡萄樹よりいづる者は凡て食ふべからず葡萄酒と濃き酒を飲ずまたすべて穢たるものを食ふべからずすべてわが彼に命じたることどもを彼守るべきなり一五マノア、ヱホバの使者にいひけるは請我らをして汝を款留しめ汝のまへに山羊羔を備へしめよ一六ヱホバの使者マノアにいひける汝我を款留るも我は汝の食物をくらはじまた汝燔祭をそなへんとならばヱホバにこれをそなふべしとマノアは彼がヱホバの使者なるを知ざりしなり一七マノア、ヱホバの使者にいひけるは汝の名はなにぞ汝の言の效驗あらんときは我ら汝を崇ん一八ヱホバの使者之にいひけるは我が名は不思議なり汝何故に之をたづぬるやと一九マノア山羊羔と素祭物とをとり磐のうへにて之をヱホバにささぐ使者すなはち不思議なる事をなせりマノアとその妻之を視る二〇すなはち火燄壇より天にあがれるときヱホバの使者壇の火燄のうちにありて昇れりマノアと其の妻これを視をりて地にひれふせり二一ヱホバの使者そののち重ねてマノアと其の妻に現はれざりきマノアつひに彼がヱホバの使者たりしを暁れり二二茲にマノアその妻にむかひ我ら神を視たれば必ず死ぬるならんといふに二三其の妻之にいひけるはヱホバもし我らを殺さんとおもひたまはばわれらの手より燔祭及び素祭をうけたまはざりしならんまたこれらの諸のことを我らに示すことをなしこたびのごとく我らに斯ることを告たまはざりしなるべしと二四かくて婦子を産てその名をサムソンと呼べりその子育ち行くヱホバこれを惠みたまふ二五ヱホバの靈ゾラとエシタオルのあひだなるマハネダンにて始て感動す

第一四章一サムソン、テムナテに下り、ペリシテ人の女にてテムナテに住る一人の婦を見二歸り上りておのが父母に語ていひけるは我ペリシテ人の女にてテムナテに住るひとりの婦を見たりされば今之をめとりてわが妻とせよと三その父母之にいひけるは汝ゆきて割禮を受けざるペリシテ人のうちより妻を迎んとするは汝が兄弟等の女のうちもしくはわがすべての民のうちに婦女無が故なるかとしかるにサムソン父にむかひ彼婦わがこころに適へば之をわがために娶れと言り四その父母はこの事のヱホバより出しなるを知ざりきサムソンはペリシテ人を攻んと釁をうかがひしなりそは其のころペリシテ人イスラエルを轄め居たればなり五サムソン父母とともにテムナテに下りてテムナ

テの葡萄園にいたるに稚き獅子咆哮りて彼に向ひしが六ヱホバの靈彼にのぞみたれば山羊羔を裂がごとくに之を裂たりしが手には何の武器も持ざりきされどサムソンはその爲せしことを父にも母にも告ずしてありぬ七サムソンつひに下りて婦とうちかたらひしが婦その心にかなへり八かくて日を經て後サムソンかれを娶らんとて立かへりしが身を轉して彼の獅子の屍を見るに獅子の體に蜂の群と蜜とありければ九すなはちその蜜を手にとりて歩みつつ食ひ父母の許にいたりて之を與へけるに彼ら之を食へりされど獅子の體よりその蜜を取來れることをば彼らにかたらざりき一〇斯て其の父下りて婦のもとに至りしかばサムソン少年の習例にしたがひてそこに饗宴をまうけたるに一一サムソンを見て三十人の者をつれ來りて之が伴侶とならしむ一二サムソンかれらにいひけるは我汝らにひとつの隱語をかけん汝ら七日の筵宴の内に之を解てあきらかに之を我に告なば我汝らに裏衣三十と衣三十襲をあたふべし一三然ども之をわれに告得ずば汝ら我に裏衣三十と衣三十襲を與ふべしと彼等之にいひけるは汝の隱語をかけて我らに聽しめよ一四サムソン之にいひけるは食ふ者より食物出で強き者より甘き物出でたりと彼ら三日の中に之を解ことあたはざりしかば一五第七日にいたりてサムソンの妻にいひけるは汝の夫を説すすめて隱語を我らに明さしめよ然せずば火をもて汝と汝の父の家を焚ん汝らはわれらの物をとらんとてわれらを招けるなるか然るにあらずやと一六是においてサムソンの妻サムソンのまへに泣ていひけるは汝はわれを惡む而巳われを愛せざるなり汝わが民の子孫に隱語をかけて之をわれに説あかさずとサムソン之にいふ我これをわが父や母にも説あかさざればいかで汝に説あかすべけんやと一七婦七日の筵宴のあひだ彼のまへに泣き居りしが第七日に至りてサムソンつひに之を彼に説あかせり其は太く強たればなり婦すなはち隱語をおのが民の子孫に明せり一八是において第七日に及びて日の沒るまへに邑の人々サムソンにいひけるは何ものか蜜よりあまからん何ものか獅子より強からんとサムソン之にいひけるは汝らわが牝犢をもて耕さざりしならばわが隱語を解得ざるなりと一九茲にヱホバの靈サムソンに臨みしかばサムソン、アシケロンに下りてかしこの者三十人を殺しその物を奪ひ彼の隱語を解し者等にその衣服を與へはげしく怒りて其父の家にかへり上れり二〇サムソンの妻はサムソンの友となり居たるその伴侶の妻となりぬ

第一五章 一日を經てのち麥秋の時にサムソン山羊羔をたづさへて妻のもとを訪ていひけるは我室に入てわが妻に會んと然るに妻の父其の入ことをゆるさず二其父すなはちいひけるはわれまことに汝は彼の婦を嫌ひたりと意ひしがゆゑに彼を汝の伴侶たりし者に與へたり彼が妹は彼よりも善にあらずやねがはくは彼に代て之を汝のものとせよ三サムソン彼らにいひけるは今回はわれペリシテ人に害を加ふるとも彼らに對して罪なかるべしと

四サムソンすなはち往て山犬三百をとらへ火炬をとり尾と尾をあはせてその二つの尾の間に一つの火炬を結ひつけ五火炬に火をつけてペリシテ人のいまだ刈ざる麥のなかにこれを放ち入れその束ね積たるものといまだ刈ざるものを焚き橄欖の園にまで及ぼせり六ペリシテ人いひけるは是は誰の行爲なるやこたへて言ふテムナテ人の婿サムソンなりそは彼サムソンの妻をとりて其伴侶なりし者に與へたればなりとここにおいてペリシテ人上りきたりて彼の婦とその父とを火にて燒きうしなへり七サムソンかれらに言ふ汝ら斯おこなへば我汝らに仇をむくはでは止じと八すなはち脛に腿に彼らを撃て大いに之を殺せりかくてサムソンは下りてエタムの巖間に居る九ここにおいてペリシテ人上り來りてユダに陣を取りレヒに布き備へたれば一〇ユダの人々いひけるは汝ら何の故にわれらに攻めのぼりたるやとかれらこたへけるはサムソンをしばりて彼がわれらに爲しごとくかれに爲んとてのぼれるなりと一一是をもてユダの人三千人エタムの巖間にくだりてサムソンにいふ汝ペリシテ人はわれらを轄るものなるを知らざるや汝などてかわれらに斯る事をなせしやサムソンかれらにいひけるは我は彼らが我に爲しごとく彼らに爲しなりと一二かれらまたサムソンにいひけるは我らは汝をしばりてペリシテ人の手にわたさんとて下りきたれりサムソンかれらにいひけるは汝らの自われを害すまじきことを我に誓へ一三彼ら之にかたりていふいなわれらはただ汝を縛りいましめてペリシテ人の手にわたさんのみわれらは必らず汝を殺さざるべしとすなはち二條の新しき索をもてかれをいましめて巖より之を携かへれり一四サムソン、レヒにいたれるときペリシテ人聲を揚てかれに近づきしが時しもヱホバの靈彼にのぞみたればその腕にかかれる索は火に焚たる麻のごとくになりて手のいましめ解はなれたり一五サムソンすなはち驢馬のあたらしき腮骨ひとつを見出し手をのべて之を取り其をもて一千人を殺し一六而して言ふ驢馬の腮骨をもて山をきづき山をつくる驢馬の腮骨をもて我一千人を撃殺せりと一七かく言終りてその手より腮骨をうちすて其處をラマテレヒと名けたり一八時に彼渇をおぼゆること甚だしかりしかばヱホバによばはりていふ汝のしもべの手をもて汝この大なる拯をほどこしたまへるにわれ今渇きて死に割禮を受けざるものの手におちいらんとすと一九ここにおいて神レヒに在るくぼめる所を裂きたまひしかば水そこより流れいでしがサムソン之を飲たれば精神舊に返りてふたたび爽になりぬ故に其名をエンハッコレ(呼はれるものの泉)と呼ぶ是今日にいたるまでレヒに在り二〇サムソンはペリシテ人の治世の時に二十年イスラエルをさばけり

第一六章一サムソン、ガザに往きかしこにて一人の妓を見てそれの處に入しに二サムソンここに來れりとガザ人につぐるものありければすなはち之を取り圍みよもすがら邑の門に埋伏し詰朝におよび夜の明たる時に之をころすべしといひてよもすが

ら静まりかへりて居る三サムソン夜半までいね夜半にいたりて興き邑の門の扉とふたつの柱に手をかけて楗もろともに之をひきぬき肩に載てヘブロンの向ひなる山の巓に負のぼれり四こののちサムソン、ソレクの谷に居る名はデリラと言ふ婦人を愛す五ペリシテ人の群伯その婦のもとに上り來て之にいひけるは汝サムソンを説すすめてその大いなる力は何に在るかまたわれら如何にせば之に勝て之を縛りくるしむるを得べきかを見出せ然すればわれらおのおの銀千百枚づつをなんぢに與ふべし六ここにおいてデリラ、サムソンにいひけるは汝の大なる力は何にあるかまた如何せば汝を縛りて苦むることを得るや請ふ之をわれにつげよ七サムソン之にいひけるは人もし乾きしことなき七條の新しき縄をもてわれを縛るときはわれ弱くなりて別の人のごとくならんと八ここに於てペリシテ人の群伯乾きしことなき七條の新しき縄を婦にもち來りければ婦之を以てサムソンをしばりしが九かねて室のうちに人しのび居て己とともにありたれば斯してサムソンにむかひサムソンよペリシテ人汝に及ぶと言にサムソンすなはちその索を絶りあたかも麻絲の火にあひて斷るるがごとし斯其の力の原由知れざりき一〇デリラ、サムソンにいひけるは視よ汝われを欺きてわれに謊を告たり請ふ何をもてせば汝を縛ることをうるや今我に告よ一一彼之にいひけるはもし人用ひたることなき新しき索をもてわれを縛りいましめなばわれ弱くなりて別の人のごとくならんと一二是をもてデリラあたらしき索をとり其をもて彼を縛りしかして彼にいふサムソンよペリシテ人汝におよぶと時に室のうちに人しのび居たりしがサムソン絲の如くにその索を腕より絶おとせり一三デリラ、サムソンにいひけるに今までは汝われを欺きて我に謊をつげたるが何をもてせば汝をしばることをうるやわれに告よと彼之にいひけるは汝もしわが髪毛七繚を機の緯線とともに織ばすなはち可しと一四婦すなはち釘をもて之をとめおきて彼にいひけるはサムソンよペリシテ人汝におよぶとサムソンすなはちその寢をさまし織機の釘と緯線とを曳拔り一五婦ここにおいてサムソンにいひけるは汝の心われに居ざるに汝いかでわれを愛すといふや汝すでに三次われをあざむきて汝が大なる力の何にあるかをわれに明に告ずと一六日々にその言をもて之にせまりうながして彼の心を死るばかりに苦ませたれば一七彼つひにその心をことごとく打明して之にいひけるはわが頭にはいまだかつて剃刀を當しことあらずそはわれ母の胎を出るよりして神のナザレ人たればなりもしわれ髪をそりおとされなばわが力われをはなれわれは弱くなりて別の人のごとくならんと一八デリラ、サムソンがことごとく其のこころを明したるを見人をつかはしてペリシテ人の群伯を召ていひけるはサムソンことごとくその心をわれに明したれば今ひとたび上り來るべしとここにおいてペリシテ人の群伯かの銀を携へて婦のもとにいたる一九婦おのが膝のうへにサムソンをねむらせ人をよびてその頭髪七繚をきり

おとさしめ之を苦めはじめたるにその力すでにうせさりてあり二〇 婦ここにおいてサムソンよペリシテ人汝におよぶといひければ彼睡眠をさましていひけるはわれ毎のごとく出て身を振はさんと彼はヱホバのおのれをはなれたまひしを覺らざりき二一 ペリシテ人すなはち彼を執へ眼を抉りて之をガザにひき下り銅の鏈をもて之を繋げりかくてサムソンは囚獄のうちに磨を挽居たりしが二二 その髮の毛剃りおとされてのち復長はじめたり二三 茲にペリシテ人の群伯共にあつまりてその神ダゴンに大なる祭物をささげて祝をなさんとしすなはち言ふわれらの神はわれらの敵サムソンをわれらの手に付したりと二四 民サムソンを見ておのれの神をほめたたへて言ふわれらの神はわれらの敵たる者われらの地を荒せしものわれらを數多殺せしものをわれらの手に付したりと二五 その心に喜びていひけるはサムソンを召てわれらのために戲技をなさしめよとて囚獄よりサムソンを召いだせしかばサムソン之がために戲技をなせり彼等サムソンを柱の間に立しめしに二六 サムソンおのが手をひきをる少者にいひけるはわれをはなして此家の倚て立ところの柱をさぐりて之に倚しめよと二七 その家には男 女充ちペリシテ人の群伯もまたみな其處に居る又屋蓋のうへには三千ばかりの男女をりてサムソンの戲技をなすを觀てありき二八 時にサムソン、ヱホバに呼はりいひけるはああ主ヱホバよねがはくは我を記念えたまへ嗚呼神よ願くは唯今一度われを強くしてわがふたつの眼のひとつのためにだにもペリシテ人に仇をむくいしめたまへと二九 サムソンすなはちその家の倚てたつところの兩箇の中柱のひとつを右の手ひとつを左の手にかかへて身をこれによせたりしが三〇 サムソン我はペリシテ人とともに死なんといひて力をきはめて身をかがめたれば家はそのなかに居る群伯とすべての民のうへに倒れたりかくサムソンが死るときに殺せしものは生けるときに殺せし者よりもおほかりき三一 こののちサムソンの兄弟およびその父の家族ことごとく下りて之を取り携へのぼりてゾラとエシタオルのあひだなる其の父マノアの墓にはうむれりサムソンがイスラエルをさばきしは二十年なりき

第一七章 一 ここにエフライムの山の人にて名をミカとよべるものありしが二 その母に言けるは汝かつてその千百枚の銀を取れしことを吾が聞ところにて詛ひて語りしが視よその銀はわが手に在り我之を取るなりと母すなはちわが子よねがはくはヱホバ汝に祝福をたまへと言り三 彼千百枚の銀をその母にかへせしかば母いひけらくわれわが子のためにひとつの像を雕みひとつの像を鑄んためにその銀をわが手よりヱホバに納む然ばわれ今之を汝にかへすべしと四 ミカその銀を母にかへせしかば母その銀二百枚をとりて之を鑄物師にあたへてひとつの像をきざませひとつの像を鑄させたり其像はミカの家に在り五 このミカといふ人神の殿をもちをりエポデおよびテラピムを造りひとりの子を立ておのが祭司となせり六 此ときにはイスラエルに王なかりけ

れば人々おのれの目に是とみゆることをおこなへり七ここにひとりの少者ありてベテレヘムユダに於てユダの族の中にをる彼はレビ人にしてかしこに寓居るなり八この人居べきところをたづねてその邑ベテレヘムユダを去しが遂に旅してエフライムの山にゆきてミカの家にいたりしに九ミカ之にいひけるは汝いづこよ來れるやと彼之にいふ我はベテレヘムユダのレビ人なるが居べきところをたづねに往くものなり一〇ミカ之に言けるは汝われと偕に居りわがために父とも祭司ともなれよ然ばわれ年に銀十枚および衣服食物を汝にあたへんとレビ人すなはち入しが一一レビ人つひにその人と偕に居んことを肯ふ是においてその少者はかれの子の一人のごとくなりぬ一二ミカ、レビ人なるこの少者をたてて祭司となしたればすなはちミカの家に居る一三ミカここにおいて言ふ今われ知るヱホバわれに恩惠をたまはんそはこのレビ人われの祭司となればなり

第一八章一當時イスラエルには王なかりしがダン人の支派其頃住むべき地を求めたり是は彼らイスラエルの支派の中にありて其日まで未だ産業の地を得ざりしが故なり二ダンの子孫すなはちゾラとエシタオルよりして自己の族の勇者五人を遣はしその境を出て土地を窺ひ探らしむ即ち彼等に言ふ往て土地を探れと彼等エフライムの山にいたりミカの家につきて其處に宿れり三かれらミカの家の傍にある時レビ人なる少者の聲を聞認たれば身をめぐらして其處にいりて之に言ふ誰が汝を此に携きたりしや汝此處にて何をなすや此に何の用あるや四其人かれらに言けるはミカ斯々我を待ひ我を雇ひて我その祭司となれりと五彼等これに言ふ請ふ神に問ひ我等が往ところの途に利達あるや否を我等にしらしめよ六その祭司かれらに言けるは安んじて往よ汝らが往ところの途はヱホバの前にあるなりと七是に於て五人の者往てライシに至り其處に住る人民を視るに顧慮なく住ひをり其安穩にして安固なることシドン人のごとし此國には政權を握りて人を煩はす者絶てあらず其シドン人と隔たること遠くまた他の人民と交ることなし八斯て彼等ゾラとエシタオルに返りてその兄弟等にいたるに兄弟等如何なりしやと彼等に問ければ九答て言ふ起よ彼等の所に攻のぼらん我等その地を見るに甚だ善し汝等は安んじをるなり進みいたりてその地を取ることを怠るなかれ一〇汝等往ば安固なる人民の所に至らんその地は堅横ともに廣し神これを汝らの手に與へたまふなり此處には世にある物一箇も缺ることあらず一一是に於てダン人の族の者六百人武器を帶てゾラとエシタオルより出ゆき一二上りてユダのキリヤテヤリムに陣を張り是をもてその處をマハネダンと名けしがその名今日に存る是はキリヤテヤリムの後にあり一三彼等其處よりエフライム山に進みミカの家に至りけるに一四夫のライシの國を窺ひに往たりし五人の者その兄弟等に告て言けるは是等の家にはエポデ、テラピムおよび雕める像と鑄たる像あるを汝等知や然ば汝ら今その爲べきことを考へよと一五乃

ち其方に身をめぐらして夫のレビ人の少者の家なるミカの家に至りてその安否を問けるが二六武器を帶たる六百人のダンの子孫は門の入口に立り一七夫の土地を窺ひに往たりし五人の者上りて其處にいりその雕める像とエポデとテラピムおよび鑄たる像を取けるが祭司は武器を帶たる六百人の者とともに門の入口に立ゐたり一八此人々ミカの家にいりて其雕める像とエポデとテラピムと鑄たる像とを取しかば祭司かれらに汝ら何をなすやと言ふに一九彼等これに言けるは汝默せよ汝手を口にあてて我らとともに來り我らの父とも祭司ともなれよかし一人の家の祭司たるとイスラエルの一の支派一の族の祭司たるとは何か好や二〇祭司すなはち心に悅びてエポデとテラピムと雕める像とを取て民の中に入る二一斯てかれら身をめぐらしその子女と家畜と財寶を前にたてて進みしが二二ミカの家を遙かに離れし時ミカの家に近きところの家の人々呼はり集てダンの子孫に追ひつき二三ダンの子孫を呼たれば彼等回顧てミカに言ふ汝何事ありて集りしや二四かれら言けるは汝らはわが造れる神々および祭司を奪ひさりたれば我尚何かあらん然るに汝等何ぞ我にむかひて何事ぞやと言や二五ダンの子孫かれに言けるは汝の聲を我らの中に聞えしむるなかれ恐くは心の荒き人々汝に撃かかるありて汝おのれの生命と家族の生命とを失ふにいたらんと二六而してダンの子孫進みゆきけるがミカは彼らが己よりも強きを見て身をめぐらして家に返れり二七彼等ミカが造りし者とその有し祭司をとりてライシにおもむき平穩にして安樂なる民の所にいたり刃をもて之を撃ち火をもてその邑を燬たりしが二八其シドンと隔たること遠きが上に他の人民と交際ざりしによりて之を救ふ者なかりきその邑はベテレホブの邊の谷にあり彼ら邑を建なほして其處に住み二九イスラエルの生たるその先祖ダンの名にしたがひて其邑の名をダンと名けたりその邑の名は本はライシなりき三〇斯てダンの子孫その雕める像を安置りモーセの子なるゲルシヨムの子ヨナタンとその子孫ダンの支派の祭司となりて國の奪はるる時にまでおよべり三一神の家のシロにありし間恒に彼等はミカが造りしかの雕める像を安置おきぬ

第一九章 一其頃イスラエルに王なかりし時にあたりてエフライムの山の奧に一人のレビ人寄寓をりベテレヘムユダより一人の婦人をとりて妾となしたるに二その妾彼に背きて姦淫を爲し去てベテレヘムユダなるその父の家にかへり其所に四月といふ日をおくれり三是に於てその夫彼をなだめて携かへらんとてその僕と二頭の驢馬をしたがへ起てかれの後をしたひゆきければその父の家に之を導きいたりしに女の父これを見て之に遇ことを悅こべり四而してその女の父なる外舅彼をひきとめたれば則ち三日これと共に居り皆食飮して其所に宿りしが五四日におよびて朝早く起あがり彼たちて去んとしければ女の父その婿に言ふ少許の食物をもて汝の心を強くして然る後に去れよと六二人すなはち坐りて共に食飮しけるが女の父その人にいひけるは請ふ

幸に今一夜を明し汝の心を樂ましめよと七其人起て去んとしけるに外舅これを強たれば遂に復其所に宿り八五日におよびて朝はやく起いでて去んとしたるに女の父これに言けるは請ふ汝の心を強くせよと是をもて日の昃るまでとどまりて共に食をなしけるが九其人つひに妾および僕とともに去んとて起あがりければ女の父彼に言ふ視よ今は日暮なんとす請ふ今一夜を明されよ視よ日昃たり汝此にやどりて汝の心をたのしませ明日蚤く起て出たち汝の家にいたれよと一〇然るに其人止宿ることを肯はずして起て去りエブスの對面に至れり是はエルサレムなり鞍おける二の驢馬彼とともにあり妾も彼とともなりき一一彼らエブスの近傍にをる時日はや沒んとしければ僕その主人にいひけるは請ふ來れ我等身をめぐらしてエブス人の此邑にいりて其所に宿らんと一二その主人これに言けるは我等は彼所に身をめぐらしてイスラエルの子孫の邑ならざる外國の人の邑にいるべからずギベアに進みゆかんと一三すなはちその僕にいひけるは來れ我らギベアかラマか是等の處の一に就て止宿んと一四皆すすみ往きけるがベニヤミンのギベアの近邊にて日暮たれば一五ギベアにゆきて宿らんとて其所に身をめぐらし入て邑の衢に坐しけるに誰も彼を家に接て宿らしむる者なかりき一六時に一人の老人日暮に田野の動作をやめて歸りきたる此人はエフライム山の者にしてギベアに寄寓れるなり但し此處の人はベニヤミン人なり一七彼目をあげて旅人の邑の衢にをるを見たり老人すなはちいひけるは汝は何所にゆくなるや何所より來れるやと一八その人これにいひけるは我らはベテレヘムユダよりエフライム山の奥におもむく者なり我は彼所の者にて既にベテレヘムユダにゆき今ヱホバの室に詣らんとするなるが誰もわれを家に接ものあらず一九然ど驢馬の藁も飼芻もあり又我と汝の婢および僕等とともなる少者の用ふべき食物も酒も在て何も事缺るところなし二〇老人いひけるは願くは汝安かれ汝が需むる者は我そなへん唯衢に宿るなかれと二一かれをその家に携れ驢馬に飼ふ彼らすなはち足をあらひて食飲せしが二二その心を樂ませをる時にあたりて邑の人々の邪なる者その家をとりかこみ戸を打たたきて家の主人なる老人に言ふ汝の家にきたれる人をひき出せ我らこれを犯さんと二三是に於て家の主人なる人かれらの所にいでゆきてこれに言けるは否わが兄弟よ惡をなす勿れ此人すでにわが家にいりたればこの愚なる事をなすなかれ二四我が處女なる女と此人の妾とあるにより我これを今つれいだすべければ汝らかれらを辱しめ汝等の好むところをこれに爲せ唯この人には斯る愚なる事を爲すなかれと二五然るにその人々これを聽いれざるにより其人その妾をとりてこれを彼らの所にいだしやりければすなはちこれを犯して朝にいたるまで終夜これを辱しめ日のいづる頃にいたりて釋てり二六是をもて婦黎明にきたりてその夫のをる彼人の家の門に仆れ夜のあくるまで其處に臥をる二七その主朝におよびておきいで家の戸をひらきて出去んと

せしがその妾の婦の家の門にたふれをりて手を閾の上におくを見ければ**二八**これにむかひ起よ我ら出往んと言たれども何の答もあらざりき是によりてその人これを驢馬にのせたちて己の所におもむきしが**二九**家にいたるにおよびて刀をとり其妾を執へて骨ぐるみこれを十二分にたちわりて之をイスラエルの四方の境におくりければ**三〇**之を見る者皆いふイスラエルの子孫がエジプトの地より出のぼりし日より今日にいたるまで斯のごとき事は行はれしことなく見えしことなし思をめぐらし相議りて言ふことをせよ

第二〇章 **一**是に於てイスラエルの子孫ダンよりベエルシバにいたりギレアデの地にいたるまで皆出きたり其會衆一人のごとくにしてミヅパに於てヱホバの前に集り**二**衆民の長たる者すなはちイスラエルの諸の支派の長等みづから神の民の集會に出づ劍をぬくところの歩兵四十萬人ありき**三**ベニヤミンの子孫はイスラエルの子孫がミヅパにのぼれることを聞り斯てイスラエルの子孫此惡事の樣を語れと言ければ**四**彼殺されし婦の夫なるレビの人こたへていふ我わが妾とともにベニヤミンのギベアに宿らんとて往たるに**五**ギベアの人起りたちて我をせめ夜の間に我がをる家をとりかこみて我を殺さんと企て遂にわが妾を辱しめてこれを死しめたれば**六**我わが妾をとらへてこれをたちわり是をイスラエルの產業なる全地に遣れり是は彼らイスラエルにおいて淫事をなし愚なる事をなしたればなり**七**汝等は皆イスラエルの子孫なり今汝らの意見と思考をのべよ**八**民みな一人のごとくに起ていひけるは我らは誰もおのれの天幕にゆかずまた誰もおのれの家におもむかじ**九**我らがギベアになさんところの事は是なりすなはち鬮にしたがひて之を攻ん**一〇**我らイスラエルの諸の支派の中に於て百人より十人千人より百人萬人より千人を取りて民の糧食を執せ之をしてベニヤミンのギベアにいたり彼らがイスラエルにおこなひたるその愚なる事にしたがひて事をなさしむべしと**一一**斯イスラエルの人々皆あつまりて此邑を攻んとせしが其相結べること一人のごとくなりき**一二**イスラエルの諸の支派遍く人をベニヤミンの支派の中に遣して言しめけるは汝らの中に此惡事のおこなはれしは何事ぞや**一三**然ばギベアにをるかの邪なる人々をわたせ我らこれを誅して惡をイスラエルに絶べしと然るにベニヤミンの子孫はその兄弟なるイスラエルの子孫の言を聽いれざりき**一四**却てベニヤミンの子孫は邑々よりギベアにあつまりて出てイスラエルの子孫と戰はんとす**一五**その時邑々より出たるベニヤミンの子孫を數ふるに劍をぬく所の人二萬六千あり外にまたギベアの居民ありて之をかぞふるに精兵七百人ありき**一六**この諸の民の中に左手利の精兵七百人あり皆能く投石器をもて石を投るに毫末もたがふことなし**一七**イスラエルの人を數ふるにベニヤミンを除きて劍をぬくところの者四十萬人ありき是みな軍人なり**一八**爰にイスラエルの子孫起あがりてベテルにのぼり神に問て我等の中孰か

最初にのぼりてベニヤミンの子孫と戰ふべきやと言ふにヱホバ、ユダ最初にと言たまふ一九 イスラエルの子孫すなはち朝おきてギベアにむかひて陣をとりけるが二〇 イスラエルの人々ベニヤミンと戰はんとて出でゆきイスラエルの人々行伍をたててギベアにて彼らと戰はんとしければ二一 ベニヤミンの子孫ギベアより進みいで其日イスラエル人二萬二千を地に撃仆せり二二 然るにイスラエルの民の人々みづから奮ひその初の日に行伍をたてし所にまた行伍をたてたり二三 而してイスラエルの子孫上りゆきてヱホバの前に夕暮まで哭きヱホバに問て言ふ我復進みよりて吾兄弟なるベニヤミンの子孫とたたかふべきやとヱホバ彼に攻のぼれと言たまへり二四 是に於てイスラエルの子孫次の日またベニヤミンの子孫の所に攻よするに二五 ベニヤミンまた次の日ギベアより進みて之にいであい再びイスラエルの子孫一萬八千人を地に撃仆せり是みな劍をぬくところの者なりき二六 斯在しかばイスラエルの子孫と民みな上りてベテルにいたりて哭き其處にてヱホバの前に坐りその日の夕暮まで食を斷ち燔祭と酬恩祭をヱホバの前に獻げ二七 而してイスラエルの子孫ヱホバにとへり（その頃は神の契約の櫃彼處にありて二八 アロンの子エレアザルの子なるピネハス當時これに事へたり） 即ち言けるは我またも出てわが兄弟なるベニヤミンの子孫とたたかふべきや或は息べきやヱホバ言たまふ上れよ明日はわれ汝の手にかれらを付すべしと二九 イスラエル是に於てギベアの周圍に伏兵を置き三〇 而してイスラエルの子孫三日目にまたベニヤミンの子孫の所に攻のぼり前のごとくにギベアにむかひて行伍をたてたれば三一 ベニヤミンの子孫民に出あひしが遂に邑より誘出されたり彼等始は民を撃ち大路にて前のごとくイスラエルの人三十人許を殺せりその大路は一筋はベテルにいたり一筋は野のギベアに至る三二 ベニヤミンの子孫すなはち言ふ彼らは初のごとく我らに撃破らると然るにイスラエルの人は云ふ我等逃て彼らを邑より大路に誘き出さんと三三 イスラエルの人々みなその所を起て去りバアルタマルに行伍をたてたり而して伏兵その處より即ちギベアの野原より起れり三四 イスラエルの全軍の中より選拔たる兵一萬來りてギベアを襲ひ其戰鬪はげしかりしがベニヤミン人は禍害の己にのぞむを知ざりき三五 ヱホバ、イスラエルのまへにベニヤミンを撃敗りたまひしかばイスラエルの子孫その日ベニヤミン人二萬五千一百人を殺せり是みな劍をぬくところの者なり三六 ベニヤミンの子孫すなはち己の撃敗らるるを見たり偖イスラエルの人々そのギベアにむかひて設たる所の伏兵を恃てベニヤミン人を避て退きけるが三七 伏兵急ぎてギベアに突いり伏兵進みて刃をもて邑を盡く撃り三八 イスラエルの人々とその伏兵との間に定めたる合圖は邑より大なる黑烟をあげんとの事なりき三九 イスラエルの人々戰陣より引き退ぞくベニヤミン初が程はイスラエルの人々を撃ちて三千人許を殺し乃ち言ふ彼等はまことに最初の戰のごとく我等に撃

やぶらると四〇然るに火焔烟の柱なして邑より上りはじめしかばベニヤミン人後を見かへりしに邑は皆烟となりて空にのぼる四一時にイスラエルの人々ふりかへりしかばベニヤミンの人々畜害のおのれに迫るを見て狼狽へ四二イスラエルの人々の前より身をめぐらして野の途におもむきけるが戰鬪これに追せまりて遂にその邑々よりいでたる者どもその中に戰死す四三イスラエルの人すなはちベニヤミン人をとりまきて之を追うち容易くこれを踏たふして東の方ギベアの對面にまでおよべり四四ベニヤミンの仆るる者一萬八千人是みな勇士なり四五茲に彼等身をめぐらして野の方ににげリンモンの磐にいたれりイスラエルの人大路にて彼等五千人を伐とり尚もこれを追うちてギドムにいたりその二千人を殺せり四六是をもて其日ベニヤミンの仆れし者は劍をぬくところの人あはせて二萬五千なりき是みな勇士なり四七但六百人の者身をめぐらして野の方にのがれリンモンの磐にいたりて四月があひだリンモンの磐にをる四八是に於てイスラエルの人々また身をかへしてベニヤミンの子孫をせめ刃をもて邑の人より畜にいたるまで凡て目にあたる者を撃ち亦その至るところの邑々に火をかけたり

第二一章

一 イスラエルの人々曾てミヅパにて誓ひ曰けるは我等の中一人もその女をベニヤミンの妻にあたふる者あるべからずと二茲に民ベテルに至り彼處にて夕暮まで神の前に坐り聲を放ちて痛く哭き三言けるはイスラエルの神ヱホバよなんぞイスラエルに斯ること起り今日イスラエルに一の支派の缺るにいたりしやと四而して翌日民蚤に起て其處に壇を築き燔祭と酬恩祭をささげたり五茲にイスラエルの子孫いひけるはイスラエルの支派の中に誰か會衆とともに上りてヱホバにいたらざる者あらんと其は彼らミヅパに來りてヱホバにいたらざる者の事につきて大なる誓をたてて其人をばかならず死しむべしと言たればなり六イスラエルの子孫すなはち其兄弟ベニヤミンの事を憫然におもひて言ふ今日イスラエルに一の支派絶ゆ七我等ヱホバをさして我らの女をかれらの妻にあたへじと誓ひたれば彼の遺る者等に妻をめとらしめんには如何にすべきや八又言ふイスラエルの支派の中孰の者かミヅパにのぼりてヱホバにいたらざると而して視るにヤベシギレアデよりは一人も陣營にきたり集會に臨める者なし九即ち民をかぞふるにヤベシギレアデの居民は一人も其處にをらざりき一〇是に於て會衆勇士一萬二千を彼處に遣し之に命じて言ふ往て刃をもてヤベシギレアデの居民を撃て婦女兒女をも餘すなかれ一一汝ら斯おこなふべし即ち汝等男人および男と寢たる婦人をば悉く滅し盡すべしと一二彼等ヤベシギレアデの居民の中にて四百人の若き處女を獲たり是は未だ男と寢て男しりしことあらざる者なり彼らすなはち之をシロの陣營に曳きたる是はカナンの地にあり一三斯て全會衆人をやりてリンモンの磐にをるベニヤミン人と語はしめ和睦をこれに宣しめたれば一四ベニヤミンすなはち其時に歸り

きたれり是において彼らヤベシギレアデの婦人の中より生しおきたるところの女子を之にあたへけるが尚足ざりき一五ヱホバ、イスラエルの支派の中に缺を生ぜしめたまひしに因て民ベニヤミンの事を憫然におもへり一六會衆の長老等いひけるはベニヤミンの婦女絶たれば彼の遺れる者等に妻をめとらせんには如何すべきや一七又言けるはベニヤミンの中の逃れたる者等に產業あらしめん然らばイスラエルに一の支派の消ることなかるべし一八然ながら我等は我等の女子を彼らの妻にあたふべからず其はイスラエルの子孫誓をなしベニヤミンに妻を與ふる者は詛はれんと言たればなりと一九而して言ふ歳々シロにヱホバの祭ありと其處はベテルの北にあたりてベテルよりシケムにのぼるところの大路の東レバナの南にあり二〇是に於てかれらベニヤミンの子孫に命じて言ふ汝らゆきて葡萄園に伏して窺ひ二一若シロの女等舞をどらんと出きたらば葡萄園より出でシロの女の中より各人妻を執てベニヤミンの地に往け二二若その父あるひは兄弟來りて我らに愬へなば我らこれに言ふべし請ふ幸に彼らを我らに取せよ我等戰爭の時に皆ことごとくその妻をとりしにあらざればなり汝等今かれらに與へしにあらざれば汝等は罪なしと二三ベニヤミンの子孫すなはちかく行なひその踊れる者等を執へてその中より己の數にしたがひて妻を取り往てその地にかへり邑々を建なほして其處に住り二四斯てイスラエルの子孫その時に其處を去て各人その支派に往きその族にいたれり即ち其處より出て各人その地にいたりぬ二五當時はイスラエルに王なかりしかば各人その目に善と見るところを爲り

ルツ記

第一章 一 士師の世をさむる時にあたりて國に饑饉ありければ一箇の人その妻と二人の男子をひきつれてベテレヘムユダを去りモアブの地にゆきて寄寓る二 その人の名はエリメレクその妻の名はナオミその二人の男子の名はマロンおよびキリオンといふベテレヘムユダのエフラテ人なり 彼等モアブの地にいたりて其處にをりしが三 ナオミの夫エリメレク死てナオミとその二人の男子のこさる四 彼等おのおのモアブの婦人を妻にめとるその一人の名はオルパといひ一人の名はルツといふ 彼處にすむこと十年許にして五 マロンとキリオンの二人もまた死り斯ナオミは二人の男子と夫に後れしが六 モアブの地にて彼ヱホバその民を眷みて食物を之にたまふと聞ければその媳とともに起ちてモアブの地より歸らんとし七 その在ところを出たりその二人の媳これとともにあり 彼等ユダの地にかへらんと途にすすむ八 爰にナオミその二人の媳にいひけるは汝らはゆきておのおの母の家にかへれ 汝らがかの死たる者と我とを善く待ひしごとくにねがはくはヱホバまたなんぢらを善くあつかひたまへ九 ねがはくはヱホバなんぢらをして各々その夫の家にて安身處をえせしめたまへと 乃ちかれらに接吻しければ彼等聲をあげて哭き一〇 之にいひけるは我ら汝とともに汝の民にかへらんと一一 ナオミいひけるは女子よ返れ 汝らなんぞ我と共にゆくべけんや 汝らの夫となるべき子猶わが胎にあらんや一二 女子よかへりゆけ 我は老たれば夫をもつをえざるなり 假設われ指望ありといふとも今夜夫を有つとも而してまた子を生むとも一三 汝等これがために其子の生長までまちをるべけんや 之がために夫をもたずしてひきこもりをるべけんや 女子よ然すべきにあらず 我はヱホバの手ののぞみてわれを攻しことを汝らのために痛くうれふるなり一四 彼等また聲をあげて哭く 而してオルパはその姑に接吻せしがルツは之を離れず一五 是によりてナオミまたいひけるは視よ汝の妯娌はその民とその神にかへり往く 汝も妯娌にしたがひてかへるべし一六 ルツいひけるは汝を棄て汝をはなれて歸ることを我に催すなかれ 我は汝のゆくところに往き汝の宿るところにやどらん 汝の民はわが民汝の神はわが神なり一七 汝の死るところに我は死て其處に葬らるべし 若死別にあらずして我なんぢとわかれなばヱホバわれにかくなし又かさねてかくなしたまへ一八 彼媳が固く心をさだめて己とともに來らんとするを見しかば之に言ふことを止たり一九 かくて彼等二人ゆきて終にベテレヘムにいたりしがベテレヘムにいたれる時邑こぞりて之がためにさわぎたち婦女等是はナオミなるやといふ二〇 ナオミかれらにいひけるは我をナオミ（樂し）と呼なかれ マラ（苦し）とよぶべし 全能者痛く我を苦め給ひたればなり二一 我盈足て出たるにヱホバ我をして空くなりて歸らしめたまふ ヱホバ我を攻め全能者われをなやましたまふに

汝等なんぞ我をナオミと呼や二二 斯ナオミそのモアブの地より歸れる媳モアブの女ルツとともに歸り來れり 即ち彼ら大麥刈の初にベテレヘムにいたる

第二章一 ナオミにその夫の知己あり 即ちエリメレクの族にして大なる力の人なり その名をボアズといふ二 茲にモアブの女ルツ、ナオミにいひけるは請ふわれをして田にゆかしめよ 我何人かの目のまへに恩をうることあらばその人の後にしたがひて穗を拾はんと ナオミ彼に女子よ往べしといひければ三 乃ち往き遂に至りて刈者の後にしたがひ田にて穗を拾ふ 彼意はずもエリメレクの族なるボアズの田の中にいたれり四 時にボアズ、ベテレヘムより來りその刈者等に言ふ ねがはくはヱホバ汝等とともに在せと 彼等すなはち答てねがはくはヱホバ汝を祝たまへといふ五 ボアズその刈者を督る僕にいひけるは此は誰の女なるや六 刈者を督る人こたへて言ふ是はモアブの女にしてモアブの地よりナオミとともに還りし者なるが七 いふ請ふ我をして刈者の後にしたがひて禾束の間に穗をひろひあつめしめよと 而して來りて朝より今にいたるまで此にあり 其家にやすみし間は暫時のみ八 ボアズ、ルツにいひけるは女子よ聽け 他の田に穗をひろひにゆくなかれ 又此よりいづるなかれわが婢等に離ずして此にをるべし九 人々の刈ところの田に目をとめてその後にしたがひゆけ 我少者等に汝にさはるなかれと命ぜしにあらずや 汝渇く時は器の所にゆきて少者の汲るを飲めと一〇 彼すなはち伏て地に拜し之にいひけるは我如何して汝の目の前に恩惠を得たるか なんぢ異邦人なる我を顧みると一一 ボアズこたへて彼にいひけるは汝が夫の死たるより巳來 姑に盡したる事汝がその父母および生れたる國を離れて見ず識ずの民に來りし事皆われに聞えたり一二 ねがはくはヱホバ汝の行爲に報いたまへ ねがはくはイスラエルの神ヱホバ 即ち汝がその翼の下に身を寄んとて來れる者汝に十分の報施をたまはんことを一三 彼いひけるは主よ我をして汝の目の前に恩をえせしめたまへ 我は汝の仕女の一人にも及ざるに汝かく我を慰め斯仕女に懇切に語りたまふ一四 ボアズかれにいひけるは食事の時は此にきたりてこのパンを食ひ且汝の食物をこの醋に濡せよと 彼すなはち刈者の傍に坐しければボアズ烘麥をかれに與ふ 彼くらひて飽き其餘を懷む一五 かくて彼また穗をひろはんとて起あがりければボアズその少者に命じていふ 彼をして禾束の間にても穗をひろはしめよ かれを羞しむるなかれ一六 且手の穗を故に彼がために抽落しおきて彼に拾はしめよ 叱るなかれ一七 彼かく薄暮まで田に穗をひろひてその拾ひし者を撲しに大麥一斗許ありき一八 彼すなはち之を携へて邑にいり姑にその拾ひし者を看せ且その飽たる後に懷めおきたる者を取出して之にあたふ一九 姑かれにいひけるは汝今日何處にて穗をひろひしや 何の處にて工作しや 願くは汝を眷顧たる者に福祉あれ 彼すなはち姑にその誰の所に工作しかを告ていふ 今日われに工作をなさしめた

る人の名はボアズといふ二〇ナオミ媳にいひけるは願はヱホバの恩かれに至れ 彼は生る者と死る者とを棄ずして恩をほどこす ナオミまた彼にいひけるは其人は我等に縁ある者にして我等の贖業者の一人なり二一 モアブの女ルツいひけるは彼また我にかたりて汝わが穫刈の盡く終るまでわが少者の傍をはなるるなかれといへりと二二 ナオミその媳ルツにいひけるは女子よ汝かれの婢等とともに出るは善し 然れば他の田にて人に見らるることを免かれん二三 是によりて彼ボアズの婢等の傍を離れずして穗をひろひ大麥刈と小麥刈の終にまでおよぶ 彼その姑とともにをる

第三章一 爰に姑ナオミ彼にいひけるは女子よ我汝の安身所を求めて汝を幸ならしむべきにあらずや二 夫汝が偕にありし婢等を有る彼ボアズは我等の知己なるにあらずや 視よ彼は今夜禾場にて大麥を簸る三 然ば汝の身を洗て膏をぬり衣服をまとひて禾場に下り汝をその人にしらせずしてその食飲を終るを待て四 而て彼が臥す時に汝その臥す所を見とめおき入てその脚を掀開りて其處に臥せよ 彼なんぢの爲べきことを汝につげんと五 ルツ 姑にいひけるは汝が我に言ところは我皆なすべしと六 すなはち禾場に下り凡てその姑の命ぜしごとくなせり七 偖ボアズは食飲をなしてその心をたのしませ往て麥を積る所の傍に臥す 是に於て彼潛にゆきその足を掀開て其處に臥す八 夜半におよびて其人畏懼をおこし起かへりて見るに一人の婦その足の方に臥ゐたれば九 汝は誰なるやといふに婦こたへて我は汝の婢ルツなり 汝の裾をもて婢を覆ひたまへ 汝は贖業者なればなり一〇 ボアズいひけるは女子よねがはくはヱホバの恩典なんぢにいたれ 汝の後の誠實は前のよりも勝る 其は汝 貧きと富とを論ず少き人に從ふことをせざればなり一一 されば女子よ懼るなかれ 汝が言ふところの事は皆われ汝のためになすべし 其はわが邑の人皆なんぢの賢き女なるをしればなり一二 我はまことに贖業者なりと雖も我よりも近き贖業者あり一三 今夜は此に住宿れ 朝におよびて彼もし汝のために贖ふならば善し彼に贖はしめよ 然ど彼もし汝のために贖ふことを好まずばヱホバは活く 我汝のために贖はん 朝まで此に臥せよと一四 ルツ朝までその足の方に臥て誰彼の辨がたき頃に起あがる ボアズ此女の禾場に來りしことを人にしらしむべからずといへり一五 而していひけるは汝の著る袿衣を將きたりて其を開げよと 即ち開げければ大麥六升を量りて之に負せたり 斯して彼邑にいたりぬ一六 爰にルツその姑の許に至るに姑いふ 女子よ如何ありしやと 彼すなはち其人の己になしたる事をことごとく之につげて一七 而していひけるは彼空手にて汝の姑の許に往くなかれといひて此六升の大麥を我にあたへたり一八 姑いひけるは女子よ坐して待ち事の如何になりゆくかを見よ 彼人今日その事を爲終ずば安んぜざるべければなり

第四章一 爰にボアズ門の所にのぼり往て其處に坐しけるに前に

ボアズの言たる贖業者過りければ之に言ふ 某よ來りて此に坐せよと 即ち來りて坐す二 ボアズまた邑の長老十人を招き汝等此に坐せよといひければ則ち坐す三 時に彼その贖業人にいひけるはモアブの地より還りしナオミ我等の兄弟エリメレクの地を賣る四 我汝につげしらせて此に坐する人々の前わが民の長老の前にて之を買へと言んと想へり 汝もし之を贖はんと思はば贖ふべし 然どもし之を贖はずば吾に告てしらしめよ 汝の外に贖ふ者なければなり 我はなんぢの次なりと彼我これを贖はんといひければ五 ボアズいふ 汝ナオミの手よりその地を買ふ日には死る者の妻なりしモアブの女ルツをも買て死る者の名をその產業に存すべきなり六 贖業人いひけるは我はみづから贖ふあたはず 恐くはわが產業を壞はん 汝みづから我にかはりてあがなへ 我あがなふことあたはざればなりと七 昔イスラエルにて物を贖ひ或は交易んとする事につきて萬事を定めたる慣例は斯のごとし 即ち此人鞋を脱て彼人にわたせり 是イスラエルの中の證なりき八 是によりてその贖業人ボアズにむかひ汝みづから買ふべしといひて其鞋を脱たり九 ボアズ長老および諸の民にいひけるは汝等今日見證をなす 我エリメレクの凡の所有およびキリオンとマロンの凡の所有をナオミの手より買たり一〇 我またマロンの妻なりしモアブの女ルツを買て妻となし彼死る者の名をその產業に存すべし 是かの死る者の名を其兄弟の中とその處の門に絶ざらしめんためなり 汝等今日證をなす一一 門にをる人々および長老等いひけるはわれら證をなす 願くはヱホバ汝の家にいるところの婦人をして彼イスラエルの家を造りなしたるラケルとレアの二人のごとくならしめたまはんことを 願くは汝エフラタにて能を得ベテレヘムにて名をあげよ一二 ねがはくはヱホバが此若き婦よりして汝にたまはんところの子に由て汝の家かのタマルがユダに生たるペレズの家のごとくなるにいたれ一三 斯てボアズ、ルツを娶りて妻となし彼の所にいりければヱホバ彼を孕ましめたまひて彼男子を生り一四 婦女等ナオミにいひけるはヱホバは讚べきかな 汝を遺ずして今日汝に贖業人あらしめたまふ その名イスラエルに揚れ一五 彼は汝の心をなぐさむる者 汝の老を養ふ者とならん 汝を愛する汝の媳即ち七人の子よりも汝に善もの之をうみたり一六 ナオミその子をとりて之を懷に置き之が養育者となる一七 その隣人なる婦女等これに名をつけて云ふ ナオミに男子うまれたりと その名をオベデと稱り 彼はダビデの父なるヱサイの父なり一八 偖ペレヅの系圖は左のごとし ペレヅ、ヘヅロンを生み一九 ヘヅロン、ラムを生み ラム、アミナダブを生み二〇 アミナダブ、ナシヨンを生みナシヨン、サルモンを生み二一 サルモン、ボアズを生み ボアズ、オベデを生み二二 オベデ、ヱサイを生み ヱサイ、ダビデを生り

サムエル前書

第一章 一 エフライムの山地のラマタイムゾビムにエルカナと名くる人ありエフライテ人にしてエロハムの子なりエロハムはエリウの子エリウはトフの子トフはツフの子なり 二 エルカナに二人の妻ありてひとりの名をハンナといひひとりの名をペニンナといふペニンナには子ありたれどもハンナには子あらざりき 三 是人毎歳に其邑をいで上りてシロにおいて萬軍のヱホバを拝み之に祭物をささぐ其處にエリの二人の子ホフニとピネハスをりてヱホバに祭司たり 四 エルカナ祭物をささぐる時其妻ペニンナと其すべての息子女子にわかちあたへしが 五 ハンナには其倍をあたふ是はハンナを愛するが故なりされどヱホバ其孕みをとどめたまふ 六 其敵もまた痛くこれをなやましてヱホバが其はらみをとどめしを怒らせんとす 七 歳々ハンナ、ヱホバの家にのぼるごとにエルカナかくなせしかばペニンナかくのごとく之をなやます是故にハンナないてものくはざりき 八 其夫エルカナ之にいひけるはハンナよ何故になくや何故にものくはざるや何故に心かなしむや我は汝のためには十人の子よりもまさるにあらずや 九 かくてシロにて食飲せしのちハンナたちあがれり時に祭司エリ、ヱホバの宮の柱の傍にある壇に坐す 一〇 ハンナ心にくるしみヱホバにいのりて甚く哭き 一一 誓をなしていひけるは萬軍のヱホバよ若し誠に婢の惱をかへりみ我を憶ひ婢を忘れずして婢に男子をあたへたまはば我これを一生のあひだヱホバにささげ剃髪刀を其首にあつまじ 一二 ハンナ、ヱホバのまへに長くいのりければエリ其口に目をとめたり 一三 ハンナ心の中にものいへば只脣うごくのみにて聲きこえず是故にエリこれを酔たる者と思ひ 一四 之にいひけるは何時まで酔ひをるか爾の酒をされよ 一五 ハンナこたへていひけるは主よ然るにあらず我は氣のわづらふ婦人にして葡萄酒をも濃き酒をものまず惟わが心をヱホバのまへに明せるなり 一六 婢を邪なる女となすなかれ我はわが憂と悲みの多きよりして今までかたれり 一七 エリ答へていひけるは安んじて去れ願くはイスラエルの神汝の求むる願ひを許したまはんことを 一八 ハンナいひけるはねがはくは仕女の汝のまへに恩をえんことをと斯てこの婦さりて食ひ其顔ふたたび哀しげならざりき 一九 是に於て彼等朝はやくおきてヱホバの前に拝をしかへりてラマの家にいたる而してエルカナ其つまハンナとまじはるヱホバ之をかへりみたまふ 二〇 ハンナ孕みてのち月みちて男子をうみ我これをヱホバに求めし故なりとて其名をサムエル（ヱホバに聴る）となづく 二一 爰に其人エルカナ及び其家族みな上りて年々の祭物及び其誓ひし物をささぐ 二二 然どもハンナは上らず其夫にいひけるは我はこの子の乳ばなれするに及びてのち之をたづさへゆきヱホバのまへにあらはれしめ恒にかしこに居らしめん 二三 其夫エルカナ之にいひけるは汝の善と思ふところを爲し此子を乳ばなすまでとどまるべし

只ヱホバの其言を確實ならしめ賜んことをねがふと斯くこの婦止まりて其子に乳をのませ其ちばなれするをまちしが二四乳ばなせしとき牛三頭粉一斗酒一嚢を取り其子をたづさへてシロにあるヱホバの家にいたる其子なほ幼稚し二五是に於て牛をころしその子をエリの許に携へゆきぬ二六ハンナいひけるは主よ汝のたましひは活くわれはかつてここにてなんぢの傍にたちヱホバにいのりし婦なり二七われ此子のためにいのりしにヱホバわが求めしものをあたへたまへり二八此故にわれまたこれをヱホバにささげん其一生のあひだ之をヱホバにささぐ斯てかしこにてヱホバををがめり

第二章一ハンナ祷りて言けるは我心はヱホバによりて喜び我角はヱホバによりて高し我口はわが敵の上にはりひらく是は我汝の救拯によりて樂むが故なり二ヱホバのごとく聖き者はあらず其は汝の外に有る者なければなり又われらの神のごとき磐はあることなし三汝等重ねて甚く誇りて語るなかれ汝等の口より漫言を出すなかれヱホバは全知の神にして行爲を裁度りたまふなり四勇者の弓は折れ倒るる者は勢力を帶ぶ五飽足る者は食のために身を傭はせ饑たる者は憩へり石女は七人を生み多くの子を有る者は衰ふるにいたる六ヱホバは殺し又生したまひ陰府に下し又上らしめたまふ七ヱホバは貧からしめ又富しめたまひ卑くしまた高くしたまふ八荏弱者を塵の中より擧げ窮乏者を埃の中より升せて王公の中に坐せしめ榮光の位をつがしめ給ふ地の柱はヱホバの所屬なりヱホバ其上に世界を置きたまへり九ヱホバ其聖徒の足を守りたまはん惡き者は黒暗にありて默すべし其は人力をもて勝つべからざればなり一〇ヱホバと爭ふ者は破碎かれんヱホバ天より雷を彼等の上にくだしヱホバは地の極を審き其王に力を與へ其膏そそぎし者の角を高くし給はん一一エルカナ、ラマに往て其家にいたりしが稚子は祭司エリのまへにありてヱホバにつかふ一二さてエリの子は邪なる者にしてヱホバをしらざりき一三祭司の民に於る習慣は斯のごとし人祭物をささぐる時肉を烹るあひだに祭司の僕三の齒ある肉叉を手にとりて來り一四之を釜あるひは鍋あるひは鼎又は炮烙に突きいれ肉叉の引きあぐるところの肉は祭司みなこれを己にとる是くシロに於て凡てそこに來るイスラエル人になせり一五脂をやく前にも亦祭司のしもべ來り祭物をささぐる人にいふ祭司のために燒くべき肉をあたへよ祭司は汝より烹たる肉を受けず生腥の肉をこのむと一六もし其人これにむかひ直ちに脂をやくべければ後心のこのむままに取れといはば僕之にいふ否今あたへよ然らずば我強て取んと一七故に其壯者の罪ヱホバのまへに甚だ大なりそは人々ヱホバに祭物をささぐることをいとひたればなり一八サムエルなほ幼して布のエポデを著てヱホバのまへにつかふ一九また其母これがために小き明衣をつくり歳毎にその夫とともに年の祭物をささげにのぼる時これをもちきたる二〇エリ、エルカナとその妻を祝していひけるは汝がヱホバ

にささげたる者のためにヱホバ此婦よりして子を汝にあたへたまはんことをねがふと斯てかれら其郷にかへる二一 しかしてヱホバ、ハンナをかへりみたまひければハンナ孕みて三人の男子と二人の女子をうめり童子サムエルはヱホバのまへにありて生育てり二二 ここにエリ甚だ老て其子等がイスラエルの人々になせし諸の事を聞きまた其集會の幕屋の門にいづる婦人たちと寝たるを聞て二三 これにいひけるは何ぞ斯る事をなすや我このすべての民より汝らのあしき行をきく二四 わが子よ然すべからず我きくところの風聞よからず爾らヱホバの民をしてあやまたしむ二五 人もし人にむかひて罪をかさば神之をさばかんされど人もしヱホバに向ひて罪をかさば誰かこれがためにとりなしをなさんやとしかれども其子父のことばを聽ざりきそはヱホバかれらを殺さんと思ひたまへばなり二六 童子サムエル生長ゆきてヱホバと人とに愛せらる二七 茲に神の人エリの許に來りこれにいひけるはヱホバ斯くいひたまふ爾の父祖の家エジプトにおいてパロの家にありしとき我明かに之にあらはれしにあらずや二八 我これをイスラエルの諸の支派のうちより選みてわが祭司となしわが壇の上に祭物をささげ香をたかしめ我前にエポデを衣しめまたイスラエルの人の火祭を悉く汝の父の家にあたへたり二九 なんぞわが命ぜし犠牲と禮物を汝の家にてふみつくるや何ぞ我よりもなんぢの子をたふとみわが民イスラエルの諸の祭物の最も嘉きところをもて己を肥すや三〇 是ゆゑにイスラエルの神ヱホバいひたまはく我誠に曾ていへり汝の家およびなんぢの父祖の家永くわがまへにあゆまんと然ども今ヱホバいひたまふ決めてしからず我をたふとむ者は我もこれをたふとむ我を賤しむる者はかろんぜらるべし三一 視よ時いたらん我汝の腕と汝の父祖の家の腕を絶ち汝の家に老たるもの无らしめん三二 我大にイスラエルを善すべけれど汝の家内には災見えん汝の家にはこののち永く老るものなかるべし三三 またわが壇より絶ざる汝の族の者は汝の目をそこなひ汝の心をいたましめん又汝の家にうまれいづるものは壯年にして死なん三四 汝のふたりの子ホフニとピネスの遇ところの事を其徴とせよ即ち二人ともに同じ日に死なん三五 我はわがために忠信なる祭司をおこさん其人わが心とわが意にしたがひておこなはんわれその家をかたうせんかれわが膏そそぎし者のまへに恒にあゆむべし三六 しかして汝の家にのこれる者は皆きたりてこれに屈み一厘の金と一片のパンを乞ひ且いはんねがはくは我を祭司の職の一に任じて些少のパンにても食ふことをえせしめよと

第三章 一 童子サムエル、エリのまへにありてヱホバにつかふ當時はヱホバの言まれにして默示あること恒ならざりき二 偖エリ目漸くくもりて見ることをえず此時其室に寝たり三 神の燈なほきえずサムエル神の櫃あるヱホバの宮に寝ね四 時にヱホバ、サムエルをよびたまふ彼我此にありといひて五 エリの許に趨ゆきいひけるは汝われをよぶ我ここにありエリいひけるは我よば

ず反りて臥よと乃ちゆきていぬ六ヱホバまたかさねてサムエルよとよびたまへばサムエルおきてエリのもとにいたりいひけるは汝われをよぶ我ここにありエリこたへけるは我よばずわが子よ反りていねよ七サムエルいまだヱホバをしらずまたヱホバのことばいまだかれにあらはれず八ヱホバ、三たびめに又サムエルをよびたまへばサムエルおきてエリの許にたりいひけるは汝われをよぶ我ここにありとエリ乃ちヱホバの童子をよびたまひしをさとる九故にエリ、サムエルにいひけるはゆきて寢よ彼若し汝をよばば僕聽くヱホバ語りたまへといへとサムエルゆきて其室にいねしに一〇ヱホバ來りて立ちまへの如くサムエル、サムエルとよびたまへばサムエル僕きく語りたまへといふ一一ヱホバ、サムエルにいひ賜けるは視よ我イスラエルのうちに一の事をなさんこれをきくものは皆其耳ふたつながら鳴ん一二其日にはわれ嘗てエリの家について言しことを始より終までことごとくエリになすべし一三われかつてエリに其惡事のために永くその家をさばかんとしめせりそは其子の詛ふべきことをなすをしりて之をとどめざればなり一四是故に我エリのいへに誓ひてエリの家の惡は犠牲あるひは禮物をもて永くあがなふ能はずといへり一五サムエル朝までいねてヱホバの家の戸を開きしが其異象をエリにしめすことをおそる一六エリ、サムエルをよびていひけるはわが子サムエルよ答へけるはわれここにあり一七エリいひけるは何事を汝につげたまひしや請ふ我にかくすなかれ汝もし其汝に告げたまひしところを一にてもかくすときは神汝にかくなし又かさねてかくなしたまへ一八サムエル其事をことごとくしめして彼に隱すことなかりきエリいひけるは是はヱホバなり其よしと見たまふことをなしたまへと一九サムエルそだちぬヱホバこれとともにいましてそのことばをして一も地におちざらしめたまふ二〇ダンよりベエルシバにいたるまでイスラエルの人みなサムエルがヱホバの預言者とさだまれるをしれり二一ヱホバふたたびシロにてあらはれたまふヱホバ、シロにおいてヱホバの言によりてサムエルにおのれをしめしたまふなりサムエルの言あまねくイスラエル人におよぶ

第四章一イスラエル人ペリシテ人にいであひて戰はんとしエベネゼルの邊に陣をとりペリシテ人はアベクに陣をとる二ペリシテ人イスラエル人にむかひて陣列をなせり戰ふにおよびてイスラエル人ペリシテ人のまへにやぶるペリシテ人戰場において其軍四千人ばかりを殺せり三民陣營にいたるにイスラエルの長老曰けるはヱホバ何故に今日我等をペリシテ人のまへにやぶりたまひしやヱホバの契約の櫃をシロより此にたづさへ來らん其櫃われらのうちに來らば我らを敵の手よりすくひいだすことあらんと四かくて民人をシロにつかはしてケルビムの上に坐したまふ萬軍のヱホバの契約の櫃を其處よりたづさへきたらしむ時にエリの二人の子ホフニとピネハス神の契約のはこととともに彼處にありき五ヱホバの契約の櫃陣營にいたりしときイスラエ

ル人皆大によばはりさけびければ地なりひびけり六ペリシテ人喊呼の聲を聞ていひけるはヘブル人の陣營に起れる此大なるさけびの聲は何ぞやと遂にヱホバの櫃の其陣營にいたれるを知る七ペリシテ人おそれていひけるは神陣營にいたる又いひけるは嗚呼われら禍なるかな今にいたるまで斯ることなかりき八ああ我等禍なるかな誰かわれらを是らの強き神の手よりすくひいださんや此等の神は昔し諸の災を以てエジプト人を曠野に撃し者なり九ペリシテ人よ強くなり豪傑のごとく爲せヘブル人がかつて汝らに事へしごとく汝らこれに事ふるなかれ豪傑のごとく爲して戰へよ一〇かくてペリシテ人戰ひしかばイスラエル人やぶれて各々其天幕に逃かへる戰死はなはだ多くイスラエルの歩兵の仆れし者三萬人なりき一一又神の櫃は奪はれエリの二人の子ホフニとピネハス殺さる一二是日ベニヤミンの一人軍中より走來り其衣を裂き土をかむりてシロにいたる一三其いたれる時エリ道の傍に壇に坐して觀望居たり其心に神の櫃のことを思ひ煩らひたればなり其人いたり邑にて人々に告ければ邑こぞりてさけびたり一四エリ此呼號の聲をききていひけるは是喧嘩の聲は何なるやと其人いそぎきたりてエリにつぐ一五時にエリ九十八歲にして其目かたまりて見ることあたはず一六其人エリにいひけるは我は軍中より來れるもの我今日軍中より逃れたりエリいひけるは吾子よ事いかん一七使人答へていひけるはイスラエル人ペリシテ人の前に逃げ且民の中に大なる戰死ありまた汝の二人の子ホフニとピネハスは殺され神の櫃は奪はれたり一八神の櫃のことを演しときエリ其壇より仰けに門の傍におち頸を鞫れて死ねり是はかれ老て身重かりければなり其イスラエルを鞫しは四十年なりき一九エリの媳ピネハスの妻孕みて子產ん時ちかかりしが神の櫃の奪はれしと舅と夫の死にしとの傳言を聞しかば其痛みおこりきたり身をかがめて子を產り二〇其死なんとする時傍にたてる婦人これにいひけるは懼るるなかれ汝男子を生りと然ども答へず又かへりみず二一只榮光イスラエルをさりぬといひて其子をイカボデ（榮なし）と名く是は神の櫃奪はれしによりまた舅と夫の故に因るなり二二またいひけるは榮光イスラエルをさりぬ神の櫃うばはれたればなり

第五章一ペリシテ人神の櫃をとりて之をエベネゼルよりアシドドにもちきたる二即ちペリシテ人神の櫃をとりて之をダゴンの家にもちきたりダゴンの傍に置ぬ三アシドド人次の日夙く興きヱホバの櫃のまへにダゴンの俯伏に地にたふれをるをみ乃ちダゴンをとりて再びこれを本の處におく四また翌朝夙く興きヱホバの櫃のまへにダゴン俯伏に地にたふれをるを見るダゴンの頭と其兩手門閾のうへに斷ち切れをり只ダゴンの體のみのこれり五是をもてダゴンの祭司およびダゴンの家にいるもの今日にいたるまでアシドドにあるダゴンの閾をふまず六かくてヱホバの手おもくアシドド人にくははりヱホバこれをほろぼし腫物をもてアシドドおよび其四周の人をくるしめたまふ七アシドド人

その斯るを見ていひけるはイスラエルの神の櫃を我らのうちにとどむべからず其は其手いたくわれらおよび我らの神ダゴンにくははればなり八是故に人をつかはしてペリシテ人の諸君主を集めていひけるはイスラエルの神の櫃をいかにすべきや彼らいひけるはイスラエルの神のはこはガテに移さんと遂にイスラエルの神のはこをうつす九之をうつせるのち神の手其邑にくははりて滅亡るもの甚だおほし即ち老たると幼とをいはず邑の人をうちたまひて腫物人々におこれり一〇是において神のはこをエクロンにおくりたるに神の櫃エクロンにいたりしときエクロン人さけびていひけるは我等とわが民をころさんとてイスラエルの神のはこを我等にうつすと一一かくて人を遣してペリシテ人の諸君主をあつめていひけるはイスラエルの神の櫃をおくりて本のところにかへさん然らば我等とわが民をころすことなからん蓋は邑中に恐ろしき滅亡おこり神の手甚だおもく其處にくははればなり一二死なざる者は腫物にくるしめられ邑の號呼天に達せり

第六章一ヱホバの櫃七月のあひだペリシテ人の國にあり二ペリシテ人祭司と卜筮師をよびていひけるは我らヱホバの櫃をいかがせんや如何にして之をもとの所にかへすべきか我らにつげよ三答へけるはイスラエルの神の櫃をかへすときはこれを空しくかへすなかれ必らず彼に過　祭をなすべし然なさば汝ら愈ことをえ且彼の手の汝らをはなれざる故を知にいたらん四人々いひけるは如何なる過　祭を彼になすべきや答へけるはペリシテ人の諸君主の數にしたがひて五の金の腫物と五の金の鼠をつくれ是は汝ら皆と汝らの諸伯におよべる災は一なるによる五汝らの腫物の像および地をあらす鼠の像をつくりイスラエルの神に榮光を皈すべし庶幾はその手を汝等およびなんぢらの神と汝等の地にくはふることを輕くせん六汝らなんぞエジプト人とパロの其心を頑にせしごとくおのれの心をかたくなにするや神かれらの中に數度其力をしめせしのち彼ら民をゆかしめ民つひにさりしにあらずや七されば今あたらしき車一輛をつくり乳牛のいまだ軛をつけざるもの二頭をとり其牛を車に繋ぎ其犢をはなして家につれゆき八ヱホバの櫃をとりて之を其車に載せ汝らが過　祭として彼になす金の製作物を櫝にをさめて其傍におき之をおくりて去らしめ九しかして見よ若し其境のみちよりベテシメシにのぼらばこの大なる災を我らになせるものは彼なり若ししかせずば我等をうちしは彼の手にあらずしてそのことの偶然なりしをしるべし一〇人々つひに斯なし二つの乳牛をとりて之を車につなぎその犢を室にとぢこめ一一ヱホバの櫃および金の鼠と其腫物の像ををさめたる櫝を車に載す一二牝牛直にあゆみてベテシメシの路をゆき鳴つつ大路をすすみゆきて右左にまがらずペリシテ人の君主ベテシメシの境まで其うしろにしたがひゆけり一三時にベテシメシ人谷に麥を刈り居たりしが目をあげて其櫃をみ之を見るをよろこべり一四車ベテシメ

シ人ヨシユアの田にいりて其處にとどまる此に大なる石あり人々車の木を劈り其牝牛を燔祭としてヱホバにささげたり一五 レビの人ヱホバの櫃とこれとともなる櫃の金の製作物をさめたる者をとりおろし之を其大石のうへにおくしかしてベテシメシ人此日ヱホバに燔祭をそなへ犠牲をささげたり一六 ペリシテ人の五人の君主これを見て同じ日にエクロンにかへれり一七 さてペリシテ人が過祭としてヱホバにたせし金の腫物はこれなり即ちアシドドのために一ガザのために一アシケロンのために一ガテのために一エクロンのために一なりき一八 また金の鼠は城邑と郷里をいはず凡て五人の君主に屬するペリシテ人の邑の數にしたがひて造れりヱホバの櫃をおろせし大石今日にいたるまでベテシメシ人ヨシユアの田にあり一九 ベテシメシの人々ヱホバの櫃をうかがひしによりヱホバこれをうちたまふ即ち民の中七十人をうてりヱホバ民をうちて大にこれをころしたまひしかば民なきさけべり二〇 ベテシメシ人いひけるは誰かこの聖き神たるヱホバのまへに立つことをえんヱホバ我らをはなれて何人のところにのぼりゆきたまふべきや二一 かくて使者をキリアテヤリムの人に遣はしていひけるはペリシテ人ヱホバの櫃をかへしたれば汝らくだりて之を汝らの所に携へのぼるべし

第七章一 キリアテヤリムの人來りヱホバのはこを携へのぼりこれを山のうへなるアビナダブの家にもちきたり其子エレアザルを聖てヱホバの櫃をまもらしむ二 其櫃キリアテヤリムにとどまること久しくして二十年をへたりイスラエルの全家ヱホバをしたひて歎けり三 時にサムエル、イスラエルの全家に告ていひけるは汝らもし一心を以てヱホバにかへり異る神とアシタロテを汝らの中より棄て汝らの心をヱホバに定め之にのみ事へなばヱホバ汝らをペリシテ人の手より救ひださん四 ここにおいてイスラエルの人々バアルとアシタロテをすててヱホバにのみ事ふ五 サムエルいひけるはイスラエル人をことごとくミズパにあつめよ我汝らのためにヱホバにいのらん六 かれらミズパに集り水を汲て之をヱホバのまへに注ぎ其日斷食して彼處にいひけるは我等ヱホバに罪ををかしたりとサムエル、ミズパに於てイスラエルの人を鞫く七 ペリシテ人イスラエルの人々のミズパに集れるを聞しかばペリシテ人の諸君主イスラエルにせめのぼれりイスラエル人これを聞てペリシテ人をおそれたり八 イスラエルの人々サムエルに云けるは我らのために我らの神ヱホバに祈ることをやむるなかれ然らばヱホバ我らをペリシテ人の手よりすくひいださん九 サムエル哺乳羊をとり燔祭となしてこれをまつたくヱホバにささぐまたサムエル、イスラエルのためにヱホバにいのりければヱホバこれにこたへたまふ一〇 サムエル燔祭をささげ居し時ペリシテ人イスラエル人と戰はんとて近づきぬ是日ヱホバ大なる雷をくだしペリシテ人をうちて之を亂し賜ければペリシテ人イスラエル人のまへに敗れたり一一 イスラエル人ミズパをいでてペリシテ人をおひ之をうちてベテカルの下に

いたる一二サムエル一の石をとりてミズパとセンの間におきヱホバ是まで我らを助けたまへりといひて其名をエベネゼル（助けの石）と呼ぶ一三ペリシテ人攻伏られて再びイスラエルの境にいらずサムエルの一生のあひだヱホバの手ペリシテ人をふせげり一四ペリシテ人のイスラエルより取たる邑々はエクロンよりガテまでイスラエルにかへりぬまた其周圍の地はイスラエル人これをペリシテ人の手よりとりかへせりまたイスラエル人とアモリ人と好をむすべり一五サムエル一生のあひだイスラエルをさばき一六歳々ベテルとギルガルおよびミズパをめぐりて其處々にてイスラエル人をさばき一七またラマにかへれり此處に其家あり此にてイスラエルをさばき又此にてヱホバに壇をきづけり

第八章一サムエル年老て其子をイスラエルの士師となす二兄の名をヨエルといひ弟の名をアビヤといふベエルシバにありて士師たり三其子父の道をあゆまずして利にむかひ賄賂をとりて審判を曲ぐ四是においてイスラエルの長老みなあつまりてラマにゆきサムエルの許に至りて五これにいひけるは視よ汝は老い汝の子は汝の道をあゆまずされぱわれらに王をたててわれらを鞫かしめ他の國々のごとくならしめよと六その我らに王をあたへて我らを鞫かしめよといふを聞てサムエルよろこばず而してサムエル、ヱホバにいのりしかば七ヱホバ、サムエルにいひたまひけるは民のすべて汝にいふところのことばを聽け其は汝を棄るにあらず我を棄て我をして其王とならざらしめんとするなり八かれらはわがエジプトより救ひいだせし日より今日にいたるまで我をすてて他の神につかへて種々の所行をなせしごとく汝にもまた然す九然れどもいま其言をきけ但し深くいさめて其治むべき王の常例をしめすべし一〇サムエル王を求むる民にヱホバのことばをことごとく告て一一いひけるは汝等ををさむる王の常例は斯のごとし汝らの男子をとり己れのために之をたてて車の御者となし騎兵となしまた其車の前驅となさん一二また之をおのれの爲に千夫長五十夫長となしまた其地をたがへし其作物を刈らしめまた武器と車器とを造らしめん一三また汝らの女子をとりて製香者となし厨婢となし炙麵者となさん一四又汝らの田畝と葡萄園と橄欖園の最も善きところを取て其臣僕にあたへ一五汝らの穀物と汝らの葡萄の什分一をとりて其官吏と臣僕にあたへ一六また汝らの僕婢および汝らの最も善き牛と汝らの驢馬を取ておのれのために作かしめ一七又汝らの羊の十分一をとり又汝らを其僕となさん一八其日において汝等己のために擇みし王のことによりて呼號らんされどヱホバ其日に汝らに聽たまはざるべしと一九然るに民サムエルの言にしたがふことをせずしていひけるは否われらに王なかるべからず二〇我らも他の國々の如くになり我らの王われらを鞫きわれらを率て我らの戰にたたかはん二一サムエル民のことばを盡く聞て之をヱホバの耳に告ぐ二二ヱホバ、サムエルにいひたまひけるはか

れらのことばを聴きかれらのために王をたてよサムエル、イスラエルの人々にいひけるは汝らおのおの其邑にかへるべし

第九章一 茲にベニヤミンの人にてキシと名くる力の大なるものありキシはアビエルの子アビニルはゼロンの子ゼロンはベコラテの子ベコラテはアビヤの子アビヤはベニヤミンの子なり二キシにサウルと名くる子あり壯にして美はしイスラエルの子孫の中に彼より美はしき者たく肩より上民のいづれの人よりも高し三サウルの父キシの驢馬失ぬキシ其子サウルにいひけるは一人の僕をともなひ起ちてゆき驢馬を尋ねよ四サウル、ニフライムの山地を通り過ぎシヤリシヤの地を通りすぐれども見あたらずシヤリムの地を通りすぐれども居らずベニヤミンの地をとほりすぐれども見あたらず五かれらツフの地にいたれる時サウル其ともなへる僕にいひけるはいざ還らん恐らくはわが父驢馬の事を措て我等の事を思ひ煩はん六 僕これにいひけるは此邑に神の人あり尊き人にして其言ふところは皆必らず成る我らかしこにいたらんかれ我らがゆくべき路をわれらにしめすことあらん七サウル 僕にいひけるは我らもしゆかば何を其人におくらんか器のパンは既に罄て神の人におくるべき禮物あらず何かあるや八 僕またサウルにこたへていひけるは視よわが手に銀一シケルの四分の一あり我これを神の人にあたへて我らに路をしめさしめんと九昔しイスラエルにおいては人神にとはんとてゆく時はいざ先見者にゆかんといへり其は今の預言者は昔しは先見者とよばれたればなり一〇サウル 僕にいひけるは善くいへりいざゆかんとて神の人のをる邑におもむけり一一かれら邑にいる坂をのぼれる時童女數人の水くみにいづるにあひ之にいひけるは先見者は此にをるや一二 答ていひけるはをる視よ汝のまへにをる急ぎゆけ今日民崇邱にて祭をなすにより彼けふ邑にきたれり一三 汝ら邑にる時かれが崇邱にのぼりて食に就くまへに直ちにかれにあはん其は彼まづ祭品を祝してしかるのち招かれたる者食ふべきに因りかれが來るまでは民食はざるなり故に汝らのぼれ今かれにあはんと一四 かれら邑にのぼりて邑のなかにいるとき視よサムエル崇邱にのぼらんとてかれらにむかひて出きたりぬ一五 ヱホバ、サウルのきたる一日まへにサムエルの耳につげていひたまひけるは一六 明日いまごろ我ベニヤミンの地より一箇の人を汝につかはさん汝かれに膏を注ぎてわが民イスラエルの長となせかれわが民をペリシテ人の手より救ひいださんわが民のさけび我に達せしにより我是をかへりみるなり一七サムエル、サウルを見るときヱホバこれにいひたまひけるは視よわが汝につげしは此人なり是人わが民ををさむべし一八 サウル門の中にてサムエルにちかづきいひけるは先見者の家はいづくにあるや請ふ我につげよ一九 サムエル、サウルにこたへていひけるは我はすなはち先見者なり汝わがまへにゆきて崇邱にのぼれ汝ら今日我とともに食す可し明日われ汝をさらしめ汝の心にあることを悉く汝にしめさん二〇 三日まへに失たる汝の驢馬は

既に見あたりたれば之をおもふなかれ抑もイスラエルの總ての寶は誰の者なるや即ち汝と汝の父の家のものならずや二一 サウルこたへていひけるは我はイスラエルの支派の最も小き支派なるベニヤミンの人にしてわが族はベニヤミンの支派の諸の族の最も小き者に非やなんぞ斯る事を我にかたるや二二 サムエル、サウルと其僕をみちびきて堂にいり招かれたる三十人ばかりの者の中の最も上に坐せしむ二三 サムエル庖人にいひけるはわが汝にわたして汝の許におけといひし分をもちきたれ二四 庖人肩と肩に屬る者をとりあげて之をサウルのまへに置くサムエルいひけるは視よ是は存へおきたる物なり汝のまへにおきて食へ其はわれ民をまねきし時よりこれを汝の爲にたくはへおきたればなりかくてサウル此日サムエルとともに食せり二五 崇邱をくだりて邑にいりし時サムエル、サウルとともに屋背の上にてものがたる二六 かれら早くおく即ちサムエル曙に屋背の上なるサウルをよびていひけるは起よわれ汝をかへさんとサウルすなはちおきあがるサウルとサムエルともに外にいで二七 邑の極處にくだれるときサムエル、サウルにいひけるは僕に命じて我等の先にゆかしめよ（僕先にゆく）しかして汝暫くとどまれ我汝に神の言をしめさん

第一〇章 一 サムエルすなはち膏の瓶をとりてサウルの頭に沃ぎ口接して曰けるはヱホバ汝をたてて其産業の長となしたまふにあらずや二 汝今日我をはなれて去りゆく時ベニヤミンの境のゼルザにあるラケルの墓のかたはらにて二人の人にあふべしかれら汝にいはん汝がたづねにゆきし驢馬は見あたりぬ汝の父驢馬のことをすてて汝らのことをおもひわづらひわが子の事をいかがすべきやといへりと三 其處より汝尚すすみてタボルの橡の樹のところにいたらんに彼處にてベテルにのぼり神にまうでんとする三人の者汝にあはん一人は三頭の山羊羔を携へ一人は三團のパンをたづさへ一人は一嚢の酒をたづさふ四 かれら汝に安否をとひ二團のパンを汝にあたへん汝之を其手よりうくべし五 其の後汝神のギベアにいたらん其處にペリシテ人の代官あり汝彼處にゆきて邑にいるとき一群の預言者の瑟と鼗と笛と琴を前に執らせて預言しつつ崇邱をくだるにあはん六 其の時神のみたま汝にのぞみて汝かれらとともに預言し變りて新しき人とならん七 是らの徴汝の身におこらば手のあたるにまかせて事を爲すべし神汝とともにいませばなり八 汝我にさきだちてギルガルにくだるべし我汝の許にくだりて燔祭を供へ酬恩祭を献げんわが汝のもとに至り汝の爲すべきことを示すまで汝七日のあひだ待つべし九 サケウル背をかへしてサムエルを離れし時神之に新しき心をあたへたまふしかして此しるし皆其日におこれり一〇 ふたり彼處にゆきてギベアにいたれるときみよ一群の預言者これにあふしかして神の霊サウルにのぞみてサウルかれらの中にありて預言せり一一 素よりサウルを識る人々サウルの預言者と偕に預言するを見て互ひにいひけるはキ

シの子サウル今何事にあふやサウルも預言者の中にあるやと一二其處の人ひとり答へて彼等の父は誰ぞやといふ是故にサウルも預言者の中にあるやといふは諺となれり一三サウル預言を終て崇邱にいたるに一四サウルの叔父サウルと僕にいひけるは汝ら何處にゆきしやサウルいひけるは驢馬を尋ねに出しが何處にもをらざるを見てサムエルの許にいたれり一五サウルの叔父いひけるはサムエルは汝に何をいひしか請ふ我につげよ一六サウル叔父にいひけるは明かに驢馬の見あたりしを告げたりと然れどもサムエルが言る國王の事はこれにつげざりき一七サムエル民をミヅパにてヱホバのまへに集め一八イスラエルの子孫にいひけるはイスラエルの神ヱホバ斯くいひたまふ我イスラエルをみちびきてエジプトより出し汝らをエジプト人の手および凡て汝らを虐遇る國人の手より救ひいだせり一九然るに汝らおのれを患難と難苦のうちより救ひいだしたる汝らの神を棄て且否われらに王をたてよといへり是故にいま汝等の支派と群にしたがひてヱホバのまへに出よ二〇サムエル、イスラエルの諸の支派を呼よせし時ベニヤミンの支派籤にあたりぬ二一またベニヤミンの支派を其族のかずにしたがひて呼よせしときマテリの族籤にあたりキシの子サウル籤にあたれり人々かれを尋ねしかども見出ざれば二二またヱホバに其人は此に來るや否やを問しにヱホバ答たまはく視よ彼は行李のあひだにかくると二三人々はせゆきて彼を其處よりつれきたれり彼民の中にたつに肩より以上民の何の人よりも高かりき二四サムエル民にいひけるは汝らヱホバの擇みたまひし人を見るか民のうちに是人の如き者とし民みなよばはりいひけるは願くは王いのちながかれ二五時にサムエル王國の典章を民にしめして之を書にしるし之をヱホバのまへに蔵めたりしかしてサムエル民をことごとく其家にかへらしむ二六サウルもまたギベアの家にかへるに神に心を感ぜられたる勇士等これとともにゆけり二七然れども邪なる人々は彼人いかで我らを救はんやといひて之を蔑視り之に禮物をおくらざりしかどサウルは唖のごとくせり

第一一章 一アンモニ人ナハシ、ギレアデのヤベシにのぼりて之を圍むヤベシの人々ナハシにいひけるは我らと約をなせ然らば汝につかへん二アンモニ人ナハシこれに答へけるは我かくして汝らと約をなさん即ち我汝らの右の目を抉りてイスラエルの全地に恥辱をあたへん三ヤベシの長老これにいひけるは我らに七日の猶予をあたへて使をイスラエルの四方の境におくることを得さしめよ而して若し我らを救ふ者なくば我ら汝にくだらん四斯て使サウルのギベアにいたり此事を民の耳に告しかば民皆聲をあげて哭きぬ五爰にサウル田より牛にしたがひて來るサウルいひけるは民何によりて哭くやと人々これにヤベシ人の事を告ぐ六サウル之を聞るとき神の霊これに臨みてその怒甚だしく燃えたち七一軛の牛をころして之を切り割き使の手をもてこれをイスラエルの四方の境にあまねくおくりていはしめける

は誰にてもサウルとサムエルにしたがひて出ざる者は其牛かくのごとくせらるべしと民ヱホバを畏み一人のごとく均くいでたり八 サウル、ベゼクにてこれを數ふるにイスラエルの子孫三十萬ユダの人三萬ありき九 斯て人々來れる使にいひけるはギレアデのヤベシの人にかくいへ明日日の熱き時汝ら助を得んと使かへりてヤベシ人に告げければ皆よろこびぬ一〇 是をもてヤベシの人云けるは明日汝らに降らん汝らの善と思ふところを爲せ一一 明日サウル民を三隊にわかち曉更に敵の軍の中にいりて日の熱くなる時までアンモニ人をころしければ遺れる者は皆ちりぢりになりて二人倶にあるものなかりき一二 民サムエルにいひけるはサウル豈我らの王となるべけんやと言しは誰ぞや其人を引き來れ我ら之をころさん一三 サウルいひけるは今日ヱホバ救をイスラエルに施したまひたれば今日は人をころすべからず一四 茲にサムエル民にいひけるはいざギルガルに往て彼處にて王國を新にせんと一五 民みなギルガルにゆきて彼處にてヱホバのまへにサウルを王となし彼處にて酬恩祭をヱホバのまへに献げサウルとイスラエルの人々皆かしこにて大に祝へり

第一二章一 サムエル、イスラエルの人々にいひけるは視よ我汝らが我にいひし言をことごとく聽て汝らに王を立たり二 見よ今王汝らのまへにあゆむ我は老て髮しろし視よわが子ども汝らと共にあり我幼稚時より今日にいたるまで汝等のまへにあゆめり三 視よ我ここにありヱホバのまへと其膏そそぎし者のまへに我を訴へよ我誰の牛を取りしや誰の驢馬をとりしや誰を掠めしや誰を虐遇しや誰の手より賄賂をとりてわが目を矇せしや有ば我これを汝らにかへさん四 彼らいひけるは汝は我らをかすめずくるしめず又何をも人の手より取りしことなし五 サムエルかれらにいひけるは汝らが我手のうちに何をも見いださざるをヱホバ汝らに證したまふ其膏そそぎし者も今日證す彼ら答へけるは證したまふ六 サムエル民にいひけるはヱホバはモーセとアロンをたてし者汝らの先祖をエジプトの地より導きいだせしものなり七 立ちあがれヱホバが汝らおよび汝らの先祖になしたまひし諸の義しき行爲につきて我ヱホバのまへに汝らと論ぜん八 ヤコブのエジプトにいたるにおよびて汝らの先祖のヱホバに呼はりし時ヱホバ、モーセとアロンを遣はしたまひて此二人汝らの先祖をエジプトより導きいだして此處にすましめたり九 しかるに彼ら其神ヱホバを忘れしかばヱホバこれをハゾルの軍の長シセラの手とペリシテ人の手およびモアブ王の手にわたしたまへり斯て彼らこれを攻ければ一〇 民ヱホバに呼はりていひけるは我らヱホバを棄てバアルとアシタロテに事へてヱホバに罪を犯したりされど今我らを敵の手より救ひいだしたまへ我ら汝につかへんと一一 是においてヱホバ、ヱルバアルとバラクとエフタとサムエルを遣はして汝らを四方の敵の手より救ひいだしたまひて汝ら安らかに住めり一二 しかるに汝らアンモンの子孫の王ナハシの汝らを攻んとて來るを見て汝らの神ヱホバ汝ら

の王なるに汝ら我にいふ否我らををさむる王なかるべからずと一三今汝らが選みし王汝らがねがひし王を見よ視よヱホバ汝らに王をたてたまへり一四汝らもしヱホバを畏みて之につかへ其言にしたがひてヱホバの命にそむかずまた汝らと汝らををさむる王恒に汝らの神ヱホバに從はば善し一五しかれども汝らもしヱホバの言にしたがはずしてヱホバの命にそむかばヱホバの手汝らの先祖をせめしごとく汝らをせむべし一六汝ら今たちてヱホバが爾らの目のまへになしたまふ此大なる事を見よ一七今日は麥刈時にあらずや我ヱホバを呼んヱホバ雷と雨をくだして汝らが王をもとめてヱホバのまへに爲したる罪の大なるを見しらしめたまはん一八かくてサムエル、ヱホバをよびければヱホバ其日雷と雨をくだしたまへり民みな大にヱホバとサムエルを恐る一九民みなサムエルにいひけるは僕らのために汝の神ヱホバにいのりて我らを死なざらしめよ我ら諸の罪にまた王を求むるの惡をくはへたればなり二〇サムエル民にいひけるは懼るなかれ汝らこの總ての惡をなしたりされどヱホバに從ふことを息ず心をつくしてヱホバに事へ二一虚しき物に迷ひゆくなかれ是は虚しき物なれば汝らを助くることも救ふことも得ざるなり二二ヱホバ其大なる名のために此民をすてたまはざるべし其はヱホバ汝らをおのれの民となすことを善としたまへばなり二三また我は汝らのために祈ることをやめてヱホバに罪ををかすことは決てせざるべし且われ善き正しき道をもて汝らををしへん二四汝ら只ヱホバをかしこみ心をつくして誠にこれにつかへよ而して如何に大なることをヱホバ汝らになしたまひしかを思ふ可し二五しかれども汝らもしなほ惡をなさば汝らと汝らの王ともにほろぼさるべし

第一三章一サウル三十歳にて王の位に即く彼二年イスラエルををさめたり二爰にサウル、イスラエル人三千を擇む其二千はサウルとともにミクマシおよびベテルの山地にあり其一千はヨナタンとともにベニヤミンのギベアにあり其餘の民はサウルおのおの其幕屋にかへらしむ三ヨナタン、ゲバにあるペリシテ人の代官をころせりペリシテ人之れをきく是においてサウル國中にあまねくラツパを吹ていはしめけるはヘブル人よ聞くべし四イスラエル人皆聞けるに云くサウル、ペリシテ人の代官を撃りしかしてイスラエル、ペリシテ人の中に惡まると斯て民めされてサウルにしたがひギルガルにいたる五ペリシテ人イスラエルと戰はんとて集りけるが兵車三百騎兵六千にして民は濱の沙の多きがごとくなりき彼らのぼりてベテアベンにむかへるミクマシに陣をとれり六イスラエルの人苦められ其危きを見て皆巖穴に林叢に崗巒に高塔に坎阱にかくれたり七また或るヘブル人はヨルダンを渉りてガドとギレアデの地にいたる然るにサウルは尚ギルガルにあり民皆戰慄て之にしたがふ八サウル、サムエルの定めし期にしたがひて七日とどまりしがサムエル、ギルガルに來らず民はなれて散ければ九サウルいひけるは燔祭と

酬恩祭を我にもちきたれと遂に燔祭をささげたり一〇燔祭をささぐることを終しときに視よサムエルいたるサウル安否を問はんとてこれをいで迎ふに一一サムエルいひけるは汝何をなせしやサウルいひけるは我民の我をはなれてちりまた汝の定まれる日のうちに來らずしてペリシテ人のミクマシに集まれるを見しかば一二ペリシテ人ギルガルに下りて我をおそはんに我いまだヱホバをなごめずといひて勉て燔祭をささげたり一三サムエル、サウルにいひけるは汝おろかなることをなせり汝その神ヱホバのなんぢに命じたまひし命令を守らざりしなり若し守りしならばヱホバ、イスラエルをさむる位を永く汝に定めたまひしならん一四然どもいま汝の位たもたざるべしヱホバ其心に適ふ人を求めてヱホバ之に其民の長を命じたまへり汝がヱホバの命ぜしことを守らざるによる一五かくてサムエルたちてギルガルよりベニヤミンのギベアにのぼりいたる一六サウルおのれとともにある民をかぞふるに凡そ六百人ありき一七サウルおよび其子ヨナタン並にこれとともにある民はベニヤミンのゲバに居りペリシテ人はミクマシに陣を張る一八劫掠人三隊にわかれてペリシテ人の陣よりいで一隊はオフラの路にむかひてシユアルの地にいたり一九一隊はベテホロンの道に向ひ一隊は曠野の方にあるゼボイムの谷をのぞむ境の路にむかふ二〇時にイスラエルの地のうち何處にも鐵工なかりき是はペリシテ人ヘブル人の劍あるひは槍を作ることを恐れたればなり二一イスラエル人皆其耜鋤斧 耒 即ち耜鋤三歯鍬斧の錣に缺ありてこれを鍛ひ改さんとする時又は鞭を尖らさんとする時は常にペリシテ人の所にくだれり二二是をもて戰の日にサウルおよびヨナタンとともにある民の手には劍も槍も見えず只サウルと其子ヨナタンのみ持り二三茲にペリシテ人の先陣ミクマシの渡口に進む

第一四章

一其時サウルの子ヨナタン武器を執る若者にいひけるはいざ對面にあるペリシテ人の先陣に渉りゆかんと然ど其父には告ざりき二サウル、ギベアの極においてミグロンにある石榴の樹の下に住まりしが倶にある民はおよそ六百人なりき三又アヒヤ、エポデを衣てともにをるアヒヤはアヒトブの子アヒトブはイカボデの兄弟イカボデばピネハスの子ピネハスはシロにありてヱホバの祭司たりしエリの子なり民ヨナタンの行けるをしらざりき四ヨナタンの渉りてペリシテ人の先陣にいたらんとする渡口の間に此傍に巉巖あり彼傍にも巉巖あり一の名をボゼツといひ一の名をセネといふ五其一は北に向ひてミクマシに對し一に南にむかひてゲバに對す六ヨナタン武器を執る少者にいふいざ我ら此割禮なき者どもの先陣にわたらんヱホバ我らのためにはたらきたまことあらん多くの人をもて救ふも少き人をもてすくふもヱホバにおいては妨げなし七武器をとるもの之にいひけるは總て汝の心にあるところをなせ進めよ我汝の心にしたがひて汝とともにあり八ヨナタンいひけるは見よ我らかの人々のところにわたり身をかれらにあらはさん九かれら若

し我らが汝らにいたるまでとどまれと斯く我らにいはば我らはこのままとどまりてかれらの所にのぼらじ一〇されど若し我らのところにのぼれとかくいはば我らのぼらんヱホバかれらを我らの手にわたしたまふなり是を徴となさんと一一斯て二人其身をペリシテ人の先陣にあらはしければペリシテ人いひけるは視よヘブル人其かくれたる穴よりいで來ると一二すなはち先陣の人ヨナタンと其武器を執る者にこたへて我等の所に上りきたれ目に物見せんといひしかばヨナタン武器を執る者にいひけるは我にしたがひてのぼれヱホバ彼らをイスラエルの手にわたしたまふなり一三ヨナタン攀のぼり其武器を執るもの之にしたがふペリシテ人ヨナタンのまへに仆る武器をとる者も後にしたがひて之をころす一四ヨナタンと其武器を取るもの手はじめに殺せし者およそ二十人此事田畑半段の内になれり一五しかして野にある陣のものおよび凡ての民の中に戰慄おこり先陣の人および劫掠人もまたおののき地ふるひ動けり是は神よりの戰慄なりき一六ベニヤミンのギベアにあるサウルの戍卒望見しに視よペリシテ人の群衆くづれて此彼にちらばる一七時にサウルおのれとともなる民にいひけるは汝ら點驗て誰が我らの中よりゆきしかを見よとすなはちしらべたるにヨナタンとその武器を執るもの居らざりき一八サウル、アヒヤにエポデを持きたれといふ其はかれ此時イスラエルのまへにエポデを著たれば也一九サウル祭司にかたれる時ペリシテ人の軍の騒いよいよましたりければサウル祭司にいふ姑く汝の手を措けと二〇かくてサウルおよびサウルと共にある民皆呼はりて戰ひに至るにペリシテ人おのおの劍を以て互に相撃ちければその敗績はなはだ大なりき二一また此時よりまへにペリシテ人とともにありてペリシテ人と共に上りて陣に來るところのヘブル人もまた翻へりてサウルおよびヨナタンと共にあるイスラエル人に合せり二二又エフライムの山地にかくれたるイスラエル人皆ペリシテ人の逃るを聞てまた戰ひに出て之を追撃り二三是の如くヱホバ此日イスラエルをすくひたまふ而して戰はベテアベンにうつれり二四されど此日イスラエル人苦めり其はサウル民を誓はせて夕まで即ちわが敵に仇をむくゆるまでに食物を食ふ者は呪詛れんと言たればなり是故に民の中に食物を味ひし者なし二五爰に民みな林森に至に地の表に蜜あり二六即ち民森にいたりて蜜のながるるをみる然ども民誓を畏るれば誰も手を口につくる者なし二七然にヨナタンは其父が民をちかはせしを聞ざりければ手にある杖の末をのばして蜜にひたし手を口につけたり是に由て其目あきらかになりぬ二八時に民のひとり答て言けるは汝の父かたく民をちかはせて今日食物をくらふ人は呪詛はれんと言り是に由て民つかれたり二九ヨナタンいひけるはわが父國を煩せり請ふ我この蜜をすこし嘗しによりて如何にわが目の明かになりしかを見よ三〇ましてや民今日敵よりうばひし物を十分に食しならばペリシテ人をころすこと更におほかるべきにあらずや三一イスラ

エル人かの日ペリシテ人を撃てミクマシよりアヤロンにいたる而して民はなはだ疲たり三二是において民劫掠物に走かかり羊と牛と犢とを取りて之を地のうへにころし血のままに之をくらふ三三人々サウルにつげていひけるは民肉を血のままに食ひて罪をヱホバにをかすとサウルいひけるは汝ら背けり直ちにわがもとに大石をまろばしきたれ三四サウルまたいひけるは汝らわかれて民のうちにいりていへ人各其牛と各其羊をわがもとに引ききたり此處にてころしくらへ血のままにくらひて罪をヱホバに犯すなかれと此において民おのおのこの夜其牛を手にひききたりて之をかしこにころせり三五しかしてサウル、ヱホバに一つの壇をきづく是はサウルのヱホバに壇を築ける始なり三六斯てサウルいひけるは我ら夜のうちにペリシテ人を追くだり夜明までかれらを掠めて一人をも殘すまじ皆いひけるは凡て汝の目に善とみゆる所をなせと時に祭司いひけるは我ら此にちかより神にもとめんと三七サウル神に我ペリシテ人をおひくだるべきか汝かれらをイスラエルの手にわたしたまふやと問けれど此日はこたへたまはざりき三八是においてサウルいひけるは民の長たちよ皆此にちかよれ汝らみて今日のこの罪のいづくにあるを知れ三九イスラエルを救ひたまへるヱホバはいく假令わが子ヨナタンにもあれ必ず死なざるべからずとされど民のうち一人もこれにこたへざりき四〇サウル、イスラエルの人々にいひけるはなんぢらは彼處にをれ我とわが子ヨナタンは此處にをらんと民いひけるは汝の目によしとみゆるところをなせ四一サウル、イスラエルの神ヱホバにいひけるはねがはくは眞實をしめしたまへとかくてヨナタンとサウル籤にあたり民はのがれたり四二サウルいひけるは我とわが子のあひだの鬮を掣けと即ちヨナタンこれにあたれり四三サウル、ヨナタンにいひけるは汝がなせしところを我に告よヨナタンつげていひけるは我は只わが手の杖の末をもて少許の蜜をなめしのみなるが我しなざるをえず四四サウルこたへけるは神かくなしまたかさねてかくなしたまへヨナタンよ汝死ざるべからず四五民サウルにいひけるはイスラエルの中に此大なるすくひをなせるヨナタン死ぬべけんや決めてしからずヱホバは生くヨナタンの髮の毛ひとすぢも地におつべからず其はかれ神とともに今日はたらきたればなりとかく民ヨナタンをすくひて死なざらしむ四六サウル、ペリシテ人を追ことを息てのぼりぬペリシテ人其國にかへれり四七かくてサウル、イスラエルの王の位につきて四方の敵を攻む即ちモアブ、アンモンの子孫エドム、ゾバの王たちおよびペリシテ人をせめけるに凡てむかふところにて勝利を得たり四八サウル力をえアマレク人をうちてイスラエルを其劫掠人の手よりすくひいだせり四九サウルの男子はヨナタン、ヱスイおよびマルキシユアなり其二人の女子の名は姉はメラブといひ妹はミカルといふ五〇サウルの妻の名はアヒノアムといひてアヒマアズの女子なり其軍の長の名はアブネルといひてサウルの叔父なるネルの子なり五一

サウルの父キシとアブネルの父ネルはアビエルの子なり五二サウルの一生のあひだ恒にペリシテ人と烈しき戰ありサウルは力ある人または勇ある人を見るごとにこれをかかへたり

第一五章一 茲にサムエル、サウルにいひけるはヱホバ我をつかはし汝に膏を沃ぎて其民イスラエルの王となさしめたりさればヱホバの言の聲をきけ二 萬軍のヱホバかくいひたまふ我アマレクがイスラエルになせし事すなはちエジプトよりのぼれる時其途を遮りしをかへりみる三 今ゆきてアマレクを撃ち其有る物をことごとく滅しつくし彼らを憐むなかれ男 女童稚哺乳兒牛羊駱駝驢馬を皆殺せ四 サウル民をよびあつめてこれをテライムに核ふ歩兵二十萬ユダの人一萬あり五 しかしてサウル、アマレクの邑にいたりて谷に兵を伏たり六 サウル、ケニ人にいひけるは汝らゆきてさりアマレク人をはなれくだるべし恐らくはかれらとともに汝らをほろぼすにいたらんイスラエルの子孫のエジプトよりのぼれる時汝らこれに恩みをほどこしたりと即ちケニ人アマレク人をはなれてさりぬ七 サウル、アマレク人をうちてハビラよりエジプトの東面なるシユルにいたる八 サウル、アマレク人の王アガグを生擒り刃をもて其民をことごとくほろぼせり九 然ども、サウルと民アガグをゆるしまた羊と牛の最も嘉きもの及び肥たる物並に羔と凡て善き物を殘して之をほろぼしつくすをこのまず但惡き弱き物をほろぼしつくせり一〇 時にヱホバの言サムエルにのぞみていはく一一 我サウルを王となせしを悔ゆ其は彼背きて我にしたがはずわが命をおこなはざればなりとサムエル憂て終夜ヱホバによばはれり一二 かくてサムエル、サウルにあはんとて夙く起きけるにサムエルにつぐるものありていふサウル、カルメルにいたり勝利の表を立て轉り進みてギルガルにくだれりと一三 サムエル、サウルの許に至りければサウルこれにいひけるは汝がヱホバより福祉を得んことをねがふ我ヱホバの命を行へりと一四 サムエルいひけるは然らばわが耳にいる此羊の聲およびわがきく牛のこゑは何ぞや一五 サウルいひけるは人々これをアマレク人のところより引きたれり其は民汝の神ヱホバにささげんために羊と牛の最も嘉きものをのこせばなり其ほかは我らほろぼしつくせり一六 サムエル、サウルにいけるは止まれ昨夜ヱホバの我にかたりたまひしことを汝につげんサウルいひけるはいへ一七 サムエルいひけるはさきに汝が微き者とみづから憶へる時に爾イスラエルの支派の長となりしに非ずや即ちヱホバ汝に膏を注いでイスラエルの王となせり一八 ヱホバ汝を途に遣はしていひたまはく往て惡人なるアマレク人をほろぼし其盡るまで戰へよと一九 何故に汝ヱホバの言をきかずして敵の所有物にはせかかりヱホバの目のまへに惡をなせしや二〇 サウル、サムエルにひけるは我誠にヱホバの言にしたがひてヱホバのつかはしたまふ途にゆきアマレクの王アガグを執きたりアマレクをほろぼしつくせり二一 ただ民其ほろぼしつくすべき物の最初としてギルガルにて汝の神ヱホバ

にささげんとて敵の物の中より羊と牛をとれり 二二 サムエルいひけるはヱホバはその言にしたがふ事を善したまふごとく燔祭と犠牲を善したまふや夫れ順ふ事は犠牲にまさり聽く事は牡羔の脂にまさるなり 二三 其は違逆は魔術の罪のごとく抗戻は虚しき物につかふる如く偶像につかふるがごとし汝ヱホバの言を棄たるによりヱホバもまた汝をすてて王たらざらしめたまふ 二四 サウル、サムエルにいひけるに我ヱホバの命と汝の言をやぶりて罪ををかしたり是は民をおそれて其言にしたがひたるによりてなり 二五 されば今ねがはくはわがつみをゆるし我とともにかへりて我をしてヱホバを拝することをえさしめよ 二六 サムエル、サウルにいひけるは我汝とともにかへらじ汝ヱホバの言を棄たるによりヱホバ汝をすててイスラエルに王たらしめたまはざればなり 二七 サムエル去らんとて振還しときサウルその明衣の裾を捉へしかば裂たり 二八 サムエルかれにいひけるは今日ヱホバ、イスラエルの國を裂て汝よりはなし汝の隣なる汝より善きものにこれをあたへたまふ 二九 またイスラエルの能力たる者は誑らず悔ず其はかれは人にあらざればくゆることなし 三〇 サウルいひけるは我罪をかしたれどねがはくはわが民の長老のまへおよびイスラエルのまへにて我をたふとみて我とともにかへり我をして汝の神ヱホバを拝むことをえさしめよ 三一 ここにおいてサムエル、サウルにしたがひてかへるしかしてサウル、ヱホバを拝む 三二 時にサムエルいひけるは汝らわが許にアマレクの王アガグをひききたれとアガグ喜ばしげにサムエルの許にきたりアガグいひけるは死の苦みは必ず過さりぬ 三三 サムエルいひけるに汝の劍はおほくの婦人を子なき者となせりかくのごとく汝の母は婦人の中の最も子なき者となるべしとサムエル、ギルガルにてヱホバのまへにおいてアガグを斬り 三四 かくてサムエルはラマにゆきサウルはサウルのギベアにのぼりてその家にいたる 三五 サムエル其しぬる日までふたたびきたりてサウルをみざりきしかれどもサムエル、サウルのためにかなしめりまたヱホバはサウルをイスラエルの王となせしを悔たまへり

第一六章 一 爰にヱホバ、サムエルにいひたまひけるは我すでにサウルを棄てイスラエルに王たらしめざるに汝いつまでかれのために歎くや汝の角に膏油を滿してゆけ我汝をベテレヘム人ヱサイの許につかはさん其は我其子の中にひとりの王を尋ねえたればなり 二 サムエルいひけるは我いかで往くことをえんサウル聞て我をころさんヱホバいひたまひけるは汝一犢を携へゆきて言へヱホバに犠牲をささげんために來ると 三 しかしてヱサイを犠牲の場によべ我汝が爲すべき事をしめさん我汝に告るところの人に膏をそそぐ可し 四 サムエル、ヱホバの語たまひしごとくなしてベテレヘムにいたる邑の長老おそれて之をむかへいひけるは汝平康なる事のためにきたるや 五 サムエルいひけるは平康なることのためなり我はヱホバに犠牲をささげんとてきたる汝ら身をきよめて我とともに犠牲の場にきたれと斯てヱサ

イと其諸子を潔めて犠牲の場によびきたる六かれらが至れる時サムエル、エリアブを見ておもへらくヱホバの膏そそぐものは必ず此人ならんと七しかるにヱホバ、サムエルにいひたまひけるは其容貌と身長を觀るなかれ我すでにかれをすてたりわが視るところは人に異なり人は外の貌を見ヱホバは心をみるなり八ヱサイ、ヘアビナダブをよびてサムエルのまへを過しむサムエルいひけるは此人もまたヱホバ擇みたまはず九ヱサイ、シヤンマを過しむサムエルいひけるは此人もまたヱホバえらみたまはず一〇ヱサイ其七人の子をしてサムエルの前をすぎしむサムエル、ヱサイにいふヱホバ是等をえらみたまはず一一サムエル、ヱサイにいひけるは汝の男子は皆此にをるやヱサイいひけるは尚季子のこれり彼は羊を牧をるなりとサムエル、ヱサイにいひけるは彼を迎へきたらしめよかれが此にいたるまでは我ら食に就かざるべし一二是において人をつかはしてかれをつれきたらしむ其人色赤く目美しくして其貌麗しヱホバいひたまひけるは起てこれにあぶらを沃げ是其人なり一三サムエル膏の角をとりて其兄弟の中にてこれに膏をそそげり此日よりのちヱホバの靈ダビデにのぞむサムエルはたちてラマにゆけり一四かくてヱホバの靈サウルをはなれヱホバより來る惡鬼これを惱せり一五サウルの臣僕これにいひけるは視よ神より來れる惡鬼汝をなやます一六ねがはくはわれらの主汝のまへにつかふる臣僕に命じて善く琴を鼓く者一人を求めしめよ神よりきたれる惡鬼汝に臨む時彼手をもて琴を鼓て汝いゆることをえん一七サウル臣僕にいひけるはわがために巧に鼓琴者をたづねてわがもとにつれきたれ一八時に一人の少者こたへていひけるは我ベテレヘム人ヱサイの子を見しが琴に巧にしてまた豪氣して善くたたかふ辯舌さはやかなる美しき人なりかつヱホバこれとともにいます一九サウルすなはち使者をヱサイにつかはしていひけるは羊をかふ汝の子ダビデをわがもとに遣はせと二〇ヱサイすなはち驢馬にパンを負せ一嚢の酒と山羊の羔を執りてこれを其子ダビデの手によりてサウルにおくれり二一ダビデ、サウルの許にいたりて其まへに事ふサウル大にこれを愛し其武器を執る者となす二二サウル人をヱサイにつかはしていひけるはねがはくはダビデをしてわが前に事へしめよ彼はわが心にかなへりと二三神より出たる惡鬼サウルに臨めるときダビデ琴を執り手をもてこれを彈にサウル慰さみて愈え惡鬼かれをはなる

第一七章一爰にペリシテ人其軍を集めて戰はんとしユダに屬するシヨコにあつまりシヨコとアゼカの間なるバスダミムに陣をとる二サウルとイスラエルの人々集まりてエラの谷に陣をとりペリシテ人にむかひて軍の陣列をたつ三ペリシテ人は此方の山にたちイスラエルは彼方の山にたつ谷は其あひだにあり四時にペリシテ人の陣よりガテのゴリアテと名くる挑戰者いできたる其身の長六キユビト半五首に銅の盔を戴き身に鱗綴の鎧甲を着たり其よろひの銅のおもさは五千シケルなり六また脛

には銅の脛當を着け肩の間に銅の矛戟を負ふ七其槍の柄は機の梁のごとく槍の鋒刃の鐵は六百シケルなり楯を執る者其前にゆく八ゴリアテ立てイスラエルの諸行伍によばはり云けるは汝らはなんぞ陣列をなして出きたるや我はペリシテ人にして汝らはサウルの臣下にあらずや汝ら一人をえらみて我ところにくだせ九其人もし我とたたかひて我をころすことをえば我ら汝らの臣僕とならんされど若し我かちてこれを殺さば汝ら我らの僕となりて我らに事ふ可し一〇かくて此ペリシテ人いひけるは我今日イスラエルの諸行伍を挑む一人をいだして我と戰はしめよと一一サウルおよびイスラエルみなペリシテ人のこの言を聞き驚きて大に懼れたり一二抑ダビデはかのベテレヘムユダのエフラタ人ヱサイとなづくる者の子なり此人八人の子ありしがサウルの世には年邁みてすでに老たり一三ヱサイの長子三人ゆきてサウルにしたがひて戰爭にいづ其戰にいでし三人の子の名は長をエリアブといひ次をアビナダブといひ第三をシャンマといふ一四ダビデは季子にして其兄三人はサウルにしたがへり一五ダビデはサウルに往來してベテレヘムにて其父の羊を牧ふ一六彼ペリシテ人四十日のあひだ朝夕近づきて前にたてり一七時にヱサイ其子ダビデにいひけるは今汝の兄のために此烘麥一斗と此十のパンを取りて陣營にをる兄のところにいそぎゆけ一八また此十の乾酪をとりて其千夫の長におくり兄の安否を視て其返事をもちきたれと一九サウルと彼等およびイスラエルの人は皆ペリシテ人とたたかひてエラの谷にありき二〇ダビデ朝夙くおきて羊をひとりの牧者にあづけヱサイの命ぜしごとく携へゆきて車營にいたるに軍勢いでて行伍をなし鯨波をあげたり二一しかしてイスラエルとペリシテ人陣列をたてて行伍を行伍に相むかはせたり二二ダビデ其荷をおろして荷をまもる者の手にわたし行伍の中にはせゆきて兄の安否を問ふ二三ダビデ彼等と倶に語れる時視よペリシテ人の行伍よりガテのペリシテのゴリアテとなづくる彼の挑戰者のぼりきたり前のことばのごとく言しかばダビデ之を聞けり二四イスラエルの人其人を見て皆逃て之をはなれ痛く懼れたり二五イスラエルの人いひけるは汝らこののぼり來る人を見しや誠にイスラエルを挑んとて上りきたるなり彼をころす人は王大なる富を以てこれをとまし其女子をこれにあたへて其父の家にはイスラエルの中にて租税をまぬかれしめん二六ダビデ其傍にたてる人々にかたりていひけるは此ペリシテ人をころしイスラエルの恥辱を雪ぐ人には如何なることをなすや此割禮なきペリシテ人は誰なればか活る神の軍を挑む二七民まへのごとく答へていひけるはかれを殺す人には斯のごとくせらるべしと二八兄エリアブ、ダビデが人々とかたるを聞しかばエリアブ、ダビデにむかひて怒りを發しいひけるは汝なにのために此に下りしや彼の野にあるわづかの羊を誰にあづけしや我汝の傲慢と惡き心を知る其は汝戰爭を見んとて下ればなり二九ダビデいひけるは我今なにをなしたるや只一言にあ

らずやと三〇又ふりむきて他の人にむかひ前のごとく語れるに民まへのごとく答たり三一人々ダビデが語れる言をききてこれをサウルのまへにつげければサウルかれを召す三二ダビデ、サウルにいひけるは人々かれがために氣をおとすべからず僕ゆきてかのペリシテ人とたたかはん三三サウル、ダビデにいひけるは汝はかのペリシテ人をむかへてたたかふに勝ず其は汝は少年なるにかれは若き時よりの戰士なればなり三四ダビデ、サウルにいひけるは僕さきに父の羊を牧るに獅子と熊と來りて其群の羔を取たれば三五其後をおひて之を搏ち羔を其口より援ひいだせりしかして其獸我に猛りかかりたれば其鬚をとらへてこれを撃ちころせり三六僕は既に獅子と熊とを殺せり此割禮なきペリシテ人活る神の軍をいどみたれば亦かの獸の一のごとくなるべし三七ダビデまたいひけるはヱホバ我を獅子の爪と熊の爪より援ひいだしたまひたれば此ペリシテ人の手よりも援ひいだしたまはんとサウル、ダビデにいふ往けねがはくはヱホバ汝とともにいませ三八是においてサウルおのれの戎衣をダビデに衣せ銅の盔を其首にかむらせ亦鱗綴の鎧をこれにきせたり三九ダビデ戎衣のうへに劍を佩て往かんことを試む未だ驗せしことなければなりしかしてダビデ、サウルにいひけるは我いまだ驗せしことなければ是を衣ては往くあたはずと四〇ダビデこれを脱ぎすて手に杖をとり谿間より五の光滑なる石を拾ひて之を其持てる牧羊者の具なる袋に容れ手に投石索を執りて彼ペリシテ人にちかづく四一ペリシテ人進みきてダビデに近づけり楯を執るもの其まへにあり四二ペリシテ人環視てダビデを見て之を藐視る其は少くして赤くまた美しき貌なればなり四三ペリシテ人ダビデにいひけるは汝杖を持てきたる我豈犬ならんやとペリシテ人其神の名をもってダビデを呪詛ふ四四しかしてペリシテ人ダビデにいひけるは我がもとに來れ汝の肉を空の鳥と野の獸にあたへんと四五ダビデ、ペリシテ人にいひけるは汝は劍と槍と矛戟をもて我にきたる然ど我は萬軍のヱホバの名すなはち汝が搦みたるイスラエルの軍の神の名をもて汝にゆく四六今日ヱホバ汝をわが手に付したまはんわれ汝をうちて汝の首級を取りペリシテ人の軍勢の尸體を今日空の鳥と地の野獸にあたへて全地をしてイスラエルに神あることをしらしめん四七且又この群衆みなヱホバは救ふに劍と槍を用ひたまはざることをしるにいたらん其は戰はヱホバによれば汝らを我らの手にわたしたまはんと四八ペリシテ人すなはち立あがり進みちかづきてダビデをむかへしかばダビデいそぎ陣にはせゆきてペリシテ人をむかふ四九ダビデ手を嚢にいれて其中より一つの石をとり投てペリシテ人の額を撃ければ石其額に突きいりて俯伏に地にたふれたり五〇かくダビデ投石索と石をもてペリシテ人にかちペリシテ人をうちて之をころせり然どダビデの手には劍なかりしかば五一ダビデはしりてペリシテ人の上にのり其劍を取て之を鞘より抜きはなしこれをもて彼をころし其首級を斬りたり爰にペリシテの

人々其勇士の死るを見てにげしかば五二イスラエルとユダの人おこり喊呼をあげてペリシテ人をおひガテの入口およびエクロンの門にいたるペリシテ人の負傷人シヤライムの路に仆れてガテおよびエクロンにおよぶ五三イスラエルの子孫ペリシテ人をおふてかへり其陣を掠む五四ダビデかのペリシテ人の首を取りて之をエルサレムにたづさへきたりしが其甲冑はおのれの天幕におけり五五サウル、ダビデがペリシテ人にむかひて出るを見て軍長アブネルにいひけるはアブネル此少者はたれの子なるやアブネルいひけるは王汝の霊魂は生くわれしらざるなり五六王いひけるはこの少年はたれの子なるかを尋ねよ五七ダビデかのペリシテ人を殺してかへれる時アブネルこれをひきて其ペリシテ人の首級を手にもてるままサウルのまへにつれゆきければ五八サウルかれにいひけるは若き人よ汝はたれの子なるやダビデこたへけるは汝の僕ベテレヘム人ヱサイの子なり

第一八章一ダビデ、サウルにかたることを終しときヨナタンの心ダビデの心にむすびつきてヨナタンおのれの命のごとくダビデを愛せり二此日サウル、ダビデをかかへて父の家にかへらしめず三ヨナタンおのれの命のごとくダビデを愛せしかばヨナタンとダビデ契約をむすべり四ヨナタンおのれの衣たる明衣を脱てダビデにあたふ其戎衣および其刀も弓も帯もまたしかせり五ダビデは凡てサウルが遣はすところにいでゆきて功をあらはしければサウルかれを兵隊の長となせりしかしてダビデ民の心にかなひ又サウルの僕の心にもかなふ六衆人かへりきたれる時すなはちダビデ、ペリシテ人をころして還れる時婦女イスラエルの邑々よりいできたり鼓と祝歌と磬をもちて歌ひまひつつサウル王を迎ふ七婦人踊躍つつ相こたへて歌ひけるはサウルは千をうち殺しダビデは萬をうちころすと八サウル甚だ怒りこの言をよろこばずしていひけるは萬をダビデに歸し千をわれに歸す此上かれにあたふべき者は唯國のみと九サウルこの日より後ダビデを目がけたり一〇次の日神より出たる惡鬼サウルにのぞみてサウル家のなかにて預言したりしかばダビデ故のごとく手をもつて琴をひけり時にサウルの手に投槍ありければ一一サウル我ダビデを壁に刺とほさんといひて其投槍をさしあげしがダビデ二度身をかはしてサウルをさけたり一二ヱホバ、サウルをはなれてダビデと共にいますによりてサウル彼をおそれたり一三是故にサウル彼を遠ざけて千夫長となせりダビデすなはち民のまへに出入す一四またダビデすべて其ゆくところにて功をあらはし且ヱホバかれとともにいませり一五サウル、ダビデが大に功をあらはすをみてこれを恐れたり一六しかれどもイスラエルとユダの人はみなダビデを愛せり彼が其前に出入するによりてなり一七サウル、ダビデにいひけるはわれわが長女メラブを汝に妻さん汝ただわがために勇みヱホバの軍に戰ふべしと其はサウルわが手にてかれを殺さでペリシテ人の手にてころさんとおもひたればなり一八ダビデ、サウルにいひけるは我は誰ぞわが命

はなんぞわが父の家はイスラエルにおいて何なる者ぞや我いかでか王の婿となるべけんと一九然るにサウルの女子メラブはダビデに嫁ぐべき時におよびてメホラ人アデリエルに妻されたり二〇サウルの女ミカル、ダビデを愛す人これを王に告ければサウル其事を善しとせり二一サウルいひけるは我ミカルをかれにあたへて彼を謀る手段となしペリシテ人の手にてかれを殺さんといひてサウル、ダビデにいひけるは汝今日ふたたびわが婿となるべし二二かくてサウル其僕に命じけるは汝ら密にダビデにかたりて言へ視よ王汝を悦び王の僕みな汝を愛すされば汝王の婿となるべしと二三サウルの僕此言をダビデの耳に語りしかばダビデいひけるは王の婿となること汝らの目には易き事とみゆるや且われは貧しく賤しき者なりと二四サウルの僕サウルにつげてダビデ是の如くかたれりといへり二五サウルいひけるはなんぢらかくダビデにいへ王は聘禮を望まずただペリシテ人の陽皮一百をえて王の仇をむくいんことを望むと是はサウル、ダビデをペリシテ人の手に殞沒しめんとおもへるなり二六サウルの僕此言をダビデにつげしかばダビデは王の婿となることを善とせり斯て其時いまだ滿ざるあひだに二七ダビデ起て其從者とともにゆきペリシテ人二百人をころして其陽皮をたづさへきたり之を悉く王にささげて王の婿とならんとすサウル乃はち其女ミカルをダビデに妻せたり二八サウル見てヱホバのダビデとともにいますを知りぬまたサウルの女ミカルはダビデを愛せり二九サウルさらにますますダビデを恐れサウル一生のあひだダビデの敵となれり三〇爰にペリシテ人の諸伯攻きたりしがダビデかれらが攻めきたるごとにサウルの諸の臣僕よりは多の功をたてしかば其名はなはだ尊まる

第一九章一サウル其子ヨナタンおよび諸の臣僕にダビデをころさんとすることを語れり二されどサウルの子ヨナタン深くダビデを愛せしかばヨナタン、ダビデにつげていひけるはわが父サウル汝をころさんことを求むこのゆゑに今ねがはくは汝翌朝謹愼で潜みをりて身を隱せ三我いでゆきて汝がをる野にてわが父の傍にたちわが父とともに汝の事を談はんしかして我其事の如何なるを見て汝に告ぐべし四ヨナタン其父サウルに向ひダビデを褒揚ていひけるは願くは王其僕ダビデにむかひて罪ををかすなかれ彼は汝に罪ををかさずまた彼が汝になす行爲ははなはだ善し五またかれは生命をかけてかのペリシテ人をころしたりしかしてヱホバ、イスラエルの人々のためにおほいなる救をほどこしたまふ汝見てよろこべりしかるに何ぞゆゑなくしてダビデをころし無辜者の血をながして罪ををかさんとするや六サウル、ヨナタンの言を聽いれサウル誓ひけるはヱホバはいくわれかならずかれをころさじ七ヨナタン、ダビデをよびてヨナタン其事をみなダビデにつげ遂にダビデをサウルの許につれきたりければダビデさきのごとくサウルの前にをる八爰に再び戰爭おこりぬダビデすなはちいでてペリシテ人とたたかひ大に

かれらを殺せしかばかれら其まへを逃げされり九サウル手に投槍を執て室に坐する時ヱホバより出たる惡鬼これにのりうつれり其時ダビデ乃ち手をもて琴を弾く一〇サウル投槍をもてダビデを壁に刺とほさんとしたりしがダビデ、サウルのまへを避ければ投槍を壁に衝たてたりダビデ其夜逃さりぬ一一サウル使者をダビデの家につかはしてかれを守らしめ朝におよびてかれをころさしめんとすダビデの妻ミカル、ダビデにつげていひけるは若し今夜爾の命を援ずば明朝汝は殺されんと一二ミカル即ち牖よりダビデを縋おろしければ往て逃されり一三斯てミカル像をとりて其牀に置き山羊の毛の編物を其頭におき衣服をもて之をおほへり一四サウル、ダビデを執ふる使者をつかはしければミカルいふかれは疾ありと一五サウル使者をつかはしダビデを見させんとていひけるはかれを牀のまま我にたづさきたれ我これをころさん一六使者いりて見たるに牀には像ありて其頭に山羊の毛の編物ありき一七サウル、ミカルにいひけるはなんぞかく我をあざむきてわが敵を逃しやりしやミカル、サウルにこたへけるは彼我にいへり我をはなちてさらしめよ然らずば我汝をころさんと一八ダビデにげさりてラマにゆきサムエルの許にいたりてサウルがおのれになせしことをことごとくつげたりしかしてダビデとサムエルはゆきてナヨテにすめり一九サウルに告る者ありていふ視よダビデはラマのナヨテにをると二〇サウル乃ちダビデを執ふる使者をつかはせしが彼等預言者の一群の預言しをりてサムエルが其中の長となりて立てるを見るにおよび神の霊サウルの使者にのぞみて彼等もまた預言せり二一人々これを告ければサウル他の使者を遣しけるにかれらも亦預言せしかばサウルまた三度使者を遣はしけるが彼等もまた預言せり二二是においてサウルもまたラマにゆきけるがセクの大井にいたれる時問ていひけるはサムエルとダビデは何處にをるや答ていふラマのナヨテにをると二三サウルかしこにゆきてラマのナヨテにいたりけるに神の霊また彼にのぞみて彼ラマのナヨテにいたるまで歩きつつ預言せり二四彼もまた其衣服をぬぎすて同くサムエルのまへに預言し其一日一夜裸體にて仆臥たり是故に人々サウルもまた預言者のうちにあるかといふ

第二〇章一ダビデ、ラマのナヨテより逃きたりてヨナタンにいひけるは我何をなし何のあしき事あり汝の父のまへに何の罪を得てか彼わが命を求むる二ヨナタンかれにいひけるは汝決て殺さるることあらじ視よわが父は事の大なるも小なるも我につげずしてなすことなしわが父なんぞこの事を我にかくさんやこの事しからず三ダビデまた誓ひていひけるは汝の父必ずわが汝のまへに恩惠をうるを知る是をもてかれ思へらく恐らくはヨナタン悲むべければこの事をかれにしらしむべからずとしかれどもヱホバはいくまたなんぢの霊魂はいくわれは死をさること只一歩のみ四ヨナタン、ダビデにいひけるはなんぢの心なにをねがふか我爾のために之をなさんと五ダビデ、ヨナタンにいひ

けるは明日は月朔なれば我王とともに食につかざるべからず然ども我をゆるして去らしめ三日の晩まで野に隱るることをえさしめよ六若汝の父まことに我をもとめなば其時言へダビデ切に其邑ベテレヘムにはせゆかんことを我に請り其は彼處に全家の歳祭あればなりと七彼もし善しといはば僕やすからんされど彼もし甚しく怒らば彼の害をくはへんと決しを知れ八汝ヱホバのまへに僕と契約をむすびたれば願くは僕に恩をほどこせ然ど若我に惡き事あらば汝自ら我をころせ何ぞ我を汝の父に引ゆくべけんや九ヨナタンいひけるは斯る事かならず汝にあらざれ我わが父の害を汝にくはへんと決るをしらば必ず之を汝につげん一〇ダビデ、ヨナタンにいひけるは若し汝の父荒々しく汝にこたふる時は誰か其事を我に告ぐべきや一一ヨナタン、ダビデにいひけるは來れ我ら野にいでゆかんと倶に野にいでゆけり一二しかしてヨナタン、ダビデにいひけるはイスラエルの神ヱホバよ明日か明後日の今ごろ我わが父を窺ひて事のダビデのために善きを見ながら人を汝に遣はして告しらさずばヱホバ、ヨナタンに斯なしまた重て斯くなしたまへ一三されど若しわが父汝に害をくはへんと欲せば我これを告げしらせて汝をにがし汝を安らかにさらしめん願くはヱホバわが父とともに坐せしごとく汝とともにいませ一四汝只わが生るあひだヱホバの恩を我にしめして死ざらしむるのみならず一五ヱホバがダビデの敵を悉く地の表より絶ちさりたまふ時にもまた汝わが家を永く汝の恩にはなれしむるなかれ一六かくヨナタン、ダビデの家と契約をむすぶヱホバ之に關てダビデの敵を討したまへり一七しかしてヨナタンふたたびダビデに誓はしむかれを愛すればなり即ちおのれの生命を愛するごとく彼を愛せり一八またヨナタン、ダビデにいひけるは明日は月朔なるが汝の座空かるべければ汝求めらるべし一九汝三日とどまりて速かに下り嘗てかの事の日に隱れたるところに至りてエゼルの石の傍に居るべし二〇我的を射るごとくして其石の側に三本の矢をはなたん二一しかしてゆきて矢をたづねよといひて僮子をつかはすべし我もし故に僮子に視よ矢は汝の此旁にあり其を取と曰ばなんぢきたるべしヱホバは生く汝安くして何もなかるべければなり二二されど若し我少年に視よ矢は汝の彼旁にありといはば汝さるべしヱホバ汝をさらしめたまふなり二三汝と我とかたれることについては願はくはヱホバ恒に汝と我との間にいませと二四ダビデ即ち野にかくれぬ偖月朔になりければ王坐して食に就く二五即ち王は常のごとく壁によりて座を占むヨナタン立あがりアブネル、サウルの側に坐すダビデの座はなむし二六されど其日にはサウル何をも曰ざりき其は何事か彼におこりしならん彼きよからず定て潔からずと思ひたればなり二七明日すなはち月の二日におよびてダビデの座なほ虚しサウル其子ヨナタンにいひけるは何ゆゑにヱサイの子は昨日も今日も食に來らざるや二八ヨナタン、サウルにこたへけるはダビデ切にベテレヘムにゆかんことを我にこひて曰け

るは二九ねがはくは我をゆるしてゆかしめよわが家邑にて祭をなすによりわが兄我にきたることを命ぜり故に我もし汝のまへにめぐみをえたるならばねがはくは我をゆるして去しめ兄弟をみることを得さしめよと是故にかれは王の席に來らざるなり三〇サウル、ヨナタンにむかひて怒りを發しかれにいひけるは汝は曲り且悖れる婦の子なり我あに汝がヱサイの子を簡みて汝の身をはづかしめまた汝の母の膚を辱しむることを知ざらんや三一ヱサイの子の此世にながらふるあひだは汝と汝の位固くたつを得ず是故に今人をつかはして彼をわが許に引きたれ彼は死ぬべき者なり三二ヨナタン父サウルに對へていひけるは彼なにによりて殺さるべきか何をなしたるやと三三ここにおいてサウル、ヨナタンを撃んとて投槍をさしあげたりヨナタンすなはち其父のダビデを殺さんと決しをしれり三四かくてヨナタン烈しく怒りて席を立ち月の二日には食をなさざりき其は其父のダビデをはづかしめしによりてダビデのために憂へたればなり三五翌朝ヨナタン一小童子を從がへダビデと約せし時刻に野にいでゆき三六童にいひけるは走りて我はなつ矢をたづねよと童子はしる時ヨナタン矢を彼のさきに發てり三七童子がヨナタンの發ちたる矢のところにいたれる時ヨナタン童子のうしろに呼はりていふ矢は汝のさきにあるにあらずや三八ヨナタンまた童子のうしろによばはりていひけるは速かにせよ急げ止まるなかれとヨナタンの童子矢をひろひあつめて其主人のもとにかへる三九されど童子は何をも知ざりき只ヨナタンとダビデ其事をしりたるのみ四〇かくてヨナタン其武器を童子に授ていひけるは往けこれを邑に携へよと四一童子すなはち往けり時にダビデ石の傍より立ちあがり地にふして三たび拜せりしかしてふたり互に接吻してたがひに哭くダビデ殊にはなはだし四二ヨナタン、ダビデにいひけるは安じて往け我ら二人ともにヱホバの名に誓ひて願くはヱホバ恒に我と汝のあひだに坐し我が子孫と汝の子孫のあひだにいませといへりとダビデすなはちたちて去るヨナタン邑にいりぬ

第二一章一ダビデ、ノブにゆきて祭司アヒメレクにいたるアヒメレク懼れてダビデを迎へこれにいひけるは汝なんぞ獨にして誰も汝とともならざるや二ダビデ祭司アヒメレクにいふ王我に一の事を命じて我にいふ我が汝を遣はすところの事およびわが汝に命じたる所については何をも人にしらするなかれと我某處に我少者を出おけり三いま何か汝の手にあるや我手に五のパンか或はなににてもある所を與よ四祭司ダビデに對ていひけるは常のパンはわが手になしされど若し少者婦女をだに愼みてありしならば聖きパンあるなりと五ダビデ祭司に對へていひけるは實にわがいでしより此三日は婦女われらにちかづかず且少者等の器は潔し又パンは常の物のごとし今日器に潔きパンあれば殊に然と六祭司かれに聖きパンを與たり其はかしこに供前のパンの外はパン无りければなり即ち其パンは下る日に熱

きパンをささげんとて之をヱホバのまへより取されるなり七其日かしこにサウルの僕一人留められてヱホバのまへにあり其名をドエグといふエドミ人にしてサウルの牧者の長なり八ダビデまたアヒメレクにいふ此に汝の手に槍か劍あらぬか王の事急なるによりて我は刀も武器も携へざりしと九祭司いひけるは汝がエラの谷にて殺したるペリシテ人ゴリアテの劍布に裹みてエポデの後にあり汝もし之をとらんとおもはば取れ此にはほかの劍なしダビデいひけるはそれにまさるものなし我にあたへよと一〇ダビデ其日サウルをおそれて立てガテの王アキシのところに逃げゆきぬ一一アキシの臣僕アキシに曰けるは此は其地の王ダビデにあらずや人々舞踏のうちにこの人のことを歌ひあひてサウルは千をうちころしダビデは萬をうちころすといひしにあらずや一二ダビデこの言を心に藏め深くガテの王アキシをおそれ一三人々のまへに佯て其氣を變じ執はれて狂人のさまをなし門の扉に書き其涎沫を鬚にながれくだらしむ一四アキシ僕に云けるは汝らの見るごとく此人は狂人なり何ぞかれを我にひき來るや一五我なんぞ狂人を須ひんや汝ら此者を引きたりてわがまへに狂しめんとするや此者なんぞ吾が家にいるべけんや

第二二章 一是故にダビデ其處をいでたちてアドラムの洞穴にのがる其兄弟および父の家みな聞きおよびて彼處にくだり彼の許に至る二また惱める人負債者心に嫌ぬ者皆かれの許にあつまりて彼其長となれりかれとともにある者はおよそ四百人なり三ダビデ其處よりモアブのミヅパにいたりモアブの王にいひけるは神の我をいかがなしたまふかを知るまでねがはくはわが父母をして出て汝らとともにをらしめよと四遂にかれらをモアブの王のまへにつれきたるかれらはダビデが要害にをる間王とともにありき五預言者ガデ、ダビデに云けるは要害に住るなかれゆきてユダの地にいたれとダビデゆきてハレテの叢林にいたる六爰にサウル、ダビデおよびかれとともなる人々の見露されしを聞けり時にサウルはギベアにあり手に槍を執て岡巒の柳の樹の下にをり臣僕ども皆其傍にたてり七サウル側にたてる僕にいひけるは汝らベニヤミン人聞けよヱサイの子汝らおのおのに田と葡萄園をあたへ汝らおのおのを千夫長百夫長となすことあらんや八汝ら皆我に敵して謀り一人もわが子のヱサイの子と契約を結びしを我につげしらする者なしまた汝ら一人もわがために憂へずわが子が今日のごとくわが僕をはげまして道に伏て我をおそはしめんとするを我につげしらす者なし九時にエドミ人ドエグ、サウルの僕の中にたち居りしが答へていひけるは我ヱサイの子のノブにゆきてアヒトブの子アヒメレクに至るを見しが一〇アヒメレクかれのためにヱホバに問ひまたかれに食物をあたへペリシテ人ゴリアテの劍をあたへたりと一一王すなはち人をつかはしてアヒトブの子祭司アヒメレクならびにその父の家すなはちノブの祭司たる人々を召したればみな王の許にきたる一二サウルいひけるは汝アヒトブの子聽よ答へける

は主よ我ここにあり一三サウルかれにいふ汝なんぞヱサイの子とともに我に敵して謀り汝かれにパンと劍をあたへ彼が爲に神に問ひかれをして今日のごとく道に伏て我をおそはしめんとするや一四アヒメレク王にこたへていひけるは汝の臣僕のうち誰かダビデのごとく忠義なる彼は王の婿にして親しく汝に見ゆるもの汝の家に尊まるる者にあらずや一五我其時かれのために神に問ことを始めしや決てしからずねがはくは王僕およびわが父の全家に何をも歸するなかれ其は僕この事については多少をいはず何をもしらざればなり一六王いひけるはアヒメレク汝必ず死ぬべし汝の父の全家もしかりと一七王旁にたてる前驅の人々にいひけるは身をひるがへしてヱホバの祭司を殺せかれらもダビデと力を合するが故またかれらダビデの逃たるをしりて我に告ざりし故なりと然ど王の僕手をいだしてヱホバの祭司を撃ことを好まざれば一八王ドエグにいふ汝身をひるがへして祭司をころせとエドミ人ドエグ乃ち身をひるがへして祭司をうち其日布のエポデを衣たる者八十五人をころせり一九かれまた刃を以て祭司の邑ノブを撃ち刃をもて男 女童稚嬰孩牛驢馬羊を殺せり二〇アヒトブの子アヒメレクの一人の子アビヤタルとなづくる者逃れてダビデにはしり從がふ二一アビヤタル、サウルがヱホバの祭司を殺したることをダビデに告しかば二二ダビデ、アビヤタルにいふかの日エドミ人ドエグ彼處にをりしかば我かれが必らずサウルにつげんことを知れり我汝の父の家の人々の生命を喪へる源由となれり二三汝我とともに居れ懼るるなかれわが生命を求むる者汝の生命をも求むるなり汝我とともにあらば安全なるべし

第二三章一人々ダビデにつげていひけるは視よペリシテ人ケイラを攻め穀場を掠むと二ダビデ、ヱホバに問ていひけるは我ゆきて是のペリシテ人を撃つべきかとヱホバ、ダビデにいひたまひけるは往てペリシテ人をうちてケイラを救へ三ダビデの從者かれにいひけるは視よわれら此にユダにあるすら尚ほおそる況やケイラにゆきてペリシテ人の軍にあたるをやと四ダビデふたたびヱホバに問ひけるにヱホバ答ていひたまひけるは起てケイラにくだれ我ペリシテ人を汝の手にわたすべし五ダビデとその從者ケイラにゆきてペリシテ人とたたかひ彼らの家畜を奪ひとり大にかれらをうちころせりかくダビデ、ケイラの居民をすくふ六アヒメレクの子アビヤタル、ケイラにのがれてダビデにいたれる時其手にエポデを執てくだれり七爰にダビデのケイラに至れる事サウルに聞えければサウルいふ神かれを我手にわたしたまへり其はかれ門あり關ある邑にいりたれば閉こめられればなり八サウルすなはち民をことごとく軍によびあつめてケイラにくだりてダビデと其從者を圍んとす九ダビデはサウルのおのれを害せんと謀るを知りて祭司アビヤタルにいひけるはエポデを持ちきたれと一〇しかしてダビデいひけるはイスラエルの神ヱホバよ僕たしかにサウルがケイラにきたりてわがために此

邑をほろぼさんと求むるを聞り一一ケイラの人々我をかれの手にわたすならんか僕のきけるごとくサウル下るならんかイスラエルの神ヱホバよ請ふ僕につげたまへとヱホバいひたまひけるは彼下るべしと一二ダビデいひけるはケイラの人々われとわが從者をサウルの手にわたすならんかヱホバいひたまひけるは彼らわたすべし一三是においてダビデと其六百人ばかりの從者起てケイラをいで其ゆきうる所にゆけりダビデのケイラをにげはなれしことサウルに聞えければサウルいづることを止たり一四ダビデは曠野にをり要害の地にをりまたジフの野にある山に居るサウル恒にかれを尋ねたれども神かれを其手にわたしたまはざりき一五ダビデ、サウルがおのれの生命を求めんために出たるを見る時にダビデはジフの野の叢林にをりしが一六サウルの子ヨナタンたちて叢林にいりてダビデにいたり神によりて其力を強うせしめたり一七即ちヨナタンかれにいひけるに懼るるなかれわが父サウルの手汝にとどくことあらじ汝はイスラエルの王とならん我は汝の次なるべし此事はわが父サウルもしれりと一八かくて彼ら二人ヱホバのまへに契約をむすびダビデは叢林にとどまりヨナタンは其家にかへれり一九時にジフ人ギベアにのぼりサウルの許にいたりていひけるはダビデは曠野の南にあるハキラの山の叢林の中なる要害に隱れて我らとともにをるにあらずや二〇今王汝のくだらんとする望のごとく下りたまへ我らはかれを王の手にわたさんと二一サウルいひけるは汝ら我をあはれめば願くは汝等ヱホバより福祉をえよ二二請ふゆきて尚ほ心を用ひ彼の踪跡ある處と誰がかれを見たるかを見きはめよ其は人我にかれが甚だ機巧く事を爲すを告たれば也二三されば汝ら彼が隱るる逃躱處を皆たしかに見きはめて再び我にきたれ我汝らとともにゆかん彼もし其地にあらば我ユダの郡中をあまねく尋ねて彼を獲んと二四かれらたちてサウルに先てジフにゆけりダビデと其從者は曠野の南のアラバにあるマオンの野にをる二五斯てサウルと其從者ゆきて彼を尋ぬ人々これをダビデに告ければダビデ巖を下てマオンの野にをるサウル之を聞てマオンの野に至てダビデを追ふ二六サウルは山の此旁に行ダビデと其從者は山の彼旁に行ダビデは周章てサウルの前を避んとしサウルと其從者はダビデと其從者を圍んで之を取んとす二七時に使者サウルに來て言けるはペリシテ人國をかす急ぎきたりたまへと二八故にサウル、ダビデを追ことを止てかへり往てペリシテ人にあたるここをもて人々その處をセラマレコテ（逃岩）となづく二九ダビデ其處よりのぼりてエンゲデの要害にをる

第二四章一サウル、ペリシテ人を追ふことをやめて還りし時人々かれにつげていひけるは視よダビデはエンゲデの野にありと二サウル、イスラエルの中より選みたる三千の人を率ゐゆきて野羊の巖にダビデと其從者を尋ぬ三途にて羊の棧にいたるに其處に洞穴ありサウル其足を掩んとていりぬ時にダビデと其從者洞の隅に居たり四ダビデの從者これにいひけるはヱホバが

汝に告て視よ我汝の敵を汝の手にわたし汝をして善と見るところを彼になさしめんといひたまひし日は今なりとダビデすなはち起てひそかにサウルの衣の裾をきれり五ダビデ、サウルの衣の裾をきりしによりて後ち其心みづから責む六ダビデ其從者にいひけるはヱホバの膏そそぎし者なるわが主にわが此事をなすをヱホバ禁じたまふかれはヱホバの膏そそぎし者なればかれに敵してわが手をのぶるは善らず七ダビデ此ことばをもって其從者を止めサウルに撃ちかかる事を容さずサウルたちて洞を出て其道にゆく八ダビデもまた後よりたちて洞をいでサウルのうしろに呼はりて我主王よといふサウル後をかへりみる時ダビデ地にふして拝す九ダビデ、サウルにいひけるは汝なんぞダビデ汝を害せん事を求むといふ人の言を聽くや一〇視よ今日汝の目ヱホバの汝を洞のうちにて今日わが手にわたしたまひしことを見たり人々我に汝をころさんことを勸めたれども我汝を惜め我いひけらくわが主はヱホバの膏そそぎし者なればこれに敵してわが手をのぶべからずと一一わが父よ視よわが手にある汝の衣の裾を見よわが汝の衣の裾をきりて汝を殺さざるを見ばわが手には惡も罪過もなきことを汝見て知るべし我汝に罪ををかせしことなし然るに汝わが生命をとらんとねらふ一二ヱホバ我と汝の間を審きたまはんヱホバわがために汝に報いたまふべし然どわが手は汝に加へざるべし一三古への諺にいふごとく惡は惡人よりいづされどわが手は汝にくはへざるべし一四イスラエルの王は誰を趕んとて出たるや汝たれを追ふや死たる犬をおひ一の蚤をおふなり一五ねがはくはヱホバ審判者となりて我と汝のあひだをさばきかつ見てわが訟を理し我を汝の手よりすくひいだしたまはんことを一六ダビデこれらの言をサウルに語りをへしときサウルいひけるはわが子ダビデよ是は汝の聲なるかとサウル聲をあげて哭きぬ一七しかしてダビデにいひけるは汝は我よりも正し我は汝に惡をむくゆるに汝は我に善をむくゆ一八汝今日いかに汝が我に善くなすかを明かにせりヱホバ我を爾の手にわたしたまひしに爾我をころさざりしなり一九人もし其敵にあはばこれを安らかに去しむべけんや爾が今日我になしたる事のためにヱホバ爾に善をむくいたまふべし二〇視よ我爾が必ず王とならんことを知りまたイスラエルの王國の爾の手によりて堅くたたんことをしる二一今爾ヱホバをさして我にわが後にてわが子孫を斷ずわが名をわが父の家に滅せざらんことを誓へと二二ダビデすなはちサウルにちかふ是においてサウルは家にかへりダビデと其從者は要害にのぼれり

第二五章 一爰にサムエル死にしかばイスラエル人皆あつまりて之をかなしみラマにあるその家にてこれを葬むれりダビデたちてバランの野にくだる二マオンに一箇の人あり其所有はカルメルにあり其人甚だ大なる者にして三千の羊と一千の山羊をもちしがカルメルにて羊の毛を剪り居たり三其人の名はナバルといひ其妻の名はアビガルといふアビガルは賢く顏美き婦なりさ

れど其夫は剛愎にして其爲すところ惡かりきかれはカレブの人なり**四**ダビデ野にありてナバルが其羊の毛を剪りをるを聞き**五**ダビデ十人の少者を遣はすダビデ其少者にいひけるはカルメルにのぼりナバルにいたりわが名をもてかれに安否をとひ**六**かくのごとくいへ願くは壽ながかれ爾平安なれ爾の家やすらかなれ爾が有ところの物みなやすらかなれ**七**我爾が羊毛を剪せをるを聞り爾の牧羊者は我らとともにありしが我らこれを害せざりきまたかれらがカルメルにありしあひだかれらの物何も失たることなし**八**爾の少者に問へかれら爾につげん願くは少者をして爾のまへに恩をえせしめよ我ら吉日に來る請ふ爾の手にあるところの物を爾の僕らおよび爾の子ダビデにあたへよ**九**ダビデの少者いたりダビデの名をもって是らのことばの如くナバルに語りてやめり**一〇**ナバル、ダビデの僕にこたへていひけるはダビデは誰なるヱサイの子は誰なる此頃は主人をすてて遁逃るる僕おほし**一一**我あにわがパンと水およびわが羊毛をきる者のために殺したる肉をとりて何處よりか知れざるところの人々にあたふべけんや**一二**ダビデの少者ふりかへりて其道に就き歸りきたりて此等の言のごとくダビデに告ぐ**一三**是においてダビデ其從者に爾らおのおの劍を帶よと言ければ各劍をおぶダビデもまた劍をおぶ而して四百人ばかりダビデにしたがひて上り二百人は輜重のところに止れり**一四**時にひとりの少者ナバルの妻アビガルに告ていひけるは視よダビデ野より使者をおくりて我らの主人を祝したるに主人かれらを詈れり**一五**されどかの人々はわれらに甚だ善くなし我らは害をかうむらず亦われら野にありし時かれらとともにをるあひだはなにをも失なはざりき**一六**我らが羊をかひて彼らとともにありしあひだ彼らは日夜われらの墻となれり**一七**されば爾今しりてなにをなさんかを考ふべし其はわれらの主人および主人の全家に定めて害きたるべければなり主人は邪魔なる者にして語ることをえずと**一八**アビガルいそぎパン二百酒の革嚢二既に調へたる羊五烘麥五セア乾葡萄百球乾無花果の團塊二百を取て驢馬にのせ**一九**其少者にいひけるは我先に進め視よ我爾らの後にゆくと然ど其夫ナバルには告げざりき**二〇**アビガル驢馬にのりて山の僻處にくだれる時視よダビデと其從者かれにむかひてくだりければかれ其人々にあふ**二一**ダビデかつていひけるは誠にわれ徒に此人の野にて有る物をみなまもりてその物をして何もうせざらしめたりかれは惡をもてわが善にむくゆ**二二**ねがはくは神ダビデの敵にかくなしまた重ねてかくなしたまへ明晨までに我はナバルに屬する總ての物の中ひとりの男をものこさざるべし**二三**アビガル、ダビデを視しとき急ぎ驢馬よりおりダビデのまへに地に俯して拜し**二四**其足もとにふしていひけるはわが主よ此咎を我に歸したまへ但し婢をして爾の耳にいふことを得さしめ婢のことばを聽たまへ**二五**ねがはくは我主この邪なる人ナバル（愚）の事を意に介むなかれ其はかれは其名の如くなればなりかれの名は

ナバルにしてかれは愚なりわれなんぢの婢はわが主のつかはせし少ものを見ざりき二六されぱわがしゆよヱホバはいくまたなんぢのたましひはいくヱホバなんぢのきたりて血をながしまた爾がみづから仇をむくゆるを阻めたまへりねがはくは爾の敵たるものおよびわが主に害をくはへんとする者はナバルのごとくなれ二七さて仕女がわが主にもちきたりしこの禮物をねがはくはわが主の足迹にあゆむ少者にたてまつらしめたまへ二八請ふ婢の過をゆるしたまへヱホバ必ずわが主のために堅き家を立たまはん是はわが主ヱホバの軍に戰ふにより又世にいでてよりこのかた爾の身に惡きこと見えざるによりてなり二九人たちて爾を追ひ爾の生命を求むれどもわが主の生命は爾の神ヱホバとともに生命の包裏の中に包みあり爾の敵の生命は投石器のうちより投すつる如くヱホバこれをなげすてたまはん三〇ヱホバその爾につきて語りたまひし諸の善き事をわが主になして爾をイスラエルの主宰に命じたまはん時にいたりて三一爾の故なくして血をながしたることも又わが主のみづから其仇をむくいし事も爾の憂となることなくまたわが主の心の責となることなかるべし但しヱホバのわが主に善くなしたまふ時にいたらばねがはくは婢を憶たまへ三二ダビデ、アビガルにいふ今日汝をつかはして我をむかへしめたまふイスラエルの神ヱホバは頌美べきかな三三また汝の智慧はほむべきかな又汝はほむべきかな汝今日わがきたりて血をながし自ら仇をむくゆるを止めたり三四わが汝を害するを阻めたまひしイスラエルの神ヱホバは生く誠にもし汝いそぎて我を來り迎ずば必ず翌朝までにナバルの所にひとりの男ものこらざりしならんと三五ダビデ、アビガルの携へきたりし物を其手より受てかれにいひけるは安かに汝の家にかへりのぼれ視よわれ汝の言をききいれて汝の顏を立たり三六かくてアビガル、ナバルにいたりて視にかれは家に酒宴を設け居たり王の酒宴のごとしナバルの心これがために樂みて甚だしく醉たればアビガル多少をいはず何をも翌朝までかれにつげざりき三七朝にいたりナバルの酒のさめたる時妻かれに是等の事をつげたるに彼の心そのうちに死て其身石のごとくなりぬ三八十日ばかりありてヱホバ、ナバルを撃ちたまひければ死り三九ダビデ、ナバルの死たるを聞ていひけるはヱホバは頌美べきかなヱホバわが蒙むりたる恥辱の訟を理してナバルにむくい僕を阻めて惡をおこなはざらしめたまふ其はヱホバ、ナバルの惡を其首に歸し賜へばなりと爰にダビデ、アビガルを妻にめとらんとて人を遣はしてこれとかたらはしむ四〇ダビデの僕カルメルにをるアビガルの許にいたりてこれにかたりいひけるはダビデ汝を妻にめとらんとて我らを汝に遣はすと四一アビガルたちて地にふして拜しいひけるは視よ婢はわが主の僕等の足を洗ふ仕女なりと四二アビガルいそぎたちて驢馬に乗り五人の侍女とともにダビデの使者にしたがひゆきてダビデの妻となる四三ダビデまたヱズレルのアヒノアムを娶れり彼ら二人ダビデの妻と

なる四四但しサウルはダビデの妻なりし其女ミカルをガリムの人なるライシの子パルテにあたへたり

第二六章一ジフ人ギベアにきたりサウルの許にいたりてひけるはダビデは曠野のまへなるハキラの山にかくれをるにあらずやと二サウルすなはち起ちジフの野にダビデを尋ねんとイスラエルの中より選みたる三千の人をしたがへてジフの野にくだる三サウルは曠野のまへなるハキラの山において路のほとりに陣を取るダビデは曠野に居てサウルのおのれをおふて曠野にきたるをさとりければ四ダビデ斥候を出してサウルの誠に來しをしれり五ここにおいてダビデたちてサウルの陣をとれるところにいたりサウルおよび其軍の長ネルの子アブネルの寢たるところを見たりすなはちサウルは車營の中に寢ぬ民其まはりに陣をはれり六ダビデ答へてヘテ人アヒメレクおよびゼルヤの子にしてヨアブの兄弟なるアビシヤイにいひけるは誰か我とともにサウルの陣にくだらんかとアビシヤイいふ我汝とともに下らん七ダビデとアビシヤイすなはち夜にいりて民の所にいたるに視よサウルは車營のうちに寢臥し其槍地にさして枕邊にありアブネルと民は其まはりに寢たり八アビシヤイ、ダビデにいひけるは神今日爾の敵を爾の手にわたしたまふ請ふいま我に槍をもてかれを一度地にさしとほさしめよ再びするにおよばじ九ダビデ、アビシヤイにいふ彼をころすなかれ誰かヱホバの膏そそぎし者に敵して其手をのべて罪なからんや一〇ダビデまたいひけるはヱホバは生くヱホバかれを撃たまはんあるひはその死ぬる日來らんあるひは戰ひにくだりて死うせん一一わがヱホバのあぶらそそぎしものに敵して手をのぶることはきはめて善らずヱホバ禁じたまふされどいま請ふ爾そのまくらもとの槍と水の瓶をとれしかして我らさりゆかんと一二ダビデ、サウルの枕邊より槍と水の瓶を取りてかれらさりゆきしが誰も見ず誰もしらず誰も目を醒さざりき其はかれら皆眠り居たればなり即ちヱホバかれらをふかく睡らしめたまふ一三かくてダビデは彼旁にわたりて遥に山の頂にたてり彼と此とのへだたり大なり一四ダビデ民とネルの子アブネルによばはりいひけるはアブネルよ爾こたへざるかアブネルこたへていふ王をよぶ爾はたれなるや一五ダビデ、アブネルにいひけるは爾は勇士ならずやイスラエルの中にて誰か爾に如ものあらんしかるに爾なんぞ爾の主なる王をまもらざるや民のひとり爾の主なる王を殺さんとていりぬ一六爾がなせる此事よからずヱホバは生くなんぢらの罪死にあたれり爾らヱホバの膏そそぎし爾らの主をまもらざればなり今王の槍と王の枕邊にありし水の瓶はいづくにあるかを見よ一七サウル、ダビデの聲をしりていひけるはわが子ダビデよ是は爾の聲なるかダビデいひけるは王わが主よわが聲なり一八ダビデまたいひけるはわが主なにゆゑに斯くその僕をおふや我なにをなせしや何の惡き事わが手にあるや一九王わが主よ請ふいま僕の言を聽きたまへ若しヱホバ爾を我に敵せしめたまふならばね

がはくはヱホバ禮物をうけたまへされど若し人ならばねがはくは其人々ヱホバのまへにのろはれよ其は彼等爾ゆきて他の神につかへよといひて今日我を追ひヱホバの産業に連なることをえざらしむるが故なり二〇ねがはくは我血をしてヱホバのまへをはなれて地におちしむるなかれそは人の山にて鷓鴣をおふがごとくイスラエルの王一の蚤をたづねにいでたればなり二一サウルいひけるは我罪ををかせりわが子ダビデよ歸れわが生命今日爾の目に寶と見なされたる故により我々かさねて爾に害を加へざるべし嗚呼われ愚なることをなして甚だしく過てり二二ダビデこたへていひけるは王よ槍を視よ請ひとりの少者をしてわたりてこれを取しめよ二三ねがはくはヱホバおのおのに其義と眞實とにしたがひて報いたまへ共はヱホバ今日爾をわが手にわたしたまひしに我ヱホバの受膏者に敵してわが手をのぶることをせざればなり二四 爾の生命を今日わがおもんぜしごとくねがはくはヱホバわが生命をおもんじて諸の艱難のうちより我をすくひいだしたまへ二五サウル、ダビデにいひけるはわが子ダビデよ爾はほむべきかな爾大なる事を爲さん亦かならず勝をえんとしかしてダビデは其道にさりサウルはおのれの所にかへれり

第二七章一 ダビデ心の中にいひけるは是のごとくば我早晩サウルの手にほろびん速にペリシテ人の地にのがるるにまさることあらず然らばサウルかさねて我をイスラエルの四方の境にたづぬることをやめて我かれの手をのがれんと二ダビデたちておのれとともな六百人のものとともにわたりてガテの王マオクの子アキシにいたる三ダビデと其從者ガテにてアキシとともに住ておのおの其家族とともにをるダビデはその二人の妻すなはちヱズレル人アヒノアムとカルメル人ナバルの妻なりしアビガルとともにあり四ダビデのガテににげしことサウルにきこえければサウルかさねてかれをたづねざりき五ここにダビデ、アキシにいひけるは我もし爾のまへに恩を得たるならばねがはくは郷里にある邑のうちにて一のところを我にあたへて其處にすむことを得さしめよ僕なんぞ爾とともに王城にすむべけんやと六アキシ其日チクラグをかれにあたへたり是故にチクラグは今日にいたるまでユダの王に屬す七タビデのペリシテ人の國にをりし日數は一年と四箇月なりき八ダビデ其從者と共にのぼりゲシユル人ゲゼリ人アマレク人を襲ふたり昔より是等はシユルにいたる地にすみてエジプトの地にまでおよべり九ダビデ其地をうちて男をも女をも生し存さず羊と牛と駱駝と衣服をとりて還りてアキシに至る一〇アキシいひけるは爾ら今日何地を襲ひしやダビデいひけるはユダの南とヱラメルの南とケニ人の南ををかせりと一一ダビデ男も女も生存らしめずして一人をもガテにひきゆかざりき其はダビデ恐くは彼らダビデかくなせりといひて我儕の事を告んといひたればなりダビデ、ペリシテ人の地にすめるあひだは其なすところ常にかくのごとくなりき一二アキ

シ、ダビデを信じていひけるは彼は其民イスラエルをして全くおのれを惡ましむされば永くわが僕となるべし

第二八章一 其頃ペリシテ人イスラエルと戰はんとて軍のために軍勢を集めたればアキシ、ダビデにいひけるは爾 明かにこれをしれ爾と爾の從者我とともに出て軍にくははるべし二 ダビデ、アキシにいひけるはされば爾 僕のなさんところをしるべしとアキシ、ダビデにさらば我 爾を永く我身をまもる者となさんといへり三 サムエルすでに死たればイスラエルみなこれをかなしみてこれをそのまちラマにはうむれりまたサウルは口寄者と卜筮師を其地よりおひいだせり四 ペリシテ人あつまりきたりてシユネムに陣をとりければサウル、イスラエルを悉くあつめてギルボアに陣をとれり五 サウル、ペリシテ人の軍を見しときおそれて其心 大にふるへたり六 サウル、ヱホバに問ひけるにヱホバ對たまはず夢に因てもウリムによりても預言者によりてもこたへたまはず七 サウル 僕等にいひけるは口寄の婦を求めよわれそのところにゆきてこれに尋ねんと僕等かれにいひけるは視よエンドルに口寄の婦あり八 サウル 形を變へて他の衣服を著二人の人をともなひてゆき彼等夜の間に其婦の所にいたるサウルいひけるは請ふわがために口寄の術をおこなひてわが爾に言ふ人をわれに呼おこせ九 婦かれにいひけるはなんぢサウルのなしたる事すなはち如何にかれが口寄者と卜筮師を國より斷さりたるを知る爾なんぞ我を死しめんとてわが生命を亡す謀計をなすや一〇 サウル、ヱホバを指てかれに誓ひいひけるはヱホバは生く此事のためになんぢ罪にあふことあらじ一一 婦いひけるは誰を我なんぢに呼起すべきかサウルいふサムエルをよびおこせ一二 婦サムエルを見て大なる聲にてさけびいだせりしかして婦 サウルにいひけるは爾なにゆゑに我を欺きしや爾はすなはちサウルなり一三 王かれにいひけるは恐るるなかれ爾なにを見しや婦 サウルにいひけるは我神の地よりのぼるを見たり一四 サウルかれにいひけるは其形容は如何彼いひけるは一人の老翁のぼる其人明衣を衣たりサウル其人のサムエルなるをしりて地にふして拜せり一五 サムエル、サウルにいひけるは爾なんぞ我をよびおこして我をわづらはすやサウルこたへけるは我いたく惱むペリシテ人我にむかひて軍をおこし又神我をはなれて預言者によりても又夢によりてもふたたび我にこたへたまはずこのゆゑに我なすべき事を爾にまなばんとて爾を呼り一六 サムエルいひけるはヱホバ 爾をはなれて爾の敵となりたまふに爾なんぞ我にとふや一七 ヱホバわれをもて語りたまひしことをみづから行ひてヱホバ國を爾の手より割きはなち爾の隣 人ダビデにあたへたまふ一八 爾 ヱホバの言にしたがはず其烈しき怒をアマレクにもらさざりしによりてヱホバ此事を今日爾になしたまふ一九 ヱホバ、イスラエルをも爾とともにペリシテ人の手にわたしたまふべし明日爾と爾の子等我とともなるべしまたイスラエルの陣營をもヱホバ、ペリシテ人の手にわたしたまはん

と二〇サウル直ちに地に伸びたふれサムエルの言のために痛くおそれ又其力を失へり其はかれ其一日一夜物食ざりければなり二一かの婦サウルにいたり其痛く慄くを見てこれにいひけるは視よ仕女爾の言をききわが生命をかけて爾が我にいひし言にしたがへり二二されば請ふ爾も仕女の言を聴て我をして一口のパンを爾のまへにそなへしめよしかして爾くらひて途に就くに時に力を得よ二三されどサウル否みて我は食はじといひしを其僕および婦強ければ其言をききいれて地より立あがり床のうへに坐せり二四婦の家に肥たる犢ありしかば急ぎて之を殺しまた粉をとり搏て酵いれぬパンを炊き二五サウルのまへと其僕等のまへに持ちきたりければ彼等くらひて立ちあがり其夜のうちにされり

第二九章 一爰にペリシテ人其軍をことごとくアペクにあつむイスラエルはヱズレルにある泉水の傍に陣をとる二ペリシテ人の君等あるひは百人或は千人をひきゐて進みダビデと其從者はアキシとともに其後にすすむ三ペリシテ人の諸伯いひけるは是等のヘブル人は何なるやアキシ、ペリシテ人の諸伯にいひけるは此はイスラエルの王サウルの僕ダビデにあらずやかれ此日ごろ此年ごろ我とともにをりしがその逃げおちし日より今日にいたるまで我かれの身に咎あるを見ずと四ペリシテ人の諸伯これを怒る即ちペリシテ人の諸伯彼にいひけるは此人をかへらしめて爾が之をおきし其所にふたたびいたらしめよ彼は我らとともに戰ひにくだるべからず然ば彼戰爭においてわれらの敵とならざるべしかれ其主と和がんとせば何をもてすべきやこの人々の首級をもてすべきにあらずや五是はかつて人々が舞踏の中にて歌ひあひサウルは千をうちころしダビデは萬をうちころすといひたるダビデにあらずや六アキシ、ダビデをよびてこれにいひけるはヱホバは生くまことになんぢは正し爾の我とともに陣營に出入するはわが目には善と見ゆ其は爾が我に來りし日より今日にいたるまで我爾の身に惡き事あるを見ざればなり然ど諸伯の目には爾よからず七されば今かへりて安かにゆきペリシテ人の諸伯の目に惡く見ゆることをなすなかれ八ダビデ、アキシにいひけるは我何をなせしやわが爾のまへに出し日より今日までに爾何を僕の身に見たればか我ゆきてわが主なるわうの敵とたたかふことをえざると九アキシこたへてダビデにいひけるは我爾のわが目には神の使のごとく善きをしるされどペリシテ人の諸伯かれは我らとともに戰ひにのぼるべからずといへり一〇されば爾および爾の主の僕の爾とともにきたれる者明朝夙く起よ爾ら朝はやくおきて夜のあくるに及ばばさるべし一一是をもてダビデと其從者ペリシテ人の地にかへらんと朝はやく起てされりしかしてペリシテ人はヱズレルにのぼれり

第三〇章 一ダビデと其從者第三日にチクラグにいたるにアマレク人すでに南の地とチクラグを侵したりかれらチクラグを撃ち火をもて之を燬き二其中に居りし婦女を虜にし老たるをも若き

をも一人も殺さずして之をひきて其途におもむけり三ダビデと其從者邑にいたりて視に邑は火に燬けその妻と男子女子は虜にせられたり四ダビデおよびこれとともにある民聲をあげて哭き終に哭く力もなきにいたれり五ダビデのふたりの妻すなはちヱズレル人アヒノアムとカルメル人ナバルの妻なりしアビガルも虜にせられたり六時にダビデ大に心を苦めたり其は民おのおの其男子女子のために氣をいらだてダビデを石にて撃んといひたればなりされどダビデ其神ヱホバによりておのれをはげませり七ダビデ、アヒメレクの子祭司アビヤタルにいひけるは請ふエポデを我にもちきたれとアビヤタル、エポデをダビデにもちきたる八ダビデ、ヱホバに問ていひけるは我此軍の後を追ふべきや我これに追つくことをえんかとヱホバかれにこたへたまはく追ふべし爾かならず追つきてたしかに取もどすことをえん九ダビデおよびこれとともなる六百人の者ゆきてベソル川にいたれり後にのこれる者はここにとどまる一〇即ちダビデ四百人をひきゐて追ゆきしが憊れてベソル川をわたることあたはざる者二百人はとどまれり一一衆人野にて一人のエジプト人を見これをダビデにひききたりてこれに食物をあたへければ食へりまたこれに水をのませたり一二すなはち一段の乾無花果と二球の乾葡萄をこれにあたへたり彼くらひて其氣ふたたび爽かになれりかれは三日三夜物をもくはず水をものまざりしなり一三ダビデかれにいひけるは爾は誰の人なる爾はいづくの者なるやかれいひけるは我はエジプトの少者にて一人のアマレク人の僕なり三日まへに我疾にかかりしゆゑにわが主人我をすてたり一四我らケレテ人の南とユダの地とカレブの南ををかしまた火をもてチクラグをやけり一五ダビデかれにいひけるは爾我を此軍にみちびきくだるやかれいひけるは爾我をころさずまた我をわが主人の手にわたさざるを神をさして我に誓へ我爾を此軍にみちびきくだらん一六かれダビデをみちびきくだりしが視よ彼等はペリシテ人の地とユダの地より奪ひたる諸の大なる掠取物のためによろこびて飲食し踊りつつ地にあまねく散ひろがりて居る一七ダビデ暮あひより次日の晩にいたるまでかれらを撃しかば駱駝にのりて逃げたる四百人の少者の外は一人ものがれたるもの无りき一八ダビデはすべてアマレク人の奪ひたる物を取りもどせり其二人の妻もダビデとりもどせり一九小きも大なるも男子も女子も掠取物もすべてアマレク人の奪さりし物は一も失はずダビデことごとく取かへせり二〇ダビデまた凡の羊と牛をとれり人々この家畜をそのまへに驅きたり是はダビデの掠取物なりといへり二一かくてダビデかの憊れてダビデにしたがひ得ずしてベソル川のほとりに止まりし二百人の者のところにいたるに彼らダビデをいでむかへまたダビデとともなる民をいでむかふダビデかの民にちかづきてその安否をたづぬ二三ダビデとともにゆきし人々の中の惡く邪なる者みなこたへていひけるは彼等は我らとともにゆかざりければ我らこれに取りも

どしたる掠取物をわけあたふべからず唯おのおのにその妻子をあたへてこれをみちびきさらしめん二三 ダビデ言けるはわが兄弟よヱホバ我らをまもり我らにせめきたりし軍を我らの手にわたしたまひたれば爾らヱホバのわれらにたまひし物をしかするは宜からず二四 誰か爾らにかかることをゆるさんや戰ひにくだりし者の取る分のごとく輜重のかたはらに止まりし者の取る分もまた然あるべし共にひとしく取るべし二五 この日よりのちダビデこれをイスラエルの法となし例となせり其事今日にいたる二六 ダビデ、チクラグにいたりて其掠取物をユダの長老なる其朋友にわかちおくりて曰しめけるは是はヱホバの敵よりとりて爾らにおくる饋物なり二七 ベテルにをるもの南のラモテにをるものヤツテルにをる者二八 アロエルにをる者シフモテにをるものエシテモにをるもの二九 ラカルにをるものヱラメル人の邑にをるものケニ人の邑にをるもの三〇 ホルマにをるものコラシヤンにをるものアタクにをるもの三一 ヘブロンにをるものおよびすべてダビデが其從者とともに毎にゆきし所にこれをわかちおくれり

第三一章一 ペリシテ人イスラエルと戰ふイスラエルの人々ペリシテ人のまへより逃げ負傷者ギルボア山に斃れたり二 ペリシテ人サウルと其子等に攻よりペリシテ人サウルの子ヨナタン、アビナダブおよびマルキシユアを殺したり三 戰はげしくサウルにせまりて射手の者サウルを射とめければ彼痛く射手の者のために苦しめり四 サウル武器を執る者にいひけるは爾の劍を拔き其をもて我を刺とほせ恐らくは是等の割禮なき者きたりて我を刺し我をはづかしめんと然ども武器をとるもの痛くおそれて肯ぜざればサウル劍をとりて其上に伏したり五 武器を執るものサウルの死たるを見ておのれも劍の上にふしてかれとともに死り六 かくサウルと其三人の子およびサウルの武器をとるもの並に其從者みな此日倶に死り七 イスラエルの人々の谷の對向にをるもの及びヨルダンの對面にをるものイスラエルの人々の逃るを見サウルと其子等の死るをみて諸邑を棄て逃ければペリシテ人きたりて其中にをる八 明日ペリシテ人戰沒せる者を剝んとてきたりサウルと其三人の子のギルボア山にたふれをるを見たり九 彼等すなはちサウルの首を斬り其鎧甲をはぎとりペリシテ人の地の四方につかはして此好報を其偶像の家および民の中につげしむ一〇 またかれら其鎧甲をアシタロテの家におき其體をベテシヤンの城垣に釘けたり一一 ヤベシギレアデの人々ペリシテ人のサウルになしたる事を聞きしかば一二 勇士みなおこり終夜ゆきてサウルの體と其子等の體をベテシヤンの城垣よりとりおろしヤベシにいたりて之を其處に焚き一三 其骨をとりてヤベシの柳樹の下にはうむり七日のあひだ斷食せり

サムエル後書

第一章 一 サウルの死し後ダビデ、アマレク人を撃てかへりチクラグに二日とどまりけるが 二 第三日に及びて一個の人其衣を裂き頭に土をかむりて陣營より即ちサウルの所より來りダビデの許にいたり地にふして拜せり 三 ダビデかれにいひけるは汝いづくより來れるやかれダビデにいひけるはイスラエルの陣營より逃れきたれり 四 ダビデかれにいひけるは事いかん請ふ我につげよかれこたへけるは民戰に敗れて逃げ民おほく仆れて死りまたサウルと其子ヨナタンも死り 五 ダビデ其おのれにつぐる少者にいひけるは汝いかにしてサウルと其子ヨナタンの死たるをしるや 六 ダビデにつぐる少者いひけるは我はからずもギルボア山にのぼり見しにサウル其槍に倚かかりをりて戰車と騎兵かれにせめよらんとせり 七 彼うしろにふりむきて我を見我をよびたれば我こたへて我ここにありといふ 八 かれ我に汝は誰なるやといひければ我かれにこたへて我はアマレク人なりといふ 九 かれまた我にいひけるはわが身いたく攣ば請ふ我うへにのりて我をころせわが生命なほわれの中にまつたければなりと 一〇 我すなはちかれの上にのりてかれを殺したり其は我かれが既に仆て生ることをえざるをしりたればなりしかして我その首にありし冕とその腕にありし釧を取りてこれをわが主に携へきたれり 一一 是においてダビデおのれの衣を執てこれを裂けりまた彼とともにある者も皆しかせり 一二 彼等サウルのためまた其子ヨナタンのためまたヱホバの民のためイスラエルの家のために哭きかなしみて晩まで食を斷り其は彼ら劍にたふれたればなり 一三 ダビデおのれに告し少者にいひけるは汝は何處の者なるやかれこたへけるは我は他國の人すなはちアマレク人なりと 一四 ダビデかれにいひけるは汝なんぞ手をのばしてヱホバの膏そそぎし者をころすことを畏ざりしやと 一五 ダビデ一人の少者をよびていひけるは近よりてかれをころせとすなはちかれをうちければ死り 一六 ダビデかれにいひけるは汝の血は汝の首に歸せよ其は汝口づから我ヱホバのあぶらそそぎし者をころせりといひて己にむかひて證をたつればなり 一七 ダビデ悲歌をもてサウルと其子ヨナタンを吊ふ 一八 ダビデ命じてこれをユダの族にをしへしむ即ち弓の歌是なり是はヤシル書に記さる 一九 イスラエルよ汝の榮耀は汝の崇邱に殺さる嗚呼勇士は仆れたるかな 二〇 此事をガテに告るなかれアシケロンの邑に傳るなかれ恐くはペリシテ人の女等喜ばん恐くは割禮を受ざる者の女等樂み祝はん 二一 ギルボアの山よ願は汝の上に雨露降ることあらざれ亦供物の田園もあらざれ其は彼處に勇士の干棄らるればなり即ちサウルの干膏を沃がずして彼處に棄らる 二二 殺せし者の血をのまずしてヨナタンの弓は退かず勇士の脂を食ずしてサウルの劍は空く歸らず 二三 サウルとヨナタンは愛らしく樂げにして生死ともに離れず二人は鷲よりも捷く獅子よりも強かりき 二四 イスラエル

の女等よサウルのために哀けサウルは絳き衣をもて汝等を華麗に粧ひ金の飾を汝等の衣に着たり二五 嗚呼勇士は戰の中に仆たるかなヨナタン汝の崇邱に殺されぬ二六 兄弟ヨナタンよ我汝のために悲慟む汝は大に我に樂き者なりき汝の我をいつくしめる愛は尋常ならず婦の愛にも勝りたり二七 嗚呼勇士は仆たるかな戰の具は失たるかな

第二章 一 此のちダビデ、ヱホバに問ていひけるは我ユダのひとつの邑にのぼるべきやヱホバかれにいひたまひけるはのぼれダビデいひけるは何處にのぼるべきやヱホバいひたまひけるはヘブロンにのぼるべしと二 ダビデすなはち彼處にのぼれりその二人の妻ヱズレル人アヒノアムおよびカルメル人ナバルの妻なりしアビガルもともにのぼれり三 ダビデ其おのれとともにありし從者と其家族をことごとく將のぼりければ皆ヘブロンの諸巴にすめり四 時にユダの人々きたり彼處にてダビデに膏をそそぎてユダの家の王となせり人々ダビデにつげてサウルを葬りしはヤベシギレアデの人なりといひければ五 ダビデ使者をヤベシギレアデの人におくりてこれにいひけるは汝らこの厚意を汝らの主サウルにあらはしてかれを葬りたればねがはくは汝らヱホバより福祉をえよ六 ねがはくはヱホバ恩寵と眞實を汝等にしめしたまへ汝らこの事をなしたるにより我亦汝らに此恩惠をしめすなり七 されば汝ら手をつよくして勇ましくなれ汝らの主サウルは死たり又ユダの家我に膏をそそぎて我をかれらの王となしたればなりと八 爰にサウルの軍の長ネルの子アブネル、サウルの子イシボセテを取りてこれをマナイムにみちびきわたり九 ギレアデとアシユリ人とヱズレルとエフライムとベニヤミンとイスラエルの衆の王となせり一〇 サウルの子イシボセテはイスラエルの王となりし時四十歳にして二年のあひだ位にありしがユダの家はダビデにしたがへり一一 ダビデのヘブロンにありてユダの家の王たりし日數は七年と六ヶ月なりき一二 ネルの子アブネル及びサウルの子なるイシボセテの臣僕等マハナイムを出てギベオンに至れり一三 セルヤの子ヨアブとダビデの臣僕もいでゆけり彼らギベオンの池の傍にて出會一方は池の此畔に一方は池の彼畔に坐す一四 アブネル、ヨアブにいひけるはいざ少者をして起て我らのまへに戯れしめんヨアブいひけるは起しめんと一五 サウルの子イシボセテに屬するベニヤミンの人其數十二人及びダビデの臣僕十二人起て前み一六 おのおの其敵手の首を執へて劍を其敵手の脅に刺し斯して彼等倶に斃れたり是故に其處はヘルカテハヅリム（利劍の地）と稱らる即ちギベオンにあり一七 此日戰甚だ烈しくしてアブネルとイスラエルの人々ダビデの臣僕のまへに敗る一八 其處にゼルヤの三人の子ヨアブ、アビシヤイ、アサヘル居たりしがアサヘルは疾足なること野にをる麞のごとくなりき一九 アサヘル、アブネルの後を追ひけるが行に右左にまがらずアブネルの後をしたふ二〇 アブネル後を顧みていふ汝はアサヘルなるか彼しかりと答ふ二一 アブネル

かれにいひけるは汝の右か左に轉向て少者の一人を擒へて其戎服を取れと然どアサヘル、アブネルをおふことを罷て外に向ふを肯ぜず二二 アブネルふたたびアサヘルにいふ汝我を追ことをやめて外に向へ我なんぞ汝を地に撃ち仆すべけんや然せば我いかでかわが面を汝の兄ヨアブにむくべけんと二三 然どもかれ外にむかふことをいなむによりアブネル槍の後銛をもてかれの腹を刺しければ槍その背後にいでたりかれ其處にたふれて立時に死り斯しかばアサヘルの仆れて死るところに來る者は皆たちどまれり二四 されどヨアブとアビシヤイはアブネルの後を追きたりしがギベオンの野の道傍にギアの前にあるアンマの山にいたれる時日暮ぬ二五 ベニヤミンの子孫アブネルにしたがひて集まり一隊となりてひとつの山の頂にたてり二六 爰にアブネル、ヨアブをよびていひけるは刀劍豈永久にほろぼさんや汝其終りには怨恨を結ぶにいたるをしらざるや汝何時まで民に其兄弟を追ふことをやめてかへることを命ぜざるや二七 ヨアブいひけるは神は活く若し汝が言出さざりしならば民はおのおの其兄弟を追はずして今晨のうちにさりゆきしならんと二八 かくてヨアブ喇叭を吹きければ民皆たちどまりて再 イスラエルの後を追はずまたかさねて戰はざりき二九 アブネルと其從者終夜アラバを經ゆきてヨルダンを濟りビテロンを通りてマハナイムに至れり三〇 ヨアブ、アブネルを追ことをやめて歸り民をことごとく集めたるにダビデの臣僕十九人とアサヘル缺てをらざりき三一 されどダビデの臣僕はベニヤミンとアブネルの從者三百六十人を撃ち殺せり三二 人々アサヘルを取りあげてベテレヘムにある其父の墓に葬るヨアブと其從者は終夜ゆきて黎明にヘブロンにいたれり

第三章一 サウルの家とダビデの家の間の戰爭久しかりしがダビデは益 強くなりサウルの家はますます弱くなれり二 ヘブロンにてダビデに男子等生る其首出の子はアムノンといひてヱズレル人アヒノアムより生る三 其次はギレアブといひてカルメル人ナバルの妻なりしアビガルより生る第三はアブサロムといひてゲシユルの王タルマイの女子マアカの子なり四 第四はアドニヤといひてハギテの子なり第五はシバテヤといひてアビタルの子なり五 第六はイテレヤムといひてダビデの妻エグラの子なり是等の子ヘブロンにてダビデに生る六 サウルの家とダビデの家の間に戰爭ありし間アブネルは堅くサウルの家に荷擔り七 嚮にサウル一人の妾を有り其名をリヅパといふアヤの女なり爰にイシボセテ、アブネルにいひけるは汝何ぞわが父の妾に通じたるや八 アブネル甚しくイシボセテの言を怒りていひけるは我今日汝の父サウルの家とその兄弟とその朋友に厚 意をあらはし汝をダビデの手にわたさざるに汝今日婦人の過を擧て我を責む我あに犬の首ならんやユダにくみする者ならんや九 神アブネルに斯なしまたかさねて斯なしたまへヱホバのダビデに誓ひたまひしごとく我かれに然なすべし一〇 即ち國をサウルの家よ

り移しダビデの位をダンよりベエルシバにいたるまでイスラエルとユダの上にたてん一一イシボセテ、アブネルを恐れたればかさねて一言も之にこたふるをえざりき一二アブネルおのれの代に使者をダビデにつかはしていひけるは此地は誰の所有なるや又いひけるは汝我と契約を爲せ我力を汝に添へてイスラエルを悉く汝に歸せしめん一三ダビデいひけるは善し我汝と契約をなさん但し我一の事を汝に索む即ち汝來りてわが面を觀る時先づサウルの女ミカルを携きたらざれば我面を觀るを得じと一四ダビデ使者をサウルの子イシボセテに遣していひけるはわがペリシテ人の陽皮一百を以て聘たるわが妻ミカルを我に交すべし一五イシボセテ人をつかはしてかれを其夫ライシの子パルテより取しかば一六其夫哭つつ歩みて其後にしたがひて倶にバホリムにいたりしがアブネルかれに歸り往けといひければすなはち歸りぬ一七アブネル、イスラエルの長老等と語りていひけるは汝ら前よりダビデを汝らの王となさんことを求め居たり一八されば今これをなすべし其はヱホバ、ダビデに付て語りて我わが僕ダビデの手を以てわが民イスラエルをペリシテ人の手よりまたその諸の敵の手より救ひいださんといひたまひたればなりと一九アブネル亦ベニヤミンの耳に語れりしかしてアブネル自らイスラエルおよびベニヤミンの全家の善とおもふ所をヘブロンにてダビデの耳に告んとて往り二〇すなはちアブネル二十人をしたがへてヘブロンにゆきてダビデの許にいたりければダビデ、アブネルと其したがへる從者のために酒宴を設けたり二一アブネル、ダビデにいひけるは我起てゆきイスラエルをことごとくわが主王の所に集めて彼等に汝と契約を立しめ汝をして心の望む所の者をことごとく治むるにいたらしめんと是においてダビデ、アブネルを歸してかれ安然に去り二二時にダビデの臣僕およびヨアブ人の國を侵して歸り大なる掠取物を携へきたれり然どアブネルはタビデとともにヘブロンにはをらざりき其はダビデかれを歸してかれ安然に去りたればなり二三ヨアブおよびともにありし軍兵皆かへりきたりしとき人々ヨアブに告ていひけるはネルの子アブネル王の所にきたりしが王かれを返してかれ安然にされりと二四ヨアブ王に詣りていひけるは汝何を爲したるやアブネル汝の所にきたりしに汝何故にかれを返して去ゆかしめしや二五汝ネルの子アブネルが汝を誑かさんとてきたり汝の出入を知りまた汝のすべて爲す所を知んために來りしを知ると二六かくてヨアブ、ダビデの所より出來り使者をつかはしてアブネルを追しめたれば使者シラの井よりかれを將返れりされどダビデは知ざりき二七アブネル、ヘブロンに返りしかばヨアブ彼と密に語らんとてかれを門の内に引きゆき其處にてその腹を刺てこれを殺し己の兄弟アサヘルの血をむくいたり二八其後ダビデ聞ていひけるは我と我國はネルの子アブネルの血につきてヱホバのまへに永く罪あることなし二九其罪はヨアブの首と其父の全家に歸せよねがはくはヨアブの家には白濁を疾

ものか癩病人か杖に倚ものか劍に仆るものか食物に乏しき者か絶ゆることあらざれと三〇 ヨアブとその弟アビシヤイのアブネルを殺したるは彼がギベオンにて戰陣のうちにおのれの兄弟アサヘルをころせしによれり三一 ダビデ、ヨアブおよびおのれとともにある民にいひけるは汝らの衣服を裂き麻の衣を著てアブネルのために哀哭くべしとダビデ王其棺にしたがふ三二 人衆アブネルをヘブロンに葬れり王聲をあげてアブネルの墓に哭き又民みな哭けり三三 王アブネルの爲に悲の歌を作りて云くアブネル如何にして愚なる人の如くに死けん三四 汝の手は縛もあらず汝の足は鏈にも繋れざりしものを嗚呼 汝は惡人のために仆る人のごとくにたふれたり斯て民皆再びかれのために哭けり三五 民みな日のあるうちにダビデにパンを食はしめんとて來りしにダビデ誓ひていひけるは若し日の沒まへに我パンにても何にても味ひなば神我にかくなし又重ねて斯なしたまへと三六 民皆見て之を其目に善しとせり凡て王の爲すところの事は皆民の目に善と見えたり三七 其日民すなはちイスラエル皆ネルの子アブネルを殺たるは王の所爲にあらざるを知れり三八 王その臣僕にいひけるは今日一人の大將大人イスラエルに斃る汝らこれをしらざるや三九 我は膏そそがれし王なれども今日尚弱しゼルヤの子等なる此等の人我には制しがたしヱホバ惡をおこな者に其惡に隨ひて報いたまはん

第四章一 サウルの子はアブネルのヘブロンにて死たるを聞きしかば其手弱くなりてイスラエルみな憂へたり二 サウルの子隊長二人を有てり其一人をバアナといひ一人をレカブといふベニヤミンの支派なるベロテ人リンモンの子等なり其はベロテも亦ベニヤミンの中に數らるればなり三 昔にベロテ人ギツタイムに逃遁れて今日にいたるまで彼處に旅人となりて止まる四 サウルの子ヨナタンに跛足の子一人ありヱズレルよりサウルとヨナタンの事の報いたりし時には五歳なりき其乳媼かれを抱きて逃れたりしが急ぎ逃る時其子墮て跛者となれり其名をメピボセテといふ五 ベロテ人リンモンの子レカブとバアナゆきて日の熱き頃イシボセテの家にいたるにイシボセテ午睡し居たり六 かれら麥を取らんといひて家の中にいりきたりかれの腹を刺りしかしてレカブと其兄弟バアナ逃げさりぬ七 彼等が家にいりしときイシボセテは其寢室にありて床の上に寢たりかれら即ちこれをうちころしこれを馘りて其首級をとり終夜アラバの道をゆきて八 イシボセテの首級をヘブロンにダビデの許に携へいたりて王にいひけるは汝の生命を求めたる汝の敵サウルの子イシボセテの首を視よヱホバ今日我主なる王の仇をサウルと其裔に報いたまへりと九 ダビデ、ベロテ人リンモンの子レカブと其兄弟バアナに答へていひけるはわが生命を諸の艱難の中に救ひたまひしヱホバは生く一〇 我は嘗て人の我に告て視よサウルは死りと言ひて自ら我に善き事を傳ふる者と思ひをりしを執てこれをチクラグに殺し其消息に報いたり一一 況や惡人の義人を其家

の床の上に殺したるをやされば我彼の血をながせる罪を汝らに報い汝らをこの地より絶ざるべけんやと一二 ダビデ少者に命じければ少者かれらを殺して其手足を切離しヘブロンの池の上に懸たり又イシボセテの首を取りてヘブロンにあるアブネルの墓に葬れり

第五章一 爰にイスラエルの支派 咸くヘブロンにきたりダビデにいたりていひけるは視よ我儕は汝の骨肉なり二 前にサウルが我儕の王たりし時にも汝はイスラエルを率ゐて出入する者なりきしかしてヱホバ 汝に汝わが民イスラエルを牧養はん汝 イスラエルの君長とならんといひたまへりと三 斯くイスラエルの長老皆ヘブロンにきたり王に詣りければダビデ王ヘブロンにてヱホバのまへにかれらと契約をたてたり彼らすなはちダビデに膏を灑でイスラエルの王となす四 ダビデは王となりし時三十歳にして四十年の間 位に在き五 即ちヘブロンにてユダを治むること七年と六箇月またエルサレムにてイスラエルとユダを全く治むること三十三年なり六 茲に王其從者とともにエルサレムに往き其地の居民ヱブス人を攻んとすヱブス人ダビデに語りていひけるは汝此に入ること能はざるべし反て盲者跛者 汝を追はらはんと是彼らダビデ此に入るあたはずと思へるなり七 然るにダビデ、シオンの要害を取り是 即ちダビデの城邑なり八 ダビデ其日いひけるは誰にても水道にいたりてヱブス人を撃ちまたダビデの心の惡める跛者と盲者を撃つ者は（首となし長となさん）と是によりて人々盲者と跛者は家に入るべからずといひなせり九 ダビデ其要害に住て之をダビデの城邑と名けたりまたダビデ、ミロ（城塞）より内の四方に建築をなせり一〇 かくてダビデはますます大に成りゆき且萬軍の神ヱホバこれと共にいませり一一 ツロの王ヒラム使者をダビデに遣はして香柏および木匠と石工をおくれり彼らダビデの爲に家を建つ一二 ダビデ、ヱホバのかたく己をたててイスラエルの王となしたまへるを暁りまたヱホバの其民イスラエルのために其國を興したまひしを暁れり一三 ダビデ、ヘブロンより來りし後エルサレムの中よりまた妾と妻を納たれば男子女子またダビデに生る一四 ヱルサレムにて彼に生れたる者の名はかくのごとしシャンマ、ショバブ、ナタン、ソロモン一五 イブハル、エリシユア、ネペグ、ヤピア一六 エリシヤマ、エリアダ、エリバレテ一七 爰に膏を沃いでダビデをイスラエルの王と爲し事ペリシテ人に聞えければペリシテ人皆ダビデを獲んとて上るダビデ聞て要害に下れり一八 ペリシテ人臻りてレパイムの谷に布き備たり一九 ダビデ、ヱホバに問ていひけるは我ペリシテ人にむかひて上るべきや汝かれらをわが手に付したまふやヱホバ、ダビデにいひたまひけるは上れ我必らずペリシテ人を汝の手にわたさん二〇 ダビデ、バアルペラジムに至りかれらを其所に撃ていひけるはヱホバ水の破壞り出るごとく我敵をわが前に破壞りたまへりと是故に其所の名をバアルペラジム（破壞の處）と呼ぶ二一 彼處に彼等其偶像を遺たればダビデと其從者

これを取あげたり二二ペリシテ人再び上りてレバイムの谷に布き備へたれば二三ダビデ、ヱホバに問にヱホバいひたまひけるは上るべからず彼等の後にまはりベカの樹の方より彼等を襲へ二四汝ベカの樹の上に進行の音を聞ばすなはち突出づべし其時にはヱホバ汝のまへにいでてペリシテ人の軍を撃たまふべければなりと二五ダビデ、ヱホバのおのれに命じたまひしごとくなしペリシテ人を撃てゲバよりガゼルにいたる

第六章一ダビデ再びイスラエルの選抜の兵士三萬人を悉く集む二ダビデ起ておのれと共にをる民とともにバアレユダに往て神の櫃を其處より舁上らんとす其櫃はケルビムの上に坐したまふ萬軍のヱホバの名をもて呼る三すなはち神の櫃を新しき車に載せて山にあるアビナダブの家より舁だせり四アビナダブの子ウザとアヒオ神の櫃を載たる其新しき車を御しアヒオは櫃のまへにゆけり五ダビデおよびイスラエルの全家琴と瑟と鼗と鈴と鐃鈸をもちて力を極め謡を歌ひてヱホバのまへに躍踴れり六彼等がナコンの禾場にいたれる時ウザ手を神の櫃に伸してこれを扶へたり其は牛振たればなり七ヱホバ、ウザにむかひて怒りを發し其誤謬のために彼を其處に撃ちたまひければ彼そこに神の櫃の傍に死ねり八ヱホバ、ウザを撃ちたまひしによりてダビデ怒り其處をペレヅウザ（ウザ撃）と呼り其名今日にいたる九其日ダビデ、ヱホバを畏れていひけるはヱホバの櫃いかで我所にいたるべけんやと一〇ダビデ、ヱホバの櫃を己に移してダビデの城邑にいらしむるを好まず之を轉してガテ人オベデエドムの家にいたらしむ一一ヱホバの櫃ガテ人オベデエドムの家に在ること三月なりきヱホバ、オベデエドムと其全家を惠みたまふ一二ヱホバ神の櫃のためにオベデエドムの家と其所有を皆惠みたまふといふ事ダビデ王に聞えければダビデゆきて喜樂をもて神の櫃をオベデエドムの家よりダビデの城邑に舁上れり一三ヱホバの櫃を舁者六歩行】【（ゆき）】たる時ダビデ牛と肥たる者を献げたり一四ダビデ力を極めてヱホバの前に踊躍れり時にダビデ布のエポデを著け居たり一五ダビデおよびイスラエルの全家歡呼と喇叭の聲をもてヱホバの櫃を舁のぼれり一六神の櫃ダビデの城邑にいりし時サウルの女ミカル窗より窺ひてダビデ王のヱホバのまへに舞躍るを見其心にダビデを蔑視む一七人々ヱホバの櫃を舁入てこれをダビデが其爲に張たる天幕の中なる其所に置りしかしてダビデ燔祭と酬恩祭をヱホバのまへに献げたり一八ダビデ燔祭と酬恩祭を献ぐることを終し時萬軍のヱホバの名を以て民を祝せり一九また民の中即ちイスラエルの衆庶の中に男にも女にも倶にパン一箇肉一斤乾葡萄一塊を分ちあたへたり斯て民皆おのおの其家にかへりぬ二〇爰にダビデ其家族を祝せんとて歸りしかばサウルの女ミカル、ダビデをいでむかへていひけるはイスラエルの王今日如何に威光ありしや自ら遊蕩者の其身を露すがごとく今日其臣僕の婢女のまへに其身を露したまへりと二一ダビデ、ミカルにいふ我はヱホバのまへに

即ち汝の父よりもまたその全家よりも我を選みて我をヱホバの民イスラエルの首長に命じたまへるヱホバのまへに躍れり二二我は此よりも尚鄙からんまたみづから賤しと思はん汝が語る婢女等とともにありて我は尊榮をえんと二三是故にサウルの女ミカルは死ぬる日まで子あらざりき

第七章一 王其家に住にいたり且ヱホバ其四方の敵を壞てかれを安らかならしめたまひし時二王預言者ナタンに云けるは視よ我は香柏の家に住む然ども神の櫃は幔幕の中にあり三ナタン王に云けるはヱホバ汝と共に在せば往て凡て汝の心にあるところを爲せ四其夜ヱホバの言ナタンに臨みていはく五往てわが僕ダビデに言へヱホバ斯く言ふ汝わがために我の住むべき家を建んとするや六我はイスラエルの子孫をエジプトより導き出せし時より今日にいたるまで家に住しことなくして但天幕と幕屋の中に歩み居たり七我イスラエルの子孫と共に凡て歩める處にて汝ら何故に我に香柏の家を建ざるやとわが命じてわが民イスラエルを牧養しめしイスラエルの士師の一人に一言も語りしことあるや八然ば汝わが僕ダビデに斯く言ふべし萬軍のヱホバ斯く言ふ我汝を牧場より取り羊に隨ふ所より取りてわが民イスラエルの首長となし九汝がすべて往くところにて汝と共にあり汝の諸の敵を汝の前より斷さりて地の上の大なる者の名のごとく汝に大なる名を得さしめたり一〇又我わが民イスラエルのために處を定めてかれらを植つけかれらをして自己の處に住て重て動くことなからしめたり一一また惡人昔のごとくまたわが民イスラエルの上に士師を立てたる時よりの如くふたたび之を惱ますことなかるべし我汝の諸の敵をやぶりて汝を安かならしめたり又ヱホバ汝に告ぐヱホバ汝のために家をたてん一二汝の日の滿て汝が汝の父祖等と共に寢らん時に我汝の身より出る汝の種子を汝の後にたてて其國を堅うせん一三彼わが名のために家を建ん我永く其國の位を堅うせん一四我はかれの父となり彼はわが子となるべし彼もし迷はば我人の杖と人の子の鞭を以て之を懲さん一五されど我の恩惠はわが汝のまへより除きしサウルより離れたるごとくに彼よりは離るることあらじ一六汝の家と汝の國は汝のまへに永く保つべし汝の位は永く堅うせらるべし一七ナタン凡て是等の言のごとくまたすべてこの異象のごとくダビデに語りければ一八ダビデ王入りてヱホバの前に坐していひけるは主ヱホバよ我は誰わが家は何なればか爾此まで我を導きたまひしや一九主ヱホバよ此はなほ汝の目には小き事なり汝また僕の家の遥か後の事を語りたまへり主ヱホバよ是は人の法なり二〇ダビデ此上何を汝に言ふを得ん其は主ヱホバ汝僕を知たまへばなり二一汝の言のため又汝の心に隨ひて汝此諸の大なることを爲し僕に之をしらしめたまふ二二故に神ヱホバよ爾は大なり其は我らが凡て耳に聞る所に依ば汝の如き者なくまた汝の外に神なければなり二三地の何れの國か汝の民イスラエルの如くなる其は神ゆきてかれらを贖ひ己の民

となして大なる名を得たまひまた彼らの爲に大なる畏るべき事を爲したまへばなり即ち汝がエジプトより贖ひ取たまひし民の前より國々の人と其諸神を逐拂ひたまへり二四汝は汝の民イスラエルをかぎりなく汝の民として汝に定めたまへりヱホバよ汝はかれの神となりたまふ二五されば神ヱホバよ汝が僕と其家につきて語りたまひし言を永く堅うして汝のいひしごとく爲たまへ二六ねがはくは永久に汝の名を崇めて萬軍のヱホバはイスラエルの神なりと曰しめたまへねがはくは僕ダビデの家をして汝のまへに堅く立しめたまへ二七其は萬軍のヱホバ、イスラエルの神よ汝僕の耳に示して我汝に家をたてんと言たまひたればなり是故に僕此祈祷を汝に爲す道を心の中に得たり二八主ヱホバよ汝は神なり汝の言は眞なり汝この惠を僕に語りたまへり二九願くは僕の家を祝福て汝のまへに永く續くことを得さしめたまへ其は主ヱホバ汝これを語りたまへばなりねがはくは汝の祝福によりて僕の家に永く祝福を蒙らしめたまへ

第八章 一此後ダビデ、ペリシテ人を撃てこれを服すダビデまたペリシテ人の手よりメテグアンマをとれり二ダビデまたモアブを撃ち彼らをして地に伏しめ繩をもてかれらを度れり即ち二條の繩をもて死す者を度り一條の繩をもて生しおく者を量度るモアブ人は貢物を納てダビデの臣僕となれり三ダビデまたレホブの子なるゾバの王ハダデゼルがユフラテ河の邊にて其勢を新にせんとて往るを撃り四しかしてダビデ彼より騎兵千七百人歩兵二萬人を取りまたダビデ一百の車の馬を存して其餘の車馬は皆其筋を切斷り五ダマスコのスリア人ゾバの王ハダデゼルを援んとて來りければダビデ、スリア人二萬二千を殺せり六しかしてダビデ、ダマスコのスリアに代官を置きぬスリア人は貢物を納てダビデの臣僕となれりヱホバ、ダビデを凡て其往く所にて助けたまへり七ダビデ、ハダデゼルの臣僕等の持る金の楯を奪ひてこれをエルサレムに携きたる八ダビデ王又ハダデゼルの邑ベタとベロタより甚だ多くの銅を取り九時にハマテの王トイ、ダビデがハダデゼルの總の軍を撃破りしを聞て一〇トイ其子ヨラムをダビデ王につかはし安否を問ひかつ祝を宣しむ其はハダデゼル嘗てトイと戰を爲したるにダビデ、ハダデゼルとたたかひてこれを撃やぶりたればなりヨラム銀の器と金の器と銅の器を携へ來りければ一一ダビデ王其攻め伏せたる諸の國民の中より取りて納めたる金銀と共に是等をもヱホバに納めたり一二即ちエドムよりモアブよりアンモンの子孫よりペリシテ人よりアマレクよりえたる物およびゾバの王レホブの子ハダデゼルより得たる掠取物とともにこれを納めたり一三ダビデ鹽谷にてエドム人一萬八千を撃て歸て名譽を得たり一四ダビデ、エドムに代官を置り即ちエドムの全地に徧く代官を置てエドム人は皆ダビデの臣僕となれりヱホバ、ダビデを凡て其往くところにて助け給へり一五ダビデ、イスラエルの全地を治め其民に公道と正義を行ふ一六ゼルヤの子ヨアブは軍の長アヒルデの子ヨシヤ

バテは史官一七アヒトブの子ザドクとアビヤタルの子アヒメレクは祭司セラヤは書記官一八ヱホヤダの子ベナヤはケレテ人およびペレテ人の長ダビデの子等は大臣なりき

第九章一爰にダビデいひけるはサウルの家の遺存れる者尚あるや我ヨナタンの爲に其人に恩惠をほどこさんと二サウルの家の僕なるヂバと名くる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれにいひけるは汝はヂバなるか彼いふ僕是なり三王いひけるは尚サウルの家の者あるか我其人に神の恩惠をほどこさんとすヂバ王にいひけるはヨナタンの子尚あり跛足なり四王かれにいひけるは其人は何處にをるやヂバ王にいひけるはロデバルにてアンミエルの子マキルの家にをる五ダビデ王人を遣はしてロデバルより即ちアンミエルの子マキルの家よりかれを携來らしむ六サウルの子ヨナタンの子なるメピボセテ、ダビデの所に來り伏て拜せりダビデ、メピボセテよといひければ答て僕此にありと曰ふ七ダビデかれにいひけるは恐るるなかれ我必ず汝の父ヨナタンの爲に恩惠を汝にしめさん我汝の父サウルの地を悉く汝に復すべし又汝は恒に我席において食ふべしと八かれ拜して言けるは僕何なればか汝死たる犬のごとき我を眷顧たまふ九王サウルの僕ヂバを呼てこれにいひけるは凡てサウルとその家の物は我皆汝の主人の子にあたへたり一〇汝と汝の子等と汝の僕かれのために地を耕へして汝の主人の子に食ふべき食物を取りきたるべし但し汝の主人の子メピボセテは恒に我席において食ふべしとヂバは十五人の子と二十人の僕あり一一ヂバ王にいひけるは總て王わが主の僕に命じたまひしごとく僕なすべしとメピボセテは王の子の一人のごとくダビデの席にて食へり一二メピボセテに一人の若き子あり其名をミカといふヂバの家に住る者は皆メピボセテの僕なりき一三メピボセテはエルサレムに住みたり其はかれ恒に王の席にて食ひたればなりかれは兩の足ともに跛たる者なり

第一〇章一此後アンモンの子孫の王死て其子ハヌン之に代りて位に即く二ダビデ我ナハシの子ハヌンにその父の我に恩惠を示せしごとく恩惠を示さんといひてダビデかれを其父の故によりて慰めんとて其僕を遣せりダビデの僕アンモンの子孫の地にいたるに三アンモンの子孫の諸伯其主ハヌンにいひけるはダビデ慰者を汝に遣はしたるによりて彼汝の父を崇むと汝の目に見ゆるやダビデ此城邑を窺ひこれを探りて陥いれんために其僕を汝に遣はせるにあらずや四是においてハヌン、ダビデの僕を執へ其鬚の半を剃り落し其衣服を中より斷て股までにしてこれを歸せり五人々これをダビデに告たればダビデ人を遣はしてかれらを迎へしむ其人々大に恥たればなり即ち王いふ汝ら鬚の長るまでヱリコに止まりて然るのち歸るべしと六アンモンの子孫自己のダビデに惡まるるを見しかばアンモンの子孫人を遣はしてベテレホブのスリア人とゾバのスリア人の歩兵二萬人およびマアカの王より一千人トブの人より一萬二千人を雇いれた

り七ダビデ聞てヨアブと勇士の惣軍を遣はせり八アンモンの子孫出て門の入口に軍の陣列をなしたりゾバとレホブのスリア人およびトブの人とマアカの人は別に野に居り九ヨアブ戰の前後より己に向ふを見てイスラエルの選抜の兵の中を選みてこれをスリア人に對ひて備へしめ一〇其餘の民をば其兄弟アビシヤイの手に交してアンモンの子孫に向て備へしめて一一いひけるは若スリア人我に手強からば汝我を助けよ若アンモンの子孫汝に手剛からば我ゆきて汝をたすけん一二汝勇ましくなれよ我ら民のためとわれらの神の諸邑のために勇しく爲んねがはくはヱホバ其目によしと見ゆるところをなしたまへ一三ヨアブ己と共に在る民と共にスリア人にむかひて戰んとて近づきければスリア人彼のまへより逃たり一四アンモンの子孫スリア人の逃たるを見て亦自己等もアビシヤイのまへより逃て城邑にいりぬヨアブすなはちアンモンの子孫の所より還りてエルサレムにいたる一五スリア人其イスラエルのまへに敗れたるを見て倶にあつまれり一六ハダデゼル人をやりて河の前岸にをるスリア人を將ゐ出して皆ヘラムにきたらしむハダデゼルの軍の長シヨバクかれらを率ゐたり一七其事ダビデに聞えければ彼イスラエルを悉く集めてヨルダンを渉りてヘラムに來れりスリア人ダビデに向ひて備へ之と戰ふ一八スリア人イスラエルのまへより逃ければダビデ、スリアの兵車の人七百騎兵四萬を殺し又其軍の長シヨバクを撃てこれを其所に死しめたり一九ハダデゼルの臣なる王等其イスラエルのまへに壞れたるを見てイスラエルと平和をなして之に事へたり斯スリア人は恐れて再びアンモンの子孫を助くることをせざりき

第一一章 一年歸りて王等の戰に出る時におよびてダビデ、ヨアブおよび自己の臣僕並にイスラエルの全軍を遣はせり彼等アンモンの子孫を滅ぼしてラバを圍めりされどダビデはエルサレムに止りぬ二爰に夕暮にダビデ其床より興きいでて王の家の屋蓋のうへに歩みしが屋蓋より一人の婦人の體をあらふを見たり其婦は觀るに甚だ美し三ダビデ人を遣して婦人を探らしめしに或人いふ此はエリアムの女ハテシバにてヘテ人ウリヤの妻なるにあらずやと四ダビデ乃ち使者を遣はして其婦を取る婦彼に來りて彼婦と寝たりしかして婦其不潔を清めて家に歸りぬ五かくて婦孕みければ人をつかはしてダビデに告ていひけるは我子を孕めりと六是においてダビデ人をヨアブにつかはしてヘテ人ウリヤを我に遣はせといひければヨアブ、ウリヤをダビデに遣はせり七ウリヤ、ダビデにいたりしかばダビデこれにヨアブの如何なると民の如何なると戰爭の如何なるを問ふ八しかしてダビデ、ウリヤにいひけるは汝の家に下りて足を洗へとウリヤ王の家を出るに王の贈物其後に從ひてきたる九然どウリヤは王の家の門に其主の僕等とともに寝ておのれの家にくだりいたらず一〇人々ダビデに告てウリヤ其家にくだり至らずといひければダビデ、ウリヤにいひけるは汝は旅路をなして來れ

るにあらずや何故に自己の家にくだらざるや一一 ウリヤ、ダビデにいひけるは櫃とイスラエルとユダは小屋の中に住まりわが主ヨアブとわが主の僕は野の表に陣を取るに我いかでわが家にゆきて食ひ飲しまた妻と寝べけけんや汝は生また汝の霊魂は活く我此事をなさじ一二 ダビデ、ウリヤにいふ今日も此にとどまれ明日我汝を去しめんとウリヤ其日と次の日エルサレムにとどまりしが一三 ダビデかれを召て其まへに食ひ飲せしめダビデかれを酔しめたり晩にいたりて彼出て其床に其主の僕と共に寝たりされどおのれの家にはくだりゆかざりき一四 朝におよびてダビデ、ヨアブへの書を認めて之をウリヤの手によりて遣れり一五 ダビデ其書に書ていはく汝らウリヤを烈しき戰の先鋒にいだしてかれの後より退きて彼をして戰死せしめよ一六 是においてヨアブ城邑を窺ひてウリヤをば其勇士の居ると知る所に置り一七 城邑の人出てヨアブと戰ひしかばダビデの僕の中の數人仆れヘテ人ウリヤも死り一八 ヨアブ人をつかはして軍の事を悉くダビデに告げしむ一九 ヨアブ其使者に命じていひけるは汝が軍の事を皆王に語り終しとき二〇 王もし怒りを發して汝に汝らなんぞ戰はんとて城邑に近づきしや汝らは彼らが石墻の上より射ることを知らざりしや二一 ヱルベセテの子アビメレクを撃し者は誰なるや一人の婦が石垣の上より磨の上石を投て彼をテベツに殺せしにあらずや何ぞ汝ら城垣に近づきしやと言はば汝言べし汝の僕ヘテ人ウリヤもまた死りと二二 使者ゆきてダビデにいたりヨアブが遣はしたるところのことをことごとく告げたり二三 使者ダビデにいひけるは敵我儕に手強かりしが城外にいでて我儕にいたりしかば我儕これに迫りて門の入口にまでいたれり二四 時に射手の者城垣の上より汝の僕を射たりければ王の僕の或者死に亦汝の僕ヘテ人ウリヤも死りと二五 ダビデ使者にいひけるは斯汝ヨアブに言べし此事を憂ふるなかれ刀劍は此をも彼をも同じく殺すなり強く城邑を攻て戰ひ之を陥いるべしと汝かくヨアブを勵ますべし二六 ウリヤの妻其夫ウリヤの死たるを聞て夫のために悲哀り二七 其喪の過し時ダビデ人を遣はしてかれをおのれの家に召いる彼すなはちその妻となりて男子を生り但しダビデの爲たる此事はヱホバの目に惡かりき

第一二章 一 ヱホバ、ナタンをダビデに遣はしたまへば彼ダビデに至りてこれにいひけるは一の邑に二箇の人あり一は富て一は貧し二 其富者は甚だ多くの羊と牛を有り三 されど貧者は唯自己の買て育てたる一の小き牝羔の外は何をも有ざりき其牝羔彼およびかれの子女とともに生長ちかれの食物を食ひかれの椀に飲みまた彼の懐に寝て彼には女子のごとくなりき四 時に一人の旅人其富る人の許に來りけるが彼おのれの羊と牛の中を取りてそのおのれに來れる旅人のために烹を惜みてかの貧き人の牝羔を取りて之をおのれに來れる人のために烹たり五 ダビデ其人の事を大に怒りてナタンにいひけるはヱホバは生く誠に此事をなしたる人は死べきなり六 且彼此事をなしたるに因りまた

憐憫まざりしによりて其牝羔を四倍になして償ふべし七ナタン、ダビデにいひけるは汝は其人なりイスラエルの神ヱホバ斯いひたまふ我汝に膏を沃いでイスラエルの王となし我汝をサウルの手より救ひいだし八 汝に汝の主人の家をあたへ汝の主人の諸妻を汝の懷に與へまたイスラエルとユダの家を汝に與へたり若し少からば我汝に種々の物を増くはへしならん九 何ぞ汝ヱホバの言を藐視じて其目のまへに惡をなせしや汝刃劍をもてヘテ人ウリヤを殺し其妻をとりて汝の妻となせり即ちアンモンの子孫の劍をもて彼を斬殺せり一〇 汝我を輕んじてヘテ人ウリヤの妻をとり汝の妻となしたるに因て劍何時までも汝の家を離るることなかるべし一一 ヱホバ斯いひたまふ視よ我汝の家の中より汝の上に禍を起すべし我汝の諸妻を汝の目のまへに取て汝の隣人に與へん其人此日のまへにて汝の諸妻とともに寢ん一二 其は汝は密に事をなしたれど我はイスラエルの衆のまへと日のまへに此事をなすべければなりと一三 ダビデ、ナタンにいふ我ヱホバに罪を犯したりナタン、ダビデにいひけるはヱホバまた汝の罪を除きたまへり汝死ざるべし一四 されど汝此所行によりてヱホバの敵に大なる罵る機會を與へたれば汝に生れし其子必ず死べしと一五 かくてナタン其家にかへれり爰にヱホバ、ウリヤの妻がダビデに生る子を撃たまひければ痛く疾めり一六 ダビデ其子のために神に乞求む即ちダビデ斷食して入り終夜地に臥したり一七 ダビデの家の年寄等彼の傍に立ちてかれを地より起しめんとせしかども彼肯ぜず又かれらとともに食を爲ざりき一八 第七日に其子死りダビデの僕其子の死たることをダビデに告ることを恐れたりかれらいひけるは子の尚生る間に我儕彼に語たりしに彼我儕の言を聽いれざりき如何ぞ彼に其子の死たるを告ぐべけんや彼害を爲んと一九 然にダビデ其僕の私語くを見てダビデ其子の死たるを曉れりダビデ乃ち其僕に子は死たるやといひければかれら死りといふ二〇 是においてダビデ地よりおきあがり身を洗ひ膏をぬり其衣服を更てヱホバの家にいりて拝し自己の家に至り求めておのれのために食を備へしめて食へり二一 僕等彼にいひけるは此の汝がなせる所は何事なるや汝子の生るあひだはこれがために斷食して哭きながら子の死る時に汝は起て食を爲すと二二 ダビデいひけるは嬰孩の尚生るあひだにわが斷食して哭きたるは我誰かヱホバの我を憐れみて此子を生しめたまふを知んと思ひたればなり二三 されど今死たれば我なんぞ斷食すべけんや我再びかれをかへらしむるを得んや我かれの所に往べけれど彼は我の所にかへらざるべし二四 ダビデ其妻バテシバを慰めかれの所にいりてかれとともに寢たりければ彼男子を生りダビデ其名をソロモンと呼ぶヱホバこれを愛したまひて二五 預言者ナタンを遣はし其名をヱホバの故によりてヱデデア(ヱホバの愛する者)と名けしめたまふ二六 爰にヨアブ、アンモンの子孫のラバを攻めて王城を取れり二七 ヨアブ使者をダビデにつかはしていひけるは我ラバを攻て水城

を取れり二八されば汝今餘の民を集め斯城に向て陣どりて之を取れ恐らくは我此城を取て人我名をもて之を呼にいたらんと二九是においてダビデ民を悉くあつめてラバにゆき攻て之を取り三〇しかしてダビデ、アンモン王の冕を其首より取はなしたり其金の重は一タラントなりまた寶石を嵌たりこれをダビデの首に置ダビデ其邑の掠取物を甚だ多く持出せり三一かくてダビデ其中の民を將いだしてこれを鋸と鐵の千歯と鐵の斧にて斬りまた瓦陶の中を通行しめたり彼斯のごとくアンモンの子孫の凡ての城邑になせりしかしてダビデと民は皆エルサレムに還りぬ

第一三章 一此後ダビデの子アブサロムにタマルと名くる美しき妹ありしがダビデの子アムノンこれを戀ひたり二アムノン心を苦しめて遂に其姉妹タマルのためにわづらへり其はタマルは處女なりければアムノンかれに何事をも爲しがたしと思ひたればなり三然るにアムノンに一人の朋友ありダビデの兄弟シメアの子にして其名をヨナダブといふヨナダブは甚だ有智き人なり四彼アムノンにいひけるは汝王の子なんぞ日に日に斯く痩ゆくや汝我に告ざるやアムノン彼にいひけるは我わが兄弟アブサロムの妹タマルを戀ふ五ヨナダブかれにいひけるは床に臥て病と佯り汝の父の來りて汝を見る時これにいへ請ふわが妹タマルをして來りて我に食を予へしめわが見て彼の手より食ふことをうる樣にわが目のまへにて食物を調理しめよと六アムノンすなはち臥して病と佯りしが王の來りておのれを見る時アムノン王にいひけるは請ふ吾妹タマルをして來りてわが目のまへにて二の菓子を作へしめて我にかれの手より食ふことを得さしめよと七是においてダビデ、タマルの家にいひつかはしけるは汝の兄アムノンの家にゆきてかれのために食物を調理よと八タマル其兄アムノンの家にいたるにアムノンは臥し居たりタマル乃ち粉をとりて之を摶てかれの目のまへにて菓子を作へ其菓子を燒き九鍋を取て彼のまへに傾出たりしかれども彼食ふことを否めりしかしてアムノンいひけるは汝ら皆我を離れていでよと皆かれをはなれていでたり一〇アムノン、タマルにいひけるは食物を寢室に持きたれ我汝の手より食はんとタマル乃ち己の作りたる菓子を取りて寢室に持ゆきて其兄アムノンにいたる一一タマル彼に食しめんとて近く持いたれる時彼タマルを執へて之にいひけるは妹よ來りて我と寢よ一二タマルかれにいひける否兄上よ我を辱しむるなかれ是のごとき事はイスラエルに行はれず汝此愚なる事をなすべからず一三我は何處にわが恥辱を棄んか汝はイスラエルの愚人の一人となるべしされば請ふ王に語れ彼我を汝に予ざることなかるべしと一四然どもアムノン其言を聽ずしてタマルよりも力ありければタマルを辱しめてこれと偕に寢たりしが一五遂にアムノン甚だ深くタマルを惡むにいたる其かれを惡む所の惡みはかれを戀ひたるところの戀よりも大なり即ちアムノンかれにいひけるは起て往けよ一六かれアムノンにいひけるは我を返して此惡を作るなかれ是は汝がさき

に我になしたる所の惡よりも大なりとしかれども聽いれず一七其側に仕ふる少者を呼ていひけるは汝此女をわが許より遣りいだして其後に戸を楗せと一八タマル振袖を着ゐたり王の女等の處女なるものは斯のごとき衣服をもて粧ひたりアムノンの侍者かれを外にいだして其後に戸を楗せり一九タマル灰を其首に蒙り着たる振袖を裂き手を首にのせて呼はりつつ去ゆけり二〇其兄アブサロムかれにいひけるは汝の兄アムノン汝と偕に在しや然ど妹よ默せよ彼は汝の兄なり此事を心に留るなかれとかくてタマルは其兄アブサロムの家に凄しく住み居れり二一ダビデ王是等の事を悉く聞て甚だ怒れり二二アブサロムはアムノンにむかひて善も惡きも語ざりき其はアブサロム、アムノンを惡みたればなり是はかれがおのれの妹タマルを辱しめたるに由り二三全二年の後アブサロム、エフライムの邊なるバアルハゾルにて羊の毛を剪しめ居て王の諸子を悉く招けり二四アブサロム王の所にいりていひけるは視よ僕羊の毛を剪しめをるねがはくは王と王の僕等僕とともに來りたまへ二五王アブサロムに云けるは否わが子よ我儕を皆いたらしむるなかれおそらくは汝の費を多くせんアブサロム、ダビデを強ふしかれどもダビデ往ことを肯ぜずして彼を祝せり二六アブサロムいひけるは若しからずば請ふわが兄アムノンをして我らとともに來らしめよ王かれにいひけるは彼なんぞ汝とともにゆくべけんやと二七されどアブサロムかれを強ければアムノンと王の諸子を皆アブサロムとともにゆかしめたり二八爰にアブサロム其少者等に命じていひけるは請ふ汝らアムノンの心の酒によりて樂む時を視すましてわが汝等にアムノンを撃てと言ふ時に彼を殺せ懼るるなかれ汝等に之を命じたるは我にあらずや汝ら勇しく武くなれと二九アブサロムの少者等アブサロムの命ぜしごとくアムノンになしければ王の諸子皆起て各其騾馬に乗て逃たり三〇彼等が路にある時風聞ダビデにいたりていはくアブサロム王の諸子を悉く殺して一人も遺るものなしと三一王乃ち起ち其衣を裂きて地に臥す其臣僕皆衣を裂て其傍にたてり三二ダビデの兄弟シメアの子ヨナダブ答へていひけるは吾主よ王の御子等なる少年を皆殺したりと思たまふなかれアムノン獨り死るのみ彼がアブサロムの妹タマルを辱かしめたる日よりアブサロム此事をさだめおきたるなり三三されば吾主王よ王の御子等皆死りといひて此事をおもひ煩ひたまふなかれアムノン獨死たるなればなりと三四斯てアブサロムは逃れたり爰に守望ゐたる少者目をあげて視たるに視よ山の傍よりして己の後の道より多くの人來れり三五ヨナダブ王にいひけるは視よ王の御子等來る僕のいへるがごとくしかりと三六彼語ることを終し時視よ王の子等來り聲をあげて哭り王と其僕等も皆大に甚く哭り三七偖アブサロムは逃てゲシユルの王アミホデの子タルマイにいたるダビデは日々其子のために悲めり三八アブサロム逃てゲシユルにゆき三年彼處に居たり三九ダビデ王アブサロムに逢んと思ひ煩らふ其はアムノンは

死たるによりてダビデかれの事はあきらめたればなり

第一四章 一 ゼルヤの子ヨアブ王の心のアブサロムに趣くを知れり 二 ヨアブ乃ちテコアに人を遣りて彼處より一人の哲婦を呼きたらしめて其婦にいひけるは請ふ汝喪にある眞似して喪の服を着油む身にぬらず死者のために久しく哀しめる婦のごとく爲りて 三 王の所にいたり是のごとくかれに語るべしとヨアブ其語言をかれの口に授けたり 四 テコアの婦王にいたり地に伏て拜し王にいひけるは王よ助けたまへ 五 王婦にひけるは何事なるや婦いひけるは我は實に嫠婦にしてわが夫は死り 六 仕女に二人の子あり倶に野に爭ひしが誰もかれらを排解ものなきにより此遂に彼を撃て殺せり 七 是において視よ全家仕女に逼りていふ其兄弟を撃殺したる者を付せ我らかれをその殺したる兄弟の生命のために殺さんと斯く嗣子をも滅ぼし存れるわが炭火を熄てわが夫の名をも遺存をも地の面に無らしめんとす 八 王婦にいひけるは汝の家に往け我汝の事につきて命令を下さん 九 テコアの婦王にいひけるは王わが主よねがはくは其罪は我とわが父の家に歸して王と王の位には罪あらざれ 一〇 王いひけるは誰にても爾に語る者をば我に將來れしかせば彼かさねて爾に觸ること无るべし 一一 婦いひけるは願くは王爾の神ヱホバを憶えてかの仇を報ゆる者をして重て滅すことを爲しめず我子を斷ことなからしめたまへと王いひけるはヱホバは生く爾の子の髮毛一すぢも地に隕ることなかるべし 一二 婦いひけるは請ふ仕女をして一言わが主王に言しめたまへダビデいひけるは言ふべし 一三 婦いひけるは爾なんぞ斯る事を神の民にむかひて思ひたるや王此言を言ふにより王は罪ある者のごとし其は王その放れたる者を歸らしめざればなり 一四 抑我儕は死ざるべからず我儕は地に潟れたる水の再び聚る能はざるがごとし神は生命を取りたまはず方法を設けて其放れたる者をして己の所より放たれをることなからしむ 一五 我此事を王我主に言んとて來れるは民我を恐れしめたればなり故に仕女謂らく王に言ん王婢の言を行ひたまふならんと 一六 其は王聞て我とわが子を共に滅して神の產業に離れしめんとする人の手より婢を救ひいだしたまふべければなり 一七 仕女また思り王わが主の言は慰となるべしと其は神の使のごとく王わが主は善も惡も聽たまへばなりねがはくは爾の神ヱホバ爾と共に在せと 一八 王こたへて婦にいひけるは請ふわが爾に問んところの事を我に隱すなかれ婦いふ請ふ王わが主言たまへ 一九 王いひけるは比すべての事においてはヨアブの手爾とともにあるや婦答へていひけるは爾の靈魂は活く王わが主よ凡て王わが主の言たまひしところは右にも左にもまがらず皆に爾の僕ヨアブ我に命じ是等の言を悉く仕女の口に授けたり 二〇 其事の見ゆるところを變んとて爾の僕ヨアブ此事をなしたるなり然どわが主は神の使の智慧のごとく智慧ありて地にある事を悉く知たまふと 二一 是において王ヨアブにいひけるは視よ我此事を爲すされば往て少年アブサロムを携歸る

べし三ヨアブ地に伏し拜し王を祝せりしかしてヨアブいひけるは王わが主よ王僕の言を行ひたまへば今日僕わが爾に惠るるを知ると三ヨアブ乃ち起てゲシユルに往きアブサロムをエルサレムに携きたれり二四王いひけるは彼は其家に退くべしわが面を見るべからずと故にアブサロム己の家に退きて王の面を觀ざりき二五偖イスラエルの中にアブサロムのごとく其美貌のために讃られたる人はなかりき其足の跖より頭の頂にいたるまで彼には瑕疵あることなし二六アブサロム其頭を剪る時其頭の髪を衡るに王の權衡の二百シケルあり毎年の終にアブサロム其頭を剪り是は己の重によりて剪たるなり二七アブサロムに三人の男子と一人のタマルといふ女子生れたりタマルは美女なり二八アブサロム二年のあひだエルサレムにをりたれども王の顔を見ざりき二九是によりてアブサロム王に遣さんとてヨアブを呼に遣はしけるが彼來ることを肯ぜず再び遣せしかども來ることを肯ぜざりき三〇アブサロム其僕にいひけるは視よヨアブの田地は我の近くにありて其處に大麥あり往て其に火を放てとアブサロムの僕等田地に火を放てり三一ヨアブ起てアブサロムの家に來りてこれにいひけるは何故に爾の僕等田地に火を放たるや三二アブサロム、ヨアブにいひけるは我人を爾に遣はして此に來れ我爾を王につかはさんと言り即ち爾をして王に我何のためにゲシユルよりきたりしや彼處に尚あらば我ためには反て善しと言しめんとせり然ば我今王の面を見ん若し我に罪あらば王我を殺すべし三三ヨアブ王にいたりてこれに告たれば王アブサロムを召す彼王にいたりて王のまへに地に伏て拜せり王アブサロムに接吻す

第一五章

一 此後アブサロム己のために戰車と馬ならびに己のまへに驅る者五十人を備たり二アブサロム夙く興きて門の途の傍にたち人の訴訟ありて王に裁判を求めんとて來る時はアブサロム其人を呼ていふ爾は何の邑の者なるやと其人僕はイスラエルの某の支派の者なりといへば三アブサロム其人にいふ見よ爾の事は善くまた正し然ど爾に聽くべき人は王いまだ立ずと四アブサロム又嗚呼我を此地の士師となす者もがな然れば凡て訴訟と公事ある者は我に來りて我之に公義を爲しあたへんといふ五また人彼を拜せんとて近づく時は彼手をのばして其人を扶け之に接吻す六アブサロム凡て王に裁判を求めんとて來るイスラエル人に是のごとくなせり斯アブサロムはイスラエルの人々の心を取り七斯て四年の後アブサロム王にいひけるは請ふ我をして往てヘブロンにてヱホバに我嘗て立し願を果さしめよ八其は僕スリアのゲシユルに居し時願を立て若しヱホバ誠に我をエルサレムに携歸りたまはば我ヱホバに事へんと言たればなりと九王かれにいひけるは安然に往けと彼すなはち起てヘブロンに往り一〇しかしてアブサロム窺ふ者をイスラエルの支派の中に偏く遣はして言せけるは爾等喇叭の音を聞ばアブサロム、ヘブロンにて王となれりと思ふべしと一一二百人の招かれたる者

エルサレムよりアブサロムとともにゆけり彼らは何心なくゆきて何事をもしらざりき一二アブサロム犠牲をささぐる時にダビデの議官ギロ人アヒトペルを其邑ギロより呼よせたり徒黨強くして民次第にアブサロムに加はりぬ一三爰に使者ダビデに來りてイスラエルの人の心アブサロムにしたがふといふ一四ダビデおのれと共にエルサレムに居る凡ての僕にいひけるは起てよ我ら逃ん然らずば我らアブサロムより遁るるあたはざるべし急ぎ往け恐らくは彼急ぎて我らに追ひつき我儕に害を蒙らせ刃をもて邑を撃ん一五王の僕等王にいひけるは視よ僕等王わが主の選むところを凡て爲ん一六王いでゆき其全家これにしたがふ王十人の妾なる婦を遺して家をまもらしむ一七王いでゆき民みな之にしたがふ彼等遠の家に息めり一八かれの僕等みな其傍に進みケレテ人とペレテ人および彼にしたがひてガテよりきたれる六百人のガテ人みな王のまへに進めり一九時に王ガテ人イツタイにいひけるは何ゆゑに爾もまた我らとともにゆくや爾かへりて王とともにをれ爾は外國人にして移住て處をもとむる者なり二〇爾は昨日來れり我は今日わが得るところに往くなれば豈爾をして我らとともにさまよはしむべけんや爾歸り爾の兄弟をも携歸るべしねがはくは恩と眞實爾とともにあれ二一イツタイ王に答へていひけるはヱホバは活く王わが主は活く誠に王わが主いかなる處に坐すとも生死ともに僕もまた其處に居るべし二二ダビデ、イツタイにいひけるは進みゆけガテ人イツタイ乃ち進みかれのすべての從者およびかれとともにある妻子皆進めり二三國中皆大聲をあげて哭き民皆進む王もまたキデロン川を渡りて進み民皆進みて野の道におもむけり二四視よザドクおよび倶にあるレビ人もまた皆神の契約の櫃を舁ていたり神の櫃をおろして民の悉く邑よりいづるをまてりアビヤタルもまたのぼれり二五ここに王ザドクにいひけるは神の櫃を邑に舁もどせ若し我ヱホバのまへに恩をうるならばヱホバ我を携かへりて我にこれを見し其往處を見したまはん二六されどヱホバもし汝を悦ばずと斯いひたまはば視よ我は此にあり其目に善と見ゆるところを我になしたまへ二七王また祭司ザドクにいひけるは汝先見者汝らの二人の子即ち汝の子アヒマアズとアビヤタルの子ヨナタンを伴ひて安然に城邑に歸れ二八見よ我は汝より言のきたりて我に告るまで野の渡場に留まらんと二九ザドクとアビヤタルすなはち神の櫃をエルサレムに舁もどりて彼處に止まれり三〇ここにダビデ橄欖山の路を陟りしが陟るときに哭き其首を蒙みて跣足にて行りかれと倶にある民皆各其首を蒙みてのぼり哭つつのぼれり三一時にアヒトペルがアブサロムに與せる者の中にあることダビデに聞えければダビデいふヱホバねがはくはアヒトペルの計策を愚ならしめたまへと三二ダビデ嶺にある神を拜する處に至れる時視よアルキ人ホシヤイ衣を裂き土を頭にかむりてきたりてダビデを迎ふ三三ダビデかれにいひけるは爾若し我とともに進まば我の負となるべし三四されど

汝もし城邑にかへりてアブサロムにむかひ王よ我爾の僕となるべし此まで爾の父の僕たりしごとく今また汝の僕となるべしといはば爾はわがためにアヒトペルの計策を敗るにいたらん三五祭司ザドクとアビヤタル爾とともに彼處にあるにあらずや是故に爾が王の家より聞たる事はことごとく祭司ザドクとアビヤタルに告べし三六視よかれらとともに彼處にはその二人の子即ちザドクの子アヒマアズとアビヤタルの子ヨナタンをるなり爾ら其聞たる事をことごとく彼等の手によりて我に通ずべし三七ダビデの友ホシヤイすなはち城邑にいたりぬ時にアブサロムはエルサレムに入居たり

第一六章 一ダビデ少しく嶺を過ゆける時視よメピボセテの僕ヂバ鞍おける二頭の驢馬を引き其上にパン二百乾葡萄一百球乾棗の團塊一百酒一嚢を載きたりてダビデを迎ふ二王ヂバにいひけるは此等は何なるかヂバいひけるは驢馬は王の家族の乗るためパンと乾棗は少者の食ふため酒は野に困憊たる者の飲むためなり三王いひけるは爾の主人の子は何處にあるやヂバ王にいひけるはかれはエルサレムに止まる其は彼イスラエルの家今日我父の國を我にかへさんと言をればなり四王ヂバにいひけるは視よメピボセテの所有は悉く爾の所有となるべしヂバいひけるは我拝す王わが主よ我をして爾のまへに恩を蒙むらしめたまへ五斯てダビデ王バホリムにいたるに視よ彼處よりサウルの家の族の者一人出きたる其名をシメイといふゲラの子なり彼出きたりて來りつつ詛へり六又彼ダビデとダビデ王の諸の臣僕にむかひて石を投たり時に民と勇士皆王の左右にあり七シメイ詛の中に斯いへり汝血を流す人よ爾 邪なる人よ出され出され八爾が代りて位に登りしサウルの家の血を凡てヱホバ爾に歸したまへりヱホバ國を爾の子アブサロムの手に付したまへり視よ爾は血を流す人なるによりて禍患の中にあるなり九ゼルヤの子アビシヤイ王にいひけるは此死たる犬なんぞ王わが主を詛ふべけんや請ふ我をして渉りゆきてかれの首を取しめよ一〇王いひけるはゼルヤの子等よ爾らの與るところにあらず彼の詛ふはヱホバ彼にダビデを詛へと言たまひたるによるなれば誰か爾なんぞ然するやと言べけんや一一ダビデ又アビシヤイおよび己の諸の臣僕にいひけるは視よわが身より出たるわが子わが生命を求む況や此ベニヤミン人をや彼を聽して詛はしめよヱホバ彼に命じたまへるなり一二ヱホバわが艱難を俯視みたまふことあらん又ヱホバ今日彼の詛のために我に善を報いたまふことあらんと一三斯てダビデと其從者途を行けるにシメイはダビデに對へる山の傍に行て行つつ詛ひまた彼にむかひて石を投げ塵を揚たり一四王および倶にある民皆アエピムに來りて彼處に息をつげり一五偖アブサロムと總ての民イスラエルの人々エルサレムに至れりアヒトペルもアブサロムとともにいたる一六ダビデの友なるアルキ人ホシヤイ、アブサロムの許に來りし時アブサロムにいふ願くは王 壽かれ願くは王 壽かれ一七アブサロム、ホシヤイ

にいひけるは此は爾が其友に示す厚意なるや爾なんぞ爾の友と往ざるやと一八 ホシヤイ、アブサロムにいひけるは然らずヱホバと此民とイスラエルの總の人々の選む者に我は屬し且其人とともに居るべし一九 且又我誰に事ふべきか其子の前に事べきにあらずや我は爾の父のまへに事しごとく爾のまへに事べし二〇 爰にアブサロム、アヒトベルにいひけるは我儕如何に爲べきか爾等計を爲すべしと二一 アヒトペル、アブサロムにいひけるは爾の父が遺して家を守らしむる妾等の處に入れ然ばイスラエル皆爾が其父に惡まるるを聞ん而して爾とともにをる總の者の手強くなるべしと二二 是において屋脊にアブサロムのために天幕を張ければアブサロム、イスラエルの目のまへにて其父の妾等の處に入りぬ二三 當時アヒトペルが謀れる謀計は神の言に問たるごとくなりきアヒトペルの謀計は皆ダビデとアブサロムとに倶に是のごとく見えたりき

第一七章

一 時にアヒトペル、アブサロムにいひけるは請ふ我に一萬二千の人を擇み出さしめよ我起て今夜ダビデの後を追ひ二 彼が憊れて手弱なりし所を襲ふて彼をおびえしめん而して彼とともにをる民の逃ん時に我王一人を撃とり三 總の民を爾に歸せしむべし夫衆の歸するは爾が求むる此人に依なれば民みな平穩になるべし四 此言アブサロムの目とイスラエルの總の長老の目に的當と見えたり五 アブサロムいひけるはアルキ人ホシヤイをも召きたれ我等彼が言ふ所をも聞んと六 ホシヤイ乃ちアブサロムに至るにアブサロムかれにかたりていひけるはアヒトペル是のごとく言り我等其言を爲べきか若し可ずば爾言ふべし七 ホシヤイ、アブサロムにいひけるは此時にあたりてアヒトペルが授けし計略は善らず八 ホシヤイまたいひけるは爾の知るごとく爾の父と其從者は勇士なり且彼等は野にて其子を奪れたる熊の如く其氣激怒をれり又爾の父は戰士なれば民と共に宿らざるべし九 彼は今何の穴にか何の處にか匿れをる若し數人の者手始に仆なば其を聞く者は皆アブサロムに從ふ者の中に敗ありと言はん一〇 しからば獅子の心のごとき心ある勇猛き夫といふとも全く挫碎ん其はイスラエル皆爾の父の勇士にして彼とともにある者の勇猛き人なるをしればなり一一 我は計議るイスラエルをダンよりベエルシバにいたるまで海濱の沙の多きが如くに悉く爾の處につどへ集めて爾親ら戰陣に臨むべし一二 我等彼の見出さるる處にて彼を襲ひ露の地に下るがごとく彼のうへに降らんしかして彼および彼とともにあるすべての人々を一人も遺さざるべし一三 若し彼何かの城邑に集らばイスラエル皆繩を其城邑にかけ我等これを河に曳きたふして其處に一の小石も見えざらしむべしと一四 アブサロムとイスラエルの人々皆アルキ人ホシヤイの謀計はアヒトペルの謀計よりも善しといふ其はヱホバ、アブサロムに禍を降さんとてヱホバ、アヒトペルの善き謀計を破ることを定めたまひたればなり一五 爰にホシヤイ祭司ザドクとアビヤタルにいひけるはアヒトペル、アブサロムとイ

スラエルの長老等のために斯々に謀れりきた我は斯々に謀れり一六されば爾ら速に人を遣してダビデに告て今夜野の渡場に宿ることなく速に渡りゆけといへおそらくは王および倶にある民皆呑つくされん一七時にヨナタンとアヒマアズはエンロゲルに俟居たり是は城邑にいるを見られざらんとてなり爰に一人の仕女ゆきて彼等に告げければ彼らダビデ王に告んとて往く一八しかるに一人の少者かれらを見てアブザロムにつげたりされど彼等二人は急ぎさりてバホリムの或人の家にいたる其人の庭に井ありてかれら其處にくだりければ一九婦蓋をとりて井の口のうへに掩け其上に擣たる麥をひろげたり故に事知れざりき二〇時にアブサロムの僕等其婦の家に來りていひけるはアヒマアズとヨナタンは何處にをるや婦かれらに彼人々は小川を濟れりといふかれら尋ねたれども見當ざればエルサレムに歸れり二一彼等が去し時かの二人は井よりのぼりて往てダビデ王に告げたり即ちダビデに言けるは起て速かに水を濟れ其はアヒトベル斯爾等について謀計を爲したればなりと二二ダビデ起て己とともにある凡ての民とともにヨルダンを濟れり曙には一人もヨルダンを濟らざる者はなかりき二三アヒトベルは其謀計の行れざるを見て其驢馬に鞍おき起て其邑に往て其家にいたり家の人に遺言して自ら縊れ死て其父の墓に葬らる二四爰にダビデ、マナハイムに至る又アブサロムは己とともにあるイスラエルの凡の人々とともにヨルダンを濟れり二五アブサロム、アマサをヨアブの代りに軍の長と爲りアマサは夫のナハシの女にてヨアブの母ゼルヤの妹なるアビガルに通じたるイシマエル人名はヱテルといふ人の子なり二六かくてイスラエルとアブサロムはギレアデの地に陣どれり二七ダビデ、マハナイムにいたれる時アンモンの子孫の中なるラバのナハシの子ショビとロデバルのアンミエルの子マキルおよびロゲリムのギレアデ人バルジライ二八臥床と鍋釜と陶器と小麥と大麥と粉と烘麥と豆と小豆の烘たる者と二九蜜と牛酪と羊と犢をダビデおよび倶にある民の食ふために持來れり其は彼等民は野にて饑憊れ渇くならんと謂たればなり

第一八章一爰にダビデ己とともにある民を核べて其上に千夫の長百夫の長を立たり二しかしてダビデ民を三に分ちて其一をヨアブの手に託け一をゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイの手に託け一をガテ人イツタイの手に託けたりかくして王民にいひけるは我もまた必ず汝らとともに出んと三されど民いふ汝は出べからず我儕如何に逃るとも彼等は我儕に心をとめじ又我儕半死とも我儕に心をとめざるべしされど汝は我儕の一萬に等し故に汝は城邑の中より我儕を助けなば善し四王かれらにいひけるは汝等の目に善と見ゆるところを爲すべしとかくて王門の傍に立ち民皆或は百人或は千人となりて出づ五王ヨアブ、アビシヤイおよびイツタイに命じてわがために少年アブサロムを寬に待へよといふ王のアブサロムの事について諸の將官に命を下せる時民皆聞り六爰に民イスラエルにむかひて野に出でエフラ

イムの叢林に戰ひしが七イスラエルの民其處にてダビデの臣僕のまへに敗る其日彼處の戰死大にして二萬にいたれり八しかして戰徧く其地の表に廣がりぬ是日叢林の滅ぼせる者は刀劍の滅ぼせる者よりも多かりき九爰にアブサロム、ダビデの臣僕に行き遭り時にアブサロム騾馬に乘居たりしが騾馬大なる橡樹の繁き枝の下を過ければアブサロムの頭其橡に繫りて彼天地のあひだにあがれり騾馬はかれの下より行過たり一〇一箇の人見てヨアブに告ていひけるは我アブサロムが橡樹に懸りをるを見たりと一一ヨアブ其告たる人にいひけるはさらば爾見て何故に彼を其處にて地に擊落さざりしや我爾に銀十枚と一本の帶を與へんものを一二其人ヨアブにいひけるは假令わが手に銀千枚を受べきも我は手をいだして王の子に敵せじ其は王我儕の聞るまへにて爾とアビシャイとイツタイに命じて爾ら各少年アブサロムを害するなかれといひたまひたればなり一三我若し反いてかれの生命を戕賊はば何事も王に隱るる所なければ爾自ら立て我を責んと一四時にヨアブ我かく爾とともに滯るべからずといひて手に三本の槍を携へゆきて彼の橡樹の中に尚生をるアブサロムの胸に之を衝通せり一五ヨアブの武器を執る十人の少者繞きてアブサロムを擊ち之を死しめたり一六かくてヨアブ喇叭を吹ければ民イスラエルの後を追ふことを息てかへれりヨアブ民を止めたればなり一七衆アブサロムを將て叢林の中なる大なる穴に投げいれ其上に甚だ大きく石を疊あげたり是においてイスラエル皆おのおの其天幕に逃かへれり一八アブサロム我はわが名を傳ふべき子なしと言て其生る間に己のために一の表柱を建たり王の谷にあり彼おのれの名を其表柱に與たり其表柱今日にいたるまでアブサロムの碑と稱らる一九爰にザドクの子アヒマアズいひけるは請ふ我をして趨りて王にヱホバの王をまもりて其敵の手を免かれしめたまひし音信を傳へしめよと二〇ヨアブかれにいひけるは汝は今日音信を傳ふるものとなるべからず他日に音信を傳ふべし今日は王の子死たれば汝音信を傳ふべからず二一ヨアブ、クシ人にいひけるは往て爾が見たる所を王に告よクシ人ヨアブに禮をなして走れり二二ザドクの子アヒマアズ再びヨアブにいひけるは請ふ何にもあれ我をも亦クシ人の後より走ゆかしめよヨアブいひけるは我子よ爾は充分の音信を持ざるに何故に走りゆかんとするや二三かれいふ何れにもあれ我をして走りゆかしめよとヨアブかれにいふ走るべし是においてアヒマアズ低地の路をはしりてクシ人を走越たり二四時にダビデは二の門の間に坐しゐたり爰に守望者門の蓋上にのぼり石墻にのぼりて其目を擧て見るに視よ獨一人にて走きたる者あり二五守望者呼はりて王に告ければ王いふ若し獨ならば口に音信を持つならんと其人進み來りて近づけり二六守望者復一人の走りきたるを見しかば守望者守門者に呼はりて言ふ獨一人にて走きたる者あり王いふ其人もまた音信を持ものなり二七守望者言ふ我先者の走を見るにザドクの子アヒマアズの走る

が如しと王いひけるは彼は善人なり善き音信を持來るならん二八アヒマアズ呼はりて王にいひけるはねがはくは平安なれとかくて王のまへに地に伏していふ爾の神ヱホバは讃べきかなヱホバかの手をあげて王わが主に敵したる人々を付したまへり二九王いひけるは少年アブサロムは平安なるやアヒマアズこたへけるは王の僕ヨアブ僕を遣はせし時我大なる噪を見たれども何をも知らざるなり三〇王いひけるは側にいたりて其處に立よと乃ち側にいたりて立つ三一時に視よクシ人來れりクシ人いひけるはねがはくは王音信を受たまへヱホバ今日爾をまもりて凡て爾にたち逆ふ者の手を免かれしめたまへり三二王クシ人にいひけるは少年アブサロムは平安なるやクシ人いひけるはねがはくは王わが主の敵および凡て汝に起ち逆ひて害をなさんとする者は彼少年のごとくなれと三三王大に感み門の樓にのぼりて哭り彼行ながらかくいへりわが子アブサロムよわが子わが子アブサロムよ嗚呼われ汝に代りて死たらん者をアブサロムわが子よわが子よ

第一九章 一時にヨアブに告る者ありていふ視よ王はアブサロムの爲に哭き悲しむと二其日の勝利は凡の民の悲哀となれり其は民其日王は其子のために憂ふと言ふを聞たればなり三其日民は戰爭に逃て羞たる民の竊て去がごとく竊て城邑にいりぬ四王は其面を掩へり王大聲に叫てわが子アブサロムよアブサロムわが子よわが子よといふ五ここにヨアブ家にいり王の許にいたりていひけるは汝今日汝の生命と汝の男子汝の女子の生命および汝の妻等の生命と汝の妾等の生命を救ひたる汝の凡の臣僕の顔を羞させたり六是は汝おのれを惡む者を愛しおのれを愛する者を惡むなり汝今日汝が諸侯伯をも諸僕をも顧みざるを示せり今日我さとる若しアブサロム生をりて我儕皆死たらば汝の目に適ひしならん七されど今立て出で汝の諸僕を慰めてかたるべし我ヱホバを指て誓ふ汝若し出ずば今夜一人も汝とともに止るものなかるべし是は汝が若き時より今にいたるまでに蒙りたる諸の災禍よりも汝に惡かるべし八是に於て王たちて門に坐す人々凡の民に告て視よ王は門に坐し居るといひければ民皆王のまへにいたる然どイスラエルはおのむの其天幕に逃かへれり九イスラエルの諸の支派の中に民皆爭ひていひけるは王は我儕を敵の手より救ひいだしまた我儕をペリシテ人の手より助けいだせりされど今はアブサロムのために國を逃いでたり一〇また我儕が膏そそぎて我儕の上にかきしアブサロムは戰爭に死ねりされば爾ら何ぞ王を導きかへらんことと言ざるや一一ダビデ王祭司ザドクとアビヤタルに言つかはしけるはユダの長老等に告て言へイスラエルの全家の言語王の家に達せしに爾ら何ぞ王を其家に導きかへる最後となるや一二爾等はわが兄弟爾らはわが骨肉なりしかるになんぞ爾等王を導き歸る最後となるやと一三又アマサに言べし爾はわが骨肉にあらずや爾ヨアブにかはりて常にわがまへにて軍長たるべし若しからずば神我に斯なし

又重ねてかくなしたまへと一四かくダビデ、ユダの凡の人をして其心を傾けて一人のごとくにならしめければかれら王にねがはくは爾および爾の諸の臣僕歸りたまへといひおくれり一五是において王歸りてヨルダンにいたるにユダの人々王を迎へんとて來りてギルガルにいたり王を送りてヨルダンを濟らんとす一六時にバホリムのベニヤミン人ゲラの子シメイ急ぎてユダの人々とともに下りダビデ王を迓ふ一七一千のベニヤミン人彼とともにあり亦サウルの家の僕ヂバも其十五人の男子と二十人の僕をしたがへて偕に居たりしが皆王のまへにむかひてヨルダンをこぎ渡れり一八時に王の家族を濟しまた王の目に善と見ゆるところを爲んとて濟舟を濟せり爰にゲラの子シメイ、ヨルダンを濟れる時王のまへに伏して一九王にいひけるはわが主よねがはくは罪を我に歸するなかれまた王わが主のエルサレムより出たまへる日に僕が爲たる惡き事を記憶えたまふなかれねがはくは王これを心に置たまふなかれ二〇其は僕我罪を犯したるを知ればなり故に視よ我今日ヨセフの全家の最初に下り來りて王わが主を迓ふと二一然にゼルヤの子アビシヤイ答へていひけるはシメイはヱホバの膏そそぎし者を詛たるに因て其がために誅さるべきにあらずやと二二ダビデいひけるは爾らゼルヤの子よ爾らのあづかるところにあらず爾等今日我に敵となる今日豈イスラエルの中にて人を誅すべけんや我豈わが今日イスラエルの王となりたるをしらざらんやと二三是をもて王はシメイに爾は誅されじといひて王かれに誓へり二四爰にサウルの子メピボセテ下りて王をむかふ彼は王の去し日より安かに歸れる日まで其足を飾らず其鬚を飾らず又其衣を濯ざりき二五彼エルサレムよりきたりて王を迓ふる時王かれにいひけるはメピボセテ爾なんぞ我とともに往ざりしや二六彼こたへけるはわが主王よわが僕我を欺けり僕はわれ驢馬に鞍おきて其に乘て王の處にゆかんといへり僕跛者なればなり二七しかるに彼僕を王わが主に讒言せり然ども王わが主は神の使のごとし故に爾の目に善と見るところを爲たまへ二八わが父の全家は王わが主のまへには死人なるのみなるに爾僕を爾の席にて食ふ者の中に置たまへりされば我何の理ありてか重ねて王に哀訴ることをえん二九王かれにいひけるは爾なんぞ重ねて爾の事を言や我いふ爾とヂバ其地を分つべし三〇メピボセテ王にいひけるは王わが主安然に其家に歸りたまひたればかれに之を悉くとらしめたまへと三一爰にギレアデ人バルジライ、ロゲリムより下り王を送りてヨルダンを渡らんとて王とともにヨルダンを濟れり三二バルジライは甚だ老たる人にて八十歳なりきかれは甚だ大なる人なれば王のマハナイムに留れる間王を養へり三三王バルジライにいひけるは爾我とともに濟り來れ我エルサレムにて爾を我とともに養はん三四バルジライ王にいひけるはわが生命の年の日尚幾何ありてか我王とともにエルサレムに上らんや三五我は今日八十歳なり善きと惡きとを辨へるをえんや僕其食ふところと飮ところを味ふを

えんや我再び謳歌之男と謳歌之女の聲を聽えんや僕なんぞ尚王わが主の累となるべけんや三六僕は王とともにヨルダンを濟りて只少しくゆかん王なんぞこの報賞を我に報ゆるに及ばんや三七請ふ僕を歸らしめよ我自己の邑にてわが父母の墓の側に死ん但し僕キムハムを視たまへかれを王わが主とともに濟り往しめたまへ又爾の目に善と見る所を彼になしたまへ三八王いひけるはキムハム我とともに濟り往くべし我爾の目に善と見ゆる所をかれに爲ん又爾が望みて我に求むる所は皆我爾のために爲すべしと三九民皆ヨルダンを濟れり王渡りし時王バルジライに接吻してこれを祝す彼遂に己の所に歸れり四〇かくて王ギルガルに進むにキムハムかれとともに進めりユダの民皆王を送れりイスラエルの民の半も亦しかり四一是にイスラエルの人々皆王の所にいたりて王にいひけるは我儕の兄弟なるユダの人々何故に爾を竊みさり王と其家族およびダビデとともなる其凡の從者を送りてヨルダンを濟りしやと四二ユダの人々皆イスラエルの人々に對へていふ王は我に近きが故なり爾なんぞ此事について怒るや我儕王の物を食ひしことあるや王我儕に賜物を與へたることあるや四三イスラエルの人ユダの人に對ていひけるは我は王のうちに十の分を有ち亦ダビデのうちにも我は爾よりも多を有つなりしかるに爾なんぞ我らを輕じたるやわが王を導きかへらんと言しは我最初なるにあらずやとされどユダの人々の言はイスラエルの人々の言よりも厲しかりき

第二〇章 一 爰に一人の邪なる人あり其名をシバといひビクリの子にしてベニヤミン人なり彼喇叭を吹ていひけるは我儕はダビデの中に分なし又ヱサイの子のうちに產業なしイスラエルよ各人其天幕に歸れよと二是によりてイスラエルの人皆ダビデに隨ふことを止てのぼりビクリの子シバにしたがへり然どユダの人々は其王に附てヨルダンよりエルサレムにいたれり三ダビデ、エルサレムにある己の家にいたり王其遺して家を守らせたる妾なる十人の婦をとりてこれを一の室に守り置て養へりされどかれらの處には入ざりき斯かれらは死る日まで閉こめられて生涯嫠婦にてすごせり四爰に王アマサにいひけるは我ために三日のうちにユダの人々を召あつめて爾此處にをれ五アマサ乃ちユダを召あつめんとて往たりしが彼ダビデが定めたる期よりも長く留れり六是においてダビデ、アビシヤイにいひけるはビクリの子シバ今我儕にアブサロムよりもおほくの害をなさんとす爾の主の臣僕を率ゐて彼の後を追へ恐らくは彼堅固なる城邑を獲て我儕の目を逃れんと七是によりてヨアブの從者とケレテ人とペレテ人および都の勇士彼にしたがひて出たり即ち彼等エルサレムより出てビクリの子シバの後を追ふ八彼等がギベオンにある大石の傍に居りし時アマサかれらにむかひ來れり時にヨアブ戎衣に帶を結て衣服となし其上に刀を鞘にをさめ腰に結びて帶び居たりしが其劍脫け墮ちたり九ヨアブ、アマサにわが兄弟よ爾は平康なるやといひて右の手をもてアマサの

鬚を將て彼に接吻せんとせしが一〇アマサはヨアブの手にある劍に意を留ざりければヨアブ其をもてアマサの腹を刺して其腸を地に流しいだし重ねて撃に及ばざらしめてこれをころせりかくてヨアブと其兄弟アビシヤイ、ビクリの子シバの後を追り一一時にヨアブの少者の一人アマサの側にたちていふヨアブを助くる者とダビデに附從ものはヨアブの後に隨へと一二アマサは血に染て大路の中に轉び居たり斯人民の皆立どまるを見てアマサを大路より田に移したるが其側にいたれる者皆見て立ちとまりければ衣を其上にかけたり一三アマサ大路より移されければ人皆ヨアブにしたがひ進みてビクリの子シバの後を追ふ一四彼イスラエルの凡の支派の中を行てアベルとベテマアカに至るに少年皆集りて亦かれにしたがひゆけり一五かくて彼等來りて彼をアベル、ベテマアカに圍み城邑にむかひて壘を築けり是は壕の中にたてりかくしてヨアブとともにある民皆石垣を崩さんとてこれを撃居りしが一六一箇の哲き婦城邑より呼はりていふ爾ら聽よ爾ら聽よ請ふ爾らヨアブに此に近よれ我爾に言んと言へと一七かれ其婦にちかよるに婦いひけるは爾はヨアブなるやかれ然りといひければ婦彼にいふ婢の言を聽けかれ我聽くといふ一八婦即ち語りていひけるは昔人々誠に語りて人必ずアベルにおいて索問べしといひて事を終ふ一九我はイスラエルの中の平和なる忠義なる者なりしかるに爾はイスラルの中にて母ともいふべき城邑を滅さんことを求む何ゆゑに爾ヱホバの產業を呑み盡さんとするや二〇ヨアブ答へていひけるは決めてしからず決めてしからずわれ呑み盡し或は滅ぼさんとすることなし二一其事しからずエフライムの山地の人ビクリの子名はシバといふ者手を擧て王ダビデに敵せり爾ら只彼一人を付せ然らば我此邑をさらんと婦ヨアブにいひけるは視よ彼の首級は石垣の上より爾に投いだすべし二二かくて婦其智慧をもて凡の民の所にいたりければかれらビクリの子シバの首級を刎てヨアブの所に投出せり是においてヨアブ喇叭を吹ならしければ人々散て邑より退きておのおの其天幕に還りぬヨアブはエルサレムにかへりて王の處にいたれり二三ヨアブはイスラエルの全軍の長なりヱホヤダの子ベナヤはケレテ人とペレテ人の長なり二四アドラムは徵募長なりアヒルデの子ヨシヤパテは史官なり二五シワは書記官なりザドクとアビヤタルは祭司なり二六亦ヤイル人イラはダビデの大臣なり

第二一章 一ダビデの世に年復年と三年饑饉ありければダビデ、ヱホバに問にヱホバ言たまひけるは是はサウルと血を流せる其家のためなり其は彼嘗てギベオン人を殺したればなりと二是において王ギベオン人を召てかれらにいへりギベオン人はイスラエルの子孫にあらずアモリ人の殘餘なりしがイスラエルの子孫昔彼等に誓をなしたり然るにサウル、イスラエルとユダの子孫に熱心なるよりして彼等を殺さんと求めたり三即ちダビデ、ギベオン人にいひけるは我汝等のために何を爲すべきか我何の

賠償を爲さば汝等ヱホバの産業を祝するや四ギベオン人彼にいひけるは我儕はサウルと其家の金銀を取じ又汝は我らのためにイスラエルの中の人一人をも殺すなかれダビデいひけるは汝等が言ふ所は我汝らのために爲ん五彼等王にいひけるは我儕を滅したる人我儕を殲してイスラエルの境の中に居留ざらしめんとて我儕にむかひて謀を設けし人六請ふ其人の子孫七人を我儕に與へよ我儕ヱホバの選みたるサウルのギベアにて彼等をヱホバのまへに懸ん王いふ我與ふべしと七されど王サウルの子ヨナタンの子なるメピボセテを惜めり是は彼等のあひだ即ちダビデとサウルの子ヨナタンとの間にヱホバを指して爲る誓あるに因り八されど王アヤの女リヅパがサウルに生し二人の子アルモニとメピボセテおよびサウルの女メラブがメホラ人バルジライの子アデリエルに生し五人の子を取りて九かれらをギベオン人の手に與へければギベオン人かれらを山の上にてヱホバの前に懸たり彼等七人倶に斃れて刈穫の初日即ち大麥刈の初時に死り一〇アヤの女リヅパ麻布を取りて刈穫の初時より其屍上に天より雨ふるまでこれをおのれのために磐の上に布きおきて晝は空の鳥を屍の上に止らしめず夜は野の獸をちかよらしめざりき一一爰にアヤの女サウルの妾リヅパの爲しことダビデに聞えければ一二ダビデ往てサウルの骨と其子ヨナタンの骨をヤベシギレアデの人々の所より取り是はペリシテ人がサウルをギルボアに殺してベテシヤンの衢に懸たるをかれらが竊みさりたるものなり一三ダビデ其處よりサウルの骨と其子ヨナタンの骨を携へ上れりまた人々其懸られたる者等の骨を斂たり一四かくてサウルと其子ヨナタンの骨をベニヤミンの地のゼラにて其父キシの墓に葬り都て王の命じたる所を爲り此より後神其地のため祈祷を聽たまへり一五ペリシテ人復イスラエルと戰爭を爲すダビデ其臣僕とともに下りてペリシテ人と戰ひけるがダビデ困憊居りければ一六イシビベノブ、ダビデを殺さんと思へり（イシビベノブは巨人の子等の一人にて其槍の銅の重は三百シケルあり彼新しき劍を帶たり）一七しかれどもゼルヤの子アビシヤイ、ダビデを助けて其ペリシテ人を撃ち殺せり是においてダビデの從者かれに誓ひていひけるは汝は再我儕と共に戰爭に出べからず恐らくは爾イスラエルの燈光を消さんと一八此後再びゴブにおいてペリシテ人と戰あり時にホシヤ人シベカイ巨人の子等の一人なるサフを殺せり一九爰に復ゴブにてペリシテ人と戰あり其處にてベテレヘム人ヤレオレギムの子エルハナン、ガテのゴリアテの兄弟ラミを殺せり其槍の柄は機の梁の如くなりき二〇又ガテに戰ありしが其處に一人の身長き人あり手には各六の指あり足には各六の指ありて其數合せて二十四なり彼もまた巨人の生る者なり二一彼イスラエルを挑みしかばダビデに兄弟シメアの子ヨナタン彼を殺せり二二是らの四人はガテにて巨人の生るものなりしがダビデの手と其臣僕の手に斃れたり

第二二章 一 ダビデ、ヱホバが己を諸の敵の手とサウルの手より救ひいだしたまへる日に此歌の言をヱホバに陳たり曰く 二 ヱホバはわが巖わが要害我を救ふ者 三 わが磐の神なりわれ彼に倚頼むヱホバはわが干わが救の角わが高櫓わが逃遁處わが救主なり爾我をすくひて暴き事を免れしめたまふ 四 我ほめまつるべきヱホバに呼はりてわが敵より救はる 五 死の波濤われを繞み邪曲なる者の河われをおそれしむ 六 冥府の繩われをとりまき死の機檻われにのぞめり 七 われ艱難のうちにヱホバをよびまたわが神に籲れりヱホバ其殿よりわが聲をききたまひわが喊呼其耳にいりぬ 八 爰に地震ひ撼き天の基動き震へりそは彼怒りたまへばなり 九 烟其鼻より出てのぼり火その口より出て燒きつくしおこれる炭かれより燃いづ 一〇 彼天を傾けて下りたまふ黑雲その足の下にあり 一一 ケルブに乘て飛び風の翼の上にあらはれ 一二 其周圍に黑暗をおき集まれる水密雲を幕としたまふ 一三 そのまへの光より炭火燃いづ 一四 ヱホバ天より雷をくだし最高者聲をいだし 一五 又箭をはなちて彼等をちらし電をはなちて彼等をうちやぶりたまへり 一六 ヱホバの叱咤とその鼻の氣吹の風によりて海の底あらはれいで地の基あらはになりぬ 一七 ヱホバ上より手をたれて我をとり洪水の中より我を引あげ 一八 またわが勁き敵および我をにくむ者より我をすくひたまへり彼等は我よりも強かりければなり 一九 彼等はわが菑災の日にわれに臨めりされどヱホバわが支柱となり 二〇 我を廣き處にひきいだしわれを喜ぶがゆゑに我をすくひたまへり 二一 ヱホバわが義にしたがひて我に報い吾手の清潔にしたがひて我に酬したまへり 二二 其はわれヱホバの道をまもり惡をなしてわが神に離しことなければなり 二三 その律例は皆わがまへにあり其法憲は我これを離れざるなり 二四 われ神にむかひて完全かり又身を守りて惡を避たり 二五 故にヱホバわが義にしたがひ其目のまへにわが潔白あるに循ひてわれに報いたまへり 二六 矜恤者には爾矜恤ある者のごとくし完全人には爾完全者のごとくし 二七 潔白者には爾潔白もののごとくし邪曲者には爾嚴刻者のごとくしたまふ 二八 難る民は爾これを救たまふ然ど矜高者は爾の目見て之を卑したまふ 二九 ヱホバ爾はわが燈火なりヱホバわが暗をてらしたまふ 三〇 われ爾によりて軍隊の中を驅とほりわが神に由て石垣を飛こゆ 三一 神は其道まつたしヱホバの言は純粋なし彼は都て己に倚頼む者の干となりたまふ 三二 夫ヱホバのほか誰か神たらん我儕の神のほか敦か磐たらん 三三 神はわが強き堅衆にてわが道を全うし 三四 わが足を麀の如くなし我をわが崇邱に立しめたまふ 三五 神わが手に戰を教へたまへばわが腕は銅の弓をも挽を得 三六 爾我に爾の救の干を與へ爾の慈悲われを大ならしめたまふ 三七 爾わが身の下の歩を恢廓しめたまへば我 踝ふるへず 三八 われわが敵を追て之をほろぼし之を絶すまではかへらず 三九 われ彼等を絶し彼等を破碎ば彼等たちえずわが足の下にたふる 四〇 汝 戰のために力をもて我に帶しめ又われに逆ふ者をわが下に拜跪しめたまふ 四

一爾わが敵をして我に後を見せしめたまふ我を惡む者はわれ之をほろぼさん四二彼等環視せど救ふ者なしヱホバを仰視ど彼等に應たまはず四三地の塵の如くわれ彼等をうちくだき又衢間の泥のごとくわれ彼等をふみにぢる四四爾われをわが民の爭鬪より救ひ又われをまもりて異邦人等の首長となしたまふわが知ざる民我につかふ四五異邦人等は我に媚び耳に聞と均しく我にしたがふ四六異邦人等は衰へ其衛所より戰慄て出づ四七ヱホバは活る者なりわが磐は讃べきかなわが救の磐の神はあがめまつるべし四八此神われに仇を報いしめ國々の民をわが下にくだらしめたまひ四九又わが敵の中よりわれを出し我にさからふ者の上に我をあげまた強暴人の許よりわれを救ひいだしたまふ五〇是故にヱホバよわれ異邦人等のうちに爾をほめ爾の名を稱へん五一ヱホバその王の救をおほいにしその受膏者なるダビデと其裔に永久に恩を施したまふなり

第二三章 一ダビデの最後の言は是なりヱサイの子ダビデの詔言即ち高く擧られし人ヤコブの神に膏をそそがれし者イスラエルの善き歌人の詔言二ヱホバの靈わが中にありて言たまふ其諭言わが舌にあり三イスラエルの神いひたまふイスラエルの磐われに語たまふ人を正く治むる者神を畏れて治むる者は四日の出の朝の光のごとく雲なき朝のごとく又雨の後の日の光明によりて地に茁いづる新草ごとし五わが家かく神とともにあるにあらずや神萬具備りて鞏固なる永久の契約を我になしたまへり吾が救と喜を皆いかで生ぜしめたまはざらんや六しかれども邪なる者は荊棘のごとくにして手をもて取がたければ皆ともにすてられん七之にふるる人は鐵と槍の柯とを其身に備ふべし是は火にやけて燒たゆるにいたらん八是等はダビデの勇士の名なりタクモニ人ヤシヨベアムは三人衆の長なりしが一時八百人にむかひて槍を揮ひて之を殺せり九彼の次はアホア人ドドの子エルアザルにして三勇士の中の者なり彼其處に戰はんとて集まれるペリシテ人にむかひて戰を挑みイスラエルの人々の進みのぼれる時にダビデとともに居たりしが一〇たちてペリシテ人を撃ち終に其手疲て其手劍に固着て離れざるにいたれり此日ヱホバ大なる救拯を行ひたまふ民は彼の跡にしたがひゆきて只褫取而巳なりき一一彼の次はハラリ人アゲの子シヤンマなり一時ペリシテ人一隊となりて集まれり彼處に扁豆の滿たる地の處あり民ペリシテ人のまへより逃たるに一二彼其地の中に立て禦ぎペリシテ人を殺せりしかしてヱホバ大なる救拯を行ひたまふ一三刈穫の時に三十人衆の首長なる三人下りてアドラムの洞穴に往てダビデに詣れり時にペリシテ人の隊レパイムの谷に陣どれり一四其時ダビデは要害に居りペリシテ人の先陣はベテレヘムにあり一五ダビデ慕ひていひけるは誰かベテレヘムの門にある井の水を我にのましめんかと一六三勇士乃ちペリシテ人の陣を衝き過てベテレヘムの門にある井の水を汲取てダビデの許に携へ來れり然どダビデ之をのむことをせずこれをヱホバの

まへに灌ぎて一七いひけるはヱホバよ我決てこれを爲じ是は生命をかけて往し人の血なりと彼これを飮ことを好まざりき三勇士は是等の事を爲り一八ゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイは三十人衆の首たり彼三百人にむかひて槍を揮ひて殺せり彼其三十人衆の中に名を得たり一九彼は三十人衆の中の最も尊き者にして彼等の長とたれり然ども三人衆には及ばざりき二〇ヱホヤダの子カブジエルのベナヤは勇氣あり多くの功績ありし者なり彼モアブの人の獅子の如きもの二人を撃殺せり彼は亦雪の時に下りて穴の中にて獅子を撃殺せり二一彼また容貌魁偉たるエジプト人を撃殺せり其エジプト人は手に槍を持たるに彼は杖を執て下りエジプト人の手より槍を捩とりて其槍をもてこれを殺せり二二ヱホヤダの子ベナヤ是等の事を爲し三十勇士の中に名を得たり二三彼は三十人衆の中に尊かりしかども三人衆には及ばざりきダビデかれを參議の中に列しむ二四三十人衆の中にはヨアブの兄弟アサヘル、ベテレヘムのドドの子エルハナン二五ハロデ人シヤンマ、ハロデ人エリカ二六パルデ人ヘレヅ、テコア人イツケシの子イラ二七アネトテ人アビエゼル、ホシヤ人メブンナイ二八アホア人ザルモン、ネトパ人マハライ二九ネトパ人バアナの子ヘレブ、ベニヤミンの子孫のギベアより出たるリバイの子イツタイ三〇ヒラトン人ベナヤ、ガアシの谷のヒダイ三一アルパテ人アビアルボン、バホリム人アズマウテ三二シヤルボニ人エリヤバ、キゾニ人ヤセン三三ハラリ人シヤンマの子ヨナタン、アラリ人シヤラルの子アヒアム三四ウルの子エリパレテ、マアカ人ヘペル、ギロ人アヒトペルの子エリアム三五カルメル人ヘヅライ、アルバ人パアライ三六ゾバのナタンの子イガル、ガド人バニ三七アンモニ人ゼレク、ゼルヤの子ヨアブの武器を執る者ベエロテ人ナハライ三八ヱテリ人イラ、ヱテリ人ガレブ三九ヘテ人ウリヤあり都て三十七人

第二四章

一ヱホバ復イスラエルにむかひて怒を發しダビデを感動して彼等に敵對しめ往てイスラエルとユダを數へよと言しめたまふ二王乃ちヨアブおよびヨアブとともにある軍長等にいひけるは請ふイスラエルの諸の支派の中をダンよりベエルシバに至るまで行めぐりて民を核べ我をして民の數を知しめよ三ヨアブ王にいひけるは幾何あるともねがはくは汝の神ヱホバ民を百倍に增たまへ而して王わが主の目それを視るにいたれ然りといへども王わが主の此事を悅びたまふは何故ぞやと四されど王の言ヨアブと軍長等に勝ければヨアブと軍長等王の前を退きてイスラエルの民を核べに往り五かれらヨルダンを濟りアロエルより即ち河の中の邑より始めてガドにいたりヤゼルにいたり六ギレアデにいたりタテムホデシの地にいたり又ダニヤンにいたりてシドンに旋り七またツロの城にいたりヒビ人とカナン人の諸の邑にいたりユダの南に出てベエルシバにいたれり八彼等國を徧く行めぐり九月と廿日を經てルサレムに至りぬ九ヨアブ人口の數を王に告たり即ちイスラエルに劍を拔く壯士八

十萬ありき又ユダの人は五十萬ありき一〇ダビデ民の數を書し後其心自ら責む是においてダビデ、ヱホバにいふ我これを爲して大に罪を犯したりねがはくはヱホバよ僕の罪を除きたまへ我甚だ愚なる事を爲りと一一ダビデ朝興し時ヱホバの言ダビデの先見者なる預言者ガデに臨みて曰く一二往てダビデに言へヱホバ斯いふ我汝に三を示す汝其一を擇べ我其を汝に爲んと一三ガデ、ダビデの許にいたりこれに告てこれにいひけるは汝の地に七年の饑饉いたらんか或は汝敵に追れて三月其前に遁んか或は爾の地に三日の疫病あらんか爾考へてわが如何なる答を我を遣はせし者に爲べきかを決めよ一四ダビデ、ガデにいひけるは我大に苦しむ請ふ我儕をしてヱホバの手に陷らしめよ其憐憫大なればなり我をして人の手に陷らしむるなかれ一五是においてヱホバ朝より集會の時まで疫病をイスラエルに降したまふダンよりベエルシバまでに民の死る者七萬人なり一六天の使其手をエルサレムに伸てこれを滅さんとしたりしがヱホバ此害惡を悔て民を滅す天の使にいひたまひけるは足り今汝の手を住めよと時にヱホバの使はヱブス人アラウナの禾場の傍にあり一七ダビデ民を撃つ天の使を見し時ヱホバに申していひけるは嗚呼我は罪を犯したり我は惡き事を爲たり然ども是等の羊群は何を爲たるや請ふ爾の手を我とわが父の家に對たまへと一八此日ガデ、ダビデの所にいたりてかれにいひけるは上りてヱブス人アラウナの禾場にてヱホバに壇を建よ一九ダビデ、ガデの言に隨ひヱホバの命じたまひしごとくのぼれり二〇アラウナ觀望て王と其臣僕の己の方に進み來るを見アラウナ出て王のまへに地に伏て拝せり二一かくてアラウナいひけるは何に因てか王わが主僕の所にきませるやダビデいひけるは汝より禾場を買ひとりヱホバに壇を築きて民に降る災をとどめんとてなり二二アラウナ、ダビデにいひけるはねがはくは王わが主其目に善と見ゆるものを取て献げたまへ燔祭には牛あり薪には打禾車と牛の器あり二三アラリナこれを悉く王に奉呈ぐアラウナ又王にねがはくは爾の神ヱホバ爾を受納たまはんことをといふ二四王アラウナにいひけるは斯すべからず我必ず値をはらひて爾より買とらん我費なしに燔祭をわが神ヱホバに献ぐることをせじとダビデ銀五十シケルにて禾場と牛を買とれり二五ダビデ其處にてヱホバに壇を築き燔祭と酬恩祭を献げたり是においてヱホバ其地のために祈祷を聽たまひて災のイスラエルに降ること止りぬ

列王紀略上

第一章 一 爰にダビデ王年邁みて老い寝衣を衣するも温らざりければ 二 其臣僕等彼にいひけるは王わが主のために一人の若き處女を求めしめて之をして王のまへにたちて王の左右となり汝の懐に臥て王わが主を暖めしめんと 三 彼等乃ちイスラエルの四方の境に美き童女を求めてシユナミ人アビシヤグを得て之を王に携きたれり 四 此童女甚だ美くして王の左右となり王に事たり然ど王之と交はらざりき 五 時にハギテの子アドニヤ自ら高くし我は王とならんと言て己のために戦車と騎兵および自己のまへに驅る者五十人を備へたり 六 其父は彼が生れてより已來汝何故に然するやと言てかれを痛しめし事なかりきアドニヤも亦容貌の甚だ美き者にてアブサロムの次に生れたり 七 彼ゼルヤの子ヨアブおよび祭司アビヤタルと商議ひしかば彼等之に從ひゆきて助けたり 八 されど祭司ザドクとヱホヤダの子ベナヤと預言者ナタンおよびシメイとレイならびにダビデに屬したる勇士はアドニヤに與せざりき 九 アドニヤ、エンロゲルの近邊なるゾヘレテの石の傍にて羊と牛と肥畜を宰りて王の子なる己の兄弟および王の臣僕なるユダの人を盡く請けり 一〇 されども預言者ナタンとベナヤと勇士とおのれの兄弟ソロモンとをば招かざりき 一一 爰にナタン、ソロモンの母バテシバに語りていひけるは汝ハギテの子アドニヤが王となれるを聞ざるかしかるにわれらの主ダビデはこれを知ざるなり 一二 されば請ふ來れ我汝に計を授て汝をして己の生命と汝の子ソロモンの生命を救しめん 一三 汝往てダビデ王の所に入り之にいへ王わが主よ汝は婢に誓ひて汝の子ソロモンは我に繼で王となりわが位に坐せんといひたまひしにあらずや然るにアドニヤ何故に王となれるやと 一四 われまた汝が尚其處にて王と語ふ時に汝に次て入り汝の言を證すべしと 一五 是においてバテシバ寝室に入りて王の所にいたるに王は甚だ老てシユナミ人アビシヤグ王に事へ居たり 一六 バテシバ躬を鞠め王を拝す王いふ何なるや 一七 かれ王にいひけるはわが主汝は汝の神ヱホバを指て婢に汝の子ソロモンは我に繼で王となりわが位に坐せんと誓ひたまへり 一八 しかるに視よ今アドニヤ王となれり而て王わが主汝は知たまはず 一九 彼は牛と肥畜と羊を饒く宰りて王の諸子および祭司アビヤタルと軍の長ヨアブを招けりされど汝の僕ソロモンをば招かざりき 二〇 汝王わが主よイスラエルの目皆汝に注ぎ汝が彼等に誰が汝に繼で王わが主の位に坐すべきを告るを望む 二一 王わが主の其父祖と共に寝たまはん時に我とわが子ソロモンは罪人と見做さるるにいたらんと 二二 バテシバ尚王と語ふうちに視よ預言者ナタンも亦入きたりければ 二三 人々王に告て預言者ナタン此にありと曰ふ彼王のまへに入り地に伏て王を拝せり 二四 しかしてナタンいひけるは王わが主汝はアドニヤ我に繼で王となりわが位に坐すべしといひたまひしや 二五 彼は今日下りて牛と肥畜と

羊を饒く宰りて王の諸子と軍の長等と祭司アビヤタルを招けりしかして彼等はアドニヤのまへに飲食してアドニヤ王 壽かれと言ふ二六されど汝の僕なる我と祭司ザドクとヱホヤダの子ベナヤと汝の僕ソロモンとは彼請かざるなり二七此事は王わが主の爲たまふ所なるかしかるに汝誰が汝に繼で王わが主の位に坐すべきを僕に知せたまはざるなりと二八ダビデ王答ていふバテシバをわが許に召せと彼乃ち王のまへに入て王のまへにたつに二九王誓ひていひけるはわが生命を諸の艱難の中に救ひたまひしヱホバは活く三〇我イスラエルの神ヱホバを指て誓ひて汝の子ソロモン我に繼で王となり我に代りてわが位に坐すべしといひしごとくに我今日爲すべしと三一是においてバテシバ躬を鞠め地に伏て王を拜し願くはわが主ダビデ王長久に生ながらへたまへといふ三二ダビデ王いひけるはわが許に祭司ザドクと預言者ナタンおよびヱホヤダの子ベナヤを召と彼等乃ち王のまへに來る三三王彼等にいひけるは汝等の主の臣僕を伴ひわが子ソロモンをわが身の騾に乘せ彼をギホンに導き下り三四彼處にて祭司ザドクと預言者ナタンは彼に膏をそそぎてイスラエルの上に王と爲すべししかして汝ら喇叭を吹てソロモン王 壽かれと言へ三五かくして汝ら彼に隨ひて上り來るべし彼は來りてわが位に坐し我に代りて王となるべし我彼を立てイスラエルとユダの上に主君となせりと三六ヱホヤダの子ベナヤ王に對へていひけるはアメンねがはくは王わが主の神ヱホバ然言たまはんことを三七ねがはくはヱホバ王わが主とともに在せしごとくソロモンとともに在してその位をわが主ダビデ王の位よりも大ならしめたまはんことを三八斯て祭司ザドクと預言者ナタンおよびヱホヤダの子ベナヤ並にケレテ人とペレテ人下りソロモンをダビデ王の騾に乘せて之をギホンに導きいたれり三九しかして祭司ザドク幕屋の中より膏の角を取てソロモンに膏そそげりかくて喇叭を吹きならし四〇民みなソロモン王 壽かれと言り民みなかれに隨ひ上りて笛を吹き大に喜 祝ひ地はかれらの聲にて裂たり四一アドニヤおよび彼とともに居たる賓客其食を終たる時に皆これを聞りヨアブ喇叭の聲を聞ていひけるは城邑の中の聲音何ぞ喧 囂やと四二彼が言をる間に視よ祭司アビヤタルの子ヨナタン來るアドニヤ彼にいひけるは入よ汝は勇ある人なり嘉 音を持きたれるならん四三ヨナタン答へてアドニヤにいひけるは誠にわが主ダビデ王ソロモンを王となしたまへり四四王祭司ザドクと預言者ナタンおよびヱホヤダの子ベナヤ並にケレテ人とペレテ人をソロモンとともに遣したまふ即ち彼等はソロモンを王の騾に乘せてゆき四五祭司ザドクと預言者ナタン、ギホンにて彼に膏をそそぎて王となせり而して彼等其處より歡て上るが故に城邑は諠囂し汝らが聞る聲音は是なり四六又ソロモン國の位に坐し四七且王の臣僕來りてわれらの主ダビデ王に祝を陳て願くは汝の神ソロモンの名を汝の名よりも美し其位を汝の位よりも大たらしめたまへと言りしかして王は

牀の上にて拜せり四八王また斯いへりイスラエルの神ヱホバはほむべきかなヱホバ今日わが位に坐する者を與たまひてわが目亦これを見るなりと四九アドニヤとともにある賓客皆驚愕き起て各其途に去りゆけり五〇茲にアドニヤ、ソロモンの面を恐れ起て往き壇の角を執へたり五一或人ソロモンに告ていふアドニヤ、ソロモン王を畏る彼壇の角を執て願くはソロモン王今日我に劍をもて僕を殺じと誓ひ給へと言たりと五二ソロモンいひけるは彼もし善人となるならば其髮の毛一すぢも地におちざるべし然ど彼の中に惡の見るあらば死しむべしと五三ソロモン王乃ち人を遣て彼を壇より携下らしむ彼來りてソロモン王を拜しければソロモン彼に汝の家に往といへり

第二章一ダビデ死ぬる日近よりければ其子ソロモンに命じていふ二我は世人の皆往く途に往んとす汝は強く丈夫のごとく爲れ三汝の神ヱホバの職守を守り其道に歩行み其法憲と其誡命と其律例と其證言とをモーセの律法に録されたるごとく守るべし然らば汝凡て汝の爲ところと凡て汝の向ふところにて榮ゆべし四又ヱホバは其嘗に我の事に付て語りて若汝の子等其道を愼み心を盡し精神を盡して眞實をもて吾前に歩ばイスラエルの位に上る人汝に缺ることなかるべしと言たまひし言を堅したまはん五又汝はゼルヤの子ヨアブが我に爲たる事即ち彼がイスラエルの二人の軍の長ネルの子アブネルとヱテルの子アマサに爲たる事を知る彼此二人を切殺し太平の時に戰の血を流し戰の血を己の腰の周圍の帶と其足の履に染たり六故に汝の智慧にしたがひて事を爲し其白髮を安然に墓に下らしむるなかれ七但しギレアデ人バルジライの子等には恩惠を施こし彼等をして汝の席にて食ふ者の中にあらしめよ彼等はわが汝の兄弟アブサロムの面を避て逃し時我に就たるなり八視よ又バホリムのベニヤミン人ゲラの子シメイ汝とともに在り彼はわがマナハイムに往し時勵しき詛言をもて我を詛へり然ど彼ヨルダンに下りて我を迎へたれば我ヱホバを指て誓ひて我劍をもて汝を殺さじといへり九然りといへども彼を辜なき者とする勿れ汝は智慧ある人なれば彼に爲べき事を知るなり血を流して其白髮を墓に下すべしと一〇斯てダビデは其父祖と偕に寢りてダビデの城に葬らる一一ダビデのイスラエルに王たりし日は四十年なりき即ちヘブロンにて王たりし事七年エルサレムにて王たりし事三十三年一二ソロモン其父ダビデの位に坐し其國は堅固く定まりぬ一三爰にハギテの子アドニヤ、ソロモンの母バテシバの所に來りければバテシバいひけるは汝は平穩なる事のために來るや彼いふ平穩たる事のためなり一四彼又いふ我は汝に言さんとする事ありとバテシバいふ言されよ一五かれいひけるは汝の知ごとく國は我の有にしてイスラエル皆其面を我に向て王となさんと爲りしかるに國は轉てわが兄弟の有となれり其彼の有となれるはヱホバより出たるなり一六今我一の願を汝に求む請ふわが面を黜くるなかれバテシバかれにいひけるは言されよ一七彼いひ

けるは請ふソロモン王に言て彼をしてシユナミ人アビシヤグを我に與て妻となさしめよ彼は汝の面を黜けざるべければなり一八バテシバいふ善し我汝のために王に言んと一九かくてバテシバ、アドニヤのために言とてソロモン王の許に至りければ王起てかれを迎へ彼を拝して其位に坐なほり王母のために座を設けしむ乃ち其右に坐せり二〇しかしてバテシバいひけるは我一の細小き願を汝に求むわが面を黜くるなかれ王かれにいひけるは母上よ求めたまへ我汝の面を黜けざるなり二一彼いひけるは請ふシユナミ人アビシヤグをアドニヤに與て妻となさしめよ二二ソロモン王答て其母にいひけるは何ぞアドニヤのためにシユナミ人アビシヤグを求めらるるや彼のために國をも求められよ彼は我の兄なればなり彼と祭司アビヤタルとゼルヤの子ヨアブのために求められよと二三ソロモン王乃ちヱホバを指て誓ひていふ神我に斯なし又重ねて斯なしたまへアドニヤは其身の生命を喪はんとて此言を言いだせり二四我を立てわが父ダビデの位に上しめ其約せしごとく我に家を建たまひしヱホバは生くアドニヤは今日戮さるべしと二五ソロモン王ヱホヤダの子ベナヤを遣はしければ彼アドニヤを撃て死しめたり二六王また祭司アビヤタルにいひけるは汝の故田アナトテにいたれ汝は死に當る者なれども嚮にわが父ダビデのまへに神ヱホバの櫃を舁き又凡てわが父の艱難を受たる處にて汝も艱難を受たれば我今日は汝を戮さじと二七ソロモン、アビヤタルを逐いだしてヱホバの祭司たらしめざりき斯ヱホバがシロにてエリの家につきて言たまひし言應たり二八爰に其風聞ヨアブに達りければヨアブ、ヱホバの幕屋に遁れて壇の角を執たり其はヨアブは轉てアブサロムには隨はざりしかどもアドニヤに隨ひたればなり二九ヨアブがヱホバの幕屋に遁れて壇の傍に居ることソロモンに聞えければソロモン、ヱホヤダの子ベナヤを遣はしいひけるは往て彼を撃てと三〇ベナヤ乃ちヱホバの幕屋にいたり彼にいひけるは王斯言ふ出來れ彼いひけるは否我は此に死んとベナヤ反て王に告てヨアブ斯言ひ斯我に答へたりと言ふ三一王ベナヤにいひけるは彼が言ふごとく爲し彼を撃て葬りヨアブが故なくして流したる血を我とわが父の家より除去べし三二又ヱホバはヨアブの血を其身の首に歸したまふべし其は彼は己よりも義く且善りし二の人を撃ち劍をもてこれを殺したればなり即ちイスラエルの軍の長ネルの子アブネルとユダの軍の長ヱテルの子アマサを殺せり然るに吾父ダビデは與り知ざりき三三されば彼等の血は長久にヨアブの首と其苗裔の首に皈すべし然どダビデと其苗裔と其家と其位にはヱホバよりの平安永久にあるべし三四ヱホヤダの子ベナヤすなはち上りて彼を撃ち彼を殺せり彼は野にある己の家に葬らる三五王乃ちヱホヤダの子ベナヤをヨアブに代て軍の長となせり王また祭司ザドクをしてアビヤタルに代しめたり三六又王人を遣てシメイを召て之に曰けるはエルサレムに於て汝の爲に家を建て其處に住み其處より此にも彼にも出るなかれ三七

汝が出てキデロン川を濟る日には汝確に知れ汝必ず戮さるべし汝の血は汝の首に歸せん**三八**シメイ王にいひけるは此言は善し王わが主の言たまへるごとく僕然なすべしと斯シメイ日久しくエルサレムに住り**三九**三年の後シメイの二人の僕ガテの王マアカの子アキシの所に逃されり人々シメイに告ていふ視よ汝の僕はガテにありと**四〇**シメイ乃ち起て其驢馬に鞍置きガテに往てアキシに至り其僕を尋ねたり即ちシメイ往て其僕をガテより携來りしが**四一**シメイのエルサレムよりガテにゆきて歸しことソロモンに聞えければ**四二**王人を遣てシメイを召て之にいひけるは我汝をしてヱホバを指て誓しめ且汝を戒めて汝確に知れ汝が出て此彼に歩く日には汝必ず戮さるべしと言しにあらずや又汝は我に我聞る言葉は善しといへり**四三**しかるに汝なんぞヱホバの誓とわが汝に命じたる命令を守ざりしや**四四**王又シメイにいひけるは汝は凡て汝の心の知る諸の惡即ち汝がわが父ダビデに爲たる所を知るヱホバ汝の惡を汝の首に歸したまふ**四五**されどソロモン王は福祉を蒙らんまたダビデの位は永久にヱホバのまへに固く立べしと**四六**王ヱホヤダの子ベナヤに命じければ彼出てシメイを撃ちて死しめたりしかして國はソロモンの手に固く立り

第三章 **一** ソロモン、エジプトの王パロと縁を結びパロの女を娶て之を携來り自己の家とヱホバの家とエルサレムの周圍の石垣を建築ことを終るまでダビデの城に置り**二**當時までヱホバの名のために建たる家なかりければ民は崇邱にて祭を爲り**三**ソロモン、ヱホバを愛し其父ダビデの法憲に歩めり但し彼は崇邱にて祭を爲し香を焚り**四**爰に王ギベオンに往て其處に祭を爲んとせり其は彼處は大なる崇邱なればなり即ちソロモン一千の燔祭を其壇に献たり**五**ギベオンにてヱホバ夜の夢にソロモンに顯れたまへり神いひたまひけるは我何を汝に與ふべきか汝求めよ**六**ソロモンいひけるは汝は汝の僕わが父ダビデが誠實と公義と正心を以て汝と共に汝の前に歩みしに因て大なる恩惠を彼に示したまへり又汝彼のために此大なる恩惠を存て今日のごとくかれの位に坐する子を彼に賜へり**七**わが神ヱホバ汝は僕をして我父ダビデに代て王とならしめたまへり而るに我は小き子にして出入することを知ず**八**且僕は汝の選みたまひし汝の民の中にあり即ち大なる民にて其數衆くして數ふることも書すことも能はざる者なり**九**是故に聽き別る心を僕に與へて汝の民を鞫しめ我をして善惡を辨別ることを得さしめたまへ誰か汝の此夥多き民を鞫くことを得んと**一〇**ソロモン此事を求めければ其言主の心にかなへり**一一**是において神かれにいひたまひけるは汝此事を求めて己の爲に長壽を求めず又己のために富有をも求めず又己の敵の生命をも求めずして惟訟を聽き別る才智を求めたるに因て**一二**視よ我汝の言に循ひて爲り我汝に賢明く聰慧き心を與ふれば汝の先には汝の如き者なく汝の後にも汝の如き者興らざるべし**一三**我亦汝の求めざる者即ち富と貴とをも

汝に與ふれば汝の生の涯王等の中に汝の如き者あらざるべし一四又汝若汝の父ダビデの歩し如く吾道に歩みてわが法憲と命令を守らば我汝の日を長うせんと一五ソロモン目寤て視るに夢なりき斯てソロモン、エルサレムに至りヱホバの契約の櫃の前に立ち燔祭を献げ酬恩祭を爲して其諸の臣僕に饗宴を爲り一六爰に娼妓なる二人の婦王の所に來りて其前に立ちしが一七一人の婦いひけるはわが主よ我と此婦は一の家に住む我此婦と偕に家にありて子を生り一八しかるにわが生し後第三日に此婦もまた生りしかして我儕偕にありき家には他人の我らと偕に居りし者なし家には只我儕二人のみ一九然るに此婦其子の上に臥たるによりて夜の中に其子死たれば二〇中夜に起て婢の眠れる間にわが子をわれの側より取りて之を己の懐に臥しめ己の死たる子をわが懐に臥しめたり二一朝に及びて我わが子に乳を飮せんとて興て見るに死ゐたり我朝にいたりて其を熟く視たるに其はわが生るわが子にはあらざりしと二二今一人の婦いふ否活るはわが子死るは汝の子なりと此婦いふ否死るは汝の子活るはわが子なりと彼等斯王のまへに論り二三時に王いひけるは一人は此活るはわが子死るは汝の子なりと言ひ又一人は否死るは汝の子活るはわが子なりといふと二四王乃ち劍を我に持來れといひければ劍を王の前に持來れり二五王いひけるは活る子を二に分て其半を此に半を彼に與へよと二六時に其活子の母なる婦人心其子のために焚がごとくなりて王に言していひけるは請ふわが主よ活る子を彼に與へたまへ必ず殺したまふなかれと然ども他の一人は是を我のにも汝のにもならしめず判たせよと言り二七王答ていひけるは活子を彼に與へよ必ず殺すなかれ彼は其母なるなりと二八イスラエル皆王の審理し所の判決を聞て王を畏れたり其は神の智慧の彼の中にありて審理を爲しむるを見たればなり

第四章一ソロモン王はイスラエルの全地に王たり二其有る群卿は左の如しザドクの子アザリヤは相國三シシヤの子エリホレフとアヒヤは書記官アヒルデの子ヨシヤパテは史官四ヱホヤダの子ベナヤは軍の長ザドクとアビヤタルは祭司五ナタンの子アザリヤは代官の長ナタンの子ザブデは大臣にして王の友たり六アヒシヤルは宮内卿アブダの子アドニラムは徴募長なり七ソロモン又イスラエルの全地に十二の代官を置り其人々王と其家のために食物を備へたり即ち各一年に一月宛食物を備へたり八其名左のごとしエフライムの山地にはベンホル九マカヅとシヤラビムとベテシメシとエロンベテハナンにはベンデケル一〇アルポテにはベンヘセデありシヨコとヘベルの全地とは彼擔任り一一ドルの高地の全部にはベンアヒナダブあり彼はソロモンの女タパテを妻とせり一二アルヒデの子バアナはタアナクとメギドとヱズレルの下にザルタナの邊にあるベテシヤンの全地とを擔任てベテシヤンよりアベルメホラにいたりヨクネアムの外にまで及ぶ一三ギレアデのラモテにはベンゲベルあり彼はギレ

アデにあるマナセの子ヤイルの諸村を擔任ち又バシヤンなるアルゴブの地にある石垣と銅の關を有る大なる城六十を擔任り一四イドの子アヒナダブはマハナイムを擔任り一五ナフタリにはアヒマアズあり彼もソロモンの女バスマテを妻に娶れり一六アセルとアロテにはホシヤイの子バアナあり一七イツサカルにはパルアの子ヨシヤパテあり一八ベニヤミンにはエラの子シメイあり一九アモリ人の王シホンの地およびバシヤンの王オグの地なるギレアデの地にはウリの子ゲベルあり其地にありし代官は唯彼一人のみ二〇ユダとイスラエルの人は多くして濱の沙の多きがごとくなりしが飮食して樂めり二一ソロモンは河よりペリシテ人の地にいたるまでとエジプトの境に及ぶまでの諸國を治めたれば皆禮物を餽りてソロモンの一生の間事へたり二二偖ソロモンの一日の食物は細麪三十石粗麪六十石二三肥牛十牧場の牛二十羊一百其外に牡鹿羚羊小鹿および肥たる禽あり二四其はソロモン河の此方をテフサよりガザまで盡く治めたればなり即ち河の此方の諸王を悉く統治たり彼は四方の臣僕より平安を得たりき二五ソロモンの一生の間ユダとイスラエルはダンよりベエルシバに至るまで安然に各其葡萄樹の下と無花果樹の下に住り二六ソロモン戰車の馬の廐四千騎兵一萬二千を有り二七彼代官等各其月にソロモン王のためおよび總てソロモン王の席に來る者の爲に食を備へて缺るところなからしめたり二八又彼等各其職に循ひて馬および疾足の馬に食する大麥と蒭蕘を其馬の在る處に携へ來れり二九神ソロモンに智慧と聰明を甚だ多く賜ひ又廣大き心を賜ふ海濱の沙のごとし三〇ソロモンの智慧は東洋の人々の智慧とエジプトの諸の智慧よりも大なりき三一彼は凡の人よりも賢くエズラ人エタンよりも又マホルの子なるヘマンとカルコルおよびダルダよりも賢くして其名四方の諸國に聞えたり三二彼箴言三千を説り又其詩歌は一千五首あり三三彼又草木の事を論じてレバノンの香柏より墻に生る苔に迄及べり彼亦獸と鳥と匍行物と魚の事を論じたり三四諸の國の人々ソロモンの智慧を聽んとて來り天下の諸の王ソロモンの智慧を聞及びて人を遣はせり

第五章一ツロの王ヒラム、ソロモンの膏そそがれて其父にかはりて王となりしを聞て其臣僕をソロモンに遣せりヒラムは恒にダビデを愛したる者なりければなり二是に於てソロモン、ヒラムに言遣はしけるは三汝の知ごとく我父ダビデは其周圍にありし戰爭に因て其神ヱホバの名のために家を建ること能はずしてヱホバが彼等を其足の跖の下に置またふを待り四然るに今わが神ヱホバ我に四方の太平を賜ひて敵もなく殃もなければ五我はヱホバのわが父ダビデに語てわが汝の代に汝の位に上しむる汝の子其人はわが名のために家を建べしと言たまひしに循ひてわが神ヱホバの名のために家を建んとす六されば汝命じてわがためにレバノンより香柏を砍出さしめよわが僕汝の僕と共にあるべし又我は凡て汝の言ふごとく汝の僕の賃銀を汝に付すべし

其は汝の知ごとく我儕の中にはシドン人の如く木を砍に巧みなる人なければなりと七ヒラム、ソロモンの言を聞て大に喜び言けるは今日ヱホバに稱譽あれヱホバ、ダビデに此夥多しき民を治むる賢き子を與たまへりと八かくてヒラム、ソロモンに言遣りけるは我汝が言ひ遣したる所の事を聽り我香柏の材木と松樹の材木とに付ては凡て汝の望むごとく爲すべし九わが僕レバノンより海に持下らんしかして我これを海より桴にくみて汝が我に言ひ遣す處におくり其處にて之をくづすべし汝之を受よ又汝はわが家のために食物を與へてわが望を成せと一〇斯てヒラムはソロモンに其凡て望むごとく香柏の材木と松の材木を與へたり一一又ソロモンはヒラムに其家の食物として小麥二萬石を與へまた清油二十石をあたへたり斯ソロモン年々ヒラムに與へたり一二ヱホバ其言たまひしごとくソロモンに智慧を賜へりまたヒラムとソロモンの間睦しくして二人偕に契約を結べり一三爰にソロモン王イスラエルの全地に徴募人を興せり其徴募人の數は三萬人なり一四ソロモンかれらを一月交代に一萬人づつレバノンに遣せり即ち彼等は一月レバノンに二月家にありアドニラムは徴募人の督者なりき一五ソロモン負載者七萬人山に於て石を砍る者八萬人あり一六外に又其工事の長なる官吏三千三百人ありて工事に作く民を統たり一七かくて王命じて大なる石貴き石を鑿出さしめ琢石を以て家の基礎を築かしむ一八ソロモンの建築者とヒラムの建築者およびゲバル人之を砍り斯彼等材木と石を家を建るに備へたり

第六章

一イスラエルの子孫のエジプトの地を出たる後四百八十年ソロモンのイスラエルに王たる第四年ジフの月即ち二月にソロモン、ヱホバのために家を建ることを始めたり二ソロモン王のヱホバの爲に建たる家は長六十キユビト濶二十キユビト高三十キユビトなり三家の拜殿の廊は家の濶に循ひて長二十キユビト家の前の其濶十キユビトなり四彼家に造り附の格子ある窻を施たり五又家の墻壁に附て四周に連接屋を建て家の墻壁即ち拜殿と神殿の墻壁の周圍に環らせり又四周に旁房を造れり六下層の連接屋は濶五キユビト中層のは濶六キユビトを第三層のは濶七キユビトなり即ち家の外に階級を造り環らして何者をも家の墻壁に挿入ざらしむ七家は建る時に鑿石所にて鑿り預備たる石にて造りたれば造れる間に家の中には鎚も鑿も其外の鐵器も聞えざりき八中層の旁房の戸は家の右の方にあり螺旋梯より中層の房にのぼり中層の房より第三層の房にいたるべし九斯彼家を建終り香柏の椽と板をもて家を葺り一〇又家に附て五キユビトの高たる連接屋を建環し香柏をもて家に交接たり一一爰にヱホバの言ソロモンに臨みて曰く一二汝今此家を建つ若し汝わが法憲に歩みわが律例を行ひわが諸の誡命を守りて之にしたがひて歩まばわれはが汝の父ダビデに言し語を汝に固うすべし一三我イスラエルの子孫の中に住わが民イスラエルを棄ざるべし一四斯ソロモン家を建終れり一五彼香柏の板

を以て家の墻壁の裏面を作れり即ち家の牀板より頂格の墻壁まで木をもて其裏面をはりまた松の板をもて家の牀板をはれり一六又家の奥に二十キユビトの室を牀板より墻壁まで香柏をもて造れり即ち家の内に至聖所なる神殿を造れり一七家即ち前にある拝殿は四十キユビトなり一八家の内の香柏は瓢と咲る花を雕刻める者なり皆香柏にして石は見えざりき一九神殿は彼其處にヱホバの契約の櫃を置んとて家の内の中に設けたり二〇神殿の内は長二十キユビト濶二十キユビト高二十キユビトなり純金をもて之を蔽ひ又香柏の壇を覆へり二一又ソロモン純金をもて家の内を蔽ひ神殿の前に金の鏈をもて間隔を造り金をもて之を蔽へり二二又金をもて殘るところなく家を蔽ひ遂に家を飾ることを悉く終たりまた神殿の傍にある壇は皆金をもて蔽へり二三神殿の内に橄欖の木をもて二のケルビムを造れり其高十キユビト二四其ケルブの一の翼は五キユビト又其ケルブの他の翼も五キユビトなり一の翼の末より他の翼の末までは十キユビトあり二五他のケルブも十キユビトなり其ケルビムは偕に同量同形なり二六此ケルブの高十キユビト彼ケルブも亦しかり二七ソロモン家の内の中にケルビムを置ゑケルビムの翼を展しければ此ケルブの翼は此墻壁に及び彼ケルブの翼は彼の墻壁に及びて其兩翼家の中にて相接れり二八彼金をもてケルビムを蔽へり二九家の周圍の墻壁には皆内外ともにケルビムと棕櫚と咲る花の形を雕み三〇家の牀板には内外ともに金を蔽へり三一神殿の入口には橄欖の木の戸を造れり其木匡の門柱は五分の一なり三二其二の扉も亦橄欖の木なりソロモン其上にケルビムと棕櫚と咲る花の形を雕刻み金をもて蔽へり即ちケルビムと棕櫚の上に金を鍍たり三三斯ソロモン亦拝殿の戸のために橄欖の木の門柱を造れり即ち四分の一なり三四其二の戸は松の木にして此戸の兩扉は摺むべく彼戸の兩扉も摺むべし三五ソロモン其上にケルビムと棕櫚と咲る花を雕刻み金をもてこれを蔽ひて善く其雕工に適はしむ三六また鑿石三層と香柏の厚板一層をもて内庭を造れり三七第四年のジフの月にヱホバの家の基礎を築き三八第十一年のブルの月即ち八月に凡て其箇條のごとく其定例のごとくに家成りぬ斯ソロモン之に建るに七年を渉れり

第七章一ソロモン己の家を建しが十三年を經て全く其家を建終たり二彼レバノン森の家を建たり其長は百キユビト其濶は五十キユビト其高は三十キユビトなり香柏の柱四行ありて柱の上に香柏の梁あり三四十五本の柱の上なる梁の上は香柏にて蓋へり柱は一行に十五本あり四また窻三行ありて牖と牖と三段に相對ふ五戸と戸柱は皆大木をもて角に造り牖と牖と三段に相對へり六又柱の廊を造れり其長五十キユビト其濶三十キユビトなり柱のまへに一の廊ありまた其柱のまへに柱と階あり七又ソロモン審判を爲すために位の廊即ち審判の廊を造り牀板より牀板まで香柏をもて蔽へり八ソロモンの居住る家は其廊の後の他の庭にありて其工作同じかりきソロモン亦其娶りたるパロの

女のために家を建しが此廊に同じかりき[九] 是等は内外とも基礎より檐にいたるまで又外面にては大庭にいたるまで皆鑿石の量にしたがひて鋸にて剖たる貴き石をもて造れるものなり[一〇] 又基礎は貴き石大なる石即ち十キユビトの石八キユビトの石なり[一一] 其上には鑿石の量に循ひて貴き石と香柏あり[一二] 又大庭の周圍にに三層の鑿石と一層の香柏の厚板ありヱホバの家の内庭と家の廊におけるが如し[一三] 爰にソロモン人を遣はしてヒラムをツロより召び來れり[一四] 彼はナフタリの支派なる嫠婦の子にして其父はツロの人にて銅の細工人なりヒラムは銅の諸の細工を爲すの智慧と慧悟と知識の充ちたる者なりしがソロモン王の所に來りて其諸の細工を爲り[一五] 彼銅の柱二を鑄たり其高各十八キユビトにして各十二キユビトの繩を環らすべし[一六] 又銅を鎔して柱頭を鑄て柱の顚に置ゆ此の頭の高も五キユビト彼の頭の高も五キユビトなり[一七] 柱の上にある頭の爲に組物の網と鏈様の槎物を造れり此頭に七つ彼頭に七つあり[一八] 又二行の石榴を一の網工の上の四周に造りて柱の上にある頭を蓋ふ他の頭をも亦然せり[一九] 柱の上にある頭は四キユビトの百合花の形にして廊におけるがごとし[二〇] 二の柱の頭の上には亦網工の外なる腹の所に接きて石榴あり他の柱の四周にも石榴二百ありて相列べり[二一] 此柱を拜殿の廊に竪つ即ち右の柱を立て其名をヤキンと名け左の柱を竪て其名をボアズと名く[二二] 其柱の上に百合花の形あり斯其柱の作成り[二三] 又海を鑄なせり此邊より彼邊まで十キユビトにして其四周圓く其高五キユビトなり其四周は三十キユビトの繩を環らすべし[二四] 其邊の下には四周に匏瓜ありて之を環れり即ち一キユビトに十づつありて海の周圍を圍り其匏瓜は海を鑄たる時に二行に鑄たるなり[二五] 其海は十二の牛の上に立り其三は北に向ひ三は西に向ひ三は南に向ひ三は東に向ふ海其上にありて牛の後は皆内に向ふ[二六] 海の厚は手寛にして其邊は百合花にて杯の邊の如くに作れり海は二千斗を容たり[二七] 又銅の臺十を造れり一の臺の長四キユビト其濶四キユビト其高三キユビトなり[二八] 其臺の製作は左のごとし臺には嵌板あり嵌板は邊の中にあり[二九] 邊の中にある嵌板の上に獅子と牛とケルビムあり又邊の上に座あり獅子と牛の下に花飾の垂下物あり[三〇] 其臺には各四の銅の輪と銅の軸ありて其四の足には肩のごとき者あり其肩のごとき者は洗盤の下にありて凡の花飾の旁に鑄つけたり[三一] 其口は頭の内より上は一キユビトなり其口は圓く一キユビト半にして座の作の如し又其口には雕工あり其鏡板は四角にして圓からず[三二] 四の輪は鏡板の下にあり輪の手は臺の中にあり輪は各高一キユビト半[三三] 輪の工作は戰車の輪の工作の如し其手と縁と輻と轂とは皆鑄物なり[三四] 臺の四隅に四の肩の如き者あり其肩のごとき者は臺より出づ[三五] 臺の上の所の高半キユビトは其周圍圓し又臺の上の所の手と鏡板も臺より出づ[三六] 其手の板と鏡板には其各の隙處に循ひてケルビムと獅子と棕櫚を雕刻み又其四周に花飾

を造れり三七是のごとく十の臺を造れり其鑄法と量と形は皆同じ三八又銅の洗盤十を造れり洗盤は各四十斗を容れ洗盤は各四キユビトなり十の臺の上には各一の洗盤あり三九其臺五を家の右の旁に五を家の左の旁に置ゑ家の右の東南に其海を置り四〇ヒラム又鍋と火鏟と鉢とを造れり斯ヒラム、ヱホバの家の爲にソロモン王に爲る諸の細工を成終たり四一即ち二の往と其柱の上なる頭の二の毬と柱の上なる其頭の二の毬を蓋ふ二の網工と四二其二の網工の爲の石榴四百是は一の網工に石榴二行ありて柱の上なる二の毬を蓋ふ四三又十の臺と其臺の上の十の洗盤と四四一の海と其海の下の十二の牛四五及び鍋と火鏟と鉢是也ヒラムがソロモン王にヱホバの家のために造りし此等の器は皆光明ある銅なりき四六王ヨルダンの低地に於てスコテとザレタンの間の粘土の地にて之を鑄たり四七ソロモン其器甚だしく多かりければ皆權ずに措り其銅の重しれざりき四八又ソロモン、ヱホバの家の諸の器を造れり即ち金の壇と供前のパンを載る金の案四九および純金の燈臺是は神殿のまへに五は右に五は左にあり又金の花と燈盞と燈鉗と五〇純金の盆と剪刀と鉢と皿と滅燈器と至聖所なる内の家の戸のため及び拜殿なる家の戸のためなる金の肘鈕是なり五一斯ソロモン王のヱホバの家のために爲る諸の細工終れり是においてソロモン其父ダビデが奉納めたる物即ち金銀および器を携へいりてヱホバの家の寶物の中に置り

第八章

一爰にソロモン、ヱホバの契約の櫃をダビデの城即ちシオンより舁上らんとてイスラエルの長老と諸の支派の首イスラエルの子孫の家の長等をエルサレムにてソロモン王の所に召集む二イスラエルの人皆エタニムの月即ち七月の節筵に當てソロモン王の所に集まれり三イスラエルの長老皆至り祭司櫃を執りあげて四ヱホバの櫃と集會の幕屋と幕屋にありし諸の聖き器を舁上れり即ち祭司とレビの人之を舁のぼれり五ソロモン王および其許に集れるイスラエルの會衆皆彼と偕に櫃の前にありて羊と牛を献げたりしが其數多くして書すことも數ふることも能はざりき六祭司ヱホバの契約の櫃を其處に舁いれたり即ち家の神殿なる至聖所の中のケルビムの翼の下に置めたり七ケルビムは翼を櫃の所に舒べ且ケルビム上より櫃と其棹を掩へり八杠長かりければ杠の末は神殿の前の聖所より見えたり然ども外には見えざりき其杠は今日まで彼處にあり九櫃の内には二の石牌の外何もあらざりき是はイスラエルの子孫のエジプトの地より出たる時ヱホバの彼等と契約を結たまへる時にモーセがホレブにて其處に置めたる者なり一〇斯て祭司聖所より出けるに雲ヱホバの家に盈たれば一一祭司は雲のために立て供事ること能はざりき其はヱホバの榮光ヱホバの家に盈たればなり一二是においてソロモンいひけるはヱホバは濃き雲の中に居んといひたまへり一三我誠に汝のために住むべき家永久に居べき所を建たりと一四王其面を轉てイスラエルの凡の會衆を祝せり時に

イスラエルの會衆は皆立ゐたり一五 彼言けるはイスラエルの神ヱホバは譽べきかなヱホバは其口をもて吾父ダビデに言ひ其手をもて之を成し遂げたまへり一六 即ち我は吾民イスラエルをエジプトより導き出せし日より我名を置べき家を建しめんためにイスラエルの諸の支派の中より何れの城邑をも選みしことなし但ダビデを選みてわが民イスラエルの上に立しめたりと言たまへり一七 夫イスラエルの神ヱホバの名のために家を建ることはわが父ダビデの心にありき一八 しかるにヱホバわが父ダビデにいひたまひけるはわが名のために家を建ること汝の心にあり汝の心に此事あるは善し一九 然ども汝は其家を建べからず汝の腰より出る汝の子其人吾名のために家を建べし二〇 而してヱホバ其言たまひし言を行ひたまへり即ち我わが父ダビデに代りて立ちヱホバの言たまひし如くイスラエルの位に坐しイスラエルの神ヱホバの名のために家を建たり二一 我又其處にヱホバの契約を蔵めたる櫃のために一の所を設けたり即ち我儕の父祖をエジプトの地より導き出したまひし時に彼等に爲したまひし者なりと二二 ソロモン、イスラエルの凡の會衆の前にてヱホバの壇のまへに立ち其手を天に舒て二三 言けるはイスラエルの神ヱホバよ上の天にも下の地にも汝の如き神なし汝は契約を持ちたまひ心を全うして汝のまへに歩むところの汝の僕等に恩惠を施したまふ二四 汝は汝の僕わが父ダビデに語たまへる所を持ちたまへり汝は口をもて語ひ手をもて成し遂たまへること今日のごとし二五 イスラエルの神ヱホバよ然ば汝が僕わが父ダビデに語りて若し汝の子孫其道を愼みて汝がわが前に歩めるごとくわが前に歩まばイスラエルの位に坐する人わがまへにて汝に缺ること無るべしといひたまひし事をダビデのために持ちたまへ二六 然ばイスラエルの神よ爾が僕わが父ダビデに言たまへる爾の言に效驗あらしめたまへ二七 神果して地の上に住たまふや視よ天も諸の天の天も爾を容るに足ず况て我が建たる此家をや二八 然どもわが神ヱホバよ僕の祈祷と懇願を顧みて其號呼と僕が今日爾のまへに祈る祈祷を聽たまへ二九 願くは爾の目を夜晝此家に即ち爾が我名は彼處に在べしといひたまへる處に向ひて開きたまへ願くは僕の此處に向ひて祈らん祈祷を聽たまへ三〇 願くは僕と爾の民イスラエルが此處に向ひて祈る時に爾其懇願を聽たまへ爾は爾の居處なる天において聽き聽て赦したまへ三一 若し人其隣人に對ひて犯せることありて其人誓をもて誓ふことを要られんに來りて此家において爾の壇のまへに誓ひなば三二 爾天において聽て行ひ爾の僕等を鞫き惡き者を罪して其道を其首に歸し義しき者を義として其義に循ひて之に報いたまへ三三 若爾の民イスラエル爾に罪を犯したるがために敵の前に敗られんに爾に歸りて爾の名を崇め此家にて爾に祈り願ひなば三四 爾天において聽き爾の民イスラエルの罪を赦して彼等を爾が其父祖に與へし地に歸らしめたまへ三五 若彼等が爾に罪を犯したるが爲に天閉て雨无らんに彼等若此處にむかひて祈り爾の

名を崇め爾が彼等を苦めたまふときに其罪を離れなば三六 爾天において聽き爾の僕等爾の民イスラエルの罪を赦したまへ爾彼等に其歩むべき善道を敎へたまふ時は爾が爾の民に與へて產業となさしめたまひし爾の地に雨を降したまへ三七 若國に饑饉あるか若くは疫病枯死朽腐噬亡ぼす蝗蟲あるか若くは其敵國にいりて彼等を其門に圍むか如何なる災害如何なる病疾あるも三八 若一人か或は爾の民イスラエル皆各己の心の災を知て此家に向ひて手を舒なば其人如何なる祈禱如何なる懇願を爲とも三九 爾の居處なる天に於て聽て赦し行ひ各の人に其心を知給ふ如く其道々にしたがひて報い給へ其は爾のみ凡の人の心を知たまへばなり四〇 爾かく彼等をして爾が彼等の父祖に與へたまへる地に居る日に常に爾を畏れしめたまへ四一 且又爾の民イスラエルの者にあらずして爾の名のために遠き國より來る異邦人は四二(其は彼等爾の大なる名と強き手と伸たる腕を聞およぶべければなり) 若來りて此家にむかひて祈らば四三 爾の居處なる天に於て聽き凡て異邦人の爾に籲求むる如く爲たまへ爾かく地の諸の民をして爾の名をしらしめ爾の民イスラエルのごとく爾を畏れしめ又我が建たる此家は爾の名をもて稱呼るるといふことを知しめ給へ四四 爾の民其敵と戰はんとて爾の遣はしたまふ所に出たる時彼等若爾が選みたまへる城とわが爾の名のために建たる家の方に向ひてヱホバに祈らば四五 爾天において彼等の祈禱と懇願を聽て彼等を助けたまへ四六 人は罪を犯さざる者なければ彼等爾に罪を犯すことありて爾彼等を怒り彼等を其敵に付し敵かれらを虜として遠近を論ず敵の地に引ゆかん時は四七 若彼等虜れゆきし地において自ら顧みて悔い己を虜へゆきし者の地にて爾に願ひて我儕罪を犯し悖れる事を爲たり我儕惡を行ひたりと言ひ四八 己を虜ゆきし敵の地にて一心一念に爾に歸り爾が其父祖に與へたまへる地爾が選みたまへる城とわが爾の名のために建たる家の方に向ひて爾に祈らば四九 爾の居處なる天において爾彼等の祈禱と懇願を聽てかれらを助け五〇 爾の民の爾に對て犯したる事と爾に對て過てる其凡の罪過を赦し彼等を虜ゆける者の前にて彼等に憐を得させ其人々をして彼等を憐ましめたまへ五一 其は彼等は爾がエジプトより即ち鐵の鑪の中よりいだしたまひし爾の民爾の產業なればなり五二 願くは僕の祈禱と爾の民イスラエルの祈願に爾の目を開きて凡て其爾に籲求むる所を聽たまへ五三 其は爾彼等を地の凡の民の中より別ちて爾の產業となしたまへばなり神ヱホバ爾が我儕の父祖をエジプトより導き出せし時モーセによりて言給ひし如し五四 ソロモン此祈禱と祈願を悉くヱホバに祈り終りし時其天にむかひて手を舒べ膝を屈居たるを止てヱホバの壇のまへより起あがり五五 立て大なる聲にてイスラエルの凡の會衆を祝して言けるは五六 ヱホバは譽べきかなヱホバは凡て其言たまひし如く其民イスラエルに太平を與へたまへり其僕モーセによりて言たまひし其善言は皆一も違はざりき五七 願くは

我儕の神ヱホバ我儕の父祖と偕に在せしごとく我儕とともに在せ我儕を離れたまふなかれ我儕を棄たまふなかれ五八 願くは我儕の心をおのれに傾けたまひて其凡の道に歩ましめ其我儕の父祖に命じたまひし誡命と法憲と律例を守らしめたまへ五九 願くはヱホバの前にわが願し是等の言日夜われらの神ヱホバに近くあれ而してヱホバ日々の事に僕を助け其民イスラエルを助けたまへ六〇 斯して地の諸の民にヱホバの神なることと他に神なきことを知しめたまへ六一 されば爾等我儕の神ヱホバとともにありて今日の如く爾らの心を完全しヱホバの法憲に歩み其誡命を守るべしと六二 斯て王および王と偕にありしイスラエル皆ヱホバのまへに犠牲を献たり六三 ソロモン酬恩祭の犠牲を献げたり即ち之をヱホバに献ぐ其牛二萬二千羊十二萬なりき斯王とイスラエルの子孫皆ヱホバの家を開けり六四 其日に王ヱホバの家の前なる庭の中を聖別め其處にて燔祭と禴祭と酬恩祭の脂とを献げたり是はヱホバの前なる銅の壇小くして燔祭と禴祭と酬恩祭の脂とを受るにたらざりしが故なり六五 其時ソロモン七日に七日合て十四日我儕の神ヱホバのまへに節筵を爲りイスラエルの大なる會衆ハマテの入處よりエジプトの河にいたるまで悉く彼と偕にありき六六 第八日にソロモン民を歸せり民は王を祝しヱホバが其僕ダビデと其民イスラエルに施したまひし諸の恩惠のために喜び且心に樂みて其天幕に往り

第九章一 ソロモン、ヱホバの家と王の家を建る事を終へ且凡てソロモンが爲んと欲し望を遂し時二 ヱホバ再ソロモンに嘗てギベオンにて顯現たまひし如くあらはれたまひて三 彼に言たまひけるは我は爾が我まへに願し祈祷と祈願を聽たり我爾が建たる此家を聖別てわが名を永く其處に置べし且わが目とわが心は恒に其處にあるべし四 爾若爾の父ダビデの歩みし如く心を完うして正しく我前に歩みわが爾に命じたる如く凡て行ひてわが憲法と律例を守らば五 我は爾の父ダビデに告てイスラエルの位に上る人爾に缺ること無るべしと言しごとく爾のイスラエルに王たる位を固うすべし六 若爾等又は爾等の子孫全く轉きて我にしたがはずわが爾等のまへに置たるわが誡命と法憲を守らずして往て他の神に事へ之を拜まば七 我イスラエルをわが與へたる地の面より絶ん又わが名のために我が聖別たる此家をば我わがまへより投げ棄んしかしてイスラエルは諸の民の中に諺語となり嘲笑となるべし八 且又此家は高くあれども其傍を過る者は皆之に驚き嘶きて言んヱホバ何故に此地に此家に斯爲たまひしやと九 人答へて彼等は己の父祖をエジプトの地より導き出せし其神ヱホバを棄て他の神に附從ひ之を拜み之に事へしに因てヱホバ此の凡の害惡を其上に降せるなりと言ん一〇 ソロモン二十年を經て二の家即ちヱホバの家と王の家を建をはりヒウムにガリラヤの地の城邑二十を與へたり一一 其はツロの王ヒラムはソロモンに凡て其望に循ひて香柏と松の木と金を供給たればなり一二 ヒラム、ツロより出てソロモンが己に與へたる

諸邑を見しに其目に善らざりければ一三我兄第よ爾が我に與へたる此等の城邑は何なるやといひて之をカブルの地となづけたり其名今日までのこる一四嘗てヒラムは金百二十タラントを王に遣れり一五ソロモン王の徴募人を興せし事は是なり即ちヱホバの家と自己の家とミロとエルサレムの石垣とハゾルとメギドンとゲゼルを建んが爲なりき一六エジプトの王パロ嘗て上りてゲゼルを取り火を以て之を燬き其邑に住るカナン人を殺し之をソロモンの妻なる其女に與へて粧奩と爲り一七ソロモン、ゲゼルと下ベテホロンと一八バアラと國の野にあるタデモル一九及びソロモンの有てる府庫の諸邑其戰車の諸邑其騎兵の諸邑並にソロモンがエルサレム、レバノンおよび其凡の領地に於て建んと欲し者を盡く建たり二〇凡てイスラエルの子孫に非るアモリ人ヘテ人ペリジ人ヒビ人ヱブス人の遺存る者二一其地に在て彼等の後に遺存る子孫即ちイスラエルの子孫の滅し盡すことを得ざりし者にソロモン奴隷の徴募を行ひて今日に至る二二然どもイステエルの子孫をばソロモン一人も奴隷と爲ざりき其は彼等は軍人彼の臣僕牧伯大將たり戰車と騎兵の長たればなり二三ソロモンの工事を管理れる首なる官吏は五百五十人にして工事に働く民を治めたり二四爰にパロの女ダビデの城より上りてソロモンが彼のために建たる家に至る其時にソロモン、ミロを建たり二五ソロモン、ヱホバに築きたる壇の上に年に三次燔祭と酬恩祭を献げ又ヱホバの前なる壇に香を焚りソロモン斯家を全うせり二六ソロモン王エドムの地紅海の濱に於てエラテの邊なるエジオンゲベルにて船數雙を造れり二七ヒラム海の事を知れる舟人なる其僕をソロモンの僕と偕に其船にて遣せり二八彼等オフルに至り其處より金四百二十タラントを取てこれをソロモン王の所に携來る

第一〇章一シバの女王ヱホバの名に關るソロモンの風聞を聞き及び難問を以てソロモンを試みんとて來れり二彼甚だ多くの部從香物と甚だ多くの金と寶石を負ふ駱駝を從へてエルサレムに至る彼ソロモンの許に來り其心にある所を悉く之に言たるに三ソロモン彼に其凡の事を告たり王の知ずして彼に告ざる事無りき四シバの女王ソロモンの諸の智慧と其建たる家と五其席の食物と其臣僕の列坐る事と其侍臣の伺候および彼等の衣服と其酒人と其ヱホバの家に上る階級とを見て全く其氣を奪はれたり六彼王にいひけるは我が自己の國にて爾の行爲と爾の智慧に付て聞たる言は眞實なりき七然ど我來りて目に見るまでは其言を信ぜざりしが今視るに其半も我に聞えざりしなり爾の智慧と昌盛はわが聞たる風聞に越ゆ八常に爾の前に立て爾の智慧を聽く是等の人爾の臣僕は幸福なるかな九爾の神ヱホバは讚べきかなヱホバ爾を悅び爾をイスラエルの位に上らせたまへりヱホバ永久にイスラエルを愛したまふに因て爾を王となして公道と義を行はしめたまふなりと一〇彼乃ち金百二十タラント及び甚だ多くの香物と寶石とを王に饋れりシバの女王の

ソロモン王に饋りたるが如き多くの香物は重て至ざりき一一 オフルより金を載來りたるヒラムの船は亦オフルより多くの白檀木と寶石とを運び來りければ一二 王白檀木を以てヱホバの家と王の家とに欄干を造り歌謡者のために琴と瑟を造れり是の如き白檀木は至らざりき亦今日までも見たることなし一三 ソロモン王王の例に循ひてシバの女王に物を饋りたる外に又彼が望に任せて凡て其求むる物を饋れり斯て彼其臣僕等とともに歸りて其國に往り一四 偖一年にソロモンの所に至れる金の重量は六百六十六タラントなり一五 外に又商賈および商旅の交易並にアラビヤの王等と國の知事等よりも至れり一六 ソロモン王展金の大楯二百を造れり其大楯には各六百シケルの金を用ひたり一七 又展金の干三百を造れり一の干に三斤の金を用ひたり王是等をレバノン森林の家に置り一八 王又象牙をもて大なる寶座を造り純金を以て之を蔽へり一九 其寶座に六の階級あり寶座の後に圓き頭あり坐する處の兩旁に扶手ありて扶手の側に二の獅子立てり二〇 又其六の階級に十二の獅子此旁彼旁に立り是の如き者を作れる國はあらざりき二一 ソロモン王の用ひて飲る器は皆金なり又レバノン森林の家の器も皆純金にして銀の物無りき銀はソロモンの世には貴まざりしなり二二 其は王海にタルシシの船を有てヒラムの船と供にあらしめタルシシの船をして三年に一度金銀象牙猿猴および孔雀を載て來らしめたればなり二三 抑ソロモン王は富有と智慧に於て天下の諸の王よりも大なりければ二四 天下皆神がソロモンの心に授けたまへる智慧を聽んとてソロモンの面を見んことを求めたり二五 人々各其禮物を携へ來る即ち銀の器金の器衣服甲冑香物馬騾毎歳定分ありき二六 ソロモン戰車と騎兵を集めたるに戰車千四百輛騎兵壹萬二千ありきソロモン之を戰車の城邑に置き或はエルサレムにて王の所に置り二七 王エルサレムに於て銀を石の如くに爲し香柏を平地の桑樹の如くに爲して多く用ひたり二八 ソロモンの馬を獲たるはエジプトとコアよりなり即ち王の商賈コアより價値を以て取り二九 エジプトより上り出る戰車一輛は銀六百にして馬は百五十なりき斯のごとくヘテ人の凡の王等およびスリアの王等のために其手をもて取出せり

第一一章

一 ソロモン王パロの女の外に多の外國の婦を寵愛せり即ちモアブ人アンモニ人エドミ人シドン人ヘテ人の婦を寵愛せり二 ヱホバ曾て是等の國民についてイスラエルの子孫に言たまひけらく爾等は彼等と交るべからず彼等も亦爾等と交るべからず彼等必ず爾等の心を轉して彼等の神々に從はしめんとするにソロモン彼等を愛して離れざりき三 彼妃公主七百人嬪三百人あり其妃等彼の心を轉せり四 ソロモンの年老たる時妃等其心を轉移して他の神に從はしめければ彼の心其父ダビデの心の如く其神ヱホバに全からざりき五 其はソロモン、シドン人の神アシタロテに從ひアンモニ人の惡むべき者なるモロクに從ひたればなり六 ソロモン斯ヱホバの目のまへに惡を行ひ

其父ダビデの如く全くはヱホバに從はざりき七 爰にソロモン、
モアブの憎むべき者なるケモシの爲又アンモンの子孫の憎むべ
き者なるモロクのためにエルサレムの前なる山に崇邱を築け
り八 彼又其異邦の凡の妃の爲にも然せしかば彼等は香を焚て
己々の神を祭れり九 ソロモンの心轉りてイスラエルの神ヱホ
バを離れしによりてヱホバ彼を怒りたまふヱホバ嘗て兩次彼に
顯れ一〇 此事に付て彼に他の神に從ふべからずと命じたまひけ
るに彼ヱホバの命じたまひし事を守らざりしなり一一 ヱホバ、ソ
ロモンに言たまひけるは此事爾にありしに因り又汝わが契約
とわが爾に命じたる法憲を守らざりしに因て我必ず爾より國
を裂きはなして之を爾の臣僕に與ふべし一二 然ど爾の父ダビデ
の爲に爾の世には之を爲ざるべし我爾の子の手より之を裂き
はなさん一三 但し我は國を盡くは裂きはなさずしてわが僕ダビ
デのために又わが選みたるエルサレムのために一の支派を爾の
子に與へんと一四 是に於てヱホバ、エドミ人ハダデを興してソロ
モンの敵と爲したまふ彼はエドム王の裔なり一五 曩にダビデ、エ
ドムに事ありし時軍の長ヨアブ上りて其戰死せし者を葬りエ
ドムの男を盡く撃殺しける時に方りて一六(ヨアブはエドムの男
を盡く絶までイスラエルの群衆と偕に六月其處に止れり)一七 ハ
ダデ其父の僕なる數人のエドミ人と共に逃てエジプトに往んと
せり時にハダデは尚小童子なりき一八 彼等ミデアンを起出てバ
ランに至りパランより人を伴ひてエジプトに往きエジプトの王

パロに詣るにパロ彼に家を與へ食糧を定め且土地を與へたり一
九 ハダデ大にパロの心にかなひしかばパロ己の妻の妹 即ち
王妃タペネスの妹を彼に妻せり二〇 タペネスの妹 彼に男子ゲ
ヌバテを生ければタペネス之をパロの家の中にて乳離せしむ
ゲヌバテ、パロの家にてパロの子の中にありき二一 ハダデ、エジ
プトに在てダビデの其先祖と偕に寢りたると軍の長ヨアブの
死たるを聞しかばハダデ、パロに言けるは我を去しめてわが國
に往しめよと二二 パロ彼にいひけるは爾我とともにありて何の
缺たる處ありてか爾の國に往ん事を求むる彼言ふ何も無し然ど
もねがはくは我を去しめよ去しめよ二三 神又エリアダの子レゾ
ンを興してソロモンの敵となせり彼は其主人ゾバの王ハダデゼ
ルの許を逃さりたる者なり二四 ダビデがゾバの人を殺したる時
に彼人を自己に集めて一隊の首領となりしが彼等ダマスコに往
て彼處に住みダマスコを治めたり二五 ハダデが爲たる害の外に
レゾン、ソロモンの一生の間イスラエルの敵となれり彼イステ
エルを惡みてスリアに王たりき二六 ゼレダのヱフラタ人ネバテ
の子ヤラベアムはソロモンの僕なりしが其母の名はゼルヤと曰
て嫠婦なりき彼も亦其手を擧て王に敵す二七 彼が手を擧て王に
敵せし故は此なりソロモン、ミロを築き其父ダビデの城の損缺
を塞ぎ居たり二八 其人ヤラベアムは大なる能力ある者なりしか
ばソロモン此少者が事に勤むるを見て之を立てヨセフの家の
凡の役を督どらしむ二九 其頃ヤラベアム、エルサレムを出し時シ

ロ人なる預言者アヒヤ路にて彼に遭へり彼は新しき衣服を著ゐたりしが彼等二人のみ野にありき三〇アヒヤ其著たる新しき衣服を執へて之を十二片に裂き三一ヤラベアムに言けるは爾自ら十片を取れイスラエルの神ヱホバ斯言たまふ視よ我國をソロモンの手より裂きはなして爾に十の支派を與へん三二(但し彼はわが僕ダビデの故に因り又わがイスラエルの凡の支派の中より選みたる城エルサレムの故に因りて一の支派を有つべし)三三其は彼等我を棄てシドン人の神アシタロテとモアブの神ケモシとアンモンの子孫の神モロクを拜み其父ダビデの如くわが道に歩てわが目に適ふ事わが法とわが律例を行はざればなり三四然ども我は國を盡くは彼の手より取ざるべし我が選みたるわが僕ダビデわが命令とわが法憲を守りたるに因て我彼が爲にソロモンを一生の間主たらしむべし三五然ど我其子の手より國を取て其十の支派を爾に與へん三六其子には我一の支派を與へてわが僕ダビデをしてわが己の名を置んとてわがために擇みたる城エルサレムにてわが前に常に一の光明を有しめん三七我爾を取ん爾は凡て爾の心の望む所を治めイスラエルの上に王となるべし三八爾若わが爾に命ずる凡の事を聽て吾が道に歩みわが目に適ふ事を爲しわが僕ダビデが爲し如く我が法憲と誡命を守らば我爾と偕にありてわがダビデのために建しごとく爾のために鞏固き家を建てイスラエルを爾に與ふべし三九我之がためにダビデの裔を苦めんされど永遠には非じと四〇ソロモン、ヤラベアムを殺さんと求めければヤラベアム起てエジプトに逃遁れエジプトの王シシヤクに至りてソロモンの死ぬるまでエジプトに居たり四一ソロモンの其餘の行爲と凡て彼が爲たる事および其智慧はソロモンの行爲の書に記さるるにあらずや四二ソロモンのエルサレムにてイスラエルの全地を治めたる日は四十年なりき四三ソロモン其父祖と偕に寢りて其父ダビデの城に葬らる其子レハベアム之に代て王となれり

第一二章 一 爰にレハベアム、シケムに往り其はイスラエル皆彼を王と爲んとてシケムに至りたればなり二ネバテの子ヤラベアム尚エジプトに在て聞りヤラベアムはソロモン王の面をさけて逃さりエジプトに住居たるなり三時に人衆人を遣はして彼を招けり斯てヤラベアムとイスラエルの會衆皆來りてレハベアムに告て言けるは四汝の父我儕の軛を難くせり然ども爾今爾の父の難き役と爾の父の我儕に蒙らせたる重き軛を軽くせよ然ば我儕爾に事へん五レハベアム彼等に言けるは去て三日を經て再び我に來れと民乃ち去り六レハベアム王其父ソロモンの生る間其前に立たる老人等と計りていひけるは爾等如何に教へて此民に答へしむるや七彼等レハベアムに告て言けるは爾若今日此民の僕となり之に事へて之に答へ善き言を之に語らば彼等永く爾の僕となるべしと八然に彼老人の教へし教を棄て自己と倶に生長て己のまへに立つ少年等と計れり九即ち彼等に言けるは爾等何を教へて我儕をして此我に告て爾の父の我儕に蒙むらせ

し軛を軽くせよと言ふ民に答へしむるやと一〇彼と偕に生長たる少年彼に告ていひけるは爾に告て爾の父我儕の軛を重くしたれど爾これを我儕のために軽くせよと言たる此民に爾斯言べし我が小指はわが父の腰よりも太し一一またわが父爾等に重き軛を負せたりしが我は更に爾等の軛を重くせん我父は鞭にて爾等を懲したれども我は蠍をもて爾等を懲んと爾斯彼等に告べしと一二ヤラベアムと民皆王の告て第三日に再び我に來れと言しごとく第三日にレハベアムに詣りしに一三王荒々しく民に答へ老人の教へし教を棄て一四少年の教の如く彼等に告て言けるは我父は爾等の軛を重くしたりしが我は更に爾等の軛を重くせん我父は鞭を以て爾等を懲したれども我は蠍をもて爾等を懲さんと一五王斯民に聽ざりき此事はヱホバより出たる者なり是はヱホバその嘗てシロ人アヒヤに由てネバテの子ヤラベアムに告し言をおこなはんとて爲たまへるなり一六かくイスラエル皆王の己に聽ざるを見たり是において民王に答へて言けるは我儕ダビデの中に何の分あらんやヱサイの子の中に產業なしイスラエルよ爾等の天幕に歸れダビデよ今爾の家を視よと而してイスラエルは其天幕に去りゆけり一七然どもユダの諸邑に住るイスラエルの子孫の上にはレハベアム其王となれり一八レハベアム王徵募頭なるアドラムを遣はしけるにイスラエル皆石にて彼を撃て死しめたればレハベアム王急ぎて其車に登りエルサレムに逃たり一九斯イスラエル、ダビデの家に背きて今日にいたる二〇爰にイスラエル皆ヤラベアムの歸りしを聞て人を遣して彼を集會に招き彼をイスラエルの全家の上に王と爲りユダの支派の外はダビデの家に從ふ者なし二一ソロモンの子レハベアム、エルサレムに至りてユダの全家とベニヤミンの支派の者即ち壯年の武夫十八萬を集む斯してレハベアム國を己に皈さんがためにイスラエルの家と戰はんとせしが二二神の言神の人シマヤに臨みて曰く二三ソロモンの子ユダの王レハベアムおよびユダとベニヤミンの全家並に其餘の民に告て言べし二四ヱホバ斯言ふ爾等上るべからず爾等の兄弟なるイスラエルの子孫と戰ふべからず各人其家に歸れ此事は我より出たるなりと彼等ヱホバの言を聽きヱホバの言に循ひて轉り去りぬ二五ヤラベアムはエフライムの山地にシケムを建て其處に住み又其所より出てペヌエルを建たり二六爰にヤラベアム其心に謂けるは國は今ダビデの家に歸らん二七若此民エルサレムにあるヱホバの家に禮物を献げんとて上らば此民の心ユダの王なる其主レハベアムに歸りて我を殺しユダの王レハベアムに歸らんと二八是に於て王計議て二の金の犢を造り人々に言けるは爾らのエルサレムに上ること既に足りイスラエルよ爾をエジプトの地より導き上りし汝の神を視よと二九而して彼一をベテルに安ゑ一をダンに置り三〇此事罪となれりそは民ダンに迄往て其一の前に詣たればなり三一彼又崇邱の家を建てレビの子孫にあらざる凡の民を祭司となせり三二ヤラベアム八月に節期を定めたり即ち其月の

十五日なりユダにある節期に等し而して壇の上に上りたりベテルにて彼斯爲し其作りたる犢に禮物を献げたり又彼其造りたる崇邱の祭司をベテルに立たり三かく彼其ベテルに造れる壇の上に八月の十五日に上れり是は彼が己の心より造り出したる月なり而してイスラエルの人々のために節期を定め壇の上にのぼりて香を焚り

第一三章一視よ爰に神の人ヱホバの言に由てユダよりベテルに來れり時にヤラベアムは壇の上に立て香を焚ゐたり二神の人乃ちヱホバの言を以て壇に向ひて呼はり言けるは壇よ壇よヱホバ斯言たまふ視よダビデの家にヨシアと名くる一人の子生るべし彼爾の上に香を焚く所の崇邱の祭司を爾の上に献げん且人の骨爾の上に焼れんと三是日彼異蹟を示して言けるは是はヱホバの言たまへる事の異蹟なり視よ壇は裂け其上にある灰は傾出れんと四ヤラベアム王神の人がベテルにある壇に向ひて呼はりたる言を聞る時其手を壇より伸し彼を執へよと言けるが其彼に向ひて伸したる手枯て再び屈縮ることを得ざりき五しかして神の人がヱホバの言を以て示したる異蹟の如く壇は裂け灰は壇より傾出たり六王答て神の人に言けるは請ふ爾の神ヱホバの面を和めわが爲に祈りてわが手を本に復しめよ神の人乃ちヱホバの面を和めければ王の手本に復りて前のごとくに成り七是において王神の人に言けるは我と與に家に來りて身を息めよ我爾に禮物を與へんと八神の人王に言けるは爾假令爾の家の半を我に與ふるも我は爾とともに入じ又此所にてパンを食ず水を飲ざるべし九其はヱホバの言我にパンを食ふなかれ水を飲なかれ又爾が往る途より歸るなかれと命じたればなりと一〇斯彼他途を往き自己がベテルに來れる途よりは歸らざりき一一爰にベテルに一人の老たる預言者住ゐたりしが其子等來りて是日神の人がベテルにて爲たる諸事を彼に宣たり亦神の人の王に言たる言をも其父に宣たり一二其父彼等に彼は何の途を往しやといふ其子等ユダより來りし神の人の往たる途を見たればなり一三彼其子等に言けるは我ために驢馬に鞍おけと彼等驢馬に鞍おければ彼之に乘り一四神の人の後に往きて橡の樹の下に坐するを見之にいひけるは汝はユダより來れる神の人なるか其人然りと言ふ一五彼其人にいひけるは我と偕に家に往てパンを食へ一六其人いふ我は汝と偕に歸る能はず汝と偕に入あたはず又我は此處にて爾と偕にパンを食ず水を飲じ一七其はヱホバの言我に爾彼處にてパンを食ふなかれ水を飲なかれ又爾が至れる所の途より歸り往なかれと言たればなりと一八彼其人にいひけるは我も亦爾の如く預言者なるが天の使ヱホバの言を以て我に告て彼を爾と偕に爾の家に携かへり彼にパンを食はしめ水を飲しめよといへりと是其人を詐けるなり一九是において其人彼と偕に歸り其家にてパンを食ひ水を飲り二〇彼等が席に坐せし時ヱホバの言其人を携歸し預言者に臨みければ二一彼ユダより來れる神の人に向ひて呼はり言けるはヱホバ斯言たまふ爾ヱホバ

の口に違き爾の神ヱホバの爾に命じたまひし命令を守らずして歸り二三ヱホバの爾にパンを食ふなかれ水を飮なかれと言たまひし處にてパンを食ひ水を飮たれば爾の屍は爾の父祖の墓に至らざるべしと二三其人のパンを食ひ水を飮し後彼其人のため即ち己が携歸りたる預言者のために驢馬に鞍おけり二四斯て其人往けるが獅子途にて之に遇ひて之を殺せり而して其屍は途に棄られ驢馬は其傍に立ち獅子も亦其屍の側に立り二五人々經過て途に棄られたる屍と其屍の側に立る獅子を見て來り彼老たる預言者の住る邑にて語れり二六彼人を途より携歸りたる預言者聞て言けるは其はヱホバの口に違きたる神の人なりヱホバの彼に言たまひし言の如くヱホバ彼を獅子に付したまひて獅子彼を裂き殺せりと二七しかして其子等に語りて言けるは我ために驢馬に鞍おけと彼等鞍おきければ二八彼往て其屍の途に棄られ驢馬と獅子の其屍の傍に立るを見たり獅子は屍を食はず驢馬をも裂ざりき二九預言者乃ち神の人の屍を取あげて之を驢馬に載せて携歸れりしかして其老たる預言者邑に入り哀哭みて之を葬れり三〇即ち其屍を自己の墓に置め皆之がために嗚呼わが兄弟よといひて哀哭り三一彼人を葬りし後彼其子等に語りて言けるは我が死たる時は神の人を葬りたる墓に我を葬りわが骨を彼の骨の側に置めよ三二其は彼がヱホバの言を以てベテルにある壇にむかひ又サマリアの諸邑に在る崇邱の凡の家に向ひて呼はりたる言は必ず成べければなり三三斯事の後ヤラベアム其惡き途を離れ歸ずして復凡の民を崇邱の祭司と爲り即ち誰にても好む者は之を立てければ其人は崇邱の祭司と爲り三四此事ヤラベアムの家の罪戻となりて遂に之をして地の表面より消失せ滅亡に至らしむ

第一四章 一 當時ヤラベアムの子アビヤ疾ゐたり二ヤラベアム其妻に言けるは請ふ起て装を改へ人をして汝がヤラベアムの妻なるを知しめずしてシロに往け彼處にわが此民の王となるべきを我に告たる預言者アヒヤをる三汝の手に十のパン及び菓子と一瓶の蜜を取て彼の所に往け彼汝に此子の如何になるかを示すべしと四ヤラベアムの妻是爲し起てシロに往きアヒヤの家に至りしがアヒヤは年齡のために其目凝て見ることを得ざりき五ヱホバ、アヒヤにいひたまひけるは視よヤラベアムの妻其子疾るに因て其に付て汝に一の事を諮んとて來る汝斯々彼に言べし其は彼入り來る時其身を他の人とすべければなり六彼が戸の所に入來れる時アヒヤ其履聲を聞て言けるはヤラベアムの妻入よ汝何ぞ其身を他の人とするや我汝に嚴酷き事を告るを命ぜらる七往てヤラベアムに告べしイスラエルの神ヱホバ斯言たまふ我汝を民の中より擧げ我民イスラエルの上に汝を君となし八國をダビデの家より裂き離して之を汝に與へたるに汝は我僕ダビデの我が命令を守りて一心に我に從ひ唯わが目に適ふ事のみを爲しが如くならずして九汝の前に在し凡の者よりも惡を爲し往て汝のために他の神と鑄たる像を造り我が怒を激し我を汝

の背後に棄たり一〇是故に視よ我ヤラベアムの家に災害を下しヤラベアムに屬する男はイスラエルにありて繫がれたる者も繫がれざる者も盡く絶ち人の塵埃を殘りなく除くがごとくヤラベアムの家の後を除くべし一一ヤラベアムに屬する者の邑に死るをば犬之を食ひ野に死ぬるをば天空の鳥之を食はんヱホバ之を語たまへばなり一二爾起て爾の家に往け爾の足の邑に入る時子は死ぬべし一三而してイスラエル皆彼のために哀みて彼を葬らんヤラベアムに屬する者は唯是のみ墓に入るべし其はヤラベアムの家の中にて彼はイスラエルの神ヱホバに向ひて善き意を懷けばなり一四ヱホバ、イスラエル上に一人の王を興さん彼其日にヤラベアムの家を斷絶べし但し何れの時なるか今即ち是なり一五又ヱホバ、イスラエルを撃て水に搖撼ぐ葦の如くになしたまひイスラエルを其父祖に賜ひし此善地より拔き去りて之を河の外に散したまはん彼等其アシラ像を造りてヱホバの怒を激したればなり一六ヱホバ、ヤラベアムの罪の爲にイスラエルを棄たまふべし彼は罪を犯し又イスラエルに罪を犯さしめたりと一七ヤラベアムの妻起て去テルザに至りて家の閾に臻れる時子は死り一八イスラエル皆彼を葬り彼の爲に哀めりヱホバの其僕預言者アヒヤによりて言たまへる言の如し一九ヤラベアムの其餘の行爲彼が如何に戰ひしか如何に世を治めしかは視よイスラエルの王の歷代志の書に記載る二〇ヤラベアムの王たりし日は二十二年なりき彼其父祖と偕に寢りて其子ナダブ之に代りて王となれり二一ソロモンの子レハベアムはユダに王たりきレハベアムは王と成る時四十一歳なりしがヱホバの其名を置んとてイスラエルの諸の支派の中より選みたまひし邑なるエルサレムにて十七年王たりき其母の名はナアマといひてアンモニ人なり二二ユダ其父祖の爲たる諸の事に超てヱホバの目の前に惡を爲し其犯したる罪に由てヱホバの震怒を激せり二三其は彼等も諸の高山の上と諸の青木の下に崇邱と碑とアシラ像を建たればなり二四其國には亦男色を行ふ者ありぎ彼等はヱホバがイスラエルの子孫の前より逐攘ひたまひし國民の中にありし諸の憎むべき事を傚ひ行へり二五レハベアム王の第五年にエジプトの王シシヤク、エルサレムに攻上り二六ヱホバの家の寶物と王の家の寶物を奪ひたり即ち盡く之を奪ひ亦ソロモンの造りたる金の楯を皆奪ひたり二七レハベアム王其代に銅の楯を造りて王の家の門を守る侍衛の長の手に付せり二八王のヱホバの家に入る毎に侍衛之を負ひ復之を侍衛の房に携歸れり二九レハベアムの其餘の行爲と其凡て爲たる事はユダの王の歷代志の書に記さるるに非ずや三〇レハベアムとヤラベアムの間に戰爭ありき三一レハベアム其父祖と偕に寢りて其父祖と共にダビデの城に葬らる其母のナアマといひてアンモニ人なり其子アビヤム之に代りて王と爲り

第一五章一ネバテの子ヤラベアム王の第十八年にアビヤム、ユダの王となり二エルサレムにて三年世を治めたり其母の名はマアカといひてアブサロムの女なり三彼は其父が己のさきに爲た

る諸の罪を行ひ其心其父ダビデの心の如く其神ヱホバに完全からざりき四 然に其神ヱホバ、ダビデの爲にエルサレムに於て彼に一の燈明を與へ其子を其後に興しエルサレムを固く立しめ賜へり五 其はダビデはヘテ人ウリヤの事の外は一生の間ヱホバの目に適ふ事を爲て其己に命じたまへる諸の事に背かざりければなり六 レハベアムとヤラベアムの間には其一生の間戰爭ありき七 アビヤムの其餘の行爲と凡て其爲たる事はユダの王の歷代志の書に記載さるるにあらずやアビヤムとヤラベアムの間に戰爭ありき八 アビヤム其先祖と倶に寢りしかば之をダビデの城に葬りぬ其子アサ之に代りて王と爲り九 イスラエルの王ヤラベアムの第二十年にアサ、ユダの王となり一〇 エルサレムにて四十一年世を治めたり其母の名はマアカといひてアブサロムの女なり一一 アサは其父ダビデの如くヱホバの目に適ふ事を爲し一二 男色を行ふ者を國より逐ひ出し其父祖等の造りたる諸の偶像を除けり一三 彼は亦其母マアカのアシラの像を造りしがために之を貶して太后たらしめざりき而してアサ其像を毀ちてキデロンの谷に焚棄たり一四 但し崇邱は除かざりき然どアサの心は一生の間ヱホバに完全かりき一五 彼其父の献納めたる物と己のをさめたる物金銀器をヱホバの家に携へいりぬ一六 アサとイスラエルの王バアシヤの間に一生の間戰爭ありき一七 イスラエルの王バアシヤ、ユダに攻上りユダの王アサの所に誰をも往來せざらしめん爲にラマを築けり一八 是に於てアサ王ヱホバの家の府庫と王の家の府庫に殘れる所の金銀を盡く將て之を其臣僕の手に付し之をダマスコに住るスリアの王ヘジヨンの子タブリモンの子なるベネハダデに遣はして言けるは一九 わが父と爾の父の間の如く我と爾の間に約を立ん視よ我爾に金銀の禮物を餽れり往て爾とイスラエルの王バアシヤとの約を破り彼をして我を離れて上らしめよ二〇 ベネハダデ、アサ王に聽きて自己の軍勢の長等を遣はしてイスラエルの諸邑を攻めイヨンとダンとアベルベテマアカおよびキンネレテの全地とナフタリの全地とを撃り二一 バアシヤ聞及びラマを築くことを罷てテルザに止り二二 是に於てアサ王令をユダ全國に降したり一人も免かれし者なし斯して即ちバアシヤが用ひてラマを築きたる石と材木を取きたらしめアサ王之を用てベニヤミンのゲバとミズパを築けり二三 アサの其餘の行爲と其諸の功業と凡て其爲たる事および其建たる城邑はユダの王の歷代志の書に記載さるるにあらずや但し彼は年老るに及びて其足を病たり二四 アサ其父祖と倶に寢りて其父ダビデの城に其父祖と偕に葬らる其子ヨシヤパテ之に代りて王と爲り二五 ユダの王アサの第二年にヤラベアムの子ナダブ、イスラエルの王と爲り二年イスラエルを治めたり二六 彼ヱホバの目のまへに惡を爲其父の道に歩行み其イスラエルに犯させたる罪を行へり二七 爰にイツサカルの家のアヒヤの子バアシヤ彼に敵して黨を結びペリシテ人に屬するギベトンにて彼を撃り其はナダブとイスラエル皆ギベトンを圍み居たればな

り二八 ユダの王アサの第三年にバアシヤ彼を殺し彼に代りて王となれり二九 バアシヤ王となれる時ヤラベアムの全家を撃ち氣息ある者は一人もヤラベアムに殘さずして盡く之を滅せりヱホバの其僕シロ人アヒヤに由て言たまへる言の如し三〇 是はヤラベアムが犯し又イスラエルに犯させたる罪の爲め又彼がイスラエルの神ヱホバの怒を惹き起したる事に因るなり三一 ナダブの其餘の行爲と凡て其爲たる事はイスラエルの王の歷代志の書に記載さるるにあらずや三二 アサとイスラエルの王バアシヤの間に一生のあひだ戰爭ありき三三 ユダの王アサの第三年にアヒヤの子バアシヤ、テルザに於てイスラエルの全地の王となりて二十四年を經たり三四 彼ヱホバの目のまへに惡を爲しヤラベアムの道にあゆみ其イスラエルに犯させたる罪を行へり

第一六章一 爰にヱホバの言ハナニの子ヱヒウに臨みバアシヤを責て曰く二 我爾を塵の中より擧て我民イスラエルの上に君となしたるに爾はヤラベアムの道に歩行みわが民イスラエルに罪を犯させて其罪をもて我怒を激したり三 されば我バアシヤの後と其家の後を除き爾の家をしてネバテの子ヤラベアムの家の如くならしむべし四 バアシヤに屬する者の城邑に死るをば犬之を食ひ彼に屬する者の野に死るをば天空の鳥これを食はんと五 バアシヤの其餘の行爲と其爲たる事と其功績はイスラエルの王の歷代志の書に記載さるるにあらずや六 バアシヤ其父祖と倶に寢りてテルザに葬らる其子エラ之に代りて王となれり七 ヱホバの言亦ハナニの子ヱヒウに由て臨みバアシヤと其家を責む是は彼がヱホバの目のまへに諸の惡事を行ひ其手の所爲を以てヱホバの怒を激してヤラベアムの家に傚たるに縁り又其ナダブを殺したるに縁てなり八 ユダの王アサの第二十六年にバアシヤの子エラ、テルザに於てイスラエルの王となりて二年を經たり九 彼がテルザにありてテルザの宮殿の宰アルザの家において飮み醉たる時其僕ジムリ戰車の半を督どる者之に敵して黨を結べり一〇 即ちユダの王アサの第二十七年にジムリ入て彼を撃ち彼を殺し彼にかはりて王となれり一一 彼王となりて其位に上れる時バアシヤの全家を殺し男子は其親族にもあれ朋友にもあれ一人も之に遺さざりき一二 ジムリ斯バアシヤの全家を滅ぼせりヱホバが預言者ヱヒウに由てバアシヤを責て言たまへる言の如し一三 是はバアシヤの諸の罪と其子エラの罪のためなり彼等は罪を犯し又イスラエルをして罪を犯し其虛物を以てイスラエルの神ヱホバの怒を激さしめたり一四 エラの其餘の行爲と凡て其爲たる事はイスラエルの王の歷代志の書に記載さるるにあらずや一五 ユダの王アサの第二十七年にジムリ、テルザにて七日の間王たりき民はペリシテ人に屬するギベトンに向ひて陣どり居たりしが一六 陣どれる民ジムリは黨を結び亦王を殺したりと言を聞り是に於てイスラエル皆其日陣營にて軍の長オムリをイスラエルの王となせり一七 オムリ乃ちイスラエルの衆と偕にギベトンより上りてテルザを圍り一八 ジムリ其邑の陷るを見て

王の家の天守に入り王の家に火をかけて其中に死り一九是は其犯したる罪によりてなり彼ヱホバの目のまへに惡を爲しヤラベアムの道にあゆみヤラベアムがイスラエルに罪を犯させて爲したるところの罪を行ひたり二〇ジムリの其餘の行爲と其なしたる徒黨はイスラエルの王の歴代志の書に記載るるにあらずや二一其時にイスラエルの民二に分れ民の半はギナテの子テブニに從ひて之を王となさんとし半はオムリに從へり二二オムリに從へる民ギナテの子テブニに從へる民に勝てテブニは死てオムリ王となれり二三ユダの王アサの第三十一年にオムリ、イスラエルの王となりて十二年を經たり彼テルザにて六年王たりき二四彼銀二タラントを以てセメルよりサマリア山を買ひ其上に邑を建て其建たる邑の名を其山の故主なりしセメルの名に循ひてサマリアと稱り二五オムリ、ヱホバの目のまへに惡を爲し其先に在し凡の者よりも惡き事を行へり二六彼はネバテの子ヤラベアムの凡の道にあゆみヤラベアムがイスラエルをして罪を犯し其虚物を以てイスラエルの神ヱホバの怒をおこさしめたる其罪を行へり二七オムリの爲たる其餘の行爲と其なしたる功績はイスラエルの王の歴代志の書に記載るるにあらずや二八オムリ其父祖と偕に寢りてサマリアに葬らる其子アハブ之に代りて王となれり二九ユダの王アサの第三十八年にオムリの子アハブ、イスラエルの王となれりオムリの子アハブ、サマリアに於て二十二年イスラエルに王たりき三〇オムリの子アハブは其先に在し凡の者よりも多くヱホバの目のまへに惡を爲り三一彼はネバテの子ヤラベアムの罪を行ふ事を輕き事となせしがシドン人の王エテバアルの女イゼベルを妻に娶り往てバアルに事へ之を拜めり三二彼其サマリアに建たるバアルの家の中にバアルのために壇を築けり三三アハブ又アシラ像を作れりアハブは其先にありしイスラエルの諸の王よりも甚だしくイスラエルの神ヱホバの怒を激すことを爲り三四其代にベテル人ヒエル、ヱリコを建たり彼其基を置る時に長子アビラムを喪ひ其門を立る時に季子セグブを喪へりヌンの子ヨシュアによりてヱホバの言たまへるがごとし

第一七章 一ギレアデに居住れるテシベ人エリヤ、アハブに言ふ吾事ふるイスラエルの神ヱホバは活くわが言なき時は數年雨露あらざるべしと二ヱホバの言彼に臨みて曰く三爾此より往て東に赴きヨルダンの前にあるケリテ川に身を匿せ四爾其川の水を飲べし我鴉に命じて彼處にて爾を養はしむと五彼往てヱホバの言の如く爲り即ち往てヨルダンの前にあるケリテ川に住り六彼の所に鴉朝にパンと肉亦夕にパンと肉を運べり彼は川に飮り七しかるに國に雨なかりければ數日の後其川涸ぬ八ヱホバの言彼に臨みて曰九起てシドンに屬するザレパテに往て其處に住め視よ我彼處の嫠婦に命じて爾を養はしむと一〇彼起てザレパテに往けるが邑の門に至れる時一人の嫠婦の其處に薪を採ふを見たり乃ち之を呼て曰けるは請ふ器に少許の水を我

に携來りて我に飲せよと一一 彼之を携きたらんとて往る時エリヤ彼を呼て言けるは請ふ爾の手に一口のパンを我に取きたれと一二 彼いひけるは爾の神ヱホバは活く我はパン無し只桶に一握の粉と瓶に少許の油あるのみ觀よ我は二の薪を採ふ我いりてわれとわが子のために調理て之をくらひて死んとす一三 エリヤ彼に言ふ懼るるなかれ往て汝がいへる如くせよ但し先其をもてわが爲に小きパン一を作りて我に携きたり其後爾のためと爾の子のために作るべし一四 其はヱホバの雨を地の面に降したまふ日までは其桶の粉は竭ず其瓶の油は絶ずとイスラエルの神ヱホバ言たまへばなりと一五 彼ゆきてエリヤの言るごとくなし彼と其家及びエリヤ久く食へり一六 ヱホバのエリヤに由て言たまひし言のごとく桶の粉は竭ず瓶の油は絶ざりき一七 是等の事の後其家の主母なる婦の子疾に罹しが其病 甚だ劇くして氣息其中に絶て無きに至れり一八 婦 エリアに言けるは神の人よ汝なんぞ吾事に關渉るべけんや汝はわが罪を憶ひ出さしめんため又わが子を死しめんために我に來れるか一九 エリヤ彼に爾の子を我に授せと言て之を其 懷より取り之を己の居る桜に抱のぼりて己の牀に臥しめ二〇 ヱホバに呼はりていひけるは吾神ヱホバよ爾は亦吾ともに宿る嫠に菑をくだして其子を死しめたまふやと二一 而して三度身を伸して其子の上に伏しヱホバに呼はりて言ふわが神ヱホバ 願くは此子の魂を中に歸しめたまへと二二 ヱホバ、エリヤの聲を聽いれたまひしかば其子の魂 中にかへりて生たり二三 エリヤ 乃ち其子を取て之を桜より家に携くだり其母に與していひけるは視よ爾の子は生くと二四 婦 エリヤにいひけるは此に縁て我は爾が神の人にして爾の口にあるヱホバの言は眞實なるを知ると

第一八章

一 衆多の日を經たるのち第三年にヱホバの言 エリヤに臨みて曰く往て爾の身をアハブに示せ我雨を地の面に降さんと二 エリヤ其身をアハブに示さんとて往り時に饑饉サマリアに甚しかりき三 茲にアハブ家宰なるオバデヤを召たり四（オバデヤは大にヱホバを畏みたる者にてイゼベルがヱホバの預言者を絶たる時にオバデヤ百人の預言者を取て之を五十人づつ洞穴に匿しパンと水をもて之を養へり）五 アハブ、オバデヤにいひけるは國中の水の諸の源と諸の川に往け馬と騾を生活むる草を得ることあらん然ば我儕牲畜を盡くは失なふに至らじと六 彼等巡るべき地を二人に分ちアハブは獨にて此途に往きオバデヤは獨にて彼途に往けり七 オバデヤ途にありし時觀よエリヤ彼に遭り彼エリヤを識て伏て言けるは我主エリヤ 汝は此に居たまふや八 エリヤ彼に言けるは然り往て汝の主にエリヤは此にありと告よ九 彼言けるは我何の罪を犯したれば汝 僕をアハブの手に付して我を殺さしめんとする一〇 汝の神ヱホバは生くわが主の人を遣はして汝を尋ねざる民はなく國はなし若しエリヤは在ずといふ時は其國其民をして汝を見ずといふ誓を爲しめたり一一 汝今言ふ往て汝の主にエリヤは此にありと告よと一二 然ど我 汝をはな

れて往ときヱホバの霊我しらざる處に汝を携へゆかん我至りてアハブに告て彼汝を尋獲ざる時は彼我を殺さん然ながら僕はわが幼少よりヱホバを畏むなり一三 イゼベルがヱホバの預言者を殺したる時に吾なしたる事即ち我がヱホバの預言者の中百人を五十人づつ洞穴に匿してパンと水を以て之を養ひし事は吾主に聞えざりしや一四 しかるに今汝言ふ往て汝の主にエリヤは此にありと告よと然らば彼我を殺すならん一五 エリヤいひけるは我が事ふる萬軍のヱホバは活く我は必ず今日わが身を彼に示すべしと一六 オバデヤ乃ち往てアハブに會ひ之に告ければアハブはエリヤに會んとて往きけるが一七 アハブ、エリヤを見し時アハブ、エリヤに言けるは汝イスラエルを悩ます者此にをるか一八 彼答へけるは我はイスラエルを悩さず但汝と汝の父の家之を悩すなり即ち汝等はヱホバの命令を棄て且汝はバアルに従ひたり一九 されば人を遣てイスラエルの諸の人およびバアルの預言者四百五十人並にアシラ像の預言者四百人イゼベルの席に食ふ者をカルメル山に集めて我に詣しめよと二〇 是においてアハブ、イスラエルの都の子孫の中に人を遣り預言者をカルメル山に集めたり二一 時にエリヤ總の民に近づきて言けるは汝等何時まで二の物の間にまよふやヱホバ若し神ならば之に従へされどバアル若し神ならば之に従へと民は一言も彼に答ざりき二二 エリヤ民に言けるは惟我一人存りてヱホバの預言者たり然どバアルの預言者は四百五十人あり二三 然ば二の犢を我儕に與へよ彼等は其一の犢を選みて之を截り剖き薪の上に載せて火を縦ずに置べし我も其一の犢を調理へ薪の上に載せて火を縦たずに置べし二四 斯して汝等は汝等の神の名を龥べ我はヱホバの名を龥ん而して火をもて應る神を神と爲べしと民皆答て斯言は善と言り二五 エリヤ、バアルの預言者に言けるは汝等は多ければ一の犢を選みて最初に調理へ汝等の神の名を呼ぶべし但し火を縦なかれと二六 彼等乃ち其與られたる犢を取て調理へ朝より午にいたるまでバアルの名を龥てバアルよ我儕に應へたまへと言り然ど何の聲もなく又何の應る者もなかりければ彼等は其造りたる壇のまはりに踊れり二七 日中におよびてエリヤ彼等を嘲りていひけるは大聲をあげて呼べ彼は神なればなり彼は默想をるか他處に行しか又は旅にあるか或は假寐て醒さるべきかと二八 是において彼等は大聲に呼はり其例に循ひて刀劍と槍を以て其身を傷つけ血を其身に流すに至れり二九 斯して午時すぐるに至りしが彼等なほ預言を言ひて晩の祭物を献ぐる時にまで及べり然ども何の聲もなく又何の應ふる者も無く又何の顧る者もなかりき三〇 時にエリヤ都の民にむかひて我に近よれと言ければ民皆彼に近よれり彼乃ち破壞たるヱホバの壇を修理へり三一 エリヤ、ヤコブの子等の支派の數に循ひて十二の石を取れり（ヱホバの言昔ヤコブに臨みてイスラエルを汝の名とすべしと言り）三二 彼其石にてヱホバの名を以て壇を築き壇の周圍に種子二セヤを容べき溝を作れり三三 又薪を陳列べ犢

を截剖て薪の上に載せて言けるは四の桶に水を滿て燔祭と薪の上に沃げ三四 又いひけるは再び之を爲せと再びこれをなせしかば又言ふ三次これを爲せと三次これをなせり三五 水に壇の周廻に流るまた溝にも水をみたしたり三六 晩の祭物を献ぐる時に及て預言者エリヤ近よりて言けるはアブラハム、イサク、イスラエルの神ヱホバよ汝のイスラエルにおいて神なることおよび我が汝の僕にして汝の言に循ひて是等の諸の事を爲せることを今日知しめたまへ三七 ヱホバよ我に應へたまへ我に應へたまへ此民をして汝ヱホバは神なることおよび汝は彼等の心を翻へしたまふといふことを知しめたまへと三八 時にヱホバの火降りて燔祭と薪と石と塵とを焚つくせり亦溝の水を舐涸せり三九 民皆見て伏ていひけるはヱホバは神なりヱホバは神なり四〇 エリヤ彼等に言けるはバアルの預言者を執へよ其一人をも逃遁しむる勿れと即ち之を執へたればエリヤ之をキシヨン川に曳下りて彼處に之を殺せり四一 斯てエリヤ、アハブにいひけるは大雨の聲あれば汝上りて食飮すべしと四二 アハブ乃ち食飮せんとて上れり然どエリヤはカルメルの嶺に登り地に伏て其面を膝の間に容ゐたりしが四三 其少者にいひけるは請ふ上りて海の方を望めと彼上り望みて何もなしといひければ再び往けといひて遂に七次に及べり四四 第七次に及びて彼いひけるは視よ海より人の手のごとく微の雲起るとエリヤいふ上りてアハブに雨に阻められざるやう車を備へて下りたまへと言ふべしと四五 驟に雲と風おこり霄漢黒くなりて大雨ありきアハブはヱズレルに乘り往り四六 ヱホバの能力エリヤに臨みて彼其腰を束帶びヱズレルの入口までアハブの前に趨りゆけり

第一九章一 アハブ、イゼベルにエリヤの凡て爲たる事及び其如何に諸の預言者を刀劍にて殺したるかを告しかば二 イゼベル使をエリヤに遣はして言けるは神等斯なし復重て斯なしたまへ我必ず明日の今時分汝の命を彼人々の一人の生命のごとくせんと三 かれ恐れて起ち其生命のために逃げ往てユダに屬するベエルシバに至り少者を其處に遺して四 自ら一日程ほど曠野に入り往て金雀花の下に坐し其身の死んことを求めていふヱホバよ足り今わが生命を取たまへ我はわが父祖よりも善にはあらざるなりと五 彼金雀花の下に伏して寢りしが天の使彼に捫り興て食へと言ければ六 彼見しに其頭の側に炭に燒きたるパンと一瓶の水あり乃ち食ひ飮て復偃臥たり七 ヱホバの使者復再び來りて彼に捫りていひけるは興て食へ其は途長くして汝勝べからざればなりと八 彼興て食ひ且飮み其食の力に仗て四十日四十夜行て神の山ホレブに至る九 彼處にて彼洞穴に入りて其處に宿りしが主の言彼に臨みて彼に言けるはエリヤよ汝此にて何を爲や一〇 彼いふ我は萬軍の神ヱホバのために甚だ熱心なり其はイスラエルの子孫汝の契約を棄て汝の壇を毀ち刀劍を以て汝の預言者を殺したればなり惟我一人存るに彼等我生命を取んことを求むと一一 ヱホバ言たまひけるは出てヱホバの前に山の上

に立てと茲にヱホバ過ゆきたまふにヱホバのまへに當りて大なる強き風山を裂き岩石を碎しが風の中にはヱホバ在さざりき風の後に地震ありしが地震の中にはヱホバ在さざりき一二又地震の後に火ありしが火の中にはヱホバ在さざりき火の後に靜なる細微き聲ありき一三エリヤ聞て面を外套に蒙み出て洞穴の口に立ちけるに聲ありて彼に臨みエリヤよ汝此にて何をなすやといふ一四かれいふ我は萬軍の神ヱホバの爲に甚だ熱心なり其はイスラエルの子孫汝の契約を棄て汝の壇を毀ち刀劍を以て汝の預言者を殺したればなり惟我一人存れるに彼等我が生命を取んことを求むと一五ヱホバかれに言たまひけるは往て汝の途に返りダマスコの曠野に至り往てハザエルに膏を沃ぎてスリアの王となせ一六又汝ニムシの子エヒウに膏を注ぎてイスラエルの王となすべし又アベルメホラのシヤパテの子エリシヤに膏をそそぎ爾に代りて預言者とならしむべし一七ハザエルの刀劍を逃るる者をばエヒウ殺さんエヒウの刀劍を逃るる者をばエリシヤ殺さん一八又我イスラエルの中に七千人を遺さん皆其膝をバアルに跼めず其口を之に接ざる者なりと一九エリヤ彼處よりゆきてシヤパテの子エリシヤに遭ふ彼は十二軛の牛を其前に行しめて己は其第十二の牛と偕にありて耕し居たりエリヤ彼の所にわたりゆきて外套を其上にかけたれば二〇牛を棄てエリヤの後に趨ゆきて言けるは請ふ我をしてわが父母に接吻せしめよしかるのち我爾にしたがはんとエリヤかれに言けるは行け還れ我爾に何をなしたるやと二一エリシヤ彼をはなれて還り一軛の牛をとりて之をころし牛の器具を焚て其肉を煮て民にあたへて食はしめ起て往きエリヤに從ひて之に事へたり

第二〇章一スリアの王ベネハダデ其軍勢を悉く集む王三十二人彼と偕にあり又馬と戰車とあり乃ち上りてサマリアを圍み之を攻む二彼使をイスラエルの王アハブに遣し邑に至りて彼に言しめけるはベネハダデ斯言ふ三爾の金銀は我の所有なり亦爾の妻等と爾の子等の美秀者は我の所有なり四イスラエルの王答へて言けるは王わが主よ爾の言の如く我と我が有つ者は皆爾の所有なり五使者再び來りて言けるはベネハダデ斯語て言ふ我爾に爾我に爾の金銀妻子を付すべしと言遣れり六然ど明日今頃我が僕を爾に遣さん彼等爾の家と爾の臣僕の家を探索りて凡て爾の日に好ましく見ゆる者を其手に置て取り去るべしと七是においてイスラエルの王國の長老を皆召て言けるは請ふ爾等見て此人の害をなさんと求るを知れ彼人を我に遣りて我が妻子とわが金銀を索めたり而るに我之を謝絶ざりしと八諸の長老および民皆彼に言けるは爾聽なかれ許すなかれと九是故に彼ベネハダデの使者に言けるは王わが主に告よ爾が最初に僕に言つかはしたる事は皆我爲べし然ど比事は我爲あたはずと使者往て反命をなせり一〇ベネハダデ彼に言つかはしけるは神等我に斯なし亦重て斯なしたまへサマリアの塵は我に從ふ諸の民の手に滿るに足ざるべしと一一イスラエルの王答へて帶る者は

解く者の如く誇るべからずと告よと言り一二 ベネハダデ天幕にありて王等と飲ゐたりしが此事を聞て其臣僕に言けるは爾等陣列を爲せと即ち邑に向ひて陣列をなせり一三 時に一人の預言者イスラエルの王アハブの許に至りて言けるはヱホバ斯言たまふ爾此諸の大軍を見るや視よ我今日之を爾の手に付さん爾は我がヱホバなるを知にいたらんと一四 アハブ言けるは誰を以てせんか彼いひけるはヱホバ斯いひたまふ諸省の牧伯の少者を以てすべしアハブ言ふ誰か戰爭を始むべき彼答けるは爾なりと一五 アハブ乃ち諸省の牧伯の少者を核るに二百三十二人あり次に凡の民即ちイスラエルの凡の子孫を核るに七千人あり一六 彼等日中出たちたりしがベネハダデは天幕にて王等即ち己を助る三十二人の王等とともに飲て酔居たり一七 諸省の牧伯の少者等先に出たりベネハダデ人を出すにサマリアより人衆出來ると彼に告ければ一八 彼言けるは和睦のために出來るも之を生擒べし又戰爭のために出來るも之を生擒べしと一九 諸省の牧伯の是等の少者および之に從ふ軍勢邑より出きたり二〇 各其敵手を撃ち殺しければスリア人逃たりイスラエル之を追ふスリアの王ベネハダデは馬に乘り騎兵を從へて逃遁たり二一 イスラエルの王出て馬と戰 車を撃ち又大にスリア人を撃殺せり二二 茲に彼預言者イスラエルの王の許に詣て彼に言けるは往て爾の力を養ひ爾の爲すべき事を知り辨ふべし年歸らばスリアの王爾に攻上るべければなりと二三 スリアの王の臣僕王に言けるは彼等の神等は山崗の神なるが故に彼等は我等よりも強かりしなり然ども我等若平地に於て彼等と戰はば必ず彼等よりも強かるべし二四 但し此事を爲せ即ち王等を除きて各 其處を離しめ方伯を置て之に代べし二五 又爾の失ひたる軍勢に均き軍勢を爾のために備へ馬は馬 戰 車は戰 車をもて補ふべし斯して我儕平地において彼等と戰はば必ず彼等よりも強かるべしと彼其言を聽いれて然なせり二六 年かへるに及びてベネハダデ、スリア人を核めてアペクに上りイスラエルと戰はんとす二七 イスラエルの子孫核められ兵糧を受て彼等に出會んとて往けりイスラエルの子孫は山羊の二の小群の如く彼等の前に陣どりしがスリア人は其地に充滿たり二八 時に神の人至りてイスラエルの王に告ていひけるはヱホバ斯言たまふスリア人ヱホバは山獄の神にして谿谷の神にあらずと言ふによりて我此諸の大軍を爾の手に付すべし爾等は我がヱホバなるを知に至らんと二九 彼等七日互に相對て陣どり第七日におよびて戰爭を交接しがイスラエルの子孫一日にスリア人の歩兵十萬人を殺しければ三〇 其餘の者はアベクに逃て邑に入ぬ然るに其石垣崩れて其存れる二萬七千人の上にたふれたりベネハダデは逃て邑にいたり奧の間に入ぬ三一 其臣僕彼にいひけるは我儕イスラエルの家の王等は仁慈ある王なりと聞り請ふ我儕粗麻布を腰につけ繩を頭につけてイスラエルの王の所にいたらん彼爾の命を生むることあらんと三二 斯彼等粗麻布を腰にまき繩を頭にまきてイスラエルの

王の所にいたりていひけるは爾の僕ベネハダデ請ふ我が生命を生しめたまへと言ふとアハブいひけるは彼は尚生をるや彼はわが兄弟なりと三三 其人々これを吉兆と爲し速に彼の言を承て爾の兄弟ベネハダデといへり彼言けるは爾等ゆきて彼を導ききたるべしと是においてベネハダデ彼の所に出來りしかば彼之を車に登しめたり三四 ベネハダデ彼に言けるは我父の爾の父より取たる諸邑は我返すべし又我が父のサマリアに造りたる如く爾ダマスコに於て爾のために街衢を作るべしアハブ言ふ我此契約を以て爾を歸さんと斯彼と契約を爲て彼を歸せり三五 爰に預言者の徒の一人ヱホバの言によりて其同儕に請我を撃てといひけるが其人彼を撃つことを肯ぜざりしかば三六 彼其人に言ふ汝ヱホバの言を聽ざりしによりて視よ汝の我をはなれて往く時獅子汝をころさんと其人彼の側を離れて往きけるに獅子之に遇て之を殺せり三七 彼また他の人に遭て請ふ我を撃といひければ其人之を撃ち撃て傷けたり三八 預言者往て王を途に待ち其目に掩巾をあてて儀容を變ゐたりしが三九 王の經過る時王に呼はりていひけるは僕戰爭の中に出しに人轉りて一箇の人を我の所に曳きたりて言けるは此人を守れ若彼失ゆく事あらば汝の生命を彼の生命に代べし或は爾銀一タラントを出すべしと四〇 而るに僕此彼に事をなしゐたれば彼遂に失たりとイスラエルの王彼にいひけるは爾の擬定は然なるべし爾之を決めたり四一 彼急ぎて其目の掩巾を取除たればイスラエルの王彼が預言者の一人なるを識り四二 彼王に言けるはヱホバ斯言たまふ爾はわが殲滅んと定めたる人を爾の手より放ちたれば爾の命は彼の生命に代り爾の民は彼の民に代るべしと四三 イスラエルの王憂へ且怒て其家に赴きサマリアに至れり

第二一章一 是等の事の後ヱズレル人ナボテ、ヱズレルに葡萄園を有ちゐたりしがサマリアの王アハブの殿の側に在りければ二 アハブ、ナボテに語て言けるは爾の葡萄園は近くわが家の側にあれば我に與へて蔬采の圃となさしめよ我之がために其よりも美き葡萄園を爾に與へん若し爾の心にかなはば其價を銀にて爾に予へんと三 ナボテ、アハブに言けるはわが父祖の產業を爾に與ふる事は決て爲べからずヱホバ禁じたまふと四 アハブはヱズレル人ナボテの己に言し言のために憂ひ且怒りて其家に入ぬ其は彼わが父祖の產業を爾に與へじと言たればなりアハブ床に臥し其面を轉けて食をなさざりき五 其妻イゼベル彼の處にいりて彼に言けるは爾の心何を憂へて爾食を爲ざるや六 彼之に言けるは我ヱズレル人ナボテに語りて爾の葡萄園を銀に易て我に與へよ若また爾好ば我其に易て葡萄園を爾に與へんと彼に言たるに彼答へて我が葡萄園を爾に與へじと言たればなりと七 其妻イゼベル彼に言けるは爾今イスラエルの國を治むることを爲すや興て食を爲し爾の心を樂ましめよ我ヱズレル人ナボテの葡萄園を爾に與へんと八 彼アハブの名をもて書を書き彼の印を捺し其邑にナボテとともに住る長老と貴き人に其書をおくれり

九彼其書にしるして曰ふ斷食を宣傳てナボテを民の中に高く坐せしめよ一〇又邪なる人二人を彼のまへに坐せしめ彼に對ひて證を爲して爾神と王を詛ひたりと言しめよ斯して彼を曳出し石にて撃て死しめよと一一其邑の人即ち其邑に住る長老および貴き人等イゼベルが己に言つかはしたる如く即ち彼が己に遣りたる書に書したる如く爲り一二彼等斷食を宣達てナボテを民の中に高く坐せしめたり一三時に二人の邪なる人入來りて其前に坐し其邪なる人民のまへにてナボテに對て證をなして言ふナボテ神と王を詛ひたりと人衆彼を邑の外に曳出し石にて之を撃て死しめたり一四斯てイゼベルにナボテ撃れて死たりと言遣れり一五イゼベル、ナボタの撃れて死たるを聞しかばイゼベル、アハブに言けるは起て彼ヱズレル人ナボテが銀に易て爾に與ることを拒みし葡萄園を取べし其はナボテは生をらず死たればなりと一六アハブ、ナボテの死たるを聞しかばアハブ起ちヱズレル人ナボテの葡萄園を取んとて之に下れり一七時にヱホバの言テシベ人エリヤに臨みて曰ふ一八起て下りサマリアにあるイスラエルの王アハブに會ふべし彼はナボテの葡萄園を取んとて彼處に下りをるなり一九爾彼に告て言べしヱホバ斯言ふ爾は殺し亦取たるやと又爾彼に告て言ふべしヱホバ斯言ふ犬ナボテの血を舐し處にて犬爾の身の血を舐べしと二〇アハブ、エリヤに言けるは我敵よ爾我に遇や彼言ふ我遇ふ爾ヱホバの目の前に惡を爲す事に身を委しに縁り二一我災害を爾に降し爾の後裔を除きアハブに屬する男はイスラエルにありて繋がれたる者も繋がれざる者も悉く絶ん二二又爾の家をネバテの子ヤラベアムの家の如くなしアヒヤの子バアシヤの家のごとくなすべし是は爾我の怒を惹起しイスラエルをして罪を犯させたるに因てなり二三イゼベルに關てヱホバ亦語て言給ふ犬ヱズレルの濠にてイゼベルを食はん二四アハブに屬する者の邑に死るをば犬之を食ひ野に死るをば天空の鳥之を食はんと二五誠にアハブの如くヱホバの目の前に惡をなす事に身をゆだねし者はあらざりき其妻イゼベル之を慫慂たるなり二六彼はヱホバがイスラエルの子孫のまへより逐退けたまひしアモリ人の凡てなせし如く偶像に從ひて甚だ惡むべき事を爲り二七アハブ此等の言を聞ける時其衣を裂き粗麻布を體にまとひ食を斷ち粗麻布に臥し遲々に歩行り二八茲にヱホバの言テシベ人エリヤに臨みて言ふ二九爾アハブの我前に卑下るを見るや彼わがまへに卑下るに縁て我災害を彼の世に降さずして其子の世に災害を彼の家に降すべし

第二二章一スリアとイスラエルの間に戰爭なくして三年を經たり二第三年にユダの王ヨシヤパテ、イスラエルの王の所に降れり三イスラエルの王其臣僕に言けるはギレアデのラモテは我儕の所有なるを爾等知や然るに我儕はスリアの王の手より之を取ることをせずして默しをるなり四彼ヨシヤパテに言けるは爾我と共にギレアデのラモテに戰ひにゆくやヨシヤパテ、イスラエルの王にいひけるは我は爾のごとくわが民は爾の民の如くわ

が馬は爾の馬の如しと五ヨシヤパテ、イスラエルの王に言けるは請ふ今日ヱホバの言を問へ六是においてイスラエルの王預言者四百人許を集めて之に言けるは我ギレアデのラモテに戰ひにゆくべきや又は罷べきや彼等曰けるは上るべし主之を王の手に付したまふべしと七ヨシヤパテ曰けるは外に我儕の由て問べきヱホバの預言者此にあらざるや八イスラエルの王ヨシヤパテに言けるは外にイムラの子ミカヤ一人あり之に由てヱホバに問ふことを得ん然ど彼は我に關て善事を預言せず唯惡事のみを預言すれば我彼を惡むなりとヨシヤパテ曰けるは王然言たまふなかれと九是によりてイスラエルの王一箇の官吏を呼てイムラの子ミカヤを急ぎ來らしめよと言り一〇イスラエルの王およびユダの王ヨシヤパテ朝衣を著てサマリアの門の入口の廣場に各其位に坐しゐたり預言者は皆其前に預言せり一一ケナアナの子ゼデキヤ鐵の角を造りて言けるはヱホバ斯言給ふ爾是等を以てスリア人を抵觸て之を盡すべしと一二預言者皆斯預言して言ふギレアデのラモテに上りて勝利を獲たまへヱホバ之を王の手に付したまふべしと一三茲にミカヤを召んとて往たる使者之に語りて言けるは預言者等の言一の口の如くにして王に善し請ふ汝の言を彼等の一人の言の如くならしめて善事を言へと一四ミカヤ曰けるはヱホバは生くヱホバの我に言たまふ事は我之を言んと一五かくて彼王に至るに王彼に言けるはミカヤよ我儕ギレアデのラモテに戰ひに往くべきや又は罷べきや彼王に言けるは上りて勝利を得たまへヱホバ之を王の手に付したまふべしと一六王彼に言けるは我幾度汝を誓はせたらば汝ヱホバの名を以て唯眞實のみを我に告るや一七彼言けるは我イスラエルの皆牧者なき羊のごとく山に散をるを見たるにヱホバ是等の者は主なし各安然に其家に歸るべしと言たまへりと一八イスラエルの王ヨシヤパテに言けるは我汝に彼は我について善き事を預言せず唯惡き事のみを預言すと告たるにあらすやと一九ミカヤ言けるは然ば汝ヱホバの言を聽べし我ヱホバの其位に坐しゐたまひて天の萬軍の其傍に右左に立つを見たるに二〇ヱホバ言たまひけるは誰かアハブを誘ひて彼をしてギレアデのラモテに上りて弊れしめんかと則ち一は此の如くせんと言ひ一は彼の如くせんといへり二一遂に一の靈進み出てヱホバの前に立ち我彼を誘はんと言ければ二二ヱホバ彼に何を以てするかと言たまふに我出て虚言を言ふ靈となりて其諸の預言者の口にあらんと言りヱホバ言たまひけるは汝は誘ひ亦之を成し遂ん出て然なすべしと二三故に視よヱホバ虚言を言ふ靈を爾の此諸の預言者の口に入たまへり又ヱホバ爾に關て災禍あらんことを言たまへりと二四ケナアナの子ゼデキヤ近よりてミカヤの頰を批て言けるはヱホバの靈何途より我を離れゆきて爾に語ふや二五ミカヤいひけるは爾奥の間に入て身を匿す日に見るにいたらん二六イスラエルの王言けるはミカヤを取て之を邑の宰アモンと王の子ヨアシに曳かへりて言ふべし二七王斯言ふ此を牢に置

れて苦惱のパンと苦惱の水を以て之を養ひ我が平安に來るを待てと二八 ミカヤ言けるは爾若眞に平安に歸るならばヱホバ我によりて言たまはざりしならん又曰けるは爾等民よ皆聽べし二九 かくてイスラエルの王とユダの王ヨシヤパテ、ギレアデのラモテに上れり三〇 イスラエルの王ヨシヤパテに言けるは我装を改て戰陣の中に入らん然ど爾は王衣を衣るべしとイスラエルの王装を改て戰陣の中にいりぬ三一 スリアの王其戰車の長三十二人に命じて言けるは爾等小者とも大者とも戰ふなかれ惟イスラエルの王とのみ戰へと三二 戰車の長等ヨシヤパテを見て是必ずイスラエルの王ならんと言ひ身をめぐらして之と戰はんとしければヨシヤパテ號呼れり三三 戰車の長彼がイスラエルの王にあらざるを見しかば之を追ふことをやめて返れり三四 茲に一個の人偶然弓を挽てイスラエルの王の胸當と艸摺の間を射たりければ彼其御者に言けるは我傷を受たれば爾の手を旋して我を軍中より出すべしと三五 是日戰爭嚴くなりぬ王は車の中に扶持られて立ちスリア人に對ひをりしが晩景にいたりて死たり創の血車の中に流る三六 日の沒る頃軍中に呼はりて曰ふあり各其邑に各其鄉に歸るべしと三七 王死て携へられてサマリアに至りたれば衆人王をサマリアに葬れり三八 又其車をサマリアの池に濯ひけるに犬其血を舐たり又遊女其所に身をあらへりヱホバの言たまへる言の如し三九 アハブの其餘の行爲と凡て其爲たる事と其建たる象牙の家と其建たる諸の邑はイスラエルの王の歷代志の書に記載るにあらずや四〇 アハブ其父祖と共に寢りて其子アハジア之にかはりて王となれり四一 アサの子ヨシヤパテ、イスラエルの王アハブの第四年にユダの王となれり四二 ヨシヤパテ王となりし時三十五歲なりしがエルサレムにおいて二十五年王たりき其母の名はアズバといひてシルヒの女なり四三 ヨシヤパテ其父アサの諸の道に步行み轉て之を離れずヱホバの目に適ふ事をなせり但し崇邱は除かざりき民尚崇邱に犧牲を獻げ香を焚り四四 ヨシヤパテ、イスラエルの王と和好を結べり

四五 ヨシヤパテの其餘の行爲と其なせる功績および如何に戰爭をなせしかはユダの王の歷代志の書に記載るにあらずや四六 彼其父アサの世に尚ほありし彼の男色を行ふ者の殘餘を國の中より逐はらへり四七 當時エドムには王なくして代官王たりき四八 ヨシヤパテ、タルシシの船を造りて金を取ためにオフルに往しめんとしたりしが其船エジオンゲベルに壞れたれば遂に往に至らざりき四九 是においてアハブの子アハジア、ヨシヤパテに言けるはわが僕をして爾の僕と偕に船にて往しめよと然どヨシヤパテ聽ざりき五〇 ヨシヤパテ其父祖とともに寢りて其父ダビデの城邑に其父祖と共に葬らる其子ヨラム之に代て王となれり五一 アハブの子アハジア、ユダの王ヨシヤパテの第十七年にサマリアにてイスラエルの王となり二年イスラエルを治めたり五二 彼はヱホバの目のまへに惡をなし其父の道と其母の道および彼のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの道に步行

み
五三 バアルに事へて之を拝みイスラエルの神ヱホバの怒を激せり其父の凡て行へるがごとし

列王紀略下

第一章 一 アハブの死しのちモアブ、イスラエルにそむけり 二 アハジヤ、サマリヤにあるその樓の欄杆よりおちて病をおこせしかば使を遣さんとして之にいひけるは往てエクロンの神バアルゼブブにわがこの病の愈るや否を問べしと 三 時にヱホバの使テシベ人エリヤにいひけるは起てサマリヤ王の使にあひて之に言べし汝等がエクロンの神バアルゼブブに問んとてゆくはイスラエルに神なきがゆゑなるか 四 是によりてヱホバかくいふ汝はその登りし牀より下ることなかるべし汝かならず死んとエリヤ乃ち往り 五 使者たちアハジアに返りければアハジア彼等に何故に返りしやといふに 六 かれら之にいひけるは一箇の人上りきたりて我らに會ひわれらにいひけるは往てなんぢらを遣はせし王の所にかへり之にいふべしヱホバ斯いひたまふなんぢエクロンの神バアルゼブブに問んとて人を遣すはイスラエルに神なきがゆゑなるか然ば汝その登りし牀より下ることなかるべし汝かならず死んと 七 アハジア彼等にいひけるはそののぼりきたりて汝等に會ひ此等の言を汝らに告たる人の形状は如何なりしや 八 かれら對へていひけるはそれは毛深き人にして腰に革の帶をむすび居たり彼いひけるはその人はテシベ人エリヤなりと 九 是に於て王五十人の長とその五十人をエリヤの所に遣はせり彼エリヤの所に上りゆくに視よエリヤは山の嶺に坐し居たりかれエリヤにいひけるは神の人よ王いひたまふ下るべし 一〇 エリヤこたへて五十人の長にいひけるはわれもし神の人たらば火天より降りて汝と汝の五十人とを燒盡すべしと火すなはち天より降りて彼とその五十人とを燒盡せり 一一 アハジアまた他の五十人の長とその五十人をエリヤに遣せりかれ上りてエリヤにいひけるは神の人よ王かく言たまふ速かに下るべし 一二 エリヤ答て彼にいひけるはわれもし神の人たらば火天より降りて爾となんぢの五十人を燒盡すべしと神の火すなはち天より降りてかれとその五十人を燒盡せり 一三 かれまた第三の五十人の長とその五十人を遣せり第三の五十人の長のぼりいたりてエリヤのまへに跪きこれに願ひていひけるは神の人よ願くはわが生命となんぢの僕なるこの五十人の生命をなんぢの目に貴重き者と見なしたまへ 一四 視よ火天より降りて前の五十人の長二人とその五十人を燒盡せり然どわが生命をば汝の目に貴重き者となしたまへ 一五 時にヱホバの使エリヤに云けるはかれとともに下れかれをおそるることなかれとエリヤすなはち起てかれとともに下り王の許に至り 一六 之にいひけるはヱホバかくいひたまふ汝エクロンの神バアルゼブブに問んとて使者を遣るはイスラエルにその言を問ふべき神なきがゆゑなるか是によりて汝はその登し牀より下ることなかるべし汝かならず死んと 一七 彼エリヤの言たるヱホバの言の如く死けるが彼に子なかりしかばヨラムこれに代りて王となれり是はユダの王ヨシヤパテの子ヨラムの二年にあたる 一八

アハジヤのなしたる其餘の事業はイスラエルの王の歴代志の書に記載さるるにあらずや

第二章 一 ヱホバ大風をもてエリヤを天に昇らしめんとしたまふ時エリヤはエリシヤとともにギルガルより出往り二 エリヤ、エリシヤにいひけるは請ふここに止まれヱホバわれをベテルに遣はしたまふなりとエリシヤいひけるはヱホバは活く汝の霊魂は活く我なんぢをはなれじと彼等つひにベテルに下れり三 ベテルに在る預言者の徒 エリシヤの許に出きたりて之にいひけるはヱホバの今日なんぢの主をなんぢの首の上よりとらんとしたまふを汝知やかれいふ然りわれ知り汝等默すべし四 エリヤかれにいひけるはエリシヤよ請ふ汝ここに止れヱホバわれをヱリコに遣したまふなりとエリシヤいふヱホバは活くなんぢの霊魂は活く我なんぢを離じとかれらヱリコにいたる五 ヱリコに在る預言者の徒 エリシヤに詣りて彼にいひけるはヱホバの今日なんぢの主をなんぢの首の上よりとらんとしたまふを汝知るやエリシヤ言ふ然り知り汝ら默すべしと六 エリヤまたかれにいひけるは請ふここに止れヱホバわれをヨルダンにつかはしたまふなりとかれいふヱホバは活くなんぢの霊魂は活くわれ汝をはなれじと二人進ゆくに七 預言者の徒 五十人ゆきて遥に立て望めり彼ら二人はヨルダンの濱に立けるが八 エリヤその外套をとりて之を巻き水をうちけるに此旁と彼旁にわかれたれば二人は乾ける土の上をわたれり九 渉りける時エリヤ、エリシヤにいひけるは我が取れてなんぢを離るる前に汝わが汝になすべきことを求めよエリシヤいひけるはなんぢの霊の二の分の我にをらんことを願ふ一〇 エリヤいひけるは汝難き事を求む汝もしわが取れてなんぢを離るるを見ばこの事なんぢにならんしからずば此事なんぢにならじ一一 彼ら進みながら語れる時火の車と火の馬あらはれて二人を隔てたりエリヤは大風にのりて天に昇れり一二 エリシヤ見てわが父わが父イスラエルの兵車よその騎兵よと叫びしが／再びかれを見ざりき是においてエリシヤその衣をとらへて之を二片に裂き一三 エリヤの身よりおちたるその外套をとりあげ返りてヨルダンの岸に立ち一四 エリヤの身よりおちたる外套をとりて水をうちエリヤの神ヱホバはいづくにいますやと言ひ而して己も水をうちけるに水此旁と彼旁に分れたればエリシヤすなはち渡れり一五 ヱリコにある預言者の徒 對岸にありて彼を見て言けるはエリヤの霊エリシヤの上にとどまるとかれら來りてかれを迎へその前に地に伏て一六 かれにいひけるは僕等に勇力者五十人あり請ふかれらをして往てなんぢの主を尋ねしめよ恐くはヱホバの霊かれを曳あげてこれを或山か或谷に放ちしならんとエリシヤ遣すなかれと言けれども一七 かれら彼の愧るまでに強ければすなはち遣せといへり是に於てかれら五十人の者を遣しけるが三日の間たづねたれども彼を看いださざりしかば一八 エリシヤの尚ヱリコに止れる時かれら返りてかれの許にいたりしにエリシヤかれらに言けるはわれ往ことなかれと

汝らにいひしにあらずやと一九邑の人々エリシヤにいひけるは視よ吾主の見たまふごとく此邑の建る處は善しされど水あしくしてこの地流産をおこす二〇かれ言けるは新しき皿に鹽を盛て我に持ち來れよと乃ちもちきたりければ二一彼いでて水の源に至り鹽を其處になげ入ていひけるはヱホバかくいひたまふわれこの水を愈す此處よりして重て死あるひは流産おこらじと二二其水すなはちエリシヤのいひし如くに愈て今日にいたる二三かれそこよりベテルに上りしが上りて途にありけるとき小童等邑よりいでて彼を嘲り彼にむかひて禿首よのぼれ禿首よのぼれといひければ二四かれ回轉りてかれらをみヱホバの名をもてかれらを呪詛ひければ林の中より二頭の牝熊出てその兒子輩の中四十二人をさきたり二五かれ彼處よりカルメル山にゆき其處よりサマリヤにかへれり

第三章一ユダの王ヨシヤパテの十八年にアハブの子ヨラム、サマリヤにありてイスラエルを治め十二年位にありき二かれはヱホバの目のまへに惡をなせしかどもその父母の如くはあらざりきそは彼その父の造りしバアルの像を除きたればなり三されど彼はかのイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪を行ひつづけて之をはなれざりき四モアブの王メシヤは羊を有つ者にして十萬の羔と十萬の牡羊の毛とをイスラエルの王に納めをりしが五アハブの死しのちモアブの王はイスラエルの王にそむけり六是に於てヨラム王其時サマリヤを出てイスラエル人をことごとく集め七また往て人をユダの王ヨシヤパテに遣していはしむモアブの王われに背けり汝われとともにモアブに攻ゆくやと彼いひけるは我上らん我は汝の如くわが民はなんぢの民のごとくまたわが馬は汝の馬の如しと八ヨラムいひけるは我儕いづれの路より上らんかかれいふエドムの曠野の途よりせんと九イスラエルの王すなはちユダの王およびエドムの王と共に出ゆきけるが行めぐること七日路にして軍勢とこれにしたがふ家畜の飲むべき水なかりしかば一〇イスラエルの王いひけるは嗚呼ヱホバこの三人の王をモアブの手にわたさんと召し集めたまへりと一一ヨシヤパテいひけるは我儕が由てヱホバに問ふべきヱホバの預言者此にあらざるやとイスラエルの王の臣僕の一人答へていふエリヤの手に水をそそぎたるシヤパテの子エリシヤ此にあり一二ヨシヤパテいひけるはヱホバの言彼にありとかくてイスラエルの王およびヨシヤパテとエドムの王かれの許に下りゆきけるに一三エリシヤ、イスラエルの王に言けるはわれ汝と何の干與あらんや汝の父の預言者と汝の母の預言者の所にゆくべしとイスラエルの王かれにいひけるは然ずそはヱホバこの三人の王をモアブの手に付さんとて召集めたまへばなり一四エリシヤ言けるはわが事ふる萬軍のヱホバは活く我ユダの王ヨシヤパテのためにするにあらずばかならず汝を顧みず汝を見ざらんものを一五今樂人をわれにつれ來れと而して樂人の樂をなすにおよびてヱホバの手かれに臨みて一六彼いひけるはヱホバ

かくいひたまふ此谷に許多の溝を設けよ一七それヱホバかく言ひたまふ汝ら風を見ず雨をも見ざるに此谷に水盈て汝等と汝等の家畜および汝らの獣飲ことを得ん一八然るも是はヱホバの目には瑣細き事なりヱホバ、モアブ人をも汝らの手にわたしたまはん一九汝等は保障ある諸の邑と諸の美しき邑とを撃ち諸の佳樹を斫倒し諸の水の井を塞ぎ石をもて諸の善地を壊ふにいたらん二〇かくて朝におよびて供物を献ぐる時に水エドムの途より流れきたりて水國に充つ二一偖またモアブ人はみな王等の己に攻のぼれるを聞しかば甲を著ることを得る以上の者を盡く集めてその境に備へしが二二朝はやく興いでしに水の上に日昇りゐて對面の水血の如くに赤かりければモアブ人これを見て二三いひけるはこれ乃はち血なり王たち戰ひて死たるならん互に相撃たるなるべし然ばモアブよ掠取に行けと二四而してモアブ人イスラエルの陣營に至るにイスラエル人起てこれを撃たればすなはちその前より逃はしれり是においてイスラエル人進みてモアブ人を撃てその國にいり二五その邑々を撃圮し各石を諸の善地に投てこれに填し水の井をことごとく塞ぎ佳樹をことごとく斫たふし唯キルハラセテにその石をのこせしのみなるに至る但し石を投るもの周りあるきてこれを撃り二六モアブ王戰闘の手いたくして當りがたきを見て劍を抜く者七百人をひきゐてエドム王の所にまで衝きいたらんとせしが遂に果さざりしかば二七己の位を継べきその長子をとりてこれを石垣の上にささげて燔祭となしたり是に於てイスラエルに大なる憤怒おこりぬ彼等すなはちかれをすててその國に歸れり

第四章一預言者の徒の妻の中なる一人の婦人エリシヤに呼はりていひけるは汝の僕なるわが夫死りなんぢの僕のヱホバを畏れしことはなんぢの知るところなり今債主きたりてわが二人の子をとりて奴僕となさんとすと二エリシヤ之にいひけるはわれなんぢの爲に何をなすべきや汝の家に如何なる物あるかわれに告よ彼いひけるは僅少の油のほかは汝の婢の家に有ものなし三彼いひけるは往て外より鄰の人々より器を借よ空たる器を借るべし少許を借るなかれ四而してなんぢ入て汝の子等とともに戸の内に閉こもりそのすべての器に油をつぎてその盈るところの者をとりのけおくべし五婦人すなはち彼を離れて去りその子等とともに戸の内に閉こもり子等のもちきたる器に油をつぎたりしが六器のみな盈たるときその子にむかひ尚われに器をもちきたれといひけるに器はもはやあらずといひたればその油すなはち止る七是においてその婦神の人にいたりてかくと告ければかれいふ往て油をうりてその負債をつくのひその餘分をもて汝と汝の子等生計をなすべしと八一日エリシヤ、シユネムにゆきしに其所に一人の大なる婦人ありてしきりにこれに食をすすめたれば彼かしこを過る毎にそこに入て食をなせり九茲にその婦人夫にいひけるは視よ此つねにわれらを過る人は我これを見るに神の聖き人なり一〇請ふ小き室を石垣の上につくりそこ

に臥床と案と榻と燭臺をかれのために備へん彼われらに至る時はそこに入るべしと一一かくてのちある日エリシヤそこに至りその室に入てそこに臥たりしが一二その僕ゲハジにむかひ彼のシユナミ人を召きたれといへり彼かの婦人を召たればその前にきたりて立つに一三エリシヤ、ゲハジにいひけるは彼にかく言へ汝かく懇に我らのために意を用ふ汝のために何をなすべきや王または軍勢の長に汝のことを告られんことを望むかと彼答へてわれはわが民の中にをるなりといふ一四エリシヤいひけるは然ばかれのために何をなすべきやゲハジ答へけるは誠にかれは子なくその夫は老たりと一五是においてエリシヤかれを召といひければこれを呼に來りて戸口に立たれば一六エリシヤいふ明る年の今頃汝子を抱くあらん彼いひけるはいなわが主神の人よなんぢの婢をあざむきたまふなかれと一七かくて婦つひに孕て明る年にいたりてエリシヤのいへるその頃に子を生り一八その子育ちてある日刈獲人の所にいでゆきてその父にいたりしが一九父にわが首わが首といひたれば父少者に彼を母のもとに負ゆけと言り二〇すなはちこれを負て母にいたりしに午まで母の膝に坐り居て遂に死たれば二一母のぼりゆきてこれを神の人の臥床の上に置きこれをとぢこめて出で二二その夫をよびていひけるは請ふ一人の僕と一頭の驢馬を我につかはせ我神の人の許にはせゆきて歸らんと二三夫いふ何故に汝は今日かれにいたらんとするや今日は朔日にもあらず安息日にもあらざるなり彼いひけるは宜しと二四婦すなはち驢馬に鞍おきてその僕にいひけるは驅て進め吾が命ずることなくば我が騎すすむることに緩漫あらしめざれと二五つひにカルメル山にゆきて神の人にいたるに／神の人遥にかれの來るを見て僕ゲハジにいひけるは視よかしこにかのシユナミ人をる二六請ふ汝はしりゆきて彼をむかへて言へなんぢは平安なるやなんぢの夫はやすらかなるやなんぢの子はやすらかなるやと彼こたへて平安なりといひ二七遂に山にきたりて神の人にいたりその足を抱きたればゲハジこれを逐ひはらはんとて近よりしに神の人いひけるは容しおけ彼は心の中に苦あるなりまたヱホバその事を我にかくしていまだわれに告たまはざるなり二八婦いひけるはわれわが主に子を求めしやわれをあざむきたまふなかれとわれは言ざりしや二九エリシヤすなはちゲハジにいひけるはなんぢ腰をひきからげわが杖を手にもちて行け誰に逢も禮をなすべからず又なんぢに禮をなす者あるともそれに答ふることなかれわが杖をかの子の面の上におけよと三〇その子の母いひけるはヱホバは活くなんぢの霊魂は生く我は汝を離れじと是をもてエリシヤついに起て婦に從ひ行ぬ三一ゲハジはかれらに先だちゆきて杖をかの子の面の上に置たるが聲もなく聞もせざりしかばかへりきたりてエリシヤに逢てこれに子いまだ目をさまさずと言ふ三二エリシヤここにおいて家に入て視に子は死ておのれの臥床の上に臥てあれば三三すなはち入り戸をとぢて二人内におりてヱホバに祈り三四而し

てエリシヤ上りて子の上に伏し己が口をその口におのが目をその目に己が手をその手の上にあて身をもてその子を掩しに子の身體やうやく温まり來る三五 かくしてエリシヤかへり來て家の内に其處此處とあゆみをり又のぼりて身をもて子をおほひしに子七度嚔して目をひらきしかば三六 ゲハジを呼てかのシユナミ人をよべと言ければすなはちこれを呼り三七 彼入來りしかばエリシヤなんぢの子を取ゆけと言りかれすなはち入りてエリシヤの足下に伏し地に身をかがめて其子を取あげて出づ三八 斯てエリシヤまたギルガルにいたりしがその地に饑饉あり預言者の徒その前に坐しをる是において彼その僕にいひけるは大なる釜をすゑて預言者の徒のために羹を煮よと三九 時に一人田野にゆきて菜蔬を摘しが野籐のあるを見て其より野瓜を一風呂鋪摘きたりて羹の釜の中に截こみたり其は皆それをしらざればなり四〇 斯てこれを盛て人々に食はせんとせしに彼等その羹を食はんとするにあたりて叫びて嗚呼神の人よ釜の中に死をきたらする者ありといひて得食はざりしかば四一 エリシヤさらば粉をもちきたれといひてこれを釜になげ入れ盛て人々に食しめよと言り釜の中にはすなはち害物あらずなりぬ四二 茲にバアルシヤリシヤより人來り初穂のパンと大麥のパン二十と圃の初物一袋とを神の人の許にもちいたりたればエリシヤ衆人にあたへて食はしめよと言ふに四三 その奴僕いひけるは如何にとや我これを百人の前にそなふべきかと然るに彼また言ふ衆人にあたへて食しめよ夫ヱホバかくいひたまふかれら食ふて尚あます所あらんと四四 すなはち之をその前にそなへたればみな食ふてなほ餘せりヱホバの言のごとし

第五章一 スリア王の軍勢の長ナアマンはその主君のまへにありて大なる者にしてまた貴き者なりき是はヱホバ曾て彼をもてスリアに拯救をほどこしたまひしが故なり彼は大勇士なりしが癩病をわづらひ居る二 昔にスリア人隊を組ていでたりし時にイスラエルの地より一人の小女を執へゆけり彼ナアマンの妻に事たりしが三 その女主にむかひわが主サマリヤに居る預言者の前にいまさば善らん者をかれその癩病を痊すならんと言たれば四 ナアマン入りてその主君に告てイスラエルの地よりきたれる女子斯々語りたりと言ふに五 スリヤ王いひけるは往よ往よ我イスラエルの王に書をおくるべしと是において彼いでゆき銀十タラントと金六千および衣服十襲をたづさへ六 イスラエルの王にその書をもちゆけりその文に曰くこの書汝にいたらば視よ我わが臣ナアマンをなんぢに遣はせるなりこは汝にその癩病を痊されんがためなり七 イスラエルの王その書を讀み衣を裂ていふ我神ならんや爭か殺すことをなし生すことをなしえん然るに此人なんぞ癩病の人を我に遣はしてこれを痊さしめんとするや然ば請ふ汝等彼が如何に我に爭を求むるかを見て知れと八 茲に神の人エリシヤ、イスラエルの王がその衣を裂たることをきき王に言遣しけるは汝何とて汝の衣をさきしや彼をわがもと

にいたらしめよ然ば彼イスラエルに預言者のあることを知にいたるべし九 是においてナアマンその馬と車とをしたがへ來りてエリシヤの家の門に立けるに一〇 エリシヤ使をこれに遣して言ふ汝ゆきて身をヨルダンに七たび洗へ然ば汝の肉本にかへりて汝は清く爲べしと一一 ナアマン怒りて去り言けるは我は彼かならず我もとにいできたりて立ちその神ヱホバの名を呼てその所の上に手を動して癩病を痊すならんと思へり一二 ダマスコの河アバナとパルパルはイスラエルのすべての河水にまさるにあらずや我これらに身を洗ふて清まることを得ざらんやと乃ち身をめぐらし怒りて去る一三 時にその僕等近よりてこれにいひけるは我父よ預言者なんぢに大なる事をなせと命ずるとも汝はそれを爲ざらんや況て彼なんぢに身を洗ひて清くなれといふをやと一四 是においてナアマン下りゆきて神の人の言のごとくに七たびヨルダンに身を洗ひしにその肉本にかへり嬰兒の肉の如くになりて清くなりぬ一五 かれすなはちその從者とともに神の人の許にかへりきたりてその前に立ていふ我いまイスラエルのほかは全地に神なしと知る然ば請ふ僕より禮物をうけよ一六 エリシヤいひけるはわが事へまつるヱホバは活く肯て禮物をうけじとかれ強て之を受しめんとしたれども遂にこれを辭したり一七 ナアマンいひけるは然ば請ふ騾馬に二駄の土を僕にとらせよ僕は今よりのち他の神には燔祭をも祭品をもささげずして只ヱホバにのみ献げんとす一八 ねがはくは主この事につきて僕をゆるしたまへ即ちわが主君リンモンの宮にいりそこにて崇拜をなしてわが手に倚ることありまた我リンモンの宮にありて身をかがむることあらんわがリンモンの宮において身をかがむる時に願くはヱホバその事につきて僕をゆるしたまへと一九 エリシヤ彼になんぢ安じて去れといひければ彼エリシヤをはなれて少しく進みゆきけるに二〇 神の人エリシヤの僕ゲハジいひけるは吾が主人は此スリア人ナアマンをいたはりて彼が手に携へきたれるものを受ざりしがヱホバは活くわれ彼のあとを追かけて彼より少く物をとらんと二一 ゲハジすなはちナアマンのあとをおひ行くにナアマンはおのれのあとに走り來る者あるを見て車より下りこれを迎へて皆平安やと言ふに二二 彼言けるは皆平安しわが主我を遣していはしむ只今エフライムの山より預言者の徒なる二人の少者わが許に來れり請ふ汝かれらに銀一タラントと衣二襲をあたへよと二三 ナアマンいひけるは望むらくは二タラントを取れとてかれを強ひ銀二タラントを二の袋にいれ衣二襲を添て二人の僕に負せたれば彼等これをゲハジの前に負きたりしが二四 彼岡に至りしとき之をかれらの手より取て室のうちにをさめかれらを放ちて去しめ二五 而して入てその主人のまへに立つにエリシヤこれにいひけるはゲハジよ何處より來りしや答へていふ僕は何處にもゆかず二六 エリシヤいひけるはその人が車をはなれ來りてなんぢを迎へし時にわが心其處にあらざりしや今は金をうけ衣をうけ橄欖園葡萄園羊牛僕婢をう

くべき時ならんや二七 然ばナアマンの癩病はなんぢにつき汝の子孫におよびて限なからんと彼その前より退ぞくに癩病發して雪のごとくになりぬ

第六章一 茲に預言者の徒 エリシヤに言けるは視よ我儕が汝とともに住ふ所はわれらのために隘し二 請ふ我儕をしてヨルダンに往しめよ我儕おのおの彼處より一の材木を取て其處に我儕の住べき處を設けんエリシヤ往よと言ふ三 時にその一人 希はくは汝も僕等と共に往けと言ければエリシヤ答へて我ゆかんと言ふ四 エリシヤかく彼等とともに往り彼等すなはちヨルダンにいたりて樹を砍りたふしけるが五 一人の材木を砍りたふすに方りてその斧水におちいりしかば叫びて嗚呼主よ是は乞得たる者なりと言ふ六 神の人其は何處におちいりしやと言ふにその處をしらせしかば則ち枝を切おとして其處に投いれてその斧を浮ましめ七 汝これを取れと言ければその人手を伸てこれを取り八 茲にスリアの王イスラエルと戰ひをりその臣僕と評議して斯々の處に我陣を張んと言たれば九 神の人イスラエルの王に言おくりけるは汝 愼んで某の處を過るなかれ其はスリア人其處に下ればなりと一〇 イスラエルの王是において神の人が己に告げ己に教たる處に人を遣して其處に自 防しこと一二回に止まらざりき一一 是をもてスリアの王是事のために心をなやましその臣僕を召て我儕の中誰がイスラエルの王と通じをるかを我に告ざるやと言ふに一二 その臣僕の一人言ふ王わが主よ然るにあらず但イスラエルの預言者エリシヤ汝が寢室にて語る所の言語をもイスラエルの王に告るなり一三 王いひけるは往て彼が安に居かを見よ我人をやりてこれを執へんと茲に彼はドタンに居ると王に告ていふ者ありければ一四 王そこに馬と車および大軍をつかはせり彼等すなはち夜の中に來りてその邑を取かこみけるが一五 神の人の從屬夙に興て出て見に軍勢馬と車をもて邑を取かこみ居ればその少者エリシヤに言けるは嗚呼わが主よ我儕如何にすべきや一六 エリシヤ答へけるは懼るなかれ我儕とともにある者は彼等とともにある者よりも多しと一七 エリシヤ祈りて願くはヱホバかれの目を開きて見させたまへと言ければヱホバその少者の眼を開きたまへり彼すなはち見るに火の馬と火の車山に盈てエリシヤの四面に在り一八 スリア人エリシヤの所に下りいたれる時エリシヤ、ヱホバに祈りて言ふ願くは此人々をして目昏しめたまへと即ちエリシヤの言のごとくにその目を昏しめたまへり一九 是においてエリシヤ彼らに言けるは是はその途にあらず是はその城にもあらず我に從ひて來れ我汝らを汝らが尋ぬる人の所に携ゆかんとて彼等をサマリヤにひき至れり二〇 彼等がサマリヤに至りし時エリシヤ言けるはヱホバよ此人々の目をひらきて見させたまへと即ちヱホバかれらの目を開きたまひたれば彼等見るにその身はサマリヤの中にあり二一 イスラエルの王かれらを見てエリシヤに言けるはわが父よ我撃殺すべきや撃殺すべきや二二 エリシヤ 答けるは撃殺すべからず汝

劍と弓をもて虜にせる者等を撃殺すことを爲んやパンと水と彼らの前にそなへて食飲せしめてその主君に往しむべきなり二三 王すなはちかれらの爲に大なる饗宴をまうけ其食飲ををはるに及びてこれを去しめたればすなはち其主君に歸れり是をもてスリアの兵ふたたびイスラエルの地に入ざりき二四 此後スリアの王ベネハダデその全軍を集めて上りきたりてサマリヤを攻圍みければ二五 サマリヤ大に糧食に乏しくなれり即ちかれら之を攻かこみたれば遂に驢馬の頭一箇は銀八十枚にいたり鳩の糞一カブの四分の一は銀五枚にいたる二六 茲にイスラエルの王石垣の上を通りをる時一人の婦人かれに呼はりて我主王よ助けたまへと言ければ二七 彼言ふヱホバもし汝を助けたまはずば我何をもてか汝を助くることを得ん禾場の物をもてせんか酒榨の中の物をもてせんか二八 王すなはち婦に何事なるやと言ば答へて言ふ此婦人我にむかひ汝の子を與へよ我儕今日これを食ひて明日わが子を食ふべしと言り二九 斯われら吾子を煮てこれを食ひけるが我次の日にいたりて彼にむかひ汝の子を與へよ我儕これを食はんと言しに彼その子を隱したり三〇 王その婦人の言を聞て衣を裂き而して石垣の上を通りをりしが民これを見るにその膚に麻布を著居たり三一 王言けるは今日シヤパテの子エリシヤの首その身の上にすわりをらば神われに斯なしまた重ねてかく成たまへ三二 時にエリシヤはその家に坐しをり長老等これと共に坐し居る王すなはち己の所より人を遣しけるがエリシヤはその使者の未だ己にいたらざる前に長老等に言ふ汝等この人を殺す者の子が我の首をとらんとて人を遣はすを見るや汝等觀てその使者至らば戸を閉てこれを戸の内にいるるなかれ彼の主君の足音その後にするにあらずやと三三 斯彼等と語をる間にその使者かれの許に來りしが王もつづいて來り言けるは此災はヱホバより出たるなり我なんぞ此上ヱホバを待べけんや

第七章一 エリシヤ言けるは汝らヱホバの言を聽けヱホバかく言たまふ明日の今頃サマリヤの門にて麥粉一セアを一シケルに賣り大麥二セアを一シケルに賣にいたらん二 時に一人の大將すなはち王のその手に依る者神の人に答へて言けるは由やヱホバ天に窓をひらきたまふも此事あるべけんやエリシヤいひけるは汝は汝の目をもて之を見ん然どこれを食ふことはあらじ三 茲に城邑の門の入口に四人の癩病人をりしが互に言けるは我儕なんぞ此に坐して死るを待べけんや四 我ら若邑にいらんと言ば邑には食物竭てあれば我ら其處に死んもし又此に坐しをらば同く死ん然ば我儕ゆきてスリアの軍勢の所にいたらん彼ら我らを生しおかば我儕生ん若われらを殺すも死るのみなりと五 すなはちスリア人の陣營にいたらんとて黃昏に起あがりしがスリアの陣營の邊にいたりて視に一人も其處にをる者なし六 是より先に主スリアの軍勢をして車の聲馬の聲大軍の聲を聞しめたまひしかば彼ら互に言けるは視よイスラエルの王われらに敵せんとてヘテ人の王等およびエジプトの王等を傭ひきたりて我らを襲は

んとすと七すなはち黄昏に起て逃げその天幕と馬と驢馬とを棄て陣營をその儘になしおき生命を全うせんとて逃たり八かの癩病人等陣營の邊に至りしが遂に一の天幕にいりて食飲し其處より金銀衣服を持さりて往てこれを隱し又きたりて他の天幕にいり其處よりも持さりて往てこれを隱せり九かくて彼等互に言けるは我儕のなすところ善らず今日は好消息ある日なるに我儕は默し居る若夜明まで待ば菑害身におよばん然ば來れ往て王の眷屬に告んと一〇すなはち來りて邑の門を守る者を呼びこれに告て言けるは我儕スリア人の陣營にいたりて視に其處には一人も居る者なく亦人の聲もせず但馬のみ繋ぎてあり驢馬のみ繋ぎてあり天幕は其儘なりと一一是において門を守る者呼はりてこれを王の家の中に報せたれば一二王夜の中に興いでてその臣下に言けるは我スリア人が我儕になせる所の如何を汝等に示さん彼等はわれらの饑たるを知が故に陣營を去て野に隱る是はイスラエル人邑を出なば生擒て邑に推いらんと言て然せるなり一三その臣下の一人對へて言けるは請ふ尚遺されて邑に存れる馬の中五匹を取しめよ我儕人を遣て窺はしめん視よ是等は邑の中に遺れるイスラエルの全群衆のごとし視よ是等は滅び亡たるイスラエルの全群衆のごとくなりと一四是において二輛の戰車とその馬を取り王すなはち往て見よといひて人を遣はしてスリアの軍勢の跡を尾しめたれば一五彼らその跡を尾てヨルダンにいたりしが途には凡てスリア人が狼狽逃る時に棄たる衣服と器具盈りその使者かへりてこれを王に告ければ一六民いでてスリア人の陣營を掠めたり斯在しかば麥粉一セアは一シケルとなり大麥二セアは一シケルと成るヱホバの言のごとし一七爰に王その手に依ところの彼大將を立て門を司らしめたるに民門にて彼を踐たれば死り即ち神の人が王のおのれに下り來し時に言たる言のごとし一八又神の人が王につげて明日の今頃サマリヤの門にて大麥二セアを一シケルに賣り麥粉二セアを一シケルに賣にいたらんと言しごとくに成ぬ一九彼大將その時に神の人にこたへてヱホバ天に窓をひらきたまふも此事あるべけんやと言たりしかば答へて汝目をもてこれを見べけれどもこれを食ふことはあらじと言たりしが二〇そのごとくになりぬ即ち民門にてかれを踐て死しめたり

第八章一エリシヤ嘗てその子を甦へらせて與へし婦に言しことあり曰く汝起て汝の家族とともに往き汝の寄寓んとおもふ處に寄寓れ其はヱホバ饑饉を呼くだしたまひたれば七年の間この地に臨むべければなりと二是をもて婦起て神の人の言のごとくに爲しその家族とともに往てペリシテ人の地に七年寄寓ぬ三かくて七年を經て後婦人ペリシテ人の地より歸りしが自己の家と田畝のために王に呼もとめんとて往り四時に王は神の人の僕ゲハジにむかひ請ふエリシヤが爲し諸の大なる事等を我に告よと言てこれと談話をる五即ち彼エリシヤが死人を甦らせしことを王にものがたりをる時にその子を彼が甦らせし婦自己の家と

田畝のために王に呼もとめければゲハジ言ふわが主王よ是すなはちその婦人なり是すなはちエリシヤが甦らせしその子なり**六**王すなはちその婦に尋ねけるにこれを陳たれば王彼のために一人の官吏を派出して言ふ凡て彼に屬する物並に彼がこの地を去し日より今にいたるまでの其田畝の產出物を悉く彼に還せよと**七**エリシヤ、ダマスコに至れる事あり時にスリアの王ベネハダデ病にかかりをりしがこれにつげて神の人此にきたると言ふ者ありければ**八**王ハザエルに言ふ汝手に禮物をとり往て神の人を迎へ彼によりてヱホバに吾この病は愈るやと言て問へ**九**是においてハザエルかれを迎へんとて出往きダマスコのもろもろの佳物駱駝に四十駄を禮物に携へて到りて彼の前に立ち曰けるは汝の子スリアの王ベネハダデ我を汝につかはして吾この病は愈るやと言しむ**一〇**エリシヤかれに言けるは往てかれに汝はかならず愈べしと告よ但しヱホバかれはかならず死んと我にしめしたまふなり**一一**而して神の人瞳子をさだめて彼の羞るまでに見つめ乃て哭いでたれば**一二**ハザエルわが主よ何て哭たまふやと言ふにエリシヤ答へけるは我汝がイスラエルの子孫になさんところの害惡を知ばなり即ち汝は彼等の城に火をかけ壯年の人を劍にころし子等を挫ぎ孕女を剖ん**一三**ハザエル言けるは汝の僕は犬なるか何ぞ斯る大なる事をなさんエリシヤ答へけるはヱホバ我にしめしたまふ汝はスリアの王となるにいたらん**一四**斯て彼エリシヤを離れて去てその主君にいたるにエリシヤは汝に何と言しやと尋ければ答へて彼汝はかならず愈るあらんと我に告たりと言ふ**一五**翌日にいたりてハザエル粗き布をとりて水に浸しこれをもて王の面を覆ひたれば死りハザエルすなはち之にかはりて王となる**一六**イスラエルの王アハブの子ヨラムの五年にはヨシヤパテ尚ユダの王たりき此年にユダの王ヨシヤパテの子ヨラム位に即り**一七**彼は位に即し時三十二歲にして八年の間エルサレムにて世を治めたり**一八**彼はアハブの家のなせるがごとくにイスラエルの王等の道を行へりアハブの女かれの妻なりければなり斯彼はヱホバの目の前に惡をなせしかども**一九**ヱホバその僕ダビデのためにユダを滅すことを好みたまはざりき即ち彼にその子孫によりて恒に光明を與んと言たまひしがごとし**二〇**ヨラムの代にエドム叛きてユダの手に服せず自ら王を立たれば**二一**ヨラムその一切の戰車をしたがへてザイルに渉りしが遂に夜の中に起あがりて自己を圍めるエドム人を擊ちその戰車の長等を擊り斯して民はその天幕に逃ゆきぬ**二二**エドムは斯叛きてユダの手に服せずなりしが今日まで然り此時にあたりてリブナもまた叛けり**二三**ヨラムのその餘の行爲およびその凡て爲たる事等はユダの王の歷代志の書に記さるるにあらずや**二四**ヨラムその先祖等とともに寢りてダビデの邑にその先祖たちと同じく葬られその子アハジアこれに代りて王となれり**二五**イスラエルの王アハブの子ヨラムの十二年にユダの王ヨラムの子アハジア位に即り**二六**アハジアは位に即し時二十二歲

にしてエルサレムにて一年世を治めたりその母はイスラエルの王オムリの孫女にして名をアタリヤといふ二七アハジアはアハブの家の道にあゆみアハブの家のごとくにヱホバの目の前に惡をなせり是かれはアハブの家の婿なりければなり二八茲にアハブの子ヨラム自身ゆきてスリアの王ハザエルとギレアデのラモテに戰ひけるがスリア人等ヨラムに傷を負せたり二九是に於てヨラム王はそのスリアの王ハザエルと戰ふにあたりてラマに於てスリア人に負せられたるところの傷を療さんとてヱズレルに歸れりユダの王ヨラムの子アハジアはアハブの子ヨラムが病をるをもてヱズレルに下りて之を訪ふ

第九章一茲に預言者エリシヤ預言者の徒一人を呼てこれに言ふ汝腰をひきからげ此膏の瓶を手にとりてギレアデのラモテに往け二而して汝かしこに到らばニムシの子なるヨシヤパテの子ヱヒウを其處に尋獲て內に入り彼をその兄弟の中より起しめて奧の間につれゆき三膏の瓶をとりその首に灌ぎて言へヱホバかく言たまふ我汝に膏をそそぎてイスラエルの王となすと而して戶を開きて逃されよ止ること勿れ四是において預言者の僕なるその少者ギレアデのラモテに往けるが五到りて見るに軍勢の長等坐してをりければ將軍よ我汝に告べき事ありと言ふにヱヒウこたへて我儕諸人の中の誰にかと言たれば將軍よ汝にと言ふ六ヱヒウすなはち起て家にいりければ彼その首に膏をそそぎて之に言ふイスラエルの神ヱホバかく言たまふ我汝に膏をそそぎてヱホバの民イスラエルの王となす七汝はその主アハブの家を擊ほろぼすべし其によりて我わが僕なる預言者等の血とヱホバの諸の僕等の血をイゼベルの身に報いん八アハブの家は全く滅亡べしアハブに屬する男はイスラエルにありて繫がれたる者も繫がれざる者もともに之を絕べし九我アハブの家をネバテの子ヤラベアムの家のごとくに爲しアヒヤの子バアシヤの家のごとくになさん一〇ヱズレルの地において犬イゼベルを食ふべし亦これを葬るものあらじと而して戶を啓きて逃されり一一かくてヱヒウその主の臣僕等の許にいできたりたれば一人之に言ふ平安なるやこの狂る者何のために汝にきたりしやヱヒウこたへて汝等はかの人を知りまたその言ところを知なりと言ふに一二彼等言けらく譃なり其を我儕に告よと是においてヱヒウ言けるは彼斯々我につげて言りヱホバかく言たまふ我汝に膏をそそぎてイスラエルの王となすと一三彼等すなはち急ぎて各人その衣服をとりこれを階の上ヱヒウの下に布き喇叭を吹てヱヒウは王たりと言り一四ニムシの子なるヨシヤパテの子ヱヒウ斯ヨラムに叛けり(ヨラムはイスラエルを盡くひきゐてギレアデのラモテに於てスリアの王ハザエルを禦ぎたりしが一五ヨラム王はそのスリアの王ハザエルと戰ふ時にスリア人に負せられたるところの傷を痊さんとてヱズレルに歸りてをる)ヱヒウ言けるは若なんぢらの心にかなはば一人もこの邑より走いでてこれをヱズレルに言ふ者なからしめよと一六ヱヒウすなはち

エズレルをさして乘往りヨラムかしこに臥をればなりまたユダの王アハジアはヨラムを訪に下りてをる一七 エズレルの戍樓に一箇の守望者立をりしがヱヒウの群衆のきたるを見て我群衆を見るといひければヨラム言ふ一人を馬に乘て遣し其に會しめて平安なるやと言しめよと一八 是において一人馬にて行てこれに會ひ王かく宣まふ平安なるやと言ふにヱヒウ言けるは平安は汝の與るところならんや吾後にまはれと守望者また告て言ふ使者かれらの許に往たるが歸り來ずと一九 是をもて再び人を馬にて遣したればその人かれらに到りて王かく宣まふ何か變事あるやと言ふにヱヒウ答て平安は汝の與るところならんや吾後にまはれと言ふ二〇 守望者また告て言ふ彼も彼等の所にまで到りしが歸り來ずその車を趨するはニムシの子ヱヒウが趨するに似狂ふて趨らせ來る二一 是においてヨラム車を整へよと言ひけるが車 整ひたればイスラエルの王ヨラムとユダの王アハジアおのおのその車にて出たり即ちかれらヱヒウにむかひて出きたりヱズレル人ナボテの地にて之に會けるが二二 ヨラム、ヱヒウを見てヱヒウよ平安なるやといひたればヱヒウこたへて汝の母イゼベルの姦淫と魔術と斯多かれば何の平安あらんやと云り二三 ヨラムすなはち手をめぐらして逃げアハジアにむかひ反逆なりアハジアよと言ふに二四 ヱヒウ手に弓をひきしぼりてヨラムの肩の間を射たればその矢かれの心をいぬきて出で彼は車の中に偃ししづめり二五 ヱヒウその將ビデカルに言けるは彼をとりてヱズレル人ナボテの地の中に投すてよ其は汝憶ふべし嘗て我と汝と二人ともに乘て彼の父アハブに從へる時にヱホバ斯かれの事を預言したまへり二六 曰くヱホバ言ふ誠に我昨日ナボテの血とその子等の血を見たりヱホバ言ふ我この地において汝にむくゆることあらんと然ば彼をとりてその地になげすてヱホバの言のごとくにせよ二七 ユダの王アハジアはこれを視て園の家の途より逃ゆきけるがヱヒウその後を追ひ彼をも車の中に撃ころせと言しかばイブレアムの邊なるグルの坂にてこれを撃たればメギドンまで逃ゆきて其處に死り二八 その臣僕等すなはち之を車にのせてエルサレムにたづさへゆきダビデの邑においてかれの墓にその先祖等とおなじくこれを葬れり二九 アハブの子ヨラムの十一年にアハジアはユダの王となりしなり三〇 斯てヱヒウ、ヱズレルにきたりしかばイゼベル聞てその目を塗り髮をかざりて窓より望みけるが三一 ヱヒウ門に入きたりたればその主を弑せしジムリよ平安なるやと言り三二 ヱヒウすなはち面をあげて窓にむかひ誰か我に與ものあるや誰かあるやと言けるに二三の寺人ヱヒウを望みたれば三三 彼を投おとせと言りすなはち之を投おとしたればその血牆と馬とにほどばしりつけりヱヒウこれを踏とほれり三四 斯て彼内にいりて食飲をなし而して言けるは往てかの詛はれし婦を見これを葬れ彼は王の女子なればなりと三五 是をもて彼を葬らんとて往て見るにその頭骨と足と掌とありしのみなりければ三六 歸りで彼につぐるに彼言ふ是す

なはちヱホバがその僕なるテシベ人エリヤをもて告たまひし言なり云くヱズレルの地において犬イゼベルの肉を食はん三七 イゼベルの屍骸はヱズレルの地に於て糞土のごとくに野の表にあるべし是をもて是はイゼベルなりと指て言ふこと能ざらん

第一〇章 一 アハブ、サマリヤに七十人の子あり茲にヱヒウ書をしたためてサマリヤにおくり邑の牧伯等と長老等とアハブの子等の師傅等とに傳へて云ふ二 汝らの主の子等汝らとともにあり又汝等は車も馬も城もあり且武器もあれば此書汝らの許にいたらば三 汝らの主の子等の中より最も優れる方正き者を選み出してその父の位に置ゑ汝等の主の家のために戰へよ四 彼ら大に恐れて言ふ二人の王等すでに彼に當ることを得ざりしなれば我儕いかでか當ることを得んと五 乃ち家宰 邑宰 長老師傅等ヱヒウに言おくりけるは我儕は汝の僕なり凡て汝が我儕に命ずる事を爲ん我儕は王を立るを好まず汝の目に善と見ゆる所を爲せ六 是においてヱヒウ再度かれらに書をおくりて云ふ汝らもし我に與き我言にしたがふならば汝らの主の子なる人々の首をとりて明日の今頃ヱズレルにきたりて吾許にいたれと當時王の子七十人はその師傅なる邑の貴人等とともに居る七 その書かれらに至りしかば彼等王の子等をとらへてその七十人をことごとく殺しその首を籃につめてこれをヱズレルのヱヒウの許につかはせり八 すなはち使者いたりてヱヒウに告て人衆王の子等の首をたづさへ來れりと言ければ明朝までそれを門の入口に二山に積おけと言り九 朝におよび彼出て立ちすべての民に言ふ汝等は義し我はわが主にそむきて之を弑したり然ど此すべての者等を殺せしは誰なるぞや一〇 然ば汝等知れヱホバがアハブの家につきて告たまひしヱホバの言は一も地に隕ず即ちヱホバはその僕エリヤによりて告し事を成たまへりと一一 斯てヱヒウはアハブの家に屬する者のヱズレルに遺れるを盡く殺しまたその一切の重立たる者その親き者およびその祭司等を殺して彼に屬する者を一人も遺さざりき一二 ヱヒウすなはち起て往てサマリヤに至りしがヱヒウ途にある時牧者の集會所において一三 ユダの王アハジアの兄弟等に遇ひ汝等は何人なるやと言けるに我儕はアハジアの兄弟なるが王の子等と王母の子等の安否を問んとて下るなりと答へたれば一四 彼等を生擒れと言り即ちかれらを生擒りその集會所の穴の側にて彼等四十二人を盡く殺し一人をも遺さざりき一五 斯てヱヒウ其處より進みゆきしがレカブの子ヨナダブの己を迎にきたるに遭ければその安否をとふてこれに汝の心はわが心の汝の心と同一なるがごとくに眞實なるやと言けるにヨナダブ答へて眞實なりと言たれば然ば汝の手を我に伸よと言ひその手を伸ければ彼を挽て己の車に登らしめて一六 言ふ我とともに來りて我がヱホバに熱心なるを見よと斯かれを己の車に乗しめ一七 サマリヤにいたりてアハブに屬する者のサマリヤに遺れるを盡く殺して遂にその一族を滅せりヱホバのエリヤに告たまひし言語のごとし一八 茲にヱヒウ民をこと

ごとく集てこれに言けるはアハブは少くバアルに事たるがヱヒウは大にこれに事へんとす一九 然ば今バアルの諸の預言者 諸の臣僕 諸の祭司等を我許に召せ一人も來らざる者なからしめよ我大なる祭祀をバアルのためになさんとするなり凡て來らざる者は生しおかじと但しヱヒウ、バアルの僕等を滅さんとて偽りて斯なせるなり二〇 ヱヒウすなはちバアルの祭禮を設よと言ければ之を宣たり二一 是てヱヒウあまねくイスラエルに人をつかはしたればバアルの僕たる者皆きたれり一人も來らずして遺れるものはあらざりき彼等バアルの家にいりたればバアルの家は末より末まで充わたれり二二 時にヱヒウ衣裳を掌どる者てむかひ禮服をとりいだしてバアルの凡の僕等にあたへよといひければすなはち禮服をとりいだせり二三 斯ありてヱヒウはレカブの子ヨナダブとともにバアルの家にいりしがバアルの僕等に言ふ汝等尋ね見て此には只バアルの僕のみあらしめヱホバの僕を一人も汝らの中にあらしめざれと二四 彼等犠牲と燔祭を献げんとて入し時ヱヒウ八十人の者を外に置て言ふ凡てわがその手にわたすところの人を一人にても逃れしむる者は己の生命をもてその人の生命に代べしと二五 期て燔祭を献ぐることの終りし時ヱヒウその士卒と諸將に言ふ入てかれらを殺せ一人をも出すなかれとすなはち刃をもて彼等を撃ころせり而して士卒と諸將これを投いだしてバアルの家の内殿に入り二六 諸の像をバアルの家よりとりいだしてこれを燒り二七 即ちかれらバアルの像をこぼちバアルの家をこぼち其をもて厠を造りしが今日までのこる二八 ヱヒウかくイスラエルの中よりバアルを絶さりたりしかども二九 ヱヒウは尚かのイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪に離るることをせざりき即ち彼なほベテルとダンにあるところの金の犢に事たり三〇 ヱホバ、ヱヒウに言たまひけらく汝わが義と視るところの事を行ふにあたりて善く事をなしまたわが心にある諸の事をアハブの家になしたれば汝の子孫は四代までイスラエルの位に坐せんと三一 然るにヱヒウは心を盡してイスラエルの神ヱホバの律法をおこなはんとはせず尚かのイスラエルに罪を犯させたるヤラベアムの罪に離れざりき三二 是時にあたりてヱホバ、イスラエルを割くことを始めたまへりハザエルすなはちイスラエルの一切の邊境を侵し三三 ヨルダンの東においてギレアデの全地ガド人ルベン人マナセ人の地を侵しアルノン河の邊なるアロエルよりギレアデにいたりバシヤンにおよべり三四 ヱヒウのその餘の行爲とその凡て爲たる事およびその大なる能はイスラエルの王の歴代志の書に記さるるにあらずや三五 ヱヒウその先祖等とともに寝りたればこれをサマリヤに葬りぬその子ヱホアハズこれに代て王となれり三六 ヱヒウがサマリヤにをりてイスラエルに王たりし間は二十八年なりき

第一一章

一 茲にアハジアの母アタリヤその子の死たるを見て起て王の種を盡く滅したりしが二 ヨラム王の女にしてアハジアの

姉妹なるヱホシバといふ者アハジアの子ヨアシを王の子等の殺さるる者の中より竊みとり彼とその乳母を夜着の室にいれて彼をアタリヤに匿したれば終にころされざりき三ヨアシは彼とともに六年ヱホバの家に隠れてをりアタリヤ國を治めたり四第七年にいたりヱホヤダ人を遣して近衛兵の大將等を招きよせヱホバの家にきたりて己に就しめ彼等と契約を結び彼らにヱホバの家にて誓をなさしめて王の子を見し五かれらに命じて言ふ汝等がなすべき事は是なり汝等安息日に入きたる者は三分の一は王の家をまもり六三分の一はスル門にをり三分の一は近衛兵の後の門にをるべし斯なんぢら宮殿をまもりて人をいるべからず七また凡て汝等安息日に出ゆく者はその二手ともにヱホバの家において王をまもるべし八すなはち汝らおのおの武器を手にとりて王を環て立べし凡てその列を侵す者をば殺すべし汝等又王の出る時にも入る時にも王とともにをるべし九是においてその將官等祭司ヱホヤダが凡て命ぜしごとくにおこなへり即ちかれらおのおの其手の人の安息日に入くべき者と安息日に出ゆくべき者とを率て祭司ヱホヤダに至りしかば一〇祭司はヱホバの殿にあるダビデ王の槍と楯を大將等にわたせり一一近衛兵はおのおの手に武器をとりて王の四周にをり殿の右の端より左の端におよびて壇と殿にそひて立つ一二ヱホヤダすなはち王子を進ませて之に冠冕をいただかせ律法をわたし之を王となして之に膏をそそぎければ人衆手を拍て王長壽かれと言り一三茲にアタリヤ近衛兵と民の聲を聞きヱホバの殿にいりて民の所にいたり一四見るに王は常例のごとくに高座の上に立ち其傍に大將等と喇叭手立をり又國の民みな喜びて喇叭を吹をりしかばアタリヤ其衣を裂て反逆なり反逆なりと叫べり一五時に祭司ヱホヤダ大將等と軍勢の士官等に命じてこれに言ふ彼をして列の間をとほりて出しめよ彼に從がふ者をば劍をもて殺せと前にも祭司は彼をヱホバの家に殺すべからずと言おけり一六是をもて彼のために路をひらきければ彼王の家の馬道をとほりゆきしが遂に其處に殺されぬ一七斯てヱホヤダはヱホと王と民の間にその皆ヱホバの民とならんといふ契約を立しめたり亦王と民の間にもこれを立しめたり一八是をもて國の民みなバアルの家にいりてこれを毀ちその壇とその像を全く打碎きバアルの祭司マツタンをその壇の前に殺せり而して祭司ヱホバの家に監督者を設けたり一九ヱホヤダすなはち大將等と近衛兵と國の諸の民を率てヱホバの家より王をみちびき下り近衛兵の門の途よりして王の家にいたり王の位に坐せしめたり二〇斯有しかば國の民はみな喜びて邑は平穏なりきアタリヤは王の家に殺されぬ二一ヨアシは位に即し時七歳なりき

第一二章 一ヨアシはヱヒウの七年に位に即きエルサレムにおいて四十年世を治めたりその母はベエルシバより出たるものにて名をヂビアといへり二ヨアシは祭司ヱホヤダの己を誨ふる間は恒にヱホバの善と視たまふ事をおこなへり三然ど崇邱は除か

ずしてあり民は尚その崇邱において犠牲をささげ香を焚り四茲にヨアシ祭司等に言けるは凡てヱホバの家に聖別て献納るところの金即ち核數らるる人の金估價にしたがひて出すところの身の代の金および人々が心より願てヱホバの家に持きたるところの金五これを祭司等おのおのその知人より受をさめ何處にても殿に破壞の見る時はこれをもてその破壞を修繕ふべしと六然るにヨアシ王の二十三年におよぶまで祭司等殿の破壞を修繕ふにいたらざりしかば七ヨアシ王祭司ヱホヤダおよびその他の祭司等を召てこれに言ふ汝等などて殿の破壞を修繕はざるや然ば今よりは汝等の知人より金を受て自己のためにすべからず唯殿の破壞の修理に其を供ふべしと八祭司等は重て民より自己のために金を受ず又殿の破壞を修理ふことをせじと約せり九斯て後祭司ヱホヤダ一箇の櫃をとりその蓋に孔を穿ちてこれをヱホバの家の入口の右において壇の傍に置り門守の祭司等すなはちヱホバの家に入きたるところの金をことごとくその中に入たり一〇爰にその櫃の中に金の多くあることを見たれば王の書記と祭司長と上り來りてそのヱホバの家に積りし金を包みてこれを數へ一一その數へし金をこの工事をなす者に付せり即ちヱホバの家の監督者にこれを付しければ彼等またヱホバの家を修理ふところの木匠と建築師にこれを與へ一二石工および琢石者に與へまたこれをもてヱホバの家の破壞を修繕ふ材木と琢石を買ひ殿を修理ふために用ふる諸の物のためにこれを費せり一三但しヱホバの家に携來れるその金をもてヱホバの家のために銀の盂燈剪鉢喇叭金の器銀の器等を造ることはせざりき一四唯これをその工事をなす者にわたして之をもてヱホバの家を修理はしめたり一五またその金を手にわたして工人にはらはしめたる人々と計算をなすことをせざりき是は彼等忠厚に事をなしたればなり一六愆金と罪金はヱホバの家にいらずして祭司に歸せり一七當時スリアの王ハザエルのぼり來りてガテを攻てこれを取り而してハザエル、エルサレムに攻のぼらんとてその面をこれに向たり一八是をもてユダの王ヨアシその先祖たるユダの王ヨシヤパテ、ヨラム、アハジア等が聖別て献げたる一切の物および自己が聖別て献げたる物ならびにヱホバの家の庫と王の家とにあるところの金を悉く取てこれをスリアの王ハザエルにおくりければ彼すなはちエルサレムを離れて去ぬ一九ヨアシのその餘の行爲およびその凡て爲たる事はユダの王の歷代志の書に記さるるにあらずや二〇茲にヨアシの臣僕等おこりて黨をむすびシラに下るところのミロの家にてヨアシを弑せり二一即ちその僕シメアテの子ヨザカルとシヨメルの子ヨザバデかれを弑して死しめたればその先祖とおなじくこれをダビデの邑に葬れりその子アマジヤこれに代りて王となる

第一三章一ユダの王アハジアの子ヨアシの二十三年にヱヒウの子ヨハアズ、サマリヤにおいてイスラエルの王となり十七年位にありき二彼はヱホバの目の前に惡をなし夫のイスラエルに罪

を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪を行ひつづけて之に離れざりき三是においてヱホバ、イスラエルにむかひて怒を發しこれをその代のあひだ恒にスリアの王ハザエルの手にわたしおき又ハザエルの子ベネハダデの手に付し置たまひしが四ヨアハズ、ヱホバに請求めたればヱホバつひにこれを聽いれたまへり其はイスラエルの苦難を見そなはしたればなり即ちスリアの王これをなやませるなり五ヱホバつひに救者をイスラエルにたまひたればイスラエルの子孫はスリア人の手を脱れて疇昔の如くに己々の天幕に住にいたれり六但し彼等はイスラエルに罪を犯さしめたるヤラベアムの家の罪をはなれずして之をおこなひつづけたりサマリヤにも亦アシタロテの像たちをりぬ七嚮にスリアの王は民を滅し踐くだく塵のごとくに是をなして只騎兵五十人車十輛歩兵一萬人而已をヨアハズに遺せり八ヨアハズのその餘の行爲とその凡て爲たる事およびその能はイスラエルの王の歴代志の書にしるさるるに非ずや九ヨアハズその先祖等とともに寢りたればこれをサマリヤに葬れりその子ヨアシこれに代て王となる一〇ユダの王ヨアシの三十七年にヨアハズの子ヨアシ、サマリヤにおいてイスラエルの王となり十六年位にありき一一彼ヱホバの目の前に惡をなし夫のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの諸の罪にはなれずしてこれを行ひつづけたり一二ヨアシのその餘の行爲とその凡て爲たる事およびそのユダの王アマジヤと戰ひし能はイスラエルの王の歴代志の書に記さるるに非ずや一三ヨアシその先祖等とともに寢りてヤラベアム位にのぼれりヨアシはイスラエルの王等とおなじくサマリヤに葬らる一四茲にエリシヤ死病にかかりて疾をりしかばイスラエルの王ヨアシ彼の許にくだり來てその面の上に涙をこぼし吾父吾父イスラエルの兵車よその騎兵よと言り一五エリシヤかれにむかひ弓矢をとれと言ければすなはち弓矢をとれり一六エリシヤまたイスラエルの王に汝の手を弓にかけよと言ければすなはちその手をかけたり是においてエリシヤその手を王の手の上に按て一七東向の窓を開けと言たれば之を開きけるにエリシヤまた射よと言り彼すなはち射たればエリシヤ言ふヱホバよりの拯救の矢スリアに對する拯救の矢汝必らずアベクにおいてスリア人を撃やぶりてこれを滅しつくすにいたらん一八エリシヤまた矢を取れと言ければ取りエリシヤまたイスラエルの王に地を射よといひけるに三次射て止たれば一九神の人怒て言ふ汝は五回も六回も射るべかりしなり然せしならば汝スリアを撃やぶりて之を滅しつくすことを得ん然ど今然せざれば汝がスリアを撃やぶることは三次のみなるべしと二〇エリシヤ終に死たればこれを葬りしが年の立かへるに及てモアブの賊黨國にいりきたれり二一時に一箇の人を葬らんとする者ありしが賊黨を見たればその人をエリシヤの墓におしいれけるにその人いりてエリシヤの骨にふるるや生かへりて起あがれり二二スリアの王ハザエルはヨアハズの一生の間イスラエルをなやました

りしが二三ヱホバそのアブラハム、イサク、ヤコブと契約をむすびしがためにイスラエルをめぐみ之を憐みこれを眷みたまひ之を滅すことを好まず尚これをその前より棄はなちたまはざりき二四スリアの王ハザエルつひに死てその子ベネハダデこれに代りて王となれり二五是においてヨアズの子ヨアシはその父ヨアハズがハザエルに攻取れたる邑々をハザエルの子ベネハダデの手より取かへせり即ちヨアシは三次かれを敗りてイスラエルの邑々を取かへしぬ

第一四章一イスラエルの王ヨアハズの子ヨアシの二年にユダの王ヨアシの子アマジヤ王となれり二彼は王となれる時二十五歳にして二十九年の間エルサレムにて世を治めたりその母はエルサレムの者にして名をヱホアダンと云り三アマジヤはヱホバの善と見たまふ事をなしたりしがその先祖ダビデのごとくはあらざりき彼は萬の事において其父ヨアシがなせしごとくに事をなせり四惟崇邱はのぞかずしてあり民はなほその崇邱において犠牲をささげ香を焚り五彼は國のその手に堅くたつにおよびてその父王を弑せし臣僕等を殺したりしが六その弑殺人の子女等は殺さざりき是はモーセの律法の書に記されたる所にしたがへるなり即ちヱホバ命じて言たまはく子女の故によりて父を殺すべからず父の故によりて子女を殺すべからず人はみなその身の罪によりて死べき者なりと七アマジヤまた鹽谷においてエドミ人一萬を殺せり亦セラを攻とりてその名をヨクテルとなづけしが今日まで然り八かくてアマジヤ使者をヱヒウの子ヨアハズの子なるイスラエルの王ヨアシにおくりて來れ我儕たがひに面をあはせんと言しめければ九イスラエルの王ヨアシ、ユダの王アマジヤに言おくりけるはレバノンの荊棘かつてレバノンの香柏に汝の女子をわが子の妻にあたへよと言おくりたることありしにレバノンの野獸とほりてその荊棘を踏たふせり一〇汝は大にエドムに勝たれば心に誇るその榮譽にやすんじて家に居れなんぞ禍を惹おこして自己もユダもともに亡んとするやと一一然るにアマジヤ聽ことをせざりしかばイスラエルの王ヨアシのぼり來れり是において彼とユダの王アマジヤはユダのベテシメシにてたがひに面をあはせたりしが一二ユダ、イスラエルに敗られて各人その天幕に逃かへりぬ一三是においてイスラエルの王ヨアシはアジアの子ヨアシの子なるユダの王アマジヤをベテシメシに擒へ而してエルサレムにいたりてエルサレムの石垣をエフライムの門より隅の門まで凡そ四百キユビトを毀ち一四またヱホバの家と王の家の庫とにあるところの金銀および諸の器をとりかつ人質をとりてサマリヤにかへれり一五ヨアシがなしたるその餘の行爲とその能およびそのイスラエルの王アマジヤと戰ひし事はイスラエルの王の歴代志の書にしるさるるにあらずや一六ヨアシその先祖等とともに寢りてイスラエルの王等とともにサマリヤに葬られその子ヤラベアムこれに代りて王となれり一七ヨアシの子なるユダの王アマジヤはヨアハズの子なるイ

スラエルの王ヨアシの死てより後なほ十五年生存へたり一八アマジヤのその餘の行爲はユダの王の歷代志の書にしるさるるにあらずや一九茲にエルサレムにおいて黨をむすびて彼に敵する者ありければ彼ラキシに逃ゆきけるにその人々ラキシに人をやりて彼を彼處に殺さしめたり二〇人衆かれを馬に負せてもちきたりエルサレムにおいてこれをその先祖等とともにダビデの邑に葬りぬ二一ユダの民みなアザリヤをとりて王となしてその父アマジヤに代しめたり時に年十六なりき二二彼エラテの邑を建てこれを再びユダに歸せしめたり是はかの王がその先祖等とともに寢りし後なりき二三ユダの王ヨアシの子アマジヤの十五年にイスラエルの王ヨアシの子ヤラベアム、サマリヤにおいて王となり四十一年位にありき二四彼はヱホバの目の前に惡をなし夫のイスラエルに罪を犯さしめたるネバテの子ヤラベアムの罪に離れざりき二五彼ハマテの入處よりアラバの海までイスラエルの邊境を恢復せりイスラエルの神ヱホバがガテヘペルのアミツタイの子なるその僕預言者ヨナによりて言たまひし言のごとし二六ヱホバ、イスラエルの艱難を見たまふに其は甚だ苦かり即ち繫れたる者もあらず繫れざる者もあらず又イスラエルを助る者もあらず二七ヱホバは我イスラエルの名を天下に塗抹んとすと言たまひしこと無し反てヨアシの子ヤラベアムの手をもてこれを拯ひたまへり二八ヤラベアムのその餘の行爲とその凡てなしたる事およびその戰爭をなせし能その昔にユダに屬し居たることありしダマスコとハマテを再びイスラエルに歸せしめたる事はイスラエルの王の歷代志の書に記さるるにあらずや二九ヤラベアムその先祖たるイスラエルの王等とともに寢りその子ザカリヤこれに代りて王となれり

第一五章一イスラエルの王ヤラベアムの二十七年にユダの王アマジヤの子アザリヤ王となれり二彼は王となれる時に十六歲なりしが五十二年の間エルサレムにおいて世を治めたりその母はエルサレムの者にして名をヱコリアと言ふ三彼はヱホバの善と見たまふ事をなし萬の事においてその父アマジヤがなしたるごとく行へり四惟崇邱は除かずしてあり民は尚その崇邱の上に犧牲をささげ香をたけり五ヱホバ王を擊たまひしかばその死る日まで癩病人となり別殿に居ぬその子ヨタム家の事を管理て國の民を審判り六アザリヤのその餘の行爲とその凡てなしたる事はユダの王の歷代志の書にしるさるるにあらずや七アザリヤその先祖等とともに寢りたればこれをダビデの邑にその先祖等とともに葬れりその子ヨタムこれに代りて王となる八ユダの王アザリヤの三十八年にヤラベアムの子ザカリア、サマリヤにおいてイスラエルの王となれりその間は六月九彼その先祖等のなせしごとくヱホバの目の前に惡を爲し夫のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪に離れざりき一〇茲にヤベシの子シヤルム黨をむすびて之に敵し民の前にてこれを擊て弑しこれに代りて王となれり一一ザカリヤのその餘の行爲はイ

スラエルの王の歴代志の書に記さる一二ヱホバのヱヒウに告たまひし言は是なり云く汝の子孫は四代までイスラエルの位に坐せんと果して然り一三ヤベシの子シヤルムはユダの王ウジヤの三十九年に王となりサマリヤにおいて一月の間王たりき一四時にガデの子メナヘム、テルザより上りでサマリヤに來りヤベシの子シヤルムをサマリヤに撃てこれを殺し之にかはりて王となれり一五シヤルムのその餘の行爲とその徒黨をむすびし事はイスラエルの王の歴代志の書にしるさる一六その後メナヘム、テルザよりいたりてテフサとその中にあるところの者およびその四周の地を撃り即ちかれら己がために開くことをせざりしかばこれを撃てその中の孕婦をことごとく剳剔たり一七ユダの王アザリヤの三十九年にガデの子メナヘム、イスラエルの王となりサマリヤにおいて十年の間世を治めたり一八彼ヱホバの目の前に惡をなし彼のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪に生涯離れざりき一九茲にアツスリヤの王ブルその地に攻きたりければメナヘム銀一千タラントをブルにあたへたり是は彼をして己を助けしめ是によりて國を己の手に堅く立しめんとてなりき二〇即ちメナヘムその銀をイスラエルの諸の大富者に課しその人々に各々銀五十シケルを出さしめてこれをアツスリヤの王にあたへたり是をもてアツスリヤの王は歸りゆきて國に止ることをせざりき二一メナヘムのその餘の行爲とその凡てなしたる事はイスラエルの王の歴代志の書にしるさるるにあらずや二二メナヘムその先祖等とともに寢りその子ペカヒヤこれに代て王となれり二三メナヘムの子ペカヒヤはユダの王アザリヤの五十年にサマリヤにおいてイスラエルの王となり二年のあひだ位にありき二四彼ヱホバの目のまへに惡をなし彼のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪に離れざりき二五茲にその將官なるレマリヤの子ペカ黨をむすびて彼に敵しサマリヤにおいて王の家の奧の室にこれを撃ころしアルゴブとアリエをもこれとともに殺せり時にギレアデ人五十人ペカとともにありきペカすなはち彼をころしかれに代て王となれり二六ペカヒヤのその餘の行爲とその凡て爲たる事はイスラエルの王の歴代志の書にしるさる二七レマリヤの子ペカはユダの王アザリヤの五十二年にサマリヤに於てイスラエルの王となり二十年位にありき二八彼ヱホバの目の前に惡をなし彼のイスラエルに罪をおかさせたるネバテの子ヤラベアムの罪にはなれざりき二九イスラエルの王ペカの代にアツスリヤの王テグラテピレセル來りてイヨン、アベルベテマアカ、ヤノア、ケデシ、ハゾルおよびギレアデならびにナフタリの全地ガリラヤを取りその人々をアツスリヤに虜へうつせり三〇茲にエラの子ホセア黨をむすびてレマリヤの子ペカに敵しこれを撃て殺しこれに代て王となれり是はウジヤの子ヨタムの二十年にあたれり三一ペカのその餘の行爲とその凡てなしたる事はイスラエルの王の歴代志の書にしるさる三二レマリヤの子イスラエルの王ペカの二年に

ウジヤの子ユダの王ヨタム王となれり三三彼は王となれる時二十五歳なりしがヱルサレムにて十六年世を治めたり母はザドクの女にして名をヱルシヤといへり三四彼はヱホバの目にかなふ事をなし凡てその父ウジヤのなしたるごとくにおこなへり三五惟崇邱は除かずしてあり民なほその崇邱の上に犠牲をささげ香を焚り彼ヱホバの家の上の門を建たり三六ヨタムのその餘の行爲とその凡てなしたる事はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらずや三七當時ヱホバ、スリアの王レヂンとレマリヤの子ペカをユダにせめきたらせたまへり三八ヨタムその先祖等とともに寢りてその父ダビデの邑にその先祖等とともに葬られその子アハズこれに代りて王となれり

第一六章 一レマリヤの子ペカの十七年にユダの王ヨタムの子アハズ王となれり二アハズは王となれる時二十歳にしてヱルサレムにおいて十六年世を治めたりしがその神ヱホバの善と見たまふ事をその父ダビデのごとくは行はざりき三彼はイスラエルの王等の道にあゆみまたその子に火の中を通らしめたり是はヱホバがイスラエルの子孫の前より逐はらひたまひし異邦人のおこなふところの憎むべき事にしたがへるなり四彼は崇邱の上丘の上一切の青木の下に犠牲をささげ香をたけり五この頃スリアの王レヂンおよびレマリヤの子なるイスラエルの王ペカ、エルサレムにせめのぼりてアハズを圍みけるが勝ことを得ざりき六この時にあたりてスリアの王レヂン復エラテをスリアに歸せしめユダヤ人をエラテより逐いだせり而してスリア人エラテにきたりて其處に住み今日にいたる七是においてアハズ使者をアツスリヤの王テグラテピレセルにつかはして言しめけるは我は汝の臣僕汝の子なりスリアの王とイスラエルの王と我に攻かかりをれば請ふ上りきたりてかれらの手より我を救ひいだしたまへと八アハズすなはちヱホバの家と王の家の庫とにあるところの銀と金をとりこれを禮物としてアツスリヤの王におくりしかば九アツスリヤの王かれの請を容たりアツスリヤの王すなはちダマスコに攻のぼりて之をとりその民をキルに虜うつしまたレヂンを殺せり一〇かくてアハズはアツスリヤの王テグラテピレセルに會んとてダマスコにゆきけるがダマスコにおいて一箇の祭壇を見たればアスス王その祭壇の工作にしたがひて委くこれが圖と式様を制へて祭司ウリヤにこれをおくれり一一是において祭司ウリヤはアハズ王がダマスコよりおくりたる所にてらして一箇の祭壇をつくりアハズ王がダマスコより來るまでにこれを作りおけり一二茲に王ダマスコより歸りてその祭壇を見壇にちかよりてこれに上り一三壇の上に燔祭と素祭を焚き灌祭をそそぎ酬恩祭の血を灑げり一四彼またヱホバの前なる銅の壇を家の前より移せり即ちこれをかの新しき壇とヱホバの家の間より移してかの壇の北の方に置たり一五而してアハズ王祭司ウリヤに命じて言ふ朝の燔祭夕の素祭および王の燔祭とその素祭ならびに國中の民の燔祭とその素祭および灌祭はこの大なる壇

の上に焚べし又この上に燔祭の牲の血と犠牲の物の血をすべて灑ぐべし彼の銅の壇の事はなほ考ふるあらん一六祭司ウリヤすなはちアハズ王のすべて命じたるごとくに然なせり一七またアハズ王臺の邊を削りて洗盤をその上よりうつしまた海をその下なる銅の牛の上よりおろして石の座の上に置ゑ一八また家に造りたる安息日用の遊廊および王の外の入口をアッスリヤの王のためにヱホバの家の中に變じたり一九アハズのなしたるその餘の行爲はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらずや二〇アハズその先祖等とともに寝りてダビデの邑にその先祖等とともに葬られその子ヒゼキヤこれにかはりて王となれり

第一七章一ユダの王アハズの十二年にエラの子ホセア王となりサマリヤにおいて九年イスラエルを治めたり二彼ヱホバの目の前に惡をなせしがその前にありしイスラエルの王等のごとくはあらざりき三アッスリヤの王シャルマネセル攻のぼりたればホセアこれに臣服して貢を納たりしが四アッスリヤの王つひにホセアの己に叛けるを見たり其は彼使者をエジプトの王ソにおくり且前に歳々なせしごとくに貢をアッスリヤ王に納ざりければなり是においてアツスリヤの王かれを禁錮て獄におけり五すなはちアッスリヤの王せめ上りて國中を遍くゆきめぐりサマリヤにのぼりゆきて三年が間これをせめ圍みたりしが六ホセアの九年におよびてアッスリヤの王つひにサマリヤを取りイスラエルをアッスリヤに虜へゆきてこれをハラとハボルとゴザン河の邊とメデアの邑々とにおきぬ七此事ありしはイスラエルの子孫己をエジプトの地より導きのぼりてエジプトの王パロの手を脱しめたるその神ヱホバに對て罪を犯し他の神々を敬ひ八ヱホバがイスラエルの子孫の前より逐はらひたまひし異邦人の法度にあゆみ又イスラエルの王等の設けし法度にあゆみたるに因てなり九イスラエルの子孫義からぬ事をもてその神ヱホバを掩ひかくしその邑々に崇邱をたてたり看守臺より城にいたるまで然り一〇彼等一切の高丘の上一切の青樹の下に偶像とアシラ像を立て一一ヱホバがかれらの前より移したまひし異邦人のなせしごとくにその崇邱に香を焚き又惡を行ひてヱホバを怒らせたり一二ヱホバかれらに汝等これらの事を爲べからずと言おきたまひしに彼等偶像に事ふることを爲しなり一三ヱホバ諸の預言者諸の先見者によりてイスラエルとユダに見證をたて汝等翻へりて汝らの惡き道を離れわが誡命わが法度をまもり我が汝等の先祖等に命じまたわが僕なる預言者等によりて汝等に傳へし法に率由ふやうにせよと言たまへり一四然るに彼ら聽ことをせずしてその項を強くせり彼らの先祖等がその神ヱホバを信ぜずしてその項を強くしたるが如し一五彼等はヱホバの法度を棄てヱホバがその先祖等と結びたまひし契約を棄てまたその彼等に見證したまひし證言を棄て且虛妄物にしたがひて虛浮なりまたその周圍なる異邦人の跡をふめり是はヱホバが是のごとくに事をなすべからずと彼らに命じ給ひし者なり一六彼等その神ヱホ

バの諸の誡命を遺て己のために二の牛の像を鑄なし又アシラ像を造り天の衆群を拜み且バアルに事へ一七 またその子息息女に火の中を通らしめ卜筮および禁厭をなしヱホバの目の前に惡を爲ことに身を委ねてその怒を惹起せり一八 是をもてヱホバ大にイスラエルを怒りこれをその前より除きたまひたればユダの支派のほかは遺れる者なし一九 然るにユダもまたその神ヱホバの誡命を守ずしてイスラエルの立たる法度にあゆみたれば二〇 ヱホバ、イスラエルの苗裔ぞことごとく棄これを苦しめこれをその掠むる者の手に付して遂にこれをその前より打すてたまへり二一 すなはちイスラエルをダビデの家より裂はなしたまひしかばイスラエル、ネバテの子ヤラベアムを王となせしにヤラベアム、イスラエルをしてヱホバにしたがふことを止しめてこれに大なる罪を犯さしめたりしが二二 イスラエルの子孫はヤラベアムのなせし諸の罪をおこなひつづけてこれに離るることなかりければ二三 遂にヱホバその僕なる諸の預言者をもて言たまひしごとくにイスラエルをその前より除きたまへりイスラエルはすなはちその國よりアッスリヤにうつされて今日にいたる二四 斯てアッスリヤの王バビロン、クタ、アワ、ハマテおよびセパルワイムより人をおくりてこれをイスラエルの子孫の代にサマリヤの邑々に置ければその人々サマリヤを有ちてその邑々に住しが二五 その彼處に始て住る時には彼等ヱホバを敬ふことをせざりしかばヱホバ獅子をかれらの中に送りたまひてその獅子かれら若干を殺せり二六 是によりてアッスリヤの王に告て言ふ汝が移てサマリヤの邑々におきたまひしかの國々の民はこの地の神の道を知ざるが故にその神獅子をかれらの中におくりて獅子かれらを殺せり是は彼等その國の神の道を知ざるに因てなり二七 アッスリヤの王すなはち命を下して言ふ汝等が彼處より曳きたりし祭司一人を彼處に携ゆけ即ち彼をして彼處にいたりて住しめその國の神の道をその人々に敎へしめよと二八 是に於てサマリヤより移れし祭司一人きたりてベテルに住みヱホバの敬ふべき事をかれらに敎へたり二九 その民はまた各々自分自分の神々を造りてこれをかのサマリア人が造りたる諸の崇邱に安置せり民みなその住る邑々において然なしぬ三〇 即ちバビロンの人々はスコテベノテを作りクタの人々はネルガルを作りハマテの人々はアシマを作り三一 アビ人はニブハズとタルタクを作りセパルワイ人は其子女を火に焚てセパルワイムの神アデランメルクおよびアナンメルクに奉げたり三二 彼ら又ヱホバを敬ひ凡俗の民をもて崇邱の祭司となしたれば其人これがために崇邱に家々にて職務をなせり三三 斯その人々ヱホバを敬ひたりしが亦その携へ出されし國々の風俗にしたがひて自己自己の神々に事へたり三四 今日にいたるまで彼等は前の習俗にしたがひて事をなしヱホバを敬はず彼等の法度をも例典をも行はず又ヱホバがイスラエルを名けたまひしヤコブの子孫に命じたまひし律法をも誡命をも行はざるなり三五 昔ヱホバこれと契約をた

てこれに命じて言たまひけらく汝等は他の神を敬ふべからずまたこれを拝みこれに事へこれに犧牲をささぐべからず三六 只大なる能をもて腕を伸て汝等をエジプトの地より導き上りしヱホバをのみ汝等敬ひこれを拝みこれにこれに犧牲をささぐべし三七 またその汝等のために録したまへる法度と例典と律法と誡命を汝等謹みて恒に守るべし他の神々を敬ふべからず三八 我が汝等とむすびし契約を汝等忘るべからず又他の神々を敬ふべからず三九 只汝らの神ヱホバを敬ふべし彼なんじらをその諸の敵の手より救ひいださん四〇 然るに彼等は聽ことをせずしてなほ前の習俗にしたがひて事を行へり四一 偖この國々の民は斯ヱホバを敬ひまたその雕める像に事たりしがその子も孫も共に然りその先祖のなせしごとくに今日までも然なすなり

第一八章一 イスラエルの王エラの子ホセアの三年にユダの王アハズの子ヒゼキア王となれり二 彼は王となれる時二十五歳にしてエルサレムにて二十九年世をさめたりその母はザカリヤの女にして名をアビといへり三 ヒゼキヤはその父ダビデの凡てなせしごとくヱホバの善と見たまふ事をなし四 崇邱を除き偶像を毀ちアシラ像を斫たふしモーセの造りし銅の蛇を打碎けりこの時までイスラエルの子孫その蛇にむかひて香を焚たればなり人々これをネホシタン(銅物)と稱なせり五 ヒゼキヤはイスラエルの神ヱホバを頼り是をもて彼の後にも彼の先にもユダの諸の王等の中に彼に如ものなかりき六 即ち彼は固くヱホバに身をよせてこれに從ふことをやめずヱホバがモーセに命じたまひしその誡命を守れり七 ヱホバ彼とともに在したれば彼はその往ところにて凡て利達を得たり彼はアッスリヤの王に叛きてこれに事へざりき八 彼ペリシテ人を撃敗りてガザにいたりその境に達し看守臺より城にまで及べり九 ヒゼキヤ王の四年すなはちイスラエルの王エラの子ホセアの七年にアッスリヤの王シヤルマネセル、サマリヤに攻のぼりてこれを圍みけるが一〇 三年の後つひに之を取りサマリヤの取れしはヒゼキヤの六年にしてイスラエルの王ホセアの九年にあたる一一 アッスリヤの王イスラエルをアッスリヤに虜へゆきてこれをハラとゴザン河の邊とメデアの邑々におきぬ一二 是は彼等その神ヱホバの言に遵はずその契約を破りヱホバの僕モーセが凡て命じたる事をやぶりこれを聽ことも行ふこともせざるによりてなり一三 ヒゼキヤ王の十四年にアッスリヤの王セナケリブ攻のぼりてユダの諸の堅き邑を取ければ一四 ユダの王ヒゼキヤ人をラキシにつかはしてアッスリヤの王にいたらしめて言ふ我過てり我を離れて歸りたまへ汝が我に蒙らしむる者は我これを爲べしとアッスリヤの王すなはち銀三百タラント金三十タラントをユダの王ヒゼキヤに課したり一五 是においてヒゼキヤ、ヱホバの家と王の家の庫とにあるところの銀をことごとく彼に與へたり一六 此時ユダの王ヒゼキヤまた己が金を著たりしヱホバの宮の戸および柱を剥てこれをアッスリヤの王に與へたり一七 アッスリヤの王またタルタン、ラ

ブサリスおよびラブシヤケをしてラキシより大軍をひきゐてエルサレムにむかひてヒゼキヤ王の所にいたらしめたればすなはち上りてエルサレムにきたれり彼等則ち上り來り漂布場の大路に沿るよの池塘の水道の邊にいたりて立り一八 而して彼等王を呼たればヒルキヤの子なる宮内卿エリアキム書記官セブナおよびアサフの子なる史官ヨア出きたりて彼等に詣りけるに一九 ラブシヤケこれに言けるは汝等ヒゼキヤに言べし大王アッスリヤの王かく言たまふ此汝が賴むところの者は何ぞや二〇 汝戰爭をなすの謀計と勇力とを言も只これ口の先の言語たるのみ誰を恃みて我に叛くことをせしや二一 視よ汝は折かかれる葦の杖なるエジプトを賴む其は人の其に倚るあればすなはちその手を刺とほすなりエジプトの王パロは凡てこれを賴む者に斯あるなり二二 汝等あるひは我はわれらの神ヱホバを賴むと我に言ん彼はヒゼキヤがその崇邱と祭壇とを除きたる者にあらずやまた彼はユダとエルサレムに告て汝等はエルサレムに於てこの壇の前に禱拜をなすべしと言しにあらずや二三 然ば請ふわが主君アッスリヤの王に約をなせ汝もし人を乘しむることを得ば我馬二千匹を汝にあたへん二四 汝いかにしてか吾主君の諸臣の中の最も微き一將だにも退くることを得ん汝なんぞエジプトを賴みて兵車と騎兵をこれに仰がんとするや二五 また我とても今ヱホバの旨によらずして比處を滅しに上れるならんやヱホバ我に此處に攻のぼりてこれを滅せと言たり二六 時にヒルキヤの子エリアキムおよびセブナとヨア、ラダシヤケにいひけるは請ふスリアの語をもて僕等に語りたまへ我儕これを識なり石垣の上にをる民の聞るところにてユダヤ語をもて我儕に言談たまふなかれ二七 ラブシヤケかれらに言ふわが君唯我を汝の主と汝とにつかはして此言をのべしめたまふならんや亦石垣の上に坐する人々にも我を遣して彼等をして汝等とともに自己の便溺を食ひ且飮にいたらしめんとしたまふにあらずやと二八 而してラブシヤケ起あがりユダヤ語をもて大聲に呼はり言をいだして曰けるは汝等大王アッスリヤの王の言を聽け二九 王かく言たまふ汝等ヒゼキヤに欺かるるなかれ彼は汝等をわが手より救ひいだすことをえざるなり三〇 ヒゼキヤがヱホバかならず我らを救ひたまはん此邑はアッスリヤの王の手に陷らじと言て汝らにヱホバを賴ましめんとするとも三一 汝等ヒゼキヤの言を聽なかれアッスリヤの王かく言たまふ汝等約をなして我に降れ而して各人おのれの葡萄の樹の果を食ひ各人おのれの無花果樹の果をくらひ各人おのれの井水を飮めよ三二 我來りて汝等を一の國に携ゆかん其は汝儕の國のごとき國穀と酒のある地パンと葡萄園のある地油の出る橄欖と蜜とのある地なり汝等は生ることを得ん死ることあらじヒゼキヤ、ヱホバ我儕を救ひたまはんと言て汝らを勸るともこれを聽なかれ三三 國々の神の中孰かその國をアッスリヤの王の手より救ひたりしや三四 ハマテおよびアルパデの神々は何處にあるセパルワイム、ヘナおよびア

ワの神々は何處にあるやサマリヤをわが手より救ひ出せし神々あるや三五 國々の神の中にその國をわが手より救ひいだせし者ありしや然ばヱホバいかでかエルサレムをわが手より救ひいだすことを得んと三六 然ども民は默して一言もこれに應へざりき其は王命じてこれに應ふるなかれと言おきたればなり三七 かくてヒルキヤの子なる宮内卿 エリアキム書記官 セブナおよびアサの子なる史官ヨアその衣をさきてヒゼキヤの許にいたりラブシヤケの言をこれに告たり

第一九章一 ヒゼキヤ王これを聞てその衣を裂き麻布を身にまとひてヱホバの家に入り二 宮内卿 エリアキムと書記官 セブナと祭司の中の長老等とに麻布を衣せてこれをアモツの子預言者イザヤに遣せり三 彼等イザヤに言けるはヒゼキヤかく言ふ今日は艱難の日懲罰の日打棄らるる日なり嬰孩すでに產門にいたりて之を產いだす力なき也四 ラブシヤケその主君なるアッスリヤの王に差遣れて來り活る神を謗る汝の神ヱホバあるひは彼の言を聞たまはん而して汝の神ヱホバその聞る言語を責罰たまふこともあらん然ば汝この遺る者の爲に祈祷をたてまつれと五 ヒゼキヤ王の僕等すなはちイザヤの許にいたりければ六 イザヤかれらに言けるは汝等の主君にかく言べしヱホバかく言たまふアッスリヤの王の臣僕等が我を謗るところの言を汝聞て懼るるなかれ七 我かれの氣をうつして風聲を聞て己の國にかへるにいたらしめん我また彼をして自己の國に於て劍に斃れしむべしと八 偖またラブシヤケは歸りゆきてアッスリヤの王がリブナに戰爭をなしをるところに至れり其は彼そのラキシを離れしを聞たればなり九 茲にアッスリヤの王はエテオピアの王テルハカ汝に攻きたると言ふを聞てまた使者をヒゼキヤにつかはして言しむ一〇 汝等ユダの王ヒゼキヤに告て言べし汝 エルサレムはアッスリヤの王の手に陷らじと言て汝が賴むところの神に欺かるるなかれ一一 汝はアッスリヤの王等が萬の國々になしたるところの事を知る即ちこれを滅しつくせしなり然ば汝いかで救らんや一二 吾父等はゴザン、ハラン、レゼフおよびテラサルのエデンの人々等を滅ぼせしがその國々の神これを救ひたりしや一三 ハマテの王アルバデの王セバルワイムの邑およびヘナとアワの王等は何處にあるや一四 ヒゼキヤ使者の手より書を受てこれを讀みヱホバの家にのぼりゆきてヱホバの前にこれを展開げ一五 而してヒゼキヤ、ヱホバの前に祈りて言けるはケルビムの間にいますイスラエルの神ヱホバよ世の國々の中において只汝のみ神にいます也汝は天地を造りたまひし者にいます一六 ヱホバよ耳を傾けて聞たまへヱホバよ目を開きて見たまへセナケリブが活る神を謗りにおくれる言語を聞たまへ一七 ヱホバよ誠にアッスリヤの王等は諸の民とその國々を滅し一八 又その神々を火になげいれたり其等は神にあらず人の手の作れる者にして木石たればこれを滅せしなり一九 今われらの神ヱホバよ願くは我らをかれの手より拯ひいだしたまへ然ば世の國々皆汝 ヱホバのみ神に

いますことを知にいたらん二〇茲にアモツの子イザヤ、ヒゼキヤに言つかはしけるはイスラエルの神ヱホバかく言たまふ汝がセナケリブの事につきて我に祈るところの事は我これを聽り二一ヱホバが彼の事につきて言ふところの言語は是のごとし云く處女なる女子シオンは汝を藐視じ汝を嘲る女子エルサレムは汝にむかひて頭を搖る二二汝誰を謗りかつ罵詈しや汝誰にむかひて聲をあげしや汝はイスラエルの聖者にむかひて汝の目を高く擧たるなり二三汝使者をもて主を謗て言ふ我夥多き兵車をひきゐて山々の嶺にのぼりレバノンの奧にいたり長高き香柏と美しき松樹を斫たふす我その境の休息所にいたりその園の林にいたる二四我は外國の地をほりて水を飮む我は足の跖をもてエジプトの河々をことごとくふみ涸すなり二五汝聞ずや昔われ之を作し古時よりわれ之を定めたり今われ之をおこなふ即ち堅き邑々は汝のために坵墟となるなり二六是をもてそれらの中にすむ民は力弱かり懼れかつ驚くなり彼等は野の草のごとく青菜のごとく屋蓋の草のごとく枯る苗のごとし二七汝の止ると汝の出ると汝の入と汝の我にむかひて怒くるふとは我の知ところなり二八汝の怒くるふ事と汝の傲慢ところの事上りてわが耳にいりたれば我圈を汝の鼻につけ轡を汝の唇にほどこして汝を元來し道へひきかへすべし二九是は汝にあたふる徵なり即ち一年は穭を食ひ第二年には又その穭を食ふあらん第三年には汝ら稼ことをし穡ことをし又葡萄園をつくりてその果を食ふべし三〇ユダの家の逃れて遺れる者は復根を下に張り實を上に結ばん三一即ち殘餘者エルサレムより出で逃避たる者シオン山より出きたらんヱホバの熱心これを爲べし三二故にヱホバ、アッスリヤの王の事をかく言たまふ彼は此邑に入じ亦これに矢を發つことあらず楯を之にむかひて竪ることあらず亦壘をきづきてこれを攻ることあらじ三三彼はその來し路より歸らん此邑にいることあらじヱホバこれを言ふ三四我わが身のため又わが僕ダビデのためにこの邑を守りてこれを救ふべし三五その夜ヱホバの使者いでてアッスリヤ人の陣營の者十八萬五千人を擊ころせり朝早く起いでて見るに皆死て屍となりをる三六アッスリヤの王セナケリブすなはち起いで歸りゆきてニネベに居しが三七その神ニスロクの家にありて禮拜をなしをる時にその子アデランメレクとシヤレゼル劍をもてこれを殺せり而して彼等はアララテの池に逃ゆけり是においてその子エサルハドンこれに代りて王となれり

第二〇章 一當時ヒゼキヤ病て死なんとせしことありアモツの子預言者イザヤ彼の許にいたりて之にいひけるはヱホバかく言たまふ汝家の人に遺命をなせ汝は死ん生ることを得じと二是においてヒゼキヤその面を壁にむけてヱホバに祈り三嗚呼ヱホバよ願くは我が眞實と一心をもて汝の前にあゆみ汝の目に適ふことを行ひしを記憶たまへと言て痛く泣り四かくてイザヤ未だ中の邑を出はなれざる間にヱホバの言これに臨みて言ふ五汝還り

てわが民の君ヒゼキヤに告よ汝の父ダビデの神ヱホバかく言ふ我汝の祈祷を聽り汝の涙を看たり然ば汝を愈すべし第三日には汝ヱホバの家に入ん六我汝の齢を十五年增べし我汝とこの邑とをアッスリヤの王の手より救ひ我名のため又わが僕ダビデのためにこの邑を守らんと七是に於てイザヤ乾無花果の団塊一箇を持きたれと言ければすなはち之を持きたりてその腫物に貼たればヒゼキヤ愈ぬ八ヒゼキヤ、イザヤに言けるはヱホバが我を愈したまふ事と第三日に我がヱホバの家にのぼりゆく事とにつきては何の徵あるや九イザヤ言けるはヱホバがその言しところを爲たまはん事につきては汝ヱホバよりこの徵を得ん日影進めること十度なり若日影十度退かば如何一〇ヒゼキヤ答へけるは日影の十度進むは易き事なり然せざれ日影を十度しりぞかしめよ一一是において預言者イザヤ、ヱホバに籲はりければアハスの日晷の上に進みし日影を十度しりぞかしめたまへり一二その頃バラダンの子なるバビロンの王メロダクバラダン書および禮物をヒゼキヤにおくれり是はヒゼキヤの疾をるを聞たればなり一三ヒゼキヤこれがために喜びその寶物の庫金銀香物貴き膏および武器庫ならびにその府庫にあるところの一切の物を之に見せたりその家にある物もその國の中にある物も何一箇としてヒゼキヤが彼等に見せざる者はなかりき一四茲に預言者イザヤ、ヒゼキヤ王のもとに來りてこれに言けるは夫の人々は何を言しや何處より來りしやヒゼキヤ言けるは彼等は遠き國より即ちバビロンより來れり一五イザヤ言ふ彼等は汝の家にて何を見しやヒゼキヤ答へて云ふ吾家にある物は皆かれら之を見たり我庫の中には我がかれに見せざる者なきなり一六イザヤすなはちヒゼキヤに言けるは汝ヱホバの言を聞け一七ヱホバ言たまふ視よ日いたる凡て汝の家にある物および汝の先祖等が今日までに積蓄へたる物はバビロンに携ゆかれん遺る者なかるべし一八汝の身より出る汝の生んところの子等の中を彼等携へ去ん其等はバビロンの王の殿において官吏となるべし一九ヒゼキヤ、イザヤに言ふ汝が語れるヱホバの言は善し又いふ若わが世にある間に大平と眞實とあらば善にあらずや二〇ヒゼキヤのその餘の行爲その能およびその池塘と水道を作りて水を邑にひきし事はユダの王の歷代志の書にしるさるるにあらずや二一ヒゼキヤその先祖等とともに寢りてその子マナセこれに代りて王となれり

第二一章 一マナセ十二歳にして王となり五十五年の間ヱルサレムにて世を治めたりその母の名はヘフジバといふ二マナセはヱホバの目の前に惡をなしヱホバがイスラエルの子孫の前より逐はらひたまひし國々の人がなすところの憎むべき事に傚へり三彼はその父ヒゼキヤが毀たる崇邱を改め築き又イスラエルの王アハブのなせしごとくバアルのために祭壇を築きアシラ像を作り天の衆群を拜みてこれに事へ四またヱホバの家の中に數箇の祭壇を築けり是はヱホバがこれをさして我わが名をヱルサレムにおかんと言たまひし家なり五彼ヱホバの家の二の庭に祭壇

を築き六またその子に火の中を通らしめ卜占をなし魔術をおこなひ口寄者と卜筮師を取もちひヱホバの目の前に衆多の惡を爲てその震怒を惹おこせり七彼はその作りしアシラの銅像を殿にたてたりヱホバこの殿につきてダビデとその子ソロモンに言たまひしことあり云く我この家と我がイスラエルの諸の支派の中より選みたるヱルサレムとに吾名を永久におかん八彼等もし我が凡てこれに命ぜし事わが僕モーセがこれに命ぜし一切の律法を謹みて行はば我これが足をしてわがその先祖等に與へし地より重てさまよひ出ることなからしむべしと九然るに彼等は聽ことをせざりきマナセが人々を誘ひて惡をなせしことはヱホバがイスラエルの子孫の前に滅したまひし國々の人よりも甚だしかりき一〇是においてヱホバその僕なる預言者等をもて語て言給はく一一ユダの王マナセこれらの憎むべき事を行ひその前にありしアモリ人の凡て爲しところにも踰たる惡をなし亦ユダをしてその偶像をもて罪を犯させたれば一二イスラエルの神ヱホバかく言ふ視よ我ヱルサレムとユダに災害をくだす是を聞く者はその耳ふたつながら鳴ん一三我サマリヤを量りし繩とアハブの家にもちひし準繩をヱルサレムにほどこし人が皿を拭ひこれを拭ひて反覆がごとくにヱルサレムを拭ひさらん一四我わが產業の民の殘餘を棄てこれをその敵の手に付さん彼等はその諸の敵の虜掠にあひ掠奪にあふべし一五是は彼等その先祖等がエジプトより出し日より今日にいたるまで吾目の前に惡をおこなひて我を怒らするが故なり一六マナセはヱホバの目の前に惡をおこなひてユダに罪を犯させたる上にまた無辜者の血を多く流してヱルサレムのこの極よりかの極にまで盈せり一七マナセのその餘の行爲とその凡て爲たる事およびその犯したる罪はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらずや一八マナセその先祖等とともに寢りてその家の園すなはちウザの園に葬られその子アモンこれに代りて王となれり一九アモンは王となれる時二十二歳にしてヱルサレムにおいて二年世を治めたりその母はヨテバのハルツの女にしてその名をメシユレメテと云ふ二〇アモンはその父マナセのなせしごとくヱホバの目の前に惡をなせり二一すなはち彼は凡てその父のあゆみし道にあゆみその父の事へし偶像に事へてこれを拜み二二その先祖等の神ヱホバを棄てヱホバの道にあゆまざりき二三茲にアモンの臣僕等黨をむすびて王をその家に弑したりしが二四國の民そのアモン王に敵して黨をむすびし者をことごとく撃ころせり而して國の民アモンの子ヨシアを王となしてそれに代らしむ二五アモンのなしたるその餘の行爲はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらずや二六アモンはウザの園にてその墓に葬られその子ヨシアこれに代りて王となれり

第二二章一ヨシアは八歳にして王となりヱルサレムにおいて三十一年世を治めたり其母はボヅカテのアダヤの女にして名をヱデダと曰ふ二ヨシアはヱホバの目に適ふ事をなしその父ダビデ

の道にあゆみて右にも左にも轉らざりき三ヨシア王の十八年に王メシユラムの子アザリヤの子なる書記官シヤパンをヱホバの家に遣せり即ちこれに言けらく四汝祭司の長ヒルキヤの許にのぼり行てヱホバの家にいりし銀すなはち門守が民よりあつめし者を彼に計算しめ五工事を司どるヱホバの家の監督者の手にこれを付さしめ而してまた彼らをしてヱホの家にありて工事をなすところの者にこれを付さしめ殿の破壞を修理はしめよ六即ち工匠と建築者と石工にこれを付さしめ又これをもて殿を修理ふ材木と斫石を買しむべし七但し彼らは誠實に事をなせば彼らの手にわたすところの銀の計算をかれらとするには及ばざるなり八時に祭司の長ヒルキヤ書記官シヤパンに言けるは我ヱホバの家において律法の書を見いだせりとヒルキヤすなはちその書をシヤパンにわたしたれば彼これを讀り九かくて書記官シヤパン王の許にいたり王に返事まうして言ふ僕等殿にありし金を打あけてこれを工事を司どるヱホバの家の監督者の手に付せりと一〇書記官シヤパンまた王につげて祭司ヒルキヤ我に一書をわたせりと言ひシヤパン其を王の前に讀けるに一一王その律法の書の言を聞やその衣を裂り一二而して王祭司ヒルキヤとシヤパンの子アヒカムとミカヤの子アクボルと書記官シヤパンと王の内臣アサヤとに命じて言ふ一三汝等往てこの見當し書の言につきて我のため民のためユダ全國のためにヱホバに問へ其は我儕の先祖等はこの書の言に聽したがひてその凡て我儕のために記されたるところを行ふことをせざりしに因てヱホバの我儕にむかひて怒を發したまふこと甚だしかるべければなり一四是において祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクボル、シヤパンおよびアサヤ等シヤルムの妻なる女預言者ホルダの許にいたれりシヤルムはハルハスの子なるテクワの子にして衣裳の室を守る者なり時にホルダはヱルサレムの下邑に住をる彼等すなはちホルダに物語せしかば一五ホルダかれらに言けるはイスラエルの神ヱホバかく言たまふ汝等を我につかはせる人に告よ一六ヱホバかく言ふ我ユダの王が讀たるかの書の一切の言にしたがひて災害をこの處と此にすめる民に降さんとす一七彼等はわれを棄て他の神に香を焚きその手に作れる諸の物をもて我を怒らするなり是故に我この處にむかひて怒の火を發す是は滅ざるべし一八但し汝等をつかはして我に問しむるユダの王には汝等かく言べし汝が聞る言につきてイスラエルの神ヱホバかく言たまふ一九汝はわが此處と此にすめる民にむかひて是は荒地となり呪詛とならんと言しを聞たる時に心柔にしてヱホバの前に身を卑し衣を裂て吾前に泣たれば我もまた聽ことをなすなりヱホバこれを言ふ二〇然ば視よ我なんぢを汝の先祖等に歸せしめん汝は安全に墓に歸することをうべし汝はわが此處にくだす諸の災害を目に見ることあらじと彼等すなはち王に返事まうしぬ

第二三章一是において王人をつかはしてユダとヱルサレムの

長老をことごとく集め**二**而して王ヱホバの家にのぼれりユダの諸の人々ヱルサレムの一切の民および祭司預言者ならびに大小の民みな之にしたがふ王すなはちヱホバの家に見あたりし契約の書の言をことごとくかれらの耳に讀きかせ**三**而して王高座の上に立てヱホバの前に契約をなしヱホバにしたがひて歩み心をつくし精神をつくしてその誡命と律法と法度を守り此書にしるされたる此契約の言をおこなはんと言り民みなその契約に加はりぬ**四**かくして王祭司の長ヒルキヤとその下にたつところの祭司等および門守等に命じてヱホバの家よりしてバアルとアシラと天の衆群との爲に作りたる諸の器と執いださしめヱルサレムの外にてキデロンの野にこれを燒きその灰をベテルに持ゆかしめ**五**又ユダの王等が立てダの邑々とヱルサレムの四圍なる崇邱に香をたかしめたる祭司等を廢しまたバアルと日月星宿と天の衆群とに香を焚く者等をも廢せり**六**彼またヱホバの家よりアシラ像をとりいだしヱルサレムの外に持ゆきてキデロン川にいたりキデロン川においてこれを燒きこれを打碎きて粉となしその粉を民の墓に散し**七**またヱホバの家の旁にある男娼の家を毀てり其處はまた婦人がアシラのために天幕を織ところなりき**八**彼またユダの邑々より祭司をことごとく召よせまた祭司が香をたきたる崇邱をばゲバよりベエルシバまでこれを汚しまた門にある崇邱を毀てり是等の崇邱は一は邑の宰ヨシユアの門の入口にあり一は邑の門にありて之に入る人の左にあたる**九**崇邱の祭司等はヱルサレムにおいてヱホバの壇にのぼることをせざりき但し彼等はその兄弟の中にありて無酵パンを食へり**一〇**王また人がその子息女に火の中を通らしめて之をモロクにささぐることなからんためにベンヒンノムの谷にあるトペテを汚し**一一**またユダの王等が日のためにささげてヱホバの家の門における馬をうつせりこの馬はパルリムにある侍從ナタンメレクの室にをりしなり彼また日の車を皆火に焚り**一二**またユダの王等がアハズの桜の屋背につくりたる祭壇とマナセがヱホバの家の兩の庭につくりたる祭壇とは王これを毀ちこれを其處より取くづしてその碎片をキデロン川になげ捨たり**一三**またイスラエルの王ソロモンが昔シドン人の憎むべき者なるアシタロテとモアブ人の憎むべき者なるケモシとアンモンの子孫の憎むべき者なるモロクのためにヱルサレムの前において殲滅山の右に築きたる崇邱も王これを汚し**一四**また諸の像をうち碎きアシラ像をきりたふし人の骨をもてその處々に充せり**一五**またベテルにある壇かのイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムが造りし崇邱すなはちその壇もその崇邱も彼これを毀ちその崇邱を焚てこれを粉にうち碎きかつアシラ像を焚り**一六**茲にヨシア身をめぐらして山に墓のあるを見人をやりてその墓より骨をとりきたらしめ之をその壇の上に焚てそれを汚せり即ち神の人が宣たるヱホバの言のごとし昔神の人この言語を宣しことありしなり**一七**ヨシアまた其處に見ゆる碑は何

なるやと言しに邑の人々これに告て其は汝がベテルの壇にむかひて爲るこの事等をユダより來りて宣たる神の人の墓なりと言ければ一八すなはち其には手をつくるなかれ誰もその骨を移すなかれと言り是をもてその骨とサマリヤより來りし預言者の骨には手をつけざりき一九またイスラエルの王等がサマリヤの邑々に造りてヱホバを怒せし崇邱の家も皆ヨシアこれを取のぞき凡てそのベテルになせしごとくに之に事をなせり二〇彼また其處にある崇邱の祭司等を壇の上にころし人の骨を壇の上に焚てヱルサレムに歸りぬ二一而して王一切の民に命じて言ふ汝らこの契約の書に記されたるごとくに汝らの神ヱホバに逾越の節を執行ふべしと二二士師のイスラエルを治めし日より已來もまたユダの王等とイスラエルの王等の代にも斯のごとき逾越の節を守りしことはなかりしが二三ヨシア王の十八年にいたりてヱルサレムにて斯逾越節をヱホバに守りしなり二四ヨシアまた祭司ヒルキヤがヱホバの家にて見いだせし書に記されたる律法の言を世におこなはんために口寄者と卜筮師とテラピムと偶像およびユダの地とヱルサレムに見ゆる諸の憎むべき者を取のぞけり二五ヨシアの如くに心を盡し精神を盡し力を盡してモーセの法に全くしたがひてヱホに歸向せし王はヨシアの先にはあらざりきまた彼の後にも彼のごとき者はなし二六斯有しかどもヱホバはユダにむかひて怒を發したるその大いなる燃たつ震怒を息ることをしたまはざりき是はマナセ諸の憤らしき事をもてヱホバを怒らせしによるなり二七ヱホバすなはち言たまはく我イスラエルを移せし如くにユダをもわが目の前より拂ひ移し我が選みし此ヱルサレムの邑と吾名をそこに置んといひしこの殿とを棄べしと二八ヨシアのその餘の行爲とその凡て爲たる事はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらずや二九ヨシアの代にエジプトの王パロネコ、アッスリヤの王と戰はんとてユフラテ河をさして上り來しがヨシア王これを防がんとて進みゆきければ彼これに出あひてメギドンにこれを殺せり三〇その僕等すなはちこれが死骸を車にのせてメギドンよりヱルサレムに持ゆきこれをその墓に葬れり國の民ここに於てヨシアの子ヱホアハズを取りこれに膏をそそぎて王となしてその父にかはらしめたり三一ヱホアハズは王となれる時二十三歳にしてヱルサレムにて三月世を治めたりその母はリブナのエレミヤの女にして名をハムタルと云ふ三二ヱホアハズはその先祖等が凡てなしたるごとくにヱホバの目の前に惡をなせしが三三パロネコ彼をハマテの地のリブラに繫ぎおきてヱルサレムにおいて王となりをることを得ざらしめ且銀百タラント金一タラントの罰金を國に課したり三四而してパロネコはヨシアの子エリアキムをしてその父ヨシアにかはりて王とならしめ彼の名をヱホヤキムと改めヱホアハズを曳て去ぬヱホアハズはエジプトにいたりて其處に死り三五ヱホヤキムは金銀をパロにおくれり即ち彼國に課してパロの命のままに金を出さしめ國の民各人に割つけて

金銀を征取りてこれをパロネコにおくれり三六ヱホヤキムは二十五歳にして王となりヱルサレムにおいて十一年世を治めたりその母はルマのペダヤの女にして名をゼブタと云ふ三七ヱホヤキムはその先祖等が凡てなしたるごとくにヱホバの目の前に悪をなせり

第二四章一ヱホヤキムの代にバビロンの王ネブカデネザル上り來りければヱホヤキムこれに臣服して三年をへたりしが遂にひるがへりて之に叛けり二ヱホバ、カルデヤの軍兵スリアの軍兵モアブの軍兵アンモンの軍兵をしてヱホヤキムの所に攻きたらしめたまへり即ちユダを滅さんがためにこれをユダに遣はしたまふヱホバがその僕なる預言者等によりて言たまひし言語のごとし三この事は全くヱホバの命によりてユダにのぞみし者にてユダをヱホバの目の前より拂ひ除かんがためなりき是はマナセがその凡てなす所において罪を犯したるにより四また無辜人の血をながし無辜人の血をヱルサレムに充したるによりてなりヱホバはその罪を赦すことをなしたまはざりき五ヱホヤキムのその餘の行爲とその凡て爲たる事はユダの王の歴代志の書にしるさるるにあらずや六ヱホヤキムその先祖等とともに寝りその子ヱコニアこれに代りて王となれり七却説またエジプトの王は重てその國より出きたらざりき其はバビロンの王エジプトの河よりユフラテ河まで凡てエジプトの王に屬する者を悉く取たればなり八ヱコニアは王となれる時十八歳にしてヱルサレムにて三月世を治めたりその母はヱルサレムのエルナタンの女にして名をネホシタと云ふ九ヱコニアはその父の凡てなしたるごとくにヱホバの目の前に悪をなせり一〇その頃バビロンの王ネブカデネザルの臣ヱルサレムに攻のぼりて邑を圍めり一一即ちバビロンの王ネブカデネザル邑に攻來りてその臣にこれを攻惱さしめたれば一二ユダの王ヱコニアその母その臣その牧伯等およびその侍從等とともに出てバビロンの王に降れりバビロンの王すなはち彼を執ふ是はその代の八年にあたれり一三而して彼ヱホバの家の諸の寶物および王の家の寶物を其處より携へ去りイスラルの王ソロモンがヱホバの宮に造りたる諸の金の器を切はがせりヱホバの言たまひしごとし一四彼またヱルサレムの一切の民および一切の牧伯等と一切の大なる能力ある者ならびに工匠と鍛冶とを一萬人虜へゆけり遺れる者は國の民の賤き者のみなりき一五彼すなはちヱコニアをバビロンに虜へゆきまた王の母王の妻等および侍從と國の中の能力ある者をもエルサレムよりバビロンに虜へうつせり一六凡て能力ある者七千人工匠と鍛冶一千人ならびに強壯して善戰ふ者是等をバビロンの王虜へてバビロンにうつせり一七而してバビロンの王またヱコニアの父の兄弟マツタニヤを王となしてヱコニアに代へ其が名をゼデキヤと改めたり一八ゼデキヤは二十一歳にして王となりヱルサレムにて十一年世を治めたりその母はリブナのヱレミヤの女にして名をハムタルと曰ふ一九ゼデキヤはヱホヤキムが凡

てなしたるごとくにヱホバの目の前に悪をなせり二〇ヱルサレムとユダに斯る事ありしはヱホバの震怒による者にしてヱホバつひにその人々を自己の前よりはらひ棄たまへり偖またゼデキヤはバビロンの王に叛けり

第二五章一 茲にゼデキヤの代の九年の十月十日にバビロンの王ネブカデネザルその諸軍勢を率てヱルサレムに攻きたりこれにむかひて陣を張り周圍に雲梯を建てこれを攻たり二かくこの邑攻かこまれてゼデキヤ王の十一年にまでおよびしが三その四月九日にいたりて城邑の中饑ること甚だしくなりその地の民食物を得ざりき四是をもて城邑つひに打破られければ兵卒はみな王の園の邊なる二箇の石垣の間の途より夜の中に逃いで皆平地の途にしたがひておちゆけり時にカルデア人は城邑を圍みをる五茲にカルデア人の軍勢王を追ゆきヱリコの平地にてこれに追つきけるにその軍勢みな彼を離れて散しかば六カルデア人王を執へてこれをリブラにをるバビロンの王の許に曳ゆきてその罪をさだめ七ゼデキヤの子等をゼデキヤの目の前に殺しゼデキヤの目を抉しこれを鋼索につなぎてバビロンにたづさへゆけり八バビロンの王ネブカデネザルの代の十九年の五月七日にバビロンの王の臣侍衛の長ネブザラダン、ヱルサレムにきたり九ヱホバの室と王の室を焼き火をもてヱルサレムのすべての室と一切の大なる室を焼り一〇また侍衛の長とともにありしカルデア人の軍勢ヱルサレムの四周の石垣を毀てり一一侍衛の長ネブザラダンすなはち邑に遺されし殘餘の民およびバビロンの王に降りし降人と群衆の殘餘者を虜へうつせり一二但し侍衛の長その地の或貧者をのこして葡萄をつくる者となし農夫となせり一三カルデア人またヱホバの家の銅の柱と洗盤の臺と銅の海をくだきてその銅をバビロンに運び一四また鍋と火鏟と燈剪と匙および凡て役事に用ふる銅の器を取り一五侍衛の長また火盤と鉢など金銀にて作れる物を取り一六またソロモンがヱホバの室に造しところの二の柱と一の海と臺とを取り此もろもろの銅の重は量るべからず一七この柱は高さ十八キユビトにしてその上に銅の頂ありその頂の高は三キユビトその頂の四周に網子と石榴とありて皆銅なり他の柱とその網子もこれに同じ一八侍衛の長は祭司の長セラヤと第二の祭司ゼパニヤと三人の門守を執へ一九また兵卒を督どる一人の寺人と王の前にはべる者の中邑にて遇しところの者五人とその地の民を募る軍勢の長なる書記官と城邑の中にて遇しところの六十人の者を邑より虜へされり二〇侍衛の長ネブザラダンこれらを執へてリブラにをるバビロンの王の許にいたりければ二一バビロンの王ハマテの地のリブラにてこれらを撃殺せりかくユダはおのれの地よりとらへ移されたり二二かくてバビロンの王ネブカデネザルは自己が遺してユダの地に止らしめし民の上にシヤパンの子なるアヒカムの子ゲダリヤをたててこれをその督者となせり二三茲に軍勢の長等およびこれに屬する人々みなバビロンの王がゲダリヤを督者

となせしことを聞しかばすなはちネタニヤの子イシマエル、カレヤの子ヨナハン、ネトバ人タンホメテの子セラヤおよび或マアカ人の子ヤザニヤならびに彼らに屬する人々ミヅパにきたりてゲダリヤの許にいたれり**二四** ゲダリヤすなはち彼等とかれらに屬する人々に誓ひてこれに言けるは汝等カルデア人の僕となることを恐るるなかれこの地に住てバビロンの王につかへなば汝等幸福ならんと**二五** 然るに七月に王の血統なるエリシヤマの子ネタニヤの子なるイシマエル十人の者とともに來りてゲダリヤを撃ころし又彼とともにミヅパにをりしユダヤ人とカルデア人を殺せり**二六** 是において大小の民および軍勢の長等みな起てエジプトにおもむけり是はカルデヤ人をおそれたればなり**二七** ユダの王ヱホヤキムがとらへ移れたる後三十七年の十二月二十七日バビロンの王エビルメロダクその代の一年にユダの王ヱホヤキムを獄より出してその首をあげしめ**二八** 善言をもて彼をなぐさめその位をバビロンにともに居るところの王等の位よりも高くし**二九** その獄の衣服を易しめたりヱホヤキムは一生のあひだつねに王の前に食をなせり**三〇** かれ一生のあひだたえず日々の分を王よりたまはりてその食物となせり

歴代志略上

第一章一アダム、セツ、エノス二ケナン、マハラレル、ヤレド三エノク、メトセラ、ラメク四ノア、セム、ハム、ヤペテ五ヤベテの子等はゴメル、マゴグ、マデア、ヤワン、トバル、メセク、テラス六ゴメルの子等はアシケナズ、リパテ、トガルマ七ヤワンの子等はエリシヤ、タルシシ、キツテム、ドダニム八ハムの子等はクシ、ミツライム、プテ、カナン九クシの子等はセバ、ハビラ、サブタ、ラアマ、サブテカ、ラアマの子等はセバとデダン一〇クシ、ニムロデを生り彼はじめて世の權力ある者となれり一一ミツライムはルデ族アナミ族レハビ族ナフト族一二パテロス族カスル族カフトリ族を生りカスル族よりペリシテ族出たり一三カナンその冢子シドンおよびヘテを生み一四またヱブス族アモリ族ギルガシ族一五ヒビ族アルキ族セニ族一六アルワデ族ゼマリ族ハマテ族を生り一七セムの子等はエラム、アシユル、アルバクサデ、ルデ、アラム、ウズ、ホル、ゲテル、メセク一八アルバクサデ、シラを生みシラ、エベルを生り一九エベルに二人の子生れたりその一人の名をベレグ（分）と曰ふ其は彼の代に地の人散り分れたればなりその弟の名をヨクタンと曰ふ二〇ヨクタンはアルモダデ、シヤレフ、ハザルマウテ、ヱラ二一ハドラム、ウザル、デクラ二二エバル、アビマエル、シバ二三オフル、ハビラおよびヨハブを生り是等はみなヨクタンの子なり二四セム、アルバクサデ、シラ二五エベル、ベレグ、リウ二六セルグ、ナホル、テラ二七アブラム是すなはちアブラハムなり二八アブラハムの子等はイサクおよびイシマエル二九彼らの子孫は左のごとしイシマエルの冢子はネバヨテ次はケダル、アデビエル、ミブサム三〇ミシマ、ドマ、マツサ、ハダデ、テマ三一ヱトル、ネフシ、ケデマ、イシマエルの子孫は是の如し三二アブラハムの妾ケトラの生る子は左のごとし彼ジムラン、ヨクシヤン、メダン、ミデアン、イシバク、シユワを生りヨクシヤンの子等はシバおよびデダン三三ミデアンの子等はエバ、エペル、ヘノク、アビダ、エルダア是等はみなケトラの生る子なり三四アブラハム、イサクを生りイザクの子等はヱサウとイスラエル三五エサウの子等はエリバズ、リウエル、ヱウシ、ヤラム、コラ三六エリバズの子等はテマン、オマル、ゼピ、ガタム、ケナズ、テムナ、アマレク三七リウエルの子等はナハテ、ゼラ、シヤンマ、ミツザ三八セイの子等はロタン、シヨバル、ヂベオン、アナ、デシヨン、エゼル、デシヤン三九ロタンの子等はホリとホマム、ロタンの妹はテムナ四〇シヨバルの子等はアルヤン、マナハテ、エバル、シピ、オナム、ヂベオンの子等はアヤとアナ四一アナの子等はデシヨン、デシヨンの子等はハムラム、エシバン、イテラン、ケラン、四二エゼルの子等はビルハン、ザワン、ヤカン、デシヤンの子等はウズおよびアラン四三イスラエルの子孫を治むる王いまだ有ざる前にエドムの地を治めたる王等は左のごとしベオルの子ベラその都城の名はデナバといふ四四

ベラ薨てボズラのゼラの子ヨバブこれに代りて王となり四五 ヨバブ薨てテマン人の地のホシヤムこれにかはりて王となり四六 ホシヤム薨てベダデの子ハダデこれにかはりて王となれり彼モアブの野にてミデアン人を撃りその都城の名はアビテといふ四七 ハダデ薨てマスレカのサムラこれに代りて王となり四八 サムラ薨て河の旁なるレホボテのサウルこれに代りて王となり四九 サウル薨てアクボルの子バアルハナンこれに代りて王となり五〇 バアルハナン薨てハダデこれにかはりて王となれりその都城の名はパイといふその妻はマテレデの女子にして名をメヘタベルといへりマテレデはメザハブの女なり五一 ハダデも薨たり／エドムの諸侯は左のごとし、テムナ侯アルヤ侯ヱテテ侯五二 アホリバマ侯エラ侯ピノン侯五三 ケナズ侯テマン侯ミブザル侯五四 マグデエル侯イラム侯エドムの諸侯は是のごとし

第二章一 イスラエルの子等は左のごとしルベン、シメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ゼブルン二 ダン、ヨセフ、ベニヤミン、ナフタリ、ガド、アセル三 ユダの子等はエル、オナン、シラなりこの三人はカナンの女バテシユアがユダによりて生たるなりユダの長子エルはヱホバの前に惡き事をなしたれば之を殺したまへり四 ユダの媳タマルはユダによりてペレヅとゼラとを生りユダの子等は都合五人なりき五 ペレヅの子等はヘヅロンおよびハムル六 ゼラの子等はジムリ、エタン、ヘマン、カルコル、ダラ都合五人七 カルミの子はアカル、アカルは詛はれし物につきて罪を犯してイスラエルを悩ませし者なり八 エタンの子はアザリヤ九 ヘヅロンに生れたる子等はヱラメル、ラム、ケルバイ一〇 ラム、アミナダブを生みアミナダブ、ナシヨンを生りナシヨンはユダの子孫の牧伯なり一一 ナシヨン、サルマを生みサルマ、ボアズを生み一二 ボアズ、オベデを生み、オベデ、ヱツサイを生り一三 ヱツサイの生る者は長子はエリアブ その次はアミナダブ その三はシヤンマ一四 その四はネタンエル その五はラダイ一五 その六はオゼム その七はダビデ一六 かれらの姉妹はゼルヤとアビガル、ゼルヤの産る子はアビシヤイ、ヨアブ、アサヘルあはせて三人一七 アビガルはアマサを産りアサの父はイシマエル人ヱテルといふ者なり一八 ヘヅロンの子カレブはその妻アズバによりまたヱリオテによりて子を擧けたりその産る子等は左のごとし ヱシル、シヨバブおよびアルドン一九 アズバ死たればカレブまたエフラタを娶れり エフラタ、カレブによりてホルを産り二〇 ホル、ウリを生み ウリ、ベザレルを生り二一 その後ヘヅロンはギレアデの父マキルの女の所にいれりその之を娶れる時は六十歳なりき彼ヘヅロンによりてセグブを産り二二 セグブ、ヤイルを生りヤイルはギレアデの地に邑二十三を有り二三 然るにゲシユルおよびアラム彼等よりヤイルの邑々およびケナテとその郷里など都合六十の邑を取り是皆ギレアデの父マキルの子等なりき二四 ヘヅロン、カレブエフラテタに死て後ヘヅロンの妻アビヤその子アシユルを生りアシユルはテコアの父なり二五 ヘヅロンの長子ヱラ

メルの子等は長子はラム 次はブナ、オレン、オゼム、アヒヤ二六 ヱラメルはまた他の妻をもてりその名をアタラといふ彼はオナムの母なり二七 ヱラメルの長子ラムの子等はマアツ、ヤミン、エケル二八 オナムの子等はシヤンマイ、ヤダ、シヤンマイの子等はナダブおよびアビシユル二九 アビシユルの妻の名はアビハイルといふ彼アバンおよびモリデを生り三〇 ナダブの子等はセレデおよびアツパイム、セレデは子なくして死り三一 アツパイムの子はイシ、イシの子はセシヤン、セシヤンの子はアヘライ三二 シヤンマイの兄弟ヤダの子はヱテルおよびヨナタン、ヱテルは子なくして死り三三 ヨナタンの子等はペレテおよびザザ、ヱラメルの子孫は斯のごとし三四 セシヤンは男子なくして惟女子ありしのみなるがセシヤンにヤルハと名くるエジプトの僕ありければ三五 セシヤンその女をこの僕ヤルハに與へて妻となさしめたり彼ヤルハによりてアツタイを生り三六 アツタイ、ナタンを生みナタン、ザバデを生み三七 ザバデ、エフラルを生みエフラル、オベデを生み三八 オベデ、ヱヒウを生みヱヒウ、アザリヤを生み三九 アザリヤ、ヘレヅを生みヘレヅ、ヱレアサを生み四〇 ヱレアサ、シスマイを生みシスマイ、シヤルムを生み四一 シヤルム、ヱカミヤを生みヱカミヤ、エリシヤマを生り四二 ヱラメルの兄弟カレブの子等はその長子をメシヤといふ是はジフの父なりジフの子はマレシヤ、マレシヤはヘブロンの父なり四三 ヘブロンの子等はコラ、タツプア、レケム、シマ四四 シマはラハムを生りラハムはヨルカムの父なりレケムはシヤンマイを生り四五 シヤンマイの子はマオン、マオンはベテスルの父なり四六 カレブの妾エパでハラン、モザおよびガゼズを產りハランはガゼズを生り四七 ヱダイの子等はレゲム、ヨタム、ゲシヤン、ペレテ、エバ、シヤフ四八 カレブの妾マアカはシベルおよびテルハナを生み四九 またマデマンナの父シヤフおよびマクベナとギベアの父シワを生りカレブの女子はアクサといふ五〇 カレブの子孫は左のごとしエフラタの長子ホルの子はキリアテヤリムの父シヨバル五一 ベテレヘムの父サルマおよびベテカデルの父ハレフ五二 キリアテヤリムの父シヨバルの子等はハロエにメヌコテ人の半五三 またキリアテヤリムの宗族はイテリ族プヒ族シユマ族ミシラ族 是等よりザレア族およびエシタオル族出たり五四 サルマの子孫はベテレヘム、ネトバ族アタロテベテヨアブ、マナハテ族の半およびゾリ族五五 ならびにヤベヅに住る諸士の宗族すなはちテラテ族シメアテ族スカテ族是等はケニ人にしてレカブの家の先祖ハマテより出たる者なり

第三章一 ヘブロンにて生れたるダビデの子等は左のごとし長子はアムノンといひてヱズレル人アヒノアムより生れ其次はダニエルといひてカルメル人アビガルより生る二 その三はアブサロムといひてゲシユルの王タルマイの女マアカの生る子其四はアドニヤといひてハギテの生る子なり三 その五はシバテヤといひてアビタルより生れ其六はイテレアムといひて妻エグラより

生る四この六人ヘブロンにてかれに生れたりダビデ彼處にて王たりし事七年と六箇月またヱルサレムにて王たりし事三十三年五ヱルサレムにて生れたるその子等は左のごとしシメア、ショバブ、ナタン、ソロモンこの四人はアンミエルの女バテシュアより生る六またイブハル、エリシヤマ、エリペレテ七ノガ、ネペグ、ヤピア八エリシヤマ、エリアダ、エリペレテの九人九是みなダビデの子なり此外にまた妾等の生る子等あり彼らの姉妹にタマルといふ者あり一〇ソロモンの子はレハベアムその子はアビヤその子はアサその子はヨシヤパテ一一その子はヨラムその子はアハジアその子はヨアシ一二その子はアマジヤその子はアザリヤその子はヨタム一三その子はアハズその子はヒゼキヤその子はマナセ一四その子はアモンその子はヨシア一五ヨシアの子等は長子はヨハナンその次はヱホヤキムその三はゼデキヤその四はシヤルム一六ヱホヤキムの子等はその子はヱコニアその子はゼデキヤ一七俘虜人ヱコニアの子等はその子シヤルテル一八マルキラム、ペダヤ、セナザル、ヱカミア、ホシヤマ、ネダビヤ一九ペダヤの子等はゼルバベルおよびシメイ、ゼルバベルの子等はメシユラムおよびハナニヤその姉妹にシロミテといふ者あり二〇またハシユバ、オヘル、ベレキヤ、ハサデヤ、ユサブヘセデの五人あり二一ハナニヤの子等はペラテヤおよびヱサヤまたレパヤの子等アルナンの子等オバデヤの子等シカニヤの子等あり二二シカニヤの子はシマヤ、シマヤの子等はハツトシ、イガル、バリア、ネアリア、シヤパテの六人二三ネアリアの子等はエリヨエナイ、ヒゼキヤ、アズリカムの三人二四エリヨエナイの子等はホダヤ、エリアシブ、ペラヤ、アツクブ、ヨハナン、デラヤ、アナニの七人

第四章一ユダの子等はペレヅ、ヘヅロン、カルミ、ホル、ショバル二ショバルの子レアヤ、ヤハテを生みヤハテ、アホマイおよびラハデを生り是等はザレア人の宗族なり三エタムの父の生る者は左のごとしヱズレル、イシマおよびイデバシその姉妹の名はハゼレルポニといふ四ゲドルの父ペヌエル、ホシヤの父エゼル是等はベテレヘムの父ヱフラタの長子ホルの子等なり五テコアの父アシユルは二人の妻を有り即ちヘラとナアラ六ナアラ、アシユルによりてアホザム、ヘペル、テメニおよびアハシタリを産り是等はナアラの産る子なり七ヘラの産る子はゼレテ、ヱゾアル、エテナン八ハツコヅはアヌブおよびゾベバを産りハルムの子アハルヘルの宗族も彼より出づ九ヤベヅはその兄弟の中にて最も尊ばれたる者なりきその母我くるしみてこれを産たればといひてその名をヤベヅ(くるしみ)と名けたり一〇ヤベヅ、イスラエルの神に籲はり我を祝福に祝福て我境を擴め御手をもて我を助け我をして災難に罹りてくるしむこと無らしめたまへと言り神その求むる所を允したまふ一一シユワの兄弟ケルブはメヒルを生りメヒルはエシトンの父なり一二エシトンはベテラパ、パセアおよびイルハナシの父テヒンナを生り是等はレカの人なり

一三ケナズの子等はオテニエルおよびセラヤ、オテニエルの子はハタテ一四メオノタイはオフラを生みセラヤはヨアブを生りヨアブはカラシム(工匠)谷の人々の父なり彼處のものは工匠なればかくいふ一五ヱフンネの子カレブの子等はイル、エラおよびナアム、エラの子等およびケナズ一六ヱハレルの子等はジフ、ジバ、テリア、アサレル一七エズラの子等はヱテル、メレデ、エペル、ヤロン、メレデの妻はミリアム、シヤンマイおよびイシバを産りイシバはエシテモアの父なり一八そのユダヤ人なる妻はゲドルの父ヱレデとシヨコの父ヘベルとザノアの父ヱクテエルを産り是等はメレデが娶りたるパロの女ビテヤの生る子なり一九ナハムの姉妹なるホデヤの妻の生める子等はガルミ人ケイラの父およびマアカ人エシテモアなり二〇シモンの子等はアムノン、リンナ、ベネハナン、テロン、イシの子等はゾヘテおよびベネゾヘテ二一ユダの子シラの子等はレカの父エル、マレシヤの父ラダおよび織布者の家の宗族すなはちアシベアの家の者等二二ならびにモアブに主たりしヨキム、コゼバの人々ヨアシおよびサラフ等なりまたヤシユブ、レハムといふ者ありその記録は古し二三是等の者は陶工にしてネタイムおよびゲデラに住み王の地に居りてその用をなせり二四シメオンの子等はネムエル、ヤミン、ヤリブ、ゼラ、シヤウル二五シヤウルの子はシヤルムその子はミブサムその子はミシマ二六ミシマの子はハムエルその子はザツクルその子はシメイ二七シメイには男子十六人女子六人ありしがその兄弟等には多の子あらざりきまたその宗族の者は凡てユダの子孫ほどには殖増ざりき二八彼らの住る處はベエルシバ、モラダ、ハザルシユアル二九ビルハ、エゼム、トラデ三〇ベトエル、ホルマ、チクラグ三一ベテマルカボテ、ハザルスシム、ベテビリ、シヤライム是等の邑はダビデの世にたるまで彼等の有たりき三二その村郷はエタム、アイン、リンモン、トケン、アシヤンの五の邑なり三三またこの邑々の周圍に衆多の村ありてバアルにまでおよべり彼らの住處は是のごとくにして彼ら各々系譜あり三四メシヨバブ、ヤムレク、アマジヤの子ヨシヤ三五ヨエル、アシエルの曾孫セラヤの孫ヨシビアの子ヱヒウ三六ヱリオエナイ、ヤコバ、ヱシヨハヤ、アサヤ、アデヱル、ヱシミエル、ベナヤ三七およびシピの子ジザ、シピはアロンの子アロンはヱダヤの子ヱダヤはシムリの子シムリはシマヤの子なり三八此に名を擧げたる者等はその宗族の中の長たる者にしてその宗家は大に蔓延り三九彼等はその群のために牧場を求めんとてゲドルの西におもむき谷の東の方にいたり四〇つひに膏腴なる善き牧場を見いだせしがその地は廣く靜穩にして安寧なりき其は昔より其處に住たりし者はハム人なればなり四一即ち上にその名を記したる者等ユダの王ヒゼキヤの代に往て彼らの幕屋を撃やぶり彼らと其處に居しメウニ人を盡く滅ぼし之に代りて其處に住て今日にいたる是はその群を牧べき牧場其處にありたればなり四二またシメオンの子孫の者五百人許イシの子等ペラテア、ネアリア、レバヤ、

ウジエルを長としてセイル山に攻ゆき[四三]アマレキ人の逃れて遺れる者を撃ほろぼして今日まで其處に住り

第五章[一]イスラエルの長子ルベンの子等は左のごとしルベンは長子なりしがその父の床を瀆ししによりてその長子の權はイスラエルの子ヨセフの子等に與へらる然れども系譜は長子の權にしたがひて記すべきに非ず[二]そはユダその諸兄弟に勝る者となりて君たる者その中より出ればなり但し長子の權はヨセフに屬す[三]即ちイスラエルの長子ルベンの子等はハノク、パル、ヘヅロン、カルミ[四]ヨエルの子はシマヤ その子はゴグ その子はシメイ[五]その子はミカ その子はレアヤ その子はバアル[六]その子はベエラ このベエラはアッスリヤの王テルガテピルネセルに虜へられてゆけり彼はルベン人の中に牧伯たる者なりき[七]彼の兄弟等はその宗族に依りその歴代の系譜によれば左のごとし長ヱイエルおよびゼカリヤ[八]ベラ等なりベラはアザズの子シマの孫ヨエルの曾孫なりかれアロエルに住みて地をネボ、バアルメオンにまでおよぼしし[九]ギレアデの地にてその家畜殖増ければまた地を東の方ユフラテ河の此方なる荒野の極端にまでおよぼせり[一〇]またサウルの時にハガリ人と戰爭してこれを打破りギレアデの東の全部なる彼らの幕屋に住たり[一一]ガドの子孫はこれと相對ひてバシヤンの地にすみて地をサルカにまで及ぼせり[一二]長はヨエル次はシヤパム、ヤアナイ、シヤパテ共にバシヤンに居り[一三]彼らの兄弟等はその宗家によればミカエル、メシユラム、シバ、ヨライ、ヤカン、ジア、ヘベル都合七人[一四]是等はホリの子アビハイルの子等なり ホリはヤロアの子ヤロアはギレアデの子ギレアデはミカエルの子ミカエはヱシサイの子ヱシサイはヤドの子ヤドはブズの子[一五]アヒはアブデルの子アブデルはグニの子グニは其宗家の長たり[一六]彼らはギレアデとバシヤンと其郷里とシヤロンの諸郊地に住て地を其四方の境に及ぼせり[一七]是等はみなユダの王ヨタムの世とイスラエルの王ヤラベアムの世に系譜に載たるなり[一八]ルベンの子孫とガド人とマナセの半支派には出て戰ふべき者四萬四千七百六十人あり皆勇士にして能く楯と矛とを執り善く弓を彎きかつ善戰ふ者なり[一九]彼等ハガリ人およびヱトル、ネフシ、ノダブ等と戰爭しけるが[二〇]助力をかうむりて攻擊たればハガリ人および之と偕なりし者等みな彼らの手におちいれり是は彼ら陣中にて神を呼びこれを頼みしによりて神これを聽いれたまひしが故なり[二一]かくて彼らその家畜を奪ひとりしに駱駝五萬 羊二十五萬 驢馬二千あり人十萬ありき[二二]またころされて倒れたる者衆しその戰爭神に由るがゆゑなり而して彼らはこれが地に代りて住その虜移さるる時におよべり[二三]マナセの半支派の人々はこの地に住み殖蔓りてつひにバシヤンよりバアルヘルモン、セニルおよびヘルモン山まで地をおよぼせり[二四]その宗家の長は左のごとし即ちエペル、イシ、エリエル、アズリエル、ヱレミヤ、ホダヤ、ヤデエル是みなその宗家の長にして名ある大勇士なりき[二五]

彼等その先祖等の神にむかひて罪を犯し曾て彼等の前に神の滅ぼしたまひし國の民等の神を慕ひてこれと姦淫したれば[二六]イスラエルの神アッスリヤの王ブルの心を振興しまたアッスリヤの王テグラテピレセルの心を振興したまへり彼つひにルベン人とガド人とマナセの半支派とを虜へゆきこれをハウラとハボルとハラとゴザンの河の邊とに移せり彼等は今日まで其處にあり

第六章[一] レビの子等はゲルシヨン、コハテ、メラリ[二]コハテの子等はアムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエル[三]アムラムの子等はアロン、モーセ、ミリアム、アロンの子等はナダブ、アビウ、エレアザル、イタマル[四]エレアザル、ピネハスを生みピネハス、アビシユアを生み[五]アビシユア、ブツキを生みブツキ、ウジを生み[六]ウジ、ゼラヒヤを生みゼラヒヤ、メラヨテを生み[七]メラヨテ、アマリヤを生みアマリヤ、アヒトブを生み[八]アヒトブ、ザドクを生みザドク、アヒマアズを生み[九]アヒマアズ、アザリヤを生みアザリヤ、ヨハナンを生み[一〇]ヨハナン、アザリヤを生り此アザリヤはヱルサレムなるソロモンの建たる宮にて祭司の職をなせし者なり[一一]アザリヤ、アマリヤを生みアマリヤ、アヒトブを生み[一二]アヒトブ、ザドクを生みザドク、シヤルムを生み[一三]シヤルム、ヒルキヤを生みヒルキヤ、アザリヤを生み[一四]アザリヤ、セラヤを生みセラヤ、ヨザダクを生む[一五]ヨザダグはヱホバ、ネブカデネザルの手をもてユダおよびヱルサレムの人を虜へうつしたまひし時に虜へられて往り[一六]レビの子等はゲルシヨン、コハテおよびメラリ[一七]ゲルシヨンの子等の名は左のごとしリブニおよびシメイ[一八]コハテの子等はアムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエル[一九]メラリの子等はマヘリおよびムシ、レビ人の宗族はその宗家によれば是のごとし[二〇]ゲシヨンの子はリブニその子はヤハテその子はジンマ[二一]その子はヨアその子はイドその子はゼラその子はヤテライ[二二]コハテの子はアミナダブその子はコラその子はアシル[二三]その子はエルカナその子はエビアサフその子はアシル[二四]その子はタハテその子はウリエルその子はウジヤその子はシヤウル[二五]エルカナの子等はアマサイおよびアヒモテ[二六]エルカナについてはエルカナの子はゾバイその子はナハテ[二七]その子はヱリアブその子はヱロハムその子はエルカナ[二八]サムエルの子等は長子はヨエル次はアビヤ[二九]メラリの子はマヘリその子はリブニその子はシメイその子はウザ[三〇]その子はシメアその子はハギヤその子はアサヤなり[三一]契約の櫃を安置せし後ダビデ左の人々を立てヱホバの家にて謳歌事を司どらせたり[三二]彼等は集會の幕屋の住所の前にて謳歌事をおこなひ來りしがソロモン、ヱルサレムにヱホバの室を建るにおよびその次序に循ひてその職をつとめたり[三三]立て奉事をなせるものおよびその子等は左のごとしコハテの子等の中ヘマンは謳歌師長たりヘマンはヨルの子ヨエルはサムエルの子[三四]サムエルはエルカナの子エルカナはヱロハム

の子ヱロハムはエリエルの子エリエルはトアの子三五トアはヅフの子ヅフはエルカナの子エルカナはマハテの子マハテはアマサイの子三六アマサイはヱルカナの子エルカナはヨエルの子ヨエルはアザリヤの子アザリヤはゼパニヤの子三七ゼパニヤはタハテの子タハテはアシルの子アシルはエビアサフの子エビアサフはコラの子三八コラはイヅハルの子イヅハルはコハテの子コハテはレビの子レビはイスラエルの子なり三九ヘマンの兄弟アサフ、ヘマンの右に立りアサフはベレキヤの子ベレキヤはシメアの子四〇シメアはミカエルの子ミカエルはバアセヤの子バアセヤはマルキヤの子四一マルキヤはエテニの子エテニはゼラの子ゼラはアダヤの子四二アダヤはエタンの子エタンはジンマの子ジンマはシメイの子四三シメイはヤハテの子ヤハテはゲルシヨンの子ゲルシヨンはレビの子なり四四また彼らの兄弟なるメラリ人等その左に立り其中のエタンはキシの子なりキシはアブデの子アブデはマルクの子四五マルクはハシヤビヤの子ハシヤビヤはアマジヤの子アマジヤはヒルキヤの子四六ヒルキヤはアムジの子アムジはバニの子バニはセメルの子四七セメルはマヘリの子マヘリはムシの子ムシはメラリの子メラリはレビの子なり四八彼らの兄弟なるレビ人等は神の室の幕屋の諸の職に任ぜられたり四九アロンおよびその子等は燔祭の壇と香壇の上に物を献ぐることを司どりまた至聖所の諸の工をなし且イスラエルのために贖をなすことを司どれり凡て神の僕モーセの命じたるごとし五〇アロンの子孫は左のごとしアロンの子はエレアザルその子はピネハスその子はアビシユア五一その子はブツキその子はウジその子はゼラヒヤ五二その子はメラヨテその子はアマリヤその子はアヒトブ五三その子はザドクその子はアヒマアズ五四アロンの子孫の住處は四方の境の内にありその閭里に循ひていはば左の如し先コハテ人の宗族が籤によりて得たるところは是なり五五すなはちユダの地の中よりはヘブロンとその周圍の郊地を得たり五六但しその邑の田野と村々はヱフンネの子カレブに歸せり五七すなはちアロンの子孫の得たる邑は逃遁邑なるヘブロン、リブナとその郊地ヤツテルおよびエシテモアとそれらの郊地五八ホロンとその郊地デビルとその郊地五九アシヤンとその郊地ベテシメシとその郊地なり六〇またベニヤミンの支派の中よりはゲバとその郊地アレメテとその郊地アナトテとその郊地を得たり彼らの邑はその宗族の中に都合十三ありき六一またコハテの子孫の支派の中此他なる者はかの半支派の中即ちマナセの半支派の中より籤によりて十の邑を得たり六二またゲルシヨンの子孫の宗族はイツサカルの支派アセルの支派ナフタリの支派及びバシヤンなるマナセの支派の中より十三の邑を得たり六三またメラリの子孫の宗族はルベンの支派ガドの支派およびゼブルンの支派の中より籤によりて十二の邑を得たり六四イスラエルの子孫は邑とその郊地とをレビ人に與へたり六五即ちユダの子孫の支派とシメオ

ンの子孫の支派とベニヤミンの子孫の支派の中よりして此に名を擧たる是等の邑を籤によりて之に與へたり六六 コハテの子孫の宗族はまたエフライムの支派の中よりも邑を得てその領地となせり六七 即ちその得たる逃遁邑はエフライム山のシケムとその郊地およびゲゼルとその郊地六八 ヨクメアムとその郊地 ベテホロンとその郊地六九 アヤロンとその郊地 ガテリンモンとその郊地なり七〇 またマナセの半支派の中よりはアネルとその郊地ビレアムとその郊地是みなコハテの子孫の遺れる宗族に歸せり七一 ゲルシヨンの子孫に歸せし者はマナセの半支派の宗族の中よりはバシヤンのゴランとその郊地 アシタロテとその郊地七二 イツサカルの支派の中よりはゲデシとその郊地 ダベラテとその郊地七三 ラモテとその郊地 アネムとその郊地七四 アセル支派の中よりはミシアルとその郊地 アブドンとその郊地七五 ホコクとその郊地レホブとその郊地七六 ナフタリの支派の中よりはガリラヤのゲデシとその郊地 ハンモンとその郊地 キリアタイムとその郊地七七 比外の者すなはちメラリの子孫に歸せし者はゼブルンの支派の中よりはリンモンとその郊地 タボルとその郊地七八 ヱリコに對するヨルダンの彼旁すなはちヨルダンの東においてルベンの支派の中よりは曠野のベゼルとその郊地 ヤザとその郊地七九 ケデモテとその郊地 メパアテとその郊地八〇 ガドの支派の中よりはギレアデのラモテとその郊地 マハナイムとその郊地八一 ヘシボンとその郊地 ヤゼルとその郊地

第七章一 イツサカルの子等はトラ、プワ、ヤシユブ、シムロムの四人二 トラの子等はウジ、レバヤ、ヱリエル、ヤマイ、ヱブサム、サムエル是みなトラの子にして宗家の長なり其子孫の大勇士たる者はダビデの世にはその數二萬二千六百人なりき三 ウジの子はイズラヒヤ、イズラヒヤの子等はミカエル、オバデヤ、ヨエル、イツシヤの五人是みな長たる者なりき四 その宗家によればその子孫の中に軍旅の士卒三萬六千人ありき是は彼等妻子を衆く有たればなり五 イツサカルの諸の宗族の中なるその兄弟等すなはち名簿に記載たる大勇士は都合八萬七千人六 ベニヤミンの子等はベラ、ベケル、ヱデアエルの三人七 ベラの子等はエヅボン、ウジ、ウジエル、ヱレモテ、イリの五人皆その宗家の長なりその名簿に記載たる大勇士は二萬二千三十四人八 ベケルの子等はセミラ、ヨアシ、エリエゼル、エリオエナイ、オムリ、ヱレモテ、アビヤ、アナトテ、アラメテ是みなベケルの子等にして宗家の長なり九 その子孫の中名簿に記載たる大勇士は二萬二百人なりき一〇 またヱデアエルの子はビルハン、ビルハンの子等はヱウシ、ベニヤミン、エホデ、ケナアナ、ゼタン、タルシシ、アビシヤハル一一 是みなヱデアエルの子にして宗家の長たりきその子孫の中に能く陣にのぞみて戰ふ大勇士一萬七千二百人ありき一二 またイリの子等はシユパムおよびホパム、またアヘラの子はホシム一三 ナフタリの子等はヤジエル、グニ、ヱゼル、シヤルム是みなビルハの產る子なり一四 マナセの子等はその妻の

産る者はアシリエルその妾なるスリアの女の産る者はギレアデの父マキル[一五]マキルはホパムとシユパムの妹 名はマアカといふ者を妻に娶れりその次の者はゼロペハデといふゼロペハデには女子ありしのみ[一六]マキルの妻マアカ男子を産てその名をペレシとよべりその弟の名はシヤレシ、シヤレシの子等はウラムおよびラケム[一七]ウラムの子はベダン是等はマナセの子マキルの子なるギレアデの子等なり[一八]その妹 ハンモレケテはイシホデ、アビエゼル、マヘラを産り[一九]セミダの子等はアヒアン、シケム、リキ、アニヤム[二〇]エフライムの子はシユテラ その子はベレデ その子はタハテ その子はエラダ その子はタハテ[二一]その子はザバデ その子はシユテラ エゼルとエレアデはガテの士人等これを殺せり其は彼ら下りゆきてこれが家畜を奪はんとしたればなり[二二]その父エフライムこれがために哀むこと日久しかりければその兄弟等きたりてこれを慰さめたり[二三]かくて後エフライムその妻の所にいりけるに胎みて男子を生たればその名をベリア(災難)となづけたりその家に災難ありたればなり[二四]エフライムの女子セラは上下のベテホロンおよびウゼンセラを建たり[二五]ベリアの子はレパおよびレセフ その子はテラ その子はタハン[二六]その子はラダン その子はアミホデ その子はエリシヤマ[二七]その子はヌン その子はヨシユア[二八]エフライムの子孫の産業と住 處はベテルとその郷里 また東の方にてはナアラン西の方にてはゲゼルとその郷里 またシケムとその郷里 およびアワとその郷里[二九]またマナセの子孫の國境に沿てはベテシヤンとその郷里 タアナクとその郷里 メギドンとその郷里 ドルとその郷里なり イスラエルの子ヨセフの子孫は是等の處に住り[三〇]アセルの子等はイムナ、イシワ、ヱスイ、ベリアおよびその姉妹セラ[三一]ベリアの子等はヘベルおよびマルキエル、マルキエルはビルザヒテの父なり[三二]ヘベルはヤフレテ、シヨメル、ホタムおよびその姉妹シユワを生り[三三]ヤフレテの子等はバサク、ビムハル、アシワテ、ヤフレテの子等は是のごとし[三四]シヨメルの子等はアヒ、ロガ、ホバおよびアラム[三五]シヨメルの兄弟ヘレムの子等はゾバ、イムナ、シレン、アマル[三六]ゾバの子等はスア、ハルネペル、シユアル、ベリ、イムラ[三七]ベゼル、ホド、シヤンマ、シルシヤ、イテラン、ベエラ[三八]ヱテルの子等はヱフンネ、ピスパおよびアラ[三九]ウラの子等はアラ、ハニエルおよびリヂア[四〇]是みなアセルの子孫にして宗家の長たり挺出たる大勇士たり將官の長たりきその名簿に記載たる能く陣にのぞみて戰ふ者二萬六千人あり

第八章[一]ベニヤミンの生る者は長子はベラ その次はアシベルその三はアハラ[二]その四はアハ その五はラパ[三]ベラの子等はアダル、ゲラ、アビウデ[四]アビシユア、ナアマン、アホア[五]ゲラ、シフパム、ヒラム[六]エホデの子等は左のごとし是等はゲバの民の宗家の長なり是はマナハテに移されたり[七]すなはちナアマンおよびアヒヤとともにゲラこれを移せるなりエホデの子等はす

なはちウザとアヒウデ是なり八シヤハライムはその妻ホシムとバアラを去し後モアブの國においてまた子等を擧けたり九彼がその妻ホデシによりて擧けたる子等はヨバブ、ヂビア、メシヤ、マルカム一〇ヱウツ、シヤキヤおよびミルマ是その子等にして宗家の長なり一一彼またホシムによりてアビトブとエルパアルを擧けたり一二エルパアルの子等はエベル、ミシヤムおよびシヤメル彼はオノとロドとその郷里を建たる者なり一三またベリア、シマあり是等はアヤロンの民の宗家の長たる者にしてガテの民を逐はらへり一四またアヒオ、シヤシヤク、エレモテ一五ゼバデヤ、アラデ、アデル一六ミカエル、イシパ、ヨハ是等はベリアの子等なり一七ゼバデヤ、メシユラム、ヘゼキ、ヘベル一八イシメライ、ヱズリア、ヨバブ是等はエルパアルの子等なり一九ヤキン、ジクリ、ザベデ二〇エリエナイ、チルタイ、エリエル二一アダヤ、ベラヤ、シムラテ是等はシマの子等なり二二イシパン、ヘベル、エリエル二三アブドン、ジクリ、ハナン二四ハナニヤ、エラム、アントテヤ二五イペデヤ、ペヌエル是等はシヤシヤクの子等なり二六シヤムセライ、シハリア、アタリヤ二七ヤレシヤ、エリヤ、ジクリ是等はヱロハムの子等なり二八是等は歴代の宗家の長にして首たるものなり是らはエルサレムに住たり二九ギベオンの祖はギベオンに住りその妻の名はマアカといふ三〇その長子はアブドン、次はツル、キシ、バアル、ナダブ三一ゲドル、アヒオ、ザケル三二ミクロテはシメアを生り是等も又その兄弟等とともにヱルサレムに住てこれに對ひ居り三三ネル、キシを生みキシ、サウルを生みサウルはヨナタン、マルキシユア、アビナダブ、エシバアルを生り三四ヨナタンの子はメリバアル、メリバアル、ミカを生り三五ミカの子等はピトン、メレク、ダレア、アハズ三六アハズはヱホアダを生みヱホアダはアレメテ、アズマウテおよびジムリを生みジムリはモザを生み三七モザはビネアを生りその子はラパその子はエレアサその子はアゼル三八アゼルには六人の子あり其名は左のごとしアズリカム、ボケル、イシマエル、シヤリヤ、オバデヤ、ハナン是みなアゼルの子なり三九その兄弟エセクの子等の長子はウラムその次はヱウンその三はエリペレテ四〇ウラムの子等は大勇士にして善く弓を射る者なりき彼は孫子多くして百五十人もありき是みなベニヤミンの子孫なり

第九章

一イスラエルの人は皆名簿に記載られたり視よ是は皆イスラエルの列王紀に録さるユダはその罪のためにバビロンに虜へられてゆけり二その産業の邑々に最初に住ひし者にはイスラエル人祭司等レビ人およびネテニ人等なり三またヱルサレムにはユダの子孫ベニヤミンの子孫およびエフライムとマナセの子孫等住り四即ちユダの子ペレヅの子孫の中にてはアミホデの子ウタイ、アミホデはオムリの子オムリはイムリの子イムリはバニの子なり五シロ族の中にてはシロの長子アサヤおよびその他の子等六ゼラの子孫の中にてはユエルおよびその兄弟六百九十人七ベニヤミンの子孫の中にてはハセヌアの子ハダヤの子なる

メシユラムの子サル八ヱロハムの子イブニヤ、ミクリの子なるウジの子エラおよびイブニヤの子リウエルの子なるシパテヤの子メシユラム九並に彼らの兄弟等その世系によれば合せて九百五十六人是みなその宗家の長たる人々なり一〇また祭司の中にてはヱダヤ、ヨアリブ、ヤキン一一およびヒルキヤの子アザリヤ、ヒルキヤはメシユラムの子メシユラムはザドクの子ザドクはメラヨテの子メラヨテはアヒトブの子なりアザリヤは神の室の宰たり一二またヱロハムの子アダヤ、ヱロハムはパシユルの子パシユルはマルキヤの子なりまたアデエルの子マアセヤ、アデエルはヤゼラの子ヤゼラはメシユラムの子メシユラムはメシレモテの子メシレモテはインメルの子なり一三また彼らの兄弟等是等は宗家の長たる者にして合せて一千七百六十人あり皆神の室の奉事をなすの力あるものなり一四レビ人の中にてはハシユブの子シマヤ、ハシユブはアズリカムの子アズリカムはハシヤビヤの子是はメラリの子孫なり一五またバクバツカル、ヘレシ、ガラルおよびアサフの子ジクリの子なるミカの子マツタニヤ一六ならびにヱドトンの子ガラルの子なるシマヤの子オバデヤおよびエルカナの子なるアサの子ベレキヤ、エルカナはネトバ人の郷里に住たる者なり一七門を守る者はシヤルム、アツクブ、タルモン、アヒマンおよびその兄弟等にしてシヤレムその長たり一八彼は今日まで東の方なる王の門を守りをる是等はレビの子孫の營の門を守る者なり一九コラの子エビアサフの子なるコレの子シヤルムおよびその父の家の兄弟等などのコラ人は幕屋の門々を守る職務を主どれりその先祖等はヱホバの營の傍にありてその入口を守れり二〇エレアザルの子ピネハス昔彼らの主宰たりきヱホバ彼とともに在せり二一メシレミヤの子ゼカリヤは集會の幕屋の門を守る者なりき二二是みな選ばれて門を守る者にて合せて二百十二人ありき皆その村々の名簿に記載たる者なりしがダビデと先見者サムエルこれをその職に任じたり二三彼等とその子孫は順番にヱホバの室すなはち幕屋の門を司どれり二四門を守る者は西東北南の四方に居り二五またその村々に居る兄弟等は七日ごとに迭り來りて彼らを助けたり二六門を守る者の長たるこの四人のレビ人はその職にをりて神の室の諸の室と府庫とを司どれり二七彼らは番守をなす身なるに因て神の室の四周に舎れり而して朝ごとにこれを開くことをせり二八その中に奉事の器皿を司どる者あり是はその數を按べて携へいりそり數を按べて携へいだすべき者なり二九またその他の器皿すなはち聖所の一切の器皿および麥粉酒油乳香香料を司どる者あり三〇また祭司の徒の中に香料をもて香膏を製る者あり三一コラ人シヤルムの長子なるマツタテヤといふレビ人は鍋にて製るところの物を司どれり三二またコハテ人の子孫たるその兄弟等の中に供前のパンを司どりて安息日ごとにこれを調ふる者等あり三三レビ人の宗家の長たる是等の者は謳歌師にして殿の諸の室に居て他の職を爲ざりき其は日夜

その職務にかかりをればなり三四是等はレビ人の歴代の宗家の長にして首長たる者なり是等はヱルサレムに住り三五ギベオンの祖ヱヒエルはギベオンに住りその妻の名はマアカといふ三六その長子はアブドン次はツル、キシ、バアル、ネル、ナダブ三七ゲドル、アヒオ、ゼカリヤ、ミクロテ三八ミクロテ、シメアムを生り彼等もその兄弟等とともにヱルサレムに住てその兄弟等と相對ひ居り三九ネルはキシを生みキシはサウルを生みサウルはヨナタン、マルキシユア、アビナダブおよびエシバアルを生り四〇ヨナタンの子はメリバアル、メリバアル、ミカを生り四一ミカの子等はピトン、メレク、タレアおよびアハズ四二アハズはヤラを生みヤラはアレメテ、アズマウテおよびジムリを生みジムリはモザを生み四三モザはピネアを生りピネアの子はレバヤその子はエレアサその子はアゼル四四アゼルは六人の子ありきその名は左のごとしアズリカム、ボケル、イシマエル、シヤリヤ、オバデヤ、ハナン是等はアゼルの子なり

第一〇章一茲にペリシテ人イスラエルと戰ひけるがイスラエルの人々はペリシテ人の前より逃げギルボア山に殺されて倒れたり二ペリシテ人はサウルとその子等を追撃しかしてペリシテ人サウルの子ヨナタン、アビナダブおよびマルキシユアを殺せり三斯その戰闘烈しうしてサウルにおし迫り射手の者等つひにサウルに追つきければサウルは射手の者等のために惱めり四サウル是におひてその武器を執る者に言けるは汝の劍をぬき其をもて我を刺せ恐らくはこの割禮なき者等きたりて我を辱しめんと然るにその武器を執る者痛くおそれて肯はざりければサウルすなはちその劍をとりてその上に伏たり五武器を執る者サウルの死たるを見て己もまた劍の上に伏て死り六斯サウルとその三人の子等およびその家族みな共に死り七谷に居るイスラエルの人々みな彼らの逃るを見またサウルとその子等の死るを見てその邑々を棄て逃ければペリシテ人來りてその中に住り八明る日ペリシテ人殺されたる者を剥んとて來りサウルとその子等のギルボア山にたふれをるを見九すなはちサウルを剥てその首とその鎧甲を取りペリシテの國の四方に人を遣はしてこの事をその偶像と民に告しめ一〇しかしてかれが鎧甲をその神の室に蔵め彼が首をダゴンの宮に釘けたり一一茲にペリシテ人がサウルになしたる事ことごとくヤベシギレアデ中に聞えければ一二勇士等みな起りサウルの體とその子等の體とを奪ひ取てこれをヤベシに持きたりヤベシの橡樹の下にその骨を葬りて七日のあひだ斷食せり一三斯サウルはヱホバにむかひて犯せし罪のために死たり即ち彼はヱホバの言を守らずまた憑鬼者に問ことを爲して一四ヱホバに問ことをせざりしなり是をもてヱホバかれを殺しその國を移してヱッサイの子ダビデに與へたまへり

第一一章一茲にイスラエルの人みなヘブロンに集まりてダビデの許に詣り言けるは我らは汝の骨肉なり二前にサウルが王たりし時にも汝はイスラエルを率ゐて出入する者なりき又なんぢの

神ヱホバ汝にむかひて汝はわが民イスラエルを牧養ふ者となり我民イスラエルの君とならんと言たまへりと三斯イスラエルの長老みなヘブロンにきたりて王の許にいたりければダビデ、ヘブロンにてヱホバの前に彼らと契約をたてたり彼らすなはちダビデに膏をそそぎてイスラエルの王となしサムエルによりて傳はりしヱホバの言のごとくせり四かくてダビデはイスラエルの人々を率ゐてエルサレムに往りヱルサレムは即ちヱブスなりその國の土人ヱブス人其處に居り五是においてヱブスの民ダビデに言けるは汝は此に入べからずと然るにダビデはシオンの城を取り是すなはちダビデの邑なり六この時ダビデいひけるは誰にもあれ第一にヱブス人を撃やぶる者を首となし將となさんと斯てゼルヤの子ヨアブ先登して首となれり七ダビデその城に住たればこれをダビデの邑と稱へたり八ダビデまたその邑の四方すなはちミロ(城塞)より內の四方に建築をなせり邑の中のその餘の處はヨアブこれを修理へり九斯てダビデはますます大になりゆけり萬軍のヱホバこれとともに在したればなり一〇ダビデが有る勇士の重なる者は左のごとし是等はイスラエルの一切の人とともにダビデに力をそへて國を得させ終にこれを王となしてヱホバがイスラエルにつきて宣ひし言を果せり一一ダビデの有る勇士の數は是のごとし第一は三十人の長たるハクモニ人の子ヤシヨベアム彼は槍を揮ひて一時に三百人を衝殺せし事あり一二彼の次はアホア人ドドの子エレアザルにして三勇士の中なり一三彼ダビデとともにパスダミムに在けるにペリシテ人其處に集りきて戰へり其處に大麥の滿たる地一箇所あり時に民ペリシテ人の前より逃たりしが一四彼その地所の中に踐とどまり之を護りてペリシテ人を殺せり而してヱホバ大なる拯救をほどこして之を救ひたまへり一五三十人の長なる三人の者アドラムの洞穴に下り磐の處に往てダビデに詣りし事あり時にペリシテ人の軍兵はレパイムの谷に陣どれり一六その時ダビデは砦に居りペリシテ人の鎮臺兵はベテレヘムにありけるが一七ダビデ慕ひ望みて言けるは誰かベテレヘムの門にある井の水を持來りて我に飮せよかし一八この三人すなはちペリシテ人の軍兵の中を衝とほりてベテレヘムの門にある井の水を汲取てダビデの許に携へきたれり然どダビデこれを飮ことをせず之をヱホバの前に灌ぎて一九言けるは我神よ我決てこれを爲じ我いかで命をかけし此三人の血を飮べけんやと彼らその命をかけて之を携へきたりたればなり故にダビデこれを飮ことを爲ざりき此三勇士は是らの事を爲り二〇ヨアブの兄弟アビシヤイは三人の長たり彼は槍を揮ひて三百人を衝ころし三人の中に名を得たり二一彼は第二の三人の中にて尤も貴くしてその首にせらる然ど第一の三人には及ばざりき二二ヱホヤダの子カブジエルのベナヤは勇氣あり衆多の功績ありし者なり彼はモアブのアリエルの二人の子を撃殺せりまた雪の日に下りゆきて穴の中にて獅子一匹を撃殺せし事ありき二三彼はまた長身五キユビト程なるエジプト

人を殺せりそのエジプト人は機織の滕のごとき槍を手に執をりしに彼は杖をとりて之が許に下りゆきエジプト人の手よりその槍を捩とりてその槍をもて之を殺せり二四ヱホヤダの子ベナヤ是等の事を爲し三勇士の中に名を得たり二五彼は三十人の中にて尊かりしかども第一の三人には及ばざりきダビデかれを親兵の長となせり二六軍兵の中の勇士はヨアブの兄弟アサヘル、ベテレヘムのドドの子エルハナン二七ハロデ人シヤンマ、ペロニ人ヘレヅ二八テコア人イツケシの子イラ、アナトテ人アビエゼル二九ホシヤ人シベカイ、アホア人イライ三〇ネトパ人マハライ、ネトパ人バナアの子ヘレデ三一ベニヤミンの子孫のギベアより出たるリバイの子イツタイ、ピラトン人ベナヤ三二ガアシの谷のホライ、アルバテ人アビエル三三バハルム人アズマウテ、シヤルボニ人エリヤバ三四ギゾニ人ハセム、ハラリ人シヤゲの子ヨナタン三五ハラリ人サカルの子アヒアム、ウルの子エリパル三六メケラ人ヘペル、ペロニ人アヒヤ三七カルメル人ヘヅライ、エズバイの子ナアライ三八ナタンの兄弟ヨエル、ハグリの子ミブハル三九アンモニ人ゼレク、ゼルヤの子ヨアブの武器を執る者なるベエロテ人ナハライ四〇エテリ人イラ、エテリ人ガレブ四一ヘテ人ウリヤ、アヘライの子ザバデ四二ルベン人シザの子アデナ是はルベン人の軍長の一人にして從者三十人を率ゐたり四三マアカの子ハナン、ミテニ人ヨシヤバテ四四アシテラ人ウジヤ、アロエル人ホタンの子等シヤマとヱイエル四五デジ人シムリの子エデアエルおよびその兄弟ヨハ、四六マハウ人エリエル、エルナアムの子等エリバイおよびヨシヤワヤ、モアブ人イテマ四七エリエル、オベデ、ソメバ人ヤシエル

第一二章一ダビデがキシの子サウルの故によりて尚チクラグに閉こもり居ける時に彼處にゆきてダビデに就し者は左のごとしその人々は勇士の中にしてダビデを助けて戰ひたる者二能く弓を彎き右左の手を用ゐて善く石を投げ弓矢を發つ者なりしが倶にベニヤミン人にしてサウルの宗族たり三首はアヒエゼル次はヨアシ是らはギベア人シマアの子等なり又ヱジエルおよびペレテ是らはアズマウラの子等なり又ベラカおよびアナトテ人ヱヒウ四またギベオン人イシマヤ彼は三十人の中の勇士にして三十人の首なり又エレミヤ、ヤハジエル、ヨハナン、ゲデラ人ヨザバデ五エルザイ、エリモテ、ベアリヤ、シマリヤ、ハリフ人シバテヤ六エルカナ、エシヤ、アザリエル、ヨエゼル、ヤシヨベアム是等はコラ人なり七またゲドルのエロハムの子等たるヨエラおよびゼバデヤ八ガド人の中より曠野の砦に脱きたりてダビデに歸せし者あり是みな大勇士にして善戰かふ軍人能く楯と戈とをつかふ者にてその面は獅子の面のごとくその捷きことは山にをる鹿のごとくなりき九その首はエゼルその二はオバデヤその三はエリアブ一〇その四はミシマンナその五はヱレミヤ一一その六はアツタイその六はエリエル一二その八はヨハナンその九はエルザバデ一三その十はヱレミヤその十一はマクバナイ一四是等

はガドの人々にして軍旅の長たりそ最も小き者は百人に當りその最も大なる者は千人に當れり一五 正月ヨルダンその全岸に溢れたる時に是らの者濟りゆきて谷々に居る者をことごとく東西に打奔らせたり一六 茲にベニヤミンとユダの子孫の中の人々砦に來りてダビデに就きけるに一七ダビデこれを出むかへ應へて之に言けるは汝ら厚 志をもて我を助けんとて來れるならば我心なんぢらと相結ばん然ど汝らもし我手に惡きこと有ざるに我を欺きて敵に付さんとせば我らの先祖の神ねがはくは之を監みて責たまへと一八 時に聖靈三十人の長アマサイに臨みて彼すなはち言けるはダビデよ我らは汝に屬すヱツサイの子よ我らは汝を助けん願くは平安あれ汝にも平安あれ汝を助くる者にも平安あれ汝の神汝を助けたまふなりと是においてダビデ彼らを接いれて軍旅の長となせり一九 前にダビデ、ペリシテ人とともにサウルと戰はんとて攻きたれる時マナセ人數人ダビデに屬り但しダビデ等は遂にペリシテ人を助けざりき其はペリシテ人の君等あひ謀り彼は我らの首級をもてその主君サウルに歸らんと言て彼を去しめたればなり二〇 斯てダビデ、チクラグに往る時マナセ人アデナ、ヨザバデ、ヱデアエル、ミカエル、ヨザバデ、エリウ、ヂルタイこれに歸せり皆マナセ人の千人の長たる者なりき二一 彼等ダビデを助けて敵軍に當れり彼らは皆大勇士にして軍旅の長となれり二二 當時ダビデに歸して之を助くる者日々に加はりて終に大軍となり神の軍旅のごとくなれり二三

戰爭のために身をよろひヘブロンに來りてダビデに就きヱホバの言のごとくサウルの國をダビデに歸せしめんとしたる武士の數は左のごとし二四 ユダの子孫にして楯と戈とを執り戰爭のために身をよろへる者は六千八百人二五 シメオンの子孫にして善戰かふ大勇士は七千一百人二六 レビの子孫たる者は四千六百人二七 ヱホヤダ、アロン人を率ゐたり之に屬する者は三千七百人二八 またザドクといふ年若き勇士ありきその宗家の長たる者二十二人ありたり二九 サウルの宗族ベニヤミンの子孫たる者は三千人是ベニヤミン人は多くサウルの家に尚も忠義を盡しゐたればなり三〇 エフライムの子孫たる者は二萬八百人皆大勇士にしてその宗家の名ある人々たり三一 マナセの半 支派の者は一萬八千人皆名を録されたる者なるが來りてダビデを王にたてんとす三二 イツサカルの子孫たる者の中より善く時勢に通じイスラエルの爲べきことを知る者きたれりその首二百人ありその兄弟等は皆これが指揮にしたがへり三三 ゼブルンの者は五萬人皆よく身をよろひ各種の武器をもて善く戰鬪をなし一心に行伍を守る者なりき三四 ナフタリの者は將たる者千人楯と戈とを執てこれに從ふ者三萬七千人三五 ダン人は二萬八千六百人にして皆そなへを守る者なりき三六 アセルの者は四萬人にして皆よく陣にのぞみ且行伍を守る者なりき三七 またヨルダンの彼旁なるルベン人とガド人とマナセの半 支派の者は十二萬人みな各種の武器を執て戰爭にいづるに勝る者なりき三八 是等の行伍を守

る軍人等眞實の心を懐きてヘブロンに來りダビデをもてイスラエル全國の王となさんとせり其餘のイスラエル人もまた心を一にしてダビデを王となさんとせり三九彼ら彼處に三日をりてダビデとともに食ひかつ飲り其はその兄弟等これがために備をなしたればなり四〇また近處の者よりイッサカル、ゼブルンおよびナフタリの者に至るまでパンと麥粉の食物と乾無花果と乾葡萄と酒と油等を驢馬駱駝牛馬に載きたりかつ牛羊を多く携へいたれり是イスラエルみな喜びたればなり

第一三章一 茲にダビデ千人の長百人の長などの諸將とあひ議り二而してダビデ、イスラエルの全會衆に言けるは汝らもし之を善とし我らの神ヱホバこれを允したまはば我ら徧く人を遣してイスラエルの各地に留まれる我らの兄弟ならびにその諸郊地の邑々にをる祭司とレビ人とに至らせ之をして我らの所に集まらしめん三而して我らまた我らの神の契約の櫃を我らの所に移さんサウルの世には我ら之に就て詢ことをせざりしなりと四會衆みな然すべしと言り其は民みな此事を善と觀たればなり五是においてダビデはキリアテヤリムより神の契約の櫃を舁きたらんとてエジプトのジホルよりハマテの入口までのイスラエル人をことごとく召あつめ六而してダビデ、イスラエルの一切の人とともにバアラといふユダのキリアテヤリムに上り往きケルビムの上に坐したまふヱホバ神の名をもて稱らるる契約の櫃を其處より舁のぼらんとし七乃ち神の契約の櫃を新しき車に載てアビナダブの家より牽いだしウザとアヒオその車を御せり八ダビデおよびイスラエルの人はみな歌と琴と瑟と鼗鼓と鐃鈸と喇叭などを以て力をきはめ歌をうたひて神の前に踊れり九かくてキドンの禾場に至れる時ウザ手を神の契約の櫃に伸してこれを扶へたり其は牛これを振たればなり一〇ウザその手を伸て契約の櫃につけたるによりてヱホバこれに向ひて忿怒を發してこれを撃たまひければ其處にて神の前に死り一一ヱホバ、ウザを撃たまひしに因てダビデ怒れり其處は今日までペレヅウザ（ウザ撃）と稱へらる一二その日ダビデ神を畏れて言り我なんぞ神の契約の櫃を我所に舁ゆくべけんやと一三ダビデその契約の櫃を己のところダビデの城邑にうつさず之を轉らしてガテ人オベデエドムの家に舁いらしめたり一四神の契約の櫃オベデエドムの家にありて其家族とともにおかかること三月なりきヱホバ、オベデエドムの家とその一切の所有を祝福たまへり

第一四章一 茲にツロの王ヒラム使者をダビデに遣はし之がために家を建させんとて香柏および木匠と石工をおくれり二ダビデはヱホバの固く己をたててイスラエルの王となしたまへるを曉れり其はその民イスラエルの故によりてその國振ひ興りたればなり三ダビデ、ヱルサレムにおいてまた妻妾を納たり而してダビデまた男子女子を得たり四そのヱルサレムにて得たる子等の名は左のごとしシヤンマ、シヨバブ、ナタン、ソロモン五イブハル、エリシユア、エルバレテ六ノガ、ネベグ、ヤピア七エリシヤ

マ、ベエリアダ、エリバレテ八茲にダビデの膏そそがれてイスラエル全國の王となれる事ペリシテ人に聞えければペリシテ人みなダビデを獲んとて上れりダビデは聞て之に當らんとて出たりしが九ペリシテ人すでに來りてレパイムの谷を侵したりき一〇時にダビデ神に問て言けるは我ペリシテ人にむかひて攻上るべきや汝彼らを吾手に付し給ふやヱホバ、ダビデに言たまひけるは攻上れ我かれらを汝の手に付さんと一一是において皆バアルペラジムに上りゆきけるがダビデつひに彼處にて彼らを打敗り而してダビデ言り神水の破壞り出るごとくに我手をもてわが敵を敗りたまへりと是をもてその處の名をバアルペラジム（破壞の處）と呼ぶなり一二彼ら其處にその神々を遺ゆきたればダビデ命じて火をもてこれを焚せたり一三斯て後ペリシテ人復谷を侵しければ一四ダビデまた神に問に神これに言たまひけるは彼らを追て上るべからず彼らを離れて回りベカの樹の方よりこれを襲へ一五汝ベカの樹の上に進行の音あるを聞ば即ち進んで戰ふべし神汝のまへに進みいでペリシテ人の軍勢を撃たまふべければなりと一六ダビデすなはち神の己に命じたまひし如くしてペリシテ人の軍勢を撃やぶりつつギベオンよりガゼルにまでいたれり一七是においてダビデの名諸の國々に聞えわたりヱホバ諸の國人に彼を懼れしめたまへり

第一五章一ダビデはダビデの邑の中に自己のために家を建て又神の契約の櫃のために處を備へてこれがために幕屋を張り二而してダビデ言けるは神の契約の櫃を舁べき者は只レビ人のみ其はヱホバ神の契約の櫃を舁しめまた己に永く事しめんとてレビ人を擇びたまひたればなりと三ダビデすなはちヱホバの契約の櫃をその之がために備へたる處に舁のぼらんとてイスラエルをことごとくエルサレムに召集めたり四ダビデまたアロンの子孫とレビ人を集めたり五即ちコハテの子孫の中よりはウリエルを長としてその兄弟百二十人六メラリの子孫の中よりはアサヤを長としてその兄弟二百二十人七ゲルシヨンの子孫の中よりはヨエルを長としてその兄弟百三十人八エリザバンの子孫の中よりはシマヤを長としてその兄弟二百人九ヘブロンの子孫の中よりはエリエルを長としてその兄弟八十人一〇ウジエルの子孫の中よりはアミナダブを長としてその兄弟百十二人一一ダビデ祭司ザドクとアビヤタルおよびレビ人ウリエル、アサヤ、ヨエル、シマヤ、エリエル、アミナダブを召し一二これに言けるは汝らはレビ人の宗家の長たり汝らと汝らの兄弟共に身を潔めイスラエルの神ヱホバの契約の櫃を我が其の爲に備へたる處に舁のぼれよ一三前には之をかきしもの汝らにあらざりしに縁て我らの神ヱホバわれらを撃たまへり是は我らそのさだめにしたがひて之に求めざりしが故なりと一四是において祭司等とレビ人等イスラエルの神ヱホバの契約の櫃を舁のぼらんと身を潔め一五レビの子孫たる人々すなはちモーセがヱホバの言にしたがひて命じたるごとく神の契約の櫃をその貫ける杠によりて肩

に負り一六ダビデまたレビ人の長等に告げその兄弟等を選びて謳歌者となし瑟と琴と鐃鈸などの樂器をもちて打はやして歡喜の聲を擧しめよと言たれば一七レビ人すなはちヨエルの子ヘマンとその兄弟ベレキヤの子アサフおよびメラリの子孫たる彼らの兄弟クシャヤの子エタンを選べり一八また之に次るその兄弟等これと偕にあり即ちゼカリヤ、ベン、ヤジエル、セミラモテ、ヱイエル、ウンニ、エリアブ、ベナヤ、マアセヤ、マツタテヤ、エリペレホ、ミクネヤおよび門を守る者なるオベデエドムとヱイエル一九謳歌者ヘマン、アサフおよびエタンは銅の鐃鈸をもて打はやす者となり二〇ゼカリヤ、アジエル、セミラモテ、ヱイエル、ウンニ、エリアブ、マアセヤ、ベナヤは瑟をもて細き音を出し二一マツタテヤ、エリペレテ、ミクネヤ、オベデエドム、ヱイエル、アザジヤは琴をもて太き音を出して拍子をとれり二二ケナニヤはレビ人の長にして負舁事に通じをるによりて負舁事を指揮せり二三またベレキヤとエルカナは契約の櫃の門を守り二四祭司シバニヤ、ヨシヤパテ、ネタネル、アマサイ、ゼカリヤ、ベナヤ、ヱリエゼル等は神の契約の櫃の前に進みて喇叭を吹きオベデエドムとヱヒアは契約の櫃の門を守れり二五斯ダビデとイスラエルの長老および千人の長等は往てオベデエドムの家よりヱホバの契約の櫃を歡び勇みて舁のぼれり二六神ヱホバの契約の櫃を舁ところのレビ人を助けたまひければ牡牛七匹牡羊七匹を献げたり二七ダビデは細布の衣をまとへり又契約の櫃を舁ところの一切のレビ人と謳歌者および負舁事を主どれるケナニヤも然りダビデはまた白布のエポデを着居たり二八斯てイスラエルみな聲を擧げ角を吹ならし喇叭と鐃鈸と瑟と琴とをもて打はやしてヱホバの契約の櫃を舁のぼれり二九ヱホバの契約の櫃ダビデの邑にいりし時サウルの女ミカル窗より窺ひてダビデ王の舞躍るを見その心にこれを藐視めり

第一六章 一人々神の契約の櫃を舁いりて之をダビデがその爲に張たる幕屋の中に置ゑ而して燔祭と酬恩祭を神の前に献げたり二ダビデ燔祭と酬恩祭を献ぐることを終しかばヱホバの名をもて民を祝し三イスラエルの衆庶に男にも女にも都てパン一箇肉一片乾葡萄一塊を分ち與へたり四ダビデまたレビ人を立てヱホバの契約の櫃の前にて職事をなさしめ又イスラエルの神ヱホバを崇め讃めかつ頌へしめたり五伶長はアサフその次はゼカリヤ、ヱイエル、セミラモテ、ヱヒエル、マツタテヤ、エリアブ、ベナヤ、オベデエドム、ヱイエルこれは瑟と琴とを弾じアサフは鐃鈸を打鳴し六また祭司ベナヤとヤハジエルは喇叭をとりて恒に神の契約の櫃の前に侍れり七當日ダビデ始めてアサフとその兄弟等を立てヱホバを頌へしめたり其言に云く八ヱホバに感謝しその名をよびその作たまへることをもろもろの民輩の中にしらしめよ九ヱホバにむかひてうたへヱホバを讃うたへそのもろもろの奇しき跡をかたれ一〇そのきよき名をほこれヱホバをたづぬるものの心はよろこぶべし一一ヱホバとその能力とを

たづねよ恒にその聖顔をたづねよ一二三その僕イスラエルの裔よヤコダの子輩よそのえらびたまひし所のものよそのなしたまへる奇しき跡とその異事とその口のさばきとを心にとむれ一四彼はわれらの神ヱホバなりそのおほくの審判は全地にあり一五なんぢらたえずその契約をこころに記よ此はよろづ代に命じたまひし聖言なり一六アブラハムとむすびたまひし契約イサクに與へたまひし誓なり一七之をかたくしヤコブのために律法となしイスラエルのためにとこしへの契約となして一八言たまひけるは我なんぢにカナンの地をたまひてなんぢらの嗣業の分となさん一九この時なんぢらの數おほからず甚すくなくしてかしこにて旅人となり二〇この國よりかの國にゆきこの國よりほかの民にゆけり二一人のかれらを虐ぐるをゆるしたまはずかれらの故によりて王たちを懲しめて二二宣給くわが受膏者たちにふるるなかれわが預言者たちをそこなふなかれ二三全地よヱホバにむかひて謳へ日ごとにその拯救をのべつたへよ二四もろもろの國のなかにその榮光をあらはしもろもろの民のなかにその奇しきみわざを顯すべし二五そはヱホバはおほいなり大にほめたたふべきものなりまたもろもろの神にまさりて畏るべきものなり二六もろもろの民のすべての神はことごとく虚しされどヱホバはもろもろの天をつくりたまへり二七尊貴と稜威とはその前にあり能とよろこびとはその聖所にあり二八もろもろのたみの諸族よ榮光とちからとをヱホバにあたへよヱホバにあたへよ二九その聖名にかなふ榮光をもてヱホバにあたへ献物をたづさへて其前にきたれきよき美はしき物をもてヱホバを拜め三〇全地よその前にをののけ世界もかたくたちて動かさるることなし三一天はよろこび地はたのしむべしもろもろの國のなかにいへヱホバは統治たまふ三二海とそのなかに盈るものとはなりどよみ田畑とその中のすべての物とはよろこぶべし三三かくて林のもろもろの樹もまたヱホバの前によろこびうたはんヱホバ地をさばかんとて來りたまふ三四ヱホバに感謝せよそのめぐみはふかくその憐憫はかぎりなし三五汝ら言へ我らの拯救の神よ我らを救ひ我らを取り集め列邦のなかより救ひいだしたまへ我らは聖名に謝しなんぢのほむべき事をほこらん三六イスラエルの神ヱホバは窮なきより窮なきまでほむべきかなすべての民はアーメンととなへてヱホバを讃稱へたり三七ダビデはアサフとその兄弟等をヱホバの契約の櫃の前に留めおきて契約の櫃の前に常に侍りて日々の事を執行なはせたり三八オベデエドムとその兄弟等は合せて六十八人またヱドトンの子なるオベデエドムおよびホサは司門たり三九祭司ザドクおよびその兄弟たる祭司等はギベオンなる崇邱においてヱホバの天幕の前に侍り四〇燔祭の壇の上にて朝夕斷ず燔祭をヱホバに献げ且ヱホバがイスラエルに命じたまひし律法に記されたる諸の事を行へり四一またヘマン、ヱドトンおよびその餘の選ばれて名を記されたる者等彼らとともにありてヱホバの恩寵の世々限なきを讃まつ

れり四二即ちヘマンおよびヱドトンかれらとともに居て喇叭鐃鈸など神の樂器を操て樂を奏せり又ヱドトンの子等は門を守れり四三かくて民みな各々その家にかへれり又ダビデはその家族を祝せんとて還りゆけり

第一七章一ダビデその家に住にいたりてダビデ預言者ナタンに言けるは觀よ我は香柏の家に住む然れどもヱホバの契約の櫃は幕の下にありと二ナタン、ダビデに言けるは神なんぢとともに在せば凡て汝の心にある所を爲せ三その夜神の言ナタンに臨みて曰く四往てわが僕ダビデに言へヱホバかく言ふ汝は我ために我の住べき家を建べからず五我はイスラエルを導びき上りし日より今日にいたるまで家に住しこと無して但幕屋より幕屋に移り天幕より天幕に遷れり六我イスラエルの人々と共に歩みたる處々にて我わが民を牧養ふことを命じたるイスラエルの士師の一人にもなんぢ何故に香柏の家を我ために建ざるやと一言にても言し事ありや七然ば汝わが僕ダビデに斯言べし萬軍のヱホバかく言ふ我なんぢを牧場より取り羊に隨がふ處より取て我民イスラエルの君長と爲し八汝が凡て往る處にて汝と偕にあり汝の諸の敵を汝の前より斷され我また世の中の大なる人の名のごとき名を汝に得させん九かつ我わが民イスラエルのために處を定めて彼らを植つけ彼らをして自己の處に住て重て動くこと無らしめん一〇又惡人昔のごとく即ち我民イスラエルの上に士師を立たる時より已來のごとく重ねて彼らを荒すこと無るべし我汝の諸の敵を圧服ん且今我汝に告ぐヱホバまた汝のために家を建ん一一汝の日の滿汝ゆきて先祖等と偕になる時は我汝の生る汝の子を汝の後に立て且その國を堅うせん一二彼わが爲に家を建ん我ながく彼の位を堅うせん一三我は彼の父となり彼はわが子となるべし我は汝の先にありし者より取たるごとくに彼よりは我恩惠を取さらじ一四却て我かれを永く我家に我國に居置ん彼の位は何時までも堅く立べし一五ナタン凡て是等の言のごとく凡てこの異象のごとくダビデに語りければ一六ダビデ王入てヱホバの前に坐して言けるはヱホバ神よ我は誰わが家は何なれば汝此まで我を導きたまひしや一七神よ是はなほ汝の目には小き事たりヱホバ神よ汝はまた僕の家の遥後の事を語り高き者のごとくに我を見倣たまへり一八僕の名譽についてはダビデこの上何をか汝に望むべけん汝は僕を知たまふなり一九ヱホバよ汝は僕のため又なんぢの心に循ひて此もろもろの大なる事を爲し此すべての大なる事を示たまへり二〇ヱホバよ我らが凡て耳に聞る所に依ば汝のごとき者は無くまた汝の外に神は無し二一地の何の國か汝の民イスラエルに如ん是は在昔神の往て贖ひて己の民となして大なる畏るべき事を行なひて名を得たまひし者なり汝はそのエジプトより贖ひいだせし汝の民の前より國々の人を逐はらひたまへり二二而して汝は汝の民イスラエルを永く汝の民となしたまふヱホバよ汝は彼らの神となりたまへり二三然ばヱホバよ汝が僕とその家につきて宣まひし言を永

く堅うして汝の言し如く爲たまへ二四 願くは汝の名の堅く立ち永久に崇められて萬軍のヱホバ、イスラエルの神はイスラエルに神たりと曰れんことを願くは僕ダビデの家の汝の前に堅く立んことを二五 我神よ汝は僕の耳に示して之が爲に家を建んと宣へり是によりて僕なんぢの前に祈る道を得たり二六 ヱホバよ汝は即ち神にましまし此恩典を僕に傳たまへり二七 願くは今僕の家を祝福て汝の前に永く在しめたまへ其はヱホバよ汝の祝福たまへる者は永く祝福を蒙ればなり

第一八章一 此後ダビデ、ペリシテ人を撃てこれを服し又ペリシテ人の手よりガテとその郷里を取り二 彼またモアダを撃ければモアブ人はダビデの臣となりて貢を納たり三 ダビデまたハマテの邊にてゾバの王ハダレゼルを撃り是は彼がユフラテ河の邊にてその權勢を振はんとて往る時なりき四 而してダビデ彼より車千輛騎兵七千歩兵二萬を取りダビデまた一百の車の馬を存してその餘の車馬は皆その足の筋を切り五 その時ダマスコのスリア人ゾバの王ハダレゼルを援けんとて來りければダビデそのスリア人二萬二千を殺せり六 而してダビデ、ダマスコのスリアに鎮臺を置ぬスリア人は貢を納てダビデの臣となれりヱホバ、ダビデを凡てその往く處にて助たまへり七 ダビデ、ハダレゼルの臣僕等の持る金の楯を奪ひて之をヱルサレムに持きたり八 またハダレゼルの邑テブハテとクンより甚だ衆多の銅を取きたれりソロモンこれを用て銅の海と柱と銅の器具を造れり九 時にハマテの王トイ、ダビデがゾバの王ハダレゼルの總の軍勢を撃破りしを聞て一〇 その子ハドラムをダビデ王に遣し安否を問ひかつこれを賀せしむ其はハダレゼル嘗てトイと戰闘をなしたるにダビデ、ハダレゼルと戰ひて之を撃やぶりたればなりハドラム金銀および銅の種々の器を携へきたりければ一一 ダビデ王そのエドム、モアブ、アンモンの子孫ペリシテ人アマレクなどの諸の國民の中より取きたりし金銀とともに是等をもヱホバに奉納たり一二 ゼルヤの子アビシヤイ鹽谷にてエドム人一萬八千を殺せり一三 斯てダビデ、エドムに鎮臺を置エドム人は皆ダビデの臣となりぬヱホバかくダビデを凡その往處にて助けたまへり一四 ダビデはイスラエルの全地を治めてその諸の民に公平と正義を行へり一五 ゼルヤの子ヨアブは軍旅の長アヒルデの子ヨシヤパテは史官一六 アヒトブの子ザドクとアビヤタルの子アビメレクは祭司シヤウシヤは書記官一七 ヱホヤダの子ベナヤはケレテ人とペレテ人の長ダビデの子等は王の座側に侍る大臣なりき

第一九章一 此後アンモンの子孫の王ナハシ死ければその子これに代りて王となりたり二 ダビデ言けるは我ナハシの子ヌンをねんごろに遇らはんかれが父われをねんごろにあしらひたればなりとダビデすなはち彼をその父の故によりて慰めんとて使者を遣はせりダビデの臣僕等アンモンの子孫の地に往きハヌンに詣りてこれを慰めけるに三 アンモンの子孫の牧伯等ハヌンに言けるはダビデ慰籍者を汝につかはしたるに因て彼なんぢの父を

尊ぶと汝の目に見ゆるや彼の臣僕等は此國を窺ひ探りて滅ぼさんとて來れるならずやと四是においてハヌン、ダビデの臣僕等を執へてその鬚を剃おとしその衣服を中より斷て臀までにして之を歸したりしが五或人きたりて此人々の爲られし事をダビデに告ければダビデ人をつかはして之を迎へしめたりその人々おほいに愧たればなり即ち王いひけるは汝ら鬚の長るまでエリコに止まりて然る後かへるべしと六アンモンの子孫自己のダビデに惡まる樣になれるを見しかばハヌンおよびアンモンの子孫すなはち銀一千タラントをおくりてメソポタミヤとスリアマアカおよびゾバより戰車と騎兵とを雇ひいれたり七即ち戰車三萬二千乘にマアカの王とその兵士を雇ひければ彼ら來りてメデバの前に陣を張り是においてアンモンの子孫その邑々より寄あつまりて戰はんとて來れり八ダビデ聞てヨアブと勇士の惣軍を遣しけるに九アンモンの子孫は出て邑の門の前に戰爭の陣列をなせり又援助に來れる王等は別に野に居り一〇時にヨアブ前後より敵の攻寄るを見てイスラエルの倔強の兵士の中を抽擢て之をしてスリア人にむかひて陣列しめ一一その餘の民をばその兄弟アビシヤイの手に交してアンモンの子孫にむかひて陣列しめ一二而して言けるはスリア人もし我に手強からば汝我を助けよアンモンの子孫もし汝に手強からば我なんぢを助けん一三汝勇しくなれよ我儕の民のためと我らの神の諸邑のために我ら勇しく爲ん願くはヱホバその目に善と見ゆる所をなしたまへと一四ヨアブ己に從へる民とともに進みよりてスリア人を攻撃けるにスリア人かれの前より潰奔れり一五アンモンの子孫はスリア人の潰奔れるを見て自己等もまたその兄弟アビシヤイの前より逃奔りて城邑にいりぬ是においてヨアブはヱルサレムに歸れり一六スリア人はそのイスラエルに撃やぶられたるを見て使者を遣はして河の彼旁なるスリア人を將ゐ出せりハダレゼルの軍旅の長ショバクこれを率ゆ一七その事ダビデに聞えければ彼イスラエルを悉く集めヨルダンを渡りて彼らの所に來り之にむかひて戰爭の陣列を立たりダビデかく彼らにむかひて戰爭の陣列を立たれば彼らこれと戰へり一八然るにスリア人イスラエルの前に潰たればダビデ、スリアの兵車の人七千歩兵四萬を殺しまた軍旅の長ショバクを殺せり一九ハダレゼルの臣たる者等そのイスラエルに撃やぶられたるを見てダピデと和睦をなしてこれが臣となれりスリア人は此後ふたたびアンモンの子孫を助くることを爲ざりき

第二〇章一年かへりて王等の戰爭に出る時におよびてヨアブ軍勢を率ゐて出でアンモン人の地を打荒し往てラバを攻圍りされどダビデはヱルサレムに止まりたりヨアブつひにラバを撃壞りてこれを滅ぼせり二ダビデ彼らの王の冠冕をその首より取はなしたりしがその金の重を量り見るに一タラントありまたその中に寶石を嵌たるありき之をダビデの首に冠らせたり彼また甚だ衆多の掠取物をその邑より取り三而して彼またその中の民

を曳いだし鋸と鐵の打車と斧とをもてこれを斬りダビデ、アンモンの子孫の一切の邑に斯く爲り而してダビデとその民はみなヱルサレムに歸りぬ四この後ゲゼルにおいてペリシテ人と戰爭おこりたりしがその時にホシヤ人シベカイ巨人の子孫の一人なるシバイを殺せり彼等つひに攻伏られき五復ペリシテ人と戰爭ありしがヤイルの子エルハナン、ガテのゴリアテの兄弟ラミを殺せりラミの槍の柄は機の膝の如くなりき六またガテに戰爭ありしが其處に一人の身長き人ありその手の指と足の趾は六宛にして合せて二十四あり彼も巨人の生る者なりき七彼イスラエルを挑みしかばダビデの兄弟シメアの子ヨナタンこれを殺せり八是等はガテにて巨人の生る者なりしがダビデの手とその臣僕の手に斃れたり

第二一章一茲にサタン起りてイスラエルに敵しダビデを感動してイスラエルを核數しめんとせり二ダビデすなはちヨアブと民の牧伯等に言けるは汝等ゆきてベエルシバよりダンまでのイスラエル人を數へその數をとりきたりて我に知せよ三ヨアブ答へけるは幾何あるとも願くはヱホバその民を百倍に增たまへ然ながら王わが主よ是はみな我主の僕ならずや然に何とて我主この事を爲んと要たまふや何ぞイスラエルをして之によりて罪を獲せしむべけんやと四されど王つひにヨアブに言勝たればヨアブすなはち出ゆきイスラエルを徧く行めぐりてヱルサレムに還れり五而してヨアブ民の總數をダビデに告たり即ちイスラエルの中には劍を帶る者一百十萬人ありユダの中には劍を帶る者四十七萬人ありき六但しレビとベニヤミンとはその中に數へざりき其はヨアブ王の言を惡みたればなり七この事神の目に惡かりければイスラエルを撃なやましたまへり八ダビデ是において神に申しけるは我この事をなして大に罪を獲たり然ども今ねがはくは僕の罪を除きたまへ我はなはだ愚なる事をなせりと九時にヱホバ、ダビデの先見者ガデにきて言たまひけるは一〇往てダビデに告て言へヱホバかく言ふ我なんぢに三のものを示す汝その一を撰べ我それを汝に爲んと一一ガデすなはちダビデの許に至り之に言けるはヱホバかく言たまふ汝擇べよ一二即ち三年の饑饉か又は汝三月の間汝の敵の前に敗れて汝の仇の劍に追しかれんか又は三日の間ヱホバの劍すなはち疫病この國にありてヱホバの使者イスラエルの四方の境の中にて撃滅ぼすことをせんか我が如何なる答を我を遣せし者に爲べきかを汝決めよ一三ダビデ、ガデに言けるは我おほいに苦む請ふ我はヱホバの手に陷らん其憐憫甚だおほいなればなり人の手には陷らじと一四是においてヱホバ、イスラエルに疫病を降したまひければイスラエルの人七萬人斃れたり一五神また使者をヱルサレムに遣してこれを滅ぼさんとしたまひしが其これを滅ぼすにあたりてヱホバ視てこの禍害をなせしを悔い其ほろぼす使者に言たまひけるは足り今なんぢの手を住めよと時にヱホバの使者はヱブス人オルナンの打場の傍に立をる一六ダビデ目をあげて視るにヱホ

バの使者地と天の間に立て抜身の劍を手にとりてヱルサレムの方にこれを伸をりければダビデと長老等麻布を衣て俯伏り一七而してダビデ神に申しけるは民を數へよと命ぜし者は我ならずや罪を犯し惡き事をなしたる者は我なり然れども是等の羊は何をなせしや我神ヱホバよ請ふ汝の手を我とわが父の家に加へたまへ惟汝の民に加へて之を疚めたまふ勿れと一八時にヱホバの使者ガデに命じ汝ダビデに告てダビデをして上りゆきてヱブス人オルナンの打場にてヱホバのために一箇の壇を築しめよと言り一九是においてダビデはガデがヱホバの名をもて告たる言にしたがひて上りゆけり二〇オルナンは麥を打ゐけるが回顧て天の使の居るを視その四人の子等とともに匿れたり二一やがてダビデはオルナンの方に來りけるがオルナン望てダビデを見すなはち打場より出ゆきて面を地につけてダビデを拝せり二二ダビデ、オルナンに言けるは此打場の處を我に與へよ我そこにてヱホバに一箇の壇を築かん汝その十分の値をとりて之を我にあたへ災害の民におよぶことを止めしめよ二三オルナン、ダビデに言けるは請ふ之を取り王わが主の目に善と觀るところを爲たまへ我なんぢに献げて牛を燔祭の料とし打禾車を柴薪とし麥を素祭とせん我みなこれを奉呈ると二四ダビデ王オルナンに言けるは然るべからず我かならず十分の値をはらひて之を買ん我は汝の物を取てヱホバに奉まつらじ又費なしに燔祭を献ぐることをせじと二五ダビデすなはち其處のために金六百シケルを衡りてオルナンに與へたり二六而してダビデ其處にてヱホバに一箇の祭壇を築き燔祭と酬恩祭を献げてヱホバを龥けるに天より燔祭の壇の上に火を降して之に應へたまへり二七ヱホバすなはちその使者に命じたまひければ彼その劍を鞘に藏めたり二八その時ダビデはヱホバがヱブス人オルナンの打場において己に應へたまふを見たれば其處にて犠牲を献ぐることを爲り二九モーセが荒野にて造りたるヱホバの幕屋と燔祭の壇とは當時ギベオンの崇邱にありけるが三〇ダビデはその前に進みゆきて神に求むることを得せざりき是は彼ヱホバの使者の劍のために懼れたるに因てなり

第二二章

一ダビデ言けるはヱホバ神の室は此なりイスラエルの燔祭の壇は此なりと二ダビデすなはち命じてイスラエルの地に居る異邦人を集めしめ又神の室を建るに用ふる石を琢ために石工を設けたり三ダビデまた門の扉の釘および鎹に用ふる鐵を夥しく備へたり又銅を數しれぬほどに夥しく備へたり四また香柏を備ふること數しれず是はシドン人およびツロの者夥多しく香柏をダビデの所に運びきたりたればなり五ダビデ言けるは我子ソロモンは少くして弱し又ヱホバのために建る室は極めて高大にして萬國に名を得榮を得る者たらざる可らず今我其がために準備をなさんとダビデその死る前に大に之が準備をなせり六而して彼その子ソロモンを召てイスラエルの神ヱホバのために家を建ることを之に命ぜり七即ちダビデ、ソロモンに言け

るは我子よ我は我神ヱホバの名のために家を建る志ありき八然るにヱホバの言われに臨みて言り汝は多くの血を流し大なる戰爭を爲したり汝我前にて多の血を地に流したれば我名の爲に家を建べからず九視よ男子汝に生れん是は平安の人なるべし我これに平安を賜ひてその四周の諸の敵に煩はさるること無らしめん故に彼の名はソロモン(平安)といふべし彼の世に我平安と靜謐をイスラエルに賜はん一〇彼わが名のために家を建ん彼はわが子となり我は彼の父とならん我かれの國の祚を固うして永くイスラエルの上に立しめん一一然ば我子よ願くはヱホバ汝とともに在し汝を盛ならしめ汝の神ヱホバの室を建させて其なんぢにつきて言たる如くしたまはんことを一二惟ねがはくはヱホバ汝に智慧と穎悟を賜ひ汝をイスラエルの上に立て汝の神ヱホバの律法を汝に守らせたまはんことを一三汝もしヱホバがイスラエルにつきてモーセに命じたまひし法度と例規を謹みて行はば汝旺盛になるべし心を強くしかつ勇め懼るる勿れ慄くなかれ一四視よ我患難の中にてヱホバの室のために金十萬タラント銀百萬タラントを備へまた銅と鐵とを數しれぬほど夥多しく備へたり又材木と石をも備へたり汝また之に加ふべし一五かつまた工人夥多しく汝の手にあり即ち石や木を琢刻む者および諸の工作を爲すところの工匠など都てあり一六夫金銀銅鐵は數限りなし汝起て爲せ願くはヱホバ汝とともに在せと一七ダビデまたイスラエルの一切の牧伯等にその子ソロモンを助くることを命じて云く一八汝らの神ヱホバなんぢらと偕に在すならずや四方において泰平を汝らに賜へるならずや即ちこの地の民を我手に付したまひてこの地はヱホバの前とその民の前に服せり一九然ば汝ら心をこめ精神をこめて汝らの神ヱホバを求めよ汝ら起てヱホバ神の聖所を建てヱホバの名のために建るその室にヱホバの契約の櫃と神の聖器を携へいるべし

第二三章一ダビデ老てその日滿ければその子ソロモンをイスラエルの王となせり二ダビデ、イスラエルの一切の牧伯および祭司とレビ人をあつめたり三レビ人の三十歳以上なる者を數へたるにその人々の頭數は三萬八千四その中二萬四千はヱホバの室の事幹を掌どり六千は有司および裁判人たり五四千は門を守る者たりまた四千はダビデが造れる讃美の樂器をとりてヱホバを頌ることをせり六ダビデ、レビの子孫を分ちて班列を立たり即ちゲルション、コハテおよびメラリ七ゲルション人たる者はラダンおよびシメイ八ラダンの子等は長エヒエルにゼタムとヨエル合せて三人九シメイの子等はシロミテ、ハジエル、ハランの三人是等はラダンの宗家の長たり一〇シメイの子等はヤハテ、ジナ、ヱウシ、ベリアこの四人はシメイの子なり一一ヤハデは長ジナはその次ヱウシ、ベリアは子多からざるが故に之をともに數へて一の宗家となせり一二コハテの子等はアムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエルの四人一三アムラムの子等はアロンとモーセ、アロンはその子等とともに永く區別れてその身を潔め

て至聖者となりヱホバの前に香を焚き之に事へ恒にこれが名をもて祝することを爲り一四神の人モーセの子等はレビの支派の中に數へいれらる一五モーセの子等はゲルシヨンおよびエリエゼル一六ゲルシヨンの子等は長はシブエル一七エリエゼルの子等は長はレハビヤ、エリエゼルは此外に男子あらざりき但しレハビヤの子等は甚だ多かりき一八イヅハルの子等は長はシロミテ一九ヘブロンの子等は長子はヱリヤその次はアマリヤその三はヤハジエルその四はヱカメアム二〇ウジエルの子等は長子はミカ次はヱシヤ二一メラリの子等はマヘリおよびムシ、マヘリの子等はエレアザルおよびキシ二二エレアザルは男子なくして死り惟女子ありし而已その女子等はキシの子たるその兄弟等これを娶れり二三ムシの子等はマヘリ、エデル、ヱレモテの三人二四レビの子孫をその宗家に循ひて言ば是のごとし是皆かの頭數を數へられその名を録されてヱホバの家の役事をなせる二十歳以上の者の宗家の長なり二五ダビデ言けらくイスラエルの神ヱホバその民を安んじて永くヱルサレムに住たまふ二六レビ人はまた重ねて幕屋およびその奉事の器具を舁ことあらずと二七ダビデの最後の詞にしたがひてレビ人は二十歳以上よりして數へられたり二八彼らの職はアロンの子孫等の手に屬して神の家の役事を爲し庭と諸の室の用を爲し一切の聖物を潔むるなど凡て神の家の役事を勤むるの事なりき二九また供前のパン素祭の麥粉酵いれぬ菓子鍋にて製る者燒て製る者などを掌どりまた凡て容積と長短を量度ることを掌どり三〇また朝ごとに立てヱホバを頌へ讃ることを掌どれり夕もまた然り三一又安息日と朔日と節會においてヱホバに諸の燔祭を献げ其命ぜられたる所に循ひて數のごとくに斷ずこれをヱホバの前にたてまつる事を掌どれり三二是のごとく彼らは集會の幕屋の職守と聖所の職守とアロンの子孫たるその兄弟等の職守とを守りてヱホバの家の役事をおこなふ可りしなり

第二四章一アロンの子孫の班列は左のごとしアロンの子等はナダブ、アビウ、エレアザル、イタマル二ナダブとアビウはその父に先だちて死て子なかりければエレアザルとイタマル祭司となれり三ダビデ、エレアザルの子孫ザドクおよびイタマルの子孫アヒメレクとともに彼らを分ちて各その職と務に任じたり四エレアザルの子孫の中にはイタマルの子孫の中よりも長たる人多かりき是をもてその分かれし班列はエレアザルの子孫たる宗家の長には十六ありイタマルの子孫たる宗家の長には八あり五斯彼らは籤によりて分たる彼と此と相等し其は聖所の督者および神の督者はエレアザルの子孫の中よりも出でイタマルの子孫の中よりも出ればなり六レビ人ネタネルの子シマヤといふ書記王と牧伯等と祭司ザドクとアビヤタルの子アヒメレクと祭司およびレビ人の宗家の長の前にて之を書しるせり即ちエレアザルのために宗家一を取ばまたイタマルのために宗家一を取り七第一の籤はヨアリブに當り第二はヱダヤに當り八第三はハリム

に當り第四はセオリムに當り九第五はマルキヤに當り第六はミヤミンに當り一〇第七はハツコヅに當り第八はアビアに當り一一第九はヱシユアに當り第十はシカニヤに當り一二第十一はヱリアシブに當り第十二はヤキンに當り一三第十三はホツバに當り第十四はエシバブに當り一四第十五はビルガに當り第十六はインメルに當り一五第十七はヘジルに當り第十八はハビセツに當り一六第十九はベタヒヤに當り第二十はエゼキエルに當り一七第二十一はヤキンに當り第二十二はガムルに當り一八第二十三はデラヤに當り第二十四はマアジアに當れり一九是その職務の順序なり彼らは之にしたがひてヱホバの家にいり其先祖アロンより傳はりし例規によりて勤むべかりしなり即ちイスラエルの神ヱホバの彼に命じたまひしごとし二〇その餘のレビの子孫は左の如しアムラムの子等の中にてはシユバエル、シユバエルの子等の中にてはヱデヤ二一レハビヤについてはレハビヤの子等の中にては長子イツシア二二イヅハリ人の中にてはシロミテ、シロミテの子等の中にてはヤハテ二三ヘブロンの子等の中にては長子ヱリヤ二子アマリヤ三子ヤハジエル四子ヱカメアム二四ウジエルの子等の中にてはミカ、ミカの子等の中にてはシヤミル二五ミカの兄弟をイツシアといふイツシアの子等の中にてはゼカリヤ二六メラリの子等はマヘリおよびムシ、ヤジアの子等はベノ二七メラリの子孫のヤジアより出たる者はベノ、シヨハム、ザツクル、イブリ二八マヘリよりエレアザル出たりエレアザルは子等なかりき二九キシについてはキシの子はヱラメル三〇ムシの子等はマヘリ、エデル、ヱリモテ是等はレビの子孫にしてその宗家にしたがひて言る者なり三一是らの者もまたダビデ王とザドクとアヒメレクと祭司およびレビ人の宗家の長たる者等の前にてアロンの子孫たるその兄弟等のごとく籤を掣り兄の宗家も弟の宗家も異なること無りき

第二五章

一ダビデと軍旅の牧伯等またアサフ、ヘマンおよびヱドトンの子等を選びて職に任じ之をして琴と瑟と鐃鈸を執て預言せしむその職によれば伶人の數左のごとし二アサフの子等はザツクル、ヨセフ、ネタニア、アサレラ皆アサフの子等にしてアサフの手に屬すアサフは王の手につきて預言す三ヱドトンについてはヱドトンの子等はゲダリア、ゼリ、ヱサヤ、ハシヤビヤ、マツタテヤの六人皆琴を操てその父ヱドトンの手に屬すヱドトンはヱホバを讚めかつ頌へて預言す四ヘマンについてはヘマンの子等たる者はブツキヤ、マツタニヤ、ウジエル、シブエル、ヱレモテ、ハナニヤ、ハナニ、エリアタ、ギダルテ、ロマムテエゼル、ヨシベカシヤ、マロテ、ホテル、マハジオテ五是みな神の言をつたふる王の先見者ヘマンの子等にして角を擧ぐ神ヘマンに男子十四人女子三人を賜へり六是等の者は皆その父の手に屬しヱホバの家において歌を謡ひ鐃鈸と瑟と琴をもて神の家の奉事をなせりアサフ、ヱドトンおよびヘマンは王の手につけり七彼等およびヱホバに歌を謡ふことを習へるその兄弟等即ち

巧なる者の數は二百八十八人八 彼ら大も小も巧なる者も習ふ者も皆ともにその職務の籤を掣けるが九 第一の籤はアサフの家のヨセフに當り第二はゲダリアに當れり彼もその兄弟等および子等十二人一〇 第三はザツクルに當れりその子等とその兄弟等十二人一一 第四はイヅリに當れりその子等とその兄弟等十二人一二 第五はネタニヤに當れりその子等とその兄弟等十二人一三 第六はブツキアに當れりその子等とその兄弟等十二人一四 第七はアサレラに當れりその子等とその兄弟等十二人一五 第八はヱサヤに當れりその子等とその兄弟等十二人一六 第九はマツタニヤに當れりその子等とその兄弟等十二人一七 第十はシメイに當れりその子等とその兄弟等十二人一八 第十一はアザリエルに當れりその子等とその兄弟等十二人一九 第十二はハシヤビアに當れりその子等とその兄弟等十二人二〇 第十三はシユバエルに當れりその子等とその兄弟等十二人二一 第十四はマツタテヤに當れりその子等とその兄弟等十二人二二 第十五はヱレモテに當れりその子等とその兄弟等十二人二三 第十六はハナニヤに當れりその子等とその兄弟等十二人二四 第十七はヨシベカシヤに當れりその子等とその兄弟等十二人二五 第十八はでハナニに當れりその子等とその兄弟等十二人二六 第十九はマロテに當れりその子等とその兄弟等十二人二七 第二十はエリアタに當れりその子等とその兄弟等十二人二八 第二十一はホテルに當れりその子等とその兄弟等十二人二九 第二十二はギダルテに當れりその子等とその兄弟等十二人三〇 第二十三はマハジオテに富れりその子等とその兄弟等十二人三一 第二十四はロマムテエゼルに當れりその子等とその兄弟等十二人

第二十六章一 門を守る者の班列は左のごとしコラ人の中にてはアサフの子コレの子なるメシレミヤ二 メシレミヤの子等は長子はゼカリヤその次はヱデアエルその三はゼバデヤその四はヤテニエル三 その五はエラムその六はヨハナンその七はエリヨエナイ四 またオベデエドムの子等は長子はシマヤその次はヨザバデその三はヨアその四はサカルその五はネタネル五 その六はアシミエルその七はイツサカルその八はピウレタイ是は神かれを祝福たまひしなり六 また彼の子シマヤにも數人の子生れたりしがその子等は大勇士にしてその父の家の主たる者なりき七 すなはちシマヤの子等はオテニ、レバエル、オベデ、エルザバデ、エルザバデの兄弟エリウとセマキヤは力ある人なりき八 是みなオベデエドムの孫子なり彼らとその子等および其兄弟等は合せて六十二人皆力ある者にしてその職に堪ふ是みなオベデエドムに屬する者なり九 メシレミヤも子等と兄弟等合せて十八人あり皆力ある者なりき一〇 メラリの子孫ホサもまた子等ありき其長はシムリ是は長子ならざりしかどもその父これを長となせしなり一一 その次はヒルキヤその三はデバリヤその四はゼカリヤ、ホサの子等と兄弟等は合せて十三人一二 門を守るところの班列此長等の中より出でみなその兄弟と等く勤務をなしてヱ

ホバの家に仕ふ一三彼ら門々を分つために小も大もともにその宗家に循ひて籤を掣たりしが一四東の方の籤はシレミヤに當れり又その子ゼカリヤのために籤を掣けるに北の方の籤これに當れりゼカリヤは智慧ある議士なりき一五オベデエドムは南の方の籤に當りその子等は倉の籤に當れり一六シユパムおよびホサは西の方の籤にあたり坂の大路にあるシヤレケテの門の傍に居り守者はみな相對ふ一七東の方にはレビ人六人北の方には日々に四人南の方にも日々に四人倉のかたはらには二人に二人一八西の方バルバルにおいては大路に四人バルバルに二人一九門を守る者の班列は是のごとし皆コラの子孫とメラリの子孫なり二〇また神の府庫および聖物の府庫を司どれる彼らの兄弟なるレビ人は左のごとし二一ラダンの子孫すなはちラダンより出たるゲルシヨン人にしてゲルシヨン人ラダンの宗家の長たる者の中にてはヱヒエリ二二およびヱヒエリの子等ならびにその兄弟ゼタムとヨエル是らはヱホバの家の府庫を司どれり二三アムラミ人イヅハリ人ヘブロン人ウジエリ人の中においては左のごとし二四モーセの子ゲルシヨムの子なるシブエルは府庫の宰たり二五その兄弟にしてエリエゼルより出たる者は即ちエリエゼルの子レハビヤその子ヱサヤその子ヨラムその子ジクリその子シロミテ二六此シロミテとその兄弟等はすべての聖物の府庫を掌どれりその聖物はすなはちダビデ王宗家の長千人の長百人の長軍旅の長等などが奉納たる者なり二七即ち戰爭において獲たる物および掠取物を奉納てヱホバの家の修繕に供へたるなり二八凡て先見者サムエル、キシの子サウル、ネルの子アブネル、ゼルヤの子ヨアブ等が奉献たる物および其他の奉納物は皆シロミテとその兄弟等の手の下にありき二九イヅハリ人の中にてはケナニヤとその子等イスラエルの外事を理め有司となり裁判人となれり三〇ヘブロン人の中にてはハシヤビアおよびその兄弟などの勇士一千七百人ありてヨルダンの此旁すなはち西の方にてイスラエルの監督者となりヱホバの一切の事を行ひ王の用を爲り三一ヘブロン人の中にてはその系譜と宗家とに依ばヱリヤといふ者ヘブロン人の長なりダビデの治世の四十年に彼らを尋ね求めギレアデのヤゼルにおいて彼らの中より大勇士を得たり三二ヱリヤの兄弟たる勇士は二千七百人にして皆宗家の長たりダビデ王かれらをしてルベン人ガド人およびマナセの半支派を監督しめ神につける事と王につける事とを宰どらせたり

第二十七章一イスラエルの子孫すなはち宗家の長千人の長百人の長およびその有司等は年の惣の月のあひだ月ごとに更り入り更り出で其班列の諸の事をつとめて王に事へたるが其數を按ふるに一班列に二萬四千人ありき二先第一の班列すなはち正月の分はザブデエルの子ヤシヨベアムこれを率ゆ其班列は二萬四千人三彼は正月の軍團の長等の首たる者にしてペレヅの子孫なり四二月の班列はアホア人ドダイその班列の者とともにこれを率ゆミクロテといふ宰あり其班列は二萬四千人五三月の軍團

を統る第三の將は祭司の長ヱホヤダの子ベナヤその班列は二萬四千人六このベナヤはかの三十人の中の勇士にして三十人の上にたてり彼の子アミザバデその班列にあり七四月の分を統る第四の將はヨアブの弟アサヘルにしてその子ゼバデヤこれに次り其班列は二萬四千人八五月の分を統る第五の將はイズラヒ人シヤンモテその班列は二萬四千人九六月の分を統る第六の將はテコア人イツケシの子イラその班列は二萬四千人一〇七月の分を統る第七の將はエフライムの子孫たるペロニ人ヘレヅその班列は二萬四千人一一八月の分を統る第八の將はゼラの子孫たるホシヤ人シベカイその班列は二萬四千人一二九月の分をすぶる第九の將はベニヤミンの子孫たるアナトテ人アビエゼルその班列は二萬四千人一三十月の分をすぶる第十の將はゼラの子孫たるネトパ人マハライその班列は二萬四千人一四十一月の分をすぶる第十一の將はエフライムの子孫たるピラトン人ベナヤその班列は二萬四千人一五十二月の分を統る第十二の將はオテニエルの子孫たるネトパ人ヘルダイその班列は二萬四千人一六イスラエルの支派を治むる者は左のごとしルベン人の牧伯はヂクリの子エリエゼル、シメオンの牧伯はマアカの子シバテヤ一七レビ人の牧伯はケムエルの子ハシヤビヤ、アロン人の牧伯はザドク一八ユダの牧伯はダビデの兄弟エリウ、イツサカルの牧伯はミカエルの子オムリ一九ゼブルンの牧伯はオバデヤの子イシマヤ、ナフタリの牧伯はアズリエルの子ヱレモテ二〇エフライムの子孫の牧伯はアザジヤの子ホセア、マナセの半支派の牧伯はペダヤの子ヨエル二一ギレアデなるマナセの半支派の牧伯はゼカリヤの子イド、ベニヤミンの牧伯はアブネルの子ヤシエル二二ダンの牧伯はヱロハムの子アザリエル、イスラエルの支派の牧伯等は是のごとし二三二十歳以下なる者はダビデこれを數へざりき其はヱホバかつてイスラエルを増て天空の星のごとくにせんと言たまひしことあればなり二四ゼルヤの子ヨアブ數ふることを始めたりしがこれを爲をへざりきそのかぞふることによりて震怒イスラエルにおよべりその數はまたダビデ王の記録の籍に載ざりき二五アデエルの子アズマウテは王の府庫を掌どりウジヤの子ヨナタンは田野邑々村々城などにある府庫を掌どり二六ケルブの子エズリは地を耕す農業の人を掌どり二七ラマテ人シメイは葡萄園を掌どりシフミ人ザブデはその葡萄園より取る葡萄酒の蔵を掌どり二八ゲデラ人バアルハナンは平野なる橄欖樹と桑樹を掌どりヨアシは油の蔵を掌どり二九シヤロン人シテナイはシヤロンにて牧ふ牛の群を掌どりアデライの子シヤバテは谷々にある牛の群を掌どり三〇イシマエル人オビルは駱駝を掌どりメロノテ人ヱデヤは驢馬を掌どり三一ハガリ人ヤジズは羊の群を掌どれり是みなダビデ王の所有を掌どれる者なり三二またダビデの叔父ヨナタンは議官たり彼は智慧あり學識ある者なり又ハクモニの子ヱヒエルは王の子等の補佐たり三三アヒトペルは王の議官たりアルキ人ホシヤイは王の伴侶たり三四

アヒトペルに次ぐ者はベナヤの子ヱホヤダおよびアビヤタル王の軍旅の長はヨアブ

第二八章一茲にダビデ、イスラエルの一切の長支派の長王に事ふる班列の長千人の長百人の長王とその子等の所有及び家畜を掌どる者閹官有力者諸勇士などを盡くヱルサレムに召集め二而してダビデ王その足にて起て言けるは我兄弟等我民よ我に聴け我はヱホバの契約の櫃のため我らの神の足臺のために安居の家を建んとの志ありて已にこれを建る準備をなせり三然るに神我に言たまへり汝は我名のために家を建べからず汝は軍人にして許多の血を流したればなりと四然りと雖もイスラエルの神ヱホバ我父の全家の中より我を選びて永くイスラエルに王たらしめたまふ即ちユダを選びて長となしユダの全家の中より我父の家を選び我父の子等の中にて我を悦びイスラエルの王とならしめたまふ五而してヱホバ我に衆多の子をたまひて其わが諸の子等の中より我子ソロモンを選び之をヱホバの國の位に坐せしめてイスラエルを治めしめんとしたまふ六ヱホバまた我に言たまひけるは汝の子ソロモンはわが家および我庭を作らん我かれを選びて吾子となせり我かれの父となるべし七彼もし今日のごとく我誡命と律法を堅く守り行はば我その國を永く堅うせんと八然ば今ヱホバの會衆たるイスラエルの全家の目の前および我らの神の聞しめす所にて汝らに勧む汝らその神ヱホバの一切の誡命を守りかつ之を追もとむべし然せば汝等この美地を保ちてこれを汝らの後の子孫に永く傳ふることを得ん九我子ソロモンよ汝の父の神を知り完全心をもて喜び勇んで之に事へよヱホバは一切の心を探り一切の思想を暁りたまふなり汝もし之を求めなば之に遇ん然ど汝もし之を棄なば永く汝を棄たまはん一〇然ば汝謹めよヱホバ汝を選びて聖所とすべき家を建させんと爲たまへば心を強くしてこれを爲べしと一一而してダビデは殿の廊およびその家その府庫その上の室その内の室贖罪所の室などの式様をその子ソロモンに授け一二また其心に思ひはかれる一切の物すなはちヱホバの家の庭四周の諸の室神の家の府庫聖物の府庫などの式様を授け一三また祭司およびレビ人の班列とヱホバの家の諸の奉事の工とヱホバの家の諸の奉事の器皿とにつきて諭すところあり一四また諸の奉事に用ふる金の器皿を作る金の重量を定め又諸の奉事の器に用ふる諸の銀の器皿の銀の重量を定む一五即ち金の燈臺とその金の燈盞の重量を宣て一切の燈臺とその燈盞の重量を定め又銀の燈臺につきても各々の燈臺の用法にしたがひて燈臺とその燈盞の重量を定め一六また供前のパンの案につきてはその各の案のために金の重量を定め又銀の案のためにも銀を定め一七又肉鉤盂杓のために用ふる純金の重量を定め金の大斝につきてもまた各々の大斝のために重量を定め銀の一切の大斝のためにも重量を定め一八また香壇のために用ふる精金の重量を定めかつ車なるケルビムの式様の金を定む此ケルビムはその翼を展

てヱホバの契約の櫃を覆ふ一九而してダビデ言けらく此工事の式樣は皆ことごとくヱホバのその手を我上にくだして我を教へて書せたまひし者なりと二〇かくてダビデその子ソロモンに言けるは汝 心を強くし勇みてこれを爲せ懼るる勿れ慄くなかれヱホバ神我神汝とともに在さん彼かならず汝を離れず汝を棄ず汝をしてヱホバの家の奉事の諸の工を成終しめたまふべし二一視よ神の家の諸の役事をなすためには祭司とレビ人の班列あり又 諸の工と從事を悦こびて爲ところの諸の技巧者汝とともに在り且また牧伯等および一切の民汝の命ずるところを悉く行はん

第二九章

一ダビデ王また全會衆に言けるは我子ソロモンは神の惟獨選びたまへる者なるが少くして弱く此工事は大なり此殿は人のために非ずヱホバ神のためにする者なればなり二是をもて我力を盡して我神の家のために物を備へたり即ち金の物を作る金 銀の物の銀 銅の物の銅 鐵の物の鐵 木の物の木を備へたり又葱珩 嵌石 黑石火崗 諸の寶石蠟石など夥多し三かつまた我わが神の家を悦ぶが故に聖 所のために備へたる一切の物の外にまた自己の所有なる金銀をわが神の家に献ぐ四即ちオフルの金三千タラント精銀七千タラントを献げてその家々の壁を蔽ふに供ふ五金は金の物に銀は銀の物に凡て工人の手にて作るものに用ふべし誰か今日自ら進んでヱホバのためにその手に物を盈さんかと六是において宗家の長イスラエルの支派の牧伯等千人の長 百人の長および王の工事を掌どる者等誠意より献物をなせり七その神の家の奉事のために献げたるものは金五千タラント一萬ダリク銀一萬タラント 銅 一萬八千タラント鐵十萬タラント八また寶石ある者はゲルシヨン人ヱヒエルの手に託て之を神の家の府庫に納めたり九彼ら斯誠意よりみづから進んでヱホバに献げたれば民その献ぐるを喜べりダビデ王もまた大に喜びぬ一〇茲にダビデ全會衆の前にてヱホバを頌へたりダビデの曰く我らの先祖イスラエルの神ヱホバよ汝は世々限なく頌へまつるべきなり一一ヱホバよ權勢と能力と榮光と光輝と威光とは汝に屬す凡て天にある者地にある者はみな汝に屬すヱホバよ國もまた汝に屬す汝は萬有の首と崇られたまふ一二富と貴とは共に汝より出づ汝は萬有を主宰たまふ汝の手には權勢と能力あり汝の手は能く一切をして大たらしめ又強くならしむるなり一三然ば我儕の神よ我儕今なんぢに感謝し汝の尊き名を讃美す一四但し我ら斯のごとく自ら進んで献ぐることを得たるも我は何ならんやまた我民は何ならんや萬の物は汝より出づ我らは只汝の手より受て汝に献げたるなり一五汝の前にありては我らは先祖等のごとく旅客たり寄寓者たり我らの世にある日は影のごとし望む所ある無し一六我らの神ヱホバよ汝の聖名のために汝に家を建んとて我らが備へたる此衆多の物は凡て汝の手より出づ亦皆なんぢの所有なり一七我神よ我また知る汝は心を鑒みたまひ又正直を悦びたまふ我は正き心をもて眞實より

此一切の物を献げたり今我また此にある汝の民が眞實より献物をするを見て喜悦にたへざるなり一八 我らの先祖アブラハム、イサク、イスラエルの神ヱホバよ汝の民をして此精神を何時までもその心の思念に保たしめその心を固く汝に歸せしめたまへ一九 又わが子ソロモンに完全心を與へ汝の誡命と汝の證言と汝の法度を守らせて之をことごとく行はせ我が備をなせるその殿を建させたまへ二〇 ダビデまた全會衆にむかひて汝ら今なんぢらの神ヱホバを頌へよと言ければ全會衆その先祖等の神ヱホバを頌へ俯てヱホバと王とを拜せり二一 而して其翌日に至りてイスラエルの一切の人のためにヱホバに犠牲を献げヱホバに燔祭を献げたり其牡牛一千牡羊一千羔羊一千またその灌祭と祭物夥多しかりき二二 その日彼ら大に喜びてヱホバの前に食ひかつ飲み／さらに改めてダビデの子ソロモンを王となしヱホバの前にてこれに膏をそそぎて主君となし又ザドクを祭司となせり二三 かくてソロモンはヱホバの位に坐しその父ダビデに代りて王となりその繁榮を極むイスラエルみな之に從がふ二四 また一切の牧伯等勇士等およびダビデ王の諸の子等みなソロモン王に服事す二五 ヱホバ、イスラエルの目の前にてソロモンを甚だ大ならしめ彼より前のイスラエルの王の未だ得たること有ざる王威を之に賜へり二六 夫ヱッサイの子ダビデはイスラエルの全地を治めたり二七 そのイスラエルを治めし間は四十年なり即ちヘブロンにて七年世を治めヱルサレムにて三十三年世を治めたりき二八 遐齢にいたり年も富も尊貴も滿足て死り其子ソロモンこれに代りて王となる二九 ダビデ王が始より終まで爲たる事等は先見者サムエルの書預言者ナタンの書および先見者ガドの書に記さる三〇 其中にはまた彼の政治とその能力および彼とイスラエルと國々の諸の民に臨みしところの事等を載す

歴代志略下

第一章一 ダビデの子ソロモン堅くその國にたてりその神ヱホバこれとともに在して之を甚だ大ならしめたまひき二 茲にソロモン、イスラエルの一切の人々すなはち千人の長 百人の長 裁判人ならびにイスラエルの全地の諸の牧伯等宗家の長などに告る所あり三 而してソロモンおよび全會衆ともにギベオンなる崇邱に往りヱホバの僕モーセが荒野にて作りたる神の集會の幕屋かしこにあればなり四 されど神の契約の櫃はダビデすでにキリアテヤリムよりこれが爲に備へたる處に携へ上れりダビデ曩にヱルサレムにて之が爲に幕屋を張まうけたりき五 またホルの子ウリの子なるベザレルが作りたる銅の壇彼處においてヱホバの幕屋の前にありソロモンおよび會衆これに就きて求む六 即ちソロモン彼處に上りゆき集會の幕屋の中にあるヱホバの前なる銅の壇に就き燔祭一千を其上に献げたり七 その夜神ソロモンに顯れてこれに言たまひけるは我なんぢに何を與ふべきか求めよ八 ソロモン神に申しけるは汝は我父ダビデに大なる恩惠をほどこし又我をして彼に代りて王とならしめたまへり九 今ヱホバ神よ願くは我父ダビデに宣ひし事を堅うしたまへ其は汝地の塵のごとき衆多の民の上に我を王となしたまへばなり一〇 我が此民の前に出入することを得んために今我に智慧と智識とを與へたまへ斯のごとき大なる汝の民を誰か鞫きえんや一一 神ソロモンに言たまひけるは此事なんぢの心にあり汝は富有をも財寶をも尊貴をも汝を惡む者の生命をも求めずまた壽長からんことをも求めず惟智慧と智識とを己のためにもとめて我が汝を王となしたる我民を鞫かんとすれば一二 智慧と智識は已に汝に授かれり我また汝の前の王等の未だ得たること有ざる程の富有と財寶と尊貴とを汝に與へん汝の後の者もまた是のごときを得ざるべし一三 斯てソロモンはギベオンの崇邱を去り集會の幕屋の前を去りてヱルサレムに歸りイスラエルを治めたり一四 ソロモン戰車と騎兵とを集めしに戰車一千四百輛騎兵一萬二千人ありきソロモンこれを戰車の邑々に置き又ヱルサレムにて王の所に置り一五 王銀と金とを石のごとくヱルサレムに多からしめまた香柏を平野の桑樹のごとく多からしめたり一六 ソロモンの有る馬は皆エジプトよりひききたれり王の商賈一群一群となして之を取いだし群ごとに價金をはらへり一七 エジプトより取いだして携へ上る戰車一輛は銀六百馬一匹は百五十なり是のごとくヘテ人の諸の王等およびスリアの王等のためにもその手をもて取いだせり

第二章一 茲にソロモン、ヱホバの名のために一の家を建てまた己の國のために一の家を建んとし二 ソロモンすなはち荷を負べき者七萬人山において木や石を斫べき者八萬人是等を監督すべき者三千六百人を數へ出せり三 ソロモンまづツロの王ヒラムに人を遣して言しめけるは汝はわが父ダビデにその住むべき家

を建る香柏をおくれり請ふ彼になせしごとく亦我にもせよ**四**今我わが神ヱホバの名のために一の家を建て之を聖別て彼に奉つり彼の前に馨しき香を焚き常に供前のパンを供へ燔祭を朝夕に献げまた安息日月朔ならびに我らの神ヱホバの節期などに献げんとす是はイスラエルの永く行ふべき事なればなり**五**我建る家は大なり其は我らの神は諸の神よりも大なればなり**六**然ながら天も諸天の天も彼を容ること能はざれば誰か彼のために家を建ることを得んや我は何人ぞや争か彼のために家を建ることを得ん唯彼の前に香を焚くためのみ**七**然ば請ふ今金銀銅鐵の細工および紫 赤青の製造に精しく雕刻の術に巧なる工人一箇を我に遣り我父ダビデが備へおきたるユダとヱルサレムのわが工人とともに操作しめよ**八**請ふ汝また香柏松木および白檀をレバノンより我におくれ我なんぢの僕等がレバノンにて木を斫ることを善するを知るなり我僕また汝の僕と共に操作べし**九**是のごとくして我ために材木を多く備へしめよ其は我が建んとする家は高大を極むる者なるべければなり**一〇**我は木を斫る汝の僕に搗麥二萬石大麥二萬石酒二萬バテ油二萬バテを與ふべしと**一一**是においてツロの王ヒラム書をソロモンにおくりて之に答へて云ふヱホバその民を愛するが故に汝をもて之が王となせりと**一二**ヒラムまた言けるは天地の造主なるイスラエルの神ヱホバは讃べきかな彼はダビデ王に賢き子を與へて之に分別と才智とを賦け之をしてヱホバのために家を建てまた己の國のために家を建ることを得せしむ**一三**今我わが達人ヒラムといふ才智ある工人一人を汝におくる**一四**彼はダンの子孫たる婦の産る者にて其父はツロの人なるが金銀銅鐵木石の細工および紫 布青布細布赤布の織法に精しく又能く各種の雕刻を爲し奇巧を凝して諸の工をなすなり然ば彼を用ひてなんぢの工人および汝の父わが主ダビデの工人とともに操作しめよ**一五**是については我主の宣まへる小麥大麥 油および酒をその僕等に遣りたまへ**一六**汝の凡て需むるごとく我らレバノンより木を斫いだしこれを筏にくみて海よりヨツバにおくるべければ汝これをヱルサレムに運びのぼりたまへと**一七**ここにおいてソロモンその父ダビデが核數しごとくイスラエルの國にをる異邦人をことごとく核數みるに合せて十五萬三千六百人ありければ**一八**その七萬人をもて荷を負ふ者となし八萬人をもて山にて木や石を斫る者となし三千六百人をもて民を操作かしむる監督者となせり

第三章**一**ソロモン、ヱルサレムのモリア山にヱホバの家を建ることを始む彼處はその父ダビデにヱホバの顯はれたまひし所にて即ちヱブス人オルナンの打場の中にダピデが備へし處なり**二**之を建ることを始めたるはその治世の四年の二月二日なり**三**神の家を建るためにソロモンの置たる基は是のごとし長六十キユビト 潤二十キユビト皆 古の尺に循がふ**四**家の前の廊は家の潤にしたがひてその長二十キユビトまたその高は百二十キユビトその内は純 金をもて蔽ふ**五**またその大殿は松の木をもて

張つめ美金をもて之を蔽ひその上に棕櫚と鏈索の形を施こし六また寶石をもてその家を美しく飾るその金はパルワイムの金なり七彼また金をもてその家その梁その閾その壁およびその戸を蔽ひ壁の上にケルビムを刻つく八また至聖所の家を造りしがその長は家の濶にしたがひて二十キユビトその濶も二十キユビト、美金をもてこれを蔽ふその金六百タラント九その釘の金は重五十シケルまた上の室も金にて覆ふ一〇また至聖所の家の内に刻鏤めたる二のケルビムを造り金をこれに覆ふ一一そのケルビムの翼は長二十キユビト此ケルブの一の翼は五キユビトにして家の壁に達しその他の翼も五キユビトにして彼のケルブの翼に達す一二また彼ケルブの一の翼は五キユビトにして家の壁に達しその他の翼も五キユビトにして此ケルブの翼と相接はる一三是等のケルビムの翼はその舒ひろがること二十キユビト共にその足にて立ちその面を家に向く一四彼また青紫赤の布および細布をもて障蔽の幕を作りケルビムをその上に繍ふ一五また家の前に柱二本を作るその高は三十五キユビトその頂の頭は五キユビト一六また環飾を造り鏈索を之に繞らしてこれを柱の頂に施こし石榴一百をつくりてその鏈索の上に施こす一七この柱を拝殿の前に竪て一本を右に一本を左に置ゑ右なる者をヤキンと名け左なる者をボアズと名く

第四章一ソロモンまた銅の壇を作れりその長二十キユビト濶二十キユビトその高十キユビト二また海を鋳造れり此邊より彼邊まで十キユビトにしてその周圍は圓くその高は五キユビトその周圍には三十キユビトの縄をめぐらすべし三その下には牛の像ありてその周圍を繞る即ち一キユビトに十宛ありて海の周圍を繞れり此牛は二行にして海を鋳る時に鋳付たるなり四その海は十二の牛の上に立りその三は北にむかひ三は西にむかひ三は南にむかひ三は東にむかふ海はその上にありて牛の後はみな内にむかふ五その厚は手寛その邊は百合花形にして杯の邊の如くに作れり是は三千バテを受容る六彼また洗盤十箇を作りて五箇を右に五箇を左に置たり是はものを洗ふ所にして燔祭の品をその中にて灌ぐ海は祭司が其身を洗ふ處なり七また金の燈臺十をその例規に從ひて作り拝殿の中に五を右に五を左に置き八また案十を作りて拝殿の中に五を右に五を左に据ゆ又金の鉢一百を作れり九彼また祭司の庭と大庭および庭の戸を作り銅をもてその扉を覆ふ一〇海は東のかた右の方に置て南に向はしむ一一ヒラムまた鍋と火鏟と鉢とを作れり／斯ヒラムはソロモン王のためになせる神の家の諸の工事を終たり一二即ち二の柱と毬とその二の柱の頂の頭およびその柱の頂なる頭の二の毬を包む二の網工一三ならびに其ふたつの網工の上にほどこす石榴四百この石榴は各々の網工の上に二行づつありて柱の頂なる頭の二の毬を包む一四また臺を作り臺の上の洗盤を作れり一五また一の海とその下なる十二の牛一六および鍋火鏟肉叉などヱホバの家の諸の器具を達人ヒラムソロモン王の爲に作りたり是みな磨

銅なり一七王ヨルダンの窪地に於てスコテとゼレダタの間の黏土の地にて是等を鑄させたり一八是のごとくソロモン是らの諸の器皿を甚だ多く造りたればその銅の重は測られざりき一九ソロモン神の家の一切の器皿を造れり即ち金の壇供前のパンを載る案二〇また定規のごとく神殿の前にて火をともすべき純金の燈臺およびその燈盞二一その花その燈盞その燈鉗是等は金の純精なる者なり二二また剪刀鉢匙火盤是等も純金なり又家の内の戸すなはち至聖所の戸および拜殿の戸の肘釘是も金なり

第五章一斯ソロモンがヱホバの家のために爲る一切の工事をはれり是においてソロモンその父ダビデが奉納たる物なる金銀および諸の器皿を携へいりて神の家の府庫の中に置り二茲にソロモン、ヱホバの契約の櫃をダビデの邑シオンより舁のぼらんとてイスラエルの長老者と諸の支派の長等イスラエルの子孫の宗家の長をヱルサレムに召集めければ三イスラエルの人みな七月の節筵に當りて王の所に集まり四イスラエルの長老等みな至りレビ人契約の櫃を執あげ五その契約の櫃と集會の幕屋と幕屋にありし諸の聖器を舁のぼれり即ち祭司レビ人これを舁のぼりぬ六時にソロモン王および彼の許に集まれるイスラエルの會衆契約の櫃の前にありて羊と牛を献げたりしがその數多くして書すことも數ふることも能はざりき七かくて祭司等ヱホバの契約の櫃をその處に舁いれたり即ち室の神殿なる至聖所の中のケルビムの翼の下に舁いりぬ八ケルビムは翼を契約の櫃の所の上に舒べケルビム上より契約の櫃とその杠を掩ふ九杠長かりければ杠の末は神殿の前の契約の櫃より見えたり然れども外には見えざりき其は今日まで彼處にあり一〇契約の櫃の内には二枚の板の外何もあらず是はイスラエルの子孫のエジプトより出たる時ヱホバが彼らと契約を結びたまへる時にモーセがホレブにて藏めたる者なり一一斯て祭司等は聖所より出たり此にありし祭司はみな身を潔めその班列によらずして職務をなせり一二またレビ人の謳歌者すなはちアサフ、ヘマン、ヱドトン及び彼らの子等と兄弟等はみな細布を纏ひ鐃鈸と瑟と琴とを操て壇の東に立りまた祭司百二十人彼らとともにありて喇叭を吹り一三喇叭を吹く者と謳歌者とは一人のごとくに聲を斉うしてヱホバを讃かつ頌へたりしが彼ら喇叭鐃鈸等の樂器をもちて聲をふりたて善かなヱホバその矜憫は世々限なしと言てヱホバを讃ける時に雲その室すなはちヱホバの室に充り一四祭司は雲の故をもて立て奉事をなすことを得ざりきヱホバの榮光神の室に充たればなり

第六章一是においてソロモン言けるはヱホバは濃き雲の中に居んと言たまひしが二我汝のために住むべき家永久に居べき所を建たりと三而して王その面をふりむけてイスラエルの全會衆を祝せり時にイスラエルの會衆は皆立をれり四彼いひけるはイスラエルの神ヱホバは讃べき哉ヱホバはその口をもて吾

父ダビデに言ひその手をもて之を成とげたまへり五 即ち言たまひけらく我はわが民をエジプトの地より導き出せし日より我名を置べき家を建しめんためにイスラエルの諸の支派の中より何の邑をも選みしこと無く又何人をも選みて我民イスラエルの君となせしこと無し六 只我はわが名を置くためにヱルサレムを選みまた我民イスラエルを治めしむるためにダビデを選めり七 夫イスラエルの神ヱホバの名のために家を建ることは我父ダビデの心にありき八 然るにヱホバわが父ダビデに言たまひけるは我名のために家を建ること汝の心にあり汝の心にこの事あるは善し九 然れども汝はその家を建べからず汝の腰より出る汝の子その人わが名のために家を建べしと一〇 而してヱホバその言たまひし言をおこなひたまへり即ち我わが父ダビデに代りて立ちヱホバの言たまひしごとくイスラエルの位に坐しイスラエルの神ヱホバの名のために家を建て一一 その中にヱホバがイスラエルの子孫になしたまひし契約を容る櫃ををさめたりと一二 ソロモン、イスラエルの全會衆の前にてヱホバの壇の前に立てその手を舒ぶ一三 ソロモンさきに長五キユビト濶五キユビト高三キユビトの銅の臺を造りてこれを庭の眞中に据おきたりしが乃ちその上に立ちイスラエルの全會衆の前にて膝をかがめ其手を天に舒て一四 言けるはイスラエルの神ヱホバ天にも地にも汝のごとき神なし汝は契約を保ちたまひ心を全うして汝の前に歩むところの汝の僕等に恩恵を施こしたまふ一五 汝は汝の僕わが父ダビデにのたまひし所を保ちたまへり汝は口をもて言ひ手をもて成就たまへること今日のごとし一六 イスラエルの神ヱホバよ然ば汝が僕わが父ダビデに語りて若し汝の子孫その道を愼みて汝がわが前に歩めるごとくに我律法にあゆまばイスラエルの位に坐する人わが前にて汝に缺ること無るべしと言たまひし事をダビデのために保ちたまへ一七 然ばイスラエルの神ヱホバよ汝が僕ダビデに言たまへるなんぢの言に效驗あらしめたまへ一八 但し神果して地の上に人とともに居たまふや夫天も諸天の天も汝を容るに足ず況て我が建たる此家をや一九 然れども我神ヱホバよ僕の祈祷と懇願をかへりみて僕が今汝の前に祈るその號呼と祈祷を聽たまへ二〇 願くは汝の目を夜晝此家の上即ち汝が其名を置んと言たまへる所の上に開きたまへ願くは僕がこの處にむかひて祈らん祈祷を聽たまへ二一 願くは僕と汝の民イスラエルがこの處にむかひて祈る時にその懇願を聽たまへ請ふ汝の住處なる天より聽き聽て赦したまへ二二 人その隣人にむかひて罪を犯せることありてその人誓をもて誓ふことを要められんに若し來りてこの家において汝の壇の前に誓ひなば二三 汝天より聽て行ひ汝の僕等を鞫き惡き者に返報をなしてその道をその首に歸し義者を義としてその義にしたがひて之を待ひたまへ二四 汝の民イスラエルなんぢに罪を犯したるがために敵の前に敗れんに若なんぢに歸りて汝の名を崇め此家にて汝の前に祈り願ひなば二五 汝天より聽て汝の民イスラエルの罪を赦し汝

が彼等とその先祖に與へし地に彼等を歸らしめたまへ二六彼らが汝に罪を犯したるがために天閉て雨なからんに彼ら若この處にむかひて祈り汝の名を崇め汝が彼らを苦しめたまふ時にその罪を離れなば二七汝天より聽きて汝の僕等なんぢの民イスラエルの罪を赦したまへ汝既にかれらにその歩むべき善道を教へたまへり汝の民に與へて產業となさしめたまひし汝の地に雨を降したまへ二八若くは國に饑饉あるか若くは疫病枯死朽腐蟊賊稲蟗あるか若くは其敵かれらをその國の邑に圍む等如何なる災禍如何なる疾病あるとも二九もし一人或は汝の民イスラエルみな各々おのれの災禍と憂患を知てこの家にむかひて手を舒なば如何なる祈祷如何なる懇願をなすとも三〇汝の住處なる天より聽て赦し各々の人にその心を知たまふごとくその道々にしたがひて報いたまへ其は汝のみ人々の心を知たまへばなり三一汝かく彼らをして汝が彼らの先祖に與へたまへる地に居る日の間つねに汝を畏れしめ汝の道に歩ましめたまへ三二且汝の民イスラエルの者にあらずして汝の大なる名と強き手と伸たる腕とのために遠き國より來れる異邦人においてもまた若來りてこの家にむかひて祈らば三三汝の住處なる天より聽き凡て異邦人の汝に籲もとむるごとく成たまへ汝かく地の諸の民をして汝の名を知らしめ汝の民イスラエルの爲ごとくに汝を畏れしめ又わが建たる此家は汝の名をもて稱らるるといふことを知しめたまへ三四汝の民その敵と戰はんとて汝の遣はしたまふ道に進める時もし汝が選びたまへるこの邑およびわが汝の名のために建たる家にむかひて汝に祈らば三五汝天より彼らの祈祷と懇願を聽て彼らを助けたまへ三六人は罪を犯さざる者なければ彼ら汝に罪を犯すことありて汝かれらを怒り彼らをその敵に付したまひて敵かれらを虜として遠き地または近き地に曳ゆかん時三七彼らその虜れゆきし地において自ら心に了るところあり其俘虜の地において翻へりて汝に祈り我らは罪を犯し悖れる事を爲し惡き事を行ひたりと言ひ三八その虜へゆかれし俘虜の地にて一心一念に汝に立歸り汝がその先祖に與へたまへる地にむかひ汝が選びたまへる邑と我が汝の名のために建たる家にむかひて祈らば三九汝の住處なる天より彼らの祈祷と懇願を聽て彼らを助け汝の民が汝にむかひて罪を犯したるを赦したまへ四〇然ば我神よ願くは此處にて爲す祈祷に汝の目を開き耳を傾むけたまへ四一ヱホバ神よ今汝および汝の力ある契約の櫃起て汝の安居の所にいりたまへヱホバ神よ願くは汝の祭司等に拯救の衣を纒はせ汝の聖徒等に恩惠を喜こばせたまへ四二ヱホバ神よ汝の膏そそぎし者の面を黜ぞけたまふ勿れ汝の僕ダビデの徳行を記念たまへ

第七章一ソロモン祈ることを終し時天より火くだりて燔祭と犧牲とを焚きヱホバの榮光その家に充り二ヱホバの榮光ヱホバの家に充しに因て祭司はヱホバの家に入ことを得ざりき三イスラエルの子孫は皆火の降れるを見またヱホバの榮光のその

家にのぞめるを見て敷石の上にて地に俯伏て拜しヱホバを讃て云り善かなヱホバその恩惠は世々限なしと四斯て王および民みなヱホバの前に犠牲を獻ぐ五ソロモン王の獻げたる犠牲は牛二萬二千羊十二萬斯王と民みな神の家を開けり六祭司は立てその職をなしレビ人はヱホバの樂器を執て立つ其樂器はダビデ王彼らの手によりて讃美をなすに當り自ら作りてヱホバの恩惠は世々限なしと頌へしめし者なり祭司は彼らの前にありて喇叭を吹きイスラエルの人は皆立をる七ソロモンまたヱホバの家の前なる庭の中を聖め其處にて燔祭と酬恩祭の脂とを獻げたり是はソロモンの造れる銅の壇その燔祭と素祭と脂とを受るに足ざりしが故なり八その時ソロモン七日の間節筵をなしけるがイスラエル全國の人々すなはちハマテの入口よりエジプトの河までの人々あつまりて彼とともにあり其會はなはだ大なりき九かくて第八日に聖會を開けり彼らは七日のあひだ壇奉納の禮をおこなひまた七日のあひだ節筵を守りけるが一〇七月の二十三日にいたりてソロモン民をその天幕に歸せり皆ヱホバがダビデ、ソロモンおよびその民イスラエルに施こしたまひし恩惠のために喜こび且心に樂しみて去り一一ソロモン、ヱホバの家と王の家とを造了へヱホバの家と己の家とにつきて爲んと心に思ひし事を盡く成就たり一二時にヱホバ夜ソロモンに顯れて之に言たまひけるは我すでに汝の祈祷を聽きまた此處をわがために選びて犠牲を獻ぐる家となす一三我天を閉て雨なからしめ又は蝗蟲に命じて地の物を食はしめ又は疫病を我民の中におくらんに一四我名をもて稱らるる我民もし自ら卑くし祈りてわが面を求めその惡き道を離れなば我天より聽てその罪を赦しその地を醫さん一五今より我この處の祈祷に目を啓き耳を傾むけん一六今我すでに此家を選びかつ聖別む我名は永く此にあるべしまた我目もわが心も恒に此にあるべし一七汝もし汝の父ダビデの歩みしごとく我前に歩み我が汝に命じたるごとく凡て行ひてわが法度と律例を守らば一八我は汝の父ダビデに契約してイスラエルを治むる人汝に缺ること無るべしと言しごとく汝の國の祚を堅うすべし一九然ど汝ら若ひるがへり我が汝らの前に置たる法度と誡命を棄て往て他の神々に事へかつ之を拜まば二〇我かれらを我が與へたる地より拔さるべし又我名のために我が聖別たる此家は我これを我前より投棄て萬國の中に諺語となり嘲笑とならしめん二一且又この家は高くあれども終にはその傍を過る者は皆これに驚きて言んヱホバ何故に此地に此家に斯なしたるやと二二人これに答へて言ん彼ら己の先祖をエジプトの地より導き出ししその神ヱホバを棄て他の神々に附從がひ之を拜み之に事へしによりてなりヱホバ之がためにこの諸の災禍を彼らに降せりと

第八章 一ソロモン二十年を經てヱホバの家と己の家を建をはりけるが二ヒラム邑幾何をソロモンに歸しければソロモンまた之を建なほしイスラエルの子孫をしてその中に住しむ三ソロモン

またハマテゾバに往て之に勝り四彼また曠野のタデモルを建てハマテの諸の府庫邑を建つ五また上ベテホロンおよび下ベテホロンを建つ是は堅固の邑にして石垣あり門あり關木あり六ソロモンまたバアラテとおのが有る府庫の邑々と戰車の諸の邑々と騎兵の邑々ならびにそのエルサレム、レバノンおよび己が治むるところの全地に建んと望みし者を盡く建つ七凡てイスラエルの子孫にあらざるヘテ人アモリ人ペリジ人ヒビ人ヱブス人の遺れる者八その地にありて彼らの後に遺れるその子孫即ちイスラエルの子孫の滅ぼし盡さざりし民はソロモンこれを使役して今日にいたる九然れどもイスラエルの子孫をばソロモン一人も奴隷となして其工事に使ふことをせざりき彼らは軍人となり軍旅の長となり戰車と騎兵の長となれり一〇ソロモン王の有司の首は二百五十人ありて民を統ぶ一一ソロモン、パロの女をダビデの邑より携へのぼりて曩にこれがために建おきたる家にいたる彼すなはち言り我妻はイスラエルの王ダビデの家に居べからずヱホバの契約の櫃のいたれる處は皆聖ければなりと一二茲にソロモン曩に廊の前に築きおきたるヱホバの壇の上にてヱホバに燔祭を献ぐることをせり一三即ちモーセの命令にしたがひて毎日例のごとくに之を献げ安息日月朔および年に三次の節會すなはち酵いれぬパンの節と七週の節と結茅節とに之を献ぐ一四ソロモンその父ダビデの定めたる所にしたがひて祭司の班列を定めてその職に任じ又レビ人をその勤務に任じて日々例のごとく祭司の前にて頌讃をなし奉事をなさしめ又門を守る者をしてその班列にしたがひて諸門を守らしむ神の人ダビデの命ぜしところ是の如くなりければなり一五祭司とレビ人は諸の事につきまた府庫の事につきて王に命ぜられたる所に違ざりき一六ソロモンはヱホバの家の基を置る日までにその工事の準備をことごとく爲しおきて遂に之を成をへたればヱホバの家は全備せり一七茲にソロモン、ヱドムの地の海邊にあるエジオンゲベルおよびエロテに往り一八時にヒラムその僕等の手に託て船を彼に遣りまた海の事を知る僕等を遣りけるが彼等すなはちソロモンの僕とともにオフルに往て彼處より金四百五十タラントを取てソロモン王の許に携へ來れり

第九章一茲にシバの女王ソロモンの風聞を聞および難問をもてソロモンを試みんとて甚だ衆多の部從をしたがへ香物と夥多き金と寶石とを駱駝に負せてヱルサレムに來りソロモンの許にいたりてその心にある所をことごとく之に陳けるに二ソロモンこれが問に盡く答へたりソロモンの知ずして答へざる事は無りき三シバの女王ソロモンの智慧とその建たる家を觀四またその席の食物とその諸臣の列坐る状とその侍臣の伺候状と彼らの衣服およびその酒人とその衣服ならびに彼がヱホバの家に上りゆく昇道を觀におよびて全くその氣を奪はれたり五是において彼王に言けるは我が自己の國にて汝の行爲と汝の智慧とにつきて聞およびたる言は眞實なりき六然るに我は來りて目に觀るま

ではその言を信ぜざりしが今視ば汝の智慧の大なる事我が聞たるはその半分にも及ばざりき汝は我が聞たる風聞に愈れり七 汝の人々は幸福なるかな汝の前に常に立て汝の智慧を聽る此なんぢの臣僕等は幸福なるかな八 汝の神ヱホバは讃べき哉彼なんぢを悦こびてその位に上らせ汝の神ヱホバの爲に汝を王となしたまへり汝の神イスラエルを愛して永く之を堅うせんとするが故に汝を之が王となして公平と正義を行はせたまふなりと九 すなはち金百二十タラントおよび莫大の香物と寶石とを王に饋れりシバの女王がソロモン王に饋りたるが如き香物は未だ曾て有ざりしなり一〇 (かのオフルより金を取きたりしヒラムの臣僕とソロモンの臣僕等また白檀木と寶石とをも携さへいたりければ一一 王その白檀木をもてヱホバの家と王の宮とに段階を作りまた謳歌者のために琴と瑟とを作れり是より前には是のごとき者ユダの地に見しこと無りき)一二 ソロモン王シバの女王に物を饋りてその携へきたれる所に報いたるが上にまた之が望にまかせて凡てその求むる者を與へたり斯て彼はその臣僕とともに去てその國に還りぬ一三 一年にソロモンの所に來れる金の重量は六百六十六タラントなり一四 この外にまた商賣および商旅の携へきたる者ありアラビアの一切の王等および國の知事等もまた金銀をソロモンに携へ至れり一五 ソロモン王展金の大楯二百を作れりその大楯一枚には展金六百シケルを用ふ一六 また展金の小干三百を作れり其小干一枚には金三百シケルを用ふ王これらをレバノン森の家に置り一七 王また象牙をもて大なる寶座一を造り純金をもて之を蔽へり一八 その寶座には六の階級あり又金の足臺ありて共にその寶座に連なりその坐する處の此旁彼旁に按手ありて按手の側に二頭の獅子立をり一九 その六の階級に十二の獅子ありて此旁彼旁に立り是のごとき者を作れる國は未だ曾て有ざりしなり二〇 ソロモン王の用ゐる飲料の器は皆金なりまたレバノン森の家の器もことごとく精金なり銀はソロモンの世には何とも算ざりしなり二一 其は王の舟ヒラムの僕を乘てタルシシに往き三年毎に一回その舟タルシシより金銀象牙猿および孔雀を載て來りたればなり二二 ソロモン王は天下の諸王に勝りて富有と智慧とをもちたれば二三 天下の諸王みな神がソロモンの心に授けたまへる智慧を聽んとてソロモンの面を見んことを求め二四 各々その禮物を携さへ來る即ち銀の器金の器衣服甲冑香物馬騾など年々定分ありき二五 ソロモン戰車の馬四千厩騎兵一萬二千あり王これを戰車の邑々に置きまたヱルサレムにて自己の所に置り二六 彼は河よりペリシテの地とエジプトの界までの諸王を統治めたり二七 王は銀を石のごとくヱルサレムに多からしめまた香柏を平野の桑木のごとく多からしめたり二八 また人衆エジプトなどの諸國より馬をソロモンに率いたれり二九 ソロモンのその餘の始終の行爲は預言者ナタンの書とシロ人アヒヤの預言と先見者イドがネバテの子ヤラベアムにつきて述たる默旨の中に記さるるにあらずや

三〇ソロモンはヱルサレムにて四十年の間イスラエルの全地を治めたり三一ソロモンその先祖等と倶に寢りてその父ダビデの邑に葬られ其子レハベアムこれに代りて王となれり

第一〇章一爰にレハベアム、シケムに往り其はイスラエルみな彼を王となさんとてシケムに到りたればなり二ネバテの子ヤラベアムはさきにソロモン王の面を避てエジプトに逃れ居しがこのことを聞てエジプトより歸れり三人衆人を遣はして之を招きたるなり斯てヤラベアムとイスラエルの人みな來りてレハベアムに語りて言けるは四汝の父我らの軛を苦しくせり然ば汝今汝の父の苦しき役とその我らに蒙むらせたる重き軛を輕くしたまへ然れば我儕なんぢに事へん五レハベアムかれらに言けるは汝ら三日を經て再び我に來れと民すなはち去り六是においてレハベアム王その父ソロモンの生る間これが前に立たる老人等に計りて言けるは汝ら如何に教へて此民に答へしむるや七彼らレハベアムに語りて言けるは汝もし此民を厚く待ひ之を悦こばせ善言を之に語らば永く汝の僕たらんと八然るに彼その老人等の教へし教を棄て自己とともに生長て己の前に立ところの少年等と計れり九即ち彼らに言けるは汝ら如何に教へて我らをして此我に語りて汝の父の我らに蒙むらせし軛を輕くせよと言ふ民に答へしむるやと一〇彼とともに生長たる少年等かれに語りて言けるは汝に語りて汝の父我らの軛を重くしたれば汝これを我らのために輕くせよと言たる此民に汝かく答へ斯これに言べし吾小指は我父の腰よりも太し一一我父は汝らに重き軛を負せたりしが我は更に汝らの軛を重くせん我父は鞭をもて汝らを懲せしが我は蠍をもて汝らを懲さんと一二偖またヤラベアムと民等は皆王の告て第三日に再び我にきたれと言しごとく第三日にレハベアムに詣りしに一三王荒々しく彼らに答へたり即ちレハベアム王老人の教を棄て一四少年の教のごとく彼らに告て言けるは我父は汝らの軛を重くしたりしが我は更に之を重くせん我父は鞭をもて汝らを懲せしが我は蠍をもて汝らを懲さんと一五王かく民に聽ことをせざりき此事は神より出たる者にしてその然るはヱホバかつてシロ人アヒヤによりてネバテの子ヤラベアムに告たる言を成就んがためなり一六イスラエルの民みな王の己に聽ざるを見しかば王に答へて言けるは我らダビデの中に何の分あらんやヱッサイの子の中には所有なしイスラエルよ汝ら各々その天幕に歸れダビデ族よ今おのれの家を顧みよと斯イスラエルは皆その天幕に歸れり一七但しユダの邑々に住るイスラエルの子孫の上にはレハベアムなほ王たりき一八レハベアム王役夫の頭なるアドラムを遣はしけるにイスラエルの子孫石をもてこれを撃て死しめたればレハベアム王急ぎてその車に登りてヱルサレムに逃かへれり一九是のごとくイスラエルはダビデの家に背きて今日にいたる

第一一章一茲にレハベアム、ヱルサレムに至りてユダとベニヤミンの家より倔強の武者十八萬を集め而してレハベアム國を

己に歸さんためにイスラエルと戰はんとせしに二ヱホバの言神の人シマヤに臨みて云ふ三ソロモンの子ユダの王レハベアムおよびユダとベニヤミンにあるイスラエルの人々に告て言べし四ヱホバかく言ふ汝ら攻上るべからず又なんぢらの兄弟と戰ふべからず各々その家に歸れ此事は我より出たる者なりと彼ら乃はちヱホバの言にしたがひヤラベアムに攻ゆくことを止て歸れり五斯てレハベアム、ヱルサレムに居りユダに守衛の邑々を建たり六即ちその建たる者はベテレヘム、エタム、テコア七ベテズル、シヨコ、アドラム八ガテ、マレシヤ、ジフ九アドライム、ラキシ、アゼカ一〇ゾラ、アヤロン、ヘブロン是等はユダとベニヤミンにありて守衛の邑なり一一彼その守衛の邑々を堅固にし之に軍長を置き糧食と油と酒とを貯はへ一二またその一切の邑に盾と矛とを備へて之を甚だ強からしむユダとベニヤミンこれに附り一三イスラエルの全地の祭司とレビ人は四方の境より來りてレハベアムに投ず一四即ちレビ人はその郊地と產業とを離れてユダとヱルサレムに至れり是はヤラベアムとその子等かれらを廢して祭司の職をヱホバの前に爲しめざりし故なり一五ヤラベアムは崇邱と牡山羊と己が作れる犢とのために自ら祭司を立つ一六またイスラエルの一切の支派の中凡てその心を傾むけてイスラエルの神ヱホバを求むる者はその先祖の神ヱホバに禮物を獻げんとてレビ人にしたがひてヱルサレムに至れり一七是のごとく彼等ユダの國を固うしソロモンの子レハベアムをして三年の間強からしめたり即ち民は三年の間ダビデとソロモンの道に歩めり一八レハベアムはダビデの子ヱレモテの女マハラテを妻に娶れりマハラテはヱッサイの子エリアブの女アビハイルの產し者なり一九彼ヱウシ、シヤマリヤおよびザハムの三子を產む二〇また之が後にアブサロムの女マアカを娶れり彼アビヤ、アツタイ、ジザおよびシロミテを產む二一レハベアムはアブサロムの女マアカをその一切の妻と妾とにまさりて愛せり彼は妻十八人妾六十人を取り男子二十八人女子六十人を擧く二二レハベアム、マアカの子アビヤを王となさんと思ふが故に之を立て首となしその兄弟の長となせり二三斯るが故に慧く取行ひ其男子等を盡くユダとベニヤミンの地なる守衛の邑々に散し置き之に糧食を多く與へかつ衆多の妻を求め得させたり

第一二章一レハベアムその國を固くしその身を強くするに及びてヱホバの律法を棄たりイスラエルみな之に傚ふ二彼ら斯ヱホバにむかひて罪を犯すによりてレハベアムの五年にエジプトの王シシヤク、ヱルサレムに攻のぼれり三その戰車は一千二百騎兵は六萬また彼に從がひてエジプトより來れる民ルビ人スキ人エテオピヤ人等は數しれず四彼すなはちユダの守衛の邑々を取り進てヱルサレムに至る五是においてレハベアムおよびユダの牧伯等シシヤクの故によりてヱルサレムに集まり居けるに預言者シマヤこれが許にいたりて之に言けるはヱホバかく言たまふ汝等は我を棄たれば我も汝らをシシヤクの手に遺おけりと

六是をもてイスラエルの牧伯等および王は自ら卑くしてヱホバは義と言り七ヱホバかれらが自ら卑くするを見たまひければヱホバの言シマヤに臨みて言ふ彼等は自ら卑くしたれば我かれらを滅ぼさず少く拯救を彼らに施こさん我シシヤクの手をもて我忿怒をヱルサレムに洩さじ八然ながら彼等は之が臣とならん是彼らが我に事ふる事と國々の王等に事ふる事との辨をしらん爲なりと九エジプトの王シシヤクすなはちヱルサレムに攻のぼりヱホバの家の寶物と王の家の寶物とを奪ひて盡くこれを取り又ソロモンの作りたる金の楯を奪ひされり一〇是をもてレハベアム王その代に銅の楯を作り王の家の門を守る侍衛の長等の手にこれを交し置けるが一一王ヱホバの家に入る時には侍衛きたりて之を負ひまた侍衛の房にこれを持かへれり一二レハベアム自ら卑くしたればヱホバの忿怒かれを離れこれを盡く滅ぼさんとは爲たまはず又ユダにも善事ありき一三レハベアム王はヱルサレムにありてその力を強くし世を治めたり即ちレハベアムは四十一歳のとき位に即き十七年の間ヱルサレムにて世を治む是すなはちヱホバがその名を置んとてイスラエルの一切の支派の中より選びたまへる邑なり彼の母はアンモニ人にしてその名をナアマといふ一四レハベアムはヱホバを求むる事に心を傾けずして惡き事を行へり一五レハベアムの始終の行爲は預言者シマヤの書および先見者イドの書の中に系圖の形に記さるるに非ずやレハベアムとヤラベアムの間には絶ず戰爭ありき一六レハベアムその先祖等とともに寢りてダビデの邑に葬られ其子アビヤ之にかはりて王となれり

第一三章一ヤラベアム王の十八年にアビヤ、ユダの王となり二ヱルサレムにて三年の間世を治めたり其母はギベアのウリエルの女にして名をミカヤといふ茲にアビヤとヤラベアムの間に戰爭ありき三アビヤは四十萬の軍勢をもて戰鬪に備ふ是みな倔強の猛き武夫なり又ヤラベアムは倔強の人八十萬をもて之にむかひて戰爭の行伍を立つ是また大勇士なり四時にアビヤ、エフライムの山地なるゼマライム山の上に立て言けるはヤラベアムおよびイスラエルの人々皆聽よ五汝ら知ずやイスラエルの神ヱホバ鹽の契約をもてイスラエルの國を永くダビデとその子孫に賜へり六然るにダビデの子ソロモンの臣たるネバテの子ヤラベアム興りてその主君に叛き七邪曲なる放蕩者これに集り附き自ら強くしてソロモンの子レハベアムに敵せしがレハベアムは少くまた心弱くして之に當る力なかりき八今またなんぢらはダビデの子孫の手にあるヱホバの國に敵對せんとす汝らは大軍なり又ヤラベアムが作りて汝らの神と爲たる金の犢なんぢらと偕にあり九汝らはアロンの子孫たるヱホバの祭司とレビ人とを逐放ち國々の民の爲がごとくに祭司を立るにあらずや即ち誰にもあれ少き牡牛一匹牡羊七匹を携へきたりて手に充す者は皆かの神ならぬ者の祭司となることを得るなり一〇然ど我儕に於てはヱホバ我儕の神にましまして我儕は之を棄ずまたヱホバに事ふる

祭司はアロンの子孫にして役事をなす者はレビ人なり一一彼ら朝ごと夕ごとにヱホバに燔祭を献げ香を焚くことを爲し又供前のパンを純精の案の上に供へまた金の燈臺とその燈盞を整へて夕ごとに點すなり斯われらは我らの神ヱホバの職守を守れども汝らは却て彼を棄たり一二視よ神みづから我らとともに在して我らの大將となりたまふまた其祭司等は喇叭を吹ならして汝らを攻むイスラエルの子孫よ汝らの先祖の神ヱホバに敵して戰ふ勿れ汝ら利あらざるべければなりと一三ヤラベアム伏兵を彼らの後に回らせたればイスラエルはユダの前にあり伏兵は其後にあり一四ユダ後を顧みるに敵前後にありければヱホバにむかひて號呼り祭司等喇叭を吹り一五ユダの人々すなはち吶喊を擧けるがユダの人々吶喊を擧るにあたりて神ヤラベアムとイスラエルの人々をアビヤとユダの前に打敗り給ひしかば一六イスラエルの子孫はユダの前より逃はしれり神かく彼らを之が手に付したまひければ一七アビヤとその民彼らを夥多く撃殺せりイスラエルの殺されて倒れし者は五十萬人みな倔強の人なりき一八是時にはイスラエルの子孫打負されユダの子孫勝を得たり是は彼らその先祖の神ヱホバを頼みしが故なり一九アビヤすなはちヤラベアムを追撃て邑數箇を彼より取れり即ちベテルとその郷里ヱシヤナとその郷里エフロンとその郷里是なり二〇ヤラベアムはアビヤの世に再び權勢を奮ふことを得ずヱホバに撃れて死り二一然どアビヤは權勢を得妻十四人を娶り男子二十二人女子十六人を擧けたり二二アビヤのその餘の作爲とその行爲とその言は預言者イドの註釋に記さる

第一四章一アビヤその先祖等とともに寢りてダビデの邑に葬られその子アサこれに代りて王となれりアサの代になりて其國十年の間平穏なりき二アサはその神ヱホバの目に善と視正義と視たまふ事を行へり三即ち異なる祭壇を取のぞき諸の崇邱を毀ち柱像を打碎きアシラ像を斫倒し四ユダに命じてその先祖等の神ヱホバを求めしめその律法と誡命を行はしめ五ユダの一切の邑々より崇邱と日の像とを取除けり而して國は彼の前に平穏なりき六彼また守衛の邑數箇をユダに建たり是はその國平安を得て此年頃戰爭なかりしに因る即ちヱホバ彼に安息を賜ひしなり七彼すなはちユダに言けるは我儕是等の邑を建てその四周に石垣を築き戍樓を起し門と門閂とを設けん我儕の神ヱホバを我儕求めしに因て此國なほ我儕の前にあり我ら彼を求めたれば四方において我らに平安を賜へりと斯彼ら阻滯なく之を建了たり八アサの軍勢はユダより出たる者三十萬ありて楯と戈とを執りベニヤミンより出たる者二十八萬ありて小楯を執り弓を彎く是みな大勇士なり九茲にエテオピア人ゼラ軍勢百萬人戰車三百輌を率ゐて攻きたりマレシヤに至りければ一〇アサこれにむかひて進み出で共にマレシヤのゼパタの谷において戰爭の陣列を立つ一一時にアサその神ヱホバにむかひて呼はりて言ふヱホバよ力ある者を助くるも力なき者を助くるも汝にお

いては異ること無し我らの神ヱホバよ我らを助けたまへ我らは汝に倚頼み汝の名に託りて往て此群集に敵るヱホバよ汝は我らの神にましませり人をして汝に勝せたまふ勿れと一二ヱホバすなはちアサの前とユダの前においてエテオピア人を撃敗りたまひしかばエテオピア人逃はしりけるに一三アサと之に從がふ民かれらをゲラルまで追撃り斯エテオピア人は倒れて再び振ふことを得ざりき其は彼等ヱホバとその軍旅に打敗られたればなりユダの人々の得たる掠取物は甚だ多りき一四かれらはまたゲラルの四周の邑々を盡く撃やぶれり是その邑々ヱホバを畏れたればなり是において彼らその一切の邑より物を掠めたりしがその中より得たる掠取物は夥多かりき一五また家畜のをる天幕を襲ふて羊と駱駝を多く奪ひ取り而してヱルサレムに歸りぬ

第一五章一茲に神の霊オデデの子アザリヤに臨みければ二彼出ゆきてアサを迎へ之に言けるはアサおよびユダとベニヤミンの人々よ我に聽け汝等がヱホバと偕にをる間はヱホバも汝らと偕に在すべし汝ら若かれを求めなば彼に遇ん然どかれを棄なば彼も汝らを棄たまはん三　抑イスラエルには眞の神なく教訓を施こす祭司なく律法なきこと日久しかりしが四患難の時にイスラエルの神ヱホバに立かへりて之を求めたれば即ちこれに遇り五當時は出る者にも入る者にも平安なく惟大なる苦患くにぐにの民に臨めり六國は國に邑は邑に撃碎かる其は神諸の患難をもて之を苦しめたまへばなり七然ば汝ら強かれよ汝らの手を弱くする勿れ汝らの行爲には賞賜あるべければなりと八アサこれらの言および預言者オデデの預言を聽て力を得憎むべき者をユダとベニヤミンの全地より除きまた其エフライムの山地に得たる邑々より除きヱホバの廊の前なるヱホバの壇を再興せり九彼またユダとベニヤミンの人々およびエフライム、マナセ、シメオンより來りて寄寓る者を集めたりイスラエルの人々の中ヱホバ神のアサと偕に在すを見てアサに降れる者夥多しかりしなり一〇彼等すなはちアサの治世の十五年の三月にヱルサレムに集り一一其たづさへ來れる掠取物の中より牛七百羊七千をその日ヱホバに献げ一二皆契約を結びて曰く心を盡し精神を盡して先祖の神ヱホバを求めん一三凡てイスラエルの神ヱホバを求めざる者は大小男女の區別なく之を殺さんと一四而して大聲を擧げ號呼をなし喇叭を吹き角を鳴してヱホバに誓を立て一五ユダみなその誓を喜べり即ち彼ら一心をもて誓を立て一念にヱホバを求めたればヱホバこれに遇ひ四方において之に安息をたまへり一六偖またアサ王の母マアカ、アシラ像を作りしこと有ければアサこれを貶して太后たらしめずその像を斫たふして粉々に碎きキデロン川にてこれを焚り一七但し崇邱は尚イスラエルより除かざりき然どもアサの心は一生の間全かりしなり一八彼はまたその父の納めたる物および己が納めたる物すなはち金銀ならびに器皿等をヱホバの家に携へいれり一九アサの治世の三十五年までは再び戰爭あらざりき

第一六章一アサの治世の三十六年にイスラエルの王バアシヤ、ユダに攻のぼりユダの王アサの所に誰をも往來せざらしめんとてラマを建たり二是においてアサ、ヱホバの家と王の家との府庫より金銀を取いだしダマスコに住るスリアの王ベネハダデに餽りて言けるは三我父と汝の父の間の如く我と汝の間に約を立ん視よ我今汝に金銀を餽れり往て汝とイスラエルの王バアシヤとの約を破り彼をして我を離れて去しめよ四ベネハダデすなはちアサ王に聽き自己の軍勢の長等をイスラエルの邑々に攻遣ければ彼等イヨン、ダン、アベルマイムおよびナフタリの一切の府庫の邑々を撃たり五バアシヤ聞てラマを建ることを罷めその工事を廢せり六是においてアサ王ユダ全國の人を率ゐバアシヤがラマを建るに用ひたる石と材木を運びきたらしめ之をもてゲバとミズパを建たり七その頃先見者ハナニ、ユダの王アサの許にいたりて之に言けるは汝はスリアの王に倚賴みて汝の神ヱホバに倚賴まざりしに因てスリア王の軍勢は汝の手を脱せり八かのエテオピア人とルビ人は大軍にして戰車および騎兵はなはだ多かりしにあらずや然るも汝ヱホバに倚賴みたればヱホバかれらを汝の手に付したまへり九ヱホバは全世界を偏く見そなはし己にむかひて心を全うする者のために力を顯したまふこの事において汝は愚なる事をなせり故に此後は汝に戰爭あるべしと一〇然るにアサその先見者を怒りて之を獄舍にいれたり其は烈しくこの事のために彼を怒りたればなりアサまた其頃民を虐げたる事ありき一一アサの始終の行爲はユダとイスラエルの列王の書に記さる一二アサはその治世の三十九年に足を病みその病患つひに劇しくなりしがその病患の時にもヱホバを求めずして醫師を求めたり一三アサその先祖等と偕に寢りその治世の四十一年に死り一四人衆これをその己のためにダビデの邑に堀おける墓に葬り製香の術をもて製したる種々の香物を盈せる床の上に置き之がために夥多しく焚物をなせり

第一七章一アサの子ヨシヤパテ、アサに代りて王となりイスラエルにむかひて力を強くし二ユダの一切の堅固なる邑々に兵を置きユダの地およびその父アサが取たるエフライムの邑々に鎮臺を置く三ヱホバ、ヨシヤパテとともに在せり其は彼その父ダビデの最初の道に歩みてバアル等を求めず四その父の神を求めてその誡命に歩みイスラエルの行爲に傚はざればなり五このゆゑにヱホバ國を彼の手に堅く立たまへりまたユダの人衆みなヨシヤパテに禮物を餽れり彼は富と貴とを極めたり六是において彼ヱホバの道にその心を勵まし遂に崇邱とアシラ像とをユダより除けり七彼またその治世の三年にその牧伯ベネハイル、オバデヤ、ゼカリヤ、ネタンエルおよびミカヤを遣はしてユダの邑々にて教誨をなさしめ八またレビ人の中よりシマヤ、ネタニヤ、ゼバデヤ、アサヘル、セミラモテ、ヨナタン、アドニヤ、トビヤ、トバドニヤなどいふレビ人を遣して之と偕ならしめ且祭司エリシヤマとヨラムをも之と偕に遣はしけるが九彼らはヱ

ホバの律法の書を携へユダにおいて教誨をなしユダの邑々を盡く行めぐりて民を教へたり。一〇是においてユダの周圍の地の國々みなヱホバを懼れてヨシヤパテを攻ることをせざりき一一またペリシテ人の中に禮物および貢の銀をヨシヤパテに餽れる者あり且又アラビヤ人は家畜をこれに餽れり即ち牡羊七千七百牡山羊七千七百一二ヨシヤパテは益々大になりゆきてユダに城および府庫邑を多く建て一三ユダの邑々に多くの工事を爲し大勇士たる軍人をヱルサレムに置り一四彼等を數ふるにその宗家に循へば左のごとしユダより出たる千人の長の中にはアデナといふ軍長あり大勇士三十萬これに從がふ一五その次は軍長ヨハナン之に從ふ者は二十八萬人一六その次はジクリの子アマシヤ彼は悦びてその身をヱホバに献げたり大勇士二十萬これに從がふ一七ベニヤミンより出たる者の中にはエリアダといふ大勇士あり弓および楯を持もの二十萬これに從がふ一八その次はヨザバデ戰門の準備をなせる者十八萬これに從がふ一九是等は皆王に事ふる者等なり此外にまたユダ全國の堅固なる邑々に王の置る者あり

第一八章一ヨシヤパテは富と貴とを極めアハブと縁を結べり二かれ數年の後サマリアに下りてアハブを訪ければアハブ彼およびその部從のために牛羊を多く宰りギレアデのラモテに倶に攻上らんことを彼に勸む三すなはちイスラエルの王アハブ、ユダの王ヨシヤパテに言けるは汝我とともにギレアデのラモテに攻ゆくやヨシヤパテこれに答へけるは我は汝のごとく我民は汝の民のごとし汝とともに戰門に臨まんと四ヨシヤパテまたイスラエルの王に言けるは請ふ今日ヱホバの言を問たまへと五是においてイスラエルの王預言者四百人を集めて之に言けるは我らギレアデのラモテに往て戰ふべきや又は罷べきや彼等いひけるは攻上りたまへ神これを王の手に付したまふべしと六ヨシヤパテいひけるは此外に我らの由て問べきヱホバの預言者此にあらざるや七イスラエルの王ヨシヤパテに言けるは外になほ一人あり我ら之によりてヱホバに問ことを得ん然ど彼は今まで我につきて善事を預言せず恒に惡き事のみを預言すれば我彼を惡むなり其者は即ちイムラの子ミカヤなりと然るにヨシヤパテこたへて王しか宣ふ勿れと言ければ八イスラエルの王一人の官吏を呼てイムラの子ミカヤを急ぎ來らしめよと言り九イスラエルの王およびユダの王ヨシヤパテは朝衣を纏ひサマリアの門の入口の廣場にて各々その位に坐し居り預言者は皆その前に預言せり一〇時にケナアナの子ゼデキヤ鐵の角を造りて言けるはヱホバかく言たまふ汝是等をもてスリア人を衝て滅ぼし盡すべしと一一預言者みな斯預言して云ふギレアデのラモテに攻上りて勝利を得たまへヱホバこれを王の手に付したまふべしと一二茲にミカヤを召んとて往たる使者これに語りて言けるは預言者等の言は一の口より出るがごとくにして王に善し請ふ汝の言をも彼らの一人のごとくなして善事を言へ一三ミカヤ言

けるはヱホバは活く我神の宣ふ所を我は陳べんと一四かくて王に至るに王彼に言けるはミカヤよ我らギレアデのラモテに往て戰かふべきや又は罷べきや彼言けるは上りゆきて利を得たまへ彼らは汝の手に付されんと一五王かれに言けるは我幾度なんぢを誓はせたらば汝ヱホバの名をもて唯眞實のみを我に告るや一六彼言けるは我イスラエルが皆牧者なき羊のごとく山に散をるを見たるがヱホバ是等の者は主なし各々やすらかに其家に歸るべしと言たまへり一七イスラエルの王是においてヨシヤパテに言けるは我なんぢに告て彼は善事を我に預言せず只惡き事のみを預言せんと言しに非ずやと一八ミカヤまた言けるは然ば汝らヱホバの言を聽べし我視しにヱホバその位に坐し居たまひて天の萬軍その傍に右左に立をりしが一九ヱホバ言たまひけるは誰かイスラエルの王アハブを誘ひて彼をしてギレアデのラモテにのぼりゆきて彼處に斃れしめんかと即ち一は此ごとくせんと言ひ一は彼ごとくせんと言ければ二〇遂に一の靈すすみ出てヱホバの前に立ち我かれを誘はんと言たればヱホバ何をもてするかと之に問たまふに二一我いでて虚言を言ふ靈となりてその諸の預言者の口にあらんと言りヱホバ言たまひけるは汝は誘なひ且これを成就ん出て然すべしと二二故に視よヱホバ虚言を言ふ靈を汝のこの預言者等の口に入たまへり而してヱホバ汝に災禍を降さんと定めたまふと二三時にケナアナの子ゼデキヤ近よりてミカヤの頰を批て言けるはヱホバの靈何の途より我を離れゆきて汝と言ふや二四ミカヤ言けるは汝奧の室にいりて身を匿す日に見るべし二五イスラエルの王いひけるはミカヤを取てこれを邑の宰アモンおよび王の子ヨアシに曳かへりて言べし二六王かく言ふ我が安然に歸るまで比者を牢にいれて苦惱のパンを食せ苦惱の水を飲せよと二七ミカヤ言けるは汝もし眞に平安に歸るならばヱホバ我によりて斯宣ひし事あらずと而してまた言り汝ら民よ皆聽べしと二八かくてイスラエルの王およびユダの王ヨシヤパテはギレアデのラモテに上りゆけり二九イスラエルの王時にヨシヤパテに言けるは我は服裝を變て戰陣の中にいらん汝は朝衣を纏ひたまへとイスラエルの王すなはち服裝を變へ二人倶に戰陣の中にいれり三〇スリアの王その戰車の長等にかねて命じおけり云く汝ら小き者とか大なる者とも戰ふなかれ惟イスラエルの王とのみ戰へと三一戰車の長等ヨシヤパテを見て是はイスラエルの王ならんと言ひ身をめぐらして之と戰はんとせしがヨシヤパテ號呼ければヱホバこれを助けたまへり即ち神彼らを感動して之を離れしめたまふ三二戰車の長等彼がイスラエルの王にあらざるを見しかば之を追ことをやめて引返せり三三茲に一箇の人何心なく弓を彎てイスラエルの王の胸當と草摺の間に射あてたれば彼その御者に言けるは我傷を受たれば汝手を旋らして我を軍中より出せと三四此日戰爭烈しくなりぬイスラエルの王は車の中に自ら扶持て立ち薄暮までスリア人をささへをりしが日の沒る頃にいたりて死り

第一九章一 ユダの王ヨシヤパテは恙なくヱルサレムに歸りてその家に至れり二 時に先見者ハナニの子ヱヒウ、ヨシヤパテ王を出むかへて之に言けるは汝 惡き者を助けヱホバを惡む者を愛して可らんや之がためにヱホバの前より震怒なんぢの上に臨む三 然ながら善事もまた汝の身に見ゆ即ち汝はアシラ像を國中より除きかつ心を傾けて神を求むるなりと四 ヨシヤパテはヱルサレムに住をりしが復出てベエルシバよりエフライムの山地まで民の間を行めぐりその先祖の神ヱホバにこれを導き歸せり五 彼またユダの一切の堅固なる邑に裁判人を立つ國中の邑々みな然り六 而して裁判人に言けるは汝等その爲ところを愼め汝らは人のために裁判するに非ずヱホバのために裁判するなり裁判する時にはヱホバ汝らと偕にいます七 然ば汝らヱホバを畏れ愼みて事をなせ我らの神ヱホバは惡き事なく人を偏 視ことなく賄賂を取こと無ればなり八 ヨシヤパテまたレビ人祭司およびイスラエルの族長を選びてヱルサレムに置きヱホバの事および訴訟を審判しむ彼らはヱルサレムにかへれり九 ヨシヤパテこれに命じて云く汝らヱホバを畏れ眞實と誠心をもて斯おこなふべし一〇 凡てその邑々に住む汝らの兄弟血を相流せる事または律法と誡命法度と條例などの事につきて汝らに訴へ出ること有ばこれを諭してヱホバに罪を犯さざらしめよ恐らくは震怒なんぢと汝らの兄弟にのぞまん汝ら斯おこなはば愆なかるべし一一 視よ祭司の長アマリヤ汝らの上にありてヱホバの事を凡て司どりユダの家の宰イシマエルの子ゼバデヤ王の事を凡て司どる亦レビ人汝らの前にありて官吏とならん汝ら心を強くして事をなせヱホバ善人を祐けたまふべし

第二〇章一 この後モアブの子孫アンモンの子孫およびマオニ人等ヨシヤパテと戰はんとて攻きたれり二 時に或人きたりてヨシヤパテに告て云ふ海の彼旁スリアより大衆汝に攻きたる視よ今ハザゾンタマルにありとハザゾンタマルはすなはちエンゲデなり三 是においてヨシヤパテ懼れ面をヱホバに向てその助を求めユダ全國に斷食を布令しめたれば四 ユダ擧て集りヱホバの助を求めたり即ちユダの一切の邑より人々きたりてヱホバを求む五 時にヨシヤパテ、ヱホバの室の新しき庭の前においてユダとヱルサレムの會衆の中に立ち六 言けるは我らの先祖の神ヱホバよ汝は天の神にましますに非ずや異邦人の諸國を統たまふに非ずや汝の手には能力あり權勢ありて誰もなんぢを禦ぐこと能はざるに非ずや七 我らの神よ汝は此國の民を汝の民イスラエルの前より逐はらひて汝の友アブラハムの子孫に之を永く與へたまひしに非ずや八 彼らは此に住み汝の名のために此に聖所を建て言へり九 刑罰の劍 疫病饑饉などの災禍われらに臨まん時は我らこの家の前に立て汝の前にをりその苦難の中にて汝に呼號らんしかして汝聽て助けたまはん汝の名はこの家にあればなりと一〇 今アンモン、モアブおよびセイル山の子孫を視たまへ在昔イスラエル、エジプトの國より出きたれる時汝イスラエル

に是等を侵さしめたまはざりしかば之を離れさりて滅ぼさざりしなり一一かれらが我らに報ゆる所を視たまへ彼らは汝がわれらに有たしめたまへる汝の產業より我らを逐はらはんとす一二我らの神よ汝かれらを鞫きたまはざるや我らは此斯く攻よせたる此の大衆に當る能力なく又爲ところを知ず唯汝を仰ぎ望むのみと一三ユダの人々はその小者および妻子とともに皆ヱホバの前に立をれり一四時に會衆の中にてヱホバの霊アサフの子孫たるレビ人ヤハジエルに臨めりヤハジエルはゼカリヤの子ゼカリヤはベナヤの子ベナヤはヱイエルの子ヱイエルはマツタニヤの子なり一五ヤハジエルすなはち言けるはユダの人衆およびヱルサレムの居民ならびにヨシヤパテ王よ聽べしヱホバかく汝らに言たまふ此大衆のために懼るる勿れ慄くなかれ汝らの戰に非ずヱホバの戰なればなり一六なんぢら明日彼らの所に攻くだれ彼らはヂヅの坂より上り來る汝らヱルエルの野の前なる谷の口にて之に遇ん一七この戰爭には汝ら戰ふにおよばずユダおよびヱルサレムよ汝ら惟進みいでて立ち汝らとともに在すヱホバの拯救を見よ懼る勿れ慄くなかれ明日彼らの所に攻いでよヱホバ汝らとともに在せばなりと一八是においてヨシヤパテ首をさげて地に俯伏りユダの人衆およびヱルサレムの民もヱホバの前に伏てヱホバを拜す一九時にコハテの子孫およびコラの子孫たるレビ人立あがり聲を高くあげてイスラエルの神ヱホバを讃美せり二〇かくて皆朝はやく起てテコアの野に出ゆけり其いづるに當りてヨシヤパテ立て言けるはユダの人衆およびヱルサレムの民よ我に聽け汝らの神ヱホバを信ぜよ然ば汝ら堅くあらんその預言者を信ぜよ然ば汝ら利あらん二一彼また民と議りて人々を選び之をして聖き飾を著て軍勢の前に進ましめヱホバにむかひて歌をうたひ且これを讃美せしめヱホバに感謝せよ其恩惠は世々かぎりなしと言しむ二二その歌を歌ひ讃美をなし始むるに當りてヱホバ伏兵を設けかのユダに攻きたれるアンモン、モアブ、セイル山の子孫をなやましたまひければ彼ら打敗られたり二三即ちアンモンとモアブの子孫起てセイル山の民にむかひ盡くこれを殺して滅ししがセイルの民を殺し盡すに及びて彼らも亦力をいだして互に滅ぼしあへり二四ユダの人々野の觀望所に至りてかの群衆を觀たりければ唯地に仆れたる死屍のみにして一人だに逃れし者なかりき二五是においてヨシヤパテおよびその民彼らの物を奪はんとて來り觀にその死屍の間に財寶衣服および珠玉などおびただしく在たれば則ち各々これを剝とりけるが餘に多くして携さへ去こと能はざる程なりき其物多かりしに因て之を取に三日を費しけるが二六第四日にベラカ（感謝）の谷に集り其處にてヱホバに感謝せり是をもてその處の名を今日までベラカ（感謝）の谷と呼ぶ二七而してユダとヱルサレムの人々みな各々歸りきたりヨシヤパテの後にしたがひ歡びてヱルサレムに至れり其はヱホバ彼等をしてその敵の故によりて歡喜を得させたまひたればなり二八即ち彼ら瑟と琴および喇叭を

合奏してヱルサレムに往てヱホバの室にいたる二九 諸の國の民ヱホバがイスラエルの敵を攻撃たまひしことを聞て神を畏れたれば三〇 ヨシヤパテの國は平穏なりき即ちその神四方において之に安息を賜へり三一 ヨシヤパテはユダの王となり三十五歳のときその位に即き二十五年の間ヱルサレムにて世を治めたり其母はシルヒの女にして名をアズバといふ三二 ヨシヤパテはその父アサの道にあゆみて之を離れずヱホバの目に善と觀たまふ事を行へり三三 然れども崇邱はいまだ除かず又民はいまだその先祖の神に心を傾けざりき三四 ヨシヤパテのその餘の始終の行爲はハナニの子ヱヒウの書に記さるヱヒウの事はイスラエルの列王の書に載す三五 ユダの王ヨシヤパテ後にイスラエルの王アハジアと相結べりアハジアは大に惡を行ふ者なりき三六 ヨシヤパテ、タルシシに遣る舟を造らんとて彼と相結びてエジオンゲベルにて共に舟數隻を造れり三七 時にマレシヤのドダワの子エリエゼル、ヨシヤパテにむかひて預言して云ふ汝アハジアと相結びたればヱホバなんぢの作りし者を毀ちたまふと即ちその舟は皆壞れてタルシシに往くことを得ざりき

第二一章一 ヨシヤパテその先祖等とともに寢りてダビデの邑にその先祖等とともに葬られその子ヨラムこれに代て王となる二 ヨシヤパテの子たるその兄弟はアザリヤ、ヱヒエル、ゼカリヤ、アザリヤ、ミカエルおよびシバテヤ是みなイスラエルの王ヨシヤパテの子なり三 その父彼らに金銀寶物の賜物を多く與へまたユダの守衛の邑々を與へけるが國はヨラムに與へたりヨラム長子なりければなり四 ヨラムその父の位に登りて力つよくなりければその兄弟等をことごとく劍にかけて殺し又イスラエルの牧伯等數人を殺せり五 ヨラムは三十二歳の時位に即ヱルサレムにて八年の間世を治めたり六 彼はアハブの家のなせるごとくイスラエルの王等の道にあゆめりアハブの女を妻となしたればなり斯かれヱホバの目に惡と觀たまふ事をなせしかども七 ヱホバ曩にダビデに契約をなし且彼とその子孫とに永遠に光明を與へんと言たまひし故によりてダビデの家を滅ぼすことを欲み給はざりき八 ヨラムの世にエドム人叛きてユダの手に服せず自ら王を立たれば九 ヨラム其牧伯等および一切の戰車をしたがへて渉りゆき夜の中に起いでて自己を圍めるエドム人を撃ちその戰車の長等を撃り一〇 エドム人は斯叛きてユダの手に服せずなりしが今日まで然り此時にあたりてリブナもまた叛きてユダの手に服せずなりぬ是はヨラムその先祖の神ヱホバを棄たるに因てなり一一 彼またユダの山々に崇邱を作りてヱルサレムの民に姦淫をおこなはせユダを惑はせり一二 時に預言者エリヤの書ヨラムの許に達せり其言に云く汝の先祖ダビデの神ヱホバかく言たまふ汝はその父ヨシヤパテの道にあゆまずまたユダの王アサの道にあゆまずして一三 イスラエルの王等の道にあゆみユダの人とヱルサレムの民をしてアハブの家の姦淫をなせるごとくに姦淫を行はしめまた汝の父の家の者にて汝に愈れるところ

の汝の兄弟等を殺せり一四故にヱホバ大なる災禍をもて汝の民汝の子女汝の妻等および汝の一切の所有を撃たまふべし一五汝はまた臓腑の疾を得て大病になりその疾日々に重りて臓腑つひに墜んと一六即ちヱホバ、ヨラムを攻させんとてエテオピアに近きところのペリシテ人とアラビヤ人の心を振起したまひければ一七彼らユダに攻のぼりて之を侵し王の家に在ところの貨財を盡く奪ひ取りまたヨウムの子等と妻等をも携へ去れり是をもてその末子ヱホアハズの外には一人も遺れる者なかりき一八此もろもろの事の後ヱホバ彼を撃て臓腑に愈ざる疾を生ぜしめたまひければ一九月日を送り二年を經るにおよびてその臓腑疾のために墜ち重き病苦によりて死ねり民かれの先祖のために焚物をなせし如く彼のためには焚物をなさざりき二〇彼は三十二歳の時位に即き八年の間ヱルサレムにて世を治めて終に薨去れり之を惜む者なかりき人衆これをダビデの邑に葬れり但し王等の墓にはあらず

第二二章 一ヱルサレムの民ヨラムの季子アハジアを王となして之に継しむ其は曾てアラビヤ人とともに陣營に攻きたりし軍兵その長子をことごとく殺したればなり是をもてユダの王ヨラムの子アハジア王となれり二アハジアは四十二歳の時位に即きヱルサレムにて一年の間世を治めたりその母はオムリの女にして名をアタリヤといふ三アハジアもまたアハブの家の道に歩めり其母かれを教へて惡をなさしめたるなり四即ち彼はアハブの家のごとくにヱホバの目の前に惡をおこなへり其父の死し後彼かくアハブの家の者の教にしたがひたれば終に身を滅ぼすに至れり五アハジアまた彼らの教にしたがひイスラエルの王アハブの子ヨラムとともにギレアデのラモテにゆきてスリアの王ハザエルと戰ひけるにスリア人ヨラムに傷を負せたり六是においてヨラムはそのスリアの王ハザエルと戰ふにあたりてラムにて負たる傷を療さんとてヱズレルに歸れりユダの王ヨラムの子アザリヤはアハブの子ヨラムが病をるをもてヱズレルに下りてこれを訪ふ七アハジアがヨラムを訪ふて害に遇しは神の然らしめたまへるなり即ちアハジアは來り居てヨラムとともに出てニムシの子ヱヒウを迎へたりヱヒウはヱホバが曩にアハブの家を絶去しめんとて膏を沃ぎたまひし者なり八ヱヒウ、アハブの家を罰するに方りてユダの牧伯等およびアハジアの兄弟等の子等がアハジアに奉へをるに遇て之を殺せり九アハジアはサマリヤに匿れたりしがヱヒウこれを探求めければ人々これを執へヱヒウの許に曳きたりて之を殺せり但し彼は心を盡してヱホバを求めたるヨシヤパテの子なればとてこれを葬れり斯りしかばアハジアの家は國を統治む力なくなりぬ一〇茲にアハジアの母アタリヤその子の死たるを見て起てユダの家の王子をことごとく滅ぼしたりしが一一王の女ヱホシバ、アハジアの子ヨアシを王の子等の殺さるる者の中より竊み取り彼とその乳媼を夜衣の室におきて彼をアタリヤに匿したればアタリヤかれを殺さ

ざりきヱホシバはヨラム王の女アハジアの妹にして祭司ヱホヤダの妻なり三かくてヨアシはヱホバの家に匿れて彼らとともにをること六年アタリヤ國に王たりき

第二三章一第七年にいたりヱホヤダ力を強してヱロハムの子アザリヤ、ヨハナンの子イシマエル、オベデの子アザリア、アダヤの子マアセヤ、ジクリの子エシヤパテなどいふ百人の長等を招きて己と契約を結ばしむ二是において彼らユダを行めぐりてユダの一切の邑よりレビ人を集めまたイスラエルの族長を集めてヱルサレムに歸り三而してその會衆みな神の家において王と契約を結べり時にヱホヤダかれらに言けるはダビデの子孫の事につきてヱホバの宣まひしごとく王の子位に即べきなり四然ば汝ら斯なすべし汝ら祭司およびレビ人の安息日に入きたる者は三分の一は門を守り五三分の一は王の家に居り三分の一は基礎の門に居り民はみなヱホバの室の庭に居べし六祭司と奉事をするレビ人の外は何人もヱホバの家に入べからず彼らは聖者なれば入ことを得るなり民はみなヱホバの殿を守るべし七レビ人はおのおの手に武器を執て王を繞りて立べし家に入る者をば凡て殺すべし汝らは王の出る時にも入る時にも王とともに居れと八是においてレビ人およびユダの人衆は祭司ヱホヤダが凡て命じたる如くに行ひ各々その手の人の安息日に入來べき者と安息日に出ゆくべき者とを率ゐ居れり祭司ヱホヤダ班列の者を去せざればなり九祭司ヱホヤダすなはち神の家にあるダビデ王の鎗および大楯小楯を百人の長等に交し一〇一切の民をして各々武器を手に執て王の四周に立ち殿の右の端より殿の左の端におよびて壇と殿にそふて居しむ一一斯て人衆王の子を携へ出し之に冠冕を戴かせ證詞をわたして王となし祭司ヱホヤダおよびその子等これに膏をそそげり而して皆王長壽かれと言ふ一二茲にアタリヤ民と近衛兵と王を讃る者との聲を聞きヱホバの室に入て民の所に至り一三視に王は入口にてその柱の傍に立ち王の側に軍長と喇叭手立をり亦國の民みな喜びて喇叭を吹き謳歌者樂を奏し先だちて讃美を歌ひをりしかばアタリヤその衣を裂き叛逆なり叛逆なりと言り一四時に祭司ヱホヤダ軍兵を統る百人の長等を呼出してこれに言ふ彼をして列の間を通りて出しめよ凡て彼に從がふ者をば劍をもて殺すべしと祭司は彼をヱホバの室に殺すべからずとて斯いへるなり一五是をもて之がために路をひらき王の家の馬の門の入口まで往しめて其處にて之を殺せり一六斯てヱホヤダ己と一切の民と王との間にわれらは皆ヱホバの民とならんことの契約を結べり一七是において民みなバアルの室にゆきて之を毀ちその壇とその像を打碎きバアルの祭司マツタンを壇の前に殺せり一八ヱホヤダまたヱホバの室の職事を祭司レビ人の手に委ぬ昔ダビデ、レビ人を班列にわかちてヱホバの室におきモーセの律法に記されたる所にしたがひて歡喜と謳歌とをもてヱホバの燔祭を献げしめたりき今このダビデの例に傚ふ一九彼またヱホバの室の門々に看守者を

立せ置き身の汚れたる者には何によりて汚れたるにもあれ凡て入ことを得ざらしむ二〇斯てヱホヤダ百人の長等と貴族と民の牧伯等および國の一切の民を率ゐてヱホバの家より王を導きくだり上の門よりして王の家にいり王を國の位に坐せしめたり二一斯りしかば國の民みな喜こびて邑は平穏なりきアタリヤは劍にて殺さる

第二四章一ヨアシは七歳の時位に即きヱルサレムにて四十年の間世を治めたりその母はベエルシバより出たる者にして名をヂビアといふ二ヨアシは祭司ヱホヤダの世にある日の間は恒にヱホバの善と觀たまふことを行へり三ヱホヤダ彼のために二人の妻を娶れり男子女子生る四此後ヨアシ、ヱホバの室を修繕んと志し五祭司とレビ人を集めて之に言けるは汝ら出てユダの邑々に往き汝らの神ヱホバの室を歳々修繕ふべき金子をイスラエルの人衆より聚むべし其事を亟にせよと然るにレビ人これを亟にせざりき六王ヱホヤダ長を召てこれに言けるは汝なんぞレビ人に求めてヱホバの僕モーセおよびイスラエルの會衆の古昔證詞の幕屋のために集めたるが如き税をユダとヱルサレムより取きたらせざるやと七かの惡き婦アタリヤの子等神の家を壞りかつヱホバの家の諸の奉納物をバアルに供へたり八是において王の命にしたがひて一箇の匱を作りヱホバの室の門の外にこれを置き九ユダとヱルサレムに宣布て汝ら神の僕モーセが荒野にてイスラエルに課したる如き税をヱホバに携へきたれと言けるに一〇一切の牧伯等および一切の民みな喜びて携へきたりその匱に投いれて遂に納めをはれり一一レビ人その匱に金の多くあるを見てこれを王の廳に携へゆく時は王の書記と祭司の長の下役きたりてその匱を傾むけ復これを取て本の處に持ゆけり日々に斯のごとくして金を聚むること夥多し一二而して王とヱホヤダこれをヱホバの家の工事を爲す者に付し石工および木匠を雇ひてヱホバの室を修繕はせまた鐵工および銅工を雇ひてヱホバの室を修復せしめけるが一三工人動作てその工事を成をへ神の室を本の状に復してこれを堅固にす一四その既に成るにおよびて餘れる金を王とヱホヤダの前に持いたりければ其をもてヱホバの室のために器皿を作れり即ち奉事の器献祭の器および匙ならびに金銀の器を作れりヱホヤダが世に在る日の間はヱホバの室にて燔祭をささぐること絶ざりき一五ヱホヤダは年邁み日滿て死りその死る時は百三十歳なりき一六人衆ダビデの邑にて王等の中間にこれを葬むる其は彼イスラエルの中において神とその殿とにむかひて善事をおこなひたればなり一七ヱホヤダの死たる後ユダの牧伯等きたりて王を拜す是において王これに聽したがふ一八彼らその先祖の神ヱホバの室を棄てアシラ像および偶像に事へたればその愆のために震怒ユダとヱルサレムに臨めり一九ヱホバかれらを己にひきかへさんとて預言者等を遣はし之にむかひて證をたてさせたまひしかども聽ことをせざりき二〇是において神の霊祭司ヱホヤダの子ゼカリヤに臨

みければ彼民の前に高く起あがりて之に言けるは神かく宣ふ汝らヱホバの誡命を犯して災禍を招くは何ぞや汝らヱホバを棄たればヱホバも汝らを棄たまふと二一 然るに人衆かれを害せんと謀り王の命によりて石をもてこれをヱホバの室の庭にて撃殺せり二二 斯ヨアシ王はゼカリヤの父ヱホヤダが己にほどこせし恩を念ずしてその子を殺せり彼死る時にヱホバこれを顧みこれを問討したまへと言り二三 かくてその年の終るにおよびてスリアの軍勢かれにむかひて攻のぼりユダとヱルサレムにいたりて民の牧伯等をことごとく民の中より滅ぼし絶ちその掠取物を凡てダマスコの王に遣れり二四 この時スリアの軍勢は小勢にて來りけるにヱホバ大軍をこれが手に付したまへり是はその先祖の神ヱホバを棄たるが故なり斯かれらヨアシを罰せり二五 スリア人ヨアシに大傷をおはせて遺去けるがヨアシの臣僕等祭司ヱホヤダの子等の血のために黨をむすびて之に叛き之をその床の上に弑して死しめたり人衆これをダビデの邑に葬れり但し王の墓には葬らざりき二六 黨をむすびて之に叛きし者はアンモンの婦シメアテの子ザバデおよびモアブの婦シムリテの子ヨザバデなりき二七 ヨアシの子等の事ヨアシの告られし預言および神の室を修繕し事などは列王の書の註釋に記さるヨアシの子アマジヤこれに代りて王となれり

第二五章一 アマジヤは二十五歳の時位に即きヱルサレムにて二十九年の間世を治めたりその母はヱルサレムの者にして名をヱホアダンといふ二 アマジヤはヱホバの善と視たまふ事を行なひしかども心を全うしてこれを爲ざりき三 彼國のおのが手に堅く立つにおよびてその父王を弑せし臣僕等を殺せり四 然どその子女等をば殺さずしてモーセの書の律法に記せるごとく爲り即ちヱホバ命じて言たまはく父はその子女の故によりて殺さるべからず子女はその父の故によりて殺さるべからず各々おのれの罪によりて殺さるべきなりと五 アマジヤ、ユダの人を集めその父祖の家にしたがひて或は千人の長に附屬せしめ或に百人の長に附屬せしむユダとベニヤミンともに然り且二十歳以上の者を數へ戈と楯とを執て戰鬪に臨む倔強の士三十萬を得六 また銀百タラントをもてイスラエルより大勇士十萬を傭へり七 時に神の人かれに詣りて言けるは王よイスラエルの軍勢をして汝とともに往しむる勿れヱホバはイスラエル人すなはちエフライムの子孫とは偕にいまさざるなり八 汝もし往ば心を強くして戰鬪を爲せ神なんぢをして敵の前に斃れしめたまはん神は助くる力ありまた倒す力あるなり九 アマジヤ神の人にいひけるは然ば已にイスラエルの軍隊に與へたる百タラントを如何にすべきや神の人答へけるはヱホバは其よりも多き者を汝に賜ふことを得るなりと一〇 是においてアマジヤかのエフライムより來りて己に就る軍隊を分離してその處に歸らしめければ彼らユダにむかひて烈しく怒を發し火のごとくに怒りてその處に歸れり一一 かくてアマジヤは力を強くしその民を率ゐて鹽の谷に往きセイル

人一萬を撃殺せり一二ユダの子孫またこの外に一萬人を生擒て磐の頂に曳ゆき磐の頂よりこれを投おとしければ皆微塵に碎けたり一三前にアマジヤが己とともに戰鬪に往べからずとして歸し遣たる軍卒等サマリアよりベテホロンまでのユダの邑々を襲ひ人三千を撃ころし物を多く奪ふ一四アマジヤ、エドム人を戮して歸る時にセイル人の神々を携さへ來り之を安置して己の神となしその前に禮拜をなし之に香を焚り一五是をもてヱホバ、アマジヤにむかひて怒を發し預言者をこれに遣はして言しめたまひけるは彼民の神々は己の民を汝の手より救ふことを得ざりし者なるに汝なにとて之を求むるや一六彼かく王に語れる時王これにむかひ我儕汝を王の議官となせしや止よ汝なんぞ撃殺されんとするやと言ければ預言者すなはち止て言り我知る汝この事を行ひて吾諫を聽いれざるによりて神なんぢを滅ぼさんと決めたまふと一七斯てユダの王アマジヤ相議りて人をヱヒウの子ヱホアハズの子なるイスラエルの王ヨアシに遣し來れ我儕たがひに面をあはせんと言しめければ一八イスラエルの王ヨアシ、ユダの王アマジヤに言おくりけるはレバノンの荊棘かつてレバノンの香柏に汝の女子を我子の妻に與へよと言おくりたること有しにレバノンの野獸とほりてその荊棘を踏たふせり一九汝はエドム人を撃破れりと謂ひ心にたかぶりて誇る然ば汝家に安んじ居れ何ぞ禍を惹おこして自己もユダもともに亡びんとするやと二〇然るにアマジヤ聽ことをせざりき此事は神より出たる者にて彼らをその敵の手に付さんがためなり是は彼らエドムの神々を求めしに因る二一是においてイスラエルの王ヨアシ上りきたりユダのベテシメシにてユダの王アマジヤと面をあはせたりしが二二ユダ、イスラエルに撃敗られて各々その天幕に逃かへりぬ二三時にイスラエルの王ヨアシはヱホアハズの子ヨアシの子なるユダの王アマジヤをベテシメシに執へてヱルサレムに携へゆきヱルサレムの石垣をエフライムの門より隅の門まで四百キユビト程を毀ち二四また神の室の中にてオベデエドムが守り居る一切の金銀および諸の器皿ならびに王の家の財寶を取りかつ人質をとりてサマリアに歸れり二五ユダの王ヨアシの子アマジヤはイスラエルの王ヱホアハズの子ヨアシの死てより後なほ十五年生存らへたり二六アマジヤのその餘の始終の行爲はユダとイスラエルの列王の書に記さるるにあらずや二七アマジヤ翻へりてヱホバに從がはずなりし後ヱルサレムにおいて黨を結びて彼に敵する者ありければ彼ラキシに逃ゆきけるにその人々ラキシに人をやりて彼を其處に殺さしめたり二八人衆これを馬に負せてきたりユダの邑にてその先祖等とともにこれを葬りぬ

第二六章一是においてユダの民みなウジヤをとりて王となしてその父アマジヤに代らしめたり時に年十六なりき二彼エラテの邑を建てこれを再びユダに歸せしむ是はかの王がその先祖等とともに寢りし後なりき三ウジヤは十六歳の時位に即きヱルサレ

ムにて五十二年の間世を治めたりその母はヱルサレムの者にして名をヱコリアといふ[四]ウジヤはその父アマジヤが凡てなしたる如くヱホバの善と觀たまふ事を行ひ[五]神の默示に明なりしかのゼカリヤの世にある日の間心をこめてヱホバを求めたりそのヱホバを求むる間は神これをして幸福ならしめたまへり[六]彼いでてペリシテ人と戰ひガテの石垣ヤブネの石垣およびアシドドの石垣を圮しアシドドの地ならびにペリシテ人の中間に邑を建つ[七]神かれを助けてペリシテ人グルバアルに住むアラビヤ人およびメウニ人を攻擊しめたまへり[八]アンモニ人はまたウジヤに貢を納るウジヤの名つひにエジプトの入口までも廣まれり其は甚だ強くなりければなり[九]ウジヤ、ヱルサレムの隅の門谷の門および角隅に戌樓を建てこれを堅固にし[一〇]また荒野に戌樓を建て許多の水溜を掘り其は家畜を多く有たればなり亦平野にも平地にも家畜を有り又山々およびカルメルには農夫と葡萄を修る者を有り農事を好みたればなり[一一]ウジヤ戰士一旅團あり書記ヱイエルと牧伯マアセヤの數調査によりて隊々にわかれて戰爭に出づ皆王の軍長ハナニヤの手に屬す[一二]大勇士の族長の數は都合二千六百[一三]その手に屬する軍勢は三十萬七千五百人みな大なる力をもて戰ひ王を助けて敵に當る[一四]ウジヤその全軍のために楯戈兜鎧弓および投石器の石を備ふ[一五]彼またヱルサレムにおいて工人に機械を案へ造らしめ之を戌樓および石垣に施こし之をもて矢ならびに大石を射出せり是においてその名遠く廣まれり其は非常の援助を蒙りて旺盛になりたればなり[一六]然るに彼旺盛になるにおよびその心に高ぶりて惡き事を行なへり即ち彼その神ヱホバにむかひて罪を犯しヱホバの殿に入て香壇の上に香を焚んとせり[一七]時に祭司アザリヤ、ヱホバの祭司たる勇者八十人を率ゐて彼の後にしたがひ入り[一八]ウジヤ王を阻へてこれに言けるはウジヤよヱホバに香を焚ことは汝のなすべき所にあらずアロンの子孫にして香を焚ために潔められたる祭司等のなすべき所なり聖所より出よ汝は罪を犯せりヱホバ神なんぢに榮を加へたまはじと[一九]是においてウジヤ怒を發し香爐を手にとりて香を焚んとせしがその祭司にむかひて怒を發しをる間に癩病その額に起れり時に彼はヱホバの室にて祭司等の前にあたりて香壇の側にをる[二〇]祭司の長アザリヤおよび一切の祭司等彼を見しに已にその額に癩病生じゐたれば彼を其處より速にいだせり彼もまたヱホバの己を擊たまへるを見て自ら急ぎて出去り[二一]ウジヤ王はその死る日まで癩病人となり居しがその癩病人となるにおよびては別殿に住りヱホバの室より斷れたればなり其子ヨタム王の家を管理て國の民を審判り[二二]ウジヤのその餘の始終の行爲はアモツの子預言者イザヤこれを書記したり[二三]ウジヤその先祖等とともに寢りたれば彼は癩病人なりとて王等の墓に連接る地にこれを葬りてその先祖等とともならしむその子ヨタムこれに代りて王となれり

第二七章一ヨタムは二十五歳の時位に即きヱルサレムにて十六年の間世を治めたり其母はザドクの女にして名をヱルシヤといふ二ヨタムはその父ウジヤの凡て爲たるごとくヱホバの善と視たまふ事をなせり但しヱホバの殿には入ざりき民は尚惡き事を爲り三彼ヱホバの家の上の門を建なほしオペルの石垣を多く築き增し四ユダの山地に數箇の邑を建て林の間に城および戍樓を築けり五彼アンモニ人の王と戰ひこれに勝り其年アンモンの子孫銀百タラント小麥一萬石大麥一萬石を彼におくれりアンモンの子孫は第二年にも第三年にも是のごとく彼に貢をいる六ヨタムその神ヱホバの前においてその行を堅うしたるに因て權能ある者となれり七ヨタムのその餘の行爲その一切の戰闘およびその行などはイスラエルとユダの列王の書に記さる八彼は二十五歳の時位に即きヱルサレムにて十六年の間世を治めたり九ヨタムその先祖等とともに寢りたればダビデの邑にこれを葬れりその子アハズこれに代りて王となる

第二八章一アハズは二十歳の時位に即きヱルサレムにて十六年の間世を治めたりしがその父ダビデと異にしてヱホバの善と觀たまふ所を行はず二イスラエルの王等の道にあゆみ亦諸のバアルのために像を鑄造り三ベンヒンノムの谷にて香を焚きその子を火に燒きなどしてヱホバがイスラエルの子孫の前より逐はらひたまひし異邦人の行ふところの憎むべき事に傚ひ四また崇邱の上丘の上一切の青木の下にて犧牲をささげ香を焚り五是故にその神ヱホバかれをスリアの王の手に付したまひてスリア人つひに彼を擊破りその人々を衆く虜囚としてダマスコに曳ゆけり彼はまたイスラエルの王の手にも付されたればイスラエルの王かれを擊て大にその人を殺せり六すなはちレマリヤの子ペカ、ユダにおいて一日の中に十二萬人を殺せり皆勇士なりき是は彼らその先祖の神ヱホバを棄しによるなり七その時にエフライムの勇士ジクリといふ者王の子マアセヤ宮内卿アズリカムおよび王に亞ぐ人エルカナを殺せり八イスラエルの子孫つひにその兄弟の中より婦人ならびに男子女子など合せて二十萬人を俘虜にしまた衆多の掠取物を爲しその掠取物をサマリアに携へゆけり九時に彼處にヱホバの預言者ありその名をオデデといふ彼サマリアに歸れる軍勢の前に進みいでて之に言けるは汝らの先祖の神ヱホバ、ユダを怒りてこれを汝らの手に付したまひしが汝らは天に達するほどの忿怒をもて之を殺せり一〇然のみならず汝ら今ユダとヱルサレムの子孫を圧つけて己の奴婢となさんと思ふ然ども汝ら自身もまた汝らの神ヱホバに罪を獲たる身にあらずや一一然ば今我に聽き汝らがその兄弟の中より虜へ來りし俘虜を放ち歸せヱホバの烈しき怒なんぢらの上に臨まんとすればなりと一二是においてエフライム人の長たる人々すなはちヨハナンの子アザリヤ、メシレモテの子ベレキヤ、シヤルムの子ヒゼキヤ、ハデライの子アマサ等戰爭より歸れる者等の前に立ふさがりて一三之にいひけるは汝ら俘虜を此に曳いる

べからず汝らは我らをして更に我らの罪愆を增んとす我らの愆は大にして烈しき怒イスラエルにのぞまんとするなりと[一四]是において兵卒等その俘虜と掠取物を牧伯等と全會衆の前に遺おきければ[一五]上に名を擧げたる人々たちて俘虜を受取り掠取物の中より衣服を取てその裸なる者に着せ之に靴を穿せ食飮を爲しめ膏油を沃ぎ等しその弱き者をば盡く驢馬に乘せ斯して之を棕櫚の邑ヱリコに導きゆきてその兄弟に詣らしめ而してサマリアに歸れり[一六]當時アハズ王人をアツスリヤの王等に遣はして援助を乞しむ[一七]其はエドム人また來りてユダを攻擊ち民を虜へて去たればなり[一八]ペリシテ人もまた平野の邑々およびユダの南の邑々を侵してベテシメシ、アヤロン、ゲデロテおよびシヨコとその鄕里テムナとその鄕里ギムゾとその鄕里を取て其處に住めり[一九]イスラエルの王アハズの故をもてヱホバかくユダを卑くしたまふ其は彼ユダの中に淫逸なる事を行ひかつヱホバにむかひて大に罪を犯したればなり[二〇]アツスリヤの王テグラテピレセルは彼の所に來りしかども彼に力をそへずして反てこれを煩はせり[二一]アハズ、ヱホバの家と王の家および牧伯等の家の物を取てアツスリヤの王に與へけれどもアハズを援くることをせざりき[二二]このアハズ王はその困難の時に當りてますますヱホバに罪を犯せり[二三]即ち彼おのれを擊るダマスコの神々に犧牲を献げて言ふスリアの王等の神々はその王等を助くれば我もこれに犧牲を献げん然ば彼ら我を助けんと然れども彼等はかへつてアハズとイスラエル全國を仆す者となれり[二四]アハズ神の室の器皿を取聚めて神の室の器皿を切やぶりヱホバの室の戶を閉ぢヱルサレムの隅々に凡て祭壇を造り[二五]ユダの一切の邑々に崇邱を造りて別神に香を焚き等してその先祖の神ヱホバの忿怒を惹おこせり[二六]アハズのその餘の始終の行爲およびその一切の行跡はユダとイスラエルの列王の書に記さる[二七]アハズその先祖等とともに寢りたればヱルサレムの邑にこれを葬れり然どイスラエルの王等の墓にはこれを持ゆかざりき其子ヒゼキヤこれに代りて王となる

第二九章[一]ヒゼキヤは二十五歲の時位に即きヱルサレムにて二十九年の間世を治めたりその母はゼカリヤの女にして名をアビヤといふ[二]ヒゼキヤはその父ダビデの凡てなしたる如くヱホバの目に善と視たまふ事をなせり[三]即ち彼その治世の第一年一月にヱホバの室の戶を開きかつ之を修繕ひ[四]祭司およびレビ人を携さへいりて東の廣場にこれを集め[五]而して之にいひけるはレビ人よ我に聽け汝等いま身を潔めて汝等の先祖の神ヱホバの室を潔め汚穢を聖所より除きされ[六]夫我らの先祖は罪を犯し我らの神ヱホバの目に惡しと見たまふことを行ひてヱホバを棄てヱホバの住所に面を背けて後をこれに向け[七]また廊の戶を閉ぢ燈火を消し聖所にてイスラエルの神に香を焚ず燔祭を献けざりし[八]是をもてヱホバの忿怒ユダとヱルサレムに臨みヱホバ彼等をして打たゞよはされしめ詑異とならしめ胡盧とならしめた

まへり汝らが目に觀るごとし九 即ち我儕の父は劍に斃れ我らの男子女子及び妻等はこれがために俘虜となれり一〇 今我イスラエルの神ヱホバと契約を結ばんとする意志ありその烈しき怒我らを離るることあらん一一 我子等よ今は怠たる勿れヱホバ汝らを擇びて己の前に立て事へしめ己に事ふる者となし香を焚く者となしたまひたればなりと一二 是においてレビ人起り即ちコハテの子孫の中にてはアマサイの子マハテおよびアザリヤの子ヨエル、メラリの子孫の中にてはアブデの子キシおよびヱハレレルの子アザリヤ、ゲルシヨン人の中にてはジンマの子ヨアおよびヨアの子エデン一三 エリザパンの子孫の中にてはシムリおよびヱイエル、アサフの子孫の中にてはゼカリヤおよびマツタニヤ一四 ヘマンの子孫の中にてはヱヒエルおよびシメイ、ヱドトンの子孫の中にてはシマヤおよびウジエル一五 かれらその兄弟を集へて身を潔めヱホバの言に依りて王の傳へし命令にしたがひてヱホバの室を潔めんとて入きたり一六 祭司等ヱホバの室の奧に入りてこれを潔めヱホバの殿にありし汚穢をことごとくヱホバの室の庭に携へいだせばレビ人それを受て外にいだしキデロン河に持いたる一七 彼ら正月の元日に潔むることを始めてその月の八日にヱホバの廊におよびまたヱホバの家を潔むるに八日を費し正月の十六日にいたりて之を終れり一八 かくて彼らヒゼキヤ王の處に入て言ふ我らヱホバの室をことごとく潔めまた燔祭の壇とその一切の器具および供前のパンの案とその一切の器皿とを潔めたり一九 またアハズ王がその治世に罪を犯して棄たりし一切の器皿をも整へてこれを潔めヱホバの壇の前にこれを据置りと二〇 是においてヒゼキヤ王蚤に起いで邑の牧伯等をあつめてヱホバの家にのぼり往き二一 牡牛七匹牡羊七匹羔羊七匹牡山羊七匹を牽きたらしめ國と聖所とユダのためにこれを罪祭となしアロンの子孫たる祭司等に命じてこれをヱホバの壇の上に献げしむ二二 即ち牡牛を宰れば祭司等その血を受て壇に灑ぎまた牡羊を宰ればその血を壇に灑ぎまた羔羊を宰ればその血を壇に灑げり二三 かくて人々罪祭の牡山羊を王と會衆の前に牽きたりければ彼らその上に手を按り二四 而して祭司これを宰りその血を罪祭として壇の上に献げてイスラエル全國のために贖罪をなせり是は王イスラエル全國の爲に燔祭および罪祭を献ぐることを命じたるに因る二五 王レビ人をヱホバの室に置きダビデおよび王の先見者ガデと預言者ナタンの命令にしたがひて之に鐃鈸瑟および琴を執しむ是はヱホバがその預言者によりて命じたまひし所なり二六 是においてレビ人はダビデの樂器をとり祭司は喇叭をとりて立つ二七 時にヒゼキヤ燔祭を壇の上に献ぐることを命ぜり燔祭をささげ始むるときヱホバの歌をうたひ喇叭を吹きイスラエルの王ダビデの樂器をならしはじめたり二八 しかして會衆みな禮拜をなし謳歌者歌をうたひ喇叭手喇叭を吹ならし燔祭の終るまで凡て斯ありしが二九 献ぐる事の終るにおよびて王および之と偕に在る者皆身をかが

めて禮拜をなせり三〇かくて又ヒゼキヤ王および牧伯等レビ人に命じダビデと先見者アサフの詞をもてヱホバを讃美せしむ彼等喜樂をもて讃美し首をさげて禮拜す三一時にヒゼキヤこたへて言けるは汝らすでにヱホバに事へんために身を潔めたれば進みよりてヱホバの室に犧牲および感謝祭を携へきたれと會衆すなはち犧牲および感謝祭を携へきたれり又志ある者はみな燔祭を携ふ三二會衆の携へきたりし燔祭の數は牡牛七十牡羊一百羔羊二百是みなヱホバに燔祭として奉つる者なり三三また奉納物は牛六百羊三千なりき三四然るに祭司寡くしてその燔祭の物の皮を剥つくすこと能はざりければその兄弟たるレビ人これを助けてその工を終ふ斯る間に他の祭司等も身を潔むレビ人は祭司よりも心正しくして身を潔めたり三五燔祭夥多しくあり酬恩祭の脂及びすべての燔祭の酒も然り斯ヱホバの室の奉事備はれり三六この事俄なりしかども神かく民の爲に備をなしたまひしに因てヒゼキヤおよび一切の民喜べり

第三〇章一茲にヒゼキヤ、イスラエルとユダに遍ねく人を遣しまた書をエフライムとマナセに書おくりヱルサレムなるヱホバの室に來りてイスラエルの神ヱホバに逾越節を行はんことを勸む二王すでにその牧伯等およびヱルサレムにある會衆と議り二月をもて逾越節を行はんと定めたり三其は祭司の身を潔めし者足ず民またヱルサレムに集らざりしに因て彼時にこれを行ふことを得ざればなり四王も會衆もこの事を見て善となし五即ちこの事を定めてベエルシバよりダンまでイスラエルに遍ねく宣布しめしヱルサレムに來りてイスラエルの神ヱホバに逾越節を行はんことを勸む是はその録されたるごとくにこれを行ふ事久しく無りしが故なり六飛脚すなはち王とその牧伯等が授けし書をもちてイスラエルとユダを遍ねく行めぐり王の命を傳へて云ふイスラエルの子孫よ汝らアブラハム、イサク、イスラエルの神ヱホバに起歸れ然ばヱホバ、アツスリヤの王等の手より逃れて遺るところの汝らに歸りたまはん七汝らの父および兄弟の如くならざれ彼らその先祖の神ヱホバにむかひて罪を犯したればこれを滅亡に就しめたまへり汝らが見るごとし八然ば汝らの父のごとく汝ら項を強くせずしてヱホバに歸服しその永久に聖別たまひし聖所に入り汝らの神ヱホバに事へよ然ればその烈しき怒なんぢらを離れん九汝ら若ヱホバに歸らば汝らの兄弟および子女その己を虜へゆきし者の前に衿憫を得て遂にまた此國にかへらん汝らの神ヱホバは恩惠あり憐憫ある者にましませば汝らこれに起かへるにおいては面を汝らに背けたまはじと一〇かくのごとく飛脚エフライム、マナセの國にいりて邑より邑に行めぐりて遂にゼブルンまで至りしが人衆これを嘲り笑へり一一但しアセル、マナセおよびゼブルンの中より身を卑くしてヱルサレムに來りし者もあり一二またユダに於ては神その力をいだして人々に心を一にせしめ王と牧伯等がヱホバの言に依て傳へし命令を之に行はしむ一三斯りしかば二月にいたりて

民酵いれぬパンの節をおこなはんとて多くヱルサレムに來り集れりその會はなはだ大なりき一四彼等すなはち起てヱルサレムにある諸の壇を取のぞきまた一切の香壇を取のぞきてこれをキデロン川に投すて一五二月の十四日に逾越の物を宰れり是において祭司等およびレビ人は自ら恥ぢ身を潔めてヱホバの室に燔祭を携へきたり一六神の人モーセの律法に循ひ例に依て各々その所に立ち而して祭司等レビ人の手より血を受て灑げり一七時に會衆の中に未だ身を潔めざる者多かりければレビ人その潔からざる一切の人々に代りて逾越の物を宰りてヱホバに潔め献ぐ一八また衆多の民すたはちエフライム、マナセ、イツサカル、ゼブルンより來りし衆多の者未だ身を潔むる事をせずその書録されし所に違ひて逾越の物を食へり是をもてヒゼキヤこれがために祈りて云ふ一九惠ふかきヱホバよ凡そその心を傾けて神を求めその先祖の神ヱホバを求むる者は假令聖所の潔斎に循はざるとも願くは是を赦したまへと二〇ヱホバ、ヒゼキヤに聽て民を醫したまへり二一ヱルサレムにきたれるイスラエルの子孫は大なる喜悦をいだきて七日の間酵いれぬパンの節をおこなへり又レビ人と祭司は日々にヱホバを讃美し高聲の樂を奏してヱホバを頌へたり二二ヒゼキヤ、ヱホバの奉事に善通じをる一切のレビ人を深く勞らふ斯人衆酬恩祭を献げその先祖の神ヱホバに感謝して七日のあひだ節の物を食へり二三かくて又全會あひ議りて更に七日を守らんと決め喜悦をいだきてまた七日を守れり二四時にユダの王ヒゼキヤは牡牛一千羊七千を會衆に餽り又牧伯等は牡牛一千羊一萬を會衆に餽れり祭司もまた衆く身を潔めたり二五ユダの全會衆および祭司レビ人ならびにイスラエルより來れる全會衆およびイスラエルの地より來れる異邦人とユダに住む異邦人みな喜べり二六かくヱルサレムに大なる喜悦ありきイスラエルの王ダビデの子ソロモンの時より以來かくのごとき事ヱルサレムに在ざりしなり二七この時祭司レビ人起て民を祝しけるにその言聽れその祈祷ヱホバの聖き住所なる天に達せり

第三一章 一この事すべて終りしかば其處に在しイスラエル人みなユダの邑々に出ゆき柱像を碎きアシラ像を斫たふしユダとベニヤミンの全地より崇邱と祭壇を崩し絶ちエフライム、マナセにも及ぼして遂にまつたく之を毀ち而してイスラエルの子孫おのおのその邑々に還りて己の產業にいたれり二ヒゼキヤ祭司およびレビ人の班列を定めその班列にしたがひて各々にその職を行はしむ即ち祭司とレビ人をして燔祭および酬恩祭を献げしめヱホバの營の門において奉事をなし感謝をなし讃美をなさしめ三また己の財產の中より王の分を出して燔祭のために即ち朝夕の燔祭および安息日朔日節會などの燔祭のために之を出してヱホバの律法に記さるる如くす四彼またヱルサレムに住む民に祭司とレビ人にその分を與へんことを命ず是かれらをしてヱホバの律法に身を委ねしめんとてなり五其命令の傳はるや否や

イスラエルの子孫穀物酒油蜜ならびに田野の諸の産物の初を多く献げまた一切の物の什一を夥多しく携へきたる六ユダの邑々に住るイスラエルとユダの子孫もまた牛羊の什一ならびにその神ヱホバに納むべき聖物の什一を携へきたりてこれを積疊ぬ七三月に之を積疊ぬることを始め七月にいたりて之を終れり八ヒゼキヤおよび牧伯等きたりて其積疊ねたる物を見ヱホバとその民イスラエルを祝せり九ヒゼキヤその積疊ねたる物の事を祭司とレビ人に問尋ねければ一〇ザドクの家より出し祭司の長アザリヤ彼に應へて言けるは民ヱホバの室に禮物を携ふることを始めしより以來我儕飽までに食ひしがその餘れる所はなはだ多しヱホバその民をめぐみたまひたればなりその餘れる所かくのごとく夥多しと一一ヒゼキヤ、ヱホバの家の内に室を設くることを命じければ則ちこれを設け一二忠實にその禮物什一および奉納物を携へいれりレビ人コナニヤこれを主どりその兄弟シメイこれに副ふ一三ヱヒエル、アザジヤ、ナハテ、アサヘル、ヱレモテ、ヨザバデ、ヱリエル、イスマキヤ、マハテ、ベナヤ等ヒゼキヤ王および神の室の宰アザリヤの命に依りコナニヤ及びその兄弟シメイの手下につきてこれが監督者となる一四東の門を守る者レビ人ヱムナの子コレ神に獻ぐる誠意よりの禮物を司どりてヱホバの献納物および至聖物を頒つ一五その手につく者はエデン、ミニヤミン、ヱシユア、シマヤ、アマリヤおよびシカニヤみな祭司の邑々に居てその職を盡しその兄弟に班列に依て之を頒つ大小ともに均し一六此外にまた凡て名簿に載たる男子三歳以上にしてヱホバの室に入りその班列にしたがひて日々の職分を盡し擔任の勤務を爲すところの者に之を頒つ一七またその宗家にしたがひて名簿に載られその班列にしたがひて擔任の事を執行ふところの祭司および二十歳以上のレビ人一八ならびに名簿に載たるその小き者その妻その男子その女子などに盡く之を頒つ會中すべて然り即ち彼等は潔白忠實にその職を盡せり一九また邑々の郊地に居るアロンの子孫たる祭司等のためには邑ごとに人を名指し選び祭司の中の一切の男およびレビ人の中の名簿に載せたる一切の者にその分を予へしむ二〇ヒゼキヤ、ユダ全國に斯のごとく爲し善事正き事忠實なる事をその神ヱホバの前に行へり二一凡てその神の室の職務につき律法につき誡命につきて行ひ始めてその神を求めし工は悉く心をつくして行ひてこれを成就たり

第三二章一ヒゼキヤが此等の事を行ひ且つ忠實なりし後アツスリヤの王セナケリブ來りてユダに入り堅固なる邑々にむかひて陣を張り之を攻取んとす二ヒゼキヤ、セナケリブの既に來りヱルサレムに攻むかはんとするを見三その牧伯等および勇士等と謀りて邑の外なる一切の泉水を塞がんとす彼等これを助く四衆多の民あつまりて一切の泉水および國の中を流れわたる渓河を塞ぎていひけるはアツスリヤの王等來りて水を多く得ば豈で可らんやと五ヒゼキヤまた力を強くし破れたる石垣をことごと

く建なほして之を戌樓まで築き上げその外にまた石垣をめぐらしダビデの邑のミロを堅くし戈盾を多く造り六 軍長を多く民の上に立て邑の門の廣場に民を集めてこれを努ひて言ふ七 汝ら心を強くし且勇めアツスリヤの王のためにも彼とともなる群衆のためにも懼るる勿れ慄く勿れ我らとともなる者は彼とともになる者よりも多きぞかし八 彼とともなる者は肉の腕なり然れども我らとともなる者は我らの神ヱホバにして我らを助け我らに代りて戰かひたまふべしと民はユダの王ヒゼキヤの言に安んず九 此後アツスリヤの王セナケリブその全軍をもてラキシを攻圍み居りて臣僕をヱルサレムに遣はしてユダの王ヒゼキヤおよびヱルサレムにをる一切のユダ人に告しめて云く一〇 アツスリヤの王セナケリブかく言ふ汝ら何を恃みてヱルサレムに閉籠りをるや一一 ヒゼキヤ我らの神ヱホバ、アツスリヤの王の手より我らを救ひ出したまはんと言て汝らを逡かし汝らをして饑渇て死しめんとするに非ずや一二 此ヒゼキヤはすなはちヱホバの諸の崇邱と祭壇を取のぞきユダとヱルサレムとに命じて汝らは唯一の壇の前にて崇拜を爲しその上に香を焚べしと言し者にあらずや一三 汝らは我およびわが先祖等が諸の國の民に爲したる所を知ざるか其等の國々の民の神少許にてもその國をわが手より救ひ取ることを得しや一四 わが先祖等の滅ぼし盡せし國民の諸の神の中誰か己の民をわが手より救ひ出すことを得し者あらんや然れば汝らの神いかでか汝らをわが手より救ひいだすことを得ん一五 然れば斯ヒゼキヤに欺かるる勿れ逡かさるる勿れまた彼を信ずる勿れ何の民何の國の神もその民を我手または我父祖の手より救ひ出すことを得ざりしなれば況て汝らの神いかでか我手より汝らを救ひ出すことを得んと一六 セナケリブの臣僕等この外にも多くヱホバ神およびその僕ヒゼキヤを誹れり一七 セナケリブまた書をかきおくりてイスラエルの神ヱホバを嘲りかつ誹り諸國の民の神々その民をわが手より救ひいださざりし如くヒゼキヤの神もその民をわが手より救ひ出さじと云ふ一八 彼ら遂に大聲を擧げユダヤ語をもて石垣の上なるヱルサレムの民に語ひ之を威しかつ擾せり是は邑を取んとてなり一九 斯かれらはヱルサレムの神を論ずること人の手の作なる地上の民の神々を論ずるがごとくせり二〇 是によりてヒゼキヤ王およびアモツの子預言者イザヤともに祈祷て天に呼はりければ二一 ヱホバ天の使一箇を遣はしてアツスリヤ王の陣營にある一切の大勇士および將官軍長等を絶しめたまへり斯りしかば王面を赧らめて己の國に還りけるがその神の家にいりし時其身より出たる者等劍をもて之を其處に弑せり二二 是のごとくヱホバ、ヒゼキヤとヱルサレムの民をアツスリヤの王セナケリブの手および諸人の手より救ひいだし四方において之を守護たまへり二三 是において衆多の人献納物をヱルサレムに携へきたりてヱホバに奉りまた財寶をユダの王ヒゼキヤに餽れり此後ヒゼキヤは萬國の民に尊び見らる二四 當時ヒゼキヤ病て死んとせし

がヱホバに祈りければヱホバこれに告をなし之に休徴を賜へり二五然るにヒゼキヤその蒙むりし恩に酬ゆることをせずして心に高ぶりければ震怒これに臨まんとしまたユダとヱルサレムに臨まんとせしが二六ヒゼキヤその心に高慢を悔て身を卑くしヱルサレムの民も同じく然なしたるに因てヒゼキヤの世にはヱホバの震怒かれらに臨まざりき二七ヒゼキヤは富と貴を極め府庫を造りて金銀寶石香物楯および各種の寶貴き器物を蔵め二八また倉廩を造りて穀物酒油などの產物を蔵め圏を造りて種々の家畜を置き牢を造りて羊の群を置き二九また許多の邑を設けかつ牛羊を夥多しく有り是は神貨財を甚だ多くこれに賜ひしが故なり三〇このヒゼキヤまたギホンの水の上の源を塞ぎてこれを下より眞直にダビデの邑の西の方に引り斯ヒゼキヤはその一切の工を善なし就たり三一但しバビロンの君等が使者を遣はしてこの國にありし奇蹟を問しめたる時には神かれを棄おきたまへり是その心に有ところの事を盡く知んがために之を試みたまへるなり三二ヒゼキヤのその餘の行爲およびその徳行はユダとイスラエルの列王紀の書の中なるアモツの子預言者イザヤの默示の中に記さる三三ヒゼキヤその先祖等と偕に寢りたればダビデの子孫の墓の中なる高き處にこれを葬りユダの人々およびヱルサレムの民みな厚くその死を送れり其子マナセこれに代りて王となる

第三三章 一マナセは十二歳の時位に即きヱルサレムにて五十五年の間世を治めたり二彼はヱホバの目に惡と觀たまふことを爲しイスラエルの子孫の前よりヱホバの逐はらひたまひし國人の行ふところの憎むべき事に傚へり三即ちその父ヒゼキヤの毀ちたりし崇邱を改ため築き諸のバアルのために壇を設けアシラ像を作り天の衆群を拝みて之に事へ四またヱホバが我名は永くヱルサレムに在べしと宣まひしヱホバの室の内に數箇の壇を築き五天の衆群のためにヱホバの室の兩の庭に壇を築き六またベンヒンノムの谷にてその子女に火の中を通らせかつ占卜を行ひ魔術をつかひ禁厭を爲し憑鬼者と卜筮師を取用ひなどしてヱホバの目に惡と視たまふ事を多く行ひてその震怒を惹起せり七彼またその作りし偶像を神の室に安置せり神此室につきてダビデとその子ソロモンに言たまひし事あり云く我この室と我がイスラエルの諸の支派の中より選びたるヱルサレムとに我名を永く置ん八彼らもし我が凡て命ぜし事すなはちモーセが傳へし一切の律法と法度と例典を謹みて行はば我が汝らの先祖のために定めし地より我これが足を重てうつさじと九マナセかくユダとヱルサレムの民とを迷はして惡を行はしめたり其狀イスラエルの子孫の前にヱホバの滅ぼしたまひし異邦人よりも甚だし一〇ヱホバ、マナセおよびその民を諭したまひしかども聽ことをせざりき一一是をもてヱホバ、アッスリヤの王の軍勢の諸將をこれに攻來らせたまひて彼等つひにマナセを鉤にて虜へ之を桎梏に繫ぎてバビロンに曳ゆけり一二然るに彼患難に罹るにおよびて

その神ヱホバを和めその先祖の神の前に大に身を卑くして一三神に祈りければその祈祷を容れその懇願を聽きこれをヱルサレムに携へかへりて再び國に莅ましめたまへり是によりてマナセ、ヱホバは誠に神にいますと知り一四この後かれダビデの邑の外にてギホンの西の方なる谷の內に石垣を築き魚門の入口までに及ぼし又オベルに石垣を環らして甚だ高く之を築き上げユダの一切の堅固なる邑に軍長を置き一五またヱホバの室より異邦の神々および偶像を取除きヱホバの室の山とヱルサレムとに自ら築きし一切の壇を取のぞきて邑の外に投すて一六ヱホバの壇を修復ひて酬恩祭および感謝祭をその上に献げユダに命じてイスラエルの神ヱホバに事へしめたり一七然れども民は猶崇邱にて犧牲を献ぐることをなを爲り但しその神ヱホバに而已なりき一八マナセのその餘の行爲その神になせし祈祷およびイスラエルの神ヱホバの名をもて彼を諭せし先見者等の言はイスラエルの列王の言行錄に見ゆ一九またその祈祷を爲たる事その聽れたる事その諸の罪愆その身を卑くする前に崇邱を築きてアシラ像および刻たる像を立たる處々などはホザイの言行錄の中に記さる二〇マナセその先祖とともに寢りたれば之をその家に葬れり其子アモンこれに代りて王となる二一アモンは二十二歲の時位に即きヱルサレムにて二年の間世を治めたり二二彼は其父マナセの爲しごとくヱホバの目に惡と觀たまふ事を爲り即ちアモンその父マナセが作りたる諸の刻たる像に犧牲を献げてこれに事へ二三その父マナセが身を卑くせしごとくヱホバの前に身を卑くすることを爲ざりき斯このアモン愈その愆を增たりしが二四その臣僕黨を結びて之に叛きこれをその家の內に弑せり二五然るに國の民その黨を結びてアモン王に叛きし者等を盡く誅し而して國の民その子ヨシアを王となしてその後を嗣しむ

第三四章一ヨシアは八歲の時位に即きヱルサレムにて三十一年の間世を治めたり二彼はヱホバの善と觀たまふ事を爲しその父ダビデの道にあゆみて右にも左にも曲らざりき三即ち尚若かりしかどもその治世の八年にその父ダビデの神を求むる事を始めその十二年には崇邱アシラ像刻たる像鑄たる像などを除きてユダとヱルサレムを潔むることを始め四諸のバアルの壇を己の前にて毀たしめ其上に立る日の像を斫たふしアシラ像および雕像鑄像を打碎きて粉々にし是等に犧牲を献げし者等の墓の上に其を撒ちらし五祭司の骨をその諸の壇の上に焚き斯してユダとヱルサレムを潔めたり六またマナセ、エフライム、シメオンおよびナフタリの荒たる邑々にも斯なし七諸壇を毀ちアシラ像および諸の雕像を微塵に打碎きイスラエル全國の日の像を盡く斫たふしてヱルサレムに歸りぬ八ヨシアその治世の十八年にいたりて已に國と殿とを潔め了りその神ヱホバの家を修繕はしめんとてアザリヤの子シヤパン邑の知事マアセヤおよびヨアハズの子史官ヨアを遣せり九彼ら祭司の長ヒルキヤの許に至りてヱホバの室に入し金を交せり是は門守のレビ人がマナセ、エフライ

ムおよび其餘の一切のイスラエル人ならびにユダとベニヤミンの人およびエルサレムの民の手より斂めたる者なり一〇やがてヱホバの室を監督するところの工師等の手にこれを交しければ彼等ヱホバの室にて操作ところの工人にこれを交して室を繕ひ修めしむ一一即ち木匠および建築者に之を交しユダの王等が壞りたる家々のために琢石および骨木を買しめ梁木をととのはしむ一二その人々忠實に操作けりその監督者はメラリの子孫たるヤハテ、オバデヤおよびコハテの子孫たるゼカリヤ、メシュラムなどのレビ人なりき彼等すなはち之を主どる又樂器を弄ぶに精巧なるレビ人凡て之に伴なふ一三彼等亦荷を負ものを監督し種々の工事に操作ところの諸の工人をつかさどれり別のレビ人書記となり役人となり門守となれり一四ヱホバの室にいりし金を取いだすに當りて祭司ヒルキヤ、モーセの傳へしヱホバの律法の書を見いだせり一五ヒルキヤ是において書記官シヤパンにきて言けるは我ヱホバの室にて律法の書を見いだせりと而してヒルキヤその書をシヤパンに付しければ一六シヤパンその書を王の所に持ゆき王に復命まうして言ふ僕等その手に委ねられし所を盡く爲し一七ヱホバの室にありし金を打あけて之を監督者の手および工人の手に交せりと一八書記官シヤパン亦王に告て祭司ヒルキヤ我に一の書を交せりと言ひシヤパンそれを王の前に讀けるに一九王その律法の言を聞て衣服を裂り二〇而して王ヒルキヤとシヤパンの子アヒカムとミカの子アブドンと書記官シヤパンと王の内臣アサヤとに命じて言ふ二一汝ら往てこの見當りし書の言につきて我の爲またイスラエルとユダに遺れる者等のためにヱホバに問へ我らの先祖等はヱホバの言を守らず凡て此書に記されたる所を行ふことを爲ざりしに因てヱホバ我等に大なる怒を斟ぎ給ふべければなりと二二是においてヒルキヤおよび王の人々シヤルムの妻なる女預言者ホルダの許に往りシヤルムはハルハスの子なるテクワの子にして衣裳を守る者なり時にホルダはエルサレムの第二の邑に住をれり彼等すなはちホルダに斯と語りしかば二三ホルダこれに答へけるはイスラエルの神ヱホバかく言たまふ汝らを我に遣はせる人に告よ二四ヱホバかく言たまふユダの王の前に讀し書に記されたる諸の呪詛に循ひて我この處と此に住む者に災害を降さん二五其は彼ら我を棄て他の神に香を焚きおのが手にて作れる諸の物をもて我怒を惹起さんとしたればなりこの故にわが震怒この處に斟ぎて滅ざるべし二六されど汝らを遣はしてヱホバに問しむるユダの王には汝ら斯いふべしイスラエルの神ヱホバかく言たまふ汝が聞る言につきては二七汝此處と此にすむ者を責る神の言を聞し時に心やさしくして神の前に於て身を卑くし我前に身を卑くし衣服を裂て我前に泣たれば我も汝に聽りとヱホバ宣まふ二八然ば我汝をして汝の先祖等に列ならしめん汝は安然に墓に歸する事を得べし汝は我が此處と此に住む者に降すところの諸の災害を目に見る事あらじと彼等即ち王に復命まうし

ぬ二九是において王人を遣はしてユダとヱルサレムの長老をことごとく集め三〇而して王ヱホバの室に上りゆけりユダの人々ヱルサレムの民祭司レビ人及び一切の民大より小にいたるまでことごとく之にともなふ王すなはちヱホバの室に見あたりし契約の書の言を盡く彼らの耳に讀聞せ三一而して王己の所に立ちてヱホバの前に契約を立てヱホバにしたがひて歩み心を盡し精神を盡してその誡命と證詞と法度を守り此書にしるされたる契約の言を行はんと言ひ三二ヱルサレムおよびベニヤミンの有ゆる人々をみな之に加はらしめたりヱルサレムの民すなはちその先祖の神にまします御神の契約にしたがひて行へり三三かくてヨシア、イスラエルの子孫に屬する一切の地より憎むべき者を盡く取のぞきイスラエルの有ゆる人をしてその神ヱホバに事まつらしめたりヨシアの世にある日の間は彼らその先祖の神ヱホバに從ひて離れざりき

第三五章一茲にヨシア、ヱルサレムにおいてヱホバに逾越節を行はんとし正月の十四日に逾越の物を宰らしめ二祭司をしてその職を執行はせ之を勵してヱホバの室の務をなさしめ三またヱホバの聖者となりてイスラエルの人衆を誨ふるレビ人に言ふ汝らイスラエルの王ダビデの子ソロモンが建たる家に聖契約の匱を放け再び肩に擔ふこと有ざるべし然ば今汝らの神ヱホバおよびその民イスラエルに事ふべし四汝らまたイスラエルの王ダビデの書およびその子ソロモンの書に本づきて父祖の家に循がひその班列に依て自ら準備をなし五汝らの兄弟なる民の人々の宗家の區分に循ひて聖所に立ち之にレビ人の宗族の分缺ること無らしむべし六汝ら逾越の物を宰り身を潔め汝らの兄弟のために準備をなしモーセが傳へしヱホバの言のごとく行ふべしと七ヨシアすなはち羔羊および羔山羊を民の人々に餽る其數三萬また牡牛三千を餽る是みな王の所有の中より出して其處に居る一切の人のために逾越の祭物となせるなり八その牧伯等も民と祭司とレビ人に誠意より與ふる所ありまた神の室の長等ヒルキヤ、ゼカリヤ、ヱヒエルも綿羊二千六百牛三百を祭司に與へて逾越の祭物と爲す九またレビ人の長たる人々すなはちコナニヤおよびその兄弟シマヤ、ネタンエル並にハシヤビヤ、ヱイエル、ヨザバデなども綿羊五千牛五百をレビ人に餽りて逾越の祭物となす一〇是のごとく獻祭の事備はりぬれば王の命にしたがひて祭司等はその擔任場に立ちレビ人はその班列に循がひ居り一一やがて逾越の物を宰りければ祭司その血をこれが手より受て灑げりレビ人その皮を剥り一二かくて燔祭の物を移して民の人々の父祖の家の區分に付してヱホバに獻げしむモーセの書に記されたるが如し其牛に行ふところも亦是のごとし一三而して例規のごとくに逾越の物を火にて炙りその他の聖物を鍋釜鼎などに烹て一切の民の人々に奔配れり一四かくて後かれら自身のためと祭司等のために備ふ其はアロンの子孫たる祭司等は燔祭と脂を獻げて夜に入たればなり是に因て斯レビ

人自分のためとアロンの子孫たる祭司等のために備ふるなり一五アサフの子孫たる謳歌者等はダビデ、アサフ、ヘマンおよび王の先見者ヱドトンの命にしたがひてその擔任場に居り門を守る者等は門々に居てその職務を離るるに及ばざりき其はその兄弟たるレビ人これがために備へたればなり一六斯のごとく其日ヱホバの獻祭の事ことごとく備はりければヨシア王の命にしたがひて逾越節を行ひヱホバの壇に燔祭を献げたり一七即ち其處に來れるイスラエルの子孫その時逾越節を行ひ七日の間酵いれぬパンの節を行へり一八預言者サムエルの日より以來イスラエルにて是のごとくに逾越節を行ひし事なし又イスラエルの諸王の中にはヨシアが祭司レビ人ならびに來りあつまれるユダとイスラエルの諸人およびヱルサレムの民とともに行ひし如き逾越節を行ひし者一人もあらず一九この逾越節はヨシアの治世の十八年に行ひしなり二〇是のごとくヨシア殿をととのへし後エジプトの王ネコ、ユフラテの邊なるカルケミシを攻撃んとて上り來りけるにヨシアこれを禦がんとて出往り二一是においてネコ使者をかれに遣はして言ふユダの王よ是あに汝の與る所ならんや今日は汝を攻んとには非ず我敵の家を攻んとするなり神われに命じて急がしむ神われとともにあり汝神に逆ふことを罷よ恐らくは彼なんぢを滅ぼしたまはんと二二然るにヨシア面を轉して去ことを肯はず却てこれと戰はんとて服装を變へ神の口より出しネコの言を聽いれずしてメギドンの谷に到りて戰ひけるが二三射手の者等ヨシア王に射中たれば王その臣僕にむかひて我を扶け出せ我太痍を負ふと言り二四是においてその臣僕等かれをその車より扶けおろし其引せたる次の車に乘てヱルサレムにつれゆきけるが遂に死たればその先祖の墓にこれを葬りぬユダとヱルサレムみなヨシアのために哀しめり二五時にヱレミヤ、ヨシアのために哀歌を作れり謳歌男謳歌女今日にいたるまでその哀歌の中にヨシアの事を述べイスラエルの中に之を例となせりその詞は哀歌の中に書さる二六ヨシアのその餘の行爲そのヱホバの律法に録されたる所にしたがひて爲し徳行二七およびその始終の行爲などはイスラエルとユダの列王の書に記さる

第三六章一是において國の民ヨシアの子ヱホアハズを取りヱルサレムにてその父にかはりて王とならしむ二ヱホアハズは二十三歳の時位に即きヱルサレムにて三月が間世を治めけるが三エジプトの王ヱルサレムにて彼を廢し且銀百タラント金一タラントの罰金を國に課せり四而してエジプトの王ネコ彼の兄弟エリアキムをもてユダとヱルサレムの王となして之が名をヱホヤキムと改めその兄弟ヱホアハズを執へてエジプトに曳ゆけり五ヱホヤキムは二十五歳の時位に即きヱルサレムにて十一年の間世を治めその神ヱホバの惡と視たまふことを爲り六彼の所にバビロンの王ネブカデネザル攻のぼりバビロンに曳ゆかんとて之を杻械に繋げり七ネブカデネザルまたヱホバの家の

器具をバビロンに携へゆきてバビロンにあるその宮にこれを蔵めたり八ヱホヤキムのその餘の行爲その行ひし憎むべき事等およびその心に企みし事などはイスラエルとユダの列王の書に記さる其子ヱホヤキンこれに代りて王となる九ヱホヤキンは八歳の時位に即きヱルサレムにて三月と十日の間世を治めヱホバの惡と視たまふ事を爲けるが一〇歳の歸るにおよびてネブカデネザル王人を遣はして彼とヱホバの室の貴き器皿とをバビロンに携へいたらしめ之が兄弟ゼデキヤをもてユダとヱルサレムの王となせり一一ゼデキヤは二十一歳の時位に即きヱルサレムにて十一年の間世を治めたり一二彼はその神ヱホバの惡と視たまふ事を爲しヱホバの言を傳ふる預言者ヱレミヤの前に身を卑くせざりき一三ネブカデネザル彼をして神を指て誓はしめたりしにまた之にも叛けり彼かくその項を強くしその心を剛愎にしてイスラエルの神ヱホバに立かへらざりき一四祭司の長等および民もまた凡て異邦人の中にある諸の憎むべき事に傚ひて太甚しく大に罪を犯しヱホバのヱルサレムに聖め置たまへるその室を汚せり一五其先祖の神ヱホバその民とその住所とを恤むが故に頻りにその使者を遣はして之を諭したまひしに一六彼ら神の使者等を嘲けり其御言を軽んじその預言者等を罵りたればヱホバの怒その民にむかひて起り遂に救ふべからざるに至れり一七即ちヱホバ、カルデヤ人の王を之に攻きたらせたまひければ彼その聖所の室にて劍をもて少者を殺し童男をも童女をも老人をも白髪の者をも憐まざりき皆ひとしく彼の手に付したまへり一八神の室の諸の大小の器皿ヱホバの室の貨財王とその牧伯等の貨財など凡て之をバビロンに携へゆき一九神の室を焚きヱルサレムの石垣を崩しその中の宮殿を盡く火にて焚きその中の貴き器を盡く壞なへり二〇また劍をのがれし者等はバビロンに虜れゆきて彼處にて彼とその子等の臣僕となりペルシヤの國の興るまで斯てありき二一是ヱレミヤの口によりて傳はりしヱホバの言の應ぜんがためなりき斯この地遂にその安息を享たり即ち是はその荒をる間安息して終に七十年滿ぬ二二ペルシヤ王クロスの元年に當りヱホバ曩にヱレミヤの口によりて傳へたまひしその聖言を成んとてペルシヤ王クロスの心を感動したまひければ王すなはち宣命をつたへ詔書を出して徧く國中に告示して云く二三ペルシヤ王クロスかく言ふ天の神ヱホバ地上の諸國を我に賜へりその家をユダのヱルサレムに建ることを我に命ず凡そ汝らの中もしその民たる者あらばその神ヱホバの助を得て上りゆけ

エズラ書

第一章 一 ペルシヤ王クロスの元年に當りヱホバ曩にヱレミヤの口によりて傳へたまひしその聖言を成んとてペルシヤ王クロスの心を感動したまひければ王すなはち宣命をつたへ詔書を出して徧く國中に告示して云く 二 ペルシヤ王クロスかく言ふ天の神ヱホバ地上の諸國を我に賜へりその家をユダのヱルサレムに建ることを我に命ず 三 凡そ汝らの中もしその民たる者あらばその神の助を得てユダのヱルサレムに上りゆきヱルサレムなるイスラエルの神ヱホバの室を建ることをせよ 彼は神にましませり 四 その民にして生存れる者等の寓りをる處の人々は之に金銀貨財家畜を予へて助くべし その外にまたヱルサレムなる神の室のために物を誠意よりささぐべしと 五 是にユダとベニヤミンの宗家の長祭司レビ人など凡て神にその心を感動せられし者等ヱルサレムなるヱホバの室を建んとて起おこれり 六 その周圍の人々みな銀の器黄金貨財家畜および寶物を予へて之に力をそへこの外にまた各種の物を誠意より獻げたり 七 クロス王またネブカデネザルが前にヱルサレムより携へ出して己の神の室に納めたりしヱホバの室の器皿を取いだせり 八 即ちペルシヤ王クロス庫官ミテレダテの手をもて之を取いだしてユダの牧伯セシバザルに數へ交付せり 九 その數は是のごとし金の盤三十銀の盤一千小刀二十九 一〇 金の大斝三十、二等の銀の大斝四百十その他の器具一千 一一 金銀の器皿は合せて五千四百ありしがセシバザル俘虜人等をバビロンよりヱルサレムに將て上りし時に之をことごとく携さへ上れり

第二章 一 往昔バビロンの王ネブカデネザルに虜へられバビロンに遷されたる者のうち俘囚をゆるされてヱルサレムおよびユダに上りおのおの己の邑に歸り此州の者は左の如し 二 是皆ゼルバベル、ヱシユア、ネヘミヤ、セラヤ、レエラヤ、モルデカイ、ビルシヤン、ミスパル、ビグワイ、レホム、バアナ等に隨ひ來れり其イスラエルの民の人數は是のごとし 三 パロシの子孫二千百七十二人 四 シパテヤの子孫三百七十二人 五 アラの子孫七百七十五人 六 ヱシユアとヨアブの族たるパハテモアブの子孫二千八百十二人 七 エラムの子孫千二百五十四人 八 ザツトの子孫九百四十五人 九 ザツカイの子孫七百六十人 一〇 バニの子孫六百四十二人 一一 ベバイの子孫六百二十三人 一二 アズガデの子孫千二百二十二人 一三 アドニカムの子孫六百六十六人 一四 ビグワイの子孫二千五十六人 一五 アデンの子孫四百五十四人 一六 ヒゼキヤの家のアテルの子孫九十八人 一七 ベザイの子孫三百二十三人 一八 ヨラの子孫百十二人 一九 ハシユムの子孫二百二十三人 二〇 ギバルの子孫九十五人 二一 ベテレヘムの子孫百二十三人 二二 ネトパの人五十六人 二三 アナトテの人百二十八人 二四 アズマウテの民四十二人 二五 キリアテヤリム、ケピラおよびベエロテの民七百四十三人 二六 ラマおよびゲバの民六百二十一人 二七 ミク

マシの人百二十二人 二八 ベテルおよびアイの人二百二十三人 二九 ネボの民五十二人 三〇 マグビシの民百五十六人 三一 他のエラムの民千二百五十四人 三二 ハリムの民三百二十人 三三 ロド、ハデデおよびオノの民七百二十五人 三四 ヱリコの民三百四十五人 三五 セナアの民三千六百三十人 三六 祭司はヱシュアの家のヱダヤの子孫九百七十三人 三七 インメルの子孫千五十二人 三八 パシュルの子孫千二百四十七人 三九 ハリムの子孫千十七人 四〇 レビ人はホダヤの子等ヱシュアとカデミエルの子孫七十四人 四一 謳歌者はアサフの子孫百二十八人 四二 門を守る者の子孫はシヤルムの子孫アテルの子孫タルモンの子孫アツクブの子孫ハテタの子孫シヨバイの子孫合せて百三十九人 四三 ネテニ人はヂハの子孫ハスパの子孫タバオテの子孫 四四 ケロスの子孫シアハの子孫パドンの子孫 四五 レバナの子孫ハガバの子孫アツクブの子孫 四六 ハガブの子孫シヤルマイの子孫ハナンの子孫 四七 ギデルの子孫ガハルの子孫レアヤの子孫 四八 レヂンの子孫ネコダの子孫ガザムの子孫 四九 ウザの子孫パセアの子孫ベサイの子孫 五〇 アスナの子孫メウニムの子孫ネフシムの子孫 五一 バクブクの子孫ハクパの子孫ハルホルの子孫 五二 バヅリテの子孫メヒダの子孫ハルシヤの子孫 五三 バルコスの子孫シセラの子孫テマの子孫 五四 ネヂアの子孫ハテパの子孫等なり 五五 ソロモンの僕たりし者等の子孫すなはちソタイの子孫ハッソペレテの子孫ペリダの子孫 五六 ヤアラの子孫ダルコンの子孫ギデルの子孫 五七 シパテヤの子孫ハッテルの子孫ポケレテハツゼバイムの子孫アミの子孫 五八 ネテニ人とソロモンの僕たりし者等の子孫とは合せて三百九十二人 五九 またテルメラ、テルハレサ、ケルブ、アダンおよびインメルより上り來れる者ありしがその宗家の長とその血統とを示してイスラエルの者なるを明かにすることを得ざりき 六〇 是すなはちデラヤの子孫トビヤの子孫ネコダの子孫にして合せて六百五十二人 六一 祭司の子孫たる者の中にハバヤの子孫ハッコヅの子孫バルジライの子孫あり バルジライはギレアデ人バルジライの女を妻に娶りてその名を名りしなり 六二 是等の者譜系に載たる者等の中におのが名を尋ねたれども在ざりき 是の故に汚れたる者として祭司の中より除かれたり 六三 テルシヤタは之に告てウリムとトンミムを帶る祭司の興るまでは至聖物を食ふべからずと言り 六四 會衆あはせて四萬二千三百六十人 六五 この外にその僕婢七千三百三十七人 謳歌男女二百人あり 六六 その馬七百三十六匹 その騾二百四十五匹 六七 その駱駝四百三十五匹 驢馬六千七百二十匹 六八 宗家の長數人ヱルサレムなるヱホバの室にいたるにおよびてヱホバの室をその本の處に建んとて物を誠意より獻げたり 六九 即ちその力にしたがひて工事のために庫を納めし者は金六萬一千ダリク銀五千斤祭司の衣服百襲なりき 七〇 祭司レビ人民等謳歌者門を守る者およびネテニ人等その邑々に住み一切のイスラエル人その邑々に住り

第三章一 イスラエルの子孫かくその邑々に住居しが七月に至りて民一人のごとくにヱルサレムに集まれり二 是に於てヨザダクの子ヱシユアとその兄弟なる祭司等およびシヤルテルの子ゼルバベルとその兄弟等立おこりてイスラエルの神の壇を築けり是神の人モーセの律法に記されたる所に循ひてその上に燔祭を獻げんとてなりき三 彼等は壇をその本の處に設けたり是國々の民を懼れしが故なり而してその上にて燔祭をヱホバに獻げ朝夕にこれを獻ぐ四 またその録されたる所に循ひて結茅節を行ひ毎日の分を按へて例に照し數のごとくに日々の燔祭を獻げたり五 是より後は常の燔祭および月朔とヱホバの一切のきよき節會とに用ゐる供物ならびに人の誠意よりヱホバにたてまつる供物を獻ぐることをす六 即ち七月の一日よりして燔祭をヱホバに獻ぐることを始めけるがヱホバの殿の基礎は未だ置ざりき七 是において石工と木工に金を交付しまたシドンとツロの者に食物飲物および油を與へてペルシヤの王クロスの允准にしたがひてレバノンよりヨツパの海に香柏を運ばしめたり八 斯てヱルサレムより神の室に歸りたる次の年の二月にシヤルテルの子ゼルバベル、ヨザダクの子ヱシユアおよびその兄弟たる他の祭司レビ人など凡て俘囚をゆるされてヱルサレムに歸りし者等を始め二十歳以上のレビ人を立てヱホバの室の工事を監督せしむ九 是に於てユダの子等なるヱシユアとその子等および兄弟カデミエルとその子等齊しく立て神の家の工人を監督せりヘナダデの子等およびその子等と兄弟等のレビ人も然り一〇 かくて建築者ヱホバの殿の基礎を置る時祭司等禮服を衣て喇叭を執りアサフの子孫たるレビ人鐃鈸を執りイスラエルの王ダビデの例に循ひてヱホバを讃美す一一 彼等班列にしたがひて諸共に歌を謠ひてヱホバを讃めかつ頌へヱホバは恩ふかく其矜恤は永遠にたゆることなければなりと言りそのヱホバを讃美する時に民みな大聲をあげて呼はれりヱホバの室の基礎を据ればなり一二 されど祭司レビ人宗家の長等の中に以前の室を見たりし老人ありけるが今この室の基礎をその目の前に置るを見て多く聲を放ちて泣りまた喜悦のために聲をあげて呼はる者も多かりき一三 是をもて人衆民の歡こびて呼はる聲と民の泣く聲とを聞わくることを得ざりきそは民大聲に呼はり叫びければその聲遠くまで聞えわたりたればなり

第四章一 茲にユダとベニヤミンの敵たる者等夫俘囚より歸り來りし人々イスラエルの神ヱホバのために殿を建ると聞き二 乃ちゼルバベルと宗家の長等の許に至りて之に言けるは我儕をして汝等と共に之を建しめよ我らは汝らと同じく汝らの神を求むアッスリヤの王エサルハドンが我儕を此に携へのぼりし日より以來我らはこれに犧牲を獻ぐるなりと三 然るにゼルバベル、ヱシユアおよびその餘のイスラエルの宗家の長等これに言ふ汝らは我らの神に室を建ることに與るべからず我儕獨りみづからイスラエルの神ヱホバのために建ることを爲べし是ペ

ルシヤの王クロス王の我らに命ぜし所なりと四是に於てその地の民ユダの民の手を弱らせてその建築を妨げ五之が計る所を敗らんために議官に賄賂して之に敵せしむペルシヤ王クロスの世にある日よりペルシヤ王ダリヨスの治世まで常に然り六アハシユエロスの治世すなはち其治世の初に彼ら表を上りてユダとヱルサレムの民を誣訟へたり七またアルタシヤスタの世にビシラム、ミテレダテ、タビエルおよびその餘の同僚同じく表をペルシヤの王アルタシヤスタに上つれり その書の文はスリヤの文字にて書きスリヤ語にて陳述たる者なりき八方伯レホム書記官シムシヤイ書をアルタシヤスタ王に書おくりてヱルサレムを誣ゆ左のごとし九即ち方伯レホム書記官シムシヤイおよびその餘の同僚デナ人アパルサテカイ人タルペライ人アパルサイ人アルケロイ人バビロン人シユシヤン人デハウ人エラマイ人一〇ならびに其他の民すなはち大臣オスナパルが移してサマリアの邑および河外ふのその他の地に置し者等云々一一其アルタシヤスタ王に上りし書の稿は是なく云く河外ふの汝の僕等云々一二王知たまへ汝の所より上り來りしユダヤ人ヱルサレムに到りてわれらの中にいりかの背き悖る惡き邑を建なほし石垣を築きあげその基礎を固うせり一三然ば王いま知たまへ 若この邑を建て石垣を築きあげなば彼ら必ず貢賦租税税金などを納じ 然すれば終に王等の不利とならん一四そもそも我らは王の鹽を食む者なれば王の輕んぜらるるを見るに忍びず 茲に人を遣はし王に奏聞す一五列祖の記録の書を稽へたまへ必ずその記録の書の中において此邑は背き悖る邑にして諸王と諸州とに害を加へし者なるを見その中に古來叛逆の事ありしを知たまふべし此邑の滅ぼされしは此故に縁るなり一六我ら王に奏聞す 若この邑を建て石垣を築きあげなばなんぢは之がために河外ふの領分をうしなふなるべしと一七王すなはち方伯レホム書記官シムシヤイおよび河外ふのほかの處に住る同僚に答書をおくりて云く平安あれ云々一八汝らが我儕におくりし書を我前に讀解しめたり一九我やがて詔書を下して稽考しめしに此邑の古來起りて諸王に背きし事その中に反亂謀叛のありし事など詳悉なり二〇またヱルサレムには在昔大なる王等ありて河外ふをことごとく治め貢賦租税税金などを己に納しめたる事あり二一然ば汝ら詔言を傳へて其人々を止め我が詔言を下すまで此邑を建ること無らしめよ二二汝ら愼め 之を爲ことを忽にする勿れ 何ぞ損害を増て王に害を及ぼすべけんやと二三アルタシヤスタ王の書の稿をレホム及び書記官シムシヤイとその同僚の前に讀あげければ彼等すなはちヱルサレムに奔ゆきてユダヤ人に就き腕力と權威とをもて之を止めたり二四此をもてヱルサレムなる神の室の工事止みぬ 即ちペルシヤ王ダリヨスの治世の二年まで止みたりき

第五章一 爰に預言者ハガイおよびイドの子ゼカリヤの二人の預言者ユダとヱルサレムに居るユダヤ人に向ひてイスラエルの

神の名をもて預言する所ありければ二シヤルテルの子ゼルバベルおよびヨザダクの子ヱシユア起あがりてヱルサレムなる神の室を建ることを始む 神の預言者等これと共に在て之を助く三その時に河外の總督タテナイといふ者セタルボズナイおよびその同僚とともにその所に來り誰が汝らに此室を建て此石垣を築きあぐることを命ぜしやと斯言ひ四また此建物を建る人々の名は何といふやと斯これに問り五然るにユダヤ人の長老等の上にはその神の目そそぎゐたれば彼等これを止むること能はずして遂にその事をダリヨスに奏してその返答の來るを待り六河外ふの總督タテナイおよびセタルボズナイとその同僚なる河外ふのアパルサカイ人がダリヨス王に上まつりし書の稿は左のごとし七即ち其上まつりし書の中に書しるしたる所は是のごとし云く願くはダリヨス王に大なる平安あれ八王知たまへ我儕ユダヤ州に往てかの大神の室に至り視しに巨石をもて之を建て材木を組て壁を作り居り其工事おほいに捗どりてその手を下すところ成ざる無し九是に於て我儕その長老等に問てこれに斯いへり誰が汝らに此室を建てこの石垣を築きあぐることを命ぜしやと一〇我儕またその首長たる人々の名を書しるして汝に奏聞せんがためにその名を問り一一時に彼等かく我らに答へて言り 我儕は天地の神の僕にして年久しき昔に建おかれし殿を再び建るなり是は素イスラエルの大なる王 某の建築きたる者なしりが一二我らの父等天の神の震怒を惹起せしに縁てつひに之をカルデヤ人バビロンの王ネブカデネザルの手に付したまひければ彼この殿を毀ち民をバビロンに虜へゆけり一三然るにバビロンの王クロスの元年にクロス王神のこの室を建べしとの詔言を下したまへり一四然のみならず ヱルサレムの殿よりネブカデネザルが取いだしてバビロンの殿に携へいれし神の室の金銀の器皿もクロス王これをバビロンの殿より取いだし其立たる總督セシバザルと名くる者に之を付し一五而して彼に言けらく是等の器皿を取り往て之をヱルサレムの殿に携へいれ神の室をその本の處に建よと一六是において其セシバザル來りてヱルサレムなる神の室の石礎を置たりき 其時よりして今に至るまで之を建つつありしが猶いまだ竣らざるなりと一七然ば今王もし善となされなば請ふ御膝下バビロンにある所の王の寶藏を査べたまひて神のこの室を建べしとの詔言のクロス王より出しや否を稽へ而して王此事につきて御旨を我らに諭したまへ

第六章一是に於てダリヨス王詔言を出しバビロンにて寶物を蔵むる所の文庫に就て査べ稽しめしに二メデア州の都城アクメタにて一の卷物を得たり その内に書しるせる記録は是のごとし三クロス王の元年にクロス王詔言を出せり云くヱルサレムなる神の室の事につきて諭す その犧牲を獻ぐる所なる殿を建てその石礎を堅く置ゑ其室の高を六十キユビトにし其濶を六十キユビトにし四巨石三行新木一行を以せよ 其費用は王の家より授くべし五またネブカデネザルがヱルサレムの殿より取い

だしてバビロンに携へきたりし神の室の金銀の器皿は之を還してヱルサレムの殿に持ゆかしめ神の室に置てその故の所にあらしむべしと六然ば河外ふの總督タテナイおよびセタルボズナイとその同僚なる河外ふのアパルサカイ人汝等これに遠ざかるべし七神のその室の工事を妨ぐる勿れ ユダヤの牧伯とユダヤ人の長老等に神のその家を故の處に建しめよ八我また詔言を出し其神の家を建ることにつきて汝らが此ユダヤ人の長老等に爲べきことを示す 王の財寶の中すなはち河外ふの租稅の中より迅速に費用をその人々に與へよその工事を滞ほらしむる勿れ九又その需むる物即ち天の神にたてまつる燔祭の小牛牡羊および羔羊ならびに麥鹽酒 油など凡てヱルサレムにをる祭司の定むる所に循ひて日々に怠慢なく彼等に與へ一〇彼らをして馨しき香の犠牲を天の神に獻ぐることを得せしめ王とその子女の生命のために祈ることを得せしめよ一一かつ我詔言を出す誰にもせよ此言を易る者あらば其家の梁を抜きとり彼を擧て之に釘ん その家はまた之がために廁にせらるべし一二凡そ之を易へまたヱルサレムなるその神の室を毀たんとて手を出す王あるひは民は彼處にその名を留め給ふ神ねがはくはこれを倒したまへ 我ダリヨス詔言を出せり 迅速に之を行なへ一三ダリヨス王かく諭しければ河外ふの總督タテナイおよびセタルボズナイとその同僚迅速に之を行なへり一四ユダヤ人の長老等すなはち之を建て預言者ハガイおよびイドの子ゼカリヤの預言に由て之を成就たり 彼等イスラエルの神の命に循ひクロス、ダリヨスおよびペルシヤ王アルタシヤスタの詔言に依て之を建竣ぬ一五ダリヨス王の治世の六年アダルの月の三日にこの室成り一六是に於てイスラエルの子孫祭司レビ人およびその餘の俘虜人よろこびて神のこの室の落成禮を行なへり一七即ち神のこの室の落成禮において牡牛一百 牡羊二百 羔羊四百を獻げまたイスラエルの支派の數にしたがひて牡山羊十二を獻げてイスラエル全體のために罪祭となし一八祭司をその分別にしたがひて立て レビ人をその班列にしたがひて立て ヱルサレムに於て神に事へしむ 凡てモーセの書に書しるしたるが如し一九斯て俘囚より歸り來りし人々正月の十四日に逾越節を行へり二〇即ち祭司レビ人共に身を潔めて皆潔くなり一切俘囚より歸り來りし人々のため其兄弟たる祭司等のため又自己のために逾越の物を宰れり二一虜はれゆきて歸り來しイスラエルの子孫および其國の異邦人の汚穢を棄て是等に附てイスラエルの神ヱホバを求むる者等すべて之を食ひ二二 喜びて七日の間酵いれぬパンの節を行へり 是はヱホバかれらを喜ばせアッスリヤの王の心を彼らに向はせ彼をしてイスラエルの神にまします神の家の工事を助けさせたまひしが故なり

第七章一是等の事の後ペルシヤ王アルタシヤスタの治世にエズラといふ者あり エズラはセラヤの子セラヤはアザリヤの子アザリヤはヒルキヤの子二ヒルキヤはシヤルムの子シヤルムはザ

ドクの子ザドクはアヒトブの子三アヒトブはアマリヤの子アマリヤはアザリヤの子アザリヤはメラヨテの子四メラヨテはゼラヒヤの子ゼラヒヤはウジの子ウジはブツキの子五ブツキはアビシユアの子アビシユアはピネハスの子ピネハスはエレアザルの子エレアザルは祭司の長アロンの子なり六此エズラ、バビロンより上り來れり 彼はイスラエルの神ヱホバの授けたまひしモーセの律法に精しき學士なりき 其神ヱホバの手これが上にありしに因てその求むる所を王ことごとく許せり七アルタシヤスタ王の七年にイスラエルの子孫および祭司レビ人謳歌者門を守る者ネテニ人など多くヱルサレムに上れり八王の七年の五月にエズラ、ヱルサレムに到れり九 即ち正月の一日にバビロンを出たちて五月の一日にヱルサレムに至る 其神のよき手これが上にありしに因てなり一〇 エズラは心をこめてヱホバの律法を求め之を行ひてイスラエルの中に法度と例規とを教へたりき一一 ヱホバの誡命の言に精しく且つイスラエルに賜ひし法度に明かなる學士にて祭司たるエズラにアルタシヤスタ王の與へし書の言は是のごとし一二 諸王の王アルタシヤスタ天の神の律法の學士なる祭司エズラに諭す 願くは全 云々一三 我詔言を出す 我國の内にをるイスラエルの民およびその祭司レビ人の中凡てヱルサレムに往んと志す者は皆なんぢと偕に往べし一四 汝はおのが手にある汝の神の律法に照してユダとヱルサレムの模様とを察せんために王および七人の議官に遣はされて往くなり一五 且汝は王とその議官がヱルサレムに宮居するところのイスラエルの神のために誠意よりささぐる金銀を携へ一六またバビロン全州にて汝が獲る一切の金銀および民と祭司とがヱルサレムなる其神の室のために誠意よりする禮物を携さふ一七 然ば汝その金をもて牡牛牡羊羔羊およびその素祭と灌祭の品を速に買ひヱルサレムにある汝らの神の室の壇の上にこれを獻ぐべし一八 また汝と汝の兄弟等その餘れる金銀をもて爲んと欲する所あらば汝らの神の旨にしたがひて之を爲せ一九 また汝の神の室の奉事のために汝が賜はりし器皿は汝これをヱルサレムの神の前に納めよ二〇 その外汝の神の室のために需むる所あらば汝の用ひんとする所の者をことごとく王の府庫より取て用ふべし二一 我や我アルタシヤスタ王河外ふの一切の庫官に詔言を下して云ふ 天の神の律法の學士祭司エズラが汝らに需むる所は凡てこれを迅速に爲べし二二 即ち銀は百タラント小麥は百石酒は百バテ油は百バテ鹽は量なかるべし二三 天の神の室のために天の神の命ずる所は凡て謹んで之を行なへ しからずば王とその子等との國に恐くは震怒のぞまん二四 かつ我儕なんぢらに諭す 祭司レビ人謳歌者門を守る者ネテニ人および神のその室の役者などには貢賦租税税金などを課すべからず二五 汝エズラ 汝の手にある汝の神の智慧にしたがひて有司および裁判人を立て河外ふの一切の民すなはち汝の神の律法を知る者等を盡く裁判しめよ 汝らまた之を知ざる者を教へよ二六 凡そ

汝の神の律法および王の律法を行はざる者をば迅速にその罪を定めて或は殺し或は追放ち或はその貨財を没收し或は獄に繋ぐべし二七 我らの先祖の神ヱホバは讚べき哉 斯王の心にヱルサレムなるヱホバの室を飾る意を起させ二八 また王の前とその議官の前と王の大臣の前にて我に矜恤を得させたまへり 我神ヱホバの手わが上にありしに因て我は力を得 イスラエルの中より首領たる人々を集めて我とともに上らしむ

第八章一 アルタシヤスタ王の治世に我とともにバビロンより上り來りし者等の宗家の長およびその系譜は左のごとし二 ピネハスの子孫の中にてはゲルシヨム、イタマルの子孫の中にてはダニエル、ダビデの子孫の中にてはハットシ三 シカニヤの子孫の中パロシの子孫の中にてはゼカリヤ彼と偕にありて名簿に載られたる男子百五十人四 パハテモアブの子孫の中にてはゼラヒヤの子エリヨエナイ彼と偕なる男二百人五 シカニヤの子孫の中にてはヤハジエルの子 彼と偕なる男三百人六 アデンの子孫の中にてはヨナタンの子エベデ彼とともなる男五十人七 エラムの子孫の中にてはアタリヤの子ヱサヤ彼と偕なる男七十人八 シパテヤの子孫の中にてはミカエルの子ゼバデヤ彼とともなる男八十人九 ヨハブの子孫の中にてはヱヒエルの子オバデヤ彼とともなる男二百十八人一〇 シロミテの子孫の中にてはヨシピアの子 彼とともなる男百六十人一一 ベバイの子孫の中にてはベバイの子ゼカリヤ彼と偕なる男二十八人一二 アズガデの子孫の中にてはハッカタンの子ヨハナン彼とともなる男百十人一三 アドニカムの子孫の中の後なる者等あり 其名をエリペレテ、ユエル、シマヤといふ彼らと偕なる男六十人一四 ビグワイの子孫の中にてはウタイおよびザブデ彼等とともなる男七十人一五 我かれらをアハワに流るる所の河の邊に集めて三日が間かしこに天幕を張居たりしが我民と祭司とを閲せしにレビの子孫一人も其處に居ざりければ一六 すなはち人を遣てエリエゼル、アリエル、シマヤ、エルナタン、ヤリブ、エルナタン、ナタン、ゼカリヤ、メシユラムなどいふ長たる人々を招きまた教晦を施こす所のヨヤリブおよびエルナタンを招けり一七 而して我カシピアといふ處の長イドの許に彼らを出し遣せり 即ち我カシピアといふ處にをるイドとその兄弟なるネテニ人に告ぐべき詞を之が口に授け我等の神の室のために役者を我儕に携へ來れと言けるが一八 我らの神よく我儕を助けたまひて彼等つひにイスラエルの子レビの子マヘリの子孫イシケセルを我らに携さへ來り又セレビヤといふ者およびその子等と兄弟十八人一九 ハシヤビヤならびにメラリの子孫のヱサヤおよびその兄弟とその子等二十人を携へ二〇 またネテニ人すなはちダビデとその牧伯等がレビ人に事へしむるために設けたりしネテニ人二百二十人を携へ來れり 此等の者は皆その名を掲げられたり二一 斯て我かしこなるアハワの河の邊にて斷食を宣傳へ我儕の神の前にて我儕身を卑し我らと我らの小き者と我らの諸の所有のために正しき途を

示されんことを之に求む 二二 其は我儕さきに王に告て我らの神は己を求むる者を凡て善く助けまた己を棄る者にはその權能と震怒とをあらはしたまふと言しに因て我道路の敵を防ぎて我儕を護るべき歩兵と騎兵とを王に請ふを羞ぢたればなり 二三 かくてこのことを我ら斷食して我儕の神に求めけるに其祈禱を容たまへり 二四 時に我祭司の長十二人即ちセレビヤ、ハシヤビヤおよびその兄弟十人を之とともに擇び 二五 金銀および器皿すなはち王とその議官とその牧伯と彼處の一切のイスラエル人とが我らの神の室のために獻げたる奉納物を量りて彼らに付せり 二六 その量りて彼らの手に付せし者は銀六百五十タラント銀の器百タラント金百タラントなりき 二七 また金の大盃二十あり一千ダリクに當るまた光り輝く精銅の器二箇ありその貴きこと金のごとし 二八 而して我かれらに言り汝等はヱホバの聖者なり此器皿もまた聖し又この金銀は汝らの先祖の神ヱホバに奉まつりし誠意よりの禮物なり 二九 汝等ヱルサレムに至りてヱホバの家の室に於て祭司レビ人の長等およびイスラエルの宗家の首等の前に量るまで之を伺ひ守るべしと 三〇 是に於て祭司およびレビ人その金銀および器皿をヱルサレムなる我らの神の室に携へゆかんとて其重にしたがひて之を受取れり 三一 我ら正月の十二日にアハワの河邊を出たちてヱルサレム赴きけるが我らの神その手を我らの上におき我らを救ひて敵の手また路に伏て窺ふ者の手に陷らしめたまはざりき 三二 我儕すなはちヱルサレムに至りて三日かしこに居しが 三三 四日にいたりて我らの神の室においてその金銀および器皿をウリヤの子祭司メレモテの手に量り付せりピネハスの子エレアザル彼に副ふ又ヱシユアの子ヨザバデおよびビンヌイの子ノアデヤの二人のレビ人かれらに副ふ 三四 即ちその一々の重と數を査べ其重をことごとく其時かきとめたり 三五 俘囚の人々のその俘囚をゆるされて歸り來し者イスラエルの神に燔祭を獻げたり即ちイスラエル全體にあたる牡牛十二を獻げまた牡羊九十六羔羊七十七罪祭の牡山羊十二を獻げたり是みなヱホバにたてまつりし燔祭なり 三六 彼等王の勅諭を王の代官と河外ふの總督等に示しければその人々民を助けて神の室を建しむ

第九章 一 是等の事の成し後牧伯等我許にきたりて言ふイスラエルの民祭司およびレビ人は諸國の民とはなれずしてカナン人ヘテ人ペリジ人エビス人アンモニ人モアブ人エジプト人アモリ人などの中なる憎むべき事を行へり 二 即ち彼等の女子を自ら娶りまたその男子に娶れば聖種諸國の民と相雜れり牧伯たる者長たる者さきだちてこの愆を犯せりと 三 我この事を聞て我衣と袍を裂き頭髪と鬚を抜き驚き呆れて坐せり 四 イスラエルの神の言を戰慄おそるる者はみな俘囚より歸り來し者等の愆の故をもて我許に集まりしが我は晩の供物の時まで驚きつつ茫然として坐しぬ 五 晩の供物の時にいたり我その苦行より起て衣と袍とを裂たるまま膝を屈めてわが神ヱホバにむかひ手を舒て 六 言け

るは我神よ我はわが神に向ひて面を擧るを羞て赧らむ其は我らの罪積りて頭の上に出で我らの愆重りて天に達すればなり七我らの先祖の日より今日にいたるまで我らは大なる愆を身に負り我らの罪の故によりて我儕と我らの王等および祭司たちは國々の王等の手に付され劍にかけられ虜へゆかれ掠められ面に恥をかうぶれり今日のごとし八然るに今われらの神ヱホバ暫く恩典を施こして逃れ存すべき者を我らの中に殘し我らをしてその聖所にうちし釘のごとくならしめ斯して我らの神われらの目を明にし我らをして奴隷の中にありて少く生る心地せしめたまへり九そもそも我らは奴隷の身なるがその奴隷たる時にも我らの神われらを忘れず反てペルシヤの王等の目の前にて我らに憐憫を施こして我らに活る心地せしめ我らの神の室を建しめ其破壞を修理はしめユダとヱルサレムにて我らに石垣をたまふ一〇我らの神よ已に是のごとくなれば我ら今何と言のべんや我儕はやくも汝の命令を棄たればなり一一汝かつて汝の僕なる預言者等によりて命じて宣へり云く汝らが往て獲んとする地はその各地の民の汚穢により其憎むべき事によりて汚れたる地にして此極より彼極までその汚穢盈わたるなり一二然ば汝らの女子を彼らの男子に與ふる勿れ彼らの女子をなんぢらの男子に娶る勿れ又何時までもかれらの爲に平安をも福祿をも求むべからず然すれば汝ら旺盛にしてその地の佳物を食ふことを得永くこれを汝らの子孫に傳へて產業となさしむることを得んと一三我らの惡き行により我らの大なる愆によりて此事すべて我儕に臨みたりしが汝我らの神はわれらの罪よりも輕く我らを罰して我らの中に是のごとく人を遺したまひたれば一四我儕再び汝の命令を破りて是等の憎むべき行ある民と緣を結ぶべけんや汝我らを怒りて終に滅ぼし盡し遺る者も逃るる者も無にいたらしめたまはざらんや一五イスラエルの神ヱホバよ汝は義し即ち我ら逃れて遺ること今日のごとし今我ら罪にまとはれて汝の前にあり是がために一人として汝の前に立ことを得る者なきなり

第一〇章

一エズラ神の室の前に泣伏して禱りかつ懺悔しをる時に男女および兒女はなはだし多くイスラエルの中より集ひて彼の許に聚り來れりすべての民はいたく泣かなしめり二時にエラムの子ヱヒエルの子シカニヤ答へてエズラに言ふ我らはわれらの神に對ひて罪を犯し此地の民なる異邦人の婦女を娶れり然ながら此事につきてはイスラエルに今なほ望あり三然ば我儕わが主の教誨にしたがひ又我らの神の命令に戰慄く人々の教誨にしたがひて斯る妻をことごとく出し之が產たる者を去んといふ契約を今われらの神に立てん而して律法にしたがひて之を爲べし四起よ是事は汝の主どる所なり我ら汝を助くべし心を強くして之を爲せと五エズラやがて起あがり祭司の長等レビ人およびイスラエルの人衆をして此言のごとく爲んと誓はしめたり彼ら乃ち誓へり六かくてエズラ神の家の前より起いでてエリ

アシブの子ヨハナンの室に入しが彼處に至りてもパンを食ず水を飮ざりき是は俘囚より歸り來りし者の愆を憂へたればなり七 斯てユダおよびヱルサレムに遍ねく宣て俘囚の人々に盡く示して云ふ 汝ら皆ヱルサレムに集まるべし八 凡そ牧伯等と長老等の諭言にしたがひて三日の內に來らざる者は皆その一切の所有を取あげられ俘虜人の會より黜けらるべしと九 是においてユダとベニヤミンの人々みな三日の內にヱルサレムに集まれり是は九月にして恰もその月の廿日なりき民みな神の室の前なる廣場に坐して此事のためまた大雨のために震ひ慄けり一〇 時に祭司エズラ起て之に言けるは汝らは罪を犯し異邦の婦人を娶りてイスラエルの愆を増り一一 然ば今なんぢらの先祖の神ヱホバに懺悔してその御旨を行へ 即ち汝等この地の民等および異邦の婦人とはなるべしと一二 會衆みな聲をあげて答へて言ふ汝が我らに諭せるごとく我儕かならず爲べし一三 然ど民は衆し又今は大雨の候なれば我儕外に立こと能はず且これは一日二日の事業にあらず 其は我らこの事について大に罪を犯したればなり一四 然ば我らの牧伯等この全會衆のために立れよ凡そ我儕の邑の內にもし異邦の婦人を娶りし者あらば皆定むる時に來るべし 又その各々の邑の長老および裁判人これに伴ふべし斯して此事を成ば我らの神の烈しき怒つひに我らを離るるあらんと一五 その時立てこれに逆ひし者はアサヘルの子ヨナタンおよびテクワの子ヤハジア而已メシユラムおよびレビ人シヤベタイこれを賛く一六 俘囚より歸り來りし者つひに然なし祭司エズラおよび宗家の長數人その宗家にしたがひて名指して撰ばれ十月の一日より共に坐してこの事を査べ一七 正月の一日に至りてやうやく異邦の婦人を娶りし人々を盡く査べ畢れり一八 祭司の徒の中にて異邦の婦人を娶りし者は即ちヨザダクの子ヱシユアの子等およびその兄弟マアセヤ、エリエゼル、ヤリブ、ゲダリヤ一九 彼らはその妻を出さんといふ誓をなし已に愆を獲たればとて牡羊一匹をその愆のために獻げたり二〇 インメルの子孫ハナニおよびゼバデヤ二一 ハリムの子孫マアセヤ、エリヤ、シマヤ、ヱヒエル、ウジヤ二二 パシユルの子孫エリオエナイ、マアセヤ、イシマエル、ネタンエル、ヨザバデ、エラサ二三 レビ人の中にてはヨザバデ、シメイ、ケラヤ（即ちケリタ）ペタヒヤ、ユダ、エリエゼル二四 謳歌者の中にてはエリアシブ門を守る者の中にてはシヤルム、テレムおよびウリ二五 イスラエルの中にてはパロシの子孫ラミヤ、エジア、マルキヤ、ミヤミン、エレアザル、マルキヤ、ベナヤ二六 エラムの子孫マッタニヤ、ゼカリヤ、ヱヒエル、アブデ、ヱレモテ、エリヤ二七 ザットの子孫エリオエナイ、エリアシブ、マッタニヤ、ヱレモテ、ザバデ、アジザ二八 ベバイの子孫ヨハナン、ハナニヤ、ザバイ、アテライ二九 バニの子孫メシユラム、マルク、アダヤ、ヤシユブ、シヤル、ヱレモテ三〇 パハテモアブの子孫アデナ、ケラル、ベナヤ、マアセヤ、マッタニヤ、ベザレル、ビンヌイ、マナセ三一 ハリムの子孫エリエゼル、

ヱシヤ、マルキヤ、シマヤ、シメオン三二 ベニヤミン、マルク、シマリヤ三三 ハシュムの子孫マッテナイ、マツタタ、ザバデ、エリパレテ、ヱレマイ、マナセ、シメイ三四 バニの子孫マアダイ、アムラム、ウエル三五 ベナヤ、ベデヤ、ケルヒ三六 ワニヤ、メレモテ、エリアシブ三七 マッタニヤ、マッテナイ、ヤアス三八 バニ、ビンヌイ、シメイ三九 シレミヤ、ナタン、アダヤ四〇 マクナデバイ、シヤシヤイ、シヤライ四一 アザリエル、シレミヤ、シマリヤ四二 シヤルム、アマリヤ、ヨセフ四三 ネボの子孫ヱイエル、マッタテヤ、ザバデ、ゼビナ、イド、ヨエル、ベナヤ四四 是みな異邦の婦人を娶りし者なりその婦人の中には子女を産し者もありき

ネヘミヤ記

第一章 一 ハカリヤの子ネヘミヤの言詞／第二十年キスレウの月我シユシヤンの都にありける時 二 わが兄弟の一人なるハナニ數人の者とともにユダより來りしかば我俘虜人の遺餘なる夫の逃れかへりしユダヤ人の事およびヱルサレムの事を問たづねしに 三 彼ら我に言けるは俘虜人の遺餘なる夫の州内の民は大なる患難に遭ひ凌辱に遭ふ又ヱルサレムの石垣は打崩され其門は火に焚たりと 四 我この言を聞坐りて泣き數日の間哀しみ斷食し天の神に祈りて言ふ 五 天の神ヱホバ大なる畏るべき神己を愛し己の誡命を守る者にむかひて契約を保ち恩惠を施こしたまふ者よ 六 ねがはくは耳を傾むけ目を開きて僕の祈禱を聽いれたまへ我いま汝の僕なるイスラエルの子孫のために日夜なんぢの前に祈り我儕イスラエルの子孫が汝にむかひて犯せし罪を懺悔す誠に我も我父の家も罪を犯せり 七 我らは汝にむかひて大に惡き事を行ひ汝の僕モーセに汝の命じたまひし誡命をも法度をも例規をも守らざりき 八 請ふ汝の僕モーセに命じたまひし言を憶ひたまへ其言に云く汝ら若罪を犯さば我汝らを國々に散さん 九 然れども汝らもし我にたちかへり我誡命を守りてこれを行なはば假令逐れゆきて天の涯にをるとも我そこより汝等をあつめ我名を住はせんとて撰びし處にきたらしめんと 一〇 そもそも是等の者は汝が大なる能力と強き手をもて贖ひたまひし汝の僕なんぢの民なり 一一 主よ請ふ僕の祈禱および汝の名を畏むことを悦こぶ汝の僕等の祈禱に耳を傾けたまへ願くは今日僕を助けて此人の目の前に憐憫を得させたまへこの時我は王の酒人なりき

第二章 一 茲にアルタシヤスタ王の二十年ニサンの月王の前に酒のいでし時我酒をつぎて王にたてまつれり我は今まで王の前にて憂色を帶しこと有ざりき 二 王われに言けるは汝は疾病も有ざるに何とて面に憂色を帶るや是他ならず心に憂ふる所あるなりと是において我甚だ大に懼れたりしが 三 遂に王に奏して曰ふ願くは王長壽かれ我が先祖の墓の地たるその邑は荒蕪その門は火にて焚たれば我いかで顏に憂色を帶ざるを得んやと 四 王われに向ひて然らば汝何をなさんと願ふやと言ければ我すなはち天の神に祈りて 五 王に言けるは王もし之を善としたまひ我もし汝の前に恩を得たる者なりせば願くはユダにあるわが先祖の墓の邑に我を遣はして我にこれを建起さしめたまへと 六 時に后妃も傍に坐しをりしが王われに言けるは汝が往てをる間は何程なるべきや何時頃歸りきたるやと王かく我を遣はすことを善としければ我期を定めて奏せり 七 而して我また王に言けるは王もし善としたまはば請ふ河外ふの總督等に與ふる書を我に賜ひ彼らをして我をユダまで通さしめたまへ 八 また王の山林を守るアサフに與ふる書をも賜ひ彼をして殿に屬する城の門を作り邑の石垣および我が入べき家に用ふる材木を我に授けしめたまへと我神善く我を助けたまひしに因て王これを我に允せり 九 是に於

て我河外ふの總督等に詣りて王の書をこれに付せり王は軍長數人に騎兵をそへて我に伴なはせたり一〇時にホロニ人サンバラテおよびアンモニ人奴隷トビヤこれを聞きイスラエルの子孫の安寧を求むる人來れりとて大に憂ふ一一我つひにヱルサレムに到りて彼處に三日居りける後一二夜中に起いでたり數人の者われに伴なふ我はわが神がヱルサレムのために爲せんとて我心に入たまひし所の事を何人にも告しらせず亦我が乘る一匹の畜の外には畜を引つれざりき一三我すなはち夜中に立いで谷の門を通り龍井の對面を經糞門に至りてヱルサレムの石垣を閲せしにその石垣は頽れをりその門は已に火に焚てありき一四かくて又前みて泉の門にゆき王の池にいたりしに我が乘る畜の通るべき處なかりき一五我亦その夜の中に渓川に沿て進みのぼりて石垣を觀めぐり頓て身を反して谷の門より歸りいりぬ一六然るに牧伯等は我が何處に往しか何を爲しかを知ざりき我また未だこれをユダヤ人にも祭司にも貴き人にも方伯等にも其他の役人にも告しらせざりしが一七遂に彼らに言けるは汝らの見るごとく我儕の境遇は惡くヱルサレムは荒はてその門は火に焚たり來れ我儕ヱルサレムの石垣を築きあげて再び世の凌辱をうくることなからんと一八而して我わが神の善われを助けたまひし事を彼らに告げまた王の我に語りし言詞をも告しらせければ去來起て築かんと言ひ皆奮ひてこの美事を爲んとす一九時にホロニ人サンバラテ、アンモニ人奴隷トビヤおよびアラビヤ人ガシムこれを聞て我らを嘲けり我儕を侮りて言ふ汝ら何事をなすや王に叛かんとするなるかと二〇我すなはち答へて彼らに言ふ天の神われらをして志を得させたまはん故に其僕たる我儕起て築くべし然ど汝らはヱルサレムに何の分もなく權理もなく記念もなしと

第三章一茲に祭司の長ヱリアシブその兄弟の祭司等とともに起て羊の門を建て之を聖別てその扉を設け尚も之を聖別てハンメアの戍樓に及ぼし又ハナネルの戍樓に及ぼせり二その次にはヱリコの人々を築き建て其次にはイムリの子ザツクル築き建たり三魚の門はハツセナアの子等これを建構へその扉を設けて之に鎖と門を施こせり四その次にはハツコヅの子ウリヤの子メレモタ修繕をなし其次にはメシザベルの子ベレキヤの子メシユラム修繕をなしその次にはバアナの子ザドク修繕をなし五その次にはテコア人等修繕をなせり但しその貴き族はその主の工事に服せざりき六古門はパセアの子ヨイアダおよびベソデヤの子メシユラムこれを修繕ひ構へその扉を設けて之に鎖と門を施せり七その次にはギベオン人メラテヤ、メロノテ人ヤドン河外ふの總督の管轄に屬するギベオンとミヅパの人々等修繕をなせり八その次にはハルハヤの子ウジエルなどの金工修繕をなし其次には製香者ハナニヤなど修繕をなしヱルサレムを堅うして石垣の廣き處にまで及べり九その次にはエルサレムの郡の半の知事ホルの子レパヤ修繕をなせり一〇その次にはハルマフの子ヱダヤ

己の家と相對ふ處を修繕りその次にはハシヤブニヤの子ハットシ修繕をなせり一一 ハリムの子マルキヤおよびバハテモアブの子ハシユブも一方を修繕ひまた爐戍樓を修繕へり一二その次にはヱルサレムの郡の半の知事ハロヘシの子シヤルムその女子等とともに修繕をなせり一三谷の門はハヌン、ザノアの民と偕に之を修繕ひ之を建なほしてその扉を設け之に鎖と閂を施しまた糞の門までの石垣一千キユビトを修繕り一四 糞の門はベテハケレムの郡の半の知事レカブの子マルキヤこれを修繕ひ之を建なほしてその扉を設け之に鎖と閂を施こせり一五 泉の門はミヅパの郡の知事コロホゼの子シヤルンこれを修繕ひ之を建なほして覆ひその扉を設け之に鎖と閂を施こしまた王の園の邊なるシラの池に沿る石垣を修繕てダビデの邑より下るところの階級にまで及ぼせり一六 その後にはベテズルの郡の半の知事アズブクの子ネヘミヤ修繕をなしてダビデの墓に對ふ處にまで及ぼし堀池に至り勇士宅に至れり一七 その後にはバニの子レホムなどのレビ人修繕をなし其次にはケイラの郡の半の知事ハシヤビヤその郡の爲に修繕をなせり一八 その後にはケイラの郡の半の知事ヘナダデの子バワイなどいふ其兄弟修繕をなし一九 その次にはヱシユアの子ミヅパの知事エゼル石垣の彎にある武器庫に上る所に對へる部分を修繕ひ二〇 その後にはザバイの子バルク力を竭して石垣の彎より祭司の長エリアシブの家の門までの部分を修繕ひ二一 その次にはハツコヅの子ウリヤの子メレモテ、エリアシブの家の門よりエジアシブの家の極までの部分を修繕ひ二二 その次には窪地の人なる祭司等修繕をなし二三 その次にはベニヤミンおよびハシユブ己の家と相對ふ處を修繕ひ其次にはアナニヤの子マアセヤの子アザリヤ己の家に近き處を修繕ひ二四 その次にはヘナダデの子ビンヌイ、アザリヤの家より石垣の彎角までの部分を修繕へり二五 ウザイの子パラルは石垣の彎に對ふ處および王の上の家より聳え出たる戍樓に對ふ處を修繕り是は侍衛の廳に近し其次にはパロシの子ペダヤ修繕をなせり二六 時にネテニ人オペルに住をりて東の方水の門に對ふ處および聳え出たる戍樓に對ふ處まで及べり二七 その次にはテコア人聳出たる大戍樓に對ふところの部分を修繕てオペルの石垣に及ぼせり二八 馬の門より上は祭司等おのおのその己の家と相對ふ處を修繕へり二九 その次にはインメルの子ザドク己の家と相對ふ處を修繕ひ其次にはシカニヤの子シマヤといふ東の門を守る者修繕をなし三〇 その次にはシレミヤの子ハナニヤおよびザラフの第六の子ハヌン一方を修繕ひその後にはベレキヤの子メシユラム己の室と相對ふ處を修繕へり三一 その次には金工の一人マルキヤといふ者ハンミフカデの門と相對ふ處を修繕ひて隅の昇口に至りネテニ人および商人の家に及ぼせり三二 また隅の昇口と羊の門の間は金工および商人等これを修繕へり

第四章一 茲にサンバラテわれらが石垣を築くを聞て怒り大に憤ほりてユダヤ人を罵れり二 即ち彼その兄弟等およびサマリア

の軍兵の前に語りて言ふ此軟弱しきユダヤ人何を爲や自ら強くせんとするか獻祭をなさんとするか一日に事を終んとするか塵堆の中の石は既に燬たるに之を取出して活さんとするかと三 時にアンモニ人トビヤその傍にありてまた言ふ彼らの築く石垣は狐上るも圮るべしと四 我らの神よ聽たまへ我らは侮らる願くは彼らの出す淩辱をその身の首に歸し彼らを他國に虜はれしめ掠られしめたまへ五 彼らの愆を蔽ひたまふ勿れ彼らの罪を汝の前より消去しめたまはざれ其は彼ら築建者の前にて汝の怒を惹おこしたればなり六 斯われら石垣を築きけるが石垣はみな已に相連なりてその高さの半にまで及べり其は民心をこめて操作たればなり七 然るにサンバラテ、トビヤ、アラビヤ人アンモニ人アシドド人等ヱルサレムの石垣改修れ其破壞も次第に塞がると聞て大に怒り八 皆ともに相結びてヱルサレムに攻來らんとしその中に擾亂をおこさんとせり九 是において我ら神に祈祷をなしかれらのために日夜守望者を置て之に備ふ一〇 ユダ人は言り荷を負ふ者の力衰へしが上に灰土おびただしくして我ら石垣を築くこと能はずと一一 我らの敵は言り彼等が知ずまた見ざる間に我ら其中に入り之を殺してその工事を止めんと一二 又彼らの邊に住るユダヤ人來る時は我らに告て言ふ汝ら我らの所に歸らざるべからずと其事十次にも及べり一三 是に因て我石垣の後の顯露なる低き處に民を置き劍鎗または弓を持せてその宗族にしたがひて之をそなふ一四 我觀めぐり起て貴き人々および牧伯等ならびにその餘の民に告て云ふ汝ら彼等のために懼るる勿れ主の大にして畏るべきを憶ひ汝らの兄弟のため男子女子のため妻および家のために戰かへよと一五 我らの敵おのが事の我らに知れたるをききておのが謀計を神に破られたるを聞しによりて我ら皆石垣に歸り各々その工事をなせり一六 其時より後わが僕半は工事に操作き半は鎗楯弓などを持て鎧を着たり牧伯等はユダの全家の後にありき一七 石垣を築く者および荷を負ひはこぶ者は各々片手もて工事を爲し片手に武器を執り一八 築建者はおのおのその腰に劍を帶て築き建つ又喇叭を吹く者は我傍にあり一九 我貴き人々および牧伯等ならびにその餘の民に告て云ふ此工事は大にして廣ければ我儕石垣にありて彼此に相離ること遠し二〇 何處にもあれ汝ら喇叭の音のきこゆるを聞ば其處に奔あつまりて我らに就け我らの神われらのために戰ひたまふべしと二一 我ら斯して工事をなしけるが半の者は東雲の出るより星の現はるるまで鎗を持をれり二二 當時われ亦民に言らく皆おのおのその僕とともにヱルサレムの中に宿り夜は我らの防守となり晝は工事をつとむべしと二三 而して我もわが兄弟等もわが僕も我に從がふ防守の人々もその衣服を脱ず水を汲に出るにも皆武器を執れり

第五章一 茲に民その妻とともにその兄弟なるユダヤ人にむかひて大に叫べり二 或人言ふ我儕および我らの男子女子は多し我ら穀物を得食ふて生ざるべからず三 或人は言ふ我らは我らの田畑

葡萄園および家をも質となすなり既に饑に迫れば我らに穀物を獲させよ四 或は言ふ我らは我らの田畝および葡萄園をもて金を貸て王の租税を納む五 然ど我らの肉も我らの兄弟の肉と同じく我らの子女も彼らの子女と同じ視よ我らは男子女子を人に伏從はせて奴隷となす我らの女子の中すでに人に伏從せし者もあり如何とも爲ん方法なし其は我らの田畝および葡萄園は別の人の有となりたればなりと六 我は彼らの叫および是等の言を聞て大に怒れり七 是において我心に思ひ計り貴き人々および牧伯等を責てこれに言けるは汝らは各々その兄弟より利息を取るなりと而して我かれらの事につきて大會を開き八 彼らに言けるは我らは異邦人の手に賣れたる我らの兄弟ユダヤ人を我らの力にしたがひて贖へり然るにまた汝等は己の兄弟を賣んとするやいかで之をわれらの手に賣るべけんやと彼らは默して言なかりき九 我また言けるは汝らの爲すところ善らず汝らは我らの敵たる異邦人の誹謗をおもひて我儕の神を畏れつつ事をなすべきに非ずや一〇 我もわが兄弟および僕等も同じく金と穀物とを貸て利息を取ことをなす願くは我らこの利息を廢ん一一 請ふ汝ら今日にも彼らの田畝葡萄園橄欖園および家を彼らに還しまた彼らに貸あたへて金穀物および酒油などの百分の一を取ることを廢よと一二 彼ら即ち言けるは我ら之を還すべし彼らに何をも要めざらん汝の言るごとく我ら然なすべしと是に於て我祭司を呼び彼らをして此言のごとく行なふといふ誓を立しめたり一三 而して我わが胸懷を打拂ひて言ふ此言を行はざる者をば願くは神是のごとく凡て打拂ひてその家およびその業を離れさせたまへ即ちその人は斯打拂はれて空しくなれかしと時に會衆みなアーメンと言てヱホバを讃美せり而して民はこの言のごとくに行へり一四 且また我がユダの地の總督に任ぜられし時より即ちアルタシヤユタ王の二十年より三十二年まで十二年の間は我もわが兄弟も總督の受べき祿を食ざりき一五 わが以前にありし舊の總督等は民に重荷を負せてパンと酒とを是より取り其外にまた銀四十シケルを取れり然のみならずその僕等も亦民を圧せり然ども我は神を畏るるに因て然せざりき一六 我は反てこの石垣の工事に身を委ね我儕は何の田地をも買しこと無し我僕は皆かしこに集りて工事をなせり一七 且また我席にはユダヤ人および牧伯等百五十人あり其外にまた我らの周圍の異邦人の中より我らに來れる者等もありき一八 是をもて一日に牛一匹肥たる羊六匹を備へ亦鷄をも許多備へ十日に一回種々の酒を多く備へたり是ありしかどもこの民の役おもきに因て我は總督の受くべき祿を要めざりき一九 わが神よ我が此民のために爲る一切の事を憶ひ仁慈をもて我をあしらひ給へ

第六章一 サンバラテ、トビヤおよびアラビヤ人ガシムならびにその餘の我らの敵我が石垣を築き終りて一の破壞も遺らずと聞り(然どその時は未だ門に扉を設けざりしなり)二 是においてサンバラテとガシム我に言つかはしけるは來れ我らオノの平野な

る某の村にて相會せんとその實は我を害せんと思ひしなり三我すなはち使者を彼らに遣はして言らく我は大なる工事をなし居れば下りゆくことを得ずなんぞ工事を離れ汝らの所に下りゆきてその間工事を休ますべけんやと四彼ら四次まで是のごとく我に言遣はしけるが我は何時もかくのごとく之に答へたり五是においてサンバラテまた五次目にその僕を前のごとく我に遣はせり其手には封ぜざる書を携さふ六その文に云く國々にて言傳ふガシムもまた然いふ汝はユダヤ人とともに叛かんとして之がために石垣を築けり而して汝はその王とならんとすとその言ところ是のごとし七また汝は預言者を設けて汝の事をヱルサレムに宣しめユダに王ありと言しむといひ傳ふ恐くはその事この言のごとく王に聞えん然ば汝いま來れ我ら共に相議らんと八我すなはち彼に言つかはしけるは汝が言るごとき事を爲し事なし惟なんぢ之を己の心より作りいだせるなりと九彼らは皆われらを懼れしめんとせり彼ら謂らく斯なさば彼ら手弱りて工事を息べければ工事成ざるべしと今ねがはくは我手を強くしたまへ一〇かくて後我メヘタベルの子デラヤの子シマヤの家に往しに彼閉こもり居て言らく我ら神の室に到りて神殿の内に相會し神殿の戸を閉おかん彼ら汝を殺さんとて來るべければなり必ず夜のうちに汝を殺さんとて來るべしと一一我言けるは我ごとき人いかで逃べけんや我ごとき身にして誰か神殿に入て生命を全うすることを爲んや我は入じと一二我暁れるに神かれを遣はしたまひしに非ず彼が我にむかひて此預言を説しはトビヤとサンバラテ彼に賄賂したればなり一三彼に賄賂せしは此事のためなり即ち我をして懼れて然なして罪を犯さしめ惡き名を我に負する種を得て我を辱しめんとてなりき一四わが神よトビヤ、サンバラテおよび女預言者ノアデヤならびにその他の預言者など凡て我を懼れしめんとする者等を憶えてその行爲に報をなしたまへ一五石垣は五十二日を歴てエルルの月の二十五日に成就せり一六我らの敵皆これを聞ければ我らの周圍の異邦人は凡て怖れ大に面目をうしなへり其は彼等この工事は我らの神の爲たまひし者なりと暁りたればなり一七其頃ユダの貴き人々しばしば書をトビヤにおくれりトビヤの書もまた彼らに來れり一八トビヤはアラの子シカニヤの婿なるをもてユダの中に彼と盟を結べる者多かりしが故なりトビヤの子ヨハナンも亦ベレキヤの子メシュラムの女子を妻に娶りたり一九彼らはトビヤの善行を我前に語りまた我言を彼に通ぜりトビヤは常に書をおくりて我を懼れしめんとせり

第七章一石垣を築き扉を設け門を守る者謳歌者およびレビ人を立るにおよびて二我わが兄弟ハナニおよび城の宰ハナニヤをしてヱルサレムを治めしむ彼は忠信なる人にして衆多の者に超りて神を畏るる者なり三我かれらに言ふ日の熱くなるまではヱルサレムの門を啓くべからず人々の立て守りをる間に門を閉させて汝らこれを堅うせよ汝らヱルサレムの民を番兵に立て

各々にその所を守らしめ各々にその家と相對ふ處を守らしめよ四邑は廣くして大なりしかどもその內の民は寡くして家は未だ建ざりき五我神はわが心に貴き人々牧伯等および民を集めてその名簿をしらぶる思念を起さしめたまへり我最先に上り來りし者等の系圖の書を得て見にその中に書しるして曰く六往昔バビロンの王ネブカデネザルに虜へられバビロンに遷されたる者のうち俘囚をゆるされてヱルサレムおよびユダに上りおのおの己の邑に歸りし此州の者は左の如し是皆ゼルバベル、ヱシユア、ネヘミヤ、アザリヤ、ラアミヤ、ナハマニ、モルデカイ、ビルシヤン、ミスペレテ、ビグワイ、ネホム、バアナ等に隨ひ來れり七そのイスラエルの民の人數は是のごとし八パロシの子孫二千百七十二人九シパテヤの子孫三百七十二人一〇アラの子孫六百五十二人一一ヱシユアとヨアブの族たるパハテモアブの子孫二千八百十八人一二エラムの子孫千二百五十四人一三ザツトの子孫八百四十五人一四ザツカイの子孫七百六十人一五ビンヌイの子孫六百四十八人一六ベバイの子孫六百二十八人一七アズガデの子孫二千三百二十二人一八アドニカムの子孫六百六十七人一九ビグワイの子孫二千六十七人二〇アデンの子孫六百五十五人二一ヒゼキヤの家のアテルの子孫九十八人二二ハシユムの子孫三百二十八人二三ベザイの子孫三百二十四人二四ハリフの子孫百十二人二五ギベオンの子孫九十五人二六ベテレヘムおよびネトパの人百八十八人二七アナトテの人百二十八人二八ベテアズマウテの人四十二人二九キリアテヤリム、ケピラおよびベエロテの人七百四十三人三〇ラマおよびゲバの人六百二十一人三一ミクマシの人百二十二人三二ベテルおよびアイの人百二十三人三三他のネボの人五十二人三四他のエラムの民千二百五十四人三五ハリムの民三百二十人三六ヱリコの民三百四十五人三七ロド、ハデデおよびオノの民七百二十一人三八セナアの子孫三千九百三十人三九祭司はヱシユアの家のヱダヤの子孫九百七十三人四〇インメルの子孫千五十二人四一パシユルの子孫一千二百四十七人四二ハリムの子孫一千十七人四三レビ人はホデワの子等ヱシユアとカデミエルの子孫七十四人四四謳歌者はアサフの子孫百四十八人四五門を守る者はシヤルムの子孫アテルの子孫タルモンの子孫アツクブの子孫ハテタの子孫シヨバイの子孫百三十八人四六ネテニ人はジハの子孫ハスパの子孫タバオテの子孫四七ケロスの子孫シアの子孫パドンの子孫四八レバナの子孫ハガバの子孫サルマイの子孫四九ハナンの子孫ギデルの子孫ガハルの子孫五〇レアヤの子孫レヂンの子孫ネコダの子孫五一ガザムの子孫ウザの子孫パセアの子孫五二ベサイの子孫メウニムの子孫ネフセシムの子孫五三バクブクの子孫ハクパの子孫ハルホルの子孫五四バヅリテの子孫メヒダの子孫ハルシヤの子孫五五バルコスの子孫シセラの子孫テマの子孫五六ネヂアの子孫ハテパの子孫等なり五七ソロモンの僕たりし者等の子孫は即ちソタイの子孫ソペレテの子孫ペリダの子孫五八ヤ

アラの子孫ダルコンの子孫ギデルの子孫五九 シパテヤの子孫ハツテルの子孫ポケレテハツゼバイムの子孫アモンの子孫六〇 ネテニ人とソロモンの僕たりし者等の子孫とは合せて三百九十二人六一 またテルメラ、テルハレサ、ケルブ、アドンおよびインメルより上り來れる者ありしがその宗家とその血統とを示してイスラエルの者なるを明かにすることを得ざりき六二 是すなはちデラヤの子孫トビヤの子孫ネコダの子孫にして合せて六百四十二人六三 祭司の中にホバヤの子孫ハツコヅの子孫バルジライの子孫ありバルジライはギレアデ人バルジライの女を妻に娶りてその名を名りしなり六四 是等の者系圖に載る者等の中にその籍を尋ねたれども在ざりき是故に汚れたる者として祭司の中より除かれたり六五 テルシヤタ即ち之に告てウリムとトンミムを帶る祭司の興るまでは至聖物を食ふべからずと言り六六 會衆あはせて四萬二千三百六十人六七 この外にその僕 婢七千三百三十七人謳歌 男 女二百四十五人あり六八 その馬七百三十六匹その騾二百四十五匹六九 駱駝四百三十五匹驢馬六千七百二十匹七〇 宗家の長の中工事のために物を納めし人々ありテルシヤタは金一千ダリク鉢五十祭司の衣服五百三十襲を施して庫に納む七一 また宗家の長數人は金二萬ダリク銀二千二百斤を工事のために庫に納む七二 その餘の民の納めし者は金二萬ダリク銀二千斤祭司の衣服六十七襲なりき七三 かくて祭司レビ人門を守る者謳歌者民等ネテニ人およびイスラエル人すべてその邑々に住り／イスラエルの子孫かくてその邑々に住みをりて七月にいたりぬ

第八章一 茲に民みな一人のごとくになりて水の門の前なる廣場に集り學士エズラに請てヱホバのイスラエルに命じたまひしモーセの律法の書を携へきたらんことを求めたり二 この日すなはち七月一日祭司エズラ律法を携へ來りてその集りをる男 女および凡て聽て了ることを得るところの人々の前に至り三 水の門の前なる廣場にて曙より日中まで男 女および了り得る者等の前にこれを誦めり民みな律法の書に耳を傾く四 學士エズラこの事のために預て設けたる木の臺の上に立たりしがその傍には右の方にマツタテヤ、シマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤおよびマアセヤ立をり左の方にペダヤ、ミサエル、マルキヤ、ハシユム、ハシバダナ、ゼカリヤおよびメシユラム立をる五 エズラ一切の民の目の前にその書を開けり（彼一切の民より高きところに立たり）かれが開きたる時に民みな起あがれり六 エズラすなはち大神ヱホバを祝しければ民みなその手を擧て應へてアーメン、アーメンと言ひ首を下げ地に俯伏てヱホバを拜めり七 ヱシユア、バニ、セレビヤ、ヤミン、アツクブ、シヤベタイ、ホデヤ、マアセヤ、ケリタ、アザリヤ、ヨザバテ、ハナン、ペラヤおよびレビ人等民に律法を了らしめたり民はその所に立をる八 彼等その書に就て神の律法を朗かに誦み且その意を解あかしてその誦ところを之に了らしむ九 時にテルシヤタたるネヘミヤ祭司たる

學士エズラおよび民を教ふるレビ人等一切の民にむかひて此日は汝らの神ヱホバの聖日なり哭くなかれ泣なかれと言り其は民みな律法の言を聽て泣たればなり 一〇 而して彼らに言けるは汝ら去て肥たる者を食ひ甘き者を飲め而してその備をなし得ざる者に之を分ちおくれ此日は我らの主の聖日なり汝ら憂ふることをせざれヱホバを喜ぶ事は汝らの力なるぞかしと 一一 レビ人も亦一切の民を靜めて言ふ汝ら默せよ此日は聖きぞかし憂ふる勿れと 一二 一切の民すなはち去りて食ひかつ飲み又人に分ちおくりて大なる喜悦をなせり是はその誦きかされし言を了りしが故なり 一三 その翌日一切の民の族長等祭司およびレビ人等律法の語を學ばんとて學士エズラの許に集り來り 一四 律法を視るにヱホバのモーセによりて命じたまひし所を錄して云く七月の節會にはイスラエルの子孫茅廬に居るべしと 一五 又云く一切の邑々及びヱルサレムに布傳へて言べし汝ら山に出ゆき橄欖の枝油木の枝烏拈の枝棕櫚の枝および茂れる木の枝を取きたりて錄されたるごとくに茅廬を造れと 一六 是において民出ゆきて之を取きたり各々その家の屋背の上あるひはその庭あるひは神の室の庭あるひは水の門の廣場あるひはエフライムの門の廣場に茅廬を造れり 一七 虜はれゆきて歸り來りし會衆みな斯茅廬を造りて茅廬に居りヌンの子ヨシユアの日より彼日までにイスラエルの子孫斯おこなひし事なし是をもてその喜悦はなはだ大なりき 一八 初の日より終の日までエズラ日々に神の律法の書を誦り人衆七日の間節筵をおこなひ第八日にいたり例にしたがひて聖會を開けり

第九章 一 その月の二十四日にイスラエルの子孫あつまりて斷食し麻布を纒ひ土を蒙れり 二 イスラエルの裔たる者一切の異邦人とはなれ而して立て己の罪と先祖の愆とを懺悔し 三 皆おのおのがその處に立てこの日の四分の一をもてその神ヱホバの律法の書を誦み他の四分の一をもて懺悔をなしその神ヱホバを拜めり 四 時にヱシユア、バニ、カデミエル、シバニヤ、ブンニ、セレビヤ、バニ、ケナニ等レビ人の臺に立ち大聲を擧てその神ヱホバに呼はれり 五 斯てまたヱシユア、カデミエル、バニ、ハシヤブニヤ、セレビヤ、ホデヤ、セバニヤ、ペタヒヤなどのレビ人言けらく汝ら起あがり永遠より永遠にわたりて在す汝らの神ヱホバを讃よ汝の尊き御名は讃べきかな是は一切の讃にも崇にも遠く超るなり 六 汝は唯なんぢのみヱホバにまします汝は天と諸天の天およびその萬象地とその上の一切の物ならびに海とその中の一切の物を造り之をことごとく保存せたまふなり天軍なんぢを拜す 七 汝はヱホバ神にまします汝は在昔アブラムを撰みてカルデヤのウルより之を導きいだしアブラハムといふ名をこれにつけ 八 その心の汝の前に忠信なるを觀そなはし之に契約を立てカナン人ヘテ人アモリ人ペリジ人ヱブス人およびギルガシ人の地をこれに與へその子孫に授けんと宣まひて終に汝の言を成たまへり汝は實に義し 九 汝は我らの先祖がエジプトにて艱難を受るを鑒

みその紅海の邊にて呼はり叫ぶを聽いれ一〇異兆と奇蹟とをあらはしてパロとその諸臣とその國の庶民とを攻たまへりそはかれらは傲りて我らの先祖等を攻しことを知たまへばなり而して汝の名を揚たまへること尚今日のごとし一一汝はまた彼らの前にあたりて海を分ち彼らをして旱ける地を踏て海の中を通らしめ彼らを追ふ者をば石を大水に投いるごとくに淵に投いれたまひ一二また晝は雲の柱をもて彼らを導き夜は火の柱をもて其往べき路を照したまひき一三汝はまたシナイ山の上に降り天より彼らと語ひ正しき例規および眞の律法善き法度および誡命を之に授け一四汝の聖安息日を之に示し汝の僕モーセの手によりて誡命と法度と律法を之に命じ一五天より食物を之に與へてその餓をとどめ磐より水を之がために出してその渇を濕し且この國をなんぢらに與へんと手を擧て誓ひ給ひしその國に入これを獲べきことをかれらに命じたまへり一六然るに彼等すなはち我らの先祖みづから傲りその項を強くして汝の誡命に聽したがはず一七聽從ふことを拒み亦なんぢが其中にて行ひたまひし奇蹟を憶はず還てその項を強くし悖りて自ら一人の首領を立てその奴隷たりし處に歸らんとせり然りと雖も汝は罪を赦す神にして恩惠あり憐憫あり怒ること遲く慈悲厚くましまして彼らを棄たまはざりき一八また彼ら自ら一箇の犢を鑄造りて是は汝をエジプトより導き上りし汝の神なりと言て大に震怒をひきおこす事を行ひし時にすら一九汝は重々も憐憫を垂て彼らを荒野に棄たまはず晝は雲の柱その上を離れずして之を途に導き夜は火の柱離れずして之の行べき路を示したりき二〇汝はまた汝の善靈を賜ひて彼らを訓へ汝のマナを常に彼らの口にあたへまた水を彼らに與へてその渇をとどめ二一四十年の間かれらを荒野に養ひたまたれば彼らは何の缺る所もなくその衣服も古びずその足も腫ざりき二二而して汝諸國諸民を彼らにあたへて之を各々に分ち取しめ給へりかれらはシホンの地ヘシボンの王の地およびバシヤンの王オグの地を獲たり二三斯てまた汝は彼らの子孫を増て空の星のごとくならしめ前にその先祖等に入て獲よと宣まひたる地に之を導きいりたまひしかば二四則ちその子孫入てこの地を獲たり斯て汝この地にすめるカナン人をかれらの前に打伏せその王等およびその國の民をかれらの手に付して意のままに之を待はしめたまひき二五斯りしかば彼ら堅固なる邑々および膏腴なる地を取り各種の美物の充る家鑿井葡萄園橄欖園および許多の菓の樹を獲乃はち食ひて飽き肥太り汝の大なる恩惠に沾ひて樂みたりしが二六尚も悖りて汝に叛き汝の律法を後に抛擲ち己を戒しめて汝に歸らせんとしたる預言者等を殺し大に震怒を惹おこす事を行なへり二七是に因て汝かれらをその敵の手に付して窘しめさせたまひしが彼らその艱難の時に汝に呼はりければ汝天より之を聽て重々も憐憫を加へ彼らに救ふ者を多く與へて彼らをその敵の手より救はせたまへり二八然るに彼らは安を獲の後復も汝の前に惡き事を行ひ

しかば汝かれらをその敵の手に棄おきて敵にこれを治めしめたまひけるが彼ら復立歸りて汝に呼はりたれば汝天よりこれを聽き憐憫を加へてしばしば彼らを助け二九 彼らを汝の律法に引もどさんとして戒しめたまへり然りと雖も彼らは自ら傲りて汝の誡命に聽したがはず汝の例規（人のこれを行はば之によりて生べしといふ者）を犯し肩を聳かし項を強くして聽ことをせざりき三〇 斯りしかど汝は年ひさしく彼らを容しおき汝の預言者等に由て汝の靈をもて彼らを戒めたまひしが彼等つひに耳を傾けざりしに因て彼らを國々の民等の手に付したまへり三一 されど汝は憐憫おほくして彼らを全くは絶さず亦彼らを棄たまふことをも爲たまはざりき汝は恩惠あり憐憫ある神にましませばなり三二 然ば我らの神大にして力強く且畏るべくして契約を保ち恩惠を施こしたまふ御神ねがはくはアッスリヤの王等の日より今日にいたるまで我儕の王等牧伯等祭司預言者我らの先祖汝の一切の民等に臨みし諸の苦難を小き事と觀たまはざれ三三 我らに臨みし諸の事につきては汝義く在せり汝の爲たまひし所は誠實にして我らの爲しところは惡かりしなり三四 我らの王等牧伯等祭司父祖等は汝の律法を行はず汝が用ひて彼らを戒しめたまひしその誡命と證詞に聽從はざりき三五 即ち彼らは己の國に居り汝の賜ふ大なる恩惠に沾ひ汝が與へてその前に置たまひし廣き膏腴なる地にありける時に汝に事ふることを爲ず又ひるがへりて自己の惡き業をやむる事もせざりしなり三六 嗚呼われらは今日奴隷たり汝が我らの先祖に與へてその中の産出物およびその中の佳物を食はせんとしたまひし地にて我らは奴隷となりをるこそはかなけれ三七 この地は汝が我らの罪の故によりて我らの上に立たまひし王等のために衆多の産物を出すなり且また彼らは我らの身をも我らの家畜をも意のままに左右することを得れば我らは大難の中にあるなり三八 此もろもろの事のために我ら今堅き契約を立てこれを書しるし我らの牧伯等我らのレビ人我らの祭司これに印す

第一〇章

一 印を捺る者はハカリヤの子テルシヤタ、ネヘミヤおよびゼデキヤ二 セラヤ、アザリヤ、ヱレミヤ三 パシユル、アマリヤ、マルキヤ、四 ハツトシ、シバニヤ、マルク五 ハリム、メレモテ、オバデヤ六 ダニエル、ギンネトン、バルク七 メシユラム、アビヤ、ミヤミン八 マアジア、ビルガ、シマヤ是等は祭司なり九 レビ人は即ちアザニヤの子ヱシユア、ヘナダデの子ビンヌイ、カデミエル一〇 ならびに其兄弟シバニヤ、ホデヤ、ケリタ、ペラヤ、ハナン一一 ミカ、レホブ、ハシヤビヤ一二 ザツクル、セレビヤ、シバニヤ一三 ホデヤ、バニ、ベニヌ一四 民の長たる者はパロシ、パハテモアブ、エラム、ザツト、バニ一五 ブンニ、アズカデ、ベバイ一六 アドニヤ、ビグワイ、アデン一七 アテル、ヒゼキヤ、アズル一八 ホデヤ、ハシユム、ベザイ一九 ハリフ、アナトテ、ノバイ二〇 マグピアシ、メシユラム、ヘジル二一 メシザベル、ザドク、ヤドア二二 ペラテヤ、ハナン、アナニヤ二三 ホセア、ハナニヤ、ハシユブ

二四ハロヘシ、ピルハ、シヨベク二五レホム、ハシヤブナ、マアセヤ二六アヒヤ、ハナン、アナン二七マルク、ハリム、バアナ二八その餘の民祭司レビ人門をまもる者謳歌者ネテニ人ならびに都て國々の民等と離れて神の律法に附る者およびその妻その男子女子など凡そ事を知り辨まふる者は二九皆その兄弟たる貴き人々に附したがひ呪詛に加はり誓を立て云く我ら神の僕モーセによりて傳はりし神の律法に歩み我らの主ヱホバの一切の誡命およびその例規と法度を守り行はん三〇我らは此地の民等に我らの女子を與へじ亦われらの男子のために彼らの女子を娶らじ三一比地の民等たとひ貨物あるひは食物を安息日に携へ來りて賣んとするとも安息日または聖日には我儕これを取じ又七年ごとに耕作を廢め一切の負債を免さんと三二我らまた自ら例を設けて年々にシケルの三分の一を出して我らの神の室の用となし三三供物のパン常素祭常燔祭のため安息日月朔および節會の祭物のため聖物のためイスラエルの贖をなす罪祭および我らの神の家の諸の工のために之を用ゐることを定む三四また我ら祭司レビ人および民籤を掣き律法に記されたるごとく我らの神ヱホバの壇の上に焚べき薪木の禮物を年々定まれる時にわれらの宗家にしたがひて我らの神の室に納むる者を定め三五かつ誓ひて云ふ我らの產物の初および各種の樹の果の初を年々ヱホバの室に携へきたらん三六また我らの子等および我らの獸畜の首出および我らの牛羊の首出を律法に記されたるごとく我らの神の室に携へ來りて我らの神の室に事ふる祭司に交し三七我らの麥粉の初われらの擧祭の物各種の樹の果および酒油を祭司の許に携へ到りて我らの神の家の室に納め我らの產物の什一をレビ人に與へんレビ人は我らの一切の農作の邑においてその什一を受べき者なればなり三八レビ人什一を受る時にはアロンの子孫たる祭司一人そのレビ人と偕にあるべし而してまたレビ人はその什一の十分の一を我らの神の家に携へ上りて府庫の諸室に納むべし三九即ちイスラエルの子孫およびレビの子孫は穀物および酒油の擧祭を携さへいたり聖所の器皿および奉事をする祭司門を守る者謳歌者などが在るところの室に之を納むべし我らは我らの神の家を棄じ

第一一章

一民の牧伯等はヱルサレムに住りその餘の民もまた籤を掣き十人の中よりして一人宛を聖邑ヱルサレムに來りて住しめその九人を他の邑々に住しめたり二又すべて自ら進でヱルサレムに住んと言ふ人々は民これを祝せり三イスラエル祭司レビ人ネテニ人およびソロモンの臣僕たりし者等の子孫すべてユダの邑々にありておのおのその邑々なる自己の所有地に住をれり此州の貴き人々のヱルサレムに住をりし者は左のごとし四即ちユダの子孫およびベニヤミンの子孫のヱルサレムに住る者は是なりユダの子孫はウジヤの子アタヤ、ウジヤはゼカリヤの子ゼカリヤはアマリヤの子アマリヤはシパテヤの子シパテヤはマハラレルの子是はペレズの子孫なり五又バルクの子マアセヤと

いふ者ありバルクはコロホゼの子コロホゼはハザヤの子ハザヤはアダヤの子アダヤはヨヤリブの子ヨヤリブはゼカリヤの子ゼカリヤはシロニ人の子なり六ペレズの子孫のヱルサレムに住る者は合せて四百六十八人にして皆勇士なり七ベニヤミンの子孫は左のごとしメシユラムの子サル、メシユラムはヨエデの子ヨエデはペダヤの子ペダヤはコラヤの子コラヤはマアセヤの子マアセヤはイテエルの子イテエルはヱサヤの子なり八その次はガバイおよびサライなどにして合せて九百二十八人九ジクリの子ヨエルかれらの監督たりハツセヌアの子ユダこれに副ふて邑を治む一〇祭司はヨヤリブの子ヱダヤ、ヤキン一一および神の室の宰セラヤ、セラヤはヒルヤキの子ヒルキヤはメシユラムの子メシユラムはザドクの子ザドクはメラヨテの子メラヨテはアヒトブの子なり一二殿の職事をするその兄弟八百二十二人あり又アダヤといふ者ありアダヤはヱロハムの子ヱロハムはペラリヤの子ペラリヤはアムジの子アムジはゼカリヤの子ゼカリヤはパシホルの子パシホルはマルキヤの子なり一三アダヤの兄弟たる宗家の長二百四十二人あり又アマシサイといふ者ありアマシサイはアザリエルの子アザリエルはアハザイの子アハザイはメシレモテの子メシレモテはイシメルの子なり一四その兄弟たる勇士百二十八人ありハツゲドリムの子ザブデエル彼らの監督たり一五レビ人はハシユブの子シマヤ、ハシユブはアズリカムの子アズリカムはハシヤビヤの子ハシヤビヤはブンニの子なり一六またシヤベタイおよびヨザバデあり是等はレビ人の長にして神の室の外の事を掌どれり一七またマツタニヤといふ者ありマツタニヤはミカの子ミカはザブデの子ザブデはアサフの子なりマツタニヤは祈祷の時に感謝の詞を唱へはじむる者なり彼の兄弟の中にてバクブキヤといふ者かれに次り又アブダといふ者ありアブダはシヤンマの子シヤンマはガラルの子ガラルはヱドトンの子なり一八聖邑にあるレビ人は合せて二百八十四人一九門を守る者アツクブ、タルモンおよびその兄弟等合せて百七十二人あり皆門々にありて伺守ることをせり二〇その餘のイスラエル人祭司およびレビ人は皆ユダの一切の邑々にありて各々おのれの産業に居り二一但しネテニ人はオペルに居りヂハ及びギシパ、ネタニ人を統ぶ二二ヱルサレムにをるレビ人の監督はウジといふ者なりウジはバニの子バニはハシヤビヤの子ハシヤビヤはマツタニヤの子マツタニヤはミカの子なり是は謳歌者なるアサフの子孫なりその職務は神の室の事にかかはる二三王より命令ありて是らの事を定め謳歌者に日々の定まれる分を與へしむ二四ユダの子ゼラの子孫メシザベルの子ペタヒヤといふ者王の手に屬して民に關る一切の事を取あつかへり二五又村荘とその田圃につきてはユダの子孫の者キリアテアルバとその郷里デボンとその郷里およびヱカブジエルとその村荘に住み二六ヱシユア、モラダおよびベテペレテに住み二七ハザルシユアルおよびベエルシバとその郷里に住み二八ヂクラグおよびメ

コナとその郷里に住み二九エンリンモン、ザレア、ヤルムテに住み三〇ザノア、アドラムおよび其等の村荘ラキシとその田野およびアゼカとその郷里に住り斯かれらはベエルシバよりヒンノムの谷までに天幕を張り三一ベニヤミンの子孫はまたゲバよりしてミクマシ、アヤおよびベテルとその郷里に住み三二アナトテ、ノブ、アナニヤ三三ハゾル、ラマ、ギツタイム三四ハデデ、ゼボイム、ネバラテ三五ロド、オノ工匠谷に住り三六レビ人の班列のユダにある者の中ベニヤミンに合せし者もありき

第一二章一シヤルテルの子ゼルバベルおよびヱシユアと偕に上りきたりし祭司とレビ人は左のごとしセラヤ、ヱレミヤ、エズラ二アマリヤ、マルク、ハツトシ三シカニヤ、レホム、メレモテ四イド、ギンネトイ、アビヤ五ミヤミン、マアデヤ、ビルガ六シマヤ、ヨヤリブ、ヱダヤ七サライ、アモク、ヒルキヤ、ヱダヤ是等の者はヱシユアの世に祭司およびその兄弟等の長たりき八またレビ人はヱシユア、ビンヌイ、カデミエル、セレビヤ、ユダ、マツタニヤ、マツタニヤはその兄弟とともに感謝の事を掌どれり九またその兄弟バクブキヤおよびウンノ之と相對ひて職務をなせり一〇ヱシユア、ヨアキムを生みヨアキム、エリアシブを生みエリアシブ、ヨイアダを生み一一ヨイアダ、ヨナタンを生みヨナタン、ヤドアを生り一二ヨアキムの日に祭司等の宗家の長たりし者はセラヤの族にてはメラヤ、ヱレミヤの族にてはハナニヤ一三エズラの族にてはメシユラム、アマリヤの族にてはヨハナン一四マルキの族にてはヨナタン、シバニヤの族にてはヨセフ一五ハリムの族にてはアデナ、メラヨテの族にてはヘルカイ一六イドの族にてはゼカリヤ、ギンネトン膳良にてはメシユラム一七アビヤの族にてはジクリ、ミニヤミンの族モアデヤの族にてはピルタイ一八ビルガの族にてはシヤンマ、シマヤの族にてはヨナタン一九ヨヤリブの族にてはマツテナイ、ヱダヤの族にてはウジ二〇サライの族にてはカライ、アモクの族にてはエベル二一ヒルキヤの族にてはハシヤビヤ、ヱダヤの族にてはネタンエル二二エリアシブ、ヨイアダ、ヨハナンおよびヤドアの日にレビ人の宗家の長等冊に録さる亦ペルシヤ王ダリヨスの治世に祭司等も然せらる二三宗家の長たるレビ人はエリアシブの子ヨハナンの日まで凡て歴代志の書に記さる二四レビ人の長はハシヤビヤ、セレビヤおよびカデミエルの子ヱシユアなりその兄弟等これと相對ひて居る即ち彼らは班列と班列とあひむかひ居り神の人ダビデの命令に本づきて讃美と感謝とをつとむ二五マツタニヤ、バクブキヤ、オバデヤ、メシユラム、タルモン、アツクブは門を守る者にして門の内の府庫を伺ひ守れり二六是等はヨザダクの子ヱシユアの子ヨアキムの日に在り總督ネヘミヤおよび學士たる祭司エズラの日に在りし者なり二七ヱルサレムの石垣の落成せし節會に當りてレビ人をその一切の處より招きてヱルサレムに來らせ感謝と歌と鐃鈸と瑟と琴とをもて歡喜を盡してその落成の節會を行はんとす二八是において謳歌ふ徒輩ヱルサレムの周圍の

窪地およびネトパ人の村々より集り來り二九またベテギルガルおよびゲバとアズマウテとの野より集り來れりこの謳歌者等はヱルサレムの周圍に己の村々を建たりき三〇茲に祭司およびレビ人身を潔めまた民および諸の門と石垣とを潔めければ三一我すなはちユダの牧伯等をして石垣の上に上らしめ又二の大なる隊を作り設けて之に感謝の詞を唱へて並進ましむ即ちその一は糞の門を指て石垣の上を右に進めり三二その後につきて進める者はホシヤヤおよびユダの牧伯の半三三ならびにアザリヤ、エズラ、メシユラム三四ユダ、ベニヤミン、シマヤ、ヱレミヤなりき三五又祭司の徒數人喇叭を吹て伴ふあり即ちヨナタンの子ゼカリヤ、ヨナタンはシマヤの子シマヤはマツタニヤの子マツタニヤはミカヤの子ミカヤはザツクルの子ザツクルはアサフの子なり三六またゼカリヤの兄弟シマヤ、アザリエル、ミラライ、ギラライ、マアイ、ネタンエル、ユダ、ハナニ等ありて神の人ダビデの樂器を執り學士エズラこれに先だつ三七而して彼ら泉の門を經ただちに進みて石垣の上口に於てダビデの城の段階より登りダビデの家の上を過て東の方水の門に至れり三八また今一隊の感謝する者は彼らに對ひて進み我は民の半とともにその後に從がへり而して皆石垣の上を行き爐戍樓の上を過て石垣の廣き處にいたり三九エフライムの門の上を通り舊門を過ぎ魚の門およびハナニエルの戍樓とハンメアの戍樓を過て羊の門に至り牢の門に立どまれり四〇かくて二隊の感謝する者神の室にいりて立り我もそこにたち牧伯等の半われと偕にありき四一また祭司エリアキム、マアセヤ、ミニヤミン、ミカヤ、エリヨエナイ、ゼカリヤ、ハナニヤ等喇叭を執て居り四二マアセヤ、シマヤ、エレアザル、ウジ、ヨナハン、マルキヤ、エラム、エゼル之と偕にあり謳歌ふ者聲高くうたへりヱズラヒヤはその監督なりき四三斯してその日みな大なる犧牲を献げて喜悦を盡せり其は神かれらをして大に喜こび樂ませたまひたればなり婦女小兒までも喜悦り是をもてヱルサレムの喜悦の聲とほくまで聞えわたりぬ四四その日府庫のすべての室を掌どるべき人々を撰びて擧祭の品初物および什一など律法に定むるところの祭司とレビ人との分を邑々の田圃に准ひて取あつめてすべての室にいるることを掌どらしむ是は祭司およびレビ人の立て奉ふるをユダ人喜こびたればなり四五彼らは神の職守および潔齋の職守を勤む謳歌者および門を守る者も然り皆ダビデとその子ソロモンの命令に依る四六在昔ダビデおよびアサフの日には謳歌者の長一人ありて神に讃美感謝をたてまつる事ありき四七またゼルバベルの日およびネヘミヤの日にはイスラエル人みな謳歌者と門を守る者に日々の分を與へまたレビ人に物を聖別て與へレビ人またこれを聖別てアロンの子孫に與ふ

第一三章 一その日モーセの書を讀て民に聽しめけるに其中に録して云ふアンモニ人およびモアブ人は何時までも神の會に入べからず二是は彼らパンと水とをもてイスラエルの子孫を迎へず

して還て之を詛はせんとてバラムを傭ひたりしが故なり斯りしかども我らの神はその呪詛を變て祝福となしたまへりと三衆人この律法を聞てのち雜りたる民を盡くイスラエルより分ち離てり四是より先我らの神の家の室を掌れる祭司エリアシブといふ者トビヤと近くなりたれば五彼のために大なる室を備ふ其室は元來素祭の物乳香器皿および例によりてレビ人謳歌者門を守る者等に與ふる穀物酒油の什一ならびに祭司に與ふる擧祭の物を置し處なり六當時は我ヱルサレムに居ざりき我はバビロンの王アルタシヤスタの三十二年に王の所に往たりしが數日の後王に暇を乞て七ヱルサレムに來りエリアシブがトビヤのために爲たる惡事すなはちかれがために神の家の庭に一の室を備へし事を詳悉にせり八我はなはだこれを憂ひてトビヤの家の器皿をことごとくその室より投いだし九頓て命じてすべての室を潔めさせ而して神の家の器皿および素祭乳香などを再び其處に携へいれたり一〇我また査べ觀しにレビ人そのうくべき分を與へられざりきこの故に其職務をなす所のレビ人および謳歌者等各々おのれの田に奔り歸りぬ一一是において我何故に神の室を棄させしやと言て牧伯等を詰り頓てまたレビ人を招き集めてその故の所に立しめたり一二斯りしかばユダ人みな穀物酒油の什一を府庫に携へ來れり一三その時我祭司シレミヤ學士ザドクおよびレビ人ペダヤを府庫の有司とし之にマツタニヤの子ザツクルの子ハナンを副て庫をつかさどらしむ彼らは忠信なる者と思はれたればなり其職は兄弟等に分配るの事なりき一四わが神よ此事のために我を記念たまへ我神の室とその職事のために我が行ひし善事を拭ひ去たまはざれ一五當時われ觀しにユダの中にて安息日に酒榨を踏む者あり麥束を持きたりて驢馬に負するあり亦酒葡萄無花果および各種の荷を安息日にヱルサレムに携へいるるあり我かれらが食物を鬻ぎをる日に彼らを戒しめたり一六彼處にまたツロの人々も住をりしが魚および各種の貨物を携へいりて安息日にユダの人々に之を鬻ぎかつヱルサレムにて商賣せり一七是において我ユダの貴き人々を詰りて之に言ふ汝ら何ぞ此惡き事をなして安息日を瀆すや一八汝らの先祖等も斯おこなはざりしや我らの神これが爲にこの一切の災禍を我らとこの邑とに降したまひしにあらずや然るに汝らは安息日を瀆して更に大なる震怒をイスラエルに招くなりと一九而して安息日の前の日ヱルサレムの門々暗くならんとする頃ほひに我命じてその扉を閉させ安息日の過さるまで之を開くべからずと命じ我僕數人を門々に置て安息日に荷を携へいるる事なからしめたり二〇斯りしかば商賣および各種の品を賣る者等一二回ヱルサレムの外に宿れり二一我これを戒めてこれに言ふ汝ら石垣の前に宿るは何ぞや汝等もし重ねて然なさば我なんぢらに手をかけんと其時より後は彼ら安息日には來らざりき二二我またレビ人に命じてその身を潔めさせ來りて門を守らしめて安息日を聖くす我神よ我ために此事を記念し汝の大なる仁慈

をもて我を憫みたまへ三三當時われアシドド、アンモン、モアブなどの婦女を娶りしユダヤ人を見しに二四その子女はアシドドの言語を半雜へて言ひユダヤの言語を言ことあたはず各國の言語を雜へ用ふ二五我彼等を詰りまた詬りその中の數人を撻ちその毛を抜き神を指て誓はしめて言ふ汝らは彼らの男子におのが女子を與ふべからず又なんぢらの男子あるひはおのれ自身のために彼らの女子を娶るべからず二六是らの事についてイスラエルの王ソロモンは罪を獲たるに非ずや彼がごとき王は衆多の國民の中にもあらずして神に愛せられし者なり神かれをイスラエル全國の王となしたまへり然るに尚ほ異邦の婦女等はこれに罪を犯さしめたり二七然ば汝らが異邦の婦女を娶りこの一切の大惡をなして我らの神に罪を犯すを我儕聽し置べけんや二八祭司の長エリアシブの子ヨイアダの一人の子はホロニ人サンバラテの婿なりければ我これを逐出して我を離れしむ二九わが神よ彼らは祭司の職を汚し祭司およびレビ人の契約に背きたり彼らのことを忘れたまふ勿れ三〇我かく人衆を潔めて異邦の物を盡く棄しめ祭司およびレビ人の班列を立て各々その職務に服せしめ三一また人衆をして薪柴の禮物をその定まる期に献げしめかつ初物を奉つらしむ我神よ我を憶ひ仁慈をもて我を待ひたまへ

エステル書

第一章 一 アハシユエロスすなはち印度よりエテオピヤまで百二十七州を治めたるアハシユエロスの世 二 アハシユエロス王シユシヤンの城にてその國の祚に坐しをりける當時 三 その治世の第三年にその牧伯等および臣僕等のために酒宴を設けたり ペルシヤとメデアの武士および貴 族と諸州の牧伯等その前にありき 四 時に王その盛なる國の富有とその大なる威光の榮を示して衆多の日をわたり百八十日に及びぬ 五 これらの日のをはりし時王また王の宮の園の庭にてシユシヤンに居る大小のすべての民のために七日の間酒宴を設けたり 六 白緑青の帳幔ありて細布と紫色の紐にて銀の環および蝋石の柱に繋がるまた牀榻は金銀にして赤白黄黒の蝋石の上に居らる 七 金の酒盃にて酒を賜ふその酒盃は此と彼おのおの異なり王の用ゐる酒をたまふこと夥だし王の富有に適へり 八 その飲むことは法にかなひて誰も強ることを爲ず 其は王人として各々おのれの好むごとく爲しむべしとその宮内のすべての有司に命じたればなり 九 后ワシテもまたアハシユエロス王に屬する王宮の内にて婦女のために酒宴をまうけたり 一〇 第七日にアハシユエロス王酒のために心 樂み王の前に事ふる七人の侍從メホマン、ビスタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、セタルおよびカルカスに命じ 一一 后ワシテをして后の冠冕をかぶりて王の前に來らしめよと言り 是は彼觀に美しければその美麗を民等と牧伯等に見さんとてなりき 一二 しかるに后ワシテ侍從が傳へし王の命に從ひて來ることを肯はざりしかば王おほいに憤ほりて震怒その衷に燃ゆ 一三 是において王時を知る智者にむかひて言ふ（王はすべて法律と審理に明かなる者にむかひて是の如くするを常とせり 一四 時に彼の次にをりし者はペルシヤおよびメデアの七人の牧伯カルシナ、セタル、アデマタ、タルシシ、メレス、マルセナ、メムカンなりき是みな王の面を見る者にして國の第一に位せり）一五 后ワシテ、アハシユエロス王が侍從をもて傳へし命を爲ざれば法律にしたがひて如何に彼になすべきや 一六 メムカン王と牧伯たちの前に答へて曰ふ 后ワシテは唯王にむかひて惡き事をなしたる而已ならず一切の牧伯たちおよびアハシユエロス王の各州のもろもろの民にむかひてもまた之を爲るなり 一七 后のこの事あまねく一切の婦女に聞えて彼らつひにその夫を藐め觀て言ん アハシユエロス王后ワシテに己のまへに來れと命じたりしに來らざりしと 一八 而して后の此所行を聞るペルシヤとメデアの諸夫人もまた今日王のすべての牧伯等に是のごとく言ん然すれば必らず藐視と忿怒多く起るべし 一九 王もし之を善としたまはばワシテは此後ふたたびアハシユエロス王の前に來るべからずといふ王命を下し之をペルシヤとメデアの律法の中に書いれて更ること無らしめ而してその后の位を彼に勝れる他の者に與へたまへ 二〇 王の下したまはん御詔この大なる御國に偏ねく聞えわたる時は

妻たる者ことごとくその夫を大小となく共に敬まふべしと二一王と牧伯等この言を善としければ王メムカンの言のごとく爲たり二二かくて王の諸州に偏ねく書をおくりもろもろの州にその文字にしたがひて書おくりもろもろの民にその言語にしたがひて書おくり凡て男子たる者はその家の主となるべくまたおのれの民の言を用ひてものいふべしと諭しぬ

第二章一これらの事の後アハシユエロス王忿怒とけてワシテおよび彼が爲たる所またその彼にむかひて議定めしところの事を憶ひおこせり二ここに王の前に事ふる僕等いひけるは請ふ美しき少き處女等を王のために尋もとめん三願はくは王御國の各州において官吏を擇び之をして美はしき處女をことごとくシユシヤンの城に集めしめ婦人を管理る王の侍從ヘガイの手にわたして婦人の局に入らしめ而して潔淨の物をこれに與へたまへ四斯して王の御意に適ふ女子を取りワシテに代りて后とならしめたまへと王この事を善として然なしぬ五茲にシユシヤンの城に一人のユダヤ人ありその名をモルデカイと曰ひキシの曾孫シメイの孫ヤイルの子にしてベニヤミン人なり六かれはバビロンの王ネブカデネザルが虜へゆきしユダのヱコニヤとともに虜はれ往る俘囚の中にありてヱサレムより移されたる者なり七かれその叔父の女ハダツサすなはちエステルを養ひ育てたり是は父も母もなかりければなりこの女子顏貌勝れてうるはしかりしがその父母の死たる後モルデカイこれを取ておのれの女となせるなり八王の命令と詔言の聞え傳はり衆多の女子シユシヤンの城にあつめられてヘガイの手にわたされし時エステルも亦王の家に携へられてゆき婦人を管理るヘガイの手に交されしが九この女子ヘガイの意にかなひて之が惠を受たり即はちヘガイすみやかに之に潔淨の物およびその分を與へまた王の家の中より七人の侍女を擧てこれに附そはしめ彼とその侍女等を婦人の局の中なる最も佳き處に移しぬ一〇エステルはおのれの民をもおのれの宗族をも顯はさざりき其はモルデカイこれを顯はすなかれと彼に言ふくめたればなり一一またモルデカイはエステルの模樣およびその如何になれるかを知んため日々に婦人の局の庭の前をあゆめり一二女子はおのおの婦人の則にしたがひて十二ヶ月を經しかる後順番にいりてアハシユエロス王にいたる是その潔淨の日を終るはかくのごとくなるが故なり即ち沒薬の油を用ふること六ヶ月また各種の薰物および婦人の潔淨ごとにあつる物等を用ふること六ヶ月一三女子の王にいたるは是のごとしその婦人の局より出て王の家にゆく時には凡てその望む物をことごとく與へらる一四而して夕に往き朝におよびて婦人の第二の局に還り妃嬪をつかさどる王の侍從シヤシガスの手に屬す王これを喜こびて名をさして召すにあらざれば重ねて王にいたることなし一五ここにモルデカイの叔父アビハイルの女すなはちモルデカイが取ておのれの女となしたるエステル入て王にいたるべき順番にあたりけるが彼は婦人をつかさどる

王の侍從へガイが言きかせたる事の外には何をももとめざりきエステルは凡て彼を見る者によろこばれたり一六 かくエステルは王の家に召いれられてアハシユエロス王にいたれり是その治世の第七年十月 即ちテベテの月なり一七 王一切の婦人に超てエステルを愛しければエステルはすべての處女にまさりて王の前に恩寵と厚情を得たり 王つひに后の冕をかれの首に戴かせ彼をしてワシテにかはりて后とならしむ一八 ここにおいて王おほいなる酒宴を設けてそのもろもろの牧伯と臣僕を饗す これをエステルの酒宴と稱ふまた諸州に租税をゆるし王の富有にかなひて物を賜ふ一九 再度處女の集められし時モルデカイは王の門に坐しをりぬ二〇 エステルはモルデカイがかれに言ふくめたる如くして未だおのれの宗族をもおのれの民をも顯はさざりきエステルはモルデカイの言語にしたがふことその彼に養なひ育てられし時と異ならざりき二一 當時モルデカイ王の門に坐し居ける時王の侍從にて戸を守る者の中ビグタンおよびテレシの二人怨むる事ありてアハシユエロス王を弑せんともとめたりしが二二 その事モルデカイに知れければモルデカイこれを后エステルに告げエステルまたモルデカイの名をもてこれを王に告げたり二三 ここにおいて此事をしらべさせしにその然ること顯はれければ彼ら二人は木にかけられその事は王の前なる日誌の書にかきしるさる

第三章 一 これらの事の後アハシユエロス王アガグ人ハンメダタの子ハマンを貴びこれを高くして己とともにある一切の牧伯の上にその席を定めしむ二 王の門にある主の諸臣みな跪づきてハマンを拜せり 是は王斯かれになすことを命じたればなり 然れどもモルデカイは跪まづかず又これを拜せざりき三 ここをもて王の門にある王の諸臣モデカイにむかひて言ふ 汝いかなれば王の命に背くやと四 かれらモルデカイに日々かく言ふといへども聽ざりければその事の爲をふさるべきか否を見んとてハマンにこれを告たり 其はモルデカイおのれのユダヤ人なることを語りたればなり五 ハマン、モルデカイの跪づかずまた己を拜せざるを見たれば ハマン忿怒にたへざりしが六 ただモルデカイ一人を殺すは事小さしと思へり彼らモルデカイの屬する民をハマンに顯はしければハマンはアハシユエロスの國の中にある一切のユダヤ人すなはちモルデカイの屬する民をことごとく殺さんと謀れり七 アハシユエロス王の十二年正月 即ちニサンの月にハマンの前にて十二月すなはちアダルの月まで一日一日のため一月一月のためにプルを投しむプルは即ち籤なり八 ハマンかくてアハシユエロス王に言けるは御國の各州にある諸民の中に散されて別れ別れになりをる一の民ありその律法は一切の民と異り また王の法律を守らずこの故にこれを容しおくは王の益にあらず九 王もしこれを善としたまはば願くは彼らを滅ぼせと書くだしたまへ さらば我王の事をつかさどる者等の手に銀一萬タラントを秤り交して王の府庫に入しめん一〇 王すなは

ち指環をその手より取はづしアガグ人ハンメダタの子ハマンすなはちユダヤ人の敵たる者に交し一〇 しかしてハマンに言けるはその銀はなんぢに與ふ その民もまた汝にあたふれば汝に善と見ゆるごとく爲よ一一 ここにおいて正　月の十三日に王の書記官を召あつめ王に屬する州牧各州の方伯およびもろもろの民の牧伯にハマンが命ぜんとする所をことごとく書しるさしむ即ちもろもろの州におくるものは其文字をもちひ もろもろの民におくるものはその言語をもちひ おのおのアハシユエロス王の名をもてこれを書き王の指環をもてこれに印したり一二 しかして驛　卒をもて書を王の諸州におくり十二月すなはちアダルの月の十三日において一日の内に一切のユダヤ人を若き者老たる者小兒婦人の差別なくことごとく滅ぼし殺し絶しかつその所有物を奪ふべしと諭しぬ一三 この詔旨を諸州に傳へてかの日のために準備をなさしめんとてその書る物の寫本を一切の民に開きて示せり一四　驛　卒王の命によりて急ぎて出ゆきぬ この詔書はシユシヤンの城に於て出されたり かくて王とハマンは坐して酒飮ゐたりしがシユシヤンの邑は惑ひわづらへり一五

第四章一 モルデカイ凡てこの爲れたる事を知しかばモルデカイ衣服を裂き麻布を纒ひ灰をかぶり邑の中に行て大に哭き痛く號び二 王の門の前までも斯して來れり 其は麻布をまとふては王の門の内に入ること能はざればなり三 すべて王の命とその詔書と到れる諸州にてはユダヤ人の中におほいなる哀みあり斷食哭泣號呼おこれり また麻布をまとふて灰の上に坐する者おほかりき四 ここにエステルの侍女およびその侍從等きたりてこれを告ければ后はなはだしく憂ひ衣服をおくり之をモルデカイにきせてその麻布を脱しめんとしたりしがうけざりき五 ここをもてエステルは王の侍從の一人すなはち王の命じて己に侍らしむるハタクといふ者を召しモルデカイの許に往きてその何事なるか何故なるかを知きたれと命ぜり六 ハタクいでて王の門の前なる邑の廣場にをるモルデカイにいたりしに七 モルデカイおのれの遇たるところを具にこれに語りかつハマンがユダヤ人を滅ぼす事のために王の府庫に秤りいれんと約したる銀の額を告げ八 またその彼等をほろぼさしむるためにシユシヤンにおいて書て與へられし詔書の寫本を彼にわたし之をエステルに見せかつ解あかし また彼に王の許にゆきてその民のためにこれに矜恤を請ひその前に願ふことを爲べしと言つたへよと言り九 ハタクかへり來りてモルデカイの言詞をエステルに告ければ一〇 エステル、ハタクに命じモルデカイに言をつたへしむ云く一一 王の諸臣および王の諸州の民みな知る男にもあれ女にもあれ凡て召れずして内庭に入て王にいたる者は必ず殺さるべき一の法律あり されど王これに金圭を伸れば生るを得べし かくて我此三十日は王にいたるべき召をかうむらざるなり一二 エステルの言をモルデカイに告げけるに一三 モルデカイ命じてエステルに答へしめて曰く 汝王の家にあれば一切のユダヤ人の如くならずして

免かるべしと心に思ふなかれ 一四 なんぢ若この時にあたりて默して言ずば他の處よりして助援と拯救ユダヤ人に興らん されど汝どなんぢの父の家は亡ぶべし 汝が后の位を得たるは此のごとき時のためなりしやも知るべからず 一五 エステルまたモルデカイに答へしめて曰く 一六 なんぢ往きシユシヤンにをるユダヤ人をことごとく集めてわがために斷食せよ 三日の間夜晝とも食ふことも飮むこともするなかれ 我とわが侍女等もおなじく斷食せん しかして我法律にそむく事なれども王にいたらん 我もし死べくば死べし 一七 ここにおいてモルデカイ往てエステルが凡ておのれに命じたるごとく行なへり

第五章 一 第三日にエステル后の服を着王の家の内庭にいり王の家にむかひて立つ 王は王宮の玉座に坐して王宮の戸口にむかひをりしが 二 王后エステルが庭にたちをるを見てこれに恩をくはへ其手にある金圭をエステルの方に伸しければエステルすすみよりてその圭の頭にさはれり 三 王かれに言けるは后エステルなんぢ何をもとむるや なんぢの願意は何なるや 國の半分にいたるとも汝にあたふべし 四 エステルいひけるは王もし善としたまはば願くは今日わが王のために設けたる酒宴に王とハマンと臨みたまへ 五 ここに於て王ハマンを急がしめてエステルの言ごとくならしめよと命じ 王とハマンやがてエステルが設けたる酒宴に臨めり 六 酒宴の時王またエステルに言けるは汝の所求は何なるや かならずゆるさるべし なんぢの願意は何なるや 國の半分にいたるとも成就らるべし 七 エステル言けるは我が所求わが願意は是なり 八 われもし王の目の前に恩を得 王もしわが所求をゆるしわが願意を成就しむることを善としたまはば 願くは王とハマンまたわが設けんとする酒宴に臨みたまへ われ明日王の宣まへる言にしたがはん 九 かくてハマンはその日よろこび心たのしみて出きたりけるが ハマン、モルデカイが王の門に居て己にむかひて起もあがらず身動もせざるを見しかば痛くモルデカイを怒れり 一〇 されどもハマン耐忍びて家にかへりその朋友等および妻ゼレシをまねき來らしめ 一一 而してハマンその富の榮耀とその子の衆多ことと凡て王の己を貴とびし事また己をたかくして王の牧伯および臣僕の上にあらしむることを之に語れり 一二 しかしてハマンまた言けらく 后エステル酒宴を設けたりしが我のほかは何人をも王とともに之に臨ましめず 明日もまた我は王とともに后に招かれをるなり 一三 然れどユダヤ人モルデカイが王の門に坐しをるを見る間は是らの事も快樂からず 一四 時にその妻ゼレシとその一切の朋友かれに言けるは 請ふ高五十キユビトの木を立しめ明日の朝モルデカイをその上に懸んことを王に奏せ 而して王とともに樂しみてその酒宴におもむけと ハマンこの事を善としてその木を立しめたり

第六章 一 その夜王ねむること能はざりければ命じて日々の事を記せる記録の書を持きたらしめ王の前にこれを讀しめけるに 二 モルデカイ曾て王の侍従の二人戸を守る者なるビグタンとテレ

シがアハシユエロス王を殺さんと謀れるを告たりと記せるに遇ふ三王すなはち言けるは之がために何の榮譽と爵位をモルデカイにあたへしや 王に事ふる臣僕等こたへて何をも彼にあたへしこと無しといへり四ここにおいて王誰ぞ庭にあるやと問ふ この時ハマンは己がモルデカイのために設けたる木にモルデカイを懸ることを王に奏せんとして已に王の家の外庭に來りて居る五王の臣僕等王につげてハマン庭に立をると言ければ王かれをして入來らしめよと言ふ六ハマンやがて入きたりしに王かれにいひけるは王の尊とばんと欲する人には如何になさば善らんかとハマン心におもひけるは王の尊ばんとずる者は我にあらずして誰ぞやと七ハマンすなはち王にいひけるは王の尊ばんと欲する人のためには八王の着たまへる衣服を携さへ來らしめかつ王の乘たまへる馬即ちその頭に王の冠冕を戴ける馬をひき來らしめ九これを王の最も貴とき一人の牧伯の手にわたし王の尊ばんとする人に其衣服を衣せしめこれを馬にのせて邑の街衢をみちびき通り 王の尊とばんと欲する人には是のごとくなすべしと呼はらしむべし一〇王ハマンに言けるは急ぎなんぢが言しごとくその衣服と馬とを取り王の門に坐するユダヤ人モルデカイに斯なせよ なんぢが言しところを一も缺こと無らしめよ一一ここにおいてハマン衣服と馬とを取りモルデカイにその衣服を着せ彼をして邑の街衢を乘とほらしめその前に呼はりて云ふ王の尊ばんと欲する人には是のごとくなすべしと一二かくてモルデカイは王の門にかへりたりしがハマンは愁へなやみ首をおほふておのれの家にはしりゆき一三しかしてハマンおのが遇る事をことごとくその妻ゼレシとその朋友等に告げるにその智者等およびその妻ゼレシかれに言けるは 彼のモルデカイすなはちなんぢがその前に敗れはじめたる者もしユダヤ人ならば汝これに勝ことを得じ必らずその前にやぶれんと一四かれら尚ハマンとものいひをる間に王の侍從きたりてハマンをうながしエステルが設けたる酒宴にのぞましむ

第七章一王またハマンとともに后エステルと酒宴せんとて來れり二この第二の酒宴の日に王またエステルに言けるは后エステルよなんぢのもとめは何なるや かならず許さるべし 汝のねがひは何なるや國の半分にいたるとも成就らるべし三后エステルこたへて言けるは王よ我もし王の御目の前に恩を得王もし善と見たまはばわがもとめにしたがりこわが生命をわれに賜へまたわが願にしたがひてわが民を我に賜へ四我とわが民は賣れて滅ぼされ殺され絶されんとす 我らもし奴婢に賣れたるならんには我默してはべらん 敵人は王の損害を償なふ事能はざるなり五アハシユエロス王后エステルにこたへて言けるは之をなさんと心にたくめる者は誰また何處にをるや六エステルいひけるはその敵その仇人は即ちこの惡きハマンなりと 是によりてハマンは王と后の前にありて懼れたり七王怒り酒宴の席をたちて宮殿の園に往きければハマンたちあがりて后エステルに

生命を乞り其はかれ王のおのれに禍災をなさんと決めしを見たればなり八 王宮殿の園より歸りて酒宴の場にいたりしにエステルのをる牀榻の上にハマン俯伏ゐたれば王いひけるは彼はまた家の内にてわが前に后を辱しめんとするかと此ことば王の口より出るや人々ハマンの面をおほへり九 時に王の前にある一人の侍從ハルボナいひけるは王の爲に善き事を言たりしかのモルデカイを懸んとてハマンが作りたる五十キユビトの木ハマンの家に立をるなりと王いひけるは彼をその上に懸よ一〇 人々ハマンを其モルデカイをかけんとて設けし木の上に懸たり王の震怒つひに解く

第八章一 その日アハシユエロス王ユダヤ人の敵ハマンの家を后エステルに賜ふ モダカイもまた王の前に來れり是はエステル彼が己と何なる係りなるかを告たればなり二 王ハマンより取かへせし己の指環をはづしてモルデカイに與ふ 而してエステル、モルデカイをしてハマンの家をつかさどらしむ三 エステルふたたび王の前に奏してその足下にひれふしアガグ人ハマンがユダヤ人を害せんと謀りしその謀計を除かんことを涙ながらに乞求めたり四 王エステルにむかひて金圭を伸ければエステル起て王の前に立ち五 言けるは王もし之を善としたまひ我もし王の前に恩を得この事もし王に正と見え我もし御目にかなひたらばアガグ人ハンメダタの子ハマンが王の諸州にあるユダヤ人をほろぼさんと謀りて書おくりたる書をとりけすべき旨を書くだしたまへ六 われ豈わが民に臨まんとする禍害を見るに忍びんや豈わが宗族のほろぶるを見るにしのびんや七 アハシユエロス王后エステルとユダヤ人モルデカイにいひけるはハマン、ユダヤ人を殺さんとしたれば我すでにハマンの家をエステルに與へまたハマンを木にかけたり八 なんぢらも亦おのれの好むごとく王の名をもて書をつくり王の指環をもてこれに印してユダヤ人につたへよ王の名をもて書き王の指環をもて印したる書は誰もとりけすこと能はざればなり九 ここをもてその時また王の書記官を召あつむ是三月すなはちシワンの月の二十三日なりきしかして印度よりエテオピアまでの百二十七州のユダヤ人州牧諸州の方伯牧伯等にモルデカイが命ぜんとするところを盡く書しるさしむ 即ちもろもろの州におくるものはその文字をもちひ諸の民におくるものはその言語をもちひて書おくりユダヤ人におくるものはその文字と言語をもちふ一〇 かれアハシユエロス王の名をもてこれをかき王の指環をもてこれに印し驛卒をして御厩にてそだてたる逸足の御用馬にのりてその書をおくりつたへしむ一一 その中に云ふ王すべての邑にあるユダヤ人に許す彼らあひ集まり立ておのれの生命を保護しおのれを襲ふ諸國諸州の一切の兵民をその妻子もろともにほろぼし殺し絶し且その所有物を奪ふべし一二 アハシユエロス王の諸州において十二月すなはちアダルの月の十三日一日の内かくのごとくするを許さる一三 この詔旨を諸州につたへんがためまたユダヤ人

をしてかの日のために準備してその敵に仇をかへさしめんがためにその書る物の寫本を一切の民に開きて示せり一四 驛卒逸足の御用馬にのり王の命によりて急がせられせきたてられて出ゆけりこの詔書はシユシヤンの城において出されたり一五 かくてモルデカイは藍と白の朝服を着大なる金の冠を戴き紫色の細布の外衣をまとひて王の前よりいできたれりシユシヤンの邑中聲をあげて喜びぬ一六 ユダヤ人には光輝あり喜悦あり快樂あり尊榮ありき一七 いづれの州にても何の邑にても凡て王の命令と詔書のいたるところにてはユダヤ人よろこび樂しみ酒宴をひらきて此日を吉日となせりしかして國の民おほくユダヤ人となれり是はユダヤ人を畏るる心おこりたればなり

第九章一 十二月すなはちアダルの月の十三日王の命令と詔書のおこなはるべき時いよいよ近づける時すなはちユダヤ人の敵ユダヤ人を打伏んとまちかまへたりしに却てユダヤ人おのれを惡む者を打ふする事となりける其日に二 ユダヤ人アハシユエロス王の各州にある己の邑々に相あつまりおのれを害せんとする者どもを殺さんとせり誰も彼らに敵ることを得る者なかりき其は一切の民ユダヤ人を畏れたればなり三 諸州の牧伯州牧方伯など凡て王の事を辨理ふ者は皆ユダヤ人をたすけたり是モルデカイを畏るるによりてたり四 モルデカイは王の家にて大なる者となりその名各州にきこえわたれり斯その人モルデカイはますます大になりゆきぬ五 ユダヤ人すなはち刀刃をもてその一切の敵を撃て殺し滅ぼしおのれを惡む者を意のままに爲したり六 ユダヤ人またシユシヤンの城においても五百人を殺しほろぼせり七 パルシヤンダタ、ダルポン、アスパタ八 ポラタ、アダリヤ、アリダタ九 パルマシタ、アリサイ、アリダイ、ワエザタ一〇 これらの者すなはちハンメダタの子ユダヤ人の敵たるハマンの十人の子をも彼ら殺せりされどその所有物には手をかけざりき一一 シユシヤンの城の内にて殺されし者の數をその日王にまうしあげければ一二 王きさきエステルにいひけるはユダヤ人シユシヤンの城の内にて五百人を殺しまたハマンの十人の子をころせりその餘の諸州においては幾何なりしぞや　汝また何か求むるところあるやかならず許さるべし尚何かねがふところあるや必らず成就らるべし一三 エステルいひけるは王もし之を善としたまはば願くはシユシヤンにあるユダヤ人に允して明日も今日の詔旨のごとくなさしめ且ハマンの十人の子を木に懸しめたまへ一四 王かく爲せと命じシユシヤンにおいて詔旨を出せりマンの十人の子は木に懸らる一五 アダルの月の十四日にシユシヤンのユダヤ人また集まりシユシヤンの内にて三百人をころせり然れどもその所有物には手をかけざりき一六 王の諸州にあるその餘のユダヤ人もまた相あつまり立ておのれの生命を保護しその敵に勝て安んじおのれを惡む者七萬五千人をころせり然れどもその所有には手をかけざりき一七 アダルの月の十三日にこの事をおこなひ十四日にやすみてその日に酒宴をなして

喜こべり一八されどシユシヤンにをるユダヤ人はその十三日と十四日とにあひ集まり十五日にやすみてその日に酒宴をなして喜こべり一九これによりて村々のユダヤ人すなはち石垣なき邑々にすめる者はアダルの月の十四日をもて喜樂の日酒宴の日吉日となして互に物をやりとりす二〇モルデカイこれらの事を書しるしてアハシユエロス王の諸州にをるユダヤ人に遠きにも近きにも書をおくり二一アダルの月の十四日と十五日を年々にいはふことを命じ二二この兩の日にユダヤ人その敵に勝て休みこの月は彼のために憂愁より喜樂にかはり悲哀より吉日にかはりたれば是らの日に酒宴をなして喜びたがひに物をやりとりし貧しき者に施與をなすべしと諭しぬ二三ここをもてユダヤ人はその已にはじめたるごとくモルデカイがかれらに書おくりしごとく行なひつづけたり二四アガグ人ハンメダタの子ハマンすなはちすべてのユダヤ人の敵たる者ユダヤ人を滅ぼさんと謀りプルすなはち籤を投てこれを滅ぼし絶さんとしたりしが二五その事王の前に明かになりし時王書をおくりて命じハマンがユダヤ人を害せんとはかりしその惡き謀計をしてハマンのかうべに歸らしめ彼とその子等を木に懸しめたり二六このゆゑに此兩の日をそのプルの名にしたがひてプリムとなづけたり斯りしかばこの書のすべての詞によりこの事につきて見たるところ己の遇たるところに依て二七ユダヤ人あひ定め年々その書るところにしたがひその定めたる時にしたがひてこの兩の日をまもり己とおのれの子孫および凡て已につらなる者これを行ひつづけて廢すること無く二八この兩の日をもて代々家々州々邑々において必ず記念てまもるべき者となしこれらのプリムの日をしてユダヤ人の中に廢せらるること無らしめまたこの記念をしてその子孫の中に絶ること無らしむ二九かくてアビハイルの女なる后エステルとユダヤ人モルデカイおほいなる力をもて此プリムの第二の書を書おくりてこれを堅うす三〇すなはちモルデカイ、アハシユエロスの國の百二十七州にある一切のユダヤ人に平和と眞實の言語をもて書をおくり三一斷食と悲哀のことにつきてプリムのこれらの日を堅うしてその定めたる時を守らしむすなはちユダヤ人モルデカイと后エステルが曾てかれらに命じたるごとくまたユダヤ人等が曾てみづから己のためおよびおのれの子孫のために定めたるがごとし三二エステルの語プリムにかかはる是等の事をかたうせり是は書にしるされたり

第一〇章

一アハシユエロス王國土および海の島々に貢をたてまつらしむ二アハシユエロス王が權勢と能力をもて爲たる一切の事業および彼がモルデカイを高くして大いなる者とならしめたる事の委き話はメデアとペルシヤの列王の日誌の書に記さるるにあらずや三ユダヤ人モルデカイはアハシユエロス王に次ぐ者となりユダヤ人の中にありて大なる者にしてその衆多の兄弟によろこばれたり彼はその民の福祉をもとめその一切の宗族に平和の言をのべたりき

ヨブ記

第一章 一ウヅの地にヨブと名くる人あり 其人と爲完全かつ正くして神を畏れ惡に遠ざかる 二その生る者は男の子七人女の子三人 三その所有物は羊七千 駱駝三千 牛五百軛 牝驢馬五百 僕も夥多しくあり 此人は東の人の中にて最も大なる者なり 四その子等おのおの己の家にて己の日に宴筵を設くる事を爲し その三人の姉妹をも招きて與に食飲せしむ 五その宴筵の日はつる毎にヨブかならず彼らを召よせて潔む 即ち朝はやく興き彼らの數にしたがひて燔祭を獻ぐ 是はヨブ我子ら罪を犯し心を神を忘れたらんも知べからずと謂てなり ヨブの爲ところ常に是のごとし 六或日神の子等きたりてヱホバの前に立つ サタンも來りてその中にあり 七ヱホバ、サタンに言たまひけるは汝何處より來りしや サタン、ヱホバに應へて言けるは地を行めぐり此彼經あるきて來れり 八ヱホバ、サタンに言たまひけるは汝心をもちひてわが僕ヨブを觀しや 彼のごとく完全かつ正くして神を畏れ惡に遠ざかる人世にあらざるなり 九サタン、ヱホバに應へて言けるはヨブあにもとむることなくして神を畏れんや 一〇汝彼とその家およびその一切の所有物の周圍に藩屏を設けたまふにあらずや 汝かれが手に爲ところを盡く成就せしむるがゆゑにその所有物地に遍ねし 一一然ど汝の手を伸て彼の一切の所有物を撃たまへ 然ば必ず汝の面にむかひて汝を詛はん 一二ヱホバ、サタンに言たまひけるは視よ彼の一切の所有物を汝の手に任す 唯かれの身に汝の手をつくる勿れ サタンすなはちヱホバの前よりいでゆけり 一三或日ヨブの子 女等その第一の兄の家にて物食ひ酒飲ゐたる時 一四使者ヨブの許に來りて言ふ 牛耕しをり牝驢馬その傍に草食をりしに 一五シバ人襲ひて之を奪ひ刃をもて少者を打殺せり 我ただ一人のがれて汝に告んとて來れりと 一六彼なほ語ひをる中に又一人きたりて言ふ 神の火天より降りて羊および少者を焚て滅ぼせり 我ただ一人のがれて汝に告んとて來れりと 一七彼なほ語ひをる中に又一人きたりて言ふ カルデヤ人三隊に分れ來て駱駝を襲ひてこれを奪ひ刃をもて少者を打殺せり我ただ一人のがれて汝に告んとて來れりと 一八彼なほ語ひをる中に又一人來りて言ふ汝の子 女等その第一の兄の家にて物食ひ酒飲をりしに 一九荒野の方より大風ふき來て家の四隅を撃ければ夫の若き人々の上に潰れおちて皆しねり 我これを汝に告んとて只一人のがれ來れりと 二〇是においてヨブ起あがり外衣を裂き髮を斬り地に伏して拜し 二一言ふ 我裸にて母の胎を出たり 又裸にて彼處に歸らん ヱホバ與へヱホバ取たまふなり ヱホバの御名は讚べきかな 二二この事においてヨブは全く罪を犯さず神にむかひて愚なることを言ざりき

第二章 一或日神の子等きたりてヱホバの前に立つ サタンも來りその中にありてヱホバの前に立つ 二ヱホバ、サタンに言たまひけるは汝何處より來りしや サタン、ヱホバに應へて言けるは地

を行めぐり此彼經あるきて來れり三ヱホバ、サタンに言たまひけるは汝 心をもちひて我僕ヨブを見しや 彼のごとく完全かつ正くして神を畏れ惡に遠ざかる人世にあらざるなり 汝われを勸めて故なきに彼を打惱さしめしかど彼なほ己を完うして自ら堅くす四サタン、ヱホバに應へて言けるは皮をもて皮に換るなれば人はその一切の所有物をもて己の生命に換ふべし五然ど今なんぢの手を伸て彼の骨と肉とを撃たまへ 然ば必らず汝の面にむかひて汝を詛はん六ヱホバ、サタンに言たまひけるは彼を汝の手に任す 只かれの生命を害ふ勿れと七サタンやがてヱホバの前よりいでゆきヨブを撃てその足の跖より頂までに惡き腫物を生ぜしむ八ヨブ土瓦の碎片を取り其をもて身を掻き灰の中に坐りぬ九時にその妻かれに言けるは汝は尚も己を完たうして自ら堅くするや 神を詛ひて死るに如ずと一〇然るに彼はこれに言ふ汝の言ところは愚なる婦の言ところに似たり 我ら神より福祉を受るなれば災禍をも亦受ざるを得んやと 此事においてはヨブまつたくその唇をもて罪を犯さざりき一一 時にヨブの三人の友この一切の災禍の彼に臨めるを聞き各々おのれの處よりして來れり 即ちテマン人エリパズ、シユヒ人ビルダデおよびマアナ人ゾパル是なり 彼らヨブを弔りかつ慰めんとて互に約してきたりしが一二目を擧て遙に觀しに其ヨブなるを見識がたき程なりければ齊く聲を擧て泣き 各おのれの外衣を裂き天にむかひて塵を撒て己の頭の上にちらし一三 乃ち七日七夜かれと偕に地に坐しゐて 一言も彼に言かくる者なかりき 彼が苦惱の甚だ大なるを見たればなり

第三章一 斯て後ヨブ口を啓きて自己の日を詛へり二 ヨブすなはち言詞を出して云く三 我が生れし日亡びうせよ 男子胎にやどれりと言し夜も亦然あれ四 その日は暗くなれ 神上よりこれを顧みたまはざれ 光これを照す勿れ五 暗闇および死蔭これを取もどせ 雲これが上をおほえ 日を暗くする者これを懼しめよ六 その夜は黑暗の執ふる所となれ 年の日の中に加はらざれ 月の數に入ざれ七 その夜は孕むこと有ざれ 歡喜の聲その中に興らざれ八 日を詛ふ者レビヤタンを激發すに巧なる者これを詛へ九 その夜の晨星は暗かれ その夜には光明を望むも得ざらしめ 又東雲の眼蓋を見ざらしめよ一〇 是は我母の胎の戸を闔ずまた我目に憂を見ること無らしめざりしによる一一 何とて我は胎より死て出ざりしや 何とて胎より出し時に氣息たえざりしや一二 如何なれば膝ありてわれを接しや 如何なれば乳房ありてわれを養ひしや一三 否らずば今は我偃て安んじかつ眠らん 然ばこの身やすらひをり一四 かの荒墟を自己のために築きたりし世の君等臣等と偕にあり一五 かの黃金を有ち白銀を家に充したりし牧伯等と偕にあらん一六 又人しれず墮る胎兒のごとくにして世に出ずまた光を見ざる赤子のごとくならん一七 彼處にては惡き者 虐遇を息め倦憊たる者安息を得一八 彼處にては俘囚人みな共に安然に居りて驅使者の聲を聞ず一九 小き者も大なる者も同じく彼處にあ

り僕も主の手を離る二〇如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ心苦しむ者に生命をたまひしや二一斯る者は死を望むなれどもきたらず これをもとむるは藏れたる寶を掘るよりも甚だし二二もし墳墓を尋ねて獲ば大に喜こび樂しむなり二三その道かくれ神に取籠られをる人に如何なれば光明を賜ふや二四わが歎息はわが食物に代り我呻吟は水の流れそそぐに似たり二五我が戰慄き懼れし者我に臨み我が怖懼れたる者この身に及べり二六我は安然ならず穩ならず安息を得ず唯艱難のみきたる

第四章一時にテマン人エリパズ答へて曰く二人もし汝にむかひて言詞を出さば汝これを厭ふや 然ながら誰か言で忍ぶことを得んや三さきに汝は衆多の人を誨へ諭せり手の垂たる者をばこれを強くし四つまづく者をば言をもて扶けおこし膝の弱りたる者を強くせり五然るに今この事汝に臨めば汝悶え この事なんぢに加はれば汝おぢまどふ六汝は神を畏こめり 是なんぢの依賴む所ならずや 汝はその道を全うせり 是なんぢの望ならずや七請ふ想ひ見よ 誰か罪なくして亡びし者あらん 義者の絶れし事いづくに在や八我の觀る所によれば不義を耕へし惡を播く者はその穫る所も亦是のごとし九みな神の氣吹によりて滅びその鼻の息によりて消うす一〇獅子の吼 猛き獅子の聲ともに息み少き獅子の牙折れ一一大獅子獲物なくして亡び小獅子散失す一二前に言の密に我に臨めるありて我その細聲を耳に聞得たり一三即ち人の熟睡する頃我夜の異象によりて想ひ煩ひをりける時一四身に恐懼をもよほして戰慄き骨節ことごとく振ふ一五時に靈ありて我面の前を過ければ我は身の毛よだちたり一六その物立とまりしが我はその状を見わかつことえざりき唯一の物の象わが目の前にあり 時に我しづかなる聲を聞けり云く一七人いかで神より正義からんや 人いかでその造主より潔からんや一八彼はその僕をさへに恃みたまはず 其使者をも足ぬ者と見做たまふ一九況んや土の家に住をりて塵を基とし蜉蝣のごとく亡ぶる者をや二〇是は朝より夕までの間に亡びかへりみる者もなくして永く失逝る二一その魂の緒あに絶ざらんや皆悟ること無して死うす

第五章一請ふなんぢ籲びて看よ 誰か汝に應ふる者ありや 聖者の中にて誰に汝むかはんとするや二夫愚なる者は憤恨のために身を殺し 癡き者は嫉媢のために己を死しむ三我みづから愚なる者のその根を張るを見たりしがすみやかにその家を詛へり四その子等は助援を獲ることなく 門にて惱まさる 之を救ふ者なし五その穡とれる物は饑たる人これを食ひ 荊棘の籬の中にありてもなほ之を奪ひいだし 羂をその所有物にむかひて口を張る六災禍は塵より起らず 艱難は土より出ず七人の生れて艱難をうくるは火の子の上に飛がごとし八もし我ならんには我は必らず神に告求め 我事を神に任せん九神は大にして測りがたき事を行ひたまふ 其不思議なる事を爲たまふこと數しれず一〇雨を地の上に降し 水を野に遣り一一卑き者を高く擧げ 憂ふる者を引興

して幸福ならしめたまふ一二 神は狡しき者の謀計を敗り之をして何事をもその手に成就ること能はざらしめ一三 慧き者をその自分の詭計によりて執へ 邪なる者の謀計をして敗れしむ一四 彼らは晝も暗黑に遇ひ 卓午にも夜の如くに摸り惑はん一五 神は惱める者を救ひてかれらが口の劍を免かれしめ 強き者の手を免かれしめたまふ一六 是をもて弱き者望あり 惡き者口を閉づ一七 神の懲したまふ人は幸福なり 然ば汝 全能者の儆責を輕んずる勿れ一八 神は傷け又裹み 撃ていため又その手をもて善醫したまふ一九 彼はなんぢを六の艱難の中にて救ひたまふ 七の中にても災禍なんぢにのぞまじ二〇 饑饉の時にはなんぢを救ひて死を免れしめ 戰爭の時には劍の手を免れしめたまふ二一 汝は舌にて鞭たるる時にも隱るることを得 壞滅の來る時にも懼るること有じ二二 汝は壞滅と饑饉を笑ひ地の獸をも懼るること無るべし二三 田野の石なんぢと相結び野の獸なんぢと和がん二四 汝はおのが幕屋の安然なるを知ん 汝の住處を見まはるに缺たる者なからん二五 汝また汝の子等の多くなり 汝の裔の地の草の如くになるを知ん二六 汝は遐齡におよびて墓にいらん 宛然麥束を時にいたりて運びあぐるごとくなるべし二七 視よ我らが尋ね明めし所かくのごとし 汝これを聽て自ら知れよ

第六章一 ヨブ應へて曰く二 願はくは我憤恨の善く權られ 我懊惱の之とむかひて天秤に懸られんことを三 然すれば是は海の沙よりも重からん 斯ればこそ我言躁妄なりけれ四 それ全能者の箭わが身にいりわが魂神その毒を飲り 神の畏怖我を襲ひ攻む五 野驢馬あに青草あるに鳴んや 牛あに食物あるに吽らんや六 淡き物あに鹽なくして食はれんや 蛋の白あに味あらんや七 わが心の觸ることを嫌ふ物是は我が厭ふ所の食物のごとし八 願はくは我求むる所を得んことを願はくは神わが希ふ所の物を我に賜はらんことを九 願はくは神われを滅ぼすを善とし 御手を伸て我を絶たまはんことを一〇 然るとも我は尚みづから慰むる所あり 烈しき苦痛の中にありて喜ばん 是は我聖者の言に悖りしことなければなり一一 我何の氣力ありてか尚俟ん 我の終いかなれば我なほ耐へ忍ばんや一二 わが氣力あに石の氣力のごとくならんや 我肉あに銅のごとくならんや一三 わが助われの中に無にあらずや 救拯我より逐はなされしにあらずや一四 憂患にしづむ者はその友これを憐れむべし 然らずば全能者を畏るることを廢ん一五 わが兄弟はわが望を充さざること溪川のごとく 溪川の流のごとくに過さる一六 是は氷のために黑くなり 雪その中に藏るれども一七 温暖になる時は消ゆき熱くなるに及てはその處に絶はつ一八 隊旅客身をめぐらして去り空曠處にいたりて亡ぶ一九 テマの隊旅客これを望みシバの旅客これを慕ふ二〇 彼等これを望みしによりて愧恥を取り 彼處に至りてその面を赧くす二一 かく汝等も今は虛しき者なり 汝らは怖ろしき事を見れば則ち懼る二二 我あに汝等我に予へよと言しこと有んや 汝らの所有物の中より物を取て我ために饋れと言しこと有んや二三 また敵人の

手より我を救ひ出せと言しことあらんや 虐ぐる者の手より我を贖へと言しことあらんや二四 我を教へよ 然らば我默せん 請ふ我の過てる所を知せよ二五 正しき言は如何に力あるものぞ 然ながら汝らの規諫る所は何の規諫とならんや二六 汝らは言を規正んと想ふや 望の絶たる者の語る所は風のごときなり二七 汝らは孤子のために籤を掣き 汝らの友をも商貨にするならん二八 今ねがはくは我に向へ 我は汝らの面の前に僞はらず二九 請ふ再びせよ 不義あらしむる勿れ 請ふ再びせよ 此事においては我正義し三〇 我舌に不義あらんや 我口惡き物を辨へざらんや

第七章一 それ人の世にあるは戰闘にあるがごとくならずや 又其日は傭人の日のごとくなるにあらずや二 奴僕の暮を冀がふが如く傭人のその價を望むがごとく三 我は苦しき月を得させられ憂はしき夜をあたへらる四 我臥ば乃はち言ふ何時夜あけて我おきいでんかと 曙まで頻に輾轉ぶ五 わが肉は蟲と土塊とを衣服となし 我皮は愈てまた腐る六 わが日は機の梭よりも迅速なり 我望む所なくし之を送る七 想ひ見よ わが生命が氣息なる而已 我目は再び福祉を見ること有じ八 我を見し者の眼かさねて我を見ざらん 汝目を我にむくるも我は已に在ざるべし九 雲の消て逝がごとく陰府に下れる者は重ねて上りきたらじ一〇 彼は再びその家に歸らず 彼の郷里も最早かれを認めじ一一 然ば我はわが口を禁めず 我心の痛によりて語ひ わが神魂の苦しきによりて歎かん一二 我あに海ならんや 鰐ならんや 汝なにとて我を守らせおきたまふぞ一三 わが牀われを慰め わが寢床わが愁を解んと思ひをる時に一四 汝夢をもて我を驚かし 異象をもて我を懼れしめたまふ一五 是をもて我心は氣息の閉んことを願ひ我この骨よりも死を冀がふ一六 われ生命を厭ふ 我は永く生るをことを願はず 我を捨おきたまへ 我日は氣のごときなり一七 人を如何なる者として汝これを大にし 之を心に留一八 朝ごとに之を看そなはし時わかず之を試みたまふや一九 何時まで汝われに目を離さず 我が津を咽む間も我を捨おきたまはざるや二〇 人を鑒みたまふ者よ 我罪を犯したりとて汝に何をか爲ん 何ぞ我を汝の的となして我にこの身を厭はしめたまふや二一 汝なんぞ我の愆を赦さず 我罪を除きたまはざるや 我いま土の中に睡らん 汝我を尋ねたまふとも我は在ざるべし

第八章一 時にシユヒ人ビルダデ答へて曰く二 何時まで汝かかる事を言や 何時まで汝の口の言語を大風のごとくにするや三 神あに審判を曲たまはんや 全能者あに公義を曲たまはんや四 汝の子等かれに罪を獲たるにや之をその愆の手に付したまへり五 汝もし神に求め 全能者に祈り六 清くかつ正しうしてあらば必ず今汝を顧み汝の義き家を榮えしめたまはん七 然らば汝の始は微小くあるとも汝の終は甚だ大ならん八 請ふ汝過にし代の人に問へ 彼らの父祖の尋究めしところの事を學べ九（我らは昨日より有しのみにて何をも知ず 我らが世にある日は影のごとし）一〇 彼等なんぢを教へ汝を諭し 言をその心より出さざらんや一一 葦

あに泥なくして長んや 荻あに水なくしてそだたんや一二 是はその青くして未だ刈ざる時にも他の一切の草よりは早く槁る一三 神を忘るる者の道は凡て是のごとく 悖る者の望は空しくなる一四 その恃む所は絶れ その倚ところは蜘蛛網のごとし一五 その家に倚かからんとすれば家立ず 之に堅くとりすがるも保たじ一六 彼日の前に青緑を呈はし その枝を園に蔓延らせ一七 その根を石堆に盤みて石の屋を眺むれども一八 若その處より取のぞかれなばその處これを認めずして我は汝を見たる事なしと言ん一九 視よその道の喜樂是のごとし 而してまた他の者地より生いでん二〇 それ神は完全人を棄たまはず また惡き者の手を執りたまはず二一 遂に哂笑をもて汝の口に充し 歡喜を汝の唇に置たまはん二二 汝を惡む者は羞恥を着せられ 惡き者の住所は無なるべし

第九章一 ヨブこたへて言けるは二 我まことに其事の然るを知り 人いかでか神の前に義かるべけん三 よし人は神と辨爭はんとするとも千の一も答ふること能はざるべし四 神は心慧く力強くましますなり 誰か神に逆ひてその身安からんや五 彼山を移したまふに山しらず 彼震怒をもて之を翻倒したまふ六 彼地を震ひてその所を離れしめたまへばその柱ゆるぐ七 日に命じたまへば日いでず 又星辰を封じたまふ八 唯かれ獨天を張り海の濤を覆たまふ九 また北斗參宿昴宿および南方の密室を造りたまふ一〇 大なる事を行ひたまふこと測られず奇しき業を爲たまふこと數しれず一一 視よ彼わが前を過たまふ 然るに我これを見ず彼すすみゆき賜ふ然るに我之を曉ず一二 彼奪ひ去賜ふ 誰か能之を沮まん 誰か之に汝何を爲やと言ことを得爲ん一三 神其震怒を息賜はずラハブを助る者等之が下に屈む一四 然ば我爭か彼に回答を爲ことを得ん 爭われ言を選びて彼と論ふ事をえんや一五 假令われ義かるとも彼に回答をせじ 彼は我を審判く者なれば我彼に哀き求ん一六 假令我彼を呼て彼われに答たまふともわが言を聽いれ賜ひしとは我信ぜざるなり一七 彼は大風をもて我を擊碎き故なくして我に衆多の傷を負せ一八 我に息をつかさしめず 苦き事をもて我身に充せ賜ふ一九 強き者の力量を言んか 視よ此にあり 審判の事ならんか 誰か我を喚出すことを得爲ん二〇 假令われ義かるとも我口われを惡しと爲ん 假令われ完全かるとも尚われを罪ありとせん二一 我は全し 然ども我はわが心を知ず 我生命を賤む二二 皆同一なり 故に我は言ふ神は完全者と惡者とを等しく滅したまふと二三 災禍の俄然に人を誅す如き事あれば彼は辜なき者の苦痛を笑ひ見たまふ二四 世は惡き者の手に交されてあり 彼またその裁判人の面を蔽ひたまふ 若彼ならずば是誰の行爲なるや二五 わが日は驛使よりも迅く 徒に過さりて福祉を見ず二六 其はしること葦舟のごとく 物を攫まんとて飛かける鷲のごとし二七 たとひ我わが愁を忘れ面色を改めて笑ひをらんと思ふとも二八 尚この諸の苦痛のために戰慄くなり 我思ふに汝われを釋し放ちたまはざらん二九 我は罪ありとせらるるなれば何ぞ徒然に勞すべけんや三〇 われ雪水をもて身を洗ひ 灰汁を

もて手を潔むるとも三一 汝われを汚はしき穴の中に陥いれたまはん 而して我衣も我を厭ふにいたらん三二 神は我のごとく人にあらざれば我かれに答ふべからず 我ら二箇して共に裁判に臨むべからず三三 また我らの間には我ら二箇の上に手を置べき仲保あらず三四 願くは彼その杖を我より取はなし その震怒をもて我を懼れしめたまはざれ三五 然らば我 言語て彼を畏れざらん 其は我みづから斯る者と思はざればなり

第一〇章一 わが心生命を厭ふ 然ば我わが憂愁を包まず言あらはし わが魂神の苦きによりて語はん二 われ神に申さん 我を罪ありしとしたまふ勿れ 何故に我とあらそふかを我に示したまへ三 なんぢ虐遇を爲し 汝の手の作を打棄て悪き者の謀計を照すことを善としたまふや四 汝は肉眼を有たまふや 汝の觀たまふ所は人の觀るがごとくなるや五 なんぢの日は人間の日のごとく 汝の年は人の日のごとくなるや六 何とて汝わが愆を尋ねわが罪をしらべたまふや七 されども汝はすでに我の罪なきを知たまふ また汝の手より救ひいだし得る者なし八 汝の手われをいとなみ我をことごとく作れり 然るに汝今われを滅ぼしたまふなり九 請ふ記念たまへ 汝は土塊をもてすてるがごとくに我を作りたまへり 然るに復われを塵に歸さんとしたまふや一〇 汝は我を乳のごとく斟ぎ牛酪のごとくに凝しめたまひしに非ずや一一 汝は皮と肉とを我に着せ骨と筋とをもて我を編み一二 生命と恩惠とをわれに授け我を眷顧てわが魂神を守りたまへり一三 然はあれど汝これらの事を御心に藏しおきたまへり 我この事汝の心にあるを知る一四 我もし罪を犯さば汝われをみとめてわが罪を赦したまはじ一五 我もし行状あしからば禍あらん 假令われ義かるとも我 頭を擧じ 其は我は衷に羞恥充ち 眼にわが患難を見ればなり一六 もし頭を擧なば獅子のごとくに汝われを追打ち我身の上に復なんぢの奇しき能力をあらはしたまはん一七 汝はしばしば證する者を入かへて我を攻め 我にむかひて汝の震怒を増し新手に新手を加へて我を攻めたまふ一八 何とて汝われを胎より出したまひしや 然らずば我は息絶え目に見らるること無く一九 曾て有ざりし如くならん 即ち我は胎より墓に持ゆかれん二〇 わが日は幾時も无きに非ずや 願くは彼姑らく息て我を離れ我をして少しく安んぜしめんことを二一 我が往て復返ることなきその先に斯あらしめよ 我は暗き地死の蔭の地に往ん二二 この地は暗くして晦冥に等しく死の蔭にして區分なし 彼處には光明も黒暗のごとし

第一一章一 是においてナアマ人ゾパル答へて言けるは二 言語多からば豈答へざるを得んや 口おほき人あに義とせられんや三 汝も空しき言あに人をして口を閉しめんや 汝 嘲らば人なんぢをして羞しめざらんや四 汝は言ふ 我教は正し 我は汝の目の前に潔しと五 願くは神言を出し 汝にむかひて口を開き六 智慧の秘密をなんぢに示してその知識の相倍するを顯したまはんことを 汝しれ神はなんぢの罪よりも輕くなんぢを處置したまふ

なり七なんぢ神の深事を窮むるを得んや　全能者を全く窮むることを得んや八その高きことは天のごとし　汝なにを爲し得んや　其深きことは陰府のごとし　汝なにを知えんや九その量は地よりも長く海よりも濶し一〇彼もし行めぐりて人を執へて召集めたまふ時は誰か能くこれを阻まんや一一彼は僞る人を善く知りたまふ　又惡事は顧みること無して見知たまふなり一二虚しき人は悟性なし　その生るるよりして野驢馬の駒のごとし一三汝もし彼にむかひて汝の心を定め　汝の手を舒べ一四手に罪のあらんには之を遠く去れ　惡をなんぢの幕屋に留むる勿れ一五然すれば汝　面を擧て玷なかるべく堅く　立て懼るる事なかるべし一六すなはち汝　憂愁を忘れん　汝のこれを憶ゆることは流れ去し水のごとくならん一七なんぢの生存らふる日は眞晝よりも輝かん　假令暗き事あるとも是は平旦のごとくならん一八なんぢは望あるに因て安んじ　汝の周圍を見めぐりて安然に寐るにいたらん一九なんぢは何にも懼れさせらるること無して偃やまん　必ず衆多の者なんぢを悦こばせんと務むべし二〇然ど惡き者は目矇み逃遁處を失なはん　其望は氣の斷ると等しかるべし

第一二章

一ヨブこたへて言ふ二なんぢら而已まことに人なり　智慧は汝らと共に死ん三我もなんぢらと同じく心あり　我はなんぢらの下に立ず　誰か汝らの言し如き事を知ざらんや四我は神に龥はりて聽るる者なるに今その友に嘲けらるる者となれり　嗚呼正しくかつ完たき人あざけらる五安逸なる者は思ふ　輕侮は不幸なる者に附そひ足のよろめく者を俟と六掠奪ふ者の天幕は繁榮え　神を怒らせ自己の手に神を携ふる者は安泰なり七今請ふ獸に問へ　然ばなんぢに教へん　天空の鳥に問へ　然ばなんぢに語らん八地に言へ　然ばなんぢに教へん　海の魚もまた汝に述べし九誰かこの一切の者に依てヱホバの手のこれを作りしなるを知ざらんや一〇一切の生物の生氣および一切の人の靈魂ともに彼の手の中にあり一一耳は説話を辨へざらんや　その状あたかも口の食物を味ふがごとし一二老たる者の中には智慧あり　壽長者の中には穎悟あり一三智慧と權能は神に在り　智謀と穎悟も彼に屬す一四視よ彼毀てば再び建ること能はず　彼人を閉こむれば開き出すことを得ず一五視よ彼水を止むれば則ち涸れ　水を出せば則ち地を滅ぼす一六權能と穎悟は彼に在り　惑はさるる者も惑はす者も共に彼に屬す一七彼は議士を裸體にして虜へゆき　審判人をして愚なる者とならしめ一八王等の權威を解て反て之が腰に繩をかけ一九祭司等を裸體にして虜へゆき　權力ある者を滅ぼし二〇言爽なる者の言語を取除き　老たる者の了知を奪ひ二一侯伯たる者等に恥辱を蒙らせ　強き者の帶を解き二二暗中より隱れたる事等を顯し　死の蔭を光明に出し二三國々を大にしまた之を滅ぼし　國々を廣くしまた之を舊に歸し二四地の民の長たる者等の了知を奪ひ　これを路なき荒野に吟行はしむ二五彼らは光明なき暗にたどる　彼また彼らを醉る人のごとくによろめかしむ

第一三章

一視よわが目これを盡く觀　わが耳これを聞て通達れり

二汝らが知るところは我もこれを知る 我は汝らに劣らず三 然りと雖ども我は全能者に物言ん 我は神と論ぜんことをのぞむ四 汝らは只謊言を造り設くる者 汝らは皆無用の醫師なり五 願くは汝ら全く默せよ 然するは汝らの智慧なるべし六 請ふわが論ずる所を聽き 我が唇にて辨爭ふ所を善く聽け七 神のために汝ら惡き事を言ふや 又かれのために虚僞を述るや八 汝ら神の爲に偏るやまたかれのために爭はんとするや九 神もし汝らを鑒察たまはば豈善らんや 汝等人を欺むくごとくに彼を欺むき得んや一〇 汝等もし密に私しするあらば彼かならず汝らを責ん一一 その威光なんぢらを懼れしめざらんや 彼を懼るる畏懼なんぢらに臨まざらんや一二 なんぢらの諭言は灰に譬ふべし なんぢらの城は土の城となる一三 默して我にかかはらざれ 我言語んとす 何事にもあれ我に來らば來れ一四 我なんぞ我肉をわが齒の間に置きわが生命をわが手に置かんや一五 彼われを殺すとも我は彼に依頼まん 唯われは吾道を彼の前に明かにせんとす一六 彼また終に我救拯とならん 邪曲なる者は彼の前にいたること能はざればなり一七 なんぢら聽よ 我言を聽け我が述る所をなんぢらの耳に入しめよ一八 視よ我すでに吾事を言竝べたり 必ず義しとせられんと自ら知る一九 誰か能われと辨論ふ者あらん 若あらば我は口を緘て死ん二〇 惟われに二の事を爲たまはざれ 然ば我なんぢの面をさけて隱れじ二一 なんぢの手を我より離したまへ 汝の威嚴をもて我を懼れしめたまはざれ二二 而して汝われを召たまへ 我こたへん 又われにも言はしめて汝われに答へたまへ二三 我の愆われの罪いくばくなるや 我の背反と罪とを我に知しめたまへ二四 何とて御顔を隱し我をもて汝の敵となしたまふや二五 なんぢは吹廻さるる木の葉を威し 干あがりたる籾殼を追たまふや二六 汝は我につきて苦き事等を書しるし 我をして我が幼稚時の罪を身に負しめ二七 わが足を足械にはめ 我すべての道を伺ひ 我足の周圍に限界をつけたまふ二八 我は腐れたる者のごとくに朽ゆき 蠹に食るる衣服に等し

第一四章一 婦の產む人はその日少なくして艱難多し二 その來ること花のごとくにして散り 其馳ること影のごとくにして止まらず三 なんぢ是のごとき者に汝の目を啓きたまふや 汝われを汝の前にひきて審判したまふや四 誰か淸き物を汚れたる物の中より出し得る者あらん 一人も無し五 その日既に定まり その月の數なんぢに由り 汝これが區域を立て越ざらしめたまふなれば六 是に目を離して安息を得させ 之をして傭人のその日を樂しむがごとくならしめたまへ七 それ木には望あり 假令砍るるとも復芽を出してその枝絶ず八 たとひ其根地の中に老い 幹土に枯るとも九 水の潤霑にあへば即ち芽をふき枝を出して若樹に異ならず一〇 然ど人は死れば消うす 人氣絶なば安に在んや一一 水は海に竭き河は涸てかわく一二 是のごとく人も寢臥てまた興ず 天の盡るまで目覺ず睡眠を醒さざるなり一三 願はくは汝われを陰府に藏し 汝の震怒の息むまで我を掩ひ 我ために期を定め而して

我を念ひたまへ一四人もし死ばまた生んや 我はわが征戰の諸日の間望みをりて我が變更の來るを待ん一五なんぢ我を呼たまはん而して我こたへん 汝かならず汝の手の作を顧みたまはん一六今なんぢは我に歩履を數へたまふ 我罪を汝うかがひたまはざらんや一七わが愆は凡て嚢の中に封じてあり汝わが罪を縫こめたまふ一八それ山も倒れて終に崩れ巖石も移りてその處を離る一九水は石を鑿ち浪は地の塵を押流す 汝は人の望を斷たまふ二〇なんぢは彼を永く攻なやまして去ゆかしめ 彼の面容の變らせて逐やりたまふ二一その子尊貴なるも彼は之を知ず卑賤なるもまた之を曉らざるなり二二只己みづからその肉に痛苦を覺え己みづからその心に哀く而已

第一五章一テマン人エリパズ答へて曰く二智者あに虚しき知識をもて答へんや豈東風をその腹に充さんや三あに裨なき談益なき詞をもて辨論はんや四まことに汝は神を畏るる事を棄てその前に祷ることを止む五なんぢの罪なんぢの口を教ふ 汝はみづから擇びて狡猾人の舌を用ふ六なんぢの口みづから汝の罪を定む 我には非ず汝の唇なんぢの惡きを證す七 汝あに最初に世に生れたる人ならんや 山よりも前に出來しならんや八 神の御謀議を聞しならんや 智慧を獨にて藏めをらんや九なんぢが知る所は我らも知ざらんや 汝が曉るところは我らの心にも在ざらんや一〇我らの中には白髮の人および老たる人ありて汝の父よりも年高し一一 神の慰藉および夫の柔かき言詞を汝 小しとするや一二なんぢ何ぞかく心狂ふや 何ぞかく目をしばたたくや一三なんぢ是のごとく神に對ひて氣をいらだて 斯る言詞をなんぢの口よりいだすは如何ぞや一四人は如何なる者ぞ 如何してか潔からん 婦の產し者は如何なる者ぞ 如何してか義からん一五それ神はその聖者にすら信を置たまはず 諸の天もその目の前には潔からざるなり一六況んや罪を取ること水を飮がごとくする憎むべき穢れたる人をや一七我なんぢに語る所あらん 聽よ 我見たる所を述ん一八是すなはち智者等が父祖より受て隱すところ無く傳へ來し者なり一九彼らに而已この地は授けられて外國人は彼等の中に往來せしこと無りき二〇惡き人はその生る日の間つねに悶へ苦しむ 強暴人の年は數へて定めおかる二一その耳には常に懼怖しき音きこえ平安の時にも滅ぼす者これに臨む二二彼は幽暗を出得るとは信ぜず 目ざされて劍に付さる二三 彼食物は何處にありやと言つつ尋ねありき 黑暗日の備へられて己の側にあるを知る二四 患難と苦痛とはかれを懼れしめ 戰鬪の準備をなせる王のごとくして彼に打勝ん二五 彼は手を伸て神に敵し傲りて全能者に悖り二六 頸を強くし 厚き楯の面を向て之に馳かかり二七 面に肉を滿せ 腰に脂を凝し二八 荒されたる邑々に住居を設けて人の住べからざる家 石堆となるべき所に居る二九 是故に彼は富ず その貨物は永く保たず その所有物は地に蔓延ず三〇また自己は黑暗を出づるに至らず 火燄その枝葉を枯さん 而してその身は神の口の氣吹によりて亡ゆかん三一 彼は虛 妄を恃み

て自ら欺くべからず 其報は虚妄なるべければなり三二 彼の日の來らざる先に其事成べし 彼の枝は緑ならじ三三 彼は葡萄の樹のその熟せざる果を振落すがごとく 橄欖の樹のその花を落すがごとくなるべし三四 邪曲なる者の宗族は零落れ 賄賂の家は火に焚ん三五 彼等は惡念を孕み 虚妄を生み その胎にて詭計を調ふ

第一六章一 ヨブ答へて曰く二 斯る事は我おほく聞り 汝らはみな人を慰めんとして却つて人を煩はす者なり三 虚しき言語あに終極あらんや 汝なにに勵されて應答をなすや四 我もまた汝らの如くに言ことを得 もし汝らの身わが身と處を換なば我は言語を練て汝らを攻め 汝らにむかひて首を搖ことを得五 また口をもて汝らを強くし 唇の慰藉をもて汝らの憂愁を解ことを得るなり六 たとひ我言を出すとも我憂愁は解ず 默するとても何ぞ我身の安くなること有んや七 彼いま已に我を疲らしむ 汝わが宗族をことごとく荒せり八 なんぢ我をして皺らしめたり 是われに向ひて見證をなすなり 又わが痩おとろへたる狀貌わが面の前に現はれ立て我を攻む九 かれ怒てわれを撕裂きかつ窘しめ 我にむかひて齒を噛鳴し我敵となり目を鋭して我を看る一〇 彼ら我にむかひて口を張り 我を賤しめてわが頬を打ち 相集まりて我を攻む一一 神われを邪曲なる者に交し 惡き者の手に擲ちたまへり一二 我は安穩なる身なりしに彼いたく我を打惱まし 頸を執へて我をうちくだき遂に我を立て鵠となしたまひ一三 その射手われを遶り圍めり やがて情もなく我腰を射透し わが膽を地に流れ出しめたまふ一四 彼はわれを打敗りて破壞に破壞を加へ 勇士のごとく我に奔かかりたまふ一五 われ麻布をわが肌に縫つけ我角を塵にて汚せり一六 我面は泣て頳くなり 我目縁には死の蔭あり一七 然れども我手には不義あること無く わが祈禱は清し一八 地よ我血を掩ふなかれ 我號呼は休む處を得ざれ一九 視よ今にても我證となる者天にあり わが眞實を表明す者高き處にあり二〇 わが朋友は我を嘲けれども我目は神にむかひて涙を注ぐ二一 願くは彼人のために神と論辯し 人の子のためにこれが朋友と論辯せんことを二二 數年すぎさらば我は還らぬ旅路に往べし

第一七章一 わが氣息は已にくさり 我日すでに盡なんとし墳墓われを待つ二 まことに嘲弄者等わが傍に在り 我目は彼らの辨爭ふを常に見ざるを得ず三 願くは質を賜ふて汝みづから我の保證となりたまへ 誰か他にわが手をうつ者あらんや四 汝彼らの心を閉て悟るところ無らしめたまへり 必ず彼らをして愈らしめたまはじ五 朋友を交付して掠奪に遭しむる者は其子等の目潰るべし六 彼われを世の民の笑柄とならしめたまふ 我は面に唾せらるべき者となれり七 かつまた我目は憂愁によりて昏み 肢體は凡て影のごとし八 義しき者は之に驚き 無辜者は邪曲なる者を見て憤ほる九 然ながら義しき者はその道を堅く持ち 手の潔淨き者はますます力を得るなり一〇 請ふ汝ら皆ふたたび來れ 我は汝らの中に一人も智き者あるを見ざるなり一一 わが日は已に過ぎ わ

が計る所わが心に冀ふ所は已に敗れたり一二彼ら夜を晝に變ふ黑暗の前に光明ちかづく一三我もし俟つところ有ば是わが家たるべき陰府なるのみ 我は黑暗にわが牀を展ぶ一四われ朽腐に向ひては汝はわが父なりと言ひ 蛆に向ひては汝は我母わが姉妹なりと言ふ一五然ばわが望はいづくにかある 我望は誰かこれを見る者あらん一六是は下りて陰府の關に到らん 之と齊しく我身は塵の中に臥靜まるべし

第一八章 一シユヒ人ビルダデこたへて曰く二汝等いつまで言語を獵求むることをするや 汝ら先曉るべし 然る後われら辯論はん三われら何ぞ獸畜とおもはるべけんや 何ぞ汝らの目に汚穢たる者と見らるべけんや四なんぢ怒りて身を裂く者よ 汝のためとて地あに棄られんや 磐あに其處より移されんや五惡き者の光明は滅され 其火の焰は照じ六その天幕の内なる光明は暗くなり其が上の燈火は滅さるべし七またその強き歩履は狹まり 其計るところは自分を陷いる八すなはち其足に逐れて網に到り また陷阱の上を歩むに九索はその踵に纏り 羂これを執ふ一〇索かれを執ふるために地に隱しあり 羂かれを陷しいるるために路に設けあり一一怖ろしき事四方において彼を懼れしめ 其足にしたがひて彼をおふ一二その力は餓ゑ 其傍には災禍そなはり一三その膚の肢は蝕壞らる 即ち死の初子これが肢を蝕壞るなり一四やがて彼はその恃める天幕より曳離されて懼怖の王の許に驅やられん一五彼に屬せざる者かれの天幕に住み 硫礦かれの家の上に降ん一六下にてはその根枯れ 上にてはその枝砍る一七彼の跡は地に絶え 彼の名は街衢に傳はらじ一八彼は光明の中より黑暗に逐やられ 世の中より驅出されん一九彼はその民の中に子も無く孫も有じ また彼の住所には一人も遺る者なからん二〇之が日を見るにおいて後に來る者は駭ろき 先に出し者は怖おそれん二一かならず惡き人の住所は是のごとく 神を知ざる者の所は是のごとくなるべし

第一九章 一ヨブこたへて曰く二汝ら我心をなやまし 言語をもて我を打くだくこと何時までぞや三なんぢら已に十次も我を辱しめ我を惡く待ひてなほ愧るところ無し四假令われ眞に過ちたらんもその過は我の身に止れり五なんぢら眞に我に向ひて誇り我身に羞べき行爲ありと證するならば六神われを虐げその網羅をもて我を包みたまへりと知るべし七我虐げらるると叫べども答なく 呼はり求むれども審理なし八彼わが路の周圍に垣を結めぐらして逾る能はざらしめ 我が行く途に黑暗を蒙むらしめ九わが光榮を褫ぎ我冠冕を首より奪ひ一〇四方より我を毀ちて失しめ 我望を樹のごとくに根より拔き一一我にむかひて震怒を燃し 我を敵の一人と見たまへり一二その軍旅ひとしく進み途を高くして我に攻寄せ わが天幕の周圍に陣を張り一三彼わが兄弟等をして遠くわれを離れしめたまへり 我を知る人々は全く我に疎くなりぬ一四わが親戚は往來を休め わが朋友はわれを忘れ一五わが家に寄寓る者およびわが婢等は我を見て外人のごとくす

我かれらの前にては異國人のごとし一六われわが僕を喚どもこたへず我口をもて彼に請はざるを得ざるなり一七わが氣息はわが妻に厭はれわが臭氣はわが同胎の子等に嫌はる一八童子等さへも我を侮どり我起あがれば即ち我を嘲ける一九わが親しき友われを惡みわが愛したる人々ひるがへりてわが敵となれり二〇わが骨はわが皮と肉とに貼り我は僅に齒の皮を全うして逃れしのみ二一わが友よ汝等われを恤れめ我を恤れめ神の手われを撃り二二汝らなにとて神のごとくして我を攻めわが肉に饜ことなきや二三望むらくは我言の書留られんことを望むらくは我言書に記されんことを二四望むらくは鐵の筆と鉛とをもて之を永く磐石に鐫つけおかんことを二五われ知る我を贖ふ者は活く後の日に彼かならず地の上に立ん二六わがこの皮この身の朽はてん後われ肉を離れて神を見ん二七我みづから彼を見たてまつらん我目かれを見んに識らぬ者のごとくならじ我が心これを望みて焦る二八なんぢら若われら如何に彼を攻んかと言ひまた事の根われに在りと言ば二九劍を懼れよ忿怒は劍の罰をきたらす斯なんぢら遂に審判のあるを知ん

第二〇章一ナアマ人ゾパルこたへて曰く二これに因てわれ答をなすの思念を起し心しきりに之がために急る三我を辱しむる警語を我聞ざるを得ず然しながらわが了知の性われをして答ふることを得せしむ四なんぢ知ずや古昔より地に人の置れしより以來五惡き人の勝誇は暫時にして邪曲なる者の歡樂は時の間のみ六その高天に達しその首雲に及ぶとも七終には己の糞のごとくに永く亡絶べし彼を見識る者は言ん彼は何處にありやと八彼は夢の如く過さりて復見るべからず夜の幻のごとく追はらはれん九彼を見たる目かさねてかれを見ることあらず彼の住たる處も再びかれを見ること無らん一〇その子等は貧しき者に寛待を求めん彼もまたその取し貨財を手づから償さん一一その骨に少壯氣勢充り然れどもその氣勢もまた塵の中に彼とおなじく臥ん一二かれ惡を口に甘しとして舌の底に藏め一三愛みて捨ず之を口の中に含みをる一四然どその食物腸の中にて變り腹の内にて蝮の毒とならん一五かれ貨財を呑たれども復之を吐いださん神これを彼の腹より推いだしたまふべし一六かれは蝮の毒を吸ひ虺の舌に殺されん一七かれは蜂蜜と牛酪の湧て流るる河川を視ざらん一八その勞苦て獲たる物は之を償して自ら食はず又それを求めたる所有よりは快樂を得じ一九是は彼貧しき者を虐遇げて之を棄たればなり假令家を奪ひとるとも之を改め作ることを得ざらん二〇かれはその腹に飽ことを知ざるが故に自己の深く喜ぶ物をも保つこと能はじ二一かれが遺して食はざる物とては一も無し是によりてその福祉は永く保たじ二二その繁榮の眞盛において彼は艱難に迫られ乏しき者すべて手をこれが上に置ん二三かれ腹を充さんとすれば神烈しき震怒をその上に下しその食する時にこれをその上に降したまふ二四かれ鐵の器を避れば銅の弓これを射透す二五是に於て之をその身よ

り拔ば閃く鏃その膽より出きたりて畏懼これに臨む二六 各種の黒暗これが寶物をほろぼすために蓄へらる 又人の吹おこせしに非る火かれを焚き その天幕に遺りをる者をも焚ん二七 天かれの罪を顯はし 地興りて彼を攻ん二八 その家の儲蓄は亡て神の震怒の日に流れ去ん二九 是すなはち惡き人が神より受る分 神のこれに定めたまへる數なり

第二一章 一 ヨブこたへて曰く二 請ふ汝等わが言を謹んで聽き之をもて汝らの慰藉に代よ三 先われに容して言しめよ 我が言る後なんぢ嘲るも可し四 わが怨言は世の人の上につきて起れる者ならんや 我なんぞ氣をいらだつ可らざらんや五 なんぢら我を視て驚き手を口にあてよ六 われ思ひまはせば畏しくなりて身體しきりに戰慄く七 惡き人何とて生ながらへ 老かつ勢力強くなるや八 その子等はその周圍にありてその前に堅く立ち その子孫もその目の前に堅く立べし九 またその家は平安にして畏懼なく 神の杖その上に臨まじ一〇 その牡牛は種を與へて過らず その牝牛は子を產てそこなふ事なし一一 彼等はその少き者等を外に出すこと群のごとし その子等は舞をどる一二 彼等は鼓と琴とをもて歌ひ笛の音に由て樂み一三 その日を幸福に暮し まばたくまに陰府にくだる一四 然はあれども彼等は神に言らく我らを離れ賜へ 我らは汝の道をしることを好まず一五 全能者は何者なれば我らこれに事ふべき 我儕これに祈るとも何の益を得んやと一六 視よ彼らの福祿は彼らの力に由にあらざるなり 惡人の希圖は我の與する所にあらず一七 惡人のその燈火を滅さるる事幾度ありしか その滅亡のこれに臨む事 神の怒りて之に艱苦を蒙らせたまふ事幾度有しか一八 かれら風の前の藁の如く 暴風に吹さらるる籾殻の如くなること幾度有しか一九 神かれの愆を積たくはへてその子孫に報いたまふか 之を彼自己の身に報い知しむるに如ず二〇 かれをして自らその滅亡を目に視させ かつ全能者の震怒を飲しめよ二一 その月の數すでに盡るに於ては何ぞその後の家に關はる所あらん二二 神は天にある者等をさへ審判たまふなれば誰か能これに知識を教へんや二三 或人は繁榮を極め全く平穩にかつ安康にして死に二四 その器に乳充ちその骨の髓は潤ほへり二五 また或人は心を苦しめて死し 終に福祉をあぢはふる事なし二六 是等は倶に齊しく塵に臥して蛆におほはる二七 我まことに汝らの思念を知り 汝らが我を攻擊んとするの計略を知る二八 なんぢらは言ふ王侯の家は何に在る 惡人の住所は何にあると二九 汝らは路往く人々に詢ざりしや 彼等の證據を曉らざるや三〇 すなはち滅亡の日に惡人遺され 烈しき怒の日に惡人たづさへ出さる三一 誰か能かれに打向ひて彼の行爲を指示さんや 誰か能彼の爲たる所を彼に報ゆることを爲ん三二 彼は舁れて墓に到り 塚の上にて守護ることを爲す三三 谷の土塊も彼には快し 一切の人その後に從ふ 其前に行る者も數へがたし三四 既に是の如くなるに汝等なんぞ徒に我を慰さめんとするや 汝らの答ふる所はただ虛僞のみ

第二二章 一 是においてテマン人エリパズこたへて曰く 二 人神を益する事をえんや 智人も唯みづから益する而已なるぞかし 三 なんぢ義かるとも全能者に何の歡喜かあらん なんぢ行爲を全たふするとも彼に何の利益かあらん 四 彼汝の畏懼の故によりて汝を責め汝を鞫きたまはんや 五 なんぢの惡大なるにあらずや 汝の罪はきはまり無し 六 即はち汝は故なくその兄弟の物を抑へて質となし 裸なる者の衣服を剥て取り 七 渇く者に水を與へて飲しめず 饑る者に食物を施こさず 八 力ある者土地を得 貴き者その中に住む 九 なんぢは寡婦に手を空しうして去しむ 孤子の腕は折る 一〇 是をもて網羅なんぢを環り 畏懼にはかに汝を擾す 一一 なんぢ黒暗を見ずや 洪水のなんぢを覆ふを見ずや 一二 神は天の高に在すならずや 星辰の巓ああ如何に高きぞや 一三 是によりて汝は言ふ 神なにをか知しめさん 豈よく黒雲の中より審判するを得たまはんや 一四 濃雲かれを蔽へば彼は見たまふ所なし 唯天の蒼穹を歩みたまふ 一五 なんぢ古昔の世の道を行なはんとするや 是あしき人の蹊たりし者ならずや 一六 彼等は時いまだ至らざるに打絶れ その根基は大水に押流されたり 一七 彼ら神に言けらく我儕を離れたまへ 全能者われらのために何を爲ことを得んと 一八 しかるに彼は却つて佳物を彼らの家に盈したまへり 但し惡人の計畫は我に與する所にあらず 一九 義しき者は之を見て喜び 無辜者は彼らを笑ふ 二〇 曰く我らの仇は誠に滅ぼされ 其盈餘れる物は火にて焚つくさる 二一 請ふ汝神と和らぎて平安を得よ 然らば福祿なんぢに來らん 二二 請ふかれの口より教誨を受け その言語をなんぢの心に藏めよ 二三 なんぢもし全能者に歸向り且なんぢの家より惡を除き去ば 汝の身再び興されん 二四 なんぢの寶を土の上に置き オフルの黄金を谿河の石の中に置け 二五 然れば全能者なんぢの寶となり汝のために白銀となりたまふべし 二六 而してなんぢは又全能者を喜び且神にむかひて面をあげん 二七 なんぢ彼に祈らば彼なんぢに聽たまはん 而して汝その誓願をつくのひ果さん 二八 なんぢ事を爲んと定めなばその事なんぢに成ん 汝の道には光照ん 二九 其卑く降る時は汝いふ昇る哉と 彼は謙遜者を拯ひたまふべし 三〇 かれは罪なきに非ざる者をも拯ひたまはん 汝の手の潔淨によりて斯る者も拯はるべし

第二三章 一 ヨブこたへて曰く 二 我は今日にても尚つぶやきて服せず わが禍災はわが嘆息よりも重し 三 ねがはくは神をたづねて何處にか遇まつるを知り其御座に參いたらんことを 四 我この愁訴をその御前に陳べ口を極めて辨論はん 五 我その我に答へたまふ言を知り また其われに言たまふ所を了らん 六 かれ大なる能をもて我と爭ひたまはんや 然らじ反つて我を眷みたまふべし 七 彼處にては正義人かれと辨爭ふことを得 斯せば我を鞫く者の手を永く免かるべし 八 しかるに我東に往くも彼いまさず 西に往くも亦見たてまつらず 九 北に工作きたまへども遇まつらず 南に隱れ居たまへば望むべからず 一〇 わが平生の道は彼知たまふ 彼われを試みたまはば我は金のごとくして出きたらん 一一 わ

が足は彼の歩履に堅く隨がへり 我はかれの道を守りて離れざりき一二 我はかれの唇の命令に違はず 我が法よりも彼の口の言語を重ぜり一三 かれは一に居る者にまします 誰か能かれをして意を變しめん 彼はその心に慾する所をかならず爲たまふ一四 然ば我に向ひて定めし事を必らず成就たまはん 是のごとき事を多く彼は爲たまふなり一五 是故に我かれの前に慄ふ 我考ふれば彼を懼る一六 神わが心を弱くならしめ 全能者われをして懼れしめたまふ一七 かく我は暗の來らぬ先わが面を黑暗の覆ふ前に打絶れざりき

第二四章一 なにゆゑに全能者時期を定めおきたまはざるや 何故に彼を知る者その日を見ざるや二 人ありて地界を侵し群畜を奪ひて牧ひ三 孤子の驢馬を驅去り 寡婦の牛を取て質となし四 貧しき者を路より推退け 世の受難者をして盡く身を匿さしむ五 視よ彼らは荒野にをる野驢馬のごとく出て業を爲て食を求め 野原よりその子等のために食物を得六 圃にて惡き者の麥を刈りまたその葡萄の遺餘を摘む七 かれらは衣服なく裸にして夜を明し覆ふて寒氣を禦ぐべき物なし八 山の暴風に濡れ 庇はるるところ無して岩を抱く九 孤子を母の懷より奪ふ者あり 貧しき者の身につける物を取て質となす者あり一〇 貧き者衣服なく裸にて歩き饑つつ麥束を擔ふ一一 人の垣の内にて油を搾め また渇きつつ酒醡を踐む一二 邑の中より人々の呻吟たちのぼり 傷けられたる者の叫喚おこる 然れども神はその怪事を省みたまはず一三 また光明に背く者あり 光の道を知ず 光の路に止らず一四 人を殺す者昧爽に興いで受難者や貧しき者を殺し 夜は盜賊のごとくす一五 姦淫する者は我を見る目はなからんと言てその目に昏暮をうかがひ待ち 而してその面に覆ふ物を當つ一六 また夜分家を穿つ者あり 彼等は晝は閉こもり居て光明を知らず一七 彼らには晨は死の蔭のごとし 是死の蔭の怖ろしきを知ばなり一八 彼は水の面に疾ながるる物の如し その產業は世の中に詛はる その身重ねて葡萄圃の路に向はず一九 亢旱および炎熱は雪水を直に乾涸す 陰府が罪を犯せし者におけるも亦かくのごとし二〇 これを宿せし腹これを忘れ 蛆これを好みて食ふ 彼は最早世におぼえらるること無く その惡は樹を折るが如くに折る二一 是すなはち孕まず產ざりし婦人をなやまし 寡婦を憐れまざる者なり二二 神はその權能をもて強き人々を保存へさせたまふ 彼らは生命あらじと思ふ時にも復興る二三 神かれらに安泰を賜へば彼らは安らかなり 而してその目をもて彼らの道を見そなはしたまふ二四 かれらは旺盛になり暫時が間に無なり 卑くなりて一切の人のごとくに沒し 麥の穗のごとくに斷る二五 すでに是のごとくなれば誰か我の謬まれるを示してわが言語を空しくすることを得ん

第二五章一 時にシユヒ人ビルダデこたへて曰く二 神は大權を握りたまふ者 畏るべき者にましまし 高き處に平和を施したまふ三 その軍旅數ふることを得んや 其光明なに物をか照さざらん四 然ば誰か神の前に正義かるべき 婦人の產し者いかでか清かるべ

き五 視よ月も輝かず 星も其目には清明ならず六 いはんや蛆のごとき人 蟲のごとき人の子をや

第二六章一 ヨブこたへて曰く二 なんぢ能力なき者を如何に助けしや 氣力なきものを如何に救ひしや三 智慧なき者を如何に誨へしや 穎悟の道を如何に多く示ししや四 なんぢ誰にむかひて言語を出ししや なんぢより出しは誰が靈なるや五 陰靈水またその中に居る者の下に慄ふ六 かれの御前には陰府も顯露なり 滅亡の坑も蔽ひ匿す所なし七 彼は北の天を虚空に張り 地を物なき所に懸けたまふ八 水を濃雲の中に包みたまふてその下の雲裂ず九 御寶座の面を隱して雲をその上に展べ一〇 水の面に界を設けて光と暗とに限を立たまふ一一 かれ叱咤たまへば天の柱震ひかつ怖る一二 その權能をもて海を靜め その智慧をもてラハブを撃碎き一三 その氣噓をもて天を輝かせ 其手をもて逃る蛇を衝とほしたまふ一四 視よ是等はただその御工作の端なるのみ 我らが聞ところの者は如何にも微細なる耳語ならずや 然どその權能の雷轟に至りては誰かこれを曉らんや

第二七章一 ヨブまた語を繼ぎていはく二 われに義しき審判を施したまはざる神 わが心魂をなやまし給ふ全能者此神は活く三 (わが生命なほ全くわれの衷にあり 神の氣息なほわが鼻にあり)四 わが口は惡を言ず わが舌は譌言を語らじ五 我決めて汝等を是とせじ 我に死るまで我が罪なきを言ことを息じ六 われ堅くわが正義を持ちて之を棄じ 我は今まで一日も心に責られし事なし七 我に敵する者は惡き者と成り我を攻る者は義からざる者と成るべし八 邪曲なる者もし神に絶れその魂神を脱とらるるに於ては何の望かあらん九 かれ艱難に罹る時に神その呼號を聽いれたまはんや一〇 かれ全能者を喜こばんや 常に神を龥んや一一 われ神の御手を汝等に敎へん 全能者の道を汝等に隱さじ一二 視よ汝等もみな自らこれを觀たり 然るに何ぞ斯愚蒙をきはむるや一三 惡き人の神に得る分 強暴の人の全能者より受る業は是なり一四 その子等蕃れば劍に殺さる その子孫は食物に飽ず一五 その遺れる者は疫病に斃れて埋められ その妻等は哀哭をなさず一六 かれ銀を積こと塵のごとく衣服を備ふること土のごとくなるとも一七 その備ふる者は義き人これを着ん またその銀は無辜者これを分ち取ん一八 その建る家は蟲の巣のごとく また番人の造る茅家のごとし一九 彼は富る身にて寢臥し重ねて興ること無しまた目を開けば即ちその身きえ亡す二〇 懼ろしき事大水のごとく彼に追及き 夜の暴風かれを奪ひ去る二一 東風かれを颺げて去り彼をその處より吹はらふ二二 神かれを射て恤まず 彼その手より逃れんともがく二三 人かれに對ひて手を鳴し 嘲りわらひてその處をいでゆかしむ

第二八章一 白銀掘いだす坑あり 煉るところの黄金は出處あり二 鐵は土より取り 銅は石より鎔して獲るなり三 人すなはち黑暗を破り極より極まで尋ね窮めて黑暗および死蔭の石を求む四 その穴を穿つこと深くして上に住む人と遠く相離れ その上を

歩む者まつたく之を覺えず 是のごとく身を縋下げ 遙に人と隔りて空に懸る五 地その上は食物を出し 其下は火に覆へさるるがごとく覆へる六 その石の中には碧の玉のある處あり 黄金の沙またその内にあり七 その逕は鷙鳥もこれを知ず 鷹の目もこれを看ず八 鷙き獸も未だこれを踐ず 猛き獅子も未だこれを通らず九 人堅き磐に手を加へ また山を根より倒し一〇 岩に河を掘り各種の貴き物を目に見とめ一一 水路を塞ぎて漏ざらしめ隱れたる寶物を光明に取いだすなり一二 然ながら智慧は何處よりか覓め得ん 明哲の在る所は何處ぞや一三 人その價を知ず人のすめる地に獲べからず一四 淵は言ふ我の内に在ずと 海は言ふ我と偕ならずと一五 精金も之に換るに足ず 銀も秤りてその價となすを得ず一六 オフルの金にてもその價を量るべからず 貴き靑玉も碧玉もまた然り一七 黄金も玻璃もこれに並ぶ能はず 精金の器皿も之に換るに足ず一八 珊瑚も水晶も論にたらず 智慧を得るは眞珠を得るに勝る一九 エテオピアより出る黄玉もこれに並ぶあたはず純金をもてするともその價を量るべからず二〇 然ば智慧は何處より來るや 明哲の在る所は何處ぞや二一 是は一切の生物の目に隱れ 天空の鳥にも見えず二二 滅亡も死も言ふ 我等はその風聲を耳に聞し而已二三 神その道を曉り給ふ 彼その所を知りたまふ二四 そは彼は地の極までも觀そなはし天が下を看きはめたまへばなり二五 風にその重量を與へ 水を度りてその量を定めたまひし時二六 雨のために法を立て 雷霆の光のために途を設けたまひし時二七 智慧を見て之を顯はし之を立て試みたまへり二八 また人に言たまはく視よ主を畏るるは是智慧なり 惡を離るるは明哲なり

第二九章一 ヨブまた語をつぎて曰く二 嗚呼過にし年月のごとくならまほし 神の我を護りたまへる日のごとくならまほし三 かの時には彼の燈火わが首の上に輝やき彼の光明によりて我黑暗を歩めり四 わが壯なりし日のごとくならまほし 彼時には神の恩惠わが幕屋の上にありき五 かの時には全能者なほ我とともに在しわが子女われの周圍にありき六 乳ながれてわが足跡を洗ひ 我が傍なる磐 油を灌ぎいだせり七 かの時には我いでて邑の門に上りゆき わが座を街衢に設けたり八 少き者は我を見て隱れ 老たる者は起あがりて立ち九 牧伯たる者も言談ずしてその口に手を當て一〇 貴き者も聲をさめてその舌を上顎に貼たりき一一 我事を耳に聞る者は我を幸福なりと呼び 我を目に見たる者はわがために證據をなしぬ一二 是は我助力を求むる貧しき者を拯ひ 孤子および助くる人なき者を拯ひたればなり一三 亡びんとせし者われを祝せり 我また寡婦の心をして喜び歌はしめたり一四 われ正義を衣また正義の衣る所となれり 我が公義は袍のごとく冠冕のごとし一五 われは盲目の目となり 跛者の足となり一六 貧き者の父となり知ざる者の訴訟の由を究め一七 惡き者の牙を折りその齒の間より獲物を取いだせり一八 我すなはち言けらく我はわが巣に死ん 我が日は砂の如く多からん一九 わが根は水の邊に蔓り 露わが枝に終夜おかん二〇 わが榮光はわが身に新なるべく

わが弓はわが手に何時も強からんと二一 人々われに聽き默して我が教を俟ち二二 わが言し後は彼等言を出さず 我説ところは彼等に甘露のごとく二三 かれらは我を望み待つこと雨のごとく口を開きて仰ぐこと春の雨のごとくなりき二四 われ彼等にむかひて笑ふとも彼等は敢て眞實とおもはず我面の光を彼等は除くことをせざりき二五 われは彼等のために道を擇び その首として座を占め 軍中の王のごとくして居り また哀哭者を慰さむる人のごとくなりき

第三〇章一 然るに今は我よりも年少き者等われを笑ふ 彼等の父は我が賤しめて群の犬と並べ置くことをもせざりし者なり二 またかれらの手の力もわれに何の用をかなさん 彼らは其氣力すでに衰へたる者なり三 かれらは缺乏と饑とによりて痩おとろへ荒かつ廢れたる暗き野にて乾ける地を咬む四 すなはち灌木の中にて藜を摘み苕の根を食物となす五 彼らは人の中より逐いださる 盗賊を追ふがごとくに人かれらを追て呼はる六 彼等は懼ろしき谷に住み 土坑および磐穴に居り七 灌木の中に嘶なき 荊棘の下に偃す八 彼らは愚蠢なる者の子 卑むべき者の子にして國より撃いださる九 しかるに今は我かれらの歌謠に成り 彼らの嘲哢となれり一〇 かれら我を厭ふて遠く我を離れ またわが面に唾することを辭まず一一 神わが綱を解て我をなやましたまへば彼等もわが前にその轡を縱せり一二 この輩わが右に起あがり わが足を推のけ我にむかひて滅亡の路を築く一三 彼らは自ら便なき者なれども尚わが逕を毀ち わが滅亡を促す一四 かれらは石垣の大なる崩口より入がごとくに進み來り 破壞の中にてわが上に乗かかり一五 懼ろしき事わが身に臨み 風のごとくに我が尊榮を吹はらふ わが福祿は雲のごとくに消失す一六 今はわが心われの衷に鎔て流れ 患難の日かたく我を執ふ一七 夜にいれば我骨刺れて身を離る わが身を噬む者つひに休むこと無し一八 わが疾病の大なる能によりてわが衣服は醜き様に變り 裏衣の襟の如くに我身に固く附く一九 神われを泥の中に投こみたまひて我は塵灰に等しくなれり二〇 われ汝にむかひて呼はるに汝答へたまはず 我立をるに 汝只われをながめ居たまふ二一 なんぢは我にむかひて無情なりたまひ 御手の能力をもて我を攻撃たまふ二二 なんぢ我を擧げ風の上に乗て負去しめ 大風の音とともに消亡しめたまふ二三 われ知る汝はわれを死に歸らしめ一切の生物の終に集る家に歸らしめたまはん二四 かれは必ず荒垤にむかひて手を舒たまふこと有じ 假令人滅亡に陷るとも是等の事のために號呼ぶことをせん二五 苦みて日を送る者のために我哭ざりしや 貧しき者のために我心うれへざりしや二六 われ吉事を望みしに凶事きたり 光明を待しに黑暗きたれり二七 わが腸 沸かへりて安からず 患難の日我に追及ぬ二八 われは日の光を蒙らずして哀しみつつ歩き 公會の中に立て助を呼もとむ二九 われは山犬の兄弟となり 駝鳥の友となれり三〇 わが皮は黑くなりて剥落ち わが骨は熱によりて焚け三一 わが琴は哀の音となり わが笛は哭の聲と

なれり

第三一章 一 我わが目と約を立たり 何ぞ小艾を慕はんや 二 然せば上より神の降し給ふ分は如何なるべきぞ 高處より全能者の與へ給ふ業は如何なるべきぞ 三 惡き人には滅亡きたらざらんや 善らぬ事を爲す者には常ならぬ災禍あらざらんや 四 彼わが道を見そなはし わが歩履をことごとく數へたまはざらんや 五 我虚誕とつれだちて歩みし事ありや わが足虚僞に奔從がひし事ありや 六 請ふ公平き權衡をもて我を稱れ 然ば神われの正しきを知たまはん 七 わが歩履もし道を離れ わが心もしわが目に隨がひて歩みわが手にもし汚のつきてあらば 八 我が播たるを人食ふも善し わが産物を根より拔るるも善し 九 われもし婦人のために心まよへる事あるか 又は我もしわが隣の門にありて伺ひし事あらば 一〇 わが妻ほかの人のために臼磨き ほかの人々かれの上に寢るも善し 一一 其は是は重き罪にして裁判人に罰せらるべき惡事なればなり 一二 是はすなはち滅亡にまでも燬いたる火にしてわが一切の産をことごとく絶さん 一三 わが僕あるひは婢の我と辯爭ひし時に我もし之が權理を輕んぜし事あらば 一四 神の起あがりたまふ時には如何せんや 神の臨みたまふ時には何と答へまつらんや 一五 われを胎內に造りし者また彼をも造りたまひしならずや われらを腹の內に形造りたまひし者は唯一の者ならずや 一六 我もし貧き者にその願ふところを獲しめず 寡婦をしてその目おとろへしめし事あるか 一七 または我獨みづから食物を啖ひて孤子にこれを啖はしめざりしこと有るか 一八 （却って彼らは我が若き時より我に育てられしこと父におけるが如し 我は胎內を出てより以來寡を導びく事をせり） 一九 われ衣服なくして死んとする者あるひは身を覆ふ物なくして居る人を見し時に 二〇 その腰もし我を祝せず また彼もしわが羊の毛にて温まらざりし事あるか 二一 われを助くる者の門にをるを見て我みなしごに向ひて手を上し事あるか 二二 然ありしならば肩骨よりしてわが肩おち骨とはなれてわが腕折よ 二三 神より出る災禍は我これを懼る その威光の前には我能力なし 二四 我もし金をわが望となし精金にむかひて汝わが所賴なりと言しこと有か 二五 我もしわが富の大なるとわが手に物を多く獲たることを喜びしことあるか 二六 われ日の輝くを見または月の輝わたりて歩むを見し時 二七 心竊にまよひて手を口に接しことあるか 二八 是もまた裁判人に罰せらるべき惡事なり 我もし斯なせし事あらば上なる神に背しなり 二九 我もし我を惡む者の滅亡るを喜び 又は其災禍に罹るによりて自ら誇りし事あるか 三〇 （我は之が生命を呪ひ索めて我口に罪を犯さしめし如き事あらず） 三一 わが天幕の人は言ずや 彼の肉に飽ざる者いづこにか在んと 三二 旅人は外に宿らず わが門を我は街衢にむけて啓けり 三三 我もしアダムのごとくわが罪を蔽ひ わが惡事を胸に隱せしことあるか 三四 すなはち大衆を懼れ宗族の輕蔑に怖ぢて口を閉ぢ門を出ざりしごとき事あるか 三五 嗚呼われの言ところを聽わくる者あらまほし （我が花押ここに

在り 願くは全能者われに答へたまへ）我を訴ふる者みづから訴訟状を書け三六 われ必らず之を肩に負ひ冠冕のごとくこれを首に結ばん三七 我わが歩履の數を彼に述ん 君王たる者のごとくして彼に近づかん三八 わが田圃號呼りて我を攻め その阡陌ことごとく泣さけぶあるか三九 若われ金を出さずしてその產物を食ひまたはその所有主をして生命を失はしめし事あらば四〇 小麥の代に蒺藜生いで 大麥のかはりに雜草おひ出るとも善し ヨブの詞をはりぬ

第三二章一 ヨブみづから見て己の正義とするに因て此三人の者之に答ふる事を止む二 時にラムの族ブジ人バラケルの子エリフ怒を發せり ヨブ神よりも己を正しとするに因て彼ヨブにむかひて怒を發せり三 またヨブの三人の友答ふるに詞なくして猶ヨブを罪ありとせしによりて彼らにむかひて怒を發せり四 エリフはヨブに言ふことをひかへて俟をりぬ 是は自己よりも彼等年老たればなり五 茲にエリフこの三人の口に答ふる詞の有ざるを見て怒を發せり六 ブジ人バラケルの子エリフすなはち答へて曰く 我は年少く汝等は年老たり是をもて我はばかりて我意見をなんぢらに陳ることを敢てせざりき七 我意へらく日を重ねたる者宜しく言を出すべし 年を積たる者宜しく智慧を教ふべしと八 但し人の衷には靈あり 全能者の氣息人に聰明を與ふ九 大なる人すべて智慧あるに非ず 老たる者すべて道理に明白なるに非ず一〇 然ば我言ふ 我に聽け 我もわが意見を陳ん一一 視よ我は汝らの言語を俟ち なんぢらの辯論を聽き なんぢらが言ふべき言語を尋ね盡すを待り一二 われ細に汝らに聽しが汝らの中にヨブを駁折る者一人も無く また彼の言詞に答ふる者も無し一三 おそらくは汝等いはん 我ら智慧を見得たり 彼に勝つ者は唯神のみ 人は能はずと一四 彼はその言語を我に向て發さざりき 我はまた汝らの言ふ所をもて彼に答へじ一五 彼らは愕ろきて復答ふる所なく 言語かれらの衷に浮ばず一六 彼等ものいはず立とどまりて重ねて答へざればとて我あに俟をるべけんや一七 我も自らわが分を答へ わが意見を吐露さん一八 われには言滿ち わが衷の心しきりに迫る一九 わが腹は口を啓かざる酒のごとし 新しき皮囊のごとく今にも裂んとす二〇 われ說いだして胸を安んぜんとす われ口を啓きて答へん二一 かならず我は人に偏らず 人に諂はじ二二 我は諂らふことを知ず もし諂らはば我の造化主ただちに我を絶たまふべし

第三三章一 然ばヨブよ請ふ我が言ふ事を聽け わが一切の言語に耳を傾むけよ二 視よ我口を啓き 舌を口の中に動かす三 わが言ふ所は正義き心より出づ わが唇あきらかにその知識を陳ん四 神の靈われを造り 全能者の氣息われを活しむ五 汝もし能せば我に答へよ わが前に言をいひつらねて立て六 我も汝とおなじく神の者なり 我もまた土より取てつくられしなり七 わが威嚴はなんぢを懼れしめず わが勢はなんぢを壓せず八 汝わが聽くところにて言談り 我なんぢの言語の聲を聞けり云く九 われは潔淨くして

愆なし 我は辜なく惡き事わが身にあらず一〇視よ彼われを攻る釁隙を尋ね われを己の敵と算へ一一わが脚を桎に夾めわが一切の擧動に目を着たまふと一二視よ我なんぢに答へん なんぢ此事において正義からず 神は人よりも大なる者にいませり一三彼その凡て行なふところの理由を示したまはずとて汝かれにむかひて辯爭そふは何ぞや一四まことに神は一度二度と告示したまふなれど人これを曉らざるなり一五人熟睡する時または床に睡る時に夢あるひは夜の間の異象の中にて一六かれ人の耳をひらきその教ふるところを印して堅うし一七斯して人にその惡き業を離れしめ 傲慢を人の中より除き一八人の魂靈を護りて墓に至らしめず 人の生命を護りて劍にほろびざらしめたまふ一九人床にありて疼痛に攻られ その骨の中に絶ず戰鬪のあるあり二〇その氣食物を厭ひ その魂靈うまき物をも嫌ふ二一その肉は瘦おちて見えず その骨は見えざりし者までも顯露になり二二その魂靈は墓に近より その生命は滅ぼす者に近づく二三しかる時にもし彼とともに一箇の使者あり 千の中の一箇にして中保となり 正しき道を人に示さば二四神かれを憫れみて言給はん 彼を救ひて墓にくだること無らしめよ 我すでに收贖の物を得たりと二五その肉は小兒の肉よりも瑞々しくなり その若き時の形狀に歸らん二六かれ若し神に祷らば神かれを顧りみ 彼をしてその御面を喜こび見ることを得せしめたまはん 神は人の正義に報をなしたまふべし二七かれ人の前に歌ひて言ふ 我は罪を犯し正しきを枉たり 然ど報を蒙らず二八神わが魂靈を贖ひて墓に下らしめず わが生命光明を見ん二九そもそも神は是等のもろもろの事をしばしば人におこなひ三〇その魂靈を墓より牽かへし 生命の光明をもて彼を照したまふ三一ヨブよ耳を傾むけて我に聽け 請ふ默せよ我かたらん三二なんぢもし言ふべきことあらば我にこたへよ 請ふ語れ 我なんぢを義とせんと欲すればなり三三もし無ば我に聽け 請ふ默せよ 我なんぢに智慧を教へん

第三四章

一エリフまた答へて曰く二なんぢら智慧ある者よ我言を聽け 知識ある者よ我に耳を傾むけよ三口の食物を味はふごとく耳は言詞を辨まふ四われら自ら是非を究め われらもろともに善惡を明らかにせん五それヨブは言ふ 我は義し 神われに正しき審判を施こしたまはず六われは義しかれども僞る者とせらる 我は愆なけれどもわが身の矢創愈がたしと七何人かヨブのごとくならん 彼は罵言を水のごとくに飮み八惡き事を爲す者等と交はり 惡人とともに歩むなり九すなはち彼いへらく 人は神と親しむとも身に益なしと一〇然ばなんぢら心ある人々よ我に聽け 神は惡を爲すことを決めて無く 全能者は不義を行ふこと決めて無し一一却つて人の所爲をその身に報い 人をしてその行爲にしたがひて獲るところあらしめたまふ一二かならず神は惡き事をなしたまはず 全能者は審判を枉たまはざるなり一三たれかこの地を彼に委ねし者あらん 誰か全世界を定めし者あらん一四神もしその心を己にのみ用ひ その靈と氣息とを己に收回したまは

ば一五もろもろの血肉ことごとく亡び人も亦塵にかへるべし一六なんぢもし曉ることを得ば請ふ我に聽けわが言詞の聲に耳を側だてよ一七公義を惡む者あに世ををさむるを得んや なんぢあに至義き者を惡しとすべけんや一八王たる者にむかひて汝は邪曲なりと言ひ 牧伯たる者にむかひて汝らは惡しといふべけんや一九まして君王たる者をも偏視ず貧しき者に超て富る者をかへりみるごとき事をせざる者にむかひてをや 斯爲たまふは彼等みな同じくその御手の作るところなればなり二〇彼らは瞬く時間に死に 民は夜の間に滅びて消失せ 力ある者も人手によらずして除かる二一 それ神の目は人の道の上にあり 神は人の一切の歩履を見そなはす二二 惡を行なふ者の身を匿すべき黑暗も無く死陰も无し二三 神は人をして審判を受しむるまでに長くその人を窺がふに及ばず二四 權勢ある者をも査ぶることを須ひずして打ほろぼし他の人々を立て之に替たまふ二五 かくの如く彼らの所爲を知り 夜の間に彼らを覆がへしたまへば彼らは乃て滅ぶ二六人の觀るところにて彼等を惡人のごとく擊たまふ二七 是は彼ら背きて之に從はずその道を全たく顧みざるに因る二八 かれら是のごとくして遂に貧しき者の號呼を彼の許に達らしめ 患難者の號呼を彼に聽しむ二九 かれ平安を賜ふ時には誰か惡しと言ふことをえんや 彼面をかくしたまふ時には誰かこれを見るを得んや 一國におけるも一人におけるも凡て同じ三〇 かくのごとく邪曲なる者をして世を治むること無らしめ 民の機檻となることなからしむ三一 人は宜しく神に申すべし 我は已に懲しめられたり 再度惡き事を爲じ三二 わが見ざる所は請ふ我にをしへたまへ 我もし惡き事を爲たるならば重ねて之をなさじと三三 かれ豈なんぢの好むごとくに應報をなしたまはんや 然るに汝はこれを咎む 然ばなんぢ自ら之を選ぶべし 我は爲じ 汝の知るところを言へ三四 心ある人々は我に言ん 我に聽ところの智慧ある人々は言ん三五 ヨブの言ふ所は辨知なし その言詞は明哲からずと三六 ねがはくはヨブ終まで試みられんことを其は惡き人のごとくに應答をなせばなり三七 まことに彼は自己の罪に愆を加へ われらの中間にありて手を拍ちかつ言詞を繁くして神に逆らふ

第三五章

一 エリフまた答へて曰く二なんぢは言ふ 我が義しきは神に愈れりと なんぢ之を正しとおもふや三 すなはち汝いへらく是は我に何の益あらんや 罪を犯すに較ぶれば何の愈るところか有んと四 われ言詞をもて汝およびなんぢにそへる汝の友等に答へん五 天を仰ぎて見よ 汝の上なる高き空を望め六 なんぢ罪を犯すとも神に何の害か有ん 愆を熾んにするとも神に何を爲えんや七 汝正義かるとも神に何を與るを得んや 神なんぢの手より何をか受たまはん八 なんぢの惡は只なんぢに同じき人を損ぜん而已 なんぢの善は只人の子を益せんのみ九 暴虐の甚だしきに因て叫び 權勢ある者の腕に壓れて呼はる人々あり一〇 然れども一人として我を造れる神は何處にいますやといふ者なし 彼は人をして夜の中に歌を歌ふに至らしめ一一 地の獸畜よりも善

くわれらを教へ空の鳥よりも我らを智からしめたまふ者なり一二惡き者等の驕傲ぶるに因て斯のごとく人々叫べども應ふる者あらず一三虚しき語は神かならず之を聽たまはず全能者これを顧みたまはじ一四汝は我かれを見たてまつらずと言といへども審判は神の前にありこの故に汝彼を待べきなり一五今かれ震怒をもて罰することを爲ず罪愆を深く心に留たまはざる（が如くなる）に因て一六ヨブ口を啓きて虚しき事を述べ無知の言語を繁くす

第三六章一エリフまた言詞を繼て曰く二暫らく我に容せ我なんぢに示すこと有ん尚神のために言ふべき事あればなり三われ廣くわが知識を取り我の造化主に正義を歸せんとす四わが言語は眞實に虛僞ならず知識の完全き者なんぢの前にあり五視よ神は權能ある者にましませども何をも藐視めたまはずその了知の能力は大なり六惡しき者を生し存ず艱難者のために審判を行ひたまふ七義しき者に目を離さず位にある王等とともに永遠に坐せしめて之を貴くしたまふ八もし彼ら鏈索に繫がれ艱難の繩にかかる時は九彼らの所行と愆尤とを示してその驕れるを知せ一〇彼らの耳を開きて教を容れしめかつ惡を離れて歸れよと彼らに命じたまふ一一もし彼ら聽したがひて之に事へなば繁昌てその日を送り樂しくその年を渉らん一二若かれら聽したがはずば刀劍にて亡び知識を得ずして死なん一三しかれども心の邪曲なる者等は忿怒を蓄はへ神に縛しめらるるとも祈ることを爲ず一四かれらは年わかくして死亡せ男娼とその生命をひとしうせん一五神は艱難者を艱難によりて救ひ之が耳を虐遇によりて開きたまふ一六然ば神また汝を狹きところより出して狹からぬ廣き所に移したまふあらん而して汝の席に陳ぬる物は凡て肥たる物ならん一七今は惡人の鞫罰なんぢの身に充り審判と公義となんぢを執ふ一八なんぢ忿怒に誘はれて嘲笑に陷いらざるやう愼しめよ收贖の大なるが爲に自ら誤るなかれ一九なんぢの號叫なんぢを艱難の中より出さんや如何に力を盡すとも所益あらじ二〇世の人のその處より絕る其夜を慕ふなかれ二一愼しみて惡に傾むくなかれ汝は艱難よりも寧ろ之を取んとせり二二それ神はその權能をもて大なる事を爲したまふ誰か能く彼のごとくに教誨を垂んや二三たれか彼のためにその道を定めし者あらんや誰かなんぢは惡き事をなせりと言ふことを得ん二四なんぢ神の御所爲を讚歎ることを忘れざれこれ世の人の歌ひ崇むる所なり二五人みな之を仰ぎ觀る遠き方より人これを視たてまつるなり二六神は大なる者にいまして我儕かれを知たてまつらずその御年の數は計り知るべからず二七かれ水を細にして引あげたまへば霧の中に滴り出て雨となるに二八雲これを降せて人々の上に沛然に灌ぐなり二九たれか能く雲の舒展る所以またその幕屋の響く所以を了知んや三〇視よ彼その光明を自己の周圍に繞らしまた海の底をも蔽ひたまひ三一これらをもて民を鞫きまた是等をもて食物を豐饒に賜ひ三二電光をもてその兩手

を包み その電光に命じて敵を撃しめたまふ三三 その鳴聲かれを顯はし 家畜すらも彼の來ますを知らすなり

第三七章一 之がために わが心わななき その處を動き離る二 神の聲の響およびその口より出る轟聲を善く聽け三 これを天が下に放ち またその電光を地の極にまで至らせたまふ四 その後聲ありて打響き 彼威光の聲を放ちて鳴わたりたまふ その御聲聞えしむるに當りては電光を押へおきたまはず五 神奇しくも御聲を放ちて鳴わたり 我儕の知ざる大なる事を行ひたまふ六 かれ雪にむかひて地に降れと命じたまふ 雨すなはちその權能の大雨にも亦しかり七 斯かれ一切の人の手を封じたまふ 是すべての人にその御工作を知しめんがためなり八 また獸は穴にいりてその洞に居る九 南方の密室より暴風きたり 北より寒氣きたる一〇 神の氣吹によりて氷いできたり 水の寛狹くせらる一一 かれ水をもて雲に搭載せ また電光の雲を遠く散したまふ一二 是は神の導引によりて週る 是は彼の命ずるところを盡く世界の表面に爲んがためなり一三 その之を來らせたまふは或は懲罰のため あるひはその地のため 或は恩惠のためなり一四 ヨブよ是を聽け 立ちて神の奇妙き工作を考がへよ一五 神いかに是等に命を傳へ その雲の光明をして輝やかせたまふか汝これを知るや一六 なんぢ雲の平衡知識の全たき者の奇妙き工作を知るや一七 南風によりて地の穩かになる時なんぢの衣服は熱くなるなり一八 なんぢ彼とともに彼の堅くして鑄たる鏡のごとくなる蒼穹を張ることを能せんや一九 われらが彼に言ふべき事を我らに教へよ 我らは暗昧して言詞を列ぬること能はざるなり二〇 われ語ることありと彼に告ぐべけんや 人あに滅ぼさるることを望まんや二一 人いまは雲霄に輝やく光明を見ること能はず 然れど風きたりて之を吹清む二二 北より黄金いできたる 神には畏るべき威光あり二三 全能者はわれら測りきはむることを得ず 彼は能おほいなる者にいまし審判をも公義をも枉たまはざるなり二四 この故に人々かれを畏る 彼はみづから心に有智とする者をかへりみたまはざるなり

第三八章一 茲にヱホバ大風の中よりヨブに答へて宣まはく二 無智の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰ぞや三 なんぢ腰ひきからげて丈夫のごとくせよ 我なんぢに問ん 汝われに答へよ四 地の基を我が置たりし時なんぢは何處にありしや 汝もし穎悟あらば言へ五 なんぢ若知んには誰が度量を定めたりしや 誰が準縄を地の上に張りたりしや六 その基は何の上に奠れたりしや その隅石は誰が置たりしや七 かの時には晨星あひともに歌ひ 神の子等みな歡びて呼はりぬ八 海の水ながれ出で胎内より涌いでし時誰が戸をもて之を閉こめたりしや九 かの時我雲をもて之が衣服となし 黒暗をもて之が襁褓となし一〇 これに我法度を定め關および門を設けて一一 曰く此までは來るべし此を越べからず 汝の高浪ここに止まるべしと一二 なんぢ生れし日より以來朝にむかひて命を下せし事ありや また黎明にその所を知

しめ一三これをして地の縁を取へて惡き者をその上より振落さしめたりしや一四地は變りて土に印したるごとくに成り　諸の物は美はしき衣服のごとくに顯る一五また惡人はその光明を奪はれ高く擧たる手は折らる一六なんぢ海の泉源にいたりしことありや淵の底を歩みしことありや一七死の門なんぢのために開けたりしや　汝死蔭の門を見たりしや一八なんぢ地の廣を看きはめしや若これを盡く知ば言へ一九光明の在る所に往く路は孰ぞや黑暗の在る所は何處ぞや二〇なんぢ之をその境に導びき得るやその家の路を知をるや二一なんぢ之を知ならん汝はかの時すでに生れをりまた汝の經たる日の數も多ければなり二二なんぢ雪の庫にいりしや雹の庫を見しや二三これ我が艱難の時にためにに蓄はへ戰爭および戰鬪の日のために蓄はへ置くものなり二四光明の發散る道東風の地に吹わたる所の路は何處ぞや二五誰が大雨を灌ぐ水路を開き雷電の光の過る道を開き二六人なき地にも人なき荒野にも雨を降し二七荒かつ廢れたる處々を潤ほしかつ若菜蔬を生出しむるや二八雨に父ありや露の珠は誰が生る者なるや二九氷は誰が胎より出るや空の霜は誰が產むところなるや三〇水かたまりて石のごとくに成り淵の面こほる三一なんぢ昴宿の鏈索を結びうるや參宿の繫繩を解うるや三二なんぢ十二宮をその時にしたがひて引いだし得るやまた北斗とその子星を導びき得るや三三なんぢ天の常經を知るや天をして其權力を地に施こさしむるや三四なんぢ聲を雲に擧げ滂沛の水をして汝を掩はしむるを得るや三五なんぢ閃電を遣はして往しめなんぢに答へて我儕は此にありと言しめ得るや三六胸の中の智慧は誰が與へし者ぞ心の内の聰明は誰が授けし者ぞ三七たれか能く智慧をもて雲を數へんやたれか能く天の瓶を傾むけ三八塵をして一塊に流れあはしめ土塊をしてあひかたまらしめんや三九なんぢ牝獅子のために食物を獵やまた小獅子の食氣を滿すや四〇その洞穴に伏し森の中に隱れ伺がふ時なんぢこの事を爲うるや四一また鴉の子神にむかひて呼はり食物なくして徘徊る時鴉に餌を與ふる者は誰ぞや

第三九章一なんぢ岩間の山羊が子を產む時をしるやまた麀鹿の產に臨むを見しや二なんぢ是等の在胎の月を數へうるやまた是等が產む時を知るや三これらは身を鞠めて子を產みその痛苦を出す四またその子は強くなりて野に育ち出ゆきて再たびその親にかへらず五誰が野驢馬を放ちて自由にせしや誰が野驢馬の繫繩を解しや六われ野をその家となし荒野をその住所となせり七是は邑の喧閙を賤しめ馭者の號呼を聽いれず八山を走まはりて草を食ひ各種の青き物を尋ぬ九兕肯て汝に事へなんぢの飼草槽の傍にとどまらんや一〇なんぢ兕に綱附て阡陌をあるかせ得んや是あに汝にしたがひて谷に馬鈀を牽んや一一その力おほいなればとて汝これに恃まんやまたなんぢの工事をこれに任せんや一二なんぢこれにたよりて己が穀物を運びかへらせ之を打禾場にあつめしめんや一三駝鳥は歡然にその翼を皷ふ然

どもその羽と毛とはあに鶴にしかんや一四是はその卵を土の中に棄おきこれを砂の中にて暖たまらしめ一五足にてその潰さるべきと野の獸のこれを踐むべきとを思はず一六これはその子に情なくして宛然おのれの子ならざるが如くしその劬勞の空しくなるも繋念ところ無し一七是は神これに智慧を授けず穎悟を與へざるが故なり一八その身をおこして走るにおいては馬をもその騎手をも嘲けるべし一九なんぢ馬に力を與へしやその頸に勇ましき鬣を粧ひしや二〇なんぢ之を蝗蟲のごとく飛しむるやその嘶なく聲の響は畏るべし二一谷を跑爬て力に誇り自ら進みて兵士に向ふ二二懼るることを笑ひて驚ろくところ無く劍にむかふとも退ぞかず二三矢筒その上に鳴り鎗に矛あひきらめく二四猛りつ狂ひつ地を一呑にし喇叭の聲鳴わたるも立どまる事なし二五喇叭の鳴ごとにハーハーと言ひ遠方より戰鬪を嗅つけ將帥の大聲および吶喊聲を聞しる二六鷹の飛かけりその羽翼を舒て南に向ふは豈なんぢの智慧によるならんや二七鷲の翔のぼり高き處に巣を營なむは豈なんぢの命令に依んや二八これは岩の上に住所を構へ岩の尖所または峻險き所に居り二九其處よりして攫むべき物をうかがふその目のおよぶところ遠し三〇その子等もまた血を吸ふ凡そ殺されし者のあるところには是そこに在り

第四〇章一ヱホバまたヨブに對へて言たまはく二非難する者ヱホバと爭はんとするや神と論ずる者これに答ふべし三ヨブ是においてヱホバに答へて曰く四嗚呼われは賤しき者なり何となんぢに答へまつらんや唯手をわが口に當んのみ五われ已に一度言たり復いはじ已に再度せり重ねて述じ六是に於てヱホバまた大風の中よりヨブに應へて言たまはく七なんぢ腰ひきからげて丈夫のごとくせよ我なんぢに問んなんぢ我にこたへよ八なんぢ我審判を廢んとするや我を非として自身を是とせんとするや九なんぢ神のごとき腕ありや神のごとき聲をもて轟きわたらんや一〇されば なんぢ威光と尊貴とをもて自ら飾り榮光と華美とをもて身に纏へ一一なんぢの溢るる震怒を洩し高ぶる者を視とめて之をことごとく卑くせよ一二すなはち高ぶる者を見てこれを盡く鞠ませまた惡人を立所に踐つけ一三これを塵の中に埋めこれが面を隱れたる處に閉こめよ一四さらば我もなんぢを讚てなんぢの右の手なんぢを救ひ得ると爲ん一五今なんぢ我がなんぢとともに造りたりし河馬を視よ是は牛のごとく草を食ふ一六觀よその力は腰にありその勢力は腹の筋にあり一七その尾の搖く樣は香柏のごとくその腿の筋は彼此に盤互ふ一八その骨は銅の管ごとくその肋骨は鐵の棒のごとし一九これは神の工の第一なる者にして之を造りし者これに劍を賦けたり二〇山もこれがために食物を產出しもろもろの野獸そこに遊ぶ二一これは蓮の樹の下に臥し葦蘆の中または沼の裏に隱れをる二二蓮の樹その蔭をもてこれを覆ひまた河の柳これを環りかこむ二三たとひ河荒くなるとも驚ろかずヨルダンその口に注ぎかかるも惶て

ず二四 その目の前にて誰か之を執ふるを得ん 誰か羂をその鼻に貫ぬくを得ん

第四一章一 なんぢ鈎をもて鱷を釣いだすことを得んや その舌を糸にひきかくることを得んや二 なんぢ葦の繩をその鼻に通しまた鈎をその齶に衝とほし得んや三 是あに頻になんぢに願ふことをせんや 柔かになんぢに言談んや四 あに汝と契約を爲んやなんぢこれを執て永く僕と爲しおくを得んや五 なんぢ鳥と戯むるる如くこれとたはむれ また汝の婦人等のために之を繋ぎおくを得んや六 また漁夫の社會これを商貨と爲して商賣人の中間に分たんや七 なんぢ漁叉をもてその皮に滿し 魚矛をもてその頭を衝とほし得んや八 手をこれに下し見よ 然ばその戰鬪をおぼえて再びこれを爲ざるべし九 視よその望は虛し 之を見てすら倒るるに非ずや一〇 何人も之に激する勇氣あるなし 然ば誰かわが前に立うる者あらんや一一 誰か先に我に與へしところありて我をして之に酬いしめんとする者あらん 普天の下にある者はことごとく我有なり一二 我また彼者の肢體とその著るしき力とその美はしき身の構造とを言では措じ一三 誰かその外甲を剝ん 誰かその雙齶の間に入ん一四 誰かその面の戶を開きえんや その周圍の齒は畏るべし一五 その並列る鱗甲は之が誇るところ その相闔たる樣は堅く封じたるがごとく一六 此と彼とあひ接きて風もその中間にいるべからず一七 一々あひ連なり堅く膠て離すことを得ず一八 嚔すれば即はち光發す その目は曙光の眼瞼(を開く)に似たり一九 その口よりは炬火いで火花發し二〇 その鼻の孔よりは煙いできたりて宛然葦を焚く釜のごとし二一 その氣息は炭火を熱し 火燄その口より出づ二二 力氣その頸に宿る 懼るる者その前に彷徨まよふ二三 その肉の片は密に相連なり 堅く身に着て動かす可らず二四 その心の堅硬こと石のごとく その堅硬こと下磨のごとし二五 その身を興す時は勇士も戰慄き 恐怖によりて狼狽まどふ二六 劍をもて之を擊とも利ず 鎗も矢も漁叉も用ふるところ無し二七 是は鐵を見ること稿のごとくし 銅を見ること朽木のごとくす二八 弓箭もこれを逃しむること能はず 投石機の石も稿屑と見做る二九 棒も是には稿屑と見ゆ 鎗の閃めくを是は笑ふ三〇 その下腹には瓦礫の碎片を連ね 泥の上に麥打車を引く三一 淵をして鼎のごとく沸かへらしめ 海をして香 油の釜のごとくならしめ三二 己が後に光る道を遺せば淵は白髮をいただけるかと疑がはる三三 地の上には是と並ぶ者なし 是は恐怖なき身に造られたり三四 是は一切の高大なる者を輕視ず 誠に諸の誇り高ぶる者の王たるなり

第四二章一 ヨブ是に於てヱホバに答へて曰く二 我知る汝は一切の事をなすを得たまふ また如何なる意志にても成あたはざる無し三 無知をもて道を蔽ふ者は誰ぞや 斯われは自ら了解らざる事を言ひ 自ら知ざる測り難き事を述たり四 請ふ聽たまへ 我言ふところあらん 我なんぢに問まつらん 我に答へたまへ五 われ汝の事を耳にて聞ゐたりしが今は目をもて汝を見たてまつる六

是をもて我みづから恨み 塵灰の中にて悔ゆ 七 ヱホバ是等の言語をヨブに語りたまひて後ヱホバ、テマン人エリパズに言たまひけるは我なんぢと汝の二人の友を怒る 其はなんぢらが我に關て言述べたるところはわが僕ヨブの言たることのごとく正當からざればなり 八 然ば汝ら牡牛七頭 牡羊七頭を取てわが僕ヨブに至り汝らの身のために燔祭を獻げよ わが僕ヨブなんぢらのために祈らん われかれを嘉納べければ之によりて汝らの愚を罰せざらん 汝らの我について言述たるところは我僕ヨブの言たることのごとく正當からざればなり 九 是においてテマン人エリパズ、シユヒ人ビルダデ、ナアマ人ゾパル往てヱホバの自己に宣まひしごとく爲ければヱホバすなはちヨブを嘉納たまへり 一〇 ヨブその友のために祈れる時 ヱホバ、ヨブの艱難をときて舊に復ししかしてヱホバつひにヨブの所有物を二倍に増たまへり 一一 是において彼の諸の兄弟 諸の姉妹およびその舊相識る者等ことごとく來りて彼とともにその家にて飮食を爲しかつヱホバの彼に降したまひし一切の災難につきて彼をいたはり慰さめ また各 金一ケセタと金の環一箇を之に贈れり 一二 ヱホバかくのごとくヨブをめぐみてその終を初よりも善したまへり 即ち彼は綿羊一萬 四千匹 駱駝六千匹 牛一千軛 牝驢馬一千匹を有り 一三 また男子七人 女子三人ありき 一四 かれその第一の女をエミマと名け第二をケジアと名け 第三をケレンハツプクと名けたり 一五 全國の中にてヨブの女子等ほど美しき婦人は見えざりきその父之にその兄弟等とおなじく產業をあたへたり 一六 この後ヨブは百 四十年いきながらへてその子その孫と四代までを見たり 一七 かくヨブは年老い日滿て死たりき

詩篇

第一篇一 惡きものの謀略にあゆまず つみびとの途にたたず 嘲るものの座にすわらぬ者はさいはひなり二 かかる人はヱホバの法をよろこびて日も夜もこれをおもふ三 かかる人は水流のほとりにうゑし樹の期にいたりて實をむすび 葉もまた凋まざるごとく その作ところ皆さかえん四 あしき人はしからず 風のふきさる粃糠のごとし五 然ばあしきものは審判にたへず罪人は義きものの會にたつことを得ざるなり六 そはヱホバはただしきものの途をしりたまふ されど惡きものの途はほろびん

第二篇一 何なればもろもろの國人はさわぎたち諸民はむなしきことを謀るや二 地のもろもろの王はたちかまへ群伯はともに議りヱホバとその受膏者とにさからひていふ三 われらその械をこぼち その繩をすてんと四 天に坐するもの笑ひたまはん 主かれらを嘲りたまふべし五 かくて主は忿恚をもてものいひ大なる怒をもてかれらを怖まどはしめて宣給ふ六 しかれども我わが王をわがきよきシオンの山にたてたりと七 われ詔命をのべんヱホバわれに宣まへり なんぢはわが子なり今日われなんぢを生り八 われに求めよ さらば汝にもろもろの國を嗣業としてあたへ地の極をなんぢの有としてあたへん九 汝くろがねの杖をもて彼等をうちやぶり陶工のうつはもののごとくに打碎かんと一〇 されば汝等もろもろの王よ さとかれ地の審士輩をしへをうけよ一一 畏をもてヱホバにつかへ戰慄をもてよろこべ一二 子にくちつけせよ おそらくはかれ怒をはなちなんぢら途にほろびんその忿恚はすみやかに燃べければなり すべてかれに依頼むものは福ひなり

第三篇 ダビデその子アブサロムを避しときのうた

一 ヱホバよ我にあたする者のいかに蔓延れるや 我にさからひて起りたつもの多し二 わが霊魂をあげつらひて かれは神にすくはるることなしといふ者ぞおほきセラ三 されどヱホバよ なんぢは我をかこめる盾わが榮わが首をもたげ給ふものなり四 われ聲をあげてヱホバによばはればその聖山より我にこたへたまふセラ五 われ臥していねまた目さめたり ヱホバわれを支へたまへばなり六 われをかこみて立かまへたる千萬の人をも我はおそれじ七 ヱホバよねがはくは起たまへ わが神よわれを救ひたまへ なんぢ曩にわがすべての仇の頰骨をうち惡きものの齒ををりたまへり八 救はヱホバにあり ねがはくは恩惠なんぢの民のうへに在んことをセラ

第四篇 琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの歌

一 わが義をまもりたまふ神よ ねがはくはわが呼るときに答へたまへ わがなやみたる時なんぢ我をくつろがせたまへり ねがはくは我をあはれみ わが祈をききたまへ二 人の子よなんぢらわが榮をはぢしめて幾何時をへんとするか なんぢらむなしき事をこのみ虚偽をしたひていくそのときを經んとするかセラ三 然ど

なんぢら知れ ヱホバは神をうやまふ人をわかちて己につかしめたまひしことを われヱホバによばはらば聽たまはん四 なんぢら愼みをののきて罪ををかすなかれ 臥床にておのが心にかたりて默せセラ五 なんぢら義のそなへものを献てヱホバに依頼め六 おほくの人はいふたれか嘉事をわれらに見するものあらんやと ヱホバよねがはくは聖顔の光をわれらの上にのぼらせたまへ七 なんぢのわが心にあたへたまひし歡喜はかれらの穀物と酒との豊かなる時にまさりき八 われ安然にして臥またねぶらん ヱホバよわれを獨にて坦然にをらしむるものは汝なり

第五篇 簫にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは我がことばに耳をかたむけ わが思にみこころを注たまへ二 わが王よわが神よ わが號呼のこゑをききたまへ われ汝にいのればなり三 ヱホバよ朝になんぢわが聲をききたまはん 我あしたになんぢの爲にそなへして俟望むべし四 なんぢは惡きことをよろこびたまふ神にあらず 惡人はなんぢの賓客たるを得ざるなり五 たかぶる者はなんぢの目前にたつをえずなんぢはすべて邪曲をおこなふものを憎みたまふ六 なんぢは虚偽をいふ者をほろぼしたまふ 血をながすものと詭計をなすものとは ヱホバ憎みたまふなり七 然どわれは豊かなる仁 慈によりてなんぢの家にいらん われ汝をおそれつつ聖宮にむかひて拜まん八 ヱホバよ願くはわが仇のゆゑになんぢの義をもて我をみちびき なんぢの途をわが前になほくしたまへ九 かれらの口には眞實なく その衷はよこしま その喉はあばける墓 その舌はへつらひをいへばなり一〇 神よねがはくはかれらを刑なひ その謀略によりてみづから仆れしめ その愆のおほきによりて之をおひいだしたまへ かれらは汝にそむきたればなり一一 されど凡てなんぢに依頼む者をよろこばせ永遠によろこびよばはらせたまへ なんぢ斯る人をまもりたまふなり 名をいつくしむ者にもなんぢによりて歡喜をえしめたまへ一二 ヱホバよなんぢは義 者にさいはひし盾のごとく恩惠をもて之をかこみたまはん

第六篇 八音ある琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは忿恚をもて我をせめ烈しき怒をもて我をこらしめたまふなかれ二 ヱホバよわれを憐みたまへ われ萎みおとろふなり ヱホバよ我を醫したまへ わが骨わななきふるふ三 わが靈魂さへも甚くふるひわななく ヱホバよかくて幾何時をへたまふや四 ヱホバよ歸りたまへ わがたましひを救ひたまへ なんぢの仁慈の故をもて我をたすけたまへ五 そは死にありては汝をおもひいづることなし 陰府にありては誰かなんぢに感謝せん六 われ歎息にてつかれたり 我よなよな床をただよはせ涙をもてわが衾をひたせり七 わが目うれへによりておとろへ もろもろの仇ゆゑに老ぬ八 なんぢら邪曲をおこなふ者ことごとく我をはなれよ ヱホバはわが泣こゑをききたまひたり九 ヱホバわが懇求をききたまへり ヱホバわが祈をうけたまはん一〇 わがもろもろの仇ははぢて大におぢまどひ あわただしく恥てしりぞき

ぬ

第七篇

ベニヤミンの人クシの言につきダビデ、ヱホバに對ひてうたへるシガヨンの歌

一 わが神ヱホバよわれ汝によりたのむ 願くはすべての逐せまるものより我をすくひ我をたすけたまへ 二 おそらくはかれ獅の如くわが靈魂をかきやぶり援るものなき間にさきてずたずたに爲ん 三 わが神ヱホバよもしわれ此事をなししならんには わが手によこしまの纏りをらんには 四 故なく仇ずるものをさへ助けしに禍害をもてわが友にむくいしならんには 五 よし仇人わがたましひを逐とらへ わが生命をつちにふみにじりわが榮を塵におくともその作にまかせよセラ 六 ヱホバよなんぢの怒をもて起わが仇のいきどほりにむかひて立たまへ わがために目をさましたまへ なんぢは審判をおほせ出したまへり 七 もろもろの國人の會がなんぢのまはりに集はしめ 其上なる高座にかへりたまへ 八 ヱホバはもろもろの民にさばきを行ひたまふ ヱホバよわが正義とわが衷なる完全とにしたがひて我をさばきたまへ 九 ねがはくは惡きものの曲事をたちて義しきものを堅くしたまへ ただしき神は人のこころと腎とをさぐり知たまふ 一〇 わが盾をとるものは心のなほきものをすくふ神なり 一一 神はただしき審士ひごとに忿恚をおこしたまふ神なり 一二 人もしかへらずば神はその劍をとぎ その弓をはりてかまへ 一三 これに死の器をそなへその矢に火をそへたまはん 一四 視よその人はよこしまを産んとしてくるしむ 殘害をはらみ虚僞をうむなり 一五 また坑をほりてふかくし己がつくれるその溝におちいれり 一六 その殘害はおのが首にかへり その強暴はおのが頭上にくだらん 一七 われその義によりてヱホバに感謝し いとたかきヱホバの名をほめうたはん

第八篇

ギデトの琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの歌

一 われらの主ヱホバよなんぢの名は地にあまねくして尊きかな その榮光を天におきたまへり 二 なんぢは嬰兒ちのみごの口により力の基をおきて敵にそなへたまへり こは仇人とうらみを報るものを鎭靜めんがためなり 三 我なんぢの指のわざなる天を觀なんぢの設けたまへる月と星とをみるに 四 世人はいかなるものなればこれを聖念にとめたまふや 人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや 五 只すこしく人を神よりも卑つくりて榮と尊貴とをかうぶらせ 六 またこれに手のわざを治めしめ萬物をその足下におきたまへり 七 すべての羊うしまた野の獸 八 そらの鳥うみの魚もろもろの海路をかよふものをまで皆しかなせり 九 われらの主ヱホバよなんぢの名は地にあまねくして尊きかな

第九篇

ムツラベン(調子の名)にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 われ心をつくしてヱホバに感謝し そのもろもろの奇しき事迹をのべつたへん 二 われ汝によりてたのしみ且よろこばん

至上者よなんぢの名をほめうたはん三 わが仇しりぞくとき蹎きたふれて御前にほろぶ四 なんぢわが義とわが訟とをまもりたまへばなり なんぢはだしき審判をしつつ寶座にすわりたまへり五 またもろもろの國をせめ惡きものをほろぼし世々かぎりなくかれらが名をけしたまへり六 仇はたえはてて世々あれすたれたり 汝のくつがへしたまへるもろもろの邑はうせてその跡だにもなし七 ヱホバはとこしへに聖位にすわりたまふ 審判のためにその寶座をまうけたまひたり八 ヱホバは公義をもて世をさばき 直をもてもろもろの民に審判をおこなひたまはん九 ヱホバは虐げらるるものの城また難みのときの城なり一〇 聖名をしるものはなんぢに依頼ん そはヱホバよなんぢを尋るものの棄られしこと斷てなければなり一一 シオンに住たまふヱホバに對ひてほめうたへ その事迹をもろもろの民のなかにのべつたへよ一二 血を問糺したまふものは苦しむものを心にとめてその號呼をわすれたまはず一三 ヱホバよ我をあはれみたまへ われを死の門よりすくひいだしたまへる者よ ねがはくは仇人のわれを難むるを視たまへ一四 さらば我なんぢのすべての頌美をのぶるを得またシオンのむすめの門にてなんぢの救をよろこばん一五 もろもろの國民はおのがつくれる阱におちいり そのかくしまうけたる網におのが足をとらへらる一六 ヱホバは己をしらしめ審判をおこなひたまへり あしき人はおのが手のわざなる羂にかかれり ヒガイオン セラ一七 あしき人は陰府にかへるべし 神をわするるもろもろの國民もまたしかからん一八 貧者はつねに忘らるるにあらず苦しむものの望はとこしへに滅ぶるにあらず一九 ヱホバよ起たまへ ねがはくは人にえしめたまふなかれ御前にてもろもろのくにびとに審判をうけしめたまへ二〇 ヱホバよ願くはかれらに懼をおこさしめたまへ もろもろの國民におのれただ人なることを知しめたまへ セラ

第一〇篇

一 ああヱホバよ何ぞはるかに立たまふや なんぞ患難のときに匿れたまふや二 あしき人はたかぶりて苦しむものを甚だしくせむ かれらをそのくはだての謀略にとらはれしめたまへ三 あしきひとは己がこころの欲望をほこり貪るものを祝してヱホバをかろしむ四 あしき人はほこりかにいふ 神はさぐりもとむることをせざるなりと凡てそのおもひに神なしとせり五 かれの途はつねに堅く なんぢの審判はその眼よりはなれてたかし 彼はそのもろもろの敵をくちさきらにて吹く六 かくて己がこころの中にいふ 我うごかさるることなく世々われに禍害なかるべしと七 その口にはのろひと虚偽としへたげとみち その舌のしたには殘害とよこしまとあり八 かれは村里のかくれたる處にをり隱やかなるところにて罪なきものをころす その眼はひそかに倚仗なきものをうかがひ九 窟にをる獅のごとく潜みまち苦しむものをとらへんために伏ねらひ 貧しきものをその網にひきいれてとらふ一〇 また身をかがめて蹲まるその強勁によりて依仗なきものは仆る一一 かれ心のうちにいふ 神はわすれたり神はそ

の面をかくせり神はみることなかるべしと一二 ヱホバよ起たまへ 神よ手をあげたまへ 苦しむものを忘れたまふなかれ一三 いかなれば惡きもの神をいやしめて心中になんぢ探求むることをせじといふや一四 なんぢは鑒たまへりその殘害と怨恨とを見てこれに手をくだしたまへり 倚仗なきものは身をなんぢに委ぬなんぢは昔しより孤子をたすけたまふ者なり一五 ねがはくは惡きものの臂ををりたまへ あしきものの惡事を一つだにのこらぬまでに探究したまへ一六 ヱホバはいやとほながに王なりもろもろの國民はほろびて神の國より跡をたちたり一七 ヱホバよ汝はくるしむものの懇求をききたまへり その心をかたくしたまはん なんぢは耳をかたぶけてきき一八 孤子と虐げらる者とのために審判をなし地につける人にふたたび恐嚇をもちひざらしめ給はん

第一一篇 うたのかみに謳はしめたるダビデのうた

一 われヱホバに依頼めりなんぢら何ぞわが霊魂にむかひて鳥のごとくなんぢの山にのがれよといふや二 視よあしきものは暗處にかくれ心なほきものを射んとて弓をはり絃に矢をつがふ三 基みなやぶれたらんには義者なにをなさんや四 ヱホバはその聖宮にいます ヱホバの寶座は天にありその目はひとのこを鑒その眼瞼はかれらをこころみたまふ五 ヱホバは義者をこころむそのみこころは惡きものと強暴をこのむ者とをにくみ六 羂をあしきもののうへに降したまはん火と硫磺ともゆる風とはかれらの酒杯にうくべきものなり七 ヱホバはただしき者にして義きことを愛したまへばなり 直きものはその聖顏をあふぎみん

第一二篇 八音にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ああヱホバよ助けたまへ そは神をうやまふ人はたえ誠あるものは人の子のなかより消失るなり二 人はみな虚偽をもてその隣とあひかたり滑なるくちびると貳心とをもてものいふ三 ヱホバはすべての滑なるくちびると大なる言をかたる舌とをほろぼし給はん四 かれらはいふ われら舌をもて勝をえん この口唇はわがものなり誰かわれらに主たらんやと五 ヱホバのたまはく 苦しむもの掠められ貧しきもの歎くがゆゑに我いま起てこれをその慕ひもとむる平安におかん六 ヱホバの言はきよきことばなり 地にまうけたる爐にてねり七次きよめたる白銀のごとし七 ヱホバよ汝はかれらをまもり之をたすけてとこしへにこの類より免れしめたまはん八 人の子のなかに穢しきことの崇めらるるときは惡者ここやかしこにあるくなり

第一三篇 伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ああヱホバよ かくて幾何時をへたまふや 汝とこしへに我をわすれたまふや 聖顏をかくしていくそのときを歴たまふや二 われ心のうちに終日かなしみをいだき籌畫をたましひに用ひて幾何時をふべきか わが仇はわがうへに崇められて幾何時をふべきか三 わが神ヱホバよ我をかへりみて答をなしたまへ わが目をあきらかにしたまへ 恐らくはわれ死の睡につかん四 おそらく

はわが仇いはん我かれに勝りと おそらくはわが敵わがうごかさるるによりて喜ばん五 されど我はなんぢの憐憫によりたのみわが心はなんぢの救によりてよろこばん六 ヱホバはゆたかに我をあしらひたまひたれば われヱホバに對ひてうたはん

第一四篇 うたのかみに謳はしめたるダビデのうた

一 愚なるものは心のうちに神なしといへり かれらは腐れたりかれらは憎むべき事をなせり 善をおこなふ者なし二 ヱホバ天より人の子をのぞみみて悟るもの神をたづぬる者ありやと見たまひしに三 みな逆きいでてことごとく腐れたり 善をなすものなし一人だになし四 不義をおこなふ者はみな智覺なきか かれらは物くふごとくわが民をくらひ またヱホバをよぶことをせざるなり五 視よかかる時かれらは大におそれたり 神はただしきものの類のなかに在せばなり六 なんぢらは苦しめるものの謀略をあなどり辱かしむ されどヱホバはその避所なり七 ねがはくはシオンよりイスラエルの救のいでんことを ヱホバその民のとらはれたるを返したまふときヤコブはよろこびイスラエルは樂まん

第一五篇 ダビデのうた

一 ヱホバよなんぢの帷幄のうちにやどらん者はたれぞ なんぢの聖山にすまはんものは誰ぞ二 直くあゆみ義をおこなひ そのこころに眞實をいふものぞその人なる三 かかる人は舌をもてそしらず その友をそこなはず またその隣をはぢしむる言をあげもちひず四 惡にしづめるものを見ていとひかろしめ ヱホバをおそるるものをたふとび 誓ひしことはおのれに禍害となるも變ることなし五 貨をかして過たる利をむさぼらず 賄賂をいれて無辜をそこなはざるなり 斯ることどもを行ふものは永遠にうごかさるることなかるべし

第一六篇 ダビデがミクタムの歌

一 神よねがはくは我を護りたまへ 我なんぢに依頼む二 われヱホバにいへらくなんぢはわが主なり なんぢのほかにわが福祉はなしと三 地にある聖徒はわが極めてよろこぶ勝れしものなり四 ヱホバにかへて他神をとるものの悲哀はいやまさん 我かれらがささぐる血の御酒をそそがず その名を口にとなふることをせじ五 ヱホバはわが嗣業またわが酒杯にうくべき有なり なんぢはわが所領をまもりたまはん六 準繩はわがために樂しき地におちたり 宜われよき嗣業をえたるかな七 われは訓諭をさづけたまふヱホバをほめまつらん 夜はわが心われををしふ八 われ常にヱホバをわが前におけり ヱホバわが右にいませばわれ動かさるることなかるべし九 このゆゑにわが心はたのしみ わが榮はよろこぶ わが身もまた平安にをらん一〇 そは汝わがたましひを陰府にすておきたまはず なんぢの聖者を墓のなかに朽しめたまはざる可ればなり一一 なんぢ生命の道をわれに示したまはん なんぢの前には充足るよろこびあり なんぢの右にはもろもろの快樂とこしへにあり

第一七篇 ダビデの祈祷

一ああヱホバよ公義をききたまへ わが哭聲にみこころをとめたまへ いつはりなき口唇よりいづる我がいのりに耳をかたぶけたまへ二ねがはくはわが宣告みまへよりいでてなんぢの目公平をみたまはんことを三なんぢわが心をこころみ また夜われにのぞみたまへり 斯てわれを糺したまへど我になにの惡念あるをも見出たまはざりき わが口はつみを犯すことなからん四人の行爲のことをいはば我なんぢのくちびるの言によりて暴るものの途をさけたり五わが歩はかたくなんぢの途にたちわが足はよろめくことなかりき六神よなんぢ我にこたへたまふ 我なんぢをよべり ねがはくは汝の耳をかたぶけてわが陳るところをききたまへ七なんぢに依賴むものを右手をもて仇するものより救ひたまふ者よ ねがはくはなんぢの妙なる仁慈をあらはしたまへ八願くはわれを瞳のごとくにまもり汝のつばさの蔭にかくし九我をなやむるあしき者また我をかこみてわが命をそこなはんとする仇よりのがれしめ給へ一〇かれらはおのが心をふさぎ その口をもて誇かにものいへり一一いづこにまれ往ところにてわれらを打圍み われらを地にたふさんと目をとむ一二かれは抓裂んといらだつ獅のごとく隱やかなるところに潜みまつ壯獅のごとし一三ヱホバよ起たまへ ねがはくはかれに立對ひてこれをたふし御劍をもて惡きものよりわが靈魂をすくひたまへ一四ヱホバよ手をもて人より我をたすけいだしたまへ おのがうくべき有をこの世にてうけ 汝のたからにてその腹をみたさるる世人より我をたすけいだし給へ かれらはおほくの子にあきたりその富ををさなごに遺す一五されどわれは義にありて聖顏をみ目さむるとき容光をもて飽足ることをえん

第一八篇 伶長にうたはしめたるヱホバの僕ダビデの歌、このうたの詞はもろもろの仇およびサウルの手より救れしときヱホバに對ひてうたへるなり云く

一ヱホバわれの力よ われ切になんぢを愛しむ二ヱホバはわが巖 わが城 われをすくふ者 わがよりたのむ神 わが堅固なるいはほ わが盾 わがすくひの角 わがたかき櫓なり三われ讃稱ふべきヱホバをよびて仇人よりすくはるることをえん四死のつな我をめぐり惡のみなぎる流われをおそれしめたり五陰間のなは我をかこみ死のわな我にたちむかへり六われ窮苦のうちにありてヱホバをよび又わが神にさけびたり ヱホバはその宮よりわが聲をききたまふ その前にてわがよびし聲はその耳にいれり七このときヱホバ怒りたまひたれば地はふるひうごき山の基はゆるぎうごきたり八烟その鼻よりたち火その口よりいでてやきつくし炭はこれがために燃あがれり九ヱホバは天をたれて臨りたまふその足の下はくらきこと甚だし一〇かくてケルブに乘りてとび風のつばさにて翔り一一闇をおほひとなし水のくらきとそらの密雲とをそのまはりの幕となしたまへり一二そのみまへの光輝よりくろくもをへて雹ともえたる炭とふりきたれり一三ヱホバは天に雷鳴をとどろかせたまへり 至上者のこゑいでて雹

ともえたる炭とふりきたり一四 ヱホバ矢をとばせてかれらを打ちらし數しげき電光をはなちてかれらをうち敗りたまへり一五 ヱホバよ斯るときになんぢの叱咤となんぢの鼻のいぶきとによりて水の底みえ地の基あらはれいでたり一六 ヱホバはたかきより手をのべ我をとりて大水よりひきあげ一七 わがつよき仇とわれを憎むものとより我をたすけいだしたまへり かれらは我にまさりて最強かりき一八 かれらはわが災害の日にせまりきたれり然どヱホバはわが支柱となりたまひき一九 ヱホバはわれを悦びたまふがゆゑにわれをたづさへ廣き處にだして助けたまへり二〇 ヱホバはわが正義にしたがひて恩賜をたまひ わが手のきよきにしたがひて報賞をたれたまへり二一 われヱホバの道をまもり惡をなしてわが神よりはなれしことなければなり二二 そのすべての審判はわがまへにありて われその律法をすてしことなければなり二三 われ神にむかひて缺るところなく己をまもりて不義をはなれたり二四 この故にヱホバはわがただしきとその目前にわが手のきよきとにしたがひて我にむくいをなし給へり二五 なんぢ憐憫あるものには憐みあるものとなり完全ものには全きものとなり二六 きよきものには潔きものとなり僻むものにはひがむ者となりたまふ二七 そは汝くるしめる民をすくひたまへど高ぶる目をひくくしたまふ可ればなり二八 なんぢわが燈火をともし給ふべければなり わが神ヱホバわが暗をてらしたまはん二九 我なんぢによりて軍の中をはせとほり わが神によりて垣ををどりこゆ三〇 神はしもその途またくヱホバの言はきよし ヱホバはすべて依賴むものの盾なり三一 そはヱホバのほかに神はたれぞや われらの神のほかに巖はたれぞや三二 神はちからをわれに帶しめ わが途を全きものとなしたまふ三三 神はわが足を麀のあしのごとくし我をわが高き處にたたせたまふ三四 神はわが手をたたかひにならはせてわが臂に銅弓をひくことを得しめたまふ三五 又なんぢの救の盾をわれにあたへたまへり なんぢの右手われをささへなんぢの謙卑われを大ならしめたまへり三六 なんぢわが歩むところを寬濶ならしめたまひたれば わが足ふるはざりき三七 われ仇をおひてこれに追及かれらのほろぶるまでは歸ることをせじ三八 われかれらを擊てたつことを得ざらしめん かれらはわが足の下にたふるべし三九 そはなんぢ戰爭のために力をわれに帶しめ われにさからひておこりたつ者をわが下にかがませたまひたればなり四〇 我をにくむ者をわが滅しえんがために汝またわが仇の背をわれにむけしめ給へり四一 かれら叫びたれども救ふものなく ヱホバに對ひてさけびたれども答へたまはざりき四二 我かれらを風のまへの塵のごとくに搗碎きちまたの坭のごとくに打棄たり四三 なんぢわれを民のあらそひより助けいだし我をたててもろもろの國の長となしたまへり わがしらざる民われにつかへん四四 かれらわが事をききて立刻われにしたがひ異邦人はきたりて佞りつかへん四五 ことくにびとは衰へてその城よりをののきいでん四六 ヱホバは活ていませ

りわが磐はほむべきかな わがすくひの神はあがむべきかな四七 わがために讎をむくい異邦人をわれに服はせたまふはこの神なり四八 神はわれを仇よりすくひたまふ實になんぢは我にさからひて起りたつ者のうへに我をあげ あらぶる人より我をたすけいだし給ふ四九 この故にヱホバよ われもろもろの國人のなかにてなんぢに感謝し なんぢの名をほめうたはん五〇 ヱホバはおほいなる救をその王にあたへ その受膏者ダビデとその裔とに世々かぎりなく憐憫をたれたまふ

第一九篇 うたのかみに謳はしめたるダビデのうた

一もろもろの天は神のえいくわうをあらはし 穹蒼はその手のわざをしめす二この日ことばをかの日につたへ このよ知識をかの夜におくる三 語らずいはずその聲きこえざるに四 そのひびきは全地にあまねく そのことばは地のはてにまでおよぶ 神はかしこに帷幄を日のためにまうけたまへり五 日は新婿がいはひの殿をいづるごとく勇士がきそひはしるをよろこぶに似たり六 そのいでたつや天の涯よりし その運りゆくや天のはてにいたる 物としてその和煦をかうぶらざるはなし七 ヱホバの法はまたくして霊魂をいきかへらしめ ヱホバの證詞はかたくして愚なるものを智からしむ八 ヱホバの訓諭はなほくして心をよろこばしめヱホバの誡命はきよくして眼をあきらかならしむ九 ヱホバを惶みおそるる道はきよくして世々にたゆることなく ヱホバのさばきは眞實にしてことごとく正し一〇 これを黄金にくらぶるもおほくの純精金にくらぶるも彌增りてしたふべくこれを蜜にくらぶるも蜂のすの滴瀝にくらぶるもいやまさりて甘し一一 なんぢの僕はこれらによりて儆戒をうく これらをまもらば大なる報賞あらん一二 たれかおのれの過失をしりえんや ねがはくは我をかくれたる愆より解放ちたまへ一三 願くはなんぢの僕をひきとめて故意なる罪ををかさしめず それをわが主たらしめ給ふなかれ さればわれ玷なきものとなりて大なる愆をまぬかるるをえん一四 ヱホバわが磐わが贖 主よ わがくちの言わがこころの思念なんぢのまへに悦ばるることを得しめたまへ

第二〇篇 伶長にうたはしめたるダビデのうた

一ねがはくはヱホバなやみの日になんぢにこたへヤユブのかみの名なんぢを高にあげ二 聖所より援助をなんぢにおくりシオンより能力をなんぢにあたへ三 汝のもろもろの献物をみこころにとめ なんぢの燔祭をうけたまはんことをセラ四 ねがはくはなんぢがこころの願望をゆるし なんぢの謀略をことごとく遂しめたまはんことを五 我儕なんぢの救によりて歡びうたひ われらの神の名によりて旗をたてん ねがはくはヱホバ 汝のもろもろの求をとげしめたまはんことを六 われ今ヱホバその受膏者をすくひたまふを知る ヱホバそのきよき天より右手なるすくひの力にてかれに應へたまはん七 あるひは車をたのみあるひは馬をたのみとする者あり されどわれらはわが神ヱホバの名をとなへん八 かれらは屈みまた仆るわれらは起てかたくたてり九 ヱホ

バよ王をすくひたまへ われらがよぶとき應へたまへ

第二一篇 伶長にうたはしめたるダビデのうた

一ヱホバよ王はなんぢの力によりてたのしみ汝のすくひによりて奈何におほいなる歡喜をなさん二なんぢ彼がこころの願望をゆるし そのくちびるの求をいなみ給はざりきセラ三 そはよきたまものの惠をもてかれを迎へ まじりなきこがねの冕弁をもてかれの首にいただかせ給ひたり四 かれ生命をもとめしに汝これをあたへてその齢の日を世々かぎりなからしめ給へり五 なんぢの救によりてその榮光おほいなり なんぢは尊貴と稜威とをかれに衣せたまふ六 そは之をとこしへに福ひなるものとなし聖顔のまへの歡喜をもて樂しませたまへばなり七 王はヱホバに依賴み いとたかき者のいつくしみを蒙るがゆゑに動かさるることなからん八 なんぢの手はそのもろもろの仇をたづねいだし 汝のみぎの手はおのれを憎むものを探ねいだすべし九 なんぢ怒るときは彼等をもゆる爐のごとくにせんヱホバはげしき怒によりてかれらを呑たまはん 火はかれらを食つくさん一〇 汝かれらの裔を地よりほろぼし かれらの種を人の子のなかよりほろぼさん一一 かれらは汝にむかひて惡事をくはだて遂がたき謀略をおもひまはせばなり一二 汝かれらをして背をむけしめ その面にむかひて弓絃をひかん一三 ヱホバよ能力をあらはしてみづからを高くしたまへ 我儕はなんぢの稜威をうたひ且ほめたたへん

第二二篇 あけぼのの鹿の調にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの歌

一わが神わが神なんぞ我をすてたまふや 何なれば遠くはなれて我をすくはず わが歎きのこゑをきき給はざるか二 ああわが神われ晝よばはれども汝こたへたまはず 夜よばはれどもわれ平安をえず三 然はあれイスラエルの讃美のなかに住たまふものよ汝はきよし四 われらの列祖はなんぢに依賴めり かれら依賴みたればこれを助けたまへり五 かれら汝をよびて援をえ汝によりたのみて恥をおへることなかりき六 然はあれどわれは蟲にして人にあらず世にそしられ民にいやしめらる七 すべてわれを見るものはわれをあざみわらひ 口唇をそらし首をふりていふ八 かれはヱホバによりたのめりヱホバ助くべし ヱホバかれを悦びたまふが故にたすくべしと九 されど汝はわれを胎内よりいだし給へるものなり わが母のふところにありしとき既になんぢに依賴ましめたまへり一〇 我うまれいでしより汝にゆだねられたり わが母われを生しときより汝はわが神なり一一 われに遠ざかりたまふなかれ 患難ちかづき又すくふものなければなり一二 おほくの牡牛われをめぐりバサンの力つよき牡牛われをかこめり一三 かれらは口をあけて我にむかひ物をかきさき吼うだく獅のごとし一四 われ水のごとくそそぎいだされ わがもろもろの骨ははづれわが心は蝋のごとくなりて腹のうちに鎔たり一五 わが力はかわきて陶器のくだけのごとく わが舌は齶にひたつけり なんぢわれを死の塵にふさせたまへり一六 そは犬われをめぐり惡きものの群われをかこみてわが手およびわが足をさしつらぬけり一七

わが骨はことごとく數ふるばかりになりぬ 惡きものの目をとめて我をみる一八 かれらたがひにわが衣をわかち我がしたぎを鬮にす一九 ヱホバよ遠くはなれ居たまふなかれ わが力よねがはくは速きたりてわれを授けたまへ二〇 わがたましひを劍より助けいだし わが生命を犬のたけきいきほひより脱れしめたまへ二一 われを獅の口また野牛のつのより救ひいだしたまへ なんぢ我にこたへたまへり二二 われなんぢの名をわが兄弟にのべつたへなんぢを會のなかにて讃たたへん二三 ヱホバを懼るるものよヱホバをほめたたへよ ヤコブのもろもろの裔よヱホバをあがめよ イスラエルのもろもろのすゑよヱホバを畏め二四 ヱホバはなやむものの辛苦をかろしめ棄たまはず これに聖顏をおほふことなくしてその叫ぶときにききたまへばなり二五 大なる會のなかにてわが汝をほめたたふるは汝よりいづるなり わが誓ひしことはヱホバをおそるる者のまへにてことごとく償はん二六 謙遜者はくらひて飽ことをえ ヱホバをたづねもとむるものはヱホバをほめたたへん 願くはなんぢらの心とこしへに生んことを二七 地のはては皆おもひいだしてヱホバに歸りもろもろの國の族はみな前にふしをがむべし二八 國はヱホバのものなればなり ヱホバはもろもろの國人をすべをさめたまふ二九 地のこえたるものは皆くらひてヱホバををがみ塵にくだるものと己がたましひを存ふること能はざるものと皆そのみまへに拜跪かん三〇 たみの裔のうちにヱホバにつかる者あらん 主のことは代々にかたりつたへらるべし三一 かれら來りて此はヱホバの行爲なりとてその義を後にうまるる民にのべつたへん

第二三篇 ダビデのうた

一 ヱホバは我が牧者なり われ乏しきことあらじ二 ヱホバは我をみどりの野にふさせ いこひの水濱にともなひたまふ三 ヱホバはわが霊魂をいかし名のゆゑをもて我をただしき路にみちびき給ふ四 たとひわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ なんぢ我とともに在せばなり なんぢの笞なんぢの杖われを慰む五 なんぢわが仇のまへに我がために筵をまうけ わが首にあぶらをそそぎたまふ わが酒杯はあふるるなり六 わが世にあらん限りはかならず恩惠と憐憫とわれにそひきたらん 我はとこしへにヱホバの宮にすまん

第二四篇 ダビデのうた

一 地とそれに充るもの世界とその中にすむものとは皆ヱホバのものなり二 ヱホバはそのもとゐを大海のうへに置これを大川のうへに定めたまへり三 ヱホバの山にのぼるべきものは誰ぞ その聖所にたつべき者はたれぞ四 手きよく心いさぎよき者そのたましひ虛きことを仰ぎのぞまず偽りの誓をせざるものぞ その人なる五 かかる人はヱホバより福祉をうけ そのすくひの神より義をうけん六 斯のごとき者は神をしたふものの族類なりヤコブの神よなんぢの聖顏をもとむる者なりセラ七 門よなんぢらの首をあげよ とこしへの戸よあがれ 榮光の王いりたまはん八 えいく

わうの王はたれなるか ちからをもちたまふ猛きヱホバなり戰鬪にたけきヱホバなり九 門よなんぢらの首をあげよ とこしへの戸よあがれ 榮光の王いりたまはん一〇 この榮光の王はたれなるか 萬軍のヱホバ是ぞえいくわうの王なるセラ

第二五篇 ダビデのうた

一 ああヱホバよ わがたましひは汝をあふぎ望む二 わが神よわれなんぢに依賴めり ねがはくはわれに愧をおはしめたまふなかれ わが仇のわれに勝誇ることなからしめたまへ三 實になんぢを俟望むものははぢしめられず 故なくして信をうしなふものは愧をうけん四 ヱホバよなんぢの大路をわれにしめし なんぢの徑をわれにをしへたまへ五 我をなんぢの眞理にみちびき我ををしへたまへ 汝はわがすくひの神なり われ終日なんぢを俟望む六 なんぢのあはれみと仁慈とはいにしへより絶ずあり ヱホバよこれを思ひいだしたまへ七 わがわかきときの罪とわが愆とはおもひいでたまふなかれ ヱホバよ汝のめぐみの故になんぢの仁慈にしたがひて我をおもひいでたまへ八 ヱホバはめぐみ深くして直くましませり 斯るがゆゑに道をつみびとにをしへ九 謙だるものを正義にみちびきたまはん その道をへりくだる者にしめしたまはん一〇 ヱホバのもろもろの道はそのけいやくと證詞とをまもるものには仁慈なり眞理なり一一 わが不義はおほいなり ヱホバよ名のために之をゆるしたまへ一二 ヱホバをおそるる者はたれなるか 之にそのえらぶべき道をしめしたまはん一三 かかる人のたましひは平安にすまひ その裔はくにをつぐべし一四 ヱホバの親愛はヱホバをおそるる者とともにあり ヱホバはその契約をかれらに示したまはん一五 わが目はつねにヱホバにむかふ ヱホバわがあしを網よりとりいだしたまふ可ればなり一六 ねがはくは歸りきたりて我をあはれみたまへ われ獨わびしくまた苦しみをるなり一七 願くはわが心のうれへをゆるめ我をわざはひより脱かれしめたまへ一八 わが患難わが辛苦をかへりみわがすべての罪をゆるしたまへ一九 わが仇をみたまへ かれらの數はおほし情なき憾をもてわれをにくめり二〇 わがたましひをまもり我をたすけたまへ われに愧をおはしめたまふなかれ 我なんぢに依賴めばなり二一 われなんぢを挨望むねがはくは完全と正直とわれをまもれかし二二 神よすべての憂よりイスラエルを贖ひいだしたまへ

第二六篇 ダビデの歌

一 ヱホバよねがはくはわれを鞫きたまへ われわが完全によりてあゆみたり 然のみならず我たゆたはずヱホバに依賴めり二 ヱホバよわれを糺しまた試みたまへ わが腎とこころとを錬きよめたまへ三 そは汝のいつくしみわが眼前にあり 我はなんぢの眞理によりてあゆめり四 われは虛しき人とともに座らざりき 惡をいつはりかざる者とともにはゆかじ五 惡をなすものの會をにくみ惡者とともにすわることをせじ六 われ手をあらひて罪なきをあらはす ヱホバよ斯てなんぢの祭壇をめぐり七 感謝のこゑを

聞えしめすべてなんぢの奇しき事をのべつたへん八 ヱホバよ我なんぢのまします家となんぢが榮光のとどまる處とをいつくしむ九 願くはわがたましひを罪人とともに わが生命を血をながす者とともに取收めたまふなかれ一〇 かかる人の手にはあしきくはだてあり その右の手は賄賂にてみつ一一 されどわれはわが完全によりてあゆまん願くはわれをあがなひ我をあはれみたまへ一二 わがあしは平坦なるところにたつ われもろもろの會のなかにてヱホバを讃まつらん

第二七篇 ダビデの歌

一 ヱホバはわが光わが救なり われ誰をかおそれん ヱホバはわが生命のちからなり わが懼るべきものはたれぞや二 われの敵われの仇なるあしきもの襲ひきたりてわが肉をくらはんとせしが蹶きかつ仆れたり三 縦ひいくさびと營をつらねて我をせむるともわが心おそれじ たとひ戰ひおこりて我をせむるとも我になほ恃あり四 われ一事をヱホバにこへり我これをもとむ われヱホバの美しきを仰ぎその宮をみんがためにわが世にあらん限りはヱホバの家にすまんとこそ願ふなれ五 ヱホバはなやみの日にその行宮のうちに我をひそませその幕屋のおくにわれをかくし巖のうへに我をたかく置たまふべければなり六 今わが首はわれをめぐれる仇のうへに高くあげらるべし この故にわれヱホバのまくやにて歡喜のそなへものを献ん われうたひてヱホバをほめたたへん七 わが聲をあげてさけぶときヱホバよきき給へまた憐みてわれに應へたまへ八 なんぢらわが面をたづねもとめよと(斯る聖言のありしとき)わが心なんぢにむかひてヱホバよ我なんぢの聖顔をたづねんといへり九 ねがはくは聖顔をかくしたまふなかれ 怒りてなんぢの僕をとほざけたまふなかれ汝はわれの助なり 噫わがすくひの神よ われをおひいだし我をすてたまふなかれ一〇 わが父母われをすつるともヱホバわれを迎へたまはん一一 ヱホバよなんぢの途をわれにをしへ わが仇のゆゑに我をたひらかなる途にみちびきたまへ一二 いつはりの證をなすもの暴厲を吐もの我にさからひて起りたてり 願くはわれを仇にわたしてその心のままに爲しめたまふなかれ一三 われもしヱホバの恩寵をいけるものの地にて見るの恃なからましかば奈何ぞや一四 ヱホバを俟望ぞめ雄々しかれ汝のこころを堅うせよ 必ずやヱホバをまちのぞめ

第二八篇 ダビデの歌

一 ああヱホバよわれ汝をよばん わが磐よねがはくは我にむかひて暗唖となりたまふなかれ なんぢ默したまはば恐らくはわれ墓にいるものとひとしからん二 われ汝にむかひてさけび聖所の奥にむかひて手をあぐるときわが懇求のこゑをききたまへ三 あしき人また邪曲をおこなふ者とともに我をとらへてひきゆき給ふなかれ かれらはその隣にやはらぎをかたれども心には殘害をいだけり四 その事にしたがひそのなす惡にしたがひて彼等にあたへ その手の行爲にしたがひて與へこれにその受べきもの

を報いたまへ五 かれらはヱホバのもろもろの事とその手のなしわざとをかへりみず この故にヱホバかれらを毀ちて建たまふことなからん六 ヱホバは讃べきかな わが祈のこゑをききたまひたり七 ヱホバはわが力わが盾なり わがこころこれに依頼みたれば我たすけをえたり 然るゆゑにわが心いたくよろこぶ われ歌をもてほめまつらん八 ヱホバはその民のちからなりその受膏者のすくひの城なり九 なんぢの民をすくひなんぢの嗣業をさきはひ且これをやしなひ之をとこしなへに懐きたすけたまへ

第二九篇 ダビデの歌

一 なんぢら神の子らよ ヱホバに獻げまつれ榮と能とをヱホバにささげまつれ二 その名にふさはしき榮光をヱホバにささげ奉れきよき衣をつけてヱホバを拜みまつれ三 ヱホバのみこゑは水のうへにあり えいくわうの神は雷をとどろかせたまふ ヱホバは大水のうへにいませり四 ヱホバの聲はちからあり ヱホバのみこゑは稜威あり五 ヱホバのみこゑは香柏ををりくだく ヱホバ、レバノンのかうはくを折くだきたまふ六 これを犢のごとくをどらせレバノンとシリオンとをわかき野牛のごとくをどらせたまふ七 ヱホバのみこゑは火焰をわかつ八 ヱホバのみこゑは野をふるはせヱホバはカデシの野をふるはせたまふ九 ヱホバのみこゑは鹿に子をうませ また林木をはだかにす その宮にあるすべてのもの呼はりて榮光なるかなといふ一〇 ヱホバは洪水のうへに坐したまへり ヱホバは寶座にざして永遠に王なり一一 ヱホバはその民にちからをあたへたまふ 平安をもてその民をさきはひたまはん

第三〇篇 殿をささぐるときに謳へるダビデのうた

一 ヱホバよわれ汝をあがめん なんぢ我をおこしてわが仇のわがことによりて喜ぶをゆるし給はざればなり二 わが神ヱホバよわれ汝によばはれば汝我をいやしたまへり三 ヱホバよ汝わがたましひを陰府よりあげ我をながらへしめて墓にくだらせたまはざりき四 ヱホバの聖徒よ ヱホバをほめうたへ奉れ きよき名に感謝せよ五 その怒はただしばしにてその惠はいのちとともにながし 夜はよもすがら泣かなしむとも朝にはよろこびうたはん六 われ安けかりしときに謂く とこしへに動かさるることなからんと七 ヱホバよなんぢ惠をもてわが山をかたく立せたまひき 然はあれどなんぢ面をかくしたまひたれば我おぢまどひたり八 ヱホバよわれ汝によばはれり 我ひたすらヱホバにねがへり九 われ墓にくだらばわが血なにの益あらん 塵はなんぢを讃たたへんやなんぢの眞理をのべつたへんや一〇 ヱホバよ聽たまへ われを憐みたまへ ヱホバよ願くはわが助となりたまへ一一 なんぢ踴躍をもてわが哀哭にかへ わが麁服をとき歡喜をもてわが帶としたまへり一二 われ榮をもてほめうたひつつ默すことなからんためなり わが神ヱホバよわれ永遠になんぢに感謝せん

第三一篇 伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ヱホバよわれ汝によりたのむ 願くはいづれの日までも愧を

おはしめたまふなかれ なんぢの義をもてわれを助けたまへ二なんぢの耳をかたぶけて速かにわれをすくひたまへ 願くはわがためにかたき磐となり我をすくふ保障の家となりたまへ三なんぢはわが磐わが城なり されば名のゆゑをもてわれを引われを導きたまへ四なんぢ我をかれらが密かにまうけたる網よりひきいだしたまへ なんぢはわが保砦なり五われ霊魂をなんぢの手にゆだぬ ヱホバまことの神よなんぢはわれを贖ひたまへり六われはいつはりの虚きことに心をよする者をにくむ われは獨ヱホバによりたのむなり七我はなんぢの憐憫をよろこびたのしまん なんぢわが艱難をかへりみ わがたましひの禍害をしり八われを仇の手にとぢこめしめたまはず わが足をひろきところに立たまへばなり九われ迫りくるしめり ヱホバよ我をあはれみたまへ わが目はうれひによりておとろふ 霊魂も身もまた衰へぬ一〇わが生命はかなしみによりて消えゆき わが年華はなげきによりて消ゆけばなり わが力はわが不義によりておとろへ わが骨はかれはてたり一一われもろもろの仇ゆゑにそしらる わが隣にはわけて甚だし相識ものには忌憚られ衢にてわれを見るもの避てのがる一二われは死たるもののごとく忘られて人のこころに置れず われはやぶれたる器もののごとくなれり一三そは我おほくの人のそしりをきい到るところに懼あり かれら我にさからひて互にはかりしが わが生命をさへとらんと企てたり一四されどヱホバよわれ汝によりたのめり また汝はわが神なりといへり一五わが時はすべてなんぢの手にあり ねがはくはわれを仇の手よりたすけ われに追迫るものより助けいだしたまへ一六なんぢの僕のうへに聖顔をかがやかせ なんぢの仁慈をもて我をすくひたまへ一七ヱホバよわれに愧をおはしめ給ふなかれ そは我なんぢをよべばなり 願くはあしきものに恥をうけしめ陰府にありて口をつぐましめ給へ一八傲慢と軽侮とをもて義きものにむかひ妄りにののしるいつはりの口唇をつぐましめたまへ一九汝をおそるる者のためにたくはへ なんぢに依頼むもののために人の子のまへにてほどこしたまへる汝のいつくしみは大なるかな二〇汝かれらを御前なるひそかなる所にかくして人の謀略よりまぬかれしめ また行宮のうちにひそませて舌のあらそひをさけしめたまはん二一讃べきかなヱホバは堅固なる城のなかにて奇しまるるばかりの仁慈をわれに顕したまへり二二われ驚きあわてていへらくなんぢの目のまへより絶れたりと 然どわれ汝によびもとめしとき汝わがねがひの聲をききたまへり二三なんぢらもろもろの聖徒よヱホバをいつくしめ ヱホバは眞實あるものをまもり傲慢者におもく報をほどこしたまふ二四すべてヱホバを俟望むものよ雄々しかれ なんぢら心をかたうせよ

第三二篇 ダビデの訓諭のうた

一その愆をゆるされその罪をおほはれしものは福ひなり二不義をヱホバに負せられざるもの心にいつはりなき者はさいはひなり三我いひあらはさざりしときは終日かなしみさけびたるが故

にわが骨ふるびおとろへたり四 なんぢの手はよるも晝もわがうへにありて重し わが身の潤澤はかはりて夏の旱のごとくなれりセラ五 斯てわれなんぢの前にわが罪をあらはしわが不義をおほはざりき我いへらくわが愆をヱホバにいひあらはさんと斯るときしも汝わがつみの邪曲をゆるしたまへりセラ六 されば神をうやまふ者はなんぢに遇ことをうべき間になんぢに祈らん大水あふれ流るるともかならずその身におよばじ七 汝はわがかくるべき所なり なんぢ患難をふせぎて我をまもり救のうたをもて我をかこみたまはんセラ八 われ汝ををしへ汝をあゆむべき途にみちびき わが目をなんぢに注てさとさん九 汝等わきまへなき馬のごとく驢馬のごとくなるなかれ かれらは鑣たづなのごとき具をもてひきとめずば近づききたることなし一〇 惡者はかなしみ多かれどヱホバに依賴むものは憐憫にてかこまれん一一 ただしき者よヱホバを喜びたのしめ 凡てこころの直きものよ喜びよばふべし

第三三篇一 ただしき者よヱホバによりてよろこべ 讃美はなほきものに適はしきなり二 琴をもてヱホバに感謝せよ 十絃のことをもてヱホバをほめうたへ三 あたらしき歌をヱホバにむかひてうたひ歡喜の聲をあげてたくみに琴をかきならせ四 ヱホバのことばは直くそのすべて行ひたまふところ眞實なればなり五 ヱホバは義と公平とをこのみたまふ その仁慈はあまねく地にみつ六 もろもろの天はヱホバのみことばによりて成り てんの萬軍はヱホバの口の氣によりてつくられたり七 ヱホバはうみの水をあつめてうづだかくし深淵を庫にをさめたまふ八 全地はヱホバをおそれ世にすめるもろもろの人はヱホバをおぢかしこむべし九 そはヱホバ言たまへば成り おほせたまへば立るがゆゑなり一〇 ヱホバはもろもろの國のはかりごとを虚くし もろもろの民のおもひを徒勞にしたまふ一一 ヱホバの謀略はとこしへに立ち そのみこころのおもひは世々にたつ一二 ヱホバをおのが神とする國はさいはひなり ヱホバ嗣業にせんとて撰びたまへるその民はさいはひなり一三 ヱホバ天よりうかがひてすべての人の子を見一四 その在すところより地にすむもろもろの人をみたまふ一五 ヱホバはすべてかれらの心をつくり その作ところをことごとく鑒みたまふ一六 王者いくさびと多をもて救をえず勇士ちから大なるをもて助をえざるなり一七 馬はすくひに益なく その大なるちからも人をたすくることなからん一八 視よヱホバの目はヱホバをおそるるもの並その憐憫をのぞむもののうへにあり一九 此はかれらのたましひを死よりすくひ饑饉たるときにも世にながらへしめんがためなり二〇 われらのたましひはヱホバを俟望めり ヱホバはわれらの援われらの盾なり二一 われらはきよき名にりたのめり 斯てぞわれらの心はヱホバにありてよろこばん二二 ヱホバよわれら汝をまちのぞめり これに循ひて憐憫をわれらのうへに垂たまへ

第三四篇 ダビデ、アビメレクのまへにて狂へる状をなし逐れていでさりしと

きに作れるうた

一 われつねにヱホバを祝ひまつらんその頌詞はわが口にたえじ二 わがたましひはヱホバによりて誇らん 謙だるものは之をききてよろこばん三 われとともにヱホバを崇めよ われらともにその名をあげたたへん四 われヱホバを尋ねたればヱホバ われにこたへ我をもろもろの畏懼よりたすけいだしたまへり五 かれらヱホバを仰ぎのぞみて光をかうぶれり かれらの面ははぢあからむことなし六 この苦しむもの叫びたればヱホバこれをきき そのすべての患難よりすくひいだしたまへり七 ヱホバの使者はヱホバをおそるる者のまはりに營をつらねてこれを援く八 なんぢらヱホバの恩惠ふかきを嘗ひしれ ヱホバによりたのむ者はさいはひなり九 ヱホバの聖徒よヱホバを畏れよヱホバをおそるるものには乏しきことなければなり一〇 わかき獅はともしくして饑ることあり されどヱホバをたづぬるものは嘉物にかくることあらじ一一 子よきたりて我にきけ われヱホバを畏るべきことを汝等にをしへん一二 福祉をみんがために生命をしたひ存へんことをこのむ者はたれぞや一三 なんぢの舌をおさへて惡につかしめずなんぢの口唇をおさへて虚偽をいはざらしめよ一四 惡をはなれて善をおこなひ和睦をもとめて切にこのことを勉めよ一五 ヱホバの目はただしきものをかへりみ その耳はかれらの號呼にかたぶく一六 ヱホバの聖顔はあくをなす者にむかひてその跡を地より斷滅したまふ一七 義者さけびたればヱホバ之をききてそのすべての患難よりたすけいだしたまへり一八 ヱホバは心のいたみかなしめる者にちかく在してたましひの悔頽れたるものをすくひたまふ一九 ただしきものは患難おほし されどヱホバはみなその中よりたすけいだしたまふ二〇 ヱホバはかれがすべての骨をまもりたまふ その一つだに折らるることなし二一 惡はあしきものをころさん 義人をにくむものは刑なはるべし二二 ヱホバはその僕等のたましひを贖ひたまふ ヱホバに依頼むものは一人だにつみなはるることなからん

第三五篇 ダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは我にあらそふ者とあらそひ我とたたかふものと戰ひたまへ二 干と大盾とをとりてわが援にたちいでたまへ三 戟をぬきいだしたまひて我におひせまるものの途をふさぎ且わが靈魂にわれはなんぢの救なりといひたまへ四 願くはわが靈魂をたづぬるものの恥をえていやしめられ 我をそこなはんと謀るものの退けられて惶てふためかんことを五 ねがはくはかれらが風のまへなる粃糠のごとくなりヱホバの使者におひやられんことを六 願くはかれらの途をくらくし滑らかにしヱホバの使者にかれらを追ゆかしめたまはんことを七 かれらは故なく我をとらへんとて網をあなにふせ 故なくわが靈魂をそこなはんとて阱をうがちたればなり八 願くはかれらが思ひよらぬ間にほろびきたり己がふせたる網にとらへられ自らその滅におちいらんことを九 然ときわが靈魂はヱホバによりてよろこび その救を

もて樂しまん一〇わがすべての骨はいはん ヱホバよ汝はくるしむものを之にまさりて力つよきものより並くるしむもの貧しきものを掠めうばふ者よりたすけいだし給ふ 誰かなんぢに比ふべき者あらんと一一こころあしき證人おこりてわが知ざることを詰りとふ一二かれらは惡をもてわが善にむくい我がたましひを依仗なきものとせり一三然どわれかれらが病しときには麁服をつけ糧をたちてわが霊魂をくるしめたり わが祈はふところにかへれり一四わがかれに作ることはわが友わが兄弟にことならず母の喪にありて痛哭がごとく哀しみうなたれたり一五然どかれらはわが倒れんとせしとき喜びつどひわが知ざりしとき匪類あつまりきたりて我をせめ われを裂てやめざりき一六かれらは洒宴にて穢きことをのぶる嘲笑者のごとく我にむかひて歯をかみならせり一七主よいたづらに見るのみにして幾何時をへたまふや 願くはわがたましひの彼等にほろぼさるるを脱れしめ わが生命をわかき獅よりまぬかれしめたまへ一八われ大なる會にありてなんぢに感謝し おほくの民のなかにて汝をほめたたへん一九虚偽をもてわれに仇するもののわが故によろこぶことを容したまなかれ 故なくして我をにくむ者のたがひに眴せすることなからしめたまへ二〇かれらは平安をかたらず あざむきの言をつくりまうけて國内におだやかにすまふ者をそこなはんと謀る二一然のみならず我にむかひて口をあけひろげ ああ視よや視よやわれらの眼これをみたりといへり二二ヱホバよ汝すでにこれを視たまへり ねがはくは黙したまふなかれ主よわれに遠ざかりたまふなかれ二三わが神よわが主よ おきたまへ醒たまへ ねがはくはわがために審判をなしわが訟をさばきたまへ二四わが神ヱホバよなんぢの義にしたがひて我をさばきたまへ わが事によりてかれらに歓喜をえしめたまふなかれ二五かれらにその心裡にて ああここちよきかな観よこれわが願ひしところなりといはしめたまふなかれ 又われらかれを呑つくせりといはしめたまふなかれ二六 願くはわが害なはるるを喜ぶもの皆はぢて惶てふためき 我にむかひてはこりかに高ぶるものの愧とはづかしめとを衣んことを二七わが義をよみする者をばよろこび謳はしめ大なるかなヱホバその僕のさいはひを悦びたまふと恒にいはしめたまへ二八わが舌は終日なんぢの義となんぢの譽とをかたらん

第三六篇 伶長にうたはしめたるヱホバの僕ダビデのうた

一あしきものの愆はわが心のうちにかたりて その目のまへに神をおそるるの畏あることなしといふ二かれはおのが邪曲のあらはるることなく憎まるることなからんとて自からその目にて謟る三その口のことばは邪曲と虚偽となり智をこばみ善をおこなふことを息たり四かつその寝床にてよこしまなる事をはかりよからぬ途にたちとまりて惡をきらはず五ヱホバよなんぢの仁慈は天にあり なんぢの眞實は雲にまでおよぶ六汝のただしきは神の山のごとく なんぢの審判はおほいなる淵なり ヱホバよな

んぢは人とけものとを護りたまふ七 神よなんぢの仁慈はたふときかな人の子はなんぢの翼の蔭にさけどころを得八 なんぢの屋のゆたかなるによりてことごとく飽ことをえん なんぢはその歡樂のかはの水をかれらに飮しめたまはん九 そはいのちの泉はなんぢに在り われらはなんぢの光によりて光をみん一〇 ねがはくはなんぢを知るものにたえず憐憫をほどこし心なほき者にたえず正義をほどこしたまへ一一 たかぶるものの足われをふみ惡きものの手われを逐去ふをゆるし給ふなかれ一二 邪曲をおこなふ者はかしこに仆れたり かれら打伏られてまた起ことあたはざるべし

第三七篇 ダビデのうた

一 惡をなすものの故をもて心をなやめ 不義をおこなふ者にむかひて嫉をおこすなかれ二 かれらはやがて草のごとくかりとられ青菜のごとく打萎るべければなり三 ヱホバによりたのみて善をおこなへ この國にとどまり眞實をもて糧とせよ四 ヱホバによりて歡喜をなせ ヱホバはなんぢが心のねがひを汝にあたへたまはん五 なんぢの途をヱホバにゆだねよ 彼によりたのまば之をなしとげ六 光のごとくなんぢの義をあきらかにし午日のごとくなんぢの訟をあきらかにしたまはん七 なんぢヱホバのまへに口をつぐみ忍びてこれを俟望め おのが途をあゆみて榮るものの故をもて あしき謀略をとぐる人の故をもて心をなやむるなかれ八 怒をやめ忿恚をすてよ 心をなやむるなかれ これ惡をおこなふ方にうつらん九 そは惡をおこなふものは斷滅され ヱホバを俟望むものは國をつぐべければなり一〇 あしきものは久しからずしてうせん なんぢ細密にその處をおもひみるともあることなからん一一 されど謙だるものは國をつぎ また平安のゆたかなるを樂まん一二 惡きものは義きものにさからはんとて謀略をめぐらし之にむかひて切歯す一三 主はあしきものを笑ひたまはん かれが日のきたるを見たまへばなり一四 あしきものは劍をぬき弓をはりて苦しむものと貧しきものとをたふし行ひなほきものを殺さんとせり一五 されどその劍はおのが胸をさしその弓はをらるべし一六 義人のもてるもののすくなきは多くの惡きものの豊かなるにまされり一七 そは惡きものの臂はをらるれどヱホバは義きものを扶持たまへばなり一八 ヱホバは完全もののもろもろの日をしりたまふ かれらの嗣業はかぎりなく久しからん一九 かれらは禍害にあふとき愧をおはず饑饉の日にもあくことを得ん二〇 あしき者はほろびヱホバのあたは牧場のさかえの枯るがごとくうせ烟のごとく消ゆかん二一 あしき者はものかりて償はず 義きものは惠ありて施しあたふ二二 神のことほぎたまふ人は國をつぎ 神ののろひたまふ人は斷滅さるべし二三 人のあゆみはヱホバによりて定めらる そのゆく途をヱホバよろこびたまへり二四 縦ひその人たふるることありとも全くうちふせらるることなし ヱホバかれが手をたすけ支へたまへばなり二五 われむかし年わかくして今おいたれど 義者のすてられ或はその裔の

糧こひありくを見しことなし二六 ただしきものは終日めぐみありて貸あたふ その裔はさいはひなり二七 惡をはなれて善をなせ然ばなんぢの住居とこしへならん二八 ヱホバは公平をこのみ その聖徒をすてたまはざればなり かれらは永遠にまもりたすけらるれど惡きもののすゑは斷滅さるべし二九 ただしきものは國をつぎ その中にすまひてとこしへに及ばん三〇 ただしきものの口は智慧をかたり その舌は公平をのぶ三一 かれが神の法はそのこころにあり そのあゆみは一歩だにすべることあらじ三二 あしきものは義者をひそみうかがひて之をころさんとはかる三三 ヱホバは義者をあしきものの手にのこしおきたまはず 審判のときに罰ひたまふことなし三四 ヱホバを俟望みてその途をまもれさらば汝をあげて國をつがせたまはん なんぢ惡者のたちほろぼさるる時にこれをみん三五 我あしきものの猛くしてはびこれるを見るに生立たる地にさかえしげれる樹のごとし三六 然れどもかれは逝ゆけり 視よたちまちに無なりぬ われ之をたづねしかど遇ことをえざりき三七 完人に目をそそぎ直人をみよ 和平なる人には後あれど三八 罪ををかすものらは共にほろぼされ惡きものの後はかならず斷るべければなり三九 ただしきものの救はヱホバよりいづ ヱホバはかれらが辛苦のときの保砦なり四〇 ヱホバはかれらを助け かれらを解脱ちたまふ ヱホバはかれらを惡者よりときはなちて救ひたまふ かれらはヱホバをその避所とすればなり

第三八篇 記念のためにつくれるダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは忿恚をもて我をせめ はげしき怒をもて我をこらしめ給ふなかれ二 なんぢの矢われにあたり なんぢの手わがうへを壓へたり三 なんぢの怒によりてわが肉には全きところなく わが罪によりてわが骨には健かなるところなし四 わが不義は首をすぎてたかく重荷のごとく負がたければなり五 われ愚なるによりてわが傷あしき臭をはなちて腐れただれたり六 われ折屈みていたくなげきうなたれたり われ終日かなしみありく七 わが腰はことごとく焼るがごとく肉に全きところなければなり八 我おとろへはて甚くきずつけられわが心のやすからざるによりて欷歔さけべり九 ああ主よわがすべての願望はなんぢの前にあり わが嘆息はなんぢに隱るることなし一〇 わが胸をどりわが力おとろへ わが眼のひかりも亦われをはなれたり一一 わが友わが親めるものはわが痍をみて遥にたち わが隣もまた遠かりてたてり一二 わが生命をたづぬるものは羂をまうけ我をそこなはんとするものは惡言をいひ また終日たばかりを謀る一三 然はあれどわれは聾者のごとくきかず われは口をひらかぬ唖者のごとし一四 如此われはきかざる人のごとく口にことあげせぬ人のごときなり一五 ヱホバよ我なんぢを俟望めり 主わが神よなんぢかならず答へたまふべければなり一六 われ曩にいふ おそらくはかれらわが事によりて喜び わが足のすべらんとき我にむかひて誇りかにたかぶらんと一七 われ仆るるばかりになりぬ わ

が悲哀はたえずわが前にあり一八 そは我みづから不義をいひあらはし わが罪のためにかなしめばなり一九 わが仇はいきはたらきてたけく故なくして我をうらむるものおほし二〇 惡をもて善にむくゆるものはわれ善事にしたがふが故にわが仇となれり二一 ヱホバよねがはくは我をはなれたまふなかれ わが神よわれに遠かりたまふなかれ二二 主わがすくひよ速きたりて我をたすけたまへ

第三九篇 伶長エドトンにうたはしめたるダビデのうた

一 われ曩にいへり われ舌をもて罪ををかさざらんために我すべての途をつつしみ惡者のわがまへに在るあひだはわが口に銜をかけんと二 われ默して唖となり善言すらことばにいださずわが憂なほおこれり三 わが心わがうちに熱し おもひつづくるほどに火もえぬればわれ舌をもていへらく四 ヱホバよ願くはわが終とわが日の數のいくばくなるとを知しめたまへ わが無常をしらしめたまへ五 觀よなんぢわがすべての日を一掌にすぎさらしめたまふ わがかいのち主前にてはなきにことならず 實にすべての人は皆その盛 時だにもむなしからざるはなしセラ六 人の世にあるは影にことならず その思ひなやむことはむなしからざるなし その積蓄ふるものはたが手にをさまるをしらず七 主よわれ今なにをかまたん わが望はなんぢにあり八 ねがはくは我をすべて愆より助けいだしたまへ 愚なるものに誹らるることなからしめたまへ九 われは默して口をひらかず 此はなんぢの成したまふ者なればなり一〇 願くはなんぢの責をわれよりはなちたまへ 我なんぢの手にうちこらさるるによりて亡ぶるばかりになりぬ一一 なんぢ罪をせめて人をこらし その慕ひよろこぶところのものを蠹のくらふがごとく消うせしめたまふ 實にもろもろの人はむなしからざるなしセラ一二 ああヱホバよねがはくはわが祈をきき わが號呼に耳をかたぶけたまへ わが涙をみて默したまふなかれ われはなんぢに寄る旅客すべてわが列祖のごとく宿れるものなり一三 我ここを去てうせざる先になんぢ面をそむけてわれを爽快ならしめたまへ

第四〇篇 伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 我たへしのびてヱホバを俟望みたり ヱホバ我にむかひてわが號呼をききたまへり二 また我をほろびの阱より泥のなかよりとりいだしてわが足を磐のうへにおきわが歩をかたくしたまへり三 ヱホバはあたらしき歌をわが口にいれたまへり此はわれらの神にささぐる讃美なり おほくの人はこれを見ておそれ かつヱホバによりたのまん四 ヱホバをおのが賴となし高るものによらず虛偽にかたぶく者によらざる人はさいはひなり五 わが神ヱホバよなんぢの作たまへる奇しき迹と われらにむかふ念とは甚おほくして汝のみまへにつらねいふことあたはず 我これをいひのべんとすれどその數かぞふることあたはず六 なんぢ犠牲と祭物とをよろこびたまはず汝わが耳をひらきたまへり なんぢ燔祭と罪祭とをもとめたまはず七 そのとき我いへらく 觀よわれ

きたらんわがことを書の巻にしるしたり八わが神よわれは聖意にしたがふことを樂む なんぢの法はわが心のうちにありと九われ大なる會にて義をつげしめせり 視よわれ口唇をとぢず ヱホバよなんぢ之をしりたまふ一〇われなんぢの義をわが心のうちにひめおかず なんぢの眞實となんぢの拯救とをのべつたへたり 我なんぢの仁慈となんぢの眞理とをおほいなる會にかくさざりき一一ヱホバよなんぢ憐憫をわれにをしみたまふなかれ 仁慈と眞理とをもて恒にわれをまもりたまへ一二そはかぞへがたき禍害われをかこみ わが不義われに追及てあふぎみること能はぬまでになりぬ その多きことわが首の髮にもまさり わが心きえうするばかりなればなり一三ヱホバよ願くはわれをすくひたまへ ヱホバよ急ぎきたりて我をたすけたまへ一四願くはわが靈魂をたづねほろぼさんとするものの皆はぢあわてんことを わが害はるるをよろこぶもののみな後にしりぞきて恥をおはんことを一五われにむかひて ああ視よや視よやといふ者おのが恥によりておどろきおそれんことを一六願くはなんぢを尋求むるものの皆なんぢによりて樂みよろこばんことを なんぢの救をしたふものの恒にヱホバは大なるかなととなへんことを一七われはくるしみ且ともし 主われをねんごろに念ひたまふ なんぢはわが助なり われをすくひたまふ者なり ああわが神よねがはくはためらひたまふなかれ

第四一篇 うたのかみに謳はしめたるダビデのうた

一よわき人をかへりみる者はさいはひなり ヱホバ斯るものを禍ひの日にたすけたまはん二ヱホバ之をまもり之をながらへしめたまはん かれはこの地にありて福祉をえん なんぢ彼をその仇ののぞみにまかせて付したまふなかれ三ヱホバは彼がわづらひの床にあるをたすけ給はん なんぢかれが病るときその衾裯をしきかへたまはん四我いへらくヱホバよわれを憐みわがたましひを醫したまへ われ汝にむかひて罪ををかしたりと五わが仇われをそしりていへり 彼いづれのときに死いづれのときにその名ほろびんと六かれ又われを見んとてきたるときは虛僞をかたり 邪曲をその心にあつめ 外にいでてはこれを述ぶ七すべてわれをにくむもの互ひにささやき我をそこなはんとて相謀る八かつ云 かれに一のわざはひつきまとひたれば仆れふしてふたたび起ることなからんと九わが恃みしところ わが糧をくらひしところのわが親しき友さへも我にそむきてその踵をあげたり一〇然はあれどヱホバよ汝ねがはくは我をあはれみ我をたすけて起したまへ されば我かれらに報ることをえん一一わが仇われに打勝てよろこぶこと能はざるをもて汝がわれを愛いつくしみたまふを我しりぬ一二わが事をいはば なんぢ我をわが完全うちにてたもち我をとこしへに面のまへに置たまふ一三イスラエルの神ヱホバはとこしへより永遠までほむべきかな アーメン アーメン

第四二篇 伶長にうたはしめたるコラの子のをしへの歌

一ああ神よしかの渓水をしたひ喘ぐがごとく わが靈魂もなんぢ

をしたひあへぐなり二わがたましひは渇けるごとくに神をしたふ 活神をぞしたふ 何れのときにか我ゆきて神のみまへにいでん三かれらが終日われにむかひて なんぢの神はいづくにありやとののしる間はただわが涙のみ晝夜そそぎてわが糧なりき四われむかし群をなして祭日をまもる衆人とともにゆき歡喜と讃美のこゑをあげてかれらを神の家にともなへり 今これらのことを追想してわが衷よりたましひを注ぎいだすなり五ああわが霊魂よ なんぢ何ぞうなたるるや なんぞわが衷におもひみだるるや なんぢ神をまちのぞめ われに聖顔のたすけありて我なほわが神をほめたたふべければなり六わが神よわがたましひはわが衷にうなたる 然ばわれヨルダンの地よりヘルモンよりミザルの山より汝をおもひいづ七なんぢの大瀑のひびきによりて淵々よびこたへ なんぢの波なんぢの猛浪ことごとくわが上をこえゆけり八然はあれど晝はヱホバその憐憫をほどこしたまふ夜はその歌われとともにあり 此うたはわがいのちの神にささぐる祈なり九われわが磐なる神にいはん なんぞわれを忘れたまひしや なんぞわれは仇のしへたげによりて悲しみありくや一〇わが骨もくだくるばかりにわがてきはひねもす我にむかひてなんぢの神はいづくにありやといひののしりつつ我をそしれり一一ああわがたましひよ 汝なんぞうなたるるや 何ぞわがうちに思ひみだるるや なんぢ神をまちのぞめ われ尚わがかほの助なるわが神をほめたたふべければなり

第四三篇

一神よねがはくは我をさばき 情しらぬ民にむかひてわが訟をあげつらひ詭計おほきよこしまなる人より我をたすけいだし給へ二なんぢはわが力の神なり なんぞ我をすてたまひしや 何ぞわれは仇の暴虐によりてかなしみありくや三願くはなんぢの光となんぢの眞理とをはなち我をみちびきてその聖山とその帷幄とにゆかしめたまへ四さらばわれ神の祭壇にゆき又わがよろこびよろこぶ神にゆかん ああ神よわが神よわれ琴をもてなんぢを讃たたへん五ああわが霊魂よなんぢなんぞうなたるるや なんぞわが衷におもひみだるるや なんぢ神によりて望をいだけ 我なほわが面のたすけなるわが神をほめたたふべければなり

第四四篇 伶長にうたはしめたるコラの子のをしへの歌

一ああ神よむかしわれらの列祖の日になんぢがなしたまひし事迹をわれら耳にきけり 列祖われらに語れり二なんぢ手をもてもろもろの國人をおひしりぞけ われらの列祖をうゑ並もろもろの民をなやましてわれらの列祖をはびこらせたまひき三かれらはおのが劍によりて國をえしにあらず おのが臂によりて勝をえしにあらず 只なんぢの右の手なんぢの臂なんぢの面のひかりによれり 汝かれらを恵みたまひたればなり四神よなんぢはわが王なり ねがはくはヤコブのために救をほどこしたまへ五われらは汝によりて敵をたふし また我儕にさからひて起りたつものをなんぢの名によりて踐壓ふべし六そはわれわが弓によ

りたのまず わが劍もまた我をすくふことあたはざればなり七 なんぢわれらを敵よりすくひ またわれらを惡むものを辱かしめたまへり八 われらはひねもす神によりてほこり われらは永遠になんぢの名に感謝せんセラ九 しかるに今はわれらをすて恥をおはせたまへり われらの軍人とともに出ゆきたまはず一〇 われらを敵のまへより退かしめたまへり われらを惡むものその任意にわれらを掠めうばへり一一 なんぢわれらを食にそなへらるる羊のごとくにあたへ斯てわれらをもろもろの國人のなかにちらし一二 得るところなくしてなんぢの民をうり その價によりてなんぢの富をましたまはざりき一三 汝われらを隣人にそしらしめ われらを環るものにあなどらしめ 嘲けらしめたまへり一四 又もろもろの國のなかにわれらを談柄となし もろもろの民のなかにわれらを頭ふらるる者となしたまへり一五 わが凌辱ひねもす我がまへにあり わがかほの恥われをおほへり一六 こは我をそしり我をののしるものの聲により我にあだし我にうらみを報るものの故によるなり一七 これらのこと皆われらに臨みきつれどわれらなほ汝をわすれず なんぢの契約をいつはりまもらざりき一八 われらの心しりぞかずわれらの歩履なんぢの道をはなれず一九 然どなんぢは野犬のすみかにてわれらをきずつけ死蔭をもてわれらをおほひ給へり二〇 われらもしおのれの神の名をわすれ或はわれらの手を異神にのべしことあらんには二一 神はこれを糺したまはざらんや 神はこころの隱れたることをも知たまふ二二 われらは終日なんぢのために死にわたされ屠られんとする羊の如くせられたり二三 主よさめたまへ何なればねぶりたまふや起たまへ われらをとこしへに棄たまふなかれ二四 いかなれば聖顏をかくしてわれらがうくる苦難と虐待とをわすれたまふや二五 われらのたましひはかがみて塵にふし われらの腹は土につきたり二六 ねがはくは起てわれらをたすけたまへ なんぢの仁慈のゆゑをもてわれらを贖ひたまへ

第四五篇 百合花のしらべにあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のをしへのうた 愛のうた

一 わが心はうるはしき事にてあふる われは王のために詠たるものをいひいでん わが舌はすみやけく寫字人の筆なり二 なんぢは人の子輩にまさりて美しく文雅そのくちびるにそそがる このゆゑに神はとこしへに汝をさいはひしたまへり三 英雄よなんぢその劍その榮その威をこしに佩べし四 なんぢ眞理と柔和とただしきとのために威をたくましくし勝をえて乘すすめ なんぢの右手なんぢに畏るべきことををしへん五 なんぢの矢は鋭して王のあたの胸をつらぬき もろもろの民はなんぢの下にたふる六 神よなんぢの寶座はいやとほ永くなんぢの國のつゑは公平のつゑなり七 なんぢは義をいつくしみ惡をにくむ このゆゑに神なんぢの神はよろこびの膏をなんぢの侶よりまさりて汝にそそぎたまへり八 なんぢの衣はみな沒薬蘆薈肉桂のかをりあり 琴瑟の音ざうげの諸殿よりいでて汝をよろこばしめたり九 なんぢがたふと

き婦のなかにはもろもろの王のむすめあり 皇后はオフルの金をかざりてなんぢの右にたつ一〇 女よきけ目をそそげ なんぢの耳をかたぶけよ なんぢの民となんぢが父の家とをわすれよ一一 さらば王はなんぢの美麗をしたはん 王はなんぢの主なりこれを伏拜め一二 ツロの女は贈物をもてきたり民間のとめるものも亦なんぢの惠をこひもとめん一三 王のむすめは殿のうちにていと榮えかがやき そのころもは金をもて織なせり一四 かれは鍼繍せる衣をきて王のもとにいざなはる 之にともなへる處女もそのあとにしたがひて汝のもとにみちびかれゆかん一五 かれらは歡喜と快樂とをもていざなはれ斯して王の殿にいらん一六 なんぢの子らは列祖にかはりてたち なんぢはこれを全地に君となさん一七 我なんぢの名をよろづ代にしらしめん この故にもろもろの民はいやとほ永くなんぢに感謝すべし

第四六篇 女音のしらべにしたがひて伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 神はわれらの避所また力なり なやめるときの最ちかき助なり二 されば地はかはり山はうみの中央にうつるとも我儕はおそれじ三 よしその水はなりとどろきてさわぐとも その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらんセラ四 河ありそのながれは神のみやこをよろこばしめ至上者のすみたまふ聖所をよろこばしむ五 神そのなかにいませば都はうごかじ 神は朝つとにこれを助けたまはん六 もろもろの民はさわぎたち もろもろの國はうごきたり 神その聲をいだしたまへば地はやがてとけぬ七 萬軍のヱホバはわれらとともなりヤコブの神はわれらのたかき櫓なりセラ八 きたりてヱホバの事跡をみよ ヱホバはおほくの懼るべきことを地になしたまへり九 ヱホバは地のはてまでも戰鬪をやめしめ弓ををり戈をたち戰車を火にてやきたまふ一〇 汝等しづまりて我の神たるをしれ われはもろもろの國のうちに崇められ全地にあがめらるべし一一 萬軍のヱホバはわれらと偕なりヤコブの神はわれらの高きやぐらなりセラ

第四七篇 伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 もろもろのたみよ手をうち歡喜のこゑをあげ神にむかひてさけべ二 いとたかきヱホバはおそるべく また地をあまねく治しめす大なる王にてましませばなり三 ヱホバはもろもろの民をわれらに服はせ もろもろの國をわれらの足下にまつろはせたまふ四 又そのいつくしみたまふヤコブが譽とする嗣業をわれらのために選びたまはんセラ五 神はよろこびさけぶ聲とともにのぼり ヱホバはラッパの聲とともにのぼりたまへり六 ほめうたへ神をほめうたへ 頌歌へわれらの王をほめうたへ七 かみは地にあまねく王なればなり 教訓のうたをうたひてほめよ八 神はもろもろの國をすべをさめたまふ 神はそのきよき寶座にすわりたまふ九 もろもろのたみの諸侯はつどひきたりてアブラハムの神の民となれり 地のもろもろの盾は神のものなり神はいとたかふとし

第四八篇 コラの子のうたなり讚美なり

一ヱホバは大なり われらの神の都そのきよき山のうへにて甚くほめたたへられたまふべし二シオンの山はきたの端たかくしてうるはしく喜悦を地にあまねくあたふ ここは大なる王のみやこなり三そのもろもろの殿のうちに神はおのれをたかき櫓としてあらはしたまへり四みよ王等はつどひあつまりて偕にすぎゆきぬ五かれらは都をみてあやしみ且おそれて怱ちのがれされり六戰慄はかれらにのぞみ その苦痛は子をうまんとする婦のごとし七なんぢは東風をおこしてタルシシの舟をやぶりたまふ八曩にわれらが聞しごとく今われらは萬軍のヱホバの都われらの神のみやこにて之をみることをえたり 神はこの都をとこしへまで固くしたまはんセラ九神よ我らはなんぢの宮のうちにて仁慈をおもへり一〇神よなんぢの譽はその名のごとく地の極にまでおよべり なんぢの右手はただしきにて充り一一なんぢのもろもろの審判によりてシオンの山はよろこびユダの女輩はたのしむべし一二シオンの周圍をありき偏くめぐりてその櫓をかぞへよ一三その石垣に目をとめよ そのもろもろの殿をみよ なんぢらこれを後代にかたりつたへんが爲なり一四そはこの神はいや遠長にわれらの神にましましてわれらを死るまでみちびきたまはん

第四九篇

伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一二もろもろの民よきけ賤きも貴きも富るも貧きもすべて地にすめる者よ なんぢらともに耳をそばだてよ三わが口はかしこきことをかたり わが心はさときことを思はん四われ耳を喩言にかたぶけ琴をならしてわが幽玄なる語をときあらはさん五わが踵にちかかる不義のわれを打圍むわざはひの日もいかで懼るることあらんや六おのが富をたのみ財おほきを誇るもの七たれ一人おのが兄弟をあがなふことあたはず之がために贖價を神にささげ八九之をとこしへに生存へしめて朽ざらしむることあたはず（霊魂をあがなふには費いとおほくして此事をとこしへに捨置ざるを得ざればなり）一〇そは智きものも死 おろかものも獸心者もひとしくほろびてその富を他人にのこすことは常にみるところなり一一かれら竊におもふ わが家はとこしへに存りわがすまひは世々にいたらんと かれらはその地におのが名をおはせたり一二されど人は譽のなかに永くとどまらず亡びうする獸のごとし一三斯のごときは愚かなるものの途なり 然はあれど後人はその言をよしとせんセラ一四かれらは羊のむれのごとくに陰府のものと定めらる 死これが牧者とならん直きもの朝にかれらををさめん その美容は陰府にほろぼされて宿るところなかるべし一五されど神われを接たまふべければわが霊魂をあがなひて陰府のちからより脱かれしめたまはんセラ一六人のとみてその家のさかえくはらんとき汝おそるるなかれ一七かれの死るときは何一つたづさへゆくことあたはず その榮はこれにしたがひて下ることをせざればなり一八かかる人はいきながらふるほどに己がたましひを祝するとも みづからを厚うする

がゆゑに人々なんぢをほむるとも一九なんぢ列祖の世にゆかん　かれらはたえて光をみざるべし二〇尊貴なかにありて曉らざる人はほろびうする獸のごとし

第五〇篇　アサフのうた

一ぜんのうの神ヱホバ詔命して日のいづるところより日のいるところまであまねく地をよびたまへり二かみは美麗の極なるシオンより光をはなちたまへり三われらの神はきたりて默したまはじ火その前にものをやきつくし暴風その四周にふきあれん四神はその民をさばかんとて上なる天および地をよびたまへり五いはく祭物をもて我とけいやくをたてしわが聖徒をわがもとに集めよと六もろもろの天は神の義をあらはせり　神はみづから審士たればなりセラ七わが民よきけ我ものいはん　イスラエルよきけ我なんぢにむかひて證をなさん　われは神なんぢの神なり八わがなんぢを責るは祭物のゆゑにあらず　なんぢの燔祭はつねにわが前にあり九我はなんぢの家より牡牛をとらず　なんぢの牢より牡山羊をとらず一〇林のもろもろのけもの山のうへの千々の牲畜はみなわが有なり一一われは山のすべての鳥をしる　野のたけき獸はみなわがものなり一二世界とそのなかに充るものとはわが有なれば縱ひわれ饑るともなんぢに告じ一三われいかで牡牛の肉をくらひ牡山羊の血をのまんや一四感謝のそなへものを神にささげよ　なんぢのちかひを至上者につくのへ一五なやみの日にわれをよべ　我なんぢを援けん　而してなんぢ我をあがむべし一六一七然はあれど神あしきものに言給く　なんぢは教をにくみわが言をその後にすつるものなるに何のかかはりありてわが律法をのべ　わがけいやくを口にとりしや一八なんぢ盜人をみれば之をよしとし姦淫をおこなふものの伴侶となれり一九なんぢその口を惡にわたす　なんぢの舌は詭計をくみなせり二〇なんぢ坐りて兄弟をそしり己がははの子を誣のしれり二一汝これらの事をなししをわれ默しぬれば　なんぢ我をおのれに恰にたるものとおもへり　されど我なんぢを責めてその罪をなんぢの目前につらぬべし二二神をわするるものよ今このことを念へ　おそらくは我なんぢを抓さかんとき助るものあらじ二三感謝のそなへものを獻るものは我をあがむ　おのれの行爲をつつしむ者にはわれ神の救をあらはさん

第五一篇　ダビデがバテセバにかよひしのち預言者ナタンの來れるときよみて伶長にうたはしめたる歌

一ああ神よねがはくはなんぢの仁慈によりて我をあはれみ　なんぢの憐憫のおほきによりてわがもろもろの愆をけしたまへ二わが不義をことごとくあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ三われはわが愆をしる　わが罪はつねにわが前にあり四我はなんぢにむかひて獨なんぢに罪ををかし聖前にあしきことを行へり　さればなんぢのいふときは義とせられ　なんぢ鞫くときは咎めなしとせられ給ふ五視よわれ邪曲のなかにうまれ罪ありてわが母われをはらみたりき六なんぢ眞實をこころの衷にまでのぞみわ

が隠れたるところに智慧をしらしめ給はん七なんぢヒソブをもて我をきよめたまへ さらばわれ淨まらん 我をあらひたまへ さらばわれ雪よりも白からん八なんぢ我によろこびと快樂とをきかせなんぢが碎きし骨をよろこばせたまへ九ねがはくは聖顔をわがすべての罪よりそむけ わがすべての不義をけしたまへ一〇ああ神よわがために清心をつくり わが衷になほき靈をあらたにおこしたまへ一一 われを聖前より棄たまふなかれ 汝のきよき靈をわれより取りたまふなかれ一二なんぢの救のよろこびを我にかへし自由の靈をあたへて我をたもちたまへ一三さらばわれ愆ををかせる者になんぢの途をしへん罪人はなんぢに歸りきたるべし一四神よわが救のかみよ血をながしし罪より我をたすけいだしたまへ わが舌は聲たからかになんぢの義をうたはん一五主よわが口唇をひらきたまへ 然ばわが口なんぢの頌美をあらはさん一六なんぢは祭物をこのみたまはず もし然らずば我これをささげん なんぢまた燔祭をも悦びたまはず一七神のもとめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり 神よなんぢは碎けたる悔しこころを藐しめたまふまじ一八ねがはくは聖意にしたがひてシオンにさいはひし ヱルサレムの石垣をきづきたまへ一九その時なんぢ義のそなへものと燔祭と全きはんさいとを悦びたまはんかくて人々なんぢの祭壇に牡牛をささぐべし

第五二篇

エドム人ドエグ、サウルにきたりてダビデはアビメレクの家にきぬと告しときダビデがよみて伶長にうたはしめたる教訓のうた

一猛者よなんぢ何なればあしき企圖をもて自らほこるや神のあはれみは恒にたえざるなり二なんぢの舌はあしきことをはかり利き剃刀のごとくいつはりをおこなふ三なんぢは善よりも惡をこのみ正義をいふよりも虚偽をいふをこのむセラ四たばかりの舌よなんぢはすべての物をくひほろぼす言をこのむ五されば神とこしへまでも汝をくだき また汝をとらへてその幕屋よりぬきいだし生るものの地よりなんぢの根をたやしたまはんセラ六義者はこれを見ておそれ彼をわらひていはん七神をおのが力となさず その富のゆたかなるをたのみ その惡をもて己をかたくせんとする人をみよと八然はあれどわれは神の家にあるあをき橄欖の樹のごとし 我はいやとほながに神のあはれみに依賴まん九なんぢこの事をおこなひ給ひしによりて我とこしへになんぢに感謝し なんぢの聖徒のまへにて聖名をまちのぞまん こは宜しきことなればなり

第五三篇

マハラツ(樂器の名、あるひはいふ調べの名)にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの教訓のうた

一愚かなるものは心のうちに神なしといへり かれらは腐れたりかれらは憎むべき不義をおこなへり善をおこなふ者なし二神は天より人の子をのぞみて悟るものと神をたづぬる者とありやなしやを見たまひし三みな退ぞきてことごとく汚れたり善をなすものなし一人だになし四不義をおこなふものは知覺なきかかれらは物くふごとくわが民をくらひ また神をよばふことをせ

ざるなり五かれらは懼るべきことのなきときに大におそれたり　神はなんぢにむかひて營をつらぬるものの骨をちらしたまへばなり　神かれらを棄たまひしによりて汝かれらを辱かしめたり六願くはシオンよりイスラエルの救のいでんことを　神その民のとらはれたるを返したまふときヤコブはよろこびイスラエルは樂まん

第五四篇　ジフ人のサウルにきたりてダビデはわれらの處にかくれをるにあらずやといひたりしときダビデうたのかみに琴にてうたはしめたる教訓のうた

一神よねがはくは汝の名によりて我をすくひ　なんぢの力をもて我をさばきたまへ二神よわが祈をききたまへ　わが口のことばに耳をかたぶけたまへ三そは外人はわれにさからひて起りたち強暴人はわがたましひを索むるなり　かれらは神をおのが前におかざりきセラ四みよ神はわれをたすくるものなり　主はわがたましひを保つものとともに在せり五主はわが仇にそのあしきことの報をなしたまはん　願くはなんぢの眞實によりて彼等をほろぼしたまへ六我よろこびて祭物をなんぢに献ん　ヱホバよ我なんぢの名にむかひて感謝せん　こは宜しきことなればなり七そはヱホバはすべての患難より我をすくひたまへり　わが目はわが仇につきての願望をみたり

第五五篇　ダビデうたのかみに琴にてうたはしめたる教訓のうた

一神よねがはくは耳をわが祈にかたぶけたまへ　わが懇求をさけて身をかくしたまふなかれ二われに聖意をとめ我にこたへたまへ　われ歎息によりてやすからず悲みうめくなり三これ仇のこゑと惡きものの暴虐とのゆゑなり　そはかれら不義をわれに負せいきどほりて我におひせまるなり四わが心わがうちに憂ひいたみ死のもろもろの恐懼わがうへにおちたり五おそれと戰慄とわれにのぞみ甚だしき恐懼われをおほへり六われ云ねがはくは鴿のごとく羽翼のあらんことを　さらば我とびさりて平安をえん七みよ我はるかにのがれさりて野にすまんセラ八われ速かにのがれて暴風と狂風とをはなれん九われ都のうちに強暴とあらそひとをみたり　主よねがはくは彼等をほろぼしたまへ　かれらの舌をわかれしめたまへ一〇彼等はひるもよるも石垣のうへをあるきて邑をめぐる　邑のうちには邪曲とあしき企圖とあり一一また惡きこと邑のうちにあり　しへたげと欺詐とはその街衢をはなるることなし一二われを謗れるものは仇たりしものにあらず　もし然りしならば尚しのばれしなるべし　我にむかひて己をたかくせし者はわれを恨たりしものにあらず　若しかりしならば身をかくして彼をさけしなるべし一三されどこれ汝なり　われとおなじきもの　わが友われと親しきものなり一四われら互にしたしき語らひをなし　また會衆のなかに在てともに神の家にのぼりたりき一五死は忽然かれらにのぞみ　その生るままにて陰府にくだらんことを　そは惡事その住處にありその中にあればなり一六されど我はただ神をよばん　ヱホバわれを救ひたまふべし一七夕に

あしたに晝にわれなげき且かなしみうめかん ヱホバわが聲をききたまふべし一八 ヱホバは我をせむる戰闘よりわが霊魂をあがなひいだして平安をえしめたまへり そはわれを攻るもの多かりければなり一九 太古よりいます者なる神はわが聲をききてかれらを悩めたまべしセラ かれらには變ることなく神をおそるることなし二〇 かの人はおのれと睦みをりしものに手をのべてその契約をけがしたり二一 その口はなめらかにして乳酥のごとくなれどもその心はたたかひなり その言はあぶらに勝りてやはらかなれどもぬきたる劍にことならず二二 なんぢの荷をヱホバにゆだねよさらば汝をささへたまはん ただしき人のうごかさるることを常にゆるしたまふまじ二三 かくて神よなんぢはかれらを亡の坑におとしいれたまはん血をながすものと詭計おほきものとは生ておのが日の半にもいたらざるべし 然はあれどわれは汝によりたのまん

第五六篇 ダビデがガテにてペリシテ人にとらへられしとき詠て「遠きところにをる音をたてぬ鴿」のしらべにあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一ああ神よねがはくは我をあはれみたまへ 人いきまきて我をのまんとし終日たたかひて我をしへたぐ二 わが仇ひねもす急喘てわれをのまんとす誇りたかぶりて我とたたかふものおほし三 われおそるるときは汝によりたのまん四 われ神によりてその聖言をほめまつらん われ神に依頼みたればおそるることあらじ 肉體われになにをなし得んや五 かれらは終日わがことばを曲るなりその思念はことごとくわれにわざはひをなす六 かれらは群つどひて身をひそめ わが歩に目をとめてわが霊魂をうかがひもとむ七 かれらは不義をもてのがれんとおもへり 神よねがはくは憤ほりてもろもろの民をたふしたまへ八 汝わがあまた土の流離をかぞへたまへり なんぢの革嚢にわが涙をたくはへたまへ こは皆なんぢの冊にしるしあるにあらずや九 わがよびもとむる日にはわが仇しりぞかん われ神のわれを守りたまふことを知る一〇 われ神によりてその聖言をはめまつらん 我ヱホバによりてそのみことばを讃まつらん一一 われ神によりたのみたれば懼るることあらじ 人はわれに何をなしえんや一二 神よわがなんぢにたてし誓はわれをまとへり われ感謝のささげものを汝にささげん一三 汝わがたましひを死よりすくひたまへばなり なんぢ我をたふさじとわが足をまもり生命の光のうちにて神のまへに我をあゆませ給ひしにあらずや

第五七篇 ダビデが洞にいりてサウルの手をのがれしとき詠て「ほろぼすなかれ」にといふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムのうた

一我をあはれみたまへ神よわれをあはれみたまへ わが霊魂はなんぢを避所とす われ禍害のすぎさるまではなんぢの翼のかげを避所とせん二 我はいとたかき神によばはん わがために百事をなしをへたまふ神によばはん三 神はたすけを天よりおくりて我をのまんとする者のそしるときに我を救ひたまはんセラ 神は

その憐憫その眞實をおくりたまはん四 わがたましひは群ゐる獅のなかにあり 火のごとくもゆる者 その歯は戈のごとく矢のごとくその舌はとき劍のごとき人の子のなかに我ふしぬ五 神よねがはくはみづからを天よりも高くしみさかえを全地のうへに擧たまへ六 かれらはわが足をとらへんとて網をまうく わが靈魂はうなたる かれらはわがまへに阱をほりたり而してみづからその中におちいれりセラ七 わが心さだまれり神よわがこころ定まれり われ謳ひまつらん頌まつらん八 わが榮よさめよ 箏よ琴よさめよ われ黎明をよびさまさん九 主よわれもろもろの民のなかにてなんぢに感謝し もろもろの國のなかにて汝をほめうたはん一〇 そは汝のあはれみは大にして天にまでいたり なんぢの眞實は雲にまでいたる一一 神よねがはくは自からを天よりも高くし光榮をあまねく地のうへに擧たまへ

第五八篇 ダビデがよみて「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムのうた

一 なんぢら默しゐて義をのべうるか 人の子よなんぢらなほき審判をおこなふや二 否なんぢらは心のうちに惡事をおこなひその手の強暴をこの地にはかりいだすなり三 あしきものは胎をはなるるより背きとほざかり生れいづるより迷ひていつはりをいふ四五 かれらの毒は蛇のどくのごとし かれらは蠱術をおこなふものの甚たくみにまじなふその聲をだにきかざる耳ふさぐ聾ひの蝮のごとし六 神よかれらの口の歯をりたまへ ヱホバよ壯獅の牙をぬきくだきたまへ七 願くはかれらを流れゆく水のごとくに消失しめ その矢をはなつときは折れたるごとくなし給はんことを八 また融てきえゆく蝸牛のごとく婦のときならず産たる目をみぬ嬰のごとくならしめ給へ九 なんぢらの釜いまだ荊棘の火をうけざるさきに青をも燃たるをもともに狂風にて吹さりたまはん一〇 義者はかれらが讎かへさるるを見てよろこびその足をあしきものの血のなかにてあらはん一一 かくて人はいふべし實にただしきものに報賞あり實にさばきをほどこしたまふ神はましますなりと

第五九篇 サウル、ダビデを殺さんとし人をおくりてその家をうかがはしめし時ダビデがよみて「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一 わが神よねがはくは我をわが仇よりたすけいだし われを高處におきて我にさからひ起立つものより脱かれしめたまへ二 邪曲をおこなふものより我をたすけいだし血をながす人より我をすくひたまへ三 視よかれらは潛みかくれてわが靈魂をうかがひ猛者むれつどひて我をせむ ヱホバよ此はわれに愆あるにあらずわれに罪あるにあらず四 かれら趨りまはりて過失なきに我をそこなはんとて備をなす ねがはくは我をたすくるために目をさまして見たまへ五 なんぢヱホバ萬軍の神イスラエルの神よねがはくは目をさましてもろもろの國にのぞみたまへ あしき罪人にあはれみを加へたまふなかれセラ六 かれらは夕にかへり

きたり犬のごとくほえて邑をへありく七 視よかれらは口より惡をはく そのくちびるに劍あり かれらおもへらく誰ありてこの言をきかんやと八 されどヱホバよ汝はかれらをわらひ もろもろの國をあざわらひたまはん九 わが力よわれ汝をまちのぞまん 神はわがたかき櫓なり一〇 憐憫をたまふ神はわれを迎へたまはん 神はわが仇につきての願望をわれに見させたまはん一一 願くはかれらを殺したまふなかれ わが民つひに忘れやはせん 主われらの盾よ 大能をもてかれらを散し また卑したまへ一二 かれらがくちびるの言はその口のつみなり かれらは詛と虚偽とをいひいづるによりてその傲慢のためにとらへられしめたまへ一三 忿恚をもてかれらをほろぼしたまへ 再びながらふることなきまでに彼等をほろぼしたまへ ヤコブのなかに神いまして統治めたまふことをかれらに知しめて地の極にまでおよぼしたまへ セラ一四 かれらは夕にかへりきたり犬のごとくほえて邑をへありくべし一五 かれらはゆききして食物をあさりもし飽ことなくば終夜とどまれり一六 されど我はなんぢの大能をうたひ清晨にこゑをあげてなんぢの憐憫をうたひまつらん なんぢわが迫りくるしみたる日にたかき櫓となり わが避所となりたまひたればなり一七 わがちからよ我なんぢにむかひて頌辭をうたひまつらん 神はわがたかき櫓われにあはれみをたまふ神なればなり

第六〇篇 ダビデ、ナハライムのアラムおよびゾバのアラムとたたかひをりしがヨアブかへりゆき鹽谷にてエドム人一萬二千をころししとき教訓をなさんとてダビデがよみて「證詞の百合花」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一 神よなんぢわれらを棄われらをちらし給へり なんぢは憤ほりたまへり ねがはくは再びわれらを歸したまへ二 なんぢ國をふるはせてこれを裂たまへり ねがはくはその多くの隙をおぎなひたまへ そは國ゆりうごくなり三 なんぢはその民にたへがたきことをしめし 人をよろめかする酒をわれらに飲しめ給へり四 なんぢ眞理のために擧しめんとて汝をおそるるものに一つの旗をあたへたまへりセラ五 ねがはくは右の手をもて救をほどこし われらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ六 神はその聖をもていひたまへり われ甚くよろこばん われシケムをわかちスコテの谷をはからん七 ギレアデはわがもの マナセはわが有なり エフライムも亦わが首のまもりなり ユダはわが杖八 モアブはわが足盥なり エドムにはわが履をなげん ペリシテよわが故によりて聲をあげよと九 たれかわれを堅固なる邑にすすましめんや 誰かわれをみちびきてエドムにゆきたるか一〇 神よなんぢはわれらを棄たまひしにあらずや 神よなんぢはわれらの軍とともにいでゆきたまはず一一 ねがはくは助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ 人のたすけは空しければなり一二 われらは神によりて勇しくはたらかん われらの敵をみたまふものは神なればなり

第六一篇 琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一ああ神よねがはくはわが哭聲をききたまへ わが祈にみこころをとめたまへ二わが心くづほるるとき地のはてより汝をよばん なんぢ我をみちびきてわが及びがたきほどの高き磐にのぼらせたまへ三なんぢはわが避所われを仇よりのがれしむる堅固なる櫓なればなり四われ永遠になんぢの帷幄にすまはん我なんぢの翼の下にのがれんセラ五神よなんぢはわがもろもろの誓をきき名をおそるるものにたまふ嗣業をわれにあたへたまへり六なんぢは王の生命をのばし その年を幾代にもいたらせたまはん七王はとこしへに神のみまへにとどまらん ねがはくは仁慈と眞實とをそなへて彼をまもりたまへ八さらば我とこしへに名をほめうたひて日ごとにわがもろもろの誓をつくのひ果さん

第六二篇 エドトンの體にしたがひて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一わがたましひは默してただ神をまつ わがすくひは神よりいづるなり二神こそはわが磐わがすくひなれ またわが高き櫓にしあれば我いたくは動かされじ三なんぢらは何のときまで人におしせまるや なんぢら相共にかたぶける石垣のごとく搖ぎうごける籬のごとくに人をたふさんとするか四かれらは人をたふとき位よりおとさんとのみ謀り いつはりをよろこびまたその口にてはいはひその心にてはのろふセラ五わがたましひよ默してただ神をまて そはわがのぞみは神よりいづ六神こそはわが磐わがすくひなれ 又わがたかき櫓にしあれば我はうごかされじ七わが救とわが榮とは神にあり わがちからの磐わがさけどころは神にあり八民よいかなる時にも神によりたのめ その前になんぢらの心をそそぎいだせ 神はわれらの避所なりセラ九實にひくき人はむなしくたかき人はいつはりなり すべてかれらを權衡におかば上にあがりて虚しきものよりも輕きなり一〇暴虐をもて恃とするなかれ 掠奪ふをもてほこるなかれ 富のましくははる時はこれに心をかくるなかれ一一ちからは神にあり神ひとたび之をのたまへり われ二次これをきけり一二ああ主よあはれみも亦なんぢにあり なんぢは人おのおのの作にしたがひて報をなしたまへばなり

第六三篇 ユダの野にありしときに詠るダビデのうた

一ああ神よなんぢはわが神なり われ切になんぢをたづねもとむ 水なき燥きおとろへたる地にあるごとくわが霊魂はかわきて汝をのぞみ わが肉體はなんぢを戀したふ二曩にも我かくのごとく大權と榮光とをみんことをねがひ聖所にありて目をなんぢより離れしめざりき三なんぢの仁慈はいのちにも勝れるゆゑにわが口唇はなんぢを讃まつらん四斯われはわが生るあひだ汝をいはひ名によりてわが手をあげん五六われ床にありて汝をおもひいで夜の更るままになんぢを深くおもはん時 わがたましひは髓と脂とにて饗さるるごとく飽ことをえ わが口はよろこびの口唇をもてなんぢを讃たたへん七そはなんぢわが助となりたまひたれば 我なんぢの翼のかげに入てよろこびたのしまん八わがたましひはなんぢを慕追ふ みぎの手はわれを支ふるなり九然ど

わがたましひを滅さんとて尋ねもとむるものは地のふかきところにゆき一〇 又つるぎの刃にわたされ野犬の獲るところとなるべし一一 しかれども王は神をよろこばん 神によりて誓をたつるものはみな誇ることをえん 虚偽をいふものの口はふさがるべければなり

第六四篇 伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 神よわがなげくときわが聲をききたまへ わが生命をまもりて仇のおそれより脱かれしめたまへ二 ねがはくは汝われをかくして惡をなすものの陰かなる謀略よりまぬかれしめ不義をおこなふものの喧嘩よりまぬかれしめ給へ三 かれらは劍のごとくおのが舌をとぎ その弓をはり矢をつがへるごとく苦言をはなち四 隠れたるところにて全者を射んとす俄かにこれを射ておそるることなし五 また彼此にあしき企圖をはげまし共にはかりてひそかに羂をまうく 斯ていふ誰かわれらを見んと六 かれらはさまざまの不義をたづねいだして云われらは懇ろにたづね終れりとおのおのの衷のおもひと心とはふかし七 然はあれど神は矢にてかれらを射たまふべし かれらは俄かに傷をうけん八 斯てかれらの舌は其身にさからふがゆゑに遂にかれらは躓かん これを見るものみな逃れさるべし九 もろもろの人はおそれん而して神のみわざをのべつたへ その作たまへることを考ふべし一〇 義者はヱホバをよろこびて之によりたのまん すべて心のなほきものは皆ほこることを得ん

第六五篇 伶長にうたはしめたる歌ダビデの讃美なり

一 ああ神よさんびはシオンにて汝をまつ 人はみまへにて誓をはたさん二 祈をききたまふものよ諸人こぞりて汝にきたらん三 不義のことば我にかてり なんぢ我儕のもろもろの愆をきよめたまはん四 汝にえらばれ汝にちかづけられて大庭にすまふ者はさいはひなり われらはなんぢの家なんぢの宮のきよき處のめぐみにて飽ことをえん五 われらが救のかみよ 地と海とのもろもろの極なるきはめて遠きものの恃とするなんぢは公義によりて畏るべきことをもて我儕にこたへたまはん六 かみは大能をおびその權力によりてもろもろの山をかたくたたしめ七 海のひびき狂瀾のひびき もろもろの民のかしがましきを鎮めたまへり八 されば極遠にすめる人々もなんぢのくさぐさの豫兆をみておそる なんぢ朝夕のいづる處をよろこび謳はしめたまふ九 なんぢ地にのぞみて漑そぎおほいに之をゆたかにしたまへり 神のかはに水みちたり なんぢ如此そなへをなして穀物をかれらにあたへたまへり一〇 なんぢ畎をおほいにうるほし畝をたひらにし白雨にてこれをやはらかにし その萌芽るを祝し一一 また恩惠をもて年の冕弁としたまへり なんぢの途には膏したたれり一二 その恩滴は野の牧場をうるほし 小山はみな歓びにかこまる一三 牧場はみな羊のむれを衣 もろもろの谷は穀物におほはれたり かれらは皆よろこびてよばはりまた謳ふ

第六六篇 伶長にうたはしめたる讃美なり 歌なり

一全地よ神にむかひて歡びよばはれ二その名の榮光をうたへその頌美をさかえしめよ三かみに告まつれ 汝のもろもろの功用はおそるべきかな大なる力によりてなんぢの仇はなんぢに畏れしたがひ四全地はなんぢを拜みてうたひ名をほめうたはんとセラ五來りて神のみわざをみよ 人の子輩にむかひて作たまふことはおそるべきかな六神はうみをかへて乾ける地となしたまへりひとびと歩行にて河をわたりき その處にてわれらは神をよろこべり七神はその大能をもてとこしへに統治め その目は諸國をみたまふ そむく者みづからを崇むべからずセラ八もろもろの民よ われらの神をほめまつれ神をほめたたふる聲をきこえしめよ九神はわれらの靈魂をながらへしめ われらの足のうごかさるることをゆるしたまはず一〇神よなんぢはわれらを試みて白銀をねるごとくにわれらを錬たまひたればなり一一汝われらを網にひきいれ われらの腰におもき荷をおき一二人々をわれらの首のうへに騎こえしめたまひき われらは火のなか水のなかをすぎゆけり されど汝その中よりわれらをひきいたし豐盛なる處にいたらしめたまへり一三一四われ燔祭をもてなんぢの家にゆかん迫りくるしみたるときにわが口唇のいひいでわが口ののべし誓をなんぢに償はん一五われ肥たるものを燔祭とし牡羊を馨香として汝にささげ牡牛と牡山羊とをそなへまつらんセラ一六神をおそるる人よ みな來りてきけ われ神のわがたましひのために作たまへることをのべん一七われわが口をもて神によばはりまた舌をもてあがむ一八然るにわが心にしれる不義あらば主はわれにききたまふまじ一九されどまことに神はききたまへり聖意をわがいのりの聲にとめたまへり二〇神はほむべきかな わが祈をしりぞけず その憐憫をわれよりとりのぞきたまはざりき

第六七篇 琴にあはせて伶長にうたはしめたる歌なり 讃美なり

一ねがはくは神われらをあはれみ われらをさきはひてその聖顔をわれらのうへに照したまはんことをセラ二此はなんぢの途のあまねく地にしられ なんぢの救のもろもろの國のうちに知れんがためなり三かみよ庶民はなんぢに感謝し もろもろの民はみな汝をほめたたへん四もろもろの國はたのしみ又よろこびうたふべし なんぢ直をもて庶民をさばき地のうへなる萬の國ををさめたまべければなりセラ五神よたみらはなんぢに感謝し もろもろの民はみな汝をほめたたへん六地は產物をいだせり 神わが神はわれらを福ひたまはん七神われらをさきはひたまふべし かくて地のもろもろの極ことごとく神をおそれん

第六八篇 伶長にうたはしめたるダビデのうたなり 讃美なり

一ねがはくは神おきたまへ その仇はことごとくちり 神をにくむものは前よりにげさらんことを二烟のおひやらるるごとくかれらを驅逐たまへ 惡きものは火のまへに蝋のとくるごとく神のみまへにてほろぶべし三されど義きものには歡喜あり かれら神の前にてよろこびをどらん實にたのしみて喜ばん四神のみま

へにうたへ その名をほめたたへよ 乗て野をすぐる者のために大道をきづけ かれの名をヤハとよぶ その前によろこびをどれ五 きよき住居にまします神はみなしごの父やもめの審士なり六 神はよるべなきものを家族の中にをらしめ囚人をとき福祉にみちびきたまふ されど悖逆者はうるほひなき地にすめり七 神よなんぢは民にさきだちいでて野をすすみゆきたまひきセラ八 そのとき地ふるひ天かみのみまへに漏る シナイの山すら神イスラエルの神の前にふるひうごけり九 神よなんぢの嗣業の地のつかれおとろへたるとき豊かなる雨をふらせて之をかたくしたまへり一〇 曩になんぢの公會はその中にとどまれり 神よなんぢは惠をもて貧きもののために預備をなしたまひき一一 主みことばを賜ふ その佳音をのぶる婦女はおほくして群をなせり一二 もろもろの軍旅の王たちはにげさる 逃去りたれば家なる婦女はその掠物をわかつ一三 なんぢら羊の牢のうちにふすときは鴿のつばさの白銀におほはれその毛の黄金におほはるるがごとし一四 全能者かしこにて列王をちらし給へるときはサルモンの山に雪ふりたるがごとくなりき一五 バシャンのやまは神の山なりバシャンのやまは峰かさなれる山なり一六 峰かさなれるもろもろの山よ なんぢら何なれば神の住所にえらびたまへる山をねたみ見るや 然れヱホバは永遠にこの山にすみたまはん一七 神の戰車はよろづに萬をかさね千にちぢをくはふ 主その中にいませり 聖所にいますがごとくシナイの山にいまししがごとし一八 なんぢ高處にのぼり虜者をとりこにしてひきゐ禮物を人のなかよりも叛逆者のなかよりも受たまへりヤハの神ここに住たまはんが爲なり一九 日々にわれらの荷をおひたまふ主われらのすくひの神はほむべきかなセラ二〇 神はしばしばわれらを助けたまへる神なり 死よりのがれうるは主ヱホバに由る二一 神はその仇のかうべを撃やぶりたまはん 愆のなかにとどまるものの髮おほき顱頂をうちやぶりたまはん二二 主いへらく我バシャンよりかれらを携へかへり海のふかき所よりたづさへ歸らん二三 斯てなんぢの足をそのあたの血にひたし之をなんぢの犬の舌になめしめん二四 神よすべての人はなんぢの進行きたまふをみたり わが神わが王の聖所にすすみゆきたまふを見たり二五 鼓うつ童女のなかにありて謳ふものは前にゆき琴ひくものは後にしたがへり二六 なんぢらすべての會にて神をほめよイスラエルのみなもとより出るなんぢらよ 主をほめまつれ二七 彼處にかれらを統るとしわかきベニヤミンあり ユダの諸侯とその群衆とありまたゼブルンのきみたちナフタリの諸侯あり二八 なんぢの神はなんぢの力をたてたまへり 神よなんぢ我儕のためになしたまひし事をかたくしたまへ二九 ヱルサレムなるなんぢの宮のために列王なんぢに禮物をささげん三〇 ねがはくは葦間の獸むらがれる牯犢のごときもろもろの民をいましめてかれらに白銀をたづさへきたり みづから服ふことを爲しめたまへ 神はたたかひを好むもろもろの民をちらしたまへり三一 諸侯はエジプトよ

りきたり エテオピアはあわただしく神にむかひて手をのべん三二 地のもろもろのくによ神のまへにうたへ主をほめうたへセラ 三三 上古よりの天の天にのりたま者にむかひてうたへ みよ主はみこゑを発したまふ勢力ある聲をいだしたまふ三四 なんぢらちからを神に帰せよその稜威はイスラエルの上にとどまり その大能は雲のなかにあり三五 神のおそるべき状はきよき所よりあらはる イスラエルの神はその民にちからと勢力とをあたへたまふ 神はほむべきかな

第六十九篇 百合花にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 神よねがはくは我をすくひたまへ 大水ながれきたりて我がたましひにまでおよべり二 われ立止なきふかき泥の中にしづめり われ深水におちいるおほみづわが上をあふれすぐ三 われ歎息によりてつかれたり わが喉はかわき わが目はわが神をまちわびておとろへぬ四 故なくしてわれをにくむ者わがかしらの髪よりもおほく謂なくしてわが仇となり我をほろぼさんとするものの勢力つよし われ掠めざりしものをも償はせらる五 神よなんぢはわが愚なるをしりたまふ わがもろもろの罪はなんぢにかくれざるなり六 萬軍のヱホバ主よ ねがはくは汝をまちのぞむ者をわが故によりて辱かしめらるることなからしめたまへ イスラエルの神よねがはくはなんぢを求むる者をわが故によりて恥をおはしめらるることなからしめたまへ七 我はなんぢのために謗をおひ恥はわが面をおほひたればなり八 われわが兄弟には旅人のごとく わが母の子には外人のごとくなれり九 そはなんぢの家をおもふ熱心われをくらひ汝をそしるものの謗われにおよべり一〇 われ涙をながして食をたち わが霊魂をなげかすれば反てこれによりて謗をうく一一 われ麁布をころもとなししにかれらが諺語となりぬ一二 門にすわる者はわがうへをかたる われは酔狂たるものに謳ひはやされたり一三 然はあれどヱホバよわれは恵のときに汝にいのる ねがはくは神よなんぢの憐憫のおほきによりて汝のすくひの眞實をもて我にこたへたまへ一四 ねがはくは泥のなかより我をたすけいだして沈ざらしめたまへ 我をにくむものより深水よりたすけいだしたまへ一五 大水われを淹ふことなく淵われをのむことなく坑その口をわがうへに閉ることなからしめたまへ一六 ヱホバよねがはくは我にこたへたまへ なんぢの仁慈うるはしければなり なんぢの憐憫はおほしわれに帰りきたりたまへ一七 面をなんぢの僕にかくしたまふなかれ われ迫りくるしめり ねがはくは速かに我にこたへたまへ一八 わがたましひに近くよりて之をあがなひわが仇のゆゑに我をすくひたまへ一九 汝はわがうくる謗とはぢと侮辱とをしりたまへり わが敵はみな汝のみまへにあり二〇 譭謗わが心をくだきぬれば我いたくわづらへり われ憐憫をあたふる者をまちたれど一人だになく慰むるものを俟たれど一人をもみざりき二一 かれら苦草をわがくひものにあたへ わが渇けるときに醋をのませたり二二 ねがはくは彼等のまへなる筵は網となり そのたのむ安逸はつ

ひに羂となれ 二三 その目をくらくして見しめず その腰をつねにふるはしめたまへ 二四 願くはなんぢの忿恚をかれらのうへにそそぎ汝のいかりの猛烈をかれらに追及せたまへ 二五 かれらの屋をむなしくせよ その幕屋に人をすまはするなかれ 二六 かれらはなんぢが撃たまひたる者をせめ なんぢが傷けたまひたるものの痛をかたりふるればなり 二七 ねがはくはかれらの不義に不義をくはへてなんぢの義にあづからせ給ふなかれ 二八 かれらを生命の冊よりけして義きものとともに記さるることなからしめたまへ 二九 斯てわれはくるしみ且うれひあり 神よねがはくはなんぢの救われを高處におかんことを 三〇 われ歌をもて神の名をほめたたへ 感謝をもて神をあがめまつらん 三一 此はをうしまたは角と蹄とある力つよき牡牛にまさりてヱホバよろこびたまはん 三二 謙遜者はこれを見てよろこべり 神をしたふ者よなんぢらの心はいくべし 三三 ヱホバは乏しきものの聲をきき その俘囚をかろしめたまはざればなり 三四 天地はヱホバをほめ蒼海とその中にうごくあらゆるものとはヱホバを讃まつるべし 三五 神はシオンをすくひユダのもろもろの邑を建たまふべければなり かれらは其處にすみ且これをおのが有とせん 三六 その僕のすゑも亦これを嗣その名をいつくしむ者その中にすまん

第七〇篇 伶長にうたはしめたるダビデが記念のうた

一 神よねがはくは我をすくひたまへ ヱホバよ速きたりて我をたすけたまへ 二 わが霊魂をたづぬるものの恥あわてんことを わが害はるるをよろこぶものの後にしりぞきて恥をおはんことを 三 ああ視よや視よやといふもののおのが恥によりて後にしりぞかんことを 四 すべて汝をたづねもとむる者のなんぢによりて樂みよろこばんことを なんぢの救をしたふもののつねに神は大なるかなととなへんことを 五 われは苦しみ且ともし 神よいそぎて我にきたりたまへ 汝はわが助われを救ふものなり ヱホバよねがはくは猶豫たまふなかれ

第七一篇

一 ヱホバよ我なんぢに依賴む ねがはくは何の日までも恥うくることなからしめ給へ 二 なんぢの義をもて我をたすけ我をまぬかれしめたまへ なんぢの耳をわれに傾けて我をすくひたまへ 三 ねがはくは汝わがすまひの磐となりたまへ われ恒にそのところに往ことを得ん なんぢ我をすくはんとて勅命をいだしたまへり そは汝はわが磐わが城なり 四 わが神よあしきものの手より不義殘忍なる人のてより我をまぬかれしめたまへ 五 主ヱホバよなんぢはわが望なり わが幼少よりの恃なり 六 われ胎をはなるるより汝にまもられ母の腹にありしときより汝にめぐまれたり 我つねに汝をほめたたへん 七 我おほくの人にあやしまるるごとき者となれり 然どなんぢはわが堅固なる避所なり 八 なんぢの頌辭となんぢの頌美とは終日わが口にみちん 九 わが年老ぬるとき我をすてたまふなかれ わが力おとろふるとき我をはなれたまなかれ 一〇 わが仇はわがことを論ひ わが霊魂をうかがふ者はたがひに議ていふ 一一 神かれを離れたり彼をたすくる者

なし かれを追てとらへよと一二神よわれに遠ざかりたまふなかれ わが神よとく來りて我をたすけたまへ一三わがたましひの敵ははぢ且おとろへ我をそこなはんとするものは誹と辱とにおほはれよ一四されど我はたえず望をいだきていやますます汝をほめたたへん一五わが口はひねもす汝の義となんぢの救とをかたらん われその數をしらざればなり一六われは主ヱホバの大能の事跡をたづさへゆかん われは只なんぢの義のみをかたらん一七神よなんぢわれを幼少より教へたまへり われ今にいたるまで汝のくすしき事跡をのべつたへたり一八神よねがはくはわれ老て頭髮しろくなるとも我がなんぢの力を次代にのべつたへ、なんぢの大能を世にうまれいづる凡のものに宣傳ふるまで我をはなれ給ふなかれ一九神よなんぢの義もまた甚たかし なんぢは大なることをなしたまへり 神よたれか汝にひとしき者あらんや二〇汝われらを多のおもき苦難にあはせたまへり なんぢ再びわれらを活しわれらを地の深所よりあげたまはん二一ねがはくは我をいよいよ大ならしめ歸りきたりて我をなぐさめ給へ二二わが神よさらばわれ箏をもて汝をほめ なんぢの眞實をほめたたへん イスラエルの聖者よわれ琴をもてなんぢを讃うたはん二三われ聖前にうたときわが口唇よろこびなんぢの贖ひたまへるわが靈魂おほいに喜ばん二四わが舌もまた終日なんぢの義をかたらん われを害はんとするもの愧惶つればなり

第七二篇 ソロモンのうた

一神よねがはくは汝のもろもろの審判を王にあたへ なんぢの義をわうの子にあたへたまへ二かれは義をもてなんぢの民をさばき公平をもて苦しむものを鞫かん三義によりて山と岡とは民に平康をあたふべし四かれは民のくるしむ者のために審判をなし乏しきものの子輩をすくひ虐ぐるものを壞きたまはん五かれらは日と月とのあらんかぎり世々おしなべて汝をおそるべし六かれは苅とれる牧にふる雨のごとく地をうるほす白雨のごとくのぞまん七かれの世にただしき者はさかえ平和は月のうするまで豐かならん八またその政治は海より海にいたり河より地のはてにおよぶべし九野にをる者はそのまへに屈み そり仇は塵をなめん一〇タルシシおよび島々の王たちは貢をさめ シバとセバの王たちは禮物をささげん一一もろもろの王はそのまへに俯伏しもろもろの國はかれにつかへん一二かれは乏しき者をその叫ぶときにすくひ 助けなき苦しむ者をたすけ一三弱きものと乏しき者とをあはれみ乏しきものの靈魂をすくひ一四かれらのたましひを暴虐と強暴とよりあがなひたまふ その血はみまへに貴かるべし一五かれらは存ふべし 人はシバの黄金をささげてかれのために恒にいのり終日かれをいははん一六國のうち五穀ゆたかにしてその實はレバノンのごとく山のいただきにそよぎ 邑の人々は地の草のごとく榮ゆべし一七かれの名はつねにたえずかれの名は日の久しきごとくに絶ることなし 人はかれによりて福祉をえん もろもろの國はかれをさいはひなる者ととなへん一

八ただイスラエルの神のみ奇しき事跡をなしたまへり神ヱホバはほむべきかな一九その榮光の名はよよにほむべきかな全地はその榮光にて滿べしアーメン アーメン二〇ヱッサイの子ダビデの祈はをはりぬ

第七三篇 アサフのうた

一神はイスラエルにむかひ心のきよきものに對ひてまことに惠あり二然はあれどわれはわが足つまづくばかりわが歩すべるばかりにてありき三こはわれ惡きものの榮ゆるを見てその誇れる者をねたみしによる四かれらは死るに苦しみなくそのちからは反てかたし五かれらは人のごとく憂にをらず人のごとく患難にあふことなし六このゆゑに傲慢は妝飾のごとくその頸をめぐり強暴はころものごとく彼等をおほへり七かれら肥ふとりてその目とびいで心の欲にまさりて物をうるなり八また嘲笑をなし惡をもて暴虐のことばをいだし高ぶりてものいふ九その口を天におきその舌を地にあまねく往しむ一〇このゆゑにかれの民はここにかへり水のみちたる杯をしぼりいだして一一いへらく神いかで知たまはんや至上者に知識あらんやと一二視よかれらは惡きものなるに常にやすらかにしてその富ましくはれり一三誠に我はいたづらに心をきよめ罪ををかさずして手をあらひたり一四そはわれ終日なやみにあひ朝ごとに責をうけしなり一五われもし斯ることを述んといひしならば我なんぢが子輩の代をあやまらせしならん一六われこれらの道理をしらんとして思ひめぐらししにわが眼いたく痛たり一七われ神の聖所にゆきてかれらの結局をふかく思へるまでは然りき一八誠になんぢはかれらを滑かなるところにおきかれらを滅亡におとしいれ給ふ一九かれらは瞬間にやぶれたるかな彼等は恐怖をもてことごとく滅びたり二〇主よなんぢ目をさましてかれらが像をかろしめたまはんときは夢みし人の目さめたるがごとし二一わが心はうれへわが腎はさされたり二二われおろかにして知覺なし聖前にありて獸にひとしかりき二三されど我つねになんぢとともにあり汝わが右手をたもちたまへり二四なんぢその訓諭をもて我をみちびき後またわれをうけて榮光のうちに入たまはん二五汝のほかに我たれをか天にもたん地にはなんぢの他にわが慕ふものなし二六わが身とわが心とはおとろふ されど神はわがこころの磐わがとこしへの嗣業なり二七視よなんぢに遠きものは滅びん 汝をはなれて姦淫をおこなふ者はみななんぢ之をほろぼしたまひたり二八神にちかづき奉るは我によきことなり われは主ヱホバを避所としてそのもろもろの事跡をのべつたへん

第七四篇 アサフの教訓のうた

一神よいかなれば汝われらをかぎりなく棄たまひしや奈何ばなんぢの草苑の羊にみかいかりの煙あがれるや二ねがはくは往昔なんぢが買求めたまへる公會ゆづりの支派となさんとて贖ひたまへるものを思ひいでたまへ又なんぢが住たまふシオンの山をおもひいで給へ三とこしへの滅亡の跡にみあしを向たまへ仇

は聖所にてもろもろの惡きわざをおこなへり四なんぢの敵はなんぢの集のなかに吼たけびおのが旗をたてて誌とせり五かれらは林のしげみにて斧をあぐる人の状にみゆ六いま銕と鎚とをもて聖所のなかなる彫刻めるものをことごとく毀ちおとせり七かれらはなんぢの聖所に火をかけ名の居所をけがして地におとしたり八かれら心のうちにいふ われらことごとく之をこぼちあらさんと かくて國内なる神のもろもろの會堂をやきつくせり九われらの誌はみえず預言者も今はなし 斯ていくその時をかふべき われらのうちに知るものなし一〇神よ敵はいくその時をふるまでそしるや 仇はなんぢの名をとこしへに汚すならんか一一いかなれば汝その手みぎの手をひきたまふや ねがはくは手をふところよりいだしてかれらを滅したまへ一二 神はいにしへよりわが王なり すくひを世の中におこなひたまへり一三なんぢその力をもて海をわかち水のなかなる龍の首をくだき一四鰐のかうべをうちくだき野にすめる民にあたへて食となしたまへり一五なんぢは泉と水流とをひらき又もろもろの大河をからしたまへり一六 晝はなんぢのもの夜も又汝のものなり なんぢは光と日とをそなへ一七あまねく地のもろもろの界をたて夏と冬とをつくりたまへり一八 ヱホバよ仇はなんぢをそしり愚かなる民はなんぢの名をけがせり この事をおもひいでたまへ一九 願くはなんぢの鴿のたましひを野のあらき獸にわたしたまふなかれ 苦しむものに命をとこしへに忘れたまふなかれ二〇 契約をかへりみたまへ地のくらきところは強暴の宅にて充たればなり二一 ねがはくは虐げらるるものを慚退かしめ給ふなかれ 惱るものと苦しむものとに聖名をほめたたへしめたまへ二二神よおきてなんぢの訟をあげつらひ愚かなるものの終日なんぢを謗れるをみこころに記たまへ二三なんぢの敵の聲をわすれたまふなかれ 汝にさからひて起りたつ者のかしがましき聲はたえずあがれり

第七五篇

「滅すなかれ」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるアサフの歌なり讃美なり

一神よわれら汝にかんしやす われら感謝すなんぢの名はちかく坐せばなり もろもろの人はなんぢの奇しき事跡をかたりあへり二 定りたる期いたらば我なほき審判をなさん三地とすべての之にすむものと消去しとき我そのもろもろの柱をたてたりセラ四われ誇れるものに誇りかにおこなふなかれといひ 惡きものに角をあぐるなかれといへり五なんぢらの角をたかく擧るなかれ頸をかたくして高りいふなかれ六擧ることは東よりにあらず西よりにあらずまた南よりにもあらざるなり七ただ神のみ審士にましませば此をさげ彼をあげたまふ八ヱホバの手にさかづきありて酒あわだてり その中にものまじりてみつ 神これをそそぎいだせり 誠にその滓は地のすべてのあしき者しぼりて飲むべし九されど我はヤコブの神をのべつたへんとこしへに讃うたはん一〇われ惡きもののすべての角をきりはなたん 義きものの角はあげらるべし

第七六篇 琴にあはせて伶長にうたはしめたるアサフの歌なり讃美なり

一 神はユダにしられたまへり その名はイスラエルに大なり 二 またサレムの中にその幕屋あり その居所はシオンにあり 三 彼所にてかれは弓の火矢ををり盾と劍と戰陣とをやぶりたまひき セラ 四 なんぢ榮光あり掠めうばふ山よりもたふとし 五 心のつよきものは掠めらる かれらは睡にしづみ勇ましきものは皆その手を見うしなへり 六 ヤコブの神よなんぢの叱咤によりて戰車と馬とともに深睡につけり 七 神よなんぢこそ懼るべきものなれ 一たび怒りたまふときは誰かみまへに立えんや 八 九 なんぢ天より宣告をのりたまへり 地のへりくだる者をみなすくはんとて神のさばきに立たまへるとき地はおそれて默したり セラ 一〇 實に人のいかりは汝をほむべし 怒のあまりは汝おのれの帶としたまはん 一一 なんぢの神ヱホバにちかひをたてて償へ そのまはりなるすべての者はおそるべきヱホバに禮物をささぐべし 一二 ヱホバはもろもろの諸侯のたましひを絶たまはん ヱホバは地の王たちのおそるべき者なり

第七七篇 エドトンの體にしたがひて伶長にうたはしめたるアサフのうた

一 我わがこゑをあげて神によばはん われ聲を神にあげなばその耳をわれにかたぶけたまはん 二 わがなやみの日にわれ主をたづねまつれり 夜わが手をのべてゆるむることなかりき わがたましひは慰めらるるをいなみたり 三 われ神をおもひいでて打なやむ われ思ひなげきてわが靈魂おとろへぬ セラ 四 なんぢはわが眼をささへて閉がしめたまはず 我はものいふこと能はぬほどに惱みたり 五 われむかしの日いにしへの年をおもへり 六 われ夜わが歌をむもひいづ 我わが心にてふかくおもひわが靈魂はねもころに尋ねもとむ 七 主はとこしへに棄たまふや 再びめぐみを垂たまはざるや 八 その憐憫はのこりなく永遠にさり そのちかひは世々ながく廢れたるや 九 神は恩をほどこすことを忘れたまふや 怒をもてそのあはれみを緘たまふや セラ 一〇 斯るときに我いへらく此はただわが弱きがゆゑのみ いで至上者のみぎの手のもろもろの年をおもひいでん 一一 われヤハの作爲をのべとなへん われ往古よりありし汝がくすしきみわざを思ひいださん 一二 また我なんぢのすべての作爲をおもひいで汝のなしたまへることを深くおもはん 一三 神よなんぢの途はいときよし 神のごとく大なる神はたれぞや 一四 なんぢは奇きみわざをなしたまへる神なり もろもろの民のあひだにその大能をしめし 一五 その臂をもてヤコブ、ヨセフの子輩なんぢの民をあがなひたまへり セラ 一六 かみよ大水なんぢを見たり おほみづ汝をみてをののき淵もまたふるへり 一七 雲はみづをそそぎいだし空はひびきをいだしなんぢの矢ははしりいでたり 一八 なんぢの雷鳴のこゑは暴風のうちにありき 電光は世をてらし地はふるひうごけり 一九 なんぢの大道は海のなかにあり なんぢの徑はおほみづの中にあり なんぢの蹤跡はたづねがたかりき 二〇 なんぢその民をモーセとアロンとの手によりて羊の群のごとくみちびきたまへり

第七八篇 アサフの教訓のうた

一わが民よわが教訓をきき、わが口のことばになんぢらの耳をかたぶけよ二われ口をひらきて譬喩をまうけいにしへの玄幽なる語をかたりいでん三是われらが曩にききしところ知しところ又われらが列祖のかたりつたへし所なり四われら之をその子孫にかくさずヱホバのもろもろの頌美と能力とそのなしたまへる奇しき事跡とをきたらんとする世につげん五そはヱホバ證詞をヤコブのうちにたて律法をイスラエルのうちに定めてその子孫にしらすべきことをわれらの列祖におほせたまひたればなり六これ來らんとする代のちに生るる子孫がこれを知みづから起りてそのまた子孫につたへ七かれらをして神によりたのみ神のみわざを忘れずその誡命をまもらしめん爲なり八またその列祖のごとく頑固にしてそむくものの類となりそのこころ修まらずそのたましひ神に忠ならざる類とならざらん爲なり九エフライムのこらは武具をとのへ弓をたづさへしに戰ひの日にうしろをそむけたり一〇かれら神のちかひをまもらずそのおきてを履ことをいなみ一一ヱホバのなしたまへることとかれらに示したまへる奇しき事跡とをわすれたり一二神はエジプトの國にてゾアンの野にて妙なる事をかれらの列祖のまへになしたまへり一三すなはち海をさきてかれらを過ぎしめ水をつみて堆かくしたまへり一四ひるは雲をもてかれらをみちびき夜はよもすがら火の光をもてこれを導きたまへり一五神はあれのにて磐をさき大なる淵より汲がごとくにかれらに飲しめ一六また磐より流をひきて河のごとくに水をながれしめたまへり一七然るにかれら尚たえまなく罪をかして神にさからひ荒野にて至上者にそむき一八またおのが慾のために食をもとめてその心のうちに神をこころみたり一九然のみならずかれらは神にさからひていへり神は荒野にて筵をまうけたまふを得んや二〇みよ神いはを撃たまへば水ほどばしりいで流あぶれたり糧をもあたへたまふを得んや神はその民のために肉をそなへたまはんやと二一この故にヱホバこれを聞ていきどほりたまひき火はヤコブにむかひてもえあがり怒はイスラエルにむかひて立騰れり二二こはかれら神を信ぜずその救にたのまざりし故なり二三されどなほ神はうへなる雲に命じて天の戸をひらき二四彼等のうへにマナをふらせて食はしめ天の穀物をあたへたまへり二五人みな勇士の糧をくらへり神はかれらに食物をおくりて飽足らしめたまふ二六神は天に東風をふかせ大能もて南の風をみちびきたまへり二七神はかれらのうへに塵のごとく肉をふらせ海の沙のごとく翼ある鳥をふらせて二八その營のなかその住所のまはりに落したまへり二九斯てかれらは食ひて飽たりぬ神はこれにその欲みしものを與へたまへり三〇かれらが未だその慾をはなれず食物のなほ口のうちにあるほどに三一神のいかり既にかれらに對ひてたちのぼり彼等のうちにて最もこえたる者をころしイスラエルのわかき男をうちたふしたまへり三二これらの事ありしかど彼等はな

ほ罪をかしてその奇しきみわざを信ぜざりしかば三三 神はかれらの日を空しくすぐさせ その年をおそれつつ過させたまへり三四 神かれらを殺したまへる時かれら神をたづね歸りきたりて懇ろに神をもとめたり三五 かくて神はおのれの磐いとたかき神はおのれの贖 主なることをおもひいでたり三六 然はあれど彼等はただその口をもて神にへつらひその舌をもて神にいつはりをいひたりしのみ三七 そはかれらのこころは神にむかひて堅からず その契約をまもるに忠 信ならざりき三八 されど神はあはれみに充たまへばかれらの不義をゆるして亡したまはず屢ばそのみいかりを轉してことごとくは忿恚をふりおこし給はざりき三九 又かれがただ肉にして過去ばふたたび歸りこぬ風なるをおもひいで給へり四〇 かれらは野にて神にそむき荒野にて神をうれへしめしこと幾次ぞや四一 かれらかへすがへす神をこころみイスラエルの聖者をはづかしめたり四二 かれらは神の手をも敵より贖ひたまひし日をもおもひいでざりき四三 神はそのもろもろの豫兆をエジプトにあらはしその奇しき事をゾアンの野にあらはし四四 かれらの河を血にかはらせてその流を飮あたはざらしめ四五 また蠅の群をおくりてかれらをくはしめ蛙をおくりてかれらを亡させたまへり四六 神はかれらの田 產を蝨賊にわたしかれらの勤勞を蝗にあたへたまへり四七 神は雹をもてかれらの葡萄の樹をからし霜をもてかれらの桑の樹をからし四八 その家畜をへうにわたしその群をもゆる閃電にわたし四九 かれらの上にはげしき怒といきどほりと怨恨となやみと禍害のつかひの群とをなげいだし給へり五〇 神はその怒をもらす道をまうけかれらのたましひを死よりまぬかれしめず そのいのちを疫癘にわたし五一 エジプトにてすべての初子をうちハムの幕屋にてかれらの力の始をうちたまへり五二 されどおのれの民を羊のごとくに引いだし かれらを曠野にてけだものの群のごとくにみちびき五三 かれらをともなひておそれなく安けからしめ給へりされど海はかれらの仇をおほへり五四 神はその聖所のさかひ その右の手にて購たまへるこの山に彼らを携へたまへり五五 又かれらの前にてもろもろの國人をおもひいだし準縄をもちゐ その地をわかちて嗣業となし イスラエルの族をかれらの幕屋にすまはせたまへり五六 然はあれど彼等はいとたかき神をこころみ之にそむきてそのもろもろの證詞をまもらず五七 叛きしりぞきてその列祖の如く眞實をうしなひ くるへる弓のごとくひるがへりて逸ゆけり五八 高 處をまうけて神のいきどほりをひき刻める像にて神の嫉妬をおこしたり五九 神ききたまひて甚だしくいかり大にイスラエルを憎みたまひしかば六〇 人々の間におきたまひし幕屋なるシロのあげばりを棄さり六一 その力をとりことならしめ その榮光を敵の手にわたし六二 その民を劍にあたへ その嗣業にむかひて甚だしく怒りたまへり六三 火はかれらのわかき男をやきつくし かれらの處女はその婚姻の歌によりて譽らるることなく六四 かれらの祭司はつるぎにて仆れ かれらの

寡婦は喪のなげきだにせざりき六五 斯るときに主はねぶりし者のさめしごとく勇士の酒によりてさけぶがごとく目さめたまひて六六 その敵をうちしりぞけ とこしへの辱をかれらに負せたまへり六七 またヨセフの幕屋をいなみエフライムの族をえらばず六八 ユダの族そのいつくしみたまふシオンの山をえらびたまへり六九 その聖所を山のごとく永遠にさだめたまへる地のごとくに立たまへり七〇 またその僕ダビデをえらびて羊の牢のなかよりとり七一 乳をあたふる牝羊にしたがひゆく勤のうちより携へきたりてその民ヤコブその嗣業イスラエルを牧はせたまへり七二 斯てダビデはそのこころの完全にしたがひてかれらを牧ひ その手のたくみをもて之をみちびけり

第七九篇 アサフのうた

一 ああ神よもろもろの異邦人はなんぢの嗣業の地ををかし なんぢの聖宮をけがしヱルサレムをこぼちて礫堆となし二 なんぢの僕のしかばねをそらの鳥に與へて餌となし なんぢの聖徒の肉を地のけものにあたへ三 その血をヱルサレムのめぐりに水のごとく流したりされど之をはうむる人なし四 われらは隣人にそしられ四周のひとびとに侮られ嘲けらるるものとなれり五 ヱホバよ斯て幾何時をへたまふや 汝とこしへに怒たまふや なんぢのねたみは火のごとく燃るか六 願くはなんぢを識ざることくにびと聖名をよばざるもろもろの國のうへに烈怒をそそぎたまへ七 かれらはヤコブを呑その住處をあらしたればなり八 われらにむかひて先祖のよこしまなるわざを記念したまふなかれ願くはなんぢの憐憫をもて速かにわれらを迎へたまへ われらは貶されて甚だしく卑くなりたればなり九 われらのすくひの神よ名のえいくわうのために我儕をたすけ名のためにわれらを救ひ われらの罪をのぞきたまへ一〇 いかなれば異邦人はいふ かれらの神はいづくにありやと 願くはなんぢの僕等がながされし血の報をわれらの目前になして異邦人にしらしめたまへ一一 ねがはくは汝のみまへにとらはれびとの嘆息のとどかんことを なんぢの大なる能力により死にさだめられし者をまもりて存へしめたまへ一二 主よわれらの隣人のなんぢをそしりたる謗を七倍ましてその懐にむくいかへしたまへ一三 然ばわれらなんぢの民なんぢの草苑のひつじは永遠になんぢに感謝しその頌辭を世々あらはさん

第八〇篇 證詞の百合花といへる調にあはせて伶長にうたはしめたるアサフの歌

一 イスラエルの牧者よひつじの群のごとくヨセフを導きたまものよ 耳をかたぶけたまへ ケルビムのうへに坐したまふものよ光をはなちたまへ二 エフライム、ベニヤミン、マナセの前になんぢの力をふりおこし來りてわれらを救ひたまへ三 神よふたたびわれらを復し なんぢの聖顔のひかりをてらしたまへ 然ばわれら救をえん四 ばんぐんの神ヱホバよなんぢその民の祈にむかひて何のときまで怒りたまふや五 汝かれらになみだの糧をくらは

せ涙を量器にみちみつるほどあたへて飲しめ給へり六 汝われらを隣人のあひあらそふ種料となしたまふ われらの仇はたがひにあざわらへり七 萬軍の神よふたたびわれらを復したまへ 汝のみかほの光をてらしたまへ さらばわれら救をえん八 なんぢ葡萄の樹をエジプトより携へいだしもろもろの國人をおひしりぞけて之をうゑたまへり九 汝そのまへに地をまうけたまひしかば深く根して國にはびこれり一〇 その影はもろもろの山をおほひそのえだは神の香柏のごとくにてありき一一 その樹はえだを海にまでのべ その若枝を河にまでのべたり一二 汝いかなればその垣をくづして路ゆくすべての人に摘取らせたまふや一三 はやしの猪はこれをあらし野のあらき獣はこれをくらふ一四 ああ萬軍の神よねがはくは歸りたまへ 天より俯視てこの葡萄の樹をかへりみ一五 なんぢが右の手にてうゑたまへるもの自己のために強くなしたまへる枝をまもりたまへ一六 その樹は火にて燒れまた斫たふさる かれらは聖顔のいかりにて亡ぶ一七 ねがはくはなんぢの手をその右の手の人のうへにおき自己のためにつよくなしたまへる人の子のうへにおきたまへ一八 さらばわれら汝をしりぞき離るることなからん 願くはわれらを活したまへ われら名をよばん一九 ああ萬軍の神ヱホバよふたたび我儕をかへしたまへ なんぢの聖顏のひかりを照したまへ 然ばわれら救をえん

第八一篇 ギテトの琴にあはせて伶長にうたはしめたるアサフのうた

一 われらの力なる神にむかひて高らかにうたひヤコブの神にむかひてよろこびの聲をあげよ二 歌をうたひ鼓とよき音のことと箏とをもちきたれ三 新月と滿月とわれらの節會の日とにラッパをふきならせ四 これイスラエルの律法ヤコブのかみの格なり五 神さきにエジプトを攻たまひしときヨセフのなかに之をたてて證となしたまへり 我かしこにて未だしらざりし方言をきけり六 われかれの肩より重荷をのぞき かれの手を籃よりまぬかれしめたり七 汝なやめるとき呼しかば我なんぢをすくへり われ雷鳴のかくれたるところにて汝にこたへメリバの水のほとりにて汝をこころみたりセラ八 わが民よきけ我なんぢに證せん イスラエルよ汝がわれに從はんことをもとむ九 汝のうちに他神あるべからず なんぢ他神ををがむべからず一〇 われはエジプトの國よりなんぢを携へいでたる汝の神ヱホバなり なんぢの口をひろくあけよ われ物をみたしめん一一 されどわが民はわか聲にしたがはず イスラエルは我をこのまず一二 このゆゑに我かれらが心のかたくななるにまかせ彼等がその任意にゆくにまかせたり一三 われはわが民のわれに從ひイスフルのわが道にあゆまんことを求む一四 さらば我すみやかにかれらの仇をしたがへ わが手をかれらの敵にむけん一五 斯てヱホバをにくみし者もかれらに從ひ かれらの時はとこしへにつづかん一六 神はむぎの最嘉をもてかれらをやしなひ 磐よりいでたる蜜をもて汝をあかしむべし

第八二篇 アサフのうた

一 かみは神のつどひの中にたちたまふ 神はもろもろの神のなかに審判をなしたまふ二 なんぢらは正からざる審判をなし あしきものの身をかたよりみて幾何時をへんとするや セラ三 よわきものと孤兒とのために さばき苦しむものと乏しきもののために公平をほどこせ四 弱きものと貧しきものとをすくひ彼等をあしきものの手よりたすけいだせ五 かれらは知ることなく悟ることなくして暗中をゆきめぐりぬ 地のもろもろの基はうごきたり六 我いへらく なんぢらは神なり なんぢらはみな至上者の子なりと七 然どなんぢらは人のごとくに死もろもろの侯のなかの一人のごとく仆れん八 神よおきて全地をさばきたまへ 汝もろもろの國を嗣たまふべければなり

第八三篇 アサフの歌なり讃美なり

一 神よもだしたまふなかれ神よものいはで寂靜たまふなかれ二 視よなんぢの仇はかしがましき聲をあげ汝をにくむものは首をあげたり三 かれらはたくみなる謀略をもてなんぢの民にむかひ相共にはかりて汝のかくれたる者にむかふ四 かれらいひたりき 來かれらを斷滅してふたたび國をたつることを得ざらしめイスラエルの名をふたたび人にしられざらしめんと五 かれらは心を一つにしてともにはかり互にちかひをなしてなんぢに逆ふ六 こはエドムの幕屋にすめる人イシマエル人モアブ、ハガル人七 ゲバル、アンモン、アマレク、ペリシテおよびツロの民などなり八 アッスリヤも亦かれらにくみせり 斯てロトの子輩のたすけをなせり セラ九 なんぢ曩にミデアンになしたまへる如くキションの河にてシセラとヤビンとに作たまへるごとく彼等にもなしたまへ一〇 かれらはエンドルにてほろび地のために肥料となれり一一 かれらの貴人をオレブ、ゼエブのごとくそのもろもろの侯をゼバ、ザルムンナのごとくなしたまへ一二 かれらはいへり われら神の草苑をえてわが有とすべしと一三 わが神よかれらをまきあげらるる塵のごとく風のまへの藁のごとくならしめたまへ一四 林をやく火のごとく山をもやす焰のごとく一五 なんぢの暴風をもてかれらを追ひなんぢの旋風をもてかれらを怖れしめたまへ一六 かれらの面に恥をみたしめたまへ ヱホバよ然ばかれらなんぢの名をもとめん一七 かれらをとこしへに恥おそれしめ惶てまどひて亡びうせしめたまへ一八 然ばかれらはヱホバてふ名をもちたまふ汝のみ全地をしろしめす至上者なることを知るべし

第八四篇 ギテトの琴にあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 萬軍のヱホバよなんぢの帷幄はいかに愛すべきかな二 わが靈魂はたえいるばかりにヱホバの大庭をしたひ わが心わが身はいける神にむかひて呼ふ三 誠やすずめは窩をえ燕子はその雛をいるる巣をえたり萬軍のヱホバわが王わが神よ これなんぢの祭壇なり四 なんぢの家にすむものは福ひなり かかるひとはつねに汝をたたへまつらんセラ五 その力なんぢにありその心シ

オンの大路にある者はさいはひなり六 かれらは涙の谷をすぐれども其處をおほくの泉あるところとなす また前の雨はもろもろの惠をもて之をおほへり七 かれらは力より力にすすみ遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ八 ばんぐんの神ヱホバよわが祈をききたまへ ヤコブの神よ耳をかたぶけたまへセラ九 われらの盾なる神よ みそなはして なんぢの受膏者の顔をかへりみたまへ一〇 なんぢの大庭にすまふ一日は千日にもまされり われ惡の幕屋にをらんよりは 寧ろわが神のいへの門守とならんことを欲ふなり一一 そは神ヱホバは日なり盾なり ヱホバは恩とえいくわうとをあたへ直くあゆむものに善物をこばみたまふことなし一二 萬軍のヱホバよなんぢに依頼むものはさいはひなり

第八五篇 伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 ヱホバよなんぢは御國にめぐみをそそぎたまへり なんぢヤコブの俘囚をかへしたまひき二 なんぢおのが民の不義をゆるしそのもろもろの罪をおほひたまひきセラ三 汝すべての怒をすてその烈しきいきどほりを遠けたまへり四 われらのすくひの神よかへりきたり我儕にむかひて忿怒をやめたまへ五 なんぢ永遠にわれらをいかり萬世にみいかりをひきのべたまふや六 汝によりてなんぢの民の喜悦をえんが爲に我儕を活したまはざるか七 ヱホバよなんぢの憐憫をわれらにしめし汝のすくひを我儕にあたへたまへ八 わが神ヱホバのいたりたまふ事をきかん ヱホバはその民その聖徒に平和をかたりたまへばなり されどかれらは愚かなる行爲にふたたび歸るなかれ九 實にそのすくひは神をおそるる者にちかし かくて榮光はわれらの國にとどまらん一〇 あはれみと眞實とともにあひ義と平和とたがひに接吻せり一一 まことは地よりはえ義は天よりみおろせり一二 ヱホバ善物をあたへたまへばわれらの國は物産をいださん一三 義はヱホバのまへにゆきヱホバのあゆみたまふ跡をわれに踏しめん

第八六篇 ダビデの祈禱

一 ヱホバよなんぢ耳をかたぶけて我にこたへたまへ 我はくるしみかつ乏しければなり二 ねがはくはわが霊魂をまもりたまへ われ神をうやまふ者なればなり わが神よなんぢに依頼める汝のしもべを救ひ給へ三 主よわれを憐みたまへ われ終日なんぢによばふ四 なんぢの僕のたましひを悦ばせたまへ 主よわが霊魂はなんぢを仰ぎのぞむ五 主よなんぢは惠ふかくまた赦をこのみたまふ 汝によばふ凡てのものを豐かにあはれみたまふ六 ヱホバよわがいのりに耳をかたぶけ わが懇求のこゑをききたまへ七 われわが患難の日になんぢに呼はん なんぢは我にこたへたまふべし八 主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく汝のみわざに侔しきものはなし九 主よなんぢの造れるもろもろの國はなんぢの前にきたりて伏拜まん かれらは聖名をあがむべし一〇 なんぢは大なり奇しき事跡をなしたまふ 唯なんぢのみ神にましませり一一 ヱホバよなんぢの道をわれに教へたまへ 我なんぢの眞理をあゆまん ねがはくは我をして心ひとつに聖名をおそ

れしめたまへ一二主わが神よ我心をつくして汝をほめたたへとこしへに聖名をあがめまつらん一三そはなんぢの憐憫はわれに大なり わがたましひを陰府のふかき處より助けいだしたまへり一四 神よたかぶれるものは我にさからひて起りたち暴ぶる人の會はわがたましひをもとめ 斯てなんぢを己がまへに置ざりき一五 されど主よなんぢは憐憫とめぐみとにとみ怒をおそくし愛しみと眞實とにゆたかなる神にましませり一六 我をかへりみ我をあはれみたまへ ねがはくは汝のしもべに能力を與へ汝のはしための子をすくひたまへ一七 我にめぐみの憑據をあらはしたまへ 然ばわれをにくむ者これをみて恥をいだかん そはヱホバよなんぢ我をたすけ我をなぐさめたまへばなり

第八七篇

コラの子のうたなり讃美なり

一ヱホバの基はきよき山にあり二 ヱホバはヤコブのすべての住居にまさりてシオンのもろもろの門を愛したまふ三 神の都よなんぢにつきておほくの榮光のことを語りはやせりセラ四 われはラハブ、バビロンをも我をしるものの中にあげん ペリシテ、ツロ、エテオピアを視よこの人はかしこに生れたりといはん五 シオンにつきては如此いはん 此もの彼ものその中にうまれたり至上者みづからシオンを立たまはんと六 ヱホバもろもろの民をしるしたまふ時このものは彼處にうまれたりと算へあげたまはんセラ七 うたふもの踊るもの皆いはん わがもろもろの泉はなんぢの中にありと

第八八篇

マハラテ、レアノテの調にあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のうたなり 讃美なり、 エズフ人ヘマンのをしへの歌なり

一わがすくひの神ヱホバよわれ晝も夜もなんぢの前にさけべり二 願くはわが祈をみまへにいたらせ汝のみみをわが號呼のこゑにかたぶけたまへ三 わがたましひは患難にてみち我がいのちは陰府にちかづけり四 われは穴にいるものとともにかぞへられ依仗なき人のごとくなれり五 われ墓のうちなる殺されしもののごとく死者のうちにすてらる汝かれらを再びこころに記たまはず かれらは御手より斷滅されしものなり六 なんぢ我をいとふかき穴 くらき處 ふかき淵におきたまひき七 なんぢの怒はいたくわれにせまれり なんぢそのもろもろの浪をもて我をくるしめ給へりセラ八 わが相識ものを我よりとほざけ我をかれらに憎ませたまへり われは錮閉されていづることあたはず九 わが眼はなやみの故をもておとろへぬ われ日ごとに汝をよべり ヱホバよなんぢに向ひてわが兩手をのべたり一〇 なんぢ死者にくすしき事跡をあらはしたまはんや 亡にしもの立てなんぢを讃たたへんやセラ一一 汝のいつくしみは墓のうちに汝のまことは滅亡のなかに宣傳へられんや一二 汝のくすしきみわざは幽暗になんぢの義は忘失のくにに知るることあらんや一三 されどヱホバよ我なんぢに向ひてさけべり わがいのりは朝にみまへに達らん一四 ヱホバよなんぢ何なればわが霊魂をすてたまふや何なればわれに面をかくしたまふや一五 われ幼稚よりなやみて死る

ばかりなり我なんぢの恐嚇にあひてくるしみまどへり一六 汝のはげしき怒わがうへをすぐ汝のおびやかし我をほろぼせり一七 これらの事ひねもす大水のごとく我をめぐり ことごとく來りて我をかこみふさげり一八 なんぢ我をいつくしむ者とわが友とをとほざけ わが相識るものを幽暗にいれたまへり

第八九篇 エズラ人エタンのをしへの歌

一 われヱホバの憐憫をとこしへにうたはん われ口もてヱホバの眞實をよろづ代につげしらせん二 われいふ あはれみは永遠にたてらる 汝はその眞實をかたく天にさだめたまはんと三 われわが撰びたるものと契約をむすびわが僕ダビデにちかひたり四 われなんぢの裔をとこしへに固うしなんぢの座位をたてて代々におよばしめんセラ五 ヱホバよもろもろの天はなんぢの奇しき事跡をほめん なんぢの眞實もまた潔きものの會にてほめらるべし六 蒼天にてたれかヱホバに類ふものあらんや 神の子のなかに誰かヱホバのごとき者あらんや七 神はきよきものの公會のなかにて畏むべきものなり その四周にあるすべての者にまさりて懼るべきものなり八 萬軍の神ヱホバよヤハよ汝のごとく大能あるものは誰ぞや なんぢの眞實はなんぢをめぐりたり九 なんぢ海のあるるをさめ その浪のたちあがらんときは之をしづめたまふなり一〇 なんぢラハブを殺されしもののごとく撃碎きおのれの仇どもを力ある腕をもて打散したまへり一一 もろもろの天はなんぢのもの地もまた汝のものなり世界とその中にみつるものとはなんぢの基したまへるなり一二 北と南はなんぢ造りたまへりタボル、ヘルモンはなんぢの名によりて歡びよばふ一三 なんぢは大能のみうでをもちたまふ なんぢの手はつよく汝のみぎの手はたかし一四 義と公平はなんぢの寶座のもとゐなり あはれみと眞實とは聖顔のまへにあらはれゆく一五 よろこびの音をしる民はさいはひなり ヱホバよかれらはみかほの光のなかをあゆめり一六 かれらは名によりて終日よろこび 汝の義によりて高くあげられたり一七 かれらの力の榮光はなんぢなり 汝の惠によりてわれらの角はたかくあげられん一八 そはわれらの盾はヱホバに屬われらの王はイスラエルの聖者につけり一九 そのとき異象をもてなんぢの聖徒につげたまはく われ佑助をちからあるものに委ねたり わが民のなかより一人をえらびて高くあげたり二〇 われわが僕ダビデをえて之にわが聖膏をそそげり二一 わが手はかれとともに堅くわが臂はかれを強くせん二二 仇かれをしへたぐることなし惡の子かれを苦しむることなからん二三 われかれの前にそのもろもろの敵をたふし彼をにくめるものを撃ん二四 されどわが眞實とわが憐憫とはダビデとともに居りわが名によりてその角はたかくあげられん二五 われ亦かれの手を海のうへにおき そのみぎの手を河のうへにおかん二六 ダビデ我にむかひて汝はわが父わが神わがすくひの岩なりとよばん二七 われまた彼をわが初子となし地の王たちのうち最もたかき者となさん二八 われとこしへに憐憫をかれがためにたもち之と

たてし契約はかはることなかるべし二九 われまたその裔をとこしへに存へ そのくらゐを天の日數のごとくながらへしめん三〇 もしその子わが法をはなれ わが審判にしたがひて歩まず三一 わが律法をやぶりわが誡命をまもらずば三二 われ杖をもてかれらの愆をただし鞭をもてその邪曲をただすべし三三 されど彼よりわが憐憫をことごとくはとりさらず わが眞實をおとろへしむることなからん三四 われおのれの契約をやぶらず己のくちびるより出しことをかへじ三五 われ曩にわが聖をさして誓へり われダビデに虚偽をいはじ三六 その裔はとこしへにつづきその座位は日のごとく恒にわが前にあらん三七 また月のごとく永遠にたてられん空にある證人はまことなりセラ三八 されどその受膏者をとほざけて棄たまへり なんぢ之をいきどほりたまへり三九 なんぢ己がしもべの契約をいみ 其かんむりをけがして地にまでおとし給へり四〇 またその垣をことごとく倒し その保砦をあれすたれしめたまへり四一 その道をすぐるすべての者にかすめられ隣人にののしらる四二 なんぢかれが敵のみぎの手をたかく擧そのもろもろの仇をよろこばしめたまへり四三 なんぢかれの劍の刃をふりかへして戰闘にたつに堪へざらしめたまひき四四 またその光輝をけしその座位を地になげおとし四五 その年若き日をちぢめ恥をそのうへに覆たまへりセラ四六 ヱホバよかくて幾何時をへたまふや自己をとこしへに隱したまふや忿怒は火のもゆるごとくなるべきか四七 ねがはくはわが時のいかに短かきかを思ひたまへ 汝いたづらにすべての人の子をつくりたまはんや四八 誰かいきて死をみず又おのがたましひを陰府より救ひうるものあらんやセラ四九 主よなんぢが眞實をもてダビデに誓ひたまへる昔日のあはれみはいづこにありや五〇五一 主よねがはくはなんぢの僕のうくる謗をみこころにとめたまへ ヱホバよ汝のもろもろの仇はわれをそしりなんぢの受膏者のあしあとをそしれり 我もろもろの民のそしりをわが懷中にいだく五二 ヱホバは永遠にほむべきかなアーメン アーメン

第九〇篇 神の人モーセの祈禱

一 主よなんぢは往古より世々われらの居所にてましませり二 山いまだ生いでず汝いまだ地と世界とをつくりたまはざりしとき永遠よりとこしへまでなんぢは神なり三 なんぢ人を塵にかへらしめて宣はく人の子よなんぢら歸れと四 なんぢの目前には千年もすでにすぐる昨日のごとくまた夜間のひとときにおなじ五 なんぢこれらを大水のごとく流去らしめたまふ かれらは一夜の寢のごとく朝にはえいづる青草のごとし六 朝にはえいでてさかえ夕にはかられて枯るなり七 われらはなんぢの怒によりて消うせ 汝のいきどほりによりて怖まどふ八 汝われらの不義をみまへに置 われらの隱れたるつみを聖顔のひかりのなかにおきたまへり九 われらのもろもろの日はなんぢの怒によりて過去りわれらがすべての年のつくるは一息のごとし一〇 われらが年をふる日は七十歳にすぎず あるひは壯やかにして八十歳にいたら

んされどその誇るところはただ勤勞とかなしみとのみ その去ゆくこと速かにしてわれらもまた飛去れり一一 誰かなんぢの怒のちからを知らんや たれか汝をおそるる畏にたくらべて汝のいきどほりをしらんや一二 願くはわれらにおのが日をかぞふることををしへて智慧のこころを得しめたまへ一三 ヱホバよ歸りたまへ斯ていくそのときを歷たまふや ねがはくは汝のしもべらに係れるみこころを變へたまへ一四 ねがはくは朝にわれらを汝のあはれみにてあきたらしめ 世をはるまで喜びたのしませたまへ一五 汝がわれらを苦しめたまへるもろもろの日と われらが禍害にかかれるもろもろの年とにたくらべて我儕をたのしませたまへ一六 なんぢの作爲をなんぢの僕等に なんぢの榮光をその子等にあらはしたまへ一七 斯てわれらの神ヱホバの佳美をわれらのうへにのぞましめ われらの手のわざをわれらのうへに確からしめたまへ 願くはわれらの手のわざを確からしめたまへ

第九一篇

一 至上者のもとなる隱れたるところにすまふその人は全能者の蔭にやどらん二 われヱホバのことを宣て ヱホバはわが避所わが城わがよりたのむ神なりといはん三 そは神なんぢを狩人のわなと毒をながす疫癘よりたすけいだしたまふべければなり四 かれその翮をもてなんぢを庇ひたまはん なんぢその翼の下にかくれん その眞實は盾なり干なり五 夜はおどろくべきことあり晝はとびきたる矢あり六 幽暗にはあゆむ疫癘あり日午にはそこなふ勵しき疾あり されどなんぢ畏るることあらじ七 千人はなんぢの左にたふれ萬人はなんぢの右にたふる されどその災害はなんぢに近づくことなからん八 なんぢの眼はただこの事をみるのみ なんぢ惡者のむくいを見ん九 なんぢ曩にいへりヱホバはわが避所なりと なんぢ至上者をその住居となしたれば一〇 災害なんぢにいたらず苦難なんぢの幕屋に近づかじ一一 そは至上者なんぢのためにその使者輩におほせて 汝があゆむもろもろの道になんぢを守らせ給へばなり一二 彼ら手にてなんぢの足の石にふれざらんために汝をささへん一三 なんぢは獅と蝮とをふみ壯獅と蛇とを足の下にふみにじらん一四 彼その愛をわれにそそげるがゆゑに我これを助けん かれわが名をしるがゆゑに我これを高處におかん一五 かれ我をよばば我こたへん 我その苦難のときに偕にをりて之をたすけ之をあがめん一六 われ長壽をもてかれを足はしめ且わが救をしめさん

第九二篇

安息日にもちゐる歌なり 讃美なり

一 いとたかき者よヱホバにかんしやし聖名をほめたたふるは善かな二 あしたに汝のいつくしみをあらはし 夜々なんぢの眞實をあらはすに三 十絃のなりものと箏とをもちゐ 琴の妙なる音をもちゐるはいと善かな四 そはヱホバよ なんぢその作爲をもて我をたのしませたまへり 我なんぢの手のわざをよろこびほこらん五 ヱホバよ汝のみわざは大なるかな汝のもろもろの思念はいとふかし六 無知者はしることなく愚なるものは之をさとらず七 惡き

ものは草のごとくもえいで不義をおこなふ衆庶はさかゆるとも遂にはとこしへにほろびん八 されどヱホバよ汝はとこしへに高處にましませり九 ヱホバよ吁なんぢの仇ああなんぢの仇はほろびん不義をおこなふ者はことごとく散されん一〇 されど汝わが角をたかくあげて野の牛のつののごとくならしめたまへり我はあたらしき膏をそそがれたり一一 又わが目はわが仇につきて願へることを見わが耳はわれにさからひておこりたつ惡をなすものにつきて願へることをききたり一二 義しきものは棕櫚の樹のごとく榮え レバノンの香柏のごとくそだつべし一三 ヱホバの宮にうゑられしものはわれらの神の大庭にさかえん一四 かれらは年老てなほ果をむすび豊かにうるほひ緑の色みちみちて一五 ヱホバの直きものなることを示すべし ヱホバはわが巖なりヱホバには不義なし

第九三篇一 ヱホバは統治たまふ ヱホバは稜威をきたまへりヱホバは能力をころもとなし帶となしたまへり さればまた世界もかたくたちて動かさるることなし二 なんぢの寶座はいにしへより堅くたちぬ 汝はとこしへより在せり三 大水はこゑをあげたり ヱホバよおほみづは聲をあげたり おほみづは浪をあぐ四 ヱホバは高處にいましてその威力はおほくの水のこゑ海のさかまくにまさりて盛んなり五 なんぢの證詞はいとかたし ヱホバよ聖潔はなんぢの家にとこしへまでも適應なり

第九四篇一 ヱホバよ仇をかへすは汝にあり神よあたを報すはなんぢにあり ねがはくは光をはなちたまへ二 世をさばきたまふものよ 願くは起てたかぶる者にそのうくべき報をなしたまへ三 ヱホバよ惡きもの幾何のときを經んとするや あしきもの勝誇りていくそのとしを經るや四 かれらはみだりに言をいだして誇りものいふ すべて不義をおこなふ者はみづから高ぶれり五 ヱホバよ彼等はなんぢの民をうちくだき なんぢの業をそこなふ六 かれらは嫠婦と旅人との生命をうしなひ孤子をころす七 かれらはいふヤハは見ずヤコブの神はさとらざるべしと八 民のなかなる無知よ なんぢらさとれ 愚かなる者よ いづれのときにか智からん九 みみを植るものきくことをせざらんや目をつくれるもの見ることをせざらんや一〇 もろもろの國をしふる者ただすことを爲ざらんや 人に知識をあたふる者しることなからんや一一 ヱホバは人の思念のむなしきを知りたまふ一二 ヤハよなんぢの懲めたまふ人なんぢの法ををしへらるる人はさいはひなるかな一三 かかる人をわざはひの日よりのがれしめ 惡きもののために坑のほらるるまで これに平安をあたへたまはん一四 そはヱホバその民をすてたまはず その嗣業をはなれたまはざるなり一五 審判はただしきにかへり心のなほき者はみなその後にしたがはん一六 誰かわがために起りたちて惡きものを責んや 誰か我がために立て不義をおこなふ者をせめんや一七 もしヱホバ我をたすけたまはざりせば わが靈魂はとくに幽寂ところに住ひしならん一八 されどわが足すべりぬといひしとき ヱホバよなんぢの憐憫わ

れをささへたまへり一九 わがうちに憂慮のみつる時 なんぢの安慰わがたましひを喜ばせたまふ二〇 律法をもて害ふことをはかる惡の位はなんぢに親むことを得んや二一 彼等はあひかたらひて義人のたましひをせめ罪なき血をつみに定む二二 然はあれどヱホバはわがたかき櫓 わが神はわが避所の磐なりき二三 神はかれらの邪曲をその身におはしめ かれらをその惡き事のなかに滅したまはん われらの神ヱホバはこれを滅したまはん

第九五篇一 率われらヱホバにむかひてうたひ すくひの磐にむかひてよろこばしき聲をあげん二 われら感謝をもてその前にゆきヱホバにむかひ歌をもて歡ばしきこゑをあげん三 そはヱホバは大なる神なりもろもろの神にまされる大なる王なり四 地のふかき處みなその手にあり 山のいただきもまた神のものなり五 うみは神のものその造りたまふところ旱ける地もまたその手にて造りたまへり六 いざわれら拜みひれふし我儕をつくれる主ヱホバのみまへに曲跪くべし七 彼はわれらの神なり われらはその草苑の民その手のひつじなり 今日なんぢらがその聲をきかんことをのぞむ八 なんぢらメリバに在りしときのごとく 野なるマサにありし日の如く その心をかたくなにするなかれ九 その時なんぢらの列祖われをこころみ我をためし 又わがわざをみたり一〇 われその代のためにうれへて四十年を歴 われいへり かれらは心あやまれる民わが道を知ざりきと一一 このゆゑに我いきどほりて彼等はわが安息にいるべからずと誓ひたり

第九六篇一 あたらしき歌をヱホバにむかひてうたへ 全地よヱホバにむかひて謳ふべし二 ヱホバに向ひてうたひその名をほめよ日ごとにその救をのべつたへよ三 もろもろの國のなかにその榮光をあらはし もろもろの民のなかにその奇しきみわざを顯すべし四 そはヱホバはおほいなり大にほめたたふべきものなりもろもろの神にまさりて畏るべきものなり五 もろもろの民のすべての神はことごとく虛し されどヱホバはもろもろの天をつくりたまへり六 尊貴と稜威とはその前にあり能と善美とはその聖所にあり七 もろもろの民のやからよ榮光とちからとをヱホバにあたへよヱホバにあたへよ八 その聖名にかなふ榮光をもてヱホバにあたへ 獻物をたづさへてその大庭にきたれ九 きよき美しきものをもてヱホバををがめ 全地よその前にをののけ一〇 もろもろの國のなかにいへ ヱホバは統治たまふ世界もかたくたちて動かさるることなし ヱホバは正直をもてすべての民をさばきたまはんと一一 天はよろこび地はたのしみ海とそのなかに盈るものとはなりどよみ一二 田畑とその中のすべての物とはよろこぶべし かくて林のもろもろの樹もまたヱホバの前によろこびうたはん一三 ヱホバ來りたまふ地をさばかんとて來りたまふ 義をもて世界をさばきその眞實をもてもろもろの民をさばきたまはん

第九七篇一 ヱホバは統治たまふ 全地はたのしみ多くの島々はよろこぶべし二 雲とくらきとはそり周環にあり 義と公平とはそ

の寶座のもとゐなり三火ありそのみまへにすすみ その四周の敵をやきつくす四ヱホバのいなびかりは世界をてらす 地これを見てふるへり五もろもろの山はヱホバのみまへ全地の主のみまへにて蝋のごとくとけぬ六もろもろの天はその義をあらはし よろづの民はその榮光をみたり七すべてきざめる像につかへ虚しきものによりてみづから誇るものは恥辱をうくべし もろもろの神よみなヱホバをふしをがめ八ヱホバよなんぢの審判のゆゑによりシオンはききてよろこびユダの女輩はみな樂しめり九ヱホバよなんぢ全地のうへにましまして至高く なんぢもろもろの神のうへにましまして至貴とし一〇ヱホバを愛しむものよ惡をにくめ ヱホバはその聖徒のたましひをまもり 之をあしきものの手より助けいだしたまふ一一 光はただしき人のためにまかれ欣喜はこころ直きもののために播れたり一二 義人よヱホバにより喜べ そのきよき名に感謝せよ

第九八篇 歌なり

一あたらしき歌をヱホバにむかひてうたへ そは妙なる事をおこなひその右の手そのきよき臂をもて 己のために救をなし畢たまへり二ヱホバはそのすくひを知しめ その義をもろもろの國人の目のまへにあらはし給へり三又その憐憫と眞實とをイスラエルの家にむかひて記念したまふ 地の極もことごとくわが神のすくひを見たり四全地よヱホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ聲をはなちてよろこびうたへ 讃うたへ五琴をもてヱホバをほめうたへ 琴の音と歌のこゑとをもてせよ六ラッパと角笛をふきならし王ヱホバのみまへによろこばしき聲をあげよ七海とそのなかに盈るもの 世界とせかいにすむものと鳴響むべし八大水はその手をうち もろもろの山はあひともにヱホバの前によろこびうたふべし九ヱホバ地をさばかんために來りたまへばなり ヱホバ義をもて世界をさばき 公平をもてもろもろの民をさばきたまはん

第九九篇

一ヱホバは統治たまふ もろもろの民はをののくべし ヱホバはケルビムの間にいます 地ふるはん二ヱホバはシオンにましまして大なり もろもろの民にすぐれてたふとし三かれらは汝のおほいなる畏るべき名をほめたたふべし ヱホバは聖なるかな四王のちからは審判をこのみたまふ 汝はかたく公平をたてヤコブのなかに審判と公義とをおこなひたまふ五われらの神ヱホバをあがめ その承足のもとにて拜みまつれ ヱホバは聖なるかな六その祭司のなかにモーセとアロンとあり その名をよぶ者のなかにサムエルあり かれらヱホバをよびしに應へたまへり七ヱホバ雲の柱のうちにましましてかれらに語りたまへり かれらはその證詞とその賜はりたる律法とを守りたり八われらの神ヱホバよなんぢ彼等にこたへたまへり かれらのなしし事にむくいたまひたれど また赦免をあたへたまへる神にてましませり九われらの神ヱホバを崇めそのきよき山にてをがみまつれ そはわれらの神ヱホバは聖なるなり

第一〇〇篇 感謝のうた

一 全地よヱホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ 二 欣喜をいだきてヱホバに事へ うたひつつその前にきたれ 三 知れヱホバこそ神にますなれ われらを造りたまへるものはヱホバにましませば我儕はその屬なり われらはその民その草苑のひつじなり 四 感謝しつつその門にいり ほめたたへつつその大庭にいれ 感謝してその名をほめたたへよ 五 ヱホバはめぐみふかくその憐憫かぎりなくその眞實よろづ世におよぶべければなり

第一〇一篇 ダビデのうた

一 われ憐憫と審判とをうたはん ヱホバよ我なんぢを讃うたはん 二 われ心をさとくして全き道をまもらん なんぢいづれの時われにきたりたまふや 我なほき心をもてわが家のうちをありかん 三 われわが眼前にいやしき事をおかず われ叛くものの業をにくむ そのわざは我につかじ 四 僻めるこころは我よりはなれん 惡きものを知ることをこのまず 五 隱にその友をそしるものは我これをほろぼさん 高ぶる眼また驕れる心のものは我これをしのばじ 六 わが眼は國のうちの忠なる者をみて之をわれとともに住はせん 全き道をあゆむ人はわれに事へん 七 欺くことをなす者はわが家のうちに住むことをえず 虛偽をいふものはわが目前にたつことを得じ 八 われ朝な朝なこの國のあしき者をことごとく滅し ヱホバの邑より不義をおこなふ者をことごとく絶除かん

第一〇二篇 なやみたる者おもひくづほれてその歎息をヱホバの前にそそぎいだせるときの祈禱

一 ヱホバよわが祈をききたまへ 願くはわが號呼のこゑの御前にいたらんことを 二 わが窮苦の日みかほを蔽ひたまふなかれ なんぢの耳をわれにかたぶけ 我がよぶ日にすみやかに我にこたへたまへ 三 わがもろもろの日は煙のごとくきえ わが骨はたきぎのごとく焚るるなり 四 わがこころは草のごとく撃れてしほれたり われ糧をくらふを忘れしによる 五 わが歎息のこゑによりてわが骨はわが肉につく 六 われは野の鸅鶘のごとく荒たる跡のふくろふのごとくになりぬ 七 われ醒てねぶらず ただ友なくして屋蓋にをる雀のごとくなれり 八 わが仇はひねもす我をそしり 猖狂ひて我をせむるもの我をさして誓ふ 九 われは糧をくらふごとくに灰をくらひ わが飮ものには涙をまじへたり 一〇 こは皆なんぢの怒と忿恚とによりてなり なんぢ我をもたげてなげすて給へり 一一 わが齡はかたぶける日影のごとし またわれは草のごとく萎れたり 一二 されどヱホバよなんぢは永遠にながらへ その名はよろづ世にながらへん 一三 なんぢ起てシオンをあはれみたまはん そはシオンに恩惠をほどこしたまふときなり そのさだまれる期すでに來れり 一四 なんぢの僕はシオンの石をもよろこび その塵をさへ愛しむ 一五 もろもろの國はヱホバの名をおそれ 地のもろもろの王はその榮光をおそれん 一六 ヱホバはシオンをきづき榮光をもてあらはれたまへり 一七 ヱホバは乏しきものの祈を

かへりみ彼等のいのりを藐しめたまはざりき一八 來らんとするのちの世のためにこの事をしるさん 新しくつくられたる民はヤハをほめたたふべし一九 ヱホバその聖所のたかき所よりみおろし天より地をみたまへり二〇 こは俘囚のなげきをきき死にさだまれる者をときはなち二一 人々のシオンにてヱホバの名をあらはしヱルサレムにてその頌美をあらはさんが爲なり二二 かかる時にもろもろの民もろもろの國つどひあつまりてヱホバに事へまつらん二三 ヱホバはわがちからを途にておとろへしめ わが齢をみじかからしめ給へり二四 我いへりねがはくはわが神よわがすべての日のなかばにて我をとりさりたまふなかれ 汝のよはひは世々かぎりなし二五 汝いにしへ地の基をすゑたまへり 天もまたなんぢの手の工なり二六 これらは亡びん されど汝はつねに存らへたまはん これらはみな衣のごとくふるびん 汝これらを袍のごとく更たまはん されば彼等はかはらん二七 然れども汝はかはることなし なんぢの齢はをはらざるなり二八 汝のしもべの子輩はながらへん その裔はかたく前にたてらるべし

第一〇三篇 ダビデのうた

一 わが霊魂よヱホバをほめまつれ わが衷なるすべてのものよそのきよき名をほめまつれ二 わがたましひよヱホバを讃まつれ そのすべての恩惠をわするるなかれ三 ヱホバはなんぢがすべての不義をゆるし汝のすべての疾をいやし四 なんぢの生命をほろびより贖ひいだし 仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ五 なんぢの口を嘉物にてあかしめたまふ 斯てなんぢは壯ぎて鷲のごとく新になるなり六 ヱホバはすべて虐げらるる者のために公義と審判とをおこなひたまふ七 おのれの途をモーセにしらしめ おのれの作爲をイスラエルの子輩にしらしめ給へり八 ヱホバはあはれみと恩惠にみちて怒りたまふことおそく仁慈ゆたかにましませり九 恒にせむることをせず永遠にいかりを懐きたまはざるなり一〇 ヱホバはわれらの罪の量にしたがひて我儕をあしらひたまはず われらの不義のかさにしたがひて報いたまはざりき一一 ヱホバをおそるるものにヱホバの賜ふそのあはれみは大にして天の地よりも高きがごとし一二 そのわれらより愆をとほざけたまふことは東の西より遠きがごとし一三 ヱホバの己をおそるる者をあはれみたまふことは父がその子をあはれむが如し一四 ヱホバは我儕のつくられし状をしり われらの塵なることを念ひ給へばなり一五 人のよはひは草のごとく その榮はのの花のごとし一六 風すぐれば失てあとなくその生いでし處にとへど尚しらざるなり一七 然はあれどヱホバの憐憫はとこしへより永遠までヱホバをおそるるものにいたり その公義は子孫のまた子孫にいたらん一八 その契約をまもりその訓諭を心にとめて行ふものぞその人なる一九 ヱホバはその寳座をもろもろの天にかたく置たまへりその政權はよろづのもののうへにあり二〇 ヱホバにつかふる使者よ ヱホバの聖言のこゑをきき その聖言をおこなふ勇士よ ヱホバをほめまつれ二一 その萬軍よ その聖旨をおこなふ

僕等よ ヱホバをほめまつれ二二その造りたまへる萬物よ ヱホバの政權の下なるすべての處にてヱホバをほめよ わがたましひよヱホバを讃まつれ

第一〇四篇一 わが靈魂よヱホパをほめまつれ わが神ヱホバよなんぢは至大にして尊貴と稜威とを衣たまへり二 なんぢ光をころものごとくにまとひ天を幕のごとくにはり三 水のなかにおのれの殿の棟梁をおき 雲をおのれの車となし 風の翼にのりあるき四 かぜを使者となし焔のいづる火を僕となしたまふ五 ヱホバは地を基のうへにおきて 永遠にうごくことなからしめたまふ六 衣にておほふがごとく大水にて地をおほひたまへり 水たたへて山のうへをこゆ七 なんぢ叱咤すれば水しりぞき 汝いかづちの聲をはなてば水たちまち去ぬ八 あるひは山にのぼり或ひは谷にくだりて 汝のさだめたまへる所にゆけり九 なんぢ界をたててこれをこえしめず ふたたび地をおほふことなからしむ一〇 ヱホバはいづみを谷にわきいだし給ふ その流は山のあひだにはしる一一 かくて野のもろもろの獸にのましむ 野の驢馬もその渇をやむ一二 空の鳥もそのほとりにすみ 樹梢の間よりさえづりうたふ一三 ヱホバはその殿よりもろもろの山に灌漑たまふ 地はなんぢのみわざの實によりて飽足ぬ一四 ヱホバは草をはえしめて家畜にあたへ 田産をはえしめて人の使用にそなへたまふ かく地より食物をいだしたまふ一五 人のこころを歡ばしむる葡萄酒 ひとの顔をつややかならしむるあぶら 人のこころを強からしむる糧どもなり一六 ヱホバの樹とその植たまへるレバノンの香柏とは飽足ぬべし一七 鳥はそのなかに巣をつくり鶴は松をその棲とせり一八 たかき山は山羊のすまひ磐石は山鼠のかくるる所なり一九 ヱホバは月をつくりて時をつかさどらせたまへり 日はその西にいることをしる二〇 なんぢ黑暗をつくりたまへば夜ありそのとき林のけものは皆しのびしのびに出きたる二一 わかき獅ほえて餌をもとめ神にくひものをもとむ二二 日いづれば退きてその穴にふす二三 人はいでて工をとりその勤勞はゆふべにまでいたる二四 ヱホバよなんぢの事跡はいかに多なる これらは皆なんぢの智慧にてつくりたまへり 汝のもろもろの富は地にみつ二五 かしこに大なるひろき海あり そのなかに數しられぬ匍ふもの小なる大なる生るものあり二六 舟そのうへをはしり汝のつくりたまへる鰐そのうちにあそびたはぶる二七 彼ら皆なんぢを俟望むなんぢ宜時にくひものを之にあたへたまふ二八 彼等はなんぢの予へたまふ物をひろふ なんぢ手をひらきたまへばかれら嘉物にあきたりぬ二九 なんぢ面をおほひたまへば彼等はあわてふためく 汝かれらの氣息をとりたまへばかれらは死て塵にかへる三〇 なんぢ靈をいだしたまへば百物みな造らるなんぢ地のおもてを新にしたまふ三一 願くはヱホバの榮光とこしへにあらんことを ヱホバそのみわざを喜びたまはんことを三二 ヱホバ地をみたまへば地ふるひ山にふれたまへば山は煙をいだす三三 生るかぎりはヱホバに向ひてうたひ 我ながらふるほどはわが神

をほめうたはん三四 ヱホバをおもふわが思念はたのしみ深からんわれヱホバによりて喜ぶべし三五 罪人は地より絶滅されあしきものは復あらざるべし わが霊魂よヱホバをほめまつれヱホバを讃稱へよ

第一〇五篇一 ヱホバに感謝してその名をよび そのなしたまへる事をもろもろの民輩のなかにしらしめよ二 ヱホバにむかひてうたへヱホバを讃うたへ そのもろもろの妙なる事跡をかたれ三 そのきよき名をほこれ ヱホバをたづねもとむるものの心はよろこぶべし四 ヱホバとその能力とをたづねもとめよ つねにその聖顔をたづねよ五六 その僕アブラムの裔よヤコブの子輩よ そのえらびたまひし所のものよ そのなしたまへる妙なるみわざと奇しき事跡とその口のさばきとを心にとむれ七 彼はわれらの神ヱホバなり そのみさばきは全地にあり八 ヱホバはたえずその契約をみこころに記たまへり 此はよろづ代に命じたまひし聖言なり九 アブラハムとむすびたまひし契約イサクに與へたまひし誓なり一〇 之をかたくしヤコブのために律法となし イスラエルのためにとこしへの契約となして一一 言たまひけるは我なんぢにカナンの地をたまひてなんぢらの嗣業の分となさん一二 この時かれらの數おほからず甚すくなくしてかしこにて旅人となり一三 この國よりかの國にゆき この國よりほかの民にゆけり一四 人のかれらを虐ぐるをゆるし給はず かれらの故によりて王たちを懲しめて一五 宣給くわが受膏者たちにふるるなかれ わが預言者たちをそこなふなかれ一六 ヱホバは饑饉たを地にまねき人の杖とする糧をことごとく碎きたまへり一七 又かれらの前にひとりを遣したまへり ヨセフはうられて僕となりぬ一八 かれら足械をもてヨセフの足をそこなひ くろかねの鏈をもてその霊魂をつなげり一九 斯てそのことばの驗をうるまでに及ぶ ヱホバのみことば彼をこころみたまへり二〇 王は人をつかはしてこれを解き もろもろの民の長はこれをゆるし二一 之をその家司となし その財寶をことごとく司どらせ二二 その心のままにかの國のきみたちを縛しめ 長老たちに智慧ををしへしむ二三 イスラエルも亦エジプトにゆき ヤコブはハムの地にやどれり二四 ヱホバはその民を大にましくはへ之をその敵よりも強くしたまへり二五 また敵のこころをかへておのれの民をにくましめ おのれの僕輩をあざむき待さしめたまへり二六 又そのしもべモーセとその選びたまへるアロンとを遣したまへり二七 かれらはヱホバの預兆をハムの地におこなひ またその國にくすしき事をおこなへり二八 ヱホバは闇をつかはして暗くしたまへり かれらその聖言にそむくことをせざりき二九 彼等のすべての水を血にかへてその魚をころしたまへり三〇 かれらの國は蛙むれいで王の殿のうちにまでみちふさがりぬ三一 ヱホバいひたまへば蝿むらがり蚤そのすべての境にいりきたりぬ三二 また雨にかへて霰をかれらに與へもゆる火をかれらの國にふらし三三 かれらの葡萄の樹といちじくの樹とをうちその境のもろもろの樹をりくだ

きたまへり三四ヱホバいひたまへば算しられぬ蝗と蝨賊きたり三五かれらの國のすべての田產をはみつくしその地のすべての實を食つくせり三六ヱホバはかれらの國のすべての首出者をうちかれらのすべての力の始をうちたまへり三七しろかね黄金をたづさへて彼等をいでゆかしめたまへり　その家族のうちに一人のよわき者もなかりき三八エジプトはかれらの出るをよろこべりかれらをおそるるの念そのうちにおこりたればなり三九ヱホバは雲をしきて蓋となし夜は火をもて照したまへり四〇又かれらの求によりて鶉をきたらしめ天の餅にてかれらを飽しめたまへり四一磐をひらきたまへば水ほどばしりいで　潤ひなきところに川をなして流れいでたり四二ヱホバそのきよき聖言とその僕アブラハムとをおもひいでたまひたればなり四三その民をみちびきて歡びつついでしめ　そのえらべる民をみちびきて謳ひつついでしめたまへり四四もろもろの國人の地をかれらに與へたまひしかば彼等もろもろのたみの勤勞をおのが有とせり四五こは彼等がその律にしたがひその法をまもらんが爲なり　ヱホバをほめたたへよ

第一〇六篇

一ヱホバをほめたたへヱホバに感謝せよそのめぐみはふかくその憐憫はかぎりなし二たれかヱホバの力ある事跡をかたりその讃べきことを悉とくいひあらはし得んや三審判をまもる人々つねに正義をおこなふ者はさいはひなり四ヱホバよなんぢの民にたまふ惠をもて我をおぼえ　なんぢの救をもてわれに臨みたまへ五さらば我なんぢの撰びたまへる者のさいはひを見なんぢの國の歡喜をよろこび　なんぢの嗣業とともに誇ることをせん六われら列祖とともに罪をかせり我儕よこしまをなし惡をおこなへり七われらの列祖はなんぢがエジプトにてなしたまへる奇しき事跡をさとらず　汝のあはれみの豊かなるを心にとめず海のほとり即ち紅海のほとりにて逆きたり八されどヱホバはその名のゆゑをもて彼等をすくひたまへり　こは大なる能力をしらしめんとてなり九また紅海を叱咤したまひたれば乾きたり　かくて民をみちびきて野をゆくがごとくに淵をすぎしめ一〇恨むるものの手よりかれらをすくひ仇の手よりかれらを贖ひたまへり一一水その敵をおほひたればその一人だにのこりし者なかりき一二このとき彼等そのみことばを信じその頌美をうたへり一三彼等しばしがほどにその事跡をわすれその訓誨をまたず一四野にていたくむさぼり荒野にて神をこころみたりき一五ヱホバはかれらの願欲をかなへたまひしかど　その靈魂をやせしめたまへり一六たみは營のうちにてモーセを嫉みヱホパの聖者アロンをねたみしかば一七地ひらけてダタンを呑みアビラムの黨類をおほひ一八火はこのともがらの中にもえおこり焔はあしき者をやきつくせり一九かれらはホレブの山にて犢をつくり鑄たる像ををがみたり二〇かくの如くおのが榮光をかへて草をくらふ牛のかたちに似す二一救主なる神はエジプトにて大なるわざをなし紅海のほとり

にて懼るべきことを爲たまへり かれは斯る神をわすれたり二三 この故にヱホバかれらを亡さんと宣まへり されど神のえらみたまへる者モーセやぶれの間隙にありてその前にたちその烈怒をひきかへして滅亡をまぬかれしめたり二四 かれら美しき地を蔑しそのみことばを信ぜず二五 剰さへその幕屋にてつぶやきヱホバの聲をきかざりき二六 この故に手をあげて彼等にむかひたまへり これ野にてかれらを斃れしめんとし二七 又もろもろの國のうちにてその裔をたふれしめ もろもろの地にかれらを散さんとしたまへるなり二八 彼らはバアルベオルにつきて死るものの祭物をくらひたり二九 斯のごとくその行爲をもてヱホバの烈怒をひきいだしければ えやみ侵しいりたり三〇 そのときピネハスたちて裁判をなせり かくて疫癘はやみぬ三一 ピネハスは萬代までとこしへにこのことを義とせられたり三二 民メリバの水のほとりにてヱホバの烈怒をひきおこししかば かれらの故によりてモーセも禍害にあへり三三 かれら神の霊にそむきしかばモーセその口唇にて妄にものいひたればなり三四 かれらはヱホバの命じたまへる事にしたがはずしてもろもろの民をほろぼさず三五 反てもろもろの國人とまじりをりてその行爲にならひ三六 おのが羂となりしその偶像につかへたり三七 かれらはその子 女を鬼にささぐ三八 罪なき血すなはちカナンの偶像にささげたる己がむすこむすめの血をながしぬ 斯てくには血にてけがされたり三九 またそのわざは自己をけがし そのおこなふところは姦淫なり四〇 このゆゑにヱホバの怒その民にむかひて起りその嗣業をにくみて四一 かれらをもろもろの國の手にわたしたまへり 彼等はおのれを恨るものに制へられ四二 おのれの仇にしへたげられ その手の下にうちふせられたり四三 ヱホバはしばしば助けたまひしかどかれらは謀略をまうけて逆き そのよこしまに卑くせられたり四四 されどヱホバはかれらの哭聲をききたまひしとき その患難をかへりみ四五 その契約をかれらの爲におもひいだし その憐憫のゆたかなるにより聖意をかへさせ給ひて四六 かれらを己がとりこにせられたる者どもに憐まるることを得しめたまへり四七 われらの神ヱホバよ われらをすくひて列邦のなかより取集めたまへ われらは聖名に謝し なんぢのほむべき事をほこらん四八 イスラエルの神ヱホバはとこしへより永遠までほむべきかな すべての民はアーメンととなふべし ヱホバを讃稱へよ

第一〇七篇 一 ヱホバに感謝せよ ヱホバは惠ふかくましましてその憐憫かぎりなし二 ヱホバの救贖をかうぶる者はみな然いふべきなり三 ヱホバは敵の手よりかれらを贖ひ もろもろの地よ東西北南よりとりあつめたまへり四 かれら野にてあれはてたる路にさまよひ その住ふべき邑にあはざりき五 かれら饑また渴き その霊魂おとろへたり六 斯てその困苦のうちにてヱホバをよばはりたれば ヱホバこれを患難よりたすけいだし七 住ふべき邑にゆかしめんとて直き路にみちびきたまへり八 願くはすべての

人はヱホバの惠により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバを讃稱へんことを九 ヱホバは渇きしたふ靈魂をたらはせ饑たるたましひを嘉物にてあかしめ給へばなり一〇 くらきと死の蔭とに居るもの患難とくろがねとに縛しめらるるもの一一 神の言にそむき至高者のをしへを蔑しめければ一二 勤勞をもてその心をひくうしたまへり かれら仆れたれど助くるものもなかりき一三 斯てその困苦のうちにてヱホバをよばはりたればヱホバこれを患難よりすくひ一四 くらきと死のかげより彼等をみちびき出してその械をこぼちたまへり一五 願くはすべての人はヱホバの惠により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバを讃稱へんことを一六 そはあかがねの門をこぼち くろがねの關木をたちきりたまへり一七 愚かなる者はおのが愆の道により己がよこしまによりて惱めり一八 かれらの靈魂はすべての食物をきらひて死の門にちかづく一九 かくてその困苦のうちにてヱホバをよばふ ヱホバこれを患難よりすくひたまふ二〇 その聖言をつかはして之をいやし之をその滅亡よりたすけいだしたまふ二一 願くはすべての人ヱホバのめぐみにより人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバをほめたたへんことを二二 かれらは感謝のそなへものをささげ喜びうたひてその事跡をいひあらはすべし二三 舟にて海にうかび大洋にて事をいとなむ者は二四 ヱホバのみわざを見また淵にてその奇しき事跡をみる二五 ヱホバ命じたまへばあらき風おこりてその浪をあぐ二六 かれら天にのぼりまた淵にくだり患難によりてその靈魂とけさり二七 左たにかたぶき醉たる者のごとく蹌踉てなす所をしらず二八 かくてその困苦のうちにてヱホバをよばふ ヱホバこれを患難よりたづさへいで二九 狂風をしづめて浪をおだやかになし給へり三〇 かれらはおのが靜かなるをよろこぶ 斯てヱホバはかれらをその望むところの湊にみちびきたまふ三一 願くはすべての人ヱホバの惠により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバをほめたたへんことを三二 かれら民の會にてこれをあがめ長老の座にてこれを讃稱ふべし三三 ヱホバは河を野にかはらせ泉をかわける地に變らせ三四 また豊かなる地にすめる民の惡によりてそこを鹵の地にかはらせ給ふ三五 野を池にかはらせ乾ける地をいづみにかはらせ三六 ここに餓たるものを住はせたまふ されば彼らは己がすまひの邑をたて三七 畠にたねをまき葡萄園をまうけてそのむすべる實をえたり三八 ヱホバはかれらの甚くふえひろごれるまでに惠をあたへ その牲畜のへることをも許したまはず三九 されどまた虐待くるしみ悲哀によりて減ゆき且うなたれたり四〇 ヱホバもろもろの君に侮辱をそそぎ道なき荒地にさまよはせたまふ四一 然はあれど貧しきものを患難のうちより擧てその家族をひつじの群のごとくならしめたまふ四二 直きものは之をみて喜びもろもろの不義はその口をふさがん四三 すべて慧者はこれらのことに心をよせヱホバの憐憫をさとるべし

第一〇八篇 ダビデの歌なり讃美なり

一 神よわが心はさだまれり われ謳ひまつらん 稱まつらん わが榮をもてたたへまつらん二 箏よ琴よさむべし われ黎明をよびさまさん三 ヱホバよ我もろもろの民のなかにてなんぢに感謝しもろもろの國のなかにてなんぢをほめうたはん四 そは汝のあはれみは大にして天のうへにあがり なんぢの眞實は雲にまでおよぶ五 神よねがはくはみづからを天よりもたかくし榮光を全地のうへに擧たまへ六 ねがはくは右の手をもて救をほどこし われらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ七 神はその聖をもていひたまへり われ甚くよろこばん我シケムをわかちスコテの谷をはからん八 ギレアデはわがものマナセはわが有なりエフライムも亦わが首のまもりなりユダはわが杖九 モアブはわが足盥なりエドムにはわが履をなげんペリシテよわが故によりて聲をあげよと一〇 誰かわれを堅固なる邑にすすましめんや 誰かわれをみちびきてエドムにゆきしや一一 神よなんぢはわれらを棄たまひしにあらずや 神よなんぢはわれらの軍とともに出ゆきたまはず一二 ねがはくは助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ 人のたすけは空しければなり一三 われらは神によりて勇しくはたらかん われらの敵をふみたまふものは神なればなり

第一〇九篇 伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 わが讃たたふる神よもだしたまふなかれ二 かれらは惡の口とあざむきの口とをあけて我にむかひ いつはりの舌をもて我にかたり三 うらみの言をもて我をかこみ ゆゑなく我をせめて闘ふことあればなり四 われ愛するにかれら反りてわが敵となる われただ祈るなり五 かれらは惡をもてわが善にむくい恨をもてわが愛にむくいたり六 ねがはくは彼のうへに惡人をたてその右方に敵をたたしめたまへ七 かれが鞫かるるときはその罪をあらはにせられ又そのいのりは罪となり八 その日はすくなくその職はほかの人にえられ九 その子輩はみなしごとなりその妻はやもめとなり一〇 その子輩はさすらひて乞丐 そのあれたる處よりいできたりて食をもとむべし一一 彼のもてるすべてのものは債主にうばはれ かれの勤勞は外人にかすめらるべし一二 かれに惠をあたふる人ひとりだになく かれの孤子をあはれむ者もなく一三 その裔はたえその名はつぎの世にきえうすべし一四 その父等のよこしまはヱホバのみこころに記され その母のつみはきえざるべし一五 かれらは恒にヱホバの前におかれ その名は地より斷るべし一六 かかる人はあはれみを施すことをおもはず反りて貧しきもの乏しきもの心のいためる者をころさんとして攻たりき一七 かかる人は詛ふことをこのむ この故にのろひ己にいたる惠むことをたのしまず この故にめぐみ己にとほざかれり一八 かかる人はころものごとくに詛をきる この故にのろひ水のごとくにおのれの衷にいり油のごとくにおのれの骨にいれり一九 ねがはくは詛をおのれのきたる衣のごとく帶のごとくなして恒にみづ

から纏はんことを二〇 これらの事はわが敵とわが靈魂にさからひて惡言をいふ者とにヱホバのあたへたまふ報なり二一 されど主ヱホバよなんぢの名のゆゑをもて我をかへりみたまへ なんぢの憐憫はいとふかし ねがはくは我をたすけたまへ二二 われは貧しくして乏し わが心うちにて傷をうく二三 わがゆく状はゆふ日の影のごとく また蝗のごとく吹さらるるなり二四 わが膝は斷食によりてよろめき わが肉はやせおとろふ二五 われは彼等にそしらるる者となれり かれら我をみるときは首をふる二六 わが神ヱホバよねがはくは我をたすけその憐憫にしたがひて我をすくひたまへ二七 ヱホバよこれらは皆なんぢの手よりいで 汝のなしたまへることなるを彼等にしらしめたまへ二八 かれらは詛へども汝はめぐみたまふ かれらの立ときは恥かしめらるれどもなんぢの僕はよろこばん二九 わがもろもろの敵はあなどりを衣おのが恥を外袍のごとくにまとふべし三〇 われはわが口をもて大にヱホバに謝し おほくの人のなかにて讃まつらむ三一 ヱホバはまづしきものの右にたちてその靈魂を罪せんとする者より之をすくひたまへり

第一一〇篇 ダビデのうた

一 ヱホバわが主にのたまふ 我なんぢの仇をなんぢの承足とするまではわが右にざすべし二 ヱホバはなんぢのちからの杖をシオンよりつきいださしめたまはん 汝はもろもろの仇のなかに王となるべし三 なんぢのいきほひの日になんぢの民は聖なるうるはしき衣をつけ 心よりよろこびて己をささげん なんぢは朝の胎よりいづる壯きものの露をもてり四 ヱホバ誓をたてて聖意をかへさせたまふことなし 汝はメルキセデクの状にひとしくとこしへに祭司たり五 主はなんぢの右にありてそのいかりの日に王等をうちたまへり六 主はもろもろの國のなかにて審判をおこなひたまはん 此處にも彼處にも屍をみたしめ 寛潤なる地をすぶる首領をうちたまへり七 かれ道のほとりの川より汲てのみ斯てかうべを擧ん

第一一一篇

一 ヱホバを讃たたへよ 我はなほきものの會あるひは公會にて心をつくしてヱホバに感謝せん二 ヱホバのみわざは大なりすべてその事跡をしたふものは之をかんがへ究む三 その行ひたまふところは榮光ありまた稜威あり その公義はとこしへに失することなし四 ヱホバはその奇しきみわざを人のこころに記しめたまへり ヱホバはめぐみと憐憫とにて充たまふ五 ヱホバは己をおそるるものに糧をあたへたまへり またその契約をとこしへに心にとめたまはん六 ヱホバはもろもろの國の所領をおのれの民にあたへてその作爲のちからを之にあらはしたまへり七 その手のみわざは眞實なり公義なり そのもろもろの訓諭はかたし八 これらは世々かぎりなく堅くたち眞實と正直とにてなれり九 ヱホバはその民に救贖をほどこし その契約をとこしへに立たまへり ヱホバの名は聖にして あがむべきなり一〇 ヱホバをおそるるは智慧のはじめなり これらを行ふものは皆あきらか

なる聰ある人なり ヱホバの頌美はとこしへに失ることなし

第一一二篇 一 ヱホバを讃まつれヱホバを畏れてそのもろもろの誡命をいたく喜ぶものはさいはひなり 二 かかる人のすゑは地にてつよく直きものの類はさいはひを得ん 三 富と財とはその家にありその公義はとこしへにうすることなし 四 直き者のために暗きなかにも光あらはる 彼は惠ゆたかに憐憫にみつる義しきものなり 五 惠をほどこし貸ことをなす者はさいはひなり かかる人は審判をうくるときおのが訴をささへうべし 六 又とこしへまで動かさるることなからん義 者はながく忘れらるることなかるべし 七 彼はあしき音信によりて畏れず その心ヱホバに依賴みてさだまれり 八 その心かたくたちて懼るることなく敵につきての願望をつひに見ん 九 彼はちらして貧 者にあたふ その正義はとこしへにうすることなし その角はあがめをうけて擧られん 一〇 惡者はこれを見てうれへもだえ切歯しつつ消さらん また惡きものの願望はほろぶべし

第一一三篇 一 ヱホバをほめまつれ ヱホバの僕よほめまつれ ヱホバの名をほめまつれ 二 今より永遠にいたるまでヱホバの名はほむべきかな 三 日のいづる處より日のいる處までヱホバの名はほめらるべし 四 ヱホバはもろもろの國の上にありてたかくその榮光は天よりもたかし 五 六 われらの神ヱホバにたぐふべき者はたれぞや 寶座をその高 處にすゑ己をひくくして天と地とをかへりみ給ふ 七 まづしきものを塵よりあげ乏しきものを糞土よりあげて 八 もろもろの諸侯とともにすわらせ その民のきみたちと共にすわらせたまはん 九 又はらみなき婦に家をまもらせ おほくの子女のよろこばしき母たらしめたまふ ヱホバを讃まつれ

第一一四篇 一 イスラエルの民エジプトをいで ヤコブのいへ異言の民をはなれしとき 二 ユダはヱホバの聖所となりイスラエルはヱホバの所領となれり 三 海はこれを見てにげヨルダンは後にしりぞき 四 山は牡羊のごとくをどり小山はこひつじのごとく躍れり 五 海よなんぢ何とてにぐるやヨルダンよなんぢ何とて後にしりぞくや 六 山よなにとて牡羊のごとくをどるや小山よなにとて小羊のごとく躍るや 七 地よ主のみまへヤコブの神の前にをののけ 八 主はいはを池にかはらせ石をいづみに變らせたまへり

第一一五篇 一 ヱホバよ榮光をわれらに歸するなかれ われらに歸するなかれ なんぢのあはれみと汝のまこととの故によりてただ名にのみ歸したまへ 二 もろもろの國人はいかなればいふ 今かれらの神はいづくにありやと 三 然どわれらの神は天にいます 神はみこころのままにすべての事をおこなひ給へり 四 かれらの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり 五 その偶像は口あれどいはず目あれどみず 六 耳あれどきかず鼻あれどかがず 七 手あれどとらず脚あれどあゆまず喉より聲をいだすことなし 八 此をつくる者とこれに依賴むものとは皆これにひとしからん 九 イスラエルよなんぢヱホバに依賴め ヱホバはかれらの助かれらの盾なり 一〇 アロンの家よなんぢらヱホバによりたのめ ヱホバ

はかれらの助かれらの盾なり一一ヱホバを畏るるものよヱホバに依頼め ヱホバはかれらの助かれらの盾なり一二ヱホバは我儕をみこころに記たまへり われらを惠みイスラエルの家をめぐみアロンのいへをめぐみ一三また小なるも大なるもヱホバをおそるる者をめぐみたまはん一四願くはヱホバなんぢらを増加へなんぢらとなんぢらの子孫とをましくはへ給はんことを一五なんぢらは天地をつくりたまへるヱホバに惠まるる者なり一六天はヱホバの天なり されど地は人の子にあたへたまへり一七死人も幽寂ところに下れるものもヤハを讃稱ふることなし一八然どわれらは今より永遠にいたるまでヱホバを讃まつらむ 汝等ヱホバをほめたたへよ

第一一六篇

一 われヱホバを愛しむ そはわが聲とわが願望とをききたまへばなり二ヱホバみみを我にかたぶけたまひしが故にわれ世にあらんかぎりヱホバを呼まつらむ三死の繩われをまとひ陰府のくるしみ我にのぞめり われは患難とうれへとにあへり四その時われヱホバの名をよべり ヱホバよ願くはわが靈魂をすくひたまへと五ヱホバは恩惠ゆたかにして公義ましませり われらの神はあはれみ深し六ヱホバは愚かなるものを護りたまふ われ卑くせられしがヱホバ我をすくひたまへり七わが靈魂よなんぢの平安にかへれ ヱホバは豐かになんぢを待ひたまへばなり八汝はわがたましひを死より わが目をなみだより わが足を顚蹶よりたすけいだしたまひき九われは活るものの國にてヱホバの前にあゆまん一〇われ大になやめりといひつつもなほ信じたり一一われ惶てしときに云らくすべての人はいつはりなりと一二我いかにしてその賜へるもろもろの恩惠をヱホバにむくいんや一三われ救のさかづきをとりてヱホバの名をよびまつらむ一四我すべての民のまへにてヱホバにわが誓をつくのはん一五ヱホバの聖徒の死はそのみまへにて貴とし一六ヱホバよ誠にわれはなんぢの僕なり われはなんぢの婢女の子にして汝のしもべなり なんぢわが縲絏をときたまへり一七われ感謝をそなへものとして汝にささげん われヱホバの名をよばん一八我すべての民のまへにてヱホバにわがちかひを償はん一九ヱルサレムよ汝のなかにてヱホバのいへの大庭のなかにて此をつくのふべし ヱホバを讃まつれ

第一一七篇

一 もろもろの國よなんぢらヱホバを讃まつれ もろもろの民よなんぢらヱホバを稱へまつれ二そはわれらに賜ふその憐憫はおほいなり ヱホバの眞實はとこしへに絶ることなし ヱホバをほめまつれ

第一一八篇

一 ヱホバに感謝せよヱホバは恩惠ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし二イスラエルは率いふべしその憐憫はとこしへにたゆることなしと三アロンの家はいざ言ふべし そのあはれみは永遠にたゆることなしと四ヱホバを畏るるものは率いふべしその憐憫はとこしへにたゆることなしと五われ患難のなかよりヱホバをよべば ヱホバこたへて我をひろき處におきた

まへり六ヱホバわが方にいませばわれにおそれなし 人われに何をなしえんや七ヱホバはわれを助くるものとともに我がかたに坐す この故にわれを憎むものにつきての願望をわれ見ることをえん八ヱホバに依頼むは人にたよるよりも勝りてよし九ヱホバによりたのむはもろもろの侯にたよるよりも勝りてよし一〇もろもろの國はわれを圍めり われヱホバの名によりて彼等をほろぼさん一一かれらは我をかこめり我をかこめりヱホバの名によりて彼等をほろぼさん一二かれらは蜂のごとく我をかこめり かれらは荊の火のごとく消たり われはヱホバの名によりてかれらを滅さん一三汝われを倒さんとしていたく刺つれどヱホバわれを助けたまへり一四ヱホバはわが力わが歌にしてわが救となりたまへり一五歡喜とすくひとの聲はただしきものの幕屋にあり ヱホバのみぎの手はいさましき動作をなしたまふ一六ヱホバのみぎの手はたかくあがりヱホバの右の手はいさましき動作をなしたまふ一七われは死ることなからん 存へてヤハの事跡をいひあらはさん一八ヤハはいたく我をこらしたまひしかど死には付したまはざりき一九わがために義の門をひらけ 我そのうちにいりてヤハに感謝せん二〇こはヱホバの門なり ただしきものはその内にいるべし二一われ汝に感謝せん なんぢ我にこたへてわが救となりたまへばなり二二工師のすてたる石はすみの首石となれり二三これヱホバの成たまへる事にしてわれらの目にあやしとする所なり二四これヱホバの設けたまへる日なり われらはこの日によろこびたのしまん二五ヱホバよねがはくはわれらを今すくひたまへ ヱホバよねがはくは我儕をいま榮えしめたまへ二六ヱホバの名によりて來るものは福ひなり われらヱホバの家よりなんぢらを祝せり二七ヱホバは神なり われらに光をあたへたまへり 繩をもて祭壇の角にいけにへをつなげ二八なんぢはわが神なり 我なんぢに感謝せん なんぢはわが神なり我なんぢを崇めまつらん二九ヱホバにかんしやせよ ヱホバは恩惠ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし

第一一九篇

アレフ

一おのが道をなほくしてヱホバの律法をあゆむ者はさいはひなり二ヱホバのもろもろの證詞をまもり 心をつくしてヱホバを尋求むるものは福ひなり三かかる人は不義をおこなはずしてヱホバの道をあゆむなり四ヱホバよなんぢ訓諭をわれらに命じてねんごろに守らせたまふ五なんぢわが道をかたくたててその律法をまもらせたまはんことを六われ汝のもろもろの誡命にこころをとむるときは恥ることあらじ七われ汝のただしき審判をまなばば直き心をもてなんぢに感謝せん八われは律法をまもらん われを棄はてたまふなかれ

○ベテ

九わかき人はなにによりてかその道をきよめん 聖言にしたがひて愼むのほかぞなき一〇われ心をつくして汝をたづねもとめたり 願くはなんぢの誡命より迷ひいださしめ給ふなかれ一一われ

汝にむかひて罪ををかすまじき爲になんぢの言をわが心のうちに蔵へたり一二 讃べきかなヱホバよねがはくは律法をわれに教へたまへ一三 われわが口唇をもてなんぢの口よりいでしもろもろの審判をのべつたへたり一四 我もろもろの財貨をよろこぶごとくに汝のあかしの道をよろこべり一五 我なんぢの訓諭をおもひ汝のみちに心をとめん一六 われは律法をよろこび聖言をわするることなからん

○ギメル

一七 ねがはくは汝のしもべを豊にあしらひて存へしめたまへ さらばわれ聖言をまもらん一八 なんぢわが眼をひらきなんぢの法のうちなる奇しきことを我にみせたまへ一九 われは世にある旅客なり 我になんぢの誡命をかくしたまふなかれ二〇 斷るときなくなんぢの審判をしたふが故にわが霊魂はくだくるなり二一 汝はたかぶる者をせめたまへり なんぢの誡命よりまよひづる者はのろはる二二 我なんぢの證詞をまもりたり 我より謗とあなどりとを取去たまへ二三 又もろもろの侯は坐して相語りわれをそこなはんとせり 然はあれど汝のしもべは律法をふかく思へり二四 汝のもろもろの證詞はわれをよろこばせわれをさとす者なり

○ダレテ

二五 わが霊魂は塵につきぬ なんぢの言にしたがひて我をいかしたまへ二六 我わがふめる道をあらはししかば汝こたへを我になしたまへり なんぢの律法をわれに教へたまへ二七 なんぢの訓諭のみちを我にわきまへしめたまへ われ汝のくすしき事跡をふかく思はん二八 わがたましひ痛めるによりてとけゆく ねがはくは聖言にしたがひて我にちからを予へたまへ二九 願くはいつはりの道をわれより遠ざけ なんぢの法をもて我をめぐみたまへ三〇 われは眞實のみちをえらび恒になんぢのもろもろの審判をわが前におけり三一 我なんぢの證詞をしたひて離れず ヱホバよねがはくは我をはづかしめ給ふなかれ三二 われ汝のいましめの道をはしらん その時なんぢわが心をひろく爲たまふべし

○へ

三三 ヱホバよ願くはなんぢの律法のみちを我にをしへたまへ われ終にいたるまで之をまもらん三四 われに智慧をあたへ給へ さらば我なんぢの法をまもり心をつくして之にしたがはん三五 われに汝のいましめの道をふましめたまへ われその道をたのしめばなり三六 わが心をなんぢの證詞にかたぶかしめて 貪利にかたぶかしめ給ふなかれ三七 わが眼をほかにむけて虚しきことを見ざらしめ 我をなんぢの途にて活し給へ三八 ひたすらに汝をおそるる汝のしもべに 聖言をかたくしたまへ三九 わがおそるる謗をのぞきたまへ そはなんぢの審判はきはめて善し四〇 我なんぢの訓諭をしたへり 願くはなんぢの義をもて我をいかしたまへ

○ワウ

四一 ヱホバよ聖言にしたがひてなんぢの憐憫なんぢの拯救を我

にのぞませたまへ四二さらば我われを誹るものに答ふることをえん　われ聖言によりたのめばなり四三又わが口より眞理のことばをことごとく除き給ふなかれ　われなんぢの審判をのぞみたればなり四四われたえずいや永久になんぢの法をまもらん四五われなんぢの訓諭をもとめたるにより障なくしてあゆまん四六われまた王たちの前になんぢの證詞をかたりて恥ることあらじ四七我わが愛するなんぢの誡命をもて己をたのしましめん四八われ手をわがあいする汝のいましめに擧げ　なんぢの律法をふかく思はん

○ザイン

四九ねがはくは汝のしもべに宣ひたる聖言をおもひいだしたまへ　汝われに之をのぞましめ給へり五〇なんぢの聖言はわれを活ししがゆゑに今もなほわが艱難のときの安慰なり五一高ぶる者おほいに我をあざわらへり　されど我なんぢの法をはなれざりき五二ヱホバよわれ汝がふるき往昔よりの審判をおもひいだして自から慰めたり五三なんぢの法をすつる惡者のゆゑによりて我はげしき怒をおこしたり五四なんぢの律法はわが旅の家にてわが歌となれり五五ヱホバよわれ夜間になんぢの名をおもひいだして　なんぢの法をまもれり五六われ汝のさとしを守りしによりてこの事をえたるなり

○ヘテ

五七ヱホバはわがうくべき有なり　われ汝のもろもろの言をまもらんといへり五八われ心をつくして汝のめぐみを請求めたり　ねがはくは聖言にしたがひて我をあはれみたまへ五九我わがすべての途をおもひ　足をかへしてなんぢの證詞にむけたり六〇我なんぢの誡命をまもるに速けくしてたゆたはざりき六一惡きものの繩われに纏ひたれども　我なんぢの法をわすれざりき六二我なんぢのただしき審判のゆゑに　夜半におきてなんぢに感謝せん六三われは汝をおそるる者　またなんぢの訓諭をまもるものの侶なり六四ヱホバよ汝のあはれみは地にみちたり　願くはなんぢの律法をわれにをしへたまへ

○テテ

六五ヱホバよなんぢ聖言にしたがひ惠をもてその僕をあしらひたまへり六六われ汝のいましめを信ず　ねがはくはわれに聰明と智識とををしへたまへ六七われ苦しまざる前にはまよひいでぬ　されど今はわれ聖言をまもる六八なんぢは善にして善をおこなひたまふ　ねがはくは汝のおきてを我にをしへたまへ六九高ぶるもの虚偽をくはだてて我にさからへり　われ心をつくしてなんぢの訓諭をまもらん七〇かれらの心はこえふとりて脂のごとし　されど我はなんぢの法をたのしむ七一困苦にあひたりしは我によきことなり　此によりて我なんぢの律法をまなびえたり七二なんぢの口の法はわがためには千々のこがね白銀にもまされり

○ヨーデ

七三なんぢの手はわれを造りわれを形づくれり　ねがはくは智慧

をあたへて我になんぢの誡命をまなばしめたまへ七四なんぢを畏るるものは我をみて喜ばん われ聖言によりて望をいだきたればなり七五ヱホバよ我はなんぢの審判のただしく又なんぢが眞實をもて我をくるしめたまひしを知る七六ねがはくは汝のしもべに宣ひたる聖言にしたがひて 汝の仁慈をわが安慰となしたまへ七七なんぢの憐憫をわれに臨ませたまへ さらばわれ生んなんぢの法はわが樂しめるところなり七八高ぶるものに恥をかうぷらせたまへ かれらは虚偽をもて我をくつがへしたればなりされど我なんぢの訓諭をふかくおもはん七九汝をおそるる者となんぢの證詞をしるものとを我にかへらしめたまへ八〇わがこころを全くして汝のおきてを守らしめたまへ さらばわれ恥をかうぶらじ

○カフ

八一わが靈魂はなんぢの救をしたひてたえいるばかりなり 然どわれなほ聖言によりて望をいだく八二なんぢ何のとき我をなぐさむるやといひつつ 我みことばを慕ふによりて眼おとろふ八三我は煙のなかの革嚢のごとくなりぬれども 尚なんぢの律法をわすれず八四 汝のしもべの日は幾何ありや 汝いづれのとき我をせむるものに審判をおこなひたまふや八五たかぶる者われを害はんとて阱をほれり かれらはなんぢの法にしたがはず八六なんぢの誡命はみな眞實なり かれらは虚偽をもて我をせむ ねがはくは我をたすけたまへ八七かれらは地にてほとんど我をほろぼせりされど我はなんぢの訓諭をすてざりき八八願くはなんぢの仁慈にしたがひて我をいかしたまへ 然ばわれ御口よりいづる證詞をまもらん

○ラメテ

八九ヱホバよみことばは天にてとこしえに定まり九〇なんぢの眞實はよろづ世におよぶ なんぢ地をかたく立たまへば地はつねにあり九一これらのものはなんぢの命令にしたがひ恒にありて今日にいたる 萬のものは皆なんぢの僕なればなり九二なんぢの法わがたのしみとならざりしならば我はつひに患難のうちに滅びたるならん九三われ恒になんぢの訓諭をわすれじ 汝これをもて我をいかしたまへばなり九四我はなんぢの有なりねがはくは我をすくひたまへ われ汝のさとしを求めたり九五惡きものは我をほろぼさんとして窺ひぬ われは唯なんぢのもろもろの證詞をおもはん九六我もろもろの純全に限あるをみたり されど汝のいましめはいと廣し

○メム

九七われなんぢの法をいつくしむこといかばかりぞや われ終日これを深くおもふ九八なんぢの誡命はつねに我とともにありて我をわが仇にまさりて慧からしむ九九我はなんぢの證詞をふかくおもふが故に わがすべての師にまさりて智慧おほし一〇〇我はなんぢの訓諭をまもるがゆゑに 老たる者にまさりて事をわきまふるなり一〇一われ聖言をまもらんために わが足をとどめ

てもろもろのあしき途にゆかしめず一〇二なんぢ我ををしへたまひしによりて我なんぢの審判をはなれざりき一〇三みことばの滋味はわが腭にあまきこといかばかりぞや 蜜のわが口に甘きにまされり一〇四我なんぢの訓諭によりて智慧をえたり このゆゑに虚偽のすべての途をにくむ

○ヌン

一〇五なんぢの聖言はわがあしの燈火わが路のひかりなり一〇六われなんぢのただしき審判をまもらんことをちかひ且かたくせり一〇七われ甚いたく苦しめり ヱホバよねがはくは聖言にしたがひて我をいかしたまへ一〇八ヱホバよねがはくは誠意よりするわが口の献物をうけて なんぢの審判ををしへたまへ一〇九わが霊魂はつねに危険ををかす されど我なんぢの法をわすれず一一〇あしき者わがために羂をまうけたり されどわれ汝のさとしより迷ひいでざりき一一一われ汝のもろもろの證詞をとこしへにわが嗣業とせり これらの證詞はわが心をよろこばしむ一一二われ汝のおきてを終までとこしへに守らんとて之にこころを傾けたり

○サメク

一一三われ二心のものをにくみ汝のおきてを愛しむ一一四なんぢはわが匿るべき所わが盾なり われ聖言によりて望をいだく一一五惡きをなすものよ我をはなれされ われわが神のいましめを守らん一一六聖言にしたがひ我をささへて生存しめたまへ わが望につきて恥なからしめたまへ一一七われを支へたまへ さらばわれ安けかるべし われ恒になんぢの律法にこころをそそがん一一八すべて律法よりまよひいづるものを汝かろしめたまへり かれらの欺詐はむなしければなり一一九なんぢは地のすべての惡きものを渣滓のごとく除きさりたまふ この故にわれ汝のあかしを愛す一二〇わが肉體なんぢを懼るるによりてふるふ 我はなんぢの審判をおそる

○アイン

一二一われは審判と公義とをおこなふ 我をすてて虐ぐるものに委ねたまふなかれ一二二汝のしもべの中保となりて福祉をえしめたまへ 高ぶるものの我をしへたぐるを容したまふなかれ一二三わが眼はなんぢの救となんぢのただしき聖言とをしたふによりておとろふ一二四ねがはくはなんぢの憐憫にしたがひてなんぢの僕をあしらひ 我になんぢの律法ををしへたまへ一二五我はなんぢの僕なり われに智慧をあたへてなんぢの證詞をしらしめたまへ一二六彼等はなんぢの法をすてたり 今はヱホバのはたらきたまふべき時なり一二七この故にわれ金よりもまじりなき金よりもまさりて汝のいましめを愛す一二八この故にもろもろのことに係るなんぢの一切のさとしを正しとおもふ 我すべてのいつはりの途をにくむ

○ペ

一二九汝のあかしは妙なり かかるが故にわが霊魂これをまもる一

一三〇 聖言うちひらくれば光をはなちて 愚かなるものをさとからしむ一三一 我なんぢの誡命をしたふが故に わが口をひろくあけて喘ぎもとめたり一三二 ねがはくは聖名を愛するものに恒になしたまふごとく身をかへして我をあはれみたまへ一三三 聖言をもてわが歩履をととのへ もろもろの邪曲をわれに主たらしめたまふなかれ一三四 われを人のしへたげより贖ひたまへ さらばわれ訓諭をまもらん一三五 ねがはくは聖顔をなんぢの僕のうへにてらし 汝のおきてを我にをしへ給へ一三六 人なんぢの法をまもらざるによりて わが眼のなみだ河のごとくに流る

○ツァデー

一三七 ヱホバよなんぢは義しくなんぢの審判はなほし一三八 汝ただしきと此上なき眞實とをもて その證詞を命じ給へり一三九 わが敵なんぢの聖言をわすれたるをもて わが熱心われをほろぼせり一四〇 なんぢの聖言はいときよし 此故になんぢの僕はこれを愛す一四一 われは微なるものにて人にあなどらるれども汝のさとしを忘れず一四二 なんぢの義はとこしへの義なり汝ののりは眞理なり一四三 われ患難と憂とにかかれども 汝のいましめはわが喜樂なり一四四 なんぢの證詞はとこしへに義し ねがはくはわれに智慧をたまへ 我ながらふることを得ん

○コフ

一四五 われ心をつくしてよばはれり ヱホバよ我にこたへたまへ我なんぢの律法をまもらん一四六 われ汝をよばはれり ねがはくはわれを救ひ給へ 我なんぢの證詞をまもらん一四七 われ詰朝おきいでて呼はれり われ聖言によりて望をいだけり一四八 夜の更のきたらぬに先だち わが眼はさめて汝のみことばを深くおもふ一四九 ねがはくはなんぢの仁慈にしたがひてわが聲をききたまへ ヱホバよなんぢの審判にしたがひて我をいかしたまへ一五〇 惡をおひもとむるものは我にちかづけり 彼等はなんぢの法にとほくはなる一五一 ヱホバよ汝はわれに近くましませり なんぢのすべての誡命はまことなり一五二 われ早くよりなんぢの證詞によりて汝がこれを永遠にたてたまへることを知れり

○レシ

一五三 ねがはくはわが患難をみて我をすくひたまへ 我なんぢの法をわすれざればなり一五四 ねがはくはわが訟をあげつらひて我をあがなひ 聖言にしたがひて我をいかしたまへ一五五 すくひは惡きものより遠くはなる かれらはなんぢの律法をもとめざればなり一五六 ヱホバよなんぢの憐憫はおほいなり 願くはなんぢの審判にしたがひて我をいかしたまへ一五七 我をせむる者われに敵するものおほし 我なんぢの證詞をはなるることなかりき一五八 虚偽をおこなふもの汝のみことばを守らざるにより 我かれらを見てうれへたり一五九 ねがはくはわが汝のさとしを愛すること幾何なるをかへりみたまへ ヱホバよなんぢの仁慈にしたがひて我をいかしたまへ一六〇 なんぢのみことばの總計はまことなり 汝のただしき審判はとこしへにいたるまで皆たゆることな

し

○シン

一六一 もろもろの侯はゆゑなくして我をせむ 然どわが心はただ汝のみことばを畏る一六二 われ人のおほいなる掠物をえたるごとくに 汝のみことばをよろこぶ一六三 われ虚偽をにくみ之をいみきらへども 汝ののりを愛す一六四 われ汝のただしき審判のゆゑをもて 一日に七次なんぢを讃稱ふ一六五 なんぢの法をあいするものには大なる平安あり かれらには蹟礙をあたふる者なし一六六 ヱホバよ我なんぢの救をのぞみ汝のいましめをおこなへり一六七 わが霊魂はなんぢの證詞をまもれり 我はいたく之をあいす一六八 われなんぢの訓諭となんぢの證詞とをまもりぬ わがすべての道はみまへにあればなり

○タウ

一六九 ヱホバよ願くはわがよぶ聲をみまへにちかづけ 聖言にしたがひて我にちゑをあたへたまへ一七〇 わが願をみまへにいたらせ 聖言にしたがひて我をたすけたまへ一七一 わがくちびるは讃美をいだすべし 汝われに律法ををしへ給へばなり一七二 わが舌はみことばを謳ふべし なんぢの一切のいましめは義なればなり一七三 なんぢの手をつねにわが助となしたまへ われなんぢの訓諭をえらび用ゐたればなり一七四 ヱホバよ我なんぢの救をしたへり なんぢの法はわがたのしみなり一七五 願くはわが霊魂をながらへしめたまへ さらば汝をほめたたへん 汝のさばきの我をたすけんことを一七六 われは亡はれたる羊のごとく迷ひいでぬ なんぢの僕をたづねたまへ われ汝のいましめを忘れざればなり

第一二〇篇 京詣のうた

一 われ困苦にあひてヱホバをよびしかば我にこたへたまへり二 ヱホバよねがはくは虚偽のくちびる欺詐の舌よりわが霊魂をたすけいだしたまへ三 あざむきの舌よなんぢに何をあたへられ 何をくはへらるべきか四 ますらをの利き箭と金雀花のあつき炭となり五 わざはひなるかな我はメセクにやどりケダルの幕屋のかたはらに住めり六 わがたましひは平安をにくむものと偕にすめり七 われは平安をねがふ されど我ものいふときにかれら戰爭をこのむ

第一二一篇 京まうでの歌

一 われ山にむかひて目をあぐ わが扶助はいづこよりきたるや二 わがたすけは天地をつくりたまへるヱホバよりきたる三 ヱホバはなんぢの足のうごかさるるを容したまはず 汝をまもるものは微睡たまふことなし四 視よイスラエルを守りたまふものは微睡こともなく寝ることもなからん五 ヱホバは汝をまもる者なり ヱホバはなんぢの右手をおほふ蔭なり六 ひるは日なんぢをうたず夜は月なんぢを傷じ七 ヱホバはなんぢを守りてもろもろの禍害をまぬかれしめ並なんぢの霊魂をまもりたまはん八 ヱホバは今よりとこしへにいたるまで 汝のいづると入るとをまもり

たまはん

第一二二篇 ダビデがよめる京まうでの歌

一 人われにむかひて率ヱホバのいへにゆかんといへるとき我よろこべり二 ヱルサレムよわれらの足はなんぢの門のうちにたてり三 ヱルサレムよなんぢは稠くつらなりたる邑のごとく固くたてり四 もろもろのやから即ちヤハの支派かしこに上りきたりイスラエルにむかひて證詞をなし またヱホバの名にかんしやをなす五 彼處にさばきの寳座まうけらる これダビデの家のみくらなり六 ヱルサレムのために平安をいのれ ヱルサレムを愛するものは榮ゆべし七 ねがはくはなんぢの石垣のうちに平安あり なんぢの諸殿のうちに福祉あらんことを八 わが兄弟のためわが侶のために われ今なんぢのなかに平安あれといはん九 われらの神ヱホバのいへのために我なんぢの福祉をもとめん

第一二三篇 京まうでの歌

一 天にいますものよ我なんぢにむかひて目をあぐ二 みよ僕その主の手に目をそそぎ 婢女その主母の手に目をそそぐがごとく われらはわが神ヱホバに目をそそぎて そのわれを憐みたまはんことをまつ三 ねがはくはわれらを憐みたまへ ヱホバよわれらを憐みたまへ そはわれらに軽侮はみちあふれぬ四 おもひわづらひなきものの凌辱と たかぶるものの軽侮とはわれらの霊魂にみちあふれぬ

第一二四篇 ダビデのよめる京まうでの歌

一 今イスラエルはいふべし ヱホバもしわれらの方にいまさず二 人々われらにさからひて起りたつとき ヱホバもし我儕のかたに在さざりしならんには三 かれらの怒のわれらにむかひて おこりし時 われらを生るままにて呑しならん四 また水はわれらをおほひ 流はわれらの霊魂をうちこえ五 高ぶる水はわれらの霊魂をうちこえしならん六 ヱホバはほむべきかな我儕をかれらの歯にわたして噛くらはせたまはざりき七 我儕のたましひは捕鳥者のわなをのがるる鳥のごとくにのがれたり 羅はやぶれてわれらはのがれたり八 われらの助は天地をつくりたまへるヱホバの名にあり

第一二五篇 みやこ詣のうた

一 ヱホバに依頼むものはシオンの山のうごかさるることなくして永遠にあるがごとし二 ヱルサレムを山のかこめるごとくヱホバも今よりとこしへにその民をかこみたまはん三 惡の杖はただしきものの所領にとどまることなかるべし斯てただしきものはその手を不義にのぶることあらじ四 ヱホバよねがはくは善人とこころ直きものとに福祉をほどこしたまへ五 されどヱホバは轉へりておのが曲れる道にいるものを惡きわざをなすものとともに去しめたまはん 平安はイスラエルのうへにあれ

第一二六篇 京まうでの歌

一 ヱホバ、シオンの俘囚をかへしたまひし時 われらは夢みるもののごとくなりき二 そのとき笑はわれらの口にみち歌はわれら

の舌にみてり　ヱホバかれらのために大なることを作たまへり
といへる者もろもろの國のなかにありき**三**　ヱホバわれらのため
に大なることをなしたまひたれば我儕はたのしめり**四**　ヱホバよ
願くはわれらの俘囚をみなみの川のごとくに歸したまへ**五**　涙
とともに播くものは歡喜とともに穫らん**六**　その人は種をたづさ
へ涙をながしていでゆけど禾束をたづさへ喜びてかへりきたら
ん

第一二七篇　ソロモンがよめる京まうでのうた

一　ヱホバ家をたてたまふにあらずば建るものの勤勞はむなしく
ヱホバ城をまもりたまふにあらずば衛士のさめをるは徒勞なり
二　なんぢら早くおき遲くいねて辛苦の糧をくらふはむなしきな
り斯てヱホバその愛しみたまふものに寢をあたへたまふ**三**　みよ
子輩はヱホバのあたへたまふ嗣業にして　胎の實はその報のた
まものなり**四**　年壯きころほひの子はますらをの手にある矢のご
とし**五**　矢のみちたる箙をもつ人はさいはひなり　かれら門にあり
て仇とものいふとき恥ることあらじ

第一二八篇　京まうでの歌

一　ヱホバをおそれその道をあゆむものは皆さいはひなり**二**　そは
なんぢおのが手の勤勞をくらふべければなり　なんぢは福祉を
えまた安處にをるべし**三**　なんぢの妻はいへの奧にをりておほく
の實をむすぶ葡萄の樹のごとく汝の子輩はなんぢの筵に円居し
てかんらんの若樹のごとし**四**　見よヱホバをおそるる者はかく
福祉をえん**五**　ヱホバはシオンより惠をなんぢに賜はん　なんぢ世
にあらんかぎりヱルサレムの福祉をみん**六**　なんぢおのが子輩の
子をみるべし　平安はイスラエルの上にあり

第一二九篇　京まうでのうた

一　今イスラエルはいふべし彼等はしばしば我をわかきときより
惱めたり**二**　かれらはしばしば我をわかきときより惱めたり　され
どわれに勝ことを得ざりき**三**　耕すものはわが背をたがへしてそ
の畎をながくせり**四**　ヱホバは義しあしきものの繩をたちたまへ
り**五**　シオンをにくむ者はみな恥をおびてしりぞかせらるべし**六**
かれらは長たざるさきにかるる屋上の草のごとし**七**　これを刈る
ものはその手にみたず　之をつかぬるものはその束ふところに
盈ざるなり**八**　かたはらを過るものはヱホバの惠なんぢの上にあ
れといはず　われらヱホバの名によりてなんぢらを祝すといは
ず

第一三〇篇　京まうでの歌

一　ああヱホバよわれふかき淵より汝をよべり**二**　主よねがはくは
わが聲をきき汝のみみをわが懇求のこゑにかたぶけたまへ**三**　ヤ
ハよ主よなんぢ若もろもろの不義に目をとめたまはば誰たれか
よく立ことをえんや**四**　されどなんぢに赦あれば人におそれかし
こまれ給ふべし**五**　我ヱホバを俟望む　わが霊魂はまちのぞむ　わ
れはその聖言によりて望をいだく**六**　わがたましひは衛士があし
たを待にまさり　誠にゑじが旦をまつにまさりて主をまてり**七**

イスラエルよヱホバによりて望をいだけ そはヱホバにあはれみあり またゆたかなる救贖あり八 ヱホバはイスラエルをそのもろもろの邪曲よりあがなひたまはん

第一三一篇 ダビデのよめる京まうでのうた

一ヱホバよわが心おごらずわが目たかぶらず われは大なることと我におよばぬ奇しき事とをつとめざりき二 われはわが霊魂をもだきしめまた安からしめたり 乳をたちし嬰兒のその母にたよるごとく我がたましひは乳をたちし嬰兒のごとくわれに恃れり三 イスラエルよ今よりとこしへにヱホバにたよりて望をいだけ

第一三二篇 京まうでの歌

一ヱホバよねがはくはダビデの爲にそのもろもろの憂をこころに記たまへ二 ダビデ、ヱホバにちかひヤコブの全能者にうけひていふ三四五 われヱホバのために處をたづねいだし ヤコブの全能者のために居所をもとめうるまでは 我家の幕屋にいらず わが臥床にのぼらず わが目をねぶらしめず わが眼瞼をとぢしめざるべしと六 われらエフラタにて之をききヤアルの野にて見とめたり七 われらはその居所にゆきて その承足のまへに俯伏さん八 ヱホバよねがはくは起きて なんぢの稜威の櫃とともになんぢの安居所にいりたまへ九 なんぢの祭司たちは義を衣 なんぢの聖徒はみな歡びよばふべし一〇 なんぢの僕 ダビデのためになんぢの受膏者の面をしりぞけたまふなかれ一一 ヱホバ眞實をもてダビデに誓ひたまひたれば之にたがふことあらじ 曰くわれなんぢの身よりいでし者をなんぢの座位にざせしめん一二 なんぢの子輩もしわがをしふる契約と證詞とをまもらばかれらの子輩もまた永遠になんぢの座位にざすべしと一三 ヱホバはシオンを擇びておのが居所にせんとのぞみたまへり一四 曰くこれは永遠にわが安居處なり われここに住ん そはわれ之をのぞみたればなり一五 われシオンの糧をゆたかに祝しくひものをもてその貧者をあかしめん一六 われ救をもてその祭司たちに衣せん その聖徒はみな聲たからかによろこびよばふべし一七 われダビデのためにかしこに一つの角をはえしめん わが受膏者のために燈火をそなへたり一八 われかれの仇にはぢを衣せん されどかれはその冠弁さかゆべし

第一三三篇 ダビデがよめる京まうでの歌

一觀よはらから相睦てともにをるはいかに善いかに樂きかな二 首にそそがれたる貴きあぶら鬚にながれ アロンの鬚にながれ その衣のすそにまで流れしたたるがごとく三 またヘルモンの露くだりてシオンの山にながるるがごとし そはヱホバかしこに福祉をくだし窮なき生命をさへあたへたまへり

第一三四篇 京まうでの歌

一夜間ヱホバの家にたちヱホバに事ふるもろもろの僕よ ヱホバをほめまつれ二 なんぢら聖所にむかひ手をあげてヱホバをほめまつれ三 ねがはくはヱホバ天地をつくりたまへるもの シオンよ

り汝をめぐみたまはんことを

第一三五篇一 なんぢらヱホバを讃稱へよ ヱホバの名をほめたたへよ ヱホバの僕等ほめたたへよ二 ヱホバの家われらの神のいへの大庭にたつものよ讃稱へよ三 ヱホバは惠ふかし なんぢらヱホバをほめたたへよ その聖名はうるはし 讃うたへ四 そはヤハおのがためにヤコブをえらみ イスラエルをえらみてその珍寶となしたまへり五 われヱホバの大なるとわれらの主のもろもろの神にまされるとをしれり六 ヱホバその聖旨にかなふことを天にも地にも海にも淵にもみなことごとく行ひ給ふなり七 ヱホバは地のはてより霧をのぼらせ 雨のために電光をつくりその庫より風をいだしたまふ八 ヱホバは人より畜類にいたるまでエジプトの首出をうちたまへり九 エジプトよヱホバはなんぢの中にしるしと奇しき事跡とをおくりて パロとその僕とに臨ませ給へり一〇 ヱホバはおほくの國々をうち 又いきほひある王等をころし給へり一一 アモリ人のわうシホン、バシヤンの王オグならびにカナンの國々なり一二 かれらの地をゆづりとしその民イスフルの嗣業としてあたへ給へり一三 ヱホバよなんぢの名はとこしへに絶ることなし ヱホバよなんぢの記念はよろづ世におよばん一四 ヱホバはその民のために審判をなしその僕等にかかはれる聖意をかへたまふ可ればなり一五 もろもろのくにの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり一六 そのぐうざうは口あれどいはず目あれど見ず一七 耳あれどきかず またその口に氣息あることなし一八 これを造るものと之によりたのむものとは皆これにひとしからん一九 イスラエルの家よヱホバをほめまつれ アロンのいへよヱホバをほめまつれ二〇 レビの家よヱホバをほめまつれ ヱホバを畏るるものよヱホバをほめまつれ二一 ヱルサレムにすみたまふヱホバはシオンにて讃まつるべきかな ヱホバをほめたたへよ

第一三六篇一 ヱホバに感謝せよヱホバはめぐみふかし その憐憫はとこしへに絶ることなければなり二 もろもろの神の神にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり三 もろもろの主の主にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり四 ただ獨りおほいなる奇跡なしたまふものに感謝せよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり五 智慧をもてもろもろの天をつくりたまへるものに感謝せよ そのあはれみはとこしへにたゆることなければなり六 地を水のうへに布たまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり七 巨大なる光をつくりたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり八 晝をつかさどらするために日をつくりたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり九 夜をつかさどらするために月ともろもろの星とをつくりたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり一〇 もろもろの首出をうちてエジプトを責たまへるものに感謝せよ そのあは

れみは永遠にたゆることなければなり一一 イスラエルを率てエジプト人のなかより出したまへる者にかんしやせよ そのあはれみはとこしへに絶ることなければなり一二 臂をのばしつよき手をもて之をひきいだしたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり一三 紅海をふたつに分たまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり一四 イスラエルをしてその中をわたらしめ給へるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり一五 パロとその軍兵とを紅海のうちに仆したまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり一六 その民をみちびきて野をすぎしめたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり一七 大なる王たちを撃たまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり一八 名ある王等をころしたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり一九 アモリ人のわうシホンをころしたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり二〇 バシヤンのわうオグを誅したまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり二一 かれらの地を嗣業としてあたへたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり二二 その僕イスラエルにゆづりとして之をあたへたまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり二三 われらが微賤かりしときに記念したまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり二四 わが敵よりわれらを助けいだしたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり二五 すべての生るものに食物をあたへたまふものに感謝せよ そのあはれみはとこしへに絶ることなければなり二六 天の神にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり

第一三七篇

一 われらバビロンの河のほとりにすわり シオンをおもひいでて涙をながしぬ二 われらそのあたりの柳にわが琴をかけたり三 そはわれらを虜にせしものわれらに歌をもとめたり 我儕をくるしむる者われらにおのれを歓ばせんとて シオンのうた一つうたへといへり四 われら外邦にありていかでヱホバの歌をうたはんや五 エルサレムよもし我なんぢをわすれなばわが右の手にその巧をわすれしめたまへ六 もしわれ汝を思ひいでずもしわれヱルサレムをわがすべての歓喜の極となさずばわが舌をわが腭につかしめたまへ七 ヱホバよねがはくはヱルサレムの日にエドムの子輩がこれを掃除けその基までもはらひのぞけといへるを聖意にとめたまへ八 ほろぼさるべきバビロンの女よなんぢがわれらに作しごとく汝にむくゆる人はさいはひなるべし九 なんぢの嬰兒をとりて岩のうへになげうつものは福ひなるべし

第一三八篇 ダビデのうた

一われはわが心をつくしてなんぢに感謝しもろもろの神のまへにて汝をほめうたはん二我なんぢのきよき宮にむかひて伏拜みなんぢの仁慈とまこととの故によりて聖名にかんしやせん そは汝そのみことばをもろもろの聖名にまさりて高くしたまひたればなり三 汝わがよばはりし日にわれにこたへ わが靈魂にちからをあたへて雄々しからしめたまへり四 ヱホバよ地のすべての王はなんぢに感謝せん かれらはなんぢの口のもろもろの言をききたればなり五 かれらはヱホバのもろもろの途についてうたはん ヱホバの榮光おほいなればなり六 ヱホバは高くましませども卑きものを顧みたまふ されど亦おごれるものを遠よりしりたまへり七 縱ひわれ患難のなかを歩むとも汝われをふたたび活し その手をのばしてわが仇のいかりをふせぎ その右の手われをすくひたまふべし八 ヱホバはわれに係れることを全うしたまはん ヱホバよなんぢの憐憫はとこしへにたゆることなし 願くはなんぢの手のもろもろの事跡をすてたまふなかれ

第一三九篇 伶長にうたはしめたるダビデの歌

一ヱホバよなんぢは我をさぐり我をしりたまへり二なんぢはわが坐るをも立をもしり 又とほくよりわが念をわきまへたまふ三 なんぢはわが歩むをもわが臥をもさぐりいだし わがもろもろの途をことごとく知たまへり四 そはわが舌に一言ありとも觀よ ヱホバよなんぢことごとく知たまふ五 なんぢは前より後よりわれをかこみ わが上にその手をおき給へり六 かかる知識はいとくすしくして我にすぐまた高くして及ぶことあたはず七 我いづこにゆきてなんぢの聖靈をはなれんや われいづこに往てなんぢの前をのがれんや八 われ天にのぼるとも汝かしこにいまし われわが榻を陰府にまうくるとも 觀よなんぢ彼處にいます九 我あけぼの翼をかりて海のはてにすむとも一〇 かしこにて尚なんぢの手われをみちびき汝のみぎの手われをたもちたまはん一一 暗はかならす我をおほひ 我をかこめる光は夜とならんと我いふとも一二 汝のみまへには暗ものをかくすことなく夜もひるのごとくに輝けり なんぢにはくらきも光もことなることなし一三 汝はわがはらわたをつくり 又わがははの胎にわれを組成たまひたり一四 われなんぢに感謝す われは畏るべく奇しくつくられたり なんぢの事跡はことごとくくすし わが靈魂はいとつばらに之をしれり一五 われ隱れたるところにてつくられ地の底所にて妙につづりあはされしとき わが骨なんぢにかくるることなかりき一六 わが體いまだ全からざるになんぢの目ははやくより之をみ 日々かたちづくられしわが百體の一だにあらざりし時にことごとくなんぢの冊にしるされたり一七 神よなんぢりもろもろの思念はわれに寶きことといかばかりぞや そのみおもひの總計はいかに多きかな一八 我これを算へんとすれどもそのかずは沙よりもおほし われ眼さむるときも尚なんぢとともにをる一九 神よなんぢはかならず惡者をころし給はん されば血をながすものよ我をはなれされ二〇 かれらはあしき企圖をもて汝にさ

からひて言ふ なんぢの仇はみだりに聖名をとなふるなり二一 ヱホバよわれは汝をにくむ者をにくむにあらずや なんぢに逆ひておこりたつものを厭ふにあらずや二二 われ甚くかれらをにくみてわが仇とす二三 神よねがはくは我をさぐりてわが心をしり我をこころみてわがもろもろの思念をしりたまへ二四 ねがはくは我によこしまなる途のありやなしやを見て われを永遠のみちに導きたまへ

第一四〇篇 伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは惡人よりわれを助けいだし我をまもりて強暴人よりのがれしめたまへ二 かれらは心のうちに殘害をくはだて たえず戰鬪をおこす三 かれらは蛇のごとくおのが舌を利すそのくちびるのうちに蝮の毒ありセラ四 ヱホバよ願くはわれを保ちてあしきひとの手よりのがれしめ 我をまもりてわが足をつまづかせんと謀るあらぶる人よりのがれしめ給へ五 高ぶるものはわがために羂と索とをふせ 路のほとりに網をはり かつ機をまうけたりセラ六 われヱホバにいへらく汝はわが神なり ヱホバよねがはくはわが祈のこゑをきき給へ七 わが救のちからなる主の神よ なんぢはたたかひの日にわが首をおほひたまへり八 ヱホバよあしきひとの欲のままにすることをゆるしたまふなかれ そのあしき企圖をとげしめたまふなかれ おそらくは彼等みづから誇らんセラ九 われを圍むものの首はおのれのくちびるの殘害におほはるべし一〇 もえたる炭はかれらのうへにおち かれらは火になげいれられ ふかき穴になげいれられて再びおきいづることあたはざるべし一一 惡言をいふものは世にたてられず暴ぶるものはわざはひに追及れてたふさるべし一二 われは苦しむものの訴とまづしきものの義とをヱホバの守りたまふを知る一三 義者はかならず聖名にかんしやし直者はみまへに住ん

第一四一篇 ダビデのうた

一 ヱホバよ我なんぢを呼ふ ねがはくは速かにわれにきたりたまへ われ汝をよばふときわが聲に耳をかたぶけたまへ二 われはわが祈をみまへにささぐる薫物のごとくにわが祈をみまへにささげ 夕のそなへものの如くにわが手をあげて聖前にささげんことをねがふ三 ヱホバよねがはくはわが口に門守をおきて わがくちびるの戸をまもりたまへ四 惡事にわがこころを傾かしめて邪曲をおこなふ者とともに惡きわざにあづからしめ給ふなかれ 又かれらの珍饈をくらはしめたまふなかれ五 義者われをうつとも我はこれを愛しみとしその我をせむるを頭のあぶらとせん わが頭はこれを辭まず かれらが禍害にあふときもわが祈はたえじ六 その審士ははほの崕になげられん かれらわがことばの甘美によりて聽ことをすべし七 人つちを耕しうがつがごとく我儕のほねははかの口にちらさる八 されど主ヱホバよわが目はなほ汝にむかふ 我なんぢに依頼めり ねがはくはわが霊魂をともしきままに捨おきたまなかれ九 我をまもりてかれらがわがためにまうくる羂とよこしまを行ふものの機とをまぬかれしめたまへ一〇 われは全く

のがれん あしきものをおのれの網におちいらしめたまへ

第一四二篇 ダビデが洞にありしときよみたる教へのうたなり祈なり

一われ聲をいだしてヱホバによばはり 聲をいだしてヱホバにこひもとむ二われはその聖前にわが歎息をそそぎいだし そのみまへにわが患難をあらはす三 わが霊魂わがうちにきえうせんとするときも汝わがみちを識たまへり 人われをとらへんとてわがゆくみちに羂をかくせり四 願くはわがみぎの手に目をそそぎて見たまへ 一人だに我をしるものなし われには避所なくまたわが霊魂をかへりみる人なし五 ヱホバよわれ汝をよばふ 我いへらく汝はわがさけどころ有生の地にてわがうべき分なりと六 ねがはくはわが號呼にみこころをとめたまへ われいたく卑くせられたればなり 我をせむる者より助けいだしたまへ 彼等はわれにまさりて強ければなり七 願くはわがたましひを囹圄よりいだしわれに聖名を感謝せしめたまへ なんぢ豊かにわれを待ひたまふべければ 義者われをめぐらん

第一四三篇 ダビデのうた

一ヱホバよねがはくはわが祈をきき わが懇求にみみをかたぶけたまへ なんぢの眞實なんぢの公義をもて我にこたへたまへ二汝のしもべの審判にかかつらひたまふなかれ そはいけるもの一人だにみまへに義とせらるるはなし三 仇はわがたましひを迫めわが生命を地にうちすて 死てひさしく世を經たるもののごとく我をくらき所にすまはせたり四 又わがたましひはわが衷にきえうせんとし わが心はわがうちに曠さびれたり五 われはいにしへの日をおもひいで 汝のおこなひたまひし一切のことを考へ なんぢの手のみわざをおもふ六 われ汝にむかひてわが手をのべ わがたましひは燥きおとろへたる地のごとく汝をしたへりセラ七 ヱホバよ速かにわれにこたへたまへ わが霊魂はおとろふ われに聖顔をかくしたまふなかれ おそらくはわれ穴にくだるもののごとくならん八 朝になんぢの仁慈をきかしめたまへ われ汝によりたのめばなり わが歩むべき途をしらせたまへ われわが霊魂をなんぢに擧ればなり九 ヱホバよねがはくは我をわが仇よりたすけ出したまへ われ匿れんとして汝にはしりゆく一〇 汝はわが神なり われに聖旨をおこなふことををしへたまへ 恵ふかき聖霊をもて我をたひらかなる國にみちびきたまへ一一 ヱホバよねがはくは聖名のために我をいかし なんぢの義によりてわがたましひを患難よりいだしたまへ一二 又なんぢの仁慈によりてわが仇をたち 霊魂をくるしむる者をことごとく滅したまへ そは我なんぢの僕なり

第一四四篇 ダビデのうた

一戰することをわが手にをしへ 闘ふことをわが指にをしへたまふ わが磐ヱホバはほむべきかな二 ヱホバはわが仁慈わが城なり わがたかき櫓われをすくひたまふ者なり わが盾わが依頼むものなり ヱホバはわが民をわれにしたがはせたまふ三 ヱホバよ人はいかなる者なれば之をしり 人の子はいかなる者なれば

之をみこころに記たまふや四人は氣息にことならず その存らふる日はすぎゆく影にひとし五ヱホバよねがはくはなんぢの天をたれてくだり 手を山につけて煙をたたしめたまへ六電光をうちいだして彼等をちらし なんぢの矢をはなちてかれらを敗りたまへ七上より手をのべ我をすくひて 大水より外人の手よりたすけいだしたまへ八かれらの口はむなしき言をいひ その右の手はいつはりのみぎの手なり九神よわれ汝にむかひて新らしき歌をうたひ 十絃の琴にあはせて汝をほめうたはん一〇なんぢは王たちに救をあたへ 僕ダビデをわざはひの劍よりすくひたまふ神なり一一 ねがはくは我をすくひて外人の手よりたすけいだしたまへ かれらの口はむなしき言をいひ その右の手はいつはりのみぎの手なり一二 われらの男子はとしわかきとき育ちたる草木のごとくわれらの女子は宮のふりにならひて刻みいだしし隅の石のごとくならん一三 われらの倉はみちたらひてさまざまのものをそなへ われらの羊は野にて千萬の子をうみ一四 われらの牡牛はよく物をおひ われらの衢にはせめいることなく亦おしいづることなく叫ぶこともなからん一五 かかる狀の民はさいはひなり ヱホバをおのが神とする民はさいはひなり

第一四五篇 ダビデの讃美のうた

一 わがかみ王よわれ汝をあがめ 世かぎりなく聖名をほめまつらん二 われ日ごとに汝をほめ世々かぎりなく聖名をはめたたへん三 ヱホバは大にましませば最もほむべきかな その大なることは尋ねしることかたし四 この代はかの代にむかひてなんぢの事跡をほめたたへ なんぢの大能のはたらきを宣つたへん五 われ汝のほまれの榮光ある稜威となんぢの奇しきみわざとを深くおもはん六 人はなんぢのおそるべき動作のいきほひをかたり 我はなんぢの大なることを宣つたへん七 かれらはなんぢの大なる惠の跡をいひいで なんぢの義をほめうたはん八 ヱホバは惠ふかく憐憫みち また怒りたまふことおそく憐憫おほいなり九 ヱホバはよろづの者にめぐみあり そのふかき憐憫はみわざの上にあまねし一〇 ヱホバよ汝のすべての事跡はなんぢに感謝し なんぢの聖徒はなんぢをほめん一一 かれらは御國のえいくわうをかたり汝のみちからを宣つたへて一二 その大能のはたらきとそのみくにの榮光あるみいづとを人の子輩にしらすべし一三 なんぢの國はとこしへの國なり なんぢの政治はよろづ代にたゆることなし一四 ヱホバはすべて倒れんとする者をささへ かがむものを直くたたしめたまふ一五 よろづのものの目はなんぢを待 なんぢは時にしたがひてかれらに糧をあたへ給ふ一六 なんぢ手をひらきてもろもろの生るものの願望をあかしめたまふ一七 ヱホバはそのすべての途にただしく そのすべての作爲にめぐみふかし一八 すべてヱホバをよぶもの 誠をもて之をよぶものにヱホバは近くましますなり一九 ヱホバは己をおそるるものの願望をみちたらしめ その號呼をききて之をすくひたまふ二〇 ヱホバはおのれを愛しむものをすべて守りたまへど 惡者をことごとく滅した

まはん二 わが口はヱホバの頌美をかたり よろづの民は世々かぎりなくそのきよき名をほめまつるべし

第一四六篇一 ヱホバを讃稱へよ わがたましひよヱホバをほめたたへよ二 われ生るかぎりはヱホバをほめたたへ わがながらふるほどはわが神をほめうたはん三 もろもろの君によりたのむことなく人の子によりたのむなかれ かれらに助あることなし四 その氣息いでゆけばかれ土にかへる その日かれがもろもろの企圖はほろびん五 ヤコブの神をおのが助としその望をおのが神ヱホバにおくものは福ひなり六 此はあめつちと海とそのなかなるあらゆるものを造り とこしへに眞實をまもり七 虐げらるるもののために審判をおこなひ 饑ゑたるものに食物をあたへたまふ神なり ヱホバはとらはれたる人をときはなちたまふ八 ヱホバはめしひの目をひらき ヱホバは屈者をなほくたたせ ヱホバは義しきものを愛しみたまふ九 ヱホバは他邦人をまもり 孤子と寡婦とをささへたまふ されど惡きものの徑はくつがへしたまふなり一〇 ヱホバはとこしへに統治めたまはん シオンよなんぢの神はよろづ代まで統治めたまはん ヱホバをほめたたへよ

第一四七篇一 ヱホバをほめたたへよ われらの神をほめうたふは善ことなり樂しきことなり 稱へまつるはよろしきに適へり二 ヱホバはヱルサレムをきづきイスラエルのさすらへる者をあつめたまふ三 ヱホバは心のくだけたるものを醫しその傷をつつみたまふ四 ヱホバはもろもろの星の數をかぞへてすべてこれに名をあたへたまふ五 われらの主はおほいなりその能力もまた大なり その智慧はきはまりなし六 ヱホバは柔和なるものをささへ惡きものを地にひきおとし給ふ七 ヱホバに感謝してうたへ 琴にあはせてわれらの神をほめうたへ八 ヱホバは雲をもて天をおほひ地のために雨をそなへ もろもろの山に草をはえしめ九 くひものを獸にあたへ並なく小鴉にあたへたまふ一〇 ヱホバは馬のちからを喜びたまはず 人の足をよみしたまはず一一 ヱホバはおのれを畏るるものと おのれの憐憫をのぞむものとを好したまふ一二 ヱルサレムよヱホバをほめたたへよ シオンよなんぢの神をほめたたへよ一三 ヱホバはなんぢの門の關木をかたうし 汝のうちなる子輩をさきはひ給ひたればなり一四 ヱホバは汝のすべての境にやはらぎをあたへ いと嘉麥をもて汝をあかしめたまふ一五 ヱホバはそのいましめを地にくだしたまふ その聖言はいとすみやかにはしる一六 ヱホバは雪をひつじの毛のごとくふらせ霜を灰のごとくにまきたまふ一七 ヱホバは氷をつちくれのごとくに擲ちたまふ たれかその寒冷にたふることをえんや一八 ヱホバ聖言をくだしてこれを消し その風をふかしめたまへばもろもろの水はながる一九 ヱホバはそのみことばをヤコブに示し そのもろもろの律法とその審判とをイスラエルにしめしたまふ二〇 ヱホバはいづれの國をも如此あしらひたまひしにあらず ヱホバのもろもろの審判をかれらはしらざるなり ヱホバをほめたたへよ

第一四八篇

一ヱホバをほめたたへよもろもろの天よりヱホバをほめたたへよ もろもろの高所にてヱホバをほめたたへよ二その天使よみなヱホバをほめたたへよ その萬軍よみなヱホバをほめたたへよ三日よ月よヱホバをほめたたへよ ひかりの星よみなヱホバをほめたたへよ四もろもろの天のてんよ 天のうへなる水よ ヱホバをほめたたへよ五これらはみなヱホバの聖名をほめたたふべし そはヱホバ命じたまひたればかれらは造られたり六ヱホバまた此等をいやとほながに立たまひたり 又すぎうすまじき詔命をくだしたまへり七 龍よ すべての淵よ地よりヱホバをほめたたへよ八 火よ霰よ雪よ霧よみことばにしたがふ狂風よ九もろもろの山もろもろのをか實をむすぶ樹すべての香柏よ一〇獸もろもろの牲畜はふもの翼ある鳥よ一一 地の王たち もろもろのたみ 地の諸侯よ 地のもろもろの審士よ一二 少きをのこ 若きをみな 老たる人をさなきものよ一三 みなヱホバの聖名をほめたたふべし その聖名はたかくして類なく そのえいくわうは地よりも天よりもうへにあればなり一四 ヱホバはその民のために一つの角をあげたまへり こはそもろもろの聖徒のほまれ ヱホバにちかき民なるイスラエルの子輩のほまれなり ヱホバを讃稱へよ

第一四九篇

一ヱホバをほめたたへよ ヱホバに對ひてあたらしき歌をうたへ 聖徒のつどひにてヱホバの頌美をうたへ二 イスラエルはおのれを造りたまひしものをよろこび シオンの子輩は己が王のゆゑによりて樂しむべし三 かれらをどりつつその聖名をほめたたへ 琴鼓にてヱホバをほめうたふべし四 ヱホバはおのが民をよろこび 救にて柔和なるものを美しくしたまへばなり五 聖徒はえいくわうの故によりてよろこび その寢牀にてよろこびうたふべし六 その口に神をほむるうたあり その手にもろはの劍あり七 こはもろもろの國に仇をかへし もろもろの民をつみなひ八 かれらの王たちを鏈にてかれらの貴人をくろかねの械にていましめ九 録したる審判をかれらに行ふべきためなり 斯るほまれはそのもろもろの聖徒にあり ヱホバをほめたたへよ

第一五〇篇

一ヱホバをほめたたへよ その聖所にて神をほめたたへよ その能力のあらはるる穹蒼にて神をほめたたへよ二 その大能のはたらきのゆゑをもて神をほめたたへよ その秀でおほいなることの故によりてヱホバをほめたたへよ三 ラッパの聲をもて神をほめたたへよ 箏と琴とをもて神をほめたたへよ四 つづみと蹈舞とをもて神をほめたたへよ 絃簫をもて神をほめたたへよ五 音のたかき鐃鈸をもて神をほめたたへよ なりひびく鐃鈸をもて神をほめたたへよ六 氣息あるものは皆ヤハをほめたたふべし なんぢらヱホバをほめたたへよ

箴言

第一章 一ダビデの子イスラエルの王ソロモンの箴言二こは人に智慧と訓誨とをしらしめ哲言を暁らせ三さとき訓と公義と公平と正直とをえしめ四拙者にさとりを與へ少者に知識と謹愼とを得させん爲なり五智慧ある者は之を聞て學にすすみ哲者は智略をうべし六人これによりて箴言と譬喩と智慧ある者の言とその隠語とを悟らん七ヱホバを畏るるは知識の本なり愚なる者は智慧と訓誨とを軽んず八我が子よ汝の父の教をきけ汝の母の法を棄ることなかれ九これ汝の首の美しき冠となり汝の項の妝飾とならん一〇わが子よ惡者なんぢ誘ふとも從ふことなかれ一一彼等なんぢにむかひて請ふ われらと偕にきたれ我儕まちぶせして人の血を流し 無辜ものを故なきに伏てねらひ一二陰府のごとく彼等を活たるままにて呑み 壯健なる者を壙に下る者のごとくになさん一三われら各様のたふとき財貨をえ奪ひ取たる物をもて我儕の家に盈さん一四汝われらと偕に籤をひけ 我儕とともに一の金囊を持べしと云とも一五我が子よ彼等とともに途を歩むことなかれ 汝の足を禁めてその路にゆくこと勿れ一六そは彼らの足は惡に趨り 血を流さんとて急げばなり一七(すべて鳥の目の前にて羅を張は徒勞なり)一八彼等はおのれの血のために埋伏し おのれの命をふしてねらふ一九凡て利を貪る者の途はかくの如し 是その持主をして生命をうしなはしむるなり二〇智慧外に呼はり衢に其聲をあげ二一熱鬧しき所にさけび 城市の門の口邑の中にその言をのべていふ二二なんぢら拙者のつたなきを愛し 嘲笑者のあざけりを樂しみ 愚なる者の知識を惡むは幾時までぞや二三わが督斥にしたがひて心を改めよ 視よわれ我が霊を汝らにそそぎ 我が言をなんぢらに示さん二四われ呼たれども汝らこたへず 手を伸たれども顧る者なく二五かへつて我がすべての勸告をすて我が督斥を受ざりしに由り二六われ汝らが禍災にあふとき之を笑ひ 汝らの恐懼きたらんとき嘲るべし二七これは汝らのおそれ颶風の如くきたり 汝らのほろび颶風の如くきたり 艱難とかなしみと汝らにきたらん時なり二八そのとき彼等われを呼ばん 然れどわれ應へじ 只管に我を求めん されど我に遇じ二九かれら知識を憎み又ヱホバを畏るることを悦ばず三〇わが勸に從はず凡て我督斥をいやしめたるによりて三一己の途の果を食ひおのれの策略に飽べし三二拙者の違逆はおのれを殺し 愚なる者の幸福はおのれを滅さん三三されど我に聞ものは平穩に住ひかつ禍害にあふ恐怖なくして安然ならん

第二章 一我が子よ汝もし我が言をうけ 我が誡命を汝のこころに蔵め二斯て汝の耳を智慧に傾け汝の心をさとりにむけ三もし知識を呼求め聰明をえんと汝の聲をあげ四銀の如くこれを探り 秘れたる寶の如くこれを尋ねば五汝ヱホバを畏るることを暁り 神を知ることを得べし六そはヱホバは智慧をあたへ 知識と

聰明とその口より出づればなり七　かれは義人のために聰明をたくはへ　直く行む者の盾となる八　そは公平の途をたもち　その聖徒の途すぢを守りたまへばなり九　斯て汝はつひに公義と公平と正直と一切の善道を暁らん一〇　すなはち智慧なんぢの心にいり　知識なんぢの靈魂に樂しからん一一　謹愼なんぢを守り　聰明なんぢをたもちて一二　惡き途よりすくひ虚僞をかたる者より救はん一三　彼等は直き途をはなれて幽暗き路に行み一四　惡を行ふを樂しみ　惡者のいつはりを悦び一五　その途はまがり　その行爲は邪曲なり一六　聰明はまた汝を妓女より救ひ　言をもて諂ふ婦より救はん一七　彼はわかき時の侶をすて　その神に契約せしことを忘るるなり一八　その家は死に下り　その途は陰府に赴く一九　凡てかれにゆく者は歸らず　また生命の途に達らざるなり二〇　聰明汝をたもちてよき途に行ませ　義人の途を守らしめん二一　そは義人は地にながらへをり　完全者は地に止らん二二　されど惡者は地より亡され悖逆者は地より抜さらるべし

第三章一　我が子よわが法を忘るるなかれ　汝の心にわが誡命をまもれ二　さらば此事は汝の日をながくし生命の年を延べ平康をなんぢに加ふべし三　仁慈と眞實とを汝より離すことなかれ　之を汝の項にむすび　これを汝の心の碑にしるせ四　さらばなんぢ神と人との前に恩寵と好名とを得べし五　汝こころを盡してヱホバに倚頼め　おのれの聰明に倚ることなかれ六　汝すべての途にてヱホバをみとめよ　さらばなんぢの途を直くしたまふべし七　自から看て聰明とする勿れ　ヱホバを畏れて惡を離れよ八　これ汝の身に良薬となり汝の骨に滋潤とならん九　汝の貨財と汝がすべての産物の初生をもてヱホバをあがめよ一〇　さらば汝の倉庫はみちて餘り　汝の酒醡は新しき酒にて溢れん一一　我子よ汝　ヱホバの懲治をかろんずる勿れ　その譴責を受くるを厭ふこと勿れ一二　それヱホバはその愛する者をいましめたまふ　あたかも父のその愛する子を譴むるが如し一三　智慧を求め得る人および聰明をうる人は福なり一四　そは智慧を獲るは銀を獲るに愈りその利は精金よりも善ければなり一五　智慧は眞珠よりも尊し　汝の凡ての財貨も之と比ぶるに足らず一六　其右の手には長壽あり　その左の手には富と尊貴とあり一七　その途は樂しき途なり　その徑すぢは悉く平康し一八　これは執る者には生命の樹なり　これ持ものは福なり一九　ヱホバ智慧をもて地をさだめ　聰明をもて天を置たまへり二〇　その知識によりて海洋はわきいで　雲は露をそそぐなり二一　我が子よこれらを汝の眼より離す勿れ　聰明と謹愼とを守れ二二　然ばこれは汝の靈魂の生命となり汝の項の妝飾とならん二三　かくて汝やすらかに汝の途をゆかん　又なんぢの足つまづかじ二四　なんぢ臥とき怖るるところあらず　臥ときは酣く睡らん二五　なんぢ猝然なる恐懼をおそれず　惡者の滅亡きたる時も之を怖るまじ二六　そはヱホバは汝の倚頼むものにして汝の足を守りてとらはれしめたまはざるべければなり二七　汝の手善をなす力あらば之を爲すべき者に爲さざること勿れ二八　もし汝に物あらば汝

の鄰に向ひ去て復來れ明日われ汝に予へんといふなかれ二九 汝の鄰なんぢの傍に安らかに居らば之にむかひて惡を謀ること勿れ三〇 人もし汝に惡を爲さずば故なく之と爭ふこと勿れ三一 暴虐人を羨むことなくそのすべての途を好とすることなかれ三二 そは邪曲なる者はヱホバに惡まるればなり されど義者はその親き者とせらるべし三三 ヱホバの呪詛は惡者の家にありされど義者の室はかれにめぐまる三四 彼は嘲笑者をあざけり謙る者に恩惠をあたへたまふ三五 智者は尊榮をえ 愚なる者は羞辱之をとりさるべし

第四章一 小子等よ父の訓をきけ 聰明を知んために耳をかたむけよ二 われ善教を汝らにさづく わが律を棄つることなかれ三 われも我が父には子にして 我が母の目には獨の愛子なりき四 父われを教へていへらく我が言を汝の心にとどめ わが誡命をまもれ 然らば生べし五 智慧をえ聰明をえよ これを忘るるなかれまた我が口の言に身をそむくるなかれ六 智慧をすつることなかれ彼なんぢを守らん 彼を愛せよ彼なんぢを保たん七 智慧は第一なるものなり 智慧をえよ 凡て汝の得たる物をもて聰明をえよ八 彼を尊べ さらば彼なんぢを高く擧げん もし彼を懷かば彼汝を尊榮からしめん九 かれ美しき飾を汝の首に置き 榮の冠弁を汝に予へん一〇 我が子よきけ 我が言を納れよ さらば汝の生命の年おほからん一一 われ智慧の道を汝に教へ 義しき徑筋に汝を導けり一二 歩くとき汝の歩は艱まず 趨るときも躓かじ一三 堅く訓誨を執りて離すこと勿れ これを守れ これは汝の生命なり一四 邪曲なる者の途に入ることなかれ 惡者の路をあやむこと勿れ一五 これを避よ 過ること勿れ 離れて去れ一六 そは彼等は惡を爲さざれば睡らず 人を躓かせざればいねず一七 不義のパンを食ひ暴虐の酒を飮めばなり一八 義者の途は旭光のごとし いよいよ光輝をまして晝の正午にいたる一九 惡者の途は幽冥のごとし 彼らはその躓くもののなになるを知ざるなり二〇 わが子よ我が言をきけ 我が語るところに汝の耳を傾けよ二一 之を汝の目より離すこと勿れ 汝の心のうちに守れ二二 是は之を得るものの生命にしてまたその全體の良薬なり二三 すべての操守べき物よりもまさりて汝の心を守れ そは生命の流これより出ればなり二四 虛僞の口を汝より棄さり 惡き口唇を汝より遠くはなせ二五 汝の目は正く視汝の眼瞼は汝の前を眞直に視るべし二六 汝の足の徑をかんがへはかり 汝のすべての道を直くせよ二七 右にも左にも偏ること勿れ汝の足を惡より離れしめよ

第五章一 我が子よわが智慧をきけ 汝の耳をわが聰明に傾け二 しかしてなんぢ謹愼を守り汝の口唇に知識を保つべし三 娼妓の口唇は蜜を滴らし 其口は脂よりも滑なり四 されど其終は茵蔯の如くに苦く兩刃の劍の如くに利し五 その足は死に下り その歩は陰府に趣く六 彼は生命の途に入らず 其徑はさだかならねども自ら之を知ざるなり七 小子等よいま我にきけ 我が口の言を棄つる勿れ八 汝の途を彼より遠く離れしめよ 其家の門に近づくこ

となかれ九 恐くは汝の榮を他人にわたし 汝の年を憐憫なき者にわたすにいたらん一〇 恐くは他人なんぢの資財によりて盈され 汝の勞苦は他人の家にあらん一一 終にいたりて汝の身なんぢの體亡ぶる時なんぢ泣悲みていはん一二 われ教をいとひ 心に譴責をかろんじ一三 我が師の聲をきかず 我を教ふる者に耳を傾けず一四 あつまりの中會衆のうちにてほとんど諸の惡に陷れりと一五 汝おのれの水溜より水を飮み おのれの泉より流る水をのめ一六 汝の流をほかに溢れしめ 汝の河の水を衢に流れしむべけんや一七 これを自己に歸せしめ 他人をして汝と偕にこに與らしむること勿れ一八 汝の泉に福祉を受しめ 汝の少き時の妻を樂しめ一九 彼は愛しき鹿のごとく美しき鹿の如し その乳房をもて常にたれりとし その愛をもて常によろこべ二〇 我子よ何なればあそびめをたのしみ 淫婦の胸を懷くや二一 それ人の途はヱホバの目の前にあり 彼はすべて其行爲を量りたまふ二二 惡者はおのれの愆にとらへられ その罪の繩に繫る二三 彼は訓誨なきによりて死 その多くの愚なることに由りて亡ぶべし

第六章一 我子よ汝もし朋友のために保證をなし 他人のために汝の手を拍ば二 汝その口の言によりてわなにかかり その口の言によりてとらへらるるなり三 我子よ汝 友の手に陷りしならば斯して自ら救へ すなはち往て自ら謙だり只管なんぢの友に求め四 汝の目をして睡らしむることなく 汝の眼瞼をして閉しむること勿れ五 かりうどの手より鹿ののがるるごとく 鳥とる者の手より鳥ののがるる如くして みづからを救へ六 惰者よ蟻にゆき其爲すところを觀て智慧をえよ七 蟻は首領なく有司なく君主なけれども八 夏のうちに食をそなへ 收穫のときに糧を斂む九 惰者よ汝いづれの時まで臥息むや いづれの時まで睡りて起ざるや一〇 しばらく臥し しばらく睡り 手を叉きてまた片時やすむ一一 さらば汝の貧窮は盜人の如くきたり汝の缺乏は兵士の如くきたるべし一二 邪曲なる人あしき人は虛僞の言をもて事を行ふ一三 彼は眼をもて眴せし 脚をもてしらせ 指をもて示す一四 その心に虛僞をたもち常に惡をはかり 爭端を起す一五 この故にその禍害にはかに來り 援助なくして立刻に敗らるべし一六 ヱホバの憎みたまふもの六あり 否その心に嫌ひたまふもの七あり一七 即ち驕る目 いつはりをいふ舌 つみなき人の血を流す手一八 惡き謀計をめぐらす心 すみやかに惡に趨る足一九 詐僞をのぶる證人 および兄弟のうちに爭端をおこす者なり二〇 我子よ汝の父の誡命を守り 汝の母の法を棄る勿れ二一 常にこれを汝の心にむすび 之をなんぢの頸に佩よ二二 これは汝のゆくとき汝をみちびき 汝の寢るとき汝をまもり 汝の寤るとき汝とかたらん二三 それ誡命は燈火なり 法は光なり 教訓の懲治は生命の道なり二四 これは汝をまもりて惡き婦よりまぬかれしめ 汝をたもちて淫婦の舌の諂媚にまどはされざらしめん二五 その艷美を心に戀ふことなかれ その眼瞼に捕へらるること勿れ二六 それ娼妓のために人はただ僅に一撮の糧をのこすのみにいたる 又淫婦は人の尊き生命を求むるな

り二七 人は火を懐に抱きてその衣を焚れざらんや二八 人は熱火を踏て其足を焚れざらんや二九 その隣の妻と姦淫をおこなふ者もかくあるべし凡て之に捫る者は罪なしとせられず三〇 竊む者もし饑しときに其饑を充さん爲にぬすめるならば人これを藐ぜじ三一 もし捕へられなばその七倍を償ひ其家の所有をことごとく出さざるべからず三二 婦と姦淫をおこなふ者は智慧なきなり之を行ふ者はおのれの霊魂を亡し三三 傷と陵辱とをうけて其恥を雪ぐこと能はず三四 妒忌その夫をして忿怒をもやさしむればその怨を報ゆるときかならず寛さじ三五 いかなる贖物をも顧みず衆多の餽物をなすともやはらがざるべし

第七章一 我子よわが言をまもり我が誡命を汝の心にたくはへよ二 我が誡命をまもりて生命をえよ 我法を守ること汝の眸子を守るが如くせよ三 これを汝の指にむすび これを汝の心の碑に銘せ四 なんぢ智慧にむかひて汝はわが姉妹なりといひ 明理にむかひて汝はわが友なりといへ五 さらば汝をまもりて淫婦にまよはざらしめ 言をもて媚る娼妓にとほざからしめん六 われ我室の牖により櫺子よりのぞきて七 拙き者のうち幼弱者のうちに一人の智慧なき者あるを觀たり八 彼衢をすぎ婦の門にちかづき其家の路にゆき九 黄昏に半宵に夜半に黒暗の中にあるけり一〇 時に娼妓の衣を着たる狡らなる婦かれにあふ一一 この婦は譁しくしてつつしみなく其足は家に止らず一二 あるときは衢にあり 或時はひろばにあり すみずみにたちて人をうかがふ一三 この婦かれをひきて接吻し恥しらぬ面をもていひけるは一四 われ酬恩祭を献げ今日すでにわが誓願を償せり一五 これによりて我なんぢを迎へんとていで 汝の面をたづねて汝に逢へり一六 わが榻には美しき褥およびエジプトの文枲をしき一七 沒薬蘆薈桂皮をもて我が榻にそそげり一八 來れわれら詰朝まで情をつくし愛をかよはして相なぐさめん一九 そは夫は家にあらず遠く旅立して二〇 手に金嚢をとれり 望月ならでは家に歸らじと二一 多の婉言をもて惑し口唇の諂媚をもて誘へば二二 わかき人ただちにこれに隨へり あだかも牛の宰地にゆくが如く 愚なる者の桎梏をかけらるる爲にゆくが如し二三 遂には矢その肝を刺さん 鳥の速かに羅にいりてその生命を喪ふに至るを知ざるがごとし二四 小子等よいま我にきけ 我が口の言に耳を傾けよ二五 なんぢの心を淫婦の道にかたむくること勿れ またこれが徑に迷ふこと勿れ二六 そは彼は多の人を傷つけて仆せり 彼に殺されたる者ぞ多かる二七 その家は陰府の途にして死の室に下りゆく

第八章一 智慧は呼はらざるか 聰明は聲を出さざるか二 彼は路のほとりの高處また街衢のなかに立ち三 邑のもろもろの門邑の口および門々の入口にて呼はりいふ四 人々よわれ汝をよび 我が聲をもて人の子等をよぶ五 拙き者よなんぢら聰明に明かなれ愚なる者よ汝ら明かなる心を得よ六 汝きけ われ善事をかたらん わが口唇をひらきて正事をいださん七 我が口は眞實を述べわが口唇はあしき事を憎むなり八 わが口の言はみな義し そのう

ちに虚偽と奸邪とあることなし九是みな智者の明かにするところ知識をうる者の正とするところなり一〇なんぢら銀をうくるよりは我が教をうけよ 精金よりもむしろ知識をえよ一一それ智慧は眞珠に愈れり 凡の寶も之に比ぶるに足らず一二われ智慧は聰明をすみかとし 知識と謹愼にいたる一三ヱホバを畏るるとは惡を憎むことなり 我は傲慢と驕奢 惡道と虚偽の口とを憎む一四謀略と聰明は我にあり 我は了知なり 我は能力あり一五我に由て王者は 政をなし 君たる者は義しき律をたて一六我によりて主たる者および牧伯たちなど凡て地の審判人は世をさむ一七われを愛する者は我これを愛す 我を切に求むるものは我に遇ん一八富と榮とは我にあり 貴き寶と公義とも亦然り一九わが果は金よりも精金よりも愈り わが利は精銀よりもよし二〇我は義しき道にあゆみ 公平なる路徑のなかを行む二一 これ我を愛する者に貨財をえさせ 又その庫を充しめん爲なり二二ヱホバいにしへ其御わざをなしそめたまへる前に その道の始として我をつくりたまひき二三永遠より元始より地の有ざりし前より我は立られ二四いまだ海洋あらず いまだ大なるみづの泉あらざりしとき我すでに生れ二五山いまださだめられず 陵いまだ有ざりし前に我すでに生れたり二六即ち神いまだ地をも野をも地の塵の根元をも造り給はざりし時なり二七かれ天をつくり海の面に穹蒼を張たまひしとき我かしこに在りき二八彼うへに雲氣をかたく定め 淵の泉をつよくならしめ二九海にその限界をたて 水をしてその岸を踰えざらしめ また地の基を定めたまへるとき三〇我はその傍にありて創造者となり 日々に欣び恒にその前に樂み三一その地にて樂み又世の人を喜べり三二されば小子等よ いま我にきけ わが道をまもる者は福ひなり三三 教をききて智慧をえよ 之を棄ることなかれ三四 凡そ我にきき 日々わが門の傍にまちわが戸口の柱のわきにたつ人は福ひなり三五そは我を得る者は生命をえ ヱホバより恩寵を獲ればなり三六我を失ふものは自己の生命を害ふ すべて我を惡むものは死を愛するなり

第九章一智慧はその家を建て その七の柱を砍成し二その畜を宰りその酒を混和せ その筵をそなへ三その婢女をつかはして邑の高處に呼はりいはしむ四拙者よここに來れと また智慧なき者にいふ五汝等きたりて我が糧を食ひ わがまぜあはせたる酒をのみ六拙劣をすてて生命をえ 聰明のみちを行め七嘲笑者をいましむる者は恥を己にえ 惡人を責むる者は疵を己にえん八嘲笑者を責むることなかれ 恐くは彼なんぢを惡まん 智慧ある者をせめよ 彼なんぢを愛せん九智慧ある者に授けよ 彼はますます智慧をえん 義者を教へよ 彼は知識に進まん一〇ヱホバを畏るることは智慧の根本なり 聖者を知るは聰明なり一一我により汝の日は多くせられ 汝のいのちの年は增べし一二汝もし智慧あらば自己のために智慧あるなり 汝もし嘲らば汝ひとり之を負ん一三愚なる婦は嘩しく且つたなくして何事をも知らず一四その家の門に坐し邑のたかき處にある座にすわり一五道をま

すぐに過る往來の人を招きていふ一六 拙者よここに來れとまた智慧なき人にむかひては之にいふ一七 竊みたる水は甘く密かに食ふ糧は美味ありと一八 彼處にある者は死し者その客は陰府のふかき處にあることを是等の人は知らざるなり

第一〇章一 ソロモンの箴言 智慧ある子は父を欣ばす 愚なる子は母の憂なり二 不義の財は益なし されど正義は救ひて死を脱かれしむ三 ヱホバは義者の靈魂を餓ゑしめず 惡者にその欲するところを得ざらしむ四 手をものうくして動くものは貧くなり 勤めはたらく者の手は富を得五 夏のうちに斂むる者は智き子なり 收穫の時にねむる者は辱をきたす子なり六 義者の首には福祉きたり 惡者の口は強暴を掩ふ七 義者の名は讃られ 惡者の名は腐る八 心の智き者は誡命を受く されど口の頑愚なる者は滅さる九 直くあゆむ者はそのあゆむこと安し されどその途を曲ぐる者は知らるべし一〇 眼をもて眴せする者は憂をおこし 口の頑愚なる者は亡さる一一 義者の口は生命の泉なり 惡者の口は強暴を掩ふ一二 怨恨は爭端をおこし 愛はすべての愆を掩ふ一三 哲者のくちびるには智慧あり 智慧なき者の背のためには鞭あり一四 智慧ある者は知識をたくはふ 愚かなる者の口はいまにも滅亡をきたらす一五 富者の資財はその堅き城なり 貧者のともしきはそのほろびなり一六 義者が動作は生命にいたり 惡者の利得は罪にいたる一七 教をまもる者は生命の道にあり 懲戒をすつる者はあやまりにおちいる一八 怨をかくす者には虚偽のくちびるあり 誹謗をいだす者は愚かなる者なり一九 言おほければ罪なきことあたはず その口唇を禁むるものは智慧あり二〇 義者の舌は精銀のごとし 惡者の心は値すくなし二一 義者の口唇はおほくの人をやしなひ 愚なる者は智慧なきに由て死ぬ二二 ヱホバの祝福は人を富す 人の勞苦はこれに加ふるところなし二三 愚かなる者は惡をなすを戲れごとのごとくす 智慧のさとかる人にとりても是のごとし二四 惡者の怖るるところは自己にきたり 義者のねがふところはあたへらる二五 狂風のすぐるとき惡者は無に歸せん 義者は窮なくたもつ基のごとし二六 惰る者のこれを遣すものに於るは酢の齒に於るが如く煙の目に於るが如し二七 ヱホバを畏るることは人の日を多くす されど惡者の年はちぢめらる二八 義者の望は喜悅にいたり惡者の望は絶べし二九 ヱホバの途は直者の城となり 惡を行ふものの滅亡となる三〇 義者は何時までも動かされず 惡者は地に住むことを得じ三一 義者の口は智慧をいだすなり 虚偽の舌は拔るべし三二 義者のくちびるは喜ばるべきことをわきまへ 惡者の口はいつはりを語る

第一一章一 いつはりの權衡はヱホバに惡まれ 義しき法馬は彼に欣ばる二 驕傲きたれば辱も亦きたる 謙だる者には智慧あり三 直者の端荘は己を導き悖逆者の邪曲は己を亡す四 寶は震怒の日に益なし されど正義は救ふて死をまぬかれしむ五 完全者はその正義によりてその途を直くせられ 惡者はその惡によりて跌

るべし六 直者はその正義によりて救はれ 悖逆者は自己の惡によりて執へらる七 惡人は死るときにその望たえ 不義なる者の望もまた絶べし八 義者は艱難より救はれ 惡者はこれに代る九 邪曲なる者は口をもてその鄰を亡す されど義しき者はその知識によりて救はる一〇 義しきもの幸福を受ればその城邑に歡喜あり 惡きもの亡さるれば歡喜の聲おこる一一 城邑は直者の祝ふに倚て高く擧られ 惡者の口によりて亡さる一二 その鄰を侮る者は智慧なし 聰明人はその口を噤む一三 往て人の是非をいふ者は密事を洩し 心の忠信なる者は事を隱す一四 はかりごとなければ民たふれ 議士多ければ平安なり一五 他人のために保證をなす者は苦難をうけ 保證を嫌ふ者は平安なり一六 柔順なる婦は榮譽をえ 強き男子は資財を得一七 慈悲ある者は己の靈魂に益をくはへ 殘忍者はおのれの身を擾はす一八 惡者の獲る報はむなしく 義を播くものの得る報賞は確し一九 堅く義をたもつ者は生命にいたり 惡を追もとむる者はおのれの死をまねく二〇 心の戻れる者はヱホバに憎まれ 直く道を歩む者は彼に悦ばる二一 手に手をあはするとも惡人は罪をまぬかれず 義人の苗裔は救を得二二 美しき婦のつつしみなきは金の環の豕の鼻にあるが如し二三 義人のねがふところは凡て福祉にいたり 惡人ののぞむところは震怒にいたる二四 ほどこし散して反りて增ものあり 與ふべきを吝みてかへりて貧しきにいたる者あり二五 施與を好むものは肥え 人を潤ほす者はまた利潤をうく二六 穀物を蔵めて糶ざる者は民に詛はる 然れど售る者の首には祝福あり二七 善をもとむる者は恩惠をえん 惡をもとむる者には惡き事きたらん二八 おのれの富を恃むものは仆れん されど義者は樹の青葉のごとくさかえん二九 おのれの家をくるしむるものは風をえて所有とせん 愚なる者は心の智きものの僕とならん三〇 義人の果は生命の樹なり 智慧ある者は人を捕ふ三一 みよ義人すらも世にありて報をうくべし況て惡人と罪人とをや

第一二章一 訓誨を愛する者は知識を愛す 懲戒を惡むものは畜のごとし二 善人はヱホバの恩寵をうけ 惡き謀略を設くる人はヱホバに罰せらる三 人は惡をもて堅く立ことあたはず 義人の根は動くことなし四 賢き婦はその夫の冠弁なり 辱をきたらする婦は夫をしてその骨に腐あるが如くならしむ五 義者のおもひは直し 惡者の計るところは虚偽なり六 惡者の言は人の血を流さんとて伺ふ されど直者の口は人を救ふなり七 惡者はたふされて無ものとならん されど義者の家は立べし八 人はその聰明にしたがひて譽られ 心の悖れる者は藐めらる九 卑賤してしもべある者は自らたかぶりて食に乏き者に愈る一〇 義者はその畜の生命を顧みる されど惡者は殘忍をもてその憐憫とす一一 おのれの田地を耕すものは食にあく 放蕩なる人にしたがふ者は智慧なし一二 惡者はあしき人の獲たる物をうらやみ 義者の根は芽をいだす一三 惡者はくちびるの愆によりて罟に陷る されど義者は患難の中よりまぬかれいでん一四 人はその口の德により

て福祉に飽ん人の手の行爲はその人の身にかへるべし一五 愚なる者はみづからその道を見て正しとす されど智慧ある者はすすめを容る一六 愚なる者はただちに怒をあらはし 智きものは恥をつつむ一七 眞實をいふものは正義を述べ いつはりの證人は虚偽をいふ一八 妄りに言をいだし劍をもて刺がごとくする者あり されど智慧ある者の舌は人をいやす一九 眞理をいふ口唇は何時までも存つ されど虚偽をいふ舌はただ瞬息のあひだのみなり二〇 惡事をはかる者の心には欺詐あり 和平を謀る者には歡喜あり二一 義者には何の禍害も來らず 惡者はわざはひをもて充さる二二 いつはりの口唇はヱホバに憎まれ 眞實をおこなふ者は彼に悦ばる二三 賢人は知識をかくす されど愚なる者のこころは愚なる事を述ぶ二四 勤めはたらく者の手は人ををさむるにいたり惰者は人に服ふるにいたる二五 うれひ人の心にあれば之を屈ます されど善言はこれを樂します二六 義者はその友に道を示す されど惡者は自ら途にまよふ二七 惰者はおのれの獵獲たる物をも燔ず 勉めはたらくことは人の貴とき寶なり二八 義しき道には生命ありその道すぢには死なし

第一三章一 智慧ある子は父の教訓をきき 戲謔者は懲治をきかず二 人はその口の徳によりて福祉をくらひ 悖逆者の靈魂は強暴をくらふ三 その口を守る者はその生命を守る その口唇を大きくひらく者には滅亡きたる四 惰る者はこころに慕へども得ることなし 勤めはたらく者の心は豐饒なり五 義者は虚偽の言をにくみ惡者ははぢをかうむらせ面を赤くせしむ六 義は道を直くあゆむ者をまもり 惡は罪人を倒す七 自ら富めりといひあらはして些少の所有もなき者あり 自ら貧しと稱へて資財おほき者あり八 人の資財はその生命を贖ふものとなるあり 然ど貧者は威嚇をきくことあらず九 義者の光は輝き惡者の燈火はけさる一〇 驕傲はただ爭端を生ず 勸告をきく者は智慧あり一一 詭計をもて得たる資財は減る されど手をもて聚めたくはふる者はこれを増すことを得一二 望を得ること遲きときは心を疾しめ 願ふ所既にとぐるときは生命の樹を得たるがごとし一三 御言をかろんずる者は亡され 誡命をおそるる者は報賞を得一四 智慧ある人の教訓はいのちの泉なり 能く人をして死の罟を脱れしむ一五 善にして哲きものは恩を蒙る されど悖逆者の途は艱難なり一六 凡そ賢者は知識に由りて事をおこなひ 愚なる者はおのれの痴を顯す一七 惡き使者は災禍に陷る されど忠信なる使者は良藥の如し一八 貧乏と恥辱とは教訓をすつる者にきたる されど譴責を守る者は尊まる一九 望を得れば心に甘し 愚なる者は惡を棄つることを嫌ふ二〇 智慧ある者と偕にあゆむものは智慧をえ 愚なる者の友となる者はあしくなる二一 わざはひは罪人を追ひ 義者は善報をうく二二 善人はその產業を子孫に遺す されど罪人の資財は義者のために蓄へらる二三 貧しき者の新田にはおほくの糧あり されど不義によりて亡る者あり二四 鞭をくはへざる者はその子を憎むなり 子を愛する者はしきりに之をいましむ二五 義しき

者は食をえて飽くされど惡者の腹は空し

第一四章 一 智慧ある婦はその家をたて 愚なる婦はおのれの手をもて之を毀つ二 直くあゆむ者はヱホバを畏れ 曲りてあゆむ者はこれを侮る三 愚なる者の口にはその傲のために鞭笞あり 智者の口唇はおのれを守る四 牛なければ飼蒭倉むなし牛の力によりて生產る物おほし五 忠信の證人はいつはらず 虛僞のあかしびとは謊言を吐く六 嘲笑者は智慧を求むれどもえず 哲者は知識を得ること容易し七 汝おろかなる者の前を離れされ つひに知識の彼にあるを見ざるべし八 賢者の智慧はおのれの道を曉るにあり 愚なる者の痴は欺くにあり九 おろかなる者は罪をかろんず されど義者の中には恩惠あり一〇 心の苦みは心みづから知る其よろこびには他人あづからず一一 惡者の家は亡され 正直き者の幕屋はさかゆ一二 人のみづから見て正しとする途にしてその終はつひに死にいたる途となるものあり一三 笑ふ時にも心に悲あり 歡樂の終に憂あり一四 心の悖れる者はおのれの途に飽かん 善人もまた自己に飽かん一五 拙者はすべての言を信ず 賢者はその行を愼む一六 智慧ある者は怖れて惡をはなれ 愚なる者はたかぶりて怖れず一七 怒り易き者は愚なることを行ひ 惡き謀計を設くる者は惡まる一八 拙者は愚なる事を得て所有となし 賢者は知識をもて冠弁となす一九 惡者は善者の前に俯伏し 罪ある者は義者の門に俯伏す二〇 貧者はその鄰にさへも惡まる されど富者を愛する者はおほし二一 その鄰を藐むる者は罪あり 困苦者を憐むものは幸福あり二二 惡を謀る者は自己をあやまるにあらずや 善を謀る者には憐憫と眞實とあり二三 すべての勤勞には利益あり されど口唇のことばは貧乏をきたらするのみなり二四 智慧ある者の財寶はその冠弁となる 愚なる者のおろかはただ痴なり二五 眞實の證人は人のいのちを救ふ 謊言を吐く者は僞人なり二六 ヱホバを畏るることは堅き依賴なり その兒輩は逃避場をうべし二七 ヱホバを畏るることは生命の泉なり人を死の罟より脫れしむ二八 王の榮は民の多きにあり 牧伯の衰敗は民を失ふにあり二九 怒を遲くする者は大なる知識あり 氣の短き者は愚なることを顯す三〇 心の安穩なるは身のいのちなり 媢嫉は骨の腐なり三一 貧者を虐ぐる者はその造主を侮るなり 彼をうやまふ者は貧者をあはれむ三二 惡者はその惡のうちにて亡され義者はその死ぬる時にも望あり三三 智慧は哲者の心にとどまり 愚なる者の衷にある事はあらはる三四 義は國を高くし罪は民を辱しむ三五 さとき僕は王の恩を蒙ぶり 辱をきたらす者はその震怒にあふ

第一五章 一 柔和なる答は憤恨をとどめ 厲しき言は怒を激す二 智慧ある者の舌は知識を善きものとおもはしめ 愚なる者の口はおろかをはく三 ヱホバの目は何處にもありて惡人と善人とを鑒みる四 温柔き舌は生命の樹なり 悖れる舌は靈魂を傷ましむ五 愚なる者はその父の訓をかろんず 誡命をまもる者は賢者なり六 義者の家には多くの資財あり 惡者の利潤には擾累あり七

智者のくちびるは知識をひろむ 愚なる者の心は定りなし八 惡者の祭物はヱホバに憎まれ 直き人の祈は彼に悦ばる九 惡者の道はヱホバに憎まれ 正義をもとむる者は彼に愛せらる一〇 道をはなるる者には嚴しき懲治あり 譴責を惡む者は死ぬべし一一 陰府と沈淪とはヱホバの目の前にあり 況て人の心をや一二 嘲笑者は誡めらるることを好まず また智慧ある者に近づかず一三 心に喜樂あれば顏色よろこばし 心に憂苦あれば氣ふさぐ一四 哲者のこころは知識をたづね 愚なる者の口は愚をくらふ一五 艱難者の日はことごとく惡く 心の懽べる者は恒に酒宴にあり一六すこしの物を有てヱホバを畏るるは多の寶をもちて擾煩あるに愈る一七 蔬菜をくらひて互に愛するは肥たる牛を食ひて互に恨むるに愈る一八 憤ほり易きものは争端をおこし 怒をおそくする者は争端をとどむ一九 惰者の道は棘の籬に似たり 直者の途は平坦なり二〇 智慧ある子は父をよろこばせ 愚なる人はその母をかろんず二一 無知なる者は愚なる事をよろこび 哲者はその途を直くす二二 相議ることあらざれば謀計やぶる 議者おほければ謀計かならず成る二三 人はその口の答によりて喜樂をう 言語を出して時に適ふはいかに善らずや二四 智人の途は生命の路にして上へ昇りゆく これ下にあるところの陰府を離れんが爲なり二五 ヱホバはたかぶる者の家をほろぼし 寡婦の地界をさだめたまふ二六 あしき謀計はヱホバに憎まれ 温柔き言は潔白し二七 不義の利をむさぼる者はその家をわづらはせ 賄賂をにくむ者は活ながらふべし二八 義者の心は答ふべきことを考へ 惡者の口は惡を吐く二九 ヱホバは惡者に遠ざかり 義者の祈禱をききたまふ三〇 目の光は心をよろこばせ 好音信は骨をうるほす三一 生命の誡命をきくところの耳は智慧ある者の中間に駐まる三二 教をすつる者は自己の生命をかろんずるなり 懲治をきく者は聰明を得三三 ヱホバを畏るることは智慧の訓なり 謙遜は尊貴に先だつ

第一六章一 心に謀るところは人にあり 舌の答はヱホバより出づ二 人の途はおのれの目にことごとく潔しと見ゆ 惟ヱホバ靈魂をはかりたまふ三 なんぢの作爲をヱホバに託せよ さらば汝の謀るところ必ず成るべし四 ヱホバはすべての物をおのおのその用のために造り 惡人をも惡き日のために造りたまへり五 すべて心たかぶる者はヱホバに惡まれ 手に手をあはするとも罪をまぬかれじ六 憐憫と眞實とによりて愆は贖はる ヱホバを畏るることによりて人惡を離る七 ヱホバもし人の途を喜ばば その人の敵をも之と和がしむべし八 義によりて得たるところの僅少なる物は不義によりて得たる多の資財にまさる九 人は心におのれの途を考へはかる されどその歩履を導くものはヱホバなり一〇 王のくちびるには神のさばきあり 審判するときその口あやまる可らず一一 公平の權衡と天秤とはヱホバのものなり 嚢にある法馬もことごとく彼の造りしものなり一二 惡をおこなふことは王の憎むところなり 是その位は公義によりて堅く立ばなり一三 義し

き口唇は王によろこばる 彼等は正直をいふものを愛す一四 王の怒は死の使者のごとし 智慧ある人はこれをなだむ一五 王の面の光には生命あり その恩寵は春雨の雲のごとし一六 智慧を得るは金をうるよりも更に善らずや 聰明をうるは銀を得るよりも望まし一七 惡を離るるは直き人の路なり おのれの道を守るは靈魂を守るなり一八 驕傲は滅亡にさきだち誇る心は傾跌にさきだつ一九 卑き者に交りて謙だるは驕ぶる者と偕にありて贓物をわかつに愈る二〇 愼みて御言をおこなふ者は益をうべし ヱホバに倚賴むものは福なり二一 心に智慧あれば哲者と稱へらる くちびる甘ければ人の知識をます二二 明哲はこれを持つものに生命の泉となる 愚なる者をいましむる者はおのれの痴是なり二三 智慧ある者の心はおのれの口ををしへ 又おのれの口唇に知識をます二四 こころよき言は蜂蜜のごとくにして 靈魂に甘く骨に良藥となる二五 人の自から見て正しとする途にして その終はつひに死にいたる途となるものあり二六 勞をるものは飲食のために骨をる 是その口おのれに迫ればなり二七 邪曲なる人は惡を掘るその口唇には烈しき火のごときものあり二八 いつはる者はあらそひを起しつけぐちする者は朋友を離れしむ二九 強暴人はその鄰をいざなひ 之を善らざる途にみちびく三〇 その目を閉て惡を謀りその口唇を蹙めて惡事を成遂ぐ三一 白髮は榮の冠弁なり義しき途にてこれを見ん三二 怒を遲くする者は勇士に愈り おのれの心を治むる者は城を攻取る者に愈る三三 人は籤をひくされど事をさだむるは全くヱホバにあり

第一七章一 睦じうして一塊の乾けるパンあるは あらそひありて宰れる畜の盈たる家に愈る二 かしこき僕は恥をきたらする子ををさめ且その子の兄弟の中にありて產業を分ち取る三 銀を試むる者は坩堝 金を試むる者は鑪 人の心を試むる者はヱホバなり四 惡を行ふものは虛偽のくちびるにきき 虛偽をいふ者はあしき舌に耳を傾ぶく五 貧人を嘲るものはその造主をあなどるなり 人の災禍を喜ぶものは罪をまぬかれず六 孫は老人の冠弁なり 父は子の榮なり七 勝れたる事をいふは愚なる人に適はず 況て虛偽をいふ口唇は君たる者に適はんや八 贈物はこれを受る者の目には貴き珠のごとし その向ふところにて凡て幸福を買ふ九 愛を追求むる者は人の過失をおほふ 人の事を言ひふるる者は朋友をあひ離れしむ一〇 一句の誡命の智人に徹るは百回扑つことの愚なる人に徹るよりも深し一一 叛きもとる者はただ惡きことのみをもとむ 比故に彼にむかひて殘忍なる使者遣はさる一二 愚なる者の愚妄をなすにあはんよりは寧ろ子をとられたる牝熊にあへ一三 惡をもて善に報ゆる者は惡その家を離れじ一四 爭端の起源は堤より水をもらすに似たり この故にあらそひの起らざる先にこれを止むべし一五 惡者を義とし義者を惡しとするこの二の者はヱホバに憎まる一六 愚なる者はすでに心なし何ぞ智慧をかはんとて手にその價の金をもつや一七 朋友はいづれの時にも愛す 兄弟は危難の時のために生る一八 智慧なき人は手を

拍てその友の前にて保證をなす一九 爭端をこのむ者は罪を好みその門を高くする者は敗壞を求む二〇 邪曲なる心ある者はさいはひを得ずその舌をみだりにする者はわざはひに陷る二一 愚なる者を產むものは自己の憂を生じ 愚なる者の父は喜樂を得ず二二 心のたのしみは良藥なり 靈魂のうれひは骨を枯す二三 惡者は人の懷より賄賂をうけて審判の道をまぐ二四 智慧は哲者の面のまへにあり されど愚なる者は目を地の極にそそぐ二五 愚なる子は其父の憂となり 亦これを生る母の煩勞となる二六 義者を罰するは善らず 貴き者をその義きがために扑は善らず二七 言を寡くする者は知識あり 心の靜なる者は哲人なり二八 愚なる者も默するときは智慧ある者と思はれ その口唇を閉るときは哲者とおもはるべし

第一八章一 自己を人と異にする者はおのれの欲するところのみを求めてすべての善き考察にもとる二 愚なる者は明哲を喜ばず惟おのれの心意を顯すことを喜ぶ三 惡者きたれば藐視したがひてきたり 恥きたれば凌辱もともに來る四 人の口の言は深水の如し 湧てながるる川 智慧の泉なり五 惡者を偏視るは善らず審判をなして義者を惡しとするも亦善らず六 愚なる者の口唇はあらそひを起し その口は打るることを招く七 愚なる者の口はおのれの敗壞となり その口唇はおのれの靈魂の罟となる八 人の是非をいふものの言はたはぶれのごとしといへども反つて腹の奧にいる九 その行爲をおこたる者は滅すものの兄弟なり一〇 ヱホバの名はかたき櫓のごとし 義者は之に走りいりて救を得一一 富者の資財はその堅き城なり これを高き石垣の如くに思ふ一二 人の心のたかぶりは滅亡に先だち 謙遜はたふとまる事にさきだつ一三 いまだ事をきかざるさきに應ふる者は愚にして辱をかうぶる一四 人の心は尚其疾を忍ぶべし されど心の傷める時は誰かこれに耐んや一五 哲者の心は知識をえ 智慧ある者の耳は知識を求む一六 人の贈物はその人のために道をひらき かつ貴きもの前にこれを導く一七 先に訴訟の理由をのぶるものは正義に似たれども その鄰人きたり詰問ひてその事を明かにす一八 籤は爭端をとどめ且つよきものの間にへだてとなる一九 怒れる兄弟はかたき城にもまさりて說き伏せがたし 兄弟のあらそひは櫓の貫木のごとし二〇 人は口の德によりて腹をあかし その口唇の德によりて自ら飽べし二一 死生は舌の權能にあり これを愛する者はその果を食はん二二 妻を得るものは美物を得るなり且ヱホバより恩寵をあたへらる二三 貧者は哀なる言をもて乞ひ 富人は厲しき答をなす二四 多の友をまうくる人は遂にその身を亡す 但し兄弟よりもたのもしき知己もまたあり

第一九章一 ただしく步むまづしき者は くちびるの悖れる愚なる者に愈る二 心に思慮なければ善らず 足にて急ぐものは道にまよふ三 人はおのれの痴によりて道につまづき 反て心にヱホバを怨む四 資財はおほくの友をあつむ されど貧者はその友に疎まる五 虚偽の證人は罰をまぬかれず 謊言をはくものは避るる

ことをえず六　君に媚る者はおほし　凡そ人は贈物を與ふる者の友となるなり七　貧者はその兄弟すらも皆これをにくむ　況てその友これに遠ざからざらんや　言をはなちてこれを呼とも去てかへらざるなり八　智慧を得る者はおのれの靈魂を愛す　聰明をたもつ者は善福を得ん九　虚偽の證人は罰をまぬかれず　謊言をはく者はほろぶべし一〇　愚なる者の驕奢に居るは適當からず　況て僕にして上に在る者を治むることをや一一　聰明は人に怒をしのばしむ　過失を宥すは人の榮譽なり一二　王の怒は獅の吼るが如くその恩典は草の上におく露のごとし一三　愚なる子はその父の災禍なり　妻の相爭そふは雨漏のたえぬにひとし一四　家と資財とは先祖より承嗣ぐもの　賢き妻はヱホバより賜ふものなり一五　懶惰は人を酣寐せしむ　懈怠人は饑べし一六　誡命を守るものは自己の靈魂を守るなり　その道をかろむるものは死ぬべし一七　貧者をあはれむ者はヱホバに貸すなり　その施濟はヱホバ償ひたまはん一八　望ある間に汝の子を打て　これを殺すこころを起すなかれ一九　怒ることの烈しき者は罰をうく　汝もしこれを救ふともしばしば然せざるを得じ二〇　なんぢ勸をきき訓をうけよ　然ばなんぢの終に智慧あらん二一　人の心には多くの計畫あり　されど惟ヱホバの旨のみ立べし二二　人のよろこびは施濟をするにあり　貧者は謊人に愈る二三　ヱホバを畏るることは人をして生命にいたらしめ　かつ恒に飽足りて災禍に遇ざらしむ二四　惰者はその手を盤にいるるも之をその口に擧ることをだにせず二五　嘲笑者を打て　さらば拙者も愼まん　哲者を譴めよ　さらばかれ知識を得ん二六　父を煩はし母を逐ふは羞辱をきたらし凌辱をまねく子なり二七　わが子よ哲言を離れしむる教を聽くことを息めよ二八　惡き證人は審判を嘲り　惡者の口は惡を呑む二九　審判は嘲笑者のために備へられ　鞭は愚なる者の背のために備へらる

第二〇章一　酒は人をして嘲らせ　濃酒は人をして騒がしむ　之に迷はさるる者は無智なり二　王の震怒は獅の吼るがごとし　彼を怒らする者は自己のいのちを害ふ三　穩かに居りて爭はざるは人の榮譽なり　すべて愚なる者は怒り爭ふ四　惰者は寒ければとて耕さず　この故に収穫のときにおよびて求るとも得るところなし五　人の心にある謀計は深き井の水のごとし　然れど哲人はこれを汲出す六　凡そ人は各自おのれの善を誇る　されど誰か忠信なる者に遇しぞ七　身を正しくして歩履む義人はその後の子孫に福祉あるべし八　審判の位に坐する王はその目をもてすべての惡を散す九　たれか我わが心をきよめ　わが罪を潔められたりといひ得るや一〇　二種の權衡二種の斗量は等しくヱホバに憎まる一一　幼子といへどもその動作によりておのれの根性の清きか或は正しきかをあらはす一二　聽くところの耳と視るところの眼とはともにヱホバの造り給へるものなり一三　なんぢ睡眠を愛すること勿れ　恐くは貧窮にいたらん　汝の眼をひらけ　然らば糧に飽べし一四　買者はいふ惡し惡しと　然れど去りて後はみづから誇る一五　金もあり眞珠も多くあれど貴き器は知識のくちびるなり一六　人

の保證をなす者よりは先その衣をとれ 他人の保證をなす者をばかたくとらへよ一七 欺きとりし糧は人に甜し されど後にはその口に沙を充されん一八 謀計は相議るによりて成る 戰はんとせば先よく議るべし一九 あるきめぐりて人の是非をいふ者は密事をもらす 口唇をひらきてあるくものと交ること勿れ二〇 おのれの父母を罵るものはその燈火くらやみの中に消ゆべし二一 初に俄に得たる產業はその終さいはひならず二二 われ惡に報いんと言ふこと勿れ ヱホバを待て 彼なんぢを救はん二三 二種の法馬はヱホバに憎まる 虚偽の權衡は善らず二四 人の歩履はヱホバによる 人いかで自らその道を明かにせんや二五 漫に誓願をたつることは其人の罟となる誓願をたててのちに考ふることも亦然り二六 賢き王は箕をもて簸るごとく惡人を散し 車輪をもて碾すごとく之を罰す二七 人の靈魂はヱホバの燈火にして人の心の奥を窺ふ二八 王は仁慈と眞實をもて自らたもつ その位もまた恩惠のおこなひによりて堅くなる二九 少者の榮はその力 おいたる者の美しきは白髪なり三〇 傷つくまでに打たば惡きところきよまり 打てる鞭は腹の底までもとほる

第二一章一 王の心はヱホバの手の中にありて恰かも水の流れのごとし 彼その聖旨のままに之を導きたまふ二 人の道はおのれの目に正しとみゆ されどヱホバは人の心をはかりたまふ三 正義と公平を行ふは犧牲よりも愈りてヱホバに悦ばる四 高ぶる目と驕る心とは惡人の光にしてただ罪のみ五 勤めはたらく者の圖るところは遂にその身を豊裕ならしめ 凡てさわがしく急ぐ者は貧乏をいたす六 虚偽の舌をもて財を得るは吹はらはるる雲烟のごとし 之を求むる者は死を求むるなり七 惡者の殘虐は自己を亡す これ義しきを行ふことを好まざればなり八 罪人の道は曲り潔者の行爲は直し九 相争ふ婦と偕に室に居らんよりは屋蓋の隅にをるはよし一〇 惡者の靈魂は惡をねがふ その鄰も彼にあはれみ見られず一一 あざけるもの罰をうくれば拙者は智慧を得 ちゑあるもの教をうくれば知識を得一二 義しき神は惡者の家をみとめて惡者を滅亡に投いれたまふ一三 耳を掩ひて貧者の呼ぶ聲をきかざる者はおのれ自ら呼ぶときもまた聽れざるべし一四 潜なる饋物は忿恨をなだめ懷中の賄賂は烈しき瞋恚をやはらぐ一五 公義を行ふことは義者の喜樂にして惡を行ふものの敗壞なり一六 さとりの道を離るる人は死し者の集會の中にをらん一七 宴樂を好むものは貧人となり 酒と膏とを好むものは富をいたさじ一八 惡者は義者のあがなひとなり 悖れる者は直き者に代る一九 争ひ怒る婦と偕にをらんよりは荒野に居るはよし二〇 智慧ある者の家には貴き寶と膏とあり 愚なる人は之を呑つくす二一 正義と憐憫とを追求むる者は生命と正義と尊貴とを得べし二二 智慧ある者は強者の城にのぼりてその堅く頼むところを倒す二三 口と舌とを守る者はその靈魂を守りて患難に遇せじ二四 高ぶり驕る者を嘲笑者となづく これ驕奢を逞しくして行ふものなり二五 惰者の情慾はおのれの身を殺す 是はその手を肯て

働かせざればなり二六人は終日しきりに慾を圖る されど義者は與へて吝まず二七惡者の献物は憎まる 况て惡き事のために献ぐる者をや二八虛僞の證人は滅さる 然れど聽く人は恒にいふべし二九惡人はその面を厚くし 義者はその道を謹む三〇ヱホバにむかひては智慧も明哲も謀略もなすところなし三一戰鬪の日のために馬を備ふ されど勝利はヱホバによる

第二二章一嘉名は大なる富にまさり恩寵は銀また金よりも佳し
二富者と貧者と偕に世にをる 凡て之を造りし者はヱホバなり
三賢者は災禍を見てみづから避け 拙者はすすみて罰をうく
四謙遜とヱホバを畏るる事との報は富と尊貴と生命となり五悖れる者の途には荊棘と罟とあり 靈魂を守る者は遠くこれを離れん六子をその道に從ひて敎へよ 然ばその老たる時も之を離れじ七富者は貧者を治め 借者は貸人の僕となる八惡を播くものは禍害を穡り その怒の杖は廢るべし九人を見て惠む者はまた惠まる 此はその糧を貧者に與ふればなり一〇嘲笑者を逐へば爭論も亦さり 且鬪諍も恥辱もやむ一一心の潔きを愛する者はその口唇に憐憫をもてり 王その友とならん一二ヱホバの目は知識ある者を守る 彼は悖れる者の言を敗りたまふ一三惰者はいふ獅そとにあり われ衢にて殺されんと一四妓婦の口は深き坑なり ヱホバに憎まるる者これに陷らん一五痴なること子の心の中に繫がる 懲治の鞭これを逐いだす一六貧者を虐げて自らを富さんとする者と富者に與ふる者とは遂にかならず貧しくなる一七汝の耳を傾ぶけて智慧ある者の言をきき且なんぢの心をわが知識に用ゐよ一八之を汝の腹にたもちて 盡くなんぢの口唇にそなはらしめば樂しかるべし一九汝をしてヱホバに倚賴ましめんが爲にわれ今日これを汝に敎ふ二〇われ勸言と知識とをふくみたる勝れし言を汝の爲に錄ししにあらずや二一これ汝をして眞の言の確實なることを曉らしめ 且なんぢを遣し者に眞の言を持歸らしめん爲なり二二弱き者を弱きがために掠むることなかれ 艱難者を門にて壓つくること勿れ二三そはヱホバその訴を糺し 且かれらを害ふものの生命をそこなはん二四怒る者と交ること勿れ 憤ほる人とともに往ことなかれ二五恐くは汝その道に效ひてみづから罟に陷らん二六なんぢ人と手をうつ者となることなかれ 人の負債の保證をなすこと勿れ二七汝もし償ふべきものあらずば人なんぢの下なる臥牀までも奪ひ取ん 是豈よからんや二八なんぢの先祖がたてし古き地界を移すこと勿れ二九汝その業に巧なる人を見るか 斯る人は王の前に立ん かならず賤者の前にたたじ

第二三章一なんぢ侯たる者とともに坐して食ふときは 愼みて汝の前にある者の誰なるかを思へ二汝もし食を嗜む者ならば汝の喉に刀をあてよ三その珍饈を貪り食ふこと勿れ これ迷惑の食物なればなり四富を得んと思煩らふこと勿れ 自己の明哲を恃むこと勿れ五なんぢ虛しきに歸すべき者に目をとむるか 富はかならず自ら翅を生じて鷲のごとく天に飛さらん六惡目をす

る者の糧をくらふことなくその珍饈をむさぼりねがふことなかれ七 そはその心に思ふごとくその人となりも亦しかればなり 彼なんぢに食へ飲めといふことといへどもその心は汝に眞實ならず八 汝つひにその食へる物を吐出すにいたり且その出しし懇懃の言もむなしくならん九 愚なる者の耳に語ること勿れ 彼なんぢが言の示す明哲を藐めん一〇 古き地界を移すことなかれ 孤子の畑を侵すことなかれ一一 そはかれが贖者は強し 必ず汝に對らひて之が訴をのべん一二 汝の心を教に用ゐ 汝の耳を知識の言に傾けよ一三 子を懲すことを爲ざるなかれ 鞭をもて彼を打とも死ることあらじ一四 もし鞭をもて彼をうたばその靈魂を陰府より救ふことをえん一五 わが子よもし汝のこころ智からば我が心もまた歡び一六 もし汝の口唇ただしき事をいはば我が腎腸も喜ぶべし一七 なんぢ心に罪人をうらやむ勿れ ただ終日ヱホバを畏れよ一八 そは必ず應報ありて汝の望は廢らざればなり一九 わが子よ 汝きき智慧をえ かつ汝の心を道にかたぶけよ二〇 酒にふけり肉をたしむものと交ること勿れ二一 それ酒にふける者と肉を嗜む者とは貧しくなり 睡眠を貪る者は敝れたる衣をきるにいたらん二二 汝を生る父にきけ 汝の老たる母を軽んずる勿れ二三 眞理を買へ これを售るなかれ 智慧と誡命と知識とまた然あれ二四 義き者の父は大によろこび 智慧ある子を生る者はこれがために樂しまん二五 汝の父母を樂しませ 汝を生る者を喜ばせよ二六 わが子よ汝の心を我にあたへ 汝の目にわが途を樂しめ二七 それ妓婦は深き坑のごとく淫婦は狹き井のごとし二八 彼は盜賊のごとく人を窺ひ かつ世の人の中に悖れる者を増なり二九 禍害ある者は誰ぞ 憂愁ある者は誰ぞ 爭端をなす者は誰ぞ 煩慮ある者は誰ぞ 故なくして傷をうくる者は誰ぞ 赤目ある者は誰ぞ三〇 是すなはち酒に夜をふかすもの 往て混和せたる酒を味ふる者なり三一 酒はあかく盃の中に泡だち滑かにくだる 汝これを見るなかれ三二 是は終に蛇のごとく噬み蝮の如く刺すべし三三 また汝の目は怪しきものを見 なんぢの心は謔言をいはん三四 汝は海のなかに偃すもののごとく帆桅の上に偃すもののごとし三五 汝いはん人われを撃ども我いたまず 我を拷けども我おぼえず 我さめなばまた酒を求めんと

第二四章一 なんぢ惡き人を羨むことなかれ 又これと偕に居らんことを願ふなかれ二 そはその心に暴虐をはかりその口唇に人を害ふことをいへばなり三 家は智慧によりて建られ 明哲によりて堅くせられ四 また室は知識によりて各種の貴く美しき寶にて充されん五 智慧ある者は強し 知識ある人は力をます六 汝よき謀計をもて戰鬪をなせ 勝利は議者の多きによる七 智慧は高くして愚なる者の及ぶところにあらず 愚なる者は門にて口を啓くことをえず八 惡をなさんと謀る者を邪曲なる者と稱ふ九 愚なる者の謀るところは罪なり 嘲笑者は人に憎まる一〇 汝もし患難の日に氣を挫かば汝の力は弱し一一 なんぢ死地に曳れゆく者を拯へ 滅亡によろめきゆく者をすくはざる勿れ一二 汝われら之を

知らずといふとも心をはかる者これを暁らざらんや 汝の霊魂をまもる者これを知ざらんや 彼はおのおの行爲によりて人に報ゆべし一三 わが子よ蜜を食へ 是は美ものなり また蜂のすの滴瀝を食へ 是はなんぢの口に甘し一四 智慧の汝の霊魂におけるも是の如しと知れ これを得ばかならず報いありて汝の望すたれじ一五 惡者よ義 者の家を窺ふことなかれ その安居所を攻ること勿れ一六 そは義 者は七次たふるるともまた起く されど惡者は禍災によりて亡ぶ一七 汝の仇たふるるとき樂しむこと勿れ 彼の亡ぶるときこころに喜ぶことなかれ一八 恐くはヱホバこれを見て惡しとし その震怒を彼より離れしめたまはん一九 なんぢ惡者を怒ることなかれ 邪曲なる者を羨むなかれ二〇 それ惡者には後の善賚なし 邪曲なる者の燈火は滅されん二一 わが子よヱホバと王とを畏れよ 叛逆者に交ること勿れ二二 斯るものらの災禍は速におこる この兩 者の滅亡はたれか知えんや二三 是等もまた智慧ある者の箴言なり 偏り鞫するは善らず二四 罪人に告て汝は義しといふものをは衆人これを詛ひ諸民これを惡まん二五 これを譴る者は恩をえん また福祉これにきたるべし二六 ほどよき應答をなす者は口唇に接吻するなり二七 外にて汝の工をととのへ田圃にてこれを自己のためにそなへ 然るのち汝の家を建よ二八 故なく汝の鄰に敵して證することなかれ 汝なんぞ口唇をもて欺くべけんや二九 彼の我に爲しし如く我も亦かれになすべし われ人の爲ししところに循ひてこれに報いんといふこと勿れ三〇 われ曾て惰 人の田圃と智慧なき人の葡萄園とをすぎて見しに三一 荊棘あまねく生え薊その地面を掩ひ その石垣くづれゐたり三二 我これをみて心をとどめ これを觀て教をえたり三三 しばらく臥し 暫らく睡り 手を叉きて又しばらく休む三四 さらば汝の貧窮は盜人のごとく汝の缺乏は兵士の如くきたるべし

第二五章一 此等もまたソロモンの箴言なり ユダの王ヒゼキヤに屬せる人々これを輯めたり二 事を隱すは神の榮譽なり 事を窮むるは王の榮譽なり三 天の高さと地の深さと 王たる者の心とは測るべからず四 銀より渣滓を除け さらば銀工の用ふべき器いでん五 王の前より惡者をのぞけ 然ばその位 義によりて堅く立ん六 王の前に自ら高ぶることなかれ 貴 人の場に立つことなかれ七 なんぢが目に見る王の前にて下にさげらるるよりは ここに上れといはるること愈れり八 汝かろがろしく出て爭ふことなかれ 恐くは終にいたりて汝の鄰に辱しめられん その時なんぢ如何になさんとするか九 なんぢ鄰と爭ふことあらば只これと爭へ 人の密事を洩すなかれ一〇 恐くは聞者なんぢを卑しめん 汝そしられて止ざらん一一 機にかなひて語る言は銀の彫刻物に金の林檎を嵌たるが如し一二 智慧をもて譴むる者の之をきく者の耳におけることは 金の耳環と精金の飾のごとし一三 忠信なる使者は之を遣す者におけること穡收の日に冷かなる雪あるがごとし 能その主の心を喜ばしむ一四 おくりものすと偽りて誇る人は雨なき雲風の如し一五 怒を緩くすれば君も言を容る 柔かな

る舌は骨を折く一六 なんぢ蜜を得るか 惟これを足る程に食へ恐くは食ひ過して之を吐出さん一七 なんぢの足を鄰の家にしげくするなかれ 恐くは彼なんぢを厭ひ惡まん一八 その鄰に敵して虚偽の證をたつる人は斧 刃または利き箭のごとし一九 艱難に遇ふとき忠實ならぬ者を頼むは惡しき歯または跛たる足を恃むがごとし二〇 心の傷める人の前に歌をうたふは寒き日に衣をぬぐが如く 曹達のうへに酢を注ぐが如し二一 なんぢの仇もし饑ゑなば之に糧をくらはせ もし渇かば之に水を飲ませよ二二 なんぢ斯するは火をこれが首に積むなり ヱホバなんぢに報いたまふべし二三 北風は雨をおこし かげごとをいふ舌は人の顔をいからす二四 争ふ婦と偕に室に居らんより屋蓋の隅にをるは宜し二五 遠き國よりきたる好き消息は渇きたる人における冷かなる水のごとし二六 義者の惡者の前に服するは井の濁れるがごとく泉の汚れたるがごとし二七 蜜をおほく食ふは善らず 人おのれの榮譽をもとむるは榮譽にあらず二八 おのれの心を制へざる人は石垣なき壞れたる城のごとし

第二六章一 榮譽の愚なる者に適はざるは夏の時に雪ふり 穡收の時に雨ふるがごとし二 故なき詛は雀の翔り燕の飛ぶが如くにきたるものにあらず三 馬の爲には策あり 驢馬の爲には銜あり 愚なる者の背のために杖あり四 愚なる者の痴にしたがひて答ふること勿れ 恐くはおのれも是と同じからん五 愚なる者の痴にしたがひて之に答へよ 恐くは彼おのれの目に自らを智者と見ん六 愚なる者に托して事を言おくる者はおのれの足をきり身に害をうく七 跛者の足は用なし 愚なる者の口の箴もかくのごとし八 榮譽を愚なる者に與ふるは石を投石索に繫ぐが如し九 愚なる者の口にたもつ箴言は酔へるものの刺ある杖を手にて擧ぐるがごとし一〇 愚なる者を傭ひ流浪者を傭ふ者は すべての人を傷くる射手の如し一一 狗のかへり來りてその吐たる物を食ふがごとく愚なる者は重ねてその痴なる事をおこなふ一二 汝おのれの目に自らを智慧ある者とする人を見るか 彼よりも却て愚なる人に望あり一三 惰者は途に獅あり 衢に獅ありといふ一四 戸の蝶鉸によりて轉るごとく惰者はその牀に輾轉す一五 惰者はその手を盤にいるるも之をその口に擧ることを厭ふ一六 惰者はおのれの目に自らを善く答ふる七人の者よりも智慧ありとなす一七 路をよぎり自己に關りなき争擾にたづさはる者は狗の耳をとらふる者のごとし一八一九 既にその鄰を欺くことをなして我はただ戯れしのみといふ者は 火箭または鎗または死を擲つ狂人のごとし二〇 薪なければ火はきえ 人の是非をいふ者なければ争端はやむ二一 煨火に炭をつぎ火に薪をくぶるがごとく争論を好む人は争論を起す二二 人の是非をいふものの言はたはぶれのごとしと雖もかへつて腹の奥に入る二三 温かき口唇をもちて惡き心あるは銀の滓をきせたる瓦片のごとし二四 恨むる者は口唇をもて自ら飾れども 心の衷には虚偽をいだく二五 彼その聲を和らかにするとも之を信ずるなかれ その心に七の憎むべき者あればな

り二六 たとひ虚偽をもてその恨をかくすとも その惡は會集の中に顯はる二七 坑を掘るものは自ら之に陷らん 石を轉ばしあぐる者の上にはその石まろびかへらん二八 虚偽の舌はおのれの害す者を憎み 諂ふ口は滅亡をきたらす

第二七章一 なんぢ明日のことを誇るなかれ そは一日の生ずるところの如何なるを知ざればなり二 汝おのれの口をもて自ら讃むることなく人をして己を讃めしめよ 自己の口唇をもてせず他人をして己をほめしめよ三 石は重く沙は軽からず 然ど愚なる者の怒はこの二よりも重し四 忿怒は猛く憤恨は烈し されど嫉妬の前には誰か立ことを得ん五 明白に譴むるは秘に愛するに愈る六 愛する者の傷つくるは眞實よりし 敵の接吻するは偽詐よりするなり七 飽るものは蜂の蜜をも踐つくす されど饑たる者には苦き物さへもすべて甘し八 その家を離れてさまよふ人はその巣を離れてさまよふ鳥のごとし九 膏と香とは人の心をよろこばすなり 心よりして勸言を與ふる友の美しきもまた斯のごとし一〇 なんぢの友と汝の父の友とを棄るなかれ なんぢ患難にあふ日に兄弟の家にいることなかれ 親しき隣は疏き兄弟に愈れり一一 わが子よ智慧を得てわが心を悦ばせよ 然ば我をそしる者に我こたふることを得ん一二 賢者は禍害を見てみづから避け 拙者はすすみて罰をうく一三 人の保證をなす者よりは先その衣をとれ 他人の保證をなす者をば固くとらへよ一四 晨はやく起て大聲にその鄰を祝すれば却て呪詛と見なされん一五 相爭ふ婦は雨ふる日に絶ずある雨漏のごとし一六 これを制ふるものは風をおさふるがごとく 右の手に膏をつかむがごとし一七 鐵は鐵をとぐ 斯のごとくその友の面を研なり一八 無花果の樹をまもる者はその果をくらふ 主を貴ぶものは譽を得一九 水に照せば面と面と相肖るがごとく 人の心は人の心に似たり二〇 陰府と沈淪とは飽ことなく 人の目もまた飽ことなし二一 坩堝によりて銀をためし鑪によりて金をためし その讃らるる所によりて人をためす二二 なんぢ愚なる者を臼にいれ杵をもて麥と偕にこれを搗ともその愚は去らざるなり二三 なんぢの羊の情況をよく知りなんぢの群に心を留めよ二四 富は永く保つものにあらず いかで位は世々にたもたん二五 艸枯れ苗いで山の蔬菜あつめらる二六 羔羊はなんぢの衣服を出し 牝羊は田圃を買ふ價となり二七 牝羊の乳はおほくして汝となんぢの家人の糧となり汝の女をやしなふにたる

第二八章一 惡者は逐ふ者なけれども逃げ 義者は獅子のごとくに勇まし二 國の罪によりて侯伯多くなり 智くして知識ある人によりて國は長く保つ三 弱者を虐ぐる貧人は糧をのこさざる暴しき雨のごとし四 律法を棄るものは惡者をほめ 律法を守る者はこれに敵す五 惡人は義きことを覺らず ヱホバを求むる者は凡の事をさとる六 義しくあゆむ貧者は曲れる路をあゆむ富者に愈る七 律法を守る者は智子なり 放蕩なる者に交るものは父を辱かしむ八 利息と高利とをもてその財産を增すものは

貧人をめぐむ者のために之をたくはふるなり九 耳をそむけて律法を聞ざる者はその祈すらも憎まる一〇 義者を惡き道に惑す者はみづから自己の阱に陷らん されど質直なる者は福祉をつぐべし一一 富者はおのれの目に自らを智慧ある者となす されど聰明ある貧者は彼をはかり知る一二 義者の喜ぶときは大なる榮あり 惡者の起るときは民身を匿す一三 その罪を隱すものは榮ゆることなし 然ど認らはして之を離るる者は憐憫をうけん一四 恒に畏るる人は幸福なり その心を剛愎にする者は災禍に陷るべし一五 貧しき民を治むるあしき侯伯は吼る獅子あるひは饑たる熊のごとし一六 智からざる君はおほく暴虐をおこなふ 不義の利を惡む者は遐齡をうべし一七 人を殺してその血を心に負ふ者は墓に奔るなり 人これを阻むること勿れ一八 義く行む者は救をえ 曲れる路に行む者は直に跌れん一九 おのれの田地を耕す者は糧にあき 放蕩なる者に從ふものは貧乏に飽く二〇 忠信なる人は多くの幸福をえ 速かに富を得んとする者は罪を免れず二一 人を偏視るはよからず 人はただ一片のパンのために愆を犯すなり二二 惡目をもつ者は財をえんとて急がはしく 却て貧窮のおのれに來るを知らず二三 人を譴むる者は舌をもて諂ふ者よりも大なる感謝をうく二四 父母の物を竊みて罪ならずといふ者は滅す者の友なり二五 心に貪る者は爭端を起し ヱホバに倚賴むものは豐饒になるべし二六 おのれの心を恃む者は愚なり 智慧をもて行む者は救をえん二七 貧者に賙すものは乏しからず その目を掩ふ者は詛を受ること多し二八 惡者の起るときは人匿れ その滅るときは義者ます

第二九章 一 しばしば責られてもなほ強項なる者は救はるることなくして猝然に滅されん二 義者ませば民よろこび 惡きもの權を掌らば民かなしむ三 智慧を愛する人はその父を悦ばせ 妓婦に交る者はその財產を費す四 王は公義をもて國を堅うす されど租税を征取る者はこれを滅す五 その鄰に諂ふ者はかれの脚の前に羅を張る六 惡人の罪の中には罟あり 然ど義者は歡び樂しむ七 義きものは貧きものの訟をかへりみる 然ど惡人は之を知ることを願はず八 嘲笑人は城邑を擾し 智慧ある者は怒をしづむ九 智慧ある人おろかなる人と爭へば或は怒り或は笑ひて休むことなし一〇 血をながす人は直き人を惡む されど義き者はその生命を救はんことを求む一一 愚なる者はその怒をことごとく露はし 智慧ある者は之を心に藏む一二 君王もし虛僞の言を聽かばその臣みな惡し一三 貧者と苛酷者と偕に世にをる ヱホバは彼等の目に光をあたへ給ふ一四 眞實をもて弱者を審判する王はその位つねに堅く立つべし一五 鞭と譴責とは智慧をあたふ 任意になしおかれたる子はその母を辱しむ一六 惡きもの多ければ罪も亦おほし 義者は彼等の傾覆をみん一七 なんぢの子を懲せ さらば彼なんぢを安からしめ 又なんぢの心に喜樂を與へん一八 默示なければ民は放肆にす 律法を守るものは福ひなり一九 僕は言をもて譴むるとも改めず 彼は知れども從はざればなり二〇 なんぢ言

を謹まざる人を見しや 彼よりは却て愚なる者に望あり二一 僕をその幼なき時より柔かに育てなば終には子の如くならしめん二二 怒る人は争端を起し憤る人は罪おほし二三 人の傲慢はおのれを卑くし 心に謙だる者は榮譽を得二四 盗人に黨する者はおのれの霊魂を悪むなり 彼は誓を聴けども説述べず二五 人を畏るれば罟におちいる ヱホバをたのむ者は護られん二六 君の慈悲を求むる者はおほし 然れど人の事を定むるはヱホバによる二七 不義をなす人は義者の悪むところ 義くあゆむ人は悪者の悪むところなり

第三〇章一 ヤケの子アグルの語なる箴言 かれイテエルにむかひて之をいへり 即ちイテエルとウカルとにいへる所のものなり二 我は人よりも愚なり 我には人の聡明あらず三 我いまだ智慧をならひ得ず またいまだ至聖きものを暁ることをえず四 天に昇りまた降りし者は誰か 風をその掌中に聚めし者は誰か 水を衣につつみし者は誰か 地のすべての限界を定めし者は誰か その名は何ぞ その子の名は何ぞ 汝これを知るや五 神の言はみな潔よし 神は彼を頼むものの盾なり六 汝その言に加ふること勿れ 恐くは彼なんぢをせめ 又なんぢを誣る者となしたまはん七 われ二の事をなんぢに求めたり 我が死ざる先にこれをたまへ八 即ち虚假と謊言とを我より離れしめ 我をして貧からしめずまた富しめず 惟なくてならぬ糧をあたへ給へ九 そは我あきて神を知ずといひヱホバは誰なりやといはんことを恐れ また貧くして窃盗をなし我が神の名を汚さんことを恐るればなり一〇 なんぢ僕をその主に讒ることなかれ 恐くは彼なんぢを詛ひてなんぢ罪せられん一一 その父を詛ひその母を祝せざる世類あり一二 おのれの目に自らを潔者となして尚その汚穢を滌はれざる世類あり一三 また一の世類あり 嗚呼その眼はいかに高きぞや その瞼は昂れり一四 その歯は剣のごとく その牙は刃のごとき世類あり 彼等は貧き者を地より呑み 窮乏者を人の中より食ふ一五 蛭に二人の女あり 與へよ與へよと呼はる飽ことを知ざるもの三あり 否な四あり皆たれりといはず一六 即ち陰府姙まざる胎水に満されざる地 足りといはざる火これなり一七 おのれの父を嘲り母に従ふことをいやしとする眼は 谷の鴉これを抜いだし鷲の雛これを食はん一八 わが奇とするもの三あり否な四あり共にわが識ざる者なり一九 即ち空にとぶ鷲の路 磐の上にはふ蛇の路 海にはしる舟の路 男の女にあふの路これなり二〇 淫婦の途も亦しかり 彼は食ひてその口を拭ひ われ悪きことを爲ざりきといふ二一 地は三の者によりて震ふ否な四の者によりて耐ることあたはざるなり二二 即ち僕たるもの王となるに因り愚なるもの糧に飽るにより二三 厭忌はれたる婦の嫁ぐにより婢女その主母に續に因りてなり二四 地に四の物あり微小といへども最智し二五 蟻は力なき者なれどもその糧を夏のうちに備ふ二六 山鼠ば強からざれどもその室を磐につくる二七 蝗は王なけれどもみな隊を立ていづ二八 守宮は手をもてつかまり王の宮にをる二九 善あゆむもの三

あり否な四あり皆よく歩く三〇獸の中にて最も強くもろもろのものの前より退かざる獅子三一　肚帶せし戰馬　牡野羊　および當ること能はざる王これなり三二　汝もし愚にして自から高ぶり或は惡きことを計らば汝の手を口に當つべし三三　それ乳を搾れば乾酪いで鼻を搾れば血いで　怒を激ふれば爭端おこる

第三一章一　レムエル王のことば即ちその母の彼に教へし箴言なり二　わが子よ何を言んか　わが胎の子よ何をいはんか　我が願ひて得たる子よ何をいはんか三　なんぢの力を女につひやすなかれ　王を滅すものに汝の途をまかする勿れ四　レムエルよ酒を飲は王の爲べき事に非ず　王の爲べき事にあらず　醇醪を求むるは牧伯の爲すべき事にあらず五　恐くは酒を飲て律法をわすれ　且すべて惱まさるる者の審判を枉げん六　醇醪を亡びんとする者にあたへ　酒を心の傷める者にあたへよ七　かれ飮てその貧窮をわすれ　復その苦楚を憶はざるべし八　なんぢ瘖者のため又すべての孤者の訟のために口をひらけ九　なんぢ口をひらきて義しき審判をなし貧　者と窮乏者の訟を糺せ一〇　誰か賢き女を見出すことを得ん　その價は眞珠よりも貴とし一一　その夫の心は彼を恃み　その產業は乏しくならじ一二　彼が存命ふる間はその夫に善事をなして惡き事をなさず一三　彼は羊の毛と麻とを求め喜びて手から操き一四　商賈の舟のごとく遠き國よりその糧を運び一五　夜のあけぬ先に起てその家人に糧をあたへ　その婢女に日用の分をあたふ一六　田畝をはかりて之を買ひ　その手の操作をもて葡萄園を植ゑ一七　力をもて腰に帶し　その手を強くす一八　彼はその利潤の益あるを知る　その燈火は終夜きえず一九　かれ手を紡線車にのべ　その指に紡錘をとり二〇　手を貧　者にのべ　手を困苦者に舒ぶ二一　彼は家人の爲に雪をおそれず　蓋その家人みな蕃紅の衣をきればなり二二　彼はおのれの爲に美しき褥子をつくり　細布と紫とをもてその衣とせり二三　その夫はその地の長老とともに邑の門に坐するによりて人に知るるなり二四　彼は細布の衣を製りてこれをうり　帶をつくりて商賈にあたふ二五　彼は筋力と尊貴とを衣とし　且のちの日を笑ふ二六　彼は口を啓きて智慧をのぶ　仁愛の教誨その舌にあり二七　かれはその家の事を鑒み　怠惰の糧を食はず二八　その衆子は起て彼を祝す　その夫も彼を讃ていふ二九　賢く事をなす女子は多けれども　汝はすべての女子に愈れり三〇　艶麗はいつはりなり　美色は呼吸のごとし　惟ヱホバを畏るる女は譽られん三一　その手の操作の果をこれにあたへ　その行爲によりてこれを邑の門にほめよ

傳道之書

第一章 一 ダビデの子ヱルサレムの王 傳道者の言 二 傳道者言く 空の空 空の空なる哉 都て空なり 三 日の下に人の勞して爲ところの諸の動作はその身に何の益かあらん 四 世は去り世は來る地は永久に長存なり 五 日は出で日は入り またその出し處に喘ぎゆくなり 六 風は南に行き又轉りて北にむかひ旋轉に旋りて行き風復その旋轉る處にかへる。七 河はみな海に流れ入る 海は盈ること無し 河はその出きたれる處に復還りゆくなり 八 萬の物は勞苦す 人これを言つくすことあたはず 目は見に飽ことなく耳は聞に充ること無し 九 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた後に成べし 日の下には新しき者あらざるなり 一〇 見よ是は新しき者なりと指て言べき物あるや 其は我等の前にありし世々に既に久しくありたる者なり 一一 己前のものの事はこれを記憶ることなし 以後のものの事もまた後に出る者これをおぼゆることあらじ 一二 われ傳道者はヱルサレムにありてイスラエルの王たりき 一三 我心を盡し智慧をもちひて天が下に行はるる諸の事を尋ねかつ考覈たり此苦しき事件は神が世の人にさづけて之に身を勞せしめたまふ者なり 一四 我日の下に作ところの諸の行爲を見たり 嗚呼皆空にして風を捕ふるがごとし 一五 曲れる者は直からしむるあたはず缺たる者は數をあはするあたはず 一六 我心の中に語りて言ふ 嗚呼我は大なる者となれり 我より先にヱルサレムにをりしすべての者よりも我は多くの智慧を得たり我心は智慧と知識を多く得たり 一七 我心を盡して智慧を知んとし狂妄と愚癡を知んとしたりしが 是も亦風を捕ふるがごとくなるを曉れり 一八 夫智慧多ければ憤激多し 知識を増す者は憂患を増す

第二章 一 我わが心に言けらく 來れ我試みに汝をよろこばせんとす 汝逸樂をきはめよと 嗚呼是もまた空なりき 二 我笑を論ふ是は狂なり 快樂を論ふ是何の爲ところあらんやと 三 我心に智慧を懷きて居つつ酒をもて肉身を肥さんと試みたり 又世の人は天が下において生涯如何なる事をなさば善らんかを知んために我は愚なる事を行ふことをせり 四 我は大なる事業をなせり我はわが爲に家を建て葡萄園を設け 五 園をつくり囿をつくり又菓のなる諸の樹を其處に植ゑ 六 また水の塘池をつくりて樹木の生茂れる林に其より水を灌がしめたり 七 我は僕 婢を買得たりまた家の子あり 我はまた凡て我より前にヱルサレムにをりし者よりも衆多の牛羊を有り 八 我は金銀を積み 王等と國々の財寶を積あげたり また歌詠之男 女を得 世の人の樂なる妻妾を多くえたり 九 斯我は大なる者となり 我より前にヱルサレムにをりし諸の人よりも大になりぬ 吾智慧もまたわが身を離れざりき 一〇 凡そわが目の好む者は我これを禁ぜず 凡そわが心の悦ぶ者は我これを禁ぜざりき 即ち我はわが諸の勞苦によりて快樂を得たり 是は我が諸の勞苦によりて得たるところの分な

り一一　我わが手にて爲たる諸の事業および我が勞して事を爲たる勞苦を顧みるに　皆空にして風を捕ふるが如くなりき　日の下には益となる者あらざるなり一二　我また身を轉らして智慧と狂妄と愚癡とを觀たり　抑　王に嗣ぐところの人は如何なる事を爲うるや　その既になせしところの事に過ざるべし一三　光明の黒暗にまさるがごとく智慧は愚癡に勝るなり　我これを暁れり一四　智者の目はその頭にあり愚者は黒暗に歩む　然ど我しる其みな遇ふところの事は同一なり一五　我　心に謂けらく　愚者の遇ふところの事に我もまた遇ふべければ　我なんぞ智慧のまさる所あらんや　我また心に謂り是も亦空なるのみと一六　夫智者も愚者と均しく永く世に記念らるることなし　來らん世にいたれば皆早く既に忘らるるなり　嗚呼智者の愚者とおなじく死るは是如何なる事ぞや一七　是に於て我世にながらふることを厭へり　凡そ日の下に爲ところの事は我に惡く見ればなり　即ち皆空にして風を捕ふるがごとし一八　我は日の下にわが勞して諸の動作をなしたるを恨む其は我の後を嗣ぐ人にこれを遺さざるを得ざればなり一九　其人の智愚は誰かこれを知らん然るにその人は日の下に我が勞して爲し智慧をこめて爲たる諸の工作を管理るにいたらん是また空なり二〇　我身をめぐらし日の下にわが勞して爲たる諸の動作のために望を失へり二一　今茲に人あり　智慧と知識と才能をもて勞して事をなさんに終には之がために勞せざる人に一切を遺してその所有となさしめざるを得ざるなり　是また空にして大に惡し二二　夫人はその日の下に勞して爲ところの諸の動作とその心勞によりて何の得ところ有るや二三　その世にある日には常に憂患ありその勞苦は苦しその心は夜の間も安んずることあらず　是また空なり二四　人の食飲をなしその勞苦によりて心を樂しましむるは幸福なる事にあらず　是もまた神の手より出るなり　我これを見る二五　誰かその食ふところその歓樂を極むることに於て我にまさる者あらん二六　神はその心に適ふ人には智慧と知識と喜樂を賜ふ　然れども罪を犯す人には勞苦を賜ひて斂めかつ積ことを爲さしむ　是は其を神の心に適ふ人に與へたまはんためなり　是もまた空にして風を捕ふるがごとし

第三章

一　天が下の萬の事には期あり　萬の事務には時あり二　生るるに時あり死るに時あり　植るに時あり植たる者を抜に時あり三　殺すに時あり醫すに時あり　毀つに時あり建るに時あり四　泣に時あり笑ふに時あり　悲むに時あり躍るに時あり五　石を擲つに時あり石を斂むるに時あり　懐くに時あり懐くことをせざるに時あり六　得に時あり失ふに時あり　保つに時あり棄るに時あり七　裂に時あり縫に時あり　默すに時あり語るに時あり八　愛しむに時あり惡むに時あり　戰ふに時あり和ぐに時あり九　働く者はその勞して爲ところよりして何の益を得んや一〇　我神が世の人にさづけて身をこれに勞せしめたまふところの事件を視たり一一　神の爲したまふところは皆その時に適ひて美麗しかり　神はまた人の心に永遠をおもふの思念を賦けたまへり　然ば人は神の

なしたまふ作爲を始より終まで知明むることを得ざるなり一一 我知る人の中にはその世にある時に快樂をなし善をおこなふより外に善事はあらず一二 また人はみな食飮をなしその勞苦によりて逸樂を得べきなり是すなはち神の賜物たり一三 我知る凡て神のなしたまふ事は限なく存せん是は加ふべき所なく是は減すべきところ無し 神の之をなしたまふは人をしてその前に畏れしめんがためなり一五 昔ありたる者は今もあり後にあらん者は既にありし者なり 神はその遂やられし者を索めたまふ一六 我また日の下を見るに審判をおこなふ所に邪曲なる事あり 公義を行ふところに邪曲なる事あり一七 我すなはち心に謂けらく神は義者と惡者とを鞫きたまはん 彼處において萬の事と萬の所爲に時あるなり一八 我また心に謂けらく是事あるは是世の人のためなり 即ち神は斯世の人を撿して之にその獸のごとくなることを自ら曉らしめ給ふなり一九 世の人に臨むところの事はまた獸にも臨む この二者に臨むところの事は同一にして是も死ば彼も死るなり 皆同一の呼吸に依れり 人は獸にまさる所なし皆空なり二〇 皆一の所に往く 皆塵より出で皆塵にかへるなり二一 誰か人の魂の上に昇り獸の魂の地にくだることを知ん二二 然ば人はその動作によりて逸樂をなすに如はなし 是その分なればなり 我これを見る その身の後の事は誰かこれを攜へゆきて見さしむる者あらんや

第四章一 茲に我身を轉して日の下に行はる諸の虐遇を視たり 嗚呼虐げらる者の涙ながる 之を慰むる者あらざるなり また虐ぐる者の手には權力あり 彼等はこれを慰むる者あらざるなり二 我は猶生る生者よりも既に死たる死者をもて幸なりとす三 またこの二者よりも幸なるは未だ世にあらずして日の下におこなはる惡事を見ざる者なり四 我また諸の勞苦と諸の工事の精巧とを觀るに 是は人のたがひに嫉みあひて成せる者たるなり 是も空にして風を捕ふるが如し五 愚なる者は手を束ねてその身の肉を食ふ六 片手に物を盈て平穩にあるは 兩手に物を盈て勞苦て風を捕ふるに愈れり七 我また身をめぐらし日の下に空なる事のあるを見たり八 茲に人あり只獨にして伴侶もなく子もなく兄弟もなし 然るにその勞苦は都て窮なくその目は富に飽ことなし 彼また言ず嗚呼我は誰がために勞するや何とて我は心を樂ませざるやと 是もまた空にして勞力の苦き者なり九 二人は一人に愈る 其はその勞苦のために善報を得ればなり一〇 即ちその跌倒る時には一箇の人その伴侶を扶けおこすべし 然ど孤身にして跌倒る者は憐なるかな之を扶けおこす者なきなり一一 又二人ともに寢れば温暖なり一人ならば爭で温暖ならんや一二 人もしその一人を攻撃ば二人してこれに當るべし 三根の繩は容易く斷ざるなり一三 貧くして賢き童子は 老て愚にして諫を納れざる王に愈る一四 彼は牢獄より出て王となれり 然どその國に生れし時は貧かりき一五 我日の下にあゆむところの群生が彼王に續てこれに代りて立ところの童子とともにあるを觀たり一六 民はすべて

際限なしその前にありし者みな然り後にきたる者また彼を悦ばず是も空にして風を捕ふるがごとし

第五章一 汝ヱホバの室にいたる時にはその足を愼め進みよりて聽聞は愚なる者の犧牲にまさる 彼等はその惡をおこなひをることを知ざるなり二 汝神の前にありては軽々し口を開くなかれ 心を攝めて妄に言をいだすなかれ 其は神は天にいまし汝は地にをればなり 然ば汝の言詞を少からしめよ三 夫夢は事の繁多によりて生じ 愚なる者の聲は言の衆多によりて識るなり四 汝神に誓願をかけなば之を還すことを怠るなかれ 神は愚なる者を悦びたまはざるなり 汝はそのかけし誓願を還すべし五 誓願をかけてこれを還さざるよりは寧ろ誓願をかけざるは汝に善し六 汝の口をもて汝の身に罪を犯さしむるなかれ 亦使者の前に其は過誤なりといふべからず 恐くは神汝の言を怒り汝の手の所爲を滅したまはん七 夫夢多ければ空なる事多し 言詞の多きもまた然り 汝ヱホバを畏め八 汝國の中に貧き者を虐遇る事および公道と公義を枉ることあるを見るもその事あるを怪むなかれ 其はその位高き人よりも高き者ありてその人を伺へばなり又其等よりも高き者あるなり九 國の利益は全く是にあり即ち王者が農事に勤むるにあるなり一〇 銀を好む者は銀に飽こと無し 豊富ならんことを好む者は得るところ有らず 是また空なり一一 貨財増せばこれを食む者も増すなり その所有主は唯目にこれを看るのみ その外に何の益かあらん一二 勞する者はその食ふところは多きも少きも快く睡るなり 然れども富者はその貨財の多きがために睡ることを得せず一三 我また日の下に患の大なる者あるを見たり すなはち財寶のこれを蓄ふる者の身に害をおよぼすことある是なり一四 その財寶はまた災難によりて失落ことあり 然ばその人子を擧ることあらんもその手には何物もあることなし一五 人は母の胎より出て來りしごとくにまた裸體にして皈りゆくべし その勞苦によりて得たる者を毫厘も手にとりて携へゆくことを得ざるなり一六 人は全くその來りしごとくにまた去ゆかざるを得ず 是また患の大なる者なり 抑風を追て勞する者何の益をうること有んや一七 人は生命の涯黒暗の中に食ふことを爲す また憂愁多かり疾病身にあり憤怒あり一八 視よ我は斯觀たり 人の身にとりて善かつ美なる者は 神にたまはるその生命の極食飲をなし且その日の下に勞して働ける勞苦によりて得るところの福祿を身に享るの事なり是その分なればなり一九 何人によらず神がこれに富と財を與へてそれに食ことを得せしめ またその分を取りその勞苦によりて快樂を得ることをせさせたまふあれば その事は神の賜物たるなり二〇 かかる人はその年齢の日を憶ゆること深からず 其は神これが心の喜ぶところにしたがひて應ることを爲したまへばなり

第六章一 我觀るに日の下に一件の患あり是は人の間に恒なる者なり二 すなはち神富と財と貴を人にあたへて その心に慕ふ者を一件もこれに缺ることなからしめたまひながらも 神またその

人に之を食ふことを得せしめたまはずして他人のこれを食ふことあり 是空なり惡き疾なり三 假令人百人の子を擧けまた長壽してその年齢の日多からんも 若その心景福に滿足せざるか又は葬らるることを得ざるあれば 我言ふ流產の子はその人にまさるたり四 夫流產の子はその來ること空しくして黑暗の中に去ゆきその名は黑暗の中にかくるるなり五 又是は日を見ることなく物を知ることなければ彼よりも安泰なり六 人の壽命千年に倍するとも福祉を蒙れるにはあらず 皆一所に往くにあらずや七 人の勞苦は皆その口のためなり その心はなほも飽ざるところ有り八 賢者なんぞ愚者に勝るところあらんや また世人の前に歩行ことを知ところの貧者も何の勝るところ有んや九 目に觀る事物は心のさまよひ歩くに愈るなり 是また空にして風を捕ふるがごとし一〇 嘗て在し者は久しき前にすでにその名を命られたり 即ち是は人なりと知る 然ば是はかの自己よりも力強き者と爭ふことを得ざるなり一一 衆多の言論ありて虚浮き事を增す然ど人に何の益あらんや一二 人はその虚空き生命の日を影のごとくに送るなり 誰かこの世において如何なる事か人のために善き者なるやを知ん 誰かその身の後に日の下にあらんところの事を人に告うる者あらんや

第七章一 名は美膏に愈り 死る日は生るる日に愈る二 哀傷の家に入は宴樂の家に入に愈る 其は一切の人の終かくのごとくなればなり 生る者またこれをその心にとむるあらん三 悲哀は嬉笑に愈る 其は面に憂色を帶るなれば心も善にむかへばなり四 賢き者の心は哀傷の家にあり 愚なる者の心は喜樂の家にあり五 賢き者の勸責を聽は愚なる者の歌詠を聽に愈るなり六 愚なる者の笑は釜の下に焚る荊棘の聲のごとし是また空なり七 賢き人も虐待る事によりて狂するに至るあり賄賂は人の心を壞なふ八 事の終はその始よりも善し 容忍心ある者は傲慢心ある者に勝る九 汝氣を急くして怒るなかれ 怒は愚なる者の胸にやどるなり一〇 昔の今にまさるは何故ぞやと汝言なかれ 汝の斯る問をなすは是智慧よりいづる者にあらざるなり一一 智慧の上に財產をかぬれば善し 然れば日を見る者等に利益おほかるべし一二 智慧も身の護庇となり銀子も身の護庇となる 然ど智惠はまたこれを有る者に生命を保しむ 是知識の殊勝たるところなり一三 汝神の作爲を考ふべし 神の曲たまひし者は誰かこれを直くすることを得ん一四 幸福ある日には樂め 禍患ある日には考へよ 神はこの二者をあひ交錯て降したまふ 是は人をしてその後の事を知ることなからしめんためなり一五 我この空の世にありて各樣の事を見たり 義人の義をおこなひて亡ぶるあり 惡人の惡をおこなひて長壽あり一六 汝義に過るなかれまた賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや一七 汝惡に過るなかれまた愚なる勿れ 汝なんぞ時いたらざるに死べけんや一八 汝此を執は善しまた彼にも手を放すなかれ 神を畏む者はこの一切の者の中より逃れ出るなり一九 智慧の智者を幇くることは邑の豪雄

者十人にまさるなり二〇 正義して善をおこなひ罪を犯すことなき人は世にあることなし二一 人の言出す言詞には凡て心をとむる勿れ 恐くは汝の僕の汝を詛ふを聞くこともあらん二二 汝も屢人を詛ふことあるは汝の心に知ところなり二三 我智慧をもてこの一切の事を試み我は智者とならんと謂たりしが遠くおよばざるなり二四 事物の理は遠くして甚だ深し 誰かこれを究むることを得ん二五 我は身をめぐらし心をもちひて物を知り事を探り智慧と道理を索めんとし 又惡の愚たると愚癡の狂妄たるを知んとせり二六 我了れり 婦人のその心羅と網のごとくその手縲絏のごとくなる者は是死よりも苦き者なり 神の悦びたまふ者は之を避ることを得ん罪人は之に執らるべし二七 傳道者言ふ視よ我その數を知んとして一々に算へてつひに此事を了る二八我なほ尋ねて得ざる者は是なり 我千人の中には一箇の男子を得たれども その數の中には一箇の女子をも得ざるなり二九 我了れるところは唯是のみ 即ち神は人を正直者に造りたまひしに人衆多の計略を案 出せしなり

第八章一 誰か智者に如ん誰か事物の理を解ことを得ん 人の智慧はその人の面に光輝あらしむ 又その粗暴面も變改べし二 我言ふ王の命を守るべし既に神をさして誓ひしことあれば然るべきなり三 早まりて王の前を去ることなかれ 惡き事につのること勿れ 其は彼は凡てその好むところを爲ばなり四 王の言語には權力あり 然ば誰か之に汝何をなすやといふことを得ん五 命令を守る者は禍患を受るに至らず 智者の心は時期と判斷を知なり六萬の事務には時あり判斷あり是をもて人大なる禍患をうくるに至るあり七 人は後にあらんところの事を知ずまた誰か如何なる事のあらんかを之に告る者あらん八 霊魂を掌管て霊魂を留めうる人あらず 人はその死る日には權力あること无し 此戰爭には釋放たるる者あらず 又罪惡はこれを行ふ者を救ふことを得せざるなり九 我この一切の事を見また日の下におこなはるる諸の事に心を用ひたり時としては此人彼人を治めてこれに害を蒙らしむることあり一〇 我見しに惡人の葬られて安息にいるありまた善をおこなふ者の聖所を離れてその邑に忘らるるに至るあり是また空なり一一 惡き事の報速にきたらざるが故に世人心を專にして惡をおこなふ一二 罪を犯す者百次惡をなして猶長命あれども 我知る神を畏みてその前に畏怖をいだく者には幸福あるべし一三 但し惡人には幸福あらず またその生命も長からずして影のごとし 其は神の前に畏怖をいだくことなければなり一四 我日の下に空なる事のおこなはるるを見たり 即ち義人にして惡人の遭べき所に遭ふ者あり 惡人にして義人の遭べきところに遭ふ者あり 我謂り是もまた空なり一五 是に於て我喜樂を讃む 其は食飮して樂むよりも好き事は日の下にあらざればなり 人の勞して得る物の中是こそはその日の下にて神にたまはる生命の日の間その身に離れざる者なれ一六 茲に我心をつくして智慧を知らんとし世に爲ところの事を究めんとした

り人は夜も晝もその目をとぢて眠ることをせざるなり一七 我神の諸の作爲を見しが人は日の下におこなはるるところの事を究むるあたはざるなり 人これを勞するもこれを究むることを得ず 且又智者ありてこれを知ると思ふもこれを究むることあたはざるなり

第九章一 我はこの一切の事に心を用ひてこの一切の事を明めんとせり 即ち義き者と賢き者およびかれらの爲ところは神の手にあるなるを明めんとせり 愛むや惡むやは人これを知ることなし一切の事はその前にあるなり二 諸の人に臨む所は皆同じ 義き者にも惡き者にも善者にも 淨者にも穢れたる者にも犧牲を献ぐる者にも犧牲を献げぬ者にもその臨むところの事は同一なり 善人も罪人に異ならず 誓をなす者も誓をなすことを畏るる者に異ならず三 諸の人に臨むところの事の同一なるは是日の下におこなはるる事の中の惡き者たり 抑 人の心には惡き事充をり その生る間は心に狂妄を懷くあり 後には死者の中に往くなり四 凡活る者の中に列る者は望あり 其は生る犬は死る獅子に愈ればなり五 生者はその死んことを知る 然ど死る者は何事をも知ずまた應報をうくることも重てあらず その記憶らるる事も遂に忘れらるるに至る六 またその愛も惡も嫉も既に消うせて彼等は日の下におこなはるる事に最早何時までも關係ことあらざるなり七 汝往て喜悅をもて汝のパンを食ひ樂き心をもて汝の酒を飲め 其は神久しく汝の行爲を嘉納たまへばなり八 汝の衣服を常に白からしめよ 汝の頭に膏を絶しむるなかれ九 日の下に汝が賜はるこの汝の空なる生命の日の間 汝その愛する妻とともに喜びて度生せ 汝の空なる生命の日の間しかせよ 是は汝が世にありて受る分 汝が日の下に働ける勞苦によりて得る者なり一〇 凡て汝の手に堪ることは力をつくしてこれを爲せ 其は汝の往んところの陰府には工作も計謀も知識も智慧もあることなければなり一一 我また身をめぐらして日の下を觀るに 迅速者走ることに勝にあらず強者戰爭に勝にあらず 智慧者食物を獲にあらず 明哲人財貨を得にあらず 知識人恩顧を得にあらず 凡て人に臨むところの事は時ある者偶然なる者なり一二 人はまたその時を知ず 魚の禍の網にかかり鳥の鳥羅にかかるが如くに世の人もまた禍患の時の計らざるに臨むに及びてその禍患にかかるなり一三 我日の下に是事を觀て智慧となし大なる事となせり一四 すなはち茲に一箇の小き邑ありて その中の人は鮮かりしが大なる王これに攻きたりてこれを圍みこれに向ひて大なる雲梯を建たり一五 時に邑の中に一人の智慧ある貧しき人ありてその智慧をもて邑を救へり 然るに誰ありてその貧しき人を記念もの無りし一六 是において我言り智慧は勇力に愈る者なりと 但しかの貧しき人の智慧は藐視られその言詞は聽れざりしなり一七 靜に聽る智者の言は愚者の君長たる者の號呼に愈る一八 智慧は軍の器に勝れり 一人の惡人は許多の善事を壞ふなり

第一〇章一 死し蠅は和香者の膏を臭くしこれを腐らす 少許の愚癡は智慧と尊榮よりも重し二 智者の心はその右に愚者の心はその左に行くなり三 愚者は出て途を行にあたりてその心たらず自己の愚なることを一切の人に告ぐ四 君長たる者 汝にむかひて腹たつとも汝の本處を離るる勿れ温順は大なる愆を生ぜしめざるなり五 我日の下に一の患事あるを見たり是は君長たる者よりいづる過誤に似たり六 すなはち愚なる者高き位に置かれ貴き者卑き處に坐る七 我また僕たる者が馬に乗り王侯たる者が僕のごとく地の上に歩むを觀たり八 坑を掘る者はみづから之におちいり石垣を毀つ者は蛇に咬れん九 石を打くだく者はそれがために傷を受け木を割る者はそれがために危難に遭ん一〇 鐵の鈍くなれるあらんにその刃を磨ざれば力を多く之にもちひざるを得ず 智慧は功を成に益あるなり一一 蛇もし呪術を聽ずして咬ば呪術師は用なし一二 智者の口の言語は恩徳あり 愚者の唇はその身を呑ほろぼす一三 愚者の口の言は始は愚なり またその言は終は狂妄にして惡し一四 愚者は言詞を衆くす 人は後に有ん事を知ず 誰かその身の後にあらんところの事を述るを得ん一五 愚者の勞苦はその身を疲らす彼は邑にいることをも知ざるなり一六 その王は童子にしてその侯伯は朝に食をなす國よ 汝は禍なるかな一七 その王は貴族の子またその侯伯は酔樂むためならず力を補ふために適宜き時に食をなす國よ 汝は福なるかな一八 懶惰ところよりして屋背は落ち 手を垂をるところよりして家屋は漏る一九 食事をもて笑ひ喜ぶの物となし酒をもて快樂を取れり銀子は何事にも應ずるなり二〇 汝 心の中にても王たる者を詛ふなかれ また寢室にても富者を詛なかれ 天空の鳥その聲を傳へ羽翼ある者その事を布べければなり

第一一章一 汝の糧食を水の上に投げよ 多くの日の後に汝ふたたび之を得ん二 汝一箇の分を七また八にわかて 其は汝 如何なる災害の地にあらんかを知ざればなり三 雲もし雨の充るあれば地に注ぐ また樹もし南か北に倒るるあればその樹は倒れたる處にあるべし四 風を伺ふ者は種播ことを得ず 雲を望む者は刈ことを得ず五 汝は風の道の如何なるを知ず また孕める婦の胎にて骨の如何に生長つを知ず 斯汝は萬事を爲たまふ神の作爲を知ことなし六 汝 朝に種を播け 夕にも手を歇るなかれ 其はその實る者は此なるか彼なるか又は二者ともに美なるや汝これを知ざればなり七 夫光明は快き者なり 目に日を見るは樂し八 人多くの年生ながらへてその中凡て幸福なるもなほ幽暗の日を憶ふべきなり 其はその數も多かるべければなり 凡て來らんところの事は皆空なり九 少者よ汝の少き時に快樂をなせ 汝の少き日に汝の心を悦ばしめ汝の心の道に歩み汝の目に見るところを爲せよ 但しその諸の行爲のために神汝を鞫きたまはんと知べし一〇 然ば汝の心より憂を去り 汝の身より惡き者を除け 少き時と壯なる時はともに空なればなり

第一二章一 汝の少き日に汝の造主を記えよ 即ち惡き日の來り

年のよりて我は早何も樂むところ無しと言にいたらざる先二 また日や光明や月や星の暗くならざる先 雨の後に雲の返らざる中に汝然せよ三 その日いたる時は家を守る者は慄ひ 力ある人は屈み 磨碎者は寡きによりて息み 窓より窺ふ者は目昏むなり四 磨こなす聲低くなれば衢の門は閉づ その人は鳥の聲に起あがり 歌の女子はみな身を卑くす五 かかる人々は高き者を恐る畏しき者多く途にあり 巴旦杏は花咲くまた蝗もその身に重くその嗜欲は廢る 人永遠の家にいたらんとすれば哭婦 衢にゆきかふ六 然る時には銀の紐は解け金の盞は碎け吊瓶は泉の側に壞れ轆轤は井の傍に破ん七 而して塵は本の如くに土に皈り 霊魂はこれを賦けし神にかへるべし八 傳道者云ふ空の空なるかな皆空なり九 また傳道者は智慧あるが故に恒に知識を民に教へたり 彼は心をもちひて尋ね究め許多の箴言を作れり一〇 傳道者は務めて佳美き言詞を求めたり その書しるしたる者は正直して眞實の言語なり一一 智者の言語は刺鞭のごとく 會衆の師の釘たる釘のごとくにして 一人の牧者より出し者なり一二 わが子よ是等より訓誡をうけよ 多く書をつくれば竟なし 多く學べば體疲る一三 事の全體の皈する所を聽べし 云く 神を畏れその誡命を守れ 是は諸の人の本分たり一四 神は一切の行爲ならびに一切の隱れたる事を善惡ともに審判たまふなり

雅歌

第一章 一 これはソロモンの雅歌なり 二 ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけせんことなり 汝の愛は酒よりもまさりぬ 三 なんぢの香膏は其香味たへに馨しくなんぢの名はそそがれたる香膏のごとし 是をもて女子等なんぢを愛す 四 われを引たまへ われら汝にしたがひて走らん 王われをたづさへてその後宮にいれたまへり 我らは汝によりて歡び樂しみ酒よりも勝りてなんぢの愛をほめたたふ 彼らは直きこころをもて汝を愛す 五 ヱルサレムの女子等よ われは黒けれどもなほ美はしケダルの天幕のごとくまたソロモンの帷帳に似たり 六 われ色くろきが故に日のわれを焼たるが故に我を視るなかれ わが母の子等われを怒りて我に葡萄園をまもらしめたり 我はおのが葡萄園をまもらざりき 七 わが心の愛する者よなんぢは何處にてなんぢの群を牧ひ午時いづこにて之を息まするや請ふわれに告よ なんぞ面を覆へる者の如くしてなんぢが伴侶の群のかたはらにをるべけんや 八 婦女の最も美はしき者よ なんぢ若しらずば群の足跡にしたがひて出ゆき 牧羊者の天幕のかたはらにて汝の羔山羊を牧へ 九 わが佳耦よ 我なんぢをパロの車の馬に譬ふ 一〇 なんぢの臉には鏈索を垂れ なんぢの頭には珠玉を陳ねて至も美はし 一一 われら白銀の星をつけたる黄金の鏈索をなんぢのために造らん 一二 王其席につきたまふ時 わがナルダ其香味をいだせり 一三 わが愛する者は我にとりてはわが胸のあひだにおきたる沒藥の袋のごとし 一四 わが愛する者はわれにとりてはエンゲデの園にあるコペルの英華のごとし 一五 ああ美はしきかな わが佳耦よ ああうるはしきかな なんぢの目は鴿のごとし 一六 わが愛する者よ ああなんぢは美はしくまた樂しきかな われらの牀は青緑なり 一七 われらの家の棟梁は香柏 その垂木は松の木なり

第二章 一 われはシャロンの野花 谷の百合花なり 二 女子等の中にわが佳耦のあるは荊棘の中に百合花のあるがごとし 三 わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし 我ふかく喜びてその蔭にすわれり その實はわが口に甘かりき 四 彼われをたづさへて酒宴の室にいれたまへり その我上にひるがへしたる旗は愛なりき 五 請ふなんぢら乾葡萄をもてわが力をおぎなへ 林檎をもて我に力をつけよ 我は愛によりて疾わづらふ 六 彼が左の手はわが頭の下にあり その右の手をもて我を抱く 七 ヱルサレムの女子等よ我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ 愛のおのづから起るときまでは殊更に喚起し且つ醒すなかれ 八 わが愛する者の聲きこゆ 視よ 山をとび岡を躍りこえて來る 九 わが愛する者は獐のごとくまた小鹿のごとし 視よ彼われらの壁のうしろに立ち 窓より覗き格子より窺ふ 一〇 わが愛する者われに語りて言ふ わが佳耦よ わが美はしき者よ 起ていできたれ 一一 視よ 冬すでに過ぎ 雨もやみてはやさりぬ 一二 もろもろの花は地にあらはれ 鳥のさへづる時すでに至り 班鳩の聲わ

れらの地にきこゆ一三 無花果樹はその青き果を赤らめ葡萄の樹は花さきてその馨はしき香氣をはなつ わが佳耦よ わが美しき者よ 起て出きたれ一四 磐間にをり 斷崖の匿處にをるわが鴿よ われに汝の面を見させよ なんぢの聲をきかしめよ なんぢの聲は愛らしく なんぢの面はうるはし一五 われらのために狐をとらへよ 彼の葡萄園をそこなふ小狐をとらへよ 我等の葡萄園は花盛なればなり一六 わが愛する者は我につき我はかれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧ふ一七 わが愛する者よ 日の涼しくなるまで 影の消るまで身をかへして出ゆき 荒き山々の上にありて獐のごとく小鹿のごとくせよ

第三章一 夜われ床にありて我心の愛する者をたづねしが尋ねたれども得ず二 我おもへらく今おきて邑をまはりありき わが心の愛する者を街衢あるひは大路にてたづねんと 乃ちこれを尋ねたれども得ざりき三 邑をまはりありく夜巡者らわれに遇ければ 汝らわが心の愛する者を見しやと問ひ四 これに別れて過ゆき間もなくわが心の愛する者の遇たれば 之をひきとめて放さず 遂にわが母の家にともなひゆき 我を產し者の室にいりぬ五 ヱルサレムの女子等よ 我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ 愛のおのづから起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ六 この沒藥乳香など商人のもろもろの薫物をもて身をかをらせ 煙の柱のごとくして荒野より來る者は誰ぞや七 視よ こはソロモンの乘輿にして 勇士六十人その周圍にあり イスラエルの勇士なり八 みな刀劍を執り 戰鬪を善す 各人腰に刀劍を帶て夜の警誡に備ふ九 ソロモン王レバノンの木をもて己のために輿をつくれり一〇 その柱は白銀 その欄杆は黄金 その座は紫色にて作り その內部にはイスラエルの女子等が愛をもて繡たる物を張つく一一 シオンの女子等よ 出きたりてソロモン王を見よ かれは婚姻の日 心の喜べる日にその母の己にかうぶらしし冠冕を戴けり

第四章一 ああなんぢ美はしきかな ああなんぢうるはしきかな なんぢの目は面帕のうしろにありて鴿のごとし なんぢの髮はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり二 なんぢの齒は毛を剪たる牝羊の浴塲より出たるがごとし おのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし三 なんぢの唇は紅色の線維のごとく その口は美はし なんぢの頰は面帕のうしろにありて石榴の半片に似たり四 なんぢの頸項は武器庫にとて建たるダビデの戍樓のごとし その上には一千の盾を懸け列ぬ みな勇士の大楯なり五 なんぢの兩乳房は牝獐の雙子なる二箇の小鹿が百合花の中に草はみをるに似たり六 日の涼しくなるまで 影の消るまで われ沒藥の山また乳香の岡に行べし七 わが佳耦よ なんぢはことごとくうるはしくしてすこしのきずもなし八 新婦よ レバノンより我にともなへ レバノンより我とともに來れ アマナの巓 セニルまたヘルモンの巓より望み 獅子の穴また豹の山より望め九 わが妹わが新婦よ なんぢはわが心を奪へり なんぢは只一目をもてまた頸玉の一をもてわが心をうばへり一〇 わが妹

わが新婦よ なんぢの愛は樂しきかな なんぢの愛は酒よりも遙にすぐれ なんぢの香膏の馨は一切の香物よりもすぐれたり一一 新婦よ なんぢの唇は蜜を滴らす なんぢの舌の底には蜜と乳とあり なんぢの衣裳の香氣はレバノンの香氣のごとし一二 わが妹わがはなよめよ なんぢは閉たる園 閉たる水源 封じたる泉水のごとし一三 なんぢの園の中に生いづる者は石榴及びもろもろの佳果またコペル及びナルダの草一四 ナルダ 番紅花 菖蒲 桂枝さまざまの乳香の木および沒藥 蘆薈一切の貴とき香物なり一五 なんぢは園の泉水 活る水の井 レバノンよりいづる流水なり一六 北風よ起れ 南風よ來れ 我園を吹てその香氣を揚よ ねがはくはわが愛する者のおのが園にいりきたりてその佳き果を食はんことを

第五章一 わが妹わがはなよめよ 我はわが園にいり わが沒藥と薫物とを採り わが蜜房と蜜とを食ひ わが酒とわが乳とを飲り わが伴侶等よ 請ふ食へ わが愛する人々よ 請ふ飲あけよ二 われは睡りたれどもわが心は醒ゐたり 時にわが愛する者の聲あり 即はち門をたたきていふ わが妹わが佳耦 わが鴿 わが完きものよ われのために開け わが首には露滿ち わが髮の毛には夜の點滴みてりと三 われすでにわが衣服を脱り いかでまた着るべき 已にわが足をあらへり いかでまた汚すべき四 わが愛する者戸の穴より手をさしいれしかば わが心かれのためにうごきたり五 やがて起いでてわが愛する者の爲に開かんとせしとき 沒藥わが手より沒藥の汁わが指よりながれて關木の把柄のうへにしたたれり六 我わが愛する者の爲に開きしに わが愛する者は已に退き去りぬ さきにその物いひし時はわが心さわぎたり 我かれをたづねたれども遇ず 呼たれども答應なかりき七 邑をまはりありく夜巡者等われを見てうちて傷つけ 石垣をまもる者らはわが上衣をはぎとれり八 ヱルサレムの女子等よ 我なんぢらにかたく請ふ もしわが愛する者にあはば汝ら何とこれにつぐべきや 我愛によりて疾わづらふと告よ九 なんぢの愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところありや 婦女の中のいと美はしき者よ なんぢが愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところありて斯われらに固く請ふや一〇 わが愛する者は白くかつ紅にして萬人の上に越ゆ一一 その頭は純金のごとくその髮はふさやかにして黑きこと烏のごとし一二 その目は谷川の水のほとりにをる鴿のごとく乳にて洗はれて美はしく嵌れり一三 その頰は馨しき花の床のごとく 香草の壇のごとし その唇は百合花のごとくにして沒藥の汁をしたたらす一四 その手はきばみたる碧玉を嵌し黄金の釧のごとく 其躰は青玉をもておほひたる象牙の彫刻物のごとし一五 その脛は蝋石の柱を黄金の臺にてたてたるがごとく その相貌はレバノンのごとくその優れたるさまは香柏のごとし一六 その口ははなはだ甘く誠に彼には一つだにうつくしからぬ所なし ヱルサレムの女子等よ これぞわが愛する者 これぞわが伴侶なる

第六章一 婦女のいと美はしきものよ 汝の愛する者は何處へゆきしや なんぢの愛する者はいづこへおもむきしや われら汝とともにたづねん二 わが愛するものは己の園にくだり 香しき花の床にゆき 園の中にて群を牧ひ また百合花を採る三 我はわが愛する者につき わが愛する者はわれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧ふ四 わが佳耦よ なんぢは美はしきことテルザのごとく 華やかなることヱルサレムのごとく 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとし五 なんぢの目は我をおそれしむ 請ふ我よりはなれしめよ なんぢの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり六 なんぢの齒は毛を剪たる牝羊の浴場より出たるがごとしおのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし七 なんぢの頰は面帕の後にありて石榴の半片に似たり八 后六十人 妃嬪八十人 數しられぬ處女あり九 わが鴿わが完き者はただ一人のみ彼はその母の獨子にして産たる者の喜ぶところの者なり女子等は彼を見て幸福なる者ととなへ 后等妃嬪等は彼を見て讃む一〇 この晨光のごとくに見えわたり 月のごとくに美はしく日のごとくに輝やき 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとき者は誰ぞや一一 われ胡桃の園にくだりゆき 谷の青き草木を見葡萄や芽しし石榴の花や咲しと見回しをりしに一二 意はず知ず我が心われをしてわが貴とき民の車の中間にあらしむ一三 歸れ歸れシユラミの婦よ 歸れ歸れ われら汝を觀んことをねがふ なんぢら何とてマハナイムの跳舞を觀るごとくにシユラミの婦を觀んとねがふや

第七章一 君の女よ なんぢの足は鞋の中にありて如何に美はしきかな 汝の腿はまろらかにして玉のごとく 巧匠の手にて作りたるがごとし二 なんぢの臍は美酒の缺ることあらざる圓き杯盤のごとく なんぢの腹は積かさねたる麥のまはりを百合花もてかこめるが如し三 なんぢの兩乳房は牝鹿の雙子なる二の小鹿のごとし四 なんぢの頸は象牙の戍樓の如く 汝の目はヘシボンにてバテラビムの門のほとりにある池のごとく なんぢの鼻はダマスコに對へるレバノンの戍樓のごとし五 なんぢの頭はカルメルのごとく なんぢの頭の髪は紫花のごとし 王その垂たる髪につながれたり六 ああ愛よ もろもろの快樂の中にありてなんぢは如何に美はしく如何に悦ばしき者なるかな七 なんぢの身の長は棕櫚の樹に等しく なんぢの乳房は葡萄のふさのごとし八 われ謂ふこの棕櫚の樹にのぼり その枝に執つかんと なんぢの乳房は葡萄のふさのごとく なんぢの鼻の氣息は林檎のごとく匂はん九 なんぢの口は美酒のごとし わが愛する者のために滑かに流れくだり 睡れる者の口をして動かしむ一〇 われはわが愛する者につき 彼はわれを戀したふ一一 わが愛する者よ われら田舍にくだり 村里に宿らん一二 われら夙におきて葡萄や芽しし蕾やいでし石榴の花やさきし いざ葡萄園にゆきて見ん かしこにて我わが愛をなんぢにあたへん一三 戀茄かぐはしき香氣を發ち もろもろの佳き果物古き新らしき共にわが戸の上にあり わが愛する者

よ我これをなんぢのためにたくはへたり

第八章一 ねがはくは汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくならんことを われ戸外にてなんぢに遇ふとき接吻せん 然するとも誰ありてわれをいやしむるものあらじ二 われ汝をひきてわが母の家にいたり 汝より教誨をうけん 我かぐはしき酒 石榴のあまき汁をなんぢに飮しめん三 かれが左の手はわが頭の下にありその右の手をもて我を抱く四 ヱルサレムの女子等よ 我なんぢ等に誓ひて請ふ 愛のおのづから起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ五 おのれの愛する者に倚かかりて荒野より上りきたる者は誰ぞや 林檎の樹の下にてわれなんぢを喚さませり なんぢの母かしこにて汝のために劬勞をなし なんぢを產し者かしこにて劬勞をなしぬ六 われを汝の心におきて印のごとくし なんぢの腕におきて印のごとくせよ 其の愛は強くして死のごとく嫉妬は堅くして陰府にひとし その焰は火のほのほのごとし いともはげしき焰なり七 愛は大水も消ことあたはず 洪水も溺らすことあたはず 人その家の一切の物をことごとく與へて愛に換んとするとも尚いやしめらるべし八 われら小さき妹子あり 未だ乳房あらず われらの妹子の問聘をうくる日には之に何をなしてあたへんや九 かれもし石垣ならんには我ら白銀の城をその上にたてん 彼もし戸ならんには香柏の板をもてこれを圍まん一〇 われは石垣わが乳房は戍樓のごとし 是をもてわれは情をかうむれる者のごとく彼の目の前にありき一一 バアルハモンにソロモンの葡萄園をもてり これをその守る者等にあづけおき 彼等をしておのおの銀一千をその果のために納めしむ一二 われ自らの有なる葡萄園われの手にあり ソロモンなんぢは一千を獲よその果をまもる者も二百を獲べし一三 なんぢ園の中に住む者よ伴侶等なんぢの聲に耳をかたむく 請ふ我にこれを聽しめよ一四 わが愛する者よ 請ふ急ぎはしれ 香はしき山々の上にありて獐のごとく小鹿のごとくあれ

イザヤ書

第一章 一 アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのときに示されたるユダとヱルサレムとに係る異象 二 天よきけ地よ耳をかたぶけよ ヱホバの語りたまふ言あり 曰くわれ子をやしなひ育てしにかれらは我にそむけり 三 牛はその主をしり驢馬はそのあるじの厩をしる 然どイスラエルは識ず わが民はさとらず 四 ああ罪ををかせる國人よこしまを負ふたみ 惡をなす者のすゑ 壞りそこなふ種族 かれらはヱホバをすてイスラエルの聖者をあなどり之をうとみて退きたり 五 なんぢら何ぞかさねがさね悖りて猶撻れんとするか その頭はやまざる所なくその心はつかれはてたり 六 足のうらより頭にいたるまで全きところなくただ創痍と打傷と腫物とのみなり 而してこれを合すものなく包むものなく亦あぶらにて軟らぐる者もなし 七 なんぢらの國はあれすたれなんぢらの諸邑は火にてやかれなんぢらの田畑はその前にて外人にのまれ既にあだし人にくつがへされて荒廢れたり 八 シオンの女はぶだうぞのの廬のごとく瓜田の假舍のごとくまた圍をうけたる城のごとく唯ひとり遺れり 九 萬軍のヱホバわれらに少しの遺をとどめ給ふことなくば我儕はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん 一〇 なんぢらソドムの有司よヱホバの言をきけ なんぢらゴモラの民よ われらの神の律法に耳をかたぶけよ 一一 ヱホバ言たまはくなんぢらが獻ぐるおほくの犠牲はわれに何の益あらんや 我はをひつじの燔祭とこえたるけものの膏とにあけり われは牡牛あるひは小羊あるひは牡山羊の血をよろこばず 一二 なんぢらは我に見えんとてきたる このことを誰がなんぢらに要めしや 徒らにわが庭をふむのみなり 一三 むなしき祭物をふたたび携ふることなかれ 燻物はわがにくむところ 新月および安息日また會衆をよびあつむることも我がにくむところなり なんぢらは聖會に惡を兼ぬ われ容すにたへず 一四 わが心はなんぢらの新月と節會とをきらふ 是わが重荷なり われ負にうみたり 一五 我なんぢらが手をのぶるとき目をおほひ 汝等がおほくの祈禱をなすときも聞ことをせじ なんぢらの手には血みちたり 一六 なんぢら己をあらひ己をきよくしわが眼前よりその惡業をさり 惡をおこなふことを止め 一七 善をおこなふことをならひ 公平をもとめ 虐げらるる者をたすけ 孤子に公平をおこなひ 寡婦の訟をあげつらへ 一八 ヱホバいひたまはく 率われらともに論らはん なんぢらの罪は緋のごとくなるも雪のごとく白くなり紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくにならん 一九 若なんぢら肯ひしたがはば地の美產をくらふことを得べし 二〇 もし汝等こばみそむかば劍にのまるべし 此はヱホバその御口よりかたりたまへるなり 二一 忠信なりし邑いかにして妓女とはなれる 昔しは公平にてみち正義その中にやどりしに今は人をころす者ばかりとなりぬ 二二 なんぢの白銀は滓となり なんぢの葡萄酒は水をまじへ 二三 なんぢの長輩

はそむきて盜人の伴侶となり おのおの賄賂をよろこび 贓財をおひもとめ 孤子に公平をおこなはず 寡婦の訟はかれらの前にいづること能はず二四 このゆゑに主萬軍のヱホバ、イスラエルの全能者のたまはく 唉われ敵にむかひて念をはらし仇にむかひて報をすべし二五 我また手をなんぢの上にそへ なんぢの滓をことごとく淨くし なんぢの鉛をすべて取去り二六 なんぢの審士を舊のごとく なんぢの議官を始のごとくに復すべし 然るのちなんぢは正義の邑忠信の邑ととなへられん二七 シオンは公平をもてあがなはれ 歸來るものも正義をもて贖はるべし二八 されど愆ををかすものと罪人とはともに敗れ ヱホバをすつる者もまた亡びうせん二九 なんぢらはその喜びたる橿樹によりて恥をいだき そのえらびたる園によりて赧むべし三〇 なんぢらは葉のかるる橿樹のごとく水なき園のごとくならん三一 權勢あるものは麻のごとく その工は火花のごとく 二つのもの一同もえてこれを撲滅すものなし

第二章一 アモツの子イザヤが示されたるユダとエルサレムとにかかる言二 すゑの日にヱホバの家の山はもろもろの山のいただきに堅立ち もろもろの嶺よりもたかく擧り すべての國は流のごとく之につかん三 おほくの民ゆきて相語いはん 率われらヱホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん 神われらにその道をしへ給はん われらその路をあゆむべしと そは律法はシオンよりいでヱホバの言はエルサレムより出べければなり四 ヱホバはもろもろの國のあひだを鞫き おほくの民をせめたまはん 斯てかれらはその劍をうちかへて鋤となし その鎗をうちかへて鎌となし 國は國にむかひて劍をあげず 戰鬪のことを再びまなばざるべし五 ヤコブの家よきたれ 我儕ヱホバの光にあゆまん六 主よなんぢはその民ヤコブの家をすてたまへり 此はかれらのなかに東のかたの風俗みち 皆ペリシテ人のごとく陰陽師となり 異邦人のともがらと手をうちて盟をたてしが故なり七 かれらの國には黃金白銀みちて財寶の數かぎりなし かれらの國には馬みちて戰車のかず限りなし八 かれらの國には偶像みち 皆おのが手の工その指のつくれる者ををがめり九 賤しきものは屈められ尊きものは卑せらる かれらを容したまふなかれ一〇 なんぢ岩間にいり また土にかくれて ヱホバの畏るべき容貌とその稜威の光輝とをさくべし一一 この日には目をあげて高ぶるもの卑せられ 驕る人かがめられ 唯ヱホバのみ高くあげられ給はん一二 そは萬軍のヱホバの一の日あり すべて高ぶる者おごる者みづからを崇るものの上にのぞみて之をひくくし一三 またレバノンのたかく聳たるすべての香柏 バシヤンのすべての橿樹一四 もろもろの高山もろもろの聳えたる嶺一五 すべてのたかき櫓すべての堅固なる石垣一六 およびタルシシのすべての舟すべての慕ふべき美はしきものに臨むべし一七 この日には高ぶる者はかがめられ 驕る人はひくくせられ 唯ヱホバのみ高くあげられ給はん一八 かくて偶像はことごとく亡びうすべし一九 ヱホバたちて地を

震動したまふとき人々そのおそるべき容貌とその稜威の光輝とをさけて巖の洞と地の穴とにいらん二〇その日人々おのが拜せんとて造れる白銀のぐうざうと黄金のぐうざうとを鼹鼠のあな蝙蝠の穴になげすて二一岩々の隙けはしき山峽にいりヱホバの起て地をふるひうごかしたまふその畏るべき容貌と稜威のかがやきとを避ん二二なんぢら鼻より息のいでいりする人に倚ることをやめよ斯るものは何ぞかぞふるに足らん

第三章一みよ主ばんぐんのヱホバ、ヱルサレムおよびユダの賴むところ倚ところなる凡てその賴むところの糧すべてその賴むところの水二勇士 戰士 審士 預言者 卜筮者 長老三五十人の首 貴顯者 議官 藝に長たる者および言語たくみなるものを除去りたまはん四われ童子をもてかれらの君とし嬰兒にかれらを治めしめん五民たがひに相虐げ人おのおのその隣をしへたげ童子は老たる者にむかひて高ぶり賤しきものは貴きものに對ひてたかぶらん六そのとき人ちちの家にて兄弟にすがりていはん 汝なほ衣あり われらの有司となりてこの荒敗をその手にてをさめよと七その日かれ聲をあげていはん我なんぢらを愈すものとなるを得じ わが家に糧なくまた衣なし 我をたてて民の有司とすることなかれと八是かれらの舌と行爲とはみなヱホバにそむきてその榮光の目ををかししが故に ヱルサレムは敗れユダは仆れたればなり九かれらの面色はその惡きことの證をなしソドムのごとくその罪をあらはして隱すことをせざるなりかれらの靈魂はわざはひなるかな自らその惡の報をとれり一〇なんぢら義人にいへ かならず福祉をうけんと 彼等はそのおこなひの實をくらふべければなり一一惡者はわざはひなる哉かならず災禍をうけん その手の報きたるべければなり一二わが民はをさなごに虐げられ婦女にをさめらる 唉わが民よなんぢを導くものは反てなんぢを迷はせ汝のゆくべき途を絶つ一三ヱホバ立いでて公理をのべ起てもろもろの民を審判し給ふ一四ヱホバ來りておのが民の長老ともろもろの君とをさばきて言給はんなんぢらは葡萄園をくひあらせり 貧きものより掠めとりたる物はなんぢらの家にあり一五いかなれば汝等わが民をふみにじり貧きものの面をすりくだくやと これ主萬軍のヱホバのみことばなり一六ヱホバまた言給はくシオンの女輩はおごり 項をのばしてあるき 眼にて媚をおくり 徐々としてあゆみゆくその足にはりんりんと音あり一七このゆゑに主シオンのむすめらの頭をかぶろにしヱホバ彼らの醜所をあらはし給はん一八その日主かれらが足にかざれる美はしき釧をとり 瓔珞 半月飾一九耳環 手釧 面帕二〇華冠 脛飾 紳 香盒 符嚢二一指環 鼻環二二公服 上衣 外帔 金嚢二三鏡 細布の衣 首帕 被衣などを取除きたまはん二四而して馨はしき香はかはりて臭穢となり 紳はかはりて繩となり 美はしく編たる髮はかぶろとなり 華かなる衣はかはりて麁布のころもとなり 麗顏はかはりて烙鐵せられたる痕とならん二五なんぢの男はつるぎにたふれ なんぢの勇士

はたたかひに仆るべし二六その門はなげきかなしみ シオンは荒廢れて地にすわらん

第四章一その日七人のをんな一人の男にすがりていはん 我儕おのれの糧をくらひ己のころもを着るべし ただ我儕になんぢの名をとなふることを許してわれらの恥をとりのぞけと二その日ヱホバの枝はさかえて輝かん 地よりなりいづるものの實はすぐれ並うるはしくして逃れのこれるイスラエルの益となるべし三而してシオンに遺れるもの ヱルサレムにとどまれる者 すべて此等のヱルサレムに存ふる者のなかに録されたるものは聖ととなへられん四そは主さばきするみたまと燒つくす靈とをもてシオンのむすめらの汚をあらひ ヱルサレムの血をその中よりのぞきたまふ期きたるべければなり五爰にヱホバはシオンの山のすべての住所ともろもろの聚會とのうへに 晝は雲と煙とをつくり夜はほのほの光をつくり給はん あまねく榮のうへに覆庇あるべし六また一つの假廬ありて 晝はあつさをふせぐ陰となり 暴風と雨とをさけてかくるる所となるべし

第五章一われわが愛する者のために歌をつくり 我があいするものの葡萄園のことをうたはん わが愛するものは土肥たる山にひとつの葡萄園をもてり二彼その園をすきかへし石をのぞきて嘉ぶだうをうゑ そのなかに望樓をたて酒榨をほりて嘉葡萄のむすぶを望みまてり 然るに結びたるものは野葡萄なりき三 さればヱルサレムに住るものとユダの人よ 請なんぢら我とわがぶだうぞのとの間をさばけ四わが葡萄園にわれの作たるほか何のなすべき事ありや 我はよきぶだうの結ぶをのぞみまちしに 何なれば野葡萄をむすびしや五然ばわれわが葡萄園になさんとすることを汝等につげん 我はぶだうぞのの籬芭をとりさりてその食あらさるるにまかせ その垣をこぼちてその踐あらさるるにまかせん六我これを荒してふたたび剪ことをせず耕すことをせず 棘と荊とをはえいでしめん また雲に命せてそのうへに雨ふることなからしめん七それ萬軍のヱホバの葡萄園はイスラエルの家なり その喜びたまふところの植物はユダの人なり これに公平をのぞみたまひしに反りて血をながし これに正義をのぞみ給ひしにかへりて號呼あり八 禍ひなるかな彼らは家に家をたてつらね 田圃に田圃をましくはへて餘地をあまさず 己ひとり國のうちに住んとす九萬軍のヱホバ我耳につげて宣はく 實におほくの家はあれすたれ大にして美しき家は人のすむことなきにいたらん一〇十段のぶだうぞの僅かに一バテをみのり 一ホメルの穀種はわづかに一エパを實るべし一一 禍ひなるかなかれらは朝つとにおきて濃酒をおひもとめ 夜のふくるまで止まりてのみ 酒にその身をやかるるなり一二かれらの酒宴には琴あり 瑟あり 鼓あり 笛あり 葡萄酒あり されどヱホバの作爲をかへりみずその手のなしたまふところに目をとめず一三斯るが故にわが民は無知にして虜にせられ その貴顯者はうゑ そのもろもろの民は渇によりて疲れはてん一四また陰府はその欲望をひろく

しその度られざる口をはる かれらの榮華 かれらの群衆 かれらの饒富 および喜びたのしめる人みなその中におつべし一五 賤しき者はかがめられ 貴きものは卑くせられ 目をあげて高ぶる者はひくくせらるべし一六 されど萬軍のヱホバは公平によりてあがめられ 聖なる神は正義によりて聖とせられ給ふべし一七 而して小羊おのが牧場にあるごとくに草をはみ 豊かなるものの田はあれて旅客にくらはれん一八 禍ひなるかな彼等はいつはりを繩となして惡をひき 索にて車をひくごとく罪をひけり一九 かれらは云 その成んとする事をいそぎて速かになせ 我儕これを見ん イスラエルの聖者のさだむることを逼來らせよ われらこれを知んと二〇 禍ひなるかな かれらは惡をよびて善とし善をよびて惡とし 暗をもて光とし光をもて暗とし 苦をもて甘とし甘をもて苦とする者なり二一 わざはひなる哉 かれらは己をみて智しとし自らかへりみて聰とする者なり二二 禍ひなるかな かれらは葡萄酒をのむに丈夫なり 濃酒を和するに勇者なり二三 かれらは賄賂によりて惡きものを義となし 義人よりその義をうばふ二四 此によりて火舌の刈株をくらふがごとく また枯草の火焰のなかにおつるがごとく その根はくちはてその花は塵のごとくに飛さらん かれらは萬軍のヱホバの律法をすててイスラエルの聖者のことばを蔑したればなり二五 この故にヱホバその民にむかひて怒をはなち 手をのべてかれらを擊たまへり 山はふるひうごきかれらの屍は衢のなかにて糞土のごとくなれり 然はあれどヱホバの怒やまずして尚その手を伸したまふ二六 かくて旗をたててとほき國々をまねき彼等をよびて地の極より來らしめたまはん 視よかれら趨りて速かにきたるべし二七 その中には疲れたふるるものなく眠りまたは寢るものなし その腰の帶はとけずその履の紐はきれず二八 その矢は銳その弓はことごとく張り その馬のひづめは石のごとくその車の輪は疾風のごとしと稱へられん二九 その嘷ること獅のごとく また小獅のごとく嘷うなりつつ獲物をつかみて掠去れども之をすくふ者なし三〇 その日かれらが嘯響めくこと海のなりどよめくがごとし もし地をのぞまば暗と難とありて光は黑雲のなかにくらくなりたるを見ん

第六章一 ウジヤ王のしにたる年われ高くあがれる御座にヱホバの坐し給ふを見しにその衣裾は殿にみちたり二 セラピムその上にたつ おのおの六の翼あり その二をもて面をおほひ その二をもて足をおほひ 其二をもて飛翔り三 たがひに呼いひけるは聖なるかな聖なるかな聖なるかな萬軍のヱホバ その榮光は全地にみつ四 斯よばはる者の聲によりて閾のもとゐ搖うごき家のうちに煙みちたり五 このとき我いへり 禍ひなるかな我ほろびなん 我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢たるくちびるの者なるに わが眼ばんぐんのヱホバにまします王を見まつればなり六 爰にかのセラピムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手にたづさへて我にとびきたり七 わが口に觸ていひける

は視よこの火なんぢの唇にふれたれば既になんぢの惡はのぞかれなんぢの罪はきよめられたりと八我またヱホバの聲をきく曰くわれ誰をつかはさん誰かわれらのために往べきかとそのとき我いひけるはわれ此にあり我をつかはしたまへ九ヱホバいひたまはく往てこの民にかくのごとく告よなんぢら聞てきけよ然どさとらざるべし見てみよ然どしらざるべしと一〇なんぢこの民のこころを鈍くしその耳をものうくしその眼をおほへ恐らくは彼らその眼にて見その耳にてききその心にてさとり翻へりて醫さるることあらん一一ここに我いひけるは主よいつまで如此あらんか主こたへたまはく邑はあれすたれて住むものなく家に人なく邦ことごとく荒土となり一二人々ヱホバに遠方までうつされ廢りたるところ國中におほくならん時まで如此あるべし一三そのなかに十分の一のこる者あれども此もまた呑つくされんされど聖裔のこりてこの地の根となるべし彼のテレビントまたは橿樹がきらるることありともその根ののこるがごとし

第七章一ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズのときアラムの王レヂンとレマリヤの子イスラエル王ペカと上りきたりてヱルサレムを攻しがつひに勝ことあたはざりき二ここにアラムとエフライムと結合なりたりとダビデの家につぐる者ありければ王のこころと民の心とは林木の風にうごかさるるが如くに動けり三その時ヱホバ、イザヤに言たまひけるは今なんぢと汝の子シヤルヤシユブと共にいでて布をさらす野の大路のかたはらなる上池の樋口にゆきてアハズを迎へ四これに告べしなんぢ謹みて靜かなれアラムのレヂン及びレマリヤの子はげしく怒るとも二の燼餘りたる煙れる片柴のごとし懼るるなかれ心をよわくするなかれ五アラム、エフライム及びレマリヤの子なんぢにむかひて惡き謀ごとを企てていふ六われらユダに攻上りて之をおびやかし我儕のためにこれを破りとりタビエルの子をその中にたてて王とせんと七されど主ヱホバいひたまはくこの事おこなはれずまた成ことなし八アラムの首はダマスコ、ダマスコの首はレヂンなりエフライムは六十五年のうちに敗れて國をなさざるべし九またエフライムの首はサマリヤ、サマリヤの首はレマリヤの子なり若なんぢら信ぜずばかならず立ことを得じと一〇ヱホバ再びアハズに告ていひたまはく一一なんぢの神ヱホバに一の豫兆をもとめよ或はふかき處あるひは上のたかき處にもとめよ一二アハズいひけるは我これを求めじ我はヱホバを試むることをせざるべし一三イザヤいひけるはダビデのいへよ請なんぢら聞なんぢら人をわづらはしこれを小事として亦わが神をも煩はさんとするか一四この故に主みづから一の豫兆をなんぢらに賜ふべし視よをとめ孕みて子をうまんその名をインマヌエルと稱ふべし一五かれ惡をすて善をえらぶことを知ころほひにいたりて乳酥と蜂蜜とをくらはん一六そはこの子いまだ惡をすて善をえらぶことを知ざるさきになんぢが忌

きらふ雨の王の地はすてらるべし一七ヱホバはエフライムがユダを離れし時よりこのかた臨みしことなき日を汝となんぢの民となんぢの父の家とにのぞませ給はん是アツスリヤの王なり一八其日ヱホバ、エジプトなる河々のほとりの蠅をまねきアツスリヤの地の蜂をよびたまはん一九皆きたりて荒たるたに岩穴すべての荊棘すべての牧場のうへに止まるべし二〇その日主はかはの外ふより雇へるアツスリヤの王を剃刀として首と足の毛とを剃たまはん また髯をも除きたまふべし二一その日人わかき牝犢ひとつと羊ふたつとを飼をらん二二その出すところの乳おほきによりて乳酥をくらふことを得ん すべて國のうちに遺れるものは乳酥と蜂蜜とをくらふべし二三その日千株に銀一千の價をえたる葡萄ありし處もことごとく荊と棘はえいづべし二四 荊とおどろと地にあまねきがゆゑに人々矢と弓とをもて彼處にゆくなり二五 鋤をもて掘たがへしたる山々もいばらと棘のために人おそれてその中にゆくことを得じ その地はただ牛をはなち羊にふましむる處とならん

第八章一ヱホバ我にいひたまひけるは一の大なる牌をとりそのうへに平常の文字にてマヘル シャラル ハシ バズと録せ二われ信實の證者なる祭司ウリヤおよびエベレキヤの子ゼカリヤをもてその證をなさしむ三われ預言者の妻にちかづきしとき彼はらみて子をうみければ ヱホバ我にいひたまはくその名をマヘルシャラル ハシ バズと稱へよ四そはこの子いまだ我が父わが母とよぶことを知らざるうちにダマスコの富とサマリヤの財寶はうばはれてアツスリヤ王のまへに到るべければなり五ヱホバまた重て我につげたまへり云く六この民はゆるやかに流るるシロアの水をすててレヂンとレマリヤの子とをよろこぶ七此によりて主はいきほひ猛くみなぎりわたる大河の水をかれらのうへに堰入たまはん 是はアツスリヤ王とそのもろもろの威勢とにして 百の支流にはびこりもろもろの岸をこえ八ユダにながれいり溢れひろごりてその項にまで及ばん インマヌエルよそののぶる翼はあまねくなんぢの地にみちわたらん九もろもろの民よ さばめき騒げなんぢら摧かるべし 遠きくにぐにの者よきけ 腰におびせよ 汝等くだかるべし 腰に帶せよ なんぢら摧かるべし一〇なんぢら互にはかれ つひに徒勞ならん なんぢら言をいだせ遂におこなはれじ そは神われらとともに在せばなり一一ヱホバつよき手をもて此如われに示し この民の路にあゆまざらんことを我にさとして言給はく一二此民のすべて叛逆ととなふるところの者をなんぢら叛逆ととなふるなかれ 彼等のおそるるところを汝等おそるるなかれ懼くなかれ一三なんぢらはただ萬軍のヱホバを聖としてこれを畏みこれを恐るべし一四然らばヱホバはきよき避所となりたまはん 然どイスラエルの兩の家には蹟く石となり妨ぐる磐とならん ヱルサレムの民には網罟となり機濫とならん一五おほくの人々これによりて蹶きかつ仆れやぶれ 網せられまた捕へらるべし一六證詞をつかね律法

をわが弟子のうちに封べし一七　いま面をおほひてヤコブの家をかへりみ給はずといへども我そのヱホバを待そのヱホバを望みまつらん一八　視よわれとヱホバが我にたまひたる子輩とはイスラエルのうちの豫兆なり奇しき標なり此はシオンの山にいます萬軍のヱホバの與へたまふ所なり一九　もし人なんぢらにつげて巫女および魔術者のさえづるがごとく細語がごとき者にもとめよといはば民はおのれの神にもとむべきにあらずや　いかで活者のために死者にもとむることを爲んといへ二〇　ただ律法と證詞とを求むべし　彼等のいふところ此言にかなはずば晨光あらじ二一　かれら國をへあるきて苦みうゑん　その饑るとき怒をはなち己が王おのが神をさして詛ひかつその面をうへに向ん二二　また地をみれば艱難と幽暗とくるしみの闇とあり　かれらは昏黒におひやられん

第九章一　今くるしみを受れども後には闇なかるべし　昔しはゼブルンの地ナフタリの地をあなどられしめ給ひしかど　後には海にそひたる地ヨルダンの外の地　ことくに人のガリラヤに榮をうけしめ給へり二　幽暗をあゆめる民は大なる光をみ　死蔭の地にすめる者のうへに光てらせり三　なんぢ民をましその歡喜を大にしたまひければ　かれらは收穫時によろこぶがごとく掠物をわかつときに樂むがごとく汝の前によろこべり四　そは汝かれらがおへる軛とその肩の笞と虐ぐるものの杖とを折り　これを折りてミデアンの日のごとくなし給ひたればなり五　すべて亂れたたかふ兵士のよろひと血にまみれたる衣とはみな火のもえくさとなりて焚るべし六　ひとりの嬰兒われらのために生れたり　我儕はひとりの子をあたへられたり　政事はその肩にありその名は奇妙また議士また大能の神とこしへのちち　平和の君ととなへられん七　その政事と平和とはましくははりて窮りなし　且ダビデの位にすわりてその國ををさめ今よりのちとこしへに公平と正義とをもてこれを立これを保ちたまはん　萬軍のヱホバの熱心これを成たまふべし八　主一言をヤコブにおくり之をイスラエルの上にのぞませ給へり九　すべてのこの民エフライムとサマリヤに居るものとは知ならん　かれらは高ぶり誇る心をもていふ一〇　瓦くづるるともわれら斫石をもて建くはの木きらるるともわれら香柏をもて之にかへんと一一　この故にヱホバ、レヂンの敵をあげもちゐてイスラエルを攻しめ　その仇をたけび勇しめたまはん一二　前にアラム人あり後にペシリテ人あり　口をはりてイスラエルを呑んとす　然はあれどヱホバの怒やまずして尚その手をのばしたまふ一三　然どこの民はおのれをうつものに歸らず萬軍のヱホバを求めず一四　斯るゆゑにヱホバ一日のうちに首と尾と椶櫚のえだと葦とをイスラエルより斷切たまはん一五　その首とは老たるもの尊きもの　その尾とは譌言をのぶる預言者をいふなり一六　この民をみちびく者はこれを迷はせその引導をうくる者はほろぶるなり一七　このゆゑに主はその少壯者をよろこびたまはず　その孤兒と寡婦とを憐みたまはざるべし　是その

民はことごとく邪まなり惡をおこなふ者なりおのおのの口は愚かなる言をかたればなり 然はあれどヱホバの怒やまずして尚その手をのばしたまふ一八 惡は火のごとくもえ棘と荊とを食つくし茂りあふ林をやくべければみな煙となりむらがりて上騰らん一九 萬軍のヱホバの怒によりて地はくろく燒その民は火のもえくさとなり人々たがひに相憐むことなし二〇 人みぎに攫めどもなほ饑ひだりに食へども尚あかずおのおのその腕の肉をくらふべし二一 マナセはエフライムをエフライムはマナセをくらひ又かれら相合てユダを攻めん 然はあれどヱホバの怒やまずして尚その手をのばしたまふ

第一〇章一 不義のおきてをさだめ暴虐のことばを錄すものは禍ひなるかな二 かれらは乏きものの訴をうけず わが民のなかの貧しきものの權利をはぎ寡婦の資產をうばひ孤兒のものを掠む三 なんぢら懲しめらるる日きたらば何をなさんとするか 敗壞とほきより來らんとき何をなさんとするか なんぢら逃れゆきて誰にすくひを求めんとするか また何處になんぢらの榮をのこさんとするか四 ただ縛められたるものの下にかがみ 殺されたるもののしたに伏仆れんのみ 然はあれどヱホバのいかり止ずして尚ほその手をのばしたまふ五 咄アッスリヤ人 なんぢはわが怒の杖なり その手の笞はわが忿恚なり六 われ彼をつかはして邪曲なる國をせめ我かれに命じて我がいかれる民をせめてその所有をかすめその財寶をうばはしめ かれらを街の泥のごとくに蹂躪らしめん七 されどアッスリヤ人のこころざしは斯のごとくならず その心の念もまた斯のごとくならず そのこころは敗壞をこのみ あまたの國をほろぼし絕ん八 かれ云 わが諸侯はみな王にあらずや九 カルノはカルケミシの如く ハマテはアルパデの如く サマリヤはダマスコの如きにあらずや一〇 わが手は偶像につかふる國々を得たり その彫たる像はヱルサレムおよびサマリヤのものに勝れたり一一 われ既にサマリヤとその偶像とに行へるごとく亦ヱルサレムとその偶像とにおこなはざる可んやと一二 このゆゑに主いひたまふ 我シオンの山とヱルサレムとに爲んとする事をことごとく遂をはらんとき 我アッスリヤ王のおごれる心の實とその高ぶり仰ぎたる眼とを罰すべし一三 そは彼いへらく われ手の力と智慧とによりて之をなせり 我はかしこし 國々の境をのぞき その獲たるものをうばひ 又われは丈夫にしてかの位に坐するものを下したり一四 わが手もろもろの民のたからを得たりしは巢をとるが如く また天が下を取收めたりしは遺しすてたる卵をとりあつむるが如くなりき あるひは翼をうごかし あるひは口をひらき あるひは喃々する者もなかりしなりと一五 斧はこれをもちゐて伐ものにむかひて己みづから誇ることをせんや 鋸はこれを動かす者にむかひて己みづから高ぶることをせんや 此はあだかも笞がおのれを擧るものを動かし杖みづから木にあらざるものを擧んとするにひとし一六 このゆゑに主萬軍のヱホバは肥たるものを瘠しめ 且その

榮光のしたに火のもゆるが如き火焰をおこし給はん一七イスラエルの光は火のごとく その聖者はほのほの如くならん 斯て一日のうちに荊とおどろとを燒ほろぼし一八又かの林と土肥たる田圃の榮をうせしめ 靈魂をも身をもうせしめて病るものの衰へたるが如くなさん一九かつ林のうちに殘れる木わづかにして童子も算へうるが如くになるべし二〇その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家ののがれたる者とは再びおのれを擊し者にたよらず誠意をもてイスラエルの聖者ヱホバにたよらん二一その遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかへるべし二二ああイスラエルよ なんぢの民は海の沙のごとしといへども遺りて歸りきたる者はただ僅少ならん そは敗壞すでにさだまり義にて溢るべければなり二三 主萬軍のヱホバの定めたまへる敗壞はこれを偏く國内におこなひ給ふべし二四 このゆゑに主萬軍のヱホバいひたまはく シオンに住るわが民よアツスリヤ人エジプトの例にならひ笞をもて汝をうち杖をあげて汝をせむるとも懼るるなかれ二五ただ頃刻にして忿恚はやまん 我がいかりは彼等をほろぼして息ん二六 萬軍のヱホバむかしミデアン人をオレブの巖のあたりにて擊たまひしごとくに禍害をおこして之をせめ 又その杖を海のうへに伸しエジプトの例にしたがひてこれを擧たまはん二七その日かれの重荷はなんぢの肩より下かれの軛はなんぢの頸よりはなれ その軛はあぶらの故をもて壞れん二八 かれアイにきたりミグロンを過ミクマシにてその輜重をとどめ二九 渡口をすぎてゲバに宿る ここに於てラマはをののきサウルギベア人は逃れはしれり三〇ガリムの女よなんぢ聲をあげて叫べ ライシよ耳をかたぶけて聽け アナトテよなんぢも聲をあげよ三一 マデメナはさすらひゲビムの民はのがれ走れり三二この日かれノブに立とどまり シオンのむすめの山ヱルサレムの岡にむかひて手をふりたり三三主ばんぐんのヱホバは雄々しくたけびてその枝を斷たまはん 丈高きものは伐おとされ聳えたる者はひくくせらるべし三四また銕をもて茂りあふ林をきり給はん レバノンは能力あるものに倒さるべし

第一一章 一 ヱツサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて實をむすばん二その上にヱホバの靈とどまらん これ智慧聰明の靈 謀略才能の靈 知識の靈 ヱホバをおそるるの靈なり三かれはヱホバを畏るるをもて歡樂とし また目みるところによりて審判をなさず 耳きくところによりて斷定をなさず四 正義をもて貧しき者をさばき 公平をもて國のうちの卑しき者のために斷定をなし その口の杖をもて國をうちその口唇の氣息をもて惡人をころすべし五正義はその腰の帶となり 忠信はその身のおびとならん六 おほかみは小羊とともにやどり 豹は小山羊とともにふし 犢 をじし 肥たる家畜ともに居てちひさき童子にみちびかれ七牝牛と熊とはくひものを同にし 熊の子と牛の子とともにふし 獅はうしのごとく藁をくらひ八 乳兒は毒蛇のほらにたはふれ 乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん九 斯てわが

聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん そは水の海をおほへるごとくヱホバをしるの知識地にみつべければなり一〇その日ヱツサイの根たちてもろもろの民の旂となり もろもろの邦人はこれに服ひきたり榮光はそのとどまる所にあらん一一その日主はまたふたたび手をのべてその民ののこれる僅かのものをアッスリヤ、エジプト、パテロス、エテオピア、エラム、シナル、ハマテおよび海のしまじまより贖ひたまふべし一二ヱホバは國々の爲に旂をたててイスラエルの逐やられたる者をあつめ地の四極よりユダの散失たるものを集へたまはん一三またエフライムの猜はうせ ユダを悩ますものは斷れ エフライムはユダをそねまず ユダはエフライムを悩ますことなかるべし一四かれらは西なるペリシテ人の境にとびゆき相共にひがしの子輩をかすめ その手をエドムおよびモアブにのベアンモンの子孫をおのれに服はしめん一五ヱホバ、エジプトの海汊をからし河のうへに手をふりて熱風をふかせ その河をうちて七の小流となし履をはきて渉らしめたまはん一六斯てその民ののこれる僅かのものの爲にアッスリヤより來るべき一つの大路あり 昔しイスラエルがエジプトの地よりいでし時のごとくなるべし

第一二章 一その日なんぢ言ん ヱホバよ我なんぢに感謝すべし 汝さきに我をいかり給ひしかどその怒はやみて我をなぐさめたまへり二視よ神はわが救なり われ依賴ておそるるところなし主ヱホバはわが力わが歌なり ヱホバは亦わが救となりたまへりと三此故になんぢら欣喜をもて救の井より水をくむべし四その日なんぢらいはん ヱホバに感謝せよ その名をよべ その行爲をもろもろの民の中につたへよ その名のあがむべきことを語りつげよと五ヱホバを頌うたへ そのみわざは高くすぐれたればなり これを全地につたへよ六シオンに住るものよ聲をあげてよばはれ イスラエルの聖者はなんぢの中にて大なればなり

第一三章 一アモツの子イザヤが示されたるバビロンにかかる重負の預言二なんぢらかぶろの山に旂をたて聲をあげ手をふり彼等をまねきて貴族の門にいらしめよ三われ既にきよめ別ちたるものに命じ わが丈夫ほこりかにいさめる者をよびて わが怒をもらさしむ四山におほくの人の聲きこゆ大なる民あるがごとしもろもろの國民のよりつどひて喧めく聲きこゆ これ萬軍のヱホバたたかひの軍兵を召したまふなり五かれらはとほき國より天の極よりきたる これヱホバとその忿恚をもらす器とともに全國をほろぼさんとて來るなり六なんぢら泣號ぶべしヱホバの日ちかづき全能者よりいづる敗亡きたるべければなり七この故にすべての手はたれ凡の人のこころは消ゆかん八かれら慴きおそれ艱難と憂とにせまられ 子をうまんとする婦のごとく苦しみ互におどろき相みあひてその面は燄のごとくならん九視よヱホバの日苛くして忿恚とはげしき怒とをもて來り この國をあらしその中よりつみびとを絶滅さん一〇天のもろもろの星とほしの宿は光をはなたず 日はいでてくらく月は その光をかが

やかさざるべし一一 われ悪ことのために世をつみし 不義のために悪きものをばつし 驕れるものの誇をとどめ 暴ぶるものの傲慢をひくくせん一二 われ人をして精金よりもすくなくオフルの黄金よりも少なからしめん一三 かくて亦われ萬軍のヱホバの忿恚のとき烈しき怒りの日に天をふるはせ地をうごかしてその處をうしなはしむべし一四 かれらは逐るる鹿のごとく集むるものなき羊のごとくなりて各自おのれの民にかへりおのれの國にのがれゆかん一五 すべて其處にあるもの見出されれば刺れ拘留らるるものは劍にたふされ一六 彼等の嬰兒はその目前にてなげくだかれ その家財はかすめうばはれ その妻はけがさるべし一七 視よわれ白銀をもかへりみず黄金をもよろこばざるメデア人をおこして之にむかはしめん一八 かれらは弓をもて若きものを射くだき腹の實をあはれむことなく小子をみてをしむことなし一九 すべての國の中にてうるはしくカルデヤ人がほこり飾となせるバビロンはむかし神にほろぼされたるソドム、ゴモラのごとくならん二〇 ここに住むもの永くたえ世々にいたるまで居ものなく アラビヤ人もかしこに幕屋をはらず牧人もまたかしこにはその群をふさすることなく二一 ただ猛獸かしこにふし吼るものその家にみち 駝鳥かしこにすみ 牡山羊かしこに躍らん二二 豺狼その城のなかになき野犬えいぐわの宮にさけばん その時のいたるは近きにあり その日は延ることなかるべし

第一四章 一 ヱホバ、ヤコブを憐みイスラエルをふたたび撰びて之をおのれの地におきたまはん 異邦人これに加りてヤコブの家にむすびつらなるべし二 もろもろの民はかれらをその處にたづさへいたらん而してイスラエルの家はヱホバの地にてこれを奴婢となし曩におのれを虜にしたるものを虜にし おのれを虐げたるものを治めん三 ヱホバなんぢの憂と艱難とをのぞき亦なんぢが勤むるからき役をのぞきて安息をたまふの日四 なんぢこの歌をとなへバビロン王をせめていはん 虐ぐる者いかにして息みしや 金をはたる者いかにして息みしやと五 ヱホバあしきものの笞ともろもろの有司の杖とををりたまへり六 かれらは怒をもてもろもろの民をたえず撃てはうち 忿恚をもてもろもろの國ををさむれど その暴虐をとどむる者なかりき七 今は全地やすみを得おだやかを得 ことごとく聲をあげてうたふ八 實にまつの樹およびレバノンの香柏さへもなんぢの故により歡びていふ 汝すでに仆たれば樵夫のぼりきたりてわれらを攻ることなしと九 下の陰府はなんぢの故により動きて汝のきたるをむかへ世のもろもろの英雄の亡靈をおこし國々のもろもろの王をその位より起おこらしむ一〇 かれらは皆なんぢに告ていはん 汝もわれらのごとく弱くなりしや 汝もわれらと同じくなりしやと一一 なんぢの榮華となんぢの琴の音はすでに陰府におちたり 蛆なんぢの下にしかれ蚯蚓なんぢをおほふ一二 あしたの子明星よいかにして天より隕しや もろもろの國をたふしし者よいかにして斫れて地にたふれしや一三 汝さきに心中におもへらく われ天に

のぼり我くらゐを神の星のうへにあげ北の極なる集會の山にざし一四 たかき雲漢にのぼり至上者のごとくなるべしと一五 然どなんぢは陰府におとされ坑の最下にいれられん一六 なんぢを見るものは熟々なんぢを視なんぢに目をとめていはん この人は地をふるはせ列國をうごかし一七 世を荒野のごとくし もろもろの邑をこぼち 捕へたるものをその家にときかへさざりしものなるかと一八 もろもろの國の王たちはことごとく皆たふとき狀にておのおのその家にねぶる一九 然どなんぢは忌きらふべき枝のごとく おのが墓のそとにすてられその周圍には劍にて刺ころされ坑におろされ 石におほはれたる者ありて踐つけらるる屍にことならず二〇 汝おのれの國をほろぼし おのれの民をころししが故に かれらとおなじく葬らるることあたはず それ惡をおこなふものの裔はとこしへに名をよばるることなかるべし二一 先祖のよこしまの故をもて その子孫のために戮場をそなへ彼等をしてたちて地をとり世界のおもてに邑をみたすことなからしめよ二二 萬軍のヱホバのたまはく 我立てかれらを攻めバビロンよりその名と遺りたるものとを絶滅し その子その孫をたちほろぼさんと これヱホバの聖言なり二三 われバビロンを刺蝟のすみかとし沼とし且ほろびの箒をもてこれを掃除かんとこれ萬軍のヱホバのみことばなり二四 萬軍のヱホバ 誓をたてて言給はくわがおもひし事はかならず成 わがさだめし事はかならず立ん二五 われアッスリヤ人をわが地にてうちやぶり わが山々にてふみにじらん ここにおいて彼がおきし軛はイスラエル人よりはなれ 彼がおはせし重負はイスラエル人の肩よりはなるべし二六 これは全地のことにつきて定めたる謀略なり 是はもろもろの國のうへに伸したる手なり二七 萬軍のヱホバさだめたまへり誰かこれを破ることを得んや その手をのばしたまへり誰かこれを押返すことを得んや二八 アハズ王の死たる年おもにの預言ありき二九 曰く ペリシテの全地よなんぢをうちし杖をれたればとて喜ぶなかれ 蛇の根より蝮いでその果はとびかける巨蛇となるべければなり三〇 いと貧しきものはものくひ乏しきものは安然にふさん われ饑饉をもてなんぢの根をしなせ汝がのこれる者をころすべし三一 門よなげけ邑よさけべ ペリシテよなんぢの全地きえうせたり そはけぶり北よりいできたりその軍兵の列におくるるものなし三二 その國の使者たちに何とこたふべきや 荅へていはん ヱホバ、シオンの基をおきたまへりその民のなかの苦しむものは避所をこの中にえん

第一五章一 モアブにかかる重負のよげん 曰く／モアブのアルは一夜の間にあらされて亡びうせ モアブのキルは一夜のまに荒されてほろびうせん二 かれバイテおよびデボンの高所にのぼりて哭き モアブはネボ及びメデバの上にてなげきさけぶ おのおのその頭を禿にしその鬚をことごとく剃たり三 かれら麁服をきてその衢にあり 屋蓋または廣きところにて皆なきさけび悲しむこと甚だし四 ヘシボンとエレアレと叫びてその聲ヤハズに

まで聞ゆ この故にモアブの軍兵こゑをあげ その靈魂うちに在てをののけり五 わが心 モアブのために叫びよばはれり その貴族はゾアルおよびエグラテシリシヤにのがれ 哭つつルヒテの坂をのぼり ホロナイムの途にて敗亡の聲をあぐ六 ニムリムの水はかわき草はかれ苗はつきて緑蔬あらずセ このゆゑに彼等はその獲たる富とその藏めたる物をたづさへて柳の河をわたらん八 その泣號のこゑはモアブの境をめぐり 悲歎のこゑはエグライムにいたりなげきの聲はベエルエリムにいたる九 デモンの水は血にて充 われデモンの上にひとしほ禍害をくはへ モアブの遁れたる者とこの地の遺りたるものとに獅をおくらん

第一六章一 なんぢら荒野のセラより羔羊をシオンの女の山におくりて國の首にをさむべし二 モアブの女輩はアルノンの津にありてさまよふ鳥のごとく巣をおはれたる雛のごとくなるべし三 相謀りて審判をおこなひ 亭午にもなんぢの蔭を夜のごとくならしめ 驅逐人をかくし 遁れきたるものを顯はすなかれ四 わが驅逐人をなんぢとともに居しめ 汝モアブの避所となりて之をそこなふ者のまへより脱れしめよ 勒索者はうせ害ふものはたえ暴虐者は地より絶れん五 ひとつの位あはれみをもて堅くたち眞實をおこなふ者そのうへに坐せん 彼ダビデの幕屋にをりて審判をなし公平をもとめて義をおこなふに速し六 われらモアブの傲慢をきけり その高ぶること甚だし われらその誇とたかぶりと忿恚とをきけり その大言はむなし七 この故にモアブはモアブの爲になきさけび民みな哭さけぶべし なんぢら必らず甚だしく心をいためてキルハレステの乾葡萄のためになげくべし八 そはヘシボンの畑とシブマのぶだうの樹とは凋みおとろへたり その枝さきにはヤゼルにまでいたりて荒野にはびこりのびて海をわたりしが 國々のもろもろの主その美はしき枝ををりたり九 この故にわれヤゼルの哭とひとしくシブマの葡萄の樹のためになかん ヘシボンよエレアレよわが涙なんぢをひたさん そは鬨聲なんぢが果物なんぢが收穫の實のうへにおちきたればなり一〇 欣喜とたのしみとは土肥たる畑より取さられ 葡萄園には謳ふことなく歡呼ばふことなく酒榨にはふみて酒をしぼるものなし 我そのよろこびたつる聲をやめしめたり一一 このゆゑにわが心腸はモアブの故をもて琴のごとく鳴ひびき キルハレスの故をもてわが衷もまた然り一二 モアブは高處にいでて倦つかれその聖所にきたりて祈るべけれど驗あらじ一三 こはヱホバが曩にモアブに就てかたりたまへる聖言なり一四 されど今ヱホバかたりて言たまはくモアブの榮はその大なる群衆とともに傭人の期にひとしく三年のうちに恥かしめをうけ 遺れる者はなはだ少なくして力なからん

第一七章一 ダマスコにかかはる重負の預言 いはく／視よダマスコは邑のすがたをうしなひて荒墟となるべし二 アロエルの諸邑はすてられん獸畜のむれそこにすみてその伏やすめるをおびやかす者もなからん三 エフライムの城はすたりダマスコの政治は

やみ スリアの遺れる者はイスラエルの子輩のさかえのごとく消うせん 是は萬軍のヱホバの聖言なり四 その日ヤコブの榮はおとろへその肥たる肉はやせて五 あだかも收穫人の麥をかりあつめ腕をもて穂をかりたる後のごとくレパイムの谷に穂をひろひたるあとの如くならん六 されど橄欖樹をうつとき二つ三の核を杪にのこし あるひは四つ五をみのりおほき樹の外面のえだに遺せるが如く採のこさるるものあるべし 是イスラエルの神ヱホバの聖言なり七 その日人おのれを造れるものを仰ぎのぞみイスラエルの聖者に目をとめん八 斯ておのれの手の工なる祭壇をあふぎ望まず おのれの指のつくりたるアシラの像と日の像とに目をとめじ九 その日かれが堅固なるまちまちは 昔イスラエルの子輩をさけてすてさりたる森のなか嶺のうへに今のこれる荒跡のごとく荒地となるべし一〇 そは汝おのがすくひの神をわすれ 己がちからとなるべき磐を心にとめざりしによる このゆゑになんぢ美くしき植物をうゑ異やうの枝をさし一一 かつ植たる日に籬をまはし朝に芽をいださしむれども 患難の日といたましき憂の日ときたりて收穫の果はとびさらん一二 唉おほくの民はなりどよめけり海のなりどよめく如くかれらも鳴動めけり もろもろの國はなりひびけり大水のなりひびくが如くかれらも鳴響けり一三 もろもろの國はおほくの水のなりひびくがごとく鳴響かん されど神かれらを攻たまふべし かれら遠くのがれて風にふきさらるる山のうへの粃糠のごとく また旋風にふきさらるる塵のごとくならん一四 視よゆふぐれに恐怖あり いまだ黎明にいたらずして彼等は亡たり これ我儕をかすむる者のうくべき報われらを奪ふもののひくべき鬮なり

第一八章一 唉エテオピアの河の彼方なるさやさやと羽音のきこゆる地二 この地葦のふねを水にうかべ海路より使者をつかはさんとてその使者にいへらく 疾走る使よなんぢら河々の流のわかる國にゆけ丈たかく肌なめらかなる 始めより今にいたるまで懼るべく繩もてはかり人を践にじる民にゆけ三 すべて世にをるもの地にすむものよ 山のうへに旗のたつとき汝等これを見ラッパの鳴響くときなんぢら之をきけ四 そはヱホバわれに如此いひ給へりいはく 空はれわたり日てり收穫の熱むしてつゆけき雲のたるる間 われわが居所にしづかに居てながめん五 收穫のまへにその芽またく生その花ぶだうとなりて熟せんとするとき かれ鎌をもて蔓をかり枝をきり去ん六 斯てみな山のたけきとりと地の獸とになげあたへらるべし 猛鳥そのうへにて夏をすごし地のけものその上にて冬をわたらん七 そのとき河々の流のわかるる國の丈たかく肌なめらかなる 始めより今にいたるまで懼るべく繩もてはかり人をふみにじる民より 萬軍のヱホバにささぐる禮物をたづさへて 萬軍のヱホバの聖名のところシオンの山にきたるべし

第一九章一 エジプトにかかる重負のよげん いはく／ヱホバははやき雲にのりてエジプトに來りたまふ エジプトのもろもろの

偶像はその前にふるひをののき エジプト人のこころはその衷にて消ゆかん二 我エジプト人をたけび勇ましめてエジプト人を攻しめん斯てかれら各自その兄弟をせめおのおのその鄰をせめ邑は邑をせめ國はくにを攻べし三 エジプト人の靈魂うせてその中むなしくならん われその謀略をほろぼすべし かれらは偶像および呪文をとなふるもの巫女魔術者にもとむることを爲ん四 われエジプト人を苛酷なる主人の手にわたさん あらあらしき王かれらを治むべし是主萬軍のヱホバの聖言なり五 海の水はつき河もまた涸てかわかん六 また河々はくさき臭をはなちエジプトの堭はみな漸次にへりてかわき葦と蘆とかれはてん七 ナイルのほとりの草原ナイルの岸にほどちかき所すべてナイルの最寄にまきたる者はことごとく枯てちりうせん八 漁者もまた歎きすべてナイルに釣をたるる者はかなしみ網を水のうへに施ものはおとろふべし九 練たる麻にて物つくるもの白布を織ものは恥あわて一〇 その柱はくだけ一切のやとはれたる者のこころ憂ひかなしまん一一 誠やゾアンの諸侯は愚なりパロの最もかしこき議官のはかりごとは癡鈍べし 然ばなんぢら何でパロにむかひて我はかしこきものの子 われは古への王の子なりといふを得んや一二 なんぢの智者いづくにありや 彼らもし萬軍のヱホバの定めたまひしエジプトに係はることを暁得ばこれをなんぢに告るこそよけれ一三 ゾアンのもろもろの諸侯は愚かなりノフの諸侯は惑ひたり かれらはエジプトのもろもろの支派の隅石なるに却てエジプトをあやまらせたり一四 ヱホバ曲れる心をその中にまじへ給ひしにより 彼等はエジプトのすべて作ところを謬らせ恰かも酔る人の哇吐ときによろめくが如くならしめたり一五 エジプトにて或は首あるひは尾あるひは椶櫚のえだまたは葦すべてその作ところの工なかるべし一六 その日エジプトは婦女のごとくならん 萬軍のヱホバの動かしたまふ手のその上にうごくが故におそれをののくべし一七 ユダの地はエジプトに懼れらる この事をかたりつぐれば聴くもの皆おそる これ萬軍のヱホバ、エジプトに對ひて定めたまへる謀略の故によるなり一八 その日エジプトの地に五の邑ありカナンの方言をかたりまた萬軍のヱホバに誓ひをたてん その中のひとつは日邑ととなへらるべし一九 その日エジプトの地の中にヱホバをまつる一つの祭壇あり その境にヱホバをまつる一柱あらん二〇 これエジプトの地にて萬軍のヱホバの徴となり證となるなり かれら暴虐者の故によりてヱホバに號求むべければ ヱホバは救ふもの護るものを遣してこれを助けたまはん二一 ヱホバおのれをエジプトに知せたまはん その日エジプト人はヱホバをしり犧牲と祭物とをもて之につかへん 誓願をヱホバにたてて成とぐべし二二 ヱホバ、エジプトを撃たまはん ヱホバこれを撃これを醫したまふ この故にかれらヱホバに歸らん ヱホバその懇求をいれて之をいやし給はん二三 その日エジプトよりアッスリヤにかよふ大路ありて アッスリヤ人はエジプトにきたり エジプ

ト人はアッスリヤにゆき エジプト人とアッスリヤ人と相共につかふることをせん二四 その日イスラエルはエジプトとアッスリヤとを共にし三あひならび地のうへにて福祉をうくる者となるべし二五 萬軍のヱホバこれを祝して言たまはく わが民なるエジプトわが手の工なるアッスリヤわが産業なるイスラエルは福ひなるかな

第二〇章一 アッスリヤのサルゴン王タルタンを遣してアシドドにゆかしむ 彼がアシドドを攻てとりし年にあたり二 この時ヱホバ、アモツの子イザヤに托てかたりたまはく 往なんぢの腰よりあらたへの衣をとき汝の足より履をぬげ ここに於てかれその如くなし赤裸跣足にて歩めり三 ヱホバ言給く わが僕イザヤは三年の間はだかはだしにてあゆみ エジプトとエテオピアとの豫兆となり奇しき標となりたり四 斯のごとくエジプトの虜とエテオピアの俘 囚とはアッスリヤの王にひきゆかれ その若きも老たるもみな赤裸跣足にて臀までもあらはしエジプトの恥をしめすべし五 かれらはその恃とせるエテオピアその誇とせるエジプトのゆゑをもて懼れはぢん六 その日この濱邊の民いはん 視よわれらの恃とせる國われらが遁れゆきて助をもとめアッスリヤ王の手より救出されんとせし國すでに斯のごとし 我儕はいかにして脱かるるを得んやと

第二一章一 うみべの荒野にかかる重負のよげん いはく／荒野よりおそるべき地より南のかたの暴風のふきすぐるが如くきたれり二 われ苛き默示をしめされたり 欺騙者はあざむき荒すものはあらすべし エラムよ上れメデアよかこめ 我すでにすべての歎息をやめしめたり三 この故にわが腰は甚だしくいたみ 產にのぞめる婦人の如き苦しみ我にせまれり われ悶へ苦しみて聞ことあたはず我をのきて見ことあたはず四 わが心みだれまどひて慴き怖ること甚だし わが樂しめる夕はかはりて懼れとなりぬ五 彼らは席をまうけ筵をしきてくひのみすもろもろの君よたちて盾にあぶらぬれ六 ヱホバかく我にいひ給へり 汝ゆきて斥候をおきその見るところを告しめよ七 かれ馬にのりて二列にならび來るものを見 また驢馬にのりたると駱駝にのりたるとをみば 耳をかたぶけて詳細にきくことをせしめよと八 かれ獅の如く呼はりて曰けるは わが主よわれ終日やぐらに立よもすがら斥候の地にたつ九 馬にのりて二列にならびたる者きたれり 彼こたへていはくバビロンは倒れたり 倒れたりそのもろもろの神の像はくだけて地にふしたり一〇 蹂躪らるるわが民よわが打場のたなつものよ 我イスラエルの神萬軍のヱホバに聞るところのものを汝につげたり一一 ドマに係るおもにの預言 いはく／人ありセイルより我をよびていふ 斥候よ夜はなにのときぞ 斥候よ夜はなにの時ぞ一二 ものみ答へていふ 朝きたり夜またきたる 汝もしとはんとおもはば問 なんぢら歸りきたるべし一三 アラビヤにかかる重負のよげん 曰く／デダンの客 商よなんぢらはアラビヤの林にやどらん一四 テマの地のたみよ水をたづさ

へて渇ける者をむかへ 糧をもて逃遁れたるものを迎へよ一五かれらは刃をさけ 既にぬきたる劍すでに張たる弓およびたたかひの艱難をさけて逃きたれり一六そは主われにいひたまはく傭人の期にひとしく一年のうちにケダルのすべての榮華はつきはてん一七そののこれる弓士のかずとケダルの子孫のますらをとは少なかるべし 此はイスラエルの神ヱホバのかたり給へるなり

第二二章一異象の谷にかかる重負のよげん曰く／なんぢら何故にみな屋蓋にのぼれるか二 汝はさわがしく喧すしき邑ほこりたのしむ邑 なんぢのうちの殺されたるものは劍をもて殺されしにあらず 亦たたかひにて死しにもあらず三 なんぢの有司はみな共にのがれゆきしかど弓士にいましめられ 汝の民はとほくにげゆきしかど見出されて皆ともに縛められたり四 この故にわれいふ回顧てわれを見るなかれ 我いたく哭かなしまん わが民のむすめの害はれたるによりて我をなぐさめんと勉むるなかれ五 そは主萬軍のヱホバ異象のたにに騷亂ふみにじり惶惑の日をきたらせたまふ 垣はくづれ號呼のこゑは山々にきこゆ六 エラムは箙をおひたり 歩兵と騎兵とありキルは盾をあらはせり七 かくて戰車はなんぢの美しき谷にみち 騎兵はその門にむかひてつらなれり八 ユダの庇護はのぞかる その日なんぢは林のいへの武具をあふぎのぞめり九 なんぢらダビデのまちの壞おほきを見るなんぢら下のいけの水をあつめ一〇 またヱルサレムの家をかぞへ且その家をこぼちて垣をかたくし一一 一つの水坑をかきとかきとの間につくりて古池の水をひけりされどこの事をなし給へるものを仰望ず この事をむかしより營みたまへる者をかへりみざりき一二 その日主萬軍のヱホバ命じて哭かなしみ首をかぶろにし麁服をまとへと仰せたまひしかど一三 なんぢらは喜びたのしみ牛をほふり羊をころし肉をくらひ酒をのみていふ我儕くらひ且のむべし明日はしぬべければなりと一四 萬軍のヱホバ默示をわが耳にきかしめたまはくまことにこの邪曲はなんぢらが死にいたるまで除き清めらるるを得ずと これ主萬軍のヱホバのみことばなり一五 主ばんぐんのヱホバ如此のたまふゆけ宮をさめ庫をつかさどるセブナにゆきていへ一六 なんぢここに何のかかはりありや また茲にいかなる人のありとして己がために墓をほりしや 彼はたかきところに墓をほり磐をうがちて己がために住所をつくれり一七 視よヱホバはつよき人のなげうつ如くに汝をなげうち給はん一八 なんぢを包みかためふりまはして闊かなる地に球のごとくなげいだしたまはん 主人のいへの恥となるものよ汝そこにて死そのえいぐわの車もそこにあらん一九 我なんぢをその職よりおひその位よりひきおとさん二〇 その日われわが僕ヒルキヤの子エリアキムを召て二一 なんぢの衣をきせ汝の帶をもて固め なんぢの政權をその手にゆだぬべし 斯て彼ヱルサレムの民とユダの家とに父とならん二二 我またダビデのいへの鑰をその肩におかん 彼あくればとづるも

のなく彼とづればあくるものなし 二三 我かれをたてて堅處にうち釘のごとくすべし 而してかれはその父の家のさかえの位とならん 二四 その父の家のもろもろの榮は彼がうへに懸る その子その孫およびすべての器のちひさきもの皿より瓶子にいたるまでも然らざるなし 二五 萬軍のヱホバのたまはくその日かたき處にうちたる釘はぬけいで斫れておちん そのうへにかかれる負もまた絶るべしこはヱホバ語り給へるなり

第二三章

一 ツロに係るおもにの預言 いはく／タルシシのもろもろの舟よなきさけべ ツロは荒廢れて屋なく入べきところなければなり かれら此事をキツテムの地にて告しらせらる 二 うみべの民よもだせ 曩には海をゆきかふシドンの商賈くさぐさの物をかしこに充せたり 三 ツロは大なる水をわたりくるシホルの種物とナイルがはの穀物とによりて収納をえたり ツロはもろもろの國のつどふ市なりき 四 シドンよはづべしそは海すなはち海城かくいへり曰く われ苦しまずうまず壯男をやしなはず處女をそだてざりきと 五 この音信のエジプトにいたるとき彼等ツロのおとづれによりて甚くうれふべし 六 なんぢらタルシシにわたれ 海邊のたみよ汝等なきさけぶべし 七 これは上れる世いにしへよりありし邑おのが足にてうつり遠くたびずまひせる邑なんぢらの樂しみの邑なりしや 八 斯のごとくツロに對ひてはかりしは誰なるか ツロは冕をさづけし邑 その中のあきうどは君 その中の貿易するものは地のたふとき者なりき 九 これ萬軍のヱホバの定め給ふところにして すべて華美にかざれる驕奢をけがし地のもろもろの貴者をひくくしたまはんが爲なり 一〇 タルシシの女よナイルのごとく己が地にあふれよ なんぢを結びかたむる帶ふたたびなかるべし 一一 ヱホバその手を海の上にのべて國々をふるひうごかし給へり ヱホバ、カナンにつきて詔命をいだしその保砦をこぼたしめたまふ 一二 彼いひたまはく虐げられたる處女シドンのむすめよ 汝ふたたびよろこぶことなかるべし 起てキツテムにわたれ彼處にてなんぢまた安息をえじ 一三 カルデヤ人のくにを視よ この民はふたたびあることなし アッスリヤ人この國を野のけものの居所にさだめたり かれら櫓をたてもろもろの殿をこぼちて荒墟となせり 一四 タルシシのもろもろの舟よなきさけべ なんぢの保砦はくだかれたり 一五 その日ツロは七十年のあひだ忘れらるべし ひとりの王のながらふる日のかずなり七十年終りてのちツロは妓女のうたの如くならん 一六 さきに忘れられたるうかれめよ琴をとりて城市をへめぐり 巧に弾じておほくの歌をうたひ人にふたたび記念らるべし 一七 七十年をはりてヱホバまたツロを顧みたまはん ツロはふたたびその利潤をえて地のおもてにあるもろもろの國と淫をおこなふべし 一八 その貿易とその獲たる利潤とはきよめてヱホバに獻ぐべければ之をたくはへず積ことをせざるなり その貿易はヱホバの前にをるものの用となり飽くらふ料となり華美なるころもの料とならん

第二四章一 視よヱホバこの地をむなしからしめ荒廢れしめこれを覆へしてその民をちらしたまふ二 かくて民も祭司もひとしく僕も主もひとしく下婢も主婦もひとしく買ものも賣ものもひとしく貸ものも借ものもひとしく利をはたるものも利をいだす者もひとしくこの事にあふべし三 地はことごとく空しくことごとく掠められん こはヱホバの言たまへるなり四 地はうれへおとろへ世は萎おとろへ地のたふときものも萎はてたり五 民おきてにそむき法ををかし とこしへの契約をやぶりたるがゆゑに地はその下にけがされたり六 このゆゑに呪詛は地をのみつくしそこに住るものは罪をうけまた地の民はやかれて僅かばかり遺れり七 あたらしき酒はうれへ葡萄はなえ 心たのしめるものはみな歎息せざるはなし八 鼓のおとは寂まり歡ぶものの聲はやみ琴の音もまたしづまれり九 彼等はふたたび歌うたひ酒のまず濃酒はこれをのむものに苦くなるべし一〇 騒ぎみだれたる邑はすでにやぶられ毎家はことごとく閉て人のいるなし一一 街頭には酒の故によりて叫ぶこゑあり すべての歡喜はくらくなり地のたのしみは去ゆけり一二 邑はあれすたれたる所のみのこりその門もこぼたれて破れぬ一三 地のうちにてもろもろの民のなかにて遺るものは橄欖の樹のうたれしのちの果の如く葡萄の収穫はてしのちの實のごとし一四 これらのもの聲をあげてよばはんヱホバの稜威のゆゑをもて海より歡びよばはん一五 この故になんぢら東にてヱホバをあがめ 海のしまじまにてイスラエルの神ヱホバの名をあがむべし一六 われら地の極より歌をきけり いはく榮光はただしきものに歸すと／われ云らく我やせおとろへたり我やせおとろへたり 我はわざはひなるかな 欺騙者はあざむき欺騙者はいつはりをもて欺むけり一七 地にすむものよ恐怖と陷阱と罟とはなんぢに臨めり一八 おそれの聲をのがるる者はおとしあなに陷り おとしあなの中よりいづるものは罟にかかるべし そは高處の窓ひらけ地の基ふるひうごけばなり一九 地は碎けにくだけ地はやぶれにやぶれ地は搖にゆれ二〇 地はゑへる者のごとく蹌きによろめき假廬のごとくふりうごく その罪はそのうへにおもく遂にたふれて再びおくることなし二一 その日ヱホバはたかき處にて高きところの軍兵を征め 地にて地のもろもろの王を征めたまはん二二 かれらは囚人が阱にあつめらるるごとく集められて 獄中にとざされ多くの日をへてのち刑せらるべし二三 かくて萬軍のヱホバ、シオンの山およびヱルサレムにて統治め かつその長老たちのまへに榮光あるべければ月は面あからみ日ははぢて色かはるべし

第二五章一 ヱホバよ汝はわが神なり 我なんぢを崇めなんぢの名をほめたたへん 汝さきに妙なる事をおこなひ 古時より定めたることを眞實をもて成たまひたればなり二 なんぢ邑をかへて石堆となし 堅固なる城を荒墟となし 外人の京都を邑とならしめず永遠にたつることを得ざらしめたまへり三 この故につよき民はなんぢをあがめ 暴びたる國々の城はなんぢをおそるべし四

そはなんぢ弱きものの保砦となり 乏しきものの難のときの保砦となり 雨風のふききたりて垣をうつごとく暴ぶるものの荒きたるときの避所となり 熱をさくる蔭となりたまへり五 なんぢ外人の喧嘩をおさへて旱ける地より熱をとりのぞく如くならしめ 暴ぶるものの凱歌をとどめて雲の陰をもて熱をとどむる如くならしめたまはん六 萬軍のヱホバこの山にてもろもろの民のために肥たるものをもて宴をまうけ 久しくたくはへたる葡萄酒をもて宴をまうく 髓おほき肥たるもの久しくたくはへたる清るぶだう酒の宴なり七 又この山にてもろもろの民のかぶれる面帕と もろもろの國のおほへる外帔をとりのぞき八 とこしへまで死を呑たまはん 主ヱホバはすべての面より涙をぬぐひ 全地のうへよりその民の凌辱をのぞき給はん これはヱホバの語りたまへるなり九 その日此如いはん これはわれらの神なり われら俟望めり 彼われらを救ひたまはん 是ヱホバなり われらまちのぞめり 我儕そのすくひを歡びたのしむべしと一〇 ヱホバの手はこの山にとどまり モアブはその處にてあくたの水のなかにふまるる藁のごとく蹂躙られん一一 彼そのなかにて游者のおよがんとして手をのばすが如く己が手をのばさん 然どヱホバその手の脆計とともにその傲慢を伏たまはん一二 なんぢの垣たかき堅固なる城はヱホバかたぶけたふし 地におとして塵にまじへたまはん

第二六章一 その日ユダの國にてこの歌をうたはん われらに堅固なる邑あり 神すくひをもてその垣その藩となしたまふべし二 なんぢら門をひらきて忠信を守るただしき國民をいれよ三 なんぢは平康にやすきをもて心志かたき者をまもりたまふ 彼はなんぢに依賴めばなり四 なんぢら常盤にヱホバによりたのめ 主ヱホバはとこしへの巖なり五 たかきに居るものを仆し そびえたる城をふせしめ 地にふせしめて塵にまじへ給へり六 かくて足これをふまん 苦しむものは足にて之をふみ 貧しき者はその上をあゆまん七 義きものの道は直からざるなし なんぢ義きものの途を直く平らかにし給ふ八 ヱホバよ審判をおこなひたまふ道にてわれら汝をまちのぞめり われらの心はなんぢの名となんぢの記念の名とをしたふなり九 わがこころ夜なんぢを慕ひたり わがうちなる靈あしたに汝をもとめん そは汝のさばき地におこなはるるとき世にすめるもの正義をまなぶべし一〇 惡者はめぐまるれども公義をまなばず 直き地にありてなほ不義をおこなひヱホバの稜威を見ることをこのまず一一 ヱホバよなんぢの手たかく擧れどもかれら顧みず 然どなんぢが民をすくひたまふ熱心を見ばはぢをいだかん 火なんぢの敵をやきつくすべし一二 ヱホバよ汝はわれらのために平和をまうけたまはん 我儕のおこなひしことは皆なんぢの成たまへるなり一三 ヱホバわれらの神よなんぢにあらぬ他の主ども曩にわれらを治めたり 然どわれらはただ汝によりて汝の名をかたりつげん一四 かれら死たればまたいきず 亡靈となりたればまた復らず なんぢかれらを糺

してこれを滅ぼし その記念の名をさへ悉くうせしめたまへり一五ヱホバよなんぢこの國民をましたまへり此くにびとを増たまへり なんぢは尊ばれたまふ なんぢ地の界をことごとく擴めたまへり一六ヱホバよかれら苦難のときに汝をあふぎのぞめり 彼等なんぢの懲罰にあへるとき切になんぢに禱告せり一七ヱホバよわれらは孕める婦のうむとき近づきてくるしみ その痛みにより て叫ぶがごとく汝のまへに然ありき一八われらは孕みまた苦しみたれどその產るところは風ににたり われら救を地にほどこさず世にすむ者うまれいでざりき一九なんぢの死者はいきわが民の屍はおきん 塵にふすものよ醒てうたうたふべし なんぢの露は草木をうるほす露のごとく地はなきたまをいださん二〇わが民よゆけ なんぢの室にいり汝のうしろの戸をとぢて忿恚のすぎゆくまで暫時かくるべし二一視よヱホバはその處をいでて地にすむものの不義をただしたまはん 地はその上なる血をあらはにして殺されたるものをまた掩はざるべし

第二七章一その日ヱホバは硬く大いなるつよき劍をもて疾走るへびレビヤタン曲りうねる蛇レビヤタンを罰しまた海にある鱷をころし給ふべし二その日如此うたはんうるはしき葡萄園あり之をうたへよ三われヱホバこれを護りをりをり水そそぎ 夜も晝もまもりて害ふものあらざらしめん四我にいきどほりなし願はくは荊棘のわれと戰はんことを 然ばわれすすみ迎へて皆もろともに焚盡さん五寧ろわが力にたよりて我とやはらぎを結べわれと平和をむすぶべし六後にいたらばヤコブは根をはりイスラエルは芽をいだして花さきその實せかいの面にみちん七ヤコブ主にうたるるといへども彼をうちしものの主にうたるるが如きことあらんや ヤコブの殺さるるは彼をころししものの殺さるるが如きことあらんや八汝がヤコブを逐たまへる懲罰は度にかなひぬ 東風のふきし日なんぢあらき風をもてこれをうつし給へり九斯るがゆゑにヤコブの不義はこれによりて潔められん これに因てむすぶ果は罪をのぞくことをせん 彼は祭壇のもろもろの石を碎けたる石灰のごとくになし アシラの像と日の像とをふたたび建ることなからしめん一〇堅固なる邑はあれてすさまじく棄去れたる家のごとく また荒野のごとし 犢このところにて草をはみ此所にてふし且そこなる樹のえだをくらはん一一その枝かるるとき折とらる 婦人きたりてこれを燒ん これは無知の民なるが故に之をつくれる者あはれまず これを形づくれるもの惠まざるべし一二その日なんぢらイスラエルの子輩よ ヱホバは打落したる果をあつむるごとく 大河の流よりエジプトの川にいたるまでなんぢらを一つ一つにあつめたまふべし一三その日大なるラッパ鳴ひびきアツスリヤの地にさすらひたる者 エジプトの地におひやられたる者 きたりてヱルサレムの聖山にてヱホバを拜むべし

第二八章一酔るものなるエフライム人よなんぢらの誇の冠はわざはひなるかな 酒におぼるるものよ肥たる谷の首にある凋ん

とする花のうるはしき飾はわざはひなるかな二みよ主はひとりの力ある强剛者をもち給へり それは雹をまじへたる暴風のごとく壞りそこなふ狂風のごとく大水のあぶれ漲るごとく烈しくかれを地になげうつべし三酔るものなるエフライム人のほこりの冠は足にて踐にじられん四肥たる谷のかしらにある凋んとする花のうるはしきかざりは 夏こぬに熟したる初結の無花果のごとし見るものこれをみて取る手おそしと呑いるるなり五その日萬軍のヱホバその民ののこれる者のために榮のかんむりとなり美しき冠となり給はん六さばきの席にざするものには審判の靈をあたへ軍を門よりおひかへす者には力をあたへ給ふべし七然どかれらも酒によりてよろめき濃酒によりてよろぼひたり祭司と預言者とは濃酒によりてよろめき 酒にのまれ濃酒によりてよろぼひ 而して默示をみるときにもよろめき審判をおこなふときにも躓けり八すべて膳には吐たるものと穢とみちて潔きところなし九かれは誰にをしへて知識をあたへんとするか 誰にしめして音信を曉らせんとするか 乳をたち懷をはなれたる者にするならんか一〇そは誡命にいましめをくはへ誡命にいましめをくはへ 度にのりをくはへ度にのりをくはへ 此にもすこしく彼にもすこしく教ふ一一 このゆゑに神あだし唇と異なる舌とをもてこの民にかたりたまはん一二曩にかれらに言たまひけるは此は安息なり疲困者にやすみをあたへよ 此は安慰なりと されど彼らは聞ことをせざりき一三 斯るがゆゑにヱホバの言かれらにくだりて 誡命にいましめをくはへ誡命にいましめをくはへ 度にのりをくはへ度にのりをくはへ 此にもすこしく彼にも少しくをしへん 之によりて彼等すすみてうしろに仆れそこなはれ罟にかかりて捕へらるべし一四 なんぢら此ヱルサレムにある民ををさむるところの輕慢者よヱホバの言をきけ一五 なんぢらは云り 我ら死と契約をたて陰府とちぎりをむすべり 漲りあふるる禍害のすぐるときわれらに來らじ そはわれら虛僞をもて避所となし欺詐をもて身をかくしたればなりと一六 このゆゑに神ヱホバかくいひ給ふ 視よわれシオンに一つの石をすゑてその基となせり これは試をへたる石たふとき隅石かたくすゑたる石なり これに依賴むものはあわつることなし一七 われ公平を準繩とし正義を錘とす 斯て雹はいつはりにてつくれる避所をのぞきさり水はその匿れたるところに漲りあふれん一八汝らが死とたてし契約はきえうせ陰府とむすべるちぎりは成ことなし されば漲り溢るるわざはひのすぐるとき汝等はこれに踐たふさるべし一九 その過るごとになんぢらを捕へん 朝々にすぎ晝も夜もすぐ この音信をきき わきまふるのみにても慴きをるなり二〇 その狀は床みじかくして身をのぶることあたはず 衾せまくして身をおほふこと能はざるが如し二一 そはヱホバ往昔ペラヂムの山にて起たまひしがごとくにたちギベオンの谷にて忿恚をはなちたまひしが如くにいきどほり 而してその所爲をおこなひ給はん 奇しき所爲なり その工を成たまはん 異

なる工なり二二 この故になんぢら侮るなかれ 恐くはなんぢらの縲絏きびしくならん 我すでに全地のうへにさだまれる敗亡あるよしを主萬軍のヱホバより聞たればなり二三 なんぢら耳をかたぶけてわが聲をきけ懇ろにわが言をきくべし二四 農夫たねをまかんに何で日々たがへし日々その地をすき その土塊をくだくことのみを爲んや二五 もし地の面をたひらかにせばいかで罌粟をまき 馬芹の種をおろし 小麥をうねにうゑ 大麥をさだめたる處にうゑ 粗麥を畔にうゑざらんや二六 斯のごときはかれの神これに智慧をあたへて敎へたまへるなり二七 けしは連枷にてうたず 馬芹はそのうへに車輪をきしらせず 罌粟をうつには杖をもちひ 馬芹をうつには棒をもちふ二八 麥をくだくか否くるまにきしらせ馬にふませて落すことはすれども斷ずしかするにあらず これを碎くことをせざるべし二九 此もまた萬軍のヱホバよりいづ その謀略はくすしくその智慧はすぐれたり

第二九章一 ああアリエルよアリエルよ ああダビデの營をかまへたる邑よ としに年をくはへ 節會まはりきたらば二 われアリエルをなやまし之にかなしみと歎息とあらしめん 彼をアリエルのごとき者となすべし三 われ汝のまはりに營をかまへ保砦をきづきて汝をかこみ櫓をたててなんぢを攻べし四 かくてなんぢは卑くせられ 地にふしてものいひ塵のなかより低聲をいだしてかたらん 汝のこゑは巫女のこゑのごとく地よりいで汝のことばは塵のなかより囀づるがごとし五 然どなんぢのあだの群衆はこまやかなる塵の如く あらぶるものの群衆はふきさらるる粃糠の如くならん 俄にまたたく間にこの事あるべし六 萬軍のヱホバはいかづち 地震 おほごゑ 暴風 つむじかぜ及びやきつくす火の燄をもて臨みたまふべし七 斯てアリエルを攻てたたかふ國々のもろもろ アリエルとその城とをせめたたかひて難ますものは みな夢のごとく夜のまぼろしの如くならん八 饑たるものの食ふことを夢みて醒きたればその心なほ空しきがごとく 渇けるものの飮ことを夢みて醒きたれば疲れかつ頻にのまんことを欲するがごとく シオンの山をせめて戰ふくにぐにの群衆もまた然あらん九 なんぢらためらへ而しておどろかん なんぢら放肆にせよ而して目くらまん かれらは醉りされど酒のゆゑにあらずかれらはよろめけりされど濃酒のゆゑにあらず一〇 そはヱホバ酣睡の靈をなんぢらの上にそそぎ 而してなんぢらの目をとぢなんぢらの面をおほひたまへり その目は預言者そのかほは先知者なり一一 かかるが故にすべての默示はなんぢらには封じたる書のことばのごとくなり 文字しれる人にわたして請これを讀といはんに答へて封じたるがゆゑによむこと能はずといはん一二 また文字しらぬ人にわたして請これをよめといはんにこたへて文字しらざるなりといはん一三 主いひ給はく この民は口をもて我にちかづき口唇をもてわれを敬へども その心はわれに遠かれり そのわれを畏みおそるるは人の誡命によりてをしへられしのみ一四 この故にわれこの民のなかにて再びくすしき

事をおこなはん そのわざは奇しくしていとあやし かれらの中なる智者のちゑはうせ聰明者のさときはかくれん一五 己がはかりごとをヱホバに深くかくさんとする者はわざはひなるかな 暗中にありて事をおこなひていふ 誰かわれを見んや たれか我をしらんやと一六 なんぢらは曲れり いかで陶工をみて土塊のごとくおもふ可んや 造られし者おのれを作れるものをさして我をつくれるにあらずといふをえんや 形づくられたる器はかたちづくりし者をさして智慧なしといふを得んや一七 暫くしてレバノンはかはりて良田となり 良田は林のごとく見ゆるときたるならずや一八 その日聾者はこの書のことばをきき盲者の目はくらきより闇よりみることを得べし一九 謙だるものはヱホバによりてその歡喜をまし 人のなかの貧きものはイスラエルの聖者によりて快樂をうべし二〇 暴るものはたえ 侮慢者はうせ邪曲の機をうかがふ者はことごとく斷滅さるべければなり二一 かれらは訟をきく時まげて人をつみし 邑門にていさむるものを謀略におとしいれ 虛しき語をかまへて義人をしりぞく二二 この故にむかしアブラハムを贖ひたまひしヱホバはヤコブの家につきて如此いひたまふ ヤコブは今より恥をかうむらず その面はいまより色をうしなはず二三 かれの子孫はその中にわがおこなふ手のわざをみん その時わが名を聖としヤコブの聖者を聖としてイスラエルの神をおそるべし二四 心あやまれるものも知識をえ つぶやけるものも教誨をまなばん

第三〇章一 ヱホバのたまはく 悖るる子輩はわざはひなるかな かれら謀略をすれども我によりてせず 盟をむすべどもわが靈にしたがはず ますます罪につみをくはへん二 かれらわが口にとはずしてエジプトに下りゆきパロの力をかりておのれを強くしエジプトの蔭によらん三 パロのちからは反てなんぢらの恥となりエジプトの蔭によるは反てなんぢらの辱かしめとなるべし四 かれの君たちはゾアンにあり かれの使者たちはハネスにきたれり五 かれらは皆おのれを益することあたはざる民によりて恥をいだくかの民はたすけとならず益とならず かへりて恥となり謗となれり六 南のかたの牲畜にかかる重負のよげん 曰く／かれらその財貨を若き驢馬のかたにおはせ その寶物を駱駝の背におはせて 牝獅 牡獅 まむし及びとびかける蛇のいづる苦しみと艱難との國をすぎて 己をえきすること能はざる民にゆかん七 そのエジプトの助はいたづらにして虛し このゆゑに我はこれを休みをるラハブとよべり八 いま往てこれをその前にて牌にしるし書にのせ 後の世に傳へてとこしへに證とすべし九 これは悖れる民いつはりをいふ子輩ヱホバの律法をきくことをせざる子輩なり一〇 かれら見るものに對ひていふ 見るなかれと 默示をうる者にむかひていふ 直きことを示すなかれ 滑かなることをかたれ 虛僞をしめせ一一 なんぢら大道をさり逕をはなれ われらが前にイスラエルの聖者をあらしむるなかれと一二 此によりてイスラエルの聖者かくいひ給ふ なんぢらこの言をあなどり

暴虐と邪曲とをたのみて之にたよれり一三 斯るがゆゑにこの不義なんぢらには凸出ておちんとするたかき垣のさけたるところのごとくその破壞にはかに暫しが間にきたらんと一四 主これを破りあだかも陶 工の瓶をくだきやぶるがごとくして惜みたまはず その砕のなかに爐より火をとり池より水をくむほどの一片だに見出すことなからん一五 主ヱホバ、イスラエルの聖者かくいひたまへり なんぢら立かへりて靜かにせば救をえ 平穩にして依頼まば力をうべしと 然どなんぢらこの事をこのまざりき一六 なんぢら反ていへり 否われら馬にのりて逃走らんと この故になんぢら逃走らん 又いへりわれら疾きものに乘んと この故になんぢらを追もの疾かるべし一七 ひとり叱咤すれば千人にげはしり 五人しつたすればなんぢら逃走りて その遺るものは僅かに山 嶺にある杆のごとく 岡のうへにある旗のごとくならん一八 ヱホバこれにより俟てのち恩惠を汝等にほどこし これにより上りてのちなんぢらを憐れみたまはん ヱホバは公平の神にましませり 凡てこれを俟望むものは福ひなり一九 シオンにをりヱルサレムにをる民よ なんぢは再びなくことあらじ そのよばはる聲に應じて必ずなんぢに惠をほどこしたまはん 主ききたまふとき直にこたへたまふべし二〇 主はなんぢらになやみの糧とくるしみの水とをあたへ給はん なんぢを敎るもの再びかくれじ 汝の目はその敎るものを恒にみるべし二一 なんぢ右にゆくも左にゆくもその耳に これは道なりこれを歩むべしと後邊にてかたるをきかん二二 又なんぢら白銀をおほひし刻める像こがねをはりし鑄たる像をけがれとし 穢 物のごとく打棄ていはん去れと二三 なんぢが地にまく種に主は雨をあたへ また地になりいづる糧をたまふ その土 産こえて豐かならん その日なんぢの家畜はひろき牧場に草をはむべし二四 地をたがへす牛と驢馬とは團扇にてあふぎ箕にてとほし鹽をくはへたる飼料をくらはん二五 大なる殺戮の日やぐらのたふるる時もろもろのたかき山もろもろのそびえたる嶺に河とみづの流とあるべし二六 かくてヱホバその民のきずをつつみ そのうたれたる創痍をいやしたまふ日には月のひかりは日の光のごとく日のひかりは七倍をくはへて七の日のひかりの如くならん二七 視よヱホバの名はとほき所よりきたり そのはげしき怒はもえあがる焰のごとく その唇はいきどほりにてみち その舌はやきつくす火のごとく二八 その氣息はみなぎりて項にまでいたる流のごとし 且ほろびの篩にてもろもろの國をふるひ又まどはす轡をもろもろの民の口におきたまはん二九 なんぢらは歌うたはん節會をまもる夜のごとしなんぢらは心によろこばん笛をならしヱホバの山にきたりイスラエルの磐につくときの如し三〇 ヱホバはその稜威のこゑをきかしめ 烈しき怒をはなちて燒つくす火のほのほと暴風と大雨と雹とをもて その臂のくだることを示したまはん三一 ヱホバのこゑによりてアツスリヤ人はくじけん 主はこれを笞にてうち給ふべし三二 ヱホバの豫じめさだめたまへる杖をアツスリ

ヤのうへにくはへたまふごとに 鼓をならし琴をひかん 主はうごきふるふ戰闘をもてかれらとたたかひ給ふべし三 トペテは往古よりまうけられ また王のために備へられたり これを深くしこれを廣くしここに火とおほくの薪とをつみおきたり ヱホバの氣息これを硫黄のながれのごとくに燃さん

第三一章一 助をえんとてエジプトにくだり馬によりたのむものは禍ひなるかな 戰車おほきが故にこれにたのみ騎兵はなはだ強きがゆゑに之にたのむ されどイスラエルの聖者をあふがずヱホバを求ることをせざるなり二 然はあれどもヱホバもまた智慧あるべし かならず禍害をくだしてその言をひるがへしたまはず 起てあしきものの家をせめ また不義を行ふ者の助をせめ給はん三 かのエジプト人は人にして神にあらずその馬は肉にして靈にあらず ヱホバその手をのばしたまはば助くるものも躓き たすけらるる者もたふれてみなひとしく亡びん四 ヱホバ如此われにいひたまふ 獅のほえ壯獅の獲物をつかみてほえたけれるとき 許多のひつじかひ相呼つどひてむかひゆくともその聲によりて挫けずその喧譁しきによりて臆せざるごとく萬軍のヱホバくだりてシオンの山およびその岡にて戰ひ給ふべし五 鳥の雛をまもるがごとく萬軍のヱホバはヱルサレムをまもりたまはん これを護りてこれをすくひ踰越てこれを援けたまはん六 イスラエルの子輩よなんぢらさきには甚だしく主にそむけり今たちかへるべし七 なんぢらおのが手につくりて罪ををかしし白銀のぐうざう黄金の偶像をその日おのおのなげすてん八 爰にアッスリヤびとは劍にてたふれん されど人のつるぎにあらず 劍かれらをほろぼさん されど世の人のつるぎにあらずかれら劍のまへより逃はしりその壯きものは役丁とならん九 かれらの磐はおそれによりて逝去り その君たちは旗をみてくじけん こはヱホバの御言なり ヱホバの火はシオンにありヱホバの爐はヱルサレムにあり

第三二章一 茲にひとりの王あり 正義をもて統治め その君たちは公平をもて宰さどらん二 また人ありて風のさけどころ暴雨ののがれどころとなり 旱ける地にある水のながれのごとく 倦つかれたる地にある大なる岩陰の如くならん三 見るものの目はくらまず 聞ものの耳はかたぶけきくをうべし四 躁がしきものの心はさとりて知識をえ 吃者の舌はすみやけくあざやかに語るをうべし五 愚かなる者はふたたび尊貴とよばるることなく 狡猾なる者はふたたび大人とよばるることなかるべし六 そは愚なるものは愚なることをかたり その心に不義をかもし邪曲をおこなひ ヱホバにむかひて妄なることをかたり 饑たる者のこころを空しくし渇けるものの飲料をつきはてしむ七 狡猾なるものの用ゐる器はあしし 彼あしき企圖をまうけ虚僞のことばをもて苦しむ者をそこなひ 乏しき者のかたること正理なるも尚これを害へり八 たふとき人はたふとき謀略をまうけ恒にたふとき事をおこなふ九 安逸にをる婦等よおきてわが聲をきけ 思ひ煩ひな

き女等よわが言に耳を傾けよ一〇思煩ひなきをんなたちよ一年あまりの日をすぎて摺きあわてん そは葡萄の収穫むなしく果をさむる期きたるまじければなり一一やすらかにをる婦等よふるひおそれよ おもひわづらひなき者よをののきあわてよ 衣をぬぎ裸體になりて腰に麁服をまとへ一二かれら良田のため實りゆたかなる葡萄の樹のために胸をうたん一三棘と荊わが民の地にはえ 樂みの邑なるよろこびの家々にもはえん一四そは殿はすてられ にぎはひたる邑はあれすたれ オペルと櫓とはとこしへに洞穴となり 野の驢馬のたのしむところ羊のむれの草はむところとなるべし一五されど遂には靈うへより我儕にそそぎて 荒野はよき田となり 良田は林のごとく見ゆるとききたらん一六そのとき公平はあれのにすみ 正義はよき田にをらん一七かくて正義のいさをは平和 せいぎのむすぶ果はとこしへの平隱とやすきなり一八わが民はへいわの家にをり 思ひわづらひなき住所にをり 安らかなる休息所にをらん一九されどまづ雹ふりて林くだけ 邑もことごとくたふるべし二〇なんぢらもろもろの水のほとりに種をおろし 牛および驢馬の足をはなちおく者はさいはひなり

第三三章 一 禍ひなるかななんぢ害はれざるに人をそこなひ 欺かれざるに人をあざむけり なんぢが害ふこと終らば汝そこなはれ なんぢが欺くことはてなば汝あざむかるべし二 ヱホバよわれらを恵み給へ われらなんぢを俟望めり なんぢ朝ごとにわれらの臂となり また患難のときにわれらの救となりたまへ三 なりとどろく聲によりてもろもろの民にげはしり なんぢの起たまふによりてもろもろの國はちりうせぬ四 蟊賊のものをはみつくすがごとく人なんぢらの財をとり盡さん また蝗のとびつどふがごとく人なんぢらの財にとびつどふべし五 ヱホバは最たかし高處にすみたまふなり ヱホバはシオンに公正と正義とを充せたまひたり六 なんぢの代はかたくたち 救と智恵と知識とはゆたかにあらん ヱホバをおそるるは國の寶なり七 視よかれらの勇士は外にありてさけび 和をもとむる使者はいたく哭く八 大路あれすたれて旅客たえ 敵は契約をやぶり諸邑をなみし人をもののかずとせず九 地はうれへおとろへ レバノンは恥らひて枯れシヤロンはアラバの如くなり バシヤンとカルメルとはその葉をおとす一〇 ヱホバ言給はく われ今おきん今たたん 今みづからを高くせん一一 なんぢらの孕むところは粃糠のごとく なんぢらの生ところは藁のごとし なんぢらの氣息は火となりてなんぢらを食ひつくさん一二 もろもろの民はやかれて灰のごとくなり荊のきられて火にもやされたるが如くならん一三 なんぢら遠にあるものよ わが行ひしことをきけ なんぢら近にあるものよ わが能力をしれ一四 シオンの罪人はおそる 戰慄はよこしまなる者にのぞめり われらの中たれか焼つくす火に止ることを得んや我儕のうち誰かとこしへに焼るなかに止るをえんや一五 義をおこなふもの直をかたるもの虐げてえたる利をいとひすつるもの

手をふりて賄賂をとらざるもの 耳をふさぎて血をながす謀略をきかざるもの 目をとぢて惡をみざる者一六かかる人はたかき處にすみ かたき磐はその櫓となり その糧はあたへられその水はともしきことなからん一七なんぢの目はうるはしき狀なる王を見 とほくひろき國をみるべし一八 汝の心はかの懼しかりしことどもを思ひいでん 會計せし者はいづくにありや 貢をはかりし者はいづくにありや 櫓をかぞへし者はいづくにありや一九 汝ふたたび暴民をみざるべし かの民の言語はふかくして悟りがたくその舌は異にして解がたし二〇われらの節會の邑シオンを見よ なんぢの目はやすらかなる居所となれるヱルサレムを見ん ヱルサレムはうつさるることなき幕屋にして その杙はとこしへにぬかれず その繩は一すぢだに斷れざるなり二一 ヱホバ我らとともに彼處にいまして稜威をあらはし給はん 斯てそのところはひろき川ひろき流あるところとなりて その中には漕舟もいらず巨艦もすぐることなかるべし二二 ヱホバはわれらを鞫きたまふもの ヱホバはわれらに律法をたてたまひし者 ヱホバはわれらの王にましまして我儕をすくひ給ふべければなり二三 なんぢの船纜はとけたり その桅杆のもとを結びかたむることあたはず 帆をあぐることあたはず その時おほくの財をわかち跛者までも掠物あらん二四 かしこに住るものの中われ病りといふ者なし彼處にをる民の咎はゆるされん

第三四章一 もろもろの國よちかづきてきけ もろもろの民よ耳をかたぶけよ 地と地にみつるもの世界とせかいより出るすべての者きけ二 ヱホバはよろづの國にむかひて怒り そのよろづの軍にむかひて忿恚り かれらをことごとく滅し かれらを屠らしめたまふ三 かれらは殺されて拋棄られ その屍の臭氣たちのぼり山はその血にて融されん四 天の萬象はきえうせ もろもろの天は書卷のごとくにまかれん その萬象のおつるは葡萄の葉のおつるがごとく無花果のかれたる葉のおつるが如くならん五 わが劍は天にてうるほひたり 視よエドムの上にくだり滅亡に定めたる民のうへにくだりて之をさばかん六 ヱホバの劍は血にてみち脂にてこえ小羊と山羊との血 牡羊の腎のあぶらにて肥ゆ ヱホバはボズラにて牲のけものをころしエドムの地にて大にほふることをなし給へり七 その屠場には野牛 こうし 牡牛もともに下るそのくには血にてうるほされ その塵はあぶらにて肥さるべし八 こはヱホバの仇をかへしたまふ日にしてシオンの訟のために報をなしたまふ年なり九 エドムのもろもろの河はかはりて樹脂となり その塵はかはりて硫磺となり その土はかはりてもゆる樹脂となり一〇 晝も夜もきえずその烟つくる期なく上騰らん かくて世々あれすたれ永遠までもその所をすぐる者なかるべし一一 鶚と刺猬とそこを己がものとなし鷺と鴉とそこにすまん ヱホバそのうへに亂をおこす繩をはり空虚をきたらする錘をさげ給ふべし一二 國をつぐべき者をたてんとて貴 者ふたたび呼集ることをせじ もろもろの諸侯はみな失てなくなるべし一三

その殿にはことごとく荊はえ　城にはことごとく刺草と薊とはえ　野犬のすみか駝鳥の場とならん一四　野のけものと豺狼とここにあひ　牡山羊その友をよび　鴟鴞もまた宿りてここを安所とせん一五　蛇ここに穴をつくり卵をうみてこれを孚しおのれの影の下に子をあつむ　鳶もまたその偶とともに此處にあつまらん一六　なんぢらヱホバの書をつまびらかにたづねて讀べし　これらのもの一つも缺ることなく又ひとつもその偶をかくものあらじ　そはヱホバの口このことを命じ　その靈これらを集めたまふべければなり一七　ヱホバこれらのものに鬮をひかせ手づから繩をもて量り　この地をわけあたへて永くかれらに保たしめ　世々にいたるまでここに住しめたまはん

第三五章一　荒野とうるほひなき地とはたのしみ　沙漠はよろこびて番紅の花のごとくに咲かがやかん二　盛に咲かがやきてよろこび且よろこび且うたひ　レバノンの榮をえカルメルおよびシャロンの美しきを得ん　かれらはヱホバのさかえを見われらの神のうるはしきを見るべし三　なんぢら萎たる手をつよくし弱りたる膝をすこやかにせよ四　心さわがしきものに對ていへ　なんぢら雄々しかれ懼るるなかれ　なんぢらの神をみよ　刑罰きたり神の報きたらん　神きたりてなんぢらを救ひたまふべし五　そのとき瞽者の目はひらけ　聾者の耳はあくことを得べし六　そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり　唖者の舌はうたうたはん　そは荒野に水わきいで沙漠に川ながるべければなり七　やけたる沙は池となりうるほひなき地はみづの源となり　野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあふ所となるべし八　かしこに大路ありそのみちは聖道ととなへられん　穢れたるものはこれを過ることあたはず　ただ主の民のために備へらる　これを歩むものはおろかなりとも迷ふことなし九　かしこに獅をらず　あらき獸もその路にのぼることなし　然ばそこにて之にあふ事なかるべし　ただ贖はれたる者のみそこを歩まん一〇　ヱホバに贖ひすくはれし者うたうたひつつ歸てシオンにきたり　その首にとこしへの歡喜をいただき樂とよろこびとをえん　而して悲哀となげきとは逃さるべし

第三六章一　ヒゼキヤ王の十四年にアッスリヤの王セナケリブ上りきたりてユダのもろもろの堅固なる邑をせめとれり二　アッスリヤ王ラキシよりラブシヤケをヱルサレムに遣はし大軍をひきゐてヒゼキヤ王のもとに往しむ　ラブシヤケ漂工の野のおほぢの傍なる上の池の樋にそひてたてり三　この時ヒゼキヤの子なる家司エリアキム　書記セブナ、アサフの子なる史官ヨア出てこれを迎ふ四　ラブシヤケかれらにいひけるは　なんぢら今ヒゼキヤにいへ　大王アッスリヤの王かくいへり　なんぢの恃とするその恃むところは何なるか五　我いふ　なんぢが說ところの軍のはかりごととその能力とはただ口唇のことばのみ　今なんぢ誰によりたのみて我にさかふことをなすや六　視よなんぢエジプトに依賴めりこれ傷める葦の杖によりたのめるがごとし　もし人これに倚もたれなばその手をつきさされん　エジプト王パロがすべて己

によりたのむものに對するは斯のごとし七 汝われらはわれらの神ヱホバに依頼めりと我にいはんかそは曩にヒゼキヤが高きところと祭壇とをみな取去てユダとヱルサレムとにむかひ汝等ここなる一つの祭壇のまへにて拜すべしといへる夫ならずや八 いま請わが君アッスリヤ王に賭をせよ われ汝に二千の馬を與ふべければ汝よりこれに乘ものをいだせ 果して出しうべしや九 然ばいかで我君のいとちひさき僕の長一人をだに退くることを得んや なんぞエジプトによりたのみて戰車と騎兵とをえんとするや一〇 いま我のぼりきたりてこの國をせめほろぼすはヱホバの旨にあらざるべけんや ヱホバわれにいひたまはく のぼりゆきてこの國をせめほろぼせと一一 爰にエリアキムとセブナとヨアと共にラブシヤケにいひけるは請スリアの方言にて僕輩にかたれ我儕これをさとりうるなり石垣のうへなる民のきくところにてはユダヤの方言をもてわれらに語るなかれ一二 ラブシヤケいひけるは わが君はこれらのことをなんぢの君となんぢとにのみ語らんために我をつかはししならんや なんぢらと共におのが糞をくらひおのが溺をのまんとする石垣のうへに坐する人々にも我をつかはししならずや一三 斯てラブシヤケたちてユダヤの方言もて大聲によばはりいひけるは なんぢら大王アッスリヤ王のことばをきくべし一四 王かくのたまへり なんぢらヒゼキヤに惑はさるるなかれ 彼なんぢらを救ふことあたはず一五 ヒゼキヤがなんぢらをヱホバに賴しめんとする言にしたがふなかれ 彼いへらく ヱホバかならず我儕をすくひこの邑はアッスリヤ王の手にわたさるることなしと一六 ヒゼキヤに聽從ふなかれ アッスリヤ王かくのたまへり なんぢらわれと親和をなし出できたりて我にくだれ おのおのその葡萄とその無花果とをくらひ おのおのその井の水をのむことを得べし一七 遂には我きたりて汝等をほかの國にたづさへゆかん その國はなんぢの國のごとき國にして 穀物 ぶだう酒 パンおよび葡萄園あり一八 おそらくはヒゼキヤなんぢらに說てヱホバわれらを救ふべしといはん 然どももろもろの國の神等のなかにその國をアッスリヤ王の手より救へる者ありしや一九 ハマテ、アルバデの神等いづこにありや セバルワイムの神等いづこにありや 又わが手よりサマリヤを救出し神ありや二〇 これらの國のもろもろの神のなかに誰かその國をわが手よりすくひいだしし者ありや さればヱホバも何でわが手よりヱルサレムを救ひいだし得んと二一 如此ありければ民は默して一言をもこたへざりき そは之にこたふるなかれとの王のおほせありつればなり二二 そのときヒルキヤの子なる家司エリアキム書記セブナおよびアサフの子なる史官ヨアころもを裂てヒゼキヤにゆき之にラブシヤケの言をつげたり

第三七章一 ヒゼキヤ王これをききてその衣をさき麁衣をまとひてヱホバの家にゆき二 家司エリアキム書記セブナおよび祭司のなかの長老等をして皆あらたへをまとはせてアモツの子

預言者イザヤのもとにゆかしむ三かれらイザヤにいひけるはヒゼキヤ如此いへり けふは患難と責と辱かしめの日なり そは子うまれんとして之をうみいだすの力なし四なんぢの神ヱホバあるひはラブシヤケがもろもろの言をききたまはん 彼はその君アツスリヤ王につかはされて活る神をそしれり なんぢの神ヱホバその言をききて或はせめたまふならん されば請なんぢこの遺れるもののために祈禱をささげよと五かくてヒゼキヤ王の諸僕イザヤにいたる六イザヤかれらに言けるは なんぢらの君につげよ ヱホバ斯いひたまへり曰くアツスリヤ王のしもべら我をののしりけがせり なんぢらその聞しことばによりて懼るるなかれ七視よわれかれが意をうごかすべければ 一つの風聲をききておのが國にかへらん かれをその國にて劍にたふれしむべし八爰にラブシヤケはアツスリヤ王がラキシを離れさりしときききて歸りけるとき際しも王はリブナを攻をれり九 このときエテオピアの王テルハカの事についてきけり云く かれいでて汝とたたかふべしと このことをききて使者をヒゼキヤに遣していふ一〇なんぢらユダの王ヒゼキヤにつげて如此いへ なんぢが賴める神なんぢを欺きてヱルサレムはアツスリヤ王の手にわたされじといふを聽ことなかれ一一 視よアツスリヤの王等もろもろの國にいかなることをおこなひ如何してこれを悉くほろぼししかを汝きさしならん されば汝すくはるることを得んや一二 わが先祖たちの滅ぼししゴザン、ハラン、レゼフおよびテラサルなるエデンの族など此等のくにぐにの神はその國をすくひたりしや一三ハマテの王アルバデの王セバルワイムの都の王ヘナの王およびイワの王はいづこにありやと一四ヒゼキヤつかひの手より書をうけて之を讀り しかしてヒゼキヤ、ヱホバの宮にのぼりゆきヱホバの前にこのふみを展ぶ一五ヒゼキヤ、ヱホバに祈ていひけるは一六ケルビムの上に坐したまふ萬軍のヱホバ、イスラエルの神よ ただ汝のみ地のうへなるよろづの國の神なり なんぢは天地をつくりたまへり一七ヱホバよ耳をかたむけて聽たまへ ヱホバよ目をひらきて視たまへ セナケリブ使者して活る神をそしらしめし言をことごとくききたまへ一八ヱホバよ實にアツスリヤの王等はもろもろの國民とその地とをあらし毀ち一九かれらの神たちを火になげいれたり これらのものは神にあらず人の手の工にして あるひは木あるひは石なり 斯るがゆゑに滅ぼされたり二〇されば われらの神ヱホバよ 今われらをアツスリヤ王の手より救ひいだして 地のもろもろの國にただ汝のみヱホバなることを知しめたまへ二一 ここにアモツの子イザヤ人をつかはしてヒゼキヤにいはせけるは イスラエルの神ヱホバかくいひたまふ 汝はアツスリヤ王セナケリブのことにつきて我にいのれり二二 ヱホバが彼のことにつきて語り給へるみことばは是なり いはくシオンの處女はなんぢを侮りなんぢをあざけりヱルサレムの女子はなんぢの背後より頭をふれり二三 汝がそしりかつ罵れるものは誰ぞ なんぢが聲をあげ目をたかく向てさ

からひたるものはたれぞ イスラエルの聖者ならずや 二四 なんぢその使者によりて主をそしりていふ 我はおほくの戰車をひきゐて山々のいただきに登りレバノンの奥にまでいりぬ 我はたけたかき香柏とうるはしき松樹とをきり またその境なるたかき處にゆき腴たる地の林にゆかん 二五 我は井をほりて水をのみたり われは足跖をもてエジプトの河々をからさんと 二六 なんぢ聞ずや これらのことはわが昔よりなす所 いにしへの日よりさだめし所なり 今なんぢがこの堅城をこぼちあらして石堆となすも亦わがきたらしし所なり 二七 そのなかの民はちから弱くをののきて恥をいだき 野草のごとく青き菜のごとく屋蓋の草のごとく未だそだたざる苗のごとし 二八 我なんぢが居ること出入すること又われにむかひて怒りさけべることをしる 二九 なんぢが我にむかひて怒りさけべると汝がほこれる言とわが耳にいりたれば我なんぢの鼻に環をはめ汝のくちびるに鑣をつけて汝がきたれる路よりかへらしめん 三〇 ヒゼキヤよ我がなんぢにたまふ徴はこれなり なんぢら今年は落穂より生たるものを食ひ明年は蘖生より出たるものを食はん 三年にあたりては種ことをなし收ことをなし 葡萄ぞのを作りてその果を食ふべし 三一 ユダの家ののがれて遺れる者はふたたび下は根をはり上は果を結ぶべし 三二 そは遺るものはヱルサレムよりいで脱るるものはシオンの山よりいづるなり 萬軍のヱホバの熱心これを成たまふべし 三三 この故にヱホバ、アツスリヤの王については如此いひたまふ 彼はこの城にいらず ここに箭をはなたず盾を城のまへにならべず 壘をきづきて攻ることなし 三四 かれはそのきたりし道よりかへりてこの城にいらず 三五 我おのれの故によりて僕ダビデの故によりて この城をまもり この城をすくはん これヱホバ宣給るなり 三六 ヱホバの使者いできたりアツスリヤの陣營のなかにて十八萬五千人をうちころせり 早晨におきいでて見ればみな死てかばねとなれり 三七 アツスリヤ王セナケリブ起てかへりゆきニネベにとどまる 三八 一日おのが神ニスロクのみやにて禮拜をなし居しにその子アデランメレクとシヤレゼルと劍をもて彼をころし 而してアララテの地ににげゆけり かれが子エサルハドンつぎて王となりぬ

第三八章 一 そのころヒゼキヤやみて死んとせしにアモツの子預言者イザヤきたりて彼にいふ ヱホバ如此いひたまはく なんぢ家に遺言をとどめよ 汝しにて活ることあたはざればなり 二 爰にヒゼキヤ面を壁にむけてヱホバに祈りいひけるは 三 ああヱホバよ 願くはわがなんぢの前に眞實をもて一心をもてあゆみなんぢの目によきことを行ひたるをおもひいでたまへ 斯てヒゼキヤ甚くなきぬ 四 ヱホバの言イザヤにのぞみて曰く 五 なんぢ往てヒゼキヤにいへ なんぢの祖ダビデの神ヱホバかくいひ給はく 我なんぢの禱告をききなんぢの涙をみたり 我なんぢの齢を十五年ましくはへ 六 且なんぢとこの城を救ひてアツスリヤわうの手をのがれしめん 又われこの城をまもるべし 七 ヱホバ語

りたまひたる此事を成たまふ證にこの徴をなんぢに賜ふ八視よ われアハズの日晷にすすみたる日影を十度しりぞかしめんといひければ乃ちひばかりにすすみたる日影十度しりぞきぬ九ユダの王ヒゼキヤ病にかかりてその病のいえしのち記し書は左のごとし一〇我いへり わが齢ひの全盛のとき陰府の門にいりわが餘 年をうしなはんと一一我いへり われ再びヱホバを見 奉ることあらじ再びいけるものの地にてヱホバを見 奉ることあらじ われは無ものの中にいりてふたたび人を見ることあらじ一二わが住所はうつされて牧人の幕屋をとりさるごとくに我をはなる わがいのちは織工の布をまきをはりて機より翦はなすごとくならん なんぢ朝 夕のあひだに我をたえしめたまはん一三われは天明におよぶまで己をおさへてしづめたり 主は獅のごとくに我もろもろの骨を砕きたまふ なんぢ朝 夕の間にわれを絶しめたまはん一四 われは燕のごとく鶴のごとくに哀みなき鳩のごとくにうめき わが眼はうへを視ておとろふ ヱホバよわれは迫りくるしめらる 願くはわが中保となりたまへ一五主はわれとものいひ且そのごとくみづから成たまへり われ何をいふべきか わが世にある間わが靈魂の苦しめる故によりて愼みてゆかん一六主よこれらの事によりて人は活るなり わが靈魂のいのちも全くこれらの事によるなり 願くはわれを醫しわれを活したまへ一七視よわれに甚しき艱苦をあたへたまへるは我に平安をえしめんがためなり 汝わがたましひを愛して滅亡の穴をまぬかれしめ給へり そはわが罪をことごとく背後にすてたまへり一八陰府はなんぢに感謝せず 死はなんぢを讃美せず 墓にくだる者はなんぢの誠實をのぞまず一九唯いけるもののみ活るものこそ汝にかんしやするなれ わが今日かんしやするが如し 父はなんぢの誠實をその子にしらしめん二〇ヱホバ我を救ひたまはん われら世にあらんかぎりヱホバのいへにて琴をひきわが歌をうたはん二一 イザヤいへらく無花果の一團をとりきたりて腫物のうへにつけよ 王かならずいえん二二ヒゼキヤも亦いへらく わがヱホバの家にのぼることにつきては何の兆あらんか

第三九章一 そのころバラダンの子バビロン王メロダクバラダン、ヒゼキヤが病をうれへて愈しことをききければ書と禮物とをおくれり二ヒゼキヤその使者のきたるによりて喜びこれに財物 金銀 香料 たふとき油をおさめたる家およびすべての軍器をおさめたる家また庫のなかなる物をことごとく見す おほよそヒゼキヤのいへの裏にあるものと全國のうちにあるものと見せざるものは一もあらざりき三ここに預言者イザヤ、ヒゼキヤ王のもとに來りていひけるは この人々はなにをいひしや何處よりなんぢのもとに來りしや ヒゼキヤ曰けるは かれらはとほき國よりバビロンより我にきたれり四イザヤいふ 彼等はなんぢの家にてなにを見たりしや ヒゼキヤ答ふ かれらはわが家にあるものを皆みたり又わが庫のなかにあるものは一つをもかれらに見せざるものなかりき五 イザヤ、ヒゼキヤにいふ なんぢ

萬軍のヱホバの言をきけ六みよ日きたらん なんぢの家のものなんぢの列祖がけふまで蓄へたるものは皆バビロンにたづさへゆかれて遺るもの一もなかるべし是はヱホバのみことばなり七なんぢの身より生れいでん者もとらはれ寺人とせられてバビロン王の宮のうちにあらん八ヒゼキヤ、イザヤにいひけるは 汝がかたるヱホバのみことばは善し また云 わが世にあるほどは太平と眞理とあるべしと

第四〇章一 なんぢらの神いひたまはく なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ二 懇ろにヱルサレムに語り之によばはり告よ その服役の期すでに終り その咎すでに赦されたり そのもろもろの罪によりてヱホバの手よりうけしところは倍したりと三 よばはるものの聲きこゆ云く なんぢら野にてヱホバの途をそなへ沙漠にわれらの神の大路をなほくせよと四 もろもろの谷はたかくもろもろの山と岡とはひくくせられ 曲りたるはなほく崎嶇はたひらかにせらるべし五 斯てヱホバの榮光あらはれ人みな共にこれを見ん こはヱホバの口より語りたまへるなり六 聲きこゆ云く よばはれ答へていふ何とよばはるべきか いはく人はみな草なり その榮華はすべて野の花のごとし七 草はかれ花はしぼむヱホバの息そのうへに吹ければなり 實に民はくさなり八 草はかれ花はしぼむ 然どわれらの神のことばは永遠にたたん九 よき音信をシオンにつたふる者よ なんぢ高山にのぼれ 嘉おとづれをヱルサレムにつたふる者よ なんぢ強く聲をあげよ こゑを揚ておそるるなかれ ユダのもろもろの邑につげよ なんぢらの神きたり給へりと一〇 みよ主ヱホバ能力をもちて來りたまはん その臂は統治めたまはん 賞賜はその手にあり はたらきの値はその前にあり一一 主は牧者のごとくその群をやしなひ その臂にて小羊をいだき之をその懐中にいれてたづさへ乳をふくまする者をやはらかに導きたまはん一二 たれか掌心をもてもろもろの水をはかり指をのばして天をはかり また地の塵を量器にもり天秤をもてもろもろの山をはかり權衡をもてもろもろの岡をはかりしや一三 誰かヱホバの靈をみちびきその議士となりて教しや一四 ヱホバは誰とともに議りたまひしや たれかヱホバを聰くしこれに公平の道をまなばせ知識をあたへ明通のみちを示したりしや一五 視よもろもろの國民は桶のひとしづくのごとく 權衡のちりのごとくに思ひたまふ島々はたちのぼる塵埃のごとし一六 レバノンは柴にたらずそのなかの獸は燔祭にたらず一七 ヱホバの前にはもろもろの國民みななきにひとし ヱホバはかれらを無もののごとく空きもののごとく思ひたまふ一八 然ばなんぢら誰をもて神にくらべ いかなる肖像をもて神にたぐふか一九 偶像はたくみ鑄てつくり 金工こがねをもて之をおほひ白銀をもて之がために鏈をつくれり二〇 かかる寶物をそなへえざる貧しきものは朽まじき木をえらみ良匠をもとめてうごくことなき像をたたしむ二一 なんぢら知ざるか なんぢら聞ざるか 始よりなんぢらに傳へざりしか なんぢらは地の基をおきしときよ

り悟らざりしか二二ヱホバは地のはるか上にすわり地にすむものを蝗のごとく視たまふ おほぞらを薄絹のごとく布き これを住ふべき幕屋のごとくはり給ふ二三又もろもろの君をなくならしめ地の審士をむなしくせしむ二四かれらは僅かに植られ僅かに播れ その幹わづかに地に根ざししに 神そのうへを吹たまへば即ちかれて藁のごとく暴風にまきさらるべし二五聖者いひ給はく さらばなんぢら誰をもて我にくらべ我にたぐふか二六なんぢら眼をあげて高をみよ たれか此等のものを創造せしやをおもへ 主は數をしらべてその萬象をひきいだしおのおのの名をよびたまふ 主のいきほひ大なり その力のつよきがゆゑに一も缺ることなし二七ヤコブよなんぢ何故にわが途はヱホバにかくれたりといふや イスラエルよ汝なにゆゑにわが訟はわが神の前をすぎされりとかたるや二八汝しらざるか聞ざるかヱホバはとこしへの神地のはての創造者にして倦たまふことなく また疲れたまふことなくその聰明こと測りがたし二九疲れたるものには力をあたへ勢力なきものには強きをまし加へたまふ三〇年少きものもつかれてうみ壯んなるものも衰へおとろふ三一然はあれどヱホバを俟望むものは新なる力をえん また鷲のごとく翼をはりてのぼらん 走れどもつかれず歩めども倦ざるべし

第四一章一もろもろの島よわがまへに默せ もろもろの民よあらたなる力をえて近づききたれ 而して語れ われら寄集ひて諭らはん二たれか東より人をおこししや われは公義をもて之をわが足下に召し その前にもろもろの國を服せしめ また之にもろもろの王ををさめしめ かれらの劍をちりのごとくかれらの弓をふきさらるる藁のごとくならしむ三斯て彼はこれらのものを追その足いまだ行ざる道をやすらかに過ゆけり四このことは誰がおこなひしや たが成しや たが太初より世々の人をよびいだししや われヱホバなり 我ははじめなり終なり五もろもろの島はこれを見ておそれ地の極はをののきて寄集ひきたれり六かれら互にその隣をたすけ その兄弟にいひけるは なんぢ雄々しかれ七木匠は鐵工をはげまし鎚をもて平らぐるものは鐵碪をうつものを勵ましていふ 接合せいとよしと また釘をもて堅うして搖くことなからしむ八然どわが僕 イスラエルよ わが選めるヤコブわが友アブラハムの裔よ九われ地のはてより汝をたづさへきたり地のはしよりなんぢを召 かくて汝にいへり 汝はわが僕われ汝をえらみて棄ざりきと一〇おそるるなかれ 我なんぢとともにあり 驚くなかれ我なんぢの神なり われなんぢを強くせん 誠になんぢを助けん 誠にわがただしき右手なんぢを支へん一一視よなんぢにむかひて怒るものはみな恥をえて惶てふためかん なんぢと爭ふものは無もののごとくなりて滅亡せん一二なんぢ尋ぬるとも汝とたたかふ人々にあはざるべし 汝といくさする者はなきものの如くなりて虛しくなるべし一三そは我ヱホバなんぢの神はなんぢの右手をとりて汝にいふ 懼るるなかれ我なんぢを助けんと一四またヱホバ宣給ふ なんぢ虫にひとしきヤコ

ブよイスラエルの人よ おそるるなかれ我なんぢをたすけん汝をあがなふものはイスラエルの聖者なり一五 視よわれ汝をおほくの鋭歯ある新しき打麥の器となさん なんぢ山をうちて細微にし岡を粃糠のごとくにすべし一六 なんぢ簸げば風これを巻さり狂風これを吹ちらさん 汝はヱホバによりて喜びイスラエルの聖者によりて誇らん一七 貧しきものと乏しきものと水を求めて水なくその舌かわきて衰ふるとき われヱホバ聽てこたへん我イスラエルの神かれらを棄ざるなり一八 われ河をかぶろの山にひらき泉を谷のなかにいだし また荒野を池となし乾ける地を水の源と變ん一九 我あれのに香柏 合歡樹 もちの樹 および油の樹をうゑ沙漠に松 杉 及び黄楊をともに置ん二〇 かくて彼等これを見てヱホバの手の作たまふところイスラエルの聖者の造り給ふ所なるをしり且こころをとめ且ともどもにさとらん二一 ヱホバ言給く なんぢらの道理をとり出せ ヤコブの王いひたまはく 汝等のかたき證をもちきたれ二二 これを持來りてわれらに後ならんとする事をしめせ そのいやさきに成るべきことを示せわれら心をとめてその終をしらん 或はきたらんとする事をわれらに聞すべし二三 なんぢら後ならんとすることをしめせ我儕なんぢらが神なることを知らん なんぢら或はさいはひし或はわざはひせよ 我儕ともに見ておどろかん二四 視よなんぢらは無もののごとし なんぢらの事はむなし なんぢらを撰ぶものは憎むべきものなり二五 われ一人を起して北よりきたらせ我が名をよぶものを東よりきたらしむ 彼きたりもろもろの長をふみて泥のごとくにし陶工のつちくれを践がごとくにせん二六 たれか初よりこれらの事をわれらに告てしらしめたりや たれか上古よりわれらに告てこは是なりといはしめたりや 一人だに告るものなし 一人だに聞するものなし 一人だになんぢらの言をきくものなし二七 われ豫じめシオンにいはん なんぢ視よ かれらを見よと われ又よきおとづれを告るものをヱルサレムに予へん二八 われ見るに一人だになし かれらのなかに謀略をまうくるもの一人だになし 我かれらに問どこたふるもの一人だになし二九 かれらの爲はみな徒然にして無もののごとし その偶像は風なりまた空しきなり

第四二章 一 わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ我わが靈をかれにあたへたり かれ異邦人に道をしめすべし二 かれは叫ぶことなく聲をあぐることなくその聲を街頭にきこえしめず三 また傷める蘆ををることなくほのくらき燈火をけすことなく 眞理をもて道をしめさん四 かれは衰へず喪膽せずして道を地にたてをはらん もろもろの島はその法言をまちのぞむべし五 天をつくりてこれをのべ 地とそのうへの產物とをひらき そのうへの民に息をあたへ その中をあゆむものに靈をあたへたまふ神ヱホバかく言給ふ六 云くわれヱホバ公義をもてなんぢを召たりわれなんぢの手をとり汝をまもり なんぢを民の契約とし異邦人のひかりとなし七 而して瞽の目を開き俘囚を獄よりい

だし　暗にすめるものを檻のうちより出さしめん八　われはヱホバなり是わが名なり　我はわが榮光をほかの者にあたへず　わがほまれを偶像にあたへざるなり九　さきに預言せるところはや成れり　我また新しきことをつげん　事いまだ兆さざるさきに我まづなんぢらに聞せんと一〇　海にうかぶもの　海のなかに充るもの　もろもろの島およびその民よ　ヱホバにむかひて新しき歌をうたひ　地の極よりその頌美をたたへまつれ一一　荒野とその中のもろもろの邑とケダル人のすめるもろもろの村里はこゑをあげよ　セラの民はうたひて山のいただきよりよばはれ一二　榮光をヱホバにかうぶらせ　その頌美をもろもろの島にて語りつげよ一三　ヱホバ勇士のごとく出たまふ　また戰士のごとく熱心をおこし　聲をあげてよばはり大能をあらはして仇をせめ給はん一四　われ久しく聲をいださず默して己をおさへたり　今われ子をうまんとする婦人のごとく叫ばん　我いきづかしくかつ喘がん一五　われ山と岡とをあらし且すべてその上の木草をからし　もろもろの河を島となし　もろもろの池を涸さん一六　われ瞽者をその未だしらざる大路にゆかしめ　その未だしらざる徑をふましめ　暗をその前に光となし　曲れるをその前になほくすべし　我これらの事をおこなひて彼らをすてじ一七　刻みたる偶像にたのみ　鑄たる偶像にむかひて汝等はわれらの神なりといふものは退けられて大に恥をうけん一八　聾者よきけ　瞽者よ眼をそそぎてみよ一九　瞽者はたれぞ　わが僕にあらずや　誰かわがつかはせる使者の如き瞽者あらんや　誰かわが友の如きめしひあらんや　誰かヱホバの僕のごときめしひあらんや二〇　汝おほくのことを見れども顧みず　耳をひらけども聞ざるなり二一　ヱホバおのれ義なるがゆゑに大にしてたふとき律法をたまふをよろこび給へり二二　然るにこの民はかすめられ奪はれて　みな穴中にとらはれ獄のなかに閉こめらる　斯てその掠めらるるを助くる者なく　その奪はれたるを償へといふ者なし二三　なんぢらのうち誰かこのことに耳をかたぶけん　たれか心をもちゐて後のために之をきかん二四　ヤコブを奪はせしものは誰ぞ　かすむる者にイスラエルをわたしし者はたれぞ　是ヱホバにあらずや　われらヱホバに罪ををかし　その道をあゆまず　その律法にしたがふことを好まざりき二五　この故にヱホバ烈しき怒をかたぶけ　猛きいくさをきたらせ　その烈しきこと火の如く四圍にもゆれども彼しらず　その身に焚せまれども心におかざりき

第四三章

一　ヤコブよなんぢを創造せるヱホバいま如此いひ給ふ　イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給ふ　おそるるなかれ　我なんぢを贖へり　我なんぢの名をよべり汝はわが有なり二　なんぢ水中をすぐるときは我ともにあらん　河のなかを過るときは水なんぢの上にあふれじ　なんぢ火中をゆくとき焚るることなく火焰もまた燃つかじ三　我はヱホバなんぢの神イスラエルの聖者　なんぢの救主なり　われエジプトを予へてなんぢの贖代となし　エテオピアとセバとをなんぢに代ふ四　われ看てなんぢを

寶とし尊きものとして亦なんぢを愛す この故にわれ人をもてなんぢにかへ 民をなんぢの命にかへん五 懼るるなかれ我なんぢとともにあり 我なんぢの裔を東よりきたらせ西より汝をあつむべし六 われ北にむかひて釋せといひ南にむかひて留るなかれといはん わが子輩を遠きよりきたらせ わが女らを地の極よりきたらせよ七 すべてわが名をもて稱へらるる者をきたらせよ 我かれらをわが榮光のために創造せり われ曩にこれを造りかつ成をはれり八 目あれども瞽者のごとく耳あれど聾者のごとき民をたづさへ出よ九 國々はみな相集ひもろもろの民はあつまるべし 彼等のうち誰かいやさきに成るべきことをつげ之をわれらに聞することを得んや その證人をいだして己の是なるをあらはすべし 彼等ききて此はまことなりといはん一〇 ヱホバ宣給くなんぢらはわが證人わがえらみし僕なり 然ばなんぢら知てわれを信じわが主なるをさとりうべし 我よりまへにつくられし神なく我よりのちにもあることなからん一一 ただ我のみ我はヱホバなり われの外にすくふ者あることなし一二 われ前につげまた救をほどこし また此事をきかせたり 汝等のうちには他神なかりき なんぢらはわが證人なり 我は神なり これヱホバ宣給るなり一三 今よりわれは主なりわが手より救ひいだし得るものなし われ行はば誰かとどむることを得んや一四 なんぢらを贖ふものイスラエルの聖者ヱホバかく言たまふ なんぢらの爲にわれ人をバビロンにつかはし彼處にあるカルデヤ人をことごとく下らせ その宴樂の船にのりてのがれしむ一五 われはヱホバなんぢらの聖者イスラエルを創造せしもの又なんぢらの王なり一六 ヱホバは海のなかに大路をまうけ大なる水のなかに徑をつくり一七 戰車および馬軍兵 武士をいできたらせ ことごとく仆れて起ることあたはず 皆ほろびて燈火のきえうするが如くならしめ給へり一八 ヱホバ言給く なんぢら往昔のことを思ひいづるなかれ また上古のことをかんがふるなかれ一九 視よわれ新しき事をなさん頓ておこるべし なんぢら知ざるべけんや われ荒野に道をまうけ沙漠に河をつくらん二〇 野の獸われを崇むべし 野犬および駝鳥もまた然り われ水を荒野にいだし河を沙漠にまうけてわが民わがえらびたる者にのましむべければなり二一 この民はわが頌美をのべしめんとて我おのれのために造れるなり二二 然るにヤコブよ汝われを呼たのまざりき イスラエルよ汝われを厭ひたり二三 なんぢ燔祭のひつじを我にもちきたらず犠牲をもて我をあがめざりき われ汝にそなへものの荷をおはせざりき また乳香をもて汝をわづらはせざりき二四 なんぢは銀貨をもて我がために菖蒲をかはず 犠牲のあぶらをもて我をあかしめず 反てなんぢの罪の荷をわれに負せ なんぢの邪曲にて我をわづらはせたり二五 われこそ我みづからの故によりてなんぢの咎をけし汝のつみを心にとめざるなれ二六 なんぢその是なるをあらはさんがために己が事をのべて我に記念せしめよ われら相共にあげつらふべし二七 なんぢの遠祖つみををかし汝のをし

への師われにそむけり二八この故にわれ聖所の長たちを汚さしめヤコブを詛はしめイスラエルをののしらしめん

第四四章一されどわが僕ヤコブよわが撰みたるイスラエルよ今きけ二なんぢを創造しなんぢを胎内につくり又なんぢを助くるヱホバ如此いひたまふ わがしもべヤコブよわが撰みたるヱシュルンよおそるるなかれ三われ渇けるものに水をそそぎ乾たる地に流をそそぎ わが靈をなんぢの子輩にそそぎ わが恩惠をなんぢの裔にあたふべければなり四斯てかれらは草のなかにて川のほとりの柳のごとく生そだつべし五ある人はいふ我はヱホバのものなりと ある人はヤコブの名をとなへん ある人はヱホバの有なりと手にしるしてイスラエルの名をなのらん六ヱホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなふもの萬軍のヱホバ如此いひたまふ われは始なりわれは終なり われの外に神あることなし七我いにしへの民をまうけしより以來たれかわれのごとく後事をしめし又つげ又わが前にいひつらねんや 試みに成んとすること來らんとすることを告よ八なんぢら懼るるなかれ慴くなかれ 我いにしへより聞せたるにあらずや告しにあらずやなんぢらはわが證人なり われのほか神あらんや 我のほかには磐あらず われその一つだに知ことなし九偶像をつくる者はみな空しく かれらが慕ふところのものは益なし その證を見るものは見ことなく知ことなし 斯るがゆゑに恥をうくべし一〇たれか神をつくり又えきなき偶像を鑄たりしや一一視よその伴侶はみなはぢん その匠工らは人なり かれら皆あつまりて立ときはおそれてもろともに恥るなるべし一二鐵匠は斧をつくるに炭の火をもてこれをやき鎚もてこれを鍛へつよき腕をもてこれをうちかたむ 饑れば力おとろへ水をのまざればつかれはつべし一三木匠はすみなはをひきはり朱にてゑがき鉋にてけづり文回をもて畫き之を人の形にかたどり人の美しき容にしたがひて造り而して家のうちに安置す一四あるひは香柏をきりあるひは槲をとりあるひは樫をとり 或ははやしの樹のなかにて一をえらびあるひは杉をうゑ雨をえて長たしむ一五而して人これを薪となし之をもておのが身をあたため又これを燃してパンをやき又これを神につくりてをがみ偶像につくりてその前にひれふす一六その半は火にもやしその半は肉をにて食ひ あるひは肉をあぶりてくひあき また身をあたためていふ ああ我あたたまれりわれ熱きをおぼゆ一七斯てその餘をもて神につくり偶像につくりてその前にひれふし之ををがみ之にいのりていふ なんぢは吾神なり我をすくへと一八これらの人は知ことなく悟ることなしその眼ふさがりて見えず その心とぢてあきらかならず一九心のうちに思ふことをせず智識なく明悟なきがゆゑに我そのなかばを火にもやしその炭火のうへにパンをやき肉をあぶりて食ひ その木のあまりをもて我いかで憎むべきものを作るべけんや 我いかで木のはしくれに俯伏すことをせんやといふ者もなし二〇かかる人は灰をくらひ迷へる心にまどはされて己がた

ましひを救ふあたはず またわが右手にいつはりあるにあらずやとおもはざるなり二一 ヤコブよ イスラエルよ 此等のことを心にとめよ 汝はわが僕なり 我なんぢを造れり なんぢわが僕なりイスラエルよ我はなんぢを忘れじ二二 我なんぢの愆を雲のごとくに消しなんぢの罪を霧のごとくにちらせり なんぢ我にかへれ我なんぢを贖ひたればなり二三 天ようたうたへヱホバこのことを成たまへり 下なる地よよばはれ もろもろの山よ林およびその中のもろもろの木よ こゑを發ちてうたふべし ヱホバはヤコブを贖へりイスラエルのうちに榮光をあらはし給はん二四 なんぢを贖ひなんぢを胎内につくれるヱホバかく言たまふ 我はヱホバなり我よろづのものを創造し ただ我のみ天をのべ みづから地をひらき二五 いつはるものの豫兆をむなしくし卜者をくるはせ智者をうしろに退けてその知識をおろかならしむ二六 われわが僕のことばを遂しめ わが使者のはかりごとを成しめ ヱルサレムについては民また住はんといひ ユダのもろもろの邑については重ねて建らるべし我その荒廢たるところを舊にかへさんといふ二七 また淵に命ず かわけ我なんぢのもろもろの川をほさんと二八 又クロスについては彼はわが牧者すべてわが好むところを成しむる者なりといひ ヱルサレムについてはかさねて建られその宮の基すゑられんといふ

第四五章一 われヱホバわが受膏者クロスの右手をとりてもろもろの國をそのまへに降らしめ もろもろの王の腰をとき扉をその前にひらかせて門をとづるものなからしめん二 われ汝のまへにゆきて崎嶇をたひらかにし 銅の門をこぼち くろがねの關木をたちきるべし三 われなんぢに暗ところの財貨とひそかなるところに藏せるたからとを予へ なんぢに我はヱホバなんぢの名をよべるイスラエルの神なるを知しめん四 わが僕ヤコブわが撰みたるイスラエルのために我なんぢの名をよべり 汝われを知ずといへどわれ名をなんぢに賜ひたり五 われはヱホバなり我のほかに神なし 一人もなし 汝われをしらずといへども我なんぢを固うせん六 而して日のいづるところより西のかたまで人々我のほかに神なしと知べし 我はヱホバなり他にひとりもなし七 われは光をつくり又くらきを創造す われは平和をつくりまた禍害をさうざうす 我はヱホバなり 我すべてこれらの事をなすなり八 天ようへより滴らすべし 雲よ義をふらすべし 地はひらけて救を生じ義をもともに萌いだすべし われヱホバ之を創造せり九 世人はすゑものの中のひとつの陶器なるに己をつくれる者とあらそふはわざはひなるかな 泥塊はすゑものつくりにむかひて汝なにを作るかといふべけんや 又なんぢの造りたる者なんぢを手なしといふべけんや一〇 父にむかひて汝なにゆゑに生むことをせしやといひ 婦にむかひて汝なにゆゑに産のくるしみをなししやといふ者はわざはひなるかな一一 ヱホバ、イスラエルの聖者イスラエルを造れるもの如此いひたまふ 後きたらんとすることを我にとへ またわが手の工とに

つきて汝等われに言せよ一二われ地をつくりてそのうへに人を創造せり われ自らの手をもて天をのべ その萬象をさだめたり一三われ義をもて彼のクロスを起せり われそのすべての道をなほくせん 彼はわが邑をたてわが俘囚を價のためならず報のためならずして釋すべし これ萬軍のヱホバの聖言なり一四ヱホバ如此いひたまふ エジプトがはたらきて得しものとエテオピアがあきなひて得しものとはなんぢの有とならん また身のたけ高きセバ人きたりくだりて汝にしたがひ繩につながれて降りなんぢのまへに伏しなんぢに祈りていはん まことに神はなんぢの中にいませり このほかに神なし一人もなしと一五救をほどこし給ふイスラエルの神よ まことに汝はかくれています神なり一六偶像をつくる者はみな恥をいだき辱かしめをうけ諸共にはぢあわてて退かん一七されどイスラエルはヱホバにすくはれて永遠の救をえん なんぢらは世々かぎりなく恥をいだかず辱かしめをうけじ一八ヱホバは天を創造したまへる者にしてすなはち神なり また地をもつくり成てこれを堅くし徒然にこれを創造し給はず これを人の住所につくり給へり ヱホバかく宣給ふ われはヱホバなり我のほかに神あることなしと一九われは隱れたるところ地のくらき所にてかたらず 我はヤコブの裔になんぢらが我をたづぬるは徒然なりといはず 我ヱホバはただしき事をかたり直きことを告ぐ二〇汝等もろもろの國より脱れきたれる者よ つどひあつまり共にすすみききたれ 木の像をになひ救ふことあたはざる神にいのりするものは無智なるなり二一なんぢらその道理をもちきたりて述よ また共にはかれ 此事をたれか上古より示したりしや 誰かむかしより告たりしや 此はわれヱホバならずや 我のほかに神あることなし われは義をおこなひ救をほどこす神にして我のほかに神あることなし二二地の極なるもろもろの人よ なんぢら我をあふぎのぞめ 然ばすくはれん われは神にして他に神なければなり二三われは己をさして誓ひたり この言はただしき口よりいでたれば反ることなし すべての膝はわがまへに屈み すべての舌はわれに誓をたてん二四人われに就ていはん 正義と力とはヱホバにのみありと 人々ヱホバにきたらん すべてヱホバにむかひて怒るものは恥をいだくべし二五イスラエルの裔はヱホバによりて義とせられ且ほこらん

第四六章一 ベルは伏しネボは屈む かれらの像はけものと家畜とのうへにあり なんぢらが擡げあるきしものは荷となりて疲れおとろへたるけものの負ところとなりぬ二かれらは屈みかれらは共にふし その荷となれる者をすくふこと能はずして己とらはれゆく三ヤコブの家よイスラエルのいへの遺れるものよ 腹をいでしより我におはれ胎をいでしより我にもたげられしものよ 皆われにきくべし四なんぢらの年老るまで我はかはらず白髮となるまで我なんぢらを負ん 我つくりたれば擡ぐべし我また負ひかつ救はん五なんぢら我をたれに比べ たれに配ひ たれに擬

らへ かつ相くらぶべきか六 人々ふくろより黄金をかたぶけいだし權衡をもて白銀をはかり金工をやとひてこれを神につくらせ之にひれふして拜む七 彼等はこれをもたげて肩にのせ負ひゆきてその處に安置す すなはち立てその處をはなれず 人これにむかひて呼はれども答ふること能はず 又これをすくひて苦難のうちより出すことあたはず八 なんぢら此事をおもひいでて堅くたつべし 悖逆者よこのことを心にとめよ九 汝等いにしへより以來のことをおもひいでよ われは神なり我のほかに神なし われは神なり我のごとき者なし一〇 われは終のことを始よりつげいまだ成ざることを昔よりつげ わが謀畧はかならず立つといひすべて我がよろこぶことを成んといへり一一 われ東より鷙をまねき遠國よりわが定めおける人をまねかん 我このことを語りたれば必らず來らすべし 我このことを謀りたればかならず成すべし一二 なんぢら心かたくなにして義にとほざかるものよ我にきけ一三 われわが義をちかづかしむ可ればその來ること遠からず わが救おそからず 我すくひをシオンにあたへ わが榮光をイスラエルにあたへん

第四七章一 バビロンの處女よ くだりて塵のなかにすわれ カルデヤ人のむすめよ座にすわらずして地にすわれ 汝ふたたび婀娜にして嬌なりととなへらるることなからん二 礱をとりて粉をひけ 面帕をとりさり袿をぬぎ髓をあらはして河をわたれ三 なんぢの肌はあらはれなんぢの恥はみゆべし われ仇をむくいて人をかへりみず四 われらを贖ひたまふ者はその名を萬軍のヱホバ、イスラエルの聖者といふ五 カルデヤ人のむすめよ なんぢ口をつぐみてすわれ 又くらき所にいりてをれ 汝ふたたびもろもろの國の主母ととなへらるることなからん六 われわが民をいきどほりわが產業をけがして之をなんぢの手にあたへたり 汝これに憐憫をほどこさず年老たるもののうへに甚だおもき軛をおきたり七 汝いへらく我とこしへに主母たらんと 斯てこれらのことを心にとめず亦その終をおもはざりき八 なんぢ歡樂にふけり安らかにをり 心のうちにただ我のみにして我のほかに誰もなく我はやもめとなりてをらず また子をうしなふことを知らじとおもへる者よなんぢ今きけ九 子をうしなひ寡婦となるこの二つのこと一日のうちに俄になんぢに來らん汝おほく魔術をおこなひひろく呪詛をほどこすと雖もみちみちて汝にきたるべし一〇 汝おのれの惡によりたのみていふ 我をみるものなしと なんぢの智慧となんぢの聰明とはなんぢを惑せたり なんぢ心のうちにおもへらくただ我のみにして我のほかに誰もなしと一一 この故にわざはひ汝にきたらん なんぢ呪ひてこれを除くことをしらず 艱難なんぢに落きたらん 汝これをはらふこと能はず なんぢの思ひよらざる荒廢にはかに汝にきたるべし一二 今なんぢわかきときより勤めおこなひたる呪詛とおほくの魔術とをもて立むかふべしあるひは益をうることあらん あるひは敵をおそれしむることあらん一三 なんぢは謀畧おほきによりて倦つか

れたり かの天をうらなふもの星をみるもの新月をうらなふ者もし能はば いざたちて汝をきたらんとする事よりまぬかれしむることをせよ**一四**彼らは藁のごとくなりて火にやかれん おのれの身をほのほの勢力よりすくひいだすこと能はず その火は身をあたたむべき炭火にあらず又その前にすわるべき火にもあらず**一五** 汝がつとめて行ひたる事は終にかくのごとくならん汝のわかきときより汝とうりかひしたる者おのおのその所にさすらひゆきて一人だになんぢを救ふものなかるべし

第四八章一 ヤコブの家よなんぢら之をきけ 汝らはイスラエルの名をもて稱へられ ユダの根源よりいでてヱホバの名によりて誓ひイスラエルの神をかたりつぐれども 眞實をもてせず正義をもてせざるなり**二** かれらはみづから聖京のものととなへイスラエルの神によりたのめり その名は萬軍のヱホバといふ**三** われ今よりさきに成しことを既にいにしへより告たり われ口よりいだして既にのべつたへたり 我にはかにこの事をおこなひ而して成ぬ**四** われ汝がかたくなにして項の筋はくろがねその額はあかがねなるを知れり**五** このゆゑに我はやくよりかの事をなんぢにつげ その成ざるさきに之をなんぢに聞しめたり 恐くはなんぢ云ん わが偶像これを成せり刻みたるざう鑄たる像これを命じたりと**六** なんぢ既にきけり 凡てこれを視よ 汝ら之をのべつたへざるか われ今より新なる事なんぢが未だしらざりし秘事をなんぢに示さん**七** これらの事はいま創造せられしにて上古よりありしにあらず この日よりさきに汝これを聞ざりき然らずば汝いはん視よわれこれを知れりと**八** 汝これを聞こともなく知こともなくなんぢの耳はいにしへより開けざりき 我なんぢが欺きあざむきて生れながら悖逆者ととなへられしを知ればなり**九** わが名のゆゑによりて我いかりを遲くせん わが頌美のゆゑにより我しのびてなんぢを絶滅すことをせじ**一〇** 視よわれなんぢを煉たり されど白銀の如くせずして患難の爐をもてこころみたり**一一** われ己のため我おのれの爲にこれを成ん われ何でわが名をけがさしむべき 我わが榮光をほかの者にあたることをせじ**一二** ヤコブよわが召たるイスラエルよ われにきけ われは是なり われは始また終なり**一三** わが手は地のもとゐを置わが右の手は天をのべたり 我よべば彼等はもろともに立なり**一四** 汝ら皆あつまりてきけ ヱホバの愛するものヱホバの好みたまふ所をバビロンに成し その臂はカルデヤ人のうへにのぞまん彼等のうち誰かこれらの事をのべつげしや**一五** ただ我のみ我かたれり 我かれをめし我かれをきたらせたり その道さかゆべし**一六** なんぢら我にちかよりて之をきけ 我はじめより之をひそかに語りしにあらず その成しときより我はかしこに在り いま主ヱホバわれとその靈とをつかはしたまへり**一七** なんぢの贖主 主イスラエルの聖者ヱホバかく言給く われはなんぢの神ヱホバなり 我なんぢに益することを教へ なんぢを導きてそのゆくべき道にゆかしむ**一八** 願くはなんぢわが命令にききしたがはんこと

をもし然らばなんぢの平安は河のごとく 汝の義はうみの波のごとく一九 なんぢの裔はすなのごとく 汝の體よりいづる者は細沙のごとくになりて その名はわがまへより絶るることなく亡さるることなからん二〇 なんぢらバビロンより出てカルデヤ人よりのがれよ なんらぢ歡の聲をもてのべきかせ地のはてにいたるまで語りつたへ ヱホバはその僕ヤコブをあがなひ給へりといへ二一 ヱホバかれらをして沙漠をゆかしめ給へるとき彼等はかわきたることなかりき ヱホバ彼等のために磐より水をながれしめ また磐をさきたまへば水ほどばしりいでたり二二 ヱホバいひたまはく惡きものには平安あることなし

第四九章一 もろもろの島よ我にきけ 遠きところのもろもろの民よ耳をかたむけよ 我うまれいづるよりヱホバ我を召し われ母の胎をいづるよりヱホバわが名をかたりつげたまへり二 ヱホバわが口を利劍となし我をその手のかげにかくし 我をとぎすましたる矢となして箙にをさめ給へり三 また我にいひ給はく 汝はわが僕なり わが榮光のあらはるべきイスラエルなりと四 されど我いへり われは徒然にはたらき益なくむなしく力をつひやしぬと 然はあれど誠にわが審判はヱホバにあり わが報はわが神にあり五 ヤコブをふたたび己にかへらしめイスラエルを己のもとにあつまらせんとて 我をうまれいでしより立ておのれの僕となし給へるヱホバいひ給ふ(我はヱホバの前にたふとくせらる又わが神はわが力となりたまへり)六 その聖言にいはく なんぢわが僕となりてヤコブのもろもろの支派をおこし イスラエルのうちののこりて全うせしものを歸らしむることはいと輕し 我また汝をたてて異邦人の光となし 我がすくひを地のはてにまで到らしむ七 ヱホバ、イスラエルの贖主イスラエルの聖者は人にあなどらるるもの 民にいみきらはるるもの 長たちに役せらるる者にむかひて如此いひたまふ もろもろの王は見てたちもろもろの君はみて拜すべし これ信實あるヱホバ、イスラエルの聖者なんぢを選びたまへるが故なり八 ヱホバ如此いひたまふ われ惠のときに汝にこたへ救の日になんぢを助けたり われ汝をまもりて民の契約とし國をおこし荒すたれたる地をまた產業としてかれらにつがしめん九 われ縛しめられたる者にいでよといひ暗にをるものに顯れよといはん かれら途すがら食ふことをなし もろもろの禿なる山にも牧草をうべし一〇 かれらは饑ずかわかず 又やけたる砂もあつき日もうつことなし 彼等をあはれむもの之をみちびきて泉のほとりに和かにみちびき給ければなり一一 我わがもろもろの山を路とし わが大路をたかくせん一二 視よ人々あるひは遠きよりきたり あるひは北また西よりきたらん 或はまたシニムの地よりきたるべし一三 天ようたへ地よよろこべ もろもろの山よ聲をはなちてうたへ ヱホバはその民をなぐさめその苦むものを憐みたまへばなり一四 然どシオンはいへりヱホバ我をすて主われをわすれたまへりと一五 婦その乳兒をわすれて己がはらの子をあはれまざることあらんや

縱ひかれら忘るることありとも我はなんぢを忘るることなし一六 われ掌になんぢを彫刻めり なんぢの石垣はつねにわが前にあり一七 なんぢの子輩はいそぎ來り なんぢを毀つもの汝をあらす者は汝より出さらん一八 なんぢ目をあげて環視せよ これらのもの皆あひあつまりて汝がもとに來るべし ヱホバ宣給く われは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし 新婦の帶のごとくに之をまとふべし一九 なんぢの荒かつ廢れたるところ毀たれたる地は このゝち住ふもの多くして狹きをおぼえん なんぢを呑つくしゝもの遙にはなれ去るべし二〇 むかし別れたりしなんぢの子輩はのちの日なんぢの耳のあたりにて語りあはん云く ここは我がために狹し なんぢ外にゆきて我にすむべき所をえしめよと二一 その時なんぢ心裏にいはん 誰かわがために此等のものを生しや われ子をうしなひて獨居りかつ俘れ且さすらひたり 誰かこれを育てしや 視よわれ一人のこされたり 此等はいづこに居しや二二 主ヱホバいひたまはく 視よわれ手をもろもろの國にむかひてあげ 旗をもろもろの民にむかひてたてん 斯てかれらはその懷中になんぢの子輩をたづさへ その肩になんぢの女輩をのせきたらん二三 もろもろの王はなんぢの養父となりその后妃はなんぢの乳母となり かれらはその面を地につけて汝にひれふし なんぢの足の塵をなめん 而して汝わがヱホバなるをしり われを俟望むものの恥をかうぶることなきを知るならん二四 勇士がうばひたる掠物をいかでとりかへし 強暴者がかすめたる虜をいかで救いだすことを得んや二五 されどヱホバ如此いひたまふ云く ますらをが掠めたる虜もとりかへされ強暴者がうばひたる掠物もすくひいださるべし そは我なんぢを攻るものをせめてなんぢの子輩をすくふべければなり二六 我なんぢを虐ぐるものにその肉をくらはせ またその血をあたらしき酒のごとくにのませて醉しめん 而して萬民はわがヱホバにして汝をすくふ者なんぢを贖ふものヤコブの全能者なることを知るべし

第五〇章一 ヱホバかくいひ給ふ わがなんぢらの母をさりたる離書はいづこにありや 我いづれの債主になんぢらを賣わたししや 視よなんぢらはその不義のために賣られ なんぢらの母は汝らの咎戻のために去られたり二 わがきたりし時なにゆゑ一人もをらざりしや 我よびしとき何故ひとりも答ふるものなかりしや わが手みぢかくして贖ひえざるか われ救ふべき力なからんや 視よわれ叱咤すれば海はかれ河はあれのとなりそのなかの魚は水なきによりかわき死て臭氣をいだすなり三 われ黑きころもを天にきせ麁布をもて蔽となす四 主ヱホバは教をうけしものの舌をわれにあたへ言をもて疲れたるものを扶支ふることを知得しめたまふ また朝ごとに醒しわが耳をさまして教をうけし者のごとく聞ことを得しめたまふ五 主ヱホバわが耳をひらき給へり われは逆ふことをせず退くことをせざりき六 われを撻つものにわが背をまかせわが鬚をぬくものにわが頰をまかせ

恥と唾とをさくるために面をおほふことをせざりき七主ヱホバわれを助けたまはん この故にわれ恥るることなかるべし 我わが面を石の如くして恥しめらるることなきを知る八われを義とするもの近きにあり たれか我とあらそはんや われら相共にたつべし わが仇はたれぞや近づききたれ九主ヱホバわれを助け給はん 誰かわれを罪せんや 視よかれらはみな衣のごとくふるび蟲のためにくひつくされん一〇汝等のうちヱホバをおそれその僕の聲をきくものは誰ぞや 暗をあゆみて光をえざるともヱホバの名をたのみおのれの神にたよれ一一火をおこし火把を帯るものよ汝等みなその火のほのほのなかをあゆめ 又なんぢらの燃したる火把のなかをあゆめ なんぢら斯のごとき事をわが手よりうけて悲みのうちに臥べし

第五一章一義をおひ求めヱホバを尋ねもとむるものよ我にきけ なんぢらが斫出されたる磐となんぢらの掘出されたる穴とをおもひ見よ二なんぢらの父アブラハム及びなんぢらを生たるサラをおもひ見よ われ彼をその唯一人なりしときに召しこれを祝してその子孫をまし加へたり三そはヱホバ、シオンを慰め またその凡てあれたる所をなぐさめて その荒野をエデンのごとく その沙漠をヱホバの園のごとくなしたまへり 斯てその中によろこびと歡樂とあり感謝とうたうたふ聲とありてきこゆ四わが民よわが言にこころをとめよ わが國人よわれに耳をかたぶけよ 律法はわれより出づ われわが途をかたく定めてもろもろの民の光となさん五わが義はちかづきわが救はすでに出たり わが臂はもろもろの民をさばかん もろもろの島はわれを俟望み わがかひなに依頼ん六なんぢら目をあげて天を觀また下なる地をみよ 天は烟のごとくきえ地は衣のごとくふるびその中にすむ者これとひとしく死ん されどわが救はとこしへにながらへ わが義はくだくることなし七義をしるものよ心のうちにわが律法をたもつ民よ われにきけ 人のそしりをおそるるなかれ人ののののしりに慴くなかれ八そはかれら衣のごとく蟲にはまれ羊の毛のごとく蟲にはまれん されどわが義はとこしへに存らへ わがすくひ萬代におよぶべし九さめよ醒よヱホバの臂よちからを着よ さめて古への時むかしの代にありし如くなれ ラハブをきりころし鱷をさしつらぬきたるは汝にあらずや一〇海をかわかし大なる淵の水をかわかし また海のふかきところを贖はれたる人のすぐべき路となししは汝にあらずや一一ヱホバに贖ひすくはれしもの歌うたひつつ歸りてシオンにきたり その首にとこしへの歡喜をいただきて快樂とよろこびとをえん 而してかなしみと歎息とはにげさるべし一二我こそ我なんぢらを慰むれ 汝いかなる者なれば死べき人をおそれ草の如くなるべき人の子をおそるるか一三いかなれば天をのべ地の基をすゑ汝をつくりたまへるヱホバを忘れしや 何なれば汝をほろぼさんとて豫備する虐ぐるものの憤れるをみて常にひねもす懼るるか 虐ぐるものの忿恚はいづこにありや一四身をかがめゐる俘囚はすみや

かに解れて 死ることとなく穴にくだることなく その食はつくること無るべし一五 我は海をふるはせ波をなりどよめかする汝の神ヱホバなり その御名を萬軍のヱホバといふ一六 我わが言をなんぢの口におきわが手のかげにて汝をおほへり かくてわれ天をうゑ地の基をすゑ シオンにむかひて汝はわが民なりといはん一七 ヱルサレムよさめよさめよ起よ なんぢ前にヱホバの手よりその忿恚のさかづきをうけて飲み よろめかす大杯をのみ且すひほしたり一八 なんぢの生るもろもろの子のなかに汝をみちびく者なく 汝のそだてたるもろもろの子の中にてなんぢの手をたづさふる者なし一九 この二のこと汝にのぞめり 誰かなんぢのために歎んや 荒廢の饑饉ほろびの劍なんぢに及べり 我いかにして汝をなぐさめんや二〇 なんぢの子らは息たえだえにして網にかかれる羚羊のごとくし街衢の口にふす ヱホバの忿恚となんぢの神のせめとはかれらに滿たり二一 このゆゑに苦しめるもの酒にあらで酔たるものよ之をきけ二二 なんぢの主ヱホバおのが民の訟をあげつらひ給ふ なんぢの神かくいひ給ふ 我よろめかす酒杯をなんぢの手より取除き わがいきどほりの大杯をとりのぞきたり 汝ふたたびこれを飲ことあらじ二三 我これを汝をなやますものの手にわたさん 彼らは曩になんぢの靈魂にむかひて云らく なんぢ伏せよわれら越ゆかんと 而してなんぢその背を地のごとくし衢のごとくし彼等のこえゆくに任せたり

第五二章一 シオンよ醒よさめよ汝の力を衣よ 聖都ヱルサレムよ なんぢの美しき衣をつけよ 今より割禮をうけざる者および潔からざるものふたたび汝にいること無るべければなり二 なんぢ身の塵をふりおとせ ヱルサレムよ起よすわれ 俘れたるシオンのむすめよ汝がうなじの繩をときすてよ三 そはヱホバかく言給ふ なんぢらは價なくして賣られたり金なくして贖はるべし四 主ヱホバ如此いひ給ふ 曩にわが民エジプトにくだりゆきて彼處にとどまれり アツスリヤ人ゆゑなくして彼等をしへたげたり五 ヱホバ宣給く わが民はゆゑなくして俘れたり されば我ここに何をなさん ヱホバのたまはく 彼等をつかさどる者さけびよばはり わが名はつねに終日けがさるるなり六 この故にわが民はわが名をしらん このゆゑにその日には彼らこの言をかたるものの我なるをしらん 我ここに在り七 よろこびの音信をつたへ平和をつげ 善おとづれをつたへ救をつげ シオンに向ひてなんぢの神はすべ治めたまふといふものの足は山上にありていかに美しきかな八 なんぢが斥候の聲きこゆ かれらはヱホバのシオンに歸り給ふを目と目とあひあはせて視るが故にみな聲をあげてもろともにうたへり九 ヱルサレムの荒廢れたるところよ聲をはなちて共にうたふべし ヱホバその民をなぐさめヱルサレムを贖ひたまひたればなり一〇 ヱホバそのきよき手をもろもろの國人の目のまへにあらはしたまへり 地のもろもろの極までもわれらの神のすくひを見ん一一 なんぢら去よされよ 彼處をいでて汚れたるものに觸るなかれ その中をいでよ ヱホバの器を

になふ者よ なんぢら潔くあれ一二 なんぢら急ぎいづるにあらず趨りゆくにあらず ヱホバはなんぢらの前にゆきイスラエルの神はなんぢらの軍後となり給ふべければなり一三 視よわがしもべ智慧をもておこなはん 上りのぼりて甚だたかくならん一四 曩にはおほくの人かれを見ておどろきたり（その面貌はそこなはれて人と異なりその形容はおとろへて人の子とことなれり）一五 後には彼おほく國民にそそがん 王たち彼によりて口を緘まん そはかれら未だつたへられざることを見いまだ聞ざることを悟るべければなり

第五三章一 われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや ヱホバの手はたれにあらはれしや二 かれは主のまへに芽えのごとく 燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり われらが見るべきうるはしき容なくうつくしき貌はなく われらがしたふべき艶色なし三 かれは侮られて人にすてられ 悲哀の人にして病患をしれり また面をおほひて避ることをせらるる者のごとく侮られたり われらも彼をたふとまざりき四 まことに彼はわれらの病患をおひ我儕のかなしみを擔へり 然るにわれら思へらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと五 彼はわれらの愆のために傷けられ われらの不義のために碎かれ みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ そのうたれし痍によりてわれらは癒されたり六 われらはみな羊のごとく迷ひておのおの己が道にむかひゆけり 然るにヱホバはわれら凡てのものの不義をかれのうへに置たまへり七 彼はくるしめらるれどもみづから謙だりて口をひらかず 屠場にひかるる羔羊の如く毛をきる者のまへにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき八 かれは虐待と審判とによりて取去れたり その代の人のうち誰か彼が活るもの地より絶れしことを思ひたりしや 彼はわが民のとがの爲にうたれしなり九 その墓はあしき者とともに設けられたれど死るときは富るものとともになれり かれは暴をおこなはず その口には虚僞なかりき一〇 されどヱホバはかれを碎くことをよろこびて之をなやましたまへり 斯てかれの靈魂とがの獻物をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永からん かつヱホバの悦び給ふことは彼の手によりて榮ゆべし一一 かれは己がたましひの煩勞をみて心たらはん わが義しき僕はその知識によりておほくの人を義とし又かれらの不義をおはん一二 このゆゑに我かれをして大なるものとともに物をわかち取しめん かれは強きものとともに掠物をわかちとるべし 彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ愆あるものとともに數へられたればなり 彼はおほくの人の罪をおひ愆あるものの爲にとりなしをなせり

第五四章一 なんぢ孕まず子をうまざるものよ歌うたふべし 産のくるしみなきものよ聲をはなちて謳ひよばはれ 夫なきものの子はとつげるものの子よりおほしと 此はヱホバの聖言なり二 汝が幕屋のうちを廣くし なんぢが住居のまくをはりひろげて

吝むなかれ 汝の綱をながくしなんぢの杙をかたくせよ三 そはなんぢが右に左にひろごり なんぢの裔はもろもろの國をえ荒廢れたる邑をもすむべき所となさしむべし四 懼るるなかれなんぢ恥ることなからん 惶てためくことなかれ汝はぢしめらるることなからん 若きときの恥をわすれ寡婦たりしときの恥辱をふたたび覺ることなからん五 なんぢを造り給へる者はなんぢの夫なり その名は萬軍のヱホバ なんぢを贖ひ給ふものはイスラエルの聖者なり全世界の神ととなへられ給ふべし六 ヱホバ汝をまねきたまふ 棄られて心うれふる妻また若きとき嫁てさられたる妻をまねくがごとしと 此はなんぢの神のみことばなり七 我しばし汝をすてたれど大なる憐憫をもて汝をあつめん八 わが忿恚あふれて暫くわが面をなんぢに隱したれど 永遠のめぐみをもて汝をあはれまんと 此はなんぢをあがなひ給ふヱホバの聖言なり九 このこと我にはノアの洪水のときのごとし 我むかしノアの洪水をふたたび地にあふれ流るることなからしめんと誓ひしが そのごとく我ふたたび汝をいきどほらず 再びなんぢを責じとちかひたり一〇 山はうつり岡はうごくとも わが仁慈はなんぢよりうつらず 平安をあたふるわが契約はうごくことなからんと 此はなんぢを憐みたまふヱホバのみことばなり一一 なんぢ苦しみをうけ暴風にひるがへされ 安慰をえざるものよ 我うるはしき彩色をなしてなんぢの石をすゑ 青き玉をもてなんぢの基をおき一二 くれなゐの玉をもてなんぢの櫓をつくりむらさきの玉をもてなんぢの門をつくりなんぢの境内はあまねく寶石にてつくるべし一三 又なんぢの子輩はみなヱホバに教をうけ なんぢの子輩のやすきは大ならん一四 なんぢ義をもて堅くたち 虐待よりとほざかりて懼ることなく また恐懼よりとほざかるべし そは恐懼なんぢに近づくことなければなり一五 縦ひかれら群集ふとも我によるにあらず 凡てむれつどひて汝をせむる者はなんぢの故にたふるべし一六 みよ炭火をふきおこして用ゐべき器をいだす鐵工はわが創造するところ 又あらし滅ぼす者もわが創造するところなり一七 すべてなんぢを攻んとてつくられしうつはものは利あることなし 興起ちてなんぢとあらそひ訴ふる舌はなんぢに罪せらるべし これヱホバの僕等のうくる產業なり 是かれらが我よりうくる義なりとヱホバのたまへり

第五五章一 噫なんぢら渇ける者ことごとく水にきたれ 金なき者もきたるべし 汝等きたりてかひ求めてくらへ きたれ金なく價なくして葡萄酒と乳とをかへ二 なにゆゑ糧にもあらぬ者のために金をいだし 飽ことを得ざるもののために勞するや われに聽從へ さらばなんぢら美物をくらふをえ脂をもてその靈魂をたのしまするを得ん三 耳をかたぶけ我にきたりてきけ 汝等のたましひは活べし われ亦なんぢらととこしへの契約をなしてダビデに約せし變らざる恵をあたへん四 視よわれ彼をたててもろもろの民の證とし又もろもろの民の君となし命令する者となせ

り五なんぢは知ざる國民をまねかん　汝をしらざる國民はなんぢのもとに走りきたらん　此はなんぢの神ヱホバ、イスラエルの聖者のゆゑによりてなり　ヱホバなんぢを尊くしたまへり六なんぢら遇ことをうる間にヱホバを尋ねよ　近くゐたまふ間によびもとめよ七惡きものはその途をすて　よこしまなる人はその思念をすててヱホバに反れ　さらば憐憫をほどこしたまはん　我等の神にかへれ豐に赦をあたへ給はん八ヱホバ宣給くわが思はなんぢらの思とことなり　わが道はなんぢらのみちと異なれり九天の地よりたかきがごとく　わが道はなんぢらの道よりも高く　わが思はなんぢらの思よりもたかし一〇天より雨くだり雪おちて復かへらず　地をうるほして物をはえしめ　萌をいださしめて播ものに種をあたへ　食ふものに糧をあたふ一一如此わが口よりいづる言もむなしくは我にかへらず　わが喜ぶところを成し　わが命じ遣りし事をはたさん一二なんぢらは喜びて出きたり平穩にみちびかれゆくべし山と岡とは聲をはなちて前にうたひ野にある樹はみな手をうたん一三松樹はいばらにかはりてはえ岡拈樹は棘にかはりてはゆべし　此はヱホバの頌美となり並とこしへの徵となりて絶ることなからん

第五六章

一ヱホバ如此いひ給ふ　なんぢら公平をまもり正義をおこなふべし　わが救のきたるはちかく　わが義のあらはるるは近ければなり二安息日をまもりて汚さず　その手をおさへて惡きことをなさず　斯おこなふ人かく堅くまもる人の子はさいはひなり三ヱホバにつらなれる異邦人はいふなかれ　ヱホバ必ず我をその民より分ち給はんと　寺人もまたいふなかれ　われは枯たる樹なりと四ヱホバ如此いひたまふ　わが安息日をまもり　わが悦ぶことをえらみて我が契約を堅くまもる寺人には五我わが家のうちにてわが垣のうちにて子にも女にもまさる記念のしるしと名とをあたへ　並とこしへの名をたまふて絶ることなからしめん六またヱホバにつらなりてヱホバに事へ　ヱホバの名を愛しその僕となり　安息日をまもりて汚すことなく凡てわが契約をかたくまもる異邦人は七我これをわが聖山にきたらせ　わが祈の家のうちにて樂ましめん　かれらの燔祭と犧牲とはわが祭壇のうへに納めらるべし　わが家はすべての民のいのりの家ととなへらるべければなり八イスラエルの放逐れたるものを集めたまふ主ヱホバのたまはく　我さらに人をあつめて既にあつめられたる者にくはへん九野獸よみなきたりてくらへ　林にをるけものよ皆きたりてくらへ一〇斥候はみな瞽者にしてしることなし　みな啞なる犬にして吠ることあたはず　みな夢みるもの臥ゐるもの眠ることをこのむ者なり一一この犬はむさぼること甚だしくして飽ことをしらず　かれらは悟ることを得ざる牧者にして皆おのが道にむかひゆき何れにをる者もおのおの己の利をおもふ一二かれら互にいふ請われ酒をたづさへきたらん　われら濃酒にのみあかん　かくて明日もなほ今日のごとく大にみち足はせんと

第五七章

一義者ほろぶれども心にとむる人なく　愛しみ深き

人々とりさらるれども義きものの禍害のまへより取去るるなるを悟るものなし二かれは平安にいり直きをおこなふ者はその寐床にやすめり三なんぢら巫女の子淫人また妓女の裔よ近きたれ四なんぢら誰にむかひて戯れをなすや誰にむかひて口をひらき舌をのばすやなんぢらは悖逆の子輩いつはりの黨類にあらずや五なんぢらは橿樹のあひだ緑りなる木々のしたに心をこがし谷のなか岩の狹間に子をころせり六なんぢは谷のなかの滑かなる石をうくべき嗣業としこれをなんぢが所有とすなんぢ亦これに灌祭をなし之にそなへものを献げたりわれ之によりていかで心をなだむべしや七なんぢは高くそびえたる山の上になんぢの床をまうけかつ其處にのぼりゆきて犠牲をささげたり八また戸および柱のうしろに汝の記念をおけりなんぢ我をはなれて他人に身をあらはし登りゆきてその床をひろくしかれらと誓をなし又かれらの床を愛しこれがためにその所をえらびたり九なんぢ香膏とおほくの薫物とをたづさへて王にゆき又なんぢの使者をとほきにつかはし陰府にまで己をひくくせり一〇なんぢ途のながきに疲れたれどなほ望なしといはずなんぢ力をいきかへされしによりて衰弱ざりき一一なんぢ誰をおそれ誰のゆゑに慴きていつはりをいひ我をおもはず亦そのことを心におかざりしやわれ久しく默したれど汝かへりて我をおそれざりしにあらずや一二我なんぢの義をつげしめさんなんぢの作はなんぢに益せじ一三なんぢ呼るときその集めおきたるもの汝をすくへ風はかれらを悉くあげさり息はかれらを吹さらん然どわれに依頼むものは地をつぎわが聖山をうべし一四また人いはん土をもり土をもりて途をそなへよわが民のみちより躓礙をとりされと一五至高く至上なる永遠にすめるもの聖者となづくるもの如此いひ給ふ我はたかき所きよき所にすみ亦こころ碎けてへりくだる者とともにすみ謙だるものの靈をいかし碎けたるものの心をいかす一六われ限なくは爭はじ我たえずは怒らじ然らずば人のこころ我がまへにおとろへんわが造りたる靈はみな然らん一七彼のむさぼりの罪により我いかりて之をうちまた面をおほひて怒りたり然るになほ悖りて己がこころの途にゆけり一八されど我その途をみたり我かれを愈すべし又かれを導きてふたたび安慰をかれとその中のかなしめる者とにかへすべし一九我くちびるの果をつくれり遠きものにも近きものにも平安あれ平安あれ我かれをいやさん此はヱホバのみことばなり二〇然はあれど惡者はなみだつ海のごとし靜かなること能はずしてその水つねに濁と泥とをいだせり二一わが神いひたまはく惡きものには平安あることなしと

第五八章一大によばはりて聲をしむなかれ汝のこゑをラッパのごとくあげわが民にその愆をつげヤコブの家にその罪をつげしめせ二かれらは日々われを尋求めわが途をしらんことをこのむ義をおこなひ神の法をすてざる國のごとく義しき法をわれにもとめ神と相近づくことをこのめり三かれらはいふわれ

ら斷食するになんぢ見たまはず われら心をくるしむるになんぢ知たまはざるは何ぞやと 視よなんぢらの斷食の日にはおのがこのむ作をなし その工人をことごとく惱めつかふ四 視よなんぢら斷食するときは相あらそひ相きそひ惡の拳をもて人をうつ なんぢらの今のだんじきはその聲をうへに聞えしめんとにあらざるなり五 斯のごとき斷食はわが悅ぶところのものならんや かくのごときは人その靈魂をなやますの日ならんや その首を葦のごとくにふし麁服と灰とをその下にしくをもて斷食の日またヱホバに納らるる日となふべけんや六 わが悅ぶところの斷食はあくの繩をほどき 軛のつなをとき虐げらるるものを放ちさらしめ すべての軛ををるなどの事にあらずや七 また饑たる者になんぢのパンを分ちあたへ さすらへる貧民をなんぢの家にいれ 裸かなるものを見てこれに衣せ おのが骨肉に身をかくさざるなどの事にあらずや八 しかる時はなんぢのひかり曉の如くにあらはれいで 汝すみやかに愈さるることを得 なんぢの義はなんぢの前にゆき ヱホバの榮光はなんぢの軍後となるべし九 また汝よぶときはヱホバ答へたまはん なんぢ叫ぶときは我ここに在りといひ給はん／もし汝のなかより軛をのぞき指點をのぞき惡きことをかたるを除き一〇 なんぢの靈魂の欲するものをも饑たる者にほどこし 苦しむものの心を滿足しめば なんぢの光くらきにてりいで なんぢの闇は晝のごとくならん一一 ヱホバは常になんぢをみちびき 乾けるところにても汝のこころを滿足しめ なんぢの骨をかたうし給はん なんぢは潤ひたる園のごとく水のたえざる泉のごとくなるべし一二 汝よりいづる者はひさしく荒廢れたる所をおこし なんぢは累代やぶれたる基をたてん 人なんぢをよびて破隙をおぎなふ者といひ 市街をつくろひてすむべき所となす者といふべし一三 もし安息日になんぢの步行をとどめ 我聖日になんぢの好むわざをおこなはず 安息日をとなへて樂日となし ヱホバの聖日をとなへて尊むべき日となし 之をたふとみて己が道をおこなはず おのが好むわざをなさず おのが言をかたらずば一四 その時なんぢヱホバを樂しむべし ヱホバなんぢを地のたかき處にのらしめ なんぢが先祖ヤコブの產業をもて汝をやしなひ給はん こはヱホバ 口より語りたまへるなり

第五九章一 ヱホバの手はみぢかくして救ひえざるにあらず その耳はにぶくして聞えざるにあらず二 惟なんぢらの邪曲なる業なんぢらとなんぢらの神との間をへだてたり 又なんぢらの罪その面をおほひて聞えざらしめたり三 そはなんぢらの手は血にてけがれ なんぢらの指はよこしまにて汚れ なんぢらのくちびるは虛僞をかたり なんぢらの舌は惡をささやき四 その一人だに正義をもてうつたへ 眞實をもて論らふものなし 彼らは虛浮をたのみ虛僞をかたり 惡しきくはだてをはらみ不義をうむ五 かれらは蝮の卵をかへし 蜘網をおる その卵をくらふものは死るなり 卵もし踐るればやぶれて毒蛇をいだす六 その織るところは

衣になすあたはず その工をもて身をおほふこと能はず かれらの工はよこしまの工なり かれらの手には暴虐のおこなひあり[七] かれらの足はあくにはしり罪なき血をながすに速し かれらの思念はよこしまの思念なり 殘害と滅亡とその路徑にのこれり[八] 彼らは平穩なる道をしらず その過るところに公平なく又まがれる小徑をつくる 凡てこれを踐ものは平穩をしらず[九] このゆゑに公平はとほくわれらをはなれ正義はわれらに追及ず われら光をのぞめど暗をみ 光輝をのぞめど闇をゆく[一〇] われらは瞽者のごとく牆をさぐりゆき目なき者のごとく摸りゆき正午にても日暮のごとくにつまづき 強壯なる者のなかにありても死るもののごとし[一一] 我儕はみな熊のごとくにほえ鴿のごとくに甚くうめき 審判をのぞめどもあることなく 救をのぞめども遠くわれらを離る[一二] われらの愆はなんぢの前におほく われらのつみは證してわれらを訟へ われらのとがは我らとともに在り われらの邪曲なる業はわれら自らしれり[一三] われら罪ををかしてヱホバを棄われらの神にはなれてしたがはず 暴虐と悖逆とをかたり虛僞のことばを心にはらみて說出すなり[一四] 公平はうしろに退けられ正義ははるかに立り そは眞實は衢間にたふれ 正直はいることを得ざればなり[一五] 眞實はかけてなく惡をはなるるものは掠めうばはる／ヱホバこれを見てその公平のなかりしを悅びたまはざりき[一六] ヱホバは人なきをみ中保なきを奇しみたまへり 斯てその臂をもてみづから助け その義をもてみづから支たまへり[一七] ヱホバ義をまとひて護胸とし救をその頭にいただきて兜となし 仇をまとひて衣となし 熱心をきて外服となしたまへり[一八] かれらの作にしたがひて報をなし敵にむかひていかり仇にむかひて報をなし また島々にむくいをなし給はん[一九] 西方にてヱホバの名をおそれ 日のいづる所にてその榮光をおそるべし ヱホバは堰ぎとめたる河のその氣息にふき潰えたるがごとくに來りたまふ可ればなり[二〇] ヱホバのたまはく 贖 者シオンにきたりヤコブのなかの愆をはなるる者につかんと[二一] ヱホバいひ給く なんぢの上にあるわが靈なんぢの口におきたるわがことばは今よりのち永遠になんぢの口よりなんぢの裔の口より汝のすゑの裔の口よりはなれざるべし わがかれらにたつる契約はこれなりと此はヱホバのみことばなり

第六〇章

[一] 起よひかりを發て なんぢの光きたりヱホバの榮光なんぢのうへに照出たればなり[二] 視よくらきは地をおほひ闇はもろもろの民をおほはん されど汝の上にはヱホバ照出たまひてその榮光なんぢのうへに顯はるべし[三] もろもろの國はなんぢの光にゆき もろもろの王はてり出るなんぢが光輝にゆかん[四] なんぢの目をあげて環視せ かれらは皆つどひて汝にきたり 汝の子輩はとほきより來り なんぢの女輩はいだかれて來らん[五] そのときなんぢ視てよろこびの光をあらはし なんぢの心おどろきあやしみ且ひろらかになるべし そは海の富はうつりて汝につきもろもろの國の貨財はなんぢに來るべければなり[六] おほくの

駱駝ミデアンおよびエバのわかき駱駝なんぢの中にあまねくみちシバのもろもろの人こがね乳香をたづさへきたりてヱホバの譽をのべつたへん七 ケダルのひつじの群はみな汝にあつまりきたりネバヨテの牡羊はなんぢに事へ わが祭壇のうへにのぼりて受納られん 斯てわれわが榮光の家をかがやかすべし八 雲のごとくにとび鴿のその窠にとびかへるが如くしてきたる者はたれぞ九 もろもろの島はわれを俟望みタルシシのふねは首先になんぢの子輩をとほきより載きたり 並かれらの金銀をともにのせきたりてなんぢの神ヱホバの名にささげ イスラエルの聖者にささげん ヱホバなんぢを輝かせたまひたればなり一〇 異邦人はなんぢの石垣をきづき かれらの王等はなんぢに事へん そは我いかりて汝をうちしかどまた惠をもて汝を憐みたればなり一一 なんぢの門はつねに開きて夜も日もとざすことなしこは人もろもろの國の貨財をなんぢに携へきたりその王等をひきゐ來らんがためなり一二 なんぢに事へざる國と民とはほろびそのくにぐには全くあれすたるべし一三 レバノンの榮はなんぢにきたり 松 杉 黄楊はみな共にきたりて我が聖所をかがやかさん われ亦わが足をおく所をたふとくすべし一四 汝を苦しめたるものの子輩はかがみて汝にきたり 汝をさげしめたる者はことごとくなんぢの足下にふし 斯て汝をヱホバの都 イスラエルの聖者のシオンととなへん一五 なんぢ前にはすてられ憎まれてその中をすぐる者もなかりしが 今はわれ汝をとこしへの華美よよの歡喜となさん一六 なんぢ亦もろもろの國の乳をすひ王たちの乳房をすひ 而して我ヱホバなんぢの救主なんぢの贖 主ヤコブの全能者なるを知るべし一七 われ黄金をたづさへきたりて赤銅にかへ 白銀をたづさへきたりて鐵にかへ 赤銅を木にかへ鐵を石にかへ なんぢの施政者をおだやかにし なんぢを役するものを義うせん一八 強暴のこと再びなんぢの地にきこえず殘害と敗壞とはふたたびなんぢの境にきこえず 汝その石垣をすくひととなへ その門を譽ととなへん一九 晝は日ふたたびなんぢの光とならず 月もまた輝きてなんぢを照さず ヱホバ永遠になんぢの光となり なんぢの神はなんぢの榮となり給はん二〇 なんぢの日はふたたび落ず なんぢの月はかくることなかるべしそはヱホバ永遠になんぢの光となり 汝のかなしみの日畢るべければなり二一 汝の民はことごとく義 者となりてとこしへに地を嗣ん かれはわが植たる樹株わが手の工わが榮光をあらはす者となるべし二二 その小きものは千となり その弱きものは強國となるべし われヱホバその時いたらば速かにこの事をなさん

第六一章一 主ヱホバの靈われに臨めり こはヱホバわれに膏をそそぎて貧きものに福音をのべ傳ふることをゆだね 我をつかはして心の傷める者をいやし俘 囚にゆるしをつげ 縛められたるものに解 放をつげ二 ヱホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告しめ 又すべて哀むものをなぐさめ三 灰にかへ冠をたま

ひてシオンの中のかなしむ者にあたへ 悲哀にかへて歡喜のあぶらを予へ うれひの心にかへて讃美の衣をかたへしめたまふなり かれらは義の樹 ヱホバの植たまふ者 その榮光をあらはす者ととなへられん四 彼等はひさしく荒たる處をつくろひ 上古より廢れたる處をおこし 荒たる邑々をかされて新にし世々すたれたる處をふたたび建べし五 外人はたちてなんぢらの群をかひ 異邦人はなんぢらの畑をたがへす者となり 葡萄をつくる者とならん六 然どなんぢらはヱホバの祭司ととなへられ われらの神の役者とよばれ もろもろの國の富をくらひ かれらの榮をえて自らほこるべし七 曩にうけし恥にかへ倍して賞賜をうけ 凌辱にかへ 嗣業をえて樂むべし 而してその地にありて倍したる賞賜をたもち永遠によろこびを得ん八 われヱホバは公平をこのみ 邪曲なるかすめごとをにくみ 眞實をもて彼等にむくいをあたへ 彼等ととこしへの契約をたつべければなり九 かれらの裔はもろもろの國のなかに知れ かれらの子輩はもろもろの民のなかに知れん すべてこれを見るものはそのヱホバの祝したまへる裔なるを辨ふべし一〇 われヱホバを大によろこび わが靈魂はわが神をたのしまん そは我にすくひの衣をきせ 義の外服をまとはせて 新郎が冠をいただき新婦が玉こがねの飾をつくるが如くなしたまへばなり一一 地は芽をいだし畑はまけるものを生ずるがごとく 主ヱホバは義と譽とをもろもろの國のまへに生ぜしめ給ふべし

第六二章一 われシオンの義あさ日の光輝のごとくにいで ヱルサレムの救もゆる松火のごとくになるまではシオンのために默さずヱルサレムのために休まざるべし二 もろもろの國はなんぢの義を見 もろもろの王はみななんぢの榮をみん 斯てなんぢはヱホバの口にて定め給ふ新しき名をもて稱へらるべし三 また汝はうるはしき冠のごとくヱホバの手にあり 王の冕のごとくなんぢの神のたなごころにあらん四 人ふたたび汝をすてられたる者といはず 再びなんぢの地をあれたる者といはじ 却てなんぢをヘフジバ(わが悦ぶところ)ととなへ なんぢの地をベウラ(配偶)ととなふべし そはヱホバなんぢをよろこびたまふ なんぢの地は配偶をえん五 わかきものの處女をめとる如くなんぢの子輩はなんぢを娶らん 新郎の新婦をよろこぶごとくなんぢの神なんぢを喜びたまふべし六 ヱルサレムよ我なんぢの石垣のうへに斥候をおきて終日終夜たえず默すことなからしむ なんぢらヱホバに記念したまはんことを求むるものよ 自らやすむなかれ七 ヱホバ、ヱルサレムをたてて全地に譽をえしめ給ふまでは息め奉るなかれ八 ヱホバその右手をさしその大能の臂をさし誓ひて宣給く われ再びなんぢの五穀をなんぢの敵にあたへて食はせず 異邦人はなんぢが勞したる酒をのまざるべし九 收穫せしものは之をくらひてヱホバを讃たたへ 葡萄をあつめし者はわが聖所の庭にて之をのむべし一〇 門よりすすみゆけ進みゆけ 民の途をそなへ 土をもり土をもりて大路をまうけよ 石をとりのぞ

けもろもろの民に旗をあげて示せ一一 ヱホバ地の極にまで告てのたまはく 汝等シオンの女にいへ 視よなんぢらの救きたる 視よ主の手にその恩賜あり はたらきの價はその前にあり一二 而してかれらはきよき民またヱホバにあがなはれたる者ととなへられん なんぢは人にもとめ尋らるるもの棄られざる邑ととなへらるべし

第六三章一 このエドムよりきたり緋衣をきてボヅラよりきたる者はたれぞ その服飾はなやかに大なる能力をもて嚴しく歩みきたる者はたれぞ これは義をもてかたり大にすくひをほどこす我なり二 なんぢの服飾はなにゆゑに赤くなんぢの衣はなにゆゑに酒搾をふむ者とひとしきや三 我はひとりにて酒搾をふめりもろもろの民のなかに我とともにする者なし われ怒によりて彼等をふみ忿恚によりてかれらを蹈にじりたれば かれらの血わが衣にそそぎわが服飾をことごとく汚したり四 そは刑罰の日わが心の中にあり 救贖の歳すでにきたれり五 われ見てたすくる者なく扶る者なきを奇しめり この故にわが臂われをすくひ我いきどほり我をささへたり六 われ怒によりてもろもろの民をふみおさへ 忿恚によりてかれらを酔しめ かれらの血を地に流れしめたり七 われはヱホバのわれらに施したまへる各種のめぐみとその譽とをかたりつげ 又その憐憫にしたがひ其おほくの恩惠にしたがひてイスラエルの家にほどこし給ひたる大なる恩寵をかたり告ん八 ヱホバいひたまへり 誠にかれらはわが民なり 虚僞をせざる子輩なりと 斯てヱホバはかれらのために救主となりたまへり九 かれらの艱難のときはヱホバもなやみ給ひてその面前の使をもて彼等をすくひ その愛とその憐憫とによりて彼等をあがなひ彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたまへり一〇 然るにかれらは悖りてその聖靈をうれへしめたる故にヱホバ翻然かれらの仇となりて自らこれを攻たまへり一一 爰にその民いにしへのモーセの日をおもひいでて曰けるはかれらとその群の牧者とを海より携へあげし者はいづこにありや彼等のなかに聖靈をおきしものは何處にありや一二 榮光のかひなをモーセの右にゆかしめ 彼等のまへに水をさきて自らとこしへの名をつくり一三 彼等をみちびきて馬の野をはしるがごとく蹟かで淵をすぎしめたりし者はいづこに在りや一四 谷にくだる家畜の如くにヱホバの靈かれらをいこはせ給へり 主よなんぢは斯おのれの民をみちびきて榮光の名をつくり給へり一五 ねがはくは天より俯觀なはし その榮光あるきよき居所より見たまへ なんぢの熱心となんぢの大能あるみわざとは今いづこにありや なんぢの切なる仁慈と憐憫とはおさへられて我にあらはれず一六 汝はわれらの父なりアブラハムわれらを知ずイスラエルわれらを認めず されどヱホバよ汝はわれらの父なり上古よりなんぢの名をわれらの贖主といへり一七 ヱホバよ何故にわれらをなんぢの道より離れまどはしめ我儕のこころを頑固にして汝を畏れざらしめたまふや 願くはなんぢの僕等のため

になんぢの産業なる支派のために歸りたまへ一八 汝のきよきたみ地をえて久しからざるにわれらの敵なんぢの聖所をふみにじれり一九 我儕はなんぢに上古より治められざる者のごとく なんぢの名をもて稱られざる者のごとくなりぬ

第六四章一 願くはなんぢ天を裂てくだり給へ なんぢのみまへに山々ふるひ動かんことを二 火の柴をもやし火の水を沸すがごとくして降りたまへ かくて名をなんぢの敵にあらはし もろもろの國をなんぢのみまへに戰慄かしめたまへ三 汝われらが逆料あたはざる懼るべき事をおこなひ給ひしときに降りたまへり山々はその前にふるひうごけり四 上古よりこのかた汝のほかに何なる神ありて俟望みたる者にかかる事をおこなひしやいまだ聽ず いまだ耳にいらず いまだ目にみしことなし五 汝はよろこびて義をおこなひなんぢの途にありてなんぢを紀念するものを迎へたまふ 視よなんぢ怒りたまへり われらは罪ををかせりかかる狀なること既にひさし 我儕いかで救はるるを得んや六 我儕はみな潔からざる物のごとくなり われらの義はことごとく汚れたる衣のごとし 我儕はみな木葉のごとく枯れ われらのよこしまは暴風のごとく我らを吹去れり七 なんぢの名をよぶ者なく みづから勵みて汝によりすがる者なし なんぢ面をおほひてわれらを顧みたまはず われらが邪曲をもてわれらを消失せしめたまへり八 されどヱホバよ汝はわれらの父なり われらは泥塊にしてなんぢは陶工なり 我らは皆なんぢの御手のわざなり九 ヱホバよいたく怒りたまふなかれ 永くよこしまを記念したまふなかれ 願くは顧みたまへ 我儕はみななんぢの民なり一〇 汝のきよき諸邑は野となり シオンは野となりヱルサレムは荒廢れたり一一 我らの先祖が汝を讃たたへたる榮光ある我儕のきよき宮は火にやかれ 我儕のしたひたる處はことごとく荒はてたり一二 ヱホバよこれらの事あれども汝なほみづから制へたまふや なんぢなほ默してわれらに深くくるしみを受しめたまふや

第六五章一 我はわれを求めざりしものに問もとめられ 我をたづねざりしものに見出され わが名をよばざりし國にわれ曰らく われは此にあり我はここに在と二 善らぬ途をあゆみおのが思念にしたがふ悖れる民をひねもす手をのべて招けり三 この民はまのあたり恒にわが怒をひき 園のうちにて犧牲をささげ 瓦の壇にて香をたき四 墓のあひだにすわり隱密なる處にやどり 猪の肉をくらひ憎むべきものの羹をその器皿にもりて五 人にいふなんぢ其處にたちて我にちかづくなかれ そは我なんぢよりも聖しと 彼らはわが鼻のけぶり終日もゆる火なり六 視よこの事わが前にしるされたり われ默さずして報いかへすべし 必ずかれらの懷中に報いかへすべし七 ヱホバいひ給く なんぢらの邪曲となんぢらが列祖のよこしまとはともに報いかへすべし かれらは山上にて香をたき岡のうへにて我を汚ししがゆゑに 我まづその作をはかりてその懷中にかへすべし八 ヱホバ如此いひたまふ

人ぶだうのなかに汁あるを見ばいはん これを壊るなかれ福祉その中にあればなりと 我わが僕等のために如此おこなひてことごとくは壊らじ九 ヤコブより一裔をいだしユダよりわれ山々をうけつぐべき者をいださん わが撰みたる者はこれをうけつぎ我がしもべらは彼處にすむべし一〇 シャロンは羊のむれの牧場となりアコルの谷はうしの群のふす所となりて我をたづねもとめたるわが民の有とならん一一 然どなんぢらヱホバを棄わがきよき山をわすれ 机をガド（禍福の神）にそなへ雜合せたる酒をもりてメニ（運命の神）にささぐる者よ一二 われ汝らを劍にわたすべく定めたり なんぢらは皆かがみて屠らるべし 汝等はわが呼しときこたへず わが語りしときききかず わが目にあしき事をおこなひ わが好まざりし事をえらみたればなり一三 このゆゑに主ヱホバかく言給ふ わが僕等はくらへども汝等はうゑわが僕等はのめども汝等はかわき 我しもべらは喜べどもなんぢらははぢ一四 わが僕等はこころ樂きによりて歌うたへども汝等はこころ哀きによりて叫び また靈魂うれふるによりて泣嘷ぶべし一五 なんぢらが遺名はわが撰みたるものの呪詛の料とならん 主ヱホバなんぢらを殺したまはん 然どおのれの僕等をほかの名をもて呼たまふべし一六 斯るがゆゑに地にありて己のために福祉をねがふものは眞實の神にむかひて福祉をもとめ地にありて誓ふものは眞實の神をさして誓ふべし さきの困難は忘れられてわが目よりかくれ失たるに因る一七 視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造す 人さきのものを記念することなく之をその心におもひ出ることなし一八 然どなんぢらわが創造する者によりて永遠にたのしみよろこべ 視よわれはヱルサレムを造りてよろこびとしその民を快樂とす一九 われヱルサレムを喜びわが民をたのしまん 而して泣聲とさけぶ聲とはふたたびその中にきこえざるべし二〇 日數わづかにして死る嬰兒といのちの日をみたさざる老人とはその中にまたあることなかるべし 百歳にて死るものも尚わかしとせられ 百歳にて死るものを詛れたる罪人とすべし二一 かれら家をたてて之にすみ葡萄園をつくりてその果をくらふべし二二 かれらが建るところにほかの人すまず かれらが造るところの果はほかの人くらはずそはわが民のいのちは樹の命の如く 我がえらみたる者はその手の工ふるびうするとも存ふべければなり二三 かれらの勤勞はむなしからず その生ところの者はわざはひにかからず 彼等はヱホバの福祉をたまひしものの裔にしてその子輩もあひ共にをる可ればなり二四 かれらが呼ざるさきにわれこたへ 彼らが語りをへざるに我きかん二五 豺狼とこひつじと食物をともにし 獅は牛のごとく藁をくらひ 蛇はちりを糧とすべし 斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん これヱホバの聖言なり

第六六章

一 ヱホバ如此いひたまふ 天はわが位 地はわが足臺なりなんぢら我がために如何なる家をたてんとするか 又いかな

る處かわが休憩の場とならん二ヱホバ宣給く　我手はあらゆる此等のものを造りてこれらの物ことごとく成れり　我はただ苦しみまた心をいため我がことばを畏れをののくものを顧みるなりと三牛をほふるものは人をころす者のごとく　羔を犧牲とするものは狗をくびりころす者のごとく　祭物をささぐるものは豕の血をささぐる者のごとく　香をたくものは偶像をほむる者のごとし　彼等はおのが途をえらみその心にくむべき者をたのしみとせり四我もまた災禍をえらびて彼等にあたへ　その懼るるところの事を彼らに臨ましめん　そは我よびしとき應ふるものなく我かたりしとき聽ことをせざりき　わが目にあしき事をおこなひわが好まざる事をえらみたればなり五なんぢらヱホバの言をおそれをののく者よヱホバの言をきけ　なんぢらの兄弟なんぢらを憎みなんぢらをわが名のために逐出していふ　願くはヱホバその榮光をあらはして我儕になんぢらの歡喜を見せしめよと　然どかれらは恥をうけん六　騷亂るこゑ邑よりきこえ聲ありて宮よりきこゆ　此はヱホバその仇にむくいをなしたまふ聲なり七シオンは産のなやみを知ざるさきに生　その劬勞きたらざるさきに男子をうみいだせり八誰がかかる事をききしや誰がかかる類をみしや　一の國はただ一日のくるしみにて成べけんや　一つの國民は一時にうまるべけんや　然どシオンはくるしむ間もなく直にその子輩をうめり九ヱホバ言給く　われ産にのぞましめしに何でうまざらしめんや　なんぢの神いひたまはく

我はうましむる者なるにいかで胎をとざさんや一〇ヱルサレムを愛するものよ皆かれとともに喜べ　かれの故をもてたのしめ　彼のために悲めるものよ皆かれとともに喜びたのしめ一一そはなんぢら乳をすふ如くヱルサレムの安慰をうけて飽ことを得ん　また乳をしぼるごとくその豐なる榮をうけておのづから心さわやかならん一二ヱホバ如此いひたまふ　視よわれ河のごとく彼に平康をあたへ　漲ぎる流のごとく彼にもろもろの國の榮をあたへん　而して汝等これをすひ背におはれ膝におかれて樂しむべし一三母のその子をなぐさむるごとく我もなんぢらを慰めん　なんぢらはヱルサレムにて安慰をうべし一四なんぢら見て心よろこばん　なんぢらの骨は若草のさかゆるごとくだるべし　ヱホバの手はその僕等にあらはれ又その仇をはげしく怒りたまはん一五視よヱホバは火中にあらはれて來りたまふ　その車輦ははやちのごとし　烈しき威勢をもてその怒をもらし火のほのほをもてその譴をほどこし給はん一六ヱホバは火をもて劍をもてよろづの人を刑ひたまはん　ヱホバに刺殺さるるもの多かるべし一七ヱホバ宣給く　みづからを潔くしみづからを別ちて園にゆき　その中にある木の像にしたがひ　豕の肉けがれたる物および鼠をくらふ者はみな共にたえうせん一八我かれらの作爲とかれらの思念とをしれり　時きたらばもろもろの國民ともろもろの族とをあつめん　彼等きたりてわが榮光をみるべし一九我かれらのなかに一つの休徵をたてて逃れたる者をもろもろの國すなはちタ

ルシよく弓をひくブル、ルデおよびトバル、ヤワン又わが聲名をきかずわが榮光をみざる遙かなる諸島につかはさん 彼等はわが榮光をもろもろの國にのべつたふべし二〇 ヱホバいひ給ふ かれらはイスラエルの子輩がきよき器にそなへものをもりてヱホバの家にたづさへきたるが如く なんぢらの兄弟をもろもろの國の中よりたづさへて馬 車 轎 騾 駱駝にのらしめ わが聖山ヱルサレムにきたらせてヱホバの祭物とすべし二一 ヱホバいひ給ふ 我また彼等のうちより人をえらびて祭司としレビ人とせん二二 ヱホバ宣給く わが造らんとする新しき天とあたらしき地とわが前にながくとどまる如く なんぢの裔となんぢの名はながくとどまらん二三 ヱホバいひ給ふ新月ごとに安息日ごとによろづの人わが前にきたりて崇拜をなさん二四 かれら出てわれに逆きたる人の屍をみん その蛆しなずその火きえず よろづの人にいみきらはるべし

ヱレミヤ記

第一章一 こはベニヤミンの地アナトテの祭司の一人なるヒルキヤの子ヱレミヤの言なり二 アモンの子ユダの王ヨシヤの時すなはちその治世の十三年にヱホバの言ヱレミヤに臨めり三 その言またヨシヤの子ユダの王ヱホヤキムの時にものぞみてヨシヤの子ユダの王ゼデキヤの十一年のをはり即ちその年の五月ヱルサレムの民の移されたる時までにいたれり四 ヱホバの言我にのぞみて云ふ五 われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり汝が胎をいでざりし先に汝を聖め汝をたてて萬國の預言者となせりと六 我こたへけるは噫主ヱホバよ視よわれは幼少により語ることを知らず七 ヱホバわれにいひたまひけるは汝われは幼少といふ勿れすべて我汝を遣すところにゆき我汝に命ずるすべてのことを語るべし八 なんぢ彼等の面を畏るる勿れ蓋われ汝と偕にありて汝をすくふべければなりとヱホバいひたまへり九 ヱホバ遂にその手をのべて我口につけヱホバ我にいひたまひけるは視よわれ我言を汝の口にいれたり一〇 みよ我けふ汝を萬民のうへと萬國のうへにたて汝をして或は抜き或は毀ち或は滅し或は覆し或は建て或は植しめん一一 ヱホバの言また我に臨みていふヱレミヤよ汝何をみるや我こたへけるは巴旦杏の枝をみる一二 ヱホバ我にいひたまひけるは汝善く見たりそはわれ速に我言をなさんとすればなり一三 ヱホバの言ふたたび我に臨みていふ汝何をみるや我こたへけるは沸騰たる鑊をみるその面は北より此方に向ふ一四 ヱホバ我にいひたまひけるは災 北よりおこりてこの地に住るすべての者にきたらん一五 ヱホバいひたまひけるはわれ北の國々のすべての族をよばん彼等きたりてヱルサレムの門の入口とその周圍のすべての石垣およびユダのすべての邑々に向ひておのおのその座を設けん一六 われかれらの凡の惡事のために我鞫をかれにつげん是はかれら我をすてて別の神に香を焚きおのれの手にて作りし物を拝するによる一七 汝腰に帯して起ちわが汝に命ずるすべての事を彼等につげよその面を畏るる勿れ否らざれば我かれらの前に汝を辱かしめん一八 視よわれ今日この全國とユダの王とその牧伯とその祭司とその地の民の前に汝を堅き城 鐵の柱 銅の牆となせり一九 彼等なんぢと戰はんとするも汝に勝ざるべしそはわれ汝とともにありて汝をすくふべければなりとヱホバいひたまへり

第二章一 ヱホバの言我にのぞみていふ二 ゆきてヱルサレムに住る者の耳につげよヱホバ斯くいふ我汝につきて汝の若き時の懇切なんぢが契をなせしときの愛曠野なる種播ぬ地にて我に従ひしことを憶ゆと三 イスラエルはヱホバの聖物にしてその初に結べる實なりすべて之を食ふものは罰せられ災にあふべしとヱホバ云ひたまへり四 ヤコブの家とイスラエルの家の諸の族よヱホバの言をきけ五 ヱホバかくいひたまふ汝等の先祖は我に何の惡事ありしを見て我に遠かり虚しき物にしたがひて虚しくな

りしや六 かれらは我儕をエジプトの地より導きいだし曠野なる岩穴ある荒たる地 旱きたる死の蔭の地 人の過ぎざる地 人の住はざる地を通らしめしヱホバはいづこにあるといはざりき七 われ汝等を導きて園のごとき地にいれ其實と佳物をくらはしめたり然ど汝等此處にいり我地を汚し我產業を憎むべきものとなせり八 祭司はヱホバは何處にいますといはず律法をあつかふ者は我を知らず牧者は我に背き預言者はバアルによりて預言し益なきものに從へり九 故にわれ尚汝等とあらそはん且汝の子孫とあらそふべしとヱホバいひたまふ一〇 汝等キッテムの諸島にわたりて觀よまた使者をケダルにつかはし斯のごとき事あるや否やを詳細に察せしめよ一一 その神を神にあらざる者に易たる國ありや然るに我民はその榮を益なき物にかへたり一二 天よこの事を驚け慄けいたく怖れよとヱホバいひたまふ一三 蓋わが民はふたつの惡事をなせり即ち活る水の源なる我をすて自己水溜を掘れりすなはち壞れたる水溜にして水を有たざる者なり一四 イスラエルはしもべなるか家にうまれし僕なるかいかにして虜掠となれるや一五 わかき獅子かれにむかひて哮えその聲をあげてその地を荒せりその諸邑は焚れて住む人なし一六 ノフとタパネスの諸子も汝の頭首の髮をくらはん一七 汝の神ヱホバの汝を途にみちびきたまへる時に汝これを棄たるによりて此事汝におよぶにあらずや一八 汝ナイルの水を飲んとてエジプトの路にあるは何ゆゑぞまた河の水を飲んとてアッスリヤの路にあるは何故ぞ一九 汝の惡は汝をこらしめ汝の背は汝をせめん斯く汝が汝の神ヱホバをすてたると我を畏るることの汝の衷にあらざるとは惡く且つ苦きことなるを汝見てしるべしと主なる萬軍のヱホバいひ給ふ二〇 汝昔より汝の軛ををり汝の縛を截ちていひけるは我つかふることをせじと即ち汝すべての高山のうへと諸の青木の下に妓女のごとく身をかがめたり二一 われ汝を植て佳き葡萄の樹となし全き眞の種となせしにいかなれば汝われに向ひて異なる葡萄の樹の惡き枝にかはりしや二二 たとひ曹達をもて自ら濯ひまたおほくの灰汁を加ふるも汝の惡はわが前に汚れたりと主ヱホバいひ給ふ二三 汝いかで我は汚れずバアルに從はざりしといふことを得んや汝谷の中のおこなひを觀よ汝のなせしことを知れ汝は疾走るわかき牝の駱駝にしてその途にさまよへり二四 汝は曠野になれたる野の牝驢馬なり其欲のために風にあへぐその欲のうごくときは誰かこれをとどめえん凡てこれを尋る者は自ら勞するにおよばずその月の中に之にあふべし二五 汝足をつつしみて跣足にならざるやうにし喉をつつしみて渇かぬやうにせよしかるに汝いふ是は徒然なり然りわれ異なる國の者を愛してこれに從ふなりと二六 盜人の執へられて恥辱をうくるがごとくイスラエルの家恥辱をうく彼等その王その牧伯その祭司その預言者みな然り二七 彼等木にむかひて汝は我父なりといひまた石にむかひて汝は我を生みたりといふ彼等は背を我にむけて其面をわれに向けずされど彼等災にあふとき

は起てわれらを救ひ給へといふ二八汝がおのれの爲に造りし神はいづこにあるやもし汝が災にあふときかれら汝を救ふを得ば起つべきなりそはユダよ汝の神は汝の邑の數に同じければなり二九汝等なんぞ我とあらそふや汝らは皆我に背けりとヱホバいひ給ふ三〇我が汝らの衆子を打しは益なかりき彼等は懲治をうけず汝等の劍は猛き獅子のごとく汝等の預言者を滅せり三一なんぢらこの世の人よヱホバの言をきけ我はイスラエルのために曠野となりしや暗き地となりしや何故にわが民はわれら徘徊りて復汝に來らじといふや三二それ處女はその飾物を忘れんや新婦はその帶をわすれんや然ど我民の我を忘れたる日は數へがたし三三汝愛を得んとて如何に汝の途を美くするぞよされば汝の行はあしき事を爲すに慣たり三四また汝の裾に辜なき貧者の生命の血ありわれ盗人の穿たる所にて之を見ずしてすべて此等の上にこれを見る三五されど汝いふわれは辜なし故にその怒はかならず我に臨まじとみよ汝われ罪を犯さざりしといふにより我汝とあらそふべし三六なんぢ何故にその途を易んとて迅くはしるや汝アッスリヤに恥辱をうけしごとくエジプトにも亦恥辱をうけん三七汝兩手を頭に置てかしこよりも出去らんそはヱホバ汝のたのむところの者を棄れば汝彼等によりて望を遂ること無るべければなり

第三章一 世にいへるあり人もしその妻をいだされんに去りゆきてほかの人の妻とならば其夫ふたたび彼に歸るべけんやさすれば其地はおほいに汚れざらんや汝はおほくの者と姦淫を行へりされど汝われに復れよとヱホバいひ給ふ二汝目をあげてもろもろの童山をみよ姦淫を行はざる所はいづこにあるや汝は曠野にをるアラビヤ人の爲すがごとく路に坐して人をまてり汝は姦淫と惡をもて此地を汚せり三この故に雨はとどめられ春の雨はふらざりし然れど汝娼妓の額あれば肯て恥ず四汝いまより我を呼ていはざらんや我父よ汝はわが少時の交友なり五窮なくその怒を含まんや恒に之を存たんやと視よ汝はかくいへど力をきはめて惡を爲すなり六ヨシヤ王のときヱホバまた我にいひ給ひけるは汝そむけるイスラエルのなせしことを見しや彼はすべての高山にのぼりすべての青木の下にゆきて其處に姦淫を行へり七彼このすべての事を爲せしのち我かれに汝われに歸れと言しかどもわれに歸らざりき其悖れる姊妹なるユダ之を見たり八我に背けるイスラエル姦淫をなせしにより我かれを出して離縁状をあたへたれどその悖れる姊妹なるユダは懼れずして往て姦淫を行ふ我これを見る九また其姦淫の噪をもてこの地を汚し且石と木とに姦淫を行へり一〇此諸の事あるも仍其悖れる姊妹なるユダは眞心をもて我にかへらず僞れるのみとヱホバいひたまふ一一ヱホバまた我にいひたまひけるは背けるイスラエルは悖れるユダよりも自己を義とす一二汝ゆきて北にむかひ此言を宣ていふべしヱホバいひたまふ背けるイスラエルよ歸れわれ怒の面を汝らにむけじわれは矜恤ある者なり怒を限なく

含みをることとあらじとヱホバいひたまふ一三汝ただ汝の罪を認はせそは汝の神ヱホバにそむき經めぐりてすべての青木の下にて異邦人にゆき汝等わが聲をきかざればなりとヱホバいひ給ふ一四ヱホバいひたまふ背ける衆子よ我にかへれそはわれ汝等を娶ればなりわれ邑より一人支派より二人を取りて汝等をシオンにつれゆかん一五われ我心に合ふ牧者を汝等にあたへん彼等は知識と明哲をもて汝等を養ふべし一六ヱホバいひたまふ汝等地に増して多くならんときは人々復ヱホバの契約の櫃といはず之を想ひいでず之を憶えずこれを尋ねずこれを作らざるべし一七その時ヱルサレムはヱホバの座位と稱へられ萬國の民ここに集るべし即ちヱホバの名によりてヱルサレムに集り重て其惡き心の剛愎なるにしたがひて行まざるべし一八その時ユダの家はイスラエルの家とともに行みて北の地よりいで我汝らの先祖たちに與へて嗣しめし地に偕にきたるべし一九我いへり嗚呼われいかにして汝を諸子の中に置き萬國の中にて最も美しき產業なる此美地を汝にあたへんと我またいへり汝われを我父とよび亦我を離れざるべしと二〇然にイスラエルの家よ妻の誓に違きてその夫を棄るがごとく汝等われに背けりとヱホバいひたまふ二一聲山のうへに聞ゆ是はイスラエルの民の悲み祈るなり蓋彼等まがれる途にあゆみ其神ヱホバを忘るればなり二二背ける諸子よ我に歸れわれ汝の退違をいやさん／視よ我儕なんぢに到る汝はわれらの神ヱホバなればなり二三信に諸の岡とおほくの山に救を望むはいたづらなり誠にイスラエルの救はわれらの神ヱホバにあり二四羞恥はわれらの幼時より我儕の先祖の產業すなはち其多の羊とそのおほくの牛および其子その女を呑盡せり二五われらは羞恥に臥し我らは恥辱に覆はるべしそは我儕とわれらの列祖は我らの幼時より今日にいたるまで罪をわれらの神ヱホバに犯し我儕の神ヱホバの聲に遵はざればなり

第四章一ヱホバいひたまふイスラエルよ汝もし歸らば我に歸れ汝もし憎むべき者を我前より除かば流蕩はじ二かつ汝は眞實と正直と公義とをもてヱホバは活くと誓はんさらば萬國の民は彼によりて福祉をうけ彼によりて誇るべし三ヱホバ、ユダとヱルサレムの人々にかくいひ給ふ汝等の新田を耕せ荊棘の中に種くなかれ。四ユダの人々とヱルサレムに住める者よ汝等みづから割禮をおこなひてヱホバに屬きおのれの心の前の皮を去れ然らざれば汝等の惡行のためわが怒火の如くに發して燃えんこれを滅すものなかるべし五汝等ユダに告げヱルサレムに示していへ箛を國の中に吹けとまた大聲に呼はりていへ汝等あつまれ我儕堅き邑にゆくべしと六シオンに指示す合圖の旗をたてよ迯よ留まる勿れそは我北より災とおほいなる敗壞をきたらすればなり七獅子は其森よりいでて上り國々を滅すものは進みきたる彼汝の國を荒さんとて既にその處よりいでたり汝の諸邑は滅されて住む者なきに至らん八この故に汝等麻の衣を身にまとひて悲み哭けそはヱホバの烈しき怒いまだ我儕を離れざればなり

九ヱホバいひたまひけるはその日王と牧伯等はその心をうしなひ祭司は驚き預言者は異むべし一〇我いひけるは嗚呼主ヱホバよ汝はまことに此民とヱルサレムを大にあざむきたまふすなはち汝はなんぢら安かるべしと云給ひしに劍 命にまでおよべり一一その時この民とヱルサレムにいふものあらん熱き風 曠野の童山よりわが民の女にふききたると此は簸るためにあらず潔むる爲にもあらざるなり一二これよりも猶はげしき風われより來らん今我かれらに鞫を示さん一三みよ彼は雲のごとく上りきたらん其車は颶風のごとくにしてその馬は鷹よりも疾し嗚呼われらは禍なるかな我儕滅さるべし一四ヱルサレムよ汝の心の惡をあらひ潔めよ然ばすくはれん汝の惡き念いつまで汝のうちにあるや一五ダンより告ぐる聲ありエフライムの山より災を知するなり一六汝ら國々の民に告げまたヱルサレムに知らせよ攻めかこむ者遠き國より來りユダの諸邑にむかひて其聲を揚ぐと一七彼らは田圃をまもる者のごとくにこれを圍むこは我に從はざりしに由るとヱホバいひ給ふ一八汝の途と汝の行これを汝に招けりこれは汝の惡なり誠に苦くして汝の心におよぶ一九嗚呼わが腸よ我 腸よ痛苦心の底におよびわが心胸とどろくわれ默しがたし我靈魂よ汝 箛の聲と軍の鬨をきくなり二〇敗滅に敗滅のしらせありこの地は皆荒されわが幕屋は頃刻にやぶられ我幕は忽ち破られたり二一我が旗をみ箛の聲をきくは何時までぞや二二それ我民は愚にして我を識らず拙き子等にして曉ることなし彼らは惡を行ふに智けれども善を行ふことを知ず二三われ地を見るに形なくして空くあり天を仰ぐに其處に光なし二四我山を見るに皆震へまた諸の丘も動けり二五我見に人あることなし天空の鳥も皆飛されり二六我みるに肥美なる地は沙漠となり且その諸の邑はヱホバの前にその烈しき怒の前に毀たれたり二七そはヱホバかくいひたまへりすべて此地は荒地とならんされど我ことごとくは之を滅さじ二八故に地は皆哀しみ上なる天は暗くならん我すでに之をいひ且これを定めて悔いずまた之をなす事を止ざればなり二九邑の人みな騎兵と射者の咄喊のために逃て叢林にいり又岩の上に升れり邑はみな棄られて其處に住む人なし三〇滅されたる者よ汝何をなさんとするや設令汝くれなゐの衣をき金の飾物をもて身を粧ひ目をぬりて大くするとも汝が身を粧ふはいたづらなり汝の戀人らは汝をいやしめ汝のいのちを索なり三一われ子をうむ婦のごとき聲首子をうむ者の苦むがごとき聲を聞く是れシオンの女の聲なりかれ自ら歎き手をのべていふ嗚呼われは禍なるかな我靈魂殺す者のために疲れはてぬ

第五章 一汝等ヱルサレムの邑をめぐりて視且察りその街を尋ねよ汝等もし一人の公義を行ひ眞理を求る者に逢はばわれ之（ヱルサレム）を赦すべし二彼らヱホバは活くといふとも實は僞りて誓ふなり三ヱホバよ汝の目は誠實を顧みるにあらずや汝彼らを撻どもかれら痛苦をおぼえず彼等を滅せどもかれら懲治をうけず其面を磐よりも硬くして歸ることを拒めり四故に我いひけ

るは此輩は惟いやしき愚なる者なればヱホバの途と其神の鞫を知ざるなり 五 われ貴人にゆきて之に語らんかれらはヱホバの途とその神の鞫を知るなり然に彼らも皆軛を折り縛を斷り 六 故に林よりいづる獅子は彼らを殺しアラバの狼はかれらを滅し豹はその邑をねらふ此處よりいづる者は皆裂るべしそは其罪おほくその背違ははなはだしければなり 七 我なに故に汝をゆるすべきや汝の諸子われを棄て神にあらざる神を指して誓ふ我すでに彼らを誓はせたれど彼ら姦淫して娼妓の家に群集る 八 彼らは肥たる牡馬のごとくに行めぐりおのおの隣の妻を慕ふ 九 ヱホバいひたまふ我これらの事のために彼らを罰せざらんや我心はかくの如き民に仇を復さざらんや 一〇 汝等その石垣にのぼりて滅せされど悉くはこれを滅す勿れその枝を截除けヱホバのものに有ざればなり 一一 イスラエルの家とユダの家は大に我に悖るなりとヱホバいひたまふ 一二 彼等はヱホバを認ずしていふヱホバはある者にあらず災われらに來らじ我儕劍と饑饉をも見ざるべし 一三 預言者は風となり言はかれらの衷にあらず斯彼らになるべしと 一四 故に萬軍の神ヱホバかくいひたまふ汝等この言を語により視よわれ汝の口にある我言を火となし此民を薪となさんその火彼らを焚盡すべし 一五 ヱホバいひ給ふイスラエルの家よみよ我遠き國人をなんぢらに來らしめん其國は強くまた古き國なり汝等その言をしらず其語ることをも曉らざるなり 一六 その箙は啓きたる墓のごとし彼らはみな勇士なり 一七 彼らは汝の穡れたる物と汝の糧食を食ひ汝の子女を食ひ汝の羊と牛を食ひ汝の葡萄の樹と無花果の樹を食ひまた劍をもて汝の賴むところの堅き邑を滅さん 一八 されど其時われことごとくは汝を滅さじとヱホバいひたまふ 一九 汝等何ゆゑにわれらの神ヱホバ此等の諸のことを我儕になしたまふやといはば汝かれらに答ふべし汝ら我をすて汝らの地に於て異なる神に奉へしごとく汝らのものにあらざる地に於て異邦人につかふべしと 二〇 汝これをヤコブの家にのべまたこれをユダに示していへ 二一 愚にして了知なく目あれども見えず耳あれども聞えざる民よこれをきけ 二二 ヱホバいひ給ふ汝等われを畏れざるか我前に戰慄かざるか我は沙を置て海の界となしこれを永遠の限界となし踰ることをえざらしむ其浪さかまきいたるも勝ことあたはず澎湃もこれを踰るあたはざるなり 二三 然るにこの民は背き且悖れる心あり既に背きて去れり 二四 彼らはまた我儕に雨をあたへて秋の雨と春の雨を時にしたがひて下し我儕のために收穫の時節を定め給へる我神ヱホバを畏るべしと其心にいはざるなり 二五 汝等の愆はこれらの事を退け汝等の罪は嘉物を汝らに來らしめざりき 二六 我民のうちに惡者あり網を張る者のごとくに身をかがめてうかがひ罟を置て人をとらふ 二七 樊籠に鳥の盈るがごとく不義の財彼らの家に充つこの故に彼らは大なる者となり富る者となる 二八 彼らは肥て光澤あり其惡き行は甚し彼らは訟をたださず孤の訟を糺さずして利達をえ亦貧者の訴を鞫かず 二九 ヱホ

バいひ給ふわれかくのごときことを罰せざらんや我心は是のごとき民に仇を復さざらんや三〇この地に驚くべき事と憎むべきこと行はる三一預言者は僞りて預言をなし祭司は彼らの手によりて治め我民は斯る事を愛すされど汝等その終に何をなさんとするや

第六章一ベニヤミンの子等よヱルサレムの中より逃れテコアに箛をふきベテハケレムに合圖の火をあげよそは北より災と大なる敗壞のぞめばなり二われ美しき窈窕なるシオンの女を滅さん三牧者は其群を牽て此處にきたりその周圍に天幕をはらん群はおのおのその處にて草を食はん四汝ら戰端を開きて之を攻べし起よわれら日午にのぼらん嗚呼惜かな日ははや昃き夕日の影長くなれり五起よわれら夜の間にのぼりてその諸の殿舍を毀たん六萬軍のヱホバかくいひたまへり汝ら樹をきりヱルサレムに向ひて壘を築けこれは罰すべき邑なりその中には唯暴逆のみあり七源の水をいだすがごとく彼その惡を流すその中に暴逆と威虐きこゆ我前に憂と傷たえず八ヱルサレムよ汝訓戒をうけよ然らざれば我心汝をはなれ汝を荒蕪となし住む人なき地となさん九萬軍のヱホバかくいひたまふ彼らは葡萄の遺餘を摘みとるごとくイスラエルの遺れる者を摘とらん汝葡萄を摘取者のごとく屢手を筐に入るべし一〇我たれに語り誰を警めてきかしめんや視よその耳は割禮をうけざるによりて聽えず彼らはヱホバの言を嘲りこれを悦ばず一一ヱホバの怒わが身に充つわれ忍ぶに倦むこれを衢街にある童子と集れる年少者とに泄すべし夫も婦も老たる者も年邁し者も執へらるるにいたらん一二その家と田地と妻はともに佗人にわたらん其はわれ手を擧てこの地に住る者を擊ばなりとヱホバいひたまふ一三夫彼らは少さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪者なり又預言者より祭司にいたるまで皆詭詐をなす者なればなり一四かれら淺く我民の女の傷を醫し平康からざる時に平康平康といへり一五彼らは憎むべき事を爲て恥辱をうくれども毫も恥ずまた愧を知らずこの故に彼らは傾仆る者と偕にたふれん我來るとき彼ら躓かんとヱホバいひたまふ一六ヱホバかくいひたまふ汝ら途に立て見古き徑に就て何か善道なるを尋ねて其途に行めさらば汝らの靈魂安を得ん然ど彼らこたへて我儕はそれに行まじといふ一七我また汝らの上に守望者をたて箛の聲をきけといへり然ど彼等こたへて我儕は聞じといふ一八故に萬國の民よきけ會衆よかれらの遇ところを知れ一九地よきけわれ災をこの民にくださんこは彼らの思の結ぶ果なりかれら我言とわが律法をきかずして之を棄るによる二〇シバより我許に乳香きたり遠き國より菖蒲きたるは何のためぞやわれは汝らの燔祭をよろこばず汝らの犠牲を甘しとせず二一故にヱホバかくいひたまふみよ我この民の前に躓礙をおく父と子とそれに蹶き隣人とその友偕に滅ぶべし二二ヱホバかくいひたまふみよ民北の國よりきたる大なる民地の極より起る二三彼らは弓と槍をとる殘忍にして憫なしその聲は海

の如く鳴るシオンの女よかれらは馬に乗り軍人のごとく身をよろひて汝を攻めん二四我儕その風聲をききたれば我儕の手弱り子をうむ婦のごとき苦痛と劬勞われらに迫る二五汝ら田地に出る勿れまた路に行むなかれ敵の劍と畏怖四方にあればなり二六我民の女よ麻衣を身にまとひ灰のうちにまろび獨子を喪ひしごとくに哀みていたく哭けそは毀滅者突然に我らに來るべければなり二七われ汝を民のうちに立て金を驗る者のごとくなし又城のごとくなすこは汝をしてその途を知しめまた試みしめんためなり二八彼らは皆いたく悖れる者なり歩行て人を謗る者なり彼らは銅のごとく鐵のごとし皆邪なる者なり二九鞴は火に焚け鉛はつき鎔匠はいたづらに鎔す惡者いまだ除かれざればなり三〇ヱホバ彼らを棄たまふによりて彼等は棄られたる銀と呼ばれん

第七章一ヱホバよりヱレミヤにのぞめる言云ふ二汝ヱホバの室の門にたち其處にてこの言を宣て言へヱホバを拜まんとてこの門にいりしユダのすべての人よヱホバの言をきけ三萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひ給ふ汝らの途と汝らの行を改めよさらばわれ汝等をこの地に住しめん四汝ら是はヱホバの殿なりヱホバの殿なりヱホバの殿なりと云ふ僞の言をたのむ勿れ五汝らもし全くその途と行を改め人と人との間を正しく鞫き六異邦人と孤兒と寡を虐げず無辜者の血をこの處に流さず他の神に從ひて害をまねかずば七我なんぢらを我汝等の先祖にあたへしこの地に永遠より永遠にいたるまで住しむべし八みよ汝らは益なき僞の言を賴む九汝等は盜み殺し姦淫し妄りて誓ひバアルに香を焚き汝らがしらざる他の神にしたがふなれど一〇我名をもて稱へらるるこの室にきたりて我前にたち我らはこれらの憎むべきことを行ふとも救はるるなりといふは何にぞや一一わが名をもて稱へらるる此室は汝らの目には盜賊の巢と見ゆるや我も之をみたりとヱホバいひたまふ一二汝等わが初シロに於て我名を置し處にゆき我がイスラエルの民の惡のために其處になせしところのことをみよ一三ヱホバいひたまふ今汝ら此等のすべての事をなす又われ汝らに語り頻にかたりたれども聽かず汝らを呼びたれども答へざりき一四この故に我シロになせしごとく我名をもて稱へらるる此室になさんすなはち汝等が賴むところ我汝らと汝らの先祖にあたへし此處になすべし一五またわれ汝等のすべての兄弟すなはちエフライムのすべての裔を棄てしごとく我前より汝らをも棄つべし一六故に汝この民のために祈る勿れ彼らの爲に歎くなかれ求むるなかれ又我にとりなしをなす勿れわれ汝にきかじ一七汝かれらがユダの邑とヱルサレムの街になすところを見ざるか一八諸子は薪を拾め父は火を燃き婦は麪を搏ねパンをつくりて之を天后にそなふ又かれら他の神の前に酒をそそぎて我を怒らす一九ヱホバいひたまふ彼ら我を怒らするか是れおのが面を辱むるにあらずや二〇是故に主ヱホバかくいひたまふ視よわが震怒とわが憤怒はこの處と人と獸

と野の樹および地の果にそそがん且燃て滅ざるべし二一 萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らの犧牲に燔祭の物をあはせて肉をくらへ二二 そはわれ汝等の先祖をエジプトより導きいだせし日に燔祭と犧牲とに就てかたりしことなく又命ぜしことなし二三 惟われこの事を彼等に命じ汝ら我聲を聽ばわれ汝らの神となり汝ら我民とならん且わが汝らに命ぜしすべての道を行みて福祉をうべしといへり二四 されど彼らはきかず其耳を傾けずおのれの惡き心の謀と剛愎なるとにしたがひて行みまた後を我にむけて其面を向けざりき二五 汝らの先祖がエジプトの地をいでし日より今日にいたるまでわれ我僕なる預言者を汝らにつかはし日々晨より之をつかはせり二六 されど彼らは我にきかず耳を傾けずして其項を強くしその列祖よりも愈りて惡をなすなり二七 汝彼らに此等のすべてのことばを語るとも汝にきかずかれらを呼ぶとも汝にこたへざるべし二八 汝かく彼らに語れこれは其神ヱホバの聲を聽ずその訓を受ざる民なり眞實はうせてその口に絶たり二九 (シオンの女よ) 汝の髮を剃りてこれを棄て山の上に哀哭の聲をあげよヱホバその怒るところの世の人をすててこれを離れたまへばなり三〇 ヱホバいひたまふユダの民は我前に惡を行へり即ちその憎むべき者を我名をもて稱へらるる室に置てこれを汚せり三一 又ベンヒンノムの谷に於てトペテの崇邱を築きてその子女を火に焚かんとせり我これを命ぜずまた斯ることを思はざりし三二 ヱホバいひたまふ然ば視よ此處をトペテまたはベンヒンノムの谷と稱へずして殺戮の谷と稱ふる日きたらん其は葬るべき地所なきまでにトペテに葬るべければなり三三 この民の屍は天空の鳥と地の獸の食物とならんこれを逐ふものなかるべし三四 その時われユダの邑とヱルサレムの街に欣喜の聲 歡樂の聲 新婿の聲 新婦の聲なからしむべしこの地荒蕪ればなり

第八章一 ヱホバいひたまふその時人ユダの王等の骨とその牧伯等の骨と祭司の骨と預言者の骨とヱルサレムの民の骨をその墓よりほりいだし二 彼等の愛し奉へ從ひ求め且祭れるところの日と月と天の衆群の前にこれを曝すべし其骨はあつむる者なく葬る者なくして糞土のごとくに地の面にあらん三 この惡き民の中のこれる餘遺の者すべてわが逐やりしところに餘れる者皆生るよりも死ぬることを願んと萬軍のヱホバ云たまふ四 汝また彼らにヱホバかくいふと語るべし人もし仆るれば起きかへるにあらずやもし離るれば歸り來るにあらずや五 何故にヱルサレムにをる此民は恒にわれを離れて歸らざるや彼らは詐僞をかたく執て歸ることを否めり六 われ耳を側てて聽に彼らは善ことを云ず一人もその惡を悔いてわがなせし事は何ぞやといふ者なし彼らはみな戰場に馳入る馬のごとくにその途に歸るなり七 天空の鶴はその定期を知り斑鳩と燕と鴈はそのきたる時を守るされど我民はヱホバの律法をしらざるなり八 汝いかで我ら智慧ありわれらにはヱホバの律法ありといふことをえんや視よまことに

書記の僞の筆之を僞とせり九智慧ある者は辱しめられまたあわてて執へらる視よ彼等ヱホバの言を棄たり彼ら何の智慧あらんや一〇故にわれその妻を他人にあたへ其田圃を他人に嗣しめん彼らは小さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪者また預言者より祭司にいたるまで皆詭詐をなす者なればなり一一彼ら我民の女の傷を淺く醫し平康からざる時に平康平康といへり一二彼ら憎むべき事をなして恥辱らる然れど毫も恥ずまた恥を知らずこの故に彼らは仆るる者と偕に仆れんわが彼らを罰するときかれら躓くべしとヱホバいひたまふ一三ヱホバいひたまふ我彼らをことごとく滅さん葡萄の樹に葡萄なく無花果の樹に無花果なしその葉も槁れたり故にわれ殲滅者を彼らにつかはす。一四我ら何ぞ此にとどまるやあつまれよ我ら堅き城邑にゆきて其處に滅ん我儕ヱホバに罪を犯せしによりて我らの神ヱホバ我らを滅し毒なる水を飲せたまへばなり一五われら平康を望めども善こと來らず慰めらるる時を望むにかへつて恐懼きたる一六その馬の嘶はダンよりきこえこの地みなその強き馬の聲によりて震ふ彼らきたりて此地とその上にある者および邑とその中に住る者を食ふ一七視よわれ呪詛のきかざる蛇蝮を汝らのうちに遣はさん是汝らを嚙べしとヱホバいひたまふ一八嗚呼われ憂ふいかにして慰藉をえんや我衷の心惱む一九みよ遠き國より我民の女の聲ありていふヱホバはシオンに在さざるか其王はその中に在ざるかと(ヱホバいひたまふ)彼らは何故にその偶像と異邦の虛き物をもて我を怒らせしやと二〇收穫の時は過ぎ夏もはや畢りぬされど我らはいまだ救はれず二一我民の女の傷によりて我も傷み且悲しむ恐懼我に迫れり二二ギレアデに乳香あるにあらずや彼處に醫者あるにあらずやいかにして我民の女はいやされざるや

第九章一ああ我わが首を水となし我目を涙の泉となすことをえんものを我民の女の殺されたる者の爲に晝夜哭かん二嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものを我民を離れてさりゆかん彼らはみな姦淫するもの悖れる者の族なればなり三彼らは弓を援くがごとく其舌をもて僞をいだす彼らは此地において眞實のために強からず惡より惡にすすみまた我を知ざるなりとヱホバいひたまふ四汝らおのおの其隣に心せよ何の兄弟をも信ずる勿れ兄弟はみな欺きをなし隣はみな讒りまはればなり五彼らはおのおの其隣を欺きかつ眞實をいはず其舌に譌をかたることを教へ惡をなすに勞る六汝の住居は詭譎の中にあり彼らは詭譎のために我を識ことをいなめりとヱホバいひたまふ七故に萬軍のヱホバかくいひたまへり視よ我かれらを鎔し試むべしわれ我民の女の事を如何になすべきや八彼らの舌は殺す矢のごとしかれら詭をいふまた其口をもて隣におだやかにかたれども其心の中には害をはかるなり九ヱホバいひたまふ我これらの事のために彼らを罰せざらんや我心はかくのごとき民に仇を復さざらんや一〇われ山のために泣き哳び野の牧場のために悲むこれらは

焚れて過る人なしまたここに牛羊の聲をきかず天空の鳥も獸も皆逃てさりぬ一一 われヱルサレムを邱墟とし山犬の巣となさんまたユダの諸の邑々を荒して住む人なからしめん一二 智慧ありてこの事を曉る人は誰ぞやヱホバの口の言を受てこれを示さん者は誰ぞやこの地滅されまた野のごとく焚れて過る者なきにいたりしは何故ぞ一三 ヱホバいひたまふ是彼ら我その前に立しところの律法をすて我聲をきかず之に從はざるによりてなり一四 彼らはその心の剛愎なるとその列祖たちがおのれに教へしバアルとに從へり一五 この故に萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれ彼等すなはち斯民に茵蔯を食はせ毒なる水を飮せ一六 彼らもその先祖たちもしらざりし國人のうちに彼らを散しまた彼らを滅し盡すまで其後に劍をつかはさん一七 萬軍のヱホバかくいひたまふ汝らよく考へ哭婦をよびきたれ又人を遣して智き婦をまねけよ一八 彼らは速にきたりて我儕のために哭哀しみ我儕の目に淚をこぼさせ我儕の目蓋より水を溢れしめん一九 シオンより哀の聲きこゆ云く嗚呼われら滅され我ら痛く辱めらる我らは其地を去り彼らはわが住家を毀ちたり二〇 婦たちよヱホバの言をきけ汝らの耳に其口の言をいれよ汝らの女に哭ことを敎へおのおのその隣に哀の歌を敎ふべし二一 そは死のぼりてわれらの窓よりいり我らの殿舍に入り外にある諸子を絕し街にある壯年を殺さんとすればなり二二 ヱホバかくいへりと汝云ふべし人の屍は糞土のごとく田野に墮ちんまた收穫者のうしろに殘りて斂めずにある把のごとくならんと二三 ヱホバかくいひたまふ智慧ある者はその智慧に誇る勿れ力ある者は其力に誇るなかれ富者はその富に誇ること勿れ二四 誇る者はこれをもて誇るべし即ち明哲して我を識る事とわがヱホバにして地に仁惠と公道と公義とを行ふ者なるを知る事是なり我これらを悦ぶなりとヱホバいひたまふ二五二六 ヱホバいひたまひけるは視よわれすべて陽の皮に割禮をうけたる者すなはちエジプトとユダとエドムとアンモンの子孫とモアブと野にをりてその鬚を剃る者とを罰する日きたらんそはすべて異邦人は割禮をうけずまたイスラエルの家も心に割禮をうけざればなり

第一〇章

一 イスラエルの家よヱホバの汝らに語たまふ言をきけ二 ヱホバかくいひたまふ汝ら異邦人の途に效ふ勿れ異邦人は天にあらはるる徵を懼るるとも汝らはこれを懼るる勿れ三 異國人の風俗はむなしその崇むる者は林より斫たる木にして木匠の手に斧をもて作りし者なり四 彼らは銀と金をもてこれを飾り釘と鎚をもて之を堅めて搖動かざらしむ五 こは圓き柱のごとくにして言はずまた步むこと能はざるによりて人にたづさへらる是は災害をくだし亦は福祉をくだすの權なきによりて汝らこれを畏るる勿れ六 ヱホバよ汝に比ふべき者なし汝は大なり汝の名は其權威のために大なり七 汝萬國の王たる者よ誰か汝を畏れざるべきや汝を畏るるは當然なりそは萬國のすべての博士たちのうちにもその諸國のうちにも汝に比ふべき者なければなり八 彼ら

はみな獸のことくまた痴愚なり虛しき者の教は惟木のみ九タルシシより携へ來し銀箔ウパズより携へ來し金は鍛冶と鑄匠の作り物なり青と紫をその衣となす是はすべて巧みなる細工人の工作なり一〇ヱホバは眞の神なり彼は活る神なり永遠の王なり其怒によりて地は震ふ萬國はその憤怒にあたること能はず一一汝等かく彼らにいふべし天地を造らざりし諸神は地の上よりこの天の下より失さらんと一二ヱホバはその能をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てその明哲をもて天を舒べたまへり一三かれ聲をいだせば天に衆の水ありかれ雲を地の極よりいだし電と雨をおこし風をその府庫よりいだす一四すべての人は獸の如くにして智なしすべての鑄匠はその作りし像のために辱をとる其鑄るところの像は僞物にしてその中に靈魂なければなり一五是らは虛き者にして迷妄の工作なりその罰せらるるときに滅ぶべし一六ヤコブの分は是のごとくならず彼は萬物の造化主なりイスラエルはその產業の杖なりその名は萬軍のヱホバといふなり一七圍の中に坐する者よ汝の包を地より取りあげよ一八ヱホバかくいひたまふみよ我この地にすめる者を此度擲たん且かれらをせめなやまして虜へられしむべし一九われ毀傷をうく嗚呼われは禍なるかな我傷は重し我いふこれまことにわが患難なりわれ之を忍べし二〇わが幕屋はやぶれわが繩索は悉く斷れ我衆子は我をすてゆきて居ずなりぬ幕屋を張る者なくわが幃をかくる者なし二一牧者は愚にしてヱホバを求めず故に利達ずその群はみな散れり二二きけよ風聲あり北の國より大なる騷きたる是ユダの諸邑を荒して山犬の巢となさん二三ヱホバよわれ知る人の途は自己によらず且步行む人は自らその步履を定むること能はざるなり二四ヱホバよ我を懲したまへ但道にしたがひ怒らずして懲したまへおそらくは我無に歸せん二五汝を知ざる國人と汝の名を龥ざる族に汝の怒を斟ぎたまへ彼らはヤコブを噬ひ之をくらふて滅しその牧場を荒したればなり

第一一章一 ヱホバよりヱレミヤにのぞめる言いふ二汝らこの契約の言をききユダの人とヱルサレムにすめる者に告よ三汝かれらに語れイスラエルの神ヱホバかくいひたまふこの契約の言に遵はざる人は詛はる四この契約はわが汝らの先祖をエジプトの地鐵の爐の中より導き出せし日にかれらに命ぜしものなり即ち我いひけらく汝ら我聲をきき我汝らに命ぜし諸の事に從ひて行はば汝らは我民となり我は汝らの神とならん五われ汝らの先祖に乳と蜜の流るる地を與へんと誓ひしことを成就んと即ち今日のごとしその時我こたへてアーメン、ヱホバといへり六またヱホバ我にいひたまひけるは汝すべて此等の言をユダの諸邑とヱルサレムの衢にしめし汝ら此契約の言をききてこれを行へといふべし七われ汝らの列祖をエジプトの地より導出せし日より今日にいたるまで切に彼らを戒め頻に戒めて汝ら我聲に遵へといへり八然ど彼らは遵はずその耳を傾けずおのおの其惡き心の剛愎なるにしたがひて步めり故にわれ此契約の言を彼等に

きたらす是はわがかれらに之を行へと命ぜしかども彼等がおこなはざりし者なり九 またヱホバ我にいひたまひけるはユダの人々とヱルサレムに住る者の中に叛逆の事あり一〇 彼らは我言をきくことを好まざりしところのその先祖の罪にかへり亦他の神に從ひて之に奉へたりイスラエルの家とユダの家はわがその列祖たちと締たる契約をやぶれり一一 この故にヱホバかくいひ給ふみよわれ災禍をかれらにくださん彼らこれを免かるることをえざるべし彼ら我をよぶとも我聽じ一二 ユダの邑とヱルサレムに住る者はゆきてその香を焚し神を籲んされど是等はその災禍の時に絶てかれらを救ふことあらじ一三 ユダよ汝の神の數は汝の邑の數のごとし且汝らヱルサレムの衢の數にしたがひて恥べき者に壇をたてたり即ちバアルに香を焚んとて壇をたつ一四 故に汝この民の爲に祈る勿れ又その爲に泣きあるひは求る勿れ彼らがその災禍のために我を呼ときわれ彼らに聽ざるべし一五 わが愛する者は我室にて何をなすや惡き謀をなすや願と聖き肉汝に災を脱れしむるやもし然らば汝よろこぶべし一六 ヱホバ汝の名を嘉果ある美しき青橄欖の樹と稱たまひしがおほいなる喧嚷の聲をもて之に火をかけ且その枝を折りたまふ一七 汝を植し萬軍のヱホバ汝の災をさだめ給へりこれイスラエルの家とユダの家みづから害ふの惡をなしたるによるなり即ちバアルに香を焚きてわれを怒らせたり一八 ヱホバ我に知せたまひければ我これを知るその時汝彼らの作爲を我にしめしたまへり一九 我は牽れて宰られにゆく羔の如く彼らが我をそこなはんとて謀をなすを知ず彼らいふいざ我ら樹とその果とを共に滅さんかれを生る者の地より絶てその名を人に忘れしむべしと二〇 義き鞫をなし人の心腸を察りたまふ萬軍のヱホバよ我わが訴を汝にのべたればわれをして汝が彼らに仇を報すを見せしめたまへ二一 是をもてヱホバ、アナトテの人々につきてかくいひたまふ彼等汝の生命を取んと索めて言ふ汝ヱホバの名をもて預言する勿れ恐らくは汝我らの手に死んと二二 故に萬軍のヱホバかくいひ給ふみよ我かれらを罰すべし壯丁は劍に死にその子女は饑饉にて死なん二三 餘る者なかるべし我災をアナトテの人々にきたらしめわが彼らを罰するの年をきたらしめん

第一二章一 ヱホバよわが汝と爭ふ時に汝は義し惟われ鞫の事につきて汝と言ん惡人の途のさかえ悖れる者のみな福なるは何故ぞや二 汝かれらを植たり彼らは根づき成長て實を結べりその口は汝に近けどもその心は汝に遠ざかる三 ヱホバ汝われを知り我を見またわが心の汝にむかひて何なるかを試みたまふ羊を宰りに牽いだすがごとく彼らを牽いだし殺す日の爲にかれらをそなへたまへ四 いつまでこの地は哭きすべての畑の蔬菜は枯をるべけんやこの地に住る者の惡によりて畜獸と鳥は滅さる彼らいふ彼は我らの終をみざるべしと五 汝もし步行者とともに趨てつかれなばいかで騎馬者と競はんや汝平安なる地を恃まばいかでヨルダンの傍の叢に居ることをえんや六 汝の兄弟と汝の父の

家も汝を欺きまた大聲をあげて汝を追ふかれらしたしく汝に語るともこれを信ずる勿れ七 われ我家を離れわが產業をすて我靈魂の愛するところの者をその敵の手にわたせり八 わが產業は林の獅子のごとし我にむかひて其聲を揚ぐ故にわれ之を惡めり九 我產業は我におけること班駁ある鳥のごとくならずや鳥之を圍むにあらずや野のすべての獸きたりあつまれ來てこれを食へ一〇 衆の牧者わが葡萄園をほろぼしわが地を踐踏しわがうるはしき地を荒野となせり一一 彼らこれを荒地となせりその荒地我にむかひて哭くなり一人もかへりみる者なければこの全地は荒たり一二 毀滅者は野のすべての童山のうへに來れりヱホバの劍地のこの極よりかの極までを滅ぼすすべて血氣ある者は安をえず一三 彼らは麥を播て荊棘をかる勞れども得るところなし汝らはその作物のために恥るにいたらん是ヱホバの烈き怒によりてなり一四 わがイスラエルの民に嗣しむる產業をせむるところのすべてのわが惡き隣にむかひてヱホバかくいふみよわれ彼等をその地より拔出しまたユダの家を彼らの中より拔出すべし一五 われ彼らを拔出せしのちまた彼らを恤みておのおのを其產業にかへし各人をその地に歸らしめん一六 彼等もし我民の道をまなび我名をさしてヱホバは活くと誓ふこと嘗て我民を敎へてバアルを指て誓はしめし如くせば彼らはわが民の中に建らるべし一七 されど彼らもし聽かざれば我かならずかかる民を全く拔出して滅すべしとヱホバいひたまふ

第一三章一 ヱホバかくいひたまへり汝ゆきて麻の帶をかひ汝の腰にむすべ水に入る勿れ二 われすなはちヱホバの言に遵ひ帶をかひてわが腰にむすべり三 ヱホバの言ふたたび我にのぞみて云ふ四 汝が買て腰にむすべる帶を取り起てユフラテにゆき彼處にてこれを磐の穴にかくせと五 ここに於てわれヱホバの命じたまひし如く往てこれをユフラテの涯にかくせり六 おほくの日を經しのちヱホバ我にいひたまひけるは起てユフラテにゆきわが汝に命じて彼處にかくさしめし帶を取れと七 われすなはちユフラテにゆき帶を我隱せしところより掘取りしにその帶は朽て用ふるにたへず八 またヱホバの言われにのぞみて云ふ九 ヱホバかくいふ我かくの如くユダの驕傲とヱルサレムの大なる驕傲をやぶらん一〇 この惡き民はわが言を聽ことをこばみ己の心の剛愎なるにしたがひて行み且他の神に從ひてこれにつかへ之を拜す彼等は此帶の用ふるにたへざるが如くなるべし一一 ヱホバいふ帶の人の腰に附がごとくわれイスラエルのすべての家とユダのすべての家を我に附しめ之を我民となし名となし譽となし榮となさんとせり然るに彼等はきかざりき一二 故に汝この言を彼らに語るべしイスラエルの神ヱホバかくいふ酒壺には皆酒盈つと彼汝にこたへていはん我儕豈酒壺に酒の盈ることを知ざらんやと一三 其時汝かれらにいふべしヱホバかくいふみよわれ此地に住るすべての者とダビデの位に坐する王等と祭司と預言者およびヱルサレムに住るすべての者に醉を盈せ一四 彼らを此と彼

と打あはせて碎かん父と子をも然すべしわれ彼らを恤まず惜まず憐まずして滅さん一五 汝らきけ耳を傾けよ驕る勿れヱホバかたりたまふなり一六 汝らの神ヱホバに其いまだ暗を起したまはざる先汝らの足のくらき山に躓かざる先に榮光を皈すべし汝ら光明を望まんにヱホバ之を死の蔭に變へ之を昏黑となしたまふにいたらん一七 汝ら若これを聽ずば我靈魂は汝らの驕を隱なるところに悲まん又ヱホバの群の掠めらるるによりて我目いたく泣て涙をながすべし一八 なんぢ王と大后につげよ汝ら自ら謙りて坐せそはなんぢらの美しき冕 汝らの首より落べければなり一九 南の諸邑は閉てこれを啓く人なしユダは皆虜移され盡くとらへ移さる二〇 汝ら目を擧げて北より來る者をみよ汝らが賜はりし群汝のうるはしき群はいづこにあるや二一 かれ汝の親み馴たる者を汝の上にたてて首領となさんとき汝何のいふべきことあらんや汝の痛は子をうむ婦のごとくならざらんや二二 汝心のうちに何故にこの事我にきたるやといふか汝の罪の重によりて汝の裾は掲げられなんぢの踵はあらはさるるなり二三 エテオピア人その膚をかへうるか豹その斑駁をかへうるか若これを爲しえば惡に慣たる汝らも善をなし得べし二四 故にわれ彼らを散して野の風に吹散さるる皮売のごとくせん二五 ヱホバいひたまふこは汝の得べき分わが量て汝にあたふる產業なり汝我をわすれて虛假を依賴ばなり二六 故にわれ汝の前の裳を剝ぎて汝の羞恥をあらはさん二七 われ汝の姦淫と汝の嘶と汝が岡のうへと野になせし汝の亂淫の罪と汝の憎むべき行をみたりヱルサレムよ汝は禍なるかな汝の潔くせらるるには尙いくばくの時を經べきや

第一四章一 乾旱の事につきてヱレミヤにのぞみしヱホバの言は左のごとし二 ユダは悲むその門は傾き地にたふれて哭くヱルサレムの呼は上る三 その侯伯等は僕をつかはして水を汲しむ彼ら井にいたれども水を見ず空き器をもちて歸り恥かつ憂へてその首をおほふ四 地に雨ふらずして土燥裂たるにより農夫は恥て首を掩ふ五 また野にある麀は子をうみて之を棄つ草なければなり六 野の驢馬は童山のうへにたちて山犬のごとく喘ぎ草なきによりて目眩む七 ヱホバよ我儕の罪われらを訟へて證をなすとも願くは汝の名の爲に事をなし給へ我儕の違背はおほいなり我儕汝に罪を犯したり八 イスラエルの企望なる者その艱るときに救ひたまふ者よ汝いかなれば此地に於て他邦人のごとくし一夜寄宿の旅客のごとくしたまふや九 汝いかなれば呆てをる人のごとくし救をなすこと能はざる勇士のごとくしたまふやヱホバよ汝は我らの間にいます我儕は汝の名をもて稱へらるる者なり我らを棄たまふ勿れ一〇 ヱホバこの民にかくいひたまへり彼らかく好んでさまよひ其足を禁めざればヱホバ彼らを悅ばずいまその愆をおぼえ其罪を罰すべし一一 ヱホバまた我にいひたまひけるは汝この民のために恩をいのる勿れ一二 彼ら斷食するとも我その呼籲をきかず燔祭と素祭を献るとも我これをうけず却てわ

れ劍と饑饉と疫病をもて彼らを滅すべし一三 われいひけるは嗚呼主ヱホバよみよ預言者たちはこの民にむかひ汝ら劍を見ざるべし饑饉は汝らにきたらじわれ此處に鞏固なる平安を汝らにあたへんといへり一四 ヱホバ我にいひたまひけるは預言者等は我名をもて詭を預言せりわれ之を遣さず之に命ぜずまた之にいはず彼らは虛誕の默示と卜筮と虛きことと己の心の詐を汝らに預言せり一五 この故にかの吾が遣さざるに我名をもて預言して劍と饑饉はこの地にきたらじといへる預言者等につきてヱホバかくいふこの預言者等は劍と饑饉に滅さるべし一六 また彼等の預言をうけし民は饑饉と劍によりてヱルサレムの街に擲棄られんこれを葬る者なかるべし彼等とその妻および其子その女みな然りそはわれ彼らの惡をその上に斟げばなり一七 汝この言を彼らに語るべしわが目は夜も晝もたえず淚を流さんそは我民の童女大なる滅と重き傷によりて亡さるればなり一八 われ出て畑にゆくに劍に死る者あり我邑にいるに饑饉に艱むものあり預言者も祭司もみなその地にさまよひて知ところなし一九 汝はユダを悉くすてたまふや汝の心はシオンをきらふや汝いかなれば我儕を擊て愈しめざるか我ら平安を望めども善ことあらず又醫さるる時を望むに却て驚懼あり二〇 ヱホバよ我らはおのれの惡と先祖の愆を知るわれら汝に罪を犯したり二一 汝の名のために我らを棄たまふ勿れ汝の榮の位を辱めたまふ勿れ汝のわれらに立し契約をおぼえて毀りたまふなかれ二二 異邦の虛き物の中に雨を降せうるものあるや天みづから白雨をくだすをえんや我らの神ヱホバ汝これを爲したまふにあらずや我ら汝を望むそは汝すべて此等を悉く作りたまひたればなり

第一五章一 ヱホバ我にいひたまひけるはたとひモーセとサムエルわが前にたつとも我こころは斯民を顧ざるべしかれらを我前より逐ひていでさらしめよ二 彼らもし汝にわれら何處にいでさらんやといはば汝彼らにヱホバかくいへりといへ死に定められたる者は死にいたり劍に定められたる者は劍にいたり饑饉に定められたる者は饑饉にいたり虜に定められたる者は虜にいたるべしと三 ヱホバ云たまひけるはわれ四の物をもて彼らを罰せんすなはち劍をもて戮し犬をもて噬せ天空の鳥および地の獸をもて食ひ滅さしめん四 またユダの王ヒゼキヤの子マナセがヱルサレムになせし事によりわれ彼らをして地のすべての國に艱難をうけしめん五 ヱルサレムよ誰か汝を憐まんたれか汝のために嘆かん誰かちかづきて汝の安否を問はん六 ヱホバいひたまふ汝われをすてたり汝退けり故にわれ手を汝のうへに伸て汝を滅さんわれ憫に倦り七 われ風扇をもて我民をこの地の門に煽がんかれらは其途を離れざるによりて我その子を絕ち彼らを滅すべし八 彼らの寡婦はわが前に海濱の沙よりも多し晝われほろぼす者を携へきたりて彼らと壯者の母とをせめ驚駭と恐懼を突然にかれの上におこさん九 七人の子をうみし婦は衰へて氣たえ尚晝なるにその日は早く沒る彼は辱められて面をあからめん其餘

れる者はわれ之をその敵の劍に付さんとヱホバいひたまふ一〇 嗚呼われは禍なるかな我母よ汝なに故に我を生しや全國の人我と爭ひ我を攻むわれ人に貸さず人また我に貸さず皆我を詛ふなり一一 ヱホバいひたまひけるは我實に汝に益をえせしめんために汝を惱す我まことに敵をして其艱の時と災の時に汝に求むることをなさしめん一二 鐵いかで北の鐵と銅を碎かんや一三 われ汝の資產と汝の資財を虜掠物とならしめ價をうることなからしめん是汝のすべての罪によるなりすべて汝の境のうちにかくなさん一四 われ汝の敵をして汝を汝の識ざる地にとらへ移さしめん夫我怒によりて火燃え汝を焚んとするなり一五 ヱホバよ汝これを知りたまふ我を憶え我をかへりみたまへ我を迫害るものに仇を復したまへ汝の容忍によりて我をとらへられしむる勿れ我汝の爲に辱を受るを知りたまへ一六 われ汝の言を得て之を食へり汝の言はわが心の欣喜快樂なり萬軍の神ヱホバよわれは汝の名をもて稱へらるるなり一七 われ嬉笑者の會に坐せずまた喜ばずわれ汝の手によりて獨り坐す汝憤怒をもて我に充したまへり一八 何故にわが痛は息ずわが傷は重くして愈ざるか汝はわれにおけること水をたもたずして人を欺く溪河のごとくなるや一九 是をもてヱホバかくいひたまへり汝もし歸らば我また汝をかへらしめて我前に立しめん汝もし賤をすてて貴をいださば我口のごとくならん彼らは汝に歸らんされど汝は彼らにかへる勿れ二〇 われ汝をこの民の前に堅き銅の牆となさんかれら汝を攻るとも汝にかたざるべしそはわれ汝と偕にありて汝をたすけ汝を救へばなりとヱホバいひたまへり二一 我汝を惡人の手より救ひとり汝を怖るべき者の手より放つべし

第一六章

一 ヱホバの言また我にのぞみていふ二 汝この處にて妻を娶るなかれ子女を得るなかれ三 此處に生るる子女とこの地に之を生む母と之を生む父とに就てヱホバかくいひたまふ四 彼らは慘しき病に死し哀まれず葬られずして糞土のごとくに田地の面にあらんまた劍と饑饉に滅されて其屍は天空の鳥と地の獸の食物とならん五 ヱホバかくいひたまへり喪ある家にいる勿れまた往て之を哀み嗟く勿れそはわれ我平安と恩寵と矜恤をこの民より取ばなりとヱホバいひたまへり六 大なる者も小さき者もこの地に死べし彼らは葬られずまた彼らのために哀む者なく自ら傷くる者なく髮をそる者なかるべし七 またその哀むときパンをさきて其死者のために之を慰むる者なかるべし又父あるひは母のために慰藉の杯を彼らに飮しむる者なかるべし八 汝また筵宴の家にいりて偕に坐して食飮する勿れ九 萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よ汝の目の前汝の世に在るときにわれ欣喜の聲と歡樂の聲と新娶者の聲と新婦の聲とを此處に絕しめん一〇 汝このすべての言を斯民に告るとき彼ら汝に問ふてヱホバわれらを責てこの大なる災を示したまふは何故ぞやまたわれらに何の惡事あるやわが神ヱホバに背きてわれらのなせし罪は何ぞやといはば一一 汝かれらに答ふべしヱホバ

いひたまふ是汝らの先祖われを棄て他の神に從ひこれに奉へこれを拜しまた我をすてわが律法を守らざりしによる一二 汝らは汝らの先祖よりも多く惡をなせりみよ汝らはおのおの自己の惡き心の剛愎なるにしたがひて我にきかず一三 故にわれ汝らを此の地より逐ひて汝らと汝らの先祖の識ざる地にいたらしめん汝らかしこにて晝夜ほかの神に奉へん是わが汝らを憐まざるによるなりと一四 ヱホバいひたまふ然ばみよ此後イスラエルの民をエジプトの地より導きいだせしヱホバは活くといふことなくして一五 イスラエルの民を北の地とそのすべて逐やられし地より導出せしヱホバは活くといふ日きたらん我かれらを我その先祖に與へしかれらの地に導きかへるべし一六 ヱホバいひたまふみよ我おほくの漁者をよび來りて彼らを漁らせまたその後おほくの獵者を呼來りて彼らを諸の山もろもろの岡および岩の穴より獵いださしめん一七 我目はかれらの諸の途を鑒る皆我にかくるるところなし又その惡は我目に匿れざるなり一八 われまづ倍して其惡とその罪に報いんそは彼らその汚れたる者の屍をもて我地を汚しその惡むべきものをもて我産業に充せばなり一九 ヱホバ我の力 我の城 難の時の逃場よ萬國の民は地の極より汝にきたりわれらの先祖の嗣るところの者は惟 謊と虛浮事と益なき物のみなりといはん二〇 人豈神にあらざる者をおのれの神となすべけんや二一 故にみよわれ此度かれらに知らしむるところあらん即ち我手と我能をかれらに知らしめん彼らは我名のヱホバなるを知るべし

第一七章一 ユダの罪は鐵の筆金剛石の尖をもてしるされその心の碑と汝らの祭壇の角に鐫らるるなり二 彼らはその子女をおもふが如くに青木の下と高岡のうへなるその祭壇とアシラをおもふ三 われ野に在る我山と汝の資産と汝のもろもろの財産および汝の四方の境の内なる汝の罪を犯せる崇邱を虜掠物とならしめん四 わが汝にあたへし産業より汝手をはなさん又われ汝をして汝の識ざる地に於て汝の敵につかへしめんそは汝ら我をいからせて限なく燃る火を發したればなり五 ヱホバかくいひたまふおほよそ人を恃み肉をその臂とし心にヱホバを離るる人は詛るべし六 彼は荒野に棄られたる者のごとくならん彼は善事のきたるをみず荒野の燥きたる處鹽あるところ人の住ざる地に居らん七 おほよそヱホバをたのみヱホバを其恃とする人は福なり八 彼は水の旁に植たる樹の如くならん其根を河にのべ炎熱きたるも恐るるところなしその葉は青く亢旱の年にも憂へずして絶ず果を結ぶべし九 心は萬物よりも僞る者にして甚だ惡し誰かこれを知るをえんや一〇 われヱホバは心腹を察り腎腸を試みおのおのに其途に順ひその行爲の果によりて報ゆべし一一 鷓鴣のおのれの生ざる卵をいだくが如く不義をもて財を獲る者あり其人は命の半にてこれに離れその終に愚なる者とならん一二 榮の位よ原始より高き者わが聖所たる者一三 イスラエルの望なるヱホバよ凡て汝を離るる者は辱められん我を棄る者は土に錄されん

此はいける水の源なるヱホバを離るるによる一四ヱホバよ我を醫し給へ然らばわれ愈んわれを救ひたまへさらば我救はれん汝はわが頌るものなり一五彼ら我にいふヱホバの言は何にあるやいま之をのぞましめよと一六われ牧者の職を退かずして汝にしたがひ又禍の日を願はざりき汝これを知りたまふ我唇よりいづる者は汝の面の前にあり一七汝我を懼れしむる者となり給ふ勿れ禍の時に汝は我避場なり一八我を攻る者を辱しめ給へ我を辱しむるなかれ彼らを怖れしめよ我を怖れしめ給ふなかれ禍の日を彼らに來らしめ滅亡を倍して之を滅し給へ一九ヱホバ我にかくいひ給へり汝ゆきてユダの王等の出入する民の門及びヱルサレムの諸の門に立て二〇彼らにいへ此門より入る所のユダの王等とユダのすべての民とヱルサレムに住るすべての者よ汝らヱホバの言をきけ二一ヱホバかくいひたまふ汝ら自ら愼め安息日に荷をたづさへてヱルサレムの門にいる勿れ二二また安息日に汝らの家より荷を出す勿れ諸の工作をなす勿れ我汝らの先祖に命ぜしごとく安息日を聖くせよ二三されど彼らは遵はず耳を傾けずまたその項を強くして聽ず訓をうけざるなり二四ヱホバいひ給ふ汝らもし謹愼て我にきき安息日に荷をたづさへてこの邑の門にいらず安息日を聖くなして諸の工作をなさずば二五ダビデの位に坐する王等牧伯たちユダの民ヱルサレムに住る者車と馬に乗てこの邑の門よりいることをえんまた此邑には限なく人すまはん二六また人々ユダの邑とヱルサレムの四周およびベニヤミンの地と平地と山と南の方よりきたり燔祭犠牲素祭馨香謝祭を携へてヱホバの室にいらん二七されど汝らもし我に聽ずして安息日を聖くせず安息日に荷をたづさへてヱルサレムの門にいらばわれ火をその門の内に燃してヱルサレムの殿舍を燬んその火は滅ざるべし

第一八章

一ヱホバよりヱレミヤにのぞめる言いふ二汝起て陶人の屋にくだれ我かしこに於てわが言を汝に聞しめんと三われすなはち陶人の屋にくだり視るに轆轤をもて物をつくりをりしが四その泥をもて造れるところの器陶人の手のうちに傷ねたれば彼その心のままに之をもて別の器をつくれり五時にヱホバの言我にのぞみていふ六ヱホバいふイスラエルの家よこの陶人のなすが如くわれ汝になすことをえざるかイスラエルの家よ陶人の手に泥のあるごとく汝らはわが手にあり七われ急に民あるひは國をぬくべし敗るべし滅すべしといふことあらんに八もし我いひしところの國その惡を離れなば我之に災を降さんとおもひしことを悔ん九我また急に民あるいは國を立べし植べしといふことあらんに一〇もし其國わが目に惡く見ゆるところの事を行ひわが聲に遵はずば我これに福祉を錫へんといひしことを悔ん一一汝いまユダの人々とヱルサレムに住る者にいへヱホバかくいへり視よ我汝らに災をくださんと思ひめぐらし汝らをはかる計策を設く故に汝らおのおの其惡き途を離れ其途と行をあらためよと一二しかるに彼らいふ是は徒然なりわれら

は自己の圖維ところにしたがひ各自その惡き心の剛愎なるを行はんと一三この故にヱホバかくいひたまふ汝ら異國のうちに問へ斯の如きことを聞し者ありやイスラエルの處女はいと驚くべきことをなせり一四レバノンの雪豈野の磐を離れんや遠方より流くる冷なる水豈涸かんや一五しかるに我民は我をわすれて虚き物に香を焚り是等の物彼らをその途すなはち古き途に蹶かせまた徑すなはち備なき道に行しめ一六その地を荒して恒に人の笑となさしめん凡て其處を過る者は驚きてその首を搖らん一七われ東風のごとくに彼らをその敵の前に散さん其滅亡の日にはわれ背を彼らに向て面をむけじ一八彼らいふ去來われら計策を設てヱレミヤをはからんそれ祭司には律法あり智慧ある者には謀畧あり預言者には言ありて失ざるべし去來われら舌をもて彼を撃ちその諸の言を聽ことをせざらんと一九ヱホバよ我にきゝたまへ又我と爭ふ者の聲をきゝたまへ二〇惡をもて善に報ゆべきものならんや彼らはわが生命をとらん爲に坑を掘れりわが汝の前に立て彼らを善く言ひ汝の憤怒を止めんとせしを憶えたまへ二一されば彼らの子女を饑饉にあたへ彼らを劍の刃にわたしたまへ其妻は子を失ひ且寡となり其男は死をもて亡されその少者は劍をもて戰に殺されよかし二二汝突然に敵をかれらに臨ませたまふ時號呼をその家の内より聞えしめよそは彼ら坑を掘りて我を執へんとしまた機檻を置てわが足を執へんとすればなり二三ヱホバよ汝はかれらが我を殺さんとするすべての謀畧を知りたまふ其惡を赦すことなく其罪を汝の前より抹去りたまふなかれ彼らを汝の前に仆れしめよ汝の怒りたまふ時にかく彼らになしたまへ

第一九章 一ヱホバかくいひたまふ往て陶人の瓦罇をかひ民の長老と祭司の長老の中より數人をともなひて二陶人の門の前にあるベンヒンノムの谷にゆき彼處に於てわが汝に告んところの言を宣よ三云くユダの王等とヱルサレムに住る者よヱホバの言をきけ萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よ我災を此處にくだすべし凡そ之をきく者の耳はかならず鳴らん四こは彼ら我を棄てこの處を瀆し此にて自己とその先祖およびユダの王等の知ざる他の神に香を焚き且辜なきものの血をこの處に盈せばなり五又彼らはバアルの爲に崇邱を築き火をもて己の兒子を焚き燔祭となしてバアルにさゝげたり此わが命ぜしことにあらず我いひしことにあらず又我心に意はざりし事なり六ヱホバいひたまふされば視よ此處をトペテまたはベンヒンノムの谷と稱ずして屠戮の谷と稱ふる日きたらん七また我この處に於てユダとヱルサレムの謀畧をむなしうし劍をもて彼らを其敵の前とその生命を索る者の手に仆しまたその屍を天空の鳥と地の獸の食物となし八かつ此邑を荒して人の胡盧とならしめん凡そこゝを過る者はその諸の災に驚きて笑ふべし九また彼らがその敵とその生命を索る者とに圍みくるしめらるゝ時我彼らをして己の子の肉女の肉を食はせん又彼らは互にその友の肉

を食ふべし一〇 汝ともに行く人の目の前にてその瓦罇を毀ちて彼らにいふべし一一 萬軍のヱホバかくいひ給ふ一回毀てば復全うすること能はざる陶人の器を毀つが如くわれ此民とこの邑を毀たんまた彼らは葬るべき地なきによりてトペテに葬られん一二 ヱホバいひ給ふ我この處とこの中に住る者とに斯なし此邑をトペテの如くなすべし一三 且ヱルサレムの室とユダの王等の室はトペテの處のごとく汚れん其は彼らすべての室の屋蓋のうへにて天の衆群に香をたき他の神に酒をそそげばなり一四 ヱレミヤ、ヱホバの己を遣はして預言せしめたまひしトペテより歸りきたりヱホバの室の庭に立ちすべての民に語りていひけるは一五 萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれ我いひし諸の災をこの邑とその諸の郷村にくださん彼らその項を強くして我言を聽ざればなり

第二〇章一 祭司インメルの子ヱホバの室の宰の長なるパシユル、ヱレミヤがこの言を預言するをきけり二 是に於てパシユル預言者ヱレミヤを打ちヱホバの室にある上のベニヤミンの門の桎梏に繫げり三 翌日パシユル、ヱレミヤを桎梏より釋はなちしにヱレミヤ彼にいひけるはヱホバ汝の名をパシユルと稱ずしてマゴルミツサビブ（驚懼周圍にあり）と稱び給ふ四 即ちヱホバかくいひたまふ視よわれ汝をして汝と汝のすべての友に恐怖をおこさしむる者となさん彼らはその敵の劍に仆れん汝の目はこれを見べし我またユダのすべての民をバビロン王の手に付さん彼は彼らをバビロンに移し劍をもて殺すべし五 我またこの邑のすべての貨財とその得たる諸の物とその諸の珍寶とユダの王等のすべての儲蓄を其敵の手に付さん彼らはこれを掠めまた民を虜へてバビロンに移すべし六 パシユルよ汝と汝の家にすめる者は悉く虜へ移されん汝はバビロンにいたりて彼處に死にかしこに葬られん汝も汝が僞りて預言せし言を聽し友もみな然らん七 ヱホバよ汝われを勸めたまひてわれ其勸に從へり汝我をとらへて我に勝給へりわれ日々に人の笑となり人皆我を嘲りぬ八 われ語り呼はるごとに暴逆殘虐の事をいふヱホバの言日々にわが身の恥辱となり嘲弄となるなり九 是をもて我かさねてヱホバの事を宣ず又その名をもてかたらじといへり然どヱホバのことば我心にありて火のわが骨の中に閉こもりて燃るがごとくなれば忍耐につかれて堪難し一〇 そは我おほくの人の讒をきく驚懼まはりにあり訴へよ彼を訴へん我親しき者はみな我蹶くことあらんかと窺ひて互にいふ彼誘はるることあらんしからば我儕彼に勝て仇を報ゆることをえんと一一 然どヱホバは強き勇士のごとくにして我と偕にいます故に我を攻る者は蹶きて勝ことをえずそのなし遂ざるが爲に大なる恥辱を取ん其羞恥は何時迄も忘られざるべし一二 義人を試み人の心腸を見たまふ萬軍のヱホバよ我汝に訴を申たれば我をして汝が彼らに仇を報すを見せしめよ一三 ヱホバに歌を謠へよヱホバを頌めよそは貧者の生命を惡者の手より救ひ給へばなり一四 ああ我生れし

日は詛はれよ我母のわれを生し日は祝せられざれ 一五 わが父に男子汝に生れしと告て父を大に喜ばせし人は詛はれよ 一六 其人はヱホバの憫まずして滅したまひし邑のごとくなれよ彼をして朝に號呼をきかしめ午間に鬨聲をきかしめよ 一七 彼我を胎のうちに殺さず我母を我の墓となさず常にその胎を大ならしめざりしが故なり 一八 我何なれば胎をいでて艱難と憂患をかうむり恥辱をもて日を送るや

第二一章 一 ゼデキヤ王マルキヤの子パシユルと祭司マアセヤの子ゼパニヤをヱレミヤに遣し 二 バビロンの王ネブカデネザル我らを攻むれば汝われらの爲にヱホバに求めよヱホバ恒のごとくそのもろもろの奇なる跡をもて我らを助けバビロンの王を我らより退かしめたまふことあらんと曰しむ其時ヱホバの言ヱレミヤに臨めり 三 ヱレミヤ彼らにこたへけるは汝らゼデキヤにかく語ふべし 四 イスラエルの神ヱホバかくいひたまふ視よわれ汝らがこの邑の外にありて汝らを攻め圍むところのバビロン王およびカルデヤ人とたたかひて手に持ところのその武器をかへし之を邑のうちに聚めん 五 われ手を伸べ臂をつよくし震怒と憤恨と烈き怒をもて汝らをせむべし 六 我また此邑にすめる人と畜を撃ん皆重き疫病によりて死べし 七 ヱホバいひたまふ此後われユダの王ゼデキヤとその諸臣および民此邑に疫病と劍と饑饉をまぬかれて遺れる者をバビロンの王ネブカデネザルの手と其敵の手および凡そその生命を索る者の手に付さんバビロンの王は劍の刃をもて彼らを撃ちかれらを惜まず顧みず恤れまざるべし 八 汝また此民にヱホバかくいふと語るべし視よわれ生命の道と死の道を汝らの前に置く 九 この邑にとどまる者は劍と饑饉と疫病に死べしされど汝らを攻め圍むところのカルデヤ人に出降る者はいきん其命はおのれの掠取物となるべし 一〇 ヱホバいひたまふ我この邑に面を向しは福をあたふる爲にあらず禍をあたへんが爲なりこの邑はバビロンの王の手に付されん彼火をもて之を焚くべし 一一 またユダの王の家に告べし汝らヱホバの言をきけ 一二 ダビデの家よヱホバかくいふ汝朝ごとに義く鞫をなし物を奪はるる人をその暴逆者の手より救へ否ざれば汝らの行の惡によりて我怒火のごとくに發で燃て滅ざるべし 一三 ヱホバいひたまふ谷と平原の磐とにすめる者よみよ我汝に敵す汝らは誰か降て我儕を攻んや誰かわれらの居處にいらんやといふ 一四 我汝らをその行の果によりて罰せん又其林に火を起し其四周をことごとく焚つくすべしとヱホバいひたまふ

第二二章 一 ヱホバかくいひたまへり汝ユダの王の室にくだり彼處にこの言をのべていへ 二 ダビデの位に坐するユダの王よ汝と汝の臣および此門よりいる汝の民ヱホバの言をきけ 三 ヱホバかくいふ汝ら公道と公義を行ひ物を奪はるる人をその暴虐者の手より救ひ異邦人と孤子と嫠婦をなやまし虐ぐる勿れまた此處に無辜の血を流す勿れ 四 汝らもし此言を眞に行はばダビデの位に坐する王とその臣および其民は車と馬に乗てこの室の

門にいることをえん五然ど汝らもし此言を聽ずばわれ自己を指して誓ふ此室は荒地となるべしとヱホバいひたまふ六ヱホバ、ユダの王の家につきてかく曰たまふ汝は我におけることギレアデのごとくレバノンの巓のごとし然どわれかならず汝を荒野となし人の住はざる邑となさん七われ破壞者をまふけて汝を攻めしめん彼ら各人その武器を執り汝の美しき香柏を斫てこれを火に投いれん八多の國の人此邑をすぎ互に語てヱホバ何なれば此大なる邑にかく爲せしやといはんに九人こたへて是は彼等其神ヱホバの契約をすてて他の神を拜し之に奉へしに由なりといはん一〇死者の爲に泣くことなくまた之が爲に嗟くこと勿れ寧虜へ移されし者の爲にいたく嗟くべし彼は再び歸てその故園を見ざるべければなり一一ユダの王ヨシヤの子シヤルム即ちその父に繼で王となりて遂に此處をいでたる者につきてヱホバかくいひたまへり彼は再び此處に歸らじ一二彼はその移されし處に死んふたたび此地を見ざるべし一三不義をもて其室をつくり不法をもて其樓を造り其隣人を傭て何をも與へず其價を拂はざる者は禍なるかな一四彼いふ我己の爲に廣厦と涼しき樓をつくり又己の爲に窓を造り香柏をもて之を蔽ひ赤く之を塗んと一五汝香柏を爭ひもちふるによりて王たるを得るか汝の父は食飮せざりしや公義と公道を行ひて福を得ざりしや一六彼は貧者と患艱者の訟を理して祥をえたりかく爲すは我を識ことに非ずやとヱホバいひ給ふ一七然ど汝の目と心は惟貪をなさんとし無辜の血を流さんとし虐遇と暴逆をなさんとするのみ一八故にヱホバ、ユダの王のヨシヤの子ヱホヤキムにつきてかく曰たまふ衆人は哀しいかな我兄かなしいかな我姊といひて嗟かず又哀しいかな主よ哀しいかな其榮と曰て嗟かじ一九彼は驢馬を埋るがごとく埋られん即ち曳れてヱルサレムの門の外に投棄らるべし二〇汝レバノンに登りて呼ばはりバシヤンに汝の聲を揚げアバリムより呼はれ其は汝の愛する者悉く滅されたればなり二一汝の平康なる時我汝に語しかども汝は我にきかじといへり汝いとけなき時よりわが聲を聽ずこれ汝の故習なり二二汝の牧者はみな風に呑つくされ汝の愛する者はとらへ移されん其時汝はおのれの諸の惡のために痛く恥べし二三汝レバノンにすみ巣を香柏につくる者よ汝の劬勞子を產む婦の痛苦のごとくにきたらんとき汝の哀慘はいかにぞや二四ヱホバいひたまふ我は活くユダの王ヱホヤキムの子ヱコニヤは我右の手の指環なれども我これを拔ん二五われ汝の生命を索る者の手および汝が其面を畏るる者の手すなはちバビロンの王ネブカデネザルの手とカルデヤ人の手に汝を付さん二六われ汝と汝を生し母を汝等がうまれざりし他の地に逐やらん汝ら彼處に死べし二七彼らの靈魂のいたく歸らんことを願ふところの地に彼らは歸ることをえず二八この人ヱコニヤは賤しむべき壞れたる器なるや好ましからざる器具ならんや如何なれば彼と其子孫は逐出されてその識ざる地に投やらるるや二九地よ地よ地よヱホバの言をきけ三〇ヱ

ホバかくいひたまふこの人を子なくして其生命の中に榮えざる人と錄せそはその子孫のうちに榮えてダビデの位に坐しユダを治る人かさねてなかるべければなり

第二三章 一 ヱホバいひ給ひけるは嗚呼わが養ふ群を滅し散す牧者は禍なるかな 二 故にイスラエルの神ヱホバ我民を養ふ牧者につきて斯いふ汝らはわが群を散しこれを逐はなちて顧みざりき視よわれ汝らの惡き行によりて汝等に報ゆべしとヱホバいふ 三 われ我群の遺餘たる者をその逐はなちたる諸の地より集め再びこれを其牢に歸さん彼らは子を產て多くなるべし 四 我これを養ふ牧者をその上に立ん彼等はふたたび慄かず懼ずまた失じとヱホバいひたまふ 五 ヱホバいひたまひけるは視よわがダビデに一の義き枝を起す日來らん彼王となりて世を治め榮え公道と公義を世に行ふべし 六 其日ユダは救をえイスラエルは安に居らん其名はヱホバ我儕の義と稱らるべし 七 この故にヱホバいひ給ふ視よイスラエルの民をエジプトの地より導出せしヱホバは活くと人衆復いはずして 八 イスラエルの家の裔を北の地と其諸て逐やりし地より導出せしヱホバは活くといふ日來らん彼らは自己の地に居るべし 九 預言者輩のために我心はわが衷に壞れわが骨は皆震ふ且ヱホバとその聖言のためにわれは醉る人のごとく酒に勝るる人のごとし 一〇 この地は姦淫をなすもの盈ち地は呪詛によりて憂へ曠野の艸は枯る彼らの途はあしく其力は正しからず 一一 預言者と祭司は偕に邪惡なりわれ我家に於てすら彼等の惡を見たりとヱホバいひたまふ 一二 故にかれらの途は暗に在る滑なる途の如くならん彼等推れて其途に仆るべし我災をその上にのぞましめん是彼らが刑罰らるる年なりとヱホバいひたまふ 一三 われサマリヤの預言者の中に愚昧なる事あるをみたり彼等はバアルに託りて預言し我民イスラエルを惑はせり 一四 我ヱルサレムの預言者の中にも憎むべき事あるを見たり彼等は姦淫をなし詐僞をおこなひ惡人の手を堅くして人をその惡に離れざらしむ彼等みな我にはソドムのごとく其民はゴモラのごとし 一五 この故に萬軍のヱホバ預言者につきてかくいひたまふ視よわれ茵蔯を之に食はせ毒水をこれに飮せんそは邪惡ヱルサレムの預言者よりいでて此全地に及べばなり 一六 萬軍のヱホバかくいひたまふ汝等に預言する預言者の言を聽く勿れ彼等は汝らを欺きヱホバの口よりいでざるおのが心の默示を語るなり 一七 常に彼らは我を藐忽ずる者にむかひて汝等平安をえんとヱホバいひたまへりといひ又己が心の剛愎なるに循ひて行むところのすべての者に向ひて災汝らに來らじといへり 一八 誰かヱホバの議會に立て其言を見聞せし者あらんや誰か其耳を傾けて我言を聽し者あらんや 一九 みよヱホバの暴風あり怒と旋轉風いでて惡人の首をうたん 二〇 ヱホバの怒はかれがその心の思を行ひてこれを遂げ給ふまでは息じ末の日に汝ら明にこれを曉らん 二一 預言者等はわが遣さざるに趨り我告ざるに預言せり 二二 彼らもし我議會に立ちしならば我民にわが言をきかしめ

て之をその惡き途とその惡き行に離れしめしならん**二三**ヱホバいひ給ふ我はただ近くにおいてのみ神たらんや遠くに於ても神たるにあらずや**二四**ヱホバいひたまふ人我に見られざる樣に密かなる處に身を匿し得るかヱホバいひたまふ我は天地に充るにあらずや**二五**われ我名をもて譃を預言する預言者等がわれ夢を見たりわれ夢を見たりと曰ふをきけり**二六**譃を預言する預言者等はいつまで此心をいだくや彼らは其心の詐僞を預言するなり**二七**彼らは其先祖がバアルによりて我名を忘れしごとく互に夢をかたりて我民にわが名を忘れしめんと思ふや**二八**夢をみし預言者は夢を語るべし我言を受し者は誠實をもて我言を語るべし糠いかで麥に比擬ことをえんやとヱホバいひたまふ**二九**ヱホバ言たまはく我言は火のごとくならずや又磐を打碎く槌の如くならずや**三〇**故に視よわれ我言を相互に竊める預言者の敵となるとヱホバいひたまふ**三一**視よわれは彼いひたまへりと舌をもて語るところの預言者の敵となるとヱホバいひたまふ**三二**ヱホバいひたまひけるは視よわれ僞の夢を預言する者の敵となる彼らは之を語りまたその譃と其誇をもて我民を惑はす我かれらを遣さずかれらに命ぜざるなり故に彼らは斯民に益なしとヱホバいひ給ふ**三三**この民或は預言者又は祭司汝に問てヱホバの重負は何ぞやといはば汝彼等にこたへてヱホバの重負は我汝等を棄んとヱホバの云たまひし事是なりといふべし**三四**ヱホバの重負といふところの預言者と祭司と民には我その人と其家にこれを降さん**三五**汝らはおのおの斯互に言ひその兄弟にいふべしヱホバは何と應へたまひしやヱホバは何と云たまひしやと**三六**汝ら復びヱホバの重負といふべからず人の重負となる者は其人の言なるべし汝らは活る神萬軍のヱホバなる我らの神の言を枉るなり**三七**汝かく預言者にいふべしヱホバは汝に何と答へ給ひしやヱホバは何といひたまひしやと**三八**汝らもしヱホバの重負といはばヱホバそれにつきてかくいひたまふ我人を汝らに遣して汝等ヱホバの重負といふべからずといはしむるも汝らはヱホバの重負といふ此言をいふによりて**三九**われ必ず汝らを忘れ汝らと汝らの先祖にあたへし此邑と汝らとを我前より棄ん**四〇**且われ永遠の辱と永遠なる忘らるることなき恥を汝らにかうむらしめん

第二四章

一バビロンの王ネブカデネザル、ユダの王ヱホヤキムの子ヱコニヤおよびユダの牧伯等と木匠と鐵匠をヱルサレムよりバビロンに移せしのちヱホバ我にヱホバの殿の前に置れたる二筐の無花果を示したまへり**二**その一の筐には始に熟せしがごとき至佳き無花果ありその一の筐にはいと惡くして食ひ得ざるほどなる惡き無花果あり**三**ヱホバ我にいひ給ひけるはヱレミヤよ汝何を見しや我答へけるは無花果なりその佳き無花果はいと佳しその惡きものは至惡しくして食ひ得ざるほどに惡し**四**ヱホバの言また我にのぞみていふ**五**イスラエルの神ヱホバかくいふ我わが此處よりカルデヤ人の地に逐ひやりしユダの虜人を

此佳き無花果のごとくに顧みて恵まん 六 我彼等に目をかけて之をめぐみ彼らを此地にかへし彼等を建て仆さず植て拔じ 七 我彼らに我のヱホバなるを識るの心をあたへん彼等我民となり我彼らの神とならん彼等は一心をもて我に歸るべし 八 ヱホバかくいひたまへり我ユダの王ゼデキヤとその牧伯等およびヱルサレムの人の遺りて此地にをる者ならびにエジプトの地に住る者とを此惡くして食はれざる惡き無花果のごとくになさん 九 我かれらをして地のもろもろの國にて虐遇と災害にあはしめん又彼らをしてわが逐やらん諸の處にて辱にあはせ諺となり嘲と詛に遭しめん 一〇 われ劍と饑饉と疫病をかれらの間におくりて彼らをしてわが彼らとその先祖にあたへし地に絶るにいたらしめん

第二五章 一 ユダの王ヨシヤの子ヱホヤキムの四年バビロンの王ネブカデネザルの元年にユダのすべての民にかかはる言ヱレミヤにのぞめり 二 預言者ヱレミヤこの言をユダのすべての民とヱルサレムにすめるすべての者に告ていひけるは 三 ユダの王アモンの子ヨシヤの十三年より今日にいたるまで二十三年のあひだヱホバの言我にのぞめり我これを汝等に告げ頻にこれを語りしかども汝らきかざりし 四 ヱホバその僕なる預言者を汝らに遣し頻に遣したまひけれども汝らはきかず又きかんとて耳を傾けざりき 五 彼らいへり汝等おのおのいま其惡き途とその惡き行を棄よ然ばヱホバが汝らと汝らの先祖に與へたまひし地に永遠より永遠にいたるまで住ことをえん 六 汝ら他の神に從ひこれに事へこれを拜み汝らの手にて作りし物をもて我を怒らする勿れ然ば我汝らを害はじ 七 然ど汝らは我にきかず汝等の手にて作りし物をもて我を怒らせて自ら害へりとヱホバいひたまふ 八 この故に萬軍のヱホバかく云たまふ汝ら我言を聽ざれば 九 視よ我北の諸の族と我僕なるバビロンの王ネブカデネザルを招きよせ此地とその民と其四圍の諸國を攻滅さしめて之を詫異物となし人の嗤笑となし永遠の荒地となさんとヱホバいひたまふ 一〇 またわれ欣喜の聲歡樂の聲新夫の聲新婦の聲磐磨の音および燈の光を彼らの中にたえしめん 一一 この地はみな空曠となり詫異物とならん又その諸國は七十年の間バビロンの王につかふべし 一二 ヱホバいひたまふ七十年のをはりし後我バビロンの王と其民とカルデヤの地をその罪のために罰し永遠の空曠となさん 一三 我かの地につきて我かたりし諸の言をその上に臨しめん是ヱレミヤが萬國の事につきて預言したる者にて皆この書に録さるるなり 一四 多の國々と大なる王等は彼らをして己につかへしめん我かれらの行爲とその手の所作に循ひてこれに報いん

一五 イスラエルの神ヱホバかく我に云たまへり我手より此怒の杯をうけて我汝を遣はすところの國々の民に飲しめよ 一六 彼らは飲てよろめき狂はんこは我かれらの中に劍をつかはすによりてなり 一七 是に於てわれヱホバの手より杯をうけヱホバのわれを遣したまふところの國々の民に飲しめたり 一八 即ちヱルサレムとユダの諸の邑とその王等およびその牧伯等に飲せてこれを

ほろぼし詑異物となし人の嗤笑となし詛る者となせり今日のごとし一九またエジプトの王パロと其臣僕その牧伯等その諸の民と二〇諸の雜種の民およびウズの諸の王等およびペリシテ人の地の諸の王等アシケロン、ガザ、エクロン、アシドドの遺餘の者二一エドム、モアブ、アンモンの子孫二二ツロのすべての王等シドンのすべての王等海のかなたの島々の王等二三デダン、テマ、ブズおよびすべて鬢をそる者二四アラビヤのすべての王等曠野の雜種の民の諸の王等二五ジムリの諸の王等エラムの諸の王等メデアのすべての王等二六北のすべての王等その彼と此とにおいて或は遠者 或は近きもの凡地の面にある世の國々の王等はこの杯を飲んセシヤク王はこれらの後に飲べし二七故に汝かれらに語ていへ萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ我汝等の中に劍を遣すによりて汝らは飲みまた醉ひまた吐き又仆て再び起ざれと二八彼等もし汝の手より此杯を受て飲ずば汝彼らにいへ萬軍のヱホバかくいひたまふ汝ら必ず飲べし二九視よわれ我名をもて稱へらるるこの邑にすら災を降すなり汝らいかで罰を免るることをえんや汝らは罰を免れじ蓋われ劍をよびて地に住るすべての者を攻べければなりと萬軍のヱホバいひたまふ三〇汝彼等にこの諸の言を預言していふべしヱホバ高き所より呼號り其聖宮より聲を出し己の住家に向てよばはり地に住る諸の者にむかひて葡萄を踐む者のごとく吶たまはん三一號咷地の極まで聞ゆ蓋ヱホバ列國と爭ひ萬民を審き惡人を劍に付せば也とヱホバ曰たまへり三二萬軍のヱホバかく曰たまふ視よ災いでて國より國にいたらん大なる暴風地の極よりおこるべし三三其日ヱホバの戮したまふ者は地の此極より地の彼の極に及ばん彼等は哀まれず斂められず葬られずして地の面に糞土とならん三四牧者よ哭き叫べ群の長等よ汝ら灰の中に轉ぶべし蓋汝らの屠らるる日滿れば也我汝らを散すべければ汝らは貴き器のごとく墮べし三五牧者は避場なく群の長等は逃る處なし三六牧者の呼號の聲と群の長等の哀哭きこゆ蓋ヱホバ其牧場を滅したまへば也三七ヱホバの烈き怒によりて平安なる牧場は滅さる三八彼は獅子の如く其巢を出たり滅す者の怒と其烈き忿によりて彼らの地は荒されたり

第二六章一ユダの王ヨシヤの子ヱホヤキムが位に即し初のころヱホバより此言いでていふ二ヱホバかくいふ汝ヱホバの室の庭に立我汝に命じていはしむる諸の言をユダの邑々より來りてヱホバの室に拜をする人々に告よ一言をも減す勿れ三彼等聞ておのおの其惡き途を離るることあらん然ば我かれらの行の惡がために災を彼らに降さんとせることを悔べし四汝彼等にヱホバかくいふといへ汝等もし我に聽ずわが汝らの前に置し律法を行はず五我汝らに遣し切に遣せし我僕なる預言者の言を聽ずば（汝らは之をきかざりき）六我この室をシロの如くになし又この邑を地の萬國に詛はるる者となすべし七祭司と預言者及び民みなヱレミヤがヱホバの室に立てこの言をのぶるをきけり

八ヱレミヤ、ヱホバに命ぜられし諸の言を民に告畢りしとき祭司と預言者および諸の民彼を執へいひけるは汝は必ず死べし九汝何故にヱホバの名をもて預言し此室はシロの如くになりこの邑は荒蕪となりて住む者なきにいたらんと云しやと民みなヱホバの室にあつまりてヱレミヤを攻む一〇ユダの牧伯等この事をききて王の家をいでヱホバの室にのぼりてヱホバの家の新しき門の入口に坐せり一一祭司と預言者等牧伯等とすべての民に訴ていふ此人は死にあたる者なり是は汝らが耳に聽しごとくこの邑にむかひて惡き預言をなしたるなり一二是に於てヱレミヤ牧伯等とすべての民にいひけるはヱホバ我を遣し汝らが聽る諸の言をもて此宮とこの邑にむかひて預言せしめたまふ一三故に汝らいま汝らの途と行爲をあらためて汝らの神ヱホバの聲にしたがへ然ばヱホバ汝らに災を降さんとせしことを悔たまふべし一四みよ我は汝らの手にあり汝らの目に善とみゆるところ義とみゆることを我に行へ一五然ど汝ら善くこれを知れ汝らもし我を殺さば必ず無辜ものの血なんぢらの身とこの邑と其中に住る者に歸せんヱホバ我を遣してこの諸の言を汝らの耳につげしめたまひしなればなり一六牧伯等とすべての民すなはち祭司と預言者にいひけるは此人は死にあたる者にあらず是は我らの神ヱホバの名によりて我儕に語りしなりと一七時にこの地の長老數人立て民のすべての集れる者につげていひけるは一八ユダの王ヒゼキヤの代にモレシテ人ミカ、ユダの民に預言して云けらく萬軍のヱホバかくいひ給ふシオンは田地のごとく耕されヱルサレムは邱墟となり此室の山は樹深き崇邱とならんと一九ユダの王ヒゼキヤとすべてのユダ人は彼を殺さんとせしことありしやヒゼキヤ、ヱホバを畏れヱホバに求ければヱホバ彼らに降さんと告給ひし災を悔給ひしにあらずや我儕かく爲すは自己の靈魂をそこなふ大なる惡をなすなり二〇又前にヱホバの名をもて預言せし人あり即ちキリヤテヤリムのシマヤの子ウリヤなり彼ヱレミヤの凡ていへるごとく此邑とこの地にむかひて預言せり二一ヱホヤキム王と其すべての勇士とすべての牧伯等その言を聽り是において王彼を殺さんと欲ひしがウリヤこれをきき懼てエジプトに逃ゆきしかば二二ヱホヤキム王人をエジプトに遣せり即ちアクボルの子エルナタンに數人をそへてエジプトにつかはしければ二三彼らウリヤをエジプトより引出しヱホヤキム王の許に携きたりしに王劍をもて之を殺し其屍骸を賤者の墓に棄させたりと二四時にシヤパンの子アヒカム、ヱレミヤをたすけこれを民の手にわたして殺さざらしむ

第二七章一ユダの王ヨシヤの子ヱホヤキムが位に即し初のころヱホバより此言ヱレミヤに臨みていふ二すなはちヱホバかく我に云たまへり汝索と軛をつくりて汝の項に置き三之をヱルサレムにきたりてゼデキヤ王にいたるところの使臣等の手によりてエドムの王モアブの王アンモン人の王ツロの王シドンの王に送るべし四汝彼らに命じて其主にいはしめよ萬軍のヱホバ、イ

スラエルの神かくいひたまふ汝ら其主にかく告べし五われ我大なる能力と伸たる臂をもて地と地の上にをる人と獸とをつくり我心のままに地を人にあたへたり六いま我この諸の地を我僕なるバビロンの王ネブカデネザルの手にあたへ又野の獸を彼にあたへてかれにつかへしむ七かれの地の時期いたるまで萬國民は彼と其子とその孫につかへん其時いたらばおほくの國と大なる王は彼を己に事へしむべし八バビロンの王ネブカデネザルに事へずバビロンの王の軛をその項に負ざる國と民は我彼の手をもて悉くこれを滅すまで劍と饑饉と疫病をもてこれを罰せんとヱホバいひたまふ九故に汝らの預言者なんぢらの占筮師汝らの夢みる者汝らの法術士汝らの魔法士汝らに告て汝らはバビロンの王に事ふることあらじといふとも聽なかれ一〇彼らは謊を汝らに預言して汝らをその國より遠く離れしめ且我をして汝らを逐しめ汝らを滅さしむるなり一一然どバビロンの王の軛をその項に負ふて彼に事ふる國々の人は我これをその故土に存し其處に耕し住しむべしとヱホバいひたまふ一二我この諸の言のごとくユダの王ゼデキヤに告ていひけるは汝らバビロンの王の軛を汝らの項に負ふて彼と其民につかへよ然ば生べし一三汝と汝の民なんぞヱホバがバビロンの王につかへざる國につきていひたまひし如く劍と饑饉と疫病に死ぬべけんや一四故に汝らはバビロンの王に事ふることあらじと汝等に告る預言者の言を聽なかれ彼らは謊を汝らに預言するなり一五ヱホバいひたまひけるは我彼らを遣さざるに彼らは我名をもて謊を預言す是をもて我汝らを逐はなち汝らと汝らに預言する預言者等を滅すにいたらん一六我また祭司とこのすべての民に語りていひけるはヱホバかくいひたまふ視よヱホバの室の器皿いま速にバビロンより持歸さるべしと汝らに預言する預言者の言をきく勿れそは彼ら謊を汝らに預言すればなり一七汝ら彼らに聽なかれバビロンの王に事へよ然ば生べしこの邑を何ぞ荒蕪となすべけんや一八もし彼ら預言者にしてヱホバの言かれらの衷にあらばヱホバの室とユダの王の家とヱルサレムとに餘れるところの器皿のバビロンに移されざることを萬軍のヱホバに求むべきなり一九萬軍のヱホバ柱と海と臺およびこの邑に餘れる器皿につきてかくいひたまふ二〇是はバビロンの王ネブカデネザルがユダの王ヱホヤキムの子ヱコニヤおよびユダとヱルサレムのすべての牧伯等をヱルサレムよりバビロンにとらへ移せしときに掠ざりし器皿なり二一すなはち萬軍のヱホバ、イスラエルの神ヱホバの室とユダの王の室とヱルサレムとに餘れる器皿につきてかくいひたまふ二二これらはバビロンに携へゆかれ我これを顧る日まで彼處にあらん其後我これを此處にたづさへ歸らしめんとヱホバいひたまふ

第二八章 一この年すなはちユダの王ゼデキヤが位に即し初その四年の五月ギベオンのアズルの子なる預言者ハナニヤ、ヱホバの室にて祭司と凡の民の前にて我に語りいひけるは二萬軍のヱ

ホバ、イスラエルの神かくいひたまふ我バビロンの王の軛を摧けり三二年の内にバビロンの王ネブカデネザルがこの處より取てバビロンに携へゆきしヱホバの室の器皿を再び悉くこの處に歸らしめん四我またユダの王ヱホヤキムの子ヱコニヤおよびバビロンに往しユダのすべての虜人をこの處に歸らしめんそは我バビロンの王の軛を摧くべければなりとヱホバいひたまふ五是に於て預言者ヱレミヤ、ヱホバの家に立る祭司の前とすべての民の前にて預言者ハナニヤと語ふ六預言者ヱレミヤすなはちいひけるはアーメン願くはヱホバかくなし給へ願くはバビロンに携へゆかれしヱホバの室の器皿及びすべて虜へうつされし者をヱホバ、バビロンより復びこの處に歸らしめたまはんと汝の預言せし言の成らんことを七然ど汝いま我なんぢの耳と諸民の耳に語らんとする此言をきけ八我と汝の先にいでし預言者は古昔より多くの地と大なる國につきて戰鬪と災難と疫病の事を預言せり九泰平を預言するところの預言者は若しその預言者の言とげなばその誠にヱホバの遣したまへる者なること知らるべし一〇ここに於て預言者ハナニヤ預言者ヱレミヤの項より軛を取てこれを摧けり一一ハナニヤ諸の民の前にて語りヱホバかくいひたまふわれ二年のうちに是の如く萬國民の項よりバビロン王ネブカデネザルの軛を摧きはなさんといふ預言者ヱレミヤ遂に去りぬ一二預言者ハナニヤ預言者ヱレミヤの項より軛を摧きはなせし後ヱホバの言ヱレミヤに臨みていふ一三汝ゆきてハナニヤにヱホバかくいふと告よ汝木の軛を摧きたれども之に代て鐵の軛を作れり一四萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいふ我鐵の軛をこの萬國民の項に置きてバビロンの王ネブカデネザルに事へしむ彼ら之につかへんわれ野の獸をもこれに與へたり一五また預言者ヱレミヤ預言者ハナニヤにいひけるはハナニヤよ請ふ聽けヱホバ汝を遣はし給はず汝はこの民に謊を信ぜしむるなり一六是故にヱホバいひ給ふ我汝を地の面よりのぞかん汝ヱホバに叛くことを教ふるによりて今年死ぬべしと一七預言者ハナニヤはこの年の七月死ねり

第二九章一預言者ヱレミヤ、ヱルサレムより書をかの虜へうつされて餘れるところの長老および祭司と預言者ならびにネブカデネザルがヱルサレムよりバビロンに移したるすべての民に送れり二是より先ヱコニヤ王と王后と寺人およびユダとヱルサレムの牧伯等および木匠と鐵匠はヱルサレムをされり三ヱレミヤその書をシヤパンの子エラサおよびヒルキヤの子ゲマリヤ即ちユダの王ゼデキヤがバビロンにつかはしてバビロンの王ネブカデネザルにいたらしむる者の手によりて送れり其書にいはく四萬軍のヱホバ、イスラエルの神すべて虜うつされし者即ち我ヱルサレムよりバビロンに移さしめし者にかくいふ五汝ら屋を建てこれに住ひ圃をつくりてその果をくらへ六妻を娶て子女をうみ又汝らの子に媳を娶り汝らの女を嫁がしめ彼らに子女を生しめよ此は汝等かしこに減ずして增んがためなり七我汝ら

を虜移さしめしところの邑の安を求めこれが爲にヱホバにいのれその邑の安によりて汝らもまた安をうればなり八萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らの中の預言者と卜筮士に惑はさるる勿れまた汝ら自ら作りしところの夢に聽したがふ勿れ九そは彼ら我名をもて謊を汝らに預言すればなり我彼らを遣さずヱホバいひたまふ一〇ヱホバかくいひたまふバビロンに於て七十年滿なばわれ汝らを眷み我嘉言を汝らになして汝らをこの處に歸らしめん一一ヱホバいひたまふ我が汝らにむかひて懷くところの念は我これを知るすなはち災をあたへんとにあらず平安を與へんとおもひ又汝らに後と望をあたへんとおもふなり一二汝らわれに籲はり往て我にいのらん我汝らに聽べし一三汝らもし一心をもて我を索めなば我に尋ね遇はん一四ヱホバいひたまふ我汝らの遇ところとならんわれ汝らの俘虜を解き汝らを萬國よりすべて我汝らを逐やりし處より集め且我汝らをして虜らはれて離れしめしその處に汝らをひき歸らんとヱホバいひたまふ一五ヱホバわれらの爲にバビロンに於て預言者を立たまひしと汝らはいふ一六ダビデの位に坐する王とこの邑に住るすべての民汝らと偕にとらへ移されざりし兄弟につきてヱホバかくいひたまふ一七萬軍のヱホバかくいふ視よわれ劍と饑饉と疫病を彼らにおくり彼らを惡くして食はれざる惡き無花果のごとくになさん一八われ劍と饑饉と疫病をもて彼らを逐ひまた彼らを地の萬國にわたして虐にあはしめ我彼らを逐やる諸國に於て呪詛となり詫異となり人の嗤笑となり恥辱とならしめん一九是彼ら我言を聽ざればなりとヱホバいひたまふ我この言を我僕なる預言者によりて遣り頻におくれども汝ら聽ざるなりとヱホバいひたまふ二〇わがヱルサレムよりバビロンにおくりし諸の俘虜人よ汝らヱホバの言をきけ二一我名をもて謊を汝らに預言するコラヤの子アハブとマアセヤの子ゼデキヤにつきて萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいふ視よわれ彼らをバビロンの王ネブカデネザルの手に付さん彼これを汝らの目の前に殺すべし二二バビロンにあるユダの俘虜人は皆彼らをもて詛となし願くはヱホバ汝をバビロンの王が火にて焚しゼデキヤとアハブのごとき者となしたまはん事をといふ二三こは彼らイスラエルの中に惡をなし鄰の妻を犯し且彼らに命ぜざる謊の言をわが名をもて語りしによる我これを知りまた證すとヱホバいひたまふ二四汝ネヘラミ人シマヤにかく語りいふべし二五萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいふ汝おのれの名をもて書をヱルサレムにある諸の民と祭司マアセヤの子ゼパニヤおよび諸の祭司に送りていふ二六ヱホバ汝を祭司ヱホヤダに代て祭司となし汝らをヱホバの室の監督となしたまふ此すべて狂妄ひ且みづから預言者なりといふ者を獄と桎梏につながしめんためなり二七然るに汝いま何故に汝らにむかひてみづから預言者なりといふところのアナトテのヱレミヤを斥責めざるや二八そは彼バビロンにをる我儕に書を送り時尚長ければ汝ら家

を建て之に住ひ圃をつくりてその實をくらへといへり 二九 祭司ゼパニヤこの書を預言者ヱレミヤに讀きかせたり 三〇 時にヱホバの言ヱレミヤにのぞみていふ 三一 諸の俘虜人に書をおくりて云べしネヘラミ人シマヤの事につきてヱホバかくいふ我シマヤを遣さざるに彼汝らに預言し汝らに謊を信ぜしめしによりて 三二 ヱホバかくいふ視よ我ネヘラミ人シマヤと其子孫を罰すべし彼ヱホバに逆くことを教へしによりて此民のうちに彼に屬する者一人も住ふことなからん且我民に吾がなさんとする善事をみざるべしとヱホバいひたまふ

第三〇章 一 ヱホバよりヱレミヤにのぞめる言いふ 二 イスラエルの神ヱホバかく告ていふ我汝に言し言をことごとく書に錄せ 三 ヱホバいふわれ我民イスラエルとユダの俘囚人を返す日きたらんヱホバこれをいふ我彼らをその先祖にあたへし地にかへらしめん彼らは之をたもたん 四 ヱホバのイスラエルとユダにつきていひたまひし言は是なり 五 ヱホバかくいふ我ら戰慄の聲をきく驚懼あり平安あらず 六 汝ら子を產む男あるやを尋ね觀よ我男が皆子を產む婦のごとく手をその腰におき且その面色皆青く變るをみるは何故ぞや 七 哀しいかなその日は大にして之に擬ふべき日なし此はヤコブの患難の時なり然ど彼はこれより救出されん 八 萬軍のヱホバいふ其日我なんぢの項よりその軛をくだきはなし汝の繩目をとかん異邦人は復彼を使役はざるべし 九 彼らは其神ヱホバと我彼らの爲に立んところの其王ダビデにつかふべし 一〇 ヱホバいふ我僕ヤコブよ懼るる勿れイスラエルよ驚く勿れ我汝を遠方より救ひかへし汝の子孫を其とらへ移されし地より救ひかへさんヤコブは歸りて平穩と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし 一一 ヱホバいふ我汝と偕にありて汝を救はん設令われ汝を散せし國々を悉く滅しつくすとも汝をば滅しつくさじされど我道をもて汝を懲さん汝を全たく罰せずにはおかざるべし 一二 ヱホバかくいふ汝の創は愈ず汝の傷は重し 一三 汝の訟を理す者なく汝の創を裹む膏藥あらず 一四 汝の愛する者は皆汝を忘れて汝を求めず是汝の愆の多きと罪の數多なるによりて我仇敵の擊がごとく汝を擊ち嚴く汝を懲せばなり 一五 何ぞ汝の創のために叫ぶや汝の患は愈ることなし汝の愆の多きと罪の數多なるによりて我これを汝になすなり 一六 然どすべて汝を食ふ者は食はれすべて汝を虐ぐる者は皆とらはれ汝を掠むる者は掠められん凡て汝の物を奪ふ者は我これをして奪はるる事にあはしむべし 一七 ヱホバいふ我汝に膏藥を貼り汝の傷を醫さんそは人汝を棄られし者とよび尋る者なきシオンといへばなり 一八 ヱホバかくいふ視よわれかの虜移されたるヤコブの天幕をかへし其住居をあはれまん斯邑はその故の丘垤に建られん城には宜き樣に人住はん 一九 感謝と歡樂者の聲とその中よりいでん我かれらを增ん彼ら少からじ我彼らを崇せん彼ら藐められじ 二〇 其子は疇昔のごとくあらん其集會は我前に固く立ん凡かれを虐ぐる者は我これを罰せん 二一 其首領は本族よりいで其督者はそ

の中よりいでん我彼をちかづけ彼に近かん誰かその生命を繋て我に近くものあらんやとヱホバいふ二二 汝等は我民となり我は汝らの神とならん二三 みよヱホバの暴風あり怒と旋轉風いでて惡人の首をうたん二四 ヱホバの烈き忿はかれがその心の思を行ひてこれを遂るまでは息じ末の日に汝ら明にこれを曉らん

第三一章一 ヱホバいひたまふ其時われはイスラエルの諸の族の神となり彼らは我民とならん二 ヱホバかくいひたまふ劍をのがれて遺りし民は曠野の中に恩を獲たりわれ往て彼イスラエルに安息をあたへん三 遠方よりヱホバ我に顯れていひたまふ我窮なき愛をもて汝を愛せり故にわれたえず汝をめぐむなり四 イスラエルの童女よわれ復び汝を建ん汝は建らるべし汝ふたたび鼗をもて身を飾り歡樂者の舞にいでん五 汝また葡萄の樹をサマリヤの山に植ん植る者は植てその果を食ふことをえん六 エフライムの山の上に守望者の立て呼はる日きたらんいはく汝ら起よ我らシオンにのぼりて我儕の神ヱホバにまうでんと七 ヱホバかくいひたまふ汝らヤコブの爲に歡びて呼はり萬國の首なる者のために叫べ汝ら示し且歌ひて言へヱホバよ願くはイスラエルの遺れる者汝の民を救ひたまへと八 みよ我彼らを北の地よりひきかへり彼らを地の極より集めん彼らの中には瞽者 跛者 孕める婦 子を產みし婦ともに居る彼らは大なる群をなして此處にかへらん九 彼ら悲泣來らん我かれらをして祈禱をもて來らしめ直くして蹶かざる途より水の流に歩みいたらしめん我はイスラエルの父にしてエフライムは我長子なればなり一〇 萬國の民よ汝らヱホバの言をきき之を遠き諸島に示していえへイスラエルを散せしものこれを聚め牧者のその群を守るが如く之を守らん一一 すなはちヱホバ、ヤコブを贖ひ彼等よりも強き者の手よりかれを救出したまへり一二 彼らは來てシオンの頂によばはりヱホバの賜ひし福なる麥と酒と油および若き羊と牛の爲に寄集はんその靈魂は灌ふ園のごとくならん彼らは重て愁ふること無るべし一三 その時童女は舞てたのしみ壯者と老者もろともに樂しまん我かれらの悲をかへて喜となしかれらの愁をさりてこれを慰さめん一四 われ膏をもて祭司の心を飫しめ我恩をもて我民に滿しめんとヱホバ言たまふ一五 ヱホバかくいひたまふ歎き悲みいたく憂ふる聲ラマに聞ゆラケルその兒子のために歎きその兒子のあらずなりしによりて慰をえず一六 ヱホバかくいひ給ふ汝の聲を禁て哭こと勿れ汝の目を禁て淚を流すこと勿れ汝の工に報あるべし彼らは其敵の地より歸らんとヱホバいひたまふ一七 汝の後の日に望あり兒子等その境に歸らんとヱホバいひたまふ一八 われ固にエフライムのみづから歎くをきけり云く汝は我を懲しめたまふ我は軛に馴ざる犢のごとくに懲治を受たりヱホバよ汝はわが神なれば我を牽轉したまへ然ば我轉るべし一九 われ轉りし後に悔い教を承しのちに我髀を擊つ我幼時の羞を身にもてば恥ぢかつ辱しめらるるなりと二〇 ヱホバいひたまふエフライムは我愛するところの子悦ぶところの子ならずや我彼にむかひ

てかたるごとに彼を念はざるを得ず是をもて我腸かれの爲に痛む我必ず彼を恤むべし二一 汝のために指路號を置き汝のために柱をたてよ汝のゆける道なる大路に心をとめよイスラエルの童女よ歸れこの汝の邑々にかへれよ二二 違ける女よ汝いつまで流蕩ふやヱホバ新しき事を地に創造らん女は男を抱くべし二三 萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひ給ふ我かの俘囚し者を返さん時人々復ユダの地とその邑々に於て此言をいはん義き居所よ聖き山よ願くはヱホバ汝を祝みたまへと二四 ユダとその諸の邑々に農夫と群を牧ふもの偕に住はん二五 われ疲れたる靈魂を飫しめすべての憂ふる靈魂をなぐさむるなり二六 茲にわれ目を醒しみるに我眠は甘かりし二七 ヱホバいひたまふ視よ我が人の種と畜の種とをイスラエルの家とユダの家とに播く日いたらん二八 我彼らを抜き毀ち覆し滅し難さんとうかがひし如くまた彼らを建て植ゑんとうかがふべしとヱホバいひ給ふ二九 その時彼らは父が酸き葡萄を食ひしによりて兒子の齒齼くと再びいはざるべし三〇 人はおのおの自己の惡によりて死なん凡そ酸き葡萄をくらふ人はその齒齼く三一 ヱホバいひたまふみよ我イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立つる日きたらん三二 この契約は我彼らの先祖の手をとりてエジプトの地よりこれを導きいだせし日に立しところの如きにあらず我かれらを娶りたれども彼らはその我契約を破れりとヱホバいひたまふ三三 然どかの日の後に我イスラエルの家に立んところの契約は此なり即ちわれ我律法をかれらの衷におきその心の上に録さん我は彼らの神となり彼らは我民となるべしとヱホバいひたまふ三四 人おのおの其隣とその兄弟に教へて汝ヱホバを識と復いはじそは小より大にいたるまで悉く我をしるべければなりとヱホバいひたまふ我彼らの不義を赦しその罪をまた思はざるべし三五 ヱホバかく言すなはち是日をあたへて晝の光となし月と星をさだめて夜の光となし海を激してその濤を鳴しむる者その名は萬軍のヱホバと言なり三六 ヱホバいひたまふもし此等の規律我前に廢らばイスラエルの子孫も我前に廢りて永遠も民たることを得ざるべし三七 ヱホバかくいひたまふ若し上の天量ることを得下の地の基探ることをえば我またイスラエルのすべての子孫を其もろもろの行のために棄べしとヱホバこれをいふ三八 ヱホバいひたまふ視よ此邑ハナネルの塔より隅の門までヱホバの爲に建つ日きたらん三九 量繩ふたたび直ちにガレブの岡をこえゴアテの方に轉るべし四〇 屍と灰の谷またケデロンの溪にいたるまでと東の方の馬の門の隅にいたるまでの諸の田地皆ヱホバの聖き處となり永遠におよぶまで再び抜れまた覆さるる事なかるべし

第三二章一 ユダの王ゼデキヤの十年即ちネブカデネザルの十八年の頃ヱホバの言ヱレミヤにのぞめり二 その時バビロンの軍勢ヱルサレムを攻環み居て預言者ヱレミヤはユダの王の室にある獄の庭の内に禁錮られたり三 ユダの王ゼデキヤ彼を禁錮ていひけるは汝何故に預言してヱホバかく云たまふといふや云く視

よ我この邑をバビロン王の手に付さん彼之を取るべし四またユダの王ゼデキヤはカルデヤ人の手より脱れず必ずバビロン王の手に付され口と口とあひ語り目と目あひ觀るべし五彼ゼデキヤをバビロンに携きゆかんゼデキヤはわが彼を顧る時まで彼處に居んとヱホバいひたまふ汝らカルデヤ人と戰ふとも勝ことを得じと六ヱレミヤいふヱホバの言われに臨みていはく七みよ汝の叔父シヤルムの子ハナメル汝にきたりていはん汝アナトテに在るわが田地を買へそは之を贖ふ事は汝の分なればなりと八かくてヱホバの言のごとく我叔父の子ハナメル獄の庭にて我に來り云けるは願くは汝ベニヤミンの地のアナトテに在るわが田地を買へそは之を嗣ぎこれを贖ふことは汝の分なれば汝みづからこれを買ひとれとここに於てわれ此はヱホバの言なりと知りたれば九我叔父の子ハナメルがアナトテにもてる田地をかひて彼に銀十七シケルを稱てあたふ一〇すなはち我その契劵を書てこれに封印し證人をたて權衡をもて銀を稱て與ふ一一而してわれその約定をのするところの封印せし買劵とその開きたるものを取り一二わが叔父の子ハナメルと買劵に印せし證人の前および獄の庭に坐するユダ人の前にてその買劵をマアセヤの子なるネリヤの子バルクに與へ一三彼らの前にてわれバルクに命じていひけるは一四萬軍のヱホバ、イスラエルの神かく云たまふ汝これらの契劵すなはち此買劵の封印せし者と開きたるものを取り之を瓦器の中に貯へて多くの日の間保たしめよ一五萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふそは此地に於て人復屋と田地と葡萄園を買ふにいたらんと一六われ買契をネリヤの子バルクに付せしのちヱホバに祈りて云ひけるは一七嗚呼主ヱホバよ汝はその大なる能力と伸たる腕をもて天と地を造りたまへり汝には爲す能はざるところなし一八汝は恩寵を千萬人に施し又父の罪をその後の子孫の懷に報いたまふ汝は大なる全能の神にいまして其名は萬軍のヱホバとまうすなり一九汝の謀略は大なり汝は事をなすに能あり汝の目は人のこどもらの諸の途を鑒はしおのおのの行に循ひその行爲の果によりて之に報いたまふ二〇汝休徵と奇跡をエジプトの地に行ひたまひて今日にまでいたるまたイスラエルと他の民の中にも然りかくして今日のごとくに汝の名を揚たまへり二一汝は休徵と奇跡と強き手と伸たる腕と大なる怖しき事をもて汝の民イスラエルをエジプトの地より導きいだし二二この地を彼らにたまへり是即ち汝がかれらの先祖等に與へんと誓ひたまひし乳と蜜の流るる地なり二三彼等すなはち入てこれを獲たりしかども汝の聲に遵はず汝の例典を行はず凡て汝がなせと命じたまひし事を爲ざりしによりて汝この災を其上にくだらしむ二四みよ壘成れり是この邑を取んとて來れるなり劍と饑饉と疫病のためにこの邑は之を攻むるカルデヤ人の手に付さる汝のいひたまひしことば既に成れり汝之を見たまふなり二五主ヱホバよ汝われに銀をもて田地を買へ證人を立よといひたまへり然るにこの邑はカルデ

ヤ人の手に付さる二六時にヱホバの言ヱレミヤに臨みていふ二七みよ我はヱホバなりすべて血氣ある者の神なり我に爲す能はざるところあらんや二八故にヱホバかくいふ視よわれ此邑をカルデヤ人の手とバビロンの王ネブカデネザルの手に付さん彼これを取るべし二九この邑を攻るところのカルデヤ人きたり火をこの邑に放ちて之を焚ん屋蓋のうへにて人がバアルに香を焚き他の神に酒をそそぎて我を怒らせしその屋をも彼ら亦焚ん三〇そはイスラエルの子孫とユダの子孫はその幼少時よりわが前に惡き事のみをなしまたイスラエルの民はその手の作爲をもて我をいからする事のみをなしたればなりヱホバ之をいふ三一此邑はその建し日より今日にいたるまで我震怒を惹き我憤恨をおこすところの者なれば我前よりわれ之を除かんとするなり三二こはイスラエルの民とユダの民諸の惡を行ひて我を怒らせしによりてなり彼らその王等その牧伯等その祭司その預言者およびユダの人々とヱルサレムに住る者皆然なせり三三彼ら背を我にむけて面を我にむけずわれ彼らをしへ頻に教ふれどもかれらは教をきかずしてうけざるなり三四彼らは憎むべき物をわが名をもて稱へらるる室にたてて之を汚し三五又ベンヒンノムの谷にあるバアルの崇邱を築きその子女をモロクに献げたりわれは彼らにこの憎むべきことを行ひてユダに罪を犯さしむることを命ぜず斯る事は我心におこらざりしなり三六いまイスラエルの神ヱホバこの邑すなはち汝らが劍と饑饉と疫病のためにバビロン王の手に付されんといひしところの邑につきて斯いひたまふ三七みよわれ我震怒と憤恨と大なる怒をもて彼らを逐やりし諸の國より彼らを集め此處に導きかへりて安然に居らしめん三八彼らは我民となり我は彼らの神とならん三九われ彼らに一の心と一の途をあたへて常に我を畏れしめんこは彼らと其子孫とに福をえせしめん爲なり四〇われ彼らを棄ずして恩を施すべしといふ永遠の契約をかれらにたて我を畏るるの畏をかれらの心におきて我を離れざらしめん四一われ悦びて彼らに恩を施し心を盡し精神をつくして誠に彼らを此地に植べし四二ヱホバかくいひたまふわれ此諸の大なる災をこの民に降せしごとくわがかれらに言し諸の福を彼等に降さん四三人衆この地に田野を買はん是汝等が荒て人も畜もなきにいたりカルデヤ人の手に付されしといへる地なり四四人衆ベニヤミンの地とヱルサレムの四周とユダの邑々と山の邑々と平地の邑々と南の方の邑々において銀をもて田野をかひ契劵を書きてこれに封印し又證人をたてんそは我かの俘囚者を歸らしむればなりとヱホバいひたまふ

第三三章 一 ヱレミヤ尚獄の庭に禁錮られてをる時ヱホバの言ふたたび彼に臨みていふ二事をおこなふヱホバ事をなして之を成就るヱホバ其名をヱホバと名る者かく言ふ三汝我に龥求めよわれ汝に應へん又汝が知ざる大なる事と秘密たる事とを汝に示さん四イスラエルの神ヱホバ壘と劍によりて毀たれたる此

邑の室とユダの王の室につきてかくいひ給ふ五彼らカルデヤ人と戰はんとて來る是には我震怒と憤恨をもて殺すところの人々の屍體充るにいたらん我かれらの諸の惡のためにわが面をこの邑に蔽ひかくせり六視よわれ卷布と良藥をこれに持きたりて人々を醫し平康と眞實の豐厚なるをこれに示さん七我ユダの俘囚人とイスラエルの俘囚人を歸らしめ彼らを建て從前のごとくになすべし八われ彼らが我にむかひて犯せし一切の罪を潔め彼らが我にむかひて犯し且行ひし一切の罪を赦さん九此邑は地のもろもろの民の中において我がために欣喜の名となり頌美となり榮耀となるべし彼等はわが此民にほどこすところの諸の恩惠を聞ん而してわがこの邑にほどこすところの諸の恩惠と諸の福祿のために發振へ且身を動搖さん一〇ヱホバかくいひ給へり汝らが荒れて人もなく畜もなしといひしこの處即ち荒れて人もなく住む者もなく畜もなきユダの邑とヱルサレムの街に一一再び欣喜の聲 歡樂の聲 新娶者の聲 新婦の聲および萬軍のヱホバをあがめよヱホバは善にしてその矜恤は窮なしといひて其感謝の祭物をヱホバの室に携ふる者の聲聞ゆべし蓋われこの地の俘囚人を返らしめて初のごとくになすべければなりヱホバ之をいひたまふ一二萬軍のヱホバかくいひたまふ荒れて人もなく畜もなきこの處と其すべての邑々に再び牧者のその群を伏しむる牧場あるにいたらん一三山の邑と平地の邑と南の方の邑とベニヤミンの地とヱルサレムの四周とユダの邑において群ふたたびその之を核ふる者の手の下を過らんとヱホバいひたまふ一四ヱホバ言たまはく視よ我イスラエルの家とユダの家に語りし善言を成就ぐる日きたらん一五その日その時にいたらばわれダビデの爲に一の義き枝を生ぜしめん彼は公道と公義を地に行ふべし一六その日ユダは救をえヱルサレムは安らかに居らんその名はヱホバ我儕の義と稱へらるべし一七ヱホバかくいひたまふイスラエルの家の位に坐する人ダビデに缺ることなかるべし一八また我前に燔祭をささげ素祭を燃し恒に犧牲を獻ぐる人レビ人なる祭司に絶ざるべし一九ヱホバのことばヱレミヤに臨みていふ二〇ヱホバかくいふ汝らもし我晝につきての契約と我夜につきての契約を破りてその時々に晝も夜もなからしむることをえば二一僕ダビデに吾が立し契約もまた破れその子はかれの位に坐して王となることをえざらんまたわが我に事ふるレビ人なる祭司に立し契約も破れん二二天の星は數へられず濱の沙は量られずわれその如く我僕ダビデの裔と我に事ふるレビ人を増ん二三ヱホバの言またヱレミヤに臨みていふ二四汝この民の語りてヱホバはその選みし二の族を棄たりといふを聞ざるか彼らはかく我民を藐じてその眼にこれを國と見なさざるなり二五ヱホバかくいひ給ふもしわれ晝と夜とについての契約を立ずまた天地の律法を定めずば二六われヤコブと我僕ダビデとの裔をすてて再びかれの裔の中よりアブラハム、イサク、ヤコブの裔を治むる者を取ざるべし我その俘囚し者を返らしめこれを恤れむべし

第三四章一 バビロンの王ネブカデネザルその全軍および己の手の下に屬するところの地の列國の人および諸の民を率てヱルサレムとその諸邑を攻めて戰ふ時ヱホバの言ヱレミヤに臨みていふ二 イスラエルの神ヱホバかくいふ汝ゆきてユダの王ゼデキヤに告ていふべしヱホバかくいひたまふ視よわれ此邑をバビロン王の手に付さん彼火をもてこれを焚べし三 汝はその手を脱れず必ず擒へられてこれが手に付されん汝の目はバビロン王の目をみ又かれの口は汝の口と語ふべし汝はバビロンにゆくにいたらん四 然どユダの王ゼデキヤよヱホバの言をきけヱホバ 汝の事につきてかくいひたまふ汝は劍に死じ五 汝は安らかに死なん民は汝の先祖たる汝の先の王等の爲に香を焚しごとく汝のためにも香を焚き且汝のために嘆て嗚呼主よといはん我この言をいふとヱホバいひたまふ六 預言者ヱレミヤすなはち此言をことごとくヱルサレムにてユダの王ゼデキヤにつげたり七 時にバビロン王の軍勢はヱルサレムおよび存れるユダの諸の邑を攻めラキシとアゼカを攻て戰ひをる其はユダの諸邑のうちに是等の城の邑尚存りゐたればなり八 ゼデキヤ王ヱルサレムに居る諸の民と契約を立てて彼らに釋放の事を宣示せし後ヱホバの言ヱレミヤに臨めり九 その契約はすなはち人をしておのおの其僕 婢なるヘブルの男 女を釋たしめその兄弟なるユダヤ人を奴隷となさざらしむる者なりき一〇 この契約をなせし牧伯等とすべての民は人おのおのその僕 婢を釋ちて再び之を奴隷となすべからずといふをききて遂にそれぞれに聽したがひてこれを釋ちしが一一 後に心をひるがへしてその釋ちし僕 婢をひきかへりて再び之を伏從はしめて僕 婢となせり一二 是故にヱホバの言ヱホバよりヱレミヤにのぞみて云一三 イスラエルの神ヱホバかくいふ我汝らの先祖をエジプトの地その奴隷たりし宅より導きいだせし時彼らと契約を立ていひけらく一四 汝らの兄弟なるヘブル人の身を汝らに賣たる者をば七年の終に汝らおのおのこれを釋つべし彼六年汝につかへたらば之を釋つべしと然るに汝らの先祖等は我に聽ず亦その耳を傾けざりし一五 然ど汝らは今日心をあらためておのおの其鄰人に釋放の事を示してわが目に正とみゆる事を行ひ且我名をもて稱へらるる室に於て我前に契約を立たり一六 然るに汝ら再び心をひるがへして我名を汚し各自釋ちて其心に任せしめたる僕 婢をひき歸り再び之を伏從はしめて汝らの僕 婢となせり一七 この故にヱホバかくいひたまふ汝ら我に聽ておのおの其兄弟とその鄰に釋放の事を示さざりしによりて視よわれ汝らの爲に釋放を示して汝らを劍と饑饉と疫病にわたさん我汝らをして地の諸の國にて艱難をうけしむべし一八 ヱホバこれを云ふ犢を兩にさきて其二個の間を過り我前に契約をたてて却つて其言に從はずわが契約をやぶる人々一九 即ち兩に分ちし犢の間を過りしユダの牧伯等ヱルサレムの牧伯等と寺人と祭司とこの地のすべての民を二〇 われ其敵の手とその生命を索る者の手に付さんその屍體は天空の鳥と野の獸

の食物となるべし二一 且われユダの王ゼデキヤとその牧伯等をその敵の手其生命を索むる者の手汝らを離れて去しバビロン王の軍勢の手に付さん二二 ヱホバいひたまふ視よ我彼らに命じて此邑に歸らしめん彼らこの邑を攻て戰ひ之を取り火をもて焚くべしわれユダの諸邑を住人なき荒地となさん

第三五章一 ユダの王ヨシヤの子ヱホヤキムの時ヱレミヤにのぞみしヱホバの言いふ二 汝レカブ人の家に往て彼らとかたり彼らをヱホバの室の一房に携きたりて酒をのませよと三 是に於てわれハバジニヤの子なるヱレミヤの子ヤザニヤとその兄弟とその諸子およびレカブ人の全家を取り四 これをヱホバの室にあるハナンの諸子の房につれきたれりハナンはイグダリヤの子にして神の人なり其房は牧伯等の房の次にして門を守るシヤレムの子マアセヤの房のうへに在り五 我すなはちレカブ人の家の諸子の前に酒を滿したる壺と杯を置き彼らに告て汝ら酒を飲めといひければ六 彼らこたへけるは我儕は酒をのまず蓋レカブの子なる我らの先祖ヨナダブ我らに命じて汝等と汝らの子孫はいつまでも酒をのむべからず七 また汝ら屋を建ず種をまかず葡萄園を植ざれ亦これを有べからず汝らの生存ふるあひだ幕屋にをれ然らば汝らが寄寓ところの地に於て汝らの生命長からんと云たればなり八 斯我らはレカブの子なるわれらの先祖ヨナダブの凡て命ぜし言に遵ひて我儕とわれらの妻と子女は生存ふるあひだ酒を飲ず九 我らは住べき屋を建てず葡萄園も田野も種も有ずして一〇 幕屋にをりすべて我儕の先祖ヨナダブが我らに命ぜしごとく行へり一一 然どバビロンの王ネブカデネザルがこの地に上り來りしとき我ら云けるは我らカルデヤ人の軍勢とスリア人の軍勢を畏るれば去來ヱルサレムにゆかんとすなはち我らはヱルサレムに住へり一二 時にヱホバの言ヱレミヤにのぞみていふ一三 萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいふ汝ゆきてユダの人々とヱルサレムに住る者とに告よヱホバいひたまふ汝らは我言を聽て教を受ざるか一四 レカブの子ヨナダブがその子孫に酒をのむべからずと命ぜし言は行はる彼らは今日に至るまで酒をのまず其先祖の命令に遵ふなり然るに汝らは吾汝らに語り頻りに語れども我にきかざるなり一五 我また我僕なる預言者たちを汝らに遣し頻りにこれを遣していはせけるは汝らいまおのおの其惡き道を離れて歸り汝らの行をあらためよ他の神に從ひて之に奉ふる勿れ然ば汝らはわが汝らと汝らの先祖に與へたるこの地に住ことをえんと然ど汝らは耳を傾けず我にきかざりき一六 レカブの子ヨナダブの子孫はその先祖が彼らに命ぜしところの命令に遵ふなり然ど此民は我に聽ず一七 この故に萬軍の神ヱホバ、イスラエルの神かくいふ視よわれユダとヱルサレムに住る者とに我彼らにつきていひし所の災を降さん我かれらに語れども聽ずかれらを召ども應へざればなり一八 茲にヱレミヤ、レカブ人の家にいひけるは萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らはその先祖ヨナダブの命に遵ひその凡の

誠を守り彼が汝らに命ぜしことを行ふ一九是によりて萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふレカブの子ヨナダブには我前に立つ人いつまでも缺ることあらじ

第三十六章一ユダの王ヨシヤの子ヱホヤキムの四年にこの言ヱホバよりヱレミヤに臨みていふ二汝巻物をとり我汝に語りし日即ちヨシヤの日より今日に至るまでイスラエルとユダと萬國とにつきてわが汝に語りしすべての言を之に錄せ三ユダの家わが降さんと擬るところの災をききて各自その惡き途をはなれて轉ることもあらん然ばわれ其愆とその罪を赦すべし四是に於てヱレミヤ、ネリヤの子バルクを召べりバルクすなはちヱレミヤの口にしたがひヱホバの彼に告たまひし言をことごとく巻物に錄せり五ヱレミヤ、バルクに云ひけるはわれは禁錮られたればヱホバの室に往くことを得ず六故に汝ゆきて汝が我の口にしたがひて巻物に錄したるヱホバの言をよみ斷食の日にヱホバの室に於て民の耳にこれを聽しめよまた之を讀みてユダの人々のその邑々より來れる者の耳に聽しむべし七彼らヱホバの前にその祈禱を獻り各自其惡き途をはなれて轉ることもあらんヱホバの此民につきてのべたまひし怒と憤は大なり八斯てネリヤの子バルクは凡て預言者ヱレミヤが己に命ぜしごとくヱホバの室にてその巻物よりヱホバの言を讀り九ユダの王ヨシヤの子ヱホヤキムの五年九月ヱルサレムの諸の民およびユダの諸邑よりヱルサレムに來れる諸の民にヱホバの前に斷食を行ふべきこと宣示さる一〇バルク、ヱホバの室の上庭に於てヱホバの室の新しき門の入口の旁にあるシヤパンの子なる書記ゲマリヤの房にてその書よりヱレミヤの言を民に讀きかせたり一一シヤパンの子なるゲマリヤの子ミカヤその書のヱホバの言を盡くききて一二王の宮にある書記の房にくだりいたるに諸の牧伯等即ち書記エリシヤマ、シマヤの子デラヤ、アカボルの子エルナタン、シヤパンの子ゲマリヤ、ハナニヤの子ゼデキヤおよび諸の牧伯等そこに坐せり一三ミカヤ、バルクが書を讀て民の耳に聽せしときに己が聽しところのすべての言を彼らに告ければ一四牧伯等クシの子シレミヤの子なるネタニヤの子ヱホデをバルクに遣はしていはせけるは汝が民に讀きかせしその巻物を手に取て來れとネリヤの子バルクすなはち手に巻物を取りて彼らの許にきたりたれば一五彼らバルクにいひけるは請ふ坐して之を我らに讀きかせよとバルクすなはち彼らに讀聞せたり一六彼らその諸の言をききて倶に懼れバルクにいひけるは我ら必ずこの諸の言を王に告んと一七またバルクに問ていひけるは請ふ汝いかにこの諸の言をかれの口にしたがひて錄せしや我らに告よ一八バルク答へけるは彼その口をもてこの諸の言を我に述べたればわれ墨をもて之を書に錄せり一九牧伯等バルクにいひけるは汝ゆきてヱレミヤとともに身を匿し在所を人に知しむべからずと二〇すなはち巻物を書記エリシヤマの房に置きて庭にいり王に詣りてこの諸の言を王につげければ二一王その巻物を持來らせんとてヱホ

デを遣せりヱホデすなはち書記エリシヤマの房より巻物を取來りて之を王と王の側に立るすべての牧伯等に讀みきかせたり二二時は九月にして王冬の室に坐せり其前に火の燃る爐あり二三ヱホデ三枚か四枚を讀けるとき王小刀をもてその巻物を切割き爐の火に投いれて之を盡く爐の火に焚り二四王とその臣僕等はこの諸の言をきけども懼れず亦その衣を裂ざりき二五エルナタン、デラヤ、ゲマリヤ等王にその巻物を焚たまふ勿れと求めたれども聽ざりき二六王ハンメレクの子ヱラメルとアズリエルの子セラヤとアブデルの子セレミヤに書記バルクと預言者ヱレミヤを執へよと命ぜしがヱホバかれらを匿したまへり二七王巻物およびバルクがヱレミヤの口にしたがひて記せし言を焚しのちヱホバの言ヱレミヤに臨みていふ二八汝また他の巻物をとりユダの王ヱホヤキムが焚しところの前の巻物の中の言をことごとく其に錄せ二九汝またユダの王ヱホヤキムに告よヱホバかくいふ汝かの巻物を焚ていへり汝何なれば此巻物に錄してバビロンの王必ず來りてこの地を滅し此に人と畜を絶さんと云しやと三〇この故にヱホバ、ユダの王ヱホヤキムにつきてかくいひ給ふ彼にはダビデの位に坐する者無にいたらん且かれの屍は棄られて晝は熱氣にあひ夜は寒氣にあはん三一我また彼とその子孫とその臣僕等をその惡のために罰せんまた彼らとヱルサレムの民とユダの人々には我わが彼らにつきて語りしかども彼らが聽ことをせざりし所の禍を降すべし三二是に於てヱレミヤ他の巻物を取てネリヤの子書記バルクにあたふバルクすなはちユダの王ヱホヤキムが火に焚たるところの書の諸の言をヱレミヤの口にしたがひて之に錄し外にまた斯る言を多く之に加へたり

第三七章 一ヨシヤの子ゼデキヤ、ヱホヤキムの子コニヤに代りて王となるバビロンの王ネブカデネザル彼をユダの地に王となせしなり二彼もその臣僕等もその地の人々もヱホバが預言者ヱレミヤによりて示したまひし言を聽ざりき三ゼデキヤ王シレミヤの子ユカルとマアセヤの子祭司ゼパニヤを預言者ヱレミヤに遣して請ふ汝我らの爲に我らの神ヱホバに祈れといはしむ四ヱレミヤは民の中に出入せりそはいまだ獄に入られざればなり五パロの軍勢のエジプトより來りしかばヱルサレムを攻圍みたるカルデヤ人は其音信をききてヱルサレムを退けり六時にヱホバの言預言者ヱレミヤにのぞみていふ七イスラエルの神ヱホバかくいふ汝らを遣して我に求めしユダの王にかくいへ汝らを救はんとて出きたりしパロの軍勢はおのれの地エジプトへ歸らん八カルデヤ人再び來りてこの邑を攻て戰ひこれを取り火をもて焚べし九ヱホバかくいふ汝らカルデヤ人は必ず我らをはなれて去んといひて自ら欺く勿れ彼らは去ざるべし一〇設令汝らおのれを攻て戰ふところのカルデヤ人の軍勢を悉く撃ちやぶりてその中に負傷人のみを遺すとも彼らはおのおの其幕屋に起ちあがり火をもて此邑を焚かん一一茲にカルデヤ人の軍勢パロの軍勢を懼れてヱルサレムを退きければ一二ヱレミヤ、ベニヤミンの地

にて民の中にその分を分ち取らんとてヱルサレムを出でてかの地に行きしが一三ベニヤミンの門にいりし時そこにハナニヤの子シレミヤの子なるイリヤと名くる門守をり預言者ヱレミヤを執へて汝はカルデヤ人に降るなりといふ一四ヱレミヤいひけるは詐なり我はカルデヤ人に降るにあらずと然どイリヤこれを聽ずヱレミヤを執へて侯伯等の許に引ゆけり一五侯伯等すなはち怒りてヱレミヤを撻ちこれを書記ヨナタンの室の獄にいれたり蓋この室を獄となしたればなり一六ヱレミヤ獄にいり土牢に入りてそこに多の日を送りしのち一七ゼデキヤ王人を遣して彼をひきいださしむ而して王室にて竊にかれにいひけるはヱホバより臨める言あるやとヱレミヤ答へていひけるは有り汝はバビロン王の手に付されん一八ヱレミヤまたゼデキヤ王にいひけるは我汝あるいは汝の臣僕或はこの民に何なる罪を犯したれば汝ら我を獄にいれしや一九汝らに預言してバビロンの王は汝らにも此地にも攻來らじといひし汝らの預言者はいま何處にあるや二〇されば王わが君よ願くはいま我に聽たまへ請ふわが願望を受納れ給へ我を書記ヨナタンの家に歸らしめたまふなかれ恐らくは我彼處に死なんと二一是においてゼデキヤ王命じてヱレミヤを獄の庭にいれしめ且邑のパンの悉く盡るまでパンを製る者の街より日々に一片のパンを彼に與へしむ即ちヱレミヤは獄の庭にをる

第三八章一マツタンの子シパテヤ、パシユルの子ゲダリヤ、シレミヤの子ユカル、マルキヤの子パシユル、ヱレミヤがすべての民に告たるその言を聞り二云くヱホバかくいひたまふこの邑に留まるものは劍と饑饉と疫病に死べし然どいでてカルデヤ人に降る者は生んすなはちその生命をおのれの掠取物となして生べし三ヱホバかくいひたまふこの邑は必ずバビロン王の軍勢の手に付されん彼之を取べしと四是をもてかの牧伯等王にいひけるは請ふこの人を殺したまへ彼はかくの如き言をのべて此邑に遺れる兵卒の手と民の手を弱くす夫人は民の安を求めずして其害を求むるなりと五ゼデキヤ王いひけるは視よ彼は汝らの手にあり王は汝らに逆ふこと能はざるなりと六彼らすなはちヱレミヤを取て獄の庭にあるハンメレクの子マルキヤの阱に投いる即ち索をもてヱレミヤを縋下せしがその阱は水なくして汚泥のみなりければヱレミヤは汚泥のなかに沈めり七王の室の寺人エテオピア人エベデメレク彼らがヱレミヤを阱になげいれしを聞り時に王ベニヤミンの門に坐しゐたれば八エベデメレク王の室よりいでてゆきて王にいひけるは九王わが君よかの人々が預言者ヱレミヤに行ひし事は皆好らず彼らこれを阱になげ入たり邑の中に食物なければ彼はその居るところに餓死せん一〇王エテオピヤ人エベデメレクに命じていひけるは汝ここより三十人を携へゆきて預言者ヱレミヤをその死ざる先に阱より曳あげよ一一エベデメレクすなはちその人々を携へて王の室の庫の下にいり其處より破れたる舊き衣の布片をとり索をもてこれを阱にを

るヱレミヤの所に縋下せり一二而してエテオピア人エベデメレク、ヱレミヤに告て汝この破れたる舊き衣の布片を汝の腋の下にはさみて索に當よと云ければヱレミヤ然なせり一三彼らすなはち索をもてヱレミヤを阱より曳あげたりヱレミヤは獄の庭にをる一四かくてゼデキヤ王人を遣はして預言者ヱレミヤをヱホバの室の第三の門につれきたらしめ王ヱレミヤにいひけるは我汝に問ことあり毫もわれに隱す勿れ一五ヱレミヤ、ゼデキヤにいひけるは我もし汝に示さば汝かならず我を殺さざらんや假令われ汝を勸むるとも汝われに聽じ一六ゼデキヤ王密にヱレミヤに誓ひていひけるは我らにこの靈魂を造りあたへしヱホバは活く我汝を殺さず汝の生命を索むる者の手に汝を付さじ一七ヱレミヤ、ゼデキヤにいひけるは萬軍の神イスラヱルの神ヱホバかくいひたまふ汝もしまことにバビロン王の牧伯等に降らば汝の生命活んまた此邑は火にて焚れず汝と汝の家の者はいくべし一八然ど汝もし出てバビロンの王の牧伯等に降らずば此邑はカルデヤ人の手に付されん彼らは火をもて之を焚ん汝はその手を脱れざるべし一九ゼデキヤ王ヱレミヤに云けるは我カルデヤ人に降りしところのユダ人を恐る恐くはカルデヤ人我をかれらの手に付さん彼ら我を辱しめん二〇ヱレミヤいひけるは彼らは汝を付さじ願くはわが汝に告しヱホバの聲に聽したがひたまへさらば汝祥をえん汝の生命いきん二一然ど汝もし降ることを否まばヱホバこの言を我に示し給ふ二二すなはちユダの王の室に遺れる婦は皆バビロンの王の牧伯等の所に曳いだされん其婦等いはん汝の朋友等は汝を誘ひて汝に勝り汝の足は泥に沈む彼らは退き去る二三汝の妻たちと汝の子女等はカルデヤ人の所に曳出されん汝は其手を脱れじバビロンの王の手に執へられん汝此邑をして火に焚しめん二四ゼデキヤ、ヱレミヤにいひけるは汝この事を人に知する勿れさらば汝殺されじ二五もし牧伯等わが汝と語りしことを聞き汝にきたりて汝ゼデキヤに語りしことを我儕に告げよ我らに隱す勿れ然ば我ら汝を殺さじ又王の汝に語りしことを告よといはば二六汝彼らに答へて我王に求めて我をヨナタンの家に歸して彼處に死しむること勿れといへりといふべし二七かくて牧伯等ヱレミヤにきたりて問けるに彼王の命ぜし言のごとく彼らに告たればその事露はれざりき是をもて彼ら彼とものいふことを罷たり二八ヱレミヤはヱルサレムの取るる日まで獄の庭に居りしがヱルサレムの取れし時にも彼處にをれり

第三九章一ユダの王ゼデキヤの九年十月バビロンの王ネブカデネザルその全軍をひきゐヱルサレムにきたりて之を攻圍みけるが二ゼデキヤの十一年四月九日にいたりて城邑破れたれば三バビロンの王の牧伯等即ちネルガルシヤレゼル、サムガルネボ寺人の長サルセキム 博士の長ネルガルシヤレゼルおよびバビロンの王のその外の牧伯等皆ともに入て中の門に坐せり四ユダの王ゼデキヤおよび兵卒ども之を見て逃げ夜の中に王の園の途より兩の石垣の間の門より邑をいでてアラバの途にゆきしが五

カルデヤ人の軍勢これを追ひヱリコの平地にてゼデキヤにおひつき之を執へてハマテの地リブラにをるバビロンの王ネブカデネザルの許に曳ゆきければ王かしこにて彼の罪をさだめたり六すなはちバビロンの王リブラにてゼデキヤの諸子をかれの目の前に殺せりバビロンの王またユダのすべての牧伯等を殺せり七王またゼデキヤの目を抉さしめ彼をバビロンに曳ゆかんとて銅索に縛げり八またカルデヤ人火をもて王の室と民の家をやき且ヱルサレムの石垣を毀てり九かくて侍衛の長ネブザラダンは邑の中に餘れる民とおのれに降りし者およびその外の遺れる民をバビロンに移せり一〇されど侍衛の長ネブザラダンはその時民の貧しくして所有なき者等をユダの地に遺し葡萄園と田地とをこれにあたへたり一一爰にバビロンの王ネブカデネザル、ヱレミヤの事につきて侍衛の長ネブザラダンに命じていひけるは一二彼を取りて善く待へよ害をくはふる勿れ彼が汝に云ふごとくなすべしと一三是をもて侍衛の長ネブザラダン寺人の長ネブシヤスバン博士の長ネルガルシヤレゼルおよびバビロンの王の牧伯等一四人を遣してヱレミヤを獄の庭よりたづさへ來らしめシヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤに付して之を家につれゆかしむ斯彼民の中に居る一五ヱレミヤ獄の庭に禁錮られをる時ヱホバの言彼にのぞみていふ一六汝ゆきてエテオピア人エベデメレクに告よ萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいふわれ我語しところの禍を此邑に降さん福はこれに降さじその日この事汝の目前にならん一七ヱホバいひたまふその日にはわれ汝を救はん汝はその畏るるところの人衆の手に付されじ一八われ必ず汝を救はん汝は劍をもて殺されじ汝の生命は汝の掠取物とならん汝われに倚頼めばなりとヱホバいひたまふ

第四〇章一侍衛の長ネブザラダンかのバビロンにとらへ移さるるヱルサレムとユダの人々の中にヱレミヤを鏈につなぎおきてこれを執へゆきけるが遂にこれを放ちてラマを去しめたりその後ヱホバの言ヱレミヤにのぞめり二茲に侍衛の長ヱレミヤを召てこれにいひけるは汝の神ヱホバ此處にこの災あらんことを言り三ヱホバこれを降しその云し如く行へり汝らヱホバに罪を犯しその聲に聽したがはざりしによりてこの事汝らに來りしなり四視よ我今日汝の手の鏈を解て汝を放つ汝もし我とともにバビロンにゆくことを善とせば來れわれ汝を善くあしらはん汝もし我と偕にバビロンにゆくを惡とせば留れ視よこの地は皆汝の前に在り汝の善とする所汝の心に合ふところに往べし五ヱレミヤいまだ答へざるに彼またいひけるは汝バビロンの王がユダの諸邑の上にたてて有司となせしシヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤの許に歸り彼とともに民の中に居れ或は汝の善とおもふところにゆくべしと侍衛の長彼に食糧と禮物をとらせて去しめたり六ヱレミヤすなはちミヅパに往きてアヒカムの子ゲダリヤに詣りその地に遺れる民のうちに彼と偕にをる七茲に田舎にある軍勢の長等および彼らに屬する人々バビロン

の王がアヒカムの子ゲダリヤを立てこの地の有司となし男女嬰孩および國の中のバビロンに移されざる貧者を彼にあづけたることをききしかば八即ちネタニヤの子イシマエルとカレヤの子ヨハナンとヨナタンおよびタンホメテの子セラヤとネトパ人なるエパイの諸子と或マアカ人の子ヤザニヤおよび彼らに屬する人々ミヅパにゆきてゲダリヤの許にいたる九シヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤ彼らと彼らに屬する人々に誓ひていひけるは汝らカルデヤ人に事ることを怖るる勿れこの地に住てバビロンの王に事へなば汝ら幸幅ならん一〇我はミヅパに居り我らに來らんところのカルデヤ人に事へん汝らは葡萄酒と菓物と油とをあつめて之を器に蓄へ汝らが獲るところの諸邑に住めと一一又モアブとアンモン人の中およびエドムと諸の邦にをるところのユダヤ人はバビロンの王がユダに人を遺したるシヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤを立てこれが有司となしたることを聞り一二是においてそのユダヤ人皆その追やられし諸の處よりかへりてユダの地のミヅパに來りゲダリヤに詣れり而して多くの葡萄酒と菓物をあつむ一三又カレヤの子ヨハナンおよび田舍にをりし軍勢の長たちミヅパにきたりてゲダリヤの許にいたり一四彼にいひけるは汝アンモン人の王バアリスが汝を殺さんとてネタニヤの子イシマエルを遣せしを知るやと然どアヒカムの子ゲダリヤこれを信ぜざりしかば一五カレヤの子ヨハナン、ミヅパにて密にゲダリヤに語りて言けるは請ふわれゆきて人知ずにネタニヤの子イシマエルを殺さんいかで彼汝を殺し汝に集れるユダ人を散しユダの遺れる者を滅すべけんやと一六然るにアヒカムの子ゲダリヤ、カレヤの子ヨハナンにいひけるは汝この事をなすべからず汝イシマエルにつきて僞をいふなり

第四一章

一七月ごろ王の血統なるエリシヤマの子ネタニヤの子イシマエル王の十人の牧伯等とともにミヅパにゆきてアヒカムの子ゲダリヤにいたりミヅパにて偕に食をなせしが二ネタニヤの子イシマエルおよび偕にをりし十人の者起上りバビロンの王がこの地の有司となせしシヤパンの子アヒカムの子なるゲダリヤを刀にて殺せり三イシマエルまたミヅパにゲダリヤと偕にをりし諸のユダヤ人と彼處にをりしカルデヤ人の兵卒を殺したり四彼がゲダリヤを殺してより二日の後いまだ誰も之を知ざりし時五ある人八十人その鬚を薙り衣を裂き身に傷つけ手に素祭の物と香を携へてシケム、シロ、サマリヤよりきたりてヱホバの室にいたらんとせしかば六ネタニヤの子イシマエル、ミヅパよりいでて哭きつつ行て彼らを迎へ彼等に逢てアヒカムの子ゲダリヤの許に來れといへり七而して彼ら邑の中に入しときネタニヤの子イシマエル己と偕にある人々とともに彼らを殺してその屍を阱に投いれたり八但しその中の十人イシマエルにむかひ我らをころすなかれ我らは田地に小麥麰麥油および蜜を藏し有りと言たれば彼らをその兄弟と偕に殺さずして已ぬ九イシマエ

ルがゲダリヤの名をもて殺せし人の屍を投入れし阱はアサ王がイスラエルの王バアシヤを怖れて鑿し阱なりネタニヤの子イシマエルその殺せし人々を之に充せり一〇イシマエルはミヅパに遺りをる諸の民即ち王の諸女と侍衛の長ネブザラダンがアヒカムの子ゲダリヤに交付しところのミヅパに遺れる諸の民とを虜にせりネタニヤの子イシマエルすなはち彼らを虜にしアンモン人に往んとて去れり一一カレヤの子ヨハナンおよび彼と偕に在る軍勢の長たちネタニヤの子イシマエルの爲し諸の惡事を聞ければ一二その衆卒を率てネタニヤの子イシマエルと戰はんとて出でギベオンの池の旁にて彼に遇ふ一三イシマエルと偕に在る人々はカレヤの子ヨハナンおよび彼とともに在る軍勢の長たちを見て欣べり一四是をもてイシマエルがミヅパより虜へきたりし所の人々身をめぐらしてカレヤの子ヨハナンの許にゆけり一五ネタニヤの子イシマエルは八人の者と偕にヨハナンを避け逃てアンモン人に往り一六カレヤの子ヨハナンおよび彼とともにある軍勢の長等はネタニヤの子イシマエルがアヒカムの子ゲダリヤを殺してミヅパより虜へゆけるところの彼遺れる民すなはち兵卒婦人兒女寺人等を其手より取りかへして之をギベオンより携かへりしが一七進てエジプトにいたらんとてベツレヘムの近傍にあるキムハムの住處に往て留れり一八こはネタニヤの子イシマエルがバビロンの王の此地の有司となしたるアヒカムの子ゲダリヤを殺せしによりカルデヤ人を懼たればなり

第四二章

一 茲に軍勢の長たちおよびカレヤの子ヨハナンとホシャヤの子ヱザニヤ並に民の至微者より至大者にいたるまで二皆預言者ヱレミヤの許に來りて言けるは汝の前に我らの求の受納られんことを願ふ請ふ我ら遺れる者の爲に汝の神ヱホバに祈れ（今汝の目に見がごとく我らは衆多の中の遺れる者にして寡なり）三さらば汝の神ヱホバ我らの行むべき途となすべき事を示したまはん四預言者ヱレミヤ彼らに云けるは我汝らに聽り汝らの言に循ひて汝らの神ヱホバに祈らん凡そヱホバが汝らに應へたまふことはわれ隱す所なく汝らに告べし五彼らヱレミヤにいひけるは願くはヱホバ我儕の間にありて眞實なる信ずべき證者となりたまへ我らは汝の神ヱホバの汝を遣して我らに告しめたまふ諸の事に遵ひて行ふべし六我らは善にまれ惡きにまれ我らが汝を遣すところの我らの神ヱホバの聲に遵はん斯我らの神ヱホバの聲に遵ひてわれら福をうけん七十日の後ヱホバの言ヱレミヤにのぞみしかば八ヱレミヤ、カレヤの子ヨハナンおよび彼と偕に在る軍勢の長たち並に民の至微者より至大者までを悉く招きて九これにいひけるは汝らが我を遣して汝らの祈を献げしめしところのイスラエルの神ヱホバかくいひ給ふ一〇汝らもし信に此地に留らばわれ汝らを建てて倒さず汝らを植て拔じそは我汝らに災を降せしを悔ればなり一一ヱホバいひたまふ汝らが畏るるところのバビロンの王を畏るる勿れ彼をおそるる勿れわれ汝らとともにありて汝らを救ひ彼の手より汝らを

拯ふべし一二われ汝らを恤みまた彼をして汝らを恤ませ汝らを故土に歸らしめん一三然ど汝らもし我らはこの地に留らじ汝らの神ヱホバの聲に遵はじと言ひ一四また然りわれらはかの戰爭を見ず箛の聲をきかず食物に乏しからざるエジプトの地にいたりて彼處に住はんといはば一五汝らユダの遺れる者よヱホバの言をきけ萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らもし強てエジプトにゆきて彼處に住はば一六汝らが懼るるところの劍エジプトの地にて汝らに臨み汝らが恐るるところの饑饉エジプトにて汝らにおよばん而して汝らは彼處に死べし一七凡そエジプトにおもむき至りて彼處に住はんとする人々は劍と饑饉と疫病に死べしその中には我彼らに降さんところの災を脱れて遺る者無るべし一八萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ我震怒と憤恨のヱルサレムに住る者に注ぎし如くわが憤恨汝らがエジプトにいらん時に汝らに注がん汝らは呪詛となり詫異となり罵詈となり凌辱とならん汝らは再びこの處を見ざるべしと一九ユダの遺れる者よヱホバ汝らにつきていひたまへり汝らエジプトにゆく勿れと汝ら今日わが汝らを警めしことを確に知れ二〇汝ら我を汝らの神ヱホバに遣して言へり我らの爲に我らの神ヱホバに祈り我らの神ヱホバの汝に示したまふ事をことごとく我らに告よ我ら之を行はんと斯なんぢら自ら欺けり二一われ今日汝らに告たれど汝らは汝らの神ヱホバの聲に遵はず汝らはヱホバが我を遣して命ぜしめたまひし事には都て遵はざりき二二然ば汝らはその往て住んとねがふ處にて劍と饑饉と疫病に死ることを今確に知るべし

第四三章一ヱレミヤ諸の民にむかひて其神ヱホバの言を盡く宣べその神ヱホバが己を遣して言しめたまへる其諸の言を宣をはりし時二ホシャヤの子アザリヤ、カレヤの子ヨハナンおよび驕る人皆ヱレミヤに語りていひけるは汝は謊をいふ我らの神ヱホバはエジプトにゆきて彼處に住む勿れと汝をつかはして云せたまはざるなり三ネリヤの子バルク汝を唆して我らに逆はしむ是我らをカルデヤ人の手に付して殺さしめバビロンに移さしめん爲なり四斯カレヤの子ヨハナンと軍勢の長等および民皆ヱホバの聲に遵はずしてユダの地に住ことをせざりき五斯てカレヤの子ヨハナンと軍勢の長等はユダに遺れる者即ちその逐やられし國々よりユダの地に住んとて皈りし者六男女嬰孩王の女たちおよび凡て侍衞の長ネブザラダンがシヤパンの子なるアヒカムの子ゲダリヤに付し置し者並に預言者ヱレミヤとネリヤの子バルクを取て七エジプトの地に至れり彼ら斯ヱホバの聲に遵はざりき而して遂にタパネスに至れり八ヱホバの言タパネスにてヱレミヤに臨みていふ九汝大なる石を手に取りユダの人々の目の前にてこれをタパネスに在るパロの室の入口の旁なる磚窰の泥土の中に藏して一〇彼らにいへ萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれ使者を遣はしてわが僕なるバビロンの王ネブカデネザルを召きその位をこの藏したる石の上

に置しめん彼錦繡をその上に敷べし一一かれ來りてエジプトの地を撃ち死に定まれる者を死しめ虜に定まれる者を虜にし劍に定まれる者を劍にかけん一二われエジプトの諸神の室に火を燃さんネブカデネザル之を焚きかれらを虜にせん而して羊を牧ふ者のその身に衣を纏ふがごとくエジプトの地をその身に纏はん彼安然に其處をさるべし一三彼はエジプトの地のベテシメシの偶像を毀ち火をもてエジプト人の諸神の室を焚べし

第四四章一エジプトの地に住るところのユダの人衆すなはちミグドル、タパネス、ノフ、パテロスの地に住る者の事につきてヱレミヤに臨みし言に曰く二萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいふ汝らは我ヱルサレムとユダの諸邑に降せしところの災をみたり視よこれらは今日すでに空曠となりて住む人なし三こは彼ら惡をなして我を怒らせしによる即ちかれらは己も汝らも汝らの先祖等も識ざるところの他の神にゆきて香を焚き且これに奉へたり四われ我僕なる預言者たちを汝らに遣し頻にこれを遣して請ふ汝らわが嫌ふところの此憎むべき事を行ふ勿れといはせけるに五彼ら聽かず耳を傾けず他の神に香を焚きてその惡を離れざりし六是によりて我震怒とわが憤恨ユダの諸邑とヱルサレムの街にそそぎて之を焚たれば其等は今日のごとく荒れかつ傾圮たり七萬軍の神イスラエルの神ヱホバいまかくいふ汝ら何なれば大なる惡をなして己の靈魂を害しユダの中より汝らの男と女と孩童と乳哺子を絶て一人も遺らざらしめんとするや八何なれば汝ら其手の行爲をもて我を怒らせ汝らが往て住ふところのエジプトの地に於て他の神に香を焚きて己の身を滅し地の萬國の中に呪詛となり凌辱とならんとするや九ユダの地とヱルサレムの街にて行ひし汝らの先祖等の惡ユダの王等の惡其妻等の惡および汝らの身の惡汝らの妻等の惡を汝ら忘れしや一〇彼らは今日にいたるまで悔いずまた畏れず汝らと汝らの先祖等の前に立たる我律法とわが典例に循ひて行まざるなり一一是故に萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいふ視よわれ面を汝らにむけて災を降しユダの人衆を悉く絶ん一二又われエジプトの地にすまんとてその面をこれにむけて往しところの彼ユダの遺れる者を取らん彼らは皆滅されてエジプトの地に仆れん彼らは劍と饑饉に滅され微者も大者も劍と饑饉によりて死べし而して呪詛となり詫異となり罵詈となり凌辱とならん一三われヱルサレムを罰せし如く劍と饑饉と疫病をもてエジプトに住る者を罰すべし一四是をもてエジプトの地に往て彼處に住るところのユダの遺れる者の中に一人も逃れまたは遺りてその心にしたひて歸り住はんとねがふところのユダの地に歸るもの無るべし逃るる者の外には歸る者無るべし一五是に於てその妻が香を他の神に焚しことを知れる人々および其處に立てる婦人等の大なる群衆並にエジプトの地のパテロスに住るところの民ヱレミヤに答へて云けるは一六汝がヱホバの名をもてわれらに述し言は我ら聽かじ一七我らは必ず我らの口より出る言を行ひ我らが

素なせし如く香を天后に焚きまた酒をその前に灌ぐべし即ちユダの諸邑とヱルサレムの街にて我らと我らの先祖等および我らの王等と我らの牧伯等の行ひし如くせん當時われらは糧に飽き福をえて災に遇ざりし一八我ら天后に香を焚くことを止め酒をその前に灌がずなりし時より諸の物に乏しくなり劍と饑饉に滅されたり一九我らが天后に香を焚き酒をその前に灌ぐに方りて之に象りてパンを製り酒を灌ぎしは我らの夫等の許せし事にあらずや二〇ヱレミヤ即ち男女の諸の人衆および此言をもて答へたる諸の民にいひけるは二一ユダの諸邑とヱルサレムの街にて汝らと汝らの先祖等および汝等の王等と汝らの牧伯等および其地の民の香を焚しことはヱホバ之を憶えまた心に思ひたまふにあらずや二二ヱホバは汝らの惡き爲のため汝らの憎むべき行の爲に再び忍ぶことをえせざりきこの故に汝らの地は今日のごとく荒地となり詫異となり呪詛となり住む人なき地となれり二三汝ら香を焚きヱホバに罪を犯しヱホバの聲に聽したがはずその律法と憲法と證詞に循ひて行まざりしに由て今日のごとく此災汝らにおよべり二四ヱレミヤまたすべての民と婦等にいひけるはエジプトの地に居るユダの子孫よヱホバの言をきけ二五萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らと汝らの妻等は口をもていひ手をもて成し我ら香を天后に焚き酒を灌ぎて立しところの誓を必ず成就んといふ汝ら必ず誓をたてかならず其誓を成就んとす二六この故にエジプトの地に住るユダの人々よヱホバの言をきけヱホバいひたまふわれ我大なる名を指て誓ふエジプトの全地にユダの人々一人もその口に主ヱホバは活くといひて再び我名を稱ふることなきにいたらん二七視よわれ彼らをうかがはん是福をあたふる爲にあらず禍をくださん爲なりエジプトの地に居るユダの人々は劍と饑饉に滅びて絶るにいたらん二八然ど劍を逃るる僅少の者はエジプトの地を出てユダの地に歸らん又エジプトの地にゆきて彼處に寄寓れるユダの遺れる者はその立ところの言は我のなるか彼らのなるかを知るにいたるべし二九ヱホバいひ給ふわがこの處にて汝らを罰する兆は是なり我かくして我汝らに禍をくださんといひし言の必ず立ことを知しめん三〇すなはちヱホバかくいひたまふ視よわれユダの王ゼデキヤを其生命を索むる敵なるバビロンの王ネブカデネザルの手に付せしが如くエジプトの王パロホフラを其敵の手その生命を索むる者の手に付さん

第四五章一ユダの王ヨシヤの子ヱホヤキムの四年ネリヤの子バルクが此等の言をヱレミヤの口にしたがひて書に錄せしとき預言者ヱレミヤこれに語りていひけるは二バルクよイスラエルの神ヱホバ汝にかくいひ給ふ三汝曾ていへり嗚呼我は禍なるかなヱホバ我憂に悲を加へたまへり我は歎きて疲れ安きをえずと四汝かく彼に語れヱホバかくいひたまふ視よわれ我建しところの者を毀ち我植しところの者を拔ん是この全地なり五汝己れの爲に大なる事を求むるかこれを求むる勿れ視よわれ災を

すべての民に降さん然ど汝の生命は我汝のゆかん諸の處にて汝の掠物とならしめんとヱホバいひたまふ

第四六章一 茲にヱホバの言預言者ヱレミヤに臨みて諸國の事を論ふ二 先エジプトの事すなはちユフラテ河の邊なるカルケミシの近傍にをるところのエジプト王パロネコの軍勢の事を論ふ是はユダの王ヨシヤの子ヱホヤキムの四年にバビロンの王ネブカデネザルが撃やぶりし者なり其言にいはく三 汝ら大楯小干を備へて進み戰へ四 馬を車に繫ぎ馬に乗り盔を被りて立て戈を磨き甲を着よ五 われ見るに彼らは懼れて退きその勇士は打敗られ狼狽遁て後をかへりみず是何故ぞや畏懼かれらのまはりにありとヱホバいひたまふ六 快足なる者も逃えず強者も遁れえず皆北の方にてユフラテ河の旁に蹶き仆れん七 かのナイルのごとくに湧あがり河のごとくに其水さかまく者は誰ぞや八 エジプトはナイルの如くに湧あがりその水は河の如くに逆まくなり而していふ我上りて地を蔽ひ邑とその中に住る者とを滅さん九 汝等馬に乗り車を驅馳らせよ勇士よ盾を執るエテオピア人プテ人および弓を張り挽くルデ人よ進みいづべし一〇 此は主なる萬軍のヱホバの復仇の日即ちその敵に仇を復し給ふ日なり劍は食ひて飽きその血に醉はん主なる萬軍のヱホバ北の地にてユフラテ河の旁に宰ることをなし給へばなり一一 處女よエジプトの女よギレアデに上りて乳香を取れ汝多くの薬を用ふるも益なし汝は愈ざるべし一二 汝の恥辱は國々にきこえん汝の號泣は地に滿てり勇士は勇士にうち觸てともに仆る一三 バビロンの王ネブカデネザルが來りてエジプトの地を撃んとする事につきてヱホバの預言者ヱレミヤに告たまひし言一四 汝らエジプトに宣べミグドルに示し又ノフ、タパネスに示しいふべし汝ら堅く立ちて自ら備よ 劍なんぢの四周を食ひたればなり一五 汝の力ある者いかにして拂ひ除かれしやその立ざるはヱホバこれを仆したまふに由るなり一六 彼多の者を蹶かせたまふ人其友の上に仆れかさなり而していふ起よ我ら滅すところの劍を避けてわが國にかへり故土にいたらんと一七 人彼處に叫びてエジプトの王パロは滅されたり彼は機會を失へりといふ一八 萬軍のヱホバと名りたまふところの王いひたまふ我は活く彼は山々の中のタボルのごとく海の旁のカルメルのごとくに來らん一九 エジプトに住る女よ汝移轉の器皿を備へよそはノフは荒蕪となり燒れて住む人なきにいたるべければなり二〇 エジプトは至美しき牝の犢のごとし蜚虻きたり北の方より來る二一 また其中の傭人は肥たる犢のごとし彼ら轉向てともに逃げ立ことをせず是その滅さるる日いたり其罰せらるる時來りたればなり二二 彼は蛇の如く聲をいだす彼ら軍勢を率ゐて來り樵夫の如く斧をもて之にのぞめり二三 ヱホバいひ給ふ彼らは探りえざるに由りて彼の林を砍仆せり彼等は蝗蟲よりも多して數へがたし二四 エジプトの女は辱められ北の民の手に付されん二五 萬軍のヱホバ、イスラエルの神いひ給ふ視よわれノフのアモンとパロとエジプトとその諸神とその

王等すなはちパロとかれを賴むものとを罰せん二六われ彼らを其生命を索むる者の手とバビロンの王ネブカデネザルの手とその臣僕の手に付すべしその後この地は昔のごとく人の住むところとならんとヱホバいひたまふ二七我僕ヤコブよ怖るる勿れイスラエルよ驚く勿れ視よわれ汝を遠方より救ひきたり汝の子孫をその虜移されたる地より救ひとるべしヤコブは歸りて平安と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし二八ヱホバいひたまふ我僕ヤコブよ汝怖るる勿れ我汝と偕にあればなり我汝を逐やりし國々を悉く滅すべけれど汝をば悉くは滅さじわれ道をもて汝を懲し汝を全くは罪なき者とせざるべし

第四七章一パロがガザを擊ざりし先にペリシテ人の事につきて預言者ヱレミヤに臨みしヱホバの言二ヱホバかくいひたまふ視よ水北より起り溢れながれて此地と其中の諸の物とその邑と其中に住る者とに溢れかかるべしその時人衆は叫びこの地に住る者は皆哭くべし三その逞しき馬の蹄の蹴たつる音のため其車の響のため其輪の轟のために父は手弱りて己の子女を顧みざるなり四是ペリシテ人を滅しつくしツロとシドンにのこりて助力をなす者を悉く絶す日來ればなりヱホバ、カフトルの地に遺れるペリシテ人を滅したまふべし五ガザには髮を剃るの事はじまるアシケロンと其剩餘の平地は滅ぼさる汝いつまで身に傷くるや六ヱホバの劍よ汝いつまで息まざるや汝の鞘に歸りて息み靜まれ七ヱホバこれに命じたるなればいかで息むことをえんやアシケロンと海邊を攻ることを定めたまへり

第四八章一萬軍のヱホバ、イスラエルの神モアブの事につきてかくいひたまふ嗚呼ネボは禍なるかな是滅されたりキリヤタイムは辱められて取られミスガブは辱められて毀たる二モアブの榮譽は失さりぬヘシボンにて人衆モアブの害を謀り去來之を絶ちて國をなさざらしめんといふマデメンよ汝は滅されん劍汝を追はん三ホロナイムより號咷の聲きこゆ毀敗と大なる滅亡あり四モアブ滅されてその嬰孩等の號咷聞ゆ五彼らは哭き哭きてルヒテの坂を登る敵はホロナイムの下り路にて滅亡の號咷をきけり六逃て汝らの生命を救へ曠野に棄られたる者の如くなれ七汝は汝の工作と財寶を賴むによりて汝も執へられん又ケモシは其祭司およびその牧伯等と偕に虜へうつさるべし八殘害者諸の邑に來らん一の邑も免れざるべし谷は滅され平地は荒されんヱホバのいひたまひしがごとし九翼をモアブに予へて飛さらしむ其諸邑は荒て住者なからん一〇ヱホバの事を行ふて怠る者は詛はれ又その劍をおさへて血を流さざる者は詛はる一一モアブはその幼き時より安然にして酒の其滓のうへにとゞまりて此器よりかの器に斟うつされざるが如くなりき彼虜うつされざりしに由て其味尚存ちその香氣變らざるなり一二ヱホバいひたまふ此故にわがこれを傾くる者を遣はす日來らん彼らすなはち之を傾け其器をあけ其罇を碎くべし一三モアブはケモシのために羞をとらん是イスラエルの家がその恃めるところのベテルの

ために羞をとりしが如くなるべし一四 汝ら何ぞ我らは勇士なり強き軍人なりといふや一五 モアブはほろぼされその諸邑は騰りその選擇の壯者は下りて殺さる萬軍のヱホバと名る王これをいひ給ふ一六 モアブの滅亡近けりその禍 速に來る一七 凡そ其四周にある者よ彼のために歎けその名を知る者よ強き竿 美しき杖いかにして折しやといへ一八 デボンに住る女よ榮をはなれて下り燥ける地に坐せよモアブを敗る者 汝にきたりて汝の城を滅さん一九 アロエルに住る婦よ道の側にたちて闚ひ逃きたる者と脱れいたる者に事いかんと問へ二〇 モアブは敗られて羞をとる汝ら呼はり哭びモアブは滅されたりとアルノンに告よ二一 鞫災平地に臨みホロン、ヤハヅ、メパアテ二二 デボン、ネボ、ベテデブラタイム二三 キリヤタイム、ベテガムル、ベテメオン二四 ケリオテ、ボズラ、モアブの地の諸邑の遠き者にも近き者にも臨めり二五 モアブの角は碎け其臂は折たりとヱホバいひたまふ二六 汝らモアブを醉はしめよ彼ヱホバにむかひて驕 傲ればなりモアブは其吐たる物に轉びて笑柄とならん二七 イスラエルは汝の笑柄にあらざりしや彼盗人の中にありしや汝彼の事を語るごとに首を搖たり二八 モアブに住る者よ汝ら邑を離れて磐の間にすめ穴の口の側に巣を作る斑鳩の如くせよ二九 われらモアブの驕傲をきけり其驕傲は甚だし即ち其驕慢矜高驕誇およびその心の自ら高くするを聞り三〇 ヱホバいひたまふ我モアブの驕傲とその言の虚きとを知る彼らは僞を行ふなり三一 この故に我モアブの爲に哭びモアブの全地の爲に呼はるキルハレスの人々の爲に嗟歎あり三二 シブマの葡萄の樹よわれヤゼルの哭泣にこえて汝の爲になげくべし汝の蔓は海を踰え延てヤゼルの海にまでいたる掠奪者來りて汝の果と葡萄をとらん三三 欣喜と歡樂園とモアブの地をはなれ去る我酒醉に酒無からしめん呼はりて葡萄を踐もの無るべし其喚呼は葡萄をふむ喚呼にあらざらん三四 ヘシボンよりエレアレとヤハヅにいたりゾアルよりホロナイムとエグラテシリシヤにいたるまで人聲を揚ぐそはニムリムの水までも絶たればなり三五 ヱホバいひたまふ我祭物を崇 邱に献げ香をその諸神に焚くところの者をモアブの中に滅さんと三六 この故に我 心はモアブの爲に簫のごとく歎き我 心はキルハレスの人衆のために簫のごとく歎く是其獲たるところの財うせたればなり三七 人みなその髮を剃り皆その鬚をそり皆その手に傷け腰に麻布をまとはん三八 モアブにては家蓋の上と街のうちに遍く悲哀ありそはわれ心に適ざる器のごとくにモアブを碎きたればなりとヱホバいひたまふ三九 鳴呼モアブはほろびたり彼らは哭ぶ鳴呼モアブは羞て面を背けたりモアブはその四周の者の笑柄となり恐懼となれり四〇 ヱホバかくいひたまふ視よ敵鷲のごとくに飛來りて翼をモアブのうへに舒ん四一 ケリオテは取られ城はみな奪はるその日にはモアブの勇士の心 子を産む婦のごとくになるべし四二 モアブはヱホバにむかひて傲りしゆゑに滅ぼされて再び國を成ざるべし四三 ヱホバいひたまふモアブに

すめる者よ恐怖と陥阱と罟汝に臨めり四四恐怖をさけて逃るものは陥阱におちいり陥阱より出るものは罟にとらへられん其はわれモアブにその罰をうくべき年をのぞましむればなりヱホバこれをいふ四五遁逃者は力なくしてヘシボンの蔭に立つ是は火ヘシボンより出で火焔シホンのうちより出てモアブの地および喧閙をなす者の首の頂を焼ばなり四六嗚呼禍なるかなモアブよケモシの民は亡びたり即ち汝の諸子は虜へうつされ汝の女等は執へゆかれたり四七然ど末の日に我モアブの虜移されたる者を返さんとヱホバいひ給ふ此まではモアブの鞫をいへる言なり

第四九章一アンモン人の事につきてヱホバかくいひたまふイスラエルに子なからんや嗣子なからんや何なれば彼らの王ガドを受嗣ぎ彼の民その邑々に住や二ヱホバいひたまふ是故に視よわが戰鬪の號呼をアンモン人のラバに聞えしむる日いたらんラバは荒垤となりその女等は火に焚れんその時イスラエルはおのれの嗣者となりし者等の嗣者となるべしヱホバこれをいひたまふ三ヘシボンよ咷べアイは滅びたりラバの女たちよ呼はれ麻布を身にまとひ嗟て籬のうちに走れマルカムとその祭司およびその牧伯等は偕に虜へ移されたり四汝何なれば谷の事を誇るや背ける女よ汝の谷は流るるなり汝財貨に倚賴みていふ誰か我に來らんと五主なる萬軍のヱホバいひたまふ視よ我畏懼を汝の四周の者より汝に來らしめん汝らおのおの逐れて直にすすまん逃る者を集むる人無るべし六然ど後にいたりてわれアンモン人の虜移されたる者を返さんとヱホバいひたまふ七エドムの事につきて萬軍のヱホバかくいひたまふテマンの中には智慧あることなきにいたりしや明哲者には謀略あらずなりしやその智慧は盡はてしや八デダンに住る者よ逃よ遁れよ深く竄れよ我エサウの滅亡をかれの上にのぞませ彼を罰する時をきたらしむべし九葡萄を斂むる者もし汝に來らば少許の果をも餘さざらんもし夜間盜人きたらばその飽まで滅さん一〇われエサウを裸にし又その隱處を露にせん彼は身を匿すことをえざるべしその裔も兄弟も隣舍も滅されん而して彼は在ずなるべし一一汝の孤子を遺せわれ之を生存へしめん汝の嫠は我に倚賴むべし一二ヱホバかくいひ給ふ視よ杯を飲べきにあらざる者もこれを飲ざるをえざるなれば汝まつたく罰を免るることをえんや汝は罰を免れじ汝これを飲ざるべからず一三ヱホバいひたまふ我おのれを指して誓ふボズラは詫異となり羞辱となり荒地となり呪詛とならんその諸邑は永く荒地となるべし一四われヱホバより音信をきけり使者遣されて萬國にいたり汝ら集りて彼に攻めきたり起て戰へよといへり一五視よわれ汝を萬國の中に小者となし人々の中に藐めらるる者となせり一六磐の隱場にすみ山の高處を占る者よ汝の恐ろしき事と汝の心の驕傲汝を欺けり汝鷹のごとくに巣を高き處に作りたれどもわれ其處より汝を取り下さんとヱホバいひたまふ一七エドムは詫異とならん凡そ其處を過る者は驚きその災害のために笑ふべし一八ヱホバいひたまふソドム

とゴモラとその隣の邑々の滅しがごとく其處に住む人なく其處に宿る人の子なかるべし一九視よ敵獅子のヨルダンの叢より上るがごとく堅き宅に攻めきたらんわれ直に彼を其處より逐奔らせわが選みたる者をその上に立てん誰か我のごとき者あらん誰か我爲に時期を定めんや孰の牧者か我前にたつことをえん二〇さればエドムにつきてヱホバの謀りたまひし御謀とテマンに住る者につきて思ひたまひし思をきけ群の弱者はかならず曳ゆかれん彼かならずかれらの住宅を滅すべし二一その傾圮の響によりて地は震ふ號咷ありその聲紅海にきこゆ二二みよ彼鷹のごとくに上り飛びその翼をボズラの上に舒べんその日エドムの勇士の心は子を産む婦の心の如くならん二三ダマスコの事ハマテとアルパデは羞づそは凶き音信をきけばなり彼らは心を喪へり海の上に恐懼あり安き者なし二四ダマスコは弱り身をめぐらして逃んとす恐懼これに及び憂愁と痛劬子を産む婦にあるごとくこれにおよぶ二五頌美ある邑我欣ぶところの邑を何なれば棄さらざるや二六さればその日に壯者は街に仆れ兵卒は悉く滅されんと萬軍のヱホバいひたまふ二七われ火をダマスコの石垣の上に燃しベネハダデの殿舍をことごとく焚くべし二八バビロンの王ネブカデネザルが攻め擊たるケダルとハゾルの諸國の事につきて／ヱホバかくいひたまふ汝ら起てケダルに上り東の衆人を滅せ二九その幕屋とその羊の群は彼等これを取りその幕とその諸の器と駱駝とは彼等これを奪ひとらん人これに向ひ惶懼四方にありと呼るべし三〇ヱホバいひたまふハゾルに住る者よ逃よ急に走りゆき深き處に居れバビロンの王ネブカデネザル汝らをせむる謀略を運らし汝らをせむる術計を設けたればなり三一ヱホバいひ給ふ汝ら起て穩なる安かに住める民の所に攻め上れ彼らは門もなく關もなくして獨り居ふなり三二その駱駝は虜掠とせられその多の畜は奪はれん我かの毛の角を剪る者を四方に散しその滅亡を八方より來らせんとヱホバいひたまふ三三ハゾルは山犬の窟となり何までも荒蕪となりをらん彼處に住む人なく彼處に宿る人の子なかるべし三四ユダの王ゼデキヤが位に即し初のころヱホバの言預言者ヱレミヤに臨みてエラムの事をいふ三五萬軍のヱホバかくいひたまふ視よわれエラムが權能として賴むところの弓を折らん三六われ天の四方より四方の風をエラムに來らせ彼らを四方の風に散さんエラムより追出さるる者のいたらざる國はなかるべし三七ヱホバいひたまふわれエラムをしてその敵の前とその生命を索むるものの前に懼れしめん我災をくだし我烈しき怒をその上にいたらせんまたわれ劍をその後につかはしてこれを滅し盡すべし三八われ我位をエラムに居ゑ王と牧伯等を其處より滅したたんとヱホバいひたまふ三九然ど末の日にいたりてわれエラムの虜移されたる者を返すべしとヱホバいひたまふ

第五〇章一ヱホバ預言者ヱレミヤによりてバビロンとカルデヤ人の地のことを語り給ひし言二汝ら國々の中に告げまた宣示

せ纛を樹よ隱すことなく宣示して言へバビロンは取られベルは辱められメロダクは碎かれ其像は辱められ其木像は碎かると三 そは北の方より一の國人きたりて之を攻めその地を荒して其處に住む者無らしむればなり人も畜も皆逃去れり四 ヱホバいひたまふその日その時イスラエルの子孫かへり來らん彼らと偕にユダの子孫かへり來るべし彼らは哭きつつ行てその神ヱホバに請求むべし五 彼ら面をシオンに向てその路を問ひ來れ我らは永遠わするることなき契約をもてヱホバにつらならんといふべし六 我民は迷へる羊の群なりその牧者之をいざなひて山にふみ迷はしめたれば山より岡とゆきめぐりて其休息所を忘れたり七 之に遇ふもの皆之を食ふその敵いへり我らは罪なし彼らヱホバすなはち義きの在所その先祖の望みしところなるヱホバに罪を犯したるなり八 汝らバビロンのうちより逃よカルデヤ人の地より出よ群の前にゆくところの牡山羊のごとくせよ九 視よわれ大なる國々より人を起しあつめて北の地よりバビロンに攻め來らしめん彼ら之にむかひて備をたてん是すなはち取るべし彼らの矢は空しく返らざる狡き勇士の矢のごとくなるべし一〇 カルデヤは人に掠められん之を掠むる者は皆飽ことをえんとヱホバ曰たまふ一一 我產業を掠る者よ汝らは喜び樂み穀物を碾す犢のごとくに躍り牡馬のごとく嘶けども一二 汝らの母は痛く辱められん汝らを生しものは恥べし視よ國々の中の終末の者荒野となり燥ける地となり沙漠とならん一三 ヱホバの怒りの爲に之に住む者なくして悉く荒地となるべしバビロンを過る者は皆その禍に驚き且嗤はん一四 凡そ弓を張る者よバビロンの四周に備をなして攻め矢を惜まずして之を射よそは彼ヱホバに罪を犯したればなり一五 その四周に喊き叫びて攻めかかれ是手を伸ぶその城堞は倒れその石垣は崩る是ヱホバ仇を復したまふなり汝らこれに仇を復せ是の行ひしごとく是に行へ一六 播種者および穡收時に鎌を執る者をバビロンに絕せその滅すところの劍を怖れて人おのおの其民に歸り各その故土に逃べし一七 イスラエルは散されたる羊にして獅子之を追ふ初にアッスリヤの王之を食ひ後にこのバビロンの王ネブカデネザルその骨を碎けり一八 この故に萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれアッスリヤの王を罰せしごとくバビロンの王とその地を罰せん一九 われイスラエルを再びその牧場に歸さん彼カルメルとバシヤンの上に草をくらはんまたエフライムとギレアデの山にてその心を飽すべし二〇 ヱホバいひたまふ其日その時にはイスラエルの愆を尋るも有らず又ユダの罪を尋るも遇じそはわれ我存せしところの者を赦すべければなり二一 ヱホバいひたまふ汝ら上りて悖れる國罰を受べき民を攻めその後より之を荒し全くこれを滅せ我汝らに命ぜしごとく行ふべし二二 その地に戰鬪の呌と大なる敗壞あり二三 嗚呼全地を摧きし鎚折れ碎くるかな嗚呼バビロン國々の中に荒地となるかな二四 バビロンよわれ汝をとるために罟を置けり汝は擒へらるれども知ず汝ヱホバに敵せし

により尋られて獲へらるるなり二五 ヱホバ庫を啓きてその怒りの武器をいだしたまふ是主なる萬軍のヱホバ、カルデヤ人の地に事をなさんとしたまへばなり二六 汝ら終の者にいたるまで來りてこれを攻めその庫を啓き之を積て塵坵のごとくせよ盡くこれを滅ぼして其處に遺る者なからしめよ二七 その牡牛を悉く殺せこれを屠場にくだらしめよ其等は禍なるかな其日その罰を受べき時來れり二八 バビロンの地より逃げて遁れ來し者の聲ありて我らの神ヱホバの仇復その殿の仇復をシオンに宣ぶ二九 射者をバビロンに召集めよ凡そ弓を張る者よその四周に陣どりて之を攻め何人をも逃す勿れその作爲に循ひて之に報いそのすべて行ひし如くこれに行へそは彼イスラエルの聖者なるヱホバにむかひて驕りたればなり三〇 是故にその日壯者は衢に踣れその兵卒は悉く絶されんとヱホバいひたまふ三一 主なる萬軍のヱホバいひたまふ驕傲者よ視よわれ汝の敵となる汝の日わが汝を罰する時きたれり三二 驕傲者は蹶きて仆れん之を扶け起す者なかるべしわれ火をその諸邑に燃しその四周の者を焼盡さん三三 萬軍のヱホバかくいひたまふイスラエルの民とユダの民は偕に虐げらる彼らを虜にせし者は皆固くこれを守りて釋たざるなり三四 彼らを贖ふ者は強しその名は萬軍のヱホバなり彼必ずその訴を理してこの地に安を與へバビロンに住る者を戰慄しめ給はん三五 ヱホバいひたまふカルデヤ人の上バビロンに住る者の上およびその牧伯等とその智者等の上に劍あり三六 劍偽る者の上にあり彼ら愚なる者とならん劍その勇士の上にあり彼ら懼れん三七 劍その馬の上にあり其車の上にあり又その中にあるすべての援兵の上にあり彼ら婦女のごとくにならん劍その寶の上にあり是掠めらるべし三八 旱その水の上にあり是涸かん斯は偶像の地にして人々偶像に迷へばなり三九 是故に野の獸彼處に山犬と偕に居り駝鳥も彼處に棲べし何時までも其地に住む人なく世々ここに住む人なかるべし四〇 ヱホバいひたまふ神のソドム、ゴモラとその近隣の邑々を滅せしごとく彼處に住む人なく彼處に宿る人の子なかるべし四一 視よ北の方より民きたるあらん大なる國の人とおほくの王たち地の極より起らん四二 彼らは弓と槍をとる情なく矜恤なしその聲は海のごとくに鳴るバビロンの女よ彼らは馬に乘り戰士のごとくに備へて汝を攻ん四三 バビロンの王その風聲をききしかば其手弱り苦痛と子を產む婦の如き劬勞彼に迫る四四 視よ敵獅子のヨルダンの叢より上るが如く堅き宅に攻めきたらんわれ直に彼等を其處より逐奔らせわが選みたる者をその上に立ん誰か我のごとき者あらんや誰かわが爲に時期を定めんや何の牧者か我前に立ことをえん四五 さればバビロンにつきてヱホバの謀りたまひし御謀とカルデヤ人の地につきて思ひたまひし思想をきけ群の弱者必ず曳ゆかれん彼必ずかれらの住居を滅すべし四六 バビロンは取れたりとの聲によりて地震へその號呼國々の中に聞ゆ

第五一章

一 ヱホバかくいひたまふ視よわれ滅すところの風を起

してバビロンを攻め我に悖る者の中に住む者を攻べし二われ簸者をバビロンに遣さん彼らこれを簸てその地を空くせん彼らすなはちその禍の日にこれを四方より攻むべし三弓を張る者に向ひまた鎧を被て立あがる者に向ひて射者の者其弓を張らん汝らその壯者を憫れまず其軍勢を悉く滅すべし四然ば殺さるる者カルデヤ人の地に踣れ刺るる者その街に踣れん五イスラエルとユダはその神萬軍のヱホバに棄てられず彼らの地にはイスラエルの至聖者にむかひて犯せるところの罪充つ六汝らバビロンのうちより逃げいでておのおの其生命をすくへ其の罪のために滅さるる勿れ今はヱホバの仇をかへしたまふ時なれば報をそれになしたまふなり七バビロンは金の杯にしてヱホバの手にあり諸の地を醉せたり國々その酒を飮めり是をもて國々狂へり八バビロンは忽ち踣れて壞る之がために哭けその傷のために乳香をとれ是或は愈ん九われらバビロンを醫さんとすれども愈ず我らこれをすてて各その國に歸るべしそはその罰天におよび雲にいたればなり一〇ヱホバわれらの義をあらはしたまふ來れシオンに於て我らの神ヱホバの作爲をのべん一一矢を磨ぎ楯を取れヱホバ、メデア人の王等の心を激發したまふヱホバ、バビロンをせめんと謀り之を滅さんとしたまふ是ヱホバの復仇その殿の復仇たるなり一二バビロンの石垣に向ひて纛を樹て園を堅くし番兵を設け伏兵をそなへよ蓋ヱホバ、バビロンに住める者をせめんとて謀りその言しごとく行ひたまへばなり一三おほくの水の傍に住み多くの財寶をもてる者よ汝の終汝の貪婪の限來れり一四萬軍のヱホバおのれを指して誓ひいひ給ふ我まことに人を蝗のごとくに汝の中に充さん彼ら汝に向ひて鯨波の聲を揚ぐべし一五ヱホバその能力をもて地をつくり其知慧をもて世界を建てその明哲をもて天を舒たまへり一六彼聲を發したまふ時は天に衆の水いづかれ雲を地の極より起らしめ電光と雨をおこし風をその庫よりいだしたまふ一七すべての人は獸のごとくにして智慧なし諸の鑄物師はその作りし像のために辱を取る其鑄るところの像は僞の者にしてその中に靈なし一八其等は空しき者にして迷妄の工作なりわが臨むとき其等は滅べし一九ヤコブの分は此の如くならず彼は萬物およびその產業の族の造化主なりその名は萬軍のヱホバといふ二〇汝はわが鎚にして戰の器具なりわれ汝をもて諸の邦を碎き汝をもて萬國を滅さん二一われ汝をもて馬とその騎る者を摧き汝をもて車とその御する者を碎かん二二われ汝をもて男と女をくだき汝をもて老たる者と幼き者をくだき汝をもて壯者と童女をくだくべし二三われ汝をもて牧者とその群をくだき汝をもて農夫とその軛を負ふ牛をくだき汝をもて方伯等と督宰等をくだかん二四汝らの目の前にて我バビロンとカルデヤに住るすべての者がシオンになせし諸の惡きことに報いんとヱホバいひたまふ二五ヱホバ言ひたまはく全地を滅したる滅す山よ視よわれ汝の敵となるわれ手を汝の上に伸て汝を巖より轉ばし汝を焚山となすべし二六ヱホバいひ

たまふ人汝より石を取て隅石となすことあらじ亦汝より石を取りて基礎となすことあらじ汝はいつまでも荒地となりをらん二七 纛を地に樹て箛を國々の中に吹き國々の民をあつめて之を攻めアララテ、ミンニ、アシケナズの諸國を招きて之を攻め軍長をたてて之を攻め恐しき蝗のごとくに馬をすすめよ二八 國々の民をあつめて之を攻めメデア人の王等とその方伯等とその督宰等およびそのすべての領地の人をあつめて之を攻めよ二九 地は震ひ搖かんそはヱホバその意旨をバビロンになしバビロンの地をして住む人なき荒地とならしめたまふべければなり三〇 バビロンの勇者は戰をやめて其城にこもりその力失せて婦のごとくにならん其宅は焼けその門閂は折れん三一 駅は趨て駅にあひ使者は趨て使者にあひバビロンの王につげて邑は盡く取られ三二 渡口は取られ沼は焼れ兵卒は怖るといはん三三 萬軍のヱホバ、イスラエルの神かくいひたまふバビロンの女は禾場のごとしその踏るる時きたれり暫くありてその苅るる時いたらん三四 バビロンの王ネブカデネザル我を食ひ我を滅し我を空き器のごとくなし龍の如くに我を呑みわが珍饈をもて其腹を充し我を逐出せり三五 シオンに住る者いはんわがうけし虐遇と我肉はバビロンにかかるべしとヱルサレムいはん我血はカルデヤに住める者にかかるべしと三六 さればヱホバかくいひたまふ視よわれ汝の訟を理し汝の爲に仇を復さん我その海を涸かし其泉を乾かすべし三七 バビロンは頽壘となり山犬の巣窟となり詫異となり嗤笑となり人なき所とならん三八 彼らは獅子のごとく共に吼え小獅のごとくに吼ゆ三九 彼らの慾の燃る時にわれ筵を設けてかれらを醉せ彼らをして喜ばしめながき寢にいりて目を醒すことなからしめんとヱホバいひたまふ四〇 われ屠る羔羊のごとく又牡羊と牡山羊のごとくにかれらをくだらしめん四一 セシヤクいかにして取られしや全地の人の頌美者いかにして執へられしや國々の中にバビロンいかにして詫異となりしや四二 海バビロンに溢れかかりその多くの波濤これを覆ふ四三 その諸邑は荒れて燥ける地となり沙漠となり住む人なき地とならん人の子そこを過ることあらじ四四 われベルをバビロンに罰しその呑みたる者を口より取出さん國々はまた川の如くに彼に來らじバビロンの石垣踣れん四五 我民よ汝らその中よりいで各ヱホバの烈しき怒をまぬかれてその命を救へ四六 汝ら心を弱くする勿れ此地にてきく所の浮言によりて畏るる勿れ浮言は此年も來り次の年も亦きたらん此地に強暴あり宰者と宰者とあひ攻むることあらん四七 故に視よ我バビロンの偶像を罰する日來らんその全地は辱められ其殺さるる者は悉くその中に踣れん四八 然して天と地とその中にあるところのすべての者はバビロンの事の爲に歡び歌はんそは敗壞者北の方より此處に來ればなりヱホバこれをいひたまふ四九 バビロンがイスラエルの殺さるる者を踣せし如く全地の殺さるる者バビロンに踣るべし五〇 劍を逃るる者よ往け止る勿れ遠方よりヱホバを憶えヱルサレムを汝らの心に置くべし五一

罵言をきくによりて我ら羞づ異邦人ヱホバの室の聖處にいるによりて我らの面には羞恥盈つ五二 この故にヱホバいひたまふ視よわがその偶像を罰する日いたらん傷けられたる者はその全國に呻吟べし五三 たとひバビロン天に昇るとも其城を高くして堅むるとも敗壞者我よりいでて彼らにいたらんとヱホバいひたまふ五四 バビロンに號咷の聲ありカルデヤ人の地に大なる敗壞あり五五 ヱホバ、バビロンをほろぼし其中に大なる聲を絶したまふ其波濤は巨水のごとくに鳴りその聲は響わたる五六 破滅者これに臨みバビロンにいたる其勇士は執へられ其弓は折らるヱホバは施報をなす神なればかならず報いたまふなり五七 われその牧伯等と博士等と督宰等と勇士とを醉せん彼らは永き寢にいりて目を醒すことあらじ萬軍のヱホバと名くる王これをいひ給ふ五八 萬軍のヱホバかくいひたまふバビロンの闊き石垣は悉く毀たれその高き門は火に焚れん斯民の勞苦は徒となるべし民は火のために憊れん五九 これマアセヤの子なるネリヤの子セラヤがユダの王ゼデキヤとともに其治世の四年にバビロンに往くときにあたりて豫言者ヱレミヤがこれに命ぜし言なりこのセラヤは侍從の長なり六〇 ヱレミヤ、バビロンにのぞまんとする諸の災を書にしるせり是即ちバビロンの事につきて錄せる此すべての言なり六一 ヱレミヤ、セラヤにいひけるは汝バビロンに往しとき愼みてこの諸の言を讀め六二 而して汝いふべしヱホバよ汝はこの處を滅し人と畜をいはず凡て此處に住む者なからしめて窮なくこれを荒地となさんと此處にむかひていひたまへり六三 汝この書を讀畢りしとき之に石をむすびつけてユフラテの中に投いれよ六四 而していふべしバビロンは我これに災菑をくだすによりて是しづみて復おこらざるべし彼らは絶はてんと／此まではヱレミヤの言なり

第五二章

一 ゼデキヤは位に即きしとき二十一歳なりしがヱルサレムに於て十一年世をさめたりその母の名はハムタルといひてリブナのヱレミヤの女なり二 ゼデキヤはヱホヤキムが凡てなしたる如くヱホバの目の前に惡をなせり三 すなはちヱホバ、ヱルサレムとユダとを怒りて之をその前より棄てはなちたまふ／是に於てゼデキヤ、バビロンの王に叛けり四 ゼデキヤの世の九年十月十日にバビロンの王ネブカデネザルその軍勢をひきゐてヱルサレムに攻めきたり之に向ひて陣をはり四周に戍樓を建て之を攻めたり五 かくこの邑攻圍まれてゼデキヤ王の十一年にまでおよびしが六 その四月九日にいたりて城邑のうち饑ること甚だしくなり其地の民食物をえざりき七 是をもて城邑つひに打破られたれば兵卒は皆逃て夜の中に王の園の邊なる二個の石垣の間の門より城邑をぬけいで平地の途に循ひておちゆけり時にカルデヤ人は城邑を圍みをる八 茲にカルデヤ人の軍勢王を追ひゆきヱリコの平地にてゼデキヤに追付けるにその軍勢みな彼を離れて散りしかば九 カルデヤ人王を執へて之をハマテの地のリブラにをるバビロンの王の所に曳きゆければ王彼の罪を

さだめたり一〇バビロンの王すなはちゼデキヤの子等をその目の前に殺さしめユダの牧伯等を悉くリブラに殺さしめ一一またゼデキヤの目を抉さしめたり斯てバビロンの王かれを銅索に繋ぎてバビロンに携へゆきその死る日まで獄に置けり一二バビロン王ネブカデネザルの世の十九年の五月十日バビロンの王の前につかふる侍衛の長ネブザラダン、ヱルサレムにきたり一三ヱホバの室と王の室を焼き火をもてヱルサレムのすべての室と大なる諸の室を焼けり一四また侍衛の長と偕にありしカルデヤ人の軍勢ヱルサレムの四周の石垣を悉く毀てり一五侍衛の長ネブザラダンすなはち民のうちの貧乏者城邑の中に餘れる者およびバビロンの王に降りし人と民の餘れる者を虜へ移せり一六但し侍衛の長ネブザラダンその地のある貧 者を遺して葡萄を耕る者となし農夫となせり一七カルデヤ人またヱホバの室の銅の柱と洗盥の臺と銅の海を碎きてその銅を悉くバビロンに運び一八また鍋と火鏟と燭剪と鉢と匙およびすべて用ふるところの銅 器を取れり一九侍衛の長もまた洗盥と火盤と鍋と燭臺と匙と爵など凡て金銀にて作れる者を取り二〇またソロモン王がヱホバの室に造りしところの二つの柱と一の海と臺の下なる十二の銅の牛を取れりこのもろもろの銅の重は稱る可らず二一この柱は高さ十八キユビトなり又紐をもてその周圍を測るに十二キユビトあり指四本の厚にして空なり二二その上に銅の頂ありその頂の高さは五キユビトその周圍は銅の網子と石榴にて飾れり他の柱とその石榴も之におなじ二三その四方に九十六の石榴あり網子の上なるすべての石榴の數は百なり二四侍衛の長は祭司の長セラヤと第二の祭司ゼパニヤと三人の門守を執へ二五また兵卒を督る一人の寺人と王の前にはべるもののうち城邑にて遇しところの者七人とその地の民を募る軍勢の長なる書記と城邑の中にて遇しところの六十人の者を邑よりとらへされり二六侍衛の長ネブザラダンこれらを執へてリブラに居るバビロンの王の許にいたれり二七バビロンの王ハマテの地のリブラにこれを撃ち殺せりかくユダはおのれの地よりとらへ移されたり二八ネブカデネザルがとらへ移せし民は左の如し第七年にユダ人三千二十三人二九またネブカデネザルその十八年にヱルサレムより八百三十二人をとらへ移せり三〇ネブカデネザルの二十三年に侍衛の長ネブザラダン、ユダ人七百四十五人をとらへ移したり其總ての數は四千六百人なりき三一ユダの王ヱホヤキンがとらへ移されたる後三十七年の十二月二十五日バビロンの王エビルメロダクその治世の一年にユダの王ヱホヤキンを獄よりいだしてその首をあげしめ三二善言をもて彼を慰めその位をバビロンに偕に居るところの王等の位よりもたかくし三三其獄の衣服を易へしむヱホヤキンは一生の間つねに王の前に食せり三四かれ其死る日まで一生の間たえず日々の分をバビロンの王よりたまはりて其食物となせり

エレミヤの哀歌

第一章 一 ああ哀しいかな古昔は人のみちみちたりし此都邑 いまは凄しき様にて坐し 寡婦のごとくになれり 嗟もろもろの民の中にて大いなりし者 もろもろの州の中に女王たりし者 いまはかへつて貢をいるる者となりぬ 二 彼よもすがら痛く泣きかなしみて涙面にながる その戀人の中にはこれを慰むる者ひとりだに無く その朋これに背きてその仇となれり 三 ユダは艱難の故によりまた大いなる苦役のゆゑによりて虜はれゆき もろもろの國に住ひて安息を得ず これを追ふものみな狹隘にてこれに追しきぬ 四 シオンの道路は節會の上り來る者なきがために哀しみその門はことごとく荒れ その祭司は歎き その處女は憂へ シオンもまた自から苦しむ 五 その仇は首となり その敵は享ゆ その愆の多きによりてヱホバこれをなやませたまへるなり そのわかき子等は虜はれて仇の前にゆけり 六 シオンの女よりはその榮華ことごとく離れされり またその牧伯等は草を得ざる鹿のごとくに成り おのれを追ふものの前に力つかれて歩みゆけり 七 ヱルサレムはその艱難と窘迫の時むかしの代にありしもろもろの樂しき物を思ひ出づ その民仇の手におちいり誰もこれを助くるものなき時 仇人これを見てその荒はてたるを笑ふ 八 ヱルサレムははなはだしく罪ををかしたれば汚穢たる者のごとくになれり 前にこれを尊とびたる者もその裸體を見しによりて皆これをいやしむ 是もまたみづから嗟き身をそむけて退ぞけり 九 その汚穢これが裾にあり 彼その終局をおもはざりき 此故に驚ろくまでに零落たり 一人の慰さむる者だに無し ヱホバよわが艱難をかへりみたまへ 敵は勝ほこれり 一〇 敵すでに手を伸てその財寶をことごとく奪ひたり 汝さきに異邦人等はなんぢの公會にいるべからずと命じおきたまひしに 彼らが聖所を侵しいるをシオンは見たり 一一 その民はみな哀きて食物をもとめ その生命を支へんがために財寶を出して食にかへたり ヱホバよ見そなはし我のいやしめらるるを顧りみたまへ 一二 すべて行路人よ なんぢら何ともおもはざるか ヱホバその烈しき震怒の日に我をなやましてわれに降したまへるこの憂苦にひとしき憂苦また世にあるべきや考がへ見よ 一三 ヱホバ上より火をくだしわが骨にいれて之を克服せしめ 網を張りわが足をとらへて我を後にむかしめ 我をして終日心さびしくかつ疾わづらはしめたまふ 一四 わが愆尤の軛は主の御手にて結ばれ諸の愆あひ纏はりてわが項にのれり 是はわが力をしておとろへしむ 主われを敵たりがたき者の手にわたしたまへり 一五 主われの中なる勇士をことごとく除き 節會をもよほして我を攻め わが少き人を打ほろぼしたまへり 主酒榨をふむがごとくにユダの處女をふみたまへり 一六 これがために我なげく わが目やわが目には水ながる わがたましひを活すべき慰さむるものわれに遠ければなり わが子等は敵の勝るによりて滅びうせにき 一七 シオンは手

をのぶれども誰もこれを慰さむる者なし ヤコブにつきてはヱホバ命をくだしてその周圍の民をこれが敵とならしめたまふ ヱルサレムは彼らの中にありて汚れたる者のごとくなりぬ 一八 ヱホバは正し 我その命令にそむきたるなり 一切の民よわれに聽け わが憂苦をかへりみよ わが處女もわかき男も俘囚て往り 一九 われわが戀人を呼たれども彼らはわれを欺むけり わが祭司およびわが長老は生命を繋がんとて食物を求むる間に都邑の中にて氣息たえたり 二〇 ヱホバよかへりみたまへ 我はなやみてをり わが腸わきかへり わが心わが衷に顚倒す 我甚しく悖りたればなり 外には劍ありてわが子を殺し 内には死のごとき者あり 二一 かれらはわが嗟歎をきけり 我をなぐさむるもの一人だに無し わが敵みなわが艱難をききおよび 汝のこれを爲たまひしを喜こべり 汝はさきに告しらせしその日を來らせたまはん 而して彼らもつひに我ごとくに成るべし 二二 ねがはくは彼等が與へし艱難をことごとくなんぢの御前にあらはし 前にわがもろもろの罪愆のために我におこなひし如く彼らにも行ひたまへ わが嗟歎は多くわが心はうれひかなしむなり

第二章 一 ああヱホバ震怒をおこし 黒雲をもてシオンの女を蔽ひたまひ イスラエルの榮光を天より地におとし その震怒の日に己の足凳を心にとめたまはざりき 二 主ヤコブのすべての住居を呑つくしてあはれまず 震怒によりてユダの女の保砦を毀ちこれを地にたふし その國とその牧伯等を辱かしめ 三 烈しき震怒をもてイスラエルのすべての角を絶ち 敵の前にて己の右の手をひきちぢめ 四面を焚きつくす燃る火のごとくヤコブを焚き 四 敵のごとく弓を張り 仇のごとく右の手を挺て立ち 凡て目に喜こばしきものを滅し シオンの女の幕屋に火のごとくその怒をそそぎたまへり 五 主敵のごとくに成たまひてイスラエルを呑ほろぼし その諸の殿を呑ほろぼし そのもろもろの保砦をこぼち ユダの女の上に憂愁と悲哀を增くはへ 六 園のごとく己の幕屋を荒しその集會の所をほろぼしたまへり ヱホバ節會と安息日とをシオンに忘れしめ 烈しき怒によりて王と祭司とをいやしめ棄たまへり 七 主その祭壇を忌棄て その聖所を嫌ひ憎みて その諸の殿の石垣を敵の手にわたしたまへり 彼らは節會の日のごとくヱホバの室にて聲をたつ 八 ヱホバ、シオンの女の石垣を毀たんと思ひさだめ 繩を張り こぼち進みてその手をひかず 壕と石垣とをして哀しましめたまふ 是らは共に憂ふ 九 その門は地に埋もれ ヱホバその關木をこぼちくだき その王ともろもろの牧伯は律法なき國人の中にあり その預言者はヱホバより異象を蒙らず 一〇 シオンの女の長老等は地に坐りて默し 首に灰をかむり身に麻をまとふ ヱルサレムの處女は首を地に低る 一一 わが目は涙の爲に潰れんとし わが腸は沸かへり わが肝は地に塗る わが民の女ほろぼされ 幼少ものや乳哺子は疲れはてて邑の街衢に氣息たへなんとすればなり 一二 かれらは疵を負る者の如く邑のちまたにて氣息たえなんとし 母の懷にその靈魂をそそ

がんとし母にむかひて言ふ 穀物と酒とはいづくにあるやと一三 ヱルサレムの女よ 我なにをもて汝にあかしし 何をもて汝にならべんや シオンの處女よ われ何をもて汝になぞらへて汝をなぐさめんや 汝のやぶれは海のごとく大なり 嗟たれか能く汝を醫さんや一四 なんぢの預言者は虚しき事と愚なることとをなんぢに預言し かつて汝の不義をあらはしてその俘囚をまぬかれしめんとはせざりき その預言するところは唯むなしき重荷および追放たるる根本となるべき事のみ一五 すべて往來の人なんぢにむかひて手を拍ち ヱルサレムの女にむかひて嘲りわらひかつ頭をふりて言ふ 美麗の極 全地の欣喜ととなへたりし邑は是なるかと一六 なんぢのもろもろの敵はなんぢに對ひて口を開けあざけり笑ひて切歯をなす 斯て言ふ われら之を呑つくしたり 是われらが望みたりし日なり 我ら已に之にあへり 我らすでに之を見たりと一七 ヱホバはその定めたまへることを成し いにしへより其命じたまひし言を果したまへり ヱホバはほろぼして憐れまず 敵をして汝にかちほこらしめ汝の仇の角をたかくしたまへり一八 かれらの心は主にむかひて呼はれり シオンの女の墻垣よ なんぢ夜も晝も河の如く涙をながせ みづから安んずることをせず 汝の瞳子を休むることなかれ一九 なんぢ夜の初更に起いでて呼さけべ 主の御前に汝の心を水のごとく灌げ 街衢のほとりに饑たふるるなんぢの幼兒の生命のために主にむかひて兩手をあげよ二〇 ヱホバよ視たまへ 汝これを誰におこなひしか 願はくは顧みたまへ 婦人おのが實なるその懷き育てし孩兒を食ふべけんや 祭司預言者等主の聖所において殺さるべけんや二一 をさなきも老たるも街衢にて地に臥し わが處女も若き男も刄にかかりて斃れたり なんぢはその震怒の日にこれを殺し これを屠りて恤れみたまはざりき二二 なんぢ節會の日のごとくわが懼るるところの者を四方より呼あつめたまへり ヱホバの震怒の日には遁れたる者なく又のこりたる者なかりき わが懷き育てし者はみなわが敵のためにほろぼされたり

第三章一 我はかれの震怒の笞によりて艱難に遭たる人なり二 かれは我をひきて黒暗をあゆませ光明にゆかしめたまはず三 まことに屢々その手をむけて終日われを攻なやまし四 わが肉と肌膚をおとろへしめ わが骨を摧き五 われにむかひて患苦と艱難を築きこれをもて我を圍み六 われをして長久に死し者のごとく暗き處に住しめ七 我をかこみて出ること能はざらしめわが鏈索を重くしたまへり八 我さけびて助をもとめしとき彼わが祈禱をふせぎ九 斫たる石をもてわが道を塞ぎわが途をまげたまへり一〇 その我に對することは伏て伺がふ熊のごとく潛みかくるる獅子のごとし一一 われに路を離れしめ 我をひきさきて獨くるしましめ一二 弓を張りてわれを矢先の的となし一三 矢筒の矢をもてわが腰を射ぬきたまへり一四 われはわがすべての民のあざけりとなり終日うたひそしらる一五 かれ我をして苦き物に飽しめ茵蔯を飲しめ一六 小石をもてわが齒を摧き灰をもて我を蒙ひたまへり一七

なんぢわが靈魂をして平和を遠くはなれしめたまへば我は福祉をわすれたり一八 是において我みづから言り わが氣力うせゆきぬ ヱホバより何を望むべきところ無しと一九 ねがはくは我が艱難と苦楚茵蔯と膽汁とを心に記たまへ二〇 わがたましひは今なほ是らの事を想ひてわが衷に鬱ぐ二一 われこの事を心におもひ起せり この故に望をいだくなり二二 われらの尚ほろびざるはヱホバの仁愛によりその憐憫の盡ざるに因る二三 これは朝ごとに新なり なんぢの誠實はおほいなるかな二四 わが靈魂は言ふ ヱホバはわが分なり このゆゑに我彼を待ち望まん二五 ヱホバはおのれを待ち望む者とおのれを尋ねもとむる人に恩惠をほどこしたまふ二六 ヱホバの救拯をのぞみて靜にこれを待は善し二七 人わかき時に軛を負は善し二八 ヱホバこれを負せたまふなれば獨坐して默すべし二九 口を塵につけよ あるひは望あらん三〇 おのれを撃つ者に頬をむけ 充足れるまでに恥辱をうけよ三一 そは主は永久に棄ることを爲たまはざるべければなり三二 かれは患難を與へ給ふといへどもその慈悲おほいなればまた憐憫を加へたまふなり三三 心より世の人をなやましかつ苦しめ給ふにはあらざるなり三四 世のもろもろの俘囚人を脚の下にふみにじり三五 至高者の面の前にて人の理を枉げ三六 人の詞訟を屈むることは主のよろこび給はざるところなり三七 主の命じたまふにあらずば誰か事を述んにその事即ち成んや三八 禍も福もともに至高者の口より出るにあらずや三九 活る人なんぞ怨言べけんや人おのれの罪の罰せらるるをつぶやくべけんや四〇 我等みづからの行をしらべかつ省みてヱホバに歸るべし四一 我ら天にいます神にむかひて手とともに心をも擧べし四二 われらは罪ををかし我らは叛きたり なんぢこれを赦したまはざりき四三 なんぢ震怒をもてみづから蔽ひ 我らを追攻め殺してあはれまず四四 雲をもてみづから蔽ひ 祈禱をして通ぜざらしめ四五 もろもろの民の中にわれらを塵埃となしたまへり四六 敵は皆われらにむかひて口を張れり四七 恐懼と陷阱また暴行と滅亡我らに來れり四八 わが民の女の滅亡によりてわが眼には涙の河ながる四九 わが目は斷ず涙をそそぎて止ず五〇 天よりヱホバの臨み見て顧みたまふ時にまで至らん五一 わが邑の一切の女等の故によりてわが眼はわが心をいたましむ五二 故なくして我に敵する者ども鳥を追ごとくにいたく我をおひ五三 わが生命を坑の中にほろぼし わが上に石を投かけ五四 また水わが頭の上に溢る 我みづから言り滅びうせぬと五五 ヱホバよ われ深き坑の底より汝の名を呼り五六 なんぢ我が聲を聽たまへり わが哀歎と祈求に耳をおほひたまふなかれ五七 わが汝を龥たりし時なんぢは近よりたまひて恐るるなかれと宣へり五八 主よなんぢはわが靈魂の訴を助け伸べわが生命を贖ひ給へり五九 ヱホバよなんぢは我がかうむりたる不義を見たまへり 願はくは我に正しき審判を與へたまへ六〇 なんぢは彼らが我を怨み われを害せんとはかるを凡て見たまへり六一 ヱホバよなんぢは彼らが我を詈り 我を害せんとはかるを凡て

聞たまへり六二 かの立て我に逆らふ者等の言語およびその終日われを攻んとて運らす謀計もまた汝これを聞たまへり六三 ねがはくは彼らの起居をかんがみたまへ 我はかれらに歌ひそしらる六四 ヱホバよ なんぢは彼らが手に爲すところに循がひて報をなし六五 かれらをして心くらからしめたまはん なんぢの呪詛かれらに歸せよ六六 なんぢは震怒をもてかれらを追ひ ヱホバの天の下よりかれらをほろぼし絶たまはん

第四章一 ああ黄金は光をうしなひ純金は色を變じ 聖所の石はもろもろの街衢の口に投すてられたり二 ああ精金にも比ぶべきシオンの愛子等は陶器師の手の作なる土の器のごとくに見做る三 山犬さへも乳房をたれてその子に乳を哺す 然るにわが民の女は殘忍荒野の駝鳥のごとくなれり四 乳哺兒の舌は渇きて上顎にひたと貼き 幼兒はパンをもとむるも擘てあたふる者なし五 肥甘物をくらひ居りし者はおちぶれて街衢にあり 紅の衣服にて育てられし者も今は塵堆を抱く六 今我民の女のうくる愆の罰はソドムの罪の罰よりもおほいなり ソドムは古昔人に手を加へらるることなくして瞬く間にほろぼされしなり七 わが民の中なる貴き人は從前には雪よりも皎潔に乳よりも白く 珊瑚よりも躰紅色にしてその形貌のうるはしきこと藍玉のごとくなりしが八 いまはその面くろきが上に黑く 街衢にあるとも人にしられず その皮は骨にひたと貼き 乾きて枯木のごとくなれり九 劍にて死る者は饑て死る者よりもさいはひなり そは斯る者は田圃の產 物の罄るによりて漸々におとろへゆき刺れし者のごとくに成ばなり一〇 わが民の女のほろぶる時には情愛ふかき婦人等さへも手づから己の子等を煮て食となせり一一 ヱホバその憤恨をことごとく洩し 烈しき怒をそそぎ給ひ シオンに火をもやしてその基礎までも燒しめ給へり一二 地の諸王も世のもろもろの民もすべてヱルサレムの門に仇や敵の打いらんとは信ぜざりき一三 斯なりしはその預言者の罪によりその祭司の愆によれり かれらは即ち正しき者の血をその邑の中にながしたりき一四 今かれらは盲人のごとく街衢にさまよひ 身は血にて汚れをれば人その衣服にふるるあたはず一五 人かれらに向ひて呼はり言ふ 去れよ穢らはし 去れ去れ觸るなかれと 彼らはしり去りて流離ば異邦人の中間にても人々また言ふ 彼らは此に寓るべからずと一六 ヱホバ怒れる面をもてこれを散し給へり 再びこれを顧みたまはじ 人々祭司の面をも尊ばず長老をもあはれまざりき一七 われらは賴まれぬ救援を望みて目つかれおとろふ 我らは俟ゐたりしが救拯をなすこと能はざる國人を待をりぬ一八 敵われらの脚をうかがへば我らはおのれの街衢をも歩くことあたはず 我らの終ちかづけり 我らの日つきたり 即ち我らの終きたりぬ一九 我らを追ふものは天空ゆく鷲よりも迅し 山にて我らを追ひ 野に伏てわれらを伺ふ二〇 かの我らが鼻の氣息たる者ヱホバに膏そそがれたるものは陷阱にて執へられにき 是はわれらが異邦にありてもこの蔭に住んとおもひたりし者なり二一 ウズの

地に住むエドムの女よ悦び樂しめ 汝にもまたつひに杯めぐりゆかん なんぢも醉て裸になるべし 二二 シオンの女よ なんぢが愆の罰はをはれり 重ねてなんぢを虜へゆきたまはじ エドムの女よ なんぢの愆を罰したまはん 汝の罪を露はしたまはん

第五章 一 ヱホバよ我らにありし所の事をおもひたまへ 我らの恥辱をかへりみ觀たまへ 二 われらの產業は外國人に歸し われらの家屋は他國人の有となれり 三 われらは孤子となりて父あらず われらの母は寡婦にひとし 四 われらは金を出して自己の水を飮み おのれの薪を得るにも價をはらふ 五 われらを追ふ者われらの頸に迫る 我らは疲れて休むことを得ず 六 食物を得て饑を凌がんとてエジプト人およびアッスリヤ人に手を與へたり 七 われらの父は罪ををかして已に世にあらず 我らその罪を負ふなり 八 奴僕等われらを制するに誰ありて我らを之が手よりすくひ出すものなし 九 荒野の刀兵の故によりて我ら死を冒して食物を得 一〇 饑饉の烈しき熱氣によりてわれらの皮膚は爐のごとく熱し 一一 シオンにて婦人等をかされユダの邑々にて處女等けがさる 一二 侯伯たる者も敵の手にて吊され 老たる者の面も尊とばれず 一三 少き者は石磨を擔はせられ 童子は薪を負ふてよろめき 一四 長老は門にあつまることを止め 少き者はその音樂を廢せり 一五 我らが心の快樂はすでに罷み われらの跳舞はかはりて悲哀となり 一六 われらの冠冕は首より落たり われら罪ををかしたれば禍なるかな 一七 これが爲に我らの心うれへ これらのために我らが目くらくなれり 一八 シオンの山は荒はて 山犬はその上を步くなり 一九 ヱホバよなんぢは永遠に在す なんぢの御位は世々かぎりなし 二〇 何とて我らを永く忘れ われらを斯ひさしく棄おきたまふや 二一 ヱホバよねがはくは我らをして汝に歸らしめたまへ われら歸るべし 我らの日を新にして昔日の日のごとくならしめたまへ 二二 さりとも汝まつたく我らを棄てたまひしや 痛くわれらを怒りゐたまふや

エゼキエル書

第一章 一 第三十年四月の五日に我ケバル河の邊にてかの虜うつされたる者の中にをりしに天ひらけて我神の異象を見たり 二 是ヱコニヤ王の虜ゆかれしより第五年のその月の五日なりき 三 時にカルデヤ人の地に於てケバル河の邊にてヱホバの言 祭司ブシの子エゼキエルに臨めりヱホバの手かしこにて彼の上にあり 四 我見しに視よ烈き風 大なる雲および燃る火の團塊北より出きたる又雲の周圍に輝光ありその中よりして火の中より熱たる金族のごときもの出づ 五 其火の中に四箇の生物にて成る一箇の形あり其狀は是のごとし即ち人の象あり 六 各 四の面あり各四の翼あり 七 その足は直なる足その足の跖は犢牛の足の跖のごとくにして磨ける銅のごとくに光れり 八 その生物の四方に翼の下に人の手ありこの四箇の物皆面と翼あり 九 その翼はたがひに相つらなれりその往ときに回轉ずして各その面の向ふところに行く 一〇 その面の形は人の面のごとし四箇の者右には獅子の面あり四箇の者左には牛の面あり又四箇の者鷲の面あり 一一 その面とその翼は上にて分るその各箇の翼二箇は彼と此と相つらなり二箇はその身を覆ふ 一二 各箇その面の向ふところへ行き靈のゆかんとする方に行く又行にまはることなし 一三 その生物の形は熱る炭の火のごとく松明のごとし火生物の中に此彼に行き火輝きてその火の中より電光いづ 一四 その生物奔りて電光の如くに往來す 一五 我生物を觀しに生物の近邊にあたりてその四箇の面の前に地の上に輪あり 一六 其輪の形と作は黄金色の玉のごとしその四箇の形は皆同じその形と作は輪の中に輪のあるがごとくなり 一七 その行く時は四方に行く行にまはることなし 一八 その輪輞は高くして畏懼かり輪輞は四箇ともに皆遍く目あり 一九 生物の行く時は輪その傍に行き生物地をはなれて上る時は輪もまた上る 二〇 凡て靈のゆかんとする所には生物その靈のゆかんとする方に往く輪またその傍に上る是生物の靈輪の中にあればなり 二一 此の行く時は彼もゆき此の止る時は彼も止り此地をはなれて上る時は輪も共にあがる是生物の靈輪の中にあればなり 二二 生物の首の上に畏しき水晶のごとき穹蒼ありてその首の上に展開る 二三 穹蒼の下に其翼直く開きて此と彼とあひ連る又各 二箇の翼ありその各の二箇の翼此方彼方にありて身をおほふ 二四 我その行く時の羽聲を聞に大水の聲のごとく全能者の聲のごとし其聲音の響は軍勢の聲のごとしその立どまる時は翼を垂る 二五 その首の上なる穹蒼の上より聲ありその立どまる時は翼を垂る 二六 首の上なる穹蒼の上に靑玉のごとき寶位の狀式ありその寶位の狀式の上に人のごとき者在す、二七 又われその中と周圍に磨きたる銅のごとく火のごとくなる者を見る其人の腰より上も腰より下も火のごとくに見ゆ其周圍に輝光あり 二八 その周圍の輝光は雨の日に雲にあらはるる虹のごとしヱホバの榮光かくのごとく見ゆ我これを見て俯伏したるに語る者の聲あ

るを聞く

第二章 一 彼われに言たまひけるは人の子よ起あがれ我なんぢに語はんと 二 斯われに言給ひし時靈われにきたりて我を立あがらしむ爰に我その我に語りたまふを聞くに 三 われに言たまひけるは人の子よ我なんぢをイスラエルの子孫に遣すすなはち我に叛ける叛逆の民につかはさん彼等とその先祖我に悖りて今日にいたる 四 その子女等は厚顏にして心の剛愎なる者なり我汝をかれらに遣す汝かれらに主ヱホバかくいふと告べし 五 彼等は悖逆る族なり彼等は之を聽も之を拒むも預言者の己等の中にありしを知ん 六 汝人の子よたとひ薊と棘 汝の周圍にあるとも亦汝蠍の中に住ともこれを懼るるなかれその言をおそるるなかれ夫かれらは悖逆る族なり汝その言をおそるるなかれ其面に慄くなかれ 七 彼等は悖逆る族なり彼らこれを聽もこれを拒むも汝吾言をかれらに告よ 八 人の子よわが汝に言ところを聽け汝かの悖逆る族のごとく悖るなかれ汝の口を開きてわが汝にあたふる者をくらふべし 九 時に我見に吾方に伸たる手ありて其中に巻物あり 一〇 彼これをわが前に開けり巻物は裏と表に文字ありて上に嗟嘆と悲哀と憂患とを錄す

第三章 一 彼また我に言たまひけるは人の子よ汝獲るところの者を食へ此巻物を食ひ往てイスラエルの家に告よ 二 是に於て我口をひらけばその巻物を我に食はしめて 三 我にいひ給ひけるは人の子よわが汝にあたふる此巻物をもて腹をやしなへ膓にみたせよと我すなはち之をくらふに其わが口に甘きこと蜜のごとくなりき 四 彼また我にいひたまひけるは人の子よイスラエルの家にゆきて吾言を之につげよ 五 我なんぢを唇の深き舌の重き民につかはすにあらずイスラエルの家につかはすなり 六 汝がその言語をしらざる唇の深き舌の重き多くの國人に汝をつかはすにあらず我もし汝を彼らに遣さば彼等汝に聽べし 七 然どイスラエルの家は我に聽ことを好まざれば汝に聽ことをせざるべしイスラエルの全家は厚顏にして心の剛愎なる者なればなり 八 視よ我かれらの面のごとく汝の面をかたくしかれらの額のごとく汝の額を堅くせり 九 我なんぢの額を金剛石のごとくし磐よりも堅くせり彼らは背逆る族なり汝かれらを懼るるなかれ彼らの面に戰慄くなかれ 一〇 又われに言たまひけるは人の子よわが汝にいふところの凡の言を汝の心にをさめ汝の耳にきけよ 一一 往てかの虜へ移されたる汝の民の子孫にいたりこれに語りて主ヱホバかく言たまふと言へ彼ら聽も拒むも汝然すべし 一二 時に靈われを上に擧しが我わが後に大なる響の音ありてヱホバの榮光のその處より出る者は讃べきかなと云ふを聞けり 一三 また生物の互にあひ連る翼の聲とその傍にある輪の聲および大なる響の音を聞く 一四 靈われを上にあげて携へゆけば我苦々しく思ひ心を熱くして往くヱホバの手強くわが上にあり 一五 爰に我ケバル河の邊にてテラアビブに居るかの虜 移れたる者に至り驚きあきれてその坐する所に七日倶に坐せり 一六 七日すぎし後ヱホバの言われに

のぞみて言ふ一七人の子よ我なんぢを立てイスラエルの家の爲に守望者となす汝わが口より言を聽き我にかはりてこれを警むべし一八我惡人に汝かならず死べしと言んに汝かれを警めず彼をいましめ語りその惡き道を離れしめて之が生命を救はずばその惡人はおのが惡のために死んされど其血をば我汝の手に要むべし一九然ど汝惡人を警めんに彼その惡とその惡き道を離れずば彼はその惡の爲に死ん汝はおのれの靈魂を救ふなり二〇又義人その義事をすてて惡を行はんに我躓礙をその前におかば彼は死べし汝かれを警めざれば彼はその罪のために死てそのおこなひし義き事を記ゆる者なきにいたらん然ば我その血を汝の手に要むべし二一然ど汝もし義き人をいましめ義き人に罪ををかさしめずして彼罪を犯すことをせずば彼は警戒をうけたるがためにかならずその生命をたもたん汝はおのれの靈魂を救ふなり二二茲にヱホバの手かしこにてわが上にあり彼われに言たまひけるは起て平原にいでよ我そこにて汝にかたらん二三我すなはち起て平原に往にヱホバの榮光わがケバル河の邊にて見し榮光のごとく其處に立ければ俯伏たり二四時に靈われの中にいりて我を立あがらせ我にかたりていふ往て汝の家にこもれ二五人の子よ彼等汝に繩をうちかけ其をもて汝を縛らん汝はかれらの中に出ゆくことを得ざるべし二六我なんぢの舌を上腭に堅く着しめて汝を啞となし彼等を警めざらしむべし彼等は悖逆る族なればなり二七然ど我汝に語る時は汝の口をひらかん汝彼らにいふべし主ヱホバかく言たまふ聽者は聽べし拒む者は拒むべし彼等は悖逆る族なり

第四章一人の子よ汝磚瓦をとりて汝の前に置きその上にヱルサレムの邑を畫け二而して之を取圍み之にむかひて雲梯を建て壘を築き陣營を張り邑の周圍に破城槌を備へて之を攻めよ三汝また鐵の鍋を取り汝と邑の間に置て鐵の石垣となし汝の面を之に向よ斯この邑圍まる汝之を圍むべし是すなはちイスラエルの家にあたふる徵なり四又汝左側を下にして臥しイスラエルの家の罪を其上に置よ汝が斯臥ところの日の數は是なんぢがその罪を負ふ者なり五我かれらが罪を犯せる年を算へて汝のために日の數となす即ち三百九十日の間汝イスラエルの家の罪を負ふべし六汝これを終なば復右側を下にして臥し四十日の間ユダの家の罪を負ふべし我汝のために一日を一年と算ふ七汝ヱルサレムの圍に面を向け腕を袒して其の事を預言すべし八視よ我索を汝にかけて汝の圍の日の終るまで右左に動くことを得ざらしめん九汝小麥大麥豆扁豆粟および裸麥を取て之を一箇の器にいれ汝が横はる日の數にしたがひてこれを食とせよ即ち三百九十日の間これを食ふべし一〇汝食を權りて一日に二十シケルを食へ時々これを食ふべし一一又汝水を量りて一ヒンの六分一を飲め時々これを飲むべし一二汝大麥のパンの如くにして之を食へ即ち彼等の目のまへにて人の糞をもて之を烘べし一三ヱホバいひ給ふ是のごとくイスラエルの民はわが追やら

んところの國々においてその汚穢たるパンを食ふべし一四是において我いふ嗚呼主ヱホバよわが魂は絶て汚れし事なし我は幼少時より今にいたるまで自ら死し者や裂殺れし者を食ひし事なし又絶て汚れたる肉わが口にいりしことなし一五ヱホバ我にいひ給ふ我牛の糞をもて人の糞にかふることを汝にゆるす其をもて汝のパンを調ふべし一六又われに言たまふ人の子よ視よ我ヱルサレムに於て人の杖とするパンを打碎かん彼等は食をはかりて惜みて食ひ水をはかりて驚きて飮まん一七斯食と水と乏しくなりて彼ら互に面を見あはせて駭きその罪に亡びん

第五章 一人の子よ汝利き刀を執り之を剃刀となして汝の頭と頷をそり權衡をとりてその毛を分てよ二而して圍城の日の終る時邑の中にて火をもて其三分の一を燒き又三分の一を取り刀をもて邑の周圍を撃ち三分の一を風に散すべし我刀をぬきて其後を追ん三汝その毛を少く取りて裾に包み四又その中を取りてこれを火の中になげいれ火をもて之をやくべし火その中より出てイスラエルの全家におよばん五主ヱホバかくいひ給ふ我このヱルサレムを萬國の中におき列邦をその四圍に置けり六ヱルサレムは異邦よりも惡くわが律法に悖り其四圍の國々よりもわが法憲に悖る即ち彼等はわが律法を蔑如にしわが法憲に歩行まざるなり七故に主ヱホバかくいひたまふ汝等はその周圍の異邦人よりも甚だしく噪ぎたち吾憲にあゆまず吾法をおこなはず又汝らの周圍なる異邦人の法のごとくに行ふことすらもせざるなり八是故に主ヱホバかくいひ給ふ視よ我われは汝を攻め異邦人の目の前にて汝の中に鞫をおこなはん九なんぢの爲せし諸の惡むべき事のために我わが未だ爲ざりしところの事此後ふたたび其ごとく爲ざるべきところの事を汝になさん一〇是がために汝の中にて父たる者はその子を食ひ子たる者はその父を食はん我汝の中に鞫をおこなひ汝の中の餘れる者を盡く四方の風に散さん一一是故に主ヱホバいひ給ふ我は活く汝その忌むべき物とその憎むべきところの事とをもてわが聖所を穢したれば我かならず汝を減さん我目なんぢを惜み見ず我なんぢを憐まざるべし一二汝の三分の一は汝の中において疫病にて死に饑饉にて滅びん又三分の一は汝の四周にて刀に仆れん又三分の一をば我四方の風に散し刀をぬきて其後をおはん一三斯我怒を洩し盡しわが憤を彼らの上にかうむらせて心を安んぜん我わが憤を彼らの上に洩し盡す時は彼ら我ヱホバの熱心をもてかたりたる事をしるに至らん一四我汝を荒地となし汝の周圍の國々の中に汝を笑柄となし凡て往來の人の目に斯あらしむべし一五我怒と憤と重き責をもて鞫を汝に行ふ時は汝はその周圍の邦々の笑柄となり嘲となり警戒となり驚懼とならん我ヱホバこれを言ふ一六即ち我饑饉の惡き矢を彼等に放たん是は滅亡すための者なり我汝らを滅さんために之を放つべし我なんぢらの上に饑饉を増しくはへ汝らが杖とするところのパンを打碎かん一七我饑饉と惡き獸を汝等におくらん是汝をして子な

き者とならしめん又疫病と血なんぢの間に行わたらん我刀を汝にのぞましむべし我ヱホバこれを言ふ

第六章 一 ヱホバの言われに臨みて言ふ 二 人の子よ汝の面をイスラエルの山々にむけて預言して言ふべし 三 イスラエルの山よ主ヱホバの言を聽け主ヱホバ山と岡と谷と平原にむかひて斯いひたまふ視よ我劍を汝等に遣り汝らの崇邱を滅ぼす 四 汝等の壇は荒され日の像は毀たれん我汝らの中の殺さるる者をして汝らの偶像の前に仆れしむべし 五 我イスラエルの子孫の尸骸をその偶像の前に置ん汝らの骨をその壇の周圍に散さん 六 凡て汝らの住ところにて邑々は滅され崇邱は荒されん斯して汝らの壇は壞れて荒れ汝らの偶像は毀たれて滅び汝等の日の像は斫たふされ汝等の作りし者は絶されん 七 又殺さるる者なんぢらの中に仆れん汝等これに由て吾ヱホバなるを知るにいたらん 八 我或者を汝らにのこす即ち劍をのがれて異邦の中にをる者國々の中にちらさるる者是なり 九 汝等の中の逃れたる者はその虜ゆかれし國々において我を記念ふに至らん是は我かれらの我をはなれたるその姦淫をなすの心を挫き且かれらの姦淫を好みてその偶像を慕ふところの目を挫くに由てなり而して彼等はその諸の憎むべき者をもて爲たるところの惡のために自ら恨むべし 一〇 斯彼等はわがヱホバなるを知るにいたらん吾がこの災害をかれらになさんと語しことは徒然にならざるなり 一一 主ヱホバかく言たまふ汝手をもて撃ち足を踏ならして言へ嗚呼凡てイスラエルの家の惡き憎むべき者は禍なるかな皆刀と饑饉と疫病に仆るべし 一二 遠方にある者は疫病にて死に近方にある者は刀に仆れん又生存りて身を全うする者は饑饉に死ぬべし斯我わが憤怒を彼等に洩しつくすべし 一三 彼等の殺さるる者その偶像の中にありその壇の周圍にあり諸の高岡にあり諸の山の頂にあり諸の青樹の下にあり諸の茂れる橡樹の下にあり彼等が馨しき香をその諸の偶像にささげたる處にあらん其時汝等はわがヱホバなるを知るべし 一四 我手をかれらの上に伸べ凡てかれらの住居ところにて其地を荒してデブラの野にもまさる荒地となすべし是によりて彼らはわがヱホバなるを知るにいたらん

第七章 一 ヱホバの言また我にのぞみて言ふ 二 汝人の子よ主ヱホバかくいふイスラエルの地の末期いたる此國の四方の境の末期來れり 三 今汝の末期いたる我わが忿怒を汝に洩らし汝の行にしたがひて汝を鞫き汝の諸の憎むべき物のために汝を罰せん 四 わが目は汝を惜み見ず我なんぢを憫まず汝の行の爲に汝を罰せん汝のなせし憎むべき事の報汝の中にあるべし是によりて汝等はわがヱホバなるを知らん 五 主ヱホバかくいひ給ふ視よ災禍あり非常災禍きたる 六 末期きたる其末期きたる是起りて汝に臨む視よ來る 七 此地の人よ汝の命數いたる時いたる日ちかし山々には擾亂のみありて喜樂の聲なし 八 今我すみやかに吾憤恨を汝に蒙らせわが怒氣を汝に洩しつくし汝の行爲にしたがひて汝を鞫き汝の諸の憎むべきところの事のために汝を罰せ

ん 九 わが目は汝を惜み見ず我汝をあはれまず汝の行のために汝を罰せん汝の爲し憎むべき事の果報汝の中にあるべし是によりて汝等は我ヱホバの汝を撃なるを知ん 一〇 視よ日きたる視よ來れり命數いたりのぞむ杖花咲き驕傲茁す 一一 暴逆おこりて惡の杖と成る彼等もその群衆もその驕奢も皆失んかれらの中には何も殘る者なきにいたるべし 一二 時きたる日ちかづけり買者は喜ぶなかれ賣者は思ひわづらふなかれ怒その群衆におよぶべければなり 一三 賣者は假令その生命ながらふるともその賣たる者に歸ることあたはじ此地の全の群衆をさすところの預言は廢らざるべければなり其惡の中にありて生命を全うする者なかるべし 一四 人衆ラッパを吹て凡て預備をなせども戰にいづる者なし其はわが怒その全の群衆におよべばなり 一五 外には劍あり內には疫病と饑饉あり田野にをる者は劍に死なん邑の中にをる者は饑饉と疫病これをほろぼすべし 一六 その中の逃るる者は逃れて谷の鴿のごとくに山の上にをりて皆その罪のために悲しまん 一七 手みな弱くなり膝みな水となるべし 一八 彼等は麻の衣を身にまとはん恐懼かれらを蒙まん諸の面には羞あらはれ諸の首は髮をそりおとされん 一九 彼等その銀を街にすてん其金はかれらに塵芥のごとくなるべしヱホバの怒の日にはその金銀もかれらを救ふことあたはざるなり是等はその心魂を滿足せしめず其腹を充さず唯彼等をつまづかせて惡におとしいるる者なり 二〇 彼の美しき飾物を彼等驕傲のために用ひ又これをもてその憎べき偶像その憎むべき物をつくれり是をもて我これを彼らに芥とならしむ 二一 我これを外國人にわたして奪はしめ地の惡人にわたして掠めしめん彼等すなはちこれを汚すべし 二二 我かれらにわが面を背くべければ彼等わが密たる所を汚さん強暴人其處にいりてこれを汚すべし 二三 汝鏈索を作れよ死にあたる罪國に滿ち暴逆邑に充たり 二四 我國々の中の惡き者等を招きて彼らの家を奪しめん我強者の驕傲を止めんその聖所は汚さるべし 二五 滅亡きたれり彼等平安を求むれども得ざるなり 二六 災害に災害くははり注進に注進くははる彼等預言者に默示を求めん律法は祭司の中に絕え謀略は長老の中に絕べし 二七 王は哀き牧伯は驚惶を身に纏ひ國の民の手は慄へん我その行爲に循ひて彼らを處置ひその審判に循ひて彼らを罰せん彼等は我ヱホバなるを知にいたるべし

第八章 一 爰に六年の六月五日に我わが家に坐しをりユダの長老等わがまへに坐りゐし時主ヱホバの手われの上に降れり 二 我すなはち視しに火のごとくに見ゆる形象あり腰より下は火のごとく見ゆ腰より上は光輝て見え燒たる金屬の色のごとし 三 彼手のごとき者を伸て吾が頭髮を執りしかば靈われを地と天の間に曳あげ神の異象の中に我をヱルサレムに携へゆき北にむかへる內の門の口にいたらしむ其處に嫉妬をおこすところの嫉妬の像たてり 四 彼處にイスラエルの神の榮光あらはる吾が平原にて見たる異象のごとし 五 彼われに言たまふ人の子よ目をあげて北

の方をのぞめと我すなはち目をあげて北の方を望むに視よ壇の門の北にあたりてその入口に此嫉妬の像あり六彼また我にいひたまふ人の子よ汝かれらが爲ところ即ちイスラエルの家が此にてなすところの大なる憎むべき事を見るや我これがために吾が聖所をはなれて遠くさるべし汝身を轉らせ復大なる憎むべき事等を見ん七斯て彼われを領て庭の門にいたりたまふ我見しに其壁に一の穴あり八彼われに言たまふ人の子よ壁を穿てよと我すなはち壁を鑿つに一箇の戸あるを視る九茲に彼われにいひ給ひけるは入て彼等が此になすところの惡き憎むべき事等を見よと一〇便ち入りて見るに諸の爬蟲と憎むべき獸畜の形およびイスラエルの家の諸の偶像その周圍の壁に畫きてあり一一イスラエルの家の長老七十人その前に立てりシヤパンの子ヤザニヤもかれらの中に立ちてあり各手に香爐を執るその香の煙雲のごとくにのぼれり一二彼われに言たまひけるは人の子よ汝イスラエルの家の長老等が暗におこなふ事即ちかれらが各人その偶像の間におこなふ事を見るや彼等いふヱホバは我儕を見ずヱホバこの地を棄てたりと一三また我に言たまはく汝身を轉らせ復かれらが爲すところの大なる憎むべき事等を見ん一四斯て彼我を携てヱホバの家の北の門の入口にいたるに其處に婦女等坐してタンムズのために哭をる一五彼われに言たまふ人の子よ汝これを見るや又身を轉らせよ汝これよりも大なる憎むべき事等を見ん一六彼また我を携てヱホバの家の内庭にいたるにヱホバの宮の入口にて廊と壇の間に二十五人ばかりの人その後をヱホバの宮にむけ面を東にむけ東にむかひて日の前に身を鞠めをる一七彼われに言たまふ人の子よ汝これを見るやユダの家はその此におこなふところの憎むべき事等をもて瑣細き事となすにや亦暴逆を國に充して大に我を怒らす彼等は枝をその鼻につくるなり一八然ば我また怒をもて事をなさん吾目はかれらを惜み見ず我かれらを憫まじ彼等大聲にわが耳に呼はるとも我かれらに聽じ

第九章一斯て彼大聲に吾耳に呼はりて言たまふ邑を主どる者等各々剪滅の器具を手にとりて前み來れと二即ち北にむかへる上の門の路より六人の者おのおの打壞る器具を手にとりて來る其中に一人布の衣を着筆記人の墨盂を腰におぶる者あり彼等來りて銅の壇の傍に立てり三爰にイスラエルの神の榮光その居るところのケルブの上より起あがりて家の閾にいたり彼の布の衣を着て腰に筆記人の墨盂をおぶる者を呼ぶ四時にヱホバかれに言たまひけるは邑の中ヱルサレムの中を巡れ而して邑の中に行はるるところの諸の憎むべき事のために歎き哀しむ人々の額に記號をつけよと五我聞に彼またその他の者等にいひたまふ彼にしたがひて邑を巡りて撃てよ汝等の目人を惜み見るべからず憐れむべからず六老人も少者も童女も孩子も婦人も悉く殺すべし然ど身に記號ある者には觸べからず先わが聖所より始めよと彼等すなはち家の前にをりし老人より始む七彼またかれらに言

たまふ家を汚し死人をもて庭に充せよ汝等往けよと彼等すなはち出ゆきて邑の中に人を撃つ八彼等人を撃ちける時我遺されたれば俯伏て叫び言ふ嗚呼主ヱホバよ汝怒をヱルサレムにもらしてイスラエルの殘餘者を悉くほろぼしたまふや九彼われに言たまひけるはイスラエルとユダの家の罪甚だ大なり國には血盈ち邑には邪曲充つ即ち彼等いふヱホバは此地を棄てたりヱホバは見ざるなりと一〇然ば亦わが目かれらを惜み見ず我かれらを憐まじ彼らの行ふところを彼等の首に報いん一一時にかの布の衣を着て腰に筆記人の墨盂をおぶる人復命まをして言ふ汝が我に命じたまひしごとく爲たりと

第一〇章一茲に我見しにケルビムの首の上なる穹蒼に青玉のごとき者ありて寶位の形に見ゆ彼そのケルビムの上にあらはれたまひて二かの布の衣を着たる人に告て言たまひけるはケルビムの下なる輪の間に入りて汝の手にケルビムの間の炭火を盈し之を邑に散すべしとすなはち吾目の前にて其處に入しが三其人の入る時ケルビムは家の右に立をり雲その內庭に盈り四茲にヱホバの榮光ケルブの上より昇りて家の閾にいたる又家には雲滿ちその庭にはヱホバの榮光の輝光盈てり五時にケルビムの羽音外庭に聞ゆ全能の神の言語たまふ聲のごとし六彼布の衣を着たる人に命じて輪の間ケルビムの間より火を取れと言たまひければ即ち入りて輪の傍に立ちけるに七一のケルブその手をケルビムの間より伸てケルビムの間の火を取り之をかの布の衣を着たる人の手に置れたれば彼これを取りて出づ八ケルビムに人の手の形の者ありて其翼の下に見ゆ九我見しにケルビムの側に四箇の輪あり此ケルブにも一箇の輪あり彼ケルブにも一箇の輪あり輪の式は黄金色の玉のごとくに見ゆ一〇その式は四箇みな同じ形にして輪の中に輪のあるがごとし一一その行ときは四方に行く行にまはることなし首の向ふところに從ひ行く行にまはることなし一二その全身その脊その手その翼および輪には四周に徧く目ありその四箇みな輪あり一三我聞に轉回れと輪にむかひてよばはるあり一四其は各々四の面あり第一の面はケルブの面第二の面は人の面第三のは獅子の面第四のは鷲の面なり一五ケルビムすなはち昇れり是わがケバル河の邊にて見たるところの生物なり一六ケルビムの行く時は輪もその傍に行きケルビム翼をあげて地より飛上る時は輪またその傍を離れず一七その立つときは立ちその上る時は倶に上れりその生物の靈は其等の中にあり一八時にヱホバの榮光家の閾より出ゆきてケルビムの上に立ちければ一九ケルビムすなはちその翼をあげ出ゆきてわが目の前にて地より飛のぼれり輪はその傍にあり而して遂にヱホバの家の東の門の入口にいたりて止るイスラエルの神の榮光その上にあり二〇是すなはち吾がケバル河の邊にてイスラエルの神の下に見たるところの生物なり吾そのケルビムなるを知れり二一是等には各々四宛の面あり各箇四の翼あり又人の手のごとき物その翼の下にあり二二その面の形は吾がケバル河の邊に

て見たるところの面なりその姿も身も然り各箇その面にしたがひて行けり

第一一章 一 茲に靈我を擧げてヱホバの室の東の門に我を携へゆけり門は東に向ふ視るにその門の入口に二十五人の人あり我その中にアズルの子ヤザニヤおよびベナヤの子ペラテヤ即ち民の牧伯等を見る二 彼われに言たまひけるは人の子よ此邑におい て惡き事を考へ惡き計謀をめぐらす者は此人々なり三 彼等いふ家を建ることは近からず此邑は鍋にして我儕は肉なりと四 是故にかれらに預言せよ人の子よ預言すべし五 時にヱホバの靈わが上に降りて我にいひ給ひけるはヱホバかく言ふと言べしイスラエルの家よ汝等は斯いへり汝等の心におこる所の事は我これを知るなり六 汝等は此邑に殺さるる者を増し死人をもて街衢に充せり七 是故に主ヱホバ斯いふ汝等が邑の中に置くところのその殺されし者はすなはち肉にして邑は鍋なり然ど人邑の中より汝等を曳いだすべし八 汝等は刀劍を懼る我劍を汝等にのぞましめんと主ヱホバいひたまふ九 我なんぢらを其中よりひき出し外國人の手に付して汝等に罰をかうむらすべし一〇 汝等は劍に踣れん我イスラエルの境にて汝等を罰すべし汝等は是によりてわがヱホバなるを知るにいたらん一一 是は汝らの鍋とならず汝らはその中の肉たることを得ざるなりイスラエルの境にて我汝らに罰をかうむらすべし一二 汝ら即ちわがヱホバなるを知にいたらん汝らはわが憲法に遵はずわが律法を行はずしてその周圍の外國人の慣例のごとくに事をなせり一三 斯てわが預言しをる時にベナヤの子ペラテヤ死たれば我俯向に伏て大聲に叫び嗚呼主ヱホバよイスラエルの遺餘者を盡く滅ぼさんとしたまふやといふに一四 ヱホバの言われに臨みていふ一五 人の子よ汝の兄弟汝の兄弟たる者は汝の親族の人々にして即ちイスラエルの全家全躰なりヱルサレムに居る人々は是にむかひて汝等は遠くヱホバをはなれて居れ此地はわれらの所有としてあたへらると言ふ一六 是故に汝言ふべしヱホバかく言ひたまふ我かれらを遠く逐やりて國々に散したればその往る國々に於て暫時の間かれらの聖所となると一七 是故に言ふべし主ヱホバかく言たまふ我なんぢらを諸の民の中より集へ汝等をその散されたる國々より聚めてイスラエルの地を汝らに與へん一八 彼等は彼處に到りその諸の汚たる者とその諸の憎むべき者を彼處より取除かん一九 我かれらに唯一の心を與へ新しき靈を汝らの衷に賦けん我かれらの身の中より石の心を取さりて肉の心を與へ二〇 彼らをしてわが憲法に遵はしめ吾律法を守りて之を行はしむべし彼らはわが民となり我はかれらの神とならん二一 然どその汚れたる者とその憎むべき者の心をもておのれの心となす者等は我これが行ふところをその首に報ゆべし主ヱホバこれを言ふ二二 茲にケルビムその翼をあぐ輪その傍にありイスラエルの神の榮光その上に在す二三 ヱホバの榮光つひに邑の中より昇りて邑の東の山に立てり二四 時に靈われを擧げ神の靈に由りて異象の中に我を

カルデヤに携へゆきて俘囚者の所にいたらしむ吾見たる異象すなはちわれを離れて昇れり二五かくて我ヱホバの我にしめしたまひし言を盡く俘囚者に告たり

第一二章 一 ヱホバの言また我にのぞみて云ふ二人の子よ汝は背戻る家の中に居る彼等は見る目あれども見ず聞く耳あれども聞ず背戻る家なり三然ば人の子よ移住の器具を備へかれらの目の前にて晝の中に移れ彼らの目の前にて汝の處より他の處に移るべし彼等は背戻る家なれども或は見て考ふることあらん四汝移住の器具のごとき器具を彼等の目の前にて晝の中に持いだせ而して移住者の出ゆくがごとく彼等の目の前にて宵の中に出ゆくべし五即ちかれらの目の前にて壁をやぶりて之を其處より持いだせ六彼らの目の前にてこれを肩に負ひ黒暗の中にこれを持いだすべし汝の面を掩へ地を見るなかれ我汝を豫兆となしてイスラエルの家に示すなり七我すなはち命ぜられしごとく爲し移住の器具のごとき器具を晝の中に持いだし又宵に手をもて壁をやぶり黒暗の中にこれを持いだし彼らの目の前にてこれを肩に負り八明旦におよびてヱホバの言われに臨みて言ふ九人の子よ背戻る家なるイスラエルの家汝にむかひて汝なにを爲やと言しにあらずや一〇汝かれらに言ふべし主ヱホバかく言たまふこの負荷はヱルサレムの君主および彼等の中なるイスラエルの全家に當るなり一一汝また言ふべし我は汝等の豫兆なりわが爲るごとく彼等然なるべし彼等は虜へうつされん一二彼らの中の君主たる者黒暗のうちに物を肩に載て出ゆかん彼等壁をやぶりて其處より物を持いだすべし彼はその面を覆ひて土地を目に見ざらん一三我わが網を彼の上に打かけん彼はわが羅にかかるべし我かれをカルデヤ人の地に曳ゆきてバビロンにいたらしめん然れども彼はこれを見ずして其處に死べし一四凡て彼の四周にありて彼を助くる者およびその軍兵は皆我これを四方に散し刀刃をぬきて其後をおふべし一五吾がかれらを諸の民の中に散し國々に撒布さん時にいたりて彼らは我のヱホバなるをしるべし一六但し我かれらの中に僅少の人を遺して劍と饑饉と疫病を免れしめ彼らをしてそのおこなひし諸の憎むべき事をその到るところの民の中に述しめん彼等はわがヱホバなるを知るにいたらん一七ヱホバの言また我にのぞみて言ふ一八人の子よ汝發震て食物を食ひ戰慄と恐懼をもて水を飲め一九而してこの地の民に言べし主ヱホバ、ヱルサレムの民のイスラエルにをる者に斯いひたまふ彼等は懼れて食物を食ひ驚きて水を飲にいたるべし是はその地凡てその中に住る者の暴逆のために富饒をうしなひて荒地となるが故なり二〇人の住る邑々は荒はて國は滅亡ぶべし汝等すなはち我がヱホバなるを知ん二一ヱホバの言われに臨みて言ふ二二人の子よイスラエルの國の中に汝等いふ日は延び默示はみな空しくなれりと是何の言ぞや二三是故に汝彼等に言べし主ヱホバかくいひ給ふ我この言を止め彼等をして再びこれをイスラエルの中に言ことなからしめん即ち汝かれら

に言へ其日とその諸の默示の言は近づけりと二四イスラエルの家には此後重ねて空浮き默示と虛僞の占卜あらざるべし二五夫我はヱホバなり我わが言をいださん吾いふところは必ず成んかさねて延ることあらじ背戻る家よ汝等が世にある日に我言を發して之を成すべし主ヱホバこれを言ふ二六ヱホバの言また我にのぞみて言ふ二七人の子よ視よイスラエルの家言ふ彼が見たる默示は許多の日の後の事にして彼は遙後の事を預言するのみと二八是故にかれらに言ふべし主ヱホバかくいひたまふ我言はみな重ねて延ず吾がいへる言は成べしと主ヱホバこれを言ふなり

第一三章 一ヱホバの言われに臨みて言ふ二人の子よ預言を事とするイスラエルの預言者にむかひて預言せよ彼のおのれの心のままに預言する者等に言ふべし汝らヱホバの言を聽け三主ヱホバかくいひ給ふ彼の何をも見ずして己の心のままに行ふところの愚なる預言者は禍なるかな四イスラエルよ汝の預言者は荒墟にをる狐のごとくなり五汝等は破壞口を守らずまたイスラエルの家の四周に石垣を築きてヱホバの日に防ぎ戰はんともせざるなり六彼らは虛浮者および虛妄の占卜を見る彼等はヱホバいひたまふと言ふといへどもヱホバはかれらを遣さざるなり然るに彼らその言の成らんことを望む七汝らは空しき異象を見虛妄の占卜を宣べ吾が言ふことあらざるにヱホバいひ給ふと言ふにあらずや八是故に主ヱホバかくいひたまふ汝等空虛き事を言ひ虛僞の物を見るによりて我なんぢらを罰せん主ヱホバこれをいふ九我手はかの虛浮き事を見虛僞の事を卜ひいふところの預言者等に加はるべし彼等はわが民の會にをらずなりイスラエルの家の籍にしるされずイスラエルの地にいることをえざるべし汝等すなはち吾のヱホバなるをしるにいたらん一〇かれらは吾民を惑し平安あらざるに平安といふ又わが民の屏を築くにあたりて彼等灰砂をもて之を圬る一一是故にその灰砂を圬る者に是は圮るべしと言へ大雨くだらん雹よ降れ大風よ吹べし一二視よ屏は圮る然ば人々汝等が用ひて圬たる灰砂は何處にあるやと汝等に言ざらんや一三即ち主ヱホバかく言たまふ我憤恨をもて大風を吹せ忿怒をもて大雨を注がせ憤恨をもて雹を降せてこれを毀つべし一四我なんぢらが灰砂をもて圬たる屏を毀ちてこれを地に倒しその基礎を露にすべし是すなはち圮れん汝等はその中にほろびて吾のヱホバなるを知にいたらん一五斯われその屏とこれを灰砂にてぬれる者とにむかひてわが憤恨を洩しつくして汝等にいふべし屏はあらずなり又灰砂にてこれを圬る者もあらずなれりと一六是すなはちイスラエルの預言者等なり彼等はヱルサレムにむかひて預言をなし其處に平安のあらざるに平安の默示を見たりといへり主ヱホバこれをいふ一七人の子よ汝の民の女等の其心のままに預言する者に汝の面をむけ之にむかひて預言し一八言べし主ヱホバかくいひたまふ吾手の節々の上に小枕を縫つけ諸の大さの頭に帽子を造り蒙せて

靈魂を獵んとする者は禍なるかな汝等はわが民の靈魂を獵て己の靈魂を生しめんとするなり一九 汝等小許の麥のため小許のパンのために吾民の前にて我を汚しかの僞言を聽いる吾民に僞言を陳て死べからざる者を死しめ生べからざる者を生しむ二〇 是故に主ヱホバかくいひたまふ我汝等が用ひて靈魂を獵ところの小枕を奪ひ靈魂を飛さらしめん我なんぢらの臂より小枕を裂とりて汝らが獵ところの靈魂を釋ち其靈魂を飛さらしむべし二一 我なんぢらの帽子を裂き吾民を汝らの手より救ひいださん彼等はふたたび汝等の手に陷りて獵れざるべし汝らは吾ヱホバなるを知にいたらん二二 汝等虛僞をもて義者の心を憂へしむ我はこれを憂へしめざるなり又汝等惡者の手を強くし之をしてその惡き道を離れかへりて生命を保つことをなさしめず二三 是故に汝等は重ねて虛浮き物を見ることを得ず占卜をなすことを得ざるに至るべし我わが民を汝らの手より救ひいださん汝等すなはちわがヱホバなるを知にいたるべし

第一四章 一 爰にイスラエルの長老の中の人々我にきたりて吾前に坐しけるに二 ヱホバの言われに臨みて言ふ三 人の子よこの人々はその偶像を心の中に立しめ罪に陷いるるところの障礙をその面の前に置なり我あに是等の者の求を容べけんや四 然ば汝かれらに告げて言ふべし主ヱホバかくいひたまふ凡そイスラエルの家の人のその心の中に偶像を立しめその面のまへに罪に陷いるるところの障礙を置きて預言者に來る者には我ヱホバその偶像の多衆にしたがひて應をなすべし五 斯して我イスラエルの家の人の心を執へん是かれら皆その偶像のために我を離れたればなり六 是故にイスラエルの家に言ふべし主ヱホバかくいひたまふ汝等悔い汝らの偶像を棄てはなるべし汝等面を回らしてその諸の憎むべき物を離れよ七 凡てイスラエルの家およびイスラエルに寓るところの外國人若われを離れてその偶像を心の中に立しめ其面の前に罪に陷るるところの障礙をおきて預言者に來りその心のままに我に求むる時は我ヱホバわが心のままにこれに應ふべし八 即ち我面をその人にむけこれを滅して兆象となし諺語となし之をわが民の中より絕さるべし汝等これによりて我がヱホバなるを知るにいたらん九 もし預言者欺かれて言を出すことあらば我ヱホバその預言者を欺けるなり我かれの上にわが手を伸べ吾民イスラエルの中より彼を絕さらん一〇 彼等その罪を負ふべしその預言者の罪はかの問求むる者の罪のごとくなるべし一一 是イスラエルの民をして重ねて我を離れて迷はざらしめ重ねてその諸の愆に汚れざらしめんため又かれらの吾民となり我の彼らの神とならんためなり主ヱホバこれをいふ一二 ヱホバの言また我にのぞみて言ふ一三 人の子よ國もし悖れる事をおこなひて我に罪を犯すことあり我手をその上に伸て其杖とたのむところのパンを打碎き饑饉を之におくりて人と畜とをその中より絕ことある時には一四 其處にかのノア、ダニエル、ヨブの三人あるも只其義によりて己の生命を救ふことをうるのみな

り主ヱホバこれをいふ 一五 我もし惡き獸を國に行めぐらしめて之を子なき處となし荒野となして其獸のために其處を通る者なきに至らん時には 一六 主ヱホバ言ふ我は活く此三人そこにをるもその子女を救ふことをえず只その身を救ふことを得るのみ國は荒野となるべし 一七 又は我劍を國に臨ませて劍よ國を行めぐるべしと言ひ人と畜をそこより絶さらん時には 一八 主ヱホバいふ我は活く此三人そこにをるもその子女をすくふことをえず只その身をすくふことを得るのみ 一九 又われ疫病を國におくり血をもてわが怒をその上にそそぎ人と畜をそこより絶さらん時には 二〇 主ヱホバいふ我は活くノア、ダニエル、ヨブそこにをるもその子女を救ふことをえず只その義によりて己の生命を救ふことを得るのみ 二一 主ヱホバかくいひたまふ然ばわが四箇の嚴しき罰すなはち劍と饑饉と惡き獸と疫病をヱルサレムにおくりて人と畜をそこより絶さらんとする時は如何にぞや 二二 其中に逃れて遺るところの男子女子あり彼等携へ去らるべし彼ら出ゆきて汝等の所にいたらん汝らかれらの行爲と擧動を見ば吾がヱルサレムに災をくだせし事につきて心をやすむるにいたるべし 二三 汝ら彼らの行爲と擧動を見ばこれがためにその心をやすむるにいたりわがこれに爲たる事は皆故なくして爲たるにあらざるなるをしるにいたらん主ヱホバこれを言ふ

第一五章 一 ヱホバの言われに臨みて言ふ 二 人の子よ葡萄の樹森の中にあるところの葡萄の枝なんぞ他の樹に勝るところあらんや 三 其木物をつくるに用ふべけんや又人これを用ひて器をかくる木釘を造らんや 四 視よ是は火に投いれられて燃ゆ火もしその兩の端を燒くあり又その中間焦たらば爭でか物をつくるに勝べけんや 五 是はその全かる時すらも物を造るに用ふべからざれば況て火のこれを焚焦したる時には爭で物をつくるに用ふべけんや 六 是故に主ヱホバかく言たまふ我森の中なる葡萄の樹を火になげいれて焚く如くにヱルサレムの民をも然するなり 七 我面をかれらに向けて攻む彼らは火の中より出たれども火なほこれを燒つくすべし我面をかれらにむけて攻むる時に汝らは我のヱホバなるをしらん 八 彼等悖逆る事をおこなひしに由て我かの地を荒地となすべし主ヱホバこれを言ふ

第一六章 一 ヱホバの言また我にのぞみて言ふ 二 人の子よヱルサレムに其憎むべき事等を示して 三 言ふべし主ヱホバ、ヱルサレムに斯いひたまふ汝の起本汝の誕生はカナンの地なり汝の父はアモリ人汝の母はヘテ人なり 四 汝の誕生を言んに汝の生れし日に汝の臍帶を斷ことなく又水にて汝を洗ひ潔むることなく鹽をもて汝を擦ることなく又布に裹むことなかりき 五 一人も汝を憐み見憫をもて是等の事の一をも汝になせし者なし汝の生れたる日に人汝の生命を忌て汝を野原に棄たり 六 我汝のかたはらを通りし時汝が血の中にをりて踐るるを見汝が血の中にある時汝に生よと言り即ち我なんぢが血の中にある時に汝に生よといへり 七 我野の百卉のごとくに汝を增して千萬となせり

汝は生長て大きくなり美しき姿となるにいたり乳は堅くなり髪は長たりしが衣なくして裸なりき八 茲に我汝の傍を通りて汝を見に今は汝の時汝の愛せらるべき時なりければ我衣服の裾をもて汝を覆ひ汝の恥るところを蔽し而して汝に誓ひ汝に契約をたてたり汝すなはち吾所屬となれり主ヱホバこれを言ふ九 斯て我水をもてなんぢを洗ひ汝の血を滌ぎおとして膏を汝にぬり一〇 文繡あるものを着せ皮の鞋を穿たしめ細布を蒙らせ絹をもて汝の身を罩めり一一 而して飾物をもて汝をかざり腕環をなんぢの手にはめ金索を汝の項にかけしめ一二 鼻には鼻環耳には耳環首には華美なる冠冕をほどこせり一三 汝すなはち金銀をもて身を飾り細布と絹および文繡をその衣服となし麥粉と蜜と油とを食へり汝は甚だ美しくして遂に榮えて王の權勢に進みいたる一四 汝の美貌のために汝の名は國々にひろまれり是わが汝にほどこせしわれの飾物によりて汝の美麗極りたればなり主ヱホバこれを言ふ一五 然るに汝その美麗を恃み汝の名によりて姦淫をおこなひ凡て其傍を過る者と縱恣に姦淫をなしたり是その人の所屬となる一六 汝おのれの衣服をとりて崇邱を彩り作りその上に姦淫をおこなへり是爲べからず有べからざる事なり一七 汝はわが汝にあたへし金銀の飾の品を取り男の像を造りて之と姦淫をおこなひ一八 汝の繡衣を取りて之に纏ひ吾の膏と香をその前に陳へ一九 亦わが汝にあたへし我の食物我が用ひて汝をやしなふところの麥粉油および蜜を其前に陳へて馨しき香氣となせり是事ありしと主ヱホバいひ給ふ二〇 汝またおのれの我に生たる男子女子をとりてこれをその像にそなへて食はしむ汝が姦淫なほ小き事なるや二一 汝わが子等を殺し亦火の中を通らしめてこれに獻ぐ二二 汝その諸の憎むべき事とその姦淫とをおこなふに當りて汝が若かりし日に衣なくして裸なりしことおよび汝が血のうちにをりて蹈れしことを想はざるなり二三 主ヱホバまた言たまふ汝は禍なるかな禍なるかな二四 汝その諸の惡をおこなひし後街衢街衢に樓をしつらひ臺を造り二五 また路の辻々に臺をつくりて汝の美麗を汚辱むることを爲し凡て傍を過るところの者に足をひらきて大に姦淫をおこなふ二六 汝かの肉の大なる汝の隣人エジプトの人々と姦淫をおこなひ大に姦淫をなして我を怒らせたれば二七 我手を汝の上にのべて汝のたまはる分を減し彼の汝を惡み汝の淫なる行爲を羞るところのペリシテ人の女等の心に汝をまかせたり二八 然るに汝は厭ことなければ亦アツスリヤの人々と姦淫をおこなひしが之と姦淫をおこなひたるも尚厭ことなかりき二九 汝また大に姦淫をおこなひてカナンの國カルデヤに迄およびしが是にても尚厭ことなし三〇 主ヱホバいひたまふ汝の心如何に戀煩ふにや汝この諸の事を爲り是氣隨なる遊女の行爲なり三一 汝道の辻々に樓をしつらひ衢々に臺を造りしが金錢を輕んじたれば娼妓のごとくならざりき三二 夫淫婦はその夫のほかに他人と通ずるなり三三 人は凡て娼妓に物を贈るなるに汝はその諸の戀人に物をおくり且汝

と姦淫せんとて四方より汝に來る者に報金を與ふ三四　汝は姦淫をおこなふに當りて他の婦と反す即ち人汝を戀求むるにあらざるなり汝金錢を人にあたへて人金錢を汝にあたへざるは是その相反するところなり三五　然ば娼妓よヱホバの言を聽け三六　主ヱホバかく言たまふ汝金銀を撒散し且汝の戀人と姦淫して汝の恥處を露したるに由り又汝の憎むべき諸の偶像と汝が之にささげたる汝の子等の血の故により三七　視よ我汝が交れる諸の戀人および凡て汝が戀たる者並に凡て汝が惡みたる者を集め四方よりかれらを汝の所に集め汝の恥處を彼らに現さん彼ら汝の恥處を悉く見るべし三八　我姦淫を爲せる婦および血をながせる婦を鞫くがごとくに汝を鞫き汝をして忿怒と嫉妬の血とならしむべし三九　我汝を彼等の手に付せば彼等汝の樓を毀ち汝の臺を倒しなんぢの衣服を褫取り汝の美しき飾を奪ひ汝をして衣服なからしめ裸にならしむべし四〇　彼等群衆をひきゐて汝の所にのぼり石をもて汝を撃ち劍をもて汝を切さき四一　火をもて汝の家を焚き多くの婦女の目の前にて汝を鞫かん斯われ汝をして姦淫を止しむべし汝は亦ふたたび金錢をあたふることなからん四二　我ここに於て汝に對するわが怒を息め汝にかかはるわが嫉妬を去り心をやすんじて復怒らざらん四三　主ヱホバいひたまふ汝その若かりし日の事を記憶えずしてこの諸の事をもて我を怒らせたれば視よ我も汝の行ふところを汝の首に報ゆべし汝その諸の憎むべき事の上に此惡事をなしたるにあらざるなり四四

視よ諺語をもちふる者みな汝を指てこの諺を用ひ言ん母のごとくに女も然りと四五　汝の母はその夫と子女を棄たり汝はその女なり汝の姉妹はその夫と子女を棄たり汝はその姉妹なり汝の母はヘテ人汝の父はアモリ人なり四六　汝の姉はサマリヤなり彼その女子等とともに汝の左に住む汝の妹はソドムなり彼その女子等とともに汝の右に住む四七　汝は只少しく彼らの道に歩み彼らの憎むべきところの事等を行ひしのみにあらず汝の爲る事は皆かれらのよりも惡かりき四八　主ヱホバ言たまふ我は活く汝の妹ソドムと其女子らが爲しところは汝とその女子らが爲しところの如くはあらざりき四九　汝の妹ソドムの罪は是なり彼は傲り食物に飽きその女子らとともに安泰にをり而して難める者と貧しき者を助けざりき五〇　かれらは傲りわが前に憎むべき事をなしたれば我見てかれらを掃ひ除けり五一　サマリヤは汝の罪の半分ほども罪を犯さざりき汝は憎むべき事等を彼らよりも多く行ひ增し汝の爲たる諸の憎むべき事のために汝の姉妹等をして義きが如くならしめたり五二　然ば汝が曾てその姉妹等の蒙るべき者と定めたるところの恥辱を汝もまた蒙れよ汝が彼等よりも多くの憎むべき事をなしたるその罪の爲に彼等は汝よりも義くなれり然ば汝も辱を受け恥を蒙れ是は汝その姉妹等を義き者となしたればなり五三　我ソドムとその女等の俘囚をかへしサマリヤとその女等の俘囚をかへさん時に其と同じ虜はれたる汝の俘囚人を歸し五四　汝をして恥を蒙らしめ汝が凡て爲たるところ

の事を差しむべし汝かく彼らの慰とならん五五 汝の姉妹ソドムとその女子等は舊の様に歸りサマリヤとその女子等は舊の様に歸らん又汝と汝の女子等も舊の様にかへるべし五六 汝はその驕傲れる日には汝の姉妹ソドムの事を口に述ざりき五七 汝の惡の露れし時まで即ちスリアの女子等と凡て汝の周圍の者ペリシテ人の女等が四方より汝を嬲りて辱しめし時まで汝は是のごとくなりき五八 ヱホバいひたまふ汝の淫なる行爲と汝のもろもろの憎むべき事とは汝みづからこれを身に負ふなり五九 主ヱホバかく言たまふ誓言を輕んじて契約をやぶりたるところの汝には我汝の爲るところにしたがひて爲べし六〇 我汝の若かりし日に汝になせし契約を記憶え汝と限りなき契約をたてん六一 汝その姉妹の汝より大なる者と小き者とを得る時にはおのれの行爲をおぼえて羞ん彼等は汝の契約に屬する者にあらざれども我かれらを汝にあたへて女となさしむべし六二 我汝と契約をたてん汝すなはち吾のヱホバなるを知にいたらん六三 我なんぢの凡て行ひしところの事を赦す時には汝憶えて羞ぢその恥辱のために再び口を開くことなかるべし主ヱホバこれを言ふ

第一七章 一 爰にヱホバの言我にのぞみて言ふ二 人の子よ汝イスラエルの家に謎をかけ譬言を語りて三 言ふべし主ヱホバかく言たまふ大なる翼長き羽ありて種々の色の毛の滿たる大鷲レバノンに來りて香柏の梢を採り四 其芽の巓を摘みカナンの地にこれを持きたりて商人の邑に置きけるが五 又その地の種をとりて之を種田に播けりすなはち之を水の多き處にもちゆきて柳のごとくにこれを樹しに六 成長ちて丈卑き垂さがりたる葡萄樹となり其枝は鷲にむかひその根は鷲の下にあり遂に葡萄樹となりて芽をふき葉を出す七 此に又大なる翼多くの羽ある一箇の大鷲ありしがその葡萄樹根をこれにむかひて張り枝をこれにむかひて伸べ之をしてその植りたる地の外より水を灌がしめんとす八 抑是を善き圃に多くの水の旁に植たるは根を張り實をむすびて盛なる葡萄樹とならしめんためなりき九 なんぢ主ヱホバかく言ふといふべし是旺盛になるや鷲その根を拔きその果を絶ちて之を枯しめざらんや其芽の若葉は皆枯ん之を根より擧るには強き腕と多くの人を用ふるにおよばざるなり一〇 是は樹られたれども旺盛にならんや東風これに當らば枯果ざらんや是その生たるところの地に枯べし一一 ヱホバの言また我にのぞみて言ふ一二 背ける家に言ふべし汝等此の何たるを知ざるかと又言へ視よバビロンの王ヱルサレムに來りその王とその牧伯等を執へてこれをバビロンに曳ゆけり一三 彼また王の族の一人を取てこれと契約を立て誓言をなさしめ又國の強き者等を執へゆけり一四 是この國を卑くして自ら立つことを得ざらしめその人をして契約を守りてこれを堅うせしめんがためなりき一五 然るに彼これに背きて使者をエジプトに遣し馬と多くの人を己におくらしめんとせり彼旺盛にならんや是を爲る者逃るることをえんや彼その契約をやぶりたり爭で逃るることを得んや一六 主ヱホバ

いひたまふ我は活く必ず彼は己を王となしたる彼王の處に偕にをりてバビロンに死べし彼その王の誓言を輕んじ其契約を破りたるなり一七夫壘を築き雲梯を建てて衆多の人を殺さんとする時にはパロ大なる軍勢と衆多の人をもて彼のために戰爭をなさじ一八彼は誓言を輕んじて契約を破る彼手を與へて却て此等の事をなしたれば逃るることを得ざるべし一九故に主ヱホバかく言たまふ我は活く彼が我の誓言を輕んじ我の契約をやぶりたる事を必ずかれの首にむくいん二〇我わが網をかれの上にうちかけ彼をわが羅にとらへてバビロンに曳ゆき彼が我にむかひて爲しところの叛逆につきて彼を鞫くべし二一彼の諸の軍隊の逃脱者は皆刀に仆れ生殘れる者は八方に散さるべし汝等は我ヱホバがこれを言しなるを知にいたらん二二主ヱホバかく言まふ我高き香柏の梢の一を取てこれを樹ゑその芽の巓より若芽を摘みとりて之を高き勝れたる山に樹べし二三イスラエルの高山に我これを植ん是は枝を生じ果をむすびて榮華なる香柏となり諸の類の鳥皆その下に棲ひその枝の蔭に住はん二四是に於て野の樹みな我ヱホバが高き樹を卑くし卑き樹を高くし緑なる樹を枯しめ枯木を緑ならしめしことを知ん我ヱホバこれを言ひ之を爲なり

第一八章 一 ヱホバの言また我にのぞみて言ふ二汝等なんぞイスラエルの地に於て此諺語を用ひ父等酸き葡萄を食ひたれば子等の齒齼くと言ふや三主ヱホバいふ我は生く汝等ふたたびイスラエルに於てこの諺語をもちふることなかるべし四夫凡の靈魂は我に屬す父の靈魂も子の靈魂も我に屬するなり罪を犯せる靈魂は死べし五若人正義して公道と公義を行ひ六山の上に食をなさず目をあげてイスラエルの家の偶像を仰がず人の妻を犯さず穢れたる婦女に近づかず七何人をも虐げず質物を還し物を奪はずその食物を饑る者に與へ裸なる者に衣を着せ八利を取て貸さず息を取ず手をひきて惡を行はず眞實の判斷を人と人の間になし九わが法憲にあゆみ又吾が律例を守りて眞實をおこなはば是義者なり彼は生べし主ヱホバこれを言ふ一〇然ど彼子を生んにその子暴き者にして人の血をながし是の如き事の一箇を行ひ一一是をば凡て行はずして山の上に食をなし人の妻を犯し一二惱める者と貧しき者を虐げ物を奪ひ質物を還さず目をあげて偶像を仰ぎ憎むべき事をおこなひ一三利をとりて貸し息を取ば彼は生べきや彼は生べからず彼この諸の憎むべき事をなしたれば必ず死べしその血はかれに歸せん一四又子生れんに其子父のなせる諸の罪を視しかども視て斯有ことを行はず一五山の上に食をなさず目をあげてイスラエルの家の偶像を仰がず人の妻を犯さず一六何人をも虐げず質物を存留めず物を奪はず饑る者にその食物を與へ裸なる者に衣を着せ一七その手をひきて惱める者を苦めず利と息を取ずわが律法を行ひわが法度に歩まば彼はその父の惡のために死ことあらじ必ず生べし一八その父は甚だしく人を掠めその兄弟を痛く虐げその民の中に善らぬ事をなした

るに由てその惡のために死べし一九しかるに汝等は子なんぞ父の惡を負ざるやと言ふ夫子は律法と公義を行ひわが凡ての法度を守りてこれを行ひたれば必ず生べし二〇罪を犯せる靈魂は死べし子は父の惡を負ず父は子の惡を負ざるなり義人の義はその人に歸し惡人の惡はその人に歸すべし二一然ど惡人もしその凡て行ひしところの惡を離れわが諸の法度を守り律法と公義を行ひなばかならず生ん死ざるべし二二その爲しところの咎は皆記念られざるべしその爲し義き事のために彼は生べし二三主ヱホバ言たまふ我爭で惡人の死を好まんや寧彼がその道を離れて生んことを好まざらんや二四若義人その義をはなれて惡を行ひ惡人の爲る諸の憎むべき事をなさば生べきや其なせし義き事は皆記念られざるべし彼はその爲る咎とその犯せる罪とのために死べし二五然るに汝等主の道は正しからずと言ふ然ばイスラエルの家よ聽け吾道正しからざるやその正しからざる者は汝らの道にあらずや二六若義人その義をはなれて惡を爲し其がために死ることあらば是その爲る惡のために死るなり二七若惡人その爲る惡をはなれて律法と公義を行はばその靈魂を生しむることをえん二八彼もし視てその行ひし諸の咎を離れなば必ず生ん死ざるべし二九然るにイスラエルの家は主の道は正しからずといふイスラエルの家よわが道正しからざるやその正しからざる者は汝らの道にあらずや三〇主ヱホバいひ給ふ是故に我汝らをば各その道にしたがひて審くべし汝らその諸の咎を悔改めよ然らば惡汝らを躓かせて滅ぼすことなかるべし三一汝等その行ひし諸の罪を棄去り新しき心と新しき靈魂を起すべしイスラエルの家よ汝らなんぞ死べけんや三二我は死者の死を好まざるなり然ば汝ら悔て生よ主ヱホバこれを言ふ

第一九章 一汝イスラエルの君等のために哀の詞をのべて二言ふべし汝の母なる牝獅は何故に牡獅の中に伏し小獅の中にその子を養ふや三彼その一の子を育てたれば小獅となりて食を攫ことを學ひ遂に人を食へり四國々の人これの事を聞きこれを陷阱にて執へ鼻環をほどこしてこれをエジプトの地にひきいたれり五牝獅姑く待しがその望を失ひしを見たれば又一個の子を取てこれを小獅とならしむ六是すなはち牝獅の中に歩みて小獅となり食を攫ことを學ひしが亦人を食ひ七其寡婦をしりその邑々を滅せりその咆哮聲によりてその地とその中に盈る者荒たり八是をもて四方の國人その國々より攻來り網をこれにうちかけ陷阱にてこれを執へ九鼻環をほどこして籠にいれ之をバビロンの王の許に曳いたりて城の中に携へ入れ其聲を再びイスラエルの山々に聞えざらしむ一〇汝の母は汝の血にして水の側に植たる葡萄樹のごとし水の多きがために結實多く蔓はびこれり一一是に強き枝ありて君王等の杖となすべし是の長は雲に至りその衆多の枝のために高く聳えて見へたり一二然るに是怒をもて拔れて地に擲たる東風その實を吹乾かしその強き枝は折れて枯れ火に焚る一三今これは荒野にて乾ける水なき地に植りてあり一

四その枝の芽より火いでてその果を燒けば復強き枝の君王等の杖となるべき者其になし是哀の詞なり哀の詞となるべし

第二〇章 一七年の五月十日にイスラエルの長老の中の人々ヱホバに問んとて來りてわが前に坐しけるに二ヱホバの言我にのぞみて云ふ三人の子よイスラエルの長老等に告て之にいふべし主ヱホバかく言ふ汝等我に問んとて來れるや主ヱホバいふ我は活く我汝らの問を容じと四汝かれらを鞫かんとするや人の子よ汝かれらを鞫かんとするや彼等の先祖等のなしたる憎むべき事等をかれらに知しめて五言べし主ヱホバかくいふ我イスラエルを選みヤコブの家の裔にむかひてわが手をあげエジプトの地にて我をかれらに知せかれらにむかひて吾手をあげて我は汝らの神ヱホバなりと言し日六その日に我かれらにむかひて吾手をあげエジプトの地よりかれらをいだし吾がかれらのために求め得たるその乳と蜜の流るる地に導かんとせり是諸の地の中の美しき者なり七而して我かれらに言けらく各人その目にあるところの憎むべき事等を棄てよエジプトの偶像をもてその身を汚すなかれ我は汝らの神ヱホバなりと八然るに彼らは我に背きて我に聽したがふことを好まざりき彼等一人もその目にあるところの憎むべき者を棄てずエジプトの偶像を棄てざりしかば我エジプトの地の中において吾憤恨をかれらに注ぎわが忿怒をかれらに洩さんと言り九然れども我わが名のために事をなして彼らをエジプトの地より導きいだせり是吾名の異邦人等の前に汚されざらんためなりその異邦人等の中に彼等居り又その前にて我おのれを彼等に知せたり一〇すなはち我エジプトの地より彼等を導き出して曠野に携ゆき一一わが法憲をこれに授けわが律法をこれに示せり是は人の行ひて之に由て生べき者なり一二我また彼らに安息日を與へて我と彼らの間の徴となしかれらをして吾ヱホバが彼らを聖別しを知しめんとせり一三然るにイスラエルの家は曠野にて我に背き人の行ひて之によりて生べき者なるわが法度にあゆまず吾が律法を輕んじ大に吾が安息日を汚したれば曠野にてわが憤恨をかれらに注ぎてこれを滅さんと言ひたりしが一四我わが名のために事をなせり是わが彼らを導きいだして見せしところの異邦人等の目のまへにわが名を汚されざらしめんためなりき一五但し我曠野にて彼らにむかひて吾手をあげ彼らをわが與へしその乳と蜜の流るる地に導かじと誓へり是は諸の地の中の美しき者なり一六是かれら心にその偶像を慕ひてわが律法を輕んじ棄てわが法憲にあゆまずわが安息日を汚したればなり一七然りといへども吾かれらを惜み見てかれらを滅ぼさず曠野にて彼らを絶さざりき一八我曠野にてかれらの子等に言り汝らの父の法度にあゆむなかれ汝らの律法を守るなかれ汝らの偶像をもて汝らの身を汚すなかれ一九我は汝らの神ヱホバなり吾法度にあゆみ吾律法を守りてこれを行ひ二〇わが安息日を聖くせよ是は我と汝らの間の徴となりて汝らをして我が汝らの神ヱホバなるを知しめんと二一然るにその子等我に

そむき人の行ひてこれによりて活べき者なるわが法度にあゆまず吾律法をまもりて之をおこなはずわが安息日を汚したれば我わが憤恨を彼らにそそぎ曠野にてわが忿怒をかれらに洩さんと言たりしが二二吾手を翻してわが名のために事をなせり是わが彼らを導き出して見せしところの異邦人等の目のまへにわが名を汚されざらしめんためなりき二三但し我汝らを國々に散し處々に撒んと曠野にてかれらにむかひて我手を擧たり二四是かれらわが律法を行はずわが法度を輕じわが安息日をけがしその父の偶像を目に慕ひたればなり二五我かれらに善らぬ法度を與へかれらが由て活べからざる律法を與へ二六彼らをしてその禮物によりて己の身を汚さしむ即ちかれらその長子をして火の中を通過しめたり是は我彼らを滅し彼らをして我のヱホバなるを知しめんためなり二七然ば人の子よイスラエルの家につげて之にいふべし主ヱホバかくいひたまふ彼らの父等は更にまた不忠の罪ををかし我を瀆せり二八我わが彼らに與へんと手をあげし此地にかれらを導きいれしに彼ら諸の高丘と諸の茂樹を尋ね得てその犠牲を其處に供へその憤らしき禮物をそこに獻げその馨しき佳氣をそこに奉つりその神酒をそこに灌げり二九我かれらに言り汝らが往ところの崇き處は何なるやと其名は今日にいたるまでバマと言ふなり三〇この故にイスラエルの家に言ふべし主ヱホバかくいひたまふ汝らの先祖の途をもて汝らはその身を汚し彼等の憎むべき物をしたひてこれと姦淫を行ふにあらずや三一汝等はその禮物を獻げその子女に火の中を通らしめて今日にいたるまで汝らの諸の偶像をもてその身を汚すなり然ばイスラエルの家よ我なんぢらの問を容るべけんや主ヱホバいふ我は活く我は汝らの問を容ざるなり三二汝ら我儕は木と石に事へて異邦人の如くなり國々の宗族のごとくならんと言ば汝らの心に起るところの事は必ず成ざるべし三三主ヱホバいふ我は生く我かならず強き手と伸たる腕をもて怒を注ぎて汝らを治めん三四我強き手と伸たる腕をもて怒を注ぎて汝らを國々より曳いだし汝らが散れたる處々より汝らを集め三五國々の曠野に汝らを導き其處にて面をあはせて汝らを鞫かん三六主ヱホバいふ我エジプトの曠野にて汝らの先祖等を鞫きしごとくに汝らを鞫くべし三七我なんぢらをして杖の下を通らしめ契約の索に汝らを入しめ三八汝らの中より背ける者および我に悖れる者を別たんその寓れる地より我かれらをいだすべし彼らはイスラエルの地に來らざるべし汝らすなはち我のヱホバなるを知ん三九然ばイスラエルの家よ主ヱホバかくいふ汝等おのおの往てその偶像に事へよ然ど後には汝らかならず我に聽て重てその禮物と偶像をもてわが名を汚さざるべし四〇主ヱホバいふ吾が聖山の上イスラエルの高山の上にてイスラエルの全家その地の者皆我に事へん其處にて我かれらを悦びて受納ん其處にて我なんぢらの獻物および初成の禮物すべて汝らが聖別たる者を求むべし四一我汝らを國々より導き出し汝らが散されたる處々より汝ら

を集むる時馨しき香氣のごとくに汝らを悦びて受納れ汝らによりて異邦人等の目のまへに我の聖ことをあらはすべし**四二**我が汝らをイスラエルの地すなはちわが汝らの先祖等にあたへんと手をあげしところの地にいたらしめん時に汝等は我のヱホバなるを知るにいたらん**四三**汝らは其身を汚したるところの汝らの途と汝らのもろもろの行爲を彼處にて憶え其なしたる諸の惡き作爲のために自ら恨み視ん**四四**イスラエルの家よ我汝らの惡き途によらず汝らの邪なる作爲によらずして吾名のために汝等を待はん時に汝らは我のヱホバなるを知るにいたらん主ヱホバこれを言ふなり**四五**ヱホバの言また我にのぞみて言ふ**四六**人の子よ汝の面を南方に向け南にむかひて言を垂れ南の野の森の事を預言せよ**四七**すなはち南の森に言ふべしヱホバの言を聽け主ヱホバかく言ふ視よ我なんぢの中に火を燃さん是なんぢの中の諸の青樹と諸の枯木を焚べしその烈しき火焔消ることなし南より北まで諸の面これがために燒ん**四八**肉ある者みな我ヱホバのこれを燒しなるを見ん是は消ざるべし**四九**我是において言り嗚呼主ヱホバよ人われを指て言ふ彼は譬言をもて語るにあらずやと

第二一章 **一**ヱホバの言われにのぞみて言ふ**二**人の子よ汝の面をヱルサレムに向け聖き處々にむかひて言を垂れイスラエルの地にむかひて預言し**三**イスラエルの地に言ふべしヱホバかく言ふ視よ我汝を責め吾刀を鞘より拔はなし義者と惡者とを汝の中より絶ん**四**我義者と惡者とを汝の中より絶んとすればわが刀鞘より脱出て南より北までの凡て肉ある者を責ん**五**肉ある者みな我ヱホバのその刀を鞘より拔はなちしを知らん是は歸りをさまらざるべし**六**人の子よ腰の碎くるまでに歎き彼らの目のまへにて痛く歎け**七**人汝に何て歎くやと言ば汝言べし來るところの風聞のためなり心みな鎔け手みな痿え魂みな弱り膝みな水とならん視よ事いたれりかならず成ん主ヱホバこれを言ふ**八**ヱホバの言我にのぞみて言ふ**九**人の子よ預言して言ふべしヱホバかく言ふ劍あり研ぎ且磨きたる劍あり**一〇**是は大に殺す事をなさんがために研てあり光り閃かんがために磨きてあり我子の杖は萬の樹を藐視ずとて我等喜ぶべけんや**一一**是を手に執んために與へて磨かしむ是劍は殺す者の手に付さんために之を研かつ磨かしむるなり**一二**人の子よ叫び哭け其は是わが民の上に臨みイスラエルの諸の牧伯等の上に臨めばなり彼らはわが民とともに劍に付る故に汝腿を撃べし**一三**その試すでに成る若かの藐視ずるところの杖きたらずば如何ぞや主ヱホバこれを言ふ**一四**人の子よ汝預言し手を拍べし劍人を刺透すところの劍三倍に働かん是は人を刺透し大なる者を殺すところの劍にして彼らを責る者なり**一五**彼らの心を鎔し礙く物を增んがために我拔身の劍をその諸の門に立つ嗚呼是は光ひらめき脱いでて人を殺さんとす**一六**汝合して右に向へ進んで左に向へ汝の刃の向ふところに隨へ**一七**我また吾手を拍ちわが怒を靜めん我ヱホバこれを言ふなり**一八**ヱホバの言また我にのぞみて言ふ**一九**人の子よバビロ

ンの王の劍の由て來るべき二の途を設けよ其二の途を一の國より出しめて道標の記號を書き邑の途の首處にこれを書くべし二〇 汝またアンモンの子孫のラバとユダの堅き城の邑ヱルサレムとに劍のきたるべき途を設けよ二一 バビロンの王その道の首處その途の岐處に止りて占卜をなし箭を搖りテラピムに問ひ肝を察べをるなり二二 彼の右にヱルサレムといふ占卜いづ云く破城槌を備へ口をひらきて喊き殺し聲をあげて吶喊を作り門にむかひて破城槌を備へ壘をきづき雲梯を建べしと二三 是はかれらの目には虛僞の占考と見ゆ聖き誓言かれらに在ばなり然れども彼罪を憶ひおこさしむ即ちかれらは取るべし二四 是故に主ヱホバかく言ふ汝ら既にその罪を憶おこさしめて汝らの愆著明になりたれば汝らの罪その諸の行爲に顯る汝ら既に憶いださるれば必ず手に執へらるべし二五 汝刺透さるる者罪人イスラエルの君主よ汝の罪その終を來らしめて汝の罰せらるる日至る二六 主ヱホバかく言ふ冕旒を去り冠冕を除り離せ是は是ならざるべし卑き者は高くせられ高き者は卑くせられん二七 我顚覆をなし顚覆をなし顚覆を爲ん權威を持べき者の來る時まで是は有ことなし彼に我之を與ふ二八 人の子よ汝預言して言べし主ヱホバ、アンモンの子孫とその嘲笑につきて斯言ふと即ち汝言べし劍あり劍あり是殺すことのために拔てあり滅すことのために磨きありて光ひらめくなり二九 人なんぢに虛浄を預言し汝に假僞の占考を示して汝をその殺さるる惡人の頸の上に置んとす彼らの罪その終を來らしめて彼らの罰せらるる日いたる三〇 これをその鞘にかへし納めよ汝の造られし處なんぢの生れし地にて我汝を鞫き三一 わが怒を汝に斟ぎ吾憤恨の火を汝にむかひて燃し狂暴人滅すことに巧なる者の手に汝を付すべし三二 汝は火の薪となり汝の血は國の中にあらん汝は重ねて憶えらるることなかるべし我ヱホバこれを言ばなり

第二二章 一 ヱホバの言われに臨みて言ふ二 人の子よ汝鞫かんとするや此血を流すところの邑を鞫かんとするや汝これにその諸の憎むべき事を示して三 言へ主ヱホバかく言ふ己の中に血を流してその罰せらるる時を來らせ己の中に偶像を作りてその身を汚すところの邑よ四 汝はその流せる血によりて罪を得その作れる偶像をもて身を汚し汝の日を近づかせすでに汝の年にいたれり是故に我汝を國々の嘲となし萬國の笑となさしむべし五 汝に近き者も遠き者も汝が名の汚れたると混亂の多きとを笑はん六 視よイスラエルの君等各その力にしたがひて血を流さんと汝の中にをる七 彼ら汝の中にて父母を賤め汝の中にて他國の人を虐げ汝の中にて孤兒と寡婦を惱ますなり八 汝わが聖き物を賤めわが安息日を汚す九 人を讒づる者血を流さんと汝の中にあり人汝の中にて山の上に食をなし汝の中にて邪淫をおこなひ一〇 汝の中にてその父の妻に交り汝の中にて月經のさはりに穢れたる婦女を犯す一一 又汝の中にその鄰の妻と憎むべき事をおこなふものあり邪淫をおこなひてその嫁を犯すものありその

父の女なる己の姊妹を犯すものあり一二人汝の中にて賄賂をうけて血を流すことをなすなり汝は利と息を取り汝の隣の物を掠め取り又我を忘る主ヱホバこれを言ふ一三見よ我汝が掠めとる事をなし且血を汝の中に流すによりて我手を拍つ一四我が汝を攻る日には汝の心堅く立ち汝の手強くあることを得んや我ヱホバこれを言ひこれをなすなり一五我汝を異邦の中に散し國々の中に播き全く汝の汚穢を取のぞくべし一六汝は己の故によりて異邦人の目に汚れたる者と見えん而して汝我のヱホバなるを知べし一七ヱホバの言また我にのぞみて言ふ一八人の子よイスラエルの家は我に渣滓のごとくなれり彼等は凡て爐の中の銅錫　鐵　鉛のごとし彼らは銀の渣滓のごとく成れり一九此故に主ヱホバかく言ふ汝らは皆渣滓となりたれば視よ我なんぢらをヱルサレムの中に集む二〇人の銀　銅　鐵　鉛錫を爐の中に集め火を吹かけて鎔すが如く我怒と憤をもて汝らを集め入て鎔すべし二一即ち我汝らを集め吾怒の火を汝らに吹かけん汝らはその中に鎔ん二二銀の爐の中に鎔るがごとくに汝らはその中に鎔け我ヱホバが怒を汝らに斟ぎしを知にいたらん二三ヱホバの言われに臨みて言ふ二四人の子よ是に言ふべし汝は怒の日に日も照らず雨もふらざる地なり二五預言者等の徒黨その中にありその食を撕くところの吼ゆる獅子のごとくに彼らは靈魂を呑み財寶と貴き物を取り寡婦をその中に多くす二六その祭司等はわが法を犯しわが聖き物を汚し聖きと聖からざるとの區別をなさず潔きと穢たるとの差別を教へずその目を掩ひてわが安息日を顧みず我はかれらの中に汚さる二七その中にある公伯等は食を撕くところの豺狼のごとくにして血をながし靈魂を滅し物を掠めとらんとす二八その預言者等は灰砂をもて是等を塗り虛浮物を見偽の占卜を人になしヱホバの告あらざるに主ヱホバかく言たまふと言ふなり二九國の民は暴虐をおこなひ奪ふ事をなし難める者と貧き者を掠め道に反きて他國の人を虐ぐ三〇我一箇の人の國のために石垣を築き我前にあたりてその破壞處に立ち我をして之を滅さしめざるべき者を彼等の中に尋れども得ざるなり三一主ヱホバいふ是故に我わが怒を彼らに斟ぎわが憤の火をもて彼らを滅し彼らの行爲をその首に報ゆ

第二三章一ヱホバの言われに臨みて言ふ二人の子よ爰に二人の婦女あり一人の母の女子なり三彼等エジプトにおいて淫を行ひその少き時に淫を行へり即ち彼處において人かれらの乳を拈り彼處においてその處女の乳房に觸る四その名は姊はアホラ妹はアホリバと云ふ彼ら我に歸して男子女子を生り彼らの本名はアホラはサマリヤと言ひアホリバはヱルサレムと云ふなり五アホラは我有たる間に淫を行ひてその戀人等に焦れたり是すなはちその隣なるアツスリヤ人にして六紫の衣を着る者牧伯たる者督宰たる者なり是等は皆美麗き秀でたる人馬に乘る者なり七彼凡てアツスリヤの秀でたる者と淫を行ひ且その焦れたる諸の者すなはちその諸の偶像をもて其身を汚せり八彼またエジプ

トよりの淫行を捨ざりき即ち彼の少き時に彼ら彼と寢ねその處女の乳房にさはりその淫慾を彼の身の上に洩せり九是故に我彼をその戀人の手に付しその焦れたるアッスリヤの子孫の手に付せり一〇是に於て彼等かれの陰所を露しその子女を奪ひ劍をもて彼を殺して婦人の中にその名を聞えしめその身の上に鞫を行へり一一彼の妹アホリバこれを見彼よりも甚だしくその慾を縱恣にしその姉の淫行よりもましたる淫行をなし一二その隣なるアッスリヤの人々に戀焦れたり彼らはすなはち牧伯たる者督宰たる者華美に粧ひたる者馬に騎る者にして皆美しき秀でたる者なり一三我かれがその身を汚せしを見たり彼らは共に一の途をあゆめり一四彼その淫行を增り彼壁に彫つけたる人々を見たり是すなはち朱をもて壁に彫つけたるカルデヤ人の像にして一五腰には帶を結び首には垂さがれる帓巾を戴けり是等は皆君王たる者の形ありてその生れたる國なるカルデヤのバビロン人に似たり一六彼その目に是等を見てこれに戀焦れ使者をカルデヤにおくりて之にいたらしむ一七是に於てバビロンの人々彼の許にきたりて戀の床に就きその淫行をもて彼を汚したりしが彼らにその身を汚さるるにおよびて彼その心にかれらを疎んず一八彼その淫行を露しその陰所を顯したれば我心彼を疎んず吾心かれの姉を疎んじたるがごとし一九彼その淫行を增しその少き日にエジプトに於て淫をおこなひし事を憶え二〇彼らの戀人に焦るその人の肉は驢馬の肉のごとく其精は馬の精のごとし二一汝は己の少き時にエジプト人が汝の處女の乳房のために汝の乳にさはりたる時の淫行を顧みるなり二二この故に主ヱホバかく言ふアホリバよ我汝が心に疎んずるに至りしところの戀人等を激して汝を攻しめ彼らをして四方より汝に攻きたらしむべし二三即ちバビロンの人々およびカルデヤの諸の人々ペコデ、ショワ、コア並にアッスリヤの諸の人々美しき秀でたる人々牧伯等および督宰等大君および名高き人凡て馬に騎る者二四鋒車および輪を持ち衆多の民をひきゐて汝に攻め來り大楯小楯および兜をそなへて四方より汝に攻かからん我裁判をかれらに委ぬべし彼らすなはち其律法によりて汝を鞫かん二五我汝にむかひてわが嫉妬を發すれば彼ら怒をもて汝を待ひ汝の鼻と耳を切とるべし汝のうちの存れる者は劍に仆れん彼ら汝の子女を奪ふべし汝の中の殘れる者は火に燒ん二六彼ら汝の衣を剝脱り汝の美しき妝飾を取べし二七我汝の淫行を除き汝がエジプトの地より行ひ來れるところの邪淫を除き汝をして重て彼らに目をつけざらしめ再びエジプトの事を憶はざらしめん二八主ヱホバかく言ふ視よ我汝が惡む者の手汝が心に疎ずる者の手に汝を付せば二九彼ら怨憎をもて汝を待ひ汝の得たる物を盡く取り汝を赤裸に成おくべし是をもて汝が淫をおこなへる陰所露にならん汝の淫行と邪淫もしかり三〇汝異邦人を慕ひて淫をおこなひ彼らの偶像をもて身を汚したるに由て是等の事汝におよぶなり三一汝その姉の途に歩みたれば我かれの杯を汝の

手に交す三二主ヱホバかく言ふ汝その姉の深き大なる杯を飲べし是は笑と嘲を充す者なり三三醉と憂汝に滿ちん汝の姉サマリヤの杯は駭異と滅亡の杯なり三四汝これを飲み乾しこれを吸つくしその碎片を咬み汝の乳房を摘去ん我これを言ふと主ヱホバ言ふ三五然ば主ヱホバかく言ふ汝我を忘れ我を後に棄たれば汝またその淫行と邪淫の罪を負べし三六斯てヱホバ我にいひたまふ人の子よ汝アホラとアホリバを鞫かんとするや然らば彼らにその憎むべき事等を示せ三七夫彼らは姦淫をおこなへり又血その手にあり彼らその偶像と姦淫をおこなひ又その我に生たる男子等に火の中をとほらしめてこれを燒り三八加之また是をなせり即ち彼ら同日にわが聖處を汚しわが安息日を犯せり三九彼らその偶像のために男子等を宰りしその日にわが聖處に來りてこれを汚し斯わが家の中に事をなせり四〇且又彼らは使者をやりて遠方より人を招きて至らしむ其人々のために汝身を洗ひ目を畫き妝飾を着け四一華美なる床に坐し臺盤をその前に備へその上にわが香とわが膏を置り四二斯て群衆の喧噪その中に靜りしがその多衆の人々の上にまた曠野よりサバ人を招き寄たり彼らは手に腕環をはめ首に美しき冠を戴けり四三我かの姦淫のために衰弱たる女の事を云り今は早彼の姦淫その姦淫をなしをはらんかと四四彼らは遊女の所にいるごとくに彼の所に入たり斯かれらすなはち淫婦アホラとアホリバの所に入ぬ四五義人等姦婦の律法に照し故殺の律法に照して彼らを鞫かん彼らは姦婦にしてまたその手に血あればなり四六主ヱホバかく言ふ我群衆を彼等に攻きたらしめ彼らを是に付して虐と掠にあはしめん四七群衆かれらを石にて擊ち劍をもて斬りその子女を殺し火をもてその家を燒べし四八斯我この地に邪淫を絶さん婦女みな自ら警めて汝らのごとくに邪淫をおこなはざるべし四九彼ら汝らの邪淫の罪を汝らに報いん汝らはその偶像の罪を負ひ而して我の主ヱホバなるを知にいたるべし

第二四章一九年の十月十日にヱホバの言我にのぞみて言ふ二人の子よ汝此日すなはち今日の名を書せバビロンの王今日ヱルサレムを攻をるなり三汝背ける家に譬喩をかたりて之に言へ主ヱホバかく言たまふ釜を居ゑ居ゑてこれに水を斟いれ四其肉の凡て佳き所を集めて股と肩とを之に入れ佳き骨をこれに充し五羊の選擇者を取れ亦薪一束を取り下に入れて骨を煮釜を善く煮たて亦その中の骨を煮よ六是故に主ヱホバかく言ふ禍なるかな血の流るる邑銹のつきたる釜その銹これを離れざるなり肉を一箇一箇に取いだせ之がために籤を掣べからず七彼の血はその中にあり彼乾ける磐の上にこれを置りこれを土にそそぎて塵に覆はれしめず八我怒を來らせ仇を復さんがためにその血を乾ける磐の上に置て塵に覆はれざらしめたり九是故に主ヱホバかく言ふ禍なるかな血の流るる邑我またその薪の束を大にすべし一〇薪を積かさね火を燃し肉を善く煮てこれを煮つくしその骨をも燒しむべし一一而して釜を空にして炭火の上に置きそ

の銅をして熱くなりて焼しめ其汚穢をして中に鎔しめその銹を去しむべし一二既に手を盡したれどもその大なる銹さらざればその銹を火に投棄べし一三 汝の汚穢の中に淫行あり我汝を淨めんとしたれども汝淨まらざりしに因てわが怒を汝に洩しつくすまでは汝その汚穢をはなれて淨まることあらじ一四 我ヱホバこれを言り是至る我これを爲べし止ず惜まず悔ざるなり汝の道にしたがひ汝の行爲にしたがひて彼ら汝を鞫かん主ヱホバこれを言ふ一五 ヱホバの言われに臨みて言ふ一六 人の子よ我頓死をもて汝の目の喜ぶ者を取去ん汝哀かず泣ず涙をながすべからず一七 聲をたてずして哀け死人のために哀哭をなすなかれ冠物を戴き足に鞋を穿べし鬚を掩ふなかれ人のおくれる食物を食ふべからず一八 朝に我人々に語りしが夕にわが妻死ね明朝におよびて我命ぜられしごとくなせり一九 茲に人々我に言けるは此汝がなすところの事は何の意なるや我らに告ざるや二〇 我かれらに言けるはヱホバの言我にのぞみて言ふ二一 イスラエルの家にいふべし主ヱホバかく言ふ視よ我汝らの勢力の榮 汝らの目の喜愛汝らの心の望なるわが聖所を汚さん汝らが遺すところの子女等は劍に仆れん二二 汝らもわが爲るごとくなし鬚を覆はず人のおくれる食物を食はず二三 首に冠物を戴き足に履を穿き哀かず泣ずその罪の中に瘦衰へて互に呻かん二四 斯エゼキエル汝らに兆とならん彼がなしたるごとく汝ら爲ん是事の至らん時に汝ら我の主ヱホバなるを知べし二五 人の子よわが彼らの力かれらの樂むところの榮その目の喜愛その心の望その子女を取去る日二六 その日に逃亡者汝の許に來り汝の耳に告ることあらん二七 その日に汝逃亡者にむかひて口を啓き語りて再び默せざらん斯汝かれらに兆となるべし彼らは遂に我のヱホバなるを知ん

第二五章一 ヱホバの言我に臨みて言ふ二 人の子よ汝の面をアンモンの人々に向けこれに向ひて預言し三 アンモンの人々に言べし汝ら主ヱホバの言を聽け主ヱホバかく言ひたまふ汝わが聖處の汚さるる事につきイスラエルの地の荒さるる事につき又ユダの家の虜へ移さるることにつきて嗚呼心地善しと言り四 是故に視よ我汝を東方の人々に付して所有と爲さしめん彼等汝の中に畜圏を設け汝の中にその住宅を建て汝の作物を食ひ汝の乳を飮ん五 ラバをば我駱駝を豢ふ地となしアンモンの人々の地をば羊の臥す所となすべし汝ら我のヱホバなるを知にいたらん六 主ヱホバかく言たまふ汝イスラエルの地の事を見て手を拍ち足を蹈み傲慢を極めて心に喜べり七 是故に視よ我わが手を汝に伸べ汝を國々に付して掠奪に遭しめ汝を國民の中より絶ち諸國に斷し滅すべし汝我のヱホバなるを知るにいたらん八 主ヱホバかく言たまふモアブとセイル言ふユダの家は他の諸の國と同じと九 是故に我モアブの肩を闢くべし即ちその邑々その最遠の邑にして國の莊嚴なるベテエシモテ、バアルメオンおよびキリヤタイムよりこれを闢き一〇 之をアンモンの人々に添て東方

の人々に與へその所有となさしめアンモンの人々をして國々の中に記憶らるること无しめん一一我モアブに鞫を行ふべし彼ら我のヱホバなるを知にいたらん一二主ヱホバかく言たまふエドムは怨恨をふくんでユダの家に事をなし且これに怨を復して大に罪を得たり一三是故に主ヱホバかく言たまふ我エドムの上にわが手を伸して其中より人と畜を絶去り之をテマンより荒地となすべしデダンの者は劍に仆れん一四我わが民イスラエルの手をもてエドムにわが仇を報いん彼らわが怒にしたがひわが憤にしたがひてエドムに行ふべしエドム人すなはち我が仇を復すなるを知ん主ヱホバこれを言ふ一五主ヱホバかく言たまふペリシテ人は怨を含みて事をなし心に傲りて仇を復し舊き恨を懷きて滅すことをなせり一六是故に主ヱホバかく言たまふ視よ我ペリシテ人の上に手を伸べケレテ人を絶ち海邊に遺れる者を滅すべし一七我怒の罰をもて大なる復仇を彼らに爲ん我仇を彼らに復す時に彼らは我のヱホバなるを知べし

第二六章一十一年の月の首の日にヱホバの言我にのぞみて言ふ二人の子よツロはヱルサレムの事につきて言り嗚呼心地よし諸の國民の門破る是我に移るならん我は豐滿になるべし彼は荒はてたりと三是故に主ヱホバかく言たまふツロよ我汝を攻め海のその波濤を起すが如く多くの國人を汝に攻きたらしむべし四彼らツロの石墻を毀ちその櫓を倒さん我その塵を拂ひ去りて是を乾ける磐と爲べし五是は海の中の網を張る處とならん我これを言ばなりと主ヱホバいひたまふ是は諸の國人に掠めらるべし六その野にをる女子等は劍に殺されん彼らすなはち我のヱホバなるを知べし七主ヱホバかく言たまふ視よ我王の王なるバビロンの王ネブカデネザルをして馬車騎兵群衆および多くの民を率て北よりツロに攻きたらしむべし八野にをる汝の女子等をば彼劍にかけて殺し又汝にむかひて雲梯を建て汝にむかひて壘を築き汝にむかひて干を備へ九破城槌を汝の石垣に向けその斧をもて汝の櫓を打碎かん一〇その衆多の馬の煙塵汝を覆はん彼等敝れたる城に入るごとくに汝の門々に入來らん時その騎兵と輪と車の聲のために汝の石垣震動べし一一彼その馬の蹄をもて汝の諸の衢を踏あらし劍をもて汝の民を殺さん汝の榮光の柱地に仆るべし一二彼ら汝の財寶を奪ひ汝の商貨を掠め汝の石垣を打崩し汝の樂き舘を毀ち汝の石と木と土を水に沈めん一三我汝の歌の聲を止めん汝の琴の音は復聞えざるべし一四我汝を乾ける磐となさん汝は網を張る處となり再び建ことなかるべし我ヱホバこれを言ふと主ヱホバ言たまふ一五主ヱホバ、ツロにかく言たまふ島々汝の仆るる聲 手負の呻吟 および汝の中の殺戮によりて震動ざらんや一六海の君主等皆その座を下り朝服を脱ぎ繡ある衣を去り恐懼を身に纏ひ地に坐し時となく怖れ汝の事を驚かん一七彼ら汝の爲に哀の詞を擧て汝に言ふべし汝海より出たる住處名の高き邑自己もその居民も共に海に於て勢力ある者その凡の居民に己を恐れしむる者よ汝如何にして亡びたるや一八

それ島々は汝の仆る日に震ひ海の島々は汝の亡ぶるに驚くなり一九主ヱホバかく言たまふ我汝を荒たる邑となし人の住はざる邑々のごとく爲し洋海を沸あがらしめて大水に汝を掩沒しめん時二〇汝を墓に往る者等の所昔時の民の所に下し汝をして下の國に住しめ古昔よりの墟址に於て彼の墓に下れる者等とともに居しめ汝の中に復人の住こと无らしむべし而して我活る人の地に榮を創造いださん二一我汝をもて人の戒懼となすべし汝は復有ることなし人汝を尋るも終に汝を看ざるべし主ヱホバこれを言ふなり

第二七章一ヱホバの言また我に臨みて言ふ二人の子よ汝ツロのために哀の詞を宣べ三ツロに言べし汝海の口に居りて諸の國人の商人となり多衆の島々に通ふ者よ主ヱホバかく言たまふツロよ汝言ふ我の美は極れりと四汝の國は海の中にあり汝を建る者汝の美を盡せり五人セニルの樅をもて船板を作りレバノンより香柏を取て汝のために檣を作り六バシヤンの樫をもて汝の槳を作りキッテムの島より至れる黄楊に象牙を嵌て汝の坐板を作れり七汝の帆はエジプトより至れる文布にして旗に用ふべし汝の天遮はエリシヤの島より至れる藍と紫の布なり八汝の水手はシドンとアルワデの人なりツロよ汝の中にある賢き者汝の舵師となる九ゲバルの老人等およびその賢き者汝の中にをりて汝の漏を繕ひ海の諸の船およびその舟子汝の中にありて汝の貨物を交易す一〇ペルシヤ人ルデ人フテ人汝の軍にありて汝の戰士となる彼等汝の中に干と兜を懸け汝に光輝を與ふ一一アルワデの人々および汝の軍勢汝の四周の石垣の上にあり勇士等汝の櫓にあり彼等汝の四周の石垣にその楯をかけ汝の美を盡せり一二その諸の貨物に富るがためにタルシシ汝と商をなし銀鐵錫および鉛をもて汝と交易を爲り一三ヤワン、トバルおよびメセクは汝の商賈にして人の身と銅の器をもて汝と貿易を行ふ一四トガルマの族馬と騎馬および騾をもて汝と交易し一五デダンの人々汝と商をなせり衆の島々汝の手にありて交易し象牙と黑檀をもて汝と貿易せり一六汝の製造品の多がためにスリア汝と商をなし赤玉　紫貨　繡貨　細布　珊瑚および瑪瑙をもて汝と交易す一七ユダとイスラエルの地汝に商をなしミンニテの麥と菓子と蜜と油と乳香をもて汝と交易す一八汝の製造物の多がため諸の貨物の多きがためにダマスコ、ヘルボンの酒と曝毛をもて汝と交易せり一九ウザルのベダンとヤワン　熟鐵をもて汝と交易す肉桂と菖蒲汝の市にあり二〇デダン車の毛氈を汝に商へり二一アラビヤとケダルの君等とは汝の手に在りて商をなし羔羊と牡羊と牡山羊をもて汝と交易す二二シバとラアマの商人汝と商をなし諸の貴き香料と諸の寶石と金をもて汝と交易せり二三ハランとカンネとエデンとシバの商賈とアツスリヤとキルマデ汝と商をなし二四華美なる物と紫色なる繡の衣服と香柏の箱の綾を盛て紐にて結たる者とをもて汝の市にあり二五タルシシの船汝のために往來して商賣を爲す汝は海の中にありて

豐滿にして榮えあり二六水手汝を蕩て大水の中にいたるに海の中にて東風汝を打破る二七汝の財寶汝の商貨物汝の交易の物汝の舟子汝の舵師汝の漏を繕ふ者汝の貨物を商ふ者汝の中にあるところの凡ての軍人並に汝の中の乘者みな汝の壞るる日に海の中に陷るべし二八汝の舵師等の叫號の聲にその處々震ふ二九凡て棹を執る者舟子および凡て海の舵師その船より下りて陸に立ち三〇汝のために聲を擧げて痛く哭き塵を首に蒙り灰の中に輾轉び三一汝のために髮を剃り麻布を纏ひ汝のために心を痛めて泣き甚く哭くべし三二彼等悲みて汝のために哀の詞を宣べ汝を弔ひて言ふ孰かツロの如くなる海の中に滅びたる者の如くなると三三汝の商貨の海より出し時は汝衆多の國民を厭しめ汝の衆多の財寶と貨物をもて世の王等を富しめたりしが三四汝海に壞れて深き水にあらん時は汝の貨物汝の乘人みな陷らん三五島々に住る者皆汝に駭かんその君等大に恐れてその面を振はすべし三六國々の商賈汝のために嘶かん汝は人の戒懼となり限りなく失果ん

第二八章 一ヱホバの言われに臨みて言ふ二人の子よツロの君に言ふべし主ヱホバかく言たまふ汝心に高ぶりて言ふ我は神なり神の座に坐りて海の中にありと汝は人にして神にあらず而して神の心のごとき心を懷くなり三夫汝はダニエルよりも賢かり隱れたる事として汝に明ならざるは无し四汝の智慧と明哲によりて汝富を獲金銀を汝の庫に收め五汝の大なる智慧と汝の貿易をもて汝の富有を増しその富有のために心に高ぶれり六是故に主ヱホバかく言ふ汝神の心のごとき心を懷くに因り七視よ我異國人を汝に攻きたらしめん是國々の暴き人々なり彼ら劍を拔きて汝が智慧をもて得たるところの美しき者に向ひ汝の美を汚し八汝を穴に投いれん汝は海の中にて殺さるる者のごとき死を遂べし九汝は人にして神にあらず汝を殺す者の手にあるも尚その己を殺す者の前に我は神なりと言んとするや一〇汝は割禮をうけざる者の死を異國人の手に遂べし我これを言ばなりとヱホバ言たまふ一一ヱホバの言我にのぞみて言ふ一二人の子よツロの王のために哀の詞を述べこれに言べし主ヱホバかく言たまふ汝は全く整へたる者の印智慧の充ち美の極れる者なり一三汝神の園エデンに在りき諸の寶石赤玉黃玉金剛石黃綠玉葱珩碧玉靑玉紅玉瑪瑙および金汝を覆へり汝の立らるる日に手鼓と笛汝のために備へらる一四汝は膏そそがれしケルブにして掩ふことを爲り我汝を斯なせしなり汝神の聖山に在り又火の石の間に歩めり一五汝はその立られし日より終に汝の中に惡の見ゆるにいたるまでは其行全かりき一六汝の交易の多きがために汝の中には暴逆滿ちて汝罪を犯せり是故に掩ふことを爲ところのケルブよ我神の山より汝を汚し出し火の石の間より汝を滅し去べし一七汝その美麗のために心に高ぶり其榮耀のために汝の智慧を汚したれば我汝を地に擲ち汝を王等の前に置て觀物とならしむべし一八汝正しからざる交易をなして犯し

たる多くの罪を以て汝の聖所を汚したれば我なんぢの中より火を出して汝を燒き凡て汝を見る者の目の前にて汝を地に灰となさん一九國々の中にて汝を知る者は皆汝に驚かん汝は人の戒懼となり限なく失果てん二〇ヱホバの言我にのぞみて言ふ二一人の子よ汝の面をシドンに向けこれに向ひて預言し二二言べし主ヱホバかく言たまふシドンよ視よ我汝の敵となる我汝の中において榮耀を得ん我彼らを鞫き我の聖き事を彼らに顯す時彼ら我のヱホバなるを知ん二三われ疫病を是におくりその衢に血あらしめんその四方より是に來るところの劍に殺さるる者その中に仆るべし彼らすなはち我のヱホバなるを知ん二四イスラエルの家にはその周圍にありて之を賤むる者の所より重て惡き荊棘苦き芒薊來ることなし彼らは我の主ヱホバなるを知にいたらん二五主ヱホバかく言ふ我イスラエルの家をその散されたる國々より集めん時彼らに由りて我の聖き事を異國人の目の前にあらはさん彼らはわが僕ヤコブに與へたるその地に住ん二六彼ら彼處に安然に住み家を建て葡萄園を作らん彼らの周圍にありて彼らを藐視る者を悉く我が鞫かん時彼らは安然に住み我ヱホバの己の神なるを知らん

第二九章 一十年の十月の十二日にヱホバの言我にのぞみて言ふ二人の子よ汝の面をエジプトの王パロにむけ彼とエジプト全國にむかひて預言し三語りて言べし主ヱホバかく言たまふエジプトの王パロよ視よ我汝の敵となる汝その河に臥すところの鱷よ汝いふ河は我の所有なり我自己のためにこれを造れりと四我鉤を汝の腮に鉤け汝の河の魚をして汝の鱗に附しめ汝および汝の鱗に附る諸の魚を汝の河より曳いだし五汝と汝の河の諸の魚を曠野に投すてん汝は野の面に仆れん汝を取あぐる者なく集むる者なかるべし我汝を地の獸と天の鳥の餌に與へん六エジプトの人々皆我のヱホバなるを知ん彼等のイスラエルの家におけるは葦の杖のごとくなりき七イスラエル汝の手を執ば汝折れてその肩を盡く裂き又汝に倚ば汝破れてその腰を盡く振へしむ八是故に主ヱホバかく言ふ視よ我劍を汝に持きたり人と畜を汝の中より絶ん九エジプトの地は荒て空曠なるべし彼らすなはち我のヱホバなるを知ん彼河は我の有なり我これを作れりと言ふ一〇是故に我汝と汝の河々を罰しエジプトの地をミグドルよりスエネに至りエテオピアの境に至るまで盡く荒して空曠くせん一一人の足此を涉らず獸の足此を涉らじ四十年の間此に人の住ことなかるべし一二我エジプトの地を荒して荒たる國々の中にあらしめんその邑々は荒て四十年の間荒たる邑々の中にあるべし我エジプト人を諸の民の中に散し諸の國に散さん一三但し主ヱホバかく言たまふ四十年の後我エジプト人をその散されたる諸の民の中より集めん一四即ちエジプトの俘囚人を歸しその生れし國なるバテロスの地にかへらしむべし彼らは其處に卑き國を成ん一五是は諸の國よりも卑くして再び國々の上にいづることなかるべし我かれらを小くすれば彼らは重て國々を治

むることなし一六彼らは再びイスラエルの家の恃とならじイスラエルはこれに心をよせてその罪をおもひ出さしむることなかるべし彼らすなはち我の主ヱホバなるを知ん一七茲に二十七年の一月の一日にヱホバの言我にのぞみて言ふ一八人の子よバビロンの王ネブカデネザルその軍勢をしてツロにむかひて大に働かしむ皆首禿げ皆肩破る然るに彼もその軍勢もその爲るところの事業のためにツロよりその報を得ず一九是故に主ヱホバかくいふ視よ我バビロンの王ネブカデネザルにエジプトの地を與へん彼その衆多の財寶を取り物を掠め物を奪はん是その軍勢の報たらん二〇彼の勞動る値として我エジプトの地をかれに與ふ彼わがために之をなしたればなり主ヱホバこれを言ふ二一當日に我イスラエルの家に一の角を生ぜしめ汝をして彼らの中に口を啓くことを得せしめん彼等すなはち我がヱホバなるを知べし

第三〇章一ヱホバの言我にのぞみて言ふ二人の子よ預言して言へ主ヱホバかく言たまふ汝ら叫べ其日は禍なるかな三その日近しヱホバの日近し是雲の日これ異邦人の時なり四劍エジプトに臨まん殺さるる者のエジプトに仆るる時エテオピアに痛苦あるべし敵その財寶を奪はんその基址は毀たるべし五エテオピア人フテ人ルデ人凡て加勢の兵およびクブ人ならびに同盟の國の人々彼らとともに劍にたふれん六ヱホバかく言ふエジプトを扶くる者は仆れ其驕るところの勢力は失せんミグドルよりスエネにいたるまで人劍によりて己の中に仆るべし主ヱホバこれを言なり七其は荒て荒地の中にあり其邑々は荒たる邑の中にあるべし八我火をエジプトに降さん時又是を助くる者の皆ほろびん時は彼等我のヱホバなるを知ん九その日には使者船にて我より出てかの心強きエテオピア人を懼れしめんエジプトの日にありし如く彼等の中に苦痛あるべし視よ是は至る一〇主ヱホバかく言たまふ我バビロンの王ネブカデネザルをもてエジプトの喧噪を止むべし一一彼および彼にしたがふ民即ち國民の中の暴き者を召來りてその國を滅さん彼ら劍をぬきてエジプトを攻めその殺せる者を國に滿すべし一二我その河々を涸し國を惡き人の手に賣り外國人の手をもて國とその中の物を荒すべし我ヱホバこれを言り一三主ヱホバかく言たまふ我偶像を毀ち神々をノフに絶さんエジプトの國よりは再び君のいづることなかるべし我エジプトの國に畏怖を蒙らしめん一四我バテロスを荒しゾアンに火を擧げノに鞫を行ひ一五わが怒をエジプトの要害なるシンに洩しノの群衆を絶つべし一六我火をエジプトに降さんシンは苦痛に悶えノは打破られノフは日中敵をうけん一七アベンとピベセテの少者は劍に仆れ其中の人々は虜ゆかれん一八テバネスに於ては吾がエジプトの軛を其處に摧く時に日暗くならんその誇るところの勢力は失せん雲これを覆はんその女子等は虜へゆかれん一九かく我エジプトに鞫をおこなはん彼等すなはち我のヱホバなるを知べし二〇十一年の一月の七日にヱホバの言われに臨みて言ふ二一人の子よ我エジプトの王パロの腕を折れり

是は再び束へて藥を施し裹布を卷て之を裹み強く爲して劍を執にたへしむること能はざるなり二二是故に主ヱホバかく言たまふ視よ我エジプトの王パロを罰し其強き腕と折たる腕とを倶に折り劍をその手より落しむべし二三我エジプト人を諸の民の中に散し諸の國に散さん二四而してバビロンの王の腕を強くして我劍をこれに授けん然ど我パロの腕を折れば彼は刺透されたる者の呻くが如くにその前に呻かん二五我バビロンの王の腕を強くせんパロの腕は弱くならん我わが劍をバビロンの王の手に授けて彼をしてエジプトにむかひて之を伸しむる時は人衆我のヱホバなるを知ん二六我エジプト人を諸の民の中に散し諸の國に散さん彼らすなはち我のヱホバなるを知るべし

第三十一章 一十一年の三月の一日にヱホバの言我に臨みて云ふ二人の子よエジプトの王パロとその群衆に言へ汝はその大なること誰に似たるや三アツスリヤはレバノンの香柏のごとし其枝美しくして生茂りその丈高くして其巓雲に至る四水これを大ならしめ大水これを高からしむ其川々その植れる處を環りその流を野の諸の樹に及ぼせり五是によりてその長野の諸の樹よりも高くなりその生長にあたりて多の水のために枝葉茂りその枝長く伸たり六その枝葉に空の諸の鳥巣をくひ其枝の下に野の諸の獸子を生みその蔭に諸の國民住ふ七是はその大なるとその枝の長きとに由て美しかりき其根多くの水の傍にありたればなり八神の園の香柏これを蔽ふことあたはず樅もその枝葉に及ばず槻もその枝に如ず神の園の樹の中その美しき事これに如ものあらざりき九我これが枝を多してこれを美しくなせりエデンの樹の神の園にある者皆これを羨めり一〇是故に主ヱホバかく言ふ汝その長高くなれり是は其巓雲に至りその心高く驕れば一一我これを萬國の君たる者の手に付さん彼これを處置せん其惡のために我これを打棄たり一二他國人國々の暴き者これを截倒して棄つ其枝葉は山々に谷々に墮ち其枝は碎けて地の諸の谷川にあり地の萬民その蔭を離れてこれを遺つ一三その倒れたる上に空の諸の鳥止まり其枝の上に野の諸の獸居る一四是水の邊の樹その高のために誇ることなくその巓を雲に至らしむることなからんためまた水に濕ふ者の高らかに自ら立ことなからんためなり夫是等は皆死に付されて下の國に入り他の人々の中にあり墓に下る者等と偕なるべし一五主ヱホバかく言たまふ彼が下の國に下れる日に我哀哭あらしめ之がために大水を蓋ひその川々をせきとめたれば大水止まれり我レバノンをして彼のために哭かしめ野の諸の樹をして彼のために痩衰へしむ一六我かれを陰府に投くだして墓に下る者と共ならしむる時に國々をしてその墮る響に震動しめたり又エデンの諸の樹レバノンの勝れたる最美しき者凡て水に濕ふ者皆下の國に於て慰を得たり一七彼等も彼とともに陰府に下り劍に刺れたる者の處にいたる是すなはちその助者となりてその蔭に坐し萬國民の中にをりし者なり一八エデンの樹の中にありて汝は其榮とその大なること孰に似たる

や汝は斯エデンの樹とともに下の國に投下され劍に刺透されたる者とともに割禮を受ざる者の中にあるべしパロとその群衆は是のごとし主ヱホバこれを言ふ

第三二章 一 茲にまた十二年の十二月の一日にヱホバの言我にのぞみて言ふ 二 人の子よエジプトの王パロのために哀の詞を述て彼に言ふべし汝は自ら萬國の中の獅子に擬へたるが汝は海の鱷の如くなり汝河の中に跳起き足をもて水を濁しその河々を蹈みだす 三 主ヱホバかく言たまふ我衆多の國民の中にてわが網を汝に打掛け彼らをしてわが網にて汝を引あげしめん 四 而して我汝を地上に投すて汝を野の面に擲ち空の諸の鳥をして汝の上に止らしめ全地の獸をして汝に飽しむべし 五 我汝の肉を山々に遣て汝の屍を堆くして谷々を埋むべし 六 我汝の溢る血をもて地を濕し山にまで及ぼさん谷川には汝盈べし 七 我汝を滅する時は空を蔽ひその星を暗くし雲をもて日を掩はん月はその光を發たざるべし 八 我空の照る光明を盡く汝の上に暗くし汝の地を黑暗となすべし主ヱホバこれを言ふ 九 我なんぢの滅亡を諸の民汝の知ざる國々の中に知しめて衆多の民をして心を傷ましめん 一〇 我衆多の民をして汝に驚かしめんその王等はわが其前にわれの劍を振ふ時に戰慄かん汝の仆るる日には彼ら各人その生命のために絶ず發振ん 一一 即ち主ヱホバかく言たまふバビロンの王の劍汝に臨まん 一二 我汝の群衆をして勇士の劍に仆れしめん彼等は皆國々の暴き者なり彼らエジプトの驕傲を絶さん其の群衆は皆ほろぼさるべし 一三 我その家畜を盡く多の水の傍より絶去ん人の足再び之を濁すことなく家畜の蹄これを濁すことなかるべし 一四 我すなはちその水を清しめ其河々をして油のごとく流れしめん主ヱホバこれを云ふ 一五 我エジプトの國を荒地となしてその國荒てこれが富を失ふ時また我その中に住る者を盡く擊つ時人々我のヱホバなるを知ん 一六 是哀の詞なり人悲みてこれを唱へん國々の女等悲みて之を唱ふべし即ち彼等エジプトとその諸の群衆のために悲みて之を唱へん主ヱホバこれを言ふ 一七 十二年の月の十五日にヱホバの言また我に臨みて言ふ 一八 人の子よエジプトの群衆のために哀き是と大なる國々の女等とを下の國に投くだし墓にくだる者と共ならしめよ 一九 汝美しき事誰に勝るや下りて割禮なき者とともに臥せよ 二〇 彼らは劍に殺さるる者の中に仆るべし劍已に付してあり是とその諸の群衆を曳下すべし 二一 勇士の強き者陰府の中より彼にその助者と共に言ふ割禮を受ざる者劍に殺されたる者彼等下りて臥す 二二 彼處にアッスリアとその凡の群衆をりその周圍に之が墓あり彼らは皆殺され劍に仆れたる者なり 二三 かれの墓は穴の奧に設けてありその群衆墓の四周にあり是皆殺されて劍に仆れたる者生者の地に畏怖をおこせし者なり 二四 彼處にエラムありその凡の群衆その墓の周圍にあり是皆ころされて劍に仆れ割禮を受ずして下の國に下りし者生者の地に畏怖をおこせし者にて夫穴に下れる者等とともに耻辱を蒙るなり 二五 殺された

る者の中にその床を置きてその凡の群衆と共にすその墓周圍にあり彼等は皆割禮を受ざる者にして劍に殺さる彼ら生者の地に畏怖をおこしたれば穴に下れる者とともに恥辱を蒙るなり彼は殺されし者の中に置る二六 彼處にメセクとトバルおよびその凡の群衆ありその墓周圍にあり彼らは皆割禮を受ざる者にして劍に殺さる是生者の地に畏怖をおこしたればなり二七 彼らは割禮を受ずして仆れたる勇士とともに臥さず是等はその武器を持て陰府に下りその劍を枕にすその罪は骨にあり是生者の地に於て勇士を畏れしめたればなり二八 汝は割禮を受ざる者の中に打碎け劍に殺されたる者とともに臥ん二九 彼處にエドムとその王等とその諸の君等あり彼らは勇力をもちながら劍に殺さるる者の中に入り割禮なき者および穴に下れる者とともに臥すべし三〇 彼處に北の君等皆あり又シドン人皆あり彼らは殺されし者等とともに下り人を怖れしむる勇力をもちて羞辱を受く彼處に彼らは割禮を受ずして劍に殺されたる者とともに臥し穴に下れる者とともに恥辱を蒙る三一 パロかれらを見その諸の群衆の事につきて心を安めんパロとその軍勢皆劍に殺さる主ヱホバこれを言ふ三二 我かれをして生者の地に畏怖をおこさしめたりパロとその諸の群衆は割禮をうけざる者の中にありて劍に殺されし者とともに臥す主ヱホバこれを言ふ

第三三章 一 爰にヱホバの言われに臨みて言ふ二 人の子よ汝の民の人々に告て之に言へ我劍を一の國に臨ましめん時その國の民おのれの國人の中より一人を選みて之を守望人となさんに三 かれ國に劍の臨むを見ラッパを吹てその民を警むることあらん四 然るに人ラッパの音を聞て自ら警めず劍つひに臨みて其人を失ふにいたらばその血はその人の首に歸すべし五 彼ラッパの音を聞て自ら警むることを爲ざればその血は己に歸すべし然どもし自ら警むることを爲ばその生命を保つことを得ん六 然れども守望者劍の臨むを見てラッパを吹ず民警戒をうけざるあらんに劍のぞみて其中の一人を失はば其人は己の罪に死るなれど我その血を守望者の手に討問めん七 然ば人の子よ我汝を立てイスラエルの家の守望者となす汝わが口より言を聞き我にかはりて彼等を警むべし八 我惡人に向ひて惡人よ汝死ざるべからずと言んに汝その惡人を警めてその途を離るるやうに語らずば惡人はその罪に死んなれどその血をば我汝の手に討問むべし九 然ど汝もし惡人を警めて翻りてその途を離れしめんとしたるに彼その途を離れずば彼はその罪に死ん而して汝はおのれの生命を保つことを得ん一〇 然ば人の子よイスラエルの家に言へ汝らは斯語りて言ふ我らの愆と罪は我らの身の上にあり我儕はその中にありて消失ん爭でか生ることを得んと一一 汝かれらに言べし主ヱホバ言たまふ我は活く我惡人の死るを悦ばず惡人のその途を離れて生るを悦ぶなり汝ら翻へり翻へりてその惡き道を離れよイスラエルの家よ汝等なんぞ死べけんや一二 人の子よ汝の民の人々に言べし義人の義はその人の罪を犯せる日にはその人を救

ふことあたはず惡人はその惡を離れたる日にはその惡のために仆るることあらじ義人はその罪を犯せる日にはその義のために生ることを得じ一三我義人に汝かならず生べしと言んに彼その義を恃みて罪ををかさばその義は悉く忘らるべし其をかせる罪のために彼は死べし一四我惡人に汝かならず死べしと言んに彼その惡を離れ公道と公義を行ふことあらん一五即ち惡人質物を歸しその奪ひし者を還し惡をなさずして生命の憲法にあゆみなば必ず生ん死ざるべし一六その犯したる各種の罪は記憶らるることなかるべし彼すでに公道と公義を行ひたれば必ず生べし一七汝の民の人々は主の道正しからずと言ふ然ど實は彼等の道の正しからざるなり一八義人もしその義を離れて罪をおかさば是がために死べし一九惡人もしその惡を離れて公道と公義を行ひなば是がために生べし二〇然るに汝らは主の道正しからずといふイスラエルの家よ我各人の行爲にしたがひて汝等を鞫くべし二一我らが虜へうつされし後すなはち十二年の十月の五日にヱルサレムより脱逃者きたりて邑は撃敗られたりと言ふ二二その逃亡者の來る前の夜ヱホバの手我に臨み彼が朝におよびて我に來るまでに我口を開けり斯わが口開けたれば我また默せざりき二三即ちヱホバの言われに臨みて言ふ二四人の子よイスラエルの地の彼の墟址に住る者語りて云ふアブラハムは一人にして此地を有てり我等は衆多し此地はわれらの所有に授かると二五是故に汝かれらに言ふべし主ヱホバかく言ふ汝らは血のままに食ひ汝らの偶像を仰ぎ且血を流すなれば尚此地を有つべけんや二六汝等は劍を恃み憎むべき事を行ひ各々人の妻を汚すなれば此地を有つべけんや二七汝かれらに斯言べし主ヱホバかく言ふ我は活くかの荒場に居る者は劍に仆れん野の表にをる者をば我獸にあたへて噬はしめん要害と洞穴とにをる者は疫病に死ん二八我この國を全く荒さん其誇るところの權勢は終に至らんイスラエルの山々は荒て通る者なかるべし二九彼らが行ひたる諸の憎むべき事のために我その國を全く荒さん時に彼ら我のヱホバなるを知ん三〇人の子よ汝の民の人々垣の下家の門にて汝の事を論じ互に語りあひ各々その兄弟に言ふ去來われら如何なる言のヱホバより出るかを聽んと三一彼ら民の集會のごとくに汝に來り吾民のごとくに汝の前に坐して汝の言を聞ん然ども之を行はじ彼らは口に悦ばしきところの事をなし其心は利にしたがふなり三二彼等には汝 悦ばしき歌 美しき聲美く奏る者のごとし彼ら汝の言を聞ん然ど之をおこなはじ三三視よその事至る其事のいたる時には彼らおのれの中に預言者あるを知べし

第三四章 一ヱホバの言われに臨みて言ふ二人の子よ汝イスラエルの牧者の事を預言せよ預言して彼ら牧者に言ふべし主ヱホバかく言ふ己を牧ふところのイスラエルの牧者は禍なるかな牧者は群を牧ふべき者ならずや三汝らは脂を食ひ毛を纏ひ肥たる物を屠りその群をば牧はざるなり四汝ら其弱き者を強くせずその病る者を醫さずその傷ける者を裹まず散されたる者をひきかへ

らず失たる者を尋ねず手荒に嚴刻く之を治む五是は牧者なきに因て散り失せ野の諸の獸の餌となりて散失するなり六我羊は諸の山々に諸の高丘に迷ふ我羊全地の表に散りをれど之を索す者なく尋ぬる者なし七是故に牧者よ汝らヱホバの言を聽け八主ヱホバ言たまふ我は活く我羊掠められわが羊野の諸の獸の餌となる又牧者あらず我牧者わが羊を尋ねず牧者己を牧ふてわが羊を牧はず九是故に牧者よ汝らヱホバの言を聞け一〇主ヱホバ斯言たまふ視よ我牧者等を罰し吾羊を彼らの手に討問め彼等をしてわが群を牧ふことを止しめて再び己を牧ふことなからしめ又わが羊をかれらの口より救とりてかれらの食とならざらしむべし一一主ヱホバかく言たまふ我みづからわが群を索して之を守らん一二牧者がその散たる羊の中にある日にその群を守るごとく我わが群を守り之がその雲深き暗き日に散たる諸の處よりこれを救ひとるべし一三我かれらを諸の民の中より導き出し諸の國より集めてその國に携へいりイスラエルの山の上と谷の中および國の凡の住居處にて彼らを養はん一四善き牧場にて我かれらを牧はんその休息處はイスラエルの高山にあるべし彼處にて彼らは善き休息所に臥しイスラエルの山々の上にて肥たる牧場に草を食はん一五主ヱホバいひたまふ我みづから我群を牧ひ之を偃しむべし一六亡たる者は我これを尋ね逐はなたれたる者はこれを引返り傷けられたる者はこれを裹み病る者はこれを強くせん然ど肥たる者と強き者は我これを滅さん我公道をもて之を牧ふべし一七主ヱホバかく言たまふ汝等わが群よ我羊と羊の間および牡羊と牡山羊の間の審判をなさん一八汝等は善き牧場に草食ひ足をもてその殘れる草を蹈あらし又清たる水を飲み足をもてその殘餘を濁す是汝等にとりて小き事ならんや一九わが群汝等が足にて蹈あらしたる者を食ひ汝等が足にて濁したる者を飲べけんや二〇是をもて主ヱホバ斯かれらに言たまふ視よ我肥たる羊と瘦たる羊の間を審判くべし二一汝等は脅と肩とをもて擠し角をもて弱き者を盡く衝て遂に之を外に逐散せり二二是によりて我わが群を助けて再び掠められざらしめ又羊と羊の間をさばくべし二三我かれらの上に一人の牧者をたてん其人かれらを牧ふべし是わが僕ダビデなり彼はかれらを牧ひ彼らの牧者となるべし二四我ヱホバかれらの神とならん吾僕ダビデかれらの中に君たるべし我ヱホバこれを言ふ二五我かれらと平和の契約を結び國の中より惡き獸を滅し絶つべし彼らすなはち安かに野に住み森に眠らん二六我彼らおよび吾山の周圍の處々に福祉を下し時に隨ひて雨を降しめん是すなはち福祉の雨なるべし二七野の樹はその實を結び地はその產物を出さん彼等は安然にその國にあるべし我がかれらの軛を碎き彼らをその僕となせる人の手より救ひいだす時に彼等は我のヱホバなるを知べし二八彼等は重ねて國々の民に掠めらるる事なく野の獸かれらを食ふことなかるべし彼等は安然に住はん彼等を懼れしむる者なかるべし二九我かれらのために一の栽植處を起してそ

の名を聞えしめん彼等は重ねて國の饑饉に滅ぶることなく再び外邦人の凌辱を蒙ることなかるべし三〇彼らはその神なる我ヱホバが己と共にあるを知り自己イスラエルの家はわが民なることを知るべし主ヱホバこれを言ふ三一汝等はわが羊わが牧場の群なり汝等は人なり我は汝らの神なりと主ヱホバ言たまふ

第三五章一爰にヱホバの言われに臨みて言ふ二人の子よ汝の面をセイル山にむけ之にむかひて預言し三之にいふべし主ヱホバかく言ふセイル山よ視よ我汝を罰し汝にむかひてわが手を伸べ汝を全く荒し四汝の邑々を滅すべし汝は荒はてん而して我のヱホバなるを知にいたらん五汝果しなき恨を懷きてイスラエルの人々をその艱難の時その終の罪の時に劍の手に付せり六是故に主ヱホバ言ふ我は活く我汝を血になさん血汝を追べし汝血を嫌はざれば血汝を追ん七我セイル山を全く荒し其處に往來する者を絶ち八殺されし者をその山々に滿すべし劍に殺されし者汝の岡々谷々および窪地窪地に仆れん九我汝を長に荒地となさん汝の邑々には人の住むことあらじ汝等すなはち我のヱホバなるを知にいたらん一〇汝言ふこの二箇の民二箇の國は我が所有なり我等これを獲んとヱホバ其處に居せしなり一一是故に主ヱホバいふ我は活く汝が恨をもて彼らに示したる忿怒と嫉惡に循ひて我汝に事をなさん我汝を鞫くことを以て我を彼等に示すべし一二汝は我ヱホバの汝がイスラエルの山々にむかひて是は荒はて我儕の食に授かるといひて吐たるところの諸の謗讟を聞たることを知にいたらん一三汝等口をもて我にむかひて誇り我にむかひて汝等の言を多くせり我これを聞く一四主ヱホバ斯いひたまふ全地の歡ぶ時に我汝を荒地となさん一五汝イスラエルの家の產業の荒るを喜びたれば我汝をも然なすべしセイル山よ汝荒地とならんエドムも都て然るべし人衆すなはち我のヱホバなるを知にいたらん

第三六章一人の子よ汝イスラエルの山々に預言して言べしイスラエルの山々よヱホバの言を聽け二主ヱホバかく言たまふ敵汝等の事につきて言ふ嗚呼是等の舊き高處我儕の所有となると三是故に汝預言して言へ主ヱホバかく言ふ彼等汝らを荒し四方より汝らを呑り是をもて汝等は國民の中の殘餘者の所有となり亦人の口歯にかかりて噂せらる四然ばイスラエルの山々よ主ヱホバの言を聞け主ヱホバ山と岡と窪地と谷と滅びたる荒跡と人の棄たる邑々即ちその周圍に殘れる國民に掠められ嘲けらるる者にかく言たまふ五即ち主ヱホバかく言たまふ我まことに吾が嫉妬の火焰をもやして國民の殘餘者とエドム全國の事を言り是等は心に歡樂を極め心に誇りて吾地をおのれの所有となし之を奪ひ掠めし者なり六然ばイスラエルの國の事を預言し山と岡と窪地と谷とに言ふべし主ヱホバかく言たまふ汝等諸の國民の羞辱を蒙りしに因て我わが嫉妬と忿怒を發して語れり七是をもて主ヱホバかく言たまふ我わが手を擧ぐ汝の周圍の諸の國民は必ず自身羞辱を蒙るべし八然どイスラエルの山々よ

汝等は枝を生じわが民イスラエルのために實を結ばん此事遠からず成ん九 視よ我汝らに臨み汝らを眷みん汝らは耕されて種をまかるべし一〇 我汝等の上に人を殖さん是皆 悉くイスラエルの家の者なるべし邑々には人住み墟址は建直さるべし一一 我なんぢらの上に人と牲畜を殖さん是等は殖て多く子を生ん我汝らの上に昔時のごとくに人を住しめ汝らの初の時よりもまされる恩惠を汝等に施すべし汝等は我がヱホバなるを知にいたらん一二 我わが民イスラエルの人を汝らの上に歩ましめん彼等 汝を有つべし汝はかれらの產業となり重ねて彼等に子なからしむることあらじ一三 主ヱホバかく言ひたまふ彼等 汝らに向ひ汝は人を食ひなんぢの民をして子なからしめたりと言ふ一四 是故に主ヱホバ言たまふ汝ふたたび人を食ふべからず再び汝の民を躓かしむべからず一五 我 汝をして重ねて國々の民の嘲笑を聞しめじ汝は重ねて國々の民の羞辱を蒙ることあらず汝の民を躓かしむることあらじ主ヱホバこれを言ふ一六 ヱホバの言また我にのぞみて言ふ一七 人の子よ昔 イスラエルの家その國に住み己の途と行爲とをもて之を汚せりその途は月穢ある婦の穢のごとくに我に見えたり一八 彼等國に血を流し且その偶像をもて國を汚したるに因て我わが怒を彼等に斟ぎ一九 彼らを諸の國の民の中に散したれば則ち諸の國に散ぬ我かれらの道と行爲とにしたがひて彼等を鞫けり二〇 彼等その往ところの國々に至りしが遂にわが聖き名を汚せり即ち人かれらを見てこれはヱホバの民にしてかれの國より出來れる者なりと言り二一 是をもて我イスラエルの家がその至れる國々にて瀆せしわが聖き名を惜めり二二 此故にイスラエルの家に言べし主ヱホバかく言たまふイスラエルの家よ我汝らのために之をなすにあらず汝らがその至れる國々にて汚せしわが聖き名のためになすなり二三 我國々の民の中に汚されたるわが大なる名 即ち汝らがかれらの中にありて汚したるところの者を聖くせん國々の民はわが汝らに由て我の聖き事をその目の前にあらはさん時我がヱホバなるを知ん二四 我汝等を諸の民の中より導き出し諸の國より集めて汝らの國に携いたり二五 清き水を汝等に灑ぎて汝等を清くならしめ汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝らを清むべし二六 我 新しき心を汝等に賜ひ新しき靈魂を汝らの衷に賦け汝等の肉より石の心を除きて肉の心を汝らに與へ二七 吾靈を汝らの衷に置き汝らをして我が法度に歩ましめ吾 律を守りて之を行はしむべし二八 汝等はわが汝らの先祖等に與へし地に住て吾民とならん我は汝らの神となるべし二九 我 汝らを救ひてその諸の汚穢を離れしめ穀物を召て之を増し饑饉を汝らに臨ませず三〇 樹の果と田野の作物を多くせん是をもて汝らは重て饑饉の羞を國々の民の中に蒙ることあらじ三一 汝らはその惡き途とその善らぬ行爲を憶えてその罪とその憎むべき事のために自ら恨みん三二 主ヱホバ言たまふ我が之を爲は汝らのためにあらず汝らこれを知れよイスラエルの家よ汝らの途を愧て悔むべし三三 主ヱホバかく言たまふ我

汝らの諸の罪を清むる日に邑々に人を住しめ墟址を再興しめん三四 荒たる地は前に往來の人々の目に荒地と見たるに引かへて耕さるるに至るべし三五 人すなはち言ん此荒たりし地はエデンの園のごとくに成り荒滅び圮れたりし邑々は堅固なりて人の住に至れりと三六 汝らの周圍に殘れる國々の民はすなはち我ヱホバが圮れし者を再興し荒たるところに栽植することを知にいたらん我ヱホバこれを言ふ之を爲ん三七 主ヱホバかく言たまふイスラエルの家我が是を彼らのために爲んことをまた我に求むべきなり我群のごとくに彼ら人々を殖さん三八 荒たる邑々には聖き群のごとくヱルサレムの節日の群のごとくに人の群滿ん人々すなはち我がヱホバなるを知べし

第三七章一 爰にヱホバの手我に臨みヱホバ我をして靈にて出行しめ谷の中に我を放賜ふ其處には骨充てり二 彼その周圍に我をひきめぐりたまふに谷の表には骨はなはだ多くあり皆はなはだ枯たり三 彼われに言たまひけるは人の子よ是等の骨は生るや我言ふ主ヱホバよ汝知たまふ四 彼我に言たまふ是等の骨に預言し之に言べし枯たる骨よヱホバの言を聞け五 主ヱホバ是らの骨に斯言たまふ視よ我汝らの中に氣息を入しめて汝等を生しめん六 我筋を汝らの上に作り肉を汝らの上に生ぜしめ皮をもて汝らを蔽ひ氣息を汝らの中に與へて汝らを生しめん汝ら我がヱホバなるを知ん七 我命ぜられしごとく預言しけるが我が預言する時に音あり骨うごきて骨と骨あひ聯る八 我見しに筋その上に出きたり肉生じ皮上よりこれを蔽ひしが氣息その中にあらず九 彼また我に言たまひけるは人の子よ氣息に預言せよ人の子よ預言して氣息に言へ主ヱホバかく言たまふ氣息よ汝四方の風より來り此殺されし者等の上に呼吸きて是を生しめよ一〇 我命ぜられしごとく預言せしかば氣息これに入て皆生きその足に立ち甚だ多くの群衆となれり一一 斯て彼われに言たまふ人の子よ是等の骨はイスラエルの全家なり彼ら言ふ我らの骨は枯れ我らの望は竭く我儕絶はつるなりと一二 是故に預言して彼らに言へ主ヱホバかく言たまふ吾民よ我汝等の墓を啓き汝らをその墓より出きたらしめてイスラエルの地に至らしむべし一三 わが民よ我汝らの墓を開きて汝らを其墓より出きたらしむる時汝らは我のヱホバなるを知ん一四 我わが靈を汝らの中におきて汝らを生しめ汝らをその地に安んぜしめん汝等すなはち我ヱホバがこれを言ひ之を爲たることを知にいたるべし一五 ヱホバの言我にのぞみて言ふ一六 人の子よ汝一片の木を取てその上にユダおよびその侶なるイスラエルの子孫と書き又一片の木をとりてその上にヨセフおよびその侶なるイスラエルの全家と書べし是はエフライムの木なり一七 而して汝これを倶にあはせて一の木となせ是汝の手の中にて相聯らん一八 汝の民の人々汝に是は何の意なるか我儕に示さざるやと言ふ時は一九 これに言ふべし主ヱホバかく言たまふ我エフライムの手にあるヨセフとその侶なるイスラエルの支派の木を取り之をユダの木に合せて一の木となしわが手

にて一とならしめん二〇 汝が書つけたるところの木を彼らの目のまへにて汝の手にあらしめ二一 かれらに言ふべし主ヱホバかく言たまふ我イスラエルの子孫をその往るところの國々より出し四方よりかれを集めてその地に導き二二 その地に於て汝らを一の民となしてイスラエルの山々にをらしめん一人の王彼等全體の王たるべし彼等は重て二の民となることあらず再び二の國に分れざるべし二三 彼等またその偶像とその憎むべき事等およびその諸の愆をもて身を汚すことあらじ我かれらをその罪を犯せし諸の住處より救ひ出してこれを清むべし而して彼らはわが民となり我は彼らの神とならん二四 わが僕ダビデかれらの王とならん彼ら全體の者の牧者は一人なるべし彼らはわが律法にあゆみ吾法度をまもりてこれを行はん二五 彼らは我僕ヤコブに我が賜ひし地に住ん是其先祖等が住ひし所なり彼處に彼らとその子及びその子の子とこしなへに住はん吾僕ダビデ長久にかれらの君たるべし二六 我かれらと和平の契約を立ん是は彼らに永遠の契約となるべし我かれらを堅うし彼らを殖しわが聖所を長久にかれらの中におかん二七 我が住所は彼らの上にあるべし我かれらの神となり彼らわが民とならん二八 わが聖所長久にかれらの中にあるにいたらば國々の民は我のヱホバにしてイスラエルを清むる者なるを知ん

第三八章一 ヱホバの言我にのぞみて言ふ二 人の子よロシ、メセクおよびトバルの君たるマゴグの地の王ゴグに汝の面をむけ之にむかひて預言し三 言べし主ヱホバかく言たまふロシ、メセク、トバルの君ゴグよ視よ我なんぢを罰せん四 我汝をひきもどし汝の腮に鉤をほどこして汝および汝の諸の軍勢と馬とその騎者を曳いだすべし是みな其服粧に美を極め大楯小楯をもち凡て劍を執る者にして大軍なり五 ペルシヤ、エテオピアおよびフテこれとともにあり皆楯と盔をもつ六 ゴメルとその諸の軍隊北の極のトガルマの族とその諸の軍隊など衆多の民汝とともにあり七 汝準備をなせ汝と汝にあつまれるところの軍隊みな備をせよ而して汝かれらの保護となれ八 衆多の日の後なんぢ罰せられん末の年に汝かの劍をのがれてかへり衆多の民の中より集りきたれる者の地にいたり久しく荒ゐたるイスラエルの山々にいたらん是は國々より導きいだされて皆安然に住ふなり九 汝その諸の軍隊および衆多の民をひきゐて上り暴風のごとく至り雲のごとく地を覆はん一〇 主ヱホバかくいひたまふ其日に汝の心に思想おこり惡き謀計をくはだてて一一 言ん我平原の邑々にのぼり穩にして安然に住る者等にいたらん是みな石垣なくして居り關も門もあらざる者なりと一二 斯して汝物を奪ひ物を掠め汝の手をかへして彼の人の住むにいたれる墟址を攻め又かの國々より集りきたりて地の壙區にすみて群と財寶をもつところの民をせめんとす一三 シバ、デダン、タルシシの商賈およびその諸の小獅子汝に言ん汝物を奪はんとて來れるや汝物を掠めんために軍隊をあつめしや金銀をもちさり群と財寶を取り多くの物を奪はん

とするやと一四是故に人の子よ汝預言してゴグに言へ主ヱホバかくいひたまふ其日に汝わが民イスラエルの安然に住むを知ざらんや一五汝すなはち北の極なる汝の處より來らん衆多の民汝とともにあり皆馬に乘る其軍隊は大にしてその軍勢は夥多し一六而して汝わが民イスラエルに攻きたり雲のごとくに地を覆はんゴグよ末の日にこの事あらんすなはち我汝をわが地に攻きたらしめ汝をもて我の聖き事を國々の民の目のまへにあらはして彼らに我をしらしむべし一七主ヱホバかく言たまふ我の昔日わが僕なるイスラエルの預言者等をもて語りし者は汝ならずや即ち彼ら其頃年ひさしく預言して我汝を彼らに攻きたらしめんと言り一八主ヱホバいひたまふ其日すなはちゴグがイスラエルの地に攻來らん日にわが怒面にあらはるべし一九我嫉妬と燃たつ怒をもて言ふ其日には必ずイスラエルの地に大なる震動あらん二〇海の魚空の鳥野の獸凡て地に匍ふところの昆蟲凡て地にある人わが前に震へん又山々崩れ嶄巖たふれ石垣みな地に仆れん二一主ヱホバいひたまふ我劍をわが諸の山に召きたりて彼をせめしめん人々の劍その兄弟を撃べし二二我疫病と血をもて彼の罪をたださん我漲ぎる雨と雹と火と硫磺を彼とその軍勢および彼とともなる多の民の上に降すべし二三而して我わが大なることと聖きことを明かにし衆多の國民の目のまへに我を示さん彼らはすなはち我のヱホバなることをしるべし

第三九章

一人の子よゴグにむかひ預言して言へ主ヱホバかく言たまふロシ、メセク、トバルの君ゴグよ視よ我汝を罰せん二我汝をひきもどし汝をみちびき汝をして北の極より上りてイスラエルの山々にいたらしめ三汝の左の手より弓をうち落し右の手より矢を落しむべし四汝と汝の諸の軍勢および汝とともなる民はイスラエルの山々に仆れん我汝を諸の類の鷙鳥と野の獸にあたへて食しむべし五汝は野の表面に仆れん我これを言ばなりと主ヱホバ言たまふ六我マゴグと島々に安然に住る者とに火をおくり彼らをして我のヱホバなるを知しめん七我わが聖き名をわが民イスラエルの中に知しめ重てわが聖き名を汚さしめじ國々の民すなはち我がヱホバにしてイスラエルにありて聖者なることを知るにいたらん八主ヱホバいひたまふ視よ是は來れり成れり是わが言る日なり九茲にイスラエルの邑々に住る者出きたり甲冑大楯小楯弓矢手鎗手矛および槍を燃し焚き之をもて七年のあひだ火を燃さん一〇彼ら野より木をとりきたること無く林より木をきりとらずして甲冑をもて火を燃しまた己を掠めし者をかすめ己の物を奪ひし者の物を奪はん主ヱホバこれを言ふ一一其日に我イスラエルにおいて墓地をゴグに與へん是往來の人の谷にして海の東にあり是往來の人を礙げん其處に人ゴグとその群衆を埋めこれをゴグの群衆の谷となづけん一二イスラエルの家之を埋めて地を清むるに七月を費さん一三國の民みなこれを埋め之によりて名をえん是我が榮光をあらはす日なり一四彼等定れる人を選む其人國の中をゆきめぐりて往來の人

とともにかの地の面に遺れる者を埋めてこれを清む七月の終れる後かれら尋ぬることをなさん一五國を行巡る者往來し人の骨あるを見るときはその傍に標をたつれば死人を埋むる者これをゴグの群衆の谷に埋む一六邑の名もまた群衆となへられん斯かれら國を清めん一七人の子よ主ヱホバかく言ふ汝 諸の類の鳥と野の諸の獸に言べし汝等集ひ來り我が汝らのために殺せるところの犠牲に四方より聚れ即ちイスラエルの山々の上なる大なる犠牲に臨み肉を食ひ血を飲め一八汝ら勇士の肉を食ひ地の君等の血を飲め牡羊羔羊牡山羊牡牛など凡てバシヤンの肥たる畜を食へ一九汝らわが汝らのために殺せるところの犠牲につきて飽まで脂を食ひ醉まで血を飲べし二〇汝らわが席につきて馬と騎者と勇士と諸の軍人に饜べしと主ヱホバいひたまふ二一我わが榮光を國々の民にしめさん國々の民みな我がおこなふ審判を見我がかれらの上に加ふる手を見るべし二二是日より後イスラエルの家我ヱホバの己の神なることを知ん二三又國々の民イスラエルの家の虜へうつされしは其惡によりしなるを知べし彼等われに背きたるに因て我わが面を彼らに隱し彼らをその敵の手に付したれば皆劍に仆れたり二四我かれらの汚穢と愆惡とにしたがひて彼らを待ひわが面を彼等に隱せり二五然ば主ヱホバかく言たまふ我今ヤコブの俘虜人を歸しイスラエルの全家を憐れみ吾聖き名のために熱中せん二六彼らその地に安然に住ひて誰も之を怖れしむる者なきに至る時はその我にむかひて爲たるところの諸の悖れる行爲のために愧べし二七我かれらを國々より導きかへりその敵の國々より集め彼らをもて我の聖き事を衆多の國民にしめす時二八彼等すなはち我ヱホバの己の神なるを知ん是は我かれらを國々に移し又その地にひき歸りて一人をも其處にのこさざればなり二九我わが靈をイスラエルの家にそそぎたれば重て吾面を彼らに隱さじ主ヱホバこれを言ふ

第四〇章一我らの虜へ移されてより二十五年邑の撃破られて後十四年その年の初の月の十日其日にヱホバの手われに臨み我を彼處に携へ往く二即ち神異象の中に我をイスラエルの地にたづさへゆきて甚だ高き山の上におろしたまふ其處に南の方にあたりて邑のごとき者建てり三彼我をひきて彼處にいたり給ふに一箇の人あるを見るその面容は銅のごとくにして手に麻の繩と間竿を執り門に立てり四其人われに言けるは人の子よ汝目をもて視耳をもて聞き我が汝にしめす諸の事に心をとめよ汝を此にたづさへしはこれを汝にしめさんためなり汝が見るところの事を盡くイスラエルの家に告よ五斯ありて視るに家の外の四周に墻垣ありその人の手に六キユビトの間竿ありそのキユビトは各一キユビトと一手潤なり彼その墻の厚を量るに一竿ありその高もまた一竿あり六彼東向の門にいたりその階をのぼりて門の閾を量るに其潤一竿あり即ち第一の閾の潤一竿なり七守房は長一竿廣一竿守房と守房の間は五キユビトあり内の門の廊の傍なる門の閾も一竿あり八内の門の廊を量るに一

竿あり九又門の廊を量るに八キユビトありその柱は二キユビトなりその門の廊は内にあり一〇東向の門の守房は此旁に三箇彼處に三箇あり此三みな其寸尺おなじ柱もまた此處彼處ともにその寸尺おなじ一一門の入口の廣をはかるに十キユビトあり門の長は十三キユビトなり一二守房の前に一キユビトの界あり彼旁の界も一キユビトなり守房は此旁彼旁ともに六キユビトなり一三彼また此守房の屋背より彼屋背まで門をはかるに入口より入口まで二十五キユビトあり一四柱は六十キユビトに作れる者なり門のまはりに庭ありて柱にまでおよぶ一五入口の門の前より内の門の廊の前にいたるまで五十キユビトあり一六守房と門の内面の周圍の柱とに閉窓あり墻垣の差出たる處にもしかり内面の周圍には窓あり柱には棕櫚あり一七彼また我を外庭に携ゆくに庭の周圍に設けたる室と鋪石あり鋪石の上に三十の室あり一八鋪石は門の側にありて門の長におなじ是下鋪石なり一九彼下の門の前より内庭の外の前までの廣を量るに東と北とに百キユビトあり二〇又外庭なる北向の門の長と寛をはかれり二一守房その此旁に三箇彼旁に三箇あり柱および差出たる處もあり是は前の門の寸尺のごとく長五十キユビト濶二十五キユビトなり二二その窓と差出たる處と棕櫚は東向の門にある者の寸尺と同じ七段の階級を經て上るに差出たる處その前にあり二三内庭の門は北と東の門に向ふ彼門より門までを量るに百キユビトあり二四彼また我を南に携ゆくに南向の門ありその柱と差出たる處をはかるに前の寸尺の如し二五是とその差出たる處の周圍に窓あり彼窓のごとしその門は長五十キユビト濶二十五キユビトなり二六七段の階級をへて登るべし差出たる處その前にありその柱の上には此旁に一箇彼旁に一箇の棕櫚あり二七内庭に南向の門あり門より門まで南の方をはかるに百キユビトあり二八彼我を携へて南の門より内庭に至る彼南の門をはかるにその寸尺前のごとし二九その守房と柱と差出たる處は前の寸尺のごとしその門と差出たる處の周圍とに窓あり門の長五十キユビト濶二十五キユビトなり三〇差出たる處周圍にありその長二十五キユビト濶五キユビト三一其差出たる處は外庭に出づその柱の上に棕櫚あり八段の階級をへて升るべし三二彼また内庭の東の方に我をたづさへゆきて門をはかるに前の寸尺の如し三三その守房と柱および差出たる處は寸尺前のごとしその門と差出たる處の周圍とに窓あり門の長五十キユビト濶二十五キユビト三四その差出たる處は外庭にいづ柱の上には此旁彼旁に棕櫚あり八段の階級をへて升るべし三五彼われを北の門にたづさへゆきてこれを量るに寸尺おなじ三六その守房と柱と差出たる處ありその周園に窓あり門の長五十キユビト濶二十五キユビト三七その柱は外庭に出づ柱の上に此旁彼旁に棕櫚あり八段の階をへて升るべし三八門の柱の傍に戸のある室あり其處は燔祭の牲を洗ふところなり三九門の廊に此旁に二の臺彼旁に二の臺あり其上に燔祭 罪祭 愆祭の牲畜を屠るべし四〇北

の門の入口に升るに外面に於て門の廊の傍に二の臺あり亦他の旁にも二の臺あり四一門の側に此旁に四の臺彼旁に四の臺ありて八なり其上に屠ることを爲す四二升口に琢石の四の臺あり長一キユビト半廣一キユビト半高一キユビトなり燔祭および犧牲を宰るところの器具をその上に置く四三内の周圍に一手寛の曲釘うちてあり犧牲の肉は臺の上におかる四四内の門の外において内庭に謳歌人の室あり一は北の門の側にありて南にむかひ一は南の門の側にありて北にむかふ四五彼われに言ふ此南にむかへる室は殿をまもる祭司のための者四六北にむかへる室は壇をまもる祭司のための者なり彼等はレビの子孫の中なるザドクの後裔にしてヱホバに近よりて之に事ふるなり四七而して彼庭をはかるに長百キユビト寛百キユビトにして四角なり殿の前に壇あり四八彼殿の廊に我をひきゆきて廊の柱を量るに此旁も五キユビト彼方も五キユビトあり門の廣は此旁三キユビト彼旁三キユビトなり四九廊の長は二十キユビト寛は十一キユビト階級によりて升るべし柱にそふて柱あり此旁に一箇彼旁に一箇

第四一章 一 彼殿に我をひきゆきて柱を量るに此旁の寛六キユビト彼旁の寛六キユビト幕屋の寛なり二戸の寛は十キユビト戸の側柱は此旁も五キユビト彼旁も五キユビト彼量るに其長四十キユビト廣二十キユビトあり三内にいりて戸の柱を量るに二キユビトあり戸は六キユビト戸の濶は七キユビト四彼量るに其長二十キユビト廣二十キユビトにして殿に向ふ彼我に言けるは是至聖所なり五彼室の壁を量るに六キユビトあり室の周圍の連接屋の寛は四キユビトなり六連接屋は三階にして各三十の間あり室の壁周圍の連接屋の側にありて連接屋は之に連りて堅く立つ然れども室の壁に挿入て堅く立るにあらず七連接屋は上にいたるに随ひて廣くなり行く即ち家の圍牆家の四周に高くのぼれば家は上廣くして下のより上のにのぼる様は中の割合にしたがふなり八我室に高き處あるを見る連接屋の基は一竿に足てその連接る處まで六キユビトなり九連接屋にある外の壁の厚は五キユビト室の連接屋の傍の隙もまた然り一〇室の間にあたりて家の四周に廣二十キユビトの處あり一一連接屋の戸は皆かの隙にむかふ一の戸は北にむかひ一の戸は南にむかふ其隙たる處は四周にありて廣五キユビトなり一二西の方にあたる離處の前の建物は廣七十キユビトその建物の周圍の壁は厚五キユビト長九十キユビト一三彼殿をはかるにその長百キユビトあり離處とその建物とその壁は長百キユビト一四殿の面および離處の東面は廣百キユビトなり一五彼後なる離處の前の建物の長を量り其此旁彼旁の廊下は百キユビトありまた内殿と庭の廊を量り一六彼の三にある處の閾と閉窓と周圍の廊下を量れり閾の對面に當りて周圍に嵌板あり窓まで地を量りしが窓は皆蔽ふてあり一七戸の上なる處内室と外の處および内外の周圍の諸の壁まで量ることをなせり一八ケルビムと棕櫚

と造りてあり二のケルビムの間毎に一本の棕櫚ありケルブには二の面あり一九 此旁には人の面ありて棕櫚にむかひ彼旁には獅子の面ありて棕櫚にむかふ家の周圍に凡て是のごとく造りてあり二〇 地より戸の上までケルビムと棕櫚の設あり殿の壁も然り二一 殿には四角の戸柱あり聖所の前にも同形の者あり二二 壇は木にして高三キユビト長二キユビトなり是に隅木ありその臺と其周圍も木なり彼われに言けるは是はヱホバの前の壇なり二三 殿と聖所とには二の戸あり二四 その戸に二の扉あり是二の開扉なり此戸に二箇彼戸に二箇の扉あり二五 殿の戸にケルビムと棕櫚つくりてあり壁におけるがごとし外の廊の前に木の段あり二六 廊の横壁と家の連接屋と段には此旁彼旁に閉窓と棕櫚あり

第四二章一 彼われを携へ出して北におもむく路よりして外庭にいたり我を室に導く是は北の方にありて離處に對ひ建物に對ひをる二 その百キユビトの長ある所の前に至るに戸は北の方にあり寛は五十キユビト三 内庭の二十キユビトなる處に對ひ外庭の鋪石に對ふ廊下の上に廊下ありて三なり四 室の前に寛十キユビトの路あり又内庭にいたるところの百キユビトの路あり室の戸は北にむかふ五 その建物の上の室は下のと中のとに比れば狹し是は廊下の爲に其場を削らるればなり六 是等は三階にして庭の柱の如くは柱あらず是をもて上のは下のと中のよりもその場狹し七 室の前にあたりて外に垣あり室にそひて外庭にいたる其長五十キユビト八 外庭の室の長は五十キユビトにして殿に對ふ所は百キユビトあり九 その下の方より是等の室いづ外庭よりこれに往ときは其入口東にあり一〇 南の庭垣の廣き方にあたり離處とその建物にむかひて室あり一一 北の方なる室のごとく其前に路ありその長寛およびその出口その建築みな同じ一二 その入口のごとく南の方なる室の入口も然り路の頭に入口あり是は垣に連るところの路にて東より來る路なり一三 彼われに言けるは離處の前なる北の室と南の室は聖き室にしてヱホバに近くところの祭司の至聖き物を食ふべき所なり其處にかれら最聖き物素祭罪祭愆祭の物を置べし其處は聖ければなり一四 祭司は入たるときは聖所より外庭に出べからず彼等職掌を行ふところの衣服を其處に置べし是聖ければなり而して他の衣を着て民に屬するの處に近くべし一五 彼内室を量ることを終て東向の門の路より我を携へ出して四方を量れり一六 彼間竿をもて東面を量るにその周圍間竿五百竿あり一七 又北面をはかるにその周圍間竿五百竿あり一八 また南面をはかるに間竿五百竿あり一九 また西面にまはりて量るに間竿五百竿あり二〇 斯四方を量れり周圍に牆ありその長五百竿寛五百竿聖所と俗所とを區別つなり

第四三章一 彼われを携へて門にいたる其門は東に向ふ二 時にイスラエルの神の榮光東よりきたりしがその聲大水の音のごとくにして地その榮光に照さる三 其狀を見るに我がこの邑を滅

しに來りし時に見たるところの狀の如くに見ゆ又ケバル河の邊にて我が見しところの形のごとき形の者あり我すなはち俯伏す 四 ヱホバの榮光東向の門よりきたりて室に入る 五 靈われを引あげて內庭にたづさへいるにヱホバの榮光室に充をる 六 我聽に室より我に語ふ者あり又人ありてわが傍に立つ 七 彼われに言たまひけるは人の子よ吾位のある所我脚の跖のふむ所此にて我長久にイスラエルの子孫の中に居んイスラエルの家とその王等再びその姦淫とその王等の屍骸およびその崇邱をもてわが聖き名を汚すことなかるべし 八 彼らその閾をわが閾の側に設け其門柱をわが門柱の傍に設けたれば我と其等との間には只壁一重ありしのみ而して彼ら憎むべき事等をおこなひて吾が聖名を汚したるが故に我怒りてかれらを滅したり 九 彼ら今はその姦淫とその王等の屍骸をわが前より除き去ん我また彼らの中に長久に居べし 一〇 人の子よ汝この室をイスラエルの家に示せ彼らその惡を愧ぢまたこの式樣を量らん 一一 彼らその爲たる諸の事を愧なば彼らに此室の製法とその式樣その出口入口その一切の製法その一切の則その一切の製法その一切の法をしらしめよ是をかれらの目の前に書て彼らにその諸の製法とその一切の則を守りてこれを爲しむべし 一二 室の法は是なり山の頂の上なるその地は四方みな最聖し是室の法なり 一三 壇の寸尺はキュビトをもて言ば左のごとしそのキュビトは一キュビトと手寛あり壇の底は一キュビト寛一キュビトその周圍の邊は半キュビト是壇の臺なり 一四 土に坐れる底座より下の層まで二キュビト寛一キュビト又小き層より大なる層まで四キュビト寛一キュビトなり 一五 正壇は四キュビト壇の上の面に四の角あり 一六 壇の上の面は長十二キュビト寛十二キュビトにしてその四面角なり 一七 その層は四方とも長十四キュビト寛十四キュビトその四周の緣は半キュビトその底は四方一キュビトその階は東に向ふ 一八 彼われに言けるは人の子よ主ヱホバかく言たまふ壇を建て其上に燔祭を献げ血を灑ぐ日には是をその則とすべし 一九 主ヱホバかく言ふ汝レビの支派ザドクの裔にして我にちかづき事ふるところの祭司等に犢なる牡牛を罪祭として與ふべし 二〇 又その血を取てこれをその四の角と層の四隅と四周の邊に抹り斯して之を淸め潔ようすべし 二一 汝罪祭の牛を取てこれを聖所の外にて殿の中の定まれる處に焚べし 二二 第二日に汝全き牡山羊を罪祭に献ぐべし即ちかれら牡牛をもて淸めしごとく之をもて壇を淸むべし 二三 汝潔禮を終たる時は犢なる牡牛の全き者および群の全き牡羊を献ぐべし 二四 汝これをヱホバの前に持きたるべし祭司等これに鹽を撒かけ燔祭としてヱホバに献ぐべし 二五 七日の間汝日々に牡山羊を罪祭に供ふべしまた彼ら犢なる牡牛と群の牡羊との全き者を供ふべし 二六 七日の間かれら壇を潔ようしこれを淸めその手を滿すべし 二七 是等の日滿て八日にいたりて後は祭司等汝らの燔祭と酬恩祭をその壇の上に奉へん我悅びて汝らを受納べし主ヱホバこれを言たまふ

第四四章一 斯て彼我を引て聖所の東向なる外の門の路にかへるに門は閉てあり二 ヱホバすなはち我に言たまひけるは此門は閉おくべし開くべからず此より誰も入るべからずイスラエルの神ヱホバ此より入たれば是は閉おくべきなり三 その君は君たるが故にこの内に坐してヱホバの前に食をなさん彼は門の廊の路より入りまたその路より出ん四 彼また我をひきて北の門の路より家の前に至りしが視るにヱホバの榮光ヱホバの家に滿るたれば我俯伏けるに五 ヱホバわれに言たまふ人の子よヱホバの家の諸の則とその諸の法につきて我が汝に告るところの諸の事に心を用ひ目を注ぎ耳を傾け又殿の入口と聖所の諸の出口に心を用ひよ六 而して悖れる者なるイスラエルの家に言べし主ヱホバ斯いふイスラエルの家よ汝らその行ひし諸の憎むべき事等をもて足りとせよ七 即ち汝等は心にも割禮をうけず肉にも割禮をうけざる外國人をひききたりて吾聖所にあらしめてわが家を汚し又わが食なる脂と血を獻ぐることを爲り斯汝らの諸の憎むべき事の上に彼等また吾契約を破れり八 汝ら我が聖物を守る職守を怠り彼らをして我が聖所において汝らにかはりて我の職守を守らしめたり九 主ヱホバかく言たまふイスラエルの子孫の中に居るところの諸の異邦人の中凡て心に割禮をうけず肉に割禮をうけざる異邦人はわが聖所に入るべからず一〇 亦レビ人も迷へるイスラエルがその憎むべき偶像をしたひて我を棄て迷ひし時に我を棄ゆきたる者はその罪を蒙るべし一一 即ち彼らは吾が聖所にありて下僕となり家の門を守る者となり家にて下僕の業をなさん又彼ら民のために燔祭および犧牲の牲畜を殺し民のまへに立てこれに事へん一二 彼等その偶像の前にて民に事へイスラエルの家を礙かせて罪におちいらしめたるが故に主ヱホバ言ふ我手をあげて彼らを罰し彼らをしてその罪を蒙らしめたり一三 彼らは我に近づきて祭司の職をなすべからず至聖所にきたりわが諸の聖き物に近よるべからずその恥とその行ひし諸の憎むべき事等の報を蒙るべし一四 我かれらをして宮守の職務をおこなはしめ宮の諸の業および其中に行ふべき諸の事を爲しむべし一五 然どザドクの裔なるレビの祭司等すなはちイスラエルの子孫が我を棄て迷謬し時にわが聖所の職守を守りたる者等は我に近づきて事へ我まへに立ち脂と血をわれに獻げん主ヱホバこれを言ふなり一六 即ち彼等わが聖所にいり吾が臺にちかづきて我に事へわが職守を守るべし一七 彼等内庭の門にいる時は麻の衣を衣べし内庭の門および家において職をなす時は毛服を身につくべからず一八 首には麻の冠をいただき腰には麻の袴を穿つべし汗のいづるごとくに身をよそほふべからず一九 彼ら外庭にいづる時すなはち外庭にいでて民に就く時はその職をなせるところの衣服を脱てこれを聖き室に置き他の衣服をつくべし是その服をもて民を聖くすること無らんためなり二〇 彼ら頭を剃べからず又髪を長く長すべからずその頭髪を剪るべし二一 祭司たる者は内庭に入ときに酒をのむべからず二二

又寡婦および去れたる婦を妻にめとるべからず唯イスラエルの家の出なる處女を娶るべし又は祭司の妻の寡となりし者を娶るべし二三 彼らわが民を敎へ聖き物と俗の物の區別および汚れたる物と潔き物の區別を之に知しむべし二四 爭論ある時は彼ら起ちて判決き吾定例にしたがひて斷決をなさん我が諸の節期において彼らわが法と憲を守るべく又わが安息日を聖くすべし二五 死人の許にいたりて身を汚すべからず只父のため母のため息子のため息女のため兄弟のため夫なき姉妹のためには身を汚すも宜し二六 斯る人にはその潔齋の後なほ七日を數へ加ふべし二七 彼聖所にいたり內庭にいり聖所にて職を執行ふ日には罪祭を獻ぐべし主ヱホバこれを言ふ二八 彼らの產業は是なり即ち我これが產業たり汝らイスラエルの中にて彼らに所有を與ふべからず我すなはちこれが所有たるなり二九 祭物および罪祭愆祭の物是等を彼等食ふべし凡てイスラエルの中の奉納物は彼らに歸す三〇 諸の物の初實の初および凡て汝らが獻ぐる諸の獻物みな祭司に歸すべし汝等その諸の麥粉の初を祭司に與ふべし是汝の家に幸福あらしめんためなり三一 鳥にもあれ獸にもあれ凡て自ら死にたる者又は裂ころされし者をば祭司たる者食ふべからず

第四五章一 汝ら籤をひき地をわかちて產業となす時は地の一分を取り聖き者となしてヱホバに獻ぐべし其長は二萬五千寛は一萬なるべし是は其四方周圍凡て聖し二 此中聖所に屬する者は長五百寛五百にして周圍四角なり又五十キユビトの隙地その周圍にあり三 汝この量りたる處より長二萬五千寛一萬の場を度り取るべし此うちに聖所至聖所を設くべし四 是は地の聖場なりヱホバに近づき事ふる聖所の役者なる祭司等に屬すべし是かれらの家を建てまた聖所を設くる聖地なり五 又長二萬五千寛一萬の處家に事ふるレビ人に屬し其所有に二十の室あるべし六 その獻げたる聖地に並びて汝ら寛五千長二萬五千の處を分ち邑の所有となすべし是はイスラエルの全家に屬す七 又君たる者の分はかの獻げたる聖地と邑の所有の此處彼處にあり獻げたる聖地に沿ひ邑の所有に沿ひ西は西にわたり東は東に涉るべし西の極より東の極まで其長は支派の分の一と等し八 イスラエルの中に彼が有ところの者は地にあり吾君等は重てわが民を虐ぐることなくイスラエルの家にその支派にしたがひて地を與へおかん九 主ヱホバかく言たまふイスラエルの君等よ汝ら足ことを知れ虐ぐることと掠むる事を止め公道と公義を行へ我民を逐放すことを止よ主ヱホバこれを言ふ一〇 汝ら公平き權衡公平きエパ公平きバテを用ふべし一一 エパとバテとはその量を同じうすべし即ちバテもホメルの十分一を容れエパもホメルの十分一を容るべしホメルに準じてその度量を定むべし一二 シケルは二十ゲラに當る二十シケル二十五シケル十五シケルを汝等マネとなすべし一三 汝らが獻ぐべき獻物は左のごとし一ホメルの小麥の中よりエパの六分一を獻げ一ホメルの大麥の中よりエ

パの六分一を献ぐべし一四油の例油のバテは是のごとし一コルの中よりバテの十分一を献ぐべしコルは十バテを容る者にて即ちホメルなり十バテ一ホメルとなればなり一五又イスラエルの腴なる地より群二百ごとに一箇の羊を出して素祭および燔祭酬恩祭の物に供へ民の罪を贖ふことに用ひしむべし主ヱホバこれを言ふ一六國の民みなこの獻物をイスラエルの君にもちきたるべし一七又君たる者は祭日朔日安息日およびイスラエルの家の諸の節期に燔祭 素祭 灌祭を奉ぐべし即ち彼イスラエルの家の贖罪をなすために罪祭 素祭 燔祭 酬恩祭を執行なふべし一八主ヱホバかく言たまふ正月の元日に汝犢なる全き牡牛を取り聖所を清むべし一九又祭司は罪祭の牲の血を取りて殿の門柱にぬり壇の層の四隅と内庭の門の柱に塗べし二〇月の七日に汝等また迷ふ人および拙き者のために斯なして殿のために贖をなすべし二一正月の十四日に汝ら逾越節を守り七日の間祝をなし無酵パンを食ふべし二二その日に君は己のため又國の諸の民のために牡牛を備へて罪祭となし二三七日の節筵の間七箇の牡牛と七箇の牡羊の全き者を日々に七日の間備へてヱホバに燔祭となし又牡山羊を日々に備へて罪祭となすべし二四彼また素祭として一エパを牡牛のために一エパを牡山羊のために備へ油一ヒンをエパに加ふべし二五七月の十五日の節筵に彼また罪祭 燔祭 素祭および油を是のごとく七日の間備ふべし

第四六章

一主ヱホバかく言たまふ内庭の東向の門は事務をなすところの六日の間は閉ぢ置き安息日にこれを開き又月朔にこれを開くべし二君たる者は外より門の廊の路をとほりて入り門の柱の傍に立つべし祭司等その時かれの爲に燔祭と酬恩祭を備ふべし彼は門の閾において禮拜をなして出べし但し門は暮まで閉べからず三國の民は安息日と月朔とにその門の入口においてヱホバの前に禮拜をなすべし四君が安息日にヱホバに獻ぐる燔祭には六の全き羔羊と一の全き牡羊を用ふべし五又素祭は牡羊のために一エパを用ふべし羔羊のために用ふる素祭はその手の出しうる程を以し一エパに油一ヒンを加ふべし六月朔には犢なる一頭の全き牡牛および六の羔羊と一の牡羊の全き者を用ふべし七素祭は牛のために一エパ牡羊のために一エパ羔羊のために其手のおよぶ程を備へ一エパに油一ヒンを加ふべし八君は來る時に門の廊の路より入りまたその路より出べし九國の民祭日にヱホバの前に來る時は北の門よりいりて禮拜をなせる者は南の門より出で南の門より入る者は北の門より出べし其入りたる門より歸るべからず眞直に進みて出べし一〇君彼らの中にありてその入る時に入りその出る時に出べし一一祭日と祝日には素祭として牛のために一エパ牡羊のために一エパ羔羊のためにはその手の出し得る程を備へ一エパに油一ヒンを加ふべし一二君もし自ら好んでヱホバに燔祭を備へんとし又は自ら好んで酬恩祭を備へんとせば彼のために東向の門を開くべし彼は安息日に爲ごとくその燔祭と酬恩祭を備ふべし又彼が出たる時はその出たる

後に門を閉べし一三汝日々に一歳の全き羔羊一箇を燔祭としてヱホバに備ふべし即ち朝ごとにこれを備ふべし一四汝朝ごとに素祭をこれに加ふべし即ち一エパの六分一と麥粉を濕す油一ヒンの三分一とを素祭としてヱホバに獻ぐべし是は長久に續くところの例典なり一五即ち朝ごとに羔羊と素祭と油とを燔祭にそなへて止ことなかるべし一六主ヱホバかく言たまふ君もし其子の一人に讓物をなす時は是その人の產業となりその子孫に傳はりて之が所有となるべし一七然ど若その產業の中をその僕の一人に與ふる時は是は解放の年までその人に屬し居て遂に君にかへるべし彼の產業は只その子孫にのみ傳はるべきなり一八君たる者は民の產業を取て民をその所有より逐放すべからず只己の所有の中をその子等に傳ふべし是わが民のその所有をはなれて散ることなからんためなり一九斯て彼門の傍の入口より我をたづさへいりて北向なる祭司の聖き室にいたるに西の奥に一箇の處あり二〇彼われに言けるは是は祭司が愆祭および罪祭の物を烹素祭の物を拷ところなり斯するはこれを外庭に携へいでて民を聖くすることなからんためなり二一彼また我を外庭に携へいだして庭の四隅をとほらしむるに庭の隅々にまた庭あり二二即ち庭の四隅に庭の設ありてその長四十キユビト廣三十キユビトなり四隅の處その寸尺みな同じ二三凡てその四の周圍なるその建物の下に烹飪の處造りてあり二四彼われに云けるは是等は家の役者等が民の犧牲の品を烹る廚房なり

第四七章 一斯てかれ我を室の門に携へかへりしが室の閾の下より水の東の方に流れ出るあり室の面は東にむかひをりその水下より出で室の右の方よりして壇の南より流れ下る二彼北の門の路より我を携へいだして外面をまはらしめ東にむかふ外の門にいたらしむるに水門の右の方より流れ出づ三その人東に進み手に度繩を持て一千キユビトを度り我に水をわたらしむるに水踝骨にまでおよぶ四彼また一千を度り我を渉らしむるに水膝にまでおよぶ而してまた一千を度り我を渉らしむるに水腰にまで及ぶ五彼また一千を度るに早わが渉るあたはざる河となり水高くして泅ぐほどの水となり徒渉すべからざる河とはなりぬ六彼われに言けるは人の子よ汝これを見とめたるやと乃ち河の岸に沿て我を將かへれり七我歸るに河の岸の此方彼方に甚だ衆多の樹々生ひ立るあり八彼われに言ふこの水東の境に流れゆきアラバにおち下りて海に入る是海に入ればその水すなはち醫ゆ九凡そ此河の往ところには諸の動くところの生物みな生ん又甚だ衆多の魚あるべし此水到るところにて醫すことをなせばなり此河のいたる處にては物みな生べきなり一〇漁者その傍に立んエンゲデよりエネグライムまでは網を張る處となるべしその魚はその類にしたがひて大海の魚のごとく甚だ多からん一一但しその澤地と濕地とは愈ることあらずして鹽地となりをるべし一二河の傍その岸の此旁彼旁に食はるる果を結ぶ諸の樹生そだたん

その葉は枯ずその果は絶ず月々新しき果をむすぶべし是その水かの聖所より流れいづればなりその果は食となりその葉は藥とならん一三主ヱホバかく言たまふ汝らイスラエルの十二の支派の中に地を分ちてその產業となさしむるにはその界を斯さだむべしヨセフは二分を得べきなり一四汝ら各々均しく之を獲て產業とすべし是は我が手をあげて汝らの先祖等に與へし者なり斯この地汝らに歸して產業とならん一五地の界は左のごとし北は大海よりヘテロンの路をへてゼダデの方にいたり一六ハマテ、ベロクにいたりダマスコの界とハマテの界の間なるシブライムにいたりハウランの界なるハザルハテコンにいたる一七海よりの界はダマスコの界のハザルエノンにいたる北の方においてはハマテその界たり北の方は是のごとし一八東の方はハウラン、ダマスコ、ギレアデとイスラエルの地との間にヨルダンあり汝らかの界より東の海までを量るべし東の方は斯のごとし一九南の方はタマルよりメリボテカデシにおよび河に沿て大海にいたる南の方は是のごとし二〇西の方は大海にしてこの界よりハマテにおよぶ西の方は是のごとし二一汝らイスラエルの支派にしたがひて此地を汝らの中にわかつべし二二汝ら籤をもて之を汝らの中に分ち又汝らの中にをりて汝らの中に子等を擧けたる異邦人の中に分ちて產業となすべし斯る人は汝らにおけることイスラエルの子孫の中に生れたる本國人のごとし彼らも汝らと共に籤をひきてイスラエルの支派の中に產業を得べし二三異邦人にはその住ところの支派の中にて汝ら之に產業を與ふべし主ヱホバこれを言たまふ

第四八章

一支派の名は是のごとしダンの一分は北の極よりヘテロンの路の傍にいたりハマテにいたり北におもむきてダマスコの界なるハザルエノンにいたりハマテの傍におよぶ是その東の方と西の方なり二アセルの一分はダンの界にそひて東の方より西の方にわたる三ナフタリの一分はアセルの界にそひて東の方より西の方にわたる四マナセの一分はナフタリの界にそひて東の方より西の方にわたる五エフライムの一分はマナセの界にそひて東の方より西の方にわたる六ルペンの一分はエフライムの界にそひて東の方より西の方にわたる七ユダの一分はルベンの界にそひて東の方より西の方にわたる八ユダの界にそひて東の方より西の方にわたる處をもて汝らが献ぐるところの献納地となすべし其廣二萬五千其東の方より西の方にわたる長は他の一の分のごとし聖所はその中にあるべし九即ち汝らがヱホバに献ぐるところの献納地は長二萬五千廣一萬なるべし一〇この聖き献納地は祭司に屬し北は二萬五千西は廣一萬東は廣一萬南は長二萬五千ヱホバの聖所その中にあるべし一一ザドクの子孫たる者すなはち我が職守をまもりイスラエルの子孫が迷謬し時にレビ人の迷ひしごとく迷はざりし者の中聖別られて祭司となれる者に是は屬すべし一二その献げたる地の中より一分の至聖き献納地かれらに屬してレビの境界に沿ふ一三レビ人

の地は祭司の地にならびて其長二萬五千廣一萬なり即ちその都の長二萬五千その廣一萬なり 一四 彼らこれを賣べからず換べからず又その地の初實は人にわたすべからず是ヱホバに屬する聖物なればなり 一五 彼二萬五千の處に沿て殘れる廣五千の處は俗地にして邑を建て住家を設くべし又郊地となすべし邑その中にあるべし 一六 その廣狹は左のごとし北の方四千五百南の方四千五百東の方四千五百西の方四千五百 一七 邑の郊地は北二百五十南二百五十東二百五十西二百五十 一八 聖き獻納地にならびて餘れる處の長は東へ一萬西へ一萬なり是は聖き獻納地に並びその產物は邑の役人の食物となるべし 一九 邑の役人はイスラエルの諸の支派より出てその職をなすべし 二〇 その獻納地の惣體は堅二萬五千横二萬五千なりこの聖き獻納地の四分の一にあたる處を取て邑の所有となすべし 二一 聖き獻納地と邑の所有との此旁彼旁に餘れる處は君に屬すべし是はすなはち獻納地の二萬五千なる所に沿て東の界にいたり西はかの二萬五千なる所にそひて西の界に至りて支派の分と相並ぶ是君に屬すべし聖き獻納地と室の聖所とはその中間にあるべし 二二 君に屬する所の中間にあるレビ人の所有と邑の所有の兩傍ユダの境とベニヤミンの境の間にある所は君の所有たり 二三 その餘の支派はベニヤミンの一分東の方より西の方にわたる 二四 シメオンの一分はベニヤミンの境にそひて東の方より西の方にわたる 二五 イッサカルの一分はシメオンの境にそひて東の方より西の方にわたる 二六 ゼブルンの一分はイッサカルの境にそひて東の方より西の方にわたる 二七 ガドの一分はゼブルンの境にそひて東の方より西の方にわたる 二八 南の方はその界ガドの境界にそひてタマルよりメリボテカデシにおよび河に沿て大海にいたる 二九 是は汝らが籤をもてイスラエルの支派の中にわかちて產業となすべき地なりその分は斯のごとし主ヱホバこれを言たまふ 三〇 邑の出口は斯のごとしすなはち北の方の廣四千五百あり 三一 邑の門はイスラエルの支流の名にしたがひ北に三あり即ちルベンの門一ユダの門一レビの門一 三二 東の方も四千五百にして三の門あり即ちヨセフの門一ベニヤミンの門一ダンの門一 三三 南の方も四千五百にして三の門ありすなはちシメオンの門一イッサカルの門一ゼブルンの門一 三四 西の方も四千五百にしてその門三あり即ちガドの門一アセルの門一ナフタリの門一 三五 四周は一萬八千あり邑の名は此日よりヱホバ此に在すと云ふ

ダニエル書

第一章 一 ユダの王エホヤキムの治世の第三年にバビロンの王ネブカデネザル、エルサレムにきたりて之を攻圍みしに 二 主ユダの王ヱホヤキムと神の家の器具幾何とをかれの手にわたしたまひければ則ちこれをシナルの地に携へゆきて己の神の家にいたりその器具を己の神の庫に蔵めたり 三 茲に王寺人の長アシベナズに命じてイスラエルの子孫の中より王の血統の者と貴族たる者幾何を召寄しむ 四 即ち身に疵なく容貌美しくして一切の智慧の道に頴く知識ありて思慮深く王の宮に侍るに足る能幹ある少き者を召寄しめこれにカルデヤ人の文學と言語とを學ばせんとす 五 是をもて王は命を下して日々に王の用ゐる饌と王の飲む酒とを彼らに與へしめ三年の間かく彼らを養ひ育てしめんとす是その後に彼らをして王の前に立ことを得せしめんとてなり 六 是等の中にユダの人ダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤありしが 七 寺人の長かれらに名をあたへてダニエルをベルテシヤザルと名けハナニヤをシヤデラクと名けミシヤエルをメシヤクと名けアザリヤをアベデネゴと名く 八 然るにダニエルは王の用ゐる饌と王の飲む酒とをもて己の身を汚すまじと心に思ひさだめたれば己の身を汚さざらしめんことを寺人の長に求む 九 以前よりヱホバ、ダニエルをして寺人の長の慈悲と寵愛とを蒙らしめたまふ 一〇 是において寺人の長ダニエルに言けるは吾主なる王すでに汝らの食物と汝らの飲物とを頒たしめたまへば我かれを畏る恐くは彼なんぢらの面の其同輩の少者等と異にして憂色あるを見ん然る時は汝らのために我首王の前に危からん 一一 寺人の長はメルザル官をしてダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル及びアザリヤを監督らせ置たればダニエル之に言けるは 一二 請ふ十日の間僕等を驗したまへ即ち我らには菜蔬を與へて食せ水を與へて飲せよ 一三 而して我らの面と王の饌を食ふ少者どもの面とを較べ見汝の視るところにしたがひて僕等を待ひたまへと 一四 是において彼この事を聽いれ十日のあひだ彼らを驗しけるが 一五 十日の後にいたりて見るに王の饌を食へる諸の少者よりも彼らの面は美しくまた肥え膩つきてありければ 一六 メルザル官すなはち彼らの分なる饌と彼らの飲べき酒とを撤きさりて菜蔬をこれに與へたり 一七 この四人の少者には神知識を得させ諸の文學と智慧に頴からしめたまへりダニエはまた能く各諸の異象と夢兆を曉る 一八 王かねて命をくだし少者どもを召いるる迄に經べき日を定めおきしがその日數も過たるに因て寺人の長かれらを引てネブカデザルの前にいたりければ 一九 王かれらと言談へり彼ら一切の中にはダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤに比ぶ者あらざりければこの四人は王の前に侍れり 二〇 王かれらに諸の事を詢たづね見に彼らは智慧の學においてその全國の博士と法術士に愈ること十倍なり 二一 ダニエルはクロス王の元年までありき

第二章 一 ネブカデネザルの治世の二年にネブカデネザル夢を見それがために心に思ひなやみて復睡ること能はざりき 二 是をもて王は命を下し王のためにその夢を解せんとて博士と法術士と魔術士とカルデヤ人とを召しめたれば彼ら來りて王の前に立つ 三 王すなはち彼らにむかひ我夢を見その夢の義を知んと心に思ひなやむと言ければ 四 カルデヤ人等スリア語をもて王に申しけるは願くは王長壽かれ請ふ僕等にその夢を語りたまへ我らその解明を進めたてまつらんと 五 王こたへてカルデヤ人に言けるは我すでに命を出せり汝等もしその夢とこれが解明とを我に示さざるにおいては汝らの身は切裂れ汝らの家は厠にせられん 六 又汝らもしその夢とこれが解明を示さば贈物と賞賚と大なる尊榮とを我より獲ん然ばその夢と之が解明を我に示せ 七 彼らまた對へて言けるは願くは王僕どもにその夢を語りたまへ然ば我らその解明を奏すべしと 八 王こたへて言けるは我あきらかに知る汝らは吾命の下りしを見るが故に時を延さんことを望むなり 九 汝らもしその夢を我に示さずば汝らを處置するの法は只一のみ汝らは相語らひて虚言と妄誕なる詞を我前にのべて時の變るを待んとするなり汝ら今先その夢を我に示せ然すれば汝らがその解明をも我にしめし得ることを我しらんと 一〇 カルデヤ人等こたへて王の前に申しけるは世の中には王のその事を示し得る人一箇もなし是をもて王たる者主たる者君たる者等の中に斯る事を博士または法術士またはカルデヤ人に問たづねし者絶てあらざるなり 一一 王の問たまふその事は甚だ難し肉身なる者と共に居ざる神々を除きては王の前にこれを示すことを得る者無るべしと 一二 斯りしかば王怒を發し大に憤りバビロンの智者をことごとく殺せと命じたり 一三 即ち此命くだりければ智者等は殺されんとせり又ダニエルとその同僚をも殺さんともとめたり 一四 茲に王の侍衛の長アリオク、バビロンの智者等を殺さんとて出きたりければダニエル遠慮と智慧とをもて之に應答せり 一五 すなはち王の高官アリオクに對へて言けるは王なにとて斯すみやかにこの命を下したまひしやとアリオクその事をダニエルに告しらせたれば 一六 ダニエルいりて王に乞求めて言ふ暫くの時日を賜へ然ばその解明を王に奏せんと 一七 斯てダニエルその家にかへりその同僚ハナニヤ、ミシヤエルおよびアザリヤにこの事を告しらせ 一八 共にこの秘密につき天の神の憐憫を乞ひダニエルとその同僚等をしてその他のバビロンの智者とともに滅びさらしめんことを求めたりしが 一九 ダニエルつひに夜の異象の中にこの秘密を示されければダニエル天の神を稱賛ふ 二〇 即ちダニエル應へて言けるは永遠より永遠にいたるまでこの神の御名は讃まつるべきなり智慧と權能はこれが有なればなり 二一 彼は時と期とを變じ王を廢し王を立て智者に智慧を與へ賢者に知識を賜ふ 二二 彼は深妙秘密の事を顯し幽暗にあるところの者を知たまふまた光明彼の裏にあり 二三 わが先祖等の神よ汝は我に智慧と權能を賜ひ今われらが汝に乞求め

たるところの事を我にしめし給へば我感謝して汝を稱贊ふ即ち汝は王のかの事を我らに示したまへり二四 是においてダニエルは王がバビロンの智者等を殺すことを命じおけるアリオクの許にいたり即ちいりてこれに言けるはバビロンの智者等を殺す勿れ我を王の前に引いたれよ我その解明を王に奏上ぐべしと二五 アリオクすなはちダニエルを引て急ぎ王の前にいたり王にまうしけるは我ユダの俘囚人の中に一箇の人を得たり是者その解明を王にまうしあげん二六 王こたへてベルテシヤザルと名くるダニエルに言けるは汝は我が見たる夢とその解明とを我に知らすることを得るやと二七 ダニエルすなはち應へて王の前に言けるは王の問たまふ秘密は智者法術士博士卜筮師など之を王に奏上ぐることを得ず二八 然ど天に一の神ありて秘密をあらはし給ふ彼後の日に起らんところの事の如何なるかをネブカデネザル王にしらせたまふなり汝の夢汝が牀にありて想見たまひし汝の腦中の異象は是なり二九 王よ汝牀にいりし時將來の事の如何を想ひまはしたまひしが秘密を顯す者將來の事の如何を汝にしめし給へり三〇 我がこの示現を蒙れるは凡の生る者にまさりて我に智慧あるに由にあらず唯その解明を王に知しむる事ありて王のつひにその心に想ひたまひし事を知にいたり給はんがためなり三一 王よ汝は一箇の巨なる像の汝の前に立るを見たまへり其像は大くしてその光輝は常ならずその形は畏ろしくあり三二 其像は頭は純金胸と兩腕とは銀腹と腿とは銅三三 脛は鐵脚は一分は鐵一分は泥土なり三四 汝見て居たまひしに遂に一箇の石人手によらずして鑿れて出でその像の鐵と泥土との脚を撃てこれを碎けり三五 斯りしかばその鐵と泥土と銅と銀と金とは皆ともに碎けて夏の禾場の糠のごとくに成り風に吹はらはれて止るところ無りき而してその像を撃たる石は大なる山となりて全地に充り三六 是その夢なり我らその解明を王の前に陳ん三七 王よ汝は諸王の王にいませり即ち天の神汝に國と權威と能力と尊貴とを賜へり三八 また人の子等野の獸畜および天空の鳥は何處にをる者にもあれ皆これを汝の手に與へて汝にこれをことごとく治めしめたまふ汝はすなはち此金の頭なり三九 汝の後に汝に劣る一の國おこらんまた第三に銅の國おこりて全世界を治めん四〇 第四の國は堅きこと鐵のごとくならん鐵は能く萬の物を毀ち碎くなり鐵の是等をことごとく打碎くがごとく其國は毀ちかつ碎くことをせん四一 汝その足と足の趾を見たまひしに一分は陶人の泥土一分は鐵なりければその國は分裂たる者ならん又汝鐵と粘土との混和たるを見たまひたればその國は鐵のごとく強からん四二 その足の趾の一分は鐵一分は泥土なりしごとくその國は強きところもあり脆きところも有ん四三 汝が鐵と粘土との混りたるを見たまひしごとく其等は人草の種子と混らん然ど鐵と泥土との相合せざるごとく彼と此と相合すること有じ四四 この王等の日に天の神一の國を建たまはん是は何時までも滅ぶること無らん此國は他の民に歸せず却てこの諸

の國を打破りてこれを滅せん是は立ちて永遠にいたらん四五かの石の人手によらずして山より鑿れて出で鐵と銅と泥土と銀と金とを打碎きしを汝が見たまひしは即ちこの事なり大御神この後に起らんところの事を王にしらせたまへるなりその夢は眞にしてこの解明は確なり四六是においてネブカデネザル王は俯伏てダニエルを拜し禮物と香をこれに献ぐることを命じたり四七而して王こたへてダニエルに言けるは汝がこの秘密を明かに示すことを得たるを見れば誠に汝らの神は神等の神王等の主にして能く秘密を示す者なりと四八かくて王はダニエルに高位を授け種々の大なる賜物を與へてこれをバビロン全州の總督となしまたバビロンの智者等を統る者の首長となせり四九王またダニエルの願によりてシヤデラクとメシヤクとアベデネゴを擧てバビロン州の事務をつかさどらしめたりダニエルは王の宮にをる

第三章一茲にネブカデネザル王一箇の金の像を造れりその高は六十キユビトその横の廣は六キユビトなりき即ちこれをバビロン州のドラの平野に立たり二而してネブカデネザル王は州牧將軍方伯刑官庫官法官士師および州郡の諸有司を召集めそのネブカデネザル王の立たる像の告成禮に臨ましめんとせり三是においてその州牧將軍方伯刑官庫官法官士師および州郡の諸有司等はネブカデネザル王の立たる像の告成禮に臨みそのネブカデネザル王の立たる像の前に立り四時に傳令者大聲に呼はりて言ふ諸民諸族諸音よ汝らは斯命ぜらる五汝ら喇叭簫琵琶琴瑟箏簫などの諸の樂器の音を聞く時は俯伏しネブカデネザル王の立たまへる金像を拜すべし六凡て俯伏て拜せざる者は即時に火の燃る爐の中に投こまるべしと七是をもて諸民等喇叭簫琵琶琴瑟などの諸の樂器の音を聞くや直に諸民諸族諸音みな俯伏しネブカデネザル王の立たる金像を拜したり八その時或カルデヤ人等進みきたりてユダヤ人を讒奏せり九即ち彼らネブカデネザル王に奏聞して言ふ願くは王長壽かれ一〇王よ汝は命を出して宣へり凡て喇叭簫琵琶琴瑟箏簫などの諸の樂器の音を聞く者はみな俯伏しこの金像を拜すべし一一凡て俯伏し拜せざる者はみな火の燃る爐の中に投こまるべしと一二此に汝が立てバビロン州の事務を司どらせ給へるユダヤ人シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴあり王よ此人々は汝を尊ばず汝の神々にも事へず汝の立たまへる金像をも拜せざるなりと一三是においてネブカデネザル怒りかつ憤りてシヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴを召寄よと命じければ即ちこの人々を王の前に引きたりしに一四ネブカデネザルかれらに問て言けるはジヤデラク、メシヤク、アベデネゴよ汝ら我神に事へずまた我が立たる金像を拜せざるは是故意にするなるか一五汝らもし何の時にもあれ喇叭簫琵琶琴瑟箏簫などの諸の樂器の音を聞く時に俯伏し我が造れる像を拜することを爲ば可し然ど汝らもし拜することをせずば即時に火の燃る爐の中に投こまるべし何の神か能く汝らを

わが手より救ひいだすことをせん一六シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴ對へて王に言けるはネブカデネザルよこの事においては我ら汝に答ふるに及ばず一七もし善らんには王よ我らの事ふる我らの神我らを救ふの能あり彼その火の燃る爐の中と汝の手の中より我らを救ひいださん一八假令しからざるも王よ知たまへ我らは汝の神々に事へずまた汝の立たる金像を拝せじ一九是においてネブカデネザル怒氣を充しシヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴにむかひてその面の容を變へ即ち爐を常に熱くするよりも七倍熱くせよと命じ二〇またその軍勢の中の力強き人々を喚てシヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴを縛りてこれを火の燃る爐の中に投こめと命じたり二一是をもて此人々はその褲子羽織外套およびその他の服装を着たるままにて縛られて火の燃る爐の中に投こまれたりしが二二王の命はなはだ急にして爐は甚だしく熱しゐたれば彼のシヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴを引抱へゆける者等はその火焔に燒ころされたり二三また此シヤデラク、メシヤク、デベデネゴの三人は縛られたるままにて燃る爐の中に落いりぬ二四時にネブカデネザル王驚きて急忙しくたちあがり大臣等に言ふ我らは三人を縛りて火の中に投いれざりしや彼ら王にこたへて言ふ王よ然りと二五王また應へて言ふ今我見るに四人の者縲絏解て火の中に歩みをり凡て何の害をも受ずまたその第四の者の容は神の子のごとしと二六ネブカデネザルすなはちその火の燃る爐の口に進みよりて呼て言ふ至高神の僕シヤデラク、メシヤク、アベデネゴよ汝ら出きたれと是においてシヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴその火の中より出きたりしかば二七州牧將軍方伯および王の大臣等集りて此人々を見たり此人々の身は火もこれを害する力なかりきまたその頭の髮は燒けずその衣裳は傷ねず火の臭氣もこれに付ざりき二八ネブカデネザルすなはち宣て曰くシヤデラク、メシヤク、アベデネゴの神は讃べき哉彼その使者を遣りて己を頼む僕を救へりまた彼らは自己の神の外には何の神にも事へずまた拝せざらんとて王の命をも用ひず自己の身をも捨んとせり二九然ば我今命を下す諸民諸族諸音の中凡てシヤデラク、メシヤクおよびアベダネゴの神を詈る者あらばその身は切裂れその家は厠にせられん其は是のごとくに救を施す神他にあらざればなりと三〇かくて王またシヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴの位をすすめてバビロン州にをらしむ

第四章一ネブカデネザル王全世界に住める諸民諸族諸音に諭す願くは大なる平安汝らにあれ二至高神我にむかひて徴證と奇蹟を行へり我これを知しむることを善と思ふ三嗚呼大なるかなその徴證嗚呼盛なるかなその奇蹟その國は永遠の國その權は世々限なし四我ネブカデネザルわが家に安然に居りわが宮に榮え居れり五我一の夢を見て之がために懼れ即ち床にありてその事を想ひめぐらしその我腦中の異象のために心をなやませり六是に於て我命を下しバビロンの智者をことごとく我前に召よ

せしめてその夢の解明を我にしめさせんと爲たれば七 すなはち博士法術士カルデヤ人卜筮師等きたりしに因て我その夢を彼らに語りけるに彼らはその解明を我にしめすことを得ざりき八 かくて後ダニエルわが前に來れり彼の名は吾神の名にしたがひてベルテシヤザルと稱へられその裏には聖神の霊やどれり我その夢を彼の前に語りて曰けらく九 博士の長ベルテシヤザルよ我しる汝の裏には聖神の霊やどれば如何なる秘密も汝には難き事なし我が夢に見たるところの事等を聞きその解明を我に告げよ一〇 我が床にありて見たる吾腦中の異象は是のごとし我觀しに地の當中に一の樹ありてその丈高かりしが一一 その樹長じて強固なり天に達するほどの高となりて地の極までも見えわたり一二 その葉は美しくその菓は饒にして一切の者その中より食を得また野の獸その蔭に臥し空の鳥その枝に棲み凡て血氣ある者みな是によりて身を養ふ一三 我床にありて得たる腦中の異象の中に一箇の警寤者一箇の聖者の天より下るを見たりしが一四 彼聲高く呼はりて斯いへり此樹を伐たふしその枝を斫はなしその葉を搖おとしその果を打散し獸をしてその下より逃はしらせ鳥をしてその枝を飛さらしめよ一五 但しその根の上の斬株を地に遺しおき鐵と銅の索をかけて之を野の草の中にあらしめよ是は天よりくだる露に濕れまた地の草の中にて獸とその分を同じうせん一六 又その心は變りて人間の心のごとくならず獸の心を稟て七の時を經ん一七 この事は警寤者等の命によりこの事は聖者等の言による是至高者人間の國を治めて自己の意のままにこれを人に與へまた人の中の最も賤き者をその上に立たまふといふ事を一切の者に知しめんがためなり一八 我ネブカデネザル王この夢を見たりベルテシヤザルよ汝その解明を我に述よ我國の智者は執も皆その解明を我に示すことを得ざりしが汝は之を能せん其は汝の裏には聖神の霊やどればなりと一九 その時ダニエル又の名はベルテシヤザルとい者暫時の間驚き居り心に深く懼れたれば王これに告て言りベルテシヤザルよ汝この夢とその解明のために懼るるにおよばずとベルテシヤザルすなはち答へて言けらく我主よ願くはこの夢汝を惡む者の上にかからん事を願くは此解明汝の敵にのぞまんことを二〇 汝が見たまひし樹すなはちその長じて強くなり天に達するほどの高となりて地の極までも見えわたり二一 その葉は美しくその果は饒にして一切の者その中より食を得またその下に野の獸臥しその枝に空の鳥棲たる者二二 王よ是はすなはち汝なり汝は長じて強くなり汝の勢ひは盛にして天におよび汝の權は地の極にまでおよべり二三 王また一箇の警寤者一箇の聖者の天より下りて斯言ふを見たまへり云くこの樹を伐たふして之をそこなへ但し其根の上の斬株を地に遺しおき鐵と銅の索をかけて之を野の草の中にあらしめよ是は天より下る露に濡れ野の獸とその分を同じうして七の時を經ん二四 王よその解明は是の如し是即ち至高者の命にして王我主に臨まんとする者なり二五 即ち汝は逐

れて世の人と離れ野の獸とともに居り牛のごとくに草を食ひ天よりくだる露に濡れん是の如くにして七の時を經て汝つひに知ん至高者人間の國を治めて自己の意のままに之を人に與へ給ふと二六又彼らその樹の根の上の斬株を遺しおけと言たれば汝の國は汝が天は主たりと知にいたる時まで汝を離れん二七然ば王よ吾諫を容れ義をおこなひて罪を離れ貧者を憐みて惡を離れよ然らば汝の平安あるひは長く續かんと二八この事みなネブカデネザル王に臨めり二九十二箇月を經て後王バビロンの王宮の上に歩みをり三〇王すなはち語りて言ふ此大なるバビロンは我が大なる力をもて建て京城となし之をもてわが威光を耀かす者ならずや三一その言なほ王の口にある中に天より聲降りて言ふネブカデネザル王よ汝に告ぐ汝は國の位を失はん三二汝は逐れて世の人と離れ野の獸と共に居り牛のごとくに草を食はん斯の如くにして七の時を經て汝つひに知ん至高者人間の國を治めて己れの意のままにこれを人に與へたまふと三三その時直にこの事ネブカデネザルに臨み彼は逐れて世の人に離れ牛のごとくに草を食ひてその身は天よりくだる露に濡れ終にその髮毛は鷲の羽のごとくになりその爪は鳥の爪のごとくになりぬ三四斯てその日の滿たる後我ネブカデネザル目をあげて天を望みしにわが分別性我に歸りたれば我至高者に感謝しその永遠に生る者を讃かつ崇めたり彼の御宇は永遠の御宇彼の國は世々かぎり無し三五地上の居民は凡て無き者のごとし天の衆群にも地の居民にも彼はその意のままに事をなしたまふ誰も彼の手をおさへて汝なんぞ然するやと言ことを得る者なし三六この時わが分別性かく我に歸りたりしがわが國の榮光につきてはまた我の尊嚴と光耀我にかへれり且また大臣牧伯等我に請求めて我ふたたび國の祚を踐み前よりも著しく威光を增たり三七是において我ネブカデネザル今は天の王を讃頌へかつ崇む彼の作爲は凡て眞實彼の道は正義自ら高ぶる者は彼能くこれを卑くしたまふ

第五章一ベルシヤザル王その大臣一千人のために酒宴を設けその一千人の者の前に酒を飮たりしが二酒の進むにいたりてベルシヤザルはその父ネブカデネザルがヱルサレムの宮より取きたりし金銀の器を携へいたれと命ぜり是王とその大臣および王の妻妾等みな之をもて酒を飮んとてなりき三是をもてそのヱルサレムなる神の宮の内院より取たりし金の器を携へいたりければ王とその大臣および王の妻妾等これをもて飮めり四すなはち彼らは酒をのみて金銀銅鐵木石などの神を讃たたへたりしが五その時に人の手の指あらはれて燭臺と相對する王の宮の粉壁に物書り王その物書る手の末を見たり六是において王の愉快なる顔色は變りその心は思ひなやみて安からず腿の關節はゆるみ膝はあひ撃り七王すなはち大聲に呼はりて法術士カルデヤ人卜筮師等を召きたらしめ而して王バビロンの智者等に告て言ふこの文字を讀みその解明を我に示す者には紫の衣を衣せ頸に

金の鏈をかけさせて之を國の第三の牧伯となさんと八王の智者等は皆きたりしかどもその文字を讀こと能はずまたその解明を王にしめすこと能はざりければ九ベルシヤザル王おほいに思ひなやみてその顏色を失へりその大臣等もまた驚き懼れたり一〇時に大后王と大臣等の言を聞てその酒宴の室にいりきたり大后すなはち陳て言ふ願くは王長壽かれ汝 心に思ひなやむ勿れまた顏色を失ふにおよばず一一 汝の國に聖神の靈のやどれる一箇の人あり汝の父の代に彼聰明了知および神の智慧のごとき智慧あることを顯せり汝の父ネブカデネザル王すなはち汝の父の王彼を立て博士法術士カルデヤ人卜筮師等の長となせり一二彼はダニエルといへる者なるが王これにベルテシヤザルといふ名を與へたり彼は心の殊勝たる者にて了知あり知識ありて能く夢を解き隱語を解き難問を解くなり然ばダニエルを召されよ彼その解明をしめさんと一三是においてダニエル召れて王の前に至りければ王ダニエルに語りて言ふ汝は吾父の王がユダより曳きたりしユダの俘囚人なるそのダニエルなるか一四我聞になんぢの裏には神の靈やどりをりて汝は聰明了知および非凡の智慧ありと云ふ一五我智者法術士等を吾前に召よせてこの文字を讀しめその解明を我にしめさせんと爲たれども彼らはこの事の解明を我にしめすことを得ず一六我聞に汝は能く物事の解明をなしかつ難問を解くと云ふ然ば汝もし能くこの文字を讀みその解明を我に示さば汝に紫の衣を衣せ金の索を汝の頸にかけさせて汝をこの國の第三の牧伯となさんと一七ダニエルこたへて王に言けるは汝の賜物は汝みづからこれを取り汝の饒物はこれを他の人に與へたまへ然ながら我は王のためにその文字を讀みその解明をこれに知せたてまつらん一八王よ至高神汝の父ネブカデネザルに國と權勢と榮光と尊貴を賜へり一九彼に權勢を賜ひしによりて諸民諸族諸音みな彼の前に慄き畏れたり彼はその欲する者を殺しその欲する者を活しその欲する者を上げその欲する者を下ししなり二〇而して彼 心に高ぶり氣を剛愎にして驕りしかばその國の位をすべりてその尊貴を失ひ二一逐れて世の人と離れその心は獸のごとくに成りその住所は野馬の中にあり牛のごとくに草を食ひてその身は天よりの露に濡たり是のごとくにして終に彼は至高神の人間の國を治めてその意のままに人を立たまふといふことをしるにいたれり二二ベルシヤザルよ汝は彼の子にして此事を盡く知るといへども猶その心を卑くせず二三却つて天の主にむかひて自ら高ぶりその家の器皿を汝の前に持きたらしめて汝と汝の大臣と汝の妻妾等それをもて酒を飲み而して汝は見ことも聞ことも知こともあらぬ金銀銅鐵木石の神を讃頌ふることを爲し汝の生命をその手に握り汝の一切の道を主どりたまふ神を崇むることをせず二四是をもて彼の前よりこの手の末いできたりてこの文字を書るなり二五その書る文字は是のごとしメネ、メネ、テケル、ウバルシン二六その言の解明は是のごとしメネ（數へたり）は神 汝の治世を數へて

これをその終に至らせしを謂なり二七テケル（秤れり）は汝が權衡にて秤られて汝の重の足らざることの顯れたるを謂なり二八ペレス（分たれたり）は汝の國の分たれてメデアとペルシヤに與へらるるを謂なり二九是においてベルシヤザル命を降してダニエルに紫の衣を着せしめ金の鏈をこれが頸にかけさせて彼は國の第三の牧伯なりと布告せり三〇カルデヤ人の王ベルシヤザルはその夜の中に殺され三一メデア人ダリヨスその國を獲たり此時ダリヨスは六十二歳なりき

第六章一ダリヨスはその國に百二十人の牧伯を立ることを善とし即ちこれを立て全國を治理しめ二また彼らの上に監督三人を立たりダニエルはその一人なりき是その州牧をして此三人の前にその職を述しめて王に損失の及ぶこと無らしめんためなりき三ダニエルは心の殊勝たる者にしてその他の監督および州牧等に勝りたれば王かれを立て全國を治めしめんとせり四是においてその監督と州牧等國事につきてダエルを訟ふる隙を得んとしたりしが何の隙をも何の咎をも見いだすことを得ざりき其は彼は忠義なる者にてその身に何の咎もなく何の過失もなかりければなり五是においてその人々言けるはこのダニエルはその神の例典について之が隙を獲にあらざればついにこれを訟るに由なしと六すなはちその監督と州牧等王の許に集り來りて斯王に言りダリヨス王よ願くは長壽かれ七國の監督將軍州牧牧伯方伯等みな相議りて王に一の律法を立て一の禁令を定めたまはんことを求めんとす王よその事は是の如し即ち今より三十日の内は唯汝にのみ願事をなさしめ若汝をおきて神または人にこれをなす者あらば凡て獅子の穴に投いれんといふ是なり八然ば王よねがはくはその禁令を立てその詔書を認めメデアとペルシヤの廢ることなき律法のごとくに之をして變らざらしめたまへと九王すなはち詔書をしたためてその禁令を出せり一〇茲にダニエルはその詔書を認めたることを知りて家にかへりけるがその二階の窓のエルサレムにむかひて開ける處にて一日に三度づつ膝をかがめて祷りその神に向て感謝せり是その時の前よりして斯なし居たればなり一一斯りしかばその人々馳よりてダニエルがその神にむかひて祷りかつ求めをるを見あらはせり一二而して彼ら進みきたり王の禁令の事につきて王に奏上して言けるは王よ汝は禁令をしたため出し今より三十日の内には只なんぢにのみ願事をなさしめ若し汝をおきて神または人にこれをなす者あらば凡てその者を獅子の穴に投いれんと定めたまへるならずやと王こたへて言ふ其事は眞實にしてメデアとペルシヤの律法のごとく廢べからざる者なり一三彼らまた對へて王の前に言けるは王よユダの俘虜人なるダニエルは汝をも汝の認め出し給ひし禁令をも顧みずして一日に三度づつ祈祷をなすなりと一四王この事を聞てこれがために大に愁ひダニエルを救はんと心を用ひ即ちこれを拯けんと力をつくして日の入る頃におよびければ一五その人々また王の許に集ひきたりて王に言けるは王よ知りたま

ヘメデアとペルシヤの律法によれば王の立たる禁令または法度は變べからざる者なりと一六是において王命を下しければダニエルを曳きたりて獅子の穴に投いれたり王ダニエルに語りて言ふ願くは汝が恒に事ふる神汝を救はんことをと一七時に石を持きたりてその穴の口を塞ぎければ王おのれの印と大臣等の印をもてこれに封印をなせり是ダニエルの處置をして變ることなからしめんためなりき一八斯て後王はその宮にかへりけるがその夜は食をなさずまた嬪等を召よせずして全く寢ることをせざりき一九而して王は朝まだきに起いでてその獅子の穴に急ぎいたりしが二〇穴にいたりける時哀しげなる聲をあげてダニエルを呼りすなはち王ダニエルに言けるは活神の僕ダニエルよ汝が恒に事ふる神汝を救ふて獅子の害を免れしむることを得しや二一ダニエル王にいひけるは願くは王長壽かれ二二吾神その使をおくりて獅子の口を閉させたまひたれば獅子は我を害せざりき其は我の辜なき事かれの前に明かなればなり王よ我は汝にも惡しき事をなさざりしなりと二三是において王おほいに喜びダニエルを穴の中より出せと命じければダニエルは穴の中より出されけるがその身に何の害をも受をらざりき是は彼おのれの神を賴みたるによりてなり二四かくて王また命を下しかのダニエルを讒奏せし者等を曳きたらせて之をその妻子とともに獅子の穴に投いれしめたるにその穴の底につかざる内に獅子はやくも彼らを攫みてその骨までもことごとく咬碎けり二五是においてダリヨス王全世界に住る諸民諸族諸音に詔書を頒てり云く願くは大なる平安なんぢらにあれ二六今我詔命を出す我國の各州の人みなダニエルの神を畏れ敬ふべし是は活神にして永遠に立つ者またその國は亡びずその權は終極まで續くなり二七是は救を施し拯をなし天においても地においても休徵をほどこし奇蹟をおこなふ者にてすなはちダニエルを救ひて獅子の力を免れしめたりと二八このダニエルはダリヨスの世とペルシヤ人クロスの世においてその身榮えたり

第七章一バビロンの王ベルシヤザルの元年にダニエルその牀にありて夢を見腦中に異象を得たりしが即ちその夢を記してその事の大意を述ぶ二ダニエル述て曰く我夜の異象の中に見てありしに四方の天風大海にむかひて烈しく吹きたり三四箇の大なる獸海より上りきたれりその形はおのおの異なり四第一のは獅子の如くにして鷲の翼ありけるが我見てをりしに是はその翼を拔とられまた地より起され人のごとく足にて立せられ且人の心を賜はれり五第二の獸は熊のごとくなりき是はその體の一方を擧げその口の齒の間に三の脇骨を啣へ居けるが之にむかひて言る者あり曰く起あがりて許多の肉を食へと六その後に我見しに豹のごとき獸いでたりしがその背には鳥の翼四ありこの獸はまた四の頭ありて統轄權をたまはれり七我夜の異象の中に見しにその後第四の獸いでたりしが是は畏しく猛く大に強くして大なる鐵の齒あり食ひかつ咬碎きてその殘餘をば足にて

踏つけたり是はその前に出たる諸の獸とは異なりてまた十の角ありき八我その角を考へ觀つつありけるにその中にまた一箇の小き角出きたりしがこの小き角のために先の角三箇その根より拔おちたりこの小き角には人の目のごとき目ありまた大なる事を言ふ口あり九我觀つつありしに遂に寶座を置列ぶるありて日の老たる者座を占めたりしがその衣は雪のごとくに白くその髮毛は漂潔めたる羊の毛のごとし又その寶座は火の焰にしてその車輪は燃る火なり一〇而して彼の前より一道の火の流わきいづ彼に仕ふる者は千々彼の前に侍る者は萬々審判すなはち始りて書を開けり一一その角の大なる事を言ふ聲によりて我觀つつありけるが我が見る間にその獸は終に殺され體を壞はれて燃る火に投いれられたり一二またその餘の獸はその權威を奪はれたりしがその生命は時と期の至るまで延されたり一三我また夜の異象の中に觀てありけるに人の子のごとき者雲に乘て來り日の老たる者の許に到りたればすなはちその前に導きけるに一四之に權と榮と國とを賜ひて諸民諸族諸音をしてこれに事へしむその權は永遠の權にして移りさらず又その國は亡ぶることなし一五是において我ダニエルその體の內の魂を憂へしめわが腦中の異象のために思ひなやみたれば一六すなはち其處にたてる者の一箇に就てこの一切の事の眞意を問けるに其者われにこの事の解明を告しらせて云く一七この四の大なる獸は地に興らんとする四人の王なり一八然ど終には至高者の聖徒國を受け長久にその國を保ちて世々限りなからんと一九是において我またその第四の獸の眞意を知んと欲せり此獸は他の獸と異なりて至畏ろしくその齒は鐵その爪は銅にして食ひかつ咬碎きてその殘餘を足にて踏つけたり二〇此獸の頭には十の角ありしが其他にまた一の角いできたりしかば之がために三の角拔おちたり此角には目ありまた大なる事を言ふ口ありてその狀はその同類よりも強く見えたり我またこの事を知んと欲せり二一我觀つつありけるに此角聖徒と戰ひてこれに勝たりしが二二終に日の老たる者來りて至高者の聖徒のために公義をおこなへり而してその時いたりて聖徒國を獲たり二三彼かく言り第四の獸は地上の第四の國なり是は一切の國と異なり全世界を幷吞しこれを踏つけかつ打破らん二四その十の角はこの國に興らんところの十人の王なり之が後にまた一人興るべし是は先の者と異なり且その王三人を倒すべし二五かれ至高者に敵して言を出しかつ至高者の聖徒を惱まさん彼また時と法とを變んことを望まん聖徒は一時と二時と半時を經るまで彼の手に付されてあらん二六斯て後審判はじまり彼はその權を奪はれて終極まで滅び亡ん二七而して國と權と天下の國々の勢力とはみな至高者の聖徒たる民に歸せん至高者の國は永遠の國なり諸國の者みな彼に事へかつ順はんと二八その事此にて終れり我ダニエルこれを思ひまはして大に憂へ顏色も變りぬ我この事を心に蔵む

第八章

一我ダニエル前に異象を得たりしが後またベルシヤザル

の第三年にいたりて異象を得たり二我異象を見たり我これを見たる時に吾身はエラム州なるシユシヤンの城にあり我が異象を見たるはウライ河の邊においてなりき三我目を擧て觀しに河の上に一匹の牡羊立をり之に二の角ありてその角共に長かりしが一の角はその他の角よりも長かりきその長き者は後に長たるなり四我觀しにその牡羊西北南にむかひて牴觸りけるが之に敵ることを得る獸一匹も無くまたその手より救ひいだすことを得る者絶てあらざりき是はその意にまかせて事をなしその勢威はなはだ盛なりき五我これを考へ見つつありけるにて一匹の牡山羊全地の上を飛わたりて西より來りしがその足は土を履ざりきこの牡山羊は目の間に著明しき一の角ありき六此者さきに我が河の上に立るを見たる彼の二の角ある牡羊に向ひ來り熾盛なる力をもて之の所に跑いたりけるが七我觀てあるに牡羊に近づくに至りて之にむかひて怒を發し牡羊を撃てその二の角を碎きたるに牡羊には之に敵る力なかりければこれを地に打倒して踏つけたり然るにその牡羊をこれが手より救ひ得る者あらざりき八而してその牡山羊甚だ大きくなりけるがその盛なる時にあたりてかの大なる角折れその代に四の著明しき角生じて天の四方に對へり九またその角の一よりして一の小き角いできたり南にむかひ東にむかひ美地にむかひて甚だ大きくなり一〇天軍におよぶまでに高くなりその軍と星數箇を地に投くだしてこれを踏つけ一一また自ら高ぶりてその軍の主に敵しその常供の物を取のぞきかつその聖所を毀てり一二一軍罪の故によりて常供の物とともに棄られたり彼者はまた眞理を地に擲ち事をなしてその意志を得たり一三かくて我聞に一箇の聖者語ひをりしが又一箇の聖者ありてその語ひをる聖者にむかひて言ふ常供の物と荒廢を來らする罪とにつきて異象にあらはれたるところの事聖所とその軍との棄られて踏つけらるる事は何時まで斯てあるべきかと一四彼すなはち我に言けるは二千三百の朝夕をかさぬるまで斯てあらん而して聖所は潔めらるべし一五我ダニエルこの異象を見てその意義を知んと求めをりける時人のごとく見ゆる者わが前に立り一六時に我聞にウライ河の兩岸の間より人の聲出て呼はりて言ふガブリエルよこの異象をその人に暁らしめよと一七彼すなはち我の立る所にきたりしがその到れる時に我おそれて仆れ伏たるに彼われに言けるは人の子よ暁れ此異象は終の時にかかはる者なりと一八彼の我に語ひける時我は氣を喪へる状にて地に俯伏をりしが彼我に手をつけて我を立せ言けるは一九視よ我忿怒の終に起らんところの事を汝に知せん此事は終末の期におよびてあらん二〇汝が見たるかの二の角ある牡羊はメデアとペルシヤの王なり二一またかの牡山羊はギリシヤの王その目の間の大なる角はその第一の王なり二二またその角をれてその代に四の角生じたればその民よりして四の國おこらん然ど第一の者の權勢には及ばざるなり二三彼らの國の末にいたり罪人の罪貫盈におよびて一人の王おこらんその顏は

猛惡にして巧に詭譎を言ひ二四その權勢は熾盛ならん但し自己の能力をもて之を致すに非ずその毀滅ことを爲は常ならず意志を得て事を爲し權能ある者等と聖民とを滅さん二五彼は機巧をもて詭譎をその手に行ひ遂げ心にみづから高ぶり平和の時に衆多の人を打滅しまた君の君たる者に敵せん然ど終には人手によらずして滅されん二六前に告たる朝夕の異象は眞實なり汝その異象の事を秘しおけ是は衆多の日の後に有べき事なり二七是において我ダニエル疲れはてて數日の間病わづらひて後興いでて王の事務をおこなへり我はこの異象の事を案ひて駭けり人もまたこれを暁ることを得ざりき

第九章一メデア人アハシユエロスの子ダリヨスがカルデヤ人の王とせられしその元年二すなはちその世の元年に我ダニエル、ヱホバの言の預言者ヱレミヤにのぞみて告たるその年の數を書によりて暁れり即ちその言にヱルサレムは荒て七十年を經んとあり三是にかいて我面を主ヱホバに向け斷食をなし麻の衣を着灰を蒙り祈りかつ願ひて求むることをせり四即ち我わが神ヱホバに祷り懺悔して言り嗚呼大にして畏るべき神なる主自己を愛し自己の誡命を守る者のために契約を保ち之に恩惠を施したまふ者よ五我等は罪を犯し悖れる事を爲し惡を行ひ叛逆を爲して汝の誡命と律法を離れたり六我等はまた汝の僕なる預言者等が汝の名をもて我らの王等君等先祖等および全國の民に告たる所に聽したがはざりしなり七主よ公義は汝に歸し羞辱は我らに歸せりその状今日のごとし即ちユダの人々ヱルサレムの居民およびイスラエルの全家の者は近き者も遠き者も皆汝の逐やりたまひし諸の國々にて羞辱を蒙れり是は彼らが汝に背きて獲たる罪によりて然るなり八主よ羞辱は我儕に歸し我らの王等君等および先祖等に歸す是は我儕なんぢに向ひて罪を犯したればなり九憐憫と赦宥は主たる我らの神の裏にあり其は我らこれに叛きたればなり一〇我らはまた我らの神ヱホバの言に遵はずヱホバがその僕なる預言者等によりて我らの前に設けたまひし律法を行はざりしなり一一抑イスラエルの人は皆汝の律法を犯し離れさりて汝の言に遵はざりき是をもて神の僕モーセの律法に記したる呪詛と誓詞我らの上に斟ぎかかれり是は我らこれに罪を獲たればなり一二即ち神は大なる災害を我らに蒙らせたまひてその前に我らと我らを鞫ける士師とにむかひて宣ひし言を行ひとげたまへりかのエルサレムに臨みたる事の如きは普天の下に未だ曾て有ざりしなり一三モーセの律法に記したる如くにこの災害すべて我らに臨みしかども我らはその神ヱホバの面を和めんとも爲ずその惡を離れて汝の眞理を暁らんとも爲ざりき一四是をもてヱホバ心にかけて災害を我らに降したまへり我らの神ヱホバは何事をなしたまふも凡て公義いますなり然るに我らはその言に遵はざりき一五主たる我らの神よ汝は強き手をもて汝の民をエジプトの地より導き出して今日のごとく汝の名を揚たまふ我らは罪を犯し惡き事を行へり一六主

よ願くは汝が是まで公義き御行爲を爲たまひし如く汝の邑ヱルサレム汝の聖山より汝の忿怒と憤恨を取離し給へ其は我らの罪と我らの先祖の惡のためにヱルサレムと汝の民は我らの周圍の者の笑柄となりたればなり一七然ば我らの神よ僕の祷と願を聽たまへ汝は主にいませばかの荒をる汝の聖所に汝の面を耀かせたまへ一八我神よ耳を傾けて聽たまへ目を啓きて我らの荒蕪たる状を觀汝の名をもて稱へらるる邑を觀たまへ我らが汝の前に祈祷をたてまつるは自己の公義によるに非ず唯なんぢの大なる憐憫によるなり一九主よ聽いれたまへ主よ赦したまへ主よ聽いれて行ひたまへこの事を遲くしたまふなかれわが神よ汝みづからのために之をなしたまへ其は汝の邑と汝の民は汝の名をもて稱へらるればなり二〇我かく言て祈りかつわが罪とわが民イスラエルの罪を懺悔し我神の聖山の事につきてわが神ヱホバのまへに願をたてまつりをる時二一即ち我祈祷の言をのべをる時我が初に異象の中に見たるかの人ガブリエル迅速に飛て晩の祭物を献ぐる頃我許に達し二二我に告げ我に語りて言けるはダニエルよ今我なんぢを教へて了解を得せしめんとて出きたれり二三汝が祈祷を始むるに方りて我言を受たれば之を汝に示さんとて來れり汝は大に愛せらるる者なり此言を了りその現れたる事の義を曉れ二四汝の民と汝の聖邑のために七十週を定めおかる而して惡を抑へ罪を封じ愆を贖ひ永遠の義を携へ入り異象と預言を封じ至聖者に膏を灌がん二五汝曉り知べしヱルサレムを建なほせといふ命令の出づるよりメッシヤたる君の起るまでに七週と六十二週ありその街と石垣とは擾亂の間に建なほされん二六その六十二週の後にメッシヤ絶れん但し是は自己のために非ざるなりまた一人の君の民きたりて邑と聖所とを毀たんその終は洪水に由れる如くなるべし戰爭の終るまでに荒蕪すでに極る二七彼一週の間衆多の者と固く契約を結ばん而して彼その週の半に犠牲と供物を廢せんまた殘暴可惡者羽翼の上に立たん斯てつひにその定まれる災害殘暴る者の上に斟ぎくだらん

第一〇章一ペルシヤの王クロスの三年にベルテシヤザルといふダニエル一の事の默旨を得たるがその事は眞實にしてその戰爭は大なり彼その事を曉りその示現の義を曉れり二當時我ダニエル三七日の間哀めり三即ち三七日の全く滿るまでは旨き物を食ず肉と酒とを口にいれずまた身に膏油を抹ざりき四正月の二十四日に我ヒデケルといふ大河の邊に在り五目を擧て望觀しに一箇の人ありて布の衣を衣ウバズの金の帶を腰にしめをり六その體は黄金色の玉のごとくその面は電光の如くその目は火の焰のごとくその手とその足の色は磨ける銅のごとくその言ふ聲は群衆の聲の如し七この示現は唯我ダニエル一人これを觀たり我と偕なる人々はこの示現を見ざりしが何となくその身大に慄きて逃かくれたり八故に我ひとり遺りたるがこの大なる示現を觀るにおよびて力ぬけさり顏色まつたく變りて毫も

力なかりき九我その語ふ聲を聞けるがその語ふ聲を聞る時我は氣を喪へる狀にて俯伏し面を土につけゐたりしに一〇一の手ありて我に捫りければ我戰ひながら跪づきて手をつきたるに一一彼われに言けるは愛せらるる人ダニエルよ我が汝に告る言を曉れよ汝まづ起あがれ我は今汝の許に遣されたるなりと彼がこの言を我に告る時に我は戰ひて立り一二彼すなはち我に言けるはダニエルよ懼るる勿れ汝が心をこめて悟らんとし汝の神の前に身をなやませるその初の日よりして汝の言はすでに聽れたれば我汝の言によりて來れり一三然るにペルシヤの國の君二十一日の間わが前に立塞がりけるが長たる君の一なるミカエル來りて我を助けたれば我勝留りてペルシヤの王等の傍にをる一四我は末の日に汝の民に臨まんとするところの事を汝に曉らせんとて來れりまた後の日に關はる所の異象ありと一五かれ是等の言を我に宣たる時に我は面を土につけて居り辭を措ところ無りしが一六人の子のごとき者わが唇に捫りければ我すなはち口を開きわが前に立る者に陳て言り我主よこの示現によりて我は畏怖にたへず全く力を失へり一七此わが主の僕いかでか此わが主と語ふことを得んとその時は我まつたく力を失ひて氣息も止らんばかりなりしが一八人の形のごとき者ふたたび我に捫り我に力をつけて一九言けるは愛せらるる人よ懼るる勿れ安んぜよ心强かれ心强かれと斯われに言ければ我力づきて曰り我主よ語りたまへ汝われに力をつけたまへりと二〇彼われに言けるは汝は我が何のために汝に臨めるかを知るや我今また歸りゆきてペルシヤの君と戰はんとす我が出行ん後にギリシヤの君きたらん二一但し我まづ眞實の書に記されたる所を汝に示すべし我を助けて彼らに敵る者は汝らの君ミカエルのみ

第一一章

一 我はまたメデア人ダリヨスの元年にかれを助け彼に力をそへたる事ありしなり二我いま眞實を汝に示さん視よ此後ペルシヤに三人の王興らんその第四の者は富ること一切の者に勝りその富强の大なるを恃みて一切を激發してギリシヤの國を攻ん三また一箇の强き王おこり大なる威權を振ふて世を治めその意のままに事を爲ん四但し彼の正に旺盛なる時にその國は破裂して天の四方に分れん其は彼の兒孫に歸せず又かれの振ひしほどの威權あらず即ち彼の國は拔とられて是等の外なる者等に歸せん五南の王は强からん然どその大臣の一人これに逾て强くなり威權を振はんその威權は大なる威權なるべし六年を經て後彼等相結ばん即ち南の王の女子北の王に適て和好を圖らん然どその腕には力なしまたその王およびその腕は立ことを得じこの女とこれを導ける者とこれを生せたる者とこれに力をつけたる者はみな時におよびて付されん七斯て後この女の根より出たる芽興りて之に代り北の王の軍勢にむかひて來りこれが城に打いりて之を攻て勝を得八之が神々鑄像および金銀の貴き器具をエジプトに携へさらん彼は北の王の上に立て年を重ねん九彼南の王の國に打入ことあらん然ど自己の國に退くべし一〇その

子等また憤激して許多の大軍を聚め進みきたり溢れて往來しその城まで攻寄せん一一是において南の王大に怒り出きたりて北の王と戰ふべし彼大軍を興してこれに當らん然れどもその軍兵はこれが手に付されん一二大軍すなはち興りて彼心に高ぶり數萬人を仆さん然れどもその勢力はこれがために增さじ一三また北の王は退きて初よりも大なる軍兵を興し或時すなはち或年數を經て後かならず大兵を率ゐる莫大の輜重を備へて攻來らん一四是時にあたりて衆多の者興りて南の王に敵せん又なんぢの民の中の奸惡人等みづから高ぶりて事を爲しつひに預言をして應ぜしめん即ち彼らは自ら仆るべし一五茲に北の王襲ひきたり壘を築きて堅城を攻おとさん南の王の腕はこれに當ることを得じ又その撰拔の民もこれに當る力なかるべし一六之に攻きたる者はその意に任せて事をなさんその前に立ことを得る者なかるべし彼は美しき地に到らんその地はこれがために荒さるべし一七彼その全國の力を盡して打入んとその面をこれに向べけれどまたこれと和好をなして婦人の女子を之に與へん然るにその婦人の女子は之がために身を滅すに至り何事をも成あたはす毫も彼のために益する所なかるべし一八彼またその面を島々にむけて之を多く取らん茲に一人の大將ありて彼が與へたる恥辱を雪ぎその恥辱をかれの身に與へかへさん一九かくて彼その面を自己の國の城々に向ん而して終に躓き仆れて亡ん二〇彼に代りて興る者は榮光の國に人を出して租稅を征斂しめん但し彼は忿怒にも戰門にもよらずして數日の内に滅亡せん二一また之にかはりて起る者は賤まるる者にして國の尊榮これに歸せざらん然れども彼不意に來り巧言をもて國を獲ん二二洪水のごとき軍勢かれのために押流されて敗れん契約の君たる者も然らん二三彼は之に契約をむすびて後詭計を行ひ上りきたりて僅少の民をもて勢を得ん二四彼すなはち不意にきたりてその國の膏腴なる處に攻いりその父もその父の父も爲ざりしところの事を行はん彼はその奪ひたる物掠めたる物および財寶を衆人の中に散すべし彼は謀略をめぐらして堅固なる城々を攻取べし時の至るまで斯のごとくならん二五彼はその勢力を奮ひ心を勵まし大軍を率ゐて南の王に攻よせん南の王もまた自ら奮ひ甚だ大なる強き軍勢をもて迎へ戰はん然ど謀略をめぐらして攻るが故にこれに當ることを得ざるべし二六すなはち彼の珍膳に與り食ふ者彼を倒さんその軍兵溢れん打死する者衆かるべし二七此二人の王は害をなさんと心にはかり同席に共に食して詭計を言ん然どもその志ならざるべし定まれる時のいたる迄は其事終らじ二八彼は莫大の財寶をもちて自己の國に歸らん彼は聖約に敵する心を懷きて事をなし而してその國にかへらん二九定まれる時にいたりて彼また進みて南に到らん然ど後の模樣は先の模樣のごとくならざらん三〇即ちキッテムの船かれに到るべければ彼力をおとして還り聖約にむかひて忿怒をもらして事をなさん而して彼歸りゆき聖約を棄る者と相謀らん三一彼より腕

おこりて聖所すなはち堅城を汚し常供の物を撤除かせかつ殘暴可惡者を立ん三二彼はまた契約に關て罪を獲る者等を巧言をもて引誘して背かせん然どその神を知る人々は力ありて事をなさん三三民の中の頴悟者ども衆多の人を教ふるあらん然ながら彼らは暫時の間刃にかかり火にやかれ虜はれ掠められ等して仆れん三四その仆るる時にあたりて彼らは少しく扶助を獲ん又衆多の人詐りて彼らに合せん三五また頴悟者等の中にも仆るる者あらん斯のごとく彼らの中に試むる事淨むる事潔よくする事おこなはれて終の時にいたらん即ち定まれる時まで然るべし三六此王その意のままに事をおこなひ萬の神に逾て自己を高くし自己を大にし神々の神たる者にむかひて大言を吐き等して忿怒の息む時までその志を得ん其はその定まれるところの事成ざるべからざればなり三七彼はその先祖の神々を顧みず婦女の愉快を思はずまた何の神をも顧みざらん其は彼一切に逾て自己を大にすればなり三八彼は之の代に軍神を崇め金銀珠玉および寶物をもてその先祖等の識ざりし神を崇めん三九彼はこの異邦の神に由り要害の城々にむかひて事を爲ん凡て彼を尊ぶ者には彼加ふるに榮を以てし之をして衆多の人を治めしめ土地をこれに分ち與へて賞賜とせん四〇終の時にいたりて南の王彼と戰はん北の王は車と馬と衆多の船をもて大風のごとく之に攻寄せ國に打いりて潮のごとく溢れ渉らん四一彼はまた美しき國に進み入ん彼のために亡ぶる者多かるべし然どエドム、モアブ、アンモン人の中の第一なる者などは彼の手を免かれん四二彼國々にその手を伸さんエジプトの地も免かれがたし四三彼は遂にエジプトの金銀財寶を手に入れんリブア人とエテオピア人は彼の後に從はん四四彼東と北より報知を得て周章ふためき許多の人を滅し絶んと大に忿りて出ゆかん四五彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん然ど彼つひにその終にいたらん之を助くる者なかるべし

第一二章 一その時汝の民の人々のために立ところの大なる君ミカエル起あがらん是艱難の時なり國ありてより以來その時にいたるまで斯る艱難ありし事なかるべしその時汝の民は救はれん即ち書にしるされたる者はみな救はれん二また地の下に睡りをる者の中衆多の者目を醒さんその中永生を得る者ありまた恥辱を蒙りて限なく羞る者あるべし三頴悟者は空の光輝のごとくに耀かんまた衆多の人を義に導ける者は星のごとくなりて永遠にいたらん四ダニエルよ終末の時まで此言を秘し此書を封じおけ衆多の者跋渉らん而して知識增べしと五茲に我ダニエル觀に別にまた二箇の者ありて一箇は河の此旁の岸にあり一箇は河の彼旁の岸にありけるが六その一箇の者かの布の衣を衣て河の水の上に立る人にむかひて言り此奇跡は何の時にいたりて終るべきやと七我聞にかの布の衣を衣て河の水の上に立る人天にむかひてその右の手と左の手を擧げ永久に生る者を指て誓ひて言りその間は一時と二時と半時なり聖民の手の碎くること

終らん時に是等の事みな終るべしと八 我聞たれども曉ることを得ざりき我また言りわが主よ是等の事の終は何ぞやと九 彼いひけるはダニエルよ往け此言は終極の時まで秘しかつ封じ置るべし一〇 衆多の者淨められ潔よくせられ試みられん然ど惡き者は惡き事を行はん惡き者は一人も曉ること無るべし然ど頴悟者は曉るべし一一 常供の者を除き殘暴可惡者を立ん時よりして一千二百九十日あらん一二 待をりて一千三百三十五日に至る者は幸福なり一三 汝終りに進み行け汝は安息に入り日の終りに至り起て汝の分を享ん

ホセア書

第一章一これユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの世イスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムの世にベエリの子ホセアに臨めるヱホバの言なり二ヱホバはじめホセアによりて語りたまへる時ヱホバ、ホセアに宣はく汝ゆきて淫行の婦人を娶り淫行の子等を取れ この國ヱホバに遠ざかりてはなはだしき淫行をなせばなり三是において彼ゆきてデブライムの女子ゴメルを妻に娶りけるがその婦はらみて男子を產り四ヱホバまた彼にいひ給ひけるは汝その名をヱズレルと名くべし 暫時ありて我ヱズレルの血をヱヒウの家に報いイスラエルの家の國をほろぼすべければなり五その日われヱズレルの谷にてイスラエルの弓を折べしと六ゴメルまた孕みて女子を產ければヱホバ、ホセアに言たまひけるは汝その名をロルマハ（憐まれぬ者）と名くべしそは我もはやイスラエルの家をあはれみて赦すが如きことを爲ざるべければなり七然どわれユダの家をあはれまん その神ヱホバによりて之をすくはん 我は弓 劍 戰爭馬騎兵などによりてすくふことをせじ八ロルハマ乳をやめゴメルまた孕みて男子を產けるに九ヱホバ言たまひけるはその子の名をロアンミ（吾民に非ざる者）と名くべし 其は汝らは吾民にあらず我は汝らの神に非ざればなり一〇然どイスラエルの子孫の數は濱の沙石のごとくに成ゆきて量ることも數ふる事も爲しがたく前になんぢらわが民にあらずと言れしその處にて汝らは活神の子なりと言れんとす一一斯てユダの子孫とイスラエルの子孫は共に集り一人の首をたててその地より上り來らん ヱズレルの日は大なるべし

第二章一汝らの兄弟に向ひてはアンミ（わが民）と言ひ汝らの姉妹にむかひてはルハマ（憐まるる者）と言へ二なんぢらの母とあげつらへ論辨ふことをせよ彼はわが妻にあらず我はかれの夫にあらざるなりなんぢら斯してかれにその面より淫行を除かせその乳房の間より姦淫をのぞかしめよ三然らざれば我かれを剥て赤體にしその生れいでたる日のごとくにしまた荒野のごとくならしめ潤ひなき地のごとくならしめ渇によりて死しめん四我その子等を憐まじ淫行の子等なればなり五かれらの母は淫行をなせりかれらを生る者は恥べき事をおこなへり蓋かれいへる言あり我はわが戀人等につきしたがはん彼らはわがパンわが水わが羊毛わが麻わが油わが飲物などを我に與ふるなりと六この故にわれ荊棘をもてなんぢの路をふさぎ垣をたてて彼にその徑をえざらしむべし七彼はその戀人たちの後をしたひゆけども追及ことなく之をたづぬれども遇ことなし是において彼いはん我ゆきてわが前の夫にかへるべしかのときのわが狀態は今にまさりて善りきと八彼が得る穀物と酒と油はわが與ふるところ彼がバアルのために用ゐたる金銀はわが彼に增あたへたるところなるを彼はしらざるなり九これによりて我わが穀物をその時にいたりて奪ひわが酒をその季にいたりてうばひ又かれの裸體

をおほふに用ゆべきわが羊毛およびわが麻をとらん一〇今われかれの恥るところをその戀人等の目のまへに露すべし彼をわが手より救ふものあらじ一一我かれがすべての喜樂すなはち祝筵新月のいはひ安息日および一切の節會をして息しめん一二また彼の葡萄の樹と無花果樹をそこなはん彼さきに此等をさしてわが戀人の我にあたへし賞賜なりと言しがわれこれを林となし野の獸をしてくらはしめん一三われかれがその耳環頸玉などを掛てその戀人らをしたひゆき我をわすれ香をたきて事へしもろもろのバアルの日のゆゑをもてその罪を罰せんヱホバかく言たまふ一四斯るがゆゑに我かれを誘ひて荒野にみちびきいり終にかれの心をなぐさめ一五かしこを出るや直ちにわれかれにその葡萄園を與へアコル(艱難)の谷を望の門となしてあたへん彼はわかかりし時のごとくエジプトの國より上りきたりし時のごとくかしこにて歌うたはん一六ヱホバ言たまふその日にはなんぢ我をふたたびバアリとよばずしてイシ(吾夫)とよばん一七我もろもろのバアルの名をかれが口よりとりのぞき重ねてその名を世に記憶せらるること無らしめん一八その日には我かれら(我民)のために野の獸そらの鳥および地の昆蟲と誓約をむすびまた弓箭ををり戰爭を全世界よりのぞき彼らをして安らかに居しむべし一九われ汝をめとりて永遠にいたらん公義と公平と寵愛と憐憫とをもてなんぢを娶り二〇かはることなき眞實をもて汝をめとるべし汝ヱホバをしらん二一ヱホバいひ給ふその日われ應へん我は天にこたへ天は地にこたへ二二地は穀物と酒と油とに應へまた是等のものはヱズレルに應へん二三我わがためにかれを地にまき憐まれざりし者をあはれみわが民ならざりし者にむかひて汝はわが民なりといはんかれらは我にむかひて汝はわが神なりといはん

第三章一 ヱホバわれに言給ひけるは汝ふたたび往てヱホバに愛せらるれども轉りてほかのもろもろの神にむかひ葡萄の菓子を愛するイスラエルの子孫のごとくそのつれそふものに愛せらるれども姦淫をおこなふ婦人をあいせよ二われ銀十五枚おほむぎ一ホメル半をもてわが爲にその婦人をえたり三我これにいひけるは汝おほくの日わがためにとどまりて淫行をなすことなく他の人にゆくことなかれ我もまた汝にむかひて然せん四イスラエルの子輩は多くの日王なく君なく犧牲なく表柱なくエボデなくテラビムなくして居らん五その後イスラエルの子輩はかへりてその神ヱホバとその王ダビデをたづねもとめ末日にをののきてヱホバとその恩惠とにむかひてゆかん

第四章一 イスラエルの子輩よヱホバの言を聽けヱホバこの地に住る者と爭辨たまふ其は此地には誠實なく愛情なく神を知る事なければなり二ただ詛 偽 凶殺 盜 姦淫のみにして互に相襲ひ血血につづき流る三このゆゑにその地うれひにしづみ之にすむものはみな野のけもの空のとりとともにおとろへ海の魚もまた絶はてん四されど何人もあらそふべからずいましむ可らず汝

の民は祭司と争ふ者の如くなれり五 汝は晝つまづき汝と偕なる預言者は夜つまづかん我なんぢの母を亡すべし六 わが民は知識なきによりて亡さるなんぢ知識を棄つるによりて我もまた汝を棄ててわが祭司たらしめじ汝おのが神の律法を忘るるによりて我もなんぢの子等を忘れん七 彼らは大なるにしたがひてますます我に罪を犯せば我かれらの榮を辱に變ん八 彼らはわが民の罪をくらひ心をかたむけてその罪ををかすを願へり九 このゆゑに民の遇ふところは祭司もまた同じわれその途をかれらにきたらせその行爲をもて之にむくゆべし一〇 かれらは食へども飽ず淫行をなせどもその數まさずその心をヱホバにとむることを止ればなり一一 淫行と酒と新しき酒はその人の心をうばふ一二 わが民木にむかひて事をとふその杖かれらに事をしめす是かれら淫行の霊にまよはされその神の下を離れて淫行を爲すなり一三 彼らは山々の巓にて犧牲を獻げ岡の上にて香を焚き橡樹 楊樹 栗樹の下にてこの事をおこなふ此はその樹蔭の美しきによりてなりここをもてなんぢらの女子は淫行をなしなんぢらの兒婦は姦淫をおこなふ一四 我なんぢらのむすめ淫行をなせども罰せずなんぢらの兒婦かんいんをおこなへども刑せじ其はなんぢらもみづから離れゆきて妓女とともに居り淫婦とともに献物をそなふればなり悟らざる民はほろぶべし一五 イスラエルよ汝淫行をなすともユダに罪を犯さする勿れギルガルに往なかれベテアベンに上るなかれヱホバは活くと曰て誓ふなかれ一六 イスラエルは頑強なる牛のごとくに頑強なり今ヱホバ羔羊をひろき野にはなてるが如くして之を牧はん一七 エフライムは偶像にむすびつらなれりその爲にまかせよ一八 かれらの酒はくされかれらの淫行はやまずかれらの楯となるべき者等は恥を愛しいたく之を愛せり一九 かれは風の翼につつまれかれらはその禮物によりて恥辱をかうむらん

第五章

一 祭司等よこれを聽けイスラエルの家よ耳をかたむけよ王のいへよ之にこころを注よ さばきは汝等にのぞまんそは我らはミズパに設くる羂タボルに張れる網のごとくなればなり二 悖逆者はふかく罪にしづみたり我かれらをことごとく懲しめん三 我はエフライムを知るイスラエルはわれに隠るるところ無しエフライムよなんぢ今すでに淫行をなせりイスラエルはすでに汚れたり四 かれらの行爲かれらをしてその神に歸ること能はざらしむ そは淫行の霊その衷にありてヱホバを知ることなければなり五 イスラエルの驕傲はその面にむかひて證をなしその罪によりてイスラエルとエフライムは仆れユダもまた之とともにたふれん六 かれらは羊のむれ牛の群をたづさへ往てヱホバを尋ね求めん然どあふことあらじヱホバ既にかれらより離れ給ひたればなり七 かれらヱホバにむかひ貞操を守らずして他人の子を産り新月かれらとその産業とをともに滅さん八 なんぢらギベアにて角をふきラマにてラッパを吹ならしベテアベンにて呼はりて言へベニヤミンよなんぢの後にありと九 罰せらるるの日にエ

フライムは荒廢れん我イスラエルの支派の中にかならず有るべきことを示せり一〇ユダの牧伯等は境界をうつすもののごとくなれり我わが震怒を水のごとくに彼らのうへに斟がん一一エフライムは甘んじて人のさだめたるところに從ひあゆむがゆゑに鞫をうけて虐げられ圧られん一二われエフライムには蠹のごとくユダの家には腐朽のごとし一三エフライムおのれに病あるを見ユダおのれに傷あるをみたり斯てエフライムはアツスリヤに往きヤレブ王に人をつかはしたれど彼はなんぢらを醫すことをえず又なんぢらの傷をのぞきさることを得ざるべし一四われエフライムには獅子のごとくユダの家にはわかき獅子のごとし我しも我は抓劈てさり掠めゆけども救ふ者なかるべし一五我ふたたびわが處にかへりゆき彼らがその罪をくいてひたすらわが面をたづね求むるまで其處にをらん彼らは艱難によりて我をたづねもとむることをせん

第六章 一 來れわれらヱホバにかへるべしヱホバわれらを抓劈たまひたれどもまた醫すことをなし我儕をうち給ひたれどもまたその傷をつつむことを爲したまふ可ればなり二ヱホバは二日ののちわれらむ活かへし三日にわれらを起せたまはん我らその前にて生ん三この故にわれらヱホバをしるべし切にヱホバを知ることを求むべしヱホバは晨光のごとく必ずあらはれいで雨のごとくわれらにのぞみ後の雨のごとく地をうるほし給ふ四エフライムよ我なんぢに何をなさんやユダよ我なんぢに何をなさんやなんぢの愛情はあしたの雲のごとくまたただちにきゆる露のごとし五このゆゑにわれ預言者等をもてかれらを撃ちわが口の言をもてかれらえを殺せりわが審判はあらはれいづる光明のごとし六われは愛情をよろこびて犧牲をよろこばず神をしるを悦ぶこと燔祭にまされり七然るに彼らはアダムのごとく誓をやぶりかしこにて不義をわれにおこなへり八ギレアデは惡をおこなふものの邑にして血の足跡そのなかに徧し九祭司のともがらは山賊の群のごとく伏伺して人をそこなひシケムに往く大路にて人をころす彼等はかくのごとき惡きことをおこなへり一〇われイスラエルのいへに憎むべきことあるを見たりかの處にてエフライムは淫をおこなふイスフルは汚れたり一一ユダよ我わが民の俘囚をかへさんときまた汝のためにも穫刈をそなへん

第七章 一 われイスラエルを醫さんときエフライムの愆とサマリヤのあしきわざと露るかれらは詐譎をおこなひ內には偸盜いるあり外には山賊のむれ掠めさるあり二かれら心にわがその一切の惡をしたためたることを思はず今その行爲はかれらを圍みふさぎて皆わが目前にあり三かれらはその惡をもて王を悦ばせその詐譎をもてもろもろの牧伯を悦ばせり四かれらはみな姦淫をおこなふ者にしてパンを作るものに燒るる爐のごとし揑粉をこねてその發酵ときまでしばらく火をおこすことをせざるのみなり五われらの王の日にもろもろの牧伯は酒の熱によりて疾し王は嘲るものとともに手を伸ぶ六かれら伏伺するほどに心を爐の

ごとくして備をなすそのパンを焼くものは終夜ねむりにつき朝におよべばまた焔のごとく燃ゆ七かれらはみな爐のごとくに熱してその審士をやくそのもろもろの王はみな仆るかれらの中には我をよぶもの一人だになし八エフライムは異邦人にいりまじるエフライムはかへさざる餹餅となれり九かれは他邦人らにその力をのまるれども之をしらず白髪その身に雜り生れどもこれをさとらず一〇イスラエルの驕傲はその面にむかひて證をなすかれらは此もろもろの事あれどもその神ヱホバに歸ることをせず又もとむることをせざるなり一一エフライムは智慧なくして愚なる鴿のごとし彼等はエジプトにむかひて呼求めまたアツスリヤに往く一二我かれらの往ときわが網をその上にはりて天空の鳥のごとくに引墮し前にその公會に告しごとくかれらを懲しめん一三禍なるかなかれらは我をはなれて迷ひいでたり敗壞かれらにきたらんかれらは我にむかひて罪ををかしたり我かれらを贖はんとおもへどもかれら我にさからひて誣言をいへり一四かれら誠心をもて我をよばず唯牀にありて哀號べりかれらは穀物とあたらしき酒のゆゑをもて相集りかつわれに逆らふ一五我かれらを教へその腕をつよくせしかども彼らはわれにもとりて惡きことを謀る一六かれらは歸るされども至高者にかへらず彼らはたのみがたき弓のごとし彼らのもろもろの牧伯はその舌のあらき言によりて劍にたふれん彼らは之がためにエジプトの國にて嘲笑をうくべし

第八章一ラッパをなんぢの口にあてよ敵は鷲のごとくヱホバの家にのぞめりこの民わが契約をやぶりわが律法を犯ししによる二かれら我にむかひてわが神よわれらイスラエルはなんぢを知れりと叫ばん三イスラエルは善をいみきらへり敵これを追ん四かれら王をたてたり然れども我により立しにあらずかれら牧伯をたてたり然れども我がしらざるところなり彼らはまたその金銀をもて己がために偶像をつくれりその造れるは毀ちすてられんが爲にせしにことならず五サマリヤよなんぢの犢は忌きらふべきものなりわが怒かれらにむかひて燃ゆかれら何れの時にか罪なきにいたらん六この犢はイスラエルより出づ匠人のつくれる者にして神にあらずサマリヤの犢はくだけて粉とならん七かれらは風をまきて狂風をかりとらん種ところは生長る穀物なくその穗はみのらざるべしたとひ實るとも他邦人これを呑ん八イスラエルは既に呑れたり彼等いま列國の中において悅ばれざる器のごとく視做るるなり九彼らは獨ゐし野の驢馬のごとくアッスリヤにゆけりエフライムは物を餽りて戀人を得たり一〇かれら列國の民に物を餽りたりと雖も今われ彼等をつどへ集む彼らは諸侯伯の王に負せらるる重擔のために衰へ始めん一一エフライムは多くの祭壇を造りて罪を犯すこの祭壇はかれらが罪に陷る階とはなれり一二我かれらのために律法をしるして數件の箇條を示したれど彼らは反て之を異物とおもへり一三かれらは我に献ふべき物を献ふれども只肉をそなへて己みづから之を食

ふヱホバは之を納たまはず今かれらの愆を記え彼らの罪を罰したまはん彼らはエジプトに歸るべし一四イスラエルは己が造主を忘れてもろもろの社廟を建てユダは堺をとりまはせる邑を多く增し加へたり然どわれ火をその邑々におくりて諸の城を燒亡さん

第九章一イスラエルよ異邦人のごとく喜びすさむ勿れなんぢ淫行をなして汝の神を離る汝すべての麥の打場にて賜はる淫行の賞賜を愛せり二打場と酒榨とはかれらを養はじ亦あたらしき酒もむなしくならん三かれらはヱホバの地にとどまらずエフライムはエジプトに歸りアッスリヤにて汚穢たる物を食はん四彼等はヱホバにむかひて酒を灌ぐべき者にあらずその祭物はヱホバの悅びたまふ所にあらずかれらの犧牲は喪に居ものゝパンのごとし凡てこれを食ふものは汚るべし彼等のパンは只おのが食ふためにのみ用ゐるべくしてヱホバの家に入るべきにあらず五なんぢら集會の日とヱホバの節會の日に何をなさんとするや六視よかれら滅亡の故によりて去ゆきぬエジプトかれらをあつめメンピスかれらを葬らん蒺藜かれらが銀の寶物を獲いばら彼らの天幕に蔓らん七刑罰の日きたり應報の日きたれりイスラエルこれを知ん預言者は愚なるもの靈に感じたるものは狂へるものなりこれ汝の惡おほく汝の怨恨おほいなるに因る八エフライムは我が神にならべて他の神をも佇望めり預言者の一切の途は鳥を捕ふる者の網のごとく且その神の室の中にて怨恨を懷けり九かれらはギベアの日のごとく甚だしく惡き事を行へりヱホバはその惡をこころに記てその罪を罰したまはん一〇在昔われイスラエルを見ること荒野の葡萄のごとく汝らの先祖等を看ること無花果樹の始にむすべる最先の果の如くなししに彼等はバアルペオルにゆきて身を恥辱にゆだねその愛する物とともに憎むべき者とはなれり一一エフライムの榮光は鳥のごとく飛さらん即ち產ことも孕むことも妊娠こともなかるべし一二假令かれら子等を育つるとも我その子を喪ひて遺る人なきにいたらしめん我が離るる時かれらの禍 大なる哉一三われエフライムを美地に植てツロのごとくなししかどもエフライムはその子等を携へいだして人を殺すに付さんとす一四ヱホバよ彼らに與へたまへ汝なにを與へんとしたまふや孕まざる胎と乳なき乳房とを與へたまへ一五かれらが凡の惡はギルガルにあり此故に我かしこにて之を惡めりその行爲あしければ我が家より逐いだし重て愛することをせじその牧伯等はみな悖れる者なり一六エフライムは擊れその根はかれて果を結ぶまじ若し產ことあらば我その胎なる愛しむ實を殺さん一七かれら聽從はざるによりて我が神これを棄たまふべしかれらは列國民のうちに流離人とならん

第一〇章一イスラエルは果をむすびて茂り榮る葡萄の樹その果の多くなるがままに祭壇をましその地の饒かなるがままに偶像を美しくせり二かれらは二心をいだけり今かれら罪せらるべし神はその祭壇を打毀ちその偶像を折棄てたまはん三かれら今い

ふべし我儕神を畏れざりしに因て我らに王なしこの王はわれらのために何をかなさんと四かれらは虚しき言をいだし偽の誓をなして約をたつ審判は畑の畝にもえいづる茵蔯のごとし五サマリヤの居民はベテアベンの犢の故によりて戰慄かんその民とこれを悦ぶ祭司等はその榮のうせたるが爲になげかん六犢はアッスリヤに携へられ禮物としてヤレブ王に献げらるべしエフライムは羞をかうむりイスラエルはおのが計議を恥ぢん七サマリヤはほろびその王は水のうへの木片のごとし八イスラエルの罪なるアベンの崇邱は荒はてて荊棘と蒺藜その壇のうへにはえ茂らんその時かれら山にむかひて我儕をおほへ陵にむかひて我儕のうへに倒れよといはん九イスラエルよ汝はギベアの日より罪ををかせり彼等はそこに立り邪惡のひとびとを攻たりし戰爭はギベアにてかれらに及ばざりき一〇我思ふままに彼等をいましめん彼等その二の罪につながれん時もろもろの民あつまりて之をせめん一一エフライムは馴されたる牝牛のごとくにして穀をふむことを好むされどわれその美しき頸に物を負しむべし我エフライムに軛をかけんユダは耕しヤコブは土塊をくだかん一二なんぢら義を生ずるために種をまき憐憫にしたがひてかりとり又新地をひらけ今はヱホバを求むべき時なり終にはヱホバきたりて義を雨のごとく汝等のうへに降せたまはん一三なんぢらは惡をたがへし不義を穫をさめ虚偽の果をくらへりこは汝おのれの途をたのみ己が勇士の數衆きをたのめるに縁る一四この故になんぢらの民のなかに擾亂おこりて汝らの城はことごとく打破られんシャルマンが戰門の日にベテアルベルを打破りしにことならず母その子とともに碎かれたり一五なんぢらの大なる惡のゆゑによりてベテル如此なんぢらに行へるなりイスラエルの王はあしたに滅びん

第一一章

一イスラエルの幼かりしとき我これを愛しぬ我わが子をエジプトより呼いだしたり二かれらは呼るるに隨ひていよいよその呼者に遠ざかり且もろもろのバアルに犧牲をささげ雕たる偶像に香を焚り三われエフライムに歩むことををしへ彼等をわが腕にのせて抱けり然どかれらは我にいやされたるを知ず四われ人にもちゐる索すなはち愛のつなをもて彼等をひけり我がかれらを待ふは軛をその腮より擧のくるもののごとくにして彼等に食物をあたへたり五かれらはエジプトの地にかへらじ然どかれらがヱホバに歸らざるによりてアッスリヤ人その王とならん六劍かれらの諸邑にまはりゆきてその關門をこぼち彼らをその謀計の故によりて滅さん七わが民はともすれば我にはなれんとする心あり人これを招きて上に在るものに屬しめんとすれども身をおこすもの一人だになし八エフライムよ我いかで汝をすてんやイスラエルよ我いかで汝をわたさんや我いかで汝をアデマのごとくせんや爭でなんぢをゼボイムのごとく爲んやわが心わが衷にかはりて我の愛憐ことごとく燃おこれり九我わが烈しき震怒をほどこすことをせじ我かさねてエフライムを滅

すことをせじ我は人にあらず神なればなり我は汝のうちにいます聖者なりいかりをもて臨まじ一〇かれらは獅子の吼るごとくに聲を出したまふヱホバに隨ひて歩まんヱホバ聲を出したまへば子等は西より急ぎ來らん一一かれらエジプトより鳥のごとくアッスリヤより鴿のごとくに急ぎ來らん我かれらをその家々に住はしむべし是ヱホバの聖言なり一二エフライムは謊言をもてイスラエルの家は詐僞をもて我を圍めりユダは神と信ある聖者とに屬きみつかずみ漂蕩をれり

第一二章一エフライムは風をくらひ東風をおひ日々に詐僞と暴逆とを增くはへアッスリヤと契約を結び油をエジプトに餽れり二ヱホバはユダと爭辨をなしたまふヤコブをその途にしたがひて罰しその行爲にしたがひて報いたまふ三ヤコブは胎にゐし時その兄弟の踵をとらへまた己が力をもて神と角力あらそへり四かれは天の使と角力あらそひて勝ちなきて之に恩をもとめたり彼はベテルにて神にあへり其處にて神われらに語ひたまへり五これは萬軍の神ヱホバなりヱホバは其記念の名なり六然ばなんぢの神にかへり矜恤と公義とをまもり恒になんぢの神を仰ぐべし七彼はカナン人(商賈)なりその手に詭詐の權衡をもち好であざむき取ことをなす八エフライムはいふ誠にわれは富る者となれり我は身に財寶をえたり凡てわが勞したることの中に罪をうべき不義を見いだす者なかるべし九我ヱホバはエジプトの國をいでしより以來なんぢらの神なり我いまも尚なんぢを幕屋にすまはせて節會の日のごとくならしめん一〇我もろもろの預言者にかたり又これに益々おほく異象をしめしたり我もろもろの預言者に托して譬喩をまうく一一ギレアデは不義なる者ならずや彼らは全く虚しかれらはギルガルにて牛を犠牲に献ぐかれらの祭壇は圃の畝につみたる石の如し一二ヤコブはアラムの野ににげゆけりイスラエルは妻を得んために人に事へ妻を得んために羊を牧へり一三ヱホバ一人の預言者をもてイスラエルをエジプトより導きいだし一人の預言者をもて之を護りたまへり一四エフライムは怒を激ふること極てはなはだしその主かれが流しし血をかれが上にとどめその恥辱をかれに歸らせたまはん

第一三章一エフライム言を出せば人をののけり彼はイスラエルのなかに己をたかうしバアルにより罪を犯して死たりしが二今も尚ますます罪を犯しその銀をもて己のために像を鑄その機巧にしたがひて偶像を作る是みな工人の作なるなり彼らは之につきていふ犠牲を献ぐる者はこの犢に吻を接べしと三是によりて彼らは朝の雲のごとく速にきえうする露のごとく打場より大風に吹散さるる穀殼のごとく窓より出ゆく煙のごとくならん四されど我はエジプトの國をいでてより以來なんぢの神ヱホバなり爾われの外に神を知ことなし我のほかに救者なし五我さきに荒野にて水なき地にて爾を顧みたり六かれらは秣場によりて食に飽き飽くによりてその心たかぶり是によりて我を忘れたり七

斯るがゆゑに我かれらに對ひて獅子の如くなり途の傍にひそみうかがふ豹のごとくならん八 われ子をうしなへる熊のごとく彼らに向ひてその心膜を裂き獅子の如くこれを食はん野の獸これを攫斷るべし九 イスラエルよ汝の滅ぶるは我に背き汝を助くる者に背くが故なり一〇 汝のもろもろの邑に汝を助くべき汝の王は今いづくにかあるなんぢらがその王と牧伯等とを我に與へよと言たりし士師等は今いづくにかある一一 われ忿怒をもて汝に王を與へ憤恨をもて之をうばひたり一二 エフライムの不義は包まれてありその罪はをさめたくはへられたり一三 劬勞にかかれる婦のかなしみ之に臨まん彼は愚なる子なり時に臨みてもなほ産門に入らず一四 我かれらを陰府の手より贖はん我かれらを死より贖はん死よなんぢの疫は何處にあるか陰府よなんぢの災は何處にあるか悔改はかくれて我が目にみえず一五 彼は兄弟のなかにて果を結ぶこと多けれども東風吹きたりヱホバの息荒野より吹おこらん之がためにその泉は乾その源は涸れんその積蓄へたるもろもろの寶貴器皿は掠め奪はるべし一六 サマリヤはその神にそむきたれば刑せられ劍に斃れんその嬰兒はなげくだかれその孕たる婦は剖れん

第一四章一 イスラエルよ汝の神ヱホバに歸れよ汝は不義のために仆れたり二 汝ら言詞をたづさへ來りヱホバに歸りていへ諸の不義は赦して善ところを受納れたまへ斯て我らは脣をもて牛のごとくに汝に献げん三 アッスリヤはわれらを授けじ我らは馬に騎らじまたふたたび我儕みづからの手にて作れる者にむかひわが神なりと言じ孤兒は爾によりて憐憫を得べければなりと四 我かれらの反逆を醫し悦びて之を愛せん我が怒はかれを離れ去たり五 我イスラエルに對しては露のごとくならん彼は百合花のごとく花さきレバノンのごとく根をはらん六 その枝は茂りひろがり其美麗は橄欖の樹のごとくその芬芳はレバノンのごとくならん七 その蔭に住む者かへり來らんかれらは穀物の如く活かへり葡萄樹のごとく花さきその馨香はレバノンの酒のごとくなるべし八 エフライムはいふ我また偶像と何のあづかる所あらんやと我これに應へたり我かれを顧みん我は蒼翠の松のごとし汝われより果を得ん九 誰か智慧ある者ぞその人はこの事を暁らん誰か頴悟ある者ぞその人は之を知んヱホバの道は凡て直し義者は之を歩む然ど罪人は之に蹟かん

ヨエル書

第一章 一 ペトエルの子ヨエルに臨めるヱホバの言 二 老たる人よ汝ら是を聽け すべて此地に住む者 汝ら耳を傾けよ 汝らの世あるは汝らの先祖の世にも是のごとき事ありしや 三 汝ら之を子に語り子はまた之をその子に語りその子之を後の代に語りつたへよ 四 噬くらふ蝗虫の遺せる者は群ゐる蝗虫のくらふ所となりその遺せる者はなめつくすおほねむしのくらふ所となりその遺せる者は喫ほろぼす蝗虫の食ふ所となれり 五 醉る者よ汝ら目を醒して泣け すべて酒をのむ者よ哭きさけべ あたらしき酒なんぢらの口に絶えたればなり 六 そはことなる民わが國に攻よすればなり その勢ひ強くその數はかられずその齒は獅子の齒のごとくその牙は牝獅子の牙のごとし 七 彼等わが葡萄の樹を荒しわが無花果の樹を折りその皮をはぎはだかにして之を棄つ その枝白くなれり 八 汝ら哀哭かなしめ 貞女その若かりしときの夫のゆゑに麻布を腰にまとひて哀哭かなしむがごとくせよ 九 素祭灌祭ともにヱホバの家に絶えヱホバに事ふる祭司等哀傷をなす 一〇 田は荒れ地は哀傷む 是穀物荒はて新しき酒つき油たえんとすればなり 一一 こむぎ大むぎの故をもて農夫羞ぢよ 葡萄をつくり哭けよ 田の禾稼うせはてたればなり 一二 葡萄樹は枯れ無花果樹は萎れ石榴椰子林檎および野の諸の樹は凋みたり 是をもて世の人の喜樂かれうせぬ 一三 祭司よ汝ら麻布を腰にまとひてなきかなしめ 祭壇に事ふる者よ汝らなきさけべ 神に事ふる者よなんぢら來り麻布をまとひて夜をすごせ 其は素祭も灌祭も汝らの神の家に入ことあらざればなり 一四 汝ら斷食を定め集會を設け長老等を集め國の居民をことごとく汝らの神ヱホバの家に集めヱホバにむかひて號呼れよ 一五 ああその日は禍なるかな ヱホバの日近く暴風のごとくに全能者より來らん 一六 我らがまのあたりに食物絶えしにあらずや 我らの神の家に歡喜と快樂絶しにあらずや 一七 種は土の下に朽ち倉は壞れ廩は圮る そは穀物ほろぼされたればなり 一八 いかに畜獸は哀み鳴くや 牛の群は亂れ迷ふ 草なければなり 羊の群もまた死喪ん 一九 ヱホバよ我なんぢに向ひて呼はらん 荒野の諸の草は火にて燒け野の諸の樹は火焔にてやけつくればなり 二〇 野の獸もまた汝にむかひて呼はらん 其は水の流涸はて荒野の草火にてやけつくればなり

第二章 一 汝らシオンにて喇叭を吹け 我聖山にて音たかく之を吹鳴せ 國の民みな慄ひわななかん そはヱホバの日きたらんとすればなり すでに近づけり 二 この日は黒くをぐらき日雲むらがるまぐらき日にしてしののめの山々にたなびくが如し 數おほく勢さかんなる民むれいたらん かかる者はいにしへよりありしことなくのちの代々の年にもあることなかるべし 三 火彼らの前を焚き火焔かれらの後にもゆ その過さる前は地エデンのごとくその過しのちは荒はてたる野の如し 此をのがれうるもの

一としてあることなし四彼らの狀は馬のかたちのごとく其馳ありくことは軍馬のごとし五その山の嶺にとびをどる音は車の轟聲がごとし また火の稗株をやくおとの如くしてその樣強き民の行伍をたてて戰陣にのぞむに似たり六そのむかふところ諸民戰慄きその面みな色を失ふ七彼らは勇士の如くに趨あるき軍人のごとくに石垣に攀のぼる 彼ら各々おのが道を進みゆきてその列を亂さず八彼ら互に推あはず各々その道にしたがひて進み行く彼らは刃に觸るとも身を害はず九彼らは邑をかけめぐり石垣の上に奔り家に攀登り盜賊のごとくに窓より入る一〇そのむかふところ地ゆるぎ天震ひ日も月も暗くなり星その光明を失ふ一一ヱホバその軍勢の前にて聲をあげたまふ 其軍旅はなはだ大なればなり 其言を爲とぐる者は強し ヱホバの日は大にして甚だ畏るべきが故に誰かこれに耐ることを得んや一二然どヱホバ言たまふ 今にても汝ら斷食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に歸れ一三汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神ヱホバに歸るべし 彼は恩惠あり憐憫ありかつ怒ることゆるく愛憐大にして災害をなすを悔たまふなり一四誰か彼のあるひは立歸り悔て祝福をその後にとめのこし汝らをして素祭と灌祭とをなんぢらの神ヱホバにささげしめたまはじと知んや一五汝らシオンにて喇叭を吹きならし斷食を定め公會をよびつどへ一六民を集めその會を潔くし老たる人をあつめ孩童と乳哺子を集め新郎をその室より呼いだし新婦をその密室より呼いだせ一七而してヱホバに事ふる祭司等は廊と祭壇の間にて泣て言へ ヱホバよ汝の民を赦したまへ 汝の產業を恥辱しめらるるに任せ之を異邦人に治めさする勿れ 何ぞ異邦人をして彼らの神は何處にあると言しむべけんや一八然せばヱホバ己の地にために嫉妬を起しその民を憐みたまはん一九ヱホバ應へてその民に言たまはん 視よ我穀物とあたらしき酒と油を汝におくる 汝ら之に飽ん 我なんぢらをして重ねて異邦人の中に恥辱を蒙らしめじ二〇我北よりきたる軍を遠く汝らより離れしめうるほひなき荒地に逐やらん 其前軍を東の海にその後軍を西の海に入れん その臭味立ちその惡臭騰らん 是大なる事を爲たるに因る二一地よ懼るる勿れ 喜び樂しめ ヱホバ大なる事を行ひたまふなり二二野の獸よ懼るる勿れ あれ野の牧草はもえいで樹は果を結び無花果樹葡萄樹はその力をめざすなり二三シオンの子等よ 汝らの神ヱホバによりて樂め喜べ ヱホバは秋の雨を適當なんぢらに賜ひまた前のごとく秋の雨と春の雨とを汝らの上に降せたまふ二四打場には穀物盈ち甕にはあたらしき酒と油溢れん二五我が汝らに遣しし大軍すなはち群るる蝗なめつくす蝗喫ほろぼす蝗噬くらふ蝗の觸あらせる年をわれ汝らに賠はん二六汝らは食ひ食ひて飽き よのつねならずなんぢらを待ひたまひし汝らの神ヱホバの名をほめ頌へん 我民はとこしへに辱しめらるることなかるべし二七かくて汝らはイスラエルの中に我が居るを知り汝らの神ヱホバは我のみにて外に無きことを知らん 我民は

永遠に辱かしめらるることなかるべし二八その後われ吾靈を一切の人に注がん 汝らの男子女子は預言せん 汝らの老たる人は夢を見 汝らの少き人は異象を見ん二九その日我またわが靈を僕 婢に注がん三〇また天と地に徴證を顯さん 即ち血あり火あり煙の柱あるべし三一 ヱホバの大なる畏るべき日の來らん前に日は暗く月は血に變らん三二 凡てヱホバの名を籲ぶ者は救はるべしそはヱホバの宣ひし如くシオンの山とヱルサレムとに救はれし者あるべければなり 其遺れる者の中にヱホバの召し給へるものあらん

第三章一 觀よ我ユダとヱルサレムの俘囚人を歸さん その日その時二 萬國の民を集め之を携へてヨシヤパテの谷にくだりかしこにて我民我ゆづりの產なるイスラエルのために彼らをさばかん彼らこれを國々に散してその地を分ち取りたればなり三 彼らは籤をひきて我民を取り童子を娼妓に換へ童女を賣り酒に換て飮めり四 ツロ、シドンよベリシテのすべての國よ 汝ら我と何のかかはりあらんや 汝ら我がなししことに返をなさんとするや若し我に返報をなさんとならば我忽ち迅速に汝らがなししことをもてその首に歸らしめん五 是は汝らは我の金銀を取り我のしたふべき寶を汝らの宮にたづさへゆき六 またユダの人とヱルサレムの人をギリシヤ人に賣りてその本國より遠く離らせたればなり七 視よ我かられを起して汝らが賣りたる處より出し汝らがなししことをもてその首にかへらしめん八 我はなんぢらの男子女子をユダの人の手に賣り彼らは之を遠き民なるシバ人に賣らん ヱホバこれを言ふ九 もろもろの國に宣つたへよ 戰爭の準備を爲し勇士をはげまし軍人をことごとくちかより來らしめよ一〇 汝等の鋤を劍に打かへ汝らの鎌を鎗に打かへよ 弱き者も我は強しと言へ一一 四周の國々の民よ汝ら急ぎ上りて集れ ヱホバよ汝の勇士をかしこに降したまへ一二 國々の民よ起て上りヨシヤパテの谷に至れ 彼處に我座をしめて四周の國々の民をことごとく鞫かん一三 鎌をいれよ 穀物は熟せり 來り踏めよ酒榨は盈ち甕は溢る 彼らの惡大なればなりと一四 かまびすしきかな無數の民審判の谷にありてかまびすし ヱホバの日審判の谷に近づくが故なり一五 日も月も暗くなり星その光明を失ふ一六 ヱホバ、シオンよりよびとどろかしヱルサレムより聲をはなち天地を震ひうごかしたまふ 然れどヱホバはその民の避所イスラエルの子孫の城となりたまはん一七 かくて汝ら我はヱホバ汝等の神にして我聖山シオンに住むことをしるべし ヱルサレムは聖き所となり他國の人は重ねてその中をかよふまじ一八 その日山にあたらしき酒滴り岡に乳流れユダのもろもろの河に水流れヱホバの家より泉水流れいでてシッテムの谷に灌がん一九 エジプトは荒すたれエドムは荒野とならん 是はかれらユダの子孫を虐げ辜なき者の血をその國に流したればなり二〇 されどユダは永久にすまひヱルサレムは世々に保たん二一 我さきにはかれらが流しし血の罪を報いざりしが今はこれをむくいん ヱホバ、

シオンに住すみたまはん

アモス書

第一章 一 テコアの牧者の中なるアモスの言 是はユダの王ウジヤの世イスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムの世 地震の二年前に彼が見されたる者にてイスラエルの事を論るなり 其言に云く二 ヱホバ、シオンより呼號りエルサレムより聲を出したまふ 牧者の牧場は哀きカルメルの巓は枯る三 ヱホバかく言たまふ ダマスコは三の罪あり 四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らは鐵の打禾車をもてギレアデを打り四 我ハザエルの家に火を遣りベネハダデの宮殿を焚ん五 我ダマスコの關を碎きアベンの谷の中よりその居民を絶のぞきベテエデンの中より王の杖を執る者を絶のぞかん スリアの民は虜へられてキルにゆかん ヱホバこれを言ふ六 ヱホバかく言たまふ ガザは三の罪あり 四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らは俘囚をことごとく曳ゆきてこれをエドムに付せり七 我ガザの石垣の内に火を遣り一切の殿を焚ん八 我アシドドの中よりその居民を絶のぞきアシケロンの中より王の杖を執る者を絶除かん 我また手を反してエクロンを撃ん ペリシテ人の遺れる者亡ぶべし 主ヱホバこれを言ふ九 ヱホバかく言たまふ ツロは三の罪あり 四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らは俘囚をことごとくエドムに付しまた兄弟の契約を忘れたり一〇 我ツロの石垣の内に火を遣り一切の殿を焚ん一一 ヱホバかく言たまふ エドムは三の罪あり 四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼は劍をもてその兄弟を追ひ全く憐憫の情を斷ち恒に怒りて人を害し永くその憤恨をたくはへたり一二 我テマンに火を遣りボヅラの一切の殿を焚ん一三 ヱホバかく言たまふ アンモンの人々は三の罪あり 四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らはその國境を廣めんとてギレアデの孕める婦を剖たり一四 我ラバの石垣の内に火を放ちその一切の殿を焚ん 是は戰鬪の日に吶喊の聲をもて爲され暴風の日に旋風をもて爲されん一五 彼らの王はその牧伯等と諸共に虜へられて往ん ヱホバこれを言ふ

第二章 一 ヱホバかく言たまふ モアブは三の罪あり 四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼はエドムの王の骨を燒て灰となせり二 我モアブに火を遣りケリオテの一切の殿を焚ん モアブは噪擾と吶喊の聲と喇叭の音の中に死ん三 我その中より審判長を絶除きその諸の牧伯を之とともに殺さん ヱホバはこれを言ふ四 ヱホバかく言たまふ ユダは三の罪あり 四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らはヱホバの律法を輕んじその法度を守らずその先祖等が從ひし僞の物に惑はさる五 我ユダに火を遣りエルサレムの諸の殿を焚ん六 ヱホバかく言たまふ イスラエルは三の罪あり 四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ 即ち彼らは義者を金のために賣り貧者を鞋一足のために賣る七 彼らは弱き者の頭に地の塵のあらんことを喘ぎ

て求め柔かき者の道を曲げ又父子共に一人の女子に行て我聖名を汚す八 彼らは質に取れる衣服を一切の壇の傍に敷きてその上に偃し罰金をもて得たる酒をその神の家に飲む九 嚮に我はアモリ人を彼らの前に絶たり アモリ人はその高きこと香柏のごとくその強きこと橡の樹のごとくなりしが我その上の果と下の根とをほろぼしたり一〇 我は汝らをエジプトの地より携へのぼり四十年のあひだ荒野において汝らを導き終にアモリ人の地を汝らに獲させたり一一 我は汝らの子等の中より預言者を興し汝らの少者の中よりナザレ人を興したり イスラエルの子孫よ然るにあらずや ヱホバこれを言ふ一二 然るに汝らはナザレ人に酒を飲ませ預言者に命じて預言するなかれと言り一三 視よ我麥束を積滿せる車の物を壓するがごとく汝らを壓せん一四 その時は疾走者も逃るに暇あらず 強き者もその力を施すを得ず 勇士も己の生命を救ふこと能はず一五 弓を執る者も立ことを得ず 足駛の者も自ら救ふ能はず 馬に騎れる者も己の生命を救ふこと能はず一六 勇士の中の心剛き者もその日には裸にて逃ん ヱホバこれを言ふ

第三章一 イスラエルの子孫よヱホバが汝らにむかひて言ところ我がエジプトの地より導き上りし全家にむかひて言ところの此言を聽け二 地の諸の族の中にて我ただ汝ら而已を知れり この故に我なんぢらの諸の罪のために汝らを罰せん三 二人もし相會せずば爭で共に歩かんや四 獅子もし獲物あらずば豈林の中に吼んや 猛獅子もし物を攫まずば豈その穴より聲を出さんや五 もし羂の設なくば鳥あに地に張れる網にかからんや 網もし何の得るところも無くば豈地よりあがらんや六 邑にて喇叭を吹かば民おどろかざらんや 邑に災禍のおこるはヱホバのこれを降し給ふならずや七 夫主ヱホバはその隱れたる事をその僕なる預言者に傳へずしては何事をも爲たまはざるなり八 獅子吼ゆ 誰か懼れざらんや 主ヱホバ言語たまふ 誰か預言せざらんや九 アシドドの一切の殿に傳へエジプトの地の一切の殿に宣て言へ 汝等サマリヤの山々に集りその中にある大なる紛亂を觀その中間におこなはるる虐遇を觀よ一〇 ヱホバいひたまふ 彼らは正義をおこなふことを知ず 虐げ取し物と奪ひたる物とをその宮殿に積蓄ふ一一 是故に主ヱホバかく言たまふ 敵ありて此國を攻かこみ汝の權力を汝より取下さん 汝の一切の殿は掠めらるべし一二 ヱホバかく言たまふ 牧羊者は獅子の口より羊の兩足あるひは片耳を取かへし得るのみ サマリヤに於て床の隅またはダマスコ 錦の榻に坐するイスラエルの子孫もその救はるること是のごとくならん一三 萬軍の神主ヱホバかく言たまふ 汝ら聽てヤコブの家に證せよ一四 我イスラエルの諸の罪を罰する日にはベテルの壇を罰せん 其壇の角は折て地に落べし一五 我また冬の家および夏の家をうたん 象牙の家ほろび大きなる家失ん ヱホバこれを言ふ

第四章一 バシヤンの牝牛等よ汝ら此言を聽け 汝らはサマリヤ

の山に居り弱者を虐げ貧者を壓し又その主にむかひて此に持きたりて我らに飲せよと言ふ二主ヱホバ己の聖を指し誓ひて云ふ視よ日汝らの上に臨むその日には人汝らを鈎にかけ汝等の遺餘者を釣魚鈎にかけて曳いださん三汝らは各々その前なる石垣の破壞たる處より奔出てハルモンに逃往んヱホバこれを言ふ四汝らベテルに往て罪を犯しギルガルに往て益々おほく罪を犯せ朝ごとに汝らの犠牲を携へゆけ三日ごとに汝らの什一を携へゆけ五酵いれたる者を感謝祭に獻げ願意よりする禮物を召てこれを告示せイスラエルの子孫よ汝らは斯するを好むなりと主ヱホバ言たまふ六また我汝らの一切の邑に於て汝らの齒を清からしめ汝らの一切の處において汝らの食を乏しからしめたり然るに汝らは我に歸らずとヱホバ言給ふ七また我収穫まではには尚三月あるに雨をとどめて汝らに下さずかの邑には雨を降しこの邑には雨をふらさざりき此田圃は雨を得彼田圃は雨を得ずして枯れたり八二三の邑別の一の邑に躚めきゆきて水を飲ども飽ことあたはず然るに汝らは我に歸らずとヱホバ言たまふ九我枯死殼と朽腐穗とをもて汝等を撃なやませりまた汝らの衆多の園と葡萄園と無花果樹と橄欖樹とは蝗これを食へり然るに汝らは我に歸らずとヱホバ言たまふ一〇我なんぢらの中にエジプトに爲し如く疫病をおこし劍をもて汝らの少き人を殺し又汝らの馬を奪さり汝らの營の臭氣をして騰りて汝らの鼻を撲しめたり然るも汝らは我に歸らずとヱホバいひたまふ一一我なんぢらの中の邑を滅すことソドム、ゴモラを神の滅したまひし如くしたれば汝らは焔の中より取いだしたる燃柴のごとくなれり然るも汝らは我に歸らずとヱホバ言たまふ一二イスラエルよ然ば我かく汝に行はん我是を汝に行ふべければイスラエルよ汝の神に會ふ準備をせよ一三彼は即ち山を作りなし風を作り出し人の思想の如何なるをその人に示しまた晨光をかへて黒暗となし地の高處を踏む者なりその名を萬軍の神ヱホバといふ

第五章一イスラエルの家よ我が汝らに對ひて宣る此言を聽け是は哀歎の歌なり二處女イスラエルは仆れて復起あがらず彼は己の地に扑倒さる之を扶け起す者なし三主ヱホバかく言たまふイスラエルの家においては前に千人出たる邑は只百人のみのこり前に百人出たる邑は只十人のみのこらん四ヱホバかくイスラエルの家に言たまふ汝ら我を求めよさらば生べし五ベテルを求むるなかれギルガルに往なかれベエルシバに赴く勿れギルガルは必ず虜へられゆきベテルは無に歸せん六汝らヱホバを求めよ然ば生べし恐くはヱホバ火のごとくにヨセフの家に落くだりたまひてその火これを燒んベテルのためにこれを熄す者一人もあらじ七汝ら公道を茵蔯に變じ正義を地に擲つる者よ八昴宿および參宿を造り死の蔭を變じて朝となし晝を暗くして夜となし海の水を呼て地の面に溢れさする者を求めよ其名はヱホバといふ九彼は滅亡を忽然強者に臨ましむ滅亡つひに

城に臨む 一〇 彼らは門にありて勸戒る者を惡み正直を言ふ者を忌嫌ふ 一一 汝らは貧き者を踐つけ麥の贐物を之より取る このゆゑ故に汝らは鑿石の家を建しと雖どもその中に住ことあらじ 美しき葡萄園を作りしと雖どもその酒を飲ことあらじ 一二 我知る汝らの愆は多く汝らの罪は大なり 汝らは義き者を虐げ賄賂を取り門において貧き者を推枉ぐ 一三 是故に今の時は賢き者默す是惡き時なればなり 一四 汝ら善を求めよ 惡を求めざれ 然らば汝ら生べし また汝らが言ごとく萬軍の神ヱホバ汝らと偕に在さん 一五 汝ら惡を惡み善を愛し門にて公義を立よ 萬軍の神ヱホバあるひはヨセフの遺れる者を憐れみたまはん 一六 是故に主たる萬軍の神ヱホバかく言たまふ 諸の街衢にて啼ことあらん 諸の大路にて人 哀 哉 哀 哉と呼ん 又農夫を呼きたりて哀哭しめ啼女を招きて啼しめん 一七 また諸の葡萄園にも啼こと有べし其は我汝らの中を通るべければなり ヱホバこれを言たまふ 一八 ヱホバの日を望む者は禍なるかな 汝ら何とてヱホバの日を望むや 是は昏くして光なし 一九 人獅子の前を逃れて熊に遇ひ又家にいりてその手を壁に附て蛇に咬るるに宛も似たり 二〇 ヱホバの日は昏くして光なく暗にして耀なきに非ずや 二一 我は汝らの節筵を惡みかつ藐視む また汝らの集會を悦ばじ 二二 汝ら我に燔祭または素祭を獻ぐるとも我之を受納れじ 汝らの肥たる犢の感謝祭は我これを顧みじ 二三 汝らの歌の聲を我前に絶て汝らの琴の音は我これを聽じ 二四 公道を水のごとくに正義をつきざる河のごとくに流れしめよ 二五 イスラエルの家よ汝らは四十年荒野に居し間犠牲と供物を我に獻げたりしや 二六 かへつて汝らは汝らの王シクテを負ひ汝らの偶像キウンを負へり 是即ち汝らの神とする星にして汝らの自ら造り設けし者なり 二七 然ば我汝らをダマスコの外に移さん 萬軍の神ととなふるヱホバこれを言たまふ

第六章 一 身を安くしてシオンに居る者思ひわづらはずしてサマリヤの山に居る者 諸の國にて勝れたる國の中なる聞高くしてイスラエルの家に就きしたがはるる者は禍なるかな 二 カルネに渉りゆき彼處より大ハマテに至りまたペリシテ人のガテに下りて視よ其等は此二國に愈るや 彼らの土地は汝らの土地よりも大なるや 三 汝等は災禍の日をもて尚遠しと爲し強暴の座を近づけ 四 自ら象牙の牀に臥し寢臺の上に身を伸し群の中より羔羊を取り圈の中より犢牛を取て食ひ 五 琴の音にあはせて唄ひ噪ぎダビデのごとくに樂器を製り出し 六 大盃をもて酒を飲み最も貴とき膏を身に抹りヨセフの艱難を憂へざるなり 七 是故に今彼等は虜はれて俘囚人の眞先に立て往んかの身を伸したる者等の嘈の聲止べし 八 萬軍の神ヱホバ言たまふ 主ヱホバ己を指て誓へり 我ヤコブが誇る所の物を忌嫌ひその宮殿を惡む 我この邑とその中に充る者とを付すべし 九 一の家に十人遺りをるとも皆死ん 一〇 而してその親戚すなはち之を焚く者その死骸を家より運びいださんとて之を取あげまたその家の奥に潛み居る者に向ひ

て他になほ汝とともに居る者あるやと言ふとき對へて一人も無しと言ん 此時かの人また言べし 默せよヱホバの名を口に擧ること有べからずと一一 視よヱホバ命を下し大なる家を撃て墟址とならしめ小き家を撃て微塵とならしめたまふ一二 馬あに能く岩の上を走らんや 人あに牛をもて岩を耕へすことを得んや 然るに汝らは公道を毒に變じ正義の果を茵蔯に變じたり一三 汝らは無物を喜び我儕は自分の力をもて角を得しにあらずやと言ふ一四 是をもて萬軍の神ヱホバ言たまふ イスラエルの家よ我一の國を起して汝らに敵せしめん 是はハマテの入口よりアラバの川までも汝らをなやまさん

第七章一 主ヱホバの我に示したまへるところ是のごとし 即ち草の再び生ずる時にあたりて彼蝗を造りたまふ その草は王の刈たる後に生じたるものなり二 その蝗地の青物を食盡し後我言り 主ヱホバよ願くは赦したまへ ヤコブは小し爭でか立ことを得んと三 ヱホバその行へる事につきて悔をなし我これを爲じと言たまふ四 主ヱホバの我に示したまへる所是のごとし 即ち主ヱホバ火をもて罰せんとて火を呼たまひければ火大淵を焚きまた産業の地を焚かんとす五 時に我言り 主ヱホバよ願くは止みたまへ ヤコブは小し爭でか立ことを得んと六 ヱホバその行へる事につきて悔をなし我これをなさじと主ヱホバ言たまふ七 また我に示したまへるところ是のごとし 即ち準縄をもて築ける石垣の上にヱホバ立ちその手に準縄を執たまふ八 而してヱホバ我にむかひアモス汝何を見るやと言たまひければ準縄を見ると我答へしに主また言たまはく我準縄を我民イスラエルの中に設く我再び彼らを見過しにせじ九 イサクの崇邱は荒されイスラエルの聖所は毀たれん 我劍をもちてヤラベアムの家に起むかはん一〇 時にベテルの祭司アマジヤ、イスラエルの王ヤラベアムに言遣しけるはイスラエルの家の眞中にてアモス汝に叛けり 彼の諸の言には此地も堪るあたはざるなり一一 即ちアモスかく言り ヤラベアムは劍によりて死ん イスラエルは必ず虜へられてゆきてその國を離れんと一二 而してアマジヤ、アモスに言けるは先見者よ 汝往てユダの地に逃れ彼處にて預言して汝の食物を得よ一三 然どベテルにては重ねて預言すべからず 是は王の聖所王の宮なればなり一四 アモス對へてアマジヤに言けるは我は預言者にあらず また預言者の子にも非ず 我は牧者なり 桑の樹を作る者なりと一五 然るにヱホバ羊に從ふ所より我を取り往て我民イスラエルに預言せよとヱホバわれに宣へり一六 今ヱホバの言を聽け 汝は言ふイスラエルにむかひて預言する勿れイサクの家にむかひて言を出すなかれと一七 是故にヱホバかく言たまふ 汝の妻は邑の中にて妓婦となり汝の男子女子は劍に斃れ汝の地は縄をもて分たれん 而して汝は穢れたる地に死にイスラエルは虜られゆきてその國を離れん

第八章一 主ヱホバの我に示したまへるところ是のごとし 即ち熟したる果物一筐あり二 ヱホバわれにむかひてアモス汝何を

見るやと言たまひければ熟したる果物一筐を見ると答へしにヱホバ我に言たまはく我民イスラエルの終いたれり我ふたたび彼らを見過しにせじ三 主ヱホバ言たまふ 其日には宮殿の歌は哀哭に變らん 死屍おびただしくあり 人これを遍き處に投棄ん默せよ四 汝ら喘ぎて貧しき者に迫り且地の困難者を滅す者よ之を聽け五 汝らは言ふ月朔は何時過去んか 我ら麥倉を開かんとす安息日は何時過去んか 我等穀物を賣んとす 我らエパを小くしシケルを大くし僞の權衡をもて欺く事をなし六 銀をもて賤しき者を買ひ鞋一足をもて貧き者を買ひかつ屑麥を賣いださんと七ヱホバ、ヤコブの榮光を指て誓ひて言たまふ 我かならず彼等の一切の行爲を何時までも忘れじ八 之がために地震はざらんや地に住る者みな哭かざらんや 地みな河のごとく噴あがらん エジプトの河のごとく湧あがり又沈まん九 主ヱホバ言たまふ其日には我日をして眞晝に沒せしめ地をして白晝に暗くならしめ一〇汝らの節筵を悲傷に變らせ汝らの歌を盡く哀哭に變らせ 一切の人に麻布を腰に纏はしめ一切の人に頂を剃しめ其日をして獨子を喪へる哀傷のごとくならしめ其終をして苦き日のごとくならしめん一一 主ヱホバ言たまふ 視よ日至らんとす その時我饑饉を此國におくらん 是はパンに乏しきに非ず 水に渇くに非ず ヱホバの言を聽ことの饑饉なり一二 彼らは海より海とさまよひ歩き北より東と奔まはりてヱホバの言を求めん 然ど之を得ざるべし一三 その日には美しき處女も少き男もともに渇のために絶いらん一四 かのサマリヤの罪を指て誓ひダンよ汝の神は活くと言ひまたベエルシバの路は活くと言る者等は必ず仆れん復興ることあらじ

第九章一 我觀るに主壇の上に立て言たまはく柱の頭を擊て閾を震はせ之を打碎きて一切の人の首に落かからしめよ 其遺れる者をば我劍をもて殺さん 彼らの逃る者も逃おほすることを得ず 彼らの遁るる者もたすからじ二 假令かれら陰府に掘くだるとも我手をもて之を其處より曳いださん 假令かれら天に攀のぼるとも我これを其處より曳おろさん三 假令かれらカルメルの巓に匿るるとも我これを搜して其處より曳いださん 假令かれら海の底に匿れて我目を逃るるとも我蛇に命じて其處にて之を咬しめん四 假令かれらその敵に虜はれゆくとも我劍に命じて其處にて之を殺さしめん 我かれらの上に我目を注ぎて災禍を降さん 福祉を降さじ五 主たる萬軍のヱホバ地に捫れば地鎔けその中に住む者みな哀む 即ち全地は河のごとくに噴あがりエジプトの河のごとくにまた沈むなり六 彼は樓閣を天に作り穹蒼の基を地の上に置ゑまた海の水を呼て地の面にこれを斟ぐなり 其名をヱホバといふ七 ヱホバ言たまふ イスラエルの子孫よ 我は汝らを視ことエテオピア人を觀がごとくするにあらずや 我はイスラエルをエジプトの國よりペリシテ人をカフトルよりスリア人をキルより導き來りしにあらずや八 視よ我主ヱホバその目を此罪を犯すところの國に注ぎ之を地の面より滅し絶ん 但し我

はヤコブの家を盡くは滅さじ ヱホバこれを言ふ 九 我すなはち命を下し篩にて物を篩ふがごとくイスラエルの家を萬國の中にて篩はん 一粒も地に落ざるべし 一〇 我民の罪人即ち災禍われらに及ばず我らに降らじと言をる者等は皆劍によりて死ん 一一 其日には我ダビデの倒れたる幕屋を興しその破壞を修繕ひその傾〱圯たるを興し古代の日のごとくに之を建なほすべし 一二 而して彼らはエドムの遺餘者および我名をもて稱へらるる一切の民を獲ん 此事を行ふ ヱホバかく言なり 一三 ヱホバ言ふ 視よ日いたらんとす その時には耕 者は刈者に相繼ぎ葡萄を踐む者は播種者に相繼がん また山々には酒滴り岡は皆鎔て流れん 一四 我わが民イスラエルの俘囚を返さん 彼らは荒たる邑々を建なほして其處に住み葡萄園を作りてその酒を飲み園圃を作りてその果を食はん 一五 我かれらをその地に植つけん 彼らは我がこれに與ふる地より重ねて抜とらるることあらじ 汝の神ヱホバこれを言ふ

オバデヤ書

第一章 一 オバデヤの預言 主ヱホバ、エドムにつきて斯いひたまふ 我らヱホバより出たる音信を聞けり 一人の使者國々の民の中に遣されて云ふ 起よ我儕起てエドムを攻撃んと 二 我汝をして國々の中において小き者たらしむ 汝は大に藐視らるるなり 三 山崖の巖屋に居り高き處に住む者よ 汝が心の傲慢なんぢを欺けり 汝心の中に謂ふ誰か我を地に曳くだすことを得んと 四 汝たとひ鷲のごとくに高く擧り星の間に巣を造るとも我そこより汝を曳くださん ヱホバこれを言たまふ 五 盗賊汝に來り強盗夜なんぢに來り竊むともその心に滿るときは止ざらんや 嗚呼なんぢは滅されて絶ゆ 葡萄を摘む者汝にいたるも尚幾何を遺さざらんや 六 嗚呼エサウは捜されその隱しおける物は探りいださる 七 汝と盟約を結べる人々はみな汝を國境に逐やり汝と和好をなせる人々はみな汝を欺きて汝に勝ち汝の食物を食ふ者等は汝の下に羂を設く 彼の中には穎悟あらず 八 ヱホバ言たまふ當日には我智慧ある者をエドムより絶除き穎悟をエサウの山より絶除かざらんや 九 テマンよ汝の勇士は驚き懼れん 而して人みな終に殺されてエサウの山より絶除かるべし 一〇 汝はその兄弟ヤコブに暴虐を加へたるに因て恥辱なんぢを蒙はん 汝は永遠に至るまで絶るべし 一一 汝が遠く離れて立をりし日 即ち異邦人これが財寶を奪ひ他國人これが門に進み入りエルサレムのために籤を掣たる日には汝も彼らの一人のごとくなりき 一二 汝は汝の兄弟の日すなはちその災禍の日を觀るべからず 又ユダの子孫の滅亡の日を喜ぶべからず その苦難の日には汝口を大きく開べからざるなり 一三 我民の滅ぶる日には汝その門に入べからず 其滅ぶる日には汝その患難を見べからず 又その滅ぶる日には汝その財寶に手をかく可らず 一四 汝路の辻々に立て その逃亡者を斬べからず 其患難の日にこれが遺る者を付すべからず 一五 ヱホバの日萬國に臨むこと邇し 汝の爲せるごとく汝も爲られ汝の應報なんぢの首に歸すべし 一六 汝等のわが聖山にて飲しごとく萬國の民も恒に飲ん 即ちみな飲かつ啜りて從前より有ざりし者のごとく成ん 一七 シオン山には救はるる者等をりてその山聖所とならん またヤコブの家はその產業を獲ん 一八 ヤコブの家は火となりヨセフの家は火燄となりエサウの家は藁とならん 即ち彼等これが上に燃てこれを焚ん エサウの家には遺る者一人も無にいたるべし ヱホバこれを言なり 一九 南の人はエサウの山を獲 平地の人はペリシテを獲ん 又彼らはエフライムの地およびサマリヤの地を獲 ベニヤミンはギレアデを獲ん 二〇 かの虜はれゆきしイスラエルの軍旅はカナン人に屬する地をザレパテまで取ん セパラデにあるエルサレムの俘虜人は南の邑々を獲ん 二一 然る時に救者シオンの山に上りてエサウの山を鞫かん 而して國はヱホバに歸すべし

ヨナ書

第一章一 ヱホバの言アミタイの子ヨナに臨めりいはく二起てかの大なる邑ニネベに往きこれを呼はり責めよ そは其惡わが前に上り來ればなりと三然るにヨナはヱホバの面をさけてタルシシへ逃れんと起てヨツパに下り行けるが機しもタルシシへ往く舟に遇ければその價値を給へヱホバの面をさけて偕にタルシシへ行んとてその舟に乗れり四時にヱホバ大風を海の上に起したまひて烈しき颶風海にありければ舟は幾んど破れんとせり五かかりしかば船夫恐れて各おのれの神を呼び又舟を輕くせんとてその中なる載荷を海に投すてたり 然るにヨナは舟の奥に下りゐて臥て酣睡せり六船長來りて彼に云けるは汝なんぞかく酣睡するや起て汝の神を呼べあるひは彼われらを眷顧て淪亡ざらしめんと七かくて人衆互に云けるは此災の我儕にのぞめるは誰の故なるかを知んがため去來鬮を掣んと やがて鬮をひきしに鬮ヨナに當りければ八みな彼に云けるはこの災禍なにゆゑに我らにのぞめるか請ふ告げよ 汝の業は何なるや 何處より來れるや 汝の國は何處ぞや 何處の民なるや九ヨナ彼等にいひけるは我はヘブル人にして海と陸とを造りたまひし天の神ヱホバを畏るる者なり一〇是に於て船夫甚だしく懼れて彼に云けるは汝なんぞ其事をなせしやと その人々は彼がヱホバの面をさけて逃れしなるを知れり 其はさきにヨナ彼等に告たればなり一一遂に船夫彼にいひけるは我儕のために海を靜かにせんには汝に如何がなすべきや 其は海いよいよ甚だしく狂蕩たればなり一二ヨナ彼等に曰けるはわれを取りて海に投いれよ さらば海は汝等の爲に靜かにならん そはこの大なる颶風の汝等にのぞめるはわが故なるを知ればなり一三されど船夫は陸に漕もどさんとつとめたりしが終にあたはざりき 其は海かれらにむかひていよいよ烈しく蕩たればなり一四ここにおいて彼等ヱホバに呼はりて曰けるはヱホバよこひねがはくは此人の命の爲に我儕を滅亡したまふ勿れ 又罪なきの血をわれらに歸し給ふなかれ そはヱホバよ汝 聖意にかなふところを爲し給へるなればなりと一五すなわちヨナを取りて海に投入たり しかして海のあるることやみぬ一六かかりしかばその人々おほいにヱホバを畏れヱホバに犠牲を獻げ誓 願を立たり一七さてヱホバすでに大なる魚を備へおきてヨナを呑しめたまへり ヨナは三日三夜魚の腹の中にありき

第二章一 ヨナ魚の腹の中よりその神ヱホバに祈祷て二曰けるはわれ患難の中よりヱホバを呼びしに彼われにこたへたまへり われ陰府の腹の中より呼はりしに汝わが聲を聽たまへり三 汝我を淵のうち海の中心に投いれたまひて海の水我を環り汝の波濤と巨浪すべて我上にながる四われ曰けるは我なんぢの目の前より逐れたれども復汝の聖殿を望まん五水われを環りて 魂にも及ばんとし淵我をとりかこみ海草わが頭に纏へり六われ山の

根基にまで下れり 地の關木いつも我うしろにありき しかるに我神ヱホバよ汝はわが命を深き穴より救ひあげたまへり七 わが靈魂衷に弱りしとき我ヱホバをおもへり しかしてわが祈なんぢに至りなんぢの聖殿におよべり八 いつはりなる虚き者につかふるものは自己の恩たる者を棄つ九 されど我は感謝の聲をもて汝に獻祭をなし又わが誓願をなんぢに償さん 救はヱホバより出るなりと一〇 ヱホバ其魚に命じたまひければヨナを陸に吐出せり

第三章一 ヱホバの言ふたたびヨナに臨めり曰く二 起てかの大なる府ニネベに往きわが汝に命ずるところを宣よ三 ヨナすなはちヱホバの言に循ひて起てニネベに往り ニネベは甚だ大なる邑にしてこれをめぐるに三日を歴る程なり四 ヨナその邑に入はじめ一日路を行つつ呼はり曰けるは四十日を歴ばニネベは滅亡さるべし五 かかりしかばニネベの人々神を信じ斷食を宣れ大なる者より小き者に至るまでみな麻布を衣たり六 この言ニネベの王に聞えければ彼 位より起ち朝服を脱ぎ麻布を身に纒ふて灰の中に坐せり七 また王大臣とともに命をくだしてニネベ中に宣しめて曰く人も畜も牛も羊もともに何をも味ふべからず 又物をくらひ水を飲べからず八 人も畜も麻布をまとひ只管神に呼はり且おのおの其惡き途および其手に作す邪惡を離るべし九 或は神その聖旨をかへて悔い其烈しき怒を息てわれらを滅亡さざらん誰かその然らざるを知んや一〇 神かれらの爲すところをかんがみ其あしき途を離るるを見そなはし彼等になさんと言し所の災禍を悔て之をなしたまはざりき

第四章一 ヨナこの事を甚だ惡しとして烈く怒り二 ヱホバに祈りて曰けるはヱホバよ我なほ本國にありし時斯あらんと曰しに非ずや さればこそ前にタルシシへ逃れたるなれ 其は我なんぢは矜恤ある神 憐憫あり 怒ること遲く慈悲深くして災禍を悔たまふものなりと知ばなり三 ヱホバよ願くは今わが命を取たまへ 其は生ることよりも死るかた我に善ればなり四 ヱホバ曰たまひけるは汝の怒る事いかで宜しからんや五 ヨナは邑より出てその東の方に居り己が爲に其處に一の小屋をしつらひその蔭の下に坐して府の如何に成行くかを見る六 ヱホバ神 瓢を備へこれをして發生てヨナの上を覆はしめたり こはヨナの首の爲に庇蔭をまうけてその憂を慰めんが爲なりき ヨナはこの瓢の木によりて甚だ喜べり七 されど神あくる日の夜明に虫をそなへて其ひさごを嚙せたまひければ瓢は枯たり八 かくて日の出し時神暑き東風を備へ給ひ又日ヨナの首を照しければ彼よわりて心の中に死ることを願ひて言ふ 生ることよりも死るかた我に善し九 神またヨナに曰たまひけるは瓢の爲に汝のいかる事いかで宜しからんや 彼曰けるはわれ怒りて死るともよろし一〇 ヱホバ曰たまひけるは汝は勞をくはへず生育ざる此の一夜に生じて一夜に亡びし瓢を惜めり一一 まして十二萬餘の右左を辨へざる者と許多の家畜とあるこの大なる府ニネベをわれ惜まざらんや

ミカ書

第一章

一 ユダの王ヨタム、アハズおよびヒゼキヤの代にモレシテ人ミカに臨めるヱホバの言是すなはちサマリアとエルサレムの事につきて彼が示されたる者なり **二** 萬民よ聽け 地とその中の者よ耳を傾けよ 主ヱホバ 汝らに對ひて證を立たまはん 即ち主その聖殿より之を立たまふべし **三** 視よヱホバその處より出てくだり地の高處を踏たまはん **四** 山は彼の下に融け谷は裂けたり火の前なる蝋のごとく坂に流るる水の如し **五** 是みなヤコブの咎の故イスラエルの家の罪のゆゑなり ヤコブの愆とは何か サマリヤにあらずや ユダの崇邱とは何か エルサレムにあらずや **六** 是故に我サマリヤを野の石堆となし葡萄を植る處と爲し又その石を谷に投おとしその基を露さん **七** その石像はみな碎かれその獲たる價金はみな火にて焚れん 我その偶像をことごとく毀たん 彼妓女の價金よりこれを積たれば是はまた歸りて妓女の價金となるべし **八** 我これがために哭き咷ばん 衣を脱ぎ裸體にて歩行ん 山犬のごとくに哭き駝鳥のごとくに啼ん **九** サマリヤの傷は醫すべからざる者にてすでにユダに至り我民の門エルサレムにまでおよべり **一〇** ガテに傳ふるなかれ 泣さけぶ勿れ ベテレアフラにて我塵の中に輾びたり **一一** サピルに住る者よ 汝ら裸になり辱を蒙りて進みゆけ ザアナンに住る者は敢て出ず ベテエゼルの哀哭によりて汝らは立處を得ず **一二** マロテに住る者は己の幸福につきて思ひなやむ 其は災禍ヱホバより出てエルサレムの門に臨めばなり **一三** ラキシに住る者よ馬に車をつなげ ラキシはシオンの女の罪の根本なり イスラエルの愆は汝の中に見ゆ **一四** この故に汝 モレセテガテに離別の饋物を與へよ アクジブの家々はイスラエルの王等におけること人を欺く溪川のごとくなるべし **一五** マレシヤにすめる者よ 我また汝の地を獲べき者を汝に携へ往べし イスラエルの榮光アドラムに往ん **一六** 汝その悦ぶところの子等の故によりて汝の髮を剃おろせ 汝の首の剃し處を大きくして鷲のごとくにせよ 其は彼等虜へられて汝を離るればなり

第二章

一 その牀にありて不義を圖り惡事を工夫る者等には禍あるべし 彼らはその手に力あるが故に天亮におよべばこれを行ふ **二** 彼らは田圃を貪りてこれを奪ひ家を貪りて是を取りまた人を虐げてその家を掠め人を虐げてその產業をかすむ **三** 是故にヱホバかく言たまふ 視よ我此族にむかひて災禍を降さんと謀る 汝らはその頸を是より脱すること能はじ また首をあげて歩くこと能はざるべし 其時は災禍の時なればなり **四** その日には人汝らにつきて詩を作り悲哀の歌をもて悲哀て言ん 事既にいたれり 我等は悉く滅さる 彼わが民の產業を人に與ふ 如何なれば我よりこれを離すや 我儕の田圃を違逆者に分ち與ふ **五** 然ば汝らヱホバの會衆の中には籤によりて繩をうつ者一人も有じ **六** 預言する勿れ 彼らは預言す 彼らは是等の者等にむかひて預言せじ

恥辱彼らを離れざるべし七 汝ヤコブの家と稱へらるる者よ ヱホバの氣 短からんや ヱホバの行爲是のごとくならんや 我言は品行正直者の益とならざらんや八 然るに我民は近頃起りて敵となれり 汝らは夫の戰爭を避て心配なく過るところの者等に就てその衣服の外衣を奪ひ九 我民の婦女をその悅ぶところの家より逐いだしその子等より我の粧飾を永く奪ふ一〇 起て去れ 是は汝らの安息の地にあらず 是は已に汚れたれば必ず汝らを滅さん 其滅亡は劇かるべし一一 人もし風に歩み謊言を宣べ我葡萄酒と濃酒の事につきて汝に預言せんと言ことあらばその人はこの民の預言者とならん一二 ヤコブよ我かならず汝をことごとく集へ 必ずイスラエルの遺餘者を聚めん 而して我之を同一に置てボヅラの羊のごとく成しめん 彼らは人數衆きによりて牧場の中なる群のごとくにその聲をたてん一三 打破者かれらに先だちて登彼ら遂に門を打敗り之を通りて出ゆかん 彼らの王その前にたちて進みヱホバその首に立たまふべし

第三章 一 我言ふヤコブの首領よイスラエルの家の侯伯よ 汝ら聽け公義は汝らの知べきことに非ずや二 汝らは善を惡み惡を好み民の身より皮を剝ぎ骨より肉を剔り三 我民の肉を食ひその皮を剝ぎその骨を碎きこれを切きざみて鍋に入る物のごとくし鼎の中にいるる肉のごとくす四 然ば彼時に彼らヱホバに呼はるともヱホバかれらに應へたまはじ 却てその時には面を彼らに隱したまはん 彼らの行 惡ければなり五 我民を惑す預言者は齒にて嚙べき物を受る時は平安あらんと呼はれども何をもその口に與へざる者にむかひては戰鬥の準備をなす ヱホバ彼らにつきて斯いひたまふ六 然ば汝らは夜に遭べし 復異象を得じ 黑暗に遭べし 復卜兆を得じ 日はその預言者の上をはなれて沒りその上は晝も暗かるべし七 見者は愧を抱き卜者は面を赧らめ皆共にその唇を掩はん 神の垂應あらざればなり八 然れども我はヱホバの御靈によりて能力身に滿ち公義および勇氣衷に滿ればヤコブにその愆を示しイスラエルにその罪を示すことを得九 ヤコブの家の首領等およびイスラエルの家の牧伯等公義を惡み一切の正直事を曲る者よ汝ら之を聽け一〇 彼らは血をもてシオンを建て不義をもてエルサレムを建つ一一 その首領等は賄賂をとりて審判をなしその祭司等は値錢を取て敎誨をなす 又その預言者等は銀子を取て占卜を爲しヱホバに倚賴みて云ふヱホバわれらと偕に在すにあらずや 然ば災禍われらに降らじと一二 是によりてシオンは汝のゆゑに田圃となりて耕へされエルサレムは石堆となり宮の山は樹の生しげる高 處とならん

第四章 一 末の日にいたりてヱホバの家の山 諸の山の巓に立ち諸の嶺にこえて高く聳へ萬民河のごとく之に流れ歸せん二 即ち衆多の民來りて言ん 去來我儕ヱホバの山に登ヤコブの神の家にゆかん ヱホバその道を我らに敎へて我らにその路を歩ましめたまはん 律法はシオンより出でヱホバの言はエルサレムより出べければなり三 彼衆多の民の間を鞫き強き國を規戒め遠き

處にまでも然したまふべし 彼らはその劍を鋤に打かへその鎗を鎌に打かへん 國と國とは劍を擧て相攻めず また重て戰爭を習はじ 四 皆その葡萄の樹の下に坐しその無花果樹の下に居ん 之を懼れしむる者なかるべし 萬軍のヱホバの口之を言ふ 五 一切の民はみな各々その神の名によりて歩む 然れども我らはわれらの神ヱホバの名によりて永遠に歩まん 六 ヱホバ言たまふ 其日には我かの足蹇たる者を集へかの散されし者および我が苦しめし者を聚め 七 その足蹇たる者をもて遺餘民となし遠く逐やられたりし者をもて強き民となさん 而してヱホバ、シオンの山において今より永遠にこれが王とならん 八 羊樓 シオンの女の山よ最初の權汝に歸らん 即ちエルサレムの女の國祚なんぢに歸るべし 九 汝なにとて喚叫ぶや 汝の中に王なきや 汝の議者絶果しや 汝は產婦のごとくに痛苦を懷くなり 一〇 シオンの女よ產婦のごとく劬勞て產め 汝は今邑を出て野に宿りバビロンに往ざるを得ず 彼處にて汝救はれん ヱホバ汝を彼處にて汝の敵の手より贖ひ取り給ふべし 一一 今許多の國民あつまりて汝におしよせて言ふ 願くはシオンの汚されんことを我ら目にシオンを觀てなぐさまんと 一二 然ながら彼らはヱホバの思念を知ずまたその御謀議を曉らず ヱホバ麥束を打塲にあつむるごとくに彼らを聚め給へり 一三 シオンの女よ起てこなせ 我なんぢの角を鐵にし汝の蹄を銅にせん 汝許多の國民を打碎くべし 汝かれらの掠取物をヱホバに獻げ彼らの財產を全地の主に奉納べし

第五章

一 軍隊の女よ今なんぢ集りて隊をつくれ 敵われらを攻圍み杖をもてイスラエルの士師の頰を擊つ 二 ベテレヘム、エフラタ 汝はユダの郡中にて小き者なり 然れどもイスラエルの君となる者 汝の中より我ために出べし その出る事は古昔より永遠の日よりなり 三 是故に產婦の產おとすまで彼等を付しおきたまはん 然る後その遺れる兄弟イスラエルの子孫とともに歸るべし 四 彼はヱホバの力に由りその神ヱホバの名の威光によりて立てその群を牧ひ之をして安然に居しめん 今彼は大なる者となりて地の極にまでおよばん 五 彼は平和なり アッスリヤ人われらの國に入り我らの宮殿を踏あらさんとする時は我儕七人の牧者八人の人君を立てこれに當らん 六 彼ら劍をもてアッスリヤの地をほろぼしニムロデの地の邑々をほろぼさん アッスリヤの人我らの地に攻いり我らの境を踏あらす時には彼その手より我らを救はん 七 ヤコブの遺餘者は衆多の民の中に在こと人に賴ず世の人を俟ずしてヱホバより降る露の如く青草の上にふりしく雨の如くならん 八 ヤコブの遺餘者の國々にをり衆多の民の中にをる樣は林の獸の中に獅子の居るごとく羊の群の中に猛き獅子の居るごとくならん その過るときは踏みかつ裂ことをなす 救ふ者なし 九 望らくは汝の手汝が諸の敵の上にあげられ汝がもろもろの仇ことごとく絶れんことを 一〇 ヱホバ言たまふ 其日には我なんぢの馬を汝の中より絶ち汝の車を毀ち 一一 汝の國の邑々を絶し汝の一切の城をことごとく圮さん 一二 我また汝の手より

魔術を絶ん 汝の中に卜筮師無にいたるべし一三我なんぢの彫像および柱像を汝の中より絶ん 汝の手にて作れる者を汝 重て拝むこと無るべし一四我また汝のアシラ像を汝の中より抜たふし汝の邑々を滅さん一五而して我忿怒と憤恨をもてその聴從はざる國民に仇を報いん

第六章一 請ふ汝らヱホバの宣まふところを聽け 汝起あがりて山の前に辨爭へ 崗に汝の聲を聽しめよ二山々よ地の易ることなき基よ 汝らヱホバの辨爭を聽け ヱホバその民と辨爭を爲しイスラエルと論ぜん三我民よ我何を汝になししや 何において汝を疲勞たるや 我にむかひて證せよ四我はエジプトの國より汝を導きのぼり奴隷の家より汝を贖ひいだしモーセ、アロンおよびミリアムを遣して汝に先だたしめたり五我民よ請ふモアブの王バラクが謀りし事およびベオルの子バラムがこれに應へし事を念ひシツテムよりギルガルにいたるまでの事等を念へ 然らば汝ヱホバの正義を知ん六我ヱホバの前に何をもちゆきて高き神を拝せん 燔祭の物および當歳の犢をもてその御前にいたるべきか七ヱホバ數千の牡羊萬流の油を悦びたまはんか 我愆のためにわが長子を獻げんか 我靈魂の罪のために我身の産を獻げんか八人よ彼さきに善事の何なるを汝に告たり ヱホバの汝に要めたまふ事は唯正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神とともに歩む事ならずや九ヱホバの聲邑にむかひて呼はる 智慧ある者はなんぢの名を仰がん 汝ら笞杖およびこれをおくらんと定めし者に聽け一〇惡人の家に猶惡財ありや 詛ふべき縮小たる升ありや一一我もし正からざる權衡を用ひ袋に僞の碼子をいれおかば爭で潔からんや一二その富る人は強暴にて充ち其居民は謊言を言ひその舌は口の中にて欺くことを爲す一三是をもて我も汝を撃て重傷を負はせ汝の罪のために汝を滅す一四汝は食ふとも飽ず腹はつねに空ならん 汝は移すともつひに拯ふことを得じ 汝が拯ひし者は我これを劍に付すべし一五汝は種播とも刈ることあらず 橄欖を蹂むともその油を身に抹ることあらず 葡萄を蹂むともその酒を飲ことあらじ一六汝らはオムリの法度を守りアハブの家の一切の行爲を行ひて彼等の謀計に遵ふ 是は我をして汝を荒さしめ且その居民を胡盧となさしめんが爲なり 汝らはわが民の恥辱を任べし

第七章一 我は禍なるかな 我の景況は夏の菓物を採る時のごとく遺れる葡萄を斂むる時に似たり 食ふべき葡萄あること無く 我が心に嗜む初結の無花果あること無し二善人地に絶ゆ 人の中に直き者なし 皆血を流さんと伏て伺ひ各々網をもてその兄弟を獵る三兩手は惡を善なすに急がし 牧伯は要求め裁判人は賄賂を取り力ある人はその心の惡き望を言あらはし斯共にその惡をあざなひ合す四彼らの最も善き者も荊棘のごとく最も直き者も刺ある樹の垣より惡し 汝の觀望人の日すなはち汝の刑罰の日いたる 彼らの中に今混亂あらん五汝ら伴侶を信ずる勿れ 朋友を恃むなかれ 汝の懐に寢る者にむかひても汝の口の戸を守れ六

男子は父を藐視め女子は母の背き娘は姑に背かん 人の敵はその家の者なるべし**七**我はヱホバを仰ぎ望み我を救ふ神を望み俟つ 我神われに聽たまふべし**八**我敵人よ我につきて喜ぶなかれ 我仆るれば興あがる 幽暗に居ればヱホバ我の光となりたまふ**九**ヱホバわが訴訟を理し我ために審判をおこなひたまふまで我は忍びてその忿怒をかうむらん 其は我これに罪を得たればなり ヱホバつひに我を光明に携へいだし給はん 而して我ヱホバの正義を見ん**一〇**わが敵これを見ん 汝の神ヱホバは何處にをるやと我に言る者恥辱をかうむらん 我かれを目に見るべし 彼は街衢の泥のごとくに踏つけらるべし**一一** 汝の垣を築く日いたらん 其日には法度遠く徙るべし**一二**その日にはアッスリヤよりエジプトの邑々より人々汝に來りエジプトより河まで海より海まで山より山までの人々汝に來り就ん**一三**その日地はその居民の故によりて荒はつべし 是その行爲の果報なり**一四** 汝の杖をもて汝の民即ち獨離れてカルメルの中の林にをる汝の産業の羊を牧養ひ之をして古昔の日のごとくバシヤンおよびギレアデにおいて草を食はしめたまへ**一五** 汝がエジプトの國より出來し日のごとく我ふしぎなる事等を彼にしめさん**一六**國々の民見てその一切の能力を恥ぢその手を口にあてん その耳は聾となるべし**一七** 彼らは蛇のごとくに塵を舐め地に匍ふ者の如くにその城より振ひて出で戰慄て我らの神ヱホバに詣り汝のために懼れん**一八** 何の神か汝に如ん 汝は罪を赦しその産業の遺餘者の愆を見過したまふなり 神は憐憫を悦ぶが故にその震怒を永く保ちたまはず**一九** ふたたび顧みて我らを憐み我らの愆を踏つけ我らの諸の罪を海の底に投しづめたまはん**二〇** 汝古昔の日われらの先祖に誓ひたりし其眞實をヤコブに賜ひ憐憫をアブラハムに賜はん

ナホム書

第一章 一 ニネベに關る重き預言 エルコシ人ナホムの異象の書 二 ヱホバは妬みかつ仇を報ゆる神 ヱホバは仇を報ゆる者また忿怒の主 ヱホバは己に逆らふ者に仇を報い己に敵する者にむかひて憤恨を含む者なり 三 ヱホバは怒ることの遲く能力の大なる者また罰すべき者をば必ず赦すことを爲ざる者 ヱホバの道は旋風に在り大風に在り 雲はその足の塵なり 四 彼海を指斥て之を乾かし河々をしてことごとく涸しむ バシヤンおよびカルメルの草木は枯れレバノンの花は凋む 五 彼の前には山々ゆるぎ嶺々溶く 彼の前には地墳上り世界およびその中に住む者皆ふきあげらる 六 誰かその憤恨に當ることを得ん 誰かその燃忿怒に堪ることを得ん 其震怒のそそぐこと火のごとし 巖も之がために裂く 七 ヱホバは善なる者にして患難の時の要害なり 彼は己に倚頼む者を善知たまふ 八 彼みなぎる洪水をもてその處を全く滅し己に敵する者を幽暗處に逐やりたまはん 九 汝らヱホバに對ひて何を謀るや 彼全く滅したまふべし 患難かさねて起らじ 一〇 彼等むすびからまれる荊棘のごとくなるとも酒に浸りをるとも乾ける藁のごとくに焚つくさるべし 一一 ヱホバに對ひて惡事を謀る者一人汝の中より出て邪曲なる事を勸む 一二 ヱホバかく言たまふ 彼等全くしてその數夥多しかるとも必ず芟たふされて皆絶ん 我前にはなんぢを苦めたれども重て汝を苦めじ 一三 いま我かれが汝に負せし軛を碎き汝の縛を切はなすべし 一四 ヱホバ汝の事につきて命令を下す 汝の名を負ふ者再び播るること有じ 汝の神々の室より我雕像および鑄像を除き絶べし 我汝の墓を備へん 汝輕ければなり 一五 嘉音信を傳ふる者の脚山の上に見ゆ 彼平安を宣ぶ ユダよ汝の節筵を行ひ汝の誓願を果せ 邪曲なる者重て汝の中を通らざるべし 彼は全く絶る

第二章 一 撃破者攻のぼりて汝の前に至る 汝城を守り路を窺ひ腰を強くし汝の力を大に強くせよ 二 ヱホバはヤコブの榮を舊に復してイスラエルの榮のごとくしたまふ 其は掠奪者これを掠めその葡萄蔓を壞ひたればなり 三 その勇士は楯を紅にしその軍兵は紅に身を甲ふ 其行伍を立つる時には戰車の鐵灼燦て火のごとし 鎗また閃めきふるふ 四 戰車街衢に狂ひ奔り大路に推あふ 其形狀火炬のごとく其疾く馳すること電光の如し 五 彼その將士を憶ひいだす 彼らはその途にて躓き仆れその石垣に奔ゆき大楯を備ふ 六 河々の門啓け宮消うせん 七 この事定まれり 彼は裸にせられて虜はれゆきその宮女胸を打て鴿のごとくに啼くべし 八 ニネベはその建し日より以來水の滿る池に似たりしがその民今は逃奔る 止れ止れと呼ども後を顧みる者なし 九 白銀を奪へよ 黄金を奪へよ その寶物限なく諸の貴き器用夥多し 一〇 滅亡たり 空虛なれり 荒果たり 心は消え膝は慄ひ腰には凡て劇しき痛あり 面はみな色を失ふ 一一 獅子の穴は何處ぞや 少き獅子の物を食ふ處は何處ぞや 雄獅子雌獅子その小獅子とも

に彼處に歩むに之を懼れしむる者なし 一二 雄獅子は小獅子のために物を噛ころし雌獅子の爲に物をくびり殺しその掠獲たる物をもて穴に充しその裂殺し物をもて住所に滿す 一三 萬軍のヱホバ言たまふ 視よ我なんぢに臨む 我なんぢの戰車を焚て煙となすべし 汝の少き獅子はみな劍の殺す所とならん 我また汝の獲物を地より絶べし 汝の使者の聲かさねて聞ゆること無らん

第三章 一 禍なるかな血を流す邑 その中には全く詭譎および暴行充ち掠め取ること息まず 二 鞭の音あり輪の轟く音あり馬は躍り跳ね車は轣り行く 三 騎兵馳のぼり劍きらめき鎗ひらめく殺さるる者夥多しくして死屍山を爲し死骸限なし 皆死屍に躓きて倒る 四 是はかの魔術の主なる美しき妓女多く淫行を行ひその淫行をもて諸國を奪ひその魔術をもて諸族を惑したるに因てなり 五 萬軍のヱホバ言たまふ 視よ我なんぢに臨む 我なんぢの裳裾を掲げて面の上にまで及ぼし汝の陰所を諸民に見し汝の羞る所を諸國に見すべし 六 我また穢はしき物を汝の上に投かけて汝を辱しめ汝をして賽物とならしめん 七 凡て汝を見る者はみな汝を避て奔り去りニネベは亡びたりと言ん 誰か汝のために哀かんや 何處よりして我なんぢを弔ふ者を尋ね得んや 八 汝あにノアモンに愈らんや ノアモンは河々の間に立ち水をその周圍に環らし海をもて壕となし海をもて垣となせり 九 かつその勢力たる者はエテオピア人およびエジプト人などにして限あらずフテ人ルビ人等汝を助けたりき 一〇 然るに是も俘囚となりて虜はれてゆきその子女は一切の衢の隅々にて投付られて碎け又その尊貴者は籤にて分たれ其大なる者はみな鏈に繋がれたり 一一 汝もまた酔せられて終に隱匿ん 汝もまた敵を避て逃るる處を尋ね求めん 一二 汝の城々はみな初に結びし果のなれる無花果樹のごとし 之を撼がせばその果落て食はんとする者の口にいる 一三 汝の中にある民は婦人のごとし 汝の地の門はみな汝の敵の前に廣く開きてあり 火なんぢの關を焚ん 一四 汝水を汲て圍まる時の用に備へ汝の城々を堅くし泥の中に入て踐て石灰を作りかつ瓦燒窰を修理へよ 一五 其處にて火汝を燒き劍なんぢを斬ん 其なんぢを滅すこと吸蝗のごとくなるべし 汝吸蝗のごとく數多からば多かれ 汝群蝗のごとく數多からば多かれ 一六 汝はおのれの商賣を空の星よりも多くせり 吸蝗掠めて飛さる 一七 汝の重臣は群蝗のごとく汝の軍長は蝗の群のごとし 寒き日には垣に巣窟を構へ日出きたれば飛て去る その在る處を知る者なし 一八 アッスリヤの王よ汝の牧者は睡り汝の貴族は臥す 又なんぢの民は山々に散さる 之を聚むる者なし 一九 汝の傷は愈ること無し 汝の創は重し 汝の事を聞およぶ者はみな汝の故によりて手を拍ん 誰か汝の惡行を恒に身に受ざる者やある

ハバクク書

第一章 一 預言者ハバククが示を蒙りし預言の重負 二 ヱホバよ我呼はるに汝の我に聽たまはざること何時までぞや 我なんぢにむかひて強暴を訴ふれども汝は助けたまはざるなり 三 汝なにとて我に害惡を見せたまふや 何とて艱難を瞻望居たまふや 奪掠および強暴わが前に行はる且爭論あり鬪諍おこる 四 是によりて律法弛み公義正しく行はれず惡き者義しき者を圍むが故に公義曲りて行はる 五 汝ら國々の民の中を望み觀おどろけ駭け 汝らの日に我一の事を爲ん 之を告る者あるとも汝ら信ぜざらん 六 視よ我カルデヤ人を興さんとす 是すなはち猛くまた荒き國人にして地を縱横に行めぐり 己の有ならざる住處を奪ふ者なり 七 是は懼るべく又驚くべし 其是非威光は己より出づ 八 その馬は豹よりも迅く夜求食する豺狼よりも疾し 其騎兵は跑まはる 即ちその騎兵は遠き處より來る 其飛ことは物を食はんと急ぐ鷲のごとし 九 是は全く強暴のために來り 其面を前にむけて頻に進むその俘虜を寄集むることは砂のごとし 一〇 是は王等を侮り君等を笑ひ諸の城々を笑ひ土を積あげてこれを取ん 一一 斯て風のごとくに行めぐり進みわたりて罪を獲ん 是は己の力を神とす 一二 ヱホバわが神わが聖者よ 汝は永遠より在すに非ずや 我らは死なじ ヱホバよ汝は是を審判のために設けたまへり 磐よ汝は是を懲戒のために立たまへり 一三 汝は目清くして肯て惡を觀たまはざる者 肯て不義を視たまはざる者なるに何ゆゑ邪曲の者を觀すて置たまふや 惡き者を己にまさりて義しき者を吞噬ふに何ゆゑ汝默し居たまふや 一四 汝は人をして海の魚のごとくならしめ君あらぬ昆蟲のごとくならしめたまふ 一五 彼釣をもて之を盡く釣あげ網をもて之を寄せ集め引網をもて之を捕ふるなり 是に因て彼歡び樂しむ 一六 是故に彼その網に犧牲を獻げその引網に香を焚く 其は之がためにその分肥まさりその食饒になりたればなり 一七 然ど彼はその網を傾けつつなほたえず國々の人を惜みなく殺すことをするならんか

第二章 一 我わが觀望所に立ち戍樓に身を置ん 而して我候ひ望みて其われに何と宣まふかを見 わが訴言に我みづから何と答ふべきかを見ん 二 ヱホバわれに答へて言たまはく 此默示を書しるして之を板の上に明白に鐫つけ奔りながらも之を讀むべからしめよ 三 この默示はなほ定まれる時を俟てその終を急ぐなり 僞ならず 若し遲くあらば待べし 必ず臨むべし 濡滯りはせじ 四 視よ彼の心は高ぶりその中にありて直からず 然ど義き者はその信仰によりて活べし 五 かの酒に耽る者は邪曲なる者なり 驕傲者にして安んぜず彼はその情慾を陰府のごとくに濶くす また彼は死のごとし 又足ことを知ず 萬國を集へて己に歸せしめ萬民を聚めて己に就しむ 六 其等の民みな諺語をもて彼を評し嘲弄の詩歌をもて彼を諷せざらんや 即ち言ん己に屬せざる物を積累ぬる者は禍なるかな 斯て何の時にまでおよばんや 嗟か

の質物の重荷を身に負ふ者よ七 汝を噬む者にはかに興らざらんや 汝を悩ます者醒出ざらんや 汝は之に掠めらるべし八 汝衆多の國民を掠めしに因てその諸の民の遺れる者なんぢを掠めん是人の血を流ししに因るまた強暴を地上に行ひて邑とその内に住る一切の者とに及ぼせしに因るなり九 災禍の手を免れんが爲に高き處に巣を構へんとして己の家に不義の利を取る者は禍なるかな一〇 汝は事を圖りて己の家に恥辱を來らせ衆多の民を滅して自ら罪を取れり一一 石垣の石叫び建物の梁これに應へん一二 血をもて邑を建て惡をもて城を築く者は禍なるかな一三 諸の民は火のために勞し諸の國人は虚空事のために疲る是は萬軍のヱホバより出る者ならずや一四 ヱホバの榮光を認むるの知識地上に充て宛然海を水の掩ふが如くならん一五 人に酒を飲せ己の忿怒を酌和へて之を酔せ而して之が陰所を見んとする者は禍なるかな一六 汝は榮譽に飽ずして羞辱に飽り 汝もまた飲て汝の不割禮を露はせ ヱホバの右の手の杯 汝に巡り來るべし 汝は汚なき物を吐て榮耀を掩はん一七 汝がレバノンに爲たる強暴と獣を懼れしめしその殲滅とは汝の上に報いきたるべし是人の血を流ししに因りまた強暴を地上に行ひて邑とその内に住る一切の者とに及ぼししに因るなり一八 雕像はその作者これを刻みたりとて何の益あらんや 又鑄像および僞師は語はぬ偶像なればその像の作者これを作りて頼むとも何の益あらんや一九 木にむかひて興ませと言ひ 語はぬ石にむかひて起たまへと言ふ者は禍なるかな是あに教誨を爲んや 視よ是は金銀に着せたる者にてその中には全く氣息なし二〇 然りといへどもヱホバはその聖殿に在ますぞかし全地その御前に默すべし

第三章一 シギヨノテに合せて歌へる預言者ハバククの祈禱二 ヱホバよ我なんぢの宣ふ所を聞て懼る ヱホバよこの諸の年の中間に汝の運動を活甦かせたまへ 此諸の年の間に之を顯現したまへ 怒る時にも憐憫を忘れ給はざれ三 神テマンより來り聖者パラン山より臨みたまふ セラ 其榮光諸天を蔽ひ其讃美世界に徧ねし四 その朗耀は日のごとく光線その手より出づ彼處はその權能の隠るる所なり五 疫病その前に先だち行き熱病その足下より出づ六 彼立て地を震はせ觀まはして萬國を戰慄しめたまふ 永久の山は崩れ常磐の岡は陷る 彼の行ひたまふ道は永久なり七 我觀るにクシヤンの天幕は艱難に罹りミデアンの地の幃幕は震ふ八 ヱホバよ汝は馬を驅り汝の拯救の車に乗りたまふ 是河にむかひて怒りたまふなるか 河にむかひて汝の忿怒を發したまふなるか 海にむかひて汝の憤恨を洩し給ふなるか九 汝の弓は全く嚢を出で杖は言をもて言かためらる セラ汝は地を裂て河となし給ふ一〇 山々汝を見て震ひ洪水溢れわたり淵聲を出してその手を高く擧ぐ一一 汝の奔る矢の光のため汝の鎗の電光のごとき閃爍のために日月その住處に立とどまる一二 汝は憤ほりて地を行めぐり 怒りて國民を踏つけ給ふ一三 汝は汝の民を救んとて出きたり 汝の膏沃げる者を救はんとて臨

みたまふ 汝は惡き者の家の頭を碎きその石礎を露はして頸におよぼし給へり セラ 一四 汝は彼の鎗をもてその將帥の首を刺とほし給ふ 彼らは我を散さんとて大風のごとくに進みきたる 彼らは貧き者を密に呑ほろぼす事をもてその樂とす 一五 汝は汝の馬をもて海を乘とほり大水の逆卷ところを渉りたまふ 一六 我聞て腸を斷つ 我唇その聲によりて震ふ 腐朽わが骨に入り我下體わななく 其は我患難の日の來るを待ばなり 其時には即ち此民に攻寄る者ありて之に押逼らん 一七 その時には無花果の樹は花咲ず葡萄の樹には果ならず 橄欖の樹の產は空くなり 田圃は食糧を出さず圈には羊絶え小屋には牛なかるべし 一八 然ながら我はヱホバによりて樂み わが拯救の神によりて喜ばん 一九 主ヱホバは我力にして我足を鹿の如くならしめ 我をして我高き處を步ましめ給ふ 伶長これを我琴にあはすべし

ゼパニヤ書

第一章一アモンの子ユダの王ヨシヤの世にゼパニヤに臨めるヱホバの言 ゼパニヤはクシの子 クシはゲダリアの子 ゲダリアはアマリヤの子 アマリヤはヒゼキヤの子なり二ヱホバ言たまふ われ地の面よりすべての物をはらひのぞかん三われ人と獣畜をほろぼし空の鳥 海の魚および躓礙になる者と惡人とを滅さん 我かならず地の面より人をほろぼし絶ん ヱホバこれを言ふ四我ユダとエルサレムの一切の居民との上に手を伸ん 我この處よりかの漏のこれるバアルを絶ちケマリムの名を祭司と與に絶ち五また屋上にて天の衆軍を拜む者ヱホバに誓を立てて拜みながらも亦おのれの王を指て誓ふことをする者六ヱホバに悖り離るる者ヱホバを求めず尋ねざる者を絶ん七汝 主ヱホバの前に默せよ そはヱホバの日近づきヱホバすでに犧牲を備へその招くべき者をさだめ給ひたればなり八ヱホバの犧牲の日に我もろもろの牧伯と王の子等および凡て異邦の衣服を着る者を罰すべし九その日には我また凡て閾をとびこえ強暴と詭譎をもて獲たる物をおのが主の家に滿す者等を罰せん一〇ヱホバ曰たまはくその日には魚の門より號呼の聲おこり下邑より喚く聲おこり山々より大なる敗壞おこらん一一マクテシの民よ汝ら叫べ 其は商賣する民 悉くほろび銀を擔ふ者 悉く絶たればなり一二その時はわれ燈をもちてエルサレムの中を尋ねん 而して滓の上に居着て心の中にヱホバは福をもなさず災をもなさずといふものを罰すべし一三かれらの財寶は掠められ彼らの家は荒果ん かれら家を造るともその中に住ことを得ず 葡萄を植るともその葡萄酒を飮ことを得ざるべし一四ヱホバの大なる日近づけり 近づきて速かに來る 聽よ是ヱホバの日なるぞ 彼處に勇士のいたく叫ぶあり一五その日は忿怒の日 患難および痛苦の日 荒かつ亡ぶるの日 黑暗またをぐらき日 濃き雲および黑雲の日一六箛をふき鯨聲をつくり堅き城を攻め高き櫓を攻るの日なり一七われ人々に患難を蒙らせて盲者のごとくに惑ひあるかしめん 彼らヱホバにむかひて罪を犯したればなり 彼らの血は流されて塵のごとくになり彼らの肉は捨られて糞土のごとくなるべし一八かれらの銀も金もヱホバの烈き怒の日には彼らを救ふことあたはず 全地その嫉妬の火に呑るべし 即ちヱホバ地の民をことごとく滅したまはん 其事まことに速なるべし

第二章一汝等羞恥を知ぬ民早く自ら内に省みよ二夫日は糠粃の如く過ぎさる 然ば詔言のいまだ行はれざる先ヱホバの烈き怒のいまだ汝等に臨まざる先ヱホバの忿怒の日のいまだ汝等にきたらざるさきに自ら省みるべし三すべてヱホバの律法を行ふ斯地の遜るものよ 汝等ヱホバを求め公義を求め謙遜を求めよ 然すれば汝等ヱホバの忿怒の日に或は匿さるることあらん四夫ガザは棄られアシケロンは荒はてアシドドは白晝に逐はられエクロンは抜さらるべし五海邊に住る者およびケレテの國民は

禍なるかな ペリシテ人の國カナンよ ヱホバの言なんぢらを攻む 我なんぢを滅して住者なきに至らしむべし六 海邊は必ず牧場となり牧者の洞および羊の牢そこに在ん七 此地はユダの家の殘餘れる者に歸せん 彼ら其處にて草飼ひ暮に至ればアシケロンの家に臥ん そは彼らの神ヱホバかれらを顧みその俘囚を歸したまふべければなり八 我すでにモアブの嘲弄とアンモンの子孫の罵言を聞けり 彼らはわが民を嘲り自ら誇りて之が境界を侵せしなり九 是故に萬軍のヱホバ、イスラエルの神言たまふ 我は活く 必ずモアブはソドムのごとくになりアンモンの子孫はゴモラのごとくにならん 是は共に蕁麻の蔓延る處となり鹽坑の地となりて長久に荒はつべし 我民の遺れる者かれらを掠めわが國民の餘されたる者かれらを獲ん一〇 この事の彼らに臨むはその傲慢による 即ち彼ら萬軍のヱホバの民を嘲りて自ら誇りたればなり一一 ヱホバは彼等に對ひては畏ろしくましまし地の諸の神や饑し滅したまふなり 諸の國の民おのおのその處より出てヱホバを拜まん一二 エテオピア人よ汝等もまたわが劍にかかりて殺さる一三 ヱホバ北に手を伸てアッスリヤを滅したまはん 亦ニネベを荒して荒野のごとき旱地となしたまはん一四 而して畜の群もろもろの類の生物その中に伏し鸅鸕および刺猬其柱の頂に住み囀る者の聲窓の内にきこえ荒落たる物閾の上に積り香柏の板の細工露顯になるべし一五 是邑は驕り傲ぶりて安泰に立をり 唯我あり 我の外には誰もなしと心の中に言つつありし者なるが斯も荒はてて畜獸の臥す處となる者かな 此を過る者はみな嘶きて手をふるはん

第三章一 此暴虐を行ふ悖りかつ汚れたる邑は禍なるかな二 是は聲を聽いれず教誨を承ずヱホバに依賴まずおのれの神に近よらず三 その中にをる牧伯等は吼る獅子の如くその審士は明旦までに何をも遺さざる 夜求食する狼のごとし四 その預言者は傲りかつ詐る人なり その祭司は聖物を汚し律法を破ることをなせり五 その中にいますヱホバは義くして不義を行なひたまはず朝な朝な己の公義を顯して缺ることなし 然るに不義なる者は恥を知ず六 我國々の民を滅したればその櫓は凡て荒たり 我これが街を荒涼れしめたれば往來する者なし その邑々は滅びて人なく住む者なきに至れり七 われ前に言り 汝ただ我を畏れまた警教を受べし 然らばその住家は我が凡て之につきて定めたる所の如くに滅されざるべしと 然るに彼等は夙に起て己の一切の行狀を壞れり八 ヱホバ曰たまふ 是ゆゑに汝らわが起て獲物をする日いたるまで我を俟て 我もろもろの民を集へ諸の國を聚めてわが憤恨とわが烈き忿怒を盡くその上にそそがんと思ひ定む 全地はわが嫉妬の火に燒ほろぼさるべし九 その時われ國々の民に清き唇をあたへ彼らをして凡てヱホバの名を呼しめ心をあはせて之につかへしめん一〇 わが散せし者等の女 即ち我を拜む者エテオピアの河々の彼旁よりもきたりて我に禮ものをささぐべし一一 その日には汝われに對てをかしきたりし諸の行爲をもて

羞を得ことなかるべし その時には我なんぢの中より高ぶり樂む者等を除けば汝かさねてわが聖山にて傲り高ぶることなければなり 一二 われ柔和にして貧き民をなんぢの中にのこさん 彼らはヱホバの名に依賴むべし 一三 イスラエルの遺れる者は惡を行はず 謊をいはず その口のうちには詐僞の舌なし 彼らは草食ひ臥やすまん 之を懼れしむる者なかるべし 一四 シオンの女よ歡喜の聲を擧よ イスラエルよ樂み呼はれ エルサレムの女よ心のかぎり喜び樂め 一五 ヱホバすでに汝の鞫を止め汝の敵を逐はらひたまへり イスラエルの王ヱホバ汝の中にいます 汝はかさねて災禍にあふことあらじ 一六 その日にはエルサレムに向ひて言あらん 懼るるなかれ シオンよ 汝の手をしなえ垂るるなかれと 一七 なんぢの神ヱホバなんぢの中にいます 彼は拯救を施す勇士なり 彼なんぢのために喜び樂み愛の餘りに默し汝のために喜びて呼はりたまふ 一八 われ節會のことにつきて憂ふるものを集めん 彼等は汝より出し者なり 恥辱かれらに蒙むること重負のごとし 一九 視よその時われ汝を虐遇る者を盡く處置し足蹇たるものを救ひ逐はなたれたる者を集め彼らをして其羞辱を蒙りし一切の國にて稱譽を得させ名を得さすべし 二〇 その時われ汝らを携へその時われ汝らを集むべし 我なんぢらの目の前において汝らの俘囚をかへし汝らをして地上の萬國に名を得させ稱譽を得さすべし ヱホバこれを言ふ

ハガイ書

第一章 一 ダリヨス王の二年六月其月の一日にヱホバの言預言者ハガイによりてシヤルテルの子ユダの方伯ゼルバベルおよびヨザダクの子祭司の長ヨシユアに臨めりいはく 二 萬軍のヱホバかくいひたまふ是民はヱホバの殿を建べき時期未だ來らずといへり 三 ヱホバの言また預言者ハガイによりて臨めり曰く 四 此殿かく毀壞をれば汝等板をもてはれる家に居るべき時ならんや 五 されば今萬軍のヱホバかく曰たまふ 汝等おのれの行爲を省察べし 六 汝らは多く播ども收入るところは少く食へども飽ことを得ず 飮ども滿足ことを得ず 衣れども暖きことを得ず 又工價を得るものは之を破れたる袋に入る 七 萬軍のヱホバまた曰たまふ 汝等おのれの行爲を省察べし 八 山に上り木を携へ來て殿を建てよ さすれば我これを悅び又榮光を受ん ヱホバこれを言ふ 九 なんぢら多く得んと望みたりしに反て少かりき 又汝等これを家に携へ歸りしとき我これを吹はらへり 萬軍のヱホバいひたまふ 是何故ぞや 是は我が殿破壞をるに汝等おのおの己の室に走り至ればなり 一〇 この故になんぢらの上の天は雨露を止め地はその產物を止めたり 一一 且われ地にも山にも穀物にも新酒にも油にも地の生ずる物にも人にも家畜にも手のもろもろの工にもすべて毀壞を召きかうむらしめたり 一二 シヤルテルの子ゼルバベルとヨザダクの子祭司の長ヨシユアおよびその殘れるすべての民ともに其神ヱホバの聲と預言者ハガイの言に聽したがへり 是は其神ヱホバかれを遣したまひしに因る 民みなヱホバの前に敬畏たり 一三 時にヱホバの使者ハガイ、ヱホバの命により民に告て曰けるは我なんぢらと偕に在りとヱホバ曰たまふと 一四 ヱホバ、シヤルテルの子ユダの方伯ゼルバベルの心とヨザダクの子祭司の長ヨシユアの心およびその殘れるすべての民の心をふりおこしたまひければ彼等來りて其神萬軍のヱホバの殿にて工作を爲り 一五 これダリヨス王の二年六月二十四日なりき

第二章 一 七月其月の二十一日ヱホバの言預言者ハガイによりて臨めり曰く 二 シヤルテルの子ユダの方伯ゼルバベルとヨザダクの子祭司の長ヨシユアおよびその殘れる一切の民に告よ 三 なんぢら遺れる者の中この殿の從前の榮光を見しものは誰ぞや 今これを如何に見るや かの殿にくらぶれば是は汝らの目に何もなきが如く見ゆるにあらずや 四 ヱホバ曰たまふゼルバベルよ自ら強くせよ ヨザダクの子祭司の長ヨシユアよ自ら強くせよ ヱホバ言たまふ この地の民よ自らつよくしてはたらけ 我なんぢらとともに在り 萬軍のヱホバこれを言ふ 五 汝らがエジプトよりいでし時わがなんぢらに約せし言およびわが靈なほなんぢらの中に留れり 懼るるなかれ 六 萬軍のヱホバかくいひたまふ いま一度しばらくありてわれ天と地と海と陸とを震動はん 七 又われ萬國を震動はん また萬國の願ふところのもの來らん 又われ榮光をもてこの殿に充滿さん 萬軍のヱホバこれを言ふ 八 銀も

我ものなり金もわが物なりと萬軍のヱホバいひたまふ九この殿の後の榮光は從前の榮光より大ならんと萬軍のヱホバいひたまふこの處においてわれ平康をあたへんと萬軍のヱホバいひたまふ一〇ダリヨスの二年九月二十四日ヱホバのことば預言者ハガイによりて臨めり曰く一一萬軍のヱホバかく曰たまふ 律法につきて祭司に問ふて曰ふべし一二人衣の裾にて聖肉を携へたらんにその裾もしパン或は羹あるひは酒あるひは油あるひは他の食物に捫らばそれらは聖ものとなるや 祭司たち答へて曰けるはしからず一三ハガイまたいひけるは屍體に捫りて汚れしもの若これらの物にさはらば其ものはけがるべきや 祭司等こたへて曰けるは汚れん一四ここに於てハガイ答へて曰けるはヱホバ曰たまふ 我前此民もかくの如くまた此國もかくの如し 又其手の一切のわざもかくのごとく彼等がその處に獻ぐるものもけがれたるものなり一五また今われ汝らに乞ふこの日より以前すなはちヱホバの殿にて石の上に石の置れざりし時を憶念べし一六かの時には二十舛もあるべき麥束につきてわづかに十を得また酒榨につきて五十桶汲んとせしにただ二十を得たるのみ一七汝が手をもて爲せる一切の事に於てわれ不實穗と朽腐穗と雹を以てなんぢらを撃り されど汝ら我にかへらざりき ヱホバこれを言ふ一八なんぢらこの日より以前を憶念みよ 即ち九月二十四日よりヱホバの殿の基を置し日までをおもひ見よ一九種子なほ倉にあるや 葡萄の樹 無花果の樹 石榴の樹 橄欖の樹もいまだ實を結ばざりき 此日よりのちわれ汝らを惠まん二〇此月の二十四日にヱホバのことば再びハガイに臨めり曰く二一ユダの方伯ゼルバベルに告よ われ天地を震動ん二二列國の位を倒さんまた異邦の諸國の權勢を滅さん 又車および之に駕る者を倒さん 馬および之に騎る者もおのおの其伴侶の劍によりてたふれん二三萬軍のヱホバ曰たまはくシヤルテルの子わが僕ゼルバベルよヱホバいふその日に我なんぢを取りなんぢを印の如くにせんそはわれ汝をえらびたればなり 萬軍のヱホバこれを言ふ

ゼカリヤ書

第一章 一 ダリヨスの二年八月のヱホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く 二 ヱホバいたく汝らの父等を怒りたまへり 三 萬軍のヱホバかく言ふと汝かれらに告よ萬軍のヱホバ言ふ汝ら我に歸れ萬軍のヱホバいふ我も汝らに歸らん 四 汝らの父等のごとくならざれ前の預言者等かれらに向ひて呼はりて言り萬軍のヱホバかく言たまふ請ふ汝らその惡き道を離れその惡き行を棄て歸れと然るに彼等は聽ず耳を我に傾けざりきヱホバこれを言ふ 五 汝らの父等は何處にありや預言者たち永遠に生んや 六 然ながら我僕なる預言者等に我が命じたる吾言とわが法度とは汝らの父等に追及たるに非ずや然ゆゑに彼らかへりて言り萬軍のヱホバ我らの道に循ひ我らの行に循ひて我らに爲んと思ひたまひし事を我らに爲たまへりと 七 ダリヨスの二年十一月すなはちセバテといふ月の二十四日にヱホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く 八 我夜觀しに一箇の人赤馬に乘て谷の裏なる鳥拈樹の中に立ちその後に赤馬駁馬白馬をる 九 我わが主よ是等は何ぞやと問けるに我と語ふ天の使われにむかひて是等の何なるをわれ汝に示さんと言り 一〇 鳥拈樹の中に立る人答へて言けるは是等は地上を遍く歩かしめんとてヱホバの遣したまひし者なりと 一一 彼ら答へて鳥拈樹の中に立るヱホバの使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穩にして安し 一二 ヱホバの使こたへて言ふ萬軍のヱホバよ汝いつまでヱルサレムとユダの邑々を恤みたまはざるか汝はこれを怒りたまひてすでに七十年になりぬと 一三 ヱホバ我と語ふ天の使に嘉事慰事をもて答へたまへり 一四 かくて我と語ふ天の使我に言けるは汝呼はりて言へ萬軍のヱホバかく言たまふ我ヱルサレムのためシオンのために甚だしく心を熱して嫉妬おもひ 一五 安居せる國々の民を太く怒る其は我すこしく怒りしに彼ら力を出して之に害を加へたればなり 一六 ヱホバかく言ふ是故に我憐憫をもてヱルサレムに歸る萬軍のヱホバのたまふ我室その中に建られ量繩ヱルサレムに張られん 一七 汝また呼はりて言へ萬軍のヱホバかく宣ふ我邑々には再び嘉物あふれんヱホバふたたびシオンを慰め再びヱルサレムを簡びたまふべしと 一八 かくて我目を擧て觀しに四の角ありければ 一九 我に語ふ天の使に是等は何なるやと問しに彼われに答へけるは是等はユダ、イスラエルおよびヱルサレムを散したる角なりと 二〇 時にヱホバ四箇の鍛冶を我に見し給へり 二一 我是等は何を爲んとて來れるやと問しに斯こたへ給へり是等の角はユダを散して人にその頭を擧しめざりし者なるが今この四箇の者來りて之を威しかのユダの地にむかひて角を擧て之を散せし諸國の角を擲たんとす

第二章 一 茲に我目を擧て觀しに一箇の人量繩を手に執居ければ 二 汝は何處へ往くやと問しにヱルサレムを量りてその廣と長

の幾何なるを觀んとすと我に答ふ三時に我に語ふ天の使出行たりしが又一箇の天の使出きたりて之に會ひ四之に言けるは走ゆきてこの少き人に告て言へヱルサレムはその中に人と畜と饒なるによりて野原のごとくに廣く亘るべし五ヱホバ言たまふ我その四周にて火の垣となりその中にて榮光とならん六ヱホバいひたまふ來れ來れ北の地より逃きたれ我なんぢらを四方の天風のごとくに行わたらしむればなりヱホバこれを言ふ七來れバビロンの女子とともに居るシオンよ遁れ來れ八萬軍のヱホバかく言たまふヱホバ汝等を虜へゆきし國々へ榮光のために我儕を遣したまふ汝らを打つ者は彼の目の珠を打なればなり九即ち我手をかれらの上に搖ん彼らは己に事へし者の俘虜となるべし汝らは萬軍のヱホバの我を遣したまへるなるを知ん一〇ヱホバ言たまふシオンの女子よ喜び樂め我きたりて汝の中に住ばなり一一その日には許多の民ヱホバに附て我民とならん我なんぢの中に住べし汝は萬軍のヱホバの我を遣したまへるなるを知ん一二ヱホバ聖地の中にてユダを取て己の分となし再びヱルサレムを簡びたまふべし一三ヱホバ起てその聖住所よりいでたまへば凡そ血肉ある者ヱホバの前に粛然たれ

第三章一彼祭司の長ヨシユアがヱホバの使の前に立ちサタンのその右に立てこれに敵しをるを我に見す二ヱホバ、サタンに言たまひけるはサタンよヱホバ汝をせむべし即ちヱルサレムを簡びしヱホバ汝をいましむ是は火の中より取いだしたる燃柴ならずやと三ヨシユア汚なき衣服を衣て使の前に立をりしが四ヱホバ己の前に立る者等に告て汚なき衣服を之に脱せよと宣ひまたヨシユアに向ひて觀よ我なんぢの罪を汝の身より取のぞけり汝に美服を衣すべしと宣へり五我また潔き冠冕をその首に冠らせよと言り是において潔き冠冕をその首に冠らせ衣服をこれに衣すヱホバの使は立をる六ヱホバの使證してヨシユアに言ふ七萬軍のヱホバかく言たまふ汝もし我道を歩みわが職守を守らば我家を司どり我庭を守ることを得ん我また此に立る者等の中に往來する路を汝に與ふべし八祭司の長ヨシユアよ請ふ汝と汝の前に坐する汝の同僚とともに聽べし彼らは即ち前表となるべき人なり我かならず我僕たる枝を來らすべし九ヨシユアの前に我が立るところの石を視よ此一箇の石の上に七箇の目あり我自らその彫刻をなす萬軍のヱホバこれを言ふなり我この地の罪を一日の内に除くべし一〇萬軍のヱホバ言たまふ其日には汝等おのおの互に相招きて葡萄の樹の下無花果の樹の下にあらん

第四章一我に語へる天の使また來りて我を呼醒せり我は睡れる人の呼醒されしごとくなりき二彼我にむかひて汝何を見るやと言ければ我いへり我觀に惣金の燈臺一箇ありてその頂に油を容る器ありまた燈臺の上に七箇の燭盞ありその燭盞は燈臺の頂にありて之に各七本づつの管あり三また燈臺の側に橄欖の樹二本ありて一は油を容る器の右にあり一はその左にあり四我答

へて我と語ふ天の使の問言けるは我主よ是等は何ぞやと五我と語ふ天の使我に答へて汝是等の何なるを知ざるかと言しにより我主よ知ずとわれ言り六彼また答へて我に言けるはゼルバベルにヱホバの告たまふ言は是のごとし萬軍のヱホバ宣ふ是は權勢に由らず能力に由らず我靈に由るなり七ゼルバベルの前にあたれる大山よ汝は何者ぞ汝は平地とならん彼は恩惠あれ之に恩惠あれと呼はる聲をたてて頭石を曳いださん八ヱホバの言われに臨めり云く九ゼルバベルの手この室の石礎を置たり彼の手これを成終ん汝しらん萬軍のヱホバ我を汝等に遣したまひしと一〇誰か小き事の日を藐視むる者ぞ夫の七の者は遍く全地に往來するヱホバの目なり準繩のゼルバベルの手にあるを見て喜ばん一一我また彼に問て燈臺の右左にある此二本の橄欖の樹は何なるやと言ひ一二重ねてまた彼に問て此二本の金の管によりて金の油をその中より斟ぎ出す二枝の橄欖は何ぞやと言しに一三彼われに答へて汝是等の何なるを知ざるかと言ければ我主よ知ずと言けるに一四彼言らく是等は油の二箇の子にして全地の主の前に立つ者なり

第五章一我また目を擧て觀しに卷物の飛あり二彼われに汝何を見るやと言ければ我言ふ我卷物の飛ぶを見る其長は二十キユビトその寛は十キユビト三彼またわれに言けるは是は全地の表面を往めぐる呪詛の言なり凡て竊む者は卷物のこの面に照して除かれ凡て誓ふ者は卷物の彼の面に照して除かるべし四萬軍のヱホバのたまふ我これを出せり是は竊盗者の家に入りまた我名を指て僞り誓ふ者の家に入てその家の中に宿りその木と石とを並せて盡く之を燒べしと五我に語へる天の使進み來りて我に言けるは請ふ目を擧てこの出きたれる物の何なるを見よ六これは何なるやと我言ければ彼言ふ此出來れる者はエパ舛なり又言ふ全地において彼等の形狀は是のごとしと七かくて鉛の圓き蓋を取あぐれば一人の婦人エパ舛の中に坐し居る八彼是は罪惡なりと言てその婦人をエパ舛の中に投いれ鉛の錘をその舛の口に投かぶらせたり九我また目を擧て觀しに婦人二人出きたれり之に鶴の翼のごとき翼ありてその翼風を含む彼等そのエパ舛を天地の間に持擧ぐ一〇我すなはち我に語ふ天の使にむかひて彼等エパ舛を何處へ携へゆくなるやと言けるに一一彼我に言ふシナルの地にて之がために家を建んとてなり是は彼處に置られてその臺の上に立ん

第六章一我また目を擧て觀しに四輛の車二の山の間より出きたれりその山は銅の山なり二第一の車には赤馬を着け第二の車には黑馬を着け三第三の車には白馬を着け第四の車には白點なる強馬を着く四我すなはち我に語ふ天の使に問て我主よ是等は何なるやと言けるに五天の使こたへて我に言ふ是は四の天風にして全地の主の前より罷り出たる者なり六黑馬は北の地をさして進み行き白馬その後に從ふ又白點馬は南の地をさして進みゆき七強馬は進み出て地を徧く行めぐらんとす彼汝ら往き地を徧

くめぐれと言たまひければ則ち地を行めぐれり八彼われを呼て我に告て言ふこの北の地に往る者等は北の地にて我靈を安んず九ヱホバの言われに臨めり曰く一〇汝かの囚虜人の中の者ヘルダイ、トビヤおよびヱダヤより取ことをせよ即ちその日に汝かれらがバビロンより歸りて宿りをるゼパニヤの子ヨシヤの家に到り一一金銀を取て冠冕を造りヨザダクの子なる祭司の長ヨシユアの首にこれを冠らせ一二彼に語りて言べし萬軍のヱホバ斯言たまふ視よ人ありその名を枝といふ彼おのれの處より生いでてヱホバの宮を建ん一三即ち彼者ヱホバの宮を建て尊榮を帶びその位に坐して政事を施しその位にありて祭司とならん此二の者の間に平和の計議あるべし一四偖またその冠冕はヘレム、トビヤ、ヱダヤおよびゼパニヤの子ヘンの記念のために之をヱホバの殿に納むべし一五遠き處の者等來りてヱホバの殿を建ん而して汝らは萬軍のヱホバの我を遣したまひしなるを知にいたらん汝らもし汝らの神ヱホバの聲に聽したがはば是のごとくなるべし

第七章一ダリヨス王の四年の九月すなはちキスリウといふ月の四日にヱホバの言ゼカリヤに臨めり二ベテルかの時シヤレゼル、レゲンメレクおよびその從者を遣してヱホバを和めさせ三かつ萬軍のヱホバの室にをる祭司に問しめ且預言者に問しめて言けらく我今まで年久しく爲きたりしごとく尚五月をもて哭きかつ齋戒すべきやと四ここにおいて萬軍のヱホバの言我に臨めり云く五國の諸民および祭司に告て言へ汝らは七十年のあひだ五月と七月とに斷食しかつ哀哭せしがその斷食せし時果して我にむかひて斷食せしや六汝ら食ひかつ飮は全く己のために食ひ己のために飮ならずや七在昔ヱルサレムおよび周圍の邑々人の住ふありて平安なりし時南の地および平野にも人の住ひをりし時に已往の預言者によりてヱホバの宣ひたりし言を汝ら知ざるや八ヱホバの言ゼカリヤに臨めり云く九萬軍のヱホバかく宣へり云く正義き審判を行ひ互に相愛しみ相憐め一〇寡婦孤兒旅客および貧 者を虐ぐるなかれ人を害せんと心に圖る勿れと一一然るに彼等は肯て耳を傾けず背を向け耳を鈍くして聽ず一二且その心を金剛石のごとくし萬軍のヱホバがその御靈をもて已往の預言者に由て傳へたまひし律法と言詞に聽したがはざりき是をもて大なる怒萬軍のヱホバより出て臨めり一三彼かく呼はりたれども彼等聽ざりき其ごとく彼ら呼はるとも我聽じ萬軍のヱホバこれを言ふ一四我かれらをその識ざる諸の國に吹散すべし其後にてこの地は荒て往來する者なきに至らん彼等かく美しき國を荒地となす

第八章一萬軍のヱホバの言われに臨めり曰く二萬軍のヱホバかく言たまふ我シオンのために甚だしく妬く思ひ大なる忿怒を起して之がために妬く思ふ三ヱホバかく言たまふ今我シオンに歸れり我ヱルサレムの中に住んヱルサレムは誠實ある邑と稱へられ萬軍のヱホバの山は聖山と稱へらるべし四萬軍の

ヱホバかく言たまふヱルサレムの街衢には再び老たる男老たる女坐せん皆年高くして各々杖を手に持べし五 またその邑の街衢には男の兒女の兒滿て街衢に遊び戯れん六 萬軍のヱホバかく言たまふこの事その日には此民の遺餘者の目に奇といふとも我目に何の奇きこと有んや萬軍のヱホバこれを言ふ七 萬軍のヱホバかく言たまふ視よ我わが民を日の出る國より日の入る國より救ひ出し八 かれらを携へ來りてヱルサレムの中に住しめん彼らは我民となり我は彼らの神となりて共に誠實と正義に居ん九 萬軍のヱホバかく言たまふ汝ら萬軍のヱホバの室なる殿を建んとて其基礎を置たる日に起りし預言者等の口の言詞を今日聞く者よ汝らの腕を強くせよ一〇 此日の先には人も工の價を得ず獸畜も工の價を得ず出る者も入者も仇の故をもて安然ならざりき即ち我人々をして互に相攻しめたり一一 然れども今は我此民の遺餘者に對すること曩の日の如くならずと萬軍のヱホバ言たまふ一二 即ち平安の種子あるべし葡萄の樹は果を結び地は產物を出し天は露を與へん我この民の遺餘者にこれを盡く獲さすべし一三 ユダの家およびイスラエルの家よ汝らが國々の中に呪詛となりしごとく此度は我なんぢらを救ふて祝言とならしめん懼るる勿れ汝らの腕を強くせよ一四 萬軍のヱホバかく言たまふ在昔汝らの先祖我を怒らせし時に我これに災禍を降さんと思ひて之を悔ざりき萬軍のヱホバこれを言ふ一五 是のごとく我また今日ヱルサレムとユダの家に福祉を降さんと思ふ汝ら懼るる勿れ一六 汝らの爲べき事は是なり汝ら各々たがひに眞實を言べし又汝等の門にて審判する時は眞實を執て平和の審判を爲べし一七 汝等すべて人の災害を心に圖る勿れ僞の誓を好む勿れ是等はみな我が惡む者なりとヱホバ言たまふ一八 萬軍のヱホバの言われに臨めり云く一九 萬軍のヱホバかく言たまふ四月の斷食五月の斷食七月の斷食十月の斷食かへつてユダの家の宴樂となり欣喜となり佳節となるべし惟なんぢら眞實と平和を愛すべし二〇 萬軍のヱホバかく言たまふ國々の民および衆多の邑の居民來り就ん二一 即ちこの邑の居民往てかの邑の者に向ひ我儕すみやかに往てヱホバを和め萬軍のヱホバを求めんと言んに我も往べしと答へん二二 衆多の民強き國民ヱルサレムに來りて萬軍のヱホバを求めヱホバを和めん二三 萬軍のヱホバかく言たまふ其日には諸の國語の民十人にてユダヤ人一箇の裾を拉へん即ち之を拉へて言ん我ら汝らと與に往べし其は我ら神の汝らと偕にいますを聞たればなり

第九章一 ヱホバの言詞の重負ハデラクの地に臨むダマスコはその止る所なりヱホバ世の人を眷みイスラエルの一切の支派を眷みたまへばなり二 之に界するハマテも然りツロ、シドンも亦はなはだ怜悧ければ同じく然るべし三 ツロは自己のために城郭を構へ銀を塵のごとくに積み金を街衢の土のごとくに積めり四 視よ主これを攻取り海にて之が力を打ほろぼしたまふべし是は火にて焚うせん五 アシケロンこれを見て懼れガザもこれを見て

太く慄ふエクロンもその望む所の者辱しめらるるに因て亦然りガザには王絶えアシケロンには住者なきに至らん六アシドドにはまた雑種の民すまん我ペリシテ人が誇る所の者を絶べし七我これが口より血を取除き之が齒の間より憎むべき物を取除かん是も遺りて我儕の神に歸しユダの牧伯のごとくに成べしまたエクロンはヱブス人のごとくになるべし八我わが家のために陣を張て敵軍に當り之をして往來すること無らしめん虐遇者かさねて逼ること無るべし我いま我目をもて親ら見ればなり九シオンの女よ大に喜べヱルサレムの女よ呼はれ視よ汝の王汝に來る彼は正義して拯救を賜り柔和にして驢馬に乘る即ち牝驢馬の子なる駒に乘るなり一〇我エフライムより車を絶ちヱルサレムより馬を絶ん戰争弓も絶るべし彼國々の民に平和を諭さん其政治は海より海に及び河より地の極におよぶべし一一汝についてはまた汝の契約の血のために我かの水なき坑より汝の被俘人を放ち出さん一二望を懷く被俘人よ汝等城に歸れ我今日もなほ告て言ふ我かならず倍して汝等に賚ふべし一三我ユダを張て弓となしエフライムを矢となして之につがへんシオンよ我汝の人々を振起してギリシヤの人々を攻しめ汝をして大丈夫の劍のごとくならしむべし一四ヱホバこれが上に顯れてその箭を電光のごとくに射いだしたまはん主ヱホバ喇叭を吹ならし南の暴風に乘て出來まさん一五萬軍のヱホバ彼らを護りたまはん彼等は食ふことを爲し投石器の石を踏つけん彼等は飲ことを爲し酒に醉るごとくに聲を擧ん其これに盈さるることは血を盛る鉢のごとく祭壇の隅のごとくなるべし一六彼らの神ヱホバ當日に彼らを救ひその民を羊のごとくに救ひたまはん彼等は冠冕の玉のごとくになりて其地に輝くべし一七その福祉は如何計ぞや其美麗は如何計ぞや穀物は童男を長ぜしめ新酒は童女を長ぜしむ

第一〇章

一汝ら春の雨の時に雨をヱホバに乞へヱホバは電光を造り大雨を人々に賜ひ田野において草蔬を各々に賜ふべし二夫テラピムは空虚き事を言ひ卜筮師はその見る所眞實ならずして虚僞の夢を語る其慰むる所は徒然なり是をもて民は羊のごとくに迷ひ牧者なきに因て惱む三我牧者にむかひて怒を發す我牡山羊を罰せん萬軍のヱホバその群なるユダの家を顧み之をしてその美しき軍馬のごとくならしめたまふ四隅石彼より出で釘かれより出で軍弓かれより出で宰たる者みな齊く彼より出ん五彼等戰ふ時は勇士のごとくにして街衢の泥の中に敵を蹂躙らんヱホバかれらとともに在せば彼ら戰はん馬に騎れる者等すなはち媿を抱くべし六我ユダの家を強くしヨセフの家を救はん我かれらを恤むが故に彼らをして歸り住しめん彼らは我に棄られし事なきが如くなるべし我は彼らの神ヱホバなり我かれらに聽べし七エフライム人は勇士に等しくして酒を飲たるごとく心に歡ばん其子等は見て喜びヱホバに因て心に樂しまん八我かれらに向ひて嘯きて之を集めん其は我これを贖ひたればなり彼等は昔殖増たる如くに殖増ん九我かれらを國々の民の中に捲ん彼等

は遠き國において我をおぼへん彼らは其子等とともに生ながらへて歸り來るべし一〇我かれらをエジプトの國より携へかへりアッスリヤより彼等を集めギレアデの地およびレバノンに彼らを携へゆかんその居處も無きほどなるべし一一彼艱難の海を通り海の浪を撃破りたまふナイルの淵は盡く涸るアッスリヤの傲慢は卑くせられエジプトの杖は移り去ん一二我彼らをしてヱホバに由て強くならしめん彼等はヱホバの名をもて歩まんヱホバこれを言たまふ

第一一章 一レバノンよ汝の門を啓き火をして汝の香柏を焚しめよ二松よ叫べ香柏は倒れ威嚴樹はそこなはれたりバシヤンの橡よ叫べ高らかなる林は倒れたり三牧者の叫ぶ聲あり其榮そこなはれたればなり猛き獅子の吼る聲ありヨルダンの叢そこなはれたればなり四我神ヱホバかく言たまふ宰らるべき羔を牧へ五之を買ふ者は之を宰るとも罪なし之を賣る者は言ふ我富を得ればヱホバを祝すべしと其牧者もこれを惜まざるなり六ヱホバ言たまふ我かさねて地の居民を惜まじ視よ我人を各々その隣人の手に付しその王の手に付さん彼ら地を荒すべし我これを彼らの手より救ひ出さじ七我すなはち其宰らるべき羊を牧り是は最も憫然なる羊なり我みづから二本の杖を取り一を恩と名け一を結と名けてその羊を牧り八我一月に牧者三人を絶り我心に彼らを厭ひしが彼等も心に我を惡めり九我いへり我は汝らを飼はじ死る者は死に絶る者は絶れ遺る者は互にその肉を食ひあふべし一〇我恩といふ杖を取て之を折れり是諸の民に立し我契約を廢せんとてなりき一一是は其日に廢せられたり是に於てかの我に聽したがひし憫然なる羊は之をヱホバの言なりしと知れり一二我彼らに向ひて汝等もし善と視なば我價を我に授けよ若しからずば止めよと言ければ彼等すなはち銀三十を權りて我價とせり一三ヱホバ我に言たまひけるは彼等に我が估價せられしその善價を陶人に投あたへよと我すなはち銀三十を取てヱホバの室に投いれて陶人に歸せしむ一四我また結といふ杖を折れり是ユダとイスラエルの間の和好を絶んとてなりき一五ヱホバ我に言たまはく汝また愚なる牧者の器を取れ一六視よ我地に一人の牧者を興さん彼は亡ぶる者を顧みず迷へる者を尋ねず傷つける者を醫さず健剛なる者を飼はず肥たる者の肉を食ひ且その蹄を裂ん一七其羊の群を棄る惡き牧者は禍なるかな劍その腕に臨みその右の目に臨まん其腕は全く枯えその右の目は全く盲れん

第一二章 一イスラエルにかかはるヱホバの言詞の重負ヱホバ即ち天を舒べ地の基を置ゑ人のうちの靈魂を造る者言たまふ二視よ我ヱルサレムをしてその周圍の國民を蹌踉はする杯とならしむべしヱルサレムの攻圍まる時是はユダにも及ばん三其日には我ヱルサレムをして諸の國民に對ひて重石とならしむべし之を持擧る者は大傷を受ん地上の諸國みな集りて之に攻寄べし四ヱホバ言たまふ當日には我一切の馬を撃て駭かせその騎手を

撃て狂はせん而して我ユダの家の上に我目を開き諸の國民の馬を撃て盲になすべし五ユダの牧伯等その心の中に謂んヱルサレムの居民はその神萬軍のヱホバに由て我力となるべしと六當日には我ユダの牧伯等をして薪の下にある火盤のごとく麥束の下にある炬火のごとくならしむべし彼等は右左にむかひその周圍の國民を盡く焚んヱルサレム人はなほヱルサレムにてその本の處に居ことを得べし七ヱホバまづユダの幕屋を救ひたまはん是ダビデの家の榮およびヱルサレムの居民の榮のユダに勝ること無らんためたり八當日ヱホバ、ヱルサレムの居民を護りたまはん彼らの中の弱き者もその日にはダビデのごとくなるべしまたダビデの家は神のごとく彼らに先だつヱホバの使のごとくなるべし九その日には我ヱルサレムに攻きたる國民をことごとく滅すことを務むべし一〇我ダビデの家およびヱルサレムの居民に恩惠と祈禱の靈をそそがん彼等はその刺たりし我を仰ぎ觀獨子のため哭くがごとく之がために哭き長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん一一その日にはヱルサレムに大なる哀哭あらん是はメギドンの谷なるハダデリンモンに在し哀哭のごとくなるべし一二國中の族おのおの別れ居て哀哭べし即ちダビデの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭きナタンの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭かん一三レビの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭きシメイの族別れ居て哀哭きその妻等わかれ居て哀哭かん一四その他の族も凡て然りすなはち族おのおの別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭くべし

第一三章一その日罪と汚穢を清むる一の泉ダビデの家とヱルサレムの居民のために開くべし二萬軍のヱホバ言たまふ其日には我地より偶像の名を絶のぞき重て人に記憶らるること無らしむべし我また預言者および汚穢の靈を地より去しむべし三人もしなほ預言することあらば其生の父母これに言ん汝は生べからず汝はヱホバの名をもて虛僞を語るなりと而してその生の父母これが預言しをるを刺ん四その日には預言者等預言するに方りてその異象を羞ん重て人を欺かんために毛衣を纏はじ五彼言ん我は預言者にあらず地を耕へす者なり即ち我は若き時より人に買れたりと六若これに向ひて然らば汝の兩手の間の傷は何ぞやと言あらば是は我が愛する者の家にて受たる傷なりと答へん七萬軍のヱホバ言たまふ劍よ起て我牧者わが伴侶なる人を攻よ牧者を撃て然らばその羊散らん我また我手を小き者等の上に伸べし八ヱホバ言たまふ全地の人二分は絶れて死に三分の一はその中に遺らん九我その三分の一を携へて火にいれ銀を熬分るごとくに之を熬分け金を試むるごとくに之を試むべし彼らわが名を呼ん我これにこたへん我これは我民なりと言ん彼等またヱホバは我神なりと言ん

第一四章一視よヱホバの日來る汝の貨財奪はれて汝の中にて分たるべし二我萬國の民を集めてヱルサレムを攻撃しめん邑は取

られ家は掠められ婦女は犯され邑の人は半は虜へられてゆかん然どその餘の民は邑より絶れじ**三**その時ヱホバ出きたりて其等の國人を攻撃たまはん在昔その軍陣の日に戰ひたまひしごとくなるべし**四**其日にはヱルサレムの前に當りて東にあるところの橄欖山の上に彼の足立たん而して橄欖山その眞中より西東に裂て甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし**五**汝らは我山の谷に逃いらん其山の谷はアザルにまで及ぶべし汝らはユダの王ウジヤの世に地震を避て逃しごとくに逃ん我神ヱホバ來りたまはん諸の聖者なんぢとともなるべし**六**その日には光明なかるべく輝く者消うすべし**七**茲に只一の日あるべしヱホバこれを知たまふ是は晝にもあらず夜にもあらず夕暮の頃に明くなるべし**八**その日に活る水ヱルサレムより出でその半は東の海にその半は西の海に流れん夏も冬も然あるべし**九**ヱホバ全地の王となりたまはん其日には只ヱホバのみ只その御名のみにならん**一〇**全地はアラバのごとくなりてゲバよりヱルサレムの南のリンモンまでの間のごとくなるべし而してヱルサレムは高くなりてその故の處に立ちベニヤミンの門より第一の門の處に及び隅の門にいたりハナニエルの戍樓より王の酒榨倉までに渉るべし**一一**その中には人住ん重て呪詛あらじヱルサレムは安然に立べし**一二**ヱルサレムを攻撃し諸の民にヱホバ災禍を降してこれを撃なやましたまふこと是のごとくなるべし即ち彼らその足にて立をる中に肉腐れ目その孔の中にて腐れ舌その口の中にて腐れん**一三**その日にはヱホバかれらをして大に狼狽しめたまはん彼らは各々人の手を執へん此手と彼手撃あふべし**一四**ユダもまたヱルサレムに於て戰ふべしその四周の一切の國人の財寶金銀衣服など甚だ多く聚められん**一五**また馬騾駱駝驢馬およびその諸營の一切の家畜の蒙る災禍もこの災禍のごとくなるべし**一六**ヱルサレムに攻きたりし諸の國人の遺れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍のヱホバを拜み結 茅の節を守るにいたるべし**一七**地上の諸族の中その王なる萬軍のヱホバを拜みにヱルサレムに上らざる者の上には凡て雨ふらざるべし**一八**例ばエジプトの族もし上り來らざる時はその上に雨ふらじヱホバその結 茅の節を守りに上らざる一切の國人を撃なやます災禍を之に降したまふべし**一九**エジプトの罪凡て結 茅の節を守りに上り來らざる國人の罪是のごとくなるべし**二〇**その日には馬の鈴にまでヱホバに聖としるさん又ヱホバの家の鍋は壇の前の鉢と等しかるべし**二一**ヱルサレムおよびユダの鍋は都て萬軍のヱホバの聖物となるべし凡そ犠牲を獻ぐる者は來りてこれを取り其中にて祭肉を煮ん其日には萬軍のヱホバの室に最早カナン人あらざるべし

マラキ書

第一章一 これマラキに託てイスラエルに臨めるヱホバの言の重負なり二 ヱホバ曰たまふ我汝らを愛したり 然るに汝ら云ふ汝いかに我儕を愛せしやと ヱホバいふエサウはヤコブの兄に非ずや されど我はヤコブを愛し三 エサウを悪めり 且つわれ彼の山を荒し其嗣業を山犬にあたへたり四 エドムは我儕ほろぼされたれども再び荒たる所を建んといふによりて萬軍のヱホバかく曰たまふ 彼等は建ん されど我これを倒さん 人は彼等を悪境とよび又ヱホバの恒に怒りたまふ人民と稱へん五 汝らこれを目に見て云ん ヱホバはイスラエルの地に大なりと六 子は其父を敬ひ僕はその主を敬ふ されば我もし父たらば我を敬ふこと安にあるや 我もし主たらば我をおそるること安にあるや なんぢら我が名を藐視る祭司よと萬軍のヱホバいひたまふ 然るに汝曹はいふ我儕何に汝の名を藐視りしやと七 汝ら汚れたるパンをわが壇の上に獻げしかして言ふ我儕何に爾を汚せしやと 汝曹ヱホバの臺は卑しきなりと云しがゆゑなり八 汝ら盲目なる者を犠牲に獻ぐるは惡に非ずや 又跛足なるものと病者を獻ぐるは惡に非ずや 今これを汝の方伯に獻げよ されば彼なんぢを悦ぶや 汝を受納るや 萬軍のヱホバこれをいふ九 請ふ汝ら神に我らをあはれみ給はんことをもとめよ これらは凡て汝らの手になれり 彼なんぢらを納んや 萬軍のヱホバこれを言ふ一〇 汝らがわが壇の上にいたづらに火をたくこと無らんために汝らの中一人扉を閉づる者あらまほし われ汝らを悦ばず 又なんぢらの手より獻物を受じと萬軍のヱホバいひ給ふ一一 日の出る處より沒る處までの列國の中に我名は大ならん 又何處にても香と潔き獻物を我名に獻げん そはわが名列國の中に大なるべければなりと萬軍のヱホバいひ給ふ一二 しかるになんぢら之を褻したり そは爾曹はヱホバの臺は汚れたり また其果すなはちその食物は卑しと云ばなり一三 なんぢらは又如何に煩勞しきことにあらずやといひ且これを藐視たり 萬軍のヱホバこれをいふ 又なんぢらは奪ひし物跛足たる者病る者を携へ來れり 汝らかく獻物を携へ來ればわれ之を汝らの手より受べけんや ヱホバこれをいひ給へり一四 群の中に牡あるに誓を立てて疵あるものをヱホバに獻ぐる詐僞者は詛はるべし そは我は大なる王また我名は列國に畏れらるべきなればなり 萬軍のヱホバこれをいふ

第二章一 祭司等よ今この命令なんぢらにあたへらる二 萬軍のヱホバいひたまふ汝等もし聽きしたがはず又これを心にとめず我名に榮光を歸せずばわれ汝らの上に詛を來らせん 又なんぢらの祝福を詛はん われすでに此等を詛へり 汝らこれを心にとめざりしに因てなり三 視よ我なんぢらのために種をいましめん また糞すなはち汝らの犠牲の糞を汝らの面の上に撒さん 汝らこれとともに携へさられん四 わが此命令をなんぢらに下し與ふるは我契約をしてレビに保たしめんためなるを汝ら知るべし

萬軍のヱホバこれをいふ五 わが彼と結びし契約は生命と平安とにあり 我がこれを彼に與へしは彼に我を畏れしめんが爲なり彼われを懼れわが名の前にをののけり六 眞理の法彼の口に在て不義その口唇にあらず 彼平安と公義をとりて我とともにあゆみ又多の人を不義より立歸らせたりき七 夫れ祭司の口唇に知識を持べく又人彼の口より法を諮詢べし そは祭司は萬軍のヱホバの使者なればなり八 しかるに汝らは道を離れ衆多の人を法に躓礙かせレビの契約を壞りたり 萬軍のヱホバこれをいふ九 汝らは我道を守らず法をおこなふに當りて人に偏りし故にわれも汝らを一切の民の前に輕められまた賤められしむ一〇 我儕の父は皆同一なるにあらずや われらを造りし神は同一なるにあらずや 我儕先祖等の契約を破りて各々おのれの兄弟にいつはりを行ふは何ぞ一一 ユダは誓約にそむけり イスラエル及びエルサレムの中には憎むべき事行はる すなはちユダはヱホバの愛したまふ聖所を褻して他神の女をめとれり一二 ヱホバこれをおこなふ人をば主なるものをも事ふる者をもヤコブの幕屋よりのぞきたまはん 萬軍のヱホバに獻物をささぐるものにてもまた然り一三 つぎに又なんぢらはこれをなせり 即ち涙と泣と歎とをもてヱホバの壇をおほはしめたり 故に彼もはや獻物を顧みずまたこれを汝らの手より悅び納たまはざるなり一四 汝らはなほ何故ぞやと言ふ そは是はヱホバ汝となんぢの若き時の妻の間にいりて證をなしたまへばなり 彼はなんぢの伴侶汝が契約をなせし妻なるに汝誓約に背きてこれを棄つ一五 ヱホバは只一を造りたまひしにあらずや されども彼にはなほ靈の餘ありき 何故にひとつのみなりしや 是は神を敬虔の裔を得んが爲なり 故になんぢら心に謹みその若き時の妻を誓約にそむきて棄るなかれ一六 イスラエルの神ヱホバいひたまふ われは離縁を惡みまた虐遇をもて其衣を蔽ふ人を惡む 故に汝ら誓約にそむきて妻を待遇はざるやう心につつしむべし 萬軍のヱホバこれをいふ一七 なんぢらは言をもてヱホバを煩勞はせり されど汝ら言ふ 何にわづらはせしやと 如何となればなんぢら凡て惡をなすものはヱホバの目に善と見えかつ彼に悅ばると言ひ また審判の神は安にあるやといへばなり

第三章

一 視よ我わが使者を遣さん かれ我面の前に道を備へん また汝らが求むるところの主すなはち汝らの悅樂ぶ契約の使者忽然その殿に來らん 視よ彼來らんと萬軍のヱホバ云たまふ二 されど其來る日には誰か堪えんや その顯著る時には誰か立えんや 彼は金をふきわくる者の火の如く布晒の灰汁のごとくならん三 かれは銀をふきわけてこれを潔むる者のごとく坐せん 彼はレビの裔を潔め金銀の如くかれらをきよめん 而して彼等は義をもて獻物をヱホバにささげん四 その時ユダとエルサレムの獻物はむかし日の如く又先の年のごとくヱホバに悅ばれん五 われ汝らにちかづきて審判をなし巫術者にむかひ姦淫を行ふ者にむかひ僞の誓をなせる者にむかひ傭人の價金をかすめ寡婦と

孤子をしへたげ異邦人を推枉げ我を畏れざるものどもにむかひて速に證をなさんと萬軍のヱホバ云たまふ六 それわれヱホバは易らざる者なり 故にヤコブの子等よ汝らは亡されず七 なんぢら其先祖等の日よりこのかたわが律例をはなれてこれを守らざりき 我にかへれ われ亦なんぢらに歸らん 萬軍のヱホバこれを言ふ 然るに汝らはわれら何においてかへるべきやと言り八 ひと神の物をぬすむことをせんや されど汝らはわが物を盗めり 汝らは又何において汝の物をぬすみしやといへり 十分の一および獻物に於てなり九 汝らは呪詛をもて詛はる またなんぢら一切の國人はわが物をぬすめり一〇 わが殿に食物あらしめんために汝ら什一をすべて我倉にたづさへきたれ 而して是をもて我を試みわが天の窓をひらきて容べきところなきまでに恩澤を汝らにそそぐや否やを見るべし 萬軍のヱホバこれを言ふ一一 我また噬食ふ者をなんぢらの爲に抑へてなんぢらの地の産物をやぶらざらしめん 又なんぢらの葡萄の樹をして時のいたらざる前にその實を圃におとさざらしめん 萬軍のヱホバこれをいふ一二 又萬國の人なんぢらを幸福なる者ととなへん そは汝ら樂しき地となるべければなり 萬軍のヱホバこれをいふ一三 ヱホバ云たまふ 汝らは言詞をはげしくして我に逆らへり しかるも汝らは我儕なんぢらにさからひて何をいひしやといへり一四 汝らは言らく神に服事ることは徒然なり われらその命令をまもりかつ萬軍のヱホバの前に悲みて歩みたりとて何の益あらんや一五 今われらは驕傲ものを幸福なりと稱ふ また惡をおこなふものも盛になり 神を試むるものすらも救はると一六 その時ヱホバをおそるる者互に相かたりヱホバ耳をかたむけてこれを聽たまへり またヱホバを畏るる者およびその名を記憶る者のためにヱホバの前に記念の書をかきしるせり一七 萬軍のヱホバいひたまふ 我わが設くる日にかれらをもて我寶となすべし また人の己につかふる子をあはれむがごとく我彼等をあはれまん一八 その時汝らは更にまた義 者と惡きものと神に服事るものと事へざる者との區別をしらん

第四章一 萬軍のヱホバいひたまふ 視よ爐のごとくに燒る日來らん すべて驕傲者と惡をおこなふ者は藁のごとくにならん 其きたらんとする日彼等を燒つくして根も枝ものこらざらしめん二 されど我名をおそるる汝らには義の日いでて昇らん その翼には醫す能をそなへん 汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん三 又なんぢらは惡人を踐つけん 即ちわが設くる日にかれらは汝らの脚の掌の下にありて灰のごとくならん 萬軍のヱホバこれを言ふ四 なんぢらわが僕モーセの律法をおぼえよ すなはち我がホレブにてイスラエル全體のために彼に命ぜし法度と誡命をおぼゆべし五 視よヱホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ預言者エリヤを汝らにつかはさん六 かれ父の心にその子女の心を慈はせ 子女の心にその父をおもはしめん 是は我が來りて詛をもて地を撃ことなからんためなり

エズラ第一書

第一章

一 ここにヨシア、エルサレムに於て主に對して過越の祭を行ひ、正月の十四日に過越の犧牲を獻げたり。二 即ち祭司たちに祭服を纒はしめ、これをその日々の班に從ひて宮の中に立たしめたり。三 彼又イスラエルの宮仕なるレビ人らに、主に對して己を潔め、ダビデの子ソロモン王の建てし家の中に、主の聖き櫃を置くことを命じたり。四『汝らもはやそれを肩に舁く要なければ、汝らの神なる主に仕へ、その民イスラエルを助け、汝らの父祖の家及び宗族に從ひて己を備へよ。五 汝らこれを、イスラエルの王ダビデの錄し所に基づき、又その子ソロモンの威徳に依りてなせ。己が兄弟なるイスラエルの子らの前に立つレビ人なる汝ら、汝らの族の諸の班に從ひ、聖所の中に立ちて、六 順序により過越を獻げ、汝らの兄弟たちのために犧牲を備へ、モーセの與へられし主の誡に從ひて過越の祭を守れ。』七 集れる民にヨシア三萬の小羊と小山羊、及び三千の犢を與へたり。此等は彼が民と祭司及びレビ人に約せし如く、王の所有物の中よう與へしなり。八 宮司ヒルキヤとザカリヤ、及びスエロ、祭司たちに過越のために二千六百の羊と三百の犢を與へたり。九 エコニヤとサマイヤ、その兄弟ナタナエル、サビヤ、オキエロ、及びヨラム、即ち千人の長たりし人々、レビ人らに過越のため五千の羊と七百の犢を與へたり。一〇 一一 此等のもの備はりし時、祭司たちとレビ人ら酵入れぬパンを持ち、宗族に從ひ、父祖の家の區分に從ひ、モーセの書に記されし如く、主に獻げんとて、正しき順序にて民の前に立ちぬ。かく彼らこれを朝の内になせり。一二 彼ら定められし如く火にて過越のものを炙り、銅の器と鍋の中に犧牲を煮てよき香を放たしめ、一三 これをすべての民の前に置けり。而して後彼等己らのために、又彼らの兄弟なる祭司たち、及びアロンの子らのために備へぬ。一四 祭司たちは夜に至るまで脂をささげ、レビ人は己らのため、又その兄弟なる祭司のため、アロンの子らのために備へぬ。一五 アサフの子らなる聖歌隊の者もまた、ダビデの定に依り、アサフ、ザカリヤ、及び王の侍從エデヌと順序に從ひて居りぬ。一六 かつすべての門には門衞ありて、誰もその日々の勤より逃るる能はざりき。そは彼らの兄弟なるレビ人等彼らのために備へたればなり。一七 一八 かく主の犧牲に關る事ども、その日成し遂げられ、ヨシア王の命に從ひて、過越祭は守られ、犧牲は主の祭壇の上に供へられたり。一九 さればその時そこにありしイスラエルの子ら過越と除酵祭を七日の間 催せり。二〇 かかる過越祭はサムエルの時より以來イスラエルに行はれざりき。二一 イスラエルのすべての王たちの中には、ヨシアが祭司、レビ人、ユダヤ人、及びエルサレムに住めるすべてのイスラエル人と共に行ひし如きかかる過越祭を行へる者なし。二二 此の過越祭はヨシアの治世の十八

年に行はれしなり。二三ヨシアの諸の業は敬虔の心より出でたれば主の御前に正しかりき。二四彼の代に起りし事の中、人々がすべての民と國とに勝りて主に罪を犯し、惡を行ひていかに彼を悲ましめ、主の御言イスラエルに向ひて、いかに確く立ちしかにつきては既に記されたり。二五ヨシアの此等のすべての行爲の後に、エジプトの王パロ、ユフラテのほとりなるカルケミシを攻め撃たんとて上り來りければ、ヨシアこれを禦がんとて出で行きぬ。二六されどエジプト王使者を彼に遣はしていふ『ユダヤの王よ、我と汝と何の關係あらんや。二七我は汝を撃たんために主なる神より遣はされず。わが戰はユフラテにてなさるるなり。主は我と共にあり。げに主は我と共にありて我を急ぎ進ましめ給ふ。されば我を離れよ。主に逆ふな。』二八されどヨシアはその車に歸らず、主の口によりて語られたる預言者エレミヤの言を蔑して、彼と戰を交へぬ。二九かくてメギドの平野にて、彼と戰ひしに、君侯たちヨシア王に逆ひて下り來れり。三〇その時王その僕らにいへり『我を戰場より運び出せ、われいたく弱れり』と。直ちに僕等彼を軍陣の外に伴ひ出しぬ。三一かくて彼第二の車に乘り、エルサレムに歸りて死に、先祖の墓に葬られたり。三二ユダヤ全國ヨシアのために喪に服せり。その時預言者エレミヤ、ヨシアのために哀歌を作りしが、主なる人々今も猶女たちと共に彼のために哀悼をなす。これはイスラエルのすべての國に於て絶えずなさるべき命令として定められしなり。

三三此等のことはユダヤの諸王の歴史の書に録さる。ヨシアのなせしすべての行爲、その光榮、主の律法につきての理解、彼のさきになしし諸の事、竝びに今語りし事など、すべてイスラエルとユダの列王の書に録さる。三四ここに於て民ヨシアの子エホアハズを取りて、その父ヨシアの代りに王となせり。その時彼二十三歳なりき。三五彼はエルサレムに於て三月の間イスラエルを治めしが、その時エジプトの王彼をエルサレムの位より下せり。三六また、民に銀百タラント、金一タラントの税を課しぬ。三七エジプトの王また彼の兄弟エホヤキムをユダヤとエルサレムの王となせり。三八エホヤキム貴族たちを縛りしが、その兄弟ザラケを捕へて、これをエジプトより伴れ來りぬ。三九エホヤキムはユダヤとエルサレムを初めて治めし時二十五歳なりき。彼は主の御前に惡を行へり。四〇バビロンの王ネブカデネザル彼の所に攻め上り、銅の鎖もて彼を縛り、バビロンにつれ行けり。四一ネブカデネザル又主の聖器を取りて運び出し、これをバビロンに於ける己が宮の中に据ゑたり。四二されど彼につきて記されたる此らのこと、及びその不潔と不敬虔は王たちの歴代史に録さる。四三その子エホヤキム彼に代りて世を治めしが、王となりし時十八歳なりき。四四彼は三月と十日の間エルサレムにて世を治めしが、主の御前に惡を行へり。四五されば一年の後ネブカデネザル使者を遣はして、主の聖器と共に彼をバビロンに携へ來らしめ、四六セデキヤをユダヤとエルサレムの王と

なせり。その時セデキヤは二十一歳なりしが、十一年の間世を治めたり。四七彼も主の御前に惡を行ひ、預言者エレミヤによりて主の口より語られし御言に心を用ひざりき。四八此の後ネブカデネザル彼を主の名によりて誓はしめしが、彼これを拒みて叛き、その頸と心を頑にして、イスラエルの神なる主の律法を犯しぬ。四九且民の司と祭司たち多くの惡しき事を行ひ、すべての國々の汚辱に過ぎて、エルサレムにある聖別されし主の宮を瀆したり。五〇されば彼らの先祖たちの神、その使者を送りて彼らを呼び返へしぬ。そは主彼らの上に、又主の住處の上に憐憫を垂れ給ひたればなり。五一されど彼等その使者を嘲り、主が彼らに語り給ひし日に、その預言者を侮りぬ。五二されば主その民をその大なる不敬虔の故に怒り、カルデヤの王たちに命じてこれを撃たしめ給へり。五三彼らはその若者を聖き宮の周圍にて劍をもて殺し、若き男をも少女をも老人をも子供をも赦さざりき。そは主これを悉く彼らの手に渡し給ひたればなり。五四彼らは主の聖器を大なるも小なるも悉く取り、主の櫃の諸の器具及び王の貨財と共にこれをバビロンまで運び行けり。五五又彼らは主の家を燒き、エルサレムの石垣を崩し、火をもてその塔を燒きぬ。五六その貴き器具をば彼ら悉く毀ちて空くせり。又劍をもて殺されざりし人々をば彼バビロンに携へ行きぬ。五七ペルシヤ人の世を治むるまで、彼らは、預言者エレミヤの口によりて主の語り給ひし御言を成就せんため、彼とその子らの僕となれり。五八かくて此の地その安息を享くるまで、荒れ居る間休みて、終に七十年滿ちたり。

第二章

一ペルシヤ王クロスの第一年に、エレミヤの口による主の御言の成就せんがため、二主ペルシヤ王クロスの靈を動かし給ひたれば、彼その國中に普く宣命を傳へ、詔書を發していへり三『ペルシヤ王クロスかくいふ。イスラエルの主、至高き主、我を全世界の王となし、四我に命じて彼のためにユダヤの地なるエルサレムに家を建てしむ。五されば若し汝等の中誰にてもその民たるものあらば、主をして、己と共にあらしめ、ユダヤの地なるエルサレムに上り行きて、イスラエルの主の家を建てよ。そは彼はエルサレムに宮居し給ふ主なればなり。八その時ユダとベニヤミンの宗家の長立ちぬ。又祭司とレビ人、竝びに主がその靈を動かし給へる人々はエルサレムに在し給ふ主のために家を建てんとて上り行きぬ。九彼らの周圍に住める人々は、銀と金とをもて、馬と家畜とをもて、又心を動かされて誓願をなせる多くの人々によりて獻げられたる多くの供物をもて、すべての事に彼らを助けたり。一〇クロス王も亦ネブカデネザルがエルサレムより運び出して偶像の宮に据ゑたる主の聖器を携へ來れり、一一さてペルシヤ王クロス此等のものを携へ來りし時、これをその庫司ミテラダテに渡し、一二彼はこれをユダの牧伯サ

ナバサルに渡しぬ。一三その數はこれなり。金杯一千、銀杯一千、銀の香爐二十九、金の壜三十、銀のもの二千四百十、及び他の器具一千。一四此等の金銀の器は悉く携へ來られ、五千四百六十九に達しぬ。一五此等は皆、俘虜となりし人々と共に、サナバサルによりて、バビロンよりエルサレムに携へ歸られたり。一六されどペルシヤ王アルタシヤスタの時に、ベレモ、ミテラダテ、ダベリオ、ラツモ、ベルナトモ、及び書記官サメリオは、サマリヤと他の地に住む彼らの同僚と共に、ユダとエルサレムに住める人々に逆ひて次の如き書を彼の許に書き送れり。一八我が主、王よ、知り給へ。汝の許より上り來りしユダヤ人、エルサレムに到りてかの背き悖れる惡しき町を築き、その市場と衣垣とを繕ひ、宮の礎を据ゑんとす。一九もし此の町建てられ、石垣築かれなば、彼等は貢を拒むのみならず、王たちに對して背かん。二〇宮に關ることにつきては、我等これを等閑にせず。二一されどわが主なる王に奏聞す。もし御心にかなはば父祖たちの諸書を檢べ給へ。二四されば今我等汝に告げ奉る。主なる王よ。若し此の町再び建てられ、石垣新にせられなば、汝は今よりケレスリヤとピニケに通路を失ひ給ふべし。』二五その時王史官ラツモとベルテトモ、書記官サメリオ竝びにその同僚、サマリヤ、スリヤ、及びピニケに住める者に宛て次の如き返書を記したり。二八されば我命じて、彼等の町を建つることを止めしめ、堅く此の命に背く者なきやう心せしめ、二九又その惡事進みて、王たちの煩ひとならざるやうにせり。』三〇此の書讀まれたれば、ラツモと書記官サメリオ、及び彼らの同僚騎兵と武裝せる人々の群と共に、エルサレムに向ひて急ぎ行き、その工事を中止せしめたり。かくてエルサレムに於ける宮の建築はペルシヤ王ダリヨスの治世の第二年まで止みたりき。

第三章

一ここにダリヨス王大なる饗宴を催して、そのすべての臣、その家に生れしすべての者、メデヤ及びペルシヤのすべての君侯たち、二インドよりエテオピアに至るまで二百十七州の、彼の下なるすべての總督、將軍、及び方伯を招けり。三彼等飲食し、滿ち足りて家に歸りし時、ダリヨス王その寢室に到りて寢ねしが、やがて眠より醒めぬ。四その時、王の身を守りし三人の若き侍衞たち互に言ひぬ五『いざ我ら各最も強き一つのものにつきていはん。その言他のものに勝りて賢しと見ゆる者に、ダリヨス王大なる賞與と優勝の印として大なる名譽を與へ、六これに紫の衣を着せ、金の杯にて飲ませ、金の床に臥させ、金の馬銜ある車、麻の頭巾、及び首輪を與へん。七彼その智慧の故にダリヨスの次席に坐し、ダリヨスの從弟と呼ばれん。』八その時彼等各その言を記し、これを封じて、ダリヨス王の枕の下に置く。九彼らいひけるは『王起き給はん時、一人彼に記したるものを渡さん。而して王と三人の君侯たちとに、その言を最も賢しと判斷せられ

しその人、定められたる如く優勝者とならん。』一〇第一のもの記しぬ『酒こそ最も強けれ。』一一第二のもの記しぬ『王こそ最も強けれ。』一二第三の者記しぬ『女こそ最も強けれ。されど最後の勝利を得るは眞理なり。』一三王眼を醒まし時、彼等記したるものを取りて彼に與へければ、彼これを讀みぬ。一四而して彼使者を遣はしてペルシヤ及びメデヤのすべての君侯たちと總督、將軍、方伯、及び大官を召し、一五己は審判者の席に坐しぬ。かくて記したるもの彼らの前に讀まれぬ。一六彼いへり『若ものたちを呼べ、彼ら自ら己が言を説明すべし。』彼ら召されたれば入り來りぬ。一七その人々彼らにいへり『汝らの記しし所に從ひて汝らの意を我らに告げよ。』一八かくいふ『君たちよ、酒はいかに強きかな。それはこれを飲むすべての人を誤らしむ。一九王をも孤兒をも、奴隷をも自主をも、富める者をも貧しき者をも、皆一つ心となす。二〇それはいかなる思をも朗にし、樂しくし、悲哀をも負債をも忘れしむ。二一又それはあらゆる心を富ましめ、王をも總督をも忘れしめ、すべてのことを大言せしむ。二二彼ら杯を持つ時は友また兄弟に對する愛をも忘れ、時には劍をも拔く二三されど酒より醒むる時は、己がなせしことを覺えず。二四君たちよ。かかることをなさしむるを見れば、酒は最も強きものにあらずや。』かく語りて彼口を噤みぬ。

第四章

一その時第二の者、卽ち王の力につきて語りしもの言ひ始む二『君たちよ。海と陸とその中のすべてのものを治むる人はその力勝れずや。三されど王は最も強し。かれは彼らの主にして、彼らを治め、いかなる事にても彼らに命じ、彼らはこれに從ふ、四彼互に戰へといはば、彼等戰はん。又彼等を敵の許に遣はさば、行きて、山をも、石垣をも、塔をも打ち毀たん。五彼らは殺すにも殺さるるにも王の命に背かず。彼等もし勝利を得なば、分捕物のみならず他のすべてのものをも、王の許に携へ來らん。六軍人にあらず、戰爭に關係なく、地を耕すものも亦同じ。その蒔きしものを再び刈り取らば、皆これを王の許に携へ來り、これに貢を納めん。七げに彼は唯の人なり。彼殺せといはば彼ら殺し、赦せといはば赦し、八打てといはば打ち、荒せといはば荒し、築けといはば築き、九切れといはば切り、植ゑよといはば植ゑん。一〇かく民も軍隊も皆彼に從ふ。且彼臥し横はり、飲み食ひて、休息をなす。一一彼ら彼のまはりを見張り、何人も去らずしてその務を盡し、又事每に彼に從ふ。一二君たちよ。かく人々に從はるれば、王こそ最も強き者にあらずや。』かくいひて默しぬ。一三次に、女と眞理につきて語りし第三の者（卽ちゼルバベル）語り初む一四『君たちよ。王は大にして、人は多く、酒亦強からずや。されど此等を治め、その上に立つは、女にあらずして何者ぞ。一五女は王を、又海と陸とを治むる民を産む。一六げ

に彼らは女より出づ、女は酒の出づる葡萄園を培ふ人々を養ひ育つ。一七 彼らは又人のために衣服を作り、人に光榮を加ふ。女なくして人在り得ざるなり。一八 人もし、金銀及びその他の善きものを手にし、淑かにして美しき女を見なば、一九 此等のものを悉く投げ出してその女に見とれ、口を開きたるまま眼をこれに注ぎ、金銀又はいかなる善きものにも勝りてこれをわがものとせんとす。二〇 人は彼を育てし己が父と己が國とを離れてその妻に著く。二一 又その妻と共に生涯を過し、父をも母をも、國をも忘る。二二 これによりて汝ら、女の汝らを治むるを知るべし。汝らは働き勞して女の許にすべてのものを携へ行くにあらずや。二三 人は劍を取り、掠め、盗まんがため遠く出で行き、海と河とに船出す。二四 又獅子を見、暗闇に歩み、盗み、掠め、奪ひしものをその戀人の許に携へ行く。二五 人は父母に勝りて妻を愛す。二六 多くの人は女のために惑はされてその奴隷となる。二七 多くの人は女のために滅び、躓き、又罪を犯せり。二八 汝ら今我を信ぜざるか。王はその力に於て大ならずや。すべての領土彼に觸るるを恐れざるや。二九 されどわれ王と王の妾アパメ、卽ち貴きバルタコの娘が王の右に坐するを見しに、三〇 かの女王の頭より冠を取りてこれを己が頭に戴き、その左手をもて王を打ちぬ。三一 然るに王はその時これに見蕩れ、口を開きたるままにてこれを眺め、かの女笑へば彼も笑ひ、かの女眉を顰むれば、慰めんとてこれに諛ひぬ。三二 君たちよ。彼等がかくするを見て、いかで女を強からずといふを得んや。』三三 その時王と貴族たち互に見廻はしたれば、かれ眞理につきて語り始む三四『君たちよ。女は強からずや。地は大にして天は高く、日は速かにその道を走る。卽ち天の周圍を廻りて、一日にして再び己が所に歸る。三五 此等のものを造り給ふ者は大ならずや。げに眞理は大にしてすべてのものよりも強し。三六 全地は眞理に向ひて呼はり、天はこれを祝福す。すべての業は震ひ戰けど、眞理には義しからぬもの一つだになし。三七 酒も義しからず、王も義しからず、女も義しからず、すべての人の子らも義しからず、又彼らの業も義しからず。彼らの中には眞理なく、その不義によりて自ら滅ぶ。三八 されど眞理は存りて、常に強く、生き又勝ちて永遠に至らん。三九 眞理は人を偏り見ず、又差別をなさず、すべての不義と惡とを離れて義を行ふ。すべての人そのわざを喜ぶなり。四〇 又眞理の審判の中に不義なし。眞理こそ萬世に亙りて力たり國たり權たり威たるなれ。ああ祝すべきかな眞理の神。』四一 かくいひて彼、口を閉づ。その時すべての民叫びていへり『眞理は大にしてすべてのものよりも強し。』四二 ここに於て王彼にいふ『何にても汝の記しし所に勝りたる汝の欲するものを求めよ。我らこれを與へん。汝は最も賢しと見られたれば、わが次席に坐してわが從弟と呼ばるべし。』四三 その時かれ王にいへり『汝の誓約を憶え給へ。汝の國に來り給ひし時、汝は誓ひて、エルサレムを建つることと、四四 エルサレムより携

へ去られしすべての器具、卽ちクロスがバビロンを滅ぼして、再びこれを彼處に送らんと誓ひし時、別ち置きし所のものを送り返すことを約し給へり。四五 汝は又、ユダヤがカルデヤ人によりて荒らされし時、エドム人の燒き拂ひし宮を建つることを誓ひ給へり。四六 されば今、主なる王よ。わが汝に求むる所、わが汝に願ふ所は、汝より出づる寛大に外ならず。されば請ふ、汝の誓を遂げ、汝の口をもて天の王に誓ひ給ひし所を果し給へ。』四七 その時ダリヨス王起ちて彼に接吻し、彼のために、すべての庫官、方伯、將軍、總督に宛て書を記して、彼らが、彼及びエルサレムを築かんとて彼と共に行くすべての人々を、安全にその道に行かしめんことを命じたり。四八 彼又ケレスリヤ及びピニケに居るすべての方伯、及びレバノンに居る者に宛て、レバノンより杉の木をエルサレムに携へ行きて、彼と共に町を築けと書き送れり。四九 しかのみならず彼、その領土を去りてユダヤに赴くすべてのユダヤ人のために、その自由につきて書き送れり。卽ち役人も總督も方伯も庫官も、強ひて彼らの戸の内に入ることなく、五〇 彼らの所有となりしすべての國は貢を免され、その時エドム人の保ち居りしユダヤ人の村々は彼らに返へされ、五一 又宮の竣工まで彼らは年毎にその建築のために二十タラントを與へられ、五二 又十七箇の燔祭を獻ぐべき誡あれば、日々壇の上に獻げらるべき其等の燔祭のために、年毎に他の十タラントを與へられ、五三 又町を建てんとてバビロンより來るすべてのものは、彼らのみならず、彼らの子孫も、共に來りし祭司たちも、皆その自由を與へられんがためなり。五四 かれ又彼らの負擔金と、祭司たちがそれによりて仕へまつる祭服を彼らに與へんことを書き送り、五五 レビ人には、宮の工事終りてエルサレムの築かるる日まで、その負擔金を與へんことを書き送れり。五六 又かれ町を守りし者に、土地と報酬とを與へんことを書き送れり。五七 かれ又クロスが別ち置きしすべての器具をバビロンより送り返へしぬ。又クロスが命ぜしことをばすべて實行せしめ、これをエルサレムに送るべきことを命じたり。五八 若者そこを出でし時、エルサレムに向ひて、顏を天に擧げ、天の王を讚美していへり。五九『勝利は汝より來る。智慧は汝より來る。又榮光は汝のもの、我は汝の僕なり。六〇 祝すべきかな、我に智慧を與へ給へる汝。われ汝に感謝す。我等の先祖たちの主よ。』六一 かくて彼其等の書をとりて出で、バビロンに來りて、すべてこれをその兄弟たちに語りしに、六二 彼らもその先祖たちの神を讚めたたへたり。そは主、彼らに自由と解放とを與へて出で行かしめ、六三 エルサレムと、主の御名によりて呼ばるる宮とを建てしめ給へばなり。かくて彼ら音樂と歡喜とをもて七日の間これを祝せり。

第五章

一 此の後宗家の長等その族に從ひて選ばれ、その妻、息子、娘等

と共に、僕、婢、家畜などを携へて出で行けり。**二**ダリヨスは千人の騎兵を遣はして、彼等が安全にエルサレムに歸り着くまで共に居らしめ、又樂器、鼓、笛などを携へしめたり。**三**その兄弟たち皆樂を奏せしが、彼はこれを彼らと共に行かしめたり。**四**これはその宗族の中の宗家に從ひ、諸の區別に從ひて出で行きたる人々の名なり。**五**祭司ピネハスの子らとアロンの子ら、サライヤの子なるヨセデクの子イエス、ユダ族のパレの血統なるダビデ家のサラテエルの子なるゼルバベルの子ヨアキム。**六**彼はペルシヤ王ダリヨスの治世の第二年、ニサンの月卽ち正月に、王の前にて智慧の言を語りたり。**七**又これは、バビロンの王ネブカデネザルによりバビロンに伴ひ來られ、他國人としてそこに住みし、俘囚の中より上りしユダヤの人々なり。**八**彼らはエルサレムに、又ユダヤの中の他の地に、各自己が町にに歸れり。卽ち彼らはその指導者ゼルバベル、イエス、ネヘミヤ、ザライヤ、レサイヤ、ヨネネオ、アルドケオ、ベエルサロ、アスパラソ、レエリヤ、ロイモ、及びバアナと共に上りしなり。**九**民とその指導者の數はこれなり。ポロの子孫は二千百七十二人、サパテの子孫は四百七十二人、**一〇**アレの子孫は七百五十六人、**一一**パアテ・モアブの子孫、イエスとヨアブの子孫は二千八百十二人、**一二**エラムの子孫は一千二百五十四人、ザトイの子孫は九百四十五人、コルベの子孫は七百五人、バニの子孫は六百四十八人、**一三**ベバイの子孫は六百二十三人、アスタデの子孫は一千三百二十二人、**一四**アドニカムの子孫は六百六十七人、バゴイの子孫は二千六十六人、アデヌの子孫は四百五十四人、**一五**エゼキヤの子アテルの子孫は九十二人、キランとアゼタの子孫は六十七人、アザルの子孫は四百三十二人、**一六**アンニの子孫は百一人、アロムの子孫、バサイの子孫は三百二十三人、アルシプリテの子孫は百十二人、**一七**バイテロの子孫は三千五人、ベテロモンの子孫は百二十三人、**一八**ネトパのものは五十五人、アナトテ、のものは百五十八人、ベタスモテのものは四十二人、**一九**カリアテアリオのものは二十五人、カピラとベロテのものは七百四十三人、**二〇**カデアサとアンミデオのものは四百二十二人、キラマとガベのものは六百二十一人、**二一**マカロンのものは百二十二人、ベトリオンのものは五十二人、ニピの子孫は百五十六人。**二二**カラモラロとオノの子孫は七百二十五人、エレクの子孫は三百四十五人、**二三**サナアの子孫は三千三百三十人。**二四**祭司はサナシブの子孫の中のイエスの子なるエドの子孫九百七十二人、エンメルテの子孫一千五十二人、**二五**パスロの子孫一千二百四十七人、カルメの子孫一千十七人。**二六**レビ人はイエスとカドミエルとバンナとスデヤの子孫七十四人。**二七**聖歌隊の者はアサフの子孫百二十八人。**二八**門衛はサルムの子孫、アタルの子孫、トルマンの子孫、ダクビの子孫、アテタの子孫、サビの子孫、すべて百三十九人。**二九**宮仕はエサウの子孫、アシパの子孫、タバオテの子孫、ケラの子孫、サウの子孫、パレアの子孫、ラバナの子孫、

アガバの子孫、三〇アクドの子孫、ウタの子孫、ケタブの子孫、アカバの子孫、スバイの子孫、アナンの子孫、カトアの子孫、ゲドルの子孫、三一ヤイロの子孫、ダイサンの子孫、ノエバの子孫、カセバの子孫、ガゼラの子孫、オジアの子孫、ピノエの子孫、アサラの子孫、バスタイの子孫、アサナの子孫、マアニの子孫、ナピシの子孫、アクブの子孫、アキパの子孫、アスルの子孫、パラキムの子孫、バサレムの子孫、三二メエダの子孫、クタの子孫、カレアの子孫、バルクの子孫、セラルの子孫、トメイの子孫、ナシの子孫、アテパの子孫。三三ソロモンの僕の子孫は、アサピオテの子孫、パリダの子孫、エーリの子孫、ロゾンの子孫、イスダエルの子孫、サプテの子孫、三四アギヤの子孫、パカレテの子孫、サビエの子孫、サロテエの子孫、マシヤの子孫、ガスの子孫、アドの子孫、スバの子孫、アペラの子孫、バロデの子孫、サパテの子孫、アルロンの子孫。三五宮仕とソロモンの僕等はすべて三百七十二人。三六彼らは皆テルメレツとテレルサよりカラアタランとアルラルに導かれて上り來れり。三七彼らはその家族又は血統につきて、そのいかにイスラエルより出でしかを示す能はざりき。バンの子なるダランの子孫とネコダンの子孫は六百五十二人なり。三八その祭司たる職位を横領せし祭司等にて見出されざりしは、オブデアの子孫、アコスの子孫、ゾルゼレオの娘たちの一人なるアウギヤを娶り、彼の名をもて呼ばれたるヤドの子孫なりき。三九此等の人々の親戚の項目の、記録簿の中を探りて見出されざりしものは、祭司の現職より退けられたり。四〇そはネヘミヤとアタリヤ彼等に向ひて、ウリムとトンミムを着けたる大祭司起るまでは聖務にたづさはるなといひたればなり。四一かくイスラエルのすべての人々は、僕婢を除きて、十二歳以上のもの四萬二千三百六十人に達したり。四二僕婢は七千三百三十七人、樂人と歌手は二百四十五人。四三駱駝四百三十五、馬七千三十七、騾馬二百四十五、駄馬五千五百二十五。四四彼らの宗家の長たる人々の或者、エルサレムにある神の宮に來りし時、彼らの力に應じて其の元の所に再び家を建てんことを誓ひ、四五又その業のために、宮の庫に金一千斤、銀五千斤、及び祭服百襲を納むることを約したり。四六かくて祭司たちとレビ人、民の中なる或もの及び聖歌隊のものと門衛等はエルサレムとその地方に住み、すべてのイスラエル人はその村々に住めり。四七されど七月近づきてイスラエルの子ら皆己が所にありし時、人々一つとなりて東に面したる第一の門の前の廣場に集りぬ。四八その時ヨセデクの子イエスとその兄弟なる祭司たち、サラテエルの子ゼルバベルとその兄弟たち、イスラエルの神の祭壇を備へ、四九神の人モーセの書に明かに命ぜられたる處に従ひて、その上に燔祭を供へたり。五〇又その地の他の國民の或る人々彼等の許に集りて、己が所に祭壇を築きぬ。そはその地のすべての國民は彼らに敵對し、彼らを壓へたればなり。彼らは時に従ひて犠牲を供へ、朝夕共に燔祭を主に獻げたり。五一彼等

又律法に命ぜられし如く假廬の祭を行ひ、定められたる如く日々犧牲を獻げたり。五二又この後常の供物と安息日、新月、及びすべての聖祭の犧牲を供へぬ。五三神の宮未だ竣工せざりしが神に對していかなる誓約にてもなしたる者は、七月の朔日より、犧牲をささげ始む。五四彼ら又石工及び木匠に金錢を與へ、五五シドンとツロより來りし人々に飮ものと食もの、及び車を與へたり。これペルシヤ王クロスによりて彼らのために記されたる命令に從ひ、レバノンより杉の木を携へ來り、これを筏にてヨツパの港まで運ばしめんがためなり。五六エルサレムの神の宮に來りて後第二年の二月に、サラテエルの子ゼルバベルとヨセデクの子イエスと彼等の兄弟たち、祭司とレビ人、又俘囚よりエルサレムに歸り來りしすべての人々工事を始め、五七彼らがユダヤとエルサレムに來りし第二年の二月の朔日に、神の宮の礎を据ゑたり。五八彼等又二十歳以上のレビ人を主の業に任じたり。その時、イエス起ちあがり、その子らと兄弟たち、その兄弟カドミエル、エマダブンの子ら、イリアドンの子なるヨダの子ら、及び彼等の子らと兄弟たち、すべてのレビ人ら皆一つ心にて工事に取りかかり、神の家の業を進むるために勞したり。かくて家造等主の宮を建てたり。五九祭司たちは祭服を纒ひ、樂器とラツパをもて、又アサフの子らなるレビ人らは鐃鈸をもて、六〇イスラエルの王ダビデの命ぜし如く、感謝の歌をうたひ、主を讃美したり。六一彼等高らかに歌ひ、感謝の歌をもて主を稱へたり。そは主の善美と榮光は全イスラエルの上に永へにあればなり。六二すべての民はラツパを鳴らし、高らかに聲を擧げて、主の家のわざのために主に向ひ、感謝の歌を歌へり。六三祭司、レビ人、宗家の長等の中に以前の家を見たりし老人ありけるが、此の建物に來りて悲み又いたく泣けり。六四されど多くの人々はラツパを用ひ、喜びて大聲に叫びぬ。六五人々民の泣く聲とラツパとを聽きわくること能はざる程なりき。そは群衆甚だしくラツパを鳴らして、その聲遠くより聽かれたればなり。六六ユダとベニヤミンの族の敵たるものどもこれを聞きし時、ラツパの響のゆゑを知りぬ。六七卽ち彼ら、それは俘囚より歸り來りし人々イスラエルの神なる主に宮を建つるなるを悟れり。六八されば彼らゼルバベルとイエス、及び宗家の長等の所に行きてこれにいふ『我らも汝らと共に建てん。六九われらも汝らと同じく、汝らの主に從ひ、我らをここに來らしめしアツスリヤの王アスバサレテの時よりこれに犧牲をささぐ。』七〇ゼルバベルとイエス、及びイスラエルの宗家の長等これに答ふ『汝らは我らの神なる主に家を建つべきにあらず。七一我らはペルシヤ王クロスの我らに命ぜし如く、我らのみにてイスラエルの主に家を建てん』と。七二されどその地の異教徒等ユダヤの人々を壓へ、これを圍みて、その工事を妨げぬ。七三又その祕なる謀略と說服と騷擾とをもて、クロス王の生ける間は常にこれを妨げたり。されば彼らはダリヨスの治世に至るまで二年の間その工事を妨

げられたり。

第六章

一さてダリヨスの治世の第二年に、預言者アガイオと、アドの子なる預言者ザカリヤ、ユダヤとエルサレムのユダヤ人等に預言せり。卽ち彼らイスラエルの神なる主の御名によりて彼らに預言せり。二其時サラテエルの子ゼルバベルとヨセデクの子イエス立ちて、エルサレムに主の家を建てしが、主の預言者たち彼らと共にありて彼らを助けぬ。三その同じ時スリヤとピニケの總督シシンネは、サテラブザネ及びその同僚と共に來りて彼等にいへり。四『誰の許可によりて汝らは此の家と此の家根を建て、又他の諸の事をなすか。これ等のことをなす工師は誰なるか。』五されどユダヤ人の長老たち恩惠を受けぬ。そは主、俘囚人を顧み給ひたればなり。六彼らはその工事を妨げられず、彼らにつきてダリヨスに書を奉りて、その返書を得る時にまで至れり。七スリヤとピニケの總督シシンネ、及びサテラブザネがその同僚なるスリヤ及びピニケの方伯等と共にダリヨスに書き送れる書の謄寫。『ダリヨス王に平安あれ。一〇而してその工事大なる速力をもて爲され、彼らの手によりて頻に進められ、あらゆる尊崇と關心とをもて成し遂げらる。一一されば我ら此等の長老たちに問ひていへり『誰の命令によりて汝ら此の家を建て、此の工事の礎を据うるや』と。一二我等書を以て汝に奏聞し、事に當る主なる者の何人なるかを汝に知らしめんがため、彼らに質問し、主なる人々の名を書き列ぬることを命じたり。一三彼等我らに答ふ『我らは天地を造り給へる主の僕なり。一四此の家は多くの年の前、強く大なるイスラエルの王によりて建てられ、且完うせられたり。一五されど我らの父祖たち天に在すイスラエルの主に逆ひて罪を犯し、その御怒を引き起せる時、主これをバビロンの王、カルデヤ人の王ネブカデネザルの手に渡し給へり。一六彼等此の家を倒してこれを燒き、人々を俘虜にしてバビロンに携へ行けり。一七されどクロス、バビロン國を治めし第一年に、クロス王書をもて此の家を建つることを許したり。一八又ネブカデネザルがエルサレムの家より運び出して己が宮に据ゑ付けし金銀の聖器をば、クロス王バビロンの宮より再び取り出してこれをゼルバベルと牧伯サナバサロに渡し、一九此等のすべての器具を携へ行き、これをエルサレムの宮に据ゑ、そこに主の宮を建てよと命じ給へり。二〇さればサナバサロ此處に來りて、エルサレムに在る主の家の礎を据ゑたり。その時より今に至るまでこれを建てつつありしが猶未だ竣らざるなり』と。二一されば王よ。若し御心にかなはば、バビロンに在る我らの主なる王の王室記錄を調べしめ給へ。二二而してもしエルサレムに在る主の家の建築クロス王の許可をもて爲されしこと見出されなば、我らの主なる王の御心もて、これを我らに證し給へ。』二三その時ダリヨス王命じてバビロンに保存されたる記錄を探ら

しめしに、メデヤ州のエクバタナ宮殿に於て、此等のことの記されたる巻物見出されぬ。二四『クロス王の第一年に、クロス人々が絶えざる火をもて犧牲を獻げんために、エルサレムなる主の家を建つることを命じたり。二五その家は高さを六十キユビト、廣さを六十キユビトにし、巨石三列とその國の新木一列とをもて造るべし。その工費はクロス王の家より給せらるべし。二六又ネブカデネザルがエルサレムの家より取りてバビロンに運び行きし主の家の聖器は金銀ともエルサレムの家に、その以前ありし所に置かるべし』と。二七されば彼スリヤ及びピニケの總督シンシネとサテラブザネ、及びその同僚、又スリヤ及びピニケの主君たちに命じて、その所を亂さず、主の僕ゼルバベルとユダヤの牧伯とユダヤ人の長老たちに、その所に主の家を建てしめたり。二八『我またその再建を完うせんことを命ず。主の家の工事竣るまで、彼ら努めてこれを見守り、ユダヤの俘囚人らを助くべし。二九又ケレスリヤ及びピニケの租税の一部は主の犧牲のために、卽ち牡牛と牡羊及び小羊のために、心して此等の人々に、ことに牧伯ゼルバベルに與へらるべし。三〇又穀物、鹽、酒、油を年毎に絶たず、エルサレムに居る祭司たちが日々の用のためにこれを求むる時、何事をも問はずして與へよ。三一又彼らをして灌祭をいと高き神に獻げしめ、王とその子等のために、卽ち彼らの生命のために祈ることを得しめよ。三二此の命令の中に記されたるいかなることにてもこれを犯し、若くは等閑にする者は、誰にもせよ、己が家より木を取り出されて、その上に擧げられ、又そのすべての所有物は王のために沒收せらるべし。三三されば人々のその御名に呼ばはる主は、エルサレムに於ける主の家を手を延べて妨げ又は毀つ者を悉く滅し給はん。三四我ダリヨス王、これに從ひて速かに行はんことを命ず。』

第七章

一その時ケレスリヤ及びピニケの總督シシンネとサテラブザネ、その同僚と共にダリヨス王の命に從ひ、二心して宮の工事を見張り、ユダヤ人の長老等と宮司とを助けたり。三かくて預言者アガイオ及びザカリヤの預言し居る間に、宮の工事進みぬ。四彼らこれ等のことを、ペルシヤの諸王クロス、ダリヨス、及びアルタシヤスタの許可をもて、イスラエルの神なる主の誡命に從ひて終りぬ。五かくてその家ダリヨス王の第六年、アダルの月の二十三日に落成せり。六イスラエルの子ら、祭司、レビ人、及び俘囚より歸り來りて加へられし人々モーセの書に記されたる所に從ひて行ひぬ。七主の宮の聖別禮に彼等は牡牛百、牡羊二百、小羊四百を獻げ、八又十二の牡山羊をばイスラエルの罪のために、イスラエルの諸の族の十二の君侯の數に從ひて獻げぬ。九祭司とレビ人は又、祭服を纏ひ、その區分に從ひて立ち、モーセの書に從ひて、イスラエルの神なる主に仕へぬ。又門衛等は各

その門を守りぬ。一〇二又俘囚より歸り來れるイスラエルの子等は、正月の十四日に、祭司とレビ人及び俘囚より歸り來れる人々の、共に聖別せられし時に過越祭を行ひぬ。そは彼ら聖別せられたればなり。レビ人も皆共に聖別せられたり。二彼らは俘囚より歸り來れるすべての人々とその兄弟なる祭司たち、及び己等のために過越を獻げたり。一三而して俘囚より歸り來れるイスラエルの子らこれを食せり。即ちそれは己をその地の異教徒の憎むべきものより聖め別ちて、主を求めしすべての人々なり。一四又彼らは七日の間除酵祭を守り、主の御前に樂めり。一五そは主アッスリヤの王の謀略を彼らに向けしめ、イスラエルの神なる主の業に彼らの手を強め給ひたればなり。

第八章

一此等のことの後、ペルシヤ王アルタシヤスタ世を治めし時、エズラ來りぬ。此のエズラはアザライヤの子、アザライヤはゼクリヤの子、ゼクリヤはヒルキヤの子、ヒルキヤはサレムの子、二サレムはサドクの子、サドクはアヒトブの子、アヒトブはアマリヤの子、アマリヤはオジヤの子、オジヤはメメロテの子、メメロテはザライヤの子、ザライヤはサビヤの子、サビヤはボカの子、ボカはアビサイの子、アビサイはピネハスの子、ピネハスはエレアザルの子、エレアザルは大祭司アロンの子なり。三此のエズラは、イスラエルの神によりて與へられたるモーセの律法に精通したる學士にして、バビロンより上り來れるなり。四王は彼に名譽を與へたり。そは彼の求むる所すべてその心に合ひたればなり。五イスラエルの子らと祭司とレビ人、聖歌隊のもの、門衞、宮仕の中の或もの彼と共にエルサレムに赴きぬ。六これは王の第七年の五月なりき。彼らは正月の朔日にバビロンより出で、主が彼のために與へ給ひし安全なる旅路を辿りてエルサレムに來れり。七エズラはいと大なる熟練を持ちたれば、主の律法と誡命とを少しも犯さず、全イスラエルに詔命と審判とを教へたり。八さてアルタシヤスタ王より、主の律法の朗讀士なる祭司エズラに書き送られたる委任狀の寫はこれなり。九『アルタシヤスタ王より主の律法の朗讀士なる祭司エズラに書を送る。一〇われ寛大の取扱をなすことに決したれば、命じて、ユダヤ人、祭司とレビ人、及びわが領土内にある彼等の國人の中、望む者を汝と共にエルサレムに行かしむ。一一われとわが友なる七人の議官に善しと見えたれば、これを望む者は皆汝と共に行くべし。一二彼らは主の律法に記されし所に照らしてユダヤ及びエルサレムの狀態を視察し、一三又われとわが友等の約せしイスラエルの主への獻物をエルサレムに運ぶべし。又バビロン全州に見出さるる、エルサレムに於ける主のための、すべての金銀、一四及びエルサレムにある彼等の神なる主の宮のために人々の與へたるもの、即ち牡牛と牡羊と小羊のための金銀と、これに關係あるものを悉く集め、一五彼らをしてエルサレムにあ

る彼らの神なる主の祭壇の上に、主に向ひて犧牲を獻げしむべし。一六 又汝と汝の兄弟が金銀をもて爲さんと思ふことは、何にてもこれを汝の神の御心に從ひてなせ。一七 又エルサレムにある汝の神の宮の用のために汝に與へられたる主の聖器、一八 又汝の神の宮の用のために、汝の思ひ出すものは何にても王の庫より取りて與ふべし。一九 又われアルタシヤスタ王はスリヤ及びピニケに於ける庫官らに、至高き神の律法の朗讀士なる祭司エズラが求むるものは速かにこれを與ふべきことを命じたり。二〇 その額は銀百タラント、小麥百石、酒百斗、又鹽量なかるべし。二一 神の律法に從ひて至高き神に速かにすべての事をなすべし。これ王とその子らの國の上に御怒の臨まざらんためなり。二二 われ又汝に命ず。稅又は他の負擔を祭司とレビ人、聖歌隊のもの、門衛、宮仕、又此の宮のために傭はれたる人々に課すべからず。何人も彼らに課稅する權利なし。二三 又汝エズラは、神の智慧に從ひて有司及び審判者を立て、スリヤ及びピニケに於ける汝の神の律法を知るすべての者を審かしむべし。又これを知らぬ者をば汝教ふべし。二四 汝の神及び王の律法を犯す者は、死刑若くは他の刑罰、罰金若くは投獄によりて罰せられん。』二五 その時學士エズラいへり『祝すべきかな、わが父祖の神なる唯一の主。主はエルサレムにあるその家に榮光を歸せんがため、此等のことを王の心に入れ、二六 王とその議官、及びそのすべての友と貴族の眼の前にて我に名譽を與へ給へり。二七 されば われ、わが神なる主の御助によりて勵まされ、イスラエルの中より我と共に行く人々を集めたり。二八 これはアルタシヤスタの治世に、その宗家に從ひ、區分に從ひて、我と共にバビロンより上り來りし者の長なり。二九 ピネハスの子孫の中にてはゲルソン、イタマルの子孫の中にてはガマエル、ダビデの子孫の中にてはセケニヤの子アド、三〇 ポロの子孫の中にてはザカリヤ。彼と共なる男百五十人と數へらる。三一 パアテ・モアブの子孫の中にてはザライヤの子エリヤオニヤ、彼と共なる男二百人、三二 ザトエの子孫の中にてはエゼロの子セケニヤ、彼と共なる男三百人、アデンの子孫の中にてはヨナタンの子、彼と共なる男二百五十人、三三 エラムの子孫の中にてはゴトリヤの子エシヤ、彼と共なる男七十人、三四 サパテヤの子孫の中にてはミカエルの子ザライヤ、彼と共なる男七十人、三五 ヨアブの子孫の中にてはエゼロの子アバデヤ、彼と共なる男二百十二人、三六 バニヤの子孫の中にてはヨサピヤの子サリモテ、彼と共なる男百六十人。三七 バビの子孫の中にてはベバイの子ザカリヤ、彼と共なる男二十八人。三八 アスタテの子孫の中にてはアカタンの子ヨアンネ、彼と共なる男百十人。三九 最後のアドニカムの子孫の中にては、(これはその名なり)エリパラト、ゲウエル、サマイヤ、彼らと共なる男七十人、四〇 バゴの子孫の中にてはイスタルクロの子ウテ、彼と共なる男七十人。四一 われ彼らをテラと呼ばるる河のほとりに集め、三日の間天幕を張りて、これを閲せり。四

二然るに祭司とレビ人の中誰も見えざりしかば、四五而してわれ彼らに乞ひて、庫の所に居りし隊長ロデオの許に行かしめ、四六これに命じてロデオとその兄弟、及びその所の庫官に語りて、我らの主の家に於て祭司の務を行ひ得る人々を我らに遣はさしめたり。四七我等の主の力ある御手をもて彼らの伴ひ來れるは、イスラエルの子なるレビの子、モオリの子孫の中より悟ある人々、アセベビヤとその子ら、及び兄弟十八人、四八アセビヤ及びカンヌネオの子らなるアンヌオとその兄弟オサイヤ、彼等の子ら二十人、ダビデ及び長たる人々がレビ人の務のために定めたる宮仕の中よりの二百二十人の宮仕にして、その名は表にて示さる。五〇われ若き人々のために我等の主の御前に斷食を誓ひ、我らと我らの子ら、及び我らと共にある家畜のために安全なる旅路を主に乞へり。五一そはわれ王に我らの敵に對して我らを守らしめんがため、歩兵と騎兵とを乞ふを恥ぢたればなり。五二我ら王に、我等の主の御力は主を求むる人々と共にあり、すべての道に於て彼らを支へ給はんといへり。五三我ら又此等のことにつきて我等の主に求め、主の我らを顧み給ふことを知れり。五四かくてわれ祭司の長たちの中十二人、エセレビヤとアサメミ、及び彼らと共なる彼らの兄弟十人を別ち、五五王とその議官、貴族及び全イスラエルの與へたる我等の主の家の金及び聖器を量れり。五八而してわれ彼等にいへり『汝等の主にありて聖なるが如く此等の器も聖なり。又金銀は我らの父祖の主なる主に對する獻物なり。五九されば汝ら、これをエルサレムにある我等の主の家の室に居る祭司とレビ人の長たちに、又イスラエルの宗家の長たる人々に渡すまで、心して守れ』六〇かくて金銀及びエルサレムにありし諸の器具を受け、これを主の宮に携へ行けり。六一我ら正月の十二日にテラ河を去りてエルサレムに來るまで主の力ある御手我らと共にありき。主は我らを途中の攻撃より、すべての敵より救ひ給ひたれば我らエルサレムに來れり。六二我ら三日其處に留りて金銀を量り、四日目にこれをウリヤの子なる祭司マルモテに渡したり。六三彼と共にありしはピネハスの子エレアザルにて、彼らと共にありしはイエスの子ヨサバデとサバンノの子モエテ、及びレビ人らなりき。すべてのもの數へられ、量られて彼等に渡されぬ。六四同時に此等のもののすべての重さ記されたり。六五且俘囚より歸り來れる人々イスラエルの神なる主に犧牲を獻げたり。卽ち全イスラエルのために牡牛十二、牡羊九十六、小羊七十二、六六宥の供物として山羊十二、此等はすべて主に對する犧牲なり。六七彼等又王の敕命を王の代官に、又ケレスリヤとピニケの總督に渡しぬ。かくて彼等は民と主の宮とを崇めたり。六八さて此等のことなされし時、長たる人々わが許に來りていへり。六九『イスラエルの國人、君侯たち、祭司とレビ人、彼らの中より此の地の異なる民を去らしめず、又異邦人、卽ちカナン人、ヘテ人、ペリジ人、エブス人、モアブ人、エジプト人、及びエドム人の不潔を取り除か

ざるなり。七〇彼らと彼らの子らは、その娘たちを娶り、聖き種は此の地の異なる民と混れり。此の事の初めより有司たちと貴族たちは此の惡に與かれり。』七一此等のことを聽くや否や我わが衣、わが聖き上衣を裂き、わが髮の毛と鬚をむしりとり、悲み憂へて坐しぬ。七二かくてイスラエルの神なる主の御言に動かされたる者は皆、この不義のためにわが嘆き悲む間に、わが許に集ひぬ。されどわれ猶憂に滿たされて夕の犧牲の時まで坐せり。七三その時われ斷食より起ちあがり、裂けたるわが衣と聖き上衣のまま地に平伏し、手を主にさし延べていへり。七四『ああ主よ、われは汝の御顏の前に恥ぢ惑ふ。七五我らの罪は我らの頭の上に增し加はり、我らの過誤は天にまで達す。七六我らは我らの先祖たちの時より今日に至るまで大なる罪の中にあり。七七我らと我らの先祖たちの罪のために、我らは兄弟たち、王たち、祭司たちと共に、地の王たちと劍と俘囚とに渡され、恥づべき餌食となりて今日に至れり。七八されど今、幾許かの慈悲主より我らに示されたり。これ汝の聖所の地に一つの根と一つの名我らに殘されんがため、七九又我らに、我等の神なる主の家の中に光を見出さしめ、我らの仕へまつる時我らに食を與へ給はんがためなり。八〇われら縛の中にありし時我等の主は我らを見棄て給はず、反つてペルシヤの諸王の前に惠を受けしめ給ひたれば、彼等我らに食を與へ、八一我等の主の宮を崇め、荒れたるシオンを興し、ユダヤとエルサレムに我らのために確なる住處を與へたり。八二ああ主よ。我ら今、此等のものをもちたればまた何をかいはん。我らは汝がかくいひて汝の僕なる預言者たちの手によりて與へ給ひし誡命を犯したり。曰く、八三汝らの嗣業として受けし地はその地の異邦人の汚辱をもて汚されたる地にして、彼らはこれに不潔を滿したり。八四されば今汝ら汝らの娘たちを彼等の息子たちと交らしむな。八五又汝ら彼らと永へに和睦を求むな。これ汝ら強くなりて、土地の善きものを食ひ、汝らこれを嗣業として永へに汝らの子等に殘さんがためなりと。八六されば我らに起りしことは皆、我らの惡しき業と我らの大なる罪のためにわれらに加へられたるなり。ああ主よ、汝は我らの罪を輕くし、八七我らにかかる根を與へ給へり。されど我らは背きて汝の律法を犯し、此の地の異教徒の不潔を己が身に混へたり。八八汝は怒りて我らを滅ぼし給はず、我らが根をも種をも名をも殘さざる程とはなし給はざりき。八九ああイスラエルの主よ、汝は眞なり。我らは此の日一つの根を殘されたり。九〇視よ、我ら今、我らの不義をもて汝の御前にあり。我らはもはやこれによりて汝の御前に立つこと能はざるなり。』九一エズラはかく祈の中に懺悔し、宮の前にて地に泣き伏しぬ。その時エルサレムより男、女、子供の大なる群彼の許に集り來れり。そは多くの人々いたく泣き叫びたればなり。九二その時イスラエルの子らの一人なるエイロの子エコニヤ呼はりていへり『エズラよ。我らは主なる神に對して罪を犯し、此の地の異教徒の異

なる女を娶りたれど、全イスラエル今高められたり。九三 九四 いざ我ら主に對して、汝と主の律法に從ふすべての人によしと見ゆる如く、異邦人の間より娶りたる我らの妻を悉くその子供らと共に出さんとの誓約を立てん。九五 起ちて務を果せ。こは汝に關ることとなり。我ら汝と共に力強くこれをなさん。』九六 さればエズラ起ちて、全イスラエルの祭司とレビ人の長とに、此等のことをなさんと誓はしめたり。彼等乃ち誓へり。

第九章

一 是に於てエズラ宮の庭より起ちてエリヤシブの子ヨナの室に行き、二 そこに宿りしが、民の大なる不義のために悲みて、パンをも食はず、水をも飲まざりき。三 茲にユダヤ全國及びエルサレムに於て、俘囚より歸り來れる人々に布告發せられたり。汝ら皆エルサレムに集るべし、四 二日若くは三日の内にそこに集まらざるものは、任命されたる長老たちによりて、その家畜宮の用のために沒收せられ、俘囚より歸り來れる人々の會より黜けらるべしと。五 三日の内に、ユダとベニヤミンの族のすべての人々エルサレムに集れり。こは九月にして、恰もその月の二十日なりき。六 民は皆宮の前の廣場に共に集りて、惡しき天候のために震ひ慄けり。七 さればエズラ起ちて彼らにいへり『汝らは律法を犯して異邦の女を娶り、これによりてイスラエルの罪を増し加へたり。八 されば今懺悔して、我らの先祖の神なる主に榮光を歸し、九 その御心を行ひて、己が身をこの地の異教徒と、異邦の女より離せ。』一〇 その時全會衆叫びて大聲にいへり『汝の語りし如く、我らこれをなさん。一一 されど群衆大にして、且天候惡しければ、我ら外に立つこと能はず。此のことにつきての我らの罪廣がり居れば、こは一日又は二日の業にあらず。一二 されば民の有司たちを殘らしめ、我らの住民の中異邦人なる妻を持つ者をば、定めたる日に來らしめ、一三 各地の有司と審判者をも彼らと共に來らしめて、此の事に因る主の御怒を我らの中より去らしめよ。』一四 その時アザエルの子ヨナタンとトカノの子エゼキヤ自ら事に當り、モソラモ、レビ、及びサバテオ彼らの陪席者となる。一五 俘囚より歸り來れる人々皆これに從へり。一六 祭司エズラ宗家の長たる人々を、皆その名によりて選びぬ。十月の朔日に至り、彼ら事を閲するため共に閉ぢ籠れり。一七 かくて異邦人なる妻を持てる人々の事件正月朔日の頃終りぬ。一八 共に來りし祭司たちの中にて異邦の女を妻に持ちたるは、一九 ヨセデクの子なるイエスの子らとその兄弟たちの中にては、マテラとエレアザル、ヨリボ及びヨハダノなり。二〇 彼等その妻を出さんと誓ひ、その愆の贖をなさんために牡羊を獻げたり。二一 又エンメルの子孫の中にてはアナニヤとザブデオ、マネ、サメオ、ヒエレエル、及びアザリヤなり。二二 パイスルの子孫の中にてはエリオナ、マシア、イスマエル、ナタナエル、オキデロ、及びサロア。二三 レビ人の中にては、ヨザバデ、セメイ、コリオ、又

の名はカリタ、パテオ、ユダ、及びヨナ。二四 聖歌隊の者の中にては、エリアシボとバクロ。二五 門衛の中にてはサルモとトルバネ。二六 イスラエルの中の、ポロの子孫の中にては、ヒエルマ、イエデヤ、メルキヤ、マエロ、エレアザル、アシビヤ、及びバシネア。二七 エラの子孫の中にては、マタニヤ、ザカリヤ、エズリエロ、オアブデオ、ヒエレモテ、及びアエデヤ。二八 ザモテの子孫の中にてはエリアダ、エリアシモ、オトニヤ、ヤリモテ、サバト、及びザルデオ。二九 ベバイの子孫の中にては、ヨハンネ、アナニヤ、ヨザバデ、及びエマテイ。三〇 マニの子孫の中にては、マムコ、エデオ、ヤスボ、ヤサエロ、及びヒエレモテ。三一 アデの子孫の中にてはナアト、モオシヤ、ラクノ、ナイド、マタニヤ、セステル、バルヌオ、及びマナセア。三二 アンナの子孫の中にては、エリオナ、アセア、メルキヤ、サベオ、及びシモン、コサメオ。三三 アソムの子孫の中にては、マルタンネオ、マタテヤ、サバネオ、エリパラト、マナセ及セメイ。三四 バアニの子孫の中にては、エレミヤ、モンデ、イスマエロ、ユエル、マムダイ、ペデヤ、アノ、カラバシオシ、エナシボ、マムニタネモ、エリアシ、バンノ、エリアリ、ソメイ、セレミヤ、ナタニヤ。エゾラの子孫の中にてはセシ、エズリル、アザエロ、サマト、ザムブリ、ヨセボ。三五 ノオマの子孫の中にてはマジテヤ、ザバデア、エド、ユエル、及びバナイヤ。三六 此等は皆異邦の女を妻としたるものにして、彼らはこれをその子らと共に出したり。三七 祭司とレビ人、及びイスラエルの中なる人々は七月の朔日にエルサレムとその地に住みぬ。かくてイスラエルの子らその住處を得たり。三八 ここにすべての民東に面したる宮の門の前なる廣場に共に集れり。三九 彼等祭司なる朗讀士エズラにいへり『イスラエルの神なる主によりて與へられたるモーセの律法を携へ來れ』と。四〇 大祭司エズラ七月朔日に、男女の全群、及びすべての祭司たちに聽かしめんがため律法を携へ來れり。四一 かれ宮の門の前なる廣場に於て、朝より午に至るまですべての男女の前にこれを讀みしに、群衆は悉く律法に心を止めたり。四二 祭司なる律法朗讀士エズラ、造られたる木の壇の上に立ちぬ。四三 彼の傍には、右の方にマタテヤ、サムモ、アナニヤ、アザリヤ、ウリヤ、エゼキヤ、及びバアルサモ、四四 左の方にパルデオ、ミサエル、メルキヤ、ロタスボ、ナバリヤ、及びザカリヤ立てり。四五 その時エズラ群衆の前に律法の書をとりて群衆の前に出で、その正面に恭しく坐せり。四六 彼律法を開きし時彼等皆直ちに立ちあがれり。かくてエズラ全能なる萬軍の神、至高き神なる主を祝したり。四七 すべての民これに答へて『アァメン』といひ、その手を擧げて地上に臥し、主を拜みぬ。四八 又イエス、アンノ、サラビヤ、イアデノ、ヤクボ、サバテオ、アウテア、マイアンナ、カリタ、アザリヤ、ヨザブデ、アナニヤ、パリヤ、及びレビ人等は主の律法を教へ、主の律法を人々に讀み聽かせ、これを彼等に悟らしめたり。四九 その時アタラテ大祭司なる朗讀士エズラと、

群衆を教へしレビ人、及びすべての人にいへり五〇『此の日は主の聖日なり。(彼ら律法を聴きし時、皆泣きたりき。)五一されば行きて、脂を食ひ、甘きものを飲め。持たぬ人にはその分前を贈れ。五二今日は主の聖日なればなり。又悲むな。主は汝らに光榮を與へ給はん。』五三さればレビ人すべての事を民に告げていへり『此の日は聖日なり、悲むな』と。五四その時彼等己が道に行き、各飲み食ひて樂み、持たぬものに分前を與へて、大なる歡喜をなせり。五五そは彼等、集りて教へられし御言を悟りたればなり。

エズラ第二書

第一章

一預言者エズラの第二の書。エズラはサライヤの子、サライヤはアザライヤの子、アザライヤはヘルキヤの子、ヘルキヤはサレマスの子、サレマスはサドクの子、サドクはアヒトブの子、二アヒトブはアキアの子、アキアはピネハスの子ピネハスはヘリの子、ヘリはアマリヤの子アマリヤはアヂエイの子、アヂエイはマリモテの子マリモテはアルナの子、アルナはオヂアの子、オヂアはボリテの子、ボリテはアビセイの子、アビセイはピネハスの子、三ピネハスはエリアザルの子、エリアザルはアロンの子、アロンはレビの族の人なり。エズラはペルシヤ王アルタシヤスタの治世にメデアの地に居りし俘虜なりき。四さて主の御言、我に臨みていふ。往きてわが民に、彼らの惡しき業及びその子等の我に對して行ひし罪を告げよ。五これ彼らこの事をその子らの子らに傳へんがためなり。六そは先祖たちの罪彼らの中に積もりて、彼ら我を忘れ、異邦人の神々に犧牲を獻げたればなり。七われ彼らをエジプトの地、卽ち奴隷たる家より救ひ出せしにあらずや、然るに彼ら我を怒らせ、わが計畫を蔑したり。八汝髮の毛をふるひて彼らの上に、すべての惡を投げよ。そは、彼等はわが律法に從はず、背き悖れる民なればなり。九かくも多くの恩惠を與へたる民を、われ何時まで忍ばんや。一〇われ彼らのために多くの王たちを擊ち破りて、パロとその僕ら、及びそのすべての軍勢を滅したり。一一我彼らの前にすべての民を滅し、東に於て二つの地方、卽ちツロとシドンの民を散らして、そのすべての敵を殺したり。一二故に汝彼らに語りていへ。一三主かく言ひ給ふ。まことにわれ汝等をして海を通らしめ、又途無き處に汝らの爲に途を開き、汝等の爲に先達としてモーセを與へ、又祭司としてアロンを與へたり。一四われ汝らに火の柱に依りて光を發ち、又汝らの中に大なる奇蹟を行ひたり。然るに汝ら我を忘れたりと主言ひたまふ。一五全能の主かく言ひ給ふ。鶉汝らのために徵となれり。我汝等を護るために陣營を與へたり。一六されど汝ら彼處にて呟きたり。汝ら敵を滅さんがために、わが名を用ひて勝利を獲ず、今に至るまで呟くなり。一七わが汝らのために與へたる恩惠何處にありや。汝ら荒野に於て飢ゑ渴きし時、我を呼びて、一八『汝何ぞ我らを殺さんがために、この荒野に導きたるや。此の荒野に於て死ぬるよりもエジプトに於て奴隷となり居る方よかりしものを』といひしにあらずや。一九われ汝らの嘆を憐み、汝らに糧としてマナを與へたり。汝ら天の使たちの糧を食ひしなり。二〇汝等渴きし時われ岩を擊ちて、足る程の水を流れ出でしめしにあらずや。又暑さのためにわれ汝等を樹蔭をもて掩ひたり。二一われ汝等に豐なる國々を頒ち與へ、汝らの前よりカナン人、ペリジ人、ペリシテ人を逐ひ出したり。われ汝等のため之に勝りて何をか行はんと主いひ

給ふ。二三全能の主、斯くいひ給ふ。汝ら荒野に於て苦き河のために渇きてわが名を汚したる時、我汝等のわが名を汚したるために火を與へずして却て樹を與へ、二四ヤコブよ、われ汝に何をなさんや。ユダよ、汝われに聽く事を望まざるや。我わが身を他の民等にめぐらし、彼等にわが名を與へん。これ彼等わが誡命を守らんがためなり。二五汝等われを捨てたるが故に我も亦汝等を捨てん。汝ら我に憐憫を求むるとも我これを汝らに與へじ。二六汝ら我を呼ばんにわれ汝等に聽かじ。そは汝等血をもて汝らの手をけがし、又汝らの足は人を殺すに早ければなり。二七汝ら我を棄てたるにあらず、己を棄てたるなりと主いひ給ふ。二八全能の主かく言ひ給ふ。父のその息子等に、母のその娘等に、乳母のその幼兒等に乞ひ求むるが如く、われも汝等に二九汝等わが民となれ、さらばわれ汝らの神と成らん、汝等わが子となれ、さらばわれ汝等の父とならんと乞ひ求めしにあらずや。三〇牝鷄の雛を翼の下に集むるが如く、われ汝等を集めたり。されど今われ汝等に何を爲さんや。三一汝らをわが前より棄てん。汝等、我に供物をささぐる時、我わが顏を汝らより反けん。そはわれ汝等の祝日と新月と肉の割禮とを認めざればなり。三二われ汝等に預言者たるわが使者たちを遣はしたるに、汝ら彼等を取りてこれを殺し、その死體を裂きたり、われ彼等の血を汝等より求めんと主いひ給ふ。三三全能の主かく言ひ給ふ。汝等の家は廢れて、われ風の藁を散すが如く汝らを拋棄てん。三四汝らの子は子を産まじ。そは、彼等わが汝等に與へし誡命を棄ててわが前に惡しき事を行ひだればなり。三五未だ聽かざるも我を信じて來らんとする民に、われ汝らの家を與へん。われ其民に徵を示したる事なけれど、彼等わが命じたる事を爲さん。三六彼らは預言者たちを見ざれども己等の古昔の狀態を憶えん。三七われ來らんとする民の恩惠を證す。彼等の子等は樂みて喜ばん。彼等肉眼をもて我を見ざれども靈をもてわが告げし事を信ぜん。三八父よ、榮光をもて、みそなはし、東より來らんとする民を顧みたまへ。三九我彼等に先達としてアブラハム、イサク、ヤコブ、ホセヤ、アモス、ミカ、ヨエル、オバデヤ、ヨナ、四〇ナホム、ハバクク、ゼバニヤ、ハガイ、ゼカリヤ及び主の御使と呼ばるるマラキを與へん。

第二章

一主かくいひ給ふ。我この民を奴隸たる家より導き出し、預言者たるわが僕によりて彼等に誡命を與へたり。されど彼等聽くことを欲せずしてわが計畫を無視にせり。二彼等を生みし母彼らにいふ。往け、わが子らよ、われは寡婦にして棄てられたり。三われ喜びをもて汝らを導き、嘆と惱とをもて汝等を失へり。そは汝ら主なる神の御前に罪を犯し、わが前にも惡しき事を行ひたればなり。四されど今われ汝等に何をなさんや。我は寡婦にして棄てられたり。子らよ、往きて主より憐憫を求めよ。

五父よ、我この子らの母によりて汝に證を立てん。そは彼らわが契約を守ることを欲せず。六願くは彼らに混亂を起し、彼らの母を分捕物にして彼らに裔をなからしめ給はんことを。七彼等わが契約を蔑したるによりて、異邦人の間に散らされ、彼らの名地の上より消し去られんことを。八災害なるかな、アッスリヤよ。汝は惡しき者を汝の中に隱す。ああ惡しき民よ、わがソドムとゴモラとになせし事を憶えよ。九彼等の地は樹脂の土塊と灰の堆積とをもて蔽はれたり。我に聽かざる者に我かくなさんと全能の主いひ給ふ。一〇主、エズラにかくいひ給ふ。我イスラエルに與へんとせしエルサレムの國をわが民に與へんと彼らに告げよ。一一われ彼らの光榮をとりて、彼らのためにわが備へたる永遠の住處を與へん。一二生命の樹、彼等のためにかぐはしき香油とならん。彼等は勞せず又疲れざるべし。一三求めよ、さらば與へられん。汝らのために日數の縮められん事を祈れ。國、汝等のために既に備へられたり。眼を覺まし居れ。一四天と地とを呼びて證せしめよ。そはわれ惡を棄てて善を造る。我は活くるなりと主言ひ給ふ。一五母よ、汝の子らを抱け。われ彼等を鳩の如く喜びて導かん。彼等の足を強めよ。そは、我汝を選べりと主いひたまふ。一六われ死にし者をその處より甦へらせ、彼等を墓より導き出さん。そは、我彼らの中にわが名を認めたればなり。一七懼るな、子らの母よ、われ汝を選べりと主いひ給ふ。一八われ汝のために助としてわが僕イザヤとエレミヤとを遣はさん。われ彼等のすすめに依りて汝のために種々の實を有つ十二本の木を潔め備へたり。一九又我乳と蜜との流るる同じき數の泉、及び薔薇と百合との生ゆる七つの大なる山を潔め備へたり。これをもてわれ汝の子らに喜びを滿たさん。二〇寡婦に義しきを行ひ、幼き者を審き、貧しき者に與へ、孤兒を護り、裸なる者に衣せよ。二一碎かれたる者と弱き者とを癒し、跛者を嘲笑ふな。不具者を護り、盲者をわが聖きを仰ぎ見る處に入らしめよ。二二老人と若者とを汝の石垣の中に守れ。二三死骸を見出す時記號を付けて之を墓に葬れ。さすれば我わが復活の時に汝らに上席を與へん。二四わが民よ、待て、安んぜよ、汝の休息來らん。二五良き乳母よ、汝の子らを養ひ、彼らの足を強めよ。二六わが汝に與へし僕等は一人だも滅亡に至らじ。我彼らを汝の數より求めん。二七心を煩はすな、悲嘆と災禍との日來たらん時、他のもの泣き悲むとも汝は樂しみて富裕にならん。二八異邦人汝を嫉むとも、汝に對して何事をもなし得じと主いひ給ふ。二九汝の子らゲヘナを見ぬやうにわが手汝を被はん。三〇母よ、汝の子らと共に喜べ。われ汝を救はんと主いひたまふ。三一汝の眠れる子らを憶えよ。われ彼等を地の祕密なる處より導き出して、彼等に憐憫を施さん。そは我は憐憫深きものなればなりと全能の主いひ給ふ。三二わが來るまで汝の子らを抱き、彼等に憐憫を告げよ。わが泉は溢れ、わが恩惠は盡くることなからん。三三われエズラ、ホレブ山に於て、イスラエルに往けと

の命を主より受けたり。われ彼等に往きたる時、彼ら我を受けずして主の誡命を棄てたり。三四 されば聽きて悟るところの異邦人よ、われ汝らにいふ。汝らの牧者を待て。かれ汝等に永遠の平安を與へん。そは世の終末に來らんとする牧者近きに在すなり。三五 國の報を受けんがために備をなせ。そは、永遠の光世々限りなく汝らを照すべければなり。三六 この世の暗黒を遁れて、汝の光榮の喜びを受けよ。われ公にわが救主の證を呼び奉らん。三七 主の與へ給ふものを受け、汝等を天の國に召し給ふものに、喜びて感謝をささげよ。三八 起きよ、立ちて主の婚禮に印せらるる者の數を見よ。三九 この世の暗黒より遁れたる者は主より輝く禮服を受けたり。四〇 シオンよ、汝の數を見よ。主の律法を完うせし、汝の白き衣を着たる者を數へ盡せ。四一 汝の慕ひたる子らの數滿てり。主の最初より召したまひし汝らの民の潔められんがために、主の御力を祈り奉れ。四二 我エズラ、シオンの山に於て、數へつくすこと能はざる大なる群衆を見たり。彼ら皆歌をもて主を讚めまつれり。四三 彼等の中に、他のすべての者よりも身の丈高き若者ありて、この若者彼等各自の頭の上に冠をかけしに、いとど高められたり。我これを見ていたく驚きたり。四四 其時、われ御使に問ひていふ『君よ、此等の者は誰なるぞや。』四五 彼答へて我にいふ『此等の者は、死の衣を脱ぎ、不死の衣を着て、神の御名を認めたる者なり。今彼等冠を戴き棕櫚の葉を受く。』四六 われ御使にいふ『彼等に冠をかけ、その手に棕櫚の葉を與ふるかの若者は誰ぞや。』四七 答へて我にいふ『彼こそは神の子なれ。彼等この世に在りて彼を認めたり。』茲にわれ、主の御名のためにかく強く立ちたる彼等を崇め始めたり。四八 その時御使、我にいふ『往きてわが民に汝の視し主なる神の諸の大なる奇蹟を告げよ。』

第三章

一 都の滅びたる三十年目に、我サラテエル、(卽ちエズラ)バビロンに居れり。われ床の上に寢ねたりし時、心煩ひて樣々の念胸先に昇り來れり。二 そは我シオンの滅亡とバビロンに住み居る人々の富とを見たればなり。三 わが靈いたく動き、我いと高き者に恐怖の言を語り始めていふ 四『萬物を統治めたまふ主よ、汝單獨にて地を造り給ひし世の創に、御言を發し給ひしにあらずや。五 又汝塵に命じ給ひたれば、塵汝に生命なき體卽ちアダムを供へたるにあらずや。されどアダムは汝の御手の業なりき。なんぢ彼に生命の靈を吹き入れ、かれ汝の御前に活ける者となれり。六 汝地の現れぬ前に汝の右の手の植ゑしパラダイスにアダムを導き給へり。七 汝アダムに、汝の唯一の誡命を與へ給へり。然るに彼その誡命を犯したれば、汝直ちに彼のため及び彼の子孫のために死を備へたまへり。彼より、數へ盡すこと能はぬ程の諸民、諸族生れたるなり。八 すべての民皆己が意の儘に歩み、汝の御前に義しからぬ行爲をなして汝を蔑したれど、

汝彼等を禁じ給はざりき。九 されど時來るに及びて、主は世に住める者の上に大水を導き到らせ、彼等を滅し給へり。一〇 卽ち彼等も同じ運命に與れるなり。アダムに死の來れる如く彼等の上には大水來れり。一一 されど汝彼等の中に一人の人を殘し給へり。卽ちノア及びその家族、卽ち彼より生れたるすべての義しき者これなり。一二 さて地上に住むもの殖え始め、子等と民と多くの種族增し加はりたる時、彼らその先祖たちよりも更に甚しき不義を行へり。一三 彼ら汝の御前に罪を犯したる時、なんぢ彼等の中より、一人の人を選びたまへり。彼の名をアブラハムといふ。一四 汝彼を愛し、夜密に彼にのみ時の終末を示し給へり。一五 なんぢ彼と永遠の契約を結び、かれの子孫を永遠に棄てじと宣ひて、彼にイサクを與へ、イサクにヤコブとエサウとを與へ給へり。一六 一七 汝ヤコブを汝のために選びてこれを大なる群となし、彼の裔をエジプトより導き出しし時、彼等をシナイ山に導き給へり。一八 汝天を傾け、地を振ひ、世界を搖り動かし、淵を震はせて世を混亂し給へり。一九 汝の榮光は、四つの門を通り行けり。卽ち火と地震と風と寒氣との門なり。そは汝ヤコブの裔に律法を與へ、イスラエルの子孫に誡命を與へんとし給へばなり。二〇 されど汝猶彼等より惡しき心を除きたまはず。これ汝の律法をして彼等の中に實を結ばしめんがためなり。二一 始祖アダム惡しき心を保ち、法を犯して敗れたり。彼より生れたる者みな然り。二二 これによりて人の弱點、いつまでも殘り、民の心の中に律法と共に惡しき根殘れり。かくて善きものは去り、惡きもの來れり。二三 又時過ぎ、年終りて後、なんぢ己のために一人の僕を起し給へり。彼の名はダビデなり。二四 なん彼に、御名のために都を建て、その中にて汝のために供物を獻げん事を命じたまへり。二五 この事成りてより多くの年過ぎたれば、その都に住む者罪を犯し、二六 アダム及びその子孫のなし如くすべてのことを行へり。そな彼らにも惡しき心遺り居たればなり。二七 かくて汝、その都をその敵の手に渡し給へり。二八 その時我わが心にいふ。バビロンに住む者、シオンよりも勝りて善き事をなししために、バビロン、シオンを治むるに至りしならんか。二九 我ここに至りて數へ盡すこと能はぬ程の惡しき事を見、わが魂この三十年目にも、多くの人の罪を犯すを見たれば、我が心弱りたり。三〇 そはわれ汝が如何にして·罪を犯す者を容れ、惡を行ふ者を赦し、又汝の民を滅し、汝の敵を守り、三一 又汝が誰にも、此等の事を悟る道を教へ給はぬ事を見たればなり。バビロンの行爲はシオンの行爲よりも善きか。三二 或は他の民はイスラエルよりも汝を善く知りたるか。又此等のヤコブの族に比べて汝の契約を信ぜし族何處にありや。三三 彼らの報酬あらはれず、彼らの勞働實を結ばず。われ異邦人の中を廻りて、彼らの富を見たり。彼等は汝の誡命を記憶せず。三四 故に今我らの罪と世に住む者の罪とを秤をもてはかり、秤いづれの方に下るかを顯したまへ。三五 地に住む者汝の御前に罪を犯さ

ざりし時ありしや。三六 汝は汝の誡命を守りたる人を見出して、その名を擧ぐるを得ん。されど汝の誡命を守りたる民を見出すこと能はざるべし。』

第四章

一 我に遣はされたる御使（その名はウリエル）我に答へていふ二『汝の心この世の事にいたく煩はさるるに、汝いかでいと高き者の道を悟り得んや。』三 我いふ『わが主よ、然り。』四 もし、汝、この三つのうちの一つを我に告ぐる事を得ば、我も亦汝に汝の見んとする道を教へん。又人の心は何故に惡しきかをも教へん。』五 我いへり『語りたまへ、わが主よ。』六 我答へていふ『此等のことをなし得るもの一人もなきに、何故我にこれを尋ね給ふか。』七 かれ我にいふ『もし我汝に『海の深處に住居幾つありや、又淵の源に泉幾つありや、空の上に道幾つありや、陰府の出口何處にありや、又パラダイスに到る道何處にありや』と問はば、八 恐らくは汝われに『われ淵に降りしこともなく、陰府に到りしこともなく、又天に昇りしことも無ければ』と答ふるならん。九 されどわれ汝に火と風と日の事のみを尋ねたり。汝此等のものの中を經來れり。此等のもの無くば、汝は在るを得じ、されど汝これ等につきてすらも答へ得ざりき。』一〇 彼又われにいふ『汝若き時より、汝と共に在りしものを知ることすら能はざるに、一一 汝の器、いかでいと高き者の道を悟るを得んや。又朽ちはてし世にありて朽ちはてしもの、いかで朽ちはてぬものを悟るを得んや。』一二 我これらの事を聞きたればひれふして、彼にいふ『我らここに來り、不義の中に生き、且苦しみて、その何故なるを悟らざるよりは、むしろ來らざりし方宜かりしならん。』一三 彼われに答へていふ『嘗て野の林の樹出でて互に語り合ひぬ一四『我ら出で往きて、海我らの前より退き、われらなほ多くの林をつくり得んがため、海に向ひて戰をいどまん。』一五 海の波も同じく共に議りて云ふ『いざ昇りて我等のために新しき地を造らんがため、野の林に向ひて戰をいどまん。』一六 されど林の思ふところ空しくなれり。そは、火來りて、その林を燒き盡したればなり。一七 海の波の思も亦同じく空しくなれり。そは、砂立ちて彼等を止めたればなり。一八 もし汝これらのものの間に審判者なりしとせば、いづれを義とし、いづれを罪ありとせしぞ。』一九 我答へていふ『彼ら互に空しきことを考へぬ。そは陸は林に與へられ、又海の面はその波を持つなり。』二〇 かれ我に答へていふ『汝義しく審きたり。何ぞ己のことにつきて同じ審判をなさざるか。二一 陸を林に、海をその波に與へられたるが如く、地の上に住む者は地の上のことのみを悟り、天の上に住む者は天の高き事を悟らん。』二二 その時我答へていひぬ『主よ、いかなれば我ものを辨ふる能力を與へられしぞ。二三 われ上に在る道を尋ぬるを欲せず。唯日々我らの前に過ぎゆくことを尋ぬ。そはイスラエル異邦人の中に罵られ、汝の愛せし民、神を知らぬ人々に

渡され、我等の先祖たちの律法空しくなりて、錄されたる契約も守られざればなり。二四 我らは蝗の如く此世を過ぎ往く。我等の生命は呼吸の如く、我等は恩惠を得るに足らざるなり。二五 されど彼、われらの呼びまつる御名につきて何をなし給ふや。われ此等のことにつきて尋ねたるなり。』二六 かれ我に答へていふ『汝かの時生き居らば見ることあらん。又汝生存へなばあやしと思ふことあらん。世はとく過ぎ逝けばなり。二七 この世は義しき者に約されたるものを保つこと能はず。そはこの世は苦惱と弱とにて充つればなり。二八 汝我に問ひたる惡しきこと既に蒔かれたり。されどそれを苅り取る時機未だ來らず。二九 若し蒔かれたるもの苅り取られず、又惡しきものの蒔かれたる處失はれずば善き者の蒔かるる畑來らず。三〇 元始よりアダムの心に一粒の惡しき種、蒔かれたれば、今に至るまで如何に多く不義の實を結び、又收穫の來らん時まで如何に多くこれを結ぶべきぞ。三一 惡しき種の一粒より不義の實如何に多く結ばれしや。汝自らこれを思ひめぐらすべし。三二 數へ盡すこと能はぬ穗、蒔かれなば、大なる禾場をも充たさん。』三三 われ答へていふ『如何なる時までにか、又如何なる時にか、これらのことども起るべき。何ぞ我等の歳かく少くして惡しきや。』三四 彼我に答へていふ『汝はいと高き者に勝りて急ぐ能はじ。そは汝は己のために急げど、上に在す者は多くの人の爲に急ぎ給へばなり。三五 義しき人の魂、その安息所に於て此等のことにつきて尋ねたるにあらずや。即ちわれ如何なる時までかくの如く希望を有つべき。又我らの禾場の報の實はいかなる時に來らんとするや。』三六 御使の長エレミエル彼等に答へていふ『汝に似たる者の數滿つる時なり。そは、かれ秤をもて世を量るべければなり。三七 かれ時を量れり。數によりて季節を量り、これを數へたり。定められたる秤の滿つる時まで彼これらのものを搖り動し給はじ。』三八 我答へていふ『主よ、わが主よ、我等皆不義に滿たされぬ。三九 義しき人の禾場の止めらるるは、我らのため、又地に住む者の罪のためにあらずや。』四〇 彼我に答へていふ『往きて孕みたる者に尋ねよ『彼九月滿つればその胎自然に子を生むことを得るや』と。』四一 我いふ『否、主よ、そは能はぬことなり。』四二 產まんとする者その產の苦痛を遁れんと急ぐが如く、此等の處も初めより預けられたるものを返へさんと急ぐなり。四三 その時汝の見んと望むもの汝に顯されん。』四四 我答へていふ『若し我汝の御前に恩惠を得なば、又もしこはあり得べき事にして、我之に相應しくば、四五 願くは我にこの事をも示したまへ。即ち過ぎたる事よりも來らんとする事多きか、或は我等の上を過ぎ逝きし事却って多かりしか。四六 我は過ぎし事を知れども來らんとする事を知らず。』四七 彼われにいふ『右の方に立て。我この比喩の說明を示さん。』四八 われ立ちて、見しに、視よ、燃ゆる爐わが前を通りて、その火焰すぎゆきたれば、われ見しに、視よ、煙のみ殘れり、四九 その後、雨の滿ちたる雲、わが前を過ぎ、激し

き勢をもて雨を降らせたり。その雨の勢すぎし時、雫のみ殘れり。五〇彼われにいふ『汝自ら心の中に辨へよ。雨、その滴よりも大なるが如く、又火その煙よりも大なるが如く、過ぎゆきしものの量多し。しかも雨の滴と煙猶殘れり。』五一我祈りていふ『我その時まで生くべしと汝思ひたまふか。誰かその時まで殘らんや。』五二かれ我に答へていふ『汝の我に尋ねたるかの徴につきて、我その一部を語り得るなり。されど汝の生命につきては、我これを汝に語らんがために遣されしにあらず。我これを知らざるなり。

第五章

一されどかの徴につきて、視よ、地に住む者の驚き合ふ日來らん。その時眞の道は隱され、地は信仰につきて荒地の如くにならん。二汝の今見るところ、又嘗て聞きしところに勝りてその不義は増し加はらん。三汝の今見る豐なる地は荒れ廢れて人跡絶え、再び沙漠の地とならん。四もしいと高き者汝に生くることを許し給はば、なんぢ亂れたる第三の國の、後の狀態を見ることを得ん。その時、日俄かに眞夜半に輝き、月眞晝に現はれ、五木より血滴り、石その聲を出し、民等は騷ぎてその歩む樣を變へん。六又地に住む者の欲せざる人地を治め、空の鳥共に飛び去らん。七ソドムの海、魚を拋げ出して、夜の間に、多くの人の知らざる聲その海より響き、八多くの處に混亂起り、火屢出でて、獸その住處を變へ、女不思議なるものを產まん。九甘き水の中に鹽辛き水混ぜられ、友その友と鬪はん。その時、智慧隱されて、知識、その住處に退かん。一〇その時、智慧多くの人に探ねらるれど、見出されざるべし。又不義と不節制、地の上に增さん。一一その時、一つの國その隣國に問ひていはん一二その時人々望めどもその望むもの與へられじ。人々働けどもその道榮えじ。一三われ此等の徴を、汝に示すことを命ぜられたり。もし汝再び祈りて、今の如く淚を流し、七日の間斷食せば、なんぢ此等のことよりも更に大なることを聞かん。』一四われ目醒めし時、わが身いたく震ひ、わが魂疲れはてて、氣を失へり。一五されば我と語りし御使我を支へ、我を慰め、我をわが足にて起たせたり。一六而して第二日の夜、民の長なるパルテエル、われに來りていふ『汝何處に居りしか。汝の顏何ぞかく悲しげなる。一七イスラエルはその俘囚の地に於て汝に託せられたるを汝知らぬか。一八起ちて糧を食へ。牧者その群を惡しき狼の手に棄つる如く、我らを棄つな。』一九われ彼にいふ『我を去れ、七日の間、我に近づくな。後、我に來れ。』かれわが言を聞きて我を去れり。二〇御使ウリエルの命ぜし如く、我七日の間、斷食して泣き悲めり。二一七日の後、わが心の思ひ再び甚しく重くなれり。二二わが魂、再び知識の靈に充たされ、いと高き者の御前に此等の言を語り始めたり。二三『主よ、わが主よ、地のすべての林とすべての樹の中より汝一つの葡萄の樹を、選び給へり。二四又全地

の中より汝一つの國を選び給へり。又地のすべての花の中より汝一つの百合を選び給へり。二五 汝海のすべての深處より一つの河を溢れ出でしめ、又すべての建てられたる都の中より、汝シオンを汝のために聖別し給へり。二六 汝すべての造られたる空の鳥の中より汝のために一羽の鳩に名を付け、又すべての造られたる獸の中より汝のために一匹の羊を選び給へり。二七 汝すべての民の群の中より一つの民を汝に近づけ給へり。而してなんぢこの汝の愛む民に、すべての人に善しとせらるる律法を與へたまへり。二八 されば主よ、いかなればこの一つの民を多くの民に與へ、一つの根を多くのものに勝りて辱め、唯一の汝のものを多くのものの中に散らし給ひしや。二九 汝の誡命を拒みし者、汝の契約を信じたる者を踏みにじれり。三〇 もし汝、なんぢの民をいたく憎み給はば、彼らは汝自らの御手によりて罰せらるべきなり。』三一 われ此等のことを語りたる後、前の夜、我に來りし御使わが許に遣はされたり。三二 かれ我にいふ『我に聽け、われ汝を教へん、心を傾けよ、われ更に汝を教へん。』三三 我いふ『わが主よ、語り給へ。』かれ我にいふ『汝イスラエルのためにいたく心を悩ましたり、汝かの民を造り給ひし者よりもかの民を愛するか。』三四 我いふ『主よ、然らず、我悲哀の中にありて、語れるなり。そは、わが心常にいと高き者の道を悟り、その御審判の幾許かを究めんとして悩むなり。』三五 かれ我にいふ『此は能はぬことなり。』我いふ『わが主よ、何故なるか。我何とて生れたるか。我をしてヤコブの苦難とイスラエルの裔の疲勞とを見ざらしめんがために何ぞわが母の胎、わがために墓とならざりしや。』三六 彼われにいふ『未だ來らぬ者をわがために教へ、散りたる雨の滴をわがために集めよ、三七 枯れたる草をわがために再び茂らせ、鎖されたる室をわがために開き、その中に閉ぢ込められたる風をわがために出せ。又我に聲の形を示せ。さすれば我汝に汝の見んと願ふ苦惱を示さん。』三八 我いふ『主よ、わが主よ、人の中に住居を持たぬ者の外に此等のことを知るは誰ぞ。三九 我は智慧なき者なれば、汝の我に賜ひし此等の事に就きていかで語り得んや。』四〇 かれ我にいふ『汝今わがいひし此等の事の一つすらなし得ざるが如く、わが審判をも又わが民に約されたる愛の終をも見出すこと能はざるべし。』四一 我いふ『主よ、見たまへ。汝末の時に來るものに此等の事を約し給ひたれど、我らの前に在りし者、又我らと我らのために來らんとする者には如何にぞや。』四二 かれ我にいふ、わが審判を環になぞらへん、後の者に遲きことなきが如く、前の者に早きこともなし。』四三 我答へていふ『汝の審判を早めんがために、汝過ぎし者と、今在る者と、來らんとする者とを皆一時に造り能はざるか。』四四 彼われに答へていふ『造られたる者はその造主に勝りて急ぐこと能はず、地も亦その中に造られんとする者を悉く同じ時に保つこと能はず。』四五 我いふ『汝如何なれば僕に、汝の造り給ひしものを、皆同じ時に必ず活かさんといひたまひしや。もし

彼等同じ時に生き、地、彼等を保ち得ば、今にても地彼らを保ちて、同じ時に出でしむるを得べし。』**四六** 彼われにいふ『女の胎に問ひて、これに言へ『汝十人の子を産むに、何故時を異にしてこれを産むか』と。女に十人の子を一時に産むことを乞ひ求めよ。』**四七** 我いふ『此は能はぬことなり。時を異にせざるを得ず。』**四八** かれ我にいふ『我も地を、時を異にして孕まるる人々のために胎となせり。**四九** 子供は子を産むこと能はず。年老いたる人もまた然り。我かくの如くわが造りたる地を整へたるなり。』**五〇** 我彼に問ひていふ『汝我に道を示し給ひたれば、われ汝の前に語らん。汝我に語りし我等の母は尚若きか。或は年老いたるか。』**五一** 彼われに答へていふ『子を産まんとする女に聞かば、彼汝に答へん。**五二** 彼に云へ、『いかなれば汝の今産みし者、汝の前に産みたる者と異りて身の丈低きぞ』と。**五三** 彼汝に答へん『精力ある若き時に生れしものは、年老いて胎弱りたる時に生るる者と異なり』と。**五四** 汝も亦考へよ、汝らは汝らの前にありし者よりも身の丈低し。**五五** 又汝等の後に來る者もかくの如くなるべし。これ彼等は若き時の精力の失せたる老人より生れたる者なればなり。』**五六** 我いふ『主よ、もし我なんぢの目の前に恩惠を得なば、願はくは、誰を用ひて汝は、汝の造り給ひしものを顧み給ふかを僕に示したまへ。』

第六章

一 かれ我にいふ『地の創造せられし始、世の出立未だ定まらざりし時、風未だ集り吹かざりし時、**二** 雷の聲未だ鳴り轟かざりし時、電光の閃光未だ輝き渡らざりし時、パラダイスの基底未だ固まらざりし時、**三** 美しき花未だ開かざりし時、地震の勢威未だ確ならざりし時、數へ盡せぬ天使の軍勢未だ集まらざりし時、**四** 空氣の高層未だ高く達せざりし時、穹蒼の極未だ名づけられざりし時、シオンの足臺、未だ据ゑられざりし時、**五** 今の年未だ現れざりし時、今罪を犯す者どもの企圖未だ遠けられざりし時、己がために信仰の寳を蒐むる人々未だ印せられざりし時、**六** その時すでにわれ此等のことをわが心の衷にて深く想ひ廻らせり。此等のものは他の者によらず我のみに由りて造られし如く、その終も他の者によらず、ただ我のみによりて定められん。』**七** 我答へていふ『時の區分は如何、初の代の終、又それに續く次の代の始は何時ぞ。』**八** かれ我にいふ『アブラハムよりアブラハムまでなり。アブラハムよりヤコブとエサウ生れ出づ。ヤコブの手はじめよりエサウの踵を握り居れり。**九** エサウはこの世の終にして、ヤコブは次の世の始なり。**一〇** 人の始はその手なり。人の終はその踵なり。エズラよ、踵と手との間に、もはや何をも求むな。』**一一** われ答へていふ『主よ、もしわれ汝の目の前に恩惠を得なば、**一二** 願くは、僕に前の夜少しく示し給ひし汝の徵の終をも示し給へ。』**一三** 彼われに答へていふ『汝足にて立て。さら

ば汝大なる聲を聞くべし。一四 汝の立ち居る處甚しく動きて、その聲の響聞ゆとも懼るな。一五 その言は終末に關ることにして、地の基もこれを悟らん。一六 その言は地の基に關ることなれば、地の基、震ひ動き、變り行く終末の樣を知らん。』一七 我これを聞きて起ち上り、尚耳を傾くる程に、視よ、語る聲ありて、その聲の音は大水の音の如し。一八 その聲いふ『視よ、地に住む者を顧みんがため、わが近づかんとする日來らん。一九 我不義の業をなせし人々の不義を調べ始むる時、又シオンの苦難の充つる時、二〇 又過ぎゆく世の極印を捺さるる時、われ此等の徵を示さん。穹蒼の前に卷物開かれ、すべての人共にこれを見ん。二一 當歳の幼兒らその聲を以て語らん。孕みたる女、三、四箇月にして月足らぬ子を産まんに、その子等生きて躍らん。二二 種の蒔かれたる處忽ちにして荒地と化せん。滿ちたる庫忽ちにして虛くならん。二三 ラツパその聲を出さば、これを聞くすべての人々俄かに懼れおののかん。二四 その時、敵のその敵と戰ふが如く、友その友と鬪ひ、地とその上に住むもの懼れおののかん。又泉の源止まりて三時の間流れざるべし。二五 わが汝にいひしこのすべての事の成就せらるるまで殘れる人々は救はれ、わが救とわが世の終とを見ん。二六 その時、彼等は、生れしより後死を味ひし事なく天に受けられたる人々を視ん。地に住む人の心變りて、異りたるものとならん。二七 惡は取り除かれ、僞は消え失すべし。二八 かくて信仰は榮え、汚穢は敗れて、久しき間實を結ばざりし眞理明かに示されん。』二九 彼われとものいひ居りし時、視よ、わが立ち居たる處、少しく動き始めたり。三〇 彼われにいふ『われ此等のことを夜中に汝に示さんがために來れり。三一 もし汝再び祈り、七日の間、再び斷食せば、われ再び晝の間、此等のことよりも大なることを汝に告げん。三二 汝の聲いと高き者に聽かれたり。強き者汝の義をみそなはし又、若き時より汝の保ち來りし操を顧みたまへり。三三 而して此等のすべての事を汝に示し、且告げんがために、かれ我を遣はしたまへり。汝心を安んぜよ、懼るな。三四 終の時の審問を恐れて、慌しく前の日の惡を思ひ煩ふな。』三五 此等のことの後、我再び泣き、前の如く七日の間、斷食して、命ぜられたる三週を過さんとせり。三六 八日目の夜、わが心再びわが衷に煩ひていと高き者の前にて語り始めたり。三七 わが魂大に燃えて、わが心惱みたればなり。三八 我いへり『主よ、汝開闢の始、第一日に御言を出して『天と地と造られよ』といひ給ひたれば、汝の御言その業を全うしたまへり。三九 而して汝の靈地の上を掩ひたれば、暗黑と沈默地を占め、人の聲未だ御前に聞こえざりき。四〇 その時、汝の御業の顯はれんがため、命じて寶庫の中より光を輝き出でしめたまへり。四一 第二日に汝穹蒼の靈を造り、これに命じて水と水とを分たしめ、一部を上に昇らしめ、其他を下に殘らしめ給へり。四二 第三日に、汝水に命じて、これを地上の七分の一に集め、七分の六を乾かし、之を守り、そのうちの一部を耕やし、且種蒔く

に相應はしからしめ給へり。四三 汝の御言出でたれば、御業忽ち成れり。四四 直ちに樹の實さわに實り、その味美はしく、その類多かりき。又たぐひなき色といとかぐはしき香の花咲き出でたり。此等は第三日に成れり。四五 第四日に、汝命じて、日を輝き出でしめ、月に光を放たしめ、星の順序をととのへ給へり。四六 而して汝、後に造くられんとする人に仕ふべきことを彼等に命じ給へり。四七 第五日に、汝水の集まり居れる、地の第七部に生物と鳥と魚とを出さん事を命じ給ひければ、彼ら出で來れり。四八 聲もなく、生命もなき水、汝の命に從ひて生物を造り、これによりて、地上の民等汝の不思議なる業を讚むるに至れり、四九 その時、汝二つの活物を護り、その一つにベヒモテ、他のものにレビアタンの名を與へ、五〇 この二つのものの間に區別を作りたまへり。五一 汝ベヒモテに第三日に乾きたる地の一部を與へたれば、彼その處に住めり。その處に、一千の山あり。五二 されど汝濕ひ居る地の第七部をレビアタンに與へたまへり。汝は、汝の欲し給ふ時、汝の欲し給ふ人にこの二つのものの食せられんがためにこれを護り給へるなり。五三 第六日に、汝地に命じて汝の御前に家畜と獸と爬ふものとを造り給へり。五四 この上に汝の造り給ひしすべてのものの主長たるアダムを造りたまへり。汝の選民たる我等は彼より出でたる者なり。五五 主よ、我これ等のすべてのことを汝の御前に語りたるは、汝この創の世を我らのために造れりと宣ひしが故なり。五六 アダムより生れたる他の民等に就きて、彼等は、何者にもあらず、唾液の如き者なりと汝宣へり。汝、彼等の富を器より落つる水の一滴になぞらへ給へり。五七 主よ、見給へ。今この無きが如き民、我等を抑へ、我等を喰はんとす。五八 主よ、我等は、汝の民、汝の初生兒、汝の獨子、汝の最も愛する者と呼ばる。然るに我等は、彼等の手に渡されぬ。五九 もし地我等のために造られしならば、いかにして我らこの世を嗣ぐものとはならざる。ああ此等のこと、何時までかくあるべきか。』

第七章

一 我これらの言をいひ終りたれば、初の夜、我に遣されたる御使また我に遣されたり。二 彼われにいふ『エズラよ、起きてわが汝に云はんがために遣されたる言を聞け。』三 我いふ『わが主よ、語り給へ。』彼われにいふ『濶くかつ大ならんがために廣き場所に海置かれたり。四 その海の入口は、河の如くならんがために狹き場所につくられたり。五 その海を見、又これを治めんがためにその海に入らんとする者は、その狹き處を通らずしていかでその濶き處に到り得んや。六 又すべての善きものに充ちたる都坦かなる場所に建て置かれたり。七 その入口は右の方に火、左の方に深き水ありて、下るに危く且狹き處にあり。八 その火と水との間に途一筋のみありて、その途は一人にて歩まずば過ぐること能はず。九 その都、或人に嗣業として與へられんに、その

嗣業を繼ぐもの、その危險を冒して入らずば、いかでそれを繼ぐを得んや。』一〇我いふ『主よ、然り。』彼われにいふ『イスラエルの嗣業も亦然り。一一彼等のためにわれ世を造りたり。而してアダムわが誡命を犯したる時、造られたるもの罪に定められたり。一二その時よりこの世の入口、狹く、悲しく、且苦しくせられぬ。その入口は惡しくして、多くの危難と勞苦とにて滿てり。一三更に勝れる世の入口は濶く且安全にして永遠の生命の實を結ぶ。一四されば活ける者、此等の狹く空しき處を經ずば、彼等のために貯へられたるものを受くること能はじ。一五汝は朽ちはつべき人なるに、何ぞ徒らに心を煩はすや。汝は死ぬべき者なるに何ぞ蠢くや。一六汝何ぞ、現世の事のみを心に思ひて、來らんとする事を思はざるや。』一七我答へていふ『主よ、わが主よ、視よ、汝御律法に、義しき人々此等のものを嗣ぎ、義しからざる人々の亡ぶる事を定め給へり。一八故に義しき者は狹き事に耐へて廣き事を望む。不正を行ふ者は狹き事に惱みて廣き事を見ぬなり。一九かれ我にいふ『汝は神の上に立つ審判者にあらず。又いと高き者に勝りて悟ある者にもあらず。』二〇されば人々の前に置かれたる神の律法の蔑せらるるよりも、むしろ今活くる多く者の亡びん事を。二一神、生れ來りし者の來る毎に、彼等の活きんがためになすべき事と、彼等の罰を逃れんがために、守るべき事とを嚴に命じたまへり。二二然るに、彼ら神に從はず、神に逆ひて、己等のために空しき事を圖りたり。二三彼ら不義の計畫を己等のために考へ、いと高き者につきて、彼いまさずと云ひ、彼の道を認めざりき。二四彼ら神の律法を棄て、その契約を拒み、その誡命を信ぜず、その御業を行はざりき。二五故にエズラよ、虛しき人には虛しきもの、滿ちたる人には滿ちたるもの備へらる。二六視よ、わが汝に預言せし徵の成就げらるる時來らん。その時、花嫁現れん、卽ち今地より隱れ居る都現はれて、人に示されん。二七その時、預言せられたる惡より救はれしすべての人々、わが驚くべきわざを見ん。二八その時、わが子イエス、彼と共に居る者どもとともに現れ、殘れる民を四百年の間 喜ばせん。二九その後、わが子キリストと息あるすべての人々とは死なん。三〇世は創始の時の如く、七日の間太古の沈默に歸りて、一人の人も殘らざるに至らん。三一その七日の後、未だ眼醒め居らぬ世は眼醒めて、朽つる者は死なん。三二その時、地はその中に眠る者を、塵はその中に默し住む者を還し、又陰府はその委ねられたる魂を解き放たん。三三その時いと高き者、審判の御座に、現れ、憐憫は過ぎ去り、忍耐は取り去られん。三四かくて審判のみ殘り、眞理は立ちて、信仰は強くせられん。三五又行爲は現れ、應報は示され、義きわざ目醒めて、惡しきわざ寢ねざるべし。』三六我答へていふ『さらば我等如何にして、昔アブラハムがツドム人のために祈り、モーセが沙漠に於て罪を犯せし先祖たちのために祈りたるを見出すか。三七モーセの後ヨシユアはアカンの時にイスラエルのために祈り、三八サムエルは

サウルの時に、ダビデは疫病のために、ソロモンは、聖所に於ける人々のために、**三九** エリヤは雨をうけし人々のために、又死にし人の生きんがために祈り、**四〇** ヒゼキヤはセナケリブの時に民のために、又多くの人は多くの人のために祈れり。**四一** 故にもし朽つる者の榮えし時、又不義の增したる時、義しき人、義しからぬ人のために祈りしことありとせば、いかで彼の時にも然からずとせんや。』**四二** 彼われに答へていふ『今の世は、終末にあらず、この世には完き榮光宿らず。故にこの世に於て力ありし者は弱き者のために祈れり。**四三** されど審判の日は、この世の終末にして、限なき來世の始なれば、その時、朽つる者は去り、**四四** 不節制は消え失せ、不信仰は斷たれ、正義は增し加はり、眞理は起きあがるなり。**四五** その時、誰にても審判に落されし者を憐むこと能はず、又勝ちし者を抑へつくること能はじ。』**四六** 我答へていふ『これはわが初の言にして又わが終の言なり。地アダムを出さざりし方よかりしならん。されど地、彼を出したれば、彼を抑へて、**四七** 罪を犯さざらしめばよかりしなり。この世に於て悲哀のうちに生き、死にて後、罰を待つすべての人は、何の益をかもたん。**四八** ああアダムよ、汝何をなせしか。汝罪を犯したれど、汝のみ墮ちしにあらず。汝より出でし我らも墮ちたるなり。**四九** 我らは、死の業を行ひたれば、限りなき世に約束せられたりとて何の益かあらん。**五〇** 我らはいとも惡しき者にして、虛しくなりたれば、永遠の希望預言せられたりとて何の益かあらん。**五一** 我等の生活いと惡しければ、健康と安全との住居備へられたりとて何の益かあらん。**五二** 我らいとも惡しき途を歩みたれば、いと高き者の榮光、潔き生活をなせし者を護りたればとて、何の益かあらん。**五三** 永遠に朽ちざる富と醫癒とに充ちたるパラダイス、示されたれど、我らこれに入るを得じ。**五四** そは我等喜悅なき處に步み居たればなり。**五五** 行狀を愼める者の顏は星よりも輝やかん。されど我等の顏は暗闇よりも暗からん。**五六** そは我ら生ける間、惡しき事を行ひたればなり。彼の時には、我等、死にし後に如何なる苦惱を受くべきかを考へざりき。』**五七** 彼答へていふ『世に生まるる人の鬪ふべき戰鬪の條件はこれなり。**五八** もし彼その戰鬪に敗れなば、汝のいひし惱を受けん。もしその戰鬪に勝たば、彼はわがいひし報酬を受けん。**五九** これこそはモーセがその生ける時に民に語りし言なれ『生きんがために生命を選べ。』**六〇** されど彼等はモーセをも、その後の預言者をも、又わが言をも信ぜざりき。**六一** されば信ぜし人々の救のために喜悅あるに似ず、彼等の滅亡を悲む者なかるべし。』**六二** 我答へていふ『主よ我知る。いと高き者は未だ世に來らぬ者を憐み給ふが故に憐深きものと呼ばれ、**六三** その律法に心を向くる者に慈悲を示すが故に慈悲深き者と呼ばれ、**六四** その造り給へる者罪を犯すともこれを忍び給へば、忍耐強きものと呼ばれ、**六五** 奪ふよりも與ふる者なれば、與ふる者と呼ばれ、**六六** 又今在る者、過ぎ去れる者、及び來らんとする者に憐憫を增し加へ給へば、憐憫

大なる者と呼ばれ給ふ。六七（そは彼、その恩惠を增し加へ給はざりしならば、此の世も、この世に住む者も、生命を保つ事能はざりしならん。）六八又彼は赦す者と呼ばれ給ふ。そは彼、罪を犯すもののその罪を離れんがために、その慈悲をもて彼等を赦し給はざりしならば、世の人の千分の一も、生き殘ること能はざりしならん。六九又彼は審判主と呼ばれ給ふ。彼その御言によりて造られし者を赦し、彼等の罪を取り消し給はざりしならば、七〇恐らくは、大なる群の中より甚しく少き數殘るに過ぎざりしならん。』

第八章

一彼われに答へていふ『至高者は、この世をば多くの人のために、來らんとする世をば少數の人のために造り給ひたり。二エズラよ、われ汝の前に比喩を語らん。もし地に問はば、地汝に、土の器を作る土は多く出づれども、金を出す砂は少しといはん。この世のわざもこれに同じ。三多くの人々造られたれど、救はるる者は少し。』四我答へていふ『わが魂よ、知識を飲み、智慧を喰へ。五なんぢ暫時の間のみここに活くるを許されたれば、喜ばずしてここに來り、又望まずしてここを去るなり。七主は唯一なり。我らは汝のいひし如く御手の一つの業なり。八主は胎の中に造れる身體に生命を與へ、又肢體を與へ給ふ。汝の造り給ひしものは、火と水との中に護られ、又その生れんとする者を、九ヶ月の間、胎内に保つなり。九護る者も護らるる者も、等しく汝の御守護のうちに護られん。後に、胎、その内に造られし者を出す時、一〇汝その母の身體の肢體なる乳房をして乳を出さしめ、一一これによりて暫時の間、その中に造られし者は養はれ、その後汝、憐憫によりてこれを守りたまはん。一二汝正義をもてこれを養ひ、律法をもてこれを育て、御意をもてこれを誡めたまふ。一三汝造りしものとしてこれを死なしめ、又御業としてこれを活かし給ふ。一四かくの如き大なる勞苦をもて造られしものを、御言をもてかくも容易く亡ぼし給ふとせば、何とて之を造り給ひしぞ。一五我いはん、凡べての人に就きて汝知り給ふ。されど我、わが心の痛む汝の民につきて、一六わが悲む汝の産業につきて、わが嘆くイスラエルに就きて、わが苦しむヤコブの裔につきて、我いはん。一七地に住む我等の墮落は明らかなれば、われ汝の前に己のため又彼等のために祈らん。一八來らんとする審判の速やかなることを我聞けり。一九願くは、わが聲を聽き、わが言を聰りたまへ、われ汝の前に語らん。』二〇『主よ、主は永遠に在す。主の眼は高く擧げられ、主の御住居は空に在り。二一主の御座は測り難く、主の御榮光はさとり難し。主の御前に天の萬軍は戰きて立ち、二二主の命によりて彼等は風と火との貌に變へらる。主の御言は眞實にして、主のいひ給ふ所は動かず。主の敕令は確く、主の誡命は畏し。二三主の御顏は淵を乾かし、主の御怒は山を熔かし、主の眞理は證をなす。二四主よ、僕の祈を

聴きたまへ。主の造り給ひし者の願に耳を傾けたまへ。二五われ生くる間は語り、悟ある限は答が言をみそなはしたまへ。われ生くる間は語り、悟ある限は答へ奉らん。二六ああ御民の罪を念ひ給ふ勿れ。誠實を以て汝に仕へ奉る者を憶え給へ。二七惡しき事をなすものの業を顧みずして、苦難の中にも汝の誡命を守りたる者を顧みたまへ、二八汝の前に僞りて歩みし者を念はず、喜びて汝の畏きを知りし者を憶え給へ。二九家畜の如くふるまひし者をみそなはし給ひそ。三〇獸よりも惡しく思はるる者を怒りたまはずして、常に主の榮光に頼りし者を愛したまへ。三一我等とわれらの先祖たちは死に到る道を歩みたれど、主は我等罪人の故に、憐憫深き者と稱へられ給ふ。三二我等には義しき業なけれど、主もし我等に憐憫を施す御心あらば、主は憐憫深き者と、稱へられ給はん。三三汝の御許に多くの業を貯はへたる義しき者は各自の業によりて報をうけん。三四人は如何なる者なれば之を憤り給ふや。朽ちはつべき世の人は如何なる者なれば、苦きをもてこれを遇ひ給ふや。三五實に生れし者の中に一人だに惡しきを行はざりし者なし。又汝の選びし者の中に罪を犯さざりし者なし。三六主よ、善き行爲の富をもたぬ者に對して、憐憫を施し給はば、之によりて汝の正義と恩惠とは宣べ傳へられん。』三七彼われに答へていふ『汝のいひし言の中、或ものは良ければ、その如くにならん。三八我罪を犯せし者の貌と、死と、審判と、その滅亡とを思はずして、三九義しき者の貌とその巡禮と、その救と、その受くべき應報とを喜ばん。四〇故にわがいひし如くに成らん。四一農夫地の上に多くの種を蒔き、多くの苗を植ゑたれど、時到りて、猶その種とその苗とは救はれず、又すべての植ゑしものも根付かざるが如く、この世に蒔かれし人々も悉くは救はれじ。』四二我答へていふ『もし我御前に恩惠を得なば、我いはん。四三農夫の種、時到りて雨を受けず、或は雨の多きが故に、その葉伸びずして、その種朽ち果つる事あらん。四四かくの如く人は御手の業にして、汝に肖たる者、汝の像と稱へられ、すべての物かれのために造られたれど、汝は彼を農夫の種に擬へ給へり。四五主よ、汝は汝の造り給ひしものを憐み給へば、我らを怒り給ふ勿れ。御民を赦し、汝の嗣業を憐み給へ。汝は自ら造り給ひしすべてのものを憐み給ふ。』四六彼われに答へていふ『今の世のものは今の世の人のため、後の世のものは後の世の人のためなり。四七我よりもわが造りしものを愛するは、汝に猶足らぬ處あればなり。汝は屢不義に近づけり。此はかくあるべきにあらず。四八されど汝はこれによりて、至高者の御前に譽を得ん。四九汝は大なる光榮を得んがために己を義しき人々の中に數へず、却て汝にふさはしく自らを卑くしたればなり。五〇世に住む人々、大なる高慢の中に歩みたれば、終末の時に、彼等の上に多くの悲むべき苦惱來らん。五一汝己のために自ら悟りて汝に似たる者より榮光を求めよ。五二汝らのためにパラダイスは開かれ、生命の樹は植ゑ

られ、來世は備へられ、喜悦は滿たされ、都は建てられ、平安は定められ、恩惠は完うせられ、智慧も既に成就せられたり。**五三**汝等より惡の根は封印せられ、虚弱は消され、死は絶たれ、陰府は逃れ、腐敗は忘られたり。**五四** 悲哀過ぎ去りて、永遠の生命の寶 終に顯はれん。**五五** されば亡ぶる者の數につきて問ふな。**五六** 彼ら自由を享けて後、いと高き者を棄て、その律法を罵り、その途を離れたり。**五七** しかのみならず、彼らは主の聖徒を蹂躪れり。**五八** 彼等は自ら死ぬべき者なりと知りつつ、その心の中に神無しといへり。**五九** 此等のこと汝等を待ち受くるが如く、渇と苦痛とは彼らのために定められたり。いと高き者は、人の亡ぶるを欲し給はざれど、**六〇** 造られたる者は、造主の御名を汚し、彼等のために生命を備へ給ひし者に恩を報いず。**六一** さればわが審判既に近づきぬ。**六二** 我この審判を多くの者に示さず、ただ汝と汝に似たる少數の人々とに示せり。』**六三** 我答へていふ『主よ、主は、終の日に自らなさんとする多くの徴を我に示したれど、その何時なるかを示し給はざりき。』

第九章

一かれ我に答へていふ『つとめて汝の心の中を量れ。前にいひしある徴の或もの過ぎたるを見ば**二**その時、いと高き者、その造り給ひし世を顧み給ふ時來れりと悟るべし。**三**世に地震、騷擾、民の異圖、牧伯等の動搖、君侯たちの不安の顯れん時、**四** 此等こそいと高き者の夙に云ひ給ひしことなれと悟るべし。**五**此の世に於ける造られたるものは、その始 明にして、その終も亦 明なるが如く、**六**いと高き者の時も然り。即ちその始は異なるわざと能力とに顯れ、その終は報と徴とに顯はれん。**七**救はれたるすべてのもの、又己の業、或はその信ずる信仰によりて逃るることを得たるものは、**八**前にいひし危險より護られ、この世に於て、又わが潔めたる國に於てわが救を見ん。**九**その時、今わが道を汚し居る者は驚き、又わが道を罵り棄てし者は苦難のうちに留まらん。**一〇** わが恩惠を受けつつも、その生ける間に我を認めず、**一一** 自由を保ち居るもわが律法を罵り、**一二** 又悔改めの機會開かれあるも、これを悟らずして、罵りたる者は、死にて後苦難のうちに此等の事を想ひ知るべきなり。**一三** されば今より後、如何なれば義しからざる者、苦しめられざるやと問ふな。むしろ義しき人の如何にして救はるるかを尋ねよ。世は彼等のものにして、彼等のために造られたればなり。』**一四** 我答へていふ**一五**『われ前にこれをいへり。今も亦いはん。亡ぶる者は救はるる者より多し。**一六** これ水の一滴より波の大なるが如し。』**一七** かれ我に答へていふ『畑あれば種あり、花あれば色あり、わざあれば造られしものあり、農夫あれば禾場あり。**一八** 人の住むべき世の未だ造られざりし前、われ今の代の人のために備へつつありしとき、我に逆ひてものいひし者なかりき。人一人だにあらざりし故なり。**一九** されど今、永遠に盡くることなき宴設けられ、又

測るべからざる律法備へられたるこの世に造られし人々その行狀を汚したり。二〇我わが世を見しに、視よ、それは滅びたり。我わが地を見しに、視よ、其内に起りし異圖のためにそれは危殆に陷れり。二一われ彼等を見て、その一部を赦し、その房の内より一粒の葡萄を救ひ、又その大なる林の中より一本の樹を救へり。二二徒らに生れし群衆は亡ぶべき者なれども、わが大なる勞苦をもて全うせしわが葡萄とわが樹とは救はるべき者なり。二三ともあれ汝尚七日を待て。二四（此の七日の間、汝斷食せずして、家の建てられざる花園を歩き、園の花のみを喰へ、肉を喰はず葡萄酒を飲まず、ただ花のみを喰ひて花園を歩むべし。）二五絶間なく、いと高き者に祈れ、さらば我來りて汝と共に語らん。』二六我その命ぜられし如くアルダテと呼ばるる庭に往きて其花の中に坐り、その畑の草を喰ひて腹を滿たしぬ。二七七日の後、われ草の上に臥して前の如くわが心を惱ましたり。二八我口を開きて至高者の御前にものいひ始む。二九『主よ、主は我らの先祖たちのエジプトより沙漠に出で來たりし時、又彼等の未だ人の歩みしことなき、荒れはてたる沙漠を歩みたりし時、彼等に顯れ、三〇かついひたまへり『イスラエルよ、我に聽け、ヤコブの裔よ、わが言に耳を傾けよ。三一視よ、われ汝らの中にわが律法を蒔く、その律法は汝等のうちに實を結ばん、それに依りて汝ら世々榮光を受けん』と。三二我等の先祖たちは御律法を受けたれども之を守らず、又彼らは御誡命を守りたることなし。されど律法の實は亡びし事なかりき。是その律法は主の律法にして、亡ぶべきものにあらざればなり。三三律法を受けし者はそのうちに蒔かれたるものを守らざりしが故に、滅亡びたるなり。三四地は種を受け、海は船を戴せ、器は食物又は飲物を容る。されど、その蒔かれたるもの、その戴せられたるもの、またその容れられたるもの亡ぶるとき、三五たとひ此等のものは亡ぶとも器は殘らん。されど我等にとりては然らざるなり。三六律法を受けし我らはこれをうけし我らの心と共に罪によりて亡びん。三七されど御律法は亡びずして榮光の中に殘らん。』三八此等のことを心の中にいひし時、われ眼を擧げしに、右の方に一人の女を見たり。視よ、此女は聲を擧げて嘆き悲み、その魂いたく惱み居たり。その衣は破れ、その頭の上には灰まき散らされたり。三九我わが思想を更へ、彼女に向ひていふ四〇『何ぞ泣くや、何ぞ汝の心惱むや。』四一彼女われにいふ『わが主よ、わが心嘆きて、四二われ彼女にいふ『汝の悲哀は何なるか、我に語れ。』四三かの女我にいふ『婢は三十年の間、夫と共に居りしも子を産みたることなし。四四その三十年の間、われ晝も夜も、時に時を、日に日を重ねて、至高者に祈をささげたり。四五三十年の後、神、婢の祈を聽き給ひてわが賤しきをみそなはし、わが惱を顧みて、我に男の子を與へたまへり。その子のために、我も夫も隣人も皆喜びて神に榮光を歸し奉れり。四六我わが子を大なる勞苦を以て養へり。四七時到りて我わが子のために妻を娶り、婚宴を設けた

り。

第一〇章

一然るに、わが子婚禮の室に入りし時、忽ち倒れて死ねり。二その時我等燈火を倒したり。わが隣人立ちて我を慰めぬ。かくてわれ翌日の夜に至るまで休めり。三我を安らかにせんとて我を慰さめゐたりしもの皆鎭まりたれば、我その夜汝の見る如くこの野に逃れ來れり。四我死ぬる時まで、絶間なく嘆き、斷食し、何をも喰はず、何をも飮まず、都にも歸らずして、此處に留らんと思ひ定めたり。』五その時、われ思ひめぐらし居りしことを止め、怒をもてかの女に答ふ六『女の中の最も愚なる者よ、我らに起りたる我等の惱を視ずや。七即ち我等の母シオン大なる惱の中に惱みて卑くせられたり。八汝はただ一人の息子のために嘆く。我等は皆悲哀の中に居れば共に嘆くは當然なり。九地に問へ。地その上に成長せる多くのもののために嘆くは宜なりと答へん、一〇地よりすべての者出でたり。又他のものも來らん、されど視よ、彼等は殆ど皆滅亡に向ひて歩み、その數盡きんとす。一一地と汝といづれか大に嘆くべき、地は大なる群衆を失ひしにあらずや。一二もしなんぢ『我と地との情態は異なり。そは我大なる苦と惱とを以て產みしわが胎の實を失ひしなれど、一三地は地の風習に從ふ。その上に來れる群衆はその來りしが如く過ぎ往けるなり』といはば、我は汝に答へん。一四汝惱を以て子を產みしが如く、地も亦初よりその實、卽ち人を、造主のためにささげたり。一五故に己が嘆を己の心のうちに保て。汝に起りし苦難を勇ましく忍べ。一六もし汝神の誡命を正しとせば、時に依りてはまた子を授けられ、女の中に譽を得ん。一七されば汝町にゆき、汝の夫に、歸へるべし。』一八彼女われに答へていふ『然すまじ、町にも入るまじ、我は此處にて死なん。』一九我更に言を重ねて、彼女にいふ。二〇『女よ、汝の心のままにすな。シオンの苦難のためにわがいふことを聞き、エルサレムの悲嘆のために慰を受けよ。二一汝見る如く我等の聖所は荒れ果て、我等の聖壇は毀たれ、二二我等の宮は滅び、我等の讃美の聲は低くなり、我等の歌は默し、我等の喜悦は盡き、我等の燈火は消え、我等の契約の櫃は破られ、我等の聖き物は瀆され、我等の呼ばるる名は罵られ、我等の自主なる男は蔑され、我等の祭司たちは燒かれ、我等のレビ人は俘虜にせられ、我等の處女たちは汚され、我等の妻たちは犯され、我等の義しき人々は携へ去られ、我等の子等は裏切られ、我等の若者らは奴隸とせられ、我等の強き者は弱くなれり。二三しかのみならずシオンの紋章はその榮光を失ひ、我らを憎む者の手に渡されたり。二四されば汝の大なる悲痛を振ひすて、多くの嘆を汝より打ち捨てよ。さすれば、至強者再び汝を憐み、至高者、汝の勞苦に代へて休息と平安とを與へ給はん。』二五われ猶この女と語り居る程に、視よ、其顏忽ち輝やき、その姿稻妻の如く光りたれば、我いたくかれを懼

れ、こは何事ぞと想ひ廻はせり。二六 視よ、かの女忽ち、恐しき大なる聲を發し、地そのために震へり。二七 我見しに、視よ、その女の姿もはや見えず、代りにそこに都建てられ、大なる墓の如き場所顯れたれば、我懼れて聲を擧げ、而していへり二八『初に我に來たりし御使ウリエルは何處に居るや。彼われをこの大なる幻象に陷らしめぬ。わが終は空に歸し、わが祈は拒まれたり。』二九 われ此等の事を語り居る間に、視よ、初に來りし御使我に來りて我を見たり。三〇 視よ、われ死にし者の如く伏して氣を失ひ、わが悟亂れたり。御使わが右の手を執りて我を強め、我をわが足にて起たせ、而して我にいふ三一『汝何ぞ頂垂るるや、何ぞ思ひ惑ふや。何ぞ汝の悟、汝の心の思亂るるや。』三二 我いふ『なんぢ我を棄てたるが故なり。われ汝の言の如く野に往きしに、言ひ得ざる事を視たり。我今猶これを見る。』三三 彼われにいふ『雄々しく立て。我汝に示さん。』三四 我いふ『わが主よ、我徒らに死なざるやう我を去り給ふな。我に語り給へ。三五 我悟らざる事を見、又知らざる事を聞きたればなり。三六 或はわが心誤り、或はわが魂夢み居るならんか。三七 願くは彼の幻象を僕に示し給へ。』三八 彼われに答へていふ『我に聽け、いと高き者汝に多くの奧義を示したれば、われ汝に汝の懼るる事を示し且語らん。三九 彼なんぢの道の正しきを見たまへり。そは汝常に汝の民のために嘆き、シオンのために大なる哀悼をなせばなり。四〇 これは幻象の意味なり。四一 暫時前に汝に現れて悲み居りし、汝の慰めんとしたる女は、四二 今汝の見る如く、女の姿にあらで、建てられつつある都として顯れぬ。四三 汝にその子の變事を語りしかの女につきての說明は左の如し。四四 汝の見しかの女は汝の見るところの建てらるる都シオンなり。四五 かれ汝に、三十年子を產まざりしといひしは、これシオンに於て三千年の間犧牲獻げられざりしことをいふ。四六 その三千年の後に、ソロモンかの都を建て、犧牲にささげたり。これかの石女の子を產みしことなり。四七 かれ苦み勞してその子を養へりといひしは、エルサレムに民の住みしことを云ふ。四八 又かのをんな、その子婚禮の室に入りて死に、大なる苦惱起りたりといひしは、エルサレムの滅びたることを云ふなり。四九 視よ、汝かの女の、子のために嘆く樣を見て、これを慰め始めたるとき、その眞の姿示されしなり。五〇 今いと高き者、汝が心より悲み、かの女のために心を盡して苦みたりし事をみそなはし、その榮光の輝とその優しき美しさとを汝に示したまへり。五一 この故に、われ汝に、家の建てられしことなき野に宿るべきことを命ぜしなり。五二 これいと高き者、汝に此等のことを示し給ふべきことを我知りたればなり。五三 さればわれ汝に、建物の基もなき野に往くことを命じたり。五四 いと高き者の都の顯るるところに、人の手の業立つこと能はず。五五 故に懼るな、汝の心を騷がすな。汝の眼の見得る限り。建物の榮光と偉大とを見よ。五六 後汝は、汝の耳の聞き得る限を聞かん。五七 汝は多くの人に勝りて祝福

せらる。少數の者と共にいと高き者の御前に名をもて呼ばれん。五八明日の夜、汝は此處に留まるべし。五九いと高き者、夜の幻象の中に、終末の日に、地に住む者になさんとすることを示したまはん。』我その夜も、またその次の夜も御使の命ぜし如く、其處に寢ねたり。

第一一章

一その後二日目の夜、われ夢を見しに、視よ、海より十二の翼と三つの頭を有てる鷲上り來れり。二我見しに、視よ、その鷲翼を地の上に擴げたるに、空の風と雲悉く彼に向ひて吹き寄せられたり。三我視しに、その翼より他の翼出でて、細く小き翼となれり。四その鷲の頭は動かず、眞中の頭は他の頭より大なるも、同じく動かざりき。五我見しに、視よ、その鷲地及び地に住む者の上に王たらんがために、その翼をもて飛び廻れり。六我見しに、天の下のすべてのものその鷲に從へり。地にあるすべてのものの中に、この鷲に逆ふもの絶えてなかりき。七我見しに、視よ、その鷲、足の爪にて起ち、翼に向ひ聲を出していふ八『行きて全地を治めよ。されど今は休め。すべてのもの同時に眼醒め居るな。各自己が處に眠り、時に從ひて眼を醒ますべし。九されど頭は終まで保たるべし。』一〇われ見しに、視よ、その聲頭より出でず、その體の眞中より出でたり。一一我その小き翼を數へしに、その數は八つなりき。一二我見しに、視よ、右の方より一つの翼起りて全地の上に王となれり。一三その翼、王となれる後、終末來りてその翼もその所在も見えずなりぬ。この翼に續きて他の翼起り、永き時の間』全地に王となれり。一四此の翼も王と成りて後、前の翼と同じく、見えずなりて、又その終末來れり。一五視よ、聲出でて彼にいふ一六『汝永く地を保ちし者よ、汝滅ぼさるる前に我これを汝に傳へん。一七汝の後に來るものは、誰も汝の時に達するもの、又は汝の時の半にも達する者なからん。一八その時第三の翼起りて前の翼と同じく王位を取りしが、これも消え失せたり。一九他の翼も各々前の翼と同じく王の位を得しも、再び現れ出づることなかりき。二〇我見しに、視よ、やがて小き翼、右の方にも起りて、地を治めたり。その中の或者は暫く王となりしも、忽ち消え失せたり。二一彼らのうち或もの位に卽きしも、治めざりき。二二その後我見しに、視よ、その十二の翼消え失せ、又二つの小さき翼も消え失せたり。二三その時、鷲の體には動かざる三つの頭と六つの小さき翼の外に、何も殘らざりき。二四我見しに、視よ、その六つの小さき翼の中より二つは別れて右の頭の下に殘り、四つは元の處に止まれり。二五我見しに、視よ、これ等の下なる翼たちて王と成る野心を起せり。二六我見しに、視よ、一つの翼起りて忽ち消え失せたり。二七第二の翼もたちしが、これ第一の翼よりも早く、直ちに消え失せたり。二八我見しに、視よ、殘りたる二つの翼も王たらんとの野心を起せり。二九彼等この野心を起せし時、視よ、眞中にありし動かざ

る頭の一つ眼醒めたり。これは二つの頭よりも大なりき。三〇我この頭が他の二つの頭を己に併せたるを視たり。三一視よ、その頭、共にありし頭とともに向き返りて、王とならんとせし二つの下なる翼を喰ひ盡せり。三二此の頭は全地を占め、大なる虐待をもて地に住む者を壓へ、その前に在りしすべての翼に勝りて大なる能力を有てり。三三此の後我見しに、視よ、眞中に在りし頭、翼と同じく、俄に消え失せたり、三四されど二つの頭殘りて地及び地に住む者の上に王となれり。三五我見しに、視よ、右の方に在りし頭、左の方に在りし頭を喰ひ盡せり。三六その時我ものいふ聲を聽けり。その聲いふ『汝の周圍を見廻し、その見るところのことを辨へよ。』三七我見しに、視よ、林の中より獅子の如きもの起き出でて吼ゆ。かれ鷲に向ひ、人の聲を出してものいふを我聽けり。三八『聽け、われ・汝にいはん。いと高き者汝に語り給はん。三九汝は、わが世を治めんがため、又わが時の終末を來らしめんがため、わが造りし四つの活物の中より殘されし活物にあらずや。四〇第四の活物なる汝來りて過ぎ去りし他のものに勝ち、大なる恐怖を與へて世を治め、又大なる虐待をもて地を治め、虚僞りをもて永く地の上に住めり。四一汝眞理によらずして地を審けり。四二汝柔和なる者を苦しめ、平和なる者を痛め、眞理をいふ者を憎み、虚僞をいふ者を愛し、實を結ぶ者の住居を毀ち、汝を害はざる者の石垣を倒せり。四三故に汝の高慢ば至高者の御前に上り、汝の誇は至強者の御前に上れり。四四いと高き者己が時を見給ひしに、視よ、その時は終り、その世は完うせられたり。四五されば汝は全く滅ぼさるべし。鷲よ、汝のいと高き翼も、小く惡しき翼も、酷き頭も、惡しき爪も、憎むべき全身も悉く滅ぼさるべし。四六これすべての地暴虐より逃れて平安を得、造主の審判と慈悲とを得んがためなり。』

第一二章

一獅子此等の言を鷲に語り居りし間、二我見つつありしに、視よ、殘りし頭消え失せて、その頭に近づきし二つの翼王とならんとて起ちあがれり。その國は小さく、騷亂にて滿てり。三我見しに、視よ、此等のものも消え失せ、鷲の全身燒かれたれば、地いたく驚けり。われ心の大なる戰慄と大なる恐怖とのために眼醒めてわが靈に云へり四『視よ、汝、至高者の道を尋ぬればこそ此等のことを我になせしなれ。五視よ、わが心疲れ、わが靈いたく弱り、今宵わが感ぜし大なる恐怖のために我に少しの氣力も殘り居らず。六されば我今、われを終まで強め給はんことを至高者に祈らん。』七我いふ『主よ、わが主よ、われ汝の御前に恩惠を得、多くの人に勝りて汝と共に義とせられ、又わが祈誠に御顔の前に昇るを得ば、八願くは我を強めたまへ。わが魂を全く慰めんがために、この懼るべき幻象の意を說き明したまへ。九主は我を、時の最後と期の終末とを示さるるに相應しきものと認め給ひしにあらずや。』一〇彼われにいふ『汝の見し幻象の

說明はこれなり。一一 汝の見し海より昇りし鷲は、汝の兄弟ダニエルの見たる幻象の裡に顯れたる第四の國なり。一二 されど今、此の幻象を汝に說き明すが如くには、彼にはその說明與へられざりき。一三 視よ、日來らん、その時、地の上に、或る國起りて、今迄在りしすべての國よりも怖るべき國とならん。一四 其國の中に相次いで十二の王たち起らん。一五 その第二の王は十二のいづれにも勝りて、永く王たるべし。一六 汝の見し十二の翼の說明は次の如し。一七 汝その頭よりにあらでその體の眞中より出でし聲を聞きたる故はこれなり。一八 その國の定まりたる時の半に於て、多くの分裂起り、その國倒れんとする程に傾かん。されどそれは猶倒れずして再び元のさまに歸らん。一九 汝鷲の翼に着きたる八つの翼を見たる意はこれなり。二〇 その國の中に、時短く、治世長からざる八人の王起らん。二一 時の半に及びて、その國のうちの二つの國は亡び、四つの國はその終末近づかんとする時まで保たれん。他の二つの國は終まで保たるべし。二二 汝の見し動かざる三つの頭の說明は左の如し。二三 終末の日に、至高者は三人の王を起して、その國の中の多くのものを新にし、地を治めしめん。二五 彼等はその不義を新にし、その終を完うすべし。二六 汝その中の大なる頭の消え失せたるを見しは、その中の一人は大に苦しめられてその寢床の上に死なんとの意なり。二七 殘されたる二人をば劍呑み盡さん。二八 一人のものの劍その伴侶を倒し、終には他の一人のもの倒されん。二九 汝右の方にありし頭の上に二つの翼昇りゆくを見たる意はこれなり。三〇 此等のものは、至高者の終まで守りたまふ者なり。これは汝の見し騷亂に滿てる小き國なり。三一 汝は又、林より起り、吼え哮りて鷲にものいひ、汝の聞きし如く、その不義とそのすべての言との故に、その鷲を誡めし獅子を見たり。三二 これはメシヤ（膏注がれたる者）なり。至高者、彼を終まで保ち給はん。彼はダビデの裔より起り、來りて彼らにものいひ、彼らをその不義とその不正との故に誡め、彼らの前にその恥づべき行爲を山の如くに積み重ねん。三三 かれ初は彼等を生けるままその審判に臨ませ、これを責めて後、彼等を滅ぼさん。三四 彼はわが民の殘れるもの、卽ちわが國の境の內なる亡ぼされざりし者を憐みて救はん。又彼は、終末の時、卽ちわが前に汝に語りし審判の日來るまで彼等を喜ばしめん。三五 これは汝の見し夢とその說明なり。三六 汝のみ至高者の祕密を知るに相應し。三七 されば汝の見し此等のすべての事を書に認めてその書をひそかなる處に匿せ。三八 而して汝民の內の聰き者、卽ち之等の祕密を心の中に藏めて守り得る人々に之を教へよ。三九 汝猶至高者の示し給はんとする他の事の示されんが爲に、此處に七日の間留まれ。』かれ我を離れたり。四〇 その時、すべての民、七日過ぎたるに、我未だ都に歸らずと聞き、小より大に至るまで集りて我が許に來り、且いふ四一『汝我らを棄てて此處に坐するは、我ら汝に逆ひていかなる罪を犯せしによるか。汝に對して我等は

何の不義を行ひしや。四二すべての豫言者の中、汝のみ結實期の葡萄の房の如く、闇の中に輝く光の如く、嵐に耐へし船への生命の港の如く、我等のために遺されたり。四三我等に起りし悪しき事は、我等のためにもはや足れるにあらずや。四四汝もし我等を棄つるならば、シオンの燒かれし時、我等も燒かれし方良かりしものを。四五我らは、そこにて死にし人々よりも善きものにはあらず。』彼等聲を揚げて泣けり。四六我答へて彼らにいふ『イスラエルよ、心安かれ。ヤコブの家よ、嘆くな。四七汝らは至高者の御前に憶えられ。至強者、汝らを永遠に忘れ給ひしにあらず。四八われ汝等を棄てたるにあらず。又汝等より遠ざかれるにあらず。シオンの荒廢のために祈り、又卑くせられたる汝らの聖所の上に慈悲を垂れ給はんことを祈らんがために、われ此處に來れるなり。四九されば汝等各自その家に歸るべし。われ此等の日の後汝等に往かん。』五〇民わがいひし如く都に往けり。五一われ御使の命ぜし如く、七日の間野に住みて野の花のみを喰ひ、其等の日の間青草わが糧となれり。

第一三章

一七日の後、われ夜夢を見しに、二視よ、海の波を荒らす風、海より起りたり。三我見しに、視よ、この風人の貌に似たる者を海より伴ひ來れり。我視しに、視よ、その人天の雲に乘りて飛び來り、世の人を顧みんとてその顏を向けたるに、彼の下に見えたるすべてのもの慄けり。四彼の聲出でし時、これを聞けるすべての者、蠟の火をうけし時に熔け失するが如くに熔け失せたり。五この後我見しに、視よ、數へ盡すこと能はざる程の群衆、海より上れるその人と闘はんがために天の四方の風より集り來れり。六我見しに、視よ、その人自ら高き山を彫り刻みてその上に跳び上れり。七我その山の刻み出されし場所を見んとせしが、能はざりき。八その後我見しに、視よ、彼と闘はんとて集まれるすべてのものいたく懼れたり。九視よ、彼はその押寄する群衆の勢を見しも、その手をも揚げず、その槍をも執らず。又何の武器をも用ひず、一〇唯その口より火の洪水の如きものを出し、その唇より焰の風を吹き、その舌より嵐の火花を吐き出せり。一一火の洪水と火の風と烈しき嵐、此等のもの皆まじりて一つとなり、闘の備へをなせる群衆の勢威の上に落ちかかりて彼等を悉く燒き盡せり。これがためにその大なる群衆滅びて灰と煙の臭との外何も遺らざりき。我これを見て驚けり。一二その後我、その人の山より下りて穩なる群衆を己のために呼び集むるを見たり。一三彼の許に大なる群衆上り來りしが、或者は喜び、或者は悲しみ、或者は縛がれ、或者は供へらるべき人々を伴ひ來れり。我大なる懼によりて眼を醒し、至高者に祈りていひぬ一四『汝始より僕に此等の驚くべきことを示し給ひ、又我を、わが祈を受けらるるに相應しき者と認めたまへり。一五今我に、この夢の説明を示し給へ。一六我想ふに、その時まで殘る者は禍害なる

かな、又その時まで殘らざる者は更に禍害なるかな。一七 其等の殘らざる者は悲むべし。一八 彼等は終末の日に殘る人々のために貯へられたるものを知れども、己等はこれに達するを得ざるなり。一九 されどその時まで殘れる者は禍害なるかな。そは彼等は此等の夢の示す如く大なる危險と多くの苦難とを見るべければなり。二〇 されど、終末の時に起らんとする事を視ず、雲の如く此の世より過ぎ行かんよりは、危險にかこまるるともそれに臨まん方寧宜しきなり。』二一 『われ汝に幻象の説明を示し、汝の語られしことを汝に現さん。二二 汝のいひし殘れる人々につきての説明はこれなり。二三 その時危險に耐へし人は、全能者に對して善き業と信仰とをもて危險に陷りたる人々を護らん。二四 故に汝知るべし。死にし人々よりも終末の時まで殘れる人々は幸福なり。二五 これば幻象の説明なり。海の中より上り來れる汝の見しかの人は、二六 これ至高者の久しき間守りし人なり。二七 汝の見し如く、その人の口より風と火と嵐と出で、二八 槍をも武器をも持たずして、彼は、己と闘はんとて出で來れる大なる群衆を滅したり。この事の説明は次の如し。二九 視よ、至高者、地に住む者を救ひ始むる日來たらん。三〇 大なる恐怖地に住む者の上に來らん。三一 その時町と町、處と處、民と民、國と國、各自戰闘の準備をなさん。三二 此等の事の成らんとする時、又わが汝に示せし徴成就せんとする時、人の貌をもて上り來りし汝の見たるわが子顯されん。三三 その時、すべての民その聲を聞かば、各自その國をも又その備へし戰をも棄てん。三四 又汝の見し如く、彼に逆ひて闘はんとする數へ盡すこと能はぬ程の大なる群衆集らん。三五 かれシオンの山の頂上に立たん。三六 汝の見し手によらで彫り出されたるかの山の如くに、そなへられ、また建てられたるシオン來りて、すべての人に示されん。三七 わが子、不義をなさんために來れる民等を嵐の如きものをもて責めん。三八 又彼等の惡しき思想と、彼等の受くべき焰の如き苦難とを彼等の前に置き、火になぞらへらるる律法をもて、勞することなく彼等を亡さん。三九 彼穩なる群衆を集めしを汝見たり。四〇 これは、アッスリヤの王シャルマネセルがホセアの時に捕虜としてイスラエルの國より出せし十の支族なり。シャルマネセル彼らを河の彼方へ移し、彼らを他の國へ動かしたり。四一 されど彼等己等のみにて互に計り、異邦人の群衆を棄て、未だ人の住まざる國へ往きてそこに住ひ、四二 己等の國にて守られざりし律法を其處に到りて守らんとせり。四三 彼等はユフラテ河の狹き通路によりてそこに入れり。四四 その時、至高者、彼等のために異なる徴を行ひ、彼等の渡り終るまで河の水源を止めたり。四五 その國に到るまで一年半の長き道程あり。その地は『アザレス』と呼ばる。四六 彼等終末の時まで其處に住み、今再び還り始む。四七 至高者、彼等の渡らんがために再び河の水源を止めたまふ。されば汝その群衆が穩に集まりたるを見たるなり。四八 然るに、汝の民の殘さるる者はわが聖なる境の中に見出さ

るる者なり。四九 されば彼、集まりたる民等の群衆を亡さんとする時、殘れる民を守り給はん。五〇 而して彼、その時、彼等に大なる徴を示し給はん。』五一 我いふ『主よ、わが主よ、海の中より上り來し人をわが見しは何故ぞや、之を我に示し給へ。』五二 彼われに云ふ『人海の底にあるものを識ること能はざるが如く、地の上に住むものも、その日來らずば、わが子及びわが子と共に在る者を見ること能はず。五三 これは汝の視し夢の説明にして、汝のみ之がために光明を得たり。五四 汝己の道を棄てわが道とわが律法とを究めんと努めたり。五五 汝は汝の生涯を智慧のうちに送り、又知識を汝の母と呼べり。五六 此の故に我これを汝に示せり、そは至高者のもとに應報貯へあればなり。三日の後に、我なんぢに他の事を語り、力ある驚くべきことを示さん。』五七 五八 その時、我時に從ひてなされたる驚くべき業の故に、又時を統べ、その時の中に起ることを治め給ふが故に、いと高き者に讃美と榮光とを歸して野に往けり。而して我其處に三日の間坐り居たり。

第一四章

一 三日目に我樫の樹の下に坐り居たるに、視よ、彼方の藪の中より聲出ていふ『エズラよ、エズラよ。』二 我いふ『主よ、我此處にあり。』我わが足にて起ちしに、三 かれ我に云ふ『わが民エジプトに於て奴隷たりし時、われ棘の中に顯れてモーセとものいひぬ。四 その時、我モーセを遣はしたれば、彼わが民をエジプトより導き出せり。而してわれ彼をシナイ山に伴ひ行き、其處にて多くの日の間彼をわが許に留め置けり。五 その時我多くの異なるわざにつきて語り、時の祕密と時の終末とを示し、彼に命じてかくいへり六『汝此等の言につきて、或ものをば公然にし、或ものをば祕密にすべし』と。七 今我汝に云ふ。八 わが汝に示せし徴と、汝の見し夢と、汝の聞きし説明とを心に留め置くべし。九 この後汝、人々の内より擧げられて、わが子と共に、又汝と等しき人々と共に時の終末まで殘されん。一〇 世その若き情態を失ひ、時古くならん。一二 而して今遺り居るは、第十部の半の後の二つの部なり。」一三 されば汝の家を整へよ。又わが民を誡めよ。彼等のうちの謙るものを慰めよ。〔賢き者を教へよ。〕今より後朽ちはつべき生命を棄てよ。一四 死に至る思想を去り、人の重荷を投げ棄て、汝の弱き性質を脱げ。一五 汝を苦むる此等の思想を去り、いそぎて此の時より遁れよ。一六 汝の見し、今起りたる惡しきことよりも猶惡しきこと起らん。一七 年古りて世衰へ來るにつれ、世に住む者の上に惡しきこと重り來らん。一八 眞理は益々遠ざかりて虛僞近づかん。視よ、汝の幻象の中に見し一九 我答へていふ『われ汝の御前に語らん、主よ。二〇 我往きて汝の命じ給ひし如く今の民を誡めん。されど來らんとする民を誡むる者は誰ぞ。世は暗闇に蔽はれて、その中に住む者に光なければなり。二一 汝の律法燒かれたるが故に、汝のなし給ひし御業、

汝のなさんとし給ふ御業を辨ふるものなし。二二 もしわれ汝の御前に恩惠を得なば、聖靈を我に送り給へ。我元始より世に行はれたること、即ち汝の律法に記されたることを記さん。これ人々汝の道を求めんがため、又終の時に生きんと欲する人々の生き得んがためなり。』二三 彼われに答へていふ『往きて民を集め、彼等をして四十日の間 汝を尋ねしむな。二四 汝多くの書板を備へ、汝のために速に文字を記し得るサレア、ダブリヤ、セレミア、エタノス、及びアシエルの五人を伴ひて、二五 此處に來れ。われ汝の記さんとすること終るまで、熄えざる理解の燈火をともさん。二六 汝此等のことをなし終りなば、そのうちの或ものを公然にし、或ものを聰き人々のみに祕に教ふべし。汝明日の今頃より書き記し始めよ。』二七 その時、われ命ぜられし如く、往きて凡ての民を集めて云ひぬ二八『イスラエルよ、此等の言を聽け。二九 我等の先祖たちは、さきにエジプトに於て寄寓人となれり。彼等其處より遁れて、三〇 生命の律法を受けたれど、これを守らざりき。汝等も彼等に從ひて、これを犯せり。三一 その時、一つの地、即ちシオンの地、汝等の所有として與へられたり。汝等も、汝等の先祖たちも、不義を行ひて、至高者の汝等に命ぜし道を守らざりき。三二 彼は義しき審判主なれば、暫が程、汝等より、汝らの與へたるものを取り除き給へり。三三 今汝ら此處にあり。汝等の兄弟たちも亦汝等と共に此處にあり。三四 さればもし汝等、己が悟性を統べ治め、己が心情を教へ導かば、汝等の生命保たれ、死て後にも憐憫を受けん。三五 死て後我ら再び活ん時、審判來らん。その時、義しき者の名顯れ、敬虔ならぬ者どものわざ明かにせられん。三六 されば今、誰にても、我に近寄るな。又四十日の間我を探ぬな。』三七 その時、彼の命じ給ひし如く』我五人の人を伴ひて野に往き、其處に留まれり。三八 視よ、翌日、聲われに呼はりていふ『エズラよ、口を開きてわが飲ませんとする物を飲め。』三九 われ口を開きしに、視よ、滿ちたる酒杯我に與へられたり。その滿ちたるものは水の如かりしも、色は火の如かりき。四〇 我これを受けて飲みしに、時、わが心に理解起り、わが胸の中に智慧起れり。そはわが靈、記憶を保ちたればなり。四一 わが口は開かれて、もはや閉ぢず。四二 至高者その五人の人に智慧を與へたれば、彼等未だ知らざる文字をもて、その聞かされし言を順序によりて書き記し、四十日の間 其處に坐れり。彼ら晝の間 書き記し、夜に至りて糧を喰へり。四三 我は晝の間 語りて、夜も默さざりき。四四 その四十日の間に九十四の書、書き記されたり。四五 その四十日終りたれば、至高者我にいひ給ふ『初に書き記したるものを公にし、讀むにふさはしき者にも、ふさはしからざるものにも、これを讀ませよ。四六 民のうちの聰き者のみに之を渡さんがために後の七十册を保つべし。四七 そのうちに悟性の源、智慧の泉、知識の河有ればなり。』四八 われかくなせり。

第一五章

一主いひ給ふ。汝の口にわが入れんとする預言の言を、わが民の耳に聴かしめよ。**二**此の言は眞實なれば、これを紙に認めよ。**三**民等の汝に向ひて企つる詭計を懼るな。彼等の不信仰の故に心を煩はすな。**四**すべて不信仰の者はその不信仰の中に死なん。**五**主かくいひ給ふ。視よ、われ地上に惡き事、卽ち劍と飢饉と死と滅亡とを齎さん。**六**そは不義は地上に增し加はり、彼らの害ふ業も地上に滿ち溢れたればなり。**七**されば主かくいひ給ふ。**八**今より後、不敬虔の故に彼らのなす惡しき業のために、我もはや默さじ。又彼らの不義に依りてなす惡しき業のために我もはや彼等を忍ばじ。視よ、罪なき血と義き血、我に呼ばはり、義き人の魂の聲常にわが許に上り來る。**九**主かくいひ給ふ。われ誠に彼等を審きて罪なきの血を彼等の中より受けん。**一〇**視よ、わが民、群の如く屠場に牽かれゆく。我今より後、これをエジプトの地に住ませじ。**一一**われ強き手と高き肱とをもて彼等を導き出さん。又われ初になせし如く、エジプトに罰を蒙らせ、そのすべての地を亡さん。**一二**願くはエジプトとその地の基、主の降さんとする懲戒と刑罰との故に嘆き悲まんことを。**一三**願くは彼等の種は盡き、彼等の樹は疾風と霰と懼るべき星とのために荒されて、地を耕す農夫ども嘆き悲まんことを。**一四**禍害なるかな、世とその中に住む者。**一五**劍と彼等の滅亡近づけり。民と民相鬪はんがため、手に劍を持ちて起たん。**一六**人々の間に動亂起るべし。又人々互に強くなり、その能力を恃みて、王たちをも大なる君侯たちをも無視にせん。**一七**人町に入らんとすとも入ること能はじ。**一八**高慢のために彼らの町は騷ぎ、その家は亡び、人々は懼れん。**一九**人その隣を憐まず、糧の缺乏と大なる苦惱とのために、劍をもてその隣の家を侵し、彼等の持物を奪はん。**二〇**神いひ給ふ。視よ、我地のすべての王たちを呼び集め、日の出づる處と南と東とレバノンとに住む民等を起たしめ、彼等を互に反かしめ、そのなせし事に報復をなさしめん。**二一**彼等の今日に至るまでわが選民になせしが如く、われ彼等になして、これを彼等の懷に返さん。主なる神かくいひ給ふ。**二二**わが右の手罪を犯すものを赦さじ。地の上に罪なきものの血を流す人々の故にわが劍止むことあらじ。**二三**火かれの怒より出でて燃ゆる藁の如く、地の基と罪人らとを呑み盡さん。**二四**禍害なるかな、罪を犯し、わが誡命を守らざる者よと、神いひ給ふ。**二五**われ彼らを赦さじ。墮落せる子等よ、我を離れ去れ。わが聖所を瀆すな。**二六**主己を棄つる者を知り給ふが故に、彼等を死と屠殺とに渡し給ふ。**二七**惡しき事全地に臨みて、彼等の中に止まらん。神己に對ひて罪を犯せし汝等を救ひ給はじ。**二八**視よ、懼るべき幻象、日の出づる處より現はる。**二九**アラビヤの龍の民多くの戰車を以て出で來る。その出でたつ日より叱咤の聲地上に轟く。これを聞く人皆懼れ慄かん。**三〇**怒を以て狂へるカルモニ人猪の如く出で、大なる能力をもて來る。彼等龍の民と

戰ひ、その齒をもてアツスリヤの地の一部を荒さん。三一 而して後、龍ども己が素姓を憶ひてその戰鬪に勝利を獲ん。もし彼等その大なる能力に賴りてカルモニ人を攻むる計畫を立てなば。三二 カルモニ人惱みて彼等の勢威の故に默し、身を廻らして逃去らん。三三 アツスリヤの國より隱に窺ふ者出でて彼等を圍み、その一人を倒さん、かくて彼等の軍勢の中に恐怖と戰慄起り、彼等の王たちに對して亂起らん。三四 視よ、東より又北より南に至るまで、怒と嵐とにて滿てる、見るも恐ろしき雲出でたり。三五 此等の雲互に衝突して、大なる星、卽ち己が星を地上に隕さん、その時、劍より血流れて馬の腹、三六 又人の股と駱駝の脚に及ぶべし。三七 地上には大なる懼れと慄起らん。その怒を見る人々、懼れ慄かん。三八 その後南より、北より、又西の或方角より大なる嵐起らん。三九 東よりの強き風は、東の國と御怒をもて起されし雲とを閉ぢ込めん。又東風をもて滅亡を來らせんとせし星、南と西の方に逐ひやられん。四〇 全地と、地に住む者とを亡さんがために、怒に滿ちたる強き大なる雲と星と擧げられん。彼等高く貴き者の上に、恐るべき星と、四一 火と霰と飛ぶ劍と洪水とを溢れしめん。すべての平地とすべての河とは、その水のあふれによりて荒されん。四二 彼等町と石垣と山と岡と林の樹と牧場の草と作物とを亡さん。四三 彼等その手を弛めずバビロンにまで到りて遂にこれを亡さん。四四 彼等バビロンに來り、その中を廻り、その上に星とすべての怒とを注ぎ出さん。その時埃と煙天にまで上り、すべての人その周圍に立ちて嘆かん。四五 而してその中に殘れる人々、バビロンを恐れしめたる者に仕へん。四六 アジヤよ、汝はバビロンの美麗とその榮光とを共に享けたり。四七 禍害なるかな、憐むべき者よ。汝己をバビロンの如きものとなせり。なんぢは汝の娘たちを淫行をもて飾れり。彼らは汝を愛する者、卽ち汝が常に共に淫行を行はんことを欲するものどもを喜ばせ、これを光榮とせり。四八 汝は憎むべき淫行を行ひし者の、すべての業とすべての異圖との跡を蹈めり。四九 故に神かくいひ給ふ。我汝の上に惡しき事を送らん。卽ち寡婦生活、貧窮、飢饉、劍、疫病なり。此等のものによりて汝らの家は荒れ果て、死と滅亡とに至らん。五〇 汝に送らるる暑熱の昇り來らん時、汝の能力の光榮、花の如くに萎まん。五一 汝は鞭をもて弱くせらるる賤しき女の如く、傷をもて懲しめらるる者の如くならん。されば汝、なんぢの力あるものと汝を愛する者とを受くること能はじ。五二 主かくいひ給ふ。われ豈嫉妬をもて、汝に向ひ行かんや。五三 汝常にわが選民を殺し、汝の手の鞭を喜び、酒に醉ひたる時、死者に向ひて、五四『汝の顏の美しさを返せ』といはざりしや。五五 娼婦の値なんぢの懷にあれば、汝その報を受けん。五六 主いひ給ふ。汝わが選民になせし如く、神汝に報い、汝を惡しき業に渡さん、五七 汝の子らは飢饉によりて亡び、汝は劍によりて倒れ、汝の町は毀たれ、汝のすべてのもの、野に於て劍のために倒れん。五八 山に居る者も

飢饉のために亡びん。彼らパンと水とのなきために、己等の肉を喰ひ、己等の血を飲まん。五九すべてのものに勝りて不幸なる汝は、來りて再び惡を受けん。六〇彼等過ぎ往かんとする時に、怠れる町を侵し、汝の國の一部を亡し、汝の地の榮光ある所を亡して後、再亡されたるバビロンに還り來らん。六一なんぢ彼等の前に粃糠の如くなりて、彼ら汝の前に火の如くならん。六二彼ら汝の町を呑みつくし、汝の地と汝の山と汝の林と汝の實を結ぶ樹とを火を以て焼かん。六三彼ら汝の子らを俘虜にし、汝の富を分捕物にして、汝の顔の榮を亡さん。

第一六章

一禍害なるかな、バビロン及びアジヤよ。禍害なるかな、エジプト及びスリヤよ。二麻布と毛織物とを纏ひ、汝等の子供らのために嘆き、且悲しめ。汝等の滅亡近きたればなり。三劍汝等に送られんに、これを防ぐ者は誰ぞ。四火汝等に送られんに、これを熄すものは誰ぞ。五災惡汝等に送られんに、これを防ぐ者は誰ぞ。六飢ゑたる獅子を、林の中に追ひ入るることを得べしや。粃糠を燃し始めば誰か之を熄し得んや。七弓を引く強き者の矢を、誰か返し得ん。八主なる神災惡を送り給はば、誰かこれを防ぎ得べき。九主の御怒によりて火出づ。誰かこれを熄し得んや。一〇主電光を輝し給はんに誰か懼れざらんや。主雷鳴を轟かし給はば、誰か戰かざらんや。一一主、人を脅し給はば、誰か御顔の前に千々に碎かれざらんや。主の御顔と、その御力の榮光の前に、地とその基搖り動き、海、その深處より出づる波と共に一二たちあがりて、その浪騒ぎ、その中なる魚も亦騒がん。一三弓を引く主の右の御手は強く、その放つ矢は鋭し。主その矢を地の極まで放ち給はんに、その矢一つだに的を外るることなからん。一四視よ、災惡送り出さる。地の極に達するまでは還り來らじ。一五火燃えて地の基を焼き盡すまでは熄ゆることなからん。一六弓を引く強き人の放ちたる矢の返らぬ如く、地に投げ下されたる災惡も返り來らじ。一七ああ悲しきかな、悲しきかな、その日我を救はんものは誰ぞや。一八これぞ患難の始。大なる悲嘆起らん。これぞ飢饉の始。多くの人亡びん。これぞ戰爭の始。力ある者ども懼れん。これぞ災惡の始。すべての人戰かん。此等の災惡來らん時、彼ら何をなさんとするや。一九視よ、飢饉と疫病、患難と苦痛。此等のものは、人を悔改めさせんがため、罰として來るなり。二〇此等のすべてのもののあるにも拘はらず彼等その罪を改めず、又その罰をも常に憶えざるなり。二一視よ、地上に食物增し加へられて、人々平穩なりと思ひ居る時、劍と飢饉と大なる混亂と諸の災惡地上に生ぜん。二二地に住む多くの人々は飢饉のために亡び、飢饉を遁るる者をば劍亡ぼさん。二三死人は塵芥の如く棄てられてこれを慰むるもの絶えてなからん。地は荒れ果ててその町々毀たるべければなり。二四地を耕して種を蒔く者一人も還らじ二五樹、實を結ぶとも誰かこ

れを集めん。二六葡萄熟すとも誰かこれを踐まん。すべての處に大なる荒地あるべし。二七その時、人、他人に逢はんと欲し、又他人の聲を聞かんと欲す。二八而して町の中に十人、野の中に二人殘されて、樹の繁みと岩の穴とに隱れん。二九オリブ園に於けるすべての樹に、三つ四つの實遺るが如く、三〇又葡萄摘の時に、懇に果を求むる人々樹に葡萄の房を少しく遺すが如く、三一その日に劍をもて人々の家を探ね求むる人々、僅に三人又は四人を遺さん。三二地荒れ果てて、その畑荊棘に塞がれ、その道路とそのすべての小徑には茨生え、羊その中に歩まじ。三三乙女たちは新郎を得ずして嘆き、女たちは夫を持たずして嘆き、娘たちは助くるものを得ずして嘆かん。三四新郎たちは戰に倒れ、男たちは飢饉のために亡びん。三五主の僕らよ、此等のことを聞きて辨へよ。三六視よ、これ主の御言なり。汝らこれを受けよ、主のいひ給ふことを拒むな。三七視よ、災惡近づけり、遲るることなし。孕りて既に九ヶ月に及べる女、產む時近づかば、二時又は三時前より、大なる苦痛胎内に起り、子その胎内を出づる時は、一瞬の猶餘もなきが如く、三九災惡は待つ程もなく來り、世は嘆きて種々の苦惱に圍まれん。四〇わが民よ、わが言を聽き、戰のために備せよ、この惡しき世には寄寓人の如くに地に住むべし。四一賣る者は逃ぐる人の如く、買ふ者は失はんとする人の如く、四二商人は益を受けざる者の如く、家を建つる者はその家に住まはぬものの如く、四三種を蒔く者は刈り入れざる人の如く、葡萄の樹を刈り込む者はその實を摘まざる人の如く、四四結婚する者は子を得ざる人の如く、獨身の者は寡婦の如くになるべし。四五かくの如く、働く者の働は益なし。四六他國人彼らの實を取り入れ、彼らの財産を分捕物とし、彼等の家を潰し、彼らの子供らを俘虜にせん。かくて彼等俘囚と飢饉とのうちにてその子どもらを產まん。四七商人その商賣の利を得んがために働くとも、それは分捕物とならん。彼ら益その町と家と財産と己が身とを飾らんに、四八我は彼等をその罪の故に益憎まんと主いひ給ふ。四九眞實なる善き女の、娼婦を憎むが如く、五〇義しき者は、不義その身を裝ふ時これを憎み、地上のあらゆる罪を探るものを守る者來らん時、彼の前に憚らずしてこれを責めん。五一されば汝、彼の如きものとなるな。又そのわざに倣ふな。五二やがて不義地より取り去られ、義我らの上に王とならん。五三罪人よ、我は罪を犯せしことなしといふな。神とその榮光の前に罪を犯せしことなしといふ人は、その頭の上に燃ゆる火を燃すなり。五四視よ、主は、人のすべての業とその思慮、その思想と心情とを知りたまふ。五五地造られよと主いひ給ひたれば、地造られ、天造られよと云ひ給ひたれば、天造られたり。五六その御言によりて星も造られたり。主は星の數を知り給ふ。五七主は淵とその寶とを探り、海とその中に在るものとを量り給ふ。五八主、水の中に海を閉ぢ込め、又その御言をもて地を水の上に浮かばせ給ふ。五九主は天を張りて穹蒼となし、

これを水の上に据ゑ給ひぬ。六〇主は砂漠の中に水の泉を造り、地に水灌がんがため高き山の頂に、河を流れ出でしむる湖を造り給へり。六一主、人を造り、その身體の中に心情を置き、これに呼吸と生命と知識とを與へ、六二又全能なる神の靈を與へ給へり。すべてのものを造り、隱れたる處にある隱れたるものを探り給ふものは、六三汝等の思慮と汝等の心にある思想とを知り給ふ。罪を犯してその罪を隱さんとするものは禍害なるかな。六四主は、誠に汝らのすべての業を探り、汝らを悉く辱しめ給はん。六五その時、汝らの罪人々の前に露はれて、汝等辱しめられん。又その日に汝らの罪、汝らを訴ふる者とならん。六六汝ら何を爲さんとするや、汝らいかで汝らの罪を神と御使たちとの前に隱すことを得んや。六七視よ、神は審判主なり。彼を懼れよ。汝らの罪を去り、汝等の不義を忘れ、これらのものに關はるな。さらば神なんぢらを導きてすべての患難より救ひ出し給はん。六八視よ、汝らの上に、大なる群衆の憤恚燃ゆ。彼等は汝らの中なる或者を伴ひ去り、又偶像に、ささげられしものをもて汝らを養はん。六九彼等に與する者は嘲と罵とを受け、彼等の足の下に踏みにじられん。七〇諸の所に、又次より次の町々に、主を畏るる者に對する大なる迫害起らん。七一彼ら狂へる者の如くに、今猶主を畏るるものを侵し、これを亡してその一人をだに容さざるべし。七二彼ら主を畏るる者の財産を分捕物となし、彼等をその家より追出さん。七三その時、わが選びたる者は、金の火に試みらるるが如くに試みらるべし。七四主いひ給ふ。わが選民よ、聽け。視よ、患難の日近づけり、われ汝等を救はん。七五懼るな、躊躇ふな、神は汝らの導師なり。七六主なる神いひ給ふ。わが誡命とわが法令とを守る者よ、汝等罪の下敷となるな。汝等の不義に頭を擡げしむな。七七災害なるかな、確く罪に縛がれ、不義に蔽はれたるものども。彼等は藪をもて塞がれし野の如く、茨にて蔽れし道の如し。人これを過ぎ行くこと能はず。七八それは鎖されて、火に燒き盡さるるなり。

トビト書

第一章

一ナフタリの族アシエルの裔ガバエルの子、アドエルの子、アナニエルの子、タビエルの子なるトビトの物語の書。二このトビトは、アッスリアの王シャルマネセルの時、アセルの上なるガリラヤのガデシ・ナフタリの右に位するテスベより虜へ移されたるものなり。

三われトビト、わが一生の間、眞理と正義との道を歩み、我とともにアッスリヤの地ニネベに行きしわが兄弟たち、及びわが國人に衆くの施濟をなせり。四われわが國、イスラエルの地にありて、年なほ若かりし時、わが父ナフタリの族は皆、犧牲をささげんがためにイスラエルのもろもろの族の中より選ばれたるエルサレムの家より、墮ちて去りゆけり。そのころエルサレムにはいと高き主の御住居なる宮潔められ、且萬代に亙りて建てられありき。五共に去り行きしすべての族は、牝犢バアルに犧牲を獻げ、わが父ナフタリの家もしかなせり。六されど我は永遠の誡律によりて、すべてのイスラエル人に命ぜられたる如く、初穗と收穫の十分の一と羊の初剪の毛とを携へて、祭の時、屡ひとりにてエルサレムに上り、これを祭壇に持ち行きて、アロンの子らなる祭司たちにささげたり。七われその第一の十分の一をエルサレムにて役ふるレビの子等に頒ち、次に第二の十分の一を賣りて年毎にエルサレムに赴き、そこにてこれを費せり。八又その第三の十分の一をばわが父の母デボラの命ぜし如く、定められたる人々に與へぬ。そは我、わが父に孤兒として遺されたればなり。九われ人と成りてわが親族の裔よりアンナを娶りて妻とし、彼によりてトビアを産めり。一〇我捕虜として、ニネベに運び去られし時、わが兄弟たち及びわが親戚の者どもは、異邦人のパンを食へり。一一されど我は之を食ふまじとわが身を抑へたり。一二こは我心を盡して神を憶えたるによる。一三至高者、シャルマネセルの前にて我に恩惠と寵愛とを與へ給ひければ、我遂に彼の厨人となれり。一四而して我メデアに赴き、ラゲスにて、ガブリアの兄弟ガブリエルの手に銀十タラントを預けたり。

一五シャルマネセル死にし時、その子セナケリブ代りて王位に即きしが、此の時この國道騷しくなりて、われメデアに行くこと能はざりき。一六シャルマネセルの時に、我わが兄弟たちに多くの施濟をなして、飢ゑたる人々にパンを與へ、一七裸なる人々に衣服を着せ、又わが國人の死にてニネベの石垣の外に投げられたるを見てはこれを葬れり。一八又セナケリブ王ユダヤより逃げ來りし人を殺しし時も、我これを私に葬れり。そはかれ怒に任せて多くの人を殺したればなり。その屍體王によりて探ね求められしも、遂に見出されざりき。一九その時、ニネベ人の一人行きてわがことを王に告げ、いかにわが彼等を葬りて、私に身

を隠せしかを語れり。而してわれ、死刑にせられんがために、探ね求めらるることを知りしかば、恐れて逃れたり。二〇かくてわがすべての持物奪はれ、わが妻アンナとわが子トビアとの他は一つの物だに殘らざりき。二一その後五十日を經ずして、王の二人の息子王を殺してアララテの山に逃れたり。而してその子サケルドノス彼に代りて王位に即きぬ。サケルドノスはわが兄弟アキエルの子アキアカロスを用ひてその國の會計及び他のすべての事務を司らしめたり。二二かくてアキアカロスわがために執成したれば、我ニネベに往きぬ。アキアカロスは王の酒人、王の印璽を持つ者、王の家宰、又會計を司る者なりき。サケルドノス彼を、己が次の位に任じたり。而してアキアカロスはわが兄弟の子なり。

第二章

一我わが家に歸り、わが妻アンナとわが子トビア再びわが許に來りし時、ペンテコステ即ち七週の聖祭の日に、わがために祝宴設けられたれば、われ食せんために席に就けり。二われ多くの肉を見たれば、わが子トビアにいひぬ『主を憶ゆる兄弟のうちの貧しき人を誰にても探ね出して此處に伴ひ來れ。視よ、我汝のために待つ』と。三彼歸りて云ふ『父よ、わが國人の一人締め殺されて、市場に投げ棄てらる』と。四われ何物をも食せず、直に起ちて、日の入る時までその死骸を奧の室に運び入れ、五而してわれ歸りて身を潔め、悲哀の中にわがパンを食せり。六われアモスの預言を思ひ出せり。曰く『汝等の節筵を悲傷に變らせ、汝らの歌を悉く哀哭に變らしめん』

七その時我泣きぬ。日暮れしかば我出でて墓を掘り、その死骸を葬れり。八隣の人々嘲りて言ふ『此人、この事柄に由りて死刑にせらるるを未だ恐れず。彼そのために逃れたるに、視よ、彼再び死人を葬りたり』と。九われ彼を葬りて歸りしその夜、わが身穢れたれば、顏に帕を掛けず、庭の壁ぎわに寢ねたり。一〇われその壁の上に雀居りしを知らず、目をあけ居る時、雀わが目に温き糞を落し、わが目に白き膜生じたり。われ醫者に行きしも彼等われを助け得ざりしが、アキアカロス我を養ひて、わがエリマイスに行く時までに及べり。

一一その頃わが妻アンナ婦室にて紡績をなし、作りしものをその持主に屆けしに、一二彼等その賃銀を拂ひ、猶そのほかに仔山羊をも與へたり。一三仔山羊わが家に來りし時鳴き始めたれば、我わが妻に云ふ『この仔山羊何處より來りしか、盜みたるにはあらざるか、持主に返せ、盜みたるものを食するは不法なり』一四妻答へて言ふ『それは、わが賃銀の外に、贈物として我に與へられしなり』と。されどわれ彼を信ぜざりしかば、これをその持主に返せといひて、彼を辱めたり。然るに妻答へて我に言ふ『汝の施濟と汝の義しき業とは何處にあるか。視よ、汝のすべてのわざは明なり。』

第三章

一われ嘆き悲み、泣きつつ祈りて言ふ二『主よ、汝は義しくして、汝のすべての御業、すべての道は憐憫なり、眞理なり。汝は永遠に眞にして義しき審判をもて審き給ふ。三願はくは我を憶え、我をみそなはし給へ。わが罪とわが無知、又わが先祖たちが主の御前に犯せし罪の故に我を罰し給ふ勿れ。四彼等汝の誡命に背きたれば、汝我らを略奪に遭はしめ、俘囚と死とにわたし、又我らの散らされ居る國々に於て、我等を恥辱の諺となし給へり。五今、わが罪及びわが先祖たちの罪に從ひて我に行ひ給ふ御審判は多様にして眞なり。六これ我ら汝の誡命を行はず、汝の御前に眞理をもて歩まざりしが故なり。主よ、今、汝の眼によしと見給ふところに從ひて我をあしらひ給へ。生くるよりも死ぬる方むしろわれに益なり。われ僞の非難を聞きていたく悲む。今われをわが苦惱より救ひ、永遠の場所に入れと命じ給へ。願はくは御顔をわれより背け給ふ勿れ。』

七その同じ日にメデヤのエクバタナに於て、ラグエルの娘サラその父の婢たちより辱められたり。八そはかの女七人の男に嫁ぎたれど、その夫等彼と寝る前に惡靈アスモデオス彼等を殺したればなり。その婢等かれに言ふ『汝、夫たちを締め殺したるを知らざるか。汝既に七人の夫を持ちたるも、その一人の名をだに用ひしことなし。九何故我等を鞭打つか。彼等死にたれば、汝も彼等と共に往け。願はくは、我ら、汝の息子をも娘をも永遠に見ざらんことを。』

一〇サラ此等の事を聞きて、甚しく嘆き悲み、自ら縊れんと思へり。されどかれ言ひぬ『我はわが父の一人娘なれば、もし我これをなさば、父の恥となり、彼の老年を、悲みの中に、墓に下らしめん』と。一一而して彼窓際にて神に向ひ、祈りて言ふ『讃むべきかな主よ、わが神よ、主の聖にして貴き御名は永遠に讃むべきかな。汝のすべての御業は、とこしへに汝を稱へん。一二主よ、今われわが眼を汝に注ぎ、わが顔を汝に向け奉る。一三願はくはわれ地より解き放たれて、もはやこの嘲罵を聞かざらんことを。一四主よ、汝知り給ふ。われは人に對して罪を犯せしことなし。一五またわれわが俘囚の地に於てわが名とわが父の名とを穢せしこと絶えてなし。我はわが父の一人娘にして、父には他に後を嗣ぐべき子も、近き兄弟もなく、又われを妻として偕に居るべき養子もなし。わが七人の夫は既に死ねり。われいかで生くるを得ん。我を殺すこと御心ならずば、願はくは我を顧み、われを憐み、今より後悔辱をきくことなからしめ給へ。』

一六〇さて、二人の祈、大なる神の榮光の前に聽かれ、一六〇ラファエル彼等を癒さんがために遣はされたり。即ちトビトの目より白き膜を取り除き、ラグエルの娘サラをトビトの息子トビアに妻配はせ、且かの惡鬼アスモデオスを縛らんがためなり。そはサラはトビアのものと定められたればなり。その同じ時、トビト歸りて己が家に入り、ラグエルの娘サラは己が二階座敷よ

り下り來れり。

第四章

一その日トビト、メデアのラゲスなるガバエルに預けたる金子のことを思ひ出し、二心の中にいひけるは『我は死を求めたれば、死ぬる前に、わが子トビアを呼びて、彼にこのことを示さざるべけんや』と。三かくて彼を呼びて言ふ
『子よ、我死なば我を葬れ。又汝の母を輕んずな。汝の一生の間彼を尊びて、その心に適ふことをなせ。彼を惱ますな。四子よ、汝なほ胎内にありし時、かれ汝のために多くの危難に遭ひしことを憶えよ。彼死なば、わが側に、一つ墓に葬れ。五子よ、汝の一生の間汝の主なる神を憶え、罪に心を向けず、主の誡命を犯さず、一生の間義を行ひ、不義の道を歩むな。六そは汝もし眞理を行はば、汝のなすわざ榮えん。すべて義を行ふ人々にしかあらん。七汝の持物より施濟をなせ。又施濟をなす時汝の眼を貪らしむな。汝の顏を貧しき人より背けずば、神の御顏汝より背けられざるべし。八汝の持物の量に從ひて施濟をなせ。汝の持物少くとも、その少きによりて施濟をなすことを懼るな。九かくして汝、必要の日のために自ら善き寶を貯ふるなり。一〇そは施濟は、人を死より救ひ、暗黒に陷らしむることなければなり。一一施濟はすべてこれをなす者にとりて、いと高きものの御前に善き賜物となるなり。一二子よ、すべての淫行を愼しめ。先づ汝の先祖たちの裔より妻を娶れ。汝の父の族にあらざる異邦り女を娶るな。そは我等は預言者たちの子なればなり。子よ、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブを憶えよ。古の我らの先祖たちは皆その兄弟たちより妻を娶り、その子らによりて祝福を得たり。彼等の裔は地を嗣がん。一三子よ、汝の兄弟を愛せよ。心の中に汝の兄弟たちの中より、汝の國人の息子、娘たちの中より妻を娶ることを輕しむな。輕蔑の中に滅亡と多くの患難あり。又浪費の中に、衰微と大なる窮乏あり。そは浪費は飢饉の母なればなり。一四汝のために働くものの賃銀を滯らしむな。手づからこれを渡すべし。汝神に仕へなば、報償汝に來らん。子よ、汝のすべてのわざを愼み、汝の行状に心せよ。一五汝の自ら憎むことを誰にもなすな。醉ふ程の酒を飲むな。醉ひたるまま道を行くな。一六汝の糧を飢ゑたる者に與へ、汝の衣服を裸なる者に與へよ。すべて汝の豐なるものをもて施濟をなせ。又施濟をなす時、汝の目惜み見ざるやうにせよ。一七義人の葬の時に汝の糧を注ぎ出せ。されど罪人には與ふな。一八すべての聰き人より勸告を求め、いかなる勸告にても益なるものは輕んずな。一九又常に主なる神を祝し、汝の道の直くせられんことと、汝の歩及び汝の計量の榮えんことを祈れ。いかなる民も皆計畫をもたず。されど主は自らすべての善きものを與へ、又御意のままに、おのが欲する者を卑くし給ふ。子よ、わが誡命を憶え、これを汝の心より消すな。二

〇われ今、メデアのラゲスなるガブリヤの子ガバエルに預けし銀十タラントを汝に示す。二一子よ、我ら貧しくとも懼るな。汝もし神を懼れて、凡ての惡より離れ、彼の御前に御心にかなふことをなさば、多くのものを持たん。』

第五章

一その時トビア答へて曰ふ『父よ、汝の命ぜしことは、何にてもすべてこれを行はん。二されど我この人を知らざるに、如何にしてその金子を受け取り得んや。』三トビト彼に證書を與へて曰ふ『誰か汝と共に行くべき人を探せ。我生くる間は彼に報酬を與へん。されば行きてその金子を受け取るべし。』四彼出でゆきてトビア人を探したるに、御使ラファエルを見出せり。五されどトビアこれを知らずして彼にいふ『われ汝と共にメデアのラゲスまで行くを得べきか、汝その所をよく知るか。』六御使彼にいふ『われ汝と共に往かん、われよくその道を知る。われ我等の兄弟ガバエルと共に宿したることもあり。』七トビア彼にいふ『我を待て、我わが父にこの事を告げん。』八ラファエル彼にいふ『往け、遲るな。』彼入りて父にいふ『視よ、われ、我と共に行く人を見出せり。』父いふ『彼をわが許に呼び來れ、われ彼の何族の者なるか、又彼は汝と共に行くに足る信ずべき人なるかを見ん。』九トビア彼を呼べば、彼入りて互に挨拶す。一〇トビト彼にいふ『兄弟よ、汝は何族、何家の人なるか、我に告げよ。』一一かれトビトにいふ『汝の求むるは、族なるか、家系なるか。若くは汝の子と共に往くべき雇人なるか。』トビト彼にいふ『兄弟よ、われ汝の生と汝の名とを知りたし。』一二彼いふ『我は、なんぢの兄弟たちのうちなる大アナニヤの子、アザリヤなり。』一三トビト彼にいふ『よくこそ來つれ、兄弟よ。われ汝の族と汝の家系とを尋ねたればとて怒るな。汝は優れたる善き家系より出でたる兄弟なり。われは大セメヤの子アナニヤとヨナタンとを知る。我ら共に禮拜のためにエルサレムに往きて、初子、及びわれらの收穫の十分の一を供へたることあり。彼等は我らの兄弟たちの過誤に迷ひ行かざりき。兄弟よ、汝は善き家柄より出でたり。一四されどわれ汝に幾許の賃銀を與ふべきか、我に告げよ。一日に一ドラクマ及びわが子と同じく日用のものを與へんか。』一五汝もし健全にて歸らば汝の賃銀に幾ばくかの割増を加へん。』一六かくて彼ら同意せり。その時トビト、トビアにいひぬ『旅の準備をせよ。往きて恙なく歸り來れ』と。その子旅に必要なるものを備へし時、父彼にいひけるは『この人と共に往け、願くは、天に在す神、汝らの旅路を祝し、主の御使汝等に伴はんことを』と。ここに於て彼ら二人旅立ち、若ものの犬も彼らと共に往けり。

一七然るにその母アンナ泣きてトビトにいふ『いかなれば汝我等の子を送り出せしか。彼は我等の前に、入るにも出づるにも、我らの手の杖ならずや。一八銀を銀に加へんとて貪るな。

我等の子のために安全を期すべきなり。**一九**主より我等の生活の爲に與へられたるもの、我等のために允ち足れり。』**二〇**トビト彼にいふ『姉妹よ、心を惑はすな。かれ健全にて歸らん。汝の目再び彼を見るべし。**二一**善き御使彼とともに往き、彼の旅路祝せらるべければ、彼健全にて再び歸らん。』**二二**かくてアンナ泣くことを止めたり。

第六章

一さて彼等その旅路に出で立ちけるが、夕に及びてテグリス河のほとりに達し、其處に宿れり。**二**若者身體を洗はんとて下りしに、河の中より魚跳び出でて、若者を飲まんとせり。**三**御使彼に『魚を捕へよ』といひければ、若者その魚を捕へて、地に引き揚げたり。**四**御使彼にいふ『魚をさきて、その心臟と肝臟と膽囊とを取り、これを安全に貯へ置け。』**五**若者御使の命ぜし如くなせり。されど彼等その魚を燒きて之を食せり。かくて二人の者その途に進み、エクバタナに近づけり。**六**若者御使に問ひけるは『兄弟アザリヤよ、かの魚の心臟と肝臟と膽囊とは何の用をなすか』と。**七**彼いふ『心臟と肝臟とは、もし惡鬼又は惡靈何人かを苦めなば、我らこれを、その男又は女の前に燻して煙をたて、これによりてその人の惱まされぬやうにするためなり。**八**されど膽囊は、眼に白き膜をもつ人に塗れば、その人癒されん。』**九**彼等ラゲスに近づきたるとき御使若者に言ひぬ**一〇**『兄弟よ、我ら今日ラグエルの許に宿らん。彼は汝の親戚にて、サラと云ふ一人娘あり。この娘、妻として汝に與へられんがため、我これをいひ出でん。**一一**その財産は汝の嗣ぐべきものなり。汝は彼の唯一の親戚なればなり。**一二**この少女は美しくして聰き者なり。されば我に聽け。われ、彼の父に告げん。我等ラゲスより歸りて後、婚姻の禮を行はん。われ知る。ラグエルは、モーセの律法に從ひて、その娘をば決して他の人に與へざるを。然らずば彼死に當るべき者とならん。そは、他の何人に歸するよりも、その財産は汝に歸すべきものなればなり。』**一三**その時、若者御使に言ひぬ『兄弟アザリヤよ、われ、この娘七人の男に嫁ぎしことと、其等の人々皆婚禮の室にて死にたることとを聞けり。**一四**我はわが父の一人子なれば、入りて前の人々と同じく死なんことを恐る。その女に來る人々の外は誰をも害はぬ惡鬼、この娘を愛し居るなり。されば我死にて、わが父と母との生命を、わがために悲みて墓に下らしめんことを懼る。彼等には、己等を葬るべき他の子なし。』**一五**御使彼にいふ『汝親戚の家より妻を娶るべしと汝の父の命ぜし言を憶えぬか。われに聽け、兄弟よ、この女必ず汝の妻となり、惡鬼とは何の關係なきに至らん。そはかれ今宵汝の妻となるべければなり。**一六**汝婚禮の室に入らば、炭火をとりて、その上に魚の心臟と肝臟とを燻して煙を立つべし。**一七**さらば惡鬼その臭を嗅ぎて外に逃れ、いつまでも歸り來ることなからん。汝かの女に近づく時、二人共に起ちて、

慈悲の神を呼び奉れ。かれ汝等を救ひ、汝等に慈悲を垂れ給はん。懼るな、かの女は、夙くより、汝のために備へられ居たる者なり。汝は彼を救ひ、彼は汝と共に往かん。われ想ふに汝は必ず彼によりて子を生まん。』トビア此等のことを聞きて、かの娘を愛し、その魂ひたすらかれを慕へり。

第七章

一 彼等エクバタナに來りて、ラグエルの家に赴きぬ。サラ彼等を迎へて挨拶し、彼等もまた彼に挨拶せり。かくてサラ彼等を家の中に伴ひ入れたり。**二**ラグエルその妻エデナにいひけるは『この若者、いかにわが從兄弟トビトに似たる』と。**三**ラグエル彼等に『兄弟たちよ、汝等何處より來るか』と問ひければ、彼等答へて云ふ『我等はニネベに俘虜となり居るナフタリの子らなり』**四**彼いふ『我等の兄弟トビトを知るか。』彼等答ふ『われ彼を知る』と。彼更に問ひていふ『彼は健全なりや。』**五**彼等いふ『彼猶生きて健全なり。』その時、トビアいひぬ『彼はわが父なり。』**六**ラグエル躍りあがりて彼に接吻して泣きぬ。**七**而して彼トビアを祝していへり『汝は優れたる善き人の子なり』と。ラグエルは、トビトの目盲ひたるを聞きし時、悲みて泣きぬ。**八**彼の妻エデナも、娘サラも泣きぬ。彼等喜びてその人々を欵待し、群の牡羊を屠りて、彼等の前に多くの肉を備へたり。
トビア、ラファエルに言ふ『兄弟アザリヤよ、途にて汝が語りしことを言ひて、それに結末をつけよ。』**九**ラファエルこれをラグエルに傳へたれば、ラグエル、トビアにいひぬ『食へ、飲め、樂め。**一〇**汝わが子を娶るべければなり。されどわれ汝に眞實を語らん。**一一**我わが子を七人の男に嫁がしめしに、彼等これに近づきたるその夜の中に皆死ねり。されど今は樂しめ。』トビア彼にいふ『汝等契約をなし、われと契約を結ぶまでは、我等何をも食ふまじ。』**一二**ラグエルいふ『慣習に從ひて、汝今よりかの女を娶れ。そは汝はかれの兄弟にして、かれは汝の有なればなり。憐憫の神、汝らに最も善きものを、そなへ給はん。』**一三**さて彼その娘サラを呼び、その手を取りて、彼をトビアに、妻として與へ、且いふ『今モーセの律法に從ひ、この女を娶りて、汝の父のもとに伴ひ往け。』ラグエル彼等を祝しぬ。**一四**かれ又その妻エデナを呼び、帳簿を取りて契約書を書き、これに捺印したり。**一五**かくて彼等食ひ初む。**一六**ラグエルその妻エデナを呼びていふ『姉妹よ、他の室を備へて娘を其處に伴ひ往け。』**一七**エデナ彼のいひし如くなし、娘を其處に伴ひ入りて、泣けり。娘も涙にくれければ、かれ言ひぬ。**一八**『子よ、心安かれ。天地の主、この汝の悲哀に對して、汝に喜悦を與へ給はん。心安かれ、娘よ。』

第八章

一 晩餐終りて彼等トビアをその娘の許に伴ひ往けり。**二**かれ往

きし時、ラファエルの言を思ひ出し、炭火を焚きて、その上に魚の心臟と肝臟とを載せ、燻して煙を立てたり。三 惡鬼その臭氣を嗅ぎて、エジプトのはてまで逃げゆきしが、御使かれを縛れり。四 この二人共に室内に閉ぢ籠りたる時、トビア床よりたち上りていひぬ『姉妹よ、起きよ。主我等を憐み給はんがため、我等祈らん。』五 而してトビア斯くいひ出づ『讃むべきかな、我等の先祖たちの神、願はくは汝の榮ある聖き御名の永遠に崇められんことを。願はくは天と汝の造りたまひしすべてのもの、汝を讃めたたへんことを。六 汝アダムを造りて、その妻エバを助手とし支持者として彼に與へ給へり。彼等より人の裔生れたり。汝言ひ給へり『人獨り居るは宜しからず、我等人のために彼に似たる助手を造らん』と。七 主よ、我今この姉妹を情欲のために娶らず、眞理に由りて娶るなり。願はくは我に御恩惠を降し、年老ゆるまで、彼と共に住ましめたまへ。』八 サラ彼と偕に『アァメン』といふ。九 かくて二人其夜共に眠りぬ。

ラグエル往きて墓を堀り、一〇 かつ言ふ『恐らくはこの人も死ぬるならん』と。一一 而して後ラグエル己が家に歸りて、一二 その妻エデナに言ふ『婢どもの中より一人を遣はして、彼の生き居るや否やを尋ねしめよ。もし生き居らずば、彼を葬りて、誰にもこれを知らしむな。一三 婢戸を開きて室に入り、二人の眠り居るを見しかば、一四 出でて『彼生き居る』と、彼等に告げたり。一五 その時ラグエル神を讃めたたへていへり

『讃むべきかな、神よ。汝はすべての潔く聖なる祝福をもて崇められ給はん。汝の聖徒とすべての造られたるものは汝を崇め、すべての御使と汝の選び給ひしものはとこしへに汝を崇め奉るべし。一六 汝は讃むべきかな。汝は我を喜ばしめ、わが恐れ居りしことを起らしめず、却つて、大なる憐憫をもて我等をあしらひ給へり。一七 汝は讃むべきかな。汝はその親たちの獨子なる二人のものに憐みを垂れ給へり。主よ、彼等を憐み給へ。喜悦と憐憫とをもて彼等の生命を健全に保ち給へ。』一八 ラグエルその僕等に命じて、墓を埋めしむ。一九 而してかれ、彼等のために、十四日の間婚筵を續けたり。二〇 婚筵終る前にラグエル、トビアに婚筵の十四日滿つるまでは決してそこを去るべからざることと、二一 終りて後に、その財産の半をとりて、安らかに父の許に歸るべきことを告げ、かつ『その殘餘をば、われとわが妻の死せん時に』といひぬ。

第九章

一 トビア、ラファエルを呼びて言ふ二『兄弟アザリヤよ、願はくは一人の僕と二匹の駱駝とを携へて、メデアのラゲスなるガバエルの許に往き、わがためにかの金子を受け取り、且かれを婚筵に伴ひ來れ。三 そはラグエルわれを去らしめじと誓ひたればなり。四 されどわが父日を數ふ。もしわれ遲れなば、彼いたく嘆かん。』五 ラファエル往きて、ガバエルの許に宿り、彼にその證書

を渡せしかば、ガバエル封印せられたる袋を持ち來りて之を彼に渡しぬ、六彼等朝早く旅立ちてその婚筵に來れり。かくてトビアその妻を祝したり。

第一〇章

一さてその父トビト日ごとに、指折り數へ居たりしが、旅の日數盡きたるに彼等猶歸らざりしかば、二トビト曰ひぬ『恐らくは彼等引き留められ居るならん。然らずばガバエル死にて、トビアに金子を與ふる者居らずなりしならん』と。三彼いたく嘆けり。四然るにその妻彼に言ふ『かく遲るるを見れば、わが子は死にたるなり。』而して彼その子のために泣きていひぬ五『子よ、わが目の光なる汝に先だたれて、われ何を欲せんや。』六その時トビト彼にいふ『默せ、心を煩はすな、彼は健全なり。』七その妻彼に『默せ、我を欺くな、わが子は死ねるなり』と答ふ。而して彼日毎に、彼等の行きし途に行きて、晝は糧を食はず、夜はその子トビアのために泣くことを止めず、ラグエルがトビヤを引き止めて、其處にて過せといひし婚筵の十四日盡くるまでに及びぬ。八その舅彼にいふ『我と共に留まれ。われ汝の父に使を遣して、汝のいかに暮し居るかを知らしめん』九トビヤいふ『否、我をわが父の許に去らしめよ。』一〇ラグエル起ちて彼に、その妻サラとその財産の半、僕婢、家畜、及び金銀を頒ち與へ、一一彼等を祝していひぬ『わが子らよ。天の神、わが死ぬる前に、汝等を榮えしめ給はん』と。一二而してその娘に向ひ『汝の舅と姑とを敬へ、彼等は既に汝の親となれり。我に汝の令聞を聞かしめよ』と言ひて、これに接吻せり。而してエデナ、トビアにいふ『愛する兄弟よ、願はくは天の主汝を強め、われ主の御前に喜悦を得んがために、我にわが娘サラによりて汝の子らを見ることを得しめ給はんことを。視よ、われわが娘を特に汝に委ぬ。なんぢこれを惱ますな。』

第一一章

一これらのことの後、トビア、神その旅路を守り給ひしが故に神を崇めつつ進み行きぬ。彼又ラグエルとその妻エデナとを祝せり。二彼等旅立ちてニネベに近づきし頃、ラファエル、トビアにいふ『兄弟よ、汝いかなる狀にて父と別れしかを憶えぬか。三我等汝の妻に先立ち行きて家を備へん。四されど汝の手にかの魚の膽嚢を携へよ。』彼等その道に往き、犬彼等の後に從ひぬ。五さてアンナその子の往きし道を眺めて坐し居たり。六而してその子の來るを見出したれば、彼トビアの父に云ふ『視よ、わが子と、彼と共に往きし人と歸り來れり。』七ラファエル云ふ『われ知る、トビヤよ、汝の父、目を開かん。されば汝、その目に魚の膽汁を塗れ。八彼その刺戟にて、必ず之をこすらん。さすれば白き膜落ちて彼汝を見得るに至らん。』九アンナ走り寄りてその子の首を抱き、『子よ、我汝を再び見たれば、いつにても死なん』

といひて、二人偕に泣きぬ。一〇トビト、戸の所に出でゆきて門の所に於てつまづきしが、その子、彼のもとに走りゆきて父を抱き、一一魚の膽嚢をその目に當てて『心安かれ、父よ』といふ。一二その目疼き出したれば、トビトこれを、こすりしに、白き膜目の縁よりむけ落ちて、一三かれその子を見るを得、その首を抱きたり。一四彼泣きて云ふ『讚むべきかな、神よ。汝の御名は永遠に讚むべきかな。汝のすべての聖なる御使は讚むべきかな。汝は我を鞭打ち、又我を憐み給へり。一五視よ我、わが子トビアを見る事を得たり。』その子も喜び、入りてメデアに於て遭ひたる大なる事を父に告げたり。一六トビト出でて、ニネベの門に赴き、神を崇め且喜びて、その嫁を迎へたり。トビトの歩むを見たる人々、彼が見る事を得たるによりて驚き合へり。一七神彼に憐憫を垂れ給ひたればトビト彼等の前にて感謝せり。トビトその嫁サラに近づきてこれを祝し、『よくこそ來つれ、娘よ。汝を我等に導き給ひし神は讚むべきかな、汝の父も汝の母も幸福なれ』といふ。一八かくてニネベに於ける彼のすべての兄弟たちのうちに喜悦ありき。アキアカロス及びその甥ナスバスも來りて、一九トビアの婚禮七日の間、大なる歡喜をもて續けられたり。

第一二章

一さてトビト、その子トビアを呼びてこれに云ふ『子よ、視よ、これは汝と偕に往きしかの人への報酬なり。汝は彼に猶多く與ふべきなり。』二彼云ふ『父よ、彼にわが所有の半を與ふるも我に不足なし。三そは彼われを恙なく汝の許に伴れ歸り、又わが妻をも癒し、わがためにわが金子を携へ歸り、且汝をも癒したればなり。』四老人彼に云ふ『かくなすは當然なり。』五かくて天の使を呼びて彼に云ふ『汝の持ち來りしすべての物の半を取れ。』六その時かれ密かに二人を呼びていひぬ七王の密事をかばふは良きことなれど、神の御業は榮光をもてこれを現はすべし。善をなせ、然らば惡汝を見出すことなからん。八斷食と施濟と正義との伴ふ祈は良し。少しの義は多くの不義に勝る。銀を貯ふるよりも施濟をなすは良し。九そは施濟は人を死より救ひ、すべての罪より潔むればなり。施濟及び正義を行ふものは生命に充たされん。一〇されど罪を行ふものは己が生命の敵なり。一一我汝等に何をも隱さじ、『王の密事をかばふはよきことなれど、神の御業は榮光をもてこれを現はすべし』と我いへり。一二汝と汝の嫁サラ祈りし時、われ汝等の祈の聲を聖者の御前に携へ上れり。汝死にし者を葬れる時、我また汝と共に居りたり。一三又汝食事を止め、急ぎ起ちあがりて死骸を掩ひし時、汝の善行我に隱れざりき。われ汝と共に在りたればなり。一四神汝及び汝の嫁サラを癒さんとて我を遣したまへり。一五我は聖徒の祈を備へ、かつ聖者の榮光の御前に往來する七人の聖なる天使の一人なるラファエルなり。』一六二人共に心騒ぎて地に平伏した

り。そは彼等懼れたればなり。一七御使彼等に云ふ『懼るな。平安汝等にあらん。一八永遠に神を讚めまつれ、そは我が來りしは己が意に由らず、神の、御意によればなり。されば汝ら永へに神を崇めまつれ。一九今日に至るまで我汝等に顯れたれど、何をも飲み又食ひしことなかりき。汝等は幻を見たるなり。二〇されば今神に感謝せよ。そは我を遣はし給ひしものに、我歸るべければなり。故にすべて此等の起りし事を書物に書き記せ。』二一彼等起ち上れる時、もはや彼を見ざりき。二二かくて彼等は、神の大にして不思議なる御業と、主の御使の彼等に顯れし事を言ひあらはせり。

第一三章

一さてトビト喜悦に溢れ、祈を書き記していひぬ二そは彼、人を鞭打ちて憐憫を示し給ふ。かれ人を陰府に導き下りて、再び携へ上り給ふ。その御手より逃れ得るものなし。三異邦人の前にて彼に感謝せよ、汝らイスラエルの子等よ。そは彼、我等を彼等の間に散らし給ひたればなり。四主の大なる事を示し、すべての生ける者の前にて彼を崇めよ。そは彼は我等の主にして、神は永遠に我等の父に在せばなり。五彼は、我等の不義の故に我らを鞭打ち給へど、再び我等に憐憫を施し給ひ、我等を、汝らの散らされ居るすべての民の中より、集め給はん。六若し汝等、汝らの全心、全靈をもて彼に向ひ、その御前に眞理を行はば、かれ御顔を汝等より隠し給はじ。されば汝等、かれ汝等のために何をなし給ふかを見、汝等の口を全く開きて、彼に感謝し、正義の主を祝し、永遠の王を崇めよ。我わが俘囚の地に於て彼に感謝し、且罪深き民等の中にてその御能力と稜威とを示す。歸れ、罪人らよ。主の御前に正義を行へ。彼汝等を受けて、汝等に憐憫を垂れ給ふとも、誰かよく之を知らんや。七我わが神を崇め、わが魂は天の王をほめまつり、その偉大なることを喜ばん。八願くは、すべての人に語らしめ、エルサレムにて彼に感謝を獻げしめよ。九ああエルサレムよ、聖なる都よ。彼、汝の子等の行爲の故に、汝を鞭打ち給ふとも、義しき者の子等の上に、再び憐憫を垂れ給はん。一〇善きものをもて主に感謝をささげ、永遠の王を讚めまつれ。これ、その幕屋、汝の中に、再び歡喜をもて建てられ、かれ、俘囚人たる者どもを汝の中にて喜ばしめ、不幸なる人々を、とこしへに汝の中にて、愛せんがためなり。一一多くの國民遠くより來りて、主なる神の御名に、その手にある供物、卽ち天の王への供物をささげん、萬代より萬代まで、人々汝をほめて、喜びの歌をうたはん。一二災害なるかな、汝を憎むすべての人々。されど幸福なるかな、永へに汝を愛するすべての人々。一三喜べ、いとどしく喜べ、義しき者の子等のために。そは彼等集ひ來りて義しき者の主を讚めたたふべければなり。一四ああ幸福なるかな、汝を愛する人々。彼等は汝の平和の故に樂しまん。幸福なるかな、汝のすべての鞭撻のために悲し

む人々。汝のすべての光榮を見ん時、彼等汝のために喜び、永遠に樂まん。一五わが魂よ。大なる王なる神を讚めまつれ。一六そは、エルサレムは、青玉と綠玉、及び貴き寶石をもて築かれ、その石垣と櫓と塞とは純金をもて建てらるべし。一七エルサレムの巷は綠柱石と紅玉、及びオフルの寶石を舗きつめられん。一八而してそのすべての巷は、ハレルヤを唱へ、讚美をささげていはん『汝を永遠に高め給ひし神は讚めまつるべきかな。』

第一四章

一かくてトビトその感謝を終へたり。彼その目盲しは五十八歳の時なりしが、八年の後再び見ることを得たるなり。二彼施濟をなし、益主なる神を畏れて、彼に感謝をささげたり。三さて彼、年いたく老いたれば、その子と、その子の六人の子等を呼びて、これにいひぬ『子よ、汝の子らを伴へ。視よ、我は年老いて、將にこの世を去らんとす。四子よ、メデアに往け。そは、我、預言者ヨナのニネベに對して豫言せしことを信ず。ニネベはやがて亡さるべけれど、メデヤには猶、暫の間平和あらん。又我等の兄弟ら良き地より全地の上に散らされ、エルサレムは荒れはて、その中なる神の家も燒かれて、時至るまで荒れたるままにてあらん。五されど神再び彼等を憐みて、その國に歸らしむべし。彼等そこに神の宮を建つべけれど、その世の時期滿つるまでは、その宮以前の宮の如くにはあらじ。その後彼等、俘囚より還り、光榮を以てエルサレムを建てん。又その中に在る神の宮も預言者たちのいへるが如く光榮を以て建てられん。六而してすべての民等は立ち歸りて、眞に主なる神を畏れ、彼らの偶像を葬らん。七かくてすべての國民主を祝し、主の民神を讚めまつり、主その民を高くし給はん。而して、眞理と正義とをもて主なる神を愛するすべての人々、我等の兄弟たちに憐憫を施しつつ喜ばん。八子よ、今ニネベより出でよ。そは、預言者ヨナのいひし言必ず成るべければなり。九汝律法と誡命とを守れ。又汝榮えんがために憐憫と正義とを表せ。一〇汝禮を盡して我を葬れ。又汝の母と我とを偕に葬れ。もはやニネベには住むな、子よ、アマンが己を育てしアキアカロスに何をなせしか、いかに彼を光明より暗黑に伴ひ行きしか、又彼にいかなる事をなせしかを見よ。然るにアキアカロスは救はれたれど、アマンは己が應報を受けて暗黑の中に下り行きぬ。マナセは施濟をなして、彼のために備へられたる死の罠より救はれたれど、アマンはその罠に陷りて亡びたり。一一子らよ、施濟は何をなすか、又正義は如何に救ふかを想へ。』

此等の事を言ひつつ、彼その床にて魂を渡したり。トビトその時百五十八歳なりき。トビア彼を光榮をもて葬れり。一二アンナの死ねる時、彼をもトビトと偕に葬りたり。而してトビアその妻及びその子等と偕にエクバタナなる舅ラグエルの許に至れり。一三彼も老いて崇められ、その舅と姑とを光榮をもて葬

り、彼等の遺産と、父トビトの遺産を嗣げり。一四 彼は百二十七歳の時、メデアのエクバタナに於て死ねり。一五 されど彼、その死に先立ちて、ネブカデネザル及びアメシユエロスの陥れしニネベの滅亡を聞き、死ぬる前にニネベの故に喜をなせり。

ユデト書

第一章

一 大なる都ニネベにありて、アツスリヤ人を治めしネブカデネザル治世の第十二年、エクバタナにありてメデアを治めしアルパクサドは、二 エクバタナとその周圍に、幅三キユビト長さ六キユビトの切石を用ひて石垣を築き、その高さを七十キユビト厚さを五十キユビトとなせり。三 城の門に樓を据ゑしが、その樓の高さは百キユビト、その土臺の廣さは六十キユビトなりき。四 門の高さは七十キユビト、幅四十キユビトにして、王の大軍はこの門より出陣し、歩兵はこの門を守りたり。五 其頃ネブカデネザル王は、ラガウの境なる大平野に於て、アルパクサド王と戰ひしが、六 山地に住むすべての民、ユフラテ河、テグリス河、フダスペス河沿岸のすべての民、エリミア人の王アリオクの領する平野の民等彼を迎へ、ケロドの子らの多くの民等、戰のために集り來れり。七 ここに於てアツスリアの王、ネブカデネザルは使を遣して、全ペルシヤの民、西方の民、キリキア、ダマスコ、レバノン、レバノンの彼方の地、海に沿へる地のすべての民、八 カルメル、ギレアデ、上ガリラヤ、エスドレロンの大平野、九 サマリアと其町々、ヨルダン河よりエルサレムに至る地方、ベタネ、ケロス、カデシ、エジプトの大河、タバネス、ラメセス、ゴセンの全地、一〇 タニス、メンピス、エテオピアの境に至るまでのエジプトのすべての民を召集せり。一一 然るにすべての民はアツスリアの王ネブカデネザルの命を輕んじて、戰に參加せざりき。彼等は王を恐れず、王を侮り、使者を辱めて、彼等の許より空しく歸らしめたり。一二 是に於てネブカデネザル王甚しく諸國民を怒り、その王位と王國とによりて誓ひ、キリキア、ダマスコ、シリアのすべての境の民を罰し、劍をもてモアブのすべての民アムモンの子ら、ユダヤ、エジプトを始め、二つの海の境の内なる民を鏖にすべしと定めたり。一三 王はその治世の第十七年に、アルパクサド王に對して軍を進め、これを打ち破り、アルパクサドの軍隊、騎兵及び戰車を粉碎し、一四 その町々を占領し、エクバタナに進入して、城樓を奪ひ、民家を掠奪し、繁華なる都を蹂躪り、一五 アルパクサドをラガウの山中にて捕へ、投鎗をもて刺し貫き、全くこれを滅して今日に至れり。一六 かくて王及び之に從ふ諸國の軍隊はニネベに凱旋し、百二十日の間休養し、且祝宴を催したり。

第二章

一 第十八年五月二十二日に、アツスリアの王ネブカデネザルは、その誓に從ひ、すべての地を罰すべしと宣言し、二 すべての臣下、すべての高官を呼び集めて、祕密の計畫を示し、その名指したるすべての地を罰すべしと命じたり。三 而して彼等、王の命に從はざりしすべての者を滅すべしとの敕令を發しぬ。四 會議

終りし時、アッスリア王ネブカデネザルは、その軍隊の總司令官にして王に次ぐ位に在るオロペルネスを召し、命じていへり五『全地の主なる大王かく宣ふ。視よ、汝わが前より出で立ち、力に自信ある者、歩兵十二萬人、騎兵一萬二千人を率ゐ、六王の命に服從せざりし西方の國を討て。七なんぢ彼らに命じて地と水とを獻ぜしめよ。我はわが怒を彼らに漏し、わが軍をして全地を蹂躪らしめ、これを分捕物として兵士に與へん。八かくてその屍は谷々河々に滿ち、大河は屍のために溢るるに至らん。九又彼らを虜として地の極にまで移さん。一〇されば汝、先づ行きてわがためにそのすべての沿岸を征服せよ。彼ら汝に降らば、わがために、處刑の日までこれを守れ。一一若し敵對ふものあらば憐むことなく、之を屠り、到る處に之を掠奪すべし。一二我はわが生命にかけて又わが王國の力に由りて、必ず我言を果さん。一三故に汝愼みて、汝の主の命に違ふことなく、わが汝に命ぜし如くこれを成し遂ぐべし。汝決してこれに背くべからず。』一四ここにオロペルネスその主の前より出で行きて、アッスリア軍のすべての長官、隊長、將校を集む。一五その主の命に從ひて、戰のために選びし兵は十二萬人及び騎馬の弓兵一萬二千人と數へられたり。一六彼これを戰時編制となし、一七駱駝と騾馬をもて多くの行李を運び、又糧食として無數の羊、牛、山羊を備へ、一八王の庫より多くの糧食と金とを携へたり。一九かくて彼とその全軍、ネブカデネザル王の先驅となり、その戰車、騎兵、選び出したる歩兵をもて、西方の地の面を蔽ひ盡さんとて出で行けり。二〇かくて彼と共に行きし諸國の民は蝗の如く、地の砂の如く、その數多きによりて數へ盡すこと能はざりき。二一彼らはニネベを出で、三日路してベクテレテの平野に到り、上キリキアの左手の山に近く陣營を張れり。二二かくて彼すべての軍、歩兵、騎兵、戰車を率ゐて、そこより山地に進み、二三プド及びルドを亡し、ラシスのすべての幼兒、及びケリア人の地の南の荒野に在りしイシマエル人の子らを虜にせり。二四彼又ユフラテ河を渉りてメソポタミアに入り、アアボナイ河に沿へるすべての町々を亡して海にまで到れり。二五而して彼キリキアの境を取りて、敵對ふものを殺し、アラビアの南に向へるヤペテの境にまで到れり。二六又彼ミデアンの子らを圍みて、その天幕を燒き、羊の欄を掠めたり。二七かくて彼麥刈の時に、ダマスコの平野に下りて、すべての畑を燒き、その牛羊の群を亡し、町々を掠奪し、その平野を荒し、そのすべての若者らを劍の刃にかけて殺せり。二八されば彼に對する恐怖と戰慄、海邊に住むすべての人々に、シドンとツロの人々に、スルとオキナに住む人々に、又エムナアンに住むすべての人々に臨めり。又アゾトとアシケロンに住むすべての人々もいたく彼を恐れたり。

第三章

一彼ら使者を遣し、和を講じていひけるは二『視よ、大王ネブカ

デネザルの僕なる我ら、御前に平伏す。願くは汝の目に善しと見ゆるままになし給へ。三視よ、すべての家屋、すべての土地、すべての麥畑、すべての羊、すべての牛、すべての羊の欄、御前にあれば、御意のままに用ひ給へ。四視よ、我らの町々とその住民は汝の僕なれば御意のままに爲し給へ』と。五使者らオロペルネスの許に來りて、かく宣べたり。六其時、彼とその軍隊は海岸に下り、大なる町々に哨兵を置き、條約のために彼等の中より人々を選びたり。七その周圍にあるすべての國民は、花環と舞踏と鼓とをもて彼等を迎へたり。八然るに彼は、彼らの國境を毀ち、森を切り倒したり。こは諸國の神々を亡し、諸國民をして、唯ネブカデネザル王のみを拜せしめ、すべての舌、すべての族をして彼のみを神と呼ばしめよとの命ありしに由るなり。九彼はユダヤの大山脈に對するドテアに近きエスドレロンに下り、一〇ゲバとスクトポリスとの間に陣し、一箇月の間滯在して軍隊の行李を集めたり。

第四章

一さてユダヤに住みしイスラエルの子らは、アツスリア王ネブカデネザルの總司令官オロペルネスの諸國民になせしこと、そのすべての神殿を掠奪して、全く荒れ廢れしめしことを聞けり。二されば彼ら大に恐れ、エルサレムなる神の宮につきて憂へたり。三これ彼らは、新に俘囚より歸り、ユダヤの民は近頃漸く集り、聖器と聖壇と聖堂とは、褻瀆より潔められたればなり。四故に彼らはサマリアのすべての海岸、コネ、ベテホロン、ベルマイム、エリコ、コバ、エソラ、及びサレムの谷に使を送り、五先づすべての山々の頂上を占領し、壘をその村々に築き、戰のために糧食を貯へたり。此は彼等の畑刈られて間もなければなり。六又その頃エルサレムにありし大祭司ヨアキムは、ドタイムに近き平地のエスドレロンに對するベツリア及びベトメスタイムの人々に書を送り、七彼等に山地の通路を守ることを命じたり。そは此等の通路はユダヤに入る途に當り、その途は狹く、多くとも二人竝び歩むこと能はざる程なれば、敵の近づくを容易に止め得ればなり。八イスラエルの子らは、エルサレムに住む民の長老らと共に、大祭司ヨアキムの命に從ひたり。九時にイスラエルのすべての民大なる熱心をもて神に祈り、又大なる熱心をもてその心を謙くせり。一〇彼等も、その妻も、その子らも、その家畜も、すべての寄寓者も、傭人も、金をもて買はれし僕、婢も皆その腰に麻布を纏ひぬ。一一すべての男、女、幼き者に至るまでエルサレムの住民は皆、宮の前に跪伏し、頭に灰を蒙り、主の御前に麻布を擴げ、祭壇の周圍に麻布を置き、一三聲を合せて熱心にイスラエルの神に呼はり、彼等の妻子を捕虜に、彼らの財産を滅亡に、聖所を褻瀆と嘲笑とに委せて、諸國民の喜とならしめ給ふ勿れと願へり。一三神は彼らの祈を聞き、彼らの悩を見そなはし給へり。そはユダヤ全國、及びエルサレムのすべての

民は全能の主の御前に、多くの日の間斷食したればなり。一四大祭司ヨアキムと主の御前に立つすべての祭司、又主に事ふるすべての人々は、麻布を腰に纒ひて、日々の燔祭を獻げ、又民の誓願と任意の供物を獻げたり。一五而して彼その冠に灰を蒙り、力の限り主に呼はりて、主いつまでもイスラエルの全家を顧み給はんことを願へり。

第五章

一イスラエルの子ら戰爭の準備をなし、山地の通路を塞ぎ、山々の頂を固め、平野に防備を施せしこと、アツスリア軍の總司令官オロペルネスに知られたれば、二彼大に之を怒り、モアブのすべての侯伯、アンモンのすべての大將、海岸のすべての總督を召し集めて、三彼等にいふ『カナンの子らよ、山地に住む此民は何ものぞ。その住む町々の狀とその軍隊の數、その兵士の長所、その民に君臨する王とその軍隊の大將につきて我に語れ。四又西方の民に優りて出で降らざる理由を我に告げよ』と。五アンモンの子らの長アキオルこれに答へていふ
『我主よ、願くは汝の僕の口より出づる一言を聞き給へ。我は汝に近く山地に住む此民の實情を奏聞せん。願くは僞なき僕の言を聞き給へ。六この民はカルデア人より出で、七メソポタミアに寓れり。そは彼等はカルデアの地に在りし彼らの先祖たちの神々に從ふことを好まざりし故なり。八彼等はその先祖たちの道を棄てて、天の神、卽ち彼らの知りし神を拜せしをもて、神々の目の前より逐ひ出されたれば、メソポタミアに逃れ、多くの日の間彼處に留りたり。九時に彼らの神、彼らに、その寓りし所を離れて、カナンの地に行くことを命じたれば、彼らはその地に住み、金銀家畜に富みたり。一〇然るに饑饉カナンの地に廣まりたれば、彼らエジプトに下り、其處に寓り、殖え增して大なる群衆となり、數へ盡すこと能はざる程となれり。一一是に於てエジプト王、彼らに逆ひて起ち、巧に彼らを治め、煉瓦を造る卑しきものとなし、奴隷となしたり。一二彼らその神に呼はりければ、神は不治の疫病をもてエジプトの全地を擊ち、エジプト人は遂に彼等を逐ひ出せり。一三かくて神は彼等の前に紅海を涸らし、一四彼らをシナイ山とカデシ・バルネアに導き、荒野のすべての民を逐ひ出せり。一五かく彼等はアモリ人の地に住み、ヘシボンを攻め亡し、ヨルダンを渉りて、すべての山地を占領したり。一六彼らはカナン人、ペリジ人、エブス人、シケム人、ギルガシ人らを亡して、多年その地に住めり。一七而して彼ら、その神の御前に罪を犯さざりし間は榮えたり。そは罪を憎み給ふ神、彼らと偕にありたればなり。一八然るに彼ら、神の示し給へる道を離れしかば、數多の烈しき戰によりて亡され、捕虜として他國に牽き行かれ、神の宮は地に引き倒され、その町々は敵に奪はれたり。一九されど彼らは今、その神に立ち歸り、その散らされたる地より歸り來り、聖所のあるエルサレムを占領せしが、そ

の處は荒れ廢れたれば、山地に住めり。二〇故に我主なる總督閣下よ、若し此民にして過誤をなし、その神に對して罪を犯さば、われら彼等の躓の原因を考へ上り行きて之に打ち勝たん。二一されども之に反し、この民に罪なくば、我主よ、願くは過ぎ行き給へ。恐らくは彼らの主なる神彼らを護り、彼らに味方し、我らは全地の前に耻をさらさん。』二二アキオル此らの事を言ひ終りし時、天幕の周圍に立ちしすべての民の間に呟き起り、オロペルネスの隊長らと海岸の民、及びモアブの民等彼を殺すべしと言へり。二三彼らいふ『我らはイスラエルの子らの顏を恐れず。見よ、此民は烈しき戰をなす力なし。二四さればオロペルネス閣下よ。我ら今上り行かん。彼らは汝の全軍のために飲まるべき餌食なり。』

第六章

一會議に列せる人々の騷ぎ止みし時、アッスリア軍の總司令官オロペルネス、もろもろの他國民の前にて、アキオルとモアブ人とに言ひぬ。二『アキオル及びエフライムの傭人らよ、汝誰なれば今日我らの間に預言して、彼らの神彼らを護れば我等イスラエル人の民と戰ふべからずといふや。抑もネブカデネザルの外に神とは誰ぞや。三王はその軍隊を送りて、地の面より彼らを亡さん。彼らの神は彼らを救はじ。我ら、王の僕は、一人の如くに彼らを亡さん。彼らは我らの馬の力を支へ得ざるべし。四我ら彼らを燒き拂はん。山々は彼らの血に醉ひ、田畑は屍骸にて滿ち、彼らの歩は我らの前に立たず、全く亡さるべしと、全地の主なるネブカデネザル王いひ給ふ。げに彼いひ給ふ『わが言は空しくならざるべし』と。五汝の罪の日に、此らの言を語りたるアンモンの傭人なる汝アキオルよ、エジプトより出で來りし此民にわが仇を報ゆるまでは、汝此後再びわが顏を見ざるべし。六その時、わが軍隊の劍と、我に仕ふる者の群汝の側を過ぎ、わが歸らん時、汝は殺されし者どもの間に倒れ居らん。七今わが僕汝を山地に引き歸り、坂の上の町々の一つに汝を置かん。八汝は、彼らと共に亡さるるまでは死なざるべし。九汝は汝の心の中に、彼らの捕はれざらんことを望むとも、汝の顏を伏すな。我既にこれをいへり。わが言は一つだに地に落ちざるべし。』一〇ここにオロペルネス、彼の天幕に仕ふる僕らに命じてアキオルを捕へしめ、ベツリアに引き到りて、イスラエルの子らに渡さしむ。一一僕らは彼を引きて陣營より平野に伴ひ出し、平野の國の中より山地の國に移し、ベツリアの下なる泉に來れり。一二町の人々丘の上に彼等を見たる時、武器をとりて町を出で、彼等に向はんとて丘の頂に登り、石投を用ひ得る人々は、皆彼らの登るを防ぎ、彼等に向ひて石を投げたり。一三されど彼らは、ひそかに山の麓に忍び寄り、アキオルを縛りて投げ出し、丘の麓に置きてその主の許に歸り行けり。一四イスラエル人はその町より下りて、彼の許に來り、その縛を解きてベツリアに伴れ

來り、町の有司たちに彼を渡せり。一五その頃の有司たちはシメオンの族、ミカの子オジア、ゴトニエルの子カブリ、メルキエルの子カルミなりき。一六彼等、町のすべての長老等を召び集めたるに、すべての青年たちも、婦たちも共にその會議に列し、人々の中にアキオルを立たしめ、オジアはその起りし事を尋ねしかば、一七彼答へて、オロペルネスの會議の決議と彼がアッスリアの君侯たちの中にて語りし言『及びオロペルネスがイスラエルの家に對して語りし大言を告げたり。一八是に於て、人々は平伏して神を拜し、神に呼はりて言ひぬ一九『ああ天の主なる神よ、願はくは彼らの高慢を見そなはし給へ。わが民の卑しきを憐み給へ。此の日汝に聖め別たるるものを顧み給へ。』二〇かくて彼らはアキオルを慰め、大に彼を讚め、二一オジアは之を彼の家に招待し、長老らのために饗筵を催し、終夜イスラエルの神に助を祈れり。

第七章

一翌くる日オロペルネス、その全軍と、彼の聯盟に加はりしすべての民を指揮し、ベツリアに向ひて陣營を進め、先づ山地の高き所を占領して、イスラエルの子らに戰を挑むことを命じたり。二その勇士ら其日の中に其陣營を移したりしが、その兵士の數は、歩兵十七萬人、騎兵一萬二千人、その外に軍需品と、徒歩のものの數甚だ夥しかりき。三彼らはベツリアに近き谷の泉の傍に營を張りしが、ドタイムよりベルマイムの間に廣がり、ベツリアよりエスドレロンに對するキアモンまで連りたり。四さてイスラエルの子ら、彼らの群を見し時、いたく憂へて、自各その隣人に言ひけるは、『此らの人々、地の面をなめ盡さば、高き山も谷も岡も彼らの重さに耐えざるべし』と。五斯くて各自武器を執り、篝火を樓の上に焚きて、終夜之を守りたり。六されど二日目に、オロペルネスは、そのすべての騎兵をベツリアにあるイスラエルの子らの前に列べ、七町への登路を偵察し、泉の源に來りて之を奪ひ、番兵を置き、己も亦人々と共に進みたり。八時にエサウの子らのすべての長等、モアブの民のすべての有司等、及び海に沿へる地の隊長ら來りて言へり九『願くは我らの主聽き給はんことを。汝の軍隊に一人の損害もなかるべし。一〇このイスラエルの子らは、その鎗に依り頼まずして、その住む山の高きに頼れり。この山の頂に登るは容易からざればなり。一一さればわが主よ、陣を布きて彼等と戰ひ給ふな。さすれば汝の民の一人も亡びざるべし。一二その陣に留り、汝の軍隊のすべての人を止め、唯汝の僕らをして山の麓より湧き出づる泉を、その手に收めて守らしめ給へ。一三ベツリアのすべての住民は、この泉より彼らの水を得れば、やがて渇きは彼らを殺し、彼らはその町を棄てん。我らと我らの民らは近き山の頂に登り、その上に陣を張りて之を見守り、一人も町より出づるものなからしめん。一四さらば彼ら及び彼らの妻子は、飢餓のために亡び、劍彼等に

臨む前に、彼等はその住む市街の中に仆れ臥さん。一五かくて汝は、彼らの叛きて穩に汝を迎へざりし罪に惡をもて報ゆることを得ん。』一六此らの言オロペルネスの眼とそのすべての僕らの眼によしと見えければ、かれ彼等の言の如くなすべきことを命じたり。一七さればアンモンの子らの軍勢、五千のアッスリアの子らと共に、去りて谷間に陣を張り、イスラエルの子らの水とその源なる泉とを占領せり。一八次いでエサウの子らはアンモンの子らと共にドタイムに對する山地に陣を張り、兵を分ちて南と東とに人を送り、モクムルの溪流に沿ひたるクシに近きエクレベルの彼方に到らしめ、その他のアッスリア軍は平地に營を列ねて全地の面を蔽ひ、その天幕と行李とは寄り集りて大なる群をなし、甚しく夥しき數となれり。一九此處にイスラエルの子ら主なる彼らの神に呼はれり。こはすべての敵彼らを圍み、逃るべき道の無きを見て彼らの心臆したればなり。二〇かくてアッスリアの全軍、その歩兵、戰車、及び騎兵、三十四日の間彼らを圍みたれば、ベツリアの民のすべての水瓶乏しくなれり。二一その水漕空しくなりて、彼らは一日分の水だに持たざりければ、分量を定めてこれを飮ましめたり。二二ここをもて幼き者は喪心し、婦と若者たちは渇のために喘ぎて、町の衢や門の通路に倒れ、彼らの中には最早何の力もあらざりき。二三その時すべての民オジアと町の長との所に來り集り、若者も婦も子供も、大聲もて叫び、すべての長老らに言ひぬ。二四『願くは神、我らと汝らとの間を審き給はんことを。そは汝らはアッスリアの子らと平和の言を交さざりければ、大なる災害われらに來れり。二五今われらには何らの助なし。神は彼らの手に我らを賣り、渇と滅亡とをもて、彼らの前に我らを拋ち給へり。二六されば今、彼らを呼びて、全市を、戰利品としてオロペルネスの民とその全軍とに渡せ。二七捕虜となさるる方却つて我らに益なり。われらは彼らの僕婢となりて、己が生命を存へしめん。かくて我ら、我らの嬰兒の死ぬるをまのあたりに見ず、われらの妻と子らの弱りつつ死ぬるを見ざるべし。二八我ら、汝らに向ひて、天と地と我らの先祖の主なる神とを證とせん。彼は我らの罪と我らの先祖たちの罪に從ひて、我らを罰し給へど、今日我らの言ひしが如くには爲し給はざるべし。』二九かくて集れるもの、一つとなりて泣き悲み、大聲に主なる神に呼ばはれり。三〇時にオジア彼らに告げて曰く『兄弟たちよ、勇め、我ら猶五日の間耐え忍ばん。其間に主なる我らの神は、我らに憐を垂れ給はん。彼は全く我らを棄て給はざるべし。三一若し此らの日過ぎて、なほ御助我らに來らずば、我は汝らの言に從ふべし。』三二かくて彼は人々を散らし、各自己が天幕に歸らしめぬ。彼等は己が町の石垣若くは戍樓に赴けり。又婦等と子供らを家に歸したり。かくて彼ら町の中にありて、心甚しく沈みたり。

第八章

一 其時イスラエルの子、サラサダイの子、サラミエルの子、ナタナエルの子、エリアブの子、エリフの子、アヒトブの子、ラパイムの子、ギデオンの子、アナニアの子、エルキアの子、オジエルの子、ヨセフの子、オクスの子、メラリの娘なるユデトこれを聞けり。二 その夫マナセは、同族のものにて、且血縁なりしが、大麦の刈穫の時に死たり。三 彼は畑に立ちて麥束を束ぬるものを監督し居りしが、暑熱のため頭を冒されて床に就き、ベツリアの町にて死にたりしかば、これをドタイムとバラモンとの間なる野に、その先祖たちと偕に葬れり。四 ユデトは寡婦にて、三年四ケ月家に在りしが、五 その家の屋根の上に天幕を張り、腰に麻布を纏ひ、寡婦の衣を着けたり。六 かれ寡婦となりてより、安息日の前日、安息日、新月祭の前日、新月祭、及びイスラエルの家の祭日と祝日の外は、日々斷食をなしたり。七 しかも彼はその容貌美はしく、見るに心地よかりき。夫マナセ金銀、僕婢、家畜、及び土地を彼に遺したれば、彼、それらのものをもて暮しぬ。八 彼甚しく神を畏れたれば、彼を譏るもの一人もなかりき。九 彼、人々の水に乏しきに落膽して、有司に向ひ、呟きし言を聞けり。ユデトは又オジアが人々に語りしすべての言、彼らに誓ひて、五日の後アツスリア人に町を渡さんといひし言を聞けり。一〇 ここに於て彼は、そのすべての財産を管理する侍女を遣はして、オジアと町の長老カブリとカルミを招けり。

一一 彼ら彼の許に來りければ、彼らに語りて言ひぬ『ああ汝らベツリアの民の有司たちよ、願くは我に聽け。そはなんぢらの此日民らに語りし言は正しからず。汝らは神と汝らとの間に誓を立て、此らの日の中に主汝らを助け給はずば、この町を我らの敵に渡さんと約せり。一二 汝ら誰なれば、この日神を試み、神を差置きて、人の子の間に立たんとするや。一三 もし全能の主を試みなば、汝ら決して何事をも知る能はざるべし。一四 汝らは人の心の深さを知る能はず、又人の思ふ事をすら知る能はざるに、いかですべての物を造り給ひし神を搜り、その御心を知り、御思を悟るを得ん。否わが兄弟たちよ、主なる我らの神を怒らしむな。一五 かれ五日の内に我らを助くるを欲し給はずとも、その御心のままに日毎に我らを護り、若くは我らの敵の前にて我らを亡ぼす力を持ち給ふ。一六 汝ら主なる我らの神の計畫を審くな。神は人にあらねば嚇かされ給はず、又人の子にあらねば躊ひ給ふことなし。一七 されば我ら神よりの御救を待ち望み、我らを助け給はんがため主に呼はるべし。御心に適はば主我らの聲を聞き給はん。一八 そはこの我らの代に於て、今日我らの族、家、民、及び町の中に、誰も昔の如く、手にて造れる神々を拜むものなし。一九 我らの先祖たちは、このために、劍にわたされ、掠められ、我らの敵の前に甚しく敗れたりしなり。二〇 されど我らは彼の外に他の神を知らざれば、我らは、かれの我らをも、われらの族の何人をも輕しめ給はざらんことを

望む。二二そはもし、神我らを輕しめ給はば、ユダヤ全國は荒れ廢れ、我らの聖所は掠められ、かれ我らの口より冒瀆を求め給はん。二三我ら奴隷となり居る處にて、異邦人の間に、かれ、我らの兄弟たちの殺戮と、地の俘囚と、われらの嗣業の荒廢とを我らの上に臨ましめん。かくて我らは、我らを捕虜とせる者どもの前に、躓となり、嘲笑とならん。二三我らの服役は恩惠を來さず、我らの主なる神は却つて之を屈辱に變へ給はん。二四されば兄弟たちよ、我ら模範を我らの兄弟たちに示さん。そは彼らの魂我らにかかり、聖所も、家も、祭壇も我らの上に置かれたればなり。二五我ら今、われらの先祖たちに爲し給ひし如く、我らを試み給ふ主なる我らの神に感謝せん。二六神のアブラハムに爲し給ひしこと、イサクを試み給ひしこと、スリアのメソポタミアにて母の兄弟ラバンの羊を飼ひ居りし時、ヤコブに起りしすべてのことを想ひ起すべし。二七神は彼らの心を試むるために、彼等になせし如く、火をもて我らを試み給はず、又我らに怨を復し給はざりき。されど唯、彼に近づくものを鞭ちて彼らを誡め給ふなり。』二八其時オジア答ていふ『汝の言ふ所のすべての事は善き心をもて言はるれば、汝の言に逆ひ得るものなし。二九これ汝の智慧の示されたる初の日にあらず、汝の生涯の初より、人は汝の智慧を知れり。これ汝の心根の善きに由りてなり。三〇されど人々はいたく渇き、我らを強ひてかく語らしめ、我らを誓はしめたれば、我らはその誓を破ること能はず。三一されば今、我らのために祈れ。汝は敬虔なる婦なれば、主は我らに雨を送りて我らの水瓶を滿たし、我らは再び落膽せざるに至らん。』三二その時ユデトいひけるは『願くは我に聽け。我は我民の子らが、後の世まで傳ふべき一の事を爲さん。三三汝ら今宵、門に立て。我わが侍女と偕に出で行かん。汝らがこの町を敵の手にわたすべしと約せし日限の中に、主は我手によりてイスラエルを顧み給はん。三四されどわがなす業を問ふな。これを爲し遂ぐるまではわれこれを告げじ。』三五其時オジアと長たち、彼にいへり『願くは安らかに行け。主なる神汝に先ち行きて、我らの敵に怨を復ひ給はん。』三六かくて彼ら天幕より歸り、各自己が所に行けり。

第九章

一ユデト卽ち跪伏し、頭に灰を蒙り、着たる麻布を脱ぎぬ。それは夕の香を、エルサレムなる主の家に獻げ居る時なりければ、大聲に呼はりて言へり二『ああ我父シメオンの主なる神よ、處女を汚さんとてその帶を解き、腿を露はして辱しめ、胎を汚して耻を與へし異國人に主は怨を報い給へり。そは然すべからずと汝の告げ給ひしことを彼ら犯したればなり。三されば汝、その有司たちを死にわたし、その欺によりて汚せし床を血に染め、その君侯たちを僕らと共に撃ち、その君侯たちを座の上に殺し給へり。四又その妻らを掠められしめ、その娘らを虜となし、そのす

べての分捕物を汝の愛し給ふ子らに頒ち給へり。彼等は汝の熱心をもて動かされ、彼らの血の汚を憎み、汝に呼はりて御助を乞へり。ああ神よ、我神よ、願くは、寡婦なるわが願をも聽き給へ。五 汝は唯此等の事を爲し給ひしのみならず、前にありしことと、それに續きて起りし事とを爲し給へり。又汝は今あるものと後あらんものとを企て給ふに、汝の企て給ふものは皆出で來るなり。六 然り、汝の定め給ひし事どもは御前に立ちていふ『視よ、われ此處に在り』と。そは汝のすべての道は備へられ、汝の裁斷は豫め知らるればなり。七 視よ、アッスリア人はその力を增し、その馬と騎兵との故に心傲り、その步兵の力を誇り、楯、鎗、弓、石投に依り頼む。彼等は、汝は戰を破り給ふ主にて在すことを知らざるなり。『主』は汝の御名なり。八 汝の御力にて彼らの力を打ち碎き、汝の御怒をもて彼らの兵力を弱め給へ、そは彼らは主の聖所を瀆し、主の榮光の御名を置き給ふ幕屋を犯し、劍をもて主の祭壇の角を斬り倒さんとすればなり。九 彼等の傲慢を見そなはし、汝の御怒を彼等の上に遣り給へ。寡婦なるわが手に、わが思ふ力を與へ給へ。一〇 わが唇の巧によりてその僕をばその君と共に、その君をば僕と共に擊ち給へ。婦の手もて彼らの威嚴を碎き給へ。一一 そは汝の御力は多人數の中になく、又強き人の中になし。汝は惱む者の神、虐げらるる者の助主、弱きものの支主、漂泊人の護主、望なき者の救主にて在し給ふ。一二 さなり、さなり、ああわが父の神、イスラエルの嗣業の神、天地の主、すべての水の創造主、あらゆる造られしものの王よ。わが祈を聽き給へ。一三 願くはわが言と欺とを、彼らの傷となし、穽となし給へ。彼らは汝の契約、汝の聖め給ひし家、シオンの頂、汝の子らのものなる家に逆ひて殘虐を企つるなり。一四 願くは、すべての國民と汝の族をして、汝の神に在すこと、卽ち全能の神に在して、汝の外にイスラエルの民を護り給ふものなきことを知らしめ給へ。』

第一〇章

一 さて彼はイスラエルの神に呼はることを止め、此らの言を終りし時、二 そのひれ伏したる所に起ち上り、
その婢を呼びて、安息日及び祭日を過せる家に歸り、三 その纏ひたりし麻布を解き、寡婦服を脫ぎ、水をもてその身を洗ひ、いと貴き香油を塗り、髮を編み、髮飾を着け、夫マナセの生き居りし時纏ひし喜びの衣を着けたり。四 かつその足に靴をはき、腕輪、鎖、指環、耳輪など、あらゆる飾を身につけ、彼を見るすべての人々の目を惑はさんと、思ふままに化粧せり。五 而してその婢に葡萄酒の革壺と油の瓶を與へ、炒麥と無花果の塊、いと良きパンをもて嚢を滿し、そのすべての容器を共に包みて、彼に負はせたり。六 かくて彼等ベツリアの町の門に至りしに、オジアと町の長老なるカブリとカルミそこに立てるを見出せり。七 然るに彼ら、彼の容貌變り、衣服更りて、その甚だ美しきを見て、

驚き言ひぬ八『我らの先祖たちの神、願くは汝に恩惠を垂れ給はんことを。願くは汝の企圖を成し遂げしめ給ひて、イスラエルの子らの榮となし、エルサレムの譽と爲し給はんことを』と。かくて彼ら神を拜せり。九かれ彼らにいひけるは『願くは町の門をわがために開きて、出で行かしめ、汝の我に告げし事を成し遂げしめよ』と。かくて彼ら若者に、かの女の言ひし如く門を開けと命じければ、一〇彼らこれを開きたり。

ユデトはその婢と共に出で行きしが、町の人々は彼を見送り、その山を降り、谷を過ぎて姿の見えずなるまでに至れり。一一彼ら眞直に谷を越えて進みしかば、アッスリア人の哨兵彼に會へり。一二彼ら彼を捕へて、『何の民ぞ、何處より來りしぞ、何處へ行くぞ』と問ひしかば、彼答へて、『我はヘブルの婦女にて、彼らより逃れたり。そは彼らは汝らに與へられて亡ぼさるべければなり。一三我は汝の軍の總司令官オロペルネスの前に眞の事を告げ、彼の進みて一人の兵をも害ふことなく、すべての山地を平ぐべき道を彼に示さんとて來れり』一四人々彼の言を聞き、又容貌を見て、その美さに驚き、之にいへり一五『汝は、我らの主の御前に急ぎ來りて汝の生命を救へり。今彼の天幕に來れ。我ら汝を導きて、汝を彼の手にわたさん。一六汝彼の前に立つ時、汝の心に恐るることなく、憚らず汝の言を述べよ。さらばかれ、汝を正しくあしらふべし。』一七彼ら百人の兵を選びて、彼とその婢とを守り、オロペルネスの天幕に送れり。一八その時、人々全陣營より集り來れり。彼の來りしこと營の中に聞えたればなり。彼らオロペルネスに己のことを告ぐるまで、彼はその天幕の外に立ち居りしに、人々出で來りて、彼の周圍に集れり。一九彼ら皆その美さに驚き、彼の故にイスラエルの子らに驚き、各自その隣に語りていふ『誰か、かかる婦を持てるこの民を侮るを得ん。彼らの一人だも殘すべからず。恐らくは全地を欺かん。』二〇オロペルネスの近臣とそのすべての僕ら出で行きて、彼を天幕に伴ひ入れたり。二一その時オロペルネスは天蓋にて蔽はれたる

彼の床にありしが其床は紫と金と碧玉と貴き寶石とにて造られたり。二二彼ら彼の女の事を彼に告げたれば、かれ銀の燭臺を先き立てて天幕の前の空地に出で來れり。二三ユデト、彼とその僕らの前に來りし時、彼等皆その容貌の美きに驚けり。ユデト跪伏して彼を拜せしが、彼の僕らはこれを起たしめたり。

第一一章

一その時オロペルネス、ユデトに言ひけるは『婦よ、心安かれ、恐るな。我は全地の王なるネブカデネザルに仕へんと欲せる者を害せず。二もし、山地に住む汝の民我を侮らざりしならば、われ彼らに對して鋒を擧げざりしならん。されど彼らは自ら此らの事をなせり。三されば今、何故汝は彼らより逃れて我らに來りしかを語れ。汝は己を救はんがため來れり。安んぜよ、汝は

今宵よりいつまでも生くるを得ん、四誰も汝を害はじ。わが主ネブカデネザル王の僕らに爲す如く、われ汝に良きもてなしをなさん。』五その時ユデト彼に答へていふ『請ふ汝の僕の言を受け、汝の婢に御前にて語らしめ給へ。我は此夜わが主に虚僞を語らじ。六汝若し汝の婢の言に從ひ給はば、神は汝の企て給ふ事を成し遂げしめ給はん。かくてわが主決してその企を仕損じ給ふまじ。七全地の王ネブカデネザルの活き給ふ如く、またその力の活くる如く、彼はすべての活けるものを支へんために汝を遣はし給ひたれば、啻に汝によりて彼に仕ふる人々のみならず、野の獸、家畜、空の鳥も亦ネブカデネザルとその全家の力によりて生きん。八そは我ら、汝の智慧と汝の魂の賢き謀略とを聞けり。全王國中にて汝のみ勇氣あり、知識に秀で、又戰の業に優れたること全地に言ひ傳へらる。九さてアキオルの汝の會議に於て述べしことにつきて、我らその言を聞けり。そはベツリアの人彼を救ひ、彼はその汝に語りしすべてのことを彼らに告げたればなり。一〇されば主よ、能はざる所なき主よ、彼の言をなほざりにせず、これを汝の心に保ち給へ。その言は眞なり。そはわが民は神に對して罪を犯すにあらずば罰せらるることなく、又劍彼らを仆すことなし。一一されど今、わが主敗れ給ふことなく、又その企圖空うせらるることなくして、死彼らの上に降らんがため、彼らの罪は彼らに打ち勝ちぬ。彼らこれによりて惡を行ふ時は、いつにても神の御怒を招くべし。一二彼等の食糧は盡き、その水乏しくなりたれば、彼ら議りて家畜を殺さんとし、神その律法をもて食ふべからずと禁じ給ひしすべてのものを食はんとせり、一三又エルサレムにて神の御前に仕ふる祭司たちのために聖め別ちて貯へ置ける穀物の初穗、葡萄酒と油の十分の一を食せんと決心したり。これらのものは、民らの手を觸るべからざるものなりしなり。一四彼ら使をエルサレムに遣はして、議會より許可を受けしめんとせり。そは彼處に住む人々もかくなしたればなり。一五されば誰か彼らに返言を傳へなば、彼ら之を行ひ、その日の中に汝にわたされて滅び失すべし。一六汝の婢はすべて此等の事を知れば、彼らの前より逃れ來れり。而して神、汝と共に事を爲さしめんがために我を遣はし給へり。全地は驚き、之を聞くもの皆驚かん。一七汝の僕は信心深く、日夜天の神に仕ふ。されば我主よ、われ汝と共に居り、夜は谷に出行きて神に祈らん。さらばかれ彼らの罪を犯せし時を我に示し給はん。一八我は歸りて之を汝に告げ、汝すべての軍勢を繰り出し給はば、彼らの中誰も汝を防ぐものなからん。一九われ汝を導きてユダヤの中を通り、エルサレムに到り、汝の位を其中に立てん。而して汝は彼らを牧ふものなき羊の如く追ひ出さん。一匹の犬も汝に向ひて口を開かざるべし。此らのことはわが先見によりてわれに示され、われは之を汝に語らんがために遣されたり。』二〇その時、この言オロペルネスとその僕らを喜ばしめ、かれらその智慧に驚きて言へり二一

『地のこの極より彼の極に到るも、かかる容貌美しく、その言智慧に滿てる婦はあらじ。』二二オロペルネスも亦彼の女に言ひぬ『神よく、我が手に入るべき民、わが主を輕しむる彼らの上に滅亡來らぬ前に、汝を我に遣し給へり。二三汝は容貌美しく、言に智慧あり。汝眞にその言の如くに爲さば、汝の神はわが神たるべく、汝はネブカデネザル王の家に住み、その譽は全地に廣まらん。』

第一二章

一其時彼、命じてかの女を、銀の器の置かるる室に伴れ來らしめ、僕らに、かれの爲めに食物を備へ、葡萄酒を與ふることを命じたり。二ユデトいひけるは『我は其を食はじ。恐くは躓を來らさん。われはわが携ふるものをもて我がために食物を作るべし』と。三オロペルネス彼にいふ『若し汝の食物盡きなば、我ら如何にして同じものを汝に與ふべきか、此處には汝の民一人もあらぬなり。』四ユデト彼にいふ『我主よ、汝の魂は活く。汝の婢は其らのものを費し盡さざる前に、主は我手によりてその定めたることを爲し給はん。』五其時オロペルネスの僕ら彼を天幕に伴れ來れり。かれ夜半まで眠り、曉の鐘の前に起き出でて、六オロペルネスに使を遣はし『わが主よ、人々に命じて、汝の婢を祈のために出で行かしめ給へ』といひぬ。七さればオロペルネスその衞兵に、彼を止むなと命じたり。かくてユデトは三日の間陣營に宿り、夜毎にベツリアの谷に出で行き、陣營の傍なる泉に身を洗ひ、八主なるイスラエルの神に、その民の子らを高めんがために道を示し給はんことを求めたり。九かれ身を潔めて天幕に歸り、夕食終るまで留まれり。一〇第四日に及びて、オロペルネスその近臣のために祝宴を催せしが、將校らをばこれに招かざりき。一一其時彼その家司なる宦官バゴアスに曰けるは『行きて汝と共に在るヘブルの婦を説き勸め、來りて我らと共に飲食せしめよ。一二視よ、若し我らかかる婦人をして我らに侍ることなく去らしめば、我らの恥とならん。もし我ら彼の女を招かずば、却つてかれに罵り笑はれん』と。一三此處にバゴアス、オロペルネスの前より出で行きて、かの女に來り曰けるは『この美しき乙女よ、恐るな。わが主の許に來り、その御前に崇められ、葡萄酒を飲みて我らと共に樂み、この日ネブカデネザル王に仕ふるアツスリアの娘らの一人の如くなれ』一四ユデト彼に曰ふ『われ誰なればとてわが主に逆はん。彼のよしと見給ふことは、速かにこれを爲さん。これわが一生の喜とならん。』一五かくてかれ起ちて、その晴衣と婦の飾を悉く身に纒へり。その婢行きて、オロペルネスの前に彼の女の座を設け、羊の毛皮をそこに敷きたり。この毛皮は、彼が敷きて坐し、且食するための、日毎の用にとて、バゴアスより受けしものなり。一六さてユデト入りて坐せしに、オロペルネスの心蕩け、その魂動かされて、かれの偕に居ることを甚しく願へり。彼は初めてかの女を

見し日より、機あらば之を誘はんと待ち構へ居たりしなり。一七オロペルネス彼にいふ『飲みて我らと共に樂め』と。一八ユデト答ふ『わが主よ、われ今飲まん。そはわが生命、この日、わが生れしより以來の、全ての日に優りて、わが中に崇めらるればなり。』一九かくて彼はその婢の作りしものを取りて食ひ且飲めり。二〇オロペルネス彼によりていたく喜び、生れしより以來、何の日に飲みしよりも多くの酒を飲みたり。』

第一三章

一夕になりたれば、僕らは急ぎ退き、バゴアスは天幕の戸を閉ぢて侍者らをその主の前より退けぬ。彼等皆行きてその床に入れり。そは饗宴長びきて、彼ら皆疲れたればなり。二ユデト獨り天幕に殘り、オロペルネスはその床に醉ひ伏したり。三ユデトはその婢に、その寢室の外に立ちて、彼の常の如く出で來るを待つべしと命じたり。そはかれ祈禱のため出で行くべしといひ、且之をバゴアスにも告げたればなり。四さればすべてのもの出で行き、小なるも大なるも、一人として寢室に留まるものなかりき。その時ユデト床の傍に立ちて、心の中に祈り言ひけるは、『ああ全能の主なる神よ、願くは今、此時、エルサレムの譽のために、我手の業を見そなはし給へ。五今こそ汝の嗣業を助くべき時、我らに逆ひて起つ敵を滅さんがため、わが企圖を果すべき時なれ』と。六かくて彼は、オロペルネスの頭の方なる寢臺の柱に來りて彼の劍を取り、七寢臺に近づき、その頭髮を捕へて言ひぬ、『ああイスラエルの神よ、今、この時、我を強め給へ』と。八而してかれ、力の限り彼の頸を、二度撃ちたれば、その頭彼より離れ、九その身體寢臺の下に轉び倒れて、天蓋を柱より引き落したり。やがて彼出でて、オロペルネスの首を婢にわたしぬ。一〇婢は之をその食物の嚢に入れ、二人は常の如く祈禱のために出で行きぬ。かくて彼等陣營を過ぎ、谷を廻り、ベツリアの山を登りて、町の門に來れり。一一ユデトは遠くより、門の番兵どもにいひぬ『開け、門を開け、神、我らの神は、我らと偕に在し、この日なし給ひしことによりて、その御力をイスラエルの中に、又その強さを敵に向ひて彰はし給へり。』一二町の人々彼の聲を聞き、急ぎ門に下り來りて、町の長老たちを呼び集めたり。一三彼ら、小なるも大なるも、共に走り出でぬ。そは彼らユデトの歸り來りしを訝りたればなり。彼ら門を開きて、彼らを迎へ、光のために火を焚きてその周圍を取りかこみぬ。一四その時かれ聲を張りあげて彼らにいひぬ『讚めまつれ、神を讚めまつれ、イスラエルの家よりその憐憫を取り去らず、此夜わが手によりて、我らの敵を滅し給へる神を讚めまつれ。』一五かれ嚢より首を取り出し、彼らに示していひけるは『看よ、アツスリアの軍の總司令官なるオロペルネスの首を。看よ、彼が醉ひ臥したる天蓋を。主は婦女の手によりて彼を撃ち給へり。一六主活き給へば、わが行く道にて我を守り給へり。わが容貌彼を欺き、彼

を滅ぼしたれど、彼は我を汚し、我を辱めて罪を犯すこと能はざりき。』一七其時すべての民いたく驚き、跪伏して神を拜し、一つとなりていへり『讃むべきかな、我等の神、汝は此の日、汝の民の敵を空しくし給へり。』一八オジア彼にいひけるは『讃むべきかな、娘よ、汝は至高神の御前にて、地のすべての婦女たちの上にあり。讃むべきかな、汝を導きて我らの敵の長の頭を撃たしめ給へる天地の造主、われらの主なる神。一九そは、なんぢの希望は、永遠に神の御力を憶ゆる人々の心より失せ去るまじ。二〇かくて神此らのことを汝の永遠の讃となし、善き事をもて汝に報い給はん。そは汝、わが民の患難のために、その生命をも惜まず、我らの神の御前に眞直なる道を歩みて、我らの敗に仇を返したればなり。』すべての民ら『實に然り、實に然り』といへり。

第一四章

一其時ユデト彼らに言ひけるは『我兄弟よ、今我に聽き、この首をとり、石垣の櫓にかけよ。二又朝となりて、日の地上にあらはるるや否や、汝ら悉くその武器をとり、すべての勇士は町を出で、大將を立て、アツスリアの子らの哨兵を襲はんがため、野に降り行くばかりになし、しかも降り行かずに居れ。三アツスリア人らは、その甲冑を着けて陣營に行き、その隊長らを起し、オロペルネスの天幕に走り行き、その居らぬを見ば、恐怖彼らを襲ひ、彼ら、汝らの前より遁げ去らん。四その時、汝らとイスラエルのすべての境に住むものとは彼らを追ひ、彼らを倒すべし。五されど汝ら此等の事を爲す前に、まづアンモン人アキオルをわが許に呼び寄せよ。これは彼、イスラエルの家を侮りしもの、又殺さん許りとなして彼を我らに送りし者を、見且知らんがためなり。』六此處に彼等オジアの家よりアキオルを呼び出しけるに、彼來りてオロペルネスの首の、集れる人々の中の一人の手にあるを見て、その面を伏せ、倒れて氣を喪へり。七彼ら、かれを蘇生らしめし時、彼はユデトの足下にひれ伏し、之を崇めていひぬ『汝はユダのすべての天幕の中に、又もろもろの國人の中に祝せられん。汝の名を聞くものは皆驚くべし。八されば汝が此らの日に爲せしことを我に語れ』と。その時ユデト民の中にて、己がなせしすべての事を彼に告げ、その出で行きし日より彼らに語りし時までの事を示せり。九彼の語り終へし時、民ら大聲に叫び、全市は喜びの聲を擧げたり。一〇アキオルはイスラエルの神が爲し給ひしすべての事を見て、深く神を信じ、その陽の皮に割禮を施し、イスラエルの家に結び付きたり。一一朝の來るや否や、石垣の上にオロペルネスの首をかけ、すべての人武器を執り、隊を組みて、山の登路に出で行けり。一二アツスリアの子等之を見し時、その班長等に使者を送れり。而して班長等はその隊長等及び千卒長等の許に、またすべての指揮官等の許に來れり。一三かくて彼らオロペルネスの天幕に到り、その執事に語りて言ふ『我等の主を醒ませ。奴隸ども全滅せられんとて、大膽に

も下り來りて、我らに戰を挑むなり。』一四バゴアス入りて天幕の戸を叩けり。そは彼、オロペルネスはユデトとともに睡れりと思ひたればなり。一五答あらざれば、彼戸を開きて寢室に入りしに、オロペルネスは死にて床に投げ出され、その頭は取り去られありき。一六彼大聲に泣き叫び、呻き悲みてその衣をさき、一七ユデトの宿りし天幕に入りしに、彼女を見ざりしかば、走り出でて人々を呼び、叫びていひぬ一八『此らの奴隷どもたばかりを爲し、ヘブルの婦女恥をネブカデネザル王の家に與へたり。そは視よ、オロペルネスは首を失ひて地に横はり居る』と。一九アッスリア人の隊長ら此らの言を聞きし時、その上衣を裂き、彼らの心大に怕惑ひ、陣營悉く泣き悲みて大なる響をなせり。

第一五章

一天幕に居りしものども此らの事を聞きし時、その出來事に驚けり。二かくて恐怖と戰慄彼らに臨み、一人もその隣人の前に止り得るものなく、皆共に走り出でて、平地及び山地のあらゆる路に逃れたり。三又ベツリアの周圍の山地に陣を布きしものらは、皆逃げ去れり。ここに於てイスラエルの子ら、彼らの中にて戰士たりしものは悉く、敵に向ひて走りかかれり。四其時オジア使をベトマスタイム、ベバイ、コパイ、コラ、及びイスラエルのすべての境に遣して、その爲されし事を告げ、又敵を逐ひかけて亡ぼすべきことを傳へたり。五イスラエルの子ら之を聞きて、一齊に敵に逐ひかかり、彼らを殺してコバイにまで到れり。エルサレムの人々及び山地の人々も同じく來れり。（人々彼らに敵の陣營に起りしことを語りたればなり。）又ギレアデ及ひ［び］ガリラヤの人々も敵の側面に迫りて、大に彼らを殺し、ダマスコを過ぎて其境にまで到れり。六殘りてベツリアにありしものは、アッスリア人の陣營を襲ひ、之を掠奪して甚しく富みたり。七殺戮を終へて歸りしイスラエルの子らは、殘りしものを得、山地及び平地の町々も得る所甚多かりき。八其時大祭司ヨアキム及びエルサレムに住むイスラエルの子らの長老たち、神のイスラエルに彰はし給ひし恩惠を見んがため、又ユデトを見てこれに挨拶せんがために出で來れり。九彼らユデトの許に來りし時、一つとなりて彼を祝し、且言ひぬ『汝はエルサレムの誇、イスラエルの大なる榮なり。げに汝こそわが國人の大なる喜びなれ。一〇汝は汝の手によりて、すべて此らの事を爲し、イスラエルに善き事を爲せり。神は之を喜び給ふ。全能の主と共に、汝は永久に譽むべきかな』と。すべての民これに和して、『眞に然り』といへり。一一民ら三十日の間陣營を掠め、ユデトにオロペルネスの天幕、そのすべての金銀の器、寢臺、容器、すべての家財を與へしかば、彼は之を取りて、その騾馬に載せ、又その荷車を備へてこれに載せたり。一二その時イスラエルのすべての婦女たち彼を見んとて共に走り來り、彼を祝し、彼の爲に踊れり。ユデトは手に樹の枝をとり、彼と共に居りし婦たちに之

を與へたり。一三彼も彼と共にありしものも、自らオリブの冠を作り、彼は先頭に立ちて踊りつつすべての婦たちを導き、イスラエルのすべての男たちは武具を着けしまま冠をいただき、口に歌を唱ひつつ従へり。

第一六章

一其時ユデトこの感謝の歌を、全てのイスラエルの中に歌ひ、すべての民らは聲高らかにこの讃歌を歌へり。二ユデト言ふ『わが神に向ひ鼓をもて歌ひ始め、わが主に向ひ鐃鈸をもて歌へ。彼に向ひ詩と讃美との調をなせ。彼を崇め、その御名を呼びまつれ。三主は戰を破り給ふ神なり。そはその軍の中にて、民らの眞中にて、われを逐ひ苦むるものの手より、我を助け出し給へり。四アツスリアは北より、山を出でて來り、十萬の軍勢を率ひ、その群は急湍を堰き止め、その騎馬は丘を蔽へり。五彼は、わが境を焼き盡し、わが若者を劍をもて殺し、乳呑兒を地に抛ち、幼きものを蹂躪り、わが處女らを分捕物とせんと言へり。六されど全能の主は、一人の婦女の手によりて、彼らの望を奪ひ給へり。七彼らの強き者、若者らの手によりて倒れしにもあらず。テイタンの子ら彼を撃ちしにもあらず。巨人等彼を壓へしにもあらず。メラリの娘なるユデト、その容貌の美しきをもて彼を弱めたるなり。八彼はイスラエルの虐げらるるものを上げんために、寡婦の衣を脱ぎ、顔に香油を塗り、髪に飾をつけ、彼を欺かんとて、身に麻の薄衣を纏ひぬ。九その靴は彼の目を迷はし、その美しさは彼の魂を虜にし、劍終に彼の首を刺し通したり。一〇ペルシヤ人はその勇氣に慄ひ戰き、メデア人はその膽力に驚きぬ。一一その時、わが卑き者ども聲高く叫び、わが弱き者ども恐れて地に伏したり。彼らその聲を揚げて逃れ行けり。一二乙女の子ら彼らを刺し貫き、逃ぐる者の子らの如くに彼らを傷けぬ。彼らはわが主の戰によりて亡びたり。一三我はわが主に新しき歌を歌はん。ああ主よ、汝は大にして稜威あり、その御力に敵し得るものなし。一四願くは、すべての造られしものを汝に仕へしめ給へ。そは汝言ひ給へば、彼らは造られ、汝その靈を出し給へば、彼らは建てられたり。汝の御聲を拒むもの一人だになし。一五山々は水のために、その基より動き、岩も汝の御前には蠟の如くに熔けん。されど汝は、汝を懼るるものに憐憫を垂れ給ふ。一六すべての犧牲もかぐはしき香とはならず、すべての肥えたるものも汝の燔祭とするに足らず、唯主を恐るるもののみ永遠に大なり。一七災害なるかな、わが族に逆ひて起り立つ國民ら。全能の主は、審判の日に彼らに讐を返し、彼らの肉に火と蟲とを加へ給はん。彼らは永遠に苦み泣くべし。』一八さて彼らエルサレムに入りし時、神を拜せり。民らは、潔められし後、全き燔祭と任意の供物、及び禮物を獻げたり。一九ユデトも亦、民らの與へしオロペルネスの全ての家財を獻げ、彼がその寢臺より取りたる天蓋を、供物として主に獻げたり。二〇民らエ

ルサレムにて、聖所の前に、三月の間饗筵をつづけ、ユデトも彼らと共に留れり。二一その後人々その嗣業の地に歸り、ユデトはベツリアに赴きて、その所有物にて暮し、その時代に、全國に尊ばれたり。二二多くの人、彼を娶らんと欲せしも、その夫マナセの死にて、その民に加はりし後、かの女の一生の間、かれを知れる男誰もなかりき。二三彼は益人々に尊ばれ、その夫の家にて、年老い、百五歳となり、その婢に暇を與へぬ。かれベツリアにて死にしかば、人々彼をその夫マナセの墓に葬れり。二四イスラエルの家七日の間、彼のために喪に服したり。かれ死ぬる前に、その所有物を夫マナセの近親のものと、己が近親のものとに頒ちたり。二五かくてイスラエルの子らを恐れしめしもの、ユデトの日にも、その死後にも、永くあらざりき。

エステル書残篇

第一〇章

四その時モルデカイいひぬ『神此等の事を爲し給へり。五我は此等の事に、關る夢を憶ゆ。その一つだに空しくなれるものなし。六河となれる小き泉ありて、そこに光あり、日あり、又多くの水ありき。この河は、王の娶りて后となせしエステルなり。七二つの龍は我とハマンなり。八諸國民は、ユダヤ人の名を滅ぼさんとて集りしものどもなり。九我國民は、神に呼はりて救はれし、このイスラエルなり。主はその民を救ひ、我らをすべての害より救ひ出し給へり。神は諸國民の間に爲し給はざりし兆と、大なる不思議を行ひ給へり。一〇故に彼は二つの籤を作り、一つは神の民のため、一つは諸國民のためとなせり。一一此らの二つの籤は、審判の時、期、又日に、すべての國民のために神の前に出で來れり。一二神はその民を顧み、その嗣業を義しとし給へり。一三而して此らの日はアダルの月に彼等に臨まん。即ちその月の十四日と十五日とに、神の御前にて、集會と歡喜と悦樂とをもて臨み、代々限りなくその民イスラエルのうちにあらん。

第一一章

一プトレミオとクレオパトラの治世の第四年、祭司にしてレビ人なりと自稱せるドシテオとその子プトレミオ、眞のものなりと稱するプリムの書を持ち來りプトレミオの子ルシマコス、エルサレムにありて之を譯したり。二アルタシヤスタ大王在位の第二年、ニサンの月の第一日、ベニアミンの族なるキシの子シメイの子ヤイロの子モルデカイ一つの夢を見たり。三彼はユダヤ人にして、スサの町に住み、大なる人にて、王の宮廷に仕ふる者、四又バビロンの王ネブカデネザルがユダの王エコニヤと共にエルサレムより移せし俘囚人の一人なりしが、その夢は次の如し。五視よ、騷音と混亂、雷と地震、及び地上の鳴動を。六視よ、二つの大なる龍戰はんとて出で來れり。その叫は大なりき。七その叫によりて、すべての國人戰の用意をなし、義しき民に逆ひて戰はんとせり。八視よ、暗黒と陰欝、患難と苦痛、又悲哀と地上に於ける大なる混亂の日を。九義しき國人は皆心憂へ、その災害を恐れて、滅亡に備へたり。一〇ここに於て、彼ら神に向ひて叫びしがその叫より、小き泉の如きもの出で、大なる河となり、洪水となれり。一一光と日昇り、低き者は高くせられ、自ら高しとする者は滅ぼされたり。一二モルデカイこの夢を見、神の爲さんと定め給ひし事を見し時目ざめ、その夢を心に保ちて夜に至り、如何にかしてこれを知らんと願へり。

第一二章

一モルデカイは宮廷にて、宮殿を守る王の二人の宦官、ビグダン及びテレシと共に眠れり。二その時かれ、彼等の語るを聞き

て、その目的を索り、彼らがアルタシヤスタ王を弑せんとするを知りたれば、これを王に告げぬ。三王二人の宦官を詮議せしに、彼等その罪を白状したれば、之を死刑に處したり。四而して王此等の事を記憶にとどめんがため記録を作り、モルデカイも亦之を記しぬ。五王はモルデカイに命じて宮廷に仕へしめ、彼に報を與へたり。六然るに王に貴ばれしブゲ人ハンメダタの子ハマン、王の二人の宦官のためにモルデカイとその民を苦しめんことを謀れり。

第一三章

一書翰の寫はこれなり。『大王アルタシヤスタ印度よりエテオピアに至る百二十州の方伯及び總督らに書を送る。二我は諸國民を征服し、全世界を統治してより、濫にわが權威を用ひず、常に公平と寛容とをもてわが民を平穩無事ならしめ、又僻遠の地に至るまで通路を設けて、天下萬民の待望む平和を來らしめんことを努めたり。三我わが顧問らにいかにしてこれを來らしむべきかを問ひたるに、我等の間にてことに智慧に優れ、確なる好意と忠實とを認められ、この國にて第二の位を與へられたるハマンは、四かく告げたり。全世界の諸國民の中に散在する一つの惡き民ありて、諸國民と反する律法を有ち、常に諸王の命を輕んじ、ために我らの恭しく企つる我らの國の統一は、行はれずと。五されば我らは、この民のみ獨すべての人々に背き、我等の律法に反する生活をなし、我らの國に惡しき影響を及ぼし、力を盡してすべての害を釀し、我らの國の堅く立つを妨ぐるが故に、六左の宣言をなす。卽ち國務の總裁にして我らの第二の父たるハマンの汝らに送る書に認めある者どもは、今年十二月卽ちアダルの月の十四日に、すべてその妻子と共に、聊の慈悲も憐憫もなく、悉くその敵の劍にて滅ぼさるべきものなり。七又すべて年老い、且邪惡なるものは、一日の中に忽ち陰府に入り、かくて今より後我らの國務整へられ、何の憂もなきに至るべし。』八ここに於てモルデカイは、主のすべての御業を思ひめぐらし、祈りて、九言へり『ああ主よ、主よ、全能の王よ、全世界は汝の力の中にあり。汝若しイスラエルを救はんと定め給はば、誰か汝に逆ひ得ん。一〇汝は天と地と、天下のあらゆる奇しきものとを造り給へり。一一汝はすべてのものの主にして、世には主に在す汝を拒み得るものなし。一二主よ、汝は凡ての事を知り給ふ。汝は、我が高ぶれるハマンに禮せざりしは、輕蔑にも傲慢にもあらず、又光榮を求むるためにもあらざるを知り給へり。一三我はイスラエルの救のために、甘んじて彼の足の裏に接吻をもなせり。一四されどわがこれを爲ししは、人の榮光を神の榮光に優れりとせざるに由る。又唯神なる汝の外には、何ものにも跪伏さざるに由る。ああ神よ、我は決して傲慢によりこれをなせしにあらず。一五ああ主よ、神よ、王よ、アブラハムの神よ、汝の民を赦し給へ。そは彼ら我らを亡ぼさん

とて眼を我らに向く。彼らは始より汝のものなる嗣業を亡ぼさんことを欲せり。一六汝のためにエジプトより救ひ出し給へる汝の分を輕しめ給ふ勿れ。一七わが祈を聽きて汝の嗣業を憐み給へ。ああ主よ、我らの悲哀を歡喜に代へ、我らを活かし、汝の御名を讚めしめ給へ。汝を讚むるものの口を亡ぼし給ふ勿れ、ああ主よ。』一八すべてのイスラエルも同じく、心を盡して主に呼はれり。彼らの死その眼の前に迫り居たればなり。

第一四章

一后エステルも亦死の恐の中にありたれば、主の御許に至り、二その美しき衣服を脱ぎて、苦惱と悲歎との衣を着け、價高き香油に代へて灰と糞とを頭に蒙り、その身を甚しく卑くし、喜のために常に飾りしすべての部分を、その亂れたる髪にて蔽ひ、三イスラエルの主なる神に祈ていへり『ああ主よ、汝のみ我等の王にましませり。願くは心さびしき婦なる我を助け給へ。汝の外に我助手はなし。四わが危險は迫り近けり。五ああ主よ、わが幼かりし時より、わが族の中にて聞きたるは、汝はイスラエルをすべての民らの中より選び、我らの先祖を彼らの祖先の中より永久の嗣業として選び、彼らに約束し給ひし事を爲し終へ給へることなり。六然るに我らは、汝の御前に罪を犯したれば、汝我らを敵の手に渡し給へり。七そは我ら彼らの神々を拜したればなり。ああ主よ、汝は義しく在せり。八然るに彼らは、我らが俘囚の苦痛の中にあるをもて滿足せず、その偶像と手を打ち合ひ、九汝が御口をもて定め給ひし事を廢し、汝の嗣業を滅し、汝を讚むるものの口を塞ぎ、汝の家と汝の祭壇との榮光を消し、一〇異邦人の口を開きて偶像を讚美せしめ、肉の王を永久に崇めしめたり。一一ああ主よ、汝の主權を無きが如き者どもに與へ給ふことなく、又彼らをして我らの倒るるを笑はしめ給ふことなく、反つて彼らの計畫を彼らに返し、我らに逆ひてこれを始めし彼らを世の見せしめとなし給へ。一二ああ主よ、我らを覺え給ひて、我らの苦惱の時に汝自らを示し、我に勇氣を與へ給へ。ああ神々の王にして、すべての主權を保ち給ふ主よ。一三獅子の前にて、わが口に雄辯を與へ給へ。その心を變へ、我らに逆ひて戰ふものを憎ましめ給へ。彼及び彼と心同じきものとを滅し給へ。一四汝の御手をもて我らを救ひ、孤獨にして汝の外に助なき我らを助け給へ。一五ああ主よ、汝は一切のことを知り給ふ。我がいかに不義の光榮を憎み、割禮なき者及びすべての異邦人の寢床を厭ふかを知り給ふ。一六汝はわがなくてならぬものを知り給ふ。そは我は人の前に出づる日に、わが頭の上に高き位のしるしを戴くを厭ふ。われこれを月のものの布片の如くに厭ひ、我が獨り居る時も之を着けぬなり。一七汝の婢はハマンの食卓に食せず、王の饗筵にも出でず、又獻祭の酒をも飲みしことなし。一八汝の婢は、此處に來りし日より今日に至るまで、汝によりて喜ぶ外に何の喜をも持たず。ああ主よ、アブラ

ハムの神よ、一九すべてのものに勝りて力ある神よ、希望なきものの聲を聽き、害ふものの手より我らを救ひ、我を恐怖より救ひ出し給へ。』

第一五章

一三日目に彼その祈禱を終へし時、その悲哀の衣を脱ぎて、晴衣を纏ひたり。二卽ち彼はすべてのものをみそなはし給ふ救主なる神に祈りたる後、晴衣を着け、二人の侍女を伴ひ、三一人の侍女に寄りかかりて、なよやかに步を運び、四他の侍女は、かれの裳をとれり。五彼はその美しさ完く、その容貌は快活にして愛らしかりき。されどその心は恐怖のために惱みぬ。六やがて彼、すべての戸を過ぎて王の前に立ちぬ。王はその玉座に坐し、黃金と寶石とをもてまばゆく飾りたる、威めしき王衣もて身を裝ひ、いと畏しく見えたり。七王は威光に輝く顏を擧げて、つらつら彼を視たり。后は倒れ、青ざめ、氣を失ひて、彼を導きし侍女の頭の上に身をかがめたり。八その時神、王の心を變へて柔和ならしめ給ひければ、王は憂ひてその玉座より躍び下り、再び氣づくまでその腕にて彼を抱き、優しき言をもて慰め曰けるは九『エステルよ、こは何事ぞや、我は汝の兄弟なり、心を安んぜよ。一〇汝は死ぬることあらじ、わが命令はわが臣民に關るのみ、近く寄れ。』一一かくて彼、その金圭を彼の頸の上に置き、一二彼を抱きて、『我に語れ』といへり。一三その時彼いひぬ『わが主よ、われ汝を見るに、神の御使の如く、わが心は汝の威光の故に恐れ惑ふ。一四主よ、汝は驚くべく、汝の御顏は恩惠にて滿てり。』一五されど彼は、その語り居る時、再び氣を喪ひて倒れたり。一六王は憂ひ、彼の僕らは皆、彼を慰めたり。

第一六章

一『大王アルタシヤスタ印度よりエテオピアに至る百二十七州の方伯、總督、及びすべてわが忠實なる臣民の平安を問ふ。二多くの者、その恩人より大なる恩惠を受くるに從ひて、益高慢に流れ、三啻に我らの臣民を害はんと謀るのみならず、その寵遇に心滿ち、氣驕りて、彼等に善をなす人々をすら害はんとす。四且彼らは人々の感謝の念を奪ふのみならず、却つて善からぬ人々の高ぶれる言をもて自らを高くし、常に萬事を見給ふ神の、惡を憎む公義より脫れ得べしと思へり。五その友の公務を委ねられたる者の好辭は、屢、權威ある多くの人々を罪なき者の血に與らしめ、回復し得ざる災禍を蒙らしむるに至る。六彼等は又、詐僞と欺瞞とにて歪められたる心をもて、侯伯たちの罪なき好意を惑はす。七わが汝らに宣ぶる事は、古史を繙くを待たず、最近起りし、不當なる權力を與へられしものどもの惡行を探らば、自ら明にならん。八されば我、嚴に將來を戒め、すべての人のために王國の安穩と平和とのために計らざるべからず。九我らは、我らの意圖を改め、我等の眼の前に起る事件を、常に

公平をもて審くべきなり。一〇そはマケドニア人にしてハンメダタの子なるハマンは、ペルシヤ人の血を引かざる眞の他國人にして、我等の善きものより遠く離れたる者なりしが、客として我等に受けられ、一一我等が諸國民に示せる好意に與り、我らの父と呼ばれ、王に次ぐものとして、常にすべての人に崇められたり。一二然るに彼は、その大なる威嚴を汚して、我等の國と我等の生命とを奪はんと企てたり。一三彼は、さきに我等の生命を救ひ、常に我等の好意を受けしモルデカイのみならず、共に我等の國の政治に與りし、罪なきエステル、及びその民を、多くの巧なる欺瞞をもて滅さんとせり。一四彼は、此等の手段によりて我等を孤立せしめ、この國をペルシヤ人よりマゲドニア人に移し得べしと思へり。一五然るに我らは、この最も憎むべき惡人の滅し盡さんとしたるユダヤ人は、何らの惡を爲さず、反つて最も正しき律法に由りて生くること、一六及び我らと我らの先祖とのために、最も優れたる方法をもて國を治め給ひし、いと高くいと強き活ける神の子らなることを見出したり。一七されば汝ら愼みて、ハンメダタの子ハマンの汝らに書き送りたる事項を行ふべからず。一八そは此らの事を企てしものは、すべてその家族と共にスサの門に曝されたればなり。すべてのものを治め給ふ神は、速かにその行に從ひて彼に報い給ひしなり。一九されば汝ら、此詔敕の寫をすべての所に掲示し、ユダヤ人をして、彼等の律法に從ひて、生くることを得しめよ。二〇汝ら彼らを助けて、その日、卽ち十二月、アダルの月の十三日に、彼らを惱さんとするものらに讐ゆることを得しむべし。二一そは全能の神、選ばれたる民の滅亡に代へて、此の日を彼らの歡喜とならしめ給ひたればなり。二二されば汝らの記念すべきもろもろの祝日の中に、この日を加へ、饗筵をもてこれを守るべし。二三今も、今より後も、この日は、我らと我らに好意をもつペルシヤ人とには平安の日、我らに逆ひて徒黨を結ぶものどもには滅亡の日となるべし。二四さればすべて、此等のことを守らざる町又は州は、憐をも受けず、悉く火と劍とをもて滅され、ただ人の通らざる所となるのみならず、野の獸と鳥にも永久に忌み嫌はるるに至らん。』

ソロモンの智慧

第一章

一 義を愛でよ。地をさばくものどもよ。よろしきをもて主をおもひ、まごころもて主をもとめよ。二 主は主をこころむることなき者に見出され、主に不信ならぬものに、あらはれたまふなり。三 よこしまなる思は神を離るれど、ためされしみ力は、こころなきものを、うちまどはす。四 智慧は、惡巧の心に、入り來ることなく、罪に賣られし身に住はざるなり。五 いましめの聖靈は、いつはりを遁れ、不明の心より立ち去り、不義いり來れば、うちまどふなり。六 智慧の靈は、人を愛するもの、冒瀆者を、その唇のゆゑに、不問に付せず。彼のこころばせにつきて神は證をなし、彼のこころのまことなる監督、彼の舌の聽者にいます。七 主の靈は人の世に滿ち、すべてを保つ者は、人の聲を知りたまへばなり。八 されば、不義をいふものは、誰も見脱がされず、義それをあらはにするとき、これを釋放さざるべし。九 敬虔ならぬ者は、そのおもひはかりの中に檢を受け、その言のきこえは主にとどかん。又その不法なる業は、あらはにされん。一〇 嫉妬の耳ありて、すべてを聽き、つぶやきの音は、蔽はれず。一一 ゆゑに、益なきつぶやきに心し、舌を惡口よりつつしめ。ひそかなることばも空しくは出でゆかず。いつはりをなす口は、たましひを取り去る。一二 なんぢの、あやまれる生涯によりて死を招き求むな。なんぢの手の業によりて、ほろびをよぶな。一三 神は死をつくりたまはず。生けるものの失するを、よろこびたまはざるなり。一四 神はすべてのものを、そのながらへんがためにつくりたまひ、世にある種々のいきものは健けきもの、その中にほろびの毒あらず。陰府の支配地上になし。一五 義は不死なればなり。一六 されど敬虔ならぬ者はその手と言とをもて死をよび寄せ、それを友なりと思ひつつ、自らはほろび失す。彼等は死と契約を結ぶ。かかるものの類にふさはしければなり。

第二章

一 彼等は、正しきわきまへなくして、自らいへり。我らの生命は短くして悲み多し。人の臨終には、せんすべなく、陰府より出で歸りしものあるを知らず。二 ただゆくりなく我らは生れしにて、この後とても、無きに等しきものにてあらん。我らが鼻の息は煙、理は我らの心動くときの火花、三 その消え失する時身は灰となりゆく。かすかなる大氣のごと靈はうすれゆき、四 時とともに我らの名は忘られ行く。また、我らの業を憶ゆるものなからん。我らの生命は浮雲のごとくすぎゆき、陽の光に追ひしかれ、その熱にうち負くる、かの狹霧のごとく散りゆく。五 我らの生涯は過ぎゆく影、我らの臨終には日延あらず。そは固く封印せられありて、誰とて歸り來るものあらず。六 されば、いざ、あるがままなる善きものを樂み、造られしものを用ふるに、若者の

ごとくひたすらにせん。**七**價高き葡萄酒と香料とにて我らをみたさん。春の花の我らを行き過ぐるものなからしめん。**八**薔薇の莟もて我らを冠せん。その萎れゆかぬ間に。**九**我らの驕樂にあづからぬものあらざれ。いづこにも、我らが歡樂の表象を殘しおかん。こは我らの分、我らの遺譲なればなり。**一〇**義しき貧者を我ら壓へん、また寡婦をもゆるさず、年多く經たる白髪をも敬はざるべし。**一一**我らが力こそは正義の律法なれ、弱きは益なきことを明にせらる。**一二**我ら義者を待伏せん。そは彼は我らにとりて無益のものにして、我等の業に反き、律法に罪を犯す我等を咎め、いましめにそむく我らの罪を數へあぐればなり。**一三**我は神につきて知るありととなへ、自ら神の子なりと稱ふ。**一四**彼は我らにとりて、我らが思の卻くるものとなれり。**一五**我らにとりて、ただこれを見るさへも厭はし。彼の生涯は他のものに似ず、彼の行路はいとど異なれり。**一六**彼は贋金として我らを扱ひ、我らの道を、汚れたるもののごとくに避く。義者の終はこれをめでたしとし、神をその父なりなどととなふ。**一七**いざ我ら彼の言のまことなるやを見、彼の臨終の如何なるやを見定めん。**一八**正しきもの神の子ならば神彼を支持し、立ち向ふものの手より彼を救ひ出したまはん。**一九**攻撃と迫害とをもて彼を驗べ、それによりて、彼の柔和を知り、彼の忍耐を知るを得ん。**二〇**彼を罪して恥づべき死をも與へん。かれの言によりて、彼を訪れ給ふことあるべければなり。**二一**かれらはかく論じ、それによりて迷ひ出でたり。かれらの惡は、かれらを盲たらしめ、**二二**神の奥義を知らず、聖きの與ふる賃銀を望まず、穢なきたましひに褒美あるをわきまへず。**二三**神は朽ちぬものとして人を創造し、おのが正しき姿の形に作りたまひたるなり。**二四**しかるに惡魔の嫉妬のゆゑに死は世に入り、彼に屬するものどもは、彼を試む。

第三章

一されど、正しきもののたましひは神の手にあり、いかなる責苦も彼等に屆くを得ず。**二**わきまへなき者の眼には死にたるものと見え、その去り行くは不運にして、**三**その我らより離れ行くは、災害なりとせらる。されど彼らは平和の中にあり。**四**人の眼には罰を受けしとせらるるも、彼等の望は不死にてみつ。**五**彼等は少のいましめを受けて、大なる善きものをうく。神、彼等をためし、神にかなふものなるを見給ひたればなり。**六**爐にある金のごとく、彼等をしらべ、完き燔祭の供物のごとく、彼等を受けたまへり。**七**神訪れたまふ時には彼等光り出で、刈株の中なる火花のごとく飛びまはらん。**八**彼等は國々を戴き、民等を治めん、かくして主はとこしへに彼等を支配したまはん。**九**神を信ずる者どもは、眞をさとり、忠實なる者どもは、愛をもて神とともに住はん。恩寵と平和は神の選びたまひし者どもにあればなり。**一〇**されどよこしまなるものどもは、その思ひはかりに從

ひて報を受けん。彼等は正しき者を輕んじ、また主に反きたるなり。一一智慧と訓とをなみするものには災害あり。彼等の望は空しく、その勤勞はいたづらにして、その業は用なし。一二彼等の妻はわきまへなく、彼等の子は惡しく、一三その生み出すものは、呪はし。汚なくして子なきもの、よこしまのうちに孕みたることなきものは慶たし。神たましひを訪れたまふとき、その果を得ん。一四その手にて不法をなさず、主に向ひてよこしまを思ひしことなき閹人はめでたし。いみじき恩寵、彼の忠信によりて與へられ、宮に住ふ、いみじき樂しさをもたん。一五よき働は、いとも高き名の果をもち、賢きことの根は絶ゆることなし。一六されど姦淫をなすものの子等は、完きにいたらず、道ならぬ床の胤は、その影失せん。一七よし永く生くることありとも、取るに足らぬものとせられ、老ひの末にいたる時、譽あらじ。一八もし終速に來ることあらば、望をもつことなく、さだめの日になぐさめなからん。一九不義なる世の末は常に悲み多し。

第四章

一子なくとも徳あるは、いとよし。徳のおもひには不死あり。神にも、人にも知らるればなり。二そのあるところ人これに倣ひ、その失せ去りしをさへ慕ひもとむ。その勝利の冠もて世々に進み行き、朽ちせぬ褒美の爭に勝を得。三不信者どもの、憤怒増し加はるも何かあらん。まことならぬ分根よりするゆゑに、根を深くおろさず。かたく留まることなし。四枝をいだしてしばし繁ることありとも、たしかに立つことなきゆゑに、風に搖りうごき、風の激しきによりて、根こぎにせられ、五育ち終へざるに枝は折れさり、その果も冗となり、熟れて食用となることなく、何の用ともならず。六正しからざる床によりて生れたる子等は、神あらはにしたまふ時、その親たちに對ひて惡の證人とならん。七されど正しき人は、假令時みたずして失せゆくとも、安にをらん。八（譽ある老は年多きによらず、齢の數によりて量られず。九人にとりては、さとき心こそ、その白髮にして、しみなき生涯こそ、まどかなる老年なれ。）一〇神を喜ばすものとなりて、彼は愛せられ、罪人の中に住み居る時、うつし去られぬ。一一彼はとり去られぬ。惡の、そのさとりを變へざらんがために。よこしまの、そのたましひを欺かざらんがために。一二（あだごとのたくみは、よきものを曇らし、慾情のみだれは、邪なきものをあやまらすればなり。）一三彼はしばしの間に完くせられ、長き年月を滿すなり。一四彼のたましひは主に悦ばる。されば彼、惡しきものの中より、急ぎてこれを取り出し給へり。一五されど民等はかかることをその心におかず。神のめぐみとあはれみとは、神の選びしものにあり。神はその聖き者を、護り見たまふを知らず、また悟らざるなり。一六されど、死にたる義者は生ける不信者を審き、速かに完うせられし若者は、不義なる者の年老

いたる、多くの年月を審かん。されど、神の彼につきて思ひたまへることの、何なるかを知らず、主の彼を保護したまへることの、何なるかを知らざるなり。一八彼等は見てこれを輕んぜん。されど主はいたくあざ笑ひたまはん。かくてその後、彼等は譽なき骸となり、死にたるものの中にて限なく除者とならん。一九主は彼等を地になげて聲さへも出でざらしめ、その基より搖り動かしたまはん。かくて彼等は、荒れすたれ果て、惱の中にあらん。また彼等のかたみも失せ去るべし。二〇彼等はその罪の數へ上げられし時、おののきつつきたらん。かくてその無法は彼等をその面前にて罪せん。

第五章

一その時義者はいと朗らかに立ち、彼を困めたりしものども、彼の働を空しからしめしものどもの前にあらん。二彼等はそれをみて、いたくもおぢおそれ、神の救のすさまじさに心を失はん。三彼等は心を改めつつ自らいはん、また心いたむによりて、うめきいでん。こは、かつて、我等笑ひの種とし、四辱の言ひぐさとしたりしもの、我等愚ものども彼の生活を心狂へるものとし、その終を、榮なきものとなしぬ。五いかにして彼は神の子等に數へられしぞ。また、聖徒の中に嗣業をもつぞ。六まことに我らは、眞の道より迷ひ出で、義の光は、我等に輝かず、陽は我らに昇り來らず、七不法と滅亡の道は我らに滿ち、我らは道なき荒野をよぎり行けり。されど、主の道はわれらこれを知らざりき。八我らの思上は、我らに何を益せしぞ。誇れる富は、何を我らにもたらせしぞ。九これらは皆過ぎ行くなり。影のごとく、また走り行く言傳のごとく、一〇さざなみする水上を通り行く船のごとく。船過ぎされば、跡も見出されず、波の上にその龍骨の跡筋さへもなし。一一また鳥の大氣をすぎ行くごとく、その跡の形さへ見えず。鳥はただ、やは風を、その羽毛によりて打ちうごかし、その動き行く大翼の、激しき勢もてうち裂きつつ飛びゆく。かくて、その後に、その去りし印さへも見出されず。一二あるはまた、的に射出されたる矢のごとし。大氣は裂かるれど、また直ちに融けあへば、人はその過ぎ行きしところさへ知らず。一三かくのごとく我らもまた、生るるとともに空しくなり、徳のごときは、その示すべき印だにもたず。ただ我らの惡のゆゑに我らは潰えゆく。一四不信者の望は風に運ばるるもみがらのごとく、また嵐の前に消えゆく泡のごとく、また風にあふ煙のごとく散らされ、また、ただ一日留まれる客の思出のごとく過ぎ去るなり。一五されど義しきものは永遠に生く。またその賃銀は主による。また、彼等についての思慮は至高者より來る。一六これによりて、彼は、妙なる王冠と、美しきかんむりとを主の手より受けん。右のみ手をもて、彼等をおほひ、み腕をもて彼等をかばひたまへばなり。一七その熱心を、武具として取り、造りたまへるものを、ものの具として、敵をしりぞけたまはん。

一八義を胸當としてまとひ、へだてなき審判を兜としたまはん。一九聖きを、うち難き楯として取りたまはん。二〇また強きみ怒りを、劒として研ぎたまはん。かくて、世は主とともに、無情のものとの戰ひにいでゆかん。二一電光の箭は、ねらひたがはず飛びゆかん。よく引かれたる大弓よりいづるごとく雲の中よりいでて、的に飛びゆく二二石投より出づるがごとく、みいかりの雹は投げ出されん。海の水も、彼等に向ひて、怒り立たん。川々は用捨なく彼等を呑まん。二三暴風は彼等に吹き向ひ、嵐のごとく、彼等を吹き飛ばさん。かくて無法は全地を荒地とし、また彼等の惡行は、王位をも覆へさん。

第六章

一されば王たちよ、聽きて悟れ。地の果までの審士らよ、學べ。二數ある民の上に權あるものどもよ、澤なる國々を誇るものどもよ、耳を傾けよ。三なんぢらの權は主より與へられ、なんぢらの王位は至高者より與へられたるなり。主は汝らの業をたづねいだし、汝らのはかりごとを審きたまはん。四汝らはその國の仕人なるに、正しき審判をなさず。律法を守らず、神のみ旨に隨ひて歩まざればなり。五恐るべく、また速かに、かれ汝らに來りたまはん。高き位にあるものには嚴しき審判を與へらるればなり。六低きにある人は、あはれみによりて赦さる。されど、強き人は、強くたづねらるべし。七凡てのものの權力者なる主は、人をかたより見たまふことなく、大なるものを崇めたまはず。小きも大なるも、ともに造りたまへるは主にして、すべてのものを、等しく慮りたまへばなり。八力あるものの上に來る査はいかめしきものなり。九されば王侯たちよ、我なんぢらに言をあたへん。それによりて汝ら智慧を學び、正しき道より落ちざることを得ん。一〇聖きものを聖く保てる人々は、自らもまた聖くせられ、教を受けたりしものは、いかに答ふべきかを知らん。一一されば、汝の願をわが言の上に置け。これを慕へよ。さらばその誡によりて鍛錬せられん。一二智慧は輝かしくして、衰ふることなく、これを愛するものに容易く見られ、これを求むるものに見出さる。一三智慧はこれを知らんとするものに先立ち、まづみづからを知らしむ。一四朝早く起きいでて智慧を求むるものは、勞することなし。その門口に智慧の坐せるを、見出すべければなり。一五智慧を思ふことは完き悟にして、智慧のために目醒めをるものは、速かにその惱より解かれん。一六智慧は自ら行きめぐりて、おのれにふさはしきものを求め、彼等の道にあはれて惠を示し、いかなる望にも答ふべければなり。一七智慧のまことなる始は、誡を願ひ求むることにして、誡を求むることは智慧を愛することなり。一八智慧を愛するはその律法を守ることにして、その誡を守ることは、腐敗なきことを慥ならしめ、一九腐敗なきことは、人を神に近づかしむ。二〇されば、智慧をねがひ求むることは國への道を安からしむ。二一されば民の君た

ちよ、王位と王杖とを喜とせば、智慧をうやまへ。さらば汝らの支配は永遠ならん。二二智慧の何なるか、如何にして出で來りしかにつきては、我宣ぶるところあらん。奥義を汝らよりかくすことあらじ。されど我は、智慧を創造のはじめより跡づけ、明なる光をもて知らるるに至らしめん。また我は、眞理を過ぎ去らしむることをせじ。二三また道にて嫉妬の心をもつがごときことを爲さざるべし。嫉妬は智慧との交を持たざればなり。二四されど賢き者の多きは、世の救にして、悟ある王はその民の安きなり。二五されば我が言によりて誡を受けよ。かくて汝は益を受けん。

第七章

一我もまた、よろづのもののごとく、やがては死ぬべきものなり。地より生れたるもの、はじめて造られしものより出でぬ。二人の種の血に合はされ、寝より來る樂によりてつくられ、母の胎にて、十月の中に肉となりぬ。三我もまた、生れ出でては、世の常の空氣を吸ひ、人と同じき地の上に落ちつきぬ。ようづの人と等しく、わがはじめの聲としては世にも同じき泣き聲をいだし、四襁褓の中に育てられ、心づかひの中に守られぬ。五王とても、これと異なれる生涯のはじめをもてるものあらず。六すべての人の生命に入る道のただ一つなるは、その去りゆく時にひとし。七この故に、われは祈をなし、それによりて悟を與へられぬ。神に呼び求めたりしに、智慧の心を與へられぬ。八我は王冠よりも、王座よりも、智慧をよろこび、富もこれに比ぶれば無きにひとしと見ぬ。九また、いかなる寳玉をも、智慧に比べんと思はざりき。すべての金は智慧の前には小さき砂のごとく、銀はその前に土と見らるべければなり。一〇健康よりも、美しさよりも、我は智慧を愛し、光よりもむしろ智慧をもつことを願ふ。その輝かしき光は、寝ね休むことなければなり。一一智慧によりて、よろづの善きもの我に來りぬ。また、智慧の手には、計り難き多くの富あり。一二我はこれらの富をよろこぶ、智慧これを導くがゆゑなり。ただ智慧の、これらのものの母たることは我これを知らざりき。一三我は何のよこしまもなくしてこれを學びたれば、一四我にとりて、智慧は盡きざる寳のごとし。また、これを用ふるものは神と親しむ。戒によりて與へられし賜の故に、彼等は神に喜ばる。一五されど我にむかひては、神ねがはくは、みこころに從ひて、いふべきことを賜はんことを。また、我にたまひしものに、ふさはしき思を思はしめたまはんことを。神自ら智慧をも導き、また賢き者を正したまへばなり。一六我らも、我らの言も、また悟も、あらゆる巧も神の手の中にあり。一七神自ら、あるとしあるものにつける謬なき知識を我にあたへ、世界の組立と萬象の動と、一八時の始と、終と、中と、黄道の移と、時候の變と、一九年のめぐりと、星の座位と、二〇生けるものの性質と、野の獸の暴ぶると、風の荒るると、人の

思と、草木の種々なると、根のもてる力とを知らしめたまへり。二一 祕れたるものも、あらはなるものも、我は悉く學べり。二二 そはすべてのものの造り手なる智慧自ら我に教へたればなり。二三 惠あり、人を愛し、堅く、また確にして、心わづらはず、力にみち、またすべてを見分け、悟 速にして、清く、またいとすばやき人の心をうち貫く。二四 智慧は如何なる動よりも、その動滑なり。げに、智慧は、その清らかさの故に、すべてのものに滿ち、すべてのものを貫くなり。二五 智慧は神の息にしてまた力、全能者の榮光の明なるかがやきなり。されば、汚れたるものは智慧の中に入るを得ず。二六 智慧は永遠の光よりのかがやき、神の働の染なき鏡、神の善きことの像なればなり。二七 智慧は一つにして、すべてのことを爲す力をもち、自ら保つとともに、すべてのものを新にす。また世々に聖きたましひの中を通り、人々を神の友、また豫言者となす。二八 神は智慧とともに住む人の外は愛し給はず。二九 智慧は陽よりも美しく、あらゆる星座の上にあり。光と比べらるる時、その前にあることを見出さるればなり。三〇 光には夜これにかはる。されど智慧には惡の勝つことなし。

第八章

一 智慧は全き力をもて、極より極にいたり、すべてのものを、よきに定む。二 我は若き時より、智慧を愛して、これを求めたり。我は、智慧をわが花嫁とせんことを求め、その美しさに魅せられたり。三 智慧は神とともに住むものとせられしそのけだかき生に譽あらしめぬ。かくてすべてを支配したまふ主、これを愛したまふ。四 智慧は神の知識の奧儀をうけ、神のためにその業を選びいだす。五 富は人生においての望ましき持ものなりとも、すべてのものに働く智慧にまさりて富多きものありや。六 よし悟は働をなすとも、智慧にまさりて、ありとしあるものを造り出すものありや。七 もし人、義を愛せば、智慧の働による果はもろもろの德なり。智慧は自制と悟と、義と、勇氣とを教ふ。人の世に、これらにまさりて益あるものなし。八 人、經驗の多きを望むか。智慧は古きを知り、來るべきものをいひ當つ。智慧は言の妙なるを悟り、謎を解くことを知り、また、徴と不思議と、時と期との末を先見す。九 されば、我は智慧をわが許にとり、我とともに住はせんと心を定めたり。智慧は我によき謀をあたへ、心づかひと悲の中に、勇氣を與ふるを知ればなり。一〇 智慧の故によりて、我は多くの人々の中に譽を得、若けれども長老たちの中に榮を得。一一 我審く時、心すばやき事を知られ、王たちの前にあがめられん。一二 我默す時、彼等我を待ち居らん。我脣をひらく時、彼等我に心をむけ、我かたり續くる時、彼等その手を口におかん。一三 智慧の故に我は不死をもち、我が後に來る者のために、永遠の記念を殘さん。一四 我は民等を支配せん。國々は我に從はん。一五 恐れらるる王たちもわがことを聞かば、我をお

それん。我が民の中に我はよきもの、戰に勇ましきものなるをあらはさん。一六 我わが家に入り來る時、智慧の許にて憩を得ん。智慧と語る時は、おぞましき事なし。智慧と住む事には苦なく喜と樂とあり。一七 我これらの事を自ら思ひめぐらし、また我心の中に思をこらして智慧との交の、不死なると、一八 智慧との交の喜なると、智慧の手の働には盡きざる富あると、智慧とたえず交るは悟なると、智慧の言と親しむは大なる譽なるとを考へし時、われ行きて、如何にして、智慧を我がために取り得んかと求めたりき。一九 我はよき兒にして、我がためによきたましひを與へられん。二〇 いなむしろ、我はよきものなりしゆゑに、汚れざる體の中に入り來りぬ。二一 されど我は神與へ給ふにあらずば、智慧をもつべきすべなきを知り、(まことに智慧の、たれによりて與へらるるかを知る事もまた悟より來るなり。)主に願ひ、主に求め、わが心のすべてをささげて言ひぬ。

第九章

一 父祖たちの神、あはれみを保ち給ふ主、すべてのものを、その御言によりてつくり給ひし主、二 主は智慧をもて人をかたちづくり給へり。人をして主につくられし生物の上に支配をもち、三 世を聖と義とをもて治め、正しきたましひをもて、審判をなさしめ給へり。四 願くは汝の御座に、汝と共に坐せるその智慧を我に與へ給へ、汝の僕らの中より我を拒み給ふなかれ。五 我は汝の奴隷にして、汝の婢女の子なり。弱くして命短きも、審判と律法とを悟る力少きものなり、六 されど、人、人の子の中にありて、全かるとも、もし汝より來る智慧、ともにあらずば、彼は數ふるに足らざるものとならん。七 汝は、我を選びて、さきに、汝の民の王たらしめ、汝の子女等のために審判を行はしめ給へり。八 汝は我に命じて、聖き山に聖所を築き、汝の住み給ふ市に、祭壇を築かしめ給へり。こは世の創より、汝のあらかじめそなへ給ひし聖き幕屋の型なり。九 智慧は汝と共にありて、汝の業を知り、世をつくり給ひし時、汝と共にありき。智慧は、汝の目に喜ばるべきものを知り、汝の誡に從ひて、正しき事を知る。一〇 願くは、聖き天より智慧を送り、汝の御座より、命じてこれを來らしめ給へ。さらば、智慧は我とともにありて、勞し、我も汝の前に喜ばるべきを學ばん。一一 智慧はすべてのものを知り、また悟る。また我がなす事をみちびきて、自ら制へしめ、その榮光をもて我を守らん。一二 かくて我が業は汝にうけられ、我は汝の民を正しく審き、我が父の王座にふさはしきものとならん。一三 何人か、神の計畫を知り、主の望み給ふものを考へ得ん。一四 人の思はたよりがたく、我等の謀るところは敗れ、一五 朽つる體は、たましひをおさへ、地にある身は、心づかひ多き人の上に重し。一六 地にあるものを、はかり知るは我等に難く、我等に近きものは、勤勞によりて見出さる。されど、天にあるものは、たれかこれをたづね出ししや。一七 汝智慧を與へ、また高

きより汝の聖靈をおくり給ふにあらずば、たれか汝の計畫を知り得んや。一八かくて、地にあるものどもの道は、直くせられ、人々は汝の喜び給ふものの、何なるやを教へられ、かつ智慧によりて救はれたり。

第一〇章

一世の最初の父としてつくられしものの一人、つくり出されし時、智慧はこれをその終までまもり、その過てる時、これを助け出し、二これに力を與へてすべてのものを支配せしめぬ。三されど、不義なるものその怒の故に智慧をはなれさりし時、その憤の故に兄弟を殺し、それによりて自ら滅びぬ。四またこのために、地は洪水によりて溺れつつありし時、智慧はふたたびこれを救ひ、小き木片によりて正しきものをみちびきぬ。五また、惡のために相謀りし國々の散らされし時、智慧は義者を知り、これを神の前に罪なきものとしてまもり、その子のために心動きし時、これを強くまもりぬ。六不信者の滅ぶる中に、智慧は義者をたすけ、ペンタポリスに天より火降りし時、彼を逃れしめぬ。七煙たつ荒野は、今もなほその惡を證し、よき實を結ぶ木も、そこには熟することなし。信ぜざるたましひはそこに記念をもち、鹽の柱そこに立ちたり。八彼等は智慧を見過しにしたれば、よきものを認むることあたはず、その愚の記念を人のために世に殘せり。その迷へる所にて、隱るること能はざらんがためなり。九されど、智慧は己に仕ふるものをそのなやみより救へり。一〇義者のその兄弟の怒より逃れ行きし時、智慧はこれを正しき道にみちびき、これに神の國を示し、また聖きことどもの知識を與へ、その勤勞を榮えしめ、その働の實を多からしめたり。一一むさぼりの故に、彼を苦しむる者ありし時、智慧はその傍にたち、これを富ましめたり。一二智慧はこれを敵の手よりまもり、彼をかくれ待つ者より救ひて、安からしめ、その烈しき戰の中に、さばき人としてこれをまもり、神に從ふは、すべての事よりも力強きことをこれにしらしめたり。一三義者の賣られし時、智慧はこれを捨てず、罪の中より救ひ出しぬ。智慧は獄にまでもともに行き、一四縲の中にありて、これを捨て去る事なく、つひに王國の冠をこれに與へ、彼を虐げし者の上に權を與へぬ。また彼を嘲りそしりし者の僞りなるをしめし、彼に永遠の榮光を與へぬ。一五智慧は聖き民と汚れなき後裔とを、これを壓ふる民より救へり。一六智慧は主の僕のたましひに入り、徴と不思議とをもて、恐しき王たちの前に立たしめぬ。一七智慧は聖き人々にその勤勢のむくいを與へぬ。驚くべき道に彼等をみちびき、晝はそのための蓋となり、夜はほのほの星となりぬ。一八智慧は彼等に紅海を越えしめ、水多き中をみちびきぬ。一九されど、その敵をば溺れしめ、深き底より投げあげたり。二〇されば、義者は不信の者を、掠めうばひぬ。かくて主よ、かれらは汝の聖き御名のために讚美を歌ひ、彼等のために戰ひ給へる汝の御手を、

相ともにほめたたへぬ。二一智慧は唖の口を開き、幼兒の舌をして、明にもの言はしめたればなり。

第一一章

一智慧は聖き預言者の手によりて、彼等の業を榮えしめん。二彼等は住ふものなき荒野を通り行き、道なき所にその天幕を張れり。三彼等は敵を防ぎ、あたを退けぬ。四彼等渇きたれば、汝によび求めたり。かくて彼等は堅き磐より、水を輿へられ、堅き石によりて、その渇を癒されぬ。五その敵の罰をうけし事によりて、彼等は己が必要なるものに益をうけぬ。六幼兒を殺すべき命令に對する罰として、河の流やまぬ泉の、血に變るによりて、敵の悶えし時、七汝は望む所に勝れる多くの水を、民に輿へ給ひぬ。八その苦める渇によりて、汝はいかに敵を罰し給ひしかを、かれらに示し給ひぬ。九彼等の試みられしは、汝の憐によりて戒められたるなり。彼等はそれによりて、不信者が怒をもて審かれ、苦めらるることの如何なるかを學び知りぬ。一〇これらの民をば、汝その父として戒め、また試み給ひき。されど彼等には、いかめしき王として臨み、これを罰し、これをたづね出し給ひぬ。一一まことに遠きものも近きものも、ともになやめり。一二そは重なれる悲哀、彼等に及び、すぎ去りしことどもを思ひ出すによりて彼等うめき、一三彼等の罰せられしによりて、他のものどもの益せられしを聞きし時、彼等は主の在す事を感じたりき。

一四古き昔に投げ出され、裸にされしものを彼等は嘲りて捨ておきしが、やがておこりしことのゆゑに驚きぬ。また彼等は義者とは異なれるさまにて渇きぬ。一五彼等の不義より來る益なき思ひはかりのゆゑに、彼等は迷ひ出でて、おぞましき腹匍ふもの、また卑しき蟲けらをあがみぬ。その時、汝はそのむくいとしておぞましき生物の多くを彼等におくり給ひぬ。一六それによりて彼等は、人が罪をおかせるそのことによりて罰せらるるものなることを學べり。一七汝のいと強き御手は、形なきものより世界をつくり給ひしが、彼等の上に多くの熊と恐しき獅子とをおくり、一八また新しくつくられし、いまだ知られざりし野の獸にして、怒に滿てるものの、あるものは火の如き息を吹き出し、あるものは音を立てつつ噴出づる煙をはき、あるものはその眼より恐ろしき火花を出し、一九そのはげしき權によりて、彼等を喰ひつくすのみならず、ただその眼の恐しさによりて、彼等を滅し得るものを送り出すことを爲し得たまふ。二〇まことにこれらのものなかりしとするとも、彼等はただ一息にて倒れしならん。正義に追はれ、また汝の權のいきによりて散らさるればなり。されど、汝はよろづのものを度と量と衡とにて定めたまへり。二一いかなる時にもいとつよく在すものは汝なりき。汝の御腕の力には、たれかたちむかひ得ん。二二全世界は汝の前には衡の上にある種粒の如く、また朝に地に降り來る露に似たり。二三されど、汝はすべての人に憐をもち給ふ。なほも

汝はすべての事を爲す權をもち給へばなり。汝は人の罪を看過にし、その悔改むるを望みたまひぬ。二四 汝はありとしあるもののすべてを愛し、汝のつくり給ひしもののいづれをもいとひ給はざればなり。もし憎み給はば汝はなにものをもつくり給はざりしならん。二五 もし、汝のぞみ給はずば、なにものかその生命をつづけ得んや。汝これを召し給はずば、いかで保たれんや。二六 されど、汝はすべてのものをゆるし給ふ、これは汝のものなればなり。ああ權の主よ、汝は命を愛し給ふものなり。

第一二章

一 汝の朽ちざる靈はすべてのものの中にあり。二 それによりて、汝は正しき道よりおちたる者に、次第にその罪を悟らしめ、彼等が罪を犯ししその事を思ひ出さしめて、彼等を戒しめ給ふ。そは、主よ、彼等その惡より逃れて汝を信ぜんが爲なり。三 汝の聖地に住みし古き民をば、まことに憎みたまひき。四 彼等は魔術と聖からざる祭をなし、惡しき術を行ひ、五 (心なくも兒等を殺し、また人の肉と血とをもて、犧牲の宴をはれり。)六 あひ結びて敬虔ならぬ交際をなし、又たすけなき己が幼兒を殺せり。されば我等の父たちの手によりてこれを滅すは汝の計略なりき。七 そは汝の眼にすべてのものよりもいと尊き地の、ふさはしき植民として、神の僕らをうけん爲なり。八 されど、これらのものすらも、汝は人としてゆるし給ひ、汝の軍隊の先驅として虻をおくりたまへり。おもむろに彼等を滅したまはんためなり。九 義者の手によりて戰の中に、不信のものを服はせ得給はざるにあらず、また、恐しき獸、またはいかめしき言によりてこれを直に退け得給はざるにあらず。一〇 ただ、おもむろにこれを罰し給ふ事によりて、汝は彼等に悔改の時を與へ給へり。彼等は生れしより惡にしてその邪は生れながらのもの、また彼等の心は如何にしても變へらるることなく、一一 初より呪はるべき種のものなりしを、知り給はざりしにあらず、また、彼等の罪に對してこれを罰し給はざりしは、彼等をおそれ給ひしゆゑにもあらざればなり。一二 たれか、汝何を爲し給ひしや、と云ふものあらんや。またたれか、汝の審判を拒み得んや。たれか、汝のつくり給ひし國々の滅ぶるによりてそしらんや。たれか不義なるものの、仇をむくいんとて汝の前に立つものあらんや。一三 すべてのものの爲に心づかひし給ふ神は、汝の外にあり得んや。汝は不義なる審判をなし給はざるを示し給ふなり。一四 汝の罰し給へるものの爲に、汝の御顔の前に、たち得る王侯たちあらんや。一五 汝は正しくしてすべてのものを正しく治め、罰せらるべきものにあらぬものを罰するは、汝の權にかかはりなきことを認め給ふ。一六 汝の權は義の始にして、汝がすべてを治め給ふことは、すべてをゆるし給ふことなり。一七 汝は全き權を持ち給ふを、人の信ぜざる時、汝はその權を示し給ふ。また、これを知るものに向ひては、その誇れる心を亂し給ふ。一八 されど汝

は、汝の權の上に支配をもち、やさしき審判を行ひ、大なる忍耐をもて、我等を治め給ふ。汝の御心のままに、汝は權をもち給へばなり。一九されど汝はこれらの術によりて、汝の民を教へ、義者は人を愛し、また、汝は汝の兒らによきのぞみを與へ、人、罪を犯す時、これに悔改を與へ給ふを知らしめ給へり。二〇汝の僕らの敵となり、死ぬべきものに、汝のむくひ給ふものは、大なる心やりと、ゆるしにして彼等がその惡より逃るべき時と所とを與へ給へり。二一まして、汝の兒等は、大なる心やりをもて、汝これを審き給ふ。汝は彼等の父たちに、よき約束の契約を與へ給ひしなり。二二されば、汝は我等を戒め給ふ時も、これに萬倍する鞭を、我等の敵に與へたまふ。我等審く時、汝の善を思ひ、また審かるる時、汝の憐を求めんがためなり。二三されば、また、愚なる生涯を送れる不義なるものは、汝これを彼等自らの忌むべき行によりて、苦しめ給へり。二四そは、彼等はまことに遠く迷ひ出でて、過れる道に行き、その敵にすら、崇められざる獸を神としてとり、愚なる幼兒の如く、欺かれたり。二五されば、汝はわきまへなき兒等に爲すが如く、彼等をなだむるための審判をおくり給へり。二六されど、彼らは兒等をなだむる教によりて、戒められず、神に相應しき審判を嘗めん。二七彼等は自ら神なりと思ひたりし生物のゆゑによりて罰せられ、その苦痛の故に憤りたりしが、彼等はそれによりて、さきには知ることを拒みたりしものをまことの神として認めたり。それによりて彼等にもまた、罰せらるることなく、その終來れり。

第一三章

一まことに神を悟らざるすべての人は、生れながらにしてむなしきものなり。眼に見ゆるよきものによりて、彼等は在し給ふものを知る權をもたず、また、その業に目をとむる事によりて、それを造り給ひしものを認むる事を知らず、二ただ、火、風、またはすみやかなる風、廻りゆく星、波立つ水、または天の諸星、これらのものを、世を治むる神々なりと思ひたりき。三もし、これらのものの美しさを喜びてこれを神なりとしたりしならば、彼等はこれらのものよりも權ある主は、さらに勝れるものなるを知るべきなり。これらのものは美の最初の創造者によりて造られたればなり。四されど若し、これらのものの權と勢に驚きたるによるものならば、彼等はこれらを造り給ひしものの、いかに力強きものなるかを知るべきなり。五つくられしものの美しさの大なるによりて、人は自らにその最初の造主の姿を思ふなり。六されど、これらの人々もせめらるる所少し。おそらくは彼等も神を求め、神を見出さんと望みつつ、迷ひ出でたりしものなるべければなり。七神の業の中に住みて彼等は心を盡してさぐり求む。されど彼等の見るものの、餘りに美しきゆゑに彼等はその見ることにとらはるるなり。八されど、彼等とても言ひ逃るべきやうなし、九もし、かかる事どもを知る權をもち、事物の

道をたづね知るを得たらんには、いかなれば彼等は、これらのものを造りし、權ある主をすみやかに見出さざりしや。一〇されど、憐むべきは彼等なるかな、彼等は死にたるものの中にその望をおき、人の手の業、よき業をもて造られし金銀、また獸の姿、また無益の石、昔ながらの手による業などを神とよべり。一一もし、樵夫が、はこびやすき木を伐り倒し、その皮を巧にのぞきさり、それを美しき形となして、人の世に使ふべき器となし、一二その手の業のこりをやきて、その食物をととのへ、腹ふくくるまでこれを食ひ、一三さらにのこれる屑にして何の用なきも、まがれる木片にして節多きものをとり、閑にまかせてまめやかにこれを彫り、閑ある時そのたくみをもてこれに形をあたへ、人の姿に似たるものとなし、一四または、卑しき獸に似たるものとし、朱をもてこれに塗り、赤き色に粧ひ、すべての汚點を塗りつぶし、一五それに相應しき部屋をそのためにつくり、これを壁につけ、釘をもて堅固にす。一六かくしてそれの落つることなきやう心す。その自ら助くるあたはざるを知ればなり。(まことにそれは像にすぎず、他よりの助を要するなり。)一七されど己が品物につき、婚姻と兒等との事につきて祈る時、彼はこの生命なきものに、ものいふことを恥とせず。一八己が健康のために、この弱きものに呼びもとめ、己が生命のために、この死にたるものに願ひもとむ。また助を要せざるに、この經驗なきものに頼り、よき旅のために、この一足をも動き得ざるものに賴る。一九また、ものを得、その手の業のよき成功をおさめんとする時、彼はその手をもて何事をもなし得ざるこのものに、事を成すべき權を請ふなり。

第一四章

一さらにまた、帆舟に乘りて、波立つ海を渡らんとする時、彼を運ぶ舟よりもさらに朽ちたる木片にむかひて呼び求む。二寶を求むる心によりて舟はつくられ、造主なる智慧自らそれを組合せぬ。三父よ、汝の攝理はこれを導きたりしなり。海にても汝は道を與へ、流の中に確なる道を設け給ふなり。四それによりて、汝はいかなる危險よりも救ひ出し給』ふことを示し、術知らぬ人をも、船出せしめ給ふなり。五かくて汝は、汝の智慧のなせる業のむなしくならざるをのぞみ給へり。されば人は小さき木片にその生命をまかせ、また筏に乘りて波を越えつつ、安らかに着くなり。六昔、誇れる巨人たちの滅びし時、世の希望は筏によりて逃れ、人のこの中に來るべき種を殘せり。汝の手はその舵を導き給ひき。七義をもち來らす木は幸るかな。八されど、手をもてつくられし偶像は、それをつくりしものとともに呪はるべし。つくりしは彼の業にして、この朽つべきものは神と名づけられたればなり。九この不信をおこなふものと、その不信とは、神ともにこれを憎み給ふ。一〇まことに彼の業はそれを犯せるものとともに罰せらるべし。一一かくて、國々の偶像にも神こ

れに臨み給はん。これらは神の造り給ひしものによりて造られたれど、汚れたるものとなり、人のたましひの躓、愚なるものの足のわなとなりたればなり。一二偶像をつくることは姦淫の始にして、これをたくむことは生命を腐れしむ。一三これらのものは、初にあらざりしが、永遠にもまたあらざるべし。一四ただ人の空しき譽を求むることによりて、偶像は世に入り來りしなり。されば、その終はすみやかなるものとせらるるなり。一五年若きものの死によりて、悲しみつかれたる父は、かくも早く取り去られし子のために像をつくり、いまは、死人なるそれを神として崇め、己がしたにあるものに、奥義とおごそかなる祭とを及ぼす。一六かくて、時を經るとともに、この不信のならはしは、いよいよ強くなり、掟として保たれ、王たちの命令によりて彫像は禮拜をうく。一七また、遠くすむによりて、そこにてこれを崇むるを得ざる人々は、遠くよりこれに似たるものを思ひ出し、己が崇むる王の見ゆる像をつくり、その熱心によりて居らざるも居るが如くに、へつらふなり。一八されど、またこの禮拜はこれを知らざるものによりて、更に高きものとせられたり。これをつくるものの、望と願とによりてすすめられたればなり。一九彼は、權威あるものを喜ばしむることあるべきやを願ひ、その術を用ひて、この似たる形を更に大なる美しさに變へ、二〇民等は、彼の手の業の美しさにひかれて、昨日までただ人として崇められしものを拜むべきものとなすにいたれり。二一かくて、これは生命のためにかくれたる危險となりぬ。人は災と暴虐とにとらはれて、傳ふべからざる名を、石と木とに授けん。二二彼等の迷へるは神を知ることにかかはるのみをもて足らず、神を知らざるによりて、烈しき爭の中に住みつつ、多くの惡を彼等は平和と呼べり。二三おごそかなる祭の中に兒等を殺し、又は祕密なる奥義を營み、又は不思議なる祭禮にことよせて、己を忘れし宴を催す。二四彼等はその生活をも、婚姻の聖きをも守ることをせず、裏切ることによる死、または正しからざる産兒による惱を互に與へ合ふ。二五かくて、すべての事は混亂の中に、血と殺人と盗と欺と、腐敗と、不信と、さはぎと、僞と、二六戰と、うけたるめぐみに對する忘恩と、たましひを汚すことと、性の混亂と、結婚の無秩序と、姦淫と、放埓とに滿さる。二七これら名もなき偶像の禮拜はあらゆる惡の始にして、また源、また、その終なり。二八彼等は物狂しきまでにうかれ、また僞の預言をなし、不義なる生活を續け、また輕々しく誓ふ。二九生命なき偶像におのれをまかせ、惡しき誓をなせども、彼等は渦の己に來るを思はず。三〇かかる、重なれる罪の故に、正しき禍は彼等に及ばん。彼等は偶像に心おくによりて、神につきて惡を思ひ、聖きを侮りて、僞の中に不義なる誓をなせばなり。三一不義なるものの邪に臨むものは、罪を犯すものをかへりみる公平にして、人々が、それによりて誓ふものの權にはあらざるなり。

第一五章

一されど、我らの神よ、汝はめぐみあり、また眞なり、忍耐と憐とをもて、すべてのものを定め給ふ。二我ら罪を犯すとも、我らは汝のものにして、汝の支配を知る。されど、我らは罪を犯さず、我等汝のものなるを知ればなり。三汝に知らるるは全き義にして、汝の支配を知ることは不死の根なり。四我等は人の術の惡しきたくみによりて迷されず、畫師の空しきわざ、さまざまの色に塗られたる形に迷はされざるなり。五愚なるものは、それを見るによりて、欲に導かれ、死にたる像の生命なき姿に、心を動かす。六彼等は惡しきものを愛し、かかる望をもつに相應しく、彼等の爲すこと、望むこと、拜むこと、みなかくの如きものなり。七陶師は、柔かき土をこね、我等のために種々なる器をつくるために働く、また、同じ土より、潔き事に用ふる器と、しからざるものとを、同じ方法によりてつくるなり。されど、いかなるものに用ひらるべきかは、つくるもの自らこれを定む。八また、彼は惡しき事のために働き、同じ土より空しき神をつくり出す。土よりつくられて、ただしばしを經たるものなれど、またしばしにして、己がとられたる土に歸り行くなり。かくて、彼に貸されたる、たましひはこれを返すことを求めらる。九彼は心に思ひわづらふなり。そは、その權の失はるるゆゑにあらず、またその生命の短きゆゑにもあらず。ただ彼は、金細工人と、銀細工人とに向ひて競ひ、また眞鍮をつくるものにならひ、にせものをつくる事を自ら誇るなり。一〇彼の心は灰にして、彼の望は土よりも價なく、彼の生涯は土塊にも劣る。一一彼は己をつくり給ひしものを知らず、彼の中に生けるたましひをふき入れ、生ける靈をあたへ給ひしものを知らざればなり。一二彼は、我等の生活を遊戲となし、我等の生涯を求むる祭となす。彼は言ふ、人は惡しき道によるとも、得べき問にものを得べきなりと。一三かかる人は、己が罪を犯せるを、すべてのものよりもよく知り、地のものより、脆き器と、彫像とをつくるなり。一四されど、彼等はいとも愚にして、幼兒よりもそのたましひ弱く、民の敵にして、これを壓ふるものなり。一五彼等は、國々の偶像をもすべて、神なりとす。されど、これらはその眼をつかひて見ず、その鼻によりて息をせず、その耳によりて聞かず、その指によりて持たず、その足は歩むことを得ざるなり。一六これらは人のつくりしものにして、自らの例をかりたるものによりてつくらる。人は己が權に從ひて、神を己の如くつくり得るなり。一七されど、朽つべきものなれば、その無法の手の業によりて死にたるものをつくり出す。彼は自ら拜むものに勝ればなり。彼は生命をもてども彼等はこれを持たざるなり。一八彼等はいとも憎むべきものを拜む。生命なき他のものに較ぶるも、これらは何ものよりも惡しきなり。一九また他の生物に較ぶるも、これらは人、これを見んと望む美しさを持たず、神の譽と神の祝福とを失へるものなり。

第一六章

一かくて彼等は、かかるものによりて、その相應しき罰をうけ、多くの蟲によりて苦しめらる。二されど、汝の民の上には、かかる罰にかはりて、惠をほどこし、鶉を食物として備へ給ひぬ。それは食欲の願に叶ふよき味をもてり。三かくて汝の敵は、食を欲すれど、彼等に送られしものの、いとはしさのゆゑに、あるべき食欲さへもいとはしくなれり。されどこれら汝の民は、ただ暫時食の缺けたるに苦しみたれど、いとよき味のものをとれり。四そは、暴虐をもて、民をあしらひたる彼等に、耐へ難き缺亡與へらるるは當然の事なりき。かくて、この民にその敵の苦しめらるるを、見しむるをよしとし給ひしなり。五野獸の恐しき怒汝の民に來り、また彼等が、まがれる蛇の咬みたるによりて、滅びんとせし時、汝の怒はいやはてまで續けられず、六ただ暫時戒のために彼等苦しめられ、救のしるしを與へられ、それによりて、汝の掟の戒を思ひ出せり。七これに、顔を向けたるものは、救はれたりしが、そはただこれを見たりしがゆゑにあらず、すべてのものの救主よ、汝のゆゑによりて救はれしなり。八かくてこの事により、汝は我等の敵に教へて、汝はあらゆる惡より救ひ出し給ふものなるを知らしめ給へり。九まことに彼等は、蝗と蠅の咬みたりしによりて殺され、彼等の生命には癒を見出さざりき。彼等はかかる事によりて、罰せらるるに相應しきものなればなり。一〇されど汝の兒等は、毒龍の齒すらもこれに勝ち得ざりき。そは汝の憐彼等のありし處をよぎり、彼等を癒し給ひたればなり。一一彼等は咬まれたり、そは彼等に汝の命令を思ひいださせん爲なりき。されど彼等は、すみやかに救はれたり。そは彼等、忘却の淵に陷り、汝の惠により、御助より洩さるることなからんためなり。一二まことに彼等の癒されしは藥草によるにあらず、また柔ぐる油によるにあらず、主よ、すべてのものを癒す、汝の御言によるなり。一三汝は生命と、死との上に權をもち、また陰府の門まで導き降り、また導きのぼり給ふ。一四されど人は、よしその惡によりて殺すことありとも、行き去りし靈を返らしむる事あたはず。陰府のうけたりしたましひを再び解放つことあたはず。一五されど汝の手は、これより逃るることあたはず。一六不信のものは、汝の腕の力によりて鞭うたれたり。かくて彼等は不思議なる雨と、雹と逃れがたき驟雨とに追はれ、また、火によりて滅しつくされたり。一七ことに、いとも驚くべきは、すべてのものを消す水の中に、火はなほもさかんに働きしことなり。かくて、この世は正しきもののために戰ふなり。一八されどある時は災、その烈しさを失へり。そは、不信のものに向ひてつかはされし生物を燒く事なからんが爲なりき。これを見たるものは、神の審判によりて追はるるなるを知れり。一九時にはまた、水の中にても、火はその權を越えて燃えあがれり。そは不義なる地の實を滅さんが爲なりき。二〇されど、汝はこれらにかはりて、汝の民に、天使の食物を與へ

てくらはしめ、また、勞せずして天よりうくるパンを備へ給へり。そは、快き種々の香を持ち、何の味にも叶ふものなりき。二一その本質は汝の子等に、よき味を示せり。また、喰ふものの願に叶ひ、すべての人の選ぶに相應しかりき。二二雪も氷も火に耐えてとけず、それによりて、人々は火が雹の中に焔え、雨の中に輝きて、敵の實を滅すを知れり。二三またそれは、正しきものの養はれんがために、己が力をさへ忘れたり。二四そは、造られしものは、造主なる汝に仕へ、不義なるものを罰せんがためにその權をのばし、汝に頼るもののためには、これを惠まんがために權を弛む。二五されば、その時にもまた、己を種々なる形にて被ひ、すべてを養ひ給ふ汝の惠に加れり。かくて惠は祈り求むるものの願に從ひて與へられぬ。二六こは、主よ、汝の愛し給ふ汝の兒等が、人を養ふ實は地より成長せるものにあらず、ただ、汝の御言の、汝に頼るものを待つことを知らん爲なり。二七そは、火によりて燒れざりしものは、弱き日光によりて溫めらるるのみにて解けたり。二八そは、我等陽よりもさきに起き出でて、汝に感謝すべきを知り、曉の光とともに、汝に祈るべきを知らん爲なり。二九感謝の心なきものの頼は、冬の霜の如く、とけ去りて、用ひ方なき水の如く流れ去らん。

第一七章

一汝の審判は、大にして、示すにかたし。されば、戒をうけざるたましひは迷ひ出づるなり。二無法のもの、聖き民をその力の中にとらへたりと思ひし時、彼等自ら、暗きの捕虜として永き世の足械に縛られ、その屋根の下に、きびしくまもられ、永遠の攝理より追ひ出されぬ。三彼等又、ひそかなる罪を犯しつつ、見らるることなしと思ひし時、忘却の暗き幕によりて互にわかたれ、恐しき恐に襲はれ、また幻影によりて心惱みたり。四彼等をおきたる暗き隅も、彼等を恐より護らず、落ち來る音と響とは彼等を圍り、微笑なき、憂の顏をもてる亡靈あらはれぬ。五彼等に光を與ふべき陽の力もなく、星のいと輝ける焰すら、その暗き夜を照らすに足らざりき。六ただ、水より燃え、恐れに滿ちたる火のゆらぎ、彼等にあらはれたれば、彼等は恐れおののきて、彼等の見るものを、その姿よりも、惡しきものと思へり。彼等はこれをみつむることあたはざりしなり。七彼等は力なく横り、魔術を弄び、また、その悟ることなきを恥ぢ戒む。八そは病るたましひより、恐怖と、苦惱とを逐ひ出すを誓ひたりしもの、みつから恐れおののきて惱めり。九惱ましき事によりて、苦しめられずとも、彼等は蟲の匍ひ來ると、蛇の走る音とにより、一〇恐れおののきて、滅びぬ。彼等は、空を仰ぐことをすら拒めり。そはいつれにも逃るる道なかりし故なり。一一惡は内なる證によりて責められ、つねにいとも惡しき事を、思ひまうくるなり。また、良心の故に強く壓へられ、おぢまどふものなり。一二そは、恐怖は、理念の與ふる助を捨て去る。一三また、心の内より出る

待望も少くして、その苦をもたらすゆゑ如何を知らざることを、一四彼等は、力なき陰府の隅より彼等に來りし力なき夜の間を、みな同じねむりもてねむれり。一五かくて、時には恐しき亡靈に襲はれ、時には、そのたましひのやぶるるによりて、自由を失ふ。思ひまうけざる恐怖、俄に彼等を襲ひたればなり。一六されば如何なる人も、その立てるところに倒れ、鐵棒なき牢獄の部屋に捕はれぬ。一七農夫なりとも、また牧羊者なりとも、荒野に勞する働人なりとも、みな襲はれ、そのまぬかれ難き苦をうけぬ。そは、闇のただ一つの鎖にてすべてのもの、しばられたればなり。一八音立つる風、擴がれる枝なる、鳥の美しき聲、烈しく走る水の落ち行く、激しき音、一九なげ下されし岩の、くだくる響、見えざる所に、飛び廻る獸等の速き足どり、烈しくうなる野獸の聲、山々の谷より出づる山彦の音、これらはみな、彼等を恐れ縮ましめん。二〇外なる世は、明なる光によりて照され、はばまれざる働によりていそがしかりき。されど彼等の上には重き夜擴がれり。二一これはやがて、彼等のうくべき闇の形なり。されど彼等は、自らに對して、その闇よりも重き闇なりき。

第一八章

一されど汝の聖き民には、大なる光ありき。かくて、エジプト人は彼等の聲を聞けども、その形を見ず、彼等の苦まざりしを幸と思へり。二されど彼等は今、かつて彼等のために苦められし者どもの、彼等をそこなはざるを感謝し、その中違のゆゑに、彼等の好意を求めたり。三汝はその民の爲に、もゆる火の柱を設け、知られざる彼等のための導となし、また、勇ましく出でゆく彼等に惠の太陽となり給ひき。四まことに、エジプト人は光をうばはれ、闇にとらはるるに相應しきものなり。彼等は汝の兒等を、獄に入れたればなり。されど、それによりて律法の朽ちざる光は、人の世に與へられたり。五かくて彼等は聖きものどもの幼兒を殺さんと相謀り、その一人の幼兒の捨てられて、また救はれ、それによりて彼等の罪、明となりし時、汝は、彼等より多くの兒等を取り去り、大水の中に彼等の軍勢を悉く滅ぼし給ひき。六その夜の事につきては、我等の父たちは、始よりこれを知ることを許されたり。こは確にこれを知ることにより、彼等はその依り頼む力によりて、喜を與へられんためなり。七かくて、汝の民は義者の救と、敵の滅ぶるとを待ち望みたりき。八そは、汝、敵の上にむくいをなし給ひし如く、同じ道によりて、我等を汝のもとに召し、我等に榮光を與へ給へり。九よき人々の、聖き兒等は、ひそかに犧牲をささげ、一つ心にて、神の律法を整へたり。こは彼等ともに、聖徒らの受くべき同じき善きものと、同じき患難とを受けんが爲なり。彼等の父たちは、聖き讃歌をささげたりき。一〇されど敵の叫は、亂れたる聲となりて、響きわたり、兒等のためになげく悲しき聲は、外にまで至りぬ。一一僕も、その主人とともに同じ正しき滅にあひ、民も王と同じく苦し

みたり。**一二**すべての人は死のただ一つの名となり、その死骸は數へ難かりき。生けるものの數は、これを葬るに足らず、ただ一撃に彼等のよき子孫は滅されん。**一三**彼等は魔術のゆゑに、すべてのものを信ぜざりしが、初兒の殺さるることによりて、民等の、神の子たるを告白せり。**一四**靜なる沈黙は、すべてのものを包み、夜はその速なる道を半まで進みし時、**一五**汝の力ある御言は天より、御座より躍び來れり。それは、嚴めしき、武士の如く、滅び行く地の中に來れり。**一六**それは汝の破るることなき戒を鋭き劍として用ひ、立ちてすべてのものを死をもて滿し、それは、天にふるるとともに地の上を歩めり。**一七**やがて、また亡靈は夢の中に、彼等を恐しく惱まし、思ひもよらぬ恐怖、彼等の上に來りぬ。**一八**かくて人々は半死ねるものとして、ここにかしこに、なげいだされ、何故に死ぬべきかを明にせられぬ。**一九**夢もまた、彼等を見出しつつ、このことを豫め示せり。彼等はその苦める理由を知らずして滅ぶることなからん爲なり。**二〇**されどまた、死の試煉に逢ふことも、義者の上に來りぬ。また多くの人は荒野にうたれたり。されどその怒は長くは續かざりき。**二一**汚なき人は、これを助くるために急ぎ行き、己が奉仕の武器、祈と、功によるねぎごととをもち來れり。彼は怒を防ぎ、災害を終らしめ、己の汝の僕なるを示せり。**二二**彼は怒にうち勝てり。されどそれは體の力によらず、また武器の鋭きによらず。ただ言によりて、罰する者を壓へたり。それによりて彼は、父たちに與へられし、約束と誓とを思ひ出さしめたり。**二三**死ねる者互に相重りて堆高く倒れし時、彼はその中に立ちて、進み來る怒を止め、生けるもののために道を切り開きぬ。**二四**そは彼の長き衣の上に、すべての世界はあり、父たちの光榮は寶石の四つの列もて造れる飾の上にあり。汝の勢は彼の頭の冠にありき。**二五**これらのものに、滅す者は服し、民等は恐をもてこれを見たり。そは怒の試を爲すのみにて足ればなり。

第一九章

一されど、不信のものには、終に至りて、憐むことなき怒を與へられん。彼等の行くべき道も、神これを豫め知り給ひき。**二**彼等はその心を變へて、汝の民を行かしめ、彼等をしてその道に急ぎ行かしめたりしが、やがてまた心變りて、彼等を追へり。**三**かくて彼等、葬の半にあり、また死にたるものの墓にて、なげきをりし時、またも、愚なる計略をなし、自ら願ひて追ひ出し落人を追へり。**四**彼等のうくべき滅は、これがため、彼等の上に近づき來れり。かくて彼等は、彼等の上に來りしことどもを忘れ、それによりて彼等を苦むるために、いまだみたざりし罰をうけたり。**五**また汝の民、驚くべき道に旅を進めたりしが、彼等もまた、不思議なる死に逢へり。**六**すべてのつくられたるものは、その類に從ひて新しき形とせられ、汝の種々なる命令に從へり。それによりて、汝の僕らは、害をうくることなく護ら

れんがためなり。七やがて、天幕を被ふ黒雲と、初、水なりしものの中より、渇きたる地のぼり來り、紅海より、さまたげなき大路出で、烈しき浪の中より、草多き野の出で來るとを見たり。八それによりて彼等はすべての軍勢とともにこれを通り行けり。これらは汝の御手によりて被はれたるものにして、不思議なる驚くべき事を見たりしなり。九主よ、彼等は馬の如くに、行き廻り、小羊の如くに飛び廻りて、彼等の救主なる汝を讃めまつれり。一〇そは、彼等は、その寄寓し時におこりし事どもを思ひ出ししなり。家畜の産することなくして、地には蝨出で、河は魚なくして多くの蛙を産み出せり。一一されど、やがてまた彼等は鳥の新しき種を見たり。彼等その慾によりて、奢りたる美味を求めし時、一二彼等をなぐさむるために、海より鶉上り來れり。一三また、罪人の上には罰來りしが、それは雷の力をもて、豫め示されししるしによるものなりき。彼等はその悪によりて、苦に逢ひしは正しかりき。彼等がその客に向ひてなせる憎しみは、まことに歎しきごとにてありたればなり。一四ソドムの人々は彼等に來りし、旅人をうけざりしが、エジプト人は彼等を益したる客を、奴隷となせり。一五しかのみならず、神はソドムの人に、また異なれるさまにて臨み給へり。彼等は異邦人を敵としてうけたればなり。一六彼等は初、宴を設けて喜び迎へし、彼等と同じ分前を持つ人々を、恐しき勞役をもて苦めぬ。一七彼等は打たれて、その目の力を失ひ、(義者の門にある人もまた然りき。)伸び來る闇によりて圍まれし時、いづれも己が家の門より逃れんとせり。一八詩の調はその節によりて異なるが如く、大氣もその形を變へつつ、種々の音を續け行けり。それは、やがて來るべきものの、姿によりて、明に知らるるなり。一九渇きたる地の生物は、水の中の生物に變へられ、泳ぐ生物は地の上を歩み、二〇火は水の中にてその力の勢を保ち、水はその消す力を忘れぬ。二一焔もまた、その中にある朽つべき生物の肉を燒かず、また、天より降りし饌は溶くべきものなれども、その氷に似たる粒を、火も溶かすことなかりき。二二主よ、すべての事において、汝は汝の民を大ならしめ、彼等に光榮を與へ、彼等を輕くはあしらひ給はず、何時にても、また何處にてもその傍に立ち給ふなり。

ベン・シラの智慧（教会書）

第一章

一 序言

律法と預言者、及び之に從ひたる人々によりて、多くの大なることども傳へられたり。此等のことの故に、その教訓と智慧とにつきて、イスラエルは崇めらるべきなり。且これらのことは、讀むもの自らこれによりて教へらるべきものなるのみならず、篤學なる人々はこれを語り、これを記して他人を益すべきものなれば、我が祖父イエス多年律法と預言者及び父祖たちの他の諸書を讀み、能くこれに精通して、自らも亦教訓と智慧とに關る事を記し、篤學なる人々及び此等のことにたづさはる人々をして、律法による生活にますます進ましめんとせり。されば乞ふ、心を傾けてこれを熟讀し、我等の解釋せんと努めし所に、若し語句の缺けたるあらば之を許せ。そはヘブル語にて語られしものを他國語に飜譯する時その力同じからず、又唯此等のみならず、律法そのものも預言も、其の他の諸書も、原語にて語るる時は、その相違少なからざるなり。ユエルゲスス王の三十八年に、われエジプトに來りて、暫くここに留り居る間、此の書より屡多くの教訓を見出しぬ。さればわれ自ら熱心と勞力を愛する心とをもて此の書を飜譯する必要を感じ、眞に不眠の注意と技巧とを傾けて、豫期の時日の内にその飜譯を終り、異境にありて、學にいそしみ、身を修め、律法に從ひて生きんと欲する者のために、これを公刊することとせり。

凡ての智慧は主より來り、永遠に主と偕に在り。**二** 海の眞砂と雨の雫、また永遠の日數、誰か之を數ふるを得ん。**三** 天の高さ、地の廣さと深さ、(また智慧)誰か之を測るを得ん。**四** 智慧はすべて此等のものの前に創造られ、知識の悟は永遠の昔よりあり。**五** (なし) **六** 智慧の根は誰に啓示せられしや。誰かその思慮を辨へ得しや。**七** (なし) **八** 唯一の、賢くしていと畏るべき主、その御坐に坐し給ふ。**九** 主自ら智慧を創造り、これを見、これを數へ、これをそのすべての御業の上に注ぎ給へり。**一〇** すべての肉には、量に從ひて、また彼を愛する者には、惜なく之を與へ給へり。**一一** 主を畏るるは光榮、名譽、悦樂、また歡喜の冠なり。**一二** 主に對する畏は心を慰め、悦樂と欣喜、又高き齡を與ふ。**一三** 主を畏るる者は終を完うし、その死ぬる時、恩惠を受けん。**一四** 智慧の始は神を畏るることとなり。智慧は信仰篤き者と共に胎内につくられぬ。**一五** 智慧はその永遠の基を人々の前に建て、彼等の裔と共に住まん。**一六** 主を畏るるは智慧の成就なり。智慧はその果をもて人々を飽しむべし。**一七** 智慧はすべての望しきものをもてその家を滿し、その產出物をもて倉を滿さん。**一八** 智慧の冠は主を畏るることとなり。智慧は平和を來らしめ、完き健康を與ふ。**一九** 智慧は知識と理解とを降し、確くこれを握る者の光榮を高む。**二〇** 智慧の根は主を畏るることとなり、その枝は高き

齢なり。二一（なし）二二不義の怒に辯明の道なし、その怒の力は滅亡を招くべし。二三忍耐強き人は時の到るまで、堪へ忍ばん。かくて歡喜、彼に來るべし。二四彼は時の到るまでその語を隱し、多くの人の口その悟を明かにせん。二五智慧の庫には知識の喩言あり。されど敬神は罪人にとりて憎むべきことなり。二六智慧を得んと欲せば、誡を守れ。さらば主惜なくこれを汝に與へ給はん。二七主を畏るることは智慧の教訓にして、信仰と柔和とは、主の喜び給ふ所なり。二八主に對する畏に背くな、二心をもてこれに近づくな。二九人の前に僞善者となるな。汝の唇に心せよ。三〇己を高しとすな、倒れて自ら恥を受けざらんためなり。主汝の隱れたる思想を明にし、汝を集會の中央に倒し給はん。そは汝主を畏れず、汝の心虛僞にて充ちたればなり。

第二章

一わが子よ、汝主なる神に仕へんとて來る時、汝の魂を嘗試に備へよ。二汝の心を直くして、常に耐へ、苦の時に急ぐな。三主に縋りて離るな。それ汝の終の榮えんためなり。四何にても汝に來るものを受け、汝の身分の低くせらるる時にても忍べ。五金は火にて試みられ、嘉せらるべき人は苦難の爐にて試みらる。六主に頼れ、さらば主汝を助け給はん。汝の道を直くして主を仰げ。

七主を畏るる人々よ、主の慈悲を待ち望め。仆れざるやう脇見すな。八主を畏るる人々よ、主に頼れ。汝らの報絶えざるべし。九主を畏るる人々よ、善きものを望み、永遠の歡喜と慈悲とを望め。一〇古の代を顧みよ、誰か主に頼りて辱められしや、誰か主を畏れて見棄てられしや、誰か主を呼びて看過しにせられしや。一一主は憐憫深く、慈悲あり、罪を赦し、患難の時に救ひ給ふ。一二禍害なるかな、怕恐るる心、弱りたる手、又二途を行く罪人。一三禍害なるかな、弱りたる心、信ぜざる故に隱家なかるべし。一四禍害なるかな、忍耐を失ひたる汝ら。主汝らを訪れ給ふ時、何をなさんとするか。一五主を畏るる者はその御言に背かず、主を愛する者はその道を守るべし。一六主を畏るる者はその喜を求め、主を愛する者は律法をもて滿さるべし。一七主を畏るる者は己が心を備へ、主の御前に己を低くすべし。一八いざ我ら人の手にあらで、主の御手に陷らん。主は稜威のみならず慈悲をもち給へばなり。

第三章

一わが子らよ、汝らの父なる我に聽き、救はれんために之を行へ。二主幼兒らのために父に光榮を與へ、子らのために母の判斷を堅め給へり。三父を敬ふ者は罪の贖をなし、四母を崇むる者は寶を積むなり。五父を敬ふ者は、その子らの喜を受けん。又その祈の日に聽かるべし。六父を崇むる者は長き壽を保たん。

主に從ふ者は、その母に休息を與ふべし。七主を畏るる者はその父を敬ひ、主に仕ふる如くその兩親に仕ふべし。八言と行とをもて汝の父を敬へ。祝福汝に來らんためなり。九父の祝福は子の家を堅むれども、母の呪咀はその基を覆へす。
一〇汝の父の不名譽を高むな、これ汝の光榮にあらず。一一人の光榮は父の光榮より來る、不名譽の母は子の恥辱なり。一二わが子よ、老いたる汝の父を助け、その生の限りこれを憂へしむな。一三その理解衰ふともこれを忍び、己が力強くとも彼を輕んずな。一四父への慰藉を忘るな、罪の代にこれをもて自らを建てよ。一五これ汝、その苦難の日に憶えられ、汝の罪は暑さに溶くる氷の如く消え去らんがためなり。一六その父を棄つる者は神を瀆すに等し、その母を怒らしむる者は主によりて呪はれん。
一七我が子よ、柔和をもて汝の努を行へ。さらば汝、嘉せらるべき人に愛せられん。一八大なる者となる時、却つて己を卑うせよ。さらば主の御前に恩惠を得ん。一九（なし）二〇主の力は大にして、卑しき者に崇めらる。二一己にとりて難きに過ぐるものを求むな、又己が力及ばざるものを探るな。二二汝の命ぜられしことを熟考せよ、隱されたるものは汝に用なければなり。二三汝に過ぎたる働のために勞すな、そは人の悟り得るよりも多くのもの汝に示されたればなり。二四多くの人々、彼等の僞によりて惑はされぬ。又惡しき疑 彼等の判斷を覆したり。二五（なし）
二六危險を愛する者は、危險のために滅びん。頑なる心は終に災を受けん。二七頑なる心は惱を負ひ、罪人は罪に罪を重ねん。
二八高ぶる者の應報はこれを醫す道なし。惡の樹彼の中に根を張ればなり。二九慧き人の心は喩言を悟るべし。聽く耳は智者の求むる所なり。三〇水は燃ゆる火を消し、施濟は罪の贖をなさん。三一好意に報ゆる者は、後の事に心を用ひ、己が倒るる時に支柱を見出さん。

第四章

一わが子よ、貧しき者より生計を奪ふな。乏しき者の眼を永く待たしむな。二飢うる魂を悲しますな、又苦難の中に在る者を惱ますな。三怒る心にまた惱を加ふな、乏しき者に與ふるにためらうな。四苦む者の願を拒むな、貧しき人より汝の顏を背くな。五汝の眼を乏しき者より背けず、彼に汝を呪ふ機を與ふな。六彼もし己が魂の苦きをもて汝を呪はば、彼を造り給ひし者その乞ひを聽き給はん。
七汝 自ら會衆の愛を得よ、又汝の頭を力ある人の前に下げよ。八貧しき者に汝の耳を傾け、平和なる言をもて柔和に答へよ。九不義なる者の手より不義を受くる者を解き放せ、汝審判を行ふ時 心を弱くすな。一〇父なきものの父となり、その母に對して夫の代となれ。さらば汝は至高者の子となり、主は汝の母に勝りて汝を愛し給はん。
一一智慧はその子等を高め、己を求むる者を捉ふ。一二智慧を愛

する者は生命を愛し、夙に起きてこれを求むる人々は喜に滿たさるべし。一三 智慧を握る者は光榮を嗣がん。その入る處にて主之を祝し給ふべし。一四 智慧に仕ふる人々は聖者に仕ふべし。智慧を愛する人々を主愛し給ふ。一五 智慧に耳を傾くる者は、國々を審き、智慧に仕ふる者は安らかに住まん。一六 人もし己を智慧に委ねば、智慧を嗣がん。且その子孫もこれを保つべし。一七 智慧は初に、彼とともに曲がれる道に歩み、驚きと怖とを彼に臨ましめ、その魂を信じ得るまで、訓誡をもて鍛へ、審判によりて試みん。一八 やがて智慧は、直なる道によりて彼に歸り、彼を慰め、その祕密をこれに示さん。一九 されどもし迷ひ出でなば智慧は彼を見棄て、滅亡の手にこれを委ねん。

二〇 機を窺ひ、惡を警め、汝の魂を恥ぢしむな。二一 そは罪を招く恥もあり、又光榮と恩惠とを招く恥もあればなり。二二 汝の魂に逆ふ人を受くな。また人を敬ひて己を倒れしむな。二三 善をなす機あらば言を妨げず、智慧の美しさを隱すな。二四 智慧は言によりて知られ、教訓は口の表現に由りて知られん。二五 眞理に逆ひて語らず、無恥の誤を卻くべし。二六 罪の告白を恥づな、河の流を堰き止むな。二七 愚かなる人の踏臺となるな、強き人の外の貌をとるな。二八 死に至るまで眞理のために爭へ。さらば主なる神汝のために戰ひ給はん。

二九 舌にて急ぐな、行を遲くすな、また怠るな。三〇 家に在りて獅子の如くすな、僕等の間に荒び狂ふな。三一 取らんがために手を擴ぐな、返す時閉づな。

第五章

一 汝の財産に頼り、『一生を過ごす程持てり』といふな。二 心の慾に歩まんために、己が魂と力とに從ふな。三 また『誰か我を支配せん』といふな、主は必ず汝に報い給はん。

四 『我罪を犯したれども何事か我に起らん』といふな、主は永く忍び給ふなり。五 贖に頼りて、罪に罪を加ふることを恐れよ。六 『その慈悲大なれば、主はわが罪の多きを許し給はん』といふな、慈悲と怒とは主より來り、その憤罪人の上に止まらん。七 主に歸ることを躊躇ひ、一日又一日と延すな、主の御怒思はざるに來り、汝は罰を受けて滅びん。

八 正しからざる財産に頼るな、刑罰の日に何の益もなからん。九 風毎に簸き分くな、道毎に歩むな、兩舌の罪人はかくするなり。一〇 汝の理解に堅く立ち、汝の言を一つとなせ。

一一 聞くに速に、答ふるに遲くせよ。一二 もし理解を持たば隣人に答へよ、持たずば手を汝の口に置け。一三 名譽も不名譽も言にあり、人の舌はその滅なり。一四 私語者と呼ばるな。舌をもて待伏すな、盜人に恥來り、兩舌の者に惡しき罰來らん。一五 大事にも小事にも無恥となるな。

第六章

一 友となるべきに敵となるな、悪しき名は恥と誹とを嗣がん。兩舌の罪人も亦かくあるべし。

二 汝の魂の計畫をもて己を高しとすな、汝のたましひ牡牛の如く引き裂かれざらんがためなり。三 汝は、なんぢの葉を食ひ盡し、己を枯木として殘さん。四 惡しき魂はこれを待つものを滅し、彼をその敵の笑草となすべし。

五 甘き言はその衣を增し、巧なる舌は交際を廣めん。六 多くの人と和げ、されど汝の助言者は千人の中の一人なるべし。七 友を得んと思はば、試驗をもてこれを得よ。急ぎてこれを信ずな。八 己が利益のために友となる者は、汝の患難の日に續かざるべし。九 友にして敵となる者は、爭を見出して汝を誹らん。一〇 又食卓にて伴侶となれる友も、汝の患難の日に續かざるべし。一一 汝の榮え居る間は、汝の身の如くなりて、僕らを使役せん。一二 されど汝もし低くせられなば汝に逆ひ、己を汝の顏より隱すべし。一三 汝の敵より己が身を離せ。また汝の友に心せよ。

一四 誠心ある友は強き保護なり、これを見出しし者は寶を見出ししなり。一五 誠心ある友に換へ得べきものなし、その價値量り知られず。一六 誠心ある友は生命の藥なり。主を畏るる人々これを見出さん。一七 主を畏るる者はその友情を正しくす。彼のなす如くその友もなすべければなり。

一八 我が子よ、汝の若き時よりの教訓を集めよ。さらば汝白髪になるまで智慧を見出さん。一九 耕し又種播く者なる智慧に來り、その善き果を待ち望め。そはその耕作に汝の勞少くして、しかも汝は直にその果を食ふべければなり。二〇 智慧はいかに愚かなる者に嚴しきぞ。理解なき者はこれとともに在ること能はざるべし。二一 智慧は試練の大なる石の如く、彼の上に來らん。彼は直ちにこれを投げ出すべし。二二 智慧はその名の如く、自ら多くの人に現れざるなり。

二三 聽け、わが子よ、わが判斷を受けよ。又わが勸言を卻くな。二四 汝の足に智慧の足桎をかけ、汝の首にその鎖をかけよ。二五 汝の肩を智慧の下に置きてこれを負ひ、その束縛のために智慧は汝に得らるべし。二六 汝のたましひを傾けて智慧に來り、汝の力を盡してその道を守れ。二七 尋ね求めよ、智慧は汝に得らるべし。これを捉へし時離すな。二八 終に至りてその止まるを知り、これによりて汝は喜を得ん。二九 かくてその桎は汝のために力の蔽となり、その鎖は光榮の衣たらん。三〇 その上に黄金の裝飾あり、又その帶は青絹なり。三一 汝これを衣の如く着、これを喜の冠の如く戴け。

三二 我が子よ、汝もし欲しなば、教訓を受け、心を用ひなば愼を得ん。三三 聽くことを好まば受くべく、耳を傾けなば慧くなるべし。三四 長老たちの群の中に立ち、智者を見出さばこれに縋れ。三五 心を傾けて敬虔なる教を聽き、賢き箴言を逃すな。三六 悟れる人を見ば、速にその許に到り、汝の足にてその戸の敷居を摩

り耗らすべし。二七 主の詔に心をとめ、常にその誡を思ひ回らせ。主は汝の心を建て、汝の願に從ひて智慧を賦與へ給はん。

第七章

一 惡をなすな、さらば惡は汝に追ひ付かざるべし。二 不義より遠かれ、さらば不義は汝を避くべし。三 我が子よ、不義の畦に種を播くな。それを七倍にして刈り取らざらんためなり。

四 勝れたる地位を主に求め、名譽の坐を主に求むな。五 主の前に自らを義とすな。王の前に汝の智慧を示すな。六 審判者となるな。汝不義を取り去る能はず、權力ある人を恐れて、正しき道に躓を置かざらんがためなり。

七 町の群衆に向ひて罪を犯すな。多くの人の前に己が身を投げ出すな。八 罪を二倍にすな。一つの罪にても罰を受けざることなからん。九 『主は我が供物の多きを見そなはし給はん、われ至高神に献ものをなす時、主これを受け給はん』といふな。一〇 汝の祈に倦み疲るな。施濟をゆるがせにすな。

一一 その魂 苦きに在る時、その人を嘲り笑ふな。低くし又高くし給ふ者は唯一なり。一二 汝の兄弟に向ひて僞をたくらむな、汝の友に向ひてもこれをなすな。一三 如何なる僞にてもなすことを欲すな、その習慣善からざればなり。一四 長老たちの群の中にて言ひ過ぐな。祈る時 言を繰り返すな。

一五 難き勞働及び至高者の命じ給へる農業を厭ふな。一六 己を罪人の群の中に數ふな、御怒の來ること遲らかざるを覺えよ。一七 彼の魂をいたく低うせよ。そは敬虔ならぬ者の刑罰は、火責と蟲責となればなり。

一八 無益なるもののために友を換へ、オフルの黄金のために眞の兄弟を換ふな。一九 賢き、良き妻を見棄つな、その美しさは黄金に勝る。二〇 一心に働く者、又汝のためにその生命を與ふる傭人を虐ぐな。二一 心にて賢き僕を愛し、その自由を奪ふな。二二 汝家畜を持つか、これを顧みよ。汝に利あらばこれを保つべし。二三 汝息子を持つか、これを矯正し、若き時よりその首を低くせしめよ。二四 汝 娘を持つか、その身體に心を用ひ、これに笑顔を向くな。二五 汝の娘を嫁がしめなば汝の心 配去らん、これを慧き人に與へよ。

二六 汝の心に合ふ妻あるか、これを去るな。二七 全心を盡して汝の父を崇めよ。汝の母の産の苦を忘るな。二八 汝を産みし人々を憶えよ。汝のためになせし心 盡は、何をもて報いんとするか。

二九 汝の魂を傾けて主を畏れ、またその祭司を敬へ。三〇 汝の力を盡して、汝を造り給へる者を愛し、その役者を忘るな。三一 主を畏れ、その祭司を崇めよ。命ぜられし如くその分前を納めよ。即ち初穗、愆祭、腿の供物、潔めの犧牲、及び聖物の初穗なり。三二 貧しき者に手を擴げよ、汝の祝福 全うせられんがためなり。三三 供物はすべて活ける人の前に喜ばる。されど死人のた

めにも好意を拒むな。三四泣く者を避くな、悲む者と共に悲め。三五病人を見舞ふに遲るな、汝はこれによりて愛を得べし。三六凡てのことに於て己が終を憶えよ。さらばいつまでも過なからん。

第八章

一力ある人と争ふな、汝その手に陷らざらんがためなり。二富める人と競ふな、彼汝を抑へん。そは黄金は多くの人を滅し、王たちの心をすら惑はしぬ。三口の人と争ひ、その火に薪を積むな。

四粗暴なる人と戲るな、これ汝の先祖らの辱しめられざらんためなり。五罪より離るる人を誹るな。我らは皆刑罰を受くべき者なり。六人の老いたる時、これを辱しむな。我らの中にも亦老ゆる人あればなり。七人の死ぬる時喜ぶな、我ら皆死ぬべきを憶えよ。

八智者の言をゆるがせにせず、その箴言と親め。汝彼等より教訓を得、いかに大なる人々に仕ふべきかを學ばん。九老いたる人の教訓をなほざりにすな、彼等もまたその父たちより、學びたるなり。汝は彼等より悟を學び、必要の時にのみ答をなすべし。

一〇罪人の炭火を燃えしむな、その火の焰にて燒かれざらんためなり。一一高ぶる人の前より怒りて起つな、彼は汝の口にわなをかけんと待ち構ふるなり。一二汝よりも大なる人に借すな、借さば損失とならん。一三汝の力に過ぎて保證人となるな、保證人とならば支拂人となれりと思へ。

一四審判者と共に法廷に行くな、彼等はその名譽に從ひて審くなり。一五無法なる人と共に途を歩むな、彼汝を惱まさん。そは彼己が心のままに事をなし、汝はその愚によりて滅ぶるに至らん。一六怒り易き人と争ふな、又彼と共に荒野を行くな、血は彼の眼には何ものにもあらず、助けなき時彼は汝を倒さん。一七愚なる者と事を議るな、祕密を保つこと能はざればなり。一八見知らぬ人の前に祕密を行ふな、これによりて何事をなすやも計られざればなり。一九凡ての人に汝の心を開くな、何人にも汝に好意を返へさしむな。

第九章

一汝の懷の妻を嫉むな、汝に逆ひて惡しき教訓を學ばざらんためなり。二汝の魂を女に與ふな、彼は汝の力を踏みにじらん。三淫を賣る女に會ふな、汝そのわなに陷らん。四歌うたう女の伴侶となるな、汝その計略に捕へられん。五少女を視つむな、その貴きものによりて躓かざらんためなり。六汝の魂を遊女に與ふな、汝の所有を失はざらんためなり。七町の街衢にて汝の周圍を見廻はすな、その淋しき處にさ迷ふな。八汝の眼を美しきによりて愛慾の火燃されぬ。九夫ある女と共に坐すな、これ

と共に酒を飲みて樂むな。汝の心彼に傾き、情慾汝を滅さん。

一〇舊き友を見棄つな、新しきはこれに比ぶべくもあらず、新しき友は新しき葡萄酒の如し。舊くならば汝喜びてこれを飲まん。

一一罪人の光榮を嫉むな、汝いかに彼の倒るるかを知らざればなり。一二敬虔ならぬ者の喜をもて喜ぶな、彼等が罰せられずしては墓に下ることなきを憶えよ。一三殺す權ある人より遠かれ、さらば汝死の恐怖を疑はざるべし。彼の許に來りなば、過をなすな、彼或は汝の生命を斷たん。汝は穽の中央を行き、町の石垣の上に歩むと知れ。

一四汝の力に從ひて汝の隣人を探り、智者と共に謀れ。一五理解ある人と共に語り、汝の語る所をすべて至高者の律法に合はしむべし。一六義しき人を汝の食卓に就かしめ、主に對する畏を汝の誹とせよ。

一七技工は工師に相應しきが如く、民を治むる者は、その言智かるべし。一八町にて恐しきは惡しき舌の人なり、言速なる人は嫌はるべし。

第一〇章

一智き審判者は、その民を教へ、理解ある人の政治には秩序あるべし。二その役者らは民の審判者の如く、町に住む民はその有司らの如し三無學なる王はその民を滅さん。町は力ある人の理解によりて建てらるべし。四主の御手の中に地上の權威あり。時來らば主相應しき人をその上に起たしめ給はん。五主の御手の中に人の繁榮あり。主は學者の前にその光榮を置き給はん。

六その犯せる惡のために隣人を憎み、暴力をもて事をなすな。

七高慢は主と人との前に憎むべきものなり。此の二つに向ひて惡を行へばなり。八不法と暴行と金錢の貪とのために、主權は、國より國に移さる。九如何なれば土と塵は誇るや。その生き居る間にすら腸を投げ出すにあらずや。一〇醫者は永き病をあざ笑ふ。今日の王も明日は死なん。一一そは人死ぬる時は、匍ふものと獸と蟲とを嗣がん。一二人の主より離るるは高慢の初にして、その心は彼を造り給ひし者を去るなり。一三高慢の初は罪なり。これを保つ者は忌むべきものを注ぎ出さん。此の故に主は奇しき禍を降し、彼等を全く滅し給ひぬ。一四主は政權を執る者の位を覆し、柔和なる者をその後に置き給ひぬ。一五主は國々の根を拔き取り、その後に卑しき者を植ゑ給ひぬ。一六主は國々の土地を覆し、地の基に至るまでこれを滅し給ひぬ。一七主は或る人々を取り出して滅し、地よりその記念を斷ち給へり。一八高慢は人のために造られず、怒は女の裔のために造られざるなり。

一九貴きはいかなる種族なるか、人の種族なり。貴きはいかなる種族なるか、主を畏るる者なり。貴からざるはいかなる種族なるか、誡を犯す者なり。二〇兄弟たちの中に在りて彼等を治

むる者は貴ばる。主を畏るる者は、主の前に貴ばる。二一（なし）二二富める人も、貴き人も、貧しき人も、その光榮は皆主を畏るるにあり。二三 悟りある貧しき人を卑むるは正しからず。罪人を崇むるは相應しからず。二四 大なる人、審判者、力ある人は崇められん。されど彼等の何人も主を畏るる者より大ならず。二五 自主は慧き僕に役へん。知識ある人は呟かざるべし。二六 汝の業をなす時賢きに過ぐな。汝の失意の時に、己を崇むな。二七 働きて、すべてのものを豊に持つ者は、己を崇めて糧を缺く者に勝れり。二八 わが子よ、柔和をもて汝の魂を崇め、その價値に從ひて、これを貴べ。二九 誰か己がたましひに逆ひて罪を犯す者を正しとせんや。誰か己が生命を辱しむる者を崇めんや。三〇 貧しき人もその知識のために崇めらる。富める人はその富のために崇められん。三一 されど貧しくして崇めらるる人富まば、その崇めらるることいかばかりぞや。又富みて賤めらるる人貧しくならば、その賤めらるることいかばかりぞや。

第一一章

一 卑しき人の智慧はその頭を高め、彼を大なる人々の中に坐せしめん。二 その美しさによりて人を讃むな。その外貌によりて人を嫌ふな。三 蜂は飛ぶものの中にて小さけれど、その生産物は甘き食物の長なり。四 着る衣の故に誇るな、名譽の日に己を高しとすな、主の御業は驚くべく、その御働きは人々の間に隱さる。五 多くの王たち地の上に坐し、思ひもうけぬ人冠をいただかん。六 多くの力ある人々いたく辱しめられ、名ある人々他人の手に渡されぬ。七 檢ぶる前に却くな、先づ知りて後に責めよ。八 聽く前に答ふな、話の間に妨ぐな。九 汝に關係なきことのために爭ふな、罪人らの審判に共に坐すな。一〇 わが子よ、多くの事のために勞すな。關係多くならば罰せられではあらざるべし。追ひ行くとも追ひ付き得ず、躍び走るとも逃るるを得じ。一一 働き、勞し、急ぎて、反つて多く遲るるものあり。一二 されど主の眼彼の上にありて恩惠を施し、彼をその卑き身分より引き擧げ、一三 その頭を高くし給ひぬ。かくて多くのもの彼を見て驚けり。一四 善と惡、生と死、貧と富、皆主より來る。一五（なし）一六（なし）一七 主の賜物は敬虔なる人の許にあり、主の恩惠は永遠に加へられん。一八 用心と辛苦とによりて富を増すものあり。これはその報の分なり。一九 その人『我は安心を得たれば、いざわが財産にて食せん』といふとも、何時これを他人に遺して死ぬるかを知らざるなり。二〇 汝の契約に確に立ちて常にこれを保ち、汝の業に熟達せよ。

二一 罪人の業に驚かず、主に信頼して、汝の勞働に止まれ。主の御前にては、貧しき人を俄に富ましむるも易き事なり。二二 主の祝福は敬虔なる人の報の中にあり。時やがて來り、主その祝福を豊にし給はん。二三『我には何の用あらんや、今よりわが善きものは何にかならん』といふな。二四『われ滿ち足れり。今より何の害か我に起らん』といふな。二五 人は善きことの日に惡しきことを忘れ、惡しきことの日に、善きことを思ひ出でざるべし。二六 主の御前には、死の日にその行爲に從ひて報ゆるは易きことなり。二七 一時の苦難は喜を忘れしむ。人の臨終にはその諸の行爲現はされん。二八 その死の前に何人をも幸福といふな、人はその子らに因りて知らるべし。

二九 すべての人を汝の家に招くな、僞人のたくらみ多ければなり。三〇 高ぶる人の心は籠の中なる囮の鷓鴣の如し。彼は間者の如く人の倒るるを窺ふ。三一 彼は善きものを惡に變へんと待ち構ふ。又彼は讚むべきものを反つて非難せん。三二 火花より多くの積まれたる炭燃えつく。罪人は血を流さんとて待ち構ふ。三三 惡を行ふ者は心せよ、彼惡事をたくらむ。恐くは彼いつまでも汝を責めん。三四 見知らぬ人を汝の家に受けなば、騷をもて汝を惱まし、汝のものより汝を遠ざけん。

第一二章

一 善をなさば、誰にこれをなすかを知れ。さらば汝の善行感謝を受けん。二 敬虔なる人に善をなせ。さらば汝 報を得ん。もし彼より受けずば、至高者より受けん。三 惡を行ひ續くるもの、また施濟をなさざるものには善來らじ。四 敬虔なる人に與へ、罪人を助くな。五 卑き者に善をなし、敬虔ならぬ者に與ふな、その糧を抑へて彼に與ふな、彼はそれをもて汝に打ち勝たん。汝は彼のためになすすべての善に對して反つて二倍の惡を受けん。六 そは至高者も亦罪人を憎み、敬虔ならぬ者に仇を返へし給はん。七 善人に與へ、罪人を助くな。

八 友は幸福の時に試みられず、敵は不幸の時に隱されざるべし。九 人の幸福の時に敵は悲み、不幸の時には、友もこれを離れん。一〇 決して汝の敵に頼るな。眞鍮の銹出づる如く、彼の惡も出でん。一一 彼己を低くして屈み行くとも、怠らず心せよ。さらば汝彼に對して鏡を拭ひし如くなり、彼の全くは銹び了せざるを知るべし。一二 彼を汝の側に居らしむな、恐くは彼汝を覆へして、汝の所に立たん。彼を汝の右に坐せしむな、恐くは彼汝の席を求めん。かくて汝は終に我が言ひしことを認め、わが言によりて刺されん。一三 誰か蛇に咬まれたる魔術師、若しくは野獸に近づきし人を憐まん。一四 此の如く誰か、罪人の許に行きこれとその罪を共にする者を憐まんや。一五 暫が程はかれ汝と共に居らんも、汝倒れなば決してこれを支へざるべし。一六 敵はその口をもて美しく語り、その心にては如何にして汝を穴に陷らしめんかを謀らん。敵はまたその眼をもて泣かん。され

どもし機を得なば血をもて猶飽き足らざるべし。一七不幸に逢ふ時、汝は其處に、汝の前に彼を見出さん。彼は汝を助くる如き様にて汝の踵を踏まん。一八彼は頭を振り、手を拍ち、多く囁き、且その顔を變へん。

第一三章

一瀝青に觸るる者は汚されん。高ぶる人と交る者はこれに等し。二汝の力に過ぎて重荷を負ふな、己よりも力強く且富める者と交はるな、土の器は釜と何の交をか持たん、彼と此と打ち合はば砕かるべし。三富める者は惡を行ひ、また人を脅す。貧しき者は虐げられて憐憫を求む。四汝に利あれば、彼は汝を商品とし、乏しくならば、汝を捨てん。五汝財産あらば彼は汝と偕に住み、汝を裸にして悔いざるべし。六汝を要する時、彼は汝を欺かん。汝に微笑みて希望を與へ、巧に汝に語り、『汝何を要するや』といはん。七また彼はその食事をもて汝を辱め、二度又三度汝を裸にし、終に汝を嘲り笑はん。かくて後は、汝を見て汝を棄て、汝に向ひてその頭を振らん。八汝心して欺かれざるやうにし、又汝の樂をもて卑くせられざるやうにせよ。九力ある人汝を招かば控えよ、さらば彼益々汝を招かん。一〇彼に迫るな、恐くは彼汝を衝き返さん。されど遠く離れて立つな、恐くは汝忘れられん。一一對等に彼と語らんと願ふな、又その多くの言を信ずな、彼はその多くの言をもて汝を試み、微笑をもて汝を探らん。一二その語りたる言を自ら守らざる者は無慈悲なり。かかる人は憚らず人を害ひ、また縛らん。一三自らこれを守り、勵みて心せよ。そは汝沒落の危險に歩むべければなり。一四（なし）

一五すべての生物はその同族を愛し、すべての人はその隣人を愛す。一六すべての肉はその類に從ひて交り、すべての人はその好む者に縋る。一七狼は小羊と何の交をか持たん。罪人と敬虔なる人との間もこれに等しかるべし。一八山狗と犬との間に何の平和かある、富める人と貧しき人との間に何の平和かある。一九野驢馬は荒野にて獅子の餌食となる如く、貧しき人は富める人の牧草とならん。二〇謙遜は高ぶる人に忌まるる如く、貧しき人は富める人に忌まる。

二一富める人倒れ始むる時、その友によりて支へらる。されど卑しき人倒るる時は、その友に見捨てらる。二二富める人倒るる時、助手許多あり。彼いふべからざることをいふとも人これを正しとす。卑き人倒れなば人々反つて彼を責めん。彼智慧を語るとも、何の位をも與へられず。二三富める人語ればすべての人默す。そのいふ所を人々雲にまで讃め舉ぐ、貧しき人語れば、人々『これは誰ぞ』といふ。もし躓かば人々手をかしてこれを倒さん。

二四富は罪なき人には善きものなり。貧は敬虔ならぬ人の口には惡しきものなり。二五人の心は、善にもあれ惡にもあれ、その

顔色を變ふ。二六 快き顔色は幸福なる人の心の印なり。喩言を見出すは難き心勞なり。

第一四章

一 幸福なるかな、口を滑らさず、罪の悲をもて刺し透されざれる人。二 幸福るかな、その魂責められず、己が希望より落されざる人。

三 富は吝嗇なる人に相應しからず。猜む人は金錢をもて何をなさんとするや。四 己が魂を離れて集むる人は他人のためにこれを集む。他人は彼の所有物をもて奢り樂まん。五 己に向ひて惡なる人は罪に向ひて善とならんや。彼は決してその財産によりて喜を得ざるべし。六 己を疑ふ者に勝りて惡しき人あらんや。此は彼の惡の報なり。七 彼善をなすとも、欲せずしてなすなり。終に至らば己が惡を現さん。八 顔を背け、人の魂を侮りつつ己が眼をもて嫉み視る人は惡なり。九 貪る人の眼は己が分をもて足れりとせず、悖徳の不正はその魂を涸らす。一〇 惡しき眼は糧を貪る。彼は食卓にて吝嗇なり。

一一 わが子よ、汝の才能に從ひて己に善をなし、價値ある供物を主の許に持ち來れ。一二 記憶せよ、死はためらはざるを。墓の契約は汝に示されざるなり。一三 汝の死ぬる前に汝の友に善をなせ。汝の力に從ひ、手を擴げて彼に與へよ。一四 善き日のために己を欺くな、善き願の分を汝より去らしむな。一五 汝の勞働を他人に遺さざるや、汝の勞力を籤にて分たざるや。一六 與へよ、受けよ、汝の魂を樂ましめよ。墓にては奢侈を求むる者なければなり。一七 すべての肉は衣の如く舊ぶ。『汝は必ず死ぬべし』とは初めよりの約束なり。一八 茂れる樹に榮ゆる葉の如く、或ものは落ち、或ものは伸ぶ。肉と血の人の世もかくの如く、一人去りて又一人生る。一九 いかなる業も朽ちて落つ。働き人はこれと共に去るべし。

二〇 幸福なるかな、智慧を求め、その理解をもてこれを究むる人。二一 その心に智慧の道を思ふ人は、智慧の祕密につきて知識を得べし。二二 跡を追ふ人の如く智慧の跡を追ひ、その道にて待伏せよ。二三 智慧の窓を窺ふ人は、その戸にて耳を傾くべし。二四 智慧の家に近く宿る人はその壁に栓を付くべし。二五 彼は己が天幕を智慧の許に張り、善きものの宿場に宿らん。二六 彼はその子らを智慧の隱家の中に置き、己はその枝の下に止まらん。二七 智慧によりて彼は暑さを避け、且その榮光の中に宿らん

第一五章

一 主を畏るるものはこれをなさん。律法を持つものは智慧を得べし。二 母のごとく智慧は彼を迎へ、處女なりしとき嫁ぎし妻の如く彼を受けん。三 悟りの糧をもて智慧はこれを養ひ、飲むべき智慧の水をこれに與へん。四 かれは智慧の上にとどまりて動かず、これに依り頼みて亂されざるべし。五 智慧は彼をその隣人

の上に高め、會衆の中央にて、彼の口を開かん。六かれは悦樂と歡喜の冠、および永遠の名を嗣がん。七愚なる人は智慧を得ず、罪人はこれを見ざるべし。八智慧は誇より遠く離る。僞者は、これを憶えざるべし。九讃美は罪人の口にふさはしからず、これは主より彼に遣はされしにあらず。一〇讃美は智慧の口にてあらはさる。主、これを榮えしめたまわん。

一一『わが倒れたるは主に因る』といふな、汝は主の憎み給ふ事をなすを得じ。一二『我を誤らしめしは主なり』といふな、主は罪人を要し給はざるなり。一三主はあらゆる惡を憎み給ふ。主を畏るる人々はこれを愛せざるなり。一四主は元始に自ら人を造り、これを助くる者の手に委ね給へり。一五汝もし欲せば誡を守り得べし。事に忠なるは喜ばしきことなり。一六主は火と水とを汝の前に置き給へり。いづれにても好むものに汝の手を延ぶべし。一七人の前に生と死とあり、いづれにてもその好むもの彼に與へらるべし。一八主の智慧は大なり。主はその力強く、すべてのものを見そなはし給ふ。一九その眼は主を畏るる人々の上にあり、主は人のあらゆる業を知り給はん。二〇主は何人にも神を敬ふなと命じ給はず、又何人にも罪を犯す許可を與へ給はざりき。

第一六章

一益なき子らの多さを望むな、又敬虔ならぬ息子らを喜ぶな。二彼等増すとも、主に對する畏共にあらずば、これを喜ぶな。三彼等の生活に依り頼むな、又その地位に心を傾くな、一人は千人よりも勝ることなり。子なくして死ぬるは敬虔ならぬ子らを持つに勝るなり。四理解を持つ一人によりて町の人口増さん。されど不法なる人々の族は衰ふべし。五かかることどもを、われ多くわが眼をもて見たり。又わが耳此よりも大なる事を聽けり。

六罪人らの集會の中に火燃やさるべし、從はぬ國人らの間に御怒燃えあがれり。七己が力をもて背きし昔の巨人と、主は和ぎ給はざりき。八主はロトのさすらいし地を赦し給はざりき。人々の誇を憎み給へるなり。九主は滅亡の民を憐み給はざりき。彼等はその罪の中に携へ去られぬ。一〇頑なる心をもて共に集れる六十萬人の歩兵をもしかなし給へり。一一唯一人の頸の強き者にても罰を受けてあらば、これ驚くべきことなり。そは慈悲と怒とは主と共にあり、主は力ありて赦を與へ、又その御怒を注ぎ給ふ。一二その慈悲の大なる如く、その懲罰も亦大なり。主はその業に從ひて人を審き給ふ。一三罪人は掠め奪ひて逃るるを得じ。敬虔なる人の忍耐は挫かれざるべし。一四主はあらゆる慈悲の業のために道を開き給はん。すべての人その業に從ひてこれを見出すべし。一五（なし）一六（なし）

一七『我は主に隱さるべし、誰か高き處より我を憶えん、われはかかる多くの人々の間に知られざるべし、數知られぬ造られたるものの中にてわが魂は何なるぞ』といふな。一八視よ、天と

諸天の天、深き淵と地とは、主の訪れ給ふ時搖り動かん。一九山も、地の基も、主の見給ふ時、共に震ひ戰くべし。二〇此等の事を正しく思ひ得る人はなし、誰かその道を考へ得んや。二一迅風起らんに誰もこれを見ざるべし。實に主の御業の多くは隱さる。二二誰か義の業を宣べんや、誰かこれに耐へんや、その契約は遠く離る。二三心無き者はこれを考へ、無智にして誤られたる人は愚なることを思ふ。

二四わが子よ、我に聽け、又知識を學べ、汝の心をわが言に傾けよ。二五われ秤量をもて教訓を示し、正確なる知識を告げん。二六主の審判によりてその業初より成る。これを造り給へる時より、主その諸の部分を整へ給へり。二七主はその御業に秩序を立て、權威あるものを代々に傳へ給へり。彼等は飢ゑず、疲れず、又その業を止むることなし。二八誰もその隣人を惱まさず、彼等は決してその御言に背くことなし。二九此等のことの後、主は地上を見そなはし、諸の善きものをもてこれを滿たし給ひぬ。三〇主は地の面を、あらゆる生けるものをもて蔽ひ給へり。されば彼等は皆地に還るなり。

第一七章

一主は土より人を創造り給ひ、再びこれを土に還し給ふ。二日數と定りたる時とをこれに與へ、また地の上のすべてのものを治むる權を與へ給へり。三主は己に等しき力をこれに着せ、己が像に似せてこれをつくり給へり。四又主はすべての肉をしてこれを恐れしめ、獸と鳥とを治むる力をこれに與へ給へり。五(なし)六勸言と舌、眼と耳、また悟る心を與へ給へり。七主は悟の熟練を彼等に滿たし、善と惡とをこれに示し給へり。八その御業の稜威を示さんために、主はその眼を彼等の心の上に置き給へり。九(なし)一〇彼等は主の聖なる御名を讃めん、これ彼等主の御業の稜威を宣べんためなり。一一主は彼等に知識を加へ、生命の律法を嗣業としてこれに與へ給へり。一二主は彼等と永遠の契約をなし、その審判をこれに示し給ひぬ。一三彼等の眼はその榮光の稜威を見、その耳はその榮光ある御聲を聽けり。一四又これに言ひ給ひけるは、『すべての不義に心せよ』と。主は彼等に、各自その隣人につきてなすべき誡を與へ給へり。一五彼等の道は常に主の御前にありて、その眼より隱されざるべし。一六(なし)一七主はすべての國人に君主を立て給へり。されどイスラエルは主の分なり。一八(なし)一九そのすべて業は主の御前に日輪の如し。主の眼は絶えず彼等の上にあり。二〇その不法は主に隱るることなし、その罪は皆主の御前にあり。二一(なし)二二人の施濟は主にとりて一つの印なり。主は人の好意を瞳の如く保ち給はん。二三後に主起ちて彼等に報い、彼等の報を彼等の頭に返し給はん。二四されど悔改むる者に答を與へ、忍耐を失はんとする者に慰藉を與へ給ふ。

二五主に立返りて、罪を棄てよ。御顔の前に汝の祈をささげ、過を少くせよ。二六至高者に來りて、不法より遠かり、憎むべきものをいたく憎め。二七陰府に在りては誰か生ける人々に代りて、至高者を讃美し、且これに感謝せん。二八在らざる者なれば死人には感謝なし。生きて確かなるものは主を讃美せん。二九主の御慈悲と、主に歸る人々への御教は如何に大なるかな。三〇すべてのものは人々の中に在り得ず、そは人の子は死なぬものにあらざればなり。三一何ものか日よりも明るき、しかもこれ猶滅びん、況して肉と血との傾向ある人をや。三二主は天の高き處にある萬軍と、土と塵なるすべての人とを見そなはし給ふなり。

第一八章

一永遠に生き給ふ者はすべてのものを均しく造り給へり。二唯主のみ義とせられ給ふ。三（なし）四主は誰にもその御業を宣ぶる力を與へ給はず、誰かその力ある御働を探り得ん。五誰か主の稜威の力を宣べ得ん、誰かその諸の慈悲を數へ得ん。六誰も取り、また加ふる能はず、誰も主の驚くべき御業を探る能はず。七人終りたる時は始めたるに過ぎず。その止むる時は困惑の中にあり。八人は何なるか、何の用か彼にある、その善は何なるか、又その惡は何なるか。九人の齡は多くとも百歳なり。一〇海の水の一滴の如く、濱の眞砂の一粒の如く、永遠の日にありては人生の數年は無きに均し。一一されば主は人のために永く忍び、その慈悲をこれに注ぎ給へり。一二主は彼等の終を見、その惡なるを知り給ふ。されば主はその御赦を増し給ふ。一三人の慈悲はその隣人の上にあり。されど主の慈悲はすべての肉の上にあり。主はこれを戒め、懲し、また教へ、牧者の如くその群を伴ひ歸り給ふ。一四その懲戒を受け、勵みてその審判を求むる者に、主は慈悲を垂れ給ふ。

一五わが子よ、善き行爲を汚すな。供物をなす時、快からぬ言を用ふな。一六露は燒くる熱を消すにあらずや、かくの如く一つの言は供物よりもよし。一七見よ、言は善き供物に勝るにあらずや。されど憐ある人は二つを持つ。一八愚なる者は憐なく人を責め、嫉む人の供物は眼を衰へしむ。

一九語る前に學べ、病む前に醫せ。二〇審判の前に己を省みよ、さらば眷顧の時に赦免を蒙るべし。二一病にかかる前に自ら謙れ、罪を犯す時悔改を示せ。二二時に臨みて誓約を果たすを何者にも妨げしむな。義とせらるるを死に至るまで待つな。二三誓ふ前に汝の誓約を備へよ、主を試むる者の如くすな。二四終の日の御怒を思へ、また御顔を背け給ふ復讐の時を思へ。二五滿ち足れる日に飢饉の時を、富める日に貧しきと乏しきとを思へ。二六朝より夕に至るまで時は移り、すべてのものは主の御前に走る。二七智者はすべてのことに恐れ、罪を犯さんとする時、これを犯さざるやう心す。二八理解ある人はすべて智慧を知り、これを見出すものに感謝せん。二九言に慧き者は自ら智くなりて、よ

き箴言を注ぎ出す。三〇 汝の情慾を追ふな、食慾より己を遠けよ。三一 慾望の満足を汝の魂に許さば、敵の前に笑草とせられん。三二 多く奢り樂むな、又その費用に縛らるな。三三 汝の財布に一錢もなき時、借りし金もて酒宴を開きて、乞食となるな。

第一九章

一 酒に醉ふ勞働人は富むことなからん。小事を輕んずる者は少しづつ倒れ行くべし。二 酒と女は悟ある人をも墮落せしめん。遊女に溺るる者は無恥に過ぐ。三 蠹と蟲かれを喰ひ、その無恥なる魂滅されん。

四 急ぎて人を信頼するものは輕率なり。罪を犯す者は己が魂に向ひて犯すなり。五 心にて樂む者は責めらるべし。六 語ることを嫌ふ者は過少し。七 汝に語らるることを繰り返へすな、さらば不利益を來たすことなからん。八 友にも敵にもこれを語るな、又汝にとりて罪とならずばそれを表はすな。九 そは彼は汝に聽き、汝を見、時至らば汝を憎まん。一〇 汝何事をか聽きし、それを葬れ、心を強くせよ、それは汝を引き裂かざるべし。一一 愚なる者は言の故に惱む。女の、その子のために産の苦をなすが如し。一二 矢の、肥りたる腿を刺す如く、言は愚なる者の腹を刺す。一三 友を戒めよ、かれ或はそれをなせしにあらざらん。もし何事かをなせしならば、再びこれをなさざるべし。一四 友を戒めよ、かれ或はそれを言ひしにあらざらん。もし言ひしならば、再びいはざるべし。一五 友を戒めよ、讒言しばしば起らん。されどすべての言を信ずな。一六 心よりにあらで口滑る人あり。その舌をもて罪を犯さざるは誰ぞ。一七 汝の隣人を嚇す前に、まづ戒めよ。いと高き者の律法に所を得さすべし。一八 （なし）一九 （なし）

二〇 すべての智慧は主を畏るることなり。すべての智慧に律法の成就あり。二一 （なし）二二 されど惡の知識は智慧にあらず。罪人の勸言は悟にあらず。二三 惡あり、こは憎むべきものなり。又智慧を缺く愚人あり。二四 少しの悟ありて恐るる人は、多くの思慮ありて律法を犯す人に勝る。二五 巧なれども正しからざる技巧あり。審判を得んために好意を曲ぐる者もあり。二六 惡をなし、悲みて首を垂るるも、心には僞の滿つる者あり。二七 その顏を伏せ、片耳の聾者の如くすとも、知られざる處にては、汝を利用すべし。二八 力足らざるため、罪を犯すを妨げらるとも、機を得ば惡をなす者あり。二九 人はその外見によりて知らる。汝見る時、智者はその顏によりて知られん。三〇 人の服裝、齒の笑、又歩方は、そのいかなる人なるかを示す。

第二〇章

一 過ぎたる戒あり、沈默を守るはむしろ智し。二 怒るよりは戒むる方いかにもよきかな。されど告白をなす者を辱しむな。三 （な

し）四 暴力をもて審判を行ふ者は、情慾をもて處女を汚す閹人の如し。五 沈默を守りて慧しと見らるる者あり。又その言葉多きために憎まるる者もあり。六 答をなすに及ばざれば沈默を守るものあり。その時を知る故に沈默を守る者もあり。七 智者は時の來るまで沈默を守るべし、されど呟く者および愚かなる者はその時を見過さん。八 言多き者は嫌はるべし、己に權威を取る者は憎まれん。

九 不幸の中に居る人に幸福の來ることもあり、利益の、損失に變ることもあり。一〇 汝を益せざる贈物もあり、その返禮二倍となる贈物もあり。一一 名譽に因りて來る恥辱もあり、低き身分よりその頭を高めらるる人もあり。一二 僅少のものをもて多くのものを買ひ、それを七倍にして返す者もあり。一三 言に慧き者は愛せらるべし、されど愚人の戲言は流されん。一四 愚人の贈物は汝を益せざるべし。彼の眼は一つにあらず、多ければなり。一五 彼は全く與へて多く責む。口を開けば廣告人の如し、今日貸して明日徴らん。かかる人は憎むべき者なり。一六 愚なる者はいはん『我は友をもたず、我にはわが善行を謝するものなし、わが糧を食ふ者は惡しき舌をもつ』と。一七 いかに屢、又いかに多くの人、かく言ひて、人に嘲られしぞ。

一八 鋪石に滑るは舌の滑に勝る。かくの如く惡人の沒落速に來らん。一九 粗野なる人は時を辨へぬ談話の如し、それは絶えず無知なる人の口にあらん。二〇 愚人の口より出づる喩言は却けらるべし、時を外れていへばなり。二一 或人は機を失ひて罪を妨げらる、その休む時何の煩悶もなし。二二 或人は恥辱の故にその生命を滅し、又その愚なる顏によりてこれを滅さん。二三 或人はまた、恥辱のために友と約束し、理由なくして彼を敵となす。

二四 僞は人の中の醜き汚點なり。それは絶えず無知なる人の口にあらん。二五 盜人は絶えず僞る人に勝る。されど彼等はいづれも滅を嗣がん。二六 僞人の性質は恥づべきものなり。その恥辱は常に彼とともにあり。

二七 智者は言をもて己を進め、賢き人は大なる人々を喜ばすべし。二八 己が土地を耕す者は、その收穫物を高く積みあげ、大なる人々を喜ばす者はその不法につきて赦を得ん。二九 供物と贈物とは智者の眼を眩し、口の謎の如く戒を退く。三〇 隱れたる智慧も、眼に見えざる寶も、これに何の益かあらん。三一 その愚を隱す人はその智慧を隱す人に勝る。

第二一章

一 わが子よ、汝は罪を犯したるか、猶これに加ふな、又汝の以前の罪のために赦を求めよ。二 蛇の顏より逃るる如く、罪より逃れよ、これに近かば嚙まれん、その齒は獅子の齒にして人のたましひを殺すなり。三 すべての不法は兩刃の劍の如く、その傷には醫の道なし。

四 虐と烈しき力とは富を荒すべし、かくて高ぶる人の家は荒れ廢れん。五 貧しき人の口より出づる歎願は神の耳に入り、その審判速に到る。六 戒を憎む者は罪人の路にあり。主を畏るる者は心より立ち歸るべし。七 舌に強き者は遠くより知らるれど、悟ある人はその滑る時にこれを知る。

八 他人の金錢にて家を建つる人は、己の墓のために石を集むる人の如し。九 惡人の集會は包まれたる麻屑の如し、その終は火なり。一〇 罪人の道は石をもて滑にせられ、その終は陰府の穴なり。

一一 律法を守る者は、その趣旨もて治むる者となる。主に對する畏の成就は智慧なり。一二 賢からざる者は教へられじ、されど苦きを増す賢さもあり。一三 智者の知識は洪水の如く溢れ、その助言は火の泉の如くなるべし。一四 愚人の心の中は破れたる器の如く、何の知識をも保たざるべし。

一五 知識ある人もし智き言を聽かば、これを人に薦め、又これに加ふべし。されど放蕩なる人これを聽かば快からず思ひ、これをその後に捨つべし。一六 愚なる人の談話は道行く時の重荷の如し。されど智者の唇には喜見出さるべし、一七 思慮深き人の口は集會の中にて求めらるべし、人々は彼の言をその心のに思ひ回らさん。

一八 智慧は愚なる者にとりては破られたる家の如し。智からざる人の知識は、意味なき話の如し。一九 教訓は悟なき人にとりては足桎の如く、右の手の手桎の如し。二〇 愚なる者は笑をもてその聲を擧ぐ、されど慧き人は靜なる微笑だもせざるべし。二一 教訓は悟ある人には黄金の裝飾の如く、右の手の腕輪の如し。二二 愚なる者の足は速に他人の家に入る、されど經驗ある人は入ることを恥づべし。二三 愚なる者は他人の家の戸より内を窺ふ、されど教を受けし人は外に立たん。二四 戸にて聽くはその人の教の缺けたるに因る。されど悟ある人は恥辱のために悲むべし。二五 見知らぬ人の唇は此等の事によりて悲まん。されど悟ある人の言は重くして量を超ゆ。

二六 愚人の心はその口にあり。されど智者の口はその心にあり。二七 敬虔ならぬ人のサタンを呪ふは、己が魂を呪ふなり。二八 私語は己が魂を汚し、その到る處にて憎まるべし。

第二二章

一 怠る人は汚れたる石に似たり。人は皆これを咎め、また辱しむべし。二 怠る人は糞堆の汚穢の如く、これに觸るる人は皆その手を振らん。

三 教養なき子を持つ父に恥辱あり。愚なる娘はその損失なり。四 聰き娘は己が夫を得べし。されど恥を來らしむる娘はこれを産みし者の憂なり。五 不敵なる娘は父と夫とに恥を蒙らしめ、その雙方より輕しめらるべし。六 時節外れし話は喪の音樂の如し、されど鞭と矯正とはいかなる時にても智慧なり。

七 愚なる者を教ふる人は、土器の破片を糊附にするが如く、又眠れる者をその熟睡より覺すが如し。八 愚なる者に語るは眠れる者に語るが如く、終に彼は『そは何なるか』といはん。九 （なし）

一〇 （なし）一一 死者のために泣け、そは光 彼を離れたればなり。愚なる者のために泣け、そは悟 彼を離れたればなり。死者のために靜に泣け、そは彼安息を得たればなり。されど愚なる者の生命は死にも劣る。一二 死者のための喪は七日なれど、愚なる者と敬虔ならぬ者とのためには一生涯喪なり。

一三 愚なる者と多く語るな、悟なき人に行くな、これに心せよ、恐くは汝 苦められん。汝はその攻擊にて汚さるべきにあらず。彼より離れよ、さらば汝 休を得、その狂氣のために惱まさるることなかるべし。一四 鉛より重きものは何ぞ、その名は『愚人』にあらずして何ぞ。一五 砂も鹽も、また鐵の塊も、悟なき人よりも、負ふに易し。

一六 建物を廻らし、これに結び付けたる木材の、地震によりて緩められぬ如く、よき助言によりて建てられたる心は危き時にも恐れざるべし。一七 思慮深き理解の上に据ゑられたる心は、研かれたる壁の上の彫刻の飾の如し。一八 高き處にある柵は風に逆ひて立つこと能はざる如く、愚なる者の想像にて恐るる心は、如何なる恐に對ひても立つこと能はざるべし。

一九 眼の傷は淚を流れしめ、心の傷は友情を斷つ。二〇 小鳥に石を投ぐる者はこれを驚かし、友を謗る者は友情を消す。二一 友に逆ひて劍を拔くとも失望すな、其處を出づる道あればなり。二二 友に逆ひて口を開くとも恐るな、和睦の道あればなり。されど誹謗、尊大、密事の暴露、また騙討、此等のものの前にはいかなる友も去らん。

二三 貧に居る汝の友を信ぜよ、その榮ゆる時 喜ばんためなり。その苦難の時には確くこれに縋れ、ともにその嗣業を嗣ぐを得べし。二四 火の前に爐の蒸氣と烟とあり。此の如く血を流す前に罵詈あらん。二五 我は友をかばうを恥ぢず、又己をその顏より隱さざるべし。二六 汝のために彼に禍 起らば、誰にてもこれを聽くもの汝に告げん。

二七 これによりてわが落つることなく、又わが舌我を滅さざらんがために、何人か我が口に門守を、我が唇に堅き封印を置かんことを。

第二三章

一 ああ主よ、わが父、わが生命の師よ、我を彼等の謀に委ね給ふ勿れ。彼等によりてわが倒るるを許し給ふ勿れ。二 我が思想に鞭をあて、わが心に智慧の懲戒を加ふるは誰ぞ。彼等はわが無知のために我を赦さず、又我が罪を看過さず。三 これわが無知増し、わが罪加はらざらんためなり。恐くはわれ、わが仇の前に倒れ、わが敵わがために喜ばん。四 ああ主よ、わが父、わが生命の神よ、われに高ぶれる眼を與へ給ふ勿れ。五 情慾をわれより

取り去り給へ。六貪婪と淫行とに我を捕へしめず、恥知らぬ心を我に與へ給ふ勿れ。

七わが子らよ、口の懲戒を聽け、これを保つものは罠に陷らざるべし。八罪人はその唇によりて捕へられ、罵る者、又高ぶる者はこれによりて躓くべし。九汝の口を誓約に慣すな。聖者の御名を呼ぶ習慣を作るな。一〇絶えず鞭打たるる僕は打たれし傷を缺く時なきが如く、絶えず誓ひ、聖者の御名を呼ぶ者は罪より潔めらるることなかるべし。一一誓約多き人は不法にて滿ち、鞭その家を離れざるべし。彼犯さば罪彼の上にあり、彼これを看過さば罪二重となる。要なきに誓はば正しとせられず、その家災禍をもて滿されん。一二死に比ぶべき言のいひ方あり、ヤコブの嗣業の中にこれを見出さしむな。敬虔なる人よりすべて此等のものは取り去られ、彼等は罪の中に悶えざるべし。一三汝の口を醜き言に慣すな。その中に罪あればなり。一四大なる人々の中に坐する時、汝の父と母とを憶えよ。恐くは汝彼等の間に躓き、その言をもて己の愚を示し、生れざりしことを願ひて、己が誕生の日を呪ふに至らん。一五恥づべき言に慣れし人は生命終るまで智慧を學ばざるべし。

一六二種の人、罪を増し加へ、第三の人は怒を來らす。情慾の心は火の如く燃え、燃え盡さずば消えず。肉體の淫を行ふ者は、火を燃し終らずば決して止めざるべし。一七淫を行ふ者にとりてすべての糧甘し、死ぬるまで彼はこれを止めざるべし。一八己が床を迷ひ出づる人は心にいふ『誰か我を見ん、暗闇我が周圍にあり、壁我を隱し、我を見る人なし、我誰をか恐れんや、至高者も我が罪を憶えざるべし』と。一九人々の眼は彼の恐なり。而して彼は、主の眼は日よりも一萬倍明く、人々のすべての道を見、隱れたる所をも見ることを知らず。二〇萬の物はその造らるる前に主に知られたり、その全うせられたる後にも主これを見給ふ。二一かかる人は町の街衢にて罰せられ、その思はざりし處に取り去られん。二二その夫を去り、他人によりて嗣子を擧ぐる妻も亦同じ。二三第一には彼は至高者の律法に從はず、第二に己が夫に向ひて罪を犯し、第三に私通をもて姦淫を行ひ、他人によりて子を産めり。二四彼は會 衆の前に伴れ來られ、其の子等も檢視を受けん。二五その子らは根を張るべからず、その枝も果を結ばざるべし。二六その呪は記憶に殘り、その責は消えざるべし。二七かくて後に遺されたる人々は、主に對する畏より善きはなく、主の誠に心を用ふるより美しきはなきを知らん。二八（なし）

第二四章

一智慧は己が魂を讃めたたへん。その民の中にて自らを崇めん。二至高者の集會の中にて智慧はその口を開き、主の萬軍の前にて自らを崇めん。三我は至高者の口より出で來り、霧の如く知を蔽へり。四高き所にわれわが住處を定めぬ。わが地は雲

の柱の中にありき。五 獨われのみ天の周圍を巡り、淵の深き處を歩めり。六 海の浪も、地上の萬物も、あらゆる民も國も、皆我が所有なり。七 すべて此等のものをもてわれ休を求めぬ。誰が嗣業の中にわれ宿らん。八 その時萬物の創造主われに誡を與へ、われを造り給へるもの、わが休むべき幕屋を造りて、言ひ給へり『汝の幕屋はヤコブの中に、汝の嗣業はイスラエルの中にあるべし』と。九 主は創世の前に我を造り給へり、終に至るまでわれ滅びざるべし。一〇 聖なる幕屋にてわれ主の御前に仕へぬ。かくてわれシオンに建てられたり。一一 主は又此の愛する町にて我に休を與へ給へり。エルサレムにわが權ありき。一二 光榮ある民の中に、即ち主の嗣業の分の中に、われわが基を据ゑたり。一三 我はレバノンの香柏の如く、ヘルモンの杉の如く高められぬ。一四 われは海邊の棕櫚の如く、エリコの薔薇の如く、野の美しきオリブの如く高められたり。一五 肉桂とアスパラトの如く、オニクスの如く、スタクテの如く、又幕屋の中なる烟る乳香の如くなりき。一六 テレビントの如くわれ我が枝を張りぬ。わが枝は榮光と恩惠の枝なり。一七 葡萄の、喜を與ふる如く、わが花は光榮と富との果なり。一八 (なし)一九 我に來れ、汝らわれを求むる者よ。わが生産にて滿たされよ。二〇 わが記念は蜜よりも、わが嗣業は蜜蜂の巣よりも甘し。二一 われを食ふ人々は猶我に向ひて飢ゑ、我を飲む人々は猶我に向ひて渴かん。二二 我に從ふ者は辱められず、我にありて業をなす者は過たざるべし。

二三 此等はすべて至高き神の契約の書、即ちモーセがヤコブの集會への嗣業として我らに命ぜし律法なり。二四 (なし)二五 主は智慧をピソンの如く豊にし給ふ。又これを新しき果實期のチグリスの如くし、二六 ユフラテの如く悟に滿たしめ、また收穫期のヨルダンの如くし、二七 葡萄期のギホンと等しく、教訓を光の如く輝き出でしめ給ふ。二八 始の人は少しも智慧を知らざりし如く、終の人も亦これを見出す能はざるべし。二九 そは智慧の悟は海よりも滿ち足り、智慧の謀は淵よりも深ければなり。

三〇 我は河よりの流の如く、園への渠の如く來りぬ。三一 我いへり『我はわが園に水灌ぎ、わが庭牀に豊に水灌がん』。見よ、わが流は河となり、わが河は海となりぬ。三二 我は教訓を朝の如く照出でしめ、これを遠くまで輝き渡らしめん。三三 我は猶、教訓を預言の如く注ぎ出し、これを代々とこしへに遺さん。三四 見よ、われは己のためにあらず、勵みて智慧を求むるすべての人々のために勞せり。

第二五章

一 われ三つのものによりて美しくせられ、主と人々との前に美しく立ちぬ。それは兄弟の一致と隣人の友情、及び夫婦相和して共に歩むことなり。二 されどわが魂は三種の人を忌み、彼等の生くるによりていたく害はれぬ。即ち誇り高ぶれる貧しき人、僞者なる富める人、及び悟なき多淫なる老人これなり。

三若き日に汝は集めざりき。いかで老いたる時にこれを得んや。四審判は白髪にとりて、計畫を知るは長老にとりて、いかに美しきかな。五老いたる人の智慧と、崇めらるる人の思想と計畫とはいかに美しきかな。六深き經驗は老いたる人の冠なり。彼等の光榮は主を畏るることなり。

七わが思ひめぐらしし九つの事ありて、わが心幸福なり。第十はわれわが舌をもてこれを言はん。己が子らの喜をもつ人。生きてその敵の沒落を見る人。八幸福なるかな、悟ある妻と偕に住む人。その舌を滑らさざりし人。己に相應しからざる人に仕へざりし人。九幸福なるかな、悟を得し人。聽く人の耳に教訓を語る人。一〇いかに大なるかな、智慧を得し人。されど何人も主を畏るる人の上には出でじ。一一主に對する畏は萬物の上にあり、これを保つ人を誰に教ふべき。一二（なし）

一三心の病にあらずば、いかなる病にてもよし。女の惡にあらずば、いかなる惡にてもよし。一四我を憎む者よりの禍にあらずば、いかなる禍にてもよし。敵の復讐にあらずば、いかなる復讐にてもよし。一五蛇の頭に勝る頭はなく、敵の怒に勝る怒はなし。

一六獅子及び龍とともに住むは、惡しき女とともに家を保つよりも善し。一七女の惡はその外見を變へ、熊の如くその顏を暗くす。一八その夫は隣人と食卓に坐せんに、これを聽かばいたく歎くべし。一九すべての惡意は女の惡意に比ぶれば小し、罪人の分前彼の上に落つべし。二〇靜なる人の言多き女に向ふは、老いたる人の砂道を登り行くが如し。二一女の美しさに己が身を投げかくな、その美貌をもて女を求むな。二二女その夫を支へなば、怒と無恥と、大なる非難あるべし。二三惡しき女は心の恥、顏の悲、また傷けられし心なり。その夫を幸福ならしめぬ女は垂れ下りたる手、麻痺せる膝なり。二四罪の初は女にありき。彼のために我等は皆死ぬるなり。二五水に出口を與ふな、惡しき女に言の自由を與ふな。二六去らしめんとする時、もし聽かずば、これを汝の肉より斷て。

第二六章

一良き妻の夫は幸福なり。その齡は二倍とならん。二賢き女はその夫を喜ばしむ、彼はその生涯を平和をもて滿さん。三良き妻は良き分前なり、即ち主を畏るる人々への分前として與へられん。四富めるにもせよ貧しきにもせよ、人善き心を持たば、その顏は常に喜に溢れん。

五三つのことをわが心は語る。第四のことにつきて、われ祈願をなせり。町の誹、群衆の集、また僞の告發、これ等はすべて死よりも恐し。六他の女を嫉む妻と、すべての人に惡を傳ふるその舌の鞭は心の憂、また悲なり。七惡しき女は其處此處と搖り動く牡牛の軛の如く、これを捉ふる者は蠍を握るがごとし。八酒に醉ふ女は大なる怒を起し、己が恥をも蔽はざるべし。九女の

淫行はその眼を揚ぐる時にあり、それはその瞼によりて知らるべし。一〇 頸の強き娘をば嚴しく見張りせよ、恐くは彼己が自由を見出してこれを用ひん。一一 愼なき眼に心せよ、汝にむかいて罪を犯すとも驚くな。一二 渇きたる旅人のその口を開き、傍にある水を飲み盡すが如く、かかる女はあらゆる處に坐し、箙を開きていかなる矢をも取らん。

一三 妻の美徳はその夫を喜ばせ、その知識は彼の骨を太くすべし。一四 静なる女は主の賜物なり、よく教へられし魂の如く貴きはなし。一五 恥を知る女は淑にも淑なり。自ら抑ふる魂の價値は限りなし。一六 主の至高所に昇る朝日の如く、家を整ふる良き妻は美はし。一七 聖なる燈明臺に輝く燈の如く、よく育ちたる女の顔は美はし。一八 銀の臺に据ゑられし金の柱の如く、健なる踵の上の足は美はし。一九（なし）二〇（なし）二一（なし）二二（なし）二三（なし）二四（なし）二五（なし）二六（なし）二七（なし）

二八 二つのもののために我が心は憂ふ、第三のもののためには怒わが上に來る。貧しきために苦む軍人、廢人と見倣さるる聰き人、義より罪に歸り行く人、主は彼のために劍を備へ給はん。

二九 商人は惡しき行爲より己を守ること難く、小賣人も罪を免さるることなからん。

第二七章

一 多くの人は利のために罪を犯したり。利を増さんことを求むる人はその眼を背く。二 石と石との繼目には確く刺さるる釘の如く、罪は買方と賣方との間に刺し入る。三 若し人勵みて主に對する畏を捉へずば、その家はすみやかに覆されん。

四 篩にふるわるる時、ものの滓殘る如く、思想を練る時、人の汚物殘らん。五 爐は陶器師の作る器を試む、人の試はその思想にあり。六 樹の果はその栽培を語る如く、人の言はその心の思想を語る。七 その思想を聽く前に人を讃むな、これは人の試なればなり。

八 もし義を求めなば汝これを得て、光榮ある長き衣の如く着るべし。九 小鳥はその類に從ひて共に棲む。眞理はこれを行ふ人に歸らん。一〇 獅子のその餌食を待ち望む如く、罪は不法を行ふ人々を求む。

一一 敬虔なる人の談話には常に智慧あれども、愚なる人は月の如く變る。一二 愚なる者の中にあらば心を用ひて時を窺へ、されど思慮ある人と共にあらばいつまでも留るべし。一三 愚なる者の談話は煩はしく、その笑は罪深き放蕩なり。一四 多く誓ふ人の言は頭髮を逆立たしめ、その爭は人の耳を掩はしむ。一五 誇る者の爭は血を流すにいたり、その罵は聽くものを憂へしむ。

一六 祕密を發く者は信用を失ひ、その心に友を得ざるべし。一七 友を愛し、これを信ぜよ。されど若し汝その祕密を發かば彼を追ふな。一八 そは敵を滅せる人の如く、汝隣人の友情を害ひたればなり。一九 手より放ちし小鳥の如く、汝はその隣人を去ら

しめ、再びこれを捕ふな。二〇これを追ふな、彼は遠く去り、罠を免れたる鹿の如く逃る。二一傷の包まるる如く、讒謗は和げらるべし。されど祕密を發くものには望なし。

二二眼をしばたたくものは惡事をたくらみ、誰も彼もこれより遠ざくることなからん。二三汝の眼の前にはその口美はしく語り、汝の言に驚くとも、やがてその口を變へ、汝の言をもて反つて躓となさん。二四わが憎む多くのものの中に彼の如きはなし、主もまた彼を憎み給はん。

二五天に向ひて石を投ぐる者は己が頭の上にこれを投ぐるなり。僞の打擊は傷を負はしむべし。二六穴を掘るものは自らこれに陷らん、罠を据うるものは自らこれにかからん。二七惡事を行ふ者には、その惡事己が上に轉り來らん、彼はその何處より來れるやを知らざるべし。二八嘲と罵とは高ぶるものより來り、復讐は獅子の如くこれを待伏す。二九敬虔なる人々の倒るるを喜ぶものどもは罠にかけられ、その死の前に苦惱これを喰ひ盡さん。

三〇怒と憤、これも亦憎むべきものにて、罪人の所有なり。

第二八章

一復讐する者は主によりて復讐せらるべし。主はその罪を憶え給はん。二隣人より受けし損害を赦さば祈る時汝の罪赦さるべし。三他人に向ひては怒りつつ、主より醫を求め得るか。四己に等しき人を憐まずば、いかで己が罪のために祈り得べき。五自ら肉にして猶怒を起さば、誰かその罪のために贖をなさん。六汝の臨終を思ひて敵意を捨てよ。死と腐敗とを思ひて誡に居れ。七誡を憶えて隣人を怒るな、至高者の契約を憶えて無知を看過せ。

八爭より遠ざかれ、さらば汝の罪を少くするを得ん。怒り易き人は爭を起す。九罪深き人は友を惱まし、平和なる人々の中に讒謗を投ぐ。一〇薪の火に從ひて燃ゆる如く、爭も激しさに從ひて增さん。人は力に從ひて、怒を起す如く、富に從ひてまた怒を增さん。一一急ぎて初められし爭は火を燃やし、忙しき鬪は血を流すに至らん。一二火花を吹かば燃えあがり、これに唾せば消えん。二つとも汝の口より出づ。

一三私語者と兩舌の者とを呪へ、彼等は多くの平和なる人々を滅せり。一四第三のものの舌は多くの人を震ひ動かし、彼等を國より國へ散らしめぬ。強き町もこれによりて滅され、大なる人の家もこれによりて覆へされたり。一五第三のものの舌は勇氣ある女を投げ出し、彼等よりその働を奪ひぬ。一六これに心を用ふるものは休を得ず、又靜なる處に住むを得ざらん。一七鞭にて打たば痕を作らん、舌にて打たば骨をも碎かん。一八劍の刃によりて、多くの人仆れたり。されど舌によりて仆れたる人の如く多からず。一九幸福なるかな、舌より掩ひ護られ、その怒の中を過ぎず、その軛を引かず、その綱をもて縛られざる人。二〇その軛は鐵の軛にして、その綱は銅の綱なり。二一その死は惡しき死

にして、陰府反つて、これに勝れり。二二 されどもそれは敬虔なる人にとりては何の力もなし、彼等はその焰によりて燒かれざるべし。二三 主を棄つる者はその中に陷らん。焰彼等の中に燃えあがりて消されざるべし、それは獅子の如く彼等に遣され、豹の如くこれを滅さん。二四 荊棘をもて汝の所有物に籬を施し、汝の銀と金とを縛れ。二五 汝の言の重さを量り、汝の口に戸と閂とを造れ。二六 これによりて滑らぬやう心せよ、恐くはなんぢ、罠をかくる者の前に仆れん。

第二九章

一 隣人に貸すものは親切を示し、その手をもて彼を強めし者は誡を守る。二 必要の時に隣人に貸し、定められたる時に隣人に返せ。三 汝の言を確くし、人との信用を保て。さらば汝は常に己が求むるものを得べし。四 多くの人借りしものを風に吹き落されし果實の如く思ひ、己等を助けし人々を惱ますなり。五 これを受くるまでは汝の手に接吻し、己が隣人の金錢につき謙りて語る。されど支拂の時來れば期限を延し、重き言を用ひ、時の短きをかこつ。六 貸主勝つ時にても辛うじて半を受け、これを拾ひものの如く思はん。然らざる時はその金を奪はれしにて、理由なく互に敵となる。その人呪と罵とを彼に返し、名譽に代へて恥辱を返さん。七 多くの人かかる惡のために貸すことを避け、徒らに欺かれんことを恐る。八 されど卑き人に向ひては忍耐し、これに施濟を待たしむな。九 誡のために貧しき人を助け、その必要に從ひて、これを空しく去らしむな。一〇 兄弟又は友のために金錢を失へ、石の下にこれを置き、錆びしめて失ふな。一一 至高者の誡に從ひて汝の寶を積め、さらばそれは黄金にも增して汝を益せん。一二 汝の岸に施物を貯へよ、これは汝をすべての惱より救はん。一三 強き楯、重き鎗にも勝りてこれは汝を敵に勝しめん。

一四 善人はその隣人に向ひて保證人となる、されど恥辱の心を失ひたる者はこれを避く。一五 保證人の親切を忘るな、彼はその生命を汝に與へたるなり。一六 罪人は保證人の財産を滅す。一七 恩を忘れし者は己を助けたる人を無視にす。一八 保證は多くの豐なる人々を落魄れしめ、海の浪の如くこれを搖り動かし、富める人々をその家より追ひ出して異國に流離はしめたり。一九 保證にて失敗し、事業にて利を得んとする罪人は訴へらるべし。二〇 己が力に從ひて汝の隣人を助け、自ら倒れざるやうに心せよ。

二一 生くるに無くてならぬは、水とパン、又裸體を蔽ふ衣と家となり。二二 丸木小屋に住む貧しき人の生活は他人の家の奢りたる饗應に勝る。二三 小なるにも大なるにも滿足せよ。二四 家より家に移り行く生活は慘し、旅人として居る處にては、汝は己が口をも開かざるべし。二五 ねぎらい、又酒を飮ましめて、しかも汝は感謝を受けず。二六『ここに來れ、旅人よ、食卓を備へよ、汝

の手に何ものか持たばそれをもて我を養へ。』二七『旅人よ、名譽の坐より出で行け。我が兄弟わが客として來る。われはわが家を要す。』二八室借の難題と金貸の誹謗。これは思慮ある人には厭はしきことなり。

第三〇章

一子を愛する者は絶えずこれを鞭打たん。終にその喜を得んためなり。二その子を懲しむる者はこれを益し、その知人の間に彼につきて誇らん。三その子を教ふる者は敵に嫉を起さしめ、友の前に彼のために喜ばん。四その父は死ぬとも、死なぬが如し。その後に己の如き人、一人を遺せばなり。五その生ける間これを見て喜び、死ぬる時にも悲まず。六彼はその敵に仇を報ゆる者、その友に恩を返す者を、己が後に遺す。七その子を甘えさす者は己が傷をつつみ、子の叫ぶ毎にその心を煩はさん。八馴らさぬ馬は強情となり、我が儘なる子は頑固となる。九子を甘えしめば、かれ汝を恐れしめ、共に遊ばば汝を憂へしめん。一〇彼と共に笑ふな。恐くは汝かれと共に悲み、終には切歯するに至らん。一一その若き時これに自由を與ふな、又その愚を見逃すな。一二若き時その首を壓へ、幼き時その脇を打て、恐くは彼頑固になりて汝に從はず、汝の魂を悩ましめん。一三汝の子を懲し、彼のために苦心せよ、その恥知らぬ行爲汝を怒らしめざらんためなり。一四その體格強く、健なる貧しき人は、その身體弱き富める人に勝る。一五健康と善き體格とはすべての黄金に勝り、強き身體は限りなき富に勝る。一六身體の健さに勝る富はなく、心の喜に勝る歡はなし。一七死は苦き生命に勝り、永遠の安息は絶えざる疾病に勝る。一八塞がれし口の上に注がれたる善きものは墓の上に置かれし食物の如し。一九供物は偶像に何の益あらんや。食ふことも嗅ぐことも能はず。主によりて苦めらるる者も此の如し。二〇處女を抱きて呻く閹人の如く、眼に見て呻くなり。二一汝の魂を悲哀に付すな。汝の計畫をもて己が身を悩すな。二二人の生命は心の喜なり、高き齢は人の歡なり。二三汝の魂を愛し、汝の心を慰め、また悲哀を汝より遠けよ。悲哀は多くの人を滅し、その中に何の益なし。二四嫉と怒とは人の齢を短くし、煩悶は時來る前に人を老いしむ。二五快活なる善き心は飲食に意を用ふべし。

第三一章

一富のための警戒は肉體を衰へしめ、その思煩は睡眠を奪ふ。二眠らざる思煩は睡眠を求めしめ、重き病は不眠に陥らしむ。三富める人は財を集めんとて勞し、その休む時善きものをもて滿さる。四貧しき人はその乏しき財をもて勞し、その休む時猶乏し。五黄金を愛する者は正しとせられず、滅を追ふものは自ら滿されん。六多くの人は黄金のために滅に渡され、その終彼等に迫る。七それは之に犠牲を獻ぐる人々にとりて躓となり、すべ

ての愚人はこれに捕へらるべし。八 幸福なるかな、缺けたる所なく、又黄金を追ひ求めざる富める人。九 それは誰ぞ、我らこれを幸福と呼ばん。彼はその民の間に驚くべきことをなせり。一〇 試みられて完しと見られしは誰ぞ、これを崇めよ。罪を犯す力ありて犯さざりしは誰ぞ、惡をなす力ありてなさざりしは誰ぞ。一一 その財產は確とせられ會衆はその施濟を告げん。一二 汝は大なる食卓に就くか、貪るな、又『その上に多くのものあり』といふな。一三 記憶せよ、嫉む眼は惡しき眼なり。眼に勝りて惡なるの曾て造られしや、それはすべての顏に淚を流さしむ。一四 その眺むる處には何處にも汝の手を延ばすな、又汝の手を皿に突き出すな。一五 己のことによりて隣人のことを思ひ、すべてのことにこれを辨へよ。一六 汝の前に置かれたるものを相應しき人の如く食へ、されどこれを食ひて貪るな、恐らくは汝人に嫌はれん。一七 先づ自制のために卓を離れ、飽き足らぬ如くすな、禮を缺かざらんためなり。一八 多くの人と共に坐するとき、手を彼等の前に延ばすな。一九 自制ある人は少許にて滿足し、その床の上にて息苦しくなることなし。二〇 健なる睡眠は適宜の食事より來る、夙に起きて心すがすがし、睡眠足らぬ苦しさと胃腸の痛みは飽くことを知らぬ人にあり。二一 強ひて食をすすめられなば中途にて起て、さらば休を得ん。二二 我に聽け、わが子よ、我を輕んずな、終には汝わが言の眞なるを知らん。汝のすべての業に速なれ。さらば何の病も汝に來らじ。二三 食ふことに寛大なる人をば人々祝福し、その優れたる證 信ぜられん。二四 食ふことに吝嗇なる人をば、町擧りてささやき、その吝嗇の證 確とならん。二五 自ら酒に強きを示すな、酒は多くの人々を滅しぬ。二六 坩堝の、鐵を浸してその質を試むる如く、酒は高ぶる人の爭によりてその心を試む。二七 酒は適宜にこれを飲まば、人にとりて生命の如く善きものなり。酒なき人に何の生命かある、酒は人を喜ばしむるために造られしものなり。二八 時に從ひて適宜に飲まれし酒は心の喜、また魂の悦なり。二九 度を過して飲まれし酒は魂の苦きにて、怒と爭とを伴ふ。三〇 醉酒は愚なる者の怒を增して己を害はしめ、その力を弱め、また傷を加ふ。三一 酒宴の席にて隣人を責むな。又その樂の時これを侮るな。非難の言を口にすな。また負債の返濟を迫るな。

第三二章

一 汝饗宴長に擧げらるるとも、自らを高しとすな。同席の人々の一人の如くなり、彼等のためを計りて後に坐せよ。二 汝の務を悉く果したる時、席に着け。これ汝彼等のために喜ばれ、汝のよき整理の故に冠を受けんためなり。三 長老たる者よ。汝に相應しく、正しき悟をもて語り、音樂を妨ぐな。四 樂の奏でらるる時に語り出すな、時に外れて汝の智慧

を表すな。五 酒宴の樂の合奏は、金に嵌めたる紅玉の印の如し。六 たのしき酒に伴ふ樂の音は、金細工の中の緑玉の如し。七 若き人よ。必要あらば語れ、されど二度乞はるるにあらずば語るな。八 汝の話を縮め、多くのことを少しの言にて語り、知りてその舌を制ふる者の如くせよ。九 大なる人々とともにあらば己を彼等と等しくすな、他の人語る時喧しくすな。一〇 雷鳴の前に電光のある如く、恥を知る人の前には好意あり。一一 よき時に起ちあがりて最後となるな。たゆたふことなく速に家に歸れ。一二 そこにて汝の娯樂をとり、心にあることをなせ。高ぶりの言をもて罪を犯すな。一三 此等のことのために、汝を造りて善きものを飲ませ給ふ主を祝せよ。

一四 主を畏るる者はその懲戒を受くべし。夙に主を求むる人々は恩惠を得ん。一五 律法を求むる者は、律法をもて滿されん。されど僞善者はこれに躓かん。一六 主を畏るる人々は審判を見出し、義の行爲を光の如く輝かすべし。一七 罪深き人は非難を避け、己が意のままに審判を受けん。

一八 思慮ある人はその目的を等閑にせざるべし。怪しげなる、高ぶる人は、思慮なく行ひたる後にても、恐をもて怯むことなからん。一九 思慮なく何事をもなすな、一度なすともこれを繰り返すな。二〇 爭の道に行くな、石ある處に躓くな。二一 滑なる道にも注意せよ。二二 己が子らに心せよ。二三 いかなる道にも己が魂を信ぜよ、これは誡を守る道なればなり。

二四 律法を信ずるものは誡にこころを用ひ、主に依りたのむものは損を受けざるべし。

第三三章

一 主を畏るる者には何の惡も起らざるべし、されど時に臨みて主これを試に逢はせ給はん。二 智者は律法を忌まざるべし、されど僞善なる人は嵐の中の船の如し。三 悟ある人は律法を信ずべし、律法はその人にとりて託宣の如く眞實なり。

四 言に備せば、人に聽かるべし。教訓を綴りて汝の答をなせ。五 愚人の心は車の輪の如く、その思は廻る軸木の如し。六 種馬は嘲る友のごとく、如何なる人これに乘るとも嘶くなり。

七 年の如何なる日の光も皆太陽より來るに、いかなれば或る日は他の日に勝るか。八 これは主の知識によりて分たる。主は期節と祭とを定め給へり。九 その或ものをば高め、また潔め、或ものをば常の日となし給へり。一〇 すべての人は地より出で、アダムは土をもて造られたり。一一 その豐なる知識をもて主これを分ち、諸の道を造り給へり。一二 或ものをば祝し高め、或ものをば聖として己に近づかしめ、或ものをば呪ひて低くし、これをその所より覆し給へり。一三 陶器師の手にある粘土の如く、主のすべての道はその聖旨に從ひて造られたり。かく人は皆これを造り給へる主の御手の中にありて、その御審のままにせらるるなり。一四 惡に對する善、死に對する生の如く、敬虔なる人に對

する罪人あり。一五かくの如く至高者の御業はすべて、一つのものは他のものに對し、二つづつ存するなり。

一六我はすべてのものの終に眼を醒し、葡萄摘の後を拾ひ集むる者の如くせり。主の惠によりて進み、葡萄摘の如くわが酒槽を充したり。一七われはわがためのみならず、すべて教訓を求むる人々のために勞せしを思へ。一八民の大なる人々よ、われに聽け。會衆の有司たちよ、われに耳を傾けよ。

一九子と妻に、兄弟と友に、汝の生ける間に、汝の上に立つ權を與ふな。又汝の所有物を他人に與ふな。恐くはなんぢ悔いて再びこれを求むるに至らん。二〇生きて息ある間に己を誰にも與ふな。二一汝の子ら汝に求むるは、汝が子らの手より求むるに勝れり。二二すべて汝の業をもて人に先だち、汝の名譽を汚すな。二三汝の生命の終る日に、死の日に、汝の嗣業を分け與へよ。

二四秣と鞭と荷物とを驢馬に、パンと懲戒と働とを僕に。二五僕を働に就かしめて汝は休むべし、その手をゆるめなば自由を求めん。二六軛と革紐とは首を馴らす。惡しき僕のためには拷問と苛責とあり。二七怠らぬやうこれを働かせよ、怠慢は多くの惡しきことを教ふ。二八彼に相應しき働を與へよ、若し從はずばその梏を重くせよ。二九何人にも度を過ぎて事をなすな。又判斷なく何事をもなすな。三〇僕あらばこれを己の如くせよ、汝血をもてこれを買ひしなり。三一僕あらばこれを己の如くに取り扱へ、そは己が魂の如く汝これを要せん、もしこれを虐げなば彼去りて逃れ行かん、汝いづれの道に彼を捜し出さんとするか。

第三四章

一虚しき僞の希望は悟なき人のものなり。夢は愚なる人に翼を與ふ。二その心を夢に置く人は、影を捉へ、風を追ふ者の如し。三夢の幻は彼に對する此の如く、顔と顔との似たるに等し。四汚れたるものをもて何ものを潔め得んや。眞なるものはいかで僞より來らんや。五先見と卜占と夢は虚しきものなり、産の苦をなす女の如く、その心空想に驅らる。六此等のもの、もし至高者にありて眷顧の時に遣されしにあらずば、これに汝の心を與ふな。七夢は多くの人を惑はしぬ。彼等はこれに依り頼みて倒れたり。八僞なく律法は成就せらるべし。眞實なる人の口にある智慧は全し。

九よく教へられし人は多くの事を知り、多くの經驗ある人は知識を説く。一〇經驗なき人は僅のことを知れど、さすらい歩きし者は事に熟練す。一一われさすらい歩きて、多くの事を見たり。わが悟はわが言に勝る。一二われ屢危險に遭ひて死なんとせしが、此等のことによりて救はれたり。一三主を畏るる人々の靈は生くべし。その希望は己等を救ひ給ひし者の上にあり。一四主を畏るる者は驚かず、又怖ぢざるべし。主はその希望なればなり。一五幸福なるかな。主を畏るる人の魂。その依り頼む者

は誰ぞ。その支柱は誰ぞ。一六主の眼は主を愛する人々の上にあり。力ある護り、強き支柱、熱き風よりの隠家、眞晝の日を避くる蔭、躓の防禦、倒れたる時の救ひ。一七主は魂を起たしめ、眼を明にし、醫と生命と祝福とを與へ給ふ。

一八不正なるものを犠牲とする人は、その供物嘲らる。不法なる人の嘲は嘉せらるることなし。一九至高者は敬虔ならぬ人の供物を喜び給はず、又犠牲の多きによりて罪を赦し給はず。二〇貧しき者の所有物より犠牲を携へ來るものは、父の眼の前にてその子を殺す者に等し。二一ささやかなパンは貧しき者の生命なり。これを彼より奪ふ者は血を好む者なり。二二その活計を奪ふ者は隣人を殺す者に等し。傭人よりその賃金を奪ふ者は血を流す者に等し。二三一人はこれを建て、一人はこれを毀つ。勞苦の外に彼等は何の益をか得し。二四一人は祈り、一人は呪ふ。いづれの聲を主は聽き給ふや。二五屍體に觸れたる後身を洗ひて、再びこれに觸れなば、その洗ふことに何の益あらんや。二六その罪のために斷食する人、出でて再び罪を犯さば、誰かその祈を聽かん。又己を辱めて何の益をか得し。

第三五章

一律法を守るものは供物を多くし、誠に心を用ふる者は酬恩祭の犠牲を献ぐ。二恩に報ゆる者は麥粉を供へ、施濟をなす者は感謝祭の犠牲を献ぐ。三惡より離るるは主の喜び給ふ所なり。不義を去るは宥の供物なり。四主の御前に空しき手にて出づな。五これはすべて誠のために行ふべきものなり。六義人の供物は祭壇を豐にし、その美はしき薫は至高者の御前にあり。七義人の犠牲は承けられ、その記憶は忘られざるべし。八善き眼をもて主を崇め、汝の手の初穂を惜まで出せ。九いかなる供物にても快き顔もてなし、喜をもて汝の十一税を納めよ。一〇その與へ給へる所に從ひて至高者に献げ、汝の手にて得たるものを善き眼をもて献げよ。一一報い給ふ主は、七倍をもて汝に報い給はん。

一二供物をもて賄賂とすな、主はこれを受け給はざるべし。汝の心を不正の犠牲に向くな。主は審主にして、人を偏り見給はざるなり。一三主は貧しき人に逆ふ者を受け給はず、虐げらるる者の祈を聽き給ふべし。一四主は孤兒の顔と寡婦の呟とを輕しめ給はざるべし。一五寡婦の涙はその頬に流れ下るにあらずや、その時はこれを倒さんとする者に向ひて揚がるにあらずや。一六御心に從ひて神に仕ふる者は受けられ、その願は雲にまで達すべし。一七卑き者の祈は雲を貫きて神に到るまで止まらず、至高者の顧み給ふまで離れざるべし。主は義しき審判をもて審判を行ひ給はん。一八主は躊躇ひ給はず、憐憫なきものの腰を碎き給ふまで、永く忍び給はざるべし。主は異邦人に仇を報い、高ぶる者の群を散らし、不義なる者の笏を毀ち給はん。一九主はあらゆる人に、その行爲に從ひて、又彼等の業に、その思慮に

従ひて報い、その民を審き給はん。かくて主はその慈悲をもて彼等を喜せ給ふべし。二〇旱魃の時に雨雲の起る如く、主の慈悲は特に従ひて苦む者に來るなり。

第三六章

一我らを憐み給へ、すべてのものの主なる神よ、我らを顧み給へ、二主をおそるる民をすべての國々に投げかけ給へ。三主の御手を異邦の上に擧げ、これに主の御力を見させ給へ。四彼等の前に我らによりて自ら聖とせられ給ひし如く、我らの前に彼等によりて大なるものとせられ給へ。五ああ神よ、我らの汝を知りし如く、彼らに汝を知らしめ、汝唯一の外に神なきを知らしめ給へ。六新しき徴を示し、もろもろの奇しき業を行ひ、汝の御手と右の御腕とを崇めさせ給へ。七御憤を起し、御怒を注ぎ、仇を去り、敵を滅し給へ。八時を速にし、御誓を憶え、彼等に汝の力ある業を宣べしめ給へ。九逃れたる者を御怒の火をもて燒き盡し、御民を虐ぐる人々を滅に陷らしめ給へ。一〇『我らの外に何者もなし』といふ敵の有司たちの頭を碎き給へ。一一ヤコブのすべての支族を集め、初よりありし如く、彼等を汝の嗣業となさしめ給へ。一二主よ、御名によりて呼ばるる民を憐み、初子と等しくなし給ひしイスラエルを憐み給へ。一三汝の聖所の町、汝の安息の地、エルサレムに慈悲を垂れ給へ。一四シオンを滿し、汝の詔を高め、汝の民に榮光を滿し給へ。一五始に汝の造り給ひしものに御證を與へ、御名の中にありし預言を起し給へ。一六汝を待ち望む者に報い給へ。さらば人々汝の預言者を信ぜん。一七主よ、御民に關るアロンの祝福に從ひて、歎き求むる者の祈を聽き給へ。さらば地上の人々、汝の永遠の神なる主に在すことを知らん。

一八腹はいかなる糧にても食せん。されど一つの糧は他の糧に勝る。一九咽喉は狩にて捕へし食物を味ふ如く、理解ある心は僞の言をも味ふ。二〇頑なる心は憂を起さん。されど經驗ある人はこれに報ゆべし。二一女はいかなる男をも受けん。されど或娘は他の娘に勝る。二二女の美しさは顔を樂ましむ。されば人は何ものにも勝りてこれを愛す。二三もしその女の舌に慈悲と柔和とあらば、その夫は人の子等の中にある心地せじ。二四妻を得る者は、己が助手、又支柱をもつなり。二五籬なくば所有物荒れ廢れん。妻をもたぬ人は、此處彼處とさすらひて悲まん。二六誰か町より町へ跳び行く、身をよろへる盜人を信ぜん。かくの如く誰か、家なくして夜その到る處に宿る人を信ぜん。

第三七章

一友は皆いはん、『我も彼の友なり』と。されど唯名のみの友あり。二伴侶又は友の敵と變る時、死に到る程なる悲なきや。三惡しき想像よ、汝は何處より轉り來り、その欺瞞をて乾ける地を蔽はんとするか。四友の喜をもて喜ぶ伴侶あれど、患難の時には

彼に背かん。五 腹のためにその友を助くる伴侶は、戰に臨みて楯をとるべし。六 汝の魂の友を忘るな、汝の富の増し加はる時これを棄つな。

七 議士は皆その議る事を褒む。されど己が利益のためにこれを議る者もあり。八 汝のたましひ議士に心すべし。汝はその關心の何なるかを豫め知れ。(彼は己のために事を議らん。)恐くは彼汝のに上に籤を投げて、九 汝にいはん、『汝の道はよし』と。而して彼汝に向ひて立ち、汝の上に何の起るかを見ん。一〇 流目にて汝を見る者と共に事を議るな、汝を猜むものに汝の計畫を隱せ。一一 女とはその競ひ争ふ者につきて、臆する者とは戰につきて、商人とは貿易につきて、怠慢者とはあらゆる種類の働につきて、汝の家の傭人とはそのなし遂ぐるわざにつきて、怠る僕とは多くの務につきて事を議るな。いかなる計畫につきても此等の人々に意を留むな。一二 汝はむしろ敬虔なる人と偕に居れ、汝は其の人を、誡を守る人と知るべし。彼の魂は汝の魂の如く、汝もし失敗たば汝とともに悲まん。一三 汝の心の計畫を、確く立てよ、汝にとりてこれに勝りて信ずべきものはあらじ。一四 人の魂は、時に臨みて、望樓に高く坐する七人の衞士に勝り、多くのことを告げんとす。一五 されど此等のことに勝りて至高者に、汝の道を眞理に導き給はんことを願へ。

一六 理性をすべての働の始となせ。思慮をすべての行爲の前に置け。一七 心の變り行く徵として、一八 四つのこと起る。善と惡、生と死、此等を常に治むる者は舌なり。一九 怜くして多くの人の教師となるも、己が魂を益すること能はぬ者もあり。二〇 言巧にして反つて人に憎まるる者もあり。その人はすべての食物を缺くべし。二一 恩惠は主より彼に來らざりき、彼はすべての智慧を奪はれたるなり。二二 己が魂に對して賢き者あり、その悟の果は口にとりては信ずべきなり。二三 智者は己が民を教へん、その悟の實は信ずべきものなり。二四 智者は祝福をもて滿され、これを見る人々はすべて彼を幸福と呼ばん。二五 人の生命は日によりて數へらる、イスラエルの諸の日はこれを數ふること能はず。二六 智者はその民の間に信頼を受け、その名は永遠に生きん。

二七 わが子よ、汝の生活をもて汝の魂を試み、その害となるは何なるかを見て、これに與るな。二八 すべてのものはすべての人に益あるにあらず、又すべての魂はすべてのものを樂むにあらざるなり。二九 奢侈に飽くな、汝の食ふものを貪るな。三〇 食物の多き處に病あり、食は過ぎなば腹痛を起さん。三一 食ひ過ぎて多くの人滅びたり。されど常に意を用ふる者はその生命を永くせん。

第三八章

一 汝の必要に從ひ、禮を盡して醫者を敬へ。そは主これを造り給ひたればなり。二 醫者は至高者より醫の力を受け、王より

禮物を受けん。三醫者の熟練はその頭を高からしめ、貴き人々の前に讚を得しむ。四主は土より藥を造り給へり。聰き人はこれを忌まじ。五水嘗て木をもて甘くせられしは、その木の力の知られんためにあらざりしや。六その驚くべき御業によりて崇められんために、主は人に熟練を與へ給へり。七主の御業によりて醫者は人の苦痛を除く。八藥劑師はこれによりて煉藥を製らん。かくて主の御業止むことなく、健康は主より地上に來るなり。

九わが子よ、汝の病める時忽にすな。むしろ主に祈れ。主は汝を醫し給はん。一〇惡しき行爲を去り、汝の手を直くせよ。又汝の心をすべての罪より潔めよ。一一かぐわしき香と麥粉とを記念の分として供へ、曾てなかりし如き肥えたる犠牲を献げよ。一二醫者に處を得させよ。そは誠に主彼を造り給ひたればなり。彼を汝より去らしむな。汝彼を要すべし。一三その手に成功ある時あり。一四彼等も亦主に、彼等を祝して人の生命を永くせんがため救と醫とを與へしめ給はんことを祈るなり。一五その創造主に逆ひて罪を犯す者を、醫者の手に陥らしめよ。

一六わが子よ、死者のために泣け。大なる苦惱を受くる者の如く、悲み叫べ。又その屍體をふさわしく包み、その葬を等閑にすな。一七一日又二日いたく泣き、大なる嘆をなし、汝の喪を死者にふさわしきものとせよ。然らざれば汝人に惡しざまに言はれん。かくして汝の悲哀のために慰藉を受けよ。一八悲哀より死來る、心の悲哀は力を衰へしむ。一九禍の中に悲哀も亦殘る。貧しき人の生活はその心を害ふ。二〇汝の心を悲哀に向けず、その終を思ひてこれを去れ。二一彼を忘るな、再び歸ることなし。汝は彼を益せず、反つて己を害はん。二二彼に臨む宣告を憶えよ。汝も亦これを受けん。昨日は我に、今日は汝に。二三死者の安息と共に、その記憶をも休ませ、その靈彼を去る時、彼のために慰藉を受けよ。

二四學者の智慧は閑暇ある機に來り、業務少き人は智くならん。二五鋤を取る人、針ある鞭の柄を誇る者、牡牛を驅り、その勞働に忙しき者、亦牡牛の頭數につきて語る者は、いかで智慧を得べき。二六彼はその心を畦作に向け、その眼醒むるは牝牛の子に草を與へんためなり。二七工匠また工匠長の晝夜休なきも亦此の如し、又印の彫刻をなす者はその勉勵によりて諸の種類を造るを得べし。彼はその似顔を作らんと心を定め、その業を終ふるまで醒め居るべし。二八鐵砧の側に坐して粗鐵をあしらう鍛冶も亦かくの如し。火の蒸氣はその肉體を疲らせ、爐の熱氣の中に、彼はその業にいそしむ。槌の音は常にその耳にあり、その眼は器の型に注がれ、その心は業の成るを待ち、全くこれをなしとぐるまで醒め居るなり。二九その勞作場に坐し、足をもて輪を廻す陶器師も亦これに等し。彼は常に心を勞して業をなし、その作りしものの數甚だ多し、三〇腕をもて粘土より形を作り、足をもてこれを整へ、念入に釉藥を施し、又勵みてその爐を潔む。

三一 此等はすべてその手に信頼し、いづれも皆己が手の業に巧なり。三二 此等の人々なくば町には住む人なく、留るものも、往來するものもなかるべし。三三 彼等は民の會議の中に求められず、又集會の中にも高められざるべし。彼等は審判の契約を悟る能はず、審判の座にも坐せず、義と審判とを説かず、又喩言の語らるる處にも見出されざるべし。三四 されど彼等は世の構造を支へん。その手の業に彼等の祈あり。

第三九章

一 されどその魂を注ぎて至高者の律法を思ひめぐらす者は、古の凡ての人の智慧を探り、また預言を究むべし。二 彼は名ある人の教訓を守り、巧なる喩言の心に入るべし。三 箴言の隱れたる意味を探り、幽玄なる喩言をもて語るべし。四 彼は大なる人々の間に仕へ、彼を治むる者の前に現れ、異邦の地に旅すべし。彼は人々の間に善と惡とを試みしなり。五 彼は夙にその心をもて、己を造り給へる主に頼り、至高者の前にその嘆願をなし、口を開きて祈をささげ、その罪の赦を乞ひ求めん。

六 大なる主欲しなば、彼は悟の靈をもて滿され、智慧の言を注ぎ出し、祈をもて主に感謝を献ぐべし。七 彼はその計畫と知識とを指し示し、祕にこれを思ひめぐらさん。八 彼はその教へられたる教訓を告げ、主の契約の律法を崇むべし。九 多くの人々その悟を讃めん。それは世の續く限り消え失せず、その記念は殘り、その名は代々に生きん。一〇 國々はその智慧を宣べ、會衆はその譽を語らん。一一 かれ生き存へなば千人に勝りて大なる名を殘し、死なば更にこれに加へん。

一二 われ猶わが思ひ回らししことを語らん。われは滿月の如く滿ちて圓なり。一三 我に聽け、聖き子らよ、小川のほとりに生ゆる薔薇の如く芽ばえよ。一四 乳香の如きかぐわしき馨を放ち、百合の如き花をつけ、美しき香を廣く放つべし。汝ら讃美の歌をうたい、そのすべての御業のために主を祝せよ。一五 その御名を崇め、汝の唇の歌と琴とをもて、主を讃めよ。汝に主を讃むる時かくいふべし。

一六 主のすべての御業はいと善く、その命じ給ふことは時に臨みて成し遂げらるべし。一七 誰も『此は何ぞや、それは何のためぞ』といふを得じ。それ等は皆その相應しき時に求めらるべし。主の御言に從ひ、水は立ちて堆くなり、その口の御言によりて容器に納めらる。一八 その命によりて聖旨は悉く成り、その救を妨ぐるものなし。一九 すべての肉の業は主の御前にありて、主の眼に隱さるることなし。二〇 主は永遠より永遠まで見給ふに、主の御前には驚くべきもの何もなし。二一 誰も『これは何ぞや、それは何のためぞ』といふを得じ。そは萬物は我等の用のため造られたればなり。

二二 主の祝福は乾ける地を河の如くに蔽ひ、洪水の如くにこれを潤しぬ。二三 主水を鹽に變らせ給へる如く、異邦人はその御怒

を嗣ぐべし。二四 主の道は聖き民には明なれど、惡しき者には躓となならん。二五 善きものは始めより善き人のために造られたる如く、惡しきものは罪人のために造られたり。二六 人の生命になくてならぬすべてのものの中にて、主なるは水と火と鐵と鹽、小麥粉と蜜と乳、葡萄の血と油と衣などなり。二七 すべて此等のものは敬虔なる人々にとりては善なれども、罪人にとりては惡に變らん。

二八 復讐のために造られたる風あり、その怒の中に重き鞭あり。終の時、その力を注ぎ出し、これを造り給へる者の御怒を鎭む。

二九 火と霰と飢饉と死、此等はすべて復讐のために造らる。三〇 野獸の齒と蠍と毒蛇、又敬虔ならぬ者を罰して滅に至らしむる劍。三一 此等は主の命を喜び、必要の時、地上に現はるる備成り、己が時に主の御言を過たざるべし。

三二 さればわれ、始より心定まり、これを思ひ回して筆をとれるなり。三三 主のすべての御業は善し、主は時に及びてすべての必要を滿し給ふべし。三四 誰も『此は彼よりも惡し』といふを得じ。これ等は皆己が時に正しく試みらるるなり。三五 されば今、汝の心と口とをもて讚美を歌ひ、主の御名を祝せよ。

第四〇章

一 大なる苦惱はすべての人のために造られたり。重き軛はアダムの子等の上にありて、その母の胎を出でし日より、萬物の母の中に葬らるる日に至るなり。二 來るべきことの期待と死の日とは彼等の思を惱し、心の恐を起さしむ。三 光榮の座に坐する者より土と塵とをもて卑くせられし者に至るまで、四 紫の衣と冠とを着くる者より大麻の粗服を纏ふ者に至るまで、五 みな怒と嫉と惱と不安、また死の恐と憤と爭とを持つ。その床につきて休む時、夜の眠はその知識を變ふ。六 彼には些少の休なく、見守の日の如くその眠の後に、又戰より逃れ來りし者の如く、その心の幻影をもて惱まさる。七 彼はその救の時に眼覺め、自ら何の恐なきを怪しむ。

八 人より獸に至るまで、肉なるものは皆かくの如く、罪人はこれを七倍せり。九 死と血を流すことと爭と劍、禍と飢饉と患難と鞭。一〇 此等はすべて惡人のために造られ、又彼等の故に洪水來りぬ。一一 土より出でたるすべてのものは土に還り、水より出でたるすべてのものは海に歸る。

一二 すべての賄賂と不正とは消え去り、善き信仰は永遠に立たん。一三 正しからざる人の所有物は河の如く乾き、雨の中の大なる雷の如く鳴り轟きて去り行くべし。一四 大水流れ出づる時、岩まろばさるる如く、それは俄に消え失すべし。一五 敬虔ならぬ者の子らは多くの枝を出さず、岩の上の清からざる根の如し。一六 水の中と川岸とに生ゆる者はすべての草の前に引き抜かるべし。一七 恩惠は祝福に滿てる園の如く、憐恤は永遠に存らん。

一八 自ら立つものと、働くものとの生命は美し、されど財寶を

見出す人は此の二つに勝る。一九 子らと、町を建つることとは人の名を揚ぐ、されど缺點なき妻は此の二つに勝る。二〇 葡萄酒と音樂とは心を喜ばしむ。されど智慧を愛することは此の二つに勝る。二一 笛と琴とは歌を美しくす。されど快き舌は此の二つに勝る。二二 汝の眼は淑さと美しさとを欲せん。されど緑なる麥の穂はこれに勝る。二三 友と伴侶は決して過たざるべし。されど夫と偕なる妻はこの二つに勝る。二四 兄弟と助手とは惱の時のためにあり、されど施濟はこの二つに勝る救なり。二五 金と銀とは足を確く立たしむ。されど思慮はこの二つに勝る。二六 富と力とは心を高む。されど主に對する畏はこの二つに勝る。主に對する畏には何の缺けたるものなく、何の助を要するものなし。二七 主に對する畏は惠の園の如く、あらゆる光榮をもて人を蔽ふ。

二八 わが子よ、乞食の生活に陷るな。もの乞ふよりは死ぬる方勝れり。二九 他人の食卓を窺ひ見る者は、生くとも生くる價値なし。彼は他人の食物によりて己が魂を汚さん。されど賢く、よく教へられたる人はこれに氣附くべし。三〇 恥を知らぬ人の口には物乞は甘味ならんも、その腹には火燃ゆべし。

第四一章

一 見よ、汝の記憶はいかに苦きかな。所有物ありて平和なる人にとりて、又何の煩なく、すべてのことに榮え、且食物を受くる力ある人にとりて、二 見よ、汝の宣告は、乏しき人、力衰へたる人、いたく老い、すべての事につきて思ひ煩ひ、僻みて且忍耐なき人によりて容れられん。三 死の宣告を恐るな、汝の前に在りしものと汝の後に來る者とを憶えよ。此はすべての肉に對する主の宣告なり。四 至高者の御心による時、汝は何故これを拒むか。十年にもせよ、百年にもせよ、又千年にもせよ、陰府に入りては生命につきての問題なし。

五 罪人の子らは忌むべき子らなり。彼等は敬虔ならぬ人々の住居に屡來る。六 罪人の子らの嗣業は滅び、その持物には絶えざる誹謗伴はん。七 子らは敬虔ならぬ父につきて呟かん。これ彼等が父のために誹らるる故なり。八 禍害なるかな、敬虔ならぬ人々、彼等は至高者の律法を捨てたり。九 汝生れしは呪のために生れしにて、汝死なば呪汝の分前とならん。一〇 土より出でたるすべてのものは又土に還る如く、敬虔ならぬ人呪咀より滅亡に至らん。一一 人の喪はその身體につきてあり。されど罪人の名は永遠に消え失すべし。一二 汝の名につきて考へよ、それは千箇の黄金の寶に勝りて永く汝と共に存ればなり。一三 善き生命は日數限りあれど、善き名はとこしへに存らん。

一四 わが子よ、平和をもて教訓を守れ。されど隱れたる智慧と見えざる寶とに何の益かあらん。一五 その智慧を隱す人に、その愚を隱す人勝る。一六 さればわが言を敬へ。あらゆる恥を保つは善からず。すべてのものはすべての者によりて、信仰をもて良

とせられざるなり。

一七父母の前に淫行を、有司と力ある人々の前に虚偽を恥ぢよ。一八審判者と有司との前に己が犯し罪を、會衆と民との前に不法を、伴侶と友との前に不正の取扱を恥ぢよ。一九汝のさすらいし地に對しては盜につきて、又神の眞理とその契約につきて、食卓に倚りかかることにつきて、貸借に關る惡口につきて、二〇汝に挨拶する者の前にての沈默につきて、遊女なる女を眺むることにつきて、二一 汝の顏を親戚に背くることにつきて、分前又は供物を取り去ることにつきて、夫ある女を視凝ることにつきて、二二若き婢を用ひ過ぐることにつきて、又その床を犯すことにつきて、非難の言を友に語ることにつきて、又與へたる後これを責むることにつきて、二三 汝の聞きしことを繰返し又語ることにつきて、又祕密を發くことにつきて恥ぢよ。二四かくて汝は眞に恥を知り、すべての人の前に惠を得べし。

第四二章

一此等のことにつきて恥づな、又これによりて人を罪に置くな。二即ち至高者の律法とその契約とにつきて、敬虔ならぬ者に對する公平なる審判につきて、三伴侶また旅人と共に計り算ふることにつきて、友の遺産よりの贈物につきて、四 秤と重さの正確につきて、量の多少につきて、五商人の差別なき賣方につきて、子供を屡矯正することにつきて又惡しき僕の脇を打ちて流す血につきて恥づな。六惡しき妻にとりて封印は善し。手多き處には汝の手を閉ぢよ。七汝の渡すものは何にてもこれを數へ又量り、受渡にはすべて證書を用ひよ。八無智なる人と愚なる人、若者と競ふ甚しく老いたる人を教ふるを恥づな。これ汝もよく教へられてすべての生ける人の前に認められんがためなり。

九娘は父にとりて人知れぬ心勞の種なり。その心勞は眠をすら奪ふ。若き時には、その齡の花散らんことを恐れ、嫁ぎては、憎まれんことを恐る。一〇處女の時には、瀆されて子を持ち、父の家にあらんことを恐れ、夫を持つ時には過誤に陷らんことを、嫁ぎし時には石婦にならんことを恐る。一一頑なる娘のためには嚴しき見張をなせ、恐くは彼汝の敵の笑草となり、町のもの笑となり、人々の間に惡しき名を立てられ、群衆の前に汝を辱めん。

一二いかなる人をも、その容貌美きがために見るな。又女たちの間に坐すな。一三衣より蠹出づる如く女より女の惡出でん。一四男の惡は、巧に人をあしらう女、又汝に恥づべき非難を來らしむる女に勝る。

一五我今主の御業を告げ、我が見たる事を宣べん。主の御言にその御業あり。一六 光を與ふる日は萬物に臨み、主の御業は榮光にて滿つ。一七主はその驚くべき御業を宣べんために聖徒たちに力を與へ給はざりき。その御業は力ある主の確く定め給へる

ものにして、如何なるものもその榮光の中に建てらるるなり。一八主は深き處を探り、又心を探り、その巧なる計畫を悟り給ふ。至高者はすべての知識を持ち、世の徴を見給ふ。一九主は過ぎたるものと來るべきものとを宣べ、隱れたるものの足跡を現し給はん。二〇いかなる思も彼を逃れず、如何なる言も彼に隱れざるべし。二一永遠より永遠に在し給ふ主は、その智慧の力ある御業を整へ給へり。これに加ふる何ものもなく、これより削る何ものもなし。主は一人の議士をも用ひ給はざりしなり。二二主のすべての御業はいかに望ましきかな。それは火花の如く見らるべし。二三此等のものはすべて永遠に、生きて存り、そのあらゆる用のために、悉く從ふ。二四すべてのものはみな二重にて、一つのものは他のものに對す。主の造り給へるものに全からざるはなし。二五一つのものは他の善きものを建つ。主の榮光を見て滿さるる者は誰ぞ。

第四三章

一高き處の誇はその潔き蒼空にあり、天の美しさはその榮光の輝にあり。二日出づる時、その行く處に音づれを告ぐ。こは驚くべき器、至高者の御業なり。三午に至ればそれは地上を燒く。誰かその燃ゆる熱氣に逆ひて立つを得ん。四爐に火を吹く人は暑き業を攬る。されど日はこれに勝ること三倍なり。山を燒き、火の湯氣を吐き、輝く光を送りて人の眼を眩ます。五大なるかな、これを造り給ひし主。主はその御言をもて御步を進め給ふ。

六月も亦すべてのことをその期節に從ひてなし、時と世との徴を告ぐ。七月より祭日の徴、即ち滿つる時に缺くる光來る。八月々はその名によりて呼ばれ、その遷變は驚くばかりなり。高き處にては天の萬軍の器となりて、その蒼空に輝き出づ。九天の美、星の光榮は、主の高き處に光を與ふる器なり。一〇聖者の御言に從ひて、此等のものはそのふさわしき位置を守り、その見張を弱めざるなり。一一虹を見、これを造りてその輝をいとも美しくし給ひし主を讃めよ。一二それは榮光の輪をもて天の周圍を廻らす。至高者の手これを伸べ擴げ給へるなり。

一三その命をもて主は雪を迅く降らせ、その審判の電光を速に送り給ふ。一四その御庫はこのために開かれ、雲は鳥の如く飛び出でぬ。一五その大なる御力をもて主は雲を聚め、これを碎きて霰となし給へり。一六主の顯れ給ふ時、山は震ひ、その御心に從ひて雨風吹き起らん。一七その雷の聲、また北風と旋風とは地を呻かしむ。鳥の飛び下る如く主は雪を播き散らし、蝗の飛ぶが如くにこれを降らせ給ふ。一八眼はその白き美しさに驚き、心はその降り來るに驚かん。一九主は又白き霜を鹽の如く地の上に注ぎ、これを固めて荊棘の刺の如くになし給ふ。

二〇寒き北風吹きて、水を凍らし、如何なる水溜にも及びて、水に胸當をつけしむ。二一それは山々を食ひ盡し、野を枯し火の如

く青草を滅さん。二二 疾く降る霧はすべてのものの醫なり。暑さの後の露は喜を與ふべし。二三 その御心をもて主は淵を鎭め、島々に樹を植ゑ給へり。二四 海を帆走る者はその危きを語る。己が身をもて我等これを聽き、且驚く。二五 その中には驚くべき奇しき御業、生命ある諸のもの、海の怪の族もあり。二六 主によりてその終遂げられ、その御言によりてすべてのもの成る。

二七 我らは多くのことを言へども、これをなす能はず、『主は一切なり』とは我らの言の總括なり。二八 いかにして我らは主を崇むる力を持つか、主は大にしてその造り給ひし御業の上にあり。二九 主は恐るべく、いと大にして、その御力は奇し。三〇 主を崇むる時、力を盡してこれを讃めよ、主は猶これに勝らん。三一 主を讃むる時、汝の全力を新にして倦むな。汝は決してこれを遂ぐること能はざればなり。三二 主を見てこれを宣ぶるものは誰ぞ、主に相應しくこれを崇むる者は誰ぞ。三三 これよりも大なる多くの事は隱さる。我等は唯その御業の少許を見しに過ぎず。三四 主は萬物を造り、敬虔なる人に智慧を與へ給へり。

第四四章

一 いざ我ら名ある人々と我らを産みし我等の先祖たちとを稱へん。二 主は彼等によりて大なる榮光を現はし、始めよりその大なる力を現はし給へり。三 その國に主たりし人々、その力のため名を揚げ、その悟をもて計畫をなし、預言をもて音づれを告げし人々。四 その計畫による民の指導者、その悟によりて民のために學者となり、その教訓の言の慧き人々。五 音樂の調を尋ね、歌を書しし人々。六 才能ありてその住居に平和に住みし人々。

七 かかる人々は皆その代に尊ばれ、彼等の日の光榮なりき。八 彼等の中には人々その譽を現はさんがために名を後に殘ししものあり。九 或者は何の記念をも殘さず、世になかりし如くにして死に、生れざりし如く、又その子らをも殘さざる如くなりき。一〇 されど彼等は慈悲深き人々にして、その義しき行は忘れられざるなり。一一 その種と共に善き嗣業は常に殘らん。その子らは契約の中にあり。一二 彼等の種は確く、その子らは彼等のために立つ。一三 その種は永遠に殘り、その光榮は消え失せざるべし。一四 彼等の身體は平和に葬られ、その名は萬代に生きん。一五 民はその智慧を宣べ、會衆はその譽を語らん。

一六 エノクは主の御心にかなひて移され、代々に悔改の模範となれり。一七 ノアは全くして義と認められ、御怒の時に世のために身代となり、洪水來りし時、殘れる者となりぬ。一八 永遠の契約は彼と共になされ、すべての肉は最早洪水のためには亡びざるに至れり。

一九 アブラハムは國々の群の大なる父となり、彼の如く光榮を持てる者は出でざりき。二〇 彼は至高者の律法を保ち、これと契約をなせり。その肉體にて彼は契約を建て、試みられし時その信仰を認められたり。

二一 されば主御誓をもて彼に臨み、國々はその裔によりて祝せられ、彼は地の砂の如く殖され、その裔は星の如く高められ、海より海に至るまで河より地の端に至るまで地を嗣ぐべきことを證し給へり。二二 イサクに向ひて、その父アブラハムのために、同じくすべての人の祝福と契約とを建て給へり。二三 又主はこれをヤコブの頭に止まらしめ、その祝福をもて彼を認め、その嗣業をこれに與へ、その分前を分ち、これを十二の族の間に分ち給ひぬ。

第四五章

一 主はことにすべての肉の眼に恩惠を得し、慈悲深き一人の人を起し給へり。それは、神と人とに愛せられし人、モーセにして、その記念は祝福にて滿つ。二 主は彼に聖徒の光榮の如き光榮を與へ、その敵の恐をもてこれを大にし給へり。三 その御言をもて主は奇しき業を止めしめ、王たちの前に彼を崇め、その民のために彼に誡を與へ、その榮光の幾分を彼に示し給へり。四 主は彼の誠實と柔和とのために彼を潔め、すべての肉の中より彼を選び給へり。五 主は彼にその御聲を聽かしめ、厚き暗闇の中に彼を伴ひ、親しく彼に近づきて誡を與へ給へり。即ちそれは生命と知識との律法にして、ヤコブに契約を與へ、イスラエルの審判を教へんがためなり。六 主は、彼の如き聖なる人、レビの族なる彼の兄弟アロンを高くし、七 これと永遠の契約を建て、民の祭司職をこれに與へ給へり。主は美しき裝飾をもて彼を祝し、榮光の衣を彼に纏はしめ給へり。八 主は彼に完き光榮を着せ、力の衣をもてこれを強め、麻の股引と長き衣、及びエボデをこれに着せ給へり。九 又主は金の石榴をもて裾を廻らし、その周圍に鈴をつけ、歩む時音を出さしめ、民の子らの記念のために、宮にてその音を聽かしめ給へり。一〇 黄金と青と紫とをもて刺繍を施し聖き衣をもて、審判の胸當をもて、ウリムとトンミムとをもて、一一 縫物師の手に成る撚絲の紅をもて、イスラエルの支族の名を彫りて記念としたる、珠玉師の作れる、金に嵌めたる印の如き寶玉をもて、一二 その上に印の如くに『聖』と彫りたる、頭帽の上の金の冠をもて、名譽の裝飾、力の業、善美を盡したる眼の欲をもてこれを裝ひ給へり。一三 彼の前にはかかるものなく、他人はこれを着ず、唯彼の子等とその裔のみ常にこれを着たり。一四 その犧牲は日毎に二度、悉く燒き盡さるべし。一五 モーセは彼を聖別し、聖き油をこれに注げり。これは彼とその裔のため、天のすべての日の間、主に仕へて祭司の務を果し、御名によりてその民を祝せんがための契約なりき。一六 主はすべての生ける人の間より彼を選び、その民の贖をなさんため、記念として犧牲と香とかぐわしき馨とを主に献げしめ給へり。一七 主はその誡の中に審判の契約の權を與へ、ヤコブに證言を教へ、その律法をもてイスラエルを照さしめ給へり。一八 異族の者らは彼に逆ひて共に集ひ、荒野

にて彼を嫉みぬ。即ちダタンとアビラムとその徒黨、及びコラの會衆にて、怒と憤とをもて彼に問へり。一九主これを見て心喜ばず、その御怒をもてこれを滅し給へり。彼等に奇しき力を現し、燃ゆる火をもて燒き盡し給へり。二〇主はアロンに光榮を加へて嗣業を與へ、收穫の初穗を彼に分ち、その糧を豐に備へ給ひぬ。二一彼等は、主が彼とその子孫のために與へ給ひし主の犧牲を食すべし。二二されど民の地に於ては彼は何の嗣業もなく、民の間には何の分もなかるべし。そは主自ら汝の分前又嗣業なればなり。

二三エレアザルの子ピネハスはその光榮第三位なり。そは彼主の畏に熱心にて、民の背ける時、魂の勇氣をもて確く立ち、イスラエルのために贖をなせり。二四されば平和の契約彼のために建てられ、彼は聖徒らとその民の指導者となり、彼とその裔とは祭司の位を永遠に保つに至れり。二五主は又ユダの族なるエサイの子ダビデと契約をなし、王の嗣業を彼のものとし、子より子に傳へしめ給へり。アロンの嗣業も亦その裔に及びぬ。二六神は汝らの心に智慧を與へて、義をもてその民を審かしめ給ふ。これ彼等の善きもの滅されず、その榮光代々に及ばんがためなり。

第四六章

一ヌンの子ヨシュアは雄々しき軍人にて、預言に於てはモーセの後繼者なりき。彼はその名の如く主の選び給ひし民の救のために、大なる者となり、彼等に逆ひて起り立てる敵に讐いて、イスラエルにその嗣業を與へたり。二その手を高く擧げ、その劍を町々に差し延べて、いかに彼は光榮を得しむ。三民の前に誰かかくは確く立ちしぞ。主自らその敵を彼の許に携へ來り給へるなり。四日は彼の手によりて歸り行かざりしや。一日は二日とならざりしや。五その敵周圍に迫りし時、彼は、いと高く、いと強き主を呼びまつり、大なる主これに聽き給へり。六大なる力の雹の中に彼は敵に向ひて激しく戰ひ、下り行きて防ぐ者どもを滅せり。これ國々の民彼の武器を知り、いかに主の御前に戰ひしかを知らんためなり。彼は至強者に從ひて戰ひしなり。七彼は又モーセの時に慈悲の業をなせり。彼とエフンネの子カルブは仇に向ひて立ち、人々を罪より救ひ、惡しき者の私語を止めたり。八かくて足にて立ちし六十萬の人々の中にて、彼等二人のみ保たれ、その嗣業の地、乳と蜜との流るる地に伴はれたり。九主又カルブに力を與へて、年老ゆるまでこれを保たせ給へり。彼は遂にその地の高き處に入り、その裔は嗣業としてこれを得たり。一〇これイスラエルのすべての子ら主に從ひて歩むことのいかに善きかを見んがためなり。

一一又士師等につきては、すべてその心淫を行はず、主より離れざりしものは、おのおのその名によりて、彼等の記念の祝せられんことを。一二彼等の骨その處より再び榮え、崇められしその

名、彼等の子らの上に再び新たにせられんことを。一三主の愛し給ひし主の預言者サムエルは王國を建てて、その民の上に立つ君たちに油注ぎぬ。一四主の律法によりて彼は會衆を審き、主はヤコブを顧み給へり。一五その信仰によりて彼は預言者と認められ、その言によりて幻に忠なる者と知られたり。一六又その敵彼の周圍に迫りし時、乳を離れぬ羔の供物をもていと強き主に呼はれり。一七主は雷を降し、大なる響をもて、その御聲を聽かしめ給へり。一八かくて主はツロの有司たちとペリシテの主君たちとを悉く滅しぬ。一九又その永き眠の前に主とその油注ぎし者との前にあげつらひていへり『我は人の所有物を、靴一つだに取らず』と。彼を責むる者一人もなかりき。二〇彼眠に就きし時預言して、主にその終を示し、民の惡を消さんために、預言をもてその聲を地より擧げたり。

第四七章

一彼の後にナタン起ちて、ダビデの日に預言せり。二脂、宥の供物より別たれし時の如く、ダビデはイスラエルの子らより離されたり。三彼は小山羊の如くに獅子を、群の小羊の如くに熊を弄びぬ。四その若き時、彼は巨人を殺して民の恥辱を取り去り、石投をもて手を揚げし時、ゴリアテの誇を碎きしにあらずや。五彼いと高き主に呼はり、主その右の手に力を與へて、強き軍人を殺さしめ、その民の角を高く擧げしめ給へり。六されば彼等はその殺せし一萬人の故に彼を崇め、主の祝福のために彼を稱へぬ。七彼は行く處にて敵を亡し、その仇なるペリシテ人を空くし、その角を碎きて今日に至れり。八彼はそのあらゆる業を用ひ、榮光の言をもていと高き聖者に感謝せり。その心を盡して讃美を歌ひ、己を造り給ひし者を愛しぬ。九又かれ祭壇の前に歌うたう者を置き、その音樂によりて美しき調を奏でしめぬ。一〇彼は祭を美しくし、期節を整へてこれを完くせり。されば人々主の聖なる御名を讚め、その聲未明より聖所に響きぬ。一一主は彼の罪を取り去り、その角を永遠に揚げ、これに王の契約とイスラエルの榮光の御座とを與へ給へり。

一二彼の後に、智慧あるその子起り、彼の故に安らかに住めり。一三ソロモンは平和の日に世を治め、神は彼に廣く安息を與へ給へり。これ彼主の御名のために家を建て、永遠に聖所を備へんがためなりき。一四汝は汝の若き日にいかに智くせられ、河の如く悟をもて滿されしぞ。一五汝の魂は地を蔽ひぬ。又汝は幽玄なる喩言をもてこれを滿しぬ。一六汝の名は遠く島々に達し、汝の平和のために汝は愛せられき。一七汝の歌と箴言と喩言とのために、又汝の解釋のために、國々は汝に驚きぬ。一八イスラエルの神と呼ばれ給へる主なる神の御名によりて、汝は錫の如くに金を集め、鉛の如くに銀を殖したり。一九然るに汝は汝の腰を女たちに屈め、その身體を彼等のなすがままに任せたり。二〇汝は汝の名譽を辱しめ、汝の胤を瀆して子らの上に御怒を招け

り。さればわれ汝の愚のために悲めり。二一かくて國は二つに分たれ、エフライムより出でしもの、從はぬ國を治めたり。二二されど主はその憐憫を捨て給はず、その業を一つだに亡し給はざるべし。又その選ばれし者の裔を消さず、彼を愛せし者の子孫を取り去り給はざるべし。主はヤコブに殘れる者を與へ、又ダビデに彼より出でたる根を與へ給へり。

二三ソロモンはその先祖たちと共に眠り、その胤よりレハベアム殘れり。彼は甚しく愚にして、悟を缺き、その謀略をもて民を背かせたり。ネバテの子ヤラベアムも亦イスラエルに罪を犯さしめ、エフライムに罪の道を與へぬ。二四かくて彼等の罪はいとどしく增し加はり、彼等は遂にその地より移されたり。二五これ彼等あらゆる罪の道を求め、自ら審判を招くに至りし故なり。

第四八章

一又預言者エリヤ火の如く現れ、その言炬火の如く燃えたり。二彼は人々に飢饉を臨ましめ、その熱心をもて彼等の數を少くせり。三主の御言によりて彼は天を鎖し、かくて三度火を呼び降しむ。四エリヤよ、彼の驚くべき業をもて汝はいかに崇められしぞ。誰か汝の如き光榮を持たん。五汝は至高者の御言によりて死人を死より、死人の處より蘇らせたり。六彼は王たちを滅亡さしめ又貴き人々をその床より下せり。七彼はシナイにて譴責を、ホレブにては復讐の審判を避けり。八汝は應報のために王たちに、又己が後を繼がしむるために預言者たちに油を注ぎぬ。九汝は火の迅風の中に、火の馬の戰車にて上に召されぬ。一〇彼は時に至りて彼等のに臨む叱責のために、激しき憤の來らぬ前に怒を和げ、父の心を子に歸らせ、又ヤコブの諸の族を回さんとて立てられしなり。一一幸福なるかな、汝を見しもの、又愛をもて美しくせられしもの、そは我らは正しく生きて生くべきものなればなり。

一二エリヤは疾風に巻き去られ、エリシャは彼の靈に滿されぬ。エリシャはその生ける間いかなる主君も恐れず、誰も彼も從はしむることを得ざりき。一三彼にとりては高きものはなく、その眠る時は彼の身體預言をなせり。一四その生ける間不思議を行ひしが、死ぬる時にもその業奇しかりき。一五されど人々悔改めず、その罪より離れざりき。彼等は遂に虜にせられて、その國より移され、悉く地の上に散らされぬ。殘されし民はその數少く、一人の主君ダビデの家に殘されぬ。一六或ものは主の御心にかなふことをなし、或ものは罪に罪を加へぬ。

一七ヒゼキヤはその町を堅め、その中に水を引き入れぬ。彼は鐵をもて岩を掘り、水のために井戸を作れり。一八彼の代にセナケリブ來りて、ラブシャケを遣はしぬ。ラブシャケ向ひて手をあげ、高ぶりて大なる者を誇りぬ。一九その時人々の心と手震ひ、産の苦をなす女の如く苦みぬ。二〇かくて彼等憐憫深き主に向ひて呼はり、その手を主に差し延べたり。聖者は天より速にこ

れを聴き、イザヤの手によりて彼等を救へり。二一主はアッスリヤ人の軍營を撃ち、主の使彼等を悉く滅しぬ。二二ヒゼキヤは主の御心にかなふことをなし、その父ダビデの道に強かりき。これ主の幻に忠信なりし大なる預言者イザヤの誡によりしなり。二三彼の時に、日は後に還り、王の生命加へられぬ。二四彼はその優れたる靈をもて、終末に起るべきことを見、シオンにて歎き悲む人々を慰めたり。二五彼は後起るべきこと、又隱れたることを、その起る前に示しぬ。

第四九章

一ヨシアの記念は、和香師の手によりて調へられたる薫香の如し。それはすべての人の口に蜜の如く甘く、酒宴の席の音樂の如く美し。二彼は民の回心を正しくあしらい、不法の憎むべきものを取り去りぬ。三彼はその心を直くして主を仰ぎ、不法の人々の代に敬神のわざをなしぬ。

四ダビデ、ヒゼキヤ、ヨシアの外は、すべて罪を犯しぬ。彼等は至高者の律法を棄てたり。ユダの王たちは皆敗れたるなり。五彼等はその力を他人に與へ、その光榮を外國に與へたり。六彼等は聖所の町を火にて燒き、その街衢を荒れ廢れしめぬ。エレミヤの手によりて記されし如し。七彼等はエレミヤを苦めたれど、彼は母の胎にて聖別されし預言者にて、或は拔き、或は毀ち、或は滅し、或は建て、或は植ゑんために遣はされぬ。八榮光の幻を見しはエゼキエルなり。主これをケルビムの車の上に現はし給へり。九彼は雨の中なる敵につきて語り、直く歩む者を正しきに導きぬ。一〇十二預言者につきては、その骨彼等の處にて榮えんことを。彼等はヤコブを慰め、希望に依りて彼等を救へり。

一一我等いかにゼルバベルを崇めん。彼は右の手の印なりき。一二ヨセデクの子イエスもまた然り。彼はその代に家を建て、聖き宮を高く据ゑ、永遠の榮光のために備へぬ。一三ネヘミヤにつきてもその記念大なり。彼は我等のために倒れたる石垣を築き、門と門を据ゑ、我等の家を再び建てたり。

一四エノクの如き人は嘗て地の上に造られざりき。彼は地より取り擧げられたり。一五又ヨセフの如き人も生れざりき。げに彼は兄弟を治むる者、民の柱なりき。彼の骨は顧られしなり。一六セムとセツとは人々の間に崇められき。されど造られたるすべての生ける者の上に立つはアダムなり。

第五〇章

一オニヤの子シモンは大祭司にして、その生ける間に家を繕ひ、彼の代に宮を固うせり。二彼によりて二重の壁の高き所、宮の周圍の高き石垣はその基より築かれぬ。三彼の代に水槽は小くせられ、周圍の銅器は海の如くなりき。四彼はその民のために計り、彼等の敗れざらんがために町を堅め、敵の襲に備へたり。五

人々彼の周圍に集ひし時、聖所より出で來りし彼は、いかに光榮に滿ちしぞ。六雲の中の曉の明星の如く、滿ちて圓なる月の如く、七至高者の宮の上に輝く太陽の如く、榮光の雲に光を與ふる虹の如く、八初穗の日の薔薇の花の如く、泉の傍の百合の如く、夏の乳香の樹の若芽の如く、九香爐の中の火と香との如く、あらゆる寶石を鏤めたる純金の伸板の器の如く、一〇果を結ぶオリブの樹の如く、又雲間に高く聳ゆる杉の如かりき。一一榮光の衣を纏ひ、全き誇を着て、聖壇の階段に立ちし時、彼は聖所の境内に榮光を滿しぬ。一二祭司たちの手よりその分を受け、己も亦祭壇の爐の側に立ち、この兄弟たちに、冠の如く圍まれし時、彼はレバノンの若き香柏の如かりき。又彼等棕櫚の樹の幹の如く彼を周りたり。一三アロンの子等も皆その光榮を纏ひ、手に主の供物を持ちてイスラエルの全會衆の前に立ちぬ。一四祭壇の勤行を終り、全能なる至高者の供物を整へんため、一五手を酒杯に延べ、葡萄の血を注ぎ、祭壇のもとに注ぎて、萬民の王なる至高者にかぐわしき馨をささげぬ。一六その時アロンの子等は聲を擧げ、延金作のラッパを鳴らし、人々の聽き得る大なる響きを起して、至高者の前に記念となせり。一七すべての民はその時、皆直ちに平伏して、顏を地につけ、至高き神、全能なる彼等の主を拜み奉りぬ。一八罪人らも亦その聲を擧げて讚美し、家の中に美しき調滿ちたり。一九民は慈悲深き主の御前に祈り、いと高き主に呼はりて、主の禮拜終るまでに及び、かくて彼等はその奉仕を果しぬ。二〇その時彼下り行きてイスラエルの子等の全會衆の上にその手を擧げ、その脣をもて主を祝し、その御名に榮光を歸したり。二一かくて彼、再び身を屈めて拜をなし、至高者よりの祝福を受けぬ。

二二汝ら今萬物の神を祝せよ。主は到る處に大なる事をなし、胎内より我等の日を高め、その慈悲に從ひて我らをあしらひ給へり。二三願くは主心の歡喜を我らに與へ、我らの日に、イスラエルに平和を與へて永遠に至らしめ、二四我らに對するその慈悲を確くし、そのよしと見給ふ時我らを救ひ給はんことを。二五二つの民の故にわが心惱む。第三は民にあらず。二六即ちサマリヤの山に坐する人々とペリシテ人、又シケムに住む彼の愚なるものどもなり。

二七われは此の書に悟と知識との教訓とを記したり。我はその心より智慧を注ぎ出しし、エルサレムのシラ・エレアザルの子イエスなり。二八幸福なるかな、此等のことを行ふ人。又これをその心に貯ふる者は智くならん。二九もしこれをなさば彼はすべてのことに強くなるべし。主の光彼の指導なればなり。

第五一章

一シラの子イエスの祈。

主よ、王よ、われ汝に感謝せん。わが救主なる神よ、われ汝を讚めん。汝の御名に感謝をささげん。二汝はわが保護者、わが

助主にして、わが身を滅より、罵る舌の罠より、僞を作る唇より救ひ出し給へり。傍に立つ人々の前にて汝はわが助主なりき。三その慈悲の豐かなるに從ひ、御名の大なるに從ひて、噛まんとする齒の切齒より、わが生命を求むる者の手より、わが持ちし多くの苦惱より、四四方を取り捲きて息を止むる火より、わが燃えしめざりし火の眞中より、五陰府の腹の深き處より、汚れたる舌より、又虚僞の言より、六王への不義なる舌の罵より、我を救ひ出し給へり。わが魂は死に近づきぬ。七彼等は四方より我を圍み、我を助くる者一人だになし。我は人の助を求めたれど得ざりき。八主よ、われは汝の慈悲と永遠の昔よりありし汝の御業とを憶ゆ。汝は汝を待ち望む者を救ひ、敵の手より彼等を助け出し給へり。九我は地よりわが願を擧げ、死より救ひ給はんことを祈れり。一〇我はわが主の父なる主に呼はり、患難の日に、また高ぶる者はびこりて、助なき時に、われを見棄て給はざらんことを乞へり。一一我は汝の御名を絶えず讚め、感謝をもて讚美せん。わが願きかれたり。一二汝は我を滅びより救ひ、惡しき時より助け出し給へり。されば我感謝をささげて汝を讚め、主の御名を祝せん。

一三我猶若くして、異國に出で行かざりし時、われ祈をもて智慧を求めたり。一四宮の前にて我これを求めたり、永遠に至るまでわれこれを求めん。一五熟せる葡萄の如く、その花によりてわが心智慧を喜ぬ。我が足は直く歩み、若き時よりこれを追ひ行けり。一六我少しく耳を傾けてこれを受け、わがために多くの教訓を得たり。一七われこれによりて益を得たり。われに智慧を與へ給へる者をわれ崇めん。一八我は智慧を行はんことを求め、善きものに熱心なりき。さればわれいつまでも恥を受けざるべし。一九わが魂は智慧と鬪ひ、わが行は正しかりき。われはわが手を上なる天に擴げ、智慧につきてのわが無知を歎きたり。二〇我はわが魂を正しく智慧に向け、純潔をもてこれを見出しぬ。われは始より智慧と偕にありし心を得たり。されば我は見棄てられざるべし。二一わが心は智慧を求めて惱みぬ。さればわれより所有物を得たり。二二主はわが報のため、われに舌を與へ給へり。さればわれこれをもて主を稱へん。

二三無智なる者よ、われに近づき、わが學舍に宿れ。二四何故汝は此等のものを缺き、汝の魂いたく渇くか。二五われわが口を開きていひぬ、價なくして汝のために智慧を得よ、二六軛の下に汝の首を置き、汝の魂に教訓を受けしめよ、智慧は汝に近く見出されん。二七汝の眼をもて見よ、いかにわれ少く勞して、わがために多くの休を得しぞ。二八多くの銀をもて汝の教訓を受け、これによりて多くの金を得よ。二九願くは汝の魂主の憐憫を喜び、汝これを讚めて恥を受けざらんことを。三〇時の來る前に汝の業をなせ。さらばそのよしと見給ふ時、主汝に報い給はん。

バルク書

第一章

一 此書に載する言は、ヘルキヤの子なるアサデヤ、アナデヤの子なるセデキヤ、セデキヤの子なるマアシヤ、マアシヤの子なるネリヤ、ネリヤの子なるバルクが、二 バビロンにて誌しものなり。時恰もカルデヤ人エルサレムを陥れ、火を放ちて之を焼きたる第五年、その月の七日目に當る。三 かくてバルクはユダの王ヨアキムの子エコニヤ、またこの書の言を聴かんとて來れる人々、四 力ある人々、王の子ら、長老たち、いと低きよりいと高きに至る凡ての人々、卽ちスド河の畔なるバビロンに住むすべての人々の前にて、この書を讀みぬ。五 ここに彼ら涙を流し、食を斷ちて、主の御前に祈れり。六 彼らまた各自の力に應じて喜捨を集め、七 之をエルサレムに居るサロムの子なるヘルキアの子、大祭司ヨアキム、彼と共にエルサレムに在る祭司たち、またすべての人々に贈れり。八 九 バルクはまた、シバンの月の十日に、さきに宮より奪ひ去られ居りし主の宮の寶物を、ユダの地に還さんとて受けとれり。これ等は銀の器にて、バビロン王ネブカデネザルが、エコニヤ、王の子ら、俘囚人、權力ある者及び全地の民をバビロンに伴去りし後、ユダの王ヨシアの子ゼデキヤが鑄造しものなり。一〇 彼らいへり、視よ、我ら金子を汝らに贈る。これは汝らの燔祭、罪祭、また薫香を買ひ、汝らのマナを整へて、主なる我らの神の祭壇に獻げんがためなり。一一 汝らバビロン王ネブカデネザル、及びその子バルタサルの生命のために祈れ。こは彼らの生命の天に於けるが如く地にも長からんがためなり。一二 主は我らに能力を與へ、我らの眼を明らかならしめ給はん。かくて我らバビロン王ネブカデネザル、またその子バルタサルの庇護の下に生き、我ら長く彼等に仕へ、彼らの前に寵愛をえん。一三 また我等のために、主なるわれらの神に祈れ。そは我ら主なる我らの神に罪を犯し、また此の日に至るまで、主の御憤と御怒、われらを去らざればなり。一四 我らが汝らに送れるこの書を讀み、祭の日また聖會の日に、主の宮に入りて懺悔すべし。

一五 汝等またいふべし。正義は主なる我等の神に歸す。されど今日見るが如く、迷謬は我らと、ユダの人々、エルサレムに住む者、一六 我らの王たち、王の子ら、祭司ら、預言者ら、我らの先祖らに、歸するなり。一七 そは我ら主の御前に罪を犯し、一八 主に從はず、主なるわれらの神の御聲を聽かず、明白に我等に與へ給ひし誡に歩まず、一九 主が我等の先祖たちをエジプトの地より導き出し給ひしより今日に至るまで、我らは主なるわれらの神に叛き、その御聲に聽き從はざりしなり。二〇 されば今日、諸の災禍と呪咀とは我らを離れ去らず。この呪咀は、主が乳と蜜との流るる地を我らに與へんとて、我らの先祖をエジプトの地より導き出し給へる日に、その僕モーセに命じて宣べしめ給ひしもの

なり。二一されど我らは、主なるわれらの神の御聲をきかず、我らに遣はし給ひし預言者たちのすべての言に從はず、二二おのが惡しき心の思念のままに異なる神々に仕へ、主なるわれらの神の御前に惡を行へり。

第二章

一されば主は我らに對し、またイスラエルを審きし審判者、我らの王たち、王の子ら、またイスラエルとユダの人々に對して語り給ひし御言を果たし、二モーセの律法に誌しし所に從ひ、エルサレムに起りしことの如く、天が下に嘗て見ざりし怖るべき災禍を我らの上に降し、三人その息子息女の肉を喰はざるを得ざるに至らしめ給へり。四しかのみならず、主は彼らを、我らの四圍の國々に渡して奴隷となし、彼らを散らし給へる四圍の國人の間に在りて、恥辱と滅亡とを受けしめ給へり。五かく我らは棄てられて、顧りみられざりき。そは我ら、主なる我らの神に罪を犯し、主の御聲に聽き從はざりし故なり。六正義は主なる我らの神に屬す。されど我らと、我らの先祖とには、今日見るが如く、拭ひえぬ恥辱のみ殘れり。七我らの上に臨める此等のすべての災禍は、主われらに向ひて宣言ひし處なればなり。八されど我らはなほ主の御前に祈りて各々その惡しき思念より離れんことを願はず。九故に主は凶惡をもて我らに臨み、禍害を我らの上に齎し給へり。そは主の我等に命じ給へる御業は悉く正しければなり。一〇然るに我ら主の御聲を聞かず、我らの前に備へ給ひし主の誡の道に歩まざりき。

一一主なるイスラエルの神よ、汝は權勢ある御手、尊き御腕、休徵と異なるわざ、又大いなる能力をもて、その民をエジプトの地より導き出し、今日呼ばれ給ふ聖名を汝自らに贏ち得たまへり。一二主なる我らの神よ、我等罪を犯し、不信を行ひ、不義をもて、汝の律法をあしらひぬ。一三願はくは御怒を我らより取り去り給へ。そは我らは汝によりて異邦人の間に散らされ、僅かに殘れる者なればなり。一四主よ、我らの祈禱と嘆願とを聽召し、汝自らのために我らを救ひ、我らを捉へ行きたる者の眼の前にて、我らを惠み給へ。一五そはイスラエルとその後裔、汝の御名によりて呼ばれなば、全地は汝が主なるわれらの神に在すことを知るべければなり。一六主よ、汝の聖なる宮より我らを覽はし、我らを顧み給へ。汝の耳を傾け給へ。主よ、我らに聽き給へ。一七汝の眼をひらきて覽はし給へ。そは死にて墓にあるもの、その魂を軀より取り去られし者は、讚美と正義とを主にささぐる能はざればなり。一八されど、主よ、大いなる惱の中にありて、虐げられ、弱められたる魂、また衰へたる眼、餓たる魂は、讚美と正義とを汝に獻げん。一九主よ、われらの神よ、我らの先祖、また王たちの正義のために我ら御前に脆きて虔しく嘆き訴ふる能はず。二〇そは汝が我らの上に降し給ひし御怒と御憤とは汝の僕なる預言者たちによりて汝が語り給ひし如く

なればなり。二一主かく語り給ふ、汝らの肩を屈めて、バビロンの王に仕へよ。さらば我が汝らの先祖に與へし地に、汝ら留まることをえん。二二されど汝らもしバビロン王に仕へず、主の御聲に聽き從ふことを欲せずば、二三われユダの町々を滅ぼし、エルサレムより再び饗宴の聲、歡喜の聲、新郎また新婦の聲を聞ゆることなからしめ、全地に住む人なきに至らしむべしと。二四されど我らバビロン王に仕へて、汝の御聲に聽き從はんと願はざりき。故に汝はその僕なる預言者たちをもて語り給へるみ言を果し給へり。卽ち我らの王たちの骨、先祖たちの骨は、墓より取り去られざるをえざるなりと。二五視よ、彼らは晝は暑熱、夜は霜空に晒さる。饑饉と劍と惡疫とに惱まされ、甚だしき苦痛のうちに死ねり。二六また主の宮は今日あるが如く、これを荒れ廢るる儘にし給へり。これイスラエルとユダの家の惡逆によりてなり。二七われらの神なる主よ、主は常にその慈愛をもて、また常にその恩惠に從ひて、我らをあしらひ給へり。二八主の僕モーセ、イスラエルの子らの前にて、汝の命ずるままに、律法を綴りし日、彼によりて主が宣ひし如くなり。曰く、二九もし汝心より我が聲に聽き從はずば、この大いなる群衆は、誠に諸國のうちにて最小き數となるべし、われ諸國に彼らを散らさんと。三〇そは我知る、彼ら我に聽くを欲せず、頑固なる民なればなり。されど捉へ行かれし地にありて、彼ら自らを想ひ出し、三一わが彼らの主なる神なることを憶ひ出でん。そはわれ彼らに一つの心と、聞くべき耳とを與ふべければなり。三二かくて彼ら俘囚の地にて我を讚め、我が名を思ひめぐらし、三三頑固なる心を棄て、惡しき業より離るべし。そは彼ら主の御前に罪を犯せる彼らの先祖の運命を想ひ出づべければなり。三四また我かれ等を、わが嘗て誓ひをもて、彼らの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに約したる地に携へ歸らん、彼らその地の主となるべし、われ彼らを增し殖さん、彼ら減らさるることなかるべし。三五われ彼らとの間に永遠の契約を立てん、われ彼らの神となり、彼ら我が民とならん。我再びわが彼らに與へたる地より彼らを追ひ出すことなかるべし。

第三章

一ああ全能の主、イスラエルの神よ、悲にある魂、惱にある靈は、汝に向ひて泣き叫ぶなり。二ああ主よ、聽き給へ。われらを惠み給へ。汝は恩惠に滿ち給へばなり。われらを憐れみ給へ。我ら御前に罪を犯したればなり。三汝もし永遠に忍び給はずば、我ら全く滅び失せん。四全能の主、イスラエルの神よ、今死せるイスラエル人とその子らとの祈を聞き給へ。彼らは御前に罪を犯し、彼らの神なる汝の御聲を聽かざりき。されば此等の災禍われらを離れざるなり。五我らの先祖の罪を憶出で給ふ勿れ。此の日ただ主の御能力と御名とを想ひ續けしめ給へ。六そは汝は我らの神なる主に在せばなり。主よ、我ら汝をたたへま

つらん。七この故に汝は、汝を畏るる思念を我らの心に置き、御名を稱ふる心を起こさしめ、俘囚にありて讚美をささげしめ給へり。そは我ら、主の御前に罪を犯したる我らの先祖の凡ての罪を憶出でんために召されたればなり。八視よ、我ら、主なるわれらの神より離れたる我らの先祖たちのすべての罪に從ひ、叱責と呪咀とを受けんために、また懲戒のために、此の日に至るまで、汝の散し給へる地に俘囚の民となる。

九イスラエルよ、生命の誡を聽け、智慧を識らんために耳を傾けよ。一〇イスラエルよ、汝の敵の國にありて、汝に起れることは何ぞや。異邦に在りて汝は卽に年老いたり。汝は死人と共に汚され、一一墓に下るものと共に數へられしにあらずや。一二汝は智慧の泉を棄て去れり。一三汝もし神の道に歩みたりせば、とこしへに平和の中に住むべかりしなり。一四何處に智慧あるか、何處に能力あるか、何處に知識あるかを學べ。さらば汝また何處に晝の長さと、生命の長さとあるかを知り、何處に眼の光あり、また平和あるかを知らん。一五誰か智慧のある處を見出し、その財寶を受け繼ぎたるや。一六異邦の侯伯たち、また地に棲む荒き獸を治めし者は何處にありや。一七空の鳥と歡樂を共にし、また人々の依り賴む金銀を積み蓄へ、絶えず之を獲んとせる者は何處にありや。一八銀をもて作られ、いとも愛でられたるもの、その手の業は測り知るべからざるもの、一九これらは滅びて墓に下り、知らぬ者かれ等に代りて現る。二〇若者ら光を見、地の上に宿る。されど彼ら知識の大路を知らず。二一その小路をも辨へず、また之を守らず、彼らの子らはその路より遠ざかれり。二二これぞ未だカナンにて聞きしことなく、テマンにて見る能はざりし處なれ。二三地上に智慧を求むるアガレ人、メランとテマンの商人、寓話の著作者、悟性の探求者など少なからず。されど誰ありて智慧の大路を知らず、その小路を想出づるものなし。二四ああイスラエルよ、神の家のいかに偉大なるかな、その治め給ふ地のいかに廣きかな、二五偉大にして絶ゆるところなく、崇高くして測り知ること難し。二六巨人ありて、往古よりその名顯はれ、優れたる勇者ありて戰にいと秀でたり。二七主は彼らを選び給はず、智慧の大路を與へ給はず。二八却つて彼ら滅ぼされたり。彼らに智慧なかりし故に、自らの愚昧によりて滅び失せたり。二九誰か天に昇りて智慧を捉へ、之を雲の上より携へ降りしや。三〇誰か海を渉りて智慧を見出し、純金をもて購ひ歸りしや。三一誰ありて智慧の大路を知らず、その小路を思はざるなり。三二されど一切を知るものは智慧を知り、その悟性をもて智慧を見出す。永遠に地を創造りし者は四足の獸をもて之に滿しぬ。三三彼は光を放ち給ふ。光は輝きわたり、再び之を招き給へば、畏懼をもて彼に從へり。三四星は守護者として空に煌き、歡喜にみつ。彼招き給へば、星ら我ここにありと答へ、彼らを創造り給へる者に向ひて、いと樂しげに光りを放つなり。三五これぞ我らの神に在すなれ。地には彼に類ふべき者なかるべ

し。三六彼は智慧のすべての道を知悉し、之をその僕ヤコブと、その愛しみ給ふイスラエルとに與へ給へり。三七彼その後己を地上に示し、人々と語り給へり。

第四章

一これは神の誡の書なり。その律法は永遠に絶ゆることなし。之を守るものは生命をえ、之より離るる者は死すべし。二ああヤコブよ、立ち歸りて、堅く之を保つべし、汝光の面前を歩め、これ光に照らされんためなり。三汝の榮譽を他の者に奪はるな。また汝らに益となるものを他の國に與ふな。四ああイスラエルよ、我らは幸福なるかな。そは神に歡ばるることどもを我ら教へられたればなり。五歡び勇め、我が民よ、イスラエルの忘形見よ。六汝ら諸國に賣られたり、されど汝らを滅ぼさんとにはあらず、ただ汝らの神の御怒に觸れ、その敵に渡されしのみ。七そは汝ら神にささげずして惡魔に犧牲をささげ、御怒を招きしによる。八汝らは、汝らを導き上りし永遠の神を忘れたり。汝らは、汝らを育みしエルサレムを悲しませたり。九さればエルサレムは神の御怒なんぢらの上に臨むを見ていへり。聽け、ああ汝らシオンの近傍に住む者よ、神、大なる悲歎をもて我が上に臨み給へり。一〇そは我、わが息子、息女の捉はれ行くを見たればなり。こは永遠者が彼らの上に齎し給ひしものなり。一一我は歡喜をもて彼らを養ひしが、涙と歎きとをもて彼らを見送れり。一二我は寡婦なり、多くの人に棄てられたる者なり、我に向ひて誰も歡喜をなすな、我はわが子らの罪によりて荒野に殘されたり。彼ら神の律法より離れたればなり。一三彼ら法規を知らず、また神の誡の大路を歩まず、その正義の懲戒の小路を辿らざりき一四シオンに近く住む者よ、來れ、永遠者の齎し給へる息子息女の俘囚を思へ。一五そは彼一の國を遠隔より彼らの上に遣はし給へり、その國は恥を知らず、不思議なる言を用ひ、老いたるを敬はず、幼きを憐れむことなし。一六彼ら寡婦の慈しみ愛する子らを奪ひ去り、息子なき寡婦を荒野に殘し行けり。一七されど、我なにをもて汝らを援くべきか。一八これらの災禍を汝らの上に齎したる者こそ、敵の手より汝らを救ひ出し給ふべきものなれ。一九行け、汝らの道を。ああ我が子らよ、行け、汝らの道を。我は荒野に殘されしものなればなり。二〇我は平和の衣を脱ぎ、祈りの麁服を纏ひて、我が日の限り、永遠者に泣き叫ばん。二一喜び勇め、ああ我が子らよ、主に泣き叫べ。さらば彼、敵の手より汝らを救ひ給はん。二二そは我が希望は永遠者にあり、かれ汝らを救ひ給はん。歡喜は聖なる者より我に來らん。そは永遠者なる汝らの救主より、憐憫すみやかに汝らに來るべければなり。二三我わが歎と涙とをもて汝らを送り出したれど、神は永遠の歡喜をもて再び汝らを我に歸し給はん。二四いま汝らの俘囚をシオンの隣人らが見たる如く、彼らまた久しからずして神より來る汝らの救ひを見ん。その來るや永遠者の大なる

榮光と光明とをもて來らん。二五我が子らよ、耐へ忍びて神より汝らに臨める御怒を受けよ。汝らの敵は汝らを迫め悩まさん。されど暫時せば、汝ら彼らの滅び失するを見、彼らの頸を踏まん。二六我が美しき者らは、荒れたる道を往き、敵に捉へられし群羊のごとくに携へ去られたり。二七勇め、我が子らよ、神に向かひて泣き叫べ。そは此らのことを汝らの上に來らしめ給ひし者に、汝ら想出ださるればなり。二八神より迷ひ出でしは汝らの心なりしも、汝ら歸りたれば更に十倍して彼を求めよ。二九汝らの上に此等の災禍を臨ませ給ひし者は、また汝らの救と共に永遠の歡喜を汝らに與へ給はん。三〇雄々しかれ、エルサレムよ、汝にその名を賜ひし者、汝を慰め給はん。三一憫むべきかな、汝を悩まし者、また汝の倒るるを見て歡びし者。三二憫むべきかな、汝の子らの仕へし町々。憫むべきかな、汝の子らを受けし國。三三そは汝の廢墟を見て歡び、汝の倒れたるを歡びし者は、また自らの荒れはつるを見て悲しまん。三四そはわれ彼の大なる群衆の歡喜となすものを奪ひ去り、その誇れるものを悲歎に變へん。三五そは永遠者より劫火いで彼らの上に臨みて絶えず、かくてその地は長く、惡魔の棲家とならん。

三六ああエルサレムよ、汝東の方を望み、神より汝に來る歡喜を視よ。三七視よ、汝の子らは來る。汝の見送りし者、彼らは聖なる者の御言により、神の榮光のうちに、東より西に向ひ、相携へて歸り來るなり。

第五章

一エルサレムよ、汝の悲歎と苦悩の衣を脱ぎすて、永遠に神より來る榮光の優美を纏へ、二神より來る正義の重衣をも纏ひ、汝の頭の上に永遠者の榮光ある冠を戴け。三神、汝の輝を天が下なるすべての國に顯し給はん。四そは汝の名は神により、とこしへに正義の平和、また神の禮拜の光榮と稱へらるべし。五起てよ、エルサレム、起ちて高きに上れ、而して東の方を望め、神に憧がるる歡喜に滿たされ、聖なる者の命ずるままに。視よ、汝の子らは相携へて、西より東に向ひて來る。六彼ら跣足にて汝に別れ、敵に携へ去られしが、神は御國の子らの如く、榮光のうちに高めつつ、彼らを汝に伴ひ歸り給ふ。七そは神、すべての高き丘、また大河の堤防を平らかにし、谷を埋めて平地となすべきことを命じ給ふ。これイスラエルの子らが、平安に神の榮光のうちに進み行かんがためなり。八諸の林も、すべての香ゆかしき樹々も、神の誡によりてイスラエルを蔽はん。九そは神己より出づる恩惠と正義とにより、榮光の輝やきの中に歡喜をもて、イスラエルを導びき給ふべければなり。

エレミヤの書翰

第一章

一 バビロニヤ人の王によりて、バビロンに捕へ移さるべき人々に、神によりて命ぜられし如く、告げんがために、エレミヤの書き送れる書の寫。二 神の御前に汝らが犯したる罪の故に、汝らはバビロン王ネブカデネザルによりてバビロンに捉へ移さるべし。三 汝らバビロンに到らば、多くの年月、また長き時期、卽ち七代に亙りて、彼處に留めらるべし。されど後、われ汝らを平和のうちに、彼の地より伴ひ歸らん。四 さて汝らバビロンに在りて、金、銀また木にて造れる神々の、肩に擔はるるを見ん。此等の神々は諸國の間に恐怖を起さしむ。五 汝ら心して異邦人に倣ふな。また汝らを圍む群衆、みな前後より彼らを拜むを汝等見るとも、恐るな。六 汝らただ心のうちに言ふべし。ああ主よ、我らはただ汝を拜すべきなりと。七 そはわが天使は汝らと偕にあり、我自ら汝らの魂を守護るなり。八 神々の舌は工匠によりて研き出され、その體は黄金もて飾られ、鍍金せらる。されど彼九 乙女をも華ならしむる黄金を取りて、かれらその神々の冠をつくる。一〇 祭司らまた時に、神々より金、銀を剝ぎて自らのために藏む。一一 實に彼らこれを賤しき娼婦に贈り、また人の衣を纏ふ如く金、銀また木にて造れる神々を飾るなり。一二 されど此らの神々は、たとひ紫の衣裳もて蔽はるるとも、自らを銹と蟲との害より救ふこと能はず。一三 宮の内なる塵、神々の顏の上に深く積れば彼ら之を拭ふ。一四 國の審判者の如くに笏を握るとも、彼に逆ふ者を、死に處する能はず。一五 彼またその右の手に懷劍と斧とをもて戰と盜賊とより自らを救ふ能はず。一六 彼ら神々にあらぬこと明白なれば、これを恐るな。一七 人の使用ふる器、一度壞れなばまた價値なし。彼らの神々も亦おなじ、彼ら神殿に据ゑらるる時、その眼は宮を訪るる人々の道の塵にて埋もる。一八 王に背き、死に定めらるるが如き者を防がんとて扉を堅ぐ鎖すが如く、祭司ら扉と錠と門とをもて、宮を堅く鎖し、盜賊らに傷けられぬやう神々を護るなり。一九 彼らは自らのためよりも多くの燈明を點二〇 彼らは宮の梁の一つの如く、地に匍ふもの彼等とその衣を食ふ時、人は彼等の心も食ひ盡されたりといふ。しかも彼らは感ぜざるなり。二一 その顏は神殿に立ち昇る煙にて煤け、二二 その體、その頭の上には蝙蝠、雀、また小鳥、猫など來りて踞まる。二三 これを見て彼らの神々にあらざることを識るべし。されば汝彼らを恐るな。二四 彼らを美しくするために飾る黄金も、その銹を拭はずば輝かず。彼らその身を燦かさるれども感ずることなし。二五 彼らはその内に息なくして、いとも價高く買はれたるのみ。二六 彼らに足なければ人々の肩に擔はる。これ彼ら自ら、彼らに何の價値もあらずと告げ居るなり。二七 彼らに仕ふる者も亦自ら恥づ。そは彼ら地に倒れなば自ら起つ能はず、それを眞直に立て置くとも自ら動

く能はず、歪められなば、自らつくろふ能はざるべし。されど人々死ねる者になす如く、彼らの前に供物をささぐるなり。二八彼等に獻げられたる犧牲は、彼等の祭司ら之を賣りまた貪る。またその妻ら彼らに倣ひて好きところを鹽にす。されど貧しき者、弱二九經期にある女、産褥にあるもの、また彼らの犧牲を喰ふ。之によりて知るべし、彼らは神々にあらず。彼らを恐るな。三〇彼らいかで神々ならんや。そは婦人ら金、銀、木もて造れる神々の前に肉をささぐればなり。三一而して祭司ら裂きたる衣を纏ひ、頭と髭とを剃り、その頸を被ふことなくして宮に座し、三二埋葬の式に人々の爲すごとく、神々の前に吼えまた叫ぶなり。三三祭司らはまた、神々の衣服を剝ぎて彼らの妻子らに纏はしむ。三四人神々に向ひてなすことは、惡なりとも、善なりとも、彼らこれに對して酬ゆる能はず。彼らに王を立つる力なく、また廢する力もなし。三五彼らまた富貴を與へえず、財寶を與へ得ず、人ありて彼らに誓を立てまた之を破るとも、彼ら責むることなし。三六彼ら一人をも死より救はず、また弱きものを勢力ある者より救ふ能はず。三七彼ら盲者の眼を開きて視えしむる能はず、悲歎く者を援くることなし。三八彼ら寡婦に哀憐を施さず、孤兒を顧みず。三九黄金、白銀を張りて飾れる木造の神々は、山より切り出されたる石塊の如し、彼等を拜する者は屈辱を受くべし。四〇カルデヤ人すら敬はざるを、誰か彼らを神々と信じ、また神々と呼ばんや。四一祭司ら物言はざる唖者を見出さば、之を伴ひ來り、恰も悟り知る者の如くに、ベル神に呼ばはらんことを懇願す。四二されど彼ら自ら之を悟る能はずして捨つ。そは彼らに知識なければなり四三綱にて身のまはりを取り捲かれ、糠を燒きて香とし、路に坐する女、その側を過ぐる者に誘はれて之と偕に寢ねなば、その友を誹りて己れに優るものにあらず、またその綱斷ち切られざりしといはん。四四彼らのうちに爲さるるは皆虛僞なり。されば彼らはいかで神々と思はれ、また言はれ得ん。四五彼らは木匠と鍛冶の手にて造らる。彼らは工匠によりてのみ存在うるなり。四六また彼らを造れる者もその生命いとはかなし。いかなれば、彼らの手に成れるものを神々と云ふや。四七彼らは後に來る者に、虛僞と恥辱とを遺したり。四八戰爭もしくは災禍かれらに臨む時は、祭司ら祕なる處にて互に謀る。四九如何なれば人々、彼らの神々にあらぬを悟り得ざる。彼らは自らを戰より救ふ能はず、災禍より遁れしむる能はず。五〇彼等はただ木材と金銀とにて飾れるものに過ぎざれば、今より後、彼らの虛僞なること明なるべし。五一また彼らは神々にあらず、人の手の作に過ぎずして、彼らの中に神の御業なきこと、諸國諸王に悉く顯るべし。五二されば、誰か彼らの神々にあらざることを識りえざる。五三彼らは國に王を立つる能はず、人々の爲に雨を降らしむる能はず、五四また自らの事件を審く能はず、誤を爲すとも正す能はず。彼らは天と地との間に住む鴉の如し。五五故に火事起りて、木材もしくは金銀鍍金の神々

の家を襲ふ時、彼らの祭司は逃げ去り、神々自らは横梁の如く微塵に燃え失せん。五六かつ彼らは王また敵に抗する能はず。いかなれば彼らを神々となし、神々と呼ぶべき。五七更にまた木材また金銀、鍍金の此等の神々は盗賊及び強盗より遁る能はず。五八彼らが纏へる黄金も白銀も衣裳も、強きもの來りて奪ひ去る。されど彼らこれを如何ともする能はず。五九故に斯る虚僞の神々たらんよりは寧ろ王となりて、その能力を示すに如かず、もしくは所有者を益する、家の中のなくてならぬ器となるに如かず、或は期る虚僞の神々たらんよりは、家の扉となりて、家の中にあるものを安全に守護るに如かず、或は宮の圓柱となるに如かず。六〇そは太陽も月も星も光り輝きてその責務を果し、且柔順なり。六一かく電光も照りかがやきて、見るに美はしく、風はまた總ての國々を吹きめぐるなり。六二また神一度、全世界を蔽はんことを雲に命じ給へば、雲は命ぜらるる儘に之六三また火、諸の丘と森とを滅さんために天より遣らるるや、その命ぜられたるが如くす。されどこれらの神々は、その外貌に於ても、また能力に於ても、彼らの如くにあらざるなり。六四されば彼らを神々と思ふべきにあらず、また呼ぶべきにあらず。彼等は事件を審きえず、人々に善を爲しえず。六五故に知れ、彼らは神々に非ず、彼らを恐るな。六六そは彼ら王たちを示す能はず、また祝するを得ず。六七また異邦人に天の休徴を示す能はず、太陽の如く輝かず、月の如く照り出でず。六八野獸は尚彼らに優る。そは彼ら草叢に棲みて自ら助く。六九されば彼らの神々なることは決して我等に顯れず、彼らを恐るな。七〇胡瓜畑に架けられたる案山子の能なきが如く、彼ら木材と金銀鍍金の神々は空し。七一また、木材と金銀鍍金の神々は果樹園の山櫨子のごとし。小鳥きたりてその上に止まる。また暗黒に投げ棄てらるる屍骸の如し。七二汝ら彼らの神々にあらざることを、彼らの纏へる燦く紫の衣の破るるによりて知るべし。而して彼らもまた後に喰ひ盡され、國の中に恥辱となるべし。七三故に偶像を持たざる正しき人となるに如かず。かかる人は恥辱を受くることなかるべし。

三童児の歌

第一章

一彼等神を讃め、主を祝しつつ、火の中に歩めり。二その時、アザリヤ立ちて、次の如くに祈れり。かれ、焔の直中にて口を開き、いひけるは、三『讃むべきかな、我らが先祖たちの神なる主よ、汝の御名は永遠に稱へられ、崇めらるるに相應しきなり。四そは我らに爲し給へるすべての事に於て、汝は正義にましませばなり。實に、汝のすべての御業は眞實にして、汝の道は正しく、汝のすべての審判は直し。五汝が我らの上に齎し給ひしすべての事に於て、また我らが先祖の聖き都エルサレムに對し、汝は正しき審判を行ひ給へり。そは正義と審判とに從ひて、我らの罪の故に汝これらの凡てのことを、我らの上にもたらし給へるなり。六我ら罪を犯し、不法を爲し、汝より離れたり。七すべての事に於て我ら罪を犯し、汝の誡に從はず、また之を守らず、また之を守らば安全ならんと我らに命じ給ひし事をなさざりき。八故に我らに齎し給ひし凡てのこと、また我らに爲し給ひしことはみな、ただ汝の正しき審判によりて爲し給ひしなり。九而して汝我等を不法なる敵、最も厭ふべき背教者、また非道なる王、世に類なき殘虐者の手に渡し給へり。一〇我らは今や、口を開きて語りえぬ者となれり。我らは汝の僕ら、また汝を拜む者の恥辱、また責めらるる者となりたり。一一されど御名の故によりて、我らを全く棄て給ふ勿れ、また汝の御誓約を取消し給ふ勿れ。一二汝の愛し給ふアブラハム、汝の僕イサク、また汝の聖なるイスラエルの故によりて、汝の憐愍を我らより斷ち給ふ勿れ。一三汝彼らに語りて約し給へり、空の星の如く、また濱の眞砂の如く、彼らの裔を増し殖さんと。一四そは、主よ、我らは何處の民よりも數少くなり、我らが罪の故に、今日全世界に散りて生き長らふなり。一五此の時に當りて、我らには君王なく、預言者なく、指導者なく、また恩惠を得んと汝の御前に捧ぐべき燔祭、犧牲、供物、薫香、などを置くべき場所もあらざるなり。一六さりながら、我らに碎けたる心と謙遜る靈とを與へて、受納れらるる者となし給へ。一七牡羊と牡牛とをもてする燔祭の如く、また幾萬の肥えたる羔をもてする如く、今日我らを犧牲として御前に獻げしめ給へ。また我らを赦して全く汝に從はしめ給へ。そは汝に信頼む者は辱しめらるることなかるべければなり。一八今我ら全心をもて汝に從ひ、汝を畏れ、汝の御顏を仰ぎ求めん。一九我らを辱かしめ給ふ勿れ、我らを汝の慈愛、汝の恩惠の多きによりてあしらい給へ。二〇主よ、汝の驚くべきみ業によりて我らを救出し、汝の御名に榮光を歸せしめ給へ。而してすべて汝の僕らを害ふ者を辱かしめ給へ。二一彼らをそのすべての能力と權威とに躓かしめ、彼らの勢力を打破り給へ。二二而して彼らに汝こそ主にましまして、唯一なる神、その榮光全地に洽きことを知らしめ給へ。』二三茲に彼らを投げ入れたる

王の僕らは、樹脂、瀝青、麻屑、木碎などをもて爐を冷すことなからしめたり。二四 かくて爐より迸り出づる火焰の流、天に冲すること四十九キユビトに達し、二五 焰は爐に近づきたるカルデヤ人を燒き盡せり。二六 されど主の御使くだりて、爐の中に立てるアザリヤ及びその徒と偕に在り、焰を爐の外に擊退けぬ。二七 かくて爐の直中を濕ひたる軟風の吹く處と化したり。故に火は遂に彼らに觸るる能はず、また彼らを害ふことも、惱ますことも能はざりき。二八 時に三人の者、異口同音に、爐の中に在し給ふ神を讃美し、これに榮光を歸し、祝福して云へり。二九 讃むべきかな、主よ、我らの先祖たちの神よ。汝は一切のものに優りて、世々歌ひ崇められ給ふ三〇 讃むべきかな、汝の榮光ある聖き御名、すべてのものに優りて、世々うたひ崇めらるるなり。三一 讃むべきかな、汝は、その聖なる榮光の宮にて世々うたひ崇められ給ふ。三二 讃むべきかな、深き淵を看、ケルビムの上に座し給ふ者よ、すべてのものに優りて、世々うたひ崇められ給ふ。三三 讃むべきかな、汝の御國の榮光ある王座に卽き給ふ者よ、すべてのものに優りて、世々うたひ崇められ給ふ。三四 讃むべきかな、天の蒼空にいまし給ふ者よ、すべてのものに優りて、世々うたひ崇められ給ふ。三五 主の萬物よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。三六 もろもろの天よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。三七 主の天使よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。三八 空の上の水よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。三九 主の萬軍よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。四〇 日と月よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。四一 空の星よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。四二 雨と露よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ四三 風よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。四四 火と熱よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。四七 夜と晝よ、主を祝ひ、世々うたひ崇あまつれ。四八 明と暗黑よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。四九 霰と寒さよ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五〇 氷と雪よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五一 電光と雲よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五二 地よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五三 山と岡よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五四 地に生ふる凡ての草木よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五六 海と川よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五五 泉よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五七 鯨と凡て水に游ぐ者よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五八 空を飛ぶ鳥よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。五九 野獸と家畜よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。六〇 世の人よ、みな主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。六一 イスラエルよ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。六二 主の祭司よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。六三 主の僕よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。六四 義人の靈魂よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。六五 心きよく謙る者よ、主を祝ひ、世々うたひ崇めまつれ。六六 ハナニヤとアザリヤとミシヤエルよ、主を祝ひ、世々うたい崇めまつれ。そは主我らを陰府より救ひ、死の手より援け

出し、爐と燃る焔の直中より救ひ出し給ひたればなり。六七 主に感謝せよ、主は恩惠ふかく、その憐愍は世々に絶ゆることなければなり。六八 すべて主を拜む者よ、神々の神を祝ひ、讚めたたへ、感謝せよ、その憐愍は永遠に絶ゆることなければなり。

スザンナ物語

第一章

一バビロンに住める人あり、その名をヨアキムといふ。二かれ妻を娶る。その名をスザンナと呼び、ヘルキアの娘にていと美しく、主を畏るる婦人なりき。三その兩親もまた義しき者にて、モーセの律法に從ひてその娘を教へたり。四ヨアキムは裕なる富を持てる者にて、その邸宅につづきて麗はしき庭園あり。ユダヤ人ら來りて彼と親しむ。そは彼は他のすべての者に優りて、敬はれ居たればなり。五その年、二人の民の長老、審判官に任ぜらる。それは『惡はバビロンより、民を治むるが如く見ゆる老いたる審判官より來れり』と、主の語り給へるが如き審判官なりき。六此等の審到官は多くヨアキムの邸宅に集ひしが、訴訟をなす者は悉く彼等に來れり。七さて晝の頃、人々去り行きし時、散歩せんとてスザンナは夫の庭園に出でぬ。八而して二人の長老は、日每に彼の女が庭園に歩むを盜み見て、祕にかれに向ひて情慾を燃し居たり。九かくて彼ら、天を仰ぎ見ることをせざらんため、また正しき審判を思ひ出でざらん爲に自らの心を曲げ、眼を背けたり。一〇彼らは共に戀のために傷つきながらも、敢て各自その惱を色に現さず。一一彼らはこの女を獲んと願ひ居たれば、自らの情慾を語るを恥ぢたるなり。一二されど彼らは日々熱心に、彼の姿を看守りぬ。一三一人のもの他のものを顧みていへり『いざ我ら家に歸らん、時は晝餐頃なればなり』と。一四かくて彼ら出で行きしが、互に對手を出し拔きて、再び同じ處に歸り來れり。程經て彼ら互に、互にその故を問ひ、互にその戀を語り合へり。茲に彼らは、スザンナが唯一人あるを窺ひ、互に相會ふべき時を定めたり。一五偶々彼らが狙ひ居たる好き機は來れり。かの女は常の如く、二人の侍女を伴ひて出でしが、暑氣甚しかりしかば、かれは園にて身を洗はんことを欲へり。一六その時、身を隱して彼の女を見つめたる二人の長老を除きて、誰もその傍に居る者なかりき。一七時にスザンナ、侍女たちにいひぬ『我に香油と盥とを持ち來れ、また園の扉を閉せ、我浴せん』と。一八侍女たちは命ぜらるる儘に園の扉を鎖し、委ねられたる事をなさんと、各自その室に退きたり。されど侍女らは長老たちを見ざりき。彼ら隱れ居たればなり。一九さて侍女らの去り行くや、二人の長老は起ち上り、彼の女に馳せかかりて云へり二〇『視よ、園の扉は鎖され、誰も我らを見る者なし、我らは汝を戀ひ慕ふ、我らの懇望を容れて、我らと寢ねよ二一汝もし我ちに聽かずば、我ら汝に向ひて證をなし、汝年若き男と偕に居たり、故に侍女らを去らしめたるなりと訴へん。』二二時にスザンナ嘆息きていひけるは、『我は板挾となりぬ、若し我これを爲さば、そは我にとりて死なり。もし之を爲さずば、汝らの手を脫るる能はず、二三主の御前に罪を犯さんよりは、むしろ之をなさずして汝らの手に陷るに如かず』と。二四かくいひて、スザ

ンナ大聲に叫びければ、また二人の長老もかれに對して叫びぬ。二五 時にその一人馳せ來りて園の扉を開けり。二六 また僕ら園に起れる叫を聽きて、彼に何事の起れるかを見んとて裏木戸に押寄せたり。二七 然るに長老ら、彼らの話を告げたれば、召使ら甚く恥ぢたり。そは嘗てスザンナに就きて、かかる噂を聽きしことなかりしが故なり。二八 かくて翌日、人々彼の夫ヨアキムの許に・集ひ來れり。また二人の長老もスザンナを死に定めんものと、その心に姦計を滿しつつ來れり。二九 彼ら人々の前に語りていひぬ『ヘルキアの娘、ヨアキムの妻なるスザンナを召喚せよ』と。彼等かれを引き來りぬ。三〇 スザンナは兩親、其の子ら、及び凡ての血族と共に出で來れり。三一 さてスザンナはいと優雅しき婦人にて、容姿美しかりき。三二 而して此等の惡漢ども『彼の女の顏覆を取れ』と命じたり。彼らその美しきを見て心を滿さんとせしなり。三三 その友とすべて彼女を見たるもの悉く泣けり。三四 時に二人の長老ら、人々の中に立ち、彼の頭に手を按きぬ。三五 彼は涙を流しつつ天を仰ぎぬ。心の中に主を信じゐたればなり。三六 長老ら語り出でぬ『我ら園を歩み居る時、此の婦人二人の侍女と偕に入り來り、園の扉を鎖し、侍女らを去らしめたり。三七 時に隱れ居たる一人の若者、この女に近より、これと寢ねたり。三八 たまたま我ら一隅にありてその惡を見たれば、彼らの處に馳せ行けり。三九 我ら彼らの偕に居るを見しも、その若者を捉ふる能はざりき。そは彼は我らよりも強く、扉を開きて、躍り去りたればなり。四〇 されど我ら此の女を捉へたり。我らその若者の誰なりしかを訊ねたれど、彼は答ふるを肯はざりき。我らこれ等のことを證す』と。四一 彼らは民の長老また審判者なりしかば、民衆は彼らを信じたり。かくて彼らスザンナを死に定めたり。四二 時にスザンナ大聲に叫びていふ『ああもろもろの祕密を知り、また萬のものの成る前に之を知り給ふ永遠に在す神よ。四三 汝は汝の婢に對して虛僞の證を爲したる彼らを知り給ふ。視よ、婢は死に定められたり。されど婢は、此の人々が、われを陷れんがために、揑造せるかかることを決してなしたるに非ず。』四四 而して主、その訴の聲を聽き給へり。四五 さてスザンナは死に處せられんとて引き行かれしが、主はダニエルと呼ぶ一人の若者の聖靈を奮ひ起たしめ給ひぬ。四六 かれ大聲に叫べり『我は此の婦人の血に與らず』と。四七 時に全會衆、身を回らし、彼に向ひていふ『汝の語れる此等の言は何ぞや』と。四八 かくて彼は人々の直中に起ちていひぬ『汝ら何故にかくも愚なるか、汝らイスラエルの子らよ、問ひ糺すことなく、汝らは、また眞理の知識に從はずして、此のイスラエルの娘を死に定めたり。四九 再び審判の座に歸れ。そは彼らは、この女に對して虛僞の證を爲したればなり。』五〇 ここに於て全會衆は、再び急ぎ身をめぐらししに、長老らダニエルにいひけるは『來れ、我らの間に座し、その思ふ處を我らに示せ、神は汝に長老たる名譽を與へ給ひしに非ずや』と。五一 時にダニエ

ル彼らにいひけるは、『此らの二人を別ちて、互に遠く離れしめよ、我彼らに問ひ糺さん』と。五二 かく彼ら別れ別れに引き離されし時、彼はその一人を呼びていへり『ああ汝、惡のうちに年を重ねたる者よ、今や汝がさきに犯せるもろもろの罪は悉く明になれり。五三 そは汝 僞の審判を宣告し、罪なき者を死に陷れ、罪ある者を赦したり。されど主は宣ふ『汝、罪なき者、また正義者を殺すべからず』と五四 汝もし、かの女を見たりとせば、我に告げよ、彼ら如何なる樹の下に偕に居りしや。』彼答ふ『乳香樹の下に』と。五五 ダニエル答へて云ふ『よし、汝は汝自身の頭に對して僞りたり。神の御使は今宣告を受けたれば、汝を眞二つに截り割かん』と。五六 斯く彼はその一人を傍に斥け、他の一人を連れ來らしめていふ『汝ユダヤ人にあらざるカナン人の子孫よ、美しき貌 汝を欺き、情慾 汝の心を曲げしめたり。五七 かく汝らイスラエルの娘らを犯し、彼ら汝を懼れて從へり。されどこのユダの娘は、敢て汝らの惡に從ふを欲せず。五八 されば今我に答へよ、如何なる樹の下にて彼ら偕に在るを見しや。』彼云ふ『柊の樹の下にて。』五九 時にダニエルいふ『よし、汝もまた汝の頭に對して僞れり。神の御使劍を把り、汝を截り割かんとて待ち居るなり、彼なんぢを滅さん』と六〇 ここに於て全會衆大聲に叫びて、凡て依り頼む者を救ひ給ふ神を讚めたり。六一 斯て彼ら二人の長老に對して起ち上れり。そはダニエル彼らが僞の證を爲したることを、彼ら自らの唇にて知り、告白せしめ、彼等を罪に定めたればなり。六二 かくてモーセの律法に從ひ、姦計をもて、その隣人に惡をなせる者に相應しく彼らに報い、彼らを死に處したり。而して罪なきの血はその日のうちに救はれたり。六三 故にヘルキアとその妻とは、スザンナの夫ヨアキム及びその凡ての血族とともに、その娘スザンナの爲に、神を讚めたり。そは彼の凡ての汚名は全く雪がれたればなり。六四 その日より後、ダニエルは民の前に大なる名聲を獲たり。

ベルと龍

第一章

一さてアステアゲス王死にてその先祖たちに加はり、ペルシヤのクロスは彼の國を繼ぎたり。二ダニエルは王と生活を共にし、彼の凡ての友に優りて崇められたり。三其頃バビロニア人はベルと呼べる一つの偶像をもてり。而して日毎にこの偶像のために費すもの小麥粉大桝十二、羊四十頭、また葡萄酒六樽に及ぶ。四王は之を拜み、日毎に訪れて之を崇む。されどダニエルは己が神を拜めり。王、彼にいひけるは『汝何故にベルを拜せざるや』と。五彼對へて云ふ『我は人の手の業なる偶像を拜むを欲せず、ただ天と地とを創造り、凡ゆる生ける物を治め給ふ活ける神を拜むなり』と。六王、彼にいふ『汝ベルを活ける神なりと思はずや、汝彼が日毎に如何に多くを喰ひ、且飲むかを見ずや』と。七ダニエル微笑みて答へけるは『王よ、欺かれ給ふな、この偶像の内側は粘土、その外側は眞鍮なり、何をも喰ひ、また飲みたることあらざるなり』と。八ここに王憤りてその祭司たちを召し、彼等にいふ『汝ら若しかかる經費を貪り、喰ふ者の誰なるを我に語り得ずば、汝ら死に當るべし。九されどベル、眞にかかる經費を貪り喰ふことを我に證し得ば、ダニエル死すべし。そは彼ベルに對して冒瀆を云ひたればなり』と。而してダニエル王にいひけるは『汝の言の如くならしめよ』と。一〇さてベルの祭司ら、その妻子らを除きて七十人を數ふ。ダニエル、王とともにベルの宮に到れり。一一斯てベルの祭司らいふ『視よ、我ら外に出づべし、されば王よ、汝肉を据ゑ、酒を供へ、堅く扉を鎖し、汝の印をもて封印し給へ。一二而して翌くる日、汝入り來る時、ベルもしすべてを喰ひ盡し居らざるを見ることあらば、我ら死を受くべし。然らずば我らに叛きて虚僞を語れるダニエル死すべし』と。一三而して彼ら之を顧慮ることなかりき。そは彼ら壇の下に祕なる拔道を設け置き、其處より絶えず内側に入りて、これらのものを喰ひ盡したればなり。一四かく彼らの出で去りし後、王はベルの前に肉を供へたり。さてダニエルはその僕らに命じて灰を持ち來らしめ、王のみ居る前にて宮の内一面に之を撒けり。而して彼ら外に出で、扉を閉ぢ、王の印をもて封印し、立ち去りたり。一五さて夜に及びて、祭司たちその妻子らと共に入り來り、常の如くに凡てを喰ひまた飲み盡したり。一六夜明になり王は早く起き出でたりしが、ダニエル彼と偕にあり。一七王ダニエルにいふ『封印は完きや。』彼答ふ『然り、王よ、それらはすべて完し』と。一八王は扉を開くや否や、直に壇の上を仰ぎ見しが、大聲を揚げて叫びいひぬ『偉大なるかな汝ベルよ、汝に何の欺瞞あらんや』と。一九時にダニエル嘲笑ひ、王を止めて内に入らざらしめていふ『王よ鋪床を見られよ、此らの足痕は誰のものなりや、意にとめ給へ。』二〇王は答へぬ『われ多くの男、女、また子供らの足痕を見る』と。而して王怒りて、二一祭司

たちとその妻子らとを捉へたりしが、彼らは王に、彼等が入り來りて、壇の上の種々なる供物を喰ひゐたる祕密の入口を示したり。二二故に王、彼等を斬殺し、ベルをダニエルの手に委ねたれば、彼ベルとその宮を滅ぼしぬ。二三その地にまた一つの大なる龍ありて、バビロニヤ人これを拜めり。二四王ダニエルにいふ『なんぢは、これも亦、眞鍮なりと云はんとするか、見よ、彼は活く、彼は喰ひ且飲むなり、汝彼を活ける神に非ずと云ふを得ざるべし、故に彼を拜せよ』と。二五時にダニエル、王に答へて云ひけるは『われは、主なる我が神を拜せん、そは彼は活ける神なればなり。二六王よ、僕に允許を與へ給へ。さらば劍をも杖をも用ひずして此の龍を斬倒さん』と。王いふ『我なんぢに允許を與へん』と。二七時にダニエル、瀝青、脂肪、毛髮などを取り混ぜて之を煮、之をまとめて龍の口に押入れしが、やがて龍は微塵に破裂したり。而してダニエルいひけるは『視よ、汝らの拜む神々はかくの如きものなり』と。二八バビロニア人之等のことを傳へ聞くや、憤ること甚しく、王に對して謀叛を圖り、いひけるは『王はユダヤ人となれり、彼はベルを破壞し、龍を斬倒し、その祭司らを殺したり』と。二九彼ら王に來りていふ『我らにダニエルを渡せ、然らずば我ら汝と汝の家とを滅亡さん』と。三〇時に王、彼らが威勢のただならぬを見るや、心ならずもダニエルを彼等の手に渡せり。三一彼等ダニエルを獅子の洞窟に投じけるが、ダニエル六日の間、そこに居たり。三二洞窟には七頭の獅子棲みゐて、日毎に屍體二つ、羊二頭を給する慣習なりき。然るにダニエルを喰ひ盡さしめんとて、その日には此等のも三三さて、ユダヤにハバククと呼ぶ一人の預言者ありき。彼はいま煮たる粥と麪麥屑を滿したる鉢を携へ、苅る者らに持ち行かんとて途にありき。三四然るに主の使ハバククに云ひけるは『行け、その食物を携へ、バビロンに居るダニエルの許に到れ、彼は獅子の洞窟に居るなり』と。三五ハバククいひけるは『主よ、我未だバビロンを見ず、また三六時に主の使彼の頭の上をとらへ、その頭髮をつかみて彼を運び去り、激しき勢をもて彼をバビロンにある洞窟の上に置けり。三七その時ハバクク叫びていへり『ダニエルよ、ダニエルよ、神が汝に遣はし給へる食物を攝れ』と。三八ダニエルいひけるは『ああ神よ、汝は我を忘れ給はず、汝を慕ひ、汝を愛する者を棄て給はず』と。三九かくてダニエル起上りて食せり。而して主の使、瞬く間に、ハバククを再びさきに居りし處に置けり。四〇第七日目に、王ダニエルを嘆き悲しまんとて出で行き、來りて洞窟を窺ひ見るに、視よ、ダニエル坐しゐたり。四一王、大聲を擧げ、叫びていひぬ『偉大なるかな、主、ダニエルの神よ、汝のほかに神あることなし』。四二而して王ダニエルを引出し、彼を滅さんとて洞窟に入れたるものらを其處に投じたるに、かれらは瞬く間に、王の目の前にて喰ひ盡されたり。

マナセの祈祷

第一章

一 天に在す全能の主、我らの父祖、アブラハム、イサク、ヤコブ、またその正しき裔の神よ。二 汝は天と地とを造り、あらゆる装飾をこれに施し、三 汝の誡の言をもて海に境し、淵を閉ぢ、汝の恐るべき、榮光ある御名をもてこれを封じ給へり。四 一切のものは汝を恐れ、汝の御力の前に慄ひ戰きて、五 汝の榮光の稜威に耐へず。罪人に對する汝の御怒の脅威は重し。六 汝のいつくしみ深き御約束は計りがたく、また探りがたし。七 そは汝はいと高き主にましまして、大なる憐憫をもち、永く忍び、慈悲に滿ち溢れ、世の人の上に災禍を降ししを悔ひ給ふ。八 主よ、汝はその大なる慈愛に從ひて、汝に逆ひて罪を犯しし人々に悔改と赦免とを約束し、汝の限りなき憐憫をもて、罪人らの救はれんがために、これに悔改を求め給ふ。されば主よ、汝は正しきものの神に在せば、正しき者に、卽ち汝に逆ひて罪を犯さざりしアブラハム、イサク、ヤコブとに、悔改を求め給はざりき。されど汝は、罪人なる我に悔改を求め給へり。九 そは我、海の眞砂の數に勝りて、罪を犯したればなり。主よ、わが咎は增し、わが過誤は加へられ、わが不義の多きによりて、われは天の高きを仰ぎ見る相應しからず。一〇 我は多くの鐵の鎖をもて低くせられたり。これわが罪の故に、我わが頭をあげず、又緩められざらんがためなり。われは汝の御怒を惹き起し、汝の御前に惡しきことを行へり。われは汝の御心を行はず、汝の誡を守らざりき。われは忌むべきことを行ひ、憎むべきことを增し加へぬ。一一 されば今、わが心の膝を屈めて、汝の恩惠を冀ひ奉る。一二 われは罪を犯したり、主よ、われは罪を犯したり。われはわが不義を認むれば、一三 謙りて汝に冀ひ奉る。われを赦し給へ、主よ、われを赦し給へ。わが不義の故にわれを滅し給ふ勿れ。とこしへに我を怒りて、わがために災を貯へ給ふ勿れ。またわれを罰して地の低き所に到らしめ給ふ勿れ。そは主よ、汝は悔い改むるものの神にて在し給ふ。一四 われに汝のすべてのいつくしみを示し給へ。われは價値なきものなれども、汝の大なる慈愛によりて、汝はわれを救ひ給はん。さらば我、わが生命のあらん限り、永久に汝を讃めまつらん。天の萬軍は汝のほまれを歌ひ、榮光は世々限りなく汝のものとならん。

アァメン。

マカビー第一書

第一章

一ケテイムの地より出で來れるピリポの子、マケドニヤ人アレキサンドルはペルシヤ人及びメデヤ人の王ダリヨスを撃ちし後、彼に代りて王となり、先づギリシヤを治めたり。二彼多くの戰をなし、多くの砦を奪ひ、地の王たちを殺し、三地の極にまで到りて、多くの國々より多くの物を奪ひ取りぬ。かくて地は彼の前に平穩となり、彼は高められてその心驕れり。四彼は甚しく強き軍隊を集めて、諸國、諸民、諸王を治めたれば、彼等は皆かれに貢を納れたり。五此の後、かれ病に罹りしが、自ら死の近づけるを悟りぬ。六ここに於てかれ、その若き時より己と偕に育てられし、名譽ある僕等を召し、彼の猶生き居る間に、その國を彼等に分ちぬ。七かくてアレキサンドルは十二年の間世を治めて死ねり。八その僕等、各自己が處にて民を治めぬ。九彼等は皆、彼の死後、自ら王冠をいただきしが、彼の子らも多くの年の間、かくなして地上に惡を増しぬ。

一〇ここに彼等の間より罪の根出でたり。彼はアンテオコス王の子、アンテオコス・エピパネスにて、嘗てロマに人質たりしが、ギリシヤ王國の第百三十七年に王となりぬ。

一一その頃、イスラエルの間より、律法を犯すもの出でて、多くの人々を説き伏せ、『我ら、我らの周圍なる異邦人と契約を結ぶべし、そは我ら、彼等を離れしよりこのかた、多くの災害我らの上に臨みたればなり』といへり。一二此等の言、彼等の耳に良かりき。一三かくて民の中の或ものども進み出でて王の許に到りければ、王彼等に、異邦人の慣行に從ひて行ふべき許可を與へたり。一四されば彼等異邦人の慣行に從ひて、エルサレムに一つの運動場を作れり。一五彼等は身に割禮を行はず、聖き契約を捨て、自ら異邦人と交り、己を惡の行爲に賣れり。

一六アンテオコスの眼に、國はよく整ひたりと見えしかば、彼エジプトをも治めて、二つの國の王とならんと欲せり。一七かくてかれ、多くの軍勢と兵車と象と騎兵、又大なる艦隊を率ゐて、エジプトに入り、一八エジプト王プトレミオに向ひて戰を挑みぬ。プトレミオ彼の前に敗れて逃れ去り、多くのもの傷つき死にたり。一九彼等エジプトの地に於て、諸の大なる町を陷れ、エジプトの物を掠め取りぬ。

二〇エジプトを撃ちし後、アンテオコスは第百四十三年に歸り、大群を率ゐてイスラエル及びエルサレムに向ひてすすみ、二一僭越にも聖所に入りて、金の祭壇と燭臺、これに屬くすべてのもの、二二供のパンの臺、灌祭の杯、金の香爐、顏蔽、冠、及び宮の正面の裝飾を取りて、これを悉く引き離したり。二三彼また銀と金、及び價高き器具をとり、又隱されたる寶を見出してこれを奪へり。二四かくてあらゆるものを奪取りし後、己が地に到りて大なる殺戮を行ひ、誇りがにこれを語れり。二五而して

イスラエルに於て、彼等の赴きし處には、いかなる處にも、大なる歎ありき。二六 有司らと長老らは泣き、處女らと若者らは力弱り、婦人たちはその美しさを失ひぬ。二七 新郎は皆哀悼をなし、婚禮の室にありし女は心重かりき。二八 地はその住む人のために動かされ、ヤコブのすべての家は恥辱を衣せられぬ。

二九 二年の後、王はユダの町々に取税人の長を遣ししに、彼大軍を率ゐて、エルサレムに來れり。三〇 而して彼たくみに平和の言を彼等に傳へければ、彼等これを信じたり。然るに彼、俄に町を襲ひて、甚しくこれを撃ち、イスラエルの多くの人々を滅せり。三一 かれ町の物を奪ひ、その家を焼き、また倒し、四方の石垣を破りぬ。三二 またかれら女たちと子供たちを俘虜とし、かつ家畜を奪ひ去りぬ。三三 而して彼等、大なる強き石垣と堅き戍樓とをもてダビデの町を築き、これをその城塞となせり。三四 彼等ここに罪深き民、律法を犯すものどもを置きて、自らを強めたり。三五 彼等また武器と糧食とを貯へ、エルサレムの分捕物を集めてこれを積み重ね、自ら恐るべき罠となれり。三六 又それは聖所に對しては待伏所となり、イスラエルに對しては絶えず惡むべき仇となれり。三七 彼等は聖所の周圍に罪なきの血を流して、聖所を瀆したり。三八 エルサレムの民は彼等の故に逃れ、町は異國人の住居となり、そこに生れたるものにとりて町は奇異なる場所となり、町の子らは皆町を捨てたり。三九 その聖所は荒野の如くあれすたれ、その祭日は喪となり、その安息日は誹謗となり、その名譽は恥辱となれり。四〇 その光榮に從ひて、その恥増し加はり、その高き名譽は喪に變りぬ。

四一 アンテオコス王は書をもて、全國はすべて一つの民となるべきことと、四二 各自己が律法を捨つべきことを命じたり。すべての民は王の言を承け、四三 イスラエルの多くの人々は彼の禮拜を認めて、偶像に犠牲をささげ、安息日を瀆しぬ。四四 而して王は使者の手によりて書をエルサレムとユダの町々とに送り、彼等に、國の異なれる律法に從ひ、四五 聖所に於ける燔祭と犠牲と灌祭とを禁ずべきこと、安息日と諸の祭日を犯すべきこと、四六 聖所と聖なるものとを瀆すべきこと、四七 偶像のために宮と社とを建てて、豚の肉と汚れたる獸とを犠牲とすべきこと、四八 その息子等に割禮を施すべからざること、またその魂をあらゆる不潔と冒瀆とをもて忌むべきものとなすべきことを命じ、四九 彼等をして律法を忘れしめ、またすべての慣行を變へしめたり。五〇 而して王の言に從ひて行はざるものは、誰にても殺さるべしといへり。五一 すべて此等の言に從ひて、かれ全國に書を送り、すべての民の上に監督を立て、ユダの町々に命じて、町毎に犠牲をささげしめたり。五二 民のうちより多くの者ども彼等の許に集められしが、彼等は皆律法を捨て、その地にもろもろの惡を行へり。五三 而して彼等、イスラエルをして、彼等のもてる隱家に己等を隠れしめたり。

五四 第百四十五年のキスリウの月の十五日に、彼等は荒す惡む

べきものを祭壇の上に築き、ユダの町々に於て、いかなる所にも、偶像への祭壇を築きぬ。五五家の門口にて、又町の街衢にて、彼等は香を焚けり。五六彼等はまた、己等の見出したる諸の律法の書をば、片々にさき、火にてこれを焼きたり。五七契約の書をもてるもの、律法を認むるもの見出されなば、何人にても王の宣告によりて死に渡されたり。五八かくて彼等は月毎に、イスラエル人に向ひ、町々に見出さるる程の人々に、その力をもて臨みぬ。五九その月の二十五日に、彼等は神の祭壇の上に造られたる偶像の壇の上に犧牲をささげたり。六〇而してその子らに割禮を施せる婦女たちをば、彼等命令に從ひて死に渡したり。六一彼等嬰兒らを、その首のまはりにかけ、彼等の家々と彼等に割禮を施したる人々とを滅しぬ。六二ここに於てイスラエルのうちの多くの人々汚れたるものを食はざることを決心し、自ら堅くこれを定めたり。六三肉をもて汚されざらんがため、また聖なる契約を冒さざらんがために、彼等は死を選びて死ねり。六四かくてイスラエルの上に、いと大なる御怒來れり。

第二章

一その頃ヨアリブの子孫なる祭司、シメオンの子、ヨハネの子、マタテヤはエルサレムより起りて、モデインに住めり。二彼に五人の子あり、カデスと呼ばれたるヨハネ、三タシと呼ばれたるシメオン、四マカビオと呼ばれたるユダ、五アバランと呼ばれたるエレアザル、及びアプスと呼ばれたるヨナタンこれなり。

六マタテヤは、ユダのうちに、またエルサレムのうちに行はれたる冒瀆を見たり。七而して彼いへり

『悲しいかな、いかなればわれ、生れ出でて、わが民の滅亡と聖き都の滅亡とを見、町は敵の手に、聖所は外人の手に渡さるる時、此處に住むか。八その宮は光榮を失へる人の如く、九その榮光ある器具は俘囚の地に携へ去られ、その幼兒らは街衢で殺され、その若者らは敵の劍をもて殺さる。一〇いかなる國人かその宮殿を嗣ぎ、その分捕物をわかち得ざる。一一その裝飾は悉く剝ぎ取られ、自主の女たりしもの奴隷となれり。一二視よ、我らの聖きもの、我らの美しさ、また我らの光榮は荒らされ、異邦人らこれを汚せり。一三いかなればわれら猶生き存へんとするか。』

一四マテタヤとその子ら、その衣を裂き、麻布を身に纏ひて、いたく歎き悲めり。

一五その時、背教を強制し居りし王の役人等、犧牲をささげんとてモデインの町に來れり。一六多くのイスラエル人彼等の許に來り、マタテヤとその子らも其處に集れり。一七王の役人ら答へてマタテヤにいひけるは『汝は此の町に於て名譽ある大なる人にして、子らと兄弟たちによりて強めらる。一八されば今、汝まづ來りて、すべての國人とユダの人々とエルサレムに殘れる人々のなす如く、王の命令を行へ。さらば汝と汝の家は王の友

のうちに數へられ、汝と汝の子らは金銀及び多くの贈物をもて敬はれん。』一九マタテヤ答へて大聲にいへり『王の支配の下にあるすべての國人かれに聽きて、各自その先祖の禮拜より離れ、その命令に從ふとも、二〇われとわが子らとわが兄弟たちは、我らの先祖たちの契約に歩むべし。二一天は我らが、律法と詔命とを棄つることを禁ず。二二我らは王の言に從ひ、我らの禮拜を離れて、右にも左にも行かざるべし。』

二三かれ此等の言葉を語り終へし時、一人のユダヤ人、すべての人の眼の前にて、王の命に從ひ、モデインにありし壇の上に犧牲をささげんとして來れり。二四マタテヤこれを見るや、その熱心燃えあがり、その腰震ひ、審判に從ひて怒を發し、走り行きて、壇の上に彼を殺せり。二五またその時、犧牲を人々に強ひし王の役人をも殺して、壇の下に引き降せり。二六彼は律法に對して熱心にして、ピネハスがサルの子ジムリになせし如くになしぬ。二七マタテヤ大聲にて町に呼はりていひけるは『律法に熱心にして契約を守るものは、何人にても我に從へ』と。二八かくて彼と彼の子らは山に逃れ、彼等が町の中にもてるすべてのものを棄てたり。

二九その時、正義と審判とを求めし多くの人々は、荒野に赴きてそこに住めり。三〇彼らの子等、彼らの妻たち、また彼等の家畜も彼等とともにありき。災害かれらの上に降りかかりたるなり。三一而して王の役人らと、ダビデの町・エルサレムに屯せし軍隊とに、王の命に背きしある人々を荒野の隱家に逃れたりと告ぐる者ありしかば、三二多くの人々彼等の跡を追ひ、これに追ひ付きて、營を張り、安息日に彼等に戰を挑みたり。三三而して其等の人々いへり『今に至るまでのことはともあれ、出で來りて王の御言に從へ、さらば汝ら生きん。』三四彼等答ふ『我らは出で行かじ、また王の言に從ひて安息日を犯さざるべし。』三五ここに於て其等の人々急ぎて戰をなさんとせしが、三六彼等はこれに應へず、石をもこれに投げず、またその隱れ居る所を防がんともせずしていへり三七『われら罪なくして死なん。天も地も我らのために證せん、汝等は審かずして我らを死に渡したり。』三八其等の者ども起ちあがりて安息日に彼等を攻め、彼らとその妻子ら、及び家畜を殺せること一千に達したり。

三九マタテヤとその友らこれを知り、彼等のためにいたく歎きぬ。四〇彼等互にいひけるは『もし我ら皆、我らの兄弟たちのなせし如く、我らの生命と律法とのために異邦人に向ひて戰はずば、彼等は今忽に我らを地より滅し盡さん』と。四一彼等その日ともに議りていひけるは『誰にても安息日に我らに向ひて戰を挑まば、我ら彼と戰はん。我らは我らの兄弟たちがその隱家に於て死ねるが如くに死ぬべきにあらず』と。四二その時、彼等の許に集ひしは、イスラエルの力ある者なるハシデームの徒にして、彼等は皆律法のために喜びて身を献げたるものなりき。四三かくて災害を逃れたるすべての者、彼等に加へられて彼等のた

めに支持者となれり。四四 彼等は軍隊を整へ、怒をもて罪人らを、憤をもて不法なる者どもを撃ちぬ。殘れる者は身の安全のために、異邦人の間に逃れたり。四五 マタテヤとその友ら巡り行きて、壇を倒し、四六 彼等がイスラエルの境の中に見出したる、割禮を受けざりしすべての子らに、強ひて割禮を行へり。四七 彼等は高慢の子らを追ひ、そのわざ彼等の手に榮えたり。四八 また彼等異邦人の手より、また王たちの手より、律法を取り返し、彼等に勝利を與へざりき。

四九 さてマタテヤの生涯終らんとし、その死ぬる日近づきたる時、彼その子らにいへり

『今や高慢と誹謗とは勢力を得、滅亡の時、また憤怒の時來れり。五〇 されば子らよ、汝ら律法に熱心なれ、汝らの生命を汝らの父祖たちの契約に與へよ。五一 彼等がその代になしし我らの父祖たちの行爲を憶えよ。而して大なる榮光と永遠の名とを受けよ。五二 アブラハムはその試煉の時、信仰を認められ、これによりて義とせられざりしや。五三 ヨセフはその患難の時に試煉に耐え、エジプトの主となれり。五四 我らの父祖ピネハスはいと熱心なりしかば、永遠の祭司の職の契約を得たり。五五 ヨシュアは御言を成し遂げて、イスラエルの士師となれり。五六 カルブは會衆の中に證を保ちて、地の嗣業を得たり。五七 ダビデはその憐憫のために、國の王位を永遠に嗣げり。五八 エリヤは律法に對していたく熱心なりしかば、天に擧げられたり。五九 ハナニヤとアザリヤとミシャエルとは、その信仰の故に焰の中より救はれぬ。六〇 またダニエルは罪なかりしかば、獅子の口より救ひ出されたり。六一 されば汝らいつまでも思へ、主に依り頼むものは力を失ふことなし。六二 罪あるものの言を恐るな。そは彼の巣は糞土と蟲となればなり。六三 彼は今日擧げられて、明日は決して見出されざるべし。そは彼は塵に還り、その思想滅び失すべければなり。六四 子らよ、汝ら強かれ、律法のために自ら男となれ、これによりて汝ら光榮を得ん。六五 視よ、汝の兄弟シメオンを。われ知る、彼は議士たるべき人なり、汝ら常に彼にきけ、彼は汝にとりて父たるべし。六六 ユダ・マカビオは、若き時より強くして力あり。彼は汝らの將となりて、民の戰を戰ふべし。六七 汝らすべて律法を行ふ者を汝らの許に招き、汝らの民の惡に報いよ。六八 異邦人に償をなせ、律法の誡に心を用ひよ。』

かくてかれ彼等を祝して、その先祖に加はりぬ。彼は第百四十六年に死に、その子ら彼をモディンなるその先祖たちの墓に葬り、全イスラエル彼のために大なる哀悼をなせり。

第三章

一 その時、彼の子、マカビオと呼ばれたるユダ、彼に代りて起ちぬ。二 而して彼のすべての兄弟たちと、その父につけるすべてのものは皆彼を助け、喜びてイスラエルの戰に參加したり。三

彼はその民のために大なる光榮を得、巨人の胸當をつけ、戰に相應しき鎧を身に纏ひ、隊伍を整へ、その劍をもて軍隊を守れり。四 彼はその行爲獅子の如く、吼えて餌をあさる獅子の兒の如くなりき。五 彼は無法なる者を搜し出してこれを追ひ、民を惱まし者どもを焼きぬ。六 無法なる者ども彼を恐れて戰き、すべて不法のわざをなす者甚しく惑ひぬ。而して救は彼の手の中に豐にありき。七 彼は多くの王たちを怒らせ、そのわざをもてヤコブを喜ばせたれば、彼の記憶はとこしへに祝せられたり。八 彼はユダの町々を歴巡りて、敬虔ならぬ者どもを地より滅し、イスラエルより御怒を取り去れり。九 かくて彼は、地のはてにまでその名を知られ、滅びんとせし者どもを共に集めぬ。

一〇 時にアポロニオ異邦人とサマリアよりの大軍を集め、イスラエルに向ひて攻め上れり。一一 ユダこれを知り、彼を迎へんとて出で行き、これを撃ちて殺せり。多くのもの傷を負ひ、倒れて死にしが、或ものどもは逃れぬ。一二 彼等分捕物を得しが、ユダはアポロニオの劍を身につけ、一生涯それをもて戰へり。

一三 シリア軍の將セロン、ユダが彼の許に忠信なる人々の群を集めしことと、我等の人々と共に戰に赴くこととを聞きて、一四 いひぬ『われは自ら名をなして、國の光榮を得ん、我はユダ及び彼と共なる物どもと戰ひて、王の言を空しくせん。』一五 かくて敬虔ならぬものどもの大軍彼を助けてイスラエルの子らに仇を讎いんとて出で行けり。

一六 かれベテホロンの上り道に近づきしに、ユダは少數の軍隊をもて彼を迎へんとて出で行けり。一七 されどイスラエルの人々、彼らを撃たんとて出で來れる軍隊を見しとき、ユダにいへり『われら何をなし得んや。かくも小き軍隊をもて、かくも大なる強き軍隊といかで戰ふを得んや、われらは今日、何の食物をもとらざれば、力弱りたり。』一八 ユダいふ『多數のもの少數のものの手に閉ぢ込めらるるはたやすきことなり、天にとりては、多數のものによりて救ふも、少數のものによりて救ふも一つなり。一九 戰に勝つは軍勢の多きに關係なし。されど力は天より來る。二〇 彼等は傲慢と不法とに滿ちて我らに來り、われらとわれらの妻子を滅し、又我らを捕虜にせんとす。二一 されど我等はわれらの生命とわれらの律法のために戰ふべし。二二 主は自ら我らの顏の前に我等を打ち敗り給はん。されど汝らは彼等を恐るる要なし。』

二三 さてかれ語ることを止めし時、俄に彼等の上に躍びかかりければセロンとその軍勢彼の前に敗れたり。二四 彼等はベテホロンを下りて、平野まで彼等を追ひつめしが、凡そ八百人のもの斃れたり。されど住民はペリシテ人の地に逃れたり。

二五 ユダとその兄弟に對する恐怖、彼等に對する戰慄、彼等の周圍の國々に臨み、二六 彼の名、王の耳にまで達しければ、すべての國人ユダの戰につきて語りぬ。

二七 されどアンテオコス王此等のことを聽きし時、憤怒に滿た

され、使者を遣はして、己が領地内のすべての軍勢を集め、甚しく強き軍隊を作れり。二八彼その庫を開きて、その兵士らに一年分の報酬を與へ、いかなる要求にも應ぜんことを命じたり。二九彼その金錢のその庫の中に缺けたると、國の貢の少くなれるとを見たり。これは彼が初よりありし律法を取り除かんがために、地の上にもたらしたる紛爭と災害とによるなり。三〇而して彼、そのさきに寛大なる手をもて與へたる報酬と贈物とを與ふるに耐えざるを恐れたり。彼は前の王たちよりも多くのものをもちたりしなり。三一彼その心の中にいたく思ひ惑ひ、ペルシャに赴きてその國々より貢を納めしめ、金錢を集めんと決心したり。三二彼は王室の血族の一人なる貴き人ルシアを、エジプトの境よりユフラテ河に至るまでの王のつとめをとるために殘し、三三彼の歸り來るまでに、その子アンテオコスを携へ來るべきことを命じたり。三四而して彼その軍勢と象の半とを彼に頒ち、そのなすべきすべてのことをこれに命じ、ユダヤとエルサレムに住める人々につきては、三五彼等に軍隊をさし向けてイスラエルの力とエルサレムの殘れるものとを絶ち滅し、彼等の記念をその所より取り除くべきこと、三六また彼等の境の中に悉く異國人を住ましめ、その土地を籤にて彼等に頒つべきことを命じたり。三七而して王はその軍勢の殘れる半をとり、第百四十七年に、アンテオケより、即ちその首府より去り、ユフラテ河を渡りて山地の國々に赴けり。

三八ルシアは、ドリメネの子プトレミオ、ニカノル、ゴルギヤなど、王の僚友なる力ある人々を選び、三九彼等とともに四萬人の歩兵と七千の騎兵とを遣して、ユダの地に赴かしめ、王の言に從ひてこれを滅さしめんとせり。四〇彼等その軍勢を率ゐて進み、平野の國なるエマオに近づきぬ。四一國の商人等彼らの名をききて、甚だ多くの金銀をとり、桎をもち、イスラエルの子らを奴隷にせんとて、その營に來れり。かつ彼等にスリヤとペリシテ人の地との軍勢加はりぬ。

四二ユダとその兄弟たち災害増し加はり、軍勢その境に營を張るを見たり。また彼等は、民を滅し、彼等を絶つべしと王の命じたる言を知れり。四三彼等互にその隣人にいひけるは、『我らは我らの民の廢墟に起たん、我らは我らの民と聖所のために戰ふべし。』四四戰に備へんがためともに祈らんとて、また慈悲と憐憫とを乞ひ求めんとて、會衆集ひ來れり。四五かくてエルサレムは住むものなくして荒野の如く、その子らは一人もこれに出入せざりき。聖所は蹂躪られ、異國人の子らは城塞を占め、異邦人その中に宿りぬ。かくて歡喜はヤコブより取り去られ、笛と琴の音止みたり。四六彼等とともに集りてエルサレムの彼方なるミヅパに來れり。そはミヅパには、前にイスラエルのための祈禱場ありたればなり。四七その日彼等斷食し、麻布を身に纏ひ、頭に灰を蒙り、その衣を裂き、四八律法の書を開き置きたり。その律法の書は異邦人らが、その中に、彼等の偶像の形を

探りたるものなりき。四九而して彼等、祭司の祭服と初穂と十分の一の供物とを携へ來りて、滿願の日終りしナザレ人を勵ましぬ。五〇彼ら天に向け、高らかに叫びていひけるは、『我ら此等の人々につきて何をなすべきか、いづこに我ら彼等を運ぶべき。五一汝の聖所は蹂躪され、瀆され、汝の祭司らは悲哀の中にありて低くせられたり。五二視よ、異邦人は我らを滅さんとて共に集ふ。汝は、彼等が我らにつきて何を思ふかを知り給へり。五三汝助け給ふにあらずば、いかで我ら、彼等の前に立ち得んや。』五四彼等ミヅパを吹き鳴らし、大聲もて叫べり。

五五此の使ユダ、民の指導者、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長を立てたり。五六而して彼、家を建て居るもの、婚約せしもの、葡萄園を植ゑ付けしもの、及び戰慄くものに、各自律法に從ひて己が家に歸るべきことを命じたり。五七軍隊は進みてエマオの南に營を張りぬ。五八而してユダいふ『身に武具をよろひて雄々しくし、朝のために備へよ。これ汝ら、我らと聖所とを滅さんとて、我らに逆ひてともに集ふ此等の異邦人と戰はんがためなり。五九我らの國と聖所との災害を見んよりは、戰に於て死なん方我らにとりてよければなり。六〇されど御心の天に於けるが如く、主なし給へかし。』

第四章

一その時ゴルギヤは五千人の歩兵と一千人の擇拔の騎兵とを率ゐ、夜に及びて進軍せり。二これ彼等ユダヤ人の軍隊に攻めかかりて不意にこれを撃たんがためなり。城塞に居りし人々はその案内者となりぬ。三ユダこれをききて、エマオに屯せし王の軍勢を撃たんとて、勇士たちを引きつれて出で立ちぬ。四彼はこれを軍勢の猶營より散り居る中になさんとせり。五ゴルギヤは夜に及びて、ユダの營に來りしに、誰をも見ざりしかば、山中に彼等を捜して、『此等の人々は我らより逃る』といへり。六夜明くるや否や、ユダ三千人の人々とともに野に現れたり。されど彼等は、己等の欲する如くには楯をも劍をも持たざりき。七然るに彼等は、強く堅められたる異邦人の陣營と、その周圍に屯せる騎兵とを見たり。而してそれ等の兵士らは皆戰に熟練せるものなりき。八その時ユダ、彼と偕にあるものどもにいひぬ『汝ら我らの多きに驚くな、また彼らの攻擊を恐るな。九パロ大軍をもて彼等を追ひし時、いかに我らの先祖たちは紅海にて救はれしかを思へ。一〇されば今、我ら天に向ひて叫ばん。もし主我らを顧み、われらの先祖たちの契約を憶え給はば、今日我らの面の前にて、この軍隊を滅し給はん。一一而してすべての異邦人は、イスラエルを贖ひ、また救ひ給ふものの在すことを知るべし。』一二異國人らその眼をあげて、彼等に向ひ來るものどもを見、一三これと戰はんとて陣營より出で行けり。かくてユダとともにありし人々ラッパを吹き鳴らしつつ戰に加はりしが、一四異邦人敗れて野に逃げ行けり。一五されど後驅のものどもは皆劍によりて斃

れたり。而して彼等敵を追ひてガザラに、またイヅミヤとアゾトとヤムニヤの野に到りしが、そこにて斃れしもの三千人なりき。一六ユダとその軍勢は、彼等を追ふことを止めて歸りし時、一七民に向けていへり『我らの前に猶戰あれば、分捕物を貪るな。一八ゴルギヤとその軍勢我らに近く山にあり。されど汝らまづわれらの敵に向ひて立ち、これと戰ひて後、勇ましく分捕物を得よ』。一九ユダ此らの言を終らざる間に、敵の一隊、山より現れ出でたり。二〇彼ら、己等の軍隊逃れて、ユダヤ人陣營を燒けるを見たり。彼らの見たる煙は何のなされしかを語りたるなり。二一彼ら此等のことを見たる時、いたく恐れ、かのユダの軍隊、野にて戰はんと備へ居るを見たれば、二二彼らは皆ペリシテ人の地に逃れたり。二三ここに於てユダ分捕せんとて陣營に歸り、多くの金銀、青絹、紫の衣、及び大なる富を得たり。二四彼ら家に歸り、感謝の歌をうたい、天に向ひて讃美を唱へたり。そは主のいつくしみは美しくして、永遠にあればなり。二五かくて此の日、イスラエルは大なる救を得たり。

二六されど異國人らの逃れたるものども、來りてルシアにすべての起れることを告げたり。二七されどこれを聞けるとき、彼うち惑ひ、かつ落膽したり。そは彼のイスラエルになさんとせしこと成らず、また王の彼になさしめんとせしこと成らざりし故なり。

二八あくる年、ルシア、彼等を滅さんとて六萬の歩兵と五千の騎兵とを集めたり。二九彼らイヅミヤに來り、ベテスラに營を張りしかば、ユダ一萬人をもて彼等を迎へたり。三〇ユダ彼等の軍隊の強きを見しかば、祈りていへり

『讃むべきかな、イスラエルの救主よ、汝は汝の僕ダビデによりて、力ある者の攻撃を壓へ、ペリシテ人の軍をサウロの子ヨナタンとその武器をとる者の手に渡し給へり。三一願くは、此の軍隊を汝の民イスラエルの手に閉ぢ込め、彼等をその大軍と騎兵との故に恥ぢしめ給へ。三二彼らの心を弱くし、彼らの勇氣を消え失せしめ、その滅亡の故に慄かしめ給へ。三三願くは、汝を愛する人々の劍をもて彼らを斃し、汝の御名を知るすべてのものをして、感謝をもて汝をたたへしめ給へ。』

三四かくて彼等、戰を交へしに、ルシアの軍のうちより五千人ばかりのもの斃れしかば、彼等その上に攻めかかれり。三五されどルシア己が軍勢の逃れ始め、ユダと共なるものどもに勇氣起り、生くるにもまた死ぬるにも、貴き覺悟の生ぜしを見て、アンテオケに退き、更に大なる軍隊を率ゐて、ユダヤに到らんがために、傭ひし兵士を集めたり。

三六されどユダとその兄弟たちいひぬ『視よ、われらの敵は敗れたり。いざ我ら聖所を潔め、これを新に奉獻せんがために上り行かん。』三七ここに於てすべての軍隊ともに集り、シオンの山に上り行けり。三八彼等、聖所の斃れたるままにて、祭壇は瀆され、門は燒かれ、中庭に、林の中の如く、山の上の如く、叢生じ、

また祭司の室は悉く倒されしを見たり。三九 ここに於て彼等その衣を裂きて、大なる哀悼をなし、その頭に灰を蒙り、四〇 その面を地につけて伏し、合圖のラッパを吹き鳴し、天に向ひて呼はれり。四一 その時或人々に命じて聖所を潔め盡すまで城に居る者どもと戰はしめたり。

四二 かくて彼、律法を喜ぶ、責むべき所なき祭司らを選びしが、四三 彼等聖所を潔め、汚瀆の石を潔からざる場所に運び出しぬ。四四 而して彼等、瀆されたる燔祭の壇につきて、いかにすべきかを議りしに、四五 彼等の心によき思考浮び出でたり。即ち彼等、異邦人これを汚したれば、己等にとりて誹謗とならんことを恐れてこれを倒し、その壇を引き倒して、四六 石を宮の山に、契約の場所に積み重ね、これについて答を與ふる預言者の出づるまでに至ることとせり。四七 彼等律法に從ひてすべての石をとり、さきのものの型に從ひて新しき壇を築けり。四八 彼等聖所と家の内部とを築き、その中庭を潔めたり。四九 また彼等聖所を新に造り、燭臺と燔祭、及び香の壇と卓とを、宮の中に携へ來れり。五〇 彼等香を壇の上に焚き、燭臺の上なる燈をともし、宮の中を照したり。五一 而して彼等パンを卓の上に置きて蔽をかけ、そのなししすべてのわざを終へたり。

五二 彼等は第百四十八年の第九月、即ちキスリウの月の二十五日に、朝早く起き出で、五三 律法に從ひて、彼等の造りし燔祭の壇の上に、犠牲をささげたり。五四 異邦人等それを瀆せるその日のその時に、彼等それを、歌と琴と笛と鐃鈸とをもて、新に献げたり。五五 すべての民その面を地につけて拜み、天を仰ぎて、彼等により成功を與へ給ひしものに讃美を奉れり。五六 彼等祭壇の奉献禮を八日の間行ひ、歡喜をもて燔祭をささげ、救と讃美の犠牲を献げたり。五七 彼等金の冠と小き楯とをもて宮の正面を飾り、門と祭司の室を新にささげ、これに戸を造れり。五八 かくて民の間にいと大なる喜あり、かつ異邦人の誹謗取り去られたり。五九 ユダとその兄弟たち、及びイスラエルの全會衆は、この壇の奉献禮が年毎に、キスリウの月の二十五日より八日の間、歡喜と悅樂とをもて催さるべきことを命じたり。六〇 その時彼等シオンの山の周圍に高き石垣と堅固なる戍樓とを築けり。異邦人がさきになせる如く、來りて彼等を蹂躪らんことを恐れたればなり。六一 而して彼これを守らんがために軍隊をそこに置き、またこれを守らんがためにベテスラを堅めたり。これによりて民、イヅミヤに對する砦を得たり。

第五章

一 然るにまはりの異邦人等、壇は築かれ、聖所はさきの日の如く奉献せられしことをききて、いたく怒れり。二 かくて彼等、彼らの中に居るヤコブの種族を滅さんとて相議り、民の中にて彼等を殺し、また滅し始めぬ。三 その時ユダ、アクラバテネにてイヅミヤのエサウの子らと戰を交へり。そは彼等イスラエルを攻め

圍みたればなり。而してユダ彼等を撃ちて大なる殺戮を行ひ、彼等の誇を打砕き、多くのものを奪取れり。四かれまたバイアンの子らの悪を憶えたり。彼等は道に待伏し、民にとりて罠となり、躓となれるものなり。五彼等ユダによりて戍楼に押込められぬ。ユダ彼等に對して營を張り、全く彼等を滅し、その所の塔に火を放ち、その中のすべてのものと共にこれを焼けり。六かれ又アンモンの子らに向ひしに、大軍と多くの者ども、その將テモテオとともにあるを見出せり。七而してユダ彼等と多くの戰ひを交へ、その面前にてこれを取りたり。八かくてユダ彼等を撃ちてヤゼルとその地の村々を奪ひ取り、再びユダヤに歸りぬ。

九ギレアデにありし異邦人、國境にありしイスラエル人を攻め滅さんとて、共に集りたれば、彼等ダテマの砦に逃れ、一〇ユダとその兄弟たちに書を送りていへり『我らの周圍に居る異邦人等我らを滅さんとて共に集る。一一彼等進み出でて、我らの逃げ籠れる砦を奪はんとす。彼等の軍勢の將はテモテオなり。一二されば今來りて我らを彼等の手より救ひ出せ。我らの多くの客斃さるるなり。一三トビアの地にありし我らのすべての兄弟たちは、死に渡され、彼等はその妻子ら、またその所有物を運び去り、一千人ばかりの人を滅せり。』一四書の讀まれ居る間に、視よ、ガリラヤより他の使者たち來れり。彼等は裂かれたる衣を身につけ、かく記されたる報告書を携へたり。一五曰く『トレマイのものども、ツロとシドンのものども、異邦人のガリラヤ全體、我等を滅さんとて共に集れり。』

一六ユダとその民ら此等の言をききたる時、大なる會衆共に集り、患難の中にありて、砦の襲を受け居る彼等の兄弟たちのために、何をなさんかと相議れり。一七ユダその兄弟シモンにいへり『人々の中より三人を選びて、ガリラヤに居る汝の兄弟たちを救ひ出せ。されどわれとわが兄弟ヨナタンはギレアデの地に赴くべし。』一八かくて彼ザカリアの子ヨセフとアザリヤとを民の指導者として、軍勢の殘と共にユダヤに殘らしめ、これを守らしめたり。一九ユダ彼等に命じていひけるは『汝ら此等の民を見守り、我らの歸り來るまで、異邦人と戰を交ふな。』二〇かくてシモンにはガリラヤに行くために三千人、ユダにはギレアデの地に行くために八千人分たれぬ。

二一シモンはガリラヤに赴きて、幾度も異邦人等と戰ひ、異邦人等彼の前に敗れたり。二二シモン彼等を追ひてトレマイの門に到りしが、そこにて異邦人のうちより凡そ三千人斃れ、かれその分捕物を得たり。二三彼等、ガリラヤとアルバタにありし者どもを、その妻子等及びそのすべての所有物と共に備へ、大なる歡喜をもてユダヤに歸れり。

二四ユダ・マカビオとその兄弟ヨナタンはヨルダンを渡りて三日路程荒野に入り、二五ナバテア人等と會ひしが、其等の人々は平和なる状にて彼等を迎へ、ギレアデの地に於て、彼等の

兄弟たちの上に起りしことを悉くこれに告げぬ。二六 彼等の多くのものが如何にボソラとボソル、またアレマ、カスボル、マケド、カルナイムに閉ぢ込められしか(これらの町々は強く大なりき)、二七 またその他のものらは、いかにギレアデの地の他の町々に閉ぢ込められしか、またいかに彼等が明日砦を攻めてこれを奪ひ、一日の中に其等の人々を悉く滅すべきことを命じたるかを告げぬ。二八 かくてユダとその軍隊俄に荒野の路よりボソラに向ひ、町を占領して、すべての男を劍の刃にかけて殺し、その所持品を奪ひとり、火を放ちて町を焼けり。二九 かれそこより夜の間に移り、砦に達するまで進みぬ。三〇 朝に及びて彼等眼をあげて見しに、視よ、數へ盡す能はざる程の多くの民、雲梯と攻城機とを用ひて砦を攻め、人々これに對して戰ひ居たり。三一 ユダ戰既に始まりて、町の叫、ラッパと大なる響と共に天に昇れるを視て、三二 その軍勢のものどもにいへり『今日汝ら、汝らの兄弟たちのために戰へ。』三三 彼人々を三組に分ちてその後に進みしが、彼等ラッパを吹き鳴らし、祈の中に呼はれり。三四 テモテオの軍隊、それはマカビオなるを見て、彼の前より逃れしが、マカビオ彼等を撃ちて大なる殺戮を行ひ、その日彼等を斃しこと凡そ八千人に及びぬ。三五 かれミヅパに進みてこれを攻め、これを取りて、そのすべての男を殺し、所持品を奪ひ、火をもて町を焼きぬ。三六 そこより彼進みてカスポル、マケド、ボソル、及びギレアデの地の他の町々を取れり。

三七 さて此等のことの後テモテオ他の軍勢を集め、小河の彼方なるラボンに對して營を張りぬ。三八 ユダは軍を探るために人々を遣しが、彼等報告をもたらしていへり『我らの周圍なるすべての異邦人ら甚しき大軍を集めたり。三九 彼等アラビヤ人を雇ひて己等を助けしめ、小河の彼方に陣を張り、汝に對して戰を交ふる備せり。』ここに於てユダ彼等を撃たんとて進みぬ。四〇 ユダとその軍隊小河のほとりに近づける時、テモテオ彼の軍勢の將たちにいひぬ『もし彼初に我らに向ひて渡り來らば、我ら彼に抗すること能はざるべし。そは彼甚しく我らに勝るべければなり。四一 されどもし彼恐れて河向に陣を張らば、我ら河を渡りて彼を攻め、彼に對して勝を得ん。』四二 さてユダ流のほとりに近づきし時、彼民の學者らを小河のほとりに留まらしめ、彼等に命じていへり『誰をも營に留まらしめず、悉く戰に出でしめよ』と。四三 彼まづ彼等に向ひて河を渡り、すべての民彼に從へり。すべての異邦人彼の面前にて敗れ、その武器を投げ捨てて、カルナイムにある宮に逃れり。四四 彼等町を占領し、火をもて宮とその中のすべてのものを焼きたり。かくてカルナイム敗れ、彼等もはやユダの面前に立つこと能はざりき。

四五 ユダはすべてのイスラエル人、ギレアデの地にありし人々を、小より大に至るまで、その妻子ら、そのもちもの、甚しき大なる軍勢を、ユダの地に伴ひ歸らんがために集めたり。四六 かくて彼等エフロンまで來りしが、此の町は大にしていと強く、彼

の行く道に位せり。彼等ここを右にも左にも避くること能はず、その中央を通らざるを得ざりき。四七 町の人々中に閉ぢ籠り、石をもて門を塞ぎぬ。四八 ユダ平和の言を彼等に送りていひけるは『我等は汝らの地を通りて我らの國に赴かんとするにて、汝らに何の害をも加へざるべし。我らは唯我らの足にて過ぐるのみなり。』されど彼等は彼に對して門を開かざりき。四九 ユダ軍隊に令を傳へて各人にその居る所に營を張らしめたり。五〇 而して營を張れる軍隊の人々、終日終夜町に對して戰ひしかば、町は彼の手に渡されぬ。五一 かれすべての男を劍の刃にかけて滅し、町を毀ち、分捕物を得、殺されし者どもの上を越えて町を通れり。五二 彼らヨルダンを越え、ベテシャンの彼方なる大なる野に到りぬ。五三 而してユダ逃れし人々を共に集め、途すがら民を勵まして、ユダの地に歸るまで及べり。五四 彼等大なる歡喜をもてシオンの山に登り、全き燔祭をささげたり。そは彼等のうち一人だも殺されずして安全に歸りたればなり。

五五 ユダとヨナタン、ギレアデの地に在りし日に、トレマイの前なるガリラヤにありしシモン、五六 ザカリヤの子ヨセフ、及びアザリヤ、即ち軍勢の長たち、彼等の遠征と戰爭につきて、また彼等が何をなししかにつきて聽けり。五七 彼等いふ『我らも、我らのために名を得べし、いざ我ら行きて我らの周圍の異邦人と戰はん。』五八 而して彼等、共にありし軍隊の人々に命じて後、ヤムニヤの方に赴けり。五九 その時ゴリギヤとその兵士等町を出でて、彼等を迎へ撃ちぬ。六〇 ヨセフとアザリヤ逃れてユダヤの境まで追はれぬ。而して此の日イスラエルの民のうちより凡そ二千人倒れたり。六一 かくて民總崩となれり。これ彼等ユダとその兄弟たちに聽かずして戰をなさんとしたればなり。六二 されど彼等は、その手によりて救イスラエルに與へられし彼の人々の裔にはあらざりき。

六三 雄々しきユダとその兄弟たちは、その名をききしすべてのイスラエル人とすべての異邦人の前に甚しく崇められぬ。六四 人々歡聲を擧げて彼等の許に共に集へり。

六五 ユダとその兄弟たち進み出でて、南に向へる地にてエサウの子らと戰ひ、ヘブロンとその周圍の村々を撃ち、その砦を斃し、そのまはりの戍棲を燒きぬ。六六 彼ペリシテ人の地に向ひて進み、サマリヤ人の地を過ぎ行けり。六七 此の日、ある祭司ら功をたてんと欲し、人のすすめに從はずして戰に出で、終にその戰にて殺されぬ。六八 ユダは身をめぐらしてアゾトとペリシテ人の地に向ひ、その祭壇を倒し、火をもてその神々の彫像を燒き、物を奪ひて、ユダの地に歸れり。

第六章

一 その頃アンテオコス王山地の國々を旅し居けるが、ペルシャのエルマイに金銀豐なる、名だたる富める町あることを聞けり。二 その處にある宮は甚しく富み、さきにギリシャ人を治めた

りしマケドニヤ王ピリポの子アレキサンドルが殘せる金の楯、胸當、及び武器を藏せりといはる。三かれ來りて町を占領し、これを奪はんとせしが、そのこと町の人々に聽えければ、能はざりき。四町の人々起きてかれに戰を挑みしかば、かれ逃れ、心樂まずしてそこよりバビロンに歸れり。

五時しも彼の許に、ペルシャへの報告をもたらし來れるものあり。曰く、ユダの地に赴きし軍勢は敗走し、六ルシアははじめ、強き軍勢を率ゐて進みしが、ユダヤ人等の前に敗れ、ユダヤ人等は武器と軍勢、及びそのやぶりたる軍隊より奪ひ取りし山なす分捕物の故に強くなり、七エルサレムにありし壇の上に、嘗て彼の造り荒す惡むべきものをば彼等引き下し、舊の如く聖所の周圍と彼の町ベテスラとに、高き石垣をめぐらせりと。八王これらのことを聽きし時驚きていたく動かされ、寢臺の上に横はりて、悲哀のために病を得たり。そは事かれの望みし如く成らざりし故なり。九大なる悲哀新に彼に臨みしかば、彼は多くの日の間そこにありて、死ぬるために備をなせり。一〇即ちかれ、己がすべての僚友を召しよせていひぬ『睡眠わが眼を去り、わが心、憂慮のために弱れり。一一われわが心にいへり『いかなる苦惱にわれ來りしぞ、今わが陷りしは、いかに大なる洪水ぞ、われはわが力によりて惠まれ、かつ愛せられたりき』と。一二されどわれ今惱み出づ、嘗てわがエルサレムになしし惡を、人を遣はしてそこより金銀の器具を取り出し、理由なくユダの民らを滅さしめしことを。一三この故にわれ、此等の災害わが上に來りしを認む。視よ、われは大なる悲哀によりて外國にて死ぬるなり。』一四彼その僚友の一人なるピリポを召して、その國全體を治めしめ、一五彼にその冠と衣と印章とを與へたり。これその子アンテオコスの養育を彼に託して、これを王となさんがためなり。一六かくてアンテオコス王、第百四十九年にそこに死ねり。一七ルシア、王の訃を知り、若き時に養育し來れるその子アンテオコスを位に即かしめ、その名をユパトルと呼びぬ。

一八さて城塞にありしものども、イスラエル人らを聖所の周圍に閉ぢ込めて、常に彼等を苦め、異邦人を強うせんことを求めたり。一九ユダ彼等を滅さんと欲し、彼等を圍み攻めんがために、すべての民を呼び集めぬ。二〇彼等ともに集りて、第百五十年に彼等を包圍し、投射臺と攻城機とを作れり。二一然るに包圍せられしものどものうち或もの出で來りしに、イスラエルの中なる神を信ぜざる人々の或もの、彼等に加はりぬ。二二彼等王の許に行きていへり『いつまで汝は、審判を行ひて我らの兄弟の仇を報い給はざるか。二三我らは喜びて汝の父に仕へ、彼の言に歩み、彼の誡に從へり。二四この故に我が民の子ら城塞を圍みて、我らより離されたり。然るに我らの多くの者をば、彼等遭ふ毎に殺して、我らの所有物を掠め取れり。二五而して彼等ただ我らに向ひてのみならず、その國境の凡ての者に向ひて、その手を擴げたり。二六視よ、彼等は今日エルサレムの城塞に對して營を

張り、これを取らんとす。而して彼等既に聖所とベテスラとを堅めたり。二七 汝もし速に彼等に向はずば、彼等はこれよりも大なることをなして、汝は遂に彼等を抑ふる能はざるに至らん。』二八 王これをききし時、怒りて、すべての彼の僚友、彼の軍勢の將たち、また馬を司るものどもを共に集めたり。二九 そのうちには他の國々より、海の島々より、彼の許に來れる傭し兵卒の群もありき。三〇 その軍隊の數は、歩兵十萬、騎兵二萬、戰に訓らされし象三十二頭なりき。三一 而して彼等イヅミヤを經て進み、ベタスラに對して營を張り、多くの日の間これと戰ひ、また戰の機械を作れり。ベタスラの人々出で來り、火を放ちて彼等を燒き、勇しく戰へり。三二 ユダ、城より進み出で、王の陣營に對して、ベテザカリヤに營を張りぬ。三三 王、朝早く起き出で、全速力をもてその軍隊をベテザカリヤの途に進めしかば、その軍隊戰の備をなして、ラッパを吹き鳴らせり。三四 而して彼等象を戰に備へんがために、これに葡萄と桑の實の血を示せり。三五 また彼等其等の象を列に整へ、象と象の間に、鎖子鎧を身に纏ひ、眞鍮の兜を頭にいただける一千人の兵卒を配し、各の象に五百人の擇拔の騎兵を備へたり。三六 これらのものは象の居りし處にあらかじめ備へられしにて、象の行く處には彼等も共に行きて象より離れざりき。三七 蔽をなせる強き木の櫓、おのおの象の上に置かれしが、それは巧なる工夫をもて象に結び付けられ、その上にこれを御するインド人の外に、戰をなす三十二人の勇しき人々乘れり。三八 騎兵の殘りしものをば、彼等軍隊の此方と彼方の二箇所に置きて、敵に恐を起さしめ、方陣によりてこれを守らしめたり。三九 さて日の光、金と眞鍮の楯の上に輝きし時、山々照りはえて、炬火の燃ゆるが如くなりき。四〇 而して王の軍隊の一部は高き山々の上に、また或ものは低き地の上に擴がり、確にして亂れざる歩にて進みぬ。四一 その軍勢の響と軍勢の行進と武器の音とをききしものは皆慄ひ戰きぬ。そはその軍隊甚しく大にして強かりければなり。四二 ユダとその軍隊これに近づきて戰ひしに、王の軍隊のもの六百人斃れたり。四三 アバランと呼ばれたるエレアザル、王の胸當をもて裝はれたる一頭の象を見しが、それは他のすべての象よりも高く、王その上にあるが如く見えたり。四四 ここに於て彼、その民を救ひ出して永久の名を得んがために己を與へ、四五 勇しく方陣の直中に進み入りて、これに走り寄り、右に左に斬り倒ししかば、かれら此方、彼方に離れたり。四六 かれ象の下に這ひ入りて、下よりこれを刺殺ししかば、象は地に、かれの上に倒れ、彼終にそこにて死ねり。四七 而してユダヤ人等王國の力と、軍隊の激しき攻擊とを見しかば、そこを去れり。

四八 されど王の軍勢彼等を攻めんとてエルサレムに上り行き、王はユダヤに向ひ、シオンの山に向ひて營を張れり。四九 而して彼ベテスラの人々と和睦せり。これ彼等包圍に耐ふべき食物なかりし故、町より出で來りたればなり。それは地にとりて安息

の年なりき。五〇王ベテスラを占領して、これを守らしむるため、そこに衞兵を置けり。五一彼多くの日の間、聖所に對して營を張り、投射臺を築きて、攻城機、火と石とを投ぐる機械、投鎗の投射器、及び投石器などを備へたり。五二然るにユダヤ人等もまた、彼等の機械に對する機械を造りて多くの日の間戰へり。五三されど聖所には糧食盡きはてたり。それは第七年にして、異邦人の間より安全のためにユダヤに逃れ來りし人々皆、貯へられしものの殘を食ひたればなり。五四聖所には少しのもの殘されしのみなりき。人々飢餓に迫られて各自己が所に散り行けり。

五五その頃ルシア聞きけるは、アンテオコス王猶生き居りし時、王位を嗣がしめんとてその子アンテオコスの養育を託せるピリポ、五六王と共にありし軍隊を率ゐてペルシャとメデヤより歸り、自ら國政を奪はんとしつつありと。五七ここに於て彼いそぎ去らんとし、王と軍勢の將帥らと人々にいへり『我等日毎に弱り行くなり。我らの食物乏しく、我らの營を張れる所は強く、且王國のことども我らの上にかかり來る。五八されば今、我ら此等の人々に右の手を與へて、彼等及びすべて彼等の國人と和睦をなし、五九彼等と契約を結びて、さきの如く彼等を、その律法に從ひて歩ましめん。彼等は我らの滅しし彼等の律法の故に怒りて、此等のすべてのことをなせるなり。』六〇而して此の言王と君侯たちとに、よしと見えければ、彼使者を遣して彼等に講和を求めしに、彼等これを承れたり。六一かくて王と君侯たち彼等に誓ひければ、彼ら砦より出で來れり。六二然るに王シオンの山に入り、その所の要害を見てその誓ひし誓を無視にし、周圍の石垣を引き倒すべき命を下せり。六三かく彼いそぎ去りてアンテオケに歸り、ピリポが町の長となり居るを見出し、彼と戰ひ、力をもて町を奪へり。

第七章

一第百五十一年に、セリウコスの子デメトリオ、ロマより出で來り、少數の人々と共に海に沿へる一つの町に上り行きて、そこを治めたり。二彼その父祖たちの王宮に入らんとせし時、その軍隊アンテオコスとルシアとを捕へて、これを彼の許に引き來れり。三そのこと彼に知られ居たれば、かれ『我に彼等の顏を示すな』といひぬ。ここに於て彼の軍隊彼らを殺せり。四かくてデメトリオその國の王位に即きぬ。五その時、すべての、不法にして神を信ぜざるイスラエルの人々彼の許に來れり。彼等の指導者はアルキモにて、大祭司たらんことを欲し居たりしものなり。六彼等民を讒言して王にいへり『ユダとその兄弟たち汝のすべての友を滅し、我らを我らの國より散らせり。七されば今、汝の信頼し給ふ人を送り、行きて彼が、我らと王の國に來らしめし荒廢と、またいかに彼が、彼等とすべて彼等を助けし者とを罰せしかを見させ給へ。』八王、己が僚友の一人なるバク

キデスを選べり。彼は河向の國を治め、王國の中にての大なる人にして、王に忠信なりき。九 王彼とかの神を信ぜざるアルキモを遣し、彼に大祭司の職を保證し、イスラエルの子らに仇を返すべきことを命じたり。

一〇 彼等進み出で、大軍をもてユダの地に來りしが、彼ユダとその兄弟たちに僞りて平和の言を送れり。一一 されど彼等は、その言に心をとめざりき。そは彼等それ等の者どもの、大軍を率ゐ來れることを知りたればなり。一二 その時アルキモとバクキデスとの許に、學者の一隊正義を求めて集り來れり。一三 ハシデームはイスラエルの子らの中にて、彼等との平和を求めし初のものなりき。一四 そは彼等いへり『アロンの裔の祭司たるもの力をもて來る、彼は我らに何の惡をもなさざるべし。』一五 かくてかれ、彼等と平和の言をかはし、彼等に誓ひていひけるは『我らは汝らにも汝らの友らにも害を加へざるべし』と。一六 彼等かれを信じたり。然るにかれ、彼等の中より六十人を捕へて、一日の中にこれを殺せり。かく記されし言の如し。一七 『彼等なんぢの聖徒の肉を地の獸に與へたり、その血をエルサレムの四圍に水のごとくながしたり、しかして之を葬るものなかりき。』

一八 かくて彼等の恐怖すべての民に臨みたり。そは彼等いへり『彼等の中に眞理も審判もあるなし。そは彼等、彼等の言ひし契約と誓約とを破りたればなり』と。一九 バクキデス、エルサレムより移りてベゼテに營を張り、使者を遣し、彼と共に在りて離れ去りし多くのもの、及び、或人々を捕へて、これを殺し、大なる坑に投げ入れたり。二〇 而して彼アルキモに國を委ね、彼を助くるために、彼の許に軍隊を殘しぬ。かくてバクキデスは王の許に去れり。

二一 アルキモは己が祭司の職のために勵みぬ。二二 民を苦めしすべてのもの、ユダの地を治めて、イスラエルに大なる害をなしもの、彼の許に集れり。二三 ユダ、アルキモとその徒が、異邦人に勝りてイスラエルの子らになししすべての惡を見たり。二四 かれ周圍なるユダヤのすべての境に出で行きて、彼を離れ去りし人々に讎いしかば、彼等この國に入ることをためらいたり。二五 されどアルキモ、ユダとその徒強くなりしを見て、己の彼等を抑ふる能はざるを知り、王の許に歸りて、彼等に對する惡しき讒言をなせり。

二六 王は、己が敬へる君侯たちの一人にて、イスラエルを惡み、その敵たりしニカノルを遣して、民を滅すことを命じたり。二七 ニカノル大軍を率ゐてエルサレムに來れり。彼ユダとその兄弟たちに僞りて平和の言を送り、いひけるは二八 『我と汝らとの間に戰あらざれ、我は平和に汝らの顔を見んがために少數の人と共に行かん』と。二九 而して彼ユダの許に來り、彼等互に平和に挨拶せり。されど敵は暴力によりてユダを捕ふる備をなせり。三〇 このこと、即ち彼が僞をもてかれの許に來りしことユダに知られしかば、ユダいたく彼を恐れ、もはやその顔を見るを欲せ

ざりき。三一 ニカノル己が計略の見出されしを知り、ユダと戰はんとてカパルサラマの外に出で行きたり。三二 而してニカノルの方に凡そ五百人のもの斃れしかば、彼等ダビデの町に逃れたり。

三三 此等のことの後に、ニカノル、シオンの山に登りしに、聖所よりある祭司ら、また民の長老のあるものども出で來りて平和に彼に挨拶し、彼に王のためにささげられありし全き燔祭を示したり。三四 然るにかれ彼等を嘲り、彼等を笑ひ、また彼らを辱しめて、高ぶり語り、三五 怒り罵りていへり『ユダとその軍隊わが手に渡さるるにあらずば、われ再び平和の中に來るとも、此の家を燒かでは置かざるべし』と。而して彼大なる怒をもて出で行けり。三六 祭司たち入りて壇と宮の前に立ち、泣きて祈りぬ。三七『汝は此の家を、汝の御名によりて呼ばしめ、汝の民のための祈りと願との家たらしめ給へり。三八 願くは此の者とその軍隊とに仇を返し給へ。彼等を劍にて倒れしめ給へ。彼等の冒瀆を憶え、彼等にもはや生くるを許し給ふ勿れ。』

三九 ニカノル、エルサレムを出でてベテホロンに營を張りしが、シリヤの軍勢彼の許に來れり。四〇 ユダは三千人の兵を率ゐてアダサに營を張れり。而してユダ祈りていへり四一『王より來りしものども冒瀆を行ひし時、汝の御使出で行きて、彼等のうち十八萬五千人を撃てり。四二 かくの如く、今日、我らの前に此の軍を敗り給へ。願くは他のすべてのものをして、彼が汝の聖所を罵りしことを知らしめ給へ。願くは彼をその惡に從ひて審き給へ。』四三 而してアダルの月の十三日に兩軍戰を交へしが、ニカノルの軍隊敗れ、彼自らその戰に倒れたるものの初となりぬ。四四 さて彼の軍隊ニカノルの斃れしを見し時、彼らその武器を投げ捨てて逃れたり。四五 ユダヤ人に一日路程、彼等を追ひて、アサダよりガザラに達するまでに及び、合圖のラッパを吹き鳴らして、人々に警報を傳へたり。四六 人々周圍なるユダヤのすべての村々より出で來りて彼等を圍みければ、彼等己を追ふ者に向きかへり、悉く劍に由て斃れ、生き殘れるもの一人もなかりき。四七 彼等分捕物と掠めとりしものとを得、ニカノルの首と、彼がかくも高ぶりて擴げし右手とを斬りとりてこれを携へ來り、エルサレムの外にこれを梟したり。四八 民いたく喜び、その日を大なる歡喜の日として守りぬ。四九 彼等年毎に此の日を守ることを定めたり。即ちアダルの月の十三日なり。五〇 かくてユダの地、暫の間安息を得たり。

第八章

一 ユダ、ロマ人の名聲を聽けり。彼等は勇しき民にして、自ら彼等の盟に加はる者を喜び受け、彼等の許に來るすべての者と親和をなす、二 實に彼等は勇しき民なりと。人々の彼に告げしはこれなり。ロマ人はガラタ人の間に戰爭と遠征をなし、これを敗りて、貢を納れしめ、三 イスパニヤの地に於ては、そこにあ

りし金銀の鑛山を手にせんがために、もろもろの事をなし、**四**彼等の計畫と忍耐とによりてすべての場所を征服し（それらの場所は彼等より甚しく遠かりき）、彼等に逆ひて地の極より來りし王たちを撃ちてこれを敗り、また他の國々に、年毎に貢を彼等に納めしめたり。**五**又キテムの王ピリポとベルセス、及び共にロマ人に逆ひて兵を擧げしものどもを、彼等戰に敗りてこれを服せしめたり。**六**アジアの大王アンテオコスもまた彼等に對して、百二十の象と馬と兵車と甚しき大軍とを率ゐて戰ひしが、彼等のために敗られたり。**七**彼等かれを生捕にし、彼も彼の後を繼ぐものも、彼等に大なる貢を納め、人質及び一區劃の土地を與ふべきことをこれに命じたり。**八** 即ちその土地はインドの國、メデヤ、ルデヤ、及び彼等の國々のいともよき部分にして、彼等はこれを彼より奪ひ、ユメネ王に與へたり。**九**而してギリシャの人々來りて彼等を滅さんと謀りし時、**一〇**その事彼等に知られければ、彼等ギリシャ人に對して一將帥を遣して、彼等を掠め、彼等の土地を征服して、その砦を打碎き、彼等を捕へて、今日に至るまでこれを奴隷となせり。**一一**その他の國々島々は、彼等に逆ひて起り立つ毎にこれを滅し、これを彼等の僕となしぬ。**一二**されど彼等の友等と彼等に賴る者等とは、彼等よく親和をなす。かく彼等近き國々と遠き國々とを征服せしかば、彼等の名聲をきくもの皆これを恐れたり。**一三**且彼等が助けて王となさんとするものをば、彼等これを王となし、また己等の欲するままにこれを位より黜す。かくて彼等は甚しく己を高めたり。**一四**而して彼等の何人も、冠をいただき、紫の衣を着て、自ら誇るが如きことなかりき。**一五**また彼等は己等のため元老院を作り、日々三百二十人のもの審判の座に着きて、常に民のために議り、彼等の秩序を保たしめたり。**一六**また彼等はその國政を年毎に一人の者に委ねて人々を治めしめ、國全體を宰らしむ。すべてのものこれに從ひ、彼等の間に嫉妬と競爭あることなし。

一七ここに於てユダ、アコスの子なるヨハネの子、ユポレネと、エレアザルの子ヤソンとを選び、これをロマに遣して、親和と同盟とを結ばしめ、**一八**ロマ人が彼等より軛を取り除かんことを求めしめたり。そは彼等、ギリシャ人の王國がイスラエルを奴隷とせしことを見たればなり。**一九**而して彼等ロマに往けり。（道はいと遠かりき。）彼等元老院に入り答へていひぬ**二〇**『マカビオと呼ばるるユダとその兄弟たち、我等を彼等に遣して、汝等と聯盟を結ばしめ、平和をなさしむ。これ我等、汝等の同盟者となり、友となり得んがためなり。』

二一この事彼等の眼によしと見えたり。**二二**これは彼等が眞鍮の卓の上にて記し、平和と聯盟との記念として彼等の保存せんがために、エルサレムに送れる記録の寫なり。

二三『ロマ人及びユダヤ人に、海にも陸にも平安永遠にあれ。劍も敵も彼等より遠ざかるべし。**二四**されどもし戰爭ロマに、若くはその領地内に於ける聯盟國の一つに起らば、**二五**ユダヤ人の國

は聯盟國として、その定められたる要項に從ひ、誠意を盡してこれを援くべし。二六又彼等と戰をなす者に對しては、ロマに善しと見ゆる如く、糧食、武器、金銀、船舶などを給與すべからず。ユダヤ人は何者をも豫期することなく、この協定を守るべきなり。二七且これと同じく、もし戰爭ユダヤ人の國に起らば、ロマ人は、定められたる要項に從ひ、聯盟者として誠意を盡してこれを援くべし。二八又その敵の同盟者に對しては、ロマに善しと見ゆる如く、糧食、武器、金銀、船舶などを供給せざるべし。ロマ人は僞なくこの協定を守らん。二九此等の言に從ひて、ロマ人はユダヤの民とかく契約を結べり。三〇されどもし今より後、盟約者の一方が何等かの項目を附加し、若くは削除せんと欲する時は、彼等その欲する如くこれをなすを得べし。而して彼等の附加し、若くは削除せし項目は何にても有效となるべし。三一デメトリオ王が彼等になしし惡につきては、我ら彼に書き送りていへり『いかなれば、汝は、汝の軛を我等の友にして聯盟者なるユダヤ人の上に重くせしや』と。三二さればもし彼等汝に向ひて何事かを論はば、我ら彼等に對して義を行ひ、汝と共に海陸より彼等と戰ふべし。』

第九章

一デメトリオは、ニカノルその軍隊と共に斃れしを聞きしかば、バクキデスとアルキモとを、彼の軍勢の右翼と共に、再びユダの地に遣せり。二彼等ギルガルへの道より進み、アルベラなるメサロテに對して營を張り、これを奪ひて多くの民を殺せり。三而して第百五十二年の一月に、彼等エルサレムに對して營を張り、四二萬の歩兵と二千の騎兵とを率ゐてベレアに進み行きぬ。五ユダはエラサに營を張りしが、擇拔の兵三千彼と偕にありき。六彼等敵軍の大軍と、その數夥しきとを見て、いたく恐れたり。而して多くのもの軍隊より脱け出で、殘れるもの八百人に足らざる程となれり。七ユダはその兵の脱け出でしを見、かつ戰彼の上に迫れるを見て、心にいたく憂へたり。かれ彼等を集むる時なかりしかば、心弱れり。八ここに於てかれ殘れるものどもにいひけるは『いざ我ら、起ちあがりて我らの敵に向ひ行かん。我ら彼等と戰を交ふるを得んか』と。九彼等かれを思ひ止まらしめんとしていひけるは『我ら決して能はざるべし。今はむしろ我らに、我らの生命を救はしめよ。我ら再び歸り來りて、我らと我らの兄弟たち、共に彼等と戰はん。されど今は我らの數少なし。』一〇ユダいふ『しかあらざれ、われこれをなして彼等を逃るべけんや。我等の時來らば、われら彼等の兄弟たちのために、男らしく死にて、我らの光榮に對する誹謗を殘すべきにあらず』と。一一軍勢營を離れて進み、彼等と戰を交へんとて立ちぬ。騎兵は二隊に別れ、石を投ぐるもの、弓引くものは、主力の人々と前線にて戰ふ人々との前に行けり。一二されどバクキデスは右翼にあり、二つの方陣を作りて進み、兵士等そのラッパを吹き

鳴らせり。一三ユダの傍なる人々もまたラッパを吹き鳴らし、地は武器の響によりて慄ひ、戰交へられて、朝より夕まで續きぬ。一四ユダはバクキデスと彼の軍隊の主力の右翼にあるを見て、こころ勇氣に滿てるすべてのものと共にそこに到りしかば、一五右翼彼等のために敗られ、ユダは彼等をアゾトの山まで追撃てり。一六左翼にありしものども右翼の敗れたるを見、身をめぐらしてユダ及び彼と偕にあるものの後を追へり。一七戰激しくなり、傷き倒れて死ねる者いづれの方にも多くありき。一八遂にユダも斃れ、殘れる者逃れたり。一九ヨナタンとシモン、その兄弟ユダをとりて、これをモデインに於けるその先祖たちの墓に葬りぬ。二〇彼等かれのために泣き、全イスラエル彼のために大なる哀悼をなし、多くの日の間喪に服していへり二一『いかにして強き者、イスラエルの救主倒れしぞ』と。二二此の外のユダの行爲、彼の戰、彼のなせし勇ましきわざ、また彼の偉大なることなど、ここに録されず。それらは甚しく多ければなり。

二三ユダの死ねる後、不法なる者どもイスラエルのすべての境に頭を出し、惡を行へるすべてのものども起ち上れり。二四その頃いと大なる飢饉ありしかば、國を舉げて彼等に傾けり。二五而してバクキデス神を信ぜざる人々を選びて、これを國の長となせり。二六彼等ユダの友等を探し出して、これをバクキデスの許に伴ひ行きしかば、かれ彼等に仇を報い、彼等を嘲りぬ。二七かくてイスラエルに、預言者の彼等に現れずなりし時より以來なかりし程の大なる患難ありき。二八ユダのすべての友等ともに集ひ、ヨナタンにいひぬ二九『汝の兄弟ユダ死にたれば、我らの敵とバクキデスに向ひて、また我らの民のうちにて我らを憎む者の間に進み行く、彼の如き人なし。三〇されば我等この日、汝を選び、彼に代りて我らの主君また將帥となす。これ汝我等の戰をなさんがためなり。』三一かくてヨナタン主權をとり、その兄弟ユダに代りて起ちぬ。

三二バクキデスこれを知りしかば、彼を殺さんことを求めぬ。三三ヨナタンとその兄弟シモンまた彼と偕にありしすべてのものこれを知りぬ。而して彼等テコアの荒野に逃れ、アスパルの池の水際に營を張りぬ。三四バクキデス安息日にこれを知り、彼とそのすべての軍隊、ヨルダンを越え來りぬ。三五ヨナタン民の指導者なる彼の兄弟を遣して、彼の友なるナバテヤ人等に彼等の荷物多ければ、これを彼等に託することを乞ひぬ。三六ヤンブリの子らメダバより出で來り、ヨハネと彼のすべての所有物とを奪ひて彼等の途に行けり。

三七されど此のことありし後、ヨナタンとシモンに、ヤンブリの子ら大なる婚禮をなし、カナンの一人の大なる貴族の娘を新婦とし、大なる行列をもて、ナダバより伴ひ來ると告げしものあり。三八ここに於て、彼等その兄弟ヨハネを想ひ起し、出で行きて、身を山陰に匿せり。三九彼等眼を舉げて見しに、視よ、大なる騷音と多くの荷物、新郎、また彼の友だちと兄弟たち、鐃鈸

と歌う者と多くの武器とをもてる彼等に會はんとて進み來れり。四〇彼等その待伏せし所より彼等に向ひて起ちあがり、これを殺せり。多くのもの傷き倒れて死に、殘れるもの山に逃れしかば、彼等そのすべての所有物を奪ひとれり。四一かくて婚禮は喪に變り、歌う者の聲は哀悼に變れり。四二かくて彼等、その兄弟の血は、思ふままに響いて、ヨルダンの沼地に歸りたり。

四三バクキデスこれをききて、安息日に、大軍を率ゐてヨルダンの岸に來りぬ。四四その時ヨナタン彼のともがらにいひぬ『我ら今起ちあがりて我らの生命のために戰ふべし。そは今日は昨日にも一昨日にもあらず。四五そは視よ、われらの前にも後にも戰あり。かつヨルダンの水、此方にも彼方にもあり、また沼と森とありて、身をめぐらすべき所なし。四六されば今、汝等、汝らの敵の手より救はれんがため天に向ひて呼はれ。』四七かくて戰交へられ、ヨナタンはバクキデスを撃たんとて手を差し延べしが、彼身をめぐらして去れり。四八ヨナタン及び彼と偕にありしものどもヨルダンに躍り入り、彼方の岸に泳ぎ行きぬ。されど他の者らは、彼等に向ひてヨルダンを渡らざりき。四九此の日バクキデスの徒凡そ一千人斃れたり。五〇かくて彼エルサレムに歸りぬ。而して彼等ユダヤに、諸の堅固なる町を建て、エリコにありし砦、エマオ、ベテホロン、ベテル、テムナテ、パラトン、及びテポンを、高き石垣と門と關とをもて堅めたり。五一而して彼イスラエルを苦むるために、そこに衞兵を置きぬ。五二彼またベテスラの町とガザラと城塞とを堅めて、軍隊を置き、糧食を貯へぬ。五三且かれ國の主なる人々の子らを人質とし、彼等をエルサレムの城塞の獄に投じたり。

五四第百五十三年の二月に、アルキモ、聖所の中庭の石垣を崩すことを命じ、預言者たちの遺業を毀ちぬ。五五而してこれを毀ち始めしその時、アルキモ打たれて、彼の企圖妨げられ、その口鎖され、中風にかかりて、もはやものいうことも、己が家事につきて命ずることも能はずなりぬ。五六かくてアルキモ大なる苦痛をもて死ねり。五七バクキデス、アルキモの死にしを見しかば、王の許に歸れり。かくてユダの地、二年の間、休息を得たり。五八而してすべての不法なる人々ともに謀りていひけるは『視よ、ヨナタン及び彼とともなるものども安全に、かつ平穩に住み居れば、我ら今、バクキデスを伴ひ來るべし。かれ一夜の内に彼等を捕へん。』五九彼等行きて彼と謀りぬ。六〇ここに於て彼進み出で、大軍を率ゐ來りて、祕密に書をユダヤに居るすべての同盟者に送り、ヨナタン及び彼と偕に居る者どもを捕ふべきことを告げたり。されど彼等能はざりき。彼等の計畫ユダヤ人等に知られたればなり。六一而してヨナタン及びともに居る人々、惡を行ふものなる、その國の人々凡そ五十人を捕へてこれを殺したり。六二ヨナタンとシモン、及び彼等と偕にありし人々、彼等を遠く荒野にあるベテバシにつれ行き、さきに倒され

しものを建ててこれを堅めたり。六三バクキデスこれを知りしかば、その軍勢を集めて、ユダヤに居る者どもに言ひ送れり。六四彼進みゆき、ベテバシに向ひて營を張り、久しきに亙りてこれと戰ひ、攻城機を据ゑたり。六五ヨナタンはその兄弟シモンを町に殘し置きて田舍に赴きしが、彼は少數の人々と共に行けり。六六而して彼オドメラとその兄弟たち、及びパシロンの子らをその天幕にて撃てり。六七彼等、それらのものどもを撃ち、力増加りて進み始めぬ。シモン及び彼と共なる人々は町を出でて、攻城機に火を放ち、六八バクキデスと戰ひしかば、バクキデス彼等のために敗られ、彼等いたく彼を苦めぬ。そは彼の計略と攻撃空しくなりたればなり。六九彼、己に此の國に來るべきことを勸めし不法なるものどもに對して甚しく怒り、その多くのものを殺せり。されど自らは己が地に去らんと思へり。七〇ヨナタンこれを知りて彼の許に使者を遣せり。これ彼等互に和睦をなし、且かれをして捕虜を彼等に返さしめんがためなり。七一かれこれを諾し、その言に從ひて行ひ、一生の間害を加へざることをヨナタンに誓へり。七二ここに於て彼、さきにユダの地より捕へたりし捕虜を、彼に返し、去りて己が國に歸り、もはや彼等の國境に來らざりき。七三かくてヨナタンはミクマシに住み、民を審き始めて、イスラエルの中より神を信ぜざる者どもを取除けり。

第一〇章

一第百六十年にアンテオコスの子、アレキサンドル・エピパネス上り來りてトレマイを占領しけるが、人々彼を受けたれば、彼そこにて世を治めたり。二デメトリオ王これをきき、いと大なる軍隊を集め、彼と戰はんとて出で來れり。

三デメトリオ、平和の言をもて、ヨナタンに書を送り、彼を崇めんとせり。四デメトリオいひぬ『彼我等に對してアレキサンドルと和睦をなす前に、我等まづ彼等と和睦をなすべきなり。五そは彼、我らが彼に對して、又彼の兄弟たちと彼の國人とに對して犯しすべての惡を憶ゆべければなり。』六デメトリオ彼に、己が同盟者とならんがために、軍隊を集め、武器を給する權を與へたり。而してかれ、城塞にありし人質をヨナタンに渡すべきことを命じたり。

七ヨナタン、エルサレムに來り、その書を讀みて、すべての民と、城塞にありし人々とに聽かしめしに、八彼等王がかれに軍隊を集むる權を與へしことをききし時、いたく恐れたり。九而して城塞に居る人々ヨナタンに人質を渡したれば、かれこれをその親たちに返したり。一〇ヨナタン、エルサレムに住み、町を建てなほし始めぬ。一一彼働くものに、石垣を築き、シオンの山を防ぐために、四角なる石をその周圍にめぐらすべきことを命じければ、彼等これをなせり。一二ここに於てバクキデスの建てたる砦にありし他國人等逃れて、一三各自その所を後にし、己が國に

去り行けり。一四かくてただベテスラに、律法と誡を捨てたる人々の或もの殘れるのみなりき。其處は彼等にとりて隱逃の場所なりければなり。

一五アレキサンドル王、デメトリオがヨナタンに送りしすべての約束を受けり。人々彼に、ヨナタンとその兄弟たちのなしし戰と勇しきわざ、また彼等が忍びし勞苦につきて語りしかば一六彼いへり『我らかくの如き人を他に見出すべきや。我ら今かれを我等の僚友となし、同盟者となさん。』一七かくてかれ書を記してこれをヨナタンに送り、此等の言をもていへり。

一八『アレキサンドル王、兄弟ヨナタンの平安を祈る。一九我ら汝につきて、汝は勇しき強き人にして、我らの僚友たるに相應しきことを避けり。二〇されば我等此の日汝を立てて汝の國の大祭司となし、王の僚友と呼ばれしめ(かれ紫の衣と金の冠とをヨナタンに送れり)、我等のわざに與り、我等と友情を保たしめんとす。』

二一第百六十年の七月、假庵の祭日に、ヨナタン聖き衣を身に纏ひて、軍隊を集め、これに武器を豐に給したり。

二二デメトリオ此等のことをききしかば、憂へていへり二三『此の我らのなししことは何ぞや。アレキサンドル己を強めんがため、我等をさしおきて、ユダヤ人等と好を通ぜしか。二四われも彼等がわれとともにありてわれを助けんがため、奬勵と名譽と贈物とにつきて、彼らに書き送らん。』二五かくて彼これらの言を彼等に書き送れり

『デメトリオ王ユダヤ國民の平安を祈る。二六汝等は、我等と結び汝等の契約を守り、我等との友情を續け、我等の敵と好を通ぜざることを聽きたれば、我等これを喜とす。二七されば汝ら猶我等との契約を保ち續けよ。さらば我等汝らに、我等に對して汝等のなししことの返禮として、善きものを報い、二八汝らに多くの免除を與へ、かつ汝等に贈物をなさん。二九されば我今汝等に自由を與へ、すべてのユダヤ人に、貢租と鹽税と王室税とを免除す。三〇またわが受くべき種の三分の一と果實の半を、今日より以後免除す。われこれを此の日より以後いつまでも、ユダの地より、又サマリア及びガリラヤの國より加へられたる三つの政府より取らざるべし。三一エルサレムとその境は聖なれば、十一税と國税を免除せらるべし。三二我またエルサレムにある城塞を支配するわが權威を讓りて、これを大祭司に與ふ。これ彼がこれを守るに相應しき人々を選ばんがためなり。三三ユダの地よりわが王國の如何なる所へなりとも俘虜として引き行かれしユダヤ人は、我悉く無償にてこれ自由を與へん。又すべての物その家畜の税をも免除せらるべし。三四またすべての祭日、安息日、新月祭、定められたる日、祭日前の三日、及び祭日後の三日はすべて、わが王國内にあるすべてのユダヤ人にとりて、免除と解放の日たるべし。三五而して何人も彼等より強要し、また何事につきても、彼等を惱す權威を持たざるべし。三六

又王の軍隊に、凡そ三萬人のユダヤ人編入せられ、すべて王の軍隊に屬するもの如く、報酬を與へらるべし。三七 彼等のうち或者どもは、王の大なる要害に置かるべき、また彼等の或ものは王國の重職に任ぜらるべし。彼等を治むるもの、彼等の有司たちは、ユダの地に於て王の命じたる如く己等の律法に歩むべし。三八 サマリヤの國よりユダヤに加へられたる三つの政府はユダヤに合せらるべし。これ彼等大祭司以外の權威に從はざるやう一つに見なされんがためなり。三九 トレマイ及びその附近の地につきては、我これをエルサレムにある聖所に贈物として與へたり。四〇 マリア、われ領土より得る王室の收入より年毎に銀一萬五千シケルを與ふ。四一 役人等が、さきの年に滯納せしものをば今より後悉く神の家の働に充つべし。四二 この他に彼等が年毎に聖所の費用としてその收入より受けし銀五千シケルは奉仕をなす祭司に關るものなれば、これもまた解除せらるべし。四三 誰にてもエルサレムにある宮に逃るるもの、またはその境内に居るものは、王に對して金銀または何物かを負ふとも自由なるべく、又彼等がわが國内に所有するものは悉く安全なるべし。四四 而して聖所の工事、及び修繕につきては、その費用もまた王室の收入より給せらるべし。四五 またエルサレムの石垣の建造、その周圍の防備につきても、その費用王室の收入より給せらるべし。ユダヤに於ける石垣の建造につきても亦然りとす。』

四六 ヨナタンと民ら此等の言を聽きし時、これを信ぜず、またこれを受けざりき。そは彼等かれがイスラエルになしし大なる惡と、かれが彼等を甚しく苦めしことを憶ゆればなり。

四七 これに反して彼等はアレキサンドルを喜べり。かれは彼等に平和の言を語りし初の人なりしかば、彼等常にかれと同盟を結べり。四八 アレキサンドル王大軍を集め、デメトリオに對して戰を挑みぬ。四九 而して二人の王、戰を交へしに、デメトリオの軍隊逃れしかば、アレキサンドルこれを追擊ちて彼等に勝ちぬ。五〇 而してかれ日の入るまで激戰を續けしかば、その日デメトリオ遂に斃れたり。

五一 アレキサンドル、エジプト王プトレミオに書を送り、此等の言をもていへり五二『我わが國に歸り、わが父祖の位に即きて主權を握り、デメトリオを斃して、我等の國を得たり。五三 然り、我かれと戰を交へしに、かれとかれの軍隊我等によりて敗られ、我等かれの王國の位に坐しぬ。五四 されば今、我等互に親善をなさん。われに汝の娘を妻として與へよ。さらば我汝と父子の關係を結び、汝と汝の娘に、汝に相應しき贈物をなさん。』五五 プトレミオ王答へていひけるは『善いかな、汝が汝の父祖の地に歸り、その王國の位に坐しし此の日。五六 われ今、汝の記したる如く汝になさん。されど、我等互に相見えんがため、トレマイにて我と會せよ。さらば、われ汝のいへる如く、汝と父子の關係を結ばん。』五七 かくてプトレミオ、エジプトより出で行けり。彼とかれの娘クレオパトラは、第百六十二年にトレマイ

に來りぬ。五八アレキサンドル王彼に會ひ、彼にその娘クレオパトラを與へ、王たちの習慣に從ひ、トレマイには、華やかに婚禮を行へり。
五九その時アレキサンドル王、ヨナタンに、彼と會ふために來るべきこと書き送れり。六〇ヨナタン威儀を整へてトレマイに赴き、二人の王に會ひて、彼等と彼等の友等に、金銀と多くの贈物とを與へ、彼等の前に喜を得たり。六一然るに彼に逆ひて、イスラエルより惡しき徒輩、即ち律法を犯すものども集り來り、彼につきて呟きしが、王彼等を顧みざりき。六二王人々に命じて、ヨナタンにその衣を脱がせ、これに紫の衣を着せしめたれば、彼等かくなしぬ。六三王ヨナタンを彼と偕に坐せしめ、己が君侯たちにいへり『彼と共に町の中央に行き、公に告げて、何人も彼に逆ひて呟くことなく、また如何なることにつきても彼を惱すことなからしむべし』と。六四彼に逆ひて呟きしものども、公に告げられし彼の光榮を見、紫の衣を着たる彼を見て逃げ去れり。六五王彼に光榮を與へ、その主なる僚友の間に彼につきて書き送り、彼を將軍となし、一州の方伯となせり。六六かくてヨナタンは平安と歡喜をもてエルサレムに歸りぬ。
六七然るに第百六十五年に、デメトリオの子なるデメトリオ、クレタを出でてその父祖たちの地に來れり。六八アレキサンドル王これをききしかば、いたく憂へて、アンテオケに歸りぬ。六九デメトリオは、ケレスリヤを治めしアポロニオを立てしかば、かれ大軍を集めて、ヤムニヤに營を張り、大祭司ヨナタンに使者を送りていへり
七〇『汝のみ我等に逆ひて己を高しとす。されど我は汝の故に嘲り罵らる。いかなれば汝、山地にて我らに逆ひ、汝の力を誇るや。七一されば今、汝もし、汝の力に頼らば、我等の許に、此の平原に下り來れ。そこにて我等ともに事を決せん。そは町々の力我等と共にあればなり。七二我と我を助くる他の者は誰なるかを、問ひて知れ。彼等いふ『汝らの足は我等の前に立つを得ず、そは汝らの先祖たちは再度、彼等の地に於て敗走りたればなり』と。七三されば今汝ら平原に於てかかる騎兵と軍勢とに堪ふること能はざるべし。ここには小石も石もなく、逃るる所もなきなり。』
七四ヨナタン、アポロニオの言を聞くや、心動かされ、十萬人のものを率ゐてエルサレムより出でしが、その兄弟シモン彼を助けんとて彼に會せり。七五彼ヨッパに對して營を張りしが、町のものども彼を閉ぢ込めたり。そはアポロニオ、ヨッパに衞兵を有したればなり。七六彼等これに對して戰を交へしかば、町の人々恐れて、彼のために開きたり。かくてヨナタンはヨッパの長となれり。七七アポロニオこれをききしかば、三千の騎兵隊と大軍とを集め、旅するが如くアゾトに出で、そこより平野に進み入らんとせり。そは彼騎兵の大軍をもちて、これに依り頼みたればなり。七八ヨナタン、アゾトにて彼に追ひつき、ここにて

兩軍、戰を交へたり。七九アポロニオ私に彼等の後に千人の騎兵を殘したりしが、八〇ヨナタンはかれの後に伏兵あるを知れり。彼等ヨナタンの軍隊を取り圍み、朝より夕に至るまで、民に矢を投じたり。

八一されど人々ヨナタンの命ぜし如く動かざりしかば、遂に敵の馬疲れたり。八二ここに於てシモンその軍勢を進め、方陣をもて戰を交へぬ（騎兵盡きたればなり）。而して彼等かれに由りて取られ、逃れ行けり。八三騎兵は平野に散らされて、アゾトに逃れ、己等を救はんとして、彼等の偶像の宮なるベテ・ダゴンに入りぬ。八四而してヨナタンはアゾトとその周圍の町々を燒き、彼等の所持品を奪へり。またダゴンの宮をも、その中に逃れ入りしものどもを、火をもて燒きぬ。八五かくて劍によりて斃れたるものと、燒かれたるものとは、凡そ八千人に達したり。八六ヨナタンそこより進み、アケシロンに向ひて營を張りしが、町の人々盛大に彼を迎へんとて出で來れり。八七ヨナタンは彼の傍にありし人々と共に、多くの分捕物をもて、エルサレムに歸れり。八八アレキサンドル王これをききしかばますますヨナタンを崇めたり。八九彼ヨナタンに金の締金を送りしが、これは王たちの血族に與ふるため用ひらるるものなり。而して彼ヨナタンにエクロンとその境を所領として與へたり。

第一一章

一エジプトの王、濱の眞砂の如き大軍と多くの軍艦とを集め、虛僞をもて自らアレキサンドルの國の主權を奪ひ、これを己の國に加へんことを求めたり。二かれ平和の言をもてスリヤに到りしかば、町々の人々かれのために門を開きて、これを迎へたり。そは彼はその舅なりければ、アレキサンドル王、彼等に、これを迎ふべきことを命じたるなり。三さて彼トレマイの町々に入りし時、各の町に、守備隊としてその軍隊を屯せしめたり。四されど彼アゾトに近づきし時、人々彼に、火にて燒かれたるダゴンの宮と、荒らされたるアゾト及びその周圍の地と、外に捨てられし屍體と、戰爭にて燒かれたる者どもを示したり。そは其等のもの彼の途に積み重ねたればなり。五人々ヨナタンを責めんとて、彼が何をなししかを、王に告げしに、王はその口を噤みたり。六ヨナタン、ヨッパにて盛大に王を迎へ、彼等互に挨拶して、ともに其處に眠れり。七ヨナタン、王と共にエルテロと呼ばるる河まで來り、而してエルサレムに歸れり。八されどプトレミオ王海に沿へるセルキヤに至るまで、海邊の町々の主權を握り、アレキサンドルについて、悪しき謀略をめぐらせり。九彼デメトリオに使者を遣はして、いひけるは『來れ、我等互に契約をなさん。さらばわれ汝に、アレキサンドルのものとせしわが娘を與へん。而して汝は汝の父の國を治むべし。一〇われ、わが娘をアレキサンドルに與へしことを悔ゆ。そは彼われを殺さんと

謀ればなり。』一一彼、かくアレキサンドルを誹れり。そは彼、その王國を貪り居たればなり。一二而してかれ己が娘をアレキサンドルより奪ひて、これをデメトリオに與へしかば、二人の間隔たりて、あらはに敵意をもつに至れり。一三プトレミオ、アンテオケに入りて、自らアジアの王冠を戴き、二つの王冠、即ちエジプトの王冠とアジアの王冠とを、その頭に戴けり。一四アレキサンドル王は、その時キリキヤにありき。その地方の人々背き居たればなり。一五而してアレキサンドル、プトレミオのなせしことをきき、彼と戰を交へんとて來りしかば、プトレミオ進み出で、大軍をもて彼を迎へ撃ち、これを潰走せしめたり。一六かくてアレキサンドルはアラビヤに逃れ、そこに身を隱さんとせしが、プトレミオ王は高められたり。一七さればアラビヤ人、ザブデエル、アレキサンドルの首をとりて、これをプトレミオに送れり。一八然るにプトレミオ王三日の後に死に、彼の砦にありし或者どもは、その砦にありし他の者どもによりて殺されたり。
一九而して第百六十七年にデメトリオ、王位に即けり。
二〇その頃ヨナタン、ユダヤの人々を集めて、エルサレムにある城塞を奪はんとし、多くの攻城機を造れり。二一己が國人を憎みし或ものども、即ち律法を犯せしものども王の許に到り、彼にヨナタンが城塞を圍み攻むることを告げたり。二二王これをききて怒りぬ。されどこれをききし時、直に出でてトレマイに來り、ヨナタンに、これを圍み攻むべからざることと、トレマイに急ぎ來りて彼に會ひ、彼と語るべきこととを書き送れり。二三されどヨナタンこれをききし時、猶圍み攻むることを命じ置きて、イスラエルの長老及び祭司の或ものを選び、自ら危險を犯して、二四金銀、衣服、及び種々の贈物を携へ、王に會はんとしてトレマイに赴きぬ。而して彼、王の前に寵を得たり。二五その時民のうちのある不法なるものども、ヨナタンに逆ひて呟きぬ。二六されど王は彼に對してその先輩のなししが如くなし、かれをその僚友の前に高め、二七大祭司の職と、さきに彼のもちしすべての名譽とを堅うし、その主なる僚友の間に彼を崇めたり。二八ヨナタンは死に、ユダヤと三州、及びサマリヤの國が貢賦を免除せられんことを求め、彼に三百タラントを納むべきことを約束したり。二九王はこれを許し、すべて此等のことにつきて、次の如き書を送れり。
三〇『デメトリオ王、兄弟ヨナタン及びユダヤ國民の平安を祈る。三一我等、汝らにつきて、我等の親族ラステネに書き送りし書の謄寫を、汝らも見んがために、汝らに書き送る。三二デメトリオ王、父ラステネの平安を祈る。三三我等、われらの友なるユダヤ人が我等に示しし好意の故に、彼等の國に善をなし、我等にとりて義しき事を守ることを決心せり。三四されば我等、彼等は、ユダヤの地、及びさきにサマリヤの國より加へられしアペレマ、ルダ、ラマタイムの三地方と、彼等に關係あるすべてのものを堅く保證せり。これエルサレムにて犧牲をささぐるすべて

の人々のためにして、彼等は、王がさきに年毎に、彼等より受けし地の生産物と果實とを納むるを要せざるなり。三五今より後我等に關る他のことにつきては、即ち我等に關る十一税と國税、また我等に關る鹽税と王室税とにつきては、我等これをすべて彼等に與へん。三六而して此等のものの一つだに、今より永久に無效とせられざるべし。三七されば今、意を用ひて此の書の寫を作り、これをヨナタンに與へて、聖なる山の上にて、適當なる著しき所に掲げしむべし。』

三八デメトリオ王、その國かれの前に平穩なることと、彼に抵抗ふものなきこととを見て、異邦人の島々より起し用ひし兵士等の他は、そのすべての兵士等を各自己が國に歸らしめたり。然るに彼の父祖たちの軍隊は皆彼を憎みぬ。三九さて、さきにアレキサンドルに屬せし人々の中の一人なるトルポンは、すべての軍隊のデメトリオにつきて呟くを見て、アレキサンドルの若き子アンテオコスを養育せしアラビヤ人エマルクの許に到り、四〇父に代りて王とならしむれば彼を渡せと迫れり。而して彼、デメトリオのなししことと、その軍隊がデメトリオを憎みしその憎惡とをエマルクに告げ、多くの日の間ここに留まれり。

四一さてヨナタン、デメトリオ王に使者を遣して、城塞に居る人々及び砦に居る人々は絶えずイスラエルに逆ひて戰ふが故に、これをエルサレムより追ひ出さんことを求めたり。四二デメトリオ使者をヨナタンに送り、これに答へていひけるは『我は唯汝と汝の國のためにこれをなすのみならず、もし我よき機を見出さば、汝と汝の國を大に崇むべし。四三されば今汝もしわがために戰ふ人々をわが許に遣さば、汝はよきことをなすなり。そはわが軍隊皆背けばなり。』四四ここに於てヨナタン三千人の勇士たちをアンテオケに遣せり。彼等王の許に到りしかば、王これを喜べり。四五その時町の人々、町の中央に共に集りて、その數十二萬人に達せしが、彼等王を殺さんと欲せり。四六王は宮殿の中庭に逃れ、町の人々は町の通路を占領して、戰を始めぬ。四七而して王ユダヤ人等を呼びて己を助けしめしかば、彼等直ちに共に集りて、各自町の中に散り行き、その日の内に、十萬人に達する程のものを殺せり。四八而して彼等その日町に火を放ちて、多くの分捕物を得、かつ王を救ひ出せり。四九町のものども、ユダヤ人等のその欲する如くに町の主權を握れるを見て、その心いたく弱り、王に嘆願して、いひけるは五〇『我等に汝の右の手を與へて、平和をなせ。而してユダヤ人等に我らと我らの町に對する戰を止めしめよ。』五一彼等その武器を投げ出して平和をなし、ユダヤ人等は王の前に、またその王國にありしすべての人々の前に崇められ、多くの分捕物をもてエルサレムに歸れり。五二デメトリオ王はその國の王位につき、地は彼の前に平穩なりき。五三されど彼の語りし所はすべて僞にして、自らヨナタンより遠かり、ヨナタンが己に與へし益に從ひて彼に報いず、甚しく彼を惱ませり。

五四 さて此の後トルポン、少年アンテオコスとともに歸り、アンテオコス主權を握りて王冠を戴きぬ。五五 而してさきにデメトリオの辱めて去らしめしすべての軍隊、彼の許に集り、デメトリオに逆ひて戰ひしかば、デメトリオ敗走りぬ。五六 トルポン象を奪ひて、アンテオケを占領せり。五七 然るに若きアンテオコス、ヨナタンに書を送りていひけるは『われ汝の大祭司職を堅うし、汝に四州を治めしめ、汝を王の僚友の一人となす。』五八 而して彼ヨナタンに、金の器具と食器とを與へ、金杯にて飲み、紫の衣を着、金の締金を用ふることを許したり。五九 またヨナタンの兄弟シモンを、ツロの階梯よりエジプトの境に至るまでの將軍となせり。六〇 ここに於てヨナタン出でて河向に到り、町々を巡回れり。而してスリヤのすべての軍隊彼の許に集りて、彼の同盟者となれり。彼アシケロンに來りしに、町の人々禮を盡して彼を迎へぬ。六一 然るにそこよりガザに到りし時、町の人々彼に門を鎖しければ、彼これを攻め圍み、火を放ちて町の周圍を燒き、掠奪を行へり。六二 而してガザの人々ヨナタンに乞ひしかば、彼その右の手を彼等に與へ、その君侯たちの子らを人質として、エルサレムに送り、彼はその國を通りてダマスコまで到れり。

六三 その時ヨナタン、デメトリオの君侯たちが、かれをその職より黜けんがために、大軍を率ゐてガリラヤのケデシに來りしことを聽きしかば、六四 これを擊たんとて出でしが、その兄弟シモンをば國に殘せり。六五 シモンはベテスラに對して營を張り、多くの日の間これと戰ひ、これを封鎖したり。六六 彼等かれにその右の手を與へんことを求めたればこれを與へ、彼等をそこより出して、町を占領し、守備隊をそこに置けり。六七 ヨナタンとその軍隊ゲネサレの水のほとりに營を張り、朝早くハヅルの平野に出でたり。六八 而して視よ、異國人の軍隊、山に伏兵を置きて、平野に彼を迎へ、彼と相接して對しぬ。六九 然るに待伏し居りしものどもその所より起ち上りて軍に加はりしかば、ヨナタンの傍に居りしもの悉く逃れ、七〇 軍隊の將なるアブサロムの子、マタテヤとカルピの子ユダの他は一人も殘らざりき。七一 ここに於てヨナタンその衣を裂き、頭に土を蒙りて祈りぬ。七二 而して彼再び彼等と戰ひてこれを敗りしかば、彼等逃れたり。七三 彼の傍より逃れしものどもこれを見て、彼の許に歸り、彼とともに敵を追ひてケデシなるその陣營まで到り、そこにてこれを圍みたり。七四 その日異國人の斃れしもの凡そ三千人なりき。かくてヨナタンはエルサレムに歸れり。

第一二章

一 ヨナタン時のよきを見て、人々を選び、これをロマに遣して、さきに彼等と交したる友情を堅うし、またこれを新にせんと欲せり。二 彼またスパルタ及び他のもろもろの所に、同じく書を送れり。三 彼等ロマに到り、元老院に入りていへり『大祭司ヨナタ

ン及びユダヤ國民、彼等のために、さきの日に於けるが如く友情と同盟とを堅うせしめんとて我等を遣せり』と。四 而してロマ人彼等に、各所の人々への書を與へて、安全にユダの地に歸ることを得しめたり。五 而してこれはヨナタンがスパルタ人等に書き送りし書の寫なり。

六『大祭司ヨナタン、國の長老、祭司、及び他のユダヤ國民、彼等の兄弟スパルタ人の平安を祈る。七 さきに汝らを治めたりしダリヨスより大祭司オニヤに書を送りて、汝等は我等の兄弟なることを告げしは、ここに記さるる寫の示すが如し。八 オニヤは遣はされたる人々を禮を盡してもてなし、同盟と友情との宣言の記されたる書を受けたり。九 我等は、我等を慰め勵ます聖書を我等の手に持てば、此等のものの何をも要せざれども、一〇 汝等より全く離れざらんがため、汝等との兄弟愛と友情とを新にせんとて書を汝等に送ることを試みたり。一一 そは汝等書を我等に送りてより長き時を經たればなり。一二 されば我等如何なる時にても止むることなく、我等の祭日に、また他の相應しき日に、我等のささぐる犧牲の中に、また我等の祈禱の中に、汝等を憶ゆ。そは我等兄弟たちを憶ゆるは正當にしてなすべきことなればなり。一三 かつ又われ汝等の光榮の故に喜ぶ。一四 されど我等のことにつきては、多くの患難と多くの戰爭我等を取り巻き、我等の周圍の王たちは、我等に逆ひて戰へり。一五 されば我等は此等の戰爭に於て、汝等と我等の同盟者、及び友等を煩はすことを欲せざりき。一六 そは我等、我等を助くるために天より來れる助をもち、我等はわれらの敵より救はれて、我等の敵は低くせられたればなり。一七 されば我等アンテオコスの子スタニオ、及びヤソンの子アンテパテルを選びて、ロマに遣し、我等と彼等との間の友情、及びさきの日の盟約を新にするために我等の書を汝等に渡さしめたり。一八 これにつきて汝等、われらに返書を與へなば幸なり。』

一九 又彼等がオニヤに送りし書の寫は次の如し。

二〇『スパルタ人の王アリオス、大祭司オニアの平安を祈る。二一 記錄に見出さるる所によれば、スパルタ人とユダヤ人とは兄弟にして、共にアブラハムの裔なり。二二 我等これを知りたれば、汝等己が平安につきて我等に書を寄するはよし。二三 我等もまた、汝等の家畜と所有物とは我等のものにして、我等のものは汝らのものなることを、汝らに書き送る。されば我等、彼等がかくの如く汝等に報告せんことを命ず。』

二四 ヨナタンは、デメトリオの君侯たち、前よりも大なる軍勢を率ゐ、彼と戰はんとて歸り來れるを聞きしかば、二五 エルサレムより歸り、ハマテの國にて彼等を迎へたり。彼等を己が國に一足だも入らしめざらんためなり。二六 彼その陣營に間者たちを遣ししに、歸り來りて、彼等が夜の間にかくかくの方法にて攻めかかるやう命ぜられたることを復命したり。二七 されど日の暮るるや否やヨナタンその兵士らに命じて、武裝して夜もすが

らの戰鬪に備へしめ、且陣營の周圍に哨兵を置けり。二八敵のものどもヨナタンと彼の兵士等戰鬪の準備をなしことを聽きしかば、心の中に恐れ慄き、陣營に火をともして去れり。二九されどヨナタンとその兵士等朝に至るまで、これを知らざりき。そは彼等燃ゆる光を見たればなり。三〇ヨナタン彼等を追ひしがこれに追ひつかざりき。そは彼等エルテロス河を越えて去りたればなり。三一ここに於てヨナタン踵をめぐらして、ザバデア人と呼ばるるアラビヤ人に向ひ、これを撃ちて、その所持品を奪へり。三二彼そこより進みてダマスコに來り、廣く國の中を巡廻れり。三三シモンは出で行きて、その旅程をアシケロンと、これに近き砦まで進め、遂にヨッパに到りてこれを占領したり。三四そは彼、かれらがその砦をデメトリオの人々に渡さんと思ひ居りしことを聽きたればなり。さればかれ守備兵を置きてこれを守らしめぬ。

三五ヨナタン歸りて、民の長老らを呼び集め、これと議りて、ユダヤに砦を造り、三六エルサレムの石垣を高くし、城塞と町との間に築山を作り、町と城塞とを隔て別ちて孤立せしめ、賣買することを得ざらしめんとせり。三七即ち彼等共に集りて町を築きしが、東側の小河の石垣落ち居りしかば、カペナタと呼ばるる所を繕ひたり。三八シモンは又平野の國にアデダを築きて、これに防備を施し、門と關とを造れり。

三九トルポンは、アジアを治めて、自ら王冠を戴き、アンテオコス王に對してその手を伸べんことを欲せり。四〇されど彼、ヨナタンの彼にかくなさしめざるべきことと、彼に對して戰を挑まんことを恐れて、ヨナタンを滅さんがため、いかにもしてこれを捕へんと欲せり。かくて彼進みてベテシャンに來れり。四一ここに於てヨナタン選拔せられたる四千人の兵を率ゐて、彼を迎へんとて出で、ベテシャンに來りぬ。四二トルポン彼が大軍を率ゐ來れるを見しかば、彼は手を伸ぶることを恐れ、四三禮を盡して彼を受け、これをそのすべての戰友等に推薦し、贈物を與へ、且その軍隊に己に對するが如く彼に服從すべきことを命じたり。四四かくて彼ヨナタンにいひぬ『我等の間に何の戰のなきに、何故汝は此等のすべての民を惱すか。四五されば今、兵士等をその家に歸らしめ、汝自らのために、汝と偕にあるべき少數の物を選びて、我と偕にトレマイに來れ。さらば我これを汝に與へ、且他の砦と他の軍隊とすべての役人等とを汝に與へん。而してわれは歸り去るべし。わが來れるはこのためなればなり。』四六ヨナタンは彼を信じて、そのいへる如くになし、その軍隊を去らしめたれば、彼等ユダの地に歸り來れり。四七されど彼三千人のものを己のために殘せしが、そのうち二千人をガリラヤに留め、一千人と共に出で行けり。四八さてヨナタン、トレマイに入るや否や、トレマイの人々門を鎖して、彼に手をかけ、彼と共に入り來りしすべてのものを劍をもて殺せり。四九而してトルポン、ヨナタンのすべての兵士等を滅さんとて、軍隊と

騎兵とをガリラヤに、即ちその大平原に遣れり。五〇兵士等ヨナタンの捕へられて殺されしことと、彼と偕に在りし者どもの殺されしこととを知り、互に勵しつつ密集してその道にすすみ、戰に備へたり。五一然るに彼等に向ひしものども、彼等が生命を賭けて戰はんとするを見しかば、再び歸り來れり。五二かくて彼等皆安全にユダの地に歸り、ヨナタン及び彼と偕にありし人々のために喪に服せり。而して彼等いたく恐れ、全イスラエル大なる哀悼をなせり。五三然るに彼等の周圍なるすべての異邦人等、彼等を全く滅さんことを求めたり。彼等いひぬ『彼等は主權者をも、彼等を助くる者をももたざれば、いざ我等、彼等と戰ひて、彼等の記憶を人々の間より取り去らん。』

第一三章

一その時シモン、トルポンが大軍を率ゐてユダの地に來り、これを全く滅さんとするを聽けり。二彼人々の慄きて大なる恐怖の中にあるを見しかば、エルサレムに上り行きて民等を共に集め、三彼等を勵ましていへり『汝らは、我とわが兄弟たちとわが父の家とが律法と聖所とに對してなししすべての事と、我らの見たる戰爭と患難とを知る。四これによりてわが兄弟たちは皆イスラエルのために死に、唯われのみ殘れり。五さればわれ、いかなる患難の時にも、決してわが生命を惜むことをせじ。われはわが兄弟たちに勝らざればなり。六われわが國人のために、わが聖所のために、またわが妻子等のために仇を報いん。そはすべての異邦人等甚しき憎惡をもて、我等を滅さんがために集へばなり。』七これらの言を聽きし時、民の精神新しき生命に燃えあがれり。八彼等大聲に答へていひけるは『汝は汝の兄弟ユダとヨナタンとに代るわれらの指導者なり。九汝われらのために戰へ。汝が我等に言ふことをばわれら悉くなすべし』と。一〇かくて彼すべての戰鬪員を集め、急ぎてエルサレムの石垣を繕はしめ、その周圍に防備を施したり。一一而して彼アブサロムの子ヨナタンを大軍と共にヨッパに遣しければ、彼そこに居りし者どもを追ひ出して、そこに留れり。一二トルポンはユダの地に入らんとし、大軍を率ゐてトレマイより進み出でしが、ヨナタンは俘虜として彼と共にありき。一三されどシモンは平野の彼方なるアデダに營を張れり。一四トルポンはシモンがその兄弟ヨナタンに代りて起ち、彼と戰を交へんとするを知り、使者を彼の許に遣していひけるは一五『我等が汝の兄弟ヨナタンを捕へたるは、彼がその職務の故に王の金庫に納むべき金錢のためなり。一六されば今、銀百タラントと人質のために彼の二人の子等とを送れ。こは彼解放せらるる時に我等に背かざらんがためなり。』一七シモンは彼等が彼に對して僞り語るを知れり。されど彼、民の大なる憎惡を買はんことを恐れて、金と子等とを彼等に送れり。一八即ち彼、金と子等とを送らざりし故にヨナタン死ねりと彼等の言はんことを恐れたる

なり。一九かくて彼金と子等とを送れり。然るにトルポン彼を欺き、ヨナタンを解放せざりき。二〇この後トルポン、國を侵略してこれを滅さんとて來り、アドラに通ずる途のほとりまで進めり。而してシモンとその軍隊とは、彼の行く處には、いかなる所までも進み出でぬ。二一さて城塞に居りし者どもトルポンの許に使者を遣し、荒野を過ぎて彼等の許に來り、彼等に糧食を送れと急立てたり。二二ここに於てトルポンそのすべての騎兵を備へしが、その夜大雪降りければ、彼その雪の故に來らざりき。而して彼進みてギレアデの地に來れり。二三されど彼バスカバに近づける時、ヨナタンを殺して彼を其處に葬れり。二四かくてトルポン身を廻らして己が國に去り行けり。

二五ここに於てシモン使者を遣して、その兄弟ヨナタンの骨を取り、これをその父祖の町モデインに葬りぬ。二六而して全イスラエル彼のために大なる哀悼をなし、多くの日の間喪に服したり。二七シモンその父と兄弟たちの墓に碑を建て、その後と前とを研きたる石もて作り、これを高く見えしめたり。二八かくて彼、その父のため、その母のため、またその四人の兄弟たちのために、七つの金字塔を作り、これを各相對せしめたり。二九而して此等に對して彼巧みなる工夫をめぐらし、その周圍に大なる柱を据ゑて、その上に永遠の記念としてあらゆる種類の武具を揃へ、且其等の武具の外に彫りたる船を置きて、海上を航する人々の此等のものを見得るやうにせり。三〇これは彼がモデインに造りたる墓にして、今日に至るまでそこにあり。

三一さてトルポン若き王アンテオコスを欺きて彼を殺し、三二彼に代りて自ら王となり、アジアの王冠を戴きて、大なる災害を國の上にもたらせり。三三シモンはユダヤの砦を築き、高き戍棲と大なる石垣と門と關とをもてその周圍をめぐらし、砦の中に糧食を貯へたり。三四かくてシモン、人々を選びてこれをデメトリオ王に遣し、國を免税にせんことを乞へり。トルポンのなししことはすべて掠奪のためなりければなり。三五デメトリオ王此等の言に對して彼の許に使者を遣し、彼に答へて次の如き書を書き送れり。

三六『デメトリオ王、大祭司にして王たちの僚友なるシモンとユダヤの長老、及び國民の平安を祈る。三七われら汝等の贈りし金冠と棕櫚の枝とを受けたり。我等は汝等と大なる平和をなし、我等の役人たちに書き送りて、汝等に免税を許可せんとす。三八我等の汝等に確言することはすべて確立せられん。汝等の築きし要害は汝等のものたるべし。三九今日まで犯されたる失錯と過誤とは我等これを赦さん。もしエルサレムに於て徵收せられたる他の税あらば、最早これを徵收せしめざるべし。四〇而してもし、汝等の中に我等の宮廷に入籍するに相應しきものあらばこれを入籍せしめ、我等の間に和睦をなさしむべし。』

四一第百七十年に異邦人の軛イスラエルよりとり除かれたり。

四二 かくて民ら、ユダヤ人の大將にして指揮者なる大祭司長シモンの第一年に、彼等の證書及び契約書に記入し始めたり。四三 その頃シモン、ガザラに對して營を張り、軍隊をもてこれを圍み、攻城機を作りて町に携へ來り、戍樓を撃ちてこれを取れり。四四 而してその攻城機の中にありし者ども町の中に躍り入りしかば、町の中に大なる鬨の聲起れり。四五 而して町の人々衣を裂き、その妻子等と偕に石垣に赴き、大聲に叫びて、シモンにその右の手を彼等に與へんことを乞へり。四六 彼等いふ『我等の弱きに從ひて我等をあしらわず、汝の慈悲に從ひてあしらえ。』四七 かくてシモン彼等と和睦し、彼等と戰はざりき。シモン彼等を町の外に出し、偶像のありし家々を潔めて、歌うたい、かつ讃美しつつ町に入れり。四八 彼凡ての汚穢を町の中より除去り、律法に從ふ人々を其處に置きて、これを前にありしよりも更に強きものとなし、そこに己の爲に住居を作れり。

四九 されどエルサレムの城塞に居る人々、外に出づることと他の場所に行くことと賣買することとを妨げられたれば、甚しく飢ゑ、彼等のうち多くの人々飢餓のために死にたり。五〇 彼等シモンに呼はりて、その右の手を彼等に與へんことを求めたればこれを與へぬ。而してかれ彼等を其處より出し、城塞をその汚穢より潔めたり。五一 かくて彼、第百七十一年の二月二十三日に、讃美と棕櫚の枝とをもて、琴をもて、鐃鈸をもて、胡弓をもて、聖歌をもて、また歌をもてこれに入れり。そは大なる敵イスラエルの中より滅されたればなり。五二 而して彼、年毎に歡喜をもて此の日を守るべきことを命じたり。城塞の傍にありし神の宮の丘をば、前よりもこれを強くし、彼とそのともがらそこに住めり。五三 シモン、その子ヨハネの勇しき人なるを見、彼を全軍の指揮者となせり。ヨハネはガザラに住みぬ。

第一四章

一 第百七十二年にデメトリオ王軍隊を集め、トルポンと戰はんがために援助を得んとてメデヤに赴きたり。二 ペルシャ及びメデヤの王アルサケ、デメトリオが彼の國境まで來りしことを聽き、これを生捕らんとてその君侯の一人を遣したり。三 而してかれ往きてデメトリオの軍隊を撃ち、彼を捕へてアルサケの許につれ來りしかば、アルサケこれを獄に投じたり。

四 かくて國はシモンの一生の間平安なりき。彼その國の善を求め、彼の權威と光榮その一生の間人々に喜ばれたり。五 そのすべての光榮の中にて彼はヨッパを取りて港とし、これを海の嶋々への關門となせり。六 彼またその國境を擴くし、國の所有を確くせり。七 而して彼捕虜の夥しき數を集めて、ガザラとベテスラと城塞とを奪ひ、その汚穢を除去りしが、何人もこれを止めざりき。八 彼等平和にその地を耕したれば、地その收穫を殖し、平野の木々はその果を増しぬ。九 老いたる人々は巷街に坐し、皆その善きものをもて共に交り、若き人々は光榮ある戰衣

を身に纏へり。一〇シモンは町々に糧食を供給し、あらゆる種類の軍需品を彼等に供給せしかば、光榮ある彼の名、地の極にまで傳へらるるに至れり。一一彼地に平和をもたらししかば、イスラエル大なる歡喜をもて喜びぬ。一二彼等各自その葡萄樹と無花果樹の下に坐し、そこには彼等を恐れしむる何ものもなかりき。一三地には彼等に對して戰をなす者絕え、王たちはその時、みな敗れたり。一四彼は低くせられたるその民のすべてのものを強め、律法を探り、不法なる惡しき者は悉く除去れり。一五彼はまた聖所を崇めて、宮の聖器を增し加へたり。

一六さてヨナタンの死にしことロマに、またスパルタにまで聞えしかば、彼等いたくこれを悲めり。一七されど彼等、彼の兄弟シモンが彼に代りて大祭司となり、その國とその町々とを治むることを聽くや否や、一八彼等がユダとヨナタンとに立てた友誼と盟約とを、新に彼と取りかはさんとて、書を眞鍮の板に記して彼の許に送れり。一九而してそれはエルサレムの會衆の前にて讀まれたり。二〇そのスパルタ人によりて送られし書の寫はこれなり。『スパルタ人の有司たち及び町は、大祭司シモン、長老、祭司、及び我等の兄弟なるユダヤ國民の平安を祈る。二一我等の民の許に遣されたる使者たち汝等の光榮と名譽とにつきて我等に報告せり。我等、彼等の來れるを喜び、二二彼等によりて語られし事どもを、かくの如く公文書に錄せり。ユダヤ人の大使なるアンテオコスの子ヌメニオ及びヤソンの子アンテパル、彼等と我等との間にありし友情を更新せんとて、我等の許に來れり。二三されば禮を盡して此等の人々をもてなし、彼等の言を公文書に錄して、スパルタの人々のために覺書とすること、民の嘉する所となれり。且我等此等のことの寫を作りてこれを大祭司シモンに送る。』

二四この後シモン、ヌメニオに千斤の重さある金の大楯を携へしめて、ロマに遣し、彼等と盟約を確うせんとせり。二五されど民此等のことを聽きし時いひぬ『如何なる感謝をもて、我等シモンとその子等とに報いんや。二六彼と彼の兄弟たち、及び彼の父の家は自ら強くなり、戰をもてイスラエルの敵を彼等の間より追ひはらひ、その自由を確うせり。』二七かくて彼等これを眞鍮の板に書き錄し、シオンの山にて、柱の上に掲げたり。これはその記し事の寫なり。

『第百七十二年エルルの十八日、即ち大祭司シモンの第三年に、二八サラメルにて、祭司等と民と民の君侯たちと國の長老たちとの集會に於て、かく我等に告げられたり。二九國の中に屢戰爭あるしに關らずヨアリブの子等の子なるマタテアの子シモンとその兄弟たち自ら生命を賭して、國民の敵を防ぎ、その聖所と律法とを確く立たしめ、大なる光榮をもてその國民を崇めしめたり。三〇この後ヨナタンその國民を集めて、彼等の大祭司となり、その民に加へられたり。三一彼等の敵、彼等の國を全く滅して、その手を彼等の聖所に伸べんがため、彼等の國を

侵略せんと企てたり。三二その時シモン起ちあがりてその國のために戰ひ、己が財産の大部分を用ひて國の勇士等に武裝を施し、これに報酬を與へたり。三三而して彼ユダヤの町々とユダヤの國民なるベテスラとに防備を施せり。ベテスラは前に敵の武器のありし所にして、彼はここにユダヤ人の守備兵を置けり。三四また海岸にあるヨッパと、さきに敵の住みたりしアゾトの境なるガザラを堅め、ユダヤ人をそこに置き、その修繕に便なるすべてのものを備へたり。三五民はシモンの信仰と、彼がその國にもたらさんとせし光榮とを見て、彼をその指導者とし、大祭司とせり。これ彼が此等のすべての事をなし、その國のために正義と信仰とを保ち、またあらゆる手段を盡してその國を高めんとせしが故なり。三六而して彼の時に、その手によりて事物整へられ。異邦人は國の外に追出されたり。またダビデの町にあり、エルサレムにありて、城塞を築き、そこより出でて聖所の周圍を潰し、その潔きに對して大なる損害を與へし者どもも追出されぬ。三七シモン、ユダヤ人等を其處に置き、國と町との安全のために、これに防備を施し、エルサレムの石垣を高くせり。三八デメトリオ王此等のことによりて、彼の大祭司職を確認し、三九彼をその僚友の一人となして、これに大なる名譽を與へたり。四〇そは彼、ユダヤ人等がロマ人等によりて友、同盟者、また兄弟と呼ばれしこと、及びロマ人等が禮を盡してシモンの使者を迎へしことを聽きたればなり。四一而してユダヤ人等と祭司等とは忠信なる預言者の起るまで、いつまでもシモンが彼等の指導者たり、大祭司たるべきことを喜べり。四二彼等はまた彼が彼等の上に將として聖所を管理すべきこと、彼等に彼等の業と國と武具と要害とを司らしむべきこと、即ち彼が聖所を管理すべきことを欲しぬ。四三また彼等は、彼がすべての人々より服從を受け、國中のすべての證書は彼の名によりて録され、彼が紫の衣を着、黄金を身につくべきこと欲したり。四四民或は祭司の中いかなる人にても、此等のことの一つにても無視にし、或は彼の語る言を拒み、或は彼を除外して國會を召集し、或は紫の衣を着、金の帶止を用ふるものは不法と認められん。四五誰にてもこれに背き、此等のことの一つにても蔑するものは罰を受くべし。四六すべての民はシモンが此等の言に從ひて立てらるべきを承認したり。四七シモンこれを承けて、大祭司たることと、ユダヤ人及び祭司たちの將たり、牧伯たり、又すべてのものの守護者たるべきことに同意せり。』
四八彼等命じて、眞鍮の板にこれを書き録さしめ、これを聖所の境の内なる著しき所に置かしめ、四九且シモンと彼の子等がこれを保ち得んがために、庫の中にその寫を置かしめたり。

第一五章

一さてデメトリオ王の子アンテオコス、海の嶋々より、ユダヤ人の祭司にして牧伯なるシモン、及びすべての民に書を送れり。二

その内容はかくの如し。

『アンテオコス王、祭司長にして牧伯なるシモン、及びユダヤ國民の平安を祈る。三兇惡なる或るものども自ら我等の父祖の國の支配者となりたれば、われはわが國のために戰ひ、これを以前の状態に回復する目的をもて、異國の兵士の群を集め、かつ軍艦を備へたり。四我は、我等の國を滅し者等と王國内の多くの町々を荒廢れしめし者等とを罰せんために、その地に上陸せんと欲す。五さればわれ今、われより前の王たちの汝に許せる一切の納貢の免除、及び他の賦税の免除は、いかなるものにてもこれを汝に確證す。六我またなんぢに、汝の國のために汝自らの印をもて、貨幣を鑄造することを認可す。七且又エルサレムとその聖所とは自由なるべく、汝の備へたるすべての武具、及び汝の築きし要害は、汝これを保つべし。八また王に負ふすべてのもの、及び今より後いつまでも王に負ふべきものはすべて免除せらるべし。九且われら、我等の王國を建設する時、汝と汝の國人と神の宮とを大なる榮光をもて崇めん。これ汝の光榮全地に顯はされんがためなり。』

一〇第百七十四年にアンテオコス、その父祖たちの地に到りしに、すべての軍隊彼の許に集り、トルポンとともに在る者少くなれり。一一アンテオコス王彼を追撃ちければ、彼逃れて海に沿へるドルに來りぬ。一二そは彼あらゆる患難一時に彼に臨み、その軍隊彼を見棄てたるを知りたればなり。一三アンテオコスは十二萬の軍人と八千の馬とを率ゐ、ドルに對して營を張れり。一四而してアンテオコス、町の周圍をとり捲き、軍船は海上よりたたかひに加はりぬ。かくて彼海陸より町を攻め、何人の出入をも許さざりき。

一五ヌメニオとその輩、ロマより來りしが、その持ち來れる、諸王と諸國とに宛てたる書の中には、此等のこと書き記されありき。

一六『ロマの議官ルキオ、プトレミオ王の平安を祈る。一七ユダヤ人の大使等、舊の友情と親善とを回復せんとて、我等の友また同盟者として、大祭司シモン及びユダヤ國民の許より來れり。一八且彼等は一千萬の黄金の楯を携へたり。一九されば我等、諸王と諸國に書を送りて、彼等を害ひ、若くは彼等と彼等の町々と彼等の國とに對して戰を挑むことなからしめ、又彼等と戰ふが如き者と同盟を結ぶことなからしむるはよき事なりと思惟す。二〇かつ彼等の楯を受くるは、我等に正しき事と見ゆ。二一さればもし兇惡なる者ども彼等の國より汝等の許に逃れ來らば、これを大祭司シモンにわたし、その律法に從ひてこれに報復をなさしめよ。』

二二彼はこれと同じ事を、デメトリオ王とアタロスとアリアラテとアルサケとに書き送れり。二三またこれを、すべての國々に、サンプサメ、スパルタ、デロス、ムンドス、シクオン、カリア、サモス、パンフリア、ルキア、アリカルナソ、ロデス、パセリス、コス、シデ、アラド、ゴルテナ、クニド、クプロ、及びクレネに

も書き送れり。二四 彼等はまた大祭司シモンにもその寫を書き送りぬ。

二五 されど二日目にアンテオコス王はドルに對して營を張り、絶えずその軍隊を率ゐ來り、また攻城機を作り、トルポンを封鎖して、その出入を許さざりき。二六 ここに於てシモンは、彼の傍にて戰はしめんとて、選抜の兵二千人を遣し、又多くの金銀及び攻城機を彼の許に送れり。二七 されど彼之を受けず、前に結びし凡ての契約を蔑し、自らシモンより離れ行けり。二八 かくて彼は、その僚友の一人なるアテノビオをシモンの許に遣し、言を交さしめていひぬ

『彼等はヨッパとガザラ、又エルサレムにある城塞、わが王國内の町々を所有す。二九 而して彼等はその國境を荒して、この地に大なる損害を與へ、わが王國内の多くの場所を占領せり。三〇 されば今、汝らが奪ひし町々と、ユダヤの國境の外にて汝らの占領せし土地よりの貢とを返せ。三一 然らずばそれに代へて我に銀五百タラントを與へよ。而して汝等が與へし損害と町々の貢とに對しては他に五百タラントを與ふべきなり。然らざれば我等來りて汝等を征服すべし。』

三二 かくて王の僚友アテノビオ、エルサレムに來りて、シモンの光榮と金銀の器具の棚と、その從者の多きとを見て驚きしが、王の言を彼に傳へたり。三三 その時シモン答へて彼にいひぬ

『我等は他人の土地を奪ひしにも、他人に屬けるものを取りしにもあらず、唯我等の父祖たちの嗣業を領せしのみ。それは、或時の間不當にもわれらの敵の所有に歸し居たりしなり。三四 されど我等は機を得て、我等の父祖たちの嗣業をとり返せり。三五 さりながら汝の要求するヨッパとガザラとにつきていはんに、此等の町々は我等の國と民とに、大なる害を與へたれど、我等はこれ等に對して百タラントを與ふべし。』

然るにアテノビオはこれに一言も答へず、三六 怒りて王の許に歸り、此等の言とシモンの光榮と彼の見たるすべての事とを、報告したれば、王いたく怒れり。三七 その間にトルポンは船に乘りて、オルトシアに逃れたり。

三八 王はケンデビオを海に沿へる地の將帥となし、彼に歩兵と騎兵とを與へたり。三九 而して王彼に命じてユダヤの前に營を張らしめ、かつ民等に對して戰をなし得んがために、ケデロンを築き、門を堅むべきことを命じたり。されど王はトルポンを追ひ行けり。四〇 ケンデビオはヤムニヤに來りて、民を怒らしめ、ユダヤを探し、人々を捕虜にし、また彼等を殺し始めたり。四一 而して彼ケデロンを築きて、騎兵と歩兵とをそこに屯せしめたり。これ彼等、王の彼に命ぜし所に從ひて、ユダヤの道への出口をつくり得んがためなりき。

第一六章

一 その時ヨハネ、ガザラより上り來りて、その父シモンに、ケン

デビオの爲しことどもを語れり。二シモンとその二人の長老の子等、ユダとヨハネとを呼びて彼等にいひぬ『我とわが兄弟たちとわが父祖の家とは、我等の若かりし時より今日に至るまで、イスラエルの戰をたたかへり。かくてすべての事我等の手によりて好轉し、我等は屡イスラエルを救ひ出したり。三されど今我は老い、汝等は主の慈愛によりて壯年に達したり。されば汝等われとわが兄弟たちに代りて、往きてわが國人のために戰へ。而して天よりの助を汝らとともにあらしむべし。』四かれ國の中より一萬二千人の軍人と騎兵とを選びたれば、彼等ケンデビオに向ひ行き、モデインにて夜を過せり。五朝に及びて彼等起き出で、平野に赴きしに、視よ、歩兵と騎兵との大軍、彼等をむかへ撃たんとして出で來れり。兩軍の間に小川ありき。六彼と彼の民等かれらに對して營を張りしが、彼見しに、民等小川を渉ることを恐れ居たれば、彼まづ渉れり。人々これを見て彼に續きて渉れり。七かれ民を別ちて騎兵を歩兵の中央に置きしが、敵の騎兵は甚しく多かりき。八彼等聖なるラッパを吹き鳴ししに、ケンデビオとその軍隊敗れて、多くのもの斃れ、殘れる者どもは城塞に逃れたり。九その時ヨハネの兄弟ユダ傷を負ひしが、ヨハネ彼等を追撃ちて、ケンデビオの築きしケデロンにまで到れり。一〇彼等アゾトの野にある戍樓に逃れ入りたれば、かれ火を放ちてこれを燒きたり。その時彼等のうち凡そ二千人のものそこに斃れぬ。かくてユダは安全にユダヤに歸れり。

一一その時アブドの子プトレミオ、エリコの平野の將帥に任ぜられたり。彼は多くの金銀を持てり。一二大祭司の養子なりければなり。一三かれ、その心驕りて、自ら國の主權者とならんと欲し、シモンとその子らとに對して、僞りて謀をめぐらし、彼等を亡きものにせんとせり。一四さてシモンはその國に在る町々を訪れて、秩序を正し、エリコに下り往けり。彼とともに往きしはその子マタテアとユダにして、時は第百七十七年の第十一月、即ちセバテの月なりき。一五そこにてアブドの子、僞りて彼等を、己が築けるドクと呼ばるる小さき砦に受け、彼等のために大饗宴を催し、兵士等をそこに忍ばせたり。一六シモンとその子ら醉のまはりし時、プトレミオとその臣下等武器をとりて起ちあがり、饗宴の場所にて、シモンを襲ひ、彼とその二人の子らと、その僕らの或ものどもとを殺せり。一七かくてプトレミオは大なる不正を行ひ、惡をもて惡に報いたり。一八プトレミオは此等のことを記して王の許に送り、彼を助けんがために軍隊を送るべきことと、彼等の國と町々とを彼に渡すべきこととを告げたり。一九而して後、ヨハネを捕へ殺さんがために他の人々をガザラに送り、また千卒長等に金銀及び贈物を與ふべければ彼の許に來れと書き送れり。二〇又エルサレムと宮の山を占領せんがために他の人々を遣せり。二一その時或ものさきにガザラに走り行きて、ヨハネに彼の父と兄弟たちの殺されしことと、プトレミオが彼をも殺さんとすることとを告げたり。二二ヨハ

ネこれをききし時いたく驚きしが、かれ己を滅さんとて來れる人々を捕へて、これを殺せり。そは彼それらの人々の彼を殺さんことを求むるを知りたればなり。

二三この他のヨハネの行爲と、彼の戰爭と、彼のなしし勇ましきわざと、彼の築きし石垣の建築と、彼の行ひしこととは、**二四**視よ、彼がその父に代りて大祭司となりし時より、彼の大祭司職の日誌の中に記さる。

マカビー第二書

第一章

一エルサレムにあるユダヤ人及びユダヤ國に居る者なる兄弟たち、全エジプトにあるユダヤ人なる兄弟たちに恩寵と平安とのあらんことを祈る。二 願くは神、汝等に善をなし、その忠信なる僕アブラハム、イサク、及びヤコブと結び給ひし契約を憶えて、三汝等すべてに、主を禮拜し、大なる心と從順なる精神とをもて御旨を行ふこころを與へ、四その律法と誡命とに汝らの心を開きて平和をなし、五 汝等の祈願を聽きいれ、汝等と和ぎて、災害の日に汝等を見棄て給はざらんことを。六我等今ここにて、汝らのために祈る。七第百六十九年デメトリオの治世に、我等ユダヤ人は、ヤソンとその輩聖地と王國とに背きし時より數年に亙り、我等の上に臨みし患難と災厄との中にありて、既に汝等に書を送れり。八彼等は門に火を放ちて、辜なきの血を流したりき。我等主に祈りしに聽きいれられしかば、犧牲と麥粉とをささげ、燈火をともして、供のパンを供へたり。九されば今汝等、キスリウの月の假廬の祭を守るべし。一〇第百八十八年これを誌す。

エルサレムに在るもの、ユダヤに在るもの、議會、及びユダ、油注がれし祭司の血統にして、プトレミオ王の教師なるアリストブロ、及びエジプトに在るユダヤ人等に恩寵と健康とのあらんことを祈る。一一 我らは王に逆ひて戰ひしに神によりて大なる危險より救はれたれば、深く主に感謝し奉る。一二そは主自ら、聖なる都に於て戰し者どもを追ひ拂ひ給ひたればなり。一三かの君侯ペルシヤに到りて、彼とともにある軍勢防ぎ難く見えし時、彼等はナネアの宮に於て、ナネアの祭司たちのために斃されたりき。一四アンテオコスは女神と偕に住まんと僞り、彼とともに居りし者どもを引きつれて此處に來り、婚資の名の下に大なる財寶を奪はんとせり。一五ナネアの宮の祭司たち財寶を出せし時、かれ少數のもの等と共に境内の石垣のうちに來りしかば、彼等アンテオコスの入り來りし時これを鎖ぢ込め、一六羽目板の天井なる祕密の戸を開きて、石を投げつけ、此の君侯を倒し、ともにある者どもを粉碎し、彼等の頭をうち碎きて、これを宮の外に居りし者どもに投げ與へたり。一七かく敬虔ならぬ者どもをわたし給ひし神は、すべての事に於て崇めらるべきなり。一八我等今、キスリウの月の二十五日に、宮潔を守らんとするが故に、これを汝等に確報する要ありと思へり。これ汝等もまた假廬の祭と、ネヘミヤが宮と聖壇とを築きし後、犧牲をささげし時行ひし火の祭とを守らんがためなり。一九そは我等の父祖たち、ペルシヤの地につれ行かれし時、その當時の敬虔なる祭司たち聖壇の火をとりて、ひそかにこれを水なき井戸の空洞に隱し、確とこれを見定めたれば、その場所何人にも知られざりき。二〇さて多くの年の後、神よしと見給ひし時、ネヘミヤ、ペルシヤ王

よりの命により、これを隠し祭司たちの子孫を、その火を探すために遣せり。然るに彼等われらに、火にあらで深き水を見出ししことを告げたれば、二一 ネヘミヤ彼等に、それを汲み來れと命じたり。而して犠牲のささげられし時、祭司たちに命じて、薪とその上に載せられしものとの上に、その水を灌がしめたり。二二 かく行ひてしばし時經し程に、さきに雲に隠れ居たりし太陽輝き出で、大なる焔燃え上りたれば人々皆いたく驚けり。二三 かくて犠牲の焼き盡さるる間に、祭司等祈をささげ、祭司等とヨナタン、ネヘミヤのなしし如く導き唱へ、人々これに和せり。二四 その祈は次の如し。『主よ、主よ、萬物の創造者なる神よ、汝は畏るべくして強く、義にして慈悲あり、汝のみ王にましまして惠深く、二五 汝のみ義にして能はざることなく、あらゆるものを供へ給ひ、汝のみ義にして能はざることなく、かつ永遠に在し給ふ。汝はイスラエルをすべての災害より救ひ、父祖たちを選びてこれを潔め給へり。二六 願くは汝の民、全イスラエルのためにこの犠牲を受け給へ。汝の分を護り、これを聖となし給へ。二七 願くは我等の散らされしものどもを集め給へ。異國人の間に繋がれある者どもを解放ち給へ。辱められ、忌嫌はるる者らを顧み、異國人等をして、汝の我等の神に在すことを知らしめ給へ。二八 我等を壓へ、驕傲をもて我等を辱むるものを苦め給へ。二九 汝の民を汝の聖所に植ゑ付け、モーセの言ひし如くなし給へ。』三〇 かくなし居る間、祭司たちは讃美の歌をうたひぬ。三一 犠牲焼き盡さるるや、ネヘミヤ命じて、殘れる水を大なる石の上に注がしめたり。三二 これをなし終りし時、焔燃え上りしが、聖壇よりの光照映えたれば、その焔消えはてたり。三三 此の事知れ渡り、さきにつれ行かれし祭司たちの火を隠しし處に水湧き出で、その水をもてネヘミヤ及び彼と偕にありし人々、犠牲を潔めしこと、ペルシヤ王に告げられたれば、三四 王その事を査べし後、その場所を聖なる地帶となせり。三五 而して王、寵を示すべき人々には、まづ彼等より贈物を受け、而して此の水の少許を彼等に與へたり。三六 ネヘミヤ及び彼と偕にありし人々、このことをネプタルと呼びしが、釋けば潔事との義なり。されど多くの人々これをネプタイと呼べり。

第二章

一 記録によれば、預言者エレミヤも亦俘れ行く人々に命じて、前に述べたる火を取らしめたり。二 この預言者は俘れ行く人々に律法を與へて、主の誡命を忘るることなく、金銀の偶像とその裝飾とを見る時にても、その心を惑はすことなきやうに命じたり。三 彼また他のかかる言をもて人々を勵し、律法をその心より離れざらしめたり。四 又その記録の中には、此の預言者神よりの警戒により、嘗てモーセが上り行きて神の嗣業を見し、かの山に赴く時、幕屋と契約の櫃と彼に從ふべしと命じたること記されあり。五 エレミヤ此處に來りて、岩の洞穴を見出し、幕屋と契約

の櫃と香壇とをその中に納め、堅くこれに戸を閉したり。**六**彼と偕に來りし人々の或もの、道標を作らんとて來りしが、これを見出し得ざりき。**七**されどエレミヤこれを知りしとき彼等を責めていへり『その場所は神が再びその民を共に集め、慈悲を示し給ふ時まで決して知られざるべし。**八**その時主此等のことを明にし、主の榮光と雲とを現し給はん。』

モーセこれを示されし如く、ソロモンその場所の大に聖別せられんことを求めし時、**九**彼は智慧あるものなりしかば、宮の奉獻と竣成との犧牲をささぐべきことを示されぬ。**一〇**モーセ主に祈りし時、火天より降りて犧牲を燒き盡し如く、ソロモンの祈りし時にも火降り來りて燔祭のものを燒き盡せり。**一一**（モーセいへり『罪祭は食さるべきものにあらざれば、他のものと共に同じ方法にて燒き盡さるべし』と。）**一二**ソロモン八日間これを守れり。**一三**而して同じ事ども、公文書にも、また、ネヘミヤに關る記録の中にも記されたり。ネヘミヤは圖書館を建てて、諸王と預言者たちについての諸書、ダビデの諸書、及び聖なる賜物についての諸王の書翰等を集めたり。**一四**これと同じ方法にてユダも我等のために、さきに起りし戰爭のために散逸せし諸書を集めたれば、其等の諸書今も猶、我等と共にあり。**一五**されば汝等もし必要あらば、これを携へ到らんために使者を遣すべし。**一六**我等將に宮潔を守らんとし居れば汝等に書き送る。汝等も此等の日を守らば幸ならん。**一七**今や神はそのすべての民を救ひ、すべての者に、嗣業と王國と祭司職と聖所とを回復し給ひたれば、**一八**律法によりて約束し給ひしが如く、神は速に我等に憐憫を垂れ、地の四方より我等を共に聖所に集め給はんとの希望を我等は持つなり。そは主、我等をもろもろの大なる災害より救ひ給ひて、此の所を潔め給ひたればなり。**一九**ユダ・マカビオとその兄弟たちに關る事どもにつきては、大なる宮潔、聖壇の奉獻、**二〇**アンテオコス・エピパネス、及びその子ユパトルに對する戰爭、**二一**ユダヤ人の宗教のために互に男らしき働をなし者等に對する天より來りし啓示などによりて、彼等は少數にも關らず、全國を救ひて、異國人の群衆を追拂ひ、**二二**全世界に有名なる神の宮を再興し、町を自由にし、また將に覆されんとする律法を回復したり。これ主、あらゆる忍耐をもて彼等に慈悲を示し給ひたればなり。**二三**此等のことどもはクレネのヤソンによりて、五卷の書に録されしが、我等は試にこれを一卷に約めんとす。**二四**卽ち我等はその量の浩澣なるを考慮し、歴史物語に對する者が、却つてその資料の多きが故に經驗する困難を思ひ、**二五**專ら、讀者に興味を與へ、史實の記憶を便にし、かくてすべての讀者を益せんことに意を用ひたり。**二六**さればこれを約むるために我等のとりし勞は容易の業にあらず、眞に額の汗と不眠の努力とを要したり。**二七**（それはさながら、饗筵を備へて他人の益を求むる者にとりて、その勞輕からざるが如くなりき。）されどこれは、多くのものの感謝に價すること

なれば、我等は喜びて、困難なる勞を忍び、二八おのおのの項目につきての正確なる記事はこれを歴史家に委ね、ここには抄録の例に從ひて勞をとることとせり。二九そは新しき家屋の工師長は、全構造に意を用ひざるべからず、また裝飾と彩色とを司る者は、その裝飾に相應しきものを求むるなり。われ思ふに、此は我等にとりても等しかるべし。三〇要點を定めて、事の全貌を見、かつ特殊の事柄に細心の注意を拂ふは、物語の原著者に相應し。三一されど表現法を簡易にし、記事の詳述を避くるは、抄録を作る者に許されざるべからず。三二されば我等、ここに此の物語を始むるに當り、既に述べたる所をもて足れりとすべし。そは物語に長々しき序文を附して、物語そのものを省略するは愚なることなればなり。

第三章

一聖なる都は、大祭司オニヤの敬虔と、その不義に對する憎惡との故によりて、住民全き平安の中に居り、律法正しく守られしかば、二王たちすら自らその場所を崇め、最も貴き贈物をもて宮に榮光を歸したり。三アジアの王セレウコスの如きも己が收入をもて、犧牲をささぐるための、すべての費用を辨じたり。四然るにベニヤミンの族より出でたるシモンなる或もの宮の保護官に任ぜられしが、町にて、市場の規則につきて大祭司と言ひ爭へり。五されど彼はオニヤに勝つこと能はざりしかば、トラセオの子にしてその頃ケレスリヤとピニケの總督たりしアポロニオの許に到り、六エルサレムの寶庫には、計り知られざる多くの金錢あり、また數へ盡すこと能はざる財産ありて、これ等は犧牲のためのものにあらねば、王の手に收めらるべき望ありと告げたり。七アポロニオは王に會ひて、その告げられし金錢の事を彼に語りければ、王、己が司財官なるヘリオドロに、その金錢の移出を完うせよと命じたり。八かくてヘリオドロ、ケレスリヤとピニケの町々を訪るる狀にて旅に出でしが、實は王の目的を遂げんがためなりき。九彼エルサレムに來りし時、町の大祭司に、禮を盡して迎へられしかば、さきに告げられしままの事と、彼のここに來れる目的とを彼等に語り、果して此等のもののありや否やを尋ねたり。一〇大祭司彼に答へて、寡婦及び孤兒のための養育費のあることと、一一他にいと貴き位にあるトビアの子ヒルカノスのものなる金錢あれど、これも敬虔ならぬシモンが僞り語りし所とは相違すること、またその額は全體にて銀四百タラント、金二百タラントなること、一二かつ場所の神聖と、全世界を通して崇めらるる宮の威光と、侵すべからざる尊嚴とに信頼したる者に惡をなすは許さるべきにあらざることを告げたり。一三されどヘリオドロは、彼に與へられし王の命令の故に、いかなる時にても、此の金錢は王の庫のために沒收せらるべきことを語れり。一四かくてかれ、日を定め、此等のことにつきて調査をなさんとて、入り來りたれば、全市憂色に鎖されたり。

一五 祭司は祭服を身に纏ひて自ら聖壇の前に平伏し、天を仰ぎて、託されたる貨財に關る律法を與へ給ひし主を呼び奉り、これを託したる人々のために、これを保存し給はんことを乞へり。一六 而して大祭司の容貌を見たるものは皆心傷めり。そは彼の顏とその色の變化は、そのたましひの憂を現したればなり。一七 恐怖と身體の戰慄彼の上に臨み、これによりてその心の中なる苦痛、彼を見居たりし人々に明に示されたり。一八 ここに於て家の中にありし人々、公の嘆願をなさんとて、群をなして出で來れり。そはその所將に恥辱を受けんばかりに見えたればなり。一九 婦たちは胸に麻布を纏ひて街に群り、閉ぢ籠れる處女たちはともに走り出で、或ものは門に、或ものは石垣に赴き、或ものは窓より外を眺めたり。二〇 而してすべてのもの手を天にさしのべて嚴なる嘆願をなせり。二一 入り混りて共に平伏し居る群衆と、憂慮の中にも期待をもてる大祭司とは、見る人に憐憫を催さしめたり。二二 かくて彼等が全能の主に呼はり、託されたるものを、これを託したる人々のために安全にかつ確實に保ち給はんことを求め居る間に、二三 ヘリオドロは詔命に從ひて執行せんとて來れり。二四 されど彼その侍從等と共に寶庫に來りし時、諸靈とあらゆる權威の主、あらたかなる顯現をなし給ひたれば、彼とともに入らんと欲したりしものども神の御力に擊たれてあはてふためき、いたく恐れて氣絶したり。二五 彼等の見たるは、恐しき騎士の乘れる、美しき馬具もて飾りし馬にして、激しく突進し來り、前脚をもてヘリオドロを打てり。而して馬上の騎士は全き金の武具を纏ひしが如く見えたり。二六 他に二人のもの彼に現れしが、彼等は力強き若者にして、榮光にかがやき、美しく着飾りて、彼の兩側に立ち、絶えず彼を鞭うちて、多くの痛き笞をこれに加へたり。二七 かくて彼俄に地に、倒れし時、厚き暗黑その上に臨みしかば、人々彼を捕へて擔架に乘せ、二八 これを運び出しぬ。而して今や、大なる行列もて多くの衞兵とともにかの寶庫に闖入せしヘリオドロは、その身全く無力となり、あきらかに神の主權を認めたり。二九 而して彼神の御業によりて啞者の如くなり、あらゆる希望と自由とを奪はれて仆れ臥したれば、三〇 人々、その地に奇しき御力を現し給ひし主を讚美したり。かくてしばし前には恐怖と警戒とに滿たされし宮は、全能の主の現れ給ひし後、大なる歡喜に滿たされぬ。三一 されどたちまちヘリオドロの親しき友の或もの、オニヤに、至高者に呼はりて、將に呼吸絶えんとして靜に横り居る彼に、生命を與へ給はんことを乞ひ求めしめたり。三二 大祭司は王がヘリオドロに對してユダヤ人何等かの奸計を企てたりと考へんことを、ひそかに恐れ、彼の醫のために犧牲をささげたり。三三 されど大祭司宥恕を祈り居りし時、さきにヘリオドロに現れしかの同じ若者ら、同じ衣を纏ひて現れ、立ちていひぬ『大祭司オニヤに感謝せよ。そは彼のために、主は汝に生命を與へ給ひたればなり。三四 汝は天より鞭打たれたれば、神の、權ある稜威を

すべての人に告げよ』と。此等の言を語り終りて、彼等見えずなりぬ。三五 かくてヘリオドロ主に對して犧牲をささげ、その生命を救ひ給ひし者に大なる誓約をなし、オニヤに感謝して王の許に歸り行けり。三六 而して彼、その眼をもて見しいと大なる神の御業をすべての人々に證せり。三七 王、ヘリオドロに、再びエルサレムに遣さんがために如何なる人の相應しきかを問ひし時、彼答へぬ三八『汝もし敵若くは叛逆者を持ち給はば、これを彼處に遣し給へ。さらば汝、彼が多くの笞を受け、辛くも生命をもて逃れ來るを迎へ給ふべし。そは眞に彼の地の周圍には神の御力あればなり。三九 天に住み給ふ者自らその眼を彼の所に注ぎてこれを助け、その所を害はんとて來るものを撃ちほろぼし給ふべし。』四〇 これはヘリオドロのことと、寶庫の護られしこととの物語なり。

第四章

一 されど前に述べしシモン、卽ちかの金錢のことと國のこととを告げし者、オニヤを讒し、ヘリオドロを唆して、自ら此等の災禍を起ししものは彼なりといへり。二 この町の恩人、同胞の保護者、律法の熱心者をば、かれシモンは、國家に對する叛逆者と呼ぶことすら敢てしたり。三 されど敵意甚しくつのりて、シモンの信任せし從者の一人によりて殺人の行はるる程となりたれば、四 オニヤ鬪爭の激しくなることと、ケレスリヤ及びピニケの總督、アポロニオがシモンの脅威を増し加へつつありしこととを見て、五 自ら王の許に赴きしが、これはその同胞を訴へんがためにあらで、公私ともに、すべての民の幸福を求めんがためなりき。六 そは彼、王の御意なくしてはもはや國のために平和を得ること覺束なく、かつシモンがその狂暴を止めざることを見たればなり。七 されどセレウコス沒して、エピパネスと呼ばれたるアンテオコス王位に卽きし時、オニヤの兄弟ヤソン大祭司職を繼げり。八 かれ王に謁見を賜はりて、銀三百六十タラントと他の資源より八十タラントとを、これに約束したり。九 猶彼は、王が彼にその權威によりて運動場と青年訓練所とを作ることを許可し、且エルサレムの住民をアンテオケの公民として登錄することを得しむるを條件として、更に百五十タラントを王に約束せり。一〇 王これに許可を與へ、彼その職權を得し時、その同國人等をギリシヤ人の慣行に從はしめたり。一一 彼は友情と同盟とのために大使としてロマに遣されたるユポレモの父ヨハネの仲介によりてユダヤ人に與へられたる、王の特惠の敕令を蔑し、正しき生活の方法を覆して、律法によりて禁ぜられたる新しき習慣を取り入れたり。一二 卽ちかれ城塞の眞下に、熱心に運動場を作り、愼深き青年たちに帽子を被らしめたり。一三 かくて不信の徒、祭司ならぬヤソンの甚しき冒瀆によりて、極端なるギリシヤの風俗取り入れられ、異なる宗教盛となれり。一四 されば祭司たちにはもはや祭壇への奉仕の熱心なく、

聖所を辱め、犠牲をなほざりにし、律法にて禁ぜらるる競技に加はらんがため、體育館にいそぎ行きて、圓盤投に熱中せり。**一五**かくて彼等は父祖たちの名譽を顧みず、ギリシヤ人等の誇を最も勝れたるものとなせり。**一六**かかりしかば恐るべき災害彼等の上に臨みぬ。即ち彼等はその習慣を熱心に模倣し、すべての事に於てこれに似んことを欲し居たりし其等の者どもを敵とし、また仇とせざるを得ざるに至れり。**一七**そは神の律法に逆ひて敬虔ならぬことをなすは易きことにあらざればなり。されど此等のことどもにつきては、時やがてこれを示すべし。**一八**さて五年毎にツロに催さるる一つの競技ありて、王これに臨みし時、**一九**兇惡なるヤソン、アンテオケ人となれる或ものどもを、聖なる使者としてエルサレムより遣し、ヘラクレスの犠牲のためにとて銀三百ドラクマを携へしめたり。その銀は携へ行きしものどもすら犠牲に用ふるは正しからずと思ひ、これを他の用に充てんことを求めたるものなり。**二〇**されば、これを送りし者はヘラクレスの犠牲のために供へしなれど、携へ來りしものどもの故に、それは三段造の船を備ふるために用ひられたり。**二一**さてメネステオの子アポロニオ、プトレミオ・ピロメトルの即位式のため、エジプトに遣されし時、アンテオコスは己が彼等の國務より除外されしことを認めしかば、自らの安全をはかりて、ヨツパに出で、そこよりエルサレムに赴けり。**二二**その時、ヤソン及び町擧りて盛大に彼を迎へしかば、彼は炬火と歡聲とのうちに入城したり。この事ありて後、かれその軍隊を率ゐてピニケに下れり。**二三**三年の後、ヤソンは前に述べしシモンの兄弟メネラオを王の許に遣して、金錢を渡さしめ、かつ必要なる事柄につきて報告をなさしめたり。**二四**されど彼は王に取入り、權威を示して自らを高め、銀三百タラントをもてヤソンを買收し、大祭司職を己がものとせり。**二五**かくて王の敕旨を奉じて來りしが、何等大祭司職に相應しきものをもたず、殘虐なる暴君の情慾と、野獸の兇暴性とをもてり。**二六**かく己が兄弟を押除けしヤソンは他のものによりて押除けられ、アンモン人の國に亡命者としてさすらへり。**二七**メネラオは職位につきしが、王に約束せし金錢をば、城塞の長ソストラトより請求を受けしにかかはらず、これを少しも拂はざりき。**二八**租税の徴收はソストラトに委ねられ居りしなり。此のために二人ともに王の面前に呼び出されたり。**二九**かくてメネラオは己が兄弟ルシマコスに大祭司職を繼がしめ、ソストラトはクプロ人等を治めしクラテスに後を讓れり。**三〇**さて周圍のことどもかくありし時、タルソとマロス、王の愛妾アンテオキスに與へられしかば、その地の人々暴動を起せり。**三一**されば王、高位の人アンデロニコにその後を託し、事を鎭めんとて、急ぎそこに來れり。**三二**その時メネラオ、好機を得たりと考へ、神の宮のものなる金の器具を幾許か盗み出して、これをアンデロニコに贈れり。彼は既にその他の器具をばツロとその周圍の町々とに賣りたりしなり。**三三**オニヤこ

のことを慥めし時、鋭くこれを責めて、己はアンテオケに近きダフネの聖所に引き籠れり。三四ここに於てメネラオはアンデロニコをつれ出して、オニヤを殺すことを彼に乞へり。かれ卽ちオニヤの許に來り、僞りて友となり、右の手を與へて誓約をなししかば、オニヤは疑ひつつも説伏せられて聖所の外に出で來れり。かくてアンデロニコ正義を無視にして彼を捉へ、これを獄に投じたり。三五この事のためにただにユダヤ人のみならず、他のもろもろの國人も、この不正なる殺人に對して憤怒と不快とを覺えたり。三六王、キリキヤの地方より歸り來りし時、町に居りしユダヤ人等、奸惡を憎みて彼等と協力せしギリシヤ人等とともに、王に訴へ出でて、オニヤが不正なる手段にて殺されしことを告げたり。三七その時アンテオコス心より悲み、殺されし彼の忠信にして規律正しき生活の故に、憐憫を催して涙を流しぬ。三八かくて怒に燃えたる彼は、アンデロニコの紫の衣を剝ぎ、その下衣を裂き、彼をつれ出して全市を引き廻し、彼がさきにオニヤに對して不正を行ひしその場所に到りし時、そこにて此の殺人者を處分したり。主かれに、その受くべき罰を加へ給へるなり。三九さて多くの冒瀆、メネラオの承認の下に、ルシマコスによりて、町の中にて侵され、その風聞國外に廣がりし時、多くの金の器具既に散らされし後なりしも、人々ルシマコスに逆ひて共に集りぬ。四〇群衆怒に滿され、彼に逆ひて起ちし時、ルシマコス三千人のものに身をよろはしめ、不義の暴力をもてこれに戰を挑み、年すすみて暴虐に長けしアウラノなる者、その軍を率ゐたり。四一されど彼等ルシマコスの襲擊を受くるや、或ものは石を、或ものは木の丸太を、或ものは傍にありし灰の一握をとり、喊聲を擧げて、ルシマコス及び共にある者どものの上に雪崩れかかれり。四二かかりしかば彼等のうち多くのもの傷き、或ものは地上に倒れ、他のすべての者は逃れたり。されど冒瀆の首魁をば彼等寶庫の前にて殺せり。四三然るに此等のことにつき、メネラオに對して告訴をなす者起れり。四四王ツロに來りし時、議會によりて遣されたる三人のもの來りて、彼の前に訴へ出でたり。四五されどメネラオは、己が不利なるを見て、彼が王に打ち勝たんがために、ドルメネの子プトレミオに多くの金錢を與へんと約せり。四六ここに於てプトレミオ、涼を取らんとするが如きさまにて王を廊につれ出し、遂にその心を變へしめたり。四七かくて王は、すべての災害の原因たりしかのもの、卽ちメネラオに對する告訴を却下したり。而してスクテヤ人に訴へ出でたりとすとも罰を受けずして赦されたるべき此等の不運なる人々に、彼不法にも死刑を宣したり。四八かくて直ちに、町と家と聖器とのために代言者となりしかの人々、この不義なる刑を受けたり。四九このことにつきて、ツロ人の或ものどもすら、その奸惡を憎みて、彼等のために盛なる葬をなしぬ。五〇されどメネラオは、權ある者の貪婪を利用して、猶もその職に留り、愈その奸惡を逞うして、同胞に對する大なる叛逆者と

なれり。

第五章

一その頃アンテオコス、エジプトへの第二の侵略をなせり。二然るに全市に亙りて四十日の間、黄金もて織りなされたる衣服を身に纏ひ、槍を手にせる騎士たち、兵士等の一隊の如きさまにて現れ、空中を駈けまはれり。三また武裝したる騎士の一隊、これと戰を交へ、追ひつ追はれつ、楯をふるひ、多くの槍をつき出し、劍を拔き、箭を放ち、黄金の裝飾とあらゆる種類の武具とを閃めかしぬ。四さればすべての人々、この顯現の吉兆ならんことを欲したり。五ここに、アンテオコス死ねりとの、虚報傳はりし時、ヤソンは一千人より少からざる兵を率ゐて、俄に町を襲ひぬ。而して石垣の上にありし人々敗れて、町遂に陷落したれば、メネラオは城塞に逃れたり。六されどヤソンは、無慈悲にも、己が國人を殺戮し、同胞に對する成功はもつとも大なる失敗なることを思はず、戰利品は敵より奪ひしにて、同胞よりにはあらずと考へたり。七されど彼は職を得ず、その謀叛の終に恥辱を受け、亡命者としてアンモン人の國に落ち行けり。八最後に彼は身の破滅を來し、アラビヤ人の暴君アレタのために囚へられしが、逃れて町より町へ走り、すべての人々に追ひ廻され、背教者として憎まれ、祖國と同胞とを屠るものとして忌みきらはれ、はてはエジプトに追ひやられたり。九かくて、さきには多くの人々をその國より異國に追ひやりし者、今は血族の關係を辿りて、隱處を見出さんものと、海を渡りてラケデモニヤ人の地に到り、終に異郷に於て死にたり。一〇さきには多くのものを葬らずして投げ棄てしもの、今は己のために哀悼をなすものもなく、葬の禮を盡すものもなく、また先組の墓にも埋められずして投げ棄てらるるに至れり。一一この起りしことにつきての報告王の許に達せし時、王はユダヤ人叛きたりと思ひ、怒りてエジプトより出で來り、武力に訴へて町を奪ひとり、一二その兵士等に命じて、その途にて遭ふ程のものを憐むことなく斬り倒さしめ、屋の上に逃るるものを悉く殺さしめたり。一三かくて青年も老いたるものも屠られ、婦女子と處女と嬰兒すら殺されたり。一四この三日かの間に八萬人のもの屠られ、四萬人のもの戰ひて殺されしが、奴隷に賣られしものは殺されしものよりも多かりき。一五されど彼はこれをもて足れりとせず、律法と祖國とに對して叛逆者となりしメネラオを案内者として、全地の至聖所なる宮に踏み入り、一六汚れたる手をもて聖器を取り出し、もろもろの王たちによりて聖所の擴張と榮光と名譽とのためにささげられたる供物を、その汚れたる手をもて引き出せり。一七而してアンテオコスは心驕りて、此は町に住める者の罪の故に全能の主暫時の間御怒を發し、その眼を聖所より背向け給へるなるを見ること能はざりき。一八彼等もし、かくも多くの罪に包まれざりしならば、この者もまた、さきにセレウコス王によりて遣さ

れ、寶庫を探らんとせしヘリオドロと等しく、進み入るや否や、たちまち鞭打たれて、その無謀なるわざを妨げられしならん。一九されど主は、その聖所の故に民を選ばず、民の故に聖所を選び給へり。二〇されば聖所もまた、民の上に臨みし災害に與りしにて、後にはその恩惠に與かりたり。かくて全能者の御怒によりて見棄てられし聖所は再び大能の主の宥和によりて、そのすべての榮光を回復せられたり。二一さてアンテオコスは、宮の中より一千八百タラントを運び出しし時、その心驕り居りしかば、高慢にも陸上を船にて、海上を徒歩にて渡り得るかの如く思ひつつ、急ぎアンテオケに向ひて去れり。二二かつ彼は國民を苦むるために總督を立てたり。エルサレムには、フルギヤ人にして、その性質はこれを任命せしものに勝りて、暴虐なるピリポを、二三ゲルジムにはアンデロニコを、またこの外に、他のすべてのものよりも惡しく、その同胞に對して自らを高しとせるメネラオを立てたり。而して彼はその公民なるユダヤ人等に對して惡意を抱き、二四かの冒瀆の主アポロニオに二萬二千人の兵を與へて、これを遣し、命じて壯年のものを殺さしめ、婦と若ものとを賣らしめたり。二五かれエルサレムに來り、僞りて平和の人と見せかけ、安息の聖日を待ちて、ユダヤ人等がその業を休むを見るや、命じて人々を武裝せしめたり。二六而して祭を見んとて出で來りしものを悉く殺さしめ、武裝せる者どもと共に町に走り行きて、夥しき多數のものを殺せり。二七されどマカビオと呼ばれしユダは、他の九人のものどもとともに退き、野獸の如き狀にて山に住み、汚穢に染まざらんがために、其處に生ずる青草の類を食ひて生命をつなげり。

第六章

一此の後久しからずして、王、老いたる一人のアテネ人を遣し、強いてユダヤ人をその父祖たちの律法より離れしめ、神の律法に從ひて生くることなからしめたり。二また彼等にエルサレムにある聖所を瀆さしめ、これをオリンピアのゼウスの宮と呼ばしめ、ゲリジムにあるものをばその地に住む者の狀態に應じて、異國人のゼウスの宮と呼ばしめぬ。三此の災害の來訪は悲むべくまたいと嘆しきことなりき。四宮は異教徒によりて、淫蕩と宴樂とをもて、滿されぬ。彼等はそこにて遊女と淫し、聖所の中にて女との關係を結び、かつ相應しからぬもろもろのものをその中に携へ入れり。五また犧牲の祭壇の上には律法によりて禁ぜられたる荒す惡むべきもの載せられぬ。六かくて人は安息日を守ることも、父祖たちの祭を祝することも、また自らをユダヤ人として告白することも能はざりき。七毎月の王の誕生日には、人々嚴しき強制によりて犧牲に與らせられ、デオニソの祭日には、蔦の冠を被り、デオニソへの禮として、行列を作りて練り歩くことを強いられたり。八且プトレミオの示唆によりて、近隣のギリシヤ人の町々にも布告發せられたれば、到る處にユ

ダヤ人は同じ取扱を受け、犧牲に與らせられたり。九かつギリシヤの儀式に從はぬものは死刑に處せらるることとなりたれば、その臨み來れる災害すべてのものに見られたり。一〇二人の婦、その子らに割禮を施したりとてつれ來られしが、彼等はその胸に子をつりさげられ、町の中を引きまはされて、はては石垣よりさかさまに投下されたり。一一また七日目をひそかに守らんとて、共に附近の洞穴に走りし他の人々はピリポの密告によりて、悉く燒き殺されたり。そは彼等はかのいと嚴なる日を守る心にて自らこれを防ぐことを恐れたればなり。一二さればわれ、この書を讀む人々に、彼等がこの災害の故に落膽せず、此等の刑罰はわが民を滅さんがためにあらず、懲しめんがためなることを考へんことを乞ふ。一三そは敬虔ならぬわざをなす者が永くこれを許されず、忽ち罰を受くるに至るは、大なる恩惠の徴なればなり。一四他の國人等につきては全能の主、彼等がその罪の極點に達するを見て罰するまで、忍耐をもてこれをしのび給へど、我らにつきてはかくなし給はず。一五此はかれ後に至りて、我等が己が罪の頂點に達する時、我等に罰を加へざらんがためなり。一六されば主決してその慈悲を我等より取り去り給はず、災害をもて懲め給ふと雖も、その民を見棄て給はざるなり。一七さはれ我等の語りしことは、これを汝らに記憶せしむるに十分なれば、我等また物語を續くべし。一八主なる學者の一人なるエレアザルは、既に齢高く、風貌高貴なる人なりしが、強いてその口を開かしめられ、遂に豚の肉を喰はしめられたり。一九されど彼は汚辱をもて生きんよりは、むしろ潔き最期を遂げんものと、自らすすみて拷問臺に上り、唾とともにその肉を吐き出したり。二〇かく彼は生命を愛するが故に、律法にかなはざるものを味はんよりは、堅くこれに逆はんと決心せり。二一されどこの禁ぜられたる犧牲の祭を司り居りし者ども、さきの日の好誼の故に彼を傍につれ行き、彼が王の命に從ひて犧牲の肉を食ひしかの如く裝はんがため、食ひて差支なき肉をひそかに持ち來らしめよとすすめたり。二二これはかくすることによりて彼が死より免れ、彼等との舊の友情の故に篤き取扱を受けんことを欲したればなり。二三されど彼は、堅き決心をもて、その壽、その老齢の威嚴、名譽ある白髮、幼時よりの教育、及び神の與へ給ひし聖なる律法にふさはしく、その心を彼等に告げ、すみやかに己を陰府に送るべきことを求めたり。二四彼いひぬ『我等の年輩となりて蔽ひ隱すは相應しからず、かくては多くの若きものども、九十歳に達したるエレアザル終に異教に改宗したりと想はん。二五彼等はわが陰蔽の故に、また此の短き、束の間の生命のために、わが故によりて惑され、我自らは、汚辱とわが老年の穢を受くべし。二六われ假令、この今の時のために世の人よりの刑罰を免るることを得とも、生死ともにいかで全能者の御手より逃るるを得んや。二七されば今、わが生命に雄々しく別を告げんがために、自らをわが老齢にふさはしきものとして示し、二八

尊ばるる聖なる律法のために喜びて、貴き光榮の死を遂げ、青年たちに貴き摸範を殘さん。』彼はこれらの言をいひ終り、從容として拷問臺に行きぬ。二九その時、彼等は少時前にかれに對してもち居りし好意を惡意に變へたり。そは彼のこれらの言を狂亂の限りと思ひたればなり。三〇かくてかれ鞭打たれて將に死なんとせし時、大聲に叫びていへり『われ死より免れ得べかりしを、忍びて鞭打たれ、わが身に大なる苦惱を受くることは、聖なる知識を持ち給ふ主に明かに知られん。げにわれは、主に對する畏の故に、魂にては喜びて此等のことを享くるなり。』三一彼かかる狀態にて死に、ただ青年にのみならず、その民の多くの人々に、記憶すべき貴き死の模範を遺せり。

第七章

一さてここに七人の兄弟あり、王の命によりて、母と偕に囚へられ、鞭と綱とをもて辱められ、忌むべき豚の肉を食へと強いられたり。二されど彼等の中の一人、代辨者となりていひぬ『汝は我等に何を求め、何を問はんとするか、我らは父祖たちの律法を犯さんよりは、むしろ死を冀ふなり』と。三王これをききて憤り、鍋と釜とを熱せよと命じたり。四而して此等のもの熱せられし時、王命じて、他の兄弟たちと母との見居る處にて、その代辨者となりし者の舌を拔き、頭の皮を剝ぎ、その手足のさきを斬り落さしめぬ。五かくて彼全身不具とせられし時、猶生き居ればとて、王これを火の傍につれ來らしめ鍋にて炒らしめたり。而して鍋の蒸氣遙に擴りし時、兄弟たちと母と貴き死を遂げんとて互に勵しつつ、かくいひぬ六『主なる神みそなはし給ふ、眞に主は、モーセが彼等に對して證せし歌の中に、『主はその僕等に憐憫をくはへたまはん』といひしが如く、我らにも憐憫を加へ給はん。』七かくの如くにして第一のもの死にし時、彼等は第二のものをつれ來りて辱め、髮毛を掴みて頭の皮を剝ぎ、且問ひけるは『汝の身體のあらゆる部分罰せられざるうちに、食せんことを欲するか』と。八されど彼はその父祖たちの國語にてこれに答へ、『否』といひぬ。されば彼もまた引きつづきて第一のものの如く拷問を受けぬ。九而して彼、その最期の息を引きとる時、かくいへり『兇惡なる汝はこの現世の生命より我等を解き放つとも、世界の王は、その律法のために死にし我等を甦らしめ、永遠の生命をもて報い給はん。』一〇彼の後に第三のもの辱められしが、かれ命ぜらるるままに、直ちにその舌を出し、勇ましくその手を差し延べ、一一嚴にいひ放ちぬ『われ天より此等のものを受けたれど、主の律法のためにこれを棄てん。されどわれ再び主よりこれを受けんことを望む。』一二かかりしかば王及びともにあるものども、その苦痛を些少も意とせざる若者の精神に驚けり。一三かくて彼死にしかば、彼等第四のものをもかくの如くにして辱め、これを拷問にかけたり。一四彼もその將に死なんとする時いひぬ『人の手によりて死に、神によりて再び甦らせら

るる希望を懷くはよきことなり。されど汝にとりては、生命への復活なかるべし。』一五かれの後に彼等第五のものをつれ出して、同じくこれを辱めたり。一六されどかれ王を見つめていへり『汝は朽ちはつべきものなるに、人々の上に權威をもつとて、汝の欲するところをなす。されど我らの民は神に見棄てられたりと思ふな。一七汝はやがて、大能の稜威が、いかに汝と汝の裔とを苦め給ふかを見ん。』一八次に彼等第六のものをつれ來れり。而してかれ、その死に臨みていひけるは『徒に欺かるな、我等はわれらの神に對して犯しし罪の故に此等の苦難を受くるなり。さればかかる驚くべきことども起れるなり。一九されど汝は、神に對して戰を挑みつつ、自ら罰を受けであるべしと思ふな。』二〇されどすべての者に勝りて驚くべく、また光榮ある記憶に相應しきはその母なりき。彼は一日の中に七人の子らの死ぬるを見つつ、主にある希望による勇氣をもてこれを忍べり。二一かれ、彼等おのおのを、その父祖たちの國語をもて勵し、貴き熱心を滿し、その女らしき思を丈夫の心をもて強め、彼等にいへり二二『われは汝等がいかにしてわが胎に入りしかを知らず、汝らに汝らの靈と汝らの生命とを與へしものはわれにはあらず、また汝等おのおのの肢體を形造りしものもわれにはあらず。二三されば、人の代をつくり、すべてのものの代を案出し給ひし世界の創造主は、慈悲をもて、再び汝らに、汝らが今、その律法のために棄てし汝等の靈と汝等の生命とを與へ給はん。』二四されどアンテオコスは、自ら侮られたりと思ひ、またその聲の恨むるが如きを訝りて、末の子の猶生き居る間に、言をもて彼にすすめしのみならず、彼を富ましめ、高き位を與へ、もしその父祖の慣習を棄てなば、彼をその僚友の一人となして國務を託せんと、誓言をもて約束したり。二五されど若者すこしもこれを聽かざりしかば、王その母を呼び出し、若者が自ら救はるるやう助言せよとすすめたり。二六かれ多くの言をもてすすめしかば、母はその子を說きすすめんとて起てり。二七されど彼の方に近づきし時、殘虐なる暴君を嘲り笑ひ、その父祖たちの國語にてかくいへり『わが子よ、わが胎内に九ヶ月汝を宿し、三年の間乳を與へ、此の年に至るまで汝を養ひはぐくみ、汝を支へ來りしわれを憐め。二八われ汝に乞ふ、わが子よ、汝の眼を天と地とに向けて、そこにあるすべてのものを見、神は無より此等のものを造り給ひ、人はかくして此の世に來れることを思へ。二九この屠殺者を恐るな、汝も汝の兄弟たちに相應しきものとなりて、死を受けよ。われ御憐憫によりて、汝の兄弟たちと共に汝を受くるを得ん。』三〇されどかれ猶語り居りし時、若者叫びぬ『汝等は誰を待つか、われは王の命に從はず、モーセによりて我等の父祖たちに與へられたる律法に從はん。三一されど汝、ヘブル人に對してあらゆる惡をたくらみし汝は、決して神の御手より逃るるを得ざるべし。三二我等は、我等の罪の故に苦難を受く。三三我等を戒め、われらの生活を懲しめんがために主は暫く我等を

怒り給ふとも、やがて主はその僕等と和ぎ給はん。三四 ああ汝、汚れたるもの、すべてのもののうちにて最も兇惡なる者よ、徒に確ならざる希望をもて、汝の驕傲を甚うし、天の子らに逆ひて汝の手を擧ぐな。三五 汝は未だすべてのものを見給ふ全能の神の審判を逃れざるなり。三六 此等のことのために、我等の兄弟たちは、少時の苦難を忍び、永遠の生命につきての神の契約の下に死ねり。されど汝は神の審判によりて、汝の傲慢に對する當然の罰を受くべし。三七 我もここに、わが兄弟たちの如く、我等の父祖たちの律法のために身と魂とをささげ、神に呼はりて、わが民にすみやかに恩惠を施し給はんことと、汝が、もろもろの苦難と災害とのうちに、主のみ神に在すことを告白するに至らんことを祈る。三八 また、我等の國人全體の上に正しく降されし全權者の御怒、われとわが兄弟たちをもて止められんことを求む。』三九 然るに王は激しく怒り、その侮蔑に逆上して、彼を他のすべてのものよりも更に殘酷にあしらへり。四〇 されば彼も、主にその全き信頼を置きて、潔く死ねり。四一 かくてそのすべての子等の後に、母も終に死ねり。四二 犠牲の祭と、甚しき殘虐とにつきては、以上述べたることをもて足れりとすべし。

第八章

一 ここにユダ・マカビオ及び彼と偕にありし人々は、祕に村々に入りて、その血族のものと、ユダヤ人の宗教を奉ずるものどもとを呼び寄せしに、ともに集りしもの六千人に達したり。二 彼ら主に呼はり、すべての者によりて壓へらるる民をみそなはし、神を畏れぬ人々によりて瀆されたる聖所に慈悲を垂れ、三 荒れ廢れて地上に跡を止めぬ程とならんとする町を憐み、主に向ひて叫ぶ血の聲をきき、四 罪なき幼兒に對する不法なる殺戮と主の御名に對する冒瀆とを憶え、また惡に對する憎惡を示し給はんことを乞へり。五 かくてマカビオ、その兵士らを集めて軍隊を作りしかば、異教徒はこれに敵すること能はざるに至れり。主の怒、憐憫に變へられたるなり。六 かれは不意撃を行ひ、町々村々に火を放ちて燒き拂ひ、最も必要なる場所を占領し、敵に少からざる損害を與へたり。七 彼は特に夜襲をもてこれらの攻撃を行ひしなり、而して彼の武名、到る處に語り傳へられたり。八 されどピリポは、彼が少しづつ地位を獲得し、ますますその所有物を增し加ふるを見しかば、ケレスリヤ及びピニケの總督プトレミオに書を送りて王のために後援を求めたり。九 ここに於てプトレミオ、王の僚友の一人なるパトロゴスの子ニカノルに、各國人より成る二萬人以上の兵を與へ、ユダヤの民を全滅にせんとて、いそぎ遣せり。また彼は戰爭に經驗ある一人の將ゴルギヤをもともに遣せり。一〇 ニカノルはユダヤ人の俘虜を賣り、その金をもて、王がロマ人に支拂ふべき二千タラントの貢を、王のために支辨せんとせり。一一 かくて直ちに、彼は海岸の町々に使者を遣し、ユダヤ人の奴隷を買はんことを求め、九十人

の奴隷を一タラントにて、拂ひ下げんと約束したり。彼はこれによりて、全能者より己に加へらるべき審判につきては何事をも待ち設けざりしなり。一二されどニカノルの侵入につきての報告ユダの許に達したり。かくてユダ彼とともにある者どもに軍隊の出現を告げしに、一三臆病にしてかつ神の審判を信頼せざるものども逃れて國を去れり。一四また他のものどもは己等に殘されしすべてのものを賣り拂ひ、かつ主に祈りて、不信なるニカノルによりてその未だ到らざる前に、豫め賣られたる者どもを、一五彼等自身のためにあらずとするも、父祖たちに與へ給ひし契約の故に、またそれによりて彼等を呼び給ひし貴くして偉大なる御名の故に救ひ出し給へと求めたり。一六而してマカビオその兵士ら六千人を集め、彼等を勵して、敵に對して狼狽することなからしめ、また不正にも彼等に逆ふ異教徒の大軍に驚くことなからしめ、一七むしろ聖所に對して犯されし不法なる冒瀆と、笑草とせられし都の恥辱と、先祖たちより受け繼ぎし生活の顚倒せられし狀態とを、眼のあたりに思ひ浮べて、勇しく闘ふべきことをすすめたり。一八かくてマカビオ言ひぬ『彼等は武器に信頼し、これによりて勇氣を起せども、我等は、全能の神に信頼す。主はその御首の一振によりて、我等に敵するものどもをも、全世界をも投げ倒し給はん。』一九且かれは、その先祖たちの代に、絶えず彼等に降し給ひし御助につきて語れり。即ちセナケリブの時に、いかに十八萬五千人のもの斃れしか、二〇またバビロンの地にてなされしガラテヤ人との戰に於て、八千のガラテヤ人と四千のマケドニヤ人とが一つとなりて、攻めかかりしが、マケドニヤ人なす術なかりし時、いかに八千人のもの天よりの御助によりて、一萬二千人を斃し、多くの戰利品を得しかを語れり。二一かくマカビオ此等の言をもて人々の勇氣を鼓舞し、律法と祖國とのために死ぬる備をなさしめし時、その全軍を四隊に分ち、二二その兄弟たちを彼と共に各隊の將となせり。即ちシモンとヨセフとヨナタンとに、おのおの千五百人を指揮せしめたり。二三彼またエレアザルをもしかなせり。而して彼、聖書を高らかに讀みて、『神の御助』といふ標語をかかげ、自ら第一隊を指揮して、ニカノルと戰を交へたり。二四全能者彼等と偕にありて戰ひ給ひしかば、彼等九千人を超ゆる敵を斃し、ニカノルの軍隊の大部分を負傷せしめ、その戰闘力を失はしめ、すべての者を走らしめたり。二五而して彼等、己等を買はんがために持ち來れる敵の金錢を沒收したり。かくて彼等しばらく彼等を追ひし後、その日の時の故に止むなく引きかへしたり。二六そは、その日は安息日の前日なりければ、彼等は追擊を續けざりしなり。二七さて彼等、敵の武具を集め、所持品を沒收せし時、自ら安息日を守り、此の日に至るまで彼等を救ひ給ひし主を、甚しく崇め、かつ讚美したり。そは主かれらの上にその慈悲を垂れはじめ給ひたればなり。二八安息日の後、彼等負傷者と寡婦らと孤兒らとに分捕物の幾分を

與へ、殘餘をば己等とその子らとに頒ちたり。二九 此等のことをなし終へ、共に祈禱をささげし時、彼等は慈悲深き主に、その僕等と再び全き平和をなし給はんことを求めたり。三〇 彼等またテモテオ及びバクキデスの軍隊と戰を交へて、二萬人を殺し、最も高き要害を占領し、負傷者と寡婦らと孤兒らとに、また老いたる者らに、彼等と同じき分前の分捕物を與へたり。三一 彼等敵の武器を集めし時、心を用ひてこれを主要なる場所に貯へ、分捕物の殘餘をエルサレムに運び到りぬ。三二 彼等またテモテオの軍隊の將にして、最も不淨なる者、またユダヤ人に多くの害を與へたる者を殺したり。三三 かくて彼等その父祖たちの町に於て祝捷祭を催しし時、宮の門に火を放ちしものどもを燒きしが、其等の者どもの間に、一民家に逃れしカリステネスも居りき。かくて此等の者どもはその不信に對する當然の報償を得たり。三四 ユダヤ人を奴隷とせんがために買はんとて千人の商人を率ゐ來りし、三度咀はれしニカノルは、三五 その眼に取るに足らぬものと見えしものに主の御助ありしため、恥辱を受け、その光榮ある服裝を脱ぎ捨てて、國內を通り、亡命の奴隸の如く、單獨にて、アンテオケに辿りつきしが、その軍勢滅されしが故に、最も大なる不幸にあへり。三六 而して、エルサレムの人々を捕虜として、ロマ人に貢せんと約せし彼は、廣く告げ示して、ユダヤ人は彼等のために戰ひ給ふ主をもつが故に害はれ得ず、これ彼等主によりて定められたる律法に從へばなりといへり。

第九章

一 その頃アンテオコス足立亂れて、ペルシヤ地方より歸れり。二 かれペルセポリスと呼ばるる町に入り、神の宮を掠め、町を奪取らんと企てしが、群衆蜂起せしかば、彼等武器をもて防禦に立ち向ひしに、アンテオコスは却つてその國の人々のために敗られ、恥づべき退却をなせり。三 而して彼、エクバタナに在りける時、ニカノルとテモテオの軍隊とに起れることにつきての報告彼の許に達したり。四 ここに於て彼、激しく憤り、己を敗北せしめし人々の惡をユダヤ人に報いんと思へり。されば彼、その兵車に命じて止まることなく進ましめ、その旅程を急がしめしが、天よりの審判既に彼の上に及び居たり。そは彼傲慢にもかくいへり『われ到らん時、エルサレムをばユダヤ人の共葬墓地となさん。』五 然るに一切を見給ふ主なるイスラエルの神、醫すべからざる、見えざる打擊を彼に加へ給へり。卽ち彼、この言をいひ終るや否や、激しき腹痛起り、內部に甚しき苦惱生じたり。六 こは彼が多くの異なる苦痛をもて、他の人々の腸を斷ちたる當然の報なりしなり。七 されど彼少しもその暴虐を止めざるのみか、猶も傲慢に滿たされ、ユダヤ人に對する憤怒の火を吐きて、旅程を急げと命じたり。然るに彼勢に任せて進み行きし程に、その兵車より墜落し、その墜落激しかりしかば、手足引裂かれたり。八 かくて、その時までは、海の浪も己が命のままとなるべしと考へ、人の分を超えて驕り、山の高さをも秤にて量り得

べしと思ひし彼は、あはれにも地上に倒され、擔架にて運ばれたり。かくてそれは明かに神の力なることすべての人に示されぬ。九而して此の神を畏れざる者の體より、蟲群り出で、かれ猶生きて苦みもがき居りし間に、その肉離落ち、その惡臭の故に、全軍腐敗を厭ひて、面を背けたり。一〇かくて少時前までは、自ら天の諸星にも觸れ得べしと思ひ居たりし者を、今はその堪へ難き惡臭の故に、誰も之を舁かんとはせざりき。一一かかりし程にさすがの彼も心碎けて、その大なる驕慢を止め、刻々に増し行くその苦痛の故に、神の笞を受け居ることを知り始めたり。一二而して己自らその臭氣に耐へ得ざるに至りし時かくいひぬ『神に服するは當然なり、死ぬべき身をもて心驕るべきにあらず』と。一三かくて此の惡虐なる者、もはや彼の上に憐憫を垂れ給はぬ全能の主に向ひて、次のことどもを誓へり。一四卽ちそれは、彼が平地となし、共葬墓地となさんとて、急ぎ來りし聖なる都の解放を布告すること、一五彼が葬にだも價せずとして、幼兒もろとも獸に投げ與へ、鳥に喰ましめんとしたりしユダヤ人等を、すべてアテネの市民等と同等とすべきこと、一六彼がさきに掠奪せし聖所を最も神に相應しき供物をもて飾り、すべての聖器をば幾倍にも增して囘復し、己が收入の中より犧牲に要する費用を支出すべきこと、一七また此の外に、彼が自らユダヤ人の一人となりて、人の住む所はいかなる所にてもこれを訪れ、神の御力を告げ示すべきことどもなり。一八されど、神の審判正しく彼の上に臨みて、その苦痛少しも減ぜざりし時、自らすべての希望を抛棄て、嘆願の性質を帶べる次の如き書をユダヤ人に書き送れり。一九『共に市民たるに相應しきユダヤ人に、王にして將帥たるアンテオコス、豐なる歡喜と健康と幸福とを祈る。二〇汝らと汝らの子ら健にして、事意の如くならば、我わが希望を天に置きて、大なる感謝を神に獻げん。二一われ病床にあれど、汝等の名譽と好意とを深く心に留む。ペルシヤ地方より歸りてわれ重き病に罹りたれば、すべての人々の共同の幸福に考慮を用ふる必要を認めたり。二二されど自ら絶望に陷りしにあらず、病より免れんとの大なる希望を有す。二三思ふに、わが父嘗て山地に軍を進めし時、後繼者を立てしは、二四豫期に反すること起り、若くは好しからざる報告來ることあらば、國に殘りし人々政權を嗣ぐ人の誰なるかを知りて、心を亂さざらんがためなり。二五且われは國境なる君侯たち及びわが王國の隣人ら機會を窺ひ、將來の事變を待つを慮りて、わがさきに山地に向ひて急ぎ居たりし頃、しばしば汝らの多くの者に託し、かつ推薦せしわが子アンテオコスを王位に卽かしめ、別紙の如く彼に書き送れり。二六さればわれ汝に勸め、汝に求む。願くは、公私ともに汝等のために與へられし益を憶えて、汝ら各自我とわが子に現在の好意を示さんことを。二七そはわれ、彼が柔和と仁慈とをもてわが目的をつぎ、寛容をもて汝等をあしらふべきを確信すればなり。』二八かくて殺人者、冒瀆者たる彼は、嘗て

他人をあしらひし如く、自らいとも激しき苦痛を忍び、異境に於て最も哀むべき運命を負ひ、山地にて最期を遂げたり。二九彼と共に養育せられしピリポはその屍を運び去りしが、アンテオコスの子を恐れて、エジプトのプトレミオ・ピロメトルの許に身を寄せたり。

第一〇章

一さてマカビオ及び彼と偕にありし人々、主の御助によりて、宮と町とを回復したり。二彼等は外人によりて市場の中に造られたる祭壇を倒し、宮の境界を毀ちたり。三かくて聖所を潔めたる後、彼等は犧牲のために他の祭壇を造り、石を打ちて火を起し、二年間中絶せし犧牲をささげ、香を焚き、燈火をともして、供のパンをそなへたり。四彼等これらの事をなしし時、平伏して主に祈り、もはやかかる災害を下し給はざらんことと、若し罪を犯すことありとも、忍びて彼等を懲し、神を瀆す、野蠻なる異國人に渡し給はざらんこととを求めたり。五さて外人によりて聖所の瀆されし、その同じ日、卽ちキスリウの月の二十五日に、宮潔行はれたり。六人々假廬の祭と同じ慣行に從ひて八日間喜悦をなせり。彼等は少時さきに、假廬の祭の間、野獸の如き狀にて山と洞穴とにさまよひ歩きしことを記憶し居たりき。七されば彼等は、葉をもて飾りたる杖と美しき小枝と棕櫚の葉とをかざして、己が所を潔め了せ給ひし主に感謝の歌をささげたり。八彼等は、また公の規定と敕令とを發して、ユダヤの全國民に、年毎に此等の日を守るべきことを命じたり。九以上はエピパネスと呼ばれたるアンテオコスの終焉の出來事なり。一〇されど我等今、この神を畏れぬ者の子に相應しきエバトル・アンテオコスの身にいかなる事の起りしかを記し、もろもろの戰爭の災害について簡單に述ぶべし。一一此の者王位に卽きし時、一人のルシアなるものを政務總裁となし、且ケレスリヤ及びピニケの總督に任じたり。一二マクロンと呼ばれたるプトレミオは、ユダヤ人に加へられたる不義の故に、彼等に對して義を行はんと欲し、平和の條件をもて彼等に對せんと努めたり。一三然るに王の僚友らのために告訴せられ、ピロメトルが彼に委任したるクプロを棄てたればとて、事毎に國賊と呼ばれ、遂にアンテオコス・エピパネスに身を寄せしが、その權威を保つこと能はざりしかば、毒を仰ぎて自らその生命を絶てり。一四されどゴルギヤ此の地方の總督となるに及びて、傭ひ入れたる軍隊を用ひて、しばしばユダヤ人と戰を交へたり。一五主なる砦を保ち居りしイヅミヤ人も亦かれに與して、ユダヤ人を惱し、エルサレムより逃れ來れる者どもを受けて、戰をなさんと試み居たり。一六されどマカビオ及び彼と偕にありし人々は神に向ひて嘆願し、彼等とともに戰ひ給はんことを求めて、イヅミヤ人の砦に突進し、一七これを強襲して、その所を占領し、石垣の上にて戰ふすべてのものを防ぎ、彼等の手に落ちし者を殺しければ、殺されしもの二

萬人を下らざりき。一八 而して九千人以上のもの、いと堅固にして、防禦に要するすべてのものの完備せる二つの戍樓に逃れしかば、一九 マカビオはシモンとヨセフとの外にザカイオとそのの部下、卽ち包圍するに足る軍隊とを殘して、自らは最も必要迫れる戰線に向へり。二〇 されどシモン及び彼と偕にありし者ども貪婪の念に驅られ、戍樓に居りし者どもの或ものより賄賂を受け、七萬ドラクマを得て、彼等の或ものどもを脫出せしめたり。二一 此のことにつきての報告マカビオに達せし時、かれ民の指導者等を集めて、金錢のためにその兄弟たちを賣り、その敵に己等に對して戰ふ便宜を與へし者どもを訴へたり。二二 かくて彼、叛逆者となりし此等の者どもを死刑に處し、直ちに二つの戍樓を占領したり。二三 彼はその武器をとりて企てしすべてのことに成功し、二つの砦に於て二萬人以上のものを殺したり。

二四 さてさきにユダヤ人によりて敗られしテモテオ外國兵の大軍を集め、少からざるアジアの騎兵を率ゐ、武力によりてユダヤを占領せんとて攻め上れり。二五 されど彼近づきし時、マカビオ及び彼と偕なる人々頭に土をふりかけ麻布を腰に纒ひて、神に嘆願をささげ、二六 祭壇の前の段の上に平伏し、彼等に恩惠を施して、律法に記されし如く、敵には敵となり、仇には仇となり給はんことを祈れり。二七 その祈禱より起ちあがるや、手に武器をとりて、町より少しく進み出で、その敵に近づきて、立ち止まれり。二八 朝に及びて兩軍戰を交へしが、ユダヤ人はその勇氣の外に、主をその隱家として成功と勝利の保證をもちしに、敵は專らその戰鬪力を頼とせり。二九 されど戰まさに酣となりし時、その敵の前に、黃金の鞍を置きたる馬に跨れる、光まばゆき五人の騎士天より現れしが、その中の二人はユダヤ人の先頭に立ち、三〇 マカビオをその中央に置き、己等の武具をもてこれを蔽ひ、傷を負ふことなからしめしが、その敵に向ひては矢と雷電とを射放ちしかば、彼等眼眩みて混亂に陷り、怕ぢ惑ひて粉碎せられぬ。三一 かくて二萬五千人の外に六百人の騎兵殺されたり。三二 然るにテモテオ自身は、ガザラと呼ばるる砦、卽ちケレアスの指揮し居たりしいと堅固なる要害に逃れ入れり。三三 されどマカビオとその部下とは喜びて、二十四日に亙り此の要害を圍み攻めたり。三四 内に居りし者ども、その場所の堅固なるを賴みて、甚しく冒瀆し、敬虔ならぬ言を浴せかけたり。三五 二十五日目の朝に及びて、マカビオの軍隊なる或若者ら、彼等の冒瀆の故に憤怒に燃え、男らしき力と猛獸の如き元氣とをもて石垣を強襲し、その接する程のものを悉く斬り倒したり。三六 他の者らも亦同じ狀にて攀登り、内のものども怕ぢ惑ひ居る間に、戍樓に火を放ちしかば、燃ゆる焰冒瀆者らを生きながらに燒き盡せり。さる程に他のものどもは門を破り開き、殘れる軍隊を内に入らしめて、町を占領したり。三七 かくて彼等、穴倉に隱れしテモテオと、その兄弟ケレアス、及びアポロパネスを殺したり。三八 彼等これらの事を成し遂げし時、イスラエルに大なる

恩惠を施し、彼等に勝利を與へ給へる主を、讃美と感謝とをもて祝したり。

第十一章

一その後幾許も經ざるに、王の後見者にして親戚たり、また政務總裁たるルシア、起りしことどもにいたく不滿を感じ、二八萬人の歩兵とすべての騎兵とを集めて、ユダヤ人に向ひ來り、町をギリシヤ人の住む場所とせんと思へり。三且諸國民の他の聖所に於けるが如く、宮に税を課し、年毎に大祭司職を賣物にせんとし、四神の御力につきては何事をも思はず、その數萬の歩兵と數千の騎兵と八十頭の象とをたのみて心驕れり。五かくてユダヤに入り、エルサレムより隔れること五スタデアなる要害の地ベテスラに近づきて、これを攻め圍みたり。六されどマカビオ及び皆にありしものども、彼が砦を攻むことを知りしかば、彼等とすべての民、悲哀と涙とをもて主に嘆願し、イスラエルを救はんがために、善き御使を送り給はんことを求めたり。七而してマカビオ自ら先づ武器をとりて、他のものどもを勵し、彼と共に危險を冒してその兄弟たちを助け出すことを勸めしかば、彼等喜びて彼と協力せり、八而して彼等エルサレムに近き所にありしに、彼等の頭上に、白き衣を身に纏ひ、黄金の甲冑を搖り動せる一人の騎士現れぬ。九ここに於て彼等皆ともに慈悲深き神を讃め、心甚しく強められ、唯人のみならず猛獸にても、鐵の城壁にても倒さん程の意氣込となれり。一〇かくて主彼等に慈悲を垂れ給ひたれば、彼等、天に於て彼等と協力して戰ふ者とともに、隊を整へて進軍したり。一一而して獅子の如く敵を襲ひて一萬一千の歩兵と十六萬の騎兵とを殺し、すべてのものを潰走せしめたり。一二彼等の大部分は、傷を負ひ、裸にて逃れ、ルシアもまた身をもて恥づべき逃走をなせり。一三されど彼は理解なき人にあらねば、自ら招ける敗北をもて己が身を秤り、ヘブル人は、全能の神彼等と共に戰ひ給ふが故に、これに打勝つこと能はずと考へ、再び使者を遣して、一四彼等の權利を悉く承認せんとの條件をもて和を結ばんことを說きすすめ、自らは、王を彼等の友となるやう說伏すべしと約束したり。一五マカビオは人のために善かれと望み居たれば、ルシアの提供せしすべての條件に承認を與へたり。かくてマカビオがユダヤ人につきて、ルシアに書き送りしことは、何事にても王の承認する所となれり。一六ルシアよりユダヤ人に書き送りし書は凡そ次の如きものなりき。

『ルシア、ユダヤ人の平安を祈る。一七汝等より遣はされたるヨハネとアブサロムは、嘆願書をもたらして、その中に記されたることどもにつきて請求をなせり。一八されば王に通達する必要あることは、すべてこれを彼に示し、王は許可し得べきものはすべてこれを許可したり。一九汝等もし此等の事につきて好意を保たば、我も亦今後努めて汝等の幸福のために寄與する

所あるべし。二〇このためにわれ、此等の人々とわが許より遣すべき人々とに、汝等と協議せんがための詳しき指令を發したり。二一 願くは汝等 健ならんことを。第百四十八年デオスコリンテオの月、第二十四日之を誌す。』二二 王の書にはかく記されたり。

『アンテオコス王、兄弟ルシアの平安を祈る。二三 我等の父は、その王國の臣下等が何等の困難なく、各自その業にたづさはり得んことを願ひつつ神々に加はり、しことを見たれば、二四 我等ユダヤ人等が、我等の父の目的に從ひてギリシヤ人の慣行に轉ずることを欲せず、却つて己等の生活の方法を選び、彼等の律法の慣行の許されんことを要求せしことをききて、二五 此の國民が不安より免れ得ん、ことを欲し、ここに、彼等の宮が彼等に回復せられんことと、彼等がその父祖たちの日より傳へられし慣行に從ひて、生きんことを決定したり。二六 されば汝、彼等の許に使者を遣して、彼等に右の手を與へ、彼等が我等の意思を知りて心を安んじ、喜びて己等の業に、いそしむことを得しめよ。』二七 國民へ宛てたる王の書は次の如し。

『アンテオコス王、ユダヤ人の元老院及び他のユダヤ人の平安を祈る。二八 汝等もし健ならば、これ我等の願なり。我等も亦 健なり。二九 メネラオは我等に、汝等の希望は、歸りて汝等の業にいそしむにあることを告げたり。三〇 さればクサンテコの月の三十日までに來る者は、わが友情に與るべし。三一 ユダヤ人等はその當然の權利を用ひ、その律法を守ること今日までの如くなるべし。而して彼等の何人も知らずしてなしし事のために苦めらるることなからん。三二 かつ我メネラオを遣したれば、彼汝等を勵すべし。三三 願くは汝等 健ならんことを。第百四十八年クサンテコの月第十五日之を誌す。』三四 ロマ人もまた次の如き内容の書を彼等に送れり。

『ロマ人の使節なるコイント・メムミオ、及びテトス・マンリオ、ユダヤ國民の平安を祈る。三五 王の親戚ルシアが汝等に許可せし事柄につきては、我等も亦これを承認す。三六 されど彼が王に通達せざるべからずと判斷せし事柄につきては、我等が汝等の益となる布令を發せんがために、汝等先づよく協議して、我等の許に使者を送るべし。そは我等テンテオケへの途にあればなり。三七 されば我等 汝らの心の何處にあるかを知らんがために、急ぎて何人かを遣すべし。願くは汝等 健ならんことを。三八 第百四十八年クサンテコの月十五日之を誌す。』

第一二章

一 かくて此等の契約の結ばれし時、ルシアは王の許に赴き、ユダヤ人はその耕作に從事せり。二 されどその地方の總督等、卽ちテモテオ、ゲンネオの子アポロニオ、ヒエロニモ、デモボン、またクプロの總督ニカノルは、ユダヤ人等が安穩を樂み、平和に生活するを欲せざりき。三 且ヨツパの人々は、神を恐れぬ大な

る惡を行へり。即ち彼等、己等の間に住めるユダヤ人等を招きて、妻子等とともに彼等の許に來らしめ、彼等に對して何等の惡意なきかの如く裝ひて、これをその備へ置きたる船に乘せたり。**四**ユダヤ人等は町の公の布告を信じて、平和なる生活を望み、何事をも疑はずして、その招待を受けしに、ヨッパの人々は彼等を海上につれ出し、二百人に下らざる者どもを溺死せしめたり。**五**ユダその同胞に加へられし殘虐をききし時、彼と偕にある者どもに命を下し、**六**義しき審主なる神に呼はりて、その兄弟たちに對する殺戮に報い、夜に乘じて港に火を放ち、もろもろの船を燒き、逃れたる者どもを劍をもて殺せり。**七**されど町鎖されし時、そこを退きしが、心には、再び來りてヨッパの住民全體を滅し盡さんことを期したり。**八**然るに、ヤムニヤの人々も、彼等の間に滯在するユダヤ人等に同じ害を加へんとするを知りしかば、**九**かれ又ヤムニヤ人に對して夜襲を行ひ、港と艦隊とに火を放ちたり。焰の輝、二百四十スタデヤを隔てしエルサレムにても見られたり。**一〇**さて彼等テモテオを擊たんとて、そこより九スタデア進みし時、歩兵五千、騎兵五百に下らざるアラビヤ人の一隊彼に攻めかかれり。**一一**かくて激しき戰となりしが、ユダとその輩は神の御助によりて勝利を得、敗れたるアラビヤの遊牧民は、家畜を與へ、また他のすべての事に於て彼等を助けんとの約束をもて、ユダに和を乞へり。**一二**ユダは多くの事に於て彼等より益を得んことを望みて、彼等との和睦を承認せしかば、彼等は友情の保證を得て、その天幕に歸れり。**一三**かれまた、石垣をめぐらせるゲフルンといふ、堅固なる或町を襲ひしが、そこには種々なる國人雜居し、その町の名はカスピンとも呼ばれぬ。**一四**されど住民等石垣の堅固なると食糧の貯へあるとを頼みて、ユダ及び彼と偕にある者どもに對して無禮なる振舞をなし、彼等を嘲り罵り、冒瀆の言をすら發せり。**一五**ここに於てユダとその輩は、ヨシュアの時、撞壁機もなく、精巧なる攻城機もなくして、エリコを陷れ給ひし、世の大なる主宰者に呼はりて、石垣に突進し、**一六**神の御意によりて町を奪ひ、言語に絕する殺戮を行ひしかば、附近にありし廣さ二スタデヤの池は、血滿ち溢れて、流れ出づるかの如く見えぬ。**一七**彼等其處より七百五十スタデア退きて、カラクスに向ひ、トブの人と呼ばるるユダヤ人の許に到れり。**一八**而して彼等その地に於て、もはやテモテオに遭はざりき。そは彼、何事をもなし得ずしてその地を去り、極めて強き守備兵を或地に殘し置きたればなり。**一九**然るにマカビオの將ドシテオとソシパテルとは進み出でて、テモテオが砦に殘し置きし者どもを一萬人以上殺せり。**二〇**ここに於てマカビオは己が手兵を二隊に分ち、此等の二人をその隊長となし、十二萬の歩兵と二千五百の騎兵とを率ゐたるテモテオを擊たんとて、急ぎ進み行けり。**二一**然るにテモテオはユダの來襲をききし時、直ちに婦等と子供等、及び荷物をカルニオンと呼ばるる要害に送れり。そはその所は包圍困難にしていづれ

の方面も路狹く、近づくに難かりければなり。二三されどユダの前衞現れ、恐怖と戰慄、敵に臨みし時、彼等は己等の上に起るすべての事を見破る彼の出現の故に慌て逃れ、彼方此方と遁げ惑ひ、互に同志討をなして斃れ、己等の劍もて刺し貫かれたり。二三ユダは少しも追擊の手を弛めず、惡人どもを劍もて殺し、三萬人に達する多くの者を滅せり。二四テモテオはドシテオ及びソシパテルの軍隊に捕へられしが、巧なる欺瞞をもて熱心にその助命を乞ひ、ユダヤ人の多くのものの親たちと或ものの兄弟たちを己が下に捕へあれば、結果によりては彼等を顧るものなきに至らんといへり。二五かくて彼、多くの言をもて、危害を加へずに彼等を引渡すべき約束を堅めしかば、彼等は己が兄弟たちを救はんがために、彼を放免したり。二六ユダはカルニオンとアテルガデスの宮とに對して進軍し、二萬五千人を殺せり。二七かれ此等のものどもを敗走せしめ、これを滅し後、あらゆる國民の群住み居りし堅固なる町エフロンに攻入りしに、石垣の正面にて強き若者たち勇しき防禦をなし、且そこには機械と投箭の豐なる貯藏ありき。二八されど彼等は、御力をもて敵の勢力を粉碎し給ふ主に呼はりて、その町を己等の手に入れ、その中に居りし者どもを殺せること二萬五千人に達したり。二九其處より出でて彼等は、エルサレムより六百スタデア隔れるスクトポリスに向ひて進軍せり。三〇されど其處に住めるユダヤ人等、スクトポリスの人々が彼等に對して示しし好意と、彼等の災害の時に、彼等をあしらひし仁慈とを證せしかば、三一感謝して、將來もまた此の民族に對して、好意を示さんことを勸めたり。かくて七週の祭近づきし時、彼等エルサレムに上れり。三二ペンテコステと呼ばるる祭の後に、彼等急ぎて、イヅミヤの總督ゴルギヤに對して進軍を始めしが、三三かれ三千の步兵と四百の騎兵とを率ゐて進み行けり。三四さて彼等 戰を交へしに、ユダヤ人の少數のもの斃れたり。三五バケノルの軍隊の一人なる騎兵、ドシテオといふ強き者、ゴルギヤに迫り、その上衣を捉へ、力に任せてこれを引き寄せたり。彼はこの呪はれたる者を生捕にせんと考へ居たりしに、トラキア騎兵の一人、彼に攻めかかりてその肩を打ちしかば、ゴルギヤはその隙に乘じてマリサに逃れたり。三六エスドリスと偕にありし者ども戰 長引きて疲れはてしかば、ユダ、主に呼はりて、自らを彼等に示し、彼等の傍に在りて戰ひ、戰の先頭に立ちて導き給はんことを求めたり。三七かく彼、父祖たちの國語にて鬨の聲を揚げ、聖歌を合唱し、不意に突進してゴルギヤの軍勢を敗走せしめたり。三八かくてユダはその軍隊を集めてオドラムの町に來りしが、七日目に及びて、彼等慣例に從ひ、自らを潔めて、安息日を守れり。三九あくる日、必要起りしかば、ユダはその部下とともに、戰死者の屍體を收容し、これを父祖たちの墓に葬りて、その血族に加へんとて來れり。四〇然るにかれら、死にし者おのおのの下衣の下に、ユダヤ人が律法によりて堅く禁ぜられしギムニヤの偶像の

奉納物を見出せり。而して彼等の斃れしは此のためなりしこと判明せり。**四一**さればすべての人、隠れたることを露し給ふ義しき審主なる主の御業を讃めつつ、**四二**嘆願をささげ、犯せる罪の悉く消し去られんことを求めたり。貴きユダは群衆を勸めて、罪より遠ざからしめたり。これ彼等は斃れし者の罪の故に何事の起れるかをその眼をもて見たればなり。**四三**また彼、人々より銀二千ドラクマを集めてこれをエルサレムに送り、罪のために犠牲を献げしめたり。彼がかく正しく且恭しく務を果せるは、復活につきて考へ居たればなり。**四四**そは彼もし死ねる人々の再び甦るべきことを豫期せずば、死人のために嘆願をなし、祈禱をささぐるは意味なき虚しきことなるべし。**四五**（かれもし、神を畏れて眠に就ける人々のために貯へられし美しき賜物を望みて、これをなししならば、その思は聖にして敬虔なり。）さればかれ、彼等がその罪より救はれんがために、死人のために赦を乞ひ求めたり。

第一三章

一第百四十九年に、ユダ及び偕に居る者の許に達せし報告によれば、アンテオコス・ユバトル大軍を率ゐてユダヤに攻め上り、**二**彼の後見人にして政務總裁なるルシア彼と偕にありて、おのおの、歩兵十一萬、騎兵五千三百、象二十二頭、及び鎌をつけたる兵車三百を持てり。**三**メネラオもまた彼等に加はり、大なる虚僞をもてアンテオコスを煽動せしが、これは己が國を救ふためにあらず、自ら高き位に卽き得べしと思ひしが故なり。**四**されど王の王は、此の惡虐なる者に對して、アンテオコスの憤怒を起さしめ給ひ、かつルシアは王に、すべての惡の原因は此の人なりと告げしかば、王かれをベレアにつれ行かしめ、その地方の慣例に從ひて、死刑に處したり。**五**さて其處に灰を滿したる、高さ五十キユビトの戍樓ありて、これに各側面より灰の中に傾斜する轉機据ゑつけあり。**六**冒瀆の罪を犯したる者、若くは他の甚しき惡しき行爲をなしたる者を、彼等ここにて悉く滅亡の中に突き落したるなり。**七**かかる運命にて律法の破壞者メネラオは、當然にも地上に墓を得ることなくして死ねり。**八**かくて、聖なる火と灰の祭壇の周圍にて、多くの罪を重ねたる彼は、灰の中にてその死を受けたり。**九**さて王は、憤怒に燃え、ユダヤ人の上に、その父の時に彼等が蒙りたる苦難の最も苛酷なるものを課せんとて來れり。**一〇**されどユダ此等のことをききし時、群衆に命じて、晝夜主に呼はり、もし他の時救を施し給はば、まさに律法と、その國と、聖なる宮とを奪はれんとする彼等を、今この時救ひ給ひ、**一一**僅に復興したるばかりなる此の民を、再び汚れたる異國人の手に陷らしむることなからしめ給はんことを祈らしめたり。**一二**かくて彼等共にこれをなし、三日の間止むることなく、涙と斷食とをもて地に平伏し、慈悲深き主に哀願しけるが、ユダは彼等を勵して、身を備ふべきことを命じたり。**一三**

長老たちとともに議りし後、彼は、王の軍勢がユダヤに入りて、町を占領する前に、進み行き、主の御助もて戰はんと決心せり。一四此の決心をこの世の創造主に委ね、偕にある者どもを勵して、律法と宮と町と國と民の生活とのために、死に至るまで勇しく戰ふべきことを命じ、モデインに近くその營を張りぬ。一五かくてその兵士等に、『勝利は神のものなり』との合詞を與へ、最も勇敢なる若ものらの選拔隊をもて夜襲を行ひ、王の幕屋に殺到して、その營にて二千人を殺し、また最も大なる象を、その上のやぐらにありし者ともろ共に斃したり。一六かくて彼等遂に、敵の陣營に恐怖と驚愕とを滿し、大なる成功をもて歸れり。一七これは、ユダに與へられたる主の御保護によりて、夜のまさに明けんとする時に成し遂げられたるなり。一八かくて王はユダヤ人のいとも勇敢なることを味ひ知りしかば、策謀をもて彼等の地位を奪はんと試み、一九ベテスラなるユダヤ人の要害に向ひて進みしが、退けられ、敗れて歸りぬ。二〇而してユダ、城内に在りし者どもに、必要なるものを送れり。二一然るに、ユダヤ人の軍中に在りしロドコスなる者敵に祕密を明ししかば、搜し出され、捕へられて、獄に投ぜられぬ。二二王は、再びベテスラに在る者等と和を結び、互に手を握り合ひて退きしが、ユダを襲ひて、却つて敗れたり。二三その時かれ、さきに政務の總裁としてアンテオケに殘されしピリポが狂暴となりしことを聞き驚きて、ユダヤ人と和睦し、自ら讓歩して、彼等のすべての權利を認むることを誓ひ、彼等と條約を結び、犧牲を獻げて、聖所を崇め、その地に慈惠を示したり。二四彼はかくマカビオを受け、トレマイよりゲルレニヤに至るまでの總督としてヘゲモニデスを殘して、トレマイに來りぬ。二五然るにトレマイの人々、ユダヤ人に對していと大なる憤怒をもちたれば、この條約に不滿をいだき、その一致せし條項を無效にせんと欲したり。二六ルシア進み出で彼等と語り、そのなし得る最もよき辯護をもて彼等を說伏せ、和げ、慰撫して、アンテオケに去れり。以上は王の侵入と退却との成行なり。

第一四章

一さて三年を經たる後、ユダ及び偕に在りし者どもの許に、報告達したり。曰く、セレウコスの子なるデメトリオ、大軍と艦隊とをもてトリポリスの港に入り來り、二アンテオコス及びその後見者ルシアを殺して國を占領したりと。三然るに、ここにアルキモなるものあり、さきに大祭司たりしが、異邦人との混合の時に、故意にわが身を汚したれば、今は己を救ふ道もなく、また聖壇に近づくを得ずと考へ、四第百五十一年の頃、デメトリオ王の許に來りて、黃金の冠と棕櫚の枝と、また此の外に宮の祭に用ふべきオリブの枝とをささげたり。而してその日は默し居たりしが、五その狂暴を逞くする機會を得て、デメトリオにその會議の席に招かれ、ユダヤ人の情況と彼等の目的とにつきて問はれ

し時、かく答へたり六『ユダ・マカビオが指導するハシデームと呼ばるるユダヤ人等は戰爭を絶たず、騷亂を起し、國を平和ならしむることを欲せざるなり。七さればわれ、わが父祖の光榮、卽ち大祭司職を抛ちてここに來れり。八第一にわれは、王に關ることどもにつきて正しき注意を拂ひ、第二にわが同胞のために心を用ふればなり。そはわが、前に述べし者どもの思慮なき行爲によりて、我等の全民族、少からざる不幸を味ひ居ればなり。九されど王よ、汝は此等のことにつきてしばしば報告を受け給へば、願くは、汝がすべての人々を受け給ふ慈惠に從ひて、敵に圍れ居る我等の國と我等の民族とを顧み給へ。一〇ユダの生き存へ居る間、國は平和を見ること能はざるべし。』一一かれ此等の言を語り終りし時、ユダに對して惡意を持ち居る王の僚友ら直ちにこれに和して、いやが上にもデメトリオを煽動したり。一二ここをもて彼、象隊の指揮者たりしニカノルを立ててユダヤの總督となし、これを遣して、一三ユダを殺し、かつ彼と偕にある者どもを散らし、アルキモを最も大なる宮の大祭司となすべしとの、記されたる指令を與へたり。一四而してさきにユダの前より逃れてユダヤを去りし異邦人等、ユダヤ人の不幸と災害とが己等にとりての成功となるべしと思ひて、ニカノルの許に群り來れり。一五然るにユダヤ人等ニカノルの侵入と異邦人の來襲につきてききし時、頭に土をふりかけ、その民を永遠に立て、常に己が臨在を現して、その嗣業なる彼等を保ち給ふ主に、嘆願をささげたり。一六而してその指揮者命を下すや、直ちにそこより出で、デサウといふ村にて、彼等と戰を交へたり。一七而してユダの兄弟シモン、ニカノルと戰ひしが、幾許も經ざるに、敵の不意の沈默によりて阻まれたり。一八されどニカノルは、ユダと偕に居る者どもの男らしさと、その國のために戰ふ勇氣とにつきてききしかば、劍によりて事を決することを避けたり。一九さればかれ、ポシドニオとテオドト、及びマタテヤを遣して親和の保證を取りかはさんとせり。二〇かくて此等の提案につきて協議を重ねし後、指揮者これを軍隊に知らしめしに、彼等悉く同じ心にて、その契約に承認を與へたり。二一ここに於て、彼等ともに、己等のみにて集らんがために日を定めたり。而して彼等各の隊より腰掛を運び來りて席を作りぬ。二二ユダ、敵方に俄に詭計のめぐらされんことを慮り、便宜の場所に、武裝せる者を置きて、適當なる協議を遂げたり。二三ニカノルはエルサレムに滯在しけるが、何等の混亂を起さず、却つて己が許に集り來れる人々を去らしめたり。二四彼はいつにてもユダを己が面前に居らしめ、心より此の人に凭れかかれり。二五彼はユダに妻を娶りて子を設くることを勸めしかば、かれ妻を娶りて、平穩なる日を送り、その生活を共にしたり。二六然るにアルキモ、二人の間の親和を見、取りかはされたる契約を手にせしかば、デメトリオの許に來りて、ニカノルは國家に對して惡意をもち、彼の王國への反逆者なるユダを己が後繼者となせりと告げ

たり。二七 ここに於て王、甚しく怒り、此の最も惡しきものの讒誣によりて激せられ、ニカノルに書を送りて、彼がその契約を喜ばざることを告げ、マカビオを囚へて、急ぎアンテオケに送るべきことを命じたり。二八 此の通知ニカノルの許に達せし時、心亂れ、何の惡事をもなさざりし人と結びたる條約の無效にせらるべきことを思ひて、打惑へり。二九 されど王の命に背くべき言ひがかりを得ざれば、彼は術策によりてその目的を遂げ得る機會を窺へり。三〇 然るにマカビオは、ニカノルが彼に對して荒々しきあしらひをなし、常の應待ますます粗暴となりたれば、これは吉兆にはあらざることを悟り、その少からざる手兵を集めて、ニカノルの前より身を匿せり。三一 ニカノルは、ユダのために巧に出し抜かれたるを知りしかば、いと大にしていと聖なる宮に來り、祭司たちが常の犧牲を獻げ居りし時に、當人を引き渡すべしと彼等に命じたり。三二 彼等誓言をもて、彼の捜索むる人の何處に居るかを知らざる旨答へしに、三三 彼その右の手を聖所の方にさし延べ、誓ひていへり『汝等もしユダを囚へて我に渡さずば、我は此の神の宮を地に倒し、祭壇を毀ち、ここにデオユソへの宮を建ててすべての人に見せしめん。』三四 彼かく言ひて去れり。ここに於て祭司たち天に向ひてその手を延べ、我等の民のために戰ひ給ふ主に呼はりて、かくいひぬ三五『宇宙萬物の主よ、汝は自ら何ものをも要し給はざれど、汝の宮居し給ふ聖所を我等の間に建つることを喜び給へり。三六 されば今、すべての聖なるものの上に在す聖なる主よ、潔められて後幾許も經ざる此の家を、とこしへに潔く保ち給へ。』三七 ユダヤ人の長老等の一人なるラヂスなる者をニカノルに讒せしものあり。されど彼はその國人を愛する者にして令聞あり、その好意の故にユダヤ人の父と呼ばれたりき。三八 さきに異邦人との交なかりし時、彼はユダヤ教を信ずるが故に讒せられしが、その身と生命とを危くし、すべての熱心をもて、ユダヤ人の宗教を守りたり。三九 ニカノルは、ユダヤ人に對して抱き居りし憎惡を明にせんことを欲し、ラヂスを捕へんとて五百人を超ゆる兵を送れり。四〇 卽ち彼はラヂスを捕へて、ユダヤ人に災害を臨ましめんとせしなり。四一 されど軍勢戍樓を占領せんとして、外側の戶に迫りし時、火を放ちて戶を燒きしかば、かれ包圍の中にありて、我とわが劍に伏したり。四二 兇惡なる者の手に落ち、己が貴さに相應しからざる凌辱を受けんよりは、むしろ潔く死なんことを選びたるなり。四三 されど急ぎたれば傷は急所を外れ、群衆は戶に殺到せり。彼は勇しく石垣の上に走り、大膽に群衆の中に身を投ぜしが、四四 彼等は速に避けて、身をかはしたれば、人なき所に倒れたり。四五 然るに息なほ彼の中にありければ、怒に燃えて起ちあがり、血は瀧の如く流れ、傷はいと重かりしが、群衆の間を走りぬけ、險しき斷崖の上に立ち、四六 その血まさに流れ盡きんとせし時、その腸を引き出でし、兩手にこれを握り群衆に向ひて、投げつけ、生命と靈との主に呼はり、これを再び與へ給はん

ことを祈りて死ねり。

第一五章

一ニカノルはユダとそのともがらとがサマリヤ地方に居ることを聞きしかば、休息の日に安全に彼等を襲はんと決心せり。二彼に從ふことを強いられたるユダヤ人等、『かかる殘虐と兇暴とをもて滅すことなく、萬物を照覽し給ふ主が、他の日に勝りて崇め、聖としたる此の日に相應しき光榮を歸せよ』といひしに、三此の三度咀はれたる惡漢問ひていへり『安息日を守れと命じたる主宰者天にありや』と。四彼等答へて『活ける主なる主宰者は天に在して、七日目を守るべきことを我等に命じ給へり』といへり。五然るに彼いひけるは『我は地上に於ける主宰者なれば、今、武器をとりて、王のわざを行へと命ず』と。されど彼その殘虐なる目的を遂ぐることを得ざりき。六ニカノルはあらゆる傲慢をもて、その頸を高くし、ユダとそのともがらとに對する完き勝利の記念碑を建てんと決心せしが、七マカビオは、猶も主よりの御助を得んとのあらゆる希望をもて、絶えずその信頼を保てり。八彼その部下を勵して、異教徒の來襲を恐るることなからしめ、さきに彼等がしばしば天より受けたる御助を心に保たしめ、今もまた、全能者より彼等に來るべき勝利を仰ぎ望ましめたり。九かつ律法と預言者とをもて彼等を慰め、彼等が今に至るまで保ち來りし闘爭を心に呼び起さしめ、彼等の熱心を鼓舞したり。一〇かくてかれ、彼等の精神を振ひ起たしめし時、その命令を彼等に與へ、同時に異教徒の不信とその誓約の破棄とを指摘したり。一一而してかれ、楯と槍との確なる防禦物によらず、よき言による奬勵をもて彼等おのおのを武裝せしめ、かつ信ずるに足る夢を語りしかば、彼等を甚しく喜ばしめたり。一二その夢に見たるはこれなり。高貴なる善人にして、事毎に崇められ、態度溫和にして、人に讚められ、幼少の時よりすべての德に秀でたる、大祭司たりしオニヤ現れ、手を延べてユダヤ人全體の上に祝福を祈り居りしに、一三年老いていと貴き一人の人そこに現れしが、その周圍には、驚くべく崇高き威嚴滿ち溢れたり。一四オニヤ答へていひけるは、『此は兄弟たちを愛する者にして、その民と聖なる都のために祈る神よりの預言者エレミヤなり』と。一五その時エレミヤはその右の手を延べて、黄金作の劍をユダに渡し、これを渡す時にかくいひぬ一六『神よりの賜物なる聖なる劍をとれ、これをもて汝、仇を擊破るを得べし。』一七いと美しくして勇氣を起さしめ、若者の魂を振ひたたしめ、これを雄々しからしむる力あるユダの言に勵されて、彼等は進み出でず、勇しく敵を防ぎ、町と聖所と宮とが、危險に瀕し居れば、大膽なる接戰によりて事を決せんと覺悟せり。一八その妻子、兄弟、眷族についての恐怖は、彼等これを意とせざりき、彼等にとりて最も大なる第一の恐怖は、その潔められたる聖所に關るものなりき。一九町に鎖込められしものは、外なる戰の故に心 惱されて、大

なる憂慮の中にありき。二〇かくて、すべてのもの、決戰の迫れるを見、敵は既にその軍勢を集めて、隊伍を整へ、象隊は便宜の位置に配せられ、騎兵も亦戰線につきし時、二一マカビオは敵の軍勢がその備へられたる種々なる武器と兇暴なる象隊とをもて現れしを認めしかば、手を天に延べて、異能を行ひ給ふ主に呼はれり。成功は武器によりて來らず、主はそのよしと見給ふ所に從ひて、相應しき者に勝利を與へ給ふことを知りたればなり。二二彼は主に呼はりてかくいひぬ『全能の主よ、汝はユダの王ヒゼキヤの時に御使を遣し、セナケリブの陣營にて、十八萬五千人を斃し給へり。二三されば天に在す主よ、願くは今、我等の前に御使を遣して、彼等に恐怖と戰慄とを起さしめ給へ。二四汝の聖なる民に對して冒瀆をもて來れる彼等を、汝の大なる御腕によりて怕惑はしめ給へ。』二五彼これらの言を終りし時、ニカノルとその輩ラツパと軍歌とをもて進み來りしかば、二六ユダとその部下は、嘆願と祈禱とをもて戰を交へぬ。二七手にては戰ひ、心にては神に祈りつつ、彼等は三萬五千人に下らざる敵兵を殺し、神の顯現によりて大なる喜をなせり。二八戰終りて彼等喜び歸らんとせし時、ニカノルが十分に武裝せるまま斃れ居るを見たり。二九ここに於て彼等大聲を擧げて叫び、父祖たちの國語をもて全能の主を祝したり。三〇かくて身も魂も全くささげて同胞のための主なる鬪士となりし彼、その生命の限り己が國人のために、若き時よりの好意を保ち來りし彼は、命じてニカノルの首を斬らしめ、又その手を肩と共に斷たしめて、これをエルサレムに携へ來らしめたり。三一かくて彼そこに到りて、その國人等を呼び集め、祭司たちを祭壇の前に立たしめし時、城塞に居りし者どもを呼び寄せ、三二これにニカノルの首と、此の冒瀆者が驕慢をもて全能者の聖なる家に對してさし延べたる手とを示し、三三敬虔ならぬニカノルの舌を切り、これを寸斷して空の鳥に與へんと言ひ、その狂暴の報償を聖所の前にかかげたり。三四而してすべてのもの天を仰ぎ、自らを現し給ひし主を祝していへり『讃むべきかな、己が所を瀆されずに保ち給ひし主よ』と。三五かれはニカノルの首と肩とを城塞の上にかかげ、すべての人に對して明にして、隱なき主の御助の印とせり。三六而して彼等は皆決議をもて、公の布告を發し、此の日を祝せずに過すが如きことなく、第十二月の十三日を恭しく記念せしめたり。その月はスリヤ語にてアダルと呼ばれ、日はモルデカイの日の前日なり。三七以上はニカノルの企の成行にして、此の時より以來、町はヘブル人によりて保たれたれば、我もまたこれをもて、わが書の終とすべし。三八もしわが記しし所佳く、わが物語正しくば、これわが望む所なり。されどもし平凡にして拙くとも、此は我がなし得る一切なり。三九葡萄酒のみを飲み、若くは水のみを飲むは害あれど、葡萄酒と水とを和するは味佳きものなるが如く、言整へられたる記述は、物語を讀む人々の耳を喜ばすべし。

これをもて此(こ)の書(ふみ)の終(をはり)とせん。

馬太傳福音書

第一章

一アブラハムの裔なるダビデの裔イエス・キリストの系圖。

二アブラハム、イサクを生イサク、ヤコブを生ヤコブ、ユダとその兄弟を生り三ユダ、タマルに由てパレスとザラとを生パレス、エスロンを生エスロン、アラムを生四アラム、アミナダブを生アミナダブ、ナアソンを生ナアソン、サルモンを生五サルモン、ラハブに由てボアズを生ボアズ、ルツに由てオベデを生オベデ、エツサイを生六エツサイ、ダビデ王を生ダビデ王ウリヤの妻に由てソロモンを生み七ソロモン、レハベアムを生レハベアム、アビヤを生アビヤ、アサを生八アサ、ヨサパテを生ヨサパテ、ヨラムを生ヨラム、ウッズヤを生九ウッズヤ、ヨタムを生ヨタム、アカズを生アカズ、ヘゼキヤを生一〇ヘゼキヤ、マナセを生マナセ、アモンを生みアモン、ヨシヤを生り一一バビロンに従さるる時ヨシヤ、エホヤキンと其兄弟を生一二バビロンに従されたる後エホヤキン、シアテルを生シアテル、ゼルバベルを生一三ゼルバベル、アビウデを生アビウデ、エリヤキンを生エリヤキン、アゾルを生一四アゾル、ザドクを生ザドク、アキムを生アキム、エリウデを生一五エリウデ、エリアザルを生エリアザル、マツタンを生マツタン、ヤコブを生一六ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生り此マリヤよりキリストと稱るイエス生れ給ひき一七其世系を數ふればアブラハムよりダビデに至るまで十四代ダビデよりバビロンに従さるる時まで十四代バビロンに従されしよりキリストまで十四代なり

一八それイエス・キリストの生れ給ること左の如し其母マリアはヨセフと聘定を爲るのみにて未だ偕にならざりしとき聖靈に感じて孕しが其孕たることを顯れければ一九夫ヨセフ義人なる故に之を辱しむることを願ず密に離縁せんと思へり二〇斯て此事を思念せる時に主の使者かれが夢に現れて曰けるはダビデの裔ヨセフよ爾妻マリヤを娶ことを懼る勿れその孕る所の者は聖靈に由なり。二一かれ子を生ん其名をイエスと名くべし蓋その民を罪より救はんとすれば也二二凡て此事は預言者に託て主の曰たまひし言に二三處女はらみて子を生ん其名をインマヌエルと稱べしと有に應せん爲なり其名を譯ば神われらと偕に在との義なり二四ヨセフ寐より起て主の使者の命ぜし言に遵ひ其妻を娶たれど二五冢子の生るるまで牀を同にせざりき其生れし子をイエスと名けたり

第二章

一夫イエスはヘロデ王の時ユダヤのベテレヘムに生れ給しが其とき博士たち東の方よりエルサレムに來り二曰けるはユダヤ人の王とて生れ給る者は何處に在す乎われら東の方にて其星を見たれば彼を拜せん爲に來れり三ヘロデ王これを聞て痛む又エル

サレムの民もみな然り四凡の祭司の長と民の學者とを集てヘロデ問けるはキリストの生るべき處は何所なる乎五答けるはユダヤのベテレヘムなり蓋預言者の錄されたる言に六ユダヤの地ベテレヘムよ爾はユダヤの郡中にて至小きものに非ず我イスラエルの民を牧ふべき君その中より出んと云ばなり七是に於てヘロデ密に博士等を召星の現れし時を詳に問て八彼等をベテレヘムに遣さんとして曰けるは往て嬰兒の事を細に尋これに遇ば我に告よ我も亦ゆきて拜すべし九かれら王の命を聞て往り前に東の方にて見たりし星かれらに先ちて嬰兒の居所にいたり其上に止りぬ一〇彼等この星を見て甚く喜び一一既に室に入ければ嬰兒の其母マリアと偕に居を見ひれふして嬰兒を拜し寶の盒を開て黄金乳香沒藥など禮物を獻たり一二博士夢にヘロデへ返る勿との默示を蒙りて他の途より其國に歸れり

一三彼等が去るのち主の使者ヨセフの夢に現れて曰けるはヘロデ嬰兒を索て殺んとする故に起て嬰兒と其母とを挈へエジプトに逃て復わが爾に示さん時まで彼處に止れ一四ヨセフ起て夜嬰兒と其母とを挈へエジプトに往一五ヘロデの死るまで其所に止れり是主預言者に託て我わが子をエジプトより召出せりと云給ひしに應せん爲也一六是に於てヘロデ博士に欺かれたるをしり大にいかり人を遣して博士に詳く問たる時を度りベテレヘムと其境の内なる二歳以下の嬰兒を盡く殺せり一七即ち預言者エレミヤの言に一八歎き悲み甚く憂る聲ラマに聞ゆラケル其兒子を歎き其兒子の無によりて慰を得ずと云しに應へり一九斯てヘロデ死しかば主の使者ヨセフの夢にエジプトにて現れ曰けるは二〇起て嬰兒とその母とを挈へイスラエルの地にゆけ嬰兒の生命を索る者は已に死り二一彼おきて嬰兒と其母とを挈へてイスラエルの地に至しが二二アクラヲ父ヘロデに代てユダヤの王たりと聞ければ彼處に往ことを懼る又夢に告を蒙りてガリラヤの内に避二三ナザレと云る邑に至りて居り彼はナザレ人と稱れんと預言者に託て云れたる言に應せん爲なり

第三章

一當時バプテスマのヨハネ來りてユダヤの野に宣傳へて二曰けるは天國は近けり悔改めよ三是は主の道を備その路線を直せよと野に呼る人の聲ありと預言者イザヤが言し人なり四此ヨハネは身に駱駝の毛衣をき腰に皮の帶をつかね蝗蟲と野蜜を食物とせり五斯時エルサレム及びユダヤを擧またヨルダンの四方より人々出てヨハネに就六己が罪を悔あらはしヨルダンにて彼よりバプテスマを授られたり七バプテスマを受んとてパリサイ及サドカイの人々の多く來れるを見て彼等に曰けるは蝮の裔よ誰なんぢらに來んとする怒を避べきことを告しや八然ば悔改に符ふ果を結べよ九爾曹われらが先祖にアブラハム有と云ことを意ふ勿れ我爾曹に告ん神は能この石をもアブラハムの子と爲しめ給ふなり一〇今や斧を樹の根に置る故に凡て善果を結

ざる樹は斫れて火に投入らるべし一一我は爾曹を悔改させんとて水を以て爾曹にバプテスマを授く我より後に來者は我に勝て能力あり我は其履を提にも足ず彼は聖靈と火をもて爾曹にバプテスマを授ん一二手には箕を持て其禾場を淨め麥は斂て其倉にいれ糠は熄ざる火にて燬べし

一三斯時イエス、ヨハネにバプテスマを受んとてガリラヤよりヨルダンに來り給ふ一四ヨハネ辭て曰けるは我は爾よりバプテスマを受べき者なるに爾反て我に來る乎一五イエス答けるは暫く許せ如此凡ての義き事は我儕盡す可なり是に於てヨハネ彼に許せり一六イエス、バプテスマを受て水より上れるとき天忽ち之が爲にひらけ神の靈の鴿の如く降て其上に來るを見る一七又天より聲ありて此は我心に適わが愛子なりと云り

第四章

一偖イエス聖靈に導かれ惡魔に試られん爲に野に往り二四十日四十夜食ふ事をせず後うゑたり三試むる者かれに來りて曰けるは爾もし神の子ならば命じて此石をパンと爲よ四イエス答けるは人はパンのみにて生るものに非ず唯神の口より出る凡の言に因と録されたり五是に於て惡魔かれを聖京に携へゆき殿の頂上に立せて曰けるは六爾もし神の子ならば己が身を下に投よ蓋なんぢが爲に神その使等に命ぜん彼等手にて支へ爾が足の石に觸ざるやうすべしと録されたり七イエス彼に曰けるは主たる爾の神を試むべからずと亦録せり八惡魔また彼を最高き山に携へゆき世界の諸國とその榮華とを見せて九爾もし俯伏て我を拜せば此等を悉なんぢに與ふべしと曰一〇イエス彼に曰けるはサタンよ退け主たる爾の神を拜し惟之にのみ事ふべしと録されたり一一終に惡魔かれを離れ天使たち來り事ふ

一二イエス、ヨハネの囚れし事を聞てガリラヤに往一三ナザレを去ゼブルンとナフタリの界なる海邊のカペナウンに至て此に居り一四これ預言者イザヤの言に一五ゼブルンの地、ナフタリの地海に沿たる地ヨルダンの外の地異邦人のガリラヤ一六此等の幽暗にをる民は大なる光をみ死地と死蔭に坐する者の上に光いでたりと云しに應せん爲なり

一七斯時よりイエス始て道を宣傳へ天國は近けり悔改めよと曰たまへり一八イエス、ガリラヤの海邊を歩て、ペテロと云シモンその兄弟アンデレと二人にて海に網うてるを見たり彼等は漁者なり一九之に曰けるは我に從へ我爾曹を人を漁る者と爲ん』二〇彼等やがて網を棄てイエスに從ふ二一此より進けるに又他の兄弟二人即ちゼベダイの子ヤコブと其兄弟ヨハネ父ゼベダイと偕に舟にて網を補へるを見て之を召しに二二彼等も頓て舟と父とを置てイエスに從へり

二三イエス、ガリラヤを徧く巡り其會堂にて教をなし天國の福音を宣傳かつ民の中なる諸の病もろもろの疾を醫しぬ二四其聲名あまねくスリヤに播りしかば人々すべての患へる者萬殊の

病また痛悩めるもの鬼に憑たるもの癲癇癱瘋の病に罹れる者を彼に携來ければ之を醫せり二五 ガリラヤとデカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダンの外より、多の人々きたり從ふ

第五章

一イエス許多の人を見て山に登り坐し給ければ弟子等も其下に來れり二イエス口を啓て彼等に教へ曰けるは三 心の貧しき者は福なり天國は即ち其人の有なれば也四 哀む者は福なり其人は安慰を得べければ也五 柔和なる者は福なり其人は地を嗣ことを得べければ也六 餓渇ごとく義を慕者は福なり其人は飽ことを得べければ也七 矜恤ある者は福なり其人は矜恤を得べければ也八 心の清き者は福なり其人は神を見ことを得べければ也九 和平を求る者は福なり其人は神の子と稱らる可ればなり一〇 義ことの爲に責らるる者は福なり天國は即ち其人の有なれば也一一 我ために人なんぢらを詬誶また迫害いつはりて各樣の悪言をいはん其時は爾曹 福なり一二 喜び樂め天に於て爾曹の報賞おほければ也そは爾曹より前の預言者をも如此せめたりき

一三 爾曹は地の鹽なり鹽もし其味を失はば何を以か故の味に復さん後は用なし外に棄られて人に踐るる而已一四 爾曹は世の光なり山の上に建られたる城は隱ることを得ず一五 燈を燃して斗の下におく者なし燈臺に置て家に在すべての物を照さん一六 此の如く人々の前に爾曹の光を耀かせ然れば人々なんぢらの善行を見て天に在す爾曹の父を榮むべし

一七 われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿われ來て之を廢るに非ず成就せん爲なり一八 われ誠に爾曹に告ん天地の盡ざる中に律法の一點一畫も遂つくさずして廢ることなし一九 是故に人もし誡の至微き一を壞り又その如く人に教なば天國に於て至微き者と謂れん凡そ之を行ひ且人に教る者は天國に於て大なる者と謂るべし二〇 我なんぢらに告ん學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義こと勝ずば必ず天國に入こと能じ

二一 古への人に告て殺こと勿れ殺す者は審判に干らんと言ること有は爾曹が聞し所なり二二 然ど我なんぢらに告ん凡て故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん又その兄弟を愚者よといふ者は集議に干らん又狂妄よといふ者は地獄の火に干るべし二三 是の故に爾もし禮物を携へて壇に往たる時かしこにて兄弟に恨るることあるを憶起さば二四 その供物を壇の前に留まづ往て爾の兄弟と和ぎ後きたりて爾の禮物を獻よ二五 爾を訟ふる者と偕に途間にある時はやく和げよ恐くは訟ふる者なんぢを審官に付し審官また爾を下吏に付し遂に爾は獄に入られん二六 我まことに爾に告ん分釐までも償はざれば必ず其處を出ること能ざる也

二七 古の人に告て姦淫すること勿と言ることあるは爾曹が聞し所なり二八 然ど我なんぢらに告ん凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也二九 もし右の眼なんぢを罪に陷さば抉

出して之を棄よ蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるるよりは勝れり三〇もし右の手なんぢを罪に陷さば之を斷て棄よ蓋五體の一を失ふは全身を地獄に投入らるるよりは勝れり

三一また曰ることあり凡そ人その妻を出さんとせば之に離縁狀を與ふべしと三二然ど我爾曹に告ん姦淫の故ならで其妻を出す者は之に姦淫なさしむる也又出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり

三三また古の人に告て僞の誓を立ること勿なんぢ誓ふ所は必ず主に遂べしと言ること有は爾曹が聞し所なり三四然ど我汝らに告ん更に誓こと勿れ天を指て誓ふ勿れ是神の座位なれば也三五地を指し誓ふこと勿これ神の足凳なれば也エルサレムを指て誓ふこと勿これ大王の京城なれば也三六爾の首を指て誓ふ勿そは一すぢの髮だに白し黒すること能ざれば也三七爾曹ただ是々否々といへ此より過るは惡より出るなり

三八目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言ること有は爾曹が聞し所なり三九然ど我なんぢらに告ん惡に敵すること勿れ人なんぢの右の頰を批ば亦ほかの頰をも轉して之に向よ四〇爾を訟て裏衣を取んとする者には外服をも亦とらせよ四一人なんぢに一里の公役を強なば之と偕に二里ゆけ四二爾に求る者には予へ借んとする者を卻くる勿れ

四三爾の隣を愛みて其敵を憾べしと言ること有は爾曹が聞し所なり四四然ど我なんぢらに告ん爾曹の敵を愛み爾曹を詛ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害ものの爲に祈禱せよ四五如此するは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり夫天の父は其日を善者にも惡者にも照し雨を義き者にも義からざる者にも降せ給へり四六爾曹おのれを愛する者を愛するは何の報賞かあらん稅吏も然せざらん乎四七安否を兄弟にのみ問は人より何の過たる事かあらん稅吏も然せざらん乎四八是故に天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし

第六章

一なんぢら人に見せんために其義を人の前に行ことを愼もし然ずば天に在す爾曹の父より報賞を得じ二是故に施濟を行とき人の榮を得ん爲に會堂や街衢にて僞善者の如く笳を己が前に吹しむる勿れ我まことに爾曹に告ん彼等は既にその報賞を得たり。三なんぢ施濟をするとき右の手の爲ことを左の手に知する勿れ四如此するは其施濟の隱れんが爲なり然ば隱たるに鑒たまふ汝の父は明顯に報たまふべし

五なんぢ祈る時に僞善者の如する勿れ彼等は人に見られんが爲に會堂や街衢の隅に立て祈ことを好われ誠に爾曹に告ん彼等は既にその報賞を得たり六なんぢ祈ときは嚴密なる室にいり戸を閉て隱微たるに在す爾の父に祈れ然ば隱微れたるに鑒たまふ爾の父は明顯に報たまふべし七爾曹祈る時は異邦人の如く重複語を言なかれ彼等は言おほきを以て聽れんと意へり八是

故に彼等に效こと勿れ爾曹の父は求ざる先に其需要物を知たまへば也九然ば爾曹かく祈るべし天に在ます我儕の父よ願くは爾名を尊崇させ給へ一〇爾國を臨らせ給へ爾言の天に成ごとく地にも成せ給へ一一我儕の日用の糧を今日も與たまへ一二我儕に負債ある者を我儕がゆるす如く我儕の負債をも免し給へ。一三我儕らを試探に遇せず惡より拯出し給へ國と權と榮は窮りなく爾の有なればなりアメン一四爾曹もし人の罪を免さば天に在ます爾曹の父も亦なんぢらを免し給はん一五然どもし人の罪を免さずば爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし

一六なんぢら斷食するとき僞善者の如き憂容をする勿れ彼等は斷食を人に見ん爲に顔色を損ふ我まことに爾曹に告ん彼等は既に其報賞を得たり一七なんぢ斷食する時は首に膏をぬり面を洗へ一八如此するは爾の斷食人に見ずして隱微たるに在す爾の父に現れん爲なり然ば隱微たるに鑒たまふ爾の父は明顯に報たまふべし

一九蠹くひ銹くさり盜うがちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ二〇蠹くひ銹くさり盜穿て竊ざる所の天に財を蓄ふべし二一蓋なんぢらの財の在ところに心も亦ある可れば也

二二身の光は目なり若なんぢの目瞭かならば全身も亦明なるべし二三若なんぢの目眊らば全身暗かるべし是故に爾の中の光もし暗からば其暗こと如何に大ならずや二四人は二人の主に事ること能ず蓋これを惡かれを愛み此を親み彼を疎べければ也なんぢら神と財に兼事ること能はず二五是故に我なんぢらに告ん生命の爲に何を食ひ何を飲また身體の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ生命は糧より優り身體は衣よりも優れる者ならずや二六なんぢら天空の鳥を見よ稼ことなく穡ことを爲ず倉に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり爾曹之よりも大に勝る者ならずや二七爾曹のうち誰か能おもひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや二八また何故に衣のことを思わづらふや野の百合花は如何して長かを思へ勞ず紡がざる也二九われ爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一にも及ざりき三〇神は今日野に在て明日爐に投入らるる草をも如此よそほせ給へば況て爾曹をや嗚呼信仰うすき者よ三一然ば何を食ひ何を飲なにを衣んとて思わづらふ勿れ三二此みな異邦人の求る者なり爾曹の天の父は凡て此等のものの必需ことを知たまへり三三爾曹まづ神の國と其義とを求よ然ば此等のものは皆なんぢらに加らるべし三四是故に明日の事を憂慮なかれ明日は明日の事を思わづらへ一日の苦勞は一日にて足り

第七章

一人を議すること勿れ恐くは爾曹もまた議せられん二爾曹が人を議する如く己も議せらるべし爾曹が人を量るごとく己も量らるべし三なんぢ兄弟の目にある物屑を視て己が目にある梁木を知ざるは何ぞや四己の目に梁木のあるに如何で兄弟にむかひ

て爾が目にある物屑を我に取せよと曰ことを得んや五 僞善者よ先おのれの目より梁木をとれ然ば兄弟の目より物屑を取得るやう明かに見べし六 犬に聖物を與ふる勿また豕の前に爾曹の眞珠を投與る勿れ恐くは足にて之を踐ふりかへりて爾曹を噬やぶらん七 求めよ然ば與られ尋よ然ばあひ門を叩よ然ば開かることを得ん八 蓋すべて求る者はえ尋る者はあひ門を叩く者は開かる可ればなり九 爾曹のうち誰か其子パンを求んに石を予んや一〇 また魚を求んに蛇を予んや一一 然ば爾曹惡き者ながら善賜を其子に予ふるを知まして天に在す爾曹の父は求る者に善物を予ざらん乎一二 是故に凡て人に爲られんと欲ことは爾曹また人にも其ごとく爲よ是律法と預言者なる也

一三 窄き門より入よ沈淪に至る路は濶その門は大なり此より入もの多し一四 生に至る路は窄その門は小し其路を得もの少なり

一五 僞の預言者を謹めよ彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども内は殘 狼なり一六 是その果に由て知べし誰か荊棘より葡萄をとり蒺藜より無花果を採ことをせん一七 凡て善樹は善果を結び惡樹は惡果を結べり一八 善樹は惡果を結ばず惡樹は善果を結ぶこと能ざる也一九 凡そ善果を結ざる樹は斫れて火に投入らる二〇 是故に其果に由て之を知べし

二一 我を召て主よ主よと曰もの盡く天國に入に非ず唯これに入者は我天に在す父の旨に遵ふ者のみなり二二 其日われに語て主よ主よ主の名に託てをしへ主の名に託て鬼をおひ主の名に託て多く異能を行しに非ずやと云もの多からん二三 其時かれらに告われ嘗て爾曹を知ず惡をなす者よ我を離去と曰ん二四 是故に凡て我この言を聽て行ふ者を磐の上に家を建たる智人に譬ん二五 雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ども倒ることなし是磐を基礎と爲たれば也二六 凡て我この言を聽て行はざる者を沙の上に家を建たる愚なる人に譬ん二七 雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ば終には倒てその傾覆おほいなり二八 イエス此等の言を語竟たまへるとき集りたる人々其教を駭きあへり二九 そは學者の如ならず權威を有る者の如く教たまへば也

第八章

一 イエス山を下しとき多の人々これに從へり二 癩病の者きたり拜して曰けるは主もし旨に適ときは我を潔なし得べし三 イエス手を伸かれに按て我旨に適へり潔なれと曰ければ癩病ただちに潔れり四 イエス彼に曰けるは愼て人に告る勿れ唯ゆきて己を祭司に見せ且モーセが命ぜし禮物を献て彼等に證據をせよ

五 イエス、カペナウンに入しとき百夫の長きたり願て曰けるは六 主よ我僕癱瘓をやみ家に臥ゐて甚だ惱めり七 イエス曰けるは我ゆきて之を醫すべし八 百夫の長こたへけるは主よ我なんぢを我が屋下に入奉るは恐れ多し唯一言を出し給はば我僕は愈ん九 蓋よれ人の權威の下にある者なるに我下に亦兵卒ありて此に往と曰ばゆき彼に來れと曰ば來る我僕に此を行と曰ば則

ち行が故なり一〇イエスこれを聞て奇み從へる人々に曰けるは我まことに爾曹に告んイスラエルの中にだに未だ斯る篤信に遇ざる也一一われ爾曹に告ん多の人々東より西より來てアブラハム、イサク、ヤコブと偕に天國に坐し一二國の諸子は外の幽暗に逐出され其處にて哀哭切齒すること有ん一三イエス百夫の長に往なんぢが信仰の如く爾に成べしと曰たまへる其時に僕は愈たり一四イエス、ペテロの家に入その岳母の熱を煩ひ臥ゐたるを見て一五その手に捫ければ即ち熱されり婦おきて彼等に事ふ一六日暮たるとき人々鬼に憑れたる者を多く携來ければイエス言にて鬼を逐出し病ある者を悉く醫せり一七預言者イザヤに托て自ら我儕の恙を受われらの病を負と曰たまひしに應せんが爲なり

一八偖イエス多の人々の己を環るを見て弟子に命じ向の岸に往んとし給しに一九ある學者きたりて曰けるは師よ何處へ往給ふとも我從はん二〇イエス之に曰けるは狐は穴あり天空の鳥は巣あり然ど人の子は枕する所なし二一また弟子の一人いひけるは主よ先ゆきて父を葬ることを我に容せ二二イエス曰けるは我に從へ死たる者に其死し者を葬らせよ

二三イエス舟に登ければ弟子等も之に從ふ二四此とき大なる颶風おこりて舟を蔽ばかりなる浪たちしにイエスは寢たり二五弟子等これに近きて醒し曰けるは主よ救たまへ我儕亡んとす二六イエス彼等に曰けるは信仰うすき者よ何ぞ懼るや遂に起て風と海とを斥ければ大に平息になりぬ二七人々奇みて曰けるは此は如何なる人ぞ風も海も之に從ひたり

二八イエス向の岸なるガダラ人の地に至れるとき鬼に憑れたる二人のもの墓より出て彼を迎ふ猛こと甚しくして其途を人の過ること能はざりしほど也二九かれら呼叫て曰けるは神の子イエスよ我儕なんぢと何の與あらん乎いまだ時いたらざるに我儕を責んとて此處に來るか三〇遙はなれて豕の多のむれ食し居ければ三一鬼イエスに求て曰けるは若われらを逐出さんとならば豕の羣に入ことを容せ三二彼等に往と曰ければ鬼いでて豕の羣に入しに惣のむれ山坡より逸て海にいり水に死たり三三牧者ども邑に逃走て此事と鬼に憑れたりし者の事を告ければ三四イエスに逢んとて邑の者擧て出きたり彼を見て此境を出んことを願へり

第九章

一イエス舟に登わたりて故邑に至ければ二癱瘋にて床に臥たる者を人々舁來れりイエス彼等が信ずるを見て癱瘋の者に曰けるは子よ心安かれ爾の罪赦れたり三ある學者たち心の中に謂けるは此人は褻瀆を言り四イエスその意を知て曰けるは爾曹いかなれば心に惡を懷ふや五爾の罪赦されたりと言と起て歩めと言と孰か易き六それ人の子地にて罪を赦すの權あることを爾曹に知せんとて遂に癱瘋の者に起て床をとり家に歸れと曰ければ七

起て其家に歸りぬ八人々これを見て奇み此の如き權を人に賜し神を崇たり

九イエス此より進往マタイと名くる人の税關に坐し居けるを見て我に從へと曰ければ起て從へり一〇イエス彼が家に食するとこき税吏罪ある人おほく來りてイエス及その弟子と偕に坐しければ一一パリサイの人これを見て其弟子に曰けるは爾曹の師は何故税吏や罪ある人と偕に食する乎一二イエス聞て彼等に曰けるは康強なる者は醫者の助を需ず唯病ある者これを需一三われ矜恤を欲て祭祀を欲ずといふ此は如何なる意か往て學ぶべし夫わが來るは義人を招ために非ず罪ある人を招きて悔改させんが爲なり

一四其時ヨハネの弟子イエスに來て曰けるは我儕とパリサイの人はしばしば斷食するに師の弟子の斷食せざるは何故ぞ一五イエス彼等に曰けるは新郎の友その新郎と偕に居うちは哀むことを得んや將來新郎をひきとらるる日きたらん其時は斷食すべき也一六新き布を以て舊き衣を補ふ者はあらじ蓋つくろふ所のもの反て之を壞その綻び尤も甚だしからん一七また新き酒を舊き革嚢に盛る者はあらじ若しかせば嚢はりさけ酒もれいでて其嚢も亦壞らん新嚢に新酒を盛なば兩ながら存べし

一八イエス彼等に此事を言る時ある宰きたり拜して曰けるは我女いま既に死り來て彼に手を按たまはば生べし一九イエス起て彼に從ひ其弟子と偕に往二〇十二年血漏を患へる婦うしろに來て其衣の裾に捫れり二一蓋もし衣だにも捫らば愈んと意へばなり二二イエスふりかへり婦を見て曰けるは女よ心安かれ爾の信仰なんぢを愈せり即ち婦この時より愈二三イエス宰の家に入りしに笛ふく者および多の人の泣咷を見て二四之に曰けるは退け女は死るに非ずただ寢たるのみ人々イエスを哂笑ふ二五彼等を出し後いりて其手を執しに女起たり二六此聲名あまねく其地に播りぬ二七イエス此を去とき二人の瞽者したがひて呼曰けるはダビデの裔よ我儕を憐み給へ二八イエス家に入しに瞽者きたりければ彼等に曰たまひけるは我此事を行得ると信ずるや答けるは主よ然り二九イエス彼等の目に手を按て爾曹の信ずる如く爾曹に成べしと曰ければ三〇其目ひらけたりイエス嚴く戒て之に曰けるは愼て人に知する勿れ三一然ども彼等いでて遍く其地にイエスの名を播めたり

三二瞽者の出るとき人々鬼に憑れたる瘖啞をイエスに携來りしに三三鬼おひ出されて瘖啞ものいへり衆人あやしみ曰けるはイスラエルの中にも未だ斯る事は見ざりき三四パリサイの人曰けるは彼鬼の王に藉て鬼を逐出せる也

三五イエス遍く郷邑を廻其會堂にて教をなし天國の福音を宣傳へ民の中なる諸の病すべての疾を愈せり三六牧者なき羊の如く衆人なやみ又流離になりし故に之を見て憫みたまふ三七其とき弟子等に曰給けるは收稼は多く工人は少し三八故に其稼主に工人を收稼場に送らんことを願ふべし

第一〇章

一 偖イエスその十二弟子をよび彼等に汚たる鬼を逐いだし又すべての病すべての疾ひを醫す權を賜へり二 その十二使徒の名は左の如とし首にはペテロと名け給ひしシモンその兄弟アンデレ、ゼベタイの子ヤコブその兄弟ヨハネ三 ピリポ、バルトロマイ、トマス稅吏マタイ、アルバイの子なるヤコブ、タッダイと名くるレッバイ四 カナンのシモン、イスカリオテのユダ是すなはちイエスを賣し者なり

五 イエスこの十二を遣さんとして命じ曰けるは異邦の途に往なかれ又サマリア人の邑にも入なかれ六 惟イスラエルの家の迷へる羊に往七 往て天國近に在と宣傳よ八 病の者を醫し癩病を潔し死たる者を甦らせ鬼を逐出すことをせよ爾曹價なしに受たれば又價なしに施すべし九 爾曹金または銀または錢を貯へ帶る勿れ一〇 行嚢二の裏衣履杖も亦然そは工人の其食物を得は宜なり一一 凡そ鄕邑に至らば其中の好人を訪て出るまでは其處に留れ一二 人の家にいらば其平安を問一三 その家もし平安を得べき者ならば爾曹の願ふ平安は其家に至らん若し平安を受べからざる者ならば爾曹の願ふ平安は爾曹に歸るべし一四 もし爾曹を接ず爾曹の言を聽ざる者あらば其家または其邑を去とき足の塵を拂へ一五 われ誠に爾曹に告ん審判の日到ばソドムとゴモラの地は此邑よりも却て易からん

一六 われ爾曹を遣すは羊を狼の中に入るが如し故に蛇の如く智く鴿の如く馴良かれ一七 愼みて人に戒心せよ蓋人なんぢらを集議所に解し又その會堂にて鞭つべければ也一八 又わが緣故に因て侯伯および王の前に曳るべし是かれらと異邦人に證をなさんが爲なり一九 人なんぢらを解さば如何なにを言んと思ひ煩らふ勿れ其とき言べき事は爾曹に賜るべし二〇 是なんぢら自ら言に非ず爾曹の父の靈その裏に在て言なり二一 兄弟は兄弟を死に付し父は子を付し子は兩親を訴へ且これを殺さしむべし二二 又なんぢら我名の爲に凡の人に憾れん然ど終まで忍ぶ者は救はるべし二三 この邑にて人なんぢらを責なば他の邑に逃れよ我まことに爾曹に告ん爾曹イスラエルの諸邑を廻盡さざる間に人の子は來るべし二四 弟子は師より優らず僕は主より優らざる也二五 弟子は其師の如く僕は其主の如ならば足ぬべし若し人主を呼てベルゼブルと云ば況て其家の者をや二六 是故に彼等を懼るること勿そは掩れて露れざる者なく隱て知れざる者なければ也二七 われ幽暗に於て爾曹に告しことを光明に述よ耳をつけて聽しことを屋上に宣播めよ二八 身を殺して魂を殺すことを能はざる者を懼るる勿れ唯なんぢら魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ二九 二羽の雀は一錢にて售に非ずや然るに爾曹の父の許なくば其一羽も地に隕ること有じ三〇 爾曹の頭の髮また皆かぞへらる三一 故に懼るる勿れ爾曹は多の雀よりも優れり三二 然ば凡そ人の前に我を識と言ん者を我も亦天に在す我父の前に之を識と言ん三三 人の前に我を識ずと言ん者を我も亦天に在す我父の前に之

を識ずと言べし
三四 地に泰平を出ん爲に我來れりと意なかれ泰平を出さんとに非ず刃を出さん爲に來れり三五 夫わが來るは人を其父に背かせ女を其母に背かせ媳を其姑に背かせんが爲なり三六 人の敵は其家の者なるべし三七 我よりも父母を愛む者は我に協ざる者なり我よりも子女を愛む者は我に協ざる者なり三八 その十字架を任て我に從はざる者も我に協ざる者なり三九 その生命を得る者は之を失ひ我ために生命を失ふ者は之を得べし四〇 爾曹を接る者は我を接る也また我を接る者は我を遣しし者を接るなり四一 預言者なるを以その預言者を接る者は預言者の報賞をうけ義人なるを以その義人を接る者は義人の報賞を受四二 わが弟子なるをもて小き一人の者に冷なる水一杯にても飲する者は誠に爾曹に告ん必ず其報賞を失はじ

第一一章

一 イエスその十二弟子に示畢しとき此處をさり道を教へ廣んが爲に彼等の諸邑に往り
二 偖ヨハネ獄にてキリストの行し業を聞その弟子二人を彼に遣して三 曰せけるは來べき者は爾なるか又われら他に待べき乎四 イエス彼等に答て曰けるは爾曹が聞ところ見ところの事をヨハネに往て告よ五 瞽者はみ跛者はあゆみ癩病人は潔まり聾者はきき死たる者は復活され貧者は福音を聞せらる六 凡そ我ために躓かざる者は福なり
七 彼等の歸れる後イエス、ヨハネの事を人々に曰けるは爾曹何を見んとて野に出しや風に動さるる葦なる乎八 然ば爾曹何を見んとて出しや美服を着たる人なるか美服を着たる者は王宮に在九 然ば何を見んとて出しや預言者なるか然われ爾曹に告ん彼は預言者よりも卓越たる者なり一〇 夫なんぢに先ちて道を備る我が使者を我なんぢの前に遣んと録されたるは即ち是なり
一一 誠に爾曹に告ん婦の生たる者の中いまだバプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき然ど天國の最小き者も彼よりは大なる也一二 バプテスマのヨハネの時より今に至るまで人々勵て天國を取んとす勵たる者は之を取り一三 それ凡の預言者と律法の預言したるはヨハネの時までなれば也一四 若なんぢら我言を承ることを好まば來べきエリヤは是なり一五 耳ありて聽ゆる者は聽べし
一六 我この世を何に譬んや童子街に坐し其侶を呼て一七 われら笛ふけども爾曹をどらず哀をすれども爾曹胸うたずと云に似たり
一八 蓋ヨハネ來て食ふこと飲ことを爲ざれば鬼に憑れたる者なりと人々言り一九 人の子きたりて食ふことをし飲ことを爲れば又食を嗜み酒を好む人稅吏罪ある者の友也といふ然ども智慧は智慧の子に義と爲らるる也
二〇 厥時イエス多の異能を行たまひたる諸邑の悔改めざるに由て責いひけるは二一 ああ禍なる哉コラジンよ噫禍なる哉ベテ

サイダよ爾曹の中に行し異能を若ツロとシドンに行しならば彼等は早く麻をき灰を蒙りて悔改しなるべし二二われ爾曹に告ん審判の日にはツロとシドンの刑罰は爾曹よりも却て易からん二三既に天にまで擧られしカペナウンよ又陰府に落さるべし蓋なんぢに行し異能を若ソドムに行しならば今日までも尚保存しならん二四われなんぢらに告ん審判の日にはソドムの地は爾よりも却て易かるべし

二五其ときイエス答て曰けるは天地の主なる父よ此事を智者達者に隱して赤子に顯したまふを謝す二六父よ然それ此の如は聖旨に適るなり二七父は我に萬物を予たまへり父の外に子を識もの無また子および子の顯す所の者の外に父を識者なし

二八凡て勞たる者また重を負る者は我に來れ我爾曹を息ません二九我は心柔和にして謙遜者なれば我軛を負て我に學なんぢら心に平安を獲べし三〇蓋わが軛は易わが荷は輕ければ也

第一二章

一當時イエス安息日に麥の畑を過しが其弟子たち飢て穗を適食はじめたり二パリサイの人これを見てイエスに曰けるは爾の弟子は安息日に爲まじき事を行り三之に答けるはダビデおよび從に在し者の饑しとき行し事を未だ讀ざる乎四即ち神の殿に入て祭司の他は己および從にをる者も食ふまじき供のパンを食へり五また安息日に祭司は殿の内にて安息日を犯せども罪なき事を律法に於て讀ざる乎六われ爾曹に告ん殿より大なるもの茲に在七われ矜恤を欲て祭祀を欲ずとは如何なることか之を知ば罪なき者を罪せざるべし八それ人の子は安息日の主たるなり

九此を去て彼等の會堂に入しに一〇一手なへたる人ありければ彼等イエスを訴へんとて之に問けるは安息日には醫すことを行べき乎一一彼等に曰けるは爾曹の中に一の羊を有る者あらんに若その羊安息日に坑に陷らば之を挈上ざる乎一二人は羊より優ること幾何ぞや然ば安息日に善を行は宜一三遂にその人に爾が手を伸よと曰ければ伸せり即ち他の手の如く愈一四パリサイの人いでてイエスを殺さんと謀れり一五イエス之を知て此を去しに多の人々これに從ふ凡て疾病ある者をみな愈し一六我を人に露すこと勿れと戒たり一七これ預言者イザヤの云し言に一八視よ我が選し我僕すなはち我心に適たる我が愛む者われ之に我靈を賦ん彼異邦人に審判を示すべし一九彼は競ことなく喧ことなし人街に於て其聲を聞ことなし二〇審判をして勝とげしむるまでは傷る葦を折ことなく煙れる麻を熄ことなし二一異邦人も亦その名に頼べしと有に應せん爲なり

二二爰に鬼に憑たる瞽の瘖なる者をイエスの所に携來りければ此瞽の瘖を醫して言ひ見るやうに爲り二三衆人みな奇みて曰けるは此はダビデの裔に非ざる乎二四パリサイの人きて曰けるは此人は鬼の王ベルゼブルを役ふに非ざれば鬼を逐出ことなし二五イエスその意を知て彼等に曰けるは凡て相爭ふ國は亡び

凡て相爭ふ邑や家は立べからず二六 サタン若サタンを逐出さば自ら相爭ふなり然ば其國いかで立んや二七 若われベルゼブルに由て惡鬼を逐出さば爾曹の子弟は誰に由て之を逐出すや夫かれらは爾曹の裁判人となるべし二八 若われ神の靈に由て鬼を逐出しならば神の國はもはや爾曹に至れり二九 また勇士をまづ縛しならざれば如何で其家に入その家具を奪ふことを得んや縛て後に其家を奪ふべし三〇 我と偕ならざる者は我に背き我と偕に斂ざる者は散すなり三一 是故に爾曹に告ん人々の凡て犯す所の罪を神を涜ことは赦れん然ど人々の聖靈を涜ことは赦るべからず三二 言を以て人の子に背く者は赦るべし然ど言をもて聖靈に背く者は今世に於ても亦來世に於ても赦るべからず三三 或は樹をも善とし其果をも善とせよ或は樹をも惡とし其果をも惡とせよ夫樹は其果に由て知るるなり三四 ああ蝮の裔よ爾曹惡にして何で善を言ことを得んや夫心に充るより口に言るる者なれば也三五 善人は心の善庫より善ものを出し惡人はその惡庫より惡ものを出せり三六 われ爾曹に告ん凡て人のいふ所の虚言は審判の日に之を訴へざるを得じ三七 それ爾その曰ところの言に由て義とせられ又其いふ言に由て罪ありとせらるる也

三八 此時ある學者とパリサイの人答て曰けるは師よ休徵をなして我儕に見せんことを爾に請ふ三九 答て彼等に曰けるは奸惡なる世は休徵を求されど預言者ヨナの休徵の外は之に休徵を與られじ四〇 夫ヨナが三日三夜魚の腹の中に在し如く人の子も三日三夜地の中に在べし四一 ニネベの人審判の日に共に起て今の世の罪を定めん彼等はヨナの誨に由て悔改たり夫ヨナより大なる者ここに在四二 南の女王さばきの日に共に起て今の世の罪を定めん彼は地の極よりソロモンの智慧を聽んとて來れり夫ソロモンより大なる者此にあり四三 惡鬼人より出て旱たる地を巡り安息を求れども得ずして曰けるは四四 我が出し家に歸らん既に來しに空虛にして掃淨り飾れるを見四五 遂に往て己よりも惡き七の惡鬼を携へ偕に入て此に居ばその人の後の患狀は前よりも更に惡かるべし此あしき世もまた此の如ならん四六 イエス人々に語をる時その母と兄弟かれに言はんとて外に立ければ四七 或人イエスに曰けるは爾の母と兄弟なんぢに言はんとて外に立り四八 イエス告し者に答て曰けるは我母は誰ぞ我兄弟は誰ぞや四九 手を伸その弟子を指て曰けるは是わが母わが兄弟なり五〇 蓋すべて我が天に在す父の旨を行ふ者は是わが兄弟わが姉妹わが母なれば也

第一三章

一 當日イエス家を出て海邊に坐せしに二 多の人々彼に集來ければイエスは舟に登て坐し凡の人々は岸に立り三 イエス譬を以て多端の言を人々に語ぬ種まく者播に出しが四 播るとき路の旁に遺し種あり空中の鳥きたりて啄み盡せり五 また土うすき磽地に遺し種あり直に萠出たれど六 日の出しとき灼れしかば根なき

が故に槁たり七また棘の中に遺し種あり棘そだちて之を蔽げり八また沃壌に遺し種あり實を結べること或は百倍あるひは六十倍あるひは三十倍せり九耳ありて聽ゆる者は聽べし一〇弟子等きたりて彼に曰けるは何故に譬をもて彼等に語り給ふや一一答て曰けるは爾曹には天國の奧義を知ことを予たまへど彼等には予へ給ざれば也一二それ有る者は予られてなほ餘あり無有者はその有る物をも奪るる也一三彼等は視ても見ず聽ても聽ず悟ざるが故に我譬を以て彼等に語れり一四イザヤの預言に爾曹は聽ども悟らず視ども見ず一五蓋この民目にて見耳にて聽心にて悟り改めて我に醫されんことを恐その心を頑し耳を蔽ひ目を閉たりと云しに應へり一六然ど爾曹の目は見爾曹の耳は聞が故に福なり一七われ誠に爾曹に告ん多の預言者と義人は爾曹が見ところを見んとしたりしが見ことを得ず爾曹が聞ところを聞んとしたりしが聞ことを得ざりき一八故に爾曹播種の譬を聽一九天國の教を聞て悟らざれば惡鬼きたりて其心に播れたる種を奪ふ是路の旁に播たる種なり二〇磽地に播れたる種は是教を聽て速かに喜び受れども二一己に根なければ暫時のみ教の爲に患難あるひは迫らるる事の起る時は忽ち道に礙く者なり二二また棘の中に播れたる種は是教を聽ども此世の思慮と貨財の惑に教えを蔽れて實らざる者なり二三沃壌に播れたる種は是教を聽て悟り實を結こと或は百倍あるひは六十倍あるひは三十倍する者なり

二四また譬を彼等に示して曰けるは天國は人畑に美種を播に似たり二五人々の寢たる間に其敵きたり麥の中に稗子を播て去り二六苗はえ出て實たるとき稗子も現れたり二七主人の僕きたりて曰けるは主よ畑には美種を播ざりしか如何して稗子ある乎二八僕に曰けるは敵人これを行り僕主人に曰けるは然らば我儕ゆきて之を拔あつむるは宜か二九否おそらくは爾曹稗子を拔あつめんとて麥をも共に拔べし三〇收穫まで二ながら長おけ我かりいれの時まづ稗子を拔集て焚ん爲に之を束ね麥をば我倉に收よと刈者に言ん

三一また譬を彼等に示し曰けるは天國は芥種の如し人これを取て畑に播ば三二萬の種よりは小けれども長ては他の草より大にして天空の鳥きたり其枝に宿ほどの樹となる也

三三また譬を彼等に語けるは天國は麪種の如し婦これをとり三斗の粉の中に藏せば悉く脹發すなり三四イエス譬をもて凡て此等の事を衆人に語たまへり譬にあらざれば語り給はず三五これ預言者に託て我譬を設て口を啓き世の始より隱たる事を言出さんと云れたるに應せん爲なり

三六遂にイエス衆人を歸して室に入り其弟子きたりて曰けるは畑の稗子の譬を我儕に解たまへ三七之に答て曰けるは美種を播者は人の子なり三八畑はこの世界なり美種は是天國の諸子なり稗子は惡魔の子類なり三九之をまく敵は惡魔なり收穫は世の末なり刈者は天の使等なり四〇稗子の斂て火に焚る如く此世の末

に於ても此の如くなるべし四一人の子その使者たちを遣して其國の中より凡て躓礙となる者また惡をなす人を斂て四二之を爐の火に投入べし其處にて哀哭切齒すること有ん四三此とき義人は其父の國に於て日の如く輝かん耳ありて聽ゆる者は聽べし
四四また天國は畑に藏たる寶の如し人みいださば之を祕し喜び歸り其所有を盡く賣てその畑を買なり
四五また天國は好眞珠を求んとする商人の如し四六一の値たかき眞珠を見出さばその所有を盡く賣て之を買なり
四七また天國は海に投て各樣の魚をとる網の如し四八既に盈れば岸に曳あげ坐て嘉ものを器にいれ惡ものを棄るなり四九世の末に於ても此の如ならん天の使等いでて義者の中より惡者を取わけ五〇之を爐の火に投入べし其處にて哀哭切齒すること有ん
五一イエス彼等に曰けるは此事を皆悟しや彼に曰けるは主よ然
五二イエス彼等に曰けるは然ば天國について教られたる學者は新き物と舊き物とを其庫より出す家の主の如し
五三イエス此譬を言畢て此を去ぬ五四其故土にいたり會堂にて教しに人々奇み曰けるは此人の智慧と異なる能は何處より來るや五五これ木匠の子に非ずや其母はマリア其兄弟はヤコブ、ヨセ、シモン、ユダに非ずや五六其姊妹等は皆我儕と偕に在に非ずや然るに此人の凡て此等の事は何處より來しや五七遂に厭て之を棄イエス彼等に曰けるは預言者は其故土其家の外に於て尊まれざることなし五八彼等が信ずることなきに由て多の異なる能を此に行給はざりき

第一四章

一其ころ分封の君ヘロデ、イエスの聲名を聞て二その僕に曰けるは是バプテスマのヨハネなり彼死より甦りたり故に異なる能を行ふなり三前にヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事に由てヨハネを捕へ縛て獄に入たり四此はヨハネ、ヘロデに此女を娶るは宜しからずと云しに因五彼ヨハネを殺さんと欲ど民これを預言者とするにより彼等を懼たりしが六ヘロデ誕生の日を祝へる時ヘロデヤの女その座上にて舞をなしヘロデを悦ばせければ七何なる物にても求に任て予んとヘロデ之に誓たり八女その母の勸ありしに因バプテスマのヨハネの首を盆に載て此に賜れと曰九王憂けれども既に誓たると席に列れる者の爲に予ることを命じ一〇即ち人を遣し獄に於てヨハネの首を斬せ一一その首を盆に載て女に予ければ女は之を其母に捧たり一二ヨハネの弟子等來りて屍を取てこれを葬り往てイエスに告一三イエスこれを聞て人をさけ舟に登て其處を去さびしき處に往給ひしが衆人きて歩行にて彼に從へり
一四イエス出て多の人を見て之を憫み其病る者を醫せり一五日くるる時其弟子きたりて曰けるは此は寂寞ところにして時もはや過し諸邑に往て自ら食を求させん爲に人々を去しめよ一六イエス彼等に曰けるは人々往ずとも可爾曹之に食を予よ一七答ける

は我儕此にただ五のパンと二の魚あるのみ一八イエス曰けるは其を此に携來れ一九遂に衆人に命じて草の上に坐しめ五のパンと二の魚をとり天を仰て謝しパンを擘て弟子にあたふ弟子之を衆人に予ぬ二〇みな食て飽其餘たる屑を拾しに十二の筐に盈たり二一食し者は婦と幼童の外凡そ五千人なりき

二二頓てイエス衆人を歸さんとして其弟子を強て船にのせ向の岸へ先に渡しむ二三斯て衆人を歸しければ祈禱せんとて密に山に上り日暮て獨そこに在せり二四舟は海中に在て逆風の爲に浪に漂はさる二五夜の四時ごろイエス海の上を歩て之に至しに二六弟子其海の上を歩るを見て驚き此は變化の物ならんと曰て懼れ叫たり二七イエス頓て彼等に曰けるは心安かれ我なり懼るる勿れ二八ペテロ答て曰けるは主よ若し爾ならば我に命じ水を履て爾の所に至しめよ二九來と曰給ひければペテロ舟より下てイエスの所に至んとて浪の上を歩たれど三〇風の烈きを見て懼れ沈かかりければ主よ我を救たまへと曰三一イエス頓て手を伸之を執て曰けるは信仰うすき者よ何ぞ疑ふや三二偕に舟に登ければ風しづまりぬ三三舟に居し者ちかよりて彼を拜し曰けるは誠に爾は神の子なり

三四遂に渡てゲネサレの地に到しかば三五其處の人々イエスを識て遍く四方に人を遣し凡て病の者を携へ來らしむ三六只其衣の裾に捫らんことをイエスに願へり捫し者は即ちみな愈されたり

第一五章

一時にエルサレムの學者とパリサイの人イエスに來て曰けるは二爾の弟子古の人の遺傳を犯は何故ぞ蓋食する時に其手を洗ざれば也三答て彼等に曰けるは爾曹は亦なんぢらの遺傳によりて神の誡を犯は何故ぞ四それ神いましめて爾の父母を敬へ又父母を詈る者は殺さるべしと宣給へり五然るに爾曹は曰て凡て人父母に對なんぢを養ふ可ものは禮物なりと云ば六その父母を敬はずとも可とす斯て爾曹遺傳により神の誡を廢くせり七僞善者よイザヤは能なんぢらに就て預言し八此民は口にて我に近き唇にて我を敬へども其心は我に遠かり九人の誡を教となして徒らに我を拜すと云り一〇イエス人々を召て彼等に曰けるは聽て悟れ一一口に入ものは人を汚さず口より出るものは是人を汚すなり一二弟子きたりてイエスに曰けるはパリサイの人この言を聞て厭棄るを爾知か一三答て曰けるは我が天の父の植ざる者はみな拔るべし一四彼等を棄おけ瞽者の相する瞽者なり若めしひのもの瞽者の相せば二人とも溝に落べし一五ペテロ、イエスに答て曰けるは此譬を我儕に解たまへ一六イエス曰けるは爾曹も未だ悟ざる乎一七凡て口に入ものは腹を運て厠に落るを未だ知ざるか一八口より出るものは心より出これ人を汚すもの也一九蓋心より出る所の惡念凶殺姦淫苟口盜竊妄證謗讟二〇此等は人を汚すものなり然ども手を洗ずして食ふは人を汚さず

二一イエス此を去てツロとシドンの地に往けるに二二其地に住る

カナンの婦いでて呼はり曰けるは主よダビデの裔よ我を憫み給へ我むすめ鬼に憑れて甚く苦めり二三 イエス一言も彼に答ざりしかば其弟子きたり請て曰けるは我儕の後より呼はるが故に彼を去せ給へ二四 答て曰けるはイスラエルの家の迷へる羊の外に我は遣されず二五 婦きたり拜して曰けるは主よ我を助たまへ二六 答けるは兒女のパンを取てに犬に投與ふるは宜からず二七 婦いひけるは主よ然されど犬もその主人の膳より落る屑を食なり二八 遂にイエス答て曰けるは婦よ爾の信仰大なり願の如く爾に成べし此時より其女いえたり

二九 イエス此を去ガリラヤの海邊にゆき山に登りて坐せり三〇 多の人々跛者瞽者瘖者殘缺者および各樣の疾病ある者を伴ひたりイエスの足下に置ければ即ち之を醫しぬ三一 是に於て瘖者はものいひ殘缺はいえ跛者はあゆみ瞽者は見たるを人々見て奇みイスラエルの神を榮たり

三二 イエスその弟子を呼て曰けるは我この衆人を憫む彼等われと偕に居こと三日にして食ふものなし飢させて去しむることを欲ず恐くは途間にて悩ん三三 其弟子かれに曰けるは野にて此多くの人に飽するほどのパンを何處より得んや三四 イエス彼等に曰けるはパン幾何あるや答けるは七と些少の魚あり三五 イエス人々に命じて地に坐しめ三六 七のパンと魚を取て謝し之を擘て其弟子に予しかば弟子これを人々に予ふ三七 食てみな飽たり餘の屑を拾しに七の籃に盈り三八 之を食るもの婦と孩子の外に四千人ありき三九 イエス人々を去しめ舟に登てマグダラの境に至れり

第一六章

一 パリサイとサドカイの人きたりてイエスを試んとて天の休徵を我儕に見せよと曰ければ二 彼等に答けるは爾曹暮には夕紅に由て晴ならんと言三 晨には朝紅また曇に由て今日は雨ならんといふ僞善者よ空の景色を別ことを知て時の休徵を別ち能はざる乎四 姦惡なる世は休徵を求るとも預言者ヨナの休徵のほか休徵を予られじ遂に彼等を離れて去ぬ

五 その弟子むかふの岸に到しにパンを携ふることを忘たり六 イエス彼等に曰けるは戒心してパリサイとサドカイの人の麪酵を愼めよ七 弟子たがひに論じて曰けるは是パンを携へざりし故ならん八 イエスこれを知て曰けるは信仰うすき者よ何ぞ互にパンを携へざりしことを論ずる乎九 未だ悟らざるか五千人に五のパンを予しとき幾筐ひろひし乎一〇 また四千人に七のパンを予しとき幾籃ひろひしや爾曹これを記ざるか一一 パリサイとサドカイの人の麪酵を愼めとはパンにつきて言るに非るを何ぞ悟らざる一二 是に於て弟子その麪酵にはあらでパリサイとサドカイの人の教を謹めと言るなるを悟れり

一三 イエス、カイザリヤ、ピリピの方に到しとき其弟子に問て曰けるは人々は人の子を誰と言や一四 彼等いひけるは或人はバプ

テスマのヨハネ或人はエレミヤまた預言者の一人なりと言り一五彼等に曰けるは爾曹は我を言て誰とする乎一六シモン、ペテロ答けるは爾はキリスト活神の子なり一七イエス答て彼に曰けるはヨナの子シモン爾は福なり蓋血肉なんぢに示せるに非ず天に在す吾父なり一八我また爾に告ん爾はペテロなり我が教會をこの磐の上に建べし陰府の門は之に勝べからず一九又われ天國の鑰を爾に予へん爾が地に於て繋ことは天に於ても繋なんぢが地に於て釋ことは天に於ても釋べし二〇遂に其弟子を戒めけるは我をキリストと人に告ること勿れ

二一此時よりイエス其弟子に己のエルサレムに往て長老祭司の長學者等より多の苦みを受かつ殺され第三日に甦る等なすべき事を示し始む二二ペテロ、イエスを援とめて主よ宜らず此事爾に來るまじと曰ければ二三イエス反顧てペテロに曰たまひけるはサタンよ我後に退け爾は我に礙く者なり夫爾は神の事を思はず人の事を思へり二四此時イエス其弟子に曰けるは若我に從はんと欲ふ者は己を棄その十字架を負て我に從へ二五蓋生命を保全せんとする者は之を失ひ我ために其生命を失ふ者は之を得べければ也二六もし人全世界を得とも其生命を失はば何の益あらん乎また人なにを以て其生命に易んや二七それ人の子は父の榮光を以て其使等と偕に來らん其時おのおのの行に由て報ゆべし二八誠に爾曹に告ん人の子其國を以て來るを見までは此に立ものの中に死ざる者あるべし

第一七章

一六日の後イエス、ペテロ、ヤコブその兄弟ヨハネを伴ひ人を避て高山に登り給しが二彼等の前にて其容貌かはり其面日の如く輝き其衣は白く光れり三モーセとエリヤ現れイエスと偕に語ぬ四ペテロ答てイエスに曰けるは主よ我儕ここに居は善もし尊旨に適はば我儕に三の廬を建せたまへ一は主のため一はモーセのため一はエリヤの爲にせん五如此いへる時かがやける雲かれらを蔽ふ聲雲より出て言けるは此は我旨に適ふわが愛子なり爾曹これに聽べし六弟子これを聞て大におそれ倒れ伏たり七イエス來りて彼等に手を按おきよ懼るる勿れと曰ければ八其目を擧しに惟イエスのほか一人をも見ざりき

九山を下るときにイエス彼等に命じて人の子の死より甦るまでは爾曹の見し事を人に告べからずと言り一〇其弟子とふて曰けるは然ばエリヤは先に來るべしと學者の云るは何ぞや一一イエス答て曰けるは實にエリヤは來て萬事を改むべし一二然ど我なんぢらに告んエリヤは既に來しに人これを知ずただ意の任に彼を待へり此の如く人の子もまた彼等より苦難を受べし一三是に於て弟子バプテスマのヨハネを指て曰たまへるを悟れり

一四彼等おほくの人の居ところに來しに或人イエスの所にきたり跪き一五曰けるは主よ我子を憫みたまへ癲癇にて屢々火に倒れ水に倒れ甚だ苦めり一六之を爾の弟子に携往たれど醫すことを得ざりき一七イエス答て曰けるは噫信なき曲れる世なる哉わ

れ何時まで爾曹と偕に居んや我いつまで爾曹を忍んや彼を我もとに携來れ一八 遂にイエス鬼を斥め給へば鬼いでて其子この時より愈たり一九 其とき弟子ひそかにイエスに來り曰けるは我儕これを逐出すこと能はざりしは何故ぞ二〇 イエス彼等に曰けるは爾曹信なきが故なり我まことに爾曹に告んもし芥種の如き信あらば此山に此處より彼處に移れと命とも必ず移らん又なんぢらに能ざること無るべし二一 然ど此類は祈禱と斷食に非ざれば出ることなし

二二 ガリラヤを周流ときイエス彼等に曰けるは人の子人の手に解され二三 かつ殺されて第三日に甦るべし弟子これを聞て甚だ哀めり

二四 彼等カペナウンに來れるとき納金を集る者どもペテロに來て曰けるは爾曹の師は納金を出さざる乎二五 然ずと曰てペテロ家に入しときイエスまづ彼に曰けるはシモン 爾は如何おもふや世界の王たちは税および貢を誰より徴か己の子よりか他の者よりか二六 ペテロ彼に曰けるは他の人より徴なりイエス彼に曰けるは然ば子は與ることなし二七 然どかれらを礙かせざる爲に爾海に往て釣を垂よ初につる魚を取てその口を啓かば金一を得べし其を取て我と爾の爲に彼等に納よ

第一八章

一 其とき弟子イエスに來て曰けるは天國に於て大なる者は誰ぞや二 イエス嬰兒を召かれらの中に立て三 曰けるは我まことに爾曹に告んもし改まりて嬰兒の若くならずば天國に入ることを得じ四 然ば凡そこの嬰兒の若く自ら謙る者はこれ天國に於て大なる者なり五 又わが名の爲に此の如き一人の嬰兒を接る者は我を接るなり六 然ど我を信ずる此小子の一人を礙かする者は磨石をその頸に懸られて海の深に沈られん方なほ益なるべし七 此世は禍なる哉そは礙かする事をすればなり礙く事は必ず來らん然ど礙を來らす者は禍なる哉八 若し爾の手なんぢの足おのれを礙かさば斷て之を棄よ兩手兩足ありて盡ざる火に投入られんよりは跛または殘缺にて生に入は善なり九 若し爾の眼おのれを礙かさば抜出して之を棄よ兩眼ありて地獄の火に投入られんよりは一眼にて生に入は善なり

一〇 爾曹この小子の一人をも愼みて輕視なかれ我なんぢらに告ん彼等が天の使者は天にありて天に在す吾父の面を恆に視ばなり一一 それ人の子は亡たる者を救はん爲に來れり一二 爾曹いかに意ふや人もし百匹の羊あらんに其一匹まよはば九十九を山に置ゆきて迷し一を尋ざる乎一三 若たづねて之に遇ば我まことに爾曹に告ん迷ざる九十九の者よりも尚その一を喜ん一四 是の如くこの小子の一人の亡るは天に在す爾曹が父の尊旨に非ず一五 もし兄弟なんぢに罪を犯ばその獨ある時に往て諫よもし爾の言を聽ばその兄弟を獲べし一六 もし聽ずば兩三人の口に由て證をなし凡の言を定んが爲に一人二人を伴ひ往一七 もし彼等にも

聽ずば教會に告よもし教會に聽ずば之を異邦人かつ稅吏のごとき者とすべし一八 我まことに爾曹に告ん凡そ爾曹が地に於いて繫ことは天に於もつなぎ爾曹が地に於て釋ことは天に於も釋べし一九 我また爾曹に告んもし爾曹のうち二人のもの地に於て心を合せ何事にても求ば天に在す吾父は彼等の爲に之を成たまふべし二〇 蓋わが名の爲に二三人の集れる處には我も其中に在ばなり

二一 厥時ペテロ、イエスに來りて曰けるは主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯を赦べきか七次まで乎二二 イエス彼に曰けるは爾に七次とは言じ七次を七十倍せよ二三 是故に天國は王その臣と會計を調んとするが如し二四 調べ始しとき千萬金の負債したる者を王に曳來りしに二五 償ひ方なかりければ之に命じて其身その妻孥とあらゆる所有をみな鬻て償へと曰り二六 その臣ひれふして拜し曰けるは請われを寛し給はば皆償ふべし二七 是に於てその臣の主憐みて之を釋その負債を免したり二八 其臣いでて己より銀一百の負債したる友に遇ければ之を執へ喉をとり負債を返せと曰二九 その友足下に俯伏て求いひけるは我を寛し給はば皆償ふべし三〇 然るに之を肯はずして往その負債を償ふまで彼を獄に入ぬ三一 外の友その爲る事を見て甚だ哀み往て此事を皆その主に告しかば三二 主かれを召て曰けるは惡き臣よ爾われに求しに因て我その負債を悉く免したり三三 我なんぢを憐みし如く爾も亦友を憐むべきに非ずや三四 その主いかりて負債をみな償ふまで彼を獄吏に付せり三五 若おのおの其心より兄弟を赦ずば我が天の父も亦なんぢらに此の如く行給ふべし

第一九章

一 イエス此等の事を言畢りしときガリラヤを去てヨルダンの外ユダヤの境に至りけるに二 多の人々從ひしかば此處にて彼等を醫し給へり三 パリサイの人きたりてイエスを試み曰けるは人なにの故に係らず其妻を出すは宜か四 答て彼等に曰けるは元始に人を造り給ひし者は之を男女に造れり五 是故に人父母を離れて其妻に合二人のもの一體と爲なりと云るを未だ讀ざるか六 然ばはや二には非ず一體なり神の合せ給へる者は人これを離すべからず七 イエスに曰けるは然ば離緣狀を予て妻を出せとモーセが命ぜしは何ぞや八 彼等に曰けるはモーセは爾曹の心の不情に因て妻を出すことを容したる也されど元始は如此あらざりき九 我なんぢらに告んもし姦淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶る者は姦淫を行ふなり又いだされる婦人を娶る者も姦淫を行ふなり一〇 弟子等イエスに曰けるは若し人妻に於て此の如くば娶らざるに若ず一一 彼等に曰けるは此言は人みな受納ること能はず唯賦られたる者のみ之を爲うべし一二 それ母の腹より生來たる寺人あり又人にせられたる寺人あり又天國の爲に自らなれる寺人あり之を受納ることを得ものは受納べし

一三 其とき人々イエスの手を按て祈らんことを求ひ嬰兒を彼に

携來りければ弟子是を阻たり一四 イエス曰けるは嬰兒を容せ我に來ることを禁しむる勿れ天國にをる者は此の如き者なり一五 即ち彼等に手を按て此を去ぬ

一六 或人きたりて彼に曰けるは善師よ我かぎりなき生を得んが爲には何の善事を行べきか一七 彼に曰けるは何故われを善と稱や一人の外に善者はなし即ち神なり若し生命に入んと欲はば誡を守るべし一八 彼こたへけるは何かイエス曰けるは殺す勿れ姦淫する勿れ盜む勿れ妄りの證を立る勿れ一九 爾の父と母を敬へ又己の如く爾の隣を愛すべし二〇 少者かれに曰けるは是みな我いとけなきより守れるものなり何の虧たるところ我にある乎二一 イエス彼に曰けるは全からん事を欲はば往て爾が所有を售て貧者に施せ然れば天に於て財あらん而して來り我に從へ二二 少者この言を聞て憂へ去ぬ彼の産業おほいなりければ也

二三 イエスその弟子に曰けるは誠に爾曹に告ん富者は天國に入こと難し二四 また爾曹に告ん富者の神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し二五 弟子之を聞て甚く驚き曰けるは然ば誰か救を受べき乎二六 イエス彼等を見て曰けるは是人には能はざる所なり然ど神には能はざる所なし

二七 此ときペテロ答てイエスに曰けるは我儕一切を棄て爾に從へり然ば何を得べき乎二八 イエス彼等に曰けるは我まことに爾曹に告ん我に從へる爾曹は世あらたまり人の子榮光の位に坐する時なんぢらも十二の位に坐してイスラエルの十二の支派を鞫べし二九 凡て我名の爲に家宅あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは子あるひは田疇を棄る者は百倍を受かつ窮なき生を嗣ん三〇 多の先なる者は後になり後なる者は先になるべし

第二〇章

一 それ天國は朝はやく出て葡萄園に工人を雇ふ主人の如し二 工人には一日に銀一枚を予へんと約束をなし彼等を葡萄園に遣せり三 また九時ごろ出て街に徒く立る者を見て四 爾曹も葡萄園にゆけ相當の價を予んと彼等に曰ければ即ち往り五 また十二時と三時ごろ出て前の如く行り六 五時ごろ出て又ほかの立る者に遇て曰けるは何ゆゑ終日ここに徒く立や七 之に答て曰けるは我儕を雇ふ物なきに因てなり彼等に曰ける爾曹も葡萄園にゆけ相當の價を得べし八 日暮るとき葡萄園の主人その家宰に曰けるは勞力たる者等を呼て後に雇へる者を始とし先の者にまで價を給へよ九 五時ごろ雇はれし者ども來りて銀一枚づつを受たり一〇 先の者ども來りて我儕は多く受るならんと意ひしに亦銀一枚づつを受一一 これを受て主人を怨みつぶやきけるは一二 この後至者の勞力たるは一時ばかりなるに終日くるしみ任あつさに當る我儕と均しく之をなせり一三 主人その一人に答て曰けるは友よ我なんぢに不義をせず爾と銀一枚の約束をなしたるに非ずや一四 爾のものを取て往われ亦この後至者にも爾の如く予ふべ

し一五我物を以て我おもふ如く行は宜らず乎わが善に因て爾の目あしき乎一六此の如く後の者は先に先の者は後になるべし夫よばるる者し多しと雖も選るる者は少なし
一七イエス、エルサレムに上るとき途間にて人を離れ十二弟子を伴ひて彼等に曰けるは一八我儕エルサレムに上り人の子は祭司の長と學者等に賣されん彼等これを死罪に定め一九また淩辱鞭ち十字架に釘ん爲に異邦人に解すべし又第三日に甦へるべし
二〇其時ゼベタイの子等の母その子と偕にイエスに來り拜して彼に求ること有ければ二一之に曰けるは何を欲ふかイエスに曰けるは此二人の我子を爾の國に於て一人は爾の右一人は爾の左に坐ることを命ぜよ二二イエス答て曰けるは爾曹は求ところを知ず爾曹は我が飮んとする杯をのみ又わが受んとするバプテスマを受得るや彼等いひけるは能すべし二三イエス彼等に曰けるは誠に爾曹は我が杯を飮また我うくるバプテスマを受べし然ど我が右左に坐ることは我が賜べきに非ず只わが父に備られたる者は賜るべし二四十人の弟子これを聞て二人の兄弟を憤れり二五イエス彼等を召て曰けるは異邦の領主はその民を主どり大人どもは彼等の上に權を操これ爾曹が知ところ也二六然ど爾曹の中にては然すべからず爾曹のうち大ならんと欲ふ者は爾曹に役るる者となるべし二七また爾曹のうち首たらんと欲ふ者は爾曹の僕となるべし二八此の如く人の子の來るも人を役ふ爲には非ず反て人に役はれ又おほくの人に代て生命を予その贖とならん爲なり
二九彼等エリコを出し時おほくの人々イエスに從へり三〇二人の瞽者路の旁に坐をりしがイエスの過ると聞て呼叫いひけるはダビデの裔主よ我儕を憫み給へ三一衆人これに默れと戒むれども愈さけび曰けるはダビデの裔主よ我儕を憫みたまへ三二イエス立止て之を呼いひけるは爾曹われに何を爲られんと願ふや三三イエスに曰けるは主よ我儕目を啓んことを願ふ三四イエス憫みて其目に手を按ければ直に見ことを得イエスに從へり

第二一章

一かれら橄欖山のベテパゲに至りエルサレムに近ける時イエス二人の弟子を遣さんとして二彼等に曰けるは爾曹むかふの村に往やがて繫たる驢馬の其子と偕にあるに遇ん夫を解て我に牽きたれ三若なんぢらに何とか言ものあらば主の用なりと曰さらば直に之を遣すべし四預言者の言に視よ爾の王は柔和にして驢馬すなはち驢馬の子に乘なんぢに來るとシヲンの女に告よと五云るに應せん爲に如此なせる也六弟子ゆきてイエスの命ぜし如くなし七驢馬と其子を牽きたり己の衣をその上に置ければイエスこれに乘り八衆人おほくは其衣を途に布あるひは樹枝を伐て途に布ぬ九かつ前にゆき後に從ふ人々呼いひけるはダビデの裔ホザナよ主の名に託て來る者は福なり至上處にホザナよ
一〇イエス、エルサレムに至れるとき都城こぞりて竦動いひける

は是誰ぞや一一 衆人いひけるは此はガリラヤのナザレより出たる預言者イエスなり

一二 イエス神の殿に入て其中なる凡の賣買する者を逐出し兌銀者の案鴿をうる者の椅子を倒し一三 彼等に曰けるは我家は祈禱の家と稱らるべしと録さる然るに爾曹これを盜人の巣となせり一四 瞽者跛者の人々殿に入てイエスに來りければ之を醫しぬ一五 祭司の長と學者たち其行たまへる奇事を見また兒童輩の殿にて呼はりダビデの裔ホザナよと云を聞て怒を含一六イエスに曰けるは彼等が言ことを聞やイエス答て曰けるは然り嬰兒乳哺者の口に讃美を備たりと録されしを未だ讀ざる乎一七遂に彼等を離れ都城を出てベタニヤに往そこに宿れり

一八 翌あさ都城へ返るとき飢ければ一九 路の旁にある一の無花果の樹を見て其處に來りしに葉の他に何も見ざりしかば今よりのち永久も果を結ぶことを得ざれと之に曰たまひければ無花果立刻に枯ぬ二〇 弟子これを見て奇み曰けるは無花果の枯ることを何に速や二一 イエス答て彼等に曰けるは我まことに爾曹に告んもし信仰ありて疑はずば此無花果に於るが如耳ならず此山に命じ此より移されて海に入よと云とも亦成ん二二 且なんぢら信じて祈らば求ふ所ことごとく得べし二三 イエス殿に入て教たるとき祭司の長および民の長老たち來り曰けるは何の權威を以て此事をなすや誰この權威を爾に予しや二四 イエス答て彼等に曰けるは我も一言なんぢらに問ん我にその事を告なば我も何の權威をもて之を行といふことを爾曹に曰べし二五 ヨハネのバプテスマは何處よりぞ天よりか人よりか彼等たがひに論じ曰けるは若し天よりと云ば然ば何ゆゑ信ぜざるかと云ん二六 もし人よりと云ば我儕民を畏る蓋みなヨハネを預言者と爲ばなり二七 遂に答て知ずと曰イエス彼等に曰けるは我も何の權威を以て之を行か爾曹に語らじ二八 爾曹いかに意ふや或人二人の子ありしが長子に來りて曰けるは子よ今日わが葡萄園に往て働け二九 答て否と曰しがのち悔て往たり三〇 また次子にも前の如く曰けるに答て君よ我往べしと曰しが遂に往ざりき三一 此二人のもの孰か父の旨に遵ひし彼等いひけるは長子なりイエス彼等に曰けるは誠に爾曹に告ん税吏および娼妓は爾曹より先に神の國に入べし三二 夫ヨハネ義道をもて來りしに爾曹これを信ぜず税吏娼妓は之を信じたり爾曹これを見てなほ悔改めず彼を信ぜざりき

三三 また一の譬を聞ある家の主人葡萄園を樹り籬を環らし其中に酒榨をほり塔をたて農夫に貸て他の國へ往しが三四 果期ちかづきければ其果を收ん爲に僕を農夫のもとに遣せり三五 農夫ども其僕等を執へ一人を鞭ち一人を殺し一人を石にて撃り三六 また他の僕を前よりも多く遣しけるに之にも前の如くなせり三七我子は敬ふならんと謂て終に其子を遣ししに三八 農夫等その子を見て互に曰けるは此は嗣子なり率これを殺して其産業をも奪べしと三九 即ち之を執へ葡萄園より逐出して殺せり四〇 然ば

葡萄園の主人きたらん時にこの農夫に何を爲べき乎四一 彼等イエスに曰けるは此等の惡人を甚く討滅し期に及てその果を納る他の農夫に葡萄園を貸予ふべし四二 イエス彼等に曰けるは聖書に工匠の棄たる石は家の隅の首石となれり是主の行給ることにして我儕の目に奇とするところなりと録されしを未だ讀ざる乎四三 是故に我なんぢらに告ん神の國を爾曹より奪その果を結ぶ民に予らるべし四四 この石の上に墜るものは壞この石上に墜れば其もの碎かるべし四五 祭司の長等およびパリサイの人かれの譬を聞おのれらを指て言るを識四六 イエスを執へんと欲ひ謀しかど唯民を畏たり蓋人々かれを預言者とすれば也

第二二章

一イエス彼等に答てまた譬を語りけるは二天國は或王その子の爲に婚筵を設るが如し三 婚筵に請おける者を迎ん爲に僕たちを遣しかど彼等きたることを好まず四 又ほかの僕を遣さんとして曰けるは我が筵すでに備れり我が牛また肥 畜をも宰りて盡く備りたれば婚筵に來れと請たる者に言五 然ども彼等かへりみずして去ぬ其一人は己の田にゆき一人は己の貿易に往り六 他の者等はその僕を執へ辱しめて殺せり七 王これを聞て怒り軍勢を遣して其殺せる者を亡し又その邑を燒たり八 是に於てその僕等に曰けるは婚筵すでに備れども請たる者は客となるに堪ざる者なれば九 衢に往て遇ほどの者を婚筵に請け一〇その僕途に出て善者をも惡者をも遇ほどの者を悉く集ければ婚筵の客充滿す一一 王客を見んとて來りけるに茲に一人の禮服を着ざる者あるを見て一二 之に曰けるは友よ如何なれば禮服を着ずして此處に來る乎かれ默然たり一三 遂に王僕に曰けるは彼の手足を縛りて外の幽暗に投いだせ哀哭また切齒すること有ん一四 それ召るる者は多しと雖も選るる者は少なし

一五 此時パリサイの人いでて如何してか彼を言誤らせんと相謀り一六 その弟子とヘロデの黨を遣して云せけるは師よ爾は眞なる者なり眞をもて神の道を教また誰にも偏らざることを我儕は知そは貌に由て人を取ざれば也一七 然ば貢をカイザルに納るは善や惡や爾いかに意ふか我儕に告よ一八 イエスその惡を知て曰けるは僞善者よ何ぞ我を試むるや一九 貢の銀錢を我に見せよ彼等デナリ一をイエスに携來りしに二〇 之に曰けるは此像と號は誰か二一 答てカイザル也といふ是に於てイエス彼等に曰けるは然ばカイザルの物はカイザルに歸しまた神の物は神に歸すべし二二 彼等之をきき奇としてイエスを去ゆけり

二三 復生なしと言なせるサドカイの人この日イエスにきたり問て二四 曰けるは師よモーセの云るに人もし子なくして死ば兄弟その妻を娶りて子をうみ兄弟の後を嗣すべしと二五 茲に我儕の中に兄弟七人ありしが兄めとりて死子なきが故に其妻を次子に遺れり二六 その二その三その七まで皆然す二七 後つひに婦もまた死たり二八 甦るときは此婦七人のうち誰の妻と爲べきか是

みな彼を娶し者なれば也二九 イエス答て彼等に曰けるは爾曹聖書をも神の能力をも知ざるに由て謬れり三〇 それ甦るときは娶らず嫁ず天にある神の使等の如し三一 死し者の甦ることに就ては爾曹に神の告たまひし言に三二 我はアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりとあるを未だ讀ざる乎そもそも神は死し者の神に非ず生る者の神なり三三 人々これを聞て其訓を驚けり

三四 イエス、サドカイの人をして口を塞がしめたりを聞てパリサイの人一處に集りけるが三五 其中なるひとりの教法師イエスを試みん爲に問て曰けるは三六 師よ律法のうち何の誡か大なる三七 イエス答けるは爾 心を盡し精神を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし三八 これ第一にして大なる誡なり三九 第二も亦これに同じ己の如く爾の隣を愛すべし四〇 凡の律法と預言者は此二の誡に因り

四一 パリサイの人の集れる時イエス彼等に問て曰けるは四二 爾曹キリストについて如何おもふ乎これ誰の子なるか彼等イエスに曰けるはダビデの裔なり四三 彼等に曰けるは然ばダビデ靈に感じて何故これを主と稱へし乎ダビデ言四四 主わが主に曰けるは我なんぢの敵を爾の足凳となすまで我みぎに坐すべしと四五 然ばダビデ既に之を主と稱たれば如何その子ならん乎四六 誰一言これに答ること能はず此日より敢て又とふ者なかりき

第二三章

一 厥時イエス人々と弟子とに告て曰けるは二 學者とパリサイの人はモーセの位に坐す三 故に凡て彼等が爾曹に言ところを守て行ふべし然ど彼等が行ふ所を爲こと勿れ蓋かれらは言のみにして行はざれば也四 また彼等は重かつ負がたき荷を括て人の肩に負せ己は一の指をもて之を動すことすら好ず五 彼等の行は凡て人に見れんが爲にする也その佩經を幅闊し其衣の裾を大にし六 また筵席の上座會堂の高座七 市上の問安人々よりラビ、ラビと稱られんことを好む八 爾曹はラビの稱を受ること勿れ蓋なんぢらの師は一人すなはちキリストなり爾曹はみな兄弟なり九 また地にある者を父と稱ること勿れ爾曹の父は一人すなはち天に在る者なり一〇 また導師の稱を受ること勿れ蓋なんぢらの導師は一人すなはちキリストなり一一 爾曹のうち大なる者は爾曹の僕と爲べし一二 凡そ自己を高する者は卑せられ自己を卑する者は高せられん

一三 噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋なんぢら天國を人の前に閉て自ら入ず且いらんとする者の入をも許さざれば也一四 噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋なんぢら嫠婦の家を呑いつはりて長き祈をなす之に由て爾曹 最も重き審判を受べければ也一五 ああ禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋なんぢら徧く水陸を歴巡り一人をも己が宗旨に引入んとす既に引入れば之を爾曹よりも倍したる

地獄の子と爲り一六 噫なんぢら禍なるかな瞽者なる相よ爾曹はいふ人もし殿を指て誓はば事なし殿の金を指て誓はば背べからずと一七 愚にして瞽なる者よ金と金を聖からしむる殿とは孰か尊き一八 又いふ人もし祭りの壇を指て誓はば事なし其上の禮物を指て誓はば背べからずと一九 愚にして瞽なる者よ禮物と禮物を聖からしむる祭の壇と孰か尊き二〇 それ祭の壇を指て誓ふ者は祭の壇および其上の凡の物を指て誓ふなり二一 また殿を指て誓ふ者は殿および其中に在す者を指て誓ふなり二二 また天を指て誓ふ者は神の寶座および其上に坐する者を指て誓ふなり二三 噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ蓋なんぢら薄荷、茴香、馬芹の十分の一を取納て律法の最も重き義と仁と信とを爾曹は廢これ行ふ可もの也かれも亦廢べからざる者なり二四 瞽者なる相者よ爾曹は蠉を漉出して駱駝をも呑もの也二五 ああ禍なる哉僞善なる學者とパリサイの人よ爾曹 杯と盤の外を潔して内には貪欲と淫欲とを充せり二六 瞽者なるパリサイの人よ爾曹まづ杯と盤の内を潔せよ然ばその外をも亦きよまるべし

二七 噫なんぢら禍なる哉僞善なる學者とパリサイの人よ爾曹は白く塗たる墓に似たり外は美しく見れども内は骸骨と諸の汚穢にて充二八 此の如く爾曹もまた外は義く人に見れども内は僞善と不法にて充二九 噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ爾曹預言者の墓をたて義人の碑を飾れり三〇 又いふ我儕もし先祖の時にあらば預言者の血を流すことに與せざりしをと三一 然ば爾曹は預言者を殺し者の裔なることを自ら證す三二 なんぢら先祖の量を充せ三三 蛇蝮の類よ爾曹いかで地獄の刑罪を免れんや三四 是故に我爾曹に預言者と智者と學者を遣さんに或は之を殺し又十字架に釘 或は其會堂にて之を鞭ち或は邑より邑へ逐苦めん三五 そは義なるアベルの血より殿と祭の壇の間にて爾曹が殺しバラキアの子ザカリアの血に至るまで地に流したる義人の血は凡て爾曹に報來らんが爲なり三六 われ誠に爾曹に告ん此事みな此代に報來るべし三七 噫エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し爾に遣さるる者を石にて撃ものよ母雞の雛を翼の下に集る如く我なんぢの赤子を集んとせしこと幾次ぞや然ど爾曹は好ざりき三八 視よ爾曹の家は荒地となりて遺れん三九 われ爾曹に告ん主の名に託て來る者は福なりと爾曹の云んとき至るまでは今より我を見ざるべし

第二四章

一 イエス殿より出ければ其弟子すすみて殿の構造を彼に觀せんとしたりしに二 イエス彼等に曰けるは爾曹すべて此等を見ざるか我まことに爾曹に告ん此處に一の石も石の上に圮れずしては遺らじ三 イエス橄欖山に坐し給へるとき弟子ひそかに來りて曰けるは何の時このこと有や又爾の來る兆と世の末の兆は如何なるぞや我儕に告たまへ四 イエス答て彼等に曰けるは爾曹

人に欺かれざるやう愼よ五 蓋おほくの人わが名を冒きたり我はキリストなりと云て多の人を欺くべし六 又なんぢら戰と戰の風聲をきかん然ど愼て懼るる勿れ此等の事は皆ある可なり然ども末期は未だ至らず七 民おこりて民をせめ國は國をせめ饑饉、疫病、地震ところどころに有ならん八 是みな禍の始なり九 其とき人なんぢらを患難に付し爾曹を殺すべし又なんぢら我名の爲に萬民に憎れん一〇 此とき許多のもの礙かつ互に付し互に憾むべし一一 また僞預言者おほく起て多の人を欺かん一二 また不法みつるに因て多の人の愛情ひややかに爲べし一三 然ど終まで忍ぶ者は救るることを得ん一四 又天國の此福音を萬民に證せん爲に普く天下に宣傳られん然るのち末期いたるべし一五 是故に預言者ダニエルに託て言れたる所の殘暴にくむべきのものの聖處に立を見ば（讀者よく思ふべし）一六 厥時ユダヤにをる者は山に遁れよ一七 屋上に在ものは其家の物を取んとて下る勿れ一八 田にをる者は其衣を取んとて歸る勿れ一九 其日には孕める者と乳を飲する婦は禍なる哉二〇 爾曹冬または安息日に逃ることを免れん爲に祈れ二一 其とき大なる患難あり此の如き患難は世の始より今に至るまで有ざりき又後にも有じ二二 若その日を少くせられずば一人だに救るる者なからん然ど選れし者の爲に其日は少くせらるべし二三 其時もしキリスト此處にあり彼處にありと爾曹にいふ者あるとも信ずる勿れ二四 そは僞キリスト僞預言者たち起て大なる休徵と異 能を行ひ選れたる者をも欺くことを得ば之を欺く可れば也二五 われ預じめ爾曹に之を告二六 若キリスト野に在といふ者あるとも出る勿れ室に在と云ものあるとも信ずる勿れ二七 そは雷の東より出て西にまで閃くが如く人の子も來るべければ也二八 それ屍のある處には鷲あつまらん二九 此等の日の患難の後ただちに日は晦く月は光を失ひ星は空よりおち天の勢ひ震ふべし三〇 其とき人の子の兆天に現るまた地上にある諸族は哭 哀み且人の子の權威と大なる榮光をもて天の雲に乘來るを見ん三一 又その使等を遣し箛の大なる聲を出しめて天の此極より彼極まで四方より其選れし者を集むべし

三二 夫なんぢら無花果樹に由て譬を學べ其枝すでに柔かにして葉萠めば夏の近きを知三三 此の如く爾曹も凡て此等の事を見ば時ちかく門口に至ると知三四 われ誠に爾曹に告ん此等の事ことごとく成まで此民は廢ざるべし三五 天地は廢ん然ど我言は廢じ

三六 その日その時を知ものは唯わが父のみ天の使者も誰もしる者なし三七 ノアの時の如く人の子の來るも亦然らん三八 それ洪水の前ノア方舟にいる日までは人々飲食嫁 娶などして三九 洪水の來り悉く之を滅すまで知ざりき此の如く人の子も亦きたらん

四〇 其とき二人田に在んに一人は取れ一人は遺さるべし四一 二人の婦磨ひき居んに一人はとられ一人は遺さるべし四二 是故に爾曹も主いづれの時きたるかを知ざれば怠らずして守れ四三 爾曹これを知もし家の主人ぬすびと何の時きたるかを知ば其家を守て破らすまじ四四 然ば爾曹もまた預備せよ意ざる時に人の

子きたらんと爲ばなり四五 時に及て糧を彼等に予さする爲に主人がその僕等の上に立たる忠義にして智 僕は誰なる乎四六 我その主人の來らん時かくの如く勤るを見るる僕は福なり四七 我まことに爾曹に告ん其所有をみな彼に督らすべし四八 若その惡僕おのが心に我が主人の來るは遲らんと意ひ四九 その朋輩を打撻きて酒に醉たる者どもと共に飮食し始なば五〇 その僕の主人おもはざるの日しらざるの時に來りて五一 之を斬殺し其報を僞善者と同うすべし其處にて哀哭切齒すること有ん

第二五章

一 其とき天國は燈を執て新郎を迎に出る十人の童女に比ふべし二 その中の五人は智く五人は愚なり三 愚かなる者は其 燈をとるに油を携へざりしが四 智き者は其 燈と兼に油を器に携へたり五 新郎おそかりければ皆假寐して眠れり六 夜半ばに叫びて新郎きたりぬ出て迎よと呼聲ありければ七 この童女ども皆おきて其 燈を整へたるに八 愚かなるもの智き者に曰けるは我儕の燈 熄んとす願くは爾曹の油を我儕に分予よ九 智きもの答て曰けるは我儕と爾曹とに恐くは足まじ爾曹賣者に往て己が爲に買一〇 かれら買んとて往しとき新郎きたりければ既に備たる者は之と偕に婚筵に入しかば門は閉られたり一一 斯て後その餘の童女きたりて曰けるは主よ主よ我儕の爲に開たまへ一二 答て我まことに爾曹に告ん我は爾曹を知ずと曰り一三 然ば怠らずして守れ爾曹その日その時を知ざれば也

一四 また天國は或人の旅行せんとして其僕をよび所有を彼等に預るが如し一五 各人の智慧に從ひて或者には銀五千或者には二千或者には一千を予へおき直に旅行せり一六 五千の銀を受し者は往て之を貿易し他に五千を得たり一七 二千を受し者もまた他に二千を得たり一八 然るに一千を受し者は往て地を掘その主の金を藏せり一九 歷久て後その僕等の主かへりて彼等と會計せしに二〇 五千の銀を受し者その他に五千の銀を携來りて主よ我に五千の銀を預しが他に五千の銀を儲たりと曰ければ二一 主かれに曰けるはああ善かつ忠なる僕ぞ爾 寡なる事に忠なり我なんぢに多ものを督らせん爾の主人の歡樂に入よ二二 二千の銀を受し者きたりて主よ我に二千の銀を預しが他に二千の銀を儲たりと曰ければ二三 主かれに曰けるはああ善且忠なる僕ぞなんぢ寡なる事に忠なり我なんぢに多ものを督らせん爾の主人の歡樂に入よ二四 また一千の銀を受し者きたりて曰けるは主よ爾は嚴人にて播ざる處より穫ちらさざる處より斂ることを我は知二五 故に我懼てゆき主の一千の銀を地に藏し置り今なんぢ爾の物を得たり二六 その主こたへて曰けるは惡かつ惰れる僕ぞ爾わが播ざる處よりかり散さざる處より斂ることを知か二七 然らば我が金を兌換館に預置べきなり然ば我が歸たるとき本と利とを受べし二八 是故に彼の一千の銀を取て十千の銀ある者に予よ二九 それ有る者は予られて尚あまりあり無有者はその有る者をも奪

るる也三〇 無益なる僕を外の幽暗に逐やれ其處にて哀哭切齒すること有ん
三一 人の子おのれの榮光をもて諸の聖 使を率來る時はその榮光の位に坐し三二 萬國の民をその前に集め羊を牧者の綿羊と山羊とを別が如く彼等を別ち三三 綿羊をその右に山羊をその左に置べし三四 斯て王その右にをる者に云ん吾父に惠るる者よ來りて創世より以來なんぢらの爲に備られたる國を嗣三五 蓋なんぢら我が飢し時われに食せ渴しとき我に飲せ旅せし時われを宿らせ三六 裸なりし時われに衣せ病しとき我をみまひ獄に在しとき我に就ればなり三七 是に於て義 者かれに答て云ん主よ何時なんぢの飢たるを見て食せまた渴たるに飲しし乎三八 何時主の旅したるを見て宿らせ又裸なるに衣しや三九 何時主の病また獄に在を見て爾に至りし乎四〇 王こたへて彼等に曰ん我まことに爾曹に告ん既に爾曹わが此兄弟の最微 者の一人に行へるは即ち我に行しなり四一 遂にまた左にをる者に曰ん罰せらるべき者よ我を離れて惡魔と其使者の爲に備たる熄ざる火に入よ四二 蓋なんぢら我が飢し時われに食せず渴しとき我に飲せず四三 旅せし時われを宿らせず裸なりし時われに衣ず病また獄に在し時われを顧ざれば也四四 是に於て彼等また答て曰ん主よ何時なんぢの飢また渴また旅し又裸また病また獄に在を見て主に事ざりし乎四五 其とき王こたへて彼等にいはん我まことに爾曹に告ん此最微 者の一人に行はざるは即ち我に行はざりし也四六 此等の者は窮なき刑罰にいり義 者は窮りなき生命に入るべし

第二六章

一 偖イエスこの諸の言を言竟りて其弟子に曰けるは二 二日ののち逾越節なるは爾曹が知ところ也それ人の子は十字架に釘られん爲に付さるべし三 此とき祭司の長および民の長老等カヤパと云る祭司の長の邸の庭に集り四 詭計をもてイエスを執へ殺さんと共々に謀いひけるは五 祭の日には行べからず恐くは民の中に亂おこらん
六 イエス、ベタニヤの癩病人シモンの家に居たまへる時七 ある婦蝋石の器物に價たかき香 膏を盛てイエスの食する所に携來り其首に斟しかば八 弟子等これを見て怒を含いひけるは此靡費のことを爲は何故ぞや九 若これを賣ば多の金を得て貧 者に施すことを得ん一〇 イエス知て彼等に曰けるは何ぞ此婦を惱すや彼は我に善事を行へる也一一 貧 者は常に爾曹と偕にあれど我は常に爾曹と偕に在ず一二 彼がこの香 膏を我體に斟しは我の葬の爲に行る也一三 われ誠に爾曹に告ん天の下いづくにても此福音の宣傳らるる處には此婦の行し事もその紀念の爲に言傳らるべし
一四 其とき十二弟子の一人なるイスカリオテのユダと云るもの祭司の長等の所に往て曰けるは一五 我なんぢらに彼を賣さば幾何を予るか遂に銀三十にて約したり一六 此時よりイエスを賣

さんと機を窺ひぬ

一七 除酵節の首の日弟子イエスに來り曰けるは我儕すぎこしの食を爾の爲に何處に備ふべき乎**一八** イエス曰けるは京城にいり某に至ていへ師いふ我が時近きければ我弟子と偕に逾越の節筵を爾が家に行べしと**一九** 弟子イエスに命ぜられし如して逾越の食を備ふ**二〇** 日くるる時イエス十二弟子と偕に席に就**二一** 食する時いひけるは吾まことに爾曹に告ん爾曹のうち一人われを賣なり**二二** 彼等いたく憂て各イエスに曰出けるは主よ我なる乎**二三** 答て曰けるは我と偕に手を盂に着る者は即ち我を賣す者なり**二四** 人の子は己について録されたる如く逝ん然ど人の子を賣す者は禍なる哉その人生れざりしならば反て幸なりしならん**二五** 彼を賣すユダ答て曰けるはラビ我なるや之に曰けるは爾の言る如し**二六** かれら食する時イエス、パンを取て祝し之をさき弟子に予て曰けるは取て食これは我身なり**二七** また杯を取て謝し彼等に予て曰けるは爾曹みな此杯より飮**二八** これ新約の我血にして罪を赦さんとて衆の人のために流所のもの也**二九** われ爾曹に告ん今より後なんぢらと偕に新しき物を吾父の國に飮ん日までは再びこの葡萄にて造れる物を飮じ

三〇 かれら歌を謳てのち橄欖山に往り**三一** 其時イエス彼等に曰けるは今夜なんぢら皆われに就て礙かん蓋われ牧者を撃ば群の綿羊たらんと録されたれば也**三二** 然ど我甦りて後爾曹に先ちガリラヤに往べし**三三** ペテロ答てイエスに曰けるは皆なんぢに就て礙くとも我は終に礙かじ**三四** イエス彼に曰けるは我まことに爾に告ん今夜鷄なかざる前に爾三次われを知ずと言ん**三五** ペテロ彼に曰けるは我は主と偕に死るとも爾を知ずと言じ弟子みな如此いへり

三六 厥時イエス彼等と偕にゲツセマネといふ處に至て弟子等に曰けるは爾曹ここに坐われ彼處に往て祈らん**三七** ペテロ及ゼベタイの二人の子を携へ憂へ哀みを催し**三八** 彼等に曰けるは我心いたく憂て死るばかり也ここに待て我と偕に目を醒しをれ**三九** 少し進往てひれふし祈いひけるは吾父よ若かなはば此杯を我より離ち給へ然ど我心の從を成んとするに非ず聖旨に任せ給へ**四〇** 而て弟子に來り其寢たるを見てペテロに曰けるは如此一時も我と偕に目を醒をること能はざる乎**四一** 惑に入ぬやう目を醒かつ祈その靈には願ふなれど肉體よわきなり**四二** 二次ゆきて復いのり曰けるは吾父よ若われに此杯を飮さで離つこと能ずば聖旨に任せ給へ**四三** 來りて又かれらの寢たるを見これ彼等の目疲たる也**四四** 彼等を離れて又ゆき第三次も同言をもて祈れり**四五** 遂に其弟子に來りて曰けるは今は寢て休め時は近し人の子罪人の手に付されん**四六** 起よ我儕往べし我を賣す者近きたり

四七 如此いへるとき十二の一人なるユダ劍と棒とを持たる多の人々と偕に祭司の長と民の長老の所より來る**四八** イエスを賣す者かれらに號をなして曰けるは我が接吻する者は夫なり之を執

へよ四九 直にイエスに來りラビ安かと曰て彼に接吻す五〇 イエス彼に曰けるは友よ何の爲に來るや遂に彼等すすみ來り手をイエスに措て執へぬ五一 イエスと偕に在し者の一人手をのべ劍を拔て祭司の長の僕を撃その耳を削おとせり五二 イエス彼に曰けるは爾の劍を故處に收よ凡て劍をとる者は劍にて亡ぶべし五三 我いま十二軍餘の天使を我父に請て受ること能はずと爾曹おもふ乎五四 もし然せば如此あるべき事を録し聖書に如何で應はん乎

五五 此時イエス人々に曰けるは劍と棒とを持て盜賊を執ふる如して我を執にきたる乎われ日々爾曹と偕に殿に坐して誨しに爾曹われを執ざりし五六 然ど此の如なるは皆預言者の録たる所に應成せん爲なり遂に弟子等みなイエスを離れて逃去ぬ

五七 イエスを執たる者これを曳て學者と長老の集れる所の祭司の長カヤパに携ゆく五八 ペテロ遠く離れてイエスに從ひ祭司の長の庭にまで至その結局を見んとて内にいり僕と偕に坐せり五九 祭司の長等および長老すべての議員ともにイエスを殺さんとして妄證を求れども得ず六〇 多くの妄りの證者きたれども亦えず後また妄りの證者二人きたりて曰けるは六一 この人曩に言ることあり我よく神の殿を毀ちて三日の内に之を建うべしと六二 祭司の長たちてイエスに曰けるは爾こたふる言なき乎この人々の爾に立る證據は如何六三 イエス默然たり祭司の長こたへて彼に曰けるは爾 キリスト神の子なるか我なんぢを活神に誓はせて之を告しめん六四 イエス彼に曰けるは爾が言る如し且われ爾曹に告ん此のち人の子大權の右に坐し天の雲に乘て來るを爾曹みるべし六五 是に於て祭司の長その衣を裂て曰けるは此人は褻瀆ことを言り何ぞ外に證據を求んや爾曹も今その褻瀆たることを聞六六 なんぢら如何おもふ乎かれら答て曰けるは彼は死に當れり六七 是に於て彼等その面に唾し且拳にて撃りまた或人かれを批いひけるは六八 キリストよ爾を撃者は誰か我儕に預言せよ

六九 ペテロ庭に坐ゐけるに或婢きたりて爾もガリラヤのイエスと偕なりと曰ければ七〇 ペテロ凡の人の前に此言を肯はずして我なんぢが言ところを知ずと曰り七一 出て門口に至れる時また他の婢これを見て其處にをる者に曰けるは此人もナザレのイエスと偕に在し七二 ペテロまた肯はずして誓ふ我この人を知ずと七三 暫くありて旁らに立たる者すすみ近てペテロに曰けるは誠に爾もその黨の一人なり蓋なんぢの方言なんぢを顯せり七四 是に於てペテロ詈り且誓て我その人を知ずと曰しが頓て雞 鳴ぬ七五 ペテロ、イエスの雞なかざる前なんぢ三次われを知ずといはんと云たまへる言を懷起し外に出て悲み哭り

第二七章

一 平旦になりて凡の祭司の長と民の長老どもに謀てイエスを殺さんとし二 既に彼を縛ひきゆきて方伯のポンテオ・ピラトに解

せり

三是に於てイエスを賣ししユダ彼の死に定られしを見て悔その銀三十を祭司の長長老等に返して四曰けるは無辜の血を付し我は罪を犯しぬ彼等いひけるは我儕に於て何ぞ與らんや爾みづから當べし五ユダその銀を殿に投棄て其處を去ゆきて自ら縊たり六祭司の長等この銀を取て曰けるは此は血の價なれば賽錢の箱に入べからずとて七共に謀この銀をもて旅客を葬る爲に陶工の田を買り八故に其田は今に至るまで血田と稱らる九是に於て預言者エレミヤに託いはれたる言にイスラエルの民に估られ估られし者の價の銀三十を取一〇主の我に命ぜし如く陶工の田を買ぬと有に應へり

一一偖イエス方伯の前にたつ方伯イエスに問て曰けるは爾はユダヤ人の王なるかイエス之に曰けるは爾が言る如し一二祭司の長長老たち彼を訟ふれども何の答もせず一三是に於てピラト彼に曰けるは此人々なんぢに立る證のかく大なるを爾きかざる乎一四方伯の甚奇とするまでにイエス一言も答へざりき一五この祭の日には方伯より民の願に任せて一人の囚人を釋の例あり一六時にバラバと云る一人の名高き囚人ありければ一七ピラト民の集りしとき彼等に曰けるはバラバか又はキリストと稱ふるイエスなる乎なんぢら誰を釋さんと欲ふや一八これ娼嫉に由てイエスを解したりと知ばなり

一九方伯審判の座に坐りたる時その妻いひ遣しけるは此義人に爾干ること勿れ蓋われ今日夢の中に彼につきて多く憂たり二〇祭司の長長老たちバラバを釋しイエスを殺さんことを求と民に唆む二一方伯こたへて彼等に曰けるは二人のうち孰を我なんぢらに釋さんことを望むや彼等バラバと答ふ二二ピラト曰けるは然ばキリストと稱ふるイエスに我なにを處べきか衆いふ十字架に釘よと二三方伯いひけるは彼なにの惡事を行しや彼等ますます喊叫て十字架に釘よと曰二四ピラトその言の益なくして唯亂の起んとするをしり水を取て人々の前に手をあらひ曰けるは此義者の血に我は罪なし爾曹みづから之に當れ二五民みな答て曰けるは其血は我儕と我儕の子孫に係るべし二六是に於てバラバを彼等に釋しイエスを鞭ちて之を十字架に釘ん爲に付したり二七方伯の兵卒イエスを携へ公廳に至り全營を其もとに集め二八彼の衣を褫て絳色の袍を着せ二九棘にて冕を編其首に冠しめ又葦を右手に持せ且その前に跪づき嘲弄して曰けるはユダヤ人の王安かれ三〇また彼に唾し其葦を取て其首を撃り三一嘲弄し畢りて其袍をはぎ故衣をきせ十字架に釘んとて彼を曳ゆく三二その出し時クレネ人のシモンといふ者に遇ければ強て之に其十字架を負せたり

三三彼等ゴルゴタ譯ば即ち髑髏と云る處に來り三四醋に膽を和せてイエスに飮せんと爲たりしに嘗て飮ことをせざりき三五斯てイエスを十字架に釘しのち鬮を拈て其衣を分これ預言者の言に彼等互に我が衣を分わが裏衣を鬮にすと云しに應へり三六

兵卒ここに坐してイエスを守れり三七 また罪標に此はユダヤ人の王イエスなりと書して其首の上に置り三八 其とき二人の盗賊イエスと偕に一人は其右一人は其左に十字架に釘らる

三九 往來の者イエスを詈り首を搖て曰けるは四〇 殿を毀ちて三日に之を建る者よ自己を救へ爾もし神の子ならば十字架より下よ

四一 祭司の長學者長老等も亦おなじく嘲弄して曰けるは四二 人を救て己が身を救あたはず若イスラエルの王たらば今十字架より下るべし然ば我儕かれを信ぜん四三 彼は神に依頼めり神もし彼を愛しまば今救ふべし蓋かれ我は神の子なりと云し也四四 同に十字架に釘られたる盜賊も同くイエスを詈れり

四五 晝の十二時より三時に至るまで其地あまねく黒暗となる四六 三時ごろイエス大聲にエリ、エリ、ラマサバクタニと呼りぬ之を譯ば吾神わが神なんぞ我を遺たまふ乎と云る也四七 旁らに立たる者のうち或人これを聞て彼はエリヤを呼るなりと曰四八 其中の一人直に走り往て海絨をとり醋を含せ之を葦につけてイエスに飲しむ四九 餘人曰けるは俟エリヤ來りて彼を救ふや否 試べし

五〇 イエスまた大聲に呼りて氣絶たり五一 殿の幔上より下まで裂て二となり又地ふるひ磐さけ五二 墓ひらけて既に寢たる聖徒の身おほく甦へりイエスの甦れる後五三 墓を出て聖城に入おほくの人に現れたり

五四 百夫の長と偕にイエスを守たるもの地震および其有し事を見て甚く懼れ此は誠に神の子なりと曰り

五五 此處に遙に望ゐたる多の婦あり彼等はガリラヤよりイエスに從ひ事し者等なり五六 其中に居し者はマグダラのマリアとヤコブ、ヨセの母なるマリアとゼベタイの子等の母となり

五七 日くれてイエスの弟子なるヨセフと云るアリマタヤの富人きたりてピラトに往イエスの屍を請しかば五八 ピラトその屍を付せと命ず五九 ヨセフ屍を取て清き枲布に裹み六〇 之を磐に鑿たる己が新しき墓におき大なる石を墓の門に轉して去六一 マグダラのマリアと他のマリアと墓に對て坐し其處に居り

六二 預備日の翌日祭司の長とパリサイの人等ピラトの所に集來り曰けるは六三 主よ我儕憶起せり彼の僞 者いきて在しとき三日ののち甦らんと言し六四 是故に命じて三日に至まで墓を固守しめよ恐くは其弟子夜きたりて之を竊み死より甦りたりと民に言ん然ば後の惑は先よりも愈勝るべし六五 ピラト彼等に曰けるは守兵は爾曹にあり往て意のままに固守しめよ六六 是に於て彼等ゆきて石に封印し守兵をして墓を固守しめたり

第二八章

一 安息日終てのち七日の首の日黎明にマグダラのマリア及び他のマリアその墓を觀んとて來りしに二 大なる地震ありて主の使者天より降り墓の門より石を轉し其上に坐す三 その容貌は閃電のごとく其衣服は雪のごとく白し四 守兵かれを懼 戰き死

たる者の如くなりぬ五天使こたへて婦に曰けるは爾曹おそるる勿れ我なんぢらが十字架に釘られしイエスを尋ることを知六彼は此に在ず其言る如く甦りたり爾曹きたりて主の置れし處を見よ七且ゆきて其弟子に告よ彼は死より甦り爾曹に先ちてガリラヤに往り彼處に於て爾曹かれを見べし我これを爾曹に告八婦懼ながらも甚く喜びて急墓をさり其弟子に告んと走り往り九弟子に告んとて往ときイエス彼等に遇て安かれと曰給ひければ婦すすみ其足を抱て拜しぬ一〇イエス彼等に曰けるは懼るる勿れ去て我が兄弟にガリラヤに往と告よ彼處にて我を見べし

一一婦の去しのち守兵のうち或者ども城に至り凡て有し事を祭司の長等に告しかば一二彼等と長老あつまりて共に議おほくの銀子を兵卒に給て曰けるは一三爾曹いへ我儕が寢たる時その弟子夜きたりて彼を竊りと一四此事もし方伯に聞るとも我儕かれに勸て爾曹に憂慮なからしめん一五かれら銀子を取て囑められたる如したりし是に於て此の如き話今日に至るまでユダヤ人の中に傳播られたり

一六十一の弟子ガリラヤに往てイエスの彼等に命じ給ふ所の山に至り一七イエスを見て拜せり然ど疑へる者もありき一八イエス進て彼等に語いひけるは天のうち地の上の凡の權を我に賜れり一九是故に爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入て弟子とし二〇且わが凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼等に教よ夫われは世の末まで常に爾曹と偕に在なりアメン

馬可傳福音書

第一章

一 これ神の子イエス・キリストの福音の始なり 二 預言者の録して視よ我なんぢの面前に我使を遣さん彼なんぢの前に其道を設くべし 三 野に呼る人の聲あり云く主の道を備へ其徑すぢを直せよと有が如く 四 ヨハネ野に於てバプテスマを施し罪の赦を得させんが爲に悔改のバプテスマを宣傳たり 五 ユダヤの全國およびエルサレムの人々かれに來りて各々その罪を認はしヨルダンといふ河にてバプテスマを受 六 ヨハネは駱駝の毛衣を着腰に皮帶をつかね蝗蟲と野蜜を食へり 七 かれ宣傳けるは我より勝れる者わが後に來らん我は屈て其履の紐を解にも足ず 八 我は水をもて爾曹にバプテスマを施ししが彼は聖靈をもて爾曹にバプテスマを施すべし 九 當時イエス、ガリラヤのナザレより來りヨルダンにてヨハネよりバプテスマを受 一〇 頓て水より上れるとき天開れ靈鴿の如く其上に降るを見たり 一一 又天より聲ありて云なんぢは我が愛子わが悦ぶ所の者なりと 一二 斯て靈ただちにイエスを野に往しむ 一三 かれ四十日野に在てサタンに試られ獸と共にをれり天の使等これに事ぬ 一四 ヨハネの囚れし後イエス、ガリラヤに至り神の國の福音を傳いひけるは 一五 期は滿り神の國は近けり爾曹悔改めて福音を信ぜよ

一六 イエス、ガリラヤの湖の邊を歩る時シモンと其兄弟アンデレの湖に網うてるを見る彼等は漁者なり 一七 イエス彼等に曰けるは我に從へ我爾曹を人を漁る者とせん 一八 彼等ただちに其網を棄て之に從へり 一九 此より少し進行ゼベタイの子ヤコブとその兄弟ヨハネの舟に在て網つくろふを見て 二〇 直に彼等を召給ひしかば其父ゼベタイを傭人と共に舟に遺て彼に從へり 二一 彼等カペナウムに至るイエス即ち安息日に會堂に入て教を爲しに 二二 人々その教を駭き合り蓋學者の如ならず權威を有る者の如く教たまへば也 二三 其會堂に汚たる鬼に憑たる人ありて 二四 喊叫いひけるは唉ナザレのイエスよ我儕は爾と何の與り有んや爾きたりて我儕を滅すか我なんぢは誰なる乎を知即はち神の聖なる者なり 二五 イエス之を責て曰けるは聲を發すこと勿れ其處を出よ 二六 汚たる鬼その人を拘攣させ大聲に叫びて彼を出たり 二七 衆人みな驚き相問て曰けるは是何事ぞや是いかなる新しき教ぞや汚たる鬼さへ權威をもて命じければ從へり 二八 是に於てイエスの聲名偏くガリラヤの四方に播りぬ 二九 彼等やがて會堂を出ヤコブ及ヨハネと共にシモン、アンデレの家に至しに 三〇 シモンの岳母熱を病て臥ゐければ或人ただちに之をイエスに告 三一 イエス往て其手をとり彼を起しければ熱たちまち去ぬ斯て其婦彼等に供事たり 三二 夕かた日の落とき人々すべての病を患へるもの鬼に憑たる者をイエスに携へ來る 三三 その邑こぞりて門に集れり 三四 イエス各樣の病を患へる多の

人々を醫し又多の鬼を逐出し鬼の言ふ事を許さざりき蓋鬼かれを識たるに因てなり
三五 昧爽にイエス早く起人なき所にゆき其處にて祈禱せり三六 シモンおよび彼と共に在し者等その跡を慕ゆき三七 彼に遇て曰けるは衆人みな爾を尋ぬ三八 イエス彼等に曰けるは我は教を宣傳る爲に爾曹と偕に附近の郷村に往ん我これが爲に來れば也三九 イエス遍くガリラヤの國を經めぐり其會堂にて教を宣且鬼を逐出せり
四〇 癩病のもの一人かれに來りて跪き求ひ曰けるは爾もし聖意に適ときは我を潔く爲得べし四一 イエス憫みて手をのべ彼に按て我意に適へり潔なれと四二 言やいな直に癩病はなれ其人きよまれり四三 四四 イエス嚴く之を戒め愼みて何をも人に告る勿れ但ゆきて己が身を祭司に見せ其潔られし爲にモーセが命ぜし所の物を獻て彼等に證據をなせと言て去しめたり四五 然ども彼いでて先この事を大に言つたへ語り廣めければイエス此後あらはに城に入がたく獨人なき所に居給ひしが人々四方より彼に來れり

第二章

一 數日の後イエス復カペナウムに來しに二 彼の室に居こと聞えければ直に多の人々集きたり門に立べき塲處さへもなき程なりきイエス彼等に教を宣三 此に癱瘋を病たる者を四人に舁せイエスに來れる者ありしが四 群集によりて近づき難かりければ彼の居ところの屋蓋を取除き癱瘋の人を床のまま縋下せり五 イエス其信仰を見て癱瘋の人に曰けるは子よ爾の罪赦されたり六 數人の學者ここに坐し居しが心中に謂けるは七 斯人は何故かく惡口を言か神にあらずして誰か罪を赦すことを得ん八 イエス直に彼等が心中に斯の如き事を論ずるを自ら其心に知て彼等に曰けるは爾曹なんぞ心中に斯る事を論ずる乎九 癱瘋の人に爾の罪は赦されたりと言と起て爾の床を取て行と言と孰れ易や一〇 それ人の子地にて罪を赦すの權威あることを爾曹に知せんとて遂に癱瘋の人に一一 我なんぢに告おきて床を取なんぢの家に歸れと曰ければ一二 その人ただちに起て床をとり衆人の前にいづ衆人みな駭き神を崇めて曰けるは我儕いまだ斯の如ことを見しことなし
一三 イエスまた海邊に往しに人々みな彼に來ければ是等を教ふ一四 此より進てアルパヨの子レビといふ者の税吏の役所に坐し居けるを見て我に從へと曰ければ彼たちて從へり
一五 斯てイエスその家にて食する時おほくの税吏罪ある衆人イエス及び弟子と共に坐せり是等の者許多ありてイエスに從ひぬ
一六 學者とパリサイの人かれが税吏および罪ある人と共に食するを見て其弟子に曰けるは何ゆゑ税吏罪ある人と共に食飲する乎一七 イエス聞て彼等に曰けるは廉強なる者は醫者の助を需ず唯病ある者これを需わが來しは義人を召ために非ず罪ある

人を召て悔改させんが爲なり

一八 ヨハネの弟子及びパリサイの人つねに斷食する事ありければ彼等イエスに來いひけるはヨハネの弟子とパリサイの弟子は斷食するに爾の弟子は何ゆゑ斷食せざる乎 一九 イエス彼等に曰けるは新郎の朋友その新郎と共にをる間に斷食することを得べき乎かれら新郎と共にをる間は斷食することを得じ 二〇 將來かれら新郎をとらるる日きたらん其日には斷食すべき也 二一 新しき布を舊衣に縫つくる者あらじ若し然せば其新に補へるもの舊を綻ばして其破かへつて惡なるべし 二二 亦あたらしき酒を舊き革嚢にいるる者あらじ若し然せば新酒は其嚢を破裂て酒もれいで革嚢も亦壞るべし新酒は新しき革嚢に盛べきもの也

二三 偖イエス安息日に麥の畠を過りしに其弟子あゆみつつ麥の穗を摘はじめければ 二四 パリサイの人彼に曰けるは彼等安息日に爲まじき事をするは何故ぞ 二五 イエス答けるはダビデ及び從に在し者の乏くして飢しとき行たる事を未だ讀ざる乎 二六 即ち祭司の長アビアタルのとき神殿に入て唯祭司の外は食まじき供物のパンを食かつ從に在し者にも與たり 二七 また彼等に曰けるは安息日は人の爲に設られたる者にして人は安息日の爲に設られたる者に非ず 二八 然ば人の子は安息日にも主たる也

第三章

一 イエスまた會堂に入しに一手枯たる人ありけるが 二 衆人イエスを訟んとして彼は此人を安息日に醫すや否と窺へり 三 イエス手枯たる人に曰けるは中に立よ 四 また衆人に曰けるは安息日には善を行と惡を行と生るを救ると殺すと孰をか爲べき彼等默然たり 五 イエス怒を含て環視し彼等が心の頑硬なるを憂へ手枯たる人に爾の手を伸よと曰ければ彼その手を伸しに即ち他の手のごとく愈たり 六 パリサイの人いでて如何してかイエスを殺さんと直にヘロデの黨に相謀りぬ

七 イエスその弟子と共に海邊に退しに多の人々ガリラヤより彼に從へり又ユダヤ 八 エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの外またツロとシドンの邊より多の人々イエスの行し事を聞て彼に群り來る 九 イエス人々の群集に因て擁なやまさるる事なからん爲に小舟を我に備おけと其弟子に曰り 一〇 是イエス數多の人々を愈ししに因て凡て病ある人々手にて彼に捫んとて擁逼しが故なり 一一 また汚たる鬼かれを見て其前に俯伏さけびて爾は神の子なりと曰しを 一二 イエス彼等に我を揚すこと勿れと嚴く戒めたり

一三 イエス山に登て其意に適ふ所の者を召しかば來りて彼に就り 一四 是に於て十二人を立て己と偕に置また教を宣傳る爲に遣し 一五 かつ病を醫し鬼を逐出すの權威を授く 一六 乃ちシモンをペテロと名け 一七 ゼベダイの子ヤコブと其兄弟ヨハネこの二人を

ボアネルゲと名く之を譯ば雷の子なり一八又アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、タツダイ、カナンのシモン一九又イスカリオテのユダ此はイエスを賣しし者なり二〇此等の者家に入しに多の人々又來り集りければ食する暇もなかりき二一其親屬きゝて彼は狂氣せりと言て之を拏んとて來る二二又エルサレムより下れる學者等も彼はベルゼブルに憑れたり且鬼の王に藉て鬼を逐出すなりと曰り二三イエス彼等を召び譬を以て曰けるはサタンは何でサタンを逐出し得んや二四もし國おのれに悖て分爭はゞ其國立べからず二五また家おのれに悖て分爭はゞ其家立べからず二六若サタン己に悖り起て分爭はゞ彼たつ可からず反て終るなるべし二七誰にても勇士の家に入て其家具を奪んとせば先勇士を縛らざれば奪ふこと能はじ縛て後その家を奪ふべし二八われ誠に爾曹に告ん人の凡の罪を涜す所の褻涜は赦るべけれど二九聖靈を涜す者は限なく赦さる可からず限なき刑罰に干らん三〇斯いへるは人々イエスを惡鬼に憑たりと言しが故なり

三一その兄弟と母と來りて戸外にたち人を遣してイエスを呼しむ三二多の人々イエスを環て坐したりしが彼に曰けるは視よ爾の母と兄弟戸外に在て爾を尋ぬ三三イエス答て曰けるは我母わが兄弟は誰ぞや三四斯て側に坐する人々を環視して曰けるは我母わが兄弟を見よ三五それ神の旨に從ふ者は是わが兄弟わが姉妹わが母なり

第四章

一イエスまた海邊にて教訓を始しに多の人々かれに集りければ彼舟に乘て坐し凡の人々は海に沿て岸に立り二かれ譬をもて多の事を彼等に教ふ教て曰けるは三聽よ種播もの播んとて出四播るとき或種は路の傍に遺しが空の鳥きたりて之を食へり五或種は土うすき磽地に遺しが土深からねば直に萌出たれど六日出しかば曝れ根なきが故に枯たり七或種は棘の中に遺しが棘そだちて之を蔽ければ實を結ばざりき八また或種は沃壤に遺しが其苗はえいでて蕃り實を結ること或は三十倍或は六十倍或は百倍せり九また彼等に曰けるは耳ありて聽ゆる者は聽べし

一〇衆人の居ざりし時イエスの側に在し者と十二弟子と此譬を問しかば一一イエス彼等に曰けるは神の國の奥義を爾曹には知ことを賜へど他の者には凡て譬を以てす一二是かれら視とき視ても見ず聽とき聽ても聰らず心を改めて其罪の赦を得ざらん爲なり一三また彼等に曰けるは爾曹この譬を知ざるか然ば如何して凡の譬を識ことを得んや一四それ播者は教を播なり一五道の播れて路の傍に遺しものは人道を聽しとき直にサタン來て其心に播れたる道を奪取なり一六また磽地に播れたるものは人道を聽とき直に喜びて之を受一七然ども己に根なきが故ただ暫時のみ後道の爲に患難あるひは迫害に遇ときは忽ち礙く者なり一八又棘の中に播れたるものは人ことばを聽ども一九此世の思慮と貨財の惑または各樣の情欲いり來りて道を蔽により終に實

を結ざる者なり二〇沃壤に播れたるものは人道を聽て之をうけ或は三十倍あるひは六十倍あるひは百倍の實を結ぶ者なり
二一また彼等に曰けるは燈を持來りて斗の下あるひは牀の下に置もの有んや之を燭臺の上に置ならず乎二二隱て明瞭にならざるはなく藏て露れざる者はなし二三耳ありて聽ゆる者は聽べし二四また彼等に曰けるは聽ところを愼めよ爾曹が度る所の量をもて爾曹も度らるべし聽たる爾曹にはなお加られん二五それ有る者はなほ與られ無有者は有る者をも取るる也
二六また曰けるは神の國は人種を地に播が如し二七日夜起臥する間に種はえいでて成長ども其然る故を知ず二八それ地は自から實を結ぶものにして初には苗つぎに穗いで穗の中に熟したる穀を結ぶ二九既に熟ば穫時いたるに因て直に鎌を入さする也
三〇また曰けるは神の國は何に比へ何の譬を以て之を喩ん三一一粒の芥種のごとし之を地に播ときは百樣の種より微けれど三二既に播て萠出れば百樣の野菜よりは大くかつ巨なる枝を出して空の鳥その蔭に棲ほどに及なり
三三イエス彼等の聽得ところに循ひ多かかる譬をもて教を彼等に語れり三四譬に非ざれば彼等に語らずイエスその弟子と共に居るとき彼等に悉く之を解聽せり
三五偖その日の夕暮イエス彼等に向の岸に濟れと曰ければ三六弟子たち人々を歸らせイエスの舟に在しを其まま之と偕に濟れり又他の小舟もともに往り三七時に颶風おこり浪うちこみて殆ど舟に滿三八イエス艄のかたに枕して寢たりしが弟子かれの目を醒して曰けるは師よ我儕が溺るるをも顧み給はざる乎三九イエス起て風を斥め且海に靜りて穩かに爲と曰ければ風やみて大に和たり四〇斯て彼等に曰けるは何故かく懼るや爾曹何ぞ信なき乎四一彼等甚しく懼れ互に曰けるは風と海さへも順ふ是誰なるぞ耶

第五章

一かれら海を濟てガダラ人の地に着二舟よりイエスの上れるとき惡鬼に憑れたる人ただちに墓間より出て彼に遇三四この人は墓間を居處とせり屢次桎梏と鏈をもて繫ども鏈をうちきり桎梏を打碎くにより之を繫うる者なく亦誰も之を制し得もの無りき五夜も晝も恆に山と墓間に於て喊喚また石をもて己が身に傷つけぬ六彼はるかにイエスを見て趨より之を拜し七大聲に呼りけるは至上神の子イエスよ我なんぢと何の與り有んや我神に託て求ふ我を苦むこと勿れ八是イエス惡鬼に人より出よと曰しに因てなり九イエス彼に爾の名は何と問しに答けるは我儕おほきが故に我名をレギヨンと云一〇切に此土地より我儕を逐出す勿れとイエスに求たり一一茲に多の豕の群山に草を食ゐたりしが一二凡の惡鬼かれに求て我儕を遣て豕に入せよと曰ければ一三イエス直に彼等に許せり汚たる鬼その人より出て豕に入しかば約そ二千匹ほどの群はげしく馳くだり山坡より海に落て海に溺

ぬ一四牧者ども逃ゆきて此事を邑また郷村に告ければ衆人其ありし事を視んとて出一五イエスに來りて惡鬼に憑れたる者すなはちレギヨンを持たりし人の衣服をつけ慥なる心にて坐し居けるを見て懼あへり一六此事を見し者ども惡鬼に憑れたりし者の事と家の事を彼等に告ければ一七頓てイエスに其境を出んことを求ぬ一八イエス舟に登んとせしとき惡鬼に憑たりし者ともに居んことを求けれども一九イエス許ずして彼に曰けるは爾の家に歸り親屬に往て主の爾に行し大なる事と爾を恤みし事を告よ二〇彼ゆきてイエスの己に行たまへる大なる事をデカポリスに言揚しければ衆人みな駭きあへり

二一イエス舟に乘て復海の彼岸に濟しに大勢の人々彼に集るイエスは海に近をれり二二會堂の宰ヤイロといふ人きたりイエスを見て其足下に伏二三切々に求いひけるは我いとけなき女死る瀕になりぬ之を救ん爲に來りて手を彼に按たまへ然ば女は生べし二四イエス彼と共に往とき衆多の人々彼に從ひて擁あへり二五爰に十二年血漏を患たる婦あり二六此婦おほくの醫者の爲に甚だ苦められ其所有をも盡く費しけれども何の益もなく轉て惡かりしが二七イエスの事を聞て群集の中より彼の後に來その衣に捫れり二八是その衣にだに捫らば愈るべしと曰ばなり二九斯て血の漏ること直にとまり既に疾いえしと其身に覺たり三〇イエス自ら能力の己より出たるを知おほぜいの人々を顧みて曰けるは我衣に捫りし者は誰なる乎三一弟子かれに曰けるは群集の人々の爾に擁あふを見て我に捫りし者は誰ぞと曰たまふ乎三二イエスこの事を行る婦を見んと環視しければ三三婦おそれ戰慄おのが身にせられし事をしり來て彼の前に俯伏ことごとく實情を告三四イエス彼に曰けるは女よ爾の信なんぢを救り安然にして往なんぢの疾いゆべし

三五イエスこの事を言をるうちに會堂の宰の家より人々來りて曰けるは爾の女すでに死たり何ぞ師を煩はす乎三六イエス直に其告る所の言をきき會堂の宰に曰けるは懼るる勿ただ信ぜよ三七イエス、ペテロとヤコブ及その兄弟ヨハネの外は誰にも共に往ことを許さざりき三八既に會堂の宰の家に來りて人々の忙亂いたく哭泣を見る三九入て彼等に曰けるは何ぞ忙亂かつ哭や女は死るに非ただ寢たる耳四〇彼等イエスを哂笑ふイエス凡の人々を出し女の父母とその從へる者等を率つれ女の臥たる所に入四一女の手を執て之に曰けるはタリタクミ之を譯ば女よ我なんぢに命ず起よといふ義なり四二直に女おきて行めり彼は年十二歳なり彼等はなはだ駭きぬ四三イエスこの事を人に知する勿れと嚴く戒め又女に食物を與よと命じたり

第六章

一イエス此を去て故郷に到しに其弟子も彼に從ひぬ二安息日に及ければ會堂にて教をはじむ衆人これを聞て奇み曰けるは如何して此人に斯のごとき事あるか誰より此智慧を授られて

如此ふしぎなる事をも其手より行か三彼は木匠に非ずやマリアの子ヤコブ、ヨセ、ユダとシモンの兄弟にして其姉妹も此に我儕と共に在に非ずや遂に人々彼に礙けり四イエス彼等に曰けるは預言者はその故郷その親戚その室家の外に於は尊ばれざることなし五イエス彼處にて患者に手を按ただ數人を醫し外ふしぎなる事を行こと能ざりき六また彼等の信ぜざるを奇み遂に諸郷を經巡て教をなせり

七イエス十二の弟子を召て彼等を二人づつ遣さんとして之に惡鬼を逐出す權威を授け八且かれらに命じけるは一の杖の外は旅の用意に何をも携なかれ旅袋糧食また金をも携ず九ただ履をはき二の衣をきる勿れ一〇また彼等に曰けるは何處にても人の家に入ばその所を去までは其處に居れ一一凡て爾曹を接ずなんぢらに聽ざる者には其處を去とき證のため足下の塵を拂へ我まことに爾曹に告ん審判の日いたらばソドムとゴモラは此邑よりも却て易かるべし一二弟子たち出て人々に悔改む可ことを宣傳へ一三また多の惡鬼を逐出し又多の病る者に膏を沃て醫しぬ

一四イエスの名播りければヘロデ王これを聞て曰けるはバプテスマを施ししヨハネ死より甦れる故に奇異なる能をなす也一五或人は之をエリヤなりといひ或は往昔の預言者の如き預言者なりと曰一六ヘロデ之を聞て曰けるは是わが首斬し所のヨハネ也かれ死より甦りたる也一七曩にヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事に因て人を遣しヨハネを捕て獄に繫げり蓋ヘロデが彼の婦を娶しを一八ヨハネ諫て爾兄弟の妻を納は宜からずと曰るに因てなり一九ヘロデヤ彼を怨て殺さんと欲しかど能ざりき二〇ヘロデはヨハネを義かつ善なる人と知て彼を敬ひ彼を保護かれに聞て多の事を行ひ且喜びて彼に聽ことをせり二一斯てヘロデその誕生の日もろもろの大臣千人の長およびガリラヤの尊き人々に享宴をなせる機會の日いたりければ二二ヘロデヤの女きたりて舞をなしヘロデと其席に列れる人々を樂ましむ王その女に曰けるは何にても我に求へ爾が望ところの者は我なんぢに與ふべし二三又彼に凡そ爾が求るものは我が領分の半に至るとも爾に與んと誓ふ二四女いでて其母に何を求べき乎と曰ければ母乃ちバプテスマのヨハネが首と曰り二五女ただちに急ぎ王にきたり求てバプテスマのヨハネが首を盆に載て即時に我に賜へと曰二六王甚だ憂けれども既に誓たると同席の者の故をもて之を拒むことを欲ず二七王ただちにヨハネの首を携來れと命じて兵卒を遣しければ彼ゆきて獄に於て之を斬二八其首を盆にのせ携來りて女に與ふ女は之を其母に與たり二九ヨハネの弟子等この事を聞て來り其屍を取て墓に葬りぬ

三〇使徒等イエスに集りて行へる事と教し事とを悉く彼に告三一イエス彼等に曰けるは爾曹衆を避て我と偕に暫く寂寞ところに往て休むべし是往來のもの多して食する暇も無りしが故なり三二かれら人を避舟にて寂寞ところに往り三三其往を見て衆人おほくイエスをしり諸邑より歩行にて趨り彼等の往んとする所へ

先ち往てイエスに集れり三四 イエス出て多の人を見に彼等は牧者なき羊の如き者なるに因て之を憫み許多の事を教はじめぬ三五 時すでに暮景になりければ其弟子かれに來いひけるは此は寂寞ところにして時も既晩し三六 衆人の食ふべき物なきが故に其自ら四周の郷村に往てパンを市んが爲に彼等を去しめ給へ三七 イエス答けるは爾曹これに食を與よ弟子かれに曰けるは我儕ゆきて銀二百のパンを市かれらに與て食しむ可か三八 イエス彼等に曰けるはパンは幾何ある往て視よ彼等みて其數をしり五のパンと二の魚ありと答ふ三九 イエス衆の人を組々にして青草の上に坐しめよと命じければ四〇 或は百人或は五十人づつ列坐せり四一 イエスその五のパンと二の魚をとり天を仰ぎ謝してパンをわり弟子に與て人々の前に陳しむ又二の魚を每人に分與ぬ四二 衆人みな食て飽四三 そのパンと魚の餘屑を拾しに十二の筐に盈たり四四 パンを食たる男およそ五千人なりき

四五 直にイエスその弟子を強て舟に乘むかふの岸なるベテサイダへ先わたらしめ己は衆人を歸しむ四六 衆人を歸ししのち祈禱の爲に山に往り四七 日暮て舟は海の中に在イエスは獨り陸に居り四八 風逆ふに因て弟子等の舟を棹に勞たるを見て曉の四時ごろイエス海の上を履きたり彼等を過んとせしに四九 弟子その海を履るを見て變化の物ならんと意ひ叫びたり五〇 蓋弟子みな之を見て懼しが故なりイエス直に彼等に語りて曰けるは心安かれ我なり懼るること勿れ五一 遂に舟に登しかば風やみぬ彼等心の中に駭き異めること甚だし五二 是其心の愚頑に因てパンの奇跡をも覺ざりし也

五三 既に濟ゲネサレしいふ地に到て舟泊せり五四 彼等舟より出しに頓て人々イエスを知て五五 徧く其四方の地へ馳ゆき病る者を床の儘にて舁ひイエスの在す處々を聞出して之に就り五六 凡そイエスの至るところ或は鄉あるひは邑あるひは村その街市に病る者を置て彼に其衣の裾にだに捫らせ給へと求り乃ち捫るほどの者はみな愈たり

第七章

一 パリサイの人と或學者たちエルサレムより來りてイエスの前に集り二 彼の弟子の中に潔らざる手即ち盥ざる手にてパンを食する者ありしを見て之を責めたり三 蓋パリサイの人とユダヤの人々はみな古の人の遺傳を守りて其手を潔あらざれば食せず四 市より歸きたりて盥ざれば亦食せず此ほか杯 椀鍋および牀を洗など多端の遺傳を受守れり五 是に於てパリサイの人と學者等イエスに問けるは爾の弟子は何ゆゑ古の人の遺傳に遵はずして盥ざる手を以てパンを食する乎六 イエス答て彼等に曰けるはイザヤは僞善者なる爾曹を指てよく預言せり其錄しし言に此民は唇にて我を敬へども其心は我に遠かり七 人の誡を教と爲て徒らに我を拜すと曰り八 夫爾曹は神の誡を棄て人の遺傳を守れり即

ち鍋杯を洗おほく此の如き事を行ふ九また彼等に曰けるは爾曹は實に己の遺傳を守んとて能も神の誡を棄る者なり一〇モーセ曰けるは爾の父母を敬へ又父あるひは母を詈る者は殺るべしと一一然ど爾曹は曰もし人父あるひは母に對て爾を養ふべき物はコルバン即ち禮物なりと曰ば事ずとも可と一二而して人の其父あるひは母の爲に何をも行事を爾曹許ず一三斯なんぢらは其教る所の遺傳をもて神の道を廢うす又おほく此類の事を行ふ

一四イエスまた衆庶を召て彼等に曰けるは爾曹みな我言を聞て悟れ一五外より人に入ものは人を汚すこと能はず然ど人より出るものは人を汚す也一六聽ゆる耳ある者は聽べし

一七イエス衆庶を離れて室に入しに其弟子たとへの意を問ければ一八彼等に曰けるは爾曹もなほ悟ざるか凡そ外より人に入ものの人を汚し能はざる事を知ざる乎一九蓋その心に入ず腹に入て厠に遺すなはち食ふ所のもの潔れり二〇又曰けるは人より出るものは是人を汚す二一人の心より出るものは惡念、姦淫、苟合、兇殺二二盜竊、貪婪、惡慝、詭譎、好色、嫉妒、謗讟、驕傲、狂妄なり二三是等の惡行はみな内より出て人を汚すもの也

二四イエス此を去てツロとシドンの境にゆき家に入て人に知れざらん事を欲しが隱れ得ざりき二五そは惡鬼に憑たる幼き女を有る婦イエスの事を聞て來り其足下に伏たるに因てなり二六この婦はサイロピニケにうまれしギリシャの者なりしが惡鬼を其女より逐出し給はん事をイエスに求り二七イエス彼に曰けるは先兒女に飽しむべし兒女のパンを取て犬に投るは善らず二八婦こたへて曰けるは主よ然されど犬も案の下に在て兒女の遺屑を食ふ也二九イエス婦に曰けるは此言に因て歸れ惡鬼は爾の女より出たり三〇婦その家に歸しに惡鬼既に出て牀に女の臥たるを見る

三一イエス、ツロとシドンの地を去てデカポリスの地を過ガリラヤの海に至れり三二人々聾の訥る者をイエスに携來りて手を按給はん事を求ければ三三イエス衆人を離れ之を外へ携ゆき指を其耳にさしいれ又唾して其舌に捫り三四且天を仰て嘆じ其人に對てエッパタと曰これを譯ば啓よとの義なり三五直に其耳ひらけ舌の絡ゆるみて正く言へり三六イエス之を人に告る勿れと彼等を戒むれば戒むるほど益言揚しぬ三七衆人はなはだしく駭きて曰けるは此人の行し所ことごとく善あるひは聾を聽えさせ或は唖者を言はしめたり

第八章

一當時あつまれる人々甚だ多りしが何の食物も有ざりければイエス其弟子を召て曰けるは二我この多の人々を憫む既に三日われと共に居しゆゑ今なにも食物なし三もし飢しまま其家に歸さば途間にて憊ん其中に遠處より來れる者あれば也四その弟子かれに答けるは此野にて何處よりパンを得この人々を飽しめん

乎**五** イエス彼等に問けるはパン幾何あるや七と答ふ**六** イエス人々に命じて地に坐せしめ七のパンを取て謝し之をわり人々の前に陳しめんが爲その弟子に與ければ即ち人々の前に陳り**七** また小き魚を些須もてり之をも祝して人々の前に陳と曰**八** 人々これを食て飽その餘屑を七の籃に拾り**九** 之を食る者おほよそ四千人なり乃ちイエス之を歸しぬ

一〇 イエス直に其弟子と共に舟に乘てダルマヌタの方に往しに**一一** パリサイの人いでて彼を試んがため天よりの休徴を求めて詰はじむ**一二** イエス心の中に深く歎息して曰けるは此世の人なんぞ休徴を求るや誠に我なんぢらに告ん休徴は此世の人に必ず與られじ**一三** イエス彼等を離れて復舟に乘むかふの岸に濟れり

一四 さて弟子パンを携ふることを忘ただ一のパンのみ舟に有き**一五** イエス彼等を戒めて曰けるは戒心してパリサイの人の麪酵とヘロデの麪酵を愼めよ**一六** 弟子たがひに論じて曰けるは是パンを携へざりし故ならん**一七** イエス之を知て彼等に曰けるは何ぞ互にパンを携へざりし事を論ずるや未だ悟ざるか爾曹の心なほ頑か**一八** 目ありて視ざるか耳ありて聽えざる乎また覺ざる乎**一九** 我五千人に五のパンを擘あたへし時その餘屑を幾籃ひろひしや答けるは十二なり**二〇** 又四千人に七のパンを擘あたへし時その餘屑を幾籃ひろひしや答けるは七なり**二一** イエス彼等に曰けるは何ぞ悟ざる乎

二二 イエス、ベテサイダに至ければ人々瞽者を携來りて之に手を按たまはん事を求り**二三** イエス瞽者の手を執て村の外へ携出その目に唾して手を彼に按とひけるは何か視るや**二四** 瞽者目を擧て曰けるは我この人々の歩行を見に樹の如し**二五** 遂にイエスまた兩手を彼の目に按その目を擧させければ乃ち愈て庶物あきらかに視たり**二六** イエス彼を其家に歸らせ曰けるは此村に入なかれ且この村人にも告る勿れ

二七 イエスその弟子と共にカイザリア、ピリピの諸村へゆく途間にて其弟子に問て曰けるは衆人は我を曰て誰とする乎**二八** 答けるは或人はバプテスマのヨハネ或人は預言者の一人なりと曰り

二九 イエス彼等に曰けるは爾曹は我を曰て誰とする乎ペテロ答けるは爾はキリストなり**三〇** イエス彼等を戒めて我事を誰にも告る勿れと命じたり

三一 また人の子の必ず多の苦難をうけ長老祭司の長學者どもに棄られ且殺されて三日の後に甦ることを彼等に示し始たまへり

三二 明に之を示し給しかばペテロ、イエスを援て諫んとせしに**三三** イエス回顧その弟子を視てペテロを戒め曰けるはサタンよ我後に退け爾は神の情を思ず反て人の情を思ふ

三四 衆人と其弟子を共に召て彼等に曰けるは若し我に從はんと欲ふ者は己を棄その十字架を負て我に從へ**三五** そは生命を全うせんとする者は之を喪ひ我ため且福音の爲に生命を喪ふ者は之を得べければ也**三六** もし人全世界を得とも其生命を喪はば何の益あらん乎**三七** また人何をもて其生命に易んや**三八** 姦惡なる此世

に於て我と我道を耻る者をば人の子も亦聖使と共に父の榮光をもて來る時之を耻べし

第九章

一イエスまた彼等に曰けるは我まことに爾曹に告ん此に立ものの中に神の國の權威をもて來るを見までは死ざる者あり二さて六日の後イエス、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひ人を避て高山に登り給ひしが彼等の前にて其容貌かはり三其衣かがやき白こと甚だしくして雪の如く世上の布漂も斯しろくは爲能はざるべし四エリヤとモーセと共に彼等に現れてイエスと語をれり五ペテロ答てイエスに曰けるはラビ我儕ここに居は善われらに三の廬を建せ給へ一は主のため一はモーセのため一はエリヤの爲にせん六此は其謂ところを知ざりしなり彼等いたく懼しに因七斯て雲彼等を蔽ひ聲雲より出て曰けるは此は我が愛子なり之に聽べし八頓て弟子環視ければイエスと己の外は一人をも見ざりき

九山を下る時にイエス彼等に命じて人の子の死より甦る迄は爾曹の見し事を人に告る勿れと曰り一〇弟子等この言を守かつ互に論じ曰けるは死より甦ると云は何の事か一一彼等イエスに問て曰けるはエリヤは前に來るべしと學者の曰るは何ぞや一二イエス答て曰けるは實にエリヤは前に來りて萬事を復振また人の子に就ては其各樣の苦難を受かつ輕慢らるる事を書しるされたり一三然ど我なんぢらに告んエリヤ既に來しに彼に就て録されたりし如く人々意の任に之を待へり

一四イエス弟子等の所にきたり多くの人々の彼等を環圍ると學者たちの彼等と論じをりしを見たり一五衆人ただちに彼を見て駭き趨よりて禮をなせり一六イエス學者に問けるは弟子と何事を論ずる乎一七衆人のうち一人こたへけるは師よ我ものいはぬ惡鬼に憑れたる我子を爾に携來れり一八惡鬼の憑時は彼傾跌され沫をふき齒を切て疲勞はつる也これを逐出さんことを我なんぢの弟子に請しかど彼等能ざりき一九イエス彼等に答て曰けるは噫信なき世なる哉いつまで我なんぢらと共に在んや何時まで我なんぢらを忍んや彼を我に携來れ二〇彼等その子を携來りしに惡鬼イエスを見て忽ち彼を拘攣しむ彼地に仆れ輾轉て沫を出ぬ二一イエスその父に問けるは幾何時より如此なりしや父いひけるは少時より也二二惡鬼しばしば之を火の中あるひは水の中に投入て殺んとせり爾もし爲ことを得ば我儕を憫みて助よ二三イエス彼に曰けるは爾もし信ずる事を得ば信ずる者に於て爲あたはざる事なし二四其子の父ただちに聲をあげ涙を流して曰けるは主よ我信ず我が信なきを助たまへ二五イエス衆人の趨集るを見て惡鬼を叱いひけるは唖にして聾なる惡鬼よ我なんぢに命ず出て再び之に入なかれ二六惡鬼さけびて大に彼を拘攣しめて出しかば彼死たる者の如なりぬ人々これを已に死りと云二七イエスその手を執て扶ければ彼たてり

二八 イエス家に入しに其弟子ひそかに問けるは我儕これを逐出すこと能ざりしは何故ぞ二九 イエス彼等に曰けるは此族は祈禱と斷食に非れば逐出すこと能ざる也

三〇 彼等ここを去てガリラヤを過この事をイエス人の知を欲ざりき三一 蓋その弟子に教て人の子は人の手に付され彼等に殺され殺されてのち第三日に甦るべしと曰たまふが故なり三二 其とき弟子等この言を曉らず亦問ことを恐たり

三三 偖イエス、カペナウンに至り室に居て弟子に問けるは爾曹途間にて何を互に論ぜし乎三四 弟子默然たり是途間にて互に論じ誰か大ならんとの爭ありければ也三五 イエス坐して其十二を召かれらに曰けるは若し首たらんと欲ふ者は凡の人の後となり且すべての人の使役とならん三六 また孩提を取て彼等の中に立て之を抱き彼等に曰けるは三七 凡そ我名の爲に斯のごとき孩提の一人を接る者は即ち我を接るなり又われを接る者は即ち我を接るに非ず我を遣しし者を接るなり

三八 ヨハネ彼に答て曰けるは師よ我儕に從はざる者の爾の名に托て惡鬼を逐出せるを見しが我儕に從はざる故これを禁たり三九 イエス曰けるは其人を禁る勿れ蓋わが名により異なる能を行ひて輕易しく我を誹得る者はあらじ四〇 我儕に敵たはざる者は我儕に屬者なり四一 爾曹をキリストに屬者として我名の爲に一杯の水にても爾曹に飮する者は我まことに爾曹に告ん其人は賞を失はざる也四二 また凡そ我を信ずる小子の一人を礙する者は其首に磨を懸られて海に投入られん方その人の爲になほ善るべし四三 若し爾の一手なんぢを礙かさば之を斷され兩手ありて地獄すなはち滅ざる火に往んよりは殘缺にて永生に入は爾の爲に善こと也四四 彼處に入ものの蟲つきず火きえず四五 若なんぢの一足なんぢを礙かさば之を斷され兩足ありて地獄すなはち滅ざる火に投入られんよりは跛にて永生に入は爾の爲に善なり四六 彼處に入ものの蟲つきず火きえず四七 もし爾の一眼なんぢを礙かさば之を抉いだせ兩眼ありて地獄の火に投入られんよりは一眼にて神の國に入は爾の爲に善なり四八 彼處に入ものの蟲つきず火きえず四九 蓋すべての人は鹽をつくる如く火を以せられ凡の祭物は鹽をもて鹽つけらる五〇 鹽は善ものなり然ど鹽もし其味を失はば何をもて之に味を加んや爾曹心の中に鹽を有て又たがひに睦み和ぐべし

第一〇章

一 イエス此を去ヨルダンの外を經てユダヤの境の內に來しに多の人々また彼に集りければ恆の如く彼等に教誨を爲たまへり二 パリサイの人來て彼を試み問けるは人その妻を出すは可か三 答て曰けるはモーセは爾曹に何を命ぜし乎四 彼等曰けるはモーセは離縁状を書與へて之を出すことを許せり五 イエス答て彼等に曰けるはモーセ爾曹の心つれなきに因て此命を爲たる也六 然ど開闢のはじめ神人を男女に造り給へり七 是故に人はその父母

を離その妻に合て八二人のもの一體と成べし然ば二には非ず一體なり九是故に神の耦せ給へる者は人これを離すべからず一〇室に在て弟子等また此事を問ければ一一イエス彼等に曰けるは凡そ其妻を出して他の婦を娶る者は其妻に對して姦淫を行ふなり一二また婦もし其夫を出して他に嫁がば此婦も姦淫を行ふなり

一三イエスに撫れんがため人々孩提を携來ければ弟子等その携來れる者を責めたり一四イエス之を見て怒を含かれらに曰けるは孩提を我に來せよ彼等を禁る勿れ神の國に居ものは斯の如き者なり一五誠に我なんぢらに告ん凡そ孩提の如くに神の國を承ざる者は之に入ことを得ざる也一六即ち彼等を抱きて手をその上に按これを祝せり

一七イエス途に出けるに一人はしり來りて跪き問けるは善師よ我かぎりなき生命を嗣ために何を行べき乎一八イエス彼に曰けるは何ぞ我を善と稱や一人の外に善者はなし即ち神なり一九誠は爾が識ところなり姦淫する勿れ殺なかれ盜なかれ妄の證を立る勿れ拐騙なかれ爾の父と母を敬へ二〇答て曰けるは師よ是みな我が幼きより守れるもの也二一イエス彼を見て愛み曰けるは爾なほ一を虧ゆきて其所有をうり貧者に施せ然ば天に於て財あらん而して來り十字架を操て我に從へ二二彼この言に因て哀み憂て去ぬ彼は大なる產業を有る者なればなり二三イエス環視てその弟子に曰けるは財を有る者の神の國に入は如何に難かな二四弟子この言を駭けりイエス復こたへて彼等に曰けるは小子よ財を恃む者の神の國に入は如何に難かな二五富者の神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し二六弟子たち甚く駭き互に曰けるは然ば誰か救を受べき乎二七イエス彼等を見て曰けるは是人には能ざる所なれど神に於ては然らず神は能ざる所なければ也二八是に於てペテロ彼に曰けるは我儕一切を舍て爾に從へり二九イエス答て曰けるは誠に爾曹に告ん我と福音の爲に家宅あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは兒女あるひは田疇を舍る者は三〇この世にて百倍を受ざる者なし即ち家宅、兄弟、姉妹、母、妻、兒女、田疇を迫害と共に受又後の世に窮なき生を受ん三一然ど多の先なる者は後になり後なる者は先になるべし

三二偖彼等エルサレムに上る途間イエス弟子に先ち行ければ彼等おどろき且おそれて從へりイエス十二を伴ひて將に己に及んとする事を彼等に告給ひけるは三三我儕エルサレムに上り人の子は祭司の長と學者等に付れん彼等これを死罪に定め異邦人に付し三四又これを嘲弄し鞭ち唾し且これを殺ん斯て第三日に甦るべし

三五ゼベタイの子ヤコブとヨハネ、イエスに來りて曰けるは師よ我儕が求る事を願くは我儕に成たまへ三六彼等に曰けるは爾曹に我が何を成ん事を欲ふや三七彼等いひけるは爾榮を得んとき我儕の一人を其右に一人を其左に坐せしめよ三八イエス彼等に

曰けるは爾曹は求ふ所を知ず爾曹わが飮ところの杯を飮わが受る所のバプテスマを受得るや三九彼等いひけるは能すべしイエス彼等に曰けるは爾曹は實に我が飮ところの杯を飮また我が受る所のバプテスマを受べし四〇然ど我が右左に坐する事は我が予ふべきに非ただ備られたる者は予らるべし四一十人の弟子これを聞てヤコブとヨハネを憤れり四二イエス彼等を召て曰けるは異邦人の君と見る者は其民を治また大なる者どもは彼等の上に權を執これ爾曹が知ところ也四三然ど爾曹の中にては然す可らず爾曹のうち大ならんと欲ふ者は爾曹に役る者とならん四四また爾曹のうち首たらんと欲ふ者は凡の人の僕とならん四五蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役はれ且おほくの人に代その命を予て贖とならん爲なり

四六斯て彼等エリコに至りイエスその弟子と大なる群集の人々と共にエリコを出る時テマイの子なるバルテマイといふ瞽者路の旁に坐して乞ゐけるが四七ナザレのイエスなりと聞て呼り曰けるはダビデの裔イエスよ我を恤み給へ四八多の人々これに緘默と戒めけれども愈よばはりてダビデの裔イエスよ我を恤み給へと曰ければ四九イエス立止りて彼を召と命じければ人々瞽者を召て彼に曰けるは心を安んぜよ起イエス爾を召五〇瞽者その表衣を棄たちてイエスに來れり五一イエス答て彼に曰けるは爾われに何を爲れんと欲ふや瞽者いひけるは主よ見なん事を欲ふ五二イエス彼に曰けるは往なんぢの信仰なんぢを救へり直に彼見ることを得イエスに從ひて路を行り

第一一章

一かれら橄欖山のベテパゲとベタニヤに至りエルサレムに近ける時イエス二人の弟子を遣さんとして二彼等に曰けるは爾曹對面の村に往かしこに入ば頓て人の未だ乘ざる所の繫げる驢馬の子を見べし其を解て牽來れ三もし誰か爾曹に何ゆゑ然する乎といふ者あらば主の用なりと曰さらば直に其を此に遺るべし四彼等ゆきて門の外の岐路に繫げる驢馬の子を見て之を解ければ五其處に立る人々のうち或人かれらに曰けるは此驢馬の子を解て如何する乎六弟子イエスの命ぜし如く曰しかば遂に許たり七弟子驢馬の子をイエスに牽きたりて己が衣を其上に置ければイエスこれに乘り八人々おほくは其衣を路上に布あるひは樹の枝を伐て路上に布九かつ前にゆき後に從ふ人々呼り曰けるはホザナよ主の名に託て來る者は福なり一〇主の名に託て來る我儕の父なるダビデの國は福なり至上處にホザナよ

一一イエス、エルサレムに至り聖殿に入て悉くみまはし時すでに暮に及ければ十二と偕にベタニヤに出往り

一二明日彼等ベタニヤより出し時イエス饑たり一三遙に葉ある無花果の樹を見てその樹に何か有んとて來しに葉の他なにも見ざりき是無花果樹の時に非れば也一四イエス此樹に對て今よりのち永久も爾の果を食ふ人あらざれといふ弟子これを聞り

一五 彼等エルサレムに至りイエス殿に入てその中にをる賣買する者を殿より逐出し兌銀者の案、鴿を鬻者の椅子を倒し一六 かつ器具を以て殿を過ることを許さず一七 また彼等に諭て曰けるは我室は萬國の人の祈禱の室と稱らるべしと録されたるに非や然るに爾曹は之を盜賊の巢と爲り一八 學者と祭司の長これを聞て如何してかイエスを喪さんと謀しが彼を懼たり蓋人々みな其教に駭きたれば也

一九 日くれてイエス城邑を出行り二〇 翌朝かれら無花果の樹を過る時その根より盡く枯たるを見る二一 ペテロ憶出てイエスに曰けるはラビ見よ詛し所の無花果樹は枯たり二二 イエス答て彼等に曰けるは神を信ぜよ二三 誠に我なんぢらに告ん誰にても其心に疑ふ事なく其いふ所の言は必ず成べしと信じ此山に移て海に入といはば其言の如く成べし二四 是故に我なんぢらに告ん凡そ祈禱の時その求ふ所のものは必ず得べしと信ぜば必ず得べし二五 又なんぢら立て祈禱する時もし人を憾こと有ば之を免せ蓋天に在す爾曹の父に爾曹も亦その過を免されん爲なり二六 もし爾曹免さずば天に在す爾曹の父も亦なんぢらの過を免し給はじ

二七 彼等またエルサレムに至りイエス殿を行るとき祭司の長學者および長老等きたりて二八 彼に曰けるは何の權威を以て此事を行や誰が此事を行べき爲に爾に此權威を與しや二九 イエス答て彼等に曰けるは我も一言なんぢらに問ん我に答よ然ば我なんぢらに何の權威を以て之を行といふ事を告べし三〇 ヨハネのバプテスマは天よりか人よりか我に答よ三一 彼等たがひに論じ曰けるは若し天よりと云ば然ば何故かれを信ぜざるかと曰ん三二 もし人よりと云ば彼等民を懼たる也蓋民みなヨハネを預言者と爲に因三三 遂に答て知ずと曰イエス答て曰けるは我も何の權威を以て之を行か爾曹に語じ

第一二章

一 イエス譬をもて彼等に語れり或人葡萄園を樹り籬を環し酒榨をほり塔をたて農夫に租與て他の國へ往しが二 期いたりければ葡萄園の果を收取ん爲に僕を農夫の所に遣しけるに三 農夫等これを執へ打撲きて徒く返しめたり四 また他の僕を彼等に遣ししに農夫等これを石にてうち首に傷つけ辱しめて返しむ五 又ほかの者を遣ししに之をも殺せり又ほかに多く遣ししに或は撲あるひは殺しぬ六 爰に一人の愛子ありけるが此わが子は敬ふならんと曰て遂に其子を遣ししに七 農夫等たがひに曰けるは此は嗣子なり率これを殺さん然ば産業は我儕の者とならん八 乃ち執へて之を殺し葡萄園の外に棄たり九 然ば葡萄園の主人なにを爲べきか彼きたりて農夫等を打滅し葡萄園を他の人に託ふべし一〇 工匠の棄たる石は屋の隅の首石と成り一一 これ主の成たまへる事にして我儕の目に奇とする所なりと録されしを未だ讀ざる乎一二 彼等この譬は己等を指て語れりと知イエスを執んとせしか

ども衆人を懼てイエスを去ゆけり
一三 彼等イエスを其言に由て陷いれんとしてパリサイの人とヘロデの黨の中より數人を遣せり 一四 遣されし者等イエスの所に來り曰けるは師よ爾は眞なる者なり又誰にも偏らざる事を我儕は知そは貌に依て人を取ず誠を以て神の道を教ればなり貢をカイザルに納るは宜や否われら納べきか納ざる可か 一五 イエスその實ならざるを知て彼等に曰けるは何ぞ我を試るやデナリを携來りて我に觀よ 一六 かれら携來りければイエス彼等に曰けるは此像と號は誰か答てカイザルなりと曰 一七 イエス曰けるはカイザルの物はカイザルに歸し又神の物は神に歸すべし彼等これを奇とせり

一八 復生なしと曰なせるサドカイの人きたりてイエスに問けるは 一九 師よ我儕にモーセが書遺るには人の兄弟もし子なくして妻を留し死ばその兄弟この妻を娶て兄弟の裔を立べしと 二〇 爰に七人の兄弟ありしが長子妻をめとり子なくして死 二一 第二の者これを娶また子なくして死 二二 第三もまた然す七人みな之を娶たれど子なく終には此婦も死り 二三 復生の時かれら甦らば此婦は誰の妻と爲べきか蓋七人おなじく之を娶たれば也 二四 イエス答て彼等に曰けるは爾曹は聖書をも神の能をも知ざるに因て謬れるならずや 二五 それ死より甦る時は娶ず嫁がず天にある使者等の如し 二六 死し者の甦る事に就てはモーセの書棘中の篇に神かれに語て我はアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりと曰たまひしを爾曹讀ざる乎 二七 神は死し者の神に非ず生る者の神なり爾曹大に謬れり

二八 學者の一人彼等の議論を聞てイエスの善これに應しを知きたり彼に問けるは諸の誡のうち何れ首なる乎 二九 イエス彼に答けるは諸の誡の首はイスラエルよ聽け主なる我儕の神は即ち一の主なり 三〇 なんぢ心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡し主なる爾の神を愛すべし是誡の首なり 三一 第二も亦これに同じ己の如く爾の隣を愛すべし斯より大なる誡なし 三二 學者イエスに曰けるは善かな師よ爾神は即ち一にして他に神なしと曰しは誠なり 三三 また心を盡し智慧を盡し精神を盡し力を盡して之を愛し又おのれの如く隣を愛するは諸の燔祭と禮物よりも愈なり 三四 イエス彼が道理を知る答を見て之に曰けるは爾神の國より遠からず此のち敢てイエスに問者なかりき

三五 イエス殿に在て教誨を爲る時かれらに答て曰けるは何ぞ學者はキリストをダビデの裔といふ乎 三六 夫ダビデ聖靈に感じて自いふ主わが主に曰けるは我なんぢの敵を爾の足凳となすまで我右に坐せよと 三七 如此ダビデ自ら彼を主と稱たり然ば如何で其裔ならんや多の人々喜びてイエスに聞ことを爲り

三八 イエス教をなせる時かれらに曰けるは長き衣服を衣てあるき市上にて人の問安 三九 會堂の高坐筵席の上座を好 四〇 また嫠婦の家を呑いつはりて長き祈をする學者を謹防よ彼等の審判るること尤も重し

四一 イエス賽錢の箱に對て坐し人々の錢を箱に入るを見たまひしに多の富者は多く投入たり 四二 一人の貧き嫠婦きたりてレプタ二を投入る此は四厘ほどに直れり 四三 イエスその弟子を召て彼等に曰けるは誠に我なんぢらに告ん箱に投入し凡の人々よりも此貧き嫠婦は多く投入たり 四四 そは彼等は皆その餘れる所を以て入この婦はその不足ところより其すべての所有すなはち全業を盡く入たれば也

第一三章

一 イエス聖殿より出ければ一人の弟子かれに曰けるは師よ視たまへ此石この殿宇いかに盛んならずや 二 イエス答て曰けるは爾曹この大なる殿宇を見か一の石も石の上に圯れずしては遺じ 三 イエス橄欖山にて殿に對ひ坐し給しにペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ竊に問けるは 四 何の時此事あるや又すべて此事の成ん時は如何なる兆あるや我儕に告たまへ 五 イエス答て彼等に曰けるは人に欺かれざるやう愼めよ 六 蓋おほくの人わが名を冒來り我はキリストなりと曰て多の人を欺くべし 七 爾曹戰と戰の風聲を聞とき懼るる勿れ是等の事はみな有べきなり然ども末期は未だ至らず 八 民は起て民をせめ國は國を攻また隨在に地震あり饑饉、變亂あり是等は苦難の始なり 九 爾曹みづから愼めよ蓋なんぢら集議所に付され又會堂にて撻たれ且證を爲んため我事に因て侯および王の前に曳立らるべし 一〇 而して福音はまづ萬民に宣傳ざるを得ず 一一 人なんぢらを曳解さば以前より何を言んと慮また思煩ふ勿れ惟なんぢら其とき賜ふ所の言を曰べし蓋ものいふ者は爾曹に非ず聖靈なり 一二 兄弟は兄弟を死に付し父は子を付し亦子はその父母に逆ひて之を死しめ 一三 又なんぢらは我名に縁て凡の人に憎るべし然ど終まで忍ぶ者は救ることを得ん 一四 預言者ダニエルが言し所の殘暴にくむ可ものの立べからざる所に立を見ば(讀者よく思べし)其時ユダヤにをる者は山に避けよ 一五 屋上にをる者は室に下る勿れ又物を取んとて其家に入なかれ 一六 田にをる者は其衣服を取んとて歸る勿れ 一七 其日には孕る者と乳を哺する婦は禍なる哉 一八 なんぢら冬にぐることを免れん爲に祈れ 一九 其日に患難あらん此の如き患難は神の物を創造たまひし開闢より今に至るまで有ざりき亦後にも有じ 二〇 もし主その日を減少し給ずば一人だに救る者なし然ど主の選たまへる所の選れし者の爲に其日を減少し給ふべし 二一 其時もしキリスト此にあり彼に在と爾曹にいふ者あるとも信ずる勿れ 二二 そは僞キリスト僞預言者おこりて休徵と奇能を行ひ選れたる者をも欺くことを得ば欺くべければ也 二三 なんぢら愼よ我預じめ爾曹に盡く之を告 二四 厥時この患難ののち日は晦く月は光を失ひ 二五 天の星はおち天の勢ひ震ふべし 二六 其とき人々は人の子の大なる權威と榮光を以て雲の中に現れ來るを見ん 二七 また其とき人の子その使者等を遣して地の極より天の極まで四方より其選れし者を集むべし 二八 夫なんぢら

無花果樹に由て譬を學その枝すでに柔かにして葉めぐめば夏の近を知二九此の如く爾曹も凡て是等の事を見ば時ちかく門口に至ると知三〇われ誠に爾曹に告ん是等の事ことごとく成までは此民は逝ざるべし三一天地は廢ん然ど我言は廢じ三二其日その時を知者は惟わが父のみなり天にある使者も子も誰も知者なし三三此日いづれの時きたる乎を知ざれば爾曹つつしみて目を醒し祈禱せよ三四それ人の子は遠行せんとして其權を僕等に委ね各に爲べき事を任け又閽者に怠らず守れと命じて家をさる人の如し三五是故に爾曹も怠らずして守れ蓋家の主人あるひは夕あるひは夜半あるひは鷄鳴時あるひは早晨に歸るかを知ざれば也三六恐くは不意の時きたりて爾曹が眠るを見ん三七われ怠らずして守れと爾曹に告るは即ち凡の人に告るなり

第一四章

一さて逾越即ち除酵節の二日前に祭司の長と學者たち詭計を以てイエスを執へ殺さんとし二曰けるは祭りの日には爲べからず恐くは民の中に亂起らん

三イエス、ベタニヤの癩病人シモンの家にて食し居たまへる時ある婦蝋石の盒に價貴きナルドの香膏を盛て携來り其盒を裂りイエスの頭に膏を沃たり四或人々互に怒を含いひけるは此膏を糜すは何故ぞや五之を鬻ば三百有奇のデナリを得て貧者に施すことを得んと此婦を言咎む六イエス曰けるは彼に係る勿れ何ぞ此婦を擾すや我に善事を行へる也七貧者は常に爾曹と偕に在ば爾曹意に隨せて彼等を濟ることを得べし我は恆に爾曹と偕に在ず八此婦は力を盡して作り蓋あらかじめ我を葬る爲わが身に膏を沃しなり九我まことに爾曹に告ん天の下いづくにても此福音を宣傳らるる處には此婦の行し事も亦その記念の爲に言傳らるべし一〇さて十二の一人なるイスカリヲテのユダ、イエスを付さんとて祭司の長に往しに一一彼等これを聞て悦び銀子を予んと約せしかばユダはイエスを付さんと機を窺へり

一二除酵節の首の日すなはち逾越の羔を殺すべき日弟子イエスに曰けるは逾越の食を何處へ往て我儕備ふべき乎一三イエス二人の弟子を遣さんとして之に曰けるは京城に往さらば水を盛たる瓶を挈る人に遇べし之に從へ一四その入ところの家の主人に師いふ我弟子と偕に逾越を食すべき客房は安に在やと曰一五然れば彼陳設たる大なる樓房を爾曹に示べし我儕の爲に其處に備よ一六弟子ゆきて京城に入しにイエスの曰たまへる如く遇しかば逾越の備をなせり一七日暮てイエス十二の弟子と偕に來れり一八かれら席に就て食する時イエス曰けるは誠に我なんぢらに告ん我と偕に食する爾曹のうち一人われを賣すべし一九彼等憂て各々イエスに言出けるは我なる乎また他の一人も曰けるは我なる乎二〇イエス答て曰けるは十二の中の一人われと共に手を盂に着る者是なり二一人の子は己に就て録されたる如く逝ん然ど人の子を賣す者は禍なる哉その人は生ざりしならば

幸なりし爲ん二二かれら食する時イエス、パンを取て祝し之を擘かれらに予て曰けるは取て食へ此は我身なり二三また杯を取て謝し彼等に予ければ皆この杯より飲り二四イエス曰けるは此は新約の我血にして衆の人の爲に流す所のもの也二五我まことに爾曹に告ん今よりのち新しきものを神の國にて飲ん日までは葡萄にて製るものを飲じ

二六彼等歌を詠て橄欖山に往り二七イエス彼等に曰けるは今夜なんぢら皆われに就て礙かん蓋われ牧者を撃ん其とき綿羊散べしと録されたれば也二八然ど我よみがへりて後なんぢらに先ちガリラヤに往べし二九ペテロ、イエスに曰けるは假令みな礙くとも我は然らず三〇イエス彼に曰けるは我まことに爾に告ん今日この夜 鷄 二次鳴まへに爾 三次われを知ずと曰ん三一彼また力言いひけるは我は爾と偕に死るとも爾を知ずと曰じ弟子みな如此いへり三二斯て彼等ゲツセマネといふ所に至りイエスその弟子に曰けるは祈る間ここに坐せよ三三遂にペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひゆき甚しく憂へ哀を催し三四彼等に曰けるは我心いたく憂て死ばかりなり爾曹ここに待て目を醒し居三五イエス少し進行て地にふし祈り曰けるは若かなはば此時を去しめ給へ三六また曰けるはアバ父よ爾に於ては凡の事能ざるなし此杯を我より取たまへ然ど我が欲ふ所を成んとするに非ず爾が欲ふ所に任せ給へ三七イエス來りて彼等の寢たるを見ペテロに曰けるはシモンなんぢ寢たるか一時も目を醒し居こと能ざる乎三八誘惑に入ぬやう目を醒かつ祈その心神は願なれど肉體よわき也三九復ゆきて同 言を曰て祈れり四〇返りて復彼らの寢たるを見る此は彼等その目倦たるなりイエスに何と對ふ可やを知ざりき四一三次きたりて彼等に曰けるは今は寢て安め充分なり時いたれり人の子は罪人の手に賣さるる也四二起よ我儕ゆくべし我を賣す者近けり

四三斯いへる時ただちに十二の一人なるユダ刃と棒とを携たる多の人々と共に祭司の長學者及び長老の所より來る四四イエスを賣者かれらに號をなして曰けるは我が接吻する者は其なり之を執て愼と曳去よ四五即ち來りてイエスに近よりラビ、ラビと曰て接吻せり四六人々手をイエスに措て執ふ四七傍に立る者の一人刃を拔て祭司の長の僕を撃その耳を削り四八イエス答て彼等に曰けるは刃と棒とをもち盗賊を執る如くして我を執に來る乎四九われ日々なんぢらと共に殿にて教しに爾曹われを執ざりき然ど此は聖書に應せんが爲なり五〇弟子みなイエスを離て奔去ぬ五一一少者その身にただ麻の夜具を蔽てイエスに從ひたりしが逮捕の者等これを執ければ五二かれ麻の夜具をすて裸にて逃去り

五三衆人イエスを祭司の長に携往けるに祭司の長長老および學者等ことごとく彼の所に集れり五四ペテロ遠く離れてイエスに從ひ祭司の長の庭の内まで入僕と共に坐して火に煥まり居り五五祭司の長および議員みなイエスを殺んとして證を求れど

も得ず五六 多の人々イエスに妄の證を言出せども其證あはず五七 此
或人々たちて妄の證を言出しけるは五八 かれ手を以て作たる此
聖殿を毀ち三日の間に手を以て作ざる別の殿を建んと言しを
我儕は聞り五九 如此いひしが其證また符ず六〇 祭司の長中に立て
イエスに問いひけるは爾 答る言なき乎この人々の爾に立る
證據は如何六一 イエス默然として何も答ざりければ祭司の長ま
た彼に問て曰けるは爾は頌べき者の子キリストなる乎六二 イエ
ス曰けるは然り人の子大權の右に坐し天の雲の中に現れ來るを
爾曹みるべし六三 是に於て祭司の長その衣を裂て曰けるは我儕
なんぞ復ほかに證據を求んや六四 その褻瀆たる言は爾曹も聞る
所なり爾曹如何に意ふや彼等擧てイエスを死に當るべき者と
擬たり六五 或者は彼に唾し又その面を掩ひ拳にて撃いひけるは
預言せよ亦僕等も手の掌にて彼を批り六六 ペテロ下庭に在しに
祭司の長のある婢きたりて六七 其火に燠まり居を見つらつら彼
を視て曰けるは爾もナザレのイエスと偕に在し六八 ペテロ 肯は
ずして曰けるは我これを知ず亦なんぢが言ところの事を識得
ざるなり斯て庭門に出ければ鷄 鳴ぬ六九 その婢かれを見て傍に
立る者に又いひけるは此人もかの黨の一人なり七〇 ペテロまた
肯はず少頃して傍に立る者またペテロに曰けるは爾 誠に彼の
黨の一人なり蓋 爾はガリラヤの人なり其方言これに合り七一 是
に於てペテロ 誓て我神の祟を受るとも爾曹が曰その人を我は
識ざる也と曰しが七二 此とき鷄 二次鳴ければペテロ、イエスの
鷄 二次なく前に三次我を識ずと曰んと言たまひし事を憶起し
且これを思反して哭 悲めり

第一五章

一 平旦に及び直に祭司の長長老學者たち凡の議員と共に議てイ
エスを繫り曳携てピラトに解せり二 ピラト彼に問けるは爾はユ
ダヤ人の王なるやイエス 答けるは爾が言る如し三 祭司の長
多 端をもて彼を訟ふ四 ピラト復イエスに問て曰けるは何も答
ざるか彼等が爾について證を立しこと幾何かりぞ乎五 ピラトの
奇と爲までにイエス何をも答ざりき六 偖この節筵には彼等が求
に任せて一人の囚人を赦すの例なり七 時にバラバと云る者あり
己と共に謀反せし黨と同く繫れ居たりしが彼等はその謀反のと
き人を殺しし者等なり八 人々聲を揚て呼り恆例の如せん事を求
り九 ピラト彼等に答て曰けるはユダヤ人の王を爾曹に我が釋さ
ん事を欲むや一〇 是ピラト祭司の長等の嫉に因てイエスを解し
たりと知ばなり一一 祭司の長民どもにバラバを釋さん事を求と
唆む一二 ピラトまた答て彼等に曰けるは然ばユダヤ人の王と
爾曹が稱る者には何を我が處ん事をなんぢら欲むや一三 彼等ま
た叫びて之を十字架に釘よと曰一四 ピラト彼等に曰けるは彼な
んの惡事を行しや彼等ますます叫びて之を十字架に釘よと曰一五
ピラト民の懽びを取んとしてバラバを彼等に釋しイエスを鞭ち
て之を十字架に釘ん爲に付せり一六 兵卒等これを公廳に携ゆき

全營を呼集め一七彼に紫の袍をきせ棘にて冕を編て冠しめたり一八斯て曰けるはユダヤ人の王安かれ一九また葦を以て其首を撃かつ唾し跪きて拜しぬ二〇嘲弄し畢て紫の衣をはぎ故の衣をきせて十字架に釘んとて曳往しが二一アレキサンデルとルフの父なるクレネのシモンと云るもの田間より來りて其處を經過りければ強て之にイエスの十字架を負せたり二二イエスをゴルゴダ譯ば即ち髑髏と云る所に携來り二三沒藥を酒に和て飲せんと爲りしに之を受ざりき二四イエスを十字架に釘しのち誰が何を取んと鬮を拈てその衣服を分てり二五朝の第九時にイエスを十字架に釘二六その罪標をユダヤ人の王と書つく二七二人の盜賊かれと共に一人は其右一人は其左に十字架に釘らる二八これ聖書に彼は罪人と共に算られたりと云しに應り二九往來の者イエスを詬り首を搖て曰けるは噫聖殿を毀て之を三日に建る者よ三〇自己を救て十字架を下よ三一祭司の長學者等も同く嘲弄して互に曰けるは人を救て自己を救ひ能ず三二イスラエルの王キリストは今十字架より下るべし然ば我儕見て之を信ぜん又ともに十字架に釘られたる者等も彼を詬れり三三第十二時より三時に至るまで徧く地のうへ暗なりぬ三四第三時にイエス大聲に呼りエリ、エリ、ラマサバクタニと曰これを譯ば吾神わが神何ぞ我を遺たまふ乎と云るなり三五傍らに立たる者のうち或人これを聞て彼はエリヤを呼なりと曰三六一人はしり往て海絨をとり醋を漬せ之を葦に束て彼に飲しめ曰けるは俟エリヤ來りて彼を救ふや否こころむべし

三七イエス大なる聲を發て氣絶三八殿の幔上より下まで裂て二と爲り三九イエスに對て立たる百夫の長かく呼り氣絶しを見て曰けるは誠に此人は神の子なり

四〇また遙に望ゐたる婦ありし其中に在し者はマグダラのマリアおよび年少ヤコブとヨセの母なるマリア又サロメなり四一彼等はイエスのガリラヤに居たまひし時これに從ひ事し者等なり亦この他にも彼と共にエルサレムに上りし多の婦ゐたりき

四二是日は備節日にて安息日の前の日なりし故四三日暮るとき尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云る者きたれり此人は神の國を慕る者なり彼はばからずピラトに往てイエスの屍を求たり四四ピラト、イエスの已に死るを奇み百人の長を呼て彼は死てより時を經たるや否やを問四五百夫の長より聞て之をしり屍をヨセフに予ふ四六ヨセフ臬布を買求め而してイエスを取下し之をその臬布にて裹み磐に鑿たる墓におき石を墓の門に轉し置り四七マグダラのマリア及ヨセの母なるマリア其屍を葬し處を見たり

第一六章

一安息日過てマグダラのマリアとヤコブの母なるマリア及サロメ香料を買ととのへイエスに抹んとて來れり二七日の首の日いと早く日の出る時彼ら墓に來り三互に曰けるは誰か我儕の爲

に石を墓の門より轉し取もの有んか是その石はなはだ巨大なればなり也四斯て彼等目を擧れば石の已に轉あるを見る五墓に入りしに白　衣をきたる少者の右の方に坐せるを見て駭き異めり六少者かれらに曰けるは駭き異む勿れ爾曹は十字架に釘られしナザレのイエスを尋ぬ彼は甦りて此に居ず彼を葬し處を見よ七且ゆきて其弟子とペテロに告よ彼は爾曹に先ちてガリラヤに往り爾曹かしこにて彼を見べし即ち其なんぢらに言しが如し八彼等いでて墓より奔れり且戰慄かつ駭き亦一言をも人に語ざりき是懼しが故なり

九イエス七日の首の日よあけごろ甦りて先マグダラのマリアに現る曩にイエス彼より七の惡鬼を逐出せり一〇イエスと共に在し者の哭哀める時に此婦きたりて是等の事を告一一彼等イエスの活て此の婦に見え給ひしことを聞しが信ぜざりき一二此後かれらの中二人の者郷村へ往けるが路を行ときイエス變たる貌にて彼等に現る一三この二人の者ゆきて他の弟子等に告けれども亦これを信ぜざりき

一四又その後十一の弟子の食しをる時に現れて彼等が信なきと其心の頑とを責め給へり是かれらイエスの甦り給るのち其を見し者の言ところを信ぜざりし故なり一五イエス彼等に曰けるは偏く世界を廻て凡の人に福音を宣傳よ一六信じてバプテスマを受る者は救れ信ぜざる者は罪に定らるる也一七信ずる者には左の如き奇跡したがふべし我名に託て惡鬼を逐出し異邦の方言をいひ一八また蛇を操へ毒を飲とも害なく又手を病の者に按なば即ち愈ん

一九斯て主は彼等に語しのち天に擧られ神の右に坐しぬ二〇弟子たち偏く福音を宣傳ふ主も亦かれらに力を協せ其從ふ所の奇跡によりて道を堅うしたまへりアメン

路加傳福音書

第一章

一 我儕の中に篤く信ぜられたる事を始より親く見て道に役たる者の二 我儕に傳し如く記載んと多の人々これを手に執る故に貴きテヲピロよ三 我も原より諸の事を詳細に考究たれば次第を爲て爾に書おくり四 爾が教られし所の確實を曉せんと欲り

五 ユダヤの王ヘロデの時にアビアの班なる祭司ザカリアと云る者あり其妻はアロンの裔にて名をエリサベツと云六 共に神の前にて義人なり凡て主の誡命と禮儀を虧なく行へり七 エリザベツ妊なきが故に彼等に子なし又二人とも年も老ぬ八 ザカリアその班次に値て神の前に祭司の職を行ふ時九 祭司の例に從ひ籤を抽て主の殿にいり香を燒ことを得一〇 香を燒ける時に衆の人々はみな外に居て祈れり一一 主の使者香壇の右に立てザカリアに現れしかば一二 ザカリア之を見て驚懼る一三 天使彼に曰けるはザカリアよ懼るる勿れ爾の祈禱すでに聞たまへり爾の妻エリサベツ男子を生ん其名をヨハネと名くべし一四 爾に喜と樂あらん多の人も亦その生るるに因て悦び有ん一五 それ此子主の前に大ならん又葡萄酒と濃酒とを飲じ母の胎より生出て聖靈に充さる一六 又イスラエルの民の多の人を主なる其神に歸す可れば也一七 彼エリヤの心と才能を以て主の先に行ん是父の心に子を慈はせ逆れる者を義人の智に歸せ主の爲に新なる民を備んとなり一八 ザカリア天使に曰けるは我すでに年老妻もまた年邁たれば何に因てか此事あるを知ん一九 天使こたへて曰けるは我はガブリエルとて神の前に立者なり爾に語てこの喜の音を告ん爲に遣されたれば二〇 其時いたりて必ず成べき我が言を信ぜざるに因なんぢ瘖となりて此事の成日まで言ふこと能はじ二一 民ザカリアを俟ゐて其殿のうちに久を異む二二 ザカリア出て言ふこと能はざりしかば彼等その殿の内にて異象を見たる事を曉たりザカリア衆人に首を以て示し竟に瘖となれり二三 その職事の日滿ければ家に歸りぬ二四 此後その妻エリサベツ孕て隱をりしこと五ヶ月にして二五 曰けるは主わが耻を人の中に灑せん爲に眷顧たまふ時は此の若く我に爲り

二六 此六ヶ月に當りガリラヤのナザレと名たる邑の二七 ダビデの家のヨセフと云る人の聘定せし所の處女に神よりガブリエルといふ天使を遣されたり其處女の名はマリアと云り二八 天使この處女に來いひけるは慶し惠るる者よ主なんぢと偕に在す爾は女の中にて福なる者なり二九 處女その言を訝この問安は如何なる事ぞと思へり三〇 天使いひけるはマリアよ懼るる勿れ爾は神より惠を得たり三一 爾孕て男子を生ん其名をイエスと名べし三二 かれ大なる者と爲て至上者の子と稱られん又主たる神その先祖ダビデ王の位を彼に予れば三三 ヤコブの家を窮なく支配すべく且その國終ること有ざるべし三四 マリア天使に曰けるは我いまだ夫に適ざるに何にして此事ある可や三五 天使こたへて曰

けるは聖靈なんぢに臨る至上者の大能なんぢを庇ん是故に爾が生ところの聖なる者は神の子と稱らるべし三六 それ爾の親戚エリサベツ彼も年老て男子を孕り素姙なき者と稱れたりしが今すでに孕て六ヶ月になりぬ三七 蓋神に於は能ざる事なければ也三八 マリア曰けるは我は是主の使女なり爾の言る如く我に應かし天使つひに彼を去り

三九 當時マリア起て亟かに山地なるユダの邑に往四〇 ザカリアの家に入てエリサベツに問安したりしに四一 エリサベツ、マリアの問安を聞しかば其胎孕腹の内にて跳動たりエリサベツ聖靈に感され四二 大聲に呼いひけるは女の中にて爾は福なる者なり亦孕る所の者も福なり四三 わが主の母われに來われ何に由てか此事を得し四四 夫なんぢの問安の聲わが耳に入しとき胎孕よろこびて我腹の中に跳れり四五 主の言を信ぜし者は福なり蓋主の語たまひし如く必ず成べければ也四六 マリア曰けるは我心主を崇め四七 我靈はわが救主なる神を喜ぶ四八 是その使女の卑微をも眷顧たまふが故なり今よりのち萬世までも我を福なる者と稱べし四九 それ權能を有たまへる者われに大なる事を成り其名は聖五〇 その矜恤は世々かれを畏るる者に及ばん五一 其臂の力を發して心の驕る者を散し五二 權柄ある者を位より下し卑賤者を擧五三 飢たる者を美食に飽せ富る者を徒く返らせ給ふ五四 アブラハムと其子孫を窮なく憐むことを忘ずして五五 其僕イスラエルを扶持たまへり是われらの先祖に言たまひしが如なり五六 マリア、エリサベツと居しこと三ヶ月ばかりにて己が家に歸たりき

五七 偖エリサベツ産期みちて男子を生り五八 その隣里の者また親戚のもの主がエリサベツに大なる慈悲を垂たまひし事を聞て偕に喜べり五九 第八日に及びければ彼等子に割禮せんとて來り其父の名に因ザカリアと名んとせしに六〇 其母こたへて然す可らずヨハネと名べしと曰ければ六一 彼等エリサベツに對て曰けるは爾が親戚の中に此名を名し者なし六二 彼ら遂に其父に頭にて示いかに名んと欲か問たるに六三 ザカリア寫字板を請て其名はヨハネと書るししかば皆奇めり六四 ザカリアの口ただちに啓て舌とけ言ひて神を頌たり六五 その隣里に住たる衆人みな懼ぬ又すべて此事を徧くユダヤの山地に傳播されしかば六六 聞ものの皆これを心に藏て此子は如何なる者にか成んと曰り偕主の手かれと共に在き六七 父ザカリア聖靈に感され預言して曰けるは六八 主なるイスラエルの神は讚美べき哉これ其民を眷顧て贖を爲し六九 我儕の爲に拯救の角を其僕ダビデの家に挺たまへば也七〇 古より聖なる預言者の口を以て言たまひしが如し七一 即ち我儕を敵また凡て我儕を惡む者の手より脱す救なり七二 此は仁惠を我儕の先祖に施し又その聖約を忘じと也七三 是我儕の先祖アブラハムに立し所の誓にして七四 我儕を敵の手より救ひ我儕の生涯を七五 聖と義に於て懼なく主に事しめんと也七六 嬰兒よ爾は至上者の預言者と稱られん蓋なんぢ主に先ちて行その路を備んと爲ばなり七七 神の深き矜恤に賴その罪を赦されて救

れん事を其民に示さんため也七八その矜恤に頼て旭の光上より七九幽暗と死蔭に住る者を照し我儕の足を導きて平康なる路に至せんとて臨めり

八〇斯て嬰兒は漸成長し精神ますます強健にしてイスラエルに顯るるの日まで野に居り

第二章

一當時天下の戸籍を査る詔命カイザル・アウグストより出たり二この戸籍調査はクレニオ、スリヤを管理し時の初次に行はれたりし也三人みな戸籍に登んとて各その故邑に歸たり四ヨセフもダビデの宗族又血統なれば戸籍に登んとて五已に孕る其聘定の妻マリアと共にガリラヤの邑ナザレより出てユダヤに上りダビデの邑ベテレヘムといふ所に至れり六此に居て產期滿ければ七冢子を生それを布に裹て槽に臥せたり此は客舍に彼等の居處なかりしが故なり

八近傍に羊を牧もの有けるが野に居て夜間その群を守たりしに九主の天使きたりて主の榮光かれらを環照ければ牧者おほいに懼たり一〇天使これに曰けるは懼ること勿れわれ萬民に關りたる大なる喜の音を爾曹に告べし一一それ今日ダビデの邑に於て爾曹の爲に救主うまれ給へり是主たるキリストなり一二爾曹布にて裹し嬰兒の槽に臥たるを見ん是其徵なり一三倐ち衆の天軍あらはれ天使と共に神を讚美て曰けるは一四天上ところには榮光神にあれ地には平安人には恩澤あれ一五天使等かれらを離て天に行ければ羊を牧もの互に曰けるは率ベテレヘムにゆき主の示し給へる其有し事を見んとて一六急ぎ至りマリアとヨセフまた槽に臥したる嬰兒に尋遇り一七既に見て此子につき天使の語し事を傳播ければ一八聞者みな羊を牧者の語る事を奇みたり一九マリアは凡て是等の言を心に記て思想しぬ二〇羊を牧者その見聞せる所みな已に語し所の如なるにより神を崇かつ讚美て返れり

二一子に割禮を行ふべき八日の日いたりければ其いまだ胎に寓ざる先に天の使者の稱し如く名をイエスと稱たり

二二モーセの律法に循ひて潔の日滿ければ嬰兒を携て主に獻んが爲エルサレムに上れり二三是主の例に初に生るる男子は主の聖者と稱べしと録されたるが如し二四また主の律法に斑鳩一雙あるひは雛鴿二を献ふべしと言るに循ひて祭を行ん爲なり

二五偖エルサレムにシメオンと云る人あり斯人は義かつ敬ありてイスラエルの民の慰められん事を俟る者なり聖靈その上に臨り二六また主のキリストを見ざる間は死じと聖靈にて示さる二七かれ聖靈に感じて神殿に入り兩親その子イエスを律法の例に循ひて行はんと携來りしに二八シメオン嬰兒を抱き神を讚美いひけるは二九主よ今その言に從ひて僕を安然に世をば逝せ給ふ三〇我目すでに萬民の前に設たまひし救を見たり三一これ異邦人を照さん光なり三二また爾の民イスラエルの榮なり三三その父母は

嬰兒に就て語る事を奇をれり三四又シメオン彼等を祝て其母マリアに曰けるは此嬰兒はイスラエルの多の人の頽て且興らん事と誹駁を受ん其號に立らる三五これ衆の心の念の露れんが爲なり又劍なんぢが心をも刺透べし

三六アセルの支派パヌエルの女にアンナと云る預言者あり彼は甚老邁なり其處女なりしとき夫に適て七年ともに居たり三七この老女は齡およそ八十四歳の嫠なりしが殿を離ず夜も晝も斷食と祈禱を爲て神に事ふ三八此時この老女も側に立て主を讃美し亦エルサレムにて贖を望る凡の人に此子の事を語れり

三九主の律法に循ひて悉く竟ければガリラヤの己が邑ナザレに歸たり四〇其子やや成長して精神強健に知慧みち神の恩寵その上に臨り

四一偖その兩親毎年に逾越の節筵にエルサレムに往しが四二彼の十二歳の時また節筵の例に循ひエルサレムに上れり四三節筵の日卒て返往けるに其子イエス、エルサレムに留りぬ然るにヨセフと母これを知ず四四同行人の中に在ならんと意ひ一日程を行て親戚知音の者に尋しが四五遇ざりければ彼を尋てエルサレムに返り四六三日ののち殿にて遇かれ教師の中に坐し且聽かつ問ゐたり四七聞者みな其知慧と其應對とを奇とせり四八兩親これを見て駭き母かれに曰けるは子よ何ぞ我儕に如此行たるや爾の父と我と憂て爾を尋たり四九イエス答けるは何故われを尋ぬるや我は我父の事を務べきを知ざる乎五〇然ど兩親は其語る事を曉ず五一イエスこれと共に下りナザレに歸て彼等に順ひ居り其母これら凡の事を心に藏ぬ五二イエス知慧も齡も彌增り神と人とに益愛せられたり

第三章

一テベリオ・カイザル在位の十五年ポンテオ・ピラトはユダヤの方伯となりヘロデはガリラヤの分封の君と爲り其兄弟ピリポはイツリア及テラコニテの地の分封の君となりルサニアはアビレネの分封の君と爲り二アンナスとカヤパ祭司の長と爲たりし時ザカリアの子ヨハネ野に居て神の命令を受三ヨルダンの邊なる四方の地に來り罪の赦を得させんが爲に悔改のバプテスマを宣傳たり四預言者イザヤの言を載たる書に野に呼る人の聲あり云く主の道を備その徑を直せよ五諸の谷は埋られ諸の山崗は夷られ屈曲たるは直く崎嶇は易せられ六人々みな神の救を見ことを得んと有が如し七茲にバプテスマを受んとて來れる衆人にヨハネ曰けるは嗚呼蝮蛇の裔よ誰が爾曹に來らんとする怒を避べき事を告しや八然ば悔改に符る果を結べし爾曹心に我儕が先祖にアブラハム有と意こと勿われ爾曹に告ん神は能この石をアブラハムの子と爲しむべし九今や斧を樹の根に置る故に凡て善果を結ざる樹は伐れて火に投入らるる也一〇衆人ヨハネに問て曰けるは然ば我儕何を爲べき乎一一答て曰けるは二の衣服を有る者は有ぬ者に分與よ食物を有る者も亦然すべし一二

税吏もバプテスマを受んとて來り曰けるは師よ我儕は何を爲べきか一三 答て曰けるは定例の税銀の外に多く取こと勿れ一四 兵卒も亦問て曰けるは我儕は何を爲べきや答て曰けるは人を強暴し或は誣 訴ることを爲なかれ得ところの給料を以て足りと爲べし

一五 民懷望し時なれば衆人みな心にヨハネをキリストなるや否と忖度たりしに一六 ヨハネ之に答いひけるは我は水を以てバプテスマを爾曹に施へり我より能力ある者きたらん我は其履帶を解にも足ず彼は聖靈と火を以てバプテスマを爾曹に施はん一七 手には箕を持て其禾場を潔め麥は斂て其藏にいれ穀は滅ざる火にて燒べし一八 ヨハネまた多 端を以て勸をなし福音を民に宣傳たり一九 さて分封の君なるヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事および行ふ所の凡の惡事をヨハネに責られければ二〇 猶も惡事を加へヨハネを獄に囚たり二一 民みなバプテスマを受けるにイエスも亦バプテスマを受て祈るとき天ひらけ二二 聖靈鴿の如き状にて其上に降ぬ又天より聲あり云なんぢは我愛子わが喜ぶ所の者なり

二三 時にイエス年およそ三十にして福音を宣始む人々にヨセフの子と意れ給へりヨセフの父はヘリ二四 其父はマッタテ其父はレビ其父はメルキ其父はヤンナ其父はヨセフ二五 其父はマタテヤ其父はアモス其父はナオム其父はエスリ其父はナムガイ二六 其父はマアツ其父はマタテヤ其父はセメイ其父はヨセフ其父はユダ二七 其父はヨハンナ其父はレサ其父はゼルバベル其父はシアテル其父はネリ二八 其父はメルキ其父はアツデ其父はコサム其父はエルモダム其父はヱル二九 其父はヨセ其父はエリエゼル其父はヨオレム其父はマツタテ其父はレビ三〇 其父はシメオン其父はユダ其父はヨセフ其父はヨナン其父はヱリヤキム三一 其父はメレア其父はマイナン其父はマタツタ其父はナタン其父はダビデ三二 其父はエッサイ其父はオベデ其父はボアズ其父はサルモン其父はナアソン三三 其父はアミナダブ其父はアラム其父はエスロン其父はパレス其父はユダ三四 其父はヤコブ其父はイサク其父はアブラハム其父はテラ其父はナコル三五 其父はサルク其父はラガヲ其父はパレク其父はヘベル其父はサラ三六 其父はカイナン其父はアパザデ其父はセム其父はノア其父はラメク三七 其父はマトサラ其父はエノク其父はヤレド其父はマレレル其父はカイナン三八 其父はエノス其父はセツ其父はアダム、アダムは即ち神の子なり

第四章

一 偖イエス聖靈に感されてヨルダンより歸り靈に導かれ野に適て二 四十日惡魔に試らる此諸日なにをも食ず四十日畢てのち饑たり三 惡魔かれに曰けるは爾もし神の子ならば此石に命じてパンと爲せよ四 イエス答けるは人はパンのみにて生る者に非ず唯神の凡の言に由と録されたり五 惡魔また彼を高山に携ゆき

一瞬間に天下の萬國を示して六曰けるは此すべての權威と榮華を爾に予ん我これを委任たれば我が欲む者に之を予ふべし七故に若わが前に拜跪ば悉く爾の屬とならん八イエス答けるはサタンよ我後に退け獨主たる爾の神に拜跪これにのみ事べしと録されたり九惡魔またイエスをエルサレムに携ゆき聖殿の頂に立て曰けるは爾もし神の子ならば此より己が身を投よ一〇そは神その使者等に命じて爾を護せん一一爾が足の石に觸ざるやう彼等手にて扶べしと録さる一二イエス答けるは主たる爾の神を試む可らずと云おけり一三惡魔この誘試みな畢て暫く彼を離たり一四イエス聖靈の能を以てガリラヤに歸しに其聲名あまねく四方の地に廣がりぬ一五斯て彼等が會堂にて教を爲凡ての人々に榮を得たり

一六その長育し所なるナザレに來り常例の如く安息日に會堂に入て聖書を讀んとて立ければ一七預言者イザヤの書を予しにイエス其書を展て斯録れたる所を見出せり一八主の靈われに在す故に貧者に福音を宣傳ん事を我に膏を沃て任じ心の傷る者を醫し又囚人に釋ん事と瞽者に見させん事を示し又壓制らるる者を縱ち一九主の禧年を宣播んが爲に我を遣せり二〇イエス書を捲その役者に予へて坐しければ會堂に在者みな目を注て視なせり二一イエス彼等に曰けるは此録れたる事は今日なんぢらの前に應り二二衆かれを稱讚その口より出る所の恩惠の言を奇み曰けるは此はヨセフの子に非や二三イエス彼等に曰けるは爾曹かならず我に諺を引て醫者みづからを醫せ我儕が聞し所のカペナウンにて行し事を自己の家郷なる此土にも行べしと云ん二四また曰けるは我まことに爾曹に告ん預言者その家郷にては敬重るる者に非ず二五われ誠を以て爾曹に告ん エリヤの時三年と六ヶ月天とぢて徧地おほいなる饑饉なりし其時イスラエルの中に多の嫠ありしかど二六エリヤは其一人へだに遣されず只シドンなるサレパタの一人の嫠に遣されたり二七また預言者エリシャの時にイスラエルの中に多の癩者ありしかど其一人だに潔られず惟スリヤのナーマンのみ潔られたり二八會堂に在し者これを聞て大に憤ほり二九起てイエスを邑の外に出し投下さんとて其邑の建たる山の崖にまで曳往り三〇然にイエス彼等の中を徑行て去ぬ三一ガリラヤのカペナウンと云る邑に至りて安息日ごとに衆人を教しに三二その言權威有ければ衆人その教に驚けり

三三會堂に汚たる鬼の靈に憑れたる人あり大聲に喊叫いひけるは三四噫ナザレのイエスよ我儕なんぢと何の與あらんや爾きたりて我儕を喪すか我なんぢは誰なる乎を知すなはち神の聖なる者なり三五イエス之を責て曰けるは聲を出こと勿れ其處を出よ惡鬼つひに其人を衆の中に仆し傷ずして出三六衆人みな驚き互に語りいひけるは權威と能力を有て汚たる鬼に命ぜしかば出去り是いかなる道ぞや三七是に於てイエスの聲名偏く此四方の地に揚りぬ

三八 イエス會堂を出てシモンの家に入しにシモンの妻母おもき熱病を患ひ居たりき三九 衆人之が爲にイエスに求ければ其傍に立て熱を斥しに熱退けり婦 直に起て彼等に事たり四〇 日の入とき各樣の病を患たる者をもてる人々皆其をイエスに携來ければ一々其上に手を按て醫せり四一 惡鬼も亦多の人々を出さり喊叫て爾は神の子キリスト也と云り然に之を斥て言ふことを容ざりき惡鬼其キリストなるを識ば也四二 明旦イエス出て人なき處に往ければ衆人尋來て其離去ことを止む四三 イエス曰けるは我又他の鄕村にも神の國の福音を宣傳ざるを得ず蓋我之が爲に遣るれば也四四 斯てガリラヤの諸會堂にて道を宣傳たり

第五章

一 衆人神の道を聽んとて擠擁ける時イエス、ゲネサレの湖の濱に立て二 磯に二艘の舟あるを見る漁の者は舟を離て網を洗をれり三 其一艘はシモンの舟なりしがイエス之にのり請て岸より少許はなれ坐して舟中より衆人を教ふ四 敎竟てシモンに曰けるは澳へいで網を下して漁れ五 シモン答けるは師よわれら終夜はたらきしかど所得なかりき然ど爾の言に從ひて網を下さん六 既に下して魚を圍ること甚だ多く網さけかかりければ七 いま一艘なる舟に侶を招きて來り助しめしに彼等が來し時其魚二艘の舟に牣て沈んばかりなりし八 シモン・ペテロ之を見てイエスの足下に俯て主よ我を離たまへ我は罪人なりと曰り九 是シモンおよび偕に在し者みな漁し所の魚の夥しきに驚ける也一〇 シモンの侶なるゼベタイの子ヤコブとヨハネも亦然りイエス、シモンに曰けるは懼るる勿れなんぢ今より人を獲べし一一 彼等舟を岸に寄おき一切を捨てイエスに從へり

一二 イエスある邑に居しとき身ことごとく癩病を患る者ありイエスを見て俯伏ねがひ曰けるは主もし聖旨にかなふときは我を潔なし得べし一三 イエス手を伸彼に按て我心にかなへり潔なれと曰ければ直に癩病愈たり一四 イエス彼を戒めて曰けるは人に告ること勿れただ往て己を祭司に示かつ潔られし爲にモーセが命ぜし如く獻物をなし證據を彼等に爲よ一五 然どもイエスの聲名ますます揚りて許多の人々或は教を聽んとし或は病を醫れんとて集り來れり一六 イエス常に人なき處に退きて祈り給ひき

一七 一日イエス教を爲せる時パリサイの人と教法師ガリラヤの諸鄕ユダヤ、エルサレムより來て此に坐しぬ彼等の病を醫すべき主の能顯はれたり一八 或人癱瘋を患たる者を牀に載て舁來り之を家に入イエスの前に置んと欲ども一九 群集にて舁入べき方なかりければ屋上に升り瓦を取除て其人を牀のまま衆人の中へ縋下しイエスの前に置り二〇 イエスその信あるを見て患者に人よ爾の罪赦さると曰ければ二一 學者とパリサイの人々心に思出けるは此褻瀆ことを言者は誰ぞ神より外に誰か罪を赦すことを得ん二二 イエスその意を知て答いひけるは何を爾曹心の中に論

ずるや二三 爾の罪赦さるといふと起て行と言と孰か易き二四 それ人の子地にて罪をゆるすの權威あることを爾曹に知せんとて遂に癱瘋の人に我なんぢに告おきて牀をとり家に歸れと曰ければ二五 その人衆の前にて直に起て臥居たる牀をとり神を崇て己が家に歸ぬ二六 衆人みな駭きて神を崇かつ大に畏懼て曰けるは我儕今日奇異なる事を見たり

二七 此後イエス出てレビと云る税吏の税關に坐し居けるを見て我に從へと曰ければ二八 レビ一切を捨おき起て從へり二九 レビ己の家にてイエスの爲に豐盛なる筵を設しに税吏また他の人々も共に筵に坐したる者多かりければ三〇 其所の學者とパリサイの人イエスの弟子に怨言曰けるは爾曹税吏また罪ある人々と共に飲食するは何故ぞ三一 イエス答て曰けるは廉強なる者は醫者の助を需ず惟病ある者これを需む三二 わが來るは義人を召く爲に非ず罪ある人を召て悔改させんが爲なり三三 彼等イエスに曰けるはヨハネの弟子は屢斷食また祈禱をなすパリサイの弟子も亦然り然るに爾の弟子飮こと食ことを爲すは何故ぞ三四 イエス曰けるは新郎の朋友その新郎と一處に居間は之に斷食なさしむる事を得んや三五 將來新郎と別るる日いたらん其日には斷食すべきなり三六 譬を以て曰けるは新衣を裁取て舊衣を補ふ者あらじ若然せば新衣をも壞ひ且新より取たる布は舊ものと合ず三七 また新酒を舊革袋に盛る者あらじ若しかせば新酒は其袋をはりさき漏出かつ革袋も壞るべし三八 新酒は新革袋に盛べき者ぞ斯てこそ兩ながら存なれ三九 舊酒を飮て立刻に新酒を欲者は有じ是舊は尤も好と云ばなり

第六章

一 逾越節の二日ののち首の安息日イエス麥の畑を徑行しに其弟子麥の穗を摘これを手にて搏くらひしかば二 或パリサイの人かれらに曰けるは爾曹安息日に行まじき事を行は何故ぞ三 イエス答て曰けるはダビデおよび從に在し者の饑しとき行たる事を未だ讀ざる乎四 即ち神の殿に入ただ祭司の外は食まじき供物のパンを取て食かつ從に在し者にも予たり五 又曰けるは人の子は安息日にも主たる也

六 また一の安息日にイエス會堂に入て教ふ此に右の手枯たる人ありければ七 學者とパリサイの人イエスこれを安息日に醫ならんかと窺ひぬ蓋かれを訴んと欲ばなり八 イエスその意を知て手なへたる人に起て中に立よと曰ければ其人おきて立り九 イエス曰けるは我なんぢらに問ん安息日に善を行と惡を行と又生を救ると殺と孰をか行べき一〇 遂に衆人を環視て其人に手を伸よと曰ければ彼その如せしに手すなはち愈て他の手の如くなれり一一 彼等大に怒て如何にイエスを處んと互に議あへり

一二 當時イエス祈禱の爲に山に往て終夜神に祈れり一三 夜明てイエス弟子を呼その中より十二人を選て之を使徒と稱く一四 即ちペテロと名給ひしシモンその兄弟アンデレ及ヤコブとヨハ

ネ、ピリポとバルトロマイ一五 マタイとトマス、アルバイの子なるヤコブとゼロテと云るシモン一六 ヤコブの兄弟のユダとイスカリオテのユダなり此ユダはイエスを賣たる者なり一七 イエス是等と共に下て平かなる地に立しに許多の弟子と夥しき人々ユダヤの四方またエルサレム及ツロ、シドンの海邊より來集りて或は其教を聽んとし或は病を醫されん事を冀へり一八 又惡鬼に難されたる者あり咸く醫されたり一九 衆みなイエスに捫らんとせり是能力の其身より出て彼等を咸く醫せば也二〇 イエス目を擧弟子を見て曰けるは爾曹貧者は福なり神の國は即ち爾曹の所有なれば也二一 爾曹いま饑たる者は福なり飽ことを得べければなり爾曹いま哭者は福なり笑ことを得べければ也二二 人の子の爲に人なんぢらを憎また絶け詈り爾曹の名を惡しとして棄なば爾曹福なり二三 其日には欣び踊れ爾曹天に於て賞賜大なれば也その先祖が預言者に行たりしも是の如し二四 爾曹富者は禍なる哉すでに安樂を受ばなり二五 爾曹飽者は禍なるかな饑んとすればなり爾曹いま笑者は禍なるかな哀み哭んと爲ばなり二六 凡の人なんぢらを譽なば爾曹禍なる哉その先祖が僞の預言者に行たりしも是の如し二七 我に聽ところの爾曹に告ん其仇を愛し爾曹を憎者を善し二八 詛者を祝し虐遇者の爲に祈禱せよ二九 人なんぢらの頬の右方を撃ば亦左方の頬を向よ爾の外服を奪ば裏衣をも禁ざれ三〇 凡て爾に求ば之に與へ爾の物を奪ば其をまた索る勿れ三一 己人に施れんとする事は亦人にも其如く施よ三二 己を愛する者を愛するは何の賞賜あらんや惡人にても己を愛する者は愛する也三三 己に善を行者に善を行は何の賞賜あらんや惡人もまた是の如く行なり三四 爾曹償るる事を得んとおもふ人に借は何の賞賜あらんや惡人も其ごとく償を得んとて亦惡人に借なり三五 爾曹仇を愛し又善をなし何をも望ずして借與よ然ば其賞賜は大なり且至上者の子と爲ん夫上者は恩を忘るる者及び不善者にまで慈愛を施せば也三六 是故に爾曹の父の憐憫の如く亦憐憫を爲べし三七 人を議すること勿れ然ば爾曹も議せられず人を罪すること勿れ然ば爾曹も罪せられず人を恕せ然ば爾曹も恕さるべし三八 人に與よ然ば爾曹も予らるべし彼等量を嘉して搖いれ撼いれ溢るる迄にして爾曹の懷に納ん爾曹量る所の其量にて亦人に量るべし

三九 また譬を彼等に曰けるは瞽は瞽の相者をなし得るや相共に溝壑に陷らざらん乎四〇 弟子は其師に踰ず凡そ全備なる者は其師の如なるべし四一 なんぢ兄弟の目にある物屑を見て己の目にある梁木を知ざるは何ぞや四二 如何で己の目にある梁木を見ずして兄弟に對ひ兄弟よ爾の目にある物屑を我に取せよと云ことを得んや僞善者よ先おのれの目より梁木をとれ然ば兄弟の目にある物屑を取こと明かに見べし四三 それ惡果を結は善樹に非ず又善果を結は惡樹に非ず四四 凡の樹はその果に因て識る荊棘より無花果を採ず又蒺藜より葡萄を採じ四五 善人は心の善庫より善を出し惡人はその惡庫より惡を出す蓋心に充るより

口に言る也四六 爾曹わが言ことを行はずして何ぞ我を主よ主よと稱るや四七 凡て我に就り我言を聞て行者を譬て爾曹に示さん四八 其人は家を建るに土を深く堀て基礎を磐上に置るが如し洪水のとき横流その家を衝とも動すこと能ず是基礎を磐上に置ばなり四九 聽て行はざる者は基礎なく家を土の上に建たる人の如し横流これを衝ときは其家ただちに傾れ其頽壞また甚だし

第七章

一 イエス此すべての言を民に教畢てカペナウンに入しに二 ある百夫の長その愛する僕やみて死ばかりなりければ三 イエスの事を聞ユダヤの長老等を遣して來り僕を助け給んことを求り四 彼等イエスに就り切に勸いひけるは此事を求る人は善人なり五 我民を愛し我儕の爲に會堂を建たり六 イエス彼等と共に往て既や其家に近けるとき百夫の長朋友を遣して曰せけるは主よ自己を勞動こと勿れ我が家裏に入奉るは憚多し七 故に我なんぢの前に出も亦憚あり第一言を發たまはば我僕は愈ん八 蓋われ人の權威の下に屬る者なるに我下に亦兵卒ありて此に往を命ば往かれに來と命ば來る我僕に之を行と命ば即ち行が故なり九 イエス聞て之を奇み從へる人々を顧て曰けるは我なんぢらに告んイスラエルの中にも未だ斯る篤信に遇ざりき一〇 遣されたる者家に歸て病たりし僕を見ば已に全快をなせり

一一 翌日イエス、ナインと云る邑に往けるに許多の弟子および許多の人々も共に往り一二 邑の門に近づきしとき舁出さるる死人あり其母は嫠にて此は獨の子なり邑の人々多これに伴ふ一三 主嫠を見て憫み哭なかれと曰て一四 近より其櫬に手を按ければ舁る者ども止れりイエス曰けるは少者よ我なんぢに命おきよ一五 死たる者起て且言ひ始むイエス之を其母に予せり一六 衆人みな懼て神を崇いひけるは大なる預言者われらの中に興る神その民を眷顧たまへり一七 イエスの此聲名ユダヤの全國また徧く四方に揚りぬ

一八 ヨハネの弟子すべて是等の事を彼に告ければ一九 ヨハネ二人の弟子を召て言遣しけるは來るべき者は爾なるか亦われら他に俟べき乎二〇 その二人イエスに來り曰けるはバプテスマのヨハネ我儕を爾に遣して言しむ來るべき者は爾なるか亦われら他に俟べきか二一 此時イエス多の疾あるひは病および惡鬼に憑たる者を醫し且おほくの瞽に見ることを賜たり二二 イエス彼等に答曰けるは爾曹が見ところ聞ところをヨハネに往て告よ夫瞽者は見跛者は行み癩者は潔り聾者はきき死し者は復活され貧者は福音を聞せらる二三 凡そ我爲に躓かざる者は福なり二四 ヨハネの使者さりし後イエス、ヨハネの事を衆人に曰けるは何を見んとて野に出しや風に動さるる葦なる乎二五 然ば爾曹なにを見んとて出しや美服を衣たる人なるか文繡を衣て奢る者は王の宮に在二六 然ば何を見んとて出しや預言者なるか然わ

れ爾曹に告ん是預言者よりも卓越たる者なり二七 それ爾に先ちて道を備る我使者を爾の前に遣んと録されたるは即ち此れなり二八 我なんぢらに告ん婦の生る者のうち未だバプテスマのヨハネより大なる預言者は無されど神の國の至微者も彼よりは大なる也二九 ヨハネに聞る庶民また税吏は其バプテスマを受て神を義とせり三〇 パリサイの人また教法師は其バプテスマを受ず自ら暴ひて神の旨に背たり三一 然ば此代の人々を何に比へ又何に譬んや三二 童子市に坐し互に呼て我儕笛ふけども爾曹踊ず悲歌をすれども爾曹哭ずと云に似たり三三 蓋バプテスマのヨハネ來りてパンをも食ず酒をも飮ざれば惡鬼に憑たる者なりと爾曹いへり三四 人の子きたりて食ふ事をし飮ことを爲ばまた食を嗜み酒を好の人税吏罪ある人の友なりと爾曹いへり三五 然ど智慧は智慧の子に義と爲らる

三六 或パリサイの人イエスを請て共に食せん事を願ければイエス、パリサイの人の家に入て食に就り三七 邑の中に惡行を爲る婦ありけるがイエスがパリサイの人の家に坐せるを知て蝋石の盒に香膏を携來り三八 イエスの後にたち足下に哭き涙にて其足を濡し首の髪をもて之を拭かつ其足に口を接また香膏を之に抹り三九 イエスを請たるパリサイの人これを見て心の中に謂けるは此人もし預言者ならば捫し者は誰なる乎又如何なる婦なる乎を知ん此婦は惡行を爲る者なり四〇 イエス之に答て曰けるはシモン我なんぢに言事あり答けるは師よ言たまへ四一 イエス曰けるは或債主に二人の負債人ありて一人は金五百一人は五十を負しに四二 償方なかりければ債主この二人を免たり然ば二人の者その債主を愛すること孰か多き我に聞せよ四三 シモン答けるは我おもふに免るる事の多き者ならんイエス曰けるは爾が意ところ違ざる也四四 遂に婦を顧みてシモンに曰けるは此婦を見か我なんぢの家に入に爾は我足に水を給ず此婦は涙にて我足を濡し首の髪をもて拭り四五 爾は我に口を接ず此婦は我ここに入し時より我足に口を接て已ず四六 爾は我首に膏を抹ず此婦は我足に香膏を抹り四七 是故に我なんぢに言ん此婦の多の罪は赦れたり之に因て其愛も亦多なり赦るること少き者は其愛も亦少し四八 是に於て其婦に曰けるは爾の罪赦さる四九 同に坐せる者ども心の中に謂けるは此人は是何人なれば罪をも赦す乎五〇 イエス婦に曰けるは爾の信爾を救り安然にして往

第八章

一 此後イエス郷邑を周遊て神の國の福音を宣傳ふ十二の弟子も偕に從ひぬ二 また前に惡鬼を患たりし者病を痊れたる婦等も從ひたり即ち七の惡鬼を逐出れたるマグダラと稱マリア三 又ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ又スザンナ此ほか多の婦ありて皆その所有を以てイエスに供事たりき

四 衆の人々諸邑より出てイエスの所に集りければ譬をもて曰り

五 種まく者種を播んとて出ぬ播るとき路旁に遺し種あり蹊踏

られ且天空の鳥これを食へり六また石上に遺し種あり萠出て槁たり是潤なきが故なり七また棘の中に遺し種あり棘も同に生長て之を蔽り八また沃壤に遺し種あり生出て實を結べること百倍せり是を言畢て呼りけるは耳ありて聽ゆる者は聽べし九其弟子とふて曰けるは是いかなる譬ぞ一〇答けるは神の國の奧義を爾曹には知ことを賜ど他の者には譬を以てす此は視ても見ず聽ても悟ざる爲なり一一夫この譬の釋は種は神の道なり一二路の旁に遺しは聽し後惡魔の爲に其心より道を奪るる者なり彼は人の信じて救れんことを恐る一三石上に遺しは聽とき喜びて道を受れども根なければ信ずること暫のみ患難に遇時は道に背く者なり一四棘の中に遺しは聽て往この世の諸慮と貨財と宴樂とに蔽れて實ざる者なり一五沃壤に遺しは正かつ善心にて道を聽これを守り忍て實を結ぶ者なり

一六燈を燃し器にて之を蔽ひ或は床下におく者なし入來る者の其光を見ん爲に臺の上に置べし一七隱て現れざる者なく藏て知れず露出ざる者なし一八是故に爾曹聽ことを愼め有る者はなほ予られ無有者は有りと意ふ所の物をも奪るべし

一九此時イエスの母と兄弟きたりけれど群集に因て近くこと能ざりしかば二〇或人これをイエスに告て曰けるは爾が母と兄弟なんぢに遇んとて外に立り二一イエス答て曰けるは神の道を聽て之を行ふ者は乃ち我母わが兄弟なり

二二一日イエス弟子と共に舟に登て彼等に湖の前岸へ渡べしと曰ければ即ち漕出せり二三舟の走る時イエス寢たり颶風湖に吹下し舟に水滿んとして危かりしかば二四弟子きたりてイエスを醒し曰けるは師よ師よ我儕亡なんとすイエス起て風と浪とを斥めければ止て平穩になりぬ二五イエス曰けるは爾曹の信何所に在や彼等駭き且奇みて互に曰けるは此は何人なるぞや風と水とに命ぜしかば亦順へり二六斯てガリラヤに對るガダラ人の地に着て二七岸に登し時ある一人邑より出てイエスに遇この者は久く惡鬼に憑れ衣をきず家に住ず惟塚にのみ居たりき二八イエスを視て喊叫その前に俯伏し大聲に呼りけるは至上神の子イエスよ我なんぢと何の與あらんや爾に求我を苦むること勿れ二九此惡鬼に人より出よとイエスが命じたるに因てなり彼の憑れたる事すでに久し鏈また桎梏にて繫守ども其を打碎き惡鬼の爲に野に逐ぬ三〇イエス之に問て曰けるは爾の名は何と稱や答けるはレギヨン是おほくの惡鬼の入たるが故なり三一惡鬼イエスに求けるは命じて底なき所に往しむる勿れ三二此に多の豕の羣山に草を食ゐたりしが彼等その豕に入んことを許せと求ければ之を許せり三三惡鬼その人より出て豕に入しかば其群はげしく馳下り山坡より湖に落て溺る三四牧者ども其有し事を見て逃ゆき之を邑また諸村に告たり三五衆人その有し事を見んとて出てイエスの所に來れば惡鬼の離れし人衣を着たしかなる心にてイエスの足下に坐せるを見て懼あへり三六惡鬼に憑れたりし人の救れし狀を見たる者この事を彼等に告ければ三七

ガダラ四方の多の衆庶イエスに此を去んことを求り是大に懼しが故なりイエス舟に登て返ぬ三八悪鬼の離たる人イエスと共に居んことを求けるにイエス之を去しめて三九家にかへり神の爾に行し大なる事を人に告よと曰ければ遂に去てイエスの己に行たまひし大なる事を遍邑に傳たり

四〇イエス返たるとき衆人みな佇望て之を喜び接ふ四一四二ヤイロと云る人あり此は會堂の宰なり年およそ十二歳なるひとりの女ありて瀕死なりければ來イエスの足下に伏て我家に來り給んことを求りイエスの往とき衆人これに擁あへり四三婦あり十二年血漏を患ひ醫者の爲に其業を盡く耗しけれど誰にも痊れ得ざりしが四四イエスの後に來て其衣の裾に捫ければ直に血の漏こと止ぬ四五イエス曰けるは我に捫るものは誰ぞや衆人はみな特に捫れる者なしと曰りペテロおよび偕に在者ども曰けるは師よ衆人なんぢに擁擠せまるに我に捫る者は誰ぞと曰たまふ乎四六イエス曰けるは我に捫る者あり能力の我身より出るを覺れば也四七その婦みづから隠せぬを知をののき來て前に伏さはりし故と其ただちに愈たることを衆人の前に告四八イエス曰けるは女よ心安かれ爾の信なんぢを救へり安然にして往四九かく言る時に會堂の宰の家より人きたりて宰に曰けるは爾が女はや死たり師を勞はす勿れ五〇イエス之をきき答て宰に曰けるは懼るる勿ただ信ぜよ女は痊べし五一イエス家に入にペテロ、ヤコブ、ヨハネおよび女の父母の外だれにも偕に入ことを許さざりき五二衆人みな女の爲に哭哀しかばイエス曰けるは哭なかれ死たるに非ず寝たる耳五三彼等その死たるを知ば之を笑へり五四イエス人々を皆いだして女の手をとり女起よと呼曰ければ五五其魂かへりて忽ち起たりイエス命じて食を予しかば五六父母は駭異ぬイエスこの行しことを人に告るを戒め給へり

第九章

一イエス十二の弟子を召集め凡の悪鬼を出し病を醫す能力と權威を賜たり二また神の國を宣傳へ病者を醫せん爲に三彼等を遣さんとして曰けるは路資に何をも携ざれ杖また旅嚢、糧、金、二の衣をも帶こと勿四何の家に入とも其處に居りて亦其處より去五爾曹を不接者あれば其邑を出る時かれらに證のため足より塵を拂へ六弟子いでて偏く諸郷にゆき福音を宣傳かつ病を醫せり

七分封の君ヘロデ、イエスの行し諸事を聞て惑り或人は之をヨハネの甦れるなりと言八ある人はエリヤの現れたる也といひ又ある人は古の預言者の一人甦れる也と言ばなり九ヘロデ曰けるは我ヨハネの首を斬り斯る事の聞ゆる者は誰なるかへロデ之を見んと欲ふ

一〇使徒たち歸來りて其行しことをイエスに告イエス彼等を携ひて潜にベテサイダと云る邑の邊なる野に退きしに一一衆人しりて從ければ之を接て神の國の事を語かつ醫を求る者を醫せり

一二日昃くとき十二の弟子きたりてイエスに曰けるは此は野なれば衆人を去せ四圍の郷村へゆきて宿をとり食を覓る事を爲たまへ一三イエス曰けるは爾曹これに食を予へよ答けるは我儕ただ五のパンと二の魚ある耳これ許多の人の爲に往て買に非ざれば別に食物はなし一四此に居し男おほよそ五千人なりきイエス弟子に曰けるは衆人を五十人づつ列べ坐せしめよ一五弟子その如く行て彼等をみな坐せしめたり一六イエス五のパンと二の魚をとり天を仰ぎ祝して之をわり弟子に予て衆の前に陳しむ一七みな食飽て餘の屑を十二の筐に拾たり

一八イエス衆の在ざりしとき祈禱したりしが弟子も偕に居りイエス之に問て曰けるは衆人は我を言て誰と爲か一九答て曰けるはバプテスマのヨハネ或はエリヤ或は古の預言者の一人の甦れる也と二〇イエス曰けるは爾曹は我を言て誰と爲かペテロ答けるは神のキリストなり二一イエス彼等を戒て此事を何人にも告る勿れと命じたり二二又曰けるは人の子かならず多の苦を受て長老祭司の長學者どもに棄られ且殺され第三日に甦るべし二三又イエス衆人に曰けるは若われに從はんと欲ふ者は己に克て日々その十字架を負て我に從へ二四その生命を保全せんと欲者は之を喪ひ我ために生命を喪ふ者は之を保全すべし二五人もし全世界を利するとも自己を喪ひ自ら亡なば何の益あらん乎二六我と我道を耻る者をば人の子も亦おのが榮光と父と聖使の榮光をもて來る時これを耻べし二七われ誠に爾曹に告ん此に立者の中に神の國を見までは死ざる者あり

二八此事を言けるのち八日ばかり過てイエス、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを携ひ祈禱せんとて山に登れり二九祈れる時に其顏の貌つねと異り其衣服白く輝きぬ三〇二人の人ありて之と言へり即ちモーセとエリヤなり榮光の中に現れて三一イエスのエルサレムにて既や世を逝んとする事を語る三二ペテロおよび偕に在し者等いたく寢たりしが已に醒てイエスの榮光また偕に立る二人を見たり三三この二人のイエスと別る時ペテロ、イエスに曰けるは師よ此に居は善われらに三の廬を建せ給へ一は爾のため一はモーセのため一はエリヤの爲にせん此は其言ところを知ざりし也三四かく言るとき雲きたりて彼等を蓋へり其雲に入しとき弟子たち懼ぬ三五聲雲より出て曰けるは此は我愛子なり之に聽べし三六聲寂たれば惟イエス一人を見たり弟子たち口を緘て見たりし事を當時は誰にも告ざりき

三七翌日山より下りければ許多の人々イエスを迎ふ三八其中の或一人よばはりて曰けるは師よ願はくは我子を眷顧たまへ此は我獨子なるに三九惡鬼の爲に憑れては忽然さけび泡をふき拘攣られて傷み離るること實に難し四〇我これを逐出す事を爾の弟子に求しかど能ざりき四一イエス答て曰けるは噫信なき悖逆世なる哉われ爾曹の中に爾曹を忍て幾何時あらんや爾が子を此に携來れ四二來ば惡鬼かれを傾跌て拘攣ぬイエス汚たる鬼を斥て其子を醫し父に予へたり四三衆人みな神の大なる能を駭きイエス

の行し事を異める時にイエス弟子に曰けるは四四此言を爾曹耳に藏めよ夫人の子は人の手に付されん四五彼等この言を悟ざりし悟ざるやう隱されたる也彼等もまた懼て此事を問ざりき

四六弟子等のうち互に誰か大ならんとの爭論ありければ四七イエス其心の念を知て孩子をとり側にたてて四八彼等に曰けるは我名の爲に此孩子を接る者は即ち我を接るなり我を接る者は我を遣しし者を接るなり凡て爾曹がうち最も小者ぞ是大ならん四九ヨハネ答て曰けるは師よ爾の名に托て鬼を逐出せる者を見たりしが我儕と共に從はざる故これを禁たり五〇イエス曰けるは禁ること勿れ我儕に敵抗ざる者は我儕に屬者なり

五一イエス天に升るの期いたりければエルサレムに往ことを確定めたり五二使者等を先に遣しければ彼等ゆきてイエスに備んが爲サマリヤ人の鄉に入しに五三鄉人そのエルサレムに向行さまなるが故にイエスを納ざりき五四弟子のヤコブ、ヨハネ此事を見て曰けるは主よ我儕エリヤの行し如く天より火を召降し彼等を滅さんとす可か五五イエス顧みて之を責め曰けるは爾曹の心如何なる乎を自ら知ざるなり五六人の子は人の命を滅す爲に來ず惟これを救ふ爲なり遂に他の鄉に往り

五七路を行とき或人イエスに曰けるは主よ何處に往たまふとも我從はん五八イエス彼に曰けるは狐は穴あり天空の鳥は巣あり然ども人の子は枕する所なし五九又ある一人に曰けるは我に從へ彼いひけるは主よ先ゆきて父を葬る事を我に容せ六〇イエス曰けるは死たる者に其死し者を葬らせ爾は往て神の國を宣よ六一又ある一人曰けるは主よ爾に從はん先ゆきて家人に別を告ることを容せ六二イエス曰けるは手を犂に着て後を顧る者は神の國に當ざる者也

第一〇章

一此後主また七十人を立て之を兩個づつに分ち自ら至んとする諸邑諸地へ前に遣さんとして二彼等に曰けるは收稼は多く工人は少し故にその稼主に工人を收稼所に遣んことを求べし三往われ爾曹を遣すは羔を狼のなかに入るが如し四囊また旅袋履をも携こと勿れ途にて人に問候をもする勿れ五人の家に入ば先其家の安全ならん事を求へ六若ここに安全の子あらば爾曹が祈る安全は其家に留らん若しからずば其祈る安全なんぢらに歸べし七其家に居りて供る所のものは之を飲食せよ蓋工人の其工錢を獲は宜なればなり家より家に移ることを爲ざれ八邑に入んに接る者あらば其なんぢらの前に供る者を食せよ九邑の中なる病の者を醫せ亦衆人に神の國は爾曹に近けりと曰一〇もし邑に入んに接る者なくば衢に出て曰一一我儕に沾たる爾が邑の塵は爾曹に對て拂ん然ども神の國の近けるを知一二われ爾曹に告ん其日いたらばソドムの刑罰は此邑よりも却て易かるべし一三ああ禍なる哉コラジンよ噫禍なる哉ベテサイダよ爾曹の中に行し異能を若ツロとシドンに行しならば彼等は早く麻

をき灰を蒙り坐して悔改しなるべし 一四 審判にはツロとシドンの刑罰は爾曹よりも却て易ならん 一五 已に天にまで擧られたるカペナウンよ又陰府に落さるべし 一六 爾曹に聽者は我に聽なり爾曹を棄る者は我を棄るなり我を棄る者は我を遣し者を棄るなり

一七 七十人喜び返りて曰けるは主よ惡鬼さへも爾の名に因て我儕に服せり 一八 イエス曰けるはわれ電の如くサタンの天より隕るを見し 一九 我なんぢらに蛇蠍を踐また敵の諸の權を制ふる權威を賜たり必ず爾曹を害ふ者なし 二〇 然ども惡鬼の爾曹に服し事は喜とする勿れ爾曹が名の天に録されしを喜とすべし 二一 此時イエス心に喜びて曰けるは天地の主なる父よ此事を智者と達者とに隱して赤子に顯し給ふを謝す父よ然それ是の如きは意旨に適るなり 二二 父は萬物を我に賜ふ父の外に子は誰なると識者なく亦子および子の顯す所の者の外に父は誰なると識者なし 二三 イエス弟子を顧て竊に曰けるは爾曹が見ところの事を見るその目は福なり 二四 我なんぢらに告ん多の預言者および王も爾曹が見ところの事を見んとせしかども見ず爾曹が聞ところの事を聞んとせしかども聞ざりき

二五 爰に一個の教法師あり起て彼を試み曰けるは師よ我なにを爲ば永生を受べき乎 二六 イエス曰けるは律法に録されしは何ぞ爾いかに讀か 二七 答て曰けるは爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く隣を愛すべし 二八 イエス曰けるは爾の答へ然り之を行はば生べし 二九 彼みづからを罪なき者に爲んとてイエスに曰けるは我鄰とは誰なる乎 三〇 イエス答て曰けるはある人エルサレムよりエリコに下るとき強盜に遇り強盜その衣服を剥取て之を打擲き瀕死になして去ぬ 三一 斯る時に或祭司この路より下しが之を見過にして行り 三二 又レビの人も此に至り進み見て同く過行り 三三 或サマリアの人旅して此に來り之を見て憫み 三四 近よりて油と酒を其傷に沃これを裹て己が驢馬にのせ旅邸に携往て介抱せり 三五 次日いづるとき銀二枚を出し館主に予て此人を介抱せよ費もし増ば我かへりの時なんぢらに償ふべしと曰り 三六 然ば此三人のうち誰か強盜に遇し者の隣なると爾意ふや 三七 彼いひけるは其人を矜恤たる者なりイエス曰けるは爾も往て其ごとく爲よ

三八 かれら路を行る時イエス一郷に入ければマルタと云る婦これを迎て自己の家に入ぬ 三九 その姉妹にマリアと云る者ありイエスの足下に坐りて其道を聽り 四〇 マルタ供給のこと多して心いりみだれイエスに近よりて曰けるは主よ我が姉妹われを一人遺て勞動しむるを何とも意ざるか彼に命じて我を助しめよ 四一 イエス答て曰けるはマルタよマルタよ爾多端により思慮ひて心勞せり 四二 然ど無て叶ふまじき者は一なりマリアは既に善業を撰たり此は彼より奪べからざる者なり

第一一章

一イエス某所にて祈禱しけるに畢しとき一人の弟子いひけるは主よヨハネ其弟子に教し如く我儕にも祈ることを教たまへ二イエス曰けるは祈る時は斯いふべし天に在す我儕の父よ願くは聖名を尊崇させ給へ爾國を臨らせ給へ爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ三我儕の日用の糧を毎日に與たまへ四我儕に罪を犯す者を凡て免せば我儕の罪をも免し給へ我儕を試探に遇せず惡より拯出し給へ五六また彼等に曰けるは爾曹の中もし或人夜半に其友へ往て友よ我が朋輩旅より來しに供べき物なきゆゑ三のパンを借よと曰んに七内に居もの答て我を煩はす勿れ既や門は閉われと共に兒曹も牀に在ば起て予ること能ずといふ者あらん乎八我なんぢらに告ん其友なるにより起て予ざれ雖ひたすら請が故に其需に從ひ起て予べし九我なんぢらに告ん求よ然ば予られ尋よ然ばあひ門を叩よ然ば啓るることを得ん一〇蓋すべて求る者は得たづぬる者はあひ門を叩者は啓るれば也一一爾曹のうち父たる者誰か其子のパンを求んに石を予んや魚を求んに其に代て蛇を予んや一二卵を求んに蠍を予んや一三然ば爾曹惡者ながら善賜をその兒曹に予ることを知まして天に在す爾曹の父は求る者に聖靈を予ざらん乎

一四イエス瘖啞なる惡鬼を逐出しけるに惡鬼いでて瘖啞ものいひしかば人々駭けり一五其中なる者の曰けるは彼は惡鬼の王ベルゼブルに藉て惡鬼を逐出せる也一六又ある人々イエスを試んとて天よりの休徵を求たり一七イエスその意を知て曰けるは互に分爭ふ國は亡び互に分爭ふ家は傾るる也一八若サタンも自ら分爭はば其國いかで立んや其なんぢら我を言てベルゼブルに藉て惡鬼を逐出すとせり一九若われベルゼブルに藉て惡鬼を逐出さば爾曹の子弟は誰に藉て惡鬼を逐出すや夫かれらは爾曹の裁判人と爲べし二〇若われ神の指をもて惡鬼を逐出たるならば神の國は既や爾曹に來れり二一勇者鎧を擐て邸を守るときは其所有安全なり二二もし之より勇者きたりて其に勝ときは其恃とせる鎧を奪ひ且贓物を分べし二三我と偕ならざる者は我に叛き我と偕に斂ざる者は散すなり

二四惡鬼人より出て旱たる所をめぐり安を求れども得ずして曰けるは我出し家に歸らん二五已に來しに掃淨り飾れるを見二六遂に往て己よりも惡き七の惡鬼を携へ入て此に居ば其人の後の患狀は前より更に惡かるべし二七この話を言るとき群集の中より一婦聲を揚て曰けるは爾を孕し腹と爾の吮し乳は福なり二八イエス答けるは然されど神の道を聽て其を守る者の福には若ず

二九人々擁集れる時イエス曰けるは今の世は惡し奇跡を求るとも預言者ヨナの奇跡の外に奇跡は予られじ三〇蓋ヨナがニネベの人に奇跡と爲し如く人の子は今の世に奇跡と爲べし三一南方の女王審判の日に共に起て今の世の人の罪を斷めん彼は地の極よりソロモンの智慧を聽んとて來れり三二夫ソロモンより大な

る者ここに在三三 ニネベの人審判の日に共に起て今の世の人の罪を斷めん彼等はヨナの勸言に因て悔改めたり夫ヨナより大なる者ここに在三四 燈を燃て隱たる處あるひは升の下におく者なし入來る者は其光を見ん爲に燭臺の上に置なり三五 身の燈は目なり爾の目瞭かならば全身あかるく其目眊ければ爾の身も暗し三六 故に爾にある光の暗らぬやう愼めよ三七 もし爾の全身光明にして暗所なくば燈の輝きて爾を照す如く全く光明なるべし

三八 イエス語れるとき或パリサイの人共に食せん事を請ければ入て食に就り三九 その食する前に洗ことを爲ざりしを見てパリサイの人異めり四〇 主これに曰けるは爾曹パリサイの人椀と盤の外を潔す然ど爾曹内は貪欲と惡にて充り四一 無知なる者よ外を造し者はまた内をも造ざりし乎四二 なんぢら所有物を以て施せ然ば爾曹の爲に凡の物は潔れる也四三 禍なる哉なんぢらパリサイの人よ薄荷茴香および凡の野菜十分の一を取納て義と神を愛することを廢これ行ふべき事なり彼も亦廢べからざる者なり四四 禍なる哉なんぢらパリサイの人よ會堂の高座市上の間安を好めり四五 禍なる哉それ爾曹は隱沒たる墓の如し其上を行く人々これを知ざる也四六 イエス曰けるは爾曹も禍なるかな教法師よ任がたき荷を人に負せ自ら指一をも其荷に按ず四七 禍なる哉なんぢらは預言者の墓を建なんぢらの先祖は之を殺せり四八 實に爾曹先祖の爲る事をこのむ證明を爲り夫かれらは之を殺し爾曹は其墓を建四九 是故に神の智慧いへる言あり我預言者および使徒を彼等に遣さんに其中の或者を殺し或者をば窘むべしと五〇 創世より以來ながしし凡の預言者の血は此代に於て討さんと爲なり五一 即ちアベルの血より殿と祭壇の間に殺されたるザカリヤの血にまで至われ誠に爾曹に告ん之を此代に討すべし五二 なんぢら禍なるかな教法師よ智識の鑰を奪て自ら入ず且入んとする者をも阻り五三 此言を語るとき學者とパリサイの人々深く憤恨を含て多端の事を詰かけ五四 その口より出る言を何事か取へ訴んとして伺ひたり

第一二章

一 そのとき數萬の人々相踐あふ程に集れりイエス先弟子に曰けるは爾曹パリサイの人の麪酵を謹めよ是僞善なり二 それ掩れて露れざる者はなく隱て知れざる者はなし三 是故に爾曹幽暗に語しことは光明に聞ゆべし密なる室にて耳に附言しことは屋上に播るべし四 我友よ爾曹に告ん身體を殺して後に何をも爲能ざる者を懼るる勿れ五 われ懼べき者を爾曹に示さん殺したる後に地獄に投入る權威を有る者を懼よ我まことに爾曹に告ん之を懼べし六 五の雀は二錢にて售に非ずや然るに神に於は其一をも忘れ給はず七 爾曹の首の髮また皆かぞへらる故に懼るる勿れ爾曹は多の雀よりも貴れり八 又われ爾曹に告ん我を人の前に識と言ん者をば人の子も亦神の使者の前に之を識と言ん九 我を人

の前に識ずと言ん者は神の使者の前に彼も識ずと言るべし一〇 凡そ人の子を謗る者は赦さる可れど聖靈を褻す者は赦さる可らず一一 人なんぢらを會堂また執政および權ある者の前に曳携なば如何こたへ何を言んと思ひ煩ふ勿れ一二 其時に說べき言は聖靈なんぢらに示すべし

一三 衆人の中より一人イエスに曰けるは師よ我が兄弟に遺業を我に分よと命たまへ一四 イエス曰けるは人よ誰われを立て爾曹の裁判人また物を分つ者と爲しぞ一五 イエス衆人に曰けるは戒心して貪心を愼めよ夫人の生命は所蓄の饒なるには因ざる也

一六 また譬を彼等に語て曰けるは或富人その田畑よく豐ければ

一七 自ら忖いひけるは我が作物を藏る所なきを如何せん一八 又曰けるは我かく爲ん我倉を毀ち更に大なるを建すべて我が作物と貨を其所に藏べし一九 斯て靈魂に對ひ靈魂よ多年を過ほどの許多の貨物を有たれば安心して食飮樂めよと言んとす二〇 然るに神これに曰けるは無知なる者よ今夜なんぢが靈魂とらるること有べし然ば爾の備し物は誰が有になる乎二一 凡そ己の爲に財を積へ神に就て富ざる者は此の如なり二二 イエスその弟子に曰けるは故に我なんぢらに告ん爾曹生命の爲に何を食ひ身體の爲に何を着んとて思ひ煩ふ勿れ二三 生命は糧より優り身體は衣よりも優れり二四 鴉を思見よ稼ず穡ず倉をも納屋をも有ず然ども神はなほ此等を養ふ況て爾曹は鳥よりも貴きこと幾何ぞや

二五 爾曹のうち誰かよく思ひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや二六 然ば最小事すら能ざるに何ぞ其他を思ひ煩ふや二七 百合花は如何して生長かを思へ勞ず紡がざる也我爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ざりき二八 神は今日野に在て明日爐に投入らるる草をも如此よそはせ給へば況て爾曹をや吁信仰うすき者よ二九 爾曹何を食ひ何を飮んと求る勿また思ひ惑ふこと勿れ三〇 凡て是等の物は世界の邦人の求るもの也なんぢらの父は是等の物の爾曹に無て叶ぬ事を知三一 ただ神の國を求めよ然ば是等の物は爾曹に加らるべし三二 小き羣よ懼るる勿れ爾曹の父は喜びて國を爾曹に予へ給はん三三 爾曹の所有を售て施し己が爲に常に舊ざる財布すなはち盡ざる財寶を天に備よ其處は盜賊も近よらず蠹も壞はざる也三四 爾曹の財寶の在ところには爾曹の心も亦そこに在べし三五 爾曹腰に帶し火燈を燃して居三六 主人婚筵より歸來り門を叩ば速かに啓ん爲に彼を待人の如せよ三七 主人きたりて其目を醒し居を見なば此僕は福なり誠に我なんぢらに告ん主人みづから腰に帶し僕を食に就せ前て之に供事すべし三八 或は二更あるひは三更に主人きたりて然なせるを見なば此僕は福なり三九 爾曹これを知べし若し家の主人盜賊いづれの時に來かを知ば其家を守て破せまじ四〇 然ば爾曹も預じめ備せよ不意ときに人の子きたらんと爲ばなり四一 ペテロ曰けるは主よ此譬は我儕に言か又は凡の人に言か四二 主いひけるは時に及て食物を給與しめん爲に主人がその僕等の上に立たる忠義にして智き家宰は誰なる乎四三 其主人きたる時

に是の如く勤るを見らるる僕は福なり四四 我まことに爾曹に告ん其所有を皆かれに督らすべし四五 若その僕 心の中に我が主人の來るは遲らんと思その僕 婢を扑たき食飲して且酒に醉はじめば四六 其僕の主人おもはざるの日しらざるの時に來りて之を斬殺し其報を不信者と同うすべし四七 僕 主人の心を知ながら預備せず亦その心に從ざる者は扑るること多らん四八 知ずして扑べき事を作し者は扑るる事も少からん多く予らるる者は多く求らるべし多く托れば之より多く求べし

四九 われ火を地に投入ん爲に來れり我なにをか欲む已に此火の燃たらん事なり五〇 われ受べきのバプテスマあり其成遂らるる迄は我痛いかばかりぞ乎五一 我は安全を地に施んとて來ると意ふや我なんぢらに告ん然ず反て分爭しむ五二 今よりのち一家に五人あらば三人は二人に敵對し二人は三人に敵對して分るべし五三 父は子に子は父に母は女に女は母に姑は其婦に婦は其 姑に敵對して分るべし五四 イエスまた衆人に曰けるは雲の西より起るを見ば直に雨ふらんと爾曹いふ果て然り五五 南より風ふけば暑からんと爾曹いふ果て然り五六 僞善者よ天地の色象を別ことを知て此時を別ち能ざるは何ぞや五七 また何ぞ自ら公義を審ざる乎五八 なんぢ訟る者と共に有司に往とき途中にて心を盡して彼より釋されんことを求めよ恐くは訟る者なんぢを裁判人にひき裁判人なんぢを下吏に付し下吏なんぢを獄に入ん五九 我なんぢに告ん一錢も殘ず償ふまでは爾そこを出ことを得ざる也

第一三章

一 當時あつまりたる者の中にピラトがガリラヤ人の血を其供物に雜し事をイエスに告る者あり二 イエス答て彼等に曰けるは爾曹此ガリラヤ人は是の如く害されし故に凡のガリラヤ人よりも益りて罪ある者と意ふや三 我なんぢらに告ん然ず爾曹悔改めずば皆おなじく亡さるべし四 シロアムの塔たふれて壓死されし十八人はエルサレムに住る凡の人々よりも益りて罪ある者と意ふや五 われ爾曹に告ん然ず爾曹悔改めずば皆おなじく亡さるべし六 又この譬を云り或人その葡萄園に植おきたる無花果樹ありしが來て之に果を求れども得ざりければ七 其園丁に曰けるは我三年きたりて此無花果樹に果を求れども得ず之を斫され何ぞ徒らに地を塞や八 園丁こたへけるは主よ我その周圍を掘て之に糞するまで今年も容せ九 もし果を結ばば善もし結ずば後に之を斫べし

一〇 イエス安息日に或會堂にて教しに一一 十八年鬼に患されたる婦あり傴僂て少も伸ること能ざりき一二 イエス之を見てよび婦よ爾は其病より釋さるると曰て一三 手を婦に按ければ直に伸て神を讃美たり一四 會堂の宰イエスの安息日に醫したる事を怒こたへて衆人に曰けるは事を爲べきの日六日あれば其中に來りて醫さるべし安息日に爲ざれ一五 主かれに答て曰けるは僞善者よ爾曹おのおの安息日には其牛や驢をとき廐より牽出して水を飮さざる乎一六 況て此婦はアブラハムの裔なり十八年サタンに

縛られたる其結を安息日に解べからざらん乎一七イエス如此曰ければ敵對し者みな慚ぬ又衆人みな其行し慈惠ことを喜べり一八イエスまた曰けるは神の國は何に比へ又なにに譬んや一九一粒の芥種の如し人これを取て其園に播ば長生て大なる樹となり天空の鳥その枝に棲なり二〇又いひけるは我神の國を何に譬んや二一麪酵の如し婦これを取て三斗の粉の中に納せば盡く發出すなり

二二イエス教つつ各城各郷を過エルサレムに向て旅行り二三或人いひけるは主よ救るる者は少き乎二四イエス彼等に曰けるは窄門に入ために力を盡せ我なんぢらに告ん入ん事を求て能ざる者おほし二五家の主人おきて門を閉し後に爾曹外にたち門を叩て主よ主よ我に啓と曰んに主人こたへて我なんぢらは何處より來しか知ずと曰ん二六然る時に我儕は爾の前に食飲し爾また我儕の衢に教たりしと言出さんに二七主人こたへて我なんぢらに告ん何處より來しか知ず皆惡を爲す者よ我を去と曰ん二八爾曹アブラハム、イサク、ヤコブ及び凡の預言者は神の國に在て爾曹は外に投出さるるを見ん時に哀哭切齒すると有べし二九また人々西や東北や南より來りて神の國に坐するならん三〇それ後の者は先に先の者は後に爲べし

三一當日あるパリサイの人々來りてイエスに曰けるはヘロデ爾を殺さんとする故に此を離往三二答て曰けるは爾曹ゆきて其狐に告よ我今日明日惡鬼を逐出し病を醫し第三日に此事をはらん三三然ども今日明日また次日は我かならず行べし蓋預言者はエルサレムの外に殺るること有ねば也三四噫エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し爾に遣されし者を石にて撃る者よ母鷄の雛を翼の下に集むる如く我なんぢの赤子を集んと爲しこと幾回ぞや爾曹は欲ず三五視よ爾曹の家は墟と爲て遺さるべし誠に我なんぢらに告ん主の名に託て來る者は福なりと爾曹いはん時いたる迄は我を見ざるべし

第一四章

一イエス安息日に食事の爲ある宰なるパリサイの人の家に入しに人々かれを窺たり二其前に腹脹を患ひたる人ありしかば三イエス應て教法師とパリサイの人々に曰けるは安息日に醫す事は宜や否四かれら默然たりイエスかの人を執へ醫して之を去しめ五彼等に答て曰けるは爾曹のうち誰か驢馬あるひは牛などの阱に陷たらんに安息日には遽かに曳出さざる乎六彼等この言に就て對ること能ざりき

七斯て其席に請れたる人々の首席を擇を見てイエス譬を以て彼等に曰けるは八なんじ婚筵に請れんとき首座に坐すること勿れ恐くは爾より尊人まねかれなば九彼と爾と請し者きたりて此人に座を譲れと曰ん然ば爾羞て末座に往べし一〇是故に爾まねかれん時は往て末座に坐せよ請し者きたりて友よ首座に進と爾に言ば同席の者の前に爾尊まるべし一一凡そ自ら高ぶる者

は卑され自ら卑だる者は高くせらるべし一二又かれを請る者に曰けるは爾午餐あるひは晩餐を設るとき朋友兄弟親戚また富る隣の人を請なかれ恐くは彼等また爾を請て其報答を爲ん一三爾筵を爲ば貧乏、癈疾、跛者、瞽者などを請け一四然ば爾福なるべし蓋彼等は爾に報ること能ず義き人々の甦らん其時なんぢら報答あれば也一五同に食せる者の一人之を聞てイエスに曰けるは神の國に食する者は福なり一六イエス彼に曰けるは或人おほいなる筵を設て多賓を請けり一七筵のとき僕を其請たる者に遣して百物はや備たれば來るべしと言せけるに一八彼等みな同く辭ぬ其始の者かれに曰けるは我田地を買たれば往て視ざるを得ず願くは我を允し給へ一九又一人の者いひけるは我五耦の牛を買たれば之を試むる爲に往ん願くは我を允し給へ二〇又一人の者いひけるは我妻を娶たり是故に往ことを得ざる也二一其僕かへりて此事を主人に告ければ主人怒て其僕に曰けるは速かに邑の衢巷に往て貧者、癈疾、跛者、瞽者などを此に引來れ二二僕曰けるは主よ命の如く行り然ど尚あまりの座あり二三主人僕に曰けるは道路や藩籬の邊にゆき強て人々を引來り我家に盈しめよ二四我なんぢらに告ん彼まねきたる人々は一人だに我餐を甞ふ者なし

二五多の人々イエスと偕に行しがイエス顧みて彼等に曰けるは二六凡そ我に來てその父母妻子兄弟姉妹また己の生命をも憎む者に非ざれば我弟子と爲ことを得ず二七又その十字架を任ずして我に從ふ者は我弟子と爲ことを得ず二八なんぢら誰か城を築かんに先坐して其費この事の竣までに足や否を計ざらん乎二九恐くは基を置て之を成能ずば見者みな嘲笑て三〇此人は築始て成遂ざりしと曰ん三一また王いでて他の王と戰はんに先坐して此一萬人をもて彼が二萬人に敵すべきや否やを籌ざらん乎三二もし及ずば敵なほ遠れる時に使を遣して和睦を求べし三三然ば此の如く爾曹その所有を盡く捨ざる者は我弟子と爲ことを得ず三四鹽は善物なり然ども鹽その味を失はば何をもて之に味を和んや三五田にも糞にも益なく外に棄らるるなり耳ありて聽る者は聽べし

第一五章

一さて稅吏と罪ある者どもイエスに聽んとて近よりければ二パリサイの人と學者たち譏誚て曰けるは此人は罪ある人に接りて共に食せり三イエス此譬を彼等に語て曰けるは四爾曹のうち誰か一百の羊あらんに若その一を失はば九十九を野におき往て其失し羊を獲までは尋ざらん乎五尋得ば喜て之を己の肩に負六家に歸て其友と其鄰の人々を召集て曰ん我と共に喜べ我うしなへる羊を獲たれば也七われ爾曹に告ん此の如く一人の罪ある人悔改なば悔改むるに及ざる九十九の義人よりは尚天に於て喜あらん八また婦のうち誰か金錢十枚をもち其の一枚を失はんに燈火を燃て家を掃除し之を獲までは切に尋ざらん乎九尋

得ば其友と其鄰の人々を召集て曰ん我と共に喜べ我うしなへる金錢を獲たれば也一〇われ爾曹に告ん此の如く一人の罪ある人悔改めなば神の使の前に喜あるべし

一一また曰けるは或人子二人あり一二その季子父に曰けるは父よ我得べき業を我に分予よ父その産を彼等に分たれば一三幾日も過ざるに季子その産を盡く集て遠國へ旅行せしが放蕩にして其分資を皆そこにて耗せり一四盡く耗ししとき大なる饑饉その地に有て彼ともしく爲はじめければ一五往て其地の一民に身を投たり其人豕を牧ために彼を野に遣せり一六かれ豕の食する所の豆莢をもて己が腹を果さんと欲ふほどなれど何をも彼に予る人なし一七自ら省悟て曰けるは我父の所には食物あまれる傭人の許多か有に我は飢て死んとす一八起て我父に往て曰ん父よ我天と爾の前に罪を犯たれば一九爾の子と稱るに足ざる者なり爾の傭人の一人の如く我を爲たまへと二〇即ち起て其父に往り尚とほく有しに其父かれを見て憫み趨往其頸を抱て接吻しぬ二一子父に曰けるは父よ我天と爾の前に罪を犯たれば爾の子と稱るに足ざる也二二父その僕等に曰けるは至も美服を携來りて之に衣せ其指に環をはめ其足に履を穿せよ二三また肥たる犢を牽來りて宰れ我儕食して樂まん二四是わが子死て復生うしなひて復得たれば也とて彼等と共に樂み始む二五その兄田に在しが歸て家に近き樂と舞の音を聞二六その僕の一人を召て是何事ぞやと問るに二七僕曰けるは爾の弟歸りたり恙なく彼を得たりしに因て爾が父肥たる犢を宰たるなり二八兄いかりて入ず是故に其父いでて彼に勸しかば二九父に答て曰けるは我多年なんぢに事て未だ爾の命に背ず然ども我友と樂む爲に羔をも予し事なし三〇然に妓の爲に爾の業を耗したる此なんぢが子かへれば之が爲に肥たる犢を宰れり三一父かれに曰けるは子よ爾は常に我と共に在また我所有は皆なんぢの屬なり三二爾の弟死て復生うしなひて復得たるが故に我儕喜て樂むは當然の事なり

第一六章

一イエス又その弟子に曰けるは或富る人に操會者ありけるが主の所有を耗ししと主人へ訴へらる二主人操會者を呼て曰けるは爾に就て我ききたる事は何ぞや今後なんぢを操會者と爲えざれば其會計たる條件を我に辨よ三操會者みづから意るは主人我操會を奪なば何を爲ん我鋤を執には力なく施を乞は恥かしし四われ操會を奪れん時は是等の家に迎らるべき所爲を知りとて五遂に主人の負債人を悉く召て其首の者に曰けるは爾わが主に負債なにほどある乎六答ていふ油百斗なり彼に曰けるは爾の券書を取いそぎ坐して五十と書よ七又一人に曰けるは爾の負債幾何あるや答ていふ小麥百斛なり彼に曰けるは爾の券書を取て八十と書よ八主人その所爲の巧なるに因て此不義なる操會者を譽たり夫この世の子輩は此世に於は光の子輩よりも尤も巧なり九我なんぢらに告ん不義の財を以て己が友を得よ此は乏か

らん時彼ら爾曹を永遠宅に接んが爲なり一〇小事に忠き者は大事にも忠く小事に忠からざる者は大事にも忠からず一一故に若なんぢら不義の財に忠からずば誰か眞の財を爾曹に託んや一二爾曹もし人の所有に不義ならば誰か爾曹の所有を爾曹に與んや一三一人の僕は二人の主人に事ること能ず蓋これを惡かれを愛し或は此を重んじ彼を輕んずれば也なんぢら神と財に兼事ること能ず一四慾ふかきパリサイの人々此事を聞てイエスを嘲哂たり一五イエス彼等に曰けるは爾曹は人々の前に自己を義とする者なり然ども神は爾曹の心を知り夫人の崇ぶ所の者は神の前に惡るる者なり一六律法と預言者はヨハネまでなり其のち神の國は宣傳らる皆用力て之に入んと爲なり一七天地の廢るは律法の一畫の廢るよりも易し一八凡そ其妻を出して他の者を娶ば姦淫を行ふ也また夫に出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり一九爰に富る人あり紫袍と細布を衣て日々奢樂めり二〇亦ラザロと云る貧者あり甚く腫物を患て富る人の門に置れ二一其案より落る餘屑にて養はれんと欲へり又犬きたりて其腫物を舐二二貧者死たれば天の使者たちに依てアブラハムの懷に送れたり富る人も死て葬られしが二三陰府にて痛苦をうけ其目をあげ遙にアブラハムと其懷に在ラザロを見て二四喊叫びいひけるは父アブラハムよ我を憐みラザロを遣して其指の尖を水に蘸わが舌を涼しめ給へ我この火燄の中に苦めばなり二五アブラハム曰けるは子よ爾は生たりし時に爾の福を受またラザロは其苦を受しを憶へ今かれは慰られ爾は苦めらるるなり二六斯耳ならず此より爾曹に渉んとするとも得ず彼より我儕に渉んとするとも亦えざる爲に我儕と爾曹との間に限おかれたる巨なる淵あり二七答けるは然ば父よ願くは我父の家へラザロを遣たまへ二八蓋われに五人の兄弟あり亦かれらが此苦の所に來ざる爲にラザロを證據に爲しめよ二九アブラハム曰けるは彼等にはモーセと預言者あれば之に聽べし三〇答けるは然ず父アブラハムよもし死より彼等に往者あらば悔改べし三一アブラハム曰けるは若モーセと預言者に聽ずば縱ひ死より甦る者ありとも其勸を受ざるべし

第一七章

一イエス弟子に曰けるは躓さるる事かならず來らん其を來らす者は禍なる哉二この小子の一人を躓するよりは磨石を頸に懸られて海に投入られんこと其人の爲に宜るべし三自己を謹愼よ若兄弟なんぢに罪を犯さば之を諫よ彼もし悔なば免せ四もし一日に七次罪を爾に犯して一日に七次なんぢに對われ悔と曰ば免すべし

五使徒主に曰けるは我儕に信を益せよ六主いひけるは爾曹もし芥種一粒ほどの信あらば此桑樹に拔て海に植れと曰ども爾曹に從ふべし七誰か爾曹の中に或は耕し或は畜を牧僕あらんに彼田より歸たる時亟かに往て食に就といふ者あらん乎八反て曰

ずや我食を備わが食飲をはるまで帯を束われに事て後なんぢ食飲すべしと九 僕主人の命ぜし事に從へばとて主人かれに謝すべきか然じと我は意り一〇 斯ば亦なんぢら命ぜられし事をみな行たる時も我儕は無益の僕なすべき事を行たるなりと謂

一一 イエス、エルサレムに往ときサマリアとガリラヤの中を經一二 ある村に入しとき十人の癩者ありて彼にあひ遙に立て聲を揚いひけるは一三 師イエスよ我儕を矜恤たまへ一四 イエス之を見て曰けるは往て己を祭司に見せよ彼等ゆく間に潔られたり一五 その一人己が醫されたるを見て返來り大聲に神を榮め一六 イエスの足下に俯伏して謝せり彼はサマリア人なり一七 イエス答て曰けるは潔られし者は十人に非や其九人は何處に在か一八 この異邦人の外に神を榮を歸せんとて返たる者あらざる乎一九 また彼に曰けるは起て往なんぢの信仰なんぢを救り二〇 神の國は何の時きたる乎とパリサイの人に問れければイエス答て曰けるは神の國は顯れて來ものに非ず二一 此に視よ彼に視よと人の言べき者にも非ず夫神の國は爾曹の衷に在二二 また弟子に曰けるは爾曹人の子の一日を見たく欲ふ日來らん然ども見ざるべし二三 人々なんぢらに此に見よ彼に見よと曰ん然ども往なかれ從ふ勿れ二四 それ電光の天の彼處より閃き天の此處に光るが如く人の子も其日に如此あるべし二五 然ど人の子かならず先おほくの苦を受また此世の人に棄られん二六 ノアの時に有し如く人の子の時にも然あるべし二七 即ちノア方舟に入し日まで衆人食飲、嫁、娶など爲たりしが洪水きたりて彼等を滅せり二八 又ロトの時にも如此ありき人々食飲、貿易、樹藝、構造など爲たりしに二九 ロト、ソドムより出し日天より火と硫黄を雨せて彼等を皆滅せり三〇 人の子の顯る日にも亦斯有べし三一 其日には人屋上に在ば其器具室に在とも之を取んとて下なかれ亦田畑にある者も同く歸なかれ三二 ロトの妻を憶へ三三 凡そ其生命を救んとする者は之を失ひ若その生命を失はん者は之を存べし三四 我なんぢらに告ん其夜ふたり同床に在んに一人は執れ一人は遺さるべし三五 二人の婦ともに磨ひき居んに一人は執れ一人は遺さるべし三六 [なし] 三七 かれら答て曰けるは主よ此事何處に有や彼等に曰けるは屍の在ところには鷲あつまらん

第一八章

一 イエスまた人の恆に祈禱して沮喪すまじき爲に譬を彼等に語けるは二 或邑に神を畏ず人を敬はざる裁判人ありけるが三 其邑に嫠婦ありて我を我仇より救たまへと曰て彼に至しに四 かれ久く肯はざりしかど其のち心の中に思けるは我神を畏ず人をも敬はざれど五 此嫠われを煩せば彼が絶ず來て我を聒さざる爲に之を救はん六 主いひけるは不義なる裁判人の言し事を聽七 況て神は晝夜祈る所の選たる者を久く忍とも終に救ざらんや八 我なんぢらに告ん神は速に彼等を救はん然ど人の子きたらんとき信を世に見んや

九又みづから義と意ひ人を輕むる或人にイエス此譬を語れり一〇二人祈んとて殿に登りしが其一人はパリサイの人一人は税吏なりき一一パリサイの人たちて自ら如此いのれり神よ我は他の人の如く強索、不義、姦淫せず亦此税吏の如くにも有ざるを謝す一二われ七日間に二次斷食し又すべて獲ものの十分の一を獻たり一三税吏は遠に立て天をも仰ぎ見ず其胸を拊て神よ罪人なる我を憐み給と曰り一四我なんぢらに告ん此人は彼人よりは義と爲れて家に歸たり夫すべて自己を高る者は卑られ自己を卑す者は高らるべし

一五イエスに按られんがため人々嬰孩を携來りしに弟子たち見て之を責たり一六イエス嬰孩を呼び弟子に曰けるは嬰孩を我に來せよ彼等を禁る勿れ神の國に居者は是の如き者なり一七誠に爾曹に告ん凡そ嬰孩の如に神の國を承ざる者は之に入ことを得ざる也

一八或宰とふて曰けるは善師よ永生を嗣ために我なにを行べき乎一九イエス彼に曰けるは何ぞ我を善と稱や一の外に善者はなし即ち神なり二〇誡は爾が知ところなり姦淫する勿れ殺なかれ竊なかれ妄證を立る勿れ爾の父と母とを敬へ二一答けるは是みな我幼より守れる者なり二二イエス之を聞て曰けるは爾なほ一を虧その所有を悉く售て貧者に施せ然ば天に於て財あらん而して來り我に從へ二三かれ大に富る者なりしかば之を聞て甚く憂たり二四イエスその甚く憂しを見て曰けるは富る者の神の國に入は如何に難かな二五富る者の神の國に入より駱駝の針の孔を穿は却て易し二六之を聞る者ども曰けるは然ば誰か救を受べき乎二七イエス曰けるは人の爲得ざる所は神の爲得ところ也二八ペテロ曰けるは我儕一切を捨て爾に從へり二九イエス彼等に曰けるは誠に爾曹に告ん凡そ神の國の爲に家あるひは父母あるひは兄弟あるひは妻あるひは兒女を捨る者は三〇今世にて幾倍をうけ來世には永生を受ざる者なし

三一イエス十二の弟子を携ひて之に曰けるは我儕エルサレムに上る人の子に就て預言者の録されし事はみな應らるべし三二夫人の子は異邦人に解され戲弄凌辱られ唾せらるべし三三且かれら鞭撲て之を殺さん又第三日に甦るべし三四弟子この語を少も達ず亦この言る事かれらに隱たり亦その語れる言を知ざりき

三五イエス、エリコに近よれる時ある瞽者道の旁に坐して乞たりしが三六大衆の過を聞て此は何事ぞと曰ければ三七人々ナザレのイエスの過なりと告三八瞽者よばはり曰けるはダビデの裔イエスよ我を矜恤たまへ三九前だち行者ども默止と之を斥れども愈ダビデの裔よ我を矜恤たまへと呼れり四〇イエス立止り彼を携來と命ず瞽者ちかよりければ四一イエス彼に問けるは爾われに何を爲れんと欲ふや答けるは主よ見なん言を欲ふ四二イエス彼に曰けるは見ことを受よ爾の信なんぢを救へり四三彼やがて見え神を榮てイエスに從ひぬ民みな之を見て神を讚美たり

第一九章

一イエス、エリコに入て經行とき二ザアカイと云る人あり稅吏の長にて富る者なり三イエスは如何なる人なるか見んと欲ども身量ひくければ大衆なるに因て見ことを得ず四彼を見んとて趨ゆき桑樹に升れりイエスその道を通んとする故なり五イエス此に來り仰て彼を見いひけるはザアカイよ速き下れ我今日かならず爾の家に宿らん六彼いそぎ下り喜てイエスを迎たり七衆人これを見てみな怨言いひけるは彼は往て罪ある人の客と爲れり八ザアカイ起て主よ我所有の半を貧者に施さん若われ誣訟て人より收たる所あらば四倍にして之を償のふべし九イエス彼に曰けるは今日この家すくはるることを得たり蓋この人もアブラハムの裔なれば也一〇それ人の子は喪ひし者を尋て救ん爲に來れり一一衆人この言を聞る時また譬を設て曰り此はエルサレムに近かつ衆人神の國たたちに顯明るべしと意が故なり一二ある貴者みづから領地を受て歸んとて遠國へ往とき一三十人の僕を召て彼等に金十斤を予て曰けるは我來まで商賣せよ一四その國民かれを憾て後により使を遣し曰けるは我儕この人を王とする事を欲ず一五領地を受て歸し時おのおの商賣して幾何の利を得たるかを知んとて金を予おきたる僕等を召と命じぬ一六初の一人きたりて曰けるは主よ爾の一斤は十斤の利を得たり一七主人いひけるは愈善僕よ爾は少者に忠なれば十の邑を宰どるべし一八また次の一人きたりて曰けるは主よ爾の一斤は五斤の利を得たり一九主人曰けるは爾も五の邑を宰どるべし二〇また一人きたりて曰けるは主よ爾の一斤は此に在われ手巾に裹て藏置たりき二一蓋なんぢ嚴人なるが故に我おそれたり爾置ざる者をとり播ざる者をかる人なればなり二二主人いひけるは惡僕よ我なんぢの口に因て爾を鞫べし爾われは嚴者にて置ざる者を取まかざる者を穫と知二三然に何ぞ我來るとき本と利を得んが爲に我金を兌錢肆に預ざりしや二四遂に傍に立る者に曰けるは此人の一斤を取て十斤有る者に予よ二五衆人主人に曰けるは主よ其人すでに十斤を有り二六主人いひけるは我なんぢらに告ん夫有者は予られ不有者は其所有ものまでも取るべし二七且わが敵すなはち我支配を欲ざる者を此に曳來りて我前に誅せ二八イエス此事を言しのち衆人に先だちてエルサレムに上れり二九橄欖と名る山に靠るベテパゲとベタニヤに近づける時その弟子二人を遣さんとて曰けるは三〇對面の村にゆけ彼處に入ば人の未だ乘ざる所の繫たる驢駒に遇べし其を解て牽來れ三一もし誰か爾曹に何ゆゑ解やと問者あらば如此こたふべし主の用なり三二遣されたる者往ければ果て其語たまへる如く遇ぬ三三かれら驢駒を解とき其主等かれらに何ぞ驢駒を解やと曰しかば三四答て主の用なりと曰て三五之をイエスに牽來り己が衣を驢駒に置イエスを其上に乘三六イエス往けるとき衆人その衣を路上に布り三七イエス、エルサレムに近づき橄欖山を下らんとする時大衆の弟子みな喜び其見し所の奇跡なる凡の能に因て大聲に神を讚て曰ける

は二八主の名に託て來る王は福なり天に於ては和平に至上所にては榮光あるべし三九大衆の中より或パリサイの人イエスに曰けるは師よ爾の弟子を責めよ四〇彼等に答けるは我なんぢらに告ん此輩もし默止なば石號呼べし四一既に近づけるとき城中を見て之が爲に哭いひけるは四二もし爾だにも今この爾の日に於て爾の平安に關れる事を知ば福なるに今なんぢの目に隱たり四三爾の敵なんぢの周邊に壘を築き四方より圍攻四四爾と其中なる兒女を擊滅し石をも石の上に遺ざる日きたらん是なんぢ其眷顧たまふの時を知ざれば也四五イエス殿に入その中にて貿易せる者を逐出し四六彼等に曰けるは我室は祈禱の殿なりと錄されたるに爾曹これを盜の巣と爲り四七イエス日々に殿にて教ふ祭司の長學者民の尊者ども彼を殺んと謀れども民みな心を傾けて其教を聽るが故に四八爲べき方を知ざりき

第二〇章

一 一日イエス殿にて民を教へ福音を宣しに祭司の長學者長老共に近よりイエスに語て曰けるは二何の權威を以て此事を行か誰この權威を予たるか我儕に告よ三答て曰けるは我も一言なんぢらに問ん且われに告よ四ヨハネのバプテスマは天よりか人よりか五彼等たがひに曰けるは若天よりと云ば然ば何故かれを信ぜざる乎と曰ん六もし人よりと云ば民みなヨハネを預言者と信ずれば我儕を石にて擊んとて七遂に答て奚よりなるか知ずと曰り八イエス彼等に曰けるは我も亦なにの權威を以て之を行かを爾曹に告じ

九即ち此譬を民に語れり或人葡萄圃をつくり農夫に租與て久しく他國へ往しが一〇期いたりければ葡萄圃の果を受收ん爲に僕を農夫の所に遣しけるに農夫等これを撲たたきて徒く返せり一一また他の僕を遣ししに之をも撲たたき辱しめて徒く返せたり一二又三次僕を遣ししに之をも傷けて逐出しければ一三葡萄圃の主曰けるは我いかに爲ん我愛子を遣すべし之を見ば恭敬ならん一四農夫ども之を見て互に議いひけるは此は嗣子なり率かれを殺さん業は我儕の所有になる可とて一五彼を葡萄圃の外に出して殺せり然ば葡萄圃の主いかに彼等を處べき乎一六かれ來て此農夫等を滅し葡萄圃を他人に託べし人々これを聞て曰けるは然は有ざれ一七イエス彼等を見て曰けるは匠人の棄たる石是こそ屋隅の首石となれと錄されしは何ぞや一八此石の上に墮るものは壞この石上に墮れば其もの碎るべし一九祭司の長學者等その己を指て此譬を語たるを知この時イエスを執へんと爲しかども民を畏たり二〇即ち之を窺ひその言を取て方伯の政事の權威に解さんとして自ら義人と僞れる間者を遣せり二一就てイエスに問けるは師よ我儕なんぢの言ところ教るところ正くかつ偏らず誠を以て神の道を教るを知二二われら稅をカイザルに納るは宜や否二三イエスその詭譎なるを知て曰けるは何ぞ我を試るや二四デナリを我に見せよ此像と號は誰なるか答てカ

イザルなりと曰二五 イエス曰けるは然ばカイザルの物はカイザルに納め神の物は神に納よ二六 かれら民の前に其言を執得ず且その答を奇と意て默然たり

二七 甦る事なしと言サドカイの人きたりてイエスに問けるは二八 師よモーセ我儕に書遺は若人の兄弟妻あり子なくして死ば兄弟その妻を娶り子を生て其嗣を繼すべしと二九 然ば七人の兄弟あらんに長子妻を娶り子なくして死三〇 第二の者この婦を娶り子なくして死三一 第三も之を娶り七人同く之を娶り子なくして死三二 終に婦も死たり三三 然ば七人ともに此婦を妻とせし故に甦りたる時は誰の婦と爲べき乎三四 イエス答て曰けるは此世の子は娶 嫁ことあり三五 彼世に入り死より復生に足ものは娶嫁ことなし三六 是また死ること能ざるが故なり蓋天の使を侔く復生の子にて神の子なれば也三七 さて死し者の甦ることに就てはモーセ棘中の篇に主をアブラハムの神イサクの神ヤコブの神と稱て之を明白せり三八 それ神は死たる者の神に非ず生る者の神なり蓋神の前には皆生る者なれば也三九 その學者等こたへ曰けるは師よ善いへり四〇 此のち敢てイエスに問者なかりき

四一 イエス彼等に曰けるは人々如何なればキリストをダビデの裔と言や四二 四三 ダビデ自ら詩の篇に主わが主に曰けるは我なんぢの敵を爾の足凳と爲まで我が右に坐すべしと言り四四 然ばダビデ之を主と稱たれば如何で其裔ならん乎四五 民みな之を聽る時その弟子にいひけるは四六 長 服を衣て遊行ことを好み市上にて人の問安會堂の高坐筵間の上坐を喜ぶ學者を愼めよ四七 彼等は嫠 婦の家を呑いつはりて長 祈をなす審判ること尤も重し

第二一章

一 イエス目をあげ富る人々の捐輸を賽錢箱に投るを見る二 又ある貧き嫠 婦のレプタ二を投たるを見て曰けるは三 われ誠に爾曹に告ん此貧き嫠は衆の者よりも多く投たり四 蓋かれらは皆その羨餘ある所より捐輸を神にささげ此婦は不足ところより其所有を盡く獻たれば也

五 また或人殿の美石と奉納物を以て修飾ることを語しに六 イエス曰けるは爾曹の見る所のもの石を石の上にも遺ず圮さるる日いたらん七 彼等とふて曰けるは師よ何の時この事あらん正に此の事の來らん時は如何なる兆ある乎八 イエス曰けるは爾曹つつしみて惑さるる事なかれ蓋おほくの者わが名を冒きたり我はキリストなり時は近よれりと云ん然ど爾曹從ふ勿れ九 戰 亂を聞とき懼るる勿れ此等の事の先に有は止を得ざること也然ど末期は未だ速ならず一〇 又曰けるは民は民をせめ國は國を攻一一 各 處に大なる地震、饑饉、疫病おこり且おそるべき事と大なる休徵天より現るべし一二 此事より先に人々爾曹を執へ苦め會堂および獄に解し我名の爲に王および侯の前に曳往べし一三 然ども爾曹が此事に遇は證と爲なり一四 故に爾曹まづ何を對んと

思慮まじき事を心に定よ一五 蓋すべて爾曹に仇する者の辨駁また敵對ことを爲えざるべき口と智とを我なんぢらに賜へん一六 又なんぢら父母、兄弟、親戚、朋友等より解され且汝らの中ある者は殺さるべし一七 爾曹わが名の爲に人々に憾れん一八 然ども爾曹の首髮一縷も喪はじ一九 なんぢら忍耐て其生命を全うせよ二〇 なんぢら軍勢にエルサレムの圍るるを見なば其亡ちかきに在と知二一 その時ユダヤに在者は山に逃よエルサレムに在者は出よ郷下に在者はエルサレムに入なかれ二二 これ刑罰の日にして録されたる事のみな應らるる日なり二三 其日には孕たる者と哺乳兒ある者は禍なる哉これ地に大なる災ありて怒この民に及べければ也二四 人々刀刃に斃れ且とらはれて諸國に曳れエルサレムは異邦人の時滿るまでは異邦人に蹂躙さるべし二五 また日月星に異象あるべし地にては諸國の人哀み海と波との瀬涛に因て顚沛二六 人々危懼つつ世界に來んとする事を俟憫むべし是天の勢ひ震動すべければ也二七 其時人々は人の子の權威と大なる榮光を以て雲に乘來るを見るべし二八 此等の事の成初ん時には起て爾曹の首を翹よ蓋なんぢらの贖ちかづけば也二九 イエス譬を彼等に語けるは無花果と凡の樹を見よ三〇 既に萌ば爾曹これを見て自ら夏はや近と知三一 此の如く爾曹も此等の事成を見ば神の國の近を知三二 誠に我なんぢらに告ん此事みな成までは此世は逝ざるべし三三 天地は廢るべし然ども我言は廢る可らず三四 爾曹みづからを愼よ恐くは飮食に耽り世事に累れ爾曹の心昏迷なりて慮よらざる時に此日なんぢらに臨ん三五 これ機檻の如く遍く地の上に居者に臨むべし三六 是故に爾曹儆醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈れ三七 イエス晝は殿にて教へ夜は出て橄欖と云る山に宿ぬ三八 民みな彼に聽んとて朝はやく殿に來れり

第二二章

一 逾越と云る除酵節近けり二 祭司の長學者たち如何してかイエスを殺さんと窺ふ但民を畏たり三 偖サタン十二の中のイスカリオテと稱るユダに入ぬ四 かれ祭司の長たちと殿司等に往如何してかイエスを付さんと語ければ五 彼等喜びて銀子を予んと約す六 ユダ諾ひて人々の居ざる時にイエスを付さんと機を窺へり

七 さて除酵節なる逾越の羔を殺べき日になりければ八 イエス、ペテロとヨハネを遣さんとて曰けるは往て我儕が食せん爲に逾越を備よ九 かれら答けるは何處に之を備んと爲か一〇 イエス曰けるは城下に入ば水を盛たる瓶を挈る人なんぢらに遇べし其入ところの家に隨ひ往て一一 家の主に師なんぢに云われ弟子と共に逾越を食すべき客房は何處に在やと曰一二 然すれば彼そなへたる大なる樓房を示すべし其處に備よ一三 彼等ゆきてイエスの曰給ひたる如く遇しかば逾越の備を爲り一四 時至ければイエス食に就ぬ又使徒も共に就たり一五 イエス彼等に曰けるは我

苦難を受る先に爾曹と共に此逾越を食すること大に願へり一六われ爾曹に告ん之を神の國に成までは復これを食せじ一七イエス杯をとり謝して曰けるは之を取て互に分よ一八我なんぢらに告ん神の國の來るまでは葡萄より造しものを飲じ一九またパンをとり謝して擘かれらに予て曰けるは此は爾曹の爲に予るわが身體なり我を記ん爲に此を行二〇また食してのち杯をとり曰けるは此杯は爾曹の爲に流す我血にして立る所の新約なり二一夫われを賣す者の手は我と共に案にあり二二人の子は果て定られたる如く逝ん然ども人の子を賣す人は禍なる哉二三かれら此事を爲ん者は誰なる乎と互に問ぬ二四また彼等の中にて長たる者は誰なるかと互の爭ありき二五イエス彼等に曰けるは異邦人の王は其民を支配す又その上に權を秉者は恩を施す者と稱らる二六然ども爾曹は如此すべからず爾曹のうち大なる者は幼が如く首たる者は役る者の如なるべし二七食に就る者と事る者と孰か大なる食に就る者ならずや然ども我は爾曹の中に事る者の如し二八わが患難に於て我と偕に居し者は爾曹なり二九我父の我に任せし如く我も爾曹に國を任ずべし三〇これ爾曹わが國に於て我案に食飲し且位に坐してイスラエルの十二の支派を鞫んが爲也三一主また曰けるはシモンよシモンよサタン爾曹を索めて麥の如く篩んとす三二然ども爾の信仰絶ざるやう爾の爲に祈れり爾歸ん時其兄弟を堅せよ三三シモン曰けるは主よ我獄にまでに死にまでも爾と共に往んと心を定たり三四イエス曰けるはペテロ我なんぢに告ん今日鷄なかざる前に爾三次われを識ずと言ん三五又彼等に曰けるは我財布、旅袋、履をも帶せで爾曹を遣しとき事の缺たること有しや答けるは無りき三六イエス彼等に曰けるは今は財布ある者は之をとれ旅袋ある者も亦然り此等を有ぬ者は衣服を賣て刃を買べし三七我なんぢらに告ん彼は罪人の中に算られて有しと録されたる此言は我に於て應らるべし蓋われを指たる事は必ず成らる可れば也三八彼ら曰けるは主見よ此に二の刃ありイエス彼等に曰けるは足り三九イエス出て例の如く橄欖の山に往けるに其弟子も從へり四〇其處に至て彼等に曰けるは誘惑に入ざるやう祈れ四一イエス彼等を離て石の投るるほど隔り曲膝いのり曰けるは四二父よ若し聖旨に肯ば此杯を我より離ち給へ然ども我意に非ただ聖旨のままに成たまへ四三使者天より彼に現れて健壯を添ぬ四四イエス痛く哀み切に祈れり其汗は血の滴りの如く地に下たり四五祈禱より起て弟子に來り彼等が憂て寢れるを見四六曰けるは何ぞ寢るや起て誘惑に入ざるやう祈れ四七如此いへるとき許多の人々きたる又十二の一人なるユダと云る者其に先ちてイエスに接吻せんと近よれり四八イエス曰けるはユダ爾は接吻をもて人の子を賣す乎四九その側に居たる者等事の及んとするを見て曰けるは主よ我儕刃をもて擊べき乎五〇其中の一人祭司の長僕を擊て其右の耳を削落せり五一イエス答て之を釋せと曰その耳に捫て醫したり五二イエス此に來し祭司の長殿司および長老等に曰けるは爾曹刃と

棒とを持來り強盜に當が如する乎五三 われ日々に爾曹と偕に殿に在し時は我に手を措こと無りき然るに今は爾曹の時かつ黒暗の勢なり五四 彼等イエスを執へ曳て祭司の長の家に携往りペテロ遙に從ひぬ五五 人々中庭のうちに火を燒て同に坐しければペテロも其中に坐したり五六 或婢かれが火の傍に坐せるを見これを熟視て曰けるは此人も彼と偕に在し五七 ペテロ承ずして女よ我これを識ずと云り五八 頃刻して他の人も亦見て曰けるは爾も彼等の一人なりペテロ曰けるは人よ我は然ず五九 約そ一時ほど過て復ほかの人力言けるは誠に此人も彼と偕に在し是ガリラヤの人なれば也六〇 ペテロ曰けるは人よ我なんぢの言ところを識ずと言も果ず忽ち鷄鳴ぬ六一 主身を回してペテロを見たまへり今日鷄なく前に三次われを識ずと言んと主の曰たまひし言をペテロ憶起し六二 外へ出て痛く哭り

六三 イエスを護れる者ども嘲弄して彼を撲六四 其目を掩ひ問て曰けるは爾を撲者は誰なるか預言せよ六五 また多端の事を言て之を譛れり六六 平旦に民の長老、祭司の長、學者ども集りてイエスを集議所に曳往て六七 曰けるは爾もしキリストならば我儕に告よイエス曰けるは假令われ爾曹に言とも信ぜざるべし六八 又たとひ我なんぢらに詰ども答ざるべし六九 今より後人の子は大權ある神の右に坐せん七〇 皆いひけるは然ば爾は神の子なるかイエス曰けるは爾曹の言る如く我は是なり七一 彼等いひけるは猶證據を須んや我儕みづから其口より聞り

第二三章

一 衆人みな起てイエスをピラトに携ゆき二 之を訟いひけるは我儕この人が民を惑し税をカイザルに納ることを禁み自ら王なるキリストと稱るを見たり三 ピラト、イエスに問て曰けるは爾はユダヤ人の王なるか答けるは爾が言る如し四 ピラト祭司の長等と衆人に曰けるは我この人に於て罪あるを見ず五 彼等ますます極力いひけるは彼はガリラヤより始て遍くユダヤを教へ此處まで來て民を亂せり六 ピラト、ガリラヤと聞て此人はガリラヤ人なる乎を問七 其ヘロデの所管なるを知て之をヘロデに遣る此時ヘロデもエルサレムに在しが八 イエスを見て甚だ喜べり蓋各樣なる彼が風聲を聞て久く之を見んことを欲ひ且その奇異なる事を見んと望ゐたれば也九 是故に多言を以て問けれどもイエス何をも答ざりき一〇 祭司の長學者たち側に立て切に彼を訟ぬ一一 ヘロデその士卒と共に彼を藐視嘲弄して華服を衣せ復ピラトに遣れり一二 ピラトとヘロデ先には仇たりしが當日たがひに親を爲り

一三 ピラト祭司の長有司および民等を呼あつめて一四 曰けるは爾曹この人を我に携來りて民を亂したる者なると爲せり我なんぢらが訟る所を以て爾曹の前に鞫ども其罪あるを見ず一五 ヘロデも亦然り爾曹をヘロデに遣せど彼もイエスが行事の死罪に當を見ざりき一六 故にわれ笞ちて之を釋さん一七 蓋この節期に必ず一人を釋こと有ばなり一八 彼等みな一齊よばはりて此人を除き

バラバを我儕に釋せと曰一九 彼は城下に一揆を起し人を殺して獄に入し者なり二〇 故にピラトはイエスを釋さんと欲ひ復かれらに曰しかど二一 かれら呼りて之を十字架に釘よ十字架に釘よと曰二二 ピラト三次いひけるは彼は何の惡事を行しや我いまだ彼の死罪あるを見ざれば笞ちて釋さん二三 彼等厲く聲をたてて彼を十字架に釘んと言募れり遂に彼等と祭司の長の聲勝たり二四 ピラトその求の如く擬て二五 彼等が求る一揆を起し人を殺して獄に入たる者を釋し其意に任せてイエスを付せり二六 彼等イエスを曳往とき田間より出來れるクレネのシモンと云る者を執へ其に十字架を負せてイエスに從はせたり二七 衆の民および婦等も從ふ婦等は彼を哭哀めり二八 イエス彼等を顧いひけるはエルサレムの女子よ我爲に哭なかれ惟おのれと己が子の爲に哭二九 産ざる者いまだ孕ざるの胎いまだ哺せざるの乳は福なりと曰ん日きたらん三〇 當時人々山に對て我儕の上に壓よ陵に對て我儕を掩へと曰ん三一 もし青木にさへ如此なさば枯木は如何せられん

三二 又他に二人の罪人をイエスと偕に死罪に處はんとて曳往り三三 彼等クラニオンと云る所に至りて此にイエス及び罪人を十字架に釘ぬ一人をイエスの右一人をイエスの左に置三四 イエス曰けるは父よ彼等を釋し給へ其爲ところを知ざるが故なり彼等鬮をしてイエスの衣服を分つ三五 人々立てイエスを見たり有司も亦嘲哂ふて曰けるは彼は他人を救へり若キリスト神の選たる者ならば自己を救べし三六 兵卒も亦かれを嘲弄し來り酢を予て三七 爾もしユダヤ人の王ならば自己を救へと曰り三八 又ギリシヤ、ロマ、ヘブルの文字にて此はユダヤ人の王なりと書る罪標を其上に建たり

三九 懸られたる罪人の一人イエスを譏て曰けるは爾もしキリストならば己と我儕を救へ四〇 他の一人こたへて彼を責め曰けるは爾おなじく審判を受ながら神を畏ざる乎四一 我儕は當然なり行ことの報を受なれど此人は何も不是事は行ざりし也四二 斯てイエスに曰けるは主よ爾國に來ん時我を憶たまへ四三 イエス答けるは誠に我なんぢに告ん今日なんぢは我と偕に樂園に在べし

四四 時約そ十二時ごろより三時に至まで遍く地のうへ黒暗と爲れり四五 日光くらみ殿の内の幔眞中より裂たり四六 イエス大聲に呼り曰けるは父よ我靈を爾の手に託く如此いひて氣絶ゆ四七 百夫の長この成し事を見て神を崇め曰けるは誠に此人は義人なりき四八 之を觀んとて衆れる衆人みな此ありし事等を見て膺を拊て返れり四九 イエスの相識の人々およびガリラヤより隨ひし婦ども遠く立て此等の事を見たり

五〇 議員なるヨセフと云る善かつ義なる人あり五一 彼等の評議と行爲を肯ばさりき是はユダヤのアリマタヤの邑の人にて神の國を慕る者なり五二 此人ピラトに往イエスの屍を乞て五三 之を取下し布にて裹いまだ人を葬し事なき石の鑿たる墓に置り五四 此日

は備節日なり且安息日近きぬ五五ガリラヤよりイエスと偕に來りし婦たち後に隨ひて其墓と屍の置れたる狀を見たり五六彼等かへりて香物と香膏を備へ置て誡に從ひ安息日を休めり

第二四章

一七日の首日の昧爽に此婦たち備置たる香物を携て墓に來しに他の婦等も偕に來れり二彼等石の墓より轉たりしを見て三入ければ主イエスの屍を見ず四之が爲に躊躇をりしに輝ける衣服を着たる二人その旁に立り五かれら懼て面を地に伏ければ其人いひけるは爾曹何ぞ死たる者を生たる者の中に尋るや六七彼は此に在ず甦りたり彼ガリラヤに居しとき爾曹に語て人の子は必ず罪ある人の手に付され十字架に釘られ第三日に甦る可と云たりしを憶起よ八彼等その言を憶いで九墓より歸て此等の事をみな十一の弟子と他の弟子等に告一〇此等の事を使徒に告たる者はマグダラのマリア、ヨハンナ、ヤコブの母なるマリア又他に偕に在し婦等なり一一使徒その語れるを虚誕と意ひて信ぜず一二ペテロ起て趨り墓に往かがまりて枲布のかたよせ在を見て其遇ところの事を奇みつつ歸れり

一三當日二人の弟子エルサレムより三里ばかり隔りたるヱマヲと云る村に往けるに一四互に此等の所遇どもを語あへり一五語り論ずる時にイエス自ら近づきて偕に往り一六然ど彼等の目迷されて知ことを得ざりき一七イエス曰けるは爾曹行つつ互に哀み議論ことは何ぞ乎一八その一人のクレオパと云る者答けるは爾はエルサレムの旅人にして獨このごろ有し事を知ざる乎一九答けるは何事ぞや之に曰けるはナザレのイエスの事なり此人は神と萬民の前に於て行と言に大なる能ある預言者なりしが二〇祭司の長と有司等かれを死罪に解して十字架に釘たり二一我儕イスラエルを贖はん者は此人なりと望たりし又それ而已ならず此等の事の成しより今日は第三日なるに二二我儕の中なる或婦たち我儕を驚駭せり彼等朝はやく墓に往二三その屍を見ずして來り天使あらはれて彼は甦れりと云るを見たりと告二四また我儕と偕に在し者も墓に往たるに婦の言る如にて且かれを見ざりき二五イエス曰けるは預言者の凡て言たる事を信ずる心の遲き愚なる者よ二六キリストは此等の難を受て其榮光に入べきに非や二七故にモーセより凡の預言者を始すべての聖書に於て己に就ての事は解明されたり二八彼等ゆく所の村に近きけるに彼ゆき過んと爲る狀をなせば二九彼等勸め曰けるは日昃きて暮に及ぬ我儕と偕に止れ彼いりて止る三〇共に食に就る時パンをとり謝して擘かれらに予ければ三一二人の者の目瞭かに爲て彼を識り又忽ち其目に見ず爲り三二彼等たがひに曰けるは途間にて我儕と語かつ聖書を解開ける時われらが心熱しに非ずや三三此時かれら起てエルサレムに歸り十一の弟子および同なる人の集り居に遇三四その人等の曰けるは主實に甦りシモンに現たり三五二人の者も途間にて所遇とパンを擘たまへるに因て識たる事

を語れり三六 此事を語れる時イエス自ら其中に立て曰けるは爾曹安かれ三七 かれら駭き懼れて見ところの者を靈ならんと意り三八 イエス曰けるは爾曹何ぞ駭くや何ぞ心に疑ひ起るや三九 我手わが足を見て我なるを知われを摸て視よ靈は我が在を爾曹が見ごとく肉と骨は有ざる也四〇 如此いひて其手足を示せしに四一 彼等喜べども猶信ぜず異める時にイエス此に食物ある乎と曰ければ四二 炙たる魚と蜜房を予ふ四三 之を取て其前に食せり四四 また彼等に曰けるはモーセの例預言者の書また詩の篇に録されたる我事につく凡の言の必ず應べきは我もと爾曹と偕に在しとき語れる所なり四五 是に於て聖書を悟せんとて其聽を啓き四六 曰けるは已に斯録されたり如此キリストは苦難をうけ第三日に死より甦るべし四七 又その名に託て悔改と赦罪はエルサレムより始まり萬國の民に宣傳られん四八 爾曹は此等の事の證人なり四九 我わが父の誓のものを爾曹に遺らん爾曹上より權を授らるる迄はエルサレムに留れ五〇 イエス彼等を導きベタニヤに至り手を擧て彼等を祝す五一 祝する時かれらを離れ天に擧られたり五二 彼等これを拜して甚く喜びエルサレムに歸り五三 恆に殿に入て神を頌美また祝謝せりアメン

約翰傳福音書

第一章

一 太初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神なり二 この道は太初に神と偕に在き三 萬物これに由て造る造れたる者に一として之に由らで造れしは無四 之に生あり此生は人の光なり五 光は暗に照り暗は之を曉らざりき

六 偖ここに神の遣し給へるヨハネと云る者あり七 その來りしは證の爲なり即ち光に就て證を作すべての人をして己に因て信ぜしめんが爲なり八 彼は光に非ず光に就て證を作ん爲に來れり九 夫すべての人を照す眞の光は世に來れり一〇 かれ世にあり世は彼に造れたるに世これを識ず一一 かれ己の國に來しに其民これを接ざりき一二 彼を接その名を信ぜし者には權を賜ひて此を神の子と爲り一三 斯る人は血脈に由に非ず情慾に由に非ず人の意に由に非ず唯神に由て生れし也一四 それ道肉體と成て我儕の間に寄れり我儕その榮を見に實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充り

一五 ヨハネ之が證を作て呼いひけるは我さきに我に後れ來らん者は我より優れる者なり蓋我より先に在し者なれば也と言しは此人なり一六 我儕みな彼に充滿たる其中より受て恩寵に恩寵を加らる一七 律法はモーセに由て傳り恩寵と眞理はイエス・キリストに由て來れり一八 未だ神を見し人あらず惟うみ給へる獨子すなはち父の懷に在者のみ之を彰せり

一九 ユダヤ人祭司とレビの人をエルサレムよりヨハネの所に遣し爾は誰ぞと問しめけるとき證せること左の如し二〇 かれ諱す所なく言顯して我はキリストに非ずと明かに曰り二一 また問けるは然ば爾は誰ぞエリヤなるか否と答ふ又なんぢは彼の預言者なる乎と問しに然らずと答たり二二 是に於て彼等また問けるは爾は誰なるか我儕を遣し者に我儕が答を爲得るやう我儕に告よ爾みづから如何に謂や二三 ヨハネ曰けるは我は即ち主の道を直せよと野に呼る人の聲なり預言者イザヤの言るが如し二四 その遣されたる人々はパリサイの人なりき二五 彼等又ヨハネに問て曰けるは然ば爾はキリストに非ずエリヤに非ず彼の預言者にも非ずして何ぞバプテスマを施すや二六 ヨハネ答曰けるは我は水を以てバプテスマを授く然ど爾曹が知ざる所のもの一人爾曹の中に立り二七 我に後れ來りて我に優れる者とは是なり我は其履の紐を解にも足ざる者なり二八 此事はヨハネのバプテスマを施しヨルダンの外なるベタニヤにて有し也

二九 明日ヨハネ、イエスの己に來るを見て曰けるは世の罪を任ふ神の羔を觀よ三〇 我に後れ來らん者は我より優れる者なり蓋我より以前に在し者なれば也と我言しは此人なり三一 われ素より此人を識ず然ど我來て水にてバプテスマを施すは彼をイスラエルの民に顯さんが爲なり三二 ヨハネまた證して曰けるはわれ靈の鴿の如く天より降りて其上に止れるを見たり三三 我は彼を

識ざれど我を遣し水にてバプテスマを施さしめし者われに曰けるは爾　靈くだりて其上に止るを見ん彼は聖靈を以てバプテスマをなす者なり**三四** 我これを見て其神の子たるを證せり**三五** 明日またヨハネ二人の弟子と偕に立**三六** イエスの行を見て神の羔を觀よと曰**三七** 如此いへるを弟子聞てイエスに從ひ往り**三八** イエス彼等の從へるを回顧て爾曹なにを求るやと彼等に問こたへてラビ何處に住るやと曰ラビを譯ば師と云の義なり**三九** イエス彼等に來り觀よと曰たまひければ遂に往て其住り給ふ處を見て是日ともに住れり時は晝の四時ごろなりき**四〇** ヨハネの曰し言を聞てイエスに從へる二人の者の其一人はシモン・ペテロの兄弟アンデレなり**四一** かれ先その兄弟シモンに遇て曰けるは我儕メツシヤに遇りメツシヤを譯ばキリストなり**四二** 即ち彼をイエスに携往しにイエス視て之に曰けるは爾はヨナの子シモンなり爾はケパと稱らるべしケパを譯ばペテロなり

四三 明日イエス、ガリラヤに往んとてピリポにあひ我に從へと曰り**四四** ピリポはアンデレとペテロの住るベテサイダと云る邑の人なり**四五** ピリポ、ナタナエルに遇て曰けるは我儕律法の中にモーセが載たるところ預言者等の記し所の者に遇り即ちヨセフの子ナザレのイエスなり**四六** ナタナエル曰けるはナザレより何の善者いでん乎ピリポ彼に曰けるは來て觀よ**四七** イエス、ナタナエルの己が所に來るを見かれを指て曰けるは視よ眞のイスラエルの人にして其心詭譎なき者ぞ**四八** ナタナエル、イエスに曰けるは如何にして我を知たまふ乎イエス之に答て曰けるはピリポが爾を召ざる先に無花果樹の下に爾の居るを見たり**四九** ナタナエル答て曰けるはラビ爾は神の子なり爾はイスラエルの王なり**五〇** イエス答て曰けるは爾が無花果樹の下に居るを我見しと言るに因て爾信ずるか此よりも大なる事を爾みるべし**五一** 又いひけるは我まことに實に爾に告ん天ひらけて神の使等人の子の上に陟降するを見ん

第二章

一 第三日にガリラヤのカナにて婚筵ありしがイエスの母も此に居り**二** イエスと其弟子も婚筵に請る**三** 葡萄酒罄ければ母イエスに曰けるは彼等に葡萄酒なし**四** イエス彼に曰けるは婦よ爾と我と何の與あらんや我時は未だ至ず**五** その母僕等に向て彼が爾曹に命ずる所の事を行よと曰おけり**六** ユダヤ人の潔の例に從ひて四五斗盛の石甕六かしこに備有しが**七** イエス僕等に水を甕に滿せよと曰ければ彼等口まで滿せたり**八** 又これを今挹取て持ゆき筵を司る者に與せと曰ければ彼等わたせり**九** 筵を司る者酒に變し水を嘗て其何處より來しを知ず然ど水を挹し僕は知り**一〇** 筵を司る者新郎を呼て彼に曰けるは凡そ人はまづ旨酒を進し酒　酣なるに及て魯酒を進に爾は旨酒を今まで留おけり**一一** 其此事をイエスがガリラヤのカナにて行るは休徵の始にして其榮を顯せり弟子かれを信ず**一二** 此後イエスその母兄弟および

弟子等カペナウンに下り其處に居こと久からずして一三ユダヤ人の逾越節ちかづきければイエス、エルサレムに上り一四殿にて牛羊鴿を賣者と兌銀する者の坐せるとを見一五縄をもて鞭をつくり彼等および羊牛を殿より逐出し兌銀する者の金を散し其案を倒し一六鴿を賣者に曰けるは此物を取て往わが父の室を貿易の家とする勿れ一七弟子等なんぢの室の爲に熱心われを蝕んと録されたるを憶起せり一八此にユダヤ人こたへてイエスに曰けるは爾これらの事を爲からには我儕に何の休徵を示るや一九イエス答て爾曹この殿を毀て我三日にて之を建んと曰ければ二〇ユダヤ人いひけるは此殿を建るには四十六年を經しに爾三日にて之を建るか二一イエスの如此いへるは其身の殿を指るなり二二死より甦り給へる後弟子たちイエスの此事を語しを憶起し聖書と彼の曰し言を信ぜり二三偖イエス逾越節にエルサレムに在しに多の人かれの行し休徵を見て其名を信ぜり二四イエス自己を彼等に托ず蓋すべての人を知二五また人の心の中を知が故に人について證を立る者を求ざれば也

第三章

一ユダヤ人の宰にてパリサイのニコデモと云る人あり二かれ夜イエスに來て曰けるはラビ我儕なんぢは神より來し師なりと知そは神もし人と偕ならずば爾が行るこの休徵は人これを行こと能ざれば也三イエス答て曰けるは誠に實に爾に告ん人もし新に生ずば神の國を見こと能はじ四ニコデモ彼に曰けるは人はや老ぬれば如何で復生る事を得んや再び母の腹に入て生る可んや五イエス答けるは誠に實に爾に告ん人は水と靈とに由て生されば神の國に入こと能ざる也六肉に由て生る者は肉なり靈に由て生る者は靈なり七我なんぢに新に生るべき事を言しを奇と爲なかれ八風は己が任に吹なんぢ其聲を聞ども何處より來り何處へ往を知ず凡て靈に由て生る者も此の如し九ニコデモ答て如何で此事あらん乎と曰一〇イエス答て曰けるは爾はイスラエルの師なるに猶この事を知ざる乎一一誠に實に爾に告ん我儕知し事をいひ見し事を證するに爾曹は我儕の證を受ず一二若われ地の事を言に爾曹信ぜずば況て天の事を言んには何で信ずることを爲んや一三天より降り天にをる人の子の外に天に升し者なし一四モーセ野に蛇を擧し如く人の子も擧らるべし一五凡て之を信ずる者に亡ること無して永生を受しめんが爲なり一六それ神が其生たまへる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信ずる者に亡ること無して永生を受しめんが爲なり一七神の其子を世に遣し給へるは世を審判んとに非ず彼に由て世を救んが爲なり一八彼を信ずる者は審判れず信ぜざる者は既に審判れたり蓋神の生たまへる獨子の名を信ぜざるに因一九罪の定まる所以は光世に臨しに人その行の惡に因て光を愛せず反て暗を愛すれば也二〇凡て惡をなす者は光を惡み其行を責られざらんが爲に光に就らず二一眞理を行ふ者は其行の顯れんが爲

に光に就る蓋神に遵て行へば也
二二 此後イエス弟子とユダヤの地に至り偕に彼處に留りてバプテスマを施す二三 ヨハネも亦サリムに近きアイノムに在てバプテスマを施す彼處には水おほきが故なり人々來りてバプテスマを受たり二四 此時ヨハネは未だ獄に入られざりき二五 ヨハネの弟子とユダヤ人と潔事に就て爭辨ありけるが二六 彼等ヨハネに來りて曰けるはラビ視よ爾と偕にヨルダンの外に在て爾が證せし者バプテスマを施すに皆かれに來れり二七 ヨハネ答て曰けるは人は天より賜ふに非ざれば受ること能ざる也二八 我はキリストに非ず惟その先に遣されし者なりと言し事を證する者は爾曹なり二九 新婦をもてる者は新郎なり新郎の友たちて其聲を聞ば之に縁て喜び多し我いま此喜び滿ることを得たり三〇 彼は必ず盛んになり我は必ず衰ふべし三一 天上より來る者は萬物の上にあり地より出るものは地に屬その言ところも地の事なり天より來る者は萬物の上に在三二 彼は自ら其見しところ聞し所の事を證と爲に其證を受る者なし三三 その證を受し者は印をもて神の眞なる事を證す三四 神の遣しし者は神の言を語る蓋神これに靈を賜ひて限量なければ也三五 父は子を愛して萬物を其手に授たり三六 子を信ずる者は窮なき生命をえ子に從はざる者は生命を見ことを得じ且神の怒その上に留らん

第四章

一 主おのれの弟子を収ること又バプテスマを施せることヨハネよりも多しとパリサイの人の聞しを知二 然ど其實はイエス自らバプテスマを施せるに非ず弟子これを行るなり三 其時ユダヤを去て復ガリラヤに往四 サマリアを經ずして行こと能ず五 遂にサマリアのスカルと云る邑に至れり此邑はヤコブその子ヨセフに予し地に近し六 此にヤコブの井ありイエス行途の疲倦にて其井の傍に坐せり時は晝の十二時ごろなりき七 一人のサマリアの婦水を汲んとて來りければイエスその婦に向て我に飲せよと曰八 蓋弟子たち食物を買んために邑へ往て在ざりし故なり九 サマリアの婦いひけるは爾はユダヤ人にして何ぞサマリアの婦なる我に飲ことを求るや此はユダヤ人とサマリアの人とは交際を爲ざれば也一〇 イエス答て曰けるは爾もし神の賜を我に飲せよといふ者の誰なるを知ば爾われに求めん然ば活水を爾に予ふべし一一 婦イエスに曰けるは主よ汲器なく井も亦深し爾何處より汲て其活水を有るか一二 この井は我儕の先祖ヤコブの予し所なり彼も其子も亦畜までも皆これを飲たり爾は彼よりも勝れし者ならん乎一三 イエス答て曰けるは凡て此水を飲者はまた渇ん一四 然ど我あたふる水を飲者は永遠かわく事なし且わが予る水は其中にて泉となり湧出て永生に至るべし一五 婦いひけるは主よ我が渇ことなく亦この處に水を汲に來らぬ爲その水を我に予へよ一六 イエス曰けるは爾ゆきて夫を呼來れ一七 婦こたへて曰け

るは我に夫なしイエス曰けるは夫なしと言るは理なり一八 蓋なんぢ曩に五人の夫ありて今ある者は爾の夫に非ず爾の言しは眞なり一九 婦いひけるは主よ我なんぢを預言者と知り二〇 我儕の列祖は此山にて拜ししに爾曹は拜すべき所はエルサレムなりと曰二一 イエス曰けるは婦よ我を信ぜよ唯に此山のみに非ず亦エルサレム而已にも非ずして爾曹父を拜すべき時きたらん二二 爾曹の拜する者を爾曹は知ず我儕の拜する者を我儕は知そは救はユダヤ人より出るが故なり二三 眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時きたらん今その時になれり夫父は是の如く拜する者を要め給ふ二四 神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也二五 婦いひけるはキリストと稱るメッシヤの來らん事を知かれ來らん時凡の事を我儕に告ん二六 イエス曰けるは爾と語る所の我は其なり二七 時に弟子きたりて彼の婦と語れるを奇みけれど其何を求るや又なに故これと語れるか問る者も無りき二八 婦その水瓶を遺して邑にゆき人々に曰けるは二九 我すべて行し事を我に告し人を來りて視よ此はキリストならず乎三〇 是に於て人々邑を出てイエスの所に來る三一 その間に弟子かれに請てラビ食し給へと曰ければ三二 イエス彼等に曰けるは我に爾曹の知ざる食物あり三三 弟子たがひに曰けるは食物を彼に饋し者は誰なる乎三四 イエス彼等に曰けるは我を遣しし者の旨に隨ひ其工を成畢る是わが糧なり三五 なんぢら穫 時になるには猶四ヶ月ありと云ずや我なんぢらに告ん目を擧て觀よはや田は熟て穫 時になれり三六 穫者は其工錢を受て永 生に至るべき實を積む斯て播者と穫者と同に喜ばん三七 彼は播これは穫と云るは之に就て眞なり三八 我なんぢらの勞せざりし所を穫せんとして爾曹を遣せり他の人々勞せしにより爾曹は其勞したる果を受たり三九 かの婦わが行し凡の事を彼われに告しと證せし言に因て其邑のサマリア人おほくイエスを信ぜり四〇 是に於てサマリアの人イエスの所に來りて偕に留り給はん事を求しかばイエス此に二日留れり四一 彼の言に因て信ぜし者前よりも多かりき四二 かれら婦に曰けるは今なんぢの言し事に因て信ずるに非ず我儕みづから聞て此は誠に世の救主と知たれば也

四三 二日すぎてイエス此を去ガリラヤに往り四四 蓋かれ自ら預言者は本土にて尊ばるる事なしと言しに因四五 ガリラヤに至りし時ガリラヤの人々彼を接たり蓋さきに節筵の時イエスのエルサレムにて行ひし凡の事を彼等もその節筵に往て之を見たれば也四六 イエス復ガリラヤのカナに至る此は曩に水を酒に爲し處なり時に王の大臣その子病に係てカペナウンに在ければ四七 イエスのユダヤよりガリラヤに來れる事をきき即ちイエスの所に往てカペナウンに下り其子を醫し給はんことを請りそは瀕死なりければ也四八 イエス彼に曰けるは爾曹休徵と異 能を見ずば信ぜじ四九 彼曰けるは主よ我子の死ざる先に下り給へ五〇 イエス曰けるは往なんぢの子は生るなり其人イエスの曰し言を信じて去ぬ五一 下る時その僕等かれに遇て告けるは爾の子は生

るなり五二彼その愈はじめし時を彼等に問ければ答て昨日の晝の一時に熱さめたりと曰五三父はイエスの爾が子は生る也と言たまひし時と其時の同きことを知て己と其全家ことごとく皆信ぜり五四この第二の奇跡はイエス、ユダヤよりガリラヤに至て行るなり

第五章

一厥後ユダヤ人の節筵ありければイエス、エルサレムに上れり二エルサレムの羊門の邊にヘブルの方言にてベテスダといふ池あり此池に五の廊あり三その中に病者、瞽者、跛者また衰たる者など多く臥ゐて水の動を待り四そは天の使時々池に下て水を動すことあり水の動るのち先ちて池に入し者は何の病によらず愈たり五三十八年病たる者一人かしこに在六イエス彼が臥をるを見て其病の久を知これに曰けるは愈んことを欲ふや七病る者こたへけるは主よ水の動るとき我を扶て池に入る人なし我いらんとする時は他の人くだりて我より先に入八イエス彼に曰けるは起よ床を取収て行め九その人立刻に愈すなはち床を取収て行めり此日は安息日なりき一〇ユダヤ人いえし者に曰けるは今日は安息日なれば爾床を取収は宜からず一一彼等に答けるは我を愈しし者われに床を取収て行めと言り一二かれら問けるは爾に牀を取収て行めと言し人は誰なるぞ乎一三愈し者その誰なるを知ざりき蓋かしこに多の人をりし故イエス避たれば也一四厥後イエス殿にて其人に遇いひけるは視よ爾すでに愈たり復罪を犯こと勿れ恐くは前に勝る災禍なんぢに罹ん一五其人ゆきてユダヤ人に己を愈し者はイエスなりと告一六是に於てユダヤ人イエスを窘迫て殺さんと謀る蓋かれが此事を行しは安息日なりければなり一七イエス彼等に答けるは我父は今に至るまで働き給ふ我もまた働くなり一八此に因てユダヤ人いよいよイエスを殺さんと謀るそは安息日を犯すのみならず神を己が父といひ己を神と齊すればなり一九是故にイエス彼等に答て曰けるは誠に實に爾曹に告ん子は父の行ふ事を見て行ふの外は何事をも行ふこと能ず蓋すべて父の行ふ事を子も亦行へばなり二〇父は子を愛し凡て己の行ふ所の事を彼に示す爾曹をして奇ましめん爲にかの事等より更に大なる事を彼に示さん二一そは父の死し者を甦らせて生しむるが如く子も己の意に從ひて人を生しむべし二二それ父は誰をも鞫ず審判は凡て子に委たり二三是すべての人をして父を敬ふ如く子をも敬はしめんが爲なり子を敬はざる者は之を遣し父を敬はず二四誠に實に爾曹に告ん我言をきき我を遣しし者を信ずる者は永生を有かつ審判に至らず死より生に遷れり二五誠に實に爾曹に告ん死し者神の子の聲を聞とき來らん今その時になれり之を聞者は生べし二六それ父は自ら生を有り其如く子にも賜て自ら生を有たせたり二七また人の子たるに因て之に審判するの權威を賜へり二八之を奇と爲こと勿そは墓に在者みな其聲を聞て出るとき來んとすれば也二九善事を行し

者は生を得に甦り惡事を行し者は審判を得に甦るべし三〇 われ何事をも自ら行ふこと能ず聞ところに遵ひて審判す我審判は公平そは我わが意を行ふことを求ず我を遣し父の意を行ふことを求ればなり三一 もし我事を我みづから證せば我證は眞ならず三二 別に我事を證する者あり我その我事を證する證の眞なるを知三三 なんぢら曩に人をヨハネに遣ししに彼眞理の爲に證を作り三四 然どわれ人の證を受ず此事を言は爾曹の救れんが爲なり三五 ヨハネは燃て光れる燈なり爾曹このみて暫く其光を喜べり三六 我はヨハネより大なる證あり蓋父の我に賜て成遂しむる事すなはち我行ふ所の事は是父の我を遣ししことを證すればなり三七 且われを遣しし父も我ことを證せり爾曹いまだ其聲を聞ず未だ其形を見ず三八 その道は爾曹の心に存ざりき蓋なんぢら其遣しし者を信ぜざるに因て知るる也三九 なんぢら聖書に永生ありと意て之を探索この聖書は我について證する者なり四〇 爾曹わが所に生を得んがため來るを欲ず四一 われ人の榮を受ず四二 われ爾曹を知なんぢらは其心に神を愛するの愛あらざる也四三 我は吾父の名に靠て來しに爾曹われを接ずもし他の人おのが名に靠て來ば爾曹これを接ん四四 爾曹は互に人の榮を受て神より出る榮を求ざる者なるに何で能信ずることを得んや四五 爾曹を父に訴る者と我を意ふ勿れ爾曹を訴るもの一人あり即ち爾曹が恃ところのモーセなり四六 若モーセを信ぜば我を信ずべし蓋モーセ我事を書たればなり四七 若モーセの書し事を信ぜずば何で我言しことを信ぜんや

第六章

一 此後イエス、ガリラヤの湖すなはちテベリアの湖の前岸へ濟しに二 許多の人々これに隨ふ蓋彼が病し者に行し休徵を見しが故なり三 イエス山に上り弟子と偕に其處に坐せり四 時ユダヤ人の逾越の節に邇し五 イエス目を擧て多の人の來れるを見てピリポに曰けるは何處よりパンを市て彼等に食しむ可か六 自ら其爲んとする事を知ど彼を試んが爲に如此いへる也七 ピリポ答けるは銀二百のパンも人ごとに少づつ予てなほ足ざるべし八 弟子の一人即ちシモン・ペテロの兄弟アンデレ、イエスに曰けるは九 此に一人の童子あり麰麥のパン五と小き魚二を有り然どこの許多の人に如何すべきぞ一〇 イエス曰けるは人々を坐せよ其處に多の草あり約そ五千人ほど坐ぬ一一 イエス、パンをとり祝謝て弟子に予へ弟子これを坐し人に予ふ又此の如にして小き魚をも人々の欲に隨ひて彼等に與たり一二 みな飽たる後イエス弟子に曰けるは少も廢はざるやうに其餘の屑を拾集めよ一三 彼等が食せし彼五の麰麥のパンの餘遺の屑を拾 集ければ十二の筐に盈り一四 人々イエスの行し奇跡を見て此は誠に世に臨るべき預言者なりと曰一五 是に於てイエス彼等が來り己を執て王に爲んとするを知ただ獨にて之を避ふたたび山に入たり一六 日の暮るころ弟子海に下て一七 舟に登カペナウンに向て海を濟る既に

暮けれどもイエス彼等に就ず一八狂風ふくに因て漸に海あれいだせり一九一里十町ばかり漕出せる時イエスの海を行み舟に近くを見て弟子たち懼たり二〇イエス曰けるは我なり懼る勿れ二一是に於て弟子喜びて彼をうけ舟に登ければ直に其往んとする所の地に着ぬ

二二明日かなたの海岸に立し人々昨日弟子の登し舟の外には舟なく且イエスは弟子と偕に舟に登ず弟子のみ往るを知二三此時テベリアより外に舟きたり主の祈りて人々にパンを食し所の近に着り二四人々イエスの此に在ず弟子も亦在ざるを見て彼等も舟に登イエスを尋ん爲にカペナウンに至れり二五湖の前岸にて彼に遇曰けるはラビ何時ここに來り給ひし乎二六イエス答て曰けるは誠に實に爾曹に告ん爾曹の我を尋るは休徴を見し故に非ただパンを食して飽たるが故なり二七なんぢら壞る糧の爲に勞かずして永生に至る糧すなはち人の子の予る糧の爲に勞くべし蓋父の神かれに印して證すれば也二八是に因て人々イエスに曰けるは我等如何なる事を行ば神の工に爲べき乎二九イエス答て彼等に曰けるは神の遣し者を信ずるは即ち其工なり三〇彼等いひけるは我儕をして爾を信ぜしむる爲に何の休徴を爲して我儕に示るや何の工を行ふや三一我儕の先祖野にてマナを食へり録して天よりパンを彼等に賜へて食しむと有が如し三二イエス曰けるは誠に實に爾曹に告ん天よりパンを爾曹に賜し者はモーセに非ず今わが父は天より眞のパンをもて爾曹に賜ふ三三神のパンは天より降りて生命を世に賜るもの也三四彼等いひけるは主よ恆に其パンを我儕に予よ三五イエス曰けるは我は生命のパンなり我に就る者は饑ず我を信ずる者は恆に渴ことなし三六然ど我なんぢらが我を見ても信ぜざる事を爾曹に告たりき三七凡て父の我に賜し者は我に就らん我に就る者は我かならず之を棄ず三八わが天より降しは己の意の任を行はん爲に非ず我を遣し者の意のままを行はん爲なり三九凡て父の我に賜し者をわれ一をも失はず末日に之を甦らすは即ち我を遣し父の意なり四〇凡そ子を見て之を信ずる者は永生を得われ復これを末の日に甦らすべし是われを遣し者の意なればなり四一是に於てユダヤ人等イエスの我は天より降しパンなりと言しことにつき四二議いひけるは彼が父母は我儕の識ところならずや即ち彼はヨセフの子イエスに非ずや然るに何ぞ我は天より降しと言や四三イエス答て曰けるは爾曹たがひに議こと勿れ四四我を遣し父もし引ざれば人よく我に就るなし我に就し人は末日に我これを甦らすべし四五預言者の書に人みな教を神に受んと録されたり是故に凡て父より聽て學し者は我に就る四六然ど父を見し者はなし惟神より來る者のみ之を見たり四七誠に實に我なんぢらに告ん我を信ずる者は永生あり四八我は生命のパンなり四九爾曹の先祖は野にてマナを食しかど死り五〇凡て食者をして死ざらしむる者は天より降れるパンなり五一我は天より降し生るパンなり若人此パンを食はば窮なく生べし我あたふるパンは我

肉なり世の生命の爲に我これを賜へん五二爰にユダヤ人たがひに爭ひ曰けるは此人いかで其肉を我儕に賜て食はしむる事を得ん乎五三イエス曰けるは誠に實に爾曹に告ん若の人の子の肉を食ず其血を飮ざれば爾曹に生命なし五四わが肉を食わが血を飮者は永生あり我末の日に之を甦らすべし五五夫わが肉は誠の食物また我血は誠の飮物なり五六わが肉を食ひ我血を飮者は我にをり我も亦かれに居五七生る父われを遣す父に由て我生る如く我を食ふ者も我に由て生べし五八これ天より降れるパンなり爾曹の先祖が食たれど尚死しマナの如きものに非ず此パンを食ふ者は窮なく生べし五九此等の事はイエス、カペナウンの會堂にて教を爲るとき言し所なり六〇弟子等のうち多の人これを聞て曰けるは此は甚しき言なり誰か能これを聽んや六一弟子の此言について讖をイエス自ら知て彼等に曰けるは此言に因て礙く乎六二もし人の子の故の處に升を見ば如何六三生命を賜る者は靈なり肉は益なし我なんぢらに曰し言は靈なり生命なり六四然ど爾曹の中に信ぜざる者あり夫イエスの如此いへるは信ぜざる者は誰おのれを賣す者は誰といふ事を元始より知ばなり六五イエスまた曰けるは是故に我さきに我父あたへざれば人よく我に就るなしと言しなり六六此後その弟子おほく返往てイエスと偕に行ざりき六七之に因てイエス十二の弟子に曰けるは爾曹も亦去んと意ふや六八シモン・ペテロ答けるは主よ我儕は誰に往んや永生の言を有る者は爾なり六九又われら信じて知なんぢは活る神の子キリストなり七〇イエス彼等に答けるは我なんぢら十二人を簡しに非ずや然ど其中の一人は惡魔なり七一此はシモンの子イスカリオテのユダを指て言るなり彼は十二の一人にしてイエスを賣さんとする者なり

第七章

一斯事の後イエス、ガリラヤを經行りユダヤの中を巡ることを欲ざりき蓋ユダヤ人かれを殺さんと謀れば也二偖ユダヤ人の構盧の節ちかづけり三是に於てイエスの兄弟かれに曰けるは爾の行ふ所の事を弟子等に見せんが爲此を去てユダヤに往四蓋己を顯さんとして隱に事をなす者あらず爾これらの事を行はば己を世に顯せよ五是その兄弟もなほ彼を信ぜざるが故なり六イエス彼等に曰けるは我時いまだ至ず爾曹の時は恆に備れり七世は爾曹を惡こと能ず我を惡そは彼等が行ふ所は惡しと我證すればなり八爾曹この節に上れ我時いまだ至らざれば我いまだ此節に上らじ九如此いひてガリラヤに留れり一〇その兄弟の往し後イエスも昭然ならずして隱に節に上る一一節の時ユダヤ人イエスを尋て曰けるは彼は何處に在や一二衆多の中にて彼につき各樣のことを言爭へり或人は彼を善人なりといひ或人は否民を惑す者なりと曰一三然どもユダヤ人を懼るに因て明に彼が事をいふ人なし

一四節筵の半ごろイエス殿に上りて教誨ければ一五ユダヤ人これ

を奇み曰けるは此人は未だ學ばず如何して書を識や一六イエス彼等に答て曰けるは我教る所は我教に非ず我を遣し者の教なり一七人もし我を遣し者の旨に從はば此教の神より出るか又己に由て言なるかを知べし一八己に由て言者は己の榮を求るなり己を遣し者の榮を求る者は眞なり其衷に不義なし一九モーセ爾曹に律法を與しに非ずや然ど爾曹の中には之を守る者なし爾曹なにゆゑ我を殺んと謀るや二〇衆人答へて曰けるは爾鬼に憑たり誰か爾を殺すことを謀らん乎二一イエス答て彼等に曰けるは我さきに一事を行しに爾曹みな奇とせり二二モーセ爾曹に割禮を授しは其己より出しに非して先祖より出し者なるが故なり之に因て爾曹割禮を安息日に行ふ二三人もしモーセの律法を破ざらんがため安息日に割禮を受る時は何ぞ我安息日に人の全身を愈し事を怒るや二四外貌によりて審判する勿れ義審判をもて審判せよ二五此時エルサレムの或人曰けるは此は人々の殺んと謀る者に非ずや二六今かれ明にいふ而して之を尤る者なし有司等は彼を誠にキリストなりと知ならん乎二七然ど我儕は此人の何處より來しを知もしキリストの來らん時は誰も其何處より來るを知者なからん二八此時イエス殿にて教をりしが大聲に呼いひけるは爾曹われを知また我いづこより來るを知されど我は己に由て來しに非ず我を遣し者は眞なる者にて爾曹の知ざる所なり二九我は彼を知そは我は彼より出彼は我を遣しし者なれば也三〇是に於て彼等イエスを執へんと謀れり然ど其時いまだ至ざるが故に措手する者なかりき三一民の中おほくの人かれを信じ曰けるはキリストの來らん時その行ところの休徵この人より多らん乎三二パリサイの人民等のイエスに就て如此ひそかに語あふを聞すなはち祭司の長等とパリサイの人と彼を執んとて下吏を遣せり三三是に於てイエス曰けるは我なほ片時なんぢらと偕にをり而して後われを遣し者に往ん三四なんぢら我を尋るとも遇べからず我をる所へ爾曹きたること能ざるべし三五ユダヤ人相互に曰けるは我儕の遇ざらん爲に彼は何處へ往んとする乎ギリシヤに散し者に往てギリシヤの人を教んとする乎三六彼が語て爾曹われを尋るとも遇べからず又わが在所へ爾曹來ること能ざる可と曰し言は何ぞや

三七節筵の末の大日にイエス立て呼り曰けるは人もし渴ば我に來て飮三八我を信ずる者は聖書に録しし如く其腹より活る水川の如に流出べし三九如此いへるは彼を信ずる者の受んとする靈を指るなり蓋イエス未だ榮を受ざるに因て靈いまだ降ざればなり四〇民の中にて多の人この言を聞て此は誠に彼預言者なりと曰四一或は斯はキリストなりと曰あるひはキリストはガリラヤより出べけんや四二聖書にキリストはダビデの裔にてダビデの住し郷ベテレヘムより出んと録ししに非ずやと曰四三是に於て民ども彼に縁て爭ひ別たり四四その中に彼を執んとする者も有けれど措手せし者なかりき四五下吏ども祭司の長とパリサイの人等の所に返ければ彼等下吏に曰けるは何ぞ彼を曳來らざる乎

四六 下吏こたへて曰けるは未だ斯人の如く言し人あらず四七 パリサイの人いひけるは爾曹も亦惑されし乎四八 有司またパリサイの人の中に彼を信ずる者あらんや四九 律法を識ざる此衆の人は罰すべき者なり五〇 その中の一人にて夜イエスに就しニコデモと云る者かれらに曰けるは五一 其人に聽ず其行を知ざる先に之を審判くは我儕の律法ならん乎五二 彼等こたへて曰けるは爾も亦ガリラヤより出し者なるか考見よ預言者はガリラヤより出ることなし五三 是に於て各人家に歸れり

第八章

一 イエス橄欖山に往り二 昧爽また聖殿に入けるが民みな彼に來ければ坐て彼等を教ふ三 爰に姦淫を爲るとき執られし婦ありけるが學者とパリサイの人これをイエスの所に曳來り群集の中に置いひけるは四 師よ此婦は姦淫を爲をる時そのまま執られし者なり五 此の如き者を石にて撃殺すべしとモーセ律法の中に命じたり爾は如何に言や六 如此いへるはイエスを試て訟の由を引出さんと欲るなりイエス身を屈め指にて地に畫り七 彼等が切に問によりイエス起て之に曰けるは爾曹のうち罪なき者まづ彼を石にて撃べしと曰八 また身を屈て地に畫り九 彼等これを聞て其良心に責られ老者をはじめ少者まで一々に出往ただイエス一人のこる婦は集の中に立り一〇 イエス起て婦に曰けるは婦よ爾を訟し者は何處へ往しや爾の罪を定る者なき乎一一 婦いひけるは主よ誰もなしイエス彼に曰けるは我も爾の罪を定ず往て再び罪を犯す勿れ
一二 イエスまた人々に語て曰けるは我は世の光なり我に從ふ者は暗中を行ず生の光を得なり一三 是に於てパリサイの人いひけるは爾は自ら己の證をなせり爾の證は眞ならず一四 イエス答て曰けるは我みづから己の證するとも我證は眞なり蓋われ何處より來り何處へ往を知ばなり爾曹わが何處より來り何處へ往を知ざるなり一五 爾曹は肉に循て人を審判く我は人を審判かず一六 我もし審判ば我審判は眞なり蓋われ獨あるに非ず我を遣し父と同に在ばなり一七 二人の證は眞なりと爾曹の律法に録されたり一八 わが證をする者は我なり我を遣し父も亦わが證を爲なり一九 彼等いひけるは爾の父は何處に在やイエス答けるは爾曹は我を識ず亦わが父をも識ざるなり若われを識たるならば我父をも識たるならん二〇 イエス此等のことを殿のうち賽錢の箱を置る處にて語けれど彼の時いまだ至ざれば誰も手を出す者なかりき二一 イエス復いひけるは我ゆかん爾曹は我を尋べし爾曹おのれの罪に死ん我ゆく所へは爾曹きたること能ざるなり二二 之に由てユダヤ人いひけるは我ゆく所へ爾曹きたること能ずと言り彼は自殺せんとする乎二三 イエス彼等に曰けるは爾曹は下より出われは上より出なんぢらは此世より出われは此世より出ず二四 是故に爾曹は己の罪に死んと我いひしなり爾曹もし我の彼なるを信ぜずば己の罪に死ん二五 彼等いひけるは爾は誰なるや

イエス曰けるは我は實に我なんぢらに告る所の者なり二六 我なんぢらに就て語る可ことと審判く可こと多端あり我を遣し者は眞なり彼に聞し事を我世に告二七 此は父を指て言るなれど彼等は知ざりき二八 是故にイエス彼等に曰けるは爾曹人の子を擧しのち我の彼なるを知また我みづから何事をも行ず惟わが父の教に從ひて此等の事を言るを知べし二九 我を遣し者我と同にあり父は我を獨遺たまはず蓋われ恆に彼の心に適ふ事を行へばなり三〇 イエス此事を言るとき多の人かれを信ぜり三一 イエス己を信ぜしユダヤ人に曰けるは爾曹もし我道に居ば誠に我弟子なり三二 かつ眞理を識ん眞理は爾曹に自由を得さすべし三三 彼等こたへけるは我儕はアブラハムの裔なり未だ人の奴隷と爲しことなし爾曹に自由を得さすべしと爾の言しは如何なる事ぞ三四 イエス彼等に曰けるは誠に實に爾曹に告ん凡て惡を行ふ者は惡の奴隷なり三五 奴隷は恆に家に居ず子は恆に居三六 是故に子もし爾曹に自由を賜なば爾曹誠に自由を得べし三七 我なんぢらがアブラハムの裔なるを知ざれども我を殺さんと謀る蓋わが道なんぢらの衷に在ざれば也三八 我は我父と偕に在て見しことを言なんぢらは爾曹の父と偕に在て見しことを行ふ三九 彼等こたへてイエスに曰けるは我儕の父はアブラハムなりイエス曰けるは汝等もしアブラハムの子ならばアブラハムの行をおこなふべし四〇 然るに今なんぢらは神に聞し眞理を告る我を殺さんと謀る是アブラハムの行に非ず四一 爾曹は爾曹の父の行をおこなふ也かれら曰けるは我儕は奸淫に由て生れず只一人の父あり即ち神なり四二 イエス彼等に曰けるは神もし爾曹の父ならば爾曹われを愛すべし我は神より出て來ればなり夫われは己に由て來るに非ず神われを遣し給へるなり四三 爾曹なんぞ我いふ言を知ざるや蓋わが道を聽ことを得ざれば也四四 爾曹己が父なる惡魔より出また其父の慾を行ふことを欲む彼は始より人を殺す者なり又眞理に居ず蓋かれの衷に眞理なければ也かれが誑を言ときは己より出して言なり蓋かれは誑者また誑者の父なれば也四五 われ眞理を言に因て爾曹われを信ぜず四六 爾曹のうち誰か我を罪に定る者ある乎われ爾曹に眞理を語るに何故われを信ぜざる乎四七 神より出し者は神の言を聽なんぢらの聽ざるは神より出ざるに因てなり四八 ユダヤ人こたへて曰けるは爾はサマリヤの人にて鬼に憑たる者なりと我儕が言るは宜ならず乎四九 イエス答て曰けるは我は鬼に憑たる者に非ず我は吾父を尊び爾曹は我を輕んずる也五〇 我は自己の榮を求めず之を求めかつ審判する所の者あり五一 われ誠に實に爾曹に告ん人もし我道を守らば窮なく死を見ざるべし五二 ユダヤ人かれに曰けるは今われらは爾が鬼に憑たる者なるを知アブラハム既に死また預言者も死り然るに爾いふ人もし我道を守らば窮なく死じと五三 爾は我儕の先祖アブラハムよりも優れる者ならん乎アブラハム既に死預言者たちも死り爾みづから誰と爲か五四 イエス答けるは我もし自ら榮をなさば我榮は虚し我を榮る者は我父すなはち爾曹

の我神と稱る所の者なり五五 爾曹は彼を識ず我は彼をしる我もし彼を識ずと言ば爾曹の如き誑者と爲ん然ど我は彼を識また其言を守るなり五六 爾曹の先祖アブラハムは我日を見んことを喜び且これを見て樂めり五七 ユダヤ人かれに曰けるは爾いまだ五十にも及ざるにアブラハムを見しや五八 イエス彼等に曰けるは誠に實に爾曹に告ん我はアブラハムの有ざりし先より在者なり五九 是に於て衆人かれを撃んとて石を取りイエス隱て其中を過り殿を出行り

第九章

一 イエス行とき生來なる瞽を見しが二 その弟子かれに問て曰けるはラビ此人の瞽に生しは誰の罪なるや己に由か又二親に由か三 イエス答けるは此人の罪に非ず亦その二親の罪にも非ず彼に由て神の作爲の顯れんため也四 晝の間は我かならず我を遣しし者の行をなす可なり夜きたらん其とき誰も行をなすこと能はず五 われ世に在時は世の光なり六 此事を言て地に唾し唾にて土を和その泥を瞽者の目に塗七 彼に曰けるはシロアムの池に往て洗へ彼すなはち往て洗ひ目見ことを得て歸れりシロアム之を譯ば遣されし者との義なり八 隣の人々および素より彼の乞食なりしを見し者等いひけるは此は坐て物を乞し人ならず乎九 或人は彼なりと曰ある人は似たる也といふ彼いひけるは我は彼なり一〇 彼等いひけるは爾の目は如何して啓たるや一一 答て曰けるはイエスといふ人土を和わが目に塗て云シロアムの池に往て洗と我ゆきて洗ければ目見ことを得たり一二 人々かれに曰けるは彼は何處に在や答て知ずと曰一三 彼等この瞽なりし者をパリサイの人の所に携詣れり一四 土を和てイエス彼が目を啓し日は安息日なりき一五 パリサイの人も彼に問けるは爾の目は如何して啓たるや答けるは彼泥を我目に置われ其を洗て見ことを得たり一六 或パリサイの人いひけるは此人安息日を守ざるが故に神より出しに非ず或人いひけるは罪人いかで斯る奇跡を行ふことを得んや是に於て彼等あらそひ別たり一七 また瞽者に曰けるは爾の目を啓しにより爾かれの事を何と言や答けるは彼は預言者なり一八 ユダヤ人かれの瞽者なりしに見得やう爲しことを其二親を呼來るまでは信ぜず即ち二親を呼來りて一九 之に問けるは此人は瞽者にて生しと言ところの爾曹の子なるか今いかにして見ことを得たる乎二〇 二親かれらに答けるは此は我子なると生來の瞽なることを知二一 然ど今如何して目明に爲しか我儕これを知ず亦その目を啓しは誰なる乎を知ず彼は年長なり彼に問よ彼みづから言べし二二 二親の如此いひしはユダヤ人を懼しに因そはイエスをキリストと言明す者あらば會堂より出すべしとユダヤ人たがひに議定たれば也二三 二親の彼は年長なり彼に問よと言しは此故なり二四 瞽なりし者を復よびて曰けるは榮を神に歸せよ我儕は彼人の罪人なるを知二五 かれ答けるは罪人なるや否われ之を知ず我は瞽者なりしが今目明になれる此一事を知二六

彼等また曰けるは彼は爾に何を行しや如何して爾の目を啓しや二七 答けるは我すでに爾曹に言しに爾曹きかず何故ふたたび聞んとするか爾曹も其弟子に爲んと欲ふや二八 かれら詬り曰けるは爾は其人の弟子われらはモーセの弟子なり二九 神のモーセに語し言は我儕しれり然ど此人の何處より來れる乎を我儕しらず三〇 其人こたへけるは此は奇き事なり彼すでに我目を啓しに其何處より來れるを爾曹しらずと曰三一 神は罪人に聽ず然ど神を敬ひて其旨に遵ふ者には聽たまふと我儕は知三二 世の元始より以來うまれつきなる瞽者の目を啓し人あるを聞ず三三 もし此人神より出ずば何事をも行得ざるべし三四 彼等こたへて曰けるは爾は盡く罪孽に生し者なるに反て我儕を教るか遂に彼も逐出せり三五 彼等は逐出ししことを聞イエス尋て之に遇いひけるは爾神の子を信ずる乎三六 答て曰けるは主よ彼として我信ずべき者は誰なるや三七 イエス曰けるは爾すでに彼をみる今なんぢと言者はそれなり三八 主よ我信ずと曰て彼を拜せり三九 イエス曰けるは我審判せん爲に世に臨る即ち見ざる者をしてみえ見る者を反て瞽と爲しむ四〇 イエスと偕に居しパリサイの人この言を聞て彼に曰けるは我儕も瞽なる乎四一 イエス彼等に曰けるは爾曹もし瞽ならば罪なかるべし然ど今われら見ゆと言しに因て爾曹の罪は存れり

第一〇章

一 誠に實に爾曹に告ん羊牢に入に門よりせずして他より踰る者は竊賊なり強盜なり二 門より入者は其羊の牧者なり三 門守は彼の爲に啓き羊はその聲を聽かれ己の羊の名を呼て之を引出す四 彼その羊を引出すとき先に行なり羊かれの聲を識て之に從ふ五 羊は別人に從はず反て避そは別人の聲を識ざれば也六 イエス彼等に此譬を言ど彼等はその語れる所いかなる意かを知ざりき七 是故にイエス復かれらに曰けるは誠に實に爾曹に告ん我は即ち羊の門なり八 凡て我より先に來し者は竊賊なり強盜なり羊その聲を聽ざりき九 我は門なり若人われより入ば救れ且出入をなして草を得べし一〇 竊賊の來るは盜んとし殺さんとし滅さんとするの他なし我きたるは羊をして生を得かつ豐ならしめん爲なり一一 我は善牧者なり善牧者は羊の爲に命を捐一二 牧者にあらず己が羊を有ず只やとはれて羊を守る者は狼の來るを見れば羊を棄てにぐ狼羊を奪て之を散す一三 雇工の逃るは傭れし者なれば其羊を顧ざるに因てなり一四 我は善牧者にて己の羊を識又己の羊に識る一五 父われを識ごとく我も父を識われ羊の爲に命を捐ん一六 我は此牢にあらざる別の羊を有り彼等をも引來らん彼等わが聲を聽ん遂に一の群一の牧者となるべし一七 わが父われを愛す蓋われ再び命を得んが爲に命を捐るが故なり一八 我より之を奪ふ者なし我みづから之を捐るなり我これを捐るの權能あり亦よく之を得の權能あり我父より我この

命令を受たり一九 偖この言に因て復ユダヤ人あらそひ別たり二〇 其中なる多の人いひけるは鬼に憑て狂ふ者なるに何ぞ彼に聽や二一 又或人いひけるは是鬼に憑れし者の言に非ず鬼は瞽者の目を啓ることを能せん乎

二二 冬のころ修殿節の時二三 イエス殿のソロモンの廊を行きけるに二四 ユダヤ人かれを環圍みて曰けるは我儕を幾時まで疑はするや爾もしキリストならば明かに我儕に告よ二五 イエス答けるは我なんぢらに告しかども爾曹信ぜず父の名に託て我が行ふ事われに就て證するなり二六 然ど爾曹信ぜず此は爾曹に言し如く我羊に非ざれば也二七 我羊は我聲を聽われは彼等を識かれら我に從ひ二八 われ彼等に永 生を賜ふ彼等いつまでも亡びず亦これを我手より奪ふ者なし二九 我に彼等を賜し我父は萬 有よりも大なり又わが父の手より之を奪うる者なし三〇 我と父とは一なり三一 是に於てユダヤ人石をとりて復かれを撃んとせり三二 イエス彼等に答けるは我父より受て我おほくの善事を爾曹に示しに其うち何の事によりて我を石にて撃んとする乎三三 ユダヤ人こたへて曰けるは石にて撃んとするは善事の爲に非ず爾ただ褻瀆ことをいひ且なんぢ人なるに己を神となすに因てなり三四 イエス答けるは爾曹の律法に我いふ爾曹は神なりと録されしに非ずや三五 聖書は毀る可らず若神の命を奉し者を神と稱んには三六 父の聖別ちて世に遣しし者われは神の子なりと稱ばとて何ぞ之を褻瀆ことをいふと曰べけん乎三七 もし我わが父の事を行ずば我を信ずること勿れ三八 若これを行ば我を信ぜずとも其事を信ぜよ蓋父の我にあり我の父に在ことを爾曹しりて信ぜんが爲なり三九 彼等また執んとしたりしがイエスその手を脱て去り四〇 斯て復ヨルダンの外なるヨハネのバプテスマを施し所に往て彼處に居けるに四一 多の人かれに至り曰けるはヨハネは休徵を行ず然ども此人につきてヨハネのいひし言はみな眞なり四二 是に於て許多の人かしこにて彼を信ぜり

第一一章

一 茲に病者ありラザロと云てベタニヤの人なりベタニヤはマリアと其姉マルタの住る村なり二 マリアは曩に主に香 膏をぬり己の頭の髪をもて主の足を拭ひし人にて此病るラザロは彼が兄弟なり三 是故にその姉妹イエスの所に主の愛する者病りと言遣せり四 イエス之を聞て曰けるは此は死る病に非ず神の榮の爲なり神の子をして之に因て榮を得しめんが爲なり五 夫マルタと其妹およびラザロはイエスの愛する所の者なり六 是故にイエスその病るを聞て此處に二日とどまり七 其のち弟子に曰けるは我儕またユダヤに往べし八 弟子いひけるはラビ、ユダヤ人は近來も石をもて爾を撃んとせしに復かしこに往たまふ乎九 イエス答けるは一日の中に十二時あるに非ずや人もし日間あるかば蹪くことなし蓋この世の光を見に因てなり一〇 また人もし夜あるかば蹪くべし蓋光その人に無が故なり一一 イエス如此いひ

て後弟子に曰けるは我儕の友ラザロ寢たり我かれを醒さん爲に往べし**一二** 弟子いひけるは主よ彼もし寢しならば愈ん**一三** イエスは彼の死しを言るなれど弟子等は寢て臥ることを言るならんと意り**一四** 是故にイエス明かに彼等に告て曰けるはラザロは死り**一五** 爾曹をして信ぜしむる爲に我かしこに在ざりしを喜ぶ然どいま彼處に往べし**一六** デドモと稱るトマス他に弟子等に曰けるは我儕も亦ゆきて彼と偕に死べし**一七** イエス至てラザロが既に墓に葬れて四日なるを知り**一八** ベタニヤはエルサレムに近し其距ること約そ廿七丁なり**一九** 多のユダヤ人マルタとマリアを其兄弟の事に因て慰めんとて既に彼等の所に來りをれり**二〇** マルタはイエス來給へりと聞て之を出迎へマリアはなほ室に坐せり**二一** マルタ、イエスに曰けるは主よ此に在せしならば我兄弟は死ざりしものを**二二** 然ながら假令今にても爾が神に求る所のものは神なんぢに賜ふと知**二三** イエス曰けるは爾の兄弟は甦るべし**二四** マルタ、イエスに曰けるは彼が末日の甦るべき時に甦らん事を知なり**二五** イエス彼に曰けるは我は復生なり生命なり我を信ずる者は死るとも生べし**二六** 凡て生て我を信ずる者は永遠も死ることなし爾これを信ずるや**二七** 彼イエスに曰けるは主よ然り我なんぢは世に臨るべきキリスト神の子なりと信ず**二八** 如此いひ竟て潜に其妹マリアをよび師きたりて爾を呼給へりと曰**二九** マリア之をきき急ぎ起てイエスの所に往り**三〇** イエス未だ村に入ず仍マルタの迎し所にをれり**三一** マリアを慰めて偕に室に在しユダヤ人マリアが急ぎ起出るを見て彼は墓に往て哭ならんと曰つつ彼に隨へり**三二** マリア、イエスの所に來り彼を見て其足下に伏いひけるは主よ若ここに在せしならば我兄弟は死ざりしものを**三三** イエス、マリアの哭と彼と偕に來しユダヤ人の泣を見て心を慟しめ身ふるひて**三四** 曰けるは爾曹何處に彼を置しや彼等いひけるは主よ來て觀たまへ**三五** イエス涕を流たまへり**三六** 是に於てユダヤ人いひけるは見よ如何ばかり彼を愛する者ぞ**三七** その中なる人曰けるは瞽者の目を啓たる此人にして彼を死ざらしむること能ざりし乎**三八** イエスまた心を慟しめて墓に至る墓は洞にて其口の所に石を置り**三九** イエス曰けるは石を去よ死し者の兄弟マルタ曰けるは主よ彼ははや臭し死てより已に四日を經たり**四〇** イエス彼に曰けるは爾もし信ぜば神の榮を見べしと我なんぢに言しに非ずや**四一** 遂に其石を死し者を置たる所より移去たりイエス天を仰ぎて曰けるは父よ已に我に聽り我これを爾に謝す**四二** 我なんぢが恆に我に聽ことを知しかるに我かく言は傍に立る人をして爾の我を遣ししことを信ぜしめんとて也**四三** 如此いひて大聲に呼いひけるはラザロよ出よ**四四** 死者布にて手足を縛れ面は手布にて裹れて出イエス彼等に曰けるは彼を釋て行しめよ**四五** マリアと偕に來しユダヤ人の行し事を見て多く彼を信ぜり**四六** 然ども其中にパリサイの人に往てイエスの行し事を告し者あり**四七** 是に於て祭司の長等とパリサイの人と議員を召集めて曰けるは我儕如何すべき乎この人多

の奇跡を行なり四八 もし彼を此ままに棄置ば人みな彼を信ぜん然ばロマの人きたりて我儕の地をも民をも奪べし四九 其中の一人にて此歳の祭司の長なるカヤパと云る者彼等に曰けるは爾曹何をも知ず五〇 又民の爲に一人死て擧國ほろびさるは我儕の益たる事をも思ざる也五一 此言は己より出しに非ず此歳の祭司の長なるによりイエスの斯民の爲に死ることを預言せるなり五二 特に斯民の爲のみならず散たる神の子民等をも一に集んが爲なり五三 偖この日よりして彼等イエスを殺さんと共に議る五四 是故にイエス此より顯にユダヤ人の中を行かず其處を去て野に近き所なるエフライムといふ邑に往て弟子と偕に留れり五五 ユダヤ人の逾越の節ちかづきければ人々己を潔んが爲に逾越の節の前に郷間よりエルサレムに上り五六 イエスを尋ね殿に立て相互に曰けるは如何に意や彼は節筵に來ざる乎五七 祭司の長等とパリサイの人と已に令を出して若イエスの所在をしる人あらば告べしと云こは彼を執んとする也

第十二章

一 逾越の節の六日前イエス、ベタニヤに至る此處は即ち死て甦りしラザロの在所なり二 是に於て或人々この處にてイエスに節筵を設くマルタ給仕を爲りラザロもイエスと偕に坐せる者のうちの一人なり三 マリアは眞正のナルダなる價たかき香 膏 一斤を携來てイエスの足に塗また己が頭髮にて其足を拭へり膏のにほひ徧く室内に滿り四 その弟子の一人なるイスカリオテのユダ即ちイエスを賣さんとする者言けるは五 此香 膏を何ぞ銀三百に售て貧 者に施さざる乎六 彼が如此いへるは貧 者を顧に非ず竊者にて且金嚢を帶その中に入たる物を奪ふ者なれば也七 イエス曰けるは彼に與る勿わが葬の日の爲に之を貯へたり八 貧 者は常に爾曹と偕に在ど我は常に爾曹と偕に在ず九 多のユダヤ人イエスが此に在を知て來る特にイエスの爲のみに非ず亦その死より甦らしし所のラザロをも見んと欲るなり一〇 祭司の長等ラザロをも殺さんと謀る一一 蓋ラザロの故に因て多のユダヤ人ゆきてイエスを信ずるがゆゑ也

一二 明日おほくの人々節筵に來りイエスのエルサレムに來らんとするを聞一三 棕櫚の葉を取ゆきて彼を迎ホザナよ主の名に託て來るイスラエルの王は福なりと呼れり一四 イエス驢馬の子を得て之に乘一五 録してシオンの女よ懼る勿れ視よ爾の王は驢馬の子に乘て來るとあるが如し一六 弟子たち初は此事を曉ざりしがイエス榮を受し後に彼等此事の彼について録され且その事を人々彼に行ひたりしを憶起せり一七 イエスのラザロを墓より呼出して甦らしし時かれと偕に居し者ども證を爲り一八 この休徴を行しことを聞しに因て人々彼を迎たるなり一九 是に於てパリサイの人たがひに曰けるは爾曹が謀る所の益なきを知ずや見よ世は皆かれに從へり

二〇 禮拜のため節筵に上れる者の中にギリシヤの人あり二一 彼等

ガリラヤのベテサイダの人なるピリポに來り求て曰けるは君よ我儕イエスに見えんことを欲ふ二二 ピリポ來てアンデレに告アンデレ亦ピリポと偕にイエスに告二三 イエス彼等に答て曰けるは人の子榮を受べき時いたれり二四 誠に實に爾曹に告ん一粒の麥もし地に落て死ずば唯一にて存んもし死ば多の實を結ぶべし二五 その生命を惜む者は之を喪ひ其生命を惜ざる者は之を存て永生に至るべし二六 人もし我に事んとせば我に從ふべし我に事る者は我をる所に在ん人もし我に事れば我父は之を貴ぶべし二七 今わが心憂悼めり何を言んや父よ此時より我を救たまへと言んか否これが爲に我この時に至れるなり二八 願くは父よ爾の名の榮を顯せ此とき天より聲ありて云われ其榮を既に顯す再これを顯すべし二九 傍に立る人々これを聞て雷なれりと曰ある人は天の使者かれに語れる也と曰り三〇 イエス答て曰けるは此聲は我ために非ず爾曹の爲なり三一 斯世はいま審判せらる斯世の主はいま逐出さるべし三二 我もし地より擧れなば萬民を引て我に就せん三三 如此イエスの言るは其如何なる状にて死んとするを示せる也三四 人々かれに答て曰けるは我儕律法にてキリストは窮なく存者なりと聞しに爾人の子かならず擧れんと言は何ぞや此人の子とは誰なる乎三五 イエス彼等に曰けるはなほ片時のあひだ光なんぢらと偕にあり光ある間に行て暗に追及れざるやう爲よ暗に行く者は其行べき方を知ず三四 なんぢら光の子と爲べきために光のある間に光を信ぜよイエス此を言畢り

彼等を避て隱たり三七 イエス彼等の前に如此おほくの休徵を行たれども尚かれを信ぜざりき三八 此は預言者イザヤがいひし言に我儕の告し言を信ぜし者は誰ぞや主の手は誰に顯れし乎と有に應へり三九 四〇 イザヤ復いふ彼等目にて見心にて悟り改めて醫るることを得ざらんが爲に彼その目を瞽し其心を頑梗せり此故に彼等信ずること能ず四一 イザヤは彼の榮を見しにより彼に就て如此は語れるなり四二 然ど有司等の中に多く彼を信ぜし者も有しがパリサイの人を畏て明に信ずると言ざりき其會堂より黜られんことを恐たるに因四三 これ彼等は神の榮より人の榮を喜るなり四四 イエス呼り曰けるは我を信ずる者は我を信ずるに非ず我を遣し者を信ずるなり四五 又われを見者は我を遣し者を見なり四六 我は光にして世に臨れり凡て我を信ずる者をして暗に居ざらしめん爲なり四七 人もし我が言を聞て守らざるとも之を審判かず我來しは世を審判かんために非ず世を救んため也四八 我を棄わが言を納ざる者を審判者あり即ち我いひし言をはりの日これを審判すべし四九 蓋われ己より言に非ず我を遣し父わが言べきこと我かたる可ことを命じ給へる也五〇 その命じ給ふ所は即ち永生なるを我しる是故に我いふ所は父の告給ふままに言るなり

第一三章

一 踰越の節の前にイエス此世を去て父に歸るべき時いたれるをしり世に在し己の民を既に愛し終に至るまで之を愛せり二 時に彼等晩飯の席につく惡魔はかねてイエスを賣んとする事をシモンの子イスカリヲテのユダといふ者の心に發さしめたり三 イエス己の手に父の萬物を賜しことと神より來り神に歸ることとを知四 晩飯の席を起て上衣をぬぎ手巾を取て腰に束五 而して盤に水をいれ弟子の足を濯その束たる手巾にて拭はじめ六 遂にシモン・ペテロに及ぶペテロ彼に曰けるは主よ爾わが足を濯ふか七 イエス答て曰けるは我爲ことを爾いま知ず後これを知べし八 ペテロ彼に曰けるは爾斷て我足を濯べからずイエス答けるは若われ爾を濯ずば爾は我と干渉なし九 シモン・ペテロ彼に曰けるは主よ止に我足のみならず手と首をも濯たまへ一〇 イエス曰けるは濯たる者は足のほか濯ふに及ず然して全く潔し爾曹は潔し然ども盡くは潔者に非ず一一 此はイエス己を賣んとする者の誰なるを知ゆゑに盡くは潔者に非ずと曰るなり一二 彼等の足を濯し後その上衣を取また坐て彼等に曰けるは我なんぢらに行し事を知か一三 爾曹われを師と呼また主と呼なんぢらの言ところは宜われは誠に是なり一四 我は爾曹の師また主なるに尚なんぢらの足を濯ふ爾曹も亦たがひに足を濯ふべし一五 我なんぢらに例を示せり此は我なんぢらに行し如く爾曹にも行しめんが爲なり一六 われ誠に實に爾曹に告ん僕は其主より大ならず又使者は之を遣す者より大ならず一七 爾曹もし之を知て此の如く行ば福なり一八 我いひし所は爾曹を凡て指るに非ず我は我選し者をしる然れども聖書に我と偕に食する者われに背て踵を擧しと録されしに應せん爲なり一九 その事の至らん時なんぢら我を信じてキリストとせん爲に其事の至ざる今より之を爾曹に告二〇 誠に實に爾曹に告ん我遣す者を接るは我を接るなり我を接るは我を遣し者を接るなり二一 イエス此事を言て心に憂へ證して曰けるは誠に實に爾曹に告ん一人なんぢらの中に我を賣者あり二二 弟子たち互に面を觀あはせ誰を指て言るなる乎を疑ふ二三 イエスの愛する一人の弟子イエスの懷に倚てありしが二四 シモン・ペテロ此は誰を指て言るなる乎を問しめんと首をもて示せり二五 イエスの懷に倚て在し者イエスに曰けるは主よ誰なるか二六 イエス答けるは我一撮の食物を濡て予る人は其なりとて遂に一撮の食物に物を濡てシモンの子イスカリヲテのユダに予ふ二七 彼が一撮の物を受し其時サタン彼に入り是に於てイエス彼に曰けるは爾が爲んとする事は速かに爲せ二八 彼に何故に如此いひしかを同に席に在者どもの中しる者あらざりき二九 或人ユダは金嚢を職れる故イエス彼をして節筵について用べき者を市しむるならんか亦は貧者に施さしむるならんと意り三〇 偖かれは一撮の食物を受て直に出たり時は既に夜なりき三一 彼の出し後イエス曰けるは今人の子榮をうく神また彼に因て榮を受るなり三二 神もし彼に因て榮を受る時は神も亦みづからの榮

の中に彼を榮しむ直に彼を榮しめん三二小子よ我なほ片時なんぢらと偕にあり爾曹われを尋ん我ゆく所に爾曹は至ること能じ前に之をユダヤ人にいふ今また之を爾曹に告三四われ新 誡を爾曹に予ふ即ち爾曹相愛すべしとの是なり我なんぢらを愛する如く爾曹も相愛すべし三五爾曹もし相愛せば之に因て人々爾曹の我弟子なることを知べし三六シモン・ペテロ彼に曰けるは主いづこへ往給ふやイエス彼に答へけるは我往ところへは爾いま從ふこと能ず後われに從はん三七ペテロ彼に曰けるは主よ何故に今なんぢら從ふこと能ざるか我は爾の爲に我命を捐ん三八イエス彼に答けるは爾 命を我ためにに捐るや誠に實に爾に告ん鷄なかざる前に爾三次われを識ずと言ん

第一四章

一なんぢら心に憂ること勿れ神を信じ亦われを信ずべし二わが父の家には第宅おほし然ずば我預て爾曹に之を告べきなり我なんぢらの爲に所を備に往三もし往て我なんぢらの爲に所を備ば又きたりて爾曹を我に納べし我をる所に爾曹をも居しめんとて也四爾曹わが往所を知また其途を知五トマス曰けるは主よ我儕なんぢの往所を知ず何にして其途を知んや六イエス彼に曰けるは我は途なり眞なり生命なり人もし我に由ざれば父の所に往こと能ず七若なんぢら我を識ば我父をも識べし今より爾曹かれを識なり已に爾曹彼を見たり八ピリポ彼に曰けるは主よ我儕に父を示し給へ然ば足り九イエス彼に曰けるはピリポ我かく久く爾曹と偕に在しに未だ我を識ざるか我を見し者は父を見しなり何ぞ父を我儕に示せと言や一〇われ父にをり父の我に在ことを信ぜざる乎われ爾曹に語し言は自ら語しに非ず我にをる父その行をなせる也一一我は父にをり父われに在と我つげし言を信ぜよ若信ぜずば我事に因て之を信ずべし一二誠に實に爾曹に告ん我を信ずる者は我行ところの事を行ん且此より大なる事を行べし蓋われ我父へ往ばなり一三爾曹すべて我名に託て求ふ所のことは我すべて之を行ん父の榮の子に因て顯れんが爲なり一四若なんぢら何事にても我名に託て求はば我これを行ん一五若なんぢら我を愛するならば我 誡を守れ一六我父に求ん父かならず別に慰る者を爾曹に賜て窮なく爾曹と偕に在しむべし一七此は即ち眞理の靈なり世これを接ること能ず蓋これを見ず且しらざるに因されど爾曹は之を識そは彼なんぢらと偕に在かつ爾曹の衷に在ばなり一八我なんぢらを捨て孤子とせず再なんぢらに就ん一九暫せば世われを見ことなし然ど爾曹は我を見われ生れば爾曹も生ん二〇その日に爾曹われ吾父に在なんぢら我に在われ爾曹に在ことを知べし二一我 誡を有ちて之を守る者は即ち我を愛するなり我を愛する者は我父に愛せらる我も亦これを愛して彼に自己を示すべし二二イスカリヲテならざるユダ彼に曰けるは主よ如何して自己を我儕に示し世には示さざる乎二三イエス答て彼に曰けるは若人われを愛せば我 言を守ん且わが父は之

を愛せん我儕きたりて彼と偕に住べし二四我を愛せざる者は我言を守らず爾曹の聞ところの言は我言に非ず我を遣し父の言なり二五われ爾曹と偕に在て此等のことを爾曹に語ぬ二六わが名に託て父の遣さんとする訓慰師すなはち聖靈は衆理を爾曹に教へ亦わが凡て爾曹に言しことを爾曹に憶起さしむべし二七われ平安を爾曹に遺す我平安を爾曹に予ふ我あたふる所は世の予る所の如きに非ず爾曹心に憂る勿れ又懼るる勿れ二八我ゆきて復なんぢらに來らんと我曰し言を爾曹きけり若われを愛せば父に往と我いへる言を爾曹喜ぶ可なり蓋わが父は我より大なれば也二九事いまだ成ず我まづ爾曹につぐ事成んときに爾曹これを信ずべき爲なり三〇此後われ多の言をもて爾曹に語じ蓋この世の主きたる故なり彼われに與ることなし三一然ど我これを爲は我の父を愛し且その命ぜしことに遵ひて行ふことを世に知しめんが爲なり起よ我儕ここを去べし

第一五章

一我は眞の葡萄樹わが父は農夫なり二我に在て凡て實を結ざる枝は父これを剪除すべて實をむすぶ枝は之を潔む蓋ますます繁く實を結ばしめん爲なり三今なんぢら我曰し言によりて潔なれり四爾曹われに居さらば我また爾曹に居ん枝もし葡萄樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能ず爾曹も我に連らざれば亦此の如ならん五我は葡萄樹なんぢらは其枝なり人もし我に居われ亦かれに居ば多の實を結ぶべし蓋もし爾曹われを離るる時は何事をも行能ざれば也六人もし我に居ざれば離たる枝の如く外に棄られて枯るなり人これを集め火に投入て焚べし七爾曹もし我に居また我いひし言なんぢらに居ば凡て欲ふところ求に從ひて予らるべし八爾曹おほくの實を結ばば我父これに由て榮をうく然ば爾曹わが弟子なり九父の我を愛し給ふ如く我なんぢらを愛す爾曹わが愛にをれ一〇若なんぢら我誡を守ば我愛に居ん我わが父の誡を守て其愛に居が如し一一我この事を爾曹に語るは我が喜なんぢらに在て爾曹の喜を盈しめんが爲なり一二我なんぢらを愛する如く爾曹も亦たがひに愛すべし是わが誡なり一三人その友の爲に己の命を捐るは此より大なる愛はなし一四凡て我なんぢらに命ずる所の事を行はば則ち我友なり一五今より後われ爾曹を僕と稱ず蓋僕は其主の行ことを知ざればなり我さきに爾曹を友と呼り我なんぢらに我父より聞し所のことを盡く告しに緣一六なんぢら我を選ず我なんぢらを選べり且爾曹をして往て實を結せ其實を存しめんが爲また爾曹の凡て我名に託て父に求ふ所の者を彼をして爾曹に賜らせんが爲に我なんぢらを立たり一七なんぢら互に愛せんがため我これを命ず一八世もし爾曹を惡ときは爾曹よりも先に我を惡と知一九爾曹もし世の屬ならば世は己の屬を愛すべし然ど爾曹は世の屬ならず我なんぢらを世より選たり之に因て世なんぢらを惡む二〇僕は其主より大ならずと我なんぢらに曰し言を心に記よ人もし我を窘迫ば爾曹をも

窘迫もし我言を守ば爾曹の言をも守るべし二一 然ど彼らは我を遣し者を識ざるに因わが名の故をもて此等の事を爾曹に加べし二二 我もし來て語ざりしならば彼等罪なからん然ど今は其罪いひひらく可やうなし二三 我を惡む者は亦わが父をも惡なり二四 我もし他の人の行ざりし事を彼等の中に行はざりしならは彼等罪なからん然ど我と吾父とを已に見かつ之を惡めり二五 此の如は彼等の律法に故なくして我を惡めりと録し言に應せん爲なり二六 われ訓慰師を父より遣らん即ち父より出る眞理の靈なり其きたる時わが爲に證をなすべし二七 爾曹も亦われと偕に始より在しに因て證を作べし

第一六章

一 われ此等の言を爾曹に語れるは爾曹の礙かざらん爲なり二 衆人なんぢらを會堂より黜くべし且すべて爾曹を殺す者みづから神に事ると意ふ時至らん三 此等の事を爾曹に行は父と我とを識ざるが故なり四 我これを爾曹に語れるは時いたりて我これを言し事を爾曹の憶起ん爲なり曩に之を爾曹に語ざりしは我なんぢらと偕に在たれば也五 我いま我を遣しし者に往んとす然ど爾曹の中われに何處へ往と問る者なく六 反て我この事を言しに因て憂なんぢらの心に盈り七 われ眞を爾曹に告ん我往は爾曹の益なり若ゆかずば訓慰師なんぢらに來じ若ゆかば彼を爾曹に遣らん八 かれ來らんとき罪につき義につき審判につき世をして罪ありと曉しめん九 罪に就てと云るは我を信ぜざるに因てなり一〇 義に就てと云るは我わが父へ往によりて爾曹また我を見ざれば也一一 審判に就てと云るは斯世の主審判を受ればなり一二 我なほ爾曹に多く語る可こと有ども今なんぢら曉ことを得ず一三 然ど彼すなはち眞理の靈の來らんとき爾曹を導きて凡の眞理を知しむべし蓋かれ己に由て語に非ず其聞し所の事を爾曹に言また來らんとする事を爾曹に示すべければ也一四 彼わが榮を顯さん蓋わが屬を受て爾曹に示せば也一五 凡て父の有給ふものは我屬なり是故に彼わが屬を受て爾曹に示すと曰り一六 暫せば爾曹われを見ず復しばらくして我を見るべし是われ父へ往なり一七 是に於て弟子の中にて或人たがひに曰けるは暫せば爾曹われを見じ復しばらくして我を見べしと言かつ是われは父へ往なりと我儕に言しは何の事ぞや一八 彼等また曰けるは此しばらくと言しは何の事ぞや其言る所を我儕知ず一九 イエス彼等が問んとするを知て曰けるは暫せば我を見じ復しばらくして我を見べしと言し此事に因て爾曹たがひに詰あふ乎二〇 誠に實に我なんぢらに告ん爾曹は哭き哀み世は喜ぶべし爾曹憂るならん然ど其憂は變て喜びとなるべし二一 婦子を産んとする時は憂ふ其期いたるに因てなり然ど已に生ば前の苦をわする世に人の生たる喜樂に因てなり二二 此の如く爾曹も今憂ふ然ど我また爾曹を見ん其時なんぢらの心喜ぶべし其喜樂を奪ふ者あらじ二三 其日なんぢら我に問ところ無るべし誠に實に爾曹に告ん凡そ我名に託て父

に求る所のもの父これを爾曹に授たまふべし二四なんぢら今まで我名に託て求たることなし求よ然ば受けん而して爾曹の喜び滿べし二五譬喩をもて此事を爾曹に語しが譬喩を用ずして爾曹に語り父に就て明かに示す時いたらん二六其日なんぢら我名に託て求ん我なんぢらの爲に父に求ふと曰ず二七蓋父みづから爾曹を愛すれば也これ爾曹われを愛し且父より我來しことを信ずるに因二八われ父より出て世に臨れり復世を離て父に往ん二九弟子かれに曰けるは爾いま明かに言て譬喩をいはず三〇我儕いま爾の知ざる所なく且人の爾に問は用なきことを知これに因て我儕神より爾の出來しことを信ず三一イエス彼等に答けるは今なんぢら信ずる乎三二時まさに至ん今いたりぬ爾曹散て各人その屬する所に往ただ我を一人のこさん然ど我獨をるに非ず父われと偕に在なり三三われ此事を爾曹に語しは爾曹をして我に在て平安を得させんが爲なり爾曹世に在ては患難を受ん然ど懼る勿れ我すでに世に勝り

第一七章

一イエス此言を語畢て天を仰ぎ曰けるは父よ時いたりぬ爾の子なんぢの榮を顯さんが爲に爾の子の榮を顯し給へ二これ爾われに賜し所の者に我永生を予んがため凡の者を制る權威を我に賜たれば也三永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣ししイエス・キリストをしる是なり四我なんぢの榮を世に顯し爾の我に委し所の行は我これを成り五父よ今我をして爾と偕に榮を得させ給へ即ち創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ六なんぢ世より選て我に賜し人々に我なんぢの名を顯せり彼等は爾の屬にして爾これを已に我に賜ふ彼等また爾の道を守れり七彼等いま爾の我に賜し者は皆爾より出しと知八蓋われ爾が我に賜し言を彼等に予たればなり彼等これを受また我爾より出し事を誠に知かつ爾の我を遣ししことを信じたり九我かれらの爲に祈る我祈るは世の爲に非ず爾の我に賜ひし者の爲なる耳それ彼等は爾の屬なれば也一〇凡て我屬は爾の屬なんぢの屬は我屬なり且われ彼等に由て榮を受一一われ今より世に在ず彼等は世にをり我は爾に就る聖父よ爾の我に賜し者を爾の名に在しめ之を守て我儕の如く彼等をも一になし給へ一二我かれらと偕に在し時かれらを爾の名に在しめて之を守たり爾の我に賜し者を我守りしが其中一人だに亡たる者なし唯沈淪の子ほろびたり是聖書に應せん爲なり一三我いま爾に就る我世に在て此事を語れるは我喜樂を彼等に充しめん爲なり一四われ爾の道を彼等に授たり世は彼等を惡む蓋わが世の屬に非ざる如く彼等も世の屬に非ざれば也一五われ爾に彼等を世より取たまへと祈らず惟かれらを守て惡に陷らす勿れと祈る一六われ世の屬に非ざる如く彼等も世の屬に非ず一七爾の眞理をもて彼等を潔め給へ爾の言は眞理なり一八なんぢ我を世に遣しし如く我も彼等を世に遣せり一九我かれらの爲に自己を潔これ眞理に因て彼等の聖

られん爲なり二〇我ただ彼等の爲にのみ祈らず彼等の教に因て我を信ずる者の爲にも祈なり二一此はみな一にならん爲なり父よ爾われに在われ亦なんぢに在かくの如く彼等も我儕にをりて一にならん爲かつ世をして爾の我を遣しし事を信ぜしめん爲なり二二爾の我に賜し榮を我かれらに授たり此は我儕の一なるが如く彼等も互に一にならん爲なり二三われ彼等に在なんぢ我にをる蓋彼等をして一に全ならしめ且世をして爾の我を遣ししこと又なんぢ我を愛する如く彼等をも愛することを知しめんと也二四父よ爾の我に賜し者の我をる所に我と偕に在て我榮すなはち爾が我に賜し者を見んことを願そは世基を置ざりし先に爾われを愛したれば也二五義き父よ世は爾を識ず我は爾を識かれらも爾の我を遣しし事を知り二六我なんぢの名を彼等に示せり復これを示さん蓋なんぢの我を愛するの愛かれらに在また我かれらに在ん爲なり

第一八章

一イエス此事を言て後その弟子と偕に出てケデロンの河を渉その處にある園の中に弟子と偕に入ぬ二イエスを賣たるユダ此處を識りイエス屢その弟子と偕に此に集りたれば也三此時ユダ一隊の兵卒と下吏どもを祭司の長等およびパリサイの人よりうけ炬と提燈と兵器を携て此に來れり四イエス事の己に及んとするを悉く知いでて彼等に曰けるは誰を尋るか五彼等こたへけるはナザレのイエスなりイエス彼等に曰けるは我は其なりイエスを賣しユダ彼等と偕に立り六イエス彼等に對て我なりと曰たまへる時かれら退きて地に仆たり七イエス復彼らに誰を尋る乎と問たまひしかば彼等ナザレのイエス也と曰八イエス答けるは我すでに爾曹に我は其なりと曰り若われを尋るならば此輩を容て去しめよ九是イエス我に賜し者の中一人だに亡る者なしと云し言に應せん爲なり一〇時にシモン・ペテロ劍を佩たりしが之を拔て祭司の長の僕を撃て其右の耳を削おとせり僕の名はマルコスと云一一イエス、ペテロに曰けるは劍を鞘に韜よ父の我に賜し杯を我飮ざらん乎一二斯て隊の兵卒および其長とユダヤ人の下吏イエスを執へ繫て一三先これをアンナスの所に曳往かれは此歳の祭司の長カヤパの外舅て一四ユダヤ人に議て一人民の爲に死るは益なりと言しは此カヤパなりき一五シモン、ペテロと外に一人の弟子イエスに從へり此一人の弟子は祭司の長の識ところの者にてイエスと偕に祭司の長の庭に入一六ペテロは門外に立り祭司の長の識ところの弟子出て門を守る婢に告てペテロをともなひ入一七是に於て門を守る婢ペテロに曰けるは爾も此人の弟子の一人ならず乎ペテロ然ずと曰一八僕等と下吏たち寒に因て炭を燒その處に立て煖れり一九祭司の長イエス其弟子と其教のことを問ぬ二〇イエス彼に答けるは我あらはに世に語れり我つねにユダヤ人の平生あつまる所なる會堂および殿にて教誨をなし隱に語れる事なし二一何ぞ我に問る乎われ如何か

たりしか聽る者に問よ彼等わが言し所を知り二一イエス如此いひしに旁に立る一人の下吏掌にて彼を打いひけるは爾祭司の長に答るに此の如か二三イエス彼に答けるは若わが語しこと善らずば其善らざるを證せよ若し善ば何ぞ我を打や二四偖アンナス、イエスを繫て祭司の長カヤパの所に遣れり二五シモン、ペテロ立て煖り居しが或人々いひけるは爾も彼の弟子の一人ならず乎ペテロ承ずして然ずと曰り二六祭司の長の僕の中の一人すなはちペテロに耳を削れし者の親戚いひけるは我なんぢが彼と偕に園に在しを見しに非ずや二七ペテロまた承はず頓て鷄なきぬ二八人々イエスを曳てカヤパより公廨に往り時すでに平旦なりき彼等汚穢を受んことを恐て公廨に入ず蓋踰越の節筵を食せんとすれば也二九ピラト出て彼等に曰けるは如何なる訟をもて斯人を訟るや三〇人々こたへけるは彼もし惡を行る者に非ずば爾に解さじ三一ピラト彼等に曰けるは爾曹これを取なんぢらの律法に從ひて審判せよユダヤの人々かれに曰けるは我儕に人を殺の權なし三二是イエスの其死んとする状を指て語れることに應へり三三ピラトまた公廨に入イエスを召て曰けるは爾はユダヤ人の王なるや三四イエス彼に答けるは爾この事を言るは自己に由か我に就て人の告しに由か三五ピラト答けるは我はユダヤ人ならんや爾の國の民と祭司の長と爾を我に解せり爾なにを爲しや三六イエス答けるは我國はこの世の國に非ず若わが國この世の國ならば我僕われをユダヤ人に付さざる爲に戰ふべし然ど我國は此世の國ならざる也三七ピラト彼に曰けるは然ば爾は王なるかイエス答けるは爾の言ところの如く我は王なり我これが爲に生これが爲に世に臨れり蓋眞理について證を爲んため也すべて眞理に屬者は我聲を聽三八ピラト彼に曰けるは眞理は如何なる者ぞ此事を言る後また出てユダヤ人に曰けるは我は斯人に罪あるを見ず三九爰に爾曹に一の例あり我踰越の節に一人の囚人を爾曹に釋す爾曹ユダヤ人の王を釋さん事の欲ふや四〇衆人また喊叫いひけるは斯人に非ずバラバを釋せバラバは盜賊なる也

第一九章

一其時ピラト、イエスを取て鞭つ二兵卒ども棘にて冕を編かれの首に冠しめ又紫の袍を衣せて三曰けるはユダヤ人の王やすかれ斯て掌にて之を打り四ピラトまた外に出て彼等に曰けるは我かれに就て罪あるを見ず之を知せんとて爾曹に曳出せり五イエス棘の冕をかぶり紫の袍を衣て外に出ピラト彼等に曰けるは視よ此その人なり六祭司の長等と下吏これを見て十字架に釘よ十字架に釘よと喊叫いふピラト彼等に曰けるは爾曹かれを取て十字架に釘よ我かれに就て罪あるを見ざる也七ユダヤ人かれに答けるは我儕に律法あり其律法に從へば彼は死べき者なり蓋かれ自己を神の子と爲ばなり八ピラト此言を聞て益懼る九また公廨に入てイエスに曰けるは爾何處の者ぞイエス答せざり

き一〇ピラト彼に曰けるは我に答ざるか我なんぢを十字架に釘る權威あり亦なんぢを釋す權威あり此事を知ざる乎一一イエス答けるは爾上より權威を賜らずば我に對て權威ある事なし是故に我を爾に解し者の罪尤も大なり一二此後ピラト彼を釋さんと謀る然どもユダヤ人さけび曰けるは若これを釋さばカイザルに忠臣ならず凡て自己を王となす者はカイザルに叛く者なり一三ピラト此言を聞てイエスを曳出し鋪石と云る所ヘブルの言にて譯ばガバタと云ところの審判の座に自ら坐れり一四其日は踰越節の備日にて時は約そ十二時ごろなりきピラト、ユダヤ人に曰けるは爾曹の王を見よ一五かれら喊叫て之を除け之を除け十字架に釘よと曰ピラト彼等に曰けるは我なんぢらの王を十字架に釘べけんや祭司の長等こたへけるはカイザルの他われらに王なし一六遂にピラト彼を十字架に釘しめんとて彼等に付せり是に於て彼等イエスを取て曳往り一七イエス十字架を負て髑髏と云る所ヘブルの言にて曰ばゴルゴダといふ所に往り一八此所に彼を十字架に釘たり別に二人の者かれと偕に十字架に釘らる一人は右一人は左イエス中に居り一九ピラト罪標を十字架につけ此はユダヤ人の王なるナザレのイエスなりと書たり二〇許多のユダヤ人この罪標を讀り蓋イエスを十字架に釘し所は京城に近ければ也其標はヘブル、ギリシヤ、ロマの言にて書たり二一ユダヤ人の祭司の長等ピラトに曰けるはユダヤ人の王と書す勿れ自らユダヤ人の王なりと言しと書すべし二二ピラト答けるは我書し所すでに書たり二三兵卒どもイエスを十字架に釘し後その上衣をとり四に分て各その一を取また裏衣を取り此裏衣は縫なく上より渾く織るもの也ければ二四互に曰けるは之を裂ずして誰の屬にならんか鬮にすべし此は聖書に彼等たがひに我衣を分わが裏衣を鬮にすと云しに應せん爲なり兵卒ども已に此事を行り二五偖イエスの母と母の姉妹およびクロパの妻のマリア並マグダラのマリアその十字架の旁に立り二六イエス母と愛する所の弟子と旁に立るを見て母に曰けるは婦よ此なんぢの子なり二七また弟子に曰けるは此なんぢの母なり是時その弟子かれを己の家に携往り二八斯てイエス諸の事の已に竟るをしり聖書に應せん爲に我渇といへり二九此處に醋の滿たる器皿ありしかば兵卒ども海絨を醋に漬し牛膝草に束て其口に予ふ三〇イエス醋を受し後いひけるは事竟ぬ首を俯て靈を付せり三一是日は節筵の備日なり此安息日は大なる安息日なれば屍を十字架の上に置ことを欲ざるが故にユダヤ人ピラトに對かれらの脛を折て其屍を取除ことを求へり三二是に於て兵卒等イエスと偕に十字架に釘られし者の一人の脛を先にをり次に亦一人の脛を折三三後にイエスに來しに已に死たるを見て其脛を折ざりき三四一人の兵卒戈にて其骨を刺ければ直に血と水と流出たり三五之を見し者證を立その證は眞なり彼また自ら言ところの眞なるをしる爾曹をして信ぜしめんが爲なり三六この事成り録して其骨の一をも摧ざるべしと有に應せん爲なり三七また他の

書に彼等の刺し者を彼等觀べしと云り三八 是後アリマタヤのヨセフと云る者にて前にユダヤ人を懼て隱にイエスの弟子となれる者イエスの屍を取とてピラトに求ピラト之を許ししに因きたりて其屍を取り三九 また曩に夜間イエスに就しニコデモという人沒藥と蘆薈を和およそ百斤ばかり携來る四〇 彼等イエスの屍を取てユダヤ人の葬の例に循ひ之を布と香にて裹り四一 さて十字架に釘し其近傍に園あり園の中に未だ人を葬りし事なき新き墓あり四二 是日はユダヤ人の節筵の備日なり又墓近かりければ其處にイエスを置り

第二〇章

一 一週の首の日の朝いまだ昧うちにマグダラのマリア墓に來て石の墓より取去ありしを見二 遂にシモン・ペテロまたイエスの愛せし所の弟子に趨往て曰けるは墓より主を取し者あり我儕何處に置しや其處を知ず三 ペテロと彼一人の弟子いでて墓に往四 二人ともに趨る他の弟子ペテロより疾趨て先に墓に至ぬ五 俯て屍を裹し布を置るを見たれども入ず六 シモン・ペテロ彼に後て來り墓にいり裹し布を置るを見たり七 その首を裹し手巾は屍を裹し布と同に置ず離て別の處に疊て置り八 是に於て先に墓に來れる他の弟子も入これを見て信ぜり九 録してイエスの死より甦るべき事あるを彼等いまだ知ざる也一〇 斯て弟子は己の宿に歸れり一一 マリアは墓の外に立て哭つつ墓にむかひ俯て一二 二人の天使しろき衣を着イエスの屍を置たりし所の首の方に一人足の方に一人坐し居を見たり一三 天使かれに曰けるは婦よ何ぞ哭くや彼こたへけるは我主を取し者あり何處に置しかを知ざれば也一四 如此いひて反顧イエスの立しを見る然どもイエスなることを知ず一五 イエス彼に曰けるは婦よ何ぞ哭や誰を尋るかマリア園を守る人ならんと意ひ彼に曰けるは君よ爾もし彼を轉移ししならば何處に置しか我に告よ我これを取べし一六 イエス彼にマリアよといふ婦かへりみて彼にラボニと曰り之を譯ば夫子なり一七 イエス彼に曰けるは我に捫こと勿れ我いまだ我父に升ざれば也わが兄弟に往ていへ我は我父すなはち爾曹が父わが神すなはち爾曹が神に升ると一八 マグダラのマリア主を見しことと主の如此おのれに言給へるといふ事を弟子等に往て告

一九 此日の暮時すなはち一週の首の日弟子等ユダヤ人を懼るるに因て集れる所の門を閉おきしがイエス來て其中に立かれらに曰けるは爾曹安かれ二〇 如此いひし後其手と脅を彼等に見す弟子たち主を見て喜べり二一 イエスまた彼等に曰けるは爾曹安かれ父の我を遣しし如く我も爾曹を遣さん二二 如此いひしのち氣を嘘て彼等に曰けるは聖靈を受よ二三 なんぢら誰の罪を釋すとも其罪ゆるされ誰の罪を定るとも其罪さだめらるべし二四 イエス來しとき十二の弟子の一人なるデドモと稱るトマス彼等と偕に在ざりき二五 是故に他の弟子かれに曰けるは我儕主を見

たりトマス彼等に曰けるは我もし其手に釘の迹を見わが指を釘の迹に探わが手を其脅に探に非ずば信ぜじ二六八日を越し後また弟子たち室の内に在けるがトマスも彼等と偕に在り門を閉たるにイエス來て其中に立て曰けるは爾曹安かれ二七遂にトマスに曰けるは爾の指を此に伸て我手を見なんぢの手を伸て我脅にさせ信ぜざる勿れ信ぜよ二八トマス答て彼に曰けるは我主よ我神よ二九イエス彼に曰けるは爾われを見しに因て信ず見ずして信ずる者は福なり三〇此書に録さるる外なほ許多の奇跡をイエス弟子の前にて行り三一此書に録せるは爾曹をしてイエスの神の子キリストなる事を信ぜしめ之を信じ其名に因て生命を得させんが爲なり

第二一章

一此後イエス復テベリアの湖にて弟子等に己を現せり其現せること左の如し二シモン・ペテロとデドモと云るトマス及ガリラヤのカナのナタナエルとゼベダイの子等また他の二人の弟子ともに在三シモン・ペテロ彼等に曰けるは我漁に往ん彼等いひけるは我儕も偕に往ん彼等いでて舟に登しが此夜は何の所獲も無りき四已に夜も明たるにイエス岸に立り然ど弟子等そのイエスなる事を知ず五イエス彼等に曰けるは小子どもよ食物あるや彼等こたへけるは無六イエス彼等に曰けるは網を舟の右に撒ば所獲あらん遂に網をうつ魚おほきに因て曳擧ること能はず七是に於てイエスの愛せし所の彼弟子ペテロに曰けるは是主なりシモン・ペテロ主なりと聞て裸なりしが衣をつけ帶して湖に投入ぬ八他の弟子等は小舟にて魚の入たる網を曳て至れり蓋岸を距こと遠からず五十間許なりければ也九岸に着しに炭火と其上に載たる魚およびパンあるを見たり一〇イエス彼等に曰けるは今獲し所の魚を少し携來れ一一シモン・ペテロ舟にゆき網を岸に曳來しに其網の中に大なる魚百五十三尾いりたり如此おほかりけれど網は裂ざりき一二イエス彼等に曰けるは來て食せよ弟子たち敢て彼に爾は誰なると問ることをせず此は主なりと知ばなり一三イエス來てパンを取かれらに予ふ魚をも亦その如せり一四イエス死より甦りしのち己を弟子等に現せること是三次なり一五偖かれら食して後イエス、シモン・ペテロに曰けるはヨナの子シモンよ爾これらの者に過て我を愛するや彼いひけるは主よ然わが爾を愛することは爾知りイエス彼に曰けるは我羔を牧一六また二次かれに曰けるはヨナの子シモンよ我を愛する乎かれ曰けるは主よ然わが爾を愛することは爾知りイエス彼に曰けるは我羊を牧一七三次かれに曰けるはヨナの子シモンよ我を愛する乎ペテロ三次われを愛する乎と言れしに因て憂ふ斯て答けるは主しらざる所なし我なんぢを愛することは爾知りイエス彼に曰けるは我羊を牧一八誠に實に爾に告ん爾いとけなき時みづから帶し意に任せて遊行ぬ老ては手を伸て人爾を束り意に欲ざる所に曳至らん一九如此いへるは其如何なる死にて神を榮ん

といふ事を示したるなり此を言て後又彼に曰けるは我に從へ二〇ペテロ反顧イエスの愛せし弟子の從へるを見この弟子は食する時イエスの懷に倚て主を賣す者は誰ぞやと問し弟子なり二一ペテロ之を見てイエスに曰けるは主よ斯人いかに二二イエス彼に曰けるは我もし彼が存て我來るを待を欲ば爾に何の與あらんや爾は我に從へ二三是に於て此言兄弟の中に傳りて此弟子死ずと言り然どもイエス、ペテロに彼は死ずと言しに非ず我もし彼が存へて我來るを待を欲ば爾に何の與あらん乎と言しなり二四此等の事について證をなし且これを書しし者は其弟子なり我儕その證の眞なる事を知り二五イエスの爲し事は此等の外になほ許多あり若これを一々しるしなば其書この世に載盡すこと能じと意ふ也アメン

使徒行傳

第一章

一テヲピロよ我すでに前書を作て凡そイエスの始て行へるところ教し所を録し二其選たる使徒等に聖靈に託て命ぜしのち擧られし時にまで至れり三夫イエスは苦難を受し後おほくの確據なる證を以て己の活たる事を現し四十日の間かれらに見え神の國の事に就て語り四また彼等と偕に集り居て命じけるは爾曹エルサレムを離ずして我に聞る所の父の約束し給ひし事を待べし五蓋ヨハネは水を以てバプテスマを施たれども爾曹は久からずして聖靈によりバプテスマを受べければ也六集れる者かれに問けるは主よ爾いま國をイスラエルに還さんと爲か七彼等に曰けるは父の其權にて定たまへる時また期は爾曹が知べき所に非ず八然ども聖靈なんぢらに臨に因て後爾曹能力を受エルサレム、ユダヤ全國サマリアおよび地の極にまで我が證人と爲べし九此事を言畢しのち彼等の見が間に擧らる雲これを接て見ざらしめたり一〇イエスの昇れる時かれら天を仰ぎ視たりしに白 衣を着たる二人の人ありて旁に立一一曰けるはガリラヤ人よ何故に天を仰て立るや爾曹を離て天に擧られし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦きたらん

一二其時かれら橄欖と名る山よりエルサレムに歸る此山はエルサレムに近く約そ安息日に行うる程なり一三已に入て樓に登れり此に留れる者はペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、ピリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルパイの子ヤコブ、ゼロテと云るシモン、ヤコブの兄弟なるユダなり一四凡此人々は婦等及びイエスの母マリア並イエスの兄弟と偕に心を合せて恒に祈禱を務たり

一五當時ペテロ弟子等(其集れる者おほよそ百二十人なり)の中に立て曰けるは一六人々兄弟よ聖靈ダビデの口によりてイエスを捕る者を導けるユダに就て預じめ語たる此聖書は必ず應ずべかりし也一七蓋彼も我儕と共に列りて此職を任たれば也一八斯人は不義の價をもて地所を買また倒に墮て眞中より裂れ其腸ことごとく流れ出たり一九此事エルサレムに住る凡の人に知しかば其地所を方言にてアケルダマと呼これを譯ば血の地所なり二〇詩の篇に録して彼の家は墟くなれ其中に人を住居する勿れ彼の職は他人に得させよと云り二一是故に主イエスの我儕が中に往來し給たる間二二即ちヨハネのバプテスマより始われらを離て擧られし日に至るまで常に我儕と偕に在し者の中一人われらと共に其甦りし事の證人と爲べき也二三是に於てバルサバと稱るヨセフ又の名はユストと云る者とマッテアとの二人を擧て二四祈いひけるは衆人の心を識たまふ主よ願はくは奉事ことと使徒の職を得させんが爲に此二人のうち孰を選たまひしか示し給へ二五既にユダは此職を離て其往べき所に往たり二六斯て鬮を取しにマッテアに當ければ彼十一人の使徒等と共に列れり

第二章

一 ペンテコステの日に至て弟子等みな心を合せて一處に在しに 二 俄に天より迅風の如き響ありて彼等が坐する所の室に充り 三 焔の如もの現れ岐て彼等各人の上に止る 四 是に於て彼等はみな聖靈に滿され其聖靈の言しむるに隨ひて異なる諸國の方言を言はじめたり 五 時に敬虔あるユダヤ人天下の諸國より來てエルサレムに留れる者ありき 六 此音おこりしに因おほくの人々集りけるが各人おのが方言を彼等の語れるを聞て躁あへり 七 みな駭き異みつつ互に曰けるは視よ此語る者は凡てガリラヤ人ならず乎 八 如何して我儕おのおの生れし所の方言を彼等より聞か 九 我儕はパルテア人ひとメデア人エラム人およびメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポント、アジア 一〇 フルギア、パムフリア、エジプト又クレネに近きリブエの地などに住る者又ロマより來て居もの或はユダヤ人及び其教に入し人 一一 又クレテ人アラビヤ人なるに彼等が我儕の方言をもて神の大なる用を語るを聞かと 一二 皆おどろき訝て互に曰けるは此は何なる故ぞや 一三 或は嘲りて此人々は甘き葡萄酒に滿されたる者なりといふ人あり 一四 是に於てペテロ十一人と偕にたち聲を揚て彼等に對いひけるはユダヤ人および凡てエルサレムに住る者よ爾曹よく我言を聞て之を知 一五 今は晝の九時なれば爾曹の逆料ごとく此人々は醉る者に非ず 一六 これ即ち預言者ヨエルに因て語れる所なり 一七 神いひ給く末の世に至て我わが靈をもて凡の人に注ん爾曹の子女も預言すべし又なんぢらの幼者は異象をみ老者は夢を見べし 一八 其とき我わが靈を我僕なる男女に注ん彼等も亦預言すべし 一九 われ上なる天に奇跡を現し下なる地に休徵を示さん即ち血あり火あり烟あるべし 二〇 主の大なる顯赫日の來ん前に日は暗く月は血に變ん 二一 凡て主の名を呼頼む者は救るべし 二二 イスラエルの人々よ此等の言を聽それナザレのイエスは爾曹の知ごとく神かれに託て爾曹の中に行し妙なる能力と奇跡と休徵とを以て爾曹に證し給る所の人なり 二三 此人は即ち神の定し旨と預め知たまふ所に應て解さる爾曹は無法の手をもて之を捕へ十字架に釘て殺せり 二四 神は其死の苦を釋て之を甦らせ給へり彼は死に繫れ在べき者ならざれば也 二五 蓋ダビデ彼に就て曰けるは我わが前に主の常に在を見るその我右に在は我動されざる爲なり 二六 是故に我心は樂み我舌は喜べり且わが肉體は望に居ん 二七 これ爾は我魂を陰府に遺おかず又なんぢの聖者を朽果しめざるが故なり 二八 爾すでに我に生命の路を示す我を爾の前に置て喜に盈しめんと 二九 人々兄弟よ我始祖ダビデに就て憚る所なく爾曹に語る是當然ことなり彼は既に死て葬られ其墓は今日に至るまで我儕の中にあり 三〇 彼は預言者にして神これに誓を立て其血統の中より一人を擧て位に即しめんと矢たまへるを知 三一 預め此事を曉るが故にキリストの甦る事につき語て彼は陰府に遺おかれず亦その肉體も朽果ずと曰るなり 三二 既に神はイエスを甦らせ給へり我儕は皆その證人なり 三三 是故

に彼は既に神の右に擧られ約束の聖靈を父より受て今なんぢらが見ところ聞ところの者を注り三四 三五 夫ダビデは天に昇しことなし然るに彼みづから言主わが主に曰けるは我なんぢの敵を爾の足凳と爲まで我右に座すべしと三六 然ば凡てイスラエルの全家よ爾曹が十字架に釘し此イエスを立て神これを主となしキリストとなし給しことを確に知三七 彼等これを聞て其心刺るるが如し是に於てペテロと他の使徒等に問けるは人々兄弟よ我儕は何を爲べき乎三八 ペテロ彼等に曰けるは爾曹おのおの悔改めて罪の教を得んが爲にイエス・キリストの名に託てバプテスマを受よ然ば爾曹も聖靈の賜を受べし三九 この約束は爾曹および爾曹の子孫また凡の遠人すなはち主たる我儕の神に召るる人々に屬なり四〇 また多 言をもて證して勸けるは爾曹この邪なる世より救出されよ四一 其時この言を聞納し者はバプテスマを受たり是日弟子に加れる者おほよそ三千人四二 彼等は常に使徒等の教訓をうけ交接をなしパンを擘ことと祈禱とを務む四三 是に於て敬畏人々の心に生ず又使徒等に託て許多の奇 跡を休徵おこなはれたり四四 信者はみな一 處に會て諸 物を共にし四五 產業と其所有を鬻て各人の用に從ひ之を分與へぬ四六 日々心を合せて殿に在また家に於てパンをさき歡喜と誠心をもて食を同にし四七 神を讚美すべての民に悅ばる主すくはるる者を日々教會に加たまへり

第三章

一 第三時祈禱の時に當てペテロとヨハネ共に殿に上しに二 一人の生來なる跛あり殿にいる人に施濟を求ん爲に日ごと負れて殿の美と名る門に置る三 彼ペテロとヨハネの殿に入んとするを見て施濟を求り四 ペテロ、ヨハネと共に熟々之を視て曰けるは我儕を觀よ五 かれ得こと有んと意ひて彼等を見つめたり六 ペテロ曰けるは金銀は我になし惟われに有ものを爾に予ふナザレのイエス、キリストの名により起て行め七 遂に其右の手を執これを起ければ其足と踝ただちに健勁なりて八 躍立かつ行めり踊あゆみ神を讚美つつ彼等と偕に殿に入ぬ九 衆 民かれの行み神を讚るを見て一〇 素その殿の美 門に坐し施濟を求たりし者なるを識この人に所遇ことを大に駭き奇めり一一 その跛者ペテロとヨハネにすがり居し間に民みな駭こと甚しくソロモンの廊と名る所に趨集れり一二 ペテロ之を見て民に答けるはイスラエルの人々よ何故に此事を奇とするや我儕が自己の能と徳をもて此人を行ししが如く何ぞ我儕に目を注るや一三 夫アブラハム、イサク、ヤコブの神わが先祖たちの神は其僕イエス即ち爾曹が解し者ピラトが釋すことを擬たる時その前に爾曹が拒し所の者を榮給へり一四 爾曹は聖者 義 者を拒み人を殺し者を己に予られん事を求一五 かつ生命の主を殺せり神は之を死より甦らせ我儕は其證人なる也一六 イエスの名は其名を信ずるに由て爾曹が見ところ識ところの此人を健勁せり如此イエスに由る信仰は

爾曹すべての人の前に於て此人を全く愈たり一七兄弟よ我は知なんぢらが行し事は知ざるに由てなり爾曹の有司等も亦然り一八然ども神は凡の預言者の口に託てキリストの苦を受ることを預め示し其言を如此かなはせ給へり一九是故に爾曹罪をくい心を改て其罪を抹ることを爲よ蓋主の前より安舒日の來り二〇且あらかじめ擬たまひしイエス・キリストを遣れんが爲なり二一神の古より聖預言者の口に託て言たまひし萬物の復興ん時まで天は必ず彼を受おくべし二二モーセ我儕の先祖たちに告て曰けるは主なる爾曹の神は爾曹の兄弟の中より我に似たる一人の預言者を起さん其爾曹に告る凡の言を聽べし二三凡て此預言者に聽從はざる者は民の中より取滅さる二四又サムエルより以來かたりし所の預言者も皆あらかじめ此日を指て言り二五夫爾曹は預言者の子孫なり且神の我儕が先祖たちに立たまひし契約を承繼ものなり即ちアブラハムに告て地の諸族は爾の裔に由て福を獲んと曰給へり二六神すでに其僕イエスを立なんぢら各人を其惡より引反し福を獲させせんが爲に先なんぢらに彼を遣せり

第四章

一彼等が民を教え且イエスの事をひき死より復生の事を宣るにより二祭司殿司およびサドカイの人たち心を悩し其民に語れるとき突然きたりて三親手これを執ふ時すでに暮ければ明日まで獄に囚おけり四然ど其道を聽し者は多これを信ず其數おほよそ五千人なり五明日有司たち長老學者六及び祭司の長アンナ並カヤパ、ヨハネ、アレキサンデルと祭司の長の凡の族エルサレムに集り七使徒等と其中に立せて問けるは爾曹何の權また何の名に由て之を行ひしや八其時ペテロ聖靈に滿され彼等に曰けるは民の有司及びイスラエルの長老よ九我儕もし病たる人に行ひし善事につき之を如何して愈ししと今日訊れなば一〇爾曹とイスラエルの民もみな知べし其なんぢらが十字架に釘しところ神の甦らせ給し所のナザレのイエス・キリストの名に由て此人健勁なることを得なんぢらの前に立たりと一一これ即ち爾曹工匠の棄し所の石屋の隅の首石となれる者なり一二此ほか別に救ある事なし蓋天下の人の中に我儕の依賴て救るべき他の石を賜はざれば也一三彼等ペテロとヨハネの忌憚る所なきを見て其無學の小民なるを識ば之を奇みたり又そのイエスと偕に在しを知一四かつ愈されたる人の彼等と偕に立るを見により駁すべき言なかりき一五斯て彼等に命じて集議所を去しめ後に相議て曰けるは一六この二人に何を處べきや彼等が既に著き休徵を行へる事は凡てエルサレムに居者の明かに知ところ也われら之を言滅こと能ず一七然ども此事の猶ひろく民に傳らざる爲に彼等を恐喝し此後その名に就て人に語ること勿しめん一八遂に彼等を召て更にイエスの名に就て語ることを教ることを爲なかれと戒む一九ペテロ、ヨハネ彼等に答て曰けるは神に聽よりも愈

て爾曹に聽ば神の前に在て義たらんか爾曹みづから之を判よ二〇 われら見しところ聞し所のものは言ざるを得ざる也二一 人々その所爲に因て神を榮たれば彼等民を畏れ此二人を罪するに由なく更に之を恐喝して釋せり二二 その奇なる跡に由て癒されたる人は四十歳餘なりき
二三 かれら釋されて其友の所にゆき祭司の長と長老の言しことを悉く告二四 その友これを聞て心を合せ神に對ひ聲を揚て曰けるは主よ爾は天と地と海と其中の萬物を造たまひし神なり二五 なんぢ曾て其僕ダビデの口に託て何故に異邦人は喧嘩もろもろの民は徒事を謀る乎二六 地の王等は起て群伯と共に集り主および其キリストに逆ふと云り二七 それ誠にヘロデとポンテヲ・ピラト異邦人およびイスラエルの民相共に此城に集り爾が膏を沃たる聖僕イエスに逆へり二八 これ爾の手なんぢの旨にて預じめ定め給ひし事を彼等は成るなり二九 三〇 主よ今彼らの恐喝を見たまへ願くは爾が手を伸て醫を施し爾の聖僕イエスの名に託て休徵と奇跡を行はしめ爾の僕等に憶することなく爾の道を宣ることを得させよ三一 かれら祈禱を畢し時その集れるところ震動みな聖靈に滿されて臆する所なく神の道を宣
三二 信者はみな心を一にし意を一にして誰一人その所有を己が物と云ことなく凡て之を共に有り三三 使徒たち大なる能をもて主イエスの甦りし事を證し彼等みな大なる恩を蒙れり三四 其中に一人も窮乏者なかりき蓋地所あるひは家を有る者は其を售て其售し所の價を挈來り三五 使徒等の足下に置これを各々の用に從ひて分予しが故なり三六 レビの族にてクプロに生しヨセフは使徒等に呼れてバルナバと稱る之を譯ば勸慰の子三七 この人田疇ありけるが其を售てその金を挈來り使徒等の足下に置り

第五章

一 然るにアナニアといふ人その妻サツピラと同に產業を鬻二 その價の幾分を藏し餘の幾分を挈來りて使徒等の足下に置ぬ其妻も之を知り三 ペテロ曰けるはアナニアよ何故に爾の心サタンに滿され聖靈に對ひ僞て地所の價の幾分を藏す事をせし乎四 地所いまだ售ざる時は爾の有ならずや已に售たりとも亦なんぢの權に屬るならずや何故に爾の心この事を發念しや爾人に對て僞るに非ず神に對て僞れる也五 アナニア此言をきき仆て氣絕之を聞者みな大に懼る六 少者ども起て彼を殮み舁出して葬れり七 約三時ばかり過その妻いまだ此所遇を知ずして入來れり八 ペテロ彼に曰けるは爾曹この價に地所を售しや我に告よ答て曰けるは然り其價なり九 ペテロ彼に曰けるは爾曹心を合せて主の靈を試るは何ぞや視よ爾の夫を葬りし者の足門外に在また爾をも舁出さん一〇 婦直に其足下に仆て氣たゆ少者ども入來て其死たるを見これをも舁出して其夫の側に葬れり一一 全會の者とこれを聞る者ども皆大に懼る一二 多の休徵と奇なる跡は使徒等の手に由て民の間に行はれたり又かれら皆心を合せてソロ

モンの廊に在一三 餘の者は敢て之に近づかざりき然れども民は彼等を尊み一四 男女とも信ずる者ますます多く主に屬ぬ一五 斯て人々病る者を携て衢にいで寢牀また榻の上に置り蓋ペテロの來らん時その影に蔭はるる者あらんかと意ばなり一六 また許多の人々四方の諸邑より病る者および惡鬼に難されたる者を携てエルサレムに來り悉く愈されたり一七 然るに祭司の長および彼と同にある者即ちサドカイ宗の徒みな起て大に憤り一八 使徒等を執て獄に置り一九 然ども主の使者夜獄の門を啓き彼等を携へ出して曰けるは二〇 往て殿に立この生命の言を悉く民に語れ二一 かれら之をきき昧爽より殿に入て教ふ祭司の長および同 人ども來て議院およびイスラエルの子孫の長老等を悉く召集て彼等を曳來せんが爲に下吏を獄に遣せり二二 其人等きたりしに獄の内に彼等を見ず反て告いひけるは二三 獄は固とぢ守者も門の外に立るを我儕は見しに啓けば内に一人をも見ざりき二四 祭司殿司および祭司の長たち此言を聞て此は如何に成行べきかと彼等に就て心惑へり二五 或人來り彼等に告けるは視よ爾曹が獄に置し者は今殿に立て民を救ふ二六 是に於て殿司は下吏等と共に往かれらを曳來れり然ど強暴ことを爲ざりき蓋石にて民は擊れん事を懼しが故なり二七 既に曳來りて彼等を議員の前に立せ祭司の長これに問て曰けるは二八 我儕この名に由て教る勿れと爾曹に嚴く禁ぜしに非や然るに爾曹は其教をエルサレムに滿せ又この人の血を我儕に負めんとす二九 ペテロと使徒たち答て曰けるは人に從ふより神に從ふは爲べきの事なり三〇 我儕の先祖の神は爾曹が木に懸て殺し所のイエスを甦らせ給へり三一 神は之を君とし救主として其右の方に擧これイスラエルに悔改と罪の赦を予んが爲なり三二 我儕は此事の證を爲者なり神おのれに從ふ者に賜ふ所の聖靈も亦證す

三三 かの人々これを聞て甚しく怒を含み彼等を殺さんと謀る三四 パリサイの人にて衆民の中に尊ばるる教法師ガマリエルと云る者議員の中にたち命じて使徒等を暫く外に出さしめ三五 曰けるはイスラエルの人々よ爾曹この人等につきて爲んとする事を自ら愼むべし三六 そは曩にチウダ起て自ら誇れり之に從へる者およそ四百人ありしが彼は殺され從ひし者は皆ちらされて跡なきに至る三七 此人の後また戸籍調査の時ガリラヤのユダ起て民を誘ひ從はししが彼も亡び其に從ひし者も悉く散されたれば也三八 今われ爾曹に語らん此人々を容て之に係る勿れ若そ謀ところ行ふところ人より出ば必ず亡べし三九 もし神より出ば爾曹かれらを亡すこと能ず恐くは爾曹神に逆らふ者とならん四〇 彼等これに從ひ使徒等を召て鞭ちイエスの名に由て語ることを爲なかれと命じて之を釋せり四一 使徒等はイエスの名の爲に辱を受るに足者とせられし事を喜びて議員の前を去四二 日々に殿および人の家に於て教をなしイエス・キリストの福音を傳て止ざりき

第六章

一當時弟子たちの數おほく加りギリシヤ方言のユダヤ人その嫠等が日々の施濟に遺漏されしを以てヘブル方言のユダヤ人にむかひ怨言し事ありければ二十二人の者弟子等を召集て曰けるは我儕神の道を棄て飲食の事に仕るは意に適ず三是故に兄弟よ爾曹の中より聖靈と智慧の滿たる善證ある者七人を撰べし我儕それを立て此事を司らせん四而して我儕は常に祈ことと道を傳ることを務べし五此言すべての人の心に合ければ信仰と聖靈の滿たるステパノ及ピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ又ユダヤ教に入しアンテオケのニコラを撰び六この人々を使徒等の前に立しむ使徒たち祈て其上に手を按り七神の道いよいよ傳播て弟子等の數エルサレムに甚しく增り祭司も多く信仰の道に從へり八ステパノ惠と能力に滿て奇なる跡と大なる休徵を民の中に行へり九時にリベルテンと稱る會堂及びクレネ人アレキサンデリヤ人キリキヤ人アジヤ人の諸會堂より人々起てステパノと言爭ふ一〇彼等ステパノの智慧と之に由て言ところの靈に敵すること能ず一一遂に人をして誣告しめけるは我儕かれが言を聞しにモーセと神を謗讟たり一二かれら民と長老學者たちの心を動させ突然きたりて彼を執へ集議所に曳來り一三妄の證人を立て曰せけるは此人は聖所と律法を謗讟ことを語て止ず一四蓋かれ語て此ナザレのイエスは此所を毀ち且モーセの我儕に授し所の例を易べしと曰るを我儕聞たれば也一五是に於て集議所に坐せる者皆目を注て彼を見しに其面天使の面の如也き

第七章

一さて祭司の長いひけるは此事かくの如なる乎二ステパノ曰けるは衆兄弟および父等よ聽我らの先祖アブラハム未だカランに住ざる前メソポタミヤに在しとき榮光の神あらはれて三彼に曰たまひけるは爾の國を出なんぢの親族を離て我なんぢに示さん所の地に至れ四斯てアブラハム、カルダヤ人の地を出てカランに住り其父の死しのち神は彼を彼處より今なんぢらが住ところの此地に移し給へり五此地に於は足を踏立るほどの地をも賜ず且かれは未だ子あらざりしに此地を產業として彼と其子孫に賜んと約束し給へり六神如此いひ給へり彼の裔は他の國に旅らん他の國の人々これを奴隷と爲て四百年の間なやまさん七神また云かれらを奴隷とする國民を我鞫べし厥後かれら其國を出この處に於て我に事んと八また彼に割禮の契約を予へ給へり斯てアブラハム、イサクをうみ第八日に割禮を之に行ふイサク、ヤコブを生ヤコブ十二の始祖を生九始祖たちヨセフを妬これをエジプトに賣り然ど神は彼と偕に在て一〇諸の患難の中より之を救出しエジプト王パロの前に於て恩寵と智慧とを賜てエジプト及パロの全家を宰らせ給ふ一一茲にエジプト、カナンの遍の地に饑饉と大なる難あり我儕の先祖たちも食物を獲ことを

得ざりき一二然るにヤコブ、エジプトに穀物ある事を聞て先われらの先祖たちを遣す一三 再び遣し時ヨセフその兄弟に識れ且ヨセフの親族パロに明になれり一四 ヨセフ人を遣して其父および凡の家族七十五人を召來しむ一五 是に於てヤコブ、エジプトに下れり彼も我儕の先祖たちも死たる後一六 スケムに送れアブラハムが金をもてスケムの父なるエンモルの子孫より買おきし墓に葬られたり一七 神のアブラハムに示し給へる約束の期ちかづくに從ひて民蕃衍りてエジプトに多なれり一八 ヨセフの事を知ざる他の王起るに至りて一九 彼あしき謀計をもて我儕の親族を待ひ我儕の先祖たちを困苦し其嬰孫の活殘ざるやう之を棄させんとせり二〇 其時モーセ生て甚美しく三ヶ月のあひだ父の家に育られ二一 棄られし後パロの女これを拾あげ己の子として育たり二二 モーセ 盡くエジプト人の學術を教られ言と行とに才能あり二三 四十歳に及て其兄弟なるイスラエルの子孫を顧るの心起れり二四 一人の寃抑らるる者を見て之を保護エジプト人を撃て其仇を報たり二五 モーセは我手をもて神の彼等を救んとし給ふ事を其兄弟悟ならんと意しかど彼等は悟ざりき二六 次日かれら相闘ふこと有ければ之に現れて和げ曰けるは人々よ爾曹兄弟なるに何故相害ふや二七 其友を害ふ者かれを拒却て曰けるは誰が爾を立て我儕の有司また刑官と爲しや二八 なんぢ昨日エジプト人を殺しし如また我をも殺さんと爲か二九 モーセ此言により逃てミデアンの地に旅人となり彼處に於て二人の子を生り三〇 既に四十年を過し時シナイ山の野に於て主の使者棘の中の火焰の間にてモーセに現る三一 モーセ之を見て奇み諦視んとして近れるとき主の聲あり云く三二 我は爾の列祖の神すなはちアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりモーセ畏怖き敢て諦視ざりき三三 主また彼に曰給ひけるは爾の足の履を解なんぢが立る處は聖地なり三四 我すでにエジプトに在わが民の苦難を見かつ其嘆息を聞これを救んが爲に降れり來れ我なんぢをエジプトへ遣さんと三五 夫彼らが拒て誰か爾を立て有司また刑官と爲し乎と云し此モーセを神は棘中に現れし使者の手に托て有司また救者として遣し給へり三六 この人エジプトおよび紅海また四十年の間野に於て奇跡と休徵を行ひて彼等を導き出せり三七 イスラエルの子孫に語て神は爾曹の兄弟の中より我ごとき一人の預言者を爾曹の爲に起し給ふ可と言しは即ち此モーセなり三八 彼は野の會に在シナイ山にて己に語れる所の天使また我儕の先祖等と偕に在て我儕に授んがため生る道を受し者なり三九 此人に我儕の先祖たちは順ふことを欲ず反て之を卻け其心すでにエジプトに返り四〇 アロンに曰けるは我儕に先つべき神を我儕の爲に遣れ蓋われらをエジプトの地より導き出しし彼モーセは如何なりしか知ざれば也四一 厥時かれら犢を造その像に犧牲を献げ己の手の所作を喜べり四二 是に於て神は彼等を顧みずして其天の軍勢を祭るに任せ給へり即ち預言者の書にイスラエルの族よ爾曹は四十年のあひだ野に於て

犧牲と祭物を我に獻しや四三また爾曹はモロクの幕屋およびレパンといふ神に象れる星すなはち爾曹が拜する爲に造れる所の像を携へたり我なんぢらをバビロンの外へ徙んと録されたる如し四四我儕の先祖たちは野にて證の幕屋を有り此はモーセに語れる者かれに對て已に見し所の式に遵ひて造れと命ぜし如く造れる者なり四五我儕の先祖たち此幕屋を承てヨシュアと偕に異邦人の地を攻取し時これを携へ入り此異邦人はダビデの時までに我儕の先祖たちの前より神の逐驅ひ給し所の者なり四六ダビデ神の前に恩を蒙てヤコブの神の爲に居所を設んと欲たれど四七ソロモン神の爲に殿を建たり四八然ども至上き神は手にて造れる所に居たまはず蓋預言者の云る如し四九即ち主いひ給く天は我座位なり地は我足凳なり爾曹我ために如何なる屋を建んと爲か又わが息む所は何處なる乎五〇我が手は此凡の物を造らざりし乎五一強項にして心と耳に割禮を受ざる者よ爾曹常に聖靈に逆ひ其先祖たちの如く爾曹も行なり五二爾曹の先祖等は孰の預言者をか窘迫ざりし彼等は義者の來んこと預め語し者を殺し爾曹は今その義者を解し且これを殺す者となれり五三爾曹は天の使者に由て律法を受なほ之を守ざる也

五四衆人これらの言を聞て大に憤り切齒しつつステパノに向へり五五然るにステパノは聖靈に滿され天を仰て神の榮光と其右にイエスの立るを見て曰けるは五六視よ我天ひらけて神の右に人の子の立るを見五七是に於て彼等大に呼り耳を掩ひ心を合せてステパノの所に驅より五八彼を邑より逐出し石をもて之をうつ證人等おのおの其衣服をサウロと云る少年の足下に置り五九彼等が石を以てステパノを撃る時かれ祈て曰けるは主イエスよ我靈魂を納たまへ六〇また跪き大聲に呼いひけるは主よ此罪を彼等に負しむる勿れ此言をいひ畢て寢に就サウロ彼の殺されしを好とせり

第八章

一此日エルサレムに在ところの教會を大に窘迫こと起り使徒等の外は皆ユダヤとサマリアの地に散されたり二敬虔ある人々ステパノを葬り之が爲に大なる哭泣をなせり三サウロは教會を殘害して此處彼處の家にいり男女を曳出して之を獄に付せり四是に於て散されたる者ども徧く往て福音を宣傳たり五ピリポはサマリアの邑に下てキリストの事を彼等に示す六多の人々ピリポの行へる奇なる跡を見聞して心を同うし謹て其語れる言を聽り七そは汚たる鬼大に喊叫て其憑る所の多の人より出また癱瘋および跛者の人も多く愈されたれば也八之に因て此邑に大なる喜ありき九爰にシモンと云る素魔術を行ひ自らを大なる者としてサマリアの民を駭かしし者あり一〇小より大に至るまで皆謹て彼に聽この人は神の大なる能なりと曰り一一彼等の謹て之に聽るは久く其魔術に駭かされたるが故なり一二然ども彼等神の國およびイエス・キリストの名につきて福音を宣るピリポを信

ぜしかば男 女ともバプテスマを受一三 シモンも亦信じてバプテスマをうけ常にピリポと偕に在て彼が行ふ所の奇なる跡と休徴を見て駭けり一四 エルサレムにをる使徒等サマリア已に神の道を受たりと聞てペテロとヨハネを彼處に遣す一五 この二人の者くだりて彼等が聖靈を受ん爲に祈れり一六 蓋かれら唯主イエスの名に入られバプテスマを受し耳にて未だ其一人にも聖靈下ざりしに因一七 この時二人の者手を彼等の上に按ければ彼等聖靈を受たり一八 使徒たちの手を按るに因て聖靈を予られしを見てシモン金を携來り彼等に曰けるは一九 我手を按ところの者も凡て聖靈を受ん爲に此權を我にも予よ二〇 ペテロ彼に曰けるは爾の金は爾と偕に亡よ爾は神の賜を金にて得んと意り二一 爾この事に於て分なく又與なし蓋爾の心神の前に正からず二二 故に爾この惡を悔改て神に祈れ爾の心の念 或は赦れん二三 我爾が膽の苦にをり不義の繫に在を見れば也二四 シモン答て曰けるは爾曹が語れるところ一も我に及ざるやう我爲に主に祈れ二五 かれら主の道を證し且これを語し後エルサレムへ返往ときサマリア人の諸邑に福音を傳たり

二六 主の使者ピリポに語て曰けるは起て南の方に向ひエルサレムよりガザに下る所の路に往その路は野なり二七 かれ起て往りエテヲピア人すなはちエテヲピア人の女王カンダケの大臣なる寺人にて凡て其女王の財寶を司る者禮拜の爲エルサレムに來し

二八 その返なるが車の中に坐し預言者イザヤの諸を讀をれり二九 靈 ピリポに曰けるは往て此車に就三〇 ピリポ趨よりて彼が預言者イザヤの書を讀を聞これに曰けるは爾その讀ところの事を曉るや三一 彼いひけるは若われを啓く者なくば如何で曉ることを得んや遂に請てピリポを己と同に坐せしむ三二 其讀をりし聖書の文は在の如し彼は羊の屠場に牽るる如く牽れ又羔の其毛を剪者の前にて聲を出さぬが如く其口を開ず三三 かれ卑賤に居しとき義 判を奪れたり誰か能その世の狀を述得んや蓋かれの生命地より滅れたれば也三四 寺人ピリポに對いひけるは請われに示せ預言者は誰を指て之を語しや自己を指しか他人を指しか三五 ピリポ口をひらき此録されたる所に基きてイエスの福音を彼に宣傳ふ三六 斯て二人の者路をゆき水ある所に至ければ寺人いひけるは水を見よ我バプテスマを受んとす何の礙か有や三七 ピリポ曰けるは爾もし全 心をもて信ぜば可らん彼こたへて曰けるは我イエス・キリストは神の子なりと信ず三八 遂に命じて車を止しめピリポの寺人の二人水に下りピリポ、バプテスマを彼に施せり三九 かれら水より上れるとき主の靈 ピリポを引去る寺人また彼を見ことを得ざりき寺人喜びて其路を往り四〇 偖アシドドにてピリポに遇る者あり彼すべての邑郷を經て福音を宣傳へカイザリヤに至れり

第九章

一 サウロは猶も兇言と殺氣を吐て主の弟子等をせめ祭司の長に

往て二ダマスコの諸會堂に寄る書を求む彼は此道に從へる者を見ば男女にかかはらず捕て之をエルサレムに曳んと意り三彼ゆきてダマスコに近けるとき忽ち天より光ありて彼を環照せり四かれ地に仆る其時サウロ、サウロ何ゆゑ我を窘迫やといふ聲を聞り五サウロ曰けるは主よ爾は誰ぞ主いひ給けるは我なんぢが窘迫ところのイエスなり爾荊ある鞭を蹴は難し六かれ戰き駭きて曰けるは主よ我に何を行しめんと爲給ふや主かれに曰けるは起て邑に入さらば爾行べき事を示さるべし七彼と偕に往る人々言ふこと能ずして立止り其聲を聞ども誰をも見ざりき八サウロ地より起て眼を啓たるに何も見ざりければ伴へる人等その手を援てダマスコに入ぬ九かれ三日の間みえず又飲食をも爲ざりき一〇斯てダマスコにアナニアと云る一人の弟子あり主幻の如彼に曰給ひけるはアナニアよ答けるは主われ此に在一一主いひ給ひけるは起て直と云る街に往ユダの家に至てタルソの人サウロといふ者を尋よ彼は祈て居一二且アナニアといふ人きたりて見ことを得させんがため手を其上に按しと幻に見たれば也一三アナニア答けるは主よ我この人につきて多の人の語るを聞しに彼がエルサレムにて爾の聖徒を苦しこと如何ばかりぞ乎一四且この處にても彼は凡て爾の名を籲者を捕んとて祭司の長より受たる權威を有り一五主いひ給ひけるは往よ彼は異邦人および王とイスラエルの子孫の前に我名を擔しめん爲に我選し器なり一六彼は我名の爲に如何ばかりの苦難を受るか我これを彼に示さん一七是に於てアナニア往て其家にいり手を彼の上に按て曰けるは兄弟サウロよ爾の來れる路にて現れし所の主イエス爾が再び見ことを得かつ聖靈に滿されん爲に我を遣せり一八忽ち彼の眼より鱗の如もの脱て再び見ことを得すなはち起てバプテスマを受一九彼すでに食して強健たり斯てサウロは數日の間ダマスコにある弟子等と交り二〇直に會堂に於てイエスの事を宣て即ち此は神の子なりと言二一聞者みな駭異て曰けるは此人はエルサレムに於て此名を籲者を殘害し且ここに來しも之を捕て祭司の長に曳んとするに非ずや二二然どもサウロは益堅固して此イエスはキリストなりと證をなしダマスコにをる所のユダヤ人を辯折たり二三既に多の日を歴て後ユダヤ人サウロを殺さんと謀しが二四その計謀つひにサウロに知る彼等は夜も晝も邑の門を守て之を殺さんとせしに二五夜弟子たち筐をもてサウロを石牆より縋下せり二六サウロはエルサレムに至て弟子たちに列らんと爲たりしに皆かれが弟子たることを信ぜずして之を懼る二七バルナバ彼を援て使徒たちの所に至り其途中にて主を見しこと又主の彼に語り給ひしこと及びダマスコに在て懼らずイエスの名に由て語しことを告たり二八彼エルサレムに在て弟子たちと偕に往來し二九主イエスの名に由て憚らず語かつギリシヤ方言のユダヤ人と辯論へり彼等サウロを殺さんと圖る三〇然ど兄弟たち之を曉り彼をカイザリヤまで送てタルソに往しめたり三一是に於てユダヤ、ガリラヤ及サマリア中の教會は

平安に且成立て主を畏れ事を行ひ聖靈の勸に因て其數いや增れり

三二 偖ペテロ遍く諸方の地を經てルッダに住る聖徒の所に至り三三 その處にて一人の癱瘋を患ひ八年の間床に臥るアイネアと名る者に遇三四 ペテロ彼に曰けるはアイネアよイエス・キリスト爾を愈す起て爾みづから床を治よ彼ただちに起三五 ルッダ及サロンに住る凡の人之を見て主に歸せり

三六 ヨッパに女の弟子ありタビタと名く譯ばドルカス彼は多の善事と施濟を行へる者なりしが三七 そのころ病て死たるにより其屍を洗て樓に置り三八 ヨッパはルッダに近き故に弟子たちペテロの彼處に在ことをきき二人の者を遣して我儕に來ことを遲する勿れと請しむ三九 ペテロ起て彼等と偕に往既に至ければ人々かれを引て樓に登る凡の寡婦たちペテロの側に立て哭泣つつドルカスが偕に在しとき常に作れる所の上衣下衣を彼に示す四〇 ペテロ彼等を悉く外に出し跪きて祈り又屍に向てタビタ起よと曰ければかの婦眼を啓きペテロを見おきて坐しぬ四一 ペテロ手を伸て之を起し聖徒および寡婦等を召て此活たるタビタを其前に立しめたり四二 此事ヨッパ中にしれ多の人々主を信ず四三 斯てペテロ久くヨッパに留して皮工シモンの家に居り

第一〇章

一 カイザリヤにイタリヤ隊と稱る組の百夫の長にてコルネリヲと云る人あり二 彼は信心の深き者にて其擧の家族と偕に神を敬ひ民に多の施濟をなし恆に神に祈禱せり三 晝の三時ごろ幻の如く神の使者の來りてコルネリヲよと曰るを明から見四 かれ目を注これを見て懼曰けるは主よ何事なるや天使かれに曰けるは爾の祈禱なんぢの施濟すでに上て神の前に配置れたり五 いま人をヨッパへ遣しペテロと云シモンを召六 彼は皮工シモンの所に寓れり其家は海濱に在七 コルネリヲに語れる天使さりし後かれ其後二人と恆に己に事る信心の深き兵卒を召八 此事を詳く告てヨッパへ遣はす

九 彼等ゆきて次日その邑に近ける時ペテロ祈禱のため屋上に升れり時は約そ十二時なりし一〇 甚く饑て食せんと欲しが人の食物を具る間に彼氣を喪へる心地して一一 天ひらけ器物の降れるを見る大なる布の如く四角を繫て地に縋下されたり一二 其中に凡て地の四足の獸昆蟲および空の鳥あり一三 かつ聲ありて彼に曰けるはペテロよ起て之を殺し食せよ一四 ペテロ答けるは主よ可らじ我いまだ穢たる物と潔からざる物を食せしことなし一五 聲ふたたび有て彼に曰けるは神の潔たる物を爾潔からずと爲なかれ一六 此の如こと三次ただちに其器物天に上られたり

一七 斯てペテロ其見し所の異象は如何なる意ならんと疑ひ在し時コルネリヲより遣されたる人等すでにシモンの家を訪て門の前に立一八 呼てペテロと稱シモンは此に寓るるや否と問一九 ペテロ猶その異象の事を思をりしに靈かれに曰けるは視よ三人の者

なんぢを尋ふ二〇起て下り疑はずして彼等と偕にゆけ我これを遣し也二一ペテロ下て其人たちに曰けるは我は爾曹が尋る所の者なり爾曹如何なる故ありて來るや二二彼等いひけるは百夫の長なるコルネリヲと云る義かつ神を敬ひ凡のユダヤ人の中に尊ばるる者なんぢを其家に召て爾の言を聽と聖使に示されたり二三是に於てペテロ彼等の召入て舘しめ次日ペテロ彼等と偕に出立けるがヨッパの兄弟たちも亦かれに伴へり二四次日かれらカイザリヤに入るコルネリヲは既に其親族および親き友等を召集て之を待居たり二五ペテロの入來れる時コルネリヲ彼を迎へ其足下に伏て拜り二六ペテロ之を扶起し曰けるは起よ我も人なり二七斯て偕に語つつ内に入て多の人の集れるを見二八彼等に曰けるはユダヤ人の異邦人と交り又近く事の律に合ざるは爾曹の知ところ也されど神は何の人をも穢たる者あるひは潔からざる者といふ勿と我に示し給へり二九是故に我請らるるや直に猶豫ずして來る我なんぢらに問われを請しは何の爲なる乎三〇コルネリヲ曰けるは四日前に我斷食して此時刻に至れり三時ごろ家に在て祈禱をりしに曄ける衣を着たる者わが前に立三一曰けるはコルネリヲよ爾の祈禱は聞れ爾の施濟は神の前に記置れたり三二然ば人をヨッパへ遣しペテロと稱シモンを召かれは海邊にある皮工シモンの家に寓れり彼きたりて爾に語るべしと三三是故に我ただちに人を爾に遣せり爾の來れるは善われら神の爾に命じ給へる一切の言を聽んとて今神の前に在なり

三四ペテロ口を啓て曰けるは我まことに神は偏らざる者にして三五何の國民にても神を敬ひ義を行ふ者は其聖旨に適と云ことを悟る三六その道は即ち神のイエス・キリストに由て平和を宣イスラエルの子孫に予たまひし所なり此イエスは萬物の主たる也三七夫ヨハネの宣しバプテスマの後ガリラヤより始りユダヤ中に有し事は爾曹が知ところ三八即ち此ナザレより出たるイエスは神より聖靈と才能を以て膏を沃がれ周遊て善事を行ひ凡て惡魔に憑たる者を愈せり蓋神彼と偕なりしに因三九我儕は彼がユダヤ人の地およびエルサレムに於て行ひし凡の事を證する者なりユダヤ人は此人を木に懸て殺せり四〇神は第三日に之を甦らせ衆の民には顯さで四一唯その預め選たまへる證人すなはち彼が甦りし後これと同に飲食せし我儕にのみ顯し給へり四二かつ彼は其生者と死者の審判人に神より定られし事を我儕に證して民に宣よと命じたり四三凡の預言者も凡そ彼を信ずる者は其名に由て罪の赦を受べしと彼につきて證せり四四ペテロこの言を語れる間に道を聽ところの凡の者に聖靈降れり四五ペテロと偕に來りし割禮ある信者等は聖靈の賜の異邦人にまで注げる事を駭きぬ四六そは異なる邦々の方言にて彼等が語れると神を讚るとを聞たれば也四七此時ペテロ答けるは我儕の如く既に聖靈を受たる此人々に孰か水を禁じてバプテスマを受ざらしむる者あらん乎四八遂に主の名に由てバプテスマを受べき事を彼等に命ず是に於て彼等ペテロに數日留らんことを請へり

第一一章

一使徒等およびユダヤ中に在ところの兄弟すでに異邦人も神の道を受たりと聞二ペテロ、エルサレムに上しとき割禮ある者ども彼と爭ひ三曰けるは爾は割禮なき人の家に入て彼等と同に食せり四ペテロその有し始より次第に語て彼等に顯し曰けるは五我ヨッパの邑に在て祈れるとき氣を喪へる心地して天より四角を繋たる大なる布の如き器の下るを見たるに其器わが前に着り六われ目を注て熟々之を視ば中に地の四足のものと野獸昆蟲および空の鳥ありき七且われにペテロよ起て之を殺し食すべしと曰る聲を聞り八我いひけるは主よ可らじ穢たる物と潔からざる物は未だ我口に入しことなし九聲また天より我に答て神の潔たる物を爾潔からずと爲なかれと曰一〇此の如きこと三次つひに各物ふたたび天に引上られたり一一其時に當てカイザリヤより我に遣せる三人の者わが居ところの家の前に立り一二また靈われに疑はずして彼等と偕に往べしと曰り且この六人の兄弟も我と伴ひ往て其人の家に入ぬ一三かれ我儕につぐ天の使者の我家に立われに向て人をヨッパへ遣しペテロと稱シモンを迎よ一四其人なんぢ及び爾の家族の救はるべき言を告んと曰るを見たりと一五斯て我かたり始しとき聖靈はじめに我儕に降し如く彼等にも降れり一六其時われ主の曰たまへるヨハネは水を以てバプテスマを施たれども爾曹は聖靈に由てバプテスマを受んとの言を意起せり一七既に神は主イエス・キリストを信ずる所の我儕に賜し如おなじ賜物を彼等に予たまへば我いかで神に逆ふことを得んや一八彼等この事を聞て答ふる所なく惟神を崇いひけるは實に然らん異邦人の生を得ん爲に彼等にも悔改を予給へる事

一九偖ステパノに就て起し苦難に因て散されたる人々旅してピニケ、クプロ及アンテオケに至しが惟ユダヤ人にのみ道を語る二〇彼等の中にクプロ、クレネの人々ありてアンテオケに來り主イエスの福音を宣てギリシヤ人にも語れり二一主の手之と偕にあり多の人信じて主に歸せり二二彼等に就て其聞えエルサレムに在ところの教會の耳に入しかば遂にバルナバを遣してアンテオケに至しむ二三彼すでに至り神の恩を見て喜び彼等に心を堅し主に屬んことを勸たり二四蓋かれは善人にて聖靈と信仰の滿る者なればなり是に於て數多の人主に加りぬ二五偖バルナバはサウロを尋んためにタルソに赴き二六彼に遇て之をアンテオケに携來れり斯て彼等一年の間ともに教會に集りて衆の民を教ふ弟子たちのキリステアンと稱られしはアンテオケより始れり二七このころ數人の預言者エルサレムよりアンテオケに來る二八その中の一人アガボと名るもの起て靈により示しけるは徧く世界に大なる饑饉あらんと其こと果してクラウデオ・カイザルの時に起たり二九是に於て弟子たち各々その力量に從ひてユダヤに住る所の兄弟を濟ん爲に彼等に物を餽んことを定め三〇遂に斯事を行ふ即ちバルナバとサウロの手に托して之を長老に

送れり

第一二章

一當時ヘロデ王教會の中の數人を困苦さんとて彼等を執ふ二かつ刃をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり三此事のユダヤ人の意に適るを見て彼またペテロをも執ふ此時は除酵節の日なり四既に彼を執て獄にいれ逾越節ののち民の前に曳出さんと欲ひ十六人の兵卒に之を守しめたり五ペテロは如此獄に守られ教會は之が爲に懇切神に祈る六ヘロデ彼を曳出さんとする前夜ペテロは二の鏈に繋れて二人の兵卒の間に睡り守者は門の前に在て其獄を守れり七時に主の使者來りければ光獄の中に照輝その使者ペテロの脇を拊て之を醒し速かに起よと曰しに鏈その手より脱たり八使者かれに曰けるは爾帶をしめ履を納よペテロその如せり天使また曰けるは爾の袍を身に纏て我に從へ九ペテロ出て之に從ひしが其使者の爲ことの眞實なるを知ず異象ならんと意ふ一〇斯て第一第二の警固を過て城邑に入ところの鐵門に至しに其門おのづから彼等の爲に啓く即ち出て一の衢を徑行とき其使者忽ち彼より離たり一一ペテロ悟て曰けるは我いま誠に知る主その使者を遣してヘロデの手および凡てユダヤ人の願望より我を拯出し給し事を一二かれ悟て後ヨハネ名をマコといふ人の母なるマリアの家に至しに多の人ここに集りて祈ゐたり一三ペテロが門の戸を叩ける時ローダと名る下婢きたりて之を窺ひしが一四ペテロの聲なるを知ければ喜に堪ず門をも啓ずして趨入ペテロの門の前に立ことを告一五彼等ローダに曰けるは爾狂り然ども女力言て我言は違ずと曰かれら又いひけるは蓋ペテロの天の使者なり一六ペテロなほ門を叩て止ざりしかば彼等門を啓きペテロを見て駭けり一七ペテロ手を搖して彼等の聲を鎭しめ主の己を獄より引出し給し事の状を告また此事をヤコブ及び兄弟たちに示せといひ遂に出て他の處へ往り一八天明に及し時ペテロは如何なりし乎と兵卒どもの中にて其騷擾容易ならざりき一九ヘロデ、ペテロを索れども見出さず遂に守卒を審問て彼等に死罪を命ず斯てヘロデはユダヤよりカイザリヤに下て止れり

二〇ヘロデ、ツロとシドンの者に對て甚しく怒を懷ければ彼等心を合せて其所に來り内侍の臣ブラストに親睦をなし之に託て平和を求む蓋かれらの國は王の國に頼て糧食を獲ばなり二一ヘロデその定たる日に於て王服を著その位に坐し彼等に對て語れり二二民聲を揚いひけるは此は神の聲なり人の聲に非ず二三ヘロデ榮を神に歸せざるにより主の使者ただちに彼を擊しかば彼は蟲の爲に噬れて氣絶ゆ二四さて神の道は益廣り二五バルナバ及びサウロは其職を成畢りてマコと名るヨハネを携ひてエルサレムより返れり

第一三章

一アンテオケの教會に數人の預言者と教師あり即ちバルナバ及ニゲルと稱るるシメヲン又クレネのルキヲ及び分封の王へロデの乳兄弟マナエン及サウロなり二彼ら主に事て斷食なせるとき聖靈曰けるは我ためにバルナバとサウロを甄別ちて我かれらに命ぜし所の事を行はしめよ三是に於て斷食し祈禱をなし手を二人の上に按て之を往しむ四如斯この二人は聖靈に遣されてセルキアに下り彼處より舟出してクプロに赴けり五彼等サラミスにつきユダヤ人の諸會堂において神の道を宣またヨハネを用ゐて其幇助となせり六斯て彼等島の中を經てパポスに至しとき僞の預言者バリエスと名る卜筮をなすユダヤ人に遇七この人は國の方伯セルギヲ・パウロといふ智人と偕にあり時に方伯バルナバとサウロを召て神の道を聽んことを求む八然るに彼の卜者エルマス（此名を釋ば卜者）二人の者に敵ひ方伯をして信ずること勿しめんとせり九サウロ一名はパウロ聖靈に滿され目を注て彼を視一〇曰けるは噫すべての詭譎と奸惡にて盈るもの惡魔の子すべての義ことの敵よ爾主の直なる道を枉て止ざる乎一一視よ主の手いま爾の上に在なんぢ瞽となり暫く日を見ざるべし即ち彼の目矇暗みて己を相せん者を求さまよへり一二是に於て方伯この所爲を見て主の教を駭き之を信ぜり一三パウロ及その從人パポスより舟出してパムフリアのペルゲに至り此處にてヨハネは彼等に別てエルサレムに歸り一四彼等は此より旅してピシデアのアンテオケに至り安息日に會堂に入て坐しぬ一五律法と預言者の書を讀畢りしのち會堂の宰たち人を以て彼等に曰せけるは人々兄弟よ若民に勸ること有ば言一六パウロ起て手を搖し曰けるはイスラエルの人々および神を敬ふ者よ爾曹聽べし一七此イスラエルの民の神は我儕の先祖たちを選び其民のエジプトの地に旅をりし時これを育かつ勁手を以て彼等を彼處より導き出し一八約そ四十年のあひだ野にて之を撫養ひ一九又カナンの地の七族の民を滅し其地を彼等に嗣しめ二〇後およそ四百五十年のあひだ即ち預言者サムエルの時まで之に審士を與たまへり二一厥後かれら王を求ければ四十年の間ベニヤミンの支派キスの子サウロを賜ふ二二後また彼を徙しダビデを立て彼等の王となし且これが爲に證して曰たまひけるは我エッサイの子ダビデと云る我心に合ふ人を得たり彼は凡て我旨を行遂べし二三神は其約束に從ひて斯人の裔より救主イエスをイスラエルに興し給り二四その來る前にヨハネ先イスラエルの凡の民に悔改のバプテスマを宣傳たり二五ヨハネその職を行ひし時いひけるは爾曹われを誰と意ふや我は其人に非ず我より後に來者あり我は其足の履を解にも足ざる者なり二六人々兄弟アブラハムの子孫および爾曹のうち神を敬ふ者よ此救の道を爾曹に遣たまへり二七夫エルサレムに住る者および其有司たちはキリストを知ず彼を罪に定て安息日ごとに讀ところの預言者の言を成しめたり二八かつ殺すべき故を得ざれども

ピラトに之を殺さんことを求め二九 已に彼に就て録されたる凡の言を成しめければ之を木より下して墓に置り三〇 然ども神は之を死より甦らせ給り三一 多日の間かれはガリラヤより己と偕にエルサレムに上し者に現れたり今かれの爲に證を民にする者は其人々なり三二 我儕も喜の音を爾曹につぐ神はイエスを甦らせて先祖等に立たまひし約束を其子孫たる我儕に成たまへり三三 即ち詩の第二編に爾は我子なり我今日なんぢを生りと録されたるが如し三四 また朽壞に歸せざる樣に彼を死より甦らする事に就ては左の如く言り云われダビデに約束せし所の頼むべき恵を爾曹に予ふ可と三五 是故に又ほかの篇に爾は其聖者を朽果しめずと云り三六 夫ダビデは神の旨に遵ひ其世の爲に勞苦しのち寢て先祖たちと偕に置れ遂に朽果たり三七 然ども神の甦らせ給し者は朽果ざりき三八 然ば人々兄弟よ此人に由て罪の赦の爾曹に傳れるを知三九 爾曹モーセの律法に依て義と爲るること能ざる凡の罪も信ずる者は皆かれに由て赦され義とせらるる也四〇 然ば爾曹 愼よ恐くは預言者の書に言れたる事なんぢらに臨ん四一 曰く藐忽者よ視て駭き且亡よ蓋われ爾曹の日に一の事を行はん人これを爾曹に告るとも爾曹信ぜざる可れば也

四二 かれら會堂を出んとせしとき次の安息日に復この事を宣よと請れたり四三 會すでに散じて多のユダヤ人および其教に入し神を敬ふ人々パウロとバルナバに從へりパウロ、バルナバ彼等に語て恒に神の恩に居ん事を勸む四四 次の安息日に至り邑の人々神の道を聽んとて幾ど皆集まれり四五 その多く集れるを見てユダヤ人嫉妬を心に滿せて爭辨かつ詬りパウロが言ところを拒めり四六 パウロとバルナバ毅然して曰けるは夫神の道は必ず先爾曹に告べきなり然ども爾曹は之を棄かつ己は永 生を受べき者に非ずと自ら定たれば我儕轉て異邦人に向ふべし四七 蓋主かく我儕に命じ給へり曰く爾 救となりて地の極にまで及ばん爲に我なんぢを立て異邦人の光となせり四八 異邦人は之をきき喜びて主の道を讚美すべて永 生に定られたる者は信ぜり四九 是に於て主の道あまねく此地に廣りぬ五〇 然るにユダヤ人神を敬ふ貴 婦等および邑の尊長たる人々の心を動させてパウロとバルナバを窘迫その境より逐出せり五一 二人は彼等に對ひ足の塵を打拂ひてイコニオムに至れり五二 斯て弟子等は大に喜樂を懷かつ聖靈に盈されたり

第一四章

一 二人の者イコニオムに於て共にユダヤ人の會堂に入て道を傳へユダヤ人及びギリシヤ人を多く信ぜしめたり二 然るに信ぜざるユダヤ人異邦人を唆て其心に兄弟を憾しむ三 彼等は久しく彼處に留り主に頼て憚らず道を傳ふ主また彼等の手に休徵と奇なる跡を行はしめて其恩の道を證せり四 邑の人々二に分れ或はユダヤ人に與し或は使徒等に與せり五 斯て異邦人ユダヤ人および其有司たち共に擁上かれらを辱しめ石にて擊んとす六 二人

のもの之を知てルカオニヤの邑なるルステラ、デルベ及その四周の地に逃れ七彼等に於て福音を傳ふ
八ルステラに一人の足弱もの坐しゐたり彼は生來の跛者にて未だ歩行しことなし九此人パウロの語るを聽をりしがパウロ目を注て其愈さるべき信仰あるを視一〇大聲に曰けるは爾の足にて正く立よ彼踴上りて行めり一一人々パウロの爲し事を見て聲を揚ルカオニヤの方言にて曰けるは諸神人の形になりて我儕に臨れり一二彼等バルナバをゼウスと稱パウロは專ら説話ことをする人なるが故にヘルメスと之を稱一三時に其邑の前にある所のゼウスの祭司犢と花箝を門に携來て衆の人と共に犧牲を獻げ彼等を祭んとせり一四使徒バルナバ、パウロ之を聞て己が衣を裂はしり出て大衆の中に入一五喊叫いひけるは人々よ何故に此事を行や我儕も亦なんぢらと同情をもつ所の人なり爾曹に福音を傳るは爾曹をして此虚妄をすて天と地と海および其中の萬物を造り給へる活神に歸しめんが爲なり一六往にし世には神すべての異邦人に其己が道を行むことを容し給しかど一七亦なんぢらを惠て天より雨を降せ豐穰なる時候をあたへ糧食と喜樂をもて爾曹の心を滿しめ己自ら證せざりし事なし一八此言を以て苦辛じて衆の人の己等に犧牲を獻んとするを止たり
一九時にユダヤ人等アンテオケ、イコニオムより來りて多の人を唆め石をもてパウロを撃しめ既に死たりと意ひ邑の外に曳出せり二〇弟子等その周圍に立るとき彼おきて邑にいり次の日バルナバと偕にデルベに往り二一斯てその邑に福音を傳へ多の人を弟子となし又ルステラ、イコニオム、アンテオケに返り二二弟子等の心を堅し其常に信仰に居んことを勸め又おほくの艱難を歴て我儕が神の國に至る可ことを教ふ二三斯て二人のもの教會ごとに長老をえらび斷食と祈禱をなし前より信じをる所の主に之を託たり二四かれら遍くピシデヤを經てパムフリヤに至り二五又ペルゲに道を傳てアッタリアに下り二六彼處より舟にてアンテオケに航る此は彼等さきに神の恩に託られ今とげし職を行はんとて出し所なり二七既に至りて教會の人を集め己を助けて神の行たまへる凡の事と異邦人のために信仰の門を開き給ひし事を告二八斯て久く弟子等と偕に彼處に止れり

第一五章

一ユダヤより下し人々兄弟たちに教けるは若なんぢらモーセの例に從ひて割禮を受ずば救るることを得じ二之に由てパウロとバルナバ大に彼等と爭ひ且論ぜしかば兄弟等この事に就てパウロ、バルナバ及その中に數人をエルサレムに上せ使徒と長老等に遇しめん事を定む三是に於て彼等教會の人々に送られ出ピニケおよびサマリアを經て異邦人の神に歸せし事を具に述すべての兄弟を大に喜ばしめたり四彼等エルサレムに至り教會と使徒および長老たちに接られ己を助けて神の行たまひし凡の事を告しに五パリサイ宗の中なる信者數人たちて曰ける

は彼等に必ず割禮を施し且命じてモーセの例を守しむべし六 使徒等および長老たち此事を議ん爲に集れり七 茲に多の論ありしがペテロ起て彼等に曰けるは人々兄弟よ久き先に神われを爾曹の中より選び福音の道を我口より異邦人に聽せ彼等をして之を信ぜしめ給しことは爾曹の知ところ也八 かつ人の心を知たまふ神は我儕に聖靈を賜し如く彼等にも賜て其證をなし九 又信仰をもて其心を潔め我儕と彼等の間に分を爲ざりき一〇 然るに今何故我らの先祖たちも我儕も負あたはざる軛を弟子等の頸に置て神を試むる乎一一 彼等の救るる如く我儕も主イエス・キリストの恩に由て救るることを信ずる也一二 是に於て人々みな默してバルナバとパウロが神の己をもて異邦人の中に行ひ給へる休徴と奇跡とを述るを聞り一三 彼等が言畢りし後ヤコブ答て曰けるは人々兄弟よ我に聞一四 神初て異邦人を眷顧その中より己が名を崇る民を取給ひし事はシモン既に之を述一五 預言者の言これと符り其書に一六 此後われ反て已に傾圯たるダビデの幕屋を復び起し其破壞の跡を再び造て之を建べし一七 是その餘の民および凡て我名をもて稱らるる異邦人に主を尋させん爲なり此すべての事を行ふ神これを言と録されたるが如し一八 神は世の始より其すべての所作を知たまへり一九 是故に我おもふ異邦人の中より神に歸する者を擾すは宜からずと二〇 然ども書を彼等に遣て偶像に汚れたる物と姦淫と勒殺たる物と血とを戒むべし二一 そは古より安息日ごとに會堂にてモーセの書を讀が故に其を宣るもの各邑にあれば也

二二 是に於て使徒および長老たち全會と偕に其中より人を選び之をパウロ、バルナバと共にアンテオケに遣さん事を定その選れたる人は兄弟の中の尊者すなはちバルサバと稱るユダ及シラスなり二三 彼等の手に托て遣し書に云く使徒長老及び兄弟アンテオケ、スリヤ、キリキヤにをる異邦人の兄弟に安を問二四 我儕が命ぜざるもの我儕の中よりいで言をもて爾曹を擾し爾曹の心を亂たりと聞二五 二六 之に由て我儕心を同し人を選て我儕の愛するバルナバ、パウロと偕に遣さんと定この二人は我儕の主イエス・キリストの名の爲に其命をも愛ざりし者なり二七 我儕ユダとシラスを遣し彼等の口より此事を述しめんとす二八 蓋聖靈と我儕と左の肝要なるものの外は何をも爾曹に任せじと定たり二九 即ち偶像に獻し物と血と勒殺たる物と姦淫とを戒むべし若これらの事を爾曹みづから愼まば善ねがはくは爾曹健剛なれ三〇 かれら遣されてアンテオケに至り衆人を集て此書を付す三一 衆人これを讀その勸を受て喜べり三二 ユダとシラスも亦預言者なれば多の言を以て兄弟を勸め彼等を堅せり三三 斯て二人の者暫く彼處に止り後兄弟たちに安然を祝され其己を遣し者の所に送れたり三四（なし）三五 パウロとバルナバはアンテオケに止り其餘の多の人と共に教をなし主の道を宣傳ふ

三六 數日の後パウロ、バルナバに曰けるは我儕さきに主の道を宣し所の諸邑に復ゆきて兄弟の光景を率とふべし三七 偕バルナバ

はマコと名るヨハネを伴はんと欲へり三八 然どもパウロは曩にパムフリアにて己より離れ役事のため共に往ざりし此マコを伴ふは宜らじと意しに因三九 遂に二人の仲に激論おこり相別てバルナバはマコを伴ひクプロに航れり四〇 パウロはシラスを選び兄弟より己を主の恩に托られて出立四一 スリヤ及びキリキヤを經て諸教會を堅せり

第一六章

一 斯てパウロはデルベ及ルステラに至れり此にテモテと云る弟子あり其母はユダヤの婦にて信者なり其父はギリシヤ人なり二 彼はルステラ、イコニオムの兄弟より稱を得たり三 パウロ之を携て偕に往んことを欲其處にをるユダヤ人の爲に割禮を行へり蓋人々皆彼が父のギリシヤ人なるを知ばなり四 斯て諸邑をすぎエルサレムにある使徒および長老等の定たる條規を守せんとて之を其人々に授く五 之に由て諸教會の信仰堅なり其數も日々に増ぬ

六 彼等フルギヤとガラテヤの地を過し時アジアに道を傳ることを聖靈に禁られ七 遂にムシアに近きビテニヤに往んとせしがイエスの靈之を許さざりければ八 彼等ムシアを經てトロアスに下れり九 斯てパウロ夜に於て一人のマケドニヤ人たちて己に請マケドニヤに渉て我儕を助よと曰を幻に見たり一〇 彼が幻に之を見し後我ら誠に主の我儕をしてマケドニヤ人に福音を宣しめんと我儕を召給ふことを推量て直にマケドニヤに往んとす一一 是に於てトロアスより航海をし眞直にはせてサモトラケに至り其次日ネアポリスに往一二 彼處よりピリピに至るピリピはマケドニヤの一の分の中なる名ある邑にして即ち殖民地なり我儕數日この邑に止れり一三 安息日に我儕邑をいで河の濱なる常に祈禱をする處にゆき坐して集れる婦女等に語しに一四 紫布を售ふテアテラの邑の商人にて神を敬ふルデヤと名くる婦きゝゐたり主その心を啓てパウロの語ることに心を用しめ給ふ一五 かの婦其家族と偕にバプテスマをうけ求て曰けるは爾曹もし主を信ずる者と我を爲ば我家に來り留れと強て我儕を入しめたり一六 われら祈禱所に往るとき卜筮をする靈に憑れたる一人の婦の奴隷われらに遇かれは卜占に因て其主たちに多の利を得させし者なり一七 パウロと我儕に從ひて喊叫いひけるは此人々は至高き神の僕にて救道を我儕に宣る者なり一八 この婦かく爲こと久かりければパウロ之を憂かへりみて靈に曰けるは我イエス・キリストの名に由て爾に命ず此婦より出よ靈立刻に出一九 是に於て其主たち利の望すでに去るを見てパウロとシラスを執へ市場に曳て有司等に至れり二〇 既に上官の所に曳來りて曰けるは此人々はユダヤ人にして我儕の邑を擾し二一 ロマ人たる我儕の受べからず行ふ可らざる所の習俗を傳る者なり二二 大勢のもの齊く起て彼等をせめ上官その衣をはぎ命じて之を杖しむ二三 多く杖てのち獄に入これを固守れと獄吏に命ず二四 獄吏かくの如

き命を受しにより彼等を奥の獄に入て桎をかけたり二五 斯て夜半ごろパウロとシラス祈禱をなし且神を讚美す囚者ら耳を傾けて之を聞ゐたりしが二六 俄に大なる地震ありて獄の基礎ふるひ動き門ことごとく直に啓け衆の囚者の械繫とけたり二七 獄吏目を醒し獄門の啓けたるを見て囚者すでに逃しと意ひ刀を拔て自殺せんとしければ二八 パウロ大聲に呼り曰けるは自ら戕ふ勿れ我儕みな此に在二九 此時かれ火を索て躍いり戰慄てパウロとシラスの前に俯伏三〇 彼等を外に携出して曰けるは君よ我すくはれん爲に何を爲べき乎三一 彼等曰けるは主イエス・キリストを信ぜよ然らば爾および爾の家族も救るべし三二 遂に彼および其家の凡の者に主の道を語れり三三 この夜の即時かれ二人を誘ひ其杖傷を濯て直に其家族と偕に皆バプテスマを受三四 且かれらを己が家に引來り食物を其前に備すべての家族と偕に神を信じて喜べり三五 天明に至て上官たち下吏を遣し曰せけるは其人々を釋べし三六 獄吏この言をパウロに告て曰けるは上官なんぢらを釋せと言遣せり然ば今いでて安然に去三七 パウロ彼等に曰けるは我儕ロマ人なるに罪を定ずして公然に我儕を杖ち且獄に入たり而して今ひそかに出さんと爲か宜からず彼等みづから來て我儕を引出すべし三八 下吏この言を上官たちに告ければ彼等そのロマ人なるを聞て懼れ三九 來て彼等に此より出んことを求つひに引出して又その邑を去んことを請たり四〇 二人のもの獄を出ルデアの家にいり兄弟等に遇これに勸をなして出去ぬ

第一七章

一 斯て彼等はアムピポリス及アポロニヤを過てテサロニケに至る此にユダヤ人の會堂あり二 パウロ常の如く彼等の中にいり三回安息日ごとに聖書に本きて彼等と論じ三 キリストの必ず苦難をうけ死より甦るべき事を説また我汝らに傳る所の此イエスは即ちキリストなる事を説明せり四 是に於て其中の人々信じてパウロとシラスに從り又神を敬ふギリシヤ人の之に從るも多く貴女も少からざりき五 然るにユダヤ人これを妬み市井にある匪類をかたらひ群を成て邑を擾せパウロとシラスを執へ民の前に曳出さんとてヤソンの家に來しが六 彼等を見出さざりければヤソン及び數人の兄弟と邑宰の前に曳來て大聲に曰けるは天下を亂す斯者ども此にまで來れり七 ヤソンは之を迎納たり此人々は皆イエスといふ他の王ありと言てカイザルの命に背く者なり八 大衆と邑の宰等これを聞て心を痛しむ九 上官はヤソン及その餘の人々より保状を取て之を釋せり一〇 兄弟たち夜間に急ぎパウロとシラスをベレアに去しむ彼等かしこに至てユダヤ人の會堂に往り一一 此處の人々はテロサニケの者よりは性情よきが故に好て道をきき此の如こと果して有か無かを知んとて日々に聖書を究れり一二 是故に其中の人おほく之を信ず又ギリシヤの貴女及び男子の信じたる者も少からざりき一三

テサロニケのユダヤ人は神の言のパウロに因てベレアにも傳りしを知又彼處に至て人々を擾しめたり**一四**是に於て兄弟たち直にパウロを海に適しむ然どもシラスとテモテは尚この處に留りぬ**一五**パウロを伴ひし者かれを携てアテンスに至る其人々パウロよりシラスとテモテを速に來しめよとの命を受て出立り

一六パウロ、アテンスに在て彼等を待る時その邑こぞりて偶像に事るを見て甚く心を傷めたり**一七**是故に會堂に於てユダヤ人および神を敬ふ人々と論じ又日々市に於て其遇ところの者と論ず

一八時にエピクリアン及びストイクの理學者數人これと相語り或人いひけるは此嘐啁者なにを言んとする乎また或人いふ彼は異なる鬼神を傳る者の如しと蓋パウロ彼等にイエス及び復生の事を宣しが故なり**一九**斯て彼を引つれアレオ山に往て曰けるは爾が語る所の此新しき教を我儕知せらるることを得るや**二〇**爾の異聞を我儕の耳に入しが故に我儕その何事なるを知んとすれば也**二一**凡て此アテンス人および其地に留れる人は惟新しき事をつげ或は聽事にのみ其日を送れり**二二**パウロ、アレオ山の中に立て曰けるはアテンスの人よ我なんぢらが每事に鬼神を敬ふの甚しきを觀**二三**われ途を行とき爾曹が敬拜ところの者を見しに識ざる神にと刻書し一の祭壇を見出せり故に爾曹が識ずして敬ふ此者を我なんぢらに示さん**二四**それ宇宙と其中の萬物を造り給る神は是天地の主なれば手にて造れる殿に住たまはず**二五**かつ衆人に生命と氣息と萬物を予たまへば物に乏きことなし人の手にて事らるるものに非ず**二六**また此神は凡の民を一の血よりつくり悉く地の全面に住せ預じめ其時と住ところの界とを定め給へり**二七**此れ人をして神を求しめ彼等が或は揣摩うる事あらん爲なり然ども神は我儕各人を離るること遠からざる也**二八**それ我儕は彼に頼て生また動また存ことを得なり爾曹の詩人たちも我儕は其裔なりと云しが如し**二九**如此われらは神の裔なれば其神を金銀または石など人の工と巧を以て造れる者と均く意ふ可らず**三〇**往者に蒙昧し時は神これを不問に爲給しが今は何處の人にも皆悔改むることを命じ給ふなり**三一**蓋神すでに其立し所の人により義をもて世を鞫べき日を定め此事に就ては彼を死より甦らせて其證を衆の人に予たまへば也**三二**かれら死たる者の復生の言を聞て或人は戲笑ある人は我儕この言を再び爾に聽んと曰**三三**是に於てパウロ彼等の中より出去る**三四**然ど數人彼に從て信ぜり其中にはアレオ山の裁判人デオヌシオ及ダマリスと名くる女また其他の人も之と偕に在き

第一八章

一此後パウロはアテンスを離てコリントに至る**二**新近イタリヤより來れる者にてポントに生しアクラと名るユダヤ人および其妻プリスキラに遇て其所に至れり彼等がイタリヤより來しはクラウデヲ、ユダヤ人に盡くロマを離と命ぜしに因てなり**三**彼その業を同くするに由て之と偕に止りて工を作ぬ其業は幕屋を製

る者なり四斯てパウロは安息日ごとに會堂に於て論じユダヤ人とギリシヤ人を勸めたり五シラスとテモテ、マケドニヤより下たる時パウロ、ユダヤ人に向てイエスのキリストなる事を證し道を傳ふることに心を凝し居り六然るにユダヤ人は之に敵ひ且誚しに因パウロ衣を拂て彼等に曰けるは爾曹の血は爾曹の首に歸すべし我は咎なし今より異邦人に適ん七遂に此を離てユストと云る人の家にいる彼は神を敬ふ者にて其家は會堂に隣れり八會堂の宰クリスポ及その家族みな主を信ず又コリント人にて道をきき信じてバプテスマを受し者も多りき九主或夜まぼろしにパウロに語給ひけるは懼るる勿れ默せずして語べし一〇蓋われ爾と偕にあれば爾を害せんとて責る者なし且この邑に我おほくの民あり一一是に於てパウロ一年と六ヶ月の間かれらの中に居て神の道を教へたり

一二ガリヨ、アカヤの代官たりし時ユダヤ人心を合せてパウロを攻かれを裁判所に曳來り一三曰けるは此徒は律法に背て神を拜ことを人に勸る者なり一四パウロ口を啓んとせし時ガリヨ、ユダヤ人に曰けるはユダヤ人よ若し不義奸惡の事ならば我が爾曹より聽は理なり一五然ども若し言語あるひは名字および爾曹の律法の論ならば爾曹みづから之を理べし我かかる事の審士たるを欲ず一六斯て彼等を裁判所より逐出せり一七是に於て凡のギリシヤ人會堂の宰なるソステネを執へ裁判所の前にて杖扑りガリヨは更に此事を意とせざりき

一八パウロ此處になほ久く留り後兄弟に暇を告てプリスキラ及アクラと偕に舟にてスリヤに濟る彼ケンクレアに在しとき誓願に因て髮を剪り一九彼エペソに至て二人を其處に留おき自ら會堂に入てユダヤ人と論ぜり二〇衆人彼が久く偕に居んことを請たれど肯はずして二一暇を告て曰けるは我この來んとする節を必ずエルサレムに於て守ざるを得ず然どもし神許し給はば復び爾曹に返べしと遂に舟出してエペソを去二二カイザリヤにつき而してエルサレムに上り教會の安否を問て後アンテオケに下り二三暫く此處に住て又出立ガラテヤ及びフルギヤの地を逐次に經て凡の弟子等を堅せり

二四爰にアレキサンデリアに生しユダヤ人にて辨才あり且聖書に達したるアポロと名る人エペソに來れり二五この人夙より主の道の教を受かつ心を熱してイエスの事を詳細に誨ふ然ど惟ヨハネのバプテスマを知るのみ二六かれ始て此會堂に於て懼らず語りければプリスキラとアクラ之を聞て彼を己が家に招き神の道を尚も詳細に説明せり二七アポロ、アカヤに往んとせしかば兄弟たち書を遣て弟子等に彼を接容んことを勸かれ至て既に恩により信ぜし者を大に助たり二八蓋かれ聖書を引てイエスのキリストなる事を示し人々の前にてユダヤ人を甚く辨折たれば也

第一九章

一アポロのコリントに居る時パウロ東の方の地を經てエペソに來り或弟子たちに遇て二之に曰けるは爾曹信者と爲しとき聖靈を受しや答けるは我儕は聖靈の有ことだに聞ざりき三パウロ曰けるは然ば爾曹バプテスマを受て何に入られしや答けるはヨハネのバプテスマに入られたり四パウロ曰けるはヨハネは誠に悔改のバプテスマをなし民に向て我の後に來る者すなはちイエス・キリストを信ぜよと曰り五彼等これを聞バプテスマを受て主イエスの名に入られたり六パウロ手を其上に按ければ聖靈かれらに臨みな異なる諸國の方言にて語かつ預言せり七其人おほよそ十二人なりき八パウロ會堂にいり憚らずして神の國の事を論じ且勸て三ヶ月を歴たり九然るに剛愎にして之を信ぜざる人々あり衆の人の前に其道を詆誹ければパウロ彼等を離れ弟子等をも別させて日々テラノスと云る人の講堂に於て論ぜり一〇二年のあひだ如此ありしかばユダヤ人もギリシヤ人も凡てアジアに住る者悉く主の道を聞ぬ一一神はパウロの手によりて希有ふしぎの事を行ひ給へり一二即ちパウロの身に着たる汗布あるひは襘衣を取て病者に加ければ病はさり惡鬼は出たり一三茲に諸所を遊行て呪をなせるユダヤ人あり惡鬼に憑れたる者に向ひ試に主イエスの名を呼て曰けるは我儕はパウロが宣る所のイエスに藉て爾に出んことを誓しむ一四如此なせる者はユダヤ人なるスケワと云る祭司の長の七人の子なり一五惡鬼こたへて曰けるは我イエスを知またパウロを識り然ど爾曹は誰ぞや一六惡鬼に憑れたる人彼等の上に躍上り之に勝て壓伏ければ彼等傷つけられ裸にて其家を逃去り一七此事エペソに住る凡のユダヤ人ギリシヤ人に聞えしかば彼等みな懼を懷ぬ又主イエスの名崇られたり一八また信ぜし者のうち多來りて自ら言あらはし其行し事を訴へたり一九また曩に魔術を行へる多の者等も其書物を集人々の前にて焚り其價を計て銀五萬なることを知り二〇主の道廣まりて勝を得こと此の如し

二一此事の竟し後パウロはマケドニヤ及アカヤを過エルサレムに往んと意を定め曰けるは我かしこに往て後かならずロマをも見べし二二即ち己に事る者の中テモテとエラストの二人をマケドニヤに遣し己は暫くアジアに留りぬ二三この時その道について容易ならぬ騷擾おこれり二四蓋一人の銀工あり名をデメテリヲと云かれアルテミスの銀龕を作り工人等に利を得しめしこと僅少からざりき二五その工人および己が類の業の者を集て曰けるは人々よ我儕の富るは此業に藉ること爾曹の知ところ也二六此パウロ手にて作れる者は神に非ずと曰て衆の人を誘惑し第にエペソ耳ならず幾どアジア中に及せり是また爾曹が見ところ聞ところ也二七此は唯我らの業の輕めらるる危ある耳ならずアジア及び天下擧て奉る所の大なる女神アルテミスの宮も藐せられ其威光も亦滅べし二八彼等これを聞て甚しく怒さけび曰けるは大なるかなエペソ人のアルテミスよ二九是に於て

擧邑大に擾れパウロの同行なるマケドニヤ人のガイヲスとアリスタルコを執へ彼等心を合せて戲園に擁入り三〇パウロその人々の中に入んとせしに弟子たち之を許さざりき三一またアジアの祭を司どる者の中に彼と親き者等ありて人を彼に遣し其自ら戲園に入ざらんことを求たり三二其時ある人は彼事をいひ或人は此事を言さけべり蓋會衆みだれて大半は何の爲に集れるかを知ざれば也三三是に於てユダヤ人アレキサンデルに出んことを勸ければ或人群集の中より之を推出しぬアレキサンデル手を搖し民に向て事實を告んとせしが三四彼等そのユダヤ人たるを知が故に皆おなじく聲を揚て大なる哉エペソ人のアルテミスよと二時ばかりの間さけびあへり三五書記官人々を撫て曰けるはエペソの人々よ此エペソは天より落し大なるアルテミスの殿に事る邑なるを知ざる者あらん乎三六この事は駁すこと能ざれば爾曹靖息にして猥に事を作べからず三七夫この人々は殿の盜賊にも非ず爾曹の女神を譭す者にも非ず然るに爾曹これを曳來れり三八デメテリヲ及び偕にある所の工人もし人を訴ふる事あらば聽訟の日あり且方伯あれば互に之に訟ふべし三九もし他の事由について求る事あらば律法に合ふ會に於て定むべし四〇われら今日の騷擾に就ては訴られんことを恐る蓋この會について辭解べき言なければ也如此かたりて會を散せり

第二〇章

一騷擾の定し後パウロは弟子等をよび別を告マケドニヤに往んとて出立ぬ二其地を經おほくの言を以て人々を勸めギリシヤに至り三此に三ケ月留りて後スリヤに航らんとせし時ユダヤ人かれを害せんと謀ければマケドニヤを過て返んと意を定たり四彼と偕にアジアまで至し者はプロスの子ベレアのソパテル及テサロニケ人のアリスタルコとセクンド、デルベのガヨスとテモテ竝アジアのテキコとトロピモなり五此徒は先ち往てトロアスに於て我儕を俟り六除酵節の後われらピリピより舟出して第五日にトロアスに至り彼等に遇て其處に七日留れり

七一週の首の日我らパンを擘ために集りしがパウロ次の日出立ん事を意ひ彼等に道をかたり講つづけて夜半に至れり八彼等が集れる樓に多の燈あり九ユテコと名る一人の少年窓に倚て坐し熟睡り居しがパウロの道を語れること久かりければ彼睡に因て三階より墜これを扶起しに既に死り一〇パウロ下て其上に伏これを抱て曰けるは爾曹憂咷ぐ勿れ此人の生命は中にあり一一斯てパウロ復上りパンを擘て食ひ久しく彼等と語り天明に及て出立り一二人々この少年を携へ其活るを見て甚だ慰めり一三偖われら舟にのり先ちてアソスに濟その處にてパウロを登んとせり蓋われ陸より往んと自ら如此は定しなり一四彼アソスに於て我儕に遇ければ彼を登てミテレネに至り一五彼處より舟出して次日キヨスの對に至り又次日サモスに着トログリヲ

ムに泊り次日ミレトスに至れり一六蓋パウロ、アジアに時を費さざる爲に舟にてエペソを過んと意を定しがゆゑ也かく定しは彼なるべくはペンテコステの日エルサレムに在ことを得んと急たるに因

一七斯て彼はミレトスよりエペソに使を遣して教會の長老たちを召り一八彼等が來し時パウロ之に曰けるは我アジアに來りし初の日より常に爾曹の中に在て行ひし事は爾曹が知ところ也一九即ち我すべての事に謙遜また涙を流しユダヤ人の詭謀により艱難に遇て主に事へ二〇益ある事は殘す所なく之を宣て或は人々の前或は家々に於て爾曹に教へ二一神に對ては悔改め主イエス・キリストに對ては信仰すべき事をユダヤ人またギリシヤ人に示せり二二今は我心切りてエルサレムに往かしこにて遇ところ如何を知らず二三ただ聖靈毎邑に我に示していふ縲絏と患難われを俟りと二四然ども我は我往べき路程と主イエスより受し職すなはち神の恩の福音を證する事を遂ん爲には我生命をも重ぜざる也二五今我知なんぢらの中を遊行て神の國を傳へし我面を此後なんぢら復び見ざるべし二六是故に我今日なんぢらに證す凡の人の血に於て我は潔くして與ることなし二七蓋われ神の旨を殘す所なく悉く爾曹に宣たれば也二八故に爾曹みづから愼み且なんぢらが聖靈に立られて監督となれる其全群を愼み主の己が血をもて買給ひし所の教會を牧ふべし二九蓋わが去ん後この群を惜ざる暴き狼なんぢらの中に入んことを知ばなり三〇亦なんぢらの中よりも弟子等を己に從はせんとて悖理なる言を言出す者おこらん三一此故に爾曹儆醒せよ我三年のあひだ夜も晝も斷ず涙を流して各人を勸しことを憶ふべし三二兄弟よ爾曹の徳を建かつ凡の聖られし者の中に於て業を爾曹に予る能ある神および其恩惠の道に今われ爾曹を委ぬ三三われ人の金銀衣服を貪りしことなし三四我この手は我および我と偕に在し者の需用に供し事は爾曹が知ところ也三五われ爾曹も如此勤勞て柔弱者を扶け且主イエスの曰給へる受るよりも與るは福なりとの言を心に記べきを凡の事に於て示せる也三六パウロかく語て跪づき衆人と共に祈れり三七 [37a] 彼等みな大に哭きパウロの頸を抱て之と接吻し三八 [37b] 其再び我面を見まじといひし言に因て別ても憂をなし彼を舟まで伴へり

第二一章

一われら強て彼等に離れ舟にて眞直にコスに至り次日ロドスにゆきパタラに至り二ピニケに濟る舟に遇これに登て出三クプロを望んで其を左に過スリヤに濟りツロに着り蓋この處にて舟の積荷を卸さんと爲ばなり四斯て我儕弟子たちを訪そこに七日とどまれり彼等靈に感じてパウロにエルサレムに往なかれと言五然ど既に七日を過しければ我儕出立て途につく彼等その妻孥と共に我儕を送て邑の外にまで至しが共に岸に跪きて祈り六互に別を告畢りて後われらは舟に登かれらは其家に歸れり七我儕ツ

ロよりトレマイに濟り既に舟路をはりぬ斯て兄弟等の安否を問かれらと偕に一日留り八 次日いでたちてカイザリヤに至り傳導者ピリポの家に入て共に留る此ピリポは七人の一人なり九 彼に預言する四人の女あり皆處女なり一〇 われら數日ここに留れるときアガボスと名る一人の預言者ユダヤより下り一一 我儕が所に來りてパウロの帶をとり己の手足を縛て曰けるは此の如くエルサレムにあるユダヤ人は此帶の主を縛て異邦人の手に付さんと聖靈いひ給へり一二 此事を聞て我儕と此地の者とともも彼にエルサレムに上る勿れと勸しに一三 パウロ 答けるは爾曹なんぞ哭て我心を摧くや我主イエスの名の爲には第に縛るる耳ならずエルサレムに死るも亦甘ずる所なり一四 かれ勸を納ざりければ我儕主の旨の如く成と曰て止一五 既に數日を經て我儕行装をなしエルサレムに上れり一六 カイザリヤの弟子等も數人われらと偕に行て我儕をクプロのナソンと云る老弟子の所に宿らせんとて其家に携ひ入ぬ

一七 我儕エルサレムに至ければ兄弟たち欣て我儕を迎ふ一八 次日パウロ我儕と偕にヤコブの家に入しに長老等みな集居れり一九 パウロ彼等の安否を問かつ神の己を用て異邦人の中に行ひ給し事を一々告ければ二〇 彼等之をきき主を崇かつ彼に曰けるは兄弟よ爾 ユダヤ人の信ぜしもの幾萬なるを知かれらは皆律法に熱心なる者なり二一 なんぢ異邦人の中にあるユダヤ人に教てモーセを樂しめ且兒子に割禮を行ふ勿れ例に從ふ勿れと言りと告る者あり彼等これを聞たり二二 今いかに爲べきぞ多の人々爾の來れるを聞て必ず集らん二三 是故に爾われらが言ところに從へ我儕に誓願のもの四人あり二四 爾この人々を携へ之と偕に潔事をなし代て其費を贖ひ彼等に髮を薙ことを得しめよ然ば人々なんぢに就て聞し所みな虚にして爾が律法を守て行へる事を知べし二五 信じたる異邦人には我儕すでに書をかき遣て斯る類の事は守るに及ずただ偶像に獻し物と血を勒殺し者および姦淫とを愼む可と定たり二六 斯てパウロは次日この人々を携へて之と偕に潔事をなし且かれら各人の爲に供物を獻べき事を其期までに潔事の日を盡さん事を殿に入て告二七 七日をはらんと爲ときアジアより來しユダヤ人パウロの殿に居を見て凡の民を聳動しめ彼を執へ二八 喊叫けるはイスラエルの人々我儕を助よ此人は遍く教を傳この民と律法と此處に逆ふ者なり又ギリシヤ人をも引て殿に入この聖所を汚たり二九 蓋かれら曩にエペソ人トロピモと云る者のパウロと共に城下に在しを見てパウロ之を殿に引入しと意へる也三〇 是に於て擧邑さわぎたち人々趨集りてパウロを執へ之を殿より曳出しければ直に其門を閉たり三一 彼等すでにパウロを殺さんとせし時あまねくエルサレム紛亂たりとの風聲千夫の隊の長に聞えければ三二 彼ただちに兵卒と百夫の長等を率ゐ彼等の所に趨下れり彼等千夫の長と兵卒を見てパウロを打ことを止三三 其とき千夫の長 近りてパウロを執へ命じて二の鏈にて之を繫せその誰たる又何事を行しか

を問たり三四 衆の人々のうち或は彼事をいひ或は此事を言さけび亂に因て千夫の長その實情を知こと能はず是故に命じて彼を陣營に曳往しめたり三五 三六 衆の人々後に從ひて彼を殺せと呼さけび擁迫るに因て階に及るとき兵卒パウロを負り三七 パウロ曳れて陣營に入んとせし時千夫の長に曰けるは我なんぢに語て可や否かれ答けるは爾ギリシヤの方言を識や三八 爾は曩に亂を起し四千人の凶徒を率て野に出しエジプト人ならず乎三九 パウロ曰けるは我はキリキヤのタルソに生しユダヤ人にて鄙邑の民に非ず願くは民に語ることを我に許せ四〇 千夫の長これを許ければパウロ階の上にたち民に向て手を搖し其大に靜れるときヘブルの方言をもて彼等に語れり

第二二章

一 人々兄弟および父等よ請いま我が陳んとする事實を爾曹きけ二 彼等そのヘブルの方言にて語るを聞ていよいよ靜れり三 パウロ曰けるは我はユダヤ人にてキリキヤのタルソに生れ而して此邑のガマリエルの足下にて長られ先祖の嚴なる律法に由て教られ神に熱心なりし事は今日の爾曹すべての者の如なりき四 われ曩に斯道の人を男女とも縛かつ獄に解し死に至るまでに之を窘たり五 即ち祭司の長と長老會の人の我に就てみな證をなすが如し我彼等より兄弟等に遺る書を受ダマスコにをる者を縛てエルサレムに曳來り刑を受しめんとて彼處に赴けり六 然ど我ゆきてダマスコに近けるに時おほよそ日中たちまち天より大なる光ありて我を環照せり七 われ地に仆る其時サウロ、サウロ何故われを害るやといふ聲を聞八 われ答けるは主よ爾は誰ぞや我に曰けるは我は爾が害る所のナザレのイエスなり九 我と偕に在しもの光を見て懼たり然ど我に語し者の聲を聞ざりき一〇 我いひけるは主よ我なにを爲べきか主われに曰給ひけるは起てダマスコに往すでに定りし爾が爲べき事は彼處に於て爾に告べし一一 その光の耀に緣て我みることを得ず成ければ我と偕に在し者の手に援られてダマスコに至れり一二 この邑に住る凡のユダヤ人の中に譽あるアナニヤといふ律法に循へる神を敬ふ人一三 我もとに來り側に立て曰けるは兄弟サウロ復び見ことを得よ我ただちに目を擧て彼を見たり一四 彼また曰われらの列祖の神は爾に神の旨を知しめ彼の義者を見させ其口より出る聲を聞しめん事を定め給へり一五 蓋なんぢ彼が爲に其見聞せし事を以て凡の人に向ひ證人と爲べければ也一六 今なんぢ如何で緩ふ可んや起て主の名を籲バプテスマを受て其罪を滌去べしと一七 我エルサレムに返り聖殿に於て祈れる時まぼろしにて一八 見けるは主われに向て急げ彼等は爾が我について立る證を納ざるが故に速にエルサレムを出よと曰たまへり一九 我いひけるは主よ我もと爾を信ずる者を執へ或は諸會堂にて之を鞭ちしことを彼等は知二〇 また爾の證人ステパノの其血を流さるる時われ傍に立て其殺さるるを好とし彼を殺す者の衣を守れり二一 主われ

に曰けるは往われ爾を遠く異邦人に遣すべし二二 彼等ききて此言に至みな聲を揚て曰けるは此の如き者を地より去かれは先に生命の有べき者ならざりき二三 かれら噫呼で其衣をぬぎ塵を空中に揚ければ二四 千夫の長命じてパウロを陣營に引入しめ何故かく彼等がパウロに向て喧呼かを知んがため鞭ちて彼に訊べしと言り二五 かれら革鞭を撻んとてパウロを引張しとき彼その側に立る百夫の長に曰けるは罪を定ずしてロマ人たる者を鞭つは律法に當ふや二六 百夫の長これを聞ゆきて千夫の長に告て曰けるは爾なすことを愼めよ此人はロマ人なり二七 千夫の長ゆきてパウロに曰けるは爾はロマ人なるや我に告よパウロ曰けるは然り二八 千夫の長こたへけるは我は多の金を以て此民籍を得たりパウロ曰けるは我は生來なり二九 是に於てパウロを拷問せんとせし者等ただちに退けり千夫の長そのロマ人なるを知かれを縛しことを懼る

三〇 斯て明日ユダヤ人の彼を訟たる故を確に知んと欲ひパウロの縛をとき祭司の長等および全議會に命じて集らしめパウロを携往て其前に立せたり

第二十三章

一 パウロ議會に目を注かれらを見て曰けるは人々兄弟よ我今日に至るまで凡のこと良心に由て神に事たり二 祭司の長アナニヤ側に立る者に命じて彼の口を撃しむ三 是に於てパウロ彼に曰けるは粉堊たる壁よ神は爾を撃ん爾が坐せるは律法に循ひて我を審ん爲なるに律法に違ひ命じて我を撃しむる乎四 側に立る者ども曰けるは爾神の祭司の長を詬るや五 パウロ曰けるは兄弟よ我その祭司の長なるを識ざりき識ば然は言ざりし也そは爾の民の有司を誹る勿れと録されたり六 パウロ彼等の其半はサドカイの人半はパリサイの人なるを知て議會の中に呼り曰けるは人々兄弟よ我はパリサイの人またパリサイ人の子なり死たる者の甦ることを望に因て我いま審判る七 パウロ如此いひしかばパリサイの人とサドカイの人の間に爭論おこりて集りたる多の人々相分れたり八 蓋サドカイ人は復生また天使および靈を無と言パリサイ人は之をみな有と言ば也九 遂に大なる喧嘩となりぬパリサイ人の學者たち立て爭ひ曰けるは我儕この人の惡ことを見ずもし靈あるひは天使の彼に語し事あらんには我儕神に敵す可らざる也一〇 斯て大なる爭ひ起ければ千夫の長パウロが彼等に引裂れん事を恐て兵隊に命じ彼らの中に下らせ之を奪とり陣營に引入しめたり

一一 主その夜パウロの側に立て曰給ひけるはパウロよ勇そは爾われに就てエルサレムに證せし如く必ずロマにも證すべければ也一二 明日に及てユダヤ人黨を結び共に誓て曰けるはパウロを殺すまでは食飲をも爲まじ一三 この誓を爲る者は四十人餘なり一四 かれら祭司の長および長老たちの所に來て曰けるは我儕パウロを殺すまでは何をも食じと誓を立たり一五 是故に請なんぢ

ら議會と偕にパウロの事をなほ詳く訊る状を作て千夫の長に告かれを爾曹に曳下らしめよ彼が近かざる前に之を殺さんと我儕すでに備を爲り一六 然るにパウロの姉妹の子この謀をきき即ち往て陣營に入パウロに告一七 パウロ請て百夫の長一人をまねき曰けるは此少者を千夫の長に携往この者かれに告べき事あれば也一八 是に於て百夫の長かれを千夫の長に携往て曰けるは囚者パウロ我を請て此少者なんぢに言べき事あれば之を爾に携往んことを求へり一九 千夫の長その手をひき僻靜なる處に退して問けるは爾我に告んとする事は何ぞや二〇 彼いひけるはユダヤ人パウロの事をなほ詳く問る状を作て爾にこひ明日かれを議會に曳下さんことを約せり二一 然ど爾かれらが言に從ふ勿れ蓋そのうち四十人餘の者パウロを殺すまでは食ず又飲じと共に誓て埋伏し今すでに其預備をなして爾の許を俟り二二 千夫の長少者に爾我に此事を告しと人に語る勿れと囑付て之を去しめ二三 又百夫の長の二人を召て兵卒二百人騎兵七十人矛を持もの二百人を備へ今夜第九時にカイザリヤに往二四 かつ畜を備てパウロを乘しめ之を護て方伯ペリクスの所に送るべしと曰二五 また左の如き書をかき添たり二六 云クラウデヲ・ルシアス最も尊き方伯ペリクスの安を問二七 この人ユダヤ人に執はれ將に殺されんとせしを我そのロマ人なるを聞しにより兵隊を率ゐ往て之を拯け二八 彼等が訟る故を知んと欲ひ之を其議會に引下しが二九 彼が訟られしは惟かれらの律法の論に由るのみにて其死に當るべく亦繫るべきの故を見ざる也三〇 然るにユダヤ人これを害せんと計よし其事われに現れしにより直に之を爾の所に遣れり又かれを訟し者等に命じて其訟る所を爾に告しめんとす三一 是に於て兵卒は命に遵ひてパウロを携へ夜の中にアンテパトリスに至り三二 明日騎兵をしてパウロと共に往しめ其餘の者は陣營に歸れり三三 騎兵はカイザリヤに至り書を方伯に呈しパウロを其前に立しむ三四 方伯書を讀畢りて彼に其國を問キリキヤの者なるを知て三五 曰けるは爾を訟る者の此に來らん時われ爾に聽べし遂に命じて之をヘロデの公廨に於て守らしめたり

第二四章

一 五日を經てのち祭司の長アナニアは長老等および一人の辨士テルトルスと共に下てパウロを方伯に訟ふ二 パウロ召出されし時テルトルス訟の端を發て曰けるは三 最も尊きペリクスよ我儕なんぢに由て太平を得かつ此國は爾の先見に藉て良に改まりたれば時に隨ひ地に隨ひて感謝せざるなし四 今我敢て爾を礙ぐる事をせじ請しばらく忍て我が片言を聽たまへ五 蓋われら此人を見に疫病の如し天下のユダヤ人を擾せり且かれはナザレ宗の首にて六 また殿をも犯んとせり我儕これを執わが律法に循ひて審を爲んと欲ひしに七 千人の長ルシアス來て我儕の手より強て之を奪とり八 彼を訟る者をして命じて爾の所に來しめたり爾かれを訊ば我儕が訟る所を悉く知べし九 ユダヤ人も共に

訟へ曰けるは此等のこと誠に然り
一〇方伯首をもて示しパウロに言しめければ彼こたへけるは爾が多の年この民の審官たるを我しるが故に自らの事情を訟ることを喜べり一一 爾しらん我崇拜の爲にエルサレムに上しより僅に十二日のみ一二 彼等は我が殿に於て人と爭論をなし又會堂あるひは城下に於て人々を擾しし事を未だ見ざるべし一三 且かれらが今われを訟る所の事は憑據を立て之を確すること能はじ一四 然ど我この事を爾に認さん夫われは彼等が異端と稱る道に循ひ我が列祖の神に事へ悉く律法と預言者の書に録されし事を信じ一五 かつ義も不義も死し者の甦らんことを神に頼て我は望り即ち彼等が望む所と異なるなし一六 此に因て我つねに自ら勵み神に對ひ人に對て良心の責なからんことを務るなり一七 われ數年を歴たりしのち施濟を我民になし又獻祭をせんが爲に歸たり一八 我かでに潔淨て此等の事を行る時アジアより來しユダヤ人等は殿に於て我が人を集ることをせず亂をも爲ざるを見たり一九 もし我を訴べき事あらば彼等なんぢの前に訟ふべし二〇 或は又わが議會の前に立るとき呼りて死たる者の復生の事に就われ今日爾曹に審判ると曰る此一言の外に此人々もし我が不義ありしを見ば言べし
二二 是に於てペリクス詳細に其道を知ければ彼等を遲しめんとして曰けるは千夫の長ルシアスの下らん其時われ悉く爾曹の事を究べんと二三 百夫の長に命じてパウロを守しめ且これを寛容にして其友の彼を供給こと有を禁ぜざらしむ
二四 數日の後ペリクス其妻ユダヤ人なるデルシラと共に來りパウロを召て其キリストを信ずる道を語るを聽二五 パウロ公義と撙節と來んとする審判とを論ぜしかばペリクス懼て答けるは爾姑く退け我便時を得ば再なんぢを召ん二六 ペリクス、パウロより金を得んことを望が故に屢次かれを召て偕に語れり二七 斯て二年を經て後ポルキス・ペストスと云る者ペリクスの職に代たりペリクス悦をユダヤ人に取んと欲ひてパウロを獄に繫おけり

第二五章

一 倩ペストスは任國に至て三日の後カイザリヤよりエルサレムに上れり二三 時に祭司の長等とユダヤの尊重たる者等パウロを彼に訴へ且これを途にて謀殺さんと欲ひ彼に勸その恩を我儕に賜てパウロをエルサレムに召給はんことを請四 ペストス答て曰けるはパウロは守られてカイザリヤにあり我も遠からず彼處に赴くべし五 是故に爾曹のうち權威ある者ども我と共に下り彼について訟べきこと有ば訟へよ六 ペストス彼等の中に十日餘とどまりてカイザリヤに下り明日審判の座に坐り命じてパウロを曳出しむ七 パウロの來れる時エルサレムより下しユダヤ人等彼を立圍み證據を立ること能はざる多端の重罪をもて訟をなせり八 パウロ辨訴けるは我いまだユダヤ人の律法および殿また

カイザルにも皆犯せる所なし九 ペストス 悦をユダヤ人に取んとしてパウロに答て曰けるは爾 エルサレムに上り彼處に於て此事につき審判を我前に受んことを望むや否一〇 パウロ曰けるは我今カイザルの審判の場に立この處に於て審を受るは當然なり我は爾が明かに知る如くユダヤ人に不義を爲しことなし一一 もし不義を行ひて死に當るべき罪を犯さば我は死を免るることを欲はじ若われを訟る所のこと虚きときは其望に任せて我を彼等にわたし得る者なし我はカイザルに上告せん一二 是に於てペストス議事官と相議こたへて曰けるは爾 カイザルに上告せんと欲へりカイザルに往べし

一三 數日を經て後アグリッパ王およびベルニケ、ペストスの安否を問ん爲にカイザリヤに來り一四 彼處に留れること久かりしかばペストス、パウロの事を王に告て曰けるは此に一人の囚者あり即ちペリクスの遺置し所なり一五 我エルサレムに居しとき祭司の長とユダヤ人の長老たち之を訟へて罪に擬んことを求へり一六 われ彼等に答けるは訟られしもの己を訟し者に對て其 訟る所を分理べき機を未だ得ざる先に之を死に付るはロマ人の例に非ず一七 是に於て彼等この處に來 集れり我も日を延ことをせず次日審判の座に坐り命じて其人を曳出さしめたるに一八 訟 者ども立て之を訟しが其事わが逆 料りし所に違へり一九 惟かれらは鬼神を敬ふ己が道とパウロが生りといふ既に死し一人のイエスとに就て爭論をなし彼を訟しのみ二〇 我これらの質訊に惑ければパウロに對ひ爾 エルサレムに往この事につきて彼處に於て審判を受ることを欲ふや否と問しに二一 彼アウグストの質訊を受んとして護れんことを求しに因れ命じて之をカイザルに送るまで守らせ置り二二 アグリッパ、ペストスに曰けるは我も亦その人に聽んことを欲なり彼いひけるは明日なんぢ之に聽べし二三 是に於て次日アグリッパとベルニケ大に威儀を備きたりて千夫の長等および邑の尊き人々と偕に公堂に入ぬパウロはペストスの命に由て曳出さる二四 ペストス曰けるはアグリッパ王及び凡て我儕と偕にある人々よ爾曹この人を觀なるべしユダヤの多の人々エルサレムに於ても亦この所に於ても彼について我に訟かれは此のち生べき者に非ずと呼叫べり二五 然ど我これを査看て其死べき事を爲ざりしを知り且かれ自らアウグストに上告せんと爲により我これを解らんことを定たり二六 我これに就て我が主上に奏すべき實情を得ず故に我これを質訊て奏すべき事を得んがため爾曹の前また殊更にアグリッパ王なんぢの前に曳出せり二七 蓋囚者を解るに其罪案を書そへざるは理に合はずと意へば也

第二六章

一 アグリッパ、パウロに曰けるは爾が自己の爲に陳る事を許たり是に於てパウロ手を伸かれらが訟を禦んとして曰けるは二 アグリッパ王よ我ユダヤ人に訟られし事につき今日なんぢの前に

て悉く辯訴ことを得が故に我を幸なる者とす三 殊に幸なるは爾ユダヤ人の例と彼等が論ずる所の端緒を悉く知たまふ事なり是故に願くは耐心て我に聽たまへ四 夫わが始よりエルサレムに在て我民の中にをり幼穉ときより如何に世を過しかをユダヤ人はみな知なるべし五 もし證を爲んとせば彼等は素より我が曩に我儕の教の中にて最も嚴き所に遵ひたるパリサイ人よりし事を知り六 今われ立て我儕の先祖等に神の約束し給し其望につきて鞫る也七 この望は即ち我儕の十二の支族の夜も晝も專ら神に事て得んとする者なりアグリッパ王よ此望の爲に我はユダヤ人に訟られたり八 神すでに死し者を甦らせ給りと云ども爾曹なんぞ信じ難しとする乎九 我も亦曩にはナザレのイエスの名に逆はんがため多の事を行は宜ことと自ら意ひ一〇 エルサレムにて此事を行り即ち祭司の長等より權威を受て多の聖徒を獄に入また彼等の殺さるる時は其を宜とし一一 諸會堂に於て屢次これを罰し強て之に褻瀆を言しめ且狂ること甚しく之に由て外國の邑にまで攻及べり一二 此とき祭司の長等より權威と命令を受てダマスコへ往しに一三 王よ其途にて正午われ天より光あるを見たり日よりも耀きて我および同に行る者を環照せり一四 我儕みな地に仆る其時ヘブルの方言にてサウロ、サウロ何ぞ我を窘る乎なんぢ刺ある鞭を蹴こと難しと我に語れる聲を我きけり一五 我いひけるは主よ爾は誰ぞや彼こたへけるは我は爾が窘る所のイエスなり一六 爾起て立よ我なんぢに現るるは爾を立て役者とし又なんぢが既に見し事と我が爾に現れて示さん其事の證人と爲んがため也一七 我なんぢを守て此民および異邦人の手より拯ふべし今なんぢを彼等に遣すは一八 彼等の目を啓き暗を離れて光に就サタンの權を離れて神に歸せしめ又彼等をして我を信ずるに因て罪の赦と聖られし者の中に於て業を受ることを得させんが爲なり一九 是故にアグリッパ王よ我この天の現示に背ずして二〇 先ダマスコ、エルサレムの人々次にユダヤの全地および異邦人にまで恆に悔改に符ふ行をなして罪を悔べき事と神に歸すべき事とを宣傳へたり二一 此等の事に由てユダヤ人われを殿にて執かつ我を殺さんとせり二二 然して我は神の佑を得今日に至るまで斃るることなく小き者にも大なる者にも證をなせり我言ところは預言者およびモーセが將來かならず成んと言しことに非ざるはなし二三 即ちキリストの苦難をうけ死し者の復生の始となり光を此民と異邦人に傳ふること也二四 パウロが如此うつたへける時ペストス大聲に曰けるはパウロよ爾は狂氣せり博學爾をして狂氣せしめたり二五 パウロ曰けるは最も尊きペストスよ我は狂氣せるに非ず我言ところは眞實にして慥なる心より出るなり二六 それ此等の事情は王よく知たまへば我はばからずして王の前に語れり蓋これらの事は方隅に行はれたるに非ざれば王に隱るる所なしと信ずれば也二七 アグリッパ王よ爾預言者の書を信ずる乎われ爾の信ずるを知二八 アグリッパ、パウロに曰けるは爾われを勸て容易キリステアンと爲んと

す二九 パウロ曰けるは容易にもせよ容易からざるにもせよ我は惟なんぢ耳ならず今日われに聽ところの者みな此縲絏なくして我ごとき者とならんことを神に願ふなり三〇 如此かたり畢しとき王と方伯およびベルニケ又ともに坐せし人々起て退き三一 相語て曰けるは此人は死べき事と縲絏にかかる可ことを爲ざる也三二 アグリッパ、ペストスに對ひ曰けるは此人もしカイザルに上告せんと言ざりしならば既釋すべき者なり

第二七章

一 われら已にイタリヤへ航ることに定りければ彼等パウロ及び他の囚者等をアウグスト隊の百夫の長なるユウリアスと名る者に付せり二 是に於て我儕アジアに沿て駛んとするアドラミテオムの舟に登て出マケドニヤのテサロニケ人アリスタルコ我儕と偕に在き三 次日シドンに着りユウリアス慇懃にパウロを待ひ彼に朋友の所へ往て其供應を受ることを許せり四 我儕また彼處より舟出せしが風の逆ふに因てクプロの風下の方に入り五 キリキヤとパムフリヤの海を過てルキヤのムラと云る港に至れり六 此處にて百夫の長イタリヤへ濟るアリキサンデリアの舟に遇て我儕を之に登たり七 多日のあひだ舟の行こと遲く僅にしてクニドスに對へる處に至り風の順ならざるに因てサルモネを過クレテの風下の方を走り八 僅にして其岸に沿ラサイアの邑に近き美港と名る處に至れり九 時を歷こと既に久く斷食の期も過ぬれば舟路の危險によりパウロ諫て一〇 曰けるは人々よ我思ふに此舟路は損害多かるべし第に積荷と舟のみならず我儕の生命にも及ばん一一 然ども百夫の長はパウロの言ところよりも船長と船主の言を信じたり一二 且この港は冬を過すに便宜らず是故に若ピニクスに至り彼處にて冬を過すことを得んかとて此處を出んと定たる者おほしピニクスはクレテの港にて西南の風と西北の風と其岸に沿て吹ところ也一三 時に南風徐に吹ければ彼等 志を得たりと意ひ錨を起クレテに沿て走しに一四 未幾ユーロクルドンと稱る狂風島より卸來り一五 舟を掣去ければ之に敵ふことを得ず我儕その風に任て一六 遂にクラウダと云る小島の風下の方へ駛ゆき僅にして小艇を收む一七 既に援上し後かれら備おける物をもて大舟の胴を縛かつ洲に乘掛んことを恐れ帆を下して流れたり一八 風疾きによりて次の日水夫ら貨物を擲つ一九 第三日に至ては我儕てづから舟具を擲つ二〇 斯て多日のあひだ日も星も見ずして疾 風ふきあてければ我儕つひに救るべき望たえ果たり二一 人々久く食せずパウロ彼等の中に立て曰けるは人々よ爾曹曩に我 諫を聽クレテより離るることを爲ずして此損害を受ずある可はずなりし二二 今われ爾曹に勸む勇め爾曹の中一人だに生命を失ふ者なし惟舟を失ふこと有んのみ二三 蓋わが屬する所わが事る所の神の使者この夜わが側に立て二四 パウロよ懼るる勿れ爾 必ずカイザルの前に立べし且神は爾と偕に舟にある者を悉く爾に賜と曰り二五 是故に人々勇めや如此

われに語り給へる如く必ず成んと我神を信ずれば也二六 われら必ず一島に推上られん二七 斯て第十四日の夜に至り我儕アデリアの海に漂ふ夜半ごろ水夫ら岸に近けりと意ひて二八 水を測しに二十尋を得たり少し進て又測しに十五尋を得たり二九 石に乗掛んことを恐れ艫より四の錨を投て天明を待わびぬ三〇 水夫ら舟より逃んとして舳より錨を投す状をなし小艇を海に下ければ三一 パウロ百夫の長と兵卒に曰けるは此人々もし舟に留らずば爾曹救ることを得じ三二 是に於て兵卒ら小艇の索を斷きり其流るるに任たり三三 夜の明んとする時パウロ凡の人々に食せんことを勸て曰けるは爾曹待わびて食せざりしこと今日にて已に十四日なり三四 故に我なんぢらに食せんことを勸そは救を得べき助となる可ればなり爾曹の頭髮一縷だに爾曹の首より隕ざるべし三五 如此かたりてパンを取凡ての人の前にて神に謝し之を擘て先食しければ三六 彼等も亦勇んで食せり三七 舟に登る所の我儕合て二百七十六人なりき三八 既に食して飽ければ穀物を海に棄て舟を輕せり三九 夜あけて其地は識ざれど一の海灣を見たり此に洲崎あり或は至ことを得ば彼處に舟を進んと謀り四〇 綱を斷て錨を海にすて舵纜を鬆め舳の帆をあげ風に順ひ洲崎を望て走しに四一 潮の流交ふ處に至りて舟を洲に乗あげ舳は膠定て動ず艫は浪の勁が爲に破られたり四二 是に於て兵卒ら囚人の泅逃れんことを恐れ之を殺さんと勸む四三 然ども百夫の長パウロを救んと欲ひ其勸を阻かつ泅得る者は先水に跳いり四四 その他は或は板あるひは舟の碎木に乘て岸に至んことを命じたり此の如く皆すくはるる事を得て岸に登れり

第二八章

一 我儕すでに救を得て後その島の名をメリタと稱ることを知れり二 夷人ら尋常ならぬ情分をかく降雨と寒とにより火を爇て我儕衆人を待遇せり三 パウロ多の柴を集て火に放しに火熱により蝮いで來て其手に繞り四 夷人ら蝮の其手に懸たるを見て互に曰けるは此人は正く人を殺しし者ならん彼海より逃たりと雖も天理その生ることを容さざる也五 パウロ蝮を火の中に拂綽して害を受ることなし六 彼等パウロを候ひて其腫るか或は忽ち仆て死ることとあらんと意に久く候へども彼に害の及ざるを見て其意を轉こは神なりと謂り七 島の長をププリヲと名く此邊に己が有る田地あり彼われらを接て慇懃に三日宿らせたり八 時にププリヲの父熱と痢病を患ひて臥居しがパウロその所に至り祈て手を其上に接これを醫せり九 此事ありしかば島にある所の多の病者等も來て醫さるることを得たり一〇 かれら禮を厚して我儕を敬ひ又舟出の時に臨て我儕が無てかなはぬ物を贈れり一一 我儕三ヶ月を經てのち此島にて冬を過ししデヲスクリの號あるアレキサンデリアの舟に登いでて一二 スラクサに着三日とどまれり一三 彼處より回てレギヲに至り一日を經て南風起ければ次日プテヲリに至り一四 兄弟等に遇かれらが請に任て七日とど

まり而してロマに往

一五 ロマの兄弟たち我儕の事を聞きアッピーポロムおよび三館と云る處に來て我儕を迎ふパウロ之を見て神に謝し其心に力を得たり

一六 既に我儕ロマに至しに百夫の長衆囚を王を守る兵隊の長に交せり然どパウロは一人の守兵と共に別に自ら居ことを許されたり一七 三日を經て後パウロ、ユダヤ人の尊重たる者等を召集むかれらの集れる時これに曰けるは人々兄弟よ我いまだ我民また先祖の例に違て何事をも爲しことなし然にエルサレムより囚人となりてロマ人の手に付されたり一八 ロマ人すでに我を審たれど死べき罪なきが故に我を釋さんと欲へり一九 ユダヤ人これを拒しにより我已ことを得ずしてカイザルに上告す然ども我が國の民を訟ん爲には非ず二〇 斯に因て我なんぢらに會ともに語んことを請るなり蓋われイスラエルの望の爲に此鏈に繫るれば也二一 彼等いひけるは我儕ユダヤより爾について書信を受ず又兄弟たちの來し者も爾に就て何の惡事あるを我儕に報また語し者なし二二 然ど我儕なんぢの意ふ所を聞んとす蓋われら何處にても此宗旨の誹らるるを知ばなり二三 既に定たる日に及て多の人パウロの館に來れりパウロ朝早より暮に至までモーセの律法と預言者の書をひき神の國の事を説かつ之を證しイエスの事を語て彼等を勸たり二四 其言に感じて之を然とする者あり亦信ぜざる者もありて二五 互に相合ざるにより遂に退けり其退かんとせし時パウロ一言を語けるは誠なるかな聖靈預言者イザヤに託て我儕の先祖等に語し言其言に云二六 なんぢ此民に往て告よ爾曹は聽ども聰らず視ども見ず二七 蓋この民目にて見耳にて聽心にて悟り悔改て我に醫されん事を恐れ其心を頑し耳を蔽ひ目を閉たりと二八 是故に爾曹知べし神の救は異邦人に遣られ彼等は之を聽ん二九 パウロが此言を言畢し時ユダヤ人退きて互に大なる爭論をなせり

三〇 斯てパウロその借受し家に居しこと全く二年すべて來り見んとする者を接て三一 憚らず神の國をのべ主イエス・キリストの事を教て禁げらるること無りき

羅馬書

第一章

一イエス・キリストの僕パウロ召れて使徒となり神の福音の爲に選る二この福音は從前より其預言者たちに託て聖書に誓ひ給へるものにて三其子われらの主イエス・キリストを指て示せり彼は肉體に由ばダビデの裔より生れ四聖善の靈性に由ば甦りし事によりて明かに神の子たること顯れたり五われら彼より恩惠と使徒の職を受これ其名の爲に萬國の人々をして信仰の道に從はせんと也六爾曹も其人々の中に在てイエス・キリストの召を受し者なり七我すべてロマに在ところの神に愛しまれ召を蒙り聖徒と爲る者にまで書を贈る爾曹願くは我儕の父なる神および主イエス・キリストより恩惠と平康を受よ

八先爾曹の信仰を世こぞりて傳揚たるが故にイエス・キリストに頼て爾曹衆人に就わが神に感謝す九我その子の福音に於て心を以て事る所の神は我が不斷なんぢらを懷ふ其證なり一〇われ祈禱ごとに終には神の旨意に適ひて平坦なる途をえ速かに爾曹に到んことを求む一一われ爾曹を見んことを深く願は爾曹を堅固せん爲に靈の賜を予へんと欲へば也一二即ち我なんぢらの中に在ば互の信仰によりて相共に安慰を得べし一三兄弟よ我しばしば志を立なんぢらに到り他の邦人の中に在ごとく爾曹の中よりも果を得んとせしかども今に至りて尚困げらる此を爾曹が知ざるを欲まず一四我はギリシヤ人及び異邦人また智人および愚人にも負る所なり一五是故に我力を盡して福音を爾曹ロマにある人々にも傳んことを願ふ一六我は福音を耻とせず此福音はユダヤ人を始ギリシヤ人すべて信ずる者を救んとの神の大能たれば也一七神の義は此に顯れて信仰より信仰に至れり錄して義人は信仰に由て生べしと有が如し

一八それ神の怒は不義をもて眞理を抑る人々の凡の不虔不義に向て天より顯る一九蓋人の知べき所の神の事情は人に顯明にして既に神これを人に顯し給へばなり二〇それ人の見ことを得ざる神の永能と其神性とは造られたる物により創世より以來さとり得て明かに見べし是故に人々推諉べきやうなし二一既に神を知て尚これを神と崇めず亦謝することをせず反て其思念を亂し其愚なる心蒙昧なれり二二自ら智と稱へて愚魯なる者となり二三朽壞ざる神の榮光を變て朽壞べき人および禽獸昆蟲の像に似す二四是故に神は彼等を其心の慾を縱肆にするに任せて互に其身を辱しむる汚穢に付せり二五彼等は神の眞を易て僞となし造物主よりも受造物を崇奉りてこれに事ふ神は永遠頌美べきもの也アメン二六此に縁て神は彼等が耻べき慾をなすに任せ給へり其婦女さへも順性の用を變て逆性の用となす二七此の如く男子は亦婦女の順性の用を棄て互に嗜慾の心を熾し男と男と耻ることをなして其悖戻に當るべき報を己が身に受たり二八かれら心に神を存ることを願ざれば神も彼等が

邪辟なる心を懐て行まじきことを行に任せ給へり二九　諸の不義、惡慝、貪婪、暴很を充す者また妬忌、凶殺、爭鬪、詭譎、刻薄を盈す者三〇　又讒害、毀謗をなし神を怨む者狎侮、傲慢、矜夸、譏詐、父母に不孝三一　頑梗、背約、不情、不慈なる者三二　凡て此等を行ふ者は死罪に當るべき神の判定を知てなほ自ら行ふのみならず亦これを行ふ者をも喜べり

第二章

一 是故に凡そ人を審判所の人よ爾推諉べきなし爾他人を審判くは正しく己の罪を定る也そは審判所の爾も同く之を行へば也二 此の如く行ふ者を罪する神の審判は眞理に合へりと我儕は知三 此等の事を行ふ者を審判きて同く之を行ふ人よ爾神の審判を免れんと意ふ乎四　汝神の豐厚なる仁慈と寛容なると恒忍たまふとを藐視する乎其仁慈は汝を悔改に導くなるを知ず五 剛愎にして悔なきの心に循ひ己の爲に神の怒を積て其義鞫の顯れん震怒の日に及ぶなり六 神は人の行に循ひて各人に其報を爲べし七 耐忍て善を行ひ榮光と尊貴と不朽壞とを求る者には永生をもて報ん八 九 然ども爭鬪をなし眞理に順はず不義につく者には報るに忿と怒と患難辛苦とを以てす此はユダヤ人を始ギリシヤ人凡て惡を行ふ人に及ぶなり一〇 ユダヤ人を始ギリシヤ人すべて善を行ふ人には榮光と尊貴と平康とを以て報ゆべし一一 これ神には偏視なければ也一二 凡そ律法なくして罪を犯せる人は律法なくして亡び律法ありて罪を犯せる人は律法に照て審判を受べし一三 神の前に義と爲るるは律法をきく者に非ず義と爲るるは律法を守る者なり一四 それ律法なきの異邦人もし本性のまま律法に載たる所を守らば律法なしと雖も己の律法たる也一五 彼等その心に銘されたる律法の工を表彰し其良心これが證をなして其思念たがひに或は貶あるひは褒ることを爲り一六 それ審判は我が福音に云る如く神イエス・キリストをもて人の隱微たる事を鞫かん日に成べし

一七 爾もしユダヤ人と稱へ律法を恃み神あるを誇り一八 その旨をしり律法に習て是非を辨へ一九 自ら瞽者の相黒暗にをる者の光二〇 愚なる者の師童蒙の傅と意ひ又律法に於て眞理を知べき事との式を得たりとせば二一 何ゆゑ人を教て自己を教ざる乎なんぢ人に竊む勿れと勸て自ら竊する乎二二 なんぢ人に姦淫する勿れと諭して自ら姦淫する乎なんぢ偶像を惡て自ら殿の物を干す乎二三 なんぢ律法に誇て自ら律法を犯し神を輕しむる乎二四 神の名は爾に縁て異邦人の中に謗讟れたりと録されしが如し二五 爾もし律法を行はば割禮は益あり若し律法を犯さば爾が割禮は割禮なきが如なるべし二六 是故に割禮なき者も若し律法の義を守らば其割禮なきも割禮せりと謂ざるを得ん乎二七 それ本性のまま割禮なくして律法を守る者は儀文を割禮をもて尚律法を犯すなんぢを審判かん二八 明にユダヤ人たるも實のユダヤ人に非ず明に身に割禮あるも實の割禮に非ず二九 反て隱にユダヤ人

たる者は實のユダヤ人たり又割禮は靈に在て儀文に在ず心の割禮は眞なり其譽は人に由ず神に由り

第三章

一 然らばユダヤ人の長 處は何ぞ耶また割禮の益する所は何ぞ耶二 そは凡の事に於て益おほし先第一は神の諭をもて彼等に託ね給へること也三 爰に信ぜざる者あれど其を如何その不信は神の信を廢べき乎四 非ず凡の人を僞とするも神を眞とすべし爾の告る言は義とせられ爾が鞫る時勝を得んと録されたる如し五 我儕が不義もし神の義を彰すとせば我何を言べきか怒を加ふる神は不義なるや此はそれ人に由て言のみ六 然こと有じ若し然こと有ば神如何して世を鞫かん耶七 もし神の眞わが僞に因て顯れ其榮光いや增ば我何でなほ罪人と爲れん乎八 如此あらば我儕が誣らるる如く善を來らせんとて惡を作は宜らずや此を我儕が言と云る者あり斯る人の罪せらる可は宜なり九 然らば如何ぞ耶われら勝れるか決てなし蓋われら既にユダヤ人もギリシヤ人も皆罪の下に在ことを證せり一〇 録して義人なし一人も有なしとあるが如し一一 明達者なく神を求る者なし一二 みな曲て全く邪となれり善を作ものなし一人も有なし一三 その喉は破れし塋その舌は詭詐をなし其 唇には蝮の毒を藏り一四 其口は詛と苦とにて滿一五 その足は血を流さんが爲に疾し一六 殘害と苦難は其途に遺れり一七 彼等は平康なる道を知ず一八 その目前に神を畏るの懼あることなし一九 それ律法の言ところは其下にある者に示すと我儕は知こは各人の口塞り又世の人こぞりて神の前に罪ある者と定らん爲なり二〇 是故に律法の行に由て神の前に義と爲るるもの一人だに有ことなし蓋律法に由て罪は知る也

二一 今律法の外に神の人を義とし給ふことは顯れて律法と預言者は其證をなせり二二 即ちイエス・キリストを信ずるに由て其義を神は凡の信者に賜ふて區別なし二三 そは人みな既に罪を犯したれば神より榮を受るに足ず二四 只キリスト・イエスの贖に頼て神の恩をうけ功なくて義とせらるる也二五 二六 神はその血によりてイエスを立て信ずる者の挽回の祭物とし給へりそは神忍て已往の罪を寬容にし給ひしことに就て今其義を彰さん爲め即ちイエスを信ずる者を義とし尚自ら義たらんが爲なり二七 然ば誇ところ安に在や有ことなし何の法をもて無とするか行の法か非ず信仰の法なり二八 故に我おもふに人の義とせらるるは信仰に由て律法の行に由ず二九 神は獨ユダヤ人のみの神なる乎また異邦人の神ならずや然また異邦人の神なり三〇 それ割禮せし者をも信仰に由て義とし亦割禮なき者をも信仰に由て義とする神は一位なれば實に然り三一 さらば我儕信仰をもて律法を廢るや然らず反て律法を堅固する也

第四章

一 然ば我儕が先祖アブラハムは肉體について何の得し所ありと

言んニ若アブラハム行に由て義と爲れたらんには誇るべき所あり然ど神の前には有ことなし三 そは聖書には何と云るかアブラハム神を信ずその信仰を義と爲れたり四 工を作ものの價は恩と稱ず受べきもの也五 然ど工なき者も不義なる者を義とする神を信じて其信仰を義と爲れたり六 工なく神に義とせらるる者の福なることは正にダビデが言る如し七 云その不法を免され其罪を蔽はるる者は福なり八 主の罪を負せざる人は福なりと九 この福は割禮の者にあるや割禮なき者にあるや抑われらアブラハムは其信仰を義と爲れたりと言り一〇 然ば如何に義と爲れしや割禮を受し後なる乎また割禮を受ざる前なるか割禮を受し後ならず割禮を受ざる前にあり一一 かつ割禮の號を受しは未だ割禮を受ざる前に信仰に由て義と爲れたる印證なり此は割禮を受ざる凡の信者の父にして彼等の義とせられん爲なり一二 また割禮を受る者の父となれり唯割禮にのみ由ず我儕が父アブラハムの割禮を受ざりし時の信仰の跡を履ものの爲なり一三 蓋アブラハムと其子孫とに世界の嗣子たることを得させんとの神の約束は律法に由に非ず信仰の義に由り一四 若それ律法に從もの嗣子たることを得ば信仰も虚く約束も亦廢るべし一五 そは怒を來するものは律法なり律法なくば犯すことも有なし一六 是故に信仰に由て得させ給ふは恩に由せて其約束をアブラハムの諸の子孫に堅固せんがため也ただ律法を有る者のみならず亦アブラハムの信仰に效ふ者に及べり一七 我なんぢを立て多の國民の父と爲りと録されたる如くアブラハムは其信ずる所の神すなはち死し者を生し無ものを有し如く稱ふる神の前に於て我儕衆人の父たる也一八 彼は望べくもあらぬ時になほ望て多の國民の父と爲んことを信ず蓋なんぢの子孫かくの如ならんと言たまひしに因てなり一九 彼その信仰淺からざれば齡およそ百歳にして己が身の既に死るが如きとサラの胎の死るが如きも顧みず二〇 不信をもて神の約束を疑ふことなく反て其信仰を篤して神を尊め二一 神は其約束し給ふ所を必ず成得べしと心に決む二二 是故に其信仰義と爲れたり二三 それ信仰に由て義とせられたりと録されしは特かれの爲のみならず亦われらの爲に録されし也二四 我儕もし我主イエスを死より甦らしし神を信ぜば同く義とせらるる事を得べし二五 イエスは我儕が罪の爲に解され又われらが義と爲られん爲に甦らされたり

第五章

一 是故に我儕信仰に由て義とせられたれば神と和ぐことを得たり此は我主イエス・キリストに頼てなり二 亦われら彼により信仰によりて今居ところの恩に入ことを得かつ神の榮を望て欣喜をなす三 第これ耳ならず患難にも欣喜をなせり蓋患難は忍耐を生じ四 忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ五 希望は羞を來らせざるを知こは我儕に賜ふ所の聖靈に由て神の愛われらの心に灌漑ばなり六 我儕なほ弱かりし時キリスト定りたる日に及

て罪人のために死たまへり七それ義人の爲に死るもの殆んど少なり仁者の爲には死ることを厭ざる者もや有ん八然どキリストは我儕のなほ罪人たる時われらの爲に死たまへり神は之によりて其愛を彰し給ふ九今その血に頼て我儕義とせられたれば況て彼に由て怒より救るる事なからん乎一〇若われら敵たりし時に其子の死によりて神に和ぐことを得たらんには況て和を得たる今その生るに頼て救るることを得ざらん乎一一ただ此耳ならず我儕に和を得させ給ひし我主イエス・キリストに頼て亦神を喜べり一二然ば是一人より罪の世にいり罪より死の來り人みな罪を犯せば死の凡の人には及たるが如し一三律法を立られし時より前に罪は世に有き律法なくば罪は人に歸することなし一四然どもアダムよりモーセに至るまでアダムの罪と等き罪を犯さざりし者にも死は之に王たりアダムは即ち來らんとする者の模なり一五然ど罪のことは恩賜のことの如きに非ず若し一人の罪に由て死るもの多からば況て神の恩と一人のイエス・キリストに由る恩の賜とは多の人に溢ざらん乎一六賜は一人より來る罪の如きに非ず蓋審判は一の罪より罪せられ賜は多の罪より義とせらるる也一七若し一人罪を犯ししにより死この一人に由て王たらんには況て溢るるの恩と義の賜を受る者は一人のイエス・キリストにより生に在て王たらざらん乎一八是故に一の罪より罪せらるる事の凡の人に及し如く一の義より義とせられ生命を獲ことも凡の人に及べり一九それ一人の逆に由て多く罪人とせられし如く一人の順に由て多く義とせらるべし二〇律法を立るは罪を増ん爲なり然ども罪の増ところには恩も愈増り二一これ罪の死をもて宰れる如く恩も我儕が主イエス・キリストに頼て永生に至らせんが爲に義をもて宰れり

第六章

一然らば我儕何を言んや恩の増ん爲に罪に居べき乎二非ず我儕罪に於て死し者なるに何でなほ其中に於て生んや三イエス・キリストに合んとてバプテスマを受し者は即ち其死に合んとて之を受しなるを爾曹知ざる乎四故に我儕その死に合バプテスマに由て彼と同に葬るるはキリスト父の榮に由て死より甦されし如く我儕も新き生命に行べき爲なり五若われら彼の死の状に等からば亦かれの復生にも等かるべし六我儕の舊人かれと同に十字架に釘らるるは罪の身滅て今より罪に役ざるが爲なるを我儕は知七蓋死し者は罪より釋さるれば也八我儕もしキリストと偕に死ば又彼と偕に生ん事を信ず九キリスト死より甦りて復しなず死もまた彼に主とならざるを知り一〇是其死しは罪について一次死しなり其いくるは神について生るなり一一如此なんぢらも我儕の主イエス・キリストにより罪に就ては自ら死る者また神に就ては生る者なりと意ふべし一二是故に爾曹罪を死べき肉體に王たらしめて其慾に徇ふ勿れ一三また爾曹の肢體を不義の器となして罪に獻ること勿れ死より甦りし者の如く己を

神に獻また肢體を義の器となして神に事ふべし一四 蓋なんぢら恩の下に在て律法の下に在ざれば罪は爾曹に主となること無ればなり也一五 然らば如何我儕恩の下に在て律法の下に在ざるが故に罪を犯すべきか非ず一六 なんぢら身を獻げ僕となり誰に從ふとも其從ふ所の僕たるを知ざるか或は罪の僕となれば死に及び或は順の僕とならば義に及ばん一七 然ども我神に感謝す爾曹は素罪の僕たりしかど今は既に授られし所の教の範に心より服ひて一八 罪より釋され義の僕となれば也一九 我いま人の言を藉て言るは爾曹が肉體よわき故なり爾曹その肢體を獻て汚穢と惡の僕となり惡に至りし如く今また其肢體をささげ義の僕となりて聖潔に至るべし二〇 蓋なんぢら罪の僕なりし時には義に事ざれば也二一 爾曹いま恥る所のことを行ひし其とき何の果を得たりしや此等のことの終は死なり二二 然ど今罪より釋されて神の僕となりたれば聖潔に至るの果を得たり且その終は永 生なり二三 罪の價は死なり神の賜は我儕の主イエス・キリストに於て賜はる永 生なり

第七章

一 兄弟よ我いま律法を知る者に言ん律法は人の畢 生その主たるを知ざる乎二 夫ある婦は律法の爲に夫の生る間はそれに繫るれど夫しなば其律法より釋さる三 然ば夫の生る間に他の人に適ば淫婦と稱ふべし若し夫しなば其律法より釋さるるが故に人に適とも淫婦には非ず四 然れば我兄弟よ爾曹もキリストの身により律法に就て殺されしもの也これ別人すなはち死より甦され給ひし者に適て神のために果を結ばんとなり五 われら肉に在し時は律法に因る罪の慾われらの肢體に動きて死の爲に果を結べり六 然ども今われらを繫る者に於て死たれば律法より釋され儀文の舊樣に由ず靈の新樣に由て事ふ

七 然らば我儕何を言べきか律法は罪なるや非ず律法に由ざれば我罪の罪たるを識ことなし夫律法に貪る勿れと言ざれば我貪慾の罪たるを識ざる也八 而して罪は誡の機に乘て我中に各樣の貪慾を起せり律法なければ罪は死るもの也九 われ昔し律法なくして生たれど誡命きたりて罪は活かへり我は死り一〇 斯て人を生さん爲の誡は反て是われを死しむる者となれり一一 何となれば罪は誡の機に乘て我を誘し其 誡をもて我を殺せり一二 それ律法は聖し誡も聖く公義かつ善也

一三 然ば善なる者われを死しむるか非ず死しむる者は罪なり罪は善なる者をもて我を死しむれば其罪たること現はれ亦 誡に由て罪の甚しきことは現るる也一四 それ律法は靈なる者と我儕は知されど我は肉なる者にして罪の下に賣れたり一五 蓋わが行ふ所の者は我も之を是とせず我が願ふ所のもの我これを行ず我が惡む所のもの我これを行ばなり一六 若われ願ざる所の者を行ふ時は律法を善とす一七 然らば今より之を行ふ者は我に非ず我に居ところの罪なり一八 善なる者は我すなはち我肉に居ざるを

知そは願ふ所われに在ども善を行ふことを得ざれば也一九われ願ふ所の善は之を行はず反て願ざる所の惡は之を行へり二〇若われ願ざる所を行ふときは之を行ふ者は我に非ず我に居ところの罪なり二一是故に我善を行はんと欲ふときに惡の我にをる此一の法あるを覺ゆ二二蓋われ内なる人に就ては神の律法を樂めども二三わが肢體に他の法ありて我心の法と戰ひ我を擄にして我が肢體の中にをる罪の法に從はするを悟れり二四噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや二五是われらの主イエス・キリストなるが故に神に感謝す然ば我みづから心にては神の法に服ひ肉にては罪の法に服ふなり

第八章

一是故にイエス・キリストに在ものは罪せらるる事なし二そは活す靈の法はイエス・キリストに由て罪と死の法より我を釋せば也三それ律法は肉に由て荏弱その能ざる所を神は爲たまへり即ち己の子を罪の肉の状となして罪のために遣はし肉に於て罪を罰しぬ四それ律法の義は肉に從はで靈に從ひて行ふ我儕に成就せんが爲なり五肉に從ふ者は肉の事を念ひ靈に從ふ者は靈の事を念ふ六肉の事を念ふは死なり靈の事を念ふは生なり安なり七そは肉の事を念ふは神に乖るが故なり是神の律法に服はず又服ふこと能ざるに因八而して肉にをる者は神の心に適ふこと能はず九もし神の靈なんぢらに住ば爾曹は肉に在で靈に在ん凡そキリストの靈なき者はキリストに屬ざる者也一〇若キリスト爾曹に在ば體は罪に縁て死靈魂は義に縁て生ん一一若イエスを死より甦らしし者の靈爾曹に住ばキリストを死より甦らしし者は其なんぢらに住ところの靈を以爾曹が死べき身體をも生すべし一二是故に兄弟よ我儕肉の爲に負ところ有て肉に從ひ役る者に非ず一三もし肉に從ひ役なば死べし若し靈に由て身體の行爲を滅さば生べし一四凡そ神の靈に導かるる者は是すなはち神の子なり一五爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ずアバ父とよぶ子たる者の靈なり一六聖靈みづから我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す一七我儕もし子たらば又後嗣たらん即ち神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たる者なり我儕もし彼と偕に苦を受なば彼と偕に榮をも受べし一八われ意ふに今時の苦は我儕に顯れん榮に比ぶべきに非ず一九それ受造者の切望は神の諸子の顯れんことを俟るなり二〇そは受造者の虛空に歸せらるるは其願ふ所に非ず即ち之を歸する者に因り二一また受造者みづから敗壞の奴たることを脱れ神の諸子の榮なる自由に入んことを許れんとの望を有されたり二二萬の受造者は今に至るまで共に歎き共に勞苦ことあるを我儕は知二三ただ此等のもの耳ならず聖靈の初て結べる實を有る我儕も自ら心の中に歎て子と成んこと即ち我儕の身體の救れんことを俟二四我儕が救を得は望によれり然ど望を見ば亦望なし既に見ところの者は何で尚これを望んや二五若われら未だ見ざる者を望ま

ば忍て之を待べし二六 聖靈も亦われらの荏弱を助く我儕は祈るべき所を知ざれども聖靈みづから言がたきの慨歎を以て我儕の爲に祈ぬ二七 人の心を察たまふ者は聖靈の意をも知り蓋神の心に遵ひて聖徒の爲に祈れば也二八 また凡の事は神の旨に依て召れたる神を愛する者の爲に悉く動きて益をなすを我儕は知り二九 それ神は預じめ知たまふ所の者を其子の状に効せんと預じめ之を定む此は其子を多の兄弟の中に嫡子たらせんが爲なり三〇 又あらかじめ定たる所の者は之を召き召たる者は之を義とし義としたる者は之に榮を賜へり三一 然ば此等の事に於て何をか言ん若し神われらを守らば誰か我儕に敵せん乎三二 己の子を惜ずして我儕衆の爲に之を付せる者は豈かれに併て萬物をも我儕に賜ざらん乎三三 神の選たる者を訟ん者は誰ぞや義とする神なる乎三四 罪を定る者は誰ぞや死て復よみがへり神の右に在て我儕の爲に禱告し給ふキリストなる乎三五 キリストの愛より我儕を絶らせん者は誰ぞや患難なるか或は困苦か迫害か飢餓か裸裎か危險か刀劍なる乎三六 是われら終日なんぢの爲に死に付され屠られんとする羊の如くせらるる也と錄されたるが如し三七 然ども我儕を愛める者に頼すべて此等の事に勝得て餘あり三八 そは或は死あるひは生あるひは天使あるひは執政あるひは有能あるひは今ある者あるひは後あらん者三九 或は高き或は深きまた他の受造者は我儕を我主イエス・キリストに頼る神の愛より絶らすること能ざる者なるを我は信ぜり

第九章

一 我キリストに屬る者なれば我が言は眞にして僞なし且わが良心聖靈に感じて二 我に大なる憂ある事と心に耐ざるの痛ある事とを證す三 若わが兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ沈淪に至らんも亦わが願なり四 彼等はイスラエルの人なり神の子なる事また榮光また盟約また律法を立られし事また祭儀また約束は皆かれらに屬り五 列祖は是かれらが先祖なり肉體に因て言ばキリストも亦彼等より出かれは萬物の上に在て世々讚美を得べき神なりアメン六 今いへる所は神の言の廢れりと謂には非ず蓋イスラエルより出る者ことごとくイスラエルに非ず七 亦アブラハムの苗裔なればとて悉く其子たるに非ず惟イサクより出る者なんぢの苗裔と稱らるべしと錄されたり八 即ち肉に由て子たる者これら神の子たるに非ず惟約束に由て子たる者は其苗裔とせらるる也九 期いたらば我來らんサラに男子あるべしと是約束の言なり一〇 此耳ならず亦リベカ我儕の先祖イサク一人に從ひて二子を孕しとき一一 其子いまだ生れず亦善惡を行ざれど神の選たまひし聖旨は變ることなく行に由で召に由を彰さんとて一二 長子は幼子に服んとリベカに言たまへり一三 錄して我はヤコブを愛しエサウを惡めりと有が如し一四 然らば我儕なにを言んや神に不義なる所あるや有ことなし一五 神モーセに曰われ矜恤んと欲ふ者を矜恤われ憐憫んと欲ふ者を憐憫と一六 然ば願ふ者にも趨る者にも由ず惟めぐむ所の神に由

り一七 聖書の中に神パロに我なんぢを立るは特に爾をもて我が權能を顯し又わが名を徧く世界に傳んが爲なりと示し給へり一八 然ば神は憐憫んと欲ふ者をあはれみ剛愎にせんと欲ふ者を剛愎にせり一九 然ば爾われに言ん神何ぞなほ人を責るや誰か其旨に逆ふことを爲んと二〇 嗟人よ爾何人なれば神に言逆ふや造れし物は造し者に向て爾何故に我を如此つくりしと云べけん乎二一 陶人は同じ塊をもて一の器を貴く一の器を賤く造の權あるに非ずや二二 もし神怒を彰し其能力を示さん爲に滅亡に備れる器を永く耐忍ことをなし二三 また榮光に預じめ備し矜恤の器に其榮の豐盛なるを示さんとせば我儕何の言こと有んや二四 この矜恤の器 即ち我儕召れし所の者は第ユダヤ人のみならず亦異邦人の中よりも召れたり二五 神ホセヤの書に我は我民ならざりし者を我民と稱へ愛せざりし者を愛する者と稱ん二六 又なんぢら我民ならずと言れたりし其處の彼等も活神の子と稱らるべしと言るが如し二七 イザヤもイスラエルに就て呼り曰けるはイスラエルの子の數は海の沙の如なれども救るる者はただ僅々ならん二八 神は義をもて其言を斷之を成竟るべし蓋さだめ給ふ所の事は主速かに此地に行ふべければ也二九 また前にイザヤ言て若萬群の主われらに裔を遺ざりしならば我儕も已にソドムの如ならん又ゴモラに同からんと有が如し三〇 然ば我儕何とか言ん義を追求めざる異邦人は義を得たり是すなはち信仰に由ところの義なり三一 然ど義の律法を追求めしイスラエルは義の律法に追及ざりき三二 此は如何なる故ぞ彼等は信仰に由ず行に由て追求めんとせしほどに躓石に蹶たれば也三三 視よわれ躓石また蹶磐をシヲンに置ん凡て之を信ずる者は辱しめられじと録されたるが如し

第一〇章

一 兄弟よ我心に願ふ所と神に祈る所はイスラエルの救れんこと也二 彼等が神に熱心なることは我證す然ども其熱心は智識に由に非ず三 彼等は神の義を識ず己の義を立んことを求て神の義に服はざる也四 凡て信ずる者の義とせられん爲にキリストは律法の終となれり五 モーセ律法に由る義を指ては之を行ふ者これに由て生を得べしと録したり六 然ど信仰に由る義は如此いへり爾心にキリストを誘ひ下らん爲に誰か天に昇らんと言こと勿れ七 又キリストを死し者の中より誘ひ還らん爲には誰か陰府に降らんと言こと勿れ八 然ば何と言るぞ道は爾に近く爾の口にあり爾の心にありと是すなはち我儕が宣る所の信仰の道なり九 蓋もし爾口にて主イエスを認はし又爾心にて神の彼を死より甦らししを信ぜば救るべし一〇 それ人は心に信じて義とせられ口に認はして救るるなり一一 聖書に凡て彼を信ずる者は辱められじと云り一二 ユダヤ人とギリシヤ人の別なし蓋凡ての者の主は惟一なればなり凡そ之を籲求る者には恩を豐盛にし一三 凡て主の名を籲求る者は救るべし一四 然ば未だ信ぜざる者を何で籲

求ることを得んや未だ聞ざる者を何で信ずることを得んや未だ宣る者あらずば何で聞ことを得んや**一五**もし遣されずば何で宣ることを得んや録して和平なる言を宣また善事を宣る者の其足は美しき哉とあるが如し**一六**然ど悉く福音を聽從しに非ずイザヤ曾て主よ我儕が宣る所の信ぜし者は誰ぞ乎と云り**一七**然れば信仰は聞よりいで聞ところは神の道に由るなり**一八**われ問ん彼等は未だ聞ざりしか聞り其聲は遍く世界に出その言は地の極にまで及べり**一九**我また問んイスラエルは知ざりしか知り曩にモーセ云われ民に非ざる者をもて爾曹を嫉妬せん又愚なる民をもて爾曹を怒らせんと**二〇**イザヤ憚ることなく言けるは我を尋ざりし者に我あへり問ざりし者に我あらはれぬ**二一**又イスラエルに就ては我終日手を擧て悖り順はざる民に向へりと云し也

第一一章

一然ば我いはん神は其民を棄しや決て然らず何となれば我も亦イスラエルの人アブラハムの裔ベニヤミンの支派なり**二**神は其預じめ知給ふところの民を棄ざりき爾曹エリヤについて聖書に載たる事を知ざるか彼イスラエルを神に訴曰けるは**三**主よ彼等は爾の預言者を殺し爾の祭壇を毀てり只われ遺れしに又我命をも求んとする也**四**然るに何と神は答給ひし乎われ自己の爲にバアルに跪づかざる者七千人を存せりと**五**是の如く今もなほ恩の選に由て遺れる者あり**六**もし恩に由ば功には由ざるなり否ざれば恩は恩らず若し功に由ば恩に非ず否ざれば功は功たらざる也**七**然ば何を言んイスラエルは其求る所を得ず選れし者は之を得て遺れし者は頑せられたり**八**神は今日に至るまで彼等に頑き心見ざる目聞えざる耳を予ふと録されしが如し**九**亦ダビデ曰けるは彼等が筵席かはりて機檻となれ網羅となれ礙物となれ其報となれ**一〇**彼等の目を曚して見しめず其背を常に屈しめよ**一一**然ば我いはん彼等が蹶は倒に及しや然らず反て彼等が錯失により救は異邦人に及べり是イスラエルを激させんが爲なり**一二**若かれらの錯失世の富となり其衰異邦人の富とならんには況て彼等の盛なるに於てをや**一三**我なんぢら異邦人に言ん我は異邦人の使徒なるが故に我職を敬重ぜり**一四**是わが骨肉の者を如何してか激し其中より數人を救んが爲なり**一五**若かれらの棄らるること世の復和とならば其收納さるるは死たる者の中より生るに同からず乎**一六**もし薦薪のパンきよからば凡のパンも亦潔くもし根きよからば枝も亦潔かるべし**一七**もし幾數の枝を折れたるに爾野の橄欖なるそれを其中に接れ共に其根により共に其汁漿を受るならば**一八**原の枝に向ひて誇る勿れ假令ほこるとも爾は根を保ず根は爾を保てり**一九**然ば爾枝の折れたるは我が接れん爲なりと言ん**二〇**然ど彼等の折れたるは不信仰により爾が立るは信仰に因なれば誇ること勿ただ戒懼よ**二一**蓋神もし原樹の枝をさへ惜まずば恐くは爾をも惜まじ**二二**然ば神の慈と嚴なるとを見よ其嚴なることは蹎者に顯れぬ爾慈に

居ば其慈は爾に在ん然ざれば亦爾も斫離さるべし二三 もし不信仰に居ずば彼等も亦接れん神は能これを接得れば也二四 爾もし本うまれつきたる野の橄欖より斫れ其生稟に反て嘉橄欖に接れたらんには況て原樹の枝は己が其橄欖に接れざらん乎二五 兄弟よ我爾曹が自己を智とする事無らん爲に此奥義を知ざるを欲まず即ち幾分のイスラエルの頑梗は異邦人の數盈るに至らん時まで也二六 然てイスラエルの人悉く救るを得ん録して救者はシオンより出てヤコブの不虔を取除かん二七 且その罪を救す時に我かれらに立ん所の誓は此也と有が如し二八 福音に就ては爾曹の益の爲に彼等は憎まれ選擇に就ては先祖の故によりて彼等は愛せらるる也二九 そは神の賜と召は易ることなきに因三〇 昔なんぢらは神に背しが今彼等が背るに由て爾曹矜恤を受たるが如く三一 今かれらの背るは爾曹の矜恤を蒙るに因て亦矜恤を受んため也三二 それ神は衆人を憐まんが爲に咸これを不服の中に入かこめり三三 ああ神の智と識の富は深かな其審判は測り難く其踪跡は索ね難し三四 孰か主の心を知し孰か彼と共に議ることを爲しや三五 孰か先かれに施て其報を受んや三六 そは萬物は彼より出かれに倚かれに歸ればなり願くは世々榮神にあれアメン

第一二章

一 然ば兄弟よ我神の諸の慈悲をもて爾曹に勸その身を神の意に適ふ聖き活る祭物となして神に獻よ是當然の祭なり二 又この世に效ふ勿れ爾曹神の全かつ善にして悅ぶべき旨を知んが爲に心を化て新にせよ三 我うくる所の恩に藉て爾曹各人に告ん心を高り思を過すこと勿れ神の各人に賜りたる信仰の量に從ひて公平に思念べし四 即ち我儕一體に多の肢あれども皆その用を同うせざるが如く五 各人キリストに於て一體たれば亦たがひに其肢たる也六 然ば賜る所は恩に藉て各々賜を異にせり或は預言あらば信仰の量に循ひて預言をなし七 或は役事あらば其役事をなし或は教誨をなすものは其教誨をなし八 勸慰をなす者は其勸慰をなし賙濟をなす者は吝なく施こし治理をなす者は懈らず治め矜恤をなす者は歡びて憐むべし九 愛は僞ること勿れ惡は惡み善は親み一〇 兄弟の愛をもて互に愛し禮義を以て相讓り一一 勤て惰らず心を熱して主に事へ一二 望て喜び患難に耐へ祈禱を恆にし一三 聖徒の匱乏を賑恤し遠人を慇懃にせよ一四 爾曹を害ふ者を祝し之を祝して詛ふべからず一五 喜ぶ者と共に喜び哀む者と共に哀むべし一六 相互に意を同うし尊大志をなさず反て卑微に附よ又自己を智とする勿れ一七 惡をもて惡に報る勿れ衆人の善とする所を心に記て之をなし一八 行得べき所は力を竭して人々と睦親むべし一九 わが愛する者よ其仇を報るなかれ退きて主の怒を待そは録して主の曰給ひけるは仇を復すは我に在われ必ず之を報んとあれば也二〇 是故に爾の仇もし飢なば之に食はせ若し渇かば之を飲せよ爾如此するは熱炭を彼の首に積なり二

一なんぢ惡に勝るる勿れ善をもて惡に勝べし

第一三章

一上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし蓋神より出ざる權なく凡その有ところの權は神の立たまふ所なれば也二是故に權に悖ふ者は神の定に逆くなり逆者は自ら其審判をうくべし三有司は善行の畏に非ず惡行の畏あり爾權を畏ざることを欲ふ乎ただ善を行へ然ば彼より褒を獲ん四彼は爾に益せん爲の神の僕なり若し惡を行ば畏れよ彼は徒らに刃を操ず神の僕たれば惡を行ふ者は怒をもて報ゆる者なり五故に之に服へ惟怒に縁てのみ服ず良心に縁て服ふべし六是故に爾曹貢を納よ彼等は神の用人にして常に此職を司どれり七なんぢら受べき所の人には之に予よ貢を受べき者には之に貢し税を受べき者には之に税し畏るべき者には畏れ敬ぶべき者は之を敬べ八なんぢら互に愛を負のほか凡の事を人に負こと勿れ蓋人を愛する者は律法を完全すれば也九それ奸淫する勿れ殺す勿れ竊む勿れ妄の證を立る勿れ貪る勿れと曰る此餘なほ誡あるとも己の如く爾の隣を愛すべしと曰る言の中に包たり一〇愛は隣を害はず是故に愛は律法を完全す一一此の如く行べし我儕は時を知り今は寐より寤べきの時なり蓋信仰の初より更に我儕の救は近し一二夜すでに央て日近けり故に我儕暗昧の行を去て光明の甲を衣べし一三行を端正して晝あゆむ如くすべし饕餮醉酒また奸淫好色また爭闘嫉妬に歩むこと勿れ一四惟なんぢら主イエス・キリストを衣よ肉體の欲を行はんが爲に其備をなすこと勿れ

第一四章

一信仰の弱き者を納よ然ど其意ふ所を詰る勿れ二或人は凡の物を食ふべしと信じ或人は弱して只野菜を食へり三食ふ者は食ざる者を藐視ること勿れ食ざる者は食ふ者を審判する勿れ神これを納れば也四なんぢ何人なれば他人の僕を審判するか彼の或は立あるひは倒ることは其主に由り彼また必ず立られん神は能これを立得れば也五或人は此日を彼日に愈れりとし或人は諸日もみな同とす各人みづから定て其心を堅すべし六日を守る者も主の爲に守り日を守らざる者も主の爲に守らず食ふ者も主の爲に食へり蓋神に謝する事をすればなり食はざる者も主の爲に食はず此また神に謝する事をせり七我儕のうち己の爲に生おのれの爲に死る者なし八蓋われら生るも主の爲にいき死るも主の爲に死この故に或は生あるひは死るも我儕はみな主のもの也九夫キリストの死て復生しは即ち生者と死者の主とならん爲なり一〇爾なんぞ其兄弟を審判するや何ぞ其兄弟を藐視るや我儕は皆キリストの臺前に立べき者なり一一錄して主の曰たまへるは我は活る神すべての膝は我が前に屈り凡の舌は我を讃美すべしと有が如し一二是故に我儕おのおの己の事を神に訟ふべし一三然ば我儕たがひに審判すること勿れ寧ろ兄弟の前に絆跌あるひは

妨 礙を置ざらんことを定むべし一四 我は主イエスに由て凡のもの潔からざるなきを知かつ之を信ず然ど人もし不潔を意はば其人に於ては即ち潔からざる也一五 爾もし食物の爲に兄弟を憂しめば其行ふところ愛の道に合はずキリスト彼の爲に死に玉ひたれば汝 食物に因て彼を滅ぼすこと勿れ一六 爾曹の善を以て人に謗るることを爲なかれ一七 そは神の國は飲食に非ず惟義と和と聖靈に由る歡樂にあり一八 此の如してキリストに事る者は神の心に適また人に善とせらるる也一九 是故に我儕人と和睦せんことと相互に徳を建んことを追求べし二〇 食物に因て神の成る所を毀こと勿れ凡の物みな潔し然ども之を食ふて人を礙かする者には惡とならん二一 肉を食ふ酒をのむ何事に由ず爾の兄弟を倒し或は礙かせ或は懦弱するは宜らざる也二二 なんぢ信あるか己これを神の前に守り其許とする所を以て自ら審判する事なき者は福なり二三 疑 者もし食はば罪に定めらる是信仰に由て食はざれば也すべて信仰に由てせざる者は罪なり

第一五章

一 然ば我儕強者は強からざる者の懦弱を負て己の心に悦ばざるをも爲べき事也二 我儕おのおの隣の徳を建んために善をもて之を悦ばすべし三 キリストすら尚おのれを悦ばす事をせざりき蓋なんぢを謗る者の毀謗は我に及べりと録されし如し四 從前より録されたる所は皆われらに訓て聖書の忍耐と安慰との言に藉て望を得させん爲に録せる也五 忍耐と安慰を予ふる神の爾曹にイエス・キリストを效たがひに心を同うする事を予て六 爾曹をして心を一にし口を一にし神すなはち我儕の主イエス・キリストの父を讃美し崇しめ給はん事を願へり七 是故にキリスト神を崇ん爲に我儕を納るが如く爾曹も互に納べし八 我いはん神の眞理の爲にイエス・キリストは割禮の役となり先祖に約束し給ひしことを堅固せり九 また異邦人も其矜恤に由て神を崇む録して是故に我異邦人の中に在て爾を崇また爾の名を讃美すべしと有が如し一〇 また異邦人よ主の民と同に喜ぶことを爲よと云り一一 萬 邦よ主を讃ふべし萬 民よ主を切に頌ふべしと云り一二 又イザヤ云らくエッサイの根めざし異邦人を治めんと爲もの興んとす異邦人みな之に頼んと一三 望を予ふる神の爾曹をして聖靈の能に由その望を大にせんが爲に爾曹の信仰より起る諸の喜樂と平康を充しめ給はんことを願へり一四 わが兄弟よ我なんぢらが仁慈に滿すべての智に充て互に勸得ることを信ず一五 然ども兄弟よ我なほ爾曹に憶起させんがため憚らずして略なんぢらに書おくれり是神の我に賜ふ所の恩に因なり一六 即ち異邦人の爲にイエス・キリストの僕となりて神の福音の祭をなし獻る所の異邦人を聖靈に由て潔まらしめ神の意旨に適せん爲なり一七 是故に我神の事に就てはイエス・キリストに由て誇る所あり一八 何となればキリスト我を助て異邦人を順從しめん爲に休徵と奇 跡の能と神の靈の能を顯し言と行とを以てエルサレムよ

り偏くイルリコに至るまで其福音を傳させ給ひしことの他は一の言をも我敢て曰ざるなり二〇 且われ愼みて他人の置し土基に建じとイエスの名の未だ稱られざる所に福音を宣傳たり二一 未だ彼に就て傳を得ざる者は悟るべしと録されたるが如し二二 是故に屢ば阻されて我なんぢらに詣ことを得ざりき二三 今この地に傳べき處なし我年來なんぢらに往んことを願る故に二四 ヒスパニヤに赴かん時に爾曹に就るべし蓋經過ときに爾曹に遇ほぼ意に滿足ことを得て又なんぢらに送られんことを望ば也二五 然ど今われ聖徒を助けん爲にエルサレムに往んとす二六 マケドニヤとアカヤの人々エルサレムの貧き聖徒の爲に供給をすることを喜悦とせり二七 彼等悦びて之をなすは其負ところ有るが故なり蓋異邦人もし靈に屬ものを享たらんには身に屬ものを以てまた彼等に事ふべき也二八 是故に我この事をはり此果を付しし後なんぢらに由てヒスパニヤに往ん二九 われ爾曹に往時はキリストの福音の滿たる恩を以て爾曹に至らんことを知り三〇 兄弟よ我儕の主イエス・キリストにより聖靈の愛に縁て爾曹に勸む願くは我と共に力を竭して我ために神に祈ることを得よ三一 蓋わがユダヤにある不信者より拯かり且エルサレムに赴く供事を聖徒の心に適せ三二 また神の旨に循ひ歡びて爾曹に詣り偕に安慰を得んがため也三三 平安の神なんぢら衆 人と偕に在さんことを願ふアメン

第一六章

一 我ケンクレアにある教會の執事なる我儕の姉妹フィベを爾曹に薦む二 なんぢら聖徒の行べき如く主に縁て彼を納其需る所は之を助よ彼は素おほくの人を助また我をも助く三 請プリスキラとアクラに安を問かれらはイエス・キリストに屬て我と共に勤る者なり四 又わが命の爲に己の頸を劒の下に置り惟われ而已ならず異邦人の凡の教會もまた彼等に感謝せり五 又その家にある教會にも安を問また我が愛する所のエパイネトに安を問かれはアジアに於てキリストの初に結べる實なり六 我儕の爲に多の苦勞をせしマリアに安を問七 また我と同に囚人となりし我が親戚なるアンデロニコとジュニヤに安を問かれら使徒等の中に名聲ある者なり我に先ちてキリストに居し者なり八 キリストに在て我が愛するアンピリアトに安を問九 キリストに屬て我儕と共に勤るウルパノ又わが愛するスタクに安を問一〇 キリストに於て鍛錬なるアペレに安を問アリストブロの家の者に安を問一一 わが親戚なるヘロデオナに安を問ナルキソの家なる主にをる者等に安を問一二 テルパイナとテルポサとに安をとへ彼等は主に於て苦勞せし女なり又愛せらるるペルシーに安を問かれは主に居て多く苦勞せし女なり一三 主に選れしルポと其母とに安を問かれが母は即ち我母なり一四 アスキキリト、ピリゴン、ヘレマ、パトロバ、ヘレメ又彼等と偕にある兄弟に安を問一五 ピロロコ、ジュリヤ、ネリオと其姉妹又オルンパ及び彼等と偕なる諸の

聖徒に安を問一六 爾曹きよき接吻をもて互に安を問キリストの諸の教會なんぢらに安を問り一七 兄弟よ我なんぢらに勸む凡そ爾曹が學る所の教に反きて争ひ分たせ又躓かする者を視とめて之を避よ一八 此の如き者は我儕の主イエス・キリストに服ず己の腹につかふる者なり又言を巧にし媚諂ひて質朴なる者の心を欺くなり一九 然ど爾曹の順從ること衆人に傳揚たれば我なんぢらの爲に喜べり我なんぢらが善に智く惡に愚ならんことを願ふ二〇 平安の神なんぢらの足の下に於てサタンを速かに碎くべし我儕の主イエス・キリストの恩なんぢらと偕に在んことを願ふ二一 我と共に勤るテモテと我が親戚ルキ、ヤソン、ソシパテロより爾曹に安を問り二二 此書を筆るテリテオ我キリストに於て爾曹に安を問二三 我と全會の寓主ガヨス爾曹に安を問り邑の庫司エラストまた兄弟クワルト爾曹に安を問り二四 我儕の主イエス・キリストの恩なんぢらと偕に在んことを願ふアメン二五
二六 世の成ざりし前より隱藏たりしかど萬國の民をして信じ服はしめんが爲いま窮なき神の命に遵ひ預言者の書に因て顯れし其奥義に循ひて我つたふる福音および我が說ところのイエス・キリストの教訓を照し爾曹を堅固することを得もの二七 即ち獨一睿智神に榮光窮なくイエス・キリストに由て在んことを願ふアメン

哥林多前書

第一章

一 神その旨により召てイエス・キリストの使徒となし給へるパウロ及び兄弟ソステネ二 書をコリントにある神の教會即ちキリスト・イエスに在て潔られ召れて聖徒となれる者および彼等の處にも我儕の處にも諸 處に於て我儕の主イエス・キリストの名を籲者にまで贈る三 なんぢら願くは我儕の父なる神および主イエス・キリストより恩寵と平康を受よ

四 イエス・キリストに在て爾曹が賜りし神の恩寵について我恆に爾曹の爲に我神に感謝す五 蓋なんぢら彼に在て諸 事すなはち凡の教訓と凡の知識に富ことを得たれば也六 是キリストの證なんぢらの中に堅せられしに因七 斯て爾曹は賜れる所の恩寵かくることなく我儕の主イエス・キリストの顯れんことを俟り八 神は終まで爾曹を堅し我儕の主イエス・キリストの日に於て爾曹に責なからしむ九 それ神は誠信なり彼なんぢらを召て其子われらの主イエス・キリストの交際に入しめ給へり

一〇 兄弟よ我儕の主イエス・キリストの名に託て我なんぢらに勸む爾曹みな言ことを同し且分 争なく心を同し意を同して聯合べし一一 蓋わが兄弟よクロエの家人爾曹の事を我に告て爾曹の中に争ひありと言たれば也一二 爾曹おのおの我はパウロ我はアポロ我はケパ我はキリストに屬すと言われ之を言なり一三 キリストは數多に分る者ならん乎パウロは爾曹の爲に十字架に釘られし乎また爾曹はバプテスマを受てパウロの名に入しや一四 われ神に謝す我はクリスポとガイオの外なんぢらの中一人にもバプテスマを施ししことなし一五 此は我名に托てバプテスマを施すと人に言れんことを懼たれば也一六 我またステパナの家族にバプテスマを施せり此外には我人にバプテスマを施ししこと有や否を知ず一七 キリストの我を遣ししはバプテスマを施させん爲に非ず福音を宣傳しめん爲なり又われに言の智慧を用しめ給はず是キリストの十字架の虚くならざらん爲なり一八 それ十字架の教は沈淪者には愚なるもの我儕救るる者には神の能たるなり一九 即ち録して我智者の智を滅し慧者の慧を廢くせんと有が如し二〇 智者安にある學者安に在この世の論者いづくにある神は此世の智慧をして愚ならしむるに非ずや二一 世人は己の智慧を恃て神を知ず是神の智慧に適へるなり是故に神は傳道の愚なるを以て信ずる者を救を善とせり二二 ユダヤ人は休徴を乞ギリシヤ人は智慧を覓む二三 我儕は十字架に釘られしキリストを宣傳ふ即ち此はユダヤ人には礙く者ギリシヤ人には愚なる者なり二四 然ど召れたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にもキリストは神の大能また神の智慧なり二五 それ神の愚は人よりも慧く神の弱は人よりも強し二六 兄弟よ召を蒙れる爾曹を觀よ肉に循る智慧あるもの多らず能ある者おほからず貴き者多からざる也二七 神は智慧を愧しめんとて世の愚なる者を選び

強者を愧しめんとて世の弱者を選ぶ二八また神は有者を滅さんとて世の賤者藐視らるるもの即ち無が如き者を選び給へり二九これ凡の人神の前に誇ことなからん爲なり三〇爾曹は神に由てキリスト・イエスに在イエスは神に立られて爾曹の智慧また義また聖また贖と爲たまへり三一録して誇者は主に因て誇るべしと在が如し

第二章

一兄弟よ我曩に爾曹に到りし時も言と智慧の美たるを以なんぢらに神の證を傳ざりき二蓋われイエス・キリストと彼の十字架に釘られし事の外は爾曹の中に在て何をも知まじと意を定めたれば也三我なんぢらと偕に居し時は弱かつ懼また多く戰慄り四我言し所また我宣し所は人の智慧の婉言を用ゐず唯靈と能の證を用ゐたり五蓋なんぢらの信仰をして人の智慧に由ず神の能に由しめんと欲ばなり六然ども我儕全き者の中に智慧を語る是この世の知惠に非ず亦此世の有司廢らんとする者の智慧に非ず七我儕の語る所は祕密たりし神の奧義の智慧なり此は創世の先より神の預じめ我儕をして榮を得しめんが爲に定め給ひしもの也八此世の有司に之を識もの一人もなし若し識ば榮の主を十字架に釘ざりしならん九録して神の己を愛する者の爲に備へ給ひしものは目いまだ見ず耳いまだ聞ず人の心いまだ念ざる者なりと有が如し一〇然ど神は其靈をもて之を我儕に顯せり靈は萬事を究知また神の深事をも究知るなり一一それ人の情は其中にある靈の外に誰か之を知んや此の如く神の情は神の靈の外に知ものなし一二我儕の受しは此世の靈に非ず神より出る靈なり是神の我儕に賜し所のものを知べき爲なり一三且われら此事を語るに人の智慧の教る所の言を用ゐず聖靈の教る所の言を用るなり即ち靈の言を以て靈の情に當るなり一四生來のままなる人は神の靈の情を受ず是かれには愚なる者と見ればなり又これを知こと能はず蓋靈の情は靈に由て辨ふべき者なるが故なり一五然ど靈に屬るものは萬事を辨へ知しかして己は人に辨へ知るることなし一六誰か主の心を知て主を教る者有んや然ど我儕はキリストの心を有り

第三章

一兄弟よ我さきに爾曹に語れるとき靈に屬る者に語るが如くする能はず惟肉に屬る者の如く亦キリストにをる赤子に語る如くせり二われ爾曹に乳を哺しめて堅き物を予ざりき爾曹食ふこと能はざればなり今も尚あたはず三蓋なんぢら尚肉に屬る者なれば也なんぢらの中に嫉妬と紛爭あり此なんぢら肉に屬て人の如く行ふに非ずや四我はパウロに屬われはアポロに屬といふ者のあるは此なんぢら肉に屬るならず乎五パウロは誰アポロは誰われらは惟おのおのに賜れる恩に隨ひ爾曹をして信ぜしめんとて勤る者なるの外なし六然ば我は種アポロは灌ぐ長る者は惟神

なり七 種るもの灌ぐ者も數るに足ず惟貴きは長る所の神なり八 それ種者も灌ぐ者も異なることなし各々功力に循ひて其賞を得べし九 我儕は神と同に働く者なり爾曹は神の田神の室なり一〇 神の我に賜し恩に循ひて我賢き工師の如く既に基礎を置たり今ほかの人その上に建いかに其上に建べき乎おのおの愼て爲べし一一 そは置給し基礎の外は誰も基礎を置ること能ざれば也これの基礎は即ちイエス・キリストなり一二 もし人この基礎の上に金銀寶石木草禾稿を以て建なば一三 各人の工は明かならん夫日これを顯す可ればなり此は火にて顯れん其火おのおのの工の如何を試むべし一四 若その建る所の工たもたば賞を得一五 若その工やかれなば損を受されど己は火より脱出る如く終には救れん一六 爾曹は神の殿にして神の靈なんぢらの中に在すことを知ざる乎一七 もし人神の殿を毀たば神かれを毀たん蓋神の殿は聖ものなれば也この殿は即ち爾曹なり一八 誰も自ら欺く勿れ若なんぢらの中に此世に於て智慧ありと意ふ者あらば智者とならん爲に愚になるべし一九 蓋この世の智慧は神の前には愚なればなり録して云く神は智者を其みづからの詭計に因て拘ふ二〇 また云く主は智者の思念を虛きものと知たまふ二一 然ば誰も人に誇る勿れ萬物は爾曹の物なり二二 或はパウロ 或はアポロ 或はケパ 或は世界あるひは生あるひは死あるひは今のもの或は後のもの是みな爾曹の屬なり二三 爾曹はキリストの屬キリストは神の屬なり

第四章

一 人宜く我儕をキリストの役者の如く神の奧義を司どる家宰の如く意ふべし二 又この世に在て家宰に求る所は其忠信ならんこと也三 われ爾曹に審判れ或は人に審判ることを尤も細事となす我も自己を審判ず四 我みづから省るに過あるを覺ず然ども此に因て義とせられず我を審判者は主なり五 然ば主の來らんときまで時いまだ至らざる間は審判する勿れ主は幽暗にある隱たる情を照し心の計謀を顯さん其時おのおの神より譽を得べし六 兄弟よ我なんぢらの爲に此等の事を我とアポロに比へたり此は我儕の事により爾曹をして録されし所に過て人を思議べからざる事を學ばせ彼に從はんとて之に逆ひ各 誇ことなからしめんためなり七 爾をして人を異ならしむる者は誰ぞ爾は何の受領ざる物を有か若これを受領ば何ぞ受領ざる如く誇や八 爾曹すでに飽なんぢら既に富り爾曹われと偕ならずして王たり我實に爾曹が王たらん事を願ふ蓋われも爾曹と偕に王たらんが爲なり九 われ意ふに神は我儕使徒を死に定られし者の如く末の者として顯し給へり蓋われらは宇宙のもの即ち天の使および人々に觀玩にせられたれば也一〇 我儕はキリストの爲に愚なる者となり爾曹はキリストに在て智き者となれり我儕は弱く爾曹は強し爾曹は貴く我儕は賤し一一 今の時に至るまで我儕は飢また渴また裸また撻れ斯て定れる住處なく一二 勞りて手づから工をなし詈らるるときは祝し窘らるるときは忍一三 誚らるるときは勸を

なせり我儕今に至るまで世の汚穢また萬の物の塵垢の如し一四 我なんぢらを愧しめん爲に之を書に非ず反て我が愛する兒女の如く爾曹を儆めんとて也一五 爾曹キリストに在て縱ひ師は一萬ありとも父は多くあることなし蓋われキリスト・イエスに在て福音を以て爾曹を生ばなり一六 是故に我なんぢらが我に傚んことを勸るなり一七 此に緣て我が愛子主に在て忠なるテモテを我なんぢらに遣せり彼は我キリストに在て教るところ即ち遍く教會ごとに教る模範を爾曹に記憶さすべし一八 爾曹の中われを爾曹に至らずとして自ら誇る者あり一九 然ど主の心に適はば我速かに爾曹に至り誇る者の其言に非ず其能を知んとす二〇 そは神國は言に在に非ず能に在ばなり二一 爾曹なにを願ふや笞を以て我なんぢらに至ることを願ふ乎はた愛と柔和の心を以て至ることを願ふ乎

第五章

一 爾曹の中に姦淫ありと常に聞ゆ其姦淫は異邦人の中にも非ざるほどの事にて人その父の妻を有と聞ゆ二 なんぢら誇るか斯る事を行ひし者の爾曹の中より黜けられんことを願て痛哭ざる乎
三 われ身は爾曹の中に居ずと雖も靈は居り我をるが如く既に之を行ひし者を審判たり四 五 即ち我儕の主イエス・キリストの名に賴て爾曹の集らんとき我靈も偕に在て我儕の主イエス・キリストの能に託かくの如き者をサタンに交し其肉躰を滅し其靈をして主イエスの日に救を得しめんと定たるなり六 爾曹の誇るは宜ろしからず少許の麪酵その全團をみな發すを知ざる乎七 爾曹は麪酵なきが如き者なれば舊き麪酵を除きて新しき團塊となるべし夫われらの逾越すなはちキリストは既に宰れ給へり八 然ば我儕舊き麪酵を用ずまた惡毒と謀佷の麪酵を用ず眞實と至誠なる無酵麪を用ゐて節を守るべし
九 われ爾曹に姦淫を行ふ者と偕に交る勿れと既に書遺れり一〇 然ど此世の淫を行ふ者または貪婪者または勒索者また偶像を拜む者と交ることを全く禁ずるには非ず若しからば爾曹は世を離れざる可らず一一 我なんぢらに書遺しは兄弟と稱ふる者もし淫を行ひ又は貪婪または偶像を拜または詬誶または沉湎または勒索をせば之と共に交ることなく斯る者と共に食することだに爲ざらしめんとて也一二 外にある者を鞫ことは何ぞ我に與らん爾曹が鞫く所は内の者に非ずや一三 外にある者は神これを鞫く斯る惡人は之を爾曹の中より黜くべし

第六章

一 爾曹のうち互に事あるとき聖徒の前に訟る事をせず敢て義からざる者の前に訟ることをする者ある乎二 なんぢら聖徒の世を鞫かんとするを知ざらんや世もし爾曹に鞫るるならば爾曹至小き事を鞫に足ざる者ならん乎三 爾曹われらが天の使を鞫んとするを知ざらんや況や此世の事をや四 是故に爾曹もし此世のこ

とを鞫んとせば教會の中にて卑微者を審判の座に坐しめよ五我なんぢらを愧しめんとて如此いへり爾曹の中に其兄弟の間の事を鞫き得る智者一人もなからん乎六然ど兄弟と兄弟相訟へ且このことを不信者の前にて爲り七爾曹たがひに相訟るにより爾曹のうち誠に過あり爾曹何ぞ此よりも寧ろ不義を受ざるや何ぞ此よりも寧ろ欺を受ざる乎八噫なんぢら不義をなし欺をなす兄弟にも亦これを行り九なんじら義からざる者の神の國を嗣ことを得ざるを知ざるか爾曹みづから欺勿れ凡て淫を行ひ又は偶像を拜または姦淫をなし又は男娼となり又は男色を行ひ一〇又は盗竊または貪婪または沉湎または辱罵または勒索者などは皆神の國を嗣ことを得ざる也一一爾曹のうち前には此の如き者ありしかども主イエスの名に頼かつ我儕の神の靈に因て洗滌また潔り又義と爲ことを得たり

一二凡の物われに可らざるなし然ど凡て益あるに非ず凡の物われに可らざるなし然ど我その一をも我が主となさず一三食は腹のため腹は食の爲なり然ど神は此も彼も滅すべし身は淫を行ふために非ず主の爲なり主はまた身の爲なり一四神すでに主を甦らせ給ふ又その能力を以て我儕をも甦らすべし一五爾曹の身はキリストの肢なるを知ざるか我キリストの肢を娼妓の肢となして可らんや可らざるなり一六娼妓に合ものは彼と一の體となるを知ざるか蓋二人のもの一躰となるべしと云給ひたれば也一七主に合ものは一靈となるなり一八なんぢら淫を避よ人の凡て行ふ罪は身の外にあり然ど淫を行ふ者は己が身を犯すなり一九爾曹の身は爾曹が神より受たる爾曹の衷にある聖靈の殿にして爾曹は爾曹の屬に非ざる事を知ざる乎二〇そは爾曹は價をもて買れたる者なればなり是故に神のものなる爾曹身に於ても靈魂に於ても神の榮を顯すべし

第七章

一なんぢら我に書遺し事については男の女に近ざるを善とす二然ども淫行を免る爲に人おのおの其妻をもち女も各々其夫を有べし三夫は其分を妻になすべし妻はまた夫に然すべし四妻は自ら其身を主どることを得ず夫これを主どる此の如く夫も自ら其身を主どることを得ず妻これを主どる五相共に拒なかれ然ど互に意を合せて暫く祈禱の爲に別るるはよし後また共に合べし是サタン爾曹の情の禁ざるに乘じて爾曹を誘はざらん爲なり六然ど我これを言は命ずるに非ず許なり七我は衆人の我ごとく爲んことを願ふ然ど各々神より己の賜を受たり此は此の如く彼は彼の如し八我いまだ婚姻せざる者および嫠婦に云ん若わが如くして居ば彼等に善なり九若みづから制ること能はずば婚姻するも可そは婚姻するは胸の熾るよりも愈ればなり一〇われ婚姻せし者に命ず妻は夫に別るる勿れ如此命ずるは我に非ず即ち主なり一一若わかるる事あらば嫁ず居か或は夫と和ぐことをすべし夫もまた妻を去べからず一二その外の人に我これをいふ主の

言に非ず若し兄弟不信なる妻を有るとき妻とともに居んことを願はば之を去なかれ一三また婦不信なる夫を有るとき夫ともに居んことを願はば之を去なかれ一四そは不信なる夫は妻に由て潔なり不信なる妻は夫に由て潔なればなり然ずば爾曹の子女は潔らず然ど今は潔き者なり一五不信者みづから離去ば其離るるに任せよ此の如き事ならば兄弟あるひは姉妹つながるる所なし神の我儕を召給へるは我儕を睦じく居しめん爲なり一六妻よ爾いかで夫を救ふことを得や否を知ん夫よ爾いかで妻を救ふことを得や否やを知ん一七然ど神の各人に頒予ふる所また主の各人を召ところに循ひて此の如く行ふべし我すべての教會に定たるも此の如し一八割禮ありて召れたる者は割禮を廢る勿れ割禮なくして召れたる者は割禮を受る勿れ一九割禮を受るも何の得ことなく割禮を受ざるも何の得ことなし得ところは惟神の誡を守るにあり二〇各人その召れし時に在し所の分に止るべし二一なんぢ奴隷にて召れなば思煩ふ勿れ然ど若し釋さるることを得ば寧ろ之を受べし二二召れて主にをる奴隷は主につける自主なる者なり此の如く召れし自主の者はキリストの奴隷なり二三爾曹は價をもて買れたる者なり人の奴隷となる勿れ二四兄弟よ各々召れし時に在し所の分に止りて神と偕に居べし

二五處女の事については我いまだ主の命を受ず然ど我主の矜恤を蒙りて忠義なる者と爲たれば我が意を述べし二六今の災に因て我婚姻せざるを善とす此の如くなるは人に善二七なんぢ妻に繋るる者なるか然らば釋ことを求る勿れ爾妻の繋なき者なるか然らば妻を求る勿れ二八爾もし娶るとも罪を犯すに非ず處女もし嫁するとも罪を犯すに非ず然ど此の如きものはその身難に遭ん我爾曹をして煩はしむるに忍ず二九兄弟よ我これを言ん今より後の時に逼れり蓋妻を有る者は有ざるが如く三〇哭ものは哭ざるが如く喜ぶ者は喜ばざるが如く買ものは有ざるが如く三一この世を用る者は用ざるが如くすべき爲なり夫この世の形状は過逝なり三二我なんぢらが思煩はざらんことを願ふ婚姻せざる者は如何して主を悦ばせんと主の事を思煩ひ三三婚姻せし者は如何して妻を悦ばせんと世の事を思煩ふなり三四妻となれる者と處女たる者との別あり嫁せざる者は身も靈も潔からんため主の事を思煩ひ嫁せし者は如何に夫を悦ばせんと世の事を思煩ふなり三五我これを言は爾曹を益せん爲なり爾曹に絆を置んとするに非ず惟爾曹をして理に合せ紛擾なく慇懃に主に事しめんとて也三六人もし其童女に對して己が行ふこと理に合ずと意ふとき童女期過かつ已ことを得ざる事あらば其意に任すべし此は罪を犯すに非ず彼らに婚姻せさすべし三七然ど人もし其心を剛毅し已を得ざることもなく又おのが隨意に爲ことを得てその童女を留置んと心の中に定なば然するは善ことなり三八此の如なれば嫁せさする者の行は善されど嫁せさせざる者の行は更に善三九夫生る間は妻法に繋るるなり然ど夫もし死ば隨意に嫁する事を許さる惟主にある者にのみ適べし四〇然

ど我おもふに嫁そのまま止りなば殊に福なり我また神の靈に感じたりと意ふ

第八章

一偶像に獻し物に就ては我儕みな知識あることをしる知識は人を驕しむ然ど愛は徳を建るもの也二若みづから能ものを知と意ふ者は未だ其知べきほどをも知ざる者なり三人もし神を愛せば是神に知れたる也四偶像に獻し物を食するに就ては我儕偶像の世に無ものなるを知また獨の神の外に神なきを知る五神と稱るもの或は天に在あるひは地に在て多の神おほくの主あるが如しと雖も六我儕に於ては惟一の神すなはち父あるのみ萬物これより生われら之に歸す又ひとりの主即ちイエス・キリストあり萬物これに由われらも之に由り七然どみな斯る事を知ず今に至りて尚心に偶像を顧み之を偶像に獻し物と意て食する者あり是故にその心弱して汚るるなり八神と我儕の關係は食物に由に非ず食するも益ることなく食せざるも損ることなし九然ど爾曹愼みて其自由を柔弱者の躓となす勿れ一〇人もし知識ある所の爾偶像の廟に坐して食するを見ば柔弱者の心之に勸られて偶像に獻し物を食せざらん乎一一又キリストの代て死たまひし弱き兄弟爾の知識に因て淪亡ざらん乎一二此の如く爾曹兄弟に罪を犯し其弱き心を傷めしむるはキリストに罪を犯すなり一三是故に若し食物わが兄弟を礙かせば我は兄弟を礙かせざる爲に永久も肉を食はじ

第九章

一我は使徒に非ずや我は自主に非ずや我は我儕の主イエス・キリストを見しに非ずや爾曹が主に在は我が工に非ず乎二われ他人には使徒に非ずとも爾曹には使徒なり蓋なんぢらの主に在は我使徒の職の印なれば也三我ことを詰す者に答ふるは此なり四われら飲食を受る權なき乎五われら他の使徒等および主の兄弟とケパとの如く姉妹なる妻を携ふる權なき乎六惟われとバルナバのみ工を止る事を得ざらん乎七誰か軍に出て己の財を費す者あらんや誰か葡萄園を樹て其果を食ざる者あらんや誰か羊を牧て其乳を飮ざる者あらん乎八われ人の事にのみ循て之を言んや律法も亦かく言に非ずや九モーセの律法も穀物を碾す牛に口籠を繋べからずと録されたり神牛の爲に慮かり給へる乎一〇又は我等の爲にのみ之を言たまひし乎こは我等のために録し給へる也そは耕す者は望ありて耕し穀物を碾す者は其穀物を得の望ありて碾は宜なれば也一一我等もし爾曹の爲に靈の物を播たらば爾曹の肉の物を穫取は大事ならん乎一二他の人もし此權威を爾曹の上に有ば況て我儕をや然ど我儕この權威を用ずキリストの福音に阻隔なきやう我儕すべての事を忍ぶ一三なんぢら知ざるか聖事を務る者は殿の物を食し祭壇に事る者は祭壇と共に其頒を取ことを一四此の如く主福音を宣傳る者は福音に由て

生活んことを定め給へり一五 然ど我此等の事は一をも用ず亦かくの如くせられん爲に之を書遺るに非ず蓋わが誇る所を人に虚くせられんよりは寧ろ死るは我に善事なれば也一六 われ福音を宣傳ると雖も誇るべき所なし已を得ざるなり若われ福音を宣傳へずば實に禍なり一七 若われ好て之を行ば賞を得ん若われ好ざるも其責任は我に與れり一八 然らば我が賞は何なる耶われ福音を宣傳ふる人をして費なくキリストの福音を得しめ又福音に在て我有る權を妄に用ざる即ち是なり一九 われ衆の人に向て自主の者なれど更に多の人を得ん爲に自ら己を衆の人の奴隷となせり二〇 ユダヤ人には我ユダヤ人の如くなれり此ユダヤ人を得ん爲なり又律法の下にある者には我律法の下に在ざれとも律法の下にある者の如くなれり是律法の下にある者を得ん爲なり二一 律法なき者には我律法なき者の如くなれり是律法なき者を得ん爲なり然ど我神に向て律法なきに非ず即ちキリストの律法の下に在なり二二 柔弱者には我柔弱者の如くなれり是柔弱者を得ん爲なり又すべての人には我その凡の人の状に循へり是いかにもして彼等數人を救ん爲なり二三 われ福音の爲に如此おこなふは人と共に福音に與らん爲なり二四 なんぢら知ずや馳場に趨るものは皆はしれども褒美を得者は唯一人なるを爾曹も得ん爲に趨るべし二五 凡て勝を競ふ者は何事をも節へ謹むなり彼等は壞れ易き冕を得んが爲に之を行ひ我儕は壞ざる冕を得んが爲に之を行ふなり二六 然ば我が趨るは定向なきが如きに非ず我が戰は空を撃が如きに非ず二七 己の體を撃て之を服せしむ蓋かの人を教て自ら棄られんことを恐れば也

第一〇章

一 兄弟よ我なんぢらが左の事を知ざるを欲まず夫われらの先祖はみな雲の下に在みな海を過二 みな雲と海にてバプテスマを受てモーセに屬り三 皆おなじく靈の食物を食し四 みな同く靈の飲物を飲り此かれらに從へる靈の磐より飮たる也その磐は即ちキリストなり五 然ど彼等の中おほくは神の心に適ざるが故に野にて滅されたり六 此等の事は我儕をして彼等が嗜し如く惡を嗜ざらしむる我儕の鑒なり七 民は坐して飲食し起て舞りと録されたる如く彼等のうち或者の行しに倣て爾曹偶像を拜者となる勿れ八 また彼等のうち或者姦淫を行ひ一日に二萬三千人死たり彼等に倣て我儕姦淫すべからず九 又かれらの中あるものキリストを試みて蛇に滅されたり彼等に倣て我儕も試むべからず一〇 また彼等の中あるもの怨言て滅す者に滅されたり彼等に倣て爾曹も怨言なかれ一一 彼等が遇る此すべての事は鑒となれり且これらの事を録されたるは末世に遇る我儕を警むる爲なり一二 然ば自ら立りと意ふ者は傾ざるやうに愼むべし一三 爾曹が遇し試惑は人の常ならざるはなし神は信なる者なり爾曹を耐忍ぶこと能ざる試惑に遇せじ爾曹が其試惑を耐忍ことを得ん爲に其にそへて逃るべき途を備へ給ふべし一四 然ば我が愛する者よ

偶像を拜する事を避べし一五 われ智者に言ごとく言ん爾曹わが言ところを審判べし一六 我儕が祝ふ所の祝 杯は同にキリストの血を享るに非ずや我儕が擘所のパンは同にキリストの體を享るに非ず乎一七 パンは惟一なり多の我儕も又一體なり蓋皆一のパンを同に享ればなり一八 肉に屬するイスラエルの人を視よ祭物を食者は祭壇に與る者に非ずや一九 然ば我いへる事は何ぞや偶像は有ものと言るか然らず偶像に獻し物は有ものと言るか然らず二〇 我いはん異邦人の獻る物は神に獻るに非ず惡鬼に獻るなり我なんぢらが惡鬼と交るを欲まず二一 なんぢら主の杯と惡鬼の杯とを兼飮こと能はず主の筵と惡鬼の筵とに兼伴る能はず二二 われら主の嫉妬を激さんとする乎われら主よりも強き者ならん乎二三 凡の物われに可らざるなし然ど凡のもの益あるに非ず凡の物われに可らざるなし然ど凡のもの徳を建るに非ず二四 人みな己の益を求るなく各 人の益を求べし二五 凡て市に鬻ものは良心の爲に問ことをせずして食すべし二六 そは地と之に盈る物は主の屬なれば也二七 爾曹もし不信者に請かれて往んとせば凡て爾曹の前に陳る物を良心の爲に問ことをせずして食すべし二八 もし人なんぢらに此は偶像に獻し物なりと云ば告し者の爲また良心の爲に之を食する勿れ蓋地と之に盈る物みな主の屬なれば也二九 良心とは爾曹の良心に非ず他の人の良心を言なり如何んぞ他の人の良心に我自由を審判るることを爲んや三〇 若われ感謝して食することを爲ば何ぞ其感謝する所のものに縁て譏らるることを爲んや三一 然ば爾曹食ふにも飮にも何事を行ふにも凡て神の榮を顯すやうに行ふべし三二 ユダヤ人をもギリシヤ人をも亦神の教會をも礙かする勿れ三三 即ち我すべての事に於て衆の人の心に適ふやうにし彼等が救れん爲に己の益を求ず許多の人の益を求るが如くすべし

第一一章

一 我キリストに效ふ如く爾曹われに效ふべし

二 兄弟よ爾曹すべての事に於て我を記念かつ我なんぢらに傳へし如く其傳を守るに因て我なんぢらを嘉三 凡の人の首はキリストなり女の首は男なりキリストの首は神なりと爾曹が知んことを願ふ四 凡て男は首に物を蒙りて祈禱をなし或は預言する時は其首を辱しむる也五 凡て女は首に物を蒙ずして祈禱をなし或は預言する時は其首を辱しむるなり此は薙髮と一にして異ことなし六 女もし物を蒙ずば髮を剪べし然ど髮を剪また薙こと若し女の耻べきことならば物を蒙るべし七 男は神の像と榮なれば其首に物を蒙るべからず女は男の榮なり八 そは男は女より出しに非ず女は男より出たれば也九 また男は女の爲に造られしに非ず女は男の爲に造られし也一〇 是故に女は天使の故に縁て首に權を有べき者なり一一 然ど主に在ては男は女に由ざることなく女は男に由ざることなし一二 女の男より出し如く男は女に由て出しかして萬物みな神より出るなり一三 爾曹みづから辨ふべ

し女物を蒙らずして神に祈るは宜きことなる乎一四 男もし長髪あらば恥べきこと也と爾曹自然に知に非ずや一五 然ど女もし長髪あらば其榮なり蓋かむりものの代に髪を賜ひたれば也一六 縦ひ争ひ論ずる者ありとも此の如き例は我儕にも亦神の教會にも有ことなし

一七 我これらの事を命じて爾曹を嘉ざるは爾曹の聚會益を受ずして反て損を招けば也一八 先なんぢら教會に集るとき其うち互に争ひ論るること有と聞り我略これを信ず一九 そは正き者の爾曹の中に顯れんため異端おこらざるを得ざれば也二〇 なんぢら一處に集るは主の晩餐を食するに非ず二一 そは食するとき各人まづ己の晩餐を食するに因あるひは飢る者あり或は醉飽る者あれば也二二 なんぢら飲食すべき家なきか神の教會を慢じ又乏き者を辱しめんとする乎われ何をか言ん此に因て爾曹を嘉べきや我は嘉ざるなり二三 我なんぢらに傳し事は主より授られたる也 即 主イエス賣るる夜パンを取二四 祝して之を擘曰けるは取て食せよ此は爾曹の爲に擘るる我體なり爾曹も如此おこなひて我を憶よ二五 食して後また杯をとり前の如くして曰けるは此杯は我が血にして立る所の新約なり爾曹も如此おこなひて飲ごとに我を憶よ二六 爾曹このパンを食し此杯を飲ごとに主の死を表して其來る時までに及ぶなり二七 然ば宜に合ずして此パンを食し主の杯を飲者は主の體と血を干なり二八 人みづから省みて後其パンを食し其杯を飲べし二九 宜に合ずして食飲する者は其食飲に由て自ら審判を招くなり蓋主の體を辨へざるに因三〇 是故に爾曹の中に弱き者病の者また寢たる者多し三一 我儕もし自ら己を辨へしならば審判を受ること無りしならん三二 然ど今審判せらるるは主の我儕を懲しめ給ふなり是我儕をして世の人と同に罪に定らるること無らしめん爲なり三三 是故に我が兄弟よ集りて食せん時互に相待べし三四 もし飢なば其家にて食すべし是爾曹の聚會審判を受るに至らざらん爲なり其ほかの事は我いたらん時これを定ん

第一二章

一 兄弟よ靈の賜については我なんぢらが知ざるを欲ず二 なんぢら異邦人なりしとき引誘に隨ひて言はざる偶像の下に誘れ往しは爾曹の知ところ也三 是故に我なんぢらに示さん神の靈に感じて語る者はイエスを詛ふべき者と謂ものなし又人聖靈に感ぜざればイエスを主と謂あたはず四 賜は殊なれども靈は同じ五 職は殊なれども主は同じ六 また行爲は殊なれども一切の事を衆の人の中に行ふ神は同じ七 靈の顯を各人に賜しは益を得しめん爲なり八 或は靈によりて智慧の言を賜り或は同じ靈に由て知識の言を賜り九 或は同じ靈に由て信仰を賜り或は同じ靈に由て病を醫す能を賜り一〇 或は異能を行ひ或は預言し或は靈を辨へ或は方言をいひ或は方言を譯するの能を賜れり一一 然ど凡て此等の事を行ふ者は同く一靈なり彼その心のままに各人に分

與るなり一二 體は一にして多の肢あり一體の凡の肢は多けれども一の體なりキリストも亦かくの如し一三 或はユダヤ人あるひはギリシヤ人あるひは奴隷あるひは自主に拘らず我等みな一靈に在てバプテスマをうけ一の體となり又みな一の靈を飲り一四 そは體は一肢のみに非ず多あれば也一五 足もし我手に非ざるが故に體に屬せずと云ば夫に因て體に屬せざる乎一六 また耳もし我目に非ざるが故に體に屬せずと云ば夫に因て體に屬せざる乎一七 もし全身目ならば聞ところは安ぞや若し全身耳ならば嗅ところは安ぞや一八 それ神は心のままに肢をおのおの體に置たまへり一九 若みな一の肢ならば體は安ぞや二〇 肢は多あれど體は一なり二一 目は手に我なんぢに用なしと謂を得ず又頭も足に我なんぢに用なしと謂を得ず二二 體のうち尤も柔しと見る肢は却て無るべからざる者なり二三 體のうち尊からずと意ふ所に物を纏て我儕殊に之を尊ぶ之に因て我儕の不美ところは愈て美しく爲なり二四 我儕の美しき所は心を用るに及ばず神は其劣れる所に殊に尊貴を加て體を調和たまへり二五 これ體のうち分事なく諸の肢たがひに相顧み扶けん爲なり二六 もし一の肢くるしまば諸の肢ともに苦み一の肢たふとばれなば諸の肢ともに喜ぶなり二七 爾曹はキリストの體にして亦おのおの其肢なり二八 神は第一に使徒第二に預言者第三に教師その次に異能を行ふ者次に病を醫す能を受し者救濟する者治理者方言をいふ者を教會に置たまへり二九 是みな使徒ならん乎みな預言者ならん乎みな教師ならん乎みな異能を行ふ者ならん乎三〇 みな病を醫す能を有る者ならん乎みな方言をいふ者ならん乎みな譯する者ならん乎三一 なんぢら至美たる賜を慕ふべし尤も善道を爾曹に示さん

第一三章

一 假令われ諸の人の言および天使の言を語るとも若し愛なくば鳴銅や響鈸の如し二 假令われ預言するの能あり又すべての奥義と諸の學術に達し又山を移すほどなる諸の信仰ありと雖も若し愛なくば數るに足ぬものなり三 假令われ我凡ての所有を施し又焚るる爲に我が身を予るとも若し愛なくば我に益なし四 愛は寛忍をなし又人の益を圖なり愛は妬まず誇らず驕傲らず非禮を行はず五 己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を念はず六 不義を喜ばず眞理を喜び七 凡そ事包容おほよそ事信じ凡そ事望み凡そ事忍なり八 愛は永久も墮る事なし然ど預言は廢り方言は息知識も亦廢らん九 我儕の知識全からず預言も全からず一〇 全き者きたれるときは全からざる者廢るべし一一 われ童子の時は語るところ童子の如く識るところ童子の如く慮るところ童子の如くなりしが成人て童子の事を棄たり一二 われら今鏡をもて見ごとく見ところ昏然なり然ど彼の時には面を對せて相見ん我いま知こと全からず然ど彼の時には我が知るる如く我しらん一三 それ信仰と望と愛と此三の者は常に在なり此うち尤も大なる者

は愛なり

第一四章

一 なんぢら愛を追求かつ靈の各樣の賜を慕べし殊に慕ふべきは預言する事なり 二 方言を語る者は人に語るに非ず神に語る也そは靈に由て奧義を語ると雖も曉る者なければ也 三 然ど預言する者は人に語りて其徳をたて勸勉をなし安慰を予るなり 四 方言を語る者は己の徳をたて預言する者は教會の徳を建るなり 五 われ爾曹がみな方言を語る事をも願へど最も願ふ所は爾曹が預言せん事なり方言を語る者は若し譯して教會の徳を建るに非ずば預言する者これより優るなり 六 然ば兄弟よ我もし爾曹に就り只方言を語りて默示あるひは知識あるひは預言あるひは教誨を語らずば爾曹に何の益あらん乎 七 それ靈なくして聲を出すもの或は笛あるひは琴もし其音別なくば吹ところ彈ところを如何で知得んや 八 もし箛さだまりなき聲を出さば誰か戰の備をなさん乎 九 此の如く爾曹も舌を以て明かならざる言を出さば何で語る所の事を知得んや此なんぢら空氣に語るなり 一〇 世間の口音の類おほしと雖も一として其義あらざるなし 一一 是故に若われ其聲の義を知ざれば語る者に對して我ゑびすとなり語る者また我に對して夷となる也 一二 然ば爾曹も靈の賜を慕ふ者なるにより教會の徳を建る爲に其賜の豐盛ならんことを願ふべし 一三 是故に方言を語る者は自ら之を譯せんことを祈るべし 一四 もし方言を以て祈らば我が靈は祈るなれど我が心は人の爲に果を結ばず 一五 然らば如何せん我靈を以て祈らん又心を以て祈らん我靈を以て頌はん我心を以て頌はん 一六 然ずば爾靈を以て祝するとき愚なる者は爾の語ることを知ざれば爾が感謝するとき如何してアメンと言んや 一七 爾の感謝するは善されど他の人は徳を建ず 一八 われ爾曹よりも多く方言を語るを以て神に感謝す 一九 教會の中に在て我方言をもて一萬の言を語らんより寧ろ人を教んために我が心を以て五言を語るを善とす 二〇 兄弟よ智慧に於ては嬰兒となる勿れ惡に於ては嬰兒となれ智慧に於ては成人となるべし 二一 律法に録して主いひ給はく異なる言ことなる唇をもて此民に語らん然れども彼らは我に聽じとあり 二二 是故に方言は信ずる者の爲に非ず信ぜざる者の爲の徵なり然ど預言は信ぜざる者の爲に非ず信ずる者の爲なり 二三 もし全會一處に集るとき皆方言を以て語らば愚なる者あるひは信ぜざる者入來らんとき爾曹に狂る者と謂ざらん乎 二四 然ど若みな預言せば信ぜざる者あるひは愚なる者入來らんとき此すべての人に由て自己を責この衆の人に由て己の罪を認むべし 二五 此の如く其心に隱たること露るるが故に伏て神を拜また神は誠に爾曹の中に在すと言ん

二六 然らば如何兄弟よ爾曹あつまれる時おのおのに或は頌詩あり或は教誨あり或は方言あり或は默示あり或は繙譯あり悉く徳を建んために之を爲べし 二七 もし方言を語る者あらば二人また

多とも三人に過ず次序に循て語り之を譯する者一人あるべし二八 もし譯する者なきときは教會の中に默して己を神に語るべし二九 預言する者は二人あるひは三人かたり其餘の者は之を辨ふべし三〇 もし旁邊に坐するもの默示を得ば先に語るもの緘默べし三一 それ爾曹みな衆の人に學ばせ又勸勉を受しめん爲に一々預言することを得ばなり三二 預言者の靈は預言者に制せらる三三 それ神は亂の神に非ず和平の神なり

三四 聖徒の諸教會の如く爾曹の婦女等も教會の中に默すべし彼等の語るを許さず彼等は律法に云る如く順ふべき者なり三五 もし學んとする所あらば室に在て其夫に問べし蓋をんな教會に於て語るは耻べきことなれば也三六 神の道は爾曹より出し乎また爾曹にのみ來りし乎三七 人もし自己を預言者とし或は靈に感ぜし者とせば我なんぢらに書遺ることは主の命なりと知べし三八 もし知ざる者あらば其知ざるに任すべし三九 然ば兄弟よ預言することを慕ひ又方言を語ることを禁ずる勿れ四〇 凡のこと端正かつ次序に循ひて行ふべし

第一五章

一 兄弟よ前に我なんぢらに傳へし福音を今また爾曹に告こは爾曹が受しところ之に因て立ち所なり二 爾曹もし我が傳へし言を固く守り徒に信ずることなくば之に由て救れん三 わが爾曹に傳へしは我が受し所の事にて其第一は即ち聖書に應てキリスト我儕の罪のために死四 また聖書に應て葬られ第三日に甦へり五 ケパに現れ後十二の弟子に現れ給へること也六 如此あらはれ給るのち五百の兄弟の共に在とき亦これに現れ給へり其兄弟のうち多は今なほ世にあり然ども既に寢たる者もあり七 此後ヤコブに現れ又すべての使徒に現れ八 最後に月たちぬ者の如き我にも現はれ給へり九 蓋われ神の教會を迫害せし故に使徒と稱ふるに足ざる者にして使徒の中に至 微 者なれば也一〇 然ど我かくの如なるを得しは神の恩に由てなり我に賜し神の恩は徒然からず我は衆の使徒よりも多く勞たり此は我に非ず我と偕にある神の恩なり一一 是故に我も彼等も此の如く宣傳へ爾曹も亦かくの如く信ぜり

一二 キリストは死より甦りしと宣傳るに爾曹のうち死より甦ること無といふ者あるは何ぞや一三 もし死より甦ることなくばキリストも亦 甦らざりしならん一四 キリストもし甦らざりしならば我儕の宣るところ徒然また爾曹の信仰も徒然からん一五 且われら神の爲に妄の證をする者とならん我儕神はキリストを甦らしと證すれば也もし死し者よみがへる事なくば神キリストを甦らしむる事なかるべし一六 もし死し者 甦る事なくばキリストも甦ること無りしならん一七 若キリスト 甦らざりしならば爾曹は信仰は徒然なんぢらは尚罪に居ん一八 又キリストに在て寢たる者も沈淪しならん一九 若キリストに由る我儕の望ただ此世のみならば衆の人の中にて尤も憐むべき者なり二〇 然ど今キリス

ト死より甦りて寢たる者の復生の首となれり二一 それ人に因て死ることいで人に因て甦ること出たり二二 アダムに屬る衆の人の死る如くキリストに屬る衆の人は生べし二三 然ど各人其次序に循ふ初はキリスト次はキリストの來らんとき彼に屬する者なり二四 後かれ諸の政および諸の權威と能を滅して國を父の神に付さん是終なり二五 蓋かれ諸の敵を其足の下に置ときまでは王たらざるを得ざれば也二六 最後に滅さるる敵は死なり二七 そは神すべての物をキリストの足下に置給へばなり萬物を其下に置りと云給るときは萬物を其下に置ところの者は其内にあらざること明かなり二八 萬物かれに服ふときは子も亦みづから萬物を己に服はしし者に服ふべし是神すべての物の上に主たらん爲なり二九 もし死し者全く甦らずば死し者の爲にバプテスマを受て何の爲にせんとする乎かれら死し者の爲にバプテスマを受るは何故ぞや三〇 また何の爲に我儕つねに危險に居や三一 我儕の主キリスト・イエスに在て爾曹につき我が有る喜をさし誓て我日々に死ると言三二 若われ人の如くエペソに於て獸と共に鬪ひしならば何の益あらん乎もし死し者甦らずば飲食するに若ず我儕明日しぬべき者なれば也三三 爾曹自ら欺く勿れ惡交は善行を害ふなり三四 なんぢら醒て義を行ふべし罪を犯す勿れ爾曹のうち神を知ざる者あり我かく言て爾曹を愧しむる也三五 人あるひは問ん死し者いかに甦るや如何なる身體にて來る乎と三六 愚なる者よ爾が播ところの種まづ死ざれば生ず三七 又なんぢが播ところのもの將來はゆる所の體を播に非ず麥にても他の穀にても只粒のみ三八 然るを神は己の意に隨ひて之に體を予へ種ごとに其おのおのの形體を予へ給ふ三九 凡の肉おなじ肉に非ず人の肉あり獸の肉あり鳥の肉あり魚の肉あり四〇 天に屬る物の形體あり地に屬る物の形體あり天に屬る物の榮は地に屬る物の榮に異なり四一 日の榮あり月の榮あり星の榮あり此星と彼星と其榮また各々異なり四二 死し人の甦るも亦かくの如し壞る者にて播れ壞ざる者に甦され四三 尊からざる者にて播れ榮ある者に甦され弱き者にて播れ強き者に甦され四四 血氣の體にて播れ靈の體に甦さるるなり血氣の體あり靈の體あり四五 録して始の人アダムは生命ある魂となり終のアダムは生命を予ふる靈となると有ごとし四六 靈の者は先に在ず反て血氣の者さきに在てのち靈の者のちに在なり四七 第一の人は地より出て土につき第二の人は天より出たる主なり四八 かの土の屬る者に凡て土に屬る者は似なり彼の天に屬る者に凡て天に屬る者は似なり四九 われら土に屬る者の状を有かくの如く後また天に屬る者の状を有ん五〇 兄弟よ我これを言ん血肉は神の國を嗣こと能はず亦壞る者は壞ざる者を嗣こと能はず五一 五二 視よ我なんぢらに奧義を告ん我儕ことごとく寢るには非ず我儕皆末の篴のならんとき忽ち瞬息間に化せん蓋篴ならんとき死し人よみがへりて壞ず我儕もまた化すべければ也五三 この壞る者は必ず壞ざる者を衣しぬる者は必ず死ざる者を衣べし五四 此くつる者くちざる者を衣こ

の死る者しなざる者を衣んとき聖書に録して死は勝に呑れんと有に應べし五五 死よ爾の刺は安に在や陰府よ爾の勝は安に在や五六死の刺は罪なり罪の能は律法なり五七 我儕をして我主イエス・キリストに由て勝を得しむる神に謝す五八 是故に我が愛する兄弟よ爾曹貞固して搖ず恆に勵て主の工を務よ蓋なんぢら主に在て其行ところの勞の徒然からざるを知ばなり

第一六章

一聖徒の爲に金を捐すことに就てはガラテヤの教會に我が命ぜし如く爾曹も行べし二 一週の首の日ごとに爾曹おのおの其得ところの利に循ひて之を家に蓄へ置これ我が到るとき始て捐すこと莫らん爲なり三 我いたらば書を爾曹が選ぶ所の人に予へ爾曹の惠をエルサレムに携へしむべし四 もし我も往べくば彼等われと偕に往べし五 我マケドニヤを經んとすればマケドニヤを經とき爾曹に就り六 爾曹と偕に留らん或は爾曹と冬を過ことあるべし斯て爾曹が我を我ゆく處に送んことを望む七 いま途間なんぢらを見ん事を欲はず主もし我に許さば暫く爾曹と偕に居んことを望む八 我ペンテコステまでエペソに居ん九 そは廣かつ功效を成の門ひらけて我前に在また敵る者多ければ也
一〇テモテ若いたらば爾曹 愼て彼をして懼る所なく爾曹の中に居しめよ蓋かれも我如く主の事を務る者なれば也一一 是故に爾曹かれを藐視事なく平安に送て我が所に來らしめよ我かれが他の兄弟等と偕に來るを待ばなり一二 兄弟アポロに就ては兄弟等と偕に彼が爾曹に到らんことを我大に勸れど彼さらに今往ことを欲はず然ど便時あらば往べし一三 なんぢら目を醒し堅く信仰に立て丈夫の如く剛かれ一四 爾曹の行ふ所みな愛を以て行ふべし一五 兄弟よステパナの家は即ちアカヤの初の果なり又かれらが聖徒のことに身を委て事るは爾曹が知ところ也一六 われ進む爾曹も此の如き者および之と偕に勞る者に服せよ一七 我ステパナとポルトナトとアカイコの來るを喜ぶ是なんぢらの缺る所を補へばなり一八 彼等わが心と爾曹の心を慰めたり是故に爾曹かくの如き者を重んずべし一九 アジアの諸教會なんぢらに安を問アクラとプリスキラ及び其家の教會主に在て爾曹に切々に安を問二〇 諸の兄弟なんぢらに安を問なんぢら潔き接吻を以て互に安を問二一 我パウロ親手なんぢらに安を問二二 もし人主イエス・キリストを愛せざれば詛はるべし主臨らん二三 願くは主イエス・キリストの恩なんぢらと偕にあれ二四 わが愛すべてイエス・キリストにをる爾曹と偕に在なりアメン

哥林多後書

第一章

一神の旨に由てイエス・キリストの使徒となれるパウロ及び兄弟テモテ、コリントにある神の教會と徧くアカヤにある凡の聖徒に書を達る二願くは爾曹我儕の父なる神および主イエス・キリストより恩寵と平康を受よ

三頌美べきかな神即ち我儕の主イエス・キリストの父慈悲の父すべての安慰を賜ふの神四神は我儕が諸般の患難の中にわれらを慰めたまふ是我儕をして神の我儕を慰めたまふ安慰を以て又もろもろの患難にをるものを慰むることを得しめん爲なり五蓋キリストの苦われらに多くあるが如く我儕の安慰もキリストに由て多くあれば也六われら或は患難を受るも爾曹が安慰と救の爲なり此安慰と救は爾曹の中に動きて我儕が受る如き苦を爾曹にも同く忍しむるなり我儕あるひは安慰を受るも亦なんぢらが安慰と救の爲なり七爾曹が苦を偕に受る如くまた安慰をも偕に受ることを我儕は知この故に爾曹につき我儕が望むところは堅し八兄弟よ我儕がアジアに於て遇し所の苦難を爾曹が知ざるを欲まず即ち責らるること甚しくして勢ひ當がたく生命を保ん望をも失ふに至れり九且われら心中に必死を定む是故に己を恃ずして死し者を甦らする神を恃めり

一〇神すでに我儕を此の如きの死より救ひ今また救へり後も尚われらを救ひ給はんことを望む一一爾曹も我儕の爲に祈りて相助く斯て許多の人により我儕に賜りし恩寵を許多の人も我儕が爲に感謝するに至らん

一二我儕の良心われら神の賜ふ所の丹心と信實に由また肉の智慧に由ず神の恩寵により世に在て行をなし特に爾曹に向ひて此の如き行を爲りと證す是われらが誇る所なり一三我儕なんぢらに書遺る所は爾曹が讀ところ曉る所の外に非ざるなり一四われ爾曹が終に至るまで左の事を爾曹の中に識者あるが如く識んことを望む即ち主イエスの日に爾曹が我儕に由て誇る如く我儕も爾曹に由て誇る是なり一五我これを信ずるに因て再び爾曹に益を得させんため前には先なんぢらに至り一六また爾曹を過てマケドニヤにゆき復マケドニヤより爾曹に歸り爾曹をして我をユダヤの方へ送しめんことを欲へり一七我かく定めしとき虚浮心あらん乎また我が定しところ肉に由てさだめ是なり是なりと言また非なり非なりと言んや一八眞實の神われらが爾曹に向ひて曰る言に是と言また非と言しことなしと證す一九蓋われら即ち我とシルワノ及びテモテ爾曹の中に傳たる神の子イエス・キリストは是と言また非と言が如き事なし彼には唯是と言こと有のみ二〇凡て神の約束は彼の中に是となり又かれの中にアメンとなり我儕に由て神の榮の顯るるに及ぶ二一我儕を爾曹と偕にキリストに堅固し且われらに膏を沃しものは神なり二二彼また我儕に印し且質として靈を我儕の心に賜へり

二三 我いまだコリントに至らざるは爾曹を寛容にせんが爲なり我神を籲わが靈の爲に證を求む二四 我儕なんぢらの信仰を主どらんとするに非ず唯なんぢらの喜樂を助んとするなり蓋なんぢら信仰に由て立ばなり

第二章

一 われ憂を以て再び爾曹に至らじと自ら決たり二 若われ爾をして憂しめば我憂しむる所の者の外に誰か我を喜ばせん乎三 われ前に爾曹に書遺しは我いたらんとき我を喜ばす可もの反て我を憂しめん事を恐れて也なんぢら皆わが喜樂を己が喜樂とすることを信ずる也四 われ大なる患難と心の哀痛あるにより多の涙を以て爾曹に書遺れり此は爾曹をして憂しめんとするに非ず我なんぢらを愛する事の深を知しめん爲なり

五 もし憂しむる者あらば我を憂しむるに非ず略なんぢら衆を憂しむるなり如此いふは我これを甚しく責ることを欲はざる也六 斯る人は多の人の責を受ること已に足り七 然ば爾曹は反て彼を赦し慰むべし恐は彼はなはだしく憂に沈まん八 是故に我なんぢらの愛を彼に顯さんことを爾曹に勸む九 我前に書を爾曹に遺りしは爾曹が凡の事に順ふや否こころみて之を知ん爲なり一〇 なんぢら何事によらず人を赦こと有ば我また之を赦さん我もし赦しし事あらば爾曹の爲キリストの前に赦ししなり一一 是われらサタンに勝ざらん爲なり我儕かれの詭計を知ざるに非ず

一二 我キリストの福音の爲にトロアスに至り主わが爲に門を開き給ひしに一三 わが兄弟テトスに遇ざるが故わが心安からず彼等に別を告てマケドニヤに往り一四 常に我儕をしてキリストに在て勝を得しめ且かれを知の香を我儕をもて遍く示す神に感謝す一五 救るる者に就ても沈淪者に就ても我儕神の爲にはキリストの馨香なり一六 沈淪者の爲には死の香にて彼等を死に至しむ救るる者の爲には生の香にて彼等を生に至らしむ誰か之を堪んや一七 我儕おほくの人の如く神の道を混亂せず即はち誠により神に由て神の前にキリストに在て言なり

第三章

一 我儕また自ら己を薦めん乎われら或人の如く人より薦書を受て爾曹に能て或は爾曹より薦書を受て人に與すべき者ならん乎二 爾曹は我儕の書なり即ち我儕心に書せり衆の人の知ところ讀ところ也三 爾曹は明かに我儕が役事に由て筆るキリストの書なり是墨に非ず活神の靈にて記し又石碑に非ず心の肉碑に記したり四 我儕キリストにより神に向ひて此の如き信仰あり五 然ど我儕己に由て自ら何事をも思得るに非ず我儕の思得るは神に因り六 かれ我儕をして新約の役者となるに足しむ儀文に事るに非ず靈に事ふる也そは儀文に殺し靈は生せばなり七 終に廢るべきモーセの面の榮に因てすらイスラエルの人々かれの面を注目こと能ざりき斯く石に鐫し儀文の死法なほ榮あるときは八 況て

靈の法は榮あらざらん乎九罪を定むる法もし榮あらば況て義とする法は其榮さらに愈らざらん乎一〇昔榮ありと爲しものも後の榮に比れば榮なき者となれり蓋後の榮の更に愈れるに縁てなり一一もし廢らん者に榮ありしならば況て長存る者に榮あらざらん乎一二われら此の如きことを望むが故に侃々して言なり一三是モーセがイスラエルの人々に其廢らんとする者の結局を視ざらん爲に帕子にて其面を蒙し如きに非ず一四然ど彼等心を頑にせり今日に至るまで彼等舊約を讀とき其帕子なほ存れり其存て廢らざるは此キリストに由て廢るべき者なれば也一五今日に至るまでモーセを讀とき其帕子なほ其心を蒙へり一六然ど其心主に歸するに及ばば其かほおほひ除かるべし一七主は即ち彼の靈なり主の靈ある所には自由あり一八凡て我儕帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見榮に榮いや増りて其おなじ像に化る也これ主すなはち靈に由てなり

第四章

一われら恩慈を蒙りて此職を受たれば敢て臆せず二恥べき隱匿たる事を棄て詭譎を行ず神の道を混さず眞理を顯して神の前に己を衆の人の良心に質なり三我儕の福音もし隱ならば沈淪者に隱るる也四此の如き人は此世の神その心を盲したる不信者なり是神の像なるキリストの榮の福音の光をして彼等を照さざらしめんが爲なり五我ら自己の事を宣るに非ず唯キリスト・イエスの主たること又我らイエスに由て爾曹の僕たることを宣るなり六光に命じて暗より照出しめたる神我儕をしてイエス・キリストの面にある神の榮光を知の光を顯さしめん爲に我儕の心を照し給へり七我儕この寶を瓦器に藏り是おほいに優たる能は我より出るに非ず神の能なる事の顯れん爲なり八われら四方より患難を受れども窮せず詮かた盡れども望を失はず九迫害れども棄られず跌倒るれども亡ず一〇われら何處へ往にも常にイエスの死を身に負り此はイエスの生ることを我儕の身に顯れしむる也一一夫われら生者の常にイエスの爲に死に付さるるはイエスの生ることを我儕が死べき肉體に顯れしむる也一二斯て死は我儕に動き生は爾曹に動くなり一三録して我信ずるに因て言りと有ごとく我儕も此のごとき信仰の靈あれば信ずるに因て言なり一四我儕は主イエスを甦らしし者のイエスと偕に我儕をも甦らせ亦我儕をして爾曹と偕に立しむる事を知り一五萬事は皆なんぢらの益となれり此はその鴻恩おほくの人の感謝に由て神の榮を顯さん爲なり一六是故に我儕臆せず我儕が外なる人は壞ることも内なる人は日々に新なり一七夫我儕が受る片刻の輕き苦は極て大なる窮なき重き榮を我儕に得しむる也一八我儕が顯る所は見る所の者に非ず見ざる所のもの也蓋見る所の者は暫時にして見ざる所の者は永遠ければなり

第五章

一我儕これを知われらが地にある幕屋もし壞なば神の賜ふ所の屋天にあり手にて造ざる窮なく有ところの屋なり二 我儕此幕屋に居て歎き天より賜ふ我儕が屋を衣の如く着んことを深く欲へり三 誠に着ことを得ば裸になること無らん四 我儕この幕屋にをり重を負て歎くなり之を衣の如く脱んことを欲はず彼を衣の如く着んことを欲ふ是生に死べき者の呑れんが爲なり五 それ此事に應ふ者と我儕を爲給ふ者は神なり彼靈を其質となして我儕に賜へり六 是故に我儕心つねに剛毅また身に居うちは主より離居ことを知り七 蓋われら見る所に憑ず信仰に憑て歩めば也八 我儕の心剛毅もつとも欲ふ所は身を離れて主と偕に居んこと也九 是故に我儕身に居ても身を離れても彼の心に適んことを勉む一〇 蓋われら必ず皆キリストの臺前に出て善にもあれ惡にもあれ各々身に居て爲し所のことに循ひ其報を受べき者なれば也

一一 如此われら主の畏べきを知が故に人に勸む我儕すでに神に明かに知れたり亦なんぢらの良心にも明かに知れたるならんと意ふ一二 我儕また自ら己を爾曹に勸ず我儕の爲に誇るべき原を爾曹に予ふ是なんぢらが之を以て彼の外貌により心に由ずして誇る者に答ん爲なり一三 我儕もし心狂るならば是神の爲なり心慥ならば是なんぢらの爲なり一四 キリストの愛われらを勉せり我儕思に一人衆の人に代て死たれば衆の人すでに死たる也一五 その衆の人に代て死しは生者をして以後おのが爲ならで己に代り死て甦りし者のために世を過しめんとて也一六 是故に今より後われら肉體に依て人を識まじ我儕肉體に依てキリストを識しかども今より後は此の如く之を識まじ一七 是故に人キリストに在ときは新に造れたる者なり舊は去てみな新しく作なり一八 一切のもの神より出かれキリストにより我儕をして己と和がしめ且その和がしむる職を我儕に授く一九 即ち神キリストに在て世を己と和がしめ其罪を之に負せず且和がしむる言を我儕に委たまへり二〇 是故に我儕召れてキリストの使者となれり即ち神われらに託なんぢらを勸め給ふが如し我儕キリストに代て爾曹が神に和がんことを爾曹に求ふ二一 神罪を識ざる者を我儕の代に罪人となせり是我儕をして彼に在て神の義となることを得しめん爲なり

第六章

一神と偕に勞く所の我儕なんぢらに勸む爾曹神の恩を徒らに受ること勿れ二 かれ曰われ慈惠の時に爾に聽また救の日に爾を助たりと今は恩惠の時なり今は救の日なり三 我儕この職を謗ること無らん爲に何事にも人を躓かせず四 且われら凡の事に於て己神の役者の如く行て己の義を人に顯せり即ち多の忍耐にも患難にも窮乏にも困苦にも五 責打にも獄に入にも擾亂の時にも勤勞にも睡ざるにも食ざるにも六 貞潔ことと知識と恆忍と

仁慈と聖靈と僞なきの愛と七 眞の道と神の能と左右に在ところの義の武具を用ゐ八 また榮耀、羞辱、惡名、令聞に由て己の義を人に顯せり九 人を惑す者に似たれども眞實人に知れざるに似たれども人に知れ死たる者に似たれども生るもの責を受るに似たれども殺されず一〇 憂るに似たれども常に喜び貧きに似たれども多の人を富し何も有ざるに似たれども凡の物を有り

一一 コリント人よ我儕の口なんぢらに啓け我儕の心 廣なれり一二 爾曹われらに狹らるるに非ず反て己が心に狹らるる也一三 われ爾曹に語ること我子に語るが如し爾曹も自ら心を廣して我に報をなすべし一四 なんぢら不信者と耦なかれ蓋義と不義と何の侶なることか有ん光と暗と何の交ることか有ん一五 キリストとベリアルと何の合ことか有ん信者と不信者と何の干ることか有ん

一六 神の殿と偶像と何の同きことか有ん夫なんぢらは活神の殿なり神嘗て我かれらの中に住り且あゆまん我かれらの神となり彼等わが民とならんと曰給ひしが如く一七 又なんぢら彼等の中より出て之を離れ汚穢に捫ること勿れ我なんぢらを納ん一八 われ爾曹の父となり爾曹わが子 女と爲べしと曰る是全能の主の言なり

第七章

一 然ば愛する者よ我儕この約束を得たれば肉と靈の凡の汚を去て自己を潔くし神を畏れて聖潔ことを成就すべし二 爾曹われらを容納よ我儕誰にも不義をなさず誰をも損はず誰をも掠めし事なし三 われ如此いふは爾曹を責んとに非ず蓋われ既に言る如く爾曹恆に我儕の心に在て共に死ともに生んと欲ばなり四 われ爾曹を信ずること大なり又なんぢらに緣て誇おほし我儕が受る凡の患難の中にも我に慰め滿ち悅び餘あり五 蓋われらマケドニヤに至れる時我儕の肉すこしも安ことなく各樣の患難にあひ外には爭ひ內には懼ありき六 然ど心 憂る者を慰め給ふ神テトスの至るに因て我儕を慰め給へり七 第に其至るに因て耳ならず爾曹の思慕ところ又憂愁ところ又われに向ふ爾曹の熱心を我に告るとき彼が自ら安慰を得たる其安慰を以て我儕を慰め給へり是故に我ますます喜べり八 われ書を以て爾曹を憂しめしを曩には悔たれども今は悔ず蓋われ其書に因て爾曹を憂しめしは暫時の間なりしを知たれば也九 今わが喜ぶは爾曹を憂しめしに因に非ず爾曹は憂て悔改むることを爲しに因て也なんぢら神に循ひて憂るにより我儕に少も損はるる事なし一〇 それ神に循ふ憂は悔なきの救を得の悔 改に至らしむ然ど世の憂は死に至しむる也一一 爾曹が神に循ひて憂し所の事を視よ爾曹に如何なる勉勵また自 訴また忿恚また畏懼また戀慕また熱心また罪を責る心を生ぜしや一切なんぢら彼事に於て自ら潔ことを表せり一二 われ書を爾曹に達りしは不義を爲たる者のために非ず又不義を受たる者のためにも非ず只われらが爾曹の爲に有ところの熱心を神の前にて爾曹に示さんことを欲てなり一三 是故に我儕安慰

を得たり我儕が安易を得たる上にテトスの喜に縁て益々喜べり蓋テトスの心なんぢら衆に縁て平安を得たればなり一四 われ爾曹の事を彼に誇しかど之を愧とせず我儕が爾曹に語し言のみな眞實なりし如くテトスの前に誇し言も亦眞實なり一五 彼は爾曹衆人の恐懼戰慄おのれを接て從ひしことを想いだし益々その心に爾曹を愛せり一六 われ凡の事を爾曹に託べきを信ず是故に喜べり

第八章

一 兄弟よ我マケドニヤの諸教會に賜りし神の恩を爾曹に告二 即ち大なる難の中に試を受るとき彼等の喜び甚だしく亦大なる其貧かれらの惜なく施す所の富厚を彰せり三 四 我これを證す彼等聖徒の爲に施濟を共にせん事を切に我儕に求め自ら願て其力量に循ひ且その力量に過て施すことをせり五 如此おこなひて我儕が望を成しのみならず神の意旨に循ひ先己を主に饋へ次に我儕に饋たり六 是故に我儕テトスが曩に爾曹をして此恩を行はしむる事を倡たれば今これを成就せんことを彼に勸む七 なんぢら諸事すなはち信仰と言と知識と凡の勉勵および我儕に向ふ愛心に富る如く此恩にも富べし八 我かく言は爾曹に命ずるに非ず然ど他の人勵むに縁てなり且なんぢらの愛の實を試みんが爲なり九 爾曹われらの主イエス・キリストの恩を知かれは富る者なりしが爾曹の爲に貧き者となれり是なんぢらが彼の窮乏に由て富る者とならん爲なり一〇 われ施濟の事について我が意を示せり是なんぢらの益なり蓋爾曹は他の人に先ち此事を一年前に行ひ始しのみならず以前より之を行はん事を願へる者なれば也一一 然ば今なんぢら其作ところを成遂よ爾曹が篤く願しごとく其所有に循て之を成遂べし一二 若人ねがふ志あらば其無ところに循ず其有ところに循て納給ふべし一三 われ他の人を安逸して爾曹を困苦めんとするに非ず平均せんことを欲ふ爾曹の餘あるを以て彼等の足ざるを補ひ一四 亦かれらの餘あるを以て爾曹の不足を補ひて平均せんが爲なり一五 録して多く斂る者も餘あらず少く斂る者も足ざる事なしと有が如し

一六 爾曹に向ふ熱心を我と同くテトスの心に賜ひし神に謝す一七 蓋かれ我が勸を納かつ熱心なる者にして自ら願て爾曹に往り一八 亦われら彼と偕に一人の兄弟を遣せり此人は福音をもて諸教會の中に頌美を得たる者なり一九 第此ならず我儕が主の榮と爾曹の熱心を彰さんとて掌理ところの此餽物を携ふる爲に諸教會に選れて我儕と偕に往もの也二〇 我儕の彼を送しは許多の餽物を掌理ことにより謹て人に謗を受ることなからん爲なり二一 我儕が如此するは主の前のみならず人の前にも善らんことを慮るなり二二 我儕また一人の兄弟を彼等と偕に遣せり我儕しばしば彼を多事に用ゐて其熱心なるを知かれ深く爾曹を信ずるに縁て今殊に熱心になれり二三 テトスの事を言ば彼は我儕の伴侶なり又われと偕に爾曹の爲に勤る者なり二人の兄弟等の

ことを言ば彼等は諸教會の使者なりキリストの榮なり[二四]是故に彼等と亦諸教會の前に爾曹その愛と我儕が爾曹について誇しことの證とを顯すべし

第九章

一 聖徒に施す事について我なんぢらに書遺るに及ず[二]蓋われ爾曹の熱心を知ばなり即ち爾曹の事をマケドニヤ人に誇りてアカヤは去年より既に備をなせりと言り且なんぢらの熱心おほくの人を激せたり[三]然ど我儕が爾曹に就て誇りしことの虚ならんことを恐れ我が言し如く爾曹をして備をなさしめん爲に兄弟等を遣せり[四]恐くはマケドニヤ人われと偕に來り爾曹が備せざるを見んとき爾曹はいふに及ず我儕まで此疑はず誇しに因て愧を受ん[五]是故に我兄弟を勸て先なんぢらに往しめ彼等をして曩に爾曹が告し所の惠のことを預じめ備しむるは必ず爲べきことと意るなり蓋この施濟を惜む心よりなさず惠む心より爲しめんとすれば也[六]それ少く播者は少く穫おほく播者は多く穫べし[七]各人その心の中に欲ふ所に隨ひて施すべし憂て爲べからず亦強て爲べからず蓋神は喜びて施をするものを愛し給へばなり[八]神は爾曹をして常に凡の物に足ざることなく凡の善事を多く行はしめん爲に諸の恩を多く爾曹に賜へ得なり[九]錄して彼は徧く施し亦貧 者に予たりその義は窮なく存んとあるが如し[一〇]播者に種を予へ食の爲にパンを備たまふ者は爾曹の種を繁衍し亦なんぢらの義の實を增給ふべし[一一]なんぢら每事に富たれば吝なく施を行ふことを得なり是人をして我儕に由て神に感謝せしむ[一二]蓋この施濟のこと第に聖徒の乏を補ふのみならず推擴め夥の人をして神に感謝せしむるに至れば也[一三]彼等は此施の證據により爾曹が言現してキリストの福音に從ふことと吝なく彼等および衆の人に施すことを知[一四]また神の爾曹に賜し厚恩に緣て爾曹を慕ひ爾曹の爲に祈て榮を神に歸す[一五]その言盡されぬ神の賜物に因て我神に感謝する也

第一〇章

一 我パウロ即ち爾曹の中に在て爾曹と面を覿するときは謙卑なんぢらを離るるときは勇敢者いまキリストの柔和と寛容を以て爾曹に勸む[二]我儕を肉に循ひて行と意ふ者あり我かくの如き人を待ふには勇敢せんと意へり只ねがふ所は爾曹に會とき此の如く勇敢せざらんことなり[三]我儕は肉に在て行けども肉に循ひて戰はず[四]夫われらが戰の器は肉に屬する者に非ず營壘を破るほど神に由て能あり[五]我儕は神の敎に逆ひて建ため所の諸の櫓を論を毀し諸の意思を擒にしてキリストに服はしむ[六]我なんぢらが全く服はんとき諸の違逆者を罰せんと既に其備をなせり

[七]爾曹は貌のみを觀か若し人みづからキリストに屬るものと信ぜば復自ら之を思ふべし己がキリストに屬る如く我等もキリ

ストに屬る者なりと八主の我儕に賜ひし所の權威すなはち爾曹を敗る爲にあらず建ん爲に賜ひし者について愈々誇るとも我愧と爲す九我これを言は書を以て爾曹を懼しむる如く見ざらん爲なり一〇蓋かれらの言に其書は重かつ嚴く其會るときの容は懦く其言は鄙と云ばなり一一此の如き人これを思ふべし我儕が暌違ときの書の言の嚴きが如く會ときに行ふ事も亦かくの如くならん一二自ら譽る者あり我儕敢て之と匹これと較ることをせず然ど彼等みづから互に度みづから互に較れば智なき者なり一三我儕は量を踰て誇らず惟神われらに頒給ひし所の法の量に循ふ我儕この量に循ひて爾曹にまで至れり一四我儕は爾曹に至るべからざる者の如く自ら量を踰て爾曹に及るに非ず蓋キリストの福音を傳て既に爾曹にまで至れば也一五我儕は量を踰て他の人の功勞を誇らず惟なんぢらが信仰いよいよ篤なり我儕の量なんぢらの中に在て更に大ならん事を望む一六是われら他の人の量に由て既に備れるものを誇らず爾曹を越て外の處に福音を傳んが爲なり一七誇る者は主を誇るべし一八蓋みづから譽るに非ずして主の譽るもの可と爲るれば也

第一一章

一願くは爾曹少しく我が愚を容よ爾曹は原より我を容る者なり二われ神の熱心の如き熱心をもて爾曹を念ふ我なんぢらを一人の夫に聘定せり是なんぢらを潔き女としてキリストに獻んとする也三蛇の詭詐にエバの惑されし如く爾曹の心壞はれてキリストに向ふの誠實を離ん事を我儕懼る四もし人きたりて我儕が未だ宣ざる外のイエスを宣んに爾曹あるひは未だ受ざる外の靈をうけ或は未だ受ざる外の福音を受るときは爾曹能これを容ん五我は何事にも尤も大なる使徒等に亞ずと意ふなり六我は言に拙けれども智識は然らず我儕の事は凡の事について爾曹に顯明なり七われ爾曹を高せんが爲に自ら卑りて價なしに神の福音を爾曹に傳しは罪を犯したる乎八われ他の教會より奪ひて給料を取なんぢらの爲に役たり九又われ爾曹の中に在て乏かりしとき誰をも累せざりき蓋マケドニヤより來りし兄弟わが乏き所を補ひたれば也すべての事に於て我みづから守て爾曹を累せざりき尚みづから守らんとす一〇我に在キリストの眞に從ひて我いふ我この誇る所のことをアカヤの地にて阻る者あらじ一一これ何故ぞや爾曹を愛せざるに因か神知たまへり一二われ機を求る者の機を絶んために我が行ふ所をなほ行はんとす是彼等をして其誇るところ我儕と同からしめん爲なり一三かの輩は僞の使徒また詭譎を行ふ者にしてキリストの使徒の貌に變じたる者なり一四これ奇しき事に非ずサタンも自ら光明の使の貌に變ずるなり一五是故に彼の役者たとひ義の使者の貌に變ずるとも大なる事に非ず彼等の終は必ずその爲ところに應べし一六又いふ人のわれを愚と意ふ勿れ然らずば爾曹われを愚なる者として受納よ是われも少しく誇らん爲なり一七わが言ところは主に循ひ

て言ふ非ず愚なる者の如く憚らず誇て言なり一八多くの人肉に因て誇れば我も亦誇るべし一九そは爾曹は智ある者にして喜びて愚なる者を容ればなり二〇人もし爾曹を奴隷とし人もし爾曹を啖ひ人もし爾曹を劫め人もし爾曹に驕り人もし爾曹の面を批とも爾曹これを容るなり二一我辱て言われらは懼弱者の如なりき然ど人の強き所には我も亦強し（わが如此いふは愚なるが如し）二二彼等へブル人なるか我も然り彼等イスラエルの人なるか我も然り彼等アブラハムの裔なる乎われも然り二三彼等キリストの役者なるか我は之に愈れり（わが如此いふは狂る者の如し）われ勞苦しこと彼等より多く鞭たれしこと彼等より夥しく獄に入れらるること多く死に遭こと屢々なり二四又われは五次ユダヤ人に四十に一を減じたる鞭を受二五三たび條にて打れ一次石にて撃れ三たび破船にあひ一晝夜海にあり二六又しばしば旅路を經かつ河の難盜賊の難同族の難異邦人の難城裏の難野の中の難海中の難僞の兄弟の中の難に遇り二七また彼等に愈て勞苦つかれ屢々寐ず飢渴しばしば食を絶ち凍裸なりし也二八此に言ざる外の事ありて日々我に迫る即ち諸の教會の憂慮なり二九誰か弱て我弱ざらんや誰か礙て我が心熱せざらん乎三〇もし我かならず誇るべくば我が弱ことを誇るべし三一永遠頌べき神主イエス・キリストの父わが謊らざるを知たまふ三二ダマスコに於てアレタ王に屬る邑宰われを執へんとしてダマスコ人の邑を守れり三三われ筐を以て牖より石垣にそひ縋下されて彼の手を脱れたり

第一二章

一わが誇は固より益なし今は主の顯現と默示に及ばん二我キリストにある一人の者を知り此人十四年前に挈へられて第三の天に至る（或は肉體に在しか我しらず或は肉體の外に在しか我しらず神知たまふ）三我この人を知（かれ或は肉體に在しか或は肉體の外に在しか知ず神しり給ふ）四かれ挈へられて樂園に至り言べからざる言即ち人の語るまじき言を聞り五我かくの如き人の爲に誇るべし我が弱ことの外は自ら誇らず六我もし自ら誇らんとするとも愚なる者とならず蓋眞を言ばなり然ども人の我に見ところ或は我に聞ところに過て我を擬んことを恐るるに因て誇ることを止べし七また賜りし多の默示に因て我が傲ること無らん爲に一の刺を我が肉體に予ふ即ち我が傲ること無らん爲に我を撃サタンの使者なり八我これが爲に三次主に之を我より離んことを求たり九我に言給ひけるは我が恩なんぢに足り蓋わが能は弱に於て全なれば也この故に寧ろ欣びて自己の弱に誇らん是キリストの能われに寓らん爲なり一〇之に因て我キリストの爲に懼弱と凌辱と空乏と迫害と患難に遭を樂みとせり蓋われ弱き時に強ければ也一一われ誇るに因て愚者となれり爾曹われを強て如此なせり蓋われ取に足ざる者なれども凡の事もつとも大なる使徒に亞らず原より爾曹に譽らるべき者なれば

也一二 われ休徴と奇跡と妙用をもて爾曹の中に多く忍びて使徒の證をなせり一三 我が爾曹を累はせざる事の外は爾曹他の教會に何の亞る所かある願くは我この不義を恕せ一四 われ今第三次なんぢらに至んとて備せり又なんぢらを累はせざらんとす蓋われ爾曹の所有を求めず唯なんぢらを求れば也それ子は親の爲に積ふべき者に非ず親は子の爲に積ふべきものなり一五 我いよいよ爾曹を愛すれば愈爾曹に愛せられず然ど欣びて爾曹の靈魂の爲に財を費し身を盡すべし一六 然ど或人言ん我なんぢらを累せざるは巧なる者なるにより詭計を以て爾曹を牢籠るなりと一七 われ爾曹に遣しし者の中の誰に由て爾曹より利を得しや一八 我請てテトスを爾曹に遣し又かれと偕に我儕の兄弟をも遣せりテトス爾曹より利を得し乎われら同心にて行ざりしや同跡を行ざりし乎

一九 爾曹また我儕みづから爾曹に愬すると意ふや我キリストに在て神の前にいふ愛する者よ我儕の行ふ所は皆爾曹の徳を建ん爲なり二〇 我いたらん時われ爾曹を見に我が欲し如ならず爾曹が我を見にも爾曹の欲し如くならざらんことを恐また爭鬪、娼嫉、忿怒爭ひ分るること毀謗、讒言、驕矜、混亂などの有んことを恐る二一 又わが再び至らん時わが神我をして爾曹の中に愧しめ給はんことを恐また我おほくの人の罪を犯て其行ひし所の汚穢、姦淫、放肆などの事を悔改めざるを見て憂んことを恐る

第一三章

一 我いま第三次なんぢらに至らん二人あるひは三人の證人の口に憑て凡の事定るべし二 我さきに爾曹に告たり我第二次なんぢらに覿しとき語りし如く罪を犯しし者と其餘の衆人に今また預じめ暌違て告われ復いたらば必ず恕さじ三 是なんぢらキリストの我に在て語る徴を求るに因てなり彼は爾曹に向て弱からず爾曹の中に強なり四 かれ弱に由て十字架に釘られたれど神の能に由て生たり我儕も彼に在て弱者なれど爾曹に向ふ神の能に由て彼と偕に生ん五 なんぢら信仰に居や否や自ら省み自ら試むべし爾曹もし棄らるる者ならずばイエス・キリスト爾曹の中にあり之を自ら知ざらん乎六 われら棄らるるものに非ざるを爾曹知んことを我のぞむ七 我儕なんぢらが少も惡を行はざらんことを神に願ふ此われらの是なることを彰すに非ず我儕棄らるる者の如く見るも爾曹が善を行はんことを願ふなり八 蓋われら眞理に逆ひて能なし眞理に順ひて能あれば也九 われら弱して爾曹強ときは我喜ぶ我儕願ふ所は爾らの全ならん事なり一〇 是故に我暌違てあるとき此を書遣る是なんぢらに覿んとき主の我に賜ひし權威すなはち敗る爲に非ず建る爲に賜ひし者に循ひて嚴く爾曹を待ふこと無らん爲なり一一 此外また言ん兄弟よ爾曹喜び且全なり且慰め且心を同うし且和睦ことをせよ然らば愛と平安の神なんぢらと偕に在ん一二 なんぢら潔き接吻をもて互に相問べし一三 諸の聖徒なんぢらに安を問り一四 願くは主イエス・

キリストの恩(めぐみ)と神(かみ)の愛(あい)と聖靈(せいれい)の交際(まじはり)なんぢら衆(すべて)と偕(とも)に在(あら)んこと
をアメン

加拉太書

第一章

一 人よりも非ず又人に由ずイエス・キリストと彼を死より甦らしし父なる神に由て立られたる使徒パウロ二 及び我と偕に在すべての兄弟ガラテヤの諸教會に書を達る三 なんぢら願くは父なる神および我儕の主イエス・キリストより恩寵と平康を受よ四 キリストは我儕の父なる神の旨に循ひ今の惡世より我儕を救出さんとて我儕の罪の爲に己が身を捨たまへり五 願くは榮彼に歸して世々に至れアメン

六 キリストの恩をもて爾曹を召たる者を爾曹が如此すみやかに離れて異なる福音に遷し事を我怪しむ七 此は福音に非ず或人ただ爾曹を擾しキリストの福音を更んとする也八 我儕にもせよ天よりの使者にもせよ若われらが曾て爾曹に傳し所に逆ふ福音を爾曹に傳る者は詛るべし九 我儕既に言しが今また我その如く言ん若なんぢらが受し所に逆ふ福音を爾曹に傳る者は詛るべし一〇 今われ人の親を得んことを要るや神の親を得んことを要るや或は人の心を得んことを求ふや若われ人の心を得んことを求はばキリストの僕に非ざるべし

一一 兄弟よ我なんぢらに示す我曾て爾曹に傳し所の福音は人より出るに非ず一二 蓋われ之を人より受ず亦教られず惟イエス・キリストの默示に由て受たれば也一三 わが曩にユダヤ教に在しとき行ひたる事を爾曹聞り即ち甚しく神の教會を窘かつ之を殘賊せり一四 我また心を人よりも先祖等の遺傳に熱しユダヤ教に在ては我が國人のうち年相若おほくの人に起りたり一五 然ども我が母の胎を出し時より我を簡びおき恩をもて我を召給ひし神一六 その子を異邦人の中に宣しめんがため心に善として彼を我心に示し給へる其時われ直に血肉と謀ることをせず一七 また我より先に使徒と作てエルサレムに在ところの者にも往ずアラビヤに往またダマスコに返れり一八 三年を經て後ペテロを尋ん爲にエルサレムに上り十五日彼と偕に居しが一九 他の使徒等には主の兄弟ヤコブを除ては誰にも遇ざりき二〇 今我爾曹に書遺る所は神の前に謊れる言なし二一 厥後われスリヤ、キリキヤの地に至り二二 然どもユダヤに在キリストの諸教會は我が面を識ざりき二三 只かれらは前に己等を窘しもの今はその前に滅さんとしたる信仰の道を宣傳ふと聞二四 我事に因て神を崇ることを爲り

第二章

一 十四年の後われバルナバと偕にテトスを伴ひて亦エルサレムに上る二 わが上りしは默示に循へるなり異邦人の中に於て我が宣し所の福音を彼等に告また私に名ある人等に之を告たり蓋いま勤る所また既に勤めし所の事の徒然ならざらんが爲なり三 我と偕に在しテトスはギリシヤ人なるになほ強ては之に割禮を受

させざりき四そは私に入られし僞の兄弟あるに因てなり彼等の私に入しは我儕がイエス・キリストに在て有ところの自由を窺ひ我儕を奴隷とせんが爲なり五われら一時も之に服する事をせず此は福音の眞つねに爾曹と偕に在んことを望めば也六かの名ある者より我は受しことなし彼等は何なる人なるにもせよ我に於て與る所なし神は偏る者に非ず彼の名ある者われに誨を加しこと無きなり七反て彼等はペテロが割禮を受たる者に福音を傳ることを託られし如く我が割禮を受ざる者に福音を傳ることを託られしを見八（ペテロに能力を予て割禮を受たる人の使徒と爲し者また我にも能力を予て異邦人の使徒と爲り）九また我に賜し所の恩を知しにより柱と意るるヤコブ、ケパ、ヨハネも其右手を予て我とバルナバに交を結べり是われらは異邦人に至り彼等は割禮を受たる者に至らん爲なり一〇彼等の惟ねがふ所は我儕が貧 民を眷顧んことなり我儕も亦この事は素より進んで爲んとする所なり一一ペテロ、アンテオケに至りしとき彼に責べき所ありしに因われ當面これを詰めたり一二蓋ヤコブより來る者の未だ至らざる前にはペテロ異邦人と同に食したれども彼等が至るに及て割禮を受たる者を懼れ退きて異邦人と別たれば也一三その餘のユダヤ人も彼と偕に僞の行をなしバルナバも遂に其 僞の行に誘れたり一四我かれらが福音の眞に遵ひ正く行はざるを見すべての人の前に於てペテロに曰けるは爾 ユダヤ人にして若し異邦人の如く行ひユダヤ人の如く行はざるときは何ぞ異邦人を強てユダヤ人の例に遵はせんと爲や一五夫われらは生 來のユダヤ人にして異邦より出たる罪人に非ず一六然ど人の義とせらるるは律法の行に由に非ず惟イエス・キリストを信ずるに由なるを知この故に我儕も律法の行に由ずキリストを信ずるに由て義とせられんが爲にイエス・キリストを信ず蓋律法の行に由て義とせらるる者なければ也一七若われらキリストに在て義とせられん事を欲ひなほ罪人ならばキリストは罪の僕なるか決て然らず一八我が先に毀し此ものを今もし復び建なば自ら其罪人なるを顯すなり一九われ律法に由律法に向ひて死り是神に向て生ん爲なり二〇我キリストと偕に十字架に釘られたり既われ生るに非ずキリスト我に在て生るなり今われ肉體に在て生るは我を愛して我が爲に己を捨し者すなはち神の子を信ずるに由て生るなり二一我は神の恩を徒然せず若し義とせらるること律法に由ばキリストの死は徒然なる業なり

第三章

一愚なる哉すでにイエス・キリストの十字架に釘られし事を明かに其目前に著されたるガラテヤ人よ誰が爾曹を誑かしし乎二我ただ此事を爾曹より聞んとす爾曹が靈を受しは律法を行ふに由か將ききて信ぜしに由か三爾曹かく愚なる乎なんぢら靈に因て始り今肉に因て全うせらるる乎四なんぢら如此おほくの苦を徒然に受しや實に徒然には有まじ五それ爾曹に靈を予へかつ

奇跡を行はしめ給ふ者の如此なすは爾曹が律法を行ふに由てなる乎又は聞て信ぜしに由てなる乎六 即ちアブラハム神を信じ其信仰を義と爲れたるが如し七 是故に信仰による者は是アブラハムの子なりと爾曹知べし八 かつ聖書すでに信仰に由て神の異邦人を義と爲給ふことを預じめ曉まづ福音をアブラハムに傳て諸國の民は爾に由て福を獲んと云り九 是故に信仰に由ものは信仰ありしアブラハムと偕に福を受一〇 凡そ律法の行に由ものは詛るべし蓋律法の書に載たる凡の事を恆に行はざる者は詛ると録されたれば也一一 かつ義人は信仰に由て生べしと有ば律法に由て神の前に義とせらるる者なきことは明かなり一二 それ律法は信仰に由ず即ち曰これを行ふ者は之に由て生べしと一三 キリスト既に我儕の爲に詛はるる者となりて我儕を購ひ律法の詛より脫しめ給へり蓋すべて木に懸る者は詛れし者なりと録されたれば也一四 是アブラハムに約束し給ひし恩惠イエス・キリストに由て異邦人にまで及び我儕にも信仰に由て約束の靈を受しめん爲なり一五 兄弟よ我いま人の事に由て曰ん人の契約だに既に定れば之を廢また加ふることなし一六 それ約束はアブラハムと其裔とに立給ひし者にして多の人を指て裔々と言るに非ず惟一人を指て爾の裔と言る也これ即ちキリストなり一七 我これを言ん神の預じめ定給ひし契約は四百三十年のちの律法これを棄その約束の言を徒然することをせざる也一八 嗣業と爲こと若し律法に由ば約束には由ざるべし然ど神は約束に由て之をアブラハムに賜へり

一九 然らば律法の用は何ぞや此は約束を受べき裔の來るまで罪の爲に加へし者にて天使等により中保の手に備へ給ひし也二〇 それ中保は一人に屬る者に非ず神は即ち一人なり二一 然らば律法は神の約束に反るや決て非ず若し人を生しうる律法を賜りしならば義とせらるるは必ず律法に由べし二二 然ども聖書は反て萬人を罪の下に拘幽たり此はイエス・キリストを信ずるに由る約束のものを諸の信者に賜らんが爲なり二三 信仰の來らざる先には我儕律法の下に拘幽られ且守れて其顯れんとする信仰を俟り二四 かく律法は我儕をして信仰に由て義とせらるる事を得しめんが爲に我儕をキリストに導く師傅となれり二五 然ども今信仰すでに來たれば我儕もはや師傅の下にあらず二六 爾曹は皆キリスト・イエスを信ずるに由て神の子となれり二七 そは凡そバプテスマを受てキリストに入る爾曹はキリストを衣たる者なれば也二八 斯る者の中にはユダヤ人またギリシヤ人あるひは奴隸あるひは自主あるひは男あるひは女の分なし蓋なんぢら皆キリスト・イエスに在て一なれば也二九 若なんぢらキリストに屬するものならば爾曹はアブラハムの裔すなはち約束に循ひて嗣子たる也

第四章

一 我いはん嗣子たる者は全業の主なれども其童蒙の時は僕に異

なることなし二父の定し期いたるまで受託者および家宰の下に在三此の如く我儕も童蒙の時は此世の小學の下に在て僕たる也四然ども期すでに至るに及びて神その子を遣し給へり彼は女よりうまれ律法の下に生れたり五これ律法の下にある者を贖ひ我儕をして子たることを得しめんが爲なり六且なんぢら既に子たることを得しが故に神その子の靈を爾曹の心に遣りアバ父と呼しむ七是故に爾はもはや僕に非ず子なり既に子ならば亦神に由て嗣子たる也八然ども爾曹神を識ざりし時は其實神に非ざる者に事て僕たりき九然ども爾曹いま神を識り反て神に識れたりと謂べし何ぞ弱く賤き小學に返りて復び之が僕たらんことを欲ふや一〇なんぢら愼て月と日と節と歳とを守る一一われ爾曹に就て危む恐くは爾曹の爲に我が勤めし事の徒然ならんことを

一二兄弟よ願くは爾曹わが如くなれ蓋われ爾曹の如なりたれば也なんぢらは我を害せしことなし一三曩に我よわき身にして爾曹に福音を傳しことは爾曹の知ところ也一四爾曹を試る者の我が身に在しを爾曹は卑めず亦厭ず反て天使の如くキリスト・イエスの如くに我を待ひたり一五爾曹その時の福は如何ありし乎われ爾曹に證す若し爲得べくば爾曹みづからの目を抉て我に予んとまで願たり一六然るに我なんぢらに眞理を語りしに縁て我なんぢらの仇となりし乎一七彼等が爾曹に熱心なるは善意に非ず爾曹を己に熱心ならしめんとて爾曹を離しめんとする也一八然ど唯わが爾曹と偕なる時のみならず善事の爲に常に熱心なるは宜きなり一九我が小子よ我なんぢらの心にキリストの状成までは復び爾曹の爲に産の劬勞をなす二〇我いま爾曹と偕に在て口氣を改めんことを欲ふ蓋われ爾曹に就て惑ばなり

二一なんぢら律法の下に在んことを欲ふ者よ我に語れ爾曹律法を聞ざる乎二二録してアブラハムに二人の子あり一人は婢より一人は自主の婦より生たりと有二三その婢より生れし者は肉に循ひ自主の婦より生れし者は約束に因て生れたる也二四この言は譬喩にして即ち此婦は二の契約に比ふべし一はシナイ山より出て子を奴隷に生これ即ちハガルなり二五此ハガルはアラビヤのシナイ山今のエルサレムに當るなり蓋かれ其諸子と偕に奴隷たれば也二六然ど上に在ところのエルサレムは自主にして是われらの母なり二七そは録して姙ず生ざる者よ喜べ産の劬勞せざる者よ聲を揚て呼れ寡居る者の子は夫ある者の子よりも多が故なりと有ばなり二八兄弟よ我儕はイサクの如く約束の子なり二九然ども當時の肉に循ひて生しもの靈に循ひて生れし者を窘し如く今も亦然り三〇然ど聖書は何と言るや婢および其子を逐そは婢の子は自主の婦の子と共に嗣子となる可らざれば也と言り三一兄弟よ此の如なれば我儕は婢の子に非ず此自主の婦の子なり

第五章

一イエス・キリスト我儕を釋て自由を得させたり是故に爾曹堅

立て復び奴隷の軛に繫るる勿れ二我パウロ爾曹にいふ爾曹もし割禮を受なばキリスト更に爾曹に益なし三我また割禮を受たる各々の人に就て證す其人は全き律法を行ふべき者なり四なんぢら律法に由て義とせらるる者はキリストと與りなく恩より墮たる者なり五われら望む所のもの即ち信仰を以て義とせらるることを靈に由て俟なり六夫キリスト・イエスに在ては割禮を受るも受ざるも益なく惟愛に由て行く所の信仰のみ益あり七なんぢら前には善走りたり誰が爾曹の眞理に循はざるやう阻ることを爲しや八その勸は爾曹を召者より出るに非ず九少許の麪酵は全團をみな發しむ一〇爾曹に就ては我なんぢらが少しも異 念を懷ざることを主に由て信ず誰にても爾曹を煩はす者は其審判を受べし一一兄弟よ我もし今も尚割禮を宣ば何ぞ窘らるる事あらん乎もし然せば既や十字架に礙くこと止べし一二爾曹を亂す者は自ら爾曹より離んことを願ふ一三そは兄弟よ爾曹は召を蒙りて自由を得たる者なれば也されど其自由を機會として肉に循ふ勿れ惟愛を以て互に事ることを爲よ一四それ己の如く爾の隣を愛すべしと曰る此一言すべての律法を全うする也一五なんぢら愼よ若たがひに呑噬はば恐くは互に滅されん一六われ謂なんぢら靈に由て行むべし然ば肉の慾を成こと莫らん一七そは肉の慾は靈に逆ひ靈の慾は肉に逆ひ此二のもの互に相敵る是故に爾曹好む所の事をなすを得ず一八然ど爾曹もし靈に導かるるときは律法の下に在ざるべし一九それ肉の行は顯著なり即ち苟合、汚穢、好色二〇偶像に事ること巫術、仇恨、鬪爭、妬忌、忿怒、分爭、結黨、異端二一娼嫉、兇殺、醉酒、放蕩などの如し此等の事につき我嘗て爾曹に斯る事をなす者は神國を嗣べからずと告しその如く今また預じめ之を告二二靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信二三温柔、撙節かくの如き類を禁ずる律法はある事なし二四夫キリストに屬する者は肉と其情および慾とを十字架に釘たり二五若われら靈に由て生なば亦靈に由て行むべし二六互に怒たがひに妬むことを爲て虛 榮を求る勿れ

第六章

一兄弟よ若はからずも過に陷る者あらば爾曹のうち靈に感じたる者柔和なる心をもて之を規正べし亦自己をも顧みよ恐くは爾誘るること有ん二なんぢら彼此の勞を任へ斯してキリストの律法を全すべし三人もし有ことなくして自ら有とせば是みづから欺くなり四各人その行ところを勘へ視よ如此せば誇る基はただ己に在て人に在ず五そは人おのおの其荷を負べければ也六然ど道を教らるる者は道を教る者に凡て有益なる物を分予ふべし七自ら欺く勿れ神は慢るべき者に非ず蓋人の種ところの者は亦その穫ところと爲なり八己が肉の爲に種ものは肉より敗壞ものを穫り靈のために種ものは靈より永生を穫るべし九善を行ふに臆する勿れ蓋もし倦事なくば我儕時に至りて穫取べけ

れば也一〇是故に若し機會あらば衆の人に善を行べし信仰の徒には別て之を行べし

一一 爾曹わが親手なんぢらに書遺る字の何に大なるかを見よ一二凡そ肉について美しからんことを欲ふ者は爾曹に割禮を強ふ是ただ己キリストの十字架の爲に窘らるることを免れんが爲なり一三そは割禮をうけたる彼等なほ自ら律法を守ることをせず彼等が爾曹に割禮を受させんとするは爾曹の肉に於て誇らんと欲ふなり一四然ど我には惟われらの主イエス・キリストの十字架の外に誇る所なからんことを願ふ此キリストに由て我世に向へば世は十字架に釘られ世の我に向ふも亦然り一五夫イエス・キリストに於ては割禮を受るも受ざるも益なく唯新に作れし者のみ益あり一六凡そ此規矩に循ひて行む者に願くは平康と恩惠とあれ神のイスラエルにも亦然れ一七今よりのち誰も我を擾はす勿れ蓋われ身にイエスの印配を佩たれば也一八兄弟よ願くは我儕の主イエス・キリストの恩なんぢらの靈と偕ならんことをアメン

以弗所書

第一章

一 神の旨に由てイエス・キリストの使徒と爲るパウロ、エペソにある聖徒およびイエス・キリストに在て信ずる者に書を贈る 二 願くは我儕の父なる神および主イエス・キリストより恩寵と平康を受よ

三 神即ち我儕の主イエス・キリストの父は頌べきかな彼キリストに由て諸の靈の恩を以て天の處にて我儕を已に惠みたり 四 それ神我儕をして其前に聖く疵なからしめん爲に世の基を置ざりし先より我儕をキリストの中に簡び 五 その意のままにイエス・キリストに由て我儕を己の子と爲んことを愛を以て預じめ定たり 六 その恩の榮を讃しめんため也すなはち愛する者に在われらに賜ふ所の恩なり 七 その恩の豐なるに由て彼にある我儕その血により贖すなはち罪の赦を得なり 八 神さまざまの智慧と聰明を予へて此恩を我儕に充しめ 九 我儕に其旨の奧義を意のままに示せり 一〇 これ自ら定め給ひし所なり即ち期の滿るときに至りて或は天に在あるひは地にある萬物をキリストに歸せしめんが爲に定め給ひし所なり 一一 萬事を其意のままに行ふ者おのれの旨に循ひて預じめ我儕を定めキリストに在て嗣子と爲ことを得しむ 一二 これ前にキリストを賴める我儕をして彼の榮の讃美らるる事を爲しめんため也 一三 爾曹も眞の道すなはち爾曹を救ふ福音を聞し後キリストを信じ我儕が業を嗣の質なる約束の聖靈を以て印せらる 一四 神聖靈をもて印したまふは其買受し者を救ひ且おのれの榮を顯さんため也 一五 是故に我も爾曹が主イエスを信ずることと諸の聖徒を愛することを聞て 一六 爾曹の爲に感謝して已ず常に我が祈禱のとき爾曹を懷ふ 一七 我儕の主イエス・キリストの神榮の父智慧と默示の靈と爾曹に賜ひ爾曹をして神を識しめ 一八 また爾曹の心の目を明かにし其召を蒙りて有つ所の望と聖徒に賜ふ所の業の榮の富と 一九 また信ずる爾曹に對して行ひ給ふ神の能の極て大なることを知しめ給はんことを願ふ爾曹の信ずるは神の大なる能の感動に由なり 二〇 二一 即ちキリストに行ひし所にして彼を死より甦らせ諸の政と權威と能力と宰治また此世のみならず來らんとする世にも凡て稱ふる所の名の上に置き天の處にて己の右に坐せしめし能なり 二二 また一切の物を彼の足下に置また彼を一切の者の上に首となし此を教會に賜ひて其首と爲り 二三 教會は彼の身體なり萬物をもて萬物に滿しむる者の滿る所なり

第二章

一 神は愆と罪に死し所の爾曹をも生し給へり 二 爾曹曾て斯世の風俗に循ひ彼の愆と罪を行ひて日を送り亦空中にある諸權を總宰どる者すなはち信じ從はざる者の中に今はたらく所の靈に循へり 三 我儕もみな曾て其中にをり肉の慾に循ひて日を送り肉

と心の慾ふ任をなし他人の如く本性にして怒の子なりき四然るに矜恤に富る神われらを愛する所の大なる愛に縁五罪に死し時にすら我儕をキリストと偕に生し（なんぢら恩に由て救れし也）六又イエス・キリストに在われらを彼と偕に甦らせ共に天の處に坐せしめ給へり七これ今より後の世々キリスト・イエスの中にて我儕に施す所の仁慈をもて其恩の勝て豐なることを顯さん爲なり八なんぢら恩に由て救を得これ信仰に由てなり己に由に非ず神の賜なり九 行に由に非ず此の如なるは誇る者なからん爲なり一〇我儕は神の造り給へる者なり即ち我儕をして善事を行はしめん爲にキリスト・イエスの中に造り給へり此事は神われらに行はせんとて預めじめ備へ給ひし所なり

一一是故に爾曹心に憶よ肉に由て異邦人なる爾曹手を以て肉に行へる割禮の者に不割禮と稱られし者なれば一二其時は爾曹キリスト無イスラエルの籍に非ざる異邦人にして夫の約束について結び給ひし契約に與りなく望なく又世に在て神なき者なりき

一三然ども今はキリスト・イエスに在ば曩に遠かりし爾曹イエスの血に由て近けり一四 一五彼は我儕の和なり二者と一となし冤仇となる隔の籬を毀ち律法の中に命ずる所の法を其肉體にて廢せり蓋二者を己に聯ね之を一の新しき人に造りて和がしめ

一六また十字架を以て冤仇を滅し又これを以て二者を一體となして神と和がしめん爲なり一七又かれ來りて福音を傳へ爾曹遠かりし者および近き者にも和平を宣たり一八それ彼に由て我儕二者一の靈に在て父に近く事を得なり一九是故に爾曹今より賓旅に非ず亦寄寓者に非ず聖徒と同じ邦また神の家に屬する者なり二〇且なんぢら使徒と預言者の基の上に建らるイエス・キリスト自ら其隅の首石となれり二一全屋みな搆合て彼の中に在やゝに增て聖殿主の中に成なり二二爾曹も偕に彼の中に建られたり是靈に由て神の居給ふ處となるべき爲なり

第三章

一是故に爾曹異邦人の爲にキリスト・イエスの囚人となれる我パウロ爾曹の爲に祈る二爾曹の爲に神の我に賜ひし恩は爾曹すでに聞しならん三 即ち默示をもて奧義を我に示せるなり我ほぼ前に録せる如し四 爾曹これを讀ば之に由て我キリストの奧義を曉れることを知べし五 前代に之を人に知しめしは今靈を以て聖使徒と預言者に示すが如ならざりき六その奧義は即ち異邦人福音に由キリスト・イエスに在て同に嗣子となり同に一體となり共に約束に與る事を得こと也七われ神の恩賜すなはち其能の感動を以て我に賜ひし恩によりて此福音の役者となれり八諸の聖徒の中に最微者よりも微き我に此恩を賜ひて測ること能はざるキリストの富を異邦人に傳へ九且イエス・キリストを以て萬物を造りし神の中に世の始より以來かくれたる奧義如何を衆の人に悟らしむ一〇これ教會を以て天の處にある政を執る者と權威を有る者に神の萬殊の智慧を知しめん爲なり一一此

は神世々の先より定め給ひし旨に循へる也この旨は我儕の主キリスト・イエスに由て成就せり一二 我儕キリスト・イエスに在て之を信ずるにより臆せざることを得また憚ることなくして神に近くことを得たり一三 是故に我なんぢらに求わが爾曹の爲に受る患難により怯ること勿れ此なんぢらの榮なり一四 一五 此に縁て我儕の主イエス・キリストの父即ち天と地にある諸族の彼に由て名を得し者の父に跪きて一六 願ふは其榮の富に循ひ其靈をもて爾曹の衷の人を剛健にし一七 又キリストをして信仰に由て爾曹の心に居しめ一八 また爾曹をして愛に根し愛を基として諸の聖徒と偕に測る可らざるキリストの愛を知一九 その潤さ長さ深さ高さを識らしめ又すべて神に滿るものを爾曹に滿しめ給はんこと也二〇 願くは我儕の中に行ふ能力に循ひて我儕の求ると ころ思ふ所よりも甚く過れる事を行得る者に二一 キリスト・イエスにより教會の中にて世々窮なく榮を歸せんことをアメン

第四章

一 然れば主に在て囚人となれる我なんぢらに勸なんぢら召れし召に符て行はんことを二 悉く謙遜と柔和と寛容なる心を以て行ひ愛を以て互に忍び三 平和といふ繫の中に務て靈の賜ふ所の一なるを守るべし四 體は一靈は一なり爾曹の召れて有つ所の望の一なるが如し五 主一信仰一バプテスマ一六 神すなはち萬人の父一なり彼は萬人の上にあり萬人に貫き萬人の中に在七 われら各人にキリストの賜ふ所の量に循ひて恩を賜ふなり八 是故に云ること有かれ上に昇しとき擄にする者を擄にし賜を人に給へりと九 已に上に昇れりと謂ば先地の下に降りしに非ずや一〇 降りし者は即ち諸の天の上に昇りし者なり彼よろづの物に滿んとす一一 この賜ひし所は使徒あり預言者あり傳道者あり牧師あり教師あり一二 これ聖徒を全ふし服役の事を行ひキリストの體の徳を建一三 我儕をして皆おなじく神の子を信じ之を知り全人すなはちキリストの滿足るほどと成までに至り一四 今よりのち嬰兒ならず人の詭譎の術と誘惑の巧に蕩漾さるること なく各様の教の風に搖動されず一五 愛をもて眞理を行ひ長て凡のこと首なるキリストに效しめん爲なり一六 彼を本とし全體すべての百節の助によりて聯緒鞏固その肢體おのおの分量に循ひ方行て其體を育みづから愛に由て徳を建るなり

一七 是故に我これを言ひ主に在て爾曹を戒む爾曹今よりのち異邦人の如く其心の邪曲なるに任せて行ふべからず一八 かれら心昏き者なり又知ところ無により頑なるに因て神の生に遠かれり一九 彼等は恥を知ず好て凡の汚を行はん爲に己を放蕩に付せり二〇 然ど爾曹は此の如く行はん爲にキリストを學べるに非ず二一 爾曹かれに聞かれの教を受てイエスにある眞理を知しならん二二 なんぢら夙に習る舊人すなはち人を惑はす慾の爲に壞らるるものを脱二三 また爾曹の心の靈を新にし二四 神に象りて眞理の義を潔にて造れる新人を衣るべし二五 斯て誑言を去お

のおの其隣に眞を言べし蓋われら互に肢なれば也二六怒て罪を犯すこと勿れ怒て日の入までに至ること勿れ二七惡魔に處を得さすること勿れ二八竊をする者復ぬすみを爲なかれ寧ろ貧者に施さんために勵て手づから善工を作べし二九凡て汚たる言を爾曹の口より出すこと勿れ唯時に從ひて人の徳を建べき善事をいひ聽者をして益あらしむべし三〇神の聖靈をして憂しむること勿れ爾曹救を得る日の爲に彼の印を受し者なり三一爾曹すべての很毒、悲慷、忿怒、喧嚷、謗讟また諸の惡を己より去べし三二互に仁慈と憐恤あるべしキリストに在て神なんぢらを赦し給へる如く爾曹も互いに赦すべし

第五章

一なんぢら愛せらるる兒女の如く神に效ふべし二また愛を以て行ひキリストの我儕を愛し我儕に代て己を禮物となし犧牲となして神の前に馨香あらしめんとて献給ひしが如すべし三聖徒たるに符ふごとく奸淫および凡の汚穢たる事また貪婪ことを互に言ことだに爲勿れ四淫辭と浮言と戲謔を言なかれ是宜からざる事なり寧ろ謝することをすべし五蓋すべて姦淫するもの汚穢たる者および貪婪者すなはち偶像を拜む者のキリストと神との國を嗣を得ざることは爾曹知ばなり六なんぢら人の虛言に欺かるること勿れ神の怒これらの事に因て背逆者に至るなり七是故に彼等に與すること勿れ八爾曹もと暗かりしが今主に在て光れり光の子輩の如く行ふべし九蓋光の結ぶ所の果は諸の仁ことと義ことと誠實の中にあればなり一〇主の悅ぶ所を辨へて之を行ふべし一一なんぢら果を結ばざる暗行に與することなく反て之を責べし一二彼等が隱にて行ふ所の事は之を言だにも愧べき事なり一三凡て責を受べきことは光に由て顯るるなり蓋すべてを顯す者は光なれば也一四是故に云る言あり寐たる者よ目を醒し死より起よキリスト爾を照さん一五然ば爾曹つつしみて行を堅くすべし智らざる者の如くせず智者の如くし一六機を窺ふべし是時惡ければ也一七是故に愚なる者と爲ことなく主の旨は如何にと識るべし一八また酒に醉こと勿れ之をなすは放蕩なり宜く靈に滿さるべし一九互に詩と歌と靈に感じて作れる賦とを以て語りあひ又うたひて爾曹の心に主を讚美すべし二〇凡の事につきて恆に我儕の主イエス・キリストの名に託て神即ち父に謝すべし二一キリストを畏るる心を以て互に服ふべし二二婦なる者よ主に服ふが如く己の夫に服ふべし二三蓋キリスト教會の首なる如く夫は婦の首なれば也キリストは身の救主なり二四然ば教會のキリストに服ふ如く婦も凡のこと夫に服ふべし二五夫なる者よキリストの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべし二六かれ己を捨しは水の洗を以て道に因て教會を潔め之を聖なる者とせんが爲なり二七また點汚なく皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり二八此の如く夫その婦を己の身となして愛す

べし婦を愛する者は己を愛する也二九 己の身を惡む者は曾て有ことなし之を保 養ふことキリストの教會を保 養ふが如し三〇 我儕は彼が身の肢なり彼が肉より出かれが骨より出たり三一 是故に人は父と母を離れ其婦に配ひ二のもの一體になるべし三二 この奥義は大なり我いふ所はキリストと教會を指なり三三 爾曹も各々その婦を己の身となして愛すべし婦も其夫を敬ふべし

第六章

一 子なる者よ爾曹主に在て兩親にしたがふべし是合 宜なれば也二 爾の父母を敬ふべし約束を加へたる誡は之を首とす三 これ爾が福を得また地上に壽長からん爲なり四 父なる者よ爾曹の子を怒すること勿れ主の警戒と教訓を以て養育べし五 僕なる者よキリストに服ふが如く畏懼戰慄まことの心をもて肉體に屬る主人に服ふべし六 人を悦ばする者の如く只眼前の事を務ること勿れキリストの僕の如く心より神の旨を行ふべし七 人に事るが如せず主に事るが如く甘心つかふべし八 そは僕なる者にもあれ自主なる者にもあれ各 行ふ所の善に循て主より報を受んことを爾曹知ばなり九 主人なる者よ爾曹も亦かくの如く彼等に行ひて厲言を止よ蓋かれらと爾曹の主天に在かれは偏る所なしと爾曹知ばなり

一〇 此他なほ言ん我兄弟よ主および其大なる能に頼て剛健なるべし一一 なんぢら惡魔の奸計を禦ん爲に神の武具を以て裝ふべし一二 我儕は血肉と戰ふに非ず政 また權威また斯世の幽暗を宰どる者また天の處にある惡の靈と戰ふなり一三 是故に神の武具を取べし是あしき日に遇て敵を禦ぎ凡の事を成就して立ん爲なり一四 なんぢら立に誠を帶として腰に結び義を護胸として胸に當一五 和平なる福音の備を鞋として足に穿一六 此ほか信仰の盾を取べし此盾をもて悉く惡者の火箭を滅ことを得ん一七 また救の冑および聖靈の劍すなはち神の道を取一八 恆に各樣の禱告と祈求を以て靈に由て求かつ諸の聖徒の爲にも愼みて此事をなし祈りて倦ざるべし一九 且わが口を啓とき言を賜はり侃々として福音の奥義を示し二〇 又わが言べき所の如く之を侃々して言得やう我ためにも祈るべし我この福音の爲に使者となりて鏈に繋れたり

二一 愛する兄弟主に忠心にて事るテキコわが如何して在か我事を爾曹に告知せん二二 我かれを特に爾曹に遣すは爾曹に我事を知せ又彼をして爾曹の心を慰しめん爲なり二三 願くは兄弟父なる神と主イエス・キリストより信仰に加て平康と愛を得んことを二四 願くは我儕の主イエス・キリストを變らずして愛する凡の者に恩あらんことをアメン

腓立比書

第一章

一キリスト・イエスの僕パウロとテモテ、ピリピに居ところのキリスト・イエスに在すべての聖徒及び凡ての監督執事に書を達る二 願くは爾曹我らの父なる神及び主イエス・キリストより恩寵と平康を受よ
三なんぢら始の日より今に至るまで偕に福音に與るに縁四 われ爾曹を思ごとに我神に謝す五また恆に爾曹衆の爲に祈求ごとに欣びて求ふ六 爾曹の心の中に善工を始し者これを主イエス・キリストの日までに全うすべしと我ふかく信ず七此の如く我が思ふは宜なり爾曹つねに我心に在に縁そは我が縲絏に在とき及び福音を辨明し之を堅固する時も爾曹は皆我と偕に我が受る恩に與れば也八我キリスト・イエスの心を以て爾曹衆を戀慕ふことに就ては其證をなす者は神なり九また爾曹の愛智識と諸の智慧の中に益大に爲て最も勝たる所を辨へ知り一〇 一一 イエス・キリストに由る義の果を滿せて神の榮光と讚美を顯はしキリストの日の爲に潔して過なからんことを祈る
一二 兄弟よ願くは爾曹わが身に在し所のこと反て福音の進行く助となりしを知れ一三斯て我が縲絏に罹しはキリストの爲なること既に王を護る所の陣營および他の人々にも凡て明に知れたり一四 わが縲絏に因て兄弟等おほくは主を信ずるの心を篤くし益勇て懼るることなく道を傳ふ一五また猜忌と分爭に因てキリストを宣る者あり又善意しに因てこれをなす者あり一六彼は我が縲絏の苦を增加んことを欲ひ誠の心なく黨を結ぶ心よりキリストを宣一七此は我が福音を辨明する爲に立られしことを知り愛心よりキリストを宣一八然らば如何孰にもあれ或は僞あるひは誠ともに宣る所はキリストなれば我これを喜ぶ且つねに喜ばん一九蓋この事の爾曹の祈禱とイエス・キリストの靈の助とに因て終に我が救となる可を知ば也二〇是わが切に願ふところ望ところ即ち我が凡の事に愧ることなく今も常の如く臆せず生るにも死るにもキリストをして我が身に因て尊められしめんと意ふに應へり二一 わが生るはキリストの爲また死るも我が益なり二二然ど肉體に在て生ること若わが工の果を結ぶ根本となるべくば何を撰ぶべきか我これを知ず二三 我この二つの間に介れたり我が願は世を逝てキリストと共に在んこと也これ最も美事なり二四 然ど我が肉躰に居るは爾曹の爲め更に必要なり二五 われ深く此事を信ずるが故に存へて爾曹衆の人と共に世に住爾曹をして信仰を益しめ信仰より出る喜びを得しむるに至らんことを知二六 われ再び爾曹と共に居ば爾曹の喜びわれに因てイエス・キリストの中に益大ならん二七 我ただ爾曹にキリストの福音に符ふ行をせんことを勸む是わが往て爾曹を見ときも離て爾曹の事を聞ときも爾曹が靈を一にして堅く立福音の道の爲に心を同うして力を協せ二八 凡の事につき敵に驚かされざらんことを知ん

爲なり凡て敵に驚かざるは敵には亡の徵なんぢらには救の徵なり是神より來るなり二九 そは爾曹に賜ふ所の恩はキリストの爲に第これを信ずること而已ならず亦これが爲に苦を受ることをも賜たれば也三〇 今なんぢらに患難あり即ち曩に爾曹が聞ところの我にある患難と同じ

第二章

一 若キリストにある勸と愛による慰と靈の交際と慈悲と矜恤とあらば二 なんぢら念を同うし愛心を同うし意を合せて念ふことを一にし我が喜を滿しめよ三 何事を思ふにも黨を結び或は虛榮を求る心を懷べからず各々謙りたる心を以て互に人を己に念りと爲よ四 又おのおの己が事のみを顧みず人の事をも顧みよ五 爾曹キリスト・イエスの意を以て意とすべし六 彼は神の體にて居しかども自ら其神と匹く在ところの事を棄難きことと意はず七 反て己を虛うし僕の貌をとりて人の如なれり八 既に人の如き形狀にて現れ己を卑し死に至るまで順ひ十字架の死をさへ受るに至れり九 是故に神は甚しく彼を崇て諸の名に超る名を之に予へ給へり一〇 此は天に在もの地に在もの及び地の下にある者をして悉くイエスの名に由て膝を屈しめ一一 且もろもろの舌をして悉くイエス・キリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲なり一二 然ば我が愛する所の者よ爾曹常に服へる如く畏懼戰慄て己が救を全うせよ我ともに居りし時のみならず我をらざる今は特に然すべき也一三 そは神その善旨を行はんとて爾曹の衷にはたらき爾曹をして志をたて事を行はしむれば也一四 凡のこと怨言ことなく又爭辨こと無して行ふべし一五 これ爾曹が玷なく雜なく神の子となり曲れる邪なる時代に在て責べき所なからん爲なり爾曹は此時代に在て光の如く世に顯はれ一六 生命の道を保てり斯てキリストの日の爲に我をして我が行ひしところ勞苦し所のことを徒然ならざるを喜ばしめよ一七 爾曹の信仰を供物として獻んには假ひ我が血を流して灌とも我これを喜ばん爾曹衆の人と共に喜ばん一八 爾曹も之が爲に喜べ我と共に喜べ一九 我なんぢらが事情をしり心を慰めんがため速かにテモテを爾曹に遣さんことを主イエスに賴て望む二〇 蓋かれの外に我と同じ心を以て爾曹の事を眞實に慮る者なければ也二一 多の人は皆おのが事のみを求めてイエス・キリストの事を求めず二二 然どテモテの鍛鍊なることは爾曹の知ところなり彼は子の父に於る如く我と共に福音の爲に勤たり二三 是故に我おのが事の終に如何なるかを知ば直に彼を遣さんと望む二四 亦われも自ら速かに往んことを主に賴て堅く信ず二五 然ども我かならず先なんぢらの使にて我が乏を補ひ我と同に勞き我と同に戰をなせる我が兄弟エパフロデトを爾曹に遣さざる可らずと意へり二六 蓋かれ己が曩に病たる事の爾曹に聞えしを以て深く爾曹衆の人を戀慕かつ憂悶をれば也二七 實に彼は病に遇て殆んど死に近けり然ど神これを憐み給へり惟かれを憐むのみならず我をも憐

み我をして我が憂に憂を重ざらしむ二八是故に我いよいよ速かに彼を遣さん是爾曹をして再び彼を見て喜ばしめ且わが憂を減さんが爲なり二九然ば爾曹主により喜びて彼を迎かつ此の如き人を尊ぶべし三〇蓋かれは己が命を顧ず死んとするばかりキリストの爲に働き爾曹が我を助る所の缺を補ひたれば也

第三章

一終に我これを言ん我が兄弟よ爾曹主に在て喜べ我この事を爾曹に書おくるは我に煩勞なく爾曹に益あり二爾曹犬を愼め惡を行ふ者を愼め割を行ふ者を愼め三そは神の靈に由て役事をなしキリスト・イエスに由て誇り肉躰に恃ざる我儕は眞の割禮を受たる者なれば也四然ど我また肉躰に恃ことを得なり若し人肉躰に恃ことを得と意はば我は更に恃ことを得なり五我は第八日に割禮を受たる者にしてイスラエルの族ベニヤミンの支派ヘブル人より生たるヘブル人なり律法に由ばパリサイの人六熱心に由ば教會を窘迫もの律法に在ところの義に由ば玷なき者なり七然ど我さきに我が益となりし所の事はキリストに由て損ありと意へり八然のみならず我わが主キリスト・イエスを識を以て最も益れる事とするが故に凡のものを損となす我かれの爲に既に此等の凡のものを損せしかど之を糞土の如く意へり九是キリストを獲かつ信仰に基きて神より出る義すなはち律法に因る己が義に非ずキリストを信ずるに由る所の義を有てキリストの中に居一〇また彼と其復生の能力を知その死の状に循ひて彼の苦に與り一一兎にも角にも死たる者の甦ことを得んが爲なり一二我これらの望を既に得たりと言に非ず亦すでに全せられたりと言に非ず或は取ことあらんとて我ただ之を追求むキリスト之を得させんと我を執へ給へる也一三兄弟よ我みづから之を取りと意はず惟この一事を務む即ち後に在ものを忘れ前に在ものを望み一四神キリスト・イエスに由て上へ召て賜ふ所の褒美を得んと標準に向ひて進なり一五是故に我儕の中すべて全者は此の如き意を懷べし爾曹もし何事に由ず異なる意を懷かば之をも神なんぢらに示し給はん一六然ど我儕すでに到れる所にありて同法に遵ひて行ふべし一七兄弟よ爾曹みな我に效ふ者となれ且なんぢらの模楷となる我儕に循ひて行をなす者を觀よ一八蓋われ屢々なんぢらに告げ今また涙を流して爾曹に告る如くキリストの十字架に敵して行ふ者多ければ也一九彼等の終は滅亡なり己が腹を其神となし己が羞辱を其榮となす彼等は惟世の事をのみ念へり二〇我儕の國は天に在われらは救主即ちイエス・キリストの其處より來るを待二一彼は萬物を己に服はせうる能に由て我儕が卑き體を化て其榮光の體に象らしむべし

第四章

一是故に我が愛するところ慕ふ所の兄弟われの喜われの冕たる我が愛する者よ今わが勸る所に從ひて爾曹堅く主に立べし二我

ユウオデヤに勸めスントケに勸む彼等が主にありて心を同うせんことを三わが眞の侶よ請なんぢ此二人の婦等を助けよ彼等クレメンス及び他の我が勞苦の侶なる人々と力を協せ我儕と共に勤て福音を傳播たり彼等の名は生命の書に録されたる也四なんぢら常に主に在て喜べ我また言なんぢら喜ぶべし五なんぢら衆の人をして其寛容なることを知しめよ主は近し六何事をも思ひ煩ふ勿れ唯毎事に祈禱をし懇求をし且感謝して己が求る所を神に告よ七神より出て人の凡て思ふ所に過る平安は爾曹の心と意をキリスト・イエスに因て守らん

八兄弟よ終に我これを言ん凡そ眞實なること凡そ敬ふべき事おほよそ公義こと凡そ清潔こと凡そ愛すべき事おほよそ善稱ある事すべて何なる德いかなる譽にても爾曹これを念ふべし九なんぢら我より學しところ受しところ聞しところ見し所を皆おこなへ然ば平安の神爾曹と偕ならん

一〇我爾曹が我を思ふ心の今また漸く萠ししを主に因て甚だ喜べり爾曹は素より我を念ゐたれども機を得ざりし也一一われ乏に因て之を言に非ず蓋われ何なる狀に居もそれを以て足りとする事を學べば也一二われ貧賤に居の道を知また富厚に居の道をしり飽ことも飢ことも豐ことも歉ことも諸の事に於て我これを熟練せり一三我は我に力を予るキリストに因て諸の事を爲得るなり一四然ども我が艱難の際に我が助を爲しは誠に善一五ピリピ人よ爾曹もまた知わが福音を傳る始めマケドニヤを離れ去るとき授受をなして我を助けし者は唯爾曹のみにして他の教會は此事なかりき一六爾曹は我テサロニケに在しとき一度ならず二度までも人を遣はし我が乏を助けたり一七われ餽贈を求るに非ず唯なんぢらが益になる果の繁からんことを求るなり一八我には諸物そなはりて餘あり我すでにエパフロデトの手より馨香にして神の享給ふところ悦給ふ所の祭物なる爾曹の餽贈を受て足り一九夫わが神は己の富に從ひてキリスト・イエスにより榮光を以て爾曹の乏ところを補ひ給はん二〇願くは我儕の父なる神に世々榮あらんことをアメン

二一爾曹キリストにある聖徒おのおのに安を問われと偕にある兄弟等なんぢらに安を問り二二諸の聖徒等なんぢらに安を問カイザルの眷屬のもの別て爾曹に安を問り二三願くは我儕の主イエス・キリストの恩なんぢら衆人と偕に在んことをアメン

哥羅西書

第一章

一 神の旨に由てイエス・キリストの使徒となれるパウロ及び兄弟テモテ 二 書をキリストに在コロサイにをる所の聖徒と忠信の兄弟等に贈る願くは爾曹われらの父なる神および主イエス・キリストより恩寵と平康を受よ

三 四 われら爾曹がキリスト・イエスを信ずる事と諸の聖徒を愛する事とを聞て爾曹の爲に祈るとき恆に我儕の主イエス・キリストの父なる神に感謝す 五 爾曹が如此聖徒を愛するは爾曹の爲に天に蓄へある所のもの即ち曩に福音の眞理の道の中にて聞し所のものを望むが故なり 六 この福音は世界に徧が如く爾曹にも來れり且なんぢらが之を聞て神の恩を眞實に曉し日より爾曹の中に果を結び益大になれる如く世界にも果を結びて大になれり 七 かく福音は我儕の愛する同じ使者エパフラスより爾曹が學る所のもの也エパフラスは爾曹の爲にキリストの忠信なる僕なり 八 彼さきに爾曹が靈に感じて懷る愛を我儕に告 九 是故に我儕この事を聞し日より爾曹の爲に斷ず祈禱をし且求む願くは爾曹靈の予ふる諸の智慧と穎悟とを以て悉く神旨を知 一〇 凡の事主を悦ばせんが爲その意に循ひて日を送り凡の善事に因て果を結び且神を知に因て漸に徳を增 一一 また神の榮の權威に循ひて賜ふ諸の能力を得て強なり凡の事よろこびて恆忍かつ久耐 一二 また我儕をして光にある聖徒の業の分を受るに堪る者とならしめ給ふ父の恩を感謝せんことを 一三 彼は暗の權威より我儕を救出して其愛子の國に遷し給へり 一四 我儕その子に由て贖すなはち罪の赦を得なり 一五 彼は人の見ことを得ざる神の狀にして萬の造れし者の先に生れし者なり 一六 そは彼に由て萬物は造れたり天に在もの地上に在もの人の見ことを得もの見ことを得ざるもの或は位ある者あるひは主たる者あるひは政を執もの或は權威あるもの萬物かれに由て造れたり且その造れたるは彼が爲なり 一七 彼は萬物より先にあり萬物かれに由て存ことを得なり 一八 教會は彼の身體にして彼は其首なり彼は元始にして凡の事につき長とならん爲に死の中より首に生れしものなり

一九 二〇 そは父すべての徳を以て彼に滿しめ其十字架の血に由て平和をなし萬物すなはち地上に在もの天に在る者をして彼に由て己と和がしむる事は是その聖旨に適ふことなれば也 二一 夫爾曹はもと惡行を行ふに因て神に遠かり心にて其敵となれる者なりしが 二二 神今キリストの肉の身體をもて其死により爾曹をして己と和がせ潔く玷なく咎なくして己の前に立しめんとす

二三 若なんぢら信仰に止り其基を定めかつ堅して福音の望より移ずば如此せらるることを得べし此福音は即ち爾曹の聞し所なり且すでに天下の萬人に傳れり我パウロその役者と作たり

二四 今われ爾曹の爲に受る苦を喜び又わが肉體をもてキリストの體すなはち教會のために其患難の缺たる所を補ふ 二五 われ

爾曹の爲に神の賜ふ所の職に循ひ此教會の役者となりて偏く神の道を傳んとす二六 この道は歴世歴代隱れたる奥義なりしが今その聖徒に顯れたり二七 神聖徒をして異邦人の中に顯れし奥義の榮のいかに豐なるを知しめんとし給へり此奥義は爾曹の中に傳へしキリストなり彼は爾曹の望む所の榮の望なり二八 我儕かれを傳へ諸人を勸め諸般の智慧をもて諸人を教え諸人をしてキリストの中に完全を得て神の前に立しめんとす二九 我これが爲に大能をもて我が衷に働く者の運用に循ひ力を竭して勞する也

第二章

一 我なんぢら及びラヲデキヤにをる人々また我が肉躰にある面を未だ見ざる人の爲に我心を勞すること何等なるを爾曹が知んことを望二 わが心を勞するは彼等が心愛に因て一になり疑を懷ざる全き穎悟の富を得かつ父なる神とキリストの奥義を知て安慰を得んことを欲する也三 智慧と知識の蓄積は一切キリストに藏れある也四 誰にても巧 言を以て爾曹を欺くこと無らん爲に我これらの事を言り五 夫われ肉體は爾曹と離をると雖ども靈は爾曹と偕に居て喜び爾曹が次序あるとキリストを信ずる信の堅固を見なり六 爾曹すでに主キリスト・イエスを承たれば彼に在て行むべし七 なんぢら根を彼におき彼に在て徳を建また教を受たる所に從ひて信仰を堅くし此を益 大にして感謝せよ

八 なんぢら愼むべし恐らくはキリストに循はず人の遺傳を世の小學に循ひ空言なる理學をもて爾曹の心を奪ん九 それ神の充足る德は悉く形體をなしてキリストに住り一〇 彼は諸の政と權威の首なり爾曹かれに在て全備する事を得也一一 爾曹彼に在て手をもて爲ざる割禮をうく即ち肉の體を脱去ところのキリストの割禮なり一二 爾曹バプテスマを受て彼と偕に葬られ亦死より彼を甦らしし神の大能を信ずるに因て彼と偕に甦らされたり一三 なんぢら前には諸の罪と身に割禮なきとに因て死たる者なり然ど神爾曹をして凡の罪を赦し彼と偕に生しめ一四 かつ手にて録し所の我儕を攻る規條の書すなはち我儕に逆ふものを塗抹これを中間より取去り釘を以て其十字架に釘たまへり一五 また政事を執者と權威ある者を滅し彼等を衆 人に示しキリストに由て勝誇れり

一六 是故に或は飲こと或は食こと或は節期あるひは月朔あるひは安息日の事により人をして爾曹を議せしむること勿れ一七 此等は皆來らんとする者の影にして其眞の形はキリストに屬り一八 謙卑ることと天 使を拜することとに因て爾曹の褒美を諞 奪んとする人に其褒美を奪るる勿れ斯の如き人は未だ見ざる者を窺ひ己の心に從ひて妄に誇り首に屬ことを爲ざる也一九 全體この首により諸の節と維をもて相助け相聯なり神に育られて長なり二〇 二一 二二 もし爾曹キリストと偕に死て世の小學より離たらんには何ぞ世に在て日を送る者の如く人の命と教に循ひ

捫る勿れ嘗ふ勿れ觸る勿れといふ律法の下になるや此等の禁じたる者は凡て人これを用れば滅るなり二三 此等の規條は自ら縱肆にして拜することを爲かつ謙卑かつ身を惜ざるに由て智慧ある者の如く見れども實に尊き者に非ずただ肉體の慾を充足する也

第三章

一 既に爾曹キリストと偕に甦りたれば天に在ものを求むべしキリスト彼處に在て神の右に坐し給へり二 爾曹天に在ものを念ひ地に在ものを念ふ勿れ三 夫なんぢらは死し者にて其命はキリストと偕に神の中に藏れ在なり四 我儕の命なるキリストの顯れんとき我儕も之と偕に榮の中に顯るる也五 是故に爾曹の地にある肢體すなはち奸淫、汚穢、邪情、惡欲および貪婪を殺すべし貪婪は即ち偶像を拜すること也六 此等の事に由て神の怒は從はざる者に臨るなり七 爾曹も曩に斯のごとき人の中に日を送りし時は此等の惡事を常に行へり八 然ど爾曹今は凡て此等の惡事および恚憾、忿怒、暴戾をさり謗讟、醜言を爾曹の口より去べし九 爾曹已に舊人と其行を脫て新人を衣たれば互に謊をいふなかれ一〇 この新人は愈新になり人を造りし者の像に從ひて知識に至るなり一一 此の如きに至りてはギリシヤ人とユダヤ人あるひは割禮ある者と割禮なき者あるひは夷狄あるひはスクテヤ人あるひは奴隸あるひは自主の別なし夫キリストは萬物の上に在また萬物の中にあり

一二 是故に爾曹神に選れて聖潔かつ愛せらるる者と爲たれば慈悲、矜恤、謙遜、柔和、忍耐を衣よ一三 爾曹互に容認をなし若し人に責べき事あらば之を恕せキリスト爾曹を恕し給へる如く爾曹も然すべし一四 この諸の事の外に愛を加へよ愛は衆徳の帶なり一五 爾曹キリストの賜ふ平安をして其心を主らしめよ爾曹一體に在て此平安に至るべき召を蒙れり爾曹恩に感ずべし一六 キリストの道をして爾曹の心を存て充足しめ諸の智慧により詩と歌と靈に感じて作れる賦とを以て互に相教へ相勸め恩に感じて心の中に神を讚美すべし一七 爾曹の爲所の諸事あるひは言あるひは行みな主イエスの名の爲に之をなし彼に由て父なる神に感謝すべし

一八 妻なる者よ其夫に從ふべし此は主にある者の爲べき事なり

一九 夫なる者よ其妻を愛すべし苦を以て之を待ふ勿れ二〇 子たる者よ爾曹すべての事二親に從ふべし是主の悅び給ふ所なり二一 父なる者よ爾曹の子を怒らする勿れ恐くは其氣餒ん二二 僕なる者よ凡のこと肉體に屬る主人に從ふべし人を悅ばする者の如くただ眼前の事を務ることなく誠心を以て神を畏れて從へ二三 なんぢら何事も人に事るが如せず主に事る如く心より之を行ふべし二四 そは爾曹は主より報賞なる嗣業を受ることをしる者なれば也なんぢら主なるキリストに事ふべし二五 不義を行ふ者は亦その不義の報をうく主は偏視たまふ事なし

第四章

一主人なる者よ爾曹も亦天に主ある事を知ば義に從ひ公平を以て其僕を待ふべし

二恆に祈禱をなし怠らずして感謝と共に之を爲べし三また神われら道を傳ふるの門を開き我儕をしてキリストの奧義を語らしめ四わが言べき所の如く此奧義を顯さしめ給はんことを我儕の爲に祈るべし我この奧義の爲に繫れたり五なんぢら機を窺がひ智慧をもて外人に交るべし六爾曹の言つねに恩を用ひ且鹽を以て調和べし然ば如何して各人に答ふべき乎を知ん

七わが愛する兄弟忠なる役者われと偕に主に事る僕テキコわが事を悉く爾曹に告知せん八我かれを殊に爾曹に遣すは彼をして爾曹の事を知なんぢらの心を慰めしめん爲なり九また忠なる我が愛する兄弟爾曹の中の一人なるオネシモを彼と偕に遣せり彼等この處の事を以て悉く爾曹に告知せん一〇我と偕に繫るるアリスタルコ及バルナバの甥マコ爾曹に安を問このマコの事に就ては爾曹すでに命を受たり彼もし爾曹に至らば之を接べし一一ユストと名るイエス爾曹に安をとふ割禮を受し者のうち惟この三人のみ我と偕に神の國の爲に勞けり我かれらに由て安慰を得しなり一二爾曹の中の一人にてキリスト・イエスの僕なるエパフラス爾曹に安を問彼は恆に爾曹の爲に力を盡て祈禱をなし爾曹が完全をえ心を堅して立すべての事神の旨に遵はんことを願へり一三われ彼が爾曹およびラオデキヤ、ヒエラポリにある者のために甚く心を勞することを證す一四我儕が愛する醫者ルカ及びデマス爾曹に安を問一五請なんぢらラオデキヤの兄弟等とヌンパス及び其家にある教會に安を問一六爾曹すでに此書を讀ば之を亦ラオデキヤ人の教會に讀せ爾曹も亦ラオデキヤより來る書をよめ一七アルキポに曰なんぢ主に在て受し所の職を愼みて盡すべしと一八我パウロ親手なんぢらに安を問なんぢら我の縲絏を念へ願くは恩寵爾曹と偕に在んことをアメン

帖撒羅尼迦前書

第一章

一パウロとシルワノとテモテ書を父なる神およびイエス・キリストに在テサロニケ人の教會に贈る願くは我儕の父なる神及び主イエス・キリストより爾曹恩寵と平康を受よ二われら祈禱の中に爾曹の事を陳て常に爾曹衆人の爲に神に感謝す三これ爾曹が信仰に由て行ひ愛に由て勞し我儕の主イエス・キリストを望むに因て忍ことを我儕の父なる神の前にて斷ず念ふが故なり四神に愛せらるる兄弟よ又是爾曹の撰れたる事を知に縁てなり五我儕の福音なんぢらに來りしは只言に由てのみならず能により聖靈に由また篤き信仰に由てなり即ち我儕なんぢらの中に在て爾曹の爲に如何におこなひし乎を爾曹の知ごとし六且なんぢら大なる難の中に聖靈の喜樂をもて道を受我儕及び主に效ひ七マケドニヤとアカヤに在すべての信者の模楷となれり八主の道爾曹より響きしは第にマケドニヤ、アカヤのみならず而して亦なんぢらが神に向る信仰すべての處に廣れり是故に我儕何事も言に及ばず九蓋かれら我儕の事を語りて我儕いかなる状にて爾曹の中にいり且なんぢら偶像をすて神に歸して活る眞神に事へ一〇その子の天より臨るを待と言ば也その子は即ち神の死より甦らしし所のイエスにして我儕を來らんとする怒より拯ふ者なり

第二章

一兄弟よ我儕が爾曹の中に入しことの徒然ならざるを爾曹みづから知二爾曹知る如く我儕さきにピリピにて苦を受また辱を受たり然ど尚なんぢらに至り我儕が神に頼て憚る所なく神の福音を大なる紛爭の中にて爾曹に語れり三我儕の勸は惑より出るに非ず汚より出るに非ず亦詐を以てせず四われら神の撰をえ福音を傳ることを託られたるに因て語なり此は人を悅ばするに非ず我が心を察し給ふ神を悅ばする也五なんぢら知が如く我儕いつも諂ふ言を用ずまた事に藉て貪ることをせず神これが證をなす六我儕キリストの使徒にて人に重ぜらるべしと雖も或は爾曹にも或は他人にも人に榮耀を求ず七乳母その赤子を育ふ如く我儕なんぢらの中に在て柔和にせり八如此なんぢらを慕ひて第に神の福音のみならず己の生命をも爾曹に予んことを喜べり是なんぢらは我が愛する者なれば也九兄弟よ爾曹われらの勞と苦をしる爾曹のうち一人をも累はせざる爲に夜晝工を作て神の福音を爾曹に宣傳へたり一〇我儕なんぢら信ずる者に對て何等か潔く義く缺ること無して行へるを爾曹も神も證をなす一一二なんぢら知我儕父が其子を待ふ如して爾曹おのおのに對ひ其國と其榮に召き給ふ神に合ひて行ことを勸また慰め亦教たり一三是故に我儕神に向ひ爾曹が我儕より神の道を聞し時之を人の道とせず神の道として受たるを斷ず感謝す此道は誠に神の道にして爾曹信ずる者の中に働くなり一四兄弟よ爾曹ユダ

ヤの中なるキリスト・イエスにある神の教會に效る者となれり蓋かれらユダヤ人に苦められし如く爾曹も己が國の人々に苦められたれば也一五 ユダヤ人は主イエスと己が預言者たちを殺しまた我儕を窘て逐出せり彼等は神の心に合はず且すべての人に逆へり一六 また我儕が異邦人に救を得させんとて語るを阻り此の如く彼等は常に己が罪を盈しむ神の極て大なる怒かれらに臨れり

一七 兄弟よ我儕暫時なんぢらに離れ居これ面のみなり心に非ず切に願ひて急ぎ爾曹の面を見んとせり一八 是故に我儕なんぢらに至らんと欲へり殊に我パウロ之を願ふこと一次のみならず兩次なりしかどサタン我儕を妨げたり一九 我儕の望また喜また誇の冕は誰ぞや我儕の主イエス・キリストの臨らん時その前にて爾曹も此ものと爲にあらず乎二〇 それ我儕の榮と喜は爾曹なり

第三章

一 是を以て我忍ぶこと能はず故に獨アテンスに留ることを意に定め二 キリストの福音を傳へ神と偕に働く我儕の兄弟テモテを爾曹に遣しし也これ爾曹を固し又爾曹の信仰の爲に爾曹を慰め三 一人もこの患難に搖されざらしめんため也それ患難は我儕に定れることなるを爾曹自ら知り四 われら爾曹と偕に在し時われら患難に遭んとすることを預じめ爾曹に告たり今果て其如く成り爾曹知ところの如し五 是故に我忍ぶこと能はず爾曹の信仰を知ん爲に人を遣しなり試る者の爾曹を試みて我儕の勞の徒然ならんことを恐れたる也六 今テモテ爾曹より我儕に來りて爾曹の信仰と愛との嘉音を聞せ又なんぢら常に我儕を切々に念われらに遇ことを欲ひ我儕が爾曹に遇ことを欲ふが如しと告たり七 是故に兄弟よ我儕さまざまの禍害と患難との中に爾曹の信仰に因て安慰を得たり八 そは爾曹もし固く主に屬ば我儕これに由て生べければ也九 われら爾曹の事に就て我儕の神の前に歡ぶ所の大なる喜により爾曹の爲に如何なる感謝を以て神に報んや一〇 晝夜切に願ふは爾曹の面を見んことと爾曹の信仰の足ざる所を補はんこと也一一 願くは神すなはち我儕の父みづから我儕の主イエス・キリストと偕に我儕を導きて爾曹に至らしめ給はんことを一二 また願ふ主爾曹の愛を增かつ滿しめ爾曹をして互に愛し衆の人を愛すること我儕が爾曹を愛する如ならしめて一三 爾曹の心を固くし我儕の主イエスその諸の聖徒と偕に來らんとき爾曹をして我儕の神なる父の前に潔して責べき所なからしめん事を

第四章

一 兄弟よ我儕かく神に願へば主イエスに賴て亦なんぢらに求め且勸む爾曹すでに我儕の教を受いかに行ひて神を悦ばすべきを知たれば益 之に進むべし二 蓋われら主イエスによりて如何

なる誠を爾曹に授けしかを爾曹知ばなり三神の旨は爾曹の潔こと即ち姦淫をせず四各々己の器を得て之を潔く貴くなして用ることを知五神を知ざる異邦人の如く情慾を放縦にせず六又この事について兄弟を欺きかつ害せざらんことを要め給ふ凡て斯る惡事を行ふ者に主報をなし給ふなり我儕曩に爾曹に告かつ證せしが如し七それ神の我儕を召きたるは我儕の汚たる事を行ふを要るに非ず潔からん事を要め給ふなり八是故に慢る者は人を慢るに非ず其聖靈を爾曹に賜ひし神を慢るなり

九兄弟を愛する事に就ては我なんぢらに書贈るに及ばず蓋なんぢら互に愛することを親く神より教られたれば也一〇爾曹マケドニヤの全地なる諸の兄弟に此の如く行へり兄弟よ我儕勸るは爾曹ますます此の如く行ひ一一かつ安靜ならんことを務め己の事を行ひ手づから工をなし曩に爾曹に我儕が命ぜし如せんこと也一二此は爾曹外人に向て正く行ひ亦自ら乏こと無らん爲なり

一三兄弟よ爾曹の憂戚は望なき他人の如ならざらんことを欲ふが故に我儕すでに寢れる者に就ては爾曹の知ざるを好まず一四我儕もしイエスの死て甦りし事を信ずるならばイエスに由る所の既に寢れる者を神かれと偕に携へ來らんことをも信ずべき也一五われら主の言に託て爾曹に告ん主の臨らん時に至り活て存れる我儕は直に寢れる者よりも先だたじ一六それ主號令と使長の聲と神の箛を以て自ら天より降らん其時キリストに在て死し者先に甦へり一七後に活て存る我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇べし斯て我儕いつまでも主と偕に居ん一八是故に此等の言を以て互に慰むべし

第五章

一兄弟よ時と期については我なんぢらに書贈るに及ばず二そは主の日の來ること盜人の夜きたるが如なることを爾曹詳細に知ばなり三人々平和無事なりと言んとき亡滅忽ちに來らん妊る婦にその劬勞の來る如なるべし人々絶て避ることを得じ四然ど兄弟よ爾曹幽暗に居ざれば其日盜賊の來る如く爾曹に來ることなし五爾曹みな光の子ども晝の子ども也われら夜に屬るもの暗に屬る者に非ず六然ば我儕他人の寢るが如く寢ることをせず醒て愼むべし七寢る者は夜ねぶり酒に醉ものは夜ゑふ也八晝に屬る我儕は信と愛の護胸をき救の望を冑として愼むべし九そは神われらを怒に遇せんと定たるに非ず我儕の主イエス・キリストに由て救を得しめんと定め給ひたれば也一〇かれ我儕の爲に死たり是我儕をして醒たるも寢れるも彼と偕に生しめんとて也一一是故に爾曹常に行る如く互に慰め又おのおのの徳を相建べし

一二兄弟よ我儕なんぢらに請なんぢらの中に勤務かつ主に在て爾曹を治め爾曹を教る者を顧み一三彼等の工に縁て厚く之を愛すべし爾曹たがひに親睦すべし一四兄弟よ我儕なんぢらに勸む

妄行者を儆め氣餒者を慰め懦弱者を扶け衆の人に向て忍ぶべし一五 なんぢら愼みて惡を以て惡に報ることなく常に互に善を追また衆の人にも善を及すべし一六 常に喜ぶべし一七 斷ず祈るべし一八 凡の事感謝すべし是イエス・キリストに由て爾曹に要め給ふ神の旨なり一九 靈を熄こと勿れ二〇 預言を藐視こと勿れ二一 凡のこと察へて其善ものを守り二二 諸の惡事の類に遠かるべし二三 願くは平安の神自らなんぢらを全く潔し又なんぢらの全靈全生全身を守りて我儕の主イエス・キリストの臨らん時に咎なからしめ給はんことを二四 爾曹を召く者は誠信なる者なり彼この事を成たまはん二五 兄弟よ我儕の爲に祈るべし二六 なんぢら潔き接吻を以て諸の兄弟の安を問べし二七 われら主に由て願ふ爾曹この書を諸の兄弟に讀聞せんことを二八 我儕の主イエス・キリストの恩爾曹と偕に在んことをアメン

帖撒羅尼迦後書

第一章

一 パウロ、シルワノ、テモテ我儕の父なる神および主イエス・キリストに在テサロニケ人の教會に書を贈る二 願くは我儕の父なる神及び主イエス・キリストより爾曹恩寵と平康を受よ
三 兄弟よ我儕なんぢらに就て恆に神に感謝すべき也これ理に合ふこと也そは爾曹の信仰彌増かつ爾曹おのおの互に愛すること篤く成たれば也四 是故に我儕なんぢらの爲に神の教會の中に誇る蓋なんぢら窘迫と患難の中に在て忍耐と信仰を存ばなり五 これ神の業 鞫の表なり爾曹をして神の國に入べき者とならしめん爲なり爾曹いま神の國の爲に患難を受六 蓋なんぢらに患難を加る者には患難を以て報七 患難を受る爾曹には我儕と偕に平安を得ことを以て報るは神の公 義なればなり此事は主イエス火燄の中にて其能力の諸使と偕に天より顯れん時にあり
八 即ち神を識ざる者および我儕の主イエス・キリストの福音に服はざる者に報を予ふ九 かれら主の面と其 勢の榮光より離れて窮なく亡る罰を受ん一〇 其時は即ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸の信者に由て讚を得ん其日なり爾曹も我儕の証を信ずる者なり一一 此に就て我儕つねに爾曹の爲に祈るは我儕の神爾曹をして召を受べき者となし又能力を以て爾曹の諸の善願と信仰の行を成就せしめん事なり一二 此我儕の神と主イエス・キリストの恩に由て我儕の主イエスの名なんぢらの中に榮られ亦なんぢら彼に在て榮られん爲なり

第二章

一 兄弟よ我儕の主イエス・キリストの臨り給ふこと及び我儕が彼の所に集ることに就ては我儕願ふ二 爾曹あるひは靈により或は言に由あるひは我が贈れるに似たる書に由て主の日いま既に來るとて心を動かし且擾こと莫らんことを三 誰なにの法を以てするとも爾曹欺かるること勿れ蓋さきに道を離るる事なく且罪の人即ち淪喪の子現るる事なくば其日きたらじ四 かれ凡て神と稱る者また人の拜む所の者に敵し之より超て己を尊くし神の殿に坐して自ら神なりと爲に至る五 われ爾曹の中に在しとき此事を語しを爾曹記憶せざる乎六 彼をして其時に至りて現れしめん爲に今かれを抑る者を爾曹しる七 それ不法の隱たる者すでに働けり今これを抑るもの除るるまで隱をり八 其時に至りて不法の者あらはるべし主イエス其口の氣を以て彼を滅さん其臨るとき發す所の榮光を以て彼を廢せん九 彼サタンの行爲に循ひて各樣の僞なる能と徵と奇 跡一〇 かつ不義の諸の詭譎を以て顯れかの淪亡者の中に在なり蓋かれら眞理を愛するの愛を受ずして救を得ざる者なれば也一一 是故に神かれらが誑を信ぜん爲に迷惑をして彼等の中に働かしむ一二 これ凡て眞理を信ぜず不義を好む者の罪を定んとて也

一三 主に愛せらるる兄弟よ爾曹の爲に我儕常に神に謝すべき也そは神始より爾曹を簡び眞理を信ずることと靈の聖を蒙ることに因て救を得しめ給へば也一四 神われらの福音を以て爾曹を此福に召き給へり爾曹をして我儕の主イエス・キリストの榮光を得しめん爲なり一五 是故に兄弟よ爾曹堅く立かつ或は我儕の言あるひは我儕の書に因て教を受たる傳を堅く守るべし一六 願くは我儕の主イエス・キリスト及び我儕の父の神すなはち我儕を愛し且恩に因て永遠の安慰と善望を予る者一七 爾曹の心を慰め凡の善行と善言に爾曹を堅固せんことを

第三章

一 終に我これを言兄弟よ爾曹われらの爲に祈り主の道をして疾ひろまり榮を受ること爾曹の中の如ならしめ二 又我儕をして邪なる惡人より救るることを得しめよそは人みな信ずる者といふに非ざれば也三 然ど主は信實なる者より彼なんぢらを堅くし爾曹を護てかの惡人より救ん四 爾曹われらの命ずる事を今すでに行ふ後また之を行はんことを主に頼て信ずる也五 願くは主なんぢらの心を神の愛とキリストの忍耐に導き給ん事を

六 兄弟よ我儕主イエス・キリストの名に託て爾曹に命ず我儕より受たる傳に循はずして妄に行む諸の兄弟に遠かるべし七 爾曹みづから如何して我儕に效ふべきを知それ我儕爾曹の中に在て妄なる事を行ず八 また人のパンを價なしに食することなく唯人を累はせざらん爲に勞と苦をして夜晝工を作り九 是われら權威なきが故に非ずただ自己を模楷とし爾曹をして傚しめん爲なり一〇 われら爾曹の中に在しとき人もし工を作ことを欲ずば食すべからずと爾曹に命じたり一一 それ爾曹の中に工を作ずして専ら餘事を務め妄なる事を行ふ者ありと我儕聞たり一二 われら此の如き者に靜に工を作て己のパンを食せんことを我儕の主イエス・キリストに託て命じ且勸む一三 兄弟よ善を行ひて倦こと勿れ一四 若この書に云る我儕の言に從はざる者あらば之を愧しめん爲に其人を録して相交ること勿れ一五 然ど彼を敵とせず兄弟の如く之を諫むべし一六 願くは平安の主つねに何事に拘ず爾曹に平安を賜んことを願くは主爾曹と偕に在んことを一七 我パウロ手づから筆を執て安をとふ書ごとに之を以て誌とす我が書るは此の如し一八 願くは我儕の主イエス・キリストの恩すべて爾曹と偕に在んことをアメン

提摩太前書

第一章

一我儕の救主なる神および我儕の望なるイエス・キリストの命に遵ひてイエス・キリストの使徒となれるパウロ二信仰に由て我が眞子なるテモテに書を贈る願くは父なる神および我儕の主キリスト・イエスにより恩寵と矜恤と平康を受よ

三我マケドニヤに往しとき爾に仍エペソに留り人に命じて彼處に異教を傳ることなく四また信仰にある神の道を立ずして辨論を生ずる奇談と極りなき系圖に心を寄ること勿らしめよと勸たり今も此の如く行はんことを願ふ五誡命の主意は愛なり即ち潔き心と善良心と僞なき信仰より出六或人これを棄て虚き論に轉り七律法の教師と爲んとして卻て其語る所その定論ところの事を自ら知ず八夫われら律法は善もの也と知る但し理に從ひて律法を用べし九律法は義人の爲に設たるに非ず不法なるもの不服なるもの不敬なるもの罪惡なるもの不潔なるもの邪僻なるもの父を殺せるもの母を殺せるめもの人を殺せる者一〇奸淫を行ふもの男色を好むもの人を攘むもの謊を言もの僞誓ふ者また此ほか正理に悖ること有が爲に設たり一一これ我に託し給ふ所の福なる神の榮の福音に循へる也

一二我に能力を賜へる我儕の主キリスト・イエスに謝す蓋われを職に任じて忠信なる者となし給へば也一三われ昔は謗讟たるもの窘迫たるもの狎侮たる者なりしが我信ぜざるとき知ずして之を行へる故になほ矜恤を受たり一四我儕の主の恩およびキリスト・イエスに在て存つ所の我儕の信仰と愛は極て大になれり一五キリスト・イエス罪人を救んために世に臨れり信ずべく亦疑はずして納べき話なり罪人のうち我は首なり一六然ども我が矜恤を受しはキリスト・イエス首先に我に寬容を悉く顯し後かれを信じて永生を受る者の我を模楷となし給へる也一七願くは萬世の王すなはち朽ず見ざる一の神に窮なく尊貴と榮光あらんことをアメン

一八我子テモテよ先に爾を指る所の預言に由て爾に命ず此預言により信仰と善良心をもて善戰を戰ふべし一九或人よき良心を棄て信仰を亡へり二〇此の如き人の中ヒメナヨとアレキサンデルあり我かれらをサタンに付せり是彼等をして謗讟を言ざらしめん爲に懲なり

第二章

一われ殊に勸む萬人の爲に顧告、祈禱、懇求、感謝せよ王及び凡て權威を有ものの爲には別て之を行べし二是われら敬虔と端莊を以て靜に安らかに日を度らん爲なり三此は美事なり我儕の救主なる神の意旨に適ふこと也四萬人救をうけ眞理を曉るに至るは神の望み給ふ所なり五それ神は一位なり又神と人との間に一位の中保あり即ち人なるキリスト・イエスなり六

かれ萬人に代り己を棄て贖となせり時いたらば證すべし七我これが爲に立られて宣傳る者となり使徒と作また信仰と眞理を異邦人に教る者となれり我キリストに在て眞をいひ譌を言ず八是故に我ねがふ人潔き手を擧て怒なく疑なく何の處にても祈んことを九また婦女は耻を知よく愼みて宜に合ふ衣にて自ら飾り髮を編ことと金と眞珠と價貴き衣を以て妝飾とせず一〇善行を以て妝飾とせんことを願ふ神を敬ふ女は如此すべき事なり一一婦女は凡のこと順ひて靜に道を學ぶべし一二われ婦女教を施すことと男の上に權を執ことを許さず婦女は只安靜にすべし一三蓋アダムは前に造られエバは後に造られたれば也一四アダムは惑されざりしなり婦は惑されて罪に陥れり一五然ども彼もし信仰と愛と潔と謹に居ならば子を生ことに因て救を得べし

第三章

一人もし監督の職を欲はば是善務を欲ふ也といふ話は誠なり二それ監督たる者は責べき所なく一個の婦の夫なるべく謹愼自ら制し品行正く旅客を慇懃に待ひ教訓をなし三酒を嗜まず人を撃ず柔和また爭はず財を貪らず四自己の家を善理め端荘を以て其子女を服はしむ可なり五人もし自己の家を理ることを知ずば如何して神の教會を管ることを得んや六かつ新に教に入し者を監督と爲べからず恐くは驕りて惡魔と同じ審判を受るに陥らん七又監督は外人にも令聞あるべし恐くは詬誶と惡魔の罟に陥らん八執事たる者も亦端荘くし兩舌せず酒を嗜まず利を貪ず九信仰の奥義を潔き良心の中に存べし一〇此を先試みて責べき所なくば執事の職に當べし一一女執事も亦端荘くし人を誘らず謹みて凡のこと忠信なるべし一二執事たる者は一個の婦の夫なるべし子女と己の家を善理むべし一三善執事の職を務る者は己に嘉級を得キリスト・イエスに基せし信仰に勇氣を得べし
一四われ速く爾に至らんことを望む然ど如此かき贈るは一五我もし遲らんとき爾如何して神の家の中に行ふべきかを知ん爲なり神の家は活神の教會なり眞理の柱と基なり一六疑もなく敬虔の奥義は大なり神肉體となりて顯れ靈に因て義とせられ天使に見れ異邦人の中に宣傳へられ世の人に信ぜられ榮光の中に擧られ給へり

第四章

一然ども靈明かにいふ後に至らば或人信仰の道より離れて人を惑す靈と惡鬼の教に心を寄ん二善を假て譌をいひ良心を烙れ三娶ることを禁じ食を斷ことを命ずる者に誘るるに因てなり食は即ち神これを造り信じて眞理を知る人に感謝して受しむるもの也四それ神の造りし物はみな美なり感謝して受るときは棄べき物なし五そは神の言と祈禱に由て潔なれば也六爾もし之を兄弟等に教るときはキリスト・イエスの良役者にして信仰の

道と爾が從ひし所の善教の道に育はれたる者なり七 妄なる談と老たる婦の奇き談をすて神を敬ふことを自ら修行すべし八 肉體の修行は益すくなし惟神を敬ふことは凡の事に益あり今 生および來 生に係る約束を得なり九 これ信ずべく又疑はずして納べき話なり一〇 之が爲に我儕苦勞をし且詬誶をうく蓋われら活る神を望ばなり彼は萬 人の救主にして殊に信ずる者の救主なり一一 なんぢ此等の事を命じ且教ふべし

一二 なんぢ年 幼を以て人に輕んぜらるる勿れ言と行と愛と信と潔を以て信者の模楷となるべし一三 なんぢ誦讀と勸勉と教訓を務めて我が至るを待一四 預言と長 老會の按手禮とに由て爾に賜ひし所の賜を忽畧にすること勿れ一五 心を之に寄て專ら之を務むべし蓋なんぢの上達すべての人に明かならん爲なり一六 なんぢ己を愼み亦教ることを愼むべし恆に此等の事を務めよ如此おこなふ時は己を救ひ亦なんぢに聽者を救はん

第五章

一 老人を責ること勿れ之を父の如くし幼者を兄弟の如くし二 老たる婦を母の如くして勸また少 女を姉妹の如くし之を勸るに貞潔を盡すべし三 寡婦なる眞の寡を敬ふべし四 然ど寡婦に子あるひは孫あれば彼等まづ己の家に孝を行ひ其親に恩を報ることを學ぶべし是神の意旨に適ふこと也五 眞の寡婦にて獨居ものは惟神に倚賴み夜も晝も顧求と祈禱を恆にする也六 縱樂をなす寡婦は生ると雖も死る者なり七 なんぢ此事を命じ彼等をして責べき所なからしむべし八 人もし己に屬する者を顧みず殊に己の家族を顧みざるならば信仰の道に背き不信者よりも劣れる者なり九 寡婦を其籍に録すことは六十歳より少かる可らず素より一個の夫の妻なりし者にて一〇 善 行の稱ある者もしくは子女を育しもの若くは旅客を館したる者もしくは聖徒の足を濯ひたる者もしくは難 人を助しもの若くは務て諸の善事に從ひし者なるべし一一 少き寡婦は之を辭るべし蓋かれらキリストに背て心を亂すときは再び嫁せんとすれば也一二 彼等は初に立たる約束を棄るに因て審判をうくべし一三 彼等また懶惰に習ひ人の家を周 遊ただ懶惰なる耳ならず妄に人の風評をいひ好て人の事に關り言べからざる事をいふ也一四 是故に我ねがふ少き寡婦は嫁をなし子女をうみ家を理て敵する者に僅にても譏るべき機を得しめざらんことを一五 そは彼等のうち既に道を棄てサタンに從へる者あり一六 信ずる男あるひは信ずる女その家に若し寡婦あらば之を助べし教會を煩はす可らず蓋教會をして眞の寡者を助しめん爲なり一七 善 治る長老をば倍して之を尊み言を傳へ教をなして勞する長老を殊に尊むべし一八 そは聖書に録して穀物を碾す牛に口籠を掛べからず又 勞 者は其値を受べき也と云ばなり一九 長老を訴る者ならんに二人三人の證 人なくば納べからず二〇 罪を犯せる者は衆人の前にて之を警むべし是餘の人をして懼しめん爲なり二一 われ神とキリスト・イエスまた選れた

る天使の前にて爾に求む預見の定をなすことなく少にても偏りて行ふこと無して此等の事を守るべし二二 輕易しく人に按手する勿れ人の罪に干ること勿れ自ら守て潔すべし二三 爾の胃のため及び爾しばしば疾ふに因て恆に水を飲こと勿れ少しく葡萄酒を用ふべし二四 或人の罪は明かにして其人に先ちて審判の場にゆき或人の罪は後に從ふ二五 此の如く善行も明かなるなり然ざるも亦終に隱るること能はず

第六章

一 凡そ軛の下にある僕は己の主を毎事に敬ふべき者となすべし是神の名と教を謗れざらん爲なり二 信者なる主を有る者は其兄弟たるに因て之を輕んず可らず別て之に事ふべし蓋益を受くるもの信者にて愛せらるる者なれば也なんぢ此事を教また勸むべし三 もし異なる教を傳て我儕の主イエス・キリストの善言と神を敬ふことに合ふ教を肯はざる者あらば四 此人みづから驕り無知にして議論と言辭の爭辨を好む此に由て媢嫉、爭鬪、毀謗、妄疑五 また邪にして眞理を離れ神を敬ひて利を得んと欲ふ人の爭論おこる也なんぢら此の如き人に遠かるべし六 神を敬ひて足ことを知は大なる利なり七 われら何をも携へて世に來らず亦何をも携へて往こと能ざるは明かなり八 それ衣食あらば之をもて足とすべし九 富んことを欲する者は患難と罟また人を滅亡と沈淪に溺らす所の愚にして害ある萬殊の慾に陷るなり一〇 財を慕ふは諸の惡事の根なり或人これを慕ひ迷て信仰の道を離れ多の苦害をもて自ら己を刺り一一 神の人よ之を避て義事と神を敬ふことと信仰と愛と堪忍と柔和とを慕ふべし一二 信仰の善戰をたたかひ永生を取べし爾これが爲に召を蒙りたり又多の人の前にて善證を作たり一三 われ萬物をして生を存しむる神およびポンテオ・ピラトに向て善證を作給へるキリスト・イエスの前にて爾に命ず一四 なんぢ我儕の主イエス・キリストの現る時まで玷なく責べき所なくして誡を守るべし一五 神その定め給へる期いたらば彼を顯さん神は即ち福ある所の獨一の權威ある者諸の王の王もろもろの主の主一六 獨一死ざるもの近くことを得ざる光に在して人未だ見しことなく又見こと能ざる者なり願くは尊貴と窮なき權力かれに有アメン

一七 爾この世の富る者に命ぜよ驕ることなく定なき財を恃ことなく唯われらを樂ませんとて諸物を豐に賜ふ神を恃み一八 また善を行ひ善事に富をしみなく施濟をなして人と共にし一九 斯て己の爲に善基を蓄へ未來の備をなすべし是眞の生を得ん爲なり二〇 テモテよ爾託せられし事を守り妄なる益なき談および智識と僞り稱ふる辨論とを避べし二一 或人この僞の智識に從ひて信仰を謬れり願くは恩寵なんぢに在んことをアメン

提摩太後書

第一章

一 神の旨に由てキリスト・イエスに在る命の約束を傳ん爲にキリスト・イエスの使徒となれるパウロ二 我愛する子テモテに書を贈る願くは爾父なる神および我儕の主キリスト・イエスより恩寵と矜恤と平康を受よ三 われ夜も晝も祈禱に斷ず爾を懷ふに因て我が先祖に效ひ潔き良心をもて事る神に謝す四 我なんぢの涕を憶て爾を見んことを願ふ是歡喜を我に充しめん爲なり五 我なんぢの僞なき信仰を念ふ此の如き信仰前に爾の祖母ロイスまた爾の母ユニケにあり今爾にも在ことを信ずる也六 是故にわれ爾をして我が按手に由て爾が受し神の賜を復び熾にせんことを欲しむ七 そは神の我儕に賜へる靈は臆する靈に非ず能と愛と謹の靈なれば也八 是故に爾われらの主の證を作ことと其囚人なる我とを恥となす勿れ惟神の能に循ひて福音の爲に我と共に苦を忍ぶべし九 かれ我儕を救ひ聖召を以て召給へり是われらの行に由に非ず惟神おのが旨と世の成ざりし先よりキリスト・イエスの中に我儕に賜ひし恩惠に由なり一〇 この恩惠は今われらの救主イエス・キリストの顯れ給ひしに由て顯れたりキリスト死を廢ぼし福音を以て生命と壞ざる事とを明著にせり一一 我この福音の爲に立られて宣傳る者となり使徒となり異邦人の師となれり一二 是故に我これらの苦に遇たり然ど之を恥とせず蓋われ我が信ずる者を知かつ我彼に託したる者を彼かの日に至るまで守ることを爲得るを信ずれば也一三 爾キリスト・イエスにある信と愛とを以て先に我に聞し所の眞の言の模楷を保つべし一四 爾に託したる善ものを我儕の中にをる聖靈を以て守るべし一五 アジアにをる者すべて我に背く是なんぢが知ところ也フゲロとヘルモゲネも其中に在一六 願くは主矜恤をオネシポロの家に賜へ蓋かれ屢われを慰め且わが鏈を恥とせず一七 其ロマに在しとき急ぎ尋て我に遇たり一八 願くは主彼をして夫の日に至り主の矜恤を得しめよ彼エペソに在て如何ばかり我に事しか爾の善しる所なり

第二章

一 わが子よ爾キリスト・イエスにある恩に堅固なるべし二 又なんぢ多の證人の前にて我より聞し所の事を忠信にして能人を教るに足る人に託すべし三 爾キリスト・イエスの精兵卒の如く我と共に苦を忍ぶべし四 兵卒を務る者は世事を以て自己を累はせず是募れる者の心を悅ばせんと爲ばなり五 もし力を角ふもの法に遵ひて角はずば冕を得ず六 勤勞たる百姓まづ實を得べき也七 爾わが言し所を思ふべし主爾に萬事を曉しめん八 ダビデの裔より出たるイエス・キリスト我が傳る所の福音の如く死より甦りたるを爾心に記べし九 この福音の爲に我苦を受て罪人の如く繫るるに至れり然ど神の道は繫れず一〇 是故に我選れし

者の爲に凡の事を忍これ彼等にもキリスト・イエスにある救および永遠の榮を得しめめんため也一一 爰に信ずべき話あり我儕もし彼と共に死なば彼と共に生べし一二 我儕もし忍ばば彼と共に王と爲べし我儕もし彼を知ずと言ば彼も我儕を知ずといはん一三 われら信ぜずと雖も彼は誠なり彼は己に違ふこと能ざる也と

一四 なんぢ彼等をして此事を憶しめ且主の前にて彼等を戒め言に因て爭ふこと勿らしむべし是益する所なく聽人をして沈淪に至らしむ一五 なんぢ神に悦ばるる者と爲んことを務また耻る所なき工人となりて眞道を正く頒ち教んことを務むべし一六 妄なる益なき談を避べし蓋之をなす者ますます不信に進ばなり一七 彼等の言は脱疽の如く腐爛るべしヒメナヨとピレトは此の如き者の中に在一八 かれら眞を謬りて復生は既に過たりといひ斯て數人の信仰を滅すなり一九 然ども神の置給ひし堅基たてり其上に印あり誌していふ主己に屬る者を知とまた云すべて主の名を籲ものは不義を離るべしと二〇 大なる家の中には金と銀の器あるのみならず木と土の器もあり彼は貴きに用ひ此は賤きに用るなり二一 人もし此等を離れて己を潔せば貴きに用る器となり潔して主の用に合ひ諸の善事を作ことを得なり二二 なんぢ幼少ときの慾を避て義と信と愛を追求め又清心にて主を籲者と和ぐ事を追求むべし二三 愚なると無學なる辨論を避べし蓋之より爭競の起るを知ばなり二四 主の僕は爭ふべからず和平に凡の人を待ひ教を善し忍ことをなし二五 逆ふ者をば柔和を以て戒むべし神あるひは彼等に悔改むる心を賜て之に眞理を識しめ給はん二六 また彼等その醉さめて惡魔の罟を脫出ん蓋惡魔彼等をして己が旨を行はしめん爲に之を擒にすれば也

第三章

一 末世に艱の日きたらん爾この事を知二 その日至ば人ただ己を愛し貪婪、矜誇、驕傲、詬誶、不孝、恩を忘れ不潔三 不情、怨を解ず、謗讟、慾を縱ままにし殘刻、善を好まず四 友を賣、放肆、自負、神よりも佚樂を愛することをせん五 彼等は敬虔の貌あれど實は敬虔の徳を棄なんぢ此の如き者を避べし六 人の家に入て愚なる女を擄にするは此の如き者なり彼の女は罪を重ね各様の慾に誘はれ七 常に學ども眞理を識に至ること能はず八 かの人はヤンネとヤンブレがモーセに敵ひし如く亦眞理に敵ふなり彼等は心の壞たるもの信仰の道に就ては棄られたる者なり九 然ど猶この上に進ことあらじ蓋かの二人の如く彼等の愚なることも衆の人に露るべければ也一〇 爾は我が教誨、品行、志意、信仰、寛容、愛、耐忍一一 及び我アンテオケ、イコニオム、ルステラにて遇し窘と困苦また我が受し窘の如何なるかを知主悉く其中より我を救給へり一二 凡てキリスト・イエスに在て神を敬ひつつ世を渡らんと志す者は窘を受べし一三 惡人と人を欺く人は益惡に進み人を惑し亦人に惑さる一四 なんぢ學て信ずる所の事

を守るべし蓋なんぢ誰に由て之を學び一五かつ幼少ときより聖書を識ことを知ばなり聖書は爾をしてキリスト・イエスを信ずるに因て救を得しめん爲に智慧を予ふるもの也一六聖書はみな神の默示にて教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學しむるに益あり一七これ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲なり

第四章

一われ神の前および顯るる時その國に於て生る者死る者を審判するキリスト・イエスの前にて爾に求む二なんぢ道を宣傳ふべし時を得も時を得ざるも勵みて之を務め各様の忍耐と教誨を以て人を督し戒め勸むべし三それ人眞の教を容ず耳を悦ばしむる言を好み其私慾に循ひて己が爲に師を增加る時來らん四かれら耳を眞理より背け奇き談に向ふべし五然ど爾すべての事に愼み苦難を忍びて傳道者の工をなし爾の職を盡せ六われ今祭物とならんとす我が世をさる期ちかづけり七われ既に善戰をたたかひ既に馳るべき途程を盡し既に信仰の道を守れり八今より後義の冕わが爲に備あり主すなはち正き審判をなす者その日に至りて之を我に予ふ獨われに予るのみならず凡て彼の顯著を慕ふ者にも予ふべし九なんぢ務て速かに我に來れ一〇デマスこの世を愛し我を棄てテサロニケに往りクレスケンス、ガラテヤにテトス、ダルマテヤに往り惟ルカのみ我と偕にあり一一爾マコを伴て偕に來れ蓋かれの職われに益あれば也一二我テキコをエペソに遣せり一三爾きたる時わがトロアスにてカルポの所に遺し外衣を携へ來れまた書籍を携へ來れ其皮なるもの尤も肝要なり一四銅匠なるアレキサンデル多く我を害せり主かれが行ひし所に循ひて報を爲ん一五爾も亦かれを防ぐべし彼甚しく我儕の言に敵ひたり一六我が始て審官に事由を陳しとき誰も我と偕にせず皆われを離たり願くは彼等に罪の歸せざらんことを一七然ど主我と偕に在て我に力量を予へ給へり是われに由て道ことごとく傳り異邦人をして皆これを聽しめん爲なり我救れて獅子の口より出たり一八主また我を救ひて諸の惡事より離しめ且われを救ひて其天の國に入ん願くは榮世々窮なく彼に歸せんことをアメン一九汝プリスキラとアクラとヲネシポロの家に安を問二〇エラスト、コリントに留れりトロピモ病あれば我かれをミレトスに留たり二一なんぢ冬より前に急ぎ我に來れユブルとプデスとリノスとクラウデヤと兄弟みな爾に安を問二二願くは主イエス・キリスト爾の靈と偕にあれ願くは恩寵爾曹に在んことをアメン

提多書

第一章

一 神の僕またイエス・キリストの使徒パウロ同じ信仰に由て我が眞子なるテトスに書を贈る我神の選び給へる人をして信仰を起さしめ且神を敬ふ眞道を知しめん爲に使徒の職をなし 二 誑なき神の創世の前に約束し給ひし永生を望めり 三 神己の定おき給へる期に及びて宣教に由てこの永生の道を顯せり宣教は即ち我等の救主なる神その命を以て我に託ね給へる所のもの也 四 願くは爾テトス父なる神および我儕の救主キリスト・イエスより恩寵と平康を受よ

五 われ爾をクレテに留たる故は爾をして缺たる所を正くし且わが爾に命ぜし如く各邑に長老を立しめんとて也 六 人もし咎むべき所なく一個の婦の夫にして其子女も放蕩をもて訴らるることなく服はざることなき信者ならば長老に立べき者なり 七 それ監督は神の家宰なれば必ず咎むべき所なく己が任をなさず輕易しく怒らず酒を嗜まず人を撃ず利を貪らず 八 遠人を懇切に待ひ善を好み謹虔、公義、聖潔自ら制し 九 學びし所の眞道を守るべし是正教を以て人を勸め且辨駁する者を折かん爲なり 一〇 そは服はずして虚き論をいふ者また欺く事を行もの多して割禮に屬する者の中には殊に此の如き者あれば也 一一 かれら汚利を得ん爲に教ふ可らざる事を教へて全家の信仰を亡すが故に必らず彼等の口をして箝がしむべし 一二 クレテ人の中なる一預言者いひけるはクレテ人は恆に誑を言もの惡獸また懶惰にして食を貪る者なりと 一三 この證は眞なり是故に爾嚴く彼等を戒め彼等をして信仰を堅うし 一四 ユダヤ人の奇き談と眞理を棄る人の立し律法に心を寄ること莫らしむべし 一五 潔人には凡の物きよく汚たる人と不信者には一として潔き物なし既に彼等の心と良心ともに汚れたり 一六 彼等自ら神を識と語れども其行は之に逆る彼等は惡むべき者なり服はざる者なり諸の善事に就ては棄べき者なり

第二章

一 然ど爾は正教に合ふ事を語るべし 二 老人には謹愼と端莊と自ら制する事とを勸且信仰と愛と忍耐とに固うならんことを勸べし 三 老婦にも聖潔に合ふ行をなさん事と人を誇らず酒を多く嗜まず善事を人に教ることとを勸べし 四 また彼等をして幼婦に夫を愛し子を愛し 五 自ら制し貞潔にし家務をなし慈悲を懷き其夫に服ふ事を教しむべし是神の道の譭れざらん爲なり 六 爾また幼男に自ら制する事を勸むべし 七 なんぢ何事を作にもおのれ善行の模楷とならん事を務め教を傳るに信實を以し端莊しくし 八 責べき所なき正言を表すべし此は敵する者をして我儕の惡を言に緣なく自ら愧ることを爲しめんため也 九 僕には己の主人に服ひ何事を爲にも之を悅ばせん事を務め之に言咈

はず一〇物を竊取ず之に忠信を盡すべき事を勸べし此は何事を爲にも我儕の救主なる神の教を飾る事をせんため也一一夫すべての人に救を賜ふ神の恩あらはれ一二我儕を誡め我儕をして神を敬はざる事と世の中の慾を棄て自ら制し正く且虔みて今世に存へ一三望所の福と大なる神すなはち我儕の救主イエス・キリストの榮の顯れん事を望待しむ一四キリスト我儕の爲に己の身を舍給へり是我儕を諸の罪より贖ひ出し且己の爲に一民を潔め之をして熱心に善事を行はしめん爲なり一五なんぢ此等の事を以て語りまた勸め爾の諸の權威を以て戒むることをすべし爾人に輕ぜらるる勿れ

第三章

一なんぢ彼等をして執政と權威ある者とに服し且順ひ凡の善事を行ふ備をなし二人を謗ず爭はず和平にし衆の人を待ふに柔和を以せんことを憶起さしむべし三我儕も前には愚なる者順はざる者迷るもの諸般の慾と樂の奴隷と爲るもの恨み媢みて日を度しもの惡べき者また互に惡あへる者なりし也四然ど我儕の救主なる神の慈と人を愛し給ふ愛の顯れし時五かれ我儕が行ひし所の義き功に由ず唯その矜恤に循ひ重生の洗と聖靈に由て新にする事とを以て我儕を救へり六聖靈は即ち神我儕をして其恩により義とせられ嗣子たるを得て窮なき生命を望み待しめん爲に七我儕の救主イエス・キリストに由て豐に我儕の上に注たまへる所のもの也八此は信ずべき話なり我なんぢが此等の事を切に語り神を信ずる者をして愼みて善功を務しめんことを欲す此等の事は美また人に益あり九なんぢ愚なる辨論と系圖と爭鬪と律法の紛爭を去べし此等は益なく亦虚妄なれば也一〇異端を稱へ分を起す人は爾これを一たび再び警めてのち遠くべし一一夫かくの如き人は邪僻にして自ら罪なるを知て尚これを犯すことを爾知ばなり

一二アルテマス或はテキコを我なんぢに遣さんとき爾急ぎてニコポリスに來り我に就べし我彼處にて冬を過さんと定めたり一三法律家なるゼナス及アポロを懇切に送り彼等をして乏き事なからしめよ一四又われらに屬る者をして善功を務め人の所需用を資んことを學て果を結ざる事なからしめよ一五我と偕に在もの皆なんぢの安を問なんぢに請ふ信仰に在て我を愛する者の安をとへ願くは恩寵なんぢら衆人にあらんことをアメン

腓利門書

第一章

一 イエス・キリストの爲に囚人となれるパウロ及び兄弟テモテ我儕が愛する者われらが勤勞の侶なるピレモン二 及び我儕が姉妹アピヤ我儕と共に戰爭をなせるアルキポ並に爾の家内の教會に書を贈る三 願くは爾曹われらの父なる神および主イエス・キリストより恩寵と平康を受よ

四 われ祈る時に常に爾の事を陳て我神に謝す五 蓋われ爾が愛と信仰をもて主イエスに向また諸の聖徒に向ふことを聞ばなり六 我が祈る所は爾と偕に信仰を有てる人なんぢらの中なる凡の善事を知に因その信仰功效をなしキリストの榮光を顯はすに至らんこと也七 兄弟よ我なんぢの愛に由て大なる喜樂と安慰を得たり蓋聖徒等の心なんぢに由て安ぜられたれば也八 是に由て我キリストに在て憚る所なく爾に其作べき事を命ずることを得と雖も九 愛の故に因て寧ろ爾に求む我すでに年老いまキリスト・イエスの爲に囚人となれるパウロ此の如き状にて一〇 わが縲絏の中にて生し子なるオネシモの事を爾に求む一一 かれ先には爾に益なき者なりしが今は爾にも我にも益ある者となれり我かれを爾の所へ歸す一二 爾これを納よ彼は我が心なり一三 われ彼をして我所に留め我が福音の爲に受たる縲絏の中に爾に代て我に事しめんと欲へり一四 然ども我なんぢの肯はざる事は何をも行を好まず是なんぢが供給止を得ざるに出ずして心より出んことを望めば也一五 彼が暫く爾を離しは爾をして永遠かれを留おき一六 此後かれを僕の如くせず僕に超るもの愛する兄弟と作しむる爲に非ざりしを知んや我かれを殊に愛す況んや爾肉に由ても主に由ても之を愛せざる可んや一七 爾もし我を侶となさば請われを納る如く彼を納よ一八 彼もし爾に不義をなし又なんぢに負債あらば爾これを我に歸せよ一九 我パウロ親手これを書り我かならず償はん爾は身をもて償ふべき負債われに有されど我これを言ず二〇 兄弟よ我爾より益を主に由て得んことを望む爾わが心をキリストに由て息しめよ二一 われ爾が服ふことを深く信じて之を爾に書贈る爾の行ふ所は必ず我いふ所よりも勝らんことを知り二二 又なんぢ我ために寓所を備へよ蓋われ爾曹の祈禱に由て終に我身は爾曹に予られんと意へば也二三 イエス・キリストに在て我と偕に囚人となれるエパフラス爾の安を問二四 わが勤勞の侶なるマルコ、アリスタルコ、デマス、ルカも同く安を爾に問二五 願くは吾主イエス・キリストの恩惠つねに爾曹の靈と偕に在んことをアメン

希伯來書

第一章

一神昔は多の區別をなし多の方をもて預言者により列祖に告給ひしが二この末日には其子に託て我儕に告たまへり神は彼を立て萬物の嗣とし且かれを以て諸の世界を造りたり三彼は神の榮の光輝その質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持われらの罪の淨をなして上天に在す威光の右に坐しぬ四彼が受し名の天の使者の名よりも愈れる如く彼等よりは愈れり五そは天の使者の中なる誰に曾て如此いへる乎なんぢは我子なりわれ今日なんぢを生りと又われ彼の爲に父とならん彼は我ために子と作べしと六また冢子を世に入しむる時に曰給へるは神の諸の使者は皆これに跪くべし七また使者等に就ては彼その使者等を風となし其役るる者を火焰となすと曰り八その子に曰るは神よ爾の位は世々に及び爾の國の杖は正き杖なり九なんぢ義を愛し惡を惡む是故に神すなはち爾の神は喜樂の膏を以て爾の侶よりも愈りて爾に沃り一〇また曰く主よ爾元始に地の基を奠く天も爾が手の工なり一一此等は亡ん然ど爾は恒に存ん此等は凡て衣の如く舊びん一二爾これらを袍の如く捲む又彼等は變らん然ど爾は變ることなし爾の壽は終ざる也一三使者等の中なる誰に爾の敵を爾の足凳となすまで我右に坐すべしと曾て云給へること有しや一四凡て天の使者は救を嗣んとする者に事んため遣さるる靈に非ずや

第二章

一是故に我儕聞し所を流過ること莫らん爲にいよいよ篤く愼むべし二それ天使等に託て告給ひし言堅立して凡の違逆と不順とみな正き報を受たらんには三此の如き大なる救を我儕等閑にして何で逭ることを得んや斯は始め主に託て示されたるを聞し者ども我儕に言證たり四神も亦その聖旨に循ひて休徵と奇跡および萬殊の異能と分与ふる所の聖靈を以て彼等と偕に證せり五それ神は我儕が言ところの來らんとする世を天の使等には服はせざりき六或篇に人證して曰けるは人を誰として爾これを心に記るや人の子を誰として爾これを眷顧るや七爾かれを天の使等より少しく遜しむ彼に榮と尊貴を冠らせ又なんぢの手にて造りし者の上に之を立たり八なんぢ萬物を其足下に服せしむ既に萬物を之に服せしむれば必ず服せずして遺る物なし然ど今に至るまで我儕萬物の未だこれに服せしを見ず九惟われら天の使等より少く遜されし者即ち死の苦を受しに因て榮と尊貴を冠せられたるイエスを見たり其死たるは神の恩に因て衆の人に代り死を嘗へんが爲なり一〇是おほくの子を榮に導かんとて其を救ふ君をして苦難を以て成しむるは萬物の歸するところ萬物を造れる者に應ること也一一それ潔る者と潔らるる者と凡て一より出この故に彼等を兄弟と稱るを恥とし給

はずして二曰らく我なんぢの名を我が兄弟に示さん爾を教會の中に讃ん三 また曰く我かれに依頼ん又いはく我と神の我に予へし諸子を見よ四 それ諸子は偕に肉と血とを具れば彼も同く之を具ふ是死をもて死の權威を有るもの即ち惡魔を滅ぼし五 かつ死を畏て生涯つながるる者を放たん爲なり六 實に天の使等を助ずアブラハムの子孫を助く七 是故に神に屬る事について矜恤と忠義なる祭司の長となりて民の罪を贖はん爲に諸 事に於て兄弟の如なるは宜なり八 蓋かれ自ら誘はれて艱難を受たれば誘はるる者を助得るなり

第三章

一 是故に同く天の召を蒙りし潔き兄弟よ二 モーセが神の全家に忠義をせし如く己を立し者に忠義なる我儕が信ずる所の使徒たる祭司の長たるイエスを深く思べし三 そは家を建りし者の家より過て榮あるが如く彼もモーセよりは過て榮を受べき者とせられたり四 凡そ家は之を建れる者あり萬物を造れる者は神なり五 夫モーセは將來に言傳へられんとする事の證をせんが爲に僕 人の如く神の全家に於て忠義をなし六 キリストの子たる者の如く神の家を宰れり我儕もし信仰と望の喜とを終まで堅く保ば我等は其家なり七 是故に聖靈の云る如くせよ爾曹もし今日其聲を聽ば野に在て主を試みたる日その怒を惹し時の如く八 爾曹心を剛愎にする勿れ九 其處に於て爾曹の列祖吾を試み我をためし又四十年の間わが作爲を視たり一〇 是故に我その代の人を怒て彼等は常に心 惑りと曰り然ど我道を知ざりき一一 故に我憤りて彼等は我が安息に入べからずと誓たり一二 兄弟よ爾曹が中に不信仰なる惡き心を懷て活神の前より離れ墮ること莫らんやう愼むべし一三 爾曹のうち誰一人罪の誘惑に由て剛愎にならざるやう今日と稱るうちに日々互に相勸めよ一四 そは我儕もし始の信仰を終まで堅く持ばキリストに與る者とならん一五 夫いへることあり若し今日その聲を聽ば怒を惹し時のごとく爾曹の心を剛愎にする勿れ一六 聞てなほ怒を惹し者は誰ぞやモーセに從ひてエジプトより出たる衆の者に非ずや一七 神は四十年のあひだ誰に向て怒しや罪を犯して其 屍を野に仆し者どもに怒れるならず乎一八 又その安息に入べからずと誰に向て誓しや信仰せざりし者等に誓るならず乎一九 是に由て觀ば彼等が入ことを得ざりしは不信に由てなり

第四章

一 是故に我等畏るべし其安息にいる約束は今も尚のこれども恐くは亦爾曹のうち之に及ざるものあらん二 蓋われらも彼等が如く福音を宣傳られたり惟かれらが聞し所の言はその信仰 劑ざりしが故に聞る者に益なかりき三 信ずる所の我儕は安息に入ことを得なり即ち言給ひたるが如し我怒れるとき誓て彼は我が安息に入べからずと云り然ども地 基を奠し時より其工はみな

成り四そは或篇に七日について左の如く云り神は第七日に凡て其工を息めりと五又この篇に彼等は我が安息に入べからずと云り六然ば之に入べき者なり先に福音を傳られたる者は信ぜざるに由て入ざりし也七是故に多年を經て後またダビデの書に於て日を定て今日と云り前に云し如く今日もし其聲を聽ば爾曹心を剛愎にする勿れ八若ヨシュア彼等を息せなば其のち神は他の日を言ざるべし九然ば安息は神の民に遺れり一〇既に安息に入し者は神おのれの工を安息し如く彼も其工を息めり一一是故に彼等の如き不信仰に傚ひて陷ざるやう我儕この安息に入んことを黽勉べし一二それ神の言は活てかつ能あり兩刃の劍よりも利く氣と魂また筋節骨髓まで刺し剖ち心の念と志意を鑒察ものなり一三また物として神の前に顯れざるなし我儕が係れる者の眼の前に凡のもの裸にて露る

一四然ば我儕に雲霄を通りて昇りし大なる祭司の長すなはち神の子イエスあり故に我儕信ずる所の教を固く持つべし一五蓋われらが荏弱を體恤こと能ざる祭司の長は我儕に非ず彼は凡の事に我儕の如く誘はれたれど罪を犯さざりき一六是故に我儕恤をうけ機に合ふ助となる恩惠を受ん爲に憚らずして恩寵の座に來るべし

第五章

一人の中より選る諸の祭司の長は人のために神に屬ことを任ぜられて罪の供物と犧牲を献ることをする者なり二己みづから荏弱に周るれば亦愚昧なる迷へる者を憐むことを得なり三是に因て民の爲になす如く己が爲にも罪の禮物を献ざるを得ず四此尊貴はアロンの如く神の召を受たる者に非れば自ら之を取者なし五此の如くキリストも自ら尊びて祭司の長とは爲ざりき爾は我子也我今日爾を生りと言し者彼を尊びて然なせり六又別の篇に爾は窮なくメルキセデクの班の如き祭司たりと云給へるが如し七かれ肉體に在しとき哀哭び涕を流して死より己を救得る者に祈りまた懇求をなし其敬畏によりて聽るることを得たり八かれ子たれども受る所の苦難に由て順ふことを效ひ九既に完全ければ凡て彼に順ふ者の永救の原となれり一〇彼はメルキセデクの班の如き祭司の長なりと神に稱られき

一一此に就て我儕多の語るべき言あれど爾曹が耳にぶきに因て講明がたし一二既に爾曹は時を經こと久しければ人の師となるべき者なるに今又神の示し給へる教の端を教られざるを得ず爾曹は堅き食物ならで乳を用べき者となれり一三凡そ乳を用る者は赤子なれば義に屬る教に熟せず一四夫かたき食物は心を勞かせ練て善惡を辨へうる成人の用るもの也

第六章

一是故に我儕キリストの教の始を離れ死行の悔改め神に屬る信仰二萬殊の洗の禮また手を按こと死し人の復生かぎりなき

審判これらの教の基は再び置ことをせずして完全に進むべし三 もし神許し給はば我儕これを行ん四 そは一び光照をえ天の賜をうけ聖靈を蒙り五 神の善言と來世の機能とを嘗ひて後六 墮落する者は神の子を再び十字架に釘て顯辱とするが故に復これを悔改に立返らすること能はざる也七 それ地しばしば其上に降る雨を吸入て耕者の爲になるべき菜蔬を生ぜば神より恩を受八 然ど荊棘と蒺藜を生ぜば棄られ且詛に近く其終は焚るべし九 愛する者よ我儕如此いへど爾曹が此に愈れること即ち救に近ことを深く信ぜり一〇 神は爾曹が先に聖徒に事へ今も尚これに事るその功勞と聖名の爲に顯し其愛を忘るる不義なる者に非ず一一 爾曹おのおの終に至るまで疑を懷かざる望を保んが爲に以前と同じ殷懃を表し怠らずして一二 かの信仰と忍耐を以て約束を嗣る者に倣んことを我儕欲へり一三 それ神はアブラハムに約束し給しとき己より大なる者の指て誓ふべきなきが故に己を指て誓一四 曰給けるは我なんぢを大に惠まん又なんぢの子孫を大に益ん一五 かれ忍て此の如く約束のものを得たり一六 凡そ人は己より優たる者を指て誓ふまた事を定る誓は凡て彼等の爭辨を止るなり一七 然ば神は約束を嗣者に其旨の易らざることを愈 表さんとして約束の上にまた誓を立給へり一八 神の誑ること能ざる此二件の易なきことは前に立ところの望を執んとて怒を避たる我儕を慰めんが爲なり一九 我儕が此望は靈魂の錨の如し堅固して動かず幔の内に入二〇 我儕の爲にイエス前驅して其處に入メルキセデクの班の如く窮なく祭司の長となれり

第七章

一 此メルキセデクはサレムの王にて至高き神の祭司なりしがアブラハム王等を殺して旋しとき彼アブラハムを迎て祝せり二 アブラハム之に凡て所獲の十分の一を分たり先その名を譯ば義の王次にサレムの王と云これ即ち平康の王なり三 彼は父なく母なく族譜なく生の始なく亦終もなし神の子に象られて恒に祭司たりき四 先祖アブラハム所獲の最も善物の十分の一を以て彼に予れば其人の如何に尊かを思ふべし五 レビの子孫のうち祭司の職を受る者は律法に循て民即ち其兄弟より十分の一を取ことを命ぜらる彼等はアブラハムの腰より出たる者と雖もなほ然なせり六 されど此血脈に非ずして彼はアブラハムより十分の一を取て其約束を有てる者を祝せり七 劣れる者の優れる者に祝さるるは論なきこと也八 此なる十分の一を受る者は死べき者彼なるは活る者なりと證せられたり九 また十分の一を受る所のレビもアブラハムによりて十分の一を輸たりと言べし一〇 蓋メルキセデクが彼に遇るときレビも其父の腰に在ばなり一一 民はレビの裔なる祭司の職に本きて律法を受たり若この職に頼て完全ことあらば何ぞ別にアロンの班と稱ざるメルキセデクの班の如き祭司の起ることを求めん乎一二 既に祭司の統かはる時は律法も亦必ず易るべし一三 此等の事は祭壇に役たる者なき支派

に屬る者を指て言り一四我儕が主のユダより出し事は明かなりモーセこの支派に就て祭司の職のことは何をも言ざりき一五既にメルキセデクの如き他の祭司起たれば律法の易ることも愈明らけし一六彼は肉體に係る律法の例に循ひて立ず朽ざる生命の能に循ひて立り一七蓋メルキセデクの班の如く爾は窮なく祭司たりきと證せられたれば也一八それ律法は何事をも全うせし所なし一九是故に前の法度はその荏弱と益なきを以て廢せられ更に愈れる善望を立られたり我儕この望に因て神に近くことを得なり二〇二一二二かの人々は誓なくして祭司となれど彼は誓を以て祭司となれり是主かはりなき誓を立て爾はメルキセデクの班のごとく窮なく祭司たりと語れる者による是の如くイエスは誓に非ざれば祭司とならざるほど尤も善契約の保証人となれり二三彼等は死あるに因て永く存こと能はず故に祭司となりたる者多りき二四然どイエスは窮なく存が故に易ことなき祭司の職を有り二五是故に彼は己に頼て神に就る者の爲に懇求んとて恒に生れば彼等を全く救ひ得なり二六是の如き祭司の長は我儕に當れる者なり彼は聖潔して不善ことなく纖垢なくして罪人に遠かれり且天よりも高し二七又かの祭司の長等の如く先おのれの罪のち民の罪の爲に日ごと犧牲を獻べき由なし蓋すでに一次おのれを獻て之を成ばなり二八それ律法は弱き人を立て祭司の長となせり然ど律法の後の誓の言は窮なく全き子を立たり

第八章

一我いへる所の肝要は是の如き祭司の長の我儕に在ことなり彼は天に於て大なる威光ある者の位の右に坐して二聖所に役ふ即ち人の建る所に非ず主の建たまへる所の眞の幕屋なり三諸の祭司の長の立られたるは禮物と犧牲を獻る爲なるが故に彼も亦かならず獻る所の物あるべし四彼もし地に居ば祭司と爲べからず蓋すでに律法に循ひて禮物を獻る祭司あれば也五彼等が事る所は天にある者の狀と影となりモーセ幕屋を造らんとせし時に爾愼て凡の事をなすには山に於て我なんぢに示しし所の式に遵ふべしと示されたりし如し六然ど今かれは愈れる約束に基きて立られたる契約の中保となる是の如く彼は勝れたる職を得たり七そは初の契約もし虧ることなくば後の契約を立ることを索めじ八その虧る所を彼等に示して曰く主いひ給ひけるは我イスラエルの家とユダの家に新約を立て全備するの日來らん九この約は我手を執て彼等の先祖をエジプトの地より導き出せる日に立し所の如きに非ず蓋かれら我が契約に居ず我また彼等を顧ざりしが故なりと主いひ給ひたり一〇また主いひ給ひけるは其日の後われイスラエルの家に立んとする契約は此なりわれは我が律法をその念に置また其心に銘さん我かれらの神となり彼等我が民と爲べし一一各人その邦人と其兄弟に教て爾主を識と復いはじ蓋小より大に至るまで悉く我を識ん一二われ彼等の不義を恤み其罪と惡とをまた意に記ざれば也一三かれ既に新と

謂しは初の物を舊とする也それ舊て衰る物は殆んど消廢んとす

第九章

一 初の契約には祭の禮儀と世に屬る聖殿とあり二 設たる前の幕屋を聖所と稱く内に燈臺と案と供のパンあり三 又第二の幔の後の幕屋を至聖所と稱く四 ここに金の香鑪と徧く金を蔽ひし契約の櫃あり此中にマナを聚めたる金の壺とアロンの芽しし杖と二の契約の碑あり五 上には贖罪所を覆へる耀榮のケルビンあり今これらに就て詳かに言ず六 此の如く此等のもの既に備はり祭司等は常に前の幕屋に入て祭を行り七 奥なる幕屋は祭司の長のみ年に一次いれど血を携ずしては入ことなし是おのれと民の愆の爲に獻るなり八 聖靈これを以て前の幕屋のなほ在りし時は至聖所に入べき路の顯れざりし事を示す九 この幕屋は當時のために設られたる表式なり之に循ひて獻たる禮物と犧牲はその奉事る者の良心を全うすること能はざりき一〇 これらはただ肉體に屬る儀文にして食もの飲もの及さまざまの洗滌と共に振興らん時まで負せられたる耳一一 今キリスト既に至れり彼は來らんとする嘉事の祭司の長にして手にて造れる幕屋すなはち此世に屬る所の者ならぬ愈りたる大なる全き幕屋により一二 羊犢の血を用ず己が血をもて一たび聖所に入て永遠贖をなすことを得たり一三 もし汚穢に灑て牛および羊の血また焚る牝犢の灰など肉體の潔むることを得ば一四 況て永遠靈により瑕なくして己を神に獻しキリストの血は爾曹に活神を奉事せんがため死の行を去しめて其心を潔ることを爲ざらん乎一五 是故に彼は新約の中保となれり是はじめの契約の時に犯せる罪を贖ふべき死あるに由て召れたる者の窮なき世嗣の約束を得んが爲なり一六 凡そ遺書あるときは必ず之を録し者の死たることを顯さざるを得ず一七 それ遺書は之を録せる者の活る時は少の力あること無その人死てのち堅うなる也一八 是故に初の契約も血なくしては立ざりき一九 モーセ律法に遵ひて諸の誡を衆の民につげ犢と羊の血および水を取て絳の毛と牛膝草をもて書と衆の民に灑て云二〇 これ神の爾曹に命じ給へる契約の血なり二一 また此の如く血をもて幕屋と凡の祭器に灑り二二 凡そ律法に循に諸の物は血を以て潔らる血を流すと有ざれば赦さるる事なし二三 是故に天に在ものに象りたる物は必ず此等をもて潔られしかど天に在ものは此等よりも愈りたる犧牲を以て潔らるべき也二四 キリストは眞の物の模なる手にて造る聖所に入ず今より永く我儕の爲に神の前に顯れんとて眞實の天に入ぬ二五 また彼は祭司の長の年ごとに他の物の血をもて聖所に入如く屢おのれを獻ることをせず二六 もし然ずば彼創世より以來しばしば苦難を受べきなり然ど己を犧牲となして罪を除かんが爲に今世の季にひとたび顯現たり二七 一たび死ることと死て審判を受ることとは人に定れる事也二八 如此キリストも多の人の罪を負んが爲に一たび犧牲とせらる彼は復罪を負ことなく己を望む者に再び

顯現て救を施すべし

第一〇章

一律法は來らんとする善事の影にして實の形に非ざれば年ごとに斷ず獻る所の祭物を以て神に來る者を恒に成全すること能はず二もし成全することを得ば獻祭者一たび潔られ復罪を覺えざるが故に獻ることを止ざらん乎三然ど年ごとに此祭をなすに因て罪を憶ること現はるる也四これ牛と羊の血は罪を除くこと能ざるに因五是故に彼世に臨るとき曰けるは爾犧牲と禮物を欲まず唯わが爲に肉體を備ふ六なんぢ燔祭と罪祭を悦ばず七厥時われ曰けるは神よ我なんぢの旨を行はんとて來る即ち我について書に録されたり八先には犧牲と禮物と燔祭と罪祭すなはち律法に循ひて獻るものを欲まず又悦ばずと言九後には神よ我なんぢの旨を行はんとて來れりと言その後なる者を立ん爲に其先なる者を除けり一〇この旨に適て我儕は潔らる此はイエス・キリストの一次おのが肉體を獻しに因てなり一一諸の祭司は日ごとに立て奉事をなし少か罪を除こと能はざる同じ犧牲を屡々獻ぐ一二然ど此人は一次罪の爲に一の犧牲を獻て窮なく神の右に坐し一三その敵を足凳となさん時を俟り一四蓋かれ一の獻物を以て潔る者を永遠全成すれば也一五聖靈また我儕に之を證す蓋この日の後われ彼等と立んとする契約は此なりと云る後に一六主いひ給はく我が律法を其心に置その衷に銘し一七復その罪と惡とを我が意に記じと有がゆゑ也一八既に此等の赦あらんには復罪のために獻ること無るべし一九是故に兄弟よ我儕イエスの血に由て其我儕の爲に開たる新しき生路より幔なる其肉體を過り憚らずして至聖所に入事を得二〇かつ神の家を理る二一大なる祭司あれば二二我儕誠實の心と疑を懷かざる信仰を保ち心の惡念を灑れ清水をもて身を洗れて近くべく二三又認はす所の望を動さずして固く守るべし蓋約束せし者は誠信なれば也二四われら互に顧みて愛心と善行を激勵し二五會集を輟る或人に倣ふことなく共に相勸め其日いよいよ近るを見て益此の如くなすべし二六若われら眞理を曉得せられし後なほ放縱に罪を犯さば罪を贖ふ犧牲また有ことなく二七惟おそれて審判を待ことと仇敵を焚滅さんとする烈火のみ遺るなり二八モーセの律法を廢る者もし二三人の證あらば恤まるること無して死べし二九況て神の子を蹂躙みづから潔られし契約の血を尋常のものとなし又恩を施す靈を侮る者の受べき其罰の重こと幾何と意ふや三〇主いはく仇を報るは我にあり我報べし又いはく主その民を鞫かん如此いへる者を我儕は知三一活神の手に陷るは畏るべき事なり三二なんぢら昔し光照を受しのち大なる苦の戰爭を忍たりし日を憶起べし三三或は詬誶と艱辛をうけ人に觀玩の如くせられ或は斯る事にあふ者に與ることを爲り三四そは爾曹わが縲絏に在を體恤また己がために天に於て愈美たる常に存つべき業あるを知り人の爾曹が業を奪んとするをも喜びて受たり三五是

故に爾曹の大なる報を受べき信仰を投棄ること勿れ三六なんぢら必ず用べきものは忍耐なり是神の旨を行ひて約束の者を受んが爲なり三七今片時ありて來る者きたらん必ず遲らじ三八義人は信仰に由て生べし若し退かば我が靈魂これを喜とせじ三九然ど我儕退きて沈淪に及ぶべき者に非ず信じて靈魂の救を受べき者なり

第一一章

一それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據とするもの也二古の人これに由て美稱を得たり三われら信仰に由て諸の世界は神の言にて造れ如此みゆる所のものは見べき物に由て造れざることを知四信仰に由てアベルはカインより愈れる祭物を神に獻て義者と證せられたり蓋神その禮物について證し給へば也かれ死れども信仰に由て今なほ言へり五信仰に由てエノクは死ざるやうに移されたり神これを移ししに因て人見出すことを得ざりき彼いまだ移されざる先に神に悦ばるる者と證せられし也六信仰なくば神を悦ばすこと能はず蓋神に來る者は神あるを信じ且神は必ず己を求る者に報賞を賜ふ者なるを信ずべければ也七信仰に由てノアは未だ見ざる事の示を蒙り敬みて其家族を救ん爲に舟を設けたり之に由て世の人の罪を定めまた信仰に由る義を受べき嗣子となれり八信仰に由てアブラハムはその承繼べき地に往との命を蒙り之に遵ひその往ところを知ずして出たり九彼また信仰に由て異邦に在が如く約束の地に寓り同じ約束を相嗣るイサク、ヤコブと共に幕屋に居り一〇そは神の造營める所の基ある京城を望めば也一一信仰に由てサラも孕を寓さるる力をうけ年邁しかども子を生り是約束せし者は誠信なりとしつれば也一二是故に死たる者の如き一人より天の星の多と海邊の砂の數へ難きが如く生出たり一三此等は皆信仰を懷きて死り未だ約束の者を受ざりしが遙かに之を望て喜び地に在て自ら賓旅なり寄寓者なりと言り一四如此いふ者は家郷を尋る事を表す也一五彼等もしその出し地を念はば歸るべきの機ありしなるべし一六然ど彼等は更に愈れる所すなはち天に在ところを慕へり是故に神は其神と稱ることを恥とせざりき蓋かれらの爲に京城を備へ給ふれば也一七信仰に由てアブラハムは試られし時イサクを獻たり彼は約束を受し者なるが其獨子を獻たり一八此子に就ては爾の子孫イサクに由て稱らるべしと云れたりき一九彼おもへらく神は死より之を復活し得ると即ち死より彼を受しが如なりき二〇信仰に由てイサクは來らんとする事に就てヤコブとエサウを祝せり二一信仰に由てヤコブは死んとする時にヨセフの二人の子を祝し又その杖の頭に扶て崇拜をなせり二二信仰に由てヨセフは死んとする時にイスラエルの子孫のエジプトより出る事について語り又おのが骸骨の事に就て命じたり二三信仰に由て父母はモーセの生れたる時その美都き子なるを見て三月の間これを匿し又王の命をも畏ざりき二四信仰に由てモー

セは成長し時パロの女の子と稱るるを辭たり[二五] 暫く罪の樂を享んよりは寧ろ神の民と共に苦難を受んことを善とし[二六] キリストの爲に受る詬誶はエジプトの貨財よりも賓貴と意へり蓋報賞を認て望ばなり[二七] 信仰に由て彼はエジプトを離れ王の怒を畏れざりき是見ざる者を見が如く耐忍べば也[二八] 信仰に由て彼は逾越節と血を灌ぐ禮を守れり蓋長子を滅す者の彼等に抵ざらんが爲なり[二九] 信仰に由て彼等は紅海を陸の如く渉しがエジプトの人は之を渉らんとして溺れ死たり[三〇] 信仰に由て七日の間エリコの城を環巡たるに遂にその石垣くづれたり[三一] 信仰に由て妓婦のラハブは信ぜざる者と共に亡ざりき蓋偵者を接て之を平安ならしめたれば也[三二] われ更に何を言んや若ギデオン、バラク竝サムソン、イピタ、ダビデ竝サムエル及び預言者等の事を言んには時足ざる也[三三] かれら信仰に由て諸國を服し義を行ひ約束の者をえ獅の口を箝み[三四] 火勢を滅し劍の刃を避れ荏弱よりして剛強せられ戰爭に於て勇しく異邦人の陣を退かせたり[三五] 婦も亦死たる者の復活を受しことあり亦ある人は最も愈れる復生を得べき爲に酷刑られて免るることを欲まざりき[三六]また或人は嬉笑をうけ鞭扑れ縲絏と囹圄の苦を受[三七] 石にて擊れ鋸にてひかれ火にて焚れ刃で殺され棉羊と山羊の皮を衣て經あるき窮乏して艱苦めり[三八] 世は彼等を居に堪ず彼等は曠野と山と地の洞と穴とに周流たり[三九] 彼等は皆信仰に由て美名を得たれども約束の所を得ざりき[四〇] そは彼等も我儕と偕ならざれば成全すること能はざる爲に更に愈れる者を神預じめ我儕に備へ給へり

第一二章

一 是故に我儕かく許多の見證人に雲の如く圍れたれば諸の重負と縈る罪を除き耐忍びて我儕の前に置れたる馳場を趨り[二] イエス即ち信仰の先導となりて之を成全する者を望むべし彼は其前に置ところの喜樂に因てその恥をも厭はず十字架を忍びて神の寶座の右に坐しぬ[三] なんぢら倦疲れて心を喪ふこと莫らん爲に惡人の如此おのれに逆ひしをも忍たる者を思ふべし[四] なんぢら惡を爭ひ拒て未だ血を流に至らず[五] また子に告るが如く告給ひし言を爾曹忘れたり曰く我子よ爾主の懲治を輕ずる勿れ其譴責を受るとき心を喪ふ勿れ[六] そは主その愛する者を懲め又すべて其納る所の子を鞭てり[七] なんぢら若この懲治を忍ばば神は子の如く爾曹を待ひ給ふなり誰か父の懲めざる子あらん乎[八] 衆の人の受る懲治もし爾曹に無ばそは私子にして實子に非ず[九] 又我儕の肉體の父は我儕を懲めし者なるに尚これを敬へり況て靈魂の父に服ひて生を得ざるべけん乎[一〇] 肉體の父は其心に任せて暫く我儕を懲む然ど靈の父は我儕に益を得しめて其聖潔に與らせんがため懲むることを爲[一一] 凡の懲治今は悅しからず反て悲と意はる然ど後之に由て鍛錬する者には義の平康なる果を結ばせり[一二] 是故に爾曹疲たる手弱たる膝を健にせよ[一三] 足蹇た

る者の迷ふことなく痊されんが爲爾曹の足に平直なる徑を備ふべし一四 爾曹衆の人と和睦ことをなし自ら潔らんことを務めよ人もし潔らずば主に見ゆることを得ざるなり一五 爾曹愼めよ恐らくは神の恩寵に及ばざるものあらん恐くは苦根生いでて爾曹を擾さん且多くの人之に因て汚るべし一六 恐くはエサウの如く淫を行ひ妄なる事をなす者あらん彼は一飯のために長子の業を鬻り一七 其のち祝ふ所の福を嗣んことを求たれども終に棄られ涙を流して志を挽回さんとせしが得こと能はざりしは爾曹の知ところ也

一八 爾曹の近ける所は捫るべき山に非ず或は燄たる火あるひは密雲あるひは黒暗あるひは暴風一九 あるひは箛の音あるひは言語の聲にも非ず此聲を聞し者は再び言をもて語給はざることを求へり二〇 そは獸さへ若し山に觸なば石にて撃るべしと命ぜられしを彼等忍ぶこと能はざりし故なり二一 その見しところ極て畏しかりければモーセも我甚く恐懼戰慄りと曰り二二 然ど爾曹の近ける所はシオンの山また活神の城なる天のエルサレムまた千萬の衆すなはち天使の聚集二三 天に録されたる長子どもの教會また衆の人を鞫く神および成全せられたる義人の靈魂二四 新約の中保なるイエス及び濯ぐ所の血なり此血の言ところはアベルの血のいふ所よりは尤も愈れり二五 愼みて告る所の者は拒む勿れ若し地にて示せる者を拒し彼等免かるる事なかりしならば況て我儕天より示せる者を拒て免るることを得んや二六 昔は其聲地を震へり今は彼つげて曰く我また一次地のみならず天をも震はん二七 この再一次と言るは震るべき者の棄られんことを示す此等の造られたるは震はれざる者の存んため也二八 是故に我儕震れざる國を得たれば恩に感じて虔み敬ひ神の意旨に合ふ所をもて之に事ふべし二九 夫われらの神は燬盡す火なり

第一三章

一 なんぢら恒に兄弟の相愛する心を存べし二 遠人を接待事を忘るる勿れ或人かく行たれば知ずして天使を接待せり三 己どもに囚るるが如く囚者を念へ爾曹も亦身に在が故に苦む者を念ふべし四 なんぢら婚姻の事を凡て貴め又牀をも汚すこと勿れ神は苟合また奸淫する者を審判たまはん五 なんぢら世を過るに貪ることをせず有ところを以て足りとせよ蓋われ爾を去ず更に爾を棄じと云給ひたれば也六 然ば我儕毅然して曰べし主われを助る者なれば畏なし人われに何をか行んと七 神の道を爾曹に教へ爾曹を導く者を念へ其行の果を觀てその信仰に效ふべし八 イエス・キリストは昨日も今日も永遠變らざる也九 萬殊なる教と異なる教に搖蕩さるる事勿れ恩に由て心を堅固せられ飲食に由ざるは善し飲食に由て行ひたる者は益する所なかりき。一〇 我儕に祭壇あり此上の物を幕屋に事る人は食ふことを得ざる也二 祭司の長罪を贖はんが爲に獸の血を携へて聖所に入その

獸の體を營外にて焚り一一是故にイエスも己の血をもて民を潔んが爲に門の外に苦を受しなり一三然ば我儕も彼の詬誶を負て營外に出かれに往べし一四我儕ここに在て恒に存つべき城邑なし惟きたらんとする城邑を求む一五是故に我儕かれら由て恒に讚美の祭を神に獻べし即ち其名を頌る唇の果なり一六然どまた善を行と施捨を行ことを忘るる勿れ此の如き祭は神これを悦べば也一七爾曹を導く者に循ひて服すべし彼等は己が事を神の前に訴ふべき者なるが故に爾曹の靈魂のために守ることを爲ばなり彼等を歎せず歡びて守ることを爲しむべし然ざれば爾曹に益なし一八なんぢら我儕のために祈禱せよ我儕よき心ありて凡の事に善行をなさんと爲ことを信ずれば也一九われ尚も速に爾曹に歸ることを得んが爲に爾曹の祈んことを更に求む二〇願くは窮なき契約の血に由て羊の大牧者なる我儕の主イエス・キリストを死より甦らしし平安の神二一イエス・キリストに由て其悦ぶ所を爾曹の心の中に起し又爾曹をして其旨を行はせんが爲に凡の善事に於て爾曹を全うせしむべし榮光かれに歸して世々曁なからんアメン

二二兄弟よ今われ爾曹に略かき贈りたれば我が勸の言を容んことを請二三我儕が兄弟テモテの釋されし事を爾曹知べし彼もし速かに來らば我かれと偕に爾曹を見ん二四請すべて爾曹を導く者および諸の聖徒に安を問イタリヤより來り者も安を爾曹に問り二五願くは恩寵なんぢら衆の人と偕に在んことをアメン

雅各書

第一章

一 神および主イエス・キリストの僕ヤコブ各處に散をる十二の支派に安を問 二 わが兄弟よ若なんぢら各様の試誘に遇ば之を喜ぶべき事とすべし 三 蓋なんぢらの受る信仰の試みは爾曹をして忍耐を生ぜしむると知ばなり 四 なんぢら全く且備りて缺る所なからん爲に忍耐をして全く働かしめよ 五 爾曹の中もし智慧足ざる者あらば夫の咎ることなく惜ことなくして衆人に予る神に求めよ然ば予られん 六 然ど疑ふことなく信じて之を求むべし疑ふ者は風に撼されて飜へる海浪の如し 七 斯の如き人は主より何物をも受ると想ふ勿れ 八 斯の如き人は貳心にして其行ふ所の事すべて定準なし 九 卑き兄弟は其高せらるる事を喜樂とせよ 一〇 富る物は其卑せらるる事を喜樂とせよ蓋草の花の如く逝べければ也 一一 それ日出て熱し草を枯せば其花おち其美しき容きゆ富る者も亦かくの如く其爲ところ半にして己まづ亡ん 一二 忍て試誘を受る者は福なり蓋こころみを經て善とせらるる時は生命の冕を受べければ也この冕は主己を愛する者に約束し給ひし所のもの也 一三 誘るる者は神われを惡に誘ふと言なかれ神は惡に誘れず亦人をも惡に誘ひ給はず 一四 人惡に誘るるは己の慾に引れて誘はるる也 一五 慾すでに孕て罪をうみ罪すでに成て死を生 一六 わが愛する兄弟よ自ら欺く勿れ 一七 凡の善賜と全き賜はみな上より諸の光明の父より降るなり父は變ること無また轉動て顯るる影もなき者なり 一八 われ己の旨に循ひ眞道を以て我儕を生り是我儕をして其造る所の物の中にて初に結べる果の如き者とならしめん爲なり

一九 是故に我が愛する兄弟よ人おのおの聽ことを速かにし語ることを徐し怒ことを徐すべし 二〇 そは人の怒は神の義を行ふ事をせざれば也 二一 然ば諸の汚穢と多の邪惡をすて柔和を以て爾曹その心に殖たる所の靈魂を救得る道を受べし 二二 なんぢら道を行ふ者となるべし徒これを聞のみにして自己を欺く者となる勿れ 二三 それ道を聞のみにして之を行はざる者は鏡に向て本來の面をみる人に似たり 二四 かれ己を照し觀て去のち直に其如何なる相貌なりしかを忘る 二五 然ば自由なる全き律法を切々に觀て離れざる者は是功を行ふ者にして聞て忘るる者に非ず斯人その行ふところ福あらん 二六 爾曹のうち誰か若みづから神に事る者と意ひて其舌に轡をつけず自ら其心を欺かば其事ることは徒然なり 二七 神なる父の前に潔して穢なく事ることは孤子と寡婦を其患難の中に眷顧また自ら守て世に汚れざる是なり

第二章

一 わが兄弟よ爾曹榮の主イエス・キリストの信仰の道を守らんには人を偏視ること勿れ 二 もし人金環をはめ美しき衣服を着て爾曹の會堂に來り又貧き人汚たる衣服を着て來らんに 三 な

んぢら美しき衣服を着たる人を顧みて爾この榮位に坐れと曰また貧者に爾彼處に立といひ或は我が足下に坐れと曰ば四爾曹は各人のうち區別を立また惡念を以て人を分ものに非ずや五我が愛する兄弟よ聽け神は斯世の貧者を選て信仰に富せ己を愛する者に約束し給ひし所の國を嗣べき者とならしめ給ふに非ずや六然るに爾曹貧者を藐視たり爾曹を陵辱また裁判所に曳ものは富者に非ずや七彼等は爾曹が稱らるる所の美名を讀す者に非ずや八爾曹もし聖書に載る所の己の如く爾の隣を愛すべしと云る貴き法を守らば其行ふところ善九然ど若し人を偏視ることをせば是罪を行ふなり律法爾曹を定めて罪人とせん一〇人律法を悉く守るとも若その一に蹪かば此全を犯すなり一一それ姦淫する勿れと言る者また殺すこと勿れと言ば爾曹姦淫せずとも若し殺すことをせば律法を犯す者となる也一二なんぢら言ること行ふこと自由の律法に循て鞫を受んとする者の如くすべし一三憐むことをせざる者は鞫かるる時また憐まるること無らん矜恤は鞫に勝なり

一四わが兄弟よ人自ら信仰ありと言て若し行なくば何の益あらん乎その信仰いかで彼を救ひ得んや一五もし兄弟あるひは姉妹裸躰にて日用の糧に乏からんに一六爾曹のうち或人これに曰て安然にして行け願くは爾曹温かにして飽ことを得よと而して其身體に無てならぬ物を之に予ずば何の益あらん乎一七此の如く信仰もし行を兼ざるときは乃ち死るなり一八或人いはん爾信仰あり我行あり請なんぢが行を兼ざる信仰を我に示せ我は我が行に由て我が信仰を爾に示さんと一九なんぢ神は惟一なりと信ず如此信ずるは善し惡鬼も亦信じて戰慄り二〇ああ愚なる人よ行を兼ざる信仰の死ることを爾知んと欲ふや二一我儕の先祖アブラハムその子イサクを壇の上に獻て義とせられたるは行に由に非ずや二二その信仰行と共に働き且行に由て信仰全備を得たるを爾見べし二三これ聖書に録してアブラハム神を信ず其信仰を義とせられたりと有に應へり彼また神の友と稱れたり二四なんぢら人の義とせらるるは信仰にのみ由に非ず行に由ことを知なるべし二五また妓婦ラハブ使者を受これを他の途より去しめて義とせられたるは行に由に非ずや二六身もし靈魂はなるれば死るごとく信仰も行ひ離れば死るなり

第三章

一わが兄弟よ爾曹多く師となる可らず蓋われら師たる者の審判を受ると尤も重と知ばなり二われらは皆しばしば愆を爲る者なり人もし言に愆なくば是全人にして全體に轡を置得るなり三夫われら馬を己に馴はせんとして其口に轡を置ときは其全體を馭すべし四舟も亦その形は大く且狂風に追るるとも小舵を以て舵子の意の隨に之を運すなり五此の如く舌も亦小ものにして誇ること大なり視よ微火いかに大なる林を燃すを六舌は即ち火すなはち惡の世界なり舌は百體の中に備りありて全體を

汚し又全世界を燃すなり舌の火は地獄より燃出七その各類の獣禽昆蟲海に在もの皆制を受また既に人に制せられたり八然ど人たれも舌を制し能はず乃ち抑がたき惡にして死毒の充るもの也九我儕これを以て主なる父を祝また之をもて神の形に像りて造られたる人を詛ふ一〇祝と詛一の口より出わが兄弟よ此の如き事は有べきに非ず一一泉の源は一穴より甘水と苦水を並に出さん乎一二わが兄弟よ無花果の樹橄欖の果を結び或は葡萄の樹無花果の果を結ぶことを得んや斯の如く泉の源鹹水と淡水を並に出すこと能はず一三爾曹のうち智くして聰明ものは誰なるや柔和なる智慧を以て善行を彰すべし一四然ど若なんぢら心の中に苦嫉と忿争を懐かば是眞理に背なり眞理に背て誇る勿れ又誑る勿れ一五斯る智慧は上より下るに非ず地に屬るもの情慾に屬るもの惡魔に屬るもの也一六そは媢嫉と忿争ある所には亂と諸般の惡事とあれば也一七然ど上よりの智慧は第一に潔く次に平和寛容柔順かつ矜恤と善果みち人を偏視ず亦僞なきもの也一八義の果は平和を行ふ者の平和を以て種に由て結ぶなり

第四章

一爾曹の中の戰鬭と争競は何より來しや爾曹の百體の中に戰ふ所の慾より來しに非ずや二爾曹貪れども得ず殺ことをし嫉ことを爲ども得こと能はず爾曹争競と戰鬭せり爾曹は求ざるに因て得ざる也三なんぢら求てなほ得ざるは爾曹慾のために費さんとして妄に求るが故なり四姦淫を行ふ男女よ爾曹世を友とするは神に敵するなるを知ざらんや世の友とならん事を欲ふ者は神の敵なり五聖書に神の我儕の衷に住しめ給ふ靈熱心を以て我儕を愛むと言るを爾曹虚きことと意ふや六神更に大なる恩惠を予ふ此に由ていふ神は驕傲者を拒ぎ謙卑者に恩を予ふと七是故に爾曹神に服へ惡魔を拒げ然ばかれ爾曹を逃去ん八なんぢら神に近け然ば神なんぢらに近き給はん罪人よ爾曹の手を淨せよ二心の者よ爾曹の心を潔くせよ九なんぢら苦め哀め哭なんぢらの笑を哀哭に易よ爾曹の歡樂を憂に易よ一〇自己を主の前に卑せよ然ば主なんぢらを高せん一一兄弟よ互に謗る勿れ兄弟を謗或は兄弟を議する者は律法を謗り律法を議するなり爾もし律法を議せば律法を行ふ者に非ず律法を議する者なり一二律法をたて人を議する者は惟一なり彼は救ふこと滅すことを爲得る也なんぢ誰なれば隣を議する乎一三われら今日明日某の邑にゆき彼處に一年とどまり賣買して利を得んといふ者よ一四なんぢら明日の事を知ず爾曹の生命は何ぞ暫く現れて遂に消る霧なり一五爾曹の言ことに易て如此いへ主もし許し給はば我儕活て或は此事あるひは彼事を行んと一六然ど今なんぢら驕りて誇ることを爲凡て此の如き誇は惡なり一七人善を行ふ事を知て之を行はざるは罪なり

第五章

一富者よ爾曹既に來らんとする禍害を思て哭叫ぶべし二爾曹の財は朽なんぢらの衣服は蠧ひ三爾曹の金銀は銹腐れり此銹證を爲て爾曹を攻かつ火の如く爾曹の肉を蝕ん爾曹この末の日に在てなほ財を蓄ふることをせり四視よ爾曹が其田を穫せし雇人に予ざる値は叫び其刈し者の呼聲は既に萬軍の主の耳に入り五なんぢら地に在て奢樂み屠らるる日に在て尚その心を悦ばせり六なんぢら義者を罪に定め且これを殺せり彼なんぢらを拒ざりき

七兄弟よ忍て主の臨るを待べし視よ農夫地の貴き産を得を望みて前と後との雨を得まで久く忍て之を待り八爾曹も忍べ爾曹の心を堅せよ蓋主の臨り給ふこと近けば也九兄弟よ爾曹互に怨ること勿れ恐くは罪に定られん視よ鞫するもの門の前に立てり一〇兄弟よ爾曹主の名に託て語りし預言者を苦と忍との式とすべし一一われら忍ぶ者は福なりと意ふ也なんぢら曾てヨブの忍を聞り主いかに彼に行給ひし乎その結局を見よ即ち主は慈悲深く且矜恤ある者也一二兄弟よ一切誓ふ勿れ或は天あるひは地あるひは他物を指て誓ふ勿れ爾曹是を是とし否を否とすべし恐くは爾曹罪に定られん一三爾曹のうち誰か苦む者ある乎あらば祈禱せよ誰か喜ぶ者あるか有ばその人讚美せよ一四爾曹のうち誰か病る者ある乎あらば教會の長老等を招くべし彼等主の名に託て其人に膏を沃ぎ之が爲に祈ん一五それ信仰より出る祈禱は病者を救ふべし主これを起さん若し罪を犯し事有ば赦れん一六なんぢら互に過ちを認らはし且病を瘳ることを得ん爲に互に祈るべし義者の篤き祈禱は力ある者なり一七エリヤは我儕と同情の人なり彼雨降ざることを切に祈りければ三年六ケ月の間地に雨降ざりき一八また祈りければ天より雨ふりて地その産を萠出せり一九わが兄弟よ爾曹のうち或は眞の道より迷る者あらんに誰か之を引反さば二〇此人知べし罪人を其迷る道より引反すは乃ち其靈魂を死より救かつ多の罪を掩ふことを

彼得前書

第一章

一 イエス・キリストの使徒ペテロ書をポント、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビテニアに散て處れる者二 即ち父なる神福音に順はしめイエス・キリストの血に灑れしめんとして其預じめ知たまふ所に循ひ靈の聖潔をもて選び給ひし人々に贈る願くは爾曹に恩寵と平康の増んことを

三 讃べきかな神われらの主イエス・キリストの父かれ其大なる矜恤を以て我儕を再び生我儕をしてイエス・キリストの甦り給ひしことに由て活る望を得させ四 亦われらの爲に天に藏ある朽ず汚れず衰へざる嗣業を得しめ給ふなり五 なんぢら信仰に由て神の能に護られ已に備ある所の末時に顯れんとする救を得なり六 之に由て爾曹喜べり今暫く各樣の艱難に遇て憂ざるを得ずと雖も却て喜をなせり七 爾曹の信仰を試みらるるは壞る金の火に試みらるるよりも貴くして爾曹イエス・キリストの顯れ給はん時に稱讃と尊貴と榮光を得に至らん八 爾曹イエスを見ざれども之を愛し今見ずといへども信じて喜ぶ其快樂は言がたく且榮光あり九 蓋なんぢら信仰の效すなはち靈魂の救を得るに因一〇 爾曹が受る所の恩を預言せし預言者等は此救に係る事を探索かつ推究ねたり一一 即ち彼等その衷に居キリストの靈キリストの受んとする苦難と其のち得んとする榮を預じめ證したる此は何の日いかなる時を示せると推究ねたり一二 彼等は默示を蒙りて其傳る所の事おのれの爲に非ず爾曹の爲なることを知り其傳へし事は今天より遣り給ふ聖靈に由て福音を傳る者の爾曹に告る所の事なり斯事は天の使等も知んことを欲へり一三 然ば爾曹心の腰に帶して愼みイエス・キリストの顯れ給ふ時なんぢらに來らんとする恩惠を疑はずして望むべし一四 なんぢら孝子なるに因て從前の蒙昧時の慾に效ふことなく一五 爾曹を召給ふ聖者に效て凡の行を潔すべし一六 そは錄して我潔ければ爾曹も潔すべしと有ばなり一七 人を偏視ず各人の行に由て鞫く者を爾曹もし父と呼ば世に寄れる日を懼れて過すべし一八 蓋なんぢら贖はれて先祖より傳りたる徒き行より離れしは銀や金の如き壞る物に由に非ず一九 疵なく汚なき羔の如きキリストの寶血に由ることを知ばなり二〇 キリスト世基を置ざりし先に定られ此末時に爾曹の爲に顯れ給へり二一 爾曹はキリストを甦らせ且これに榮を予へ給ひし神をキリストに由て信ずる者なり是故に爾曹の信仰と望は神に由り二二 爾曹すでに靈により眞理に循ひて靈魂を潔め僞なく兄弟を愛するに至たれば潔心をもて互に篤く相愛すべし二三 爾曹が再び生るるは壞べき種に由に非ず壞べからざる種すなはち窮なく存つ神の活る道に由なり二四 それ人は既に草の如く其榮は凡の草の花の如し草は枯その花は落二五 然ど主の道は窮なく存なり爾曹に宣傳る福音は乃ちこの道なり

第二章

一是故に爾曹すべての怨恨すべての詭譎また僞善娼嫉および諸の謗言を棄て二今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く爾曹心を養ふ眞乳を慕ふべし此に由て爾曹長て救に至らん三なんぢら嘗ひて主を仁ある者と知たらんには斯の如すべし四主は人に棄られ給へど神に選れたる貴き活石なり五爾曹かれに來り活石の如く建られて靈の室となり亦潔き祭司となりイエス・キリストに由て神に悦ばるる靈の祭物を獻べし六そは聖書に録して我選し所の貴き隅の首石をシヲンに置ことを信ずる者は辱しめられじと有ばなり七この石信ずる爾曹には貴き物となり信ぜざる者には工師に棄られて隅の首石となれる石となり八また躓く石礙ぐる岩と爲なり彼等は道を信ぜざるに因て之に躓く此は彼等かく定られたる也九爾曹は選れる族王なる祭司聖民神に屬る者なり此は爾曹をして召て幽暗より出し其異光に入給ひし者己の徳を顯さしめん爲に爾曹を此の如き者となし給へる也一〇爾曹は素民に非ず然ば今神の民となる素矜恤を受ず然ど今矜恤を受たり

一一愛する者よ我爾曹に勸む爾曹は賓旅また寄寓者なれば靈魂に逆ひて戰ふ肉の慾を去べし一二又なんぢら異邦人の中に在て善行を作べし是爾曹を謗りて惡を行ふ者と言る異邦人をして爾曹の善行を見て眷顧たまふ日に神を崇しめん爲なり一三なんぢら主の爲に凡て人の立る所の者に服へ或は上にある王一四或は惡を行ふ者を罰し善を行ふ者を賞る爲に王より遣されたる方伯に服ふべし一五蓋なんぢら善を行ふを以て愚なる人の無知の言を止るは神の旨なれば也一六なんぢら自由なる者の如くせよ然ど其自由を以て惡を掩ふことなく神の僕の如すべし一七衆の人を敬ひ兄弟を愛し神を畏れ王を尊ぶべし

一八僕なる者よ畏懼を以て主人に服ふべし只善良者柔和なる者にのみならず苛刻者にも服ふべし一九人もし受べからざる苦難をうけ神を敬ひて之を忍ばば嘉べき事なり二〇爾曹もし過をなし撻れて之を忍とも何の嘉べき事ならん乎されど若し善をなし苦められて此を忍ばば神に嘉稱を得べし二一爾曹の召れたるは之が爲なり蓋キリスト爾曹の爲に苦をうけ爾曹をして己の跡に隨はしめんとて式を爾曹に遺し給へば也二二かれ罪を犯さず又その口に詭譎なかりき二三かれ詬られて詬らず苦られて厲言を出さず只義を以て鞫く者に之を託たり二四彼木の上に懸て我儕の罪を自ら己が身に任給へり是我儕をして罪に死て義に生しめん爲なり彼の鞭扑れしに因て爾曹醫れたり二五それ爾曹はもと羊の如く迷たりしが今なんぢらの靈魂の牧者監督に歸れり

第三章

一妻なる者よ爾曹その夫に服ふべし若し教に循はざる夫あらば教に由ず妻の行に由て服はん二そは爾曹の敬懼を以て潔き行をなすを見に因てなり三爾曹の妝飾は髮を辨金を掛また衣を着る

が如き外面の妝飾に非ず四ただ心の内の隱たる人すなはち壞ることなき柔和恬靜なる靈を以て妝飾とすべし此靈の妝飾は神の前にて價貴もの也五昔神に依頼みし聖女も其夫に服ひて此の如く己を飾たり六サラ、アブラハムに服ひて之を主と稱しが如し若なんぢら善を行ひ何事をも懼ずば即ちサラの子たる也七夫たる者よ爾曹も妻を遇ふこと弱き器の如く理に循ひて之と同に居これを敬ふこと生命の恩を嗣者の如くすべし是なんぢらの祈禱に阻礙なからん爲なり

八終に我これを言ん爾曹みな心を同うし互に體恤兄弟を愛し憐み謙遜九惡を以て惡に報る勿れ詬を以て詬に報る勿れ却て此の如き人の爲に福を求むべし蓋なんぢらの召れたるも福を嗣ん爲なれば也一〇それ生命を愛して佳日を送らんと欲ふ者は舌を禁て惡を言ず脣を緘て詭譎を言ざらんことをせよ一一惡を避て善を行ひ和睦を求て之を追べし一二そは主の目は義人の上に止り其耳は義人の祈禱に傾き主の面は惡を行ふ者に向て怒れば也一三爾曹もし熱心に善を行はば誰か爾曹を害はん乎一四縱ひ義き事の爲に苦めらるるとも爾曹福なる者なり人の爾曹を威嚇を畏るる勿れ亦憂る勿れ一五なんぢら心の中に主なるキリストを崇むべし亦爾曹の衷にある望の緣由を問人には柔和と畏懼を以て答をなさんことを恒に備よ一六かつ答るときは善良心に從ふべし是なんぢらを惡を行ふ者と誣なんぢらがキリストに在て行ふ善行を謗る者の自ら愧ん爲也一七若し爾曹が善を行ふに因て苦を受ること神の意旨ならば惡を行ふに因て苦を受るに愈れり一八キリストも一次罪に因て苦を受く義者不義者の爲にせり是我儕を引て神に至んとてなり彼その肉體は殺れ其靈は生されたり一九彼その靈を以て獄にある靈に宣傳へたり二〇この獄にある靈は昔ノア方舟を備る間神の忍て待給へるとき從はざりし靈なり此方舟にいり水に由て救れし者は僅にして惟八人なりき二一其水に由て表したるバプテスマ、イエス・キリストの復生に由て今我儕をも救ふ此バプテスマは肉體の汚穢を除くに非ず善良心神を求むるなり二二イエス・キリスト天に往て今神の右に在せり諸の天使權威ある者能ある者みな彼に服ふなり

第四章

一キリスト既に我儕の爲に肉體に苦難を受給ひたれば爾曹も亦その心を以て自ら鎧ふべしそは肉體に苦を受し者は罪を斷たれば也二これ今より後人の慾に循はず神の旨に循ひて肉體に寓れる餘時を過ん爲なり三夫我儕既に往にし日は異邦人の心に從ひて好色、私慾、沈湎、醉興、酒宴、偶像を祭る憎べき事を行て既や足り四なんぢら彼等と偕に放蕩の極に趨ざるに因て彼等これを怪みて爾曹を謗るなり五かれら生者死者を鞫んと備を爲をる者に己の事を陳ん六福音は死し者に宣傳へたり蓋彼等をして其肉躰は人に由て審判を受るとも其靈は神に由て生命を得

しめん爲なり七 萬物の末期邇けり是故に愼みて自ら制することを爲て祈禱すべし八 何事よりも先たがひに篤く相愛することをすべし蓋愛は多の罪を掩ばなり九 なんぢら互に吝ことなく接待すべし一〇 神の各樣の惠を司どる善家宰の如く各人その受し所の賜を以て互に施すべし一一 人もし道を語らば神の示と意ひて語るべし人もし服役を作ば神の賜ふ能と意ひて服役を作べし是イエス・キリストに由て每事に神の榮の歸せん爲なり夫榮と權は神に歸して世々に至る也アメン

一二 愛する者よ爾曹を試むる火の如き苦を非常事の如くして爾曹異とする勿れ一三 卻てキリストの苦に與るを以て歡樂とすべし然ば其榮の顯れん時また爾曹喜び躍らん一四 若なんぢらキリストの名の爲に謗れなば福なり蓋榮の靈すなはち神の靈なんぢらの上に止れば也キリストは彼等に瀆され爾曹に崇らるる也一五 爾曹の中あるひは人を殺し或は盜をなし或は惡を行ひ或は猥に人の事に干涉などして苦に遇もの有ざれ一六 若キリステアンたるに因て苦に遇ば羞ること勿れ却て之に緣て神を崇むべし一七 そは神の家を首として世を審判するときに已に至ばなり若し我儕なほ首に審判せらるる時は神の福音に從はざる者の其結局は如何ぞや一八 もし義者僅じて救るるを得ば神を敬はざる者と罪人は何處に立んや一九 是故に神の旨に循ひて苦に遇ものは善を行ひて其靈魂を信ずべき造物者に託すべし

第五章

一 キリストの苦を親く見て證をなし且顯れんとする榮に與ることを得る者なる長老たる我なんぢらの中にて我と同く長老たる者に勸む二 爾曹の中にある神は羊の群を牧これを牧司どるに止を得ずして爲ず好てなし利を貪るために爲ず樂みて爲べし三 又なんぢら託せられたる者に主と爲べからず羊の群の式と爲べし四 なんぢら牧者の長の顯れん時に壞ることなき榮の冠冕を得ん五 また幼者に勸む爾曹長老に服へ且互にみな相服ひて謙遜を衣よ夫神は驕傲者を拒ぎて謙遜者に恩を與給ふなり六 是故に爾曹神の大能の手下に己を卑すべし期至らば彼なんぢらを高せん七 爾曹その憂慮ところを悉神に託ぬべし蓋かれ爾曹を顧みたまへばなり

八 謹愼儆醒なんぢらの敵なる惡魔吼る獅子の如く徧行て呑べき者を尋ぬ九 なんぢら信仰を堅して之を禦げ蓋なんぢら世にある兄弟の同く此苦を受るを知ばなり一〇 諸の恩惠を予ふる神すなはち爾曹をして暫く苦を受る後キリスト・イエスにある窮なき榮に入しめんとて爾曹を招きし神爾曹を全うし堅くし強して基の上に置給ふべし一一 願くは榮光と權力世々神に在アメン

一二 われ意ふにシルワノは忠信なる兄弟なり我片の言の書を彼に託ね爾曹に贈て勸をなし且なんぢらが立ところの恩は乃ち神の眞恩なることを證せり一三 バビロンに在所の爾曹と共に選れたる教會なんぢらに安を問また吾子マコも爾曹に安を問

り 一四 なんぢら愛の接吻を以て互に安をとへ願くはキリスト・イエスに在なんぢら衆に平康あらん事をアメン

彼得後書

第一章

一 イエス・キリストの僕また使徒なるシモン・ペテロ我儕の神と救主イエス・キリストの義に由て我儕が受し所と同じ貴き信仰の道を受し者に書を贈る二 願くは神と我儕の主イエスを識に因て爾曹に恩寵と平康の増んことを三 神その能力に循ひて生命と敬虔に係る凡のものを我儕に賜へり是われら榮と徳を以て我儕を召き給し者を識に由てなり四 また神その榮と徳に因て至大なる貴き約束を我儕に予へ給へり此は爾曹をして此約束に由て世にある所の慾の敗壞を脱かれ神の性質を有しめん爲なり五 是故に爾曹勤て信仰に徳を加へ徳に智識を加へ六 智識に撙節を加へ撙節に忍耐を加へ忍耐に敬虔を加へ七 敬虔に兄弟の睦を加へ兄弟の睦に愛を加ふべし八 此等のもの若なんぢらの衷に在て彌增ときは爾曹われらの主イエス・キリストを識ことに怠ることなく又實を結ざること無に至らん九 此等のものなき者は盲なり遠く見こと能はず且その舊き罪を潔られし事を忘るる也一〇 是故に兄弟よ勤て爾曹の召れし事と選れし事とを堅固せよ若前に告たる事どもを行はば爾曹いつまでも躓くこと莫らん一一 此の如ば神なんぢらに我儕の主なる救主イエス・キリストの永遠國に入の恩を豐に予へ給ふべし
一二 是故に恒に我なんぢら此等の事を知かつ既に受たる眞道に堅けれど尚なんぢらに此事を憶起させんとして怠らざる也一三 我この幕屋に居あひだ爾曹に此事を憶起させて爾曹を勵すは當然のことと意へり一四 蓋われらの主イエス・キリストのわれに示し給へる如く我わが幕屋を離るることの近を知ばなり一五 我また爾曹をして我が世を去ん後にも常に此等の事を憶起さしめんことを勤む一六 われら前に爾曹に我儕の主イエス・キリストの能力と其顯れ給ふことを告るに巧なる奇談を用ざりき我儕は親く其大なる威光を見し者なり一七 至大なる榮光の中より聲ありて彼を呼こは我心に適ふ我が愛子なりと曰る此時かれは神なる父より尊と榮を受たり一八 われら彼と偕に聖山に在し時この天より出し聲を聞り一九 殊に預言者の確言われらに在この言は暗處に輝る燈の如きものなり夜の明るまで明星の爾曹の心の中に出るまで之を顧みば善二〇 まづ首に知べき事は聖書の諸の預言は預言者おのれの意を以て示せるに非ざるを知んこと也二一 そは預言は索より人意に由て出しに非ず神に屬する聖人聖靈に感じて語りし者なれば也

第二章

一 昔し民の中に僞の預言者あり其ごとく爾曹の中にも僞の師いでん彼等は淪亡に至る異端を傳へ且おのれを贖ふ主を主とせずして速かなる淪亡を自ら取べし二 また多の人かれらの好色に效はん眞道これに由て謗讟を受ん三 かれら貪婪心に由て造言を

設け爾曹より利を取んとす彼等の審判は昔より定あれば遲からじ彼等の淪亡は寐ず四神さきに罪を犯し天使を容さず之を地獄に投いれ之を幽穴に置之を禁錮彼等をして審判の時を待しめ給へり五また古世を容さず洪水を以て神を敬はざる世を滅ぼし只義道を傳ふるノアの一家八人を救へり六又ソドムとゴモラの邑を滅さんと定め之を焚て灰となし後の神を敬はざる者の鑒となし七ただ義きロト即ち悪者の淫亂の行を恒に憂へし者を救へり八この義人かれらの中にをり日々その不法の行を見聞して己の義き心を傷たり九此の如く神を敬ふ者を患難より救ひ不義なる者を審判の日まで守りて之を罰し一〇別て汚たる情慾に循ひ肉の慾を行ひ主たる者を藐視ずる者を罰する事を知給ふなり此輩は膽太く自放なる者にして尊者を謗ることを畏れざるなり一一天使は彼等に愈し大なる權威と能力を有ど主の前に此尊者を詬て訴ることを爲ず一二彼等は執れて殺さるる爲に生れたる無知獸の如し知ざる所の事を謗り其邪曲により滅されて不義の報を受ん一三彼等は白晝も酒食を樂とす汚なり瑕なり爾曹と同に筵席に與るとき其詭譎を樂とせり一四かれら目に淫婦を充し罪を犯して止ず心の堅らざる者を惑はし其心貪婪に慣これ詛るべき子輩なり一五かれら正道を離れて迷に入ボソロの子バラムの道に從へりバラムは不義の利を貪りし者なり一六彼その不法の爲に責らる語ること能はざる驢馬人の聲をなして預言者の狂を禁たり一七此輩は水なき井なり狂風に逐るる雲なり黒暗かれらの爲に窮なく存れり一八それ彼等は誇たる虚誕を語り肉慾と淫亂を以て夫の迷へる者の中より辛じて脱たる者を誘へば也一九また彼等は之に自由を予ると稱れども自ら淪亡の奴僕たり蓋かたるる者は勝者の奴僕たれば也二〇彼等もし我儕の主なる救主イエス・キリストを識に因て世の汚を脱れ復これに累れて勝るる時は其後の状態は前に愈りて更に惡かるべし二一かれら義の道を識て尚その傳られし所の聖命を棄んよりは寧ろ義の道を識ざるを美とすべし二二犬かへり來りて其吐たる物を食ひ豕あらひ潔られて復泥の中に臥と云る諺は眞にして彼等に應へり

第三章

一愛する者よ我今この第二の書を爾曹に筆贈る此兩書を以て爾曹の眞實なる心を勵し二先に聖預言者の語りし言と爾曹の使徒等が傳へし主なる救主の命令を記憶させんとす三まづ首に此事を知べし末日至らば戲謔者いで來り己の慾に從ひて行み四主の約束し給ひし其臨る何處に在や列祖の寢しより以來すべての物開闢の始と變ること無と云ん五彼等は神の言に由て上古天あり地の水より出かつ水に由て立六之に由て古の世水に掩れて滅たる事を知を欲まず七それ神は其言を以て今の天と地を蓄へ之を火にて焚ん爲に神を敬はざる人を審判する淪亡の日まで存せり八愛する者よ爾曹この一事を知ざる可らず主に於て

は一日は千年の如く千年は一日の如し九主その約束し給ひし所を成に遲きは或人の遲しと意ふが如くに非ず一人の亡ぶるをも欲み給はず衆人の悔改に至らんことを欲みて我儕を永く忍び給ふ也一〇然ど主の日の來ること盜の夜きたるが如ならん其日には天大なる響ありてさり體質ことごとく焚毀れ地と其中にある物みな焚盡ん一一斯の如く諸のもの鎔されん然ば爾曹神の日の來るを待これを速やかにせんことを務いかに潔行をなし神を敬ふことを爲べき乎一二神の日には天熱毀れ體質焚鎔ん一三然ど我儕は其約束に因て新しき天と新しき地を望み待り義その中に在一四愛する者よ爾曹すでに之を望み待ば汚なく疵なく主の前に安然に在んことを務よ一五且われらの主の我儕を永く忍び給ふは我儕の救となるを知べし我儕の愛する兄弟パウロも其賦られし智慧に循ひ曾て此事を爾曹に書贈れり一六彼その凡の書にも此事に就て語たり彼の書の中には難明ところあり無學なる者心の堅らざる者他の聖書を強解が如く之をも強解て自ら敗亡に至るなり一七愛する者よ爾曹預じめ之を知ば愼めよ惡者の迷謬に誘れて其堅き心を失ふこと勿れ一八なんぢら益我儕の主なる救主イエス・キリストを知んことと益その恩惠を知ことを努むべし願くは榮光今も後も彼に歸して窮なからんことをアメン

約翰第一書

第一章

一 それ我儕が聞また目に見懇切に觀わが手捫りし所のもの即ち元始より在し生命の道を爾曹に傳ふ二 この生命すでに顯れたれば我儕これを見て證をなす即ち原父と偕に在し者にて我儕に顯れたる窮なき所の此生命を爾曹に傳ふ三 われら見しところ聞し所を爾曹に傳ふるは爾曹を我儕と同心ならしめん爲なり我儕は父および其子イエス・キリストと同心たり四 我儕この書をかき贈て爾曹の喜樂を充しめんとす五 神は光なり少の暗 處なし此は我儕彼より聞て亦なんぢらに傳る告なり六 若われら神と同心なりと言て暗を行かば我儕が言ところは謊にして眞理を行ふに非ず七 若神の光に在が如く光の中を行かば我儕互に同心となるを得かつ其子イエス・キリストの血すべて罪より我儕を潔む八 もし罪なしと言ば是みづから欺けるにて眞理かれらに在なし九 もし己の罪を認はさば神は信實なる公義者なるが故に必ず我儕の罪を赦し諸の不義より我儕を潔むべし一〇 もし罪を犯たることなしと言ば神を謊 者とする也その道われらに在なし

第二章

一 わが小子よ我これらの事を爾曹に書贈るは爾曹をして罪を犯すこと莫らしめん爲なり若し人罪を犯せば我儕の爲に父の前に保惠師あり即ち義なるイエス・キリスト二 彼は我儕の罪の挽回の祭物なり第に我儕の爲のみならず徧く世の爲の挽回の祭物なり三 われら若その誡を守らば是に由て彼を識りと自ら曉るべし四 われ彼を識りと言て其 誡を守らざる者は謊 人なり眞理その衷に在なし五 凡て其道を守る者は神を愛するの愛誠に其衷に於て完全す是に由て我儕が彼に在ことを自ら曉る六 彼に居といふ者は彼の行し如く行むべき也

七 兄弟よ我なんぢらに新しき誡を書贈るに非ず即ち始より爾曹の有る舊 誡なり此舊 誡は始より爾曹が聞し所の道なり

八 然ど我が爾曹に書贈る所いまだ新しき誡なり此言は彼に於ても爾曹に於ても眞實なり蓋いま暗昧はやや過て眞の光耀ばなり九 光に居と言て其兄弟を憎む者は今なほ暗に居なり一〇 兄弟を愛する者は光に居て己を躓かするもの其衷になし一一 兄弟を憎む者は暗にをり暗に行て其往ところを知ず是その目を暗に眊さるればなり一二 小子よ我この書を爾曹に書おくるは爾曹主の名に緣て罪を赦されたるに因一三 父老よ我この書を爾曹にかき贈るは爾曹元始よりの者を識るによる壯者よ我この書を爾曹に書おくるは爾曹惡者に勝るによる孺子よ我この書を爾曹に筆おくるは爾曹父を識るに因一四 父老よ我この書を爾曹に贈しは爾曹始よりの者を知るに因てなり壯者よ我この書を爾曹に贈しは爾曹剛健かつ神の道爾曹の心に有て惡者に勝るに因てなり一五 この世あるひは此世にある物を愛する勿れ

人もし此世を愛せば父を愛するの愛その衷に在なし一六 凡そ世に在もの即ち肉體の慾眼目の慾また勢より起る驕傲これらは皆父より出るに非ず世より出るもの也一七 この世と其慾とは逝るものにて神の旨を行ふ者は永遠存るなり

一八 孺子よ今は乃ち季世キリストに敵する者來らんと爾曹が聞し所の如く今すでにキリストに敵する者多し是に由て今は乃ち季の世なるを我儕は知り一九 我儕を離れて彼等出たりと雖も素より我儕の屬ならざる也もし我儕の屬ならんには恒に我儕と偕なるべし彼等いで去るは衆の者の悉くは我儕の屬ならざること顯さんが爲なり二〇 爾曹は既に聖主より膏を沃れて一切の事を知二一 われ爾曹が眞理を識ざるに因て此書を筆おくるに非ず爾曹眞理を識かつ凡の謊は眞理より出ざることを識るを以てなり二二 誰か是謊者イエスを言てキリストとせざる者ならずや父と子とを拒む者は即ちキリストに敵する者なり二三 凡そ子を拒む者は父をも有ず子を受る者は父をも有り二四 なんぢら始より聞る者を爾曹の衷に居しむべし若し始より聞る者なんぢらの衷に居ば爾曹は子と父とに居ん二五 これ主の我儕に約束し給へる約束すなはち窮なき生命なり二六 我爾曹を惑す者に就て此等の事を爾曹に書贈れり二七 爾曹は主より沃れたる膏その衷に存れるが故に教を人より受るに及ばず其膏すべての事を爾曹に教ふ且眞實にして虚假なし爾曹膏の教る如く恒に主に居べし二八 小子よ恒に主に居べし其顯現時に我儕懼ることなく其降臨時に其前に耻ること莫らん爲なり二九 爾曹は主の公義を知に由て公義を行ふ者の皆主の生ところなるを亦しる也

第三章

一 なんぢら視よ我儕稱られて神の子たることを得これ父の我儕に賜ふ何等の愛ぞ世は父を識ず是に由て我儕をも識ざる也二 愛する者よ我儕いま神の子たり後いかん未だ顯れず其現れん時には必ず神に肖んことを知そは我儕その眞狀を見べければ也三 凡そ神に由る此望を懷く者は其潔が如く自己を潔す四 罪を犯す者は律法を犯す罪とは即ち律法を犯すこと也五 我儕の罪を除かんが爲に主の現れ給ひしことは爾曹の知ところなり彼また自ら罪なし六 凡そ彼に居者は罪を犯さず凡そ罪を犯す者は未だ彼を見ず未だ彼を識ざる也七 小子よ人に惑さるること勿れ義を行ふ者は義人なり即ち主の義なるが如し八 罪を犯す者は惡魔より出そは惡魔は始めより罪を犯せばなり神の子の顯るるは惡魔の工を毀たんが爲なり九 凡そ神に由て生るる者は罪を犯さず蓋神の種その衷に在に因かれ亦罪を犯すこと能はず蓋神に由て生るれば也

一〇 是に由て神の子と惡魔の子とは明かに著る凡そ義を行はず其兄弟を愛せざる者は皆神より出しに非ず一一 我儕の互に相愛すべきは爾曹の始より聞し所の命令なり一二 カインに效ふこと勿れ彼はかの惡者より出し者にて其弟を殺せり何故これを殺

ししか己の行し所は惡く弟の行し所は義かりしに因一三わが兄弟よ世なんぢらを憎むとも駭くこと勿れ一四われら兄弟を愛するに因すでに死を出て生に入しことを自らしる兄弟を愛せざる者は死の中に居一五凡そ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり凡そ人を殺す者は窮なき生命その衷に存ことなし此は爾曹の知ところ也一六主は我儕の爲に生を捐たまへり是に由て愛といふ事を知たり我儕また兄弟の爲に生を捐べし一七世の寶財をもち兄弟の窮乏を見て反て惠施の心を閉る者は何で神を愛するの愛その衷に存んや一八小子よ我儕愛するに言と舌とを以て相愛する事なく行と實とを以てすべし一九是に由て我儕眞理より出しを知かつ我儕心を主の前に安んずべし二〇我儕が心もし我儕を責ば神は我儕が心よりも大なるにより凡の事を知給はざるなし二一愛する者よ我儕が心みづから責ること無ば神に向て憚る所なかるべし二二且われらが凡て求る所は彼よりも受そは其誡を守りて其悅び給ふ所を行へば也二三この誡は即ち我儕神の子イエス・キリストの名を信じ彼の我儕に命ぜし如く互に相愛すること也二四神の誡を守る者は神にをり神も亦かれに居われら其賜ふ所の靈に由て即ち其われらに居給ふことを知り

第四章

一愛する者よ凡の靈を信ずる勿れその靈神より出るや否やを試むべし多の僞預言者いでて世に入り二凡そイエス・キリストの肉體となりて臨り給ることを認はす靈は神より出これに由て神の靈を知べし三凡そイエス・キリストを認はさざる靈は神より出るに非ず即ちキリストに敵する者の靈なり此者の將に來らんとする事は爾曹が聞る所なり今既に世に居り四小子よ爾曹は神より出また彼等に勝ことを得たり蓋なんぢらの衷に居ものは世の衷にをる者より大なるに因て也五彼等は世より出し者なれば其いふ所も世より出し者の言べき事にして世人は之に聽り六我儕は神より出たり神を識ものは我儕にきき神より出ざる者は我儕に聽ず是に由て眞理の靈と迷謬の靈とを知なり

七愛する者よ我儕互に相愛すべし愛は神より出れば也おほよそ愛ある者は神に由て生れ且神を識るなり八愛なき者は神を識ず神は即ち愛なれば也九神はその生給へる獨子を世に遣はし我儕をして彼に由て生を得しむ是に於て神の愛われらに顯れたり一〇われら神を愛するに非ず神われらを愛し我儕の罪の爲に其子を遣して挽回の祭物とせり是すなはち愛なり一一愛する者よ此の如く神われらを愛し給へば我儕も亦たがひに相愛すべし一二未だ神を見し者なし我儕もし互に相愛せば神われらの衷に居て彼を愛する愛を我儕の衷に完全す一三かれ已に其靈をもて我儕に賜ふ是に由て我儕の彼に居かれの我儕に居ことを知一四父曩に其子を遣して世の救主と爲り我儕すでに之を見たり今その證を作なり一五凡そイエスを神の子なりと認はす者は神かれに居かれ神に居一六我儕の爲に神の有る愛を我儕すでに知て信ず神

は即ち愛なり凡そ愛にをる者は神にをり神また彼に居一七此の如く我儕の愛全備を得て鞫日に懼なからしむ蓋主の如く我儕世に在ばなり一八愛の中に懼あることなし全き愛は懼を除そは懼は苦を有り凡そ懼るる者は愛を全備せざる也一九われら神を愛するは彼まづ我等を愛するに因り二〇もし我は神を愛すと言て其兄弟を憎む者は是譃者なり既に見ところの兄弟を愛ずして未だ見ざる神を何で愛せん乎二一神を愛する者は亦その兄弟をも愛すべし此誡は我儕彼より授られたり

第五章

一 凡そイエスをキリストと信ずる者は神に由て生れたる也おほよそ之を生者を愛する者は亦その生る所の者をも愛する也二 我儕もし神を愛して其誡を守らば此に由て我儕神の兒女を愛すると知三 神の誡を守るは是すなはち神を愛する也その誡は難からず四 凡そ神に由て生るる者は世に勝我儕をして世に勝しむる者は我儕が信なり五 誰か能世に勝んイエスを神の子と信ずる者に非ずや

六 神の子は水と血をもて臨る即ちイエス・キリストなり惟水のみならず水に又血を兼七 證を爲す者は靈なり靈は眞實なれば也八 證を作ものは三すなはち靈と水と血この三の者の歸する所は一なり九 我儕もし人の證を受る時は神の證は更に大なるべし神の證は此なり即ち其子の爲に作る證なり一〇 神の子を信ずる者は其衷に此證あり神を信ぜざる者は神を譃者とす蓋神のその子の爲に證せる證を信ぜざれば也一一 神は窮なき生をもて我儕に賜ふ此生は乃ちその子に在これ其證なり一二 神の子をもつ者は生を有その子を有ざる者は生を有ず一三 われ神の子の名を信ずる爾曹に此等の事を書贈るは爾曹に窮なき生ある事を知しめんが爲なり一四 凡て我儕神の旨に合へる事を求ば彼かならず聽ん是われら彼に向て篤く信ずる所なり一五 凡て我が求る所を彼の聽ことを知ば我が求る所を彼に得ることを亦しる也一六 もし人その兄弟の死に至らざる罪を犯すを見ば祈りて死に至らざる罪を犯す者に生を予ふべし死に至る罪あり我これが爲に祈れと言ず一七 凡ての不義は罪なり然ど死に至らざる罪あり一八 凡て神に由て生れたる者の罪を犯さざる事を我儕はしる神に由て生れたる者は自ら守かの惡者これに觸ことを爲ざる也一九 我儕は神につき擧世は惡者に服するを我儕は知二〇 また神の子すでに來り我儕が眞理者を識の智慧を我儕に賜るを知われら眞理者にあり即ち其子イエス・キリストに在かれは乃ち眞神また永生なり二一 小子よ爾曹みづから愼みて偶像に遠かれアメン

約翰第二書

第一章

一長老選を蒙れるクリアと其子等に書を贈る我誠に爾曹を愛す第我のみならず凡そ眞理を識る者は亦みな爾曹を愛せり二爾曹を愛するは是われらの衷に在て恒に離れざる眞理に縁てなり三爾曹は實と愛とに居て神すなはち父および父の子イエス・キリストより恩寵と慈悲と平康とを受べし

四われ爾の子等の中わが受し所の父の命のごとく眞理に遵ひて行む者の有を見て甚だ喜べり五クリアよ我いま爾に勸む互に相愛すべし此は新しき誡を書贈るに非ず即ち始より我儕が有る所の者なり六われら彼の誡に遵ひて行むは是すなはち愛なり爾曹が始より聞し如く愛に行むは是乃ち誡なり七そは惑に誘ふ者おほく世に出イエス・キリストの肉體と爲て臨り給へることを認はさず此惑に誘ふ者は乃ちキリストの敵なれば也八なんぢら我儕が勤勞し所の事を虚くせず全き賞を得んが爲に自ら愼むべし九凡そキリストの教に居ずして人を導く者は神を有ずキリストの教にをる者は父および子を有り一〇人もし此教を有ずして爾曹に來らば之を家に納ること勿れ彼に安かれと言なかれ一一彼に安かれといふ者は共に其惡行に與する也

一二我なほ多端あれども紙と墨とを以て爾曹に書おくるを欲ず我儕の喜樂の充滿せん爲に爾曹に至り口を對て語らんことを望む一三爾の姉妹すなはち選を蒙れる者の兒女なんぢに安を問りアメン

約翰第三書

第一章

一 長老愛するガヨス即ち我が誠に愛する所の者に書を贈る二 愛する者よ爾が靈魂の隆んなる如く爾すべての事につきて隆んに又康強ならんことを我ねがふ三 兄弟來りて爾が眞理を有ること即ち爾が眞理に行むことを證したれば我甚だ喜べり四 わが子等の眞理を行むを聞に愈れる大なる喜樂は我になし五 愛する者よ爾は賓旅なる兄弟にまで凡て行ふに忠信をもて行へり六 かれら教會の前に在て爾の愛を證せり爾もし神に合ふべく彼等の行路を助ば其行ふところ善なり七 彼等は主の名の爲に出て異邦人より何をも受ざれば也八 是故に我儕かくの如き人を助くべし蓋われらも彼等と偕に眞理に働く者とならん爲なり九 われ曩に書を教會に贈りしが彼等の中に於て長たらんことを欲むデヲテレペス我を納ざりき一〇 我もし往ば其行る所を心に記置ん彼は惡言をもて妄に我儕を論じ且これを以て足りとせず自ら兄弟を接ず其を接んとする者をも妨げて教會より黜けたり一一 愛する者よ惡に效ふ勿れ即ち善に效へ善を行ふ者は神より出惡を行ふ者は未だ神を見ざる也一二 デメテリヲは衆人と眞理とに證をせらる我儕も證をす我儕の證の眞實なるを爾知り一三 我なほ多の事を爾に書贈らんと爲ども筆と墨とを以て書きおくるを欲ず一四 速かに爾を見て口を對へ語らんことを望む

一五 願くは爾安かれ多の友なんぢの安を問り請なんぢ我に代て諸友おのおのに安を問

猶太書

第一章

一イエス・キリストの僕ユダ即ちヤコブの兄弟書を召れたる者すなはち父なる神に愛せられ且イエス・キリストの爲に守らるる衆人に贈る二 願くは爾曹に慈悲と平康と仁愛の增んことを

三愛する者よ我心を熱して共に與る所の救の事を爾曹に書おくらんと思ゐたりしが今なんぢらに書を贈りて聖徒が一たび傳られし信仰の道の爲に力を盡して戰はん事を爾曹に勸ざるを得ず

四そは神を敬はず我儕の神の恩を易て色慾を放縱にするの緣となし惟一の主なる神と我儕の主イエス・キリストを棄るもの數人潛に教會に入たればなり彼等が此審判を受ることに定られたる事は昔より預じめ錄されたり五なんぢら素より知る事なれど我なほ爾曹に憶起させんとする事は主その民をエジプトの地より救出ししのち信ぜざる者を滅ぼし給ひし事と六己が本位を守らずして其住る所を離れたる天使を限なく繫て大なる日の審判まで幽暗の中に守り置たまひし事と七ソドム、ゴモラ及び其比隣の邑かれらと同く姦淫をなし且男色を行ふにより限なく火の罰を受て鑑戒に立られし事となり八この夢みる者も亦肉體を汚し主たる者を藐忽じ尊者を謗れり九それ天使の長ミカエル惡魔とモーセの屍を爭ひ論ぜしときは彼なほ之を謗りて訴へざりき惟主なんぢを責べしと曰り一〇然るに彼等は知ざる所の事を謗れり其本性しる所は無知獸の知ところと同じ彼等は之を以て己を亡せり一一 禍なる哉彼等はカインの途にゆき利の爲にバラムの迷謬に馳またコラの逆ひし如して亡びたり一二彼等は爾曹の愛の筵席の磐なり憚る所なく同に其筵席に與りて自己を養へり彼等は風に逐るる雨なき雲枯て再かれ根を拔るる果のなき秋の樹一三その穢を湧出す海の猛浪道をはなれたる星なり之が爲に黑暗を限なく留置れたり一四アダムより七代に當れるエノク此輩の事を預言して曰けるは視よ主其聖萬軍と偕に來りて一五衆人を鞫き凡て神を敬はざる者の神を敬はずして行ひし惡行と神を敬はざる罪人の主に逆ひて語れる諸の惡言を責給ふべしと一六此輩は怨言もの足ことを知ざる者おのれの慾に從ひて行き其口は誇ることを語り利の爲に人に諂ふ者なり一七愛する者よ爾曹わが主イエス・キリストの使徒等の曩に語りし言を憶起すべし一八即ち我儕に語ていふ末期に戲譃者おこり己が橫逆なる慾に徒ひて行んと一九彼等は自ら區別をなす者また肉に屬る者にして靈のなき者なり二〇愛する者よ爾曹その徳を至潔き信仰の上に建て聖靈に感じて祈り二一自己を守りて神の愛の中に居われらの主イエス・キリストの永生を賜ふ其矜恤を待べし二二彼等のうち或者をば論じて口を噤しめ二三或者をば火より取出して救ひ或者をば畏懼を以て憐むべし其惡は肉の慾に染たる衣までも惡むことをせよ

二四 二五 我儕の救主なる獨一の神すなはち爾曹を躓かせじと保り爾曹をして汚なく歡びて其榮光の前に立ことを得しむる者は世の始の前より今また後も世々永遠われらの主イエス・キリストに由て榮と威光と大能と權を有ち給ふなりアメン

約翰默示録

第一章

一 此イエスキリストの默示すなはち神彼をして迅速に起るべき事を彼の僕等に示さしめんとて彼に賜ひし所なりイエス・キリスト其使を以て僕ヨハネに之を贈り示し給へり二 ヨハネ神の道とイエス・キリストの證と其凡て見し所のものとを證す三 この預言の書を讀者と之を聞て其中に記しある所を守る人々は福なり蓋時近ければ也

四 ヨハネ書をアジアにある七の教會に贈る願くは今在し昔し在し後在す者および其寶座の前の七つの靈五 及び忠信なる證者死の中より首に生れし者天下の諸王は君たるイエス・キリストより爾曹恩寵と平安を受けよ願くは我儕を愛し其血を以て我儕の罪を洗潔め六 我儕をして王となし祭司と爲てその父の神に屬しむる者に榮光と權力世々窮なく有んことをアメン

七 視よ彼は雲に乘りて來る衆の目かれを見ん彼を刺たる者も亦これを見べし且地の諸族これが爲に哀哭んアメン八 主たる神いひ給へり我はアルパ也オメガなり始めなり終なり今あり昔あり後ある全能の者なり

九 我ヨハネ即ち爾曹の兄弟なんぢらと患難を共にしイエス・キリストの國および其忍耐を共にする者曩に神の道とイエスの證の爲にパトモスという島に居て一〇 主の日に我靈に感じて箛の如き大なる聲の我後に在を聞り一一 云く爾の見ところを書に録して之をアジアに在エペソ、スムルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤの七の教會に贈るべし一二 われ身を轉して我に語る聲を觀んとし既に身を轉せば金の七の燈臺一三 又其七の燈臺の間に人の子の如き者あるを見たり其身には足まで垂る衣をき胸には金の帶を束ね一四 首と髮とは白こと羊の毛の如く雪の如く目は火焰の如し一五 足は爐に燒る眞鍮の如く聲は大水の響の如し一六 右の手には七の星をもち兩刃の利劍その口よりいで面は甚しく耀く日の如し一七 我これを見しとき死る者の如く其足下に仆れたり彼右の手を我に按て曰けるは懼るる勿れ我は首先なり末後なり一八 我は生者なり前に死しことあり視よ我は世々窮りなく生んアメン我は陰府と死との鑰を持り一九 なんぢ見し所および今ある所のこと後ある所のことを録すべし二〇 其は爾が見し所の我が右の手の七の星また七の金の燈臺の奧義なり七の星は七の教會の使者七の燈臺は七の教會なり

第二章

一 爾エペソの教會の使者に書おくるべし右の手に七の星を執また七の金の燈臺の間を行む者かくの如く言と二 曰われ爾の行爲と勞苦と忍耐と爾が惡人を容る能ざると爾が曩に夫の自ら使徒なりと稱て實は使徒に非ざる者を試みて其妄言を見あらは

しし事と三 爾が忍耐する事と我名のために患難を忍びて倦ざりし事とを知四 然ど我なんぢに責べき事あり爾 初時の愛を離れたり五 なんぢ何處より墜しかを憶ひ悔 改めて初の工を行へ然ずして爾もし悔 改めずば我なんぢに到り爾の燈臺を其處より取除かん六 然ども爾に一の取べき事ありニコライ 宗の人の行爲を惡むことなり我も之を惡めり七 耳ある者は靈の諸教會にいふ所を聽べし勝をうる者には我神の樂園にある生命の樹の實を食ふ事を許さん

八 なんぢ又スムルナの教會の使者に書おくるべし首先末後のもの死てまた生たる者かくの如く言と九 曰われ爾の行爲と患難と貧乏とをしる貧乏とは雖ど爾は富り我また夫の自らユダヤ人なりと稱て實は非ざるサタンの會の者の褻瀆の言を知り一〇 なんぢ將に受んとする苦を懼るる勿れ惡魔まさに爾曹の中の者を獄に入て爾曹を試みんとす爾曹十日のあひだ患難を受べし爾死に至るまで忠信なれ然ば我生命の冕を爾に賜へん一一 耳ある者は靈の諸教會にいふ所を聽べし勝を得ものは第二の死の禍害を受ず

一二 爾ベルガモの教會の使者に書おくるべし兩刃の利劍をもつ者かくの如く言と一三 曰われ知なんぢが住處は即ちサタンの座位のある所なり爾は固く我名を保つ嘗て我が忠信の證人アンテパス爾曹の中サタンの住ところにて殺されし時にも爾わが道を棄ざりき一四 然ども我なんぢに數件の責べき事あり爾曹の中バラムの教を保つ者あり先にバラム、バラクに教て凝 物をイスラエルの民の前に置しむ即ちバラクをして彼等に偶像に獻し物を食はせ姦淫を行はしめたり一五 また爾曹の中にニコライ 宗の教を保つ者あり此教は我が惡む所なり一六 なんぢ悔 改めよ然ざれば我迅速に爾に到り我が口の劍をもて彼等と戰はん一七 耳ある者は靈の諸教會にいふ所を聽べし勝をうる者には我藏しあるマナを予へん亦白石の上に新しき名を記して之に予へん之を受る者の外に此名を知ものなし

一八 爾テアテラの教會の使者に書贈るべし神の子その目は火焰の如く其足は眞鍮の如なる者かくの如く言と一九 曰われ爾の行爲と愛と信仰と服役と忍耐とを知また爾が後に爲し工は始の工よりも多ことを知二〇 然ども我なんぢに責べき事あり爾はかの自ら預言者なりと稱て我が僕を教これを惑し姦淫を行はせ偶像に獻し物を食しむる婦イエザベルを容おけり二一 われ嘗て此女に悔 改むべき機を予たれど其姦淫を悔 改ることを爲ざりき二二 我かれを牀に投入ん又かれと淫する者も若その行を悔 改めずば我これを大なる苦難の中に投入ん二三 また死をもて彼の婦の兒女を殺さん之に因て諸教會は我が人の心腸を察り爾曹各々の行に循ひて報を爲ことを知ん二四 我この餘のテアテラの人いまだ此教を受ず所謂サタンの奧義を未だ識ざる爾曹に言われ他の任を爾曹に負せじ二五 只なんぢら有ところの者を我いたる時まで固く保つべし二六 勝を得て終に至るまで我が命ぜし

事を守る者には我諸邦の民を治むる權威を賜へん二七 彼は鐵の杖をもて諸邦の民を牧り彼等を陶瓦の器の如く碎かん我わが父より受たる權威の如し二八 我また彼に曙の明星を賜へん二九 耳ある者は靈の諸教會にいふ所を聽べし

第三章

一 爾サルデスの教會の使者に書贈るべし神の七の靈を持また七の星を持もの此の如く言と曰われ爾の行爲をしる又なんぢに生る名ありて其實は死ることを知二 なんぢ目を醒し幾ど死んとする殘情を堅せよ我なんぢの行爲の我神の前に全きを見ざる也三 是故に爾が受たるところ聞たる所を憶起これを守りて悔改めよ若し目を醒し居ずば我盜賊の如く爾に到らん爾わが何の時なんぢに到るかを知ざる也四 然どもサルデスになほ數人いまだ其衣を汚さざる者あり彼等は白衣をきて我と同に行まん彼等は然するに足もの也五 勝を得るものは白衣を着られん我それ名を生命の書より塗抹さず又わが父と其使等の前に彼が名を言陳ん六 耳ある者は靈の諸教會にいふ所を聽べし

七 爾ヒラデルヒアの教會の使者に書贈るべし聖もの誠なる者ダビデの鑰をもつ者かれ闢ば誰も闔ること能はず彼闔れば誰も闢こと能はず此者かくの如く言と八 曰われ爾の行爲をしる視よ我れ門を爾の前に闢けり之を闔ることを得る者なし蓋なんぢ少く力ありて我言を守り我名を棄ざれば也九 夫の自らユダヤ人と稱て實は非ず唯謊言をいふサタンの會の或者をして我これを爾の所に來らしめ爾の足の前に伏しめ我なんぢを愛せしことを知しめん一〇 爾わが忍耐の言を守しにより我も亦なんぢを守りて地に住人を試みんが爲に全世界に臨んとする試煉の時に之を免れしむべし一一 われ迅速に來らん爾が有ところの者を堅く保ちて爾の冕を人に奪るること勿れ一二 勝をうる者をば我神の殿の内の柱となさん此より再び出ることなし我また我神の名と吾神の京城すなはち天より我神の所より降る新しきエルサレムの名および我が新しき名を之に書さん一三 耳ある者は靈の諸教會の言ところを聽べし一四 爾ラオデキヤの教會の使者に書贈るべしアメンたる者忠信なる眞實の證者神の造化の始なる者かくの如く言と一五 曰われ爾が冷かにも有ず熱も有ざることを爾の行爲に由て知り我なんぢが冷かなるか或は熱からん事を願ふ一六 爾すでに溫然して冷かにも有ず熱くも有ず是故に我なんぢを我が口より吐出さんとす一七 なんぢ自ら我は富かつ豐になり乏しき所なしと稱て實は憫るもの憐むべきものまた貧く瞽ひ裸體なるを知ざれば一八 われ爾に勸なんぢ富をなさんために我より火に煅たる金を買また己が裸體の恥の露れざらん爲に白衣を買て纏へ又見ことを得ん爲に目藥を買て目にぬれ一九 凡て我が愛する者は我これを責め之を懲す是故に爾勵て悔改めよ二〇 視よ我戸の外に立て叩もし我聲を聞て戸を開く者あらば我その人の所に就ん而して我はその人と偕に其人は我と偕に食せん二一

勝をうる者には我さきに勝を得て我父と偕に其寶座に坐するが如く我と偕に我が寶座に坐することを許さん二二 耳ある者は靈の諸教會に言ところを聽べし

第四章

一 此後われ見しに天に門開けありたり我が初に聞る所の我に語れる箛の如き聲また我に語て曰ここに上れ我こののち起るべき事を爾に示さん二 われ直に靈に感じ天に一の寶座設ありて其寶座の上に坐する者あるを見たり三 その坐する者の貌は金剛石、赤瑪瑙の如く且その寶座の四圍に緑の玉の如き虹あり四 その寶座の四圍に又二十四の寶座あり二十四人の長老白衣をき首に金の冕を戴きて其寶座に坐するを見たり五 その中央の寶座の中より閃電迅雷および許多の聲いづ又その寶座の前に燃れる七の燈火あり是神の七の靈なり六 寶座の前に水晶に似たる玻璃の海の如きものあり寶座の正面とその四圍に四の活物あり前後ことごとく目なり七 第一の活物は獅子の如く第二の活物は牛の如く第三の活物は面の貌人の如く第四の活物は飛鷲の如し八 この四の活物おのおの六の翼あり其内外ことごとく目なり此もの夜る晝る息ずしていふ聖かな聖かな聖かな昔し在し今在し後います主たる全能の神と九 この活物寶座に坐する所の世々窮なく生る者に榮を歸し之を尊び之に感謝せし時一〇 二十四人の長老寶座に坐する者の前に伏この世々窮なく生る者を拝し己の冕を其寶座の前に投出し曰けるは一一 主よ爾は榮と尊貴と權威を受べき者なり爾は萬物を造り萬物は意旨に由て有ち且造れたり

第五章

一 我また寶座に坐する者七の印にて封印せる内外に文字ある巻を其右の手に持るを見たり二 我また一人の強き天の使 大なる聲を發して誰か此 巻を開き封印を解に堪る乎と宣傳るを見たり三 然るに天にも地にも地の下にも此 巻を開き又これを見ことを得る者なし四 一人として此 巻を開き又これを見に堪る者なきが故に我甚だしく哭り五 彼の長老の一人われに曰けるは哭なかれユダの支派より出たる獅子ダビデの根すでに勝を得たれば此 巻を開き又この七の封印を解ことを得なり六 われ寶座および四の活物のあひだ長老等の間に羔 立をるを見たり此 羔さきに殺されし事あるが如し之に七の角と七の目あり此目は全世界に遣はす神の七の靈なり七 この羔すすみて寶座に坐する者の右の手より巻を取り八 巻を取るとき四の活物および二十四人の長老おのおの琴を執また香を盛たる金の香爐を執て羔の前に俯伏したり此香は聖徒等の祈禱なり九 この長老たち新しき歌を唱いひけるは爾は此 巻を取その封印を解に堪る者なり蓋なんぢ曾て殺され其血をもて諸族、諸音、諸民、諸國の中より我儕を贖て神に歸せしめ一〇 且我儕の神の爲に我儕を王と

なし祭司と作給へば也われら地に王たるべし一一我また見しに寶座と活物および長老等の四圍に衆の天の使の聲あるを聞り其數千々萬々一二かれら大聲に曰けるは曩に殺れたりし羔は權威、富、智慧、能力、尊敬、榮光、讃美を受べき者なり一三我また天および地および地の下および海の上にある所の凡て造れたるもの又其中に在もの皆いへるを聞り曰く願くは讃美、尊敬、榮光、權力、寶座に坐する者と羔とに歸して世々窮なからんことを一四是に於て四の活物アメンと曰り二十四人の長老伏て拜せり

第六章

一 羔その一の封印を開しとき我觀しに活物の一つ雷の如き聲にて來れと曰を聞り二われ觀しに一匹の白馬を見たり之に乘るもの弓を携ふ且冕を與られたり彼常に勝り又勝を得んとて出行り

三また第二の封印を開し時われ第二の活物の來れと曰を聞り四また一匹の赤馬いで來れり之に乘るもの地の平和を奪ひ且人々をして彼此に相殺しむる權を予られたり彼また巨なる刀を授けらる

五また第三の封印を開し時第三の活物の來れと曰を聞り我觀しに一匹の黒馬を見たり之に乘るもの手に權衡を持り六我かの四の活物の中に聲あるを聞り曰く銀十五錢に小麥五合銀十五錢に大麥一升五合なり油と葡萄酒を傷ふ可らず

七また第四の封印を開しとき第四の活物の來れと曰を聞り八われ觀しに一匹の灰色たる馬を觀たり之に乘る者の名は死という陰府その後に随へり彼等刀劍、饑饉、死亡および地の猛獸をもて世の人の四分の一を殺すの權を予られたり

九また第五の封印を開しとき祭壇の下に曾て神の道のため及その立し證の爲に殺される者等の靈魂あるを見たり一〇かれら大聲に呼り曰けるは聖 誠の主よ何時まで地にすむ者等を審判せず且これに我儕の血の報をなし給ざる乎一一爰に彼等各人に白 衣を賜へて之に曰給ひけるは彼等の如く殺されんとする其同に勞ける兄弟等の數の盈るまで安んじて暫く待べし

一二また第六の封印を開し時われ觀しに大なる地震あり日は毛布の如く黒なり月は血の如くなれり一三天の星は無花果の樹の大風に搖て未だ熟せざる其實の落るが如く地に隕一四天は卷物を捲が如く去ゆき諸山諸島みな移てその處を離れたり一五地の諸王また貴人、富者、將軍、勇士すべての奴隷すべての自主 悉く洞に匿れ一六山と巖とに曰けるは願くは我儕の上に墜我儕を掩ふて寶座に坐する者の面と羔の怒を避しめよ一七この羔の怒の大なる日すでに至れるなり誰か之に抵ることを得んや

第七章

一 此後われ四人の天 使地の四隅に立て地の四方の風を援とめ

地の上にも海の上にも樹の上にも風を吹せざるを見たり二又この他に一人の天使活神の印を持て東より登り來るを見たり此使者かの地と海を傷ふことを許されたる四人の使者に向て大聲に呼り三我儕の神の僕の額に我儕が印するまでは地をも海をも樹をも傷ふ可らずと曰り四我印せられたる者の數を聞しにイスラエルの諸の支派のうち印せられたる者合せて十四萬四千あり五ユダの支派にて一萬二千ルベンの支派にて一萬二千ガドの支派にて一萬二千六アセルの支派にて一萬二千ナフタリの支派にて一萬二千マナセの支派にて一萬二千七シメオンの支派にて一萬二千レビの支派にて一萬二千イサカルの支派にて一萬二千八ゼブルンの支派にて一萬二千ヨセフの支派にて一萬二千ベニヤミンの支派にて一萬二千人也

九此後我觀しに諸國、諸族、諸民、諸音の中より誰も數へ盡すこと能ざるほどの許多の人白衣をき手に棕櫚の葉をもち寶位と羔の前に來りて立り一〇かれら大聲に呼り曰けるは救は寶座に坐せる我儕の神と羔より出るなり一一天使みな寶座および長老等と四の活物との四圍に立て寶座に向ひ俯伏して神を拜し一二曰けるはアメン願くは讚美、榮光、智慧、感謝、尊敬、權威、能力、世々窮なく我儕の神に歸せよアメン一三長老の一人われに曰けるは此白衣を着たる者は誰か且何處より來りし乎一四われ答けるは君よ爾これを知べし彼われに曰けるは彼等は大なる艱難を經て來れり曾て羔の血にて其衣を滌これを白なせる者なり一五是故に彼等は神の寶座の前に在かつ神の殿にて夜晝神に事ふ寶座に坐する者は彼等の中に居給ふべし一六彼等は重て飢ず重て渇ずまた日も熱氣も彼等を害はざる也一七そは寶座の前にある羔かれらを養ひ彼等を活る水の源に導き又神かれらの涙を其目より拭ひ給ふ可れば也

第八章

一また第七の封印を開しとき天靜謐なりしこと凡そ半時二われ神の前に立る七人の天使をみる彼等七の箛を予られたり三また一人の天使金の香爐を持來て祭壇の側に立かれ多の香を予られたり此は寶座の前にある金の祭壇の上に之を獻て諸の聖徒の祈禱に添しめん爲なり四香の烟聖徒の祈禱に添て天使の手より神の前に升れり五この天使香爐を執これに祭壇の火を盛て地に傾けければ許多の聲迅雷と閃電および地震起れり

六七の箛を執る七人の天使箛をふく備を爲り七第一の天使箛を吹ければ血の雜たる雹と火と地に雨降地の三分の一焚亡また樹の三分の一焚亡凡ての青草も焚亡たり

八第二の天使箛を吹ければ火に焚る大なる山の如きもの海に投入られ海の三分の一血に變たり九海の中にある造られたる活物三分の一死船三分の一破壞たり

一〇第三の天使箛を吹ければ一の大なる星明燈の如くに燃て天より隕即ち河の三分の一および水の源に隕たり一一この星の

名は茵陳といふ水の三分の一は茵陳の如く苦く變り如此水の苦く變るに因て多の人死り一二 第四の天の使 笳を吹ければ日の三分の一月の三分の一星の三分の一みな撃れて其三分の一すべて暗なり晝三分の一光なく夜も亦光なし一三 われ見しに一の鷲穹蒼の中央を飛大なる聲にて呼をきく曰く後また三人の天使 笳を吹んと爲により地に住者は禍なるかな禍なるかな禍なる哉

第九章

一 第五の天 使 笳を吹ける時我天より地に隕たる一の星を見たり此星底なき坑の鑰を與られたり二 彼底なき坑を啓ければ大なる爐の烟の如き煙坑より上り日と穹蒼とは此坑の烟の爲に暗なれり三 多の蝗 烟の中より地に出この蝗地の蠍の權の如き權を與らる四 又地の草もろもろの青緑および諸の樹を傷ふこと勿ただ額に神の印なき人々を傷ふべしと命ぜられたり五 且これに人を殺ことを許さず惟五ヶ月の間かれらを苦むる事を許れたり其痛苦は人蠍に刺れたる時の痛苦の如し六 この時に人々死を求んと爲ども能はず死んことを願ども死は遁去べし七 此蝗の状は戰のために備たる馬の如し頭には金の冕の如ものを戴き其面は人の面の如し八 此に女の髮の如き髮あり其齒は獅子の齒の如し九 また鐵の胸當の如き胸當あり其翼の音は數多の馬の戰 車を引て戰場に馳るが如し一〇 且これに蠍の尾の如き尾と蠆とあり此蝗五ヶ月のあひだ人を傷ふ權を有り一一 この蝗に王あり底なき坑の使者なりヘブルの音にて其名をアバドンと云ギリシャの音にてアポリオンと云一二 一の禍すぎ去てなほ二の禍 至らんとす

一三 第六の天の使 笳を吹し時われ神の前なる金の祭壇の四角より出る聲ありて一四 この笳を持る第六の天使に語をきく曰かの繋れて大河ユフラテの邊にある四人の使者を釋せ一五 乃ち四人の使者釋れたり年月日時に至りて人の三分の一を殺さん爲に之を備しもの也一六 騎兵の數に萬々あり我その數を聞り一七 我異象に此馬と之に乗る者を見しが其形狀かくの如し彼等は火色、紫 色、硫磺色の胸當を着馬の首は獅子の首の如く其口より火と煙と硫磺いづ一八 此馬の口より出る火と煙と硫磺と三のものの爲に人の三分の一殺れたり一九 この馬の力量は口と尾にあり其尾は蛇の如にして首あり之を以て人を傷ふ也二〇 この禍にて殺れざる餘の人々は尚その手なす所を悔改めず惡鬼を拜し見こと聞こと行ことを得ざる金、銀、銅、石、木の偶像を拜し二一 又その兇殺、魔術、姦淫、盗竊を悔 改めず

第一〇章

一 我また一人の強き天 使の雲を衣て天より降るを見たり虹その首にあり其面は日の如く其足は火の柱の如し二 其手には展たる小き巻をとり其右の足を海の上にふみ左の足を地に履三 獅子

の吼る如く大聲に呼れり呼れるとき七の雷ありて聲を出せり四七の雷聲を發しし時われ之を書記さんとせしに天より出る聲ありて此七の雷の言ることは爾これを封じて書記す可らずと曰るを聞り五我が見る所の海と地に跨り立る天の使右の手を擧て天に向ひ六世々窮なく生る者即ち天および其中のもの地および其中のもの海および其中の物を造たる者を指て誓ひ曰けるは此のち時を延す可らず七第七の天使の聲を出すとき即ち箛を吹ときに至りて神その僕なる預言者等に示し給ひし如く其奧義成就すべし八我が聞し所の天より出し聲また我に曰けるは行て夫海と地に跨り立る天使の手に持ところの展たる小き巻を取九我その天使の所に往て之に曰けるは請小き巻を我に予よ彼いひけるは此巻を取て食盡せ爾の腹苦く爲べし其口に入るときは蜜の如く甜らん一〇われ天使の手より小き巻を取て之を食しに口に在し時は其甜こと蜜の如なりしが食盡しし時わが腹苦く爲たり一一かれ我に曰けるは爾再び諸民、諸國、諸音、諸王の事を預言すべし

第一一章

一われ杖の如き葦を予られたり天使われに曰けるは起て神の殿と香壇並に其處にて拜する者を度れ二殿の外の庭は殘して度る可らず蓋これを異邦人に予へ給ひたれば也かれら四十二ヶ月のあひだ聖城を蹂躪さん三我わが二人の證者に能を予ん彼等麻の衣を着て千二百六十日の間預言すべし四彼等は地を宰どる主の前に立る二の橄欖の樹二の燈臺なり五もし彼等を害はんとする者あれば火その口より出て其敵を滅すなり若し彼等を害はんとする者あれば其者は此の如く殺るべし六かれら預言する間天を閉て雨を降ざらしむるの權を有り亦水を血に變らせ且その心の任に幾回にても各樣の災殃を以て地を撃權を有り七彼等が其證をなし畢んとき底なき坑より上る獸ありて之と戰をなし勝て之を殺さん八その屍は大なる邑の衢にあり此邑を譬てソドムと名け亦エジプトと名く即ち主の十字架に懸られ給ひし所なり九諸民、諸族、諸音、諸國の者三日半の間かれらの屍を見かつ其屍を墓に葬ることを許さず一〇地にすむ者等かれらの死しに因て喜び樂み互に禮物を贈答せん蓋この二人の預言者地に住ものを苦めたれば也一一三日半ののち生の靈神より出て彼等の中に入かれら起て其足を立しかば之を見もの大に懼たり一二われ天より大なる聲ありて此に升れと彼等に言を聞り彼等雲に乘て天に升れり其敵これを見たり一三この時に大なる地震ありて邑の十分の一は傾れ此地震の爲に死し者七千人遺れる者等は大に懼れ榮を天の神に歸せり一四第二の禍すぎ去り第三の禍速に來らんとす

一五第七の天使箛を吹しとき天に大なる聲ありて曰此世の諸の國は我儕の主および主のキリストの屬と爲りキリスト世々窮なく之を治め給はん一六神の前に在て位に坐し居たる二十四

人の長老俯伏して神を拜し**一七**曰けるは今在し昔し在す全能の主たる神よ我儕感謝す爾すでに大なる權を執て政事を施し給ふに因**一八** 諸の國の民怒を懷けり爾の怒も亦至れり且死し者を審判して爾の僕なる預言者及び聖徒ならびに大と小との別なく其名を懼るる者に賞を予へ地を亡す者を亡し給ふ時既に至れり**一九** 時に神の殿天に闢け殿の中に神の約束の櫃みゆ又閃電と聲と迅雷および地震と大なる雹と有き

第一二章

一 爰に大なる異象天に現はる一人の婦あり日を着月を足の下にふみ首に十二の星の冕を戴けり**二** 彼すでに孕み居しが子を産んとして甚く苦み泣叫べり**三** また一の異象天に現はる一條の大なる赤き龍あり之に七の首の十の角あり其七の首に七の冕を戴けり**四** その尾にて天の星三分の一を曳これを地に墮せり此龍子を産んとする婦の前にたち産を待て其子を食んとす**五** 婦 男子を生り其子鐵の杖をもて萬國の民を主理らんとす彼神と其寶座の下に擧られたり**六** 婦のがれて野に往り神そこにて彼を千二百六十日のあひだ食はしめん爲に備給へる一の所あり**七** 斯て天に戰起れりミカエルその使者を率て龍と戰ふ龍も亦その使者を率て之と戰ひしが**八** 勝こと能ず且再び天に居ことを得ず**九** 是に於て此大なる龍すなはち惡魔と呼れサタンと呼るる者全世界の人を惑す老蛇地に逐下さる其使者も亦ともに逐下されたり**一〇** 天に大なる聲あるを聞り曰く我儕の神の救と能力と其國と神のキリストの權威今すでに至れり蓋われらの神の前に夜晝われらの兄弟を訴ふる者既に逐下されたれば也**一一** 我儕の兄弟は羔の血および己が證せし所の道に因て之に勝り彼等は死に至るまで其生命を惜ざりき**一二** 是故に天と天に居者は喜べ地と海は禍なる哉そは惡魔おのが時の幾時も無をしり大なる怒を懷て爾曹の所に下れば也

一三 龍おのが既に地に逐下されしを見て彼の男子を生る婦を窘せり**一四** この婦 大なる鷲の二の翼を予られ野に飛て己が所に至り其處にて蛇を避一年と二年と半年のあひだ養はれたり**一五** 蛇その口より水を河の如く婦の後に吐て之を漂さんとせり**一六** 地婦を助け口を啓て龍の口より吐たる水を吞盡せり**一七** 龍 婦を怒りてその餘の兒女すなはち神の誡を守りイエスの證を有つものと戰はんとて往り**一八** われ海の砂の上に立て

第一三章

一 一匹の獸の海より出るを見たり之に七の首と十の角あり其角の上に十の冕を戴き其首に僭妄の名を書せり**二** 我が見し所の獸その形は豹の如く其足は熊の足の如く其口は獅子の口の如し龍おのれの能力と座位と大なる權威を之に予たり**三** 我この獸の一の首傷を受て幾ど死んとする狀なるを見たり其死んとする狀なりし傷愈ければ全世の人これを奇として從へり**四** 龍その

權威を獣に予しに因て人々龍を拝し又この獣を拝し曰けるは誰か此獣の如き者あらんや誰か之と交戰をなし得ものあらん乎五この獣夸大なる言と讟す言とをいふ口を予られ又四十二ヶ月のあひだ働をなすべき權を予らる六かれ口を啓て神を讟し其名と其幕屋および天にすむ者等を讟せり七かれ聖徒等と戰ひ之に勝ことを許され又諸族、諸民、諸音、諸國を宰どる權威を予られたり八地に住る凡の人即ち世の始より殺され給ひし羔の生命の冊に其名を録されざる者等は此獣を拝せん九耳ある者は之を聽べし一〇凡そ人を虜にする者は己また虜にせられ刀にて人を殺す者は己また刀にて殺さるべし聖徒の忍耐と信仰茲に在

一一我また一匹の獣の地より出るを見たり之に二の角ありて羔の角の如し且その言ふこと龍の如し一二この獣先の獣の前にて先の獣の凡の權威をとり地と其上に住る者をして先に死んとする状なりし傷の愈たる獣を拝せしめたり一三また大なる奇徵をなし人々の前にて火を天より地に降し一四且その權を得て獣の前に行ふ所の奇徵を以て地にすむ者を欺き彼等に語りて彼の刀傷を受てなほ活る獣の像を作らしむ一五彼この獣の像に生命を予へ之をして言ふことを得しめ又その像を拝せざる者を悉く之に殺しむるの權を予られたり一六かれ衆人をして大小、貧富、自主、奴隸の別なく或は右の手或は額に印誌を受しむ一七印誌すなはち獣の名あらざる者あるひは其名の數あらざる者は凡て貿易する事を得ざらしめたり一八此獣の數目の義を知ものは智慧あり才智ある者は此獣の數を算よ獣の數は人の數なり其數は六百六十六なり

第一四章

一われ觀しに羔シオンの山に立り十四萬四千の人是と偕にあり皆その額に羔の名および羔の父の名を書せり二われ天より聲あるを聞り衆の水の聲の如く大なる雷の聲の如し我が聞し此聲は琴を彈者の琴をひく琴の音なり三かれら新しき歌を寶座の前および四の生物と長老等の前に歌ふ此歌は贖はるることを得て地より來れる十四萬四千人の外は學得ことなし四彼等は婦女と交りて其身を玷ざる潔者なり且羔の往ところ何處にても之に從ふ彼等は人の中より贖出されたる者にて神と羔に獻し初の果なり五その口譌言なし彼等は疵なき者也

六我また一人の天使の穹蒼の中央を飛を見たり彼地にすむ者即ち諸國、諸族、諸音、諸民に宣傳ん爲に永遠ある所の福音を携へ七大なる聲にて曰けるは神を畏れ榮を之に歸せよ蓋神の審判し給ふとき既に至ればなり天地海及び水の源を造り給ひし者を拝せよ八また一人の天使そのあとに從ひ往て曰けるは大なるバビロンは傾たり傾たり彼その姦淫に因て干る怒の酒を萬國の民にも飮しめたり九第三の天使かれらの後に從ひ往て大聲に曰けるは若し獣と其像を拝し其印誌を額あるひは手に受る者あらば一〇必ず神の怒りの酒を飮ん即ち神の怒の杯に物を

雜ずして斟る者也また聖天使たち及び羔の前にて火と硫磺を以て苦めらるべし一一その苦めらるる烟上に騰て盡る時なし獸と其像を拜する者また其名の印誌を受る者は夜晝安からざるなり一二神の誡とイエスを信ずる信仰を保つ聖徒の忍耐ここに在一三われ天より聲ありて我に言ふを聞り曰なんぢ此事を書せ今より後主に在て死る死人は福なり靈も亦いふ然かれらは其勞苦を止て息ん其功これに隨はんと

一四われ觀しに白雲あり其雲の上に人の子のごときもの首に金の冕を戴き手に利鎌を持て坐せり一五また一人の天使殿より出大なる聲にて雲の上に坐する者に曰けるは刈時すでに至れり地の穀物すでに熟したり爾の鎌を入て刈一六雲の上に坐する者その鎌を地に入ければ地の穀物刈取れたり一七また一人の天使天にある殿より出かれも亦利鎌を持り一八また一人の火を掌る權威を有る天使祭壇より出大なる聲にて利鎌を持る者に曰けるは地の葡萄すでに熟したり爾の利鎌を入て葡萄の球を刈斂めよ一九天使その鎌を地に入地の葡萄を刈斂めて神の怒の大なる酢に投入たり二〇城の外にて此酢を踐しに血酢より出て馬の轡に達ほどに至り廣れること七十五里に及べり

第一五章

一我また大にして且奇なる異象の天に現れしを見たり七人の天使末後の七の災殃を持り神の怒は此にて盡る也二我また火の雜たる玻璃の海の如ものを見たり且獸と其像および其名の數に勝たる者神の琴を執て此玻璃の海の上に立るを見たり三かれら神の僕モーセの歌と羔の歌を謳て曰けるは主全能の神なんぢの行爲は大なるかな妙なるかな萬民の王よ爾の道は義なるかな誠なる哉四主よ誰か爾を畏ざらんや誰か爾の名を崇ざらんや唯なんぢ聖し萬民の民なんぢの前に來りて拜せん爾の義き行爲すでに顯れたり

五此後われ觀しに天にて證の幕屋の殿闢たり六七の災殃を持る七の天使潔して光ある布をき胸に金の帶を束ねて此殿より出七四の活物の一この七人の天使に世々窮なく在す神の怒を盛る金の金椀を予ふ八神の榮光と權力より出る煙殿に滿たり七の天使の持る七の災殃の畢まで殿に入ことを得者なし

第一六章

一我また殿より大なる聲いでて七の天使に語るを聞り曰く往て神の怒を盛る七の金椀を地に傾けよ二第一の使者ゆきてその金椀を地に傾けければ獸の印誌ある人と其像を拜する人とに惡かつ苦痛の腫物生たり三第二の使者その金椀を海に傾けければ海は死し者の血の如くなりて海にある活物みな死たり四第三の使者その金椀を河および水の源に傾けければ其水みな變て血と爲り五われ水を掌る天使の云る言を聞り曰くいま在し昔し在す聖主よ爾かくの如く審判をなし給ふに因て義なり六なんぢ

聖徒と預言者の血を流し彼等に血を予て飮しむ彼等は之を受べき者なり七我また聲ありて祭壇より出るを聞り曰く然り主たる全能の神よ爾の審判は正かつ義なり八第四の使者その金椀を太陽の上に傾けければ太陽火を以て人を烤の權を予られたり九人々大熱に烤れて此等の災殃を掌どり給ふ神の名を詬り且悔改めず神に榮を歸せざりき一〇第五の使者その金椀を獸の座の上に傾けければ其國暗なり人みな痛苦に因て其舌を齧たり一一又その痛苦と腫物との故に因て天の神を詬り己が行を悔改めざりき一二第六の使者その金椀を大河ユフラテに傾けければ其水涸盡たり是東方の諸王の路を備ん爲なり一三我また龍の口と獸の口及び僞り預言者の口より蛙に似る三の汚たる靈の出るを見たり一四此は惡魔の靈なり異なる跡を行ひて全地の諸王に就り彼等をして全能の神の大なる日の戰に集らしむ一五視よ我盜賊の如して來らん裸裎にて行き羞 處を見るること無らん爲に目を醒し衣を着をる者は福なり一六かの三の靈諸王たちをヘブルの音にてハルマゲドンとよぶ所に集たり一七第七の使者その金椀を空中に傾けければ大なる聲天の殿の中なる寶座より出て曰けるは既に成り一八此とき許多の聲迅雷閃電また大なる地震ありき人の地に出しより以來かくの如き大なる地震ありし事なし一九大なる邑三になり異邦人の諸の城傾たり神大なるバビロンを憶起して之に己の劇き怒の酒を盛たる杯を予へ給へり二〇 諸の島は遁去もろもろの山は見なく爲り二一 また大なる雹天より人々の上に降り雹ごとに重さ約そ一タラントあり人々雹の災に因て神を詬れり蓋この災 甚しく大なれば也

第一七章

一七の金椀を持る七人の天 使の其一人きたりて我に語て曰けるは來れ我なんぢに多の水の上に坐する大淫婦の審判を示さん二地の王等これと淫を行ひ地に住る者その淫亂の酒に醉たり三われ靈に感じ携へられて野にゆき絳色の獸に乘る婦を見たり此獸あまねく體に僭妄の名あり又七の首と十の角あり四この婦 紫と緋の衣を纏ひ金と寶石と眞珠を以て身を飾り手に憎べきもの及び己が奸淫の穢を盛る金の杯を持五その額に名を書せり云く奧義大なるバビロン地の淫婦と憎むべき者との母六我此婦の聖徒の血に醉イエスの證を作し者等の血に醉たるを見たり我この婦を見て大に駭き異めり七天 使われに曰けるは爾なにゆゑ駭くや我なんぢに此婦および之を乘する七の首十の角ある獸の奧義を語ん八爾が見し獸は昔には有しが今は無のち無底坑より上りて沈淪に往ん世の始より生命の册に其名を録されざる地に住るもの昔にあり今あらず後また出る獸を見て駭かん九爰に智慧の心あるべし此七つの首は婦の坐する七の山なり一〇七の王あり其五は既に傾て一は尚あり餘の一は未だ來らず來らば暫く止らん一一昔に在て今あらざる獸は第八なり即ち七の王より出し者にて終に沈淪に往ん一二 爾が見し十の角は十の

王なり彼等は未だ國を得ざれども此獸と偕に一時のあひだ王の如き權威を執べし一三彼等はみな同心にて己が能力と權威を彼の獸に予ふ一四かれら羔と戰はん而して羔これに勝なり蓋羔は諸の主の主王の王これと偕にある者はみな召れ選れたる忠信の者なるに因一五天使また我にいふ淫婦の坐する所の爾が見し水は庶民、群衆、諸國、諸音なり一六爾が見し十の角と獸は夫の淫婦を憾み之をして荒墟かつ裸裎に爲しむ又その肉を食ひ火を以て之を焚べし一七蓋彼等に神おのが旨に循ふの心を予へ彼等をして心を同うせしめ且神の言の悉く成まで其國を獸に予しめ給へばなり一八爾が見し婦は地の諸王に王たる大なる城邑なり

第一八章

一此後われ又一人の天使の大なる權威を有て天より降るを見その榮地を照し輝けり二かれ大なる聲にて呼り曰けるは大なるバビロン傾たり傾たり今惡魔の住處また各樣の汚たる靈および穢たる憎べき鳥の巢と爲り三そは萬國の民かれが奸淫に因て干る怒の酒をのみ地の諸王かれと淫を行ひ地の商賈かれが甚しき奢華に由て富を致ばなり

四我また天より聲あるを聞り曰わが民よ爾かれの罪に共に與りまた彼の災に共に遇これを免れんが爲その中を出べし五それ彼が罪は積りて天に至り神その不義を心に記給へり六彼が爾曹に爲し如く彼に爲その行を照し倍して之に報い彼が斟予し杯に爾曹また倍して之に斟予へよ七彼が自ら高ぶり自ら奢れる如く亦痛苦悲哀を彼に予へよ彼心の中に謂れは女王の位に坐す我は寡婦に非ず我かならず悲哀に遇じと八是故に諸の災殃一日の間に彼の身に來らん即ち死、悲哀、饑饉なり彼また火にて焚盡されん蓋彼を鞫給ふ主たる神は能力ある者なればなり九彼と婬を行ひ彼と共に奢華くらしし地の諸王彼が焚るる煙を見て之が爲に哭き哀まん一〇この諸王かれが受る痛苦を畏れ遙に離れ立て曰ん哀き哉哀き哉大なる邑バビロン堅固なる邑爾が受る審判一時の間に至れりと一一地の商賈これが爲に哭哀めり蓋かれらの貨物を買人なければなり一二その貨物は金銀、寶石、眞珠、細麻布、紫にて染し物、絹、緋に染し物各樣の香木、象牙各樣の器皿價貴き木或は眞鍮或は鐵あるひは蝋石にて作る各樣の器皿一三また肉桂、香料、香膏、沒藥、乳香、葡萄酒、油、麥粉、麥、牛、羊、馬、車、奴隸および人の魂なり一四バビロン爾が心に嗜る果穀の熟期すでに過去すべての奢れる華美のもの既に亡ぶ復これを見ざるべし一五此等の物を販ひバビロンの爲に富を致し者等バビロンの受る苦を畏れ遙に離れ立て哭哀み曰けるは一六哀き哉哀き哉細麻布と紫にて染し物と緋に染し物とを纏ひ金、寶石、眞珠にて飾たる大なる城邑よ此の如き大なる富一時の間に消滅んとは一七一八凡の舟長海を航る人々及び舟子と海に由て生業を作ものバビロンの燃る烟を見はるかに離

れ立て喊叫いひけるは何の邑か此大なる邑に比ぶ可んや一九 また塵を首の上に散布し哭 哀つつ叫び曰けるは哀き哉 哀き哉この大なる邑その奢侈に由て凡て海に舟を有る者の富を得たる此邑一時の間に滅しこと二〇 天よ聖徒、使徒、預言者よ爾曹これを喜べし神なんぢらの爲に之を審判給へる也二一 一人の強き天の使磨の如き巨なる石を取これを海に投て曰けるは大なる城バビロン此の如く烈しく打仆されて再び顯る事なからん二二 バビロンよ爾の中に琴をひき樂を奏し笛をふき鈸を鳴す聲重ねて聞えず各様の工人重ねて見えず磨の音重ねて聞えず二三 火燈の光かさねて輝ず新郎新婦の聲かさねて聞えざるべし蓋なんぢの中の商人は地の尊貴者なれば也また萬國の民なんぢの魔術に惑されたれば也二四 預言者聖徒および凡て地に在て殺されたる者の血は此邑に見えたり

第一九章

一 此後われ許多の人の呼が如き大なる聲の天に在を聞り曰 ハレルヤ救と榮と權力は我儕の神の有ち給ふ所なり二 その審判は直かつ義なり蓋神かの淫亂に因て世界を汚したる大淫婦を鞫き己が僕等の血の報を求て之を罰し給へば也三 かれら再ハレルヤと言り淫婦を焚火の烟のぼりて世々熄時なし四 二十四人の長老および四の活物寶座に座し給ふ所の神を伏拜てアメンハレルヤと言へり五 聲寶座より出ていふ神の僕よ神を畏る者よ大と小との別なく皆われらの神を讚美すべし六 我おほくの人の聲の如く多の水の音の如く大なる雷の聲の如き聲を聞り曰 ハレルヤ夫主なる全能の神は王なり七 われら喜び樂もて神を崇めん蓋羔の婚姻の期すでに至り其婦すでに自ら備をなし畢たれば也八 婦は潔して光ある細布を衣ことを許さる此細布は聖徒の義なり九 天使われに曰けるは羔の婚姻の筵に招れたる者は福なりと書記せ又われに曰これ神の眞の言なり一〇 我その足下に俯伏して拜せんと爲ければ彼我にいふ然すべからず愼めよ我も爾と同く僕なり亦イエスの證を有つ爾の兄弟と同く僕なり爾ただ神を拜せよイエスの證を立る靈と預言の靈と殊なる事なし一一 我また天の闢を觀しに一匹の白馬あり之に乘るもの忠信また誠實と稱らる彼は義を以て審判と戰爭を爲せり一二 その目は火焰の如く其首は多の冕を冠れり又録せる名あり彼の外に之を識者なし一三 かれ血に染たる衣を纏へり彼の名は神の言と云一四 天にある諸軍皎く輝ける細布をき白馬に乘て之に從へり一五 彼の口より利劍いづ之を以て列國の民を撃かつ鐵の杖を以て列國の民を牧らん彼また全能の神の甚しき怒の酢を践一六 彼が衣と股に録せる名あり曰く諸王の王諸主の主一七 我また一人の天使の日の中に立るを見たり彼空中に飛鳥に大なる聲にて呼曰けるは爾曹神の大なる筵に集り來り一八 諸王の肉將軍の肉勇士の肉馬と之に乘る者の肉および自主奴隷大と小との別なく凡の人の肉を食へ一九 我かの獸 地の諸王および其軍隊の既に集

りて白馬に乗る者および其軍隊と戰はんと爲を見たり二〇 獸と僞の預言者と共に擒にせらる此僞の預言者は前に獸の前にて異なる跡を行ひ獸の印誌を受たる者および其像を拜する者を惑しし者なり此二のもの生ながら硫礦にて燃る火の池に投入られ二一 その餘の者は白馬に乘る者の口より出る所の劍にて殺れたり諸の鳥かれらの肉を食ひて飽り

第二〇章

一 われ一人の天使底なき坑の鑰と大なる鏈を手に携へて天より降るを見たり二 かれ惡魔と稱へサタンと稱る龍すなはち老蛇を執て之を千年のあひだ縛置んとす三 之を底なき坑に投入れ閉こめて其上に封をなし千年過るまで諸國の民を惑すこと莫らしむ其後かならず暫時のあひだ釋放さるべし四 我おほくの座位を見しに其上に坐する者あり彼等審判の權を予らる又イエスの證および神の道の爲に首斬れたる者の靈魂を見たり此は獸と其像を拜せず其印誌を額あるひは手に受ざりし者の靈魂なり皆生てキリストと共に千年の間王と作り五 其他の死人は千年終まで甦らざる也これ第一の復生なり六 この第一の復生に與る者は福なり是聖者なり此輩の上に第二の死は權を執こと能ず彼等は神とキリストの祭司と作キリストと共に千年の間王たるべし

七 千年終てサタン其囚より釋放さるべし八 かれ出て地の四方の列邦ゴグとマゴグを惑し之を集て戰しめんとす彼等の數は海の沙の如し九 かれら地に遍く滿て聖徒の陣營と愛らせる城とを圍む此時に火天より降りて彼等を焚盡せり一〇 彼等を惑し惡魔火と硫礦の池に投入られたり即ち獸および僞の預言者の居ところ也ここは夜も晝も患難痛苦ありて世々熄時なし

一一 われ白き大なる寶座と之に坐する者とを見る地と天と其前を遁て再び留るべき處を得ず一二 我また死し者の大と小との別なく皆神の前に立を見たり其處に書ありて展く別に又一の書ありて展これ生命の書なり死し者は皆書に録せる所の事に由その行に循ひて審判を受る也一三 海その中の死人を出し死と陰府と其中の死人を出せり彼等おのおの其行に循ひて審判を受たり一四 死と陰府と火の池に投入られたり是第二の死なり一五 凡て生命の書に録されざる者も亦火の池に投入られたり

第二一章

一 われ新しき天と新しき地を見たり先の天と先の地は既に過さり海も亦有ことなし二 われ聖城なる新しきエルサレム備整ひ神の所を出て天より降るを見その狀は新婦その新郎を迎ん爲に修飾たるが如し三 われ大なる聲の天より出るを聞り云く神の幕屋人の間にあり神人と共に住人神の民となり神また人と共に在して其神と爲給ふなり四 神かれらの目の涕を悉く拭とり復死あらず哀み哭き痛み有ことなし蓋前事すでに過去ばなり五

寶座に坐する者われに曰けるは見よ我萬物を新にせん又我に曰けるは爾これを書記せ蓋この言は信ず可して確實なれば也六かれ我に曰けるは既に成り我はアルパ也オメガなり始なり終なり渇者には價なしに生命の水の源にて飲事を許さん七勝をうる者は此等の物を得て其業と爲ん我かれの神となり彼わが子と爲べし八然ど臆する者信ぜざる者憎む可もの人を殺すもの奸婬を行ふもの魔術をなす者偶像を拜する者および凡て譌を言ものは火と硫磺の燃る池にて其報を受べし是第二の死なり

九末後の七の災殃の盛る七の金椀を執る七人の天使の一人來りて我に語り曰けるは來れ我なんぢに羔の妻なる新婦を見せん一〇われ靈に感じ天使に携へられて大なる高山に至れり此にて我に大なる城聖エルサレム神の榮を以て神の所を出て天より降るを示す一一其城の光輝くこと至賓き玉の如く澄澈る金剛石の如し一二此に大なる高き石垣ありて十二門り其門に十二の天使をれり門の上に名を書せりイスラエルの十二の支派の名なり一三東に三の門あり北に三の門あり南に三の門あり西に三の門あり一四城の石垣に十二の基址あり其上に羔の十二使徒の名あり一五我に語れる者城と門と石垣とを測ん爲に金の竿を持ゐたり一六城は四方にして長と闊と同じ天使竿を以て城を測しに六百里あり長さ闊高さ共に相等し一七又その石垣を測りしに人の度に從へば百四十四キュビトあり人の度は天使の度と同じ一八石垣は金剛石にて築き城は清潔なる玻璃の如き純金にて造れり一九城の石垣の基址は各樣の玉にて飾れり第一の基址は金剛石第二は青玉第三は赤玉第四は緑の玉二〇第五は紅の瑪瑙第六は黃色の玉第七は薄き黃色なる玉第八は水色の玉第九は紅の玉第十は翡翠第十一は深紅の玉第十二は紫の玉なり二一十二の門は十二の眞珠なり一の門は一の眞珠にて造り城の衢は澄澈る玻璃の如き純金なり二二われ城の中に殿あるを見ず蓋主たる全能の神および羔その殿なれば也二三また城に日月の照ことを需ず蓋神の榮光これを照し且羔城の月燈なれば也二四萬の國の民この光に藉りて行まん地の諸王おのれの榮と尊貴とを以て此城に來らん二五その門は終日とぢず此に夜ある事なし二六萬の民己の榮と尊貴とを以て此城に來らん二七凡て潔らざる者と憎べき行を爲もの或は譌をいふ者は必ず此に入ことを得ず唯羔の生命の書に録されたる者のみ入なり

第二二章

一天使生命の水の河を我に示せり其水澄澈りて水晶の如し神と羔の寶座より出二城の衢の中および河の左右に生命の樹あり十二種の果を結び一種を月ごとに結ぶ也其樹の葉は萬國の民を醫すべし三重て呪詛あることなし神と羔の寶座そこに在その僕これに事ん四僕ども神の面をみ神の名かれらの額に在べし五彼處には夜あることなく燈の光と日の光とを用ることなし蓋主なる神かれらを照し給へば也かれらは世々窮なく王たらん六

天使また我に曰けるは此言は信ず可して誠實なり預言者の靈魂の神なる主速かに成んと爲ことを其衆僕に示すために其使者を遣せり七 われ速に至らん此書の預言の言を守る者は福なり

八 我ヨハネ此等の事を見聞せり之を見聞せしとき我に此等の事を示せる天使の足下に俯伏して拜せんと爲ければ九 かれ我にいふ然すべからず愼めよ我は爾と同く僕なり亦なんぢの兄弟なる預言者及び此書の言を守る者と同く僕なり爾ただ神を拜せよ一〇 彼また我に曰けるは此書の預言の言を封ずること勿れ蓋時近ければ也一一 不義者は不義なる任にし汚穢者は穢き任にし義者は義なる任にし聖者は聖き任にせよ一二 われ速に至らん必ず報應あり各人の行ふ所に循ひて之に報べし一三 我はアルパ也オメガなり首先なり末後なり始なり終なり一四 その衣を洗ひし者は福なり彼等は生命の樹の果を受ることを得また門より城に入ことを得べし一五 犬および魔術を爲もの奸淫を行ふもの人を殺すもの偶像を拜する者また凡て謊言を好て虛妄を行ふ者は城の外に居なり一六 我イエスわが使者を遣して此事を爾曹諸教會に證す我はダビデの根また其苗裔なり我は輝く曙の明星なり一七 靈と新婦といふ來れど之を聞者も來れといへ渇者は來るべし願ふ者は價なしに生命の水を飲べし一八 我この書の預言の言を聞者に證をなす若この書の預言の言に加る者あれば神この書に錄す所の災を以て之に加へん一九 若この書の預言の言を削る者あれば神之をして此書に錄す所の生命の樹の果と聖城とに與ること莫らしむ二〇 此事を證する者いひけるは我必らず速かに至らんアメン主イエスよ來り給へ二一 願くは主イエスの恩寵すべての聖徒と共に在んことを